プロ野球オールスター・ワールドベースボールクラシック

S・H・K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プロ野球オールスター・ワールドベースボールクラシック

【Ｎコード】
Ｎ７９４３Ｆ

【作者名】
Ｓ・Ｈ・Ｋ

【あらすじ】
日本プロ野球７５年の歴史を彩るスターたちがここに集結。歴史上の十二球団オールスターが繰り広げる奇跡の日本一決定戦がいまはじまる。野球が好きならぜひ一読を。あなたが好きなあの選手も嫌いなこの選手も多分出てきます。どこから読んでも楽しめる短編を重ねる形式をとっているので興味あるところからどうぞ。
なおアホみたいに野球に詳しくないと半分も楽しめないのであしからず、半分も楽しめないってことは４０パーセントくらいは楽しめるかもしれないので、暇な人は、検索がてら挑戦してください。

＜ここから注目！！！＞なお拍手ボタンを新しく設置したので、ＩＤ登録が面倒なかたはそちらで感想をよろしくおねがいします。のはずでしたが、ＩＤなしでも感想が書き込めるようです。なんであの選手がいねーんだ、あのチームが地味すぎるなどとリクエストすれば、反映される場合もあります。

感想は随時受け付けておりますので、批判要望でもけっこうなのでどしどしください。

主な対戦カード　ヤクルト対日本ハム　１７０話あたりから
巨人対近鉄　２５０話あたりから
ソフトバンク対阪神　３５０話あたりから

きっかけは

昭和４０年会と昭和４８年会のおなじみの対決イベントに、特別に昭和５５年会が加わったのが、すべてのはじまりだった。

昭和４０年会といえば、古田池山のヤクルトの両巨頭を筆頭に、山本昌、渡辺久信、小宮山、吉井、武田ら好投手の宝庫で知られる年代。そして、昭和４８年会は、逆に、イチローを始めとして、中村紀、小笠原、松中ら超強打者が多い年代として知られる。

そこに、松坂を頂点とする昭和５５年会が加わったら、それは９０年代から２０１０年代に突入するプロ野球の歴史といってもいい。

イベントの対決の場として選ばれたのは、スカイマークスタジアム（旧。グリーンスタジアム神戸）。昭和４８年会の象徴、イチローの主戦場だった球場であるが、そのイチローは、いつものとおり、イベントを欠席している。

「なんで、イチローさん、出ないですかね？」

いくらイチローだからといって、敬称付けにするのは、年下である昭和５５年会に限られる。そして、イチローを世界で一番気にしていいのは、この男、松坂大輔である。

昭和４０年会対昭和４８年会に飛び降りで入った昭和５５年会の選手は両軍にバランスよく配分されている。投手力にやや劣る昭和４８年会に、ナンバーワン投手である松坂が配分されるのは、絶妙なハンデ付けであろうか。そして、昭和４８年回の４番を務めるのは、松中でも小笠原でもなく、

「知らんわ。あいつはこういうイベントにはよう出んのや。オレの結婚式には出てくれたのになあ」

「へえ、ノリさんの結婚式にイチローさん出たんだ。どんなスピーチをしたか、なんだか想像できますね～」

中村紀が三冠王松中を押しのけて、４番の座をに座るのは、成績とか戦術的の意味よりも、座りのよさとか親分肌の性格が買われた

ことを意味するだろう。
「まったく、つれんえっちゃのう、イチローは」
昭和４０年会先発の渡辺久信の持病のひとつである四球病の顔がのぞき、（他の持病はあえてここでは晒さない）中村紀に走者を二人置いて回ってきたときのこと、中村紀がバットのグリップを握ったその時だった。
夏の日の喉のように乾いた声、それでいてジョーク交じりの冷笑が織り交じった独特のトーンで、中村紀への野次が飛んだのは。
「ノリ、オレが代打に出ようか？」
「は？　誰や、オレをやじったやつは？」
真剣勝負を題しているが、そこはイベントの余興、野次られた中村紀であるが、必死な犯人探しをするわけでないが、彼はやじった主を探し始めた。
「カツノリか？　まっちゃんか？」
昭和４８年会のムードメーカー的存在のカツノリや５番打者に甘んじる松中を指名手配したが、彼らは揃って首を振っている。
「オレだよ、オレ」
「その声は！　なんでお前がおるねん！　い、イチロー？！」
「え、イチローさん？」
「イチロー？　どこだよ」
「そこです、坪井さんの後ろ！」
「なんで、お前がいるんだ！」
昭和４８年会のベンチだけではない、昭和４０年会のベンチにも衝撃は走った。いつものように欠席したはずのイチローが昭和４８年会のベンチの中にいたのだ。
「いちゃ悪いですかね？　僕も昭和４８年会に参加する権利はあるだろ？　なあ、ノリ。お前とは高卒同期で、一緒にウエスタンリーグで戦った仲だよな？　僕は首位打者戦線を独走し、ノリは打率最下位ラインをさまよっていたけどね」
「なんや、イチロー。急に同級生、恋しくなったんか？　まあええ

わ、試合に参加したいならしてもええぞ。ただし、カツノリの代走ていどの出番しか用意できんけどな」

「試合に出る？　冗談じゃないよ、僕はシアトルの至宝だよ。断りなしで、試合に参加できる立場じゃないさ」

「それなら、なにしにきたんや？」

「君たち、いや、昭和４０年会のみなさんや、昭和５５年会の小僧っ子たちに、いいニュースを僕は持ってきたんだ」

イチローはいつのまにか、ベンチを抜け出し、マウンドの中央に立っていた。もちろん試合は中断され、試合後の野球教室に参加するために招待されていたリトルリーグの子供たちは、突然のスーパースターの登場に沸き返った。

「みなさん、こんにちわ、鈴木一郎です。知っていますか？　そりゃ知っていますよね？　でも、知らないことがある。あなたたちは、まだ重要すぎることを知らない」

イチローは、マウンドにいた渡辺久信に近づき、ポッコリと出たお腹を指さした。

「いやいや。久しぶりですね、渡辺久信さん。僕とあなたといえば、１９９６年のノーヒットノーランですよね？　最後の打者となった僕は、野球人生最大の屈辱でしたよ、あのＷＢＣの韓国戦までですけどね。落ち目に入った投手にノーヒットノーランをやられるなんて、僕の野球哲学に反してますから」

「なんだよ、イチロー、なにしにきた」

「いや、そのお腹が出てない、のびあがる快速球を投げていたころの渡辺久信さんにノーヒットノーランをやられたら、僕はやられたと思うだけで、何も感じることはなかったんですけどね、野球選手のくせに、ぽってりと太りだした渡辺久信さんにやられるちゃあいけないんですよ」

「だから、なんだよ」

イライラする渡辺久信であるが、人をいらつかせるマイペースぶりはイチローの真骨頂であるが、返す刀で同期生、中村紀も斬りつ

ける。
「お前もそうだよ、ノリ。お前のようなのがいるから、野球選手は太っていてもできるんだと思われる」
「オレは渡辺久信さんとはちゃうで。太ってても、大活躍やったぞ」
「そりゃまあそうだった。でも、今のノリは全盛期のお前とはほど遠い。もしも、もう一度、あの時のように、腰がはちきるようなフルスイングできたなら？　今のように、引退から１０年たった渡辺久信さんと渋い打撃で野球人生の終盤を生きるノリの対決も悪くない。だけど、あの時のように、快速球とフルスイングがぶつかり合うとしたら？」
「だから、何をいうてるんや」
　イチローの話はいくらたっても先が見えない。マイペースが持ち味のイチローであるが、度が過ぎると、昭和４０年会の番格捕手古田もイチローに割って入る。
「だから、なんやの、イチロー」
「いやいや古田さん、こんちわ！　鈴木一郎です」
「挨拶はええから」
「そして、古田さんです。快速球にフルスイングに、五体満足でぴちぴちのプレーができる体に監督解説者を経験した今の古田さんの頭脳の味付けが加われば、これ以上に興味深い対決はないでしょ。僕だって、どのメジャーリーガーのスーパースター同士の対決よりも、こっちの方がみたくなる」
「だからなんなんだよ、イチロー！！」
「だから、可能なんですよ、その対決が」
「どういうことだよ」
「そろそろ、明かしましょうか？　プロ野球オールスターワールドベースボールクラシックの開幕のお知らせですよ」
「はあ、なんやその、プロ野球オールスターなんたらと、８０年代のバラエティみたいなノリのタイトルは」
「ノリは８０年代ですけど、現代だからこそできるイベントですよ。

とにかく、みんな全盛期に戻れるんです。まあ、ピークはいつもその先にある僕、３０代よりも４０代、５０代と、日々素晴らしくなる僕の全盛期はまだ訪れてませんが」

「あほか、そんなん全盛期なんかに戻れるわけがない」

超現実主義の古田ははなから信じようともしない。だが、イチローも古田に負けずおとらず超現実主義だ。そのイチローが、全盛期に戻れるというのなら。

「僕の言う事だから信じるんでしょ？　僕はジョーク好きですが、面白いジョークが好きなんです。こんなセンスのないジョークは言いませんよ」

「そりゃまあそうやが……」

「信じない？　信じないなら実例をお見せましょうか？」

「実例やと？」

「……ブーマーさん、出ておいでください」

イチローイングリーンスタジアム神戸

「ブーマー？」
「ブーマーかいな。珍しくないな。ブーマーは外国人の代理人、またはＯＢ戦なんかで、度々来日しとるわ」
「でも、ノリの見るブーマーは、すでに６０の齢に届きそうなおっさんのブーマーでしょ？　もしも、あの時の、そう、三冠王に輝いたブーマー。三冠王といえば、落合さん、バース以来２５年は出ていませんが……」
「あほいうな、２００４年に松中が取っとるわ」
「２００４年？　僕が向こうで世界記録を更新したとき、日本ではそんなことがありましたか。それはさておき、ブーマーさん、カモン……いや、ここは、グリーンスタジアム神戸。ＤＪキムラ風に行きましょうか……。オリックスブルーウェーブの攻撃は、３番、ファースト、ブーマーウェルズ！！」
　イチローのコールとともに、大柄長身の男が、昭和４０年会の並み居るメンツを押しのけ一塁側のダックアウトから、のっしのっしと出てくる。
「たしかに、ブーマー。そして、よく見かけるでっぷりと肥えたブーマーやない！　腹は出とるが、肉つきは現役時代のもんや！」
　ブーマーは、阪急ブレーブスのユニフォームを現役さながらに着こなしている。かついだバットを投手の渡辺久信に向けると、
「ヘイ！　ヒサノブ！　またホームランね！」
　さっそくのホームラン予告だ。
「なんだと、ブーマー……。今のお前に打たれるわけがない！　オレは今でも１３５キロは出るんだ！」
　イチローが、渡辺久信とブーマーの間に割って入る。
「はいはい、こういうありきたりな展開を僕は好まない。僕が好むのは、スピーディーな展開です。渡辺久信投手が打たれないと思う

なら、ブーマーさんが一発打てると豪語するなら、勝負すればすぐにわかることでしょ？」

「そりゃそうだ、６０のでぶのおっさんにオレが打たれるわけがない。オレは工藤さんより二歳も若いんだ」

イチローが進行役だと、話は早い。中村紀を押しのけ、ブーマーが打席に入る。あの独特のユニフォームを下から順番に触るクセを交えて。

投手の渡辺久信はブーマーとイチローの鼻っ柱を折るために、初球から全力投球。やや早い掲示の出ることで有名なグリーンスタジアム神戸のスピードガンは１３５キロを記録した。しかし、このボールをブーマーは軽々と、グリーンスタジアム神戸の左中間最深部に打ち込む。

「な、なんだと」

「あの時のように、１６０m飛ばそうとしたけど、ヒサノブ、球遅すぎね～　１５０キロ、どーぞ」

「でるわけないだろうよ、今のオレに１５０が……。しかし、ブーマー。あなたのスイングは、現役時代さながらだ。どうしてですか？　トレーニング？」

ブーマーは首を横に振り、なにも答えない。日本語がわからないわけではないが、イチローが助けぶねを出す。

「だから、いったでしょ？　現実を見せるって？　今のブーマーさんの現実をみて、まだ理解できないんですか？　いくら、ブーマーさんだからといって、６０近い体でグリーンスタジアム神戸の最深部は打ち込めませんよ。ではなぜ打ち込めたか？　それは最盛期に時間を戻したんです。心と知識はそのままで、体だけ、三冠王を獲得したあの時に……」

「まさか……なあ、古田？」

「そうや、ヒサノブのいうとおりや。体の時間を戻す？　そんなんすぐに信じられるかちゅうんや。ブーマーのそっくりな男を独立リーグあたりからひっぱてきたのが、トリックの種やろ？　独立リー

グなら、１３５キロの棒球をあそこまでも飛ばせる者はいくらでもおるやろうからな」

「そうですか、ヒサノブさんはまだしも、古田さんならすぐに分かってくれるとおもったんですけどね……。それでは、実証、二人目を披露しましょうか……ジョニー！　ジョニーこと、黒木知宏が現実を証明します」

イチローは、鯉を呼び寄せるように、手をたたきジョニー黒木の名前を呼んだ。

「ジョニー？　あほな、ジョニーは肩痛の怪我で投げれんはずや」

三塁側の昭和４８年会のベンチにいた黒木が、ウインドブレーカーを脱ぎ捨てすっと席を立つ。

「もう、イチロー、試合の途中で、万全の姿を見せて、驚かせようと思ったのに」

「しょうがないだろ、ジョニー。みなさん、疑い深いんだから」

黒木の持ち前の闘志に自信のオーラがこびりついている。度重なる故障ですっかりと消え果てた闘気をみなぎらせながら、黒木はマウンドに走っていく。

「ノリ。打席に入れよ」

「１３０も出んお前を現役のオレが打ってもなあ」

「いいから、立てよ」

「まあ、ノリ、付き合ってやれよ。そうでないと試合が進まん」

「そうですね、古田さん……」

黒木がゆっくりとモーションに入る。故障が完治しないまま引退した黒木から打っても面白くないと、ノリはやる気ではなかったが、この黒木のフォームの始動が全盛期のままと気がつくと、

「なんやと……こりゃもしかして！」

急いで、現役モードに入り、黒木に相対す。そして黒木の解き放ったストレートはまっすぐどまんなかに古田のミットに飛び込もうとしたが、ノリのフルスイングがこれの邪魔をする。

「打ちのは忍びないが……しゃーない」

左中間に飛んでいく長打コースの打球だが、ノリは走ることもしない。
「どこがや、どこが、ぜんせい……うん？　１４６？」
グリーンスタジアム神戸のスピードガンは今の黒木のストレートを１４６キロと表示していた。
「ちょっと待て、１４６キロいえば、ジョニーの現役最高速に近いやないか！　なんで故障したままのお前がそのボールを投げれるんだ！」
「ノリ、いくらどまんなかでも、１４６を打てるとは、お前もまだまだやるじゃないか！」
「お世辞はええ、ジョニー、なんで、お前、１４６キロを……スピードガンを誤魔化した？」
「いや、ノリ。それはない。コースこそ大甘がボールは走ったたぞ」
「古田さん……」
「もしかすると、もしかする！　イチローのいっていることは現実かもしれんな。オレたちは、とんでもない奇跡を目の当たりにし、とんでもない試合に放り込まれようとしているかもしれんぞ……」

１２人の奇跡

「なかなか、信じてくれませんね。さすがは野球選手です、疑い深いひとたちの集団です。では、奇跡を目の当たりにしたら？　僕が宗教に一欠片の野心があるのならば、偉大な宗教家になれるでしょうね、それくらいの奇跡です……。もしも、この世にいないはずの選手が、みなさんの目の前に現れたら？」

「いくらなんでもあるわけない。なあノリ？」

「そうですよ、古田さん、あるわけがない……」

「そうですか、ならお見せしますよ？とびっきりの奇跡を！　それでは、一斉に登場してもらいましょうか。いでよ、プロ野球オールドタイム・オールスターズ！」

イチローがそう叫ぶと、グリーンスタジアム神戸の照明は暗転、薄暮の闇に包まれて一瞬、照明がついたときに、奇跡は起きていた。

ずらりと並んだ１２人の野球人。

沢村栄治、津田恒美、江藤慎一、藤村富美男、武上四郎、秋山登、稲尾和久、杉浦忠、大下弘、梶本隆夫、山内一弘、そして、最後の１２人目は、鈴木貴久。

「鈴木貴久さん？」

鈴木貴久に真っ先に反応したのは、もちろん中村紀。選手、コーチと関わっただけに鈴木貴久が偽物か本物か検証するまでなく、感覚でわかる。

「まさか……。イチロー、お前……」

「信じてもらいましたか？　１２人の偉大なる野球人は、もちろん用意されたそっくりさんではありません。この大会開催を聞いて、駆けつけてくれた正真正銘の本人たちです。偽物とか、トリックとか、実証しろとか、もういりませんよね？　同じ野球人なら、感覚的にわかるはずです。彼らは本物だと……」

「まさか、どうしてだ、イチロー？」

「どうしてこうしてもありませんよ、古田さん。あれこれ考えるのはあとにすべきです。野球人が時間を戻せるとしたら、やるべきことは一つです」

「それが、プロ野球オールスターワールドベースボールクラシックかいな……」

「そうですよ、既存の１２球団に近鉄を加えて、あ、楽天は近鉄の系譜でいいか、なら１２球団で競うんですよ、歴史上もっとも強いチームはどこかってね」

「そういうことか、たしかに面白いな。オレも戻れるんやろな？」

「なんども行ってますよ、今の経験と知識をもって、全盛期の体に戻れると。古田さんなら盗塁阻止率６割の頃ですか？　それとも、大江千里ばりの黒ぶちメガネをかけてた頃ですかね？」

「ははは、黒ぶちメガネはないな、たとえ、その時代を選んだにしても、黒ぶちメガネは賭けへんよ……」

「そうですか、それはいいとして、そういうことです。大会の日程は、いずれ送付されると思いますから」

「待て、イチロー！　古田さんみたいなＯＢはええとして、オレラ現役組は本チャンの野球があるぞ！」

「良い質問だな、ノリ。時間が足りない？　この世にいないはずの人たちを呼び寄せるなら、時間の自由くらい、どうってことはないんだよ。いつだっていいんだ。実際に流れる時間のすき間に僕らは流れこみ、試合はできる、キャンプだって、オープン戦だって、そこでする。休日だって楽しむことができる。時間と時間の間を有効に使えるんだ」

「ようわからんが、オレは奇跡を目の当たりにしとる……それも信じんといかんなあ」

「さすが、野球人。疑い深いけれど、いったん認めれば、物分りはいい……。それでは、みなさん試合で会いましょう。今の僕のこの言葉を皮切りに全ては動き出します。１２球団のすべてが動き出します。ベンチ入り選手を誰にするかを決めるのは日本では監督の仕

事でしょうが、その監督を誰にするかを決めるのはＧＭです。さあみなさん、今の僕の開会宣言を首尾よく流したマスコミ情報をゲットした各球団の上層部のみなさん、まずはＧＭを決めてください。それから監督ですよ？」

「監督？　おいイチロー、お前のオリックスは誰がええんや？」

「いやだな、古田さん。僕の発言は通りやすいんですよ。僕が適当に出した意見の通りになるんだから、うかつにはいえませんが、ただ予想させていたたぎますと……そうだな、仰木さんかな、僕といえば仰木さん、いや上田さんかな、阪急黄金時代は上田さんのええで節の賜物です、西本さんはないな、近鉄がほっとかないでしょ、そして、西本さんは近鉄を選ぶでしょうね」

「土井監督は？」

古田は嫌味のつもりで土井の名前を出したのだが、イチローは思いのほか饒舌。

「いいね、土井監督！　僕は土井さんにかなりの罪悪感を持ったままなんですよ。僕の実力不足がために土井さんの名誉は傷ついたまま。それを晴らすのも僕の役目ですかね……。まあ予想はこのへんにしておいて……」

イチローは三塁側ベンチの昭和４８年会に視線を定めた。

「高木大成！　球団営業も天職だろうけど、やっぱりお前はレオの貴公子だよ。松中！　三冠王取ったってほんと？　その打撃を見せてよ。小坂！　メジャーにもとんでもないショートがたくさんいるけど、お前はもっととんでもなかったよ。カツノリ！　ああ、お前は選手としては無理だわ、裏方で貢献しろよ」

次々と独特のイチロー節で、選手たちにエールを送る。次のイチローの毒牙は一塁側の昭和４０年会に飛び散る。

「小宮山さん！　また僕に勝負球にとんでもないボール球投げてくださいよ。今度は飛びついてでもヒットにしてやりますから。武田さん！　いつも辛口のメジャー解説ありがとうございます。その減らず口を若干たたきなおしてあげますから。山本昌さん！　熱狂的

中日ファンとして、あなたと真剣勝負を一度したかった……あ、まだ現役でしたっけ」

さんざん、鋭い舌鋒を見せたあとイチローは勝手に締めに入る。

「それでは、プロ野球オールスターワールドベースボールクラシックのプレイボールを宣言します！　あ、試合の方はだいぶ後になりますが……色々と立て込んでいるため……」

野球は幸せか

「出たくないわけがないでしょ」

これが大会開催の一報を聞いたイチローの第一声だ。

「う〜ん……出たい気持ちはやまやまなんですけど、膝がちょっと本調子でなく……。え？　全盛期の能力と肉体に戻れる？」

そのイチローの最大のライバルである松井秀喜はこう答えた。

「……」

伝説の打者榎本喜八は、何を聞かれても何も答えない。ただバットを振るだけ、すでに参戦モードだ。

「巨人で出る？　何をいうちょる。ワシは国鉄の金田や。打倒巨人でいきまっせ」

「桑田を叩きのめす」

「五輪のリベンジや」

「また三原監督と稲尾と野球ができる。オレ、それだけで涙が出るほど嬉しいよ」

「なんや？　ワシはどこで出れるんや。阪神か？　楽天か？　ヤクルトか？　なに、ホークスで出てくれ？　なんや、また鶴岡御大の元で野球ができるのか…。ムフフ」

「また連続試合出場の記録が伸びるね」

「イチローは走者にうろちょろされるのが嫌い？　関係あらへん。どんどんスタート切りまっせ」

「オレの三冠王は、福嗣が生まれる前。これでやっと、全盛期の本当のオレを見せれるよ」

「ええ、エキサイトしてきましたよ。ダっと振って、バっと捕って、ザっと走る。フアンの皆様が、かっと燃え上がるようなプレー

がまたできるんですから。ウフフ……」

大々的に開催が宣言された、日本プロ野球の歴史を彩る大会、ＷＢＣのプロ野球版、プロ野球オールスター・ワールドベースボールクラシック。

十二球団の歴史上のベストメンバーが集い、日本一を決める奇跡の大会が、ついに開幕を告げようとする。

まず動き始めたのは、各球団のＧＭたち。

２８人の正規メンバーに、それに加えて予備メンバーの選出はＧＭよりも、監督、コーチの意見が強く反映されるのが日本式だ。そして、その監督を誰にするかを選択する役割が、ＧＭにはある。

巨人軍のＧＭに任命された清武英利（現・巨人代表）は、頭を悩ませていた。

巨人軍には、歴代のべ１１人の監督がいる。この大会の監督は、その球団の監督経験者に限られる規則になっている。つまり、１１人の候補者に限られるわけだ。

藤本定義、藤本英雄、中島治康、三原修、水原茂、川上哲治、長嶋茂雄、藤田元司、王貞治、堀内恒夫、そして、現監督の原辰徳。

人気でいえばＯＮにかなうものはいないだろう。だが、グラウンドで自由奔放にプレーしてこそＯＮだ。それでこそスターだ。監督の重責を与えて、プレーに制限を加える必要はどこにもない。

巨人の第一期黄金時代を築きながら、その後の野球人生を打倒巨人に捧げた藤本定義も好捕から除かれる。阪神など藤本の他の所属球団から狙っているともっぱらの噂だ。１２球団共存共栄の大会。ライバルチームに因縁深い相手がいてこそ大会は盛り上がるものだ。

同様に三原脩も候補から外れる。巨人を倒すこそ野球人生であり、

西鉄時代、大洋時代に続き、３度目の巨人を破っての優勝を狙うには、監督要請のある、西武、横浜、ヤクルト、近鉄のいずれかを選ぶだろうしかない。

戦時中の混乱期に兼任監督を務めた藤本英雄、中島の二人も候補には入らないだろう、彼らは実績を残した監督であるが、戦時中の混乱期の臨時監督にすぎない。巨人軍の監督史上唯一のＶなし監督に終わった堀内もないだろう。彼が活きる場所は、好き勝手に振る舞えるマウンドのはずだ。隠れた名監督の呼び声も高い藤田も、本職ともいえる投手コーチに専念する意向だ。

残る監督候補は３人。スポーツ紙各紙の論調は、かねがね二人の候補者に絞られていた。

川上か、水原か。

巨人軍の歴史において、この二人の監督実績はぐんを抜いている。管理野球、哲のカーテン……といったキーワードに代表されるように、典型的組織優先型野球の川上か、それとも選手の個性を最大限に重んじる水原か。

監督選びを一歩間違えれば、重厚な戦力を十分に引き出せないだろう。いくら１２球団随一の戦力を誇る巨人でも、他球団に足元をすくわれる可能性は低くない。

川上にはＶ９という偉大な実績がある。この大会もＷＢＣ方式にのっとることを考えれば、日本シリーズ、１１連勝無敗の短期決戦での圧倒的強さという要素も見過ごせない。

一方の水原は、巨人軍第二の期黄金時代を築いたのも確かであるが、三原西鉄にシリーズ三連敗を許し、鶴岡南海にも、ホークス史上、ただ一度の巨人戦シリーズ勝利を許している。

ただ、歴史上の大スターが一同に会するこの大会の趣旨を考えると、監督川上には、あまりにも敵が多すぎるのだ。

四番サードが決定済みの長嶋は、監督解任の黒幕は川上であると今でも恨んでいるし。川上との主導権争いの末に、他球団に追いやられた千葉、別所、与那嶺らも、川上には長嶋以上の恨みがある。

そして、反川上といえば、あの男を忘れてはならないだろう。

広岡達郎だ。川上と同タイプの指揮官であり、川上に異常な反骨心を燃やす、広岡は敵にまわすと、巨人にとって最大の脅威になるだろう。

巨人の正遊撃手は広岡で決まりとの見方もあるが、西武、ヤクルトを日本一に導いた実績から、当該球団から監督としてのオファーも来ている。

西武、ヤクルト、両球団とも、巨人日本一の前に立ちはだかる強敵だ。

そのいずれかに、打倒川上に闘志を燃やす広岡が監督就任となれば、これほどやりにくい相手はないだろう。

水原の監督就任にも問題は立ちはだかる。短期決戦での実績が圧倒的に劣る点がまず一つ。さらに、松井、高橋由、二岡、阿部ら現役世代からも多くのエントリーが予想されるなか、水原という名前は、いかにも時代が遠すぎる。Ｖ９世代でない現役選手たちでも、川上の監督像は容易につかめるが、水原とは世代間ギャップがありすぎる。これでは、水原野球がどういう野球かを掴むだけで、大事なキャンプが終わってしまう危険性がある。

現役世代だけでない。水原の巨人監督期間中入団したＯＮはまだしも、堀内、柴田らのＶ９世代でさえも、水原との縁はそれほど深くない。

水原は、鶴岡、三原と並び、プロ野球三大監督の一人だ、といくら口で説明しても、先の二人と比較して、現在に残る物語性がやや弱いことは否めない。

監督のカリスマ性が十分に発揮できないチームは、空中分解する可能性も秘めているのだ。

清武はずっと頭を抱えている。東京ドーム内に特別に設置された巨人軍大会特別事務局の時計を見る。

「決断の時間か……。今日、この時間に決めないとすべての大会ス

ケジュールが立ち遅れることになるな」
川上か？　水原か？
「野球は幸せか、巨人軍は非常か」
非常？　そうなのだ。ＧＭは時に非常にならなければならないのだ。ＧＭは他の誰でもない、清武自信である。監督を任命するのはＧＭの自分だけに与えられた権利だ。ルールにのっとった１１人の監督経験者の中から誰を選ぼうと、それはＧＭである清武の自由だ。誰にも文句を言われるいわれはない。
それならば、候補は一人に絞られる。
「決まった。これが巨人軍にとって、最善の選択、そして、日本一になるたったひとつの選択肢。３つの中でたったひとつ、栄光につながる道を、選手とスタッフを歩ませる監督は、この男しかいない」
３つ？　川上か水原の二択ではないのか？
「清武ＧＭの独自カラーも十分に発揮できる。そして、戦術、戦略、統率力、カリスマ性、実績、巨人軍のブランドに沿ったイメージのよさ……。すべての要素を兼ね備えた男に、僕は巨人軍を託す。……原辰徳しかいない」
清武は決めた。サプライズ起用でも、奇をてらったものでもない。原には監督としての素質がある。幼い時から実の父親でもあるアマ球界の名将原貢の横で監督としての帝王学を学び続けていた原は、監督になるべく生まれた男だ。
原には威厳がない？　それは違う。原は全日本をまとめる大将である。日本代表の監督に威厳がないわけがない。
決断が間違いではないか不安がこびりつき、予見される批判が頭によぎるが、全てを押し殺し、清武は今、部屋を出た
原辰徳に、巨人軍監督要請をするために。

お家騒動、西の監督選び

「村山か吉田か」
「安藤や、安藤で決まりや」
「中村勝広。采配はスカタンやけど、文句はいわへんで。面倒なことがない」
「星野はどうや？　金集めなら、アレより上手いのおらへんで」
「金集めは上手いかもしれへんが、金がかかりすぎる。気づいたら赤を出しとる」
「なら岡田はどうや。球児や金本も、岡田なら文句いわんやろう」
「ダメダメ。岡田より年上の選手に舐められる」
「生え抜き二千本安打の藤田平。鬼平や。実績は誰にも負けへん」
「……」
「なんや、なんや。藤田が監督ってのが、おかしんかい？　そりゃま、おかしいか。おかしいな。新庄がついてこない」
「新庄？　新庄はいらんやろ。センターは赤星がおる」
「肩が比べ物にならん。それよりな、こういう大会に栄えるのは、新庄や」
「新庄や赤星の出番があるかい！　平成オールスターやないんやで！　タイガース75年のベストや。外野の三人は金本、別当、真弓で決まりや」
「金本？　ありゃ広島の選手やないかい。全身に猛虎魂を宿した選手やないとなあ」
「それなら、別当も真弓も他所の血が混じっとる選手やないかい」
「別当は毎日に強奪されただけや。心は阪神や。真弓も、生え抜き同然や。クラウンって何ライターやねん。どっかの社会人野球か？」

喧々諤々の議論が続くが、これはけして監督決定権を持つものたちの会議ではない。とある大阪の新聞社で、日夜繰り広げられる単

なる与太話の一例に過ぎないのだ。

実際の決定権を持つ阪神球団事務所でも、監督問題は、二つの派閥に割れていた。

「タイガース史上、ただ一人の日本一監督。ムッシュこと吉田しかおらんやろ」

「悲運のミスタータイガース村山に、今度こそ、充実な戦力の元、指揮をとってもらいたい。だから村山や！」

オズの魔法使いの異名をとった小津正次郎は、腕組みしたまま動かない。

吉田義雄か村山実か。

優勝、日本一経験という実績の差で、吉田の圧倒的にリードと見られるが、決定権はＧＭの小津にある。

すでに監督提出期限は、目前に迫っている。

決断の時間だ。

小津がすくと立ち上がった。

「吉田や」

「いやいや村山に最後のチャンスを」

支援者たちの選挙運動ははてなく続くが、小津は耳を貸す素振りもない。

「藤本さんに頼もうと思う」

吉田でも村山でもない、意外な名前に、球団事務所は静まり返った。

「藤本？　あんな若造の控え二塁手に監督やらすんですか？」

関西の気風らしく、小意気なジョークが帰るが、笑いは起きない。

「吉田も村山も藤村さんも統率できるのは、藤本さんしかいないやろ」

藤本定義。阪神と巨人、両球団の監督経験のある史上唯一人の男。

そして、阪神を2リーグ分立後に、二度優勝させた監督もこの男の

みだ。

「三原さんや水原さんの上で監督をやり、川上さんをテツと呼び捨てにできる男が我が阪神にいるんや。利用しないでどうする」

さすが、江川と小林のトレードを成立させ、ポンコツと化した田淵を真弓や若菜といった若武者に替えた男。目の付け所が違うのだ。

それでも、吉田と村山を押す声は収まらない。阪神球団は、吉田派と村山派で二分されているといってもいい。二人を中心した主導権争いが、戦後の阪神の歴史といっても大げさではないほどだ。

二人の処遇を間違えると、チームがガタガタになる可能性がある。それを案じていた小津は、ある一案をていした。

「吉田を野手キャプテン。村山を投手キャプテンで考えている。どうや？」

両派閥を押さえ込む見事な折衷案であったが、場はそれでも収まりきらない。

「吉田にキャプテンはムリや。あんなセコイおっさん、選手がついてきいひん」

すかさず村山派の罵倒が飛ぶと、

「村山はあかん。プレーイングマネージャーを投げ出した男や。キャプテンも投げ出すに決まってるわ」

吉田派がやり返す。はたしてこれでまとまるかどうか。先が思いやられる次第で…。

ＷＢＣ監督候補の啖呵

「ワシを監督にするのか、しないのか、どっちなんや」
星野はソファーに腰を下ろしたまま微動だにしない。その手には味噌カツバーガーが強く握られている。阪神に雇われた身ながら、心は名古屋にありますという彼独特のパフォーマンスか。
「星野くん。君は中日のＯＢ会から除外されている身だ。いまさら、どの面下げて、ドラゴンズの監督になりたいというのかね」
「選手なら中日。監督なら阪神か中日にしかなれない。そういう大会なんですよ！　阪神から監督のオファーがないのんら、もう中日しか、僕が監督になる目はないんです！」
脅し一辺倒ではないのが、相手の懐に入り込む星野の上手さだ。規律をかざし、論理的に攻める。
「この僕以外に中日の監督に勤まる人物がいますか？　あなたたちが高い評価をくだす落合の心はロッテですよ。三冠王を三度とったロッテで選手としてプレーすると僕の耳には入っている。ならば、高木守道ですか？　優勝してないでしょ、あのおっさん。ウォーリー（与那嶺）にやらせますか？　ダメダメ、あの人も、巨人でプレーできると、はりきってる。それとも近藤貞雄。僕をＯＢ会から除名したジイさんにでもやらせますか？　優勝たった一回、それ以外は、オールＢクラスのワシの親友コージ並の監督ですけどね。ウハハハ」
星野は強気だ。中日監督としての実績は、他の候補者と比べて、圧倒的にリードをしていると自負をしている。
それでも中日のＧＭである西川順之助（現・球団社長、星野を中日追放に追い込んだ人物といわれる）は冷静。
「天知さんがいる」
西川がつぶやくと星野の顔色が変わった。
「天知さん？」

天知俊一。中日で唯一、日本一とリーグ優勝を同時に達成した監督であり、星野の明治の大先輩でもある。

思わぬ名前に、星野はとまどいを隠せない。

「天知さんですかい…」

旗色が悪くなると、途端に言葉数が少なくなり、決断力がにぶるのも、これもまた星野の特色である。

腕組みをして、貧乏ゆすりをしても言葉が出ない。出直して作戦を練り直すと、星野は急に立ち上がり、

「ワタシが監督になれば、あのＴＯＹＯＴＡも協力したいと申してる。この不況でスポンサーとれる監督は、ワタシと王、長嶋くらいですよ。それも頭に入れておいてください」

と捨て台詞を残し球団事務所を後にした。

監督選びが紛糾していたのは、横浜も同じだった。

「三原さんに決まりだろう。昭和３５年奇跡の日本一の立役者だ。戦力に劣る横浜を優勝に導ける監督は彼しかいないよ」

「それが三原さんは、引っ張りだこでして……。ライオンズやスワローズ、バファローズの監督はおろか、球団社長を務めた日本ハムから、ＧＭの依頼まであって、とにかく連絡もつきにくい状態なんです」

「なら、権藤さんはどうだ？　彼も日本一監督だ」

「権藤さんは投手偏重すぎます。野手陣をまとめられる素養がありませんよ」

「秋山ｌ土井のバッテリーもダメ。監督としては問題外。古葉さんや森さんもうちでは失敗している。三原さん以前は古すぎる。なら１０００勝監督の別当さんか……。これもダメだな、１０００勝っても、優勝が一度もない」

「近藤さんに…」

「貞雄か、昭仁か、どっちの近藤だ？　無闇に盗塁死の山を築きた

いのか、闇雲にスクイズ失敗を笑われたいのか」
「いっそ大矢くんに……」
「冗談だろ」
「いやいや、冗談ではありませんよ。ただでさえ、大魔神佐々木に、あそこがイタイ、ここがイタイの平松と、ひと癖もふた癖もあるメンバーばかりです。大矢くんなら、なんとなく、まとめられそうな気がします。人柄がいいですからね。一応、当時の弱小ベイを二位に押し上げた実績もありますし、９８年日本一の下地を築いたという印象も世間にはあります」
「性格なら、山下大ちゃんでいいじゃないか。慶応のプリンスだぞ。プリンス。実家も金持ちで、心の刺がない」
「それはさすがに…。連続最下位の監督は…」
「それもそうだな。三原さんに引き受けたもらえるのが、一番なんだが…」

一方、監督もＧＭもあっさりと決まった球団もある。
ファイターズだ。

「ハリがな、親分が監督もＧＭもやれいうんだ。いつも偉そうに喝だのあっぱれいってるオレたちが、失敗するのも成功するのも職業野球の華だ。とかいいやがるんだ。ま、オレもそれもそうだなとその気になってだな、ＧＭも監督もどっちもやるのはくたびれるが、これもお世話になった野球への最後のご奉公ってことだな。まあ、スモールとかセットアッパーだがなんだか、最近の野球はようわからんから、ヒルマンでもコーチに入れて、そっちに面倒なことはやらせてだな。オレはベンチで、どっかと座ってだな、選手に睨みきかせるよ。オレの鋭い目が光ってりゃあ、ハリも大杉も現役の時のような手抜きはできねえだろ」

各球団の組閣は続く。

ええでにＩＤに傲慢なオーナー

オリックスの歴史には三人の優勝監督がいる。西本幸雄、上田利治、仰木彬である。

「近鉄の監督？　ないない。あそこは西本さんで決まり。ライオンズで選手？　セカンドは辻がいるでしょ。片岡とかいうのも出てきてる。そうなると、ボクなんて出番ないよ。となると、そうだね、オリックスで監督となるかな」

「マスコミの皆さんによく書いてもらいたいことがあります。仰木さんの日本一は何度ですか？　ワタシは三度も日本一になっております。人気とか知名度とかに流されずに、そういう大事なところを書いてくださいよ。あと、エエではないで。ワシは、イイで、とはようういうが、エエでとは、ただの一度もゆうたことがない」

オリックスの監督につくのは上田か？　仰木か？　日本一の実績は、三度の上田に軍配が上がるが、人気は仰木の圧倒だ。イチローのハートをつかんでいることも仰木にとっては大きい。

ロッテは大映やユニオンズを内包して挑む。

「金田さんがスワローズで投手一本でやるのはウチにとって幸いですね。ねえ、瀬戸山さん」

「そうですよね。あの人が監督になると色々とうるさいですからね。重光ジュニアオーナー代行」

「ウチを日本一にした監督は三人です。そのうちの一人、金田さんは消えました。さらには湯浅監督がいますが」

「古いね。なにせ昭和２５年の日本一ですか。かくいうワタシもよく知らない」

「最後の一人は」

「あの人だね。いいんですか？　あの人に頼んでも。瀬戸山さん」

「仕方ないでしょう。監督として残した実績と人気は、ウチではダントツです。少々ギャラは、はりますが……」
「あの男に依頼するなら、サブローの四番とベニー小宮山偏重は厳禁と契約書に書いておいてくれ」

そしてヤクルトといえば、野村がまっさきに浮かぶが…。
「関根さんに頼もうか？　選手には、ノビノビとプレーしてもらいたい」
「本のタイトルが、一勝二敗の人に監督やらせますか？」
「じゃあ、広岡にするか、野村にするか、若松の兼任もあるな」
「ウチの場合、兼任はちょっと……。古田で懲りてますから」
「野村にやらすか」
「野村はムリです。ホークスでプレーすることが決まってます。城島にホンモノの捕手のリードを見せつけてやるわと意気込んでます」
「じゃあ広岡か。広岡も巨人のレギュラーショートで出るんだろう？」
「川相もいますし、二岡の打撃も広岡以上です。若武者坂本もいます。戦前派ながら、逆シングルの白石という名手もいます。他に河埜兄やら黒江やら多彩なメンツがいます。巨人は広岡にこだわなくても、十分なチーム作りができます。火種になりそうな広岡をあえて入れる必要もありませんし」
「それなら、広岡に頼んでみるか。打倒巨人に燃えてくれるだろう」

広島は排他的なくせが出る。
「松田オーナー。古葉さんしかいませんよ」
「古葉はダメだ。慶彦もダメだ。二人は、広島を裏切ったんじゃけ。二度と広島の土を踏まさせんぞ。阿南に、コージ。候補ならいくらでもおる。二人とも立派な優勝監督じゃ」
「古葉さんも慶彦も先日のＯＢ戦で広島の土を踏んでおりますが…」
「……」

「市民球場もなくなりました。オーナーも過去を清算してください。ここは古葉さんにひとつ。広島を日本一にしたただ一人の監督じゃないですか」
「……。なら、ブラウンにやらせよう。アイツなら格安のギャラでも、喜んで働いてくれるだろう」
「オーナー……」

楽天も参加の意向を示していたが…。
「で、ウチはどうなんだい？　四年しか球団の歴史はないけど」
「戦力的に劣るとの判断で、近鉄の後続球団として扱われることに決定しました。つっまり選手監督も近鉄のユニフォームで出ると」
「近鉄の？　ダメダメ。とっとと近鉄のカラーを消し去りたいんだよ。楽天カラーを全面的に打ち出したい。四年の歴史でも立派な戦力があるじゃないか。マー君、塩川、一場…。なによりも、ウチには岩隈がいるじゃないか」
「近鉄出身です」
「ノリも来た」
「近鉄出身です」
「礒部とかいうのもいた」
「近鉄出身です」
「いいよ、いいよ。野球にはたいして興味ないから。宮内さんに頼まれて仕方なく球団持ってるだけだから。勝手にやってよ」

大矢で悪いか

オファーが殺到していた三原の記者会見が行われることになった。ライオンズの監督か？　横浜の監督か？　はたまたサプライズがあるのか？　三原の胸中は？

情勢は、三原の第一声が発せられる前に決していた。三原の横には、根本陸夫がいた。

ライオンズＧＭ兼管理部長、根本陸夫。球界史上に残る寝業師だ。

「わたくし、三原修は、本日ライオンズの監督就任を受諾したことをここに発表し……」

三原のライオンズ監督受諾は予想の範囲内であったが、サプライズは別に起こる。

三原を落とした根本が、西武だけでなく、なんと二球団のＧＭを兼務していたのだ。ライオンズとホークス。福岡と歴史を結ぶ因縁のライバル球団のＧＭを兼務だ。超法規的措置。中内功、孫正義、堤義明の三者会談によって、ことは決まった。この三人に宮内、ナベツネのお許しがくだれば、否応でも野球界は動く。

三原のライオンズ監督就任が決まり、慌てふためいたのが、横浜の球団事務所だ。

「いっそ大矢でも」

冗談とおぼしきセリフがにわかに現実を帯びてくる。ダントツの最下位でも続投した大矢が、歴史的大会の監督にもなる。

はたしてファンは許すだろうか？

「やはり権藤に頼もう。権藤に野手出身の有能なヘッドコーチをつければなんとかなる」

「誰かいますか、適任者？」

「青田昇。巨人のイメージばかり先行するが、三度の本塁打王はウチでとったものだ。ヘッドとしても有能で、阪急や阪神を優勝に導

いている」
「ウチで監督経験もありますね」
「問題は、権藤や青田が選手として使えることだ。動ける体を手にいれたんだ。プレーに色気を出すのが自然の摂理。三原さんのように断られたら、それこそ大矢の出番だ」
「大矢だけで力不足なら、大矢、山下、近藤昭仁のトロイカ体制でいきますか」
「全敗もあるな、こりゃ…」

「城島とノムのどっちを使うかって？　そんなもん。実力のあるほう使うわ。どっちが実力あるかって？　そんなもんワシは知らん。城島なんぞ見たこともないからな。顔もよう知らんな。何？　ノムより男前？　そうか、そこは勝ってるな。ウハハハ」
豪快に笑い飛ばすのは、ホークスの監督に就任した鶴岡御大だ。
実の息子がマリナーズのスカウトを勤めていることもあり、実は城島の情報は逐一入っている。
つまりは、野村か城島、どちらを使うのかは、すでに決まっているはずである。そんな素振りも見せずのたぬき親父ぶり。
さすが三大監督の一人である。

そして、東京ドームの監督室に妄想を練る男がいた。
「捕手が森さんかなあ、いやあ、慎之介もいいぞ。あいつの打撃は、森さんを圧倒している。一塁は王さん、三塁は長嶋さんで決まりだな。ＤＨは川上さんを起用しないとなあ。ボクの出番ないなあ。しかたない監督に専念しよう」
監督の就任依頼を受けてもいないのに、原は大会の構想を練っていた。

監督室をノックする音がした。

「清武ですが」
清武ＧＭのお出ましだ。原は胸の高鳴りを抑えつつ、あくまで冷静を装い、
「どうぞ。何の御用ですか？」
と簡素に応じる。
その時、原の脳裏には、すでに、就任挨拶の文句がかけめぐっていた。

「失礼します」
清武が監督室に足を踏み入れた。
「実は、監督に相談したいことが…」
原の目は野望に満ちている。巨人、ＷＢＣ監督に、歴史的大会のＪＷＢＣでまた巨人の監督。これ以上の地位を得たものが、野球人にいるだろうか？
ＯＮと比較され続けてきた罵倒され続けてきた男が、遂にＯＮを抜き去るのだ。
その瞬間が今一刻と迫っている。
「どうぞ…」
と、原は、わざとつっけんどんに清武を招き入れる。
清武は、いつもとかわらぬ、朴訥とした宮崎なまりで語りを始める。
「監督…」
いきなり、監督呼ばわりだ。依頼承諾の儀式の前にそれは、ネタばらしに通じる。
原はニヤけた顔を、つくろうに必死だ。
「なんですしょうか……清武代表…いやＧＭ？」
「相談に乗ってくれませんか？」
相談？　その内容はいわなくてもわかる。勿体つけずに、本題に入れと原は強く思った。
ところが、現実というものは思いどおりには進まない。
「川上さんと水原さんのどちらが監督の方が、選手としてやり易いですか？」
あれ？　あれれれ？　何かおかしいぞ。今、監督と呼んだのはなに？
「え？　え？」

原の目はみるみる涙に溢れてその顔は、精気を失っていく。

ボクへの監督就任依頼じゃない？

清武さんなら、きっとボクを選ぶはずだ。

清武の信念とボクの巧みなマネージメントこそが、巨人軍再生の理由ではないのか。

原はそうおもっていた。

世間やオーナーからの圧力にも負けずに、原を押し立てるとおもっていた。

「どうしたんですか？　監督」

監督との呼称は、あくまでも巨人軍の現役監督としてのもので、ＪＷＢＣの監督としてではない。清武のいつものクセが、原に早合点させたに過ぎないのだ。

原は虚ろだ。

いくらチャンスでポップフライを打ち上げても、キラリ眩しい前歯を見せつけた男が、虚ろになるのだから、ショックのほどが伺える。

「はい……。え？　何か？」

もう、言葉にならない。

それでも現実は現実として流れていく。

切り替えていこう。敗戦にうなだれる選手によくそう声をかけるじゃないか。まだ実績がたらないのだ。いくら三連覇と世界一の偉業を掲げても、川上、藤田、水原らには、まだ足元にも及ばないじゃないか。日々精進してこそ、道は開ける。第一回の大会に力及ばずなら、第二回の監督の座を射止めればいいじゃないか。

原よ自分を取り戻せ。

「そうっすね」

監督になって、そうっすねはない。威厳のかけらもないじゃないか。

「そうですね」
すかさず、いい直し。
清武は原の異変に気づいたのか、必死な弁明に走る。
「ワタシもね、本当は、監督を監督にしたくてね……。全ての権限は、GMであるワタシにある。だから、強引にでも監督を監督にしたくて…」
「清武さん。それ以上はいわないでください。ワタシも巨人に三十年近く身を置くものです。いわなくても、わかります。何があったのか、よくわかります」
原は清武を懐柔させた。原は、弱みを見せぬように、海老一兄弟の兄のように、精一杯目を広げたが、その目は赤く充血していた。
原の頭の中は、すでに犯人探しに移っていた。
ナベツネ？　正力？　日テレの会長？　川上派か水原派の手？
誰だ。誰なんだ？　ボクの監督就任を阻止したのは？
いや、誰が首謀者だろうといいじゃないか。ここは大人になるべきだ。相談にさらりと乗って、動揺した素振りを見せないのが、大人じゃないか。
「川上さんと水原さんですか……。あいにく、ワタシは、どちらの方のもとでも野球をやってない…。水原さんは、ワタシの師匠である藤田さんの慶応の先輩。川上さんは藤田さんを投手コーチとして重宝された方…。そうですね、どっちも素晴らしい野球人ですよ。ワタシの口からは、どちらが監督として上と軽々しく、いえないな」
原を上手く窮地を取り繕った。さすが何度も地獄を見た男だ。絶望からの身のほどこしかたを知っている。
貴重な意見を得た、参考にするといって、清武は席を立った。
別れ際、原と清武はいつものようにグータッチを交わした
清武の消えた監督室からは、原の深いため息だけ充満していた。

お知らせと、さらばサムライ野球

大会の宣伝部長が決定しました。

巨人　宮本和知
「ズムサタでどんどん取り上げていきますよ」

阪神　川藤幸三
「なにい？　ワシがベンチ外ってどういうこっちゃ。まあええ、バースと将棋の続きや」

中日　峰隆太
「今日は中日ことだけでね、ハイ。泰葉ネタは勘弁してくださいよ～…」

広島　募集中

ヤクルト　出川哲郎
「野球に関してはマジメにいきますよ。ボクは」

横浜（大洋）　大矢陽子
「えっと、あのその、噛まずに一生懸命レポートしたいと、お、おおお、思います…」

埼玉西武（西鉄その他）小倉智昭
「とくダネのオープニングトークで毎朝十分くらいやりますよ」

オリックス（阪急）パンチ佐藤
「久々に燃えてきましたよ～　イチローネタならボクに任せてくだ

さい」

北海道日本ハム（東映他）　山本モナ
「なんで私なんですか～？　私巨人ファンですよ？　二岡さんが背番号２３をつけた？　ニュース２３？　なんですかそれ」

千葉ロッテ（大毎、毎日、東京、高橋、トンボ）　古閑美保
「アタシ、ロッテの選手なんて一人も知りませんよ～」

近鉄楽天　藤田まこと
「近鉄なくなって野球は見ないことに決めたのになあ」

福岡ソフトバンク（ダイエー南海）　水島新司
「サードは岩鬼で、レフトはあぶだな」

以上大会本部からのお知らせでした。

原は失意のどん底にいた。
壁に貼り付けた仮想オーダーも今では虚しい。
一番センタークロウ　二番セカンドシノさん　三番ファースト王　四番サード長嶋　五番レフト松井　六番ＤＨ川上　七番ライトヨシノブ　八番キャッチャー慎之介　九番ショート二岡に×して川相を×にして坂本　投手　堀内恒
監督　ボク
監督　ボク、ぼく、僕……。

引っぺがそうと思ったが、思い直した。
まだまだチャンスがある。巨人の監督の座だって、二度のチャンスがあったじゃないか。

ＷＢＣだって、まさか原がやるなんて誰も想像してなかった。
だから、今回だってまたチャンスはある。
原はすくと立ち上がって、オーダー表を見直した。
おかしなところが一つある。
原をマジックを持って書き直した。
「クロウは暴露本でボクを小馬鹿にしてたな……。う～ん、バツだ。
センターは与那嶺さんにしておこう…」
監督はそのまま、ボクであった。

現役監督を排除するとは、最強のチームを云々

「ワシ以外に誰がいる。北京のリベンジの舞台？　この大会は、リベンジの舞台ではない。ハハハ。誰かさんのセリフじゃありませんが」

中日の監督の座についた星野は、終始ご機嫌だった。

「自分も登板するのかって？　もちろん、もちろん。ワタシは、中日の歴代三位の勝ち星をあげた投手ですよ。ワシが投げて、ワシが抑えて、ワシの采配で勝ちますよ。ウハハ」

当初、中日は、星野以外の監督を考えていた。

喧嘩別れのような形で中日を飛び出る。中日ＯＢ会から除外。北京でのお粗末な敗戦。強すぎる阪神のイメージ。そして、いまだに巨人監督の夢を捨てていないこと。様々な要素が、就任の妨げになっていた。

しかし、会見場には星野がいる。

「中日でリーグ優勝と日本一を同年に達成したのは、天知さんだけ？　そうですよ、落合のアレは、リーグ優勝さえしてませんから。ならば、天知さんが監督をやればいい？　もちろん、天知さんにも協力してもらいますよ。総監督としてね。ワタシの明治の大先輩でもありますから」

会見場の隅で、アンチ星野の急先鋒と言われる西川ＧＭ兼球団社長は、臍を噛んでいた。

監督を選ぶ権限は、ＧＭである自分にあるはずだった。

星野の見えざる力が、全てを土壇場でひっくり返したのだ。

総監督といえど、天知にさほどの権限はない。メンバー選考も、コーチ選びも星野の一手にある。

「落合？　いりませんよ。アイツがいなくても、十分戦えますよ。ドラゴンズ７０年の歴史から見ればねえ、落合なんてねえ、ちょっ

と打つくらいの選手ですよ。なら、一塁は誰だって？　谷沢？　谷沢はないでしょう。谷沢は」

星野は谷沢とも折り合いが悪い。中日の監督に就任したときに、現役続行を望む谷沢をムリに引退に追い込んだことも有名だ。

「大豊だっていますよ。なにより大豊は、谷沢と違って守備が上手い。外野じゃないんだから、ダイビングでカツラを飛ばすこともありませんからね。アハッハハハ」

大豊が一塁を守るようになったのは、落合がＦＡで去ったあと。その二年前から、着脱済みです。

「西沢だっていますよ。え、知らない？　不勉強ですなあ、最近の若い記者の皆さんは～。中日の永久欠番１６ですよ。Ｔ・ウッズが破るまで、本塁打と打点の球団記録を持っていた偉大な打者ですよ。そうだタイロン（ウッズ）もいるね。タイロンでもいい」

ただ無闇に谷沢を外すのもまずい。生え抜きの大スターであることには、違いないのだから。

世論から、反発を受けるのは、北京でこりごりだ。

「といいのは冗談で、もちろん谷沢ですよ。我が中日の一塁は」

さほど冗談でもない、だいたい本音です。

「投手の布陣？　もちろんワシ中心といきたいところだが、杉下茂という大エースがいらっしゃる。小松も孝政も源治（郭）も今中もいる。昌（山本）だっているからね。まあ、投手星野は、目立つ場面限定で起用しますよ」

中日シーズン勝ち星記録を持つ、権藤の名前はついぞ星野からあがらなかった。

権藤も反星野と言われる。

「ヘッドコーチは、もちろん島野さん。ブチもコージもいないから、コーチもベストメンバーですよ。ウハハハ」

最後、カメラの前で、大きくガッツポーズをとって、会見は終わった。

テレビのカメラにも、新聞のカメラにも分け隔てなくポーズを作

る。さすがに、星野。マスコミ操縦法を心得ている。
コーチも星野カラーで染められていた。悪く言えば、イエスマンたちである。
だが、投手コーチに驚くべき名前があった。
近藤貞雄。
ＯＢ会から星野を除名した張本人である。
星野の渡した組閣リストには、明治大学の後輩高橋三千丈（プロ通算六勝）の名前があったが、西川が、直前に差し替えたのだ。
星野の暴走を食い止めるのは、この男しかいない。と西川が送り込んだ刺客である。

日替わりオーダーから見える明日　西岡欠場遊撃塀内

「イイデスカ？　カネダさんは、スワローズで投手でプレーするソウデス。ニシモトさんは、近鉄の監督をするソウデス。ユアサさんとノウニンさんは、放棄試合をしたスエに監督をヤメタヒトみたいですネ～　ヤマウチさんは、前期の優勝しかシテマセン。監督はワタシしかイマセンネ～。セトヤマさん？」

「ですから、こうして依頼しにきたんじゃないですか」

「ＯＨ～　シツレイ、シツレイ。ソウデスカ、ワタシが、マリーンズの監督に！？」

ボビーは、お得意のおどけたポーズを見せる。

「２０１０年からの契約延長のオハナシと勘違いしてました。ドウモスイマセン」

ミステイクてな感じで、額をポンと叩く。

「ただし、色々と条件があります」

瀬戸山は、ボビーに英語で書かれた契約書を見せる。細かい字で、びっしりと何十ページにも及んでいる。

ボビーは、ふんふんと頷きながら、随所まで読み込む。

契約書の先頭には、一際目立つ書体で、大会の基本理念が書かれている。

すべては、名誉だ。

仕事の価値は、金額で決まるという考えを持つボビーも大会の趣旨には納得している様子だ。

ただし、引っかかるところがあった。

サブロー四番、ベニーをメンバーから外すという要綱だ。

ボビーは、眉をきつい八の字にして、まくし立てた。

「イイデスカ？　ベニーは、マリーンズ史上に残るプレーヤーデス。

リー、アルトマン、ヒロタ、ヤマウチ、ニシムラ、ベットウらレジェンドな存在の外野陣にヒケをトリマセン。先のリー、アルトマン、ヤマウチに加えて、オチアイ、マリーンズの歴史には、特別な四番打者が多くイマス。それでも、四番サブローというファクターは、数々のアイデアから、外すことはデキマセン。戦術のアイデアのレパートリーは、多ければ、多いほど、チームは勝利を手にすることがデキルのデス」

「そうですか。では、この話はなかったことに……」

瀬戸山が席を立つ。ボビーの目の色が変わる。

金には替えられない名誉と、特別な大会だからこそ得られる興奮。常に表舞台に立ちつづけたいボビーには、魅力的な代物だ。

「セトヤマ、ストップ」

瀬戸山を引き止める。

「コミヤマを敗戦処理で起用するコトはイイノのデスね～？」

「いいですよ。小宮山が勝ち試合の継投からあぶれるほど、マリーンズの歴史には凄い投手が溢れかえっていますから」

瀬戸山の許しを得たボビーは、これまたお得意のスマイルを浮かべる。

「ＯＫ、ＯＫ～　イイデショウ。引き受けマショウ」

もちろん、小宮山の起用法で、気が変わったわけでもない、最初から、やりたくてたまらなかっただけなのだ。

小宮山は適当な理由付けに使われたのにすぎない。

ボビーは、素早く契約書にサインをして瀬戸山に渡した。

これが、契約延長のサインなら、数億の金が入る。

だが、これは名誉を得るためのサインなのだ。

選手に選手の、監督には監督の、全員一律のギャラしか支払われない。

ボビーはそれでも満足だ。

マリーンズ監督、ボビー・バレンタイン、ここに誕生。

退席するとき、ボビーは難しい顔で、いかにベニーをメンバーにねじ込むか考えていた。

「ベニーは三割三十本デスヨ～　オオツカも使いたいデスネ～　コサカは、クライイからイリマセン……」

契約社会のアメリカでは、契約が全てである。

それでもこの男、自分が好きなようにひっくり返そうと、あらゆる手段を案じている。

コラムニストフッくん

父ちゃんのオフは、いつもアニメのＤＶＤ三昧です。今日も朝から、アニメづけ。テレビの前から、一歩も動きません。

「電話よ」

母ちゃんが、電話と大きな声で呼んでも空返事です。

「ああ……電話……う、うん……」

しびれを切らせた母ちゃんが、父ちゃんの耳元まで行って叫びました。

「父ちゃん！！　電話よ」

ようやく気づいたようで、

「あ、はいはい、電話ね」

ようやく受話器の元へと、重い腰を上げました。

「まったく父ちゃんは……」

と、僕と母ちゃんは同時に言いました。

電話に出ると、父ちゃんは、

「ハイハイハイ、出場してほしい？　う～ん……」

父ちゃんは、ああ見えて、優柔不断です。物事を自分で決めることは、滅多にありません。

今日も、なかなか色よい返事ができません。

「ロッテねえ……。ロッテ……」

母ちゃんが、ジェスチャーで、父ちゃんに、指示を送ります。

父ちゃんは野球の試合では監督ですが、家では選手にすぎません。

ウチの家族の監督は母ちゃんなのです。

母ちゃんは、両手を掲げて、大きな丸印を作りました。

「出なさい、出なさい」

と父ちゃんだけに聞こえるように、小声で、口添えもしてます。

それを見た父ちゃんは、しぶしぶ、

「出るよ、出ますよ。ハイ、ハイハイハイ……」

ＯＫすると、父ちゃんは、受話器を置きました。
父ちゃんは、何を言うこともなく、大きくため息をつきました。
「ロッテで出るのね？　よかったじゃない。三冠王を取った時代ね。でも、ロッテの監督さんは、バレンタインさんよね。あのお方、打つ順番をコロコロ変えるんでしょ？」
僕も母ちゃんと同じ心配が頭をよぎりました、
「そうだよ、父ちゃんが、八番とか打たされたらどうするの？」
父ちゃんは、急に饒舌になりました。
「ロッテ史上で一番打った打者は誰ですか？　オレだっつうーの。オレを四番以外を打たせる監督がどうにいますか？　いるとしたら、オレしかいないつうの」
とさっそくテレビの前に陣取った父ちゃんは、まくし立てました。
そんな父ちゃんに、母ちゃんは呆れて、
「体でも動かしたらどうなの？　ロッテ時代の全盛期の肉体に戻れるんでしょう？」
また、父ちゃんの口は重くなりました。
「ううん、いいよ、オレ天才だから」
そういうと、一時停止していたアニメのＤＶＤをまた再生しました。
父ちゃんは、その後、夜遅くまで、ＤＶＤを見つづけました。

僕と母ちゃんが寝静まったあと、父ちゃんの寝室から、おかしな音が聞こえてきました。
何の音だろう？　と気になった僕は、ベットを抜け出して、寝室をのぞきにいきました。
父ちゃんは、バットを振っていました。力強く、それでいて、きれいなスイングで、思わず見とれてしまいそうでした。。
僕たちの前では、何の素振りも見せなかったのに、スイングをしている、父ちゃんは、とてもうれしそうです。
父ちゃん、ああ見えて、とても恥ずかしがりやで、人前で、必死

な姿など見せな

呆れるほど長きカギカッコ

「あのねあののねあのののあねのあののね、ワシ達川じゃけんども、広島の正捕手は、ワシしかいないけん。西山？　彼はたしかにいい捕手ですよ。ワシより肩はいいし、ワシと違って、三割打った経験もある。捕手のクセして、まあ走らせたら、緒方や野村よりも速いんだわ。ただ、捕手に必要なのはなんでしょうかね？　あのね、捕手には、何よりも経験が必要なんよ、経験ですよ。経験。西山は一回しか優勝しておらんでしょうよ。しかもねえ、その一回の優勝の時、西山はまだぺーぺーでしょ。あのね、あのあの、その時のね、正捕手は誰か知っておりますか？　ワタクシ、ワシ達川なのよ。ワシは、五度も優勝を経験してるんですよ。カープは六度優勝してますが、ワシはカープの優勝のほとんど経験してることになります。まあ最初の二回は、水沼さんと道原さんつう先輩方がレギュラーで、ワシ、ほとんどブルペンでカベやってただけどもね。そんなことより、経験ですよ。経験。ワシの捕手としての大舞台の経験は、まあ広島の捕手で一番と思うけん。監督は、古葉さんでしょ？　古葉さんが、ワシ以外の捕手を指名したら、クソーと思いますがね、そこは、原監督じゃありませんが、カープ愛を持って、グッとこらえて。西山頑張れよ～。石原、お前成長したなあ～とかベンチで応援しますよ。ヨシヒコ？　まあたしかに、慶彦とワシは犬猿の仲じゃ。ダイエーの王さんにコーチとして呼ばれたとき、慶彦もおったから、ウソー？　思いましたよ。案の定、何度も慶彦と殴り合いのケンカをしてねえ、お恥ずかしい話ですが、そのうちの一度は、選手の前でもやりあった。それで、ダイエーのコーチを一年で辞めるわけですが、あの王さんだってね、コーチを勤めていた古賀さんと酒場で殴り合いやったそうですよ。何も、ケンカすることを肯定してるわけじゃないけん。チームを思って、真剣にやりあうことで、そういうことが、起きてしまうこともあることですわ。慶彦も参加予定？　ダイ

ジョーブ、ダイジョーブ、村田さんの肘直したのは、ジョーブ博士ですが。あのね、あのあのね、この前の市民球場の最後のＯＢ戦でね、ワシが捕手やってたとき、走者の慶彦が、ホームに猛然と突進してきたんです。それで、クロスプレーになってね、ヨシヒコとワシは軽く衝突したわけです。ベンチは真っ青になったと思いますよ。それでもねえ、ワシも笑顔、慶彦も笑顔。笑顔笑顔なの。いや、年月は、いろいろなものを洗い流してくれるのうと、しみじみ思ったけん。そうか、そうか、広島市民でまたできる？　といことはですね、あのあのあのね、ワシが落としたコンタクトレンズ、何度も何度も珍プレーで流れましたが、ワシが落としたコンタクトレンズを必死に探して、プレーが中断したいうの。アレ、ワシには、なんのギャラも発生しないのよ。フジテレビさんからは、珍プレー大賞とかいうのも貰いましたがね、その後は、何もないんよ。それはそうと、コンタクトレンズの話じゃ。世の中には、常識のウソいうのがありまして、落としたものは、見つかるていう常識もありますよね？　え、ない？　ないと話が続かないけん、ここはあったことにしてよ。それが常識のウソというわけで、コンタクレンズは、探しても探してもいっこうに見つからん。まあワシはこうしてメガネをかけておりますが、中井美穂ちゃんのダンナさんじゃないんだから、メガネかけて、捕手をやるのは、怖くてようできん。なんとかレンズをみつけてやりますよ。ははは、あのね、あのあのあの…」

延々と続くが以下割愛。

落合が送り込めし使者　トランザム？

出場を依頼に、榎本喜八が住む東京の自宅を訪れた男は、意外な人物であった。

榎本といえば、屈指の変人としられる。彼が耳をそっと傾ける人物は、球界広しといえども、その数は限られている。クリーンナップを組んだ山内一弘。高校の先輩であり、打撃の師匠である荒川博。他に、早稲田グループの小森一生、佃など、ごくごくわずかだ。

だが、その人物は、その誰でもなかった。

榎本に目をつけたのは、監督であるバレンタインであった。

フクーラと同じ左の一塁手で、しかも、フクーラより、どの部門を見ても打撃成績に秀でている。なによりも、四球の数が多く、すなわち出塁率が良い。まさにバレンタインの理想とする左打ちの一塁手だ。

バレンタインが榎本を気に入った理由はそれだけではない。歴史上、最も風変わりの男である点だ。

大会の趣旨は、日本の野球の歴史を現代に知らしめること。

この男のキャラを歴史に埋もれさせてはならないと、バレンタインは強い使命感を帯びたのだ。

ただバレンタインより早くアクションを起こしたのは、選手として参加することを決めた落合であった。自分の先輩であり、何よりも、昭和生れで二千本安打を放ちながら、名球会入りを拒絶していることも気になっていた。同じく名球会にそっぽを向きつづける落合が、シンパシーを感じないわけない。

さらに、求道者と呼ばれた打撃を生で見てみたいという、技術屋としての欲求にかられていた。

これまた自分と同じく変わり者の榎本。ヘソを曲げれば、出場を拒否するという事態もありうる。

落合はなんとしてでも榎本と同じチームに野球がやりたい。自宅の場所は知っている。賃貸業を営み生活しているという。

落合は自分が動くことを嫌った。

一選手でしかない自分が動けば、色々と勘ぐられる野球界。単純に面倒であるということもあるのだが。

落合は自分の代わりに、使者を送り込んだ。

「おい。久々だなあ。お前選手で出れねーんだろ？　こういう形でいいから、ロッテに貢献しろよ。頼むよ。じゃあな」

電話での会話は、それだけで終わった。

たったそれだけのぶしつけの依頼にも男は断ることはなかった。落合は打撃の師匠であり、ＦＡを行使するか、相談した恩人でもあるのだから。

榎本宅に送り込まれた使者の名前は、愛甲猛。

幾度もの失踪騒ぎもなんのその、いまや立派な会社員だ。

愛甲は、緊張の面持ちで、チャイムを押す。

榎本宅にチャイム音がこだまする。

はたして榎本喜八は、現れるのだろうか？

今回、銃は発砲しません

いくらチャイムを押しても、榎本の姿は見えなかった。

「留守かな？　出直そうか…」

愛甲が諦めようとしたその瞬間、榎本は現れた。

榎本は、冬というのに、白のシャツ一枚に、下はステテコのガラのパンツ一丁という姿で、庭先から現れてきた。

その手には、白木のバットが握られていた。素振りでもしていたのか、ところどころ汗をかいている。

愛甲をまるで不審者をみるような目つきで、ジロジロと見つめる。

「存じ上げますかどうかわかりませんが……。ワタシは愛甲猛と言うもので…」

思わず、名刺を差し出そうとするが、今日は自分の会社の営業に来たわけでない。

ロッテの一員として、榎本をスカウトしにきたのだ。

中学時代から名が通った不良。

殺人以外の悪事に身を染めたといわれ、三年夏甲子園優勝後、自らの不祥事で、後輩を出場停止に追い込んだ男。

地元逗子の警察の一日署長を勤めながら、数ヶ月後、その警察署に補導された男。

引退後、自らのステロイド使用を告白し、週刊誌から小銭を稼いだ男。

チームメイトの名前も語り、あんな人だとは思わなかったと、激怒された男。

失踪後のテレビ出演の直前に、またまた失踪して、芸能界からも追放された男。

そんな愛甲でさえ、縮こまる榎本の存在感。
強い意志を感じる太い眉に、屈強な肉体。とても７０を越えた老人にはみえない。
いくら愛甲が、榎本に挨拶しようとも、ただ頷くだけで、言葉すら発しない。
二人の間にただただ流れる重苦しい空気。さすがの愛甲さえ、異様な雰囲気に飲み込まれそうになっている。
ただこのまま帰るわけにはいかない。落合の頼みをむげにすることできない。
愛甲は粘った。

「愛甲？　どこかで聞いたことあるな…」
ようやく榎本が愛甲の存在に気づいたのは、二人が出会って十分が経過したあたりだった。
榎本が愛甲に近づく。愛甲は、昔取った杵柄からか、一瞬身の危険を感じ取ったが、それは取り越し苦労に終わった。
殺気がないのだ。それよりなによりも、気配すら押し殺している。むしろ、気配のなさは、殺気より手強い。
闇に生きるスナイパーになったら、きっと成功するだろうなと愛甲は思った。

榎本は、自分が握っていたバットを手渡した。
「もしかして、きみ野球の選手か？」
選手もなにも、プロ野球の選手で、あなたの後に、だいぶ時間はたちますが、一塁を守った男ですよと愛甲は、口に出したかったが、この男には、口で説明することは無駄だと思った。
ならば、目で見える形で、証明するしかない。
愛甲は手渡されたバットを握った。そのまま榎本とともに庭に出た。

頭の中では、走れコータローをモチーフにしたロッテ時代の応援歌が流れ始めた。

愛甲はバットを思い切り振った。

王を越える素質の持ち主と言われた男のスイングは、いまだに力強かった。

久々に体の中から溢れ出す快感に愛甲は思わず笑みを浮かべた。

「野球の選手だな。しかも、職業にしていた」

聞き覚えのある愛甲という名前と今のスイングで、完全に思い出すと思いきや、榎本は、

「あいにく自分以外に興味がないんでね。引退後の選手はようしらなんだ」

居間に通された愛甲は大会の概要と趣旨を説明し始めた。さすがに現役の営業だ。顧客への対応とくれば、こっちのもんだ。それでも榎本の感心は、すこぶる薄い。

「ほう」

時々、相槌を入れるのが、関の山だ。

一応の説明を聞き終えると、榎本は急に饒舌になるのだが、

「ワタシは、いまだに現役復帰を目指しているのですよ。さっきアタナとお会いしたときに、庭でスイングしていたのもその一環です。全盛期の肉体に戻れるいわれても、興味ありませんな。なにせ、今が全盛期というつもりで、日々鍛錬しておりますから……」

とあっさりと拒否の姿勢を示した。

ほとほと困り果てた愛甲は、榎本と同じく鍛錬の日々を送る、

「それじゃあ、村田さんと一緒ですね」

と村田兆治の名前を半ばやけくそ気味に出した。

「村田？　村田いうのは、ワタシの後輩の村田長治くんのことですか？」

村田は、旧名を長治という。

「そうです、その村田さんです」

「そうですか、村田くんもまだ現役とトレーニングをしているのですか。ワタシの十個くらい後輩ですから、もう六十になるのでしょうか。その村田くんも出場するの？」

「はい、もちろん。それも全盛期の肉体に戻って」

愛甲は、他の選手の動向など知るよしもない。だが勢いが大事だ。ハッタリでも押し通せ。

「そうですか。ならば、ワタシも全盛期の肉体に戻れないと不公平になりますね……。さっき、日々全盛期といいましたが、実は、恥ずかしいことに、若干の衰えは自覚しておりまして……」

「？　それなら、出場してくれると？」

「もちろん。ところで、監督は誰ですか？　濃人さんですか？　宇野さんですか？　本堂さんですか？　別当さんですか？　西本さんですか？　田丸さんですか？　それとも大沢さんではないですよね？」

榎本は自分の現役時代の監督をあげつらったがそのどれでもない。バレンタインというちょいとうさん臭いイタリア系の外国人ですといいたかったが、どうせいってわからないだろうなと思い、愛甲は辞めた。

愛甲は落合に連絡をした。

「あ、そう」

の一言だったが、愛甲にはなにより重かった。

どうでもいい箸休め　後に欠番になる恐れも

「どもギャオスこと、内藤です。イエ～イ」
「え～　パンチ佐藤です。お集まりになった八万七千のファンの皆様こんにちわ。仰木監督か上田監督か知りませんが、ボクの心はひとつです」
「坂東です。ほんまにもう、星野くん。ボクのこと使ってよ。ええフォーク投げまっせ」
「金村です。ノリなんか使うなら、是非ともボクを使ってください。西本監督」
「ベンチサイドリポートこと大塚です。日本シリーズ歴代最高打率が誰だか知ってますか？　ボクですよ、ボク。短期決戦なら滅茶苦茶強いんですよ。キヨのお守りもしますよ～」
「まいど～　でお馴染みの岩本で～す」
ここ神宮球場の寒空の下、大会のエントリーから漏れた選手が多数集まって、なにやらイベントが行われた。
オレをエントリーさせろと掲げられた応援幕には書かれている。
集まったメンツが、メンツだからだろうか、神宮の入りは極めて寂しい。横浜とヤクルトの消化試合でも、もう少し、賑わいがある。
しかも、ただダラダラと各自マイクパフォーマンスを繰り返してるだけ、これでは、アピールにもならない。
「元木です。長嶋さんにキヨさんにゴジラ、豊富にネタ持ってますよ」
「亀山です。現役時代と相当体型が変わりましたが、亀山です」
「金石です。……あ、あの、妻が陣内貴美子でおなじみの……」
「亀山に追い越されそうですが、香川です。ドカベンですわ」
「前田です。引退したばかりですか、二十四時間喋れますよ」
「ダンプこと辻です。自分でもなんで呼ばれたかわかりません」
さすがに集まった熱心なファンにも飽きが出始めている。

豪を煮やした大会特別ディレクターに任命されているテリー伊藤が、

「おい、お前ら、そこの二流選手のお前ら」

二流とののしられてた選手からはブーイングの連呼、タレント活動も多い彼ら、さすがにノリはいい。

「メンバーから漏れて悔しかったら、這い上がってこい」

と、ここで登場したのが、おなじみ熱湯風呂だ。

「熱湯風呂に一番長く入っていたものを、特別にメンバーとして推薦する」

これには、集ったメンバーは歓喜の連続。

西武代表大塚　オリックス代表パンチ佐藤　近鉄代表金村　ソフトバンク代表香川　ロッテ代表前田　日本ハム代表岩本

広島代表金石　巨人代表元木　中日代表坂東　横浜代表ダンプ辻

ヤクルト代表ギャオス内藤　阪神代表亀山

このメンツが、敗者復活？　での代表入りを目指す。

まさかの続き、作者の想像を越える展開

この企画の放送権利を、地上波に売ろうとしたが、当然どこも買い取ってくれずに、結局は、ＣＳ放送であるＪスポーツが引き取ることになった。受信できる地域が限られるが、ＣＳの特権と宣伝を考慮し、大会前を中心に、９８回～１０３回ほど繰り返して流すという。つまり、Ｊスポーツに替える度に、騒がしい彼らがいやでも目に入ることになるのだ。これは、これで困りごとである。

まず熱湯に飛び込んだのは、内藤である。はだかの上半身に「ギャオス」とたすきガケがしてある。

「おりゃあ～」気合を入れて、入湯したが、「うわ、あちひちひ～」思った以上に熱いのか、すぐに飛び出てしまった。

すかさず、側にあった冷水と氷で体を冷やす。

「テリーさん、本当に熱いじゃないですか！」

「当然じゃないですか～。この熱さに耐えてこそ、二流選手が一流になれるのですよ～」

亀山、香川と次々入湯するが、すぐに飛び出すばかりで、ろくな記録もでない。

ここで登場したのが、岩本だ。たすきには「まいどならぬエース岩本」とある。

「先輩方、情けないやないですか」と啖呵を切っただけあって、じっと熱さに耐えて、一分が経過する。

「どうですか、みなさん」と両手を上げて、アピールだ。

すると、針とメモリのついた怪しげな機械が、テリーの奥から登場する。

「ここで、これまたお馴染みウソ発見機。ハリが反応しただけ、風呂の温度が上がる仕組みになっています」

お約束のブーイングの連呼だ。

「ヒルマンが嫌いだ」

「いいえ」と岩本は答えるが、大きく針が動き、温度は上昇する。
さすがに耐えきれなくなった岩本は、浴槽から飛び出す。一分半に迫る好記録であったが、パンチ佐藤があっさりと更新した。ウソ発見機が登場するが、
「土井が嫌いだ」との質問にも、
「はい」とあっさり答える度胸でクリア。三分たったところで、優勝を確信したのか、
「上田さん、仰木さん、グリーンスタジアムで会いましょう」と自分から出る。
続く選手たちも、記録はでない。
「後輩の星野に先輩面されるのは、勘弁だ」「夜もクセ者だ」「いとこの金田賢一より、自分のほうがかっこいいと思う」
ウソ発見機の餌食になって消えて行った。
最後に登場するのは、ダンプ辻であった。タレント活動が多い他の選手と違い、ダンプはいかにも地味。
だが、ダンプ辻は、控え捕手として二十年以上プロで過ごしただけあって、我慢強かった。
「江夏が嫌いだ。ヒゲ辻が嫌いだ。田淵のリードはまるでなっていないと思う」などの尋問にも負けずに、あっさりと記録を更新してしまった。
なんと優勝はダンプ辻である。これまた地味な勝者に場内困惑気味だ。
「え〜　ダンプ辻さんが、エントリーされます。それでは皆さん盛大な拍手を〜」
この企画これでいいの？　との微妙な空気をある男が切り裂いた。
「テリーさん」
突然、現れた男は、ベイスターズの０９年からの新ユニフォーム（評判いまひとつ）に身を包んだ大矢であった。
大矢の登場に神宮球場は大歓声……ともいかない。まばらな握手と失笑が起きるだけだった。

「あらら？　これはサプライズゲスト、なんとベイスターズの大矢監督がお越しになっています！」

無理に織り上げようと、テリーが声を張り上げる。

二人は早稲田実業の先輩後輩だ。がちりと握手を交わすやいなや、大矢がマイクを奪い取る。

「え～　みなさん。こんにちわ。大矢です。我がベイスターズ・ホエールズの優勝経験は二度だけです。そのうちの一人である三原さんは、ご存知のとおりライオンズの監督になりました。もう一人の権藤さんは選手として中日でプレーすることに、色気を見せています。いまだ、我が横浜の監督の座が宙に浮いている状態です。現役の監督として、横浜を愛するものとして、これはとても悲しいことです。優勝監督がダメなのなら、二位の経験のある監督となるのが、自然の流れですね」

「大矢先輩、９７年に見事、二位に導きましたよね～」

テリーが見事なフォロー。

大矢が決意を込めるように、一息溜めてから、

「そこで皆様に提案とお許しを請いたいのです。もしも熱湯風呂で、ダンプさんよりも、いい記録が出たのなら，この大矢に監督を任せていただきたいのです」

この大矢の唐突のチャレンジスピリッツには、神宮もさすがに沸いた。

もちろん熱湯風呂に長く入れたからといって、どうなるわけもない。大矢の暴走であるのだから。

それでも、大矢はアピールと世論を味方につける絶好のチャンスだと思い、計画を実行に移した。

「そういう大矢先輩も、ヤクルトの捕手としてプレーできる実績と実力があると思いますが…」

「ええ、レギュラーになれるでしょう。それでも、今の僕は横浜の人間なんです。横浜愛にあふれているんです」

レギュラーは古田だろう？　皆さん心の中で突っ込む。

大矢は、ユニフォームの上下ともを脱ぐ。その下は、ベイスターズブルーの海パン一丁だった。ずいぶんなやる気である。

熱湯第１６話　とりかえばおおや物語

オーヤ！！　オーヤ！！　オーヤ！！

神宮に巻き起こる大歓声に大矢は右手を上げて答える。

この日の観衆、主催者発表で８０００。とはいえ、見た目どう見ても、６００～７００。平日開催の東都リーグの試合の方がまだ入ってるくらいだ。

大矢は意を決して、熱湯に飛び込む。浴槽の底に尻をつける、時計が動き出す。現在のトップは、ダンプ辻の記録した五分二十秒だ。大矢は、この記録を更新すれば、監督の座につけるのだ。

誰が決めた？　大矢が決めたのだ。

既成事実。

大矢の暴走。大矢の入湯。大矢の娘は、生で見ると、そこそこかわいい。

「あち……」

否応でも漏れる大矢の感想。耐えるのだ。耐えてこそ、栄光が輝くのだ。

慣れてくれれば、意外といけるじゃないか？　一分経過、二分経過……。待っていろ古田。待っていろ権藤。

最高の舞台でお前たちにリベンジだ。

そんな折り最終兵器の登場だ。

ウソ発見機。

テリーが、にこにこと、

「先輩覚悟してさい」

それが、地獄の尋問開始の合図。

「古田が嫌いだ」

「森が嫌いだ」

「権藤に手柄を全部持っていかれたと思っている」
「本当は、ヤクルトの監督をやりたい」
「恩知らずの相川に、愛しき娘、陽子はやれない」
「二年後、斎藤の入団会見。横にいるのは、自分である」
「首になったら、フジサンケイグループがまた雇ってくれるか心配だ」
「仕事をくれるなら、モノマネの審査員でもいい」
「ダントツ最下位で留任とは、刑期がもう一年残っている気分だ」
「早稲田実業～駒沢大学という経歴にコンプレックスがある」
「大下、石毛、中畑、野村謙二郎、広瀬、森繁、大宮、新井兄弟……と駒沢出身は、ヤクザか、バカな体育会ばかりだが、自分だけは違うと思っている」

矢継ぎ早に、容赦ない詰問が大矢を襲う。「いいえ」「いいえ」「いいえ」……。律儀な性格の持ち主らしく、ぶしつけな質問にも律儀に答える。

それでも、針は正直に大矢の心象を浮き彫りにする。針は左右最大限にぶれ動く。針の動きは、ボイラーに直結している。ボイラーが活発に動く。風呂の温度はどこまでも上がる。

立ちこめる異常なほどの蒸気。側にいるだけのテリーでさえ、汗をかきはじめる。

それでも、大矢は耐える。そんな大矢に、再びコールが巻き起こる。

オオヤ、オオヤ…。

今度のコールには、儀礼的、嘲り半分なものではない。正真正銘、大矢の行動が民衆を突き動かしたのだ。

４分半が経過する…。大矢の勝利は目の前だ。

ついに五分経過。誰もが大矢の記録更新を確信したその時…。

大矢はあっさりと浴槽から飛び出てしまう。

なぜ？　何故？　ナゼ？　ＷＨＹ？

まるで二位になりながら、解任（実際は契約切れで契約延長ならず）された97年の悪夢の再来のように、勝負は半端に終わった。

現実に戻った大矢は打ちひしがれる。

これで監督の座は遠のいてしまうのか？

だが、救世主が現れる。

大矢の健闘を讃えて、拍手をしながら登場する者は、ベイスターズ球団社長であっり今大会GMの佐々木であった。

「監督、感動しました」

「社長？　なぜこんなところに…」

「監督に頼たいことがあったもので…。神宮にいると聞いて飛んできたのです」

「頼みたいこと？」

「もちろん、JBC（ジャパンベースボールクラシック）の監督就任依頼です」

「！！」

物事は、大矢が何かをする前に決まっていたのだ。ただ大矢の行動は無駄ではない。彼の勇気が、幸運を呼び寄せたのだ。

大矢明彦監督ここに誕生。

だが、たいてい物事には裏がある。

大矢はあくまでも、とりあえずである。横浜にとって、監督大矢は苦肉の策であった。

大矢は候補の中の四～五番手にすぎない。

大会の規程には、負けた球団の選手監督は勝ち進んだ球団に転向することができる。ただし、現役選手、監督、コーチ時代の所属したチームに限る。

つまり、先に西武や中日が負ければ、大矢は勝ち進んでも、三原や権藤に取って代わられる可能性があるのだ。

大矢はこの事をまだ知らない。

大矢明彦暫定監督ここに誕生。

イチローいんたびゅ　インタビュアーは、義田か石田か（笑）

ーオリックスの監督に上田さんがなるようだけど？

「マジっすか？　ボクがオリックス入ったときに、編成部長かなんかをやっていたのが、上田さんなんですよ。上田さんには日本ハムの監督時代、さんざん狙われたなあ～。ボク、ハムとやると、なんかめちゃくちゃ打っちゃうから、よけいに（笑）　四割とか、五割とか。攻略法ないから、壊してエエデ（笑）　とかで、インばっかり攻められて。下柳さんには、肘にぶつけられて、シーズン絶望に追い込まれたこともありましたよ」

ーそれでは上田のもとではやりにくい？

「これがそんなこともない（笑）　監督なんか、誰でも出る気満々でしたから。土井さんでも？　って聞きたそうだなあ～（笑）　世間でいわれるほど、ボクら、仲悪いわけでもないんですよ。球場とかであったら、ちゃんと挨拶もして、手短ながら会話くらいしますし。だからといって仲がいいわけでもない（笑）　それで、仰木さんはどうするの？　近鉄の監督？　ライオンズで選手？」

ー近鉄の監督は西本さんに決定の模様。

「そうなんだ。仰木さん、もったいないな～　また監督やる姿見たかったのに。イニング毎に、セカンドだ、レフトだ、ショートだ、守備位置いじらされて困惑する田口さんとか、藤井さんに代打三輪さんとか、また見たかったのになあ（笑）」

軽口を叩くが、残念そうなイチロー。

ーチームメイトになる選手の印象はどう？　たとえば福本とか。

「福本さんかあ。一、二番組んでも、面白そうだし。センター福本、ライトイチローってなるのかなあ。福本さん、僕より足速そうだから、ライトのボールでも任しちゃおうかなあ（笑）　マリナーズだと、センターのボールも僕が取らないとならない（笑）　盗塁されると気が散る？　いやいや、遠慮しないで、どんどんやってくださ

い。これが世界の福本の足かあって、打席という特等席で、じっくりと観察しますから。積極的な打撃が信条なボクでも、そうなると打たない（笑）　いいボールが来たら？　そんときは打っちゃいますね（笑）　福本さんが、手から滑り込むのは、あかんと言いながら、華麗にスライディングしているのに、ボールはライトスタンドに一直線（笑）　そうそう福本さんといえば、これまた僕の新人のときの監督。もちろん二軍のですよ。一軍は例のあの人（笑）　って、さっき名前出しちゃったけど（笑）　こういうことというから、誤解されるんだって土井さんに言われそうだ（笑）　まあ、福本さんの監督っていっても、解説、あのままの人だから（笑）　面白い大阪のおっさんってイメージしかない（笑）」

ー対戦したいチームは？

「もちろん中日。ボクが子供のころ、ナゴヤ球場で見たスターが勢ぞろいですもん。田尾さんに、大島さん、星野さん…。楽しみだなあ。ボクの打席で構えるときの一連の動作。アレ、実は、田尾さんのそのままなんですよ。……あれ？　なんで意外そうな顔しているの？　……もしかして、星野さんの名前を出したから？　世間じゃタブーと思われていても、僕の中じゃタブーじゃない（笑）　今の星野さんじゃなく、全盛期の星野さんが見れるんでしょ？　ってまた誤解を招きそうな言い方だな（笑）」

ー巨人から、松井も参加予定だ。

「へえ～　出るんだ。ＷＢＣは出ないのに。まあ、体調とか、日程とか、関係ないものねえ。それに、ＷＢＣと違って、ボクとチームメイトになるわけじゃないし（笑）　王、長嶋、松井の、スーパースター、スーパースター、スーパースター？　のクリーンナップですね（笑）　松井もスーパースターかな？　ボクが判断することでもないか（笑）」

ー最後に意気込みを。

「やるからには、絶対に勝ちます。勝負どうこうでなく楽しみたいとかいうのが、もしチームにいたら、先輩でもぶっ飛ばします。WBC以上に興奮させますよ。期待しまくってください」

以上、イチロー特別インタビューでした。

ビッグステーキ打線　西浦ブルッグスウィルソンその他

東京高輪プリンスホテル飛天の間に開設されたドラフト会議会場には、すでに、十二球団のフロント、監督、関係者が集まっていた。

このドラフトは、金本、江夏、大杉ら、数球団で活躍し、各球団から、出場要請が来ている選手をめぐって、泥沼の争奪戦に発展することを憂慮して、緊急に儲けられた会議である。

また、落合のように、ロッテ、中日、巨人で、活躍しながらも、そのうちのロッテのみからしか要請のないような選手は、ドラフトと当然、無関係である。

まずは、金本の抽選に入る。広島と阪神、両球団の一騎打ちだ。

広島から、くじを引くのは、第一期監督時代に金本をドラフト指名し、第二期時代に、ＦＡで逃げられた山本浩二だ。

一方の阪神は、中村勝広が壇上に登った。

阪神の監督時代に、松井をはずし、ＧＭ監督などを勤めるオリックスでも、辻内、中田と連敗続きだ。ところが、だからこそ、そろそろ当たるころ…と、妙なポジティブ思考で、くじ引き代表に選出された。

広島時代の金本といえば、トリプル３を記録したことからわかるように、三拍子揃った（打撃、本塁打、そして盗塁。三拍子めは守備ではない）選手。阪神時代は、０５年のＭＶＰ、０４年の打点王と主砲としての働きが目立つ。

最初にくじを引くのは、該当選手が先に所属していたチームだ。

広島代表の山本が抽選箱に手を入れる。

次に、中村がくじを引く。

クジを係員に手渡す。封を切ってから、また両者の手元に戻す。

先に中身を確認したのは、中村だ。無反応。

これをみた山本が、中身を見る。無念そうに、首を振る。どうや

ら、外れくじのようだ。
それを見た中村がようやくガッツポーズ。辻内のときの教訓（早とちりで当たりと勘違い）から、判断には慎重に慎重を重ねる。

「解説の小関さん。（ドラフト会議倶楽部会長）　金本は阪神です」
「地元出身の選手をじっくりと育てて、ＦＡで持っていかれたのに、ここでもまた持っていかれる。いやあ～ドラフトは、なんつうか、非常ですねえ。だっから、面白いんですが」

次に抽選は、小笠原をかけて行われる。小笠原は、日本ハムに長く在籍し活躍した選手。０７年にＭＶＰをとるなど、連覇に貢献したとはいえ、巨人在籍は、たったの二年だ。当然、残した実績、在籍年数からでも、感情的にも、日本ハムに、出場要請の権利があると考えられれいた。
それだけでなく、なにせ、巨人には、小笠原が守る一塁と三塁に、ＯＮというスーパースターがいるのだ。小笠原にわざわざ出場要請する必要性はどこにも感じられない。それでも、巨人が、あえて出場要請したのは、ベンチを厚くするだけでなく、他球団の戦力を削ぎ落とすためだと揶揄されている。巨人の清武ＧＭは、ＯＮとポジションを争える選手の争奪戦に参加するのは、勝つために当然過ぎる戦略、とこころにもないことを主張するが……。
日本ハムは、大沢監督が自らクジを引く。巨人代表は、小笠原をＦＡで獲得したことと相思相愛の大田を見事引き当てたことを評価されて、原だ。
原は、内心、ポジションのかぶる小笠原が巨人に来れば、ますます自分の出番がなくなると危惧している。それでもジャイアンツ愛だ。ただチームのためを思って、くじを引く。
結果、クジを引き当てたのは、大沢日本ハムであった。

「小関さん、小笠原はハム」

「これは当然の報いですよ。小笠原は日本ハムの選手ですよ。神様っていうんですね」

大喜びで日本ハムのフロントが陣取るテーブルに戻る大沢の一方、くじを外した原は天を仰ぎ、何やらつぶやくくている。ただこれは、巨人フロントとと世間に向けた一種のパフォーマンスだ。その実内心では、ああ、よかった、くじ外して。ボクの出番がなくならないで、ああ、よかった。といつになく前向き？　だ。

小笠原に対して、メッセージを送る余裕もある。よりによって外れくじの余白の部分に「ガッツ、今回は縁がなかったな。日本ハムで、ビッグステーキ打線再来の一翼を担うことを期待してるぞ。それでは、ＷＢＣ・ペナントでシーユーアゲイン！（正しい使い方を覚えた？）」と、ビッグステーキ打線という自らが提唱しながら、まるで定着しなかった呼び名を、いまさらながらに堂々と使う度胸も見せつける。

ハムは勢いにのり、ヤクルトと競った大杉も手に入れる。これで、張本、大杉、小笠原の強烈な打線が組めると、大沢は、高笑いだ。「ビッグバンならぬ、暴れん坊打線の再来だな、こりゃ」

目玉の抽選に入る。江夏である。江夏の全盛期といえば、阪神時代だ。ハムや広島も、彼を欲したが、江夏が阪神以外では投げないといえば、あっさりと手を引くつもりであった。ところが、江夏は阪神以外で投げてもいい、といいだしたのだ。

これには、阪神のメンバー構成が影響されている。江夏をトレードに出した吉田が、野手キャプテンとしてベンチ入りし、江夏と殴り合いになった金田正泰が、コーチとして入閣されると予想されるからだ。

これを察知した大沢が攻勢をかけた。

「おい、エナツ、オレのところに来い。阪神と違って、ハムはノビ

ノビできるぞ」

同じく広島からも、

「津田、大野にキミがいれば、鉄壁のリリーフ陣が組める」

と古葉が口説き落としに馳せ参じ、さして活躍していない南海から、野村までも、

「江夏よ、お前を抑えとして再生させたの誰や?」

と来れば、なんと干していた西武までも参戦だ。

「広岡が使わなかっただけ。使えば、西武時代の江夏の才覚でも、十分活躍できますよ」

と三原マジックの宣言だ。

所属していた五球団によるくじ引きが始まる。

「小関さん、どこが江夏を引くと予想されます?」

「ハムや広島で、抑え江夏つうのも見たい気持ちはありますが、心情的には、やっぱり阪神の江夏ですよ。スケールがあって、球にボリュームがあって、僕の大好きなタイプの左腕ですから」

古葉、大沢、野村と江夏を使いこなした猛獣使いならぬ当時の監督たちがくじ引きの舞台に挑む。西武はGMの根本が引くようだ。残る阪神は意外な人物がくじを引く。江夏の入団時の監督でもある藤本が引くのでもなく、尊敬する村山が引くのでもなく、なんと犬猿の仲とされる吉田がくじを引くようだ。

「ハイハイ、そこどいてえな。ワタシとおりますから」

とクセの強い京都弁を携えて、ひょうひょうと登場だ。

記者会見場で抽選を見守る江夏も、吉田の行動に苦虫を噛み潰すばかりだ。

はたして、江夏はどこの球団が独占交渉権を獲得するのか?

運命のドラフト会議後半

江夏のくじ引きも、所属していた順番に行われる。
先頭打者は阪神。吉田がにたにたと、おフランス流の笑顔を浮かべ、
「届きますかな」
抽選箱に手を突っ込む。
「お、届きましたわ」
「あれこれ考えずに、届いたクジ取りましたわ。うへへ」
と相変わらずの人を喰った所作。モニター越しの江夏も苦笑だ。
野村、古葉、大沢が順番にくじを引く。ただ最後の根本だけは、抽選箱にさえ近づかない。
特別係員の促されても、
「残りくじを引くをわざわざ必要はない。無駄な作業は非効率」
との持論を展開。結局、根本が引かずに、係員が取り出して、開封。

野村南海？　違う。　野村は無念そうに首を降る。
古葉広島？　これも違う。
大沢日本ハム？　違う。
根本西武？　表情を変えないが、違うようだ。
吉田阪神？　これだ。
「当たってしまいましたわ。うへへ…」

全盛期の投球ができるとはいえ、江夏は複雑だ。マスターズリーグでも、吉田を嫌い、わざわざ大阪のチームでなく、東京のチームに所属した経緯もあるくらいだ。
報道陣から一斉にフラッシュを浴びせられた江夏は、
「自分は、プロですから。投げろ、いわれたら、どこでも投げます

よ」

と、あっさり出場は認めたが、表情は硬く、顔には汗が滲んでいた。

巨人は、小笠原にオファーした一方、張本、金田、清原、落合、ローズら、巨人でもそれなりの活躍した移籍選手には、出場要請をしていない。

「彼らには、他球団を盛り上げてほしい」

と、清武はみえすいたことを語るが、どうやら扱いづらい選手をわざわざ取りにいく必要がないという背景があるようだ。

たしかに、ＯＮら生え抜きに、このメンツが加われば、戦力的にも、興行的にも、魅力は十分だが、まとめる方は一苦労だ。落合が清原が張本がベンチウォーマーとして控えている。戦力に厚みというより、誰が座りたいだろうか、そんなベンチに。

阪神は、新人ドラフトで見せないヒキの強さを見せる。

ロッテと競った小山、ハムと競った新庄と連続に当たりくじを引き当てる。

小山は村山と両輪を組んでいた大投手であるが、両雄並び立たずの言葉どおり、二人の仲も微妙だ。

新庄もメジャー行きしてから、阪神とすっかり疎遠である。

打撃より、守備の戦力としての獲得と考えられるが、遅刻をした新庄を長時間正座させた藤田平とベンチをともにすることになる。

江夏、村山、吉田、新庄、藤田……。戦力的充実は図れたが、お家騒動必死な面々である。

その一方、ベンチにも入れないのが、江本である。南海、阪神、どちらから、要請があると思いきや、いまだ、色よいオファーは届いていないようだ。両球団で、エースクラスの働きをしたが、その分、負けも多く、半端な存在と見られたのか。

「あいつら、オレを無視しやがって。解説でボロクソにいうたる」
と沢田亜矢子の娘似のひきつった笑顔で、毒舌全開を宣言だ。

巨人軍最高機密会議　我らの原さんもいるよ

「キャッチフレーズなににしましょうか」
ジャインアツ愛。ジャイアンツ愛。ジャイアンツ愛。ジャイアンツ愛ジャイアンツ愛ジャイアンツ愛ジャイアンツ愛ジャイアンツ愛ジャイアンツ愛ジャイアンツ愛…。
「ジャ…」
遮れる、ジャイアンツ愛。
「それでは、川上監督」
「やっぱりねえ～　巨人軍は紳士たれで決まりでしょうな。正力先生の教えでもあるからねえ～　それに加えて、レレレ？　伝統を英語でいうと…」
「レジェンド」
「そうそのレジェンドでもつけて…」
「ジャイア…」
無視される、ジャイアンツ愛。
「では、巨人軍は紳士たれ　～レジェンド～　にキャッチフレーズを決定します。一同、依存はないですか？」
依存はある。ジャイアンツ愛ジャイアンツ愛ジャイアンツ愛ジャイアンツ愛ジャイアンツ愛ジャイアンツ愛ジャイアンツ愛ジャイアンツ愛ジャイアンツ愛。
ジャイアンツ愛、すべての巨人軍の選手は、ジャイアンツ愛の元に戦うべきである。

監督の就任の野望ははてなく砕かれたが、原は、選手兼打撃コーチの役目を授かり、スタッフ会議に参加することになった。ただ、参加する他のスタッフは、監督に就任した川上に、ヘッドコーチの牧野、投手コーチの藤田……と、老練なクセ者だらけだ。とても若輩の原が自由に意見をいえる雰囲気ではない。

キャッチフレーズひとつにとっても、川上ー牧野ラインであっさりと決定したのだ。

「一塁は王、三塁は長嶋。これには、誰も依存ないですね？」

議事役の牧野がふる。誰も意義を唱えない。

一塁には、打撃の神様川上もいるが、とうの本人も、「最高の打者は王」と日頃から認めており、監督に専念したい意向から、ＤＨや代打として参加する腹づもりだ。

原には依存があった。口元まで、三塁はボクじゃないですか？と出かかったが、さすがに長嶋を押し出して、試合に出る勇気はなかった。

自分の利益のみ追求して、自我を押しとおすのは辞めよう。

我々の世代を一人でも多く、歴史ある巨人軍の代表として、大会に送り込む。今日の自分の使命は、まさにこれのみだ。

「問題は二塁と遊撃です。二塁には、千葉さん、篠塚。遊撃には、広岡、黒江、川相ら甲乙付けがたい選手がいます」

川上監督は、最近の巨人の事情にも詳しいのか、

「二塁には、仁志。遊撃には、二岡もいる。若い二人だが、二人とも二十本打つ長打力がある。仁志は、勘のいい守備。二岡には強肩という長所もある」

と意外なことに、現役である若手選手を推薦だ。

二岡仁志の二人には、ちょっとした意見がある原が勇気を出して、口をはさむ。

「お言葉ですが、仁志には人間的に問題があり、二岡もモ…」

だが、虚しいことに、原の意見には、誰も耳を貸さない。

議事の牧野は川上の言葉だけを拾い、

「なるほど、たしかに二人の長打は捨てにくい。仁志と二岡は、各自、二塁と遊撃の巨人軍シーズン最多本塁打記録を持っている」

と候補入りの証しとして、黒板に名前を書き加える。

この二人と野球をやるのは、まっぴらだ。たとえ四割打とうとも、サムライジャパンのメンバーには選びたくないほど、嫌っている。二人には、なによりジャイアンツ愛がない。リハビリ中の選手が、五反田のホテルなんぞ言語道断だ。

勇気を持て。

「川上監督、牧野ヘッド」

はっきりと強いトーンでいえば、相手に届く。

「原コーチ、何か意見がおありかな？」

「その二人にはジャイアンツ愛がかけております。チームのためになりません。なにより二人は、性格が……」

初めて、自分の意見が通ったぞ。だが。川上御大、原の勇気をあっさりと一蹴だ。

「原くん」と威厳たっぷりに、声をかけると、

「は、ハイ」

原、また萎縮。

「原くんが、二人にあまりいい感情を持たないことは、ワタシも知っておる。だがね、指導者が私情をはさむのはよくないよ。好き嫌いは誰にもある。そこをぐっとこらえてだな、ただチームにプラスになるものを起用する。それが自分のためにも、選手のためにも、チームのためにも、親孝行にもなるんじゃないかな。とにかく、私情はよくないよ。私情は。チーム事情に私情は変えられぬ。だよ」

「はい、ごもっともです」

原は思わず背筋を伸ばした。チーム事情に私情は変えられぬ、金言ではないか。原はサムライジャパンに岡島を選出しなかった自分の器量の狭さを少しだけ後悔した。

「遊撃といえば、広岡さんはどうなんですか？」

内野守備走塁コーチとして、会議に参加している土井が意見を出す。牧野は、手元の秘密メモも見てから、

「広岡はどうやら、ヤクルトで監督をやりたいようですが…。川上

監督どうします？　いつものように、あの手この手を駆使して、ひっくり返しますか？　我がチームの戦力を厚くするだけでなく、ヤクルトのチーム作りをめちゃめちゃにする効果もあります。大会目前に監督が不在となっちゃ、勝ち目はありませんからね」

川上と広岡といえば、いろいろな因縁がある。

広岡の送球を川上がろくに捌けず、広岡の失策になったり、広岡の打席で、長嶋にホームスティールのサインを出したことに怒り、采配批判して、広岡がチームから追放されたりとだ。

それでも事情に私情ははさまない川上のこと。チームに必要な存在なら、広岡は選出するはずだ。

原は川上の男気に期待して、胸がときめいている。

ところが、川上の、

「広岡はイランよ」

一言で議決。

原はあぜん茫然だ。アンタ思い切り私情をはさんでいるじゃないかと。

さすがに、現役時代はチームプレーなど何も興味も示さず、自分のためだけに野球をやっていたのに、監督になったとたん、口うるさく、選手は、チームの犠牲になれと、といたおっさんなだけはあると原は思った。

いってることとやってることが違う。でもね、人間なんて、そんなものですよ。原さん。

川崎球場復興計画

選手の復活はもちろん、当時の球場も復活させようと機運が盛り上がっていた。

手始めに、復元が比較的楽そうな川崎球場を再現することになった。

現在アメフト競技場と化した川崎球場跡地に、復元した球場を設置することで、プロジェクトは開始された。

復元は順調に進んだ。今にも朽ち果てそうなスタンド。無機質に高くそびえ立つ右翼側の金網。お魚加えたマドロックを陽気に追いかける有藤。ヘンゲル参上など、数々の落書き。いちゃつくカップル。ホームランを打ったときに、もらえる人形を三連続ゲットした家族まで。なるべく細かいところも再現しようと、作業は進んだ。

ただ最終段階にミスがあった。それは狭い土地に人口が密集する日本において、致命的なミスであった。

発注の段階で担当者が、１と入力するべきところ、１１と間違って入力してしまったのだ。１を連続に入れる初歩的なミスであったが、気づいた時には、もはや手遅れであった。川崎球場が１１個できてしまったのだ。一つは、使用するとして、残りの１０個をいかにするべきか？

いっそ誰かにプレゼントしようということになった。

まず、川崎球場を置けるような、広大な土地を保有している外国人選手に当たりをつけた。

マドロック、リー兄弟、ディアズなどが候補者に上がった。

マドロックは拒絶した。

「無人のスタンドに不気味に流れるサザエさんが頭からこびりついてはがれないんだ」

庭先に、川崎球場があったならば、見る度に辛かった日本の日々を思い出すだろうか。マドロックにとってそれは耐えられないこと

だ。

選手として来日予定のリー兄弟も、

「川崎には、いろいろな思い出はあるけど…」と言葉を濁すだけだった。

その中で、ディアズだけは、

「カワサキ？　オー、ケッコウネ。もらえるものなら、なんでももらっておくよ」

と一個引き取ることになった。ただ、ディアズが、川崎が何であるか覚えていることは怪しく、お届け物ですと、ずいぶん大きな箱だねと、開けてみたら、球場が届いていた。そんなシュチュエーションが予見できるが、それでも彼の顔は笑顔でいられるのだろうか。

1個の処分先はすんだのだが、問題は、残りの9個をどうするかだ。

川崎球場に思いれがあるのは、ロッテの選手と横浜に移転する前の大洋の選手に、短期間であるが、本拠地にしていた高橋・トンボユニオンズの選手たちだ、と決めつけて、勝手に送りつけることにした。

「困ったなあ」

ユニオンズで唯一の有名選手である佐々木信也は、送られた川崎球場の置き場に困り、いっそ誰かに送りつけてやろうと思った。プロ野球ニュースの取材に行ったさいに、自分を無視した仁志か、ユニオンズ消滅後、合併先の大毎で、自分を首にした西本にしようか。

迷っていた佐々木の前に奇跡が起きた。

佐々木にプレゼントされた川崎球場に、どこからか、ユニオンズの選手が集まってきたのだ。

サル・レッカ、マケーブ、スタルヒンの外人選手に、四番打者荒川、エース伊藤に突貫小僧坂本……。

懐かしい面々の顔を見ると佐々木の目に涙があふれてくる。

「でも、これじゃあ、某映画のパクリじゃないか」
そういわれると、そのとおりです。ユニオンズの選手もいまひとつわからないから、このへんで。

福島のステーキ店の前にドン。
小川の刑務所の前にドン。
園川の自宅の上にドン。自宅が潰れても園川、たんたん。
横田の上にドン。プロレスラーに憧れてた横田は、潰されず、川崎球場を持ち上げる。

それでも川崎球場は余っている。　誰か、貰い手ありますか？

沢村栄治のブログ

ブロクをやらないか？　って巨人軍のひとにたのまれて（にこにこ～）

一生懸命、ひとさまのブログをみてみて研究したよお～ぱちぱちぱち～　えらい！！

みようみまねで、キーボードうつのもひとくろおお～～　だけどっっ楽しいよお～～！！

そうそう、川上くんにあったんだ！！　ずいぶんと久しぶりーに戦地に赴くまえ以来だから、なんと！？　６０年？？？？　ぶりかな～　いつのまにか、権力もっちゃって、どん！？　とか呼ばれてるらしいおお～　ギザエラソッス！

シブイッス！！！！　アコガレッス！！

さいごにあったときは、まだまだまだぺ～ぺ～　だったのにい（わらわらわら）　熊本もっこすのＩＮＡＫＡＭＯＮＯ（爆笑）そのままだったのにいい～

すっかりおじいちゃまになっちゃって、頭なんて、禿げ上がってもう、逆に！　あれれ？　あかごに見えるんだよお～

そろそろぼくたちのところにきたら？　なかまがいなくなってさびしいでしょでしょでしょ？？　こっちには千葉くんところの茂ちゃんも、青田もスタちゃんも、水原さんも三原さんも　みんないるでよおっていったら、まだまだ生きるってへえ　テヘテヘ　あと１０年は生きるってさあ！！？　エイエイ驚いて、手榴弾投げちゃった！！

そうそう手榴弾っていえば、ぼきゅの出した、手榴弾投げの記録にせまった、蝦夷の松坂くんのおマゴまご孫くんが、大リーグで活躍してるそうだねえ～　ヤンキースに投げ勝っちゃうとか、すごおおおいよおお～　ベーブルースやゲーリック（自慢じゃないけど、てゆうか、自慢だけど～～　草薙でかれらお手玉に取ったのお、エ

イエイさあ～）を三振に取ってるんでしょ？
え、そんな二人とうにいないって？？？　わかってるよおおおｗっｗ　これが大正うまれジョークだよ　爆笑した？　ねえ？　ねえねえ　爆笑したでしょお？　トュル～ルル～
そうそうボクの業績にびんじょおして、沢村賞とかいうのがあるらしい？　んだよおお～　感激したよお～　去年沢村賞つうかエイエイ賞受賞した岩隈くんにたまたまだけど、あったんだよおお～
なに投げるの　ねえねえ？　ドロップとシュートでしょってきいてみたら、ナ、ナント！！？？　すらいだー？　ふぉーく？　しらねえよ、そんなのププンガプンってボヲル投げるみたい
ふぉーくってなんぞえ？　えええええええ？？？？　バーッターのすんぜんで、すっとんと落ちルウ～　ありえねえスよお、ありえねえ、すよお、反則じゃねえすかあ？
そおそおみなさんにとってもよいおしらせがあるのです　ついこないだ巨人軍の会議とやらがあってみごと！！！　メンバー入りが決まりました～　はい、拍手、拍手う～　ぱちぱちぱち～
でもねえ？　えいえいの実力にみんな疑問？　をかんじてるみたいで～　秘密兵器だから~ 秘密兵器だから～　秘密兵器って　ナンすかあ？　鬼畜米国が密かにつくってる原子爆弾ってもんすかあ？
とにかく秘密兵器ってことで、やきもきさせる役目で頼むってドン川上くんにいわれちゃった~ せっかく６０年ぶりに地上で投げれると思ったのになあああ
先発がよかったなあ～

〓えいえい〓

沢村栄治のブログ（後書き）

さすがに何だこりゃ

涌井無知との遭遇

「松坂さん」
「なんだ、ワク」
「あの人、誰ですか？」
「うん、誰のことだ？」
「ほら、あの、一塁側にいるスラっとしたかっこいい人」
「ああ、もしかして４１番？」
「そうです、４１番」
「知らないのか？　４１番だぞ、４１番。ライオンズの４１番だぞ」
「知りません。木村すか？　鳥谷部さんですか？」
「な、わけねーだろ。木村や鳥谷部さんがなんの用あるんだよ」
「あ、帽子取りましたよ。見事なまでにフサフサで、真ん中でわけている。ちょっと時代遅れかなあって髪型だけど…」
「だから、監督だよ、監督」
「え、監督って？」
「渡辺監督だよ」
「渡辺監督って、ライオンズの選手だったですか？」
「当たり前だろ」
「へえ、知らなかった。横浜高校時代、そんなこといってなかったのになあ。プロにいたとは」
「そっちの渡辺監督じゃねえぞ、ワク」
「じゃあ、どこの渡辺監督なんですか？」
「久信さんに決まってるだろう」
「え？　だって、はげてないし、ぽっこりとお腹が出てもいないし……。目と鼻筋だけ、なんとなく面影ありますけっどねえ……」
「え、じゃねえよ。お前、本当にしらねえんだな。久信さんは、トレンディーエースとか、新人類って呼ばれて、若い子に大人気だったんだぞ」

「本当すか？　人気って、ボクよりもですか？」
「ああ、凄かったらしいぞ。あの姿みれば、納得するだろう？　足が長くて、スリムで、顔もかっこいいし」
「ところで、新人類って何すか？　トレンディってのは、なんとなくわかります。大昔はやったドラマのジャンルのことですね？」
「本当、説明するの面倒になってきた…。新人類ってのは、さあ、簡単にいうとだなあ…。ダルビッシュやお前みたいなやつらの総称なんだよ。今でいうとゆとり？　かな。違うかな…」
「ダルやボクらみたいなの？？？？」
「ピンときてねえみたいだなあ。まあいいや、おいワク、じゃあ、アレわかるか？　２１番だ」
「２１？　貴さんですか？」
「違う、久信さんの前の前の前の監督だよ」
「前の前の前すか？　今の監督の前は伊東さん……。その前は……えっと……誰でしたっけ？」
「伊原さんだろ？　おいおい大丈夫か。ワクみたいなのが、偉大な先輩だらけの大会にエントリーされて」
「ああ、そうだ。伊原さんだった。伊原さんの前は……？　え、っと……？？？」
「もういい、東尾さんだよ。現役時代も今と同じく丸顔で、今とそんなに変わってないだろう？」
「ああ、そういわれれば…」
「ワク、お前には大会用特別選手名鑑やるから、よくみとけ。いちいちオレがついて回って、説明するのも面倒だしな」
「勉強って、あまり好きじゃないんだよな。なにせ、ボクたち横浜高校ですもんねえ、松坂先輩」
「お前と一緒にするなよ」

「お～い、松坂に涌井～」
「あ、久信さんどうも、お久しぶりです」

「キャッチボールでもしないかあ」

「いいボール投げますね、監督」
「どうでもいいが、お前ら顔丸いなあ。もっと絞れよ。オレみたいにスリムになれよ～　女にモテねえぞ」
「監督にいわれるとは思わなかった」

「誰ですか、あの人、松坂さん」
「うん、またかよ」
「ほら、あの、前髪だけチョロリとたらして、黒ブチの太い眼鏡をかけて、ストライプの変なシャツ着て、柄の悪いセカンドバック抱えている人ですよ」
「あれも久信さんだよ」
「え？」
「え？　じゃねえよ」
「当時は、ああゆうファッションが流行りだったんだよ。体型が昔に戻って、当時のファッションにしてみたんだろうな」
「罰ゲームかなにかかと思いましたよ」
「そんなこといってると、ワク、お前、また監督に引きずり回されるぞ」
「じゃあ、あの松岡修造みたいな、さわやかな風体は誰です？」
「ああ、あれ、清原さんだ」
「ええ？　あれが！！　じゃあ、あれ、誰ですか？　一見ヤクザ風の…」
「ああ？　またかよ…。ヤクザ風はたくさんいすぎてわからんなあ」

こうして涌井と松坂の漫才は延々と続きましたとさ。

涌井無知との遭遇（後書き）

前フリはいいからさっさと試合を始めろとのメッセージがまだ届いてません

高知安芸キャンプリポート第1クール初日　観衆４００人気温7度

阪神がキャンプを行う、高知県安芸市営球場は異様な雰囲気に包まれていた。

選手同士にろくな会話がないのだ。

大挙押し寄せた報道陣が壁になっていることもあるが、それにしても、挨拶どころか、目を合わそうともしない選手が多すぎる。

それもそのはずだ。藤村、吉田、江夏、村山、小山、掛布、田淵、岡田、金本、藤川、井川……。あまりにも、個性が強すぎるのだ。当初から懸念されていたが、より事態は深刻だ。

この日、注目されていた村山と吉田の両巨頭の接近はなかった。村山はブルペンで投球練習。吉田はグランドで守備の連携を確かめいたのだ。

一人、外野フェンスに向かってキャッチボールを繰り返すのは、井川だ。その姿はあまりにも寂しい。

数少ない同年代の藤川が気をつかって、

「井川さん、いっしょにキャッチボールでも、やります？」

「いいよ、球児、気をつかわなくて。ヤンキース（の３Ａ）でも、いつもこうしてるから」

金本は一人、ハードトレニーングに励んでいる。寂しそうに見つめている男がいる、新井である。

新井は阪神のユニフォームではなく、ジャージ姿だ。

「あの金本さん。ボクは、どうすればいいんでしょうね？」

「なんや、新井大先生。おまえ、阪神のメンバーから漏れてるやろ。なんで、ここにおるんや？　年間八本塁打の日本の四番さまが」

「広島からも、連絡がないんです」

「カープの一塁三塁には、江藤や衣笠さん、水谷さんがおるからな。他にも、ロペスもおるしな。ほおだ、栗原もおるな」

「辛くて、寂しくて、溜まらずに金本兄貴に会いにきたんです」
「我慢せい。補欠には入っておるんやろ？」
「はい。そこはなんとか」
「なら、練習や練習や。江藤が骨折することでも祈ってな、練習に励むんや」
「兄貴にそういわれると、勇気が出てきました。それでは、練習してきます！」
どこまでも単純な新井である。

掛布は掛布で、
「この大会のギャラどうなの？　賞金それだけ？　優勝しても？　それじゃあ全然足りないなあ。仕方ない、球児や金本から借りるか…。このさいプライドなんて…」
と、何やら、金策に走っている。

ベンチで一人ぼお～といているのは、今岡だ。せっかく、優勝した当時の肉体と能力が戻ったのに、覇気のなさはそのままだ。現在の不振ぶりをよくあらわしている。
耐えかねた岡田が独特の言語で、
「おい（今岡）、（練習）せえへんの？　（あいかわらずやな）お前は　そら、（そんな心構えじゃ）そうなる（一割台だったり、史上最悪の三塁守備だったり、嫁のが事業に走ったり）わ」
と今岡を奮い立てようとしても、今岡は微動だにしない。
今岡の横で、大きなイビキを立てて寝ているのが江夏である。江夏がイビキをかくたびに、大きなお腹は膨らんだり、へこんだり。今岡はそれをじっと凝視している。
「へこんだり、ふくらんだり、へこんだり、ふくらんだり、へこ…」
江夏の腹から、打撃のヒントでも見つけたのか、「あ」とつぶやくと頭を撫でる。
「髪の毛がある」

髪の毛も肉体の一部であるから、ふっさりとしていた全盛期に戻っていたのだ。それがよほど嬉しいのか今岡はにっと笑う。

田淵は田淵でいまだに北京五輪の言い訳をしているし、聞き飽きた阪神コーチ時代の自慢を繰り替えしている。

山本和行は、ＵＦＯを見ただの、メジャーに連れていけだの、まだいっているし、

バースは、ろくに打撃練習せずに、評論家として訪れていた川藤と将棋を何局も繰り返し、オマリーは、犬歯が痛い？　と、とっとと早退し、杉本綾に似たセクシー美女とのデート（デードではない）に向かう始末だ。

ただ一人、あの男がいなかった。日本ハムと競ったすえに、阪神が取り戻しことに成功したあの男が。練習開始時間は、とっくに過ぎているのに。

突然、あたりの雰囲気がかわり、ざわめきが広がる。ベンチの奥に向かって、報道陣がいっせいにフラッシュを浴びせる。

「たっだいま～」

練習開始から三十分が過ぎたころ、ようやくの真打ちの登場だ。赤いリストバンドに、白い歯がまぶしい。

吉田とともにショートでノックを受けていた藤田平は、男の登場に、グラブを置き腕組みをして応戦する。

遅刻は許さない。遅刻をしたら、グランドで正座。それが、鬼の藤田平政権の絶対の掟だ。

「おい、新庄、まあ遅刻か！　正座だ、正座！　反省するまで、外野で座っておけ」

と口元までででかかったが、

ただ、このチームの監督は、藤田ではない。藤本定義である。

一選手が勝手なことはできない、ぐっと堪えて、また守備練習に戻る。

新庄と藤本は初対面だ。

「誰？　このおじいちゃん」

もちろん、新庄は、藤本をまるでしらない。

「え？　この人が、監督なの？　藤本さん、誰それ？？？」

とのっけから、失礼極まりない。それでも藤本はにこにこしている。

「ほお、おまえがうわさの新庄か」

と、あくまでもおおらかだ。新庄と抱擁を交わす。

このひどく自分勝手な集まりのメンバーでも、この監督ならまとめることができるのではないか？　いやあ無理でしょう、お家騒動という不知の病にかかったチームのことだから……。

森本ＶＳ東映フライヤーズ一家

日本ハム（東映、日拓ホーム）は、沖縄は名護でキャンプをスタートさせていた。

意外なことに、沖縄をキャンプ地とするのは、日本ハムが先駆者なのである。

大沢親分のもと、体作りに励んでいたのだが、興味深いことに、主にフライヤーズに所属していた選手と、ファイターズに所属していた選手のカラーがまるで違うのである。

フライヤーズの選手は、張本、大杉に代表されるように、武闘派が多く、一方のファイターズの選手は、小笠原や稲葉のように、闘志をうちに秘めるタイプが多数を占めている。

当然のごとく、この二つのチームの間に交流は少なく、見えない壁が存在するのだが、異質な勢力を取り持つ働きをしているのが、森本であった。

森本は忙しく、両勢力の間を行き来する。張本に呼ばれれば、

「はい、先輩」

と直立不動で御用を伺い、用事を済ませば、今度は小笠原の元へ走り、フライヤーズと、どんな会話があったか、報告をする。

「オレが呼ばれた理由がなんとなくわかったよ……」

と森本は音を上げてしまう。幸か不幸か、森本は小間使いにぴったりなキャラなのである。

森本がフライヤーズの先輩達のティーバッティングに付き添われてるときに、問題は起きた。

「うわ……。揉め事？」

山本八郎と白仁天の両外野手が、肩がぶつかったの、ぶつかってないので、ちょっとした小競り合いをしているのだ。

森本は風貌に似ず、実は気の弱い穏健派である。小競り合いとは

いえ、喧嘩だ。暴力は見たくない。優勝を目指そうとチーム一丸とならなければいけないのに、これではせっかくのムードが壊れてしまう。

森本は勇気を振り絞り、喧嘩を止めさせようと、二人の間に割って入ろうとしたが、フライヤーズのリーダー格である毒島に、逆に止められてしまう。

「いいんだよ、ヒチョリ。オレたちの間じゃ、あれくらい挨拶がわりだよ」

毒島は暴れん坊揃いのフライヤーズナインにあって、珍しく優等生タイプである。後に、スカウト編成、二軍監督として、西武黄金時代の礎を築いたことからも、これがわかる。

「挨拶がわり？　殴り合ってますけど……」

白の右ストレートが、山本の頬を強打。それにひるまず、山本も蹴りで応戦だ。

森本はただ呆れるばかりだ。

「どうなってるんだ、この人たち……」

ただどことなく二人の間に陰湿な雰囲気がないことは、森本も感じ取っていた。殴り合いをしながらも、互いに笑みをこぼしあっているのだ。久々の喧嘩が嬉しくてしょうがないというところだ。

だが、森本には報告の義務がある。

「大沢親分、いえ、監督。大変です。先輩方が喧嘩を……」

「おう？　なんだ、けんか!?　そうか、そうか。血気盛んであっぱれじゃねえか」

と取り合わないが、森本は粘る。

「でも、監督。そろそろ止めないと、怪我しますよ……。戦力ダウンですよ」

「戦力ダウンか。そりゃそうだな。せっかく満足な肉体を取り戻したのに、それを生かせないと、あいつらもかわいそうだな、こりゃ」

大沢はようやく重い腰をあげて、喧嘩の成敗に向かうと思いきや、

「おうおう、おめえら、喧嘩とは元気いいじゃねえいかい。だけど

よお、そんなみみっちい小競り合いていどの喧嘩で、怪我するんもバカらしいわ。やるなら、正々堂々とみんなでやろうわ。せっかく、さみい中来てるお客人もその方が喜ぶぞ」

え？　みんなで？　正々堂々と？

「どうだおめえら、喧嘩のトーナメントでもやらんか？　この中でよお、誰が、一番強いか、決めるんだわ。久々にわけえころの肉体を手にして、高ぶる気持ちを抑えるのも大変だろ？　ここで全部吐き出すんや。そのかわりだ、喧嘩は、この場っきりにしてえくれよ。うはは」

大沢の提案に、山本と白は喧嘩を止めて、聞き入る。張本や大杉も興味津々だ。一人呆れるのは森本だ。

この人たちっていったい何者なんだ……、喧嘩じゃなくて、野球をしにきてるんでしょ？

※注おそらく両方だと思われます。

「おい、ヒチョリ。ファイターズの野郎どもにも、ここで喧嘩トーナメントやるからっていってこい」

「え？　あ、はい」

すでにフライヤーズ側からは、大杉、張本、白、山本の出場が決まっている。

「こっちからは四人か。八人くれえいねえとトーナメントにならんわな。よし、ヒチョリ、ファイターズの方から、四人くれえ連れてこい」

「え？　え、四人ですか!?　わ、わかりました!!」

森本はファイターズナインが陣取る内野グランドに全力疾走だ。

「なんで、オレ、こんな大会に出ること決めちゃったんだろうな……」

森本の後悔も時既に遅し。

大沢親分提案のリアルファイトの始まりだ。

Ｆｓリアル喧嘩トーナメント　～誰か出てくれ～（前書き）

これは野球小説なのか！？

Ｆｓリアル喧嘩トーナメント　～誰か出てくれ～

ブルペンでは西崎とダルビッシュが競うように、投球練習に熱を上げていれば、内野では、片岡、小笠原、金子誠、白井一らが、連携プレーに磨きをかけている。

そんな中、割ってはいるように森本は、

「あのう……。た、大変、い、いいにくいことなんですが……」

ファイターズの面々に向かって叫ぶが、それぞれ練習に打ち込んでいるためか、誰も見向きもしない。

ダルビッシュはボールの回転に首をかしげるだけで、白井一は金子誠とベースの入り方で熱い議論を交わしている。

「ファイ！！　ター！！　ズ！！！！　の　み・な・さん！！！！！」

思い切って、最大音量で声の限り吠える。ようやく何事だと、練習の手を止める。

「詳細な事情は面倒だからいいません！！！　簡単にお知らせします！！！！　喧嘩トーナメントが開催されます！！　こっちの定員は四人です！！　出場意志がある方はいませんか！！！　いたならば、ただちに挙手をお願いします！！」

突然の妙な嘆願に、ファイターズナインは呆気にとらわれるばかりだ。

「お、お願いします！！　は、早くしないと、オレの命が！！」

続いての懇願にも、反応は薄い。

コーチとして参加していたヒルマンは、首を横にふりふり両手を広げて、五年の日本滞在で、日本人を理解したと思ったが、完全には理解できてなかったようだとジェスチャーで表現だ。

当然、誰も参加の意志を示さないと思いきや、一人の選手の右手が延びた。右手は黒かった。外人選手だ。その男は、ブリューワ。地味ながらも、シーズン三度の退場記録を持つ乱闘男だ。

「ようやく一人……。他にいませんか！！」

誰も続くものはいない。選手が揃わないとフライヤーズの先輩方に何をされるかわからないと恐怖に怯える森本。そんな中、「オレが出る!!」との声が出るが、どこを見渡しても、発言者が見当たらない。

「ヒチョリ、こっちや、こっち」

関西弁だ。森本は懸命に声の主を探す。主はベンチにいた。評論家として訪れていた岩本である。

「岩本さん？　で、でも選手じゃないし……」

「ええないかい!!　オレもファイターズのエースと呼ばれた男や。ほんの一時期やけど……。トーナメント？　に出て優勝でもすりゃあ、大沢の親分も、岩本すげーな、見直したわいと、メンバーに追加してくれるはずや」

岩本は、すでにやる気に満ちている。着ていたコートを脱ぎ、そでをまくるやいなや、ボディービルダーのように腕の筋肉をびくつかせて、猛アピールだ。

「まあ、岩本さんがそこまでやる気なら…。これで二人か……」

ところが、トントン拍子に三人目が決まる。

「しゃあーない、オレ出よっか」

と名乗りを上げたのは、その身軽さからチャボと異名がついた、大沢第一次政権のトップバッター島田誠だ。

「誠さん……。参加ありがとうございます」

と一礼するが、肝心の四人目が決まれない。

「もうこうなったら、やけだ」

森本はそう言い残して、ロッカーに消える。数分後、グランドに再び戻った森本は、いつしかのオールスターで紛争したタイのボクサーの格好をしていた。上半身裸で、下は黒のブーツに、これまた黒のボグシングパンツ一丁だ。どこに用意してあったのか、茶色のペンキで全身を塗りたくっている。

「四人目は……、このオレだ」

大杉、張本、山本八郎、白仁天のフライヤーズ勢に、森本、岩本、ブリューワ、島田誠のファイターズ出身の四人を加えた八人でリアル喧嘩トーナメントの開始だ。

白仁天　韓国出身の外野手。東映、太平洋ロッテ近鉄で、三拍子揃った選手として長く活躍。帰国後、プレーヤーとしても、監督としても、韓国野球の発展に貢献するが、姦通罪（いわゆる浮気）で逮捕されたことも。

山本八郎　浪商出身の外野手。高校プロ通じて、張本の先輩であり、暴れん坊軍団の象徴的存在。幾多の出場停止を喰らうが、その都度蘇った不屈の男。ファンの指示も厚く、出場停止の処分をめぐって、署名運動が起きたほどだ。

Ｆｓリアル喧嘩トーナメント開始

「ファイターズ勢四人の登場に色めき立つフライヤーズナイン。
大杉が指を組みポキポキと鳴らせば、張本はにやっと笑う。
森本はムエタイのマネをして笑いを取ろうとするが、笑いどころか、森本は誰の視線も感じない。
普段から、ウケの悪いことは慣れている森本とはいえ、あまりも辛い雰囲気だ。

「おめえら、くじ引きや。対戦カード決めるぞ」
大沢監督の指示の元、集りし八人は、対戦相手を決めるくじを引く。

森本は不安でいっぱいだ。できるだけ弱い相手と当たりたい。
張本さんだけは勘弁してくれ…。大杉さんも強そうだぞ、なに、あの腕っ節…。白さんと山本さんは、さっきの喧嘩の迫力は本物だし……。ブリューワは見るからに怖そうだし、岩本さんは引退しても目が笑ってないし、島田さんはオレより素早そうだ…。うわ…誰と当たっても、おしまいだ……。なんで、オレこんな大会にでることになったんだろ…。
森本が最初にくじを引く。ドラフトさながら抽選箱が用意されている。ボクシンググローブを外し忘れて、箱の中に手が入らないという、渾身のパフォーマンスを披露するが、誰一人反応しない。
「森本、おめえ、外し忘れてるぞ」
と大沢が真顔で注意しただけだ。
「あ～　すいません」
と一応謝るが、場はますますと沈んでいく。
森本が箱から用紙を取り出し、開く。
「7番です」

森本は第二ブロック、第二試合に決定した。
続くブリューワが引いたくじは、８番。森本の対戦相手は早くも決まった。
「８？　もしかして、オレ、ぶ、ぶ、ブリューワとかよ？」と呟き戦く森本。
太い腕に分厚い胸板、しかも言語が通じない。考えようによっては、一番やっかいな相手と当たることになった。

くじの結果、第一ブロック第一試合は張本と岩本。第二試合が大杉と嶋田
第二ブロック第二試合は、山本と白の因縁の対決。第二試合が森本とブリューワ、と決定した。

男たちの道楽は、喧嘩だけではすまない。博打好きの多いフライヤーズナインの中で、誰が優勝するのか？　という賭けがあちこちで始まっている。しかも、大沢監督自ら、賭けを体系化して、
「おう、おめえらも賭けろや。一口千円だぞ」
と報道陣やファイターズナインにも持ちかける。あっというまに、賭けは広がり、喧嘩トーナメントの更なる盛り上がりに火をつける始末だ。
投票が終わり、オッズが発表された。張本二倍　大杉三倍　山本八郎一・五倍　ブリューワ四倍　白四倍　島田六倍　岩本六倍　森本七倍
張本、大杉の二枚看板のオッズの低さに、山本八郎の人気が目につく。森本は七倍と一番の倍率がついた。若さがプラス要素とされず、喧嘩経験のなさと判断されたのであろうか。

四方を正方形に取り、それをナインが取り囲む形で、試合会場となる。
大沢監督の「かあん」という口ゴングで試合は開始だ。

第一試合は張本対岩本。オッズからも、残した逸話の違いからも岩本の断然不利と思われるが……。

それに負けじと岩本は闘志を燃やす。なにやら秘策があるらしいのだが…。

Ｆｓ喧嘩一回戦　張本岩本山本森本

「張本先輩…覚悟をしてください。先輩に恨みはありませんが、倒させてもらいます。どうしても、クラシックに出場したいんでねえ。ねえ、大沢親分、もしワタシが優勝したのなら、クラシックの登録メンバーに追加させてくれませんでしょか」

「おう？　岩本、おめえ、選出してなかったか？　そうか、いいだろう、優勝したら、いれてやるぞ。元々、この喧嘩はなあ、精神力と体力の見極めでもあるんだわ。メンバー決めの参考にでもしようと思ってよお」

「そうでっかい。やる気がよりいっそう溢れてきましたわい」

岩本の秘策とは、中国拳法であった。幼少時からブルース・リーに憧れ、入団会見にヌンチャクを持ち込んだ伝説もある。構えもさまになっている。上半身裸になると、多少贅肉がついたとはいえ、筋肉質な体が披露される。大阪ではちょっと名の知れた男、喧嘩には自信がある。

「あちょー、おちょー」

と張本に、蹴りや手刀で攻撃だ。

「ガンちゃん、それだけ？」

強靭な肉体は岩本の攻撃にびくともしない。

「ぬう…さすがに張本先輩や…いつも偉そうにしてるだけありますなあ……」

岩本第二の攻撃。ヌンチャク殺法だ。小器用に腕と手首をこねくり回すが、肝心のヌンチャクがない。

「大沢親分…。武器の使用は許されていますか？」

「武器い？　これは、喧嘩や。肉体と肉体のぶつかりあい。武器の使用なんぞ邪道だわ」

「そりゃ、当然ですわな…」

このままでは、エアーヌンチャクだ。
「ガンちゃん、パフォーマンスはすんだ?」
「はい、これで手の内さらけ終わりました」
張本の強烈な蹴り一発で、岩本は吹っ飛び、あっけなくKOだ。
「勝者張本〜」と大沢が叫ぶ。
さすが優勝候補の一角だけある、圧勝だ。
第二試合は、これも優勝候補の大杉の圧勝だ。嶋田誠の得意とするバック転とスピードに幻惑されながらも、いざ、接近戦に持ち込めば、パワーが格段上の大杉の圧倒的優位だ。
結果、第一ブロックの準決勝は、本命視される二人の対決となった。

第二ブロックは喧嘩トーナメントの発端となった二人の対決だ。
山本八郎対白仁天の一回戦屈指の好カードだ。場内のムードは最高潮に達する。
球界史上最強の暴れん坊ともいわれる山本と同僚大杉と決闘（理由なし、ただどっちが強いかを決めるため）したとされる白仁天。
試合開始はなっから、組み合い接近戦だ。ノーガードの殴り合い。白がストレートを放てば、山本はジャブの応酬で応戦する。すさまじい迫力に観客とかしたナインも圧倒されるばかりだ。
頭にポップをかぶり、胸にビーチボール二個を仕込み、ミニスカートを吐いて、チアガールに扮したウインタースもさすがに応援のポンポンを止める。
殴り合いは互角とみるや、先に離れたのは、白の方だった。距離を保って、そこから助走をつけて、プロレスでいうところのドロップキックの炸裂だ。山本は避けきれずに、まともに喰らう。さすがの大ダメージか、倒れたきり立ち上がらない。
白は勝ったと思い込み、勝ち名乗りを上げようとするが、軽率な判断は油断につながる。山本がいつのまにか立ち上がり、白の背後を取ると、ブレーンバスターで応戦だ。脳天を地面に打ち付けられ

た白はダウン。

山本は勝ちを確信したのか、１０カウントをとり始める。だが、白は信じられないことに、わずか、３カウントで立ち上がるほど、ダメージはなかった。いや、甚大なダメージはたしかにあったのだが、闘争本能が彼を立たしたのだ。

二人は、倒されても、倒されても、負けじと立ち上がる。不屈の闘志というよりも、もはやたんなるバカである。

戦いは長期戦になった。やがて、喧嘩は終わりを迎える。

山本の今日何発目かのパンチが白の顎をとらえると、白は沈んだ。必殺のパンチであったというよりも、すでに両者限界に達していたのだ。白はそのまま担架で運ばれた。診断の結果、本大会出場は絶望との結果が出た。

勝った山本もダメージは甚大で、眠るように倒れ込んだ。

第四試合、一回戦、最後の対戦だ。あまりにもレベルの高い試合のあとだけに、場内はどこか試合に集中していない。

森本もあっさりと負けるつもりである。元々自分は人数合わせで呼ばれたんだ、とにかく故障しないうちに、ある程度試合の様相をていしてから、負ければ義務はすむはずと考えている。

ただムエタイの格好をした森本を、自分への侮辱と感じ取ったのか、ブリューワの目は血走って、遠くまで聞こえてくるような、荒っぽい歯ぎしりをしている。

故障程度じゃすまないかもしれない……。森本は強い恐怖に打ちひしがれる。

二人とも、両手を合わせて、お辞儀をしてから試合が始まる。

ブリューワは利き手である右腕をぐるぐると回転させる。普通、野球選手が喧嘩をする場合、利き手と逆を使うのだが、あえて利き手である右を使うとは、それだけ入れ込んでいる証拠である。

肩慣らしはおしまいだ。あとは森本を捕まえて、一発食らわすだけだ、ブリューワは黒い肌によりいっそう輝く白い歯を見せると、森本目がけて突進する。その突進は、伊藤敦規をマウンドに沈めた

９０年のハッスルぶりを思い起こさせる。
　一撃でも食らうと今季どころか、生涯絶望だと、森本は必死に逃げる。自慢の俊足と小回りを使って、ブリューワを翻弄する。ヒットアンドウエー？　逃げるのは逃げるが、ヒット（攻撃）はしない。ただ逃げるのみだ。まともに喧嘩をしたことのない森本に理由なく相手に攻撃など簡単にはできない。それ以上に気が小さく、ブリューワに近づけもできないのだ。
「はあ、はあはあ」逃げるばかりで、さすがに森本の体力が切れてくる。
　ブリューワも同様だ、ひざまづき、肩で息をする。森本はブリューワが一休みしたのに、安心したのか、わずかなスキが生まれた。ブリューワから目を切った瞬間、森本に向かって、猛然と黒い弾丸が突っ込んでくる。
　疲れていた姿を見せたのは、スキを伺うフェイクであったのだ。さほど足がある選手でもなかったのに、獲物を追いかけるその足はリッキー・ヘンダーソンやぴのクラスだ。
　森本追い詰めらてた、一回戦敗退確実？
　ブリューワは極度に勝負弱い選手であった。そこそこの成績を残しながらも、記憶に残らず、あげく解雇されたのも勝負弱さが大きな要因であった。
　渾身の右ストレートが、見事に空振りだ。森本はよけてもいないのに。体勢を崩してよろけるブリューワ。
何が起きたのか把握しきれない森本。ここで、「ヒチョリ、チャンスや～！　いけ！　シバイたれ！！」
　との声援が飛ぶ。とっとと敗退した岩本がちゃっかり応援に回っているのだ。
「チャンス！？　って、どうすれば！！？？」
「おまえ、キックボクサーやろ！　キックや！　キック！！！」
「え？　えええ？　こ、こうかな！？」
助言どおり、適当に足を高く蹴り上げようとすると、そこにちょ

うど立ち上がろうとしたブリューワの顎があった。
喉元にヒールが入り、一発でKOだ。
森本は前評判を覆し、見事に勝ってしまったのだ。
場内は、割れんばかりのヒチョリコールだ。
「ヒチョリ、ポーズや。ポーズをとらなあ」と名セコンドの岩本の声が飛ぶ。
「え？　ポーズ？」と促されるまま、適当にムエタイの勝利のポーズを踊る。観客も正確に再現しているかどうかに意味を見出しているわけではないので、とりあえず受ける。
だが、勝ったのいいが、森本の次の対戦相手は山本八郎だ。鬼畜のようなファイターっぷりを散々見せつけられた山本に森本はどう挑むのか？

Ｆｓ喧嘩一回戦　張本岩本山本森本（後書き）

こんなのが何話続くんだ

Ｆｓ喧嘩最終章～　今週のご意見番

「今週のご意見番といいたいところですが…ご存知のとおり親分とハリさんは日本ハムのキャンプに参加しています。中継つながってるの？　大丈夫？　そう、じゃあ、名護の親分とハリさ～ん」
「おう、おはよう」
「おはようございます」
「どうですが、久々のキャンプは？」
「順調順調」
「ハリさんは？」
「こっちもすこぶる元気ですよ～　優勝は我が日本ハムに間違いなしですよ～　打線は、私に大杉くんにガッツ、投手は、ダルビッシュも尾崎も忘れてならない土橋さんもいますしねえ。でもやってみないことにはわかりません。ジャイアンツもおることだし」
「話変わりますけど、なにやらおもしろいことがあったと聞きましたが～」
「あ～　ああ、あれのことか？　喧嘩か喧嘩」
「ええ、ありましたよお～。喧嘩のトーナメントですわ。私含めて八人の選手が真剣勝負でやり合いましたわ」
「いいですか？　野球の練習そっちのけで喧嘩とは」
「しかたねえよ。フライヤーズの暴れん坊どもがよお。一発触発の雰囲気でよお。放っておくとよお、大乱闘になりそうだからよお。ここでガス抜きじゃねえが、喧嘩のトーナメントやりましょうってなってなあ。そのかわり喧嘩はこれっきりなってよお条件でやったんだ」
「え？　そのＶＴＲがある。それでは準決勝からになりますが……どうぞ……」
「おや、これはハリさんと、向うの人は、あ、大杉さんだ。懐かし

いなあ」

「そうなんですよ。私と大杉くんの対決だったんですよ。ＯＨ砲と呼ばれて、３、４番コンビを組んだ仲なんですけどね。現役時代もようやり合いましたわ。いやあ４０年ぶりくらいの手合わせだったけど、とにかくいい勝負でした」

「そうなんだよ。こっちもよお、ハリと大杉はクリーンナップの構想だったからよお、怪我だけはよしてくれよって見てたんだが、そのうちに熱が入っちゃってよお」

「ここで、ハリさんのパンチが大杉さんのボディに決まる」

「このパンチがねえ～　効いたみたいです。これで私の勝ちが決まったようなもんです」

「大杉さん、これでＫＯ。その結果、ハリさん、これで決勝進出」

「いや～　大杉くんも強かった。パンチは重いし速い。でもねえ、年の功というか、私の経験の差が若干彼の上をいったのか、勝たせてもらいましたよ、ははは」

「それで、準決勝第二試合……勝った方がハリさんと決勝で戦うことになりますが……。これは、ムエタイの格好……？　スキンヘッドだ。もしかして、森本……ヒチョリですか？」

「そう、ヒチョリです。相手をカッとさせる作戦なのか、ムエタイのマネをしてねえ。困ったもんです」

「ところが、いくら、待っても…対戦相手がこない。おや、待ちくたびれたのか、シャドーボクシングのモノマネか何かしてる」

「対戦相手はねえ…山本八郎という私の浪商の先輩なんですが……行方不明のところなんとか探しあてて参加してもらった選手なんですが……一回戦でねえ、白という選手と死闘を繰り広げてねえ。ダメージが思ったより大きくて」

「それで、準決勝の試合開始に間に合わないと」

「そうなんですよ、どうやらクラシックの出場も不可能なほどの故障をしたらしい。これで、森本の不戦勝で決勝進出が決定」

「勝ったヒチョリがそれほど嬉しそうにもないのが気になりますが……。山本八郎選手に一応喝いれておきます？」
「先輩には喝はいれませんよ。男と男の勝負の末の負傷ですもの」
「これで決勝はハリさんとヒチョリ。これまたずいぶんと年の差がある戦いになりましたねえ」
「ええ、ざっと４０年ほど離れています。でもねえ、私の肉体は全盛期に戻っている。肉体が若いもの同士なら負ける要素はありませんぞ」
「ちょっと待ってハリさん、結果はＶＴＲで。はい、これが決勝のＶです……。ハリさんが、こっち来いと手招きしてるけど、ヒチョリは来ない」
「ええ、ヒチョリは警戒しているのか、ただ勇気がないのか、なかなか、こっちに来なくてねえ。じらされましたよ、この作戦には」
「森本のヒチョリはよお、元々、戦力ってよりか、一人若くて元気なのがいると、道具運びとかお使いとか、色々と便利だから呼んだんだ。本人も薄々気付いてるのか。オレがよお、おい、ヒチョリ、もし、ハリに勝って優勝したら、メンバー選出考えてやってもいいぞと叫んだんだ」
「そうしたら、このとおり、ハリさんに近づいては、攻撃仕掛けると。効果ありましたねえ」
「でもねえ、肝心の攻撃がお粗末でした…。彼はねえ、一回戦から運だけで勝ち進んだんです。実力が伴っていないから、パンチも蹴りも威力がない。ほら、今、蹴りがヒットしましたけどねえ～　蚊がさしたくらいの痛さでしたよ」
「ここで、ようやく、ハリさんの攻撃だ」
「彼とは、喧嘩の戦歴が違います。ほら、一発でのびたでしょ？」
「ほんとだ。ところが、勝負はつかない」
「ええ、彼はしつこいというか、執念深いというか倒れても倒れても立ち上がる。よほど優勝してクラシックのメンバーに入りたいのか」

「ハリさんの蹴りが決まる。パンチが決まる。あ、今度は頭突きだ。こりゃ痛そうだわ。それでもヒチョリは負けない。めげずに立ち向かう」

「結局勝ったのは私なんですが、ヒチョリは偉いですよ。私の攻撃をここまで受けて、まあだファイティングポーズ取る気力があるのは、彼くらいなものです」

「あっぱれあげましょうか？」

「いいえ、そりゃダメです。優勝は私なんですから」

「それじゃあ、親分、クラシックのメンバーには？」

「すごい努力をしたよ。森本は。入れてやってもいいかな」

「やってもいい？　確定ではない？」

「ははは、まだ確定じゃねえな。開幕まで日にちがあるからなあ。メンバーに入るだけでも相当なもんですよ」

「そうですか。それでは親分とハリさん大会頑張ってくださいね。熱くなりすぎず、喧嘩はほどほどに」

「おう」

「大会期待してください」

「はい、それでは、続いては…」

Ｆｓ喧嘩最終章～　今週のご意見番（後書き）

意外にも本選は二回で終わったよ

３０話記念　遠投競技会ＩＮハマスタ

「えー　本日は横浜スタジアムより、プロ野球史上最高の強肩は誰だ？　の模様をお送りします。実況はわたくし、ＴＶＫの森田。解説はおなじみの秋山登、鈴木隆の豪華Ｗ解説でお送りします。それではよろしくお願いします」

トップバッターは中日の英智。現役屈指の強肩らしく、スタジアムのセンター最深部までボールを投げる。フェンスの１１８と距離が表示された少し上の部分に当たる。

初っぱなから、好記録だ。１２３ｍの記録が出た。ところが、７５年の歴史を誇る日本プロ野球。上には、上がいる。

続く羽生田があっさりと記録を更新する。フェンスをはるかに越え、バックスクリーンに吸い込まれる。参加選手も自信喪失になりそうな強肩ぶりが披露される。

「さすがに羽生田。マイナー時代にベストアーム賞を受賞した経験のあるアメリカが認めた強肩です。いやあ、すごいですねえ、秋山さん」

「そうですね」

秋山登の解説の七割はそうですねの一言ですまされる。

「いやあ、しかしプロってのは、すごいねえ」

一方の鈴木はよくしゃべるが、肝心の解説の中身というと単なる横浜ファンのオヤジである。

純粋に史上最高の強肩を決める競技会の雲行きが怪しくなってきたのは、ブラウンの登場からであった。

「おや，広島……。胸に大きなＣマーク、第一期山本浩二監督時代にお馴染みだったユニフォームです。どうやら、白人…。これは、ブラウンですねえ？　驚きましたねえ、秋山さん。監督のブラウンが選手時代の肉体で登場。別人と思いましたよ。なにしろ、肉付き

が違う」
「そうですね」
「ところで、ブラウンって、強肩でしたっけ？」
ダイビングして、捕手を吹っ飛ばしたり、ダイビングして、ボールを後逸した記憶は鮮明にあるが、現役時代のブラウンに、とくに強肩であったという逸話も記録もない。
大方の予想通り、ブラウンは一塁付近に小走りで向かうと、ベースを引っこ抜き、力いっぱいに放り投げた。
それからだ、この競技会が、なんでもありになったのは。
スアジアムが大歓声に包まれる。世界の王が威厳たっぷりに現れたのだ。手には、なぜか折りたたみのパイプイス。
「これは驚きました。王さんですよ、秋山さん」
「そうですね」
「資料によりますと、王さんがダイエー監督時代の試合中、城島がイラ立ちをぶつけていたのを、自分への采配批判と受け取り、城島に向かってパイプイスを投げた事件。ありましたねえ、そんな事件。このイス、投げつけた当時の代物らしいですよ」
下手からパイプイスが高々と宙に投げられる。しかし、角度が尽きすぎたためか、高く上がりすぎて、記録はもうひとつだ。
「王は選抜の優勝投手なんだから、イスじゃなくて、ボールを投げてほしかったねえ」
そういう問題か。

今度は打って変わって、スーツ姿の二人が登場だ。一人はスラリと長身で、もう一人はずんぐりむっくりである。
「これは、西崎と武田ですねえ。おや、ユニフォームではありませんよ。鈴木さん、なんと私服です」
「しかし、おかしな格好だねえ。これが、今の人のファッションですかい」
今の人のファッションではなく、バブル期のファッションに身を

染めた二人が投げるのは、小脇に抱えたセカンドバックであった。
思うようにならなかった契約更改の怒りを乗せて、セカンドバックはくるくると宙を舞う。

「今度は、ロッテの現役ベニーの登場です。何を投げるんでしょうね？　秋山さん」
「そうですね」
気がつくと、ホームベースの後ろに必要もないのに捕手がいた。
「おやおや、キャッチャー、これは西武の選手です。２７番、伊東ではありませんね、どうやら細川…のマスクを、ベニーが剥ぎ取ると…」
掴み上げると、足払いで、細川を放り投げる。
「細川投げられちゃいましたよ、鈴木さん」
「大丈夫かねえ、細川」
心配をよそに細川は元気に立ち上がると、細川とベニーは笑顔で健闘を讃えあう。
「細川は叩きつけられた影響か、右肩を抑えています。脱臼でもしたのでしょう。ただ、たいした記録は出てませんけど、二人は満足そうですよ、鈴木さん」
「う～ん。しかし、不公平だねえ。ボールと人じゃあ、投げれる距離が違うよ」

今日一番の歓声が起こる。大魔神がわざわざリリーフカーに乗って参上だ。
「佐々木です。我ら横浜が生んだ世界の大魔神佐々木です。おやおや、見たところ、佐々木は何も持ってないようですよ、秋山さん」
「氷を持ってます」
「おや、本当だ。さすが、秋山さん、大投手だけに鋭い観察力の持ち主だ。失礼しました。佐々木は確かに。氷を持っていますねえ」
「寒いとはいえ、溶けねえか心配だねえ」

「ところで、なんで氷なんですかね、あ、そうだ、サイパンの事件は佐々木の氷投げが原因だ」

佐々木は現役時代さながらの、豪快さと繊細さを併せ持ったフォームから、氷を投げる。ただ、思ったように記録は伸びない。

「佐々木、まずいって顔してますよ。たしかに、氷は急に失速した。どうしましたかねえ、鈴木さん」

「フォークを投げちまったんじゃねえかな。いつものクセで」

「あ、なるほど。それで、突然落ちたと」

佐々木の投げた氷が溶けるころ、次の挑戦者の登場だ。

「ディアズと誰でしょう、資料を見ないとわかりませんが、白人選手と黒人選手が数人出てきましたよお。ずいぶんと大きなものを持ってますよ。円柱状のものです。大きすぎて、持ち運ぶのもままなりません」

ディアズとともに、登場したのは、白人がシャーリーとヘンゲル、黒人がマックスとモトリー。

「なんだろうねえ、球場にも見えるねえ」

「今はいった情報によりますと、どうやら、川崎球場らしいですよ。これは、奇遇だ。本日、放送席の秋山・鈴木、両名にも思いれ深い川崎球場です」

「懐かしいねえ」

「外人選手だけではとても持てないと、古川、岡部、大順、山下、丹波といったロッテの大砲として期待されながらも、思うような活躍ができなかった面々が手伝っているようです」

「技術はねえけど、力はあるからねえ。彼ら」

「しかし、川崎球場投げたら危なくないですか?」

「へへへ、大丈夫でしょうよ。川崎より横浜スタジアムのが一回り大きい」

どういう理屈だ。

「そうですか、おっと、投げた。あ〜　のびる、のびる。ただ記録

は抜けなかった」
　川崎球場は外野止まり。ただ心配されるのは、外野の球拾いに駆り出されてた選手連中だ。
「宮里、横谷、石橋、山崎といった大洋末期を象徴するような非力な外野陣がボール拾い要員として、外野で陣取ってましたが、下敷きになってないでしょうね、彼ら。山崎といえば、忘れちゃならない初代番長ですよ」
　心配は無用だ。彼らは両翼のファールゾーンに避難していた。我々は無事だと両手を振って合図する。
「おや、大丈夫のようだ。これは一安心だ」

「だれでしょうか。ずいぶんと古めかしいユニフォームを着ての登場だ。顔をよくみても誰だかわからない。鈴木さんわかります？」
「わかんねえな」
「沢村さん」
　と秋山がぼそっとつぶやく。
「秋山さんご名答！　たしかに伝説の投手沢村栄治、その人です。いやあ失礼、実物を見たことありませんから、すぐにわからなくて」
「何をなげるのかねえ？」
　すでにボールを遠くに投げることは誰も期待していない。
「あ、手には、手榴弾です。沢村といえば、手榴弾投げの軍隊記録を持つことはあまりにも有名」
　伝説どおり、足を頭より高く上げる独特のフォームから、手榴弾は投じられる。手榴弾は、らせん状に回転しながら、青空を飛んでいく。内野を越えて外野まで達したが、羽生田の記録は抜けない。
　沢村も実力を出せなかったと不満の表情を浮かべる。
　ただ、ある意味想像どおりの出来事が起きた。
　外野の芝生に落ちた手榴弾が、

　ちゅどーん。

「おやおやこれは、危ない。手榴弾が爆発しましたよ。ああ～　波留が爆発に飲み込まれたようで、のたうち回ってます」
　しかし、波留は元気者らしく、手を上げて、笑顔で担架を制止する。
「さすが、波留です、痛みにも負けない。今の横浜ナインもこの気力とファイトを見習ってほしいですねえ、秋山さん」
「そうですね」

　その現在の闘志なき？　横浜ナインの挑戦だ。
「今度は、ベイの誇る若き三大大砲の村田、吉村、内川のクリーンナップトリオの東条です。村田は投手あがり、吉村は多くの捕殺をマークする強肩の持ち主。これは期待が持てそうです」
　いまさら、遠投に戻るのか。
　ところが、村田が突然マイクを持ちパフォーマンスだ。
「ええ、ファンの皆さん。ボクたちが投げるのは、シーズンです。我ら横浜は、信じられないことに、大敗した昨年と同じ監督で挑みます。しかも、弱点の投手でなく、飽和状態の外野手を一位指名するありさま。横浜開港１５０年の記念のシーズンを投げちゃいました」

「おやおや、これは驚きました。けしてモノは投げずに、マイクパフォーマンスで勝負です。秋山さん、これは意表をつかれましたよ」
「そうですね」
「途中で、試合を投げるのは、ぬるま湯横浜の悪しき伝統とはいえ、シーズン丸まる投げるとは、いかんともしがたい」

　シーズンを丸まる捨てるというスケールの大きさと哀れさが、羽生田の記録を抜いたと判断されて、優勝の栄冠は、村田ら横浜の三選手に輝いた。

「優勝は横浜ですよ、さすがに野球以外のイベントには無類の強さを発揮しますね」
「野球の方も、ちっとは頑張ってほしいね」
「みなさま、このへんでお別れです。実況はわたくし森田でお送りしました。では、また強肩決定戦があったら、お会いしましょう」
ねえだろう。

練習とかいて、大下と読む

広島のキャンプは地獄の様相をていしていた。

夜も明けすがら、グランドには、選手首脳陣が集まり出して、すでに練習に入っている。

この球団には合理的思想や科学的論理が入り込む余地がない。あるのは、ただ根性のみだ。

陣頭指揮をとり、グランドで檄を飛ばすのは、もちろんこの人。内野守備走塁コーチとして、スタッフ入りをした鬼軍曹大下剛である。

「こらー謙二郎。そんなボールもよう捕れんのかあ。グラブが悪いんじゃ、グラブが！　素手じゃ！　素手！」

喧嘩腰にノックを受けていた野村は、大下の売り言葉に反応して、グラブを投げ捨てて、素手で打球に挑む。

「おらーこい！！　大下！！」

素手だからといって容赦はしない。ノックバットから放たれた強烈な打球は、かすかな焦げ臭さを漂わせながら閃光となり、サードの野村を襲う。その上絶え間ないノックの連続でボコボコになったグラウンド、ボールは不規則に弾む。

たとえ、グラブをしていても、取りきれないだろう。

ところが、逃げずに捕りにいくのが、広島野球。両手で止めると、当然、ボールは弾かれるが、痛みもなんのその、すぐさま拾いあげると、

「おらー」と一塁へ怒りの送球。

「そうじゃ、謙二郎！　それじゃ、それ！　そのファイトがカープの真髄じゃ！！」

広島は、他球団のように、能力や戦力バランスを考えて、大会メンバーを選出する方式はとっていない。

猛練習に生き残ったものだけを使うという戦略だ。国民栄誉賞の

衣笠でも、ミスター赤ヘルの山本浩二といえども、練習から脱落すれば、メンバーから外すこともいとわないという。

衣笠がノックを受けにサードに入れば、この調子だ。

「きぬ～！　お主、現役時代何本ヒット打った～!?」

「２５４３本!!」

「そうか！　それじゃあ、２５４３本ノックじゃあ！」

「おう!!」

実績で区別はしない。実績があるほど、さらなる練習を課すという悪魔の方針だ。

「ワシらはカープはなあ、ジャイアンツさんやライオンズさんに、戦力が劣ってるんじゃ。全盛期の肉体を取り戻したらな、さらなる練習で、それ以上の能力を得るしかない勝ち目はないんじゃ」

大下が地元メディアの取材で明かしたように、他球団が調整やチームプレーに励んでいる間、広島は練習で能力の限界のさらにその上をいこうという魂胆だ。

特命野手総合コーチとしてスタッフ入りしているブラウンは、非効率的な練習に懐疑的であったが、元来、ハッスルプレーを身上にしていた選手だ。悪きにつけ良いにつけ、結果が出るまで、黙って見守る構えだ。

一塁側のネットにしがみつき寂しく見守る大柄の男の姿があった。阪神のウインドブレイカーに、広島の帽子をかぶる奇妙な格好のこの男の正体は？　男の存在に気付いたのは、大下だった。

「なんじゃ誰かと思うたら、阪神の新井選手かい。うちらカープになんのようじゃ？　偵察かあ?」

「いえ、メンバーに入れてほしくてまいった次第でありましてでございまして」

「新井選手はタイカースの立派なあ～　レギュラー一塁手じゃろ？」
「それが、あいにくにも、メンバーに選出されませんでしたのでした」
「ほおそれで、のこのことカープに」
「大下先輩お願いします！」
「ワシは監督じゃないけん。古葉監督に頼みなさいな」
「古葉監督お願いします！」
肝心の古葉監督は大下に練習の指揮を任せて、ベンチから、姿半分を出すおなじみのスタイルで見守っている。ただその目は鋭く、選手起用の見極めをしているのは、想像にかたくない
ところが、新井の必死の願いも虚しく、古葉はそっぽを向きつづけている。
「古葉監督は、ようお前のこと知らんはずじゃ。そうじゃ、走れい、新井」
「走るんですか？」
「そうじゃ、そこの坂道をダッシュ続ければ、そのうち運がよければ、古葉監督の目にとまるじゃろう」
新井はいわれるがまま、坂道をダッシュだ。勾配が急で、坂の上の方が見えないほど道は続く。上り下りには、いかにもキツそうだ。
「こうですか？」
「坂道ダッシュを一万も続ければ、古葉監督も見込みのある奴と気にかけてくれろじゃろ」
「は、はい」

それでも、広島の練習は統率が取れていた。それぞれが、熾烈な大会レギュラー争いに勝ち残って優勝を奪い取ろうと、とにかく必死なのだ。
それもそのはずだ。どこのポジションも広島は厚い。サードは江藤と衣笠が鎬を削り、捕手は達川が西山や水沼を蹴落とそうと、胃から汗出るほどの猛練習を繰り返し、一塁は、打点王ロペス、首位

打者水谷と新鋭栗原に永遠のポスト赤ヘルの小早川が争う。遊撃は、名球会野村にベストナイン三村に新人王梵がノックを受けていたが、肝心の男の姿が見えなかった。本来、野村とどちらを起用するか、首脳陣の頭をとことん悩ませるあの男の姿が。

高橋慶彦だ。昼過ぎに一人グランドに現れると、古葉監督や衣笠らごく少数の仲のいいものに挨拶をしただけで、他の多くの連中とは、言葉を交わすどころか、目も合わせない。

けだるそうに遊撃のポジションに入ると、大下から声が飛ぶ。

「おう、慶彦、久しぶりじゃなあ。お前は何本ヒットを打った？」

「さあ、忘れましたわ」

「そうか、それじゃあ、７０００本ノックじゃあ」

現役時代さながらの、よくいえば軽快、悪くいえば軽率な動きでノックを受ける慶彦。

だが、慶彦は十本ほどノックを受けると、これで体慣らしは十分ばかりと、さっさと内野から姿を消し、ネット裏へティーバッティングに向かった。チームの和を見出す身勝手な行動であったが、不思議と慶彦を弾劾する声は上がらなかった。

じつはキャンプ前のミーティングで、慶彦がどんな行動をとっても、なるべく放っておくとの方針が確認されていたためだ。方針にのっとり、大下はとくになにもいうこともなかった。

慶彦は十分ほどでティーバッティッグを終えると、とっととグランドを後にした。だからといって、練習量が少ないわけではない。全体練習が少ないだけで、影では血反吐を吐くほどに、必死の練習を繰り返していた。

その練習とは、愛弟子西岡と女を引っ掛けては、シャワーを浴びている隙にバットスイング。酒を飲んで、もよおしては、トイレを二塁に見立てて、リードの練習と、遊びと練習をごっちゃまぜにした往時の風景そのままであったが。

慶彦にとっては古葉監督が良き理解者であることが幸いした。古葉も慶彦が影で練習を積んでいることは、熟知している。

ただ問題は、その他首脳陣の多くがアンチ慶彦なのだ。その筆頭が大下で、野村との熾烈な遊撃争いの行方はみえない。

練習という地獄は日が暮れても続く。脱落者が出る。東出が過呼吸で倒れては、瀬戸が捕手の層の厚さに自信をなくし失踪し、メディーナが骨折しては、小早川が赤痢になる。ただそこは、カープ６０年の歴史。いくらでもメンバーの替えはいる。その一人が新井だ。

新井は、ひたすら坂道ダッシュを繰り返す。

「はあはあ、古葉監督まだですか…膝が割れそうです…」

ただ古葉監督の位置から、坂道が死角になっていることに、新井はまだ気付いていない。

黒田親子ものがたり

黒田がブルペンから戻ると、通路に見かけない男が立っていた。男は南海のユニフォームを着ていた。それも、ずいぶんと古めかしい、黒田にも馴染みのないモデルだ。

「久しぶりやな」

男の年頃は黒田より、少し下くらいだろうか。背は黒田より低いが、そのぶんがっちりとしている。

「失礼ですが……どなたさまですか…」

黒田はいっこうに誰だか分からない。

「ハハハ、わからんのもムリないな……。なにせ、博樹、おまえが生まれるずいぶん前の姿じゃからなあ」

博樹と黒田の下の名前を呼んだ。

黒田は下の名前で呼ばれたことで、すべてがわかったようだ。

「も、もしかして、親父か?」

「ようやっと、わかったか」

黒田の父親は、黒田一博という強肩で鳴らした南海の元外野手。一昨年、享年八十歳で、惜しくもこの世を去った。その父親が、大会の参加選手として、全盛期の肉体も持ち、黒田の前に現れたのだ。

「そ、そうか。オヤジも大会に参加できるんだ……」

「なんや、意外そうやな~。こうみえて、ワシは鶴岡南海の三番打者やぞ。まあ、酒飲みで、親分にユニオンズに放出されちまったがな…。はは」

「それで、出場できるの?」

「まあ、難しいな。南海だけでもやっかいな連中多いのに、福岡行った後にもえげつないのがぎょうさんおる。それでもな、親分が黒田、お前も来いいうから、ついてきたんや。まあ、親分なりに、ワシをユニオンズに放出した罪滅ぼしを今こうしてしてくれてるのかなと思うてる。まあ、大会に出るため来たいうより、現世ツアーに

参加したようなもんやな……」
「母さんにはあった？」
「ああ、あったよ。元気にしておった。まあ、死んだ人間が元気いうのも、おかしなもんやがな」
「そうか、それはよかった」
「で，おまえはどうなんや。ワシのことばかり聞いてからに。残れそうか？」
「まあなんとかね。広島にもいい投手がたくさんいるけど、現代の投手の代表として、球種の多さを古葉監督さんが評価してくれてるみたいで…」
「ほお、出れるんかい？　おまえが出れるんじゃ、広島いうのもいうほどたいした球団じゃないのう…とくさそう思おたが、どうやら現世ツアーの行き先は、ホークスの応援とおまえの応援に決まりのような」
「それで、いつまでいられるの？」
「大会が終わるまでといいたいところじゃが、ワシのような補欠はチームが負けるその日までだぞうだ」
「負けるまで？　そうか、それじゃあホークスが勝ち残れば、大会が終わるいられるのか…。カープとホークスが決勝戦ってなったら最高だ」
「そうだ。ワシもそれを願っておる」
黒田は、急に父親の手を握りしめて、
「いっそ大会が終わらないといい…。永遠に大会が続けば、……そうすれば、ずっと一緒にいられる」
と涙を浮かべて、語りかけたが、父親は、黒田の手を払うようにのけた。
「博樹、そんな心構えじゃダメだ。メジャーで生き抜いていけないぞ。ええか、物事には、いつか終わりがくるんじゃ。別れは、誰にも避けれないのじゃ。前だ。常に前だけ向いて生きるんじゃ。人生なんぞは、ワシのように死んだあとにでも、天国で振り返ればいい

んじゃ」

「そうだね。父さん……」

黒田はこらえきれずにボロボロと涙をこぼしていた。

黒田の父親は、慰めるように、黒田の肩を抱いた。

伝説の高速スライダーとヤスダの魔球

「オーヤくん、オーヤくん。魔球ができたからみてよ」
「ヤスダさん、何ですか？」
「うん、オーヤくんじゃない」
「大矢さん？　あの人は横浜で監督やってますよ」
「それじゃあ、おぬしは誰だ？　古田か？　え」
「古田は痛風です」
古田が痛風で倒れたあげく、対抗となる大矢は横浜の監督に就任している。よって第三の捕手が浮上してくるのだが、スワローズ史上、古田大矢に続く実績を残した捕手といえばこの男だ。
「な～んだ。ヤエガシくんじゃあないかに～」
暫定的にヤクルトの捕手として、マスクをかぶるのは八重樫だ。独特なフォームから繰り出される強打は、評価の高いところだが、パスボールの帝王と呼ばれた捕球のまずさと、古田大矢というプロ野球歴代屈指の阻止率を誇る二人と比較すると、肩の面で劣ることは否定できない。昨年まで４０年近くユニフォームを着つづけていただけに、性格の良さは誰もが認めるところだが…。八重樫では不安とばかりに、ヤクルト首脳陣は、金田の投球をノーサインで受けていた国鉄時代の正捕手根来や、捕手失格を言い渡された秦に、再度マスクをかぶせ、現役捕手の福川まで呼び寄せて、緊急事態に備えている。ホークスと並ぶ捕手王国と見られていたヤクルトは、キャンプ早々大ピンチでに陥っている。

「ふん。古田のやつ……。痛風なんかにかかりよって、扇の要の自覚がないのか」
管理野球の総帥ともいえる広岡達郎は、古田の自覚のなさを薙げている。かくいう広岡も現役監督時代に贅沢病ともいわれる痛風にかかり、ナインからひんしゅくを買ったのだが……。

ヤクルトのキャンプにはいまひとつまとまりがない。野村の元で優勝を経験した選手が多いからだ。その野村は、ホークスで選手をやることを選択したために、監督はできない。

ヤクルトナインは、野村ＩＤ野球と広岡管理野球のギャップに戸惑うことになるのだ。

玄米食を強要されるのは当然で、夜の営みまで厳しくチェックされるのだから、たまらない。全盛期の肉体と容姿を取り戻しイケイケとばかりに、夜遊びを考えていた池山は意気消沈していた。

災難続きのヤクルトにも、希望があった。故障により選手生活を終えた投手たちが、大挙復活したのだ。現役とはいえ、往時の輝きが見られない石井弘寿は左腕史上最高ともいわれる１５５キロの剛球を取り戻し、中日での四年間、史上最悪の給料泥棒と罵られつづけた川崎は、蘇った伝家の宝刀である鋭いシュートで、打撃練習の同僚といえど遠慮なく内角を突きまくる。

もっとも注目されたのは、伊藤智仁の復活だ。幻の史上最高の投手とも呼ばれた伝説の９３年の切れ味を取り戻したのだ。球速表示こそ、リハビリ中に提携先のインディアンズで筋力アップした復活後の９７～００に多少劣るが、スライダーのキレは恐ろしいものがある。カットファストボールとも見間違えるほど球速で打者の手元にきたボールが、ミットに入る寸前に、大きなスローカーブくらい曲がるのだ。

思えば、高速スライダーとの言葉が広がったのは、伊藤智仁の社会人時代であった。アマ全日本の主力投手とはいえ、一人のアマ選手に過ぎない伊藤が投げるボールに異名がつくとは、それだけインパクトのあるボールであることがわかる。

彼ら投手陣の調整は順調だが、問題は、いつ肩、肘の爆弾が破裂するのかだ。ヤクルト投手陣の故障の多さは群を抜く。その可能性はけして低くない。肉体の再生はあくまで一度。大会中に壊れたら、自力で治すしかないのだ。

ベイスターズ球場　雰囲気最悪

横浜はやる気がなかった。

負け戦と決めつけて、金をかけたくないのか、沖縄宜野湾行きを取りやめて、地元横須賀のベイスターズ練習場でキャンプを開始したのだ。

ベイスターズ球場とご立派な名前がついているが、早い話、たんなる練習施設である。合宿所に隣接され、グラウンドの広さもそれなりにあり、二軍の試合も行われることもあるが、観客席は、バックネット裏の５００席ほどで、施設も貧弱だ。ロッカールームもろくになく、ビジターのチームの選手は、外で着替えることを強いられる。

海も近いために、浜風が絶え間なく流れてくる。沈滞する横浜のムードに、浜風はどことなくうら寂しい。

親会社のＴＢＳが金を出し渋るのも無理はない。他球団と比べて、戦力的に劣るのは明らかな上に、監督問題に手間取り、あげくの果てに、十二球団で唯一、優勝経験のない監督を起用せざるを得なかったのだ。

伝統的に、ぬるま湯球団と揶揄されてきた球団、練習のムードも今ひとつ上がってこない。現役から抜擢された村田と内川はそんな空気を敏感に感じとる。

「どうよ、内川、このムード」

「弛緩していますねえ」

「報道陣もまるっきりいねえし、観客もチラホラだ……。つうかよお、平日の教育リーグとかのが、まだいんじゃねーの」

「これじゃあ、シーズンとたいして変わりませんねえ。せっかく、歴史に残る大会だと喜んできたのに…」

「ほんとだよ。もう帰りてえ～。監督もシーズンと同じだし……ああ……」

噂をすればなんとやら、監督の大矢が、二人に近寄ってくる。
「おい、村田」
「なんでしょうか…大矢監督」
強面で対応するが、
「決まったぞ……おまえに四番を任せる」
の一言で、破顔一笑。
「四番？　このワタシ、男・村田が並み居る先輩方を抑えて、四番打者の栄誉を享受できると？」
「うん。ローズや、松原さん、桑田さん…。他に候補はいたけど、おまえの若さと可能性にかけたよ」
「ありがとうございます。男・村田。横浜ベイスターズの四番打者として恥ずかしくない成績を残すために、今から練習に精進する所在であります」
横綱の襲名を意識するようなコメントを残し、村田は喜び勇んで、打撃練習へとバッティンググゲージに向かう。
「単純だな……あの人…」
一人残された内川はあぜんとばかりにアゴをのばすばかりだ。

とはいえ大矢である。大矢の権限のなさと、横浜の体質からして、村田四番が確実ともいえない。コーチ陣にも、監督の決断をひっくり返そうと、てぐすね引いて待っているものがいるのだ。
嫌いな投手が投げているときに、わざと打たなかったり、エラーをしたりする選手が実在したり、監督とフロントがもめて、腹いせに、ろくな補強をしなかったりと、この手の話、横浜では快挙いとまない。
悪しき伝統がこびりつく球団ならではだ。

すでに降れ腐れている選手がいた。高木豊である。彼の本職であるセカンドにはローズがいた。守備と走塁では自分が圧勝と自負しているが、肝心の打撃に差がある。残した打率は負けないものがあ

るが、長打力と勝負強さはローズの圧倒的リードだ。
高木には、現役時代にも、大リーグエンゼルスからやってきたローズにセカンドを追われて、サード、ファーストとポジションを転々としたあげくに、失意の戦力外通告を喰らった苦い思い出もある。
バッテリー以外のポジションを守った経験のある高木。ならばと、他のポジションで出場を狙うが、厳しいものがあった。
ファーストは背が低すぎて、サードは肩が弱すぎて、適正はない。主に若手時代と日本ハムの在籍当時に外野としての出場経験も豊富にあるが、屋鋪、多村、金城など本職の外野手たちにはとうていかないそうもない。
残るはショードだ。肩に問題があるとはいえ、現役時代の８５～８６にはほぼフルシーズン遊撃手としてプレーしベストナインも獲得しているポジションだ。
ただショートのライバルも手厳しい。石井琢郎と山下大輔の二大プリンスがいるのだ。打撃と走塁は負けてないとはいえ、石井の肩の強さと山下の守備力の前には白旗を上げざるをえない。
それだけでなく、プレーボーイぶりも石井とはいい勝負だし、頭髪関係の潔さも山下に負けている。（高木はカツラメーカーのＣＭに出て増毛するが、山下は断固オファーを断り続けて、ギャグにする）
勇んで、大会出場を決めた高木豊であったが、やる気はみるみる後退気味だ。外野のフェンスに寄りかかると、
「たく……せっかく来てやったのに……控えかよ…控え……。息子の応援にでも行った方がよかったよ……あ～あ」
「おい、豊」
「はあ～？　なんすか～」
呼ばれても生返事だ。
「おい、豊。腐るなよ。オレなんて、レギュラーはおろかベンチ入りも厳しい。それでもな、野球ができるってだけで、喜んで飛んできたぞ」

聞き覚えのある懐かしい声だ。声の正体は…。高木は声の主を確かめた。

「ヒロカズさん!?」

加藤博一、その人であった。

「おひさ～　元気だった～?」

「来てたんですか……」

「おうよ。豊。また屋鋪とおまえとオレでスーパーカートリオの再来といこうでないかい。一番の実力者のおまえが腐ってちゃ話にもならん」

「スーパーカートリオすかあ?　また、墨に出て盗墨失敗して、墨に出て盗墨失敗して、墨に出て盗墨失敗して、スリーアウトチェンジ。監督さん激怒を繰り返すんすかあ?」

へらず口を叩いているが、高木の顔は、みるみるうちに生気を取り戻してきた。

やがて、立ち上がると、三人で盗墨のサインの打ち合わせをしようと、外野にいる屋鋪を呼びにいった。

恐怖　凶弾炸裂？

私が体験した恐怖体験をお話しします。

とある冬の日、九州への出張に向かうために、空港を使うことになったのですが、あいにくの悪天候で、離陸時間が大幅に狂い、搭乗客である私は、待たされることになったのです。

聞いたところ、離陸までにはかなりの時間を要するということでした。

時間を潰そうと空港の近くの喫茶店に入ったのですが、それがすべての悪夢の始まりでした。

入店したときから、なにか普通でない雰囲気であると感じていたのですが、また別の喫茶店を探すのも面倒だと、そのまま席についたのです。

私と同じように、ここで時間潰しと考えたものが多いのか、店内は満席に近い状態。あいにく相席になったのですが、同席した男が、常人離れした格好をしているのです。年頃は三十前後というのに、どぎつい金髪をつんつんさせ、顔中、まるで泥棒のような、無精髭。体はひときわ大きく、派手な色のスーツを来ています。腕には、いかにも高そうな時計をはめて、塗られた金箔が、眩しく光っています。

まいったなあ～　大変な席に座ってしまった。なるべくなら、目を合わせたくないと、伏し目がちにしていたのですが、そんな私の態度に気づいたのか、男が声を掛けてきたのです。

「おたくも、飛行機待たされてるいるですか？」

言葉使いは丁寧でしたが、低いトーンの野太い声、迫力は十分でした。思わず、身震いをしてしまったのですか、無視することもできずに、私はしかたなく反応しました。

「はい……。ちょっと九州まで仕事がありまして……」

「ほな、ボクと一緒やね」

ソフトな関西弁でしたが、威圧感はたっぷりです。その時、私は、男の目を初めてまじまじと見ました。

勝負師の目をしていたのです。

その目は、若干たれ気味とはいえ、あくまで鋭く、獲物を狙う目をしていました。私は確信しました。この男は浮世離れした世界に身を置くものだと。

私は会話をそれっきりにしたかのですが、男は許してくれません。行き先から、仕事まで、根掘り葉掘り聞いてくるのです。たいして私は、男の素性について何も聞くことはできません。

聞かれて、すぐに答えられる職業とは、とうてい思えないのです。

男は、色濃い反応を見せたのは、私の年収を聞いたときでした。見栄も張らずに、正直に答えたのですか、数字を聞いた瞬間男の顔色が変わりました。

「ほおー……」

といったきり、何も続けませんでしたが、明らかに、その顔は、勝ったという満足の顔でした。

そりゃあ、怪しい世界に生きるアンタとは年収は桁違いだろうけど、こっちは安定しているんだといい返したっかったのですが、とうてい無理でした。

冷静になって、店内を見渡すと、男と同じ雰囲気を醸し出すものが、そこら中にいました。男たちはどれもがっしりとしていて、奇抜な髪型をしていました。今時見かけない五分刈りに、角刈りに、男とおなじような金髪、はては、ドレッドヘアーの黒人までいるのです。

なんだ、この店は、店内中、この男の仲間か？　さすがに耐えきれなくなり、注文をキャンセルし、店を出ようと出口のトビラに手を掛けたのですが、私の行く手を阻む男がいました。例のドレッドの黒人です。

「ノー、ノー、外は寒いネエ～」

と英語と日本語の混じった妙な言語で、私が外に出ることを許さ

ないのです。
私は、店の外に出ることを諦めました。無理に出ようとすると、身の危険が及ぶと感じたのです。
最近のや〇ざも、国際色豊かになったなあと思い、しかたなく席に戻ったのです。
席を外していた間に、男の元に、違う男が寄ってきました。挨拶しにきた男は、すらりとした長身で、サラサラのヘアーをしています。
なにやら席の男と挨拶を交わしています。
「また一緒になりましたね、頑張りましょう」
と聞こえました。会話の中で席の男は、ノリさんと呼ばれていました。すらりとした男は、クマと呼ばれていました。
私は、男たちの会話の、また一緒？　の部分が引っかかりました。ノリという男は、いわゆるこの方々の業界用語でいうところのお勤めがすんだのでしょうか。そして、いったい二人は何を頑張るのと誓ったのか？　想像するだけで、身が悶える思いです。
クマと呼ばれる男が、私の存在に気がついたのか、気安く話しかけています。その内容は、なにやら、三色だの、大先生だの、いかがわしい宗教の勧誘でした。クマと呼ばれる男は、本職の仕事だけでなく、普及にも熱心なのです。私より若いのに、と思わず感心してしまいました。
私の向かいの席の会話が耳に入ってきました。向かいの席には、にやけ顔の色男と不満顔の大男が座っていました。にやけ顔はナシダさん、大男はヨシイと呼ばれていました。なにより戦慄を覚えたのは会話の内容です。
「ナシダさん、ＷＢＣのダル用に、アメリカ仕様の特別のロージンをあるルートから仕入れることに成功しました」
ＷＢＣ？　ダル？　スポーツに疎い私にもわかります。ＷＢＣとは野球の世界大会で、ダルとはサエコとかいう娘と結婚したなんとかハムの投手です。たしかダルビッシュとかいって、ＣＭでも見か

けます。

そのダルに、特別ルートで仕入れたロージン？　ロージンって何だろう？　と思っていると、ヨシイと呼ばれる男は、バックから、白い布袋を取り出しました。中には、粉状なものが入っているのか、触る度に、緩やかにへこみます。

もしかすると、あの袋の中身の正体は？　ダルとかいう投手は、北京の五輪のときでしょうか、見かけに比べて気が弱いところがあると、たまたまみていたテレビ中継で見かけました。

気の弱さを克服するための粉状のもの……。これ以上は私の口からは、とてもいえません。すると、ロージンというのは、布袋の中身を隠すための、隠語なのでしょうか。ヨシイと呼ばれる男は、闇で取引する仕事を専門にでもしているのでしょう。

ナシダと呼ばれる男は、ロージンとされる布袋の手触りを確かめると、

「これは、いい手触りだ。日本製とものが違うね」

と、ロージンと呼ばれる布袋を表しました。ナシダと呼ばれる男は、その道のエキスパートなのでしょうか。手触りだけで、中身のデキを感じ取るとは、いやはや、別世界とはいえ感心させられます。

「このロージンさえあれば、ロージンだけに、ご老人も安心して観戦できる投球ができるね」

私は耳を疑いました、ナシダと呼ばれる男が、ダジャレをいったのです。最近のヤク○はギャクもいうのです。

私の横の席の携帯がなりました。横の席には、太い眉で、顔が濃すぎる角刈りの男が座っていました。

「カズエか。そうだよ、困っちゃって……パパの乗る予定の飛行機が大幅に遅れて…」

電話をかけてきたのか、この男の娘さんでしょうか。親しげに会話をしています。○クザとはいえ、親子仲は良好のようです。

とはいえ、ゴリラと見間違えるようなこの男の娘……想像すると……。失礼になりますが、あまりいい顔の娘さんは浮かびませんで

した。

店内を見渡す限り、浮世離れした男たちにあふれています。さきほどのドッレドだけでなく、赤鬼のようなほっぺをした白人や、目のいっている黒人や、俳優のエディーマーフィーそっくりの黒人までいます。最近のあちらさんお業界も人手不足なのか、国際色が豊かです。

気になるのは。意外と和気藹々としたこの集団の中、一人、難しい顔をして腕組みをした男がいるのです。坊主が伸びた状態の髪型の男は、誰とも会話することもなく、精神統一をするかのごとく、目を閉じて、ジッとしています。

浮いているのでしょうか？　あ、もぐら顔の小太りの男が、気難しい男に話しかけました。

「草魂や。草魂でとにかく走るんや」

とこのゆおな意味不明なことを、アリタと呼ばれるもぐら男に、しきりに繰り返していました。

私には、まるで言葉の意味に見当が尽きません。もしかすると、薬の濫用で頭がやられたのかも……。

アリタと呼ばれる男も物騒なことをいいだしました。

「今度は、福本さんを刺してやる」

刺す？　アリタと呼ばれる男は、接近戦を得意とするスナイパーなのでしょうか？　それにしては、体が重そうだ。もう少し絞らないと、フクモトという男は刺せないぞ…。

と私がいらぬ心配をしていたときに、店の雰囲気を一変さえる出来事があったのです。

ふさふさの白髪のとろりとした垂れ目の老人の入店が空気を変えたのです。一見、何の威厳もなさそうな老人の入店で、場の空気をピリリとしまったのを部外者の私でさえ感じました。

老人は風貌から想像する、ソフトでゆったりとした声そのままにいいました。

「なんや、おまえら、ここにいたのか。探したで」
ところどころ鼻がつまったようでしたが…。
オヤジ……。オヤジといっせいに集団が反応します。赤鬼の白人も、久々の再会なのでしょうか、ニシモトサンと老人を呼んで、いまにも涙がこぼれそうなほど感動しています。
もしかすると、この頼りなさげの老人は、集団の親分ではないでしょうか？　あの草魂の男も、親分の登場に身を正して構えます。
やがて、飛行機の離陸の準備ができたとの知らせが届きました。
どうやら、集団と同じ行き先である私は、また同席となったら堪らないと、別の便にすることにしました。
以上が私の体験です。

宮崎空港に降り立った異様な集団。スーツを身にまとい土木関係者のような肉体を揺らし、のしのしと歩く。角刈りに、派手な金髪に、ドレッドヘアーの黒人までいる。
空港に居合わせた搭乗客には、ヤクザの出入り？　と勘違いされたが、近鉄の復活である。
一人恐々と、岩隈にひっついて離れない男がいた。田中将大である。大会本部は楽天を近鉄の後継球団とし、田中にも出場する権利が発生したのだ。
楽天でチームメイトとなるノリもまだよく知らない。山崎武司も呼ばれていないことから、田中が馴染みあるのは、岩隈だけだ。物怖じのしない度胸の良さに定評があるとはいえ、さすがに近鉄球団の雰囲気には、すぐに慣れにくいものがある。
「う～ん。ボクが近鉄のユニフォームを着て投げる……う～ん」
と本人は戸惑いを隠せない。

偵察要員偵察をする

「こちら、デーブ」
西武の特別スコアラーに任命されたデーブこと大久保は、宮崎県でキャンプをはるホークスの偵察に訪れていた。ライオンズの宿命のライバルといえば、今も昔もホークスである。
「それがですね…ウシシ……。野村さんと城島の正捕手争いが、大変なことになっていて、お互い意識しすぎているのか、目も合わせないすんよ。監督の鶴岡さんも二人の関係を気にかけることもなく放っておくだけ。こりゃあ…分裂寸前ですよ。ホークス…雰囲気が最悪っす」
意外と仕事熱心なデーブ。その一方同じく、スコアラーに任命された鈴木鍵の仕事ははかどらない。
「こらあ、ケン。ぼおっとしてないで、よく見ろ」
デーブに注意を促されるが、
「デーブさん。なんで、オレ、メンバーに入れないですかねえ?」
「仕方ねえだろ。西武はなあ、それだけ層が厚いんだよ。オレでさえ補欠に入れず、こうしてスコアラーやらされてるんだ。ケンが入れるわけねえべ」
「デーブさんはまだしも、オレ、こう見えても東尾西武連覇の四番打者ですよ。左の代打でいいから、ベンチに入りたかったなあ……」
「グチグチいってねえで、仕事に集中しろ」
デーブの携帯が鳴り響く。
「はい、こちらデーブおう垣内か。どうだ、ロッテの方は」
ロッテ担当は垣内だった。
「えっとですね……あの……」
「もっとハキハキ喋れよ。だっからおめー、みかんの大器とかバカにされんだつうの」
「すいません」

「で、ロッテの方はどうなのよ？　なになに落合さんが守るポジションなくて、揉めてるって？　どこもおなじだな～。そうだな、三塁には、ミスターロッテの有藤さん。一塁には、打撃の職人榎本さん。二塁には、名球会の山崎さんがいるもんなあ～　あのひとＤＨ嫌いだし。そうか、バレンタインはどういうつもりなんだ？　落合さんと起用法の会談とかしてねえの？　そっかそっか、一応、それらしい会話はあったって？　なに？　バレンタインが落合さんを便利屋で使うといいだして、二人のコミュニケーションはそれっきりだって？　ウシシシ……。はい、はい、じゃあ、また情報頼むべ」

　電話を切り鈴木との会話に戻る。

「聞いたか？　ケン、ロッテもボロボロだってよお。こりゃあ、我が西武で決まりだべ」

「ブルペン見てください」

「うん？　ブルペン？　あの下手投げ…。あーあれが杉浦さんか」

　ブルペンでは杉浦が華麗なアンダスローから見事な直球を投じている。

「はええなあ～。杉浦さんの投球はじめてみるけど、下手であんな速いのそういねえよ。松沼の兄やんよか、はええかも」

「ああ…下手投げには絶対に左打者が必要なのになあ……ボクならあの速球、センター前にクリーンヒット打てるのに…」

「まだぐちってんのか。いいかげん、切り替えろよ。ケン。しいかしなあ。ウチもそうだけど、昔と今で、黄金時代を築いた球団は豊富にメンバーいるよなあ～。何度も優勝をした鶴岡南海に、王さんと根本のオヤジが作り上げた福岡のホークス王国……」

「捕手には野村さんと城島」

「そりゃさっきオレがいったつうの。よく聞いてけケン。一塁から、松中ー井口ー小久保ー川崎のムネりん。これだけでも脅威なのに、飯田ー鶴岡兼任ー陰山ー木塚のいわゆる１００万ドルの内野陣もポジションを譲らない。弱点ねえかな…なんか見つけたか？　ケン」

「野村さんと城島雰囲気悪いですよ」

「それもオレがいったつうの…うん？」
「どうかしました？」
「ちょっと待てよ……。あれ？　おう……。ウシシシ…。見つけたぞ……ホークスの弱点……。こりゃあ早く…三原さんに連絡しないとな……監督賞ものだぞ…うししし」

星野の鉄拳一発二発

他球団がキャンプで調整するなか、星野中日は実戦モードに突入していた。近くでキャンプをはっていた韓国ＳＫを相手に迎え入れての練習試合だ。

キャンプ地に選ばれた星野の地元、岡山県マスカットスタジアムには、中日の大会スローガンである「勝ちたいんや」ならぬ「勝ちたいんだぎゃ」なる応援幕がそこら中にはりめぐされている。

売店には、勝ちたいんだぎゃＴシャツや、勝ちたいんだぎゃドリング、勝ちたいんだぎゃボールペン、勝ちたいんだぎゃきびだんごと豊富なグッズに加えて勝ちたいんだぎゃバージョンのドアラも現れるほどだ。

もちろん、グッズの権利は星野が持ち、利益は、星野のふところに入る仕組みになっている。

「我が家は、やっぱりええわな」

と久々に、中日に戻った星野はご機嫌である。

ただ問題はコーチに天敵近藤貞雄がいるのだ。

「なんで、あのじいさんがいるんや」

星野は、近藤の存在だけが不満だ。

練習試合が開始された。

ＳＫはＤＨを入れた十人野球のオーダーを組んだが、中日はあえてＤＨは取らなかった。

「ＤＨなんぞ。野球やない」との星野の信念と投手に代打を起用することで、なるべく多くの選手を試合でみたいという理由だった。

中日ドラゴンズが組んだオーダーは、衝撃的なものだった

一番センター田尾、二番セカンド立浪、三番ライト福留、四番サード大島、五番ショート宇野、六番レフト山崎、七番ファースト大豊、八番キャッチャー中村、九番ピッチャーは杉下だ。

見事に星野カラー一色に染められているのだ。田尾と大先輩の杉下以外は星野の元でプレーした星野チルドレンというべき選手たちだ。高木、谷沢のドラゴンズの誇る大スターでさえ、ベンチスタートだ。

「これが、ワシの考える最強オーダーや。文句あるか？」

と星野は居直るばかりだ。たしかに、打線は強力だ。ただ上位はまだしも下位に脆さがあるのにはいなめない。サード大島、レフトに山崎と打力優先の守備にも疑問が残る。

ミスの連続であった。山崎が判断ミスで、外野飛球を逸らせば、大島は、ぽろりぽろりとボールが手につかない。中村は遠慮からか杉下をうまくリードできない。見かねた杉下は自分からサインを出すことにしたが、星野はそれを知らず、四回、フォークを使わずに、痛打を浴びたことを、中村の配球ミスと判断し、中村をベンチの裏に呼び寄せて、顔の形が変形するまで、殴ったのだ。杉下から、あれは自分の配球と聞かされたが、もう遅い。星野はすでに、顔の形が変形されるまで殴られた中村に、人前に見せれる顔でない、と宿舎に直行を命じていたのだ。

もちろん暴行がばれるとまずいから、帰らさせたとはいえずに、広報は打撲と発表したが。

皮肉にも、中村と交代で入った中尾が内を大胆に使う好リードを見せて、試合を引き締める。捕手失格と外野に転向させたあげく、巨人に放出した中尾の活躍に星野の顔は渋い。

星野の鉄拳の被害者は中村以外にもいた。大豊だ。守備は無難にこなしたが、問題は打撃であった。ボール球を振るなとの指示が、星野から出ていたが、大豊は、打席に立った三打席ともボール球を振って打ち取られたのだ。

星野は、「ワシの指示をようきけんのか」と一喝したあと、大豊を右の拳で殴った。それだけならでまだしも、「台湾に帰れ」といってしまったのだから、大変だ。

大豊は試合中、そのまま本当に帰ってしまったのだ。

「アイツ本当に台湾に帰ったのか？」

と星野が心配しても後の祭りだ。中日は、大豊という貴重な戦力を早くも失うことになった。

試合は中盤を迎えても、劣勢。練習とはいえ、格下の韓国球団にまけるのはまずい。しかも相手は現役単独、こっちは歴代のオールスターだ。

北京に続き韓国に苦杯を舐めることは許されない。

星野はベンチに座っていた戦力の封印を解いた。

セカンドには、高木が入り、帰った大豊の代わりに谷沢を投入だ。関係がよくない二人さえ、使いざるを得ない状況だ。さらには、拙守を見せたレフト山崎を下げて中をセンターに入れ田尾をレフトに移した。

守備が固まり、打線につながりが生まれた。八回に、捕手として、中尾中村をはるかに上をいく実績がありながら、ベンチを温めていた木俣の代打タイムリーで同点に追いつくと、最終回、ＳＫの守護神であり北京の胴上げ投手のアンダーハンド投手、チョンを攻めて、最後、谷沢の二塁打でさよなら勝ちだ。

辛くも逆転勝利を飾ったが、星野に笑顔はない。自分が溺愛する選手の失態を、嫌いな選手がカバーしたうえでの勝利ということもあるが、そもそもブザマなミスに苛立っていたのだ。

「みっともない試合をしよって。今日ミスしたヤツは大会から外す。具体的に誰だって？　レフトや。レフトでまごついてたヤツや」

と山崎武司の大会からの除外を示唆した。レフトの守備力で試合を落とすのは、外野守備軽視の星野といえども、もうこりごりのようだ。

イチローと仰木の再会

オリックスは宮古島でキャンプをおこなっていた。

ブーマー、長池、加藤秀司、藤井、石嶺の長距離砲たちのパワーも魅力のひとつだが、オリックスの見ものはなんといっても外野守備だ。

センターの福本が、見事な開脚を見せて、フェンス際の飛球を捕球すれば、ライトからイチローのレーザービームが放たれる。田口や蓑田がレフトに入れば、一部のスキのないクッション処理をみせて、素早いモーションで内野に返球する。本西が田口、イチローに外野守備の極意を教えれば、山森が外野フェンスをよじ登り、ウィリアムズが長いリーチを見せつけ、谷が独特の美的センスを披露する。

夢の外野陣が形成されたのだ。

「いやあ～メジャー三十球団のどっこにもないよ～こんな外野陣。メジャーのゴールドグラブ取れるよ。谷さん以外の全員」

約十年ぶりにオリックスのユニフォームに身を包んだイチローも興奮を隠せない。

「えーで、えーで、阪急の伝統は健在や」

上田も打撃ゲージから、満足そうに見つめる。

オリックスの監督は結局上田に落ち着いたのか？　事情は複雑怪奇に捻れていた。

イチローに近寄るサングラスのパンチパーマの男がいた。

ご存知仰木彬その人だ。

「うんうん。イチロー、やっぱり、おまえはマリナーズより、こっちのがユニのが似合っとる」

「あれ？　仰木さん。なんですか？　大会限定で解説でもやるんですか？」
「解説？　むふふ。そっちのほうが気楽に見れるな…。ワシも監督なんや、監督…」
「え？　監督は上田さんでしょ？」
「上田くんも監督。ワシも監督。宮内オーナーが、二人監督がいるチームもおもしろいと。ワシも監督やることになったんや」
「はい？　なんすかあ？　そのめちゃくちゃなアイデアは？　まあオリックスらしいといえばらしい」
「そうやろ。オリックスの野球はいつも時代の先をゆくんや。闘将上田野球にワシの仰木マジックが融合すれば、こりゃ最強のチームになるな」
「最悪のチームになる可能性もありますね」
「わっはっは。最悪のチームか。それもけっこうやな。最悪のチームつうのも、おもろいわ」
　上田仰木のW監督体制。前代未聞のこのアイデア、はたして、吉と出るか、凶と出るか。まあ凶と出る可能性のが高そうですが…はたして…。

「どや、慎之介。あれから成長したか？」
森は横浜監督時代に、当時ルーキーだった阿部を相手ベンチから見ているが、監督解任後すぐにハワイに居住した森と阿部に深い親交はない。
「森さんどうも」
阿部の挨拶もどこかよそよそしい。
「あれから成長したみたいやな。まあワシの横浜時代のおまえは、みるも無残なリードをしてもんや。その頃と比べると、だいぶましになったようやな」
「そりゃどうも」
褒めているのか、けなしているのか、阿部も反応に困る。
「そうや、慎之介、おまえに言付けがあったの忘れてた。バッテリーコーチの吉田がな、おまえのこと探しておったぞ。吉田は今、第二球場のブルペンにいる。はやく行ってこい」
「ほんとですか？　第二球場のブルペンですね。わかりました、すぐに行きます」
阿部はレガースをつけたまま第二球場へと走っていた。後ろ姿を見ながら、森は不気味に微笑む。
川上が直々にブルペンに入り捕手陣にむかい、
「おい、いまからバッテリーミーティングをやる。森に藤尾に山倉にそして阿部、捕手陣は全員、監督室にきなさい」
ブルペンは四人の投手が同時に投球練習できるように作られているが、一番右端のキャッチャーボックスがぽっかりと空いている。そう阿部が腰を降ろしていた場所だ。
「監督、阿部がいません」
川上に直言したのは、左端に腰を降ろす森だ。
「阿部がいない？　阿部はどこいったんだ……」

「阿部のヤツ、練習抜け出して、馬券を買いに行ったらしいですよ」
「練習中に馬券？　阿部いうのは、そういうヤツだったのか。てっきりマジメなヤツとばかり思っておったわ」
「まったくけしからんヤツですね…」
阿部は森の策略にまんまとかかったのだ。森はどうしても巨人軍歴代最高の捕手は自分だと足跡を残したい。そのためにはこの大会での正捕手の座は絶対に死守したい。最大のライバルは阿部だと考えた。藤尾は森自身が外野に追いやった選手。山倉はおっとりしすぎていて、覇気がなく川上に対してのアピールが弱い。
阿部の打撃は、自分のはるかに上だ。打率２７０、本塁打１０本がせいぜいの自分と比べて、阿部は捕手ながら、三割三十本も記録する選手だ。おまけに肩を強く、守備にしても俊敏でバカにできるものではない。リードと経験に圧倒的な差があるにしても、川上は阿部を先発に起用して、自分を抑えの捕手に使う可能性が高い。
森としては、最初から最後までマスクをかぶり、巨人の優勝に貢献したい。ならば、阿部を潰しにかかるしかない。ライバル潰しは森の十八番（おはこ）でもある。
慶応の三冠王大橋、早稲田の阿野、平安の大型捕手佐々木…並み居るライバル、素材と素質で圧倒するものたちに、森はあの手、この手を駆使し勝ってきたのだ。
阿部に森の毒牙が忍び寄る。阿部のキャッチャーマスクを隠すは、偽のサインを教えるは、現役時代をともにした仲のいい投手陣に阿部を無視するようにことづけるは……。
数々の森の策略にはまり、阿部は次第の持ち前の明るさと元気を失っていく。阿部の覇気のない姿を見た首脳陣も評価を下げる。
捕手は誰を起用するかのマスコミの質問に川上はこう答えた。
「う～ん。阿部にしようと思っておったが、私の眼鏡違いのようだった。もう少しやれる子思うたが……。リードを考えると森になるのかなあ…」

森の一歩リードだ。近くで聞いていないふりをして、しっかりと聞いていた森は、小さくガッツポーズを作った。

４０話　ライオンズ開幕投手クイズ０９

清原、カブレラ、中西、秋山、デストラーデら長距離砲の共演。豊田、石毛、松井稼頭央、中島の豪華すぎる遊撃手争い。

さすが西鉄、西武で黄金時代を築いたライオンズ、半端でない選手層の厚さだ。東尾西武の連覇に貢献したマルチネスや遊撃手で二度の三割を記録した田辺の名前すら上がらないほどだ。

野手陣以上に、投手陣が注目を集めるのは、さすがに長年、投手王国の看板を背負うライオンズである。渡辺西武の抑えグラマンに、森慎二ー豊田の無敵のコンビに、最強のロングリリーバー潮崎、広岡時代の森繁和、永射……。リリーフ陣も多士済々であるが、先発陣は、もっとすごい。稲尾にはじまり、池永、東尾、渡辺久、工藤、西口、松坂、そして現代のエース涌井に岸…。一球団でこれだけの投手を排出したことだけでも脅威だ。

伝説と現在を融合させる彼らの名前を見ると、自然と頭に浮かぶのは、三原監督は誰をエースとして指名するのか？　だ。つまりは、ライオンズの開幕投手は誰か？　ということである。

大方の予想は、やはり稲尾である。なんといっても監督は三原だ。三原西鉄のエースといえば稲尾の他はいない。なにしろ人間でありながら、神様と仏様と並び称された男だ。あふれるほどのスタミナ、絶妙な制球力…、一シーズンに４２勝をあげた実績……短期決戦での伝説的な働き…。

すべてのデータが稲尾を後押しする。ただ、稲尾は絶対的な切り札である。実は、三原が稲尾を開幕投手に指名することは、シーズンにおいても、シリーズにおいても、それほど多くない。展開を見て稲尾を投入して勝ちを取りにいくという起用法をとっていたのだ。となると開幕投手に指名しない可能性はありうる。

それでは他の候補は？　やはり稲尾の次となれば東尾になるだろ

う。どんな打者も場面も恐れない度胸。たとえ、屈強な外国人であろうが、相手の看板打者であろうが、物怖じせず内角を突けるのは、この男ならではだ。

洞察力に優れて、敵の出方を見るのにも適している。打たれたとしても、チームに何らかの財産をもたらす投手でもある。

なにより東尾は、西鉄、太平洋クラブ、クラウンライターの福岡ライオンズ時代から、埼玉は所沢の西武時代まで知る投手だ。稲尾を知り、松坂をも知る。ライオンズの生き証人ともいえる。西鉄勢と西武勢のチームワークがとやかくいわれる中、ふたつを結びつける男として開幕に起用する価値はある。

敵の出方を見るというと、広岡時代は、松沼兄が定番で、森の時代は、先の東尾に加えて、現在の監督の渡辺久と工藤のどちらかが定番であった。森西武は八度のシリーズを戦ったが、この三人で、その八度のすべてを占めている。

また三原マジックのひとつとして語り継がれているのが、１９５６年の日本シリーズの川崎徳二の開幕起用だ。わずか数勝のベテラン投手をあえて開幕投手に抜擢したのは、様子見ともうひとつベテランの経験を買ってのものといわれる。その再現もありうる。短期決戦の開幕経験豊富の彼らから、一人抜擢されても、なんら不思議でもない。

隠し球としてあげられるのは、田中勉であった。田中勉といえば、黒い霧の仕掛け人ともいえる男だ。いくら、歴史を彩るスター選手を集結させる大会とはいえ、田中の起用はまずいと誰もが思うだろう。そこをあえて起用するのが三原だ。田中の実力自体は、最多勝や最多奪三振の実績からわかるように、本物だ。ただオールスターに三度選出されながらも、いずれも辞退。シリーズでも、さんさんたる成績しか残していない。短期決戦にきわめて縁のない投手といえる。

三原の知らぬ投手の起用もおもしろい。

三原は涌井の投球に目を見張ったという。当然、涌井のことは三原は知らない。その三原の目からしても、涌井の投球には光るものがあった。スライダー、カーブ、フォーク、チェンジアップにシュート……。あげきれぬほど多彩なボールを投げ込む投手は三原の現役監督時代に、どこを探してもいなかった投手だ。

なにより、三原が涌井に惚れたのは。ポーカーフェイスぶりだ。どんな場面でも表情を変えない涌井は、三原の理想とする投手像に近い。未来の野球を支える投手として、涌井を指名する可能性も捨てきれない。なお三原は、涌井に、同じく無表情ぶりがウリだった加藤初にならい、鉄仮面とあだ名をつけようとしたが、涌井は、どこかカッコウ悪いとやんわりと拒否した。

球界の大先輩がせっかくニックネームをつけたのに、拒絶するとは…と周囲は涌井の応対にやきもきしたが、三原はなんてクソ度胸の持ち主だと、逆に涌井の評価をあげることになったのだ。同じく三原が注目したシリーズＭＶＰの岸が、三原とろくに目も合わせれなかったのとは対象的であった。

三原の知らぬ現代の日本のエースといえば、なんといっても松坂だ。日本のエースを起用する。なんらおかしなこともない。球数の多さや制球の乱れがとやかくいわれるが、メジャーで、しかもアリーグ東地区という一番タフな場所で、１８勝した実績は伊達ではない。昨年のこした勝率は長いメジャーでも驚異的数字で、被打率が一番低い投手とのデータもある。

三原も初めてみた松坂の投球には腰を抜かしたようで「いままで一番速い投手は沢村、一番球の重い投手はスタルヒンと思っておったが、松坂とかいう小僧は、それ以上かもしれん」とのコメントを残している。

球速と球威に、伝家の宝刀のスライダー。メジャーでは滑るボールにいまなお苦しんでいるが、日本時代に比べても、松坂の体格は年々厚くなっている。なれ親しんだ日本のボールで、球威も西武時代よりもパワーアップしたようにもみえる。

最後に忘れてはならないのは、西口だ。西武の主力投手で十年以上もローテの牽引車を担っている。勝ち試合にたいする登板試合数は、歴代でも屈指である。つまりは、もっとも勝ちの期待できる投手ともいえよう。西口の可能性も捨てきれない。

ただ気になるのはいまだ日本シリーズ0勝という記録だ。シリーズだけでなくプレーオフでも働きはない。そんな西口をあえて初戦にもってくる…これも三原マジックといえよう。

三原は報道陣を集めるとクイズを出した。

「ライオンズの開幕投手は誰か？」

とそのものズバリである。

正解すれば、賞品か賞金でも出るんですか？　とぶしつけな記者の質問にこう答えた。

「正解者がいないのに、賞品の心配する出題者がどこにいるのか」

？　正解者がいないだって？　三原マジックの予告であろうかー。

緊急清原増殖警報発令中

肉体の再生のためのカプセルは、一選手につき、一回きりしか使うことができない。つまり、使用後、故障をしたら、肉体の再生は二度とできないのだ。だが、逆に考えると、使用していない選手は、故障を完治することが可能なのだ。

松坂を例に出すと、松坂は今が全盛期だとし、カプセルの使用を拒否した。もしも、松坂が大会中になんらかの故障を抱えても、カプセルを使用すれば元に戻るのだ。

ただ何球団にも在籍した選手は、その限りではない。今度は落合を例にとろう。カプセルには、落合の各年ごとのデータが用意されている。落合は好きな年のデータを選ぶことができる。もしも、ロッテから出場する落合が、敗退後、勝ち残った他の球団から出場をすることを望み、その球団が落合を欲した場合、移籍は成立する。

ロッテから出る落合は当然、連続で三冠王を取った時代に肉体を再生するだろうが、移籍をした場合、もう一度カプセルに入る必要がある。巨人に移籍したら、巨人在籍時のデータにより、肉体は再生される。

つまりは、巨人に移籍したとたんに、パワーは格段に落ちて、守るポジションは一塁に限られるという戦力的にも魅力のない線湯になる。

なにもカプセルは全盛期の肉体に戻すだけではない。選手が選択した場合、どんな年代にも再生が可能だ。もしも佐々木が、メジャー行き以前ではなく、横浜復帰後のデータを選択すれば、カプセルは佐々木をその時代に戻す。

当然、復帰後の佐々木はスピードがガタ落ちで、フォークの威力も弱まっている。体力も限界に近く無理がきかない。佐々木があえて、そんな自分を再生するとは思えないが、一応もしものために、データは用意してある。

用意されたデータが仇になる事件が勃発した。
西武から出場する清原が、カプセルに入った。清原は、ルーキー時代か、最高の成績を残した９０年のデータのどちらを選択するか迷ったあげくに、９０年を選択した。
本人は、高校三年時の打撃こそ最高と考えたが、西武から出場する場合、西武時代のデータしか使用できないので断念した経緯もある。
ルーキー時代に比べて、出塁率も高く、円熟した時期と判断したようだ。
ただ清原がカプセルを使用したときに、ちょっとしたトラブルがあり、機械が誤作動を起こしてしまった。
結果、悪夢のような出来事が起きてしまった。
清原がカプセルから出て、スマートなボディと爽やかな顔を近くの鏡で確かめ、清原は満足そうに帰宅するのだが、カプセルからいろいろな清原が出てきたのだ。
次々と清原が出てくる風景は、異様であり滑稽でもあった。
輝かしいルーキー時代の清原。
平沼にバットを投げつけ体当たりし、徐々に黒くなってきたころの清原。
９０年を境に緩やかに下降していった清原。
懸命にダイエットし、頬がこけるほど痩せた西武最終年の清原。
ＦＡで念願の移籍を果たすが、ふるわず覇気のない清原。
ＦＡ移籍の翌年、極端にバットを短く持ち、薮を脅すなど、キャラに変化が見られたころの清原。
故障続きで、不要論が最高値に達したころの精神状態のやばい清原。
肉体改造に目覚めた清原。番長キャラが定着し、坊主頭で耳にピアスをしはじめたころの清原。
さらなる故障続きで再び不要論が高まり、自暴自棄になったころの清原。

そして、オリックス移籍後、リハビリに明け暮れる清原。

つごう１１体の清原が次々とカプセルから出てきたのだ。肉体の再生の研究は進んでいたが、コピーできる研究はまだ始まったばかり。それなのに、誤作動とはいえ、クローンが誕生してしまったのだ。

誤作動の原因と仕組みを解明するために、カプセルは一時研究所に戻された。

原因は究明できていないが、おそらく清原の変貌の激しさに、機械がついていけなかったのではないかという説が有力である。

なお、次々と誕生した清原は、係員の制止を降りきり、何の目的あるのか、日本全国に散らばったという。

政府から、緊急清原異常増殖警報が発令されたが、散らばった清原の所在は完全に掴めてはいない。

緊急清原増殖警報発令中（後書き）

清原を見かけたら、塩をかけてください。

村田と落合排除の方向？

ロッテは鹿児島でキャンプを行っていた。

迷走といえば、この球団も負けてはいない。

各選手がカプセルに入り、肉体を取り戻しているなか、村田兆治だけはカプセル入りを拒んでいた。

「ワタシは今が常に全盛期だ」

還暦を迎える年齢ながら、１４０キロの速球を投げる村田ならではだが、ロッテとしては、これは困り者だ。年齢的にみればすごい能力の持ち主であって、とうてい今大会では通用するレベルではない。

それでも村田は、今のままの肉体でキャンプに入った。

自分より年の上の木樽や成田が全盛期の肉体を取り戻し、当時の速球を投げ込むとなりで、村田は１４０もなかなかでないボールをなげている。

球団関係者やバレンタインは、そのうち降参してカプセル入りするだろうと見ていたが、さすが、昭和生れの明治男と表されたこともある。頑固一徹、それならば、急ピッチに仕上げて１５０キロのボールを投げてやると意気込んでいるのだ。

このままだとエースと見られた男の選出落ちも、考えなくてはならない。

６０を迎える男が混じり参戦…呼び物としてはおもしろいが、まず戦力にはならないのだ。

混迷を深めていたのは、野手陣も同じだ。

落合と西岡の異色の二遊間のコンビネーションがいまひとつしっくりとこない。

西岡はスピードのなさを嘆けば、落合は西岡のプレーの軽さを指摘する。ショートの西岡が二塁に入る落合に転送するとき、素早い

モーションで送球したが、ボールは浮き上がり、落合のグラブの上を越えていった。

西岡のいうとおり、落合の二塁への入りが緩慢だったようにも見えるし、西岡の送球に粗さがあったのも事実だ。

バレンタインの考えるベストのコンビと考えられていたが、次第に雲行きは怪しくなっていた。

キャンプも後半に入ると、二塁には山崎や堀が多くつくようになる。堀は西岡とのコンビを経験済みであるし、山崎は長年二塁を本職にして、ゴールデングラブの受賞歴もある選手だ、若い西岡とも違和感なく連携が取れる。

問題は、落合の行方だ。三塁には有藤。一塁には榎本が盤石に構え、ＤＨはリーの存在よりなにより、落合が好んでいない。守備につかないとリズムがとれないというのだ。

よって落合の守備位置は現在定かではない。三度の三冠王の男がベンチスタートの可能性もでてきたのだ。とはいえ、落合は代打も好んでいない。

一打席で結果を出すなんてオレには、むりとのことだ。

バレンタインも落合の処遇には頭を悩ませている、代打、ＤＨで使えないとなると、ベンチに置いておくのも無駄だ。そのうち落合のパワーをバレンタインは評価していない。

川崎球場だから、５０本打てた。川崎なら福浦でも３０本は打てる。大会では現代の広い球場の使用が多くなる。ゆえに落合の打球は、フェンス際で急失速するだろう。

そもそもそんなノーパワーで、鈍足で、守るところもない落合は、使う必要がないということだ。

落合もバレンタインの自分への低評価には薄々と気づいており、ただでさえ良くなかった関係が、修復不可能にまで達している。

となると、まさかのベンチ入りならず……。大会最大のサプライズもあるのか？

村田、落合、投打の主軸でありチームの顔の二人がメンバーから

消えるのか？

清原だらけ

増殖した清原のうちの一体は鎌ヶ谷の日本ハムの練習場にいた。
清原が目をつけたのは、中田である。
中田は清原と親交があり、メールの交換をする仲だ。
中田は清原が来ていることに気づくと、帽子を取って挨拶をした。
ただ清原は、増殖した清原であり、巨人時代の清原だ。巨人時代の清原のデータに中田などない。ただ見知らぬ生意気そうな小僧が、オレの気を引こうと必死だとしかみえない。
さすがの中田も清原の反応がおもわしくないことはわかり、今度は、ネット裏でへばりついている清原までかけより、じかに挨拶をしようとした。
「なんじゃい、小僧が。ハムのガキなんてワシは知らんわ」
清原の一人称は僕であり、イメージするところのワシなどはけして使わない。だが、増殖した清原は、データの打ち間違いか、ワシを使用する。
清原がひと睨みすると、中田はみるみる縮こまり、今日は機嫌がよろしくないのかなと、それで退散をした。
増殖をした清原は、どうやらイースタンの試合に出るつもりで、はるばる鎌ヶ谷まで訪れたようだ。
「はよう、試合を始めんか」
もちろんシーズンオフであり、いくら待っても試合は始まらない。
清原も様子がおかしいことに、気がついたのか、
「なんや…球場間違えたのかのう…。しゃあない。帰るか」
清原は鎌ヶ谷を後にした。
球場に出向く清原はある意味真面目な方なのかもしれない。多くの清原は一ヶ所に集まっていた。
馴染みの店に顔を出そうと、清原は六本木を訪れていた。当然、清原同士顔を合わせることになるのだがー。

清原は、ものまねタレントのいたずらと思い、
「なんや、ワレおもろいのう」
と寛大であったが、巨人時代の清原は、オリックス時代の清原がオリックスのユニフォームを着ていたことがどうしても許せず、
「おう、なんでワシが、オリックスのユニフォームなんぞ身につけてるねん。どういう冗談や」
とオリックス時代の清原の胸ぐらを掴んだ。オリックス時代の清原も、巨人時代の清原がものまねタレントと思い込んでいる。
「おまえこそ、なんのつもりや。巨人のユニなんて着やがって。ワイにケンカを売っておるんか」
巨人時代の清原は、自分がオリックスのユニフォームを着るなんてとても信じられるわけがなく、オリックス時代の清原は、巨人のユニフォームを着た自分を見ると古傷をえぐられるようで、気分のいいものではない。
清原同士、目の前の清原が気にくわないという奇妙な現象が起きているのだ。
そこに新たなる清原が登場したのだから、事態はより複雑になる。次なる清原は、西武時代、しかも初々しいルーキー時代の清原だ。髪型も少年隊の東山を意識した、きっちりと固めて、前髪を少したらすものだ。外見もすらりとスマートで、きっちりとヒゲも剃ってあり、青々とした肌が輝いて見える。まるで紳士服の広告のモデルのように、さわやかで凛としている。
まだ未成年なだけあって、西武時代の清原はどこかおどおどしている。ときおり、写真週刊誌のカメラが潜んでいないか、気にする素振りも見せる。
「フラッシュ、フライデー、フォーカス……。おっしゃ、今日はどこのカメラマンもおらへん。思う存分遊べるで」
もちろん今日フォーカスなどとうに休刊になっている。そもそも、写真週刊誌は、もはや清原の敵ではなく、戦友であるのだが。
清原は西武時代の清原を清原だと思わない。

「なんや、ここは、おまえのような青臭いガキがくるところやない」
「そうや。お子ちゃまは、家でママのおっぱいでも吸うてればいいんや」
清原は、二人がかりで、西武時代の清原を威嚇した。これにはスーパールーキーとは、まだ大人の世界の免疫が不足している西武時代の清原にはちょとい刺激の強い二人だ。
西武時代の清原は怖い坊主のヤクザのおっさんに絡まれたと勘違いし、
「す、すんまへん…」
とすっかりしり込みをしている。
巨人時代の清原とオリックス時代の清原は、若造を一喝する目の前の清原をいたく気に入り、
「おまえ、なかなかおもろいやっちゃのう」
「おまえこそ」
意気投合してしまった。
「おまえ、売れるで。見込みある」
「売れる？　なんのこっちゃい。おまえと違って芸能界の人間やないんや。売れるとは、よういわん」
といまだ清原同士ものまねタレントと勘違いしているのだが。
残されたうぶの清原は一人寂しく店の前にいる。
「世の中には、怖いおっさんがおるもんやなあ……。まあ、あれより、東尾のおっさんのが怖いか」

大会本部も清原の増殖にただ手を拱いているわけにはいかず、対策本部を急遽設置したのだ。
「清原増殖対策会議」の名の元、有識者が集まったのだ。
目には目を、歯に歯を、清原の増殖には、ライバルの増殖をとばかりに、清原と因縁のある相手を増殖して、清原を食い止めようとの結論がでたのだ。
幸い、桑田、野茂、佐々木の清原の因縁深き選手達のカプセル入

りがまだであった。カプセル入りするさいに、清原が増殖した当時の状況を完全に再現し、彼らを増殖しようとの試みだ。

清原が増殖した当時の気温、湿度、天候を人工的に再現し、清原がカプセル入りした寸前に、くしゃみをしたカプセル専用の係員にコショウを降りまき、鼻をむずむずさせやすい環境まで作り上げたのだ。

苦労のかいがあって、桑田や野茂、佐々木の増殖は見事に成功したのだ。

大会に参加する全盛期の三人以外の増殖した三人に、清原を止めるよう任命したのだが、これがうまくいななかったのだ。

桑田や野茂はそもそもプライベートの清原に興味がなく、佐々木にいたっては、よし、キヨと遊ぶぞと意気込むありさまだ。

増殖した桑田や野茂が勝手に散らばり、増殖した佐々木は、夜の街に消えていった。

まさしくミイラ取りがミイラになったのだ…。

混迷を深める清原問題。そしていっこうに始まりがみられない大会…。この先どうするの？

いまさら渋る松井

大会開始が待たれる中、気になるニュースが飛び込んできた。巨人松井が今になって、大会出場を渋っているというのだ。

肝心の理由はというと、多くの日本のファンは、巨人時代最後の５０本を打った年を松井の全盛期と考えるが、松井自身は、ヤンキースの故障する前の自分こそが、最高の自分だと考えている。つまりは日本で５０本打った自分よりも、メジャーで３０本を打った自分が上だと思っている。

５０本打ったそんままの技術と肉体では１６本しか打てなかった。血の滲む努力とパワーアップで、３０本打てる松井が誕生したのだ。

松井とクリーンナップを組むことが想定されていた、長嶋や王がはたして自分のようにメジャーで３０本打てるだろうか？

日本史上、一部の外国人選手をのぞき、メジャーで３０本を打てる能力を備えた打者は自分しかいないと松井は自負している。

イチローや松坂がそうしたように、肉体を戻さず現状の能力で、大会に望むこともできるが、今の松井は膝に爆弾を抱えて、とても状態がよいとはいえない。

大会に出場するならば、カプセルに入り、肉体を再生することが必要になるのだが、カプセルには、巨人時代のデータしか、インプットされておらず、メジャー時代の肉体にリセットするのは許されてはいない。

松井は、厳しい選択を迫られる。巨人時代の自分は最高の自分ではない。最高の技術を見せることが趣旨の大会なのに、それができない自分は、大会に出場する権利がないと考え始めたのだ。

生真面目というか、頑固というか、松井らしいといえば、松井らしい。

周りを固める選手が、日頃面識の少ない伝説的人物ばかりで、若い自分はやりづらいという後ろ向きな理由も見え隠れするのだが…

…。

宮崎にいた松井は東京に戻り、辞退の意向を伝えに、読売新聞本社の教団事務所に赴くことにした。有能な広報である広岡が代わりを勤めようとしたが、松井は、歴史的な大会、自分の口で伝えないと失礼になると、これを拒否した。

ＷＢＣも連続で辞退しており、五輪の出場経験もない。この大会も辞退することになると、松井は大きなイベントにとことん縁がないことになる。

松井のような大スターはお祭りに欠かせないのだが…。

正装のスーツに身を固めた松井は、球団事務所前で、息をついた。扉のむこうには大会ＧＭの清武がいる。松井本人から連絡を受けて、彼も宮崎からとんぼ返りしていたのだ。清武は松井の辞退をひっくり返そうと、あの手この手の殺し文句を用意していた。今、松井の登場を待ち、その文句を暗唱しているところだ。

中には、ＯＮをはさんで、松井を四番にする。というとんでもないものまである。

松井がドアを開けようと手をのばしたその時、意外な人物が松井を呼び止めたのだ。

「おい、松井、おまえも球団になんか用なのか？　珍しいやないか。おまえのような優等生が、球団に物言いなんてのう」

清原である。それも増殖した方の清原である。

松井の耳に清原が増殖した一報はまだ届いていない。

「あ、清原さん。どうも、久しぶりです」

松井は見る見るうちに見えない厚い壁を張り巡らせた。松井は、清原の自分への嫉妬をひしひしと感じるのか、松井は清原を苦手にしているのだ。当たり障りのない会話はするのだが、深い言葉は交わさない関係だ。

「清原さんこそ、なにか用あるんですか？　清原さんは西武から出

るんでしょう？」

「西武？　何を意味のわからんこと抜かしておるんじゃ。ワシは巨人の人間や。西武なんぞとうにオサラバしたわい」

この清原は巨人時代の清原であった。ただ栄光の西武時代に思いを馳せているのか、西武と聞くといたたまれない気分になるようで、

「よかったのう。西武のころのわいは……」

と、ひとり感傷に浸り出したのだ。

しかも、この清原は、契約年数が残っているのに、戦力外になるとの噂を聞きつけて、それは許さじと読売本社に乗り込んだころの清原だ。怒りに打ちひしがれているのか、顔は真っ赤で、眉間には深いシワが寄っている。より近寄りがたい空気を充満させている。

ところが、ふと松井と出会ったことで、怒りが一時的に沈静化したのか、松井を語り出す余裕も見せる。

「しかし、松井はええのう…」

「僕がですか？　いえいえ清原さんこそうらやましいですよ」

「お世辞はええ。なによりも、毎日試合に出れるのがええのう。ワイみたいに、故障続きで野球もろくにできん身になってみい？　たえられんで」

今の自分は、毎日試合ができるほど健康体ではないのに、清原さんは何をいっているんだ、この人は。と松井は思うが、巨人時代毎日当たり前のように、試合に出ていた自分を思い出すと、何だか、涙が出てくる。

そうだ、野球選手は試合に出てなんぼじゃないか。巨人時代は当たり前のように毎日出ていた。

そして、この大会に出場すれば、その巨人時代の肉体を取り戻す機会がある。

思い直すなら今だ。大会に出れば、一時的とはいえ、健康な肉体で試合ができる。

ドアを開こうと握っていたのぶを離した。

とはいえ、頑固な松井だ、一度決めたことは貫き通す人生を歩ん

できた。悩んだ末に出した結論が、いとも簡単にひっくり返すわけにもいかない。

深い悩みモードに突入した松井に、信じられない光景が飛び込んできた。

目の前に、清原がたくさんいるのだ。増殖した清原が、一斉に集まって来たのだが、松井はそのことを知らない。

「清原さんが、ななな何人もいる……」

さすがの松井も呆然とするしかない。はじめは、目の錯覚か偽者かなにかと思ったが、どうみても本物の清原と認識したようだ。

何人もの清原を見ているうちに松井の人生観が、急激にかわりはじめた。

信念に基づかない人生だって悪くない。柔軟に生きたほうが幸せなのかもしれないと。

松井は、球団事務所の扉を開くのをやめて、そのまま読売新聞社を後にした。

清原には、一言「どうも」とお礼をいって別れた。

松井の出場が正式に決定した。

増殖した清原は一斉に事務所の扉を開けたが、中にいた清武とは、まだ面識がなく「読売はまた関係ない部外者をよこした」と怒ってどこかに消えた。

桑田野茂佐々木警報

一年目、清原の活躍を妬みつつ、今に見ていろよと二軍で走り込みする桑田。

バブルの絶頂に身を浸す桑田。中牧の暴露本で謹慎に追い込まれた桑田。

バブル崩壊で、焦げ付きはじめる桑田。

上半身の筋肉をつけすぎて、ボールの切れがガタ落ちする桑田。

リハビリで一年間休養を取る桑田。

復帰後、マウンドに祈りを捧げあざとくなり始めた桑田。ワインやピアノの芸術分野に手を出して、どこか違う方面に言ってしまった桑田。ボールが走らなくなり、引退寸前の桑田。

すっぽ抜けのボールがギリギリのストライクになる新ストライクゾーンになり、防御率一位になる桑田。効力が消えて、元に戻る桑田。出るとＫＯで、いよいよ戦力外の桑田。巨人の先手を打ち、戦力外通告を受ける前に、勝手にメジャー行きを決める桑田。弱小パイレーツで敗戦処理を嬉しそうにやる桑田。

ルーキー時代の輝きがなくなりはじめたころの野茂。太りすぎて、消化試合で投げまくってムリヤリタイトルをとっても、評価されない野茂。草魂が監督になりふてくされはじめたころの野茂。草魂と揉めて、二軍で遊んでいたころの野茂。

メジャー行きを決めて、見違えるようにスッキリした野茂。大活躍で、国民的英雄になった野茂。

先細りになり、忘れ去られたころの野茂。何球団も首になりながら這い上がったころの野茂。

復帰したドジャースで安定してたころの野茂。腹をたぷんたぷんさせながら、メジャー復帰を狙っていたころの野茂。

先発リリーフやるもしっくりとこないころの佐々木。遠藤にかわり抑えとなり驚異的な奪三振率を誇っていたころの佐々木。ロングリリーフもいとわないころの佐々木。思うように年俸が上がらず、毎度揉めてた佐々木。近藤に嫌われて、よりによって駒田と交換されそうになった佐々木。サイパンで、野々村真と氷を投げて遊んでいた佐々木。メジャー行きを決めて、肩休めに後半戦サボっていた佐々木。マリナーズでそこそこ活躍していた佐々木。榎本加奈子に乗り換えた佐々木。

横浜に復帰して顔だけでなんとか抑えていた佐々木。顔が通じなくなり、門倉に取って代わられた佐々木。ペナントの最中に思い出作りの登板をする佐々木。

清原対策に選ばれた三人のライバルたちのいろいろな時代が復元された。対策本部は、この三人のどれかが、清原を食い止めることを期待したのだが、そううまくことは運ばずに、増殖された三人は、勝手気ままに散らばってしまった。

清原警報に続いて、桑田野茂佐々木警報の発令か？

増殖した彼らが、このままでは何をするのかわからない。

彼らを一同に集める手段はなにかなにのかと策を講じた。野球選手が集まる手段といえば？

冬だから契約更改？　オフだから運動会などのイベント？

あなたをアイドルや女子アナが待ちわびていると嘘をつく？

そうだ、サイン会だ。野球選手にとってサイン会ほど、おいしい仕事はない。短時間で、頭も体力もつかわずに、黄金が稼げるのだ。しかも、球団をとさない、いわゆるとっぱらにすれば、たとえ佐々木のように十億の年俸を手にしようとも断るものなどいない。

増殖された清原、桑田、野茂、佐々木にむけてアナウンスがスされた。

明日の午後、東京ドームにおいて、サイン会が開催されます、清

原、桑田、野茂、佐々木、以上の選手は、お早めにお集まりください。なおギャラはとっぱらいでー。

ミュータントたちの変身

対策本部の狙いどおり、本体を除く、増殖した清原、桑田、野茂、佐々木は、サイン会のギャラ目当てに、ここ東京ドームに一同に介したのだ。

総勢４０人くらいの増殖した清原、桑田、野茂、佐々木。とにかく不気味である。

「ギャラ？　この４人の格じゃ同額だろう？」

「しかし、この４人となると、やっぱドームくらいの器が必要やのう。人手の予想は５万らしいで。史上最大のサイン会や」

なんて、清原と佐々木がのんきに会話をしていれば、１０人の桑田はマフィアのように黒いスーツとサングラスをびしっと決めてば、野茂はただボーとしている。

東京ドームの投手板の付近に、いかにも、おざなりなかんじで、長机と、パイプ椅子が４つ用意されている。

「なんや、球界の大スター４人が揃ういうのに、ずいぶんと手抜いたセットやな。歓迎、清原、佐々木、野茂、あと一人はどうでもええけど…の幕くらい用意できんのか」

「まあ、キヨ。とっととサイン会終わらせて、帰りに飲もうや」

「そうやのう。今日は、銀座に六本木に新宿にハシゴや。ところで、佐々木。なんやしらんが、数多くないかのう？」

「オレもそれ気になっていた。清原、桑田、野茂、にオレがそれぞれ十人ほどいる。まあ、あれだろ？　ファンの数が多いから、よけいに用意したんだろうよ」

「そうか。スターは辛いのう」

清原、桑田、野茂、佐々木の４人というか、４０人ほどは、は長机を取り囲むようにして、サイン会の始まりを待つが、一行に誰一人もらいにこない。

「まだかよ、誰もこないじゃねえかよ。まあギャラもらえれば、どうでもいいか」

さすがに佐々木はしびれをきらしはじめた。それでも、誰もこない。当然だ。これは彼らをはめるためのワナなんだから。

対策本部は頃合いは見計らって作戦を実行にうつした。

増殖した清原、桑田、野茂、佐々木に向かい、東京ドームに吊るされた天井カメラが落ちてくる。

どずかびがしゃ～ん。

ドーム内に耳をつんざくような爆音がこだました。

対策本部の狙いはこれだったのか？　それにしても残酷やすぎないか？　いくらいてはならぬ増殖したいわばミュータントといえど、人間の形はしている。

一網打尽も狙ったとはいえ、カメラに潰されたその下には、どんな惨状がー。

カメラをのけるために、クレーンが用意された。

だが、クレーンをわざわざ持ち出す必要はなかった。カメラは勝手に持ち上がったのだ。清原、桑田、野茂、佐々木のミュータントたちが、力を合わせて持ち上げたのか？　ミュータントたちの復讐か？　対策本部が緊張に包まれるその時、カメラを持ち上げたものがあわらになった。

それは４０人のミュータントたちでなく、一人であった。

そしてその一人は、伊良部であった。

４０人のミュータントが瀕死の状態から合体をはたして、伊良部に化けたのだ。

伊良部は生まれたままの姿で、服も何も着ていない。

持ち上げていたカメラを放り投げると、対策本部の人々に向かって、近づいてきた。

相手はミュータントの変身した姿、しかも伊良部だ。それに素っ裸だ。

怖いってもんじゃない。取って食われるかもしれない。対策本部

は後ずさりをする。
ところが、襲いかかるわけでもなく、「うばうば」と指をしゃぶるだけだ。
体は成長しきっているが、どうやら知力は乳飲み子ていどらしい。つまりは頭は生まれたままの伊良部だ。
対策本部の中に、日本の科学トレーニングの第一人者、元近鉄ロッテ楽天メッツの立花がいた。野茂をよく知ることから、選ばれたのだが、伊良部にいたく感動をしているらしい。
「い、伊良部や、それも素のままの伊良部や」
日頃から、伊良部の才能はクレメンスクラス。素直に育っていれば、サイヤング賞を取れる素質がるといってはばからなかった立花。いままさに素のままの伊良部がそこにいる。
この伊良部を、屈折させずに、うまく育てて上げれば……。
伊良部に向けて、麻酔銃が向けられたのを立花は身をもって制止した。
「待ってください。この伊良部を僕に預けさせてください。僕が責任持って育てます」
伊良部は、たまたまカメラをのけた瞬間に最初に目に入った立花を、父親と思い込み、ぐずらず素直についていった。
こうして増殖した清原問題は一応の解決を見た。日本は平和になったのだ。
ただこの平和がいつまで続くのかはわからない。案外、平和を破るのは、怪物ではなく、奢り高ぶる人間自身なのかもしれない。

ジャパンベースボールクラシック　〜完〜

戦力予想ニュース

「戦力分析のお時間です。さて、さっそく優勝予想と行きましょうか。みなさんフリップをいっせいに出してください
巨人、巨人、西武、ソフトバンク、巨人、巨人、西武、オリックス、巨人、西武、阪神…中日、巨人、巨人、西武、
巨人人気ですねえ…。おや、横浜？　これはどういうことでしょうか？　江本さん」
「横浜でなにが悪いんですか？　戦力ありますよ。へへへ…」
「横浜の戦力…。例えば？」
「外国人が豊富。ポンセ、パチョレック、ローズに、シピンに、ボイヤー…。あと、鼻の穴がでかいのおったでしょ？　ブラなんとかいうの」
「ブラッグス？」
「そうその、ブラッグス。ほおら、たくさんいるでしょうよ」
「外国人枠がありますが？　ベンチに入れるのは、投打一律４人まで…。日本人はどうなんでしょうか？」
「佐々木がおりますよ。佐々木は球界史上最強の守護神です。アイツは、長いイニング投げさせたら、二流、三流やけど、一回だけなら、どんな打者もよう打ち崩せませんよ。他のリリーフにも、盛田、明雄（斉藤）、斎藤隆。やっかいなのがいるわ、いるわ」
「そこまで持っていく先発は？」
「いますよ、まず平松に、遠藤に、秋山登さん……あと、えーと…思い浮かばんわなあ。大丈夫かいな。横浜…」
「自分であげといて、大丈夫かはないでしょう。先発は、他に番長三浦や、野村収、弘樹のW野村もいる」
「そう、そう、その番長に、野村。顔の長いのと丸いの。ほら、おりますでしょう？　ウヘヘ…」
「大矢監督は四番に村田を据えることを明言している。勤まります

かねえ？」

「そりゃ大丈夫よ。去年の村田の成績知ってますか？　五輪で抜けながらも、４６本打ったんですよ？　某代表監督に、北京で、八番打たされる、ひどい扱い受けながらも（苦笑）」

「その五輪が村田の思わしくない評価の原因なんでは？　この大会も同じ短期決戦」

「大丈夫よ。監督が、某星野……って、名前言っちゃったよ（苦笑）。じゃあなくて、大矢やから。そりゃ打ちますよ（ウヘヘ）」

「えー　横浜と同じく、一名しか上げなかったのが、カープ…。その一名の森永さん…」

「はい。カープは強いですよ。まず打撃がいい。ミスター赤ヘルの山本浩二に、鉄人衣笠に、江藤、前田、緒方の現役世代がからむ。慶彦や野村、正田、山崎らで、伝統の機動力も使える。投手陣も揃っていますよ。佐々岡、北別府、長谷川、外木場、安仁屋の自慢の三文字投手陣に、津田、大野の強力リリーバー。ここに江夏や金本が加わる予定です。これをまとめるのが私の大学の後輩の名将古葉です」

「江夏や金本は、阪神が負けない限り、広島に参加できませんが？」

「阪神はすぐ負けますよ（笑）なにせまとまりがありませんから」

「まとまりのない阪神をあげた解説者のみなさんの意見をお聞きしましょう。まずは金村さん。金村さんは、在籍した近鉄でなく、阪神をあえてあげている。その理由もお聞きしましょう」

「えー。近鉄は選手は素晴らしいけど、フロントが最悪なんですわ（苦笑）だから、ボクの評価も低い（苦笑）。野茂や阿波野の投球は楽しみなんですけれども、エースは、どうやら、あのおっさんらしいですから（苦笑）あえて、名前は上げませんが、イニシャルをとって、クサ（苦笑）と呼んでおきましょうか。まあ、このおっさんがまっ違いなくチームの雰囲気をぶち壊しますわ（苦笑）ボクもその被害者ですからようくわかります。一選手の分際で、岩隈やマー君に走り込みを要求するんやないですか（笑）。もちろんスパイ

クで（苦笑）。近鉄と違ごうて、阪神は強いですよ。阪神褒めると、関西地方の仕事がようけくるからってわけじゃないですよ」

「誰もあげていない球団もありますね…。ロッテに日本ハム。これはそれぞれのＯＢのご意見をお聞きしましょうか。まずは日本ハムのＯＢ岩本さん」

「ガッツに張本さん大杉さんの偉大な先輩方が組む、ビッグバンだか、暴れん坊だか、ビッグステーキやら、よう名前は覚えておりませんが、打線は日本一強力やと思います。ダルビッシュに、西崎さん、土橋さん、の本日二度目になりますが、偉大な先輩方が、からむ投手陣も意外に強力です」

「それでは、なぜ優勝予想を外した？」

「ヘッドコーチがヒルマンやからです」

「おやおや、金村さんに続いて、私怨ですか？」

「はい。きっぱりと個人的恨みです」

「そうですか、正直でよろしい。それでは、ロッテＯＢの倉持さん。なにやら、娘さんがＡＫＢ４８でアイドルをやっていると聞きましたが、その話はまた別の機会に。ダメですか、ロッテ？」

「私は岩本くんや金村くんと違い、個人的恨みはありません。冷静に戦力的に足りないと、断腸の思いで、マリーンズの名前を外しました」

「落合、山内、リーの打線に、村田、小林」

「バレンタインの采配が歪みを生みそうです。彼は抑えを小林雅でいくと名言していますが、私はこの雅の抑えが心配なんですよ。バレンタインを見ると、一度決めたことは、滅多に変えません。頑固というか、柔軟性がないというのか、劇場投手と呼ばれた、小林雅のことです。ランナーを貯めて、ピンチに陥る状況が出てきますでしょう。そこで、小林を降ろして、他の投手を起用できるか、そこが問題なんです。ベンチには歴史的投手がたくさん入ることでしょう。バレンタインが、彼らを出し惜しみせずに起用できるか？　と考えると、正直不安な面が大きいのです」

「バレンタインといえば、目まぐるしい打順の組みかえも、おなじみです」

「その打順入れ替えが仇になりそうなんです。プライドの高い伝説的な選手が、昨日は四番、今日は八番、明日はベンチなんて采配についていけると思いますか？　慣れている現役選手でさえ、不満が爆発する寸前なんですから」

「ヤクルトも一名だけですね。これは監督も勤められた関根さんですが…」

「ヤクルト強いよ」

「一言ですか？（笑）」

「うん。いけない？　もっとしゃべる？」

「なるべくなら、お願いいたします（笑）」

「僕も広島のコーチ時代一緒にやったから、ようくわかってるけど、広岡くんの管理野球ね。これねえ、効くのよ。とくにねえ。一流選手に。玄米食なんか食わせやがって、ナニクソってね。これ意外と発奮材料にもなる効果もあるのよ。古田も痛風だったよね？　古田にも玄米食はいい」

「その古田がリタイアという情報が…。それも痛風で……」

「ほんと？」

「知りませんですか？」

「うん、今知った。でも、ヤクルトには古田がいなくても、大矢がいるよね。彼も古田に負けない強肩の捕手」

「大矢さんは、横浜の監督で、ヤクルトからエントリーされてませんよ」

「あ、出れないんだ…。じゃあ、ヤクルト替えようか…。まあいいや、面倒だから、ヤクルトで」

「よろしいですか？（笑）　おっと、残念ながらここでお時間が…。続きは、また明日ということで…。えっと、明日は海外サッカーに、美女アスリート特集に、女子アナの挑戦企画？　すいません。明日はできないかもしれません。いつかやりますから…、野球ファンの

皆さんは期待しないでお待ちください…」

スターたちのプロモーションＣＭ撮影

ＪＢＣ用のＣＭ撮影が行われた。

（ジャパンベースボールクラシック）

１２球団を代表した選手、監督らが出演するもので、プロ野球７５年の歴史にふさわしい豪華な顔ぶれが集結した。

まずパリーグ編と題して、オリックスからイチロー、西武から稲尾、ロッテから落合、ソフトバンクから野村、近鉄からは、史上最高の代走要員藤瀬、日本ハムからは張本が選ばれた。

ＣＭの内容はこうだ。打者張本がセーフティーバントを試みる、見事な快足を見せて、ギリギリ一塁セーフになる。それだけの足を見せつけたのに、張本は代走と交替する。張本は不服そうな顔を浮かべるが、それもしかたがない。なにせ代走で送り出されたのは、藤瀬なんだから。

藤瀬が、投手の稲尾を執拗に警戒する。捕手は肩に自信のない野村だ。藤瀬の足ならば、スタートを切られたら、オールセーフは間違いない。

それならばと牽制にクイックに間合いのリズムを変えて、藤瀬にスタートを切らせない工夫をするが。藤瀬はそれでも果敢に二塁を陥れる。

稲尾の苦労も虚しく、二塁は藤瀬のものになる。ただ藤瀬は二塁を盗むだけでは、とても満足をしない。三塁も奪う気満々だ。これには落合があからさまに嫌がる。打者落合は走者が動かれることを嫌うのだ。二盗はまだしも、三盗となれば、打者の視界に真っ正面にいる走者の動きが否応でも入る。

藤瀬を刺すことを、半ば諦めた野村は打者落合を攻め立てる。お得意のつぶやき戦術だ。

おまえの母ちゃんえらい女やな。

そりゃあ、ノムさんあんたのもでしょ。

つぶやきは動揺を誘うことなく、同情を誘うのだ。

いつのまにか三塁にコマを進めた藤瀬を背負い落合は、恩師稲尾の必殺球、外のスライダーをとらえて、ライトへとフライを上げる。まだアウトカウントはひとつだ。犠牲フライには、十分過ぎるあたりだ。しかも走者は藤瀬だ。

ただライトにいるのは、イチローだ。ホームで殺せる可能性は万が一、いや当たりと走者を顧みても、億が一の可能性もない。

藤瀬は悠々とタッチアップのスタートを切る。それでもイチローは可能性がミクロでもある限り、それにかけて、全身全霊のバックホームをする。

だって藤瀬さんが転ぶかもしれないでしょ？

シニカルなイチローらしい視点だ。卓越した代走といえど、ときには転ぶ。１０・１９の佐藤純一のように。

藤瀬は転びもせず、ホームを駆け抜ける。

それでも、レーザビームが野村のミットに、一瞬だけ遅くダイレクトで飛び込む。

一球、ひとつのプレー、一瞬の判断、それすべて究極のせめぎあい。

一月足らずに、７５年の全てが濃縮。

ＪＢＣ　ジャパンベースボールクラシック。近日開幕。

パリーグ編の撮影は、こうして滞りなく終わった。当初、くせのある一流選手同士うまくいくのか心配されたが、一流の選手は一流の役者でもあるのだ。たとえ仲がどうであれ、彼らはただ演じるのだ。

問題はセリーグ編にあった。セとパはそれぞれ違う広告代理店に依頼したのだが、偶然にも似たようなコンセプトの作品を撮影することになっていたのだ。

投手はヤクルト松岡、捕手は阪神田淵、打者は巨人王、二塁に中

日高木守道がいて、センターには横浜屋鋪。そして走者には代走の今井。

松岡の渾身の速球に、王は振り遅れ、王シフトの逆をつく。振り遅れたとはいえ、痛烈な打球がガラ空きの三遊間を襲う。

サードもショートも二塁ベース付近にいる極端過ぎるシフトなのだが、それでも二塁手の高木は打球を追う。サードやショートよりも遠くに位置していたはずなのに、三遊間の打球に追いつかんとばかりに全力に走り、わずかな差で打球を逃すことになるのだが、執着心は光り、これが同じく、センターの定位置からはるか一、二塁に位置していた屋鋪を刺激する。

屋鋪はプロ野球史上指折りの脚力を見せて、左中間を破ろうとするライナーに飛びつく。

見事捕球をしたのだが、地面に全身を打ち付ける。これを見た二塁走者の今井は、三塁はおろか、一挙ホームとばかりにスタートを切る……。

細かい状況は違うとはいえ、走攻守の一瞬の激しいやりとりは同じだ。あえて地味な代走を抜擢したところも似ている。

スタッフは先に収録したパのＣＭを見て、愕然と肩を落とした。あれ以上のものが取れるだろうか。

急遽、方向転換することになった。ただ日程はつまっている。近日中に、これだけの面子を揃えるのは難しい。

それならば、歌でも歌わせよう。セリーグの連盟歌ってのがあったはず。たしかレコードには、王と松岡も歌い手と参加をしていた。

幸いにも、収音スタジオが隣接していたために、すみやかに録音は行われた。

パのＣＭは、ダイナミックで見栄えがいいのに、セのＣＭは、今ひとつ乗り切れない６人の合唱のＰＶ。

ただ、この落差が逆に大会を印象つけたのだ。宣伝しては、悪くない結果になった。

オレが許さん　特別編

この雑誌の読者のみなさんなら、よ～く知っていると思いますが、オレは今、ライオンズのキャンプに参加するために宮崎の南郷にいるのです。そうです、ジャパンベースボールクラシックのメンバーと、してです。

最初は、この大会、金儲けの匂いがプンプンとして、オレも出る気はなかったんだけど、三原さんが監督として、参加するとなれば、これは引くわけにはいけません。

いやあ、久々にあった三原さんの懐かしいこと。オレは、常日頃から、西鉄の三原野球こそ本物の野球と書いているのですが、それは間違いではありませんでしたよ。

三原さん、現代の野球にも精通してて、問題点をズバリと指摘する。これは、オレも唸るしかなく、普段はあの世にいる人とはとても思えませんでしたよ。（三原さんとの詳しい話は、後日、この雑誌で、オレとの対談形式でやりますから、楽しみにしてください）

キャンプ前に、何やらカプセルに入って、全盛期の肉体になったわけですが、いやあ、体がよく動くし、飯をうまけりゃあ、酒もうまい。（タバコは吸いませんよ。あれは、スポーツ選手にとって、百害あって、一利もナシです）

そりゃあ、二十代の体なんですから、当たり前といえば、当たり前なんですが、それにしても、オレの顔って、ここまでよかったのかと思いますよ。鏡を見ると、ナルシストでもないのに、見惚れてしまうのです。

豊田さんってそんなに男前だったの？　と昔から顔見知りの記者の皆さんも驚くくらいですから、若い選手やマスコミは推して知るべしです。

このキャンプにはねえ、松井稼頭央やら、西武のイケメン軍団である中島、片岡ら、二枚目と呼ばれる選手が大挙として、参加して

おりますが（現監督のあの人も、スリムなお腹と、ふさふさの髪を触って満足そうでした）、豊田にかかっては、みな裸足で逃げ出します。

担当のO君に、ページのどこかに、オレの写真を載せるようにいってありますから、読者の皆さんの目にも入ることでしょう。

どうです？　豊田は男前でしょう？　調子にのって、今の若い人風に、ちょっとばかり、髪の毛を茶色に染めたりしていますが、それはご愛嬌といこうで、お許しください。

ところがですよ、いいことばかりでもないんです。この肉体は大会が終われば、元のご老体に元通り。これは規則だからしょうがいないこととはいえ、もうひとつはどうにかならんのですかねえ。

レギュラー争いです。オレはショートなんですけど、ライオンズのショートはねえ、厄介なものばかりがいる。メジャーではいまひとつですが、三割三十本三十盗塁の松井稼頭央に、８６年のＭＶＰで、西武のチームリーダー石毛。これに、若きレオのショート中島までいる。森西武黄金時代の田辺や、オレの後の西鉄のショートを守ったロイなど、争いのメンバーに入れないほどの豪華さです。

顔だけなら、オレがダントツなのですが、こと野球となると、こうはいかない。オレの時代は人工芝なんてまがいものはなかったのですが、守ってみると、これが守りづらいのなんの。

イレギュラーしないのはいいのですが、打球がバカみたいに速い。しかも。下半身に疲れがくる。新しい技術で、これでも前よりましになったそうですから、いかに人工芝というものがデタラメかというのも、読者のみなさんも分かってくれるでしょう。

打撃のほうもそうですよ。オレの時代はカーブ、シュートに速球くらいしかない男らしい時代だったのですが、現代の野球には、フォークだのチェンジアップだの、果てには、ツーシームだのわけのわからんものまである。

野球も時代によって変わるものだから、仕方がありません。（あくまでも時代の変化ですよ。野球の進化ではありませんよ。ここを

間違えたら大変なことになります）

オレもなんとしてでも試合に出て、三原のオヤジの喜ぶ顔が見たいから、まがい物とはいえ、慣れるしかありません。急ごしらえで、調整してる最中です。

人工芝の打球についていけない、ツーシームを芯に外してゴロの山で、豊田がレギュラーじゃあ、三原監督もね、豊田をひいきしているといわれかねません。

そうならんように、努力しますよ。見ててくださいよ。ライオンズの開幕戦のスコアボードには、きっと二番遊撃豊田がいますから。

おもしろいエピソードがたくさんありますが、字数がつきました、それはまた次週にでも。

50話　黒い霧事件の余波

黒い霧事件で永久追放を受けた選手の処分はどうするのか？
すでにライオンズのキャンプでは田中勉と池永が汗を流している。
そもそも田中勉は、永久追放をくらってはいない。彼は、黒い霧に深く関わった重大人物とされているが、永易とともに、野球機構の調査、警察の捜査に深く関わったことが考慮されて、処分は受けていない。
池永は、数年前に、永久追放からの身分復帰を果たしており、問題はない。
ところが、市民感情、ファン感情もある。事件に関わっていたことは広く知られており、球場での心のない野次も心配される。池永はその点、マスターズリーグ登板や、ラジオ解説で、現場復帰をしており、さほど問題はない。
問題は、田中勉である。後輩の池永に、八百長を持ちかけて、百万を握らせた男だ。
当然、田中を快く思わないオールドファンも多く、球場には、心ないファンの汚い野次が飛び交っている。
「また金かけるのか～？」
「よう顔をだせるのう。八百長選手が～」

「くそ…好き勝手いいおって」
気にかけたのは、被害者でもある池永だ。
「先輩、気にせんとしてください」
「おう池永か…。悪かったのう。あの時は…」
「すんだことですよ。もう四十年以上前の出来事ですわ。はるか遠い昔の…」
「それにしてものう。ひどいと思わんか？　人間誰しも間違いはあるんじゃ。わしらは長い年月で償ったつもりじゃ。たいていの犯罪

者が、刑務所のお勤めが追えるほどじゃ。それを今更蒸し返しよって…」

「無視でいきましょう」

池永と田中の並ぶブルペンに向けての野次は、止まることをしらない。それでも二人はじっと耐えなければならない。

野次に言い返せない先輩達を見かねた男気にあふれる東尾が立ち上がった。

「おいお前ら」

スネに傷がある東尾の登場は、ファンを悪い意味で刺激する。

「おお、今度はトンビか」

「麻雀のメンツ足りとんかあ～？　なんならワシも加わるぞ～」

東尾は若いファンにもお馴染みだけに、たちが悪い。局地的であった野次が、スタンドのあらゆる場所に広がる。

東尾はついに我慢しきれなくなったのか、ボールを握る。

察知した池永はすかさずに止めにはいる。池永は東尾の野球においても私生活でおいても憧れであり、良い見本である。

スライダーとシュートの横の揺さぶりも、強烈なインコース攻めも、豪快な私生活もみな、池永に倣ったものだ。

「こらあ。トンビやめんかあ」

今の東尾には、その池永の制止も効かない。

昼間から、酒を煽り泥酔している中年の男が東尾のターゲットだった。

口汚い野次を飛ばし、率先して他のファンを扇動している男だ。

「おう、トンビかあ。おもろい、投げてみい」

男の口車に乗せられたのか、東尾はボールを投げ入れる。だが、男は、ネット越しのブルペンから４０～５０メートル離れたスタンドの上部にいる。当てるのは難しい距離だ。当てたとしても、この距離だと、加減しないと当たる距離ではない。

たとえ、当たったとしても、加減をしたボールに威力はなく、男を威圧するものにならない。

ところが、東尾はさすが。球威と制球を両立する。ボールはぐんぐんと勢いよく男に向かってのびる。男は逃げる暇なく、ボールは男が手に持つ一升瓶に当たる。これほどの距離でも投じられたボールにはまだ勢いがあり、一升瓶は粉々になる。驚いた男は悲鳴を上げて退散する。

「どうや、これが危険球の王様、東尾のボールや」

首謀者を退治したことで、野次は不気味なほどピタリと止まった。

「ようやった、トンビ」

と池永に、素っ気なく褒められのが、東尾はなによりうれしい。

松沼兄弟の球種チェック

松沼兄弟が球種チェックを行うことになったのは、彼らの兄弟の偉大な実績を考えれば、しごく当然のことであろうか。

ネット裏から、投手が投げた球種を瞬時に判断して、該当するボタンを素早く的確に押す。シンプルであるが、これほど眼力と経験が必要なものもないのだ。

球筋そのものから、球種を判断できればよいのだが、あふれるばかりの多彩な球種が横行する現代野球にとって、それは容易ではない。事前に投手の投げる球種を細かくチェックし、ボールそのものだけでなく、打者の対応の仕方や球速に頼って、判断する必要もある。

球種チェックとは意外と奥深いのだ。

「こんにちわ、兄やん」

「オトマツ、今日はよろしく。人生の先輩は僕だけど、球種チェックの先輩は、君だから」

「いやいや、こちらこそ、よろしく頼むよ」

「いやあ、しかし光栄だよね、僕ら兄弟が、球種チェックの大役を仰せつかることになるなんて」

「最近の球種チェックは、データ専門の会社のスタッフがやっているようだけど、やっぱり僕らプロの目からみた球種チェックのほうが、見ている人たちも、安心と信頼性が置けるよね」

「ほんと、そうだよね」

「さっそくだけど、兄やん。これが大会に使う、球種チェック専用のボタンの配置図」

左から、ストレート、スライダー、カーブ、シュート、フォーク、カット、ツーシーム、チェンジアップ、シンカー、特殊球と割り振って、ボタンが配置されている。

「いいんじゃないかな」
「そうかな？　普段のペナントの試合じゃ、これでいいと思うけど、記念すべき歴史的な大会と考えると、これじゃあ、不十分な気がするんだけど」
「そういわれるとそうかなあ。確かに、この大会には色々な魔球を操る投手がエントリーされているよね」
「そうなんだよ、その魔球を特殊球として一括りにするのもなんだか味気ない」
「そういえば、ナックルやパーム、スローカーブといった多くの投手が使い魔球とは判別されない球種も特殊球に入っているね」
「でしょう？　この配置だと、特殊球の範疇が広すぎるんだよなあ」
「となると、ボタンを付け加えてもらう必要性が出てくると」
「それだけでなく、投手固有の魔球の判別もしたいよね。長いプロ野球の歴史では、色々な固有の魔球がある」
「ミヤボール、ヨシボール、バタボールといった使い手の投手の名前の一部が入った魔球から、小宮山のシェイクのようにオリジナルのボールまで幅広くある」
「ところが、その全部をボタンに反映させると」
「ボタンが多すぎる」
「そうなんだよ、さすが兄やん。ボタンがあまりにも多すぎると、配置を記憶するのも大変で、押し間違えることもある」
「機械の大きさは決まっているから、ボタンの配置図だけ大きくするわけにはいかない。となると、ボタンが多くなるに連れて、ボタン一つの大きさが小さくならざるを得ない」
「ボタンの幅が小さくなると、不都合が生じる可能性も高くなる」
「ボタン幅が小さくなると、自分では、カーブのボタンを押したつもりが、隣のスライダーボタンを押した、何てことになりかねない」
「そうそう、指の太さよりも、小さくなると、その手のミスが頻発する恐れがある」
「球種チェックのプロとしては、なんとも避けたいミスだよねえ。

ところで、兄やん？」
「なんだい、オトマツ」
「兄やんは大会に呼ばれてないの？」
「一応、呼ばれてるよ。今日だって、キャンプを抜け出して来たんだ。オトマツ、君は？」
「僕は、提出されたメンバーリストに入っているようだけど、キャンプには呼ばれていないんだ。僕の方が勝ち星が多かった年もあるけど、兄やんは百勝あげた投手だし、なによりアンダースローは貴重だもんな」
「オトマツこそ、東都の江川と呼ばれた速球はさすがだったよ」
「兄弟が褒めあってる場合じゃないよ、これは危機だよ。球種チェック始まって以来の」
「危機？」
「僕らが、大会に呼ばれたら誰が、このボタンを押すんだい？」
「そういえばそうだな。ただでさえ日に最大六試合ある野球だ。ただでさえ、二人では人手が足りないかもしれないのに、僕ら二人が抜けるとさらに大変だ」
「だから、僕ら二人以外にも目星をつけておく必要がある」
「僕の息子にもやらせるか。一応、東洋大学で１４０投げる主力投手だったんだぜ、松沼兄に松沼弟に松沼息子かあ」
「う～ん、それも悪くはないけど、やっぱりプロ経験者でないと、球種は判断できないんじゃないかな。それに、球種チェックの世界も世襲制かよって世間の批判が集まる」
「それは息子が可哀想だ」

　球種チェックは松沼弟から始まり、実兄である松沼兄が受け継ぎ、台湾帰りの渡辺久信の後を西村が受け持ち歴史の流れ。現在は、解説者がやらず、主にデータ専門会社のスタッフの手によって判別されている。

「僕ら以外に二人の球種チェックのエキスパートがいる」
「久信はメンバー入り確実でしょう。西村はどうなんだろうなあ。彼に託すしかないのかなあ」
「西村も悪くはないけれど、まだ経験の面で物足りないところも正直ある」
「じゃあ、どうする。プロ野球ＯＢ集めて…」
「うん、片っ端から集めて、特訓だよ。各投手の持ち球の完全なる把握から、的確で素早いボタン押しに、中継中にも油断はならない。ただボタンを押すだけではないんだ、いつ実況に話をふられるかもわからないからねえ」
「そうだよ、僕ら、ボタンを押すだけじゃないんだよ。解説をする必要もあるんだよ」
「開幕まで、日は残りわずか、僕ら兄弟のように、完全なる球種チェッカーになることは難しいけど、ある程度できるまでは、仕込んでおくよ。もしも間違えたボタンを押したら、電流が流れるとかね」
「頼むよ、オトマツ」
「任せろよ、兄やん」

1犠打目　バントの達人

「大会開幕直前記念、第一回、バントが一番上手いプロ野球選手は誰か選手権。いやあ、盛り上がってきましたねえ～　今宵、プロ野球史上で最もバントが上手い選手がついに、ついに決まるんですよ。司会はおなじみ私、みのもんた。解説はこれまたおなじみ、別所さんと関根さんで、こちら、ビッグエッグ、東京ドームからお伝えします。いやあ～関根さん。興奮してきましたよねえ」

「そう？　バントでしょ？　バントなら僕にもできるよ、僕は主軸だから、バントのサインなんてでなかったけど」

「ガハハハ、私は別所だけどねえ、関根の言う通り。ワタシもねえ、投手ながら、クリーンナップも勤めたくらいだからねえ。それも巨人だよ、大巨人軍の。バントのサインなんてたとえ出ても、無視して打ちましたよ。ガハハ」

「そういわずに、ここはプロの技を見せてもらいましょうよ。さあて、大会のルールは…見ればわかる。さっさとはじめましょう」

バント名人十二人が集い、トーナメント形式で争われる。一回戦は八人で行われて、残りの四人はシード選手として、二回戦からの出場となる。

シードされる選手は、バントの世界記録保持者の川相。西武黄金時代の二番打者平野。シーズンバント記録を持つ代表のうるさ型キャプテンこと宮本。ゲーム記録の四犠打を最初に記録したセーフティーバントの達人弓岡の面々だ。いずれもバントの腕と技術二確固たる裏付けがあり、有力な優勝候補といえよう。

十二球団対抗の形をとっており、走者も参加選手と同じ球団から出る。つまり、バントで進める走者の走力と走塁技術も大きな勝敗を分ける要素となっている。

一回戦の第一試合は、阪神と近鉄の関西球団同士の因縁の対決と

なった。阪神は長くバントの歴代記録を持っていた吉田か、八十八年に五十七犠打の当時のシーズン記録を打ち立てた和田の参加が予想されたが、意外にも代表は久慈であった。

先の二人に実績は劣るとはいえ、久慈もバントと守備と選球眼で食ってきた男だけに、腕は確かだ。

近鉄の代表は新井だ。名球会会員で、バントのトップテンに入るのは、この新井と石井琢郎だけだ。打席の多くを犠牲にしながら、きっちりとヒットを積み上げる。いやはや頭の下がる選手である。

守備側がバント防げば、そこで選手の試技は終了、裏の攻撃で相手が成功させれば、そこで勝負は決まる。もしも裏の先取も失敗すれば、勝負は次に持ち越される。

守備側が四球で逃げることを防ぐために、とにかくアウトにならなければいいというルールだ。たとえバントをしなくて、ヒットを打っても、四球を選んでもいい。本塁打をはなってベース一周でもいいのだ。

とへいえ打率は三割が限度、出塁率にしても四割を越えるのも稀。一方のバントの成功率はおおよそ七割で、選手権に参加する達人のレベルとなると、九割に迫る。

結局は、犠打を選択するのが一番効率的なのだ。

表の攻撃は、阪神久慈。近鉄は強力な守備陣をひく。投手は、牽制の名人、神部。捕手は球界屈指の強肩捕手梨田…とくると思いきや、強肩…だけ？　の捕手的山。一塁は、どこでも守れる便利屋兼任女優のお父さん吹石。二遊間は、阿部と前田と渋く決めて、サードはノリでなくて、日本のネトルズの異名をとった羽田。外野の三人は、左から、新井、大村、中根。新井もゴールデングラブを盾に守備についている。

阪神の一塁走者は、赤星でもなく、地味な新庄と後世に伝えられる北村である。盗塁をするわけでもなく、とにかく二塁を奪い取ればいいのだから、猪突猛進タイプの北村に矛先が向いたのだろう。

久慈が打席に入る。最初からバントの構えだ。もちろんセーフテ

ィー狙いで、投球と同時にバントの構えをしてもいいのだが、やはり最初から構えた方が、より確実に決められる。

一塁と三塁は、バントシフトを引き、前へ前へと出て、打者の久慈に重圧を与えようとする。神部は、執拗に、一塁の北村を牽制する。もちろんサインプレーで、前へ出た一塁の吹石の代わりに、二塁の阿部がベースにつく、普段あまり見かけないフォーメーションだ。バント選手権のための特別仕様であり、近鉄の打倒阪神への本気ぶりが伺える。

牽制といえど、盗塁に注意を払う目的ではない。一歩でもスタートを送らせて、二塁で一塁走者を封殺しようとする狙いだ。神部の牽制は、世界の盗塁王福本をも悩ませた崇高たる技術の代物だ。初見でクセがわかるはずもなく、一塁走者が県政で刺されても、アウトのルールのために、北村のリードは見る見る小さくなっていく。

牽制数球の間に、投球とのペースで、カウント1－1になるまでどれだけの時間がかかったのだろう。

久慈はバントをするのを半ば諦めたのだ。強烈なシフトに、巧みな牽制、襲いかかるプレッシャーに手はガチガチで、とても成功させる自信はない。ならば、広く開いた内野の隙間を狙って、ヒットで稼ごうと考えた。

神部のボールはそれほど球速がなく、当てるのはそう難しくはない、当たれば、広く開いた内野のどこかに抜けていくだろう。窮地から脱するための久慈の妙案だが、結果は裏目に出る。

叩きつけて、前進守備の内野の頭の上を越す打撃を心がけたのだが、高目のボールに背の低い久慈のバットは下から出て、左翼へと、フラフラとした飛球を打ち上げるハメになってしまった。

無理して、打ちにいくことはなかった、バントの失敗なら、バント選手権だけに、致し方なしだ。それが打ってでて、平凡な邪飛。明日の関西の新聞では、クソ味噌に叩かれるわ、球場帰りに熱狂的阪神ファンになにをされるかわからないわと久慈ははやくも憂鬱に

なるのだ。

左翼の新井が、大きく手を上げて、定位置から、一歩、また一歩と、ゆっくりと後退する。首位打者を取り、だ櫛成績が加味された年とはいえ、ゴールデングラブ賞受賞の守備力は高いものがある。強烈な守備範囲もなければ、肩も今ひとつながら、捕球技術は確かだ。新井が落とす飛球ではない。

ただ次第に様子がおかしくなる。一歩、また一歩後退するに連れて、フェンスが徐々に近くなる。東京ドームは極端にふくらみのない球場として有名で、左中間、右中間は、箱庭球場サイズしかないのだ。

しかも東京ドームはエアードームのために、上空に風が舞っている。この気流にのると、ボールは、思ったより以上に伸びていく。

フェンスに当たる？　いやその上を越える。なんと本塁打だ。通算わずかな本塁打しか放っていない久慈が、晩と選手権で流し打ちの本塁打を放ったのだ。

照れ笑いを浮かべながら、ベース一周する久慈とは、対照的に左翼の新井は淡々と左翼上空の屋根を見つめる。

ただ、本塁打に本塁打で対抗する必要はない。バントを成功させれば、それでイーブンだからだ。

裏の阪神は、投手若生、捕手ヒゲ辻こと、辻佳、一塁に遠井、二塁からは豪華だ。二塁バックトスの鎌田、三塁は初代フルイング記録保持者長嶋より上の三塁手三宅、遊撃は、ご存知ムッシュこと今牛若丸吉田のゴールデンｔリオだ。

外野はソロムコ、並木、池田。

なるほど昭和三十年代後半の藤本阪神黄金時代のメンバーをそのまま守備につかせたわけだ。気心が知れており、連携もバッチリだ。なにより内野のトリオはプロ野球史上きっての守備力と知られる。ただ守備の穴がある、一塁手の遠井は、他のトリオに比べて、格段に守備力が落ち、不動の一塁手と揶揄されるほどだ。外野の三人も守備力に際立ったものはないが、外野には飛ばさないという気概の

現れか。

新井の狙いは一塁の遠井で決まりだ。ドラッグバント気味に一塁の遠井に取らせるバントをすれば、遠井の遅い足はもたつき、二塁で殺される心配はないと見たのだ。

一塁に取らせれば、たとえ強めのベントでも成功するだろう。一塁の走者は、鈴木武。同年代に同じセリーグでプレーした鈴木は遠井の緩慢な守備力は熟知している。迷わずスタートが切れる。

狙いどおり、一塁の遠井の正面にバントを転がした。一塁の遠井は前進するのももたついている。してやったり、と思いきや、そこにはいないはずの男がいた。三塁の三宅だ。投球とともに、一塁の遠井狙いを察知した三宅は、新井に悟られないように、一塁ライン上に走っていたのだ。

三宅がボールを拾い上げると迷わず、二塁へ送球、二塁には、カバーにはいった遊撃手の吉田が待ち構えている。タイミングは微妙だ。だが、無理な体勢から投げたためか、送球したボールが、あらぬ方向にそれていく。

これでバントは成功？　まだ早い。一塁のカバーに向かっていた二塁手の鎌田が、急いで、逆方向にスタートをし、三宅の逸れた送球をなんとかカバー。

ここからまた華麗な技が披露される。体勢を整えてからの送球ではとても間に合わないと、拾った体勢そのままから、後ろ手で二塁へと送球する。伝説のバックトスだ。

二塁は、鎌田の視野にまるではいっていないはずなのに、確実で正確に送球される。二塁はフォースプレイだ。タッチの必要はない。間一髪アウト。バント失敗。

一回戦の第一試合は、一回の裏表であっさりと終わった。ただ意外性と技術にとんだ見事な合戦に観客は唸るしかない。

ただ実況席だけは少し空気が違う。司会のみのはこくりこくりと船を漕ぎ、関根さんは。

「わりとバント下手だね」とあっさりと一蹴だ。

1儀打目　バントの達人（後書き）

メッセージでもいいからください。
中国では、手紙を信とかきます。

2犠打目　予想だにしないバントの名手続々と登場中

第二試合目は、ロッテ代表の佐藤健一と横浜代表の銚子の対決となった。いかにも地味で盛り上がりの欠ける対戦だ。もともとバントの上手い選手は総じて地味なのだが、それにつけても地味だ。この二人の現役時代は森西武の全盛期に当たり、バント戦術の花盛りで、毎年のように、何かしらのバントの記録が達成された時代だ。

横浜としては、なんとしてでも勝っておきたい。本大会での期待が持てない現状では、エキシビジョンのミニ大会に勝つしか存在感を示せないのだ。

それにしても、銚子は三塁手でありながら、非力な二番打地者を勤めていた事実だけでも、当時の弱さがわかるのだが、これが一位指名の大卒選手となると、余計に物悲しい。

好き好んで、誰が、一位で本塁打０の三塁手を獲得しなければならないのだ。伝統的に、横浜のスカウティングはかのうようにどこかピントの外れているものなのである。

ロッテの守備陣系は、捕手に優勝捕手村上、一塁におなじみ福浦、二塁に大毎当時の正選手八田、三塁に突貫小僧坂本、遊撃に俊足の飯塚、外野は、ボビーの秘蔵っ子大塚、顔面ファイター諸積、首位打者平井。投手は、百勝投手の水谷。

横浜の布陣は、投手に巨漢広報欠端、捕手に日本有数の保険外交員市川、一塁にメットで守備に就く駒田、二塁に強運だけで切り抜いてきた？　近藤昭仁、三塁には名手進藤、外野の三人は加藤博一前のエンタティナー中塚、大洋日本一のレギュラー岩本、一本足打法の黒木弟。

ロッテ側の走者は、暁の快特急、飯島。横浜は現役から野中が選出された。

勝負は地味に始まり、地味に終わった。第一試合のように打って

出たり、的を絞ったバント攻撃をするのでもなく、両者とも淡々とバントを繰り返し、走者を進めていくのだ。

選手権本来の形であるが、地味さに拍車をかけることになった。

決着がついたのは、五回裏のミス。表の攻撃で佐藤が失敗したことで焦りが生じたのか、三塁の坂本が、三塁方向にふらふらと上がった小飛球を、突貫小僧の異名のとおり果敢に頭から突っ込んで、アウトにしようとしたのだが、勢いよすぎて、ボールを通り越してしまったのだ。

銚子の勝ち抜けで。第三試合に移る。広島からは、現役の東出。足と小技を絡めるチームとの印象と違って、いまだ広島には、驚くべきことに、誰一人も、年間の最多犠打記録選手がいない。そんななか十年で１９８もの犠打を決めて、４００犠打の金字塔も視野に入る東出が選ばれるのも当然か。

一方のホークスは樋口。聞きなじみのない名前であるが、年間の最多内野安打記録の保持者といわれて、うち六割が、セーフティーバントで稼いだものだ。

自己犠牲を求められる選手権で、自分も生きようとする選手をあえて起用するあたり、鶴岡野球の奥深さだ。

勝負は対照的な展開を見せた。樋口が野手の隙をついて、打球を転がし、足で生きれば、東出は確実に走者を進めて、自分を殺す。

記録が安打と犠打でも、この勝負はどこまでいってもタイである。このままでは、勝負がつかないと見たホークス側は、極端すぎる守備体系を引いた。三塁の藤原と一塁の藤本博史が、東出の目の前まで前進。遊撃の定岡兄と二塁の桜井も投手の横まで守備位置をずらす。

このシフトでとたとえどこに転がしても、そこには敵が待ち構えてバントは失敗に終わる。しかも送球して殺す以前に、東出にそのままタッチして殺すことを念頭に入れた守備位置だ。

それならば、東出は、内野の頭を越せばいいのだが、非力な東出にはそれも難しい。第一試合の久慈のまさかの強打を目前にした捕

手の筒井は、バントのしやすく、打球をあげにくい低めのボールを要求している。外野の三人である堀井、大野、柴原も内野と外野の境界線まで前進してきている。おまけに投手の加藤伸一は、年間披本塁打０を記録したほどの、重い球質の持ち主ときている。

東出の送りバントを防ぎ、それでいて外野まで飛ばす飛球を防ごうと完全なら作戦だ。

東出は負けず嫌いの塊のような気性の持ち主だけあって、それならば外野の頭を越してやろうと、一転強打の腹積もりだ。

加藤お得意の重いシュートが東出の外角に逃げるように決まる。東出は、これを予期していたのか強打。打球はふらふらセンター方向に打ちあがる。定位置ならば、前へ二歩、三歩の平凡な当たりだが、超前進守備においては、外野の頭を越す大飛球だ。

ところが、現在、高校野球の監督であり、元盗塁王の大野が自慢の快速を飛ばして、背走につぐ背走で、見事キャッチしてしまったのだ。

これには、東出も走者の木下もがっくりとうなだれるしかない。裏の攻撃で樋口が五連続のセーフティー成功で、勝利をもぎ取った。五打数五安打である。

ちなみに広島の投手は大石弥太郎、捕手は瀬戸、一塁は長内、二塁は、小阪、三塁は興津、遊撃は、梵、外野の三人は、ガードナー、長嶋、西田。

一回戦最後の試合は、意外な顔合わせとなった。日本ハムと中日の間で行われるのだが、出場予想される選手から大幅に違った選手の登場に眠りかけていた観客席も目を覚ます。

中日の予想される選手として、燃えよ!!　ドラゴンズで二番の～が送りバントとの歌詞がある。そこに当てはまる誰かであろうと、大方の予想だ。谷木であり、平野であり、立浪であり、種田であり、鳥越であり、久慈であり、井端であり、荒木がその候補者であるが、平野、久慈は他球団から出場を決めて、鳥越や種田も中日のイメージは薄まっている。立浪にいまさらバントの印象はなく、初代燃え

ドラの二番打者谷木は、そもそもそれほど犠打を記録していない。となれば、荒木、井端の現役コンビか。小技の上手さがより強い井端の登場と思いきや、想像のはるか上を行っていた。

バント選手権は、私用で忙しいと星野が指揮を拒否したために、現役監督である落合がベンチに入ったのだが、まさしくひねくれものの落合らしい選出であった。

一塁側のベンチからのそのそと登場したのは、昨年まで中日に所属していた中村紀洋であった。意外な選手の登場に客席は沸き返る。

小技系の選手が四苦八苦してバントを決める一方、中村はいとも簡単にバントを成功させる。あまりにも、高い成功率のために二番ノリの起用に踏み切ったほどだ。ただウッズや和田、森野と並ぶ主砲でありながら、自分だけにバントを要求させる落合を見限って移籍を決めた背景もあるのだが。

日本ハムの意外性はその上をいく。何度も犠打王に輝いた青野や白井一、現役の田中賢介ら典型的な二番打者タイプの登場が予想されていたなか、プロ野球史上最も、意外性という言葉が似合う男の登場だ。ＳＨＩＮＪＯこと新庄である。忘れがちだが、日本ハム初年度、新庄の役割は二番打者である。

ノリの登場だけでも、スタンドはざわめいていたのに、新庄との対決となると、ざわめきではすまない。盛り上がりに欠けていたスタンドにウェーブが起こるほどヒートアップしてきたのだ。

新庄とノリという大物スターがバント対決をするとなれば当然か。はたしてどおうなることか…。

3犠打目　ノリ対新庄対落合

新庄とノリのバント対決。申し合わせたわけでもないに、奇妙な顔合わせとなった。なお本大会と異なる球団からも、バント選手権へのエントリーは認められている。

日本ハムの新庄といえば、真っ白にコーティングした歯と対照的な日焼けサロン焼きの黒い肌に茶髪。まさに新庄そのままだが、中日のノリといえば、近鉄時代とは一変して、丸坊主にひげをきちんと剃り上げた優等生だ。

二人に共通しているのは、バットコントロールの上手さ。バントに一番必要なのは、小手先のテクニックなのだ。二人には、この小手先のテクニックが意外と備わっている。また日本ハムと中日での新庄とノリは主役を期待するというよりも、目だった脇役といえ、それだけにバントを要求されるシーンも少なくなかった。

落合が指揮を執るらしく、中日の守備はどこも手堅い。二遊間はアライバコンビで、サードは守備だけで飯を食った正岡だ。一塁には珍しい守備型一塁手の渡辺が入り、捕手には第二捕手として長く活躍した新宅が入る。外野の三人は、音、英智、彦野のゴールデングラブトリオだ。

興味深いのは彦野の起用だ。彦野といえば、アンチ落合の急先鋒として知られる。そんな彦野を起用するとは、落合は懐が広いのか、それとも、なにか思惑があるのか。

走者には、盛田。盛田？　誰もが首をひねる名前だ。投手の森田ではないし、そもそも字が違う。あの闘病に打ち勝ったことで知られる盛田は近鉄と横浜の選手だ。出場資格はない。そもそも彼らは投手。落合といえど投手を走者に起用することはないだろう。

落合のロッテ時代の同僚に森田という内野手がいるが、彼もロッテ一筋で、なにより名前が違う。

盛田の正体は？　知られざる代走専門の選手で、守備記録も打撃

の記録がないながら、多くの試合と盗塁数を記録したプレイヤーだ。落合も盛田のことは知らなかったのだが、資料と首っ丈になっているうちに発掘したらしい。開幕投手川崎に告ぐ落合流のサプライズ采配だ。

一方の日本ハムは渋く固めた。捕手は東映時代の優勝捕手安藤、一塁は、名五番打者吉田勝、二塁に、ちびっ子軍団の影なる象徴菅野、三塁に顔が四角いが守備は滑らかな古屋、遊撃に、これも優勝時のレギュラー岩下、外野の三人は、規定打席に到達しそうでしない岡持、地味な新庄こと井出、そしてパンチ佐藤の高校大学通じてひとつ先輩鈴木だ。走者は趣味が塗り絵の川名慎一。

投手の逆転、ゼロ戦のマツこと松浦に相対して、ノリは打席に入る。大きく構えることもなく、最初からバントの構えだ。松浦はバントをさせじと、得意のフォークやカーブを低目に集めるが、ノリには効果なし。教科書どおりのお手本のようなバントで淡々と二塁に走者を進める。

二十勝投手であり、落合一家と親交が深いことでも知られる中日稲葉と相対した新庄もノリと同様に見事なバント技術を見せ付ける。

役者は派手だが、演じる題目は極めて地味。五回、六回と延々と犠打の応酬が続く。観客に飽きが来ているとエンタティナーの血が騒いだノリ。落合のサインを無視してまで、攻撃に転じる。自慢のフルスイングがついに炸裂だ。けたたましい打球音を残して打球は火を噴くようにレフトの前に転がる。バント一転強打にノリも観客もご満悦であるが、落合だけは渋い顔。このあととくとくと長いお説教が待っているとは塁上のノリも知らず。

ノリの強打に触発された新庄も、これまたフルスイングだ。中日バンチにいるノリはほくそ笑む。狙いはこれだ。自分がフルシングすれば、新庄も負けじとバントを捨てることだろう。

打力なら自分が上。新庄の強打は高い確率でまさしく空振りで終わることだろうとの読みだ。

読みどおり、新庄のフルスイングは、精密度が低く、バットの下

に当たるのが、精一杯で、捕手への凡ゴロとなる。
二塁送球は間に合いそうもない、一塁走者の川名が思い切ったスタートを切っているのだ。
一塁に仕方なく投げる。新庄は落胆で走る気もないので、悠々とアウト。
ここでいったんすべての時間がフリーズする。
新庄はアウトになりながら、走者を進めた。試合規定なら、勝負はまだ続く。ところが、新庄は大振りしたうえの進塁打。
規定には、進塁打の項目もあり、内野手、または投手が捕球し打者走者が一塁でアウトとなっても、走者を進めた場合、これが進塁打となり、犠打と同じ扱いとなるとある。
ところが、捕球したのは、捕手の安藤である。捕手がとった場合の扱いは規定にはない。
ルールに厳しい落合がベンチを飛び出して、抗議だ。
審判団が集まる。なお遅らせながら、本日の審判を紹介します。球審渡田、一塁小林毅、二塁佐々木、三塁井野の四種審判で裁かれています。
長い協議の結果、意図しない新庄の打撃は選手権の趣旨にふさわしくないと、結果、新庄はただの凡打の扱いとなり、ノリの勝利に終わる。
久慈、銚子、樋口、ノリの意外な？　顔ぶれの四人が一回戦を潜り抜けて、バント四天王が待つ二回戦へとコマを進めた。
久慈と川相の伝統の一戦バント編。
銚子と弓岡の地味すぎる対決。
正統派バントの後継者宮本とノリの対照的な対決。
平野対樋口の送り対セーフティーの究極の対決。
ところで忘れ去られた放送席は？　みのはさっさと次の仕事に向かい、別所はうたた寝、一人元気なのが関根の爺さん。ところが、関根一人ではまともな実況になるわけがなく、「おや

」だの「上手いな」だの「ほう」だの「落合出てきちゃた」だのどうでもいい感嘆が時たま漏れ聞こえるだけの奇妙な中継となっている。

4犠打目　川相の策略、宮本の模倣

意外な顔合わせになった二回戦であるが、開始までわずかながらに間があった。

川相は対戦相手である久慈をこっそりトイレに呼び出すと、なにやらプロ野球の仕組みをいまさら教えている。

「久慈くん」

「なんでしょうか。川相さん」

「わかっているよね？」

「え？」

「僕と君、どっちが勝ったほうが、盛り上がるのか。ひいては野球界が良くなるのか」

「あ……」

「悪いことはいわない、君が勝ちあがっても、熱狂的阪神ファン以外は誰も喜ばない。お客さんやテレビの前の人々は、僕と平野さん、あるいは宮本との究極の頂上決戦を待ち望んでいるんだよ。いいかい、わかるよね？　僕がいいたいのはそれだけだよ」

そう言い残すと、川相は用もたさずに、トイレから消えた。

一人残された久慈は、頭を抱えている。先輩である川相にそこまでいわれたのなら、なにかしらの感情が働かないわけがない。

たしかに、自分のような地味な選手が勝ち上がっていいのだろうか？　といっても川相さんこそ地味じゃないか。

よし、ここは川相に勝って、一泡吹かせてやろう。第一、こんな選手権で誰が勝とうか、プロ野球の未来なんて何のかかわりもないじゃないか。

ところが、久慈にかかる重圧はより奇妙な方向へと押し潰される。

久慈がグランドに再び姿を現すと、川相がすでに、決勝に向かう意気込みをテレビ局のインタビューで語っているのだ。久慈がいることに気づいた川相は、ちらちらと久慈を横目で見ては、牽制する。

まるで川相のその目は、君が勝ったら、このＶＴＲが無駄になるでしょ？　わかっているよね久慈くん？　と語りかけているようであった。

対決が開始された。

一回の表、川相が見事にバントを決めると、裏の久慈が重圧に負けたのか、あっさりと、バント失敗の小フライを上げて、あっけなく対戦は終わりを告げた。

これで、いいんだ。もしも勝ったら、川相さんに何をされるかわからないと、久慈は達観したような表情で、グランドを去った。

さすがに川相である。高卒ドラフト下位から、競争を潜り抜けて、巨人のレギュラーを勝ち取っただけのことはある。目的を遂行するために、手段を選ばないのだ。

川相の振る舞いをつぶさに観察していた宮本は、これは使えると、自分も同じ行動に出たのだ。対戦相手である、ノリをこれまたトイレに呼び寄せては、久慈にかけたようなプレッシャーをかける。

「わかっていろよな、ノリ」

「はい？」

「お前とオレ、どっちが勝ったほうが、選手権が盛り上がるのか、ましてや、球界が良くなるのか」

「僕のほうじゃないですか？」

「え？」

「宮本さんのように、バントのイメージがカビのようにこびりついた人が勝ってもおもろないでしょ、僕のような大砲が勝ったほうが意外性があって盛り上がると違いますか。まあ球界がよくなるかどうか、大袈裟すぎてようわかりまへんが…」

「う……」

「で、なんでっしゃろうか、僕をわざわざ呼び出して……」

「いやなんでもないんだ…もうことはすんだ…」

作戦失敗。

これで逆に動揺してしまったのが、仕掛けた宮本の方であった。

しかも表の攻撃のノリがこれまたきれいにバントを決めるのだ。

投手の村田元一が投じた胸元の速球を、捕手の根来と一塁の、ロバーツの中間点に転がす、教科書どおりのバントだ。

バントの名手が、小技勝負において、大砲に負けるのはみっともない。なんとしてでも、決めなければと余計な力が入る。

サードの前に強めのバントをしてしまったのだ。ボールを殺せず、これでは、二塁で封殺されるのは、目に見えている。ところが、この対戦からサードに入ったノリがこれをジャックル。

あわてて、二塁に送球するが、間に合わずセーフ。

名手のノリがあの打球をお手玉するわけがないと宮本は不審に思う。

まさか俺の忠告を聞き入れた結果の行動なのか？　ところが、攻守交替の際、ノリがにっこりと宮本をみて微笑んだ。

その笑顔を、宮本は、同じ故意の失策であるが、脅しに屈したのではなく、あっさりと勝負がついたら、面白くないでしょうと、自分をなめた態度にとったのだ。　これで、一転宮本の闘志に火がついた。

オレのところに、転がしてきやがれ、絶対に殺してやる。ところが、宮本が守備につくのは、遊撃だ。バントの打球が転がってくるのは、めったにないポジション。

そこで、宮本は思い切ったポジショニングに出る。

三塁の長嶋一茂と争ったことでおなじみの角を越えて、なんと一人、超前進守備をとり、ノリの目の前までに出てくる。先輩である二塁の盗塁王の東条にも、臆せずセカンドベースにくっつくように指示を徹底。

ノリよ、オレの前に打球を転してみろ、全部さばいてやる。と無言の挑発だ。

宮本はノリの負けず嫌いの性分をくすぐろうと、策を施したのだが、これでもノリは乗ってこない。

挑発なんのそのと、一塁のロバーツの前に転がしにかかる。

ロバーツはＯＫ、ＯＫと自分のボールであることを主張するが、なんと宮本が、この打球を猛然と捕りにいく。

ところが、一塁に走るノリと交錯してしまう。

宮本は、守備妨害を主張するが、走者は規定の線上を走っていたので、問題なしとの判断で、抗議は空振りに終わる。

体重差のため、ノリは無傷で終えたが、宮本には衝突のダメージが残った。尻餅をついた際に、両手をつき、グラブをはめていた左腕をいためたのだ。

宮本は右利きであるが、バントの際に、コントロールするのは利き手と逆の左である。左にダメージがあるのならば、バットの操作が難しくなる。

大ピンチに陥ったのだが、宮本は負傷を理由に降参することもなく裏の打席に向かった。両手でバットを持とうとも、左手に力が入らない。さとられないように、一切テーピングの類をしていないため、故障を抱えているとは、誰も気づいていはない。

隙を見せてはならぬと、両手でバントをしにいくが、バットのコントロールがろくにできず、真ん中の速球を空振りしてしまう。

これではいかんと、宮本は決死の片手バントに出たのだ。右手一本で操作しやすいように、バットの中心からややずれたところに手を添えて、バントの構えだ。なるほど、腕一本なら、中心部分を持ったほうが、持ちやすい。ところが、この持ち方には致命的な弱点がある。

すぐに見破ったのが、中日ベンチに陣取る落合だ。

落合は内を攻めろと、バッテリーに指示を飛ばした。当然の策である。なにしろ宮本はバットの中心付近を持ち、内のボールをバントしようとすれば、長く突き出たバットが腹に当たるのだ。

この回から、バッテリーに入った、投手の板東と捕手の谷繁はこの指示をはなから無視をする。

「なんやもう、落合監督、おもろうないなあ～片手でバントができるかどうかを、お客さまが見たいんであって、バントをさせないと

ころはみたくないんや。のう谷繁くん」
「そうっすよねえ」
「だから、人気が落ちるんや、ほんまにもう」
板東は、わざと外のボールを投じる。これなら、片手でも、バントはしやすい。それでも慣れぬ片手バント、宮本はなんとかバットを当てるが、打球は空しくファールになる。
スリーバント失敗で、宮本の負けだ。宮本はバントができないと見ると、作戦の変更にうってでた。
ファウルで粘って、四球をもぎ取る。当然、片手であるから、バットは振り切れない、必然的に、当てるだけになる。
ちょこんとバットの先端に当たった打球は、小フライになって、一塁ファウルゾーンに打ち上げ続けられる。
落合は、まったく振っていない、スリーバントではないのかと抗議に出るが、主審の二出川はあれが右手一本では精一杯だと退ける。
四球、五球と、カットで粘りにつけて、ボール球が増えてくる。なにしろ、投手の板東がめんどくさがってきてるのだ。カウントはいつのまにか、フルカウントになっていた。
「四球でも出してちゃっちゃと終わりにしよう。ギャラ安いのに勘弁してほしいわ、ほんまにもう」
板東のやる気のなさに、気がついた落合はいつものようにのそのそとベンチを出て、にこにこと、ボールを奪い取ると、板東をマウンドから降ろす。
一球で三振を奪うには、右手一本じゃ追いつかないフォークを投じる投手と、落合が自信を持って、送り出したのが、小野和幸だ。８８年中日優勝時のエース。活躍したのは、その年だけであったが、長身から投げ降ろす角度のある速球とフォークボールには定評があった。
なるほど、小野のフォークは、それほど落ちるとはいえないが、なにしろ制球力がある。しかもミスターフルハウスと異名をとったとおり、２－３のカウントには慣れ親しんだ投手だ。

ストライクからストライクゾーンに落ちるフォークを投げれる小野ならば、宮本は、片手では縦のバット操作が困難で、バットに当てられないのはおろか、四球で逃げようとも、見逃し三振になるのだ。

まさに落合らしい的確な選手起用である。

ちなみに、板東もフォークが武器にあるのだが、男らしくないと速球を投げ続けたのだが。

小野は要求どおり、フォークを投じた。真ん中からやや落ちるフォーク。普通の打者なら一番危険なゾーンであるが、今の宮本では手も出せず見送るしかない。

ボールゾーンまで落ちるとの祈り空しく、フォークはソトライクに高さに納まる。

宮本が天を仰ぎ、見送りの三振と誰もが思ったが、主審の二出川の手は上がらない。首を左右に振ると、高い声で、

「ボール、ボール!!　ボールフォアでバッターファースト!!」

と連呼した。

度重なるゾーンの改正で、現代の感覚ではあきらかに、ストライクのゾーンであるが、なにせ二出川は昭和三十年代という古い時代に活躍した審判。低目につらい時代の審判だ。彼の目からはぎりぎりボールと見極めても不自然ではない。

落合は誤審とまたベンチを飛び出す、今度は執拗な抗議に出る。

二出川は「オレがルールブックだ!」の台詞どおり頑固一徹。一度くだした判定に確固たる信念を持つ。落合の抗議を聞きうけるそぶりも見せない。

長く落合の抗議が続いたが、二出川は突然「落合監督、退場!!」と宣告する。

暴力があったわけでもないが、長い抗議を遅延行為と判断したのだ。

これには落合はびっくりで、今度はなぜ退場にしたんだと、抗議の趣旨を変えてつめよる。冷静な落合も自然と熱くなり、二出川に

触れんとばかりに接近する。
中日ナインがこれ一大事と駆けつける。なかでも一番近くで見守っていた三塁のノリは一目散に駆け寄ったのだが、ダッシュしたさいに体勢を崩して、思わず、二出川の体に触れてしまう。
これを故意の侮辱行為と受け取った二出川はノリにも返す刀で「退場！！」とやってしまう。
もうひっかかめっちゃかだが、勝負はこれで決したのだ。
普段の試合ならば、退場者が出ても、代わりの選手を出せば、試合は続くのであるが、この選手権はあくまで一対一の勝負だ。
当事者が退ければ、そこで試合は終わる。宮本のまさかの大逆転勝利だ。
ところで、二出川ときたら、近づいてきた中日の選手に次々と退場を命じて、非公式記録ながら、一試合最多退場のギネス記録を更新する騒ぎになった。
いまだ解説を続けていた関根さん。
「二出川さん、変わってねえな～」
と一人悦に浸ってる。

なお二回戦残り二試合は順当に四天王の二人である、弓岡と平野が勝ち、準決勝へとこまを進めた。

5犠打目　準決勝だ。バババント

「準決勝と決勝はわたくし船越がお伝えします。いやあ～中畑さん、わたくし久々の実況なんですけど」
「久々なの？　なにかあったけ？」
「それはここではいえませんが、さあ、第一試合は川相と弓岡の対決だ」
　オリックスは、上田の指揮の元、捕手、阪急史上最多出場捕手岡村、一塁、一塁の守備固めだけで飯を食った大隈、二塁、三度の飯より喧嘩好きの住友、三塁、ヒゲにグラサンの森本、遊撃日本で育った最初の大リーガーレインズ、外野は阪急伝統の名左翼手の元祖大熊、福本のお手本代走で盗塁王の山本公二、強肩のウィリアムズと阪急時代の選手中心に固めてくる。
　そして投手は知られざるニア二百勝投手石井茂雄だ。
「ぐへへへ、石井は、岡山の出身、川相の同郷で、しかも現役最後は巨人にいたんやで。いくら川相とはいえ郷土の巨人の大先輩相手にようバントもできんやろ」
　闘将の異名をとるが、上田は知将でもある。川相の精神的動揺を誘うとばかりに、あらゆる手段も辞さない。

「中畑さん、我らの川相の先攻です。どうでますかね？」
「う～ん、ここはバントじゃないでしょうか」
「あーと、おっしゃるとおりバントです！　これが芸術的に決まりました、さすが、川相、さすが中畑さんですねえ～ズバリバントを当てました！」
「いやあ～　ウヘッヘ…」

　川相の皮の厚さはその上をいく。なんの動揺すらきたさずに、いとも簡単にバントを決めるのだ。

しかし、裏に異変が起きる。塁上には、阪急の初代盗塁王河野が待ちかまえていたのだが、主役である弓岡がいつまでたっても出てこない。

上田が球審である笠原に事情説明にいく。どうやら弓岡になにかしらのアクシデントが起きたようだ。

上田が選手の交代は認められるのか、まだベンチには阪急最後の二番打者の福良や、近鉄からの最高の貢物大島らのバントの名手も控えていると理解を求めるが、認められない。繰り返すが、これは球団対抗ではなく、あくまで個人対抗である。

いかなる理由でも、選手の交代は認められていないのだ。

ルールには、当該選手が審判の宣告から、１５分の間に出てこない場合、選手の試合放棄とみなし、試合はそこで終わるとある。

いたずらに時間だけすぎていく、それでも弓岡は出てこない。

規定の時間に達した。弓岡はついに姿を現さなかった。

笠原がホームベース上で「弓岡の試合放棄により、川相の勝利」を宣告する。

川相は大方の予想通りに、決勝へとこまを進めたのだ。

弓岡の故障の原因は？　ただのアクシデントか！？　それともまたもや川相の策略か！？

謎が謎を呼び試合は第二試合へとうつる。

準決勝第二試合は、平野と宮本だ。歴代二位の犠打数を誇る平野とそれに続く三位の宮本。コンディションングが万全ならば、互角の戦いが予想されるが、宮本はいかんせん手負いの状態。短時間で、左腕が万全になるわけがなく、劣勢は否めない。

決死の片手バントもうまくいかず、四球死球作戦をとるしかないのか。宮本は開始の間にじっくりと作戦を練り上げた。

どうすれば税金を安く済ませるか……ではなく、いかにして勝ち抜くか、をだ。

そこで思いついた必死の作戦は、名づけて「ロス五輪柔道無差別級ラシュワン戦法」だ。

思い切り、自分が手負いの状態とアピールし、平野の同情を誘う作戦だ。動揺を誘うだけでなく、平野にも片手バントをせざるをえない雰囲気まで持っていければ、しめたもの。

左腕にぐるぐるに包帯を巻き、下半身に故障もないのに、右手で杖を突き宮本は、よろけながらの登場だ。

平野はこれおみても涼しい顔。さすが平野金物店を姉と二人で切り込みしたことはある。これしきの人の不幸には、なんの感慨もわかないのだ。

またも作戦失敗と落胆する宮本だが、包帯を巻いたまま打席に入る。

ところが、宮本にさらなる敵が現れた。それも相手のライオンズ勢でなく、味方であるはずののヤクルトからだ。

一塁走者の福地が輪をかけて宮本を困難な状況に陥れる。西武の投手帆足は元同僚だけあって、クセを熟知している。

確実に盗めると、二盗、三盗だ。

何、馬鹿なことをしているんだ、と宮本は塁上の福地をひとにらみ。それでも福地は理解していない。この状況で犠打を決めるのには、スクイズの必要がある。

スクイズといえば、犠打の中でも一番困難を極めるものだ。

選手権の競技の性質上、点を取る必要性はどこにもない。スクイズしようとただの送りバントであろうと、同じ価値しかないのだ。

それでも福地はなんで宮本さん怖い顔をしてるんだと意に介してない。

カウント１―１。

宮本は窮地の策にでた。このさいだ、包帯をした左腕を添えているだけでもいい。両手でバントだ。これで失敗しても悔いはない。

福地がスタートを切る。これを察知していた帆足ー細川の現役バッテリーは、当然のように、ウエストの策に出る。

宮本は飛ぶ。操作のできないバットは空を切る……。スクイズ失敗？　ところがだ、打球は前に転がっている。

おかしい、確かにバットは空を切った。それでも打球は前に転がっている。

秘密は左腕にあった。包帯だ。必要以上に巻いていたために、太く突き出た包帯が、ボールと衝突したのだ。

転がった打球を帆足が捕球し。そのままホームにグラブトス。福地のスタートと走力は抜群で、滑り込むこともなく、すでに駆け抜けていたのだ。

スクイズ成功？　いや、包帯に当たったのだ。当たりに行ったのでから、死球にもならない。宮本はアウトだ。

左腕の包帯に当たったのを、間近に見た細川は激しく抗議をするのだが、球審の栄村はその細川が視界の邪魔になって、打球と包帯の衝突がよく見えなかったのだ。

判定は覆らずに、スクイズ成功。

決死の思いで進塁させた宮本の反面、裏の平野は、初球送りバント成功。宮本の奮闘も水の泡なのか？

二回の攻防が始まらない。宮本があっさりと降参してたのだ。これ以降戦っても勝ち目がないとみたのか、それとも奇跡のスクイズ成功に、いかなること手段を講じても勝ち抜くというＰＬ立命館プリンスホテルで培った人生観を変えたのか、ただ満足したのか、定かではないが、これで、決勝は川相と平野の両バント職人の対決になったのだ。

6犠打目　バントしりとり

弓岡の情報が入ってきた。オリックスの広報は二回戦で一塁に走った際、足首を捻ったのが故障の原因と発表した。

ところが、いくら走塁のシーンをＶＴＲで検証しても、弓岡が足を痛めた様子はどこにもない。やはり、川相が何かしら、手を施したのか？

謎は解明されぬまま、舞台は決勝へと移った。

川相と平野の二大バントスターの頂上決戦に、十時を回って、鳴り物入りの応援がが禁止されたスタンドにも、活気が出てくる。

送れ、送れの大合唱だ。

なお決勝は、バント以外の手は禁止されている。準決勝まで、バント以外の決まり手が、意外に多く選手権の趣旨にそぐわないとでも判断されたのであろうか。

とにもかくにも、セーフティー含む送りバントが禁じられたため、いろいろなルール変更がなされた。

四死球は同じ打席をやり直し。盗塁とバッテリーミスで、走者が三塁まで進塁するのは許される。本塁へ生還した場合はやり直し。ヒッティングはその時点でアウト。ヒッティングバントの境目は、スリーバントの規則にのっとる。

勝敗の決着は、同じくサドンデス方式。バントを成功する限り続行し、どちらかが失敗すれば、そこで成功者の勝利。どちらも失敗すれば、これも勝負は続行。

つまり、一回で終わる場合もあれば永遠と続く可能性もある。

指揮を執るのは西武は森だ。森は監督として、また西武の一員として参加する最後の機会と考えて、より張り切っている。

平野に巨人投手の情報を包み隠さず享受だ。本大会では巨人の選手として、参加するとは思えないほど、打倒ジャイアンツに燃えて

いる。

川相を森と同じく川上派の藤田の化身と見たのか、みずから中日から呼び寄せ、屈指のバント名人平野をこれも森に見立ての代理戦争のつもりだ。

ところが、指揮を執っていた藤田の姿が見えない。所要があると、選手権を抜け出したのだ。

球界の紳士と呼ばれた藤田だけにさぞ、高貴なお誘いでもあったのだろうか。

藤田が代理に立てたのは、よりによって堀内である。ラジオの解説に来ていた堀内を見つけると、「ホリ、頼むよ」のひとことで押し付けて帰ってしまったのだ。

堀内はいい迷惑のはずだが、巨人史上唯一のVなし監督のレッテルをこの選手権でひっぺはが巣チャンスとばかりに、引き受けたのだ。

ペナントの優勝とこの選手権の優勝が同価値であるかは、議論の余地があることであろうが。

ところが、堀内と川相の関係に問題がある。川相といえば、巨人でいったん引退を決めたあと原巨人でコーチをやることが、内定していたのだが、例の人事異動のために、晴天の霹靂で、堀内が監督になってしまい、コーチの内定がどこかに吹き飛び、宙に浮いた形の川相は、中日で現役続行を選択することになる。

仲たがいの最大要因といえば雨のランニング事件であることは有名だ。当時ヘッドコーチの堀内は練習を指導する立場にあり、雨模様にかかわらず、選手にランニングを強要したのだ。プライドの高い巨人ナインだけに、当然のごとく不平不満が渦巻いた。

代表して堀内に駆け寄ったのがリ、選手のリーダー格であった川相である。

ところが、堀内は、ヘッドの命令に口答えするなとばかりに、川相の陳情を一蹴、それどころか、平手打ちを川相の頬に食らわしたのだ。

この事件により二人の関係はずたずたに引き裂かれたのだが、因縁の二人が、このような形で、選手と監督の立場になろうとは、運命とはいかに残酷なものであろうか。

川相を先頭に守備につく巨人ナインも登場だ。捕手は堀内の恋人吉田、一塁は王の守備固め股割りの山本功児、二塁は原のサインバットの保有者仁志、三塁は焼肉屋の店長岡崎、遊撃は世紀の落球の河埜兄、外野は第二期黄金時代の五番打者南村、ナボナの社長国松、史上最強の五番打者マムシこと柳田、と堀内の選出らしくとりとめのないメンバーだ。

一方三塁側からは平野を先頭に、捕手は田淵にあきれて一年でヘッドを降参した黒田、一塁は

大洋時代の応援歌がもの悲しい、王のコピーこと片平、二塁は、九番打者とはいかなるものかを体現した高木浩之、三塁は花の独身貴族継続中行沢、遊撃は和製オジースミス奈良原、外野は松井の代打に出て顰蹙を買い捲った左キラー西岡、センターは双子を使いあぶさんをもてあそんだ大友、そしてライトには、すし職人にメジャー進出を阻まれた実家がラーメン屋の小関だ。

いずれも守備力に覚えのあるメンバーだ。片平と高木に外野の三人はいずれもゴールデングラブの受賞者で、黒田のリードは野村野球の後継者として定評があり、行沢と奈良原の守備力はメジャークラスだ。

森が厳選しただけに、なかなかのメンツあるが、これでも彼らは、本大会には無関係である。三原が巨人の選手として出場する森に情報漏れを警戒したために、主だった面々の派遣を拒否したこともあるが、それにしても、控えクラスでこれだけの守備力とは。

「いやあ中畑さん、緊張の度合いが徐々にましてきましたねえ～」

「ほんとですよ、しかも西武とジャイアンツ、これって、本大会の前哨戦じゃなかろうかね。ところで、肝心の本大会はいつ始まるのよ？　私はこうして、準備に余念がないけどさ、いつまでたっても、

始まるそぶりもない」
「一テレビ局のアナウンサーであるわたくしに聞かれても、返答に困りますよ」
「あんた、まだアナウンサーだっけ？」
「プロ野球関係者の復権も許されるんですよ、そんなことよりもなによりも、見てください、東京ドームのオーロラビジョンに映し出された、あの彫像」
「あ、バントをしてるねえ」
「そうなんです、優勝選手には、あのバントの構えをした彫像に、選手の背番号と、チーム名、名前を掘り込んで、なんと東京ドームに隣接する野球体育博物館に展示されるという特典がつくとのことです」
「へえ、そりゃ凄い…で、それだけなの？」
「賞金やその他の商品はない模様です」
「なるほど、まさに名誉とプライドをかけた戦いということですか」
「その彫像に彫りこむ役目は、例年の自主トレで、見事な陶芸技術を披露してくれた、独立リーグの波浪の仕掛け人こと石毛宏典さんに行ってもらいます。中畑さんの大学の後輩ですよ」
「石毛が担当するんですか～、おいハチ元気にやっとるかってかあ……ところで、陶芸と彫刻って同じなの？」
「細かいことは気にしないでください…さあ、前置きをこのくらいにしまして、選手権決勝がプレイボールならぬプレイバントです」

先攻と後攻どちらかを取るのかも勝負の分かれ目だ。先攻を取り、バントを成功させれば、後攻に重圧を寄与できる。逆に、失敗しても、後攻になんとか成功して勝負を決しないとと、これまた違う心象を形作ることができる。
先攻が有利といえよう。これまで、裏表の決定はじゃんけんで決してきたが、決勝だけに特別に、バントしりとり勝負が行われる。
バントに関する言葉を次々と言い合う変形型のしりとり。出した

言葉が、世界犠打辞典に、載っているか、いないのかが、審議の方法。

まずはお題は「バント」

ト？　トトトトト…。

先に手を上げた平野に解答権利。

「投飛」

投飛？？　世界犠打辞典で審議……。投飛とは、数あるバント失敗のなかでも、一番みっともないもの。無残に打ち上げて、内野でもっとも守備機会の少ない投手に捕球されたら、そりゃあ赤っ恥である。

審議の結果、セーフ。次、川相。

「ひ？　ひ……非力」

非力、すなわち、犠打をするものについて回るもの。長打力があるものに、よほどのことがない限りバントはさせない。セーフ。

「キ？　キキキキ…奇襲スクイズ」

審議、セーフ。奇襲スクイズとは文字通り、思わぬ場面でスクイズを敢行すること。ただ奇襲好きの監督は、えてして奇襲を使いすぎる傾向にあるために、はたして奇襲といえるかが問題。

「ズ？？？？　ずずずず…図画工作」

審議、セーフ。犠打職人は手先が器用な傾向にあり、百人のバント名人の好きな科目をとった結果、図画工作が体育に次いで、高い比率を残した。

「く、くくくく…苦節」

審議、セーフ。バントをするようなタイプの選手は、華々しく入団した選手は少なく、苦労を重ねてレギュラーをつかむ。よって苦節がよく似合う。

「つつつつ…突き指」

審議、セーフ。ボールに正対して、手を突き出すバント練習につき指はつき物。突き指を重ねて、うまくなる。

「びびびび…ビギニングラック」
審議、セーフ。初心者がバントできないこともない。普段打席に立たない投手が、見事送りバントを決めることもある。ただし、初心者ができるからといって、バントの世界は浅くない。回数を重ねるにつれて、失敗も増える。失敗が増えれば、バントに対し恐怖心が生まれる。すなわちバントの名人とはその重圧を潜り抜けたものといえる。
「くくくくくく…クルーン」
審議、セーフ。クルーンの速球ほどバントしにくいものはない。荒れるわ、早いわ。
「んんんん？」
あれ？　しりとり的にはアウトじゃないか。よって勝者は平野、先攻は平野が取ることに……「オレ、後攻にするわ」
え？　先攻有利でしょ？　これも川相の策略？　それとも平野の考え？　先輩の余裕？

最後の犠打目　フューチャリング長嶋茂雄　「果てしない夢を」

「中畑さん、先攻は我らが川相です。どう出ますかねえ？」
「投手は渡辺智男。走者は一塁に栄村…走らせたいところですが、ここはバントでしょう」
「おお、バントの構えです。さすが、中畑さんです」
「でへへへ…」

ところがベンチと呼吸があわない。バントのみしか許されていないはずの決勝で、監督の堀内がサインを出す。サインといえば、このボールでバントをしろか、このボールは待てか、走者を走らせて、バントの補助をするか、三種類くらいしかないのであるが、それでも堀内はサインを送る。
なんと「打っていけ」とブロックサインだ。堀内は勝って優勝監督の座を享受したいはずなのに、
なぜ、打てのサインを出すのか？　規則の変更を理解していないのか？　それとも優勝監督の名誉よりも川相をこけにすることを選んだのか？　堀内の心理は不明。それでも川相は従わずに、バントだ。見事に成功させる。

ベンチの戻った川相は堀内と儀礼的にハイタッチを交わすのだが。どこかおざなりだ。目も合わさず、ハイタッチといえないほど両者の手は上がっていない。

これも堀内流の作戦であった。川相の持ち前の反骨精神をくすぐるために、あえて打てのサインを出したのだ。川相は熱くなるほど、小技に秀でる珍しいタイプであり、堀内もその属性を熟知している。

ひねくれもの、現代でいうところのツンデレの堀内らしい選手操縦法ともいえる。川相は堀内のひねた愛情を理解しておらず、ベンチに腕組みで仏頂面だ。せっかくドームの天井に設置した平野の視界をさえぎるための特製のレーザーポインターの稼動を忘れている。

川相の選手権第三試合目にしてようやく、策謀抜きで、勝負することになった。結果、決勝戦らしく正々堂々とした舞台になったのは喜ばしいことだ。

川相も決めれば、平野もバントをいとも簡単に決める。巨人の投手の香田が厳しくインコースを攻めても、伝説のスローカーブでかわしても、平野の前には効果はない。

大方の予想通り、バントの名手の対決は、膠着状態に。

「おく～～～～～～～～～り～～～～～～バ～～～～～～～ン～ト成功」

船越が無理に盛り上げるが、バントはいつまでも続く。どこまでいっても送りバント。いかなることがあって送りバント。決勝までの道筋で見せて波乱の展開があるわけもなく、とにかく送りバント。

百二十球を超えた両投手にさすがに疲れが出る、おまけに牽制にバント処理にベースカバーで、疲れは球数以上だ。

なんと送りバントだけで投手をＫＯ。替わりに巨人から漫画家の木田、西武から渡り鳥左腕杉本。

ところが、守備側がいかなる手段でバントを失敗させようとも、二人はバントを決める。

「おくおくおくおく～～～～～～りりりり～～～バント～～～～～～～～～

るが、バントの応酬の前には、誰が監督であろうと、同じである。指示を出すこともなく、ただ機械的に疲れた選手を交代させるのだから。

木田から、木戸、安原達、倉田とリレーした巨人に対し、西武は、杉本から、橋本、デニー、森慎二とリレーする。投手リレーにも何かしらの策があるわけでもなく、ただブルペンで仕上がった順番に出しているだけである。

それでもバントの成功は続く。箕島と星稜の対決を抜いたと思えば、プロ野球記録である延長２８回をも抜く。世界記録であるライト工業対田中病院の延長４５回を抜いてもなおも、バントは続く。バント、バントにまたバント。生還することもない走者が延々と二塁に送られる。死ぬこともなく、生きることもない走者に広がる無常は、手段ではなく、目的と化した送りバントの空しさを如実に表している。

必死の継投で、サンチェー菅原一小川一高橋尚とつないだ巨人、三井一井上善一田中章とつないだ西武ともついに、投手の底が尽きる。

野手をマウンドにあげて、不安定な球筋を見せてもバントは終わらない。

バント千日戦争はいつまでも、いつまでも続く。終わりのない戦い。ただ栄光のために、二人は戦う。いまだ一片の光も見えない勝利の栄光だけを信じて。

三原マジック炸裂？

巨人がオープン戦の対戦相手に選んだのは意外にも西武であった。もちろん巨人は優勝候補の筆頭であるが、西武はそれを上回る戦力のあるチームと目されている。西鉄の最強時代を初めとして、西武の三十年余りにも、何種類もの形の黄金時代を築いてきたことで、何重にも戦力の厚みがあるのだ。西武だけでも六人もの優勝監督がいることからもそれはわかる。もちろんこの両球団を軸に、大会は展開を見せていくことが予想される。

そんな球団同士だけに、お互い手の内を見せたくないのが、本来の姿であろうが、互いに宮崎県でキャンプをはることもあり、オープン戦が実現された。ただ場所が近いからと、対戦するわけではない。

川上にも三原にもそれなりに狙いがあるのは当然のことだ。対戦を申し込んだのは、ライオンズの監督の三原からである。策士三原のことであるから、巨人の内部でも対戦に拒絶反応を示すものもいたが、川上は王者は堂々と戦うべきとの強い信念で実現の運びになったのだ。

平日の昼下がりにもかかわらず、宮崎サンマリンスタジアムにはこの両球団の対戦を一目見ようと、徹夜組もでる盛況ぶりだ。

人気凋落で巨人にすっかりと冷たくなった日本テレビもこの対決はさすがに、中継しないわけにもいかずに、昼の帯番組のワイドショーを休止させてまで、生にこだわったのだ。

もちろん最大の見所は、ＯＮの三十五年ぶりの競演である。練習試合であろうとも、看板スターは一日も休んではならないとの考え方はいまだ健在で、三番一塁王、四番三塁長嶋の懐かしい組み合わせで、復活を果たしたのだ。五番には最後まで出場を渋った松井が名をつなれた。注目の捕手は阿部と発表された。森の策謀も空しく…といいたいところだが、阿部のスタメン捕手を進言したのは、な

にをいう森その人である。表向きは、阿部の能力の高さを買ってのスタメン推薦となっているが、森はもちろん負けを認めてはいない。西武の強力打線を阿部のリードでは抑えれないともくろんだのだ。試合が終わるころには、勝手に森と阿部の評価は逆転しているはずと踏んだのだ。

森らしい先の先まで読んだ策であったが、三原は森のさらにその上をいっていた。

当初から、三原は主力を隠して、巨人の出方を探ってくるはずだとも懸念があったわけで、たとえば、稲尾や中西といった現代野球から大きく乖離した主力を隠して、力が落ちる　ーとはいっても、十分に実力者であるのだがー　二番手、あるいはそのまた下のクラスで挑んでくるとはず…。片岡や中島といった知り尽くされた現代の選手から、基や竹之内といった忘れられた実力者がそれにあたろうか。

巨人との本戦、おそらく準決勝以降での本当の戦いまでは、主力をひた隠し、控えクラスで出鼻をくじく、巨人が伝統的に持つライオンズ恐怖症をより強固にする。

ヘッドの牧野はそう見ていた。

ライオンズ恐怖症。

巨人は西鉄に三連敗をきったことをはじめとして、史上最高の日本シリーズといわれた八十三年の西武に初の敗戦から、八十七年の伝説的な走塁から、九十年の野球観が変わるほどの四連敗まで、巨人はライオンズに負け続けてきたのだ。九十四年の長嶋の初の日本一と、〇二年の四連勝返しで、恐怖症も消えうせたかと思われたが、〇八年の敗戦で、いまだに巨人はライオンズに分が悪いことが改めて証明された形だ。シリーズ通算巨人からみて、三勝七敗。あきらかに苦手意識が数字からも現れている。

長嶋にしても新人の年に三連勝から奇跡の大逆転をくらい、王も巨人ダイエーの監督時代を通じて西武を苦手にしてきた歴史がある。現代の指揮官である原も、西武には強い意識を持っている。

ＷＢＣメンバーに西武から多く選んだのもその現われだ。

牧野の懸念はそこにある。中心軸を担う西武がそろって西武恐怖症なら、とても大会の覇権は担えない。そこで期待されるのが、松井だ。

松井には西武に対して苦手意識はないのだ。九十年の四連敗当事も、彼は高校生であり、阪神ファンとの立場で試合を見ていた。

二度の対戦も、いずれも勝利を収めており、松井の対西武の通算は、八勝二敗だ。西鉄の強さも肌で感じていないこの男こそキーアンであると牧野は期待をしいている。

それでは、ライオンズのスタメンは？　これが予想以上にとんでもないメンバーだ。

なにせ稲尾も中西もベンチ入りすらしておらず、九州向けのラジオの解説を勤めているくらいだ。

清原は？　秋山は？　清原にいたっては、日本テレビの放送ブースにいる。

桑田や松井にエールを送る余裕さえ見せている。秋山はなんと同じ宮崎でも、ソフトバンクのキャンプ地にいた、監督一年目だけあって、時間を見つけては、指導に余念がないのだ。

驚くべきメンバー。川上は首をひねり、牧野は資料に首っ丈だ。先発マウンドに登った堀内恒も、メンバーを見ては拍子抜けしたようで、ブルペンの投球にもいまひとつ実が入っていないようだ。

オープン戦にもかかわらずミッチｆリトバッテリーミーティングをして試合に挑んだ阿部は、何がおきたのかわからないと、状況さえよくつかめていない様子だ。

なにしろ二軍、三軍クラスさえなく、その下のクラスの選手が多くメンバーに名をつられていたのだ。

阿部はポツリとつぶやいた。

「ビュフォードって誰だよ……」

誰だ誰だだれだれだダレダレだれだれだよ？

ライオンズファンからの怒声が飛ぶのはわかる。せっかく主力の出場を期待して、わざわざ平日、仕事や学校を抜け出して、来たのにこのメンバーでは、チケット代返せと野次が出るのも仕方がないか。それだけでなく、巨人ファンからも罵声が三原に浴びせられる。ガチンコの勝負ははなから期待していないまでも、せめて知っている選手が見たいのだ。

一番右翼ジャクソン
二番遊撃菊川
三番中堅ビュフォード
四番指名打者ハワード
五番左翼安部
六番一塁河野
七番二塁仰木
八番捕手宮寺
九番三塁伊原
先発投手野口

仰木ってもしかしてあの仰木？　スタンドから疑問の声が漏れ始める。当然あの仰木だ。あれ？　仰木はオリックスの監督として、宮古島で陣頭指揮を取っているのでは？　昨日のスポーツニュースでもその模様は大きく扱われいた。

選手首脳陣の二重所属は禁じられているはずだ。

知られた仰木とは違う、もう一人の仰木なのか？

いや日本球界史上仰木は一人しかいないのだ。当然あの仰木だ。

「仰木のプレー姿が見たい古いファンもおるじゃろう」

三原ならではの粋なら計らいだ。伊原とくればあの伊原しかいない。史上最強の三塁コーチャーと知られる伊原である。選手実績の

なさをよくあげつらえるが、太平洋クラブ時代のライオンズのレギュラー三塁手を勤め上げたこともある。もちろん仰木と同じく選手としては、大会の参加は困難だが、今のファンに名コーチの現役のプ$レー姿を見せたい、これも三原流のサービスだ。

ビュフォードといえば、これまた太平洋時代の選手で、三塁と外野を守るユーティーティーながら、ベストナインも獲得した忘れられた名選手の一人だ。メジャー実績も豊富で、貧乏球団が奮発して呼んだ選手の一人である。

ビュフォードを上回るメジャー実績があるのが、四番のハワードだ。

ハワード？　ＷＨＯ？　ライオンズの歴代レギュラーのリストのどこにもいないじゃないか。とお思いのファンのかたがた。あなたは正解だ。なにしろハワードはたった二打席しかたっていないのだから。

メジャーの本塁打王として華々しく来日。地元の新聞社がハワードが何本の本塁打を記録するのか？　というクイズが行われたことからも、当時の熱がわかる。

もともと、下半身の限界が近づいていて、結果、クイズの答えは０。

そのハワードが三十年以上の沈黙を破り、ここに復活だ。

ハワードには特別措置として、オープン戦限定起用を約束して、メジャー時代の体に復元されている。太平洋時代のハワードが復活されて、たった二打席でまた膝の爆弾を爆発されても困り物だからだ。

奇々怪々の三原マジックの前に巨人ベンチには言葉もない。

巨人打線はほぼフルメンバーとおぼしきベストな打線を組んでいるだけあって、狐に化かされた気分だろうか。

柴田、篠塚の一、二番コンビに、王、長嶋、松井の理想的な中心軸、そこに高橋由、阿部、二岡の若き後方射撃がある。

これだけみれば巨人の圧勝が予想されるが、はたして試合はどう

転ぶのか。

先発投手からして、誰だかわからない。野口？　中日にいたＭＶＰ左腕の野口のわけはない。古いファンから、野口二郎との声が漏れる。鉄腕と評されて、二百を優に超える勝ち星を集めた歴史的な投手だ。ところこが、野口は、消滅球団を行き来した野球人生を起こったのだが、ライオンズにいた事実はない。それならば、兄の野口明か？　戦後は主に、捕手として活躍しながら、戦中には、投手として、最多勝を獲得したほどの、多彩な才能を秘めた選手であったが、このれもライオンズにいた実績はない。

答えは、野口正明であった。西鉄草創期の主戦投手でありながら、三原マジックが世間を翻弄する前に、その全盛期を終えたために、いまひとつ後世へのアピールがない選手であるが、最多勝経験もある間違いなく球団史に残る投手だ。捕手の宮寺は、巨人の二軍でくすぶっていたところ、西鉄に目をかけられて、高倉との交換で、移籍をし、すぐさまレギュラーを獲得して、それなりに活躍をした選手である。

名選手の高倉と二軍の捕手の宮寺の一対一の交換ではさすがに釣り合いが取れていないと、巨人有利のトレードと揶揄されたのだが、実際は高倉の高年俸削減のために西鉄側から誘いをかけた商談といわれている。

監督の川上からして、宮寺が誰だが、思い出すのに苦労したようで、牧野ヘッドの口添えでようやくピントが定まったようだ。

たとえ控えのクラスといえど、宿敵ライオンズの選手には違いない。本大会を考えれば、研究をする余地があるはずだ。

牧野は野口のクセを見破ろうと、ブルペンの投球からして、目をさらに、投球モーションを見守る。それをみて三原がほくそ笑む。なにしろ今日のスタメンの選手どころか、控えまで、誰一人、本大会に起用するつもりはないのだ。あくまで今日の試合の目的は、本大会に出場の見込みのない選手の顔見世と、巨人ベンチによけいに

考える暇を与えることだ。

勝敗にはさほどこだわらないが、巨人が勝ったとして、しごく当たり前、あまつさえ負けることがあれば、ライオンズ恐怖症は深刻な病となる。

三原はそこまで考えての起用だ。三原のもくろみは早くも効果が出ている。巨人ナインに苛立ちが見えているのだ。苛立ちがもっとも見れ取れるのが、先発の堀内恒夫だ。

彼は天才にありがちな、気分屋で大試合にめっぽう強い一方、気のならない試合にはとことん弱い。Ｖ９時代の投手でありながら、意外と負け数も多いことからもそれがわかる。

そんな堀内が、この打線を見て気分がよろしいわけがない。

捕手の阿部を呼びつけると、

「ペヤングだ」

となぞの一言を吐き捨てて、阿部を困惑させる一幕も。

先頭打者のジャクソンが右打席に入る。クラウチング気味に構える黒人選手である。

「ジャクソン？　ジャクソン？　どのジャクソンさんだよ、くそが。焼き鳥の食いすぎで死んじまった野郎か？　ありゃサンケイのヤツだっけ」

堀内のつぶやきにあるジャクソンとは、堀内の新人時代にサンケイアトムズにいた外野手である。彼のいうとおり、焼き鳥の食いすぎ……。それだけでなく、つまり過度の暴飲暴食がたたり、現役中に死亡してしまった悲運のプレイヤーだ。

もちろんこのジャクソンは人違いだ。９５年９６年に在籍した三拍子そろった外国人。ベストナインを獲得したり、球宴に出場するなど、それなりの活躍を見せたのだが、日本シリーズと無縁だったこともあり、その印象は悲しいが、薄いものがある。

なおジャクソンは主に一番打者を勤め、巨人のマックや、日本ハムのデューシーと並び、当時の静かなトレンドであった外国人トップバッターの一人として記憶される。

外国人ならではの先頭打者アーチが狙える攻撃的一番打者と呼べば、聞こえがいいが、主軸として、いまひとつ頼りにならなかった証拠でもある。

堀内のおもな球種といえば、自慢の速球と大きなカーブである。ここにチェンジアップを加えて、わずか三種類の球種で勝負する典型的な本格派投手であるが、今日の堀内は、カーブの連投で入る。こんな打線に速球を投げて疲れるのはバカバカしい。カーブを適当に投げて、打たせてとって楽にいこうとの計算か。

ところが、格落ちの打線といえど、そう甘くはいかない。ジャクソンが四球続いたカーブを引っぱたくと、打球はあっという間に左中間を抜けていく。スタンディングダブルだ。悠々と二塁にたどり着き、タイムをかけて、砂を払う。

二番の菊川。これも聞きなじみのない名前だ。西鉄末期から、太平洋クラブ時代にかけて、三塁と遊撃で活躍した選手で、彼も巨人の二軍にいた選手の一人だ。

堀内にもなじみのある名前で、それだけにこれまたなめてかかるのだ。巨人の二軍がみなレギュラー。それが他球団とＶ９の差だよといわんばかりに甘いボールの連続だ。

ところが、ボールが甘くても、堀内のボールはすさまじい。軽く投げた速球が打者の手元でぐんぐん伸びて、三振に切って取ったのだ。

どんなもんだと堀内は甲府の小天狗の鼻をさらに高くする。

続くビュフォードもポップフライに切って取り、さすがにエース、ピンチになれば本領発揮…と思いきや、ハワードに痛い目にあう。

堀内はメジャー通の一面もあり、当然、ハワードの凄さは理解している、それでも、太平洋のハワードにはなめてかかるのが、堀内。

メジャー通であるが、特別にメジャー全盛期の肉体で出場をしていることまで知らない。低目の速球を真芯でとらえると、ボールはピンポン球のように、飛んでいく。なんと広いサンマリンスタジアムのバックスクリーンのそのはるか上を越してしまったのだ。

超特大の本塁打。

ハワードが日本で初めて、ゆっくりとベース一周することになるのだ。

特大弾を食らった巨人にもすくいはある、このハワードが本大会に出場しないことだ。ただ三原だけに、何をやってくるのかわからない不気味さがある。さらに三原の後ろには、寝業師根本がＧＭとしてついている。彼らなら、ルールをひっくり返して、ハワードを本大会のラインナップに加えるくらい、そう難しくない仕事かもしれない。

打たれた堀内は、闘志に火がつけばよいのだが、その様子は微塵も見られない。逆に投げやりになったのか、あれがメジャーのパワーかと感心しきりだ。

気分で投げる典型的なタイプなだけに、このような状態では、ボールがいくわけがない。

エースをいとも見事にふぬけた状態にした三原はさすがである。

掟破りの東尾、赤子の亀井

続く打者の安部……規定打席には一度も到達したことがないが、森西武黄金時代の左翼の一番手といえば、真っ先に彼の名前があがるほどの実力者だ。

巨人とのシリーズで何度も、殊勲打を放っているだけに、巨人ベンチの警戒心たるや、想像以上だ。とくにブルペンで試合を見つめる、桑田は安部の顔も見たくない一人だ。

交流戦のない時代にもかかわらず、ましてや、セ一筋の桑田、パ一筋の安部でありながら、安部は桑田キラーの異名を取っていたのだ。

桑田得意の大きなカーブを、すくいあげるように、センター前にはじき返す安部の打撃はいまだ脳裏に新しい。

桑田も堀内も大きく分けると同じタイプだ。カーブとストレートの正統的投手。制球力やボールの勢いこそ違いあれ、堀内キラーになる資質を秘めているのが、安部だ。

まさしくこの打席でも、地面につきそうなくらいの低目のカーブを、拾い上げると打球はセンター前のクリーンヒットだ。

堀内はもはやなんのダメージもないが、桑田は悪夢がよみがえったかのように、思わずタオルで視界を閉ざす。

試合は西武の一方的なペースで進む。

史上最高の谷間投手新谷、９３年新人王アンパンマン、サンフレチェの一人杉山、稲尾以前の西鉄のエース島原、大津、西鉄最後のエース豪腕河原……そして球種チェックのデータ集めに余念のないオトマツこと松沼雅之。こまめな継投に巨人打線は沈黙を続ける。

彼らがそろって、本大会のメンバー入りが絶望的といわれているのだから、その層の厚さたるやことに恐ろしい。

そして迎えた九回。先頭の王に小田を当てる。永謝のあとを次いだ変則のワンポイント左腕だ。

王を得意の大きなカーブで三振に取ると、次の長嶋には、西武の中継ぎ…というよりも、箕島連覇のエースとしてのがとおりがよい、石井毅が登板。サイドからの鋭い変化球で長嶋を腰砕けにする。

これで終わらないのが三原野球のしつこさ。松井には、市村を当てる。左には左のジグザグリレーだ。

市村も変則の左腕投手、ドラフト史上最年長で指名されたことが話題になった。彼を有名にしたのは、プレー自体よりも、リリーフカーに乗り間違えたことというのも面白い。

市村が呼ばれたわけでないのに、市村がリリーフカーに乗り込みマウンドへ。そこでようやく人違いと気づいた市村はそのままリリーフカーに乗りブルペンへととんぼ返り。

８６年の珍プレー大賞を受賞したユーモラスにあふれるシーンの主役が市村であった。

市村で松井を打ち取り試合終了…。そこまでうまくことは運ばない。松井お得意の耐球作戦で、一塁に四球を選んで塁に出る。

次の打者は途中から打線に加わった原だ。もうベンチには誰も投手はいない。このまま右の原に市村を当てるしかない…。誰もがそう思ったのだが、ライオンズのベンチから、この試合は投手コーチとしてベンチに入っていた東尾が、いつものにやけた顔で飛び出てくる。

市村のボールを奪い取ると、球審に投手交代を告げる。越権行為に見えるが、監督の三原の許可は取ってある。監督以外の選手交代は認められてはいない。主審のミスであるが、そのまま交代は受け入れられる。

ベンチにはもう投手は誰もいないはずだが？　ブルペンから飛び出てきたのは、褐色の肌の外国人だ。

なんとデストラーデである。

今日ベンチ入りした選手で唯一本大会出場の見込みのある男だ。その男が、投手として試合に出場。たしかに９５年に一試合だけ登板の記録があるが、ド素人の登板に巨人ナインにようやく火がつく。

我らが若大将原が、デストラーデのチェンジアップを捉えると、火を噴くような打球がレフトスタンドに放りこまれる。

どうだとばかりに原はバットを後ろ手で放り投げる。９２年に見せた有名なシーンの再現だ。ところが、試合はとうに決まっている。この一発で二点入っても、この点差をつめるのは不可能に近い。すなわち焼け石に水の一発。いまさら打っても時すでに遅し。ただ投手は、デストラーデだ。おそらくプロ野球史上何千もの投手がマウンドに立ったろうが、彼より見栄えのしない投手は他にいないだろう。

原の一発を号砲にして、奇跡の大逆転の事態もありうる。なにしろもうベンチには一人の投手どころか、選手もいないのだから。たまらず東尾がマウンドに向かう。いまさら勇気づけるのか、それともあと１アウト。適当に投げてもそのうち終わるよとでも楽観論を伝えにいったのか。守備につく他の野手と以外の選手交代はできないのだから。

なにやら東尾が球審に言付ける。やはり、野手と交代でもさせるのか。もはややけくそに近い。

ところがだ、野手でもなく、デストラーデと交代でマウンドに立ったのは、その東尾であった。

ベンチに登録されていない東尾の登板に、当然のように、巨人軍のベンチは抗議に出る。

球審の村田を捕まえては、抗議というよりも、お説教に近い孫に祖父が諭すような口調で、それでいてねちねちと止まらない。

客の受けは悪くない。それもそのはず、ようやく出てきたスターといえるライオンズ選手の登場に反応が悪いわけがない。

公式戦でもない、たかがオープン戦。細かいことは気にするなという雰囲気が流れている。

川上は、巨人に旗色のよろしくない空気に気づき、抗議をしめる。

ここで厚くなったら、三原のおっさんの思う壺だ。これも三原流の作戦であると、判断した川上は、ベンチに戻る。

本塁打を打ったばかりで、意気往々としている選手兼打撃コーチ補佐（キャンプ中に降格した）原は、川上に怖いもの知らずで、監督としての姿勢を問いにかかる。

「ＷＨＹ？　川上監督、なぜあっさりと引いたのですか？　オープン戦といえど、不正は許してはいけません！」

「原くん、君はまだ若い」

川上は原を相手にもせず、そのひと言で一蹴だ。

納得のいない原は手を両手に広げて、首を盛んに横に振る。

自分が監督なら、退場も辞さない猛抗議をするのに、やっぱり、ご老体になると、ジャイアンツ愛は薄れるのか。

漫然とベンチに座り、試合を見つめると、マウンド上には東尾がいた。にたにたとふてぶてしい笑顔で、ロージンを触っている。

あんなにロージンに触っているくせに、どうして、僕に危険なボールを投げたの？　滑らないはずでしょ？（８３年のシリーズで、原は東尾のビーンボールを体験済み）

滑ったから投げてしまったわけではない。むろん意図的に投げたのだ。

打席には、途中から守備に入って、この回初打席を迎える、亀井だ。亀井がなぜこのメンバーの中にいるのか？　ＷＢＣ代表候補だから、いてもいいじゃないか。

この点差。ルール破りの起用。オープン戦で、打席には本番にはいないだろう若手。まさか、危険球を投げないだろうと見せかけて、投げてしまうのが、東尾だ。

亀井の頭部を狙い１３０キロの速球が襲い掛かる。危ないと思った亀井は、もんどりかえってよける。

土を払い、脱げたヘルメットを手に持つと、果敢にも東尾をひとにらみ。東尾は悪びれることもなく、にやにやと誤る、謝罪の意として、帽子を取るが、どこにも懺悔の気持ちが現れていない。

巨人ベンチは飛び出さんとするが、川上の

「行くな」

のひと言で撤収。

「熱くなってはいかん。たかがオープン戦じゃ」

川上が威厳を示そうとしているが、、当の本人が一番イラついている。貧乏ゆすりは、緊急地震速報の域に達し、ぐつぐつと煮えきったその顔は、ゆでだこより、ポストよりも真っ赤だ。

打席に入りなおした亀井は絶対に打ってやるとばかりに、口を大きく開けて、掛け声を何度もかけるが、腰はすっかりと引けている。東尾の１２０キロ台の力のないまっすぐ三本にまったく手がでずに、あっさりと三振に取られる。

外角ぎりぎりどころか、ほぼど真ん中に近い、甘い甘いボールであったが、腰砕けの亀井にとっては、銀河系よりも遠く感じられただろう。

宮崎サンマリンといえば、巨人のホームであるが、すっかりとライオンズにのっとられた感じだ。

東尾が、たいして何もしていないのに、大声援に帽子を取って（危険球への謝罪よりも、堂々と潔く）応えれば、大量点を奪った打者を差し置いて、ヒーローインタビューにも立つ始末だ。

「いやあ、亀井くんには悪いことをした、なにせ急な登板だったから、ブルペンでろくな準備ができなくて…グへへ。抜けちゃったのよ。ゲへへへ」

その後、みっちりと肩を作っていたことが判明。

「想像以上に怖がりで、ためしにど真ん中投げたら、三つとも空振りで…ぐへへ」

おやおや、すっぽ抜けだったはずなのに、想像以上に怖がりだった？

東尾のインタビュー以上に衝撃的だったのが、三原の会見だ。

「今日出た選手は、いいアピールになったかだって？　意図しない最後の二人以外（デストラーデと東尾）は、今日これっきり使いません」

つまりは、情報だけ外に出ただけでなく、本戦に出ない控えクラ

スに完敗するという巨人だけにダメージが残り、収穫ゼロの試合であった。

三原の筋書き通りにすべては運んだのだ。

敦賀気比無知との遭遇

「ヒサさん、ヒサさん……」

「あ、ヒサさん待ってください！」

「えっと、ヒサさん、あの人誰でしたっけ？」

「ヒサさあ～ん、何荷造りしてるんですかあ？　キャンプ日程まだありますよ」

「強制帰京だよ」

「え？」

「この前の西武戦で、オレまずい投球したろ？　それでもうオレのテスト終了、即刻東京帰れって、藤田コーチにいわれたさ」

「ちょ、ちょい、ちょっと待ってくださいよ、ヒサさんがいなくなったら、オレ一人になっちゃうじゃないですか！？」

「上原がいるじゃん」

「上原さんは、この前、Ａ班に昇格したでしょうよ」

「あ、そっか。Ｂ班で現役世代は、オレら二人だけだったなあ」

「誰に頼ればいいんですか！？　周りは知らない人ばっかり……」

「お前、例の罰則で、ＯＢの名前と顔、必死に覚えたんじゃなかったっけ？」

「必死に、勉強したんすけど、成果のほうは…さほど…」

「嘘つけよ、お前が必死に勉強？」

「必死っていうのは、言いすぎかな…」

「そうだ、金村さん…じゃなかった、金田さんに頼ればいいじゃん…。お前の披露宴でもお世話になったろ」

「それがどこを探しても、金田さんがいない…３００うん勝…じゃなかった、４００勝投手なのに、キャンプに呼ばれてもいないって変すよね…」

「いるわけねえじゃん。４００勝のうちの３００うん勝はどこで勝ったか、知ってんのかよ？」
「巨人……？」
「ばーか、スワローズだよ。国鉄スワローズ。金田さんはヤクルトのキャンプに参加してるんだよ。ニュースで見なかったか？　金田式健康棒の使い方講座をみっちりとやってたろ。あ、おまえが、ニュースなんぞ高尚なものをみるわけないか」
「そうか、金田さんヤクルトなんだ…。どうも見かけないと思ったら…」
「じゃあ、頑張れよ。オレらの希望の星がおまえなんだ。上原も今じゃボルティモアだし、内海お前の当落に、全てがかかってるんだぞ。なにせ、現役巨人投手でメンバー入りの期待できるのおまえくらいなんだから」
「あの…最後に気になることがひとつあるんですけど、聞いていいですか？」
「なんだよ、早くいえよ」
「あのひょろっと背の高い白人の外国人投手いますでしょ？　誰でしたっけ、あれ…？」
「ああ、あれ？　あれな、サンチェ」
「サンチェって…たしか黒人だったでしょ、騙さないでくださいよ…それくらいオレにもでもわかります。ガルベスでもないし、ガリクソン…、メイ？、違うな…。最初、グライシンガーかなあと思ったけど、よく見ると違うし…」
「冗談だよ、冗談。あの人須田さんだよ」
「須田…さん！？？　ってまた騙さないでくださいよ。須田って日本の苗字じゃないですか？　ハーフの人にもみえないし」
「マジで須田さんだって、じゃあ試してみるか？　へーイ！須田さあん！！」
「ハーイ！！　ヒサノリ！！　ナニカゴヨウデスカ！」
「うわ、本当に須田さんだ」

「な？　で、下の名前が博なんだよ。へーイ！　博さん！」
「ハーイ！　ヒサノリ！」
「日本語も流暢だ。本当に須田さんだったんだ…。それに、グライシンガーと違って意外にフレンドリーだ」
「どうだ。本当に須田さんだったろ。おっと、もうこんな時間か。じゃあな内海、もうすぐ、お向かえのタクシーが来る時間だ」
「え、え、え、ヒサさんちょっと一人にし・な・い・で…ください…。って、行っちゃったよ…。オレ一人だよ。あーあ」
　内海に次々と恐怖が降り注いだのは、この時からだった。
　誰も知らない。知られてはいけないわけでもないが、内海は誰も知らない。内海を抜擢した堀内や、現役の上原の他、桑田や斎藤、槙原の三本柱や江川、西本などの内海も知っている有名選手は、一軍にあたるA班で調整に励んでいる。
　一方の二軍にあたるB班は、ボールの慣れや野球の違いを考慮して、あえて古い時代の主力投手を置いたために、内海一人だけ浮いている状態だ。
　一応参考資料として、選手名鑑が配られているのだが、写真写りの荒さと、実際に動く選手に差があり、人目では、誰が誰だと確認できないのだ。
　背番号上のネームも古い時代のユニフォームには入っていないものが多く、判別に使えるものではない。

「君が内海さんのお孫さんか～　おじいさんには大変世話になってねえ…そういえば目じりとかおじいさんにそっくりだ」
「はあ、どうも…」
　まるで、法事などで、知らない親戚にであった状態。むこうは知っていても、こっちはどこの誰だか皆目見当のつかない。内海は、ぼろが出ないように、出ないようにと会話のやりとりに一苦労する。
　救世主というわけでもないが、助け舟程度になりそうな男が内海の前に現れる。

はたしてその男の正体とは？

人造真人間木佐貫

隣接するメイングランドのサンマリンスタジアムから、サブグランドのひむかスタジアムまで、B班の視察に訪れた原である。

「あ、原監督」

「やあ、内海くん、元気にやってるかね？　ところで、今の私は監督じゃないぞ」

「あ、いけね…原打撃コーチ…でしたっけ？」

「原チームスタッフとでも呼んでくれ」

「チームスタッフ…？」

強く推薦した亀井の無残な三振の責任を取って、原は打撃コーチ補佐からも降格。いまや役職名なしのチームスタッフ。ただし、コーチとしての権限はいまだある。

「頑張れよ、内海。…と君個人にエールを送りたいところだが、コーチの立場としては、公平に見ないとならない。……あ、どうも中上…あ、藤本さんとお呼びしたほうがよろしいかな…お久しぶりです…原です」

「おう原くんか」

「おい内海、お前も帽子を取って挨拶しろ。藤本英世投手だぞ、知っているよな？」

「え？　、えええええ、もちろん…」

「日本初の完全試合を達成された偉大な投手だ。戦時中は兼任監督も勤められた大変にジャイアンツ愛あふれるお方だ」

「へえー」

へえはまずいだろ。日本初の完全試合投手くらい常識だぞ。

「おや、向こうにはスタちゃん」

あ、やっぱり須田さんなんだ。原さんがジョークをいうわけないからなあ。

「へーイスタちゃーん！　シーユーアゲイン！！」
シーユーアゲンイン＝さようなら、またねと意味。
ただし原の脳内では、お久しぶりです、との意味のこと。ただし、スタルヒンは原の誕生すぐに、自動車事故で亡くなられていて、もちろん初対面。原の複雑怪奇のコミュニケーションにもスタルヒンは笑顔を絶やさない。
「ハーイ」
初めて見た。誰だか知らないけど、とにかく笑顔で応対だ。

「スタちゃんは、日本初の３００勝投手なんだぞ、当然知ってたよな内海」
「は、はいもちろん」
へえ、３００勝も勝ってるんだ、あの須田っていう人。
「内海、何度もいうがお前にジャイアンツ愛がかかっているんだぞ。私が強く推したのは、ヒサノリと亀井に坂本（キャンプ初日に力不足で強制帰京）にお前なんだ。もはや、お前しか残っていないんだ。頑張れよ」
「あの、越智とか山口とか西村は参加してないんですか？」
「もちろんしてるさ。彼らはG班として、上を目指して汗をかいてる」
「G班？　B班より下にまだあったんだ。A、B、C、D…。オレのアルファベット教育が確かなら、G班って七番目？　七軍ってことか…さすが巨人軍ですね」
「そうだぞ、これが巨人軍の偉大さだ。お前に古きよく時代の投手が多くいるB班を体験してもらって、さらなるレベルアップを…と考えてね、私がコーチ会議で、強くお前のB班入りを推したんだ」
実際、内海のB班入りを最後まで反対したのは原。そこまでのレベルに到達していないと強く意見したが、結局、藤田投手コーチチーフの現役のエース投手一軍のそばにおいて大きく育てたいという意見が通った。

「…あ、そうだ忘れていた、ヒサノリの代わりに、東京から呼び寄せた男がいるんだ」

誰だよ？　また知らない人だろうに。

「木佐貫だ。もうすぐ到着する。面倒みてやってくれ。じゃあ、私は野手にも目を光らせないとまずいから…」

木佐貫？　ほらまた誰だが…って、木佐貫さん？　ってあの木佐貫さんだよなあ。ああ良かった、知ってる人がまた来た。

プロ野球選手向きでない性格第三位。小学校低学年の担当教師にしたい野球選手第一位。きれいな日本語をあやつる選手第一位。実直がユニフォームをはおい、律儀がブリーフをはいたような男、木佐貫の登場だ。

木佐貫ならば、内海の優秀ならガイドにぴったりだ。木佐貫のことだ、Ｂ班に所属する十数人のデータを完全にインプットしてくるのに違いない。

内海の期待通り、登場のはなから、木佐貫節が炸裂する。

「どうも、木佐貫です。はじめまして、木佐貫と申します。読売巨人軍で投手をやらさせてもらっています」

投手の一人一人に、角度九十度の見事なお辞儀を交えて、あいさつ回りだ。

「これは、これは大友投手。１９５３年の最優秀防御率、最高殊勲選手、ベストナイン、最高勝率、沢村賞投手ですね」

「こちらは、中尾投手。巨人軍史上左腕最多の２０９勝あげられた方ですね。本大会は投手コーチも兼任されるようで…そちらでもお力を発揮したいただきたい所存で…」

これだけ相手を褒め上げているのに、いやみにならないのが木佐貫の素朴さか。とにかく、会った投手に詳しいデータで応対する。

「どうも、キサさん」

「これは、これは内海投手……オリックスのドラフト一位を蹴り…」

「オレの詳しい寸評はいいですから……キサさんも山口とかと一緒で、いままで東京で調整してたんすか？　たしかG班でしたっけ？
七軍すよね、何軍越しの大抜擢じゃないですか」
「いや、僕はI班だよ」
「I班？　I？？　Iって、ABCDEFG…このあとなんだっけ、わかんねーや…とにかくGより後ろですよね？　何軍までいったいあるんだ…。まあいいや、I班も東京ですよね？」
「うん、さすがにI班までいくとグランドに不足が出てね。今は亡き多摩川グランドをわざわざ再構築して、僕とI班のみなさんはそこで練習に励んでいたのだよ。ヒサノリさんの入れ替えで、急遽呼び出されてね」
「へえー。ところで、キサさん、さっそく聞きたいことがあるんすけど」
「なんだい」
「あそこに、ほら今、ブルペンに入っている、背番号21の高橋ってネームの入った左腕投手がいますよね？　最初見たとき、名前も背番号も一緒で左腕だから、ヒサノリさんと思ったんですよ。ところが、ヒサノリさんは別にもいる。おかしいな、なんで二人いるんだって…清原さんが増殖したニュースを聞いて、あ、それかなって思ったんすけど、ヒサさんは違うって…。誰なんでしょうね？　あの人…」
「あのお方ね。…いいかい、内海、胸に手を当てて、ようく考えるんだよ」
「え？　こうすか？」
「わかっただろう？」
「…まったく」
「わからないかい？　それでは、ヒントをあげよう。君の最大の武器チェンジアップは誰に習った？」
「誰って…二軍時代の監督の高橋……あ、あれ高橋一三さんかあ。いやあ若くなっているから、まったく気づかなかった…って、いま

さらヤベエよ。どやされる、説教される。ろくに挨拶もしてないよ」

「ようやく気づきおったか。内海のやつ…アイツらしいっていえばアイツらしいか…」

「うわ、もうヒサノリさんの替わりにオレが離脱すれば良かった…耐え切れんよ…この雰囲気…キサさんが来て多少救われたけど…う？　そのキサさんがいねえ。うわ、もう早速ブルペンで投球練習か。さすが練習熱心だなあ……で、左足痛めてる……もう故障離脱…そしてまたオレ一人…」

内海にさらなる試練が。競争意識を高めようと、初の合同練習の試みとして、B班がいるひむかスタジアムに、C～F班の投手がぞろぞろと集まってくる。

「おまえが内海か」

「ほお、内海さんの孫か」

「オレの名前は当然知っとるよな？　知らんかったら、承知せんぞ、ガハハ…」

「カルシウムタリテマスカ？」

内海の見知らぬ人々が、続々とご来場…。内海は、頭を抱えてもだえるのみ…。

大矢マジック炸裂

三原マジック炸裂の一面記事を読んだ大矢の顔は上気している。
自分も三原さんのような采配をしてみたい。
今日の練習試合がマジックの格好の試し時だ。
大矢采配の肝といえば、必要以上に執拗な継投と、むやみやったらの無謀なコンバートにある。
そこに、慣れぬマジック采配を加えれば、これまたとんでもない結果が待ち受けていることは創造に難くない。
他球団とオープン戦ができればいいのだが、あいにく横浜は、地元神奈川は横須賀のベイスターズ球場で節約キャンプに励んでいるために、近くに適当な対戦相手がいない。
そこで、紅白戦を練習試合に当てることになったのだが、紅軍の監督を担当する近藤昭仁ヘッドコーチのやたらめったらな張り切りぶりが、気になるところだ。
大矢の耳に届かぬところで、この紅白戦を、下克上の戦いといいふらしているらしく、勝った方が、本大会の監督を務めることになると、勝手な魂胆をしたためている。
近藤が勝てば監督になり、負けても、ヘッドの座は安泰。大矢のそ知らぬ話で、監督とコーチとしての関係も保たれる。
いわば近藤圧倒的有利な試合なのだが、大矢はそんなこととともつゆ知らずにマジックの炸裂お披露の場と考えている。
大矢白軍は村田・佐々木を初めとする、主にベイスターズ世代、一方の近藤紅軍は、大洋世代中心の構成となっている。
いわば、大矢対近藤だけでなく、ベイスターズ対ホエールズの戦いの場でもあるのだ。
紅軍のオーダーはしごくまっとうなもの。近藤も三原門下生の一人で、マジックに憧れをもつ一人であるが、大切な一戦は慎重に戦おうとの心意気が見える。

捕手は土井、一塁は松原、二塁はシピン、三塁は桑田、遊撃は山下大輔、左翼手は長崎、中堅手は中塚、右翼手は高木由一、指名打者は田代だ。

ベンチにも、近藤昭仁自らや、近藤和彦、ポンセなどそうそうたるメンバーが控える。

先発投手は、平松が肩に違和感を訴えたために、急遽稲川に変更された。

白軍は、紅軍と違い、奇異に富んだメンバーだ。

捕手は谷繁…ここまではいいのだが、一塁に高木豊、二塁に進藤、三塁にローズと妙な守備位置の変更を施し、遊撃は当然、石井琢朗しかいないと思いきや、なんと内川だ。

内川は和製ジーターといわれ、石井の後継者の一番手であったが、度重なる送球難で、外野にコンバートされた経緯がある。

そんな内川を右打者史上最高打率を記録した一塁ではなく、遊撃で起用するとは…。

これも大矢マジックのひとつか？

外野の左翼鈴木尚、中堅多村、右翼ブラッグスはまだしも、指名打者村田は反感を買うことになる。守備の悪さを指摘されている村田であるが、サード守備にはプライドを持っている。

守備からリズムを作るタイプで、主にＤＨ起用された五輪でのひどさをみれば、彼が指名打者向きでないのはわかる。

四番に指名されたのはいいが、守りにつけないとは本人も思いもよらぬところで、ベンチにどかっと座るが、どこかいつもの元気がないのだ。

しかもその横には、控えを宣告された石井がいる。大矢マジックの成果か、早くも二人の不満分子を抱えての不安なスタートだ。

先発も、ハマの番長三浦か、優勝時のエース野村弘樹の起用が考えられていたが、本人もびっくりの盛田の起用だ。

セットアッパーで鳴らしていた盛田をあえて、先発に起用し、失敗させた張本人が大矢であるが、三度目の正直とばかりの起用か。

そういえば第一期大矢時代の開幕投手は二年とも、盛田である。

「ウチはどうしても、チーム力に劣るから、他と違ったことをしないと勝てない」

がこのところの大矢の口癖。違ったことをするのはよいが、間違ったことはしないでくださいよ。

大矢マジック炸裂（後書き）

大矢を出すとアクセス数がガクッと落ちるんだよなあ

紅白戦なのに、しっちゃかめっちゃか

気分屋で、シュート一辺倒の盛田は、性格的にも、投手のタイプ的にも、先発にはまるで向いていない。

九十六年、九十七年の先発起用で散々な目に会い、やがて放出の憂き目にあったために、本人も先発に不向きと公言し、近鉄移籍以降は中継ぎとして、再生しただけに、先発に対するトラウマは相当なものだ。

そんな盛田をあえて、先発に起用するのが、大矢マジックの一環なのか、それとも、盛田先発に唯一拘った監督として、当時の悔恨を今、ここで晴らそうとしているのか。

とにかく、久しぶりの先発登板の盛田は、どういった配球で入ればいいかわからず、先頭の中塚に甘いボールを投じてしまう。

先発だけに、無駄なペース配分を考えて、初球はとりあえずストライクとの甘い考えか、それを見透かされたように、中塚はミート。流し打ちの名人だけに、打球は反対方向のサードに飛ぶ強烈なライナーとなる。サードのローズも、これまた不慣れなポジション。強烈とはいえ、正面の当たり。普通の三塁手ならイージーの打球だが、グラブをスムーズに出せず、後ろに弾いてしまう。

結果、強襲の内野安打で中塚が塁に出る。

ローズの緩慢な守備に切れたわけでなく、ただ盛田はイラついている。よほどきれいなマウンドが合わないのか、すでに、投げやりの姿勢がでてくる。

もうどうにもなれと二番に入ったシピンの初球は、シュートのすっぽ抜けの危険球。

紅白戦で味方同士、危ないボールはないだろうよと、シピンは帽子を取っての謝罪を要求するが、強気と弱気が同居する盛田は、謝るそぶりも見せず、逆に、抗戦の構えで、詰め寄る強気振りが出る。

シピンはついには切れて、ライオン丸と異名を取った由縁である

自慢の長髪とヒゲをなびかせて、マウンドの盛田に向かって突進。

乱闘に発展するのを阻止とばかりに、一塁手の高木豊が間に入り、食い止めに走るが、逆に、誰でもいい状態のシピンに首根っこを捕まえられて、頭にパンチの雨あられ。

これを機に一斉に乱闘に発展。ベイスターズ対ホエールズだけでなく、ホエールズの間にもいざこざが。

チーム中で険悪の雰囲気が漂っていたホエールズ。いざこざに紛れて、ここぞとばかりに、憎いアイツをぼこぼこにしてやろうと、内輪もめ。

ターゲットに選ばれたのが、長崎。大洋で全盛期を過ごし、首位打者を獲得しながらも、自らを晩年のわずか三年しかいなかった阪神ＯＢと公言し、大洋時代を頑として語ろうとしない長崎のこと、チーム内に敵が多いことから、蹴りや、パンチを四方八方から食らうわ、食らう。

やり返そうとも、攻撃がどこからも来て、誰の足なのか、手なのかわからずに、やがてダウン。

乱闘の発端のシピンは、珍しく止め役になったブラッグズに両手を羽交い絞めにされてようやく鎮まる。

テンションの低いローズは乱闘の輪に加わらず、外から腕組みをしていると思いきや、大門がアレンに追いかけらた悪夢を思い出したのか、外野に意味もなく逃げるわ、もうしっちゃかめっちゃか。

審判が退場者を宣告してようやく事態は収拾するのだが、危険球の盛田と発端となったシピンの退場は当然として、止めに入った高木まで退場とは、本人も納得いくわけがない。

審判は、高木が止め役に見えずに、火付け役に見えたのだから仕方がない。

そもそも、高木が普段慣れ親しんだ二塁のポジションについていれば、一塁付近で起きた乱闘の止め役になってはいないだろう、一塁に大柄な駒田でも入っていれば、シピンといえども食い止められたかもしれない。

そもそも大矢が盛田先発のマジックを披露しなければ、ゲームは円滑に始まり、乱闘すら起きていないだろう。

それでも、大矢はそ知らぬ顔で、審判に抗議。高木の退場に不服があると思いきや、なんと盛田の危険球への解釈をめぐっての抗議。

ここで盛田が降板されては、盛田先発の正しさを十年越しで、証明してやろうとの大矢の魂胆が崩れてしまうと必死だ。

当然、高木の裁定を巡っての抗議と思い込んでいたベイスターズナインは、大矢の的外れの抗議に意気消沈。

乱闘で盛り上がった気持ちも、急速にしぼむ事になる。

ひとつの采配で、これだけチームをがたがたにするとは、恐るべき大矢マジック。

盛田に替えて急遽マウンドに送り込んだのが、野村弘樹。特別に速いボールも決め球もない野村だが、ＰＬ仕込のマウンド度胸で、荒れた試合を締めにかかる。

後続を切って取りピンチをゼロに抑えると、ベンチに戻ってきた野村に大矢が大げさな歓迎を示す。

そもそもベイスターズのエースといえば、日本一当時のエース野村か、ハマの番長三浦。普通の監督ならば、彼らのどちらかをマウンドに送るだろう。さすれば、試合は最初から引き絞まったはずとベンチはしらけムードだ。

ところが、大矢采配はさえをみせるのだ。得意であり、泣きどころである継投がズバズバとはまるのだ。

それもそのはず、山北、真田、横山、小山田、高宮といった弾があるけれど、弾切れに思える弾が飛び出すわけでなく、ベイスターズ十七年の歴史を彩る好投手が次々と飛び出てくるのだ。

野村の後を継いだ三浦が、二段モーションを限定復活させて、緩急自在の投球を見せれば、川村が、かまぼこ板を投げ続けて会得した、独特の腕の振りが投げられる百三十そこそこの速球で打者を牛耳れば、吉見が出てきて…。

え？　吉見？？

次々飛び出るすかしたマシンガンの弾

吉見？　なんで吉見？　それほどベイスターズの投手層は薄いわけ？

薄いのです。

ベイスターズとなって、二桁投手は、野村、島田、斎藤、三浦、川村、戸叶、小宮山、門倉、土肥、吉見、寺原の十一人しかいない。しかも、野村ら五人は九十八年の奇跡の日本一世代であり、門倉ら五人は、外様の投手だ。

つまり、吉見はポスト日本一世代の生え抜き唯一の二桁投手。暗黒時代の希望の星として、大会に参戦するが、いくら、〇二年の直球が走り、得意のスローカーブとチェンジアップシンカーの緩急がついた吉見とはいえ、軽い球質はそのままだ。

捉えられれば、どこまでも飛んでいく。先頭の新人本塁打記録を持つ桑田に特大の一発を左翼席（ベイスターズ球場に実際はそんな立派なものはない。左翼を超えれば、そこは市民向けのプール）に放り込まれれば、続くオバQこと田代にもドデカイ一発を左翼席（ベイスターズ球場には……）へと連続の被弾。

三連発の危険性を感じ取った大矢はすかさず吉見を降ろして、土肥にスイッチ。規定投球も、二桁も一回こっきりの土肥？　それほど投手の層が薄いの？

薄いんじゃないの。

土肥が呼ばれたのも、理由がある。巨人キラーの実績を買われたのだ。大矢は日本一の最大の関門を巨人とみなし、巨人対策として土肥を呼び寄せたのだ。

優勝予想で、もっとも高い倍率がつきそうな横浜が、筆頭候補の巨人対策とは、用意周到というべきか、気が早いというべきか…。

土肥も吉見と負けじ劣らずに軽い球質の持ち主。左打者用に起用されたのに、その左打者の高木由一（好一、嘉一）に軽々と右翼席

（ベイスターズ球場には、実際にそんな立派なものはなく、右翼を超えれば住宅街が広がる）まで運ばれる。

悪夢の三連発。ところが、大矢ベイスターズにも救いがある。三発食らっても、三点差なのだ。大味の大洋野球らしく、打っても、打っても、最少得点しか入らない。

大洋の投手層もベイスターズとかわらずそれほどの厚さがない。平松がサボタージュすれば、遠藤は古傷のアキレス腱を痛めて、秋山は、久しぶりに、競艇がやりたいと、とんねるずの木梨を連れ立って、ベンチ外。抑えには、斉藤明雄がでんと控えるが、出番には早すぎる。

蝶取り名人稲川の後、パラシュートボールの高橋重行がつなぎ、ゼロに抑えるが、完全試合男の島田源太郎が、ベイのマシンガン打線の餌食になる。

お得意の単打の応酬で、無死満塁のチャンスを形作り、打者は四番の村田。本来なら絶好の機会のはずだが、今日の村田は慣れぬ指名打者のリズムに戸惑い、どこか精彩がない。

島田のドロップに連投にあえなく三球三振。

大矢は村田の体調がどこか悪いのかいぶかしがるが、体調ではなく、起用法の悪さで腐っているのは明らかだ。

村田の三振は続く内川にも伝染してか、ミートの達人内川が珍しくあっさりと三振。

ローズが一、二塁間を破ろうとする強烈な打球を放つが、一塁走者の多村の足に当たり、記録はヒットながら、アウトになり、結局ヒット四本で得点はゼロ、いくら打っても、得点が入らない、これまたベイ伝統の効率が悪い攻撃が出たのだ。

なお打球を当てた多村はこれまたお得意の故障で戦線離脱。ついていないときは、ついていないことが重なるものだ。

横浜を捨てた男たちに、しがみつく男たち

近藤率いる大洋もいよいよ投手が底をつきはじめる。紅白戦だけに、無理に長いイニングは投げさせない。よって、細切れの継投になるのだが、そこで送り込まれたのが、松本豊。東北の玉三郎と呼ばれた二枚目の投手であるが、高校時代はマックス１４７キロの速球を誇る快速球投手として、もてはやされたが、プロ入り後は、スライダーに頼る中継ぎ投手としてチームに貢献をした。

自慢の球速も、プロでは、１４０そこそこと並のレベル。二線級投手には無類の強さを見せるベイ打線の恰好の餌食となる。

ブラッグス、谷繁に連打を食らうと、大矢は、九番進藤に、とっておきの代打佐伯を送る。たまらずベンチを飛び出した近藤は、松本を降ろし、左腕の岡本透を送り出す。

しめたと大矢はこれをみて、佐伯に、代打の代打、これまた切り札の波留。

左投手対右打者の攻撃有利の状況を作り出したと、大矢は一人悦に入るのだが、佐伯という切り札を打席に送ることもなく切ったことにより、後々、大変な目に合うことを、このときの大矢は知らない。

岡本は波留の内角を鋭く突くのだが、覆いかぶさって構える波留には絶好の当たり所。ユニフォームを掠めたていどの痛くない死球で、塁に出る。

これで、無死満塁。でたらめな継投にかけては、近藤は、大矢の先駆者である。岡本をさっさと降ろして、このイニング三人目の投手を送り込む。

なんと新浦だ。新浦といえば、巨人時代が全盛である。防御率のタイトルを取り、当代随一の快速左腕と鳴らした時代だ。それが、大洋の投手として参加？　たしかに、韓国で培った七色の変化球を

駆使して、二桁勝利をあげるなど、活躍をしたが、巨人時代の数字から見劣りすることは否めない。

それでも新浦が、あえて横浜からの出場を望んだのは、投手層の薄さから、出番があるからに他ならない。なにせ、大洋、横浜を通じて、二桁勝った左腕など、両手に足りるくらいしかいないからだ。

六十年近くの球団の歴史がある中、先に出た吉見、野村、土肥、岡本透に、この新浦に、ノーヒッター鬼頭に、大洋日本一の主力鈴木隆、二十八連敗の権藤に、草創期の片山しかいないのだ。

巨人の投手層では、出番がおぼつかなくとも、横浜ならば、十分にチャンスがあると、新浦が思ってもおかしくはない。

打席に入るのも、これまた巨人と因縁のある駒田だ。高木豊の退場により途中から、一番ファーストに入ってのだが、駒田は新浦と違い、初めから、横浜のキャンプ参加を志願したわけではない。

巨人の門を叩こうとしたのだが、王と川上が故障したら、もしかしたら出番があるかもしれないから、D班あたりで、もしもの出番に備えて練習に励んでくれと、屈辱的な扱いを受けた。

それでも駒田は、全盛期の巨人からなんとか出たいと、その扱いを受けるつもりであったが、D班より上とみなされる、B班、C班に、自分より格下と見ていた同じ一塁手の李や中畑がいることを知り、これはやってられないと、宮崎行きを直前に取りやめて、横浜のキャンプに合流したのだ。

駒田も必死だ。他の名球会会員が押しなべて、本大会出場を確実にしているなか、駒田だけあやふやな立場でいるからだ。

世界の本塁打王や打撃の神様がいない横浜とはいえ、無冠の帝王、駒田の守備の師匠である松原や、九十年の首位打者パチョレックや、右打者シーズン最高打率の内川など、一塁手には強敵が控えている。

横浜が生んだ唯一のゴールデングラブ一塁手として、守備には自信があるのだが、打撃成績は先の三人と比べると分が悪いことは確かだ。

たかが紅白戦といえど、一打席、一打席をおろそかにできない。

なんとかアピールをして、劣る実績の穴埋めをしたいところだ。
それには最適の場面であるが、ともかく満塁である。満塁といえば、駒田である。苦手の左腕とはいえ、古代から、満塁は駒田のものである。
投打どちらも、巨人から見放された同士の対決であるが、横浜は伝統的にこの手の選手が多く在籍する。古くは青田昇に、元祖三冠王中島や、塀際の魔術師平山、今では、工藤に、仁志である。
再生というべきか、都落ちというべきか、ともかくにも、巨人と因縁がある選手が多いだけに、本大会での対戦が楽しみである。
駒田が大きな体を小さくして構える。長打力よりも、確実性をとったフォームだ。王二世と期待されて、一本足打法を伝授されたのだが、すぐに取り組みをやめて、着実にヒットを重ねて、気がついてみれば、二千本というのも駒田らしいか。
駒田といえば、典型的なローボールヒッター。長いリーチで低目のボールをすくうのが上手いタイプだ。
新浦も、巨人時代のような速球がないだけに、丹念に、低目、低目と、スライダー、カーブ、スクリューなど変化球を投じるのだが、これが駒田の得意のゾーン。ボールから、ボールの大ボールでも、駒田にはストライゾーンだ。
打球は一閃ライトへと飛ぶ。守備要員で途中から入った江尻の頭上を越える走者一掃の二塁打。
これで、三対三の同点。ついにゲームは振り出しに戻る。大洋が、一発攻勢を決めればに、横浜が、マシンガン連打で返す。
大矢、近藤の采配もなんのその試合は白熱とした様相を呈す。
試合が押し迫ると、ここからは自慢のリリーフ陣の登板だ。大矢横浜が寺原、斎藤隆、クルーン、佐々木のクワトロ１５０キロを送りこめば、
近藤大洋は、斉藤明雄でノラリ、クラリと交わす。斉藤明雄は古き時代の抑えらしく、一イニング限定どころか、何イニング投げるのもいとわない。

九回を終えて試合は同点。紅白戦だけにこのまま引き分け…と思いきや、近藤は試合続行を要求。

この試合の勝敗で、監督の座がかかっていることも知らない大矢は、マジックの出しどころが物足りないと、決着がつくまで延長という近藤の練習試合で異例の要請を、安請け合いしてしまう。

ところが、投手の弾数が当に尽きている。特別ルールとして、ベンチ入りしていない投手の登板も認められえた。

大矢横浜は、十回を木塚、加藤のクワトロ2で凌いだが、続く十一回は困り果てたのか、門倉をマウンドに送る。

「横浜だけはやめておけよ」の捨て台詞を吐いて、ベイスターズあらＦＡ宣言した門倉だが、巨人は当然として、近鉄や中日からも、出場依頼の音沙汰もない。

背に腹は換えられぬと、横浜のキャンプに参加しているだが、やはり門倉は門倉だ。

立ち上がりから、持ち前の不安定な投球が顔をのぞかせる。

先頭の山下大輔を、いきなりストレートの四球で歩かせると、続く伊藤の打席の初球で、地面に叩きつけられるようなフォークを投げて、山下がすかさず二塁を陥れる。

門倉はみるからに、散々な調子であるが、もうブルペンにはこれといって替える投手もおらず、このまま託すしかない。

伊藤がきっちりと送り、ランナー三塁。紅白戦といえども、本気モードだ。

打者は途中から九番に入った高橋雅裕。一死三塁で、同点の延長戦。

打者は非力の高橋で、監督は近藤昭仁。これは誰がどうみても、スクイズしかありえない場面である。

近藤といえば、スクイズが代名詞。わずかなるスクイズ成功歓喜の影に、無数なる失敗の残痕。

誰もが、スクイズと思うなか、大矢は…。

スクイズの攻防、山下の頭皮

打者の高橋も、三塁走者の山下も、横浜ベイバッテリーも、ネット裏に、とってつけたように作れてたわずかな観客席の、これまたわずかな、しかも平日の昼間に紅白戦を見にこれる余裕があるファンも、記者席にいる、数人の記者たちも、誰しもが、ここはスクイズだろうと予想を立てる中、近藤だけが、ここでスクイズを出して、驚かせてやると、妙に得意げだ。

大矢は、さらにたちが悪い。打ってくるぞ、と守備陣に注意を促し、捕手の相川には、マサ（高橋）はなんてことのない打者だから、どんどんストライクを取りにいけと、支持を飛ばす。

困惑したのは、相川だ。ストライクを取りにいったら、スクイズの餌食になると、反論したかったが、紅白戦でそこまでする気力もなく、かぶりを振りながら大矢の支持にしたがったのだ。

どうせ、自分は、もうヤクルトの人間だ。横浜がどうなろうと、知ったことかと思ったわけでもなかろうが…。

大矢に忠告したのが、守備走塁コーチとしてベンチ入りしている青山だ。

「監督、向こうの監督、近藤さんですよ」

「そうだよ、近藤さんだよ。それがどうしたの？」

大矢、まだ気がつかない。

「あの…近藤さんといえば、スクイズが代名詞ですよ…」

「ああ…そうだった……スクイズだね、うん、この場面はスクイズの可能性が捨てきれないね」

捨てきれないどころか、誰がどう見てもスクイズの場面です。

「おい、相川、スクイズもあるぞ」

ここで、ようやく、両手をメガホンにして、スクイズ警戒の指示が飛び出る。スクイズ警戒か、ヒッティングに注意か、指示の不徹底で中途半端なことは否めず、バッテリーを余計に混乱させること

になった。

相川の構えも、ウエストボールか、勝負をするのか、いまひとつ決めかねているのか、中腰の姿勢だ。

近藤が三塁コーチの引地に、素早くブロックサインを送る。引地は山下になにやら耳打ちをして、受け取ったサインを、打者の高橋に送り返す。

二月とはいえ、熱戦だけに、自然と汗が出る。山下は思わず、ヘルメットを脱ぎ、汗をぬぐう。もちろん、禿頭があらわになり、観客の笑いを誘ったことは記することもないことか。

相川は懸命にサインを読み取ろうとする。投げやりの態度もみせたが、やはり勝負師として、負けていい試合はないのだ。

紅白戦だけに、サインのキーを見破るのは、そう難しくない。相川は、初球のスクイズはないと判断した。

しょせん横浜の野球は大味だ。緻密な野球をするチームならば、ばればれのサインなど、紅白戦でも使わないはずだと、相川はこれまた見捨てた球団の批判だ。

ならばとカウントを取るために、相川は外のまっすぐを要求した。今日の門倉の制球はめちゃくちゃであるが、まるで制御のつかない変化球に比べて、ストレートはまだストライクが入る。

コースを狙わせずに、腕を振らせれば、それなりのボールが来ると相川は予想付けた。

相川の要求どおり、、門倉は速球をストライクゾーンに投げ込むのだが、思わぬことに、三塁走者の山下がスタートを切り、高橋がスクイズの構えをしたのだ。

ゾーンに来た置きにきた速球だけに、スクイズにはおあつらえむきだ。一塁方向に転がすと、打球の勢いは中間点で死ぬ、お手本のようなスクイズとなり、三塁走者の山下が楽々生還して、見事成功。

虚をつかれたのは、他ならぬ相川だ。あのサインは絶対に、初球は様子見のサインのはずと呆然と立ち尽くす。

たしかに、引地経由で高橋に伝わったサインは、相川が見破った

とおり、初球は様子見のサイン。
ところが、これは、ダミーで、本当のサインは、走者である山下が出していたのだ。山下が、ヘルメットを脱いで、汗をぬぐったのがそのサイン。
これはいわゆるフラッシュサインで、山下の頭が光れば、それがスクイズのサインであった。
まんまと騙された相川は、横浜を下にみた自分を少しだけ後悔した。
スクイズ成功で、これで近藤大洋が一点のリード。
なんの工夫もなく、みえみえのスクイズを決められた横浜バッテリーと大矢には、スタンドから失笑が漏れる。
門倉は二死無走者から、三連続四死球を出し、満塁にして降板。
最後に残った五十嵐が、懐かしの前傾姿勢をして、右手をちょこと突き出す珍妙なセットポジションから、スライダーの連投で、絶体絶命の大ピンチを切り抜けた。
試合は十一回裏に移る。さすがにロング抑えの斉藤明雄とはいえ、三イニングが限界と、送り込まれたのが、大洋初代エースの高野。
ところが、高野は、六十年前の投手だけに、マウンドの違い、ゾーンの違いに苦労して、思うような投球ができない。
なんとか、ツーアウトを取るのだが、走者を一塁、三塁に置く大ピンチ。ここで打者は、代走から試合に入った万永。
バント専門、代走守備専門の選手であり、ここは代打と誰しもが思うのだが、はたして総力戦、ベンチに人はいるのか？
大矢はここが最後の大勝負と、切り札を切る。
「佐伯！　出番だぞ。男を見せてこい」
「監督、ボク、もう試合に出てますけど…」
「そんなバカなこと…？　あ、そうだっけ」
佐伯は、左投手をおびき出すという役目だけで、すでに今日の仕事を終えている。切り札を打席に立たずして、切ったという事実を、大矢はすっかりと忘れていたようで、他に代打とベンチを見渡すが、

残った野手は、第三の捕手、秋元だけ。打率二割そこそこの秋元なら、万永の方がまだ通算打率が高いと、

「よし、万永、お前に任せたぞ」

そのまま打席に立たせることにした。九十八年日本一のとき正三塁手の進藤の故障をよく埋めたとは、万永には、この場面、荷が重いのか、あっさりと追い込まれる。打てる様子はどこにもなく、大矢マジックを詠うならば、ここで、表のお返しとばかりにセーフティースクイズに出るとか、一塁走者をおとりに使ってのダブルスチールで、三塁走者の生還を狙うとか、手立てはあるのだか、大矢は動かず、万永にかける。

社会人時代、小さな体ながら、金属バットを振り回し、怪物の異名を取った万永、ここは大矢の期待に応えて…とくれば、盛り上がるのだが、現実は非常。

高野の渾身をこめた直球に振り遅れて、あっさりと三振で試合終了。

ところで、みなさんはお覚えであろうか？　石井琢朗がまさかのスタメン漏れで、ベンチから試合を見守ったいたことを。石井を使わずして、試合は終わったのだ。石井は、突発性の腰痛とコメントを残して、ゲームの中盤にベンチからも消えていた。

はたして、大矢の狙いは？　それとも、これもすっかりと忘れていたのか？

とにもかくにも、試合は熱のこもった接戦のすえに、近藤大洋の勝利に終わった。この一戦に、本大会の監督の座をかけていた近藤は、記者をわざわざ呼びつけての、勝利監督インタビューだ。

「これで、ボクが監督だよ…むふふ…。大矢くん？　彼には、バッテリーコーチでもやってもらおうかな…」

勝手に規制事実を作り、勝手に監督の座を得たことを宣言した近藤の、ピントの外れた策士ぶりは、当然、大矢の耳にも届く。

「え？　近藤さんが監督？　ボクがバッテリーコーチ？　なにそれ？」

意に介さないというべきか、よくわかってないというべきか…。

大矢は監督の座を譲ったつもりもなく、近藤は監督の座に座ったつもり。大乱闘で遺恨を残した上に、これまたチームに、大変な火種ができたまま紅白戦は終わる。

近鉄対レッドソックス

近鉄は無謀にも、大会直前に、アメリカ遠征に出たのだ。世界一フィリーズの監督のマニエルが近鉄から出場することもあり、メジャーのチームとオープン戦として、手合わせすることになったのだ。

近鉄？　ＷＨＡＴ？　とつれない反応も、野茂がいたチーム、それも、全盛期を過ごし、その全盛の力が復元されていると聞くと、逆に、向こうのほうから対戦のオファーがくる有様だ。

結局、その中から、ボストンレッドソックスと一戦を交える手はずとなった。

伝統のフェンウェイパークにて、近鉄対レッドソックスの対戦がここに始まる。

近鉄の先発はもちろん野茂。迎え撃つレッドソックスは、エキシビジョンゲームにかかわらず、エースのベケット。レスターやウェイクフィールドら、ローテーション投手もベンチ入りの本気モードだ。

ブルペンには、巨人からも、日本ハムからも、いまだ出場のオファーもなく、悶々としている岡島や、メジャー屈指の抑えのパペルボンらが控えている。

なお、近鉄の指揮を執るのは、直前の渡米で体調を崩すことを憂慮し、帯同を断念した西本に替わり、なんと鈴木啓示が勤めることに。

「スズにも、指導者として、ええカッコしてもらいたいもんや」

西本の親心のもと、まさかの監督復帰だ。

鈴木と野茂といえば、確執があまりにも、有名であるが、そんな監督鈴木が、あえて野茂を送り込んだのも、皮肉といえば、皮肉か。

先攻は近鉄。レッドソックスのマウンドにベケットが仁王立ち。

競合球団のエースと呼ばれるだけあって、圧倒的な存在感がある。

それでも、一向にひるむことがないのが、近鉄猛牛軍団ならでは

か。

一番の大石が打席に立つ。一七〇にも満たない大石と巨漢ベケットでは、まるで大人と子供だ。

ベケットはなめたわけではないが、初球、甘いボールから入る。大石はこれを上から思い切り叩くと、打球はふわふわと左翼に飛んでいく。

小さいながら、力のある大石といえど、ベケットのボールの重さに力負けをしたのか、打球は思うように飛んでいかない。

それでも、ここフェンウェパークは、世界きっての変形球場。左翼方面は、藤井寺や日生球場並みに狭いのだ。

平凡な外野フライと思われた打球は、ふらふらと上がった打球は風にも乗り、グリーンモンスターの上部に当たる。

大石は、これを見て、悠々と二塁……、いや、、左翼手のベイがクッションボールに戸惑っているスキをついて、一挙三塁へ。

ベイが慌てて、返球をするが、すでに大石は快速を飛ばして、三塁に達している。いきなりの三塁打に、近鉄ベンチはやんやの大騒ぎ。

気性の荒いベケットはベイの怠慢な守備に明らかにイラつき始めている。

「チッ、マニーのゲス野郎なら、三塁にはいかせなかったぜ」

マニーとは、マニー・ラミレスのこと。ベイの前の左翼手で、グリーンモンスターの番人と呼ばれるほど、そびえ立つ高い壁を熟知しており、卓越した処理能力を見せていた。

とはいえ、守備能力自体は、平均から大きく劣り、その上、怠慢守備も多く、一部のラテン系選手と日本人選手以外から総すかんされていた。

当然、白人のベケットとの折り合いも悪く、そんなベケットから、マニーを懐かしむ言葉がでてくるくらい、大石の三塁打は屈辱的であったのだ。

ベケットを落ち着かせようと、捕手のバリテックがマウンドに走

る。

「ヘイ、ジョシュ（ベケットのファウストネーム）…。いいか、相手は、ニューヨークのようなタフな連中じゃないぜ、日本のやつらだ。今のまぐれだ、気にするな。お前なら、ゼロで切り抜けられるぞ」

口では、日本をなめた言動を取るバリテックであるが、リードは実に慎重だ。試合前に岡島から打者の特徴を丹念に取材するくらい、熱心な研究を重ねて、試合に挑んでいる。

二番は新井。バリテックは、岡島に取材する際、イメージがわきやすいように、メジャーに例えたら誰だに近いかと、聞いたのだが、新井を例える際に出した名前が、イチローである。

イチロー？　あんな打者がそうそうそこらにいてたまるかいと、バリテックは岡島の発言をはなから信じられなかったのだが、現実、対戦している新井は、確かにイチローを彷彿とさせる。

どんなボールにも、的確なミートを心がる打撃はまさにイチロー。いやそれ以上に、しぶといのだ。

当てれるもんなら、当ててみなと積極的にストライクを取りにくるベケットの投球に、新井は執拗なカットバッティングでファウルを重ねる。

バリテックはイチローならば、手を出してきそうな外に逃げるチェンジアップを投じさせるのだが、これにもピクリとも動かない。

「オカジマのヤツ、アライのどこがイチロー？　これじゃあまるで、ボッグス（殿堂入りのイチローターイプの好打者であるが、選球眼はイチローの上を行く）じゃないか」

バリテックが思わずつぶやき呆れるほど、新井の想像以上の打撃技術。

ベケットもじれたのか、新井を歩かせてしまう。

近鉄の三番はローズ。ここからベケットがエンジン全開モードだ。同じアメリカ人、それも都落ちの選手じゃないかとばかりに、ローズを攻め立てる。

変化球一球もなしのオール直球勝負。一五五キロの速球が高めにのびる。ローズはかすることもできずに、三球ともＶＴＲを繰り返したような空振りを見せて、あっさりと三振。

気を取り戻したベケットは、続く中村紀、ブライアントを連続三振。それも、全て直球の三球三振。まさに格の違いを見せ付けて、ピンチを切り抜ける。

警戒モードに入っていたバリテックも

「オカジマのやつ、ローズ＝グリフィーｊｒ、ナカムラ＝マニー、ブライアント＝ハワードに例えていたが……。ヤツの脳にシステムエラーでも出たのかな…」

日本のレベルはこんなものかと見くびった矢先…マウンド上で衝撃の風が吹く。

野茂の登場だ。メジャーで活躍したころの野茂よりも、近鉄の野茂は、より荒々しい。制球力に欠けるが、そのぶんより速球の威力がある。

フォークは一級だが、速球のレベルは並と見くびっていたレッドソックスの連中を手玉に取る。ベケットにも劣ることない一五〇の速球が高めにぐんぐんのびれば、フォークもより効果的だ。

先頭のエルズベリーを三振に取れば、続く〇八年アリーグＭＶＰのペドロイアにも打撃をさせない。

「野茂もようやく走りこみの重大性がわかったかな」

鈴木が謎の自負を見せれば、ビックパピーこと、メジャーでもっとも勝負強い男といわれるオーティズのバットも寄せつけない。

直球で追い込み、フォークで勝負と思わせて、最後も直球。野茂との相性を考えて抜擢された女房役の光山のリードも光る。

「捕手が光山じゃないと投げたくないだの、野茂のヤツ、相変わらず生意気やな。エースなら、捕手が誰でも投げんかい」

鈴木は野茂の好投を喜ぶどころか、わがままぶりをなじるが、そういう鈴木こそ、現役時代は有田としか組まなかったのは有名である。

70話　投打二刀流関根潤三

古い時代の選手の多くが国内での最終調整を望んだために、アメリカ行きは八十年代から後の選手に限られるなか、一人異色の風を吹かせるのが、関根である。

殿堂入りの選手だけに、近鉄から出場のオファーも当然のようにあったのだが、いまさら自分の出番ではないと、出場を辞退していた。

ところが、アメリカ遠征、それも現役のメジャーリーガーと合いまみれると聞き、法政大学時代、アメリカ選抜相手に好投した血が騒いだのか、遠征限定で出場を決めたのだ。

関根さんといえば、ヤクルトの監督時代や、プロ野球ニュースの解説者での好々爺ぶりが、つとに印象深いのだが、カプセルに入って若返った関根さんは、見違えるように生き生きとしている。

投手で二桁勝利をあげて、打者では三割を達成した二リーグ分裂後、最初で最後の選手だけに、実力も折り紙つきだ。

六番右翼手で、先発出場をしている関根が初の打席に立つ。メジャー相手とはいえ、当の関根さんは気負うところもない。

「なんだい、右翼方向がバカに広いと思ったら、左翼の方はずいぶんと狭いねえ。まったくなんて、いい加減な球場なんだい……てなこと思ったら、左翼の方のフェンス、間が抜けたほど高いねえ」

そういう球場です。

「おやおや、投手もこりゃまたデカイ。まるでミケンズを思い出したよ」

ミケンズは関根さんの同僚だった外人投手。日本の自責点のルールの欠陥を指摘したことで有名。

こんなのん気さで、ベケットのような剛速球投手が打てるのか…、不安ばかりが募る矢先、関根さんのバッドが火を噴く。

レッドソックスバッテリーもずいぶんとやせこけた打者が打席に

入ったと見くびったわけでもないが、攻めの甘さに加えて、球の甘さは否定できない。

関根さんの打球は狙い済ましたように、狭い左翼をつく。グリーンモンスターの高い壁に打球が当たる悠々の二塁打。

「五十年ぶりに走ったら疲れたよ」

口ではそういうが、息ひとつ乱してはいない。なにせ、心は今でも、体は若いのだから。二塁ベースカバーに入ったペドロイアにひとしきりの自慢タイム。

「お前さん。オレはねえ、レフトのほうが狭いと思ったから、そっち狙ったんだよ。うふふ…どうだい狙いだろうでしょ…でもねえ、右翼のほうようくみたら、塀が低いじゃないの。こりゃ右翼狙ったら本塁打だったよ。ちくしょう、走らなくてすんだのに。うふふ」

ペドロイアは、当然日本語などわかるわけがない。とりあえず、感じの良さそうな日本人と、日本式に帽子を取って挨拶をしてみる。すると二十代中頃の若さに似合わず、ずいぶんとすっきりした頭髪があらわになると、関根さん、

「おやおや、お若いのに、こりゃずいぶんと寂しいね…。ほれ、オレはふさふさだよ…」

帽子をとって、打撃自慢の次はボリューム自慢。ペドロイア、やはり日本語わからず、挨拶を返してくれたフレンドリーな日本人としか思わず。

礼儀の物まねで、帽子を取ってお辞儀をするのだが、二十代中盤の若者と思えぬほど、うら寂しい頭髪があらわになると、関根さん、

「お若いの、こりゃあ、ずいぶんきてるねえ、お前さん…。ほら、どうだい、オレに髪は。ふさふさでしょ」

打撃の自慢のお次は、ボリュームの自慢だ。ところが、ペドロイア、日本語がわかるわけもなく、律儀に帽子をとってくれた日本人としか思えず、まさか、頭皮をけなされているとは思いもよらず。

続く、七番は石井。一回に絶対のチャンスを潰しているだけに、

なんとしてでも一点でも、もぎ取りたい場面だ。ところが、打者は強打の石井。バントのサインは出しにくいと誰もが思う中、鈴木はバントのサインを出す。

メジャーと力勝負をしたいと張り切ってやってきた男・石井は、バントのサインに不満があり。

指示にそむくこともなく、バントはするのだが、乗り気でないだけあって、連続の失敗。たやすく追い込まれ、スリーバントのサインはまさか…のそのまさかをやってしまうのが、草魂・鈴木。

「なんとしてでも、一点や」

コンパクトに強振ができ、フライ系の打球をあげる石井に適した変形球場。バントの不慣れな石井。すでに得点圏に走者を置いている。石井の後は下位打線の捕手光山と遊撃手の水口。石井を打たせたほうが得点確率が高いのは、状況を的確に判断すれば、おのずと答えは出てくるのだが、そこで、あえてバントのサインを出すのが、迷監督、鈴木。

ところが、サインを無視して、石井は強打。大きく足を上げて、バッドを独特の大上段から振り下ろる独特の打撃から放たれた打球は、石井お得意の右中間へと飛んでいく。

左翼方向は、藤井寺球場クラスだが、右翼の方は、まさにメジャーサイズのフェンウェイパーク。打球がぐんぐん伸びても、まだフェンスに到達しない。

しかも中堅手は、メジャーきっての俊足、ネイティブアメリカンの血を引く、数少ない大リーガー、エルズベリー。

快脚を飛ばして、打球を追いかけると、グラブの先で、ボールを捕まえる。

大ファインプレーに石井は天を仰ぎ、観客は総立ち、ところが、球場内の誰の注目も浴びない中、二塁走者の関根さんがひっそりとタッチアップからスタートを切る。

悠々と三塁に到達…だけに満足をせずに、三塁ベースも蹴って、一挙本塁を陥れる。

イメージに似合わず果敢な走塁を見せる関根さん。

強肩とはいえないエルズベリーから、山なりの返球がカットマンのペドロイアに返ると、ようやく関根の動きに気がついたペドロイア、二塁手にしては、強肩の選手だけに、矢のような送球を本塁へと送る。

関根を殺してやろうと、捕手のバリテックがホームで待ち構える。

関根さんは、1、捕手のブロックを掻い潜り、手か足をベースの一角に潜り込ませる。

2、バリテックとの体重差をいとわずに、体当たりをかまして、落球を誘う。

タイミングはアウト、セーフになるためには、このふたつの選択肢があるのだが、関根さんが選んだのは…、のどちらでもなく、

「あらら、こりゃアウトだわ…足が動くから、ついよくばっちゃった」

あっさりと諦めて、三塁に戻ることもなく、その場に立ち尽くす。

バリテックもなにがなんだか理解できず、一瞬、合わせるように止まってしまったが、我に返ると、関根にタッチ。

絶好のチャンスがまたも潰れてしまったのだが、

「いけると思ったんだけどねえ。さすが、アメリカ人さんは肩が強いねえ」

関根さんはあいからずのんき、近鉄ＯＢ会会長の重鎮の関根さんには、だれも注意もお小言もいえない。

鈴木も、関根の走塁に注意をできなくても、サイン破りの石井には一言必要なのに、連続試合四番打者記録のために、故障の石井を無理やり試合に出し続けさせて、選手生命を事実上断ったことに、負い目があるのか、鈴木は石井にも何もいえず。

チームがひとつにまとまらず、指揮官もこのとおりでは、ベンチのムードも最悪だ。

ところが、最悪なら、最悪なりに、結果を出すのが、近鉄野球。

この回無得点の雰囲気が漂う中、　伏兵の一発が出る。
光山が強振した打球は、ふらふらと、左翼に上がり、そのまま高いグリーンモンスターの上を越えてのまさかまさかの一発。
野茂との相性を考えて起用。打撃には何の期待もかけられてなかったが、ヘラクレスと呼ばれるほど、異常に発達した上体の筋肉は、観賞用ではないことを証明した。
巨人との日本シリーズ以来ともいえる値千金の一発にベンチのムードも一変。
普段は表情も崩さない野茂も女房の一発に破顔一笑。
ところが、鈴木だけは仏頂面。
「ワシの指示どおり、石井が送っておれば、今頃、にいぜろやないかい」
一人、歓喜の輪の外だ。

与四球神対四球神

二回一失点で降板したベケットのコメント。

「三本も長打を打たれた？　ふん、手を抜いてやったのさ。ただノモと組んだデカイ捕手だけは、違ったね。ヤツならレッドソックスと契約させてもいいぜ。まあキャンプ招待だけどね（招待選手とは、キャンプでふるいにかけられる立場。生存確率は十％にも満たない）。ジェイソン（バリテック）よりは打つだろうよ（バリテックの打率二割そこそこ）」

平静を装っていたのだが、悔しさを滲ませていたとのこと。

二回裏も野茂のトルネードが唸りを上げる。一四〇後半のストレートがびしびし決まる。ただ打者も四番のユーキリス。

ユダヤ系アメリカ人であり、日本でもベストセラーになったマネーボールで、フォアボールのギリシャ神と評されたのは、あまりにも有名だ。

ギリシャ神との表現には不似合いなブルドックのような風貌で、飢えたごとく、ボールに食らいつく。四番打者でありながら、コンパクトな打撃を心がけて、執拗に粘る。

四球を奪い取る神様と、日本野球の四球記録の数々を持つ野茂。矛と盾の対決ではないが、結果はやはり、四球だ。

２－０のカウントから、フォークも速球もことごとくカットして、野茂の乱れを待つ。調子がいいとはいえ、近鉄時代に復元された野茂。メジャー時代より、荒々しい。

続くベイ、ドリューも連続の四球で無死満塁。出塁率を重視して集められた連中だけに、野茂から、フォアボールを奪い取ることは、そう難しくない注文だ。

七番は、これまた鋭い選球眼とフェンウェイ向きの打撃力を持つローウェル。ただ、右で鈍足なだけに併殺も奪いやすい。

「おい、野茂、打たせていこうや。フォークをスプリット気味に低

目に加減してもいいから投げい。この打者のスイングだと、ひっかけてゴロや。ホームゲッツーの絶好のカモや」

光山がマウンドに走り、野茂に助言をするのだが、野茂は頑固一徹。

「いやです。力で抑えにいきます。無死満塁から三連続三振やりますから。見といて下さいよ」

近鉄時代の体が切れている状態に戻り、野茂は嬉しいのか、大ピンチにも強気一辺倒で、美学の優先だ。

「お前に、力を抜けいうたオレが馬鹿やったわ。勝手にせいや」

「はい、勝手にさせてもらいます」

見放した光山だが、久々に見る野茂の頑固さが何か嬉しい。

有言実行が野茂の野球人生。宣言どおり、トルネードの回転は荒々しく、そしてボールも暴れ馬のように、散らばる。それが逆に的を絞らせない効果につながり、ローウェル、バリテックを連続の三振だ。

深いカウント勝負の打者が並ぶレッドソックス打線。２－３のカウントを作り、さあ押し出しいらっしゃいと待ち構えれば、突然、ズバッとストライクゾーンに決まる野茂のようなタイプはやりやすそうで、そうでもないのだ。

ところが九番に入ったルーゴだけは特性が異なる。彼だけは、積極的に打ちにいくタイプだ。大型契約で、入団しながらも、守備に打撃にまるでいいところのないルーゴ。松坂が投げれば、まずい守備で足を引っ張るルーゴ。追い出そうとも、引き取り先のないルーゴ。マイナー上がりの若手に、脅かされるどころか、追い越されたルーゴ。

そんなルーゴだけにエキシビジョンとはいえ、打ってアピールしたいところだ。

「ルーゴ…たしか、ドミニカの選手やったなあ…。見るからに、フォーク系統に弱そうやな…。おし、フォークの連投で、かっこよく三連続三振で、ピンチ脱出といこうや…」

光山の目論見も、必死のルーゴには通用しない。初球空振りしたフォークを、二球目に叩くと、打球は右翼方向に飛んでいく。
「しまった…。振りにいかず、合わせにいきおった」
光山の後悔も遅く、打球はぐんぐんと伸びていく。抜ければ走者一掃だ。右翼を守るのは、関根さん。打力は現代でも通じるところを見せたが、守備は？マークだ。
一昔前、右翼といえば、守備が一番まずいものの定番。投手転向後、とりあえずついた関根だけに、そ多くの期待もできない。
快足を飛ばして、ランニングキャッチとのイメージも沸きにくい。深い右中間のフェンス手前まで打球は飛んでいく。
逆転を覚悟した瞬間、関根さんはそこにいた。
いつのまに、そこにいたのか。フェンス手前に待ち構えるようにしていた関根さんは、余裕のキャッチ。
「すごいでしょ？　このへん飛んでくるんじゃねえのってところにあらかじめいたのよ。野茂の投球や、リード、打者の打球傾向を読んだかって？　ううん、勘よ、観。八十年も生きていれば、これくらい働くのよ」
それでも野茂は不満そう。ゼロで切り抜けた結果よりも、三振で締めくくれなかった過程が気に食わないのだ。
「どうだい、野茂、いい位置取りだったでしょ？」
ベンチに戻った関根さんは、意気揚々と野茂にご自慢。
「あ……関根って、誰かと思ってたら、あの関根さんやったんですか…へえ、今気づけました……」
「いんだよ、オレだって、野球選手だったことを、三十年ぶりに思い出したんだから、お互いさまよ」
「……ふ～ん、そうですか……はあ……」
予想通り、いまひとつ会話がかみ合わない二人。
「野茂、失礼だぞ。関根さんはなあ、ＯＢ会会長もやっておられるんやぞ」
いきなり金村が間に入り、会話の橋渡しだ。

「ってな具合に、唐突に割り込まんと、ワシ出番なさそうやねん。年寄り連中が日本残るゆうから、やっとベンチに入れるおもうたら、監督がクサのおっさんやないかい。ワシ、あのおっさんに、近鉄追い出されたいうのに、アメリカまで、何しにきたちゅうねん…。あー、ノリの守備要員でもええから、試合に出たいのう」

あなたはおそらく試合が終わるまで、このままベンチです。

草魂、苦し紛れの投手リレー

ベケットについで、マウンドへと上がるのが、左腕エースのレスター。日本人には、とてもマネできそうもない一四〇後半の剛球を、左腕からビシビシと決める投手だ。

手を抜きがちのベケットと打って変わり、難病を克服したことからもわかるように、どんな状況にも真摯に立ち向かう選手で、格下とみる日本球団にも、容赦しない。

大石、新井を連続の三振に切ってとると、三番ローズにもかすりもさせない。

あっさり、三振に抑え込まれて、意気消沈なローズ。

相手のレッドソックスといえば、近鉄に来る前年に所属していた球団。古巣であり、自分を日本に売り払った球団でもある。

それだけに、なんとか見返してやろうとの気持ちが強く、それがかえって、力みにつながったのか、今日のローズのバットから、快音が聞かれそうな雰囲気はどこにもない。

このままでは見返すどころか、日本の野球で積み上げた実績さえも、否定されそうだ。

お前らも、神と崇めるサダハル・オーの記録に並んだ打者というのに、なんだい、この赤子扱いは…。

ローズのイライラは募るばかりだ。

「ヘイ、タフィー、リラックス、リラックス」

守備につく際、僚友のノリに、励まされるが、ローズは上の空。

励ましたノリでさえ、メジャーには強いコンプレックスがある。

打率一割ちょっと。自慢の一発はゼロ。大半をマイナーで過ごし、失意の帰国。

五番を任されたブライアントにしても、ドジャースの将来を担う大砲と期待されながらも、いつしか見切られて、日本に流れてきたのだ。

メジャーに複雑な感情を持つ三人が中心に座る打線に、大きな期待をかけることは酷であろうか。

となれば、伏兵の思わぬ一発であげた虎の子の一点を、なんとしてでも守らないとならない。

野茂は飛ばしに、飛ばす。相変わらず、ボールが多く、レッドソックスの耐球作戦もあいまみれて、球数は、あっというまにかさんでいく。

先発完投の確固たる哲学を持つ鈴木は、野茂が十六個の四球を与えながら、完投させた実績もあるだけに、野茂をどこまで引っ張るかは注目される。

「おい、野茂、いけるとまでいってくれんか」

近鉄時代の野茂ならば、二百球でも、三百球でも完投するまで投げていたところだが、メジャー流にかぶれた今の野茂は、

「百球で降ろさせてください」

あっさりと鈴木の頼みを断る。

「ふん、勝手にせい」

鈴木は、いまさら野茂と争うのもこりごりなのか、あっさりと引いてしまう。

百球という数字は、球数の少ない制球力のある投手なら、七回まで十分いけるが、野茂のような荒れ狂う投手なら五回までに達してしまう。今日の野茂は、さらに荒れていて、四回にも達してしまうほどの勢いだ。

ならば、継投勝負。監督の采配の見せ所となるのだが、とうの鈴木は投手陣をコーチの久保任せ。

「おい、久保、今日のベンチ入ってる投手誰や」

「はい、大塚、吉井と、メジャー公式球使用を考慮して、こちらに馴染みのあるやつらを入れています」

ベンチ入りの投手も熟知していないありさまだ。

「しかし、最近の投手も軟弱になったもんやな。少しのボールの違いに大騒ぎや。プロの投手なら、どんな環境にでも、即座に適応さ

せないとホントはあかんのや。ワシをみてみい、飛ぶボールと飛ばないボールを試合毎に使い分けても、文句ひとついわず投げたもんや」

鈴木の説教と自慢話がベンチに響き渡るが、誰も耳を貸さない。

野茂の投球数は、四回で早くもリミットの百球に到達。自動的に交代となった。四球を出しながら、結局、無安打無失点の内容。

「点取られるのもあかんが、四球はもっとあかんのや。ほれみてみい、野茂のだらだらとした投球リズムで、援護は一点だけやないかい」

鈴木にとっては、とても合格点を与えられない内容。それでも、日本の単独チームが、メジャーに殴りこみをかけた、それなりに注目された一戦。

ここで、野茂とがっちりと握手をすれば、地に落ちたワシのイメージも少しは回復するんじゃないかと、計算した鈴木は、野茂を笑顔で迎えて、イメージアップを狙った。

「野茂くん、よう投げたな、ご苦労さん」

ところが、野茂は握手を求めた鈴木を完全に無視して、通りすぎてしまう。

今でも、鈴木が嫌いなのか、ただ気づかなかったのか、それとも、満足した投球でもないので、握手はできない美学なのか、真意は定がではないが、とにかく、鈴木は名誉回復の絶好の機会を逃してしまったのだ。

ばつの悪い鈴木は、差し出した左手の行き場に困り、

「なんやしらんが、急に背中がむずがゆくなったわ。アメリカの気候のせいやろうか」

かゆくもない背中をかいて、ごまかしたのだが、そもそも誰も鈴木を注視してないのだ。すべては無駄である。

野茂の次を託されたのは、大塚だ。ＷＢＣ初代守護神であり、近鉄時代は、セの佐々木と並び称されたパのセーブ王。そして、、なによりも、アメリカのマウンド、ボールをよく知っている。

よっしゃーの雄たけびとともに、解き放たれたストレートは優に一五〇を超えて、伝家の宝刀縦のスライダーは打者の直前で消えるように、きれまくる。

一イニング限定なら、野茂より、よほど上の投球ができるのだ。

大塚とくれば吉井である。野茂ー大塚ー吉井。近鉄が産み出した三人のメジャーリーガーの豪華リレーだ。

きれるシュートと野茂直伝のフォークを持つ吉井とはいえ、野茂ほどの剛球も、大塚ほどの決め球もない。

劣る能力を補うのが、持ち前の度胸である。

仰木監督にたてついて、鈴木に噛み付き、長嶋巨人の魅力的すぎるオファーも蹴り飛ばした男だ。

メジャーの大男にひるむところなく、内角を突きまくる。

ヨシイはそこそこの投手だけど、それほどの投手ではないとインプットされていたレッドソックス打線も、吉井の思わぬ速球の威力と、シュートのきれに、驚きたじろく。

マウンドに仁王立ちしているのは、メジャー時代の吉井ではない、近鉄時代に復元された吉井である。

多彩な球種も、老練な技術もあるわけではないが、荒々しい速球のキレは、若いだけにメジャー時代よりもあるのだ。

吉井がマウンドを去ると、試合は六回を終了していた。

ボストンのマウンドは、レスターを継いだ中継ぎ役のロペス、デルカーメンが完璧に仕事をこなし、七回からは、ついにあのナックルボーラーの登場である。

ウェイクフィールドと相対した関根さんは、独特のナックルボールに半ば呆れ顔だ。

「ベンチの横だとさ、なんだよあのヘナヘナボール、打てねえなんて、情けねえって見てたんだけど、打席に入ると違うね。もうグラグラ手元で揺れてさ。もう、びっくりしちゃったのよ。オレも年だから、とうとう乱視にでもなっちゃったかなあと思ったけど、ようく考えると、若返ってたんだよね。ふふ」

初見で魔球が打てるわけもなく近鉄打線は沈黙を続ける。
投手陣が抑え、依然として、一点のリードを守ってるとはいえ、すでに自慢の三人のメジャーリーガーは出し尽くしたのだ。
アメリカのボールになれた投手を連れてきたことで、おのずと選択肢は狭まる。
七回からは佐野の登板だ。中日を解雇された後、一年間、ドジャースのマイナーでプレーしただけに、アメリカのマウンド、ボールには慣れたものだ。
ところが、肝心の実力は…先の三人と実績が見劣るのは否めない。それでも、一四〇そこそこながら、独特のコンパクトに体を回転させる投球モーションから繰り出されるボールは、低目に集まる。
走者がいないときもセットから投げる佐野だが、突然と振りかぶる。
振りかぶったさい、わざと帽子に手をかけて落とす、忽然とあらわになったはげ頭で、観客の笑いを取り、打者を幻惑する、いわゆるテカテカ投法だ。
が、披露をした打者がまずかったのだ。同じく寂しい頭のペドロイア。
自分への侮辱と判断したペドロイアは、猛然と打ちにいく。
テカテカ投法は、パフォーマンスの一種であり、打者は見逃し、佐野はボールゾーンに投げ影の鉄の掟が存在する。
日本の掟など、知ったこっちゃないと、ペドロイアは高目のボール球をむりやり大根切り。
グリーンモンスターに行く手を阻まれたが、火の噴くような二塁打を放ち、ベースには、頭から滑り込む。
ヘルメットが勢いで脱げて、佐野のように、寂しさあらわとなるが、ペドロイアのプレーは遊びではない。
チームに火をつけるためだ。
「だから佐野はあかんのや。ふざけすぎや」
鈴木がたまらずベンチを飛び出し、投手を交替する。

ただでさえ、残りの投手に不安があるのにかかわらず、あきらかに早すぎるスイッチだ。

「ピッチャー……、誰おったかのう…」

球審のデービットソンに投手交代を告げにいったはいいが、鈴木はベンチ入りの投手さえ熟知していないのだから、名前が出てくるわけがない。

仕方なく、久保の援護を仰ぐと、

「しゃ、しゃしゃ…シャウス？　誰やそれ。まあええわい、ピッチャーシャウスとかいうのや」

告げた鈴木でさえ、ちんぷんかんぷん。

久保の秘密兵器第一弾が、シャウスだ。

九十八年優勝争いをするチームに、途中加入したシャウスは、五連続三振を奪うなど、鮮烈なデビューを飾ったが、その後さっぱりで、一年で帰国。

それでも野球をあきらめずに、腕を下げて、ワンポイントリリーフとして、メジャーのキップを掴み取ると、四〇を超えた今も、現役で活躍している苦労人だ。

オーティズは、シャウスの腕のアングルに戸惑いを隠せない。

左のオーティズには、シャウスのボールが背中から、突然現れるように見えるのだ。

まったくタイミングが合わず、最後は外に逃げていく変化球で空振りの三振だ。

シャウスはもちろんワンポイント、続いて出てくるのが、秘密兵器第二段のマットソンだ。

表のウエイクフィールドに対抗するように、ナックルボーラーの登場だ。

ところが、同じナックルボーラーとはいえ、投げるナックルのレベルには、かなりの差がある。

ウェイクフィールドは、八割方ナックルを放るが、マットソンはそこまでの自信がない。

四球の神ユーキリスには見極められて、ベイには、手元が狂い死球だ。

これで、満塁の大ピンチ。打者は、才能を浪費する男、ドリュー。前評判ほどの成績を残してはいないドリューとはいえ、怖い打者には違いない。

おまけに左打者だ。右腕マットソンのナックルの出所が丸見えで、近鉄のブルペンに左腕はもういない。

「おい久保、どないしよか」

「う〜ん、困りましたねえ……左腕…左腕…あ、そうだ、いいアイデアがあります」

投手コーチの久保がベンチを飛び出すと、一塁手の石井に向かってなにやら指示を出す。

「おーい、石井、関根さん呼んでくれ」

「え、関根さん?」

いぶかしげな石井が関根に声をかけてベンチまでつれてくる。

「なんだい、ベンチとライトの往復だけで疲れる気分になるのに」

「投げれますか?」

「うん? 投げていいの? おお、喜んで投げるよ…」

「あ、ブルペンで肩を作らなくて…」

「そんなのいらないよ、六十年前の投手にはいちいちそんなのなかったの。投げろいわれたら、さっと投げてたのよ」

秘密兵器第三弾関根さんの登板だ。これにはレッドソックスベンチも驚き呆れている。そりゃそうだ、守っていた野手の登板だなんて。

メジャーでも、点差がついたり、延長でブルペンがからになった場合に限り、野手も投げるが、この接戦ではありえないことだ。

それも肩を作っている様子もなく、いきなりマウンドに上がるのだ。

「マウンドなんて六十年ぶりだねえ…。あれれ、こんなに遠かった

け？　届くかな…届いた」
　頼りなさげだが、ボールはそれなりだ。
　レッドソックスベンチがこれを見て動く。右の代打のバルデリを送り込む。ディマジオ二世と呼ばれながら、怪我に苦しんだバルデリは〇九年よりレッドソックスに移籍。　控えの外野手、ＤＨとして期待されている選手だ。
「右にかえてくれたねえ…しめた」
　関根さんは思わずにんまり。左投手対左打者なら、左投手対右打者を選ぶのがセオリー。　ところが、関根の決め球は右打者により威力を発揮する。
「オレの投げてたころは、左なんて珍しくてねえ…だから右打者抑える研究ばかりしてたのよ」
　その研究成果が、右の外に大きく逃げていくシュートボール。俗に逆カーブと呼ばれたほど、シュートとはおもえない大きさで曲がり逃げていくボールだ。
　バルデリもしめた真ん中と思うと、大きく逃げて空振り、また真ん中と思うと、これまた逃げて空振り。
　三球目、これまた真ん中だ。もう騙されないと、悠然と見送ると、そのままっすぐストライク。
「へへへ…メジャーさんをど真ん中で三振に取っちゃったよ」
　四人の投手リレーで大ピンチを切り抜けた近鉄はこの一点を守りきれるだろうか。

ボストンに吹き荒れる六甲おろし

ついに岡島の登板だ。メジャーでも指折りの中継ぎ左腕に数えられながらも、ＷＢＣ合宿にも、ＪＢＣの巨人、日本ハムのキャンプにも呼ばれなかった岡島だけに、色々な思いを込めてのマウンドだろう。

彼独特の前を見ないでボールをリリースするモーションから繰り出される速球は表示以上の威力がある。

これに、メジャーで覚えたスプリット気味に落ちるチェンジアップを交えて、近鉄打線を封じにかかる。

特別解説として、招かれたパンチョ伊東も、日本人メジャーリーガーの登場に、饒舌をますます極める。

「いやいやいや、伝統あるフェンウェイパークのマウンドに、あの岡島が立つなんて、とても信じれないよ。オレが生きていたころの岡島は、連打を浴びて情けない顔してた記憶しかないからねえ。その岡島が、メイジャーリーグで堂々とプレーしてるんだもん。オレも驚きびっくりタメゴローだよ。地獄で、いつもめんたま丸くして、彼の登板を見つめているんだよ」

「あれ、パンチョさん、地獄なんですか？　てっきり天国かと…」

「馬鹿いっちゃいけねえよ、福井くん。人間なんての悪行の固まりだよ、たいてい地獄行きさ」

「そうなんですかはあ」

迎える打者は光山。両軍唯一の得点を叩き出した打者であるが…。

鈴木がベンチをおもむろに出てくる。

「代打や、代打…誰にしよか…。ワシと同じ苗字の貴久、鈴木貴久でええわ…」

なんと代打を出して、光山をベンチに下げてしまう。得点を叩き出しただけでなく、苦しい継投となった投手陣を引っ張る好リード

も光り、ここで交代する理由はどこにもないと思われるのだが、あえて鈴木は代打の起用に打って出たのだ。

「光山は二割そこそこの打者や…一日一本が限度や。つまりもう今日のヒットは期待できんちゅうこっちゃ。それならば、少しでも打てる打者に、替えて追加点を狙いにいくのがセオリーやろ。ワシの若いころの監督であらされる三原大監督も、似たような采配をようとったもんやわ。三本ヒット打った打者に、代打を送るんや。四打席目もヒットを打つ確率と、凡退する確率どっちが高いんやいうてな。むふふ…ワシも、ついに大監督の仲間入りや」

今日ここまでの試合、近鉄が、なんとかリードを保っているのも、光山の働きが大きいのは明らかだ。キーマンをあっさりと下げるなんて、ダメ監督は、どこまでいってもダメ監督と、ベンチはしらけムードだ。

裏の回から、マスクをかぶることになった古久保も、いきなりの起用に頭を悩ませている。いままで対戦したこのない打者を相手にするのだから、当然だ。しかも試合途中に放り込まれるのだ。

それまでの配球や流れなどもまったくわからないまま、リードをしなければならないのだから。

代打に出された鈴木貴久が、塁に出るなりすれば、まだ報われるのだが、あっさりと凡退してしまうのだから、余計にたちが悪い。

八回の裏も、そのまま関根の続投と思われたが、あっさりと拒否をする関根さん。

「肩慣らししないで投げたら、肩やっちまったみたいだな…。悪いけど、他の人と交代させてちょうだい。またライト守るからさ」

あわよければ、関根で試合を終わらせようとした鈴木の計画が根本から狂う。もはや、ブルペンには、ろくな投手が残っていないのだ。　阿波野も、岩隈も、赤堀も、日本での調整を選んだのだから。

「どないしたもんやろか…久保コーチ、なんか名案あるか？」

「監督投げれませんか…？」

「ワシ？　登録してへんやろ」

「一応、ベンチ入りメンバーに名前は載せておきましたが…」
「……。アメリカのマウンドに、ボールで満足の投球ができるかい。一流投手はな、デリケートなもんや。少しの環境の違いでガタガタになるんや…。野茂や吉井のような一流に満たない投手なら、気にせんと投げれるんだろが」
シリーズ第一話では、投手はどんな環境でも投げろとおっしゃっていた草魂監督。
「久保コーチ、キミが行ったらどないや？」
「あいにく、私は登録外でして……ちょっと、ブルペンにいる清川コーチに連絡してみます…。清川コーチ、どうなの？　そっちのほうは……。二人できてる？　あ、そう。あの二人ねえ…仕方ない、十五番のカードから切るか……」
久保が仕方なくマウンドに上げた投手は福盛である。実績も実力も不足していながら、現役のメジャーリーガーであることが買われての抜擢だ。
とはいっても、メジャーの環境に、いまだに戸惑いを隠せず、ボールは滑るわ、マウンドは合わないわで四苦八苦の現状だ。
カウントを取るのも、決め球もフォークの典型的なフォークピッチャーである福盛も、ボールが手につかなければ、結果は見えている。
フォークはボールのゾーンから、ボールに外れれば、手を出す打者など、メジャーのレベルには皆無。あっという間に、大ピンチをこさえて、マウンドを譲る羽目に。下半身はメジャーサイズも、投手としては、まだまだのようである。
八回の裏で都合、九人目の投手の登場である。
「どうしてもよわいとかオレを連れていけって食い下がるから、敗戦処理というか、どうでもいい場面で投げれる投手も必要と、そういう立場で、連れてきたんだが…まさか、この一大事にアイツをあげないとならないとはねえ…」
マウンドで、そわそわと、救援投手の登場を待ちわびていた久保

の第一の心配事はボールに慣れているかどうかである。ベンチ入りした投手の中で（野手登録の関根はのぞく）、彼だけが、アメリカ野球と無縁であるからだ。

「どう、慣れたか？」

「いや全然。しかっし、メジャーのボールの質って最悪すね。日本のボールの品質のがよほどいいっすよ。これにあわせて統一しろなんて、馬鹿にするなって話ですよ」

とにかく、べらべらとまくし立てたら止まらない、この投手の正体とは？

久保の心配事その二。

「いくら、エキシビジョンだからといって、口の方はほどほどにな…。相手は「刺激するとまずいからな」

「平気すよ、安心してください。抑えても、レッドソックスはロッテより弱いとか、口が滑ってもいいませんから。楽天より弱いならいっちゃいそうすが」

「頼んだぞ、期待は…一応してるから」

もうおわかりであろうが、近鉄最後の切り札が、よりによって加藤哲郎である。この回からマスクをかぶる古久保も不思議顔。

「なんで、おまえが帯同してるんや？　アメリカ野球の経験あったか？」

「いや全然。野茂や吉井が通用するなら、オレが通用しないわけないと、証明するために、わざわざ、こんなところまできたんすよ。ミナミのホステスきりもみしてるオレからしたら、メジャーの連中など屁みたいなもんすよ」

あいかわらず、出所不明の自信であふれかえる加藤哲。実力の足りなさを、その自信でカバーできるのだから、今日の加藤哲は、メジャーといえど手厳しい。

世界屈指のクラッチヒッターオーティズに対しても、ひるむことなく攻め立てる。

「なにが、オーティズだ。日本シリーズ第七戦の駒田のが怖いわ」

加藤哲の威勢はいいが、ボールはそこまで伝わらず……。
オーティズは、あっさりと逆転となる二塁打を放つ。
「オーティズってヤツ…よう見ると、ミナミの用心棒みたいだな。今度ウチの店に雇ってみるか」
ひれ伏すことなく、あくまでも強気の加藤哲であった。
逆転でイケイケのレッドソックスは、続く四番のユーキリスをベンチに下げて、代打を送る。しょせんエキシビジョン、相手は日本の球団、一点のリードで主軸をお役御免ということか。それともユーキリス以上の打者がいるのであろうか。いくら強豪球団といえど、WBCアメリカチームの正一塁手ユーキリス以上の打者がそうそういるとも思えないのだが…。
代打として出てきた打者、レッドソックスの秘密兵器…。招待選手として参加をしている…。
「マーーイク！・グリーーーンウェル！！」
グリーンウェル？　あのグリーンウェル？　そうそのグリーンウェルである。日本に極秘に入国して、無断にカプセル使用して、阪神時代の肉体に再生して帰国。再び、メジャーへの舞台へ、古巣レッドソックスのキャンプに参加しているのである。
キャプテンのバリテックに声をかけられるグリーンウェル。
「へい、マイク。キンテツは、あなたが日本でプレーしていたチームと聞いたが？」
「そうとおり、ただ在籍していたのは確かだけど、プレーはしてないよ、割のいい年金をもらっただけさ。私の野球人生は生涯レッドソックスなのだから」
同じ関西の球団とはいえ、阪神と近鉄をすっかり混合しているグリーンウェル。テンガローハットをかぶり、六甲おろしを歌って、阪神ファンを涙させた過去も忘れて…。
ミスターレッドソックスの異名を欲しいままにしていたグリーンウェルだけに、ファンの歓声もひときわ高い。コールだけで、総立ちである。

近鉄も、いまさら十年前の害国人の投入とは、なめられたと闘志を燃やす。

「なにが、関西の救世主、阪神日本一の使者だよ。口だけの男は許せねえ」

加藤哲郎先生もそう申しております。

「いやいや、まさかまさか、またミスターレッドソックスのプレーをこの目で見られるとは。いやあ、生き返ってよかったよ、うん」

パンチョも興奮。

捕手の古久保もリードに頭を悩ませる。なにせ、グリーンウェルのプレー姿の記憶がないのだから。それでも、外のボールは流されて、狭い左翼に持っていかれると判断して、内のボールを要求。それでもフェンウェイの形状を最大限知っているグリーンウェルはなんなく流して、左翼方向に持っていく。ふらふらとした打球だが、高さは十分、グリーンモンスター越えもありうる高さのフライだ。グリーンウェルは長打と確信するが、打球はもう一歩伸びない、天罰なのか、復元されたのが、阪神時代のデータで、いまひとつパワー不足だったが、フェンス
間際で、レフトローズのグラブにすっぽりとおさまる。

逆転を許した近鉄は最終回の攻撃を迎える。レッドソックスはクローザーのパペルボンもつぎ込む本気ぶりを見せる。

「いやあ、このパペルボンって投手はねえ、今のメイジャーリーグで一番のクローザーなんですよ。なにせ、球が速いのてなんの…彼はねえ…」

豪華リレーにパンチョの口も滑らかだ。

近鉄は中軸を迎えるが、好打順とはいえない。初回から沈黙を続けているからだ。

特にローズは重症で、気負いから、バットのスイングは彼本来のものからほど遠い。しかも、パペルボンの登場にもはやあきらめ気味だ。

ノリが気落ちするばかりの盟友タフィーにそっとアドバイスだ。
「タフィー、スイングが縮こまってるで。メジャー相手だからいうて、自分のスイングを変えることはないんや。それに、この球場は変形球場や。レフトの方見てみい、まるで日生球場やないかい。パペルボンの速球に遅れてもええんや。振り切れば、押し込まれても、タフィーのパワーなら、あの壁まではイージーや」
「ニッセイ？」
「日生忘れたか、なら藤井寺や。タフィーの近鉄在籍初年度のホーム球場や」
「藤井寺ね、ＯＫ、左半分は藤井寺ね」
ノリのアドバイスで気分を取り戻したのか、メジャーコンプレックスの呪縛から解き放たれたローズは、足を上げて、大きくバックスイングを取り、下からすくいあげるようにバッドを振り上げる、本来の打法が戻る。
日本の速球ていどには対応できるが、メジャークラスの速球には振り遅れると、スカウト連中に酷評されている打法である。
それでも、いつもの自分を取り戻したローズのバッドは火を噴く。パペルボンの速球に押されはしたが、大きなフォロースルーがカバー。はじき返された打球は、目論見どおり左翼のグリーンモンスターへと飛んでいく。
結果、この試合両軍通じて何本目になるだろうかの二塁打。ようやくメジャーへの呪縛がとかれたローズはベース上で、一息つく。
ローズといえば、カブスで迎えた開幕戦で、当時の速球王グッデンから、三本塁打打ったように、元来、メジャーの一級の速球に対応できる打者なのだ。
無死二塁、四番のノリ、一点差。
「ノリは主砲やお前に任せたで」
鈴木は強打のサインを送るが、ノリは勝手に送る。ローズの二塁打を無駄にしたくないとの気持ちが現れたバントだ。
「むむむ……うむむ…」

もはや鈴木のぐうの音も出ない、好き勝手が近鉄の信条とあきらめるしかない。かくいう自分もそうなのだから。

「頼んだで、ラルフ」

ノリは続くブライアントの肩を叩きエールを送るが、音なしどころか、オール空振りの三振。まさかの一発が出る雰囲気もない。

鈴木は動く。サインは無視されても、選手起用は無視されない。

「代打、石渡」

石渡を送る。まさかの一発より、確実性を取った。ところが、鈴木は石渡にとんでもない指示を送る。

「ええか、石渡、わかっておるな、スクイズや、まず同点狙いや」

鈴木は、石渡があの江夏の二十一球で、スクイズを失敗した打者であることを忘れたわけでもないのに、強気にスクイズ策だ。

近鉄に珍しく強調路線の石渡は、監督の指示にそむくこともなく、スクイズを試みるが、トラウマが蘇ったのか、相手の不意をついた作戦にも、かかわらず、小フライを上げて、あえなく失敗してしまう。

「ぐむぐむぐむむ……」

せっかく作戦らしい作戦を使えたのに、限って失敗。鈴木はどこまでも指導者運がないのか。

それでも、フライ処理のさい足を痛めたパペルボンが降板したのは、近鉄にとっての幸運か。もうベンチにはこれといった投手もいないのだから…。

出てきた投手は、秘密兵器第二段、田沢である。

「せっかく、アメリカ来たのに、日本の球団相手に投げるのもへんな気分だな…」

ネクストサークルにいた関根が自らベンチに戻る。

「田沢なら、オレよりふさわしい打者がいるでしょ」

勝手に試合から降りて、代打の指名だ。それでも近鉄ＯＢ会長に鈴木も逆らえず、代打が出てくる。

近鉄最終秘密兵器。

「代打大久保」
大久保のコールに田沢も目を白黒。
「大久保？　近鉄にデーブって在籍してたっけ？」
もちろん出てきた代打は、デーブ大久保ではなく、違う大久保だ。
左打席に入り、ヘルメットを取り、田沢に挨拶をすると、ようやく田沢は気づく。
「か、監督？　大久保監督！？」
田沢の新日石時代の監督、大久保秀昭である。近鉄に在籍して、主に代打として活躍した選手だ。
「まさか、またまさかだ、監督と対決するとは…」
田沢が投じた初球、大久保はフルスイングを見せる。ヘッドの抜けがいいスイングは、さすが、アトランタの全日本の五番打者だ。谷、松中、とクリーンナップを組み、井口、福留を下位に従えていたこともある。空振りに終わったが、田沢を震え上がらせるだけの効果はあった。
「田沢、お前は精神的にまだまだ弱い。オレのスイングにビビッてちゃあ、メジャー連中の相手にはならんぞ」
大久保が諭すようにつぶやく。どうやら、田沢の動揺を誘うための空振りだったようだ。効果は十分で、田沢の投球は初球より甘く入る。
「あ」と失投と気づいた田沢が声を上げたが、大久保は打ち返す。強烈な投手ライナーが田沢を襲う。ところが、田沢は強運の女神にもほれられているのか、だめもとに差し出したグラブに、打球がすっぽり。
「入っちゃった」
本人も驚きの偶然で、試合終了。田沢は見事セーブを上げる。
ブルペンで試合終了の知らせを聞いた金村はひどくがっかり。
「なに？　終わったの？　ああ、くそ、同点なったら、ワシが投げてやろうと肩をこさえてたちゅうのに…。甲子園優勝投手のワシが

投げれば、加藤より、よほどいい投球できたのに。ああ残念やなあ。まあ、クサのおっさんが勝利監督でいい気にならへんでよかったかのう」

どこまでも身勝手な金村であった。

ＷＢＣ大便乗　星野のリベンジ

「ええか、イチローだけには、絶対打たすなよ。あのくそガキのひとことで、ワシの人生設計がメタメタにされたわ、いまでも、胸糞悪いわ。なに？　宮崎キャンプで、笑顔のツーショット？　あれは世間様へのアピールや。不仲説の否定のためのな。イチローといつまでも仲が悪い思われとったら、ＣＭもようこんのや」

星野が投手陣だけを特別に集めて、明日のＷＢＣ代表チームとの壮行試合への訓示だ。

中から五人を呼び上げて、自ら、薫陶をささげる。

「ええな、お前らは、中日史上えりすぐりの左腕五人衆や。お前らに、イチロー封じを命じる。イチロー一人だけに投げさすから、全身全霊をかけて投げい。内をどんどん攻めるのや。当てたら？　いいぞ、むしろ当てにいけ。ぶっ壊して、再起不能にしてこいや」

沖縄北谷球場には朝から長蛇の列。開門も早める練習試合には異例の措置。

「ワシの人気も捨てたもんじゃないな」

星野はほくそ笑むが、もちろんこれはＷＢＣチームの人気。星野中日見たさに集まったファンなど数えるくらいだ。

中日の先発には、鈴木孝政がたつ。持ち味の人を食ったような投球で、青木、中島を抑える。ツーアウト、打者は三番イチローとなったところで、自らマウンドを降りる。

すわ、故障？　造反？　球場内が色めき立つが、予定の行動。星野が出てきて、投手交代を告げる。

星野中日二度目の優勝のＭＶＰ左腕野口の登場だ。

持ち味の大きなスライダーで、イチロー封じといきたいところだが、星野の突き刺さるような視線におびえてか、ボールがゾーンにいかない。いずれも大きく外れて、カウント０－３。

星野は苛立ち、ベンチを蹴り上げんばかりの鬼の形相。これにはベンチにいたバンスローも、星野は相変わらずクレージーと呆れるばかり。

野口は完全にびびり、腕が触れない。懸念した捕手の中村が、腕を振れと指示を出すが、野口には利かない。

鈍感、宇宙人と揶揄される野口でも、さすがに打たれたら、自分がどうなるのはわかっている。しかも逃げての四球は星野が一番嫌うこと。

結果、腕が振れずに、置きに行くようなボールを投じて、センターにクリーンヒットを打たれる。

星野は、「野口の馬鹿が」と吐き捨てると、ベンチ内の扇風機を殴りつけて、破壊。

ベンチを飛び出して、野口からバンチへの交代を告げる。危険を予期していた野口は、星野から逃げるように、ベンチに急いで隠れるが、察知した星野は、野口を追い回す。

ベンチの奥から、聞こえてくる悲鳴と鈍い音。これには、ベンチ入りのアレックスもびっくり。星野を知らぬアレックスだけに刺激が強すぎたか。

試合内容などどうでもいい、とにかくイチローだけは抑えろとの指示の元、イチローには打たれるは、試合内容はその通りめちゃくちゃだは、壮行試合の意義も吹き飛ぶ荒れた試合に。

イチロー退治の第二の刺客は、今中だ。天性の腕の振りから繰り出されるミサイルのようなストレートとブーメランのように曲がるスローカーブは、まさに天才の冠にふさわしいものだ。

「野口はダメでも、今中なら大丈夫や。４－１、５－１なら、イチローの負けや…。みておれよ、これから、お前の惨め凡退ショーが始まるで」

星野は仁王立ち。相当の自信と今中への信頼である。打者一人だけあって、今中のボールはより勢いを増す。一四〇の表示でも、速いと感じる今中の速球が、一四七、八を記録しているのだ。イチロ

ーといえども、ミートどころか、当てさえするのも大変だ。
追い込むと、強気の速球勝負、なんとか当てると、打球は遊撃前に前に転がる。遊撃手は守備を買われて井端が投入されている。
「落合はまあまあ、星野は最低」
の井端だけに、星野の覚えも悪くなっていたが、イチロー殺しに手段は選べない。猛然と前に出ると、難しいごろをなんなくさばいて、すばやいモーションで、一塁に送球。
どこにも無駄はないが、それでもイチローの足は速い。間一髪の内野安打だ。
「かあ、人間としてセコければ、野球もセコいのか」
星野は連続安打に怒り心頭。思わず、近くにいた森野の頭を小突く。パウエルに、森野を殴るなら、オレも殴ってみろと、抗戦を受けるが、今の星野の眼中にはなし。
今中を降ろすついでに、一塁で殺せなかった遊撃手の井端も戦犯と、交代を命じられる。
これが後に大変なミスにつながるのだが…。星野はそれを知らない。

内野安打騒動記

「どいつもこいつも気合が足りんのや」

星野のイライラが募るほど、ベンチは重苦しくなる。

ゲーリーが、星野に監督が感情をあらわしてもチームにプラスにはならないと促しても、星野には無駄。

星野の勝負度外視の継投に、ＷＢＣ日本代表の万全の投手力が加われば、試合は大差がつく。

イチローの三打席目、マウンドに上がるのは松本幸行。巨人Ｖ１０を阻止した、昭和四十九年の中日のエース。星野の活躍ばかりが伝えられるが、当時の先発の大黒柱はこの人だ。

早過ぎる投球テンポで、打者を幻惑する軟投派左腕。

メジャーに渡り、テンポのいい投手にはなれているイチローも、松本には戸惑う。返球を受けたと思ったら、モーションに入っているのだ。イチローの構える前の独特の儀式の途中でもかまわず投げる松本。一分足らずで、イチローを追い込んでしまう。

たまらずイチローはタイムをかけて打席を外そうとするが、球審が認める前に松本は投じていた。ゾーンいっぱいの低めにきたので、三振を恐れ、慌てて、バットを出す。バットの先っぽになんとか当てた打球は、またもショートゴロに、井端に替わって、遊撃に入った種田がさばくが、これも内野安打。

内野のマルチプレーヤーの種田とはいえ、遊撃守備では井端に劣ることは否めない。井端であったらなら、殺せた当たりだけに、星野の早計な判断が悔やまれるところだ。

自らの判断で出した種田を怒るわけにもいかないだろうと思いきや、イニングの終わるころ、種田の頬は赤くはれていた。

四打席目、投手は岩瀬だ。北京の戦犯、岩瀬がもう少しまともな投球をしていれば、ＷＢＣをリベンジの舞台とすることもできて、ひいては夢の巨人軍監督につながったはずだ。星野に因縁深いイチ

ローと岩瀬の対決だ。

星野は内野安打封じの策を講じていた。岩瀬の前の投手の落合英二にわざと満塁にさせたのだ。満塁で走者が詰まっていれば、ホースプレーとなり、内野は格段に守りやすくなる。遊撃にイチローが転がしても、二塁で封殺すれば、イチローには内野安打は記録されないのだ。

イチロー封じとして、遊撃手もバードに替えている。バードは打率一割台で、ダイヤモンドグラブを獲得したことからもわかるように、守備の達人である。バードに、満塁に、岩瀬、万全の体制でイチロー封じ四度目の正直となるか。

岩瀬は得意のスライダーを出し惜しみせずに放る。イチローも岩瀬のスライダーには、当てるのも困難で、バットは空を切る。

星野がサインを送る。捕手の中村は、相次ぐ、イチローへの配球ミスで、リードの実権を剥奪されたのだ。

「スライダー続けい。ええぞ、岩瀬、お前のスライダーはやっぱり一級品や」

指示通り岩瀬は、追い込んでもスライダーを投じる、外へ逃げていく絶妙なボールにイチローは、なんとか当てる。まとも遊撃に飛んでいく。三度目に待ち構えるのは、バードだ。これがすばやい。噂以上のハンドリングで華麗にボールを防ぐと、星野の事前指導どおり、二塁での封殺狙いだ。

体をねじり、二塁に送球…。早い、速い、はやい。ところが、このスピードが逆に命取りになる。バードの早さになれていない二塁の荒木のベースカバー間に合わないのだ。送球したボールは空しく、二塁ベースを空過して、外野に転がっていく。

記録はまたも内野安打。今日四本目のヒットだ。

もしも、井端が遊撃のままなら、荒木と培ったコンビネーションで、息を合わせて二塁で封殺できたのに…。あるいは、バードにあわせて、二塁も現役時代コンビを組んだ高木守道に替えていたのなら…。すべて後の祭りである。

星野は怒りを通り越して、もはや笑顔しか出てこない。これには、ベンチにいたマーチンも、あの星野は大人になったと感慨深げだ。ところが、星野の笑顔は、怒りの頂点でもあるのだ。はらわたは煮えくり返り、頭は血で沸騰している。

四安打の時点で、勝負は、イチローの完勝であるが、五打席目は捨てるわけにはいかない。なんとしてでもイチローに一太刀浴びせねば、上がった血圧が下がらない。

五人目の刺客に予定されていたのは、近藤真一だ。山本昌や、都、昭和三〇年代に活躍した中山らの左腕の投入を考えられたが、初登板でノーヒットノーランを記録した強運と勢いを買って抜擢されたのだ。

現役ブルペンコーチである近藤は、自ら星野に連絡を取り、

「肩はできました。必ずや、イチローの首を取ってきてまいります」

順調な調整ぶりを告げたが、

「もうお前らは信用しとらんわ。このたわけどもめが」

イチロー五打席目、予定を覆してマウンドに上がったのは、星野自信である。

「ワシが投げたる。お前らようみとけ、これがイチロー封じのお手本や」

星野のイチロー封じ大作戦はこうだ。球威や絶対的な決め球はない星野。おまけに左打者にみやすい右のスリークオーター。それらをカバーするために、思い切って内角をつくのだ。イチローに当ててでも、内をつけとの指示を飛ばしたが、どれも手ぬるい攻めと星野は満足していない。

執拗に内をついて、腰を引かせて、外と見せかけて、また内をつく、徹底した配球で、自らお手本を示し、憎きイチローを打ち取ろうとする魂胆だ。

「イチロー死ねや」

すさまじいばかりの星野の気合と迫力。はたして、星野の猛絶たる気迫は、イチロー退治につながるだろうか？

ところがだ。
WBC代表ベンチから、原が出てくる。イチローのお尻をぽんと叩く。なんと代打である。それもそのはずゲームは一方的な展開。無理にイチローに何打席も立たせることないのだ。
これには星野は呆然。
「ワシから逃げた」
と一方的に、勝利宣言するも、どこか空しい。代打の栗原に、菱えた星野は、ストレートの四球を与えると、さっさとマウンドを鹿島に譲る。

「この抑え切れない怒りはどこへもっていけばいいんや」
悶々とする星野。
「怒りのやり場がたくさんあるのう…ふふふ覚悟しとけよ、お前ら」
ベンチには見渡す限り、ストレス解消の山。
星野の鉄拳がうなり、いつまでも叫び声が上がっていたとさ。

走れ、ヨシヒコ、走れ、新井

新井は走る。ひたすらにただ走る。新井は福岡ドームを目指す。公共機関の利用や、車、自転車での移動はだめ。ただひたすら自分の足だけで、キャンプを張る宮崎から、広島とソフトバンクの練習試合が行われる福岡を目指すのだ。

先着順にベンチに座れ、先に着いた十名には、スタメンのご褒美だ。

新井は出だしから遅れている。特に目をつけられた新井は、天文学的な数ほどのノックをこなし、朝から晩まで走りこんだために、心身ともにぼろぼろなのだ。

「か、金本、あに、兄貴…。そちらの（阪神・安芸）キャンプはとても快適らしいですね…。手短く、ぬるく、物足りないくらいに…。僕も阪神で参加できたのなら…。八本塁打の大砲ですが…。バースを蹴散らして、一塁を守ることができたのなら…」

道路の真ん中に倒れそうになる新井。後ろから、クラクションが鳴り響く。

新井は慌てて、道の恥に体をどかす。クラクションを鳴らした車は、赤いスポーツカー。見るからに高級車で、一般人の手にできるものではない。

スポーツカーは急ブレーキをかけて止まる。窓が開き、新井を呼び止める。

「よお、新井君じゃないか。乗ってくか?」

「あ、慶彦さん…」

スポーツカーの乗り主は高橋慶彦。彼も福岡ドームを目指し、自力で移動中のはずだが、車を利用している。

「あの…車は禁止のはずですが…」

「知ってるよ」

「慶彦さん、またボイコットするつもりですか?」

慶彦とボイコット。新井選手が小学校五年で純粋なカープファンであったの一九八七年開幕直前に行われた先代の松田オーナー主催の激励会を、なにも開幕前の大事な時期にやることないでしょと、慶彦選手会長はボイコット。チームの和を乱したと、開幕から数試合、謹慎をくらい、翌々年のロッテ放出の決定打となった。

「試合だろ？　もちろん出るよ」
「あの…でも…き、規則が…」
「規則？　フフフ…。オレを試合に出さないで、栄冠をつかめるのかな、我が愛しきカープは。で、乗るの？　乗らないの？　乗らないみたいだね。新井君は、さすが、プロ野球選手会会長だね。真面目だ。いいことだ。それじゃあな、新井君。ドームのベンチで会おうな」
慶彦を乗せたスポーツカーは颯爽と走り去る。

総勢百名を超える広島のサバイバルキャンプ。期間中に、脱落者がいたとはいえ、福岡を目指す道には、そこかしこに、広島の選手であふれている。
最高峰にいたはずの新井も脱落者の屍を、時に、別れの涙。時に、侮蔑のまなざしを交えて、乗り越えていく。
ドラえもんを愛する、めがねのやせっぽちロードン。
大門を追い掛け回し、背中にセミをひっつけながら、本塁打一周をしたアレン。
衣笠の守備要員として、早いときは四回から試合に出たジョンソン。
中日ゲーリーの兄貴としかいいようのないレーシッチ。
四番で四十本の前評判が、気がつくと消えていたヤング。
薬でもやっているんじゃないかと思いたくなるほど、常に興奮していたアイルランド。

いずれも熱狂的にカープを応援したころの助っ人だけに、新井の心中も複雑だ。

手を差し伸べたい。いや、それはできない。彼らは、新井のライバルなのだ。

「アイアイアイアイアイルランド〜。ジョジョジョジョジョジョン〜ソン」

応援歌をレイクエムとして（歌詞は新井のオリジナル）、彼らを、新井は見捨てた。

その先には、東出がいた。ガードレールに寄りかかり、いまにも崩れ落ちそうなほど、疲弊している。

「ひ、東出じゃないか。大丈夫か？」

さすがに、同期入団で、ぼろぼろの三遊間を守った仲。言葉なく見過ごすことはできない。

情を持って、東出に声をかけるのだ。

「あ、新井さん…。その声は新井さんですね…」

東出は、疲労で、目も開けられないほどだ。

「そうだ、僕は新井だ。頑張れ、東出。同期生じゃないか。一緒に目指そう。栄光のベンチを」

「オレはもう無理です……」

「そんな弱音を吐くな」

「いえ…もうだめです…。オレの形見といっちゃあ大げさですが、オレの帽子を持っててくれませんか？」

「帽子？」

「ベンチの奥にでも飾って置いていただければ…。オレも広島の一員として、戦っているんだと勇気がわきますから…」

「わかった…。帽子を飾ればいいんだな」

東出は、帽子を新井に手渡すと、最後の力を振り絞り、唯一所持が許されたケータイを懐から出して、

「あ…東出です…。リタイヤです…。車お願いします」

リタイヤ宣言と引き換えに、救護車を呼ぶ連絡を取った。

救護車が一目散に駆け寄ると、東出はたちまち元気になって、車に乗り込む。

「腹減ったなあ～。焼肉でも食い行くか」

新井は、東出の立ち直りの早さにしばし呆然。

「でも、屍の皆さんの帽子を持って、ベンチ入りってのもカッコいいな…」

妙な知恵をつけた新井は、ちょっと戻って、先の外国人選手の帽子も回収。

「君らのぶんまで、戦ってくるよ」

ところが、アイルランドは先においとま。帽子を回収できないとわかると、

「まったく…アイルランドはせっかちすぎるな…。変わってないな～」

新井、身勝手に、やや切れ。

帽子とはいえ、何十も重ねると、さすがに大荷物。

「僕はみんなの分まで頑張らないと…。みんなの願いを背負っているんだ」

これまた勝手な思い込む。

新井の先々には往年の名選手がはいつくばっている。

熱狂的な広島ファンであった新井であっても、昔の選手はちんぷんかんぷんだ。

大会用に作られたケータイサイトの選手名鑑を頼る。

「この人は、藤井選手か…。衣笠さんの前の一塁手で、年間二十本打つ大砲…。二十本で大砲か～昔のカープのハードルは低かったんだなあ～」

新井選手は、八本塁打で大砲です。

「こっちの人は、興津選手…。なになに、新人時代からレギュラーを張った…三塁手？　昔のカープは、新人でも、誰でも、レギュラ

ーになれたんだなあ。人材不足だなあ」
新井選手も、江藤流出の人材不足から重用されました。
「大和田選手…。この人は西鉄で出番なくて、広島に移籍したら、とたんに四番だって？　昔のカープは、よその二軍選手が即四番かあ。レベルひくっ」
新井選手も、金本流出で、他に四番がいなくて、無理やり座らされてました。

「みなさんの思いは、僕が継ぎます」
勝手に、倒れている選手の帽子を、脱ぎ取っては、コレクション。もはや、単なる重度の帽子収集マニア。
次第に大きくなる新井の態度。
「よお、栗原じゃん。どうした、もうへばりか？　リタイアなら、帽子貸せよ。ベンチで飾ってやるからよ」
ところが、新井となると、妙な対抗心をかもし出す栗原選手。今にも倒れ込みそうだったのに、気を取り直して、走り出す。
「新井先輩。ＷＢＣも落ちて、この大会も落ちるわけにはいかんのです」
「ち、もらい損ねた」
栗原に先を越されるということは、控えの右の大砲を先に埋められるということだ。
役割がかぶる新井にしては、栗原に先行を許すのは、自殺行為に等しい。新井は、そこまで頭が回らず、ただ安閑としている。

福岡ドームに真っ先に乗り込んだのは、もちろん高橋慶彦だ。車のキーをじゃらつかせながら、球場入り。待ち構えていた大下内野守備走塁コーチ兼任鬼軍曹兼任見張り役も、不正と見抜いても、慶彦には口を出さないルールから、なにも言えず、ただ渋い顔を作るしかない。
「あ、大下さん、オレ一番乗り？」

ただ大下は無言でうなずくだけ。
「やったー。先発オーダーに書き込んでいいすよね？」
まだ真っ白なオーダー表に、一番乗りの褒美として、真っ先に書き込む、慶彦。
「もちろん、一番遊撃…と、いや、やっぱり、四番がいいな。プロになったからには、一度は四番を打つのが夢だった」
なんと、堂々と四番に自分の名前を書き記す慶彦。のっけからめちゃくちゃなことに…。
アイデアを出したのは、大下だけに、文句も言えない…。

崩れ行く大下の目論見、新井の道徳心

福岡ドームに着いた二番手の選手とは？

「お来たのう。誰かのう。背が高いな…。ヒゲがもじゃついておる…。誰じゃ…ありゃ…。永田コーチ、誰じゃ、あれ…」

大下は目を細めるが、見当がつかない。

「ランスですよ…ランス」

「ランス？」

「三振か、ホームランか、のランスですよ」

「おお、いたのう、そんなヤカラも。キリストでも化けてきたかと思ったわい。しかし、ランスか…。あれだけ大きいのに、よう走れたのう」

到着したランスは早速、笑みを浮かべながら、スタメンボードに、名前を書き込む。

「ランスよ…、七番あたりにしておいてくれよ。下位打者なら、お前のようなびっくり箱でもいいけん」

ランスは大下の怖さも知らなければ、言葉もわからない。さらに、場の空気も読めないランスは、よりによって、一番打者に書き込む。

「トップバッター、メニー、メニー、バッティングチャンス。メニー、メニー、ホームラン」

なぜか、片言の英語で、心境を告白。

「一番…。低打率の三振王が一番…斬新なオーダーじゃのう…」

自らのアイデアだけに、大下は怒りたくても、怒れない。いまさら、撤回できず、奇妙なオーダーの出来上がりを眺めるしかない。

「キヌや、コージや、謙二郎はどうしたんじゃ。のろのろしおって」

ランスから遅れること、三分。三番手の登場だ。
「ようやくついたわい、あのね…あのね。遠いからね…、宮崎から、福岡まで歩くのはね」
達川の登場。一人でも、ぶつぶつとしゃべっている。
「おう、なんじゃ、タツか。お前が三番目とは、驚いたわい。ろくな体力も、走力もないのに、よう三番手に入れたのう」
「大下コーチ、頭ですよ、頭。頭を使えば、何事も上手く切り抜けれるんですわ。…大下コーチ、今、ワシ、三番言いました？」
「ああ、三番目じゃ」
「なんと…ワシの前にデカイのが一人おると思ったが、そのさらに前にもいたと。誰ですかい？」
大下は無言で、スタメンボードを指差す。
「慶彦…。アヤツかい」
大下にとっても、達川にとっても、慶彦は天敵。
「また、アイツ、何かしましたかのう？　見かけんかったのに…。ワシのように、タクシー使ったのかう、大下コーチ、知ってましたか？　今の時代ケータイひとつあれば、タクシーに乗れるんですよお。電子マネーいうてね…。ああ……しまった、ワシのしたズルをばらしてしもうた」
「タツ、慶彦の話題は禁句じゃ」
「ああ、そうじゃった。そうじゃった…。こりゃ、えろうすまない……」
「タツ、ズルはいいが、ばれんようにやれや…。手際のよさをはかる競争でもあるんじゃ」
「はい、今度はそうします…。さあスタメンに名前を記す、褒美じゃ、褒美…。なんじゃ、四番はもう埋まってるのう。四番打ちたかったけん…。三番にしとこ…。わあ、慶彦氏の前じゃないか…。これは失敗したのう。まあ、ええわい…。ポジションはどこがいいかのう…投手もええのう。三塁もかっこええ…長嶋さんや、衣笠さんの気分じゃ。三塁は…、遊撃の慶彦氏の隣かい、こりゃこれでオモ

ロイのう」

「タツ…ふざけるのはたいがいにせいよ…」

「大下コーチ、重ね重ねえろうすいまへん…捕手にしておきますよ…。あのね、でも、三番は譲りませんよ…。三番捕手かい…、、古田や、城島のようじゃ、かっこええのう、ワシ」

四番目に到着したのは、野村。息せき切って走ってきたのは、彼が初めてである。

「おう、謙二郎ようきたな、待っておったぞ…」

「大下コーチ、僕は何番手ですか？　四番目？　おかしいな…。常に先頭にいたつもりなのに…はあはあ」

「たぶん、真面目に走って着いたのは、お前が最初じゃ」

「そ、そうなんですか、はあ、はあ…」

「スタメンの褒美じゃ。お好きなところに、はよう、書けい」

「一番も、遊撃も埋まってますね…。三塁…キヌさんいるしなあ…、一塁か…新井の大馬鹿野郎に空けといてやるか…。センター、若いころ外野守ってたから、いけるかな」

さすがに次期幹部候補生の野村、場の空気をしっかり読む。

「九番センターでいかせてもらいます」

続いて、五番手は、思い切り古くなって金山次郎。一リーグ時代の本塁打王であり、盗塁王だ。大先輩のお出ましに、大下は最敬礼で出迎える。

「これはこれは、大下大先輩…」

「戦前派は足腰が強いんじゃ…みたか、大下よ。ワシはこうみえても、本塁打王じゃ…。五番打たせてもらうわい」

大下はもう笑うしかない。達川ー慶彦ー金山（本塁打王といっても年間最多は八本）のとんでもクリーンナップ誕生の前には…。

一方、新井は、屍の帽子を拾い集めることで、英気を養い、順調に歩を進めていた。

福岡に入ったところで、新井は地元のヤンキー集団に絡まれていた。

「こいつ新井じゃない？」

一人の野球ファンのヤンキーに目をつけらた、新井は、またたくまに囲まれる。

「僕は新井じゃない」

必死に否定しても、無駄。ユニフォーム姿の新井は、ＡＲＡＩ、２５と大きく背中に書いてあるのだから。

「新井だ」「新井たい」「いやん新井だわ」「どうしちゃいましょうか」「やっちゃう？」「阪神の選手ばってん」

新井は無抵抗だ。抵抗したら、正当防衛とはいえど、経歴に傷がつくことは否めない。

このまま新井はやられてしまうのだろうか？　そんなおり、救世主の登場だ。新井の後方からやってくる広島の選手。

「新井…。ここはオレに任せておきい…。久々に腕が鳴るわ」

背番号ゼロ、ミラクル男、長嶋清幸の登場だ。現役時代は大乱闘を立ち回り、少年時代は静岡の有名な不良。

集団に割って入ると、新井を外につまみ出して、ヤンキーにファイティングポーズを取る。

「いいですか…長嶋さん」

「いいから、ここはオレに任せ。オレよりお前のが戦力になるしなあ…オレはどうやら、野球より喧嘩のほうが血が騒ぐたちらしいぜ」

七人相手でも、長嶋はひるまない。

「誰だ、このおっさん、知ってるか？」

「カープの長嶋？…。さあ知らんたい」

「鶴太郎に似てねえ？」

「似てる、似てる…鶴太郎、俳優気取りやがって、皆のども、こい

つやっちまえ」
「おうよ」
かわるがわる襲いかかるヤンキーを向こうに大立ち回りだ。

「長嶋さん…」
「なんだ、新井、はよう行けや」
長嶋はさすが名の知れた不良、7人がかりとはいえ、チンピラもどきなど相手にしない。新井と会話する余裕すらある。
「帽子ください」
「はあ？　帽子？」
とにかく帽子が欲しい新井選手であった。

堕ちていく新井

新井はゴール目前だ。

屍の帽子を拾い集め、すでに五十ほどに数は膨らんでいる。

小林幹英や、澤崎、小山田、チェコといった無理な投手起用により、短命に終わった投手の帽子がある。

斉藤浩行、片岡、榊原、朝山、徳本といった未完の大器に終わった選手の帽子がある。

長谷川、河内、川島、宮崎、遠藤、化けそうで化けなかったドラ1たちの帽子がある。

シェーン、ガードナー、デュプリー、ベイル、ブロックとなんとなくいたなという外国人選手の帽子がある。

太田垣、大石弥太郎、小阪、藤本和宏ら、筆者が良く知らず話に加えることができない選手の帽子がある。

色々な選手の思いを胸に、新井はひたすらに走る。

すでにベンチ入りは27まで埋まっている。残るイスはたったのひとつ。そして、新井と供に、福岡ドームを目指すのが、長内、西田、木村拓、嶋ら、各野手たちだ。

長内は、左のパワーヒッターとして、一発の期待が持て、西田は、天才的センスから、勝負強い打撃が身上。キムタクはご存知のとおり、どこでも守れるスーパーユーティリティープレイヤー。

嶋は新井と同学年の首位打者経験者。いわゆる赤ゴジラである。

新井に口で攻撃を仕掛ける。

「のう、新井よお。おぬしに代打が勤まるかのう」

「そうよ、新井よ。ワシらのように、代打の心得をお前が知っておるか」

「新井よ、同期のよしみとして忠告させてもらう。衣笠さんや、江

藤さんが先に着かれたそうだ。一塁、三塁のコーナープレーヤーは埋まっている。外野のオレに譲れ」

「新井くん、譲るなら僕にだよ。君は僕のように、どこでも守れるかい？　無理だよねえ。どこの守備をついても、必死に泡くう君が、緊急を要する守備要員なんて務まるわけがないよ」

ただし、今の新井に、精神的動揺を誘う手立てはさほどの意味をもたらさない。新井は屍たちを超えていく上で、情を捨てさるを得なかったのだ。

時には、命乞いする者もいた。

時には、騙まし討ちをしようとする選手がいた。

時には、不正に手を染める現場を目撃し、新井が通報して、お役御免としたこともあった。

今の新井には血も、涙も、人の縁もない。つてを頼り、広島に滑り込み入団したころの新井ではなく、広島を振り切り、愛しの兄貴の元へ一直線したあの年のオフの新井なのだ。

ジャパンベースボールクラシックという、とってつけたような大会に、いかほどの価値があるかはわからない。その控え野手として、参戦することによって得られる名声や、欲求の充足が、金銭的にも、社会的立場でも、満ち足りた今の新井を潤すことができるかどうかもわからない。

それでも、新井は、ベンチ入りを目指す。

「嶋、キムタク、西田、新井…」

すでに、新井の中で、年功序列は崩壊していたのだ。今の彼らは、先輩でも、気のいい同期でもない。新井の行く手を阻もうとする、敵でしかない。

新井は最終手段に打って出た。手にいっぱいになった帽子を、四人に向かって投げ捨てたのだ。幾重もの重なった帽子は、自らの足で、頂を目指す新井にとって、重荷でしかないのだ。

思いを背負いベンチ入りするはずでは？
カープの苦難と、栄光の歴史が流れている帽子だろうが？

いや、違う。しょせんキャンプ前に支給された帽子なのだ。積もる年月の行く末もなく、染み付いた汗と泥は、たかだか、ここ十日あまりのもの。

よく考えれば、たいした価値などないのだ。

だから、新井は帽子を撒き散らした。たかが帽子といえど、これほどの数があれば、大人四人ほどを埋まらせることはたやすい。

彼らは、追いかぶさる帽子を、払いのけて、脱出を図ろうとするが、四人がもがけばもがくほど、帽子の底なし沼の深みにはまっていく。のけた帽子が、相手に重なり合う悪循環に陥る。

カープの帽子とともに、貴重なバイプレーヤーは息を絶える。

「やべえ、これ後で、怒られるな。とくに西田さんは怖そうだ…」

新井は一抹の不安を感じ、彼らの生ける墓標から立ち去ったのだ。後は、ただひたすらにゴールを目指すのみ。先攻するものも、追うものもいない、一人旅。

新井は、思わずため息をついた。戦いが収束に向かう安堵の一息なのか、それとも油断なのか…。

後方から、足音がする。思わず、新井は振り返る。

「まさか、まだいたとは…」

栗原である。彼は、体調と相談し、ひたすらにペースを崩さず、脱落者を待ち、ゴールに向かう策を取ったのだ。

新井と栗原の宿命の邂逅。

「栗原…。お前は、どうしてこうも、オレの人生の前に立ちはだかるんだ」

「運命じゃないですか。新井さんのいくところに僕が行く。そういった運命ですよ」

「運命？　まさか、お前は阪神行きを狙ってないだろうなあ」

「オレはメジャー行きすよ。新井さん」
国内移籍を選択した新井にとって、メジャーという名前はずしりと重い。気後れしたような気分で、栗原をみてしまう。

ラストスパートまで体力を温存していた栗原は、ゴール寸前にスパートをかける。すでに、歩くのも苦しい新井は、栗原に抜き去られると、その距離は徐々に広がっていく。
右の大砲。一塁と三塁に限定される守備位置。若さが売り。キャラがかぶる栗原の先行は新井にとって最も許してはならぬこと。
悪魔に心を売った新井は、なんだってできる

福岡ドームに広がる暗雲

福岡ドームではすでに熱戦が繰り広げられていたのだ。鶴岡監督は、福岡の地であることを考慮して、ダイエー・ソフトバンクドリームチームで戦いに挑んだ。

捕手は城島。一塁は松中。二塁は井口。三塁は小久保。遊撃は川崎。左翼がバルデス。中堅が柴原。右翼が佐々木誠。ＤＨがズレータだ。

先発の杉内の左腕から、繰り出されるノビのある速球に広島変則打線はまる手が出ない。

一番打者のランスが打つそぶりをみせずあっさりと見逃し三振に取られたと思えば、グチグチと判定にクレームをつければ、三番達川は、のっけから打つのを諦めて、死球作戦に出る有様。

杉内が調整とばかりに二回で降板しても、斉藤和巳、和田と一線級のリレーで来るからたまらない。

威風堂々と投げ下ろす斉藤に、山本浩二が豪快な打撃で対抗と行きたいものだが、今日のミスター赤ヘル、到着が遅れたものだから、八番に座るお粗末さ。

八番の居心地が悪いのか、むくれたのか、頼みのミスターの打撃にさえがない。

こうなったら、二十一世紀の強化されたホークスの投手たちよ、早く引っ込めと願うしかない。

チャンスは早くも訪れた。ダイエー暗黒時代のエース、村田が登板すると、不安定な投球を見せる。大きなカーブに、スライダー、フォーク、シュートと多彩な変化球と百四十キロ中盤の速球を駆使するが、どうにも制球がままならない。

慌てたホークベンチは、左腕の吉田豊彦を投入するが、これまた輪にかけて乱調。

過度の走り込みによって、不振の先発北別府、後続の池谷、佐伯

らの乱調で、こしらえた七点の得点差を詰める絶好の機会だ。
ところが、打順はこのチャンスにクリーンナップの達川に回ってきてしまう。
「かっとばしてくるけんね」
意気揚々の達川であるが、さすがに古葉監督に呼び止められる。
「代打？　ワシ三番ですよ？　三番に代打って、もう少し、信頼頂けたらとね、あのね、思いますけんのう」
「右の恰好の代打が、今到着したんだ。タツ、悪いな。替わってくれや」
「古葉大監督、直々のお願いとあっては、男達川、文句はありませんわあ。それもねえ、全日本の代表だもんね」

今、到着したばかりの右の代打。しかも、全日本の代表？　ももも、もしかして新井？
のっそりとベンチの奥から姿を現した大男。
「達川さん、オレ、日本代表じゃないすよ。候補止まりですよ」
「おうそうじゃった、合宿で落とされたんじゃった。栗原、絶対打ってこいよ」
ベンチ入り最後に滑り込んだのは、栗原であった。ホークスは、少しでも局面を有利に展開したいと、投手を左の吉田から、右の若田部にスイッチ。
ところが、殺気たった栗原には意味をもたらさない。ろくに練習もしていないのに、初球から、フルスイング。打球は、聳え立つ高いドームのフェンスを越える特大の一発。
満塁弾となり、差を一気に詰める。
ライバルの栗原の働きを知らず、新井はまだゴールをひたすらに目指している。
栗原の一発が飛び出した瞬間、新井のスパイクの紐が切れた。くつの紐が切れるということは、新井にとって、不吉な知らせ。
思わず、ケータイで試合速報を確認すると、栗原の一発が飛び出

たことが記されている。

新井は悔恨する。　最終手段とばかりに、

「おい、栗原、お前、ベンチに滑り込んでもいいことないぞ。お前はきっと最年少、ベンチで小間使いの役目が待ち受け取るぞ。カープという、低い、低い、お山の大将につかる今のお前じゃあ、耐え切れんぞ」

新井は口で栗原を蹴落とそうとしたが、効果なし。金本の兄貴だったら、もっと上手いことといえたんだろうなと、自らのボギャブラリーのなさを嘆くしかない。

離されて、離されて、やがて栗原の姿が消えるころになると、新井も諦めたのか、　急ぐでなく、完走モードに切り替えたのだ。

「完走者には、景品が出るそうだ。それもらうか」

すっかりと、散歩モードに入った新井は、九州見物気分で、てくてくと歩を進めていたのだが、栗原の働きに、闘志が再燃。ふたたび、走り出したのだ。

試合は栗原の一発を契機に、もつれ始めていた。一打逆転のチャンス。打者は、持ち前の若さと身体能力を生かし、スタメンに殴り込みをかけた、赤松だか、天谷。

ところが、赤松だか、天谷だかに、荷は重く、ここまでヒットどころか、ろくにバットにも当たっていない。

代打に打たそうとも、ゆがんだ戦力分布。控えにもろくな選手どころか、野手すら残っていない。

そこに、新井が、ようやくの到着。留めなく流れる汗をタオルで拭い、完走記念に、創建ホーム（広島ローカル?）提供のノートをもらい、少しがっかりと来たところ、大下が現れる。

「新井、よう来たのう」

「あ、大下コーチ」

「代打じゃ、代打」
「え、代打？　もうベンチ入りはとっくに締め切りなんじゃ…」
「そんなんかまうか、こんなもんしょせんは練習試合じゃ。ひっそりと、投手の名前を一人消して、お前の名前を書き込んだんじゃ」
ちなみに消された投手は川端。そもそも、ホークス側には、今日のベンチ入りメンバーは白紙で手渡されおり、総勢二十八人になるまで、広島選手の出場が許される特別のルールが了承されている。
ここまで二十六人の出場。本来、残りは投手二人（もう一人は清川）のはずであったが、新井の到着を知った大下が勝手に書き換えたのだ。

「で、でも、準備が…」
「どうでもええ、健太（栗原）も、準備なしで、駆けつけて、ホームラン打ったんじゃ」
栗原の名前を出されたら、新井も引っ込みがつかない。誰が相手投手かも知らず、バットケースから、適当なバット（ちなみに、町田のバット）を握り、打席に向かう。
九回表、一打逆転の代打新井。ホークスの投手は、かつての新人王、左腕三瀬。
愛しき兄貴にとんでもない危険球を投じた三瀬である。新井は否が応でも打つしかない。
ここで、打ったらまるで、劇画だ、映画だ、ドラマだ、舞台だ、小説だ。栗原の一発など吹き飛び、新井が全てを独り占めだ。
初球、空振り。ボールが見えていない。仕方ない突然の起用。まだ目慣らしの段階さ。
二球目、空振り。最後の一球で、決めるのがヒーローだよ、う、うん…。
三球目、空振り三振。世の中そんな上手くいくことなく、試合は終わる。

新井が四番だったから、北京の惨敗につながったんだ。そんな陰口が聞こえる中、広島地元メディアは、駆けつけた栗原の働きに群がる。

誰にも見向きもされない新井は一人ぽつんとうなだれる。

「これじゃあ、出ないほうがよかったよ」

同じく駆けつけ出場した栗原と新井の明と暗。

完走記念に貰い受けた創建ホーム提供のノートに、今日の悔しさを、存分に撒き散らし、新井の一日は終わる。

いきなり推理もの

小林至探偵団。

球界に突如としてはびこる謎を解くために、結成された国立大学出身のプロ野球選手の一団である。

小林の他、東大の松家、遠藤。筑波大の杉本友、渡辺正和、滋賀大の関口雄大、神戸大の塚本で構成され、新治と井手を顧問とする。

今日の依頼は、阪神とロッテのオープン戦が行われる高知市営球場に仕掛けられたとされる爆弾の在りかと、脅迫をしてきた犯人を突き止めることである。

ロッテの先発は清水直行。阪神の先発は藪。二人とも、生き残りをかけての先発であったが、バックネット裏はそれどころではない。なにしろ爆弾を仕掛けたの脅迫が届いているのだ。

しかも犯人は球場内の観客だという、犯人と思わしき男がかけてきた電話には確かに、球場の声援や、場内アナウンスが混じっている。

どうやら、男がいうとおり、犯人は球場内にいることに、間違いはないようだ。

選手と観客の安全を考えて、大会事務局は、試合の中止を要請したのだが、調整と、選手選考の見極めの最終段階、どうしてもやりたいと両球団が譲らずに、試合は定刻どおり挙行された。

いだずらと軽く考えたのだろう、事務局も警察に問い合わせて、普段の倍の警備を要請し、もしもに備えてはいるが、どこか、ありえないことだと安閑としている。

ところが、犯人は本気である。まず手始めとばかりに、小宮山に催眠術をかけたの電話が来る。

催眠にかかった小宮山はこれから行われるテレビ局のインタビューで、赤ちゃん言葉を話すと犯人はいう。

まさか、あのマウンド上の哲学者というべき小宮山が、である。赤ちゃん言葉でインタビューを受けるわけがないと、関係者は、たかをくくるのだが…。

新庄が在阪ラジオ局向けのインタビューを受けている。

「いいしょ、これ、いいっしょ？」

新庄がＪＢＣ、それもこの試合限りの特別用リストバント、それもまた奇妙なデザインを見せびらかすと、これは新庄作ではないが、気に入っているから、身につけていると答える。

その横でたった今、投球を終えたばかりの小宮山のテレビインタビューも行われているのだが、

「そうでちゅ。上手く行きまちた。これで、ボビーちゃまちゃまに、アピーユできたとおもいまちゅ。もちゅろん、たいきゃいほんちゃんでもなげりゅつみょりでちゅよ」

犯人のいうとおり、赤ちゃん言葉でインタビューに答えているのだ。新庄ならば、冗談ですることはありえるが、繰り返しになるが、小宮山が、である。

さすがにこれはありえないことだと、犯人は本気だと、呼び寄せられたのが、探偵団だ。

小林至は、ソフトバンクのフロントも兼務しているだけあって、腰が低い。

『小林至探偵団』と印字された名刺を渡すのにも、実に懇切丁寧だ。

探偵といえば、クールと世間のイメージは懲り固まっているが、実際は、自営業。

顧客に失礼なことがあってはならぬのだ。

「要件はお伺いしました。これは本気ですよ。私、小林は、探偵業を始めて、まだ二ヶ月。これが初めての依頼でありますが、経験上、これはいたずらとはとうてい思えないのです。で、犯人から連絡はその後おありで？」

「ふざけたことに、表裏が終わるたびに、連絡が来るんです」

「ほう、おや、今、河本が八木選手を打ち取った。ちなみに、河本は僕のドラフト同期で、同い年なんですよ。え？　そんなことはどうでもいい？　これは失礼。ところで、イニングが終了して、攻守の交代だ。犯人から連絡が…」

電話が鳴りひびく。球場関係者が受話器をあげようとするが、

「待ってください。うちのものに出させます。杉本くん、取りなさい」

「はい」

命令どおりに、杉本が受話器をあげる。杉本は筑波大の理系卒のイメージから遠く、実に気が短い。彼が犯人からの連絡を受ける役とするには、少々、心配がよぎる。

「こちら、球場案内室だ」

「ふへへへ、村山です……どの村山かって？　ふへへへ、ミスタータイガース、ザトペック村山にきもうてますがな……。吉田じゃありませぬぞ…フへへ。すしを五十人前届けてもらえますがな？」

「ウチは寿司屋じゃねえ」

「ふへへへ、間違いましたわ…こりゃえろうすんまへん…ふへへへ」

がちゃ、つーつー。

どうやら、ムッシュ吉田が、村山の名前を騙り、過剰に寿司を注文しようとしたいたずらの間違え電話のようだ。

「ふざけやがって」

杉本は受話器を叩きつけるように、置く。

「まあまあ、杉本君、そう熱くなりなさんな。間違え電話くらいで…。彼はね、頭は切れるんですが、かっとなるところがあってねえ。こういう役目には、不向きなんですよ」

おまえが指名したんだろう。

また受話器が鳴りひびく。

「今度は松家君出て」

「はい」

東大出身最高の素質を持つと囁かれる松家が電話に出る。

「もしもし、球場案内室です」
「うふふっふ、どうも、どうも。誰かって？　僕ですよ、僕…。犯人ですよ…。僕がどこにいるかって？　何度もいってるでしょうに、この球場のどこかだよ、どこか…。捜して御覧なさい…。見つけられるかな？　さてさてお楽しみはこれからだ。まずはテレビをつけてみてくれ。ＮＨＫだ。国会中継がやっているだろう？　そろそろ首相の答弁の時間だな」
　松家が手招きで、テレビの電源を入れるように、支持。探偵団最年少の関口が、球場内モニターとは、また別のテレビのスイッチを押す。
　高知はチャンネル数の関係か、ＮＨＫがついていた。
　犯人のいうとおり、国会中継のさなかだ。
「つけたぞ、たしかに今首相が答弁をしている。それが何だ？」
「漢字を読み間違えるぞ…くくく」
「馬鹿な、一国の首相が漢字を読み間違えるだって？」
「ありえんとおもうだろう？　それがありうるんだな。この塀際の魔術師の手にかかればな」
　首相の答弁の時間。机上にある紙を読み上げるのだが、つっかかりつっかかりで、進みが悪い。
　議事堂には、容赦なく、野党から、汚い野次が飛び交う。
　そして、遂には…。
「ええー　年度末の、としひ…」
　ありえない読み間違いに、待ってましたと野次が飛ぶ。
「おい、なんだよ、としひって。歳費だろう、歳費」
　一国の首相にあるまじき失態に、失笑が漏れる。
　その一方、笑いもなく、凍りついたのが、球場案内室だ。
　犯人の予言どおり、ことが運んだのだから。
「どうだ、みたか…これが、塀際の魔術師の力さ…。まさか、総理大臣様が、小学生でも読める漢字を読めないなんて、ありえんよな？　ところが、オレの魔術にかかればこのとおりよ」

もはや、いたずらと切り捨てておくことはできない。
応対する松家の声のトーンも変わり、緊張が混じる。
「よ、要求はなんだ、金か？」
「ようやく、オレの力を信じてくれたかい？　欲しいのは金？　違うね、僕が欲しいのは、スリルと絶望さ。爆発すれまで、指を加えてみとけよ…。それとも、爆弾のありかがわかるかね？　くくく」
「おまえはどこにいるんだ？」
「それをいっちゃあ、ゲームにならんだろう…。オレは球場のどこかにいる……。オレを先に見つけてもいい、爆弾を、先にでもいい。まあどっちも見つからないだろうね…ククク…」
深くソファーに腰をかけていた小林が、すくっと立ち上がり、松家から受話器を譲り受ける。
「電話はかわった。僕は、小林至探偵団の団長の小林至というものだ。元ロッテの東大君といえば、わかるだろう」
「ロッテの投手？　知らないね。くくく、そんなに有名な投手なら、この試合に出ていないとおかしいだろうよ…。くくく」
知名度だけには自信のあった小林は、少々がっかりときたのだが、気を取り直して、
「犯人よ、君は絶対に、小林至探偵団の名にかけて、捕まえてみせる。覚悟しなさいよ」
「くくくく、無理だよ、無理…。ほら、こうしているうちに、試合は進行しているよ…。試合終了ともに、ドカーンさ…。くくく、早くしないとね、みんな木っ端微塵さ…。くくく」
はたして、小林至探偵団は、犯人も見つけることができるのか？
はたして、ろくに推理小説も読まないのに、事件物が書ききれるのか？
続きが書けず、次回、違う話で逃げやしないか？　乞うご期待だ。

ブリーデンの放った打球は、三塁線への強烈なライナー。初芝が不恰好に横っ飛びをするが、追いつけずに、打球は、ベースに当たり、ファウルゾーンに切れていく。

ファウルゾーンにいたボールボーイが思わずキャッチ。どうやら、ファウルと勘違いしたようだ、特別ルールによりエンタイトルツーベースとなったが、観客はどっと沸く。

「おいおい、ボールボーイさん。いくら陽気がいいからって、居眠りしちゃあいかんよ」

「携帯禁止だぞ、坊主！！　めったに球はこないけど、仕事中だぞ！」

オープン戦だけに暖かい野次が飛び、スタンドはのんびりとしたムード。

ボールボーイは審判にお目玉をもらい、ばつが悪そうに、そのまま懲罰交代なしに元の位置につく。

小林至が、的確に指示を出す。

「渡辺君、君は、関口君や、新入りの塚本君とともに、球場内のお客さんを虱潰しに当たってくれ」

「お言葉ですが、団長。わたくしたちは、あくまで、一営利業。お客様から、個人情報を聞き出すとのはいかがのものかと…。その手のものは、権力を行使できる警察に任せておいては…」

「渡辺君、君は僕より年が上なだけあって、よく意見するね。あのね、僕なのよ。団長は。僕の命令が絶対なのよ」

「それは重々承知しておりますが、個人情報保護とうるさい昨今の情勢をかいま見ますと…」

「う、うるさい。僕に従えばいいんだ。口答えすると、ソフトバンクに復帰させて上げないぞ」

今度は、ソフトバンクのフロントの立場を誇示。

「わかりました…」
　渡辺は切り札のカードを切られては従うしかない。
「杉本君と松家君は、球場内の関係者を当たってくれ。いいかい、どこに犯人が潜んでいるかわかったもんじゃない。警備員に化けてるかもしないし、ウグイス嬢かもしれん。妥協するんじゃないよ」
　一人残されたのが、遠藤だ。日本ハムのベースボールオペレーターの役職につき、将来のＧＭと期待されている、フロントの若きホープだ。
「あのう、僕は何をすればいいんでしょうか…」
「遠藤君、君は、僕と、ここで推理する役目だ。散らばったやつらと違って、君は次代の球界をになう存在だ。特別に、僕の推理の補助役を命じる」
「事件は球場内で起きているんですよ…。案内室で起きているんじゃありません」
「試合は球場で起きている。そして、案内室には場内モニターがついている」
「そ、それが何か？」
「いいかい、攻守交替ごとに、犯人から連絡が来るんだ。これが何を意味しているのか、わかるかい？」
「あ」
「そうだよ、試合に関わっているものだ。それも深くね。試合の動きがよく見渡せるのが、このモニターってわけさ。窓の外からは、球場内も一望できるしね。わたしは、この案内室で犯人を見つけ出す」
「深く関わっているって、ま、まさか…」
「そうだよ、僕は、選手か監督と睨むね。審判の可能性も捨てきれないけど、彼らは試合集中している。しかも、攻守交替といえど、彼らはやることがある。とても攻守交替の短い間に行動に移せない。それに、審判は常に、公衆の面前に監視されている、下手な行動は取れないよ。となれば、選手と監督、コーチ、だね。彼らは、攻守

交替を息抜きに使うことができる、しかもオープン戦のような入れ替えの多い試合は、暇になる選手が多い。攻守交替のごたごたを縫って、我々と連絡を取っている。僕はそう推理する」

「ま、まさか」

「そのまさかさ。選手は注目を常に浴びていたいんだ。それも、昔大スターとちやほやされていた連中ならなおさらにね。その渇望が、おかしな形に表れると、犯行予告、つまりは劇場型犯罪とゆがんだ形になるわけさ」

「なるほど」

納得すんなよ。

「いるだろう、この試合にも、昔大スターで、今落ち目なのが…。例えば…。今、打席に立っている彼…なんてその典型だよ」

打席には、いつにもまして、妙なリストバントをつけた新庄がいる。

「新庄さんが、ま、まさか…」

「いやいや、新庄も、あのころのように輝きたいんだよ。引退当時のように、群集の注目を一手に集めたいんだよ。それには、この大会を利用するのさ。新庄型パフォーマンスの一種さ」

「そ、そんなに、注目されてましたっけ？　この大会…。アクセス数も、話が進むにつれて落ちているんですよ…」

「アクセス数何をいっているのかい？　僕はなにも新庄だけが怪しいといっているわけじゃないさ。容疑者は他にもいる。それどころか、ベンチにいる両軍の全てが容疑者といってもおかしくない。例えば、ボビー、バレンタイン。２０１０年からの契約延長を脅しにかけるかもしれない。小宮山さん、彼でもおかしくない。二浪で早稲田に入学の頭脳を生かして、僕ら東大に挑戦状を叩きつけているかもしれない。それに、小宮山さんなら、しっくりとくるだろう？」

「あ、さっきのインタビュー…」

「そうそう、あれはただの自作自演なわけだよ。まだまだ容疑者はいる。伊良部だ。伊良部にそんな犯行なんて思いつくかだって？

伊良部を馬鹿にするんじゃないぞ。彼と僕は一緒にプレーしたけど、これが意外と、頭が切れるやつだったんだ。がきデカみたいな顔してね…」

「あれですか、イルカは意外と頭がいいとか…。そんな感じで…」

「伊良部を獣と一緒にするんじゃないよ」

「すいません」

「落合さんだって怪しい。落合さんは、学生時代、野球部をさぼっては映画館に通いつめたほどの映画マニア。映画好きがこうじて、犯行に走ってもおかしくないな。その手の映画もたくさんみたことだろうし」

「……」

「なんだい、遠藤君。僕の推理に、ぐうの音もでないのか、呆れているのか」

「い、いえ…。あ、それなら、榎本さんも、あ、怪しいですね」

上司に話を合わせる遠藤君。出世するタイプだ。

「いいところついたね。榎本さんも怪しいんだよ。奇行で有名だった人だ。部屋に立て篭もっては、銃を乱射したりね。そんな榎本さん、爆弾仕込んでも不自然でもない。遠藤君、さすが、僕が見込んだことだけはあるな」

「いえいえ…」

「僕がね、中でも怪しいと思っているのが、平井、高沢、西村の三外野手なのよ。彼らは、いずれも首位打者経験だけど、まったく目立たない。ならば、いっそ、目立つこの大会で、爆破予告をして、世間に存在を知らしめようと思ってもおかしくないな」

「あの…さっきからいってますが、この大会、もう四十人くらいしかみてないんですよ」

「なにわけのわからぬことを…。いいかい、スタンドをみなさい。平日の昼間にもかかわらず、老若男女が埋め尽くしているじゃないか。これだけで五百人はいるよ。昔の川崎球場風に発表すると、八千人だ。どこから、四十人という数字が出てくるんだ」

「あ、あの…。一話目は六百人ほどみていただいているんですが、二話目に、はやくもガクンと半減して、その後、緩やかに落ちて、シリーズ物が続くと、これまた急減して、八十話になっても、開幕しない現状、もはや四十人ほどしかみてないんですよ。この大会…」

「もういい、なにがいいたいのかわけがわからない。君の推理を聞かせてもらおうか。阪神のベンチの方の容疑者を積極的にあげつらってくれ。僕は、ロッテOBだけに、ロッテの容疑者あげるのは遠慮がないけれど、阪神の方は部外者でそうもいかないんだ。そっちは君に任せたよ」

「阪神、でで、すか？　阪神…。久慈…。久慈選手あたりはどうでしょうか…。電話から漏れた声は、幼い感じがしましたし…。それならば、あどけなさが残る久慈さんあたりかなと…」

「馬鹿をいうなよ、遠藤君。久慈は若返ったとはいえ、もういい成年だよ。声変わりはとっくのとうに果たしている。声に幼さなど、残るわけがないよ。まったく、僕が見込んだというのに、君はデタラメな推測と皆目不明の閲覧者を持ち出して…。試合だよ、試合。ヒントは試合の中にあるはずだ。じっくりと観戦して、ヒントを見つけ出そうじゃないか」

小林と遠藤は一転、押し黙って、テレビを凝視する。

「何が起こるんでしょうね」

「爆発だよ、爆発。ぎっと睨みつけろ、爆発の先を探すんだ」

「爆発したら、おしまいじゃないですか」

「……。容疑者だ、容疑者を呼べ。ゲームから退いたのから片っ端だ」

容疑者の用意できてるぜ

第一の容疑者。のっけから、やっかいなのが登場だ。
「久しぶりだな、伊良部君…。おっと、伊良部容疑者と呼ぶべきかな…。我々探偵団以外に球場にいるもの全てが容疑者なんだ」
「久しぶりだ？　誰や…あんた」
「ふふふ、お忘れかな、伊良部容疑者…。小林だよ、小林至…」
「小林？　だから誰やって」
「ほら、ロッテで同僚だった…」
「ロッテに小林ってヤロウ、山ほどいてな。あいにく、どれがだれだがわからないんや」
「ほら…東大出で話題になった…」
「ああ…アンタかい…すっかり太って、わからなかったよ」
「伊良部容疑者にはいわれたくないね…」
「ところで、なんで、オレが容疑者なんや」
「ふふふ、僕と君の仲だ…。さあ、楽になるんだ。爆弾を仕掛けた犯人は私だと、白状しなさい。警察沙汰は二度は勘弁だろ？　もしも素直にげろったら、警察に差し出すのは勘弁しておくよ」
「爆弾？　なにをわけのわからんことぬかしておるんや」
「ふふふ、証拠は山ほどあるんだよ…。さあ遠藤君、ひとつずつ洗い上げて、容疑者を追い詰めてくれ」
結局、遠藤に任せきりだが…。
「えええ？」
「何を戸惑っているんだ。さっき、僕があげた伊良部犯人説を明確に裏付ける証拠を羅列するんだ」
「団長は、あの、伊良部さんは意外と頭がいいといったきり…」
小林にはなんの根拠も裏付けもなく、伊良部を真っ先に呼んだの

だ。これには、伊良部は当然のように切れる。
「なんや、人を勝手に呼び寄せて、犯人扱いしやがって、オレは不動産じゃないつうの。このイナゴどもが、お前らに、ミケランジェロの気持ちがわかるのか？　ええ、こら、どあほどもが。そのペン、へし折ってやろうか？」
「まあまあ、伊良部容疑者、何も君を犯人と決め付けたわけじゃない。あくまで容疑者の一人として呼んだんだ」
伊良部はおさまるはずがなく、小林がひじ欠けていたステンレス製の机をひっくり返して、部屋から出て行ったのだ。
遠藤と二人がかりで、机を直すが、小林は不満ありあり。
「遠藤君、君が伊良部が怪しいというから、意を汲んで呼んだのに、根拠ひとつ出せないとは…」
「え、え？　あの、団長が…」
「言い訳はいいよ、言い訳は成長の敵だよ、君。僕のように出世しないよ、いくら東大出のブランドをなびかせたって」
身勝手な小林団長、果たして犯人は検挙できるのでしょうか？

敗戦処理から得るものは何もない

「小宮山さん、なんです、さっきのインタビューは。コミさんらしくない」
「おう、ジョニーか。いやね、あれはな、男と男の約束なんだよ」
「約束？」
「入り待ちのファンの坊主とな、今日の試合で、ひとつでも四球を出したら、赤ちゃん言葉で、インタビューに答えるって約束しちまってなあ。精密機械のオレが予定の一イニングを四球ゼロなんて、お安い御用だ、って安請け合いしちまってなあ。結果、ラインバックに一個出しちまって…。男・小宮山としてはファンとの約束は守らんとな」
「へえ、コミさんもすか」
「その口ぶりからすると、なんだ、お前もか」
「オレは本塁打浴びたら、なまらないように答えるって約束させられましたよ」
「で、被本塁打なしのお前はなにかもらえるのか？」
「いけね、オレが勝った時の約束忘れてた。あの坊主捕まえて、なんかもらわなきゃ」
「まあいいじゃないか、本塁打を浴びなかったとはいえ、藤本や鳥谷なんぞに打たれて、三失点のお前だ。イーブンでことにしといてやれよ」
「そうですよね…アハハ」

「小宮山です…なんだ、至、小林至じゃないか、なにやってるんだ、こんなところで」
「時間がないんだ、手短にお話します。僕は探偵で、小宮山さん、あなたは容疑者だ」
「容疑者？　あああれか、爆弾騒ぎのか？　なんだよ、オレまで疑

われてるのかよ」
「疑われる材料はありますよ、さっきのインタビューだ」
「あ、あれか？　どうだインパクトあったろ？　新庄のようなキャラがやってお当たり前すぎて、意外性がないんだ。オレのようにインテリで売ってるのがやると、逆に効果的なのよ。至、お前もやってみたら？　東大君のキャラに反して、人気出るぜ。ソフトバンクのＣＭのあの一家に仲間入りできるかも名、アハハ
「あのインタビューは犯人が予告したとおりだった」
「ほう…そうなのかい」
「予言者の予言は、たいてい当たり前のことか…」
「自作自演かのどっちかだな」
「さすが、伊良部と違って話が早い。小宮山さん、いや、小宮山容疑者、つまり、全ては、あなたの自作自演の犯行なんだ」
「フハハハ、残念だな、東大出の推理はその程度なのかい？　オレはいたずらに乗っただけだよ、かわいいいたずらにね。爆弾云々もいたずらだろ、騒ぐことじゃない」
「しらばっくれるな、まだまだ証拠はあるんだぞ、遠藤君」
まとも遠藤頼り。
「えっと、証拠ですか、証拠…」
遠藤がまごつくと、室内の電話が鳴り響く。
「遠藤君、取りたまえ」
「は、はい」
遠藤がいわれるがまま受話器を取る。
「くくく、次の予言だ。全ては塀際の魔術師の通りにすすむ。ロッテの監督、バレンタインとかいったかな…。厳格な姿勢を崩すことのない監督が、おどけるぜ、次のイニングの交代を告げるときだ。よくテレビをみろよ、くくく」
「なんだって、バレンタイン監督がおどけるだって？」
遠藤が叫ぶ、小林が乗りかかる。
「バレンタインが？　ありえない、あの監督がおどけるなんて、天

地がひっくり返ってもありえない」
　モニターにバレンタインが写し出される。審判に選手交代を告げたとき、たしかに、ウインクを交えて、客の反応をもてあそぶように、おどけている。
　遠藤と小林がそろって声を上げる。
「お、おどけたー、また予言の通りだ」
　小宮山だけが冷静に、分析をする。
「おいおい、ボビーがおどけるなんて、普通のありふれた光景じゃないか。それに、今の電話でわかたろ？　オレが犯人じゃないこと。やっぱりただのいたずらだったこと。このふたつが」
　小宮山はそそくさと退席しようとするが、小林が引き止める。
「待て、複数犯の犯行じゃないか？」
「バカバカしい、東大コンビさん、せいぜい、推理ごっこを楽しんでくれ」
　引止めを無視して、小宮山は退席。
　途方にくれる小林。
「また、捜査は一からやり直しだ…」
「頑張りましょう、団長」
「次の容疑者は、小川を呼んでくれ、あの人も、八十八年の最多奪三振投手だ。大会に参加しているだろう？」
「あの小川投手は、さすがに召喚できないと、当局に止められています」
「そうか、ますます袋小路だ」

「はい、こちら小林だ。なんだ、杉本君かい、どうだい観客席の中に怪しいのいたかい？　モノでも人でも」
「あの、それがですね、いたどころじゃないんです」
「どういうことだ？」
「オレは、一塁側中心に回っているんですが、怪しい人物やモノがわんさと出てきてるんです」

「なんだって？　爆弾はあったのか？」
「いや、爆弾まではいきないんですが、発炎筒だの、爆竹だの、はては刃渡り何十センチの包丁だの…」
「まさか一塁側って？」
「阪神の応援席です」
「なるほど、それは仕様だ。事件とはおそらく関連性はないだろう。あまり刺激しないように立ち去ってくれ。くれぐれも怪我のないように」

犯人からの予言電話は続く。
「くくく、次の回、阪神の遊撃手、吉田が守備位置につくときに、地べたに落ちている、小銭を拾うぞ…くくく」
またも予言どおり、吉田は三塁ベース付近で、十円玉を見つけると、我さきと拾い上げて、大事そうに、ポケットにしまったのだ。
往時さながらの吉田の守銭奴ぶりに、オールドファンは歓喜余ってか野次を飛ばす。
「お～い、吉田。おぬし、あいかわらず、こすいのう。その十円はなあ、ボール係りの小僧のポッケから落ちたんじゃ、ワシみとったぞ、返してやれや～」
野次には手馴れたものの吉田。
「落としたら、誰かに拾われる前に拾わんとダメなんです。少年に人生の厳しさを教えてやったんですわ」
居直る図太さをみせる。
またも予言的中、はたして、犯人はどこに潜んでいるのか？

「これだけ、探しても爆弾ひとつ見つからない、やっぱりね、いたずらだよ。最初から怪しいと思ってたんだ。この手のはたいてい愉快犯のいたずらに終始するんだ。まったくとんだ茶番に担がれたもんだよ、思えば、小宮山さんのいうとおりだ。東大出は難しくことを考えるたちだから、時に深みにはまるんだ。早稲田くらいのていどだと、柔軟に物事を考えるから、意外と真実にたどり着きやすいんだよ。おもえば、首相が漢字読めないのも、ボビーがおどけるもの当たり前のことじゃないか、バカバカしい」

小林は投げ出すが、遠藤は一人、真実の光を探している。

テレビには、新庄の打席が写し出されている。入れ替わりの激しい試合の中、一人、フルイニング出場のハッスルぶりだ。

遠藤の鈍らない眼光は、ある一筋の光明にたどり着く。

「あの、団長」

「なんだい、今、僕は腹ごしらえにカップラーメンを食しているところだ」

「新庄さんのリストバント、何か違和感を感じません？」

「なにが、違和感だ。君はヒルマンかい。特別仕様だろ？　さっきインタビューでいってたじゃないの？」

「いえ、何か、必要以上に厚手に感じるんですよ、まるで、中に何かが入っているような…」

「中に？　何が」

「あの、バ…」

「バ？　バークレオ？　バンチ？　バッキー？　バチュラー？　外国人選手が入ってるわけないでしょ」

「いや…バク」

遠藤のヒントに、はたと気がついた小林は、すくっと立ち上がる。

「そうだ、爆弾だ。小型の爆弾が仕掛けられているんだ。う〜む、これぞ探偵の吟味だ。窮地一点、頼りない助手の何気ないひとことも聞き漏らさず、そこから煩雑な推理のあみだをたどり、正確にたどりつく…。いやいや、私も名探偵の仲間入りだ」

「あのう、僕がほとんど…」

遠藤の手柄にさせずと小林は勝手に物事を進める。

「おい、遠藤君、これから、塀際の魔術師の種明かしの時間だ。探偵団と球場関係者を集めるんだ」

球場案内室に集められた探偵団と関係者を前に、小林が得意げに、推理を始める。

「球場内のどこを探しても、爆弾が見つからない。それはなぜか？爆弾はグランドにあるのだから、球場の施設内のどこを探しても見つかるわけがない」

遠藤がたどり着いたと知らずに、松家は羨望のまなざしで小林にふる。

「グランド内など衆知の場所で、爆弾なんて仕掛けるスキがあるのですか？」

「仕掛けたのは、グランド内ではありません。球場の外で仕掛けて、それをご丁寧に仕掛けられた者がグランドの中まで、運んでいるのです」

小林の名推理に球場関係者も固唾を飲む。

「グランド内に運べる？　それじゃあ、犯人は選手か、コーチ、監督、審判ら関係者の誰かというのですか？」

「そうです、ところが、彼らは加害者であり、被害者なのです」

「たとえば…リストバンド。あれだけの厚さがあれば、最近の技術では十分の爆弾を隠せます。いますよね？　今日はいつもと違うリストバンドを身に着けてプレーをしている選手が？」

新入りの塚本は初々しい。

「あ、し、新庄さん？」

「そのとおり、新庄です。たしかに、新庄はイニングの間のテレビ局のインタビューで、今日は特別仕様のリストバンドをつけているといいました。しかもです、彼のデザインでない。つまりは誰かからのもらいもの。おそらく犯人が新庄が好みそうなデザインのリストバンドを作りー」

「その中に爆弾を隠して、新庄にプレゼントしたと。球場入り口あたりで？」

「そのとおり、まんまと新庄はリストバンドをはめてプレーをしております。犯人は、なにかの弾みで、リストバンドに隠された爆弾が爆発するのを待つだけです。新庄はサーカスプレーが多い選手だ。守備に、打撃に、走塁に、一試合じっくりと待てば、やがてリストバンド内の爆弾は爆発をする…。例えば、本塁打を打って喜んだはずみにドカーンとか…」

小林の推理どおり、爆弾は新庄のリストバンドに仕掛けられていたのである。犯人がファンを装い新庄が好みそうなドハデなデザインのリストバンドをプレゼントし、まんまとかかった新庄は早速それをつけてプレーしている。

小林が遠藤に指示を飛ばす。早速、試合を止めて、新庄のリストバンドを回収するようにだ。ところがその矢先、新庄がダイビングキャッチを試みた際に、あいにくリストバンドが地面に触れてしまい、それが爆発の引き金になったのだ。

時すでに遅く、小型とはいえ、恐ろしく性能のいい爆弾、けたたましいほどの爆音とともに、球場もろともふっ飛ぶ。

選手は？　観客は？　探偵団は？

全てがチリになったのだ。

生存者ゼロ。犯人も被害にあったのだが、今となっては、誰が犯人だかわからない、

二球団の主力選手がいなくなったのだ。

ジャパンベースボールクラシック、開幕間近で　大会の存亡の危

機。

この一大事に規定など意味はない。

大会が特別に利用を許されている蘇生センターは、被害者の蘇生を許した。

爆発以前からの物故者は二度目の蘇生をし、大会終了後、すみやかに天国に送り出すことは変わらず、爆破により死去したものは、蘇生するとともに、特別に大会後の生存を許可した。

これにより被害者、全員はあっさりと生き返ることになったのだが、一人様子がおかしいのは、新庄である。

パピプペポしかしゃべれないのだ。また新庄のいたずらと思い、誰もが気にも止めなかったのだが、パピペペポ語で応じることから、藤田平が切れて、また正座させられたのだが、反省の色どころか、パピプペポしかしゃべれないのだ。

さすがにこれは異常だといぶかしがり、検査の結果、言語能力の低下が認められた。

応急措置の必要性が論じられたのだが、、翌日、バビブベボもしゃべれるようになり、日に、日に、言語能力の良化が見られることで、いったん放置されることになった。

「ベプ、ベプ」

北別府のことをさしているのか、別府温泉に行きたいのか、別府修作に会いたいのか、真意はわからないが、とにかく症状は回復に向かっていることは確かだ。

なお、探偵団、マスコミ、球場関係者、観客など巻き込まれた人間も蘇生されたのだが、一人だけ、データがデタラメで、生き返れなかったものがいる。

ボールボーイの少年である。履歴書に書かれた住所、氏名などまったくウソで、遺体の引き取り先も見つからないありさまだ。

確かな生前のデータが見つかるまで、少年の遺体は、遺留品のケータイ電話とともに、安置されている。

そのケータイ電話の画面は、《検索、小林至》のままで止まっている。

粉飾気味高地のキューバ打線

仰木がまたとんでもないことを考えついたのだ。

日本ハムとの最終調整試合で、選手を百人起用するアイデアをひねり出したのだ。

日本ハムの監督の大沢に打診したところ、こころよくＯＫが出されただけでなく、なんと、日本ハムの側も付き合うのことだ。

前代未聞の百人ベンチ入り野球がここに始まる。

さすがに、百人の選手が集まると、ロッカールームは足りるわけがなく、年功序列と野球界の慣わしにしたがい、先輩組の阪急選手はロッカーを使用して、後輩格のオリックス組は、外で着替えをすることに。

田口は心配顔だ。

「なあ、また仰木のおっさん、変なことはじめてなあ。困るなあ、しかし。オレなんて、最後のアピールの場やなのに、百人も選手がいたら、ろくな出番ないやろ。どうや、イチロー、お前の打席も一打席が限度やぞ」

田口の横で着替えをしているイチロー。ちょうどパンツ一丁になったところだ。林家ペーパー夫妻から送られたピンクの柄のブリーフだ。

「大丈夫ですよ、ボクくらいになると、その一打席で結果出せますから」

「お前に聞いたオレがバカやった。お前は、レギュラー当確やもんな。オレはボーダーギリギリや」

「田口さんがボーダー？　ウソでしょう…。外野の定員が六人とすると、ボクに、福本さん、簑田さん、長池さんが、確定として…」

「ヤワラちゃんのだんなさんも当選やろ。これで五人はまず決まりや」

「で、田口さんは六人目でしょ？」
「そんな甘くないわ。ＤＨ専門とはいえ、石嶺さんも外野の枠を食うやろ。藤井さんもおる」
「あ、いっぱいいますね、外野。さすがは伝統の球団ですね」
「今頃気がついたんかい。そりゃ、お前みたいな天才は枠の心配はイランよな。ほれ、あそこで、女の記者に自慢の肉体披露してる、デカ（高橋智）さんも虎視眈々と狙っている」
「デカさんすか？　大丈夫ですよ、あの人、仰木さんに嫌われてますから」
「監督は仰木さんだけやない、上田さんもおるやろ」
「上田さんの頃も干されてたとよく嘆いていましたよ」
「そうやったけ？　ああ、デカさんって、数少ない、元Ｖ９戦士のＤ監督の信仰者やったな。それなら、大丈夫か、あの人はまず落ちると」
「でも、田口さんには鉄壁な守備があるでしょ？　ベンチには置いといて損ないすからね。うちは他に外野守備の名手といえば…、ウィリアムズ、本西さん、山森さん、熊野さんに、現役では坂口もいる、あらら、守備の名手だけでもこんなにいますね」
「お前には先輩へのリスペクトが足らんなあ。オレには内野守備もこなせるつう、他の外野の人にはない利点があるんや」
「田口さんを内野手で使う勇気のある監督いますか？　イップスで悪送球の山でしょ？　そんなめちゃくちゃな起用する監督いないでしょ…って、仰木さんが監督だった。あのおっさんなら、使いますね」
「その仰木のおっさんな、なんやら聞いたところによるとなあ、タイゲイニーを異常に評価してるらしいんや」
「た、タイゲイニーって、あのタイゲイニーっすかあ？」
「そうや、あのタイゲイニーや。一番打者で突如本塁打を連発した…」
田口が真面目にタイゲイニーを語れば、イチローはどこまでも茶

化す。
「水野晴男そっくりの？」
「意外と選球眼がよく出塁率が四割近辺の…」
「メキシコリーグで四割打った？」
「ってイチロー、お前の知識、外国人マニアみたいやぞ…」
「ははは、メキシコで四割打ったなんてたいしたことないっすよ、田口さん、ＷＢＣ見たでしょ？　メキシコのあの飛びよう…。メキシコの打率なんて日本じゃ一割引の価値しかないっすよ。日本じゃ三割が関の山っす」
「日本でも三割打ってない、オレにいうなや、イチロー」
「あれ、田口さん、三割打ってないんすかあ？　マジですか？」
田口は精一杯に強がりを見せる。
「規定打席未到達ならあるで」
ところが、規定打席未到達の数字など、イチローには意味がない。
「そうですか、そうですか…。これはますますタイゲイニー有利ですね」
「そうか…」
イチローのからかい半分を真に受けて落ち込む田口。
さすがのイチローも、田口を励ます。
「気を取り戻してくださいよ。さすがにタイゲイニーのメンバー入りはないですから。そもそもタイゲイニー、この試合の球場入りしてますか？　百人もベンチに入れる試合に姿がないとなると、タイゲイニーはないですよ」
「そうやな、タイゲイニーはないな」
田口が機嫌を取り戻したところに、ヘッドコーチとしてベンチ入りしている住友が姿を現す。一見、小柄で温和で見えるが、浪商出身のバリバリの武闘派。三度の飯よりけんかがすきと選手名鑑の趣味の欄に記すほどだ。
「阪急、オリックスの野郎ども、よう聞けよ。今日のスタメンを発表する。調整試合の最終戦、そのスタメンの意味、あえて言わんで

もわかるやろうな?」

最終戦のスタメンとなれば、極めて公式戦のオーダーに近いものだ。

「えー、一番センター福本、二番ライトイチロー…」

イチローは小さくガッツポーズ。田口はそれをうらやましそうにみつめるだけだ。

「三番ファーストブーマー…」

田口はさすがに、上位に名をつらねることはないと気を抜くが…。

「四番レフト…」

レフト? レフトとくれば、田口のポジションだ。時に、でたらめの仰木マジックでも、田口の四番はない。スタメンを半ばあきらめて、

「四番を打てるレフト? 誰やろ、長池さんか、石嶺さんあたりやろうか…。まさか、デカさんはないやろ…」

ファン目線としての興味に移る。

ところが、住友の口から発せられた名前は意外なものすぎて…。

「四番レフトタイゲイニー…」

まさかのタイゲイニーである。静まり返っていたロッカーは、とたんに、ざわめきが止まらない。驚く田口に、にやにやが止まらないイチロー。

「うわさは本当やったのか…」

常識的に考えて、調整試合の最終戦、四番スタメンとくれば、本大会のメンバー入りは確実。

はたして、田口は、伏兵タイゲイニーに、外野手の最後のイスを奪われて、すごすごと球場を後にするのか?

タイカップにあやかってタイゲイニー

田口は気落ちしてやまない。

「はあ〜、やっぱり噂は本当やった…」

「ところで、そのタイゲイニーを異常に評価している噂ってどこから来たものですか？」

壁に寄りかかり目線を下に落としたまま、田口が黙って、指を指した、その先には、パンチ佐藤がいた。

「ああ、パンチさんかあ〜。パンチさんも候補だよなあ〜」

「パンチさんも？」

思わず田口が目をひん剥ける。

「そりゃ、パンチさんも候補の一人でしょ？　いくらベンチにいたって、控えの野手なんてそう出番なんてそうあるわけないでしょうよ。ＷＢＣでいうところの亀井状態。そうなれば、ムードメーカーというか、賑やかし役一人置いておいたほうが戦力的にはプラスに働くかもしれないでしょ。そうなれば、パンチさんは適役でしょうよ。代打として使いどころがあるかもしれないし」

ますます落ち込む田口。

「はあ〜　オレ、一応日本人で唯一ワールドシリーズに二度出ている男やぞ？　ベンチに入れずとなると、メジャーが泣くわ」

イチローは、田口の不安を駆り立てまま、励ましもしないで、田口の落ち込みようを見て、にやついている。さすが、イチローだ。エムっ気、たっぷりである。

「しかし、一試合に百人もベンチに入れるって、仰木のおっさんもようやるわ。おっさんや、客は楽しいかもしれへんんが、やるほうはたまったんやないで。三番打たされた翌日に、八番とか、シーズン中に急に内野に再コンバートやら、あのおっさんには、色々とひどい目にあったもんや」

田口が愚痴るが、イチローは乗らない。
「なんや、イチロー。急に静かになったな。いつもはオレ以上に悪口言いまくりやのに…」
イチローは、黙って、田口の背後を指差す。
「は？　後ろに、誰かおるんか？」
田口が後ろを振り返ると、そこには仰木監督がいた。顔面蒼白になる田口。
「か、監督…」
思わず、直立不動だ。悪口が聞こえてないか、気をもむが、心配ご無用だ。仰木は、試合前というのに、一杯引っ掛けたのか、顔を赤らめていて、できあがった状態。選手の会話など耳に入る様子ではない。
「おい、田口」
「はい、な、なんでしょうか」
と仰木の指示を待つのだが、
「カップ酒こうてきてくれんか？」
「え？　試合ですよ、これから…」
「どうせ練習試合や…」
「監督はいいかもしれませんが、ボクは選手として…」
「タグ、どうせ、お前は、終盤の出番や。近くのコンビニに行って帰るくらいの時間はぎょうさんあるやろ」
ボーダーであえぐ田口は、監督の命令に背くことはできない。
仰木は、胸ポケットから、素の万札を一枚取り出して、田口に手渡す。
「釣りは、お駄賃や」
さすがに、西鉄出身、豪快である。
「カップ酒ですね…種類はなんにしましょうか？」
「鬼ころしか、大関にしといてくれや」
「わかりました…それでは…」
さっと用を済ませようと、田口は急ぎ足だが、仰木は呼び止める。

「そうや、タイゲイニンも探しといてくれや」
「タイゲイニン？　なんでしょうか、それ…タイの芸人？」
「違ったか…タイ……そうや、タイゲイニーや」
「探すって、今日の先発四番でしょ？」
「それが、球場入りしてないちゅうんや。宿舎は出たらしいんやが…」
タイゲイニーといえば、田口のライバル。行方不明なら、行方不明で越したことがないのだが、この場では、一応命令を聞きうけたことにしておく。それが、四六時中、生存競争に渦中にいる田口の生きるすべである。
「タイゲイニーですね…。見つけれるよう努力します」

田口は、口では約束するが、行動に移す気はさらさらない。
「タイゲイニー、遅れろ、遅れろ…。タイゲイニーが遅れれば、しめたもんや。うちはビジターやから、先攻や。表の攻撃で、一人塁に出て、四番に打順が回り、本人いないとなれば、しゃあないと代打や。三者凡退でも、裏の守りに入れば、守備で交替や…。アピールの場を失ったタイゲイニーはそのままベンチ入りならずで、オレに回ってくる…」
田口が、東京ドームから、場外へ出ようと、回転ドアに手をかけようとしたところ、係り員となにやら押し問答をしている、小柄でがっしりとした黒人の姿があった。
オリックスの選手と思われるが、係員の手違いか、不勉強か、球場入りにストップがかけられているらしい。
田口は念じた。
タイゲイニーでないことを。
黒人選手？　ウィリアムズやろ？　レインズやろ？　ルーズベルト・ブラウンやろ？　トッド・ブラウンやろ？　ケージやろ？　バンプやろ？　キャブレラやろ？　ペレスやろ？　ウィリーやろ？　ウィンやろ？　オーティズやろ？　マルチネスやろ？

阪急〜オリックスの歴代の黒人を浮かべて、タイゲイニーでないことを強く願うが、現実は非情である。

黒人選手は田口の存在に気がつく。

「オ〜、ターグーチ！　アイム、ゲイニー、タイゲイニー！！」

やはり、案の定、タイゲイニーである。田口はタイゲイニーを無視して、この場をすごすごとやり過ごす選択肢もある。時間的に見て、ここで田口が見捨てれば、タイゲイニーの球場入りはならず、すなわち、選手交替で、出番は消滅だ。

「タグチ〜！！　ユー！　メジャーリーガー！！」

田口は、二年しか一緒にやっていない外国人が、名前を覚えていることが、たまらなくうれしい。しかも、メジャーリーガーであることも認識している。

仲間である。彼は、れっきとした戦友だ。見捨ててはおけない。

「係員の兄ちゃん」

「あ、田口さん…」

さすがに係員は田口は認識できている。

「そいつは、タイゲイニーいうて、オリックスの選手や。しかも、スタメンや、はよう、中に入れんと、間に合わん。身分は、オレが保障するから、入れとってや」

「選手なんですか…。すいません、この手元の資料にタイゲイニーなんてなくて…」

「兄ちゃんが謝らんでいいで。百人も選手おれば、資料に手落ちなんてあるやろ」

田口はどこまでも心が広いんだ。

「タグ〜チ！　サンキュウ！！　アツヒロー！　アイラブユー！」

タイゲイニーは感謝しきりで、球場内へと、ひた走る。

「アツヒロ？　そりゃ本西さんの下の名前やろ…」

上の名前は覚えていても、下の名前は不確かだったようだ。

コンビニからの帰り際、仰木ご指名のカップ酒片手に、自己嫌悪

に陥る田口。
「どこまでも甘いんや、オレって奴は…。ライバルを蹴落とすチャンスやったのに…。イチローなら、どうしたやろか？　黙って見過ごしたやろか…。いや、イチローでも助けたはずや、ライバルと切磋琢磨して勝ち抜く。それがスターちゅうもんや。オレもスターを目指そう。しゃあない。タイゲイニーの凡打を期待して…」
球場入りすると、どこかしら中途半端な誓いの田口に、早速、災難が降りかかる。
ベンチに戻ると、ざわめきが止まらない。さすがに百人のベンチ入りだけあって、押し合いへし合いどころか、あふれている。
そんなベンチが総立ち状態。
「なんや？　点入ったんか？　誰が入れたんや」
ベンチの祝福を受けていたのはタイゲイニーである。
どうやら、先制の一発を放ったようだ。
田口が見捨てていれば、この活躍はなかった。複雑な田口の前に、タイゲイニーの姿が。
感情を押し殺して、無理に笑顔を作り、出迎えるが、
「オガワさん、オガワさん」
どうやら、人違いをしているようだ。
「小川じゃないちゅうの…」

めくるめくブロウズ

裏の守り、イチローが右翼の守備位置につこうと、入念に柔軟運動をしていたところ、仰木が、肩をぽんぽんと叩く。

「イチロー、ご苦労さん」

「ご苦労さんって、まだ、ボク何もしてないですよ」

たとえイチローとはいえ、何イニングを試合に出す余裕はない。なにせ、百人もの選手が、出番はまだかとベンチで腕を撫しているのだ。

とはいえ、プライドの高いイチローである。交替で出てくる選手の人選にも、気を払わなければならない。実力の落ちるプレイヤーを出せば、なんであんなヤツに、試合を奪われたかと、ぶんむくれ、実力が上のプレイヤーを出せば……、とはいえ、イチロー以上のプレイヤーなど、どこにいるのだろうかという話だ。

メジャーの長い歴史を見ても、イチロー以上に長打力があったり、盗塁ができたり、打率を残せる外野手を探すのはたやすいが、イチローのように、長打と選球眼以外、すべて揃った外野手を探すのは、たやすいことではない。

例えば、世界の盗塁王ヘンダーソンにしても、イチローをはるかに凌駕する選球眼と盗塁数を誇るが、守備も打率も、イチローの足元にも及ばない。

ところが、阪急、オリックスの歴史を通じて、イチロー以上？ともいえる外野手がいるのだから、日本の野球も捨てたものではない。

日本の盗塁王福本と三割三十本三十盗塁にゴールデングラブに、おまけに三十犠打の簑田だ。この二人をイチローの交換要員にすれば、イチローもしぶしぶ納得と上手く運ぶのだが、すでに、この二人はイチローと並んで試合にスタメン出場をしているのだ。

ならば、三人揃って、交替させれば、イチローだけでなく、三人

ともどものプライドを守れると踏んだ仰木は、いっぺんに交替させるのだ。

田口はオレの出番だとはやる気持ちを押さえつける。レギュラー三人の次に出てくる外野手三人とくれば、順列的に、本大会の控え外野手三人とくるのは自然なことだ。

ここで、呼ばれれば、ベンチ入りはほぼ確定と見てもいい。

仰木は交替の外野手三人を呼び出す。

「長池」

長池？　阪急黄金時代の四番で、本塁打王で、ＭＶＰだ。これは田口が負けても、仕方なし。

「谷」

谷？　う〜ん、日本時代は同格というか、田口が一歩上だったが、渡米後（結婚後）多少、打撃面で差がついたことは否めない。これも仕方ない。残る一枠に期待をかける。

「小川」

小川？　小川って、あの小川？　外野手ちゃうやん、内野手やん。なんで外野のオレを起用せんのかと田口はがっくりだ。どうやら、一塁の加藤秀を左翼に回して、空いた一塁に、小川を起用するらしい。

外野の六人沸の最後はオレだと意気込んでいた田口は肩透かしを食らった感じだ。

選手が百人もいるのだから、投手も異常なほど、ベンチ入りをしている。ブルペンはあふれるほどの盛況で、東京ドームが用意した、三つのマウンドでは、数が足りもせず、もれた投手がどこで、投球練習するかというと、グランド上での、ウォーニングアップが禁止されていたＷＢＣよろしく、ベンチや、裏の通路の隙間を使い、通行人に気を使いながらの、キャッチボールだ。

必然的に、交替も早め早めになるのも致し方ない。

史上二位の三百五十勝投手米田が、先発のマウンドを踏んだと思いきや、自慢のヨネボール（どういった変化をするのか、いまひと

つ検討つかず）一人打ち取ったところで、はい交代。
史上最高のサブマリン山田が替わりに、マウンドに聳え立ったと思えば、最近の球場のマウンドは、どうも下手投げに不利と、制球を乱し、四球ひとつだしたところで、はい交代。
今度、飛び出てきたのが、二百五十も勝っておきながら、負け越している左腕梶本。
三番張本を、華麗な腕の振りから、投げ下ろされる糸を引くような速球で、空振りの三振に取ると、はい、出番はここまでと、仰木がボールをむしりとって、マウンドから引きずりおろす。
なんとまあ、豪華な左のワンポイントリリーフである。
交代で出てきたのが、大舞台になれば不死鳥のようによみがえる足立。仰木としては、名球会会員で一イニングを任せるプランを立てていたが、さすがに、二百勝投手は、四人も見当たらず、仕方なしに、足立を起用した模様だ。とはいっても、足立にしても、百八十以上ものの勝ち星を挙げた大投手である。豪華絢爛たる投手リレーであることに違いはない。
足立はシンカーの連投で、大丸の後輩に当たる四番の大杉を内野ゴロに料理。
四人しめて、千以上の勝ち星を挙げた投手リレーで、一イニングをゼロ封する。

日本ハムも、負けじと次々と選手を交替させる。張本、大杉の二大スターでさえ、一打席の顔見世がすんだとさっさと交替だ。
投手リレーもオリックスが実績を積んだ大投手のリレーなら、日本ハムは、一時的に強烈な輝きを放った投手のリレーだ。
八十一年の最優秀防御率、大きなカーブが武器の岡部、八十二年の二十勝投手のサイドハンド工藤、十五勝無敗の元祖カットファウストボールの使い手間柴、逆転のマツこと八十八年の最多勝投手松浦、野茂のライバルだった九十年の新人王候補酒井、九十六年のオールスター先発投手今関…。

どこを取っても百以上の勝ち星を重ねた投手をおらず、積み上げた実績こす薄っぺらだが、

輝いていた、まさにその年に復元された投手たちは、オリックスの強力打線を抑え込む。

スコアブックが、書き足された交替選手で、はみ出すくらいいっぱいになっても、田口の出番は一向にこない。

田口はいつまでたってもベンチなのに、タイゲイニーは交替を忘れたかと思うくらいに、試合に出続ける。ＤＨだけに、交替させる機会は打席で代打を送るか、塁に出た後に代走を送るかしかないのだが、漫然と打席に立ち、そして、走者になることもなく、本塁打を放ってベース一周をするのだ。二打席目にして、早くも日本ハムの七番手、九十六年前半の独走の立役者であり、失速の最大要因だった島崎の落ちきらないシンカーを、今度は左翼スタンドに叩きこんだのだ。

イチローや張本でさえ、とっとと交替するのに、漫然と試合に出続けて、それでいて最高の結果を残すタイゲイニーに、田口の心境はいかに…。

こじ開けられた重い扉

なぜ田口がタイゲイニーの後塵を辞さなければならないのか？阪急～オリックスの７０年以上の歴史の中で田口といえば、有数の外野手であり、左翼手である。

さすがに、三十本塁打、三十犠打を両立しつつ、福本に次ぐ盗塁をしてダイヤモンドグラブまで掻っさらう異能の簑田には、実績を劣るが、他に田口以上の左翼手がいただろうか？

衰えて中堅から左翼に一時退避していた福本。

同じ指名打者で、生え抜きの石嶺に気を使って、やっとこさ守備についていた門田。

さらに翌年、一年気を使ったからいいでしょと左翼を守った石嶺。体に切れが戻り、本塁打を連発して、打点王に輝き、意外なスローイングの巧みさで、幾多もの補殺を記録したが、たった一年の所業では、石嶺を有数の左翼手として扱うのは難しい。

何の特徴もないのに、豪華外野陣の一角を五年ほど勤めて、いつのまにか、フロントの重鎮まで上り詰めた小林晋哉。

過ごした時代が、飛ぶボール、打撃マシーン時代到来前とはいえ、同じタイプで、田口以上の打撃成績を残していない大熊。

遅咲きの長距離砲として、話題を集めた矢野清。とはいえ、遅咲きらしく、消えるのもまた早い。

白井一幸を殺人スライディングで、闇に葬り去り、東京ドームの天井にぶち当てたことだけが、強く印象に残る、ウイリアムズ。ちなみに、貢献したほうが、ウイリアムス。

ウイリアムズとウイリアムス。どっちがどっちかわかる必要性は、特にない。

よく詳細はつかめないが、たしかに一番打者として、初優勝の貢献したウインディ。

いかにも荒削りのまま、選手生命を全うした高橋智。

その田口のメジャー（３Ａもしくは２Ａ）流出のすきを練って適当に起用された佐竹、早川、塩谷といったいかにも、十把ひとからげの面子。

村松の移籍に伴い、左翼に移り、ゴールデングラブ受賞者とは、とても信じられないような凡プレーを連発した谷。

その谷が抜けて左翼に納まった村松は、俊足をそぎ落とされて、早打ちで単打を稼ぎ、結果、ＯＰＳ（出塁率プラス長打率）が極端に低くなり、返品される始末。

誰が、田口以上の左翼手であろうか？　簑田が引っ込めば、順列的に、当然田口の出番である。簑田は確実に引っ込む。それも、オールスターよりも恐ろしく早い交代劇で。それが、百人ベンチ入り野球の定め。

簑田が得意の流し打ちと華麗な盗塁を敢行すると、お役御免とばかりに、簑田はベンチに引っ込む。

さあ田口よ。君の出番だ。途中出場は、カージナルス、フィリーズ時代でお手のものだ。

代走、守備固め、代打に、ダブルスイッチによる、投手の打順に入り、一番打席の遠い外野と交替で守備につく。

カージナルス時代のラルーサはまるで仰木のように、絶え間なきタクトをふるい、フィリーズ時代のマニエルは恩師、西本のように、古く日本流を好む。

なんでもきやがれ。エリート田口は、日本での姿。成長した田口は、どんな姿も受け入れるのだ。

ところが、だ。現実はそううまくことが運ばない。

簑田の代走に指名されたのは、熊野である。

八十五年の新人王。とはいえ、実質一発屋、というかすでに年齢が年齢で、あとはゆるやかに下降線をたどった選手。

田口の上を行く選手とはとても思えない。

新人王をとった年は、福本を左翼に押しのけ中堅を守り、肝心の

左翼手としての働きは、福本が再び中堅に戻った時代に限られる。

田口は唇を噛んだ。

順番が違う。自己採点では、阪急～オリックス史上第二位の左翼手。

そもそも、タイゲイニーが先発で出ていること自体がおかしい。

たしかに、タイゲイニーも左翼手だ。だが、それは、土井オリックスという忌々しい歴史の最後のあだ花じゃないか。三年連続の三位であり、最終年は、７０勝以上勝ち、１３０試合制度化では、優勝の殊勲を授かっても疑わしくない数字。

それほど勝ちながら、誰もが、どす黒い暗さを感じずにいられなかった土井オリックス。

無人のグリーンスタジアムの左翼席に、右翼席に、ぽんぽんと本塁打を打ち分けた異色のトップ打者タイゲイニー。

そんなタイゲイニーを三番指名打者に鞍替えさせ、守備につかせないことで、彼のリズムを奪い、体重増を招かせて、故障の連続で使い物にならなくしたのは誰であろう、仰木監督、その人じゃないか。

田口は、その隙を縫い、深刻なるイップスの発症で、内野手に見切りをつけて、タイゲイニーの偉大なる空位により、ぽっかりと空いていた左翼手の座を手に入れたのだ。

土井オリックスの象徴が左翼タイゲイニーとすれば、仰木オリックスの象徴は左翼田口である。かもし出すのは、前者は、グリーンスタジアムの位置していた山の中らしく、重く、鈍いイメージとすれば、後者は、港町神戸らしく。颯爽としたイメージだろうか。

黄金たる象徴をベンチに閉じ込めて、暗黒を纏うものをグラウンドに解き放つ仰木はいったい何を考えているのか？

田口にはその意図がわからない。わかるはずもないだろう、特にないのだから。

田口の愚痴

焦点が定まらずに試合はこくこくと続く。

さすがに、両軍おのおの時代を超越した百にのぼる選手登用を目指す試合だけあって、時には、大きな時代の隔たりが起こりうる。

オリックスの打席に、新鋭大引が立てば、日本ハムのマウンドには、東映フライヤーズ時代の初代エース米川康夫が、向かえ立つ。

二リーグ分立直後の世代の米川が、大引を誰だかわからなければ、当然、大引も誰だかわからない。

起用する仰木も、死後に入団した大引になじみがなければ、現役時代に対戦したはずの米川の印象も、まちまちだ。

「う〜ん、米川…おったような、おらんかったような…。ウエさん、おったか?」

「おりましたよ、仰木さん、チームメイトだっやないですか」

「そうっだったか…」

「ええ、米川さんは、最後、西鉄におりましたよ。そこで仰木さんと同僚やったはずです」

「う〜む、覚えておらんなあ。記憶の容量にも限界があってなあ…うほほ…」

実際は、記憶の能力の問題というよう、酒が入って、うまく機能してないだけである。

東京ドームに詰め掛けたコアのファン、というか暇人も、どちらの存在も深く理解したものも、さすがに少なく、球場中に、得体の知れない緩んだ空気が流れ始める。

米川の得意のカーブ攻めに、大引の無駄のないコンパクトなスイングが応戦。

右打ちをみせて、打球はライト前へ飛ぶが、黒人の右翼手が、敢然と前進して、これを好捕。

この黒人はミッチェルである。ところが、このミッチェルも時代が違い、救われた投手も、安打を阻まれた打者も、誰だか理解をしていない。

観客席からも、ミッチェルって誰だよとの疑問の声が飛びかい、

「もしかして、あのミッチェル？　三億円もの大金を見事一月足らずの仕事量で、もって帰った問題児の？」

いや、あれはダイエーです。

「それじゃあ、そのいとこのミッチェル？」

それも、ダイエーです。

「ならば、コールドゲームとなって、本塁打、一本損して、その差で、本塁打王を取り逃したミッチェル？」

ああそれ、それだよ、うん。

この大会の趣旨として、重視したのが、因縁とつながりである。時代を隔てた選手同士が対決しても、そこには何かしらのドラマが生まれるはずと機構側は考えた。

ところが、メンバーを大量に使えば、使うほど、そこにドラマや物語を見つけるのには、難しくなり、まるで、ゲーム後半、スター選手が出払い、地味目な選手同士で繰り広げられる、オールスターを見るようだった。

七十年の歴史のつながりも、因縁もぶった切った展開で、試合は進む。

ベンチにも、両軍の選手を完全に理解しているものは少ない。

大沢、仰木は、そういうキャラクターとして、上田も、自分が球界から退いた後の、選手や、プロに身を投じる前の選手には、頭がぼやけている。

「西浦？　おったかのう…」

日本ハムの打席に入る西浦に、？マークを抱いては、選手資料に、目を落とす始末だ。

あのう、西浦は、あなたが、日本ハムの監督時代に落合を差し置いて、抜擢した選手です。

関係者用の選手名鑑をめくる音が絶えない中、出てくる選手を完全に把握している男がいた。

首脳陣でなければ、ベンチ入りしているスコアラーでもない。

ご存知、田口である。

「お、捕手が、種茂さんから、安藤さんに替わったな…。東映が日本一になったときの、第二捕手から、正捕手への交代や…」

「おや、ウチのピッチャー、秋元さんや…。横須賀工業出身のサイドハンドやな…」

もともと阪急ファンだけに、阪急～オリックスの選手には詳しい上に、暇を見つければ、試合に生きるはずと、関係者名鑑をむさぼるように読んでは、これでは物足りないと、一人づつ検索にかける熱心さ。そこで得た情報をプリントアウトしては、自分の資料として持ち歩く細かさ。

現役で関西学院に受かった頭脳に、阪神に、お断り十か条を叩きつけた大胆さを持てば（本人は、阪神にＦＡ移籍の目が出た際、マスコミの暴走と必死に否定）、たかだが、一球団百人選手の記憶など、たやすい。

日本ハムのマウンドに、岡部が登れば、その特徴や経歴がすらすらと出てくる。

「岡部さん…。巨人の原さんの東海大相模の同期や…同期といっても、岡部さんは控えで、主戦は村中さんという左投手や…。八十一年の最優秀防御率投手で…」

岡部が、打席にダンナヤワラこと谷を迎える。

「ヤワラちゃんのだんなさんには、情報が入っておらんらしいな。岡部さんに決め球は外に逃げるカーブや…。ああ、引っ張りんにいったら、引っ掛けるだけや…」

田口の予言どおり、谷は、カーブを打ち損じて。ショートゴロに倒れる。

「オレに立たせれば、カーブの曲がりぱなを待ち構えて、右中間を抜く二塁打やったのに…。谷のやつ、現在巨人打撃投手の岡部さんと顔合わせしてるはずやのになあ…」

これだけの知識と博学振りを披露しても残念ながら、田口の出番はない。

なぜなら、仰木、上田の両オリックス監督に、その存在をぽっかりと忘れ去られているのだから。

がんばれタグチくん

選手が激しく入れ替わっても、軸だけは不動。
タイゲイニーが、あれから十五年以上の時を隔てて、存在感を際立たせる。
四番の四番ぶりに、近鉄オリックスの監督時代を通じて、意外と四番打者に恵まれなかった仰木は興奮を隠せない。
「タイゲイニー帰らせてのは、誰や？　土井ちゃんかい？　ワシの時おったら、あんな猫の目打線組まんかったのに」
タイゲイニーは、土井がデタラメに一番に起用して、頂点を極めて、翌年、仰木が三番に移したら、一気に地獄に落ちて、辛酸をなめたのだ。

タイゲイニーが打つ。
タイゲイニーが走る。
タイゲイニーが転ぶ。
田口がおっと、ギョロ目をギョロギョロさせる。
タイゲイニーが立ち上がる。
大丈夫、大丈夫と、走りよるコーチを制止させて。
仰木が立ち上がる。
仰木が思い出す。
「なんや、タイゲイニーって、あのタイゲイニーやないか、ワシにさんざん迷惑かけた…。こんな故障の多いやつは、よう使えやせんわ……」
突然、何かを思い出したかのように、タイゲイニーを見切り、タイゲイニーを下げる。
タイゲイニーは、交代を、テスト合格のお役御免と思い込み、ベンチに帰る。
生じた意識の差は、後の些細なトラブルを起こすのだが、タイゲ

イニーはさすがにもういいだろうから、書かない。

「代走？　オレかな」

田口が期待を抱くが、代走に指名されたのは、山本公二。球界に何人もいる、山本こうじの一人であり、主に代走ながら、盗塁王にも輝いた、当時新人の福本も憧れを抱いた走り屋である。

「またオレスルーかい。まあええ、代走じゃ、ろくなアピールにならん」

さすがに、過酷なマイナー生活に、平坦なベンチ生活に耐えた田口である。

物事をポジティブに受け入れる姿勢は、われわれにも学ぶものがある。

タイゲイニーを見切ったことに、仰木に冴えが出たとも、思えないが、ベンチを立つと、田口を呼び寄せた。

田口は、また酒が切れたかと、ベンチ裏に走ろうとするが、仰木は強い口調で呼び止める。

「おい、タグ、代打や、代打」

代打？　まさか、まさか、まさか？　まさかと思いつつ、百人の選手を無理やり出そうとする方針なんだから、出番はいつか来る。

いや、直前まで忘れさられたけれど、出番は来たのだ。

ついに、ついに打席に田口が立つ。

思えば、いろいろなことがあった。今日一日だけでも、カップ酒を買いに行かされ、タイゲイニーに、絶望感を味わされれば、いつまでも呼ばれず、悶々とベンチで過ごす。

すべては、打席に立てば吹き飛ぶ。

田口もそう思い、打席に入ったときに生じる心の変容を期待したが、思ったような、感慨も揺れもなかった。　思えば、カップ酒を買いにいき、七回まで、ベンチに座ってただけなのだ。

yあな

投手は誰であろう？　投手は新人王の経験もある皆川康夫、サイドハンドの右投手だ。

田口も、時代違いの投手なのに、勉強の成果か、すらすらと特徴が出てくる。

「えっと、親子鷹の走りの選手で、親父さんも、フライヤーズの選手やったやな。……、あかんわ。経歴がすらすらでも、肝心の得意なボールなどが、まっさら」

マウンド上での、たった六球の投球練習が、情報を得る唯一の機会と、田口は注視する。

「カーブ、シュート……あと落ちる球、シンカーやな？　まあよくいるサイドハンドや…。曲がり球に、狙いに絞って流してもよし、内角の速球系に山をはって、引っ張るのもよし…自由自在にいけるで……」

田口が妙な自身を持ったところ、残念ながら、投手は交替する。

「ちょっと待て…。替わりぱなでしょう？　いくら百人投入試合でも、一打者も完了せずに、交替は規則違反やろ」

皆川は右肩をさすっている。どうやら、今の練習で痛めたようだ。一打者を完了せずとも、故障での投手交替は規則違反では、けしてない。

交替に出てきたのは、グロスである。連続最多勝をとったほどの投手であるが、当時短い黄金時代のまっさなかにあったオリックスには相性が著しく悪く、九十六年など優勝を争っていたのにかかわらず、わざと避けてローテを組んだほどだ。

グロスの登場に田口も色めき立つ。

「グロス！！　こりゃ歓迎や。グロスとの相性は悪くないはずや。しかも、オレは、後のメジャー生活で、当時てこずったグロス特有の動く球も慣れきってる。メジャーの一線ところのムービングはグロスなんて目やないで。こりゃ楽勝に打てるわ」

ところが、田口にサインの壁が立ちはだかる。
一塁走者の山本の盗塁をアシストしろという。しかも具体的に、ボール球に手を出しても、わざと空振りして、捕手の送球を妨げろとのことだ。
「アシストかいな…。まあええわい、一球ストライクあげても、グロスは打てるわ」
サインのとおり、ボール気味の変化球をスイングして盗塁をアシストする。
「さてと、見事にアシストしたし、今度はタイムリーで走者を返すとするかい」
それでも、サインの壁は立ちはだかる。
「お、送れ？　グロスは打てるちゅうの！」
田口はしぶしぶサインに従うが、二球目は大きく外れてボール。制球には自信を持つグロスも経験の少ない救援のマウンドに戸惑っているようだ。
一塁コーチのサインを見る。
「今度は右に打てやと？　いくらオレがなんでもできる田口さんでも、要求激しく変えすぎや」
はたして
田口は、縛るサインを忠実に実行して、信頼を得ることができるだろうか？

田口で長々

田口は、監督の権限でプレーが制限されることに慣れきってるといっていい。

策士仰木のもとで、七年、知将ラルーサのもとで、六年（うち二年は、ほんとはマイナーの監督のもと）、仰木と同じく西本の傍系にあたるマニエルのもとで、一年

（仰木の前にも、あの監督のもとで、二年）

これだけ小難しい監督のもとで、野球をやれば、何を指示されて、遂行できる技能と精神力を身につけるだろう。

そんな田口でさえも、目まぐるしく変わる選手交替に合わせるかのように、ころころ変わるサインには、戸惑いを含んだ呟きをもらす。

「右に打て…。進塁打のサインや…」

盗塁アシスト、バントときて今度は右打ちの支持。まるで、この打席に田口の真意を問うかのように、要求のハードルが高い。

一塁コーチャーの今津からのサインを受け取った田口が、構えようとするところ、ベンチから、もそもそと仰木が飛び出してくる。

この場面いったい何の用があって、飛び出すのか？

主審になにかしら告げている。いぶかしがる田口。

「まさか、代打はないやろ…。得点圏に進んだから、切り札を切ろうって…ありうるわ。仰木のおっさんなら、どんな起用をしても不思議やないわ。ベンチには、史上最強代打の高井さんも、藤井さんも残ってる点」

田口の不安は今回は当たらず、仰木の告げた内容は、選手交替は交替であるが、代打ではなく、代走である。

見事、盗塁を慣行した代走屋に、さらに代走とは、さすがに、仰木でさえも選手起用に苦心しているようだ。

元気よく、ベンチを飛び出しのは、パンチ佐藤だ。
そこそこの足を持っているが、走塁技術に長けているとはとても言えず、代走には不向きの選手であるが、そこは、九十年代を代表する稀代のショーマン。
短い足をフル回転させて、二塁のベーチに颯爽と立てば、それだけで、ベンチのムードも、球場の空気も、一変する。
「相変わらずやな…。パンチさん…」

二塁走者となったパンチは、盛んに大きなリードを取って、日本ハムバッテリーを揺さぶりにかかる。
「ずいぶん、リードとりおるなあ…。あいにく、日本ハムバッテリーは、呼吸があっていない。二塁手とのコンビネーションも、十年以上前の外人のグロスと、最近の選手に田中賢介じゃ、あわないやろ。
リードを広めに取っても、牽制でささされる可能性は低い…。さすが、亜細亜大学〜熊谷組の野球のエリートコースを歩んだパンチさんや、意外と野球頭脳も持ち合わせている」

ところがだ、パンチ佐藤はリードを大きく取るだけでなく、三塁ベースをちらりちらりと、横目で見ているのだ。
いかにも、三塁に盗塁したげのパンチの態度に、田口の不安は倍増だ。
「ま、まさか、い、いや、いくら、バッテリーが無警戒でも、パンチさんの足と盗塁技術じゃ、三塁盗塁はムリやろ…」
パンチが、大きく目を見開き、一塁コーチの今津に、アイコンタクトをしきりに送る。
今津コーチもただのコーチではない。今晩、宿舎で、今津コーチと下痢するまで飲みたいです、の今津コーチだ。
パンチのアイコンタクトが意味するものは、いやでもわかる。
パンチの意を、そのままに受け取ると、今度は、田口に伝達する。

「またまた、サインの変更……」

パンチが走るまで、待てというサインだ、しかも、臭いボールは、振ってでも、盗塁のアシストをしろという。

ありえない、今度、アシストをしたら、たちまち追い込まれる。いくら、グロスに絶対の自信を持つ田口といえど、追い込まれては、打つ確率は、大幅に下がる。

しかも、走者は、パンチだ。いくら、盗塁のアシストの空振りをして、捕手の送球を妨げても、肝心の走者の盗塁技術と純粋たる走力に、まるで、確信が持てない。

「こうなったら、サイン無視や…」

仰木をチラリと見る。田口のようなロールプレイヤーに求められるのは、作戦遂行能力だ。

作戦に逆らって、結果吉と出ても、田口程度の能力なら、その結果も、たかが知れている。

それならば、どんな無謀な策でも、しらりと遂行するプレーヤーが求められるのだが、作戦が、作戦である。

しかも、パンチと一塁コーチの今津の独断である。

ならば、策に逆らっても、ロールプレイヤーの名は廃れない。

グロスがセットポジションに入る。二塁のパンチをちらちら見るが、牽制に入る雰囲気はない。二塁手とのコンビネーションに、やはり難があるのだ。

そのまま、グロスは、ホームに投球する。

パンチは、スタートを切る。広めに取ったリードの優位性は、走ってすぐさまに、どこぞへと消え去る。

思った以上に遅いのだ。懸命に手足をばたつかせるが、加速が悪い。

しかも、勘付いた日本ハムの捕手、加藤俊夫は、外に外しにきた。

これでは、盗塁の援護の空振りをしても、とうてい無意味。

このままでは、数秒後に起こりうる事態は、三塁ベース手前で、頭を抱えるパンチと、追い込まれた上に、返す走者がいなくなった

田口の途方にくれる姿だ。
ならば、打つしかない。どんなボールでも、食らいつくのみだ。
しかも、インフィールドにゴロを打つ。
ライナーやフライなら、パンチは戻れず併殺。たとえ、ファウルで逃れても、この様子では、パンチは次も走りにくるだろう。
悪球打ちには、一定の評価のある田口は、左足を大きく踏み込んで、強引に、外のボール球を打ちに行く。
打球の形態は、ライナー性。まずい、当てたはいいが、これでは、ライナーゲッツーだ。
一塁手のラドラが、体を半身にして、このライナーを取りにかかるが、すんでのところで、横をとおり抜けていく。
田口は運がいい。一塁のラドラの本職は、二塁と外野だ。一塁の経験があるとはいえ、本職ではない。
本職の上手い一塁手なら、ライナーのまま好捕して、すかさず、二塁に転送、併殺完成となるところだが、打球はライナーのまま右翼へと飛んでいく。
田口は、小さく右手でガッツポーズをとりながら、一塁に向かう。
「よっしゃ!!　ライナーのわりに、打球速度は出ていない。この打球じゃ、パンチさんでも帰ってこれるやろ!」
打球は、右翼手の中島輝士の前でライナーからゴロに変わる。ところが、パンチは、ホームを伺うどころか、三塁ベース上にヘッドスライディング
をしたまま、感傷に浸っているのだ。
「みましたか!　仰木、上田の両監督方々!!　わたくし、パンチ佐藤は、猛然と三塁盗塁を成功させましたよ!!」
田口が右翼前に巧打を放ち、暴走に陥る窮地を救われたことも知らず、パンチは三塁盗塁成功と、勝手に早合点しているようだ。
田口は、ひたすらに、あぜんだ。そりゃそうだ、暴走を助けて適時打のはずが、ただの好機を広げるヒットに成り下がったのだから。
「ああ〜くそ〜　パンチさんやなかったら…、ごく普通の走者やっ

たら、打点つきのヒットやったのに…」

ただパンチの根拠不明の三盗敢行がなければ、田口は無理やり打ちにいかなかったわけだ。

「まあええわ…。ある意味、暴走が産み出したヒットや…」

この切り替えの早さ、さすがメジャーのベンチプレーヤー暦五年である。

田口で長々（後書き）

主役扱いを受けた皆さんの今期の現状

内海　偽侍
森本　不調
大矢　休養
清原　ひざ痛
田口　マイナー暮らし

東海の龍

勝手な盗塁敢行で、見切った？　のか、パンチにも、これまた代走が出てくる。

代走の代走の、これまた代走だ。類似のケースを、長い野球の歴史の中でも探すのは、おそらく困難であろう。

パンチは、アピール成功と解釈して、何度も過剰なガッツポーズをとりながら、ベンチに戻る。

代走の代走の代走で、出てきたのは、岩本好弘だ。

中日時代の乱闘要員ぶりが、有名だが、元は、阪急の選手だ。足には、自信があり、シーズン二十一盗塁をマークしたこともある代走に、持って来いの走者だ。

田口の打席が、終わったところで、バッテリーがそっくりと替わる。

投手は、逆転のマツこと松浦宏明。捕手は、東海の龍こと大宮龍男だ。

オリックスの打者は、なんでもござれの業師福良淳一。

走者となったからといって、田口は気を抜いてはいない。主軸ならば、打てばいいが、脇役には、すべてが要求されるのだ。

守備、走塁、打撃以外のあらゆる要素が、厳正なる審査員である首脳陣に、監査されているのだ。

「まずは、牽制を一球もらって、相手のクセとタイミングを見計らって、隙あらば盗塁をし掛けよう…。運よく、打者は、オレと、一、二番コンビをよく組させてもらった福良さんや。なんでもできるや…」

田口の皮算用はいかようなものだが、サインの縛りが、田口を襲い掛かる。

コーチャーの今津から、口ぞえで伝えられた作戦。

「三塁走者の岩本が、走りたがっている」

また！　代走は盗むしか、自己アピールするすべがないのか！？
「さすがに、岩本の単独ホームスチールはムリや。ならば、田口、お前が、おとりになって、その間に、突っ込ませる」
今度の任務はおとりである。自己犠牲を仕入れた結果、今度は、チームのために、自ら、死を選び、というのか！
「はあ…」
「頼むで…。岩本も生き残りに必死なんや。アイツにも、アピールの舞台を与えてくれや」

作戦は、こうだ。田口が二塁へスタートを切り、大宮が二塁に送球した隙を練って、岩本がホームを狙う。
田口の盗塁が成功して、岩本が本塁を陥れれば、最良であるが、もし、田口が刺されても、その間に岩本が生還すればいいという策だ。
もし、岩本のスタートが悪ければ、田口は文字通り、おとりになって、一、二塁間でわざとはさまれて、時間稼ぎをして、岩本の手助けをする。
阪急の黄金時代や、森西武が多用した、まさに守備陣を、足でかき回す作戦だ。

松浦が投球する。田口がスタートを切る。福良が見逃す。援護の空振りをしないのは、岩本のスタートを気づかせないように、大宮の送球を遅らせないためだ。
大宮もさすがに、百戦錬磨の捕手。二塁に送球せず、中間点にいる松浦に送球する、いわゆるピッチャーカット。
岩本はスタートを切りかけたが、これでは、急ブレーキ。
田口は、おとりと化し、一、二塁の間で止まる。投手の松浦は、ボールを持ったまま走りよって、
二塁手の田中賢介にトス。田口は、一塁手のラドラと挟まれた格好になり、これを見た岩本が、猛然とスタートを切る。

ラドラと田中と松浦、三者の、言語と時代の違いのコミュニケーション不足で、岩本の本塁発進の指示が遅れる。

ランダンプレーの最中にようやく気づいた田中が、田口を無視して、本塁へ送球。

ストライク返球でしかさせないタイミングであったが、そのストライク送球がいく。

岩本を待ち構える大宮。

この二人には、強い因縁がある。二人とも、気性の荒さを買われて、星野中日第一次政権に傭兵された過去があるのだ。

しかし、その後は、対照的。星野に気に入れられて、コーチまで務めた岩本に比べて、大宮は、星野の手にも、持て余し、再度、西武に放出されたほどだ。

東海の龍の異名は伊達ではない。同郷で同年代のF1レーサーの中嶋悟（レーサーは、ワルか、金持ちの二者択一）も、大宮のやんちゃぶりには、一目置いていたという。

正面激突必至！　の状況。勝つのは、星野組切り込み隊長岩本か！　はぐれ星野組大宮か！！

猪突猛進に、岩本が、大宮に、ぶつかりに行って、落球を誘おうとするが、逆に弾き飛ばされてしまう。

単純に、防具を含めた体重の差もあるといえるが、大沢親分が目をかけて、あの江夏に、教育係を勤めさせ、いっぱしの正捕手へと、育て上げた東海の龍の迫力勝ちということか。

岩本を弾き飛ばした大宮の姿を見て、田口は、猛獣を思い浮かべ、かかわりたくないと強く願った。

なるべくなら、クロスプレーにならずに、生還したいと。

だが、その精巧な硝子細工のような願いは、次の瞬間、あっけなく、粉々に砕け散った。

二塁を回って、オーバーランした田口を、刺してやろうと、大宮は、二塁へと、すかさずに、ボールを転送した。

ところが、このイニングだけでも、度々顔を出す、ジェネレーションギャップによる、コンビネーション不足が、また出てきたのだ。

二塁手の田中賢も、遊撃手の岩下光一（東映日本一の正遊撃手）も、どちらも、ベースに入らず、大宮の転送したボールは、むなしく、センター方向へと抜けていく。

これをみた田口は、悠々三塁へ…が、守備の乱れは、それだけで収まらない。

センター方向に抜けたボールは、中堅手の定位置。楽々と、カバーできるはずが、福良の右方向への打撃に、備えて、ライト寄りに、守備位置を取っていた、中堅手の井出竜也
の横を抜けていく。

本来なら、カバーできる位置に、適時、移動しておかなければならないのだが、それを怠った井出の凡ミスだ。

さすが、二度のゴールデングラブを取り、アマ時代、全日本の三番に座りながら、シドニー五輪の際、球団が、日本代表に推薦しながら、アマ側に、井出よりも、もっといい選手にしてくれと、むげに、断られた実績のある井出である。

このカバーリングミスを見た、三塁ベースコーチャーの中田昌宏は、腕をぐるぐると回す。

三塁で、止まりかけていた田口は、コーチの支持を見て、アクセルを踏みなおし、三塁ベースを蹴る。

憂慮していたことが、現実となる。ホーム、クロスプレーのタイミングだ。

井出が、すばやく回りこみ、処理。迅速に、ホームへと、矢のような送球。

カットマンなしに、帰ってきたボールは、捕手の手前で、ワンバウンドして、大宮のミットに吸い込まれる。

凡ミスを取り返す見事な後処理。これでは、大宮を弾き飛ばすか、上手く回り込みでもしない限り、アウトだ。

高校時代、気性の荒さが災いしたのか、進路が滞っていたところ、逆に、気性を買った太田誠駒沢大監督に、拾われた大宮。

高校時代、一族に倣って、関西学院進学のために、野球部引退後、予備校に通い、見事現役合格した田口。

その育ちの差が、プレーに現れたわけでもないが、田口は、体当たりを選択して、大宮に当たりにいったわりが、そこに勢いは感じられず、

大宮のブロックの前に、いとも簡単に跳ね返されてしまう。

幸いに、大宮の阿修羅のような迫力に、怖気ついたためか、心にブレーキがかかり、急減速したため、跳ね飛ばされても、それほどのダメージがないことか。

パソコンを日記代わりに使っている田口と、

野球に関するパソコンのソフトを、自作して、販売できるレベルにある大宮の差が出たのだろうか。

問題は、この後の田口の処遇である。田口に評価があれば、もう一打席は期待できないにしても、１イニング程度は、守備につけるだろうが、

首脳陣の田口に対する評価がさほどでもない、また、お嬢様走塁で、評価が下がったのなら、攻撃だけでお役御免となるだろう。

結果だけいうと田口は守備につくことになる。

ところが、田口はなぜか、浮かない顔をしている。それははたして、なぜだろうか？

田口で何話目だ

高田繁や、簑田と並び、史上最高の守備力を持つ左翼手を選考する際、田口の名前があがらないことはない。

それほどの肩と足持つ左翼手ながら、仰木はトラウマを持つ内野手での起用を辞さない。

お得意の猫の目打線のレパートリーを増やすためだが、田口も田口で、意外とこなせてしまうのだ。

今日も田口は、二塁に置かれている。

このイニングの守り、右翼には山森、中堅には本西の規定打席に達せずとも、ゴールデングラブをかっさらった守備名人がいて、左翼に、田口が入れば、地味ながらも、史上最高の形容詞がつく守備陣形を引けるのだが、左翼にいるのは、先述のとおり、田口でなく、打撃の人…のわりに、その打棒もそれほどでもない小林晋哉である。

田口は、二塁にその守りを構えるのだが、もはや仰木の気まぐれ配置には、慣れっこであり、多少の不満を内包させつつ、守備位置に気を使ったり、キーストンコンビを組む遊撃手とのコンビメーションを図ったりする。

さてさて、その遊撃とは、誰だろう。

「本屋敷さんやら、河野さんやら、古いひとがおったらどうしようか。かといって最近の選手もなあ、オレがリードせなあかんし…小川さんやら、大島さんやら、オリックス時代に組んだ人がええなあ…」

遊撃にいるのは、黒人だ。

「黒人やん!?　誰やろ!?　バルボン?　違うな、バルボンは二塁手やったなあ…」

ざっと全身なめまわしても、答えが出ず、降参して、スコアボードを見てしまう田口。

そこには、６レインズと表記されてあった。
「レインズ!?　これまた古いわ、コミュニケーションとりづらそうだわ」
レインズ、米マイナーリーグを経て、阪急に入団。遊撃ながら、首位打者であり、盗塁王であるスーパープレイヤー。
まさに昭和三十年代のイチローであり、実際、阪急を退団後、大リーグに挑戦して、レギュラーポジションを担った経験もある。
まさに、日本球界のメジャー挑戦のさきがけといえる存在の選手だ。
ところが、肝心の結果のほうはというと、思うようにならず、わずか数年後で日本へ復帰と当時の日米の差を如実にあらわした選手といえよう。

日本ハムの打者は広瀬。非力ながら、徹底的な右打ちで活路を見出すタイプの選手だ。
現役時代が重なる田口は、広瀬の特徴をよくつかんでいる。
内野の司令塔として、守備位置の指示を出そうとするが、遊撃はレインズであり、長いアメリカ生活で培った英語を駆使して、なんとか、レインズを右よりの守備につかせるが、一塁を見ると、これまた黒人である。
「また黒人かい。誰なんやろ…。オーティズ?　ああオーティズかい。アメリカで何年かやったわ。たしか、ドミニカンやな…。スペイン語かい」
さすがの田口、何ヶ国語もペラペラ…、とまではいかないが、簡単な指示くらいはお手の物。一、二塁間を狭めろとの指示を出し、オーティズは左よりに心持寄る。
さあ、最後の三塁手には、広瀬のセーフティーも、頭を入れておけと、バントのジェスチャーを交えて、前よりの守備を取らせるか…。
三塁手に目をやると、これまた黒人の選手だ。しかも小柄だ。

「オレ以外、みんな黒人かい。誰や？　誰や？　バンプか？　ペレスか？　小柄やな」

田口の熱目線に、気づいたのか、三塁手はくるりと振り向き、満面の笑顔で、

「おお～　タグチかいな。わかっとるわい、セーフティーに注意やろ？　ヒロセは非力やさかいな～」

黒人なのに、コテコテの関西弁。

「なんや、バルボンさんかい…」

三塁手はバルボンであった。もともとは、二塁手であるが、どこでもこなすことが、メンバー入りの近道と、志願して三塁を守っている。

英語、スペイン語、関西弁を駆使できる田口こそが、この内野陣の司令塔にふさわしいといえよう。

男はつらいよのテーマソングを模した前奏が終わると、打球は、田口の予想通り右方向に飛んでいく。

打球は一二塁間を破ろうとする、強烈なゴロ。あらかじめ、一塁よりに寄っていた田口は、身を挺してダイビング。

打球は、ハーフバンドでグラブに吸い込まれる。

田口は、十年に一度の大型内野手と喧伝された身体能力の高さを見せるが、問題はここからだ。

ルーキー時代から三年連続で、内野手として開幕スタメンを勝ち取りながら、三年連続で、悪送球からのエラーづくしで、開幕早々にオーダーから外されたのだ。

イップスはもちろんのこと、果てには、難聴になり、結果内野手として見切りをつけることになったのだが、今の田口は、若いころと精神力が違う。

半身の姿勢となって、送球モーションに移る。どこにも、気負いも、力みもない。

ところが、精神的の疾患がなくとも、送球はずれる。

送球の体勢が悪かったのか、高めに抜ける。
打者走者の広瀬は、これは内野安打いただきと得意の猛烈なヘッドスライディングを見せる。
高めに抜けた送球といっても、一塁手の守備力が水準に達していれば、なんなく取れる程度であったが、あいにく、一塁手はオーティズ。
たとえ、ゴロをファンブルしても一塁に間に合う距離の二塁手ながら、３２という、１リーグ時代と見間違うような失策を重ねたオーティズ。
移った先の一塁手としても、うまくはない。
伸ばしたミットの先に送球を掠めるのがやっとで、広瀬の出塁を許してしまう。
広瀬はヘッドスライディングのそのまま、地面を叩いて、決死の出塁を喜ぶが、記録は田口のエラー。
ところが、田口に動揺は見られない。若いころの田口なら、悩みふさぎ込む送球だが、今の田口は、使ったほうが悪いと、いい意味で開き直れるのだ。
すかさすマウンドに行き投手を励ます切り替えの早さからも、それは伺える。
投手もこれまた黒人である。
黒人選手が当時珍しかったナイターの元、グランドを駆け巡り、夜の勇者と呼ばれたころの
左投手、ニューベリーであった。
さすがの田口も、自分以外の投手含む、内野手が全員黒人はアメリカ時代も記憶にない。
「ニューベリーとは驚いたわ。てっきりゲインズとおもっとった」
全国で、四人くらいしかわからないギャグで締めくくる田口であった。

田口で何話目だ（後書き）

この小説で主役扱いを受けた選手たちの今期

星野仙　ＶＩＰルームでオーナーやお偉いさんを接待。

福盛　見事、国内復帰濃厚。

関根さん　ご存命。

新井　三番に座ると大爆発。

慶彦　１イニング１５点の打撃コーチ。

バレンタイン　署名活動で１０万集まる人気ぶり。

松家　セットアップ昇格まもなく。

代理監督田口元気です

投手は伊藤敦規。阪神での献身的な中継ぎ役のイメージに、すっかりと塗り替わったが、もとはオリックスで、山田久志の後継者と期待された投手。

西武キラーで鳴らし、唯一のオールスター出場もこのオリックス時代だ。

打者はブリューワだ。因縁の相手である。

死球に怒ったブリューワが、マウンド上に詰め入り、伊藤を殴りかかった事件は珍プレー特集に欠かせない場面だ。

歴史は繰り返すとはよく言ったもので、意識したのか、していないのか、伊藤のサイドハンドから放たれたボールは、サイド特有のシュート回転がかかり、ブリューワの胸元を抉った。

ブリューワは不適に笑うと、この程度のボールは配球の範囲内となんとか心を落ち着けたのだが、日本ハムベンチに陣取る暴れん坊どもが黙ってはいない。

すわ乱闘だ。さて、飛び出せと一人、二人、がじりじりとベンチ前に詰め寄ってくる。

ただ暴れん坊たちも、この程度では、血は騒がないと、心の準備をするだけだが、フライングして飛び出してしまった選手がいた。

森本だ。自分の快脚を見せて、あっというまに、打者と投手の視線に紛れ込むが、はたと誰も飛び出してこないことに、気がつくと、顔を赤らめて、右往左往するのだが、時すでに遅し。

森本の早とちりに、オリックス側の血気盛んなやからが反応して、飛び出してくる。

乱闘隊長岩本好弘が、先陣を切れば、三度の飯より喧嘩が好きと選手名鑑の趣味欄に記していた住友ヘッドコーチが続く。

それならばと、日本ハムの暴れん坊どもも、負けじと飛び出す。

両軍二百人を超す乱闘劇は、史上最も激しいものといっていい。

張本が、大将を潰せと、上田に殴りかかれば、養育費未払いで、指名手配の身のニールが、師匠マグワイア譲りのステ〇イドパワーで、大杉とヘビー級の勝負を挑む。

審判も止めることはできず、大量に出ると思われる退場者の選別に切り替える。

ただ、運が悪いことに、審判も混同したのか、外国人選手の識別違いが発生した。

乱闘の輪の外で見守っていたブリトーが、暴れていたウィルソンと見間違えらて、無実の罪で退場を食らう場面も。

その他、両軍計二十三名の退場者を出す野球史上最悪？　最高？の乱闘劇となった。

張本に応戦した上田が退場となったが、あいにく監督は二人いたため、試合はつつがなく進行される…はずであったが…。

退場の伊藤敦規の替わりマウンドに登った伊藤隆偉が、警告試合となって、危険球、即投手、監督退場の息をつめる状況にかかわらず、果敢にも、内角を攻めてしまって、、

それも運が悪く、同じく退場となったブリューワの代打西園寺（水前寺清子の親戚）の腰にずどんと当ててしまう。

ふたたび乱闘？　さすがに、大乱闘の後に乱闘を起こす元気は両軍にすでになく、伊藤隆が、帽子を取り、西園寺が気にするなと伊藤隆を気遣って、場は鎮まった。

それでも、危険球のルールにしたがって、伊藤隆は退場。警告が出ていた監督の仰木も退場を命じられる。

ちょうど酔いが回って来たところで、仰木はあっさりと退場を受け入れたが、困るのは、代理の監督だ。

先の大乱闘劇で、ダブル監督の一人の上田も、ヘッドの住友も退場していない。

代理監督を指名する権利は、仰木にあるのだが、ただの立ちの悪い酔っ払い状態の仰木がまともな判断が期待できるのか？

カップ酒を片手に、ベンチに下がる仰木は田口を呼び止めた。
「タグチ」
田口は、またカップ酒のお使いかと早合点して、ベンチ裏に向かおうとしたが、仰木の口から飛び出した言葉は意外なものであった。
「おまえが、ワシの替わり監督せい」
田口が了承か拒否の姿勢を示す前に、仰木は、審判の中村稔に、
「ワシの代理は田口や」
とだけ告げて、足早に、とはいえ千鳥足だか、ベンチを後にした。

「オレが監督？」
何事にもポジティブに受け入れる田口は、突然の監督就任も前向きに受け入れるのだ。
「決まったものはしゃーない。日本でも、メジャーでも、当然、指導者になる器やからな。格好の練習の舞台や」
そうはいっても、この試合は普通の采配を揮える試合ではないのだ。
終盤になっても、今も残る多くの選手たちを使い切らなければならないのだ。そして、調整の最終段階だけに勝利も掴み取りたい。
ふたつを見据えつつ、采配のふるうのは、大ベテランの仰木、上田の両名将も労を要したことだ。
まったくの未経験の田口がその両立ができるかどうか…だ。

代理監督田口元気です（後書き）

都合九話目。
およそ一割を占めます。
このままだと、田口が主人公です。
誰かケテスタください。

求道者たちのたるい薄暮ゲーム（前書き）

閑話休題

求道者たちのたるい薄暮ゲーム

「ええ～　本日は開幕直前スペシャル対談と題しまして、球史に残る打撃の求道者の皆様に集まっていただきました。え～　上座から、打撃の神様こと、巨人川上哲治監督兼内野手」

「どうも、川上です」

「そのお隣が、まさに対談にふさわしい打撃の求道者ロッテ榎本喜八内野手」

「……」

「そのまたお隣が、またロッテの三冠王三度の史上最高の右打者落合内野手」

「……」

「え～、そして下座に座りますのが、現代の天才打者こと広島前田智徳外野手」

「……」

「ちゃんと、対談になるか、ちょっと心配に、なってきましたけど、まずは、一番若い、前田選手に、伺いたい。ズバリ、打撃の極意とは？」

「……」

「あ、虫の居所でも悪いかな？　それでは、落合さんに……」

「……」

「これじゃ、対談になりませんね…、榎本さん、なにかあります？　打撃の極意ですよ？」

「……、あとう……」

「は？　あとう、あ、あとう、これまた禅問答？　ですね、川上さ

んは、今の榎本さんの意見についてどう思われます？」
「いとうですな」
「は？　い、いとう？」
前田が自ら、口を開き、
「う、う、う、有働…１３０キロそこそこのなめた投手じゃった」
落合がこれを受けて、
「江藤だな、遠藤でもいい」
榎本はあっさり、
「お、大藤」
川上も涼しげに、
「加藤」
前田は苦にせず、
「紀藤じゃ、紀藤、広島にもおったのう、今、音信不通らしいがのう」
落合は不遜に、
「工藤、工藤だよ、工藤、めちゃくちゃに打ってやったから、オレの顔見ただけでびびるぞ、あいつ」
榎本は考え込んで、
「け、け、け、けけけけけけ」
一向に出てこず、ＫＯ。自ら、座ったまま後ろに倒れる。
回答件は、川上に移るが、
「外藤。実況パワフルプロ野球に出てくるから、ええだろ」
前田はやられたとの顔をしながらも、
「こ、近藤じゃ、広島にもおったなあ、太った秋田の男じゃ」
落合は、したり顔で、
「佐藤だよ、佐藤」
川上は、長生きの秘訣を披露するように、
「し、次藤。キャプテン翼に出ておった」
前田は、行き過ぎたファンをたしなめるように、
「須藤。開幕早々、大洋の監督を放り投げた人じゃ」

落合は、フクシくんにお小遣いを与えるように、たやすく、
「せ、清藤」
川上は、世界が止まったように見えるかごとく、
「そ、そそそ、ソトーじゃ、ソトー、カブスの新人王捕手じゃ」
と言い放つが、さすがに、反則とわかると、自ら降参。
前田に回答権が移るが、
「そ？　そ、そ、そ、」
答えが出てこない。
「だめじゃ、でてこんわ…」
これで、落合が回答できたのなら、落合の勝利となるが、落合が答えられなければ、そはスルーで、た行に移る。
「……」
落合は、回答も、降参もしない。ダンマリ作戦で、いたずらに時間だけが過ぎていく。
「……」
「……」

「で、打撃の極意だっけ？　打撃の極意なんてねえよ、それが、極意かな…」
無理に、本題に戻す落合の負けず嫌いさが垣間見れて、対談はお開き。

坂本緊急招集？（前書き）

あのう…田口は？

坂本緊急招集？

坂本は真っ暗闇の中にいた。
暗闇の中に放り出されても、坂本はたじろぐ様子もない。さすがに度胸が据わっている。
どうせ、夢の中の出来事だ、と早くも看破しているのだ。

目の前には、巨人のユニフォーム姿の老人が一人いるだけだ。
「坂本勇人君！　私は君を、巨人軍の選手として招集しに来た！」
老人は、さも自分を知っていて当然との前提で話を進めていくが、坂本は誰だかわからない。
「わっはははは…私は、神様じゃよ、神様といっても、野球限定の神様じゃがね」
「はあ…。その神様とやらが、僕に何の用があるんですか？」
「何度も言わすな、今シーズンの活躍から、急遽、君を呼ぶことになってじゃな、じきじきに、監督でも私が、要請をじゃな…」
「おじいちゃんのお言葉は光栄ですけど、僕は、もう巨人軍の選手ですから」
まるでボケ老人を扱うように、坂本は軽くあしらう。
「その巨人軍ではない。日本職業野球祭典の巨人軍じゃ」
「はあ？　なんすかそれ…しょくぎょうのさいてん？　やきゅう？　うん？　ああ…なにか、そんなイベントがあったような気がします…。僕もキャンプに呼ばれて、一日でチームに帰されました」
「それじゃ、それじゃよ」
「ところで、なんで、おじいちゃんが、僕を呼びに？　職員の方か何かですか？」
「わっはははは…さすが若者じゃ…私を知らんでもおかしくはないな…。野球の神様でわからんなら、ドン、巨人のドン、いや、野球界

のドンといえば、私のことだ」
若者に寛大な姿を見せても、坂本はぴんときてない。
「はあ…」
痺れを切らして、名前を吐き出すのだが…。
「川上じゃよ。私は、巨人軍監督の川上じゃよ」
「ああ…」
名前を出しても、それがどうしたと反応はすこぶる悪い。
これに怒りを覚えたわけでもないのだが、川上は坂本に試練を与えたのだ。
「だが、君のように爛々とした将来を持つものでも、わずか数年ほどの実績で、いきなりの伝統ある巨人軍入りはまずいと思い、あえて、難題を用意したのじゃ」
「はあ…」
川上の手に急にバットが現れて、それを魔法の杖のように振りかざすと、二人の目の前に、いくつかの部屋ができたのだ。
「さあ、坂本勇人君よ、君はどの部屋でもいい、ひとつ選んで飛び込みたまえ。もしも、君が無事に、部屋の中の課題を突破したのら、その暁にベンチ入りの栄誉を与えよう」
「はあ…」
「どれでも、いいんじゃぞ。しかも、扉を開き、中を下調べしてから選ぶこともできる。よく考えて自分の実力にあった部屋を選んでくれたまえ！　それでは私は消える！
もしその機会があるのなら、巨人軍のベンチであおう！　若者よ！」
すると、川上は煙に包まれていずこへと消えたのだ。
何が起きたのか、よくつかめない坂本でも、夢の中だと思えば話は早い。
遊んでやろうと気分で取り組めば、物事は進んでいく。
まず最初に目に入った部屋の表札には、「野球地獄」と記されている。
「野球地獄？」

いきなりけったいなものにぶち当たったものだ。
それでも練習好きの坂本は、勉強地獄はまだしも、野球地獄ならクリアできると、部屋の中をのぞいたのだ。
「うわ！　なんやこれ…」
いきなり声を上げたほどの光景。
部屋の中で繰り返されいたのは、野球の練習でも、ただの練習ではない。地獄と付くのにふさわしい、陰惨たる光景だ。
迫る鉄球を木のバット一本で打ち返そうとするもの。谷底に飛び出す木の枝に釣らされて、さかさまの状態でバットを振るもの。
重いコンダラを引きずりグランド整備をするもの。
さすがの坂本もこの地獄をクリアするほどの狂気じみた熱意はない。
黙ってドアを閉めると、次の部屋を物色しはじめた。
どの部屋も、名前に地獄つきで、一筋縄にいきそうもない。

「女地獄」
興味がそそられる地獄だ。坂本は、下半身をもぞもぞさせながら、扉を開けた。
そこには、若い女から、そうでない女まで、百人は超えてるであろうほどの女がいたのだ。
どの女もそこそこの容姿の持ち主であるが、いわゆるＢ級～Ｃ級で、目が留まるほどの女は見当たらない。
「坂本く～ん　私知ってますかあ～？　～～って雑誌でモデルの仕事をしている～…」
「何よ、坂本くんの最初の相手はあたしよ、あたし！　ほら、ａあたし、名古屋の深夜番組でアシスタントやってる～」
まるで、場末のオーディション会場のように品位なきアピール合戦が繰り広げられる。
どうやら、この女たちは、いわゆる芸能事務所に所属している、いわゆるタレントのようだ。

どこかで、かろうじて見たことあるタレントから、まったく見たことないタレントまで、坂本を狙う目つきは、まるで女豹そのものだ。

多少心が突き動かされたが、おぼれると身を滅ぼすと、自制心から扉を閉めた。

「ＯＢ地獄」

次に開けた扉はＯＢ地獄だ。特に、ＯＢに興味があったわけでもないが、もはや手当たりしだいである。

開けた部屋には、青田昇や、荒川博、別所毅彦、、広岡達朗、金田正一など、うるさ型の巨人軍ＯＢが立ち並んでいる。

「おう、お前が坂本つうやつか！　ワシは、お前の兵庫の大先輩の青田いうものや！　お前の打撃フォーム見させてもらったが、内角打ち上手いな！　最近の選手じゃいない技術の持ち主や！　あのさばきじゃ、広島の長谷川良平や、大洋の秋山登のシュートを返せるわ！　だがな、あのままじゃ外が打てん！　外の打ち方、この青田が教えちゃる」

「ガッハハハ！　どうも坂本！　ベーやんこと別所です！　ガッハハハハ！　ガハッハハッハ！！」

「君も荒川道場の門下生にしてあげるよ！　足をもっと高く上げたら、君は右の王貞治になれる！！」

「ふん、坂本、君は打撃はちょっといいけどね、遊撃手としては、最悪の遊撃手だよ。ふん、僕が教えたら、二流程度にはしてあげれるけどね、ふん」

「坂本！　君は素晴らしい！！　高卒二年間からレギュラーなんて、昭和名球会入り確実！！　前祝いと称してだな、君のＴシャツを作りたいから、その権利は、ぜひぜひ我が金田企画を通して…」

まさに、これこそ地獄絵図である。

坂本は無言の笑顔を振る巻くことをＯＢへの敬意として、扉を静かに閉じた。

それでも、漏れてくるＯＢたちの馬鹿でかいだみ声。この部屋を選択しなくてよかったと坂本は心から思った。

「遊撃手地獄」

伝統ある巨人軍を代表する絢爛豪華な遊撃手たちの集いである。

先人に倣い、研鑽をつめる。　ようやく居場所を見つけたの胸をなでおろす坂本だが、どの顔を眺めてみても生気がないのだ。

千葉派だったため、千葉について近鉄にいったあと、巨人に戻れなくなった平井。

川上の采配に反発したために、巨人を追い出されて、数年間ほど、新聞社の薄給の評論家としての仕事しかなかった広岡。

巨人を出されて先の西鉄で、レギュラー勤めるも、黒い霧に巻き込まれたライフルマンこと船田。

よりによってデーブとの派閥闘争に負けて、西武退団に追い込まれた、とにかく丸い黒江。それでも、デーブの不祥事を流し、見事カタキをとった腹黒い黒江。

とにかく特筆事項のない地味な初代上田。

甲子園バックスクリーンさん連発前日の有名な落球でレギュラーからおろされた河埜。

大型内野手、巨人次代の遊撃手として期待されながらも、女癖の悪さから、懲罰トレードを食らった鈴木康友。

栄えある開幕先発も、悪送球から逆転負けで、一転野球人生が狂ってしまった鴻野。

遊撃手としてのはつらつさの欠片もない岡崎。

慶応の先輩藤田が監督の時以外、もっぱら二軍にいたこれまた上田。

華々しいデビューとは裏腹に、地味にオリックス黄金時代に貢献した勝呂。

二岡に、川相だ。
土色の生気のない顔した二岡が、扉越しの坂本に近づくと、そっと手をさし伸ばした。
「坂本、君も仲間だ。君も撮られた、僕と同じ」
「違います、僕は、二岡さんと違って、身持ちじゃない、門限も守っている、何の問題もありません」
二岡は、坂本の敢然たる受け答えに、涙を溜めるばかりだ。
「そうか、札幌で、また三遊間を組もう」
「不吉なこといわんでください」

そして、お待ちかねの川相である。
坂本の全身を頭の先から、つめの先までなめるように見渡す。
「ふ～ん、いい体格してるね～。これは巨人軍伝統の大型遊撃手にふさわしい人材だ。ただちょっと打ちすぎるのが遊撃手らしくない。遊撃たるもの、脇役に徹しないとね～」
川相は持っていたバットを両手で持ち、身をかがめて、バントのジャスチャーをした。
「バント教えてあげようか？　打率２６０、本塁打は一桁前半で、犠打が５０ほど、それが遊撃手らしい数字だよ…」
バントのジャスチャーしたまま坂本に近づいて、バットの先で小突くように、坂本の胸の辺りに押し付ける。
「若い芽はなるべく早くつんでおかないと……オレの出番がなくなっちゃう…」
えもいわれぬような恐怖を感じた坂本は思わず部屋を閉めた。
それでも、しぶとく扉に挟まり存在感を示す川相のバットの先に身震いしながら坂本は次の部屋を物色した。

いやな予感がした。遊撃手地獄にあのひとがいない。
そして次の地獄は「門限破り地獄」である。
予感的中、扉の向こうは、夜の宴会さなかのクラブ。

元木は遊撃手地獄に参加せず、ここにいたのだ。

へべれけ状態の元木が、ホステスの胸をもみながら、赤ら顔で叫ぶ。

「お～　坂本～。はよ、こっちのテーブルこいや。キヨさんもおるで～　お前がくると若い子の食いつきが違うんや～」

隣には、もちろんのことに清原。

「おう、お前が坂本つう伊丹のガキか。わいが清原や。野球選手の正しい遊びつうもんを教えたるわ」

床には、飲みつぶされた小田や、福井、高橋由伸が、死んだように転がっている。

プロ野球選手の正しい遊びは、野球選手としては正しくないと感じ取った坂本は即座に扉を閉めた。

もう何がきても驚かない。

「オビスポ地獄」

表札を見れば、すべてがわかるが坂本は飛び込む

坂本田中ぎこちない笑顔と得体の知れぬ緊張感

オビスポなら、多少のことなら絶えられると坂本は扉を開いた。
「ナンダサカモトジャナイカ」
想像どおりオビスポが、人懐っこい笑顔と、たどたどしい日本語で坂本を迎えた。
オビスポの顔を見ると、なんだか癒された気分になった坂本は、この地獄を切り抜けることに決めたのだが、
「オイサカモト、こんびにデカッテニびーるノンダラオコラレタドウスリャイインダ？」
いつものように、無理難題を押し付けられるが、そこは慣れっこ。はいはい、オビチャンとたしなめようとするが、オビスポの影から、オビスポが現れ、
「サカモト　オマエノたおるヲツカワセテモラッタゾ」
坂本に無礼を働いたと思えば、またその影から次々とオビスポが現れる。
「サンレンショウシタノニ、マタニグンダ　ドウスリャイインダヨ？」
「クルーンノオレヲミルメツキガコワイ　サカモトタスケテクレ」
「トウキュウレンシュウノボールガウマクナゲレナイカラタイジョウクラッタ」
「オチヤヤマグチガガンバッテイルノニ、ヒサノリノヤツッテキタラ　サカモト、オマエカラモ、ヒサニヒトコトタノム」
オビスポ一人なら、なんとかなるが、これだけのオビスポの相手ができるほど、人間はできていないと、坂本は静かに扉を閉じた。
もう地獄はひとつだけ。
「女地獄」
重い腰痛を食らって、欠場したばかりなのに、すぐさま女におぼ

れることはない。
どの地獄も、正真正銘の地獄。地獄を選ばずして、真の巨人軍の一員にはなれない。
坂本は思わずつぶやいた。
「田中…なんとかしてくれ」
小中学校の同級生といえど、さほど仲のよかったわけでない田中の名前が思わず飛び出るほど、坂本は窮地にいるのだ。

「なんとかしてやるよ、坂本」
坂本は思わず、耳を疑った。
たしかに、田中の声だ。だが、見渡しても、田中の姿はない
「ここだよ、坂本」
どうやら、天の方から田中の声がした。
思わず坂本が宙を仰ぐと、そこには、見上げるほど巨大化した田中がいた。
いくら田中が巨体でも、坂本とこれほどの体格差はない。
「田中、なんや、お前、巨大化したんか？」
「さあな、オレが巨大化したか、坂本が小さくなったか知らんけど、これが今のオレとお前の差や。それが体の違いになって出たんやないか？　甲子園優勝、新人王、ＭＶＰ、ＷＢＣ五輪代表の差や」
「オレだって、首位打者、ＭＶＰの有力候補や」
「そんなもん、オレの勲章の前にはちっぽけなもんや。撮られる女もブランコと知らんモデルで大違いや」
「女の差はないやろ…」
坂本が反論しかかったところ、田中は坂本の背中をひょいとつまみ、軽々と持ち上げたのだ。
「なにするんや、田中」
じたばたするばかりで、坂本は反撃すらできない。
「お前が、地獄を選びきれんから、オレが選んだる」

田中はそういうと、つまみあげた坂本を、放り投げた。
投げられた坂本は、絶叫する。
「うぎゃああ」

がばりとベットから起きる坂本。夢だとわかっていたが、それでも植え付けれた恐怖は、坂本の頭を支配する。
「まさに、悪夢やった」
ようやく落ち着きを取り戻すと、ホテルの部屋のドアがノックされていることに気づく。

「いませんか～」
「？なんやろ…」
「頼まれたマッサージですよ～」
「マッサージ？　そんなん頼んだかなあ…。まあええわ、ちょうど腰痛やし…」
マッサージ師を疑問なく、部屋に招きいれた。
男は４０そこそこの長身痩せ型。あんまさんらしく、サングラスにニット帽姿で、顔はよく確認できないが、それでも髭の濃さはよくわかる。
坂本は、うつぶせになったまま、マッサージ師に背中を見せた。
「お客さん、腰が大変なことになってますね」
「ええ…試合に、プライベートに、よく使ってますから」
「ほう…？　それなら、もっと大変なことにしないとね？」
「？　どういう意味や！？」
「まだ、気づかないのか、坂本よ。先人は敬意を持って扱わないとな」
「そ、その声はか、川相さん？！」
「ようやく気づいたか」
ニット帽とサングラスを脱ぎ去ると、まさに、その川相である。
「せいぜい、送りバントしかできない体にしてやる」

「やめてください、か、川相さん～」

坂本田中ぎこちない笑顔と得体の知れぬ緊張感（後書き）

川相ももういいだろ

代理監督、田口のん気です

「オレが監督？」

何事にもポジティブに受け入れる田口は、突然の監督就任も前向きに受け入れるのだ。

「決まったものはしゃーない。日本でも、メジャーでも、当然、指導者になる器やからな。格好の練習の舞台や」

そうはいっても、この試合は普通の采配を揮える試合ではないのだ。

終盤になっても、今も残る多くの選手たちを使い切らなければならないのだ。そして、調整の最終段階だけに勝利も掴み取りたい。

ふたつを見据えつつ、采配のふるうのは、大ベテランの仰木、上田の両名将も労を要したことだ。

まったくの未経験の田口がその両立ができるかどうか…だ。

田口はおそるおそるベンチに、残っている人数を数えはじめた。

ひいふうみいよう…。十を越えたあたりで、数えるのが怖くなり、カウントを止めた。

「こんなに残ってるって、どう采配ふるえちゅうねん。選手使うんで、精一杯やん」

それでも、不幸中の幸いというか、ベンチに残っているのは、田口より若い年代の選手が多いことだ。

「塩崎、日高、下山…。起用しなくても、オレに文句言えんやろ、あいつらの格じゃあ…」

なるほど、田口より下のオリックス勢は、おとなしいというか、実績の無さからか、萎縮さえしているようにも見える。

ところが、その中で一人だけ、いつまでたっても、起用されないことに、いらだちの感情をあらわにしている男がいた。

塩谷だ。

塩谷がなぜ、この大会のベンチ入りしているのだろう？

百人集める試合ゆえに、ついつい選考が荒くなりがち。塩谷は、意外なことに、規定打席に到達しての、三割をマークした経験があり、

驚くべきことに、球宴にも、出場暦があることで、一応、選に残ったのだ。

先の大乱闘のさいにも、審判の見えないところで、同期の西浦に蹴りを一発入れただけで、じっと我慢したのだ。

荒くれ者で気性の激しいことで有名な塩谷が、乱闘への加担を我慢するとは、相当な覚悟の証拠だ。それもこれも試合に出場するためである。

そんな塩谷を使わずとしたら、同郷の先輩である田口とはいえ、容赦はしないだろう。

「あの目つきのあらいの誰やったっけなあ…？」

田口は思わず考え込む。さすがの田口も、自分がメジャーにいったあとに、オリックスに加わった選手には疎い。

「あ…塩谷や。阪神にいたチンピラ野郎、オレと同じ兵庫や。たしか神港（学園）やったな。それで、なんでアイツが、ここにおるねん。そうか、オレの出たすぐ後に、移籍してきたんやっけなあ…」

しかも、田口の流出で、空き家となった左翼手のポジションを、副島、早川、佐竹ら微妙なメンツと争い、栄光の背番号６を背負った男だ。

「なんや、塩谷のヤツ、オレに、メンチきってるで。何様や、年下の分際で。起用せんとおこ」

田口は、塩谷をはなから無視を決め込む。

「最終回、誰を捕手にしようか…」

ベンチに残る捕手経験者は、日高を含めて、三人。最終イニングを一人の捕手で乗り切るとなると、二人余る算段となる。

田口は、オリックス～阪急の捕手をざっと思い浮かべた。

「上田阪急の正捕手中沢さん、西本阪急の正捕手岡村さん、新人王の藤田さん、二リーグ分立直後の山下さん…。イチローの師匠、河村さん、一応現役やけど、最後の阪急戦士の一人、中嶋さん…、あとは、オリックス優勝時の高田さんに、オレと同級の三輪か。う～ん、こりゃあ、日高の入る余地あるなあ。

起用しとかんと、選考の際に不利になるなあ…」

田口が、思案する横で、塩谷が、意味ありげに、膝にレガースをつけている。

「なんや、アイツ、何のアピールのつもりや。あいつに、捕手が務まるかちゅうねん。…？、そういやあ、オレが、土井ちゃんに干されて、ファームおったころ、あいつは、新人のペーペーで、はじめは捕手やっとなあ…思い出したわ。捕手、内野、外野できるユーティリティーか仰木のおっさんが好むタイプやなあ…。って、それよっか、どこでもできる控えってオレのライバルやん」

塩谷が、思わせぶりに、マスクをかぶる。それでも、田口は動じない。

塩谷が、何を意味するのか、田口に向けて、バットを振り上げる。

田口は田口で、何年もアメリカ球界に身を置けば、塩谷程度のクレージー野郎は珍しくなく、それほど取り乱した態度を見せない。

「脅しても無駄や、無駄」

ところが、けして脅しではない。そのまま、塩谷は、バットを振り下ろすと、田口の脳天をガツン。

田口は田口で、何年もアメリカ球界に身を置けば、塩谷程度のクレージー野郎は珍しくなく、それほど取り乱した態度を見せない。

崩れるように、田口は地面にひれ伏した。

塩谷は、悪びれた様子も見せず、逆に得意げでさえある。

塩谷に、反旗をひるがえすものいない。百戦錬磨の阪急勢は、これしきの揉め事は日常茶飯事と静観を決め付け、オリックス勢は、ただただ恐怖にとられている。

とりあえずの将が制圧した今、このままでは、塩谷の恐怖政治が

チームを圧する。

審判が、誰でもいいから、代理監督を出してくれと、ゲームの進行を促す。なにせ、一ヶ月近く時間は止まったままだ。

止まった時間を再度動かすのは、努力と労力を費やすものだが、塩谷の「オレが監督」と胸を指差すジャスチャーであっさりと試合は再開される。

まずい、田口よ、目覚めよ。このまま、塩谷が監督ならば、試合は大変なことになる。

「捕手は日高。遊撃は塩崎さん、入ってくれへん？　ブルペンどうなってんのん？、右のサイドの鈴木平さんと、左のヤーナルが作っとるのか。ハムの次の打者は、右の野口さんか。なら、鈴木平さんやな」

目覚めよ、田口。塩谷に試合をのっとられたら、オリックスの暗黒の霧はいつまでたっても、晴れぬぞ。

「けん制のタイミングみたいから、一塁走者の吉沢さんに、二歩三歩、余分にリード取らせてくれ…。左腕の田中調さんとはいえ、けん制は甘いわ…。よっしゃ、思い切って、スチールや」

田口、田口よ、聞いているのか？　早く速く端役…。このままでは塩谷の的確な選手起用と緻密な采配でオリックスの逆転勝利だぞ！！

田口は、ついぞ目覚めなかった。逆転勝利でナインを溢れんばかりの歓喜を余所に、田口はひたすら、眠り続けている。

夢の中の田口は、今日の日記は話題豊富とホクホク顔だ。だが、逆に、これを短くまとめるのも大変であり、しかも、致命的な途中離脱で、肝心のオチがないことに、一抹の不安も覚えている。

代理監督、田口のん気です（後書き）

感想もメッセージもつかないもんだなあ

突然にまとめ

過去約百話を通して、圧倒的に地味なのが、ヤクルトだ。

なんと、主役のなった話は、キャンプ序盤の安田・広岡・伊藤智の三者混合の話までさかのぼるのだ。

古田、広沢、若松、青木ら、キャラにも、個性、話題を欠かないことからしても、意外である。

各球団が行っているオープン戦練習試合にも、姿を見せず、じっくりと世間の目から隠れて、調整しているのだろうか。

ヤクルトＶＳ大学全日本の構想もあったが、斎藤東浜中田くらいしか、キャラをつかめず頓挫。お蔵入りになりました。

ヤクルトに続いて、地味なのがソフトバンクだ。

オープン戦も、広島主役の話で、敵役としてしか、描かれておらず、キャンプ風景も、デーブや垣内、鈴木健の偵察隊の話で、出てくるだけだ。

ただ、この球団も、野村、城島、鶴岡、門田と、避けられぬ複雑な人間関係が絡みつくため、今後の展開が楽しみだ。

なかでも、注目は、城島と野村の正捕手争いだ。

野村と不仲といわれる鶴岡が、後期鶴岡南海の象徴である野村を使うの？　それとも、唯一の捕手メジャーリーガーである城島をためらいなく使うのか？

どちらかをＤＨで起用の逃げも難しい、ＤＨには、ミスター指名打者門田がドンと座っているのだ。松中もＤＨも希望していることから、このあたりの絡みにも注目必至だ。

意外と健闘を見せているのが、横浜だ。三原、権藤のたった二人の優勝監督が、他の球団に流出したことで、すべてのごたごたは始まった。

まさかの大矢就任、相変わらずひどい内部抗争、金をかけず、合宿所前のグランドをキャンプ地に選定した親会社ＴＢＳ…。

すべては、予期せぬ快進撃の前兆か、それとも、予定調和のオチへの前振りか…。

消滅球団で奮闘する近鉄。扱いやすいキャラの濃さと数々の伝説の賜物か、思い出に捧げるトリビュートか。

対レッドソックス編の関根の活躍ぶりが印象に残る。

近鉄といえば、非公式的な後継球団の楽天である。わずか数年の歴史を盾に目立てというのも、無理がある話で、その苦境の中、二話に登場する田中の孤軍奮闘ぶりが目立っている。

キャンプでそこそこ目立ちながら、その後、失速するのがロッテだ。落合、村田、榎本、愛甲、伊良部ら、変人たちの奇行も、実際のバレンタイン対球団フロントの醜悪な争いの前に、やや霞んだようだ。

西岡、里崎ら０５年の日本一戦士たちに、いまひとつ元気がないのも影響をしているのか。

意外や、意外、取り上げられていると思われがちの阪神が、ここ最近さっぱりである。

同じ関西球団が、オリックスの最終調整試合が想像以上に伸び、結果、目立ったことで、余計、目立たなさを際立たせている。

江夏、田淵、村山、吉田、新庄、掛布、バースらのビッグネームたちの今後の活躍ぶりが、関西の盟主奪還の鍵を握っている。

その阪神を上回る露出振りを発揮しているのが、その阪神への人

材提供球団化している広島だ。

特に目立つのは、新井の屈折した広島への思いだ。

ただ、現実の新井の不振振りが、目立つと、シャレにならない恐れがあるために、せめて２５０、２０本ラインは超えてほしいところだ。

チームの上昇とともに、露出を増やしているのが、日本ハムだ。

前身の東映フライヤーズの個性が際立っており、話に使いやすいのが、ハムの露出をより増やしている。

忘れられがちなのが、中日である。前半こそ、星野の無節操ぶりが目立ったが、その後急失速。これも現実の星野のカリスマ性の急落に一因があるだろうか。

ピンポイントに前に出るのが、西武だ。

西鉄、西武、ふたつの異なった歴史と黄金時代があり、話の作りやすさは群を抜いている。

ただ、三原マジックがうまく行きすぎな側面があり、当たり外れの強弱をどうつけるのかが、今後の課題である。

なんだかんだいって、多くの話数に顔を出すのが、巨人である。

困ったときの巨人頼みではないが、やはり取り上げる話題・人物には事欠かない球団である。

とはいえ、スター候補坂本はいいとして、オピスポまで登場するのは、時事ネタに頼りすぎで、再考に値する。

ここまでの各球団のもっとも目立った選手・ＭＩＰを決めるとすれば、

巨人　原、内海、坂本、川相が思い浮かぶが、ここは、序盤をぐいぐい引っ張った原だろうか。

ヤクルト　取り上げる機会が圧倒的に少ないが、バント対決で奮闘した宮本あたりか。

阪神　吉田の腹黒さに、新庄の天然さが目立つが、物語のキャラ立ちとしては、吉田が新庄を上回る。

広島　新井、達川、大下、高橋慶彦ら、大変な面子が思い浮かぶが、ここはあえて、珍しく感動ネタに逃げた黒田としておこう。

中日　星野一択か。星野他の中日は恐ろしく目立っていない。田尾、山本昌、福留、宇野、谷沢、権藤、板東、ジャコビーらは、じっと鳴りを潜めているのか。

横浜　大矢、村田、内川、佐々木らの横浜ベイスターズよりも、大洋から秋山登を選ぶ。そうですね一言で済ます解説振りは圧巻だ。

西武　内に秘めた毒性をじっと隠し、ぼけ役に徹してくれた涌井、やっかいな複線を残してくれた大久保、やっかいなのに娘が捕まった東尾、バント勝負の平野、名前だけが心象に残るビュフォードがいるが、

ここは、将来性をかって涌井か。

オリックス　物語のおよそ一割を占める、完結まで三ヶ月以上を要した大作を引っ張った功績は大。さすがのタイゲイニーである。

ソフトバンク　ここもヤクルト同様目だった活躍が見られない。広島戦で、新井を三振に切ってとった三瀬を選んでおこう。

近鉄　楽天を含んで考える。バント合戦のノリ、レッドソックス戦の関根、金村、鈴木啓示、佐野、野茂ら多彩な面々がいるが、近鉄ＯＢ会長ながら、近鉄のイメージが薄くなりがちな、関根を選んでおこう。

ロッテ　変人奇人のオンパレードだが、序盤に登場して、物語の方向性を決定付けた愛甲を選ぶ。

日本ハム　貴重なバイプレーヤーぶりを発揮してくれた森本、暴れん坊軍団東映の象徴張本が二大候補だが、あえてブリューワを推す。

まったく目立たないが、実は二度に渡って登場しているのだ。

ただ、百話を迎えて、なお前振り段階とは、先が思いやられるのだが、真摯に取り組めば、その先には完結というゴールがみられるだろう。

ブランコ、攝津、菊池雄星、糸井、フィリップスなどなど、日に日に、現実球界から、使えるキャラが舞い降りてくるので、早めに完結への道筋を立てないと大変なことになるのだが…。

外国人収容所

現在、東京ドーム横の野球体育博物館は、臨時の外国人選手待機所となっている。

全ての外国人選手は、一度、ここに待機を命じられて、球団から出動指令があった場合に限り、外出を許されるシステムとなっている。

過去七十五年に渡る総勢九百名以上の外国人が一挙に集うだけあって、とにかく賑やかである。

飛び交う言語も、英語、スペイン語、韓国語、中国語と色とりどりだ。

バース、クロマティ、カブレラなど大会でもレギュラー起用の予想される選手は、当然、球団からの要請でここにはいない。

ベンチ入りを争うレベルの選手も、オープン戦帯同のために、出動命令が下っている。

つまり、現在もここに待機している選手は、ベンチ入りも厳しいとの評価であるが、そのレベルはけして低くない。

なにかあれば、我参じまいと腕を撫しているのだ。

待機している外国人選手は、主に在籍した球団ごとに、ブロック分けされている。

巨人フロアは、歴史の長さと偉大な実績に比例せず、意外と地味な顔ぶれだ。

Ｖ９時代は、外人なしの純血主義で戦い、最近は、他球団の実績ある選手に頼りがちだからであろう。

ガリクソンが、メジャー二十勝投手の、オレがなぜ呼ばれないんだと、糖尿病対策にインシュリンの注射を打れば、

感情を表さないことこそ美徳と親に教わったブラッドリーが、相

変わらずの仏頂面を見せる。

ジョンソンが、メジャーの世界一監督が、なんでこんなところに押し込まれているんだと頭を抱えれば、

クレイジーライトことライトは、募らせた呼ばれないイライラを、物品破壊で晴らし、ライトの蹴り上げた灰皿が、まったく存在感のないブラウンに当たれば、跳ね返った灰皿が、

ドアースイングを繰り返す呂に当たり、また打撃フォームが崩れれば、当たって落ちた灰皿を拾い上げたレイサムは、スリーアウトと勘違いして、灰皿を投げ込む。

ミセリが浅草で撮った観光写真を、ミアディッチに見せつければ、ラスとホセとランデルとワズディンは、なぜ日本の球団は、僕らをまた雇ったんだろう？　といぶかしがる。

トマソンは、博物館に押し込まれる前に、街中で見かけた、壁から飛び出た意味不明な突起物を、トマソンと呼ぶ民衆に疑問がいっぱいで、ホワイトは、黒人なのに、ホワイトなんですか？

という聞き飽きた質問にも、笑顔を崩さないと思えば、スミスは上から読んでも、下から読んでもスミスとの応援歌の歌詞に怒りを隠さない。

グラッデンは、西村一中西のバッテリーの顔写真入の人形にパンチの応酬をすれば、それを持つコトーは、左投手の顔を思い浮かべて、一人にやける。

子供に階段から落とされた傷もいえたバーフィールドは、自分より先にバーフィールドが巨人に在籍いたことに驚きを隠せない。

オビスポは、先人に囲まれても、まったくいつものペースを崩されなければ、デビットとグローバーは、存在価値さえ見つけれない。

リンドとカスティヤーノとデラクルーズは、遊撃を守れる外国人であることを、ことさらに誇れば、マントとルイスは、早々と大外れの烙印を押されたことを恨み、ダンカンは、ガルベルの

暴挙を止めたときのポーズを形作り、笑いを誘い、クルーガーとペレスとケアリーとバーンサイドの微妙な左腕連中が大笑いしてる

そばで、陰気なメイはクスリともしない。
アルモンテが加えてた葉っぱを、いたずら顔で取り上げたクレスポは、その葉っぱで、寝ているベイリーの脇をくすぐれば、ベイリーが寝たいた場所は、簡易ベットでもなんでもなく、
サンチェの大きな顔であることがわかる。
アルフォンゾがメジャー実績をひけらかせば、クルーズは、自分の兄の実績を自慢することで平常心を保つ。
ディロンとキャプラーが巨人在籍時の扱いのひどさを愚痴りあえば、ミセリとブラントリーとデセンスは途中入団の悲しさか、
人々の記憶に埋もれいることを悔やむ。

感電死したGGことゴンザレスと、薬物違反で強制帰国を受けたゴンザレスと、二年目開幕スタメンもわずか一試合で見切られた巨人初代ゴンザレスと、あれよあれよと
球宴出場にこぎつけたゴンザレスは、お互い、どれがどのゴンザレスか確認するのも一苦労で、区別のつかないモスビーは、もやもや踊りにぶつければ、やがて足を痛めて
得意の途中リタイアだ。
モスビーが衛生兵はいないかと、呼びつければ、そばにいたジョーンズが救急箱を抱え走ってくるが、オールドユニフォームを好んで身にまとうホリンズにぶつかり、
お互い、ソーリーソーリーと外国人の柄でもなく否を認めれば、ソーリーとコーリーを聞き間違えたコーリーが、存在の薄い自分が呼ばれるわけがないと自己嫌悪に陥れば、
チョン・ミンテとチョ・ソンミンとチョン。ミンチョルは、まるで男前と普通の顔とどちらでない顔の見本市だと、メジャー実績豊富なマックが評する。
マリオがフォークの握りをアピールして、次はフォークが来るぞ相手に植え付けて、ストレートを投げてやると、
、ほくそ笑むことによって、１９７５年以降の外人解禁以降の外

人はあらかた出たと、外国人選手名鑑をめくれば、李、林らの台湾人の育成選手やら、安、呉らの中国人の育成選手やら、ロメロがいたことを失念してたことを恥じた

ジャン・ジェンミンは台湾人は適当な民族性だから、大成しないんだと悟り、広田、宮本、柏枝、ビル西田らの日系ハワイアンの時代に思いを馳せる。

一応にあきらめ顔の彼らに生気をもたらす合図。

博物館の入り口付近から、独特の甲高い声がする。

長嶋だ。外国人選手を指揮下においた経験と物怖じしない英語力が買われて、外国人担当ＧＭに任命された長嶋である。

長嶋の登場は、新たなる出動を意味をする。

外国人収容所（後書き）

ふざけるな頭大丈夫？などの作品への苦情は受け付けます

かくも黒き長嶋

長嶋はぱりっとしたスーツに身を包み、三人のお供を引き連れている。

長嶋の登場で、博物館は一種独特のオーラに包み込まれるが、外国人にとっては知ったことではない。

王がメジャーにも通用する伝説のヒーローである一方、長嶋は、巨人の外国人にとって、ただの頼りない優柔不断なボスなのである。

長嶋は、お供が携えたメモを受け取ると、咳払いひとつしたあとに、メモに目を落とす。

読み上げられた選手は、戦力として、博物館から脱出の許可が出るのだ。

緊張と静寂が支配する中、長嶋とトーン外れの声が響き渡る。

「え〜　ど〜も、巨人軍外国人特別ＧＭの長嶋です…えへへへ…川上の爺さんが、クロマティとウォーリー（与那嶺）では飽き足らないみたいで、戦力補充に来ましたよ〜

エへへへ…まったく、川上の爺さんは、相変わらず、強欲ですね〜えへへ…」

能書きはいい、早く名前を読み上げろと博物館の雰囲気は悪い。

そんな空気を感じ取ったか、感じ取らないか、長嶋は、選手名を読みあげる。

「ラミちゃんいますか〜　エへへへ」

し〜ん。返事がない。

「え？　ラミレスはヤクルトが持っていった？　まったく人様の戦力を勝手に持っていくなんて許せませんですね〜　エへへ。では、ネクスト…クルーンはどうかな？」

し〜ん。返事はない。

「なに？　クルーンはベイが持っていった？　エへへ…そうですか

～。ペタはいるかな？」
し～ん。
「ハウエルでもマルティネスでも、この際、えり好みはしませんよ…えへっへへ…」
し～ん。
「スンちゃん…スンヨプはいる？」
し～ん。
「スンヨプもロッテが持っていった？　ヘッヘ、他球団は、いわゆる強欲ですね～。使いようのない戦力を飼い殺しにしてまで、ライバルの戦力をそぎ落とす気ですか～？　えへへ。ヒルマンやグライシンガーはさすがに強奪されてませんよね～？」
し～ん。
「そうだ、ベターなグットアイデアが閃きましたよ～　シピン！私のファースト政権のクラッチなセカンドベースマンのシピン、彼ならいるはずだ」
し～ん。
「…もう、メイでいい。メイの野郎はいるよな？」
ようやく名前があがった陰気なメイが、もっさりと手を上げる。
メイといえば、阪神退団の引き金となった、野村追訴のビラ配りが有名だ。
そのメイのそばで、憤懣やる方ないのが、ガルベスである。
最多勝投手でありながら、ここまで名前がいっこうにあがらない。それどころか、巨人にしか在籍していないために、他球団からの出場も不可能。
呼ばれない限り、博物館で悶々とした時間を過ごすしかない。
ガルベスの精神力からすると、待つのはもう限界。ボスであった長嶋から、無視されたことで、完全に緊張の糸が切れた。
ガルベスは、あの時よろしく、ボールをむんずとつかむと、長嶋に向かって、投げようとするのだ。
まさに、あの夏の日の悪夢の再現である。

ガルベスの隣にいた、前回忘れられた外国人、ガルベスと同郷のドミニカン、サンタナが止めに入るが時すでに遅し。

ガルベスから投じられた速球は、スピードガンで１５３キロを計測し、ツーシーム回転を伴って、長嶋に向かって飛んでいく。

ただ、長嶋もボールを投げられるのは、生涯二度目（一度目は、巨人入団会見の時、当時小学生の星飛馬）だけあって、手馴れたものだ。

動物的勘か、超人的な運動神経が働いてか、メモを持っていない左手を出して、素手でなんなくキャッチする。

長嶋は、暴挙再びにも、怒りを露にするどころか、笑顔で、

「へへっへ、誰だ！　ちょっと元気があふれ過ぎてるのは？」

殺気立ったガルベスが目に留まり、さすがの長嶋もすぐに感づく。

「なんだ、ドミンコですか～？　えっへへへ…ドミンゴ…えっへへへ…」

ドミンゴとは、長嶋特有のガルベスの呼び名。ガルベスのフルネーム、バルビーノ・ガルベスのどこにも、ドミンコは入っていないが、あえて、長嶋はガルベスをこう呼ぶ。

ちなみに、ドミンゴとは、スペイン語で日曜日という意味。

「うん？　ゲームに出たいのか？　そうか、うん…」

長嶋は監督の職についてない一選手の身なので、チームがどうなっても責任はない。

むしろ、ガルベスという稀代のトラブルメーカーをメンバー入りさせることで、憎き川上内閣を、内部からめちゃくちゃにしてやろうと、長嶋の秘めた黒い部分がうづき出したのだ。

「エへへへ…川上の爺さんに、ワンバブル（一泡）もツーバブル（二泡）も吹かせますか…えへへへ」

「えへっへへへ…。ユーもメイと一緒に、我がジャイアンツに帯同しますか？　えへへへ……」

ガルベスは、今までの動乱どこにやら、しゅんと縮こまって、こ

くりと、うなづく。
長嶋、メイ、ガルベスが手を取り合って同盟を結ぶ。
ここに、長嶋、メイ、ガルベスの変則極悪トリオの誕生である。
とにかく、陽気な長嶋。
とにかく、陰気なメイ。
とにかく、不安定なガルベス。
二人を送り込み、川上の手を焼かせてやろうと、たくらむ長嶋の目論見は当たるのだろうか？

長嶋御一行が博物館を出ようとした瞬間、なぜか、場内の係員に呼び止められる。
「あのう～　入館料（入場料）　まだお支払いになっておられないのですが……」
「うん？」

天下の長嶋とはいえ、しっかりと、入場料は徴収する。
さすが、恒常的な赤字体質の日本野球機構が運営する野球体育博物館。
細かいことから、手をつけないと赤字脱却はならないのだ。

かくも黒き長嶋（後書き）

メッセージは下記にお願いします
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｇ．ｐｈｐ？ｃ＝ｗ５５８５ｄ＆ａｍｐ；ｍ２＝３＆ａｍｐ；ｔｏ＝ｗ５５８５ｄ

パワプロ5決定版?

中日とヤクルトの外国人収容所は隣り合わせである。

呉越同舟というか、両軍の各選手が入り乱れている。

同じ09年度新外国人でも、それほどインパクトがある成績を残していないデントナはまだしも、本塁打王争い独走しながら、いまだ召集がかけられず、ブランコが博物館に留まっているのは意外である。

中日の監督である星野が、落合カラーが強すぎるブランコに拒絶反応を示したのか、ブランコ以上の一塁手がいくらでもいるからなのか、真意は定かではない。

ブランコを取り囲むのが、いわゆるドミニカ組みで、デラロサ、パヤノ、ネルソンの現役世代もいれば、クルス、ブラウン、ベロア、マルティネス、グラセスキ、S・ラミレス、ラミレスなど誰が誰だか、よくわからない面子まで様々だ。

国際色豊かで、そのドミニカ組みの近くでは、イ・ビュンギュとイ・ヘチョンが、日本での待遇の悪さを愚痴りあっていると思えば、失意からの復活で人格者に変貌したイム・チャンヨンがなだめる光景もある。

本塁打王の実績がありながら、守備力の無さと安定感の欠如で、召集が見送られ続けているホージーが、懐かしのプリント倶楽部、通称プリクラを、他の外国人にべたべたと貼り付けるのも、微笑ましい一幕だ。

殺伐とした巨人フロアと違い、意外なほど和やかなムードが流れるが、それを一変させたのが、このホージーのプリクラであった。

二軍暮らしに、収容所暮らしが重なって、韓国のイチローのプライドがズタズタになっていたイ・ビョンギュが、ホージーが、いきなり、頬にプリクラを貼り付けた行為を、コミュニュケーションの一種と取らず、侮辱と取ったため、一騒動に発展した。

募ったイライラで、必要以上に激高するイと、元々、ＮＹストリートの札付きの悪だったホージーのもみ合いは、殴る、蹴るの迫力ある喧嘩に発展した。

百戦錬磨の外国人たちの集まりだけあって、この程度の喧嘩で動じることはない。

そろって傍観を決めるが、切れたら止まらないイ・ヘチョンに、元祖韓国のイチローこと、リージョンボムが加勢したあたりで、しゃれにならないと感じたガイエルが仲裁に入った。

「元気なのは結構だ。けれども、発散の仕方を間違えてはいないか？」

これには、ヤクルトフロアの外国人のボス的存在のペピートンも同調した。

「そうだ、決着をつけたいんだったら、喧嘩でなく、これでつけろ」

バックの奥から取り出したのは、暇潰しのための用意していたゲーム機である。

「この小型テレビにゲーム機をつなぐから、ゲームで決着だ」

ヤンキース黄金の一塁手だったペピートンの命令は、外国人たちにとって絶対だ。

ホージー達は、あっさりと喧嘩を辞めて、しぶしぶとゲーム機の前に集った。

用意されたゲームは、パワフルプロ野球のようだ。

「ここにくる途中、秋葉原で買ったんだ」

とペピートンは説明する。どうやら、ゲームは中古のようで、何年度のものかもよくわからないが、おなじみのアナウンサーの実況パワフルプロ野球の掛け声とともに、ゲームは始まる。

ホージーの選んだチームは、もちろんヤクルト。

「僕がいるね」

思わず、喜びのガッツポーズを見せたとおり、メンバーには、ホージーが登録されている。

となると、９７年、９８年のデータを使用したバージョンのようだ。
「フルタ、イケヤマ、ドバシ、イナバ、懐かしいね…」
稲葉の名前を見たヤクルトの現役左腕バレットが感嘆の声を上げる。
「ひょー驚いた、稲葉ってヤクルトにいたのか？　僕も対戦したけど（交流戦で、日本ハム相手に先発登板している）、彼はいい打者だったよ」

イ・ビョンギュが選んだのは、中日といきたいところだが、先輩のジョンボムの忠告は絶対だ。
「ドラゴンズだけは、やめとけよ」
「ラジャー」
「野球はジャイアンツだ、ビョンギュ」
「ラジャー」
「といいたいところだが、ベイスターズ。スワローズでも、ドラゴンズでもなければ、ベイスターズを選ぶのが、賢い選択だ」
ジョンボムにとって、優勝を目指す中日の前にベイスターズは立ちはだかったチーム。
「お言葉ですが、ジョンボム先輩、ベイスターズはないでしょ？」
ビョンギュにとっては、ただの最弱チーム。
「なにをいうのか、ベイスターズこそ最強のチームだ」
「それだったら、タイガーズを選んだほうがましです」
「タイガース？　うはは、それこそ冗談だぞ」
十年も在籍年度が異なれば、チームの勢力も違う証明だ。
結局、あいだをとったのか、無難に巨人を選択した。

「松井、清原、仁志…さすが、巨人ですね、強力打線ですね、先輩。斎藤、桑田、槙原、ガルベス……。先輩、どいつを先発に送り込みますか？」

「そうだな、どいつも嫌な投手だったが…、槙原がいい。やつのフォーク、スライダーはやっかいだ」
「ラジャー」

一方のホージーは、石井一久を先発に選択するが、打順を決めるときに、ある違和感を感じる。
「度会？　副島もいる？　ア、アンソニー？　なぜ、彼らがいるんだ…？」
ホージーは自分の名前が登録されていることで、９７年度のデータと思い込んでいたが、実際は８年度のデータであった。
９７年度のホージーは本塁打王に輝き、優勝に貢献した偉大なる年だが、９８年度は一転、故障・不振に泣き、あげく解雇の憂き目にあった年だ。
チーム力も当然、雲泥の差で、特に目に余る打力の弱さはゲームの性質上致命的である。
登録されているホージーのデータも惨めで、長打力はまだしも、ミート能力が平均以下ならば、守備力、肩の力は、最悪に近い数値だ。
選択ミスの後悔も、時すでに遅し。
勝負に固執する韓国人コンビが、いまさらの変更を認めてくれるわけもない。

ヤクルトのオーダー
１、飯田（中）２、真中（右）３、ホージー（左）４、古田（捕）５、アンソニー（一）
６、池山（三）７、土橋（二）８、宮本（遊）９、石井一（投）
巨人のオーダー
１、仁志（二）２、清水（左）３、松井（中）４、清原（一）５、高橋（右）６、元木（三）川相（遊）８、村田真（捕）９、槙原（投）

ワニ男パリッシュが、ワニをミミズ男ハドラーに進めれば、ミミズ男ハドラーは、ミミズをワニ男パリッシュに進めるも、お互い、人間の食い物ではないと拒絶しあう中、ゲームは開始される。

横浜隼人高校の四番の親父は代打屋

慣れぬ手つきで悪戦苦闘の両者だが、さすがに野球選手らしく、センスはあり、めきめきと上達していく。

ホージーが、石井一の大きなスライダーで、三振を取れば、ビョンギュは、槙原のフォークで対抗だ。

ゲームは、素人同士の試合は荒れるという戦前の予想を覆して、投手戦の様相を呈するが、

最初に、つまずきを見せたのは、ビュンギュ操る巨人だ。

槙原のスタミナの減り方が、明らかに早いのだ。

「先輩、敵方の石井は、まだピンピンなのに、こっちの槙原は能力が減退しています。なにか、敵方の工作が仕掛けてあるのでしょうか？」

確かに、ゲームとはいえ、先発が三回でスタミナ切れは欠陥だ。

「う～む…工作の余地もありそうだ、なにせ、敵方の一味の一人が用意した代物…。そうだ、思い出した、この年の槙原は、途中で抑えに転向を果たしたはずだ」

「だから、スタミナの数値が中途半端なんですね。どう対処します、先輩？」

「桑田、斎藤を容赦なくつぎ込め」

「いいでんすか、先輩？　ゲームとはいえ、先発を次々つぎ込んで…。それでは、あまりに、勝負に固執というか、もはや子供じみていませんか？」

「いいんだ、勝負なんぞ勝てば、なんでもいいんだ」

「ラジャー」

斎藤の登板に、逆にホージーが色めき立つ。ホージーにとっての斎藤は、平成の大投手でなく、小早川に三連発を打たれた、平均的な投手なのだ。

ホージー操るホージーが、覚えたての強振で、斎藤の１４３キロ

の直球に狙いを定めれば、白球は閃光のようにスタンドに飛んでいく。

「キャホーイ～～」

コントローラーは宙に放り投げて、ガッツポーズだ。

だが、ホージーの必要以上な派手な狂気乱舞に、韓国人コンビは血相を変える。

「当てていいですか？」

「許可する」

ビュンギュは、ヤクルトの各打者の体目掛けて狙いにいくが、ゲームの性質上、死球は狙っても出しにくいのだ。

いくら、斎藤のスライダーを内角ギリギリから曲げても、打者はするりとよける。

あげく、死球攻めを感知されて、逆に、悪球を狙い打ちされる。

鬱憤晴らしの死球攻めのはずが、気がついてみたら、大量のリードを許してしまう。

必殺の電源切りで、ノーゲーム作戦も、伸ばした手の先に、察知したロブロの手があり、ブロックされる。

人格者ロブロに諭された韓国コンビは、仕方なく、ゲームを続行する。

だが、この続行が、韓国コンビにとって吉となる。

博物館に来訪者。外国人の臨時招集の任を受けたヤクルト編成部長の小田義人だ。

ホージーは、ようやく自分の出番かと色めきたつのだが、

「ブロス！　召集理由として、長身からの角度ある剛球と、縦のスライダー」

「イム・チャンヨン！　説明不能、今季の著しい活躍から、抑え候補の一人に急浮上」

「スコット！　ダイヤモンドグラブ獲得の守備力は貴重だ」

「ホッジス！　実力どうこう以上に最多勝の実績は偉大」

すでに召集されている、ロバーツ、ヒルトン、ホーナー、ハウエル、ペタジーニ、ラミレス　グライシンガーに加えて、新たに、四名が召集される運びだ。

ゲームを操る手を休めて、小田の声に聞き耳を立てていたホージーは、ひどくうなだれている。

またも、召集の声がかからなかったのだ。

いくら、小田がこれが最後の召集ではないと強調しても、感情はゲームにも強い影響を及ぼす。

気の抜けた打撃に、意味不明な配球に、弱い球際…あっという間に、大量のリードは縮まり、

石井一のスタミナは切れる。

ホージーも負けじと、石井と並ぶ三本柱の伊藤智、川崎の投入を図るが、致命的なミス。

オーダー決めのさい、彼らをベンチ入りさせていなかったのだ。

廣田、この年、不調の高津、伊東昭光、恐ろしいことにまだいる高木に、渡辺久信…。等々、頼りない面子がリリーフにずらり。

スタミナ切れで、１３０キロまで球速の落ちた石井一よりましと、名前を買って、高津を送り込むのだが、切れのないシンカー一球種は、松井、清原、高橋のＭＫＴ砲の格好の餌食になる。

リグスが、大きな頭を揺さぶりながら、必死の応援しても、ミューレンがにたにたしても、

スミスとスミスが俺だれだっけと自己嫌悪に落ちても、デシンセイが、長嶋一茂のマスコミ攻勢にうんざりしても、ブロハードが、ホーナー入団で、失意の帰国をしても、ガトームソンが、毛生え薬の効力を確かめても、ヤクルトの試合の劣勢はひっくり返らない。

ビュンギュ操る巨人の桑田、ガルベスの継投に抑え込まれたまま、試合は九回に突入する。

ガルベスに代打福王を送って、さらなる引き離しを考えたために、九回はリリーフに託すしかないのだが、巨人強力先発陣は、すでに弾切れだ。

「先輩、どうします??　抑えに、どの野郎を送り込みます???」
「うむ…。三沢?　入来?　野村?　西山?　河野?　どの野郎も、とんでもないだめ投手じゃないか、大巨人でありながら、ろくな抑え投手がいないなんて…。だからいったろ?　ベイスターズにしておけって。ベイスターズなら、大魔神佐々木がいたんだ」
「いまさら遅いですよ、先輩…。それに、最初に巨人を進めたのは、先輩じゃないですか。抑えの槙原を先発に推したのも先輩だ」
「なにを、目上に口答えするのか?　儒教の教えをなんてこころえる」

これだけ険悪なムードが立ち込めれば、ゲームにも影響…といかず、ゲームで結構強力?　な西山が、あっさりと、ヤクルトの、青柳、佐藤真一、大野の代打攻勢を抑え込む。
勝負は感情を凌駕する、韓国人の気質が垣間見れた一幕だ。
(ただし、感情も勝負を凌駕する、主に敗戦濃厚の場合)
韓国人コンビは、勝利を喜ぶが、ふと我に返ると、何の見返りがないことに気づくのだ。
「そうだ、先輩、勝利の戦利品として、竹島を韓国固有の領土と認めさせましょう」
「おう、そうだ、それはいい考えだ」
韓国人コンビが、日韓の領土問題を、アフリカ系アメリカ人に訴えても、何の意味もないと気づくのは、これから、けっこう間がかかる出来事であった。

関西にいまだある風景

「あのう…」
「し、声が大きい。わしらが、野球賭博の開帳者だと、他の客人に悟られたら、どないするんや」
「そ、そうですね…」
「キミもな、玄人の世界に踏み込んだなら、ルールを遵守せなあかんわ」
「それで、どんな仕組みなんですか」
「まあ、大まかに言わせてもらうと、勝つチームを当てるんや。ただ、そんな簡単なこたあない。十二分の一や、子供でも、おばさんでも、
勘で当たるちゅうはなしや。それも、あれこれ、楽しい要素絡ませて、商売に昇華させるのが、わしらの腕の見せどころや。簡単にゆうと、ハンデやな。例えば、高校野球を例に出そうか。」
優勝高校何回もある、関西の有名野球学校と、あれよあれよと勝ち進んだ東北の初出場のふつーの県立高校が、甲子園の緒戦で、顔を合わせるとする。
こんなもん、はなから、有名校が勝つのに決まっとる。だが、それじゃあ、商売にならん。そこで、ハンデをつけるんや。例えば、この組み合わせやと、三点。三点もハンデつけときゃあ、３－１とか、善戦に持ちこみゃー、勝利や
東北の高校のハンデ勝ちや。これだと、俄然勝負が面白ろうなるわなあ。客の熱の入れようも違ってくるつうもんや。ただ、そのハンデ付けが難しいんや。つけすぎてもあかん。一見、実力が離れてそうで、そうでない場合もある。
高校野球つうもんは、しょせんお子様同士や。名前や看板の実力差なんぞ、すぐひっくり返る。客もよう知ってるもんばかりやから、漬け込んでくる。まあ、これは、高校野球の話しやけど、今度のベ

ーなんとかつう、大会も同じや。
７５年の歴史上の選手が全員集うんや。しかも、前代未聞の取り組みと来てる。名うてのハンデ師のわしでさえ、綿密な戦力分析はお手上げの状態や」
「なるほど、そこで、僕の出番ってわけですね？」
「そうや、わしがみこんだ、戦力分析の神様のキミにやな、ハンデ付けのお手伝いを頼みたいつうわけや」
「神様ってほどでもないんですけど…。ただ趣味が高じて、データサイトを運営してるだけですよ」
「そのサイなんとかが、わしが見ても舌を巻くレベルなんや。予想、分析も適確なら、選評も的を射ている。で、どないや、肝心の大会の分析のほうは…」
「ええ、色々な筋から情報を集めて、多角的に分析している最中です」
「で、単刀直入に聞く。どこが、強い思う？」
「巨人…」
「やっぱジャイアンツかいな。まあそうなるわな。ダントツの日本一の回数を誇っておる」
「といいたいところですが、オリックスが来ると僕は睨んでます」
「ほう…これはまた、面白いとこついてきたなあ…。で、どのあたり買っておるんや？」
「まず機動力と守備力の二軸が備わっています。松永、大橋の三遊間は、いずれも強肩と広い守備範囲を誇ります。さらに、簑田、福本、イチローの外野陣は、ちょっとやそっとや、打球は抜けはしません」
「イチロー、福本の一、二番コンビも絢爛豪華やな。足もあれば、巧打もある。福本には、粘っこさと選球眼。イチローには、プロ野球史上ダントツのミート力。二人の出塁率は軽く四割を超えると、わしは睨んでおる」
「その後もすごいですよ、長池、ブーマー、加藤、石嶺、マルカー

ノと、勝負強い打点王経験者が続々と控えています。若干、守備位置が重なる部分がありますが、そこは、仰木、上田の両名監督が上手く起用していくことでしょう。投手力も、山田、米田、梶本の名球会三本柱に、星野、足立、石井茂といった変則投手が控えていますただ問題は抑えです。山口高志や平井などの剛球投手が来ると見ていますが、いずれも、速球一本押しの投手です。力勝負に固執すると大崩れする危険性を含んでいます」

「ただ、わしは、その監督二人つうのが、ひっかかるんや。勝負は人間のするもんや、感情が左右する。監督が、二人いちゃあ、選手が、どっちを向いて、仕事をしていいのか、迷いが生じると見ておる」

「そこは心配無用ですよ。オリックスの選手は、大人の集団。割り切ってますよ」

「そういうもんかのう…。で、阪神はどないや…？　関西の優はオリックスつうより、やっぱ阪神や」

「……」

「いきなりダンマリかいな」

「すいません…。戦力的には、見るものがあるんですが、その抱えている火種があまりに多くて…。それが、いつ爆発するかってレベルじゃなくて、必ず爆発するレベルなんです」

「まあな、ムッシュの吉田に村山に、独善的な藤村のおっさんも、権藤をサル呼ばわりして殴られた金田もおる。たしかに、やっかいなメンツや。岡田と掛布の関係も微妙や」

「バース、掛布、岡田、藤村、真弓、田淵、金本のダイナマイト打線レジェンドの破壊力はすさまじいものがあるんですが…。僕はお家騒動の結果、すぐさま敗退すると読んでます。やっぱり、三強をあげると、オリックス、巨人に西武ですね」

「で、苦しいとこあげて見てくれるか？」

「やっぱり横浜ですね、監督どうこうより、六十年の歴史がありながら、投手のベンチ入り十二名をあげるのでさえ、大変なんです。

これでは、とても戦えないと見ています。それに、日本ハムも苦しい。ここも投手です。

ダルビッシュがエースと騒がれていますが、たしかにダントツのいい投手です。でも、それが即、球団の歴史上のエースとなると、ちょっと疑問が生じるのです。環境適応力の無さも、気になるところです」

「そうか…。あとな、オリックス阪神と来たら…」

「近鉄ですね？」

滝川中学

「ちゃうちゃう、ソフトバンクや、いや南海や。巨人ー阪神が伝統の一戦ゆわれおるが、違う、わしらの時代は、巨人ー南海こそ、伝統の一戦や。別所さんの因縁でな、そりゃ毎試合、大変な空気やったんや

「ソフトバンクは強いですよ。やはり、南海時代、福岡時代と二度の黄金時代を築きあげたことはあります。戦力に厚みがあるんです。相手や球場に合わせて、どんな打順も組めるんですよ」

「だが、福岡の長、王が当然巨人から出場するちゅうんで、ホークス見れんのや。鶴岡の親分に、松中、城島らクセのある現役組の連中がついていくんか、心配なんや。鶴岡ゆうてもぴんとこない世代やろ?」

「それ現役組よりも、もっと、やっかいなのがいますよね?」

「野村か」

「そのとおりです。僕なら、野村を外しますね」

「３０００試合に三冠王の大捕手やぞ?」

「捕手なら、城島で十分です。打撃成績は劣りますが、肩の強さで補ってます。なにより、明るいキャラがいい。短期決戦には必要ですよ、城島のようなタイプは」

「ＤＨで使おうとも、そこには、門田や松中がおるしな…。となると、代打要員でベンチに座る…。あかんわな、控えで腐るだろうノムがベンチにおったら、ムード最悪や。

城島のリードをぶつぶつと即興で批判するのが目に浮かぶわ」

「ですよね? だから、僕ならベンチからも外します。代打兼控え捕手なら、吉永という最適な存在もいます。荒削りですか、田上を入れてみるのも面白い。でも、

鶴岡監督は、城島と野村の二人を最後まで競わせています。どうやら、実績と経験を買って野村を使うようですが」

「そうくると、城島が面白くないわな」
「メジャーリーガーのプライドもありますし、ＷＢＣの恨みもあります、どっちにしろ、険悪なムードに包まれるでしょう…。だから、僕は戦力は買っても、過大な評価はしません」
「先発はどないや？　杉浦、皆川、宅和の南海勢に、斉藤、和田、杉内の現役組が重なる、けっこうなもんやな」
「ただそうなると、先発を読むのが難しくなりますよね？」
「そうなんや。年長者で権力もある三原のおっさんが、予告先発断固反対の姿勢や、となると予告先発は見送られる可能性が高いわ。ハンデ師の最大の仕事は、先発を読むことや。やっぱり野球はなんやゆうても先発や。先発がわかれば、試合展開もおのずとわかるもんや」
「先発を事前に読み解けば、ハンデもつけやすい」
「その先発を確実にモノにできれば…」
「そんな方法あるんですか？」
「簡単や。女を抱かせるとかな、酒を飲ませるとかな、金をつかませるとかな、色々とあるんや…。金ゆうても、選手は名選手ばかり、みんなお金持ちや。となると、博打で負けこませてな、借金させるのが手っ取り早いわな」
「古いですね」
「古い？　こんなんに古いも、新しいもあるんかい。秘密を引き出すのには、欲望をつくんや。これはな、何十年たっても永久に変わらんのや。とにかく、先発漏洩は、八百長の誘いと違ってな、ガードが甘いちゅうかな、意外に簡単に口を割ってくれるもんなんや」
「そこまでしなくても、もっと、楽で確実な方法ありますよ。現代は情報社会ですから」
「なんや、その方法ちゅうのは？」
「ブログですよ、ブログ。最近の選手は、パの投手は予告先発、セの投手も、新聞予想がほぼ当たるせいか、先発秘守義務の意識が低

いんです。特に先発投手は、暇にまかせてブログの更新を頻繁にするものが多いんです。

　更新するたびに、ネタがなくなる、となると、先発の日程をこっそり洩らす…とまでは、さすがにいきませんが、選手のスケジュールを紐解いておけば、先発は自然とわかるんです。例えば、先発前日は、外出を控えるとか、

決まった場所で過ごす、緊張のためか、ブログ自体、堅めな雰囲気で統一される…といった類です」

「ブログ？　ネットかいな…今の選手はそれやるやろうけど、昔の選手はようやらんやろ」

「それが、大会中、すべての選手のブログ更新が義務付けられいるんですよ」

「なんやて？　わしと同じで、パソコンなんぞ、ちんぷんかんぷんの連中やろ？」

「口述筆記ではありませんが、選手のコメント、今日の出来事の簡単な感想を、担当者が拾い上げて、それを代わりに、パソコンやケータイを使って入力…。これだけでも立派なブログになりますから」

「まあようわからんが、わしの古いちゅうか恒久的なもんと、キミの新しいの、どっちがより確実に先発を知ることができるか、勝負としゃれ込もうやないか」

「そういきましょうか、より説得力のあるプレゼンをしたのはどっちか？　を胴元に判定してもらって、その先発でハンデ付けと行きましょう」

「そうやな、胴元に判断は絶対や」

「でも、意外ですよね」

「なにがや」

「巨人、大洋いわゆる横浜、どちらからも出場されないなんて」

「わしの存在がうっとしいんやろ。まあな、わしも外野で、あれこれいちゃもんつけたほうが、気楽でええわい」

「そうですか、残念です…伝説の豪快な打撃をこの目で見たかった

のに…。それでは、青田さん、またの機会に……」

「おう…」

滝川中学（後書き）

気がついたら開幕前に１００話超えてた

最終ロースター発表スペシャル～横浜編～夏の日の絶対勝利宣言

「えー大事な選手選考をファンに委ねるとはばかげた行為との批判もあるでしょうが…」

のっけから大矢の歯切れが悪い。それもそのはず、大会登録メンバーをファンの投票で決めるというのだ。

狙いはどこにあるのか？

惨めな早期敗戦を想定した監督、スタッフ及びフロントの責任放棄との声も上がったが、実際は、ＴＢＳのスポーツ部から、持ち上がった企画だ。

球団上層部より、親会社とはいえ、テレビ局の意見が通るところに、横浜のゆがんだ現状をよくあらわしている。

選手の反応もすこぶる悪い…はずだが、意外にも淡々と受け入れている。

「この手の、※1企画物のファン投票は、現役の選手に偏りがち、オレたちが有利…。だよな、ウッチー？」

「ですよね、村田さん…、愛子様に投票権がおありなら、いっそう僕が有利」

「ああん？　皇室だろうと民間人だろうと、一票の重みは同じだろ？」

※1、神奈川の地元ローカル局、ＴＶＫが二十世紀ベストナインをファンに問うたところ、

９８年の日本一メンバーに、右翼にブラッグス、その年の首位打者金城をサードに入れた面子に決まった。　つまり、佐伯と進藤は省かれたのだ。

現役世代が、自身を持てば横浜大洋世代も同様。

「ふふふ…甘いわ…。８０年代のプロ野球テレビ人気全盛期に活躍して名と顔が売れたオラらが有利だよな？　遠藤…」

「当然ですよ、明夫さん…」

斉藤明夫が、今時はやらない、なまず髭をぴくつかせれば、それを受けた遠藤が、ＨＯＹＡ製のメガネをくいと上げて、高貴なプライドをちらつかせる。

ただ、現代のファンに名が売れるのも、いいとこだらけではない。

「ヘボ采配ばかりしてるから、オレ危ないかもしれねえな…」

田代が肩を落とせば、山下がすかさず、実も蓋もないフォロー。

「大丈夫だよ、オバＱ、横浜の監督なんてみんな最下位経験者なんだから」

こうして、とんでもない企画はあっさりと選手の了承を得て実行に移された。

ファンとは、誰なのか？　誰でも投票できるのなら、他球団ファンの陰謀で、戦力ダウンが容易にできる。

例えば、サード銚子、ショート高橋雅、抑えデニーに集中的に投票すれば、それだけで、試合に勝つのは難しくなる。

横浜ファンに限定しなければ、投票が成立しないと、ファン認定に簡単なテストが実施されることになった。

お題は五つ、横浜ファンならば、答えて当然の問題ばかりだ。

Ｑ１、横浜の外国人投手で、最も勝ち星を上げた投手は誰か？

１、ホルト　２、セドリック　３、ドミンゴ　４、ホワイトサイド　５、マットホワイト

Ｑ２、　この中からＣＭ出演経験のない選手を一人だけ選べ。

１、高木豊　２、中山裕章　３、金城龍彦　４、佐々木主浩　５、遠藤一彦

６、谷繁元信　７、多村仁　８、斉藤明夫

Q3、さらに、一人のぞいた上記の面々が出たCMを答えよ。
なお、複数に渡るCM出演経験者は、ひとつ上げるだけでいい。

Q4、1995年、時の近藤昭仁監督が、開港記念日に開催されるホームの試合を絶対勝利試合と宣言した。その試合のスコアと勝敗を書け。

Q5、大洋が、横浜に移転して、横浜大洋に改称する際、株式の譲渡が行われた。
筆頭株主は、もちろん大洋漁業であるが、半分近くの株はどこから、どこへと譲渡されたのか？　その企業名を記せ。

簡単なテストといいつつ、とんでもない奇問、珍問だらけだ。
ところが、現代はネットの時代。キーワードひとついれれば、答えが出てくる時代。
度重なる検索の試行錯誤を潜り抜けて、晴れて投票権を手にした横浜？　ファンが大挙、聖地横浜スタジアムに集う。
関内駅から降り立つファンが、マリンブルーに身を包んだ、横浜ファンが占める…と思いきや、虎柄のハッピを着た関西訛りのものから、竜の刺青入りの物騒なものやら、呼ばれざるもの？　たちの姿も…。
はたしてどうなる、※2前代未聞のこの試み？

※2　前代未聞といいつつ、2000年、近鉄が、ホーム開幕試合で同じように、ファンが投票をしてスタメンを決めている。
普通のベストオーダーに決まり、ほっとするやら、ならやる意味があったのかと喧々諤々の議論…とそこまでの話題性すら残念ながらなかった。
また、仰木監督のオリックス一年目のオープン戦でも同様の試み

が行われて、そのときのファン投票一位が移籍したばかりの岡田、二位がパンチ佐藤というとほほな結果に終わってる。

なお当時、鈴木一朗だったイチローは、期待の若手として、なんとか枠内に滑り込み、スタメン出場を果たしている。

うろ覚えのオーダー。

鈴木８　田口５　佐藤和３　岡田５　高橋智７　藤井９　小川６　中嶋２　福良４

おそらくこんな感じだったと思われます。

最終ロースター発表スペシャル～横浜編～夏の日の絶対勝利宣言（後書き）

一月ぶりの更新でも開幕するそぶりさえない。

高田、長崎、内川…皇室は左翼がお好き

入場待ちのファンで横浜スタジアムの入場ゲートはごった返している。

「何度も繰り返しますが、球団公式のホームページから、テストを受けていただいて、全問正解なら、認証ページに移動、そこにある、認定画像をプリントアウトして、それをお持ちいただけなければ、投票権はありません…」

「皇室のものでもないのか？」

「皇室といえど、平等の方針でして…」

「そうか…せっかく、認証ページにたどり着いたのにのう…、肝心のプリンターがないのだ。今度、雅子にプリンター買ってもらうかのう」

「順調かな？」

「あ、大矢監督」

「小学生のそれも小さな女の子、入れてあげればいいじゃないか…」

「だめですよ、世の中にはルールがあるんです」

「さすが、相模原市役所出身の高木由一は細かいねえ」

「公務員は、規律を遵守することが第一ですからね」

三割を何度も打った高木由一（嘉一、好一）を入場ゲートの係りに置くほどの豪華さを見せるファン投票イベント。

そこまで、細かくやるなら、明らかな他球団ファンは通しちゃいけないのに、認定のプリント用紙があれば、ほいほい通してしまう有様。

「はい、これが投票用紙。イベントが開始するまで回収するから、

それまで、しっかりと書き込んでおいてね～」
明らかな阪神ファンの連れに用紙を手渡せば、
「横浜の選手って誰がおったけ？」
「…、若菜、加藤博一とかおるやん」
「おおおった、おった…。って、みな元阪神の選手やん」
「阪神関連の選手で埋め尽くしといたれ」
「それおもろいな…。阪神関連の選手うめたるか…。四番はパチョレック…。先発は野村の収やな…中継ぎは池内に、佐久本と…。こりゃ弱いわ、さすが横浜阪神両方の負け犬魂持った選手やな」
「負け犬はよけいやんけ」

スタジアムにはわれもわれもと、人が押し寄せて、いつのまにか、三万の席はすべて埋まり、
高校野球の夏の予選決勝と見間違うばかりの客の入りだ。
ただ集計の必要があるために、発表までには、時間がかかる。
そのため、グランド上では、ファンを飽きさせないために、さまざまな創意工夫がされている。
川村の厚木東高校時代の伝説の練習、かまぼこ板投げの再現。
若菜捕手による、ホームベース上での空タッチ講座。
谷繁、盛田による、似合わないチョビ髭の進め。
ブラッグスの鼻の穴に、いったい何が入るか。
佐藤政夫のクニャクニャ投法、木塚、五十嵐の独特のセットポジション物まね大会。
…等々だ。

ところ変わって、監督室には、大会監督の大矢を始め、歴代の横浜、大洋の監督が並んでいる。
山下大輔、田代富雄、近藤昭仁、江尻亮、土井淳、秋山登…。歴代、しかも二年で監督がころころ代わるチームで歴代監督たるものがこれだけとは異常な有様。

それもこれも、外様が大半を占める歴代の監督、横浜などから誰が参加するかと、他のチームに散っていったからだ。

半期で終わった江尻をのぞき、すべて最下位経験者であることも、これまた異常な事態だ（田代は予定）。

これから投票の集計作業に入るのだが、下のものやバイトにでも集計など、任せておけばいいと思われがちだが、これも自ら投票結果を確かめて、現実を受け入れるという監督たちが決めた方針だ。

投票結果を淡々と読み上げるのは、俳人として知られた江尻（唯一の勝率五割こえ監督※ロッテ時代含まず）

「投手、高野…」

「高野？　おいおい高野はヤクルトの投手だろう？」

さっそく、大矢（監督通算勝率，４４７※０８年度まで）から横槍が入る。

「まったく、小難しいテストやったわりにこれだ…。間違えるにしても、せめて、横浜在籍経験のある選手をあげてくれよな…最近のファンの質は…」

「うん？　高野」

年長者の土井（監督通算勝率，４２２）が感づく。

「高野って投手いたよな。たしか、球団創設期のエース投手だ。高野裕良だったかなあ。どうだ、秋山、君も覚えてるだろう？」

高校時代からの盟友秋山（監督通算勝率，３９５）に問う。

「……高野？……いたね…、うん、いたよ、うん……」

「いたんですか、これはお恥ずかしい」

大矢は年甲斐もなく照れる。

「しかし、六十年前の選手を記入するなんて、物好きなファンがいるもんだねえ。僕でさえ半世紀前の選手なのにさ」

一癖ある近藤昭仁（監督通算勝率・４６１）がすかさず茶化す。

「どうせ、年寄りのファンだよ、還暦どころか、七十越えてるだろ

…どれ、江尻見せてみ」
近藤は、江尻から用紙を受け取ると、年齢欄を確かめる。
「どれどれ…19歳？　なんだい若者じゃないかい、それも平成生まれときた。われわれでさえよく知らぬ先輩の名前をよく書けるなあ」
協調派である山下（監督通算勝率・380）がフォローだ。
「若い人ほど、昔の記録とかに熱心なものですよ。ほら、見てください、記入欄の横に書き添えられた熱いメッセージ」
そこには、貴重な二十勝投手が投手陣から漏れることは許されまじとある。
「熱心なのはいいけど、見たこともない選手の名前をよく書けるわな。最近の若者ってやつはようわからんわ」
近藤昭仁（監督通算最下位回数三回）の性格上、簡単に折れることはない。

ただ開票するだけでは、気がすまない、おしゃべりの近藤昭仁（監督広しと言えど、ペナントで一試合勝っただけで、シリーズや球宴のような大舞台さながらに、勝利者監督インタビューをやるのは彼くらいだ）
「それで、あのテストの答えはどうだったのよ？」
大矢（監督通算最下位数一回＋一回）は答える。
「あれれ、近藤さんわからなかったかんですか？　僕と違って横浜生え抜き（選手として）なのに」
「生え抜きだろうと、わかる設問じゃないだろ、あれ」
「でも、近藤さんの監督時代の問題もあった。問いの4でしたっけ」
「僕の監督時代ってことは、大矢、君もコーチとしていたはずだ。君はわかったのか？」
「……」
「ほらみろ」
「記憶がないけど、敗戦が正解のはずですよ。なぜなら、勝利が答

えならば、面白くもない問題ですから」
「さすが、捕手らしく読むな。で、問い2だっけ、ＣＭ出演ないの、あれ、多村だろ？」
「ご名答…。あれは完全にわかりました」
ちなみに、遠藤、斉藤明夫、メガネ会社のＣＭ（遠藤は解説時代に三菱地所のＣＭあり）。
中山、マルハのパッ缶。佐々木、日清ごんぶと、ミロ。
金城、打率が一割下がったら大変ですよ。（００年．３４６→０１年．２７１→０２年．１７０）
谷繁、ナイキのＣＭでなぜかバスケ。
高木豊、解説時代に、ヘアフォーライフ。

「しかし、※ＷＢＣの五番打者がＣＭ出演経験すらないとは嘆かわしいことだ」
近藤昭仁（監督通算Ａクラス回数一回）がため息交じりなのも、ごもっとも。
※ＷＢＣ初代のメンバーの主なスタメンのＣＭ出演暦。
イチロー…数え切れるほど多数。　西岡…ナイキ。
福留…ローカルＣＭ。松中…ソフトバンク、ローカルＣＭ。
多村…。岩村…兄が営む漁業関連の会社の宣伝ポスター。
小笠原…日本ハム本社ＣＭ。里崎…ローカルＣＭ。
川崎…ローカルＣＭ、ヨドバシカメラなど。　松坂…ハンバーガー計画、スポーツドリンク「ＳＰＥＥＤ」、バンテリンなど多数。
なのだから。

「５の答えは、西武から、ニッポン放送とＴＢＳだったよな」
「ええ、西武がライオンズを買うときに二重の株保持が問題になって、大洋の株を譲渡したんですよね」
「ふたつの放送局が株を持ったおかげで、権力闘争が激しくなったよな」

関根…ニッポン放送、近藤昭人…ＴＢＳ、大矢…ニッポン放送、山下、牛島…ＴＢＳ、田代…ニッポン放送と、よその球団から、監督を連れてくる場合をのぞき、たいていは、このふたつの放送局出身の解説者から監督になっている。

ＴＢＳが親会社になったことから、ＴＢＳ派に傾くと予想されていたが、大矢や田代が監督（代行）に就任したことから、権力闘争とは、一筋縄でいかないようだ。

「それで、問い１は誰なのよ？　一番多く勝った外人投手ってのは」

「ドミンゴ…。じゃないかな…自信ないけど…」

「ドミンゴ？　本当かい？　アイツ、ウチでは二年そこらで、シーズン８勝くらいの投手だろ」

近藤と大矢が自信なさげに進める中、土井が助け舟だ。

「いや、あれは、セドリックだよ。ドミンゴが１３勝、セドリックが１４勝。たかが、一勝の違いだけどね」

さすが、名捕手だけあって、土井（監督通算最下位回数一回）のデータ蓄積能力はすさまじい。

「いたなあ…。セドリック…、たしか、合宿住まいで、寮のトイレで、自分したものを流さず、顰蹙をかった投手ですね」

山下（監督通算最下位回数二年で二回）が懐かしがるが、その山下政権二年目の０４年の最多勝投手が、途中入団のセドリックの７勝というのも、悲しい事実だ。

「しかし、グライシンガーやらルイスやらが、年に１５とか勝つ時代に、六十年の歴史で最多勝が１４勝のセドリックというのもなあ…。ランドルフはまだしも、ウォーランド、グリン、マストニーで、今年のうちがどれだけ試合を落としたことか…」

田代（監督通算最下位数…一回の予定だが、０９年度の最下位が、代行の彼につくのか、休養の大矢につくのか判断に困る）がため息。

外国人取りに定評ある横浜も、投手にまで、そのノウハウは培われてないようだ。

開票作業は、淡々と続く。
「はい、捕手門前、内野、一塁からマイヤー、種田、宮崎剛、引地、外野は、岩本尭、渡辺、レイノルズ…」
相変わらず、江尻が渋い声で読み上げれば、
「捕手門前とは渋いところつくね、球団の捕手本塁打シーズン記録の持ち主だ」
近藤や土井はいちいち名前の上がった選手で議論に花が咲く。
「いやいや、引地さんも負けずに渋いよ。二軍監督であり、初代鉄人だ」
この中では若手のために、選手の名前と数を正の字で記入することを任された山下と開いた票を散らかすことなく、整頓する係りを任された田代。
「ふう、疲れた…。開いても、開いても、まだまだ票の箱の山…」
「三万ですものねえ」

延々続くと思われた単純作業に水を差したのが、最年長の秋山の一言だ。
「発表、今日？」
大矢は、いったん票を開ける作業の手を止めて、大先輩の疑問に敬意を払うように笑顔で答えた。
「ええ、集まった観衆の前で、大々的に…。ローカルではＴＶＫ。全国向けにはＣＳ中継もありますよ。たしか六時からだったかな」
無口な秋山に代わり近藤が口を挟む。
「間に合うのか？」
近藤の一言が、彼らと球団の運命を劇的に変えるとは、このとき

誰も思わなかった。
「なにがです」
大矢は、秋山のときの返答と違い、近藤には、口うるさい先輩をたしなめるような口調だった。
「開票だよ、開票」
「あ」
「三万もの票を、われわれたった数人で、夕方までに開票できるわけがない」
「あ」
「いまさらだが、どういった意図で、われわれが開票作業してるんだ?」
「票操作の防止ですよ。われわれが自ら、開票することにより、不正な操作のチェックも果たす…」
「不正もなにも、開票が間に合わなきゃ、意味がない」
「あ」
「で、どうするんだ、残りの三万近くの票…」
不穏な空気を感じ取った山下が乱れそうな和を、立て直そうと激励まじりの言葉を発する。
「急ピッチにやればできないことは…」
現実路線の近藤は意に返さない。
「間に合うわけがない」

「それではどうします?」
スマートな頭脳の持ち主と定評のある江尻は、解決策を見つけることに勢力を傾けようとする。
「勝手に決めたメンツを…」
秋山がぽそっと発した一言が、彼らの道筋を決定付ける。
「発表すればいいんじゃないか?」
同期の土井がすかさず秋山の言葉に付け加えてフォローだ。さすがに長年培ったバッテリーの呼吸はピッタリだ。

「あ」
いつだって大矢は驚く役目だ。
「そうだな、だいたい、大事な選手選考をファンに託す意味がわからん。この大会は、オールスターであって、オールスターじゃないんだ。遊びじゃない、真剣勝負なんだ」
いつだって近藤は議論の中心に居座ろうとする。
「それがいい」
田代はただ賛同するだけだ。
「だけど、どうします？　もしファンが感づいたなら、こんな投票結果はおかしいと」
山下は全体に留意し、疑問点をぶつける。
「あ」

「どうもなにも、この手の投票は、結局、誰もが納得する面々に収まるもんだ」
相変わらず近藤は、口やかましく小言を言う。
「でも、明らかに、ベイファンでないものも、投票している。スタンドのいでたちを、見れば明らかです。もしかすると、彼らの勢力が純然たるベイファンを上回っているかもしれない」
山下は、引くところは引くが押すべきところは押すのだ。
「一部の暴徒が目立つだけで、実際は、良心的なファンの勢力がはるかを占めている。絶対値が大きくなるにつれて、善は悪を必ず、凌駕する。これが数の論理」
広岡が操るリモコンこと江尻が結論つけて場は決まる。
近藤…早稲田。江尻…早稲田。秋山、土井…明治。
大矢…早稲田…実業から駒沢。田代…藤沢商業。
横浜の命運を任された彼ら頭脳集団の知恵と決断力により、厳正なる開票は放棄された。

とはいえ、実際は、巨人、中日、阪神の三大悪…もとい老舗球団

のファンたちが、結託して、横浜を、弱小チームにするべき、組織的に集団投票をしていたのだ。

彼らの数が千も満たないとはいえ、六十年の歴史を繰るスケールの大きい投票の性質上、どうしても、数が割れる。たとえ千に満たないとはいえ、無視できる勢力ではないのだ。

公正なる開票が行われていれば、彼らの組織票の選手で占められていた可能性は低くない。

ちなみに、これが、彼らの投票した組織票の代表的一群だ。

投手、田辺、岡本透、松本豊、大門、竹内弘明、森中、竹下慎太郎、五月女、抑え、ギャラード（横浜時代の）

捕手、市川、一塁手、大野、二塁手、三塁手、清水、遊撃手、アスプロ

外野手、田中一、古木、小池。

なるほど、けして悪いメンツではないが、他球団の歴史的選手には、かなり見劣りする。

かれらが、選出されていれば、横浜の早期敗退は確実だ。

歴代の監督たちは、不正な開票をすることで、偶然、不正な組織票からくる暗然たる未来を回避したのだ。

「で、どうするの、メンツ」

「遠藤とか、秋山さんとか、平松とか、抑えは佐々木とか、野手では、松原さんとか、誰もが納得する面々を適当に書いとけばいいでしょう」

適当です…適当にね。

発表期限の数時間前に、メンバーが早々と決定すると、彼らは、試合に向けての作戦を練ることなく、ダラダラ過ごすと、

「お、６時１０分前だ…そろそろ出動と行くか…」

近藤の一言により、彼らは席を立った。

ただ、残された開票されずの三万に迫る票は、箱に眠ったまま放置されている。監督室に放置されてればいい。

部外者立ち入り禁止だからだ。　だが、箱は狭い部屋に入りきるわけなく、監督室の通路の前にズラリと置かれている。

この箱が、後に波紋を及ぼすとは、このとき誰も知らない。

大矢を先頭に、歴代監督たちが一列になって、グラウンド入りをする。

先頭が大矢…が原因なのか、観客の反応はいまひとつだ。

だが、待ちに待ったメンバーが発表されるだけあって、球場は独特の緊張感に包まれている。

大矢がマウンドの前方に立つと、用意されたマイクスタンドに顔を寄せる。

「え〜、横浜の監督を務めさせてもらうことになった大矢です…」

左翼席に陣取った阪神ファンが歓声をあげる。

彼らは、期待しているだ。彼らの仕組んだメンツが選出されることを。

彼らはしらない。澄ました顔で大矢が不正を働いていることを。

スタンドは誰も気づかない。大矢の口から飛び出る納得できるメンツが、ファンが選んだものではないことを。

「え〜　発表します…投手…秋山登、平松政次、佐々木主浩、遠藤一彦…」

残された箱は、取材に来ていた写真週刊誌の記者に見つかる。

不審におもった記者は、箱の中身を確かめると、開票されていない票の山であることに気がついた。

彼らは、発表に沸くスタンドを尻目に、箱を次々と外に駐車してある社用のワゴン車へと運び出した。

そして、一大スキャンダルに発展したのだ。

「横浜ベイスターズ、ファン投票に不正が発覚!!　開票されぬ三万の票!　これがその動かぬ証拠だ!」

おどろおどろし見出しで、大々的に報じられた。

その前文がこうだ。

いよいよ開幕が迫る、歴史上のオールスターが繰り広げるジャパン・ベースボール・クラシック（通称ＪＢＣ、なお名称は仮称、開幕日、使用球場も未定）。

イチロー、松井秀の現代の大物スターに、ＯＮ、江夏らが参戦を決定して否応なく盛り上がりを見せているが、大会に、水を差す一大事件が本誌記者の取材により発覚したのだ。

その事件の主役は横浜ベイスターズ。横浜といえば、代表選手をファン投票で決めることで、各方面に波紋を及ぼしたが、そのファン投票に
重大な不正があったのだ。

まず、右上の大きな写真を見てほしい。一見、なんの変哲のないただのダンボール箱であるが、この中身が問題なのだ。

中身を取り出してみると、開票されてないファン投票用紙が出てきたのだ。未開封の投票用紙を数えてみると、なんと、二万八千にも及ぶのだ。主催者発表によると、ファン投票の総数は、二万九千弱。

つまり、ほとんどの票が開封されずに、眠ったままなのであった。

右下の写真がその票だ。票の下部をよく見てほしい。横浜ベイスターズの印と認証されたＩＤが見えるだろう。

これが動かぬ証拠である。

これでは、横浜が発表したメンバーは、ファンが決めたものとは、とうてい言えぬことになる。

では、あのメンバーは、開票されたと思われる数百の票をもとに決めたのか?

それとも、まったくのデタラメで誰かの意思により決定されたの

か？

どちらにしろ、ファンが決めたメンバーとの横浜の発表とは様相が異なる。

ためしに、本誌が、手間隙を掛けて開票したところ、なんと発表されたメンバーと未開封のメンバーでは、だいぶ異なるのだ。

それが、左上にある表の右側のメンバーだ。左側の発表済みのメンバーと見比べてみるといい。

ところどころ、食い違いがあることがおわかりいただけよう。

本誌開票によるファン投票選出には、鬼頭、平岡など聞きなじみのない名前を混じっている。

球団は、戦力の弱体化を恐れて、すんでのところで、ファン投票によるメンバー決定を回避したのか？

ならばなぜ、球団は、ファン投票に選考を託したのか？　託したのなら、どんな結果でも受けいれるのが本筋であろう。

この不正を球場入りする大矢明彦監督に直撃してみた。

ー「ファン投票に不正があったことがわかった」

大矢氏「知らないな。僕は責任者じゃないから。上のほうに聞いてくれないかな」

ー「関係者によると、開票作業は監督自らの手で行ったそうだ」

この質問をぶつけると大矢は表情を一転させた。

大矢氏「知らないったら、知らないって！　ＴＢＳ！！　ＴＢＳ！！」

怒気をこめた声色で、記者を振り払うように球場入りした。

ＴＢＳとはなんのことだろうか？　たしかにこの企画の出所はＴＢＳのようだが、大矢も監督としての責任があるはずだ。

なおこの事件は、何週にもわたって追求していくつもりだ。

第二報、三報を期待していただきたい。

事件は、球団社長が否定会見をする事態に発展した。

球団社長のまずい対応もあり、世間の注目を集めたが、時間がたつにつれて、
事件から世間の関心は薄れて、うやむやのうちに、静かに終結した。

神々の愚作（後書き）

ベイをオチに使うな

え？？？なにこれ開幕戦？（前書き）

開幕？

え？？？なにこれ開幕戦？

中日の先発は杉下茂、フォークボールの神様だ。
ロッテの先陣を切るのが、西岡。打席に入る前、ロッテの打撃コーチ、得津にアドバイスを受ける。
「フォークの連投で来ますか？」
「杉下さんは、これぞという打者にしか、フォークを投げない人といわれる」
「なら、オレには投げてきますね」
西岡が得意の大口を叩くと、試合は始まる。
捕手の木俣がサインを出す。杉下がうなずくと、第一球が投じられる。
長身から、糸を引くようなストレートが、外角低めに投げ込まれる。
開幕それも、記念すべき大会の第一球だけに、打者は敬意を払い見逃す…はずなのだが、西岡は空気を読まない。
読まないどころか、それを利用する男だ。
ストレートでくるなら打てばいいやん…。
シャープなスイングからはじき出された打球は、一、二塁間に転がる。
半身の姿勢の一塁の谷沢の横を抜けると、西岡はヒットと確信して右手を上げて軽くガッツポーズ。
だが、喜びもつかのま、二塁の名手高木守道が打球に飛びつくと、体勢を即座に立て直して、一塁に送球。
俊足の西岡でも間にあわじと…とはいかず、投手の杉下の一塁カバーが送れて、送球とのタイミングが合わず、ポロリとこぼしてしまう。
西岡は一塁に生きて、記録は内野安打。
杉下のカバー遅れのミスであるが、ベンチの星野は怒りたくても

怒れない。杉下は明治の大先輩でもある畏敬の存在なのだから。

ひきつらせながら笑顔を無理やり形作り、腕組みをするだけだ。

攻撃的二番として、バレンタイン野球の目玉として起用される榎本喜八だ。

送りバントも十分考えられる場面だが、榎本が二番に座るロッテ打線に、その可能性は薄い。川上か榎本かと並び賞されるほどの弾丸ライナーの持ち主。

引っ張れば、最低でも西岡を二塁に進めることができるのだから。

西岡は盛んに二塁に走りたがっている。一塁ベースコーチの佐藤兼伊知を捕まえると、

「いけますよね？　二塁。投手、おじいちゃんでしょ？　クイックとかようできませんよ。投球練習観察してもね、セットからでも、大きく足上げてましたよ？　あんなん５０年前の野球やん」

「待て、ボビーのサインは、打てのサインだ」

「サインなんて無視、無視…それがロッテ野球ですやん」

西岡はじりじりとリードを広げる。

杉下はセットで長く持ちなかなか投げようとしない。

ヘッドコーチとしてベンチ入りしている濃人がバレンタインにアドバイスだ。

「ボビー、杉下は、中日を退団したあと、ロッテの前身の大毎に移籍して、榎本と同僚になっている。間近でみて、その凄さをよく知っている。つまりフォークを使ってくる可能性が高い。ここは、フォークを投げるタイミングで、走らせても面白い。捕手の木俣はそれほど肩もフットワークも映えるほうではない」

「ソウデスカ」

納得したふりをして、やり過ごすすべを会得しているバレンタインは信念を簡単には曲げない。

バッティングカウントで、右に引っ張れとサインを送る。

なるほど、中日とロッテの前身東京オリオンズで監督を経験した

ことから、今回のヘッドコーチに抜擢された濃人のいうとおり、榎本を警戒した杉下は初球からフォークボールを投じる。

木俣の前で大きくワンバウンドするが、木俣は体で止めて前に弾いて、西岡の進塁を許さない。

初球からフォークで入るとは、杉下や木俣の時代のセオリーとは大きく反する。けれども、解説や指導者として、現代野球のエキスをたぶんに吸収した二人には十分ありうる配球だ。

それにしても、榎本だ。フォークにピクリとも重心が動かず見逃せる技術と集中力の高さはすさまじいものがある。

え？？？なにこれ開幕戦？（後書き）

開幕初戦ですけど、次の話が
開幕前に戻っても了承してください

続きそうで続かない

ウルフがいいよ。
ウルフ？　近鉄の外人選手？
まさかあ、高橋由伸ですよ。
ああそういえば、一時期ウルフとか呼ばれていましたねえ。
高橋由伸といえばねえ、ＢＩＧＥＧＧの申し子ですから。
ビッグエッグ？？？？
いやだなあ、東京ドームの愛称ですよ。大きな卵にみえるところからねえ。
そう…でしたね。東京ドームといえば、天井に当てるような特大弾を放った選手がいましたね。
キャブレラね。
カブレラでしょう？　キャブレラはオリックスの外国人だ。
来日当初はその初代に倣ってキャブレラと呼ばれてたの。
そうでしたっけ。
インボイスの最長飛距離を持っているのもキャブレラね。
インボイス？　当時はグットウィルでしょう？
また怪しい名前を出す。インボイスですよ、キャブレラが浜の番長から…。
浜の～といえば、元祖は大魔神。
大魔神？　大魔神といえば、巨人の石毛でしょ、佐々木の方はあくまで横浜支部ですよ。
石毛が大魔神？？　あんなへぼ抑えが大魔神ですって？　あははは。
…その番長から放った超ド級の本塁打は、インボイスで記録しています。
そうでしたっけ？　たしか、西武球場、西武ドーム、インボイス、グットウィル、業務停止命令でほどなく、西武ドームに戻ったんで

すよね？
西武ドームが屋根に覆われたのはいつからか知ってます？
そりゃ西武ドームの名称になってからでしょ？
完全に覆われる前に西武ドームと呼ばれてたんですよ！
今でも完全には覆われてませんよ？
つべこべいわず聞き入れてください。屋根が半分もついていない段階で西武ドームと呼ばれてたんですよ！
たしか、ドームのクセに雨天中止になりまくって、最後の方はダブルヘッダーの連続でムリヤリ消化したんですよね？
おまけに、屋根半端だから、日陰ができるわ、それがホームと投手プレートの間でボールが
視界から消えるわでろくなことがなかったんですよね。
石井弘寿クラスの速球なら、さらに見えにくいですよね？
石井弘寿といえば、つば め組の一人ですよね？
違いますよ、彼は残念ながら入っていません。押本、松岡、林、五十嵐ら０９年リリーフ陣の総称です。
五十嵐といえば、石井とのダブルセットアップで有名でしたよね？
ええ、勝利の女神がほれた男ですよ！
はあ？　五十嵐と石井といえば、ロケットボーイズですよ！！
フィニッシャー！！！
はい？
フィニッシャー！！　ですよ。高津の愛称ですよ？
はあ？　聞いたことないなあ、ミスターゼロなら聞いたことありますけど。
ゼロというかミスターナンバー２ですよ！
はあ…たしか、高校で、上田投手の二番手。大学でも小池秀郎の二番手、
ドラフトでも同期の岡林、小坂の影に隠れがちだったことからつけられた愛称ですね
ツーといえば、スリー、ブルー・スリーですよ？

ブルース・リーと区切るんでしょ？
いや、ブルー・スリーでよろしいことなんです。荒木、井端、福留の俊足巧打の1，2，3番トリオですよ。
知らないなあ…。アライバなら有名ですけど、福留を加えてですか？　1～3番をまとめて、総称するのは結構ありますよね？　高木豊…。
銚子利夫、高橋雅裕のスーパーカートリオですね。
はい？　俊足でもなさそうのが混じってるんですけど？
俊足といえば、Ｆ1セブンですね。
一のあとに七が続くというなぞの愛称ですね？
赤星、沖原、藤本、高波…。
そこまで思い浮かぶんだよね。
上坂。
そのとおり。
平下？
ＯＫ。
田中秀太？
ブー。
う～ん…。
本多、川崎とくれば？
松田？
そう正解。本多、川崎、松田のトリオの総称知ってる？
自動車、バイク…で俊足が売り物…。
正解は…ありそうでない。
なんだいそれ…ヤマヤマコンビが関の山ですよね
ヤマヤマコンビも悲惨だけど、レフティーズも悲惨だ。河野博文、川口和久、阿波野秀幸、
宮本和知と実績ある左腕たちが、いきなり中継ぎの左投手として、ひとまとめにされるわ、
ありふれた微妙な名称だわで…。

ありふれた名称といえば、ＮＨＫトリオも、ヤングトリオもひどい。

ＮＨＫトリオ？

ＮＨＫトリオは中西、平田、木戸の小うるさいベテラントリオのイニシャルをとったという途方もない理由からです。

はい？　なぜ阪神？　ＮＨＫトリオといえば、沼田、平松、黒木の日本ハム社会人出身トリオの総称でしょ？

誰ですか、その三人。　ヤングトリオは、松井、元木、一茂でしたっけ？

そのとおり、大森や吉岡の二軍の帝王よりもヤングでもない一茂が入り込んでるのが味噌。

ひどい名称なら下山下もひどい。

それはひどくない。簡潔かつわかりやすく、本人の名前入りでアピールになる。

いまさらですが、カブレラといえば、ツインバズーカにビッグボーイズといういまひとつ定着しなかった名称に纏わられた選手ですよね。

いまさら、キャブレラを蒸し返すとは…。

あれれ？　キャブレラといってたのはあなたですよ？

そんな馬鹿な、私はカブレラと…。

「なにやってるんすか、佐伯さん…」

「おう、寺原か。ちょっとな、二次会で疲労する腹話術の練習をな…。しかし、標準語ってやつはむずがゆいのう…」

続きそうで続かない（後書き）

感想がないと乾燥しちゃいそう
元気トリオというのも思い出したが、平尾しか思いつきませんでした
記憶のあるかたご一報どうｚ

久方ぶりのヤクルトの主役のお話（前書き）

１００話ぶり

久方ぶりのヤクルトの主役のお話

イケトラコンビこと池山、広沢がいる！
小さな大打者若松がいる！
弾丸ライナーの杉浦がいる！！
和製ピートローズこと荒井幸雄がいる！（いわれてませんてば）
小さな大投手石川がいる！
ニア２００勝投手松岡がいる！！
和製ライアンこと伊東昭光がいる！（いわれてませんてば）
そして、スワローズといえばこの男、カネヤンこと天皇・金田正一だ！

投手陣の先頭を切り、軽やかに走るわ、走る！
どれだけ走っても口は滑らかだ！
「科学式だかオギノ式がなんだか知らないけど、選手は走って足腰鍛えんといけませんよ～　投げるのも下半身が大事！　あっちのほうも下半身が大事！！　なんてね～うははは～」

金田のテンションにネアカ軍団と呼ばれたヤクルト黄金時代勢もついていけていない。
石井一久が眠そうに最後尾につけば、藤井は携帯片手にブログの更新にひたすら走る。
だらけた先輩勢をよそに、生真面目に金田の後を追うように走るのが新鋭、由規だ。
オーバーワークを心配した古田が、半ば強引に由規を呼び止める。
「ヨシノリ！　金田さんは化けもんなんやから、ついていこうと思うなよ！　自分のペースでいけよ！」
「あ、はい…古田さん」
「意地悪な質問するが、金田さん、お前どれだけの投手か知っとる

か？」
「そりゃ、もちろん、唯一の４００勝投手ですもの…」
「で、ヨシノリ…。なんで金田さんがウチにいるのか不思議じゃないか？」
「いえ…」
「そうか、不思議そうな顔してるぞ」
「あ…。巨人の選手とばかり…」
「そうやろ、そう思うのもしかたないけどなあ。本とかでも、最終所属の巨人で表記されとるし」
「あのう…ところで、なぜ金田さんだけ違うユニフォームなんですか？　あれたしか、今年、こ交流戦で着たオールドユニフォームですよね？」
「それが天皇やろ。一人だけ違っても許される…。まあ、詳しくいうとな、金田さんは、ヤクルトにあまりいい感情持ってなくてな、巨人に行ったのも、内部抗争の成れの果てみたいなもんでな。本人は同じスワローズでも、ヤクルトＯＢとしてでなく、国鉄ＯＢとして参加してるつもりなんじゃないか」
「あ、そうか、あれ国鉄時代のユニだっけ…」

「そうだ、ヨシノリ、ブルペンこい」
「え、でも、まだランニングが…」
「オレ、お前の球受けたことないやろ…一度体験してみたいなあ～１５６キロの速球とやらを」
「あ…そうか、僕と古田さんは入れ違い…」
「そうそう、自分が首になったあとの入団だからな、お前は…。といってもクジで引き当てたのも自分やけどな」

ブルペンではすでに、八重樫や根来といった古田の控えでベンチ入りが予想される捕手陣が、球を受けていた。

根来といえば、金田の剛速球をノーサインで捕球していたことで有名な国鉄史上最高の捕手。

一方、八重樫といえば、どちらかというと打撃本位の捕手で、特に奇怪なオープンスタンスの打撃フォームは球史に残る打法だ。

肝心のブルペンの主役である投手陣も豪華絢爛。

８０年代の孤高のエース尾花が長身から投げおろすボールは低めにことごとく決まる。

王に７５６号を打たれたことで有名な鈴木康二郎のシンカーは、クセのあるボールで、捕手にもとりづらくミットをはじくように決まる。

そして、館山だ。あらゆる球種を最大限に駆使して、投げ込む投球術は芸術の域だ。

「どうだ、ヨシノリ、うちの投手陣も捨てたもんじゃないだろ」

「そうですね、すごいです…」

「でもな、弱点あってな。捕手が足りなくてなあ。首脳陣は福川とか米野や川本の召集も考えたらしいよ。まあ、本来、僕の二番手になるべく大矢さんが、控えは嫌だと横浜の監督を選んだからなあ…捕手不足になるのも無理ないやろうな」

「あ、でも古田さんが、フル出場してくれれば安泰…」

「そうよ、ヨシノリ、オレがフルに出れれば、何の問題ないわけよ、自分でもいうのもなんやけど、総合力ではプロ野球史上三本指に入ってるオレやもん…。あとの二本が誰だかあえていいませんが…」

古田はブルペンのある捕手の後ろで投手の投球を見つめる。

「だけどな、考えてみい、オレでもいつ故障するかわからん、そのときの控え捕手が落ちると、チーム力がガクっと落ちるだろ？　八重樫さんも根来さんもいい捕手だけど、備えあればなんとやらってことでなあ、まあ交換いうわけやないけどな、相川くんに来てもらったわけや。相川は、ベイスターズで実績をつんだ捕手やろ、むこうで出るのが本筋やけど、むこうも、谷繁とか土井さんとか捕手が

多くて、出場できないなら、ヤクルトから出ると」
　捕球したあと、相川が立ち上がり、マスクをとって古田に軽く会釈をする。
「どや、相川…ウチの投手の特徴や球のクセつかめたか？」
「そうですね…。一通り主力の方のボールを受けさせてもらいましたが、いい投手がそろってるいますね…。今投げてもらってる梶間さんですか、左のサイドに近い腕の振りから、結構なクセ球を投げられて、捕るのにも一苦労でしたよ」
「で、おべっかはおいておくとして、ぶっちゃけどうよ？」
「え、素晴らしい投手ばかり…」
「そうか？　投手が足りないと思うてない？」
「いや、そんなことは…」
「いいよ、お世辞は、実際足りんしなあ…、力のある投手は山ほどおるんやけど、肝心の数が足りんのよ…弱小時代が長く、少数のエースに頼った時代が長かったからな。投手の頭数だと、巨人や西武とは、はなから勝負にならんのよ。でもな…」
「何か、秘策でもあるんですか？」
「あるよ。どれだけ戦力が削がれようとも、創意工夫で勝ってきたのがウチの伝統。全盛期の力に戻る…。全盛期そのままの能力じゃ、能力の絶対値に劣る巨人には勝てんわな…。ならばどうすればいい？　ヨシノリ答えてみい」
「え、全盛期の力に戻って…」
「勝ち目ないようにおもうやろ？　いまやっている練習を調整と顔合わせ思えばそうや。だがな、この練習で上手くなろうとおもえばな、そこで巨人に勝てるチャンスが生まれるわけや。ヤクルトの伝統…下馬評が悪いときこそ勝つ…そしてその秘訣は…。戦力の見直しと再生…」
「なるほど…」
「ところで、ヨシノリ、なんで高井や一場がおるんやと不思議に思うてるやろ？　オレより格下の選手の分際で…」

「いや…どちらの方も…僕よりも素晴らしい先輩です…」
「いいのよ、おべんちゃらは…。呼んだのは…。オレやから、オレが捕手や監督やってたときに、モノにできなかった高井。うちの伝統を引く再生屋の野村の爺さんが見放した一場…」
古田はマスクをつけ、空いていた捕手ボックスに腰掛ける。
そして、マウンド上には、その高井がいる。
「この二人や眠っている逸材をこの期間でいかに開花できるか、それがウチの勝つ秘訣よ！　戦力にプラスαがあればな、巨人にも勝てるとこみせつけてやらんとな」
啖呵をきる古田であるが、自信なさげに投球動作に入る高井をみると一抹の不安を覚えずにいられない。

遠い夜空に　こだまする。
竜の叫びを　耳にして。
ナゴヤドーム（ナゴヤ球場、中日球場）に　つめかけた。
ぼくらをじぃーんと　しびれさす。
いいぞがんばれ　ドラゴンズ。
燃えよドラゴンズ　。

一番高木が塁に出て、二番中が送りバント、三番谷沢がタイムリー、四番落…あ……。
「オレ竜の名前を出すの気にくわんわ」
四番江藤がホームラン。いいぞ、すごいぞ、ドラゴンズ、もーえよ、ドラゴンズ～。
「これだわ、四番は、裏切り者のオレ竜じゃなく、闘将江藤さんだわ。しかしまあ、たわけたことに、難しいもんだぎゃ～。メンバー決定前に、作詞するいうのも」
五番福留がクリーンヒット、六番木俣が流し打ち、七番立浪がヒットエンドラン、八番……スクイズバント。
「え～…。サードが立浪で…、二塁は守道さんで、一塁が谷沢さん。外野は埋まっとるわなあ。残るは遊撃だもな…。宇野でいくか、井端でいくか、どうするかのう～」

大会用の燃えよ！　ドラゴンズの作詞を依頼された、山本正之は頭を悩ませている。
正式なメンバー発表前に作詞の作業を完了しないと、録音、ＣＤの販売の間に合わないのだ。
数少ない実戦形式の試合や新聞報道を参考しつつ、独自でオーダ

ーを組み立てるのだが、これがまた難しい。
あの選手もいるし、この選手もいる。星野さんならばの星野カラーが強い選手を使うだろうか、それとも、なりふり構わず勝つ野球を追求するメンバーでいくだろうか。
選手を加えては消す、作業の繰り返しで、工程はどうしても滞りがちになる。
困ったあげく、思いついた妙案。
「星野さんに聞こう」
直接、監督である星野に連絡を取る奥の手に出たのだ。

「あ、星野さん？　どうも山本です、燃えドラの作詞の…」
「おう、山本か。元気にしとったか？」
「はい、オレ竜は元気ありませんが、自分は元気ですわ。で、早速なんですがね、燃えドラの作詞に行き詰ってですね。メンバーがどうにも、うまく決まらなくて…」
「で、オレに直接聞こうってか？」
「はい」
「あははは、バカいうな。正式発表前だぞ。選手にもまだ伝えというのに」
「はあ…」
「…まあ、お前もドラゴンズ人気の礎を気づいた人間だ。むげにはできんわな。そこでだ、ヒントをあげよう」
「よろしくお願いします」
「どこを聞きたい？　投手か？　野手か？」
「まずは、遊撃ですね。ウーやんか井端と思うんですがね」
「その二人だけか？　オレの先輩でおられる一枝さんや牧野さんもあるぞ。同じ明治の遊撃でも鳥越みたいなでくの坊はないわな」
「意地悪せんと、井端か宇野のどっちかでしょ～？」
「あははは、そうやな。井端が落合は普通、星野は最悪といっとったな。それがヒントや」

「なるほど、よくわかりました」

八番宇野がスクイズバント…。
「宇野がスクイズではしっくりこんわ」
八番宇野がエンタイトルツーベース。
「こうしとこ」

「それでは投手はどのような感じで」
「投手か？　こっちは簡単やろ。実績、風格、名前、どれも揃った奴らの集まりや。まあ、一人、二人上げると、中日が誇る二百勝投手は確定やな」
「マサと杉下さん」
「そうや」
「となると、星野さんはどうされるんですか？」
「オレに監督もやらせて、投げるほうも頑張れいうのか？」
「はい、ワクワクしますわ」
「うははは、オレは最初からそのつもりや。オレを誰だと思ってるんだ？　初代セーブ王で、沢村賞投手やぞ？　実績、風格、名前に、スター性まで揃っておる。ただ先発して長いイニング投げるのは難しいわな、監督兼任の重責で。だからな、おいしいところで、ちょこちょこっとだけ投げて、ヒーローの座持ってくつもりや」
「なるほど、星野さんらしいですわ」

杉下フォークが冴え渡る～。
マサのスクリューアメリカ仕込～。
郭、小松、孝政、岩瀬が中を締め～。
最後に星野仙一仁王立ち～。
いいぞ　がんばれ　ドラゴンズ。
燃えよ　ドラゴンズ！。

「あとな、落合はうちからは出んぞ。アイツはロッテから出るらしいな」
「そうですか、それを聞いて胸がすく思いですわ。中日を裏切った男がベンチにいるだけで虫唾が走りますわ」

今中切れ味日本刀～。
川上憲伸力こぶ～。
ドンヨル、ギャラード、また海渡る～。
野口、小野、都、与田が蘇る～。
いいぞ　がんばれ　ドラゴンズ。
燃えよ　ドラゴンズ！～。

ぼくもあなたも　願ってる。
祈る気持ちで　待っている。
それはひとこと　優勝だ。
星野監督の　胴上げだ。
いいぞがんばれ　ドラゴンズ。
燃えよドラゴンズ。
がんばれがんばれ　ドラゴンズ。
燃えよドラゴンズ！

最終ロースター発表スペシャル～巨人編～怪奇彫像現象特集

発表は東京ドームシティ広場特設会場にて。
選手を模した彫像があれば合格、なければ失格。

最終調整試合のあとに、選手に配られたロースター入り発表の連絡は突拍子のないものだった。
予想外の発表方法に、選手間に波紋が生じるが、変に逆らったら、メンバー入りに支障が出ると、ぐっと我慢する。
それでも親しいもの同士、自然と愚痴が飛び交う。

「ありえーねよ。選手を何だとおもってるんだよ…。なあ内海」
「そうすよね…ヒサさん」
またまた出てきた三連覇確実の巨人を文字通り支える縁の下の力持ち生え抜き社会人出身逆指名左腕コンビのゴンザレス・グライシンガー・東野に次ぐ四番手、つまり左腕のエース内海と、内海に次ぐ二番手左腕、つまりローテの最後尾高橋尚成の二人である。

「でも、しょうがないんじゃないですか、この大会、以外と費用が出るようだし、これ中継するんでしょ？　放送権が入るから、こんな感じで盛り上げないとしょうがないんじゃないんすか」
「中継たって、またまたまた日テレの地上波じゃねーじゃん。ＢＳ日テレとＧ＋だぜ？　しかもよー、半端な中継時間だ。なんだよ五十五分で延長なしって？　最後までやりやがれって」
「どのくらいかかるんですか？　一時間弱ですむんですかね」
「オレが知るかバカ。つうか、こんなふざけたイベントオレいかねーから」
「え？　せっかく強制送還から復帰できたのにすか？」
「復帰つっても、故障者の一時的な穴埋めみたいなもんだろ？　ど

うせカット要員だよ。落ちるし、くだらねーし、いかねーって。内海、お前一人でいっとけ」
「そうすか…。しょうがない、風神雷神でも誘っていくかな」
「風神雷神が残るわけねーだろ」
「藤田投手コーチチーフが、風神雷神の異名にふさわしいリリーバーだと高評価下してるって新聞載ってましたけど」
「ふん…どうせ、オレは首脳陣の誰からもコメントされてねーえって」
すっかりふてくされた高橋であったが、発表当日…。

内海は風神山口と雷神越智を連れ立って、発表の舞台に来た。
腐ってもさすが盟主で、たくさんの報道陣、ファンが、発表を待つ選手をぐるりと囲むように、陣取っている。
選手には、王がいる。長嶋がいる。松井がいる。斎藤雅樹がいる。江川がいる。
絶対当確の大選手といえど、分け隔てなく発表を待つのは、規律を重んじる巨人軍らしいといえる。
伝説の選手たちに囲まれては、内海たち現役は形無し。輪の角でひっそりとするしかないが、輪の中をよく見てみると、そこにはよく知った馴染みの顔があった。
高橋尚成だ。あれだけ拒みながら、ちゃっかり来ていたのだ。
「うわ…。なんだかんだいって来てるじゃん」
内海たちは高橋と顔を合わせないように、距離をとりながらの行動を図る。

いよいよ除幕式だ。
彫像を覆い隠した大きな幕が、川上監督の合図の元、取り除かれる。
「せーの…」
巨大なクレーンが幕を持ち上げる。

いよいよロースター選手の彫像が白日の元に晒される。
いちいち探さなくても一目でわかる最前列には、伝説級の選手たちがずらりと並んでいる。
選手兼任の川上やＯＮはもちろんのこと、隔たる巨大な世代間ギャップを克服した沢村栄治の彫像も見える。
当確の選手だけあって、彫像の作りも丹精だ。特徴を見事捉えて、まるで魂の入った生き物と見間違えるようだ。
王の華麗なるフラミンゴ打法…。長嶋の送球のあとの手首のひらひら…。
一発を食らい首をかしげる江川…。
さすがに、特別仕様の彫像は前列の一部だけで、後列からは普通の立ち姿で、人目で判断するのは難しい。
これから選手自らが、自分の彫像が、どこかにないか探す作業に入るのだ。
自分の彫像を発見できる選手もいれば、洩れる選手もいる。
その陰影をドキュメンタリータッチに描き、視聴率を稼ごうという中継局の狙いだ。

当落線上の選手たちがいっせいに自分の彫像探しに入る。
内海はもちろん、スタッフとして選手選考に加わったはずの原までがこの輪に入っている。
原にはぴったりと専用のカメラがマークするが、すぐに発見だ。
大きく見開いた目と下膨れたその顔は間違いなく原そのものである。
原は、満面のスマイルでカメラにコブシを突き出す。
彫像に済の張り紙を貼り付けて、メンバー入り決定。
原のように特徴がわかりやすければいいが、多くの彫像はぱっとみどれも同じである。

内海はすでに投げやりモードだ。

「どれも同じに見える」
越智、山口も同様だ。
探し当てれずうろうろするだけだ。特に山口の特徴のない顔を表現するのは極めて難しい。
超一流の技師が山口を目の前にして彫りこんでも、それが山口に見えるかさえ疑問だ。

内海はある彫像の前に釘付けになる。
「これ、ラミちゃんだろ…、ラミレスだろ…。って、おかしいな、ラミレスは当落メンバーどころか、ヤクルトから出場するはずだぞ」
内海のいうとおり、とろんとした大きな目に厚い唇のひょうきんさがにじみ出た顔。
さらに、ゲッツのポーズまで形作られている。
ラミレスそのものだ。
「どういうこった」
内海の疑問に答えるように、場内アナウンスが流れる。東京ドームのお馴染みのウグイス嬢の方が声の主だ。
「選手の皆様にお伝えいたします。彫像のなかには当落線上に残っていない無関係の選手の彫像がダミーとして多く混ざっております。ご注意ください」

「なんだよそれ」
内海もあきれる。まったく関係ないモノを混ぜて探し当てずらくするために取った陰湿な策である。これが日テレが５５分もの中継を裂いた主たる理由だ。

「なおダミー人形は石でなく石膏でできているため、破壊しやすくなっています」

「なるほど、ダミーと見破れば破壊して探しやすくしろってか」

内海は漫然とラミレスの石膏人形にけりを食らわす。
「ラミちゃん、ごめん」
一蹴りで粉々に砕け散るのだが…。
「うわ…中からなんか出てきた…」
石膏人形から飛び出てきたのは、巨体の黒人だ。
「うがー」
「うわ～」
顔がひときわ大きい褐色の巨体な黒人、つまりサンチェである。
サンチェが襲い掛かる。もちろんジョークなのだが、巨人軍の歴史に疎い内海はサンチェにピンと来ない。サンチェも内海など知らない。
「うが～」
「うわー」
よって空虚な寸劇が繰り広げられるだけである。
とりあえず逃げる内海、とりあえず追いかけるサンチェ。
一種の様式美にさえみえるから不思議である。

最終ロースター発表スペシャル～巨人編～怪奇彫像現象特集（後書き）

まさか内海がまた出るとは

空虚な追いかけっこもナアナアに終わり、内海は再び彫像探しに戻る。

「あれ」

意外なことに。

「これそうじゃん、これオレじゃん」

あっさりとみつかったのだ。

「おいおい、マジかよ。オレ入っちゃったよ…」

内海も我ながら信じられぬ思いだ。

「これたしかにオレだよな…。キレ長がの目に、クールな下唇…。オレだ、オレだよ…」

背後を調べて、背番号と背ネームの確認をするが、選手は顔とスタイルで誰だと判断がつくべしという巨人軍の教えの元、この彫像には、あえて何も入れられていない。まっさらのユニフォームのままだ。

「やっぱねーか…。番号あったら、一目でわかるしな」

内海と思われる彫像があったのはいいが問題はあの人、高橋尚成だ。

「クソ…。どこにも見付かんねー。高橋尚成様を舐めやがって…。07年ベストナイン投手だぞ？　日本シリーズ初戦から連続勝利投手だぞ？（その後、短期決戦勝ち星なし）」

イライラする高橋尚成を遠目に、内海は内なる不安を募らせる。

「やべえ…。ヒサさんの見つかってねえのかよ…。ヒサさんのがなくて、オレのがあるなんて、ヒサさんのプライドズタズタだろうな…。オレに火の粉が降りかかるぞ」

なるべく気づかれないように、息を潜めるが、しらみつぶしに彫像探しをする高橋の目に、そのうち内海と内海と思われる彫像が入

るのは当然の成り行きだ。
じりじりと近づく高橋、息を飲み込む内海。
「来た…」
だが、内海は再度、細目でよく内海と思われる彫像を見ると…。
「…あれ？　この頬のブツブツとした感じ…。彫り跡…？。それとも、ニキビを表現してるの？　ニキビとしたら、オレじゃなくてヒサさんにも見えるぞ、これ…」
ご存知のとおり、高橋尚成は、四角い顔に、ニキビ面に、細長い切れ長の目が特徴。内海はどちらかというと丸顔だが、切れ長の目が特徴が共通している。
大きな差異は丸顔と四角い顔。彫像は微妙なラインを描きどちらともとれる。ニキビ面なのか、石特有のざらついた表面なのか判断できにくい。
もとより、出来上がりに差がつきやすい彫像。見ようによっては内海と思われる彫像は、高橋尚成の彫像にも見えるのだ。
内海が隠れようとも、見つからない手はずはない。

「なんだよ、オレがいちゃおかしいか？」
さっそく、気づかることに。
「いやべつに…」
「中畑さんにいわれたんだよ　発表には必ず来いとな。巨人の駒沢の先輩には逆らえねーや。どんな状況からでも逃げないのが駒沢魂って口うるさくてよ」
「そうすか…」
「しかし、ねーよな…。わかってたがよ～。で、お前もみつかんねーんだろ？」
「いえ、あの…その」
「あ～」
内海と思われる彫像が見つかった！？　って当然の運びだ。
「それなんだよ、まさか…」

内海は、高橋が内海の彫像と思えば、嫉妬からくるいやみが炸裂するだろうし、高橋尚成自身の彫像と思えば、ぬか喜びから、余計なっとばっちりを食らうことを覚悟すべきだ。

「その細長い目に、ふてぶてしい面…。おまけにグラブを右につけてるところから左利き…」

どれも内海と高橋尚成の共通の特徴だ。

「金刃のダミーじゃねーか」

はい？　内海でも高橋尚成でもなく、か、金刃!?

「金刃のダミー像があるなんてけったくそわりい」

高橋は金刃と思われるダミー像の頭をつかむと、握力に任せて粉々に砕く。

「ああ…」

内海と思われる彫像は、内海の彫像でもなく、高橋尚成の彫像でもなく、金刃のダミー像だったようだ。

たしかに、ふてびてしい顔で、長く細い目は金刃にも共通している。

「ヒサさん、なんで一発でわかったんですか？　金刃のダミー像と…」

「あん？　内海てめーばかか？　頭のところの石膏ハゲかかってたろ？」

なるほど。

「あのう、先輩方…」

すっかり、陰に隠れていたが、越智と山口のコンビもいたのだ。

「なんだよ、山口…」

「この彫像何ですが…」

「あ～ん？」

山口が指差す方には、彫像ならぬただの石像があった。

「選手の彫像じゃねーじゃん。寺とか神社とかに置いてありそうな古びた石像じゃん」

「それはそうなんですけどね…。これたしか風神、雷神像なんですよ」

向かって左にあり左手を振りかざしてるのが、風神の像、つまり、二人でいうところの山口。

向かって右にあるのが、雷神の像、つまり越智である。

「そうなのか？　それが、風神雷神なのか。てゆうかさあ、なものオレが知るわけねーよ」

「それがなんだよ」

「もしかして、僕たちのニックネームの由来である石像があるってことは僕らが合格…なんて思ったり…」

「はあ？」

「いや、ちょっとおもったりしたり…」

「だと、思うなら、済みの張り紙つけろや」

彫像を発見して、済みの張り紙を貼り付ければ、作業は完了する。ただ、貼り間違いは許されない。巨人軍には一度たりとも、間違いは許されない掟だ。

自分の彫像すら見つけれぬものは巨人軍の一員になる資格さえないと判断され、たとえレギュラークラスの実力者であっても　時間内に発見できなかった場合、代表から脱落の厳しい規則だ。

ちょうど岡崎が自分の彫像だと思い、済みの張り紙をつけたところ、実際は、福王のダミー像であることが判明して、取り除かれたところだ。

目前で繰り広げられた失格劇を見ると、越智山口が躊躇するのも、うなづける。

ただ前進しない二人にいらだったのは高橋。

「まごまごすんな」

二人の持っていた紙を無理やり取り上げ、石像に貼り付けた。

邪が出るのか、正が出るのか、固唾を呑んで見守るが、　結果、彼らを待ち受けていたのは無反応だ。

祝福のインタビューが迫るわけでも、失格のペナルティが降りか

かるわけでもない。
ただむなしく時間が通り過ぎるなか、石像に小さな異変があることを内海が発見する。
「なんか、もぞもぞしてる」
高橋が石像に近づき、軽く叩く、すると、石像の中から、ノックのこだまが返ってくる。
どうやら、サンチェのケース同様、中に誰かが入っていて、脅かす仕組みになっていたのだが、石像が突き破れずにいるようだ。
「あんた、誰？」
高橋の問いかけにも無反応。
「フーアーユー？」
言語を変えて、再度、質疑応答。
「アイム、グラッデン」
「あ～、で、そっちは？　雷神の方だっけ」
「コトー」
それで、すべてわかったと石像そのままに彼らは後にした。

四人の彫像ひとつも見つからず、途方にくれかかる。時間は迫り、枠は狭ばっていく。
「やっぱ、来なきゃよかった、こんなとこよ～。時間の無駄だったわ」
「ほんとすね～。今の時代三連覇するのが、どれだけ大変か。その三連覇をいずれもローテ投手して支えているのって、オレ（内海）とヒサさんしかいねーのに」
ふれくされて切れ掛かる先輩左腕に、温厚で無口な山口がついに切れた。
「先輩たち、あきらめるのは、まだ早いんですよ、時間も枠もまだ埋まっていません」
「ぐっさん（山口）なんだよ、珍しく熱くなって」
「あるものはない、ないものはないんだよ、山口」

育成から這い上がった山口には、気持ちが切れることは許されない。切れることは死を意味するからだ。

「バカヤロー」

山口は叫んだ。

いつにない山口の熱さに、さすがの二人も感化されたのか。

「そうだ、同じバカなら必死のバカのましいだよな～」

高橋は思い腰を上げて、内海も続いた。

「そうすね～。まさか山口にメンタル教わるとは」

時間は残酷にも過ぎ、歓喜の叫びと絶望の嘆きが交差すると、枠はひとつ、ふたつと埋まっていく。

「ないない、どこにもない」

残るイスはひとつ。つまり内海、高橋、山口、越智の四人のうち、必ず三人は落ちる。最悪の場合、四人全員脱落するのだ。

「どこだ、どこだ」

ひとつの枠でも、いまだあふれかえるダミー像。比較的ポピュラーな呂明嗣や、南村不可止、エンディ宮本から、マニアックな上田武司、菅原（サンチェ菅原）なものもまで幅も広い。

最後の彫像探しは困難を極めたが、フィナーレは意外とあっさり訪れる。

「あった」

どこに特徴づけるか製作者も困っただろう、山口の顔。

再現度数は低くないが、この彫像を山口と一目で判断するのは難しい。

よりによってぽっと出の後輩の山口だけ通る展開に、いつもの高橋なら、嫉妬の炎がたぎるところだが、今の高橋は違う。

「おめでとう、山口」

素直に祝福の言葉が出るのだ。

代表落選の帰り道、彼らは何を語らう。
「このお土産、けっこういいすよね、ヒサさん」
内海が手にするのは、参加賞として、配られた個人ネーム、背番号入りのジャビット人形。
「まあな、子供の土産にくらいにはなるだろう」
「あれ？　このジャビットの背面に何か紙挟まってますよ」
「お？　オレにもあるな」
内海は紙を引っこ抜き、内容を確認。
「なになに～。諸君は、栄光の巨人軍の補欠である。代表に何かあったとき、すぐさま駆けつけるべく、臨戦態勢でいてほしい。川上哲治…。だって」
「はん？　ばかばかしい、今度来てくださいっていわれたって、誰が…」
「行きますよね」
「まあな…」
「そうすよ、諦めたらおしまいなんです…諦めたら…」

十二球団監督会議

細かい大会規定を話し合うために、監督会議が開かれることになった。

都内某所のホテルの一室。

飾り気もない部屋に、質素な長テーブルひとつ、その上には、大会スポンサーのミネラルウォーターが置かれているだけだ。

役員の合図の元、外で待たされていた監督たちはいっせいに入室して、席に着く。

長テーブルは向き合う形になっていおり、パイプイスが左右それぞれ六つ、用意してある。

つまり、六者同士迎えあう図式となるわけだ。

知ってか知らずか、巨人軍の川上哲治が上座を取れば、意図的に対抗意識を燃やす、西武、三原脩がその前に陣取る。

川上は意識してか、三原と視線を合わせず、三原は意識して、川上を凝視する。

三原の横には、打倒巨人の旗印のもと、一応の同盟を結ぶ、ソフトバンクの鶴岡一人が座る。

川上の横を、他者を押しのけて？　星野仙一が奪い取る。星野は川上につくことによって、川上の地位をそっくりそのまま頂こうとたくらんでいるのか。

阪神の藤本定義が中央に座る。最年長者であり、川上と三原を選手として指導しただけあって、貫禄十分、隙が見えない。

六大学出身で年が近く長年の同盟関係を築きながら、いつしか袂を分かれた、日本ハム大沢啓二とヤクルトの広岡達朗は横になるのを避けて、向かい合うように座る。

異例の監督二人制を取るオリックスは、仰木彬が代表として、会議に出席、セ・パがきれいに分かれていることを感知して、パ・リーグ勢側の席を選ぶ。

もちろんその横には、師と仰ぐ近鉄の西本幸雄がいる。
グラウンドでは鉄拳制裁、いつもはおだやかな笑顔を崩さない古葉竹識は、協調路線を貫き、セの側を取る。
ロッテのバレンタインは唯一の外国人監督だけあってか、自分の知りえない人間関係をじっくりと見極めてから席につく。
残る席はひとつ。
バレンタインのように、人間観察をしていていたわけでもなく、有益な席取りを思案していたわけでもない、腑抜けた監督、そう、横浜の大矢明彦だ。
あごに手を添えて、考えるポーズを取ったものの、選ぶ余地すらない。
役員に着席を促され、あわてて席に着く、大矢の締りの悪さに、ヤクルト時代、大矢を指導した広岡は冷徹に笑う。

会議の主な議題は予告先発、ＤＨ制度の有無だ。
日本シリーズの監督会議でも必ず話題にのぼるこのふたつの命題、セパの制度上のもっとも大きな違いである。
司会進行役は、さわやかさと当たり障りのなさを買われた栗山英樹。百戦錬磨のつわものたちを仕切るのには、やや役者不足の感もある。
「え〜　まずはＤＨからですね…。どなたか意見がある方は挙手をどうぞ」
まっさきに手を上げたのは、なんと大矢だ。
「あ、大矢監督、どうぞ」
着席の失態を取り戻そうといきりたったわけでもなかろう。
「ＤＨはですね、個人的見解になりますが、日本シリーズや交流戦のように、セの本拠地では、ＤＨなしの野球本来の九人野球、パの本拠地では、ＤＨありの攻撃的な現代野球、
これでいいんじゃないでしょうか。このふたつはそれぞれ甲乙つけがたき魅力があります。ＤＨがないと、門田君、石嶺君のようなＤ

H専門としえ名を成した強打者が生きない。
かといって、ＤＨの十人野球では、代打の切り札として、一世を風靡した阪急の高井さんや、広島の宮川さんのような人たちが生きてこない。ＤＨがあれば、一人の強打者がラインナップに加わり、また一人の守備の名手が日の目に当たる。ＤＨがない九人野球だと逆説的に、選手交代が増えて、いろいろな選手をファンの皆さんに楽しんでもらうことができます。投手交代の妙や投手の打撃も堪能することでしょう。以上の点を留意して、私は、ＤＨをセパの本拠地によって使い分けることがベストの選択だと思います」
長い解説者生活で培った話術を用いて、立て板に水のごとく、流暢に話し上げる。
実績を上回る監督たちを前にしてこの威風堂々とした態度、大矢はすっかり、したり顔である。
どうだ、異論を挟む余地がどこにもない完璧な論理武装だろう？
さあ、誰か意見はないか？
「え～　大矢監督の意見についてなにかありすでしょうか」
ない。誰も発言しない。三原、川上、鶴岡、藤本、西本らの老将たちも、星野、バレンタイン、大沢のうるさ型も、仰木、古葉、広岡らの策士も、大矢の前に、へたり込んだままだ。
自分の意見が通る快感、猛者どもをやり込めた自信が大矢の体全体に漲り、高潮していく。
「え～、なければ、採決に入りますよ」
採決は多数決。この場合は、全試合ＤＨなしか、全試合ＤＨありか、大矢案でもある、セパの本拠地で分けるかである。
大矢に反論がないとすると、多数は大矢案に集まることになる。
ところが、土壇場で、最長老、藤本の呟きが発せられる。
ぼそっとした口調ながら、はっきりと室内の隅々まで通る声。
「ワシ、ＤＨいうのようわからんわ」
藤本は昭和四十年代前半に監督を退いているために、昭和五十年から施行されたＤＨに縁がない。

「のう、三原に、テツ（藤本はあえて川上をこう呼ぶ）、お前さんたちもそうだろう？」

川上、鶴岡、三原も、昭和五十年以前に監督を退いているため、監督としてＤＨを経験していない。

「練習試合で試しましたが、まだピンときませんなあ」

三原はいう。三原は日本ハムのフロントとしてＤＨ野球を見ているが、体験はしていない。

「たしかに、こういうのもなんですが、デーエイチいうのは、邪道ですなあ」

川上は、解説、評論家の立場としてＤＨ野球を三十年以上見ているが、いまだ違和感があるようだ。

もちろんＶ９の名将である川上は、野球観だけに固執をしない。戦力的見地から見てもＤＨは、巨人軍にとって必要ないと見ているのだ。

堀内、江川、桑田ら、伝統的に、打撃に秀でる投手が多いだけでなく、三番、一塁王、四番、三塁長嶋、五番、中堅手松井、ＤＨなしでも、

これだけのクリーンナップが組めるのだから。

「野球は九人でやるもんよのう」

鶴岡が続く。

この四人が口を異論を口にすれば、揺れるシーソーはどうしても、重鎮の方に傾く。

大矢はたちまち居場所をなくしたようで、テンションも落ちていく。

近鉄時代、ＤＨマニエルをフル活用して二連覇を果たした西本も、ばつが悪い。

近鉄には、マニエル、ブライアント、ローズ、クラーク、デービスらＤＨ向きの強打者がうごめいてるために、ＤＨ制度はどうしても譲れない。

長年のパリーグ製勝で培った反骨精神が奮い立つ。

「そうはゆうてもですねえ…。野球いうものは時代によって、変わっていってるんですよ」

独特の鼻に詰まった口調で異を挟む。

「大矢君も、私も、何も、全試合指名打者いうてるわけではない。半々といっておるんです」

そうだ、そうだ、もっといってやれと祈るだけで、大矢は口を挟まない。

西本、三原の意見が対立しているだけに、両者を監督の理想像とする仰木の立場は微妙だ。

仰木野球の肝である多彩なラインナップを駆使するためには、ＤＨは絶対に必要なのであるが…。

セパで日本一の経験を持つ広岡はどっちでも、ござれと余裕の笑みを浮かべれば、大沢は傍観。

シリーズや五輪で、さんざんＤＨ野球に振りまわれた星野は、場の雰囲気を見て、発言を控えている。

（星野は、三度のシリーズ出場で、ＤＨ野球では、何と一勝八敗、恐るべき勝率である。また五輪では、内外野こなせる便利屋として召集した森野をＤＨに使い失笑を買っている）

星野の見立てのとおり、風はＤＨなしに流れている。

大矢案はこのまま流されるのか？

十二球団監督会議（後書き）

またまたまた大矢かよ
意外と人材不足だな

一筋縄に行かない曲者たち（一人のぞいて）

論調が重鎮の意見に流れるなか、場の空気を読めないのか、あえて冒険に出るのか、バレンタインは得意の早口でまくし立てる。

「イイデスカ？　ワールドスタンダードハＤＨベースボールがシュリュウデ～ス」

身振り手振りを使い、日本語と英語のちゃんぽんで打って出るのだが、老将たちは、挟みこむ英語がわからない。

「すたんだーとって何や？　日本なら日本語で話せ」

バレンタインとはふたつ越しの西本が噛み付く。

「スタンダートトハ～　ソウデスネ～　シュリュウ、セカイキジュンデスカネ～」

西本にもわかりやすい言葉で言い換えるが、あやすような態度がまた西本は気に食わない。

自分の意見に同調するものとはいえ、むやみに溶解しないところも西本らしいといえる。

「イマドキ、ＤＨをトッテイナイノハ～　ニホンノセリーグ、コウコウヤキュウ、ロクダイガクヤキュウ、メジャーノナリーグノキュウタイイゼントシタホンノイチブデース」

世界が何だ、アメリカが何だ、日本は日本だとする監督たちは聞く耳を持とうともしない。

バレンタインの演説むなしく、風はＤＨなしに流れたままである。

議論も一通り出尽くしたと栗山は採決を取る。

「いいですか？　三つのどれかに挙手してください。一つ目は、全試合ＤＨ、二つ目は、全試合ＤＨなし、つまり九人野球です、最後の三つ目は、セパの本拠地によって使い分ける」

「まずは、全試合ＤＨ制度」

想像どおり、誰も手を上げない。西本などは、近鉄いてまえ野球

を実現させるためには、全試合ＤＨで挑みたいところだが、風向きを読み、挙手をしない。

「次は、全試合ＤＨなしの九人野球」

事前予測だと、大勢を占める意見だ。

まず、まっさきに川上が挙手。ＤＨ制度を闇の葬りたい星野が続く。これに、鶴岡、三原、藤本らＤＨ制度に異を唱えた者たちが続くと思われたが…。

三原は上げない、ただほくそ笑むだけ。

藤本も上げない、鶴岡も上げない。三原も鶴岡も上げなければ、鶴岡を大親分とする大沢、三原門下生の仰木も上げない。

ＤＨを駆使して、江藤、水谷らポジションをかぶる選手を駆使しようとする古葉も上げない。

もともと、どっちでもいい広岡は、憎むべき川上の意見には賛同しない。

風に流されて大矢も挙手する寸前まで心が動いたが、大矢も思いとどまる。

川上は信念を持ち、挙手しているだけに、上げられた左手はまっすぐピンと伸びている。

星野もＤＨ排除論の持ち主だが、場の雰囲気の読み違いに戸惑ったのか、上げられた右手に、しなやかさは消えかかっている。

ではなぜ、あれだけ、ＤＨ野球に嫌悪を示していた三原らが挙手をしなかったのか？

事前に示し合わせての、憎き巨人の将川上をはめるための策略だろうか。

それとも、やはり巨人の意見には同調できないと、反逆魂に火がついたのか。

真意はわからない。とにもかくにも…道筋は定まる。

「え～、それでは三つ目、一応いきます…。ＤＨ使い分けるの方、挙手願います」

三原が一目散に上げる。西本、仰木が続く。三人続いたところで、大矢が重い手を上げる。

広岡、古葉、大沢が上げて、締めはバレンタインだ。

鶴岡と藤本は棄権として、採決は、ＤＨを使い分けるに落ち着いた。

大矢は、採決前の動きを見ると自分の意見が取ったのが、信じられぬ思いだ。

たった一人だけ優勝経験がなく萎縮していた大矢もこれで自信がついたことであろう。

ただ、その自信が、肝心の采配の機微に、つながるかどうかはわからないが。

最終ロースター発表スペシャル～オリックス&近鉄編～パンチとイチローの気まぐれ

能力復元タイムカプセルに、タイムマシン機能があることが発見された。

ダイアログを戻りたい日時に合わせて、カプセルを程よく揺らすと、中にいる人間がその時代に復元されるだけでなく、指定された時代に行けるという。

発見者は金本で、藤本と赤星が中に入った際、いたずら目的で揺らしたところ、藤本と赤星が忽然といなくなったという。

金本は、消えた二人を懸命に探したが、一向に見つからず、まあ、なんとかなるやろうと軽い気持ちで、行方不明になったことを誰にも報告せずに、そのまま帰途についた。

行方不明が問題になることなく、藤本と赤星は翌日、ひょっこりと帰ってきた。

二人は、たった一日どこかに消えただけなのに、帰還まで六年あまりかかったという。

また冗談をいってると二人の供述を誰も受け付けなかったが、疑問に思った関本が調べ上げたところ、タイムスリップしていたことが発見されたのだ。

二人は、２００３年の能力と体に再現されるはずが、２００３年に戻ってしまい、本物の藤本、赤星が活躍していることから、表舞台に出れず、藤本赤星のそっくりさんをうたい、いく先々で阪神ファンにおごらせることによって、寝食を紡いだという。

二人がタイムスリップしたことは、いたずらをした金本に好奇な目がいくことにより、連続フルイニングに支障をきたすために、内密に伏せられることになったが、刺激的な事件のこと、誰かが口を割る。

秘密は、一人が口を割れば、瞬く間に広がっていく。

噂を聞きつけたのは、イチローとパンチ佐藤である。

二人の共通の目的は、土井正三のオリックス監督就任を防ぐことにあった。

土井が監督にならなければ、レギュラーとして起用されたはずとパンチはもくろみ、

土井が監督にならなければ、ピートローズの記録をもっと簡単に抜けたはずだとイチローはたくらむ。

「これすかね、パンチさん」

「このダイヤルだよ、イチロー。このダイヤルを時間に合わせて…」

「えっと、Dさんの監督就任が91年ですから…」

「90年にいけば、D監督の就任を防げるな」

外からカプセルを揺らす役目を任されたのは、これまたアンチ土井の松永である。

「お〜い、まだかあ?」

「まだです、今、合わせるところです」

ダイヤルは一桁ずつ合わせる仕様でなく、西暦の4桁、つまり20世紀ならば、19の桁と、あとの二桁に別れている。

一桁ずつダイヤルの変換ができれば、あわすのもたやすいが、二桁ともダイヤルが変わるのだから、目的の年度に合わせるのも、ちょっとした労がいる。

「20××年を19××年にするのには、一回ずらせばすむけど、××年の部分が面倒だな〜」

「今、09ですから、80回ほど回せばいいだけですよ」

「イチロー、君は見ているだけだから簡単にいうけど、このダイヤル、案外重いんだよ」

パンチのいうように、ダイヤルを、一回ずらすだけで一苦労の様子だ。

11、12、13…目的の90までは遠い。

もともと気が短い松永はなぜ手間取っているか、わからずイライ

ラを募らせている。
「まだか？」
「もうしばらくお待ちください…」
６７、６８、６９…。ダイヤルは確実に回る。
「まだか？」
８１、８２…。もうしばらくすれば、９０に届く。
「まだか？」
「まだか？　もう待てない」
短気な松永は９０に到達する直前に、カプセルを揺らし始めたのだ。
「待ってください…。あああ…」
パンチの絶叫も届かず、イチローともども、予期もしない時間にタイムスリップだ。
指し示されたダイヤルはいったい１９…何年なのか？
二人は戻ってこれるのか？

彼らは気にせず前を向く

二人の降り立った年は…？

パンチとイチローは気がつくと、公園のベンチの上にいた。

「大丈夫すか？　パンチさん」

「大丈夫だよ、イチロー…。松永さんは気がはやって揺らすから、９０年に合わせれなかったよ」

「しかし、揺らす役間違えましたね、気長な福良さんにでも頼めばよかったなあ」

「まあ、いまさらいっても遅いよ」

「ところで、何年すかね？」

「８０年代後半だと思うけど…」

携帯を取り出して、確認するが、８０年代でつながるわけもないし、正確な時刻を刻んでいるはずもない。

「あっちゃ～…って当然だよね～」

パンチめがけて、風に舞った新聞紙が飛んでくる。

「都合よく来たよ～」

早速、新聞を手に取り日付を確かめる。

「１９８８年…」

「二年前についちゃいましたね～。戻りましょうか？」

「戻り方知ってるの？」

「当たり前じゃないですか。戻れないとすると、世界のスーパースターの僕のいない現代なんてどれだけの損失か」

「どうせ、僕は旅番組のリポータークラスのいても困らないタレントだよ…。って、待て…」

「なんすか？」

「８８年といえば、あの年じゃないか」

「僕は中学三年で、中日の優勝に歓喜した年ですね」

「いやいや、中日もいいけど…。パだよ、パリーグ、エキサイティ

ングリーグ
パだよ」
「西武の優勝した年…」
「その西武と最後まで競ったのは？」
「近鉄…仰木近鉄」
「そうだよ、僕らの恩人の仰木さんの近鉄だよ」
「僅差で優勝を逃した…」
「最後の一戦に勝てば優勝だった…」
「１０、１９…」
「そうだよ、君も見てただろ？」
「ええ、西武より近鉄の方がシリーズで勝ちやすいから必死に応援してましたよ」
「D監督の就任を防ぐのもいいけど、歴史を変えようじゃないか…ポジティブなほうに」
「え？」
「近鉄に勝たせるんだよ、僕らの仰木さんのために…」
「どうやって？」
「イチロー、君が加われば…」
「パンチさん、あなたが加われば…」
「そうだよ、二人の力があれば、１０，１９を勝ちに変えられる」
「とんでもないこと思いつきますねえ～」
イチローはすくっと立ち上がる。
「でも、矛盾しませんか、パンチさんも僕もこの時代に生きている。佐藤和弘と鈴木一朗が二人いることになる」
「パンチとイチローっていう格好の名前があるじゃないか」
「あ、なるほど。でもどうするんですか？　経歴とか戸籍とか」
「気にしない、気にしない…。都合のいい戸籍なんて結構簡単に入るんだよ」
「お金さえあれば」
「そう、そのお金は君がたんまり用意してくれたじゃないか」

この時代に使えるように、一世代前の旧札で、しめて、ン億のお金がイチローの持つバックに入っている。
「あ、でも、ドラフトかからなきゃ入団できませんよ…」
「大丈夫、この時代にはドラフト外という便利なものがあってねえ」
「そうか、そういう時代か…」
「ドラフト外にかかる経歴を買えば、六月末までには、いつでも入団できる時代さ」
公園近くには、これまたバッティングセンターが。
「お、あそこにバッティングセンターある、パンチさん体ならしに打っていきましょうか」
「望むところだ」
二人はまだ気づいていない、重大な事態に。

イチローは、揚々と１４０キロの打席に向かう。
「１４０の速球一本なら、イチローなら、容易くオールミートだね」
「当たり前すよ」
ところが、初球…。
「あ、あ、あれ？」
当てるのが精一杯だ。
「どうした、イチロー、時間旅行疲れか？」
「おかしい、感覚が違う…。あ、そうか」
「なんだい、急に」
「忘れてた、時間が戻るって事は、僕たち自体も、この時代の肉体に戻るんだ」
「あ、そうだった、記憶だけ残して…。いまさら、だけど、イチロー、君、若返ったってより、幼いよ」
「そりゃそうすよ、中学三年ですもん。そういうパンチさんだって…」
「僕は熊谷組二年生、２４のころだ」
「顔立ちが、若いのはいいですよ、でも問題は体力、中学三年の体

力でプロのボール打てますか？」
「どうだろう、君ならあながち打てないことも…」
「そうっすよね、打てて．２５０～２６０ですよ」
「中学三年で、．２５０打てると豪語してさまになるのは君くらいだよ」
イチローは、１４０のボールをなんなく打ち返すが、はじき出される打球はプロの打球とは程遠い。
「あ、やっぱ．２６０だわ、こりゃ…」

望みどおりの戸籍と経歴を買った二人は、一路藤井寺球場に向かい、仰木監督、直々に入団テストの懇願に行く。
この時代の仰木は、もちろんこの二人をしらない。はたして受け入れられるだろうか？

デストラーデをデストロイヤーといい間違える首脳陣の陣

「入団テストやって？　どんな奴らや。なに、高校生と大学生の卒業したて？　二人とも、進学も就職もあてがないから見てくれって？」

普通の監督なら、身もしらぬテスト生など、門前払いであるが、仰木は普通ではないのだ。

「ふとっさん、どうしよう？　二人とも、左打ちの外野手らしいで」

中西太ヘッドコーチに意見を仰ぐ。

「暇だから見てやろうや。左の外野はちょうど、新井、淡口のベテラン勢しかいないところだ」

「ふとっさんがそういうなら…」

「どうも、僕がパンチです」

「僕はイチローです」

「なんや、ふざけた自己紹介やなあ～。ちゃんとした名前ないのか」

「ありますよ、でも登録名なんてのも面白いんじゃないでしょうか？」

「なんや、登録名って」

「ブーマーやアニマルみたいなやつですよ、本名と違う愛称で登録するんです、これからの平成の時代はこれですよ」

「へーせ？　なにいっとるんや」

「あ、まだ昭和だっけ…。まあ、とにかくファンに受け入れられるようにと」

パンチの熱弁が続くが、仰木が注目するのはパンチの頭髪である。

「ほお～　お前、パンチパーマか、ワシとおんなじやな」

仰木は、こりこりのパンチパーマを撫で付ける。

「そうです、パンチパーマだから、パンチです」

「面白いなあ、まあ、三十分くらい時間あるから見てやるか…」
「あ、ありがとうございます」
二人は深々とお辞儀をする。
「だがな、見込みなきゃ、とっとと帰ってもらうデ」

見込みなら十分、なにせドラフト一位にかかるパンチ佐藤と史上最高のヒットメーカーのイチローなのだから。
ところが、勝手が違うのか、てこずることに…。
まずは走力、５０メートル走だ。合格水準は６．５秒といわれている。
イチローは中学三年の身体能力とはいえ楽々クリアー。
パンチの方は…。
「はあはあ…、何秒ですかあ??」
「６．５秒やな」
ギリギリである。
「ところで、お前、フライングしとらんかったか?」
「男パンチ、そんな、ズルはいたしません」
ところが、きっちりとフライングしていたのだ。
上手くごまかせたとしたり顔のパンチであるが。

「ふとっさん、いま、アイツ、ピストル鳴る前にスタート切ったよな?」
「ああ、まあええことよ、ええことよ…」
試験管の二人にはきっちりと気づかれていたのであった。

続く遠投テスト、イチローはこれまた水準の９０メートルを難なくクリアするが、
肩に自信のないパンチは三度の試技とも…。
「ウオりゃあああああああああああああああ」
「８５メートル…やな」

９０メートルを越えない。
「ふとっさん、どうする？」
「とりあえず、掛け声はよかったな、元気はいいこと、元気が一番」
「そうやな、元気で５メートル足らんの多めにみとくか」
投げる際の元気さが評価されて一応の突破を見る。

ここまでくれば、後は守備と打撃の実技、合格は決まったようなものと思われるが、試験台としてとんでもない男が登場する。
当時のエース阿波野秀幸である。
阿波野といえば、パンチと亜細亜大の同級生だ。
「阿波野、僕だよ、僕」
聡明な阿波野は、本物の佐藤和弘は熊谷組に所属していることがわかって、そっくりさんの戯言と処理する。
パンチの懸命な同級生だから手加減しろアピールにも軽く会釈するだけで取り合わない。

イチローが打席に入る。阿波野が初球を投じる。
真ん中低めに切れのある速球が投じられる。イチローは手も足も出ずに打席を思わずはずす。
「はえええ～、プロのボールってこんなに速かったけ？」
中学三年のイチローの動体視力では、マシンの１４０を注視できても、同じ１４０でも、ロのエースが投じる１４０は追いきれないのだ。
この速球に、多彩な変化球に対応できることを示さなければ合格はない。
果たして二人は対処できるのか？

「ちょっとタイマ」…「おっとタイムをかけましたね…なんでしょう…」

イチローは打席を外すと、パンチのもとに駆け寄って阿波野の攻略法を聞き出す。

「阿波野さんって、どんな球種投げましたっけ？」

「お前も、対戦しただろ？」

「あいにく全盛期過ぎてました、あれほどのキレはなかったです」

「カーブ、スライダーにスクリューを混ぜる」

「あ、そうだ、スクリューが決め球でしたよね？　ということは左の僕らには投げてこない」

スクリューは主に右の外に投げられるボール。

打席に入りなおすイチロー。

入団テスト、ぶつけてはならないと内は投げてこない、しかも高校生と偽る細身の男に変化球すら投げてこないと読んだイチローは、真ん中から外側の速球にヤマを張る。

「まっすぐこい、甘いところにこい」

ぶつぶつとつぶやきが捕手役の古久保の耳に届いたのか。

「コイツ、速球待ちか…」

意地悪心かカーブのサインを出す。

阿波野はうなずきカーブを投じる。

速球一本に絞ったイチローは予想しないカーブに体勢が崩れて前のめりの状態。

「しまった」

それでも、その状態から、右手一本で、外側に外れるカーブを払うように当て、三遊間の頭を越えるヒットを打ってしまう。

中学三年にしてさすが天才のイチローである。

「ふとっとさん、どうや」

「非力やなあ、まるでゴボウのような体つきや。だが、あの当てる技術は見所あるな。まあ体できるまで5年かかるけどな」
「採っとくか？」
「好きにせいよ」

イチローが手招いたから、パンチに打てる？　のと思いきや…。
「どうせい」
奇妙な雄たけびの元、阿波野の速球をクリーンヒット。さすが、社会人を代表する打者で、全日本の三番を張った男の打撃技術だ。

「ふとっさん、どうや」
「代打くらいなら使えるかもしれん」
「採っとくか？」
「好きにせい」

打撃テストで高評価を得たことで、合格確実と思うのはまだ早い。最後に待ち受けた守備力テスト。
中学三年のイチローは外野手経験が浅く、ノッカーの打球を取るどころか、打球勘がなく、ボールの落ちる意味すらつかめない。
生粋の外野のパンチは打球の判断はできるのだが、追いつけない。追いついてもポロリの連発。
さすがに、守備のまずさから土井野球の掲げる守りのＶ９野球から早々と脱落しただけある。

「ふとっさん、いるか？」
「……」

評価が地に落ちたところ、思わぬ助け舟が出る。
「監督大変です、デービスが、大麻取締り違反で逮捕されました」
「なんやて？」

時は８８年六月、デービス事件が起きた年である。
選手枠に空きが出たところで、チャンスが生じた。
「ふとっさん、どうしよう？」
「センターの新井をデービスの一塁に回して、空いた外野に…」
「あいつら持ってくんか？」
「無理やろうな」
「まあ、この際、取っとくか、ドラフト外や外れても、たいした金銭的痛手はないやろ」
かくしてギリギリで合格が決まったのである。
二人は入団会見を手短に済ませると早くもチームに合流した。
もちろん一軍合流といわず二軍である。
彼らは１０．１９までに一軍昇格して仰木の手助けができるだろうか？

その入団会見の終了直後のこと…。
イチローが切り出す。
「あのう、仰木監督」
「なんや」
「デービスの穴はですね、わざわざ新外国人取りに行く必要ありません」
「なんでや」
「中日の二軍に干されているブライアントという…」

ヤクザ揃いのとんでもない一軍にいける、たったひとつの方法

高校大学で厳しい練習を切り抜けたパンチは試合の連続に対応できるが、中学生のイチローは
体力が続かない。
「ウエスタンってたまに名古屋や広島遠征あるくらいでほとんど関西に留まっているに、なんでこんなに疲れるんですかね？」
「ハハハ、中学生の体力で簡単にプロの日程についてこられるわけないよ」
それでもイチローは期待度の高さから、右投手用の右翼のレギュラーを任されて、打率二割台と一割台を行ったり来たりの健闘を見せている。
中学三年としては二割打てば驚異的であるが、プロ一、二年目以外当たり前に三割打ってきたイチローにとって、とても満足できる数字ではない。
一方のパンチはさすが、全日本の三番である、おもに、指名打者と左翼、一塁を任されて、打率も三割をキープしている。
「ヒットはこうやって打つんだよ、イチロー」
イチローに、思わぬところで、技術と体力の違いを見せ付けてご満悦のパンチだ。

それでも一軍昇格のお呼びはかからない。一軍が好調であり、空きが生まれないからだ。
イチローの進言？　によって獲得したブライアントの活躍もあり、左の外野手は充足している。
夏が過ぎるころに、さすがのイチローも自暴自棄になる。
「このままじゃ、１０．１９に間に合いませんよ」
「頑張ろうじゃないか、まだ秋が来たばかりだ」
「帰りましょうか、今年中に昇格できなければ、二軍にいても意味

がない」
「そんなこというな、あのイチローが物事を成しとけずに逃亡するなんてありえないよ。ＣＭにもあったじゃないか」
「パンチパワーだ？」
「それは僕の出ていた栄養ドリンクのＣＭ文句。小さなことを積み重ねることだけが、とんでもないところに行く唯一の方法だってやつだよ」
「積み重ねても間に合わない」
「それもそうだけど…。なら方法を変えようじゃないか」
「？」
「売り込むんだよ、僕らから、一軍に」
「どうやって」
「僕らは未来から来た」
「そりゃそうでしょうよ」
「結果を知っている」
「だから」
「近鉄は９月の中ごろから快進撃で西武を追い詰める」
「で」
「僕らを置けば、勝利を呼び込めると売り込むんだよ、過去は過去で流れている、僕らが無理やり変えない限り、勝敗はかわらないはずだ。つまり勝利の連続は決まっている。それを僕らが運を運んできたとアピールすれば」
「そうか、仰木さんは縁起を担ぐ人。しかも僕の推薦したことになっているブライアントの活躍もあり、強運の信頼度もある」
「そうだよ、それでいこうよ」

こんな二軍の新人の戯言を聞きうける監督は普通いないのだが、仰木は普通ではなかった。
「縁起担ぎか、おもろいな」
安直に二人の昇格を決めたのだ、そして二人のいうとおり、上げ

たとたんに、近鉄は西武との差をつめていく。
もちろん二人が運を運んだわけでなく、史実なのであるが、こうなると二人を落とす術はなくなる。
パンチはたまに代打、イチローはオグリビーや栗橋、羽田などの鈍足のベテランの代走として出るくらいで、ほとんど試合の出ないまま二人は一軍にい続ける。

やがて二人の存在に気づいたマスコミが取り上げる。
「幸運のルーキー？　無名の新人の佐藤和と鈴木一（登録名は結局、認められず本名での登録となった）の昇格から近鉄の快進撃はじまる」
ただし、彼らの代わりに二軍に落ちた中堅、ベテラン選手の愚痴（谷真や尾上など）も合わせて掲載されてたことも付け加えておく。

あれはあれでこれはこれで

「あんなん一軍におるから、おれらが二軍や」
「夜道歩くときは注意せい」
新聞にはぶっそうなことが書いてあるが、イチローは動じない。
「これっすよ、この日常離れしたプロレス的発言はあうのが、昭和のパリーグでしょ、近鉄ですよ」
怯えるどころか、逆に奮い立ってる模様だ。

「おい、佐藤和に鈴木一、荷物運びは、お前ら、新人の役目やろ。はよう、運びや、モタモタすんなよ」
二人をどやしつけるのは、金村である。後に、パンチの後援会入会し、ヘコヘコしながら、イチローにインタビューをする男とは思えない威張りっぷりである。
金村以外にも、栗橋、羽田のベテラン勢から、吉井、小野、山下、光山らの当時の若手まで、いかつい連中がそろってる。
体がゴツイだけでなく、パンチに角刈り、白のスーツにハンドバックのいでたちは、その筋の集団のままある。
それでもユニフォームに着替えれば、実力者揃い、雨天中止の埋め合わせの代替試合続きの過酷な日程にも、ばてずに西武を追いかけるのだ。

そして、運命の１０．１９の日が来た。
ロッテとのダブルヘッダーを連勝することが、優勝することのたったひとつ残された道。
パンチとイチローは実力を発揮せずとも、強運を送り込んだ者として、ここまで残ることができたのだ。

「イチロー、ここだよ、ついに辿りついんだ」
「ようやく来ましたねえ。しかし川崎球場…まだ慣れませんねえ」
「そうか、イチローが入団した９２年は、ロッテの千葉移転の直後だっけ」
「ええ、旧態依然とした球場がなくなる頃です」
「でもいいだろう、川崎みたいな球場も…、この狭さ、観客席との近さ、ぼろぼろの今にも朽ち果てそうなスタンド…小汚いトイレ…。これが、野武士がうようよした頃のパリーグだよ。ちなみに、僕の地元だよ、僕は、ロッテ子供の会の会員で、よくここに観戦に来たもんだ」
「いい球場…？　いい球場ということにしておきましょうか…」
「おいおい、語尾があやふやだねえ」

第一試合のオーダー。
近鉄。
一番セカンド大石、二番ファースト新井、三番ライトブライアント、四番ＤＨオグリビー、五番レフト淡口、六番センター鈴木貴、七番サード吹石、八番キャッチャー山下、九番ショート真喜志。
ロッテ。
一番セカンド西村、二番サード上川、三番ファースト愛甲、四番ＤＨマドロック、五番ライト岡部六番レフト古川、七番センター伊藤史、八番キャッチャー斉藤、九番ショート森田。
先発投手は、近鉄小野、ロッテ小川である。

吹石といえば、あの女優さんの親父さんで、真喜志といえば、マキシシングルとのうたい文句が出るたびに、片隅に浮かぶ人で、愛甲といえば球界の野良犬で、マドロックといえば、陽気な有藤に追いかけられる人で、　伊藤史といえば、あの人の元だんなさんであり、斉藤といえば、急に内野手から捕手になった、ロッテのいい加減さを象徴する人で、小川といえばあの人である。

もちろんのことイチロー、パンチはスタメンを外れたのであるが、イチローはこの日においても試合に出ないでいるつもりはない。試合に出れなくても、体力をつけて、プロらしくなった体で、打撃練習では快音を連発するほどに急成長を見せているのだ。

練習の一挙手一投足も見落とさない仰木のこと、イチローの進化ぶりもチェックが入っているだろうか…。

最終ロースター発表スペシャル～楽天編～楽天雑草軍団、ひそやかに襲来（前書き）

オリックスネタ恒例の一休み

最終ロースター発表スペシャル～楽天編～楽天雑草軍団、ひそやかに襲来

身の宵どころのない楽天軍団たちがついに立ち上がった！

彼らは、近鉄の傍系と判断。近鉄からの出場が原則であるが、岩隈、田中などごく少数のスター選手以外はまったくお声のかからないまま今日に至っている。

そこで、機構が出した新たな判断は、近鉄から要請のある楽天選手以外はフリー。

つまり、近鉄以外の十二球団のどこからも出場できる許可を得たのだ。

それでも、彼らの元に出場依頼の要請は、待てど暮らせども来ない。

実力以前に、知名度の低い地味な面子揃いなのが災いしたのか。

それならばと、強硬手段に出た。

十二球団監督会議が行われているホテルに飛び、直談判だ。

いままさに、監督会議が行われている部屋の扉の前で、嶋、渡辺直人、草野、鉄平、永井、中村真人ら初のクライマックスシリーズ出場の貢献者たちが立ち並ぶ。

ところが、彼らは揃って地味。

華もなければ、知名度もない。もしもユニフォーム姿でない彼らにあったなら、熱狂的なファン以外の誰が楽天の一線級の選手と気づくだろうか。

「どうやってアピールしましょうか」

司令塔よろしく嶋が口火を切る。

「僕は、遊撃レギュラーとして、標準レベルの守備力とそこそこ残した盗塁の実績、それに加えて、打率のわりに、気持ち高めの出塁率…かな」

切込み隊長渡辺直人の切り込みは、どこか半端。

「オレは、高い打撃技術かな～。それに、一塁でも、二塁でも、遊撃でも、三塁でも、左翼でも、中堅でも、右翼でも、どこでも守れるところ…かなあ」

この中で最年長の草野がこう答えれば、嶋は臆せず、駄目だし。

「守れるっていっても、どこも下手っすけどね。それにしても、草野、渡辺両先輩ともぱっとしませんね～。それでは、永井はどうかな？」

「僕は…一年間ローテで回れたことかなあ～」

嶋と同期の永井もどこか控えめ。

「おいおい、短期決戦だぜ。長丁場向きのアピールしてどうする。お前なら、球速表示以上に感じる速球とか、カーブとか、走者置いての粘りの投球とかあるだろう」

嶋はすかさず駄目だし。

「オレは…なんだろう？」

「鉄平さんなら、当然打撃っすよ。なにせ０９年の栄えある首位打者じゃあないすか～」

はっきりしない鉄平には助け舟。

「そっか、タイトルは大きいなあ～うん」

「みなさん、控えめっすねえ～。アピールってのはこうやってするもんすよ！」

嶋が啖呵をきって、お手本を見せる。

「ええ～　古田捕手、田淵捕手、大矢捕手ら歴代のスーパー捕手に並ぶほどコンスタントに高い盗塁阻止率を叩きだす、若き頭脳派捕手はいかがすかあ～。

打撃は正直見劣りしますが、それでも起用されてしまうほどの、確かなリードと投手を包み抱擁力は、プロ数年の選手とは思えませんよ～」

長所をこれでもかと見せつけた上に、短所もアピールポイントに変えるすべを披露だ。

「すげえな、嶋」
球宴出場も果たした救援左腕の有銘がことさら驚けば、
「すげえよ、嶋」
本家ガニエがどこぞへと消えても、怪しいゴーグル、無精ひげに、だぼだぼのユニフォームのガニエルックをやめようとしない小山も呼応する。
「オレここにいていいのかな？」
微妙に活躍した新人左腕藤原が自己の存在意義を問えば、
「オレこそ」
北京五輪予選候補だったことも誰も覚えてなさそうな青山が悶々とする。
「オレハ、ナニヲアピール、スレバイインダ？」
気がついたら年間一軍にいたグウィン、彼ほど、年間とおして一軍にいながら、形容しがたい外国人も珍しい。
気性がぶっ飛んでいるわけでも、圧倒的な投球をみせるわけでもなく、外国人救援投手にありがちな、際立って、お茶目な救援失敗談も
これといって思い浮かばない。
嶋は、そんな頼りよげない救援陣に駄目押し。
「いいですか、小山さん、有銘さん、グウィン、その他、あなたたちは、僕のリードで勝っているだけ…救援だから何とか凌いでいるとの表現が
適切でしょうが…ですから…。いずれにしても、僕のおかげですから」
嶋の独り舞台に、そっと釘をさす男が現れた。
中村真人、悪球打ちの名人その人である。
「嶋くん、ちょっといいすぎじゃないか？」
入団は一年遅れであるが、人生の先輩としてガツンと嶋の伸びる鼻をへし折っておきたいところであるのだが、
「何がいいすぎなんですが？　僕はみなさんのことを思ってですね

…。みなさんがいかにすれば、人生が開けて、より楽しい生活が送れるか、それを思うとですね、今やらないと手遅れになるんでしょ、ここが最後のチャンス、なりふり構わずぶつかって、栄光をつかもうと…」

嶋の矢継ぎ早の反撃に合い、中村真人は急失速。

「そ、そうだね…。い、今やらんとね…」

いたって、地味で、嶋以外自己主張に欠ける面子である。

彼らは、はたして、どこかの球団に、ひっそりと、もぐりこめることができるのだろうか…？

楽天監督保険加入者一名

「おい、会議室がなんだか騒々しい」
部屋際に立っていた苦労人中谷が気づく。
「イスを片付ける音がする」
星野ジャパンの申し子長谷部が呼応。
「いよいよ出てくるわけか」
嶋がまとめにはいる。

会議室から、まず飛び出してきたのは、早速の難物、星野仙一である。
楽天選手たちを見つけるやいなや、
「なんや、マスコミか？　今日はしゃべらんよ、決まったことは明日の正式発表まで内密なんや」
選手とはまったく思わず、記者かなにかと勘違いだ。楽天の選手になじみがないうえに、私服姿ならわかるべきことはない。

「いえ、僕たちはあのその…」
年長格の草野が説明をするが、要領を得ない。しどろもどろである。
年配を取り込むのが上手い嶋も、さすがに星野は大物過ぎるのか。
「小山さん、鉄平さん。星野さんと来たら、あなたたちの番でしょうが」
元中日の星野門下生を人質に差し出す。
勢い押されて星野の前に出る鉄平と小山、だが、その顔に生気はない。
「あ、あの星野さん久しぶりです、おおおお、おじゃなかった、こ、こ小山…」

「あん？　（しばし重い沈黙があって）おお小山か～　変わったのう、ぶさいくなゴーグルとひげ面でようわからんかったわ」
「僕は鉄平です、お久しぶりです」
「ああ？　鉄平、誰や、わからんわ」
「あ、あの土谷鉄平です」
「あ？　（またしばし重い沈黙が繰り返されて）ああ～　土谷か？　元気にしとったか？　ところで、なんやお前ら二人して、記者どもに混じって…。あ、そうか、一日記者とかの体験しとんのか？」
「違うんです、僕たちは楽天が参加しないことからフリーの立場として自由に十二球団どこからも出場する権利を得て…」
　小山は気を取り戻してとつとつと説明しあげる。
「ああん？　（今度は、軽い沈黙）お～　そうやったな、たしか、コミッショナーがそういうてたわ。で、なんや、お前ら、オレのドラゴンズから出たいと頼みにきたのか？」
「あ、はい、できれば…」
「うあははっは！　直談判に出るお前らの心意気は買うがな、あいにく我が星野中日は、熾烈な生存競争を繰り広げておってな、お前らの入るスキなど、どこを探してもないんや。本塁打王やら、首位打者やらのタイトル保持者まで、メンバー落ちの危機なんやぞ。お前らのようなペーペーじゃ問題外やな」
　星野には一兵卒が口添えをできない雰囲気があるのだが、鉄平は臆せず切り込む。
「僕も首位打者ですよ、知ってますか？」
「あん？　お前が首位打者やって？　笑わすな。土谷は、ワシが目をつけて、ワシがスカウトに指示して、進学偽装してまでとった選手やぞ？　それが首位打者やと？」
　鉄平は星野の意味不明な論理展開を、一切合財、気にしない。

「しかも、小山さんは救援陣のリーダーとして、二位進出の立役者といってもいいまで成長されました」
「小山が？　あのアホな投球しかできんあの小山が救援陣の立役者やと？　小山といえば井口を寸でで逃し、誰かいないかと、コイツでは残り物でも、地元だからいいわけ立つと
と一位に押し立てた投手やぞ？　そんな小山が…」
「知らないんですか？　それでも五輪の監督を担い十二球団を分け隔てたなく見たお人ですか？」
　鉄平はもはや怖いものなしや。
「楽天なんぞ、マー君と岩隈以外見なくても同じや。あとは、ポンコツの山崎武司くらいしかようおらんやろ」
「でも、楽天の監督を狙ってか、トヨタの会長さんと一緒に、うちの三木谷オーナーと会食されましたよね？　それで楽天の現状をよく知らないんじゃ話しになりませんよね？」
「ば、ばかいうな！　誰が楽天の監督の座なんぞ狙っておるか！　あれは保険や、保険かけたんや。ワシの狙いは巨人の監督の座一本や。夢がかなうその日まで阪神のＳＤに腰掛とんのや。巨人の監督の夢が散ろうとも、阪神の監督の座をキープしておくために、ＳＤの職に就いているんや。無能の真弓を担ぎ上げて、岡田を追い出したんのもそのためや。楽天？　楽天は、巨人、阪神の次の保険に過ぎんのや！」
「そうですか、はあ」
　切り込んだはいいが、鉄平はあっさりと落城。
　自らの野望を語り意気揚々とした星野は次の標的を見つける。
「おい、おまえ、長谷部やないか！　ワシが地方のしょうもないリーグにいたお前を発掘して、ワシのコーチングで開眼して、ワシがワシのジャパンに入れて
五球団一位競合の投手に一躍のし上がった、ワシが育て上げた長谷部やないか！」
　隠れるようにした長谷部を見つけてしまう。

「あ、どうも、あの説はかねがね…」
「契約金なんぼもらった？」
「一億五千万です」
「そりゃ表の金やろ、裏でいくらもろうたんかと、聞いてるんや」
「いえ同じです」
「なんやと？　競合するレベルの即戦力投手が名目上の上限それっぽっちやと？　山田秋親レベルで六億五千万（ワシの中日裏切り、ダイエーにいくいうたから、ワシがリークしてやたんだ）、那須野レベル（ワシは一場、野間口両取りに夢中で眼中になしやったな）でさえ五億もろうとんやぞ？　楽天さんはやっぱり渋いのう、保険かけるとこ間違えたかのう。わっはははは！　まあ、そのときが来たら、ワシのお得意の口八丁で丸め込んで、何億でも引き出すがな
がっはははは」
　星野はなぜか、怪気炎で去る。
　星野の次に室内から出てくるのは、バレンタインである。現役監督を退いて五年以上たつ星野と違いバレンタインといえば、現役同然で、しかも楽天とは同じリーグで
何度も顔合わせしているとくる。
　楽天の選手の顔と名前が一致して、当然であるが…。

ドンと呼ばれた爺さん

なにゆえボビーは外国人である、人は基本的に、違う人種の顔を見分けるのが困難だ。

日本人も、人種の異なる白人や黒人とくれば、皆同じ顔にみえるものだ、それに加えて地味な顔が並ぶ楽天勢。

「Ｏｈ～　アナタ、タチハ、イーグルスノメンバーデスネ～」

楽天の選手とわかっただけ星野よりましといえるのだが、

「アナタハ、テッペー」

「キミハ、クサノ」

嶋を鉄平と言い切り、渡辺直人を草野という始末だ。

「ソシテ、ユーハ、ワタナベマサトデスネ～」

それは、ロッテの地味な便利内野手だろう。

嶋が嘆願を切り出す前に、バレンタインが勝手に握手会とサイン会を始める。

「ニホンヲサル、ダイカントクノサインとシェイクハンドハ、イカガデスカ？」

フレンドリーに接してくれる監督になれていない楽天選手たちは戸惑うが、とたんに、ボビーのとりこだ。

「いい監督さんじゃないか」

「オレもあんた監督の元でやりたかった」

「こんないい人に、あの人と違って、何の問題があったんだろ？」

表の顔もあれば、裏の顔もあるのが大監督になる大きな条件のひとつなのです。

ボビーが去ると次々と監督たちが飛び出てくる。

三原、鶴岡、藤本…かつての大監督たちだ。

大監督が楽天の選手どころか、球団自体の存在を把握しているのも怪しく、長老たちの凛とした姿勢に、感嘆をもらすしか、楽天の選手たちのすべはない。

「三原さんかっこええな、ダンディーの異名は伊達じゃない」

「それは、水原さんの異名ですよ、小山さん」

「そうやったかな、中谷」

大監督に無視されるのも承知のこと。

狙いは、現代野球の担い手にあるのだから。

古葉、気づかない。

上田、ええでの声掛けで終わる。

大沢、ノムのいうことは気にすんなの一言。

西本、一睨みで終わる、一睨みで楽天勢は縮みこむ。

広岡、チャンスだ。

広岡といえば、実質的なアドバイザーとして、初期の楽天を影で支えた男。

楽天選手に気をとられないわけがない。

広岡が、同じ遊撃手である渡辺直人を見つけると、無言のまま、渡辺直人の捕球からスローイングまでの守備のマネをし始める。

これが、特徴や欠点までを把握して、またよく似ているのだ。

物まねを披露すると、欠点を指摘しての簡易的な守備教室を施す。

それが終わると、広岡は挨拶ひとつなく冷淡に去っていく。

「なんだったんだろ」

「さあ…。まあ参考にはなったけど…」

「結局、出場アピールすらできずか…」

「今の広岡さんで何人目だ？　嶋」

「十人目、いや十一人目すかねえ…」

嶋は多重カウントを犯したのだが、楽天の司令塔が間違えるわけないと、誰も疑いを持たない。

「ってことは、あと一人か…」

「誰、残ってましたっけ？」
「横浜…」
「大矢さんか…」
「なんで、そこでガクっとくるんですか？　大矢さんですよ、逆にチャンスじゃないですか？　優勝どころか、二位にもめったに立ったことのない横浜（過去六十年で優勝二回は有名であるが、二位も四度しかないのである）。そんなガラクタの戦力に二位になった僕らが割り込めないわけがないでしょう？」
　嶋が奮起を促すと、大矢がのそのそと出てくる。
「いやあ～　席を立つとき、ペットボトルの水ひっくり返しちゃって…。片付けやなんやで、遅れちゃたなあ…」
　交流戦の前にいなくなった大矢は今年の楽天をよく知らない。それでも過去二年の蓄積された知識があれば、鉄平あたりはたやすく判定できるはずであるが。

「あ、キミは」
　大矢は立ち止まると、解説で培ったよく通った声を披露する。
「同じ捕手として、僕のことだろうな」
　嶋が持参すうと、鉄平は、
「どうせ、僕は関係ないやろうな」
　なぜかしりごみをする。

「噂の」
　噂が立つほどの選手はいるかと見渡すが…。
「リンデン」
　リンデンを指名する当たり大矢である。
「いやあ、キミがリンデンくんかあ」
　いつのまにか参加していたリンデンに駆け寄る大矢であるが、リンデンはポケットに手を突っ込んだままだ。

「フーアーユー？」
途中入団のリンデンは大矢など知りえない。
「キミがリンデンかあ」
事件に言及することもなく時の人に出くわした感動しか持ちえない大矢だ。

「リンデンがいるってことは…君たちは、楽天の選手なのか？」
ようやくわかる監督が来てくれたと、楽天勢は安堵の表情を浮かべるのだが、
「そうか、そうか…それじゃあな」
それで終わりのようだ。
「いっちゃったよ」
「結局、ろくなアピールできないどころか」
「顔も一致しなったな」
「終わったなあ」
終幕のムードが漂うが、監督はまだ残っていたのだ。
嶋のカウントミスでそろって勘違いしているのだが、一人だけ室内にまだいたのである。
川上哲治、ドンである。
まだドンがいるとわかっても、ドンである。
天井人のドンにとっては、楽天の在籍数年の選手など、目も届かないだろう。

川上の登場である。
なぜ一人遅れて出てきたかは明らかにされていない。
残された大会担当者となにやら、他球団にとってはよからぬ、巨人にとってはよきことを話しあったでもいたのか。

「川上さんが出てきた」
「挨拶だけはしておくか」

一同、川上に向かって、深く、深く頭を下げる。
川上は楽天の選手に、笑顔を携えて寄り添ってきた。
ファンかなにかと勘違いしたのだろうか。

「握手でもしてもうらおう」
「やめとけ、ドンだぜ、球界の」
左殺しの中島が、恐れずに、手を差し出すと、川上は、すかさず握り締めるのである。
「やあやあ、君は、中島くんだねえ～」
「え？　は、はい、中島です…」
知っているのである。ドンが中島レベルの選手の名前を。しかも、私服姿の彼を一目で見抜いたのだ。
これには、中島だけにかかわらず、楽天選手も皆驚きを隠せない。
「救済分配ドラフトのオリックスの唯一の生き残りで、オリックスの左投手にめっぽう強く、名前の読み方も、‥なかじま‥じゃなくて、‥なかしま‥と濁らないんだってねえ」
さらに、異常なほど詳しいのである。
「そっちの君は、草野くん。打撃の天才で、中盤まで首位打者争いトップだったねえ…。そうそう、いとこが、アイドリングのメンバーで、酒井くんといったかな」
「こっちの君は、高須くん。得点圏となると目の色を変えるね。一見、無表情一辺倒だけど、私にはわかるよ」
「あっちの君は、宮出くん。君のでかさは、的の大きさが必要な一塁の守備要員にぴったりだよ」
「向こうにいる君は、内村くん。いやあ小さいのによく頑張るねえ、BCリーグの希望の星だよ」
と次々に選手を名指しては、特徴をこと細かく的確に述べるのである。
「朝井君はいないのかな？　あの子のカーブや守備のうまさは、堀内を連想させるのに」

ここにいない選手まで、言及する有様だ。
疑問に思ったことは解決せずにいられない鉄平がドンに直撃だ。
「どうしてそんなに詳しいのですか？」
「あっはっは、この年になると、毎日暇でねえ。野球を見るくらいしか楽しみがないのだよ。我が巨人軍だけでなく、その他十一球団に大リーグまで目を光らせておる」
「なるほど」

ここまで評価するならば、切り込んでみる価値があると嶋はいきり立つ。
「川上監督、フリーの立場である僕たち楽天選手を、巨人軍のメンバーに加えてくれとまではいいません。ただ選考する際に、頭の片隅にでも入れておいてくださいませんか？」
嶋は一人前に出て頭を下げる。
「楽天の選手の力を借りるほど、巨人軍は落ちてはおらんわ」
一蹴で終了。
この話も終了。

ドンと呼ばれた爺さん（後書き）

リニューアルしてから音信不通

九月二十七日からの伝言（前書き）

ついにイチロー、パンチの続きであります

九月二十七日からの伝言

小野の立ち上がりを愛甲がいきなり砕く、先制の2ランホーマーだ。

勝っても最下位がとうに決まっているロッテが、無駄に意地を見せるのは、なにも個人成績狙いだけではない。

西武ファン除く全野球ファンが近鉄の勝利を願っているのならば、ちょいと嫌がらせをして困らせてやろうと、その程度のモチベーションが、かえって実力を発揮させるものだ。

先制弾を喰らった小野は、信心が足りなかったと、マウンド上でお題目をつぶやけば、ホームに還って、高沢とハイタッチする愛甲は、大先生のおかげであると、心の中で、三色の旗をふる。

近鉄は勝たなければならないとの焦りからか、ロッテ先発の小川にまるで、手も足も出ない。

小川のサイド気味の腕の振りから繰り出されるキレのいいストレートとシンカーにきりきり舞いだ。

さすが、この年の奪三振王、しかも、投球回数を上回る数、どれだけ年俸が上がるのかと、胸を弾めば、浪費癖にも火がつく。

あれが欲しい、これも欲しいと際限なく夢は膨らむが、世の中のバブルも自らのバブルも弾けることは、この時の小川は知らない。

勝っても負けても気楽なロッテベンチと比べて、近鉄ベンチは総じて表情が固い。

普段、ベンチの盛り上げと知られる村上にも元気がない。

となれば、結果を知りたるパンチの出番だ。

この試合は史実どおりならば、勝利は確実。ムードを盛り上げることもないが、次の試合の歴史を変えるべく、パンチは立ち上がるのだ。

「先輩方!!　暗くなったらいけません!!」

遠慮していたパンチが遂に、その牙を剥くのだ。
「オグリビー!!　お前さん、大リーグの本塁打王だろう？　川崎球場くらい三分の力でスタンドインだよな!!」
オグリビーに日本語の声援など届くわけがないのか、あえなく、袴田への捕手フライに終わる。
「やい、淡口さん!!　腰の振りが足りないんじゃないの？　小川投手を艶やかな愛人と思って、ぐりぐり振り回してくださいよ!」
下ネタを混ぜたが、効果なし。淡口は三振に倒れる。
「おい、イチロー、記録はどうだい？」
イチローはあらかじめ、テーブルスコアを持ってきていた。
「淡口さんの三振はスコアどおり、オグリビーのキャッチャーフライも史実どおりすね」
つまり、パンチの鼓舞ていどでは、歴史は塗り替えれないらしい。
それでも、パンチは檄を飛ばすのを諦めない。
「やい！　鈴木選手!!……」
後が出てこない。さすがのパンチも現実の世界で、すでに若くして故人となった鈴木を冗談めかして、鼓舞をするのには、躊躇うようだ。
すると、鈴木が左翼席に叩き込むのだから、間が悪い。
新人パンチの必死の激励に一目を置いていたナインの風向きが変わる。
「おい新人、お前が黙っとった方が、結果出るやないか」
「そやそや」
「そやな」
強面揃いの近鉄ナインに咎められたら、さすがのパンチも意気消沈。
それでもパンチはめげずに、今の本塁打は自分の檄のおがけであると、イチローに史実の確認を求めるが、
「史実どおりすね」
の一言で撃沈、言葉で戦力にならうと試みたパンチはベンチの隅

で丸くなる。
　ロッテは、七回裏に、名前もプレースタイルも成績も見た目も、すべて地味な佐藤健一の二塁打で加点をする。
　小川の調子と牛島というパ・リーグきっての守護神が控えていることを考えると、残りの二回で二点、いや、引き分けは許されない近鉄は、三点以上奪うことが優勝へのただひとつの条件、さすがに、雲行きが怪しく、近鉄ベンチもより固くなるのだが、パンチ、イチローの奇妙な新人コンビだけ実にゆったりとベンチに陣取っている。
　この態度がベテラン勢の顰蹙を買ったのか、羽田から直々に喝が飛ぶのだ。
「こらあ、新人、若いのに、なんちゅう態度や～」
　応援程度で歴史を変わらぬと悟った二人だけに、恐れることはない。

「この回で追いつきます」
　イチローがさらりといいのければ、
「先輩、先ほど、黙っとけといったじゃないですか」
　パンチは静寂の正当性を訴える。
　ただ近鉄に言論の責任などはない。
「それとこれとは別じゃ～　とにかく声を出せ、声を」
　羽田は荒く狂うが、イチローは動ぜず、予言を続ける。
「淡口さんはセカンドフライ」
　淡口はそのとおり、セカンドフライに倒れる。
　テーブルスコアを持つイチローは、スコアを見れば、一目瞭然である。
「鈴木さんはライト前ヒット」
　鈴木がヒットを打つと、次第に不思議なムードが生まれてくる。
「なんや、この小僧のいうとおりになりよる」
「偶然や」

「偶然でもええ。次、代打の加藤正樹はどうなるんや」
「四球ですね」
これも当たったのだから、ベンチは背筋を凍らせる。
「偶然や」
「偶然も三度も続けば、見事なもんや」

イチローが暴走しすぎだと、パンチが止めに入る。
「おいイチロー、そのくらいにしないか、僕らの正体がバレるぞ」
「そうしときますか」
イチローが手元にあるメモ帳サイズのスコアブックをポケットに納めようとするのだが…。

「なんや、この小僧、何隠そうとしとるんや？」
感づいた羽田に奪われてしまう。
「なんや、これ、今日のスコアか？　感心やな、スコア付けて、後で研究でもするのか」
じっくりと眺めると、何かがおかしい。
「なんや、九回までのスコアが書いてあるやないか」
「そんなわけあるかい、今、八回や」
「そやそや」
「いいや、間違いない、九回まできっちり書いてある、ちなみに、次の村上は左翼手越え二塁打とあるな」
「予言者きどりか」
「ノース和製トラボルタ港東ムースやったけ？」
「それいうならノストラダムスやろ」
「そうそれやそれ」
「ふん、当たるわけない」
「何も、いい予言まで否定せんでも」
「何が、いい予言じゃ。同点じゃあかん試合やろ？　3ランで一気にひっくり返さんといかん局面やろ」

「それはそうやけどな」

またそのとおり、村上が左中間を破る二塁打を放つものだから、イチローのハンディサイズのメモ帳は、予言書として崇められる。

「何々、ここで牛島やと？」

八回同点で抑えの切り札投入の策は、今日見られない起用法であるのだが、

「まあ当然やな」

「同点で止めとおかんとな、ロッテにしたら」

昭和の終わりは、誰しも納得の策であった。

牛島の投入を見て仰木は、代打の切り札ベテラン栗橋を送り込む。

「ワシの結果はどうなの？」

栗橋は、さらりと羽田に尋ねるが、

「聞かんほうがいいかもな」

「そりゃ、悪い結果が出るといってるのと同じだろ、羽田」

「そやったな、すんません」

栗橋は三振に終わる、同点に追いついて一息をつく所だが、近鉄にとって引き分けは負けに等しいどころでなく、完全たる敗北であり、残る攻撃は九回、一回のみ、切羽詰まった状況に身を置かれたのだが、予言書の存在が近鉄ベンチの緊張を解かせる。

「羽田さん、この試合、これからどうなるんよ？」

「内緒や、内緒」

そういいつつ、羽田の顔は真っ赤に上気して、どこか緩んでいる。

まさに見ればわかる顔だ。

一年目はマラソン、二年目は鍋、三年目は二軍で干される

九回表近鉄の攻撃。
ここで一点でも勝ち越さない限り、すべては終わりである。
九月の月刊ＭＶＰを獲得して、絶好調であるオグリビーであるが、あえなくショートゴロに倒れる。
先頭の四番打者の死にも動揺は見られない。
予言書によると、この試合は勝つことになっているからだ。
たかが、数例の結果を当てたに過ぎないのに、すっかりと信じ込んでしまうあたり、ずいぶん単純であるが、わかりやすい思考回路をしているから、近鉄は怒涛の進撃ができるのだ。
淡口が二塁打を放つ。
当然だ、この試合は勝つことになっているのだ、それでも、近鉄ナインは蜂の巣を突いたように沸き返る。
結果が見えても、喜びを爆発できるのが、これまた単純な近鉄ナインらしい。
ここで、淡口に代走、佐藤純一が送り込まれる。
秋田生まれだけに落合二世と黙された社会人スラッガーであったが、プロの世界の壁に阻まれ、
代走守備要員に甘んじている男であるが、それだけに、走塁に間違いはないはずであったが…。
好調、鈴木が猛打賞となる、今日三本目のヒットを放つ。
佐藤が還って、勝ち越し、それが予言書の予言である…はずとナインは見たのだが…右翼手の岡部から予想だにしない好返球がホームに飛んでくる。
佐藤はホームを狙うが、慌てて、三塁に戻る…このとき、信じられない光景が…！
何と佐藤が転ぶのだ、プロの走者が転ぶなんて、そう滅多にあるものではない、しかも、この大事な場面で起きるなんて…。捕手の

袴田と三塁手の水上に挟まれた佐藤は、あえなく挟殺…。
絶好のチャンスがつぶれた。
おかしい、本当にこの試合勝てるのか。
羽田はスコアブックとにらめっこ。
近鉄ナインには不穏な雰囲気が漂う。
ベンチに戻ってきた佐藤は居場所がなく、新人のパンチとイチローに逃げ込む。
「ど、どうしようか…とんでもないことやっちまった、オレ」
「気にしないでください、佐藤の先輩の純一さん、これくらいの失敗、あなたが後の審判生活で起こすミスジャッジの多さに比べたら、このくらいのミス…」
パンチは思わず、佐藤の現状、パリーグの審判として活動する佐藤純一の姿を思い浮かべて、
激励をするが、
「は？　オレが審判？？」
現役まっただかの佐藤純一に、審判どうのといわれてもピンとくるわけがないのだ。

「安心してくださいよ、絶望的なしょうもないミスですけど、この試合はなんとかなりますから」
イチローはクールに言い放つ。

九回二死、あとワンナウトで近鉄のＶ逸が決まるのだが、密かに引退を決めている梨田が境地を救う。
独特のこんにゃく打法から、放たれた打球は、センター前に転がる。
センターに入るのは、内野守備のスペシャリスト、森田…つまり、外野は専門外であるが、
ロッテの選手層の薄さから、外野手として、ちょくちょく起用されている選手である。

もしも、森田が外野の専門職で、日頃から、外野一本で練習を積んでいれば、ホームで刺せたかもしれない微妙な打球であるが、専門外の森田は的確にさばくのがいっぱいいっぱい。

二塁走者の鈴木は、足をもつれながら、全力で還ってくる。

勝ち越しだ、鈴木は、そのまま中西太打撃コーチともんどり打って抱擁。

合わせて、優に２００キロを越える二人の大男の抱擁は、この場面だからこそ生えるのだ。

「ほら、打ったでしょ？」

ベンチが大騒ぎでも一人クールなイチロー、普通なら、どやされる場面であるが、予言者として崇められてるだけに、許されるのである。

九回裏、追いつかれても終わりの場面、引き続きマウンドには吉井が上がっている。

この年の最優秀救援投手だけに、当然の起用であるが、その吉井が先頭の丸山を四球で歩かせてしまう。

思わず飛び出る仰木が阿波野に交替を告げる。

抑えの切り札である自分をどうして信頼できないかと吉井はベンチ裏で暴れる。

「阿波野、君は獅子奮迅で投げるから、太く長い野球人生になっちまったんだよ」

パンチが憐れむが、イチローがすかさずつっこむ。

「パンチさん、太く長くじゃあ、最高の野球人生じゃないすか、まるで僕みたいに…」

「ああそうだな、阿波野は大卒で１４年もやれたから、どう考えても短くないし…。最初の３年は素晴らしいのだから、細くもないし、どう形容したらいいんだろう」

「得意のマラソンで例えたら、どうですか？」
「マラソンでいうと、１０キロくらいまでトップを走りながらも、その後はペースダウン、終わってみたら、完走も１０位入賞も怪しいってところかな？」
「なんか違いますねえ…」
「う～ん…」
パンチが適当な例えが出来ぬうちに、試合は終わるのだ。
近鉄の辛勝、望みはつながれた。

「これからが本番ですね」
はたしてパンチ、イチローは歴史の壁をぶち壊せるのか？

ちなみに吹石徳一はこの日が引退試合（前書き）

ここまで3ヶ月感想なし

お気に入りも一件って

ちなみに吹石徳一はこの日が引退試合

２０分の休憩を挟み、運命の第二試合が始まる。
イチロー、パンチは当然スタメンから漏れた。
両軍の先発は、近鉄がこの年のドラ一高柳、ロッテが結局この年だけ二桁勝った園川。

「おい小僧、第二試合の予言書はないんか」
羽田はイチローを捕まえては、スコアブックの提出を迫るが、
「残念ながら、ありません」
この言葉は嘘。
事実、イチローは、第二試合のスコアも用意済みであるが、第二試合は史実の上で引き分けに終わった試合。
試合はスコアどおりに進ませない、史実をひっくり返すためにやって来たのだから。

「え～　諸先輩方～　この試合は、日本中に注目されるビッグゲームであります！　ここ川崎に集った3万の観衆はもちろんのこと、テレビの前では、全国８５００万人の視聴者がこの試合の一挙一投足を見守っております。一切の手抜きなしで、全力プレーを見せつけてやりましょう！！」
第一試合の野次将軍ぶりが評価されてか、第二試合の盛り上げ役に任命されたパンチであるが、
まだこの時点の近鉄ナインは、この試合が記録的な視聴率を記録することも知らなければ、全国ネットで中継されることすら知らない。
「テレビ？」
「あるわけない」
「いや、地元関西じゃやってるんちがう？　ＡＢＣあたりが、中継車出してたで」

「関東ではないな、試合出る前のホテルで新聞確かめたけど、どこにも中継予定なかったわ」
「そらそうやろ、パあーリーグやで、いくらビッグゲームいうてもな」
「まあ、新人がいいたいことは、全国民に見られているつもりでやれちゅうこっちゃ」
いいように解釈してくれて、試合は開始だ。

近鉄の初回の攻撃を園川がゼロに封じ込める。1
「ざまあみろ」
園川は球場中埋め尽くした近鉄ファンにそうつぶやきマウンドを降りた。
ロッテにとってはただの消化試合なのに、この気合の入れよう。
曲がった闘志の燃やしかたは、今に続くロッテの伝統だ。

二回裏、サザエさんのテーマにもすっかり慣れ親しんでいないマドロックが左翼席にぶち込む。
汚い狭っ苦しい球場に、ガラガラのスタンドから流れる奇妙な楽曲、バリバリの大リーがーの力を削いできたが、大試合となると、首位打者四度の血が騒ぐのだ。
園川といえば典型的な凪げてみないと…の投手。
いい園川もあれば、悪い園川もある。
その比率は、良い悪い悪い良い悪い悪い悪い悪い…で、まさに七勝したら十五敗喰らいそうな
いかにもBクラスのローテ投手であるが、こんな日に限って、今日の園川は素晴らしい。
のらりくらりとした変化球に、切れのいいストレートが混ざれば、ゼロ行進を並ばせる。
オグリビーのタイムリーで同点にするのがやっと、同点つまり敗北の近鉄ナインは苛立ちを募らせる。

仰木の前で屈伸運動を重ねたり、パンチは必死のアピールで、代打起用を訴えるが、仰木は動かない。

左腕の園川に実績のない左打者など出せるわけがない。

「試合が煮詰まると、荘さんに交替します、その時まで待ちましょう」

「でもね、イチロー、僕たちは歴史を変えにきたわけだ、早いところ、僕らが動いて、試合の流れを変えたいところだろ？　それに園川さんは、イチローの大好物じゃないか、２００本安打のの時の投手だろ？」

「通算でも軽く四割以上打ってますね」

「だろう？　仰木監督に進言しなきゃ、あの人は相性を第一に采配をふるう人だ」

有言実行というか、口に出したらすでに行動に移しているのが、パンチである。

「仰木監督、一生のお願いです、鈴木一朗を代打として起用してください」

新人が監督に選手起用の進言とは、前代未聞である、うるさ型の先輩の心象いかに…であるが、ナインは試合に集中していてそれどころでない。

「新人が起用にけちつけるな」

仰木のいうことはしごくまともだ。

「心配せんでええ、鈴木一の起用は考えておるから。あの小僧はうちの秘密兵器や」

仰木は打撃練習、新人しかも控えのイチローの練習時間はごくごくわずか、その中で、天才的なミートの一翼をしっかりと見抜いていたのだ。

「なら、このパンチ…いや佐藤和弘の起用を…」
「お前はベンチの賑やかし役や、試合に出んでも、戦力や」
パンチ起用は無下なく却下…。

試合は七回表、先頭のとっておきの代打、村上があえなく三振に取られる、いやなムード。
打順は下位、いてまえ打線といえど、下位の3人はもっぱら守備の人、吹石、山下、真喜志…
いずれも二割がやっとの打者で、攻撃にはまったく期待の出来ない選手だ。
吹石は怪我の金村に代わって三塁の守備についている。
いてまえの象徴的存在の金村ならまだしも吹石には…、誰しもそう思う場面で、吹石のバットが火を吹く。
まさかの本塁打で勝ち越し、まさかの娘が美人で女優デビュー、さらにまさかは続く、真喜志まで一発を放つのだから、近鉄ナインならじとも、誰もが試合は決したと思うだろう。
ところが、ロッテの空気の読めなさ加減は尋常ではないのだ。
ただ左でちょっと体型とフォームと背番号が似ているだけで、和製ソレイタの異名を持つ岡部が追撃のソロを放てば、三度の盗塁王で首位打者でありながら、まったく目立たない無名の監督扱いされる西村が同点タイムリーを打つのだから、ロッテの底意地の悪さは、監督、選手の人相どおりだ。
ブライアントが今年の主役はオレさと一発をかまして勝ち越せば、イチローが獲得を進言したという、この話だけの特別設定が生きてると思えば、ハーモニーがうまいくらいしか、特徴のない首位打者高沢が阿波野から一発を放って同点に追いつくのだ。
首位打者争いをしていた高沢はこの一発で実質的にタイトルを確定させるだが、ヒットでいいのに一発を放つなんて、これもまたロッテだとしかいいようがない。
試合はいよいよ九回の攻防…そう、有藤の出番である。

史実にない話

問題の九回裏が来る。

けん制をめぐり、ロッテの有藤監督が延々と九分間の伝説の抗議をした回である。結局、この抗議が近鉄にとって命取りになった。

当時、パリーグは四時間を越えると、新しいイニングに入らないと規定してため、この九分間のロスタイムが響き、十回で打ち切られて引き分けになったのだ。

つまり、九分間の抗議がなければ、十回で試合は終わらず、十一回のイニングがあったはずなのだ。

この事実を知っているのは、もちろん未来から来たパンチとイチローだけである。

「いいか、阿波野，よく聞けよ。このイニング、二塁に古川先輩が行っても、絶対にけん制するなよ」

※古川慎一…パンチ、阿波野の亜大の一年先輩。当時三年目の右打ちの外野手。

パンチはこの時代に生きる本当の自分との混同を避けるために、あえて、阿波野との接触を避けていたが、阿波野も、次第に佐藤和弘という存在を不思議に思い始めていた

大学の同級生と同姓同名で、しかも同じ左打ちの外野手、顔、背格好もよく似ている、

この男はいったい何者なのか。

経歴を見ると聞いたこともない高校と大学を出ている、しかも、熊谷組に在籍している正真正銘の佐藤和弘に連絡を取ると、

いつもの明るい調子で、「阿波野、そんな馬鹿なことがあるかい？　僕が二人いるわけない」と否定してくれる。

同一人物ではないとはっきりしたはずなのに、目の前の無名のルーキーが、まるで本当の佐藤和弘のように、アドバイスを送ってく

る。

「いいか、絶対、けん制だけはだめだ」

新人テストの時以来、挨拶すら交わしていないのに、どうしてこんなに馴れ馴れしいんだろう？

普通なら新人が何をいっているんだと一括するところだが、この顔を見ると、つい普通に会話を交わしてしまう。

「僕は、けん制には自信を持っている」

「自信とかそういう話じゃない、けん制自体が命取りになるんだ…」

阿波野はもう聞いていない。すでにマウンドに向かっていたのだ。

それでもパンチは叫ぶ。

「けん制はだめだぞ」

古川が二塁に進む。二塁の大石が古川のリードを少しでも狭めようと、古川の背後で執拗に動く。

けん制にはふたつの効力がある。走者を刺せればそれが最善であるが、一番の狙いはリード幅を狭めて、一歩でもスタートを遅らせることだ。

二塁の大石がベースに入る。古川があわてて二塁に戻る。

一連の動作で大石が、古川に覆いかぶさるような格好になる。

一塁手のように、常にベースに引っ付いているわけにもいかないので、けん制は、バッテリー間と二塁手、遊撃手のサインのやり取りで行われる。

一塁側から有藤が飛び出てくる。今のプレーは走塁妨害ではないかとの抗議に出るためだ。

仰木もたまらず出てくる、プレー内容いかんより、抗議の長さに痺れを切らしたためだ。

有藤は引かない。持ち前の頑固さに火がついたのか、仰木の顔を見ると抗議を、よりヒートアップさせる。

問題の場面だ、このままだと史実どおり延長十回引き分けで試合

は終わる。
　いてもたってもいられないパンチが飛び出す。プレーする選手はもとより、ベンチに座っている選手が抗議に加担するのは異例中の異例、というより、明確にルールに反している。
「有藤監督、時計です、時計、スコアボードの時計を見てください。このまま長引かせると、規定の時間に迫ってしまいます。これだけの好試合、半端に終わらせていいのでしょうか？」
　誰だかわからない若造に、いちゃもんつけられたら、天下の有藤は我慢ならない。脅しとして、パンチの胸倉をつかもうとするが、当のパンチは土下座をしているのだ。
「このとおりお願いします」
　予想だにしない土下座が飛び出されて拍子抜けをしたのか、
「時間稼ぎの引き分け狙いで抗議長引かせようおもっとたが、なんだがバカバカしくなったわ」
　あっさりと引き下がる覚悟を決める。
「ありがとな、有藤」
　仰木が軽くお礼の言葉を述べる。
「まあ、走塁妨害は走塁妨害ですけどね、急いで戻りましょ仰木さん。迅速に試合進行せんとね…」

　有藤の抗議の手際のよさ？　があってか、羽田が併殺打に倒れる、史実どおりである。
　十回裏の攻撃、史実と違い、時計の針は四分ほど早まっている。史実と違いそのまま阿波野にマウンドを託すと、十一回の攻撃を作り出そうと、ちぎっては投げるテンポと、異常な闘争心で打者を攻め立てる。
　ロッテの打者も無駄に時間を食う行為は行わない。ちょっと打席を外そうものなら、近鉄守備陣の殺気に肝を冷やし、二万を越える

観客のブーイングに晒されるのだ。
阿波野は早打ちを誘うとゾーンにびゅんびゅん投げ込んでくる。ロッテ攻撃陣は甘いボールがきたと手を出すが、気迫に押さえ込まれたのか、凡打の山を築く。
スリーアウト目、遊撃手の真喜志の超ファインプレーが飛び出ると、規定の時間内に十回の攻防が終わる。
パンチとイチローの時間旅行が、史実にない、十一回を作り出されたのだ。

そして史実にない１１回は、現実離れをした展開を見せる。
「代打鈴木一」
鈴木のアナウンスを聞いても、川崎の観客は反応しない。一部マニアなファンが運を運んできた途中入団の新人の一人と認識しているだけだ。
球場中、いや近鉄ベンチまで、延長の大激戦で、いよいよ選手層も限界かとのムードが支配している。
ただ一人、代打に指名した仰木だけをのぞいて…。
「アイツは何かを持っている目をしとる。なにかしでかすデ」

ついに、イチローが打席に入る。
投手は関清和。当時二年目の若手速球投手である。
本来のイチローならそう難しくない投手であるが、今のイチローは中学三年のイチローである。
１４５キロの生きている速球は１００マイルに匹敵するし、変化球は、視界から消える感覚に陥る。
イチローはただひたすら願う。
カーブよこい！
その願いは通じる。相手のロッテバッテリーはイチローのか細さをみて、なめきったのか、決め球でもないカーブを２－１のカウントから投げ込んできたのだ。

「打てる、打って出て返ってきて、仰木監督に優勝の美酒を味合わせる」

速球や速い変化球と違い、緩い変化球は、中学三年のイチローでもこなせるのだ。

タイミングを狂わせながらも、右手一本で、バットに当てて、レフト前に運ぶ。

イチローは一塁を蹴って、二塁に向かう、足から滑り込んでセーフ。

「このまま近鉄が勝つと優勝だ、それはそれでいい、その目的でここまで我慢してきたんだ。近鉄が優勝すると、何が起きる？　シリーズの相手は僕の愛する中日だ。ところが、中日は短期決戦にことごとく弱い。近鉄も弱いが、中日も負けずと弱い。どっちが勝つのかわからない。近鉄がシリーズで勝つとする。一度の日本一は、監督の座をどこまで保障してくれるかわからないが、仰木監督は、史実どおりの五年の期間より、より長く政権を手にするかもしれない。そうなると、当然、オリックスの監督に就任することが遅れる、いやオリックスの監督自体ならないかもしれない。歴史が変わるのだから。そうなると何が起きるんだろう。土井さんの後、違う監督がくる、誰が来るかわからないが、僕を使ってくれるかはわからない。一、二年レギュラー定着が遅れるならまだしも、最悪、レギュラーにすらなれないかもしれない」

イチローは、白い息を吐き出した。

「僕は僕じゃなくなるかもしれない」

次の打者にヒット性の当たりが飛び出す。

二塁から、イチローがスタートを切る。三塁コーチは、一か八かの判断で手を回す。

右翼からすばやく中継され、カットマンの一塁手の愛甲に渡ったボールは、矢のような返球で本塁に返ってくる。

いつもは、雑なプレーが目立つロッテが、なにもこんなときに限って、見事な連携を見せなくていいのにと近鉄ファンが　ため息を

つきそうなほど、正確に中継プレーは決まる。
イチローは、まだ本塁前、捕手の袴田が待ち構えるようにタッチ、本塁寸前憤死だ。
観客のほとんどが、にわか近鉄ファンと化した川崎球場の二万強の観客は、大きな落胆で腰を落とした。

イチローの走塁をとがめるものは誰もいない。むしろ無名の新人のイチローの巧打に快脚に口をぽかんと開けたほどである。

「どうした、イチロー、三塁回ってからの脚がお前らしくなかったぞ」
パンチの疑問にイチローはこう答えた。
「引き分けの美学ってあるかもしれないですね」

試合時間は四時間を越えていた。
近鉄はもう勝利がない、それでも、試合は終わっていない。守備につかなければならないのだ。
たった回半分の消化試合のために…。
代打に出たイチローに替わって、パンチが外野の守備についた。
中学三年＋αレベルの守備力のイチローより、社会人二年目で外野の守備経験豊富なパンチの方が、評価が高かったのである。
すでに優勝の行方が決まっているのだから、こまめな采配をふるう必要もないのであるが、
たとえ勝ちがなくても、きっちりとした選手起用で、シーズンを終わらせようとする首脳陣の考えだろうか。
とはいえ、選手には、どこか気迫が感じられない。球際に弱く、ランナーをためてしまう。
二死、二、三塁、左翼守備についたパンチに平凡な飛球が飛んでいく。
いくら守備に難のあるパンチとはいえ、イージーフライだ。

だが、パンチの追い方がどことなくハッキリしない。
「落とそうかな」
パンチはそうつぶやいた。
引き分けなら、いっそ落として負けたほうが、逆にスッキリするとおもったのだろうが、
イチローのいった「引き分けの美学」という言葉が頭に残っており、
このボールをわざと、落とさずキャッチした。
試合は終わった、パンチとイチローの目的も終わった。
目的を果たせなかったにかかわらず、二人はどこか晴れやかな顔している。
試合終了後の残念会を欠席した二人は、その足で、球団代表の元に向かい、退団届けを提出した。
二人がこの時代にいる必要性はもうないのだから。

翌日、二人の退団が発表された。
「異例、新人選手二人が退団。近鉄の新人選手、佐藤和弘外野手と鈴木一朗外野手が退団を申し入れた。
将来性のある両選手だけあって球団は引き止めたが、二人の意思は堅く、近日中に任意引退選手になる模様だ」
また数日後の新聞。
「任意引退の新人外野手二人に経歴査証疑惑が浮上。先日、引退が発表された、佐藤和、鈴木一の両選手に、経歴がデタラメであるという前代未聞の
事態が発生した。これは、戸籍を売った闇の売人の告発でわかったもので、その男によると、二人は身分を明かさず、数千万もの現金を払い戸籍を買ったという。
近鉄球団はこの事態について、両選手とも退団後の消息がつかめないので、まったくわからない、球団としては寝耳に水である一の点張りだ。なおこの事件を重く見たパリーグ連盟は、

近く近鉄の代表を呼び、詳しく事情を聞くという」

事件は、未解決のまま、やがて話題性を失った。

二人は、現代に戻ってきた。二十年の時を隔てているのだから、元の時代になれるのも一苦労だろう。

ただ、二人のタイムスリップは、現代に何の影響も持たらせていない。

ただ一人の人間の人間性の世間の見方をのぞいて…。

有藤元ロッテ監督が１０，１９を語る。

有藤元監督と１０．１９といえば、敵を思いやり手短に済ませた紳士的な抗議が有名であるが…。

「あれは今でも走塁妨害だと思う。でもね、あんないい試合が白黒決着つかないとファンにも野球の神様にも申し訳ないと思ってね。あっさりと引き下がった…」

叫べ、ひたすらに（前書き）

ＰＣが使用不可の状態のため、ボツ？　ネタを交えました。
さすがにどうてもいいレベルだなこれ

叫べ、ひたすらに

「近鉄代表佐々木恭介行きます」
台車に乗ったくじ引き箱が用意されて、あのときの再現だ。
箱に手を突っ込み、くじを勢いよく引く抜き、天にかざすと、血管がちぎれるばかりに、叫ぶ。
「よっしゃあ～～～

査と関連せず、個人的趣味によるものと思われる。

「西武代表、G，G，佐藤」

壇上に上がり、胸をそらして心の奥底から叫ぶ。

「きもてぃ～～～～～～～～～～～～～～」

おなじのフレーズが炸裂したが、審査員の評価を芳しくない。

名誉審査員を任されてた解説者の元祖的に存在、小西得郎（ご婦人にはわからぬ痛み、当たったほうも痛いが、当てたほうも痛い…などおなじみのフレーズの発案者といわれている）

「なんともうしましょうか…。声の大きさやハリつやはいいんだけどね、テレが見られるというか、恥ずかしさがにじみ出ていたのが、よくないね。こういう場では、もっと弾けないといけません」

「ヤクルト代表、若松勉」

もじもじとした若松が登場すると、顔を赤らめながらも、必死に叫ぶ。

「ファ、ファンの皆様、おめめでとうございます…」

声はさほどのボリュームでないにしても、一所懸命さが共感を呼び、高評価が出たようだ。

「オリックス代表、佐藤和弘、会社と相談して決めますが、僕の心は一つです」

とおり一辺倒すぎて、評価は芳しくない。

「横浜代表、村田修一、男・村田、弱冠２９歳…」

弱冠は二十歳限定の呼称と知らずに、大卒の村田は使いまくっていました。

「巨人代表、古城和幸、今日のヒーローはオレやで～」

芸人のギャグを借りてくるのはいいけれど、チョイスのセンスも重要と世に知らしめた古城でした。

「千葉ロッテ代表、堀幸一、ショートホープを買いに行かされて、塩コンブ買ってきてすいませんでした～」

ありがちなエピソードの謝罪。
「福岡ソフトバンク代表、柳田聖人、評論家ども、ざまあみろ～！」
前評判覆して日本一の祝勝会での名言。
「ヤクルト代表、内藤尚之、ぎゃお～～～～～～す」
省略。
「広島代表、松井隆昌、違いのわかる男です！！」
すでに誰もわからんだろう。
「巨人代表、阿部慎之介、最高で～～～す～～～」
ただの旬のネタ。
「阪神代表、葛城育郎、うおおおおおおお～～～～」
とくに感想なし。
「中日代表……」

「おや、光山さん、中日代表出てきませんね～」
「どうしたんやろね」
「今入ってきた情報によりますと、どうやら本大会に専念したいとの申し出があったようで、大声え大会を辞退した模様です」
「僕も一応ＯＢなんだけど、これは残念やね。またボイコットと叩かれますよ、これ」
ただ誰も思いつかなかったから、ボイコットにさせましてすいません。

「日本ハム代表、多田野数人」
まさかの、多田野参戦である。
様々なタブーを取っ払って、自由な雰囲気に包み込まれているこの大会。
それにしたって、多田野はまずい。
多田野の参加をどうして、許可をしたのか？　盛り上がりに欠けることが予想されたからか？
ただ多田野だからといって、危険性をはらんでいるとは限らない。

得意のスローボールを投げ込む際の奇声を上げるかもしれないじゃないか。
自主トレで手首を骨折したときの悲鳴を上げるかもしれないじゃないか。
いくら多田野だって、表向きは、渋い声の好青年であり、常識人。
やっちゃいけないことはわかっている。
そのはずだった。

多田野が登場した瞬間、すべては崩れ去った。
裸。
一糸まとわぬ、裸。
警備員と係員が飛んで行って、取り押さえて、お引き取り願ったために、最悪の事態は避けられた。
連れ去られる多田野は何やら叫んでいたが、城野アナが珍しく機転を利かせて、
「光山さん、我々がＣＭをしている」
「プロ野球スピリッツ６やね」
無理やりに宣伝を重ねて、放送に乗らず難を逃れたとさ。

最終ロースター発表スペシャル～広島編～新井のバックドラフト９８年７位コ

近鉄編の続きがかけなくて申し訳ないなか
構想二分の短篇どうぞ

最終ロースター発表スペシャル～広島編～新井のバックドラフト９８年７位コ

広島の最終ロースターのメンバーが発表される模様だが、様子が明らかにおかしい。

なぜか、寺。

しかも所は、鹿児島県、最福寺。

寺で発表するのもいいけれど、何も鹿児島までくることはないと選手、報道陣から不評を買っているが、一人だけ、勘づいた男がいた。

新井だ。

新井がオフの恒例行事【護摩行】を行う場所である。

護摩行とは、例の燃えさかる炎に身を近づけて、お経を読む荒行である。

飛び散る火の粉に構わず、必死の形相でお経を読む姿は、もはやオフの風物詩である。

もしや、いくら、広島だからといって、たまたま発表に、お寺を選んだだけであって、護摩行と絡めてくるなんて、さすがに、そのまさかありえないだろうと…ところが、まさか、まさか、そのまさかである。

大下内野守備走塁コーチが、発表方法を説明する。

「ソフトバンクとの最終調整試合で、メンバーはだいたい固まった。じゃがのう、こっちも頭を悩ましても、絞りきれないところがあってのう…」

それは嘘。

絞ろうとするれば、絞れてたが、妙案…もちろん大下だけあって、それは過酷なものであるが、

思いついたため、わざと多くの面子を最終選考にダブらせたままに

したのだ。
「ボーダーラインの選手から、この燃えさかる炎の近くに座ってもらう。つまりだな、遠い選手ほど炎の被害受けんいうわけや。遠くに座る選手は、衣笠やコージの当確組の選手じゃ。となると、ボーダーのやつらどもは、必死になって、炎の熱さに耐えないといけん。もし、逃げ出すような臆病者がいたら、カープの選手としてはとても使えん、即刻、お帰りになって結構じゃ」

無茶苦茶な最終選考であるが、新井にとっては有利といえよう。
「僕は鳴れている」
広島の選手でこの荒行の経験者は新井くらい。
金本の兄貴は、阪神に選択されたため、この場にいない。
大下が、座る位置の指示を出す。
もちろん、ギリギリに踏みとどまっている新井は、炎のすぐそばだ。
目の前には、終生のライバルと化した栗原が陣取る。
栗原と新井は目を合わすことなく、燃えさかる炎より熱い火花を散らす。
「また栗原か」
新井が思えば、
「また新井さん」
栗原も意識する。
全員が正座して、いよいよ最終試験の開始だ。

「ええか、逃げ出さずに、３０分耐えろ、それ以前に、熱さから逃げ出した奴は失格じゃ」
大下が、ライターで点火…それだけでなくガソリンをどくとくと入れる。
「いつもは５００度が限度らしいが、今日はサービスや。６００～７００度でどうや」

近くで見守る報道陣や首脳陣さえ耐えきれないほど、熱さは増していく。

一番近くの新井はどれだけ熱いのだろうか。

それでも、新井は耐える。

「駒大時代のシゴキや、大下さんの理不尽の猛練習に比べれば…これしき」

火の粉が飛び散る、新井の頬を焦がす。

新井の隣に座ってた新鋭、前田健太、彼はＰＬだけに、根拠ゼロの精神修行に免疫が出来ているはずであるが、

「も、もう耐えきれません…」

立ち上がって、逃げ出してしまう。

ＰＬといっても、あの事件の後でいささか緩くなったあとの入学、しかもブラウン流に染まっているだけあって、根性が不足しているのか。

「前田健太失格じゃけん」

大下が冷たくいいはなつと、前田健太のユニフォームや道具の入ったバッグを持ち、

「もういらんやろ、これも」

そのまま火にくべてしまうのだ。

ユニフォームやグラブが燃料となって、火の熱さはより増していく。

さすがの新井も、経験したことのない熱さに、食いしばる歯もすりきれそうなばかりだ。

それを見た大下が、甘い誘いをかける。

「新井選手、つめたーい、お茶や、いるか?」

コップ一杯のお茶を新井の口元にこれ見よがしに持っていく。

「どうや、きっとこの世のものと思えんほど、おいしいぞ」

これはきっと罠だ。

もし口をつけた瞬間、誘いに乗るなど言語道断と退場を言い渡されるのに決まっている、その手には乗るかと、新井は断固無視を決

める。
　ところがだ、目の前の栗原がまんまと誘いに乗り、お茶を飲み干してしまう。
「うめ～」
　恍惚な表情を浮かべる栗原。
「どうや、うまいやろ、健太」
　大下も笑顔だ。失格を言い渡されることもない。
　となれば、新井も飲まない理由はない。
「大下コーチ、ボ、ボクにも」
「新井選手、やっぱりいるんか？」
「お～い、高コーチ、新井選手用に、マグカップを持ってきてくれやあ～」
　高二軍内野守備走塁担当を呼びつける。
　高が指図どおりマグカップを持ってくると、大下に手渡す。
「ほら、新井選手、冷たいぞ～」
「ど、どうも」
　新井は受け取ると、すかさずグイっと飲み干す。
　ところが…。
「ぐわあ～」
　その中身はタバスコであった。
　新井は思わず吐き出しそうになるが、大下からストップがかかる。
「おい新井選手、飲んだもん、吐き出せたら承知せんぞ」
「は、はい…」
　身にかかる熱さに加えて、内面からも魔の手が忍び寄る。
　口の中がヒリヒリすれば、胃が逆流するようなダメージを受ける。
　それでも新井は耐えるのだ。
　２０分経過。
　残りは１０分。
　大下のあの手この手の策略は終わることを知らない。
　大下が腕時計を外すと、炎の中に放り投げたのだ。

「ワシの腕時計が、愛用の腕時計が…」
もちろん、わざとで、愛用の腕時計とは嘘っぱちのこのために用意した安物であるが、
「とってきてくれんかのう」
誰にいっているわけではない。
栗原にいっているわけでも、新井にいっているわけでもない。
それでもお互い目を合わせると、行動を起こすしかない。
やるかやられるか、トータルベースボールだ。
先に炎の中に手を突っ込んだのは、栗原であった。
「あつ、あつうつつっつ」
そりゃ熱いに決まってる。
半端な行為で時計は取れないと、新井は覚悟を決める。
勇敢にも、というか無謀にも炎の中に飛び込んだのだ。

「あ、あのバカ」
大下も呆れる新井の行動…。
新井は炎の中から焼け焦げた腕時計を探し当てると、すぐさま中から戻ってくるのだが、
「大下コーチ！　腕時計です！」
「バカ、近寄るな！」
もちろん、全身に炎をまとっての帰還だ。
「大下コーチ！！！」
このままでは、新井が焼け死んでしまう危険性を感じた　田中尊バッテリーコーチが、消化ように用意してあったバケツ一杯の水を新井に浴びせる。
「あ、間違えた」
ところが、これがガソリンで新井はよけに燃えてしまうハメに。
しごきで死ぬ以外は責任を持たない大下であったが、これでは確実に焼死してしまう。

「新井～！！！」

防犯用にあらかじめ出動していた消防車が水をぶっかけるとようやく沈火。

新井はうつ伏せになって、倒れている。

誰もが思った。死んだはずと…。

だがしかし、

新井は生きていた。

すくっと立ち上がると、焼け焦げながら機能している腕時計を見て、

「３０分経過しました！！」

飛び上がって喜ぶのだ。

新井は生きている。

「なんだ、生きてるんか」

大下もあっさりとしたものだ。

「ならええな」

こうして新井はまさしく生き残ったわけであるが、焼死の危機から帰ってきた新井は、今までとどこか違うのだ。

誰も気づいてはいないが、そこしれぬパワーアップをしているのだ。

フルに出て１５本が限度が、２０本塁打打てるくらいに。

最終ロースター発表スペシャル～広島編～新井のバックドラフト９８年７位コ

なんだこの落ち

最終ロースター発表スペシャル～ソフトバンク編～妄想と現実の間

ソフトバンクの最終ロースター発表の福岡ドームのミーティング室に、集められたナイン。

南海の大阪勢、ダイエー・ソフトバンクの福岡勢が真っ二つに分かれているだけでなく、その集団の中でも、目を合わせないものがいるほど、殺伐とした雰囲気である。

例えば、南海勢でいうと、鶴岡派である広瀬と反鶴岡の筆頭である野村。

福岡勢でいうと、井口、松中、城島の間には異様な雰囲気が漂っている。

代表入り確実の彼らが、これだから、ボーダーライン上の選手同士に飛び交う火花の熱さたるや、鍋が煮えて、香川ががっつきそうなほどである。

吉永、柳田、大道の三人がボーダーにいるそれだ。

左打ちの強打が買われ、野村、城島に次ぐ第三の捕手としてベンチ入りの濃厚な吉永であるが、パンチ力を武器に、突如として浮上してきた田上の存在が気にかかる。

柳田といえば、規定打席に到達したこともなく、平凡な打撃成績しか残していないが、ここぞという時のいやらしい打撃が評価されて、最終選考まで残った。

大道とくれば、代打の切り札との期待である。粘り強さと、勝負所で物怖じしない精神力が買われたのだが、ダイエー・ソフトバンク時代は、代打としてより、ＤＨや外野手として起用された選手だけに、代打専門としての生き残りには疑問の余地がある。

さらにいえば、この三人といえば、スパイ騒動の当事者である。

調査委員会から、黒に近いグレーと判決が下り、限りなくスパイに手を染めた可能性が高いが、逆に、それを鶴岡親分が評価しているのだから、おかしなものだ。

「いかなる手を使っても、成績を残そうとする貪欲な姿勢はむげにできない」

吉永はまだしも、大道、柳田のベンチ入りは限りなくゼロに近いが、バイプレーヤーと評価されるならば、逆転があるかもしれない。

ミーティング室のドアが開いた。

鶴岡親分に、西武と職務を兼務する根本ＧＭの登場である。

野村が目を背ければ、大道は眼光鋭い両目で、鶴岡を凝視する。

いまさらアピールしても無駄であるが、最後まで望みを捨てない大道はさすがサバイバルの職人である。

「これから、大会の最終メンバーを発表する」

鶴岡の一言でピンと張り詰めた空気が流れる。

「ベンチ入りは２８人やが、６０人まで許された登録メンバーを臨機応変に入れ替えて、試合に望むからして、ベンチ入りせんでも、気落ちせず、精進に励むように…。なお、発表はワシの口からはいわん」

鶴岡でないにしたら、隣にいる根本？

「特別に先生がお越しになっちょる、先生どうぞ」

鶴岡がそういと、また扉が開く。

髭面の長髪でメガネをかけた痩せこけた男の入場だ。

湯上谷？　たしか、晩年の湯上谷は若手の頃のアイドルぶるが、一転、先のような格好をして異彩を放っていたが…。

「どうも、こんにちわ、水島です」

その正体は水島新司であった。

水島を歓迎する向きは少ない。小久保は露骨に嫌な顔をし、大道は意味なく鋭い眼光を放つ。

なぜ、水島なのか？

「先生は、長年ホークスの人気に多大に貢献してくれておるからな、その報いちゅうか、先生にメンバーを決めてもらうことにしたんや」

ナインに戦慄が走った。
なぜ、水島が決めるのか？　どうして、水島は断らないのか？
それでも大人の集団だからか、露骨に反応を示すものはいない、ただ舌打ちが聞こえるのみだ。

「それでは、発表します」
現実と虚構をよくごちゃ混ぜにする御大だけに、そのまさかはなかろうか…いやいくらなんでもそれはないだろうと誰もが思ったのだが…。
「一番サード…」
ここで一瞬溜めを作った。
サードで一番打者にふさわしい選手？
１００万ドルの内野陣の蔭山か。
それとも、チャイこと藤原満か。
長距離砲を据えて、先制パンチを食らわすなら小久保もありうる。
だが、サードで一番、水島ときたら…。
「イワキ」
ブルペン捕手として、この場にいた岩木哲が一瞬色めき立つ。
「お、おれ？」
そんなわけはない。イワキは岩木でなく、岩鬼である。
自分の漫画の選手を持ってくるとは、何事たるや。水島の暴走は止まることを知らない。
「二番セカンド岡本、三番センター広瀬」
このあたりは実在の選手である。
「四番レフト…」
ときたら、もちろん…。
「景浦」
だ。
「五番ＤＨ門田、六番ファースト飯田、七番ライト杉山」
松中も野村も城島の名前もない。プライド高き彼ら、さすがに苛

立ちを隠せない。
「八番捕手…」
ようやく捕手の出番、城島にしても、野村にしても、八番という守備型捕手にありがちな打順に満足するわけがない。
「香川」
それどころか、二人をさしおいて、吉永でも、田上でも、吉田博之でも、山崎でも、黒田でも、内田でもなく、香川、ドカベンである。
「九番ショート木塚、投手は杉浦、以上」
さすがにナインの中には、これはジョークであるとのムードが漂い始めている。
漫画の選手に香川である。
福岡のローカル局の仕組んだドッキリではないかと辺りを見渡す川崎もいるが、おすぎも博多華丸大吉も出てこない。
「以上、これが先発メンバーや、水島先生、ご苦労さん」
鶴岡は帽子をとって、頭を下げる。
「岩鬼とあぶはやっぱりかかせんな。門田はＤＨの専門性、香川はキャラを買った、その周りを、結束を重視して鶴岡南海の兵隊で固めたんや」
水島は悦に入って、選考理由を語り始める。
「あとのベンチ入りは、この黒板に貼り付けた紙に書いてあるから、勝手にみい」
鶴岡が締めに入るが、納得する向きはない。
城島が食ってかかる。
「鶴岡親分！」
「なんや、阪神の城島」
「今はホークスの城島です！　それはいいとしてですね、なんすか、このふざけたメンバー！」
「どこがや」
「オレがおらんし、漫画の選手が入ってるでしょ！」

「漫画？　岩鬼ならおるやろ」
「どこにいるんですか！」
「ほら、一番後ろ」
鶴岡が指さす席には、すりきれた学制帽をかぶる大男が座っていた。
しかも、その口からはひょいと、葉っぱが伸びている。
城島は思わず驚く。
明らかに岩鬼だ。
「ほんとうにおったんか」
その横には、カップ酒をかっくらう帽子を目深にかぶった無精髭の男もいた。
「あ、あぶさんもおる！」
「ほらおるやろ？」
鶴岡が言い放ては城島は信じられないと着席。
ただ岩鬼は明らかに浅黒く、そばに置かれたグラブにはアルファベッドでニエベスと刺繍されいた。
横の男の肌も浅黒く、スパイクには、これはカナでオーティズの文字がある。
城島たちはまんまと騙されたのだが、気づかない。
この段階にきてふざけたメンバーを発表する鶴岡親分の意図はどこに？

最終ロースター発表スペシャル～ソフトバンク編～妄想と現実の間（後書き）

いままでどれだけ複線張り巡らせたっけ
ライオンズ開幕投手とか近藤ベイのっとりもあったなあ

最終ロースター発表スペシャル～ヤクルト編～チラシをミルミル松園オーナー

開幕がいよいよ迫ってきた。チケットも順調に売れている。とくに巨人絡みのチケットの売り上げは驚異的で、昨今の人気低下をまったく感じさせない。要因としては、ＯＮの揃い踏みによる離れていたオールドファンの掘り起こしに成功したことがあげられるのだが、もうひとつ大きな要因になっているのは、松井の日本への本格復帰である。二度のＷＢＣを辞退し日米野球にも参加をしていない松井は、ヤンキースでの日本開幕をのぞき。日本のファンと縁遠くなっていたのだ。松井の雄姿を待ち望んでいたファンは、巨人のユニフォームを身に着けて５５を背負うを松井の姿にどれだけ胸を弾ませるだろうか。

ただ売れているチェットもあれば、売れていないチケットも残念なことに存在する。

動きが鈍いのはヤクルトである。

荒木大輔を皮切りに、ホーナー、広沢、池山、古田、長島一茂とスター揃いで人気を博した時代と違い、近年の神宮球場はＣＳ争いをしていても、閑古鳥が鳴いている有様だ。

それでも開幕戦くらいは大勢のファンでスタジアムを埋めないとどうにも格好がつかないと、球団はなりふり構わない作戦にでた。

とにかくそこらじゅうにタダ券をばら撒くという、あらがちな作戦なのだが、ばら撒くスタッフがこれまた豪華なのだ。

監督、コーチ、選手が総動員なのである。

これに意を反したのが監督である広岡だ。

「ばかばかしい」

の一言で、拒絶。

ボイコット同然の広岡の姿はやはり見えない。

松園オーナー直々の提案を受け入れないことから、すわ監督解任？　の事態に発展すると思われたが、当の松園はだんまりを決め込

んでいる。

広岡を監督にしたときから、これくらいの騒動は織り込み済み。

巨人の選手時代は、時の川上監督の采配を批判して辞め、ヤクルトの監督は、コーチの解任を求めるフロントの動きに反抗して辞任。

西武の監督のときは、優勝しながらも、根本管理部長に煙たがれて、任を解かれ、ロッテＧＭも、選手ファンに総スカンを喰らって辞めた実績があるだけに、広岡のこのていどの反抗は不問に付さなければ、広岡を監督にすることなど、とうていできないのだ。

それでも、６０年のヤクルト、国鉄、サンケイのスター選手が勢ぞろいしてるだけあって、面子は豪華絢爛である。

特に、手慣れた手つきで、チケットを配るのは安田だ。

タブチくんのトリックスターぶりはあまりにも有名であるが、実際のキャラの立ち用もすさまじい。

オフにはゴルフ場のキャディーや居酒屋のバイトを勤め、契約更改では、実の子供を連れてきて、泣き脅し？　の同伴交渉をするほどの異彩ぶりを発揮した。

「見にきてねえ～」

街中によくいるやけにはりきったティッシュ配りのおばさんのように、チケットを配りまくる。

タブチくんのあの神出鬼没のキャラもまんざら嘘ではなさそうだ。

一方、国鉄の優、金やんときたら、勝手に商売を絡める。

「金田式健康棒ご購入の方には、もれなくチケットあげるで～」

度の過ぎた副業を嫌う松園は止めに入るがお構いなしだ。

若い世代も負けてはいない。

古田が培った営業スマイルで、老若男女を魅了すれば、青木は現役スターの特性を生かして、券をさばきまくる。

ところが、困ったことが起きたのだ。タダ券を配るのもいいが、配りすぎているのである。

「オーナー、すでに三万越えてます」

武上打撃チーフの心配をよそに、松園はあっけらかん。
「大丈夫、大丈夫、タダ券の客など、実際に、配った一割くればいいほうだ」
そんなのんきな松園の顔にチラシがかかる。
「なんじゃこれは」
ひっぱがすとそこには、
「松園オーナー…解任を求む…！？　じゃと！」
そのチラシは一枚どころではない、何枚も何十枚も降ってくるのだ。
上空から、パタパタと轟音が鳴り響いていることに気づく。
杉浦が八重樫が岩村が空を見上げると、ヘリコプターが旋転していて、どうやらそこから、チラシがばらまかれているようだ。
先の文句だけでなく、
「松園オーナーはひとでなし」
「松園オーナーの商売優先の姿勢にはついていけない」
「松園オーナーは巨人ファン」
などなどそのどれも、目を覆うばかりな中傷ばかりである。
「誰だ、バラ巻いておるのは」
轟音を切り裂くような大声で、松園は叫ぶ。
ヘリの窓から顔を覗かせたのは、もちろん広岡である。
「やはり、あいつか…」
武上打撃チーフがここぞとばかりに、
「オーナー、目に余る行為です。許しておいてよいのでしょうか？」
武上は広岡解任の後の監督の座を狙っていたのだ。
「うむむむ…」
広岡就任のときから、騒動が起きるのは織り込み済みである。
広岡以外に適任者がいないのだからしかたがない。ヤクルトには三人の優勝、日本一監督がいる。
広岡、野村、若松であるが、野村はホークスの選手として出場するのが当然で、若松も選手兼任を断固拒否している。

となれば、広岡の一択なのである。
実は優勝監督が三人ならば、二位に輝いた監督も実は少ないのだ。先の若松と武上だけである。
スキあらば監督の座を乗っ取ろうとする武上には、監督としての資質のなさを嫌というほど見せつけられたのだ。
めちゃくちゃな投手起用に、７８年の優勝メンバーに固執し、若返りが図れず、先細り、あげくその選手たちの信頼を損なう人身掌握術の無さ…。
三人の次の候補者として本来上がる武上であるが、これではとても任せきれない。
だからこそ広岡に目をつぶるしかないのである。
ヤクルトの抱える最大の火種は、監督にある。
はたして、導火線についた火は爆弾までに到達する前に、任務をまっとうできるのか？
最大の注目はそこにある。

最終ロースター発表スペシャル～千葉ロッテ編～ボビーの暴走

バレンタインの監督就任にともないある明文化された約束が施されていた。

1、契約期間中は、上層部の決めたスケジュールどおりに動く。

2、選手、コーチの決定権は、監督にはない。ただし意見は聞き受けるが、その意見に拘束力はない。

3、練習日程はコーチ陣との協議のもと、メジャー仕込みの過度な休養はとらせない。

4、采配も、首脳陣の合議制、合議と違うサインを出した場合、以後サインを出す権利は剥奪。

5、ファンサービスは従来どおり率先して行うべきであるが、リップサービスでも、フロント批判があった場合、これも罰則。

6、メディアとの関係は良好を保つこと。

7、副業は禁止、当然、第二次政権のような金銭での支援も行わない。

8、上記の七項目を厳しく守ること。もしも、重大な違反があれば、契約解除、契約金、ギャラも日数に応じて返還する。

バレンタイン側は何色を示したが、歴史上の一大イベントの指揮官の名誉には勝てず、これを渋々受け入れたのだ。

ただバレンタインがこれを守るとは限らない。

「ワタシのホカにカントクにフサワシイジンブツはいますか？」

ロッテ球団の歴史の脆弱さをついて、暴れる覚悟があるようだ。

バレンタインのいうとおりたしかに、毎日、大毎、東京、ロッテの歴史を通じて、他の監督候補の人材が欠けることはいなめない。

初代日本一監督の湯浅はＷＨＯ？　であり、大毎を優勝に導いた西本は近鉄の監督。

ロッテの初の優勝監督の濃人も影は薄い。バレンタインの一つ前

の日本一監督、金田に至っては、ヤクルトの投手としてやる気満々である。

さっそく、バレンタインがひと騒動を起こしたのだ。

球団が決めた最終ロースター発表の前日、千葉マリンに勝手に記者を集めて、勝手にメンバー発表の場を設けたのである。

通訳を介して発表されるメンバーは、当然のごとくバレンタインカラーの色濃いものであった。

これを聞きつけた瀬戸山代表は千葉マリンに駆けつけたが、時既に遅く、

「え～　これから千葉ロッテマリーンズの最終ロースターの発表とまいります」

記者会見は開けていたのだ。

「投手１２名捕手３名野手１３名、なおこのメンバーに補助要員が加わります」

発表されたメンバーは、

投手、清水直、渡辺俊介、小林宏、成瀬、伊良部、小宮山、河本、薮田、小林雅、荒巻、木樽、成田。

捕手、里崎、土井垣、袴田。

内野手、榎本、堀、山崎、西岡、今江、有藤、水上。

外野手、西村、サブロー、ベニー、山内、別当、リー。

バレンタインチルドレンというべき、９５年二位のメンバーと０５年日本一のメンバーに、資料や実際のプレーを見て、バレンタインが気に入った選手を加えたメンバーである。

もちろんスタッフ会議で練り出せれたメンツとは、かなり食い違う。

「え～　監督の現段階の構想するオーダーは…」

一番ショート西岡、二番セカンド堀、三番ファースト榎本、四番

ライトサブロー
五番センター別当、六番キャッチャー里崎、七番ＤＨリー、八番サード有藤、九番レフト山内と通訳の口から出た。
打順が適当なら、あの人も、この人もいない。記者から矢継ぎ早に質問が浴びせられる。
「落合がいませんが？」
「村田兆治はどうしたんですか？」
当然出てくるだろう、球団史の投打のナンバーワンスターの欠落への指摘。
「え～　バレンタインがいうには、榎本、有藤、リーをどうしても起用したい戦力、となるとポジションがかぶる落合は起用しづらい。二塁でのスタメンも考えたが、守備力に穴ができるために、見合わせた。ベンチにおいて代打要員と考えたが、存在が大きすぎて、ベンチに置いておく選手ではないと判断した。村田の場合は、本人が全盛期に戻ることを躊躇したため、今の６０を越えたままの実力では、とうてい通用しないと判断して、やむなく外すことにした」
通訳がまるで用意されたかのように、よどみなくバレンタインの言葉を訳す。
だが、村田と落合のメンバー入りは、スタッフ会議の時点では決まっていたことであった。
落合はいくら有藤や榎本とかぶるとはいえ、その打力は二人を軽く凌駕するほどだし、村田にしても、いくら頑固者とはいえ、現状の力で、一度痛い目にあえば、全盛期の能力にもどるであろうと楽観論が出ていたのである。
それが勝手にひっくり返して子飼いの選手を多く入れたのだから、記者会見場に飛んできた瀬戸山は怒り心頭である。
瀬戸山は抗議もせずその場を立ち去った。
翌日、瀬戸山代表の口から、スタッフ会議をもとに決まったメンバーが発表された。
当然、両者の発表は、食い違うところがかなりある。

選手の間に動揺が走ったが、当事者の落合は、
「なるようになるよ」
まるでよそ事のように述べるだけだ。
若い西岡（旧名ＴＳＵＹＯＳＨＩ）にしたって、
「いつものこと」
意外なことに冷静であった。
はたして選手はどちらを向いて野球をするのであろうか？

最終ロースター発表スペシャル～阪神編～派閥の論理

最終ロースター発表会場である甲子園球場に続々と集まる阪神ナイン。

「こんちわ～金本さん」

「おお赤星に球児か」

「こんちわ～金本さん」

「なんや鳥谷も最後まで残ったんか」

「よお、カネ」

「おお、シモに矢野、黄金…ってほどもないか、シルバーバッテリーが揃って登場やな」

現役世代は比較的に和やかであるが、旧世代はピリピリとしたムードに包まれていた。

和田、新庄らの暗黒世代。

岡田、掛布、真弓らの８５年日本一世代。

田淵、江夏、藤田平の打倒Ｖ９に燃えた世代。

吉田、村山、小山らの昭和三十年代の隔年優勝世代。

藤村兄、金田、若林らの一リーグ時代のダイナマイト打線世代。

世代間同士、仲睦まじいことなく、お互いの意識しあいときたら、阪神の伝統のそのままである。

「なんやこれ」

金本らが思わず立ち止まった。

いつもと様子が違う。選手関係者入り口の扉がいくつもあるのだ。

「特別仕様か」

ただ複数の扉にはある違いがあった。扉の上の方に掲げられたプレートに、それぞれ、

「吉田派」

「村山派」

「藤村派」
「金田派」
「安藤派」
と印字されているのである。
「どういう意味や」
金本らが思案していると岡田が現れた。
「あはは、お前ら、タイガースにおる期間が短いから、ようわからんのやな」
「あ、監督」
「これはあれよ、くぐった扉の派閥に属するいうわけよ」
「派閥ですか？　ワシら外様は、阪神の派閥など考えもせんかった。広島時代には派閥にえろうめにあいましたから、こっちきたらできるだけ関わらんとおもうて」
「広島も色々あるらしいな」
「ところで、監督はどこの扉くぐるんですか？」
「オレはあれやな、８５年のＶ戦士よ、当然吉田派と行きたいところやけど、そろそろあれよ、岡田派、いうのも旗揚げしてもいいころよ」
「おう岡田派ですかい？　そりゃ好都合や。オレら無所属も岡田派についていきますわ」
「そやから、職員にいうて扉を用意してもらったのよ」
そう岡田がいうとちょどよく扉が職員の手によって用意されたところ。
大男三人がえっちらほいと扉を持ってくる。
「スペンサー、フォード、メンチを特別に働かせてるのよ、もちろん無給や。働かずに高額年俸もらってた報いよ」
「さあ、どんどんくぐれ、岡田派の誕生よ」
岡田が合図して、金本、赤星、下柳、藤川が次々とくぐる。
その光景を寂しげに、ポツンと遠くで見守っていたのがいた、井川である。

岡田は、井川がどれをくぐるか迷っていると見て、呼び寄せた、
「井川よ、遠慮せいへんで、ここくぐれや」
井川はうっすらと笑みを浮かべると、招きに応じて扉を無言でくぐった。
「これもう、岡田派は最大勢力ちゃうか?」
岡田は高笑いをするが、致命的なミスを置かしていたことに気づいていない。
職員メンチへの連絡の不手際で、ネームプレートが「岡田派」でなく「中村勝広」と印字されていたのである。
岡田はこのことに気づいていない。
この一部始終を、密着していた関西のスポーツ新聞記者が目撃していたのだから大変である。
その翌日、一面にデカデカと「岡田、金本、球児が謎の中村派旗揚げ!」とやったものだから
騒動に発展したのうはいうまでもない。
同じ早稲田出身とはいえ、自分の代打に亀山事件から、中村との仲がこじれたままの岡田。さてさてどうなるのか。

「稲葉さん」
「二岡か」
「稲葉さんはどうして札幌に？」
「色々あってなあ、そういう二岡は？」
「僕もです」
「どうして、二岡がここにいるんだ？　日本ハムからは選出されてないだろう？」
「巨人からオファーがありました、なにやら、僕は巨人の遊撃史上年間最多本塁打保持者らしいです。その打力を買われて、レギュラー候補の筆頭だったんですが…」
「坂本が出てきたわけだ」
稲葉の問いに、二岡は多くを語らない。
すると、今度はひょっこりと藤井秀吾が現れた。
「どうも、稲葉さん」
「おう藤井、お前はなんで札幌組んだりまで来たんだ？」
「遊びほうけていたから、嫌われたんじゃないんでしょうか」
「オレと同じか」
「でももう北海道とはおさらばっすよ」
「東京に帰るんか？」
「できれば」
「ヤクルトか？」
「とらんでしょ」
「横浜か巨人」
「そうなるといいですね～」
「阪神やソフトバンクもあるな、関西や九州でもいくか？」
「寒いよりは…」
「そうか、オレはこの寒さが好きだけどな」

藤井が去ると、今度は多田野の登場だ。

「おまえはどうして札幌に？」
「横浜にいるはずだったんですけどねえ」
「でもメジャーにも登りつめた」
「まあそれもたった数年です。気づいてみたら、ウインナー片手に、札幌で投げてました」
「そうか…」

「どうも稲葉さん」
「おうダルか、おまえはなんでハムの単独指名やったんだ？」
「僕もよくわかりません」
「ハム以外いやだとゴネたわけでもないのか？」
「１２球団どこでも、よかったんですよ」
「それで、お前ほどの投手が単独か、同期によほど重複する実力者がいたんか？」
「涌井が同期すね」
「涌井も単独だろ？」
「野間口さん、一場さん、那須野さんがビッグ３で負けた球団が僕や涌井に乗り換えたまでですよ」
「なんでそんな低い評価だったんだ」
「さあ」
「ダバコか？」
「パチンコも少々」
「そう…」
ダルビッシュが挨拶を終えると、今度は小笠原である。

「雰囲気が違うな」
「ヒゲですよ、ヒゲ」
「巨人は、原則ヒゲ面禁止だもんな」

「ハムは自由ですから」
「だからオレはここにいるんだ」
「僕は数年前までいました」
「東京の方がいいのか？」
「まあ家建てた後の移転ですからねえ」
「そうか、でも札幌のが住みやすいだろ？」
「…」
「なんか答えろ、オレは住みやすいぞ…」
「あ、大沢監督が来たようです、席に戻らないと…」
「最終選考に残れるように、ガッツの幸運を祈って…」

最終ロースター発表スペシャル～埼玉西武編～監督特別対談

開幕記念特別対談と称して、巨人川上監督と西武三原監督の対談がＮＨＫで行われる。

七時のニュースの直後、七時半から七時五十四分までのゴールデン生放送と、さすがに扱いはいい。

番組名はズバリ「開幕直前特番　巨人・西武の両監督ここに語る」だ。

川上は巨人時間のとおり三十分前に到着して、念入りに打ち合わせをする猪口才の無さを見せるが、三原はいっこうに姿を現せない。

川上はあらかじめフリップに開幕想定オーダーを書き込むサービスのよさを見せても、三原はまだ来ない。

苛立った川上が、

「三原さんはまだかい？」

とプロデューサーに頭ごなしに聞くが、こちらに向かっている途中との一点張りだ。

スタジオのモニターには七時のニュースが流れている。

ニュースも中盤を過ぎ、スポーツコーナーに差し掛かるが、三原の到着はまだ。

スポーツコーナーに、キャンプを打ち上げた西武の帰京の模様が映し出せると、川上は目を細めてモニターに見入る。

三原魔術に翻弄されて疑心暗鬼になっている川上は、選手の顔をつぶさにチェックしているのだ。

なにせ、西武とのオープン戦では、仮の面子ばかりで、本来のメンバーをまるで見れなかったからである。

モニターには、中西、稲尾、豊田らの西鉄軍団から、松坂、清原、秋山らの西武勢とオープン戦で姿を見えなかった顔が映っていた。

「直前となると、さすがにひた隠しにはできないようじゃな…」

川上がほくそ笑むのもつかの間、コーナーは天気予報に移る。

天気予報とくれば、ニュースも終盤。
それでも三原は姿を現さない。
つに切れた川上。
「三原はまだか」
呼び捨てにして、プロデューサーを怒鳴りつける。
スタッフが、慌てふためき機嫌をとろうとするが、三原が来なければしかたがない。
天気予報が終わり、予報士の妙齢のお姉さんが微妙に首をかしげると、女性スタッフが叫ぶ。
「監督が入られました」
「ふん、ギリギリか、それがライオンズの教えか」
気を取り直した川上は着席をする。
ところが、ＮＨＫ局内に入ったばかりで、上の階にあるスタジオ入りには時間がかかるようで、三原なしで番組は開始される。
七時半ちょうど、司会のアナとホスト役の与田がぎこちない笑顔を作る。
「え～　西武の監督はいまスタジオに到着したばかりです、いましばしお待ちください」
アナウンサーが平謝りすると、与田が川上にふる。
「え～　それでは川上監督にお話を伺いたいと思います…」
川上はブスッたれていたが、ＮＨＫで悪い顔を見せれないと、なんとか取り繕う。
「あらかじめお渡ししたフリップに、開幕予想オーダーを書いてもらいました…これはあくまでも構想であり、必ずしも開幕オーダーとは一致しないことを視聴者のみなさまに、お断りしておきます…」
川上がフリップを出す。達筆である、マジック書きにしても、書の心が表れている。
「捕手は阿部慎之介と森の二枚看板じゃな、そこに山倉を加えた三人を想定している…。投手や調子によって使い分けるが、前の二人は日本シリーズＭＶＰ、山倉にいたってはシーズＭＶＰじゃ。これ

ほど豪華な面子は巨人軍だけでしょう」
「一塁は王さん、三塁は長嶋さん」
「ＯＮは当然かかせんな、まあ一塁にはワタシもおりますけど…」
「問題は二遊間」
「二塁は、千葉に篠塚…万が一には守備走塁担当の土井もおるし、故障が出れば仁志だって呼び寄せることができる。遊撃は、川相も二岡も平井も河埜もいいが、坂本、この若者の未知数の魅力にも期待したい」
構想を述べるが、川上はどこか不機嫌、三原が姿を現せないのだからそれもそのはず。
与田もそれに気づき、
「西武の監督はしばらくつくようです」
と繰り返す。
そのとき、スタジオの扉が開く、いよいよ三原の登場か？
ところが、姿を現したのは三原ではなかった。
なぜか、そこには、褐色の大男がいたのだ。
プロデューサーのカンペでアナウンサーが紹介をする。
「え～　西武のマルチネス監督が、今到着されたようです」
なんと三原ではなく、マルチネス、ドミンゴ・マルチネスの登場である。
巨体だけに、上の階まで上がるのには、息を切らせるしかない。
膝をついて、激しく呼吸をする。
驚きのあまり、与田の肩幅が微妙に縮まったように見えるが、川上の寿命は逆に延びたようだ。川上は血色を変えて、怒り飛ばす。
「み、三原はどうした」
カンペを読んだアナが冷静に答える。
「三原監督は先ほど辞任した模様、新監督はマルチネス氏のようです」
思えば、西武と巨人の監督対談と銘打っただけで、どこにも川上・三原の名前はない、これも三原の策略か。

そうと気づいた川上は席に戻り、着席したばかりのマルチネスと対談するしかない。

マルチネスはベラバラと豊富とメンバーをまくし立てるが、なにぶんスペイン語、しかも通訳は用意されてなく、アナウンサーがメンバーの名前を聞きかじりで拾うのが精一杯。

「え～　石毛、松井らの名前が出ていますね…」

これでは対談にもならないと川上は顔を真っ赤にするが、なにせＮＨＫの全国生放送。

切れるわけにはいかないのだ。

「きれたら三原の思うツボ…」

と念仏のように繰り返しじっと耐える。

対談は、平行線のまま幕を閉じる。

最後、儀礼的にがっちりと握手をするが、マルチネスの強く川上を見つめる目線と違い、川上はどこに飛んで、こころあらずの状態である。

なおマルチネスは番組終了直後、辞任を申しで、三原の監督復帰が決まったことは、書くまでもない。

最終ロースター発表スペシャル～埼玉西武編～監督特別対談（後書き）

まだ外人オチ

最終ロースター発表スペシャル～松竹ロビンス編～ベイスターズの前進です一点

京都でひっそりととんでもないことが起きていた。
復活させる必要のない選手と球場が何の手違いか、蘇っていたのである。
いったい誰がなんのために!?
わからない。すべては謎に包まれたまま、彼らは許された。
むざむざと追い返すわけにも行かず、彼らは久方ぶりの、白球の感触と、芝の匂いを楽しんでいた。

「小鶴か、久しぶりやなあ……」
京都の立命館大学の敷地内に、突然と復活した衣笠球場。
伝説といえば、聞こえがよくなるかもしれないが、それほどの歴史を築く前に消えた球場だ。
学生達が、球場の存在していた事実を知るわけがなく、教授や職員らも、よほどの年配の方でよほどの野球好きでないと、球場を懐かしむ感傷も持てないほど、歴史に埋もれた球場である。
「なんや、ワシのこと無視かい」
ここ衣笠球場を本拠地にしていたチームといえば、松竹ロビンス。
セトンラルリーグ初代優勝チームでありながら、わずか三年で、大洋ホエールズに吸収合併された幻のチームである。
合併といえど、その実態は消滅同然であり、ロビンスの歴史は雲散し、優勝を彩ったスターは思い出されることなく、埋もれていったのだ。
ただ一人のスーパースターを除いて。
小鶴誠。和製ディマジオ。ラビットボールをゴルフスイングでかっ飛ばし、打率３５５、５１本塁打、１６１打点というアンタッチャブルな記録を残した、偉人的人物だ。
打率、本塁打は、後に続く超人的選手に、破られはしたが、打点

の記録はいまだに不滅である。
落合が得点圏打率五割近くの常軌を逸した数字を残しても、ローズがマシンガン打線が作った走者をすべて返しても、今岡が野球人生のすべての運をぶつけて、打点を荒稼ぎしても、小鶴の記録は頂上で輝くままだ。

「いくら、ワシが最高殊勲選手を小鶴にさらわれて、ぶんむくれたいうても、あれから六十年や。機嫌はいくぶん取り直してるで、挨拶くらい返せや」
小鶴の無愛想ぶりをなげくのが、大エースの真田重蔵だ。
３９勝とこれまた偉大な記録を作りながら、最高殊勲選手を小鶴にさらわれた。
最高殊勲はもらったものと自負していた真田は、これでやる気をなくし、シリーズでは、シーズン中のような投球ができず、唯一の日本一の機会を逃したのである。

むろん、小鶴と真田がいくら超人的活躍をしたからといって、二人だけで優勝できるほど甘くはない。
盗塁王金山次郎がいる。
初代新人王、理論派左腕大島信雄がいる。
二塁手を兼任する走れる捕手荒川昇治がいる。
一年目２６本塁打、二年目３４本塁打といまだ一、二年目の本塁打記録保持者の大岡虎雄がいる。
元祖神主打法の使い手で、トリプルスリーを初めて達成した岩本義行がいる。

いくら時代が古すぎる、ラビットボールあっての水爆打線といえど、実力者揃いなのは、間違いない。
大会本部は彼らの復活を警戒していた。
彼らを参加させたならば、十二球団を食う可能性も否定できない

のだ。
もしも六十年前に露と消えたチームが、次々と現存のチームを破ったら？
オールドファンは喝采を送るかもしれないが、現代の根幹を持たないチームの躍進は大会の盛り上がりの興をそぐことは否めない。
それ以上に、現代野球のレベルが疑われ、将来の野球人気に影響を与えるかもしれないのだ。

ただ、先述のように、そのまま彼らを返すわけにはいかない。
蘇らせて、そのままお帰りくださいというのも失礼な話で、故人ながら人権問題に発展するだろうか。
処遇が決まらないまま、彼らは復活をはたした衣笠球場で練習をしている。
ボールを投げるのは楽しい。
ボールを飛ばすのも楽しい。
だが練習は何のためにするのか？
練習は練習のためにはない、練習は試合のためにある。

監督である小西徳郎は元祖解説者の口ぶりの穏やかさで、練習を見守るが、オーナーである田村駒次郎は、見守るだけでは、飽き足らない。
「試合じゃ、試合じゃ、巨人や、巨人をまた叩き潰すんや！」
十二球団対抗で開催されるスケジュールはいまさら崩せるわけはないのだが、　アメリカから野球協約を日本に持ち込んだ張本人だけに、規則に詳しければ、規則の裏もつける。
「今の巨人のオーナーは誰や？！」
取り巻きが滝鼻と答えるが、
「ナベツネいうのは違うんか？！　ナベツネいうのが最大の権力者やろ？！」
さすが当代きっての商売人、ひさかたの現世はやばや、内情もよ

く勉強しているようだ。
「よっしゃ、ナベツネに直談判や、強引にいこうや、強引に」
とはいえ強行突破の腹づもりのようで。

最終ロースター発表スペシャル～松竹ロビンス編～ベイスターズの前進です一度

まさか松竹が出てくるとは

抽選会場の悪夢

いよいよ大会の組み合わせを決めるための抽選会が行われる。十二球団それぞれの監督と、くじ引き要員に各球団選りすぐりの運に覚えのあるものが会場に姿を現す。

十二球団が４つに別れ、三球団ずつのグループに入り、総当たりで、最下位の一球団が落ちるのが第一ステージの対戦方法だ。

つまり最下位に入らなければ、勝ち残れるわけで、二位狙いならば、ひとつ抜けて強いチームの組に入ることを避けるより、抜けて弱いチームの組に入るくじをひくことが望まれる。

前評判によると、抜けて強いチームとは、強大な戦力を誇る巨人や、西武であり、抜けて弱いチームとは、戦力に加えて戦術に難のある横浜あたりか。

シード制度がないため、組に入った３つの球団のすべてが下馬評の高いチームの可能性や、すべてがよろしくない評価の球団であることも考えられる。

すべてはくじ運である。

ドラフト一位のくじ１１連敗の阪神や、菊池、清原、松井と大物に挑んでもくじを外しつづけ、堂上弟のときに限って引き当てる中日は、祈る気持ちで抽選に挑む。

早期敗退が許されないのはプライドの問題だけではない。ある程度先に進むとの算段で放送権料や動員収入をあてこんで、予算を組んでいるからだ。

もし西武、巨人と同組になって、第１ステージ敗退となると、目も当てられない。

そのためか、両球団は抽選のために秘密兵器を用意したのだ。

阪神は、江川のくじを引き当てた小津の魔法使いこと小津球団社長。

中日は、近藤真一を引き当てた星野の出番と思いきや、虚をついて落合英二の出番だ。

落合があえて選出されたのは、強い霊感を買ったためだ。

とうの本人もあたりクジが見えると豪語しており、そのヒキに注目が集まる。

くじの強さに定評のある球団も名うてのドラフト王者を揃える。

ヤクルトは黄金の左といわれ荒木、広沢、一茂、伊東、川崎、伊藤智を引き当てた相馬球団社長。

近鉄は、福留を引き当てた佐々木恭介。

巨人は、残りくじの松井を当てた長嶋…。

ところが、会議直前まで適任者が決まらず、一悶着があったのが、横浜である。

適任者がいないのは仕方がないが、責任をとりたくないからか譲り合う始末だ。

結局のところ、監督である大矢がその責務を負うことになったのだが、大矢ではろくなくじがひけないだろうと、はや陰口が叩かれている。

陰口を叩くなら、自分が引けばいいのに、責任のないところから、ものをいうのが横浜の悪しき伝統か。

ただ陰口のとおり、大矢はとんでもない目にあうのだ。

十二球団の通算勝率が低い順からくじをひくことになったのだが、それは当然、横浜で、最弱と噂される球団から、勝ち抜け表の席の空白を埋めていく。

つまり横浜がくじ引きの指針となり、その後の球団の運命を、なかば決定付けることになるのであるが、大矢はくじをひくことさえ許されなかった。

大矢が壇上に上がり、緊張をほぐすために大きく息をついたそのとき、騒動は幕を開けた。

大矢の抽選箱への行く手を遮るように、二人の男が壇上に駆け上

がったのである。
大きな腹を突き出して中年の男は叫んだ。
「ちょいまちいな」
もう一人の初老の紳士は、さりげなく、
「大矢くん、ひさしぶり」
大矢は一目では誰だか分からなかったが、会場内から、
「水原」
と声が飛ぶと、初老の紳士の正体は判別できた。
「水原…監督？　ですか…」
紳士の正体は、水原茂であった。歴史上の五指に入る大監督とされながら、巨人の監督争いでは、すんでのところで川上に破れた。翻って、巨人と同じく日本一に導いた東映（日本ハム）の監督を狙ったが、すでに大沢がどっしりとその座を固めていたため、断念。

大監督に傍観者にさせるのはまずいと、巨人は総監督の椅子を用意したが、これをやんわりと拒否。
その後、公の舞台に姿を現せていなかったが、ここに謎の登場である。
紳士は水原と判明しても、もう一人の太った男の正体は不明。
会場内も水原のように正体を解き明かす声は飛ばない。
我慢できずに、太った男は正体を自らバラす。
「わいは松竹ロビンスのオーナー田村駒次郎や」
啖呵を切られた大矢であるが、どう反応していいか困り、
「はあ」
としか言葉が出てこない。
彼らの割り込みの本当の狙いは？

大矢に襲いかかるこまごまとした運命

「大矢いうんかい？」
「はあ…」
「オタクさんの球団、ワシのロビンスの後継球団らいしいやないか」
「はあ？」
大矢は、横浜の前身、大洋が松竹ロビンスを吸収したことを忘れている。
「なあ譲ってなあ」
「はい？」
「わし参加したいねん、このなんとかちゅう大会に。たのんまっせ」
「頼まれても…」
「あんたも、要領えないお人でんな、そげな優柔不断な態度やと出世せえへんで」
「一応、監督まで出世しましたが…」
大矢と田村に任せていたら埒があかないと、水原が割ってはいる。
「なあ、大矢くん、こういうこっちゃ、つまりだな、大洋…いや横浜いうんか？　君のチームの代わりに私らのチームを参加させてもらいとこう頼んでるわけだ」
「え？　はい？」
大矢はようやく真意を得たようで、
「そんな、いまさら無茶苦茶ですよ、我々は、大会のために血のにじむような準備してきたんですよ。それに、ロビンスの参戦要請は理解できますが、水原さん、失礼ながら、あなたはどこの球団を率いるつもりなんですか？」
「ふふふ…知ってのとおり、わたしは巨人の監督になれなかった身…。それならば外から、川上巨人を叱咤激励しようと解説の仕事を引き受けようと思ったんだが、せっかく生き返ったのだから、野球の試合をやらなしょうがないと思い直してね…」

「それはわかりますけど、肝心のチームは…」
「ふふふ…」
水原は含み笑いのあと、おもむろに手を二度三度叩く。
「さあ、みなさん出番ですぞ…」
拍手を呼び鈴に、壇上の幕の外から次々とユニフォーム姿の男が出てくる。
「清水…」
まず最初に目に入ったのは清水隆行だ。
「こっちは若菜じゃないか」
ふてぶてしい面構えで大矢に会釈するのは若菜である。
「あ、江本、お前もなんで…」
「おう大矢」
江本はいつもの調子だ。
「そして、これは仁志」
仁志が不敵に微笑む。
「もうおわかりになったかな、大矢くん」
ところご、大矢はこれでもピンとこない。
「いや…まったく皆目検討…」
「ふふふ、私と同じ境遇の持ち主を集めたのだよ」
「同じ境遇？」
「そうだ、ワタシと同じ所属するチームに必要無しといわれて、はぐれはぐれになった選手達だ」
「あ…なるほど…」
大矢も納得したように、水原は１２球団から選考に漏れた選手を集めて、一チームを作ることにしたのだ。
清水、仁志は長年レギュラーを勤めた実力者であるが。層の厚い巨人に割って入るのは難しい。
若菜にしたって阪神には田淵、矢野の厚い壁があり、江本は、南海、阪神のエースを勤めながら、扱いの静らさが敬遠されたか、オファーがついぞこなかったのである。

とはいえ、彼らは、まごうことなき偉大な選手であり、はぐれものを集めたチームとはいえその実力は本物である。
「ふふふ、チーム名は消滅したはぐれものの集団の先輩、高橋ユニオンズにあやかって水原ユニオンズと名づけた…本拠地は、これまた、そのまま川崎球場を借りることにした…」
「水原はんのいったとおりや、大矢はん、わしらの松竹ロビンスに」
「わたしらのユニオンズに道を譲ってくれないかね」
「いくらチームのめどがたったからといってそうやすやすと、譲るわけにはいけませんよ」

彼らの目的はただ一つ、大会の参加である。
ただ１２の枠で大会のスケジュールは決定済み、これから動かすわけにはいかない。
大矢の言い分ももっともなのである。
それならば、唯一の手段、実力を見せて、ひとつ枠を開かせればいいわけだ。

「まあ、ただで譲ってもらうつもりは毛頭ない」
「そや、勝負や、勝負、きみんとこの球団とわしと水原はんの球団、勝った方が大会に参加できる、これならどうや」
「え？」
大矢が同意できないのも当然、横浜には勝って現状、負けておお恥で、なんの得もない勝負なのだ。
ところが、会場の反応は違う。
イベントとあって、ファンが招待されているのであるが、
「大矢、はぐれものや、六十年前の化石じみたチームに怖気つくのか～？」
「そうだ、そうだ～」
「やれやれ面白うそうだ～」
ファンはこの勝負にいたって好意的。

「そうだファンのみなさんのいうとおりや～　大矢受けんか～」
監督席に鎮座する星野まで自分には火の粉は富んでこないと、対岸からはやし立てる。
ファンから関係者からこう勝負を望まれたからには、大矢の胸もうずく。
大矢コンピューターが損得勘定を計算する。
ユニオンズはしょせん、はぐれもの、江本や仁志が主力のチームに負けるわけがない。
松竹ロビンスも優勝球団とはいえ、六十年前のカビの生えた単年チーム、横浜の六十年の歴史の総力を注ぐチームに勝てるわけがない。
おまけにいい調整の舞台じゃないか、この2チームを退けることによって、勢いもつく。
計算の結果…。
「お受けしましょうか」
答えは、ＯＫ。
「大矢はん、おおきに、おおきに～」
田村は飛び上がって喜び、水原はそっと笑みを浮かべる。
田村は喜びもつかのま、商売人の顔に戻る。
「で、ひとつ条件あるんやけど」
「条件？」
「オタクさん六十年のオールスターでいくつもりなんか？」
「ええ…」
「そりゃあきまへんで、わしのロビンスは単年や、おたくさんも、単年のチームで勝負せんと、公平やない」
「え？　え？」
大矢は話が違うととまどうが、田村は場内に訴える。
「そうやろお客さん～」
「そうだ、そうだ、大矢も単独チームで勝負しろ～」
顫動したら勝負あり、世論は田村の味方である。

大矢コンピューターが再起動だ。
単独勝負だろうと、六十年のチームに負けるわけがない。
六十年前にフォークがあるだろうか？
チームプレーがあるだろうか？
クセやサインなど一目で見破れるほど簡素に違いない。

結論、勝てる勝負だ。
「いいでしょう、単独でいきましょう」
大矢はまたも承諾した。
「で、その単独のチームやけど…」
「え？」
大矢はてっきりこっちで選択できると思っていた。
９８年の幻の大矢ベイを思い浮かべていたが…。
「それもくじで決めよう思ってな」
田村はポケットのなかから、細く切った何枚もの紙切れを取り出した。
「この赤いほうは五枚あって、西暦の三桁目、黄色く塗ってる方が十枚あって、西暦の四桁目や…。三桁目のほうは、５～０、四桁目の方は０～９の数字が書いておる。つまり赤いのが８、黄色いの７やったら、８７年のチームとわしらは戦うこっちゃ」
「横浜～大洋六十年のいずれかのチームがそのくじで選択できるわけですね？」
「そういうこっちゃ」
「いいでしょう、おもしろい…」
大矢はくじをひくことに決めた。
もちろん狙いは六十分の一、９８年だ。
ただ横浜とはいえ、他に強いチームはある、大洋日本一の６０年は当然、その前後や、巨人Ｖ９時代の万年三位時代もおもしろい。
大矢はまず黄色いくじを引くことにした。
大矢流の演出である。年度の末尾を先に引いた方が、三桁目に対

する興味が残るからだ。
大矢はこれと決めて、黄色いくじを一気に引き抜く。
大矢はかかれた数字をまじまじと見る。
「8だ」
なんと狙いどおり、98年の8である。それを野にさらそうとかざすと場内は大盛り上がり。
もちろん98年のチームの再来を望んでの盛り上がりだ。
「9！　9！　9！！」
どこからともなく起きた9を引けコールを背に大矢は赤いくじを引く。
迷うことなく、大矢は一本のくじを引っこ抜いて、それを天にかざした。
おそるおそる、数字にめをやると、丸みが見えた。
「9のまるみ?!」
大矢の胸は高まったが、丸みからとびでるヒゲはどこにも見当たらなかった。　つまりただの丸、つまりゼロである。
「ゼロ！　ゼロと8！！」
08…08年、大矢は再びあの暗黒のチームを引き受けることになった…。
「三浦、寺原……あと誰いたっけ、あの年の投手…」

ロビンス対ベイスターズ　先祖と腹違いの子孫の因縁

抽選は途中で中断し、特別対策小委員会が設けられて、三球団総当たりで一位のチームが大会に参加に出きることになった。

再び悪夢の０８年のベイを率いることになった大矢であるが、先発で使うはずだった三浦であるが、本大会での登板が見込まれるため使うことができない。

それならば二番手投手の出番であるが、０８年の二番手といえば、ウッドである。

これといって決め球もなく１４０にも満たない右の平凡な投手、変化球が一通り投げれて、制球もそこそこであるが、逆にそこが狙い目で打ち崩される可能性も否定できない。

三番手といえば、当時新人の小林。１５０近い速球は見どころがあるが、制球力に欠け、安定感も心許ない。

ならば左腕の出番と、那須野、吉見の抜擢も頭に浮かんだが、彼らに期待できるものは、残念なにもない。

抑えの寺原につなぐまでどういった継投でしのぐのか、リリーフの手薄さも問題だ。小山田、横山、真田、石井、木塚が控えるが、いずれも実力に疑問符が投げかけれる。

三すくみなら得失点差の規定も、無駄な投手を使えない縛りになる。

打線の方にも問題が山積み、村田内川吉村がどんと座る中軸はいいが、その前後の石井、仁志の出塁率の低さや下位打線の脆弱さは否定できない。

この打線で、松竹の水爆打線に対抗できるのだろうか？

あの投手力で、伝説の投手真田に太刀打ちできるだろうか。

大矢は腕を組み、じっくりと策を練った。

……。

妙案が思い浮かぶわけがない。思い浮かぶなら、とっくに０８年になんとかしているのである。

大矢はつぶやいた。

「まあなるようになるよ」

なるようにならなかったからああゆう結果になったんだろうが。

横浜スタジアムには、朝から熱心なファンが詰め掛けていた。

松竹の奇跡の復活に胸を踊らす往年のファンから、伝説のチームを一目見てやろうと、やじうま気分の若いファンが三塁側に陣取る。

ところが、一塁側は空席が目立つ。それもそのはず、誰が好き好んで、近年の最悪チームの復活を喜ぶのだろうか。

それもエース三浦の登板不可能が浸透して、勝ち目はないと、はなから負けもみこんで観戦拒否ときているのである。

チアダンスチーム、ディアーナが必死に盛り上げ、ホッシーがバズーカでプレゼントを飛ばすが、すべては空虚。

スタンドの空気が冷や込んでいるのなら、チームの雰囲気もよろしくない。

どうしてまたあの最悪のチームで試合をしなくてはならないのか。勝っても、賞金が出るわけもない、ただの防衛戦。

放出された石井琢郎やＦＡで沈む船を脱した相川がベンチに入るのも気まずい。

選手間が冷え込んでいるなら、首脳陣も調子がおかしい。

「あれ、田代、お前、０８年の一軍スタッフだっけ？」

「それがよく覚えてないんですよ、一軍と二軍激しく右往左往して」

記憶が混同しているのか、二軍監督であったはずの田代がなぜかベンチ入りしている。

「そうか、まあいいか」

大矢も小さいことには気にかけない。それだけ勝負に身を入れていない証拠か。

両軍の先発オーダーが発表される。
松竹のオーダーは、
金山４　三村５　小鶴８　岩本９　大岡３　吉田７　荒川２　松本６　真田１
の当然ながらベストメンバーだ。
ところが、横浜のオーダー発表で、ぬるま湯球団らしい凡ミスが起きる。
「オーダーが違うよ」
大矢がスコアボートに表示されるメンバーに違和を覚える。
「あれ？　そうですか」
田代が自信なさげに答える。
「一番石川…琢郎って書いたはずだけどなあ」
「あれ、琢郎って０８年いましたっけ？」
「いたよ…あ、でもオレが石井と石川を言い間違えたかもしれない」
「しっかりしてくださいよ、監督」
「ごめん、ごめん」
同様のミスを犯した田代にお目玉を喰らう大矢であった。
「まあ、石川でいいや、全盛期の石井と比較するならともかく、０８年ならそう実力は違わないからな」
大矢の適当な人事掌握が石井琢郎を腐らせる。
手違いとはいえ、スタメン落ちは事実、それを知った琢郎はベンチ裏で、壁を蹴るなり、バットで送風機を壊すなり大暴れだ。
ベンチのムードは悪化の一途…さあ横浜は生き残ることができるのか？

大矢と田代がとことんボケる

「あれ捕手は相川じゃないの？」
「え？　０８年に相川いましたっけ？」
「いたよ、いた」
「０８にＦＡと記憶してたもんで」
「あ、０８にＦＡだっけ？　そんなような気もしてきた」
相川がＦＡ宣言したのは田代のいうとおり０８年であるが、０８年のオフである。
相川は０８のメンバーとして使用可能なのに、首脳陣の連絡の不手際で、スタメン捕手は実績の乏しい武山と書き込んでしまったのだ。
「まあいいや、武山でなんとかなるよ、うん」
なんとかならないから、０９年に捕手でひどい目にあったじゃないですか…。
先発投手は結局、ウッドが消去法で選ばれた。
チェンジアップや動くボールという六十年前には見られなかった球種で勝負できる投手であることが決め手になったが、３勝１２敗、防御率４点後半の投手である、過度の期待は禁物だ。
表面上の数字に説得力がないのに加えて、スタミナ面にも問題がある。持って６回がいいところで、寺原につなぐまでに、頼りないリリーフをつぎ込まなければならないのだ。
エース真田をどうにか打ち崩して、ウッドが投げる間にできるだけ点数を取るのが唯一の必勝法である。
なおこの試合はＴＢＳにより緊急中継されることになった。
実況は自称世界の松下、解説は新庄、清原のＷ解説だ。
「え～お二人とも、よろしくお願いします～」
「オレ、松竹ってチーム、全然知らないんだけど、清原さん知ってますか？」

「オレも全然しらん」
「え～世界の松下が松竹のことをざっくりと調べてきたので、そのへんをご安心を…」

試合は松竹の先攻で始まった。
ウッドの初球を金山が叩く。いきなり無死一塁。二番の三村はセオリーならバント、後ろに、３割３０本を記録するクリーンナップが３人も控えているからなおのことだ。
ウッドー武山のバッテリーもそのつもりで、一塁走者に気を払わない。
彼らは、金山が歴史に残る盗塁王であることを知らない。
初球から、金山は走る。ウッドのモーション大きく楽々と盗塁。
三盗はないとたかをくくったところで、ウッドが油断して牽制、クイックを怠ると、金山はスタートを切る。
武山は猛然と送球をするが、三塁も楽々と陥れる。
若い捕手だけあって、ベンチからの徹底した指示が必須なのであるが、首脳陣はぼおと見つめるだけで、なんの手立てもしないのだ。
打者の三村が、右方向へ狙い打つ、右に打てば、凡打でも三塁走者を確実に返せるという腹づもりだ。
狙いどおり、打球は、投手ウッドの足元を抜けて二塁方向に、すわ進塁打、一点先制…。
ところが、二塁手は勘のいい仁志。得意のポジショニング取りで、待ち構えたように、ゴロを処理をする。
三塁走者の金山を目で牽制して、一塁に送球。
仁志の培った経験で、先取点を阻止したのだ。
「さすが、仁志」
大矢は喝采を送るのだが、ある疑問が浮かぶ。
「あれでも、あいつ、はぐれもののチームにもいたよなあ…。この後、はぐれもののチームと対戦するとき、あいつどっちに入るんだろう?」

作者はそのあたりも考えてるので大矢はしないで。

先取点を防いで息を継いだのもつかのま、史上最強の打者と相対さなければならない。

小鶴誠がゆっくりと打席に向かう。

「あれが小鶴さんか」

大矢も興味深々。

「スラッガーのわりに意外と大きくないですねえ」

田代くらいのデカさがないとスラッガーとしてかっこが尽きませんよねえ。

「昔の人はあれでも大きいほうだよ」

「ところで、ゴルフスイングでしたっけ？」

「そうそう、新田さんって人の提唱する理論のもと、本塁打を連発したんだよな」

「ゴルフスイングってことはアッパーですよね？」

「アッパーってことは低目の球に強そうだねえ」

「ウッドは低目にボールを集めて、なんとかしのぐタイプですよね」

「そうそう」

「武山に指示を飛ばさなくて大丈夫ですか？」

「何が？」

「いえ、若い武山はそのあたりの情報つかんでるか心配で」

「大丈夫だろ」

「そうですか」

もちろんぬるま湯最下位集団に指導の徹底などあるわけがない、武山は三番打者は相当なスラッガーとの情報が入ってるだけで、安易に低目をついて一発を防ぎにいく配球を選択する。

長身から繰り出されるウッドの動く球筋に小鶴は面食らう。

それもそのはずだ、外国人投手といえば、スタルヒンくらいしかいない時代であり、微妙に手元で動く球なども存在しえなかったか

らだ。
　にもかかわらず、対応能力に秀でる小鶴はたったの数球でウッドの球筋を見切り、執拗に低目をつく武山の配球を読み、外に流れるボール気味のカーブをしゃくりあげるようなアッパースイングでとらえると、打球は左翼方向に飛んでいく。
「あ、フライをあげてくれた」
「犠牲フライにはなりそうですねえ」
「まあ一点はいいよ」
「しかし芯を食ったわりに飛びませんね」
「まあ昔の人の体格とパワーだからねえ」
「五十本塁打は、やっぱりラビットボールの賜物なんですかねえ」
「ラビット？　あ、水爆打線対策に飛ばないボールを使おうって」
「スタッフ会議で決まりましたけど」
「田代、きみ、用具係にちゃんといった？」
「いや」
「まさか、ハマスタでいつもつかってる飛ぶボールのまま…」
　そのまさかである、平凡なフライのはずだった打球は、失速せずに、追い風にも乗ってフラフラとフェンス手前まで飛んでいく。
　左翼に入った内川がまごつきながら追いつづけ、フェンスに手をかける。
「あれ、内川って０８年、外野手だっけ？」
「違いましたっけ？」
　０８年の内川は主に一塁手、それを忘れて、左翼に使う大矢。
「あ、入る」
　打球は、狭い横浜スタジアムの左中間ギリギリに飛び込む。
「あの打球が入るなんて…」
「飛ばないボールを申請したはずなのに」
「飛ぶボールのままだったようですね…」
　小鶴の本塁打で松竹は二点を先制する。
「武山はなんでアッパーの小鶴さんに低目ばっかり投げさせたんだ

よ。飛ばないボールを使おうって話になったのに、なんで飛ぶボールのままなんだよ、その前になんで相川が捕手じゃないんだ…百戦錬磨の相川なら…」

ああ首脳陣が徹底していたら防げる得点だったのに、いまさら嘆いても時既に遅しです。

積極的攻撃の悪夢

二点をとられたというのに横浜のベンチはどこかのんびりムード。
二点ならひっくり返せるさ。
いくら年に３９勝ったとはいえ、六十年前の投手でしょ？
ドロップとカーブくらいしか球種ないでしょ？
速球投手だからといって出て１４０くらいでしょ？
いつでも打てるさ…そんなムードが漂っている。
弛緩したムードが、劣勢を返せない。
オレがオレがの個人プレーがまとまりを欠けさせる。
石川、仁志、内川、村田、吉村と続く上位打線は悪くない。
石川の足に、仁志のむき出しの攻撃力が組み合わされば、チャンスは無限に広がる。
たとえ一、二番が倒れても、右打者最高打率の内川が控えている。
内川が出れば、ベイスターズの日本人史上最高の成績を残した第二回ＷＢＣ四番打者の村田が返すだろう。
二点など何の優位点にもならないほど、横浜の打線は脅威だ…のはずである…。

先頭打者に起用された石川が、初球を簡単に打って、ポップフライを上げるのはいい。
彼は若いのだ、積極的に出て、失敗に終わる、それも勉強である。
一番があっさりと倒れたら、二番打者の役目はじっくりとボールを選球して、球数を稼ぐことだ。二番も続けて、淡白な攻撃に出たら、これほど相手投手を楽にさせることはない。
二番の仁志は野球エリートで、経験豊富のベテラン、日本シリーズから五輪予選まで短期決戦の戦いを熟知している。
指揮官大矢も仁志に任せておけば大丈夫と、全幅の信頼を寄せる

のだが…。

ああ仁志も、仁志である。どこまでいっても仁志は攻撃的で、感情のままプレーをする。

打てるボールが来たら打てばいいじゃん、一球待つよりも、ヒットが出たほうがチームのためでしょ？

もっとものはなしだ、ヒットが出ればそれが一番いい。ところが、そうやすやすヒットは出ないのである。

わずか二球。

先頭の石川のポップフライの再生を見るかのように、仁志の打ち上げたボールは、頼りなく打ち上がる。

仁志は、絶好球だったのに、しくじったとバットを投げ捨てて悔しがる。

たった二球。

もしも、選球眼としぶとい打撃が持ち味の石井琢朗を一、二番のいずれかに起用しておけば、同じアウトを与えるにしても、これほど淡白な攻撃を見せなかったはずだ。

三番の内川の役割。

どこの打者でも二球でツーアウトを取られたら、一球見送るだろう。それがたとえ、おあつらいむきの絶好球であっても、チームを思うなら見送るだろう。

内川もそれを肝に命じていた。

一球目は何が何でも見送ろう。超がつくほど積極的打撃が持ち味の内川であるが、特徴を封印してまでチームをとるその心意気こそ、勝利への道筋なのである。

ところが。

内川にも真ん中高めに甘いカーブがくるのだから、見送ろうと思っていた内川も禁を破って、手を出してしまう。

結果が出ればいい。

火の吹くようなライナーが三遊間に飛ぶ。

結果が出れば。

結果はでない、いくらいい当たりを打ったからといって、ライナーが野手のグラブに収まれば何もならない。
遊撃手の松本がちょいと横に飛んで、打球を納める。
たった三球。
たった三球の初回の攻撃は終わる。
初回終わって、２－０で松竹のリード。
初回だからといって、現代のチームが現代野球にのっとての試合で、六十年前の化石じみたチームにリードを許すことは、ファンは許さない。
「大矢辞めろ～」
大矢はもう辞めてます、実際の話では。

積極的攻撃の悪夢（後書き）

松竹編どれだけ長いんだ

忘れ去られた外国人、続々と登場

二回の裏とんでもないチャンスがやってくる。

四番の村田が打席にメットをかぶり直す仕草をして打席に入ると、捕手の荒川が目を白黒させる。

「なんや、この野郎、髪の毛が茶色いやないか、おまけに、えらそうにヒゲをはやかしてる」

荒川はつぶやくと、真田に内角をせめるようにサインを出す。

真田も生意気なやっちゃと荒川の意図に頷き、執拗に内をせめる。

村田はこれしきの内角攻めには動じない。

四球続いた内のボールに、微動だにせず、肘にボールが当たっても、トレーナーを制止して一塁に歩く。

真田は、

「よけれるやろ」

と主審に指差しポーズで、猛然と抗議したが判定が変わるわけはない。これで熱くなった真田は制球を乱し、続く五番吉村にも四球を与えてしまう。

六番は佐伯。打撃を期待してスタメンの佐伯だけあって。強打と思いきや、確実に同点狙いで送りバントだ。

「よし、一打同点の場面ができたぞ」

後続が打撃に期待できない武山に、投手のウッドだけに、七番に座る金城が勝負だ。

「監督、金城が歩かされたら、ゼロに終わる可能性が高いですよ？」

「大丈夫だよ、しょせん、昔の野球、それに金城が元首位打者の強打者で、後続が実績ゼロだなんて、昔の人は知らないよ」

田代の不安を一蹴するのだが、松竹はその辺りもよく研究している。

金城には臭いボールから入り、結局四球で歩かせる。満塁にしても後続の能力の落ちる打者打ち取れるという計算だろう。

「半ば敬遠の四球でしたよ…」
「平気、平気、こういうときに限って、八番打者は意外性を発揮するもんだよ」
大矢はどこまでいっても楽観的。だが、大矢がポジティブ思考に陥るほど、現実は闇に包まれる。
武山は二点を取り替えそうと、焦ったのか、甘いドロップを打ち損じてショートフライ。
これで打者は投手のウッド。外国人だけにパワーはあるとはいえ、しょせん投手である、打撃には期待できない。
ぶんぶんとバットを振り回して、アピールするが、大矢が飛び出してくる。
失地挽回、送りバントが采配ミスといわれないためにも、このイニングで点を取っておく必要がある。
ウッドを呼び寄せて、ベンチに下げさせる。
「代打だ、代打、田代、誰でいく?」
「森笠でいきましょう」
「よし、森笠か、お〜い森笠〜」
森笠は呼べど待てどやってこない。
「どうやら、森笠はいないようだぞ」
「あれ? ０８年にいませんでしたっけ、それじゃあ大西でも」
「大西は右だ、左がいい」
「左ですか…そうですね…」
「ん? あのベンチの隅にいるでかい外人誰だ?」
「え? あの左でバット持ってる奴ですか?」
「あれでいい、体が大きくて打ちそうだ」
大矢は主審の元に走り、
「代打…あの背番号６の白人…」
主審は大矢の適当なコールにも深く頷いて、ウグイス嬢にわかるように大きな声で、
「代打ビグビー」

「あ、そうだ、ビグビーだ。そんな奴もいたな」
ようやく思い出す。
１９０を越えるビグビーの迫力には、松竹ナインも戸惑いを見せる。
「なんや、あのゴツイの」
期待して入団した割に、怪我に、ドーピング騒動にろくな結果を残せなかったビグビーだけに、ここはなんとか打って名誉回復をしたいところであるが、エース真田は、外国人ていどには恐れをなさない。
速球を続けて、最後の得意のドロップを落として、空振り三振を奪う。
天を仰ぐビグビー、また采配みのらずとうなだれる大矢。

「監督、次、投手誰いきます？」
優秀であるとか、誰々を育てたとか一切評判を聞かない投手コーチの斉藤明夫が、大矢に指示を仰ぐ。
「え？　投手？」
大矢は、ウッドに代打を出して、投手交代の必要があることをすっかると忘れている。
「真田、横山、小山田、吉見、那須野、山北といますが、どれいきましょうか？」
どれもダメそうだ、これで残り7イニング、どうやってしのごうかと、大矢は自業自得ながら、頭を抱える。

ＹＹＯＮ～必殺の一人半殺しもできない継投

「それじゃあとりあえず横山でいいや」

０４年パ・リーグ最優秀救援投手の横山をとりあえずとはなんという大矢の傲慢さであろうか。

横山を抜擢して、横山を拾ったのは大矢ではないか。

横山よ、奮起せよ、ポスト佐々木の筆頭といわれたあのころを、思い出し、自慢の速球とフォークボールで水爆打線を牛耳取れ。

まあ、横山がこれで奮起するようなハートの持ち主ならもっと活躍できたんだろうよ、横山は、走者を出せば、お決まりのじれったいほどの間合いの長さで客を焦らしかと思うと、膨大なる持ち時間とは何だったんだろうかってくらいに、逃げの投球を繰り返して、いたずらにピンチを広げるだけだ。

たまりかねた大矢が、「山北」と口走る。

和製ランディージョンソン、、その根拠は速球にも、スライダーの切れにもあらず、単なる長身でサイド気味の腕の振りからのしかも自己申告である。

横山も逃げれば、山北も逃げる。

１４０に満たないストレートと、さして曲がらないスライダーは、長身左腕を金田くらいしかお目にかかっていない六十年前の打者にも、いとも簡単にみきられる。

横山の走者を律儀に一掃すれば、次の人頼むよと、新たなり走者を作り出しては、大矢がしびれを切らす。

「お、小山田！」

頼りなさげの前者二人の投手と違って、小山田は立派な面構えだ。

立派な体格に、四角い顔に、はやかした無精髭。松竹ナインもこれは違うでと目を細めるが、小山田は残念ながら、広島の守護神として１５０キロの速球をサイドからビュンビュン投げていたころとは、何もかも違う。

技巧派に転向したといえば、聞こえはいいが、その実、えっさほいと、投げ込まれた、自称「スカイシンカー」は高目からど真ん中に落ちる絶好球となり、オレも負けじに一発叩き込んでやろうと意気込む水爆打線の猛者どもの格好の餌食となる。

「な、な那須野！」

大矢はたまらず那須野を送り込む。

那須野がリリーフカーから降りて、小走りに走っていくと、松竹ナインは、「また、背のでっかい左かあ」とため息混じりに漏らす。

１８０を越えれば、超大型選手の時代と比べて、１９０クラスが次々と繰り出される現代野球の体格の良さは異次元にもきた気持ちだろう。

ただし、これで投球内容も異次元ならば、話の筋は通るのであるが、投球内容はある意味、別次元。

那須野の体格を見れば、球威あふれる速球や、二階から落ちるようなカーブがあってもいいようなものであるが、実際に繰り出されるボールは、打ちごろの速球に、申し訳なさそうに落ちるチェンジアップにカーブである。

左投手を二人もマウンドに送っているのであるが、大矢は今更ながらに、とんでもない事実に気がつく。

「あれ、松竹打線って左打者が一人もいないよ」

今更過ぎるのであるが、投手の真田を含めても、松竹打線はずらりと右打者が九人並んでいる。当時の野球事情を考えても、左打者になるのは左利きの選手ばかりで、右利きの選手が有利だからといって、左打者に挑戦することはほとんどなかった時代。

ならば十二分にありうる現象であるが、大矢は今の今まで気づいていなかったのである。

「左投手二人も出した意味がないよ」

まあ誰を出しても結果はたいして変わらないって話はこのさい抜きにして。

「まだ三回なのに、無駄に投手使っちゃったよ」

投手のベンチ入りは九人。
ウッドー横山ー山北ー小山田ー那須野とリレーしているのだから、ここまですでに、五人も使っている。
残り六回を四人でやりくりしなければならないのだ。
投手に代打を起用することを考えると、すでにギリギリの人数である。
それでもはりきるのが大矢。
「手詰まりの継投は任せておけ」
毎度のように投手を総動員してきた大矢には慣れっこの事態である。
「中盤で敗戦処理のどうでもいい投手を引っ張り、最後に調整と称して勝ちゲームの投手を無理やりマウンドに上げれば、なんのそのだよ」
大矢はすでに、試合の方は投げて、体裁を整えるほうに走ってる模様。
二試合だけの超短期決戦で、序盤で試合を投げるのはどうかと…。

煮えきれないぬるま湯

「桑原謙太郎」

敗戦処理のロングリリーフで出した桑原が意外といい投球をしたものだから、大矢は三回のマシンガンリレーを悔やんでも悔やみきれない。

点差は七点。

村田が真田から得意の右方向に一発を放っても、もはや焼け石に水の雰囲気。

負ければ、窮地に追い込まれる。

三すくみの状態なのだから、敗戦と計算すると、次の試合、松竹が水原のはぐれものの集団を打ち破れば、そこで敗退決定。

これだけ長い長い準備期間があったのに、横浜は試合をせずに大会をさらなければならない。

それなのに、横浜はどうだ。

逆転してやろうとの気概が微塵もない。

打ち上げれば、ヘラヘラ、野手の落球もありうるのに、全力で走ろうともしない。

回はただただ重なる。

横浜スタジアムの熱心なファンもさすがに呆れくたびれたのか、声をからして声援を送ることや、メガホンを叩く手もやめ、ただ漫然と試合が流れるのを見つめている。

それでも横浜に好機はあった。

「どんな試合にも、チャンスは最低三度は訪れる、一度潰したからとへこたれるな」

との猛撃を弘田ヘッドコーチが飛ばしたのはいいが、五回に訪れた二度目のチャンスも、六回に訪れた三度目のチャンスもことごとく潰すのである。

セオリーからすると、もうチャンスは訪れない。

ただただ六十年の隔たりをひっくり返し美酒に酔う松竹ナインを尻目に、横浜ナインは、とぼとぼと家路につかなければならないのか。

ただ好機はあった。

松竹がエース真田を降ろしてくれたのだ。

走者を出してはしのぐ苦しい投球の連続とはいえ、エース真田を降ろすならば、横浜に分がある。

なにせ真田は年間３９勝の大投手だ。

これ以上の投手が選手層の薄い時代にそうはいるわけがない。松竹は翌日も試合がある。そこに第二投手を起用するはずで、救援に出てくるのは、第三の投手か、救援専門の投手がいなかった時代の救援投手であろう。

これは逆襲のチャンスである。

たとえ負けたとしても、三チームがタイで並んだ場合に生きてくるのが、得失点差。ならば一点でも取って、つめておきたいところである。

「ピッチャー大島」

コールされた投手は、大島という投手だ。

どれどれ、どんな選手だろうと、事前に配布されていた選手簡易名簿を見ると、

「２０勝投手だって？　しかも新人王の左腕」

よく考えれば、二試合だけの短期決戦、いい投手を惜しげもなくつぎ込むのがセオリーである。

投手の石井裕也に打席が回ってきたところだ。当然代打であるが、

「代打、誰行きましょう？」

「う～む、左投手か、右の大西かなあ」

大矢は、悩むが石井裕也と聞いてある選手を思い出した。

「そうだ、琢郎がいた、石井琢郎だ」

「琢郎は左打者ですよ？」

「左対左なんて細かいことに構うもんか」

田代がベンチ裏にいた石井琢郎を呼び寄せる。
スタメン落ちで腐ってもいいものなのに、石井は、さっぱりとした顔で姿を現す。
ベンチ裏であれだけ暴れたのに、仕事には持ち込まない。
この姿勢が、のちに、燃えないナインに火をつけることになるのだが、肝心の打席での結果というと、遊撃手へのゴロに終わる。
ところが、楽々アウトなのに、ヘッドスライディッグを慣行して、アウトになったとわかると、猛然と悔しがるさまに、冷めていたスタンドは湧き上がる。
これにナインも目の色を変える。
一部の反石井は、またパフォーマンスをやりおってと、白い目でみたのだが、この試合が絶対に負けられない戦いであることを改めて認識させたのである。

反撃のベイ

石井裕也を救援した、真田がなんとか追加点を小鶴、岩本、大岡の合計１２４本の超クリーンナップをバックスクリーン三連発の三点に抑え込むと、石井琢郎の闘志が火をつけさせた横浜０８年型マシンガン打線がつながる、つながる。

一点でも多くとならなければならない。

一点でも多く取って、差を詰めておけば、この一敗も無駄にならないかもしれない。

とにかく塁に出したなら、漏らさずにホームに返して、得点を重ねろ。

誰が指示をしたわけでもなく、とにかく横浜の得点への執着心は素晴らしい。

いまさらながらであるが、いまさらでも遅くはない。何点差でも負けは負けのペナントレースじゃないんだから、一点でも多く取って、一点でも少ない防ぐのは、未来への道筋である。

三塁に吉村がいて、なんでもないゴロを佐伯が打った。

いつもの吉村なら無理をせずホームに突っ込まないところだが、今日の吉村は違う。

猛然と突っ込むと、さしてたっぱがないにもかかわらず十分な体重を捕手の荒川にぶつける執念の体当たり。

六十年前の野球ではなかったクロスプレー（当時は選手層に限りがあり、相手を負傷させないプレーが暗黙の了解）に、荒川は思わずボールをこぼす。

神主打法の闘将岩本（孫がゼルダの伝説のＣＭにも出演）をはじめとして、荒れくれものの多い松竹ナインであるが、ここは、揉め事は辞めろと止めには入った大西が一発殴られて、負傷退場しただけで、事はおさまった。

試合はまだ続く、些細な揉め事で壊すわけにもいかないのである。

八回に寺原がマウンドにあがった。

追い上げているとはいえ、逆転ほぼ不可能のビハインドゲームに、抑えが登板するのに、モチベーションに欠ける。

ペナントと違い記録の残らない短期決戦でけに、それはなおさらのはずであるが、寺原は、チームに生まれつつある勢いを背負ってマウンドにのぼるのである。

１５０キロの速球に緩急の差をつけるカーブにチェンジアップ、これにシュートがストレート以上の球速で内角に食い込めば、水爆打線とはいえ、手が出せるわけがない。

これに慌てたのは小西松竹監督。

松竹も得失点差は重要な問題、これ以上の失点は防がなければならないと、２３勝を上げた二番手の江田を送り込む。

江田は典型的な技巧派でシュートを集めるタイプだ。

内川、村田、吉村の右打者にぴったりな投手であるが、コンパクトに肘をたたんだ内川にシュートをライト前に運ばれれば、村田には今日二本目となる一発を左翼席に放り込まれる。

点差はこれで三点。

九回も引き続きマウンドに上がった寺原が三者凡退に抑え込むと、ガッツポーズ。

負け試合で、気迫を見せる抑え投手は、シーズン最中なら、顰蹙ものであるが、短期決戦では色合いが違う。

寺原の闘志は、裏の逆転劇につながらなかったが、横浜は負けたにしても、確かなる傷跡を松竹に残したのである。

三本柱をマウンドに上がらせて、七点を奪った。

これが次の水原はぐれもの球団との試合に影響が出ることは必死で、松竹は戦う前にして劣勢に立つことになるのだ。

松竹が次の試合も勝てばジ・エンドだけに、横浜の終盤の反撃は大きなものであった。

だが、それをわからずして、というようりも、敗戦は敗戦。

これに腹を立てた横浜ファンが、
「大矢、辞めろ」
の大コール。
だから、もう辞めてるってば。

選択ミスの痛恨

松竹ロビンスと水原ユニオンズの運命の一戦は、ユニオンズが仮の本拠地とする
川崎球場で行われることになった。
川崎だけに、設備はしょっぱい。
昔気質の松竹ナインは慣れたものとしても、特に荒くれ物が多い水原の選手は文句タラタラである。
「なんで、こんなひどい球場なんや、ほら今ゴギブリ走ったで」
江本が文句をたれれば、若菜は同調する。
「ほんとですよ、こんな球場なら、僕の育てた城島でもろくなプレーできませんよ」
主力が、この調子だから、まとまりがあるはずもなく、彼らはてんでバラバラである。
「エモに、若菜、プロが設備に文句いうもんやない」
意外なことに、まとめ役になっているのが青田昇である。
「しっかしまあ、青田さんが巨人から誘いがないのも意外ですねえ？」
江本は不思議がるが、青田は平然。
「まあ、川上のおっさんが、ワシのこと使いにくかったんやろ」
青田は、阪神藤本や近鉄西本からのヘッドコーチの誘いも蹴っている。
「そこで、川上巨人に一泡吹かそうと、水原のじいさんの誘いを受けたんや」
「あれでも青田さんって、野球賭博のハンデ切ってるって話もありましたよね？」
若菜は事情通、青田はそれでも動じない。
「それはそれ、これはこれや」
なぎが別なのかよくわからないが、青田がいうことは絶対である。

「お、監督の登場だ」
さすがに荒くれ者だらけとはいえ、大監督の水原が来るとなれば、背筋を伸ばすしかない。
水原が選手ロッカーにわざわざ出向いてミーティングである。
「おまえらに、細かいことゴチャゴチャいってもむだやろ。実力がありながら、使いづらいってだけで、残れなかったやつらだ。ただひとつ、取り決めを作った。サインも指示もくそもない、めちゃくちゃやってこい」
水原の簡素な訓示にナインは目を瞬かせる。
「お～」
はぐれものたちが、一瞬にして、一致団結である。
水原は色々と策をこうじたが、采配放棄が一番であると答えを出した。
なにせ、一、二番からして、仁志、清水のコンビである。
あれこれ細かい制約をつけるより自由にやらせたほうが、力を存分に発揮できるとみたのだ。

松竹の先発は、本日も真田だ。
六十年前のチームとはいえ、先発の連投は定石ではない。だがしかし、たった二試合で決める戦いであることを考えたら、これはありうる策だ。
前日も、勝ちが濃厚となると、さっさとマウンドを降ろしたことをみても、連投は想定内の策であったのだろうか。
さらに、前日投げた、２０勝以上トリオの江田、大島もベンチ入り。
連日の三本柱リレーで下克上をはたすつもりか。
一方、水原の先発は、小川健太郎である。
小川といえば、黒い霧事件で永久追放を喰らった曰く付きの投手である。
昭和４０年代前半の主力投手だけに、中日としても貴重な戦力と

考えていたが、永久追放の前に屈して、選考を断念した経緯がある。
さらに、小川が追放されたときの中日監督は水原、その人であり、ここにも因縁が見え隠れする。
先発にシーズン２９勝投手小川を持ってこれることからもわかるように、余り物を集めて作った即席チームとはいえ、その実力は確かだ。
お馴染みの二塁仁志に、新人時代の監督だった水原を慕って中日やオリックスのオファーを蹴ってきた三塁の島谷の守りは堅い。
ただ最後まで定まらなかったのが、遊撃手。
遊撃手は潰しのきく選手が多く、他のポジションで起用されたり、コーチとして需要があったりで、なかなか人材が集まらなかったのだ。
９２年の新人王阪神久慈、近鉄の天才児矢ノ浦や、中日、阪急で活躍した盗塁王河野、大洋日本一で有名な鈴木武、広岡前の巨人の遊撃手平井などが候補にあがったが、誰も決め手に欠いたのである。
そこで、水原が目をつけて抜擢したのが、鳥谷である。
平均より上の打率、平均よりかなりいい選球眼、二十本打てる長打力、そこそこ速い足、土のグラウンドでは史上最高の守備率を記録した安定度を増した守備…。
飛び抜けたものはないが、すべてに安定した能力が期待できる選手と、水原は見込んだのである。
吉田や藤田平がいては、出番がないと、鳥谷も、水原の誘いに乗ったのだ。
だが、鳥谷はいまさらながら後悔をしている。
隣に、こうるさい早稲田の先輩仁志がいれば、後ろを守るセンターはそれ以上にやかましい青田。
投手も一筋縄でいかないどくされた連中ばかり…。
「とんでもないところにきてしまった」
関西の空気にいまだ馴染まないといわれる関東っ子の鳥谷が、この雰囲気にすぐに慣れろというのは、どだい、無理な話だろうか。

鳥谷の悪夢

とにかく口うるさいのは仁志。

引っ張りの雰囲気を感じ取った鳥谷がちょっと右に動けば、この打者はセンター方向狙いだから、左につめろと、しかめっ面でいうのだから、後輩の鳥谷にしたら指示にしたがうしかないわけで、その結果、フルスイングで三遊間をゴロで抜ける打球が飛んできたなら、二塁方向に寄っていた鳥谷は、瞬時に体を翻して、これをとめようと思っても、抜けていくわけである。

仁志は責任を感じて、「悪い、悪い」だの「お前が正しかった」と軽くでも謝罪の意を示してくれれば、鳥谷も少しは救われるのだが、仁志はあいかわらずしかめっ面を崩さない。

漢字がよく似ている三塁手島谷でも、仁志と長年一二番コンビを組んできた左翼手の清水でも誰でもいいから、「気にするな」の一言でもあれば、鳥谷はこれ以上、身を固くすることはないのだろう。

それでも職人はだの彼らは、知らぬ存ぜぬだ。

小川健太郎がピンチを作った。

仁志のよけいなポジショニングの指導がなければ、存在し得なかったピンチかもしれない。

ところが、現実には、走者は三人も塁にいる。

小川は久しぶりのマウンドの感触に戸惑っているようにも見える。

それもそのはず、オープン戦もキャンプも何もやってないのだから、勘が狂うのも当然である。

間が悪い、心に余裕がない、打者と勝負せずに自分と勝負している。

鳥谷にはそう見えてしかたがない。

小川の普段の投球ぶりなど知るよしもないが、中日のエースだった人だ、もっと見栄えのいい投球ができるはずだと鳥谷は思う。

マウンドに入って間を取れば、変化が起きるかもしれない。
鳥谷は思ったことを実行できるタイプではない、埼玉と東京の境目に育ったベットタウン子、どこまでも普通で、控えめである。
どうみても堅気ではない雰囲気を漂わせる投手の小川を、気軽に励ますことなんてできないのである。
尋常でない人間は、下柳で慣れているとはいえ、小川は生きている時代が違いすぎる。
仁志先輩、あなたがマウンドに寄って一声かけてくださいと、鳥谷は、念じるが、仁志は気にしている素振りもない。
見過ごして試合が壊れゆくのをみる。わざわざ奇妙な球団に参入した自分の運命がこれなのかと鳥谷は自戒するのだが、センターにいた青田が、ホーム方向に、にじり寄ってきて、ドスの聞いた声で、「お～い、とりたにとかいうの、小川に一声かけてやれ」ときたのだから、鳥谷の心臓のバクバクは止まらない。
青田にいわれたのならば、鳥谷は動くしかない。
鳥谷がタイムを取って、マウンドに小走りにいくと、仁志らが、じりじりと歩みを始める。
鳥谷は、真っ先にマウンドにつくことを憂慮してか、小走りのペースを緩めるのだが、先輩方はそれに会わせるかのように、歩調を遅らせる。
しかたがない、一番乗りでしかたがない。
これも若手の役目である。
先に、マウンドについたのが鳥谷なのだから、小川に声をかけなければ、奇妙である。
だが、ジェネレーションギャップに地域差。
小川という投手は福岡出身と聞く。
九州の人間で浮かぶのは、守備の怠慢なプレーに年甲斐もなく、切れる下柳であり、つかみどころのない現・監督であり、新しく加わる球団4人目のフルイニング出場を狙う、いかにも気難しそうな捕手である。

関東育ちの鳥谷にとって、西にすむ人間ほど、理解がしがたいものはない。

「あ、あのう…」

「なんじゃ」

小川は明らかにイラついている。精神状態を乱しているのだから、間合いを取ったことは間違いはない。

ただそれを立ち直らせる術を鳥谷が持っているのならばの話で、そうでなければ、ただの逆効果である。

西の人間はやっぱりやっかいだ。

鳥谷の現在の同僚の野手でレギュラークラスの東の育ちといえば、平野恵一と狩野くらいしかない。

赤星にしても愛知という東といってはばかられる育ちで、これまた難しい性格である。

ああ、どうして僕は関西の球団を選んだのだろうと後悔しても遅い。

小川は目の前にいるのだから。

「がんばってください」

「あん？　ワシは精一杯やっちょるが？」

そりゃそうだ。これではダメだと鳥谷は、言葉を続ける。

「ちゃんと投げてください」

鳥谷はかける言葉を欠いただけで、意味を含んだわけではなかったのだが、仁志がぎょっとした顔をする。

鳥谷は忘れていたのだ、小川が黒い霧で消えた投手であったことを。

ちゃんと投げていないから、ちゃんと投げるとなるわけだ。

まるでそれでは八百長を疑っているようなもの、考えすぎといえるが、考えすぎてしまうのが、永久追放を負ったものへの応対だ。

いまさらながらまずいことをいったと気づいた鳥谷は青くなる。

ところが、小川は面を崩し、高笑いをする。

「わははは、この小僧、ワシが八百長して追放されたおもっとる

な。ワシはオートレースの八百長で追放されたんじゃ、野球に関しては真面目じゃ」

これが思わぬかたち小川の緊張を解く鍵になったのだから、人生何が起きるかわかったものではない。

これで気をよくした小川は得意のサイドからのゆさぶりと伝説の背面投げを交えて、ピンチを脱した。

背面投げから投じられたボールはなんのへんてつもないやまなりのボール球であったが、相手の心を乱すのにはもってこい。

これで、かっかした松竹強力打線を悪球を振らせて牛耳ったのだから。

イニングが終わっても、鳥谷の心臓の鼓動は勢いに陰りを見せない。

「これがまだ八回も続くのか」

生きた心地でないようだ。

鳥谷の悪夢（後書き）

１４０話にして主役が鳥谷
しかも１５Ｐ

どこまでも抜きん出ない鳥谷

水原監督はとんでもない策に打って出た。

二回になると、小川をさっさと降ろして、次の投手をマウンドにあげたのだ。

田中調。

東映～産経で活躍した左腕投手である。これまた黒い霧で疑惑をかけられた選手で、水原の誘いで東映に入団した秘蔵子である。なお出身も水原と同じ香川は高松だ。

小川が一回で降ろされたからさぞむくれていると思いきや、そうではない。

ベンチにどかっと腰を降ろして、さっぱりとした顔で試合を見つめている。

これは初めから決まっていた継投策であった。

予想外に力のある投手を集めることができた水原は、一回ずつの九人リレーを考えたのだ。

力がある上に一回を全力で投げさせたら、水爆打線とはいえ手がでないだろういう目論見である。

一打席で知らない投手の見たことないボールを見極めるのも容易ではない。

田中調の高い奪三振率は、試合にも生きる。

速球、カーブで幻惑すると、最後にまた速球。またカーブ、カーブで追い込み、最後にまたカーブと若菜の配球も冴えを見せたことで松竹打線を沈黙させる。

二回裏、打席に入るのは、四番のフィルダー。

フィルダーほどの選手が、選から漏れるとは、水原にとってはこれ以上のない天からの授かりものである。

一塁には、バースにオマリーがいてこれ以上抱えきれないと、阪神が手放したのであるが、メジャーに帰ると、たちまち５０本を打

って本塁打王に輝いたそのパワーは、日本野球史上最大ともいえる。
それほどの打者を一年だけの実績、日本ではバースが圧倒だからといって、戦力外にした阪神の判断は、はたしてどうだろうか。
肝っ玉の塊のような松竹のエース真田も、さすがに、フィルダーの体格と発散するオーラには、何かを感じ取ったようで、大胆な攻め一転、低めをつく投球に切り替える。
フィルダーが手を出してもおかしくないコースにボールは集まるが、じっと我慢をして四球を選ぶ。
個人プレーに走りがちのフィルダーであるが、ここで勝てないと、自分に低い評価をくだした阪神と戦えないとつなぐ意識を全面に押し出したのである。
五番は史上最強の五番打者こと柳田。
矢野顕子が歌にするほどの個性的な風貌と、その後、淡口～清水と続く巨人伝統の左打ちの外野手としての強打は世に知れたものである。
史上最強の五番を戦力にしなくても、いくらでもいる巨人の層の厚さはやはり脅威である。
では、ここで柳田が史上最強の五番であるか特別に検証してみよう。
柳田にその異名がついたのは、昭和５２年の長嶋巨人第一期の連覇の年だ。
それ以前の巨人の五番といういＯＮの後で、適任者はいないかと、各球団から連れてきたものだ。関根から、桑田、森永、田中久、高倉と腕に覚えのある打者を乱獲しては、どれもしっくいかず、結局、黒江や森あたりの打者に打たせたり、末次の遅い開花を待つしかなかったのである。
そこで打率３４０、本塁打２１本も打ったのだから、柳田が最強の五番の冠を背負わされたのもわかる。
では、それ以後に柳田以上の五番は存在しなかったのか？
柳田以降というと、シピン、原、中畑、クロマティ、吉村、ブラ

ドッリー、駒田、コトー、マック、広沢らがそこに名を繋ぎ、高橋由伸、清原、そして現代の亀井の名が上がる。

成績的には全盛期の高橋、吉村、原の後を打ったころのクロマティ、三拍子を加味すると亀井あたりが上かもしれないが、時代とインパクトを考えると、柳田が圧倒しているだろうか。

説明が長くなったためか、柳田の打席は終わっていた。

強烈な一塁ライナー、飛び出していたフィルダーが巨体を返して、懸命に一塁に戻ったために、併殺は免れた。

六番打者は、飯島。

飯島といっても、代走の飯島でなく、月に向かって打てと大杉に指導したことで知られる飯島である。

首位打者に輝いた飯島ほどの打者であるが、消滅球団の大映スターズに長くいたため宿無し。

そこに、目をつけた水原が引っ張ってきたのであるが、その目に狂いはなかった。

飯島は真田と同時代の選手のため、投球を熟知していた。

右方向に大きなフライを放つ。狭い川崎なら十二分に本塁打の飛距離であったが、

高くそびえ立つ金網に阻まれる。

それでも普通の一塁走者ならば、一挙に本塁に帰ってくる当たりだ。

ところが、一塁走者は、盗塁をしただけで、全米のニュースになったほどの鈍足なフィルダー。

息を切らせて三塁に行くのがやっとであった。

二塁、三塁、ここで七番の島谷が四球を選び満塁だ。

打者は若僧鳥谷。

ベンチからそそり立つ怖〜い先輩方の視線。

スターなら満塁の走者一掃する当たりが打てるし、間の悪い凡人なら一人も返せず、あげく併殺なんて打っちゃって恐ろしい先輩方の冷たい目線を浴びるのだが、鳥谷はどこまでいっても煮えきれな

い。
そこそこ甘いボールを犠飛の教科書どおりの打撃で、右翼に打ち返すと、フィルダーがドタドタとホームに帰ってくる先制の犠牲フライ。
最低限の仕事をしたのだから、ベンチも文句はいえないはずであるが、何か物足りない。
まるで鳥谷のすべてを表しているかのように、物足りない。
犠飛に満足して、ヒットを打てなかったことを悔やまずに、平然と帰ってくる鳥谷がこれまた物足りない。
ただこの結果に狂喜乱舞していた男がいた、テレビ中継をじっとみつめる大矢であった。
（テレビ中継といっても、親会社のＴＢＳニュースバードが、お義理で流している気合の入っていない中継であるが）
なにせ、この一戦で松竹が勝つと、その時点で横浜の敗退が決定なのだから、松竹が先制を許して、ぷっくりとした頬を緩ませるのは、当然か。
「これで、松竹勝ったら、明日の試合、消化試合だからなあ」
そうなのである、松竹が勝っても、明日の予定は変わらず、試合が行われる。
「ギャラも出ない消化試合などやってられっか」
それでも、どこか後ろ向きの大矢であった。

大矢のシンキングベースボール

「あ、おいおい田代！」
大矢が中継を見て、何かに気づいたご様子。
「なんですか、監督」
「仁志がいるぞ」
いまさらだ。
「うちにも仁志がいるのに、むこうにもいる」
「特別に複数の存在を認めてみたいですね」
「そうなのか、あ、仁志のところに打球が飛んだ。あ、飛びついた…。何だか動きがいいぞ」
「そりゃそうでしょう、むこうの仁志は巨人時代の若くてピチピチした仁志ですから」
「う～む、こっちの０８年型の仁志は、ろうそくの消えかけなのに…。あ、仁志がすごく嫌そうな顔でブツブツいってるぞ」
「あの態度はうちの仁志でも健在ですよね」
「う～む、体力が衰えたなら、口くらいは大人になってくれてもいいのにな…」

連投に慣れている真田とはいえ、さすがに本調子ではない。少しでも甘く入ると、水原打線が襲いかかる。
点を重ねる度に、大矢が拍手。
「やった、またとった」
「よし、いけ、ほら、よ～し！」
ところが、大矢は水原球団が点を重ねると、それだけ横浜が不利になることを忘れている。
水原が勝って、その水原を横浜が次の試合でどうにかこうにか破れば、さんすくみ。
となると、得失点差の勝負となり、水原球団が点を重ねることは、

大矢横浜の進出可能性を狭めることになるだ。
それなのに、大矢はただただ喜ぶ…。

田中調から、黒い霧の火付け役永易、さらに益田、与田と黒いリレーの前に松竹打線は音なしである。
次々と出てくる投手に戸惑っているだけでなく、狭い川崎を舞台に松竹打線が一発狙いできていることを若菜がすかして、ボール球で勝負しているのが功を奏している。

「あ」
大矢はいまさら気づいたのか、
「おい明夫、計算機持ってきてくれ」
斉藤明夫を呼びつけて、計算機を持参させる。
「ちょっと待てよ、うちのチームは松竹に三点差で負けた。ってことは、次の試合はいくつ点を取って水原さんの球団に勝てばいいんだ？」
単純な計算を暗算ですませないところに大矢の緻密さがよくでている。
「今、５－０で水原さんが勝っている…。このままの点差で試合が終わるとすると、松竹の得失点差はマイナス３ってことか。で、水原さんの球団はプラス５…。うちは現在マイナス３だから、もし明日の試合勝っても、さんすくみだから、えっと…」
計算機を叩き、メモ書きをする大矢。
「ぎょ！」
オールスター小倉優子音楽隊の魚くんみたいな声を出して、大矢はわかる。
「明日、最低でも五点差つけないとうちの勝ちじゃないじゃないか！」
五点差つければ、大矢横浜はプラス２となり、水原球団はプラス１で逆転。

「おいおいおい勝つのが難しいのに、五点差って、どういうこったい…」
大矢は机をどんと力任せに叩いて、
「おい明夫に、田代！　こりゃ水原さんを盲目的に応援してるだけじゃいけないぞ！」
いまさら気づいたのかと斉藤も田代も呆れるが、一群の将には逆らえない。
「そうでしたか、監督！」
斉藤がわざとらしくヒゲをびくつかせて驚くと、田代も、
「こりゃ、松竹の追いつかないていどの攻撃を期待したいといけませんね！」
眼鏡をずらして、驚いたふりをする。
だが、この三人が願えば、願うほど、物事は暗転していくのである。

「あ！　鳥谷！　なんだお前！！」
二番手江田の外に逃げるシュートを捕まえると、鳥谷の打球はふらふらと打ち上がり、狭い左翼席の最前列に飛び込む、なんとも経済的な本塁打。
ここぞの場面で打つのでなく、目立たないダメ押しの一撃を放つ辺り鳥谷らしい。
「この鳥谷！　よけいなことを！　オレの後輩のくせに！」
大矢はあくまで、駒沢出身であり、早稲田実業卒とはいえ、早稲田大学出身の鳥谷とはなんの関係もないのに、後輩呼ばわりだ。
「あ～　仁志！　クソ！　オレの下でのお前はそんなにきびきび動かなかったろ！」
「あ～　なんでフィルダー打つんだ！」
大矢の願いは虚しく、点差は広がっていく…。

大矢のはかない夢、夢、夢

投手を繰り出せば、どこかで調子の悪い投手が出てきて歪みをきたすとは、完投絶対主義の藤田元司の言葉であるが、水原ユニオンズにも当てはまったのである。

サイドから剛球を投げ込む森安であるが、どうも調子がよろしくない。

四球、死球、死球と来てまた四球。チーム初の失点を許したかとおもうと、続く打者のなんでもない投手ゴロを弾いて、無駄な点をやってしまう。

小刻みなリレーでつないできたが、一人一回と言い渡しているために、回の途中から替えにくい。

森安任せたと、水原は仁王立ちであるが、森安はその期待に応えきれず、さらなら失点を許してしまう。

さあこれは一大事。まだ点差があるとはいえ、気を緩めてばかりいられない。

水原は、投手コーチの川崎（南海～巨人～西鉄の２００勝投手でのちの監督）をマウンドにいかせ、このイヤな雰囲気を一掃できる投手はアレしかいないと、ブルペンコーチに電話連絡を取る。

「いつでもいけまっせ」

電話を受けたブルペンコーチは、景気良くいいはなった。

すると受話器を置くと、そのブルペンコーチはウインドブレーカーを脱ぎ捨て、金網を開けて、グラウンドに飛び出てくる。

兼任コーチとして呼ばれた秘密兵器、板東英二が自ら登板をする。

マウンドに上がっても、にこにこと営業スマイルを崩さない板東。

これを見たテレビの前の斉藤明夫は思わずほくそ笑む。

「板東さんだ、こりゃいけますよ」

「バカ、明夫。松竹が逆転されてもまずいんだろ」

「ああそうでしたっけ、なら板東さんがほどほどに点を取られるこ

とを祈りましょうか」
大矢にたしなめられたら、斉藤もおしまいである。

投球練習をするが、球が走ってる様子はない。準備万端との自己申告は何だったのか。
それでも顔はにこにこと余裕たっぷり。
川崎コーチが、
「板東、おまえだいじょぶか？」
と心配がおであるが、
「そりゃあ大丈夫でっせ、ブルペンコーチがいけるいいましたから」
とそのコーチは自分なのに、どこまでもはぐらかしにかかる。
打者はめぐりが悪く、小鶴誠。
小鶴の向けてストレートの握りを見せる大胆不敵の板東。
これには小鶴腹を立てるどころか、正々堂々とした勝負をしようと目を輝かすのである。
さあ板東は、走っていないストレートで勝負するのであろうか？
いくら板東といえど、こうまで見栄を切ったなら、速球勝負だろう。
一球目…低めにすううとボールが入ってくる、小鶴待ってましたと、得意のゴルフスイング…だが、ボールは当たる寸前でストンと落ちる。
さすが坂東だ、ストレート勝負を予告して、てらいもなくフォークを投げる。
あんまとかかる小鶴も小鶴であるが、そこは昔気質の人、一本気なのだ。
二球目、これもまた坂東は予告直球勝負、まさか二度はありえないだろう、いくら板東でも…。が、これまたフォーク、これまた小鶴はスイング。
それでも坂東はにこにこ。
ああまた坂東は直球の握り…イヤよく見るとはさんでいる。フォ

ーク？　いやいやに見せかけて直球だろうと、小鶴が悩むと、またまたフォーク…小鶴は三振に取られる。
小鶴が騙せたら、岩本も大岡も騙せる。
横浜相手に三連発打ったクリーンナップをすべて予告投球で、結果すべてフォーク攻めで三振に取ったのである。
さすがペテン師板東、戦前派の頑固者を騙すのはお茶の子さいさいか。
これには大矢も拍手喝采。
「いや板東さん、すごいや抑えちゃったよ」
「でももう少し取られた方が、うちに有利になってましたよね」
「う～んそうだなあ～」
大矢もうなる微妙な点差で試合は終盤。ここで負けると厳しい立場に立たされることは承知の松竹ナインは、なんとか、ひっくり返そうと食らいついてくるのだ。
サイドからナックルを放る酒飲み三浦清弘を攻め立てると、大矢の心臓はバクバク。
「まずいよ、これ松竹逆転しちゃうよ…あれ、でも引き分けだとどうなるんだ？」
「松竹が一勝一分け、うちが次勝っても一勝一敗、勝率で負けますね」
「そうなると、同点でもだめなのか…。がんばれ～水原さんちの球団！」
どっちにつくかコロコロ変わる大矢だ。
水原はたまらずブルペンに連絡を取る。
「用意できてます」
いつのまにかブルペンコーチから関西弁が消えて、標準語に戻っている。
坂東は登板を終えると、仕事は終わりととっとと次の営業の場所にいってしまったのだ。
代わりにコーチを勤めることになった小林幹英が送り出した投手

は、切り札？　江本である。

ふてぶてしいマウンドさばきから得意のエモボール…といえばなにかそれらしい魔球に思えるが、実際はただの落ちるカーブである。好不調の波の激しい江本であるが、今日の江本はたまたま調子がよく、後続をいとも簡単に抑え込んでしまう。

「よくやった、さすがオレの同級生！」

大矢が江本を自分本位で褒めると、水原球団の打線が爆発してしまう。

三本柱がマウンドから消えて、四番手の九勝投手下手投げの井筒がマウンドに上がると待ってましたと襲いかかる。

やはり当時の選手層だと四番手以降はがくっと力が落ちるようだ。フィルダーに、代打のミサイル打線の一角、葛城隆男の一発が飛び出ると試合は大勢を決する。

最後も江本がちょちょいと抑えて、水原ユニオンズの快勝である。結果、点差は結局五点と、横浜にとって微妙な点差になった。次、横浜が勝つにしても、同じく五点差が必要なのである。

「おいおい田代に明夫…五点差だって、よ五点…。いっそ諦めるか」

大矢が早くも白旗降参ムードになったなか、お立ち台に上がった江本が大矢に救いの手を差し伸べる。

「松竹打線？　水爆だが原爆だか知らんが、しょせん化石チームや、ぜんぜんたいしたことなかったわ」

得意のビッグマウスを並べると、

「おう大矢見とるか？」

いきなり自分の名前がテレビに出て大矢、びっくり、つまんでいたみかんを喉につまらせる。

「同級生のよしみにええこと教えたる。お前抽選会でクジひいたやろ？　あれ不正があってな、松竹のオーナーのおっさんな、初めから０８になるように仕組んでおったんや」

そのタネは単純そのまま。用意されたくじのどれをひいても０８だったのである。

「でお前は、クソみたいなチーム率いることになってかわいそうやったな。オレらにしてもな、０８年の横浜などに勝っても当たり前すぎて歯ごたえないからな。ひとつチャンスをやろうか、これは水原監督以下も同意してくれたんやが…。六十年の中から好きなチームを選び直してもええよ」

大矢はおもわずはっとする。

「なに？」

「いまから、ここにＦＡＸの番号でるから」

江本が宙をなぞると、画面に数字が出る。

「今すぐＦＡＸで送ってくれや」

「明夫、ファファファックス、あるるるっかかか？」

「はいここに…」

大矢が希望する年度といえばあの年しかない。

「９８年だ、９８と大きく書いて番号どおり送ってくれ」

「はいただちに」

大矢は幻の日本一監督だ、ついに夢の９８年チームの指揮を取れるのだ。

焦っていても大矢に抜かりはない。書き間違えの多い田代に指示を出さず、斉藤に出したのである。

斉藤は９８とマジックで大きく書くと、すかさずテレビの番号を打ち込んだ。

ここまでミスはない。

９８と書いてし、番号も間違いない。

が、遅かったのである。

斉藤のＦＡＸが届くその前に、すでにＦＡＸ用紙を持ったスタッフが江本にかけより手渡していたのである。

誰が？　そりゃ番号出てるし。

なんのために？　そりゃいたずらだろ。

罪悪感は？　あるわけない。

江本は内容を確認すると、テレビカメラに向かって差し出した。

「８９年、大矢は１９８９年の球団を選んだ」

数字は同じでも並びは違う。

８９年、大洋最後の最下位の年…。

「９８年、９８年、日本一の球団の監督…」

大矢の夢はまたも吹き飛んだのだ。

なお斉藤の送ったＦＡＸは無事球場に送られたが、いたずらと判断されて丸めて捨てられた。

田代と斉藤明夫の変貌

８９年の横浜とは、どんなチームなんだろうか？

チームはまだ横浜大洋ホエールズのころで、　監督は古葉であるが、率いるのはもちろん大矢。

パチョレックとポンセの優良外国人が在籍するが、ポンセは前年二冠王の輝きなく、物足りない数字で、パチョレックは、打率はいいとして、長打力が足りない。

その外国人二人の脇に四番に座るのが、山崎賢一である。

外野手のベストナインの三割打者であるが、個性的なこけしバットを短く持ち、小さく構えるその姿は四番の名にふさわしくない小物ぶりを発散してる。

クリーンナップがこれだから、一、二番や下位打線は推して知るべし。

三割の常連の高木豊が２７８に終わり、屋鋪にいたっては２０６の散々な数字が並ぶ。

打撃もひどければ、投手もひどい。

抑えの中山が前年の登板過多の影響で一勝十敗に終わり、先発にいたっては新浦や遠藤のロートルに、大門、欠端の二線級頼りなのである。

のちのエース野村弘樹もローテの一員であったが、二年目と経験浅く、大きな負け越しを喰らっている。

大矢は、０８年のチームと何が違うのか頭を悩ませていた。

長打力は、村田、吉村のいる０８だろう。抑えだってこの年なら中山より、寺原が上。先発もどっこいどっこいであるが、０８のが若さがあり三浦という柱がいる。

走力は、スーパーカートリオの名残りのある８９に軍配が上がるが、守備力は大きな違いはないだろう。

なんだ、０８とどっこいの戦力どころか、得点力に欠ける分８９のがひどいチームじゃないか。

そいえば記憶にある、８９年は横浜博の年だ。博覧会もひどければ、大洋もひどいと叩かれていたことを大矢も記憶している。

これで０８横浜を打ち破った松竹を一蹴した水原球団にどうやって勝てというのだ。

絶望的。

大矢の脳内に、その三文字が浮かんだが、やがて的がとれて、二文字となる。

絶望。

おおよその観測の雰囲気は消し飛び、確定事項だ。

勝てるわけがない。

大矢は、メモ帳に、記録の本に掲載されている８９年のベストオーダーをそのまま書き写して、床についた。

翌日、この試合も横浜のホームであるスタジアムで行われる。

横浜がホーム二試合の運びになったのは、地理的、興行的観点と、勝って現状維持の球団に対するささやかなアドバンテージである。

横浜、いや大洋のオーダーは、８９年の基本的オーダーそのまま。

高木４　銚子５　ポンセ９　山崎７　パチョレック３　屋鋪８

高橋雅６　市川２

先発は、新浦を送り込んだ。

「上位はまだ見れるけど、下位の酷さはなんだよこれレベルだなあ」

大矢は今更嘆く。

「なあ田代」

いつもと同じように田代に同意を求めるが、この年の田代は管理職でなく、現役の打者。

しかも、控えとして悶々としている頃で、大矢にも、上司として

接しない。
「はあ…オレはその下位にも加われないほどのレベルですが」
田代はどこかいじけている、そんな投げやりの田代は相手にしないと、斉藤明夫を話に相手に変える。
「なあ明夫、先発もひどいよなあ？　新浦しかいねーんだもん。遠藤は故障明け、野村もペーペーでさあ」
「あ？」
斉藤も現役投手の一員で、まだギラギラとしている頃だ。新浦しかいないといわれちゃあ、気分はよろしくないのも当然。
「あ？　ってオレは監督だぞ」
大矢も、勝手が違うことを承知しているのだが、思わずいい返してしまう。
「なんで大矢さんが、うちの監督なの？」
現役時代の斉藤明夫にとって、大矢＝ヤクルトのイメージなのである。違和感を感じるのも夢裏はない。
ユニフォームにしたって大洋のマリンブルーと白のコントラストのおしゃれな大洋ユニに身を包んでいる中、大矢だけはベイスターズ仕様のユニである。
「明夫、そりゃあいろいろあってなあ…。まあ説明すると長くなる、とりあえず試合に集中しようや」
とりあえず試合は始まる。

大矢の場違いなスモールボール

新浦が、スライダー、スクリュー、パームと得意の多彩な変化球で、水原球団をゼロに抑え込むが、大矢の不安は一層されない。

「どうやって勝てばいいんだよ」

大矢は思わず漏らすが、勝つだけでは、話にならないことを忘れている。

最低でも5点差をつけなければ、得失点差での逆転は不可能なのだ。

たとえ大矢大洋が、完全試合で勝ったとしても、四点しかとれなかったら、実質的の敗北である。

いかにして五点以上をとるのかが、采配の肝であるが、水原球団の先発のミンチーが高木豊に四球を与えると、大矢は迷わず、

「バントで送って先制点狙いだ。短期決戦ほど先取点が重要になってくる」

眼鏡をずらして、ナイター照明を浴びさせると、レンズがきらりと光る。

「さあ銚子よ、送れ」

銚子の一塁手へのバント、これを指名打者制度のないこの試合、一塁に入ったフィルダーがお手玉して、銚子も一塁に残る。

結果は吉と出たが、策としてのバントには疑問の余地が残る。

そうだろう、そうだろう。

五点が最低必要なのに、一点を取りにいってどうなることか。

ポンセがミンチーの外に流れる大きなカーブに腰砕けになって、結果的に二塁と三塁に走者を進めても、大矢だけが喜ぶ。

「いいか！　今のは同じアウトでも、プロダクティブアウトといってな、自分が死んでも最低走者を進める生産的なアウトなんだよ！　覚えとけよ、大洋の大味な野球の教科書には、載ってない言葉だ

と思うから」
大矢は得意気になって素早くサインを三塁コーチャーに出す。
「スクイズだ、スクイズ！　確実に点を取りにいくぞ」
四番にスクイズ。
「山崎は非力な四番だ」
とはいっても、五点が必要な現状、四番がスクイズで一点を取りにいくのはいかがなものか。
一点はやるとばかりにシフトを取る水原球団は、スクイズを成功させて、アウトをひとつ増やす策を取る。
くれてもらった得点なのに、大矢は大喜びである。
「よっしゃ！　先取点取ったぞ！」
ベンチはさほど活気づかない。大矢采配に疑問があるためだが、監督には逆らえない。
ただ斉藤明夫がくさすだけだ。
「五点とらなあいかん試合なんやろ？　一点とってどうするんだ、ああ？」
「なんだ、明夫、采配批判か？」
大矢が睨みつけるが、斉藤のなまずひげはそのていどでびくつかない。
大矢に何をいわれても我れ関せずである。
斉藤が指摘するのも無理はない。先発のミンチーがそれだけ乱調なのである。
四球に失策で投球を乱し、大矢が動かず、放っておけば、大量点が望めたほど、ストライクとボールがはっきりとしていたのだ。
大矢のもぎ取った一点は、数分後に、はかなく消える。
フィルダーが失策の汚名返上とばかり、超特大の横浜スタジアム場外に出る一発を放ち、あっという間に追いついたのである。
フィルダーといえば、８９年の一年だけ阪神に在籍経験があるのだが、まさしく今戦っている大洋の年度だ。
しかも大洋投手陣は、１６本のアーチを献上するほどフィルダー

のカモだ。単純計算すると、５×１６で８０、もし相手の五球団がすべて大洋なら１３０試合で年間８０本の本塁打となる。

それほど相性の悪いフィルダーに、えいと勝負にいくバッテリーは何を考えているのか。

「あ、フイルダーって誰かと思ったら、あのアメリカ帰って打ちまくったやつか」

監督大矢がこの調子ならしかたないことか。

彼らはなぜ、パウエルを取り合ったのか

「うむむ…新浦じゃもたないなあ。早めにブルペンに肩を作らせておくか」

ベンチ横の控え選手が書いてある黒板を見ても、頼りない投手ばかりだ。

「大門、欠端、松本…うむむ。あれ、明夫？　そうか明夫がいた、よし明夫、ベンチに座ってないで、肩作ってこい、二番手でいかせるから」

「は？　監督、今年のオレは先発ですぜ」

８９年の斉藤は先発に返り咲いて二年目。

「そこを何とか頼むよ、明夫、お前の度胸がこういう決戦には必要なんだよ」

「ふ～ん」

「ふ～んじゃない、監督命令だ」

カーン、乾いた音が響き渡る。

「ほら、また打たれた、早く、明夫、お前以外ろくなのがいないんだ」

「へえへえ」

斉藤がようやく立ち上がると、ベンチ裏に消えた。

「ふう、ようやくわかってくれたか、しかしロートルの扱いは大変だわ」

大矢はまた忘れている。やっかいなロートルが斉藤だけでないことを。

加藤博一がいる。片平晋作がいる。遠藤一彦がいる。そして田代までいる。

おまけにこうるさい高木豊もいる。

高木をのぞく、彼らはすでに力が落ちた選手、それでいて試合に起用しないとむくれるのだから、やっかいなものである。

「うむっっむむっむ…また走者を出した…もう我慢できん」
大矢はブルペン連絡用の電話の受話器を取ると、まくしたてた。
「用意はできたか、用意は？」
「へいへい」
ブルペンコーチを通り越して、斉藤が受話器を取ると、気のない相槌を打つ。
「そうか、明夫行ってくれ」
大矢は主審に交代を告げる。
「ピッチャー斉藤明夫」
リリーフカーに乗った斉藤が出てくるのであるが、明らかに気乗りしていない。
投球練習を繰り返すが、ボールの走りが悪い。
「おいおい明夫、まるで準備できてねーじゃん」
斉藤は、口だけで、ろくに肩を作っていなかったのである。
不満分子の反乱？　いやいやそれでも斉藤明夫はスローカーブを見せて、仁志、清水の一、二番を四角い顔で凄んで、ビビらせて、抑え込んだのである。
球速１３０に満たないボールを武器に、顔で抑え込むのだから、さすが、斉藤明夫である。

水原が、ミンチーに替えてマウンドに送り込んだのは、パウエルだ。
二重契約で味噌をつけたが、実力は本物。長身からの大きなカーブと速球のコンビネーションは、大洋小粒打線を戸惑わせるだろうか。
ところが、このパウエルもミンチー同様足元がおぼつかない。
水原は首をひねる。最多勝を取った外国人投手が漏れているからと聞いて、入団を要請したのに、聞き間違いか。
そういえばミンチーも、防御率のタイトル保持者のわりにピリッとしなかった。

水原は致命的なミスを犯していたのだ。

ギャラ交渉の段階で、インセンティブの付帯条項をつけずに、契約するだけで満額出る提示をしてしまったのだ。

インセンティブ契約になれていない水原が犯したミスであるが、契約したら、勝ちとなれば、パウエルは燃え上がらない。

きれのないボールで、つるべ打ちにあう。水原は、今更ながら、勝ち上がらないとギャラが出ない方式にしておくべきだったと悔やんでも遅い。

水原がベンチを出て、交代を告げようとするが、パウエルはこれを断固拒絶。

なにやら、起用法も契約条項に入ってるようで、一イニング以下の交替には本人の同意がいるのである。

大矢の相変わらずのバント作戦で、アウトをもらうが、パウエルが一回を投げ終わったあと、大洋がリードをしていたのである。

まさにパウエルさまさまであるが、大矢は自分の手柄だと勘違いする。

「さすが名将大矢！　こんなチームを勝たせるなんて！」

試合はまだ序盤なのに、この調子であった

。

彼らはなぜ、パウエルを取り合ったのか（後書き）

そろそろ大矢にも飽きてきたから、次かまたその次あたりで終わり

パンパース捕手登場!?

水原はわかっていた。

この試合が、横浜にとってなんの特もない試合であることを。

水原ユニオンズが十二球団による十二球団のための幸せなる祭典を破壊しにきた侵略者であることを。

だから手加減を加えたわけでもないが、試合を作っている節があるのだ。

「勝たんでもええ。うちが勝っても試合自体は盛り上がらないからな」

水原にしたら四点差負けでタイ。三点差負けなら水原の勝ちの試合であるからだ。

ならば、観客と視聴者を楽しませてやろうとのねらいだ。　だからパウエルの降板にこだわらず、続投させたのだ。

大矢大洋が、四点差にして、あと一点だと一気呵成に盛り上がると、涼しい顔で、フィルダーが今日二発目を放ち、三点差にする。

それでも大洋は、めげずに、立ち向かってくるのだから、試合は放っておいても盛り上がる。

「あ、いけね！」

荒れ球左腕の田辺が仁志のどてっ腹に当てたのだ。田辺といえば、８９年と大矢横浜初年度の９６年をつなぐ数少ない投手の一人であるが、ノーコンで気が弱いのはかわらず。

年下の仁志は、先輩田辺にも臆せず、帽子をとっていないじゃないかとにじり寄る。

仁志がマウンドに向かうのを、捕手の市川が止めに入るが、仁志が応戦して、小競り合いに発展する。

それ乱闘と、飛び出した水原球団の荒れた連中。若菜が捕手のポジションを奪われた恨みとばかり市川に殴りかかると、若菜と舌禍

事件の因縁のある加藤博一が、若菜を羽交い締め。
乱闘の輪は広がるばかりと思いきや、これも水原がとった盛り上げるための演出、客が湧き上がるのを見ると、さっと自軍の選手を引き上がらせる。
手際の良さから、審判は誰にも退場を言い渡せず、試合は続行。
それでも被害者は出た。市川は若菜に殴られたさいに、首を痛めて、負傷退場だ。
「お～い、誰か替わりの捕手はいないか」
控えリストの黒板を見る大矢。
捕手の欄には、谷繁、堀場、宮里とある。
「宮里？　ありゃせんよ、あいつは外野手だ」
この年の宮里は、たしかに捕手兼任外野手、しかもその宮里を捕手に戻そうとしたのも監督一年目の大矢である。
「堀場？　ないない…打撃でいっぱいだ。ん？　谷繁…谷繁？　なんだ谷繁がいるじゃないか!!　早くいってくれよ、スタメンで使ったのに」
ベンチにはまだ大矢が鉄拳をおふるいつつ育て上げた捕手、谷繁がいたのある。
「谷繁!!　マスクをかぶれ!!」
谷繁の背中をどんと押して気合を入れるのだが、谷繁は、今の中日でみせるような男臭さもなく、
「はあん？」
どこか甘い。高卒一年目のころの谷繁であるからしかたがないか。
「いけ!　谷繁!」
「ふへえ？」
「試合だ、試合!」
「ああ、試合ですかあ?!」
それにしても頼りなさすぎるが、大矢はそこにも気がつかない。
「谷繁なら、リードも、肩も、キャッチングも、ブロックもなんの心配もいらない!　オレの育てた谷繁だから!　おまけに意外性の

一発もあるよ、う〜ん」

が、谷繁は、替わった大門のフォークを思い切り弾き、仁志を二塁に行かせてしまう。

それもワンバウンドしてるわけでもない、捕りやすいフォークだ。

「おかしいな、試合に入りたてで体が反応しなかったのかなあ？」

大矢は首をかしげる。

捕球がおかしければ、配球もおかしいのだ。

清水といえば、ストライクゾーンに来たボールを積極的に振る打者である。

大矢も８９年型谷繁は清水の特徴をよく知らないとみて、口酸っぱくいったのだ。

「清水にはボール球を使ってせめろよ、谷繁」

その清水に、谷繁は、フォークがボールになったあとの二球目、大矢のお小言が、右から左に抜けたがごとく、みえすいた配球をするのだ。

安易に甘いカーブでストライクを取りにくると、清水はこれを強振。

打球は一塁線を抜けていく強烈なライナー、仁志は三塁を蹴って、ホームをつく。ライトのポンセから好返球が返ってくる。

アウトのタイミングであったが、谷繁のブロックが甘い。いや甘いどころか、仁志のスライディングを怖がって、ブロックにもなっていないのである。

悠々と仁志が滑り込むと、谷繁は儀礼的にお嬢さんタッチも、判定は当然、セーフ。

「こら〜　谷繁！　なんだそのブロックは！！」

大矢がいまさら切れても遅い。限定復活した８９年の谷繁を叱って成長させたからといっても無駄だからである。

大矢もそれに気づいたか、気づかないのか、怒りを沈めると、

「まあ何事も経験だ、うんうん」
だから無駄だってば。

だめ捕手、谷繁の登場で、大矢大洋の劣勢…？　と思いきや、大矢の継投策がはまるのである。
大矢の継投策がはまったのは、ただの偶然であった。大矢だからといって、たまには采配が当たる。そのたまに、ほんとうにたまにが、この大事な場面に出たのである。

試合は終盤に向かう。ところが、ここでまた試合は、困った展開に陥る…。

今日の大矢はすこぶる調子がいい

試合は八回の裏、大洋の攻撃、大洋のリードであるが、点差は三点なのである。

「ふふふふ、勝った、勝った。こんな弱くて惨めなチームを勝たせるなんて、オレって名将だなあ」

たしかに、今日の大矢采配はズバリと当たっているからして、今日の大矢は名将かもしれない。

が、点差は繰り返すが、三点差である。

「監督、この試合五点差ないとまずいんじゃなかったんでしたっけ？」

リーダー格で、大洋にしては理論派である高木豊がそっと進言をする。

「ん？　ああ！　そうだった、そうだった！！　五点差だよ、五点差！！」

大矢はスコアボードを見た打線は下位だ。

「下位で、二点…。マサ、谷繁、投手で二点…うむむむ。そうだ！　いいこと思いついた、九回にわざと追いついて裏でサヨナラ満塁弾で四点差勝利にすればいいんだ！」

名案が思いついてそれかよ。

「あれでも、四点差だと得失点差は並びだ…。並びだと、どういうルールなんだっけ…。おい豊！大会要綱の紙、持ってこい」

「へいへい…」

豊がいやいや、壁に下げてあった紙を持ってくると、大矢は奪うように取る。

「なになになに？　得失点差が並んだ場合は合計の本塁打数で決着をつける？　今、うちは、昨日の村田で二発だけ…。むこうは昨日の合わせて、六発…。う〜む、そうだ！　五者連続で打て！」

めちゃくちゃいうな。

「と待てよ、五連発なら余裕で、五点差以上じゃないかい」
そりゃそうだ。
「五連発打てるならとりあえず連発して五点差にしろ！　おいマサ（高橋雅裕）狙っていけよ！」
この年の高橋の本塁打は３０５打席たって、たったの二本。通算でもわずか１４本の選手である。
ところが、大矢の気合が乗り移ったのか、水原球団の大矢根の甘くなったボールを捕らえると、打球は右翼席に飛んでいく。
「ほらオレの指示どおりだよ！！」
大矢は涙をちょちょぎらせて、高橋は拳を上げる。本塁打だ、滅多に出ない本塁打がここで出たのである。
「あと一点だ！！　谷繁！　お前も続けよ！」
連発？　のちにシーズン２０本を幾度と記録する谷繁でも、８９の谷繁はプロとして非力。
高橋に谷繁が続くなんて、万の一の確率である。
「いけえ！！」
だが、今日の大矢は幸運が乗り移っている。
長嶋に食ってかかったことで有名な強気の大矢根であるが、負け試合の登板となると、気合が乗らないのか、谷繁にもボールが甘く入る。
谷繁のむちゃ振りが、たまたま真芯を食って、打球は左翼席めがけて飛んでいく。
「うっひょおおおおおおおおお！　連続！！　連発！！！！！！」
大矢の興奮が最高潮に達すのもわかるが、打球はフェンス手前で失速する。
大矢は一転、うなだれて、ベンチに腰をかけるのだが、勢いはまだ失っていない。
「よし、投手の打席だ！　代打だ！　代打！」
代打の顔ぶれを見る。まだ田代がいるじゃないか。８９の田代といえば衰えきっていたのだが、長打力はまだまだ大洋の野手陣では

あるほうだ。

「田代！！　いやまてよ、石橋！　お前いけ！！」

大矢が指名したのは、田代でなく外野の守備要員の石橋である。

「なんかひらめいた」

ひらめき！　いつもの大矢なら大矢のひらめきなんてとなるところが、今日の大矢は違う。

「代打石橋！！」

石橋のけつを叩いて送り出す。

「一発だ、一発！！！」

石橋といえば、一試合三本塁打があまりにも有名であるが、それはまぐれであり、通算はたったの六本塁打、つまり一試合でプロ人生の半分を打ってしまったのである。

石橋にはもう幸運のメーターはゼロだ。

メーターがつきたのだから、酔っ払って須藤監督にからんで、それが原因で干されたんだ。

それなのに、石橋は後光が差している。切れた幸運メーターに何がやってもうまくいく大矢が新たなる運を注入したのだ。

石橋は打つ、ボールは一直線にバックスクリーンに飛び込む。

まさかまさかの本塁打で点差は五になる。

完成寸前のパズルを、きれいにぶち壊すのが、いつもの大矢野球であるが、今日の大矢は、詰めも念入りである。

この年不調の中山を「最後の一回を任す、一回を全力でいけば抑えられる」と暗示をかけて。送り込むと、何敵フィルダーをきってとるなど、快投を見せて、ついに…。

「あと一球、あと一球…」

スタンドからの声援をバックに、中山が最後の打者の代打興津をフォークで空振りに取ると、

フォークが捕りきれない谷繁がまごつく場面もあったが、一塁に送

球してスリーアウト、試合終了。
点差は五点、松竹、横浜、水原が三すくみになった結果、得失点差で横浜の勝ち抜け、いや下克上を退けることが決定。

「やったあああああ～」
大矢は一人マウンドまで走るが、ナインはいたって冷静。それもそのはず。現状維持をはたしただけなのだから。しかも大洋ナインに、ほとんど関係ないし。
「あれ、胴上げないの？」
そこまでねえよ。

今日の大矢はすこぶる調子がいい（後書き）

松竹水原下克上シリーズ全二十話て

今数えたら１５０話中大矢主役が３２話

こりゃ人気落ちるわ

どっきりマル秘報告

「かんぱーい！」
横浜某所では、水原ユニオンズの解団式と称して宴のまっさなかである。
「いやあ、みな、ようがんばったなあ」
「監督こそ、見事な采配ぶりでしたよ」
敗退が決まったのに、見事な采配もなにもないものであるのだが。
「まあな、しかし苦労したでえ。どの投手に打たれる役目を演じさせるか」
「ワシは演技でも打たれるのはいや」
「江本がそういうなら、引き受けてくれたパウエルやミンチーには頭のさがる思いだ」
「ＮＯ、ＮＯ、ＢＯＳＳ、アリガトネー」
「パウエルのやつ失点ごとにインセンティブがつくと条項に入れたら、はりきって、甘いボール投げやがって」
「ＦＯＦＯＦＯ…」
臨時収入にパウエルは笑いが止まらない。
「それに、大矢根や。お前が非力な打者に見事な一発、いや二発を献上してくれたおかげでどうにかなった」
「あんなもん、お茶の子さいさいや。ハーフスピードのストレートをピンポイントに高目の一番飛びやすいとこに放るなんて、制球のあるワシにしかできんよ」
「それにしてもよう飛んだな」
水原が感心すると、若菜が話に加わる。
「僕がこっそりと、スーパー飛びやすいボールに替えておきましたもの」
「そうか、さすが空タッチでセーフをアウトにした捕手やな」
「ふふふ、ちょうど主審が、僕のライオンズ時代の後輩の山本でし

たから、ちょっと先輩風、吹かせてね、ボール袋ごとそっくりと」

「しっかしまあ、大矢の采配にはヒヤヒヤしたわ」

江本は得意のなめらかな舌鋒で、大矢采配を腐す。

「ミンチーが何点でもくれてやると、わざと走者だしてるのに、送りバントだの、スクイズだの、セコセコ一点狙いにきよってまあ。オレの同級生とは思えんわ、うへへへ」

「それにしても、フィルダーよ、お前はすごいのう」

巨体をゆらし、目一杯に、つまみをほおばるフィルダーは、水原の言葉はわからずとも笑顔を見せる。

「一発目の場外弾もとんでもない当たりやったが、二発目の当たり損ないを力でねじ込むんのもすごかったのう」

「いや、それ以上に凄かったのは、最後の打席、ここで一発出たら、四点差になる場面で、オレ（江本）高知商業の後輩の中山の打ちごろのボールを我慢したとこやね。あんなんオレでもスタンドに放り込めるわ、ウへへへ」

年長者が讃えあう中、仁志たち若手選手は、不満げである。彼らは水原の輪とは、離れたところに固まる。

「お前はどう思う、鳥谷？」

「複雑ですねえ」

「そうだろう？　オレもそうだ。水原さんのミーティング聞いたときは、はらわたが煮えくり返りそうだったよ」

「まさか、わざと負けろとおっしゃるとはねえ」

「連勝で勝ち上がるって、打倒巨人、打倒原辰徳の気持ちが一気に萎んだよ」

「僕たちは、盛り上げ役」

「しかも、乗り込んできた松竹ロビンスをていよくお帰りになられるように、急ごしらえのとっかんチームだってよ」

「あ、でも松竹に勝てたよかったですよね？」

「まあ松竹は歯ごたえあったな。投手陣が連投でなくフレッシュな状態なら、危なかったかもしれない。しょせん、六十年前のチームとなめていたのオレがおろかだったよ」

ことの起こりはこうである。

松竹のオーナー、田村駒次郎が、日本野球機構に乗り込んできた。

「わしらをあの世から呼び寄せておいて、野球もさせずに、お帰りくださいって非人道的やろ！」

正論を用いて説き伏せるだけでなく、しかるべきところに訴える覚悟があると強気に出るのだ。

裁判の二文字が出ると日本人は弱い。しかも、田村は日本野球の草創期の功労者、むげに追い返すわけにもいかず、野球機構は条件付きで参加を認めた。

それが今回の入替え戦である。

田村は、一番弱い球団が初代セ・リーグ優勝球団の松竹と入れ替わることによって、興行的安定とファンの興味を引き起こすと、譲らなかった。

田村が指名した最弱の球団とはもちろん横浜である。

慢性的赤字の続く野球機構は、興行的の効果に心ひかれたが、いまさら松竹を横浜に変えたら、緻密に設定された日程の問題や、一般向けに販売を開始した全試合通しのチケットや、横浜を載せたガイドブックなどの回収で、それ以上の赤が出ると判断した。

ならば、松竹を利用して、入替え戦を盛り上げて、ひと儲けしてやろうと目論んだが、横浜が松竹に勝てる保証はない。

そこで急遽俎上に上がったのが、水原が指揮する、はぐれものの球団の設立である。

敗退行為であると、当初乗り気はなかった水原。

それでも野球界振興と大会の盛り上がりに一声借りられるならと、寛大なこころで引き受けたのだ。

さらにいうと、水原や江本らは、すでに多くの解説、評論の要請

が舞い込んでおり、それが大会出場のギャラをはるかに上回っているという金銭的な事情もあったようだ。だから、敗退することに躊躇ないわけである。

たとえ松竹が横浜に勝ったとしても、松竹を打ち破るだけの実力者を揃えた水原球団が、松竹に勝ち、水原球団がわざと横浜に負ければ、タイで並ぶ。

タイで並んだときの条件を設定しておけば、策士でもある水原は、うまい具合に負けてくれるだろうとの企みもあった。

問題もある。水原球団が実力、魅力ともに、横浜のそれを凌駕することだ。大矢横浜よりも、

三原や巨人と因縁ある水原が大会に加わったほうが、盛り上がるのは自明の理。

しかし、楽天の参加も認めないのに、歴史的に根のない球団を加えるのには、興行優先も度がすぎる。

ならば、水原のメンツをとって、松竹球団も充足させて、横浜を生き残らせて、野球機構も儲けるのには、今回のようにやるしかなかったのだ。

水原は、急造チームが、優勝球団松竹を破ることで、三大監督の采配の妙を現世にアピールできた。

松竹は、試合をすることで、一応の欲求を満たした。

大会最弱とされてお荷物の声の高かった横浜は、大会前に真剣勝負をすることで、勢いをつけて大会に望めることになった。

野球機構も、三試合で八万近くの観客と放送権料で、莫大な大会運営費用の一部を補える財力がついた。

つまり、すべてがうまくことが運んだのであるが、それも大矢の突然の采配能力の開花のおかげであることは誰も知るよしはない。

水原球団ナインは、自分たちは道化と納得つつも、一部、仁志らの反乱分子は本気で勝ちにいっていたのだ。それを防いだのが、大矢の見事な継投であり、選手起用だった。

大矢の突如開花した采配能力は、あの日限りの徒花なのか、それ

とも大会本選でもいやおうなきに発揮されるのか…。

それはまだ誰にもわからない。

断ち切る勇気

「もう一度聞く。本当にいいのか？」
「悔いはありません」
「本当か？」
「ええ」
「それなら、とびこめ」
見張り人である鉄仮面・加藤初がそういうと、田中浩康は、自ら飛び込んだダストボックスに吸い込まれいく。
加藤は、田中が塵になったことを確認すると、ボックスの扉を閉めた。
「ふう」
仕事を終えた加藤が、ため息をつくと、ダストボックスの向こう側から、新たなる田中が現れた。
「無事、完了したか」
再び、この世に、現れた田中と吸い込まれた田中には、さほどの差異は見受けられない。
「変わったか、戻ったか？」
加藤の抽象的な問いに、田中は答える。
「そりゃ、たいして変わりませんよ、僕は07年のベストナインの時に、体を復元しただけですから、たった二年です…」
「そうか」

巨人からの誘いも、西武からの誘いも断った加藤は、水原球団にも加勢せずに、野球機構からある仕事を引き受けた。
選考から漏れて、用のなくなった、体を全盛期に復元した選手を始末し、それを見届ける役目だ。
田中浩康は、二塁手に人材を欠くヤクルトにとって、有望なスタメン候補の一人であったが、

遊撃池山、二塁手宮本の流れには逆らえず、守備の達人ながら、基本的に二塁しか守れない田中は、二塁、遊撃、三塁、両翼と、どこでも守れる土橋の後塵を排したのである。

機構側からしても、過去の田中がいつまでも、世の中に出回るのは、たとえ、大会期間中であったとしても、世間体が悪い。

ならば、本人が了承するのならば、タイムカプセルのすぐ近くに、体を元に戻すダストボッグスを用意したのである。

加藤はその任務を与えられたわけであるが、何があっても、顔色一つ崩さない加藤は、見届け人に適任ある。

「……」

それにしても暇だ。

田中の後に、やってくる選手はいない。

なぜなら、一度全盛期に体を戻すと、元に戻る踏ん切りがつかないのだ。

田中のように、まだ若いなら、体を戻したところに違いはない。

ところが、引退選手となると、顔つきが若くなるわ、体型は引き締まるわ、髪の毛はふさふさだわ、体力はあるわ、となると、当然、女にもてるわで、なかなか元に戻したがらないのだ。

機構は、選手の早期復元を推奨し、早ければ、早いほど、高くなる報奨金も用意している。大会終了後の復元だと、報奨金は限りなくゼロになるが、若さは尊い。金の大小には、かえられないのである。

暇でしかたない加藤は、脳内で麻雀をはじめる。参加メンバーは、加藤に、同期の東尾、太平洋クラブ時代の先輩土井に、巨人時代の先輩柴田である。

加藤以外の三人は、いわくつきの面子であるが、加藤に他意はない。ただ思い浮かんだのが、この三人であっただけだ。

「うへへへ…初、また勝たせてもらったぜ」

脳内の東尾が勝ち名乗りを上げれば、
「まてトンビ、勝ち逃げは許さんぞ」
加藤は脳内でもニヒル。
「ん？　なんか店内、ざわついてきてで。サツ（警察）のガサ入れか？」
「騒ぐな、トンビ。サツぐらいで」
「そうそう、続けようぜ」
「なんや、土井さんに、柴田さん。賭け事でエライ目にあってるのに、安閑としなさんな」
「トンビ、賭博でエライ目にあったのは、お前もやろ」
三人のしょうもないやりとりに、加藤は表情を崩さない。

加藤の脳内麻雀が煮詰まってくる頃、ずいぶん久しぶりに、来訪者が来た。
「小池か」
「加藤先輩どうも」
現れたのは、小池秀郎だ。
「なんだ、小池、オレが亜細亜出身って、よう知ってるな」
「中退であろうと、チェックしてますよ」
「お前が、ロッテに決まったとき、オレも、学生に混じって、え～と叫んだもんだ」
「加藤さん、後輩でも同輩でも、ないでしょ」
加藤は冗談を言うときも、表情を崩さない。加藤と同じく孤高の人である小池も、冗談を冗談として流さない。
他人に興味を抱かない二人の間の冗談は、冗談にならず、ただ目前を通り過ぎていく。

「それで、お前も決心ついたのか？」
「はい」
「お前、八球団競合いしては、期待はずれだったなあ。だが最多勝

取った年もあった
それでも選考から漏れたのか？」
「一応、候補には入ったみたいですね」
「候補なら、元に戻すことはない。けが人や不調で生じる空きを待て」
「最多勝取った年でも、大学の絶頂期にはほど遠いんです」
「最多勝取った年より、大学時代のが上だって？」
「ええ。大学時代の調子なら、１５どころか、２０は勝ちましたよ」
「なら大学時代に戻せばよかった」
「機構に掛け合ったんですけど、認められなかった。あくまでプロ時代限定らしいです」
「そうか、なら飛び込めや」
「はい」
小池は躊躇なく、ボッグスの穴に落ちていく。
飛び込むと腹を決めても、いざとなるとためらう者もいる。加藤は、そんな輩の背中を押す役割であるが、小池には必要なかった。
元の年齢に戻った小池は、加藤と目を合わせることなく、静かに消えた。

「……」
加藤は、また脳内で遊びをはじめた。
「お～い、初、中座すんな」
東尾の叫びにも、耳を貸さない加藤は、勝手に違う遊びをはじめた。
「にらめっこ、しましょ、あっぷぷ」
ブラッドリー、高木守道、サンチェなど、球界きっての無表情たちを集めて、にらめっこ大会である。
笑わないことが家訓の高木や、宗教の教えであるブラッドリー相手は、いくら加藤でも、さすがに強敵だ。なかなか勝負がつかない。

「あのう…」
誰かが加藤に話しかけるが、勝負に熱中している加藤は気づかない。
「加藤さん」
男は、しびれをきたして、肩を叩く。
「あぷぷぷ」
「え？」
男は、加藤の風評と違う第一印象にとまどいを見せる。
「あのう…」
「なんだ、今岡か」
醜態を見せても、加藤はそれでも鉄仮面だ。
「お前のような実力者が、なんでだ？」
「わからんですよ、これぱっかり…」
「打点王だろ？　首位打者だろ？　内野ならどこでもできるんだろ？」
「それでも、いらんいわれました…」
「阪神の内野は、吉田さん、藤田平さん、岡田、掛布、バースか。確かに強敵ぞろいだな。それでもお前の実績はひけをとらんだろ」
「僕もそのはずやったんですけど」
「たとえば、走者が溜まったときに、代打で勝負強いお前が出てきたら、投手としては溜まったもんやないな」
微妙にだじゃれを交えてるのだが、今岡は気づかない。
「僕もそう思うですけどねえ、これぱっかりは、首脳陣が決めることやから…」
「決心ついたか？」
「……」
「ついたか？」
「……掛布さんあたり、酒で不祥事起こして、オレ替わりにいけるかもしれんなあ」
「決心ついたか？」

「岡田さん、よう考えたら無冠やん、オレ、タイトルホルダーやで」
「決心ついたか？」
「……長打のない和田さん入れるなら、オレやろ」
「ついたか？」
「……髪の毛も、このとおりまだあるしなあ…」
「やっぱ辞めるか？」
「……いかせてもらいますわ」
今岡がようやく覚悟を決めると、加藤はボッグスの扉を開けた。

「頭からいくんと、足から入るの、どっちが多いですか？」
「半々だな」
「加藤さんなら、どういきます？
「そんなこと聞いてどうする」
「いえ、参考までに」

覚悟を決めたはずの今岡であるが、無駄に時間稼ぎをして、なかなか飛び込まない。
「足からいかせてもらいます…。頭からやと、頭打って、またハゲそうやし」
右足を上げて、穴に突っ込む。
「さゆおなら、神より勝負強い今岡よ…」

「今岡、今岡おるかああ？」
なにやら、今岡を呼び止める声が後方からかかる。
「誰かが俺をよんどる？」
振り返ると、そこにいたのは…。

断ち切る勇気（後書き）

そろそろラストかなあ

ＴＢＳの野心

「いまおかあああああ」
「桧山さん、オレになんか用ありますか？」
「早まるなあ！！」
「止めても無駄ですよ」
「トライアウトや！」
「はい？」
「選考から漏れた選手を集めて敗者復活のトライアウトが開かれるらしいんや」
「その手には乗りませんよ。何度騙されたことか」
「今度は、騙しでも、ふかしでもない。お前も、おかしいおもうたやろ？　発表されたメンバーに不足があるって。あれはあらかじめ、トライアウト用に数名分空けといたらしんや。漏れた投手と野手が直接対決して、結果を残したら、そこに滑り込む」
「あくまで結果で判断されるんですよね？」
「そうや」
「結果がすべて…。派閥も何もなく、結果で決まるなら、参加しましょか。ところで、桧山さんはそのトライアウトに召集かかっているですか？」
「まあ一応な。ようは、お前のライバルで、代打の枠を争うってわけや」
「桧山さんは、ベンチに入っても代打が精一杯でしょうが、オレは違いますよ。岡田さん、掛布さんを払いのけて、スタメンですから」
「なんや、急に大きくでたなあ」
　一命を取りとめた今岡は、緊急に最終選考トライアウトに参戦することになったのだ。
　現役スターの再生をマスコミは瞬時に嗅ぎつけた。
　今岡の逆境からの挑戦を、ＴＢＳがカメラで追いたいと名乗りを

上げたのである。
今岡はとくに考えもなく、ＯＫを出したが、そこはテレビ屋。視聴率のためなら、なんでｍするのである。
当然、桧山が寸前で今岡のダストボッグス入りを止め、参加の契機になったシーンを、カメラは映していない。番組構成上、窮地からの復活のシーンがないと収まりが悪いと、ヤラセギリギリで、わざわざ再現することになったのだ。

「いまおか」
映画の出演歴があるとはいえ、桧山は棒読み。
「はい」
ローカルＣＭ出演多数の今岡も、セリフに感情を込められない。
「なんでしょうか」
「えっと…」
セリフがつまる桧山。
「トライアウトですか？」
桧山の言葉が出ないとわかると先乗りする今岡。
「そうだトライアウトだ」
トライアウトの情報がない今岡がトライアウトと口走る不自然さ。
「出ます、でます」
まるで、幼稚園児の学芸会のような稚拙な演技であるが、取り直している時間がないとＯＫがでたのだ。

今岡と桧山は、新幹線を使い、トライアウト会場である甲子園に向かった。
車内でも他の乗客の迷惑に構わず、同行のディレクターの演技指導がふりそそぐ。
口をあけてぽかんとしている今岡では面白みがないと、
「今岡さん、ため息なんかついてよ」
「もっとうなだれて、遠くなんて見ちゃって」

「食い扶持がなくなって、自殺に追い込まれる姿とか思い浮かべてさ」

今岡にしてみれば、大会参加は意地とプライドの問題である。

今岡は、参加がかなわなくても、現実の世界に戻ればいいのだから、ＴＢＳのスタッフが望むような、現実のトライアウト参加のように、ギリギリの切迫感をだせと言われてもむりがあるのだ。

それに加えて、自己演出が下手な今岡。スタッフがいくら注文つけても、都合のいい絵がとれるわけがなく、ディレクターは諦めたのか、新幹線の停車中に、ＡＤに駅弁を買いにいかせ、それを今岡に食べさせて、急遽、旅情ものにしてかっこをつけたのである。

なお、弁当を食べた今岡が発した感想が、気の利いたことではなかったのは付け加えるまでもないだろう

。

選考漏れになった男たち

今岡は甲子園に降り立った。

その瞬間、まるで、遅れていた主役の登場を待ちわびていたように、スタンドは沸いた。

「僕は、追い込まれれば追い込まれるほど、力が発揮できる」

今岡の言葉に嘘はない。彼ほど、逆境に強い選手はいないのだ。

事実、若手の有望株から外れかかれば、三割を打ち、金本が歩かされて、今岡勝負となれば、走者を一掃する。

窮地に立たされた今岡は人が変わる。いつもの茫洋とした姿は消えて、静かに燃え上がる。

打席に向かう両足にも、震えは見られない。土をしっかりと蹴り、前を見つめて、歩みを続ける。

打席に入ると、相手投手を睨みつける。

投手も、今岡と同じく生き残りをかけた身だ。

藪恵一。阪神の暗黒時代を支えたエースが今岡に渾身の投球をする。

ボール、ボール…。ストライクが入らない。さしもの藪も、厳しいテストに心を乱したのか。

三球目、ストライク…。真ん中の甘いコースであるが、今岡は手を出さない。

「打てる球だった」

今岡は、テスト後、このボールについて、こう語った。

「打てるボールはあれくらいしかなかった」

今岡が後悔するように、一球のストライクで正気を取り戻した藪は、見違えるような投球を見せる。

続く四球目、速球に今岡、振り遅れる。

最後の五球目、外に流れるスライダーで空振りに終わる。結果、三振。

ベンチに戻る今岡は、つぶやいた。

「三球目…」

甘い球を見過ごした後悔の念にかられた今岡は、それに縛られ、それ以降の投球に集中できなかったのだ。

「藪さんくらいのいい投手となると、一打席につき、甘い球は一球だけ」

甘いボールであったが、今岡が見逃したのには、伏線があった。初球、二球目のボール球である。一見、普通のボール球であったが、藪は二球ともに、シュートをかけておいたのだ。

藪は、荒れているのでなく、意図的にボール球を内に投じた。それも、四球厳禁のテストで、二球のボールカウントを使ってでも、今岡に内を意識させていたのである。

今岡は知らず知らず、肉体的にも、精神的にも、のけぞらされていたのだ。

今岡には、甘いボールが、外ぎりぎりのボールに見えたから、見逃してしまったのだ。

「藪さんの投球を見て、このテストは本気だと思った」

今岡はいつも火がつくのが遅い。アマ時代の今岡はむしろ早熟だった。名門ＰＬで下級生の頃から、四番に座り、東洋大学に進学すれば、一年からレギュラーを奪い取り、同期の井口とともに、全日本の一員として活躍したのだ。

それがプロとなると、授かった才能だけでは、通用しない。元来、のんびり屋の今岡は伸び悩む。今岡は定位置を本当の意味で奪い取ったのは六年目のことであった。

「二打席目、投手がマイク仲田さんだとしって、複雑な気持ちになった」

今岡がこう語るように、仲田は対戦相手として厄介な投手である。球が荒れる、それでいてストライクになるボールの威力は、井川や江夏と並ぶ三振奪取率を誇るほどだ。

四球を選んだところで、さしたるアピールにならない、この手の

テストでは、一番、当たりたくない投手だ。
抱いていた心配がそのままでる。
ボール、ボール、ボール…。
藪のように意図的にボール球を重ねたわけではない。ストライクを入れようとしても、緊張で腕が振れず、球道が定まらない。
この場面、四球を選んでなんになろうか。マイク仲田の悪い病気が出たと、試験管が判断するだけで、四球で歩いた今岡には何の得もない。
制球のいい投手から、粘ったあげくに四球を奪い取ったなら、評価にプラスが生まれるだろうが、今岡はただ歩いただけである。
ただ歩いただけの今岡は、強烈な打球を放つ権利をひとつ奪われるのにすぎない。
「歩きたくない、その一心で、どんなボール球でも打ってやろうと思いました」
今岡はそう語る。
今岡は、ストライクを取りに来た置きにくるボールが来ることを願ったが、思い虚しく、ボールはゾーンから外れる。
今岡は少々のボール球なら、ヒットにできる技術と自信を持っていたが、このボールは、その範疇を大きく越えてた。
「それでも、僕はバットに当てた」
曲芸のような打ち方で、高目に大きく外れるボールを叩いたのだが、打球は遊撃の前で大きくバウンドするだけであった。
土の甲子園で大きくはずむ打球が飛ぶということは、今岡がそれだけ、高目のボールを思い切り叩きつけた証明である。
内野安打。
誰もがそう思った。足の遅い今岡でも一塁に間に合うだろう。
だが、今岡は走らなかった。
「走りましたよ」
今岡は否定する。たしかに、今岡の足は一塁に向いて進んでいたが、そのスピードたるや、全力疾走に遠かった。

「あれで精一杯です」
今岡はそう繰り返すが、照れがあるのか、全力プレーをよしとしない今岡の姿勢が、トライアウトに放り込まれる事態になったのだ。
ある首脳陣はこういう。
「あの打力は捨てがたい、代打要員で残そうおもったが、練習態度に真剣味が足らんからな」
そうでなければ、今岡がここにいる道理はないのである。
今岡は、バースや掛布よりも打点を稼いだし、岡田の８５年に負けるとはいえ、それ以外の年には負けない成績を残している。
「わからない、どうして落とされたのか」
今岡はわからない。いや、今岡も全力プレーの欠如が、選考から漏れた要因であることは充分わかっているであろう。
それでも今岡は、全力でプレーすることをしない。
「僕は精一杯やっている。そう見えないだけ」
全力疾走して、ヒットを何本か増やしても、ゴロに飛びついて、守備機会を増やしても、今岡いは意味がないのである。
「ヒットを打つ、走者を返す。それが僕の役割」

「あかん、今岡は何にもかわっとらん」
試験管の一人として、ネット裏でテストを見守っていた岡田がつぶやく。
「アイツは置かれている状況を理解してない。最終テストとなれば、変わるおもうたやけどなあ…」
岡田は首をひねる。
それでも今岡に変化は見られない。
三塁守備についた今岡に、代打争いのライバル八木裕の打球が飛ぶ。
ライナー性の当たり。二、三歩体を翻せば、取れる当たりだが、今岡は微動だにしない。
「遊撃手の藤本の打球だと思った」

今岡はそう弁明するが、映像を見る限り、今岡の打球であることは、明白だ。

元より、評価の芳しくなかった走塁、守備がこの有様なら、今岡は打撃で取り返すしか道は残されていないのだ。

八木、桧山、遠井、渡辺博之、坪井…今岡とともに、トライアウトに参戦している打者は、結果を残す。

たとえヒットがでなくとも、火の当たるような打球を放ち、真摯なプレーをアピールする。

今岡は絶命の危機に立たされた。

「それでも、僕は、ダストボッグスに入らなかったことを後悔しない。二打席で結果がでなくても、四打席で勝負するのが、プロ」

今岡の三打席目の対戦相手は、上田次郎。昭和４０年代後半の投手陣を支えたサイドハンドの投手だ。

仲田や藪と違って、今岡には馴染みのない投手だ。

「タイム！」

今岡がタイムをかけた。

「僕は、上田さんの投球をよく知りません。初対戦はどうしても、投手が有利。上田さんの球種も決め球も知らない僕が、不利なのはいなめません。公平をきするなら、僕が知っている投手をお願いします」

今岡はとんでもないことを口走った。理は通っているとはいえ、受け入れがたい願い。

「自分勝手？　それはないでしょう。当然の権利を主張したまでです」

ところが、今岡の願いは受け入れられたのだ。上田は、次の藤井栄治に投げるはずだった中込と交換する形でマウンドを降りた。

中込伸。今岡と同時代でプレーした投手。

「やったと思いましたよ。中込さんは、まっスラが武器。左打者の懐に切れ込む球筋は、桧山さんら左には厄介な投手ですが、僕のような右打者にとっては、ただ外に流れていくボールですから」

今岡の自信と裏腹に中込は今岡を攻め立てる。

「気後れした」

今岡がそう語るように、中込の威圧感は、独特なものであった。中学時代から荒れた校内の番をはり、阪神時代も多々たる問題を引き起こし、台湾に渡って名将になった思えば、八百長騒動で現地当局に拘束される男。

「殺されるかとおもった」

藪のように、内を攻めるわけでも、仲田のようにどこへ投げてくるかわからないわけでもない。

中込は、ただ、まっスラにカーブ、フォークを交えた普通の投球をしているだけのに、今岡を震えたたす。

「四打席目がある」

今岡は捕手木戸へのポップフライに倒れても、安閑としていた。

「池田さんが出てきて、内心喜んだ」

池田親興を今岡は下に見ていた。

「８５年のエースといっても、九勝、防御率四点台の投手でしょ」

もう後がない打席でも、今岡は変わらなかった。

ボールに食らいつくわけでもなく、神経を研ぎ澄まし、一球にかけるわけでもなく、今岡は気のないスウィングを繰り返し、センター池田祥一への平凡なフライで終わった。

結果、四打席、四打数、ゼロ安打、打率・０００、打点ゼロ…守備機会ゼロ、好走塁ゼロ…印象最悪。

「見事なまでに、ゼロが並びましたね」

今岡はそれでも気落ちすることなく、淡々と語る。

「悔しくないかって？　いや、ぜんぜん…。そもそもトライアウトなんて儀式でしょ。誰を残すなんて、最初から決まっているものな

んです」

今岡の携帯が鳴った。

「はい、もしもし…合格ですか？　はいはい、代打の切り札として期待している…？」

今岡のいうとりことは運んだ。四打数四安打の爆発を見せた桧山でなく、今岡がベンチ入りに滑り込んだのだ。

「たった四打席の結果より、１４７打点ですよ」

「おいおいおい、なんだ、このＶＴＲ」

「使えませんか？」

「おもしろいと思ってるのか？」

「戦力外になった男たち風に撮ってみたんですけどねえ～」

「主役の今岡が、グダグダでその結果、吉報が来るって、話になってねえよ」

「人生なんて、案外こんなものですよ」

「…しかたねえ、経費削減の時代、こんなＶも貴重だ。一応流すか…」

「ゴールデンでいきますか？」

「なわけねえーよ。関西ローカルの土曜日の昼間だ、せいぜい」

選考漏れになった男たち（後書き）

怪獣サッシー上陸大作戦

大会開催前だといういうのに、怪獣が上陸するというのだ。

怪獣は、長崎県沖で生まれたために、長崎ゆかりの怪物酒井圭一の愛称にあやかって、『サッシー』と名づけられた。

隊長５０メートルに及ぶ巨大な生き物は、九州上陸に、徐々に近づいている。

もしサッシーが上陸したならば、被害は甚大に登ることが容易に想像でき、それを防ぐために、自衛隊が出動したのだが、ミサイルを打ち込もうとも、炎で焼き殺そうとしても、びくともせず、大きな網で捕獲しようとも、すぐにひきちぎって、出てきてしまうのである。

もはや策はないと、お手上げ状態になったその時、意外な弱点が見つかった。

ひきちぎった網を処理したさいに、ついていたサッシーの細胞を解剖、研究したところ、メガネから反射される光りに弱いことがわかったのだ。

これは実験者の眼鏡が、たまたま光を反射したときに、細胞がやけただれて、見つかったものである。直接、光を当てても、なんの変化は見られないが、眼鏡を通して、光を当てると、サッシーの細胞はただれてチリとなるのだ。

原因は解明されていないが、眼鏡の反射される光が弱点であることは事実だ。さすれば、自衛隊は眼鏡部隊を編成して、怪獣退治に向かう手はずになるはずであるが、サッシーは頭も切れる。

サッシーは、日本中に怪光線を発して、あらゆる眼鏡を壊しにかかった。しかし、怪獣の発する光線とはいえ、眼鏡が遠隔地にあればあるほど、光線の威力は弱まる。特に高価で丈夫な眼鏡が、破壊されず無事に残ったのだ。

高価で丈夫な眼鏡を持つものは限られていた。その多くはプロ野

球選手の所有のものであった。
スポーツ用の特注の眼鏡はサッシーの光線で破壊できないほど、強固に作り込まれていた。
自衛隊にしても、いまさら眼鏡を生産しても、サッシーの上陸までには追いつかず、緊急措置として、丈夫な眼鏡をかけた野球選手を集めて、特別部隊を編成することにした。
駆り出されたのは、古田、初芝、土橋、八重樫、的山、小宮山…など歴代有数の眼鏡の持ち主たちだ。
彼らは、サッシーが上陸すると予測される沿岸に集められて、横一列に並ばされた。
「僕達は、これからどうすればよろしいんでしょうか？」
リーダー格の古田が疑問をぶつけるが、自衛隊から派遣された隊長は答えられない。
「とにかくサッシーが来るまで待て」
隊長の態度に古田は切れる。
「そんなものの言い方ありますか？　いくらお国のためといっても、僕らは、権利を主張する義務があります！」
うるさ型の小宮山が続く。
「そうそう、オレたちは命がけでやってるんだ。保障は？　手当ては？」
さすが、選手会の重鎮たちだ。戦いの最前線を、労働争議の場に変えてしまう。古田、小宮山が自衛隊と問答を繰り広げている間に、サッシーは上陸に近づく。
空は一転、暗転し、海が揺れる。地鳴りがする。
海上を飛び交っていたカモメたちも、一目散に逃げる。
「ぎゃおおお～～」
サッシーの雄叫びが響き渡る。サッシーは取材用にマスコミが飛ばしていたヘリコプターを片手でたやすく叩き落とす。
サッシーに怖気ついたのか、集まった見物客も逃げ出す。
度胸の座ったプロ野球選手といえど、怪獣は別だ。

初芝は染め上げた金髪が真っ白になるほど、肝を冷やし、一ミリ足りとも表情を変えない土橋が、口をすぼませる。

それほどの恐怖をサッシーが与えるが…。

「もし、怪獣にやられたら、一人あたり、最高年俸の十年分は保障してくれまっか？」

古田の条件闘争はそれでも続く。

コンタクトレンズ紛失大作戦

「古田さん、早く並んで！！」
初芝に促されるが、古田はまだやりあっている。
「なんや、初芝、ちょい待て、向こう側が、俺らの条件受け入れんつもりなら、ストも辞さないつもりや」
「そんな場合じゃないでしょ！！」
初芝は、古田の袖を引っ張り無理やり並ばせる。
サッシーは、重い体を持ち上げるように、歩をすすめ、次第に古田たちに迫りくる。

「怪獣めがけて、いっせいに眼鏡の光を反射させるんだ！！」
小宮山が叫ぶ。横一列になった眼鏡部隊は、太陽を見つめて、どうにか、その光をサッシーに反射させようと悪戦苦闘するが、なかなか角度があわない。
たまたまうまい具合に光が反射して、サッシーまで届くが、一筋の光ではサッシーのダメージも少ない。
逆に、それがサッシーの逆鱗に触れたのか、眼鏡部隊に向かって、燃えたぎるような炎を吐き出す。
「逃げるっぺ！！！」
八重樫が叫ぶが、逃げ遅れた的山が足をくじいてしまう。
「まとやまあ～～～！！！」
広橋が的山を助けようとするが、時既に遅し。
的山は炎に包まれてしまう。
「おい的山、大丈夫か！！！」
炎にやけ焦がれた的山の身を案じて、達川が駆け寄ろうとするが、その時、つまづいて、眼鏡を落とす。光線に耐えた眼鏡であるが、落とした弾みでレンズにヒビが入る。これでは、とても使い物にはならない。

「ワシの眼鏡が～！！　ワシ目が悪うて、眼鏡ないとようみえんのよ！！　そうだ、コンタクト！！　コンタクトがあったんよ」

懐からコンタクトケースを取り出して、装着しようとするが、この緊急事態、焦って手元が狂い、レンズを落としてしまう。

「ワシのコンタクト！！！」

落ちたレンズを探すが見つからない。

「おいそこのデストラーデにホーナーにバンスロー、お前らもぼけっとしとらんで、ワシのコンタクト探すの手伝わんかい！！」

外人部隊として特別に参加したデストラーデたち巻き込んで、紛失したレンズ探しだ。

「見つからん！！　あのレンズ、この前購入したばかりで、けっこう値が張ったんよ！　見つけんと母ちゃんに怒られるけんのう！！」

それでもレンズは見つからない。

「おい、怪獣お前も探さんかい！　もとはといえばのう、ワシがコンタクトなくしたのもお前のせいじゃ！」

あげく、怪獣まで駆り出そうとするのだが、サッシーに伝わるわけがない。

騒ぎの中、怪獣はついに上陸だ。

入れすぎた浴槽に入浴するがように、サッシーは海水をまき散らして、陸に一歩を踏みしめる。それがレンズを落とした付近であるから、達川は激怒。

「おいこら、怪獣！！！　そこはレンズ落としたとこと、何度いうたらわかるんじゃ！」

サッシーは達川の怒りに構わず、大きな手を振り回しはじめる。

「危ない！！　みんな逃げろ！！！」

杉浦忠が叫ぶ。大きな手で人間ごと握りつぶされると思いきや、サッシーの狙いは、眼鏡にあった。

振り回した手は、眼鏡部隊の眼鏡だけにヒットする。　眼鏡部隊の眼鏡は揃って、遠くに弾き飛ばされた。

サッシーにとって、眼鏡のない人間などたやすい獲物である。焦って、人間ごと始末するよりも、眼鏡だけを遠ざければ、サッシーの安全は確保される。

「眼鏡、眼鏡、眼鏡…」

達川のようにレンズを用心深く用意していない部隊の大半は視力を失う。飛ばされた眼鏡を必死の思いで掴み取るが、

「度があわん」

自分の落とした眼鏡ではないためか、目にフィットしないのである。彼らの眼鏡は特注品だ。視力に合わせるだけでなく、落ちにくいように、顔の骨格を計算して、眼鏡がデザインされている。

それが少しでも違えば、眼鏡としての機能を用しないのだ。

「これも違う」

「これ湯上谷のだろ?」

「違いますよ、こっちの小宮山さんのじゃないですか? ゴーグルですよ」

「バカ、マリンで投げるんじゃないんだから、ゴーグルなんてつけてくるか」

彼らの目的は、自分の眼鏡を見つけることではないはずだ。眼鏡を反射して怪獣退治がただひとつの役目。それにもかかわらず彼らは眼鏡探しに没頭する。

のけものにされたサッシーはいい気分がしない。

「があおおおおおおおおお〜〜」

いつもより一オクターブ上げて、叫ぶが、眼鏡部隊は振り向いてくれない。

ついに切れたサッシーは強烈な炎を吐き出す。

眼鏡部隊は一瞬にして、火の海…。

どれくらいの熱さかはわからないが、灼熱の火にあぶられた彼らの命はないはずだ。

そのはずだった。

サッシーは彼らの屍をまたぎ、街の中心部へと歩を進める。
サッシーは、結果として眼鏡部隊に背中を見せたことになる。
眼鏡部隊は生きていた。炎にあぶられても、誰一人絶命することなく、彼らは、自分の眼鏡探しに没頭していたのである。
サッシーにスキが生まれたことに気がついたのは、小田幸平だ。
捕手としての視野の広さだとか、のちに、色々と理由付けされたが、小田が気づいたのはただの偶然、眼鏡を探していた目の前にサッシーの大きな背中があったに過ぎない。
「あ、怪獣！　むこう向いてますよ！！」
小田の何気ない一声に、争議を終えた古田が反応した。
「あ、ホンマや！　今がチャンスやん！」
古田は労働争議の結果、怪獣退治の際の多大なる報奨金を引き出して、ご満悦の状態である。
古田は報奨金目当てで、裸眼で怪獣に襲いかかる。
弱点は眼鏡だけのはず！！？
眼鏡を持たずして古田に勝ち目はあるのか！？

古田は、サッシーの足元を蹴飛ばした。
サッシーはただのひと蹴りで、倒れてしまうのだ。
「やったー」
サッシーは意外や、見かけ倒しであった。体はミサイルを跳ね返すほど、丈夫であるが、足腰に弱点があり、初めての陸上歩行になれていないせいか、足元がおぼついてなかったのだ。
眼鏡部隊は、サッシーが倒れている今がチャンスと、落ちている眼鏡を反射させて、サッシーの止めを差しにかかる。
サッシーは細胞から破壊されて、粉々に砕け散る。
部隊は歓喜に包まれるが、達川だけ渋い顔。
サッシーが倒れるときにした、パリーンとの音を聞き漏らさなかったからだ。

「あの音は、ワシのコンタクトレンズが割れた音～」
サッシーの倒れたちょうど場所に達川の落としたレンズがあったようだ。
「おい、古田、レンズの保障は争議の条件に入れといたか？」
「あ、達川さん、その辺りの保障は忘れてましたわ…」
「あ、くそ～　ワシのレンズ～～」

左腕ダブルエース

タイムカプセルがまたまた誤作動を引き起こした。
タイムカプセル管理係が、テスト用として入力した漫画データをモチーフにした選手が、カプセルの中から次々と飛び出てくるのである。
キャラや人格が、漫画そのままなら、風貌までも漫画チックになっているのだ。
「明治の大砲なのが、ドラフト一位の新人王の木戸くんが二十本打つのがヒロサワです」
「遠山れーす」
「星、ワシは、あえて、お前を千尋の谷に突き落とすんじゃ」
「でふでふ槙原でふ」
「くわくわくわくわっわわわわわ」
「おいタカシ、チェリオ買ってこい」
「よろしくどーぞ関根です」
「おいヒロサワ、１０００本ノックだ！」
「コンコン…コンコン…」
「二回もやるとは思わなかった」
「すいま千昌男でゲス」
「だめだロッテ、やっちマリーンズ」

石井浩朗を漫画の架空キャラにプロボーズすれば、なぜか、イガグリ頭の小久保が出てくるわ、妙に太った井口が出てくるわ、落合が童夢くんのスノーミラージュボールを打倒するために、滝に打たれながらバットを振れば、金田は、狂気じみたほどの勢いで、カネやんダンスを踊る。（それは現実のキャラとさほど変わらないのであるが）
無邪気に笑いながら走り回る原に見かねた王がパイプイスで、原

を殴打すれば、サンチェはひたすら暗く、呂明賜は広沢日本語学校で日本語を学べば、ホーナーは休みたがる。

タブチがゴルフに行けば、キャディーにヤスダとヒロオカが潜み、元木がこれ以上ないくらい姑息な悪役に描かれ、高木宣宏は、まるで漫画のオリジナルのように、どこまでも天真爛漫に描かれている。内之倉をはじめとするダイエーの二軍選手が、手動で福岡ドームの開け閉めをすれば、こっちの内野倉はバッターをヘイヘイと挑発すれば、天井が開き、虫に刺されて、頬をカイカイとかきあげれば、天井は閉まる。

田村・F・藤夫のリードが明るくあっさりとすれば、田村藤夫・Aのリードは、陰湿で執拗だ。

岡田の顔がやかんそのものだったり、藤山寛美そっくりだったり、ひょっとこだったりすれば、栄村の背番号が、６６６だったりする。種田はムスっと一言も発せず、万永や大島公一は、米粒のように小さい。バースは実はロボットだったり、巨人くんのライバルとして燃える小早川にいたり、小学生相手に親友にされてしまう中畑がいたりする。

彼らが、次々とカプセルの中から飛び出てくれれば、街は喧騒に包まれることは間違いない。

いろいろな長嶋親子が飛び出てくる。それはそれでいい。どの漫画の長嶋親子も、キャラが定まっているからだ。天真爛漫でおっちょこちょいのボケ役である。野茂も長嶋親子と同じく、どの漫画のキャラも無口でぼう～としている。

吉田義男は誰が描いても、せこく、村山は悲壮感にあふれて、はらいせでラーメン屋に、いたずらの出前電話をしたりする。香川はいつでも必要以上に太り、狛田は誰の作品でも馬である。

いつの時代でも、どんな漫画家の手によっても、定まったキャラと風貌を持つのなら、混乱は最小限に食い止められるが、この二人はそうはいかない。

桑田と清原である。

先のカプセルの誤作動でも、この二人は無限に増殖したのであるが、今回の騒動でも二人が主役だ。

西武のユニフォーム姿の清原は、たいていの場合さわやかキャラである。なぜか歯が出ていないのに、出っ歯キャラの清原は、どこまでもまっすぐ純粋で関西なまりのかけらもなければ、桑田に騙されてどこまでもお人好しにかかれて、景浦をどこまでも慕い、山下たろーの夢の中に、衣笠、山本浩二、落合らを携えて、真打ちとして登場するのだ。

いたって、爽やかな西武・清原の中でひとり異質なのがいた。巨人時代の番長キャラそのままの西武清原を描いたキャラがいるのである。

作者の先見性に感服するが、どこまでもクールでいけすかないイチローに嫉妬した清原は、オリックス時代にイチローと馴れ合う清原より、より清原らしいのはなぜであろうか。

西武・清原に敵意を燃やすのは、桑田である。

巨人入団一年目のころの桑田は、まだおとなしい。多めのほくろと、清原に対する屈折した思いはキャラに影を投げかけるが、住友銀行と見せかけて、三井銀行に預金したり、バスを降りると見せかけて、降りなかったり、清原の藁人形を夜な夜な、五寸釘で打ち込むていどですんでいる。

あきらかに常軌を逸しだすのは、桑田が借金や暴露本で叩かれはじめたころのキャラだ。桑田のほくろは、黒点を打つよりも、ホワイトで修正したほうが早いほど密集し、舌は、カメレオンのように伸び縮むである。

すでに人というより、違う生物であるが、いまだ爽やかな清原とのコントラストはより明確になる。

清原と桑田が暗闇で交わいだしたのが、巨人移籍後だ。不振に苦しむ清原はどこまでも暗い。

イメージアップを狙い、日の当たる場所へと這い上がろうとする桑田より、深い谷底に沈んで行いく。

体質改善をして、谷底から這い上がった清原のキャラは既に別人であった。

まるで金融漫画の取り立てのヤクザのような、きつい関西弁に、どす黒い顔は、西武時代に描かれた清原とは似ても似つかない。

白い世界に羽ばたきたくても羽ばたききれない桑田と、本性をさらけ出したのか、虚勢をはっているのか真っ黒なキャラになった清原との対比は、もはや映えないのだ。

白と黒の対象が描き出した二人の双曲線は、野球人生の半ばで頓挫する。

もはや、野球漫画における清原と桑田の役割は終わったかのように、オリックス移籍後の清原はただのリハビリばかりする金食いキャラに成り下がり、メジャー移籍で、余計なブランドイメージを掘り起こした桑田を描く漫画キャラはどこをみてもないのである。

幾多なる黒い桑田と白い清原が、重なり合うように揉めれば、黒い清原と、光を求めて迷走する黒い桑田は、禁断の盃を交わす。

すでにキャラは街中に溢れて、余計な騒動を各所で巻き起こしているが、大会本部は静観する模様だ。

風貌が漫画のキャラそのままだとしても、人道的観点から、すぐに殺傷するのは問題がある。

さらには、漫画キャラが巻き起こす珍騒動をカメラに収めたいと、ＴＢＳが名乗りをあげたのだ。

今岡のトライアウト番組の失敗を取り替えそうと必死なスタッフは、野球機構に法外な放送権料を提示した。

慢性的な赤字体質に苦しむ機構側は渡りに船とこれを受けてしまったのである。

桑田が何人もの一般人に呪いをかけていると苦情が殺到している

が、金のためと恥を忍んで機構側は成り行きを見守っている。

左腕ダブルエース（後書き）

参考文献

ガンバレ！　タブチくん　あぶさん　ドカベンプロ野球編

パロ野球ニュース　山下たろーくん　アストロ球団

荒川道場　ササキ様に願いよ　笑ってよタネダくん

球界番長キヨマー　巨人の星　童夢くん　イノマティー

リトル巨人くん　ワルG　など多数

十一月三十一日

「もしもし、なんや…」
「前川、元気か？」
「誰や、こんな夜分遅く」
「中濱だよ、近鉄で一緒だった」
「おう中濱か、久しぶりだな」
「お前、近鉄の最終選考に残ったんだってな」
「まあ当然やろ、近鉄最後の優勝の立役者の前川さまやで」
「同期から、おめでとうと祝福の言葉をかけたくてな、電話したんだ。で、候補に入ったはいいが、残れそうなの？」
「まあ、たぶんいけるやろ、投手がボロボロの近鉄やで」
「発表はいつだ？」
「ちょっと待て…スケジュール帳調べるから」
「おまえがスケジュール管理か、似合わねえな」
「オレも立派な社会人になったんよ…。発表は、十二月一日…場所は、藤井寺球場やそうだ」
「今日が十一月三十日だから」
「明日は十一月三十一日やな」
「それじゃあ、明後日か。吉報を待ってるぜ」
「おう、ありがとな、中濱」

彼らは、またとんでもないミスを犯していたのだ。
想えば、中濱が干され、前川が問題児の烙印が押されたのは、すべてこのミスが引き金であった。
彼らは、すでに忘れている。十年の月日は彼らを成長させることなく、ただ過ぎ去ったのである。

あくる日、特に予定がなかった前川は、目覚まし時計をかけずに、

余裕の朝寝をむさぼっていた。

前川のベッド脇の壁にかけられた日めくりカレンダーは、大きく一日と記されていた。

前川は、午前0時の鐘がなり、日付が変わるやいなや、カレンダーを破ったのであるが、その日付が何日であるかまでには気を払わなかった。

そもそも日めくりカレンダーを導入したのは、前川に、月による日数の知識、いや感覚というのが正しいか、が欠如しているからであり、あのミスを繰り返さないための自戒からである。

もしも月めくりならば、月が変わったことを否応でも認識するが、日めくりであると、日が変わることは認識できるが、月が変わったことには、細心の注意を払わなければ、意識が飛んでいかない。そこが前川にとっての落とし穴であった。

前川の頭に、十一月三一日が存在にしてても、　前川のカレンダーには、十一月三一日などない。

すでに日付は、十二月一日である。

藤井寺球場は、ピリピリとしたムードに包まれていた。

首脳陣以下、候補選手が集まっていたが、前川だけ姿がないからである。

監督である西本は、前川の不在にいらつき、前川を推薦した梨田も立場がない。

前川はタフネスで強気な貴重な左腕であると梨田が、強行に推薦し、候補入りとなったのであるが…。

「おい、ナシ、お前やないか、前川を推薦したんは、いつくるんや」

「すいません、西本監督…。ちょっと遅れているみたいです…。あいつは免停で、車乗れないですから、バスか電車の交通事情で遅れてるんじゃないでしょうか…」

「電車やバスの遅れやと？　お前近鉄をバカにするんか？」

「いえそんなつもりは」

梨田の必死の弁明も虚しい。前川の普段の素行を考えると、遅刻

は、彼のだらしなさに起因すると誰もがわかっているからだ。

「おい儀部、お前、ドラフト同期だろ、前川の連絡とってくれや」

「え、オレがですか？　しかたないなあ…」

儀部が携帯を取り出し、前川に連絡を取ろうとするが、

「番号わからん、メールアドレスもしらんし…。おい誰か前川の連絡先知ってる奴おるか？」

「オレ知ってますよ！」

名乗り上げたのは、前川と団子兄弟といわれた川口憲史。

「おうケンシ（憲史）いっちょたのむわ！」

憲史はさっそうと前川に連絡を取るが…。

「……」

当の前川は、携帯の音くらいでは、目を覚まさないほど熟睡している。

「出ませんね…」

「だから前川みたいなの入れるのワシは反対したんや。少々の問題児ならワシが手なずけるが、前川のような人間失格の奴はワシでも面倒見きれん。おい、梨田！」

「はい、西本監督…」

「レギュラー捕手、お前やなくて、有田でいく」

「そこをなんとか…」

前川は、すでに失格寸前の窮地に追い込まれたのであるが、とんでもない救世主がやってきた。

ふらっと現れた、巨人のユニフォームを着た男…。

「みなさん、何をお困りで？」

「なんで、巨人の選手が来るんだ？　球場間違えたか？」

梨田が追い返そうとするが、その顔を見ると驚く。

「お前、桑田！！　桑田じゃないか！」

「梨田さん、こんにちわ」
「桑田はいいが、何か、いつも雰囲気違うな…。なにかより怪しい…」
「へへへ、わかりますか…」
桑田は桑田でも、タイプカプセルの誤作動が作り出した漫画キャラの桑田が、ひょっこりと紛れ込んだのだ。（前回参照）
「ほくろもこころなしか多いな」
「へへへへへ、舌も伸びますよ」
桑田がそういうと、カメレオンのように舌が伸びる。
「うわ、なんやこれは」
梨田はじめ近鉄ナインは驚くのであるが、西本だけは膨れ面だ。

「困りごとなら解決しますよ‥‥」
「桑田にいうのもあれだが、前川がこんのよ」
「ボクのＰＬの後輩の前川がですか？　仕方ないな、心構えがなってないと注意したのに…」
「先輩の桑田からも何とかいってくれ…。その前に連絡が取るのが先決だけど…あいつ寝てるみたいで…電話にもでんわ」
「携帯貸してください」
「？　携帯…おういいよ、おい憲史…桑田にお前の携帯貸してやってくれ」
憲史が携帯を桑田に手渡すと、
「僕が起こしてやりますよ」
また舌が伸びると、受話器の話し口ににゅるにゅると入り込み、それが遠く離れた前川の自宅に届くと、前川の携帯から舌が顔を出し、
「前川、起きろ、前川…」
桑田の舌が前川を起こそうと必死に揺するのだ。
桑田の妖術に近鉄ナインは呆然であるが、桑田ならありうると傍観しているのだ。

それでも前川は起きない。
「なんや、うるさいのう」
寝ぼけながら、桑田の舌を握ると、
「なんやこれ、邪魔や」
そのままひきちぎってしまったのである。

遠隔離れた桑田は、
「いた」チクリとダメージを受けるが、さして気にしている様子もない。

「どうした桑田、何かあったのか！」
「前川くんに、ちぎられたみたいです…」

「もう待てん！　前川失格！」
西本の断が降りると、桑田は煙幕を巻き、それが晴れると、その姿は、どこかへ消えていた。

近鉄ナインは驚くこともない、桑田ならありうると。

十一月三十一日（後書き）

ぽっと思いついたネタです
今日しかないと放り込みました

小さいのに、とにかくよく喋る男

大矢横浜の辛勝で、下克上球団を蹴散らしたことにより、正式な抽選会が執り行われることになった。

横浜のくじを引くのはもちろん、大矢…とはいかない。

大矢は試合を終えてすぐのために、会場入りが間に合わず、近藤昭仁がくじを引くことになったのであるが、ヘッドコーチである近藤が勝手に、

「僕が監督だから」

といいはなったから、これ一大事。肝心の大矢はというと、祝勝会で抽選会など知らぬ、存ぜぬ。

いきなりの近藤の監督宣言に戸惑った抽選会の司会者の大塚光二は、

「あれ、横浜の監督は大矢さんじゃ…」

「おいおい、忘れたかい、紅白戦で僕の率いる大洋軍が大矢横浜に勝利を収めたから、監督がひっくり返ったんだよ」

近藤は既成事実として、無理にこり固めるのだが、取材不足の大塚は、

「ああそうでしたっけ…。それでは近藤監督、くじを引いてください…」

大塚に監督の承認権利があるわけではないが、公の場所で監督と呼んでしまったら、それはすなわち判定となる。

大塚が近藤を監督として認定してしまったから、球団本部はひっくり返ることに。

「なんで、近藤さんが監督なんだよ！」

「紅白戦勝利で下克上だってよ」

「あれ、冗談じゃなかったのかよ！」

「どうするんだ、大矢さん怒るぞ」

「まあ、大矢さんでも近藤さんでもたいしてかわらんかな」
「まあな」
「それじゃ、近藤さんでいいのかよ」
「いいか」
「いいよ」
一騒動あったあげく、近藤でもいいかとなるこのいい加減な雰囲気こそ、まさしく横浜にはびこる体質であるが、
「でも、どうしよう、公式パンフレット、大矢さんが監督として印刷しちゃったよ」
「仕方ないな、いまさら、差し替えるわけにもいかない」
「大矢さんの上に近藤さんとかいたシールをペタリと貼るか」
「まるで内職だな」
「面倒だけど、しょうがない」
「ダレにやらせる？」
「那須野とか森大輔とか染田とか高崎とか高宮とか土居龍太郎とか細見とか河原とか小桧山とか暇そうなやつらにやらせておけばいいよ」
「そうだな、裏金含めてたいそうな契約金払って働きがいまいちなやつらにやらせよう」

こうして近藤監督は既成事実となってしまったのであるが、
「よし！！　これだ！！」
近藤の引いたくじが横浜にとって有利なくじであったから、近藤はツキを持っているとなり、この時点で大矢待望論は行き場所を失うことになる。
十二球団を三つにわけることから抽選ははじまる。
つまり第一回戦は四球団ずつわかれてのグループ総当たりで、上位二チームが第二段階に進める仕組みだ。
近藤のひいたくじは、西武と同組である。優勝候補筆頭の西武と同組で何が、いいくじかと言うと、球団事務所の反応でそれはよく

わかる。
「西武と同組？」
「負けてもいいわけがたつ」
むろん、後ろ向きな言い訳ばかりでない。
「三原監督との因縁で動員が期待できる」
彼らは前を向くこともするのだが、それが銭勘定の方向であろうと、彼らを攻めることはできない。
どうせ負けるなら、いや確実にだめならば、せめて黒字を出す、球団経営の心得として、なにが間違っているといえるだろうか。
恩師三原西武と決まった近藤の舌鋒はなめらかに回る。
「三原さんとやりたいと想ってたんだよ。まあ、決勝でやるつもりだったから、一回戦という舞台は整ってないけど、三原マジックの上をいく近藤マジックを見せるから期待してちょうだいね。ロッテを首になるとき、今度は強いチームでやりたいといったけど、本当にこのとおり自慢のできるチーム作りができたよ…。抑えに僕の嫌いな佐々木、先発に僕の嫌いな野村、捕手に僕の嫌いな谷繁、一塁に…」
決められた時間を軽くオーバーしても、監督の座についた近藤は止まらない。
「こ、近藤監督、次の抽選もありますんで、このへんで…」
インタビュアーの佐々木修が、しびれを切らして、ぶった切る。
「そう？　じゃあ、この続きは西武に勝った後の勝利監督インタビューで話すわ」
近藤はどこまでも自信家である。
知らぬ間に監督の座から滑り落ちたはたして大矢の運命はいかに。

ついに抽選？

ここまでの抽選で決まった組み合わせは以下の通りだ。

1横浜ー西武
2ヤクルトー
3　ーロッテ
4　ーソフトバンク
5広島ーオリックス
6　ー近鉄

セパ対抗を煽るために、初戦の組み合わせは、セパの対戦になるように、調整されている。

さらに、この6カードを組みあせて、3つのグループを作る抽選をする。

つまり、上位二位までが勝ち抜けであるから、優勝候補と当たっても、残りのグループ分け次第で、勝ち抜けるわけだ。横浜は西武と当たったからといって、悲観しても絶望することはない。

次の抽選で一強三弱のグループに入れば、十分に勝算が出てくるわけだ。

さあ次は注目の巨人。くじ引きは長嶋が勤める。近藤のような小兵とは違い、長嶋は全身からオーラを放っている。

この日のための特注のスーツをビシッと決めて、足の先から頭のてっぺんまで行き届いたコーディネイトはさすが最大のスターだ。

抽選箱に手をつっこむと、迷いなく、これと決めたくじを引く。

引いたくじをこれ見よがしにかざせば、開いた左手は、あの92年11月に松井を引き当てたときに見せた、親指だけをぐっと立てるポーズをとる。

まだくじが開かれてもいないのに、渾身のポーズをとって様にな

るのは、ミスタープロ野球・長嶋だけができる芸当か。
「おやおや、長嶋さん、開封前に、もうガッツポーズですか」
大塚のちゃちゃにも、
「えへへへへへ…」
得意の微笑みで交わす。

「くじ番号は…6です。巨人の相手は…近鉄…。近鉄に決定しました」
会場から今日一番の歓声が巻き起こる。相手が近鉄云々だからではない。
どこに決まろうと、注目を集める、それが巨人なのである。

「巨人ですよ…西本監督」
西本の付き添いにきた作戦コーチ兼任の梨田が、目の悪い西本に状況を伝える。
「相手に不足なしやな…。テツ（川上）を打ち負かせるときが、ついにきたで」
西本は日本シリーズ八戦全敗であることは知られた事実であるが、そのうち、巨人に五敗、それもすべて川上政権下の巨人相手である。積年の恨みと屈辱を、晴らす絶好のチャンスが訪れたのだ。
一方、迎え撃つ巨人は、早くも近鉄の分析モード。
「近鉄か…。投手は誰だ?」
「鈴木啓示…ですかな」
「鈴木は意外と一発勝負に弱い。メジャー実績から野茂も捨てきれない」
「うちが左に弱いと見れば、阿波野もあるな。鈴木と比較しても大舞台には強さを見せている」
「打線はどうだ」
「ローズがやっかいです。うちにたいして屈折した思いがありますから」

「他にノリ、ブライアント、大石…」
「強力だが、荒さもある。うちの投手陣なら弱点をついていけば、必ず抑えることができる」
川上以下、藤田投手コーチや牧野ヘッドがすかさず近鉄の徹底解剖。

これが横浜となると…。
山下、秋山、田代らお気軽なコーチたちで…。
「西武か」
「三原さんはやっかいだなあ」
「開幕は誰できますかな」
「三原さんは当ててみるなら当ててごらんと挑発してたと、新聞でみたよ」
「へえ」
「ほお」
「楽しみだなあ」
「三原さんのことだ、きっとぼくらが想像もつかない投手を起用して驚かせてくれるよ」
待ちわびず、予想して対策しろよ。
「打線はどうだろう…」
「片平がやっかいだ。うちに対して屈折した思いがある」
「片平？…保彦？」
「いやいや晋作の方でしょ」
「屈折した思いあるのか？」
「ないか」
「他に、清原、秋山、カブレラ、中西、デストラーデ、豊田、中島、おかわり…」
「たしかに強力だけど、荒さもある」
「うちの投手陣なら、弱点をつけば、抑え込める」
「そんな制球力あったっけ？」

「そんなに卑下しさんな。うちにも制球力ある投手はたくさんいますよ。三浦、遠藤、野村…あと…うむむむ」
「弱点どうこう、その前に弱点を見抜く分析力が…」
「うちは金がなくて、スコアラー陣にかける費用が、十二球団最低クラス…」
「まあなんとかなるだろう。清原は内角が弱点…」
誰でもしってる。
「そのくらいにざっくりと適当に抑えておけば、後は谷繁がなんとかしますよ」
「そうだな」
はなから横浜が不安をまき散らすのをよそに、抽選会は進む。

阪神の小津がひいたくじは、４番である。
「阪神の対戦相手は、ソフトバンクに決まりました～」
ソフトバンクといえば、城島だ。
阪神といえば、これまた城島である。
城島はもちろんソフトバンクから出場、新しい所属の阪神とあいまみれることになった。
まさに因縁の対決だ。
ヤクルトの相手は日本ハムと決まり、最後は中日のくじ引きの番。
もちろん残りくじはひとつで引く必要はないが、儀礼的に行われる。
予備抽選で最後のくじになった落合英二は得意の霊感の発しどころを失ったわけだが、箱の前で思わせぶりに、
「う～ん…見えます、４のくじが…」
ひいたくじは、当たり前だが、４だ。
落合は霊感を披露できたと満足したようす。
中日の対戦相手はロッテに決まった。

「ロッテ？」
星野はくびをふる。

「ロッテかいな…待てよ」
隣り合わせになったバレンタインに話をふる。
「おいボビー、おまえんとことやった気がするんだが、気のせいか？」
「おう、ホシノサン～　ワタシもドラゴンズとやったヨウナキガシマス～」
「そうか、お互い同じ夢でもみたんかのう」
ええ、夢です。
１００話過ぎに開幕戦がありましたが、あれは夢なんです。

袋をかぶった男

山下が、使える選手をつれてくるという。
「使える選手といっても、横浜（大洋）に在籍経験のある選手しか使えないはず」
波留の言い分はもっともだ。
「そうそう、これだけいろいろな選手をとっかえひっかえ試して、まだ掘り起こされていない選手がいるとは想えない」
進藤の言うことも、もっともだ。
「ふふふ、まあみてなさいって…。あいつは、今日の12時きっかりに、ここ横浜ベイスターズ練習場に姿を現すから」
山下のいうとおり12時となったが、そんな選手は、いっこうに姿は現さない。
「来ませんよ、山下さん」
「はっは～　自分のコーチとしての立場が危ういから吹いたんですか」
波留や進藤にやいのやいのいわれるが山下は動じない。
「もう来てるんだよ」
「え、どこに？」
「どこですか？」
「ふふふ、ほら、そこだよ」
山下は、センター方向に、風で舞い飛ぶビニール袋を指さすだけで、そこには誰もいない。
「いませんよ」
「まったくからかうのもいいかげんにしてください」
ビニール袋に目をやるのもばかばかしいと、やがて呆れ返り顔を見合う進藤と波留。
目を離したうちに、ビニール袋は山下たちの視界から消える。

「だから、もう来てるんだって…。今度はネット裏の方、みてごらん」
付き合うのも、億劫だが、先輩コーチの命令には背けない。
「今度はネット裏ですか…」
気のならない二人が振り向くと、そこには、舞っていたビニール袋を頭にかぶった横浜の選手がいた。
「うわ！」
「なんですか、あれ！！」
「あれが、僕のつれてきた秘密兵器さ…」
ビニール袋をとらず、男は軽く礼をする。
「ふざけてますよ、ビニール袋かぶってるなんて」
「そうですよ、失礼じゃないですか！」
彼らが、慎むのもむりはない。
「いいんだよ、あれで」
それでも山下が認めたのだから、二人は口出しできない。
「だから誰なんですか、あの男は！」
ユニフォームの胸には番号が入っていない。
「おい、お前…」
ここまででかかったところで、波留は、慎重をきす。
「山下さん、あの男は、僕より上ですか？」
「そのくらいは明かしてもいいかな。下だ。それもずいぶん」
上下関係にうるさい球界だ。身元不明とはいえ、年上にぞんざいな口は叩けない。
「なら、命令口調でいかせてもらうわ…。おい、誰か知らんが、背中みせえ」
波留は、背中を見て、背番号か、背ネームを見て、手がかりを得ようとしたが、
「あ、なんや、名前も背番号も入ってない」
「これじゃあ、わからん」
進藤もお手上げで、山下に泣きつくが、

「山下さん、そろそろ種明かしお願いしますよ」
「ふふふふ、わからないから、面白いんじゃないか」
「本当に、過去、横浜に在籍した記録のある選手なんですか？　波留よりも、かなり年下だとすると、太陽の選手ではないことはわかりますが…」
「それは間違いない。身元不明の投手を連れてくるほど、間抜けじゃない」
「投手？　今、投手いいましたよね？」
「そうだよ、投手だ。あの男は…それもうちに足りない左投手だ」
「左？」
「秘密兵器とはいっても、テストなしで、ねじ込むほど、私は強欲ではない。きちんと実力を見せつけて、あの男をメンバーに加えたいと想っている」
「テスト？」
「そうだよ。君たちは、そのテスト要員として、呼ばれたんだ」
「え？　あの男と対戦ですかい？」
「そんな、心の準備ができていませんよ」
「まて、進藤さん…。面白いじゃないですかい。男・波留の闘志がメキメイ沸いてきましたで…」
「お前がそういうなら、オレもつきあってやるか…」
「二人だけでなんだから、もう一人呼び寄せた…」
「って、もう打席に入ってますがな」
左打席で、きもちよくマシンを打ち込んでいるのは、佐伯であった。
「なんや、佐伯いつのまに…」
「いつのまにって、さっきからずっとおるわい。ぬるま湯集団にあって、この練習熱心ぶり、さすが佐伯さまや～　我ながら感心するで～。で、その袋のお兄ちゃんかい」
袋の男は、佐伯にお辞儀をする。
「いつものオレなら、袋かぶったままで、人に挨拶するアホたれな

ど、ボコボコにしてやるところやが、今日のところは仕方ないわな」
「それじゃあ、さっそく行きますかい。トップは、ハマの核弾頭ことオレに行かせてもらいます」
「まあ秘密兵器ゆうても、たいしたことあらへんやろ。そんなたいそうな奴なら、今まで名前が出てこん方がおかしいからな。ベイで成績残した奴は、斎藤さん、佐々木さん、三浦から、山口の若手まで、たいていテストされてきたから。波留よ、手加減してやれよ」
「了解」
「ふふっふ、手加減などしていいのか？」
「え？」
「お前さんたち三人は、ボーダーギリギリの選手だろ。テストとはいえ、手抜きをしたら、残れんぞ。私を誰だと想っている。山下大輔選手兼任内野守備走塁コーチじゃないか」
「ああ、そうやった…オレら三人ともまな板の恋ならぬ、まな板のベイやった」
手につばをつけて、気合を入れ直す波留。
「そんじゃ、兄ちゃん、わしらも生存に忙しい立場てなもんで、本気でいかせてもらいまっせ…」
実践形式のテストのために、ちゃんと守備につく。一塁は佐伯、三塁は進藤のテスト要員で、遊撃は山下本人が、残る二塁は万永、外野は井上純、下園、川端がつく。打撃捕手は、秋元が勤める。
袋の男がマウンドを鳴らすと、波留がタイムをとる。
「おい、袋の兄ちゃん。投球練習せんでもはええんか？」
袋の男はうなずく。山下がすかさず翻訳。
「いいそうだ。ブルペンで投げ込んだそうだから」
「なるほど、それではいきまっせ…、しゃああ～」
波留は叫ぶが、今度は山下がタイムをかける。
「なんですか、山下さん」
すかされたかっこうの波留はおもわずずっこけるが、山下の狙いは…。

「投球したときに袋がとれてしまったら、この素敵なミステリーも台無しだ。そこでこれだ」
山下がポケットから取り出したのは、白いゴムひも。
「このひもで、袋にしばって、頭から飛ばないようにする」
「あれ、山下さん、それあれやないですか！　山下さんの現役時代に、帽子がとんでハゲ頭があらわれるのを、防ぐために、帽子に縛りつけたゴムひもやないですか！」
佐伯の揶揄に、山下はひるまない。
「そうだ、よく知ってるな」

これでようやくプレーボールの準備が整った。
「もう一度、気合入れますか。しゃああ～！！」
袋の男が、投球モーションに入る。
「む、振りかぶった…」
佐伯が思わず声を出したほど、袋の男は雄大なワインドアップだ。
振りかぶった両手を胸まで戻し、力を蓄え、そこから、その力を爆発する。
真上から投じられたボールは、ロケットのような球道を描き、秋元のミットを襲う。
打席の波留は、初球は様子見と、見送ったのはいいが…。
「！！」
「あ！」
「これは！！」
打席の波留だけでなく、守備についている佐伯、進藤の三人が同時で声を発してしまうほど、袋の男のボールは速く、そして切れ味を誇っていた。
「この袋の兄ちゃん！！　いったいどこのどいつや！！！！」

袋から捕手をみる男

「山下さん、何者なんですか、この男は！！　この練習場にはスピードガン表示がないから、正確な数字はわかりませんが、目測で１４０後半はでてましたで！」
「だから、正体は明かしたら面白くないといっているじゃないか」
「おい波留、山下コーチのいうとおりや。我々も袋男の正体探しを楽しもうやないかい」
「で、でもな佐伯、誰とわかれば、球種や特徴で攻略しやすいからに…」
「まあ、あわてずじっくりいこうやないかい…。推理はこの佐伯さまにお任せや。なんていうても、オレだけやで、横浜ベイスターズ誕生からずっとおるんは…。去年まで石井琢朗つう小賢しいのがおったけどな…。ベイ在籍選手、そして左腕、ここまで練習試合やオープン戦に呼ばれてないやつでおれらより年下…。そんなんすぐつきとめてやるわ…」
佐伯の口上が長いため、袋の男は、すでに第二球を投じていた。
これもまたストレート、しかも一球目よりも、速さが増しているようにもみえる。
「く…」
波留は手を出すが、当てるのがやっとだ。波留は打席から出て、一度体勢を取り直す。
「秋元さん…」
「なんだ…？」
「秋元さん、ブルペンであいつの肩慣らし付き合ったんでしょ？そん時、顔を見せて、投げていたんでしょ？」
「いや、ブルペンはあれと違う袋をかぶって投げていた」
「そこまできっちり演出しておるんかい…。で、球種は…。ストレート以外なんの球投げておったんですかい？」

「…」

「教えてくださいよ、先輩…」

「おい、打席に入れ…、袋さんが投げたくてうずうずしてるぞ…」

「はいはい…」

三球目、これもストレート、それが高めに浮くが、打ちたがりの波留、これに手を出して、空振り。

「……全部、ストレート…？」

あぜんとする波留に、秋元が、とどめの一言。

「ブルペンでも、全部直球だったぞ…。袋さんは…」

「それ、はよゆうてくださいな…」

種明かしをされても、波留が打てたかどうかはわからない。それほど袋の男のボールは切れ味鋭いのだ。

佐伯が、顎に手をあてて推理モードだ。

「左、年下、それに加えてあの速球？　そんなんおったか？　もしおるったとすれば、うちの投手陣で台頭せんはずがない…」

波留に替わり、進藤が打席に入る。波留はセンターに入り、センターの下園がライト、ライトの川端がサードにつく。

「たっぱはどのくらいや…。目測からすると、１８０ないな…。これで、吉見、那須野の長身左腕は容疑者から外れた…。１７０台の左腕…河原？　あれはオレらより一つしただ。山下さんのいうずいぶん下から外れる…。土肥か？　いやあいつは、技巧派左腕や、１４０後半おろか、１４０もようでん投手や、しかもあんな真上から腕はようでてこん…」

波留より進藤は通算打率がかなり劣る。波留が２７８あるにたいし、進藤は２３９である。その差、４分近くあるが、進藤は自信ありげだ。

「オレが得意の左腕、しかも単調な速球投手…」

進藤がこういうように、打率で劣るといえど、進藤は一本調子のタイプに自信を持っているのだ。おそらく対左腕の数字はそれほど

優れたものでないにしろ、単調な速球投手には、進藤の強烈なリストが源の長打力が、最大限に発揮されることだろう。
袋の男もこれを知ってか、波留の時よりも、より腕をふる。
その二球目、ミートした打球は、遊撃方向に飛んでいくライナー。
「よっしゃ」
おもわずヒットを確信してガッツポーズを取るが、遊撃は、名手山下だ。横っ飛びでこれを捕球。反動で帽子が落ちるが、すぐに拾いかぶり直す。一連の動作は現役さながらである。
「くそお…」
悔しがる進藤。

「ナイスピッチ」
袋の男に近づいて佐伯は激励を送るが、耳元で囁く。
「よう投げたな…。高宮…」
正体見えたりと佐伯は、名前を出して動揺誘いにかかるが、袋の男はただうなづくだけ。
「さあ、打撃にいきましょ…」
佐伯はグラブをバットに持ち替えて、打席に向かう。
「おれが耳元で正体いうたら、あいつびくっとしたで。高宮やとはな…ふふふふ。成績が上がらず、サイドにしてこじんまりしたと思えば、いつのまにか上に戻して、見違えるような速球を習得してからに…。だがのう、高宮とわかれば、こっちのもんや…。あいつにはたいした変化球はない。あいつには制球力がない。そして肝心の度胸がない。どうや、オレが正体見破ったら、あの動揺の仕方…。落ち着かせるために、ロージン触ってるが、その手がぶるぶる震えてるで…。速球磨いたのはいいが、あいつの場合、スタミナが問題や。そうこう簡単にスタミナがつくわけない。どうや二打席、五球ほどでスタミナ切れ寸前や…まあワンポイントやから、しゃあないか…」

左、佐伯よりもだいぶ年が下。ベイスターズ在籍歴あり、１７０台の速球投手。

「さらにや、グラブちらりとみさせてもろうたが、ＹＢ１５とあった…。ここまで隠して、大事なところ、抜け落ちていたな」

それに加えて、背番号１５。０９年現在ベイスターズの背番号１５は高宮がつけている。

「高宮、勝負や！！！」

佐伯は、袋の男に対してバットをかざす。

サード守備に再びついた進藤は、遊撃の山下に、

「高宮！　ああそうか、高宮か！！　たしかに小柄に」

正解かどうか問うが、

「高宮…？　うふふ。ただ私から言えることは、高宮は松竹との試合で投げたなあ…」

「え？　それじゃあ…」

高宮が正解であるか、山下は答えない。

練習試合、オープン戦、対外試合、どれにも投げていない投手と山下はいっていたが、そうだとすると、高宮は該当者から外れることになるのだが…。

袋にされる男

「え！　高宮じゃない！？　ちょっと待ってくださいよ…。ベイスターズになってから背番号１５の左腕って河原に、高宮…！！　あ～！！！　まさか、アイツ！　いや待てよ、アイツ！　が投げげられる体じゃ…」

「進藤、袋くんが投げるぞ、守備体勢に入れ…」

進藤は、袋の正体に見当がついたようであるが、佐伯は変わらず高宮だと思い込んでいる。

「多少、左で速くてもなあ…。速球だけじゃ、この佐伯さまは抑えきれんぞ！」

袋男はモーションに入る。第一球…。

佐伯は球種を読む必要はない、速球しかないのだから。

ボールは高く外れる。球速はあるが、制球はままならない。袋男は肩で息をしているようにも見える。

「疲れか。高宮くん…速球を磨くのもええが、スタミナもつけんとな。せいぜいワンポイントで終わるで…」

「山下コーチ…。袋があの男だとすると…肩は、体は、だ、大丈夫なんですか？！」

「それが心配だ。あの通り球速は十分…だが、問題は体力…。体も肩も元に戻したはいいが、また壊すことを恐れて、投げ込むが不足したいるようだ…」

「体と肩を元通り？　いやあの男はベイスターズ在籍のいつの時代にいっても、体は戻らないはずです！」

「早い話、アイツはずるをしたんだ…」

「スル？！」

「そうだ、大会規定によると、体を復元できるのは、プロ時代に限

られている。だが、あいつは、夜中に忍び込む、タイムカプセルを高校時代に戻したんだ…」

「高校時代?!　そうか、あいつの高校時代は…」

「大会規定に違反しているから、いままで隠して練習させていたんだ」

「規定はクリアできるんですか」

「アイツの速球を見てみろ…。あれを見せられたら、机上のルールなんて吹き飛ぶぞ…」

「……」

袋の男は、二球目を投じる。これも大きく外れてボール。

「ふはははは、高宮!　四球でええんか?」

制球を乱す袋の男、たまらず山下が檄を飛ばす。

「おい袋!!　怖がるな!!　このままじゃ失格だぞ!!　どうせダメなら壊れてもいいから、全力を尽くせ!」

袋の男はうなずく。

第三球目は、山下の檄が飛んだか、初めて変化球を投じる。

緩いカーブだ。肩を怖がってか、腕の振りが速球と明らかにちがう。

佐伯は投げた瞬間にカーブと見切ったが、ノーツーからの初めての変化球、百戦錬磨のベテランはこれに手を出さない。

「カーブか」

ワンストライクを取られたが、佐伯は勝ち誇る。一球で変化球を見切ったと袋の男を睨みつけた。

「速球がゾーンに入れず、変化球がこれじゃあ、佐伯さまは抑え込めんで…」

佐伯の挑発が応えたのか、袋の男が声を初めて声を発した。

「くそ〜…」

「なんや、高宮…。袋男の演技はもうおしまいか？」

「この袋が…オレの力にリミットをつけているんだ…」

そういうと袋の男は、かぶっていた袋を自らひきちぎった。

男の正体は…。

「やっぱ、オレの推理通り、高宮やん！　さすが名探偵佐伯さまや！」

「違うぞ、佐伯、そいつの顔をよく見ろ！」

進藤が叫ぶ。

「え？」

そもそも佐伯は高宮の顔を正確に記憶していないのだ。

「違ったか…誰や、お前…」

正体があかされても、佐伯は誰だかわからない。ついに山下がしびれを切らして、ネタばらし。

「北陸のランディジョンソン…森大輔。もう隠れる必要はない」

「佐伯さん、お久しぶりです…」

森は、いまさら佐伯に挨拶だ。

「森？　…ああ、おったな、森か…。おまえずっと二軍におったから、顔をよう覚えとらんかったわ」

「山下コーチ、あの森ですか…やっぱり…。どおりで、とんでもない速球を投げるはずですよ。オレに投じた速球、石井一久か、今でいうと菊池雄星と見間違うほどの威力でした…」

「あれが、高校時代一試合２３奪三振をマークした森大輔の本当の力だ」

森大輔。七尾工業時代、県予選で一試合２３奪三振をマークする

など、その怪腕ぶりを全国に轟かせた。田中良平、内海と並び、北陸三羽烏と称されたが、体力不足を懸念して社会人に。

その後、自由枠で横浜に入団するが、故障が相次ぎ、試合登板どころか、練習すらままならず、わずか三年で戦力外の憂き目にあった。

「オレはコーチとして、あいつをそばで見ていたが、ついぞまともな投球を見たことがなかった…。練習も別メニューの連続だ。それもそのはず、体自体、自由に動かないほどなんだから…」

「問題は、体力…」

「いくら、高校時代に戻ったからといって、体力不足で、社会人にいった投手…。大丈夫なんですか…山下コーチ…」

「…」

ようやく森と認識した佐伯は、

「おう、森か、相手に不足なしや…さあこいや」

森は、袋がリミッターだったわけではない。故障を怖がり、知らず知らず、ブレーキをかけていたのだ。今、そのたがを外す。

振りかぶる。

モーションに入る。

腕を振り下ろす。

そこから解き放たれたボールは、いままでのどのボールより速い。

ボールは弾丸のように、ミットまで一直線。佐伯はスイングをするが、予想以上の速さで腰砕けになる。

「なんや、今のボール…。どっかでみたことある…そうや、石井一久が、うちをノーヒットに抑え込んだときのボールはがこんなんやった…」

佐伯が呆然と見逃した次の瞬間…。

「うわ〜〜〜」
森が叫び声とともに、左肩を抑える。
遊撃から山下がすっ飛んでいく。
「ど、どうした、大輔…」
「今の、い、一球で、肩が…」
「大丈夫か、大輔…。悪かった、お前を無理に引っ張り出して…」
「いえ、これでよかったんです…。佐伯さんのような大打者を空振りにとれた…これで…たった一球でも、いい直球が投げれて…」
森は、そういいのこすと、山下に抱えられて、ベンチ裏に引き下がった。

「森…」
進藤は感傷に浸っているが、
「聞いたか、波留、おれんこと、大打者いうたで、森の奴」
「あほ、お世辞や。佐伯が大打者なら、オレはスーパースターや」
「なんや、大打者とスーパースター？　どっちが上かいな、もっとわかりやすい例えつかえや」
二人は漫才に励む。

大会事務局には、今日もファンからの電話がなりやまない。
礼儀のよさと、日本語の正しさが買われ、苦情対応係りに就任した木佐貫と、仕事がないから電苦情対応係に舞わされた久保裕也が、ひっきりなしの電話攻勢に追われている。
「はい、こちらはジャパンベースボールクラシック大会事務局、苦情対応係、木佐貫と申します。お客様は、今回どのようなご意見がおありで、お電話なさいましたでしょうか」
木佐貫がこのとおり、マニュアルどおりの対応を見せれば、同期の久保は、
「はい、こちら事務局…」
ずいぶん、おざなりである。
「え？　開幕はいつだって？」
苦情の大半は、これである。大会開催が決まって、膨大な時が過ぎているのに、いつになっても大会が開幕する気配がないのである。
久保は受話器を下げて、
「おい木佐貫、開幕はいつかだってよ」
「また、それか…」
「適当に、もうすぐだとか答えておこうか。そば屋の出前みたいに」
「それじゃあ、ダメだよ。お客様には、真実の情報だけ伝えないと。曖昧にしていたらダメ」
「オリックスに放出される人はいうことが違うねえ…。そうはいっても、開幕日程はオレらにもわからないんだぜ」
「抽選会はあったんだけどな…。あれからいくぶん日数がたっているけれど、その後の音沙汰が…」
「なら、しょうがない…」
久保は受話器を持ち直して、
「はい、お待たせ。もうすぐです…。はい、どーも…」

ガチャリとあっさり受話器を置く。

「しかしよ、木佐貫…。これだけ開幕しそうでしないと、ファンが鬱憤溜まるのもわかるよなあ」

「そうだね、まるで、久保の投球を見ているようだね」

「それいうなら木佐貫だろ…。四球を怖がって」

「真ん中に投げて」

「一発をくらい」

「首脳陣の方々にみっちりと叱られて」

「今度は攻めたらいいが」

「怖い打者の皆様に当ててしまって」

「またちびるか…。そりゃオリックスに放出されるわ」

また電話がなる。今度は木佐貫が受話器をとる。

「はい、こちら…」

木佐貫が名乗る前に、電話の主はまくし立てる。

「開幕はまだか！」

木佐貫は内心またかと思うが、表には出さず、丁寧な対応を忘れない。

「あのその件につきましては…」

「早く開幕してくれないと、困るんだよ！」

「どうのようにお困りでしょうか。詳しい事情をおっしゃってくれれば、こちらも対処の仕方をご提案します」

「縮まっているんだ！」

「え？」

「僕だけじゃない！」

「なにが縮まっているのですか…？もう少し詳しく…」

木佐貫の問いに返答なく、やがて電話の主の声が変わる。

「若松さんだけじゃない、僕も縮まっているんだ」

「え？　若松さん…。さっきの電話の方は若松さん…もしや、あの

小さな大打者ですか？　なにやら聞き覚えのある声色だと思っておりましたが…」
「そうだ、その若松さんだ」
「そうすると、その声は、もしや小坂さん、小坂誠さんではないでしょうか？」
「そうだ、僕は小坂だ！」
　小坂が名乗りを上げると、また電話の主が変わる。
「オレもだ、オレも縮まっているんだ！！」
「その声は、我が亜細亜大学の偉大なる先輩、赤星さんではないでしょうか…。あの苦情対応は私、木佐貫が勤めておりますので…」
「いまさら、オメーの紹介はいらねえよ。とにかく、オレたちは縮まってるんだ」
「オレたち？、そのオレたちとは、若松さんと小坂さんと赤星先輩のお三方でよろしいのでしょうか？」
「三人だけじゃない！　電話を替わるのもいちいち面倒だから、俺が口頭で伝える。田中一徳、平野恵一、万永さん、石川、大島公一さん、中日にいた鎌田ら、とにかく１６０センチ台の野球選手の多くがここにいる！　そのみんなが縮まっているんだ！」
「なんと！」
「今、こうしている間にどんどん縮まっているんだ！」
「さて、わたくしどもが、皆様の縮小に、いかなるお力添えをできるのかともうしますと、この短い時間では、とても十分な対応策をご提案願いかねますので…」
「対応策はただ一つ！　開幕しろ！　そうでないとオレたちは縮まりすぎて、消えてしまう！」
「わたくしどもも、全力で取り組んでおりますので、開幕までしばらくお待ちください…」
　木佐貫が電話対応に苦慮していると久保が見かねて、
「おいおいまた、開幕の苦情か。しかも、グダグダ長けな。オレに貸してみな」

木佐貫の受話器を取り上げると、
「もうすぐ開幕するっていってるだろ！　それまで、正座でもして待ってろ！　ボケ！」
赤星があの赤星だとわかっていない久保は、先輩に対して、ぞんざいな態度をとってしまう。
「あ、その声は、巨人の久保だろ！　てめー、球界の先輩に何て態度だ！　今度、あったときはメタメタにしてやる！」
「はいはい、メタメタにしてみろってんだ」
久保は怒りに任せて、受話器を置く。
「しつけえやつには、こういう対応でいいんだよ、木佐貫」
「おい今の赤星さんだぞ…」
「どの赤星だよ」
「阪神の赤星さんに決まっているだろ」
「え？」
ここで初めて、電話の向こうが阪神の赤星とわかった久保は血の気がさーと引いた思いをする。
「おいおいおいおい、まじか！」
「うん」
赤星といえば、普段は折り目正しいがが、一度切れると、球界きっての荒くれものと知られる。福岡のヤンキー久保は、その真逆。実はきわめて気が小さいのである。
「あわわわわわわわわわ」
「これでわかったかい？　日頃からきちんとした対応を心がけていれば、こんな目には合わないんだよ」
慌てふためき続ける久保。
そして電話の向こうの赤星たちは…。
「まったく、オレたちが縮まってなくなったら、大会運営に重大な損失を及ぼすのに」
「脅しは利かなかったな」
電話の向こうには、三人以外のちびっこ選手はいなかった。

「誰の提案でしたっけ？　こうやって脅せば、嫌でも開幕せざるをえないと言いだしたのは」
「若松さんでしょ？」
「いや赤星だ」
「いや小坂さんでしょ」
三人で罪をなすりあっているだけであった。

隠し球

田上秀則に、切り出したのは阿部慎之介の方からであった。
「田上くん、許せないよな」
「なにがですか？」
「隠し球だよ」
「あ！」
阿部と田上といえば、ともに、山崎浩司が仕掛けた隠し球にひっかかった選手である。
「ジャイアンツドラフト一位、ＷＢＣ代表、日本シリーズＭＶＰ、北京五輪予選最優秀選手、野球選手の王道を歩んできた、僕のただ一つの汚点なんだよ。隠し球にひっかかったってのは」
「そうですか…」
「この過去はどうあがいても消せるものではない。僕が偉大なる実績を打ち立てつづけても、隠し球にやられた傷跡は残る。田上くん、お前もそうだよな？」
「阿部さんほどの輝かしい実績はない自分ですが、消せるもんなら消したい過去っすねえ…」
「そうだろう、お前も消したいだろう？　オレみたいに栄光の歴史に汚点が色濃く記されるのも、アレだが、田上くんのようないまいちな選手だと、隠し球にかかった選手として後世に語り続けられるんだぜ？　九州産業大出身の田上くんにも、わかりやすくいうと、強肩強打絶妙なリードの光る阿部選手にも隠し球にひっかかった過去があるんですって…。で、田上くんは、オレのような輝かしい装飾なしで、ただ隠し球にひっかかったちょっと長打のあるマヌケ捕手となるわけだ。これ、耐えきれるか？」
阿部は、田上をタイムカプセルの前に呼び出した。しかもそれは警備の手薄くなる夜分遅くのこと。
阿部は、タイムカプセルをよからぬことに使う気ありありなのだ。

「だから、お前をここに呼んだんだ。もうわかるよな？　洞察力の鋭い捕手だもの」
「え…？」
「わかんねーのかよ、たく、打撃だけの二流捕手が…。タイムカプセルあるだろ！」
「ええ」
「これ、使いようによっては、タイムマシンとして使えるんだってよ」
「へえ…」
「これ使って、オレとお前が、隠し球にかかった日時に戻って…」
「隠し球にかからんよう、歴史を変えてくればええのか」
「ご名答、さあいくぞ、田上くん。まずは、お前がひっかかった２００９年の６月３０日、ところは、福岡ヤフードームだ」
乗り気でない田上を無理やり押し込み二人は、タイムスリップする。

「さあ、ついたぞ…。外に出ろ」
阿部に押し出される格好で田上は外の世界に出るが…。
「変わってないですね」
「そりゃ当たり前だろ、過去の世界といっても、つい最近だぜ」
二人はヤフードームの前にたつ。多くの客が、ゲートをくぐり、球場内に消えていっている。
「ちょうどいい。試合開始直前のようだ」
「でも阿部さん、どうやって隠し球を辞めさせるんですか？」
「山崎の奴に直接いえばいい」
「え？　それはちょっとまずい違いますか？」
「なんで？」
「立派な八百長やないですか！　不利なプレーをさせないように脅すいうんは」
「今更なんだよ、歴史を変える大事を前にして。軽い八百長行為く

らいでさあ」
「軽いや重いはありませんて。八百長は八百長ですよ」
「…煮えきれない奴だな。田上くん、お前が、山崎を呼び出して、軽くいってやればそれで済む話なんだよ。隠し球みたいな汚いプレーは辞めろって…お前は、たしか山崎の高校の一年先輩だろ？　先輩のいうことを聞けない後輩がどこにいるんだ」
「たしかに後輩ですけど…。それなら、もっとスマートに行きましょうよ？」
「スマートに？」
「そうです。同じ歴史を変えるなら、隠し球せんような正々堂々としたプレーヤーに、山崎を仕立てるんですよ」
「どうやって？」
「高校時代に戻るんですよ。赤子の魂百までいうやないですか。野球人にとって、高校時代のプレースタイルが絶対やないですか！」
「なるほど、山崎の高校時代に戻って、腐った精神を入れ替えさすと」
「それが一番ですよ！　僕はアイツの先輩ですから、ガツンといえる立場やし」
「そうだな、それでいくか…。山崎を更正させれば、オレの隠し球にひっかかった歴史も消えて、一石二鳥…それどころか、これからも山崎の隠し球に悩まされることはなくなる…」
「それなら、はよ行きましょう！」
二人は再びタイムカプセルに乗り込み、
「よし、山崎の高校時代か…。田上くんはオレの一つ下、山崎はそのまた一つ下となると、高校時代は１９９６年から１９９８年の三年間か…」
「９８年でいきましょか。ちょうど僕が卒業後で、僕と僕のバッティングが避けられますし」
「そうだな、９８年か…。オレがアマチュア全日本の正捕手として輝いていた時代だな…」

「さすがに、９８年となると、今と雰囲気違うな」
「もうかれこれ１０年以上立ってますからね」
二人が降り立ったのは、大阪産業大付属高校、野球部グランド前。
「僕が、山崎、呼んできますよ」
「頼むぜ。きっちりととくとくと説教して、あいつの腐った野球観を更正させてくれや」
「ああそうだ、阿部さんは、その時間でマントでもこうてきてください」
「マント？」
「そうマントです。いくら山崎が僕の後輩いうたかて、少しの説教で野球観変えるとは思いません」
「それとマント何の関係あるんだ？」
「ショックを与えるのは、常識を越えた不思議な体験やないかと思うんです。阿部さんがマントをかぶり顔を隠して、予言者か魔法使いを演じるんです。その不思議な風貌の口から、まっとうな野球論語られたら、高校生の野球観なんて一発で変わりますよ」
「それはいい手だが、なんでオレの役目なんだ？」
「この騒動に引き込んだのは、阿部さんやないですか、それくらいやってくださいよ」
「しかたねえな…」

田上は、ＯＢとして山崎をグランドの外に呼びつけた。
「ちわーす、田上先輩。わざわざ福岡から後輩たちの激励に駆けつけてくださり、大変ご苦労さまです」
山崎は帽子をとり深々と頭を下げる。
「おう山崎、久しぶりやな」
「あれ、先輩、ちょっと太りました？」
「大学の寮のめしがうまくてな」

「ところで、今日は、僕に何の御用でしょうか？」
「ちょっとお前に会わせたい人がいてな」
「え？　誰ですか？」
「お偉い予言者や」
「予言者？」
「お前、プロ志望なんやろ？　近鉄のスカウトが接触してるそうやないか」
「そうです。同じ遊撃手の近大の二岡さん次第らしんですけど、なんやら三位あたりでとりたいいうてましたよ」
「そこでだ、そんなお前に、予言者の先生からありがたい言葉をもらってな、プロの世界に身を引き締めて入ってもらおうおもうて、わざわざ来てもらったんだ」
「そうですか、先輩のご厚意ありがたくちょうだいします！」

「それじゃ、せんせ…」
田上が呼ぶと、木の影からマントをかぶった阿部が登場する。
「なんか、それぽいですね…」
「それぽいいうな。れっきとした大先生や」
「失礼しました…」
「ウーナギーイヌ先生いうんや」
「変わった名前ですね…。どこの方ですか？」
「詳しい国籍は話してくれんが、日本じゃないことはたしかや」
阿部は内心腹を立ててるが、作戦を遂行させるためには顔に出さない。

「君が山崎浩司くんだね？」
「わ、日本語しゃべった？」
「さっきから何度も失礼いうてるやろ、そのお前の態度を改めたくてよんだんや…」

「すんません…」
「それでは、せんせ、山崎にご享受お願いします」
「こほん、こほん」
阿部は、それらしく咳をして威厳を高めてみる。
「私を信用していますか？」
「え？　ええもちろん…」
「君は嘘をいっている？」
「え？」
「目を見ればわかります。無理もない。いきなり知らぬ男を信用しろいうのも無理がある話だ。ならば、予言をしよう！」
「予言？！」
「そうだ、この予言は確実に当たる。これから十年、君の周りで起こることから、社会の動きを予言してしんぜよう。君は年を重ねていくうちに、私のすごさが嫌でもわかるだろう」
「はあ…」
「すべてが私のいうとおりになる。そして、君は私がいうような人間になろうだろう。常に正しく、卑劣なマネをしない野球人に…」
「…」
「予言、君は近鉄に指名される」
「はあ…」
「近鉄はなくなる」
「なくなる？　どういうことですか？　身売りですか？」
「違う、消滅だ！」
「消滅？！！　ちょっと待ってください！　消滅したら、僕はどないなるんですか？」
「消滅は２００４年のことだ」
「２００４年！　６年後やん…まだ、僕、ペーペーやろ」
「だが、安心するいい、君は救われる」
「ほんまですか？！」
「君はレギュラーになる」

「近鉄が消滅してレギュラー…？」
「そうだ、紆余曲折あるがな」
「レギュラー？　一応、選手としては成功するんですか…」
「ただ、ひとついっておきたいことがある」
「なんですか!?」
「汚いプレーは厳禁だ。さすれば君の人生はいつまでも輝ける」
「汚いプレー？」
「そうだ、野手を殺しにいくスライディング…。ホームベース上での無理な体当たり、お立ち台でガムをくちゃくちゃなんてもってのほかだ…」
「はあ…。心配せんでも、僕、高校生ですから、そういうプレーはようせんですよ」
「そして隠し球だ！」
「隠し球!?」
「これだけは絶対にご法度だ！　いいか、これをしたら、君の野球人生はそこでお開きになると、私の水晶玉に出ている」
田上は内心舌を出す。それではいくらなんでも単刀直入すぎるよ、阿部さんと。
「そうですか、隠し球ですか…わかりました…」
このあと、阿部は予言者としての真実味がますように、あらゆる予言を山崎に話した。
それは確定した未来の出来事であるが、９８年に生きる山崎にとっては信じられない出来事ばかりである。
「へえ？　横浜高校の松坂が夏の甲子園決勝でノーヒットノーラン？　イチローがメジャーに移籍してＭＶＰ？　プロ参加の野球の世界大会が開かれて、日本が連覇？　しかも中日の選手は集団ボイコット？　ほんまですか？」
「全部、現実に起きることだ。先生のいうことは絶対だ」
「そうですか…」
「そこの田上くんも、素晴らしい人生を歩む。ホークスのレギュラ

ー捕手となりベストナイン捕手になるだろう」
「先輩すごいやないですか！　ホークスいうたら大学と同じ福岡やし…でもホークスには城島いうやっかいな捕手がいますよね…それ追い越しちゃうんですか、先輩？」
「そのとおり、城島は、田上くんに負けて、阪神に働き場所を求める」
「へえ、城島追い払うなんてさすが先輩やなあ…」

野球の予言だけでは、山崎を洗脳できたりないと阿部は世相の動きを予言しはじめる。
「次に社会の動きを予言してしんぜよう…」
言葉が続かない。阿部は、そこらの野球選手に漏れず、社会の動きに疎いのである。
「不況が続く…」
絞り出してこれである。
「不況？　今も不況やないですか！？」
「それが十年以上未来でも続くんだ。しかもさらに泥沼だ」
「へえ…」
「だから、不正なる野球をするのはやめよう。正しく野球をしよう」
強引に結びつける阿部。
「わかりました…今日はありがたいお言葉ありがとうございました…」
山崎は口でこういっても半信半疑…。だが、阿部の予言がことごとく当たるのだから、信じずにはいられない。
「あのウナギいうの言うことが全部当たってるやん…」
山崎は正しく生きる。
山崎は正しく野球をする。

そして、二人は現代に戻る…。
「歴史は変わったやろか」

「ここまで面倒なことして変わらなかったやってられねーよ。おい田上くん、オレが持ってきたノートブックで山崎浩司と検索しろ」
「はい、ただちに。もし山崎が正しく野球人生を送っていたら…」
「山崎は隠し球をしないことになる…」
田上は山崎浩司と検索画面に入力する。ヒットされたページにアクセスするが…。
「あ…隠し球の記述がない！！」
「うまくいったか、やれやれだぜ…」
「それどころか、山崎は０７年に野球界を去っている！！」
「なんだって！」
「そうやった…。ブラウン監督に干されていた山崎が、窮地を脱したのは、阿部さんを隠し球にかけた０７年８月のことやった…。隠し球をやらないと歴史になると、山崎は唯一のアピールのしどころがなくなり、球界から消えてしまったんや！」
「…まあ、いいじゃないか…田上くん、隠し球の過去が消えたんだから…」
「ええわけないでしょ！　僕の後輩ですよ！！　歴史を替えに行きましょう！」
「…しかたねえね…」
こうして、田上と阿部はまたタイムカプセルに乗り込んだ。

隠し球はループする

「山崎は特に秀でた打力や走力があるわけじゃないんです。どこでもこなせる守備力に、汚いプレーをしてなんぼの選手なんです」
「じゃあ、どうするよ？　オレが隠し球にかかるように歴史変えるのか？」
「いや、考えがあります。０７年の日程を調べたところ、阿部さんが隠し球にかかった１５日の二日後に、広島は阪神と試合をしています。山崎はまだ一軍に帯同してますから、そこで、隠し球をやらせるんです」
「そうか、隠し球をさせて、ブラウンいや、他球団の編成にアピールさせるのか。でも、どうするんだよ、山崎はすっかりと洗脳されてるんだぞ。隠し球をなんてするもんか」
「洗脳させたのは誰ですか？」
「オレか…」
「そうですよ、阿部さんまた、よろしゅう頼みますわ」
「…またマントかよ」
「それでは、２００７年８月１５日にタイムスリップ…」

二人は阪神ー広島が行われる京セラドーム大阪に降り立った。
「ふう…夏真っ盛りだから、暑いなあ、これでマント着用かよ…」
「それじゃあ、僕、山崎呼んできますから…」
「おい待て田上くん、不自然じゃないか？」
「え？」
「田上くんもおれもシーズン真っ盛りだろ。他球団の選手を呼び出すなんて、おかしな話だろ」
「あ…それじゃあ、どうすれば…」
「どうするか…」
「ウーナギイヌ先生がまた山崎を呼びに来た。それで一発じゃない

ですか？」
「ウーナギイヌは辞めろ…」
「山崎は先生を信頼して正しく野球をしている。その先生が９年ぶりに山崎に会いにくる。断る奴がおりますか？」
「それでいくか…」
「じゃあ、さっそく球場の係の人に連絡をとってみますわ。ウーナギイヌ先生の名を使って…」

「山崎浩司さま、ウーナギイヌさまがお待ちです。至急、球場外〇×ゲートまでお越しください…」
アナウンスが流れると、田上の読みどおり、山崎はのこのことやってくる
「山崎来たな！　それじゃあ、後は阿部さん頼みますわ…」
「おい田上くん、お前もだ」
「え？」
田上は物陰に隠れようとするが、阿部に引っ張り出されて…。

「久しぶりですね、先生。９年前のあの日はいつまでも忘れませんでした！　もう練習そこそこ、すっ飛んできましたよ！」
山崎は、マントをかぶった阿部を尊敬の眼差しで見る。その眼は、洗脳が効いたか、より澄んでいるようにみえる。
「あれ？　先生、その横の方は誰ですか？」
「これは、私の弟子で予言者の見習いみたいななもんだ。名前はハーシラレホウーダイという」
「そうですか！」
もちろんその弟子の正体とは、むりやりマントをかぶらされた田上である。

「またお前に予言を与えにきた」
「ははああ～　ありがたくちょうだいいたします…」

「お前は野球人生の岐路に立たされているな」
「わかりますか？　先生のいうとおり正しい野球人生を心がけて、おかげで広島に移籍したから出場機会に恵まれて、ようやくそれなりの実績を残したんですが、その後、さっぱりで…今回ようやく一軍に戻れましたが、十分なアピールができないままですわ…」
「正しいプレーを続けるのは悪くないが、ここは運気を変えるために、一度、汚いプレーをやってみるのもいいかもしれんぞ」
「汚いプレー？」
「そうだ、隠し球とか」
「いやそれは先生が、断じたプレーじゃないですか」
「その私がやれといっているんだ。なあ弟子のポロリくん」
「弟子のポロリ、さっきと名前違いますよ？」
田上はまたうなづく。
「ポロリはミドルネームだ」
「はあ…」
「わかったか、隠し球だ。これを成功させれば、君の道は開ける。ただし一度だけだぞ…二度とするな」
「わかりました…チャンスがあればやってみますわ…」
「そうそう予言もしておこう」
「待ってました…」
阿部の予言は絶対確実である。
「今年の日本シリーズで、山井投手が完全試合をしかけるが、落合監督が九回に岩瀬投手を投入するって？　ブラウンが楽天の監督？　星野さんの評判が地に落ちる？　ほんまですか？　いや先生のいうことは確実でしたわ…」
阿部はさらに社会の動きを予言する。
「不況はまだまだ続く…少なくとも二年は…」
「ほんまですか？　不況が？」
また不況の話である。

すっかりと洗脳された山崎は、球場に戻る。

「ふう、マントは暑いわ…」
「効きましたかね」
「大丈夫だろ…」
「確かめますか…山崎が隠し球を遂行するか…」
「よしチケット買って野球観戦がてら見守ろうか…」

スタメン落ちの山崎であったが、遊撃手の梵に替わり七回裏から守りについた。

「来ましたよ、山崎」
「おうやっとか」
三塁側から二人は行方を見守っている。
「でも、二塁に走者いかんと隠し球の機会ありませんよ」
「そうだな…それがやっかいだ」
であるが、つごうよく、二塁打が出て、
「おうやった」
「いけ山崎!!」
だが、その走者が悪い。
「でも肝心の走者が…」
「兄貴…金本兄貴…」
外野から返球されるが、投手には返さず、山崎はボールを持ったままだ。
投手はマウンドプレートを踏まないようにぐるぐると回る。（投手がプレートを踏むと、隠し球はボークとなる）
金本は知らず、二塁から離れて大きくリードをとる。
山崎はするすると金本の背後に近づき、タッチ。
二塁塁審がアウトを宣告。
何が起きたのかわからない金本。

二塁の東出とハイタッチする山崎。
金本はようやく事情をつかむ、その顔は怒気にあふれている。

「かあ～よりによって金本兄貴！！」
「知らんぞ、オレ」

二人の心配をよそに、山崎は金本に闇討ちを受けることなく、無事、日々を過ごした。
被害といえば、腹を立てた阪神ファンに、自宅の玄関を壊されたくらいであった。
隠し球をしたことで、世間と球界に名を知らしめた山崎はオリックス移籍後レギュラーの座をつかむ。

歴史は変わった。
山崎浩司は、一度の隠し球を記録したにすぎない。

ただその隠し球の汚名を晴らしたい男がいた。
もちろん金本だ。
「おい、新井！　お前を呼んだのはな、このタイムカプセルを使って、過去に戻り、山崎に隠し球の過去を消すためや…」
以後、無限に続く。

スパイ大作戦

巨人戦との初戦を控え東京ドームに乗り込んできた近鉄猛牛軍団は、宿舎を東京ドーム近くの東京ドームホテルにとった。

監督の西本は、各マスコミの巨人圧倒的優位の論調に、腹に据えかねていた。

「なになに、巨人圧勝!?　近鉄の荒い野球は巨人の組織野球の前に破れさるやと？　問題は勝敗やない、ＯＮと松井がいくつ東京ドームのスタンドに放り込むかだ？　くう、ここまでこけにされんと闘志がわいてくるわ…」

なかでも西本の顔を赤くしたのは、牧野ヘッドコーチの談話だった。

「なになに…近鉄の打線の弱点はすべて研究ずみ？　なんなら完全試合もお見せしましょうか？　やと？　くそ～牧野のヤロー、テツの腰巾着がえらそうに…」

牧野の談話はいうまでもなく西本を挑発させるための作戦であるが、まんまとそれに乗る西本も老いてなお血気盛んだ。

「絶対負かせて、テツと牧野に土下座させてやるわ…」

とはいえ、１２球団最多の日本一回数を誇る巨人と、日本一ゼロのまま、消えた近鉄の戦力差は歴然としている。

「監督、梨田です…」

「おう梨田か入れや」

梨田を自室に呼び寄せたのは、西本自身も認める戦力差を、ひっくり返すためのあの手この手の作戦を練り上げるためだ。

「さっそくやが、ナシ、お前、巨人に勝てる思うか？」

「勝てますよ」

「正直にいえ」

「……ちょっと難しいところがありますが、作戦はちゃんと考えてありますよ」

「そうか、さすが作戦コーチやな。ところで、巨人の先発は誰がくる思う？」
「ズバリ、堀内さんだと思いますね」
「ホリか…その根拠はなんや」
「監督が川上さんでしょう？　川上さんといえば、Ｖ９、Ｖ９といえば堀内投手ですよ。大舞台の経験も豊富ですからね」
「そこが、ナシ、お前の甘いところや。だから日本シリーズに勝てないんや。（梨田は通算０勝２敗、西本は０勝８敗）ホリはこんとワシは思う。なぜなら、舞台は狭い東京ドームや。しかもいてまえ近鉄打線が相手や。一本調子で被弾の多い堀内は、大事な初戦にワシは使わんと思う。一発で相手に流れがいくのが一番厄介やからな」
「そうですか、それでは監督は誰でくると思いますか？」
「左投手やろうな。ワシが巨人の監督で近鉄打線分析したら左を当てるな」
「左ですか？」
「そうや、左や。ブライアント、ローズ、マニエル、中軸にＭＶＰトリオの外人左打者がおるからな、この三人を封じ込めにかかる、ワシならな」
「つなぎ役に新井さんや小川亨さんもおられますからね」
「で、巨人の左で先発してきそうなの誰がおる？」
「そりゃ高橋一三さんがおられます。川上さんいうたら右は堀内、左は高橋一の時代ですから」
「一三か。アイツはある意味堀内以上に大舞台に強く、ハマればやっかいやけど、制球力にかけるわな。高橋以外にはおらんのか？」
「ちょっとお待ちください…資料見ますから…。そうですね、他にメンバー入ってる先発しそうな左ですか…」
「内海とか高橋ヒサとかいなかったか？」
「現役の二人ですね…補欠には入ってるようですが、ベンチ入りはないようですよ」
「新浦はどうや？」

「これも漏れてます」
「古い時代になるが中尾は？　２００勝投手やろ？」
「コーチとして登録されておりますが、選手登録はなされてませんね」
「伊藤芳明は？　沢村賞とったはずや？」
「伊藤さんも漏れています。あ、なぜか、スカウト登録はされていますね。誰をどういうつももりでスカウトするかようわかりませんが…」
「ん～ん～　なんやったっけな、みや…みや…でてこん、顔は思い浮かぶんやけど…」
　西本が言葉につまっていると、突然ドアが開いた。
「ん～ん～　そうやその顔や」
「ど～も、宮本で～す。お邪魔します～」
　そこには、立看板を持った宮本和知がいたのだ。
「噂をすればなんとやらやな…」
「西本監督に、梨田さん、突然のところですいませんが…」
「なんだ、宮本、ちょうどお前の噂をしていたところだぞ」
「え、そうなんですか、それはちょうどいい」
「で、なんのようや」
　西本は切れぎみだ。それを感じ取った宮本はより下でに出る。
「実はですね、大会直前特別企画と称しまして、晩ごはんを調べたいと思いまして…まあ単刀直入にいうと、隣の晩ごはん野球バージョンなんですが…」
「晩ごはん、いうてもホテルの食事だぞ」
「まあそうなんですけど…」
　宮本とスタッフは、部屋の中に図々しく入り、テーブルに並べられた軽食を勝手にカメラに納める。
「ほう、おいしいそうですね～　ちょっとこのツマリもらってもいいですか～」
「勝手にせい」

西本は仏頂面を崩さないが、梨田は営業用スマイルを振りまく。
「おう撮ってもええけど、こんなん撮って絵になるか？」
「お二人のツーショットが撮れれば、それだけで十二分、絵になりますから！」
宮本は必死に取り繕うが、何か怪しさが残るのだ。梨田は、そのことにうすうすと気づきはじめた。
「宮本、なんか、ツマミ以外のも映してないか？」
ツマミに乗ったテーブルには、梨田が書き留めている作戦メモが置いてあるのだ。
梨田は、あえて、ツマミの近くにそのメモを寄せて宮本たちの反応を確かめにかかった。
「おい宮本、メモもフレームに入ってるで」
「え、え、そうですか」
怪しい。
梨田は何かを確信して、わざと作戦会議を再会させた。
「それでは、監督、会議の続きですが…」
宮本は遠慮して、部屋を出ることなく、逆に耳をそば立ててるように見える。
「西本監督、うちの先発は山崎慎太郎でいきましょうか」
もちろんこれはデタラメ。梨田は宮本を巨人軍の派遣したスパイと確信して嘘の情報をわざとながしているのだ。
「山崎慎太郎！　おい梨田！！　ふざけるな！　わざと負けるつもりか！　山崎の球威でどうやって巨人打線封じろいうんや！！」
だが肝心の西本がそれに気づいていないから台無しだ。それでも宮本がいるうちは嘘の情報を流すしかない。相手を撹乱させるいい機会だ。
「捕手は藤井でいきましょう！　これ巨人はビックリしますよ！僕が有田さんがくるおもてますからね」
「なんで藤井や！」
「外人はローズやマニエルじゃ、巨人さんに研究されてますから、

思い切ってスチーブンスとテリーリー使いましょう」
「誰やテリーリーいうのは」
いつまでたっても西本は梨田の意図に気づかないが、梨田はでたらめ情報を流しつづける。
宮本はひとしきりの情報を得たと思うと、
「それでは、お邪魔しました～」
ようやく部屋から消えた。

「おい梨田、お前ふざけるのもいい加減にしろ！　また昔のようにぶん殴られたいんか！」
「西本監督、宮本は巨人のスパイですよ?」
「スパイやと?　そうか、テツめ、相変わらず姑息な手段を使いおるな…」
「調べた方が、いいじゃないんですか?　情報つつのけじゃありませんか?　なにせここは東京ドームホテル、敵方の領地みたいなもんですよ」
「盗聴器か?」
「調べましょうか?」
「いまどきの盗聴器はワシらがわからんほど小型化巧妙化しておるやろ、探すだけムダや」
「そうですか…では場所を移しましょうか?」
「ふん、情報が盗まれたかて、勝てばいいんや」
西本は強気というか強情そのものであるが、巨人軍の魔の手は盗聴器だけではすまない。

「…なにか気配を感じるんですが…」
梨田はドアのついたほうの壁を確かめる。
「このあたりに、人がいるような」
「なんや盗み聞きしてるいうんか?　まさか、いくら巨人でもそん

なあからさまなことはやっておらんやろ」

「いえ、壁に耳あり、障子に目あり、昔からいいますでしょ？」

梨田は確信まで迫っていた。

正しくは、壁に耳あり、障子にケアリーであった。

隣の部屋にはこのためだけに、寝泊まりしているケアリー（９２年のみ所属）だけが耳をそば立てていたのだ。

なおケアリーは半年で帰国したため、日本語の理解が深くなく、梨田と西本の会話をほとんど理解してなかったことを付け加えておく。

「ナシ、気にすんな」
「西本監督、そうはいっても用心に用心を重ねて…」
「時間がない。座れや」
「は、はい…」

「で、話の続きは何やったかな」
「巨人の先発が誰がくるかですね」
「ああそうやった。堀内か高橋一三かって話になったんやな」
「その二人が有力ですけど、私はまだ可能性がある投手がいると思いますね」
「誰や？」
「別所さんとスタルヒンですよ」
「ベーやんにスタちゃんか。３００勝投手やからな、あるな…」
「あと、私が巨人の監督だったらの話ですが、斎藤雅樹か上原を起用しますね。この二人は安定感が巨人史上随一です。斎藤はペナント開幕戦の実績が抜群、上原は国際試合無敗と大舞台になれてますから」
「桑田や槙原はないか？」
「その二人は、ちょっと安定感にかけるきらいが…槙原の最大出力は目をみはるものがありますが…」

コンコン…二度、三度、ドアをノックする音がする。
「また来客か？　ナシ頼んだわ」
「はい…誰や？」
「あのボーイです…お話中のところすみませんが…軽食の補充に参りました…」
「そうか、入れや」

「お邪魔します…」
ボーイが丁重にドアを開けて、入室するが、
「ボーイさん、けっこう小さいね」
「あ、はいよくいわれます…１６０前半なんですよ…」
「そうか、小さいのに負けず頑張ってよ…」
「どうも…」
「松本くん…新人王おめでとう…」
軽食の皿に手をかけたボーイの手が一瞬止まる。
「……な、なんのことですか？　新人王って…」
「うふふ」
「それでは、失礼しました…」
ボーイはそそくさと退室する。
「名前呼んだな、あのボーイ、ナシの知り合いか？」
「いえいえ、松本ですよ」
「松本？」
「あのボーイもスパイですよ、巨人の松本哲也ですよ。日本シリーズでいえというほど奴の姿を見ましたから、ボーイの格好でもすぐにわかりました」
「あいつもスパイ？」
「ええ、このツマミの入った皿の横にある作戦メモを必死になって、横目で見ていましたよ」
「まったく、巨人のやることは…」
「それでは、うちの打線をどう組むかです、巨人の先発が右か左かでガラリと変える必要がありますが」
「右や、右、ワシなら左でいくが、テツみたいなおもしろくない野球する奴は、堀内でくるやろうからな」
「それでは、右投手と推定して組みましょうか」
「打ち勝つしかないな。ＯＮと松井の三人だけで通算１５００本以上本塁打打ってるんやで。これの上にいく打線を構築せんとな…。おいナシ、近鉄の日本人で年間に３０本以上打ったの誰がいる？」

「栗橋さん、土井さん、ノリ、羽田さん、石井…の五人ですね」
「五人か…寂しいな…それで外人は？」
「ブライアント、ローズ、マニエル、ジョーンズ、クラーク、バンボ、デービスの七人ですね」
「合わせて１２人か…おいナシ、打ち勝つぞ…」
「え？」
「その１２人の全部使えるオーダー組めや…」
「え？！　そんな不可能ですよ！　ポジションがかぶり過ぎています！　ＤＨがいくらあっても足りませんよ！……？」
困惑していた梨田であったが、ふと気配に気づき立ち上がる。
「どうしたんだ、ナシ、またか」
「ええ」
梨田は扉を開くと、そこには吉岡がいた。
「なんや、吉岡、お前か、スパイおもうたで…」
「あ、ちょっと監督に用があったんですが、お取り込み中のようでしたね、すいません、また出直します…」
吉岡はそういうと走り去った。
「……」

「なんや誰や」
「吉岡ですよ」
「吉岡か、またスパイ思うたわ」
「スパイなんじゃないでしょうか？」
「吉岡が？　あいつは我が近鉄の一員やぞ」
「元巨人ですからね…しかもあいつは補欠で、開幕の巨人戦でベンチ入りする予定はない。寝返ってもおかしくない立場ですよ…」
「ふん、疑心暗鬼になるのが一番悪いで」
「それが巨人の狙いじゃないですか？　情報を探るためにスパイを動員しているのではなく、動揺を誘い組織を内側から破壊するのが…」

「牧野やテツがやりそうなことやな…」
「それで、その１２人すべてをオーダーに組むいう話なんですが」
「不可能か？　９人は放り込めるやろ」
「捕手がいませんよ、二塁手もいない」
「そうか、そこは本職でいくか、二塁は大石、捕手はお前か有田やな」
「となると残りの七つのポジションは…」
「その１２人のうち七人や」
「守備が破綻しますよ」
「球場は東京ドームや。外野は狭い。守備範囲に気を取られることもないやろ」
「そうですか…」
ガチャーン、突然、物騒な音がした。
「なんや」
ホテルの窓ガラスが割れて、ボールが飛び込んできたようだ。
「今度はスナイパー雇って発砲おもうたが、ボールか…」
梨田が割れた窓から外を見ると、野球少年？　がこちらを見てボールを返してくれとさかんに促している。
「なんや草野球の少年か、大変やな、都会の子は。野球やる広場もなくホテル前でやならいかんのだから」
梨田はボールを投げ返す。五階から投げ下ろしたことに加えて、梨田の強肩だ、すさまじいスピードとＧが加わるが、少年は難なく補球する。
「ありがとうな～　おじさん～」
「お う気をつけえてやれよ、亀井、しかしさすがゴールデングラブやな。捕球ようできた」
「ただのガキンチョか、ナシ？」
「ええ亀井と鈴木尚広と脇谷と古城が野球やってただけですよ」
「また巨人の選手か」

「はい、情報を得る目的いうより、会議の邪魔をして霍乱狙いみたいですね…」
「ふん、わしらは動じんぞ」
「…となると、オーダーは、一塁デービス、三塁石井、遊撃ノリ、左翼土井さん、中堅ローズ、右翼栗橋、ＤＨマニエルになりますが、本当にこの守備陣形でいけますか？　三遊間の守備吐範囲狭いですよ？」
「王長嶋松井相手に三遊間ゴロで抜けるヒットですんだらもうけもんや」
「なるほど…これこそイテマエですね…取られたら取り返す野球ですか…それでうちの先発は誰で生きます？　鈴木さんか野茂か阿波野か」
「ふはあ～　なんか眠うなってきたな。続きは明日や…ナシ、帰っていいぞ…」
「そうですか、先発は明日ですか…」
「なんや不満か？」
「いえ…それでは失礼します。お休みください、監督…」

梨田が部屋からでると、ボーイに扮装した松本と顔を合わせる。
「よう松本」
「うまくいきましたね…なし…いや中畑さん…」
「ふふふふふ、もうこのマスクは取ってもいいかな」
マスクを脱ぎ捨てるとそれは梨田に扮した中畑であった。
「いやあ、同級生に化けるとはいえ演技に苦労したなあ」
「情報ばっちり？」
「ああ、近鉄のオーダーもばっちりだ。これがひどいオーダーでさあ、勝ったも同然だよ、うしししし」

始球式選定会議

開幕を前にして困ったことがまた起きたのだ。始球式に適した人物が皆目見当たらないのである。

なにせ、始球式に似つかわしい球界の偉人や大選手は大会に首脳陣選手として参加しているのだ。

タレント、有名人や政治家でお茶を濁すことも案として浮かんだが、名誉ある大会に野球人以外をグラウンドに上げるのはふさわしくないと却下された。

始球式会議は紛糾が続いたが、結局、大会に参加している以外の野球人に限定し、各球団に選定が任されることになった。

オリックスを向かえ広島新球場、マツダスタジアムで開幕を迎える広島が人選に頭を悩ませていた。

「新井に投げさせましょうか」

大下の提案に石本秀一総監督は首をひねる

「新井はベンチ入りを決めたじゃないか」

これには白石敏夫名誉監督も賛同し、

「そうじゃ、石本さんのいうとおりじゃ、新井はダメじゃ」

門前総監督補佐も新井案にダメ出しをする。

「そうそう、新井はダメ」

困った大下は、

「それじゃあ、誰がいるいうんですか？」

大先輩に向かって強い口を聞くが、

「おい大下、口が過ぎるぞ、先輩達は敬いなさい」

古葉監督にたしなめられる。

「しかしですね、新井はベンチに入れたいうてもたいして役に立ちませんよ。代走や守備ができるわけでもない。代打いうても確率が低すぎますわ」

「なにをいう、大下、新井をねじ込んだのは、駒沢の先輩のお前や

ないか」

「石本総監督、お言葉ですがね、私は新井を候補に入れ直しただけで、後は新井の自力でベンチ入りを掴んだわけで、ワシは何もしとりませんわな」

会議の雰囲気が悪いと、調整派の阿南ヘッドコーチが割ってはいる。

「大下！　お前は内野守備走塁コーチなんだぞ！　スタッフの中では下っ端やぞ」

「しかし、総監督だの名誉監督だの補佐だのヘッドだの役職が多すぎじゃありませんか？　これじゃあ責任の所在がハッキリしませんわ、古葉監督、いったいこのスタッフで一番エライのは誰ですか？」

「それは、もちろんこの私だよ」

「なら、もうちょっと統率してくださいよ」

大下がそういうのも無理はない。広島の監督には、優勝４度の実績が買われて古葉が就任したが、広島苦境時代を支えた先人たちを無下にはできないと、彼らに重大な役職を与えたのだ。

初代監督の石本に総監督。

広島にかけつけて選手兼任監督についた白石に名誉監督。

王シフトを考案したことで知られる門前に総監督補佐である。

役職名だけで実権は握らせないはずであったが、彼らはこうしてスタッフ会議に出ては、発言を統率している。

古葉にしても、先人たちには強く出ることができず、傍観している現状だ。

広島政財界のバックを盾に、一コーチの立場から、広島制圧を企んでいた大下にとって、彼ら三長老は、目の上のたんこぶである。

なにせ彼らは揃って広島県出身で、大下よりも強固なバックを持っているのだ。

「そうだ」

「どうした、大下、何がそうだだ」

「いえ、こっちのことですわ、気にせんとしてくだされ」
大下が思わず口に出してしまうほどの名案が浮かんだようだ。
新井追い出しがダメなら、三長老の誰かに始球式をやらせて、それでお引き取り願おうという魂胆だ。
なにせ相手はオリックス。一番打者はイチローで決まりである。イチロー相手に始球式となれば、広島ローカルだけでなく、全国メディアも放っておかないだろう。イチローと対比されることで、偉大なる先人がいたことを、現代に広く知らしめることができる。
野球人にとってはこの上ない始球式である。
大下は、こう繰り出せば、名誉に溺れる長老たちのこと、一人は乗ってくるだろうと企んだ。そうなれば、うるさい長老のうち一人を蹴落とすことができるからだ。
「あのう、そうじゃ、総監督、総監督補佐、名誉監督のお三方、あなたたちの誰かが始球式やるいうのはいかがですか？」
大下の提案に三人の目の色が変わった。
「始球式をワシらにやと？」
「面白ろそうやな」
「そうじゃな、こうしてご意見番やるのも悪うないが、始球式となると球場中、いやテレビの前の人々の視線を独り占めだ」
「おい門前、お前やれえ」
「私ですか、石本総監督？」
「そうじゃ、総監督補佐いうのもやることないやろ、なら始球式でもやってこい」
「ほうですかい。ならいっちょワシがやりますかい」
しめた、と大下は思った。
すべては、大下の狙いどおりである。
「それでは、始球式は門前さんに決まりいうことで…」
大下は彼らの気が変わらないうちに、連盟に提出する用紙に門前の名前を書き込んだ。
これで、やっかいなたんこぶが一人減ったのだ。

あと、二人だ。
石本と白石がいなくなれば、広島カープは、大下のものだ。
広島県内を牛耳る大下にとって、監督古葉だのヘッド阿南だの九州派閥はひとつも怖くはないのだ。
大会が終盤になると、一コーチの大下がすべての手綱を握る、大下はそのつもりである。

「おい門前、お前はもうスタッフやない。退場願うぞ」
「はいはい」
石本総監督にいわれ、門前がおっくうそうに関を立ち、退出する。
大下は、一人減ったと思わず笑みを浮かべる。

「お～い、森永入ってこい」
「え？」
大下は思わず目を白黒させた。
門前が出て行ったいなや、替わりに森永勝也元監督が入室してきたのだ。
「どうも、こんにちわ」
「門前に替わり総監督補佐を勤める森永じゃ、みんなよう知ってるおもうが、一応紹介しておいた」
森永総監督補佐代理にここに誕生。

「くそお～　一人減ったおもうたに…」
大下は苦虫を潰す。

始球式選定会議（後書き）

広島歴代監督雇用状況
石本　総監督
白石　名誉監督
門前　始球式
森永　総監督補佐代理
長谷川　広島投手
根本　西武ソフトバンクＧＭ
別当　ロッテ外野手
ルーツ？？？？？？？？？
古葉　監督
阿南　ヘッドコーチ
山本　外野手
三村　野手総合コーチ
達川　捕手
ブラウン　特命コーチ
野村　内野手

ハムＶＳヤクルト　プレビュー１　ダルビッシュ対策会議

日本ハムとの試合を控えた、ヤクルトのスタッフ会議の分析は呆れるほど深く切り込んでいた。

監督が広岡で、選手とスコアラーを兼任する安田、選手と投手コーチを兼任する尾花がヤクルト時代の野村が認めるほどに、分析力があるのだからそれも当然か。

一選手の古田もその輪に加わり、野村なきヤクルトでＩＤ野球を実践である。

「先発はダルビッシュか？」

広岡が切り出す。

「ええ、色々とデータやダルビッシュの調整具合、調子、他の投手との兼ね合い、大沢監督の性格を考えるとダルビッシュの確率は８７パーセントです」

安田がそう答える。広岡と安田のやりとりといえば、すぐにギャグチックな展開が思い浮かぶだろうが、今日の二人はいたって真面目である。

「８７？　残りの１３は誰でくるというのだ」

「西崎が７、尾崎投手が５パーの確率できます。いずれも日本ハム～東映の歴史に残るエース投手です」

「７に５？　おい１２にしかならんぞ。残りの１パーセントはどうなっているんだ？」

「１は、サプライズの可能性ですねえ。大沢監督はテレビでも活躍なされている。マスメディア受けを狙い、あっという投手を出してくる可能性があります。それが残りの１です」

「ふん、大沢が考えそうなことだな。で、誰だ、そのサプライズに出てきそうなのは」

「工藤幹夫と木田勇ですかね。彼らは大沢監督時代に２０勝したいわば秘蔵っ子ですから、彼らに託す可能性も捨てきれません」

「工藤と木田？　ふん、私が西武時代によく対戦した投手じゃないか。すでに丸裸だ」

古田が穏やかに割り込む。

「ダルビッシュが８７パーセントですか？　そこまで高い確率でくるならダルビッシュ対策だけでＯＫなんじゃないでしょうかね？」

「古田、お前はそこが甘いんだ。今上がった投手の対策は全員きっちりやるぞ」

「すいません」

「夜中になったもやる。ダルビッシュの球種をおさらいしておこうか、安田」

「はい、ストレートはもちろん、ツーシーム、シュート、フォーク、スライダー、カッター、カーブ、チェンジアップ、他に、あまり投げませんが、シンカーもありますね」

「スライダー中心か？」

「そうは限りませんね。スライダー中心に日もあれば、他の球種を軸に組み立てる日もありますね。いい例が０９年日本シリーズの第二戦、故障で満足に体の自由がきかないダルビッシュは、体に負担がかからなくても投げれると、普段あまり多投しないカーブを軸に手玉に取りました。しかも、登板直前に、０８年のシリーズに巨人打線をゼロ封にした岸のカーブを見よう見まねで、身につけたのです」

「それは体調が悪かったからだろ？」

「ええ」

「なら今の体調はどうなんだ？」

「万全の模様です」

打撃コーチとして参加する武上がはじめて意見をいう。

「なら速球中心でくるだろう。投手というものは調子がいいと速球で押しがちだ」

さらにこの武上発言に割ってきたのが尾花だ。

「いいえ、そうとは限りませんよ。ダルビッシュはいくら体調がよ

くて速球が走っていても、直球中心の組み立てでくるほど単純な投手ではありません。自分は変化球投手として認識しているらしく、調子がいいときほど変化球を混ぜてきてます」
「となると、変化球をこなせない外国人打者は使えないな」
「池山や広沢も厳しいと思いますね。ダルビッシュの外のスライダーにくるくる回る光景が想像できます」
「だが、一発がないと怖さがない。宮本や土橋のようなしぶとい打者を並べて、コツコツと攻め立てても要所を締めにきたら残塁の山だ」
安田がデータをみる。
「ただでさえ低い被打率が、ピンチとなるとさらに低下します」
「ふん、変化球でのらりくらりとかわされて、要所となると本気で投げられたら、うちの打者ではついてこれるかね」
「ちょっと厳しいですねえ…」
「ただダルビッシュは国際試合にはあまり強さを発揮していないようだが」
「そうです、つけるならそこです。国際試合となるとどうもぴりっとしないんです。ボールの違いからか、マウンドがしっくりこないのか、環境の変化に意外と弱いのか、本来の投球ができない傾向があります。北京五輪は制球がままならず、決勝リーグからは敗戦処理に回されましたし、第二回ＷＢＣでは、これも本来の調子からほど遠く、抑えに回されました」
「環境の変化に弱いのか？」
「ええ」
「我が本拠地、神宮開幕とはこれは幸先がいいな。マウンドをダルビッシュが嫌がる高さに変えるか。ボールを国際球にすり替えるか。で、肝心のダルビッシュの神宮球場での成績はどうなんだ？」
「年に一度の交流戦やオープン戦、オールスターでしか投げる機会ありませんからねえ…０９年は公式戦では投げてしませんし…ただひとつおもしろいデータを見つけました」

「なんだ？」
「神宮大会という秋の地区優勝チームを集めた大会がありますでしょ？　ダルビッシュは高校二年のときそこでえらい目にあっているんです。雨模様のぬかるんだグランドに制球を乱し、審判の判定にケチをつけ、あげくコールド負け。あのダルビッシュがコールド負けですよ？　いくら精神的に未熟だった高校時代のこととはいえ、神宮球場には、トラウマがあることは確かです」
「ますます都合がいいな」
「ダルビッシュは屋内専用と揶揄されるほど、屋外球場を苦手にしているんですよ」
「ぬかるんだマウンドか…当日の天気はどうなんだ、おい中西」
　ここでようやく中西バッテリーコーチにお鉢が回ってくる。
「予報では曇りですね」
「曇りか…雨を願いたいところであるが、強すぎると中止だからな。微妙なところだな」
「それなら僕にええ考えがありますよ」
「なんだ、古田いってみろ」
「ちょうど僕らは表は守備でしょう？　僕がマウンドにいってわからんように、ダルビッシュが足を踏み出すあたりをよく掘っておきますから」
「ふん、それはいい手だな。うちの先発もちょうど金田だ。都合がいい」
「そうですよ、失礼ですけど、長身ながら足の短い金田さんとダルビッシュなら、足の踏み出す位置が違いますから。ダルビッシュが踏み込む足の位置を掘っても、金田さんには影響ありませんから」
　ここで尾花。
「投手というのは、デリケートなもので、掘れたマウンドを堀直すのは嫌なもんなんです。些細なことですが、それに気を取られると投球に集中できない、ダルビッシュのような繊細な投手ならことさらです。僕もＷＢＣや五輪で彼の投球を見させてもらいましたが、

環境が変わると球種の選択幅が狭まるようなんです。変化球は指先の微妙な感覚が命ですから、投げやすいスライダーに頼りがちになるようですね」

「ふん、そうか、それはいい情報だ。よし、それでいこう、環境の変化に弱いダルビッシュをあの手この手で集中力を奪い、スライダーに頼りがちにさせて、それを狙い打つか…」

「いやあダルビッシュ対策が立てられるなんてさすがヤクルト史上選りすぐりの首脳陣やなあ」

古田は感動するが、狙いは別。

「みっちり対策しました、今日はこれでお開きといきませんか?」

古田は早く帰りたかっただけであった。

「おい、古田、まだダルビッシュ対策が終わったばかりだ。ダルビッシュにかけた時間と同じく、ハムの残り２８人を分析してくんだぞ」

「ええ～?」

古田はがっかり、この調子では夜中までかかりそうだ。

ハムＶＳヤクルト　プレビュー２　ヤクルトＩＤ会議

「問題はダルビッシュがどの捕手と組むかですよ」
中西は、バッテリーコーチらしく、なめらかに捕手の話題に移す。
「捕手か、日本ハムの捕手といえば、田村に決まりだが」
広岡がのり、尾花が続く。
「ダルビッシュはあらゆる面で繊細な投手です。捕手の相性も問題になります」
古田は、食事の約束を反故にしても打倒ダルビッシュ！　もうやけくそだ。
「ダルの捕手いうたら鶴岡ですねえ」
「鶴岡か。ゴールデングラブ受賞者とはいえ、日本ハム史上では何番目の捕手だ？　五指にも入らないだろう。そこのところどうだ、安田」
「練習試合の起用状況と大沢監督のコメントに私の目分量による加えた、仮想ハムの捕手ランキングによりますと、一位は前述の田村、二位は８１年の優勝捕手の大宮、三位は６２年の日本一ＭＶＰ選手種茂、四位はヤクルトにもいた加藤俊夫、五位はこれもヤクルト出身の野口　それに６２年の正捕手安藤捕手が続き、一塁手と捕手を兼任する高橋信二もいます」
「鶴岡は入っていないのか」
「はい、優勝経験三度の守備力とリード面は評価できますが、肩は平凡で打撃はあまりにも非力です」
「それでも大沢は鶴岡を起用するかどうかだ。どうだ尾花、投手の立場からして捕手の違いはそれほど気になるものか？」
「僕のような冷静沈着なタイプの投手と違いダルビッシュは意外と切れやすい一面があります。ようは、それを抑えられるのが鶴岡なんでしょう。ダルビッシュと鶴岡は二軍時代からバッテリーを組んできましたから」

「配球どうのより、制御役として鶴岡が必要なのか、ふん、面倒な投手だな」

「その役目が田村ができるかですねえ、まあダルに気遣って鶴岡を出すなら、しめたものですよ。私は、巨人の投手コーチとして日本ハムとシリーズで戦いましたが、鶴岡は打者として、完全に安全パイでしたから。とくに指名打者のない東京ドームの試合では、投手と鶴岡で二死は確実にとれると計算できましたからね。これは楽でしたよ。神宮開幕で指名打者は使用できませんから、鶴岡起用は勇気がいりますよ」

「尾崎や西崎の対策をしておくか。おい安田、この二人がくるという根拠はなんだ?」

彼らが座るテーブルには、一面にスポーツ新聞各紙が置かれている。その見出しはどれも、「開幕ダルで先勝!!」

「大沢監督、ダルにあっぱれ予約?!」

「主砲張本断言、ダルしかいない!!　彼は私が見たなかで最高の投手」

「ダル、開幕に向けて、急ピッチ調整!　新球お披露目を宣言?」

「愛妻サエコ、神宮見参!　彼の三振ショーがみたい」

ダルビッシュの開幕先発間違いなしばかりだ。

「新聞記者の取材力は絶対ではないが、これだけ各紙ダルビッシュで横並びの状態。他の投手がそれでもくるのか?」

「はい、根拠はありますよ。まず、この大会の仕組みがトーナメントではないこと。そして次の対戦相手がまだ決まっていないこと」

初戦の組み合わせは決定しているが、二試合目のくじ引きは試合終了後に行われる。

「この次の試合の相手が曲者なんですよ。もしかしたら巨人かもしれない。大沢監督はショーマンですし、巨人にダルビッシュを当てるのが一番盛り上がると知っています。もしもうちとの試合にダルビッシュを投げさせたら、巨人戦の登板は当然できなくなります。

ならヤクルト相手ならダルビッシュでなくても勝てると舐めて他の先発起用もなくはないからです。これがダルビッシュがくる確率が１００にならない理由です。舐めて他の投手がくるといっても、これが尾崎さんや西崎に一年目のアメージングルーキーのころの木田ですから。考えようにいっちゃあ、こっちの方がやっかいかもしれませんけどねえ」

「安田さん、そうですよ、僕らも今こうしてダルに頭がいっぱいでしょ？　これで他の投手がきたら、研究もデータもおなざりですから、よう打てませんよ。とくに尾崎さんは、僕は球を見たことないけど、サイド気味のスリークオーターから、１５５キロの速球放るいうやないですか、西崎さんにしても、対戦したことありますが、あのスライダーとのびのある速球でしょ？　ちょっとねえ…」

「ふん、古田、戦わずして悲観的になってどうする」

「すんません、広岡監督…。そうだ、ハムいうたら高橋直樹さんや、うちの監督もやられてた土橋さんの可能性はないですか？　安田スコアラー。たしか、このお二人、日本ハム東映史上上から一、二の通算勝利数だったはずやけど」

「高橋直樹投手、僕の早稲田の先輩ですが…に土橋さん、これは僕が投手コーチとして支えた人ですが、この二人は、高橋さんがサイドからアンダー、土橋さんがサイドスロー、尾崎投手も横から腕が出てきますが、二人に比べて速球派、だが、この両者は技巧派で打たせてとる投手です。青木、若松、岩村、ペタジーニと上位に左打者が並ぶうちにはぶつけてこないはずだよ。大沢監督の性格といい定石からみても、短期決戦は力で抑え込むのが得策だからね」

「なるほど、神宮は拡張したといっても、まだ札幌とかに比べたら狭い。そこに技巧派投手ぶちこむのは、たしかに、ちょっと厳しいものがありますね」

「投手はひとまず置いといて、次は打者の分析に入ろうか、安田、研究結果」

「これがこの前やった紅白戦のオーダーです。白組がレギュラー、

紅組が控えという分け方なんですが、神宮開幕を意識して指名打者を外しています」

安田は黒板にオーダーを記す。

紅　毒島８　白井一４　稲葉９　柏原３　ウインタース７　片岡５
大宮２　金子誠６　柴田１

白　島田誠８　田中賢４　張本７　大杉３　大下弘９　小笠原５
田中幸６　田村２　金村１

「以上なようなラインナップです。おそらく、白軍の方は、バッテリー以外これが開幕オーダーでしょうね」

古田が思わずうなる。

「ほう～　田中賢介ってそんなすごい選手やったんや。まだ二十代やのに…大下弘って、あの大下さんか？　広島の軍曹の方の大下さんは元東映とは知ってたが、大下弘さんもそうやったんや…へえ～」

「ふん、古田、そんなことはどうでもいい。この白組の打線をみて何か気づかんか」

「え？　なんやろうか…」

「捕手失格だぞ、その洞察力では…」

安田は黒板にある記号を書き足す。

白　▲島田誠８　▲田中賢４　▲張本７　大杉３　▲大下弘９　▲小笠原５　田中幸６　田村２　金村１

「▲？　…あ、そうか！　左打者ばっかやん！　六番まで大杉さん以外みな左や！」

「で、古田、うちの先発はいまさらだが誰だ？」

「金田さんでしょう、あ！　左や、左投手や」

「そうだ、これがベストオーダーだ！　と大沢が変にこだわると左偏重の打線で金田に相対さなければならんのだ」

「う～ん、そうなるとうち有利やな～　いくら張本さんやガッツ（小笠原）が球史に残る左打者いうても、金田さんはそう打てんやろし…。左対左のセオリーにとらわれるのはよくないいうても…」

「ふん、大沢が金田を怖がり右打者を当ててくると、それはそれでこっちはしめたもんだぞ。わかるか、古田、その意が？」
「え？　右打者いうたら、。田中賢介のところに白井一さんか元々セカンドだった金子誠がおるし、サードのガッツのところには、ボンバーこと３０発経験もある古屋さんや現役Ｖ戦士小谷野、あと柏原さんもサード守れるはず（阪神時代掛布さんが故障したとき代わりに守っておったな）。まあガッツよりは攻撃力は劣るいうても、いい打者ばかりなのは変わらないですが」
「それでは張本はどうする？　あいつは東映時代、打率が落ちるのを嫌がって苦手な左投手の時は、仮病を使って休んだほど、左は苦手だぞ」
「う～ん、張本さんのかわりの右打者か？　ハムで右打ちで外野手？　おったかな…新庄は阪神にいったし…。井出あたりでも力不足や」
「このさい代わりの選手が誰でもいいんだ。左投手がきた、大沢がハリを引っ込める。さあハムのベンチはどうなる？」
「あ、すこぶる雰囲気が悪い！　張本さんが自分から申告して休むならいざ知らず、大沢監督が張本さんは金田さんを打てないおもうて独断で下げたら、こりゃ張本さんが切れて暴れてもおかしくない」
「そうなると暴れん坊集団だ、ベンチはめちゃくちゃになり」
「繊細なダルは調子を乱すと…」
「まあそうはいってもハリははずさんだろ。だからどう転んでもウチが有利なんだ。ハリは同胞の先輩で左腕の金田を打てない。だからといって外したらベンチが大変なことになる」
「う～ん、ウチにとってはいいことずくめですね～」
口ではそういっても古田は、心ここにあらず。
時計も見る、急げば、まだ食事の約束に間に合う。
会議もそろそろ煮詰まり、ヤクルト有利の結論に向かっている。
ここで古田が強引に締めれば会議は終幕するはずだ。
「ええ～　さすがヤクルトやなあ。う～ん素晴らしいわ。ダルや張

本なんて怖くない、勇気が沸いてきましたわ！　さあ、雰囲気が最高潮に達した今、そろそろ会議を締めに…」

広岡が古田をぎろりと睨む。

広岡の眼鏡がきらりと光る。広岡が分厚い資料を盾にして、机で整える。

「何をいってるんだ、古田。まだ分析の【ぶ】の字もすんでおらんぞ」

会議は踊る。

古田は覚悟を決める。

熱闘！　ヤクルトＶＳハム第一話　開幕前の開幕戦

ヤクルト対日本ハムは、大学野球の兼ね合いもあり盛大なる開幕セレモニーの前に行われることになった。
当然、この一試合しかプロ野球の試合がないため、フジサンケイグループや北海道のローカルマスコミだけでなく、全メディアの注目を一手に集めている。
ＢＳとはいえ中継も全国ネットだ。（北海道では地上波でも中継）

注目のハムの先発は予想どおりダルビッシュ？　試合開始前いよいよ先発バッテリーが発表される…。
「両軍のバッテリーを発表します…先攻の北海道日本ハムファイターズのピッチャーはダルビッシュ、背番号１１」
大方の見方どおり、大沢はダルビッシュを選択した。左翼スタンドに陣取る日本ハムファンはこの発表にすでに勝ちはもらったと、大騒ぎだ。

「ダルできましたねえ～　尾花さん」
「望むところだよ、古田、正々堂々、エース対決が、大会の開幕戦にふさわしい」
ブルペンで金田の仕上げの投球を受ける古田も気がそぞろで、投球をチェックする尾花に意見を仰がずにいられない。
「捕手は誰でいきますか？　田村さん、それとも相性で鶴岡？」
「し、アナウンスが聞こえない、古田黙れ…」

「キャッチャーは…岩本…」

「うん、今、岩本いいました？！！」
「古田、お前もそう聞こえたか？　たしかに岩本といったよな！？」

「ハムの岩本ってあの岩本しかおりませんよね？」
尾花は資料をすかさずチェックするが、
「ああ、あの岩本しかいない、ガンちゃんや、ガンちゃん…投手の岩本や！」
「何の狙いですか！？　岩本に捕手ができるわけがない！」
古田は金田に合図をして、
「金田さん、ちょっと失礼します」
投球をやめさせ、ブルペンの金網越しから三塁側のブルペンを覗き見る。
「ほんまに岩本か？！　ダルの投球受けてるのは！　ダルは大きくてよう見えるが、捕手の姿が小さくてよう見えん」
「まて、古田、バックネット裏にスコアラーの城石がいるから、連絡をとって、双眼鏡で覗かせる…おい城石、こちらブルペンの尾花だ。捕手岩本いうのはどういうことだ。三塁側のハムのブルペンで誰がダルの投球受けてるか、ちょっと覗いてくれや…」
「はい、わかりました…」
生え抜きに見せかけて元日本ハムの実績が買われて、日本ハム戦スコアラーに就任した城石は指示どおり、三塁側を覗く。
「捕手は二人います…。一球ごとに、入れ替わってダルの投球を受けています…。背番号は２２と６４です…」
「２２と６４？　田村と鶴岡か！　おい古田、田村と鶴岡が代わりばんこに、投球を受けているそうや！」
「え、二人で交互に？　どういうことだ？」
「岩本はおそらく当て馬や！」
「捕手に当て馬ですか？」
「ああ、ウチの先発がわからなかったわけやない。捕手を田村か鶴岡のどっちにするか決めかねているんや！」
「決めかねているって、もう試合開始ですよ！」
「おそらく、大沢監督の意向じゃないやろ、あの人は決断力豊の人やからな。ダルだ！　ダルがどっちか決められずに、ブルペン調整

まで待ってくれと言い出したんやろ。おそらく大沢監督は総合力で圧倒する田村でいきたいが、ダルは相性の問題で鶴岡にしたい。が、一投手のわがままで鶴岡にしろといえずに、ズルズルと最終調整まで引っ張ってしまったんや」

「なるほど、このブルペン調整で捕手を決めざるをえなくなったというわけですか」

「試合前から、あちらさんはぐちゃぐちゃや。運がこっちに向いてきたで。田村できても鶴岡できてもハムには波風立ちっぱなしや…」

投球を中断された金田が待ちくたびれて、

「おい、古田、この金田様をどんだけ待たせるちゅうんや」

「あ、すいません、金田さん…」

「むこうのゴタゴタのおかげで、こっちにも波風たちそうや…」

尾花が渋い顔をしたころ、三塁側は修羅場を向かえていた。

バッテリコーチの種茂が思わず怒号をまき散らす。

「おいダル、どっちだ、どうがいいんだ…はよう決めんか」

「すいません、コーチ…。もう一球、また田村さんにお願いできますか？」

「まったく、まだ決まらんの…」

ダルビッシュが田村にストレートを投じる、田村のミットは寸分も動かずに、これを受け止める。さすが、８０年代後半から９０年代前半にかけて、黄金時代の西武伊東と並び称された、いやそれ以上との評価もあった田村だ、正確無比なキャッチングは芸術的でもある。

それでもダルビッシュはしっくとした顔を見せない。

ダルビッシュにしたら、田村のような大型捕手より、鶴岡のように小柄なながらきびきびと動く捕手のが投げやすいのだ。

心でそうは決めても、チームの和を考えるみると、捕手田村の決断を迫られるが…。

第一球の重み

「しかし、悪いな、ガンちゃん（岩本）。当て馬にお前を使って」
「いえいえ、めっそうもありませんよ、大沢親分、当て馬いうてもこうして、偉大なる諸先輩の皆様がたと同じスコアボードに岩本の名前が刻まれるだけで、なんたるや光栄ですから！」

試合開始３０分前、バッテリーを含めた両軍のオーダーが発表された。先攻の日本ハムは、
島田誠８　小笠原５　張本７　大杉３　大下９　田中幸６　金子誠４　岩本２　ダルビッシュ１
後攻のヤクルトは、
青木８　若松７　岩村５　ペタジーニ３　古田２　杉浦９　池山６　宮本４　金田１

金田対策に右を並べることも考えられたが、実績とネームバリューで劣る田中賢の代わりに金子誠を入れただけであった。
一方のヤクルトはほぼ大方の予想どおりの打線。ライトは広沢でもラミレスでもなく杉浦を起用、金田を含めて九人中六人を左打者で固めたダルビッシュ先発の賭けに勝ったラインナップ。

「おい、ヒルマンよお」
大沢の隣にはヘッドコーチとしてベンチ入りしてるヒルマンがいる。
「しかしあれだな、さすがヒロさん（広岡）だな。ダルビッシュの先発を読みきって左をズラリと並べてきたわ」
ヒルマンはすぐに答えない。間に通訳が入るのだから、どうしても会話のテンポは悪くなりがちだ。
大沢が手持ち無沙汰で待つと、ようやく通訳を介して返答が返っ

てくる。
「ダルビッシュは世界最高の投手だ。相手がどんな打線できてもベストピッチをしてくれるはずだ…とヒルマンはいっております」
「……」
歯の浮くような言葉ばかり並べやがってと大沢は憤懣やるかたなく、ついには、戦後すぐに進駐軍との交流で培った英語で通訳抜きで差しで勝負だ。
「おう、通訳お前邪魔だ。おいヒルマン、ユーヘッドコーチOK？ミーフィールドマネージャー。ミーとユー、ウィッチ、エライのデュウユー？」
どうやら監督とヘッドコーチどっちがえらいかわかっているだろうなと、上下関係をはっきりとさせたかったようであるが、うまく英語にできなかったようだ。
「…？」
ヒルマンは当然、何をいっているかわからないが、五年の日本生活で培った対日本人用の人身掌握が発揮される。
「ユー」
「わかってるじゃねえか、コイツ」
日本人は謙遜する人種であるが、その実、プライドが高い、とりあえず相手を立てておけば、日本人は満足するのだ。

西垣初代国鉄監督の始球式がすんで、いよいよ４００勝投手、金田の手によって開幕の一球が投げ込まれる。
古田がサインを出す、当然直球だ。
記念すべき大会の開幕の第一球、しかも投手は日本の奪三振王投手金田、直球で入らずして、何で入るのか。
打者の島田誠も、空気の読めない外国人打者でも経験の浅い新人選手でもない、百戦錬磨の名選手だ。プロの礼儀としきたりは十分理解しているはずだ。

初球をあえて見送り、余韻を保ち、二球目から打ちにいく。
これにより試合は引き締まり、この試合だけでなく大会全体に厳格なる流れを作るのが、開幕戦の初回表を託されたバッテリーと打者の役目である。
金田は古田のサインにうなづく。
古田は外角低めに構える。
金田が振りかぶり、あまり大きくないステップから、ボールをリリースする。
古田は背筋に電流のようなものが走ったことに気づく、さすがの古田にしても、この一球は重みが違う。緊張に襲われて身が縮こまる思いだ。
ところが、島田が足を浮かせて、打ちにいく姿勢を取っていることに気づく。
見送るのが礼儀だろうに？　島田さんは何を考えているんだ、古田は戸惑うが、島田誠をヘッドコーチに招くほど、仲のいい尾花は気になることをいっていた。
「先頭の島田誠には注意しろ。彼は、時々トリッキーなことをしてくる。入団会見で、新人の分際でバック中をやった男や」
まさか、打ちにいく？　まずい、金田はストライクをとりにボールを置きにきている…？！　小柄ながら小力のある島田だ、このままでは、高い確率で長打を浴びる！
だが、金田が島田の上をいく。金田は直球のサインに頷きながら、手元から離れたボールは浮き上がり放物線を描くのだ。
「か、カーブ？」
古田のサインを無視して、金田は勝手にカーブ、しかも、抜いたスローカーブを投じてきたのだ。直球狙いで打ちにいった島田は重心が前にかかり、バットを止めることができず、打ち損じる。
三塁小笠原への平凡なポップフライ。
島田は悔しがりバットを叩きつける。
古田は冷や汗をかく。これが高津や石井一久なら、サイン無視を

するなと、マウンドに詰め寄って一括するところだが、金田相手にはそうもいかない。

「危なかった…島田さん、打ちにいかんかったら、後ろに逸らすとこやった」

いつもの古田の捕球技術ならば、速球のサインでカーブを投げられても捕球はたやすい、しかし場面が場面だ。固くなった古田は、もし島田が打たなかったら、逸らしていただろう。むろん走者なしの初球、逸らしたところになんら問題は生じないが、カーブが捕球できないというみっともないレッテルが貼られるところであった。

だが、この一球が古田の眠っていた闘志に火をつける。

「この大会は遊びでも儀式でもない。意地と名誉をかけた血生臭い真剣勝負や。何が儀礼的の一球や、そんなもんくそくらえや…。ビーンボール、ダマシ、ひっかけ、なんでもありでいくで…」

天皇金田とＩＤ古田とガッツ小笠原と喝張本

二番打者は小笠原。年代の近い古田とは当然、顔見知りであり、お辞儀をして打席に入る。

小笠原はローボールヒッターであり、ベルトより低目のボールをしゃくりあげて、外野の間を抜くのが持ち味のいわゆるメジャーリーグでよくいわれるようなギャップヒッターである。

攻略方法としたら、いかに高目を意識させて、小笠原が手を出しそうな低目の好きなゾーンから外す変化球を振らせるかにかかってくる。

古田のリード哲学といえば、投手のよさを引き出すよりも、打者の弱点を攻める主眼に置くことにある。弱点を徹底的に執拗に攻められてるのが古田の真骨頂だ。

ところが、投手は金田。練習試合やブルペンで古田と組んだからといって、そうやすやす古田が金田を操縦できるわけがない。なにせ相手は天皇と呼ばれた男である。

古田がサインを出す、真ん中からカーブを落とせのサイン。

初球から、ボール球をあえて要求し、打ちたがりの打者の出端をくじくのは古田の得意とする配球であるが、金田は小難しいことを考えず、ストライクを取りにくる投手。

まさに水と油。であるが、金田は古田のサインにうなづく。

だが、古田ははなから金田を信用していない。島田誠の打席を見るように、平気でサインと違うボールを投げてくる投手だ。

金田が投じたボールは、はたしてストレート。

やはりサイン無視、自分が投げたいボールを投げ込んできた。

攻撃的な打撃がモットーの小笠原はこれを打ちにいく。しかし、ボールはバットの上を通過。

空振り、ワンストライク。

古田は金田のストレートを信頼していなかった。何度ブルペンで

投球を受けても、そのスピードに、球威に、いまひとつ確信を持てなかったからだ。

が、いざ試合となると、金田の速球はものが違う。しょせん練習は練習と、手を抜いていたのか。

それでも古田は金田の速球に全幅の信頼を置いていない。

バックスクリーンの球速表示を見る、１４３キロ。

練習試合でみた数字と大きく違いはない。デジタル表示を過信するわけではないが、指し示す数字に違いがないとしたら、いくら手元でのノビや回転が違っていたとしても、その差は、如実に現れるものだろうか。

同じ投手の投げる同じ球速表示の速球に、それほどの違いが生まれるのだろうか。

金田は速球で押したがっている。

小笠原は狙いどおりの速球がきて、待ってましたとフルスイングしたが、空を切った。

三味線。

古田の頭にその三文字が浮かび上がる。

小笠原の空振りはわざとだ。初球から豪快に振りにいき、金田に直球勝負の誘いをかけているのだ。

４００勝投手の天皇金田にしたら、小笠原とはいえひよっこ同然、そんな赤子の挑発に乗らなければ、男ではないと、一本調子になることを狙っての空振りだ。

もし次も小笠原の望む速球が投げられても、ストライクが取れるだろう。金田の速球の威力と小笠原が初対戦であることを考えると、打ってもファウルがやっとだ。

だが、問題は追い込んでからだ。二球、金田の速球を見た小笠原にしたら、三球目の速球は容易に弾き飛ばせるはずだ。それがもしファウルになっても、何度もそうやって逃げていくうちに、やがて小笠原の打撃技術は金田の速球をとらえるだろう。

ならば、二球目も速球を投げさせればいい、ファウルが取れるのだから、何度もいうように問題は追い込んでからだ。

追い込んでから、金田にプライドを捨てさせて、ボール球の変化球を外に投げさせることができるかだ。

古田はストレートのサインを出す。金田がうなづく。

小笠原がバットを立てて、すうと息を吐いてスタンスを取る。

金田が投じる、ボールは放物線を描く。

カーブだ、ストレートのサインを出してカーブ？

カーブは高目から急降下に真ん中に落ちてくる。小笠原は狙いが外れたと、見逃して、ストライク。

「…！」

どういうことだ、金田は速球で押したいはずだ。古田もその意をくんでサインを出した。金田も頷いたが、投げたのはカーブ。

単なるひねくれもの？　それともサイン間違い？

マウンドに飛んでいって、真偽を確かめるか？　いやその必要はない、利用できるものは利用してやれ。

古田がサインを出す、カーブ。

追い込んだら、圧倒的に有利。サインどおりに、勝負を焦った小笠原にボール球になるカーブを振らせるのもよし、見逃してボールカウントがひとつ増えても、次のエサマキとすればよし。もしサインと違いストレートが来ても、まだ金田の目のなれていない小笠原は、ファウルで逃げるのが精一杯だからだ。

だが、古田の狙いはそれだけではない。カーブのサインを出したのには、れっきとした意図がある。

金田はカーブのサインに頷き、カーブを投げ込んだ。

サインの裏を投げるひねくれものでも、サイン違いでもない、金田は自分が投げたい球を、好き勝手に投げ込んでいるんだ。

ひねくれものならストレートを放るし、サイン違いならこれもストレートを投じるからだ。

カーブを投じたならば、そのどちらでもない。

古田はそう確信した。
金田といえば、伝説のノーサイン投法だ。捕手のサインに頼らず、自分で配球をして、好き勝手に投げ込んでいくスタイル。
これは現代野球には通用しないと、広岡監督直々に禁止令が出て、金田もそれにしたがった。だが、従順な金田は演技。いまこうして、サインにしたがったふりをして、自分の投げたい違うボールを投げているのだから。
古田がサインを出す。安全にボール球を振らせようと、カーブだ。
金田が勝手に投げる、小笠原を渾身の高目速球で空振りに取る。
ＩＤ野球の優等生の古田としたら、おもしろくない展開だ。
投手が捕手の組み立てを無視し、それが功を奏すのだから。
挑発してきた小笠原の手には乗らず、それを逆手に取って緩急を使い、抑え込んだ金田のコンビネーションは見事であるが、古田はそのままの組み立てでは、やがて通用しなくなるとよんでいる。
「現代野球や、現代野球、昭和３０年代の野球ちゃうで、投手が好き勝手投げるんが、いつまでも通用するわけないやん」
古田はぶつぶつとぼやくが、金田には切り出せない。
「まあイニング間にでも、広岡監督交えて、ガツンというか」

「三番レフト張本」
神宮球場がわれんばかりの歓声に包まれる。
４００勝投手と３０００本安打の対決だ。
古田がぶつぶついうと、広岡から矢のような指示が飛ぶ。
「え、マウンドいけって？　金田さんがサイン無視してるのがもうばれた？」
だが、様子が違う、広岡はさかんに右足で地面を蹴っている。
「あ、そうや、作戦や、作戦、ダルビッシュ打倒作戦や」
お覚えだろうか、古田の立てたダルビッシュ打倒作戦、ダルビッシュの踏み込む足元を彫り上げて、ダルビッシュの動揺を誘おうという策だ。

古田がマウンドに走る。金田が鬼のよう形相で古田を怒鳴り上げる。

「なんじゃ、古田、ピンチでもないのに、いちいちマンドくるな、時間の無駄だ、コラ」

古田にしても来たくてきているわけではない。ただ作戦実行のために致し方なしである。

「あ、金田さん、違うんですよ、ちょっと、マウンドに用事がありまして」

古田は懸命に場を取り繕うと、後ろ足でわからないように、ダルビッシュの踏み込むと想定される足場を掘り返す。

「だから、何のようだ、古田、もしかして、サインの件か？」

「いやあのその点はまたあとで…」

念入りに掘り起こすと、古田はマスクをかぶりなおし、キャッチャーサークルに戻った。

金田は不満げであるが、サイン無視がお咎めなしとわかると機嫌を取り直した。

「ふう、作戦完了と、いや息を抜いちゃあいかん、張本さんや、またけったいなのが続くわ…」

張本が打席に入り、足場をさかんに固めている。

「なあ、古田」

「なんですか、張本さん」

「頼みがあるんだ」

「頼み？　打たせいうても打たせませんよ…ハハハ」

古田はもちろん冗談のつもりだが、

「打たせろ」

「え？」

「ヒットでいいから打たせろ」

「なにをいうてるんですか、張本さん、真剣勝負ですよ…」

一回表で第三話

「お願いだ、古田。私と金田さんの関係、お前もよく知っているだろ？　私はことあるごとにあの人に虐げられてきたんだ。打って見返したいんだ」

「だから張本さん、真剣勝負なんですよ、オールスターなら気持ちをくんであげますが」

「ヒットでいいんだ、ヒットで。ヒット一本でも打てれば、あの人からのいじめもからかいも少しでも弱めることができるんだ」

古田はそんな無茶な頼みに、乗るわけがない、それは張本も十分に承知している。

「もしヒットを打って塁に出たら、私はわざと盗塁死する」

張本は、古田にとっても不利にならない条件をつけたのだ。

「これで、どうだ、私がヒットを打つ、金田さんに釘を打つ、０点でこの回の攻撃スリーアウトになる。まさに四方八方すべてが丸く収まるじゃないか」

古田の目がきらりと輝く、たしかにヤクルト側にとって不利な点はない。

ゼロにすむのなら多少の規律違反がなんだ。真剣勝負だからこそ、規律を破るんじゃないか。

「でもヒットを打つ方法なんてありませんよ、金田さんが力を抜いて甘いボールを投げさせる術が僕にはない」

古田は金田がサイン無視をしていることを隠し、張本にといただす。

「セーフティーだ。古田が指示を出して、三塁の岩村を後ろに下げさせるんだ」

「バント？」

「そうだ、私はこうみえてもセーフティーバントの名人だ。どんなボールを投げられても、三塁の守備位置が後ろならば、確実に決め

ることができる」
「……わかりました」
古田は岩村に、大きな身振りで、下がれと指示を出す。
岩村も走者なしでいきなりの守備シフトの変更に戸惑いを見せるが、古田のことだ、何かの意図があるはずだと、あっさりと受け入れる。

「ありがとう…古田、これで金やんとの鬱陶しい日々にさようならができるよ」
張本の目には心なしか光るものがある。
「……」
例によって古田のサイン無視して、好き勝手に投げ込む金田は、腕を振って速球を投じる。
胸元ののびのある速球、バントをするのは一番やっかいなボールと高さであるが、張本の技術は想像以上だ。
うまく勢いを殺して、三塁線に転がす。岩村は後ろに下がっている、成功確実？
いや、ボールが転がるとともに、岩村が猛ダッシュしてきた。
張本は目を白黒させるが、躊躇している暇はない、一塁を目指すのだ。
これがまた速い。張本は、史上に残るバットマンだけでなく、屈指の俊足選手でもあったのだ。
岩村が取る、素早く一塁に送球、タイミングはギリギリ。
一塁塁審の柳田の判定は？
「セーフ」
横に大きく腕が広がった。セーフティーは成功するが、張本は岩村を怒気の含んだ顔で睨みつける。
「なんで、アイツ、ワシのセーフティーがわかったんだ。あの動き事前に予測せんとできんぞ」

その答えは古田にある。張本の見ていないスキをぬって、岩村に、バントのかっこうをしてセーフティーに注意のジャスチャーを送っていたのだ。

張本も曲者だが、古田も負け時劣らずだ。張本を盗塁で殺す労をかける前に、あわよくば、セーフティー失敗で張本を殺そうと目論んでいたのだ。

もし張本に話が違うと、どやされたら、岩村の勘の良さと動きのよさは想定外であったと言い逃れすればいいのだから。

張本は一塁に立つ。古田に向かって、親指を立てる。

「一球めからくる合図か。よっしゃそれなら、肩慣らし兼ねて二塁に思い切り放ったるか」

張本は大きくリードを取る。投手の金田は気にする素振りはない。牽制するどころか、相対する張本を目で殺すこともない。

これだけ走者を無視したのなら、ベンチが走者に気を払えと指示を出すところだが、打者は四番の大杉だ。盗塁を犯す危険性よりも、大杉の長打を期待する場面だ。打者オンリーの金田の姿勢を攻める向きはない。

金田が投げる。張本がスタートを切る。大杉が盗塁援護のスイングをする。

古田はほくそ笑む。わざと盗塁死するうえに、ストライクも取れた。

「一石二鳥や」

張本のスタートはいい、いや、すこぶるいい。

古田に微かな疑問が生じる。張本はどうして二塁に刺されるのに、あれほどのスタートを切るのか。それでも古田は張本を疑わない。

わざと盗塁死したと怪しまれないように、滑り込む際にこけるふりでもして、失速するのか。

古田は矢のような送球を二塁に投じる。

二塁手の宮本がベースカバーに入る。張本は失速するどころか、華麗なスライディングをする。宮本が張本にタッチにいくが、張本の足の入るのが速く、二塁塁審に友寄は大きく腕を横に広げる。

張本をただの打つだけの選手と勘違いしている若いファンは、張本の思わぬ走塁に驚き、大きな声援を送る。

「張本～　お前走れたのか～」

実は、年間４１盗塁の記録もある俊足の選手なのだ。

忘れてはならないのは、まんまと盗塁を決められた古田である。

「騙された、なにが盗塁死するからヒットを打たせてだ、あのオッサン、くそ～もう誰も信用せんで…」

その古田も、あわよくば、セーフティーバントで張本を殺そうとしたのだから、あまり人のことはいえない。

二死ながら走者は二塁だ。

打者は四番の大杉、古田はスコアボードで打順を確認。

「五番は天才打者大下弘…」

古田は、大下と世代が違いすぎて、その実力のほどをよく知らない。

戦後すぐの時代の選手だ。変化球もいまほど豊富ではないだろう。現代野球の多彩な投球に対応できるかがだ。一縷は空いている、大杉を歩かせてでも、大下勝負でいくか。

「ちょっと待てよ。投手は金やんやないかい。カーブとストライクしかないやん、これじゃあ、大下さんも対応できるわ」

さらに古田の頭を霞めたのは、三原修の言葉だ。

「天才打者を五人あげるなら、中西、長嶋　王、川上、大下、三人あげるなら中西、長嶋、大下、そして一人選ぶなら大下弘…やっけ」

天才、それもとびっきりの、それが五番の大下弘だ。

古田はベンチを見る。

広岡は腕を組んで何も指示を出さない。

「監督も大下さんを恐れて、敬遠の指示を出せんのか」

金田は古田に早く座れといきり立っている。

「あのおっさんも、勝負したいみたいやから、勝負するか。まあ金やんが逃げるわけないか」
古田はマスクをかぶり直して座る。
「おい古田、挨拶」
「すんません大杉さん、挨拶が遅れて…集中してもんで…」
「美穂ちゃん元気か？」
「え、そりゃ元気ですよ」
古田の妻、中井美穂と大杉はプロ野球ニュースで共演経験あり。
「ほう、そりゃあよかった」
口はおだやかだが、大杉の丸太のような太い腕から繰り出されるスイングは、速く、そして豪快だ。
金田の速球をフルスイング、打球は振りおくれて、一塁側のスタンドに飛んでいくが、そのスイングのあとに、焦げるような匂いがしたのだ。
「なんや、まさか、かすっただけで、その摩擦で焦げたんか、なんちゅうスイングや」
大下が最高の天才なら、大杉のこの振りは何なんだ。
「追い込んだのはいいけど、ちょっとやそっとのスイングやなら、これいかれるわ…」
古田の不安は増すばかりだ。
張本に騙されてチャンスメイクされて、そのうえ得点されたら古田は目も当てられない。
ボール球は3つ使える、ボール球を振らせるリードをしたいが、勝負の早い金田が従うとは思えない。
「頼む、ボール球投げてくれ」
古田がサインを出す。金田は例によって、頷きながら従わない。
ボールになるカーブは投げず、ストレート勝負だ。
「もうどうにでもなれ」
古田は思わず叫ぶ。
しかし信じられないことがおきる。金田が踏み込んだ際バランス

を崩したのだ。
バランスを崩した金田だが、重心が残っていたため、ボールはストライクゾーンに飛び込む。
これが速球と見切った大杉には、チェンジアップになり、前につんのめりながら、それでもバットに当てたが、打球は捕手古田への小飛球だ。古田ががっちりと掴むと、思わずガッツポーズ。
「結果オーライ…でもなんで、金田さんはバランスを崩したんや…。あ、そうか、オレの打倒ダルで掘った場所や、あれでこけたんや…でもなんでや、金田さんのステップ幅では絶対に届かない場所に掘ったはずやのに…」
古田は金田のフォームを思い返す。それまでと違ったステップ幅ではないのか？
「それでも、いつもと同じステップ幅や」
同じフォームで同じステップ幅で投げたのに、どうして金田はバランスを崩した？
古田はわからない。まったくの謎である。

一回裏。ダルビッシュがマウンドに走る。注目は捕手だ。
スタメン発表は岩本であるが、当然、当て馬、岩本は出てこない。
田村か？　鶴岡か？　ベンチから出てきたのは、小柄な捕手だ。
「日本ハムファイターズの選手の交代をお知らせします…キャッチャー岩本に代わりまして、鶴岡、背番号６４」
鶴岡だ。ダルビッシュは鶴岡を取った。

「ふふふ、鶴岡を取ったか、勝ったも同然だ」
広岡は密かに笑う。

役者不足の鶴岡

「ダルビッシュは鶴岡を選んだ、おい古田はどう思う？」
「ダルビッシュは万全ではないと僕は見ますね、広岡監督」
「ふん、お前もそう見るか」
「ええ、万全なら誰が捕手でもいいはずです。体調なのかブルペンでの調子なのか、何かしら投球に違和感を感じたから、慣れしたんだ捕手を選択した」
「ふん、まあ９０点だな」
「満点やないと？」
「そうだ、マイナスされる１０点が何なのかが、わかるまで考えていろ」
「でも監督、鶴岡で正直助かりましたね」
「まあな」
広岡は不敵に笑う。

マウンド上でダルビッシュと鶴岡が最終の打ち合わせを取る。
「ダル、どうして僕を指名したんだ」
「たいして意味はありませんよ、なんととなくです」
「なんとなんか、う～ん、まあいい。とにかく攻めていくぞ。ヤクルトの上位打者は脅威だけど、逃げていたら埒があかない」
「わかりました」

ヤクルトの一番から青木、若松、岩村とヤクルト史上に残る左打者がズラリと並ぶ。
いづれも小柄な選手であるが、天才的な打撃センスを誇る打者ばかりだ。さしものダルビッシュとはいえ、たやすく料理ができる相手ではない。

打席に向かう青木を広岡が呼び止める。
「おい青木。投手じゃない、捕手を潰しにいけ」
「投手じゃなく捕手？」
青木はその意がすぐには理解できなかった。
打席に入ってもまだつぶやいている。
「ダルではなく鶴岡を？」
「なんだ、青木、僕の名前をあげて」
鶴岡と青木はともに１９８１年生まれの同期生である。
「よう鶴岡、よろしく頼むな」
「どうして、僕がこの歴史的大会に参戦してるか不思議そうな顔をしてるな」
「いやそんなことはないよ、鶴岡は優勝チームの正捕手じゃないか」
「社交辞令はいいよ、自分自身が一番不思議なんだから」

鶴岡はゴールデングラブを獲得した捕手とはいえ、通算打率は二割そこそこ、長打力があるわけでも、驚くほどの強肩があるわけではない。
ダルビッシュが選択しなかった田村は、優勝経験以外のすべてを鶴岡の上にいく日本ハム史上最高の捕手である。
新聞雑誌などのオーダー予想で日本ハムの捕手はすべて田村であり、鶴岡をレギュラーに組み込んだメディアはないのは当然、控え捕手として予想したメディアも皆無であった。

ダルビッシュが初球を投じる。
青木は見逃す、糸を引くような直球がアウトローに決まり、ストライク。
青木は打席をはずし、二度、三度、素振りを繰り返す。

「どうだ古田、ダルビッシュのストレートは」
「相変わらず、見事の一言ですね」

「調子は万全と見るか」
「いや直球のスピードだけじゃ、アイツの調子は図れませんよ。問題は精神状態と変化球がどれだけ投げれるかです。ＷＢＣの時みたいに、いくら１６０の表示が出ても、変化球がゾーンに決まらんなら、それダルビッシュいえませんよ」

青木は広岡の言葉を反芻している。
「捕手を潰す…か」
ダルビッシュは二球目を投じる。
「こういうことだな」
青木はバントの構えをする。高目に速球が外れる。青木はバットを引く。鶴岡は青木のバットの動きに惑わされてか、これを捕球できず、前にこぼす。
「なるほど、これだな…」

「どうだ古田、今の取れないボールか？」
「いやいや優勝チームの捕手ならあれくらいバシとミットの芯で取って、投手にリズム感をあたえなあ失格ですわ」
「あの程度の捕手なのか？」
「いつもの鶴岡はうまいですよ。キャッチングのうまさと気配り武器に、テスト生から這い上がった男ですから」
「それがどうだ、あの慌てよう」
「大試合のプレッシャー。そして気後れ」
「そうだ、それだ。どうして自分がこの場所に立っているのかわからんのだ」
「頭で分かっていても、体が分かっていない、どうしても違和感を拭えない」
「それが緊張感に上乗せされて、よけいにプレーにキレが出ない」
「青木にいうた一言の真意は」
「そういうことだ。舞台鳴れしていない初回こそ鶴岡を潰す絶好の

チャンスなのだ」

「おい鶴岡、緊張するな」

「わかってるよ」

青木のつぶやくがまた鶴岡をカチコチに固める。

緊張している人間に、緊張するなと声をかけたら、よけいに意識してしまう。青木はそれを狙って、鶴岡に言葉をかけたのだ。

鶴岡は自分を見失っている。サインのリズムが狂う。ダルが首を振る。いつもの鶴岡ならダルを言いきかせるように同じサインを出して力づくで納得させるのだが、今日の鶴岡は鶴岡ではない。違うサインを出す。ダルが首を振る。また違うサインを出す。

リズムは崩壊する。ダルビッシュはプレートを外す。ダルビッシュもいつもと違う。鶴岡を選択をしたのは遠慮から、どうにも覇気がないのだ。

呼吸があわないなら、鶴岡を恫喝してでも呼吸をあわすのだが、今日のダルはいたっておとなしいのだ。

ボール、ボール、カウント、ワンスリー。

「四球目までの球種は直球、直球、スライダー、直球」

「これ北京五輪の最悪のダルと同じパターンですよ、広岡監督。直球が走っても、ストライクが入らない、変化球に頼りたくても、スライラーしか投げれない、さらにそれがストライクをとれない」

「ふん、間違いなんだ、鶴岡を選択したダルビッシュの話ではない、投手に選択権利を与えた大沢が根本的に間違っているんだよ、ふん」

ダルビッシュは青木に四球を与える。

鶴岡はダルビッシュの激励の喝を入れるが、その声はいつもより心なしか小さい。

鶴岡対広岡

「鶴岡の選択が間違いじゃない。選手起用を選手に委ねた大沢の判断自体が間違いなのだ」

広岡が強くいうとおり、大沢の采配には疑問の余地がある。はたして、なぜ大沢はダルビッシュに捕手の選択を委ねたのか。

話は、試合前日の日本ハムスタッフミーティングに遡る。

「おうヒルマン、おめーさんはオレがここまでいっても捕手鶴岡を譲らんいうのか？」

「ダルビッシュは鶴岡と組んで初めてその実力を最大限に発揮できる……とヒルマンはいっております」

「おめーは田村のすごさをしらねーんだ。確かに鶴岡もいい捕手よ、だけどよお、田村はよお、ホームベースから遠投でバックスクリーンにぶち込む肩を持っているんだぜ。おまけに強打ときているし、リードもいい。ダルとは組んだ経験がないのはあれやが、最高の投手と捕手の息はピッタリのはずよ」

「日本野球の真髄は点を与えない野球ではないのか。ダルビッシュと鶴岡が組めば、相手に与える得点はゼロになる…とヒルマンはいっております」

「おめーさんも強情よな、だがよお、オレも強情でよ、捕手田村は譲らんがな」

「大沢監督が譲らないならば、強権を発動します…とヒルマンはいっております」

ヒルマンがいう強権とは、ヘッドコーチのヒルマンに与えられた特権のこと。そもそもヒルマンは優勝二回、日本一一回で、優勝一回、日本一ゼロの大沢の実績を上回る。

その実績を盾に監督就任を望み、ヘッドコーチの要請を拒否しつづけたが、一試合につき一度の強権を発動を得たことで、一応の受

託を見た。
「おうヒルマンよお、試合前いうのに、もう強権発動するのか？
捕手鶴岡いう強権をよお」
「それならば、捕手の選択をダルビッシュに任せるのです…とヒルマンはいっております」
「選手に？」
「はい…とヒルマンはいっております」
「おう通訳、ＹＥＳくらいオレにもわかるわ…選手に任せるいうのか？」
「ダルビッシュなら最良の選択をしてくれるはずです…とヒルマンはいっております」
本来の大沢にしたら、選手に起用を任せるなど、言語道断であるが、ヒルマンとの二大体制では事情が異なる。
「ダルに捕手の選択を任せる、それがヤクルト戦においての強権でいいんか？」
「よろしいでしょう…とヒルマンはいっております」
大沢にしたら、強権を試合前に使いはたすことは都合がいいのだ。試合では自由に采配をふるえるのだから。
「よしそれでいこうや。まあダルは頭のいい投手。間違った選択はしないやろうからな」
大沢はダルビッシュが実力で圧倒する田村を指名してくるはずと読んでいた。だからこそヒルマンの提案を認めたのであるが、現実には、ダルビッシュは鶴岡を選択したのだ。

「選手起用を選手に委ねるなんて、やっぱり邪道だぜ…」
大沢は後悔するが、時すでに遅し。
鶴岡は、場違いの舞台に、うろたえてつづけているのだ。

二番は若松。一塁走者は青木、広岡はどうでる？
「佐藤ヘッドコーチ。ダルビッシュのクイックモーションのタイム

と鶴岡の二塁送球タイムからみて、青木の二塁盗塁成功の可能性を簡潔に示せ」

「ダルビッシュと鶴岡は名コンビですが、盗塁阻止に関しては、まだ二流です。ダルビッシュはたとえ二塁にいかれても、本塁に返さなければいいとの考えからかクイックの習得に熱心ではありません。さほど肩の強くない鶴岡と合わせて、青木の二塁盗塁成功は極めて高いといえます」

「よろしい」

広岡が三塁コーチャーの水谷新太郎にサインを伝達する。受け取った水谷は一塁上の青木に送る。

「鶴岡を潰せじゃなかったの？」

青木は思わず目を白黒させる。送られてきたサインは盗塁するなである。

「いけるのになあ」

青木は思わず、ベースの端を蹴る。

「ふん、盗塁を許すより、よほど恐ろしい目に鶴岡を合わせてやるぞ、ふん」

盗塁以上に恐ろしい目？　広岡の企みは？

「鶴岡は、リズムを合わせるだけで四苦八苦しているのに、おまけに盗塁の警戒とくる。ひとつのことで手一杯なのに、そのうえにまた難事が降りかかるのだ」

鶴岡は立ち上がる、初球は様子見のピッチアウト。だが青木は走らない。

「ひとつのことを対処できんのに、ふたつのことをいっぺんに片付けようとしても、どだい無理な話よ、鶴岡ていどのキャリアならな…ふん」

鶴岡は青木を盛んに警戒するが、それにとらわれて、ダルビッシュへの配慮がおなざりになる。はてに単調だった配球はさらに単調になり、カウントを悪くして、困った挙句に投げさせた甘い直球を

好打者若松は一、二塁間に運ぶ。

「ほれみろ、一、三塁だ。ふん」

初回から、一、三塁の大ピンチ。鶴岡の頭はパニック寸前だ！

鶴岡対広岡（後書き）

まさかのこれでもかの鶴岡押し

オルガ婦人も興奮

打者は三番岩村。現役メジャーリーガーであり、二回のＷＢＣでいずれもレギュラーを勤めたヤクルトを史上に残る選手。

打者としての持ち味は強烈な下半身の力と上半身のねじれを利用したフルスイングと選球眼。そこに俊足の隠し味が加わるのだから、厄介この上ない存在だ。

打率は、若松青木よりも低いが、総合力ではヤクルト史上最強の打者である。

一、三塁の場面で岩村、何の策もないはずであるが、広岡が岩村を呼び寄せる。

広岡の言付けに岩村は一瞬嫌そうな顔を見せたが、すぐに無表情に戻り打席に向かい直す。

「監督、岩村になにいうたんですか？」

古田は次の次の打者としてベンチ前で準備を重ねるが、気になって仕方がない。

「ふん、古田。みればわかるよ」

ダルビッシュが初球を投じる。真ん中高めに浮く速球だ。

？！　岩村がバントの構えをした。まさか岩村がスクイズバント？　しかし三塁走者の青木はスタートを切っていない。

岩村はバットを引く。ボールは高めに外れるがギリギリストライク。

騒然となるスタンド、そしてまさかの作戦に戸惑う鶴岡。

「岩村にスクイズ？」

古田も驚きを隠せない。

そして肝心の岩村は、バットを叩きつける。スクイズの指示が出

たことで、自分が信頼されていないとの怒りか、采配批判のパフォーマンスか？

「広岡監督、なんですか、岩村にスクイズとは！　どういうつもりですか！」

「ふん、古田、すべては演技だよ」

「え、演技？」

「そうだ、岩村のスクイズも岩村の怒りもすべて私が指示をした演技だ。どうだ？　鶴岡を見ろ、岩村に怒りにおびえてか、よけい萎縮したじゃないか。さらにまさかの岩村スクイズの敢行で、奴のコンピューターはショート寸前だよ、ふふふ…。」

「あ！　なんちゅうえげつない作戦なんや」

「ふん、古田、お前が選手兼任監督時代に岩村に送りバント指示して、岩村の怒りをかったことがあったろ？　あれを参考にしたんだよ、ふふふふ」

「そうですか…」

鶴岡はすでに自分を見失っている。くるわけがないスクイズにおびえ、冷静さを失った岩村なら、怒りに任せてボール球に手を出してくるだろうと読んだが、スクイズも怒りもすべては演技の岩村は、それには手を出してこない。

結果、岩村は一塁に歩く。ノーアウト満塁の大ピンチ。

「ふん、鶴岡だ。このピンチは鶴岡がすべての要因だ」

そして打者は四番ペタジーニ。ライトスタンドは割れんばかりの大歓声に溢れ、お馴染みのベネズエラの国家が前奏として流されるとさ、それは最高潮に達する。

「ペータ！　ペータ！！　ペータ！！」

応援はやがて、チャンステーマに移り変わる。ポパイのテーマに

乗せて、
「ＫＯ！　ＫＯ！　日ハム～　ＫＯ！　ダルビッシュ！」
の大合唱だ。
ピンチを迎えて鶴岡は顔面蒼白の状態。
「どうすればいいんだ…ああ…待てよ、ペタジーニ？」
ペタジーニは選球眼と長打力を併せ持つ打者。出塁率と長打率の和を足したＯＰＳは日本在籍六年間で１を越えている。どんな強打者でもシーズン単年でのＯＰＳが１を越えることは稀。それがペタジーニは通算でも１を越えているのだから、おの凄さがわかるだろう。
そんな打者を相手にして鶴岡はほのかに自信を取り戻す。
「いけるかもしれない…」
鶴岡の対ペタジーニ安心理論はこうだ。
ペタジーニは選球眼に優れて多くの四球を選ぶ、それゆえ追い込むのは比較的容易。初球のストライクは見逃してくるうえに、ダルビッシュの球威なら制球に欠ける今の状態でも、ファウルは稼げる、ツーストライクは計算できる。
ペタジーニは追い込まれからこそ本領を発揮できる打者であるが、意外と三振も多く球威ある速球には振りおくれがちになる打者でもある。
追い込んでからの一球が勝負となる。
いくら調子の悪いダルビッシュとはいえ、追い込んでからダルビッシュを攻略するのはほぼ不可能だ、ストレートがある、スライダーが切れる。まだ姿を現していない多彩な変化球の影に怯える。
「いける」
鶴岡はそうつぶやくとマスクをかぶり直して、腰を据えた。
追い込めば勝ち、だがそのカウントを作れないのが今日のダルビッシュの調子であり、鶴岡の技能。
ペタジーニは初球の直球を見逃すと、ボールが二つ続いたあと、真ん中のスライダーをファウルにした。

ペタジーニは追い込まれたとはいえ、直球もスライダーも見切った。

それでも鶴岡はペタジーニを追い込ませた。

「追い込んだら勝ち」

五球め、直球が外に外れる。フルカウント。満塁押し出しの危機、それでも鶴岡は狙いどおり。

「打者とは不思議なもの。２－２からは自信を持って見逃せるボールでも、２－３からは振ってしまう。それは四球を恐れてボール球を投げ込むはずがないという心理が起因している。ペタジーニとはいえ例外ではない…」

鶴岡はダルビッシュに、ストライクからボールになるフォークを投げさせたい。それが投げれれば間違いなく空振り三振に取れると鶴岡は考えている。だが、今日のダルビッシュの状態では、ボールからボールのフォークになって押し出しを与えるか、落ちきれずストライクとなり一発を喰らう、その危険性が高い。

それでも鶴岡はフォークのサインを出す。

「ふん、古田お前の解答は９０点だ。残りの１０点の答えは信頼だよ。ダルビッシュが鶴岡を選んだのは、信頼だよ。信頼しているから、鶴岡を選んだ。田村にはその信頼が足りなかったのだ」

鶴岡はダルビッシュを信頼した。ダルビッシュならば、要求通りのフォークを投げてくれる。スライダー以外の変化球が定まらない今日の状態でも。けして捨てっぱちのリードではない。鶴岡は、ダルビッシュを信頼しているからこそフォークのサインを出し、ダルビッシュは鶴岡を信頼しているからこそ、サインに頷く。

「ふん、信頼だのなんだの私が大嫌いな言葉だ。歯が浮くよ、まったく…ふん」

ダルビッシュは強く腕を振る。真ん中高目からフォークボールが

落ちる、ペタジーニは空振りする。
ベースの上でワンバンドするが、鶴岡は体で制する。
空振り三振、ダルビッシュは拳を突き上げる。鶴岡は呪縛が解けたように、大きな声を出し、ナインに
「ワンナウト！　ワンナウト！」
と声を出す。

「ふん、これで鶴岡は元通りか、人間とは単純なもんだ、ふん、だがな鶴岡、お前は平常心だからといって力が劣る捕手にはかわりがないんだよ…ふふふふふ」

古田対鶴岡

五番は古田だ。古田の打撃の特性といえば、肩の可動域の広さを利用した柔軟な打撃。これに捕手特有の読みのうまさを重ね、力だけに頼らない独自の打撃スタイルを構築した。

「なあ鶴岡、ダルビッシュの調子はどうや？」

古田は鶴岡を揺さぶりにかける。

「ぼちぼちですねえ」

鶴岡は気を取り直している。古田の誘導にも乗らない。

「さっきのペタのフォーク、あれまぐれやろ？」

「どうですかねえ」

古田は鶴岡の受け答えで配球の出方を探るはずだった。もし自信なさげに答えたら、これまでどおり直球とスライダーに的を絞り、もしなんらかの手応えを口にしたら、あらゆる変化球を想定にいれるはずであったが、見事にはぐらかされたのだ。

古田のコンピュターは正常に作動しない。

鶴岡は手探りながら、ダルビッシュの変化球の封印をとき、ツーシーム、カーブ、カットボールが飛び交う。

制球はあいかわらずままならず、キレ味にも劣るが、古田を混乱させるのには十分で、

「カット、カーブ、ツーシームきて、あとはなんや？」

古田に的を絞らせず、その結果、甘く入るストレートで空振り三振に切って取る。

「くわあ～　直球やん…ただの真ん中…難しく考える必要はなかったんや…」

鶴岡は変化球の封印を解いたのはいいが、それのどれも手応えを感じず、困ったあげく、直球を要求したが、変化球で頭がいっぱいの古田には、逆にそれが功を奏したのだ。

無死満塁は、二死満塁になった。

六番は杉浦だ。
同じ右翼手には広沢もいるし、左翼専門とはいえ、ラミレスもベンチにいる。
杉浦の現役時代をよく知らない鶴岡は、その起用の意図が今ひとつ掴めないでいる。
「たしか、日本シリーズで代打満塁サヨナラホームラン打った人だな、杉浦さんって…」
鶴岡の知る、杉浦の実績は彼が１１歳のころだった９２年のこの一発だけで、
「ラミレスがこの場面で出てきたら、どれだけ怖かったことか」
杉浦の怖さを実感できないのだ。
「杉浦さんが得意とするボールは低めの直球系統、それをスイングスピードを利して、弾丸ライナーをぶっ放す…フェンスの低い神宮では、それがそのままスタンドインする危険性があるから注意しろか」
鶴岡は打席にはいる前の素振りを念入りにチェック。
「たしかにいいスイングだ」
そして、杉浦対策の大事な鉄則。
「初球は見逃す」
データを詳しくとった分けではないが、現役時代の杉浦は、初球は、九割以上の確率で見逃したという。大事なこの場面なら、なおさらその確率は高くなる。
「無死満塁が二死になり得点はいまだゼロ…」
鶴岡は、杉浦が初球を見逃す確率が１００であるという確信を持った。ボール球を打ち損じたとしたら、目も当てられないからだ。
流れはまたたくまに、日本ハムに移る。
「よし…」
初球、ストライクを取りにこいと、しかも杉浦の得意の低めの直球を要求する。ストライクを稼ぎ、そのうえ精神的動揺も誘うのが狙いだ。

「いくら初球は待ちの哲学の杉浦さんでも、得意のボールを見逃したら、しまったと思うだろう…」
ダルビッシュは要求より、外にボールが来るが、ゾーンギリギリだ。
「よし…」
鶴岡が声を上げた瞬間、杉浦が振りにくる。
「え？？」
九割以上、初球を見逃す杉浦だって、この場面に残りの一割未満の確率がくる。

「広岡監督、初球狙いが成功しましたよ」
「古田、まだ早いよ、ふん」

打球は高々と神宮の夜空に舞い上がり、球場中に悲鳴と歓声が交差する。
センターの島田誠がひたすら背走、背走、フェンスの手前でこちらを向く、フェンスに手をかける、グラブを上げる。

「あああ…」
鶴岡がため息を漏らす。
島田のグラブにボールはすっぽりと収まる。

「ふん、ほらみろ、武上、お前がぬか喜びするからこうなるんだ…」
「……」

杉浦の初球狙いは、広岡の指示。策は当たったかにみえたが、ダルビッシュの球威がほんの少しだけ上をいった。
それでも鶴岡は冷や汗が止まらない。
「あれが杉浦さんの怖さか…」
ラミレス以上の恐怖を感じ、ベンチに戻った。

この回はゼロ。あれだけ塁を賑わせて、結果ゼロならヤクルトのショックはいかほどなのか。

「おい古田、残塁1で得点なしと残塁3で得点なし、今後のゲームに影響を及ぼすのはどっちだ」

「同じですよ、この試合は過程どうこうではない、結果がすべて。結果がゼロなら同じですよ」

「ふん、１００点だ」

古田はマスクをかぶり、グランドに走り出す。

二回表の意外性

「これが大下弘か…」

古田は左打席に入る大下を下から見上げると、そうつぶやいた。

「天才打者……か……」

古田は戦後すぐの天才打者の実力をはかりかねている。

「オープン戦紅白戦通じての成績が１１－２。打率にして二割を切っている。それでメンバーに残ったのは、調整だったからか、それとも偉大過ぎて外せなかったのか。どっちかやな…」

大下の入っている右翼手には、稲葉もいる、主将の毒島もいる、外国人のソレイタもいる。

古田にとっては、カーブとシュートしか変化球のなかった時代の天才・大下より、現代の巧打者稲葉のがよほど脅威なのである。

「大下さんには悪いが、現代の変化球の脅威にさらされてもらいまひょか」

あ…。投手は金田だ。

「カーブしかないやん…」

これでは変化球地獄に叩き落とすどころではない。

しかも、金田は古田のサインに従うこともなく、ただ投げたいボールを投げ込むだけときた。

「どうか…神様、金やんに勝たせてください…」

古田は天に祈るしかない。金田は大下を意識して、徹底的に直球勝負にでるのは目に見えているからだ。

金田は直球を力一杯投げ込む。大下はそれをケレン味のないスイングで、きびすをかえす。

ボールは、戦後すぐの荒廃した青空に、大アーチを駆けたあの時と同じように、神宮の夜空に舞い上がる。

力と力の勝負。勝ったのは金田だ。右翼手の杉浦のグラブに、ボールは収まる。

古田はどうしてか晴れやかな気持になっていた。
「４００勝投手と天才打者の抜きさしなしの真剣勝負をこんなまじかで見れて、オレはなんちゅう幸せものやろ。バッテリーで打ち取ったちゅうか、ただの傍観者やな、これじゃ」
スピードガンの表示は１４６。今日の最速だ。
「立ち上がりはちょっとあれやったけど、調子出てきたか…」
それは古田の早合点。大下相手だからこそ、引きだせたボールなのだ。
続く、金田古田と同じ名球会仲間の田中幸雄には、ボールがきれない。独特の早いテンポが生み出せない、そしてカウントを悪くし、気のなくストライクを取りにいったボールを痛打される。右中間をやぶる二塁打だ。
金田は二塁に走者を置いても、気を吐くことはない。
金子の初球ボールは大きく外れる。
「おいおいおい、金やん、これやと金子誠にもいかれるで…」
金子誠は打率こそ高くないが、意外性のある打者だ。ツボにくれば一発もある。
古田は、ベンチの広岡を見る。一塁を指さして、何かを伝えたいようだ。
広岡は古田の訴えにうなづく。
「ふん、古田よ。鶴岡起用の攻撃面の負を、試合早々尽きやがって。まあしかたがない。４００勝と世界有数の投げあい。先制点は死を意味する試合だ」

古田の作戦とは…。
古田は立ち上がり、大きく両手を上げて、
「金田さん、敬遠、敬遠」
敬遠の指示だ。プライドの塊のような金田のこと、金子誠ごときを敬遠するのは受け入れがたいはずであるが、金田がいくら吠えても、

「おい、古田、おいお前、ふざけるな、おいこりゃ、ワシをどれおもうとるのだ」
「敬遠は譲りませんよ～」
古田が座らないのだからしかたがない。
結局、ボールを3つ重ねて、金子誠を空いている一塁に送る。
「金やんは口ではああゆうが、絶対腹の中じゃ計算してるぜ」
古田はそういうように、金子を歩かせたのは、確信たる意味がある。

「八番キャッチャー鶴岡」
金子の後続は鶴岡だ。歴史上の名選手の集うこの試合で、一人見劣りする男。
守備はなんとかこなしたが、本当の問題は攻撃点だ。
DH制度ならば、二死にしてでも鶴岡に送らせて、次の打者の一振りにかける作戦もあろうが、ヤクルトホームのこの試合、後続は投手のダルビッシュだ。
才気あふれるダルビッシュといえども、打撃には期待ができない。

鶴岡のまさかの一打に期待をかけるしかない。大試合に時折見せる、しぶとくライト前に落とすあの打撃がここで出ることを…。

空振り、空振り、そして空振り、金田は赤子をひねるように、鶴岡を切って取る。

「ふん、鶴岡様々だ。九人制野球で非力の捕手はご法度だよ、大沢…ふふふ」
これがセパの野球を知る広岡が、パの野球しか知らない大沢に対する優位点か。
たしかに大沢のいうとおり、セの覇権は、打撃の優れたチームに輝くことが多い。

２１世紀に入ってからの優勝チームの捕手は、古田、矢野、阿部、谷繁であり、この四人で一番打撃の劣る谷繁にしても、意外性のある長打と、意外と高い値を示す出塁率で貢献する。

ひるがえってパのチームはどうか。的山、伊東、城島、里崎、細川、そして高橋信二と併用される鶴岡である。

城島が際立ち、里崎や高橋のような強打の捕手もいるが、的山や鶴岡のような貧打の捕手も共存する。

この手の貧打の捕手がレギュラーを勤めるチームが、交流戦やシリーズの九人野球になると、得点力が大幅に落ちるのは、よく見られる光景だ。

日本ハムはダルビッシュの好打に、一切れの期待をかけたが、その願い虚しく…。

「鶴岡だ、敗因は鶴岡だ、ふん」

広岡はほくそ笑み、古田は、プランを立てる。

「とにかく、困ったら、後ろや、後ろ、満塁にしてでも、後ろ（八番、九番）に回せば、この試合勝てるで…」

二回表の意外性（後書き）

反響いまいち？
しかし感想が一月こないとあれだなあ

悪魔の広岡、悪魔の使徒宮本

今日一番の歓声が沸き起こる。何年たっても池山の人気は色褪せない

長年、人工芝の上で守備についていた池山は、若くして体がボロボロになっていた。その頃の池山といえばどうだ。野村ＩＤを叩き込まれて、状況に応じた打撃ができるようになったのはいいが、魅力はとうに消え失せていた。

バットを短く持って右に打つのは池山であって池山ではない。年間の三振数が１００を切るのは池山であって池山ではない。

豪快に振り回してこそ池山なのだ。

さあ打席の池山はどうだ？　体は当たり前のように３０本の本塁打を打ち、ダイナミックな守備を見せつけた全盛期に戻っている。

これに老熟してから身につけた野村ＩＤ野球を組み込めば、池山はどれほど打てるだろうか。

「ふん、元のなんにも考えてない打者に戻ったじゃないか、ふん」

広岡が飽きれるように、体が復元された池山は、それに頼りきってとにかくバットを振り回す。

真ん中のカーブをにタイミングをずらされても気にしない。

ボール球を振らされたからといって気にしない。

追い込まれても気にしない。

「ふん、まあいい。七番打者には期待しておらん。まさかの一発が出ればそれでいい、ふん」

池山は三振に倒れる。

それでも天を仰いで淡白な打撃を悔いることもない。みっつ振りきれる体がなによりも、変えがたいのだ。

「宮本、わかっているよな？」

広岡は、次の打者の宮本にそう声を駆けた。

宮本は言葉を発することなく、ただ頷いた。

一死、走者なし、次が投手の八番打者の役目とは、いったいなにがあろうか。

出塁して金田に送らせて一番の青木に期待をかけたい場面であるが相手は調子を持ち直してきたダルビッシュ。そうたやすく出塁できる相手ではない。

池山に倣っていちかばちかで振り回してもいい場面、だが宮本は通算５３本塁打で一発のある打者とはとてもいえない。

池山があっさりと三振、次が金田であることを考えると、道はひとつ。とにかく粘って、一球でも球数を投げさせるのだ。広岡の求めていたことはそれであった、宮本ならばいわずとも実践してくるはずと、あえて口にはしなかったが…。

宮本はいつもよりもよりバットを短く持って、ダルビッシュの投球を待つ。

「ふん、さすが宮本、よく野球をわかっている」

プロの投手が打者三人に投げる投球数は、だいたい１５球～２０球。とすると、三者凡退ではそれが１イニングでの投球数になるわけで、池山が三球で倒れ、金田が三球でおなじく三振に取られる可能性が高いことを考えると、三者凡退のイニング平均の球数には１０球ほど足りない。

「ふん、宮本よ、とにかく１０球は粘れ。１０に達したならば凡打しても何の文句もない」

広岡が宮本を起用したのは、高い野球頭脳と経験を試合にフェードバックできる選手だからである。

この試合二塁手として先発起用されているが、そもそも宮本は本職の二塁手ではない。本職ではなく長打力にかける宮本を二塁手として起用するには、当然、内外から反発があったのだ。

「日本一の立役者ヒルトンも、ハドラーも、新人王に輝いた苫篠弟も、現役の田中浩康も、国鉄時代にさかのぼるとベストナイン歴のある土屋さんも箱田さんもいる、クセ者土橋もいる！　それなのに

どうして宮本なんですか！」
武上打撃コーチはそう強く主張した。それでも広岡は耳を貸さない。
「広岡監督のような遊撃手出身は、二塁手を遊撃手なら誰でもできるポジションと勘違いしている。二塁手は遊撃手以上に奥が深く難しいポジションです！　急造二塁手の宮本が勤まるポジションではありませんよ！」
「ふん、他人の名前をあげて、本当はお前が二塁手として試合に出たいんだろう？」
武上自身も、あの怪童江夏を抑えて新人王に輝いたほどの、実績のある二塁手だ。
「そのとおりですよ！　二塁手宮本なら私のが上だ！」
ケンカ屋武上らしく、本音を隠そうともしない。打撃コーチのポストを与えられたが、ヤクルトの二塁手は自分との自負から、どうしても先発として試合に出たいのである。
「ふん、武上よ。お前がいくら本職でも、宮本を試合に起用しない勝てない。ただそれだけだ」
監督トップダウンの権力を行使されたら、いちコーチとしては、文句のつけようがない。その場はこれですんだが、武上の腹の虫は収まっていない。
「宮本、打つな、粘るな、あっさり倒れろ」
広岡の聞こえないところで、武上は宮本の失敗を期待する。

「またファウル…」
思わず捕手の鶴岡がぼやくほど宮本はしぶとさを見せる。バットを寝かせて構えて、振りきらず止めて当たるような打撃スタイルは、はなからボールをフェアグランドに打ち返すつもりはない。
「宮本さんいい加減前へ打ってくださいよ…」
「これがオレの役目だ。鶴岡、悪いな」
鶴岡には宮本に前へ打ち返させる秘策があった。だが、捕手とは

いえ古田のような、いい意味でのずる賢さをもちあわせていない鶴岡には、その秘策を使うのは、はばかれる思いがあった。
「ちょっとなあ…」
それでも、このままズルズルと宮本に粘られて球数が重なれば、どうしても流れはヤクルトにいってしまう。
「しょうがない…やるか…」

ダルビッシュが投げた瞬間、鶴岡が、「あ、甘い」と声をあげた。するとバットのヘッドを返さずファウルで逃げることを心がけていた宮本のリストが、声につられて自然に返ってしまう。打球は遊撃の田中幸雄への平凡なライナー。
わざと甘いと声に出すことによって、宮本の条件反射を誘ったのだ。これが鶴岡の秘策の正体であった。

「すいません、広岡監督。粘り倒そう思いましたが、つい鶴岡の声にかかって…」
「ふん、まあいい七球投げさせたから、とりあえず合格点だ。だがな宮本、もう次の回に守備につくな」
「え?」
「お前、今の打席で右足を痛めただろう?」
「いえ、そんなことは…」
「いわんでもいい。一塁に走りかけた動作がどうにもおかしいから、すぐにわかったぞ」
「……」
「ふん、図星か」
「お願いします。この試合だけでも…」
宮本は頭を下げるが、広岡は泣き脅しで、揺らぐタイプではないが…。
「それなら条件がある」
「条件?」

「ああ、けが人のお前を試合に出すんだ。こっちはハンデ背負って試合をやっているようなものだ。なら状況を同じにすればいい」
「……？」
「お前は幸い、相手と接触の多い二塁手だ…。怪我をさせるんだよ、むこうにも…」
「……！」
「ただしわからんようにやれよ、むこうは気の短い連中だらけだ。乱闘になってよけい怪我人増えたら、目も当てれん」
「……」
「5回、いやおまけして6回、そこまでに一人にダメージを与えなかったら、容赦なくお前を下げるからな。覚悟しとけ」
「……」
金田は三振に倒れた。宮本は広岡のつけた条件に首を縦にふることなく、グランドに走っていた。
とはいえ、拒絶したわけでもない、それを広岡は、宮本の受諾と受け取り、選手交代をつげずに宮本をそのままにした。
「ふん、さすが宮本、野球頭脳が高い…。どんな手を使ってでも勝ちたいよなあ…」

暴れん坊集団本領発揮？

宮本は広岡に反旗ををひるがえすどころか、
「一人怪我をさせろか」
ＰＬ～同志社～プリンスホテルと野球エリートコースを歩んだ宮本であるが、ただ敷かれたレールの上をを快走したわけではない。常に泥臭いプレーを肝にして、自ら切り開いてきたのだ。
「品定め…」
一番から島田誠、小笠原、張本と続く日本ハムの３回表の攻撃。
「張本さんは勘弁…」
二塁手が相手選手を怪我をさせるのは、二塁上での接触プレーが主たるものか。タッチをわざと相手の致命傷になる部位にするか、併殺崩れを狙い殺人スライディングを仕掛けてくる走者に逆に、正当防衛乗じて蹴りでも入れあげるか。
「張本さんに、もしも、そんなことしたら、殺されるで…」
そもそも宮本が専門外の二塁についたのは前回記したように、広岡の強い推薦であるが、他のポジションを守らせる案がなかったわけでもない。宮本といえば遊撃で一時代を築いた選手であり、三塁手としてもゴールデングラブを獲得するほどの名手だ。
首脳陣が最初に立案した布陣は、遊撃宮本、三塁池山、二塁岩村であった。二塁岩村はＷＢＣやレイズ、１０年からパイレーツで、もはやお馴染みであり、三塁池山も晩年に数年こなしたポジションだ。まさに三者とも、経験ありのポジションで、この布陣が通るとおもいきや、監督である広岡はダメ出しをした。
「ふん、二塁岩村の守備範囲が気に食わん。あれじゃあ、ヒットをいたずらに増やすだけだ、ふん」
さらに、広岡は池山の遊撃守備を想像以上に買っていて、
「池山は宮本以上の肩と守備範囲がある、遊撃を守らせる」
そこで浮上した案は、まさに折衷案というべきもので、遊撃を池

山にして、岩村の二塁守備範囲をカバーするという布陣だ。だがこれも頓挫。原因は三塁宮本にあった。それは守備力ではなく攻撃面。宮本の打力では三塁手としてはあまりにも魅力にかけるというものだ。

同じ三塁には９２年ＭＶＰのハウエルがいる。守備に多少目をつぶってでもハウエル起用は、宮本起用よりも利点がありそうだ。いくら広岡が宮本を高く買っていても、この比較論は、少々立場が悪い。

そうなると勢い宮本が控えに回るざるをえない。選手の監督として、宮本を常にグランドに立たせたい広岡はこれを恐れて、この案も破棄。

そこで浮上したのが、宮本を本職でない二塁に置く現在の形である。宮本は、自分を強く推した広岡の立場を考えるとぜがひでも結果を出したい立場にあるのだ。

広岡が宮本を条件付きで残したのは、宮本の早期退場は、風向きが強くなるのを防ぐ意味もあったのか。ニヒルな独裁者広岡が珍しく保身に走ったのか。

「あ…張本さんが歩いた」

宮本の不安は早くも現実となる。

「まだ三回、リミットの六回まで時間はあるよな…」

張本が宮本めがけて飛んできたならば、

「体が勝手に動いて、張本さんをドーンとやってしまうかもしらん…」

戦いは相手だけではない。内なる敵とも戦わなければならない。名誉あるこの大会でレギュラーをつとめることは、宮本の野球人生をどれだけ豊かにするだろうか。生き残るために、宮本の遺伝子に組み込まれたＤＮＡは、宮本の感情とは別に張本に襲いかかるだろうか。

「こんでいい…張本さんは、二塁にこんでいい」

宮本の願いもむなしく、現実はそうなる。
大杉が打つ。打球は遊撃手の池山に転がる。
宮本は祈る。
「池山さん、二死や。一塁にほいと送球してくれよ」
その願いも神様はかなえない。池山は体をよじり、二塁手の宮本にトスをする。
宮本が二塁のベースカバーに入る。
しなくてもいいのに張本が、宮本の落球を誘いにかける殺人スライディングを繰り出す。
ベースを踏んだ宮本は、張本のスライディングを避けるために飛び上がる。宮本は一瞬の空中で人生の半分を反芻すると、そのまま張本に覆いかぶさる。
本能だろうか、偶然だろうか、それとも故意だろうか。
宮本が張本を怒らせたのは。
「ワレ、宮本、先輩に何さらすんじゃ、コラー」
宮本はすくみ上がった。
だが本当の恐怖は張本の見せたひとかけらの怒りはない。
これだけ接触プレーで体重をかけて、張本がどこも痛めてないことであった。
徒労。
宮本は流した冷や汗ほどの成果も得られない。

狙え張本を、歌え高らかに

張本に胸ぐらを捕まれて、

「コラ、ボケ。カス、おんどれら、殺すぞ、クソこの野郎」

罵詈雑言を浴びせられたら、いくら策士宮本とはいえ一溜まりはない。

さあ、この騒ぎで火がついたのは日本ハムのベンチだ。ナインが張本に加勢いたすとばかりに、最前列に前のめりになれば、ベンチ登録外で観客席で観戦中の暴れん坊たちも、いまにもフェンスを飛び越えて参戦まいろうと、ネットを掴み興奮状態だ。

こうなるとヤクルトナインも宮本を見捨ててはいられない。天下の張本恐れず、応戦せねばと身構える。

二人のいざこざに最初に首を突っ込んだのは打者走者の大杉だ。大杉といえば、野球においてもケンカにおいても球史に残るハードパンチャーだ。張本に大杉が加われば、軽量級の宮本など軽くふっとぶ…はずであったが…。

「おいおいおい、ハリさんやめんか」

「なんじゃ、大杉、お前、ワシのケンカを止めにきたんか?!」

「ああそうだよ。この試合は、ただの試合じゃないんだよ。名誉ある大会の開幕戦だ。多くの球場のお客様にテレビの向こうのファン、どれだけこの試合に注目してると思っているんだ? みっともないことはやめてくれんか、ハリさん」

大杉は参戦せじと飛んできたわけではなかった。みっともない乱闘騒ぎに発展することを諫めにきたのだ。

これには飛び出しかかった両軍のベンチも、その足を止めるしかない。

張本も大杉の言葉にほだされたわけでもないが、吹けば飛びそうな宮本相手に自分一人で騒ぐのもバカらしいと気持ちが萎えてきたのは確かのようだ。

「くそ、今回は勘弁してやるかのいのう…」
つかんでいた宮本の襟を投げるように離すと、張本はそのままベンチに戻っていった。
投げられたら勢いですっころんでしまった宮本は、痛めていた右足の症状をより悪化させることになる。
これで張本がどこも痛めずピンピンとしているのだから、故意か？偶然か？　謎の張本殺しは、宮本の一歩的の損失に終わった。

広岡の目も鋭い。
「残念だったな、宮本。せっかく張本をやりにいったのに、アイツどこも痛めておらんぞ。ふん」
張本無事を、遠くベンチから看破しているのだ。
これではなんとか張本の故障をでっち上げて、ごまかしの条件クリアを狙っていた宮本も何も言えない。
「ふん、6回だぞ、6回、それまで誰かを殺らなければ、引っ込んでもらうからな、ふん」

宮本の決死のダイブも効かず、まったくの健康体の張本であるが、守備では相変わらずである。

「鶴岡潰しに加えて張本潰し作戦でいくか、ふん」
守備の拙い左翼の張本と右翼の大下（外野手としての失策数は歴代最多）狙いの策は、試合前から交わされてきた議論だ。投手がダルビッシュであって、狙い打ちの制限をつきでの攻略は不可能であると結論付けて、守備の穴狙いの打撃指示は出されていなかったが、
「鶴岡の配慮の足りないリードなら狙える」
ここでも鶴岡がキー。すっかりと場慣れした鶴岡であったが、広岡にとってはいまだ組みやすしのようだ。
「大事にいこうと思うと外に構えて」
その外のボールを青木に流されて、打球は左翼張本に飛んでいく。

張本はいったんバックしたと思いきや、今度は一転前進。オーライ、オーライと自分の打球とセンターの島田誠を制止しても、その足はバタバタが止まらない。

バンザイ。

結果として、ボールは張本の待ち構えていた位置より後方にポトリと落ちる。

「ふん、あれが張本の守備力だ。ついていくぞ」

センターの島田のバックアップが素早かったこともあり。青木の二塁進塁は妨げたが、不味い守備で青木の出塁を許したことは事実。

「おい、若松。鶴岡の頭なら、青木の盗塁を怖がり、二塁送球しやすい外中心になるはずだ。それをまた穴狙いだ」

若松に指示を出すと、さすが打撃の天才、みごと作戦を推敲して、打球はまた張本に飛んでいく。

レフト前だ。普通の左翼手なら当たり前のようにキャッチする当たり。それでも不安と、遊撃の田中幸雄が、三塁の小笠原が、張本のフォローとばかり走ってくるが、これが張本のプライドを刺激して、

「おまえらくるな」

張本にこう凄まれたら、田中と小笠原の足はすくむ。張本は前進に前進を重ねて、グラブを差し出して、懸命に打球を取りにいく。

打球はワンバウンドしてグラブに収まったかに見えたが、張本は直接取ったと、グラブを高々と掲げてアピールをする。

「とった、とった、とったよ、私はとった」

二塁塁審の平光に猛アピールだ。

しかし、平光は張本の演技に騙されず、腕を横に広げる。

張本はそれでも引かずに、

「どこみてるんだ、アンタ、おいこら」

今度は猛抗議であるが、これを見て、青木が一気にガラ空きの三塁を陥れようとする。

が、張本は青木のこの動きを見透かしていたかのように、瞬時に

頭を切り替えて、三塁に送球する。
どうやら、一連の抗議は青木をおびき出す罠であったようだ。
青木、好走塁一転、暴走？　いやいや待て。張本の肩は悲しいくらいに弱い。
ボテボテボテ…。ボールは遠投５メートルの時点で放物線のキャリー運動をやめて、地面に落ちれば、後はコロコロと三塁めがけて転がっていくしかない。
これを近くにいた田中が拾って、送球しなおす手もあったが、張本がどうだといわんばかりに、その送球を見つめていれば、そのままにしておくしかない。
それでどうだ？　ボールは見事、三塁に正しく転がっていくじゃないか。
青木まさかの憤死？　いやいやここでまた問題。三塁のカバーが不在なのだ。小笠原も田中も張本追いかけてはるか遠くにいれば、本来カバーに入るべき捕手の鶴岡も、どうしてか捕手の定位置で見守りつづけている。
「こりゃあ～鶴岡～カバーいかんか～」
「あ」
大沢の叱咤で、ようやく我を取り戻したのはいいが、もはや時は遅し。こぼれた球を拾いにベンチ方向に走るのが精一杯だ。
張本の見事なコロコロ送球は、このまま三塁上を空過？　いやいや三塁には投手のダルビッシュがカバーに入っていた。投手がベース上のクロスプレーに参加するのは本来ご法度。それでも大事な先制点をめぐる攻防、
「誰もいないから入りました」
とクールに言い放ったダルの隠れたファインプレーで、青木は三塁上で死す。
「ふん、こんなもん偶然の産物だ。張本狙いはやめんぞ、ふん」
広岡はどこまでも冷静を装う。

ライト前の攻防

今度、走者を殺しにいったら殺される。

大杉が張本をなだめすかしたことで事なきを得たが、二度めとなると話は別。いいようにやりたいことやられて舐められて溜まるかと、爆発するだろう。

「どうすりゃいいんや」

宮本は頭がすりきれるほど、考えをめぐらすが、なかなか名案は思い浮かばない。

案がなければ、宮本は試合途中に引っ込まされる運命であるが、運命はそこまで待ってくれないのかもしれない。

大下が二塁への強烈な打球を打つ。

遊撃手で魅せたあの広大なる守備範囲を、合わせ鏡のように、二塁手として魅せられたら、ヤクルト史上の誰にも負けない守備範囲の二塁手として宮本は輝けるが、足を痛めている状態ではそれは無理強いに近い。

足が動かない、無闇に足を動かすと爆弾が爆発する、ならばテクニックをつかって打球との距離を縮めようと思っても、宮本には二塁手としてのそのテクニックがない。

打球は抜けていく。

「広岡監督～　見ましたか、いまの宮本のプレー！！　私なら絶対に取れていましたよ！！」

「騒ぐな、武上、ふん、騒ぐな、武上…。騒ぐのなら6回終わってからにしろ、ふん」

武上は、広岡と宮本の取り決めの内容を知らない。

走者一塁、チャンスを広げるのなら絶好な機会だ。だが、日本ハムには、それほどの余裕はない。

もし次の田中幸雄に送らせて、一死二塁にしても、後続の金子誠

が歩かされたら、そこで終わり。後続の鶴岡とダルビッシュには、とうてい期待ができないからだ。

大沢は頭をひねらせる。ヘッドコーチのヒルマンや守備走塁コーチの白井一幸に意見を仰ぐ。

「お前らなら、どうする？」

「私なら、幸雄に送らせますね…金子が敬遠されても構わない。鶴岡のまさかの打撃に淡い期待をかけます。もし鶴岡が打ったなら、俄然こっちの流れがきますよ」

「田中は、年間本塁打27本を記録したほどの打者だ。私なら彼の一撃にかける…。彼が倒れても金子がいる…彼の時折みせる長打には何度助けられたことか。とヒルマンはいっております」

「お前らの意見も割れんだなあ～　ならオレの采配はこうだ」

田中にバントのサインを出す。

古田はほくそ笑む。

「零点や、この回も」

一死、二塁になる。

「金子歩かせて…」

だが、ネクストを見て古田は目を丸くする。

「稲葉！　稲葉やん!!　そうかあいつがおったか！」

まだイニングは4回、普通の試合なら代打攻勢をかけるのには早すぎる。しかも稲葉ほどの打者を切れば、終盤にカードの不足に泣くのは目に見えている。しかし、この試合は歴史と伝統が交差する試合。ベンチには稲葉だけでなく、多種多彩な打者が、いまかいまかと出番を待ちわびている。

「稲葉はダミーや！　ああしてネクストに置いて、稲葉の代打あると相手に睨ませて、金子で勝負させる気や。だいたい金やんは左や。左打者の稲葉はようつかえんやろ」

古田は立ち上がりこそしないが、外に大きく外れて構える。

「稲葉出せるなら、出してみいや」

古田はそう口走るが、すぐに前言撤退。
「いやいやマジで出されたら困るわ…。代打稲葉なら鶴岡ひっこんで田村さんが出てくるんやぞ。打撃も守備もパワーアップやん…」
ボールツーとなると、稲葉はベンチに引っ込む。
「ほうれみい、稲葉は打線やろ」
が、代わりにベンチから、のっしと姿を見せたのは柏原。
「柏原さん？　右やん、それも金やん得意そうな打者やん…」
８１年優勝の４番打者だ。
「柏原さんやt一発ある、一気に三点なったら致命傷やんか…」
ボールはスリー。
「大沢監督、鶴岡にそのまま打たせてくれ～」
ボールは中に入り、ワンスリー。
「金やん、制球悪いのう…」
古田は大きく外に構えるが、またボールは中に入る。
「敬遠いうてるやろ…」
古田は関せず、また外だ。だがここで、金田はのらりくらり一転、腕を思い切り振ってくる。
そして古田の構えおかまいなしにボールは甘く飛び込んでくる。しかもど真ん中だ！
「わあ～」
古田は思わず叫んだが、金子は振り遅れて三振だ。古田も想定外のボールをなんとかつかみきる。
「金やん、勝負してきた…」
金子は意外性の打者でとんでもないボールをヒットにしたと思えば、真ん中のボールをあっさりと振ってしまう打者でもある。この場面では、裏の目が出たようだ。
「まあよう考えればこうやって殺すのが一番や…・これで鶴岡に代打を出されても敬遠してダルビッシュと勝負。いくらなんでもダルに代打はないやろ…」

鶴岡だ。二死一塁で鶴岡である。
「今度は打たなきゃ、せっかく幸雄さんが送ってくれたから、今渡こそは打たなきゃ、打たなきゃ、打たなきゃ」
責任感にとらわれて、頭はガチガチの状態。これでは、バットに当たりそうもない。
「鶴岡、体こちこちやな…。はい、こりゃもらったわ…」

「う〜ん、やっぱこうなるかあ〜」
大沢は田中幸雄に送らせた采配を悔いる。
「いや、大沢監督、鶴岡だって、通算二割打っているんですよ」
白井はそういうが、鶴岡の持ち打率を二割とすると、金田相手で半分の一割減、よけいな緊張の分にこれまたその半減。
「5分かなあ、鶴岡が打てる確率は。5分いうても、五分五分の五分ちゃうで…。打率の5分、つまり5パーセントや…」
古田は鶴岡の実力をそう見くびっていた。
みくびるなと鶴岡は言い返したい所だが、実際鶴岡は見くびられるような状態である。
第一、二死二塁で、次が投手。敬遠の四球がセオリーだ。鶴岡勝負で、誰もか当然と見守っているのだから。
だが、それが古田に取っての落とし穴だ。鶴岡を見くびりすぎて、適切な守備位置の徹底を忘れていたのだ。
鶴岡の長打力から、右翼手の頭を越える打球はまず不可能、ならば、右翼手の杉浦は前進守備を取ってポテンヒットを防ぐのが定石であるが、今、杉浦は定位置で腕を組んでいる。
野球博士、ハムのベンチの白井一は、これを見過ごさなかった。
杉浦の位置を見て右に飛ばせば何かが起きるとみた白井一は、
「おい、鶴岡!!　アジアシリーズだ、アジア一を思い出せ〜〜」
とはっぱをかけたのだ。一瞬、意味の通らない激励だが、鶴岡ははっと気がついた。
「アジア一？　あ、そうか!」

鶴岡は０６年アジアシリーズ決勝で、虎の子の一点である適時打を打っていたのだ。台湾ラニューの下克上を退けて、日本ハムと日本の威信を守ったその一打は、ライトの前にポトリち落ちたものだった。

「右翼、ライト、右方向…ポトリでいい」

鶴岡はそう暗示をかけると、体が少しだけ楽になったような気がした。

鶴岡は打つ、バットにしぶとく当てる。打球はライトに飛んでいく。狙いどおりポテンコースだ!!

「しまった〜!!!　守備位置の指示忘れれた!!」

古田がそう叫んでも、過ぎた時間は戻らない。

杉浦は猛然と前進するが、届きそうもない。

すわ、先制点?!　二塁にいた大下はすでにホームに戻っている。

ところがだ、そこに、いないはずの二塁手宮本がいた。

「宮本!!!　さすがや〜」

古田の今度の叫びは、歓喜の叫びだ。

ボールは、宮本のグラブに直接収まる。

宮本は追いついたのか?　いや宮本の足の状態ではそれは無理。

「動けなきゃ、最初からそこにいればいいんや」

宮本は誰にも気づかれないように、あらかじめ鶴岡のポテンを警戒した守備位置を取っていたのだ。

「ふん、私が宮本を買っているのは、自ら考えて動けるその野球頭脳だ、ふん」

滅多に人を褒めない広岡が賞賛するほどのプレーを見せて、ヤクルトは先制点を防いだ。

宮本はひっそりと作戦を敢行する

「なんとかせいいわれても、なんもできんことがある」
宮本は思考の袋小路に足を踏み入れていた。すでに右足は動かすだけで、痛みが走るほど重傷だ。
「おとなしく交代するか…」
宮本の走者殺しが封印された今、もはやなす術がないのだから。ネクストで打席を待っていてもどこか上の空だ。
「はあ…やっぱ無理やったんかな…なれん二塁手での先発は…。動きが遊撃と逆やから体にかかる負担もちゃうから、痛めて足をより悪化させたし…。アテネの時の予選や、ヤクルト一年目のころ守った経験あるからいけるおもうたけどなあ…」
七番の池山の打球が遊撃の田中に転がる。イレギュラーしたが、うまくすくい上げて、一塁に送球。
「なんや、珍しい、人工芝の神宮でイレギュラーなんて…。芝を張り替えた影響かのう。それとも荒れた試合だから小石でもあったか。…イレギュラー？　あ！」
宮本はすっかりと忘れていた。なにも、相手を故障させる機会は、守備の時に限った話ではない。
「打者としても相手を一人葬り去ることくらいできるわ…。それも、誰も怒らせることもなく、しかたがない事故として処理される方法が…」
宮本は5回の表の守備についた。
「ダルビッシュの速球の威力とオレのバットの角度とスイングスピードから打球が転がる位置を計算すると…このあたりやな…」
宮本は左足で円をかき、目星をつけた。
「このあたりをさっと荒らしておけば…ひっそりと石つぶてでもおいておけば…」
宮本の作戦は、ひっそりと完璧に遂行される。

二死から張本が四球で歩いた。今日の張本は三打席三出塁だ。投手の頂点に立つ金田と、打者の頂点に立つ張本の勝負は、張本の完勝で終わりそうだ。

金田が、たとえ、四打席め、五打席めの仮定の打席で、目の色買えて、張本を切って取っても、出塁率は6割から8割に推移するにとどまる。もはや張本の勝利はひっくり返らない。

「また張本さんだ。二度あることは三度あるいうが、ほんまに三度もありやがる、しかしけったいなシュチュエーションや…」

大杉がゴロを打つ。二遊間に抜ける当たりだが、池山が好捕、それを宮本にトス。張本がまた宮本に襲いかかる。今日何度目かの殺人スライディングだ。

だが、宮本はもう張本と喧嘩をしない。苦境を抜き出せる術があるのだから、二塁ベースを踏んで、飛翔することもなく、さらりとよけて、ベンチに戻る。

「二塁手は金子誠か…ええやん…後輩やで、アテネ五輪、中畑ジャパンのメンバーやん…」

五回裏、先頭は八番宮本。

宮本は気が楽だ。ただ打ち返せばいい。平凡なゴロを二塁手のあのあたりに。さすれば宮本の犯行は遂行される。

「本塁打や長打打ていうなら、それ無理や思うけど、ゴロや、ゴロ。走者が誰もいないのに、ただ二塁のゴロ打てばいいんやで…そんなんいくらでもできるわ…。オレの技術ならな」

宮本はトップから一直線にダルビッシュの151キロの速球にバットを出す。

「右を意識して、バットを寝かせたり、一瞬間を取る必要なんかないにゃ、ただバットを素直に出せば、ダルの渾身の速球に振り遅れて、打球はあのあたりに飛んでいく！」

宮本が表の守備で、目星をつけたあのあたりに…。

金子は股を割って、捕球体制に入る。
イージーなゴロだ。金子誠なら、晩飯のメニューに思いを回らせたり、鼻歌まじりでも取れるだろう。
ただ、それは金子が、宮本の施した細工に気づいていたならの話だ。
ボールは金子のグラブに収まる寸前に、不規則に跳ね上がる。
石つぶてが効いたのか、宮本が荒らした芝生がそうさせたのか、それは誰にも分からない。
跳ね上がったボールは金子が慌てて出したグラブを通過して、金子の喉元をえぐる。
「ぐわ！」
金子がそう声を出すと、そのまま後方に倒れる。慌てて遊撃の田中がボールを拾い、一塁送球して宮本のあわよくば出塁の野望はたったが、
「悪いな、金子」
金子のダメージが覆らない。喉をさすり、咳を何度か繰り返す。
「しかしうまくいったとはいえ、喉元は薄気味悪いわ…。せめて、頬にでも当たって、外傷ですんだほうがましやったなあ」
トレーナーがすっ飛んでくる。すかさず金子の喉元をチェックするが、金子は。さかんに左のふとももを指さしている。どうやら喉元には損傷がないようだが、後ろに倒れたさいに、足首をひねったようだ。
「足首か…それならそれでこっちの気分も晴れやかやわ…」
金子は出場続行をさかんに志願したが、ドクターストップがかかり、結局、控えの田中賢介と交代して、無念の途中退場だ。
「うまくいったわ…ふう…。金子には悪いことをした。でもまあ許せや、これも野球や…生き残ったものだけが勝者や」
ＰＬの同級生で宮本より素質があるものがどれほどいただろう。
ドラフト二位ながら、いたって小粒とさほど大きな期待をかけられ

てなかった宮本が、あれほどいたドラフト同期が落ちていくのを尻目に生き残ったのはなぜだろうか？

「蹴落として生きるちゅうのは、なんとも辛いなあ…。そうはいうても、蹴落とされた方のが辛いんかな…」

宮本は一回だけ早い五回に、広岡に言付けられた条件をクリアさせた。

天皇金田が吠える

両軍、いまだ無得点で試合は後半戦に突入する。

金田とダルビッシュの投げ合いだ。均衡した展開になるのは十分予測できたこと。

しかし、その内容というとしまった試合とはいいにくい。

金田のサイン無視投法、力の落ちる打者にあえて打順を回す背水の陣を引いた戦術、神宮のマウンドがあわず、どうにかこうにか抑えているダルビッシュ、そして影なるスナイパー宮本の張りめぐらせた策は静かに暴発する…。

「金田はどこまでいけるか?」

広岡は禁句ともいえる言葉を口にした。なにせ天皇・金田だ。国鉄時代、飛び抜けた存在といえ一選手の身分で、監督以上の権限を持ち、登板機会を自ら決めて、気が向いたときにマウンドに上り、気が向いたときにマウンドを降りた男だ。

金田より年長者で、日本一、三度の大監督広岡とはいえ、金田を操縦できるとは限らない。

広岡が見切っても、金田は聞き入れないかもしれないし、広岡がまだイケルと判断しても、金田は勝手にボールを置くかもしれない。

尾花は、既に金田のコーチングを放棄している。

それは、宮崎県西都ではった第二次キャンプのことだ。

尾花は、金田のクイックモーションに、気に入らない点があった。素人目では、何度見てもわからないほど、細かいフォームの違いであったが…。

「金田さん、足の動きが…」

金田は耳を貸さないどころか、尾花の頭を無言で、グラブで叩いたのだ。

尾花は顔にグラブの跡がつくほどに傷を残したが、それでも野村

や王と大監督にも自分の意見を通してきた尾花だ、金田とはいえひるまない。
「軸足です、軸足です…」
さすがに４００勝投手、金田は尾花の修正ポイントをすべて事前に理解してきた。
「ワシの時代はクイックなんて、面倒なものはなかったわ。だからこうして色々なクイックのモーションを試してるところや…。尾花、軸足やろ？　軸足の体重の乗りが悪いんやろ？　わかってるわ」
金田は、軸足に体重を乗せたクイックを披露した。
「こうやろ？　ほれ」
投げ終わった、その勢いで、尾花をトレーバーよろしく蹴り上げる。蹴られた尾花は、ブルペンの金網に打ち付けられる。
尾花はその時思った。
金田は、あまりにも偉大で、あまりにも危険だ。

「広岡監督、大変失礼なことを申し上げますが、私には金田さんの交替ポイントがわかりませｍん」
「ふん、尾花よ、おびえるな。その時がきたら、金田は、力ずくに引きずり降ろす」
その時がくるだろうか？　金田は先発完投が当たり前だった時代の投手、その投手が、ボールに力がなくなったとしても、ゼロに抑えていたら降板を受けいれるだろうか？
五番の大下弘が、金田の渾身の直球をライトフェンスギリギリまで飛ばしたとき、
「ふん、尾花よ、ブルペンを用意しとけ」
広岡は冷酷でかつ冷静だ。金田のボールのキレが、かすかに落ちていることを見誤らない。
「わかりました」
尾花はブルペン連絡用の電話を取り、ブルペンコーチの伊東昭光に連絡をとった。

「伊東、ロケットボーズいけるか？」
「はい、尾花投手コーチチーフ。五十嵐はいける状態ですが、石井弘寿の方はどうもよくありません」
「ハムの打線は上位から左が並ぶ、石井を突っ込もう思うたが、苦しいか。それなら他の左投手…」
石川は先発タイプとブルペン入りしていない。藤井は素行の悪さと波の大きさでメンバーから落とされた。山部は制球難でつゆと消えた。
「安田さんです…」
「安田さんか…」
二人がため息混じりになるのも無理はない。安田は変化球と速球の緩急差でごまかし打者を抑えるタイプである。僅差の終盤、リリーフに期待されるのは、力で抑えられる速球と決め球であり、一発を喰らわない集中力だ。
尾花は安田と現役をともにしたことで、集中力の欠如から不用意な一発を浴びる姿を多々見てきたのだ。
「あとは梶間さんやろ…」
もう一人の左腕も安田と似た幻想的な左のサイドハンドスローの梶間。彼も安田と同様、大事な場面で信用しきれない面がある。
「ふう」
尾花はため息をついた。
「金田さん、せめて、張本さんの次の打席くらいまでは持ってくださいよ…」
が、しかし、金田の球威は日本ハムの走者を塁上にためさせる。
田中幸雄が塁に出ると、古田は首をひねる。
「しっかし同じ流ればかりやなあ～　同じ打者出して、同じ打者を打ち取って…この流れはまずいな。どっかに歪みがくるわ…」
古田のいうように、どこかで見た流れた。田中が出て、鶴岡に回し、残塁の山を築かせる。
「この策、今日三度目なるな…使うとしたら…。ただもう回は六回

や。鶴岡に代打が出てきてもおかしくはない。ダルビッシュがすっかりと立ち上がって、捕手の相性関係なしとくりゃあ」

今日初打席の田中賢介にも制球が定まらない。

「ボール、ボール、またボールや…しかし金やん、なんやろ？　４００勝投手やろ？　六回でへばりがくるとは、おもわななんだ。まああれか？　昔と違って、下位で手抜きができず、全員に全力投球やろか、それともボールやマウンドの違和感？」

金田は田中賢介も四球で歩かせる。

鶴岡だ。

今日三度目の鶴岡勝負であるが、ネクストにいた鶴岡を大沢が呼び寄せて、

「ようがんばった」

「すみません、チャンスを潰しまくって」

「気にすんなゼロで抑えるのが、おめーの仕事だ」

大沢は鶴岡のお尻を何度か叩き、ダルビッシュに目配せしてから、主審に交替を告げた。

「誰や…」

古田が三塁側のベンチを凝視する。

バットを持って、さっそうと出てきたのは…。

「稲葉か。左対左いうても、やっぱりここぞの場面は稲葉に賭けにきたな」

稲葉篤紀。

すっかり日本ハムの人の印象に塗り替えられたが、元はヤクルトで１０年レギュラーを勤めた選手、ヤクルトも三拍子揃った稲葉の必要性を痛切に感じ、オファーを出したが、緊急ドラフトの結果、日本ハム入りが決まった経緯がある。

「稲葉、あっちのくじ引いたら、今頃こっちのもんやったのになあ…」

稲葉、ハム、チャンスとくれば、それは稲葉ジャンプである。
神宮にも負けじと詰め掛けたハムファンが一斉に飛び跳ねて、稲葉に声援を送る。
稲葉の応援になれない金田は、さすがの肝っ玉も、稲葉ジャンプが震源地の地震で、ゆさゆさと揺れ動く。
「なんや、この馬鹿騒ぎわ…静かにせい」
金田はハエを払うように、グラブを振り、日本ハムファンを煽るが、この大歓声、さしもの金田の声を届かない。
「くそ…はよ投げて、抑えて、黙らしてやるわ…で打者は誰や？あのちっこい兄ちゃん（鶴岡のこと）か？　ぬ？　違う、左？　ワシに左の代打やと？　大沢の野郎、舐め腐りやがって…ん、稲葉？　稲葉やないかい…中京か」
稲葉は中京高校出身、金田は享栄高校出身、いわゆる愛知私学四強の宿命のライバルの二校だ。
「中京高校のやつには死んでも打たせん…」
金田は目の色を変えて、稲葉を封じにかかる……。

「特に凄かったのは、最後のボールでしたね、古田さん。のびが違いましたよ」
「ああ、宮本か。ノビな、ノビ…」
「どうしたんですか、古田さん、せっかく因縁の稲葉を抑え込んだのに…」
「なんか、この違和感、あの時もかんじたんや…一回や、大杉さんを打ち取った、あの一球」
「マウンドでこけた一球…」
「オレがダルビッシュ潰しに掘った穴でこけたんや。まあその穴は、すぐにダルが修正して意味なかったんけどな…。こけるはずがないのにこけた…。ひとのび違てか」
「どういう意味です？」
「金田さんも疲れたんやなあ」

「？？？」

「そのうちわかるよ、宮本…」

金田の奥義

「これだけはいえる。今の金やんは交替しろいわれたら、あっさりと降りる…」
「ほんまですか？　あの金田さんですよ」
「それだけ、日本ハムの打線は労力を使うってこっちゃ。そりゃそうやろ、大杉さん、張本さん、ガッツが次々と出てくるんやもんなあ…」
「しかし、ダルビッシュに代打がでないのは助かりましたね」
「ダルは調子悪くてアップアップでもゼロで抑えていることは確かや。大沢監督も決断できんかったやろうな。五回失点ゼロの大エースを降ろすことを…」

「ふん、田村か…」
鶴岡が代打稲葉で引っ込み、正捕手田村がさっそうと三塁側ベンチから出てくる。
「鶴岡は潰し損ねたが、ゲーム中盤の均衡した展開で、捕手が替わるか…ふん…」

二番の若松は、田村の配球にとまどう。鶴岡の攻めからガラリとかえてきたからだ。バットコントロールに優れたしぶとい若松が、中途半端なスイングで三振を取られたのは、その象徴か。
外からストライクゾーンに入ってくるいわゆるバックドアのスライダーは、若松の頭の片隅にもなかったからだ。
若松はさかんに首をひねる。田村は一人切って流れに乗れると、軽快なアクションで、ボールを内野に回す。
「田村さんはさすがや。鶴岡とは年季が違うなあ…」
最高の捕手と謳われる古田も、田村の実力には、思わず唸りをあげた。

田村が秀でていたのは配球の妙だけではない。キャッチングの巧みさでも見せる。メジャーリーグでも多くの四球を選びしつこい一番打者と評される岩村が、自信を持って見逃した外角のボール。田村は、ミットを巧妙に動かして、ストライクに見せかける。

はたして、どうだ？　主審の友寄の判定は、田村の動きに翻弄されて、ストライクをコールし、岩村を怒らせる。

「友寄さん、今のはないって」

判定はくつがえることなく、岩村は首をかしげながらベンチに戻る。

鶴岡とのコンビ解消、田村との新コンビ結成は、澄み切った小川のように流れている。

「ふん」

さしもの広岡も、あとに続く言葉がないのか。

「広岡監督、これ最初から田村なら…均衡状態でここまでこれたかどうか…」

「ふん、佐藤ヘッド、黙って見つめている。捕手の途中交替はどこかで歪みがくる。それが野球の流れってものよ、ふん」

広岡の言葉は強がりか、ペタジーニもボールに押されたレフトフライに倒れた。このイニングもゼロ。そして三者凡退、塁上に走者を賑わせず、何の事件も起きずにイニングが終わったのは、この試合、初めてのことではないか。

捕手田村が、その流れを運んできたのだ。田村がツキを携えたラッキボーイではなく、鶴岡との歴然たる実力差がそうさせたのか。

試合は7回、いよいよ終盤戦だ。打順は一番の島田誠から。三打席出塁なく、精彩を欠く今日の島田。それでも大沢日本ハムの優勝の立役者、大沢は信頼して島田を送り出す。

ハムのベンチの端っこで、睨まれないくらいに声を出しつづけていた森本は、そわそわしている。

「出番はまだか」
森本といえば、一番中堅手の島田とその役割がかぶる選手だ。三打席凡退の島田、相手投手はその凡退させた金田が君臨している。そして島田は左打者、金田は左投手。左対左はどうしても打者が不利。
以上の点を総合して、森本は密かに期待を抱いていた。
「代打、ヒチョリ、初球から狙っていけよと送り出されると思ったんだけどなあ…」
森本は、たとえ先発メンバーから漏れても、代打に、代走に、守備要員に八面六臂の活躍が出きると勝手に値踏みをしていた。
ところが、日本ハムの首脳陣が森本に期待していたのは、足と守備力であり、打つ方にはてんで期待をかけていなかったのだ。
むしろ打つ方より期待されていたのは、ムードメーカー的の役割。森本はそれに気づいてか、声をからして声援を送っていたが、森本のような現役選手は、どうしても遠慮がにならざるをえず、その本領を十分に発揮したとはいいがたい。
それならば期待されいない打つ方で挽回したいところだが、名前を呼ばれなければどうしようもない。

「金やんの球威はやっぱ落ちとるな…」
古田のいやな予感は当たっていた、金田は明らかに疲れている。前の回にもその兆項が現れていたが、この回ではそれが如実に現れている。
「傷口が広がる前に、交替させんといかん状態や…。でもあの金やんがゼローゼロの投げあいで先に降りるのを受けてくれるかや…。オレは受ける思うが、広岡監督や尾花コーチがそれいい渡せるか…」
腕が振れない、下半身に粘りがない、ボールは走らない。カーブが描く放物線の弧は大きさを失っている。
金田は限界だ。限界なりに、それなりの投球ができるのが金田である。ボールがおじぎするなら、丁寧に低めに集めればいいじゃな

いか。
島田は打つ。打球が三塁線に転がる。岩村が半身の姿勢でこれを取り、苦しい体勢のまま一塁に送球。
島田は俊足だ。間一髪、一塁塁審の柳田の腕は広がらない。内野安打ならじと天を仰ぐ島田。
打たせて取る投球もできるのが、金田の奥深さであったが、その時、金田はマウンドにいなかった。
「限界」
そう言い残すと、自らマウンドをあとにした。

「まさか、自分から降りるとはなあ…尾花さん、予想外でしたねえ…。次の投手の用意できてますか?」
マウンド付近で、古田はマスクを取り、腰に手をやり、尾花は、ボールをさかんにこねている。
「古田、あらゆる事態を想定して動くのが、正しい首脳陣の姿や」
「さすが歴戦のコーチ、尾花さん…。用意周到やな。次は誰が行きます? 小笠原、張本さんと左が続きますから、石井弘ですか?」
「出てきてからのお楽しみだ」
「そうですか…」
尾花は、投手の最新状態が気になってか、ブルペンへ向かって駆けていく。
宮本が古田の元に近づく。
「古田さんがいったとおりですね…金田さんは自ら降りた…。なんでわかったんですか?」
「あれや、大杉さん稲葉に投じた一球の違和感、それが秘密よ。絶対に抑えたいポイントや、金やんは裏技を使ったや」
「裏技?」
「ああ、裏技や。宮本、お前二塁の守備位置から何か、金やんの違い感じかったか?」
「…そういえば、背番号…背番号34がズームアウトしていく錯覚

に襲われたような…」
「それやそれ。単刀直入にいうと、金やんは、あの二球、プレート踏まずに、一歩前に出て投げたんや。だから宮本の目には背中が小さくなったように見えた」
「え！」
「だから、ひとのびが違った。そりゃそうだ、前から投げてるんやから。だから、オレが掘った金田さんのステップ幅じゃ届かないはずの穴に届いて、こけた」
「……反則やないですか…そればれるのが怖くて金田さんがさっさと降りたんかな」
「まあ反則やけどな。反則使わんとならんほど、あの大投手が追い込まれてたってこっちゃ」
「そうはいうても…」
「宮本、反則いうが、ばれたか？　ばれな限り、それ反則やないで…。勝者として讃えられるんや…きれいにな…」

また宮本は張本と出会い、別れる

「しかし、プレート踏まず、投げてよう誰にもばれませんでしたね～」

「それがすごいことよ。三万の観客から、両軍ナイン、そして審判。すべての目をごまかしたんやから…。だからか二度が限度おもうたにゃろな…さすがの金田さんも…」

左腕から相手打者を幻惑する投球が持ち味の梶間健一がマウンドに上がる。

「梶間さんか…ゴリ（石井弘）やないんか…。この緊迫した場面、技巧派でのらｒくらりよりも、ゴリの速球で牛耳るほうがええと思うけどな…」

古田は不安を口にするが、梶間の切れ味鋭いボールを受けて、評価を修正。

「これいけるかもしらんわ。豊富なブルペンから真っ先に駆り出されることはあるなあ」

時代が異なり、初めて対戦した小笠原は、梶間の投球に翻弄される。

出所がわからない。腕の角度を変えて投げ込んでくる。変化球につかみどころがない。

小笠原の自慢のフルスイングも虚しく空を切る…。

カウント２－３。だからといって、梶間が絶対有利な立場にたっている分けではない。制球が定まっていないのだ。左腕投手のありがちな不安定な投球に広岡は苛立ちを募らせる。

「梶間は梶間だ、ふん、そこまで信用できん。尾花、次と次と次を用意しておけ」

梶間は外に逃げるカーブを投じた。微妙なゾーンだ。小笠原は見逃す。

主審の友寄の腕は高く上がる。

「ふん、今の三振は偶然だ。結果よければすべてよしの一戦集中の試合だが、偶然の投手に、何人もの打者相手を託せん…」

「広岡監督、五十嵐ができたようです…」

「五十嵐か…右だな…。よし、もし張本が出たら、五十嵐を大杉のところで突っ込む」

「大杉さんに五十嵐…。力と力のぶつかり合いですね」

「ふん、二人だけの世界なら力に浸ればいい。だが、これは勝負だ。立会人の古田がうまく操縦するはずだ、ふん」

張本も梶間の投球に戸惑う。張本は巨人時代に出始めの梶間と何度も対戦し、その特徴から、モーションまで理解しているはずだが、あれから30年。張本は頭でわかっても、体がついていかない。

張本はまた、あの手を使う。

「おい古田、打たせてくれ」

「その手には乗りません…」

古田は張本の泣き言を一蹴だ。

「く、この無礼者めが」

張本はボテボテの遊撃ゴロを打つ。

「しまった」

俊足の左打で、内野安打を量産するタイプでもある張本であるが、はなから諦めたのか、全力疾走をしない。

が、これを遊撃の池山がはじく。それをみた張本は、ギアを入れて、猛然とダッシュ。速い、とにかく速い、突如出現した出塁のエサをめがけて張本は走る。

池山は慌てて、一塁に送球するが、張本は既にベースを駆け抜けていた。

張本は、すかさずスコアボードの記録判定を見る。
Eのランプに明かりが灯る。記録はエラー。公式記録員は、池山のジャックルが出塁の最大要因と判断したのだ。
「おい公式記録員!!。ばかものが、ヒットだろうが。たしかに池山は、お手玉したが、私の足だから間に合ったのだ!」
自分の足が稼いだヒットと確信していた張本は、その判定に怒りを露にする。
一塁コーチャーの井出外野守備走塁コーチにたしなめられて、ようやくその怒りの矛先を納める。
「くそが…」
これに恐怖を覚えたのは宮本である。
「今日四度目やん、張本さん…」
一度目は盗塁での交錯。二度目は例の宮本の殺人ダイブ。三度目は、殺人スライディングをさらりとよけた宮本。
そして四度目。
「しかも、記録の判定で虫の居所が悪いときてる…。神様、どうか四度目のクロスはありませんように…神様って誰や…？　野球の神様？　それ川上監督やん…ＰＬの神様にも祈っとくか」

投手は梶間から、五十嵐に交替している。予定どおりの継投だ。
大杉の丸太のような腕を見ると、五十嵐の闘志は山火事のように燃え上がる。
「１５８キロで料理したい」
自己最速の球速を口にし、力勝負の心づもりだ。
大杉も望むところだと、鼻息を荒くしている。
古田もへんにかわさず、五十嵐の闘志を利用する腹だ。
「大杉さん相手いうても五十嵐の速球は日本人最速や。外国人入れてもクルーンくらいやろ、明らかに上いうんは…」
大杉はフルスイングをもって、五十嵐の心意気に御礼を返す。
１５７。

デジタルの冷たい表示は、五十嵐の状態を的確にあらわす。
「振りおくれた…」
大杉のフルスングは、五十嵐のボールを掴まえては、インフィールドに飛ばさない。
１５８。
自己最速が表示される。絶好調、五十嵐の球威と球速は全盛期のそれに戻っている。
「二球めまではいい。二球めまでなら速球でカウントが稼げる…」
古田は男と男の一対一の勝負に立ち会えど、その頭脳まで、熱くはさせていない。
三球め、古田は、体を大きく外に寄せて構える。
遊び球を入れて、五十嵐の煮えたぎった頭の温度調整をすると、フォークボールのサインを出した。
その時、古田は強く願った。
「五十嵐、顔に出すなよ。首振るなよ」
ここまできたら速球一本で抑え込みたいのが、五十嵐の偽りざる気持ちであろう。だが、古田のサインに不満の色を出さないことで、逆に大杉に速球勝負であることを意識させた。
「五十嵐の奴、大人になったな…」
大杉も百戦錬磨、火花散る勝負とはいえ、速球一本でくるとは、けして思っていなかった。フォークも頭に入れて、五十嵐の様子から出方を探っていたが、フォークのサインに顔色一つ変えなかった五十嵐に騙されて、速球一本で的を絞ったのだ。
まさか五十嵐が平気な顔をして、フォークのサインに頷くとは思ってもいなかったのだ。
１４０キロのフォークがくる。真ん中から少しだけ落ちる、甘いフォーク。だが、１５８キロに合わせて調整していた大杉のスイングは、虚しく空を切る。

「勝った」
古田はそうつぶやくと、軽くガッツポーズを取り、ボールをマウンド付近に向かって投げ置いた。ボールはコロコロと転がっている。
宮本は胸をなでおろしている。
「四度目の接触はなかった…」
ただ見逃せば、ボールになったボール。張本がスタートを切っていたこともあり、ボールなら張本との接触があったのだから、まさに命拾いだ。
四度目の残塁の走者となった張本は、ベンチに戻らず、その場で立ちつくしている。森本にグラブを持ってこさせて、そのまま守備位置に向かうつもりだ。
張本の前に、一塁側のベンチに戻ろうとする宮本が横切る。
「宮本」
宮本は張本に呼び止められた。きっとろくな用事ではないだろうが、張本の言葉に耳を向けないことは、死を意味する。
「さっきの借りを、まだ返しておらんぞ」
「……」
もちろん殺人ダイブのことだ。
「宮本、お前のような小兵を潰しても、虫は収まらん。潰すなら、お前のチームの根幹をぶっつぶす」
「……」
宮本はそのまま何もいわず、礼だけしてベンチに戻り直した。

試合はいつ動くのかわからない

「宮本なんぞは狙わん？　根幹狙い？　張本のおっさん、なにいうてんや。この宮本慎也さまこそ、そのチームの根幹やん…」

宮本は夜空を見た。夜分崩れるとの予報と違い、空には、月が照らされている。

「そう強がるが、冷静になると…。わがヤクルトスワローズの根幹は…打席にいるあの人…」

古田は今日初めての捕手田村に惑わされている。

「鶴岡なら、過去三打席で配球の傾向掴んで、いくらでも狙い球を絞れたのに、捕手が田村さん、そんなんもう意味ないわ」

古田といえば、両肩の可動域の柔軟さから繰り出される柔らかいスイングで、ボールを拾うように広角にはじき返す技術と、捕手独特の読みの鋭さが持ち味の打者であるが、初めて相対する、ダルビッシュと田村の組み合わせには、それが機能しない。

「鶴岡なら、このカウントではこうくる…」

ズバっと内に速球を投げ込まれて、古田はジ・エンド。

「が、田村さんが、どうくるかまではわからんわ…」

古田は、バットを回しながら、とぼとぼとベンチに戻る。

「誰が解説しとるか、チェックし忘れたけど、きっと今ごろ、古田はリードに手一杯で、打撃のほうまで頭が回らないんでしょうね～とかありきたりの常套句いうてるやろうなあ～」

それでは古田のリクエストにおこたえてして、ここで本日の実況席の顔ぶれを見てみよう。

この試合の中継は、ＮＨＫ－ＢＳ、フジテレビＣＳ、ラジオの各局で中継されているのであるが、その中から特別にニッポン放送のブースの様子を覗いてみよう。

「どうですか、荒木さん、古田はここまで快音なし」

「古田は、リードで手一杯なんですよ…」

ヤクルト側のゲスト、荒木大輔が、高校時代にはられたレッテルどおり、模範的回答をすれば、日本ハム側のゲスト解説の広瀬哲郎も

「古田？　そうそう、荒木大輔くんがいうように、打てないのもしょうがないって。この試合はあれでしょ？　開幕戦？　しかも、ほら、緊迫した展開じゃない？　どうしても、捕手ってポジションはさあ、守備の方、優先になっちゃうんだよ。オレは内野？　一筋でさあ、バッテリーの気持ちはいまいち理解できないんだけどさあ」

お得意の半疑問形表現を多投して、古田の気持ちを代弁したつもりだが、そのとうの古田は。

「捕手としても一流、打者としても一流のオレみたいなタイプは打席と守備で、気持ちを切り替えるくらい簡単やっちゅうの…。ダルの投球と捕手の交替にやられただけや」

ありきたりの解説にダメ出しである。

「古田さん」

「なんや宮本、なんかようか？」

さすがの古田もここまで快音なしとくると、イラだってるようだ。宮本にも、どこかつっけんどんである。

「最後のインコース」

「あああれか、あれは予想外やったな…今日初の田村さん相手やから読みきれんかった」

「あれ配球やありませんよ」

「は？　配球やろ…。まあ次みてみい、次こそは読み勝ってやるから」

「いえ、あれは古田さんを潰しにきたんです。外角をはって踏み込んでくる古田さんに内に投げ込んで…」

「そうか、そういうことか。オレを死球で潰そうって腹づもりか。オレが消えたら、チーム力ガタ落ちやもんな。なら、受けてたつしかないわな。そういうもんや、真剣勝負の野球いうのは」

「古田さん…」

杉浦も満足にバットを振らせてもらえない。思い切り引っ叩いて弾丸ライナーを放つのが持ち味の杉浦が当てただけの打撃をするのだ。

「ふん、これが田村だ。鶴岡とは同じ配球に見えても、奥深さが違うのだ。だから打者はとまどい、満足な打撃ができん」

田村交替で逆にチャンスが生じると睨んでいた広岡も、お手上げの状態。

7番はブンブン丸こと池山だ。

「池山」

「なんでしょうか、広岡監督」

「何も考えるな」

「ホームラン打ちゃいいんでしょ」

池山に小難しいことをいっても無駄であると、広岡は、池山を自由にさせた。

「どうせ二死走者なしの下位打線、池山に頭を使わせて、出塁させてもチャンスは広がらん。なら自由にやらすべきよ…万が一を期待してな…ふん、私のような合理主義者が奇跡に頼ったらおしまいだがね、ふん…」

池山はとにかく振る。ケレン味なく振る。ヘルメットが飛び、振り回した勢いを抑圧できず、転ぶと、観客から失笑が漏れるどころか、大歓声が沸き起こる。空振りでこれだけ沸かせられる選手も、そういないだろう。

「ふん、見せ物だな、ふん、まるで空振りショーだ、ふん」

誰もが、池山は三振に終わり、このイニングは何事もなく終わりをつげると思っている。ただ一人、鶴岡をのぞいて。

「僕なら、ここはストレートで勝負する…。有は、球の速い変化球（ダルビッシュ）

投手と揶揄されるけど、やっぱり基本はストレートなんです…7回で多少、球威が落ちているといっても、ここはストレートで締めたいなあ…１４０後半はまだでる、空振りは取れる…。池山さんのような振り回してくる打者に、今日の変化球の制球ではちょっと怖い。ボールになる変化球を振らせるつもりが甘くなりドカーン…ってこともありうる…」

ダルビッシュが頷く。スライダーを投げる。やや甘めに入る。池山のスイングがそれをとらえる。

ボールは、宮本が見上げた夜空と同じ夜空に舞いあがる。

「」

速球勝負なら、捕手が鶴岡なら、この一発は生まれていなかったか、どうかは誰にもわからない。

変化球勝負だから、捕手が田村に交替したから、この一発が生まれたかどうかも、わからない。

のこった事実は、ヤクルトに先制点が刻まれたこと。

池山は何度もガッツポーズを繰り返し、ダルビッシュは、ボールが吸い込まれた左翼席を見ながら小首を傾げた。

ヤクルトの応援が陣取る右翼席は、色とりどりの傘が踊り、東京音頭の大合唱。日本ハム側の左翼席は、静まり返り、日本ハムのオレンジユニのレプリカユニを着た熱心な男は、飛び込んできたホームランボールを、腹立ちのあまり、グラウンドに投げ返そうとしたが、記念すべき大会第一号の価値のあるボールと目算し、誰にも取られないように、厳重にバックのなかに保管した。

ヤクルトベンチも蜂の巣を叩いたような騒ぎだ。戻ってきた池山を、古田が、宮本が、岩村が、ベンチウォーマーに甘んじるラミレスが、手厚く出迎える。

広岡は冷静を装うが、

「ふん、まだ一点だ、ふん」

口元は、ほのかに緩んでいる。

元祖カットボーラー登場

宮本は、気落ちしていたダルビッシュの初球を叩いた。
走者なく二死で迎えた八番打者の役目に、なにがあるだろう？
池山に続けとばかり、振り回すのも悪くないだろう、ところが、
自分は宮本だ。一発を打てる長打力はない。

宮本は若いころを思い出した。
あの守備だけの人で、八番という打撃になんら期待をかけられていなかった、あの日々を。
回す、とりあえず投手の打順に回す。投手が倒れても、代打策実らずでもよし。次のイニングが一番からの好打順になるのなら。
「よっしゃ！」
センター前に打球が抜けるクリーンヒット、宮本は走りながら、そっと拳を突き上げる。
「いつ」
しかし、喜びすぎて、太股を高く上げすぎたのか、足の腫れがピリリと疼き出す。
一塁上で足首に願いを込めるようにして、宮本はさする。
「あと、二回や…それまでもてよ…」

ダルビッシュは体力も気力も限界をとうに越えていた。もしゲームのようにダルビッシュのスタミナゲージが目の前に見えていたら、池山の一発でどれだけ、そのメモリが減っただろうか。
真一文字に結ばれたダルビッシュの口が開かれたとき、
「もういっぱいいっぱいです…すみません…先に点与えてしまって」
限界を口にしていた。
ダルビッシュ七回持たずして、降板。
ダルビッシュの降板に前後するが、広岡は一気呵成でたたみ掛け

ようと、九番の投手五十嵐の打順に代打を宣告していた。
ネクストでぶんぶんと切れ味鋭くバットを振り回すのは、背番号２６、秦真司、外野手兼任第三の捕手兼左の代打の切り札として、ベンチ入りをはたしていた選手だ。
秀でた打撃センスは、口の悪い時の監督野村にさえ「天才」と称されていたほどである。
ダルビッシュが大の苦手とする橋本将（千葉ロッテからＣランクＦＡで横浜に移籍）と似たタイプの打者であることから、ダルビッシュの秘密兵器ともくされていたが、そのダルビッシュは夢想ダルキラー秦を目の前にして、試合から退く。
投手は、左の間柴にかわった。８１年の大沢ハムの優勝の立役者の一人で、１５勝無敗、勝率１０割の不滅の記録を残した投手だ。
ハムは、この左腕リリーバーの選考に苦慮した。当初は江夏の起用を考えていたが、阪神にくじで当てられて、これを断念。
武田勝、八木といった現役世代から、酒井光次郎などを試したが、いずれも決め手にかけた。
そこで名乗りをあげたのが、この間柴茂有である。
微妙にスライドするまっすぐ、いまでいうカットボールを多投して、打者を翻弄するタイプである。
間柴の姿を秦は、おもわず口元の端をあげ、しかめっ面をした。
「左か」
左打者の秦は左投手が登場すると、ベンチに下がる運命がある。
それを打破しようと、秦は右打者の原に弟子入りし、スイッチヒッター転向を本気で考えた時期があったが、マスターならず、泣く泣く断念した経緯もある。
広岡が呼びつける前に、秦はベンチに下がっていた。
代打の代打。左投手には、右打者。
ふだんのペナントでも、ありふれた策であるが、代打の代打の選手が、代打の選手より、はるかに威圧感が劣ることはよくあることだ。

例えば、左投手登場とともに、林威助を引っ込めて、大和を出すように、長打と打撃センスあふれる選手の代打の代打に、守備走塁を買われてベンチに入ってる選手が、ただ一人残っていた右打者だからというだけで、指名されることもままある。

だが、舞台は、ＪＷＢＣ／Ｌ。

代打の秘密兵器より、強力な打者は、まだベンチに眠っている。

ラミレスだ。

いまさら、巨人に買われたラミレスがヤクルトのユニフォームに袖を通すことに、拒絶反応を示すヤクルトファンも少なくないが、いざ試合となると、心は踊り狂う。

ペタジーニと同じく、ベネゼエラ国家の前奏とともに、「ラミレス、ラミレス」の大コールが沸き返る。

ラミレスは四球の極端に少ない打者だ。つまり初球から好球を見逃さず、狙ってくる。

勝負は、初球から熱にまみれる。

間柴は、出し惜しみなく、カットボールをラミレスの胸元に投じる。ラミレスはこれを打つが、打球はバックネット裏に消えていく。

宮本はファウルとわかるとすぐに帰塁したのだが、そのときだ、また電流のような痛みが右足に走ったのは。

「く…」

広岡は宮本の細かい所作をも見逃さない。広岡は土橋を呼びつけている。おそらく、足の悪い宮本に替えて、同じポジションの土橋を代走に送る準備だろうか。

フル出場を誓う宮本は、代走なんかでさがってはいられない。

「はってでも、出てやるわ…」

しかし、足の痛みはなかなか収まらない。

「時間、時間が欲しい…足の痛みがひく時間が…」

宮本は念じる。ラミレスを粘れ、粘って、粘って時間を稼いでくれ。

野球の神様はなんて残酷なんだろうか、ラミレスは二球めを打ち

上げる。これもカットボールだった。
足の痛みは引かない。それでも、広岡の前では、痛みを顔に出せない。
宮本は無表情で、広岡の前をやり過ごすことに成功すると、誰もいないベンチ裏で、しかめっ面を作り、歯を食いしばった。

魔球登場？

「ただいまの回、代打いたしましたラミレスに代わりまして、安田が入ります…ピッチャー安田、背番号９９」

左の大下に合わせて、左の安田の投入だ。広岡は徹底したジグザグ継投で、日本ハム打線を、完全沈黙させるつもりだ。

なお安田の現役時代の背番号は２２であるが、高津とかぶることもあり、先輩安田が後輩高津に譲るかっこうで、トリックスターらしく最大値の９９を自ら背負うことにした。

安田と時代がクロスしないハムの現役世代は、渡辺浩司スコアラーが調べ上げたリポートを手にし、直前対策だ。

「なんだこりゃ、ボールが見逃してください、見逃してくださいと懇願する？」

田中幸雄が驚きの声を上げれば、

「超スローボールを投げ込んで、うちわであおいで揺らさせる？」

田中賢介も目をシロクロだ。

「ごめん、ごめん、それタブチくんでのヤスダ投手の魔球だわ。調べてるうちに混ぜちゃった」

渡辺スコアラーがベンチ裏から顔をにょきと出して、頭をかきかき、詫びを入れる。

「びっくりしちゃいましたよー、とうてい実現不可能な魔球ですから…。でも渡辺スコアラー、この打者の悪口をいって惑わせる、これなら現実でも可能ですよ…」

「賢介、それはオレも思った。漫画の魔球だけど、それだけは現実でも応用出きるって」

「ですが、渡辺スコアラー。これは漫画のヤスダさんでしょう？いくらなんでも現実の安田さんはそんなキャラではない」

「いや、幸雄。安田さんは、早稲田出身で、スコアラーや編成でも名をなした頭脳派だけど、そのキャラもそうとう、かわってたよう

だ。漫画のキャラはデフォルメしてあるのは当然だけど、それに近いらしい」

「本当ですか？　いくらなんでも漫画上でしょ？　僕も映画で見たことありますが、タブチさんがゴルフやってるときにヤスダさんがキャディーに変装していたとか、これ漫画でしかありえない」

「実際、オフに居酒屋やキャディーでバイト経験あるらしいぞ。子供を連れて契約更改に挑んだ逸話もある。これはすべて本人のインタビューで口にしたものだ」

「まさか、あのキャラ、そこまで実在の本人に近かったとは…」

「ああ、要注意だ。なにか仕掛けてくるぞ…」

安田には威圧感がない。背が低く腕も短い。かといって厚い筋肉を誇るわけでもなく、そのストレートは、はかないほど頼りない。

「投球練習で投げた八球、すべて直球だ」

さすが名球会会員田中幸雄だ。つぶさに投球練習をチェックし、すかさず投手を丸裸にする。

「たいていの投手は、練習で、得意球、直球、カウント球を試投するが…」

「すべて直球では、参考にもなりませんね…、幸雄さん…」

「これは噂どおり、やっかいな投手だぞ、賢介」

大沢はじりじりしていた。腰を上げては、座り直すの繰り返し。

「大下さんに代打を出すべきか…。親分いわれるこのオレが、女の腐ったやつみたいに、うじうじと迷うなんてなあ」

大下といえば、大沢より年長の唯一の選手だ。大沢が気を使うのも無理はない。

「大下さんは、戦後すぐの野球界を救った恩人や…。大下さんを楽しみに、このなんとかなんとかなんとかを、見てくださってるオールドファンもたくさんおられることよ…。だがよお…今日の内容はイマイチだ、そのうえ、投手は変則左腕の安田ときている。ベンチ

には柏原や高橋信二の優勝チームの四番が控えている…。やつらのモチベーションを下げないためにも、ここで代打を使いたいところだがよお…」

大沢は悩む。首脳陣民主主義を提唱した大沢は、白井やヒルマンと意見をかわし、これまで試合を進めてきたが、

「おい白井」

白井は聞こえないふりをして、資料を読みふけっている。大下から背番号3をひきついだ白井は、大下の起用議論に関わりたくないようだ。それではヒルマンは？　ヒルマンはいうまでもなくアメリカの人。日本のレジェンドにタブーなく切り込めるはずが、通訳がトイレに駆け込んで議論ができないと、首を振っている。

ヒルマンも大下から逃げたのだ。アメリカ人は、日本人よりも歴史を尊ぶ傾向にある。歴史の短い国だから、歴史を重視するとのことである。

戦後すぐの選手である大下の起用に、当初、ヒルマンは難色を示していたが、数々の逸話を耳にして深い感銘を受けてから、日本野球でもっとも尊敬すべき人であると見識を変え、大下起用に口をはさまなくなった経緯がある。

だからヒルマンも逃げたのだ。

大沢は議論すべく首脳陣を失い、自ら決断をくださなくてはならなくなった。

大沢は重い腰をあげる。

「大下さんや…」

大下を呼び寄せる、いや正しくは、大沢が小走りで、大下に近づいていったのだ。大沢は、大下に代打を告げることわりをいれにいったのであるが、先に大下が口を開いた。

「監督、あの月に向かって打っていいかのう…。これは私の同僚でもあった飯島がコーチ時代に大杉くんに託したもんじゃが、ええ言葉だから引用させてもらったわ…」

大沢は、大下に先制攻撃を受けたような気分になり、

「ああ、打ってくだされ…あの月をぶっ壊すほどの一発を…」
代打とつげれずに、引き返してしまう。
「親分いうのは、ときに人情が必要よ…」
代打ででる予定だった高橋信二に、
「悪いな、信二、また次の機会で頼むわ」
詫びを入れるが、高橋も、大下の代打では荷が重かったようだ。
「いえいえ、大下さんの代打で打てなかったら、なにいわれるかわかりませんもん…」

大下は一打同点を狙い、ストレートに的を絞ったが、相手が悪すぎる。
安田は投じる。だが、ボールはこない、いつまでもこない、じれた大下が振り出す。それでもボールはこない。バットを止める。ボールは、ボールゾーンに収まる。古田がすかさず、三塁塁審の名幸に、振った、振ったとチェックスイングアピール。
名幸の腕はぐるぐると回る。
スコアボードに球速表示が出る。
７４キロ。
あまりの遅さに、歓声が起きたほどだ。
二球め、緩急の差を利して、速球に的を絞った大下だが、これもスローボール。それも天に向かって放り上げるような大きな放物線を描くボールである。
大下のアゴが上がる、これは手を出せないと見逃す。
主審の友寄は右手をあげて、ストライクとコールする。
球速表示は？
出ない、測定不可能、あまりにも遅すぎて、スピードガンが作動しなかったのだ。
執拗な古田と、トリックスター安田の性格を合わせれば、三球めもスローボールでくることはわかるのだが、豪快剥落の大下は、速球が今渡こそくると思っている。

こない、速球もこなければ、ボールもこない。
大下は、仕方なく振りにいくと、ボールをふわふわと落ちた。

ベンチの最前列でこのボールを見つめていた田中賢介は、思わず声を荒げた。
「魔球だ！　渡辺スコアラー、魔球ですよ…」
「いや、あれはパラシュートボールいう球だ」
「なんですかそれ？」
「チェンジアップの一種とも、パームの一種ともいわれている…。とにかくスローボールできて手元でふわっと変化するボールだ…」
「……それ十分魔球ですよ…」

大下は三振に倒れた。大杉と合わせて、二人で八打席ゼロ出塁。主軸の不振ぶりが、今日のハムのこれまでをよくあらわしている。
田中幸雄が打席に入る。
するとどうだ、マウンドの安田がにやりと笑うではないか。大下には敬意を払っていたが、田中には、その必要なしとのことか。
「もしかして、悪口いわれるかも…」
田中の頭に、雑念がよぎる。

名球会会員田中幸雄

「やりにくそ…」

不平不満を口にせず黙々とプレーすることで、ミスターファイターズの冠をえた田中幸雄が珍しく、弱音をはく。

田中幸雄の長い野球人生においても、マウンド上であれだけヘラヘラと笑いかける投手がいただろうか。

古田のサインをのぞく、一瞬ぎょっとした顔を浮かべて、笑顔を崩したと思うと、また満面の笑顔を浮かべ、げじげじ眉を小刻みに動かす。

このような安田の所作は、中学時代の出川哲朗がテレビ中継で一目惚れして、ヤクルトファンになった話があるほど、人を食っている。

「田中幸雄く～ん」

きた、やはりきた、うわさや漫画だけのお話ではない、実際に、目の前の安田は、１８．４４メーター離れた田中幸雄に問いかけをしてきた。

大観衆の歓声と日本ハムの田中幸雄のマーチが絶えず鳴り響くなかでも、安田のダミ声は、田中の耳に正確に達している。

先輩捕手が挨拶をしてきたら、返すべきであろう。

かといって、話し込む必要はない。適当に相槌をうてば、それで礼儀として成立する。だが、投手が挨拶をしてきたら、どうすべきだろう。

安田は先輩であり、田中と同じ九州出身だ。無礼なマネは働けないが、投手と打者が、会話を交わすなど聞いたこともない。勝負のうえで、投手と打者が通じあうとか、その手の比喩はあるかもしれないが…。

名球会の行事で交流のある古田に、田中は思いのたけをぶつける。

「古田さん、安田投手が、僕に話しかけてきてます。これは返すべ

きですか？」

「どうだろうな～　オレ知らんわ…。まあ一応、先輩を立てて、挨拶くらいしとけ」

挨拶をしろといわれても、衆人看守のなか、離れた投手の安田まで、はっきりと届くほどの大きな声を、田中は出せない。

九州男児であり、質実な性格である田中は、そうした、はしたないマネができないのだ。

「こ、こんちわ、安田さん…」

顔を赤らめながら、精一杯の声を絞るが、幸雄コールの大合唱のなか、安田の耳には届かない。

「あれれれ、幸雄くんは、ミスターファイターズの人格者じゃなかったかなあ～。先輩に挨拶ひとつできないとは思わんかったなあ」

安田は、田中の無礼？　にすかさずつけこんで悪口をたたみかける。

「まったく、しょせん、２０００本安打のためにダラダラと居座る自分勝手な選手だったのかなあ～」

田中は耐える。安田の作戦だ。挑発にのせられたら、相手のペースにまんまとはまることだろう。

「あれっれ？　これだけ先輩が話しかけても、こたえんとは…。いっちょ、教育してやるかに～。オーヤくん、オーヤくん…違った…捕手は古田だ…。古田くん、古田くん…。そのサインはなしにして、内角にかまえてくれんかのう～。　頭の付近にビーンボール…そうはいうてもワシの投げるボール、速くも重くもないから、当たっても痛くないがに～」

安田の予行投球をへて、外にかまえていた古田は、内にかまえ直す。

しかし田中は、一連の安田の言動を心理作戦と見切っていた。

安田はトリックスターである。言動不一致のはずである、安田が黒といえば白を切ってくると…。

さすが、田中、伊達に名球会の称号を得ていｔない。
「名球会いうから、どんなすごい成績おもうて、打率みたら、２６０くらいしかないがに～」
安田は、悪口を携えて、投じるが、それは集中力の欠如につながっていた。
安田が投げると、田中に覆いかぶさるように構えていた古田は、すかさず体を外に寄せる。

田中は、初めから、この動きを見抜いてた。外のゾーンギリギリのボールを叩くと、打球はライト方向に飛んでいく。
右方向の打球は、田中お得意のコースだ。おっつけたように打ちながら、打球はグングンと加速するように伸びていく。
ライトがバック、バック…。ライトは、この回あたまから、杉浦に代わり、守備のスペシャリスト、飯田哲也が入っている。
「飯田なら取れる」
古田は叫ぶ。
「ふん、こういうときのために飯田を入れといたんだ、ふん」
広岡は自賛する。

しかし飯田はセンターのスペシャリストであって、ライトのスペシャリストではなかった。
青木と若松がいるため、センター、レフトの守備交替は考えづらい。ならば飯田を使うのは、ライトのみ、広岡も飯田もそれを十分頭にいれて、キャンプから練習を重ねてきた。
だが、それもしょせん、付け焼き刃であった。生涯、ほんのわずかしかライトの経験のない飯田は、フェンスとの距離が図りきれず、フェンスの恐怖から逃げるために、スピードを緩めてしまった。
これが命取りになり、飯田のグラブをかすめて、打球は地面に、ポトリと落ちる。
田中はスタンディングで二塁に到達して、そこからあわよくば三

塁とオーバーランしたが、打球の行方を確かめて、止まりかける。
が、ここで信じられないことが起きた。目測の誤りを取り替えそうとした飯田が、つかまえたボールをジャックルしたのである。
これをみた田中は再び、ギアをあげて、三塁を目指す。
飯田は、ライトから遠投で、三塁補殺を目論んだが、田中の足が、タッチしにいった岩村のグラブより、一瞬早く、ベースをなめていた。
記録はワンヒット、ワンエラー、田中に二塁打、飯田に失策が記録された。
打球判断のミスはライトの経験不足と言い訳できるが、直後のお手玉は問答無用、あせった飯田のチョンボである。
飯田の起用を提案した福富外野守備走塁コーチが、その判断を悔いる。
「広岡監督、やはり本職に任せた方が…」
「ふん、ひとつのミスで騒ぎ立てるな…。私は飯田を信用している。このミスをきっととりかえすはずだ」
しかし局面は、一死三塁、同点の危機だ。

２００話記念カナダ人登場

大沢、ヒルマン、白井の三者会談は、火花を飛び散らせる。
「強行、強行でいきましょう」
総合コーチの立場である白井がそういえば、ヘッドコーチである、白井の盟友ヒルマンは、静かに同調する。
「待て、オメーらの気持ちはわかるが、ここはスクイズでいこうや」
「そうはいいましても、大沢監督、打者は当てるのがうまい賢介、投手は技巧派でバットに比較的当てやすい安田投手。二人の相性関係を計算しますと、引っ張らせて二塁にゴロを転がせれば、三塁走者の幸雄が還ってくる可能性は非常に高い。それに気になるのは二塁手の宮本。宮本といえど二塁手としては素人のようなもの。勝負の別れ際、間一髪の場面で、正当なプレーができるかどうか…。さらに宮本の動きが回が進むにつれて、落ちてきてるのです。故障でもおかしたかどうか知りませんが、狙い目なことはたしかです」
「賢介の技術ならスクイズは高い確率で決まる。ここは確実に同点狙いや」
「強行です。再度申しますが、宮本の動きなら、平凡な二塁ゴロでも、抜けてタイムリーになる可能性がある」
二人の意見はどこまでも平行線をたどるが、それを交じらせたのは、広岡の決断であった。
広岡は、投手チーフの尾花を制して、自らマウンドまでいき、安田のボールをむしり取った。
「広岡監督、そりゃないですに～。このイニングは僕に任せるはずだったでしょ？　それに打者は左の田中賢介ですに～。ちゃちゃっと料理しますから～」
安田は駄々をこねるが、広岡に迷いはない。
「ふん、安田。お前はほどほどの投手であるが、それ以上に優秀なスコアラーだ。なにも試合から締め出すわけではない。ペンとスコ

アブックを持ち、我々の勝利をネットの裏からサポートしてくれ」
「ひどいな～。最優秀防御率二度もとった男をつかまえて、ほどほどの投手呼ばわりとは～」
安田はしぶしぶ交替を受け入れて、マウンドを降りる。

「交替？　賢介まで安田さんでいくと思っていたが…」
「力のある投手で三振をとりきたか。ヒロさんのヤローめ…」
「石井弘でくるかな？…。同じ左ながら、安田さんよりボールの力のある投手だ…」
白井の読みを広岡采配はことごとく外す。
ブルペンから走ってきたのは、右投手。
「まさか…松岡さんは先発要員だろ？」
松岡弘。ヤクルトでは金田に次ぐ勝ち星を誇る速球投手。
「石井の調子がいまいちなのか、松岡さんのボールの威力にかけたのか…」
白井はメガネの整え直し、
「監督、スクイズでいきましょう…松岡さんの１４０後半のボールで攻められたら、賢介は犠牲フライにもならないポップフライに倒れる可能性が高い」
「白井…。オレはだから最初からスクイズいうとるんだ…」
大沢が巨体を持ち上げて、サングラスを光らせる。
「ガハハ、ヒロさんや…。よけいな間をありがとうよ…いいスクイズを思いついたわい…職業野球らしい激しいスクイズをのう…」
大沢はベンチを出て、主審の友寄に駆け寄る。
「賢介に代打？　いや賢介以上のバントの名手はベンチにいない。スクイズなら代打を出す必要性はない…。僕が登録されていたら別だけど…」
白井はバント小技は手慣れたものの二番打者として名を馳せたが、本人が口にするように、参謀訳に徹するために、ベンチ登録はされていない。

が、大沢が指さしたのは、田中は田中でも、賢介ではなく三塁走者の幸雄であった。

「代打じゃない？　代走？　幸雄に？　三塁走者だぞ…わざわざかえる必要があるのか？　幸雄はそれほど俊足ではないが、遅い選手ともいえない。スクイズバントがうまく決まったら十分に還ってくる足はある…」

白井はベンチ横にある控え選手のかかれた黒板に目をやる。

「それにだ…もう替えの内野手がいないぞ…幸雄を引っ込めたら替わりの遊撃手がいない…本来、遊撃の控えのはずだった金子誠は先発二塁手として、ゲームに出て、故障でひっこんでいる…」

代走？　代走ときたらオレの出番だと、帽子をとって、ヘルメットにかぶり直した森本は念入りに屈伸運動をする。

「きた～～～～！！！！！　八回にきて、ようやく僕の出番がまわってきました～！！」

森本はことのほかはりきるが、大沢が呼び出したのは…。

「ジューシー。代走いってこいや」

ジューシー？　ジューシーとは誰のことだ。

「僕のあだ名？」

森本が鼻のあたまを指をさして、自問自答するが、

「ヒチョリとかピッコロとか、スター性のない新庄とか呼ばれたことあるけど…ジューシーと呼ばれた覚えはないなあ…おっかしいなあ…僕のはずなのにな…大沢監督がかってにつけた新しいあだ名かな」

首を傾げてると、大沢は少し顔を赤らめて、

「まちげえた、ジューシーじゃねえや…デューシーだ、デューシー」

「でゅでゅでゅデューシー！！！　外国人選手ですかあ！！　代走の切り札の僕がいるじゃないですか！！　それでどうしてデューシー！！　彼は足が速いんですか！！」

森本は猛然とアピールするが、大沢は聞いちゃいない。

「ヒルマン、おめーは外国人担当やろうが、はやくデューシー呼ん

でこいや」
「ＯＫ、ボス」
ヒルマンは裏のミラールームでバットを振っていたデューシーを捕まえて、連れてくる。
デューシーもてっきり代打要員のつもりで準備をしていた。代走とは寝耳に水のようで、大きな目をぱちくりさせてる。
しかし、大沢が通訳を介してデューシーに代走起用の意図をつげると、了解とばかりに彼は不敵に微笑んだ。
デューシーとは、９５年～９６年に在籍したカナダ出身の細身の黒人選手である。打率こそ低いが我慢強い打者で、意外な出塁率を誇り、一発もある一番打者としてチームに貢献。打撃だけでなく足や肩も平均以上で、日本ハム退団後も、長くメジャーの控え外野手として活躍した。

だが、代走に起用するほど足が使える選手かというと、
「デューシーなら僕でしょおおお！！？」
森本が納得しないことからも、それは伺える。なにせ盗塁する場面ではないにしろ、年間９盗塁が最高の選手だ。年間３０盗塁を記録する森本との差は歴然としている。
「ヒチョリ、僕も分からない、大沢監督がデューシーを起用する意図が…いやそれ以前に、貴重なベンチ入り枠をけずる選手でもない…同じ外国人ならウィルソンやセギノールがよほど上。そもそも左打ちの外野手は飽和状態…デューシーにこだわらなければ、白仁天や富田さんら右の外野手の枠ができバランスが取れたのに…」
「白井さん、誰がデューシーをねじ込んだんですか？」
「監督だよ、監督…なにやらデューシーのビデオチェックしたさいにあるプレーが頭にこびりついて離れないらしい」
「デューシーのあるプレー？？？」
「それは試合で見てのお楽しみだってさ」

デューシーは三塁ベース上で三塁コーチャーの高代から、松岡のクセや投球の傾向、ゴロを打ったときの判断などを伝授されてるが、通訳を介しても、その意図は十分に伝わらないようだ。

「かあ～　もどかしい！　僕なら、なんでもこざれで作戦を遂行できるのになあ」

森本は頭をかかえる。白井はため息をつく。

「誰を幸雄の替わりに遊撃につかう気だ…まったく…。ああしてこうして…う～ん、この守備陣は…こりゃ同点にしても無意味な陣形かもしれん…まさしくファイヤーフォーメーションだ…」

２００話記念カナダ人登場（後書き）

ついに一話のなかで一打者も進まなかった

ただ相手は広岡であり、古田だ。大沢が職業野球らしいスクイズを披露させたくとも、やすやすと実行させじとヤクルトは包囲網をひく。

「ここは確実にスクイズだ、ふん…。田中賢介をそのままで、三塁走者にわざわざ代走を送る…これは私に、スクイズをやりますと教えているようなものだ。さらに、大沢の性格を考えると、こっちが警戒して、外せば外すほど、逆に意固地になってスクイズをやりにくる…、ふん」

広岡と古田の考えは一致、広岡の意向をくんだ渡辺進野手総合コーチが古田にシグナルを飛ばすと、古田は一度だけ深く頷いた。

スクイズ警戒、走者を一塁に送り出してでも、スクイズをさせるなとの指示だ。一塁の走者は当然、逆転のランナー、危険性をともなう策であるが、今日のヤクルトは走者を溜めても、勝負どころで打ち取るタイトロープを渡る作戦をとり、ここまでゼロに封じてきたのだ。その策にぶれはない。

「ふん、古田。とりあえず初球は外せ。たとえスクイズを仕掛けてこなくても…」

松岡が投球モーションに入ると、古田は腰をあげて、スクイズを外しにきた。しかし、デューシーはスタートを切らず、田中はバントの構えもしない。スクイズは初球からはこなかった。

「ふん、今ので、ウチの勝ちだ。二球連続外してこないと、大沢は考えるだろう…しかし、私には逆転の走者を出してでも、スクイズを敢行させない覚悟があるのだ。次も外せ…」

ボール球を増やしてでも、広岡はぶれない。

松岡が三塁走者デューシーを目で制してから、モーションに入る。

デューシーはスタートを切る。田中はスクイズの構えをする。
古田は立ち上がる。
「ふん、どうだ、スクイズ失敗だ！」
広岡がほくそえむが、スタートを切ったはずのデューシーがつまづいている！　それを見た古田が矢のような送球を三塁岩村に投じるが、デューシーは頭から慌てて戻って、間一髪、セーフ。
「ふん、マヌケな外国人のマヌケな走塁に助けられたな、ふん」
広岡は大沢采配を憐れむが、ただこれは大沢の想定内の作戦。
「ヒロさんが、二球連続外すのは重々承知。デューシーが転んだのも、すべて、オレの授けた作戦どおり…。これでノーツーだわい…。いくらヒロさんでも、これ以上、ボールを重ねる勇気はないだろ…次だ、次で決めてやるわ」
大沢は強がりでもない。なぜなら、セーフティースクイズ（打者が転がってから、走者がスタートをきる作戦）以外のスクイズにおいて、スクイズをする打者の役目は、たとえ外されても、ボールをバットに当てることだ。
だが、田中賢介は、そのそぶりも見せず、悠然と見逃していたのだ。それはスクイズのサインは出ていなかった証拠であり、デューシーの一連の動きは陽動作戦である証明である。これで大沢の言い分に筋が通っていることが分かる。
カウントはノーツー。一死三塁、一点差。これ以上、カウントを悪化させるのは、ヤクルトの渡る綱渡りの綱が、毛の先ほど細くなることを意味するのだ。
大沢がスクイズのサインを出す。顔色は一つもかえていない。高代がそれを受け取り、田中賢介に流す。
田中も役者だ。眉の先も動かさない。古田は、田中の挙動をみて、スクイズのサインが発信されたかどうかを見破ろうとしたが、これでは分からない。
分からないなら、外せ。
それが広岡と古田の信条である。切れそうな綱の上を平気で渡ろ

うとしているのである。
デューシーがスタートを切る。田中がスクイズの構えをする。
古田が立ち上がる。
大沢が叫ぶ。
「ま、まさか、三球連続外してくるだと！！」
大沢は広岡の覚悟を甘く見ていたのだが、白井は違った。
「想定内…外してくるのは想定内！　賢介には、この時のために練習させていたんだ！」
このとき？　ボールは大きく外れる。田中賢介がボールに当てようと、必死になって飛んだ。
「賢介には、ウエストさせたボールをスクイズさせる練習をさせたんだ！」
右手を離して、左手を添えただけの状態のバットの先端が、ボールを当てる。
この場面、ファウルでもいい。ワンストライク増えるが、デューシーは戻り、振り出しに戻るからだ。
当てたのに精一杯で小フライになり、捕球されるのはまずい。デューシーは三塁に戻れず、併殺になるからだ。
それならば、当てたボールが、守備の正面をついて、アウトのタイミングでクロスプレーを迎えるほうがいい。古田が落球する可能性もあるのだから。
が、賢介は、外されたボールにたいして、最善の結果をだした。これも白井の命を受けて、ウエストされたボールに対してのスクイズ特訓を怠らなかった成果だろう。
田中と白井に付き合わされた、スウィーニーと実松の労も報われることだろう。
ボールは、三塁岩村の前、絶妙な位置と回転で転がった。
広岡の覚悟は大沢の作戦の上をいったが、田中の努力と技術は、広岡のそれのさらに上にいったのだ。

デューシーは還ってくる?!　同点!?　いやいや三塁は岩村だ。バットで貢献できず、悶々とした気持ちを抑えられなかった岩村は、ここで鬱憤を爆発させる。

猛然とつっこんできて、ボールを掴み取ると、崩れた体勢そのままで、バックホームだ!

古田が取る、デューシーは?

まだだ、まだ来ていない。森本が思わず叫ぶ。

「僕の足だったら、すでにベースの一角に足が入っていた!!」

二転三転、その結果はアウト…?!　いや大沢はまだ諦めていない。

「ジューシー!　てめーを使ったのは、この時のためだ!!　あれも見せろ!!」

デューシーは、右の肘を張らせて、正面突破にきた。古田を体当たりで吹き飛ばすつもりだ。

そもそも大沢が、デューシーに惚れ込んだのは、デューシーのプレーが抑えられた１９９５年のビデオを見たことからだ。

そのビデオの中、デューシーは広角に打てる長打とそこそこの走守を見せたが、大沢をうならせるほどではなかった。だが、あるひとつのプレイが、大沢の目に止まったのだ。対ダイエーで、捕手の坊西を強烈な体当たりで失神寸前に追い込んだプレーがそれだ。このプレーは当時のハムとダイエーの死球騒ぎの遺恨から、繰り出された掟やぶりの走塁（実際、そのあと乱闘に発展して、デューシーは同じカナダ人のライマーと格闘している）。

が、このプレーをいたく気に入った大沢が、監督権限を強く発令、体当たり要員として、ねじ込んだのだ。

デューシーのエルボーアタックが飛んでくる。しかし、古田も守り神だ。逃げずにデューシーの体当たりを体ごと受ける。

……。

古田は、たとえはじき飛ばされても、ボールを離さなかった。

主審の友寄がアウトとコールすると、興奮から古田は顔を真っ赤

にさせて、デューシーを睨んだ。
　このスキをぬって、打者走者の田中賢介は、二塁を陥れようとしたが、古田はぬかりない。興奮そのままのぎょろりとした目つきで、田中賢介に目をやると、すごすごと田中は一塁に戻った。
　スクイズ失敗だ。
　ヤクルトベンチは歓喜の渦に包み込まれる。広岡はただ一人冷静を装うが、
「ふん、気を抜くな、まだ二死だ…」
　その鼻の穴は興奮からぷくりと大きくなっている。
　それに比べて、スクイズ失敗のハムのベンチときたら、どうしても声は出ない。
　ムードメーカーの森本が声を張り上げて、
「まだツーアウト！　いけるよ、いける！　同点いけるよ」
　檄を飛ばすが、そのあとが続かない。
「はあ～　僕ならいけたのに…」
　森本は代走が自分でなかったことを、いまだ納得できていない。
　では、そのデューシーにこだわった大沢本人は…。
「…デューシーを使ったのは、まちがいでねえ。たしかにスクイズは失敗に終わったが、ヤクルトには十分ダメージをあたえたわい」
　これはなにも強がりだけからくるセリフではない。ヤクルトは、大沢のいうとおり傷ついていた。
　体当たりを受けた古田が、首をひねり、手首を回し、体の不調を訴えているのだ。
「ほうれみい、デューシーの体当たりを喰らった古田…。古田を潰した、それだけで価値があるんだ…」
　張本がいった宮本にいった言葉の一端が思い出される。張本は確かにいった、ヤクルトの根幹を潰してやると…

満身創痍の八回

デューシーのラフプレーは、乱闘には発展しなかった。
グランドでは、もはや遺恨云々を取り沙汰できる雰囲気はなく、
「ツーアウト、ツーアウト、あと一死を全力でみんなで取りにいきましょう！！」
古田がこう掛け声をかけたように、熱戦をただ進行させたい空気が支配していた。

一死三塁の絶好の場面を潰して、二死一塁となっても大沢は諦めない。
「古田を潰せたんだ、こっからが本当の勝負よ…もう八回もツーアウトだけどよお～　容器にプツリと開けた穴から、どくどくとヤクルトが流れてくるぜ。白井、松岡のクイックどうだ？」
「松岡さんは、クイックの徹底されていない昔の投手です。それを見越してキャンプ中に特訓を繰り返したようです…。その結果、見事マスターし、そこらの現役投手以上のクイックを身につけたようです」
「そこらのあんちゃん以上かい…。だが、超一流じゃないんだな…。目に止まらぬ早さでクイックされちゃあ、おしめーだけどよ…。平均以上ていどじゃ、１００パーセント成功だぜ」
古田は首をさかんに回している。
「ふふふ、絶対確実の鍵は古田だ。今の古田の状態なら、二塁送球はツーバウンド送球がいっぱいだぜ…」
大沢は田中賢介に初球から走れとのシグナルを送った。田中は、古田の強肩ぶりが頭にあり、初球から走ることには懐疑的であったが、大沢の指示である、走らなければならない。
今日の大沢の采配は裏目にでる。先のスクイズがそうだし、鶴岡、田村の捕手リレーもうまくいったとは言い難い。それでも大沢は優

勝経験のある監督である。いちかばちかの賭け事に負けることはあっても、絶対の自信をもつ取引は、滞りなく成功させる。

田中がスタートを切る、松岡がクイックモーションで投げる。田村が見逃して、古田が送球…しない…古田はボールを握りそこねたか、トップの位置まで右腕をひいたところで、送球するのをやめた。

「あかんわ、うまくにぎれんかった」

田中はそのまま二塁に滑り込み、ユニフォームについた砂をぱっぱと払う。

「ふっふふ、古田よ…うまくごまかせたつもりでも、この大沢親分の目はごまかせんぞ…。握り損ねたんじゃない…投げれねーんだぜよ。投げてもボテボテのゴロ送球が限度だからよお」

二死二塁、走者は得点圏にふたたび進む。打者は八番の田村。捕手であるが、その打力は高田監督時代には五番も任されたほどだ。

代打の策はなく、田村にすべては任せられる。

松岡は外の速球を投げる。田村はそれを逆らわずにおっつけて、打球は一、二塁に転がる。

二塁は宮本だ。いつもの宮本なら、悠々と守備範囲のボールであるが、満身創痍の体、ボールはグラブを弾くと、ライト方向に抜けていく。

二塁にいた田中は、三塁を蹴って、一挙ホーム生還を試みる。

しかし、ライトに入っていた飯田が極端な前進守備をひいていて、宮本が弾くやいなや、ボールをカバーングして、元二塁手、元捕手らしく、素早いモーションから、バックホーム。

矢のようなボールが帰ってきた、これをみた三塁コーチャーの高代は、田中に、

「ストップ、ストップ」

と矢継ぎ早に指示を出し田中は慌てて三塁に戻る。

さすが、昭和６３年の日米野球で、その年に、連続無失点記録を作りミスターゼロといわれたハーシュハイザーから、一発を放った

田村だ。巧打が光り、二死、一、三塁のチャンスメイクをした…。
いや、田村は一塁にとどまらない。
大沢から、よくとおった大きな声で、
「おい田村!!　二塁いけ、二塁!!」
指示を出されたのだ。監督の指示とあっては、動かざるをえない。
田村は半信半疑でスタートを切った。田村の足を考え見ると、二塁封殺は目に見えているが…。
古田はまた投げれない。二歩、三歩前に出ただけで、田村の動きを見ているだけだ。
「うまい具合にすきをつかれたなあ～　いかんわ」
反省を口にするが、ここまでの古田の動きを総括すると、田中の盗塁も、田村の進塁もただただ見てるだけなのだ。これでは投げれない状態であると疑われてもしかたがない。
ヤクルトのベンチには、守備力も肩も古田よりは落ちるとはいえ、ベストナイン経験のある八重樫が残っている。
この状態の古田なら、八重樫に交替させるのが最善の策である。
広岡は動く。
「八重樫…」
しかし、八重樫はベンチにはいない。
「どこいったんだ、八重樫、代打の準備で裏か？　それともブルペンでボールを受けているか?」
八重樫はロッカールームにいた。
「どこいったんだべさ、オレのメガネ、コンタクトもねーべ」
メガネケースも、コンタクトレンズのケースを探しているのであるが、バックの中をみてもないのだ。
それが中西バッテリコーチの口づてで広岡に伝わると、
「ふん、バカ者めが、この大事な時に…。裸眼の八重樫に捕手をやらせられるか…ふん」
広岡はベンチを出る。
八重樫の他に捕手はいない。第三の捕手の秦は代打として、すで

に使っている。
「監督、何がようですか？」
古田は平静を装うが、広岡が出てきた理由は十分理解していた。
個人的には試合に出つづけて、ウイニングボールをこの腕で捕りたいと思う古田であるが、しこの状態で出つづけるのは、チームに迷惑がかかる、交替もやむなしと覚悟を決めたその時、
「おい、宮本、下がれ」
広岡は宮本の交替を告げにきたのだ。
「僕ですか！」
まさか自分にお鉢が回ってくると思ってなかった宮本は驚きを隠せない。
「監督、頼みます！　ここまで来たんです！　最後までいかせてください！」
宮本は懇願するが、広岡の腹は決まっている。
「ふん、古田に宮本、一人ならまだしも、けが人を二人も試合に置いておけるか…。宮本、お前の方が古田より状態は悪い、それもかなりな。次の試合もあるんだ、ここは引っ込んでくれ」
宮本は、広岡にそこまで見抜かれたら、もう反論できない、黙って頷いた。
「ふん、古田、なんとか、試合終了まで持たせろよ。もし勝ちで試合を終えたら、お前だけ明日の練習を免除してやってもいいぞ」
「了解……」

広岡が宮本を引っ込めてまで古田にこだわったのは、統率力と、体の状態抜きに頭はさえているからであるが、替えの捕手がいないのも事実だ。
唯一の替えの捕手の八重樫は、準備を怠り、使える状態ではないからだ。
古田は、ベンチ裏の詳しい事情を知るよしもない、ただ広岡の決断を意気に感じていた。

「走ってみいや、ハムの連中。肩が壊れても、刺してるわ…」

広岡と大沢の繰り出す策にドキドキが止まらない

宮本は、納得しきっていないようであったが、わりきった。
「チームのためならしょうがない…でもなんでオレだけなんやろ？古田さんだって故障してる…」
宮本も八重樫の裸眼騒ぎを、まだよく知らない。
八重樫のメガネケースはスタッフ総出でさがしている最中。しかしどこを探しても見つける様子はない。
代用品の案も浮かんだが、すぐに萎んで消えた。
古田や土橋をはじめとしてメガネプレーヤー数多いヤクルトであるが、どれも八重樫の度にはあわないのだ。
彼らがいくら探しても見つけられないのにはわけがあった。
八重樫持参のメガネ、コンタクトケースは、日本ハムのロッカーにあったからだ。
「うまいこといくもんやね…まさかこうあっさりと盗み出した…盗む？　そんなん人聞きわるいなあ～　借りただけですわ。あとでこっそりと返しにいくから、八重樫さん待っといてくださいね～」
メガネケースは岩本の手にあった。　偵察要員として起用されすぐに試合からのぞかれた岩本は、大沢直々に、八重樫のメガネ隠し作戦の実行犯の命を授かっていたのだ。

大沢はここが勝負所とみて、仕掛けてきた。
打順は、投手の間柴、当然、代打が送られる。ベンチに控えた打者は、柏原、高橋信二、片岡、ソレイタ、毒島の五人。最初の二人が右、残りは左打ち。投手は右の松岡、となると送り込まれるのは、左になるか。
抜群の選球眼が光り、打率プラス一割の出塁率を誇る片岡か。史上二位の三塁打を誇る中距離打者、頼れるキャプテン毒島か。それとも一気に3ラン狙いで、サモアの怪人ことソレイタか。

大沢のだした答えは…。
「おー柏原、おまえの出番だ。がんばれよ～」
左ではない右の柏原だ。
「向こうにはまだ左の石井が残っている。左の代打なら当然投入してくるだろうよ。それで慌てて柏原だすんなら最初から出せばいいことよ。なんてたってオレを優勝させてくれた４番打者ぜよ。柏原はよ、左とか右とか関係ねーぜ」
さらに田村を呼び寄せた。大沢自ら、走塁の指示？　いや違う、田村に代走を出すのだ。今日の二番手捕手であり、本来は正捕手でもある田村に代走を出すとは大沢のこの回にかけた本気度が伺える。
だが、問題は交替の捕手である。本来の第二捕手であった大宮は鶴岡起用の煽りをくって、ベンチにも登録されていない。
田村と同等の能力がある大宮が起用できれば、田村の代走も頷ける手であるが、残る捕手は、捕手失格の烙印を押され、代打要員兼控えの控え捕手兼控えの一塁手としてベンチ入りをした高橋だけだ。
田村の代走が送られたことで、裏の回の捕手は高橋に確定した。
「よし、出番が来た」
試合に入り込んでいた高橋は、大沢の指示を仰ぐことなく、捕手用具一式を身につけてブルペンに走った。
だが、高橋は捕手失格で一塁に専念している身だ。久々の捕手姿は違和感が拭えないようだ。
「ちゃんとリードできるかなあ…」

そして、代走に送られた選手といえば、ついに試合に姿をあらわした森本である。
「やっときた～」
スラリと伸びた長い手足をくねらせて、準備運動だ。
飯田は強肩であるが、センターの青木とレフト若松はそれほどでもない肩の選手だ。森本の足を持ってすれば、センター前やレフト前に飛んだら、それが単打でも一気に還ってこれる足がある。

宮本の後の二塁には、土橋が入った。バッテリー以外、どこでも守れる選手であるが、本職は二塁手。田中も武上もベンチ入りしていないなか、唯一のホンモノの二塁手だ。

日本ハムの応援団は柏原を迎えて、大盛り上がりだ。伝説の応援歌がお披露目だ。

「じゅんい〜ち」

コールのあと重々しくタイコの音がドン、ドン、ドンと響き渡る。松岡が古田のサインを覗き込む、セットに入ろうとしたその瞬間、広岡がベンチから出てきて、タイムをとった。

古田は、リズムを壊すマネするなと思ったが、口には出さなかった。

マウンド付近で広岡中心に輪ができた。

「ふん、きみたちには、とんでもない作戦を授けたいと思う。あまりにも突飛な策だ。もしも、私の策が、きみたちの野球道に引っかかるなら、監督批判などと恐れずに、申しでてくれ」

「突飛ですか？　このすべてが出尽くしたといってもいい世の中で、そんな珍しい作戦あるんですか？」

古田の疑問も頷ける。

「敬遠だよ」

「敬遠？」

古田だけでない、松岡が、岩村が、土橋が、池山が、松岡が、遠巻きに見守っていたペタジーニまで、同じように声を上げた。

「たしかに、二死、二塁、三塁の状況。一塁ベースは空いてますし、次の打者は、この試合、あたりが見られない島田さん、敬遠もありうる策やと思いますが…」

「代打もあるんじゃないでしょうか？」

岩村が古田に続く。それを受けて楽天で首脳陣経験がある池山が締める。

「片岡もベンチにおるしね、代打で我慢強い、片岡が出てきたら、押し出し同点もありえますよ」

彼らがいいたいことは、それだけではない。

「ドコガ、メズラシイ策ダ、ミスターヒロオカ」

拙い日本語で、ペタジーニは疑問の確信をつく。

「ふん、歩かせるなら、それでいい、最悪の場合ね」

「最悪の場合？　敬遠そのもんで最高も最低もない違いますか？　次の打者の結果にどうこうはありますが…。あ、敬遠のボールが暴投になるケースはありますけど」

「ふん、この作戦の突飛なところは、敬遠しつつ勝負する所だ」

「たまにみる、急に座ってストライクを投げ込んで、相手打者の虚をつく策ですか？」

「ふん、古田にしてもわからんか、打者は誰だ？　この作戦は、日本野球史上、たった三人にしか使えない策だ」

「三人？」

「それは、新庄、クロマティ、そして、今打席で我々を窮地に落とそうと胸を弾ませている柏原だよ…」

「何の共通点があるんですか？　……あああ～～～～」

「ふん、やはり古田か…最初に感づいたのは…」

広岡と大沢の繰り出す策にドキドキが止まらない（後書き）

今私は恐ろしいことに気づいた。
八回表ですでに6話消化しているのだ

森本と高橋は往復する

「しかし、あのおっさん、よう、あんな作戦を思いつくもんやなあ～」

広岡のとんでもない作戦に古田は感心しきりだ。

「ふん」

ベンチに戻ってきた広岡は、作戦について多くは語らず、仁王立ちを崩さない。

古田を驚かし、広岡がいきりたつ作戦とはなんだろうか。

柏原が松岡を抹殺しようと、ヘルメットのひさしから目を光らすと、古田は立ち上がった。

柏原は、気分をすかされたと口をひんまげる。

日本ハムの応援席は、関東の応援団、特有の男女別パートの応援をやめて、

「よわ～む～し！　よ～わむし！！」

度重ねなる広岡ヤクルトの墨を埋める作戦を攻め立てた。

「また敬遠か、ヒロさんよ～　勝利優先もいいけどよ～　たまにゃあ勝負を優先しようや～」

大沢も、評論家目線で広岡の作戦を批評するが、監督としての仕事を忘れてはいない。

「次は、島田誠か～　オレを優勝監督にしてくれた立役者だ。心情的には打たせてやりてーところだが、ソレイタも毒島も片岡もいるぜ。満塁は望むところよ…」

二球め、古田は変わらず立っているが、松岡の投げたボールは、古田の立っていた位置より内側にきた。

松岡は、「ごめん、ごめん」と平謝り、

古田は、「ちゃんと投げてくださいよ」とたしなめる。

それをみた柏原は、とっさに三塁側のベンチを振り向き大沢に、

目で合図した。
さすが、８１年の４番打者と優勝監督の関係だ。柏原の一瞬の目くばりだけで、大沢は柏原の意図を理解して二度大きくうなづいた。
「おもしれー、これこそ職業野球よ」
大沢は、目を輝かした。
古田は、そのやり取りを見逃してなかった。
「ふふふ、作戦どおりや…」

敬遠のボールを打った打者は何人いるだろう。正確に確認できる資料はないが、日本野球史上三人は、いることが分かっている。
１９９０年、一打サヨナラの場面、広島の金石のボールを打ち返した巨人クロマティ。１９９９年、槙原の気を抜いたボール球を、打席からはみ出し打った、新庄、これもサヨナラ打。そして、今、打席にいる柏原だ。彼は、日本ハムが初優勝した１９８１年に、西武の永射からホームランを打った。この三人だ。
柏原は、その感触を一日たりとも忘れていなかった。
目の前で見ていた大沢は、それを思い出した。
広岡は、それを知っていた。
古田は、広岡の作戦を聞き、松岡にそのボールを投げさせた。
古田は立ちつくしている。松岡は、敬遠らしく立ち投げで、ボールを離す。
柏原は大きく太い足を踏み込ませると、バットを振り出した。
柏原は、あの時のように、敬遠のボールを打ちにきた。
松岡のボールは、二球めと同じように、内にはいってきた。
「あ」
古田は、思わず声を上げた。ただそれは、のどから飛び出た声とは違った。どこか演技かかっていた。
飛び上がるようにした柏原は、大根切りでボールをとらえた。ボールは、インフィールドに弾き返された。ただ柏原には、あの時の

ような感触を感じていなかった。
松岡は、敬遠の球ながら、微妙にスライドをかけていたのだ。柏原の芯をわずかに外したことで、広岡の突飛な敬遠作戦は、成功をみた…はずであったが…。
「落ちろ～」
柏原は、走りながら叫ぶ。
打球は、二塁手の土橋と、遊撃手の池山と、中堅手の青木がいずれも追う三画地帯に飛んでいった。
敬遠と気を抜いていたら、誰も追いつかなかったろう。だが、これは広岡の作戦のうちだ。広岡の薫陶をうけた三人の野手の足は、ことのほかよく動く。
しかし、打球は三人がどうやっても追いつけない、ただ一点の場所に落ちた。
青木が拾い上げて、すかさずバックホームを試みるが、すでに三塁走者の田中賢介は、ホームに生還している。
「同点だ～～～」
大沢が拳を上げる。
「いや、逆転だぜ～～～　ヒチョリ還ってこんか～」
しかし森本は、スタートを切り損ねていたのだ。二死からの飛球は、バットが当たった時点で、スタートを切るのがセオリー。が、森本は、どうせ敬遠だろうと、目を離していたのである。
飛球が上がって慌ててスタートを切った森本は、青木がボールを掴んだその時、三塁を回ったどころだった。
三塁コーチャー高代の腕がグルグル回る。
青木がすかさずバックホーム、肩の強くない青木であるが、ど真ん中ストライクを投じた。
森本は、三本間の半分より本塁よりにいた。
タイミングはアウトか？　森本のとるべき走塁は？
1、デューシーにがしたように、体当たりで正面突破だ。体にガタが来ている古田のことだ。二度目の体当たりは致命傷とともに、

落球する可能性もある。
2、森本は、打力不足ながら、代走要員として選ばれたように、走塁のエキスパートだ。名捕手古田のブロックのスキをついてベースの一角を手で払うことくらいお手のものだろう。
3、漫画的な手であるが、運動神経抜群の森本、八双飛びのごとく古田を飛び越えることは難しくないだろう。

答えは、その3つのうちにはなかった。
森本は、急ブレーキをかけて、三塁に戻ったのだ。
「やべ～　間にあわねえ～」
3つの選択肢から外れたこの手は、本来は許されない手。三塁よりにいたらまだしも森本は本塁よりまできていたのだ。
だが、森本は九死に一生を得る。森本を追い込んで、ランダンプレーで挟もうとした古田のミットからボールがポロリと落ちたのだ。
急いで拾い上げようとしたが、手につかない。
その間に、森本は、頭から三塁ベースに帰っていた。
「はあはあはあ…たたた、助かった～」

凡ミスである。普通なら広岡の怒号が飛ぶ場面であるが、古田の体に限界が近づいていることを知っている広岡は何も言わない。
「ふん」
古田は首をかしげながら、落ちたボールを拾い上げた。

一瞬にして目まぐるしく展開が動いたが、改めて整理しておこう。
広岡は敬遠のボールを柏原にわざと打たせる作戦を授けた。
松岡ー古田のバッテリーは見事に作戦を遂行して、柏原をはめ凡打に打ち取ったはずであったが、ボールはポトリと青木の前に落ちた。
状況は二死、二塁、三塁だ。本来なら、一挙に二人還って逆転の場面であるが、森本がチョンボをおかし、三本間に挟まれてしまっ

た。

だが、デューシーの体当たりで、体力を消耗していた古田は落球して森本をむざむざと三塁に還らしてしまう。

突飛な作戦が結果的に失敗に終わった広岡は腕組みをし、一挙逆転のはずと大沢は同点の喜びも見せない。

打者は一番にかえって島田誠だ。今日当たりはないとはいえ、本来しぶとい打者だ。島田を警戒した広岡は慎重な継投をとる。

松岡を下げて、左の石井弘寿の名前をコールした。ＭＡＸ１５５キロを誇る日本人最速左腕の登場だ。本来なら、必勝パターンの一人として真っ先に左殺しの命を授かる投手であるが、ブルペン投球の不調が伝えられたため、ここまで残っていたのだ。

「ふん、使いたくなかったが、しかたない」

石井の登板をみて、大沢はベンチを眺めた。

「石井に、左打者は分が悪いぜ…右だ。右はいねーか…」

大沢はベンチを眺めるが誰も名乗りを上げない。控え選手のかかれた黒板を見るが、そこにいた右打者は、

「信二か、高橋信二はどこいった！」

高橋は捕手の役をまっとうするためにすでにブルペンに走っていた。

「おい、信二呼んでこい！！」

大沢はこのイニングに、とことんかける。柏原、森本に続いて高橋信二を送り込む。この回だけで三人目の交代選手である。

「え？　代打！！！」

裏の回の配球で頭がいっぱいであった高橋は、切り替えができぬまま、捕手用具を脱ぎ捨てて打席に向かった。

「なんで、オレ？　代打なんだろう？？？」

高橋は、ブルペンに向かった時点で、流れの外にいたのだ。

石井のボールは、１４７、１４６、１４８…、マックスからは程遠く、制球もバラついている。ブルペンからいい連絡がこなかったのも裏付ける調子であるが、高橋はこれを打ちきれない。
ほぼ真ん中のボールに振り遅れると天を仰いだ。
「あ～」
だが、この悔しさは半分、ベンチへのアピール交じりのパフォーマンスだった。
「え？　三塁にヒチョリ？　え、同点？　え？　え？？？　もしかして打てば勝ち越しのヒーロー？　え」
状況をいまさら把握しても、時既に遅し。
試合は八回の裏に向かっていた。

日本ハム背水の守備陣

「あああ…どうしよう、どうしよう…この走塁ミスは致命的だ。僕にとってもチームにとっても…取り返せねば……。あ…もう挽回するチャンスないわ」

森本は、スコアボードを見つめ、ため息を漏らした。

「信二さんがそのまま捕手に入るだろ。内野手が足りないから、代打した柏原さんが内野のどこかに入る…すると、信二さんを代打に出された島田誠さんのセンターがあく。そこに代走に出たわたくし、森本稀哲の出番とくれば、さあ守備に打撃に取り返すとポジティブシンキングにでもなろうけど、あいにく僕は八番の田村さんの代走だ。投手はなるべく回ってこない遠い打順に入れるのがセオリー…。八番投手、九番柏原さん、一番捕手信二さん…。そして、センターの座をいとめるのは…

「デューシーをセンターに入れるか。同じ２５０しか打てねーボンクラでも、デューシーには２５本、本塁打打てる長打力がありゃあ。滅多に長打のねえヒチョリより期待感が持てるってもんよ。おいヒルマン、デューシーに伝てえこおよ。おめーら、外人同士だろうが、英語でヘイとかオーとかいってよお、呼んでくりゃあいいんだ」

しかし、ヒルマンは、大沢の申し出にさかんに首をふる。

「デューシーは、先ほどの体当たり肋骨にヒビが入って、とても試合続行は不可能な状態とヒルマンは言っております」

「なにい〜？　まあしかねーか。名誉のリタイアってことにしておいてやるか。となると、あれか…」

ベンチに戻ってきた森本は、大沢の前を通るのを避ける。凡走のお仕置きに、どんなカミナリが落ちるかわかったものじゃない。

「おーヒチョリ」

「あ、ははは いいい（やっぱし来やがった〜！）」

森本は肩をすくめ、必要以上に肝を冷やしている。
「センターにへえれ。デューシーよりやっぱ、おめーにかけてえわ。さっきの走塁をとりけえしてこいよ」
「へ？　ははははい、わかりましたああ～　絶対取り替えしてきます！！！」
おびえてた森本が一転、持ち前の元気を取り戻し、グラブを拾い上げると、センターにかけていく。
「適当な出まかせも、単純な奴には、効くもんやな…」

八回表で、四人もの選手を交替させたため、守備陣形に大幅な変更が余儀なくされる。
小笠原から大下までの2～5番に変更はないが、その他の選手と守備位置はすべてかわった。

捕手は高橋信二。センターは森本。そして投手には、武田久が入る。問題は二遊間だ。ファーストが本職である柏原がセカンドに入り、セカンドにいた田中賢介が、ショートに回った。
「ふん、大沢め、動きすぎたな…。穴だらけの守備だ、おかげで攻めやすくなったぞ、ふん：」
広岡がほくそ笑むように、日本ハムの守備陣は、かなり厳しい守備だ。
高橋は捕手失格の烙印を押されて、一塁手として新たなスタートを切った選手。大下、張本、大杉は打撃に期待がかけられた選手だ。三塁の小笠原にしても、一塁手としては、一流の首位力がある選手であるが、三塁手としては、中村紀が故障で不振だった年に、おこぼれで一度だけ、ゴールデングラブを捕ったにすぎない。
二遊間の柏原と田中賢介のコンビも本職ではない。柏原は二塁手として試合出場があるとはいえ、それは南海時代の若い頃と、緊急時に限られる。
田中にしても、ポスト田中幸雄としてショートで育てられた選手

であるが、定着できず、やがてセカンドに安住の地を求めた選手だ。
「ふん、森本だけだ…ふん」
辛口の広岡がただひとつ認めるのが、センターの森本の守備力である。

「いやあ～　センターはやっぱり気持ちいいなあ…。？　あれ、待てよ、なんだこの久々にセンター守った感は…。僕は、ポスト新庄さんとして、センターの位置を不動のものにしたはずだ…。新庄さんが引退した翌年の２００７年から２００８年まで、たしかにそれは僕のものだった…。アイツが出てくるまでは…」
森本の脳裏に浮かんではこびりつくその顔は、糸井嘉男だ。
「糸井、アイツさえいなきゃなあ…オレはレフトなんかに戻らなかったのに…」
２００９年、前年の打撃不振でレギュラーの地位を剥奪された森本は、野手転向間もない糸井とセンターの座を争うことになった。
開幕スタメンこそ勝ち取った森本であるが、糸井との打撃成績の差は歴然。やがて糸井はセンターの座を不動のものにし、森本は空いていたレフトに、文字通り左遷されることになった。
「なんで、糸井いたいに右中間を宇宙間と勘違いするようなアホに大事なセンターを取られにゃいかんのよ…」
実際の公式戦だけの話ではない。森本はこの大会でも糸井と最後のベンチ枠を争っていたのだ。キャンプ終盤に来て、彗星のように現れた糸井が急浮上。首脳陣の意見は真っ二つに割れた。
長打力もあり、高い出塁率を誇る打撃は森本以上。走塁、守備力、肩も、荒削りだが森本と同等か上と糸井派が優勢であったが、それがひっくり返ったのは、森本の糸井にない特性であった。
それは右打ちであること。他の外野手は左打ちがほんとんでで右打ちが一人でもいないとばらんすが崩壊すること。そして、森本は糸井にない緻密で精巧なプレーができること。このふたつである。
チーム結成にあたって、日本ハムが掲げたコンセプトは、東京時

代の豪快な野球と北海道に本拠地を移してからの繊細な野球の融合であった。

野手転向まもなく、身体能力に優れながら、ポカのある糸井に比べて、ヒルマン一白井の野球学校の優等生である森本は、コンセプトに似合ったプレーができるだろうと期待を受けたのである。

それなのに、それなのに、ああそれなのに…。森本はとんでもないミスをおかしたのだ。

「森本、もうけっこうだ。次から糸井でいくから…、とかいわれんように頑張らなきゃいかんなあ…」

投手の武田久が高橋を呼び寄せた。

「サイン大丈夫か?」

「忘れるわけないって、オレ何年捕手やってきたとおもってるんだ」

同級生であり、何度もバッテリーを組んだ間柄だ、会話もざっくばらんである。

「それならいいけど…」

サインは忘れていなかった高橋であるが、配球までは覚えてなかった。

「どうしよう、オレ、バッテリーミーティング出てないんだ…」

いや、それ以前に、相手の特徴も把握してないのである。

打者は青木だ。

「青木は、現役だし交流戦で何度やったからわかる…。でも次の若松さんわかんね…。その次の岩村もわかる…。だが四番のペタわかんねーよ。ペタが日本にいたとき交流戦なかったし…さあどうしようか…」

高橋はサインを出す。リズムがいい、迷いがない。サインの出し方には破綻がない。

武田は、シュート、スライダーにフォークをたまに交える投手であるが、基本はストレートだ。１５０キロのスピードがあるわけで

はない、出てせいぜい１４５キロだ。それで打者を牛耳るのだから、その秘訣はスピード表示にはない。

球のノビと制球力にある。背の低い武田から繰り出されるストレートは打者に浮き上がるような印象を与え、コースを間違えない。それがこの体格にして優勝チームの無敗のストッパーとして君臨できたゆえんである。

「青木は、左打者だ。武田のシュートは右の懐をえぐるもの…左にはただ外に逃げていくボールにしかならない…。だが、それでいい…青木は当てるのがうまい、おもわず外に手を出す…ボール一個分シュートっする…芯を外れた打球はショートゴロが精一杯だ…」

高橋の読みは的外れでもなかった。ミート能力の優れた青木は、外に逃げていくシュートに手を出してしまい、注文どおりショートゴロを打ったが、高橋はある二つの重大事項を見落としていた。

青木は足が速く、しかも走り出しの速い左打ち。内野安打でヒットを荒稼ぎするタイプだ。

そして遊撃手は、田中賢介。本職ではない。

捕球するまで、問題はどこになかったが、刺せる肩がないのだ。ふんばって、一塁に遠投するが、青木の足は、すでに一塁ベースを駆け抜けていた。

同じ田中でも、幸雄の強肩なら刺せただろう、ただ慣れる遊撃での鳴れぬ遠投、賢介には青木を刺せる余地など、どこにもなかったのだ。

高橋は捕手の鉄則を忘れていたのだ。捕手は常に広い視点を持ち、グランド全体を見渡せ、である。

高橋の頭に田中賢介の肩と青木の足の比較が頭に入っていれば、このヒットは防げたはずだ。

「ふん。これだ、これが野球の恐ろしさだ…。これだけのメンツを集めて、なぜかどうして、ド素人が守備位置の大半を占める…。ふ

ん、これが日本一の冠がつかないただの優勝監督、大沢のおろかさだよ…。アイツは戦力構想を見誤った、勝負所でしくじった、だからこうなるんだよ…ふん」

日本ハム守備陣、投手の武田以外に赤ランプが灯るなか、森本だけが、救いどころのはずであったが…。

「ど、どうしよう、左横見たら張本さん、右横みたら大下さん…フライがボクか両先輩か、ビミョーなところ飛んだらどうしよう…僕が捕った方が安全なのは間違いないけど、先輩方のプライドが…ああこわ…ハリさんなんて、ばかもん、ワシがとれた打球だ、怒鳴りつけそうだもん…」

その森本にも不安があるようで…。

同年代の威信をかけて

武田は、青木を十分に警戒し、牽制を何度も繰り返して、クイックモーションをとったはずだった。

高橋信二は、飛び抜けた強肩でないにしろ、盗塁阻止率は三割台とそれなりにの肩は持ち合わせている。

青木は盗塁王のタイトル保持者だ。仕掛けてくることは、わかりきっていた。

それだけ注意と敬意を払っても、青木が二塁ベースを盗んだ。

それも初球からだ。

初球スチールのサインを出した広岡が抜け目なければ、果敢に走って成功させた青木も見事だ。

広岡には絶対の自信があった。

高橋の肩と青木の走力をはかりにかけたのはもちろん、広岡は二遊間の守備力も計算に入れていた。

「ふん、二遊間はどっちも、素人だ。しかも年代のまったく違う選手…。息が合わないだろう…タッチが遅れるだろう…ふん、そのどっちとはね…」

青木のスチールは実際、微妙なタイミングであった。高橋の送球がストライクで飛んできたからだ。が、柏原と田中賢介が二塁ベースカバーを譲り合った結果、二遊間経験値の高い田中が、ベースに入ったのだが、入るのが遅れたぶん、タッチが甘くなったのである。

勢いよく、青木の体にグラブを叩きつけ、審判にアピールすれば結果は違ったものになったかもしれないが、田中のタッチは、ベース入りが遅れたぶん、置きにいくだけのタッチになってしまったのだ。

無死二塁。打者は４０００打数以上の打率ランキング二位の若松。日本人登録に限れば、ここ二十年以上、一位に座りつづけている大打者ある。

しかし、高橋は若松の攻略法が分からない。
「バッテリーミーティングなんで、オレ出なかったんだろう？　こうみえても登録は捕手だぜ？」
いまさら過去を悔いても遅い。現実は目の前に広がっているのだから。
「若松さんは、天才打者で、抜群のミート力のある打者。しかも足が速く、内野安打にも警戒すべし…かといって小柄なアベレージ打者とみくびるな。年間２０本以上の本塁打記録があるように、一発にも注意を払うべし…」
高橋から若松の一通りの特徴がスラスラと口をつくが、それは全選手を集めたミーティングで語られた内容にすぎない。
「肝心の攻め方がわからない…どこのコースに強いのか…変化球と速球、好きなのはどっちか…最近の状態は…。まったく情報がない…」
高橋は、まったくの手探り状態でリードを組み立てなければならないのである。困り果てた高橋は、ベンチに応援を求めた。
「バッテリーコーチの種茂さん…。田村さんでも、いやこのさい鶴岡でもいい…若松さんの攻め方を誰か教えてくれ…！！」
種茂は資料に目をやって気づかない。田村はよそをむいている。鶴岡と一瞬目があったが、鶴岡は余計な責任をしょいたくないのか、すぐに目をそらされた。
「それなら、久！　アイツに聞けばいい！　アイツはバッテリーミーティングに出たはずだ！」
高橋は、タイムを取り小走りにマウンドまでいった。
「おい久！　若松さんの攻め方教えてくれ！　オレ、バッテリーミーティング出てないんだ…。なら、お前がリードしてもいい、女房役のプライドなど、このさい投げ捨てる」
「え？　オレ、バッテリーミーティングのとき、寝てたわ」
「なにいい～？？」
「いや、だって、あれ深夜すぎに緊急召集かかっただろう？　だか

ら、オレ、後ろの席でこっそりと…」
「不真面目だな～」
「そういうお前だって、種茂コーチに一応、お前もくるかって言われて…」
「一応？　一応とはなんですか？　ってついかっとなって言い返して、そのままふて寝しちゃって、結局、欠席だった…」
「ああそうだダルに聞け、アイツ野球オタクだから、熱心に聞き入ってたぜ」
「この状況で、ダルに聞けるか…」

高橋は、不安を拭えないまま守備位置に戻った。
「待てよ…無死、二塁ならバント…いかに球史に残る大打者でも、ここはバントで送るのがセオリーじゃないか…。一死、三塁は過酷な状況に変わりはないが、三番の岩村、ペタ、古田さんと、オレがよく知る打者に回ってくるじゃないか…」
たしかに、セオリーはバント。ただ相手は広岡である、何を仕掛けてくるかわからない。
だが、さしもの知将も、安全第一に定石を選択した。
「バントだ」
若松は、華麗なバットコントロールをバント操作に転換して、見事に送りバントを決めた。
広岡がセオリーをとった理由は色々と推測できるが、一番の要因は、表の守備でとっぴな敬遠策が結果的に失敗したことからだろうか。
いくら図太い広岡でも、冒険し続けるわけにはいかないのだ。

「よかった、バントだ…。これであのバッテリーミーティングを、ふてくされて欠席した過去が多少だけど、拭えたかな……」
高橋はひと息をついたが、状況が押し迫っていることには変わりはない。

三番岩村が、独特のオーラを放ちながら打席に向かってくる。
「同級生の出世頭の岩村くんの登場か…」
岩村と高橋が同級生なら、投手の武田も同い年。１９７８年生まれの威信をかけて三者が火花を散らす。
「死んでも、這いつくばっても、苦しんでも、どんな汚いことをしてでも青木を還す」
高橋も岩村にそうまで言われたら言い返せずにはいられない。
「よう同級生、相変わらず自信家だな…」
「高橋久しぶりだな…しかし、オレがイースタンにいたとき、お前は二軍の試合にすら、ろくに出てなかったよな？　そんなお前とここで出会えるとはね」
岩村は、二軍ながら、高卒すぐにレギュラーを獲得。好成績を残し、次代の主砲の座を固めていたが、対する高橋は、試合出場すらままならず悶々とした日々を過ごしていた。
「け、おしゃべりも変わらずか…まあいい、すぐに黙らせてやるからな…。ところでスクイズはないだろうな？」
「バカにするな、オレも誰だと思ってる？　オレにスクイズのサインなどでるわけねーだろ」
「ふん、どうだか、今日、ろくな当たりのないくせに」
高橋は、岩村を尋問にかけて、スクイズのサインが出ているかいなかを探ったが、悲しいがな、捕手を離れた高橋には、岩村の挙動で、真意を見破る力を失っていたのである。
「わからんわ…出てるような、出てないような…。岩村の眉毛がぴくっと動いたから、出てるといえば出てる気がするけど、一文字の結んだ口が微動だにしなかったから、出ていないような気もしてきた…。聞く必要もなかったなあ～」

抑止力のゆくえ

高橋は、またベンチの指示を請いだ。
「大沢監督、ヒルマン、白井さん、誰でもいいですから、岩村が何を仕掛けてくるか、教えてください～」
大沢は、高橋の物乞いのような目が気に入らなかったのか、
「おい信二～　オメー捕手だろうが！　そんくれえ自分の頭で考えな～」
大沢は、高橋の責任論に転嫁するが、ようは大沢自身も広岡の打つ手がわからないのである。

「まったく、あれでも親分いわれる人かね…。待てよ、走者は三塁だけだ。一、二塁は、空いている…。最悪ふたつの塁を埋める手もある…。岩村、ペタを避けて、古田さん、飯田さんで勝負だ。古田さんは、あのとおりボロボロの肉体、飯田さんの攻撃的性格は要注意だけど、基本的には、穴のある打者だ…。代打が出てくるかもしれないが、すでにラミレスは使っているし、岩村、ペタ以上の打者がそうそうベンチにいるとは思えない…。この手でいくか…」
高橋は外に構えた、武田は高橋の構えたミットをめがけて放る。武田のボールは糸を引くように高橋のミットに収まった。高橋のミットは一寸も動いていない。
「おいおい、同級生、あそこまで啖呵を切って、逃げるのか？」
岩村が高橋を挑発をするが、
「ふん、なんとでもいえ、お前とだけ勝負してるんじゃない、ヤクルトとハムで戦ってるんだ」
高橋は耳を貸さない。
高橋のミットは変わらず、外のままであるが…。
「け、くさいところ、ついて歩かせるなんて策は、いつまでたっても中途半端な腰抜け野郎がやる策なんだよ！」

岩村は思い切り踏み込んで、外に外れるボールを叩いた。
「しめた、打ってくれた！」
高橋は、岩村の性格を見抜き、あわよければ、ボール球を打ってくれと願っていたが、それは現実となった。
岩村は踏み込んで打ったはいいが、いわゆる手打ちの状態、当てただけの打球が、左翼方向にまいあがる。
三塁の青木はタッチアップの姿勢を取る。
高橋は叫ぶ。
「あの距離でタッチアップ？　走るなら走ってみろ！　絶対アウトのタイミングだ！！」
しかし、その左翼方向にいるプレーヤーが問題なのである。
張本だ。
張本は幼いころの怪我の影響で、肩はすこぶる弱い。
「ま、まずい、左翼は張本さんだった！」
高橋は、今頃張本の守備のまずさを思い出しても遅い、やはり全体を見る視野が欠如しているのだろうか。

まごつく張本を見守るのはセンターの森本である。森本の守備範囲内であるが、張本がそこにいる。張本の気高いプライドを考えると、張本を押し抜けて、自分が取るまねだどぺーぺーの森本にはできないのである。
「僕の肩なら、青木を刺せる…。だけど張本さんを押し抜けたらその場で殺される…」

「おい森本！！」
張本が声を荒げた。
「え？」
「お前が捕って、青木を刺せ！」
「で、でも…」
「でもじゃない！　オレがいいといってるんだから！！」

「わかりました」
張本のお許しが出たならば森本は引っ込んでる場合じゃない。
張本がどくと、森本が落下点についた。
青木は森本の捕球をみて、スタートを切った。

森本はさほど肩の強い選手とはいえないが、現役屈指の走者抑止力を持つ。同じ外野手で、近年最多の補殺記録を持つ平野コーチから学び、正確な送球と素早いモーションも身につけたのだ。
森本の腕から放たれたボールは、カットマンの邪魔が入ることなく、一直線に捕手高橋の元に飛んでいく。
タイミングはアウト。
「うわ～　広岡監督にネチネチやられる～」
腕を回した水谷新太郎三塁コーチは頭を抱えて、
「よっしゃ～　さすがヒチョリだぜ～　さっきの失敗を取り返したぜ！！」
大沢は拳を突き上げ、さしもの広岡も弱音を吐く。
「ふん、張本がプライドを捨てるとは計算外だったな…」
結果的に、広岡がただひとつ評価していたセンターの森本に大事なボールが飛んでしまったのである。

だが、ボールは、広岡の評価しない捕手に返ってくる。
高橋は、久しぶりの捕手で、ボールの止め方を忘れたわけではないだろう。
青木は小柄な軽量級の走者だ。彼の繰り出すであろうスライディングに気を取られたわけでもないだろう。
漆黒の闇に煌々と光るナイター照明は、そのとき、高橋だけを照らし忘れていた。

「あああ～～～～～～～～」
カバーに回った武田が叫んだとき、高橋は、ボールを後ろに逸ら

していた。
スライディングをするのをやめた青木が、ホームベースをしっかりと踏む。
高橋は、森本の渾身の返球を止めれず、後ろに逸らして、致命的な一点をヤクルトに献上した。

ワンダウン、ツーダウン、でもまだいける

高橋の股からボールが抜けていったとき、高橋の時間は止まった。
茫然自失、高橋は青ざめて、口を開けたまま立ちつくしている。
ナインが激励しようとも、励まし切れないボーンヘッド。
リーダーを自認する小笠原が、ようやく重い口を開いて、
「信二、気にするな、まだ九回がある」
高橋の肩を叩くが、高橋は返事もしない。
高橋は、この回のその後記憶がないという。
ペタジーニを敬遠ぎみの四球で歩かせて、満身創痍の古田が、
「攻撃と守備でスパっと切り替えれるオレやけど、今日は違うわ…」
気力なく武田久ののびのある速球に無抵抗なまま切ってとられると、このイニングはあの一点だけで終わった。
高橋は追加点を許さない配球を成功さえたのだが、今の高橋には慰めにもならない。

「おい信二、失敗は誰でもある」
「……」
ひとつふたつうなずくだけで、無言を突き通す。
大沢でこれだから高橋を正気に戻せる人物など、ベンチにいないはずであったが…。

バキ。

鈍い音がベンチに響くと、高橋は頬を抑えていた。
「どうだ、信二、目え覚めたか?」
高橋を殴ったのは、大杉、その人であった。
「大杉さん…」
「試合はまだ続くんだ、取り返すチャンスなんていくらでもある」

「でも大杉さん…もう九回です…。僕の守備の機会はおろか、一番に入っている僕に打順が回ってくる分けがない。この回は二番の小笠原さんからの攻撃なんですよ…！」

「そうか、それなら、オレがその機会を作ってやるよ…同じ岡山県人の後輩が取り戻せる機会をね…」

「大杉さん…！！」

九回表を締めるのはもちろんこの男をおいて他にいない。

高津である。

セーブの日本記録を持つ男であるが、同記録二位の佐々木と違い、ぴしゃりぴしゃりと打者を抑える投手とは言い難い。走者をためては、シンカーを駆使してのらりくらりとリードを守る投手である。

しかし、それはペナントの話、こと短期決戦となると、高津ほどの抑え投手はこの日本には存在しない。

「ふん、ミスターゼロのお出ましだ…もらったぞ、この試合…」

辛口な広岡が全幅の信頼をおくほど、一発勝負の高津は秀でているのだ。

日本シリーズセーブ機会失敗なし、それどころか通算１１試合で無失点だ。

その強さの秘訣は、持ち前の度胸のよさもあるが、シンカーである。

彼独特のシンカーは、一発勝負の初見の打者が打ち崩すのは極めて困難。これにストレートを混ぜれば、打者は混乱の渦に叩き落とされて、気がついてみれば、勝負は終わっているのだ。

高津などたいした投手ではない、あのシンカーも二度目なら見極められると泣き言を吐いても、遅い。勝負は短期決戦、そうやすやすと二度目の機会など回ってこないのだ。

さらにバッテリーを組むのが、高津を知り尽くす古田である。

「高津、今日はまあまあの出来やなあ～」

「まあまあですか？」
「まあまあでも、オレが頭使えさえすれば、絶対確実に抑えれるがな」

打者は小笠原だ。高津と小笠原は、同時代の選手ながら、あまり相対したことがない。巨人に移った小笠原が、ヤクルトに復帰した高津と顔を合わせたとしても、それは晩年の高津である。

今、目の前にいる高津は、全盛期の高津である。

シンカーが切れる、ストレートが、うなりをあげないにしても、勢いよく胸元に飛び込んでくる。

次はシンカーと見切って、そのとおり、シンカーが来ても、それは小笠原がみた一球目のシンカーとは違っていた。それは、遅く、大きくブレーキをかえて沈み込む。一球目にみせたストレートの起動から沈むシンカーと違う二種類目のシンカーだ。

小笠原が体勢を崩して当てるのが精一杯。岩村がファウルグランドでグラブを構えたとき、すでに小笠原の足は、ベンチに向いていた。

「おい高津、きさまは、私と同じ広島県人だよなあ！！」

張本がお得意の口での攻撃で、高津を攻めてくるが、

「またその手ですか～　張本さん」

古田はあきれ果て、高津は微動だにしない。セーブ記録の日本一に座るにふさわしい、クソ度胸だ。張本すら恐れない。（広島出身で、広島ファンであった高津は、小さい頃から広島の選手と接する機会があったようだ。なかでも江夏とは子供のころから顔なじみで、よくだっこをされたりしてかわいがられていたそうだ。江夏で免疫が出来たのが、張本に萎縮しない要因か）

「おい知ってるか、この私は、高津と同じタイプの山田久志や足立と何度も対戦してるんだぞ！　山田と足立に比べれば、高津のシンカーなど子供のようなもの…通用する分けがない、いいからシンカ

ーなど投げさすのをやめるんだ」
張本は往生際が悪いのか、相変わらず口汚い攻撃をやめようとしない。
「あれ、山田さんと高津が同タイプ？　山田さんは、張本さんがパ・リーグにいた昭和５０年までストレートとカーブで抑え込む本格派やったはずだけどなあ…シンカー覚えたのは張本さんが、巨人行った昭和５１年からちゃいますか？　それに高津のシンカーは、山田さんと同じシンカーでもちょっと違いますよ…」
さすが阪急ファンであり、野球オタクの古田だ。張本が出まかせで引っ掛けようとも、てんで乗ってこない。
「ぬうぬぬぬ、こしゃくな…」
張本はシンカーにタイミングが合わない。セーフティーバントを仕掛けようとも、今日二度目だ。三塁の岩村は爛々と目を輝かせ、ならば一塁のペタジーニに狙いを変えたが…。
「またセーフティー！！　おっさん、大選手のわりにやることせこいな」
古田は口ではそういうが、張本の出方はお見通し。ペタジーニに密かに合図を飛ばし、前に出させると、華麗なグラブ裁きでバントを処理、落ち着いてベースカバーの土橋にボールを送って、
「きた！！　ついに九回二死まで！！」
古田がおもわずおたけびを上げた。
思えば長く厳しい道のりであった、何人のハムの走者が、塁を賑わしたことだろう。高津は七人目の投手だ。一点ですんでいることが不思議である。打者との駆け引きがあった、走者との潰し合いがあった。
おかげで古田は、心身ともボロボロである。
だが、あとワンナウトをとれば、すべてから解放され勝利の美酒を味わえるのだ。
そして、向かえるのは四番大杉だ。

「大杉さんか…一発に注意や…」

さしもの古田でも、大杉が、同じ岡山県人の高橋のために燃えたぎった心で打席に入ったことを知らない。

でもまだいける、ゲームはこれからかよ…。

「粘るなあ、大杉さん…」

高津は滴り落ちる汗を拭う。

「だからといって、いくら粘っても、僕のシンカーを初見の打者が見きれるわけがない」

高津のこの自信こそが、短期決戦無敵の秘密である。自信は、けして過信にはつながらない。

おごりも恐れもないポーカーフェイスから、はじき出されたシンカーは、大杉の目の前から、突然に消え去る……。

「よう高津のシンカーについてくるわ…」

ツーワンから、ファウルが五球。

ヤクルト応援団から、ひっきりなしに続いた「あと一球」コールも、さすがに音量が絞られてくる。

高津のシンカーは空振りをとれるボールでないにしろ、これだけシンカーを当てつづける大杉の技量もたいしたものだ。

「これまでの四打席無安打がなんやったろって粘りやなあ…。たしかに金やん、五十嵐の速球投手と高津はタイプがまったくちゃうけど、これほど豹変するもんか?」

古田はマスク越しから、前の打席までとの違いを探ろうとする。

「違うのは、まずスイングやな。前の打席までは張本さんが必ず塁にいた…。それを返そうとヒット狙いに切り替えるどころか、一挙に引き離すチャンスとばかり一発狙いのスイングやった…。それが、この場面はどうやろか。走者なし、一発で同点の場面。逆に、塁に出て後ろにつなぐ意識が、スイングから表れておるやんか…。コンパクト、それでいて、強烈…」

シンカー勝負にしびれを切らしたのか、古田は、高津にストレートを投げさせた。しかし、これも大杉はファウルで逃げる。

「投げるボールないやん…どうする高津…歩かせるか？」
古田の問いかけに、高津は首を何度も振る。
「自信家やなあ…」
高津の溢れる自信は、確固たる実績からくるのだ。
ミスターゼロの自分が、二死走者なし、追い込んだ場面から失点するわけがない。
古田も大杉を歩かせるのは、半信半疑だった。後続には、大下弘が控えている。
大杉と同じく、これまで快音を響かせてはいないが、球史に残るカリスマスター、この場面で何かを起こす気配がある。
「あのしゃくりあげるようなスイング、低めに消える高津のシンカーにあう気がするわ…」
古田の頭は、ネクストの大下に奪われていた。それが目の前の大杉に対する配慮にかけたわけではないが、
「シンカーや…高津、シンカーや…。投げるボールがなくなったら、一番自信のあるボールしかない…」
古田にしては当たり前過ぎる配球。最悪の結果を引き出しても、自信のあるボールなら、悔いを残さないだろう。まさか、超現実路線の古田が、そんなセンチメンタルなことを考えた分けでもないだろうが…。

高津は古田のサインに疑いの余地すらなく、腕を振り切る。
シンカーは見きられたはずであった。
大杉は、前の打席までと違って、大振りを仕掛けてこない。
シンカーは、大杉の胸元から沈んでいくが、縦起動のコンパクトなスイングは、それをとらえて離さなかった。
月に向かって打てと飯島コーチから耳打ちされたあの日から４０有余年の年月がたった。
大杉の見た月は、あの時の月と同じだろうか。
高く、高く上がったボールは、ポールのはるか上を飛んでいった

…。

「月に向かって打て…」

おもわずこのセリフを吐いたのは、打った大杉本人だけではなかった。

古田が、高津が、高橋信二が、大沢が、広岡が…心の中で叫んだのだ。

「月に向かって打ったが、ファウルや…」

１００ｍむこうのポールの上を越えていった打球、しかもバイアスがかかった古田が正しい判断ができるとは思えない。

大杉はホームランを確信して、大きく万歳をすれば、広岡は腕を回されたときに備え、ベンチを飛び出す準備をしていたし、レフトの若松は左翼の線審富沢を指さして、ファウル、ファウルと連呼していた。

損得勘定のないものは、この打球をどう判定をくだすだろうか…。

左翼線審の富沢は、グルグルと腕を回した。

１９７８年の日本シリーズ、富沢に食ってかかったのは上田利治だった…広岡は、それを遠巻きに見つめて速やかなる試合進行を望む側だった…。

「ビデオだ。あの時と違うビデオ判定だ」

富沢の頑固さは広岡がよく知っている。抗議を繰り返しても無駄。なにせ、一時間以上の抗議にも判定を覆さなかった男だ。

バックネット裏のビデオルームのモニターを６人の審判が見つめる。

ボールは確かにポールの上を越えていた。

改めて、富沢がホームランをコールすると、大杉はまた何度も拳を突き上げて、高橋信二は、溢れ出る涙を隠しもしなかった。

同点。

ミスターゼロの魔法が解けた高津は、走者を溜めては、なんとか

しのぐ、いつもの高津に戻っていた。
「気落ちするな、まだ同点や」
古田の掛け声も虚しい。
大下と勝負することもできなかった。
あれほど急激に沈んでいたシンカーは、生き物のようなストレートは、もう今の高津にはない。
六番は投手の武田久。当然、代打だ。
「残る野手は三人、片岡、ソレイタ、そして毒島さん…どれを切ってくるかや…。一発狙いでくるならソレイタ…。走者を溜めたいなら選球に優れる片岡…」
大沢が送り込んだ代打は、毒島章一。
「毒島さん…ついに来たな…」
古田が、この場面、一番出てきてほしくない打者が、この毒島であった。
「毒島…ストッパー毒島…?」
古田の要警戒をよそに、マウンドの高津はピンときていないようだ。

「そのくらい知ってますよ、古田さん…。毒島さんといえば、根本管理部長の右腕として西武黄金時代を影で支えた敏腕スカウトでしょ？」

「そんな情報いらんわ、目の前にいる毒島さんは、西武の編成でもコーチでもない。東映ッフライヤーズで一時代を築いた好打者や。とにかく三人控えていた左の代打陣から毒島さんを選択したんはそれなりの意味があるちゅうわけや。毒島さんの三塁打数は、福本さんに次いで史上二位。つまり長打で、一挙、一塁走者の大下さんを返そうとの考えや」

「一見、長打がなさそうなアベレージタイプですか、その実は、長打に注意ってわけですか」

「そうそう、とにかく低目をつけ」

古田は、ミットを高津の胸に押し当てて、気合を入れ直したが、「ちょいと待てよ…低目に集めろと高津にいうたが、高めを叩いてスタンドに放り込むタイプやない…。レベルスイングで、野手の間を抜いて、二塁、三塁とベースを奪うタイプや…。低目なんぞ、逆に格好の餌食やないか…」

古田は、なかなか考えがまとまらないうちに捕手の定位置に戻っていた。

「古田くん、どーも」

「あ、どうも、毒島さん」

毒島は実にクールだ。挨拶一つとっても澱みがない。

古田はそれまでのファイターズの選手が、どんな挨拶をしたか思い返していた。

「島田さんはどこかおちゃらけてた、ガッツは不遜、張本さんは脅迫まがい、大杉さんは、気合が空回りしていた。田中幸雄や賢介は

オレに遠慮しいしいやった。鶴岡は、とにかく、打席に入ること自体におびえているように見えた。ダルはオレと目を合わせんかった…。他の代打陣は、挨拶の余裕もない雰囲気やった…。それがどうや、この毒島さんの醸し出す空気は…。これが、東映暴れん坊軍団をまとめたキャプテンシイかいな…」

何かしらのヒントを得ようと、毒島の立ち姿を舐めるように見渡したが、

「すっとした打席の構え…力みも恐れもない…。見えてこんな…得意なコースも苦手なコースも…」

古田は、特別、濃密だった日本ハム対策ミーティングを思い起こしたが、

「毒島さんは、練習試合を通じて、一打席だけ打席に立ったが、結果はストレートの四球…そこからは何も得られなかった」

安田スコアラーのレポートを反芻する。

「データなしか…」

古田は、大きな声で

「ツーアウト、ツーアウト～」

とナインと自分に気合を入れ直した。

手探り状態の一球め、古田は無難にシンカーを要求した。

高津の投げたシンカーは、外側から大きく落ちて、ボールゾーンへと外れた。

「キレが落ちている…。かといって毒島さん逃げたら、得点圏に背負うことになる…次の賢介も毒島さん並に厄介な打者には変わらん…」

広岡は高津を替えるそぶりもない。腹を据えて、この一回を高津に任せるつもりだ。

「交代したくとも投手がおらんのや」

残る投手は、一人。延長を考えると、高津を替えることはできない。

「なら、高津で抑えるしかウチの勝ちはない…。ミスターゼロの魔法が解けた高津でな…」

シンカー？　ストレート？

二択である、高津には、この二つしかない。メジャー時代にスローカーブを駆使した高津であるが、古田の頭には、そのボールはない。

古田から、決断力が消え失せていた。二択でありながら、選びきれないのである。

「マウンドにおるのは、ミスターゼロの高津やない、いつもの高津や。どっちを要求しても打たれる気がするわ…。？　いつもの高津？　そうやいつもの高津やん。短期決戦無失点の高津などたった日本シリーズ１１試合そこらの高津やないか。オレが５００試合以上この手でうけた高津は、いつもの高津。四苦八苦しながら、度胸と粘り強さで切り抜けてきた高津やないか。一点取られたからなんや…。同点やからなんや…、負けたわけでも負けてるわけでもない。しかも二死一塁、こんなん今までしのいできた修羅場に比べれば、屁みたいなもんや…」

古田は気持ちを切り替えて、サインを出す。

高津はうなづく。顔面蒼白、息を乱す高津であるが、それもいつもの高津だ。

高津は、そんな精神状態からも、丁寧な投球を忘れない。

真ん中内側のストレート、古田がこれを選んだのは、深い理由があるわけでもない。

ただ覚悟を決めて、投げさせたのだ。

毒島は一打閃光。流れるようなスイングで、このボールをはじき返す。

ボールは一塁線に飛んでいった。

「まずい、長打コースや…一塁線抜かれる…」

だが、っそこにはペタジーニがいた。ペタジーニが横っ飛びで、これをグラブに納めた。

「ぺた～～～～」
高津は抱きつかんばかりに勢いでペタジーニに駆け寄った。
「二度めや、同じイニングで二度もペタの守備に救われるとはなあ…。巨人時代はろくにゴロもとらんかったクセに。しかしまあ、いちかばちかで勝負して、結果オーライになるもんやなあ…。これも高津や。完璧に抑え込むのが、ミスターゼロの高津なら、なんとなく抑え込んでしまうのも高津や」
同点、ヤクルトの裏の攻撃がゼロなら、試合は延長線に突入する。
古田はボロボロだ。九回に足を交えた攻撃がなかったことは幸いしたが、腕は肩までしか上がらない。
「なんとか、サヨナラで決めてくれ」
古田の願いはかなうだろうか。
日本ハムの投手は、尾崎行雄にかわっていた。
怪童である、剛速球投手である。
やすやすと古田の願いをかなえてくれる男ではない。ただ、ヤクルトには、とっておきのサヨナラ男がいた。
広岡は、今その男を呼び寄せる。

高津の綱渡りただいま開演中（後書き）

へえ？　毒島ってこんな選手だったの？
とか思わないでください
作者も知りませんから

サヨナラ男の一発で試合は終わる、きっと

「バッター飯田にかわりまして、ハウエル。バッターはハウエル、背番号４４」

シーズン最多のサヨナラホームラン五本の記録を持つハウエル。ミーティングを欠席し、ヤクルト打者の情報も持ちあわせていない高橋は、さぞハウエルの攻略法に苦慮するはずだ。いざサヨナラとなると、神がかり的な集中力を見せるハウエルは、速球、変化球、球種構わずスタンドに放り込むのである。

「細かいことを考える必要はない」

高橋は、種茂バッテリーコーチに、たしかにそういわれた。

「誰が打者だろうと、短いイニングを全力で来る尾崎は打てない。もしも打たれたら、俺が全責任を持つ…か」

ハウエルが五本ものサヨナラとなるアーチを神宮の夜空に打ち上げていたとき、高橋は中学三年だった。高橋の脳裏には、あの時のハウエルの弾道が、今もこびりついて離れない。

「それも全部、ストレートを要求しろって…」

ハウエルの素振りは、高橋にさらなる恐怖心を植え付ける。全身筋肉のその体を、ねじらせるように振り込むスイングは、強烈そのものだ。

「尾崎さんは、速球一本槍の投手。ヤクルトのことだ、抜け目なくハウエルにその情報を伝えているだろう。速球一本に的を絞り、タイミングがあったらどかーん…。せっかく、大杉さんに挽回の機会をもらったのに、それがさっそく台無しになるな…」

それでも高橋は、尾崎にストレートのサインを出す。いや、正しくはストレートのサインしか出せないのだ。なぜなら、ベンチからの指示で、このイニングに限り、高橋がどんなサインを出しても尾崎はストレートを投げる、それがベンチから出た決め事なのだから。

つまり高橋の指は、小器用に動くが、それはすべてダミー。ヤク

ルトベンチを惑わせるためでしかない。
「オレに責任が及ばないなら、どんな結果にでようとも、オレは知らん」
あのミスを取り戻そうと、いきり立つことなく、高橋は、開き直っていた。
尾崎は、両腕を何度も大きくゆすりながら、反動をつけるいわゆるロッキングモーションから、振りかぶって、第一球を投げ込む。
腕の位置は、サイドよりやや上のスリークォーターの位置。本来、左打者のハウエルには見やすい角度であるが、ハウエルは尾崎のストレートに押される。
ハウエルがとらえたと思うと、打球は三塁側スタンドに消えていった。完全に振り遅れているのである。
スピードガン表示は１５１。ダルビッシュ、五十嵐に続き、今日、三人目の１５０オーバーだ。
「速いなあ」
高橋は思わず、感嘆の声を漏らした。
だが、いまだ、高橋は半信半疑である。
「速いし、ノビがあるし、球威もある…でもこれで三つも押し通せっていわれても…」
尾崎の過ごした時代と、今は違う。打撃マシーンがある現在、速いだけでは、打者を封じ込むことはできないのだ。
「これにカーブとか、チェンジアップがあれば、また違うけど…」
思えば、高橋の捕手人生とくれば、どやされてばかりの日々であった。緩急をつけろ、高低を使え、変化球でかわせ、相手をはぐらかせろ、騙せ…。
歴代のバッテリーコーチは、決まって高橋に、このような配球術を叩き込んだ。
実際、高橋が組んだ多くの投手が、配球で打者を翻弄する技巧派投手。ダルビッシュにしても、その限りだし、ミラバル、武田勝、金村、正田、八木、スウィーニー…。

高橋と好相性で、よく組んでいたグリンが、かっとなって速球で押しにくると、「抜いた球のサインを出して落ち着かせろ」とベンチから怒号が飛んだものだ。

だからなのか、ストレート一本で押せと指示されても、そう簡単に納得できるはずがない。

それでも高橋は、機械的に、意味のないサインを出し、尾崎は愚直にストレートだけを投げ込んでくる。

１５３。

尾崎がスピードガンに表示させた球速は、初球よりも2キロ増していた。

「スピードガンの表示を全面的に信用する分けではないけれど…」

高橋のミットは手応えを感じ取っていた。

「いけるかもしれない…あながち、ストレート一本槍は間違いじゃないかもしれない…」

初球、振り遅れたファウルを飛ばしたハウエルは、二球め、かすることもなかった。

三球目。

ハウエルが待ち構えたところに、尾崎は投げ込む。

１５５。

スピードガン表示は、2キロ刻みで、尾崎の状態が上向きになることを示していた。

それでも、二球めまでと同じ真ん中だったら、打たれたかもしれない。ただ尾崎は、このボールにささやかな技巧を施していた。

ハウエルが比較的苦手として、手を出してくる高目のボールゾーンに投げ込んだのだ。中腰の高橋が、この剛球をミットに収めてたとき、ハウエルは2回目の空振りを喫してた。

日本ハムは、表の高津に続き、裏の守りで、ヤクルトのジンクスをまたも握りつぶしたのだ。

サヨナラ男のサヨナラの一発を封じ、みやげ一つ持たせずベンチ

に帰らせた。
「こうなると思ったわ」
「古田さん、これまたネガティブな発言ですね、聞き捨てならない」
「青木、よう考えてみ、ハウエルは、たしかに5本の記録サヨナラ本塁打の記録を持っている。だがな、通算でも、その5本なんや。つまり4年在籍して、記録を打ち立てた年以外一本も打っとらんのや。これはもうな、生涯打てるサヨナラ本塁打を、その年に打ち尽くしたに違いないと思ってたんや…。一年で、サヨナラ5本打てば、人間の持ってる運など使い尽くすちゅうわけや」
古田は、チームの空気に構わず持論を展開すれば、高橋は、八回の悪夢から、すっかりと立ち直っている。
「これも捕手の醍醐味かもしれない…。何も考えず、ただ投手の才覚だけに頼り、ひたすらミットと体で受け止める…。もし、こんな投手ばかりだったら、オレ一塁手なんてやってねーわ…」
投手に気をつかわないときの高橋は、優秀なるバットマンである。次の打席があるとしたら、それは好影響を与えるだろう。

ただ遠い夜空だけ見上げて振っていたブンブン丸・池山も、一太刀浴びせようバットをひとあまり余らせて握っていた、寡黙なる暗殺者土橋も、尾崎のストレートの餌食になった。

12球。これが尾崎のこの回に投げた球数だ、もちろん全てストレート。いくらでもカットして粘ろうと企んでいた土橋にさえ、わずか5球で料理したのだ。
2ー2。
ヤクルトー日本ハムの、JWBC／Lの開幕ゲームは、延長線に突入する!

「ま〜た、出番なかった」
ネクストサークルには、投手高津の代打に控えて広沢が待ちわび

ていたが、待ちくたびれに終わった。
「九回だぜ。なんでヤクルト黄金時代の四番打者が九回終わって出番ないかな～」
　ヤクルトには、過去６度の優勝で、広沢を含めて５人の四番打者がいる。相手の日本ハムの四番を務める大杉。今、四番を打つペタジーニ、そして続く五番の古田。阪神からエントリーするオマリーを除くと、試合に出ていない四番打者は広沢だけである。
「オレ、広岡監督に嫌われてるのかな～。オレの名字は、広岡監督の広に、沢村栄二の沢を取って、親が名付けてくれたのに～」
　不満ありありの広沢に、僚友池山がグラブを投げつけてくる。
「なんだ、イケ、オレにグラブを投げつけて…」
「広沢さん。広岡監督が、１０回から守備につけっていってましたよ」
「オレが、守備から試合に??　なに考えてるんだ、広岡のおっさん…。しかもライトだと?　どうなってもシラネーゾ、おい」

エキストライニング・ストレッチ

「ふう…延長か」

この試合を、ネット裏で偵察していたオリックス日高は、スコアブックをいったん閉じて、一息をついた。

「そういえば結構来ているな…」

日高だけではない。各球団、この試合に偵察隊を派遣していたのだ。

日高のすぐ後ろにいるのは、阪神から派遣された安藤。

日高と安藤は同級生であり、ともに九州から関西球団に身を預けた気楽さからか、ざっくばらんに情報交換を繰りかえしていた。

「日高、捕手の視点から、この試合をどう見る?」

「一見、好ゲームだけど、チャンスの潰し合いだね、とても締まった試合とはいえない」

「投手のオレからみてもそう思う。とくに苛立ちを覚えるのは、日本ハムの攻撃だよ」

「打順かな。最初に組んだ打順構成が悪かったかもしれないな。こういうオールスターをかき集めた試合にありがちなつながりのなさ。当たってる打者のあとに当たってない打者が続く、運のなさもあるけどね…。偉大なる選手に、遠慮して細かい采配を使えないようじゃ、日本ハムに勝機はないよ」

「日高、お前、それだけの観察眼がありながら、なんでオリックス投手陣が崩壊させるんだ?」

「……」

「あれ、オレ、聞いちゃいけないこと聞いた?」

「いや、合併とか、毎年かわる監督とか、次々抜ける主力選手とか…好成績残した投手がすぐにいなくなるとか、新しくきた首脳陣が、なぜか経験実績ある僕を差し置いて、自分のカラーを出そうと違う捕手を使いたがるんだよ…。辻、前田、鈴木さん、川崎さん、吉原

さん…。比べる必要なく、僕のが上なのになあ…。って、何をいわせるんだ、安藤。０２年には防御率１位、２位、０８年は４人の２桁勝利を作り出した日高くんだぞ…。なにも、毎年、毎年、指を加えて、投手陣を崩壊させた分けではない」

「悪かったよ、阪神も、９０年代は似たようなものだったから、気持ちは分かるよ…。まあ、オレが入団した０２年からは黄金時代続きだけど…」

「自慢も自虐もみっともないだけだ…。安藤、何球団確認できた？」

「オレと日高で、まず２球団。目の前で熱戦を繰り広げたヤクルト日本ハムの両球団をのぞくと、残り８球団…」

「あそこに、巨人の鶴岡がいるな」

「ああ、あれも同級生だ…。横に同じく、巨人の古城がさんがゲームを見つめている」

「向こうの席には、広島の梵と天谷、赤松が雁首揃えている」

「さっきん、売店に飲み物かったとき、ロッテの今江がいたぞ、いやあ０５年のシリーズで打ちまくってすいませんと、生意気なこといわれたけど」

「僕もトイレにいったときに、西武の栗山にあった。アイツ、兵庫出身の生粋のオリックスファンだから、サイン求められたよ」

「おや？　バックスクリーンみたか？」

「え？」

「今、ソフトバンクの松田と本多が映ってたぞ。ボール片手にご機嫌なのか、気前よく、カメラ目線で手を振っていた」

「セリーグのクセにソフバンの若手の私服姿よくわかったなあ…」

「あのう…日高さんに、安藤さんですよね…」

「ん？」

「あ？」

「あ、ご挨拶が遅れましたが、楽天の嶋です…近鉄から雇われて、スコアラーやってます」

「あ、嶋か、どっかでみた顔と思ったわ…」
「そろそろ試合再開しそうなので、失礼します…」

「これで、6球団か…残り2球団…」
「どこだ?」
「中日…」
「中日? あのねちっこくて。いやらしくて、抜け目がなくて、優勝されると野球人気がガクッと落ち込む中日が偵察員を派遣しないわけないよ」
「う〜ん…」
日高と安藤が唸りを上げると、日高のいた前列に座っていた客が一斉に立ち上がり、こちらに向かって振り返った。
「シツレイネ…」
まず声を荒げたのが、チェン。台湾訛りの日本語はどこかいじらしい。
「こうして、わが中日は…」
モテモテ男の浅尾が続き、
「総勢7人の」
高橋聡文…浅尾と同じくWBC辞退で一躍脚光を浴びた投手だ。
「大偵察隊を編成して…」
彼は、朝倉だ。投球フォームも、投球パターンもコロコロ変わる。そのためか過小評価されるきらいがある。
「日本ハムとヤクルトを丸裸にして」
そして、藤井。典型的な技術が供わない身体能力だけの選手と思いきや、冬季リーグで鍛錬を積み、レギュラーの座を獲得した努力の男だ
「それを逐一、わが一群の将、星野仙一に報告するのだ」
とゴーグル男、完全未遂、じぇんかんで勝って先発を勝ち取るでお馴染みの山井。
「わかった、日高に安藤」

この中では、最年長の英智が締める。彼こそ典型的な打力が拙い身体能力だけの選手だ。

彼らはそう伝え終えると、一斉に席に座り、それから日高、安藤に構わず、仕事に専念しだした。

「中日はやっぱいたなあ」

「それも7人…だってよ」

「中日らしい、実に中日らしいなあ…」

「これで残る偵察隊を出していない球団は…」

「尾花監督を迎えて、アナライズベースボールを掲げる」

「横浜ベイスターズ…」

「どこの球団も派遣しやすい現役選手を偵察隊に派遣しているところみると、横浜はさしずめ…」

「石川、藤田、山口、武山、下園あたりの売り出し中の若手選手が、この球場のどこかでこの試合を偵察しているはず」

「はずか…。横浜は公式戦のスコアラーさえ、経費の問題で人員削減してるんだぞ…」

「いなくても不思議じゃないか…。このＪＷＢＣ／Ｌのキャンプも横須賀の練習場の格安だったみたいだし…」

「いややっぱいるよ、僕たちが見つけられないだけさ」

日高は、性善説で答えを出したが、実際、このスタンドのどこにも横浜の偵察隊はいなかった。

彼らは、横須賀のベイスターズの合宿所で、この試合を偵察していた。

「あ、藤田さん！　中継終わっちゃった」

「クソ、だから地上波はやなんだよ…。あ～、神宮鵜行く経費もおりないなんて」

「石川、リモコン、リモコン…。ケーブルのフジでやってるそうだぞ…」

彼らは、地元テレビ局のＴＶＫ（北海道のテレビ局から特別にネット）でこの試合を観戦していたが、試合が長引いたため、時間切れで中継終了。

「お、山口、このアニメ知ってるか！」

「あ、知ってますよ、僕の世代でも…。これジャンプの漫画でしょ？！」

彼らは、チャンネルを替えている途中に、アニメ専門チャンネルに目を奪われ、その後、野球中継にチャンネルが戻ることは、二度となかった。

「ライトだってよ、ライト」

広沢がライトにつき、打順は九番。

「九番？　あ、次の回は九番、オレからか！　さすが広岡監督、三時間ベンチに座りっぱなしのオレの体調を気遣って、まずは守備につかせて、試合の雰囲気になれさせる気か～　いやあ、さすが名将と呼ばれる人だけあるわ～　いよ！　大監督！！」

なにも、広岡はそこまで広沢に気遣ったわけではない。ただ単純に、外野手の底がつきただけなのだ。

「広岡監督、どうしましょ…広沢が外野手ですよ！！」

「ふん、あわてるな、武上。おまえは、だから凡将なのだ。いくら守備のまずい広沢とはいえ、ライトだ。そうそう打球は飛んでこない」

延長ともなると、広岡はもう半分やけだ。理詰めの野球を葬り去り、運命を天に預ける。

「あ！」

「え！　え！」

先頭の田中賢介は、替わったばかりのヤクルトの最後の投手、岡

林の初球をとらえると、打球を、ライトに飛ばした。

「広岡監督～　さっそく広沢に！！！！」

「ふん、慌てるな、ふん…」

まごつく広沢、ふらつく広沢、あんなに遠くにあるのにフェンスを怖がる広沢。

「外野フライってどうやって取るんだっけ？！」

エキストライニング・ストレッチ（後書き）

オリックスファンの方から、オリックスＶＳ阪神がみたいとのメッセージがあったので、こういう風にしました
え？　日高ＶＳ安藤じゃだめ？

「右！、右！」
センター青木が叫んだ。
「前、前、前…！！」
二塁の土橋に終わらない。
「ヒロサワ、ヒダリだ、ヒダリ！！」
われ関せずと、孤独を愛し滅多に声を出さない一塁のペタジーニまでもだ。
ヤクルトはチーム一丸となって、ひとつのアウトを取りにいく。
「右だ、左だ、前だって、どこいきゃあいいんだよ…！」
「広沢さん、下がってください。オレが捕ります！！」
「青木、もう間に合わん…」
広沢が目をつぶって、万歳をする。
「あれ、入った？」
天は、一体となったヤクルトナインの心意気に応えたのだ。広沢がいちかばちかで上げたグラブに、ボールは吸い込まれた。
平凡なライトフライを捕っただけで、広沢はガッツポーズだ。それを見たヤクルトナインの盛り上がりと来たら、これがただワンナウトを取っただけですまないことは分かる。

「ふん、これだ、これだよ。私はこれを計算して、広沢を守備から入れたんだ…これで流れはヤクルトのものだ…」
妥協を許さない超現実路線の広岡でさえこれだ。試合は、単純な力関係だけでは、もう決まらない。流れにのって勢いに乗じたものが、勝ち名乗りを上げられるのだ。

ひとつのアウトをとって落ち着いたのか、岡林はマウンドにそびえ立つ。

岡林は、パラグアイで少年時代を過ごした投手。一年目は抑え中心で１１勝を上げ、二年目は、空のキャリアイヤーとなった。いや彼だけでない、岡林を語るものは、すべてこの年にみせた熱投に、彼の記憶を集約する。たった９日間で合計３０イニングを投げた日本シリーズ、７回から登板して、１５回まで投げ、引き分けを勝ち取ったあの試合…。岡林の投手人生は、実質、この年に終わることになったが、彼が見せたマウンドさばきは、ファンの心に永遠に残る。

「ヒチョリか、柏原さん、どっちでもいから出てくれ…」

打撃に集中できる権利を得た高橋は、そう強く願う。八番の森本と九番の柏原のどちらか塁に出れば、一番の高橋に回るのだ。

「クソー。這ってでも塁に出て、手負いの古田さんから走りまくろうと思ったんだけどなあ…」

森本は首をかしげる。ストレートのおされて二塁ゴロに倒れたのだ。岡林の球筋を確認しようと、高橋は森本を捕まえる。

「どうだった、岡林さんは…」

「まっすぐも１４０そこそこだし、スライダー、フォークも特別すごいってわけでもないのに…なんだろう、気迫に押されたのかなあ…腕の振りに惑わされたのかなあ」

「そうか…。岡林さんといえば９２年の西武とのシリーズやったなあ。ヒチョリお前も見てたろ？　オレより二つ下だから、お前小６だったか？」

「あんまよく覚えてませんねえ…オレ、サッカー派だったから、小６のころといえば、Ｊリーグの開幕待ちわびて、地元の読売ベルディに夢中だった時期ですよ…」

「ふ～んそうかい。オレは学校から帰ってきて、かじりつきながらテレビ見たけどね」

「あれ、岡山も中継あったんですか？」

「バカにするな。つうか岡山だろうが、日本シリーズは全国中継やろ。それよりこの回、先頭が賢介で、次にお前や、で柏原さんはさんで、オレ。これ０９年のうちの打線の流れだ」
「あ、一番賢介、二番オレ、三番稲葉さんを柏原さんに替えて、四番が信二さん…たしかに」
「だから期待したのに、お前も賢介も塁を賑わせないって…」
「って戦犯候補だった二人が無駄口叩いてる間に、柏原さんが、レフトフライに倒れた」
「あ～、回ってこなかった…回ってきたら、適時打打てる予感あったんだけどなあ…」

三者凡退に終わったが、ムードを沈ませないように、大沢は、ナインに喝を入れる。
「まあ気にすんな。ヤクルトの投手は、もう岡林しかいねえ。うちがゼロに封じこめてりゃあ、絶対勝てるぞ、てめーら」
大沢の言う通り、岡林は最後の砦である。
「ふん、岡林には悪いが、彼は元々、この時のために入れたもの。腕が折れようと、あれが使えるイニングまでは投げてもらう」
広岡は、岡林をリリーフ要員としてベンチ入りを決めたが、勝利の方程式に組み込むつもりはなかった。緊急時のロングリリーフとして入れたのだ。
ところがで、広岡がいう、あれが使える回とはなんであろうか…。

一塁側、ヤクルトのブルペン…。伊東昭光ブルペン担当コーチが、
「おい、どんどん投げ込め。早く肩を作るんだ」
早めに肩を作るように促すが、もう投手は使えないはずだが…。
「相川はどうだ？　体はほぐれたか？」
「はい、伊東コーチ、いつでもいけます…」
ブルペンには、捕手の相川もいた。捕手のベンチ入りは、秦と八重樫だけのはずだ…相川は２５人のベンチ入りに未登録だ。

いったい、彼らは、なんのために急ピッチの調整をしているのだろうか…？

怪童に限界はあるのか

「おっしゃ、この広沢さまが、神宮の夜空に一発打ち上げて、このクソ長い試合に蹴りをつけるとしましょうか…」

広沢は、かのように大口を叩くが、ここにヤクルトにとって不吉なデータがある。

広沢が外野守備につくと、そのチームには不幸が訪れるというものだ。実際、広沢が外野に転向したのは、８７年、プロ三年目のことであった。以後、８７～８９まではライトに専任。その間、ヤクルトはＢクラスに低迷。９０年から一塁に戻り、９１年まで外野と兼任して試合に出つづける。すると、ヤクルトの成績は上向きになり９１年は、久方ぶりのＡクラス。９２年から一塁に専念しだすと、途端にチームは連覇。９５年にＦＡを行使して巨人に移籍すると、一塁に落合がいたことから、空いていたレフトにコンバート。その年の巨人は３０億円を使い、大型補強しながら、三位に終わる惨敗ぶり。翌９６年も、レフトは広沢の構想だったが、オープン戦で故障してシーズンの大半を棒に振ると、チームは優勝。９７年マック退団で松井がセンターに移り、空いたライトを広沢が実績を盾に奪い取ると、清原、ヒルマン、石井らの補強で１００勝確実とまでいわれたチームがまさかの低迷…。以後、広沢の所属したチームに日が当たるのは、０３年の阪神フィーバーまで待たなければならなかった。この時の広沢は、代打と一塁手に仕事を限定していた。

つまり、広沢が外野守備に多くついたチームは、優勝どころか、優勝争いにも縁遠くなるのだ。

これはジンクス云々の話ではない。それだけ広沢の外野守備力がチームの足かせになる証拠だ。

ペタジーニに、打力も守備力も、足元に及ばず、外野に安住の地を求めた広沢は、ぜがひでも、バットで結果を残さなければならないのだ。

「青木、おめー知ってるか。怪童尾崎さんをよお」
「僕の生まれる、ずっと前の投手ですからねえ～」
広沢は次の打者の青木をつかまえては、おしゃべり。実にのんきなものである。
「ふふふ、オレが生まれた１９６２年にデビューしたんだぞ…ふふふ。それだけだ…」
「はあ…」
広沢に、尾崎の特別な攻略法などない。ただストレートに力負けせじと、関根監督時代のように、振り回すしか手立てはない。

「持つかなあ、この回もストレート一本で…」
種茂バッテリコーチは、この回もストレート一本勝負を高橋に命じた。
「二回も連続、ストレート一本槍で抑え込めるほど、甘い打線じゃないと思うけど…」
尾崎は高橋の不安をよそに、ストレートを真っ向から投げ込む。１５６。
広沢はフルスイングでこれに応えたが、バットは虚しく空を切る。
「また、速くなっている…。１３球目で最速がまた来たぞ…。もしかして尾崎さんは、投げれば、投げるほど、球速をましてくるタイプなのか…。そんな投手いっこないと思うが、なにせ怪童の名を授かった投手だ…ありえない話しでもないかも…」
高橋は、夢を見ていた。そんな、投手いるわけがないのだ。尾崎のストレートは、この初球が頂点…。あとは緩やかな下降線をたどるだけであった。
尾崎は、肩で息をするようになる。たった１３球、いや全力投球の１３球はそれだけで、怪童の体力を奪っていた。
二球め、尾崎のストレートは１５４キロを計時した。
「はやえな、なあ高橋くん」

二球めも虚しく空振りした広沢は、相手を称賛して止まない。
「ええ、とんでもない人ですよ」
高橋は、広沢が誘いをかけたことに気づかない。素直にストレートの速さを認めたことで、広沢は全球、速球勝負と確信した。九回の上がりたてで、フレッシュな状態の尾崎ならば、広沢に悟られようと、問題なく切って取れるのだが、左肩下がりの尾崎のストレートは、広沢に付け入るスキを与える。
高橋は、疑いなくストレートのサインを出した。（それ以外のサインは封印されているのだが）
尾崎の投じたストレートの初速は１５１。終速となると、もっと落ちるだろうか…。そのストレートを広沢は待ってましたと、ぶっ叩く。
綺麗に腰がまわり、弾き飛ばした打球は、センター方向を襲う。
「いけーーーー」
広沢は叫ぶ。
打球は、夜風に乗り、グングンと伸びていく。センターの森本がひたすら背走、また背走。フェンスの手前で、こちらをくるりと振り返り、打球はグラブに収められる。
ヤクルト応援団の歓声はため息に替わる。
「おしい、実におしかった、手応え十分だったのにな～」
広沢は首を傾げながら、ベンチに戻るが、打席に向かう青木を捕まええて、
「青木～。お前ならいけんぞ。尾崎さんの速球は、たしかに落ちてるわ」
「ほんとですか？」
「ああ、一球ごとにな。捕手の高橋は、それに気づいてない…狙っていけ」
「わかりました…」
広沢の読みどおり高橋は、尾崎のストレートが下降線を描いてい

ることに、いまだ気がついていない。球速表示が落ちていることは把握しているが、ストレートの力自体は、まだあると思い違いしているのだ。

打席に入った青木は、大きく息をついた。安打製造機の一番打者だ。出塁第一のはずであるが、青木は、自分一人で決めてやると意気込んでいた。

「広沢さんがいうとおり、落ち気味のストレートなら、小柄な僕でもスタンドに叩き込む自信はある」

ＷＢＣで三番に座り、２０本のホームランを記録したこともある青木だ。狙ってとらえれば、一発を打てる力は十二分にある。

疲れが来たことは、尾崎本人が一番知っていた。久々の登板で力を入れすぎたのか。蒸し暑さの残る、神宮の秋の夜空は、思ったより過酷な条件なのか。

それでも、尾崎はストレートを投げるのをやめない。

コンパクトで鋭い青木のバットスイングは、尾崎の高めのストレートを、真芯でとらえた。

打球は炎となり、一二塁間をライナーで抜けていく。

「くそお、高めのボールを芯で叩きすぎた…。もうちょいボールの下っ面を叩いてたら、今頃スタンドにぶち込んでいたのに…」

青木は、ヒットを打っても納得しない。さすが向上心あふれる第二のイチローである。

高橋は、今になって、尾崎に限界がきたことに気づいた。なにも青木の一撃が、高橋の目を覚まさせたわけでもない。

球速表示。

「あれ、今のボール、１４８キロ？　あれれ、あれ、どんどん肩が温まって、とんでもないボールを小出しにするのが、怪童たる由縁でしょ？」

高橋は、あごに手を当てて、考え抜いた。

「もしかして、尾崎さん、限界？　そういえば、１５６が表示され

てから、小刻みに球速落ちてるぞ」
　１５０台から１４０台に突入して、ようやく高橋は気がついたのである。
「いくら怪童でも、投げる度に、球速が増す投手なんて、この世にいるものか…次は若松さん、その後は岩村、でペタちゃん…おいおい、この落ち気味のストレート一本で、この歴戦の打者たちをどうやって封じ込めっていうんだよ」
　高橋は、ベンチに命乞いをした。種茂バッテリーコーチは、その球界随一の美男子といわれたマスクを、ひとつも崩してはいない。
　大沢はベンチにどっかと腰を降ろし、尾崎を交代するそぶりも見せない。
「なんてたって、投手は怪童尾崎だぜ。回の途中で替えられかっよ」
　彼らは、尾崎に心酔しきっている。
　尾崎が二回ぽっちで体力が切れるわけがない、打たれる分けがないと…。
　だが、現実の尾崎は電池切れ寸前で、高橋は、電池を交換する術も、長く持たせて、なんとかしのぐ方法すら知りえない。
「これでもストレート一本？　サヨナラ喰らいますよ…」
　尾崎も尾崎だ。限界を自覚して、種茂の出した決まりごとを勝手に破り、カーブでもシュートでも投げ込めれば、それで裏をついて抑えられるかもしれないが、
「ワシのへなちょこシュートや、小便カーブで若松を打ち取れるかのう。いや、その前に、カーブって、どう投げたかのう…」
　変化球を投げきれる技術すらないのだ。

　高橋は、ストレートを要求した。
　それしかサインを出せないのだ。
　尾崎は、ストレートを投げ込んだ。
　それしか投げられないのだ。
　青木はスタートを切った。もはや尾崎にも、高橋にも、青木を一

塁に釘付けさせておく余裕がなく、青木は悠々と二塁を陥れた。
このボールの球速は１４６キロ。若松が盗塁援護の空振りをしたことで、ストライクはとれたが、限界は、もはや明白。
それでもベンチは動かない。

「ピッチャー交代してくれえ～～～～」
高橋は、心の中で叫んだはずだった、だが、それは声となり、盛大の応援が鳴りやんだ、一瞬をつき、大沢の耳にも尾崎の耳にも届いたのだ。
采配に口出し。
越権行為。
若輩者が、大先輩に物言い。
高橋が、しまったと気づいた時、既に手遅れだった。
高橋に向けて、味方のナインから、氷塊のような冷たい視線が突き刺さる。

「ガッツさん！」
高橋は、小笠原を捕まえては問いただした。
「今、オレなんて言ったか聞こえましたか？」
小笠原は、いたってクール。顔色一つ変えず、高橋に死刑宣告を施す。
「ああ、なんでピッチャーかえねえんだよ、バカヤローとはっきりとな。お前の一言で球場中が凍りついたよ」
小笠原は、多少、尾ひれをつけたが、高橋のいいたいことはまさにそれ。尾崎が頬を膨らまし、ベンチから大沢が飛び出し、大杉はおもしろくなったとぞ笑いを堪えきれず、走者の青木は、ただ呆然とし、打者の若松は高橋に同情をする。
「高橋、た、た、大変なことになったあ…。わ、私まで思わず緊張してしまった」

「おい、信二！」
大沢のダミ声が高橋の胸に突き刺さる。
「な、なんでしょうかかか」
しらばっくれても遅い。もはやこのグランドの誰もが、高橋の采配批判を耳にしているのだから。
ベンチ、内野までしか届かなかった声が、わざわざ、田中賢介と柏原経由で外野にも伝わる。
「なに？　高橋がそんなことを！　ム！　これは采配批判だ。勝手な言動でチームワークを壊そうとするとはなんたる不届きもの。喝だ！　喝！」
左翼の張本の耳まで届き、センターの森本は、
「信二さん、ご愁傷様…」
と拝んだマネをし高橋の冥福を祈る。

高橋は生きたまま、死んだのか？

しかし大沢のかけた言葉は意外なものであった。

「悪かったな」

「え」

「たしかに投手の替え時だ。オレも怪童尾崎の伝説に遠慮しちまってよ。なかなか替える踏ん切りがつかんかったんだ。この回だけは尾崎と心中だ。なんてよ、あきらかに限界の投手を見きれないなんてオレは監督失格だ。お前の一言で、目覚めた気分だ」

大沢に続き、尾崎がゆっくりと高橋に近づいてくる。

「ワシもや。一回ぽっち投げたくらいで限界がくるなんて情けないったらあらへんわ。速球一本槍じゃ通用せんから、投球術でかわそうと思えど、その術が今のワシにはない。まあ、元々、このオールスターを速球だけで抑えようなんて、虫のいい話やったんや。ワハハハ、また勉強してくるわ。そんときは、この厄介な連中に通用するカーブでも覚えてくるから、高橋、待っとけよ！！」

高橋にそう告げると、なんのわだかまりもなく、尾崎はマウンドを、自ら降りた。

大沢は、待ってましたと、ブルペンで念入りに作らせていた、

「ピッチャー、尾崎に替えて木田！」

木田をコールした。

「は？　え？　あ？」

高橋は、呆然としている。

「オレ、また助かった？　よくわからないけど…」

「北海道日本ハムのピッチャー尾崎に替わりまして、木田！　背番号１６！」

ブルペンから小走りで登場したのは、木田勇。１９８０年のルーキイヤーにあらゆる投手タイトルに加え、新人王、ＭＶＰを獲得し

たサウスポーだ。

だが、その後は、転落の一途、翌年、１０勝をなんとか上げて、日本ハムの優勝に貢献したのが最後の輝き。大洋移籍初年度、そこそこの数字を残したが、あとは散々たる成績が残るだけで、プロ野球史上、最も転落の激しい人生を送った選手である。

「木田か…。これは手強いぞ」

小さな大打者若松が思わずつぶやきを漏らすほど、木田はとんでもない投手であった。

１４０キロ中盤のストレートによく落ちるパームボールは、左打者の若松にとって、最も危険な相手といえる。

左投手でパームを自在に操る左投手など、滅多にいるものではない。現役では、西武の帆足が左のパームボーラーとして知られているが、帆足は出て１４０そこそこの速球、しかもそのパームたるや、パーム本来の抜けて落ちるという代物ではなく、右打者に食い込む、遅いスライダーのような球筋である。

つまり１４５にパームを交える左投手など、まず類をみないのだ。だからこそのタイトル独占であり、その後の転落である。

パームボーラーは短命と言われる。パームの元祖、３００勝小山正明をのぞき、中日の藤沢、広島の小林、西武の石井丈。いずれもパームを武器に旋風を起こしたが、それは一時の夢でしかなかった。

パームは諸刃の剣であるが、今の、１９８０年の能力に完全に復元された木田にとっては、大きな武器でしかない。

高橋は、速球を要求しても、パームを要求しても、変化をつけてカーブのサインを出してもよかった。

どれを投げても、若松が、岩村が、かの好打者は、木田のボールにきりきり舞いなのだから。

木田は三振を取るたびに、派手なガッツポーズを繰り返した。思えば、プロ野球のガッツポーズの始祖といえば、この木田勇であった。

だからかよく似合い、ガッツポーズを見せつけられたヤクルトナインは、苦笑いを浮かべて、それを受け入れるしかなかった。

こうして十回裏のゼロが刻み込まれた。

試合は延長１１回。

「クソ～　決まらんかったか」

古田は嘆いても守備につくしかない。捕手は古田だけだのだから。

「古田よ。踏ん張れ、あと二回だ。二回我慢すれば…」

「オーイエス」

古田は、中西バッテリーコーチのはっぱにおどけた返したが、

「あと、二回か…よっしゃ」

それを励みに、気合を入れ直した。

あと二回？　あと二回とはなんのことだろうか。

１２回が終わると何が待ち受けているのか。

捕手、相川がブルペンで調整していることと関係性があるのだろうか？

「あ～　またライトの守備位置にいかないかんのか～　憂鬱だな、面倒だな、また恥かくかなあ…。ペタたしか巨人時代ライト守ってたろ？　一塁と交換してくんねーかな…。一塁ならちょっとしれた名手だぞ、この広沢さまは…。ペタのヤローは肩も強いんだ、ライトから捕手を飛び越えて、三塁側のカメラ席にぶち込むくらい…」

広沢には関係性はなさそうだ。

バントをしない二番打者

「よっしゃ！　この気分、捕手をやりながら、頭はクリア！　四番一塁の気分で打席に入ろう」

何度も窮地から救われた高橋は、すっかり開き直って乗り気だ。

岡林の投球なんのそのと、センター前にきれいにはじき返す。

高橋は、先頭打者として十分な仕事を果たした。

「よし」

高橋は、塁上で強く拳を握りしめる。

「ガッツさん、オレをホームにかえしてくださいよ」

二番は小笠原。二番小笠原と言えば９９年、００年にパリーグを席巻した「バントをしない二番打者」である。

しかし、延長のこの場面、二番打者の役割は高橋をなんとしてでも二塁に送ることだ。

小笠原は、三塁コーチの高代からサインを見る。顔色一つ変えず、再び生やしたヒゲをビクつかせた。

小笠原の受け取ったサインは、バントか、強打か、それともエンドランか。まさか高橋に単独スチールはないだろう。いくら、古田の送球に問題があるとしてもだ。

小笠原は、腰を沈めて、バントの構えを取った。二塁に封殺しようと、サード岩村が、ファーストペタジーンが、猛然と前進してくる。

強烈なバントシフト。慣れた打者なら、様子見で見送るところだが、バントをしない二番打者小笠原は、かまわずバントをする。

ボールは投手前に転がる。フィールディングのいい岡林が、拾い上げて、すかさず二塁に送球。ベースカバーに入った池山が、二塁ベースを踏んで、一塁に転送。

すわ、併殺完成？

小笠原が飛んだ。

派手なプレーを好まない小笠原が、決死のヘッドスライディングだ。

ヘルメットを飛ばして、ベースに頭から飛び込む。

一塁塁審の判定は？

「セーフ」

腕は横に広がった。

舞い上がった砂で、惑わされたのか、小笠原の執念がみのったのか、微妙な判定は日本ハムに味方をした。

「打たせたほうがよかったか」

大沢が嘆く。采配が裏目に出たのは、これが初めてではない。

合議制。

二度の優勝を誇るヒルマンを監督に押す声が強かったなか、大沢は監督に就任した。世論は、大沢に全権を託すことを許さなかった。とくに強い声が上がったのは、今の本拠地北海道だ。

「大沢になにがわかるか」

「ヒルマンに任せろ」

「白井コーチの作戦を委任すれば大沢でもいい」

今のバント失敗で、日本ハムの球団事務所の電話はパンク状態。

「だから、大沢はやめとけといったんだ」

「なにが親分だ、えらそうなクセになにもできないじゃないか」

「もう大沢の出るテレビはみない」

だが、北海道のファンは、この作戦が、白井総合コーチから出たことを知らない。大沢は強打を推したが、「大事な走者はきっちりと送りましょう」との白井の意見が通ったのだ。

白井にしても小笠原のバント技術に疑問がなかったわけではない。だが、試合前日に小笠原にバント練習をさせたことから、試合でもできるはずと、バント作戦を推したのだ。しかし、できるはずでは、実戦には不十分。できるではなくてはバントのサインを出すべきではなかったのだ。

「う〜ん、昨日の練習の感じなら決めてくれると思ったんだけど」

白井は悔いるが、責任を持つのは、監督の大沢である。
「気にするな、白井、こういうときもあらあ。オレが全部、責任持つから、気にせず意見を出してくれや」
大沢は、親分としての器の大きさを見せるが、これから合議制が機能するかは別問題である。

「う～ん、古田が送球不能の状態とすると、あえて捕手前に転がせるのも、面白かったかもしれない」
白井は懲りずに、奇策を練り上げる。

「オレの出番はまだかいな」
出番を待ちわびていたとのは、広沢だけではない。日本ハムベンチにもいたのだ。
片岡篤史。
日本ハムの残る野手は、ソレイタと彼だけだ。
「ちょい待てや、張本さん出るやろ、大杉さんと大下さんがああなると、六番の投手のところに二死満塁のチャンスがくるな」
片岡は指折り数えると、希望の眼差しを見せる。
「そこで代打オレや。四時間近くベンチにいたオレがひーろーになる、大チャンスやないか」
それほど人生は甘くない。片岡が望むとおりになるなら、阪神一年目に彼は大活躍をしているし、出番を待つことなく、スタメンで起用されていただろう。
だが、現実は時に望みどおりになる。
「あ、オレ、ほんまにヒーローやん…」

バントをしない二番打者（後書き）

ポイント不動でかれこれ５０話。

サモアの怪人

「よっしゃ来た！」

片岡が思わず立ち上がるのも無理はない。ヒーローになる絶好のチャンスが、目の前に広がっているのだから。

二死満塁。

ヤクルトがこの大ピンチをこさえたのは、張本を敬遠して大杉を併殺でしとめようと企んだことからだった。

大杉は結果、火のでるようなレフトフライに倒れた。前の打席で一発を放っている大杉を凡打に打ち取っても、広岡は満足するそぶりはなく、

「ふん、古田め、あせりおって。もっと丁寧に配球するば、併殺に切れたものの」

広岡は、古田を攻め立てたが、それは次の大下への畏怖の裏返しだった。

「ふん、大下さんは怖い、怖すぎる…。この場面で決めるのがスター。大下さんは、そのスター中のスターだ…」

この気持ちは古田も同じだった。広岡が指示することなく、古田は大下との勝負を避けて、六番投手木田との勝負を選んだ。

当然、代打が出てくるのは織り込み済み。好調の木田を降ろせば、もし失点を喫しても取り返すチャンスはあると、古田はそこまで計算に入れていた。

いくら木田が好調だからといって、大沢の頭の中に、木田をそのまま打席に送る選択肢は、はなから存在していなかった。

代打は誰が出るのか。

残る野手は、たった二人だけ。いわば二択である。

ソレイタか？　片岡か？

一発長打をとるのか、それとも高い出塁率をとるのか。

「オレに決まっとる」
片岡はそうつぶやいた。
「二死満塁や、オレならヒットを打たんでも得点を刻める…。オレの選球眼の凄まじさ知っとるか？　打率が．３００そこらで、あのイチローより高い出塁率記録したんやで…。９８年、イチローが五年連続、首位打者で騒がれた年や」
片岡は、必ず自分が指名されるはずと、バットを持ち、ヘルメットをかぶって、準備に余念はない。いますぐグランドで飛び出せる用意はできた。

大沢が飛び出し主審の友寄に選手交代を告げた。
「代打、ソレイタ」
え？
「オレやない？」
大沢は、この絶好の大チャンスに、片岡ではなくソレイタを指名した。
「は？」
片岡は、バットを持ったまま固まっている。そんな片岡を気遣ってか、すかさず大沢が声をかける。
「わりーな、片岡。オメーを使って、タイムリーか押し出し狙いってのも考えたけどよ。相手は岡林だ。滅多に制球ミスはない投手や、押し出しは頭からないもんと考えてよ。それなら、ソレイタを使って、あわよくば、四点狙いと考えたわけだ。相手はしぶとい広岡ヤクルトだからな。ちまちま一点取ってもよお、セーフティーリードとはいえんからな、一気に大量点ってわけだ」
「それは分かります。大沢監督、でも僕の出番はもうないんですか？」
「あるあるある！　オメーの出番はちゃんと考えてあらあ。もしもソレイタが結果を出してだな、裏の守備に突入した暁には、オメーを絶対安心の守りの切り札に使うつもりだ。大杉を下げて、オメー

を三塁に入れる。それで三塁の小笠原を一塁回す。これで、内野の守備は完璧よ！　ぜってー勝ちは間違いなしってわけよ！」

苦しい大沢のフォローであった。ただ片岡より、日本ハムの外国人史上、年間最多の本塁打記録を持つソレイタの方が優先順位が高かっただけである。

だが、片岡は、この苦しい弁明を素直に聞き入れて、その気になってしまっている。

「守りの切り札！　代打でヒーローなるのもええが、守備で貢献とは、ＰＬ出身のエリートのオレにはお似合いかもな。地味やけど、玄人は、オレの守備を勝因にあげるはずや。１１回裏、三塁線を片岡を入れて固めたことが、投手の安心感につながり、虎の子の一点を守りきれたとかな」

片岡は気づいていない。代打からも守備につけることを。

ソレイタ。サモア出身の左のパワーヒッターである。１９８１年の優勝には、五番ＤＨとして貢献した。引退後、土地をめぐるトラブルで、ハワイで銃殺されたことが日本に知らされた悲劇の男がここに復活だ。

「ソレイタ、いけ！　絶対打てよ！！」

片岡には出番を奪われたわだかりなどどこにもない。ただ純粋にソレイタの成功を願っている。

ソレイタは、強烈なアッパースイングで岡林の低目のスライダーをとらえた。打球はライトに舞いあがる！

「ライトは広沢さんや、いけるで！」

片岡が叫び、日本ハムベンチは総立ちだ。

広沢がまごつく。打球は、上空の風にのり、右に左とダンスする。

「どこいけばいいんだよ！！」

広沢には打球判断能力がない。

「広沢さんがとれるわけない！！　よっしゃああ！！　大量点や！」

打球は、広沢が足をふらつかせる、その位置より、はるかフェンスよりに落ちようとする。
そこには、青木がいた。
センターから広沢のカバーにいった青木は、打球の滞空時間があまりにも長すぎたため、落下地点に到達してしまったのだ。
打球は、青木が掲げたグラブに収まった。
「青木、お前、足はやーな」
広沢は感謝を口にするより、青木のあまりの素早さに飽きれたのだ。
青木が捕った位置は、もうライトのポール側。青木の並外れたスピードとソレイタのパワーが生み出した異例の滞空時間が作り出した、フライアウトであった。

「あ、また出番ねーや」
同点のまま推移したために片岡は、また出番を失った。
「おう片岡、気落ちするな！　同点ってことはよ、オメーがヒーローになれるチャンスがまた生まれたってことよ！！　次の代打はまた投手のところやから、いつになるかわからんが、きっとオメーにその機会が訪れるはずだ！　それまで心待ちにしてくれや！」
まさか、こんなとってつけた檄に片岡は騙されないと思いきや、
「そうですよね！　そのときがくるまで力づくに応援します！」
すっかりと信じてしまい、目を輝かせる始末だ。

「ふう…あと一回や」
古田は防具をぬぐのもしんどうそうだ。
「古田よ、よく耐えたな。あと一回だ」
中西バッテリーコーチが用具の取り外しをお手伝いだ。
「一回か…よっしゃ頑張ろう！　と気勢を上げたいところなんですけど、ちょっときついかなあ」
「あと一回なんとか頼む！　そうすれば相川が使える！」

「１２回終わるまでにサヨナラ勝ちなら相川に頼らなくてもええんですけどねえ」
　相川に頼る？　相川はもっぱらブルペン捕手の役目で帯同し、２５人のベンチ入りに入っていないはずであるが…。
「しかし、まあ相川入れといてよかったですね」
「ああ、そうだな」
「最初、邪道やないか、思いますわ。延長１３回いくと２５人以外の選手を使えるなんて…。でもその制度が、今のウチにいいように作用しようとしている。投手の替えもできるし、オレの替わりに相川を入れられる」
　ＪＷＢＣ／Ｌ、大会特別ルール。
　延長１３回に突入すると、事前に登録した補欠選手の中から自由に一人だけ選手を起用できる。
　これは延長１５回まで、一回ずつに適用され、つまり１５回までいくと、ベンチに入っていない選手を三人使えることになる。
　これは延長無制限が決まった時点で、提案されたルール。総力戦・消耗戦が予想されたために、持ち上がったルールであったが、野球本来の形ではないと批判もあった。
　その急先鋒に立ったのが古田であった。豊富な戦力を抱える巨人に有利すぎるルールであると、撤廃を要求したが、オーナー会議の過半数を得て承諾された経緯がある。

「最初に、このルールに助けられるのは、なんやオレやん…」
　古田は、多少罰が悪い気分は抜けないが、今、そんな体裁にこだわっている場合ではない。
「はやく、こいこい１３回…、あ、そのまえにサヨナラ勝ちすりゃあええんか」

「なんや、そのルール？　知らんかった」

今更、このルールを知り、目を丸くするのは片岡だ。
なお延長１８回までは、前出の三人までしか使えないが、以後、一回につき一人の起用が新たに認められ、予備登録ぎりぎり４０人まで合計１５人まで補欠選手を使えるのだ。（計算上、それは３０回までいくことになるが）

「はあ、オレが最終兵器やないの！？」
延長１３回は今か今かと、続々と補欠選手がベンチ入りをしている。
ウインタースがいる。クルーズがいる。セギノールがいる。ウィルソンもいる。
「はあ？　オレより打ちそうなのばかりやん…」
はたして片岡に出番は回ってくるのだろうか。

江戸っ子対仙台っ子

１１回裏、日本ハムのマウンドには、江戸っ子エース土橋が上がった。

土橋は、東映～日拓ホーム～日本ハムを通じて、球団最多の勝ち星を誇る投手だ。エースこそダルビッシュに奪われたが、抑えの切り札の一人としてブルペンを支える。

土橋といえば、先発完投型の古き良き時代の大投手だ。その土橋がなぜ抑えとしてベンチ入りする運びになったのか、ここで詳しく検証してみよう。

大沢が、真っ先に抑えの切り札と考えたのは、江夏であった。８１年のＭＶＰで、度胸、実績申し分ない江夏。だが、江夏は、所属球団選択ドラフトの結果、阪神に攫われてしまう。

江夏を引くものｔおばかり思っていた大沢は、次の抑え候補に頭を悩ませることになる。

日本ハム初代抑えの切り札というべき、マッシー村上は南海に取られ、逆転のマツこと松浦は、練習試合の不調で選考漏れ、９３年～９６年にコンスタントにセーブをあげた金石も、いまひとつ球威不足。０６年セーブ王で日本一の立役者、マイケル中村は、巨人での不調が響き、補欠登録止まり。０４年セーブ王の横山や、９１年セーブ王の武田一浩の名前も上がったが、抑えとしては物足りないと選考は難航した。（０９年セーブ王、無敗の武田久は、セットアップ向きと抑えの切り札に指名されなかった。実際、このゲームでも、当初の予定どおり８回に投げている）

そこで白羽の矢が立ったのが、土橋である。

なによりも度胸が満点。球威も存在感も抜群。なによりも制球力が十分で、不用意な投球をしないことが決め手であった。

そして、土橋といえば、テンポのよさである。

そのテンポの早さといえば、近年もっともテンポのいいといわれ

た巨人時代の上原の比ではない。
　捕手から、投球を受け取るやいなや、もうモーションに入っているのだ。この土橋のテンポに合わせるために、苦心を重ねたのが、捕手の高橋。あらかじめ、次の配球を用意し、すかさずサインを出して、土橋に間を与えないように、頭と体をフル回転させる。

「なにが、ペタジーニだ！　まどろっこしいんだよ！　ペタ！　そうだペタでいい！　お前のことペタとよんでやらあ！」
　打者のペタジーニは、ふだん、勝負の遅いタイプ。じっくりと足場を固めてから構え、ボールを見極め、時に打席を外し素振りをしつつ相手の出方を探るのが、ペタジーニのペースである。
　だが、土橋は、ペタジーニの勝手にはさせない。ペタジーニがことを起こす前に、投げ込んでいるのだ。注意散漫なペタジーニは土橋の変哲のない速球に振り遅れる。
　タイムをとって間をあけようと手をあげようとしたら、土橋はすでに投げ込んでいる。
「いちいち、間を取るな、しゃらくせえ！」
　ベネゼエラっ子ペタジーニは、江戸っ子土橋のペースにまんまとはまり、無様なサードフライに倒れた。

　ネクストにいた古田は、土橋の投球を観察するとか、投球と同時にタイミングを合わせて、バットを振ってみるとか、そういった研究をする気力さえなく、ただバットを小脇に跪いているだけだ。
「はあ…打席か…面倒やなあ…」
　あの古田が、これほどの弱気な姿勢を見せるとは、相当体がきついのか。
「ふん、古田を打席に送るとは、みすみす相手にアウトを上げるようなものだな」
　古田の次は、投手の岡林。この回に、得点が入る望みは、一縷もないはずであるが…。

広岡は動いた。古田を呼び寄せて、肩を叩いた。
「ここまでよう頑張ったな、ご苦労さん」
古田の替えの捕手はいないはずだ。相川にしても起用が許されるのは１３回から、現在１１回、次の守備があるとしたら、１２回、裸眼の八重樫を捕手に据えるしか方法はない。
「やっと休める」
古田は、最後まで出たいとか、泣き言をいうことなくベンチに下がった。
「八重樫さん頼みましたよ…」

代打は八重樫だ。コンタクトもメガネも紛失し、裸眼状態のはずの八重樫がコールされたのだ。これには大沢も驚きを隠せない。
「バカな！　八重樫のメガネとコンタクトはウチのロッカーにあるはずだ！」
大沢の命を受けて、岩本がヤクルトのロッカーから、こっそり、くすねてきたはずだ。

「ふん、宮本、さすがだ。お前は、試合から退いてもチームに貢献をもたらす」
「偶然ですよ…偶然。怪我の手当てに医務室行こうとしたら、岩本のガンちゃんと出くわしましてね…。なんか、オレの目よう見んのですわ、ガンちゃんの奴。こりゃおかしいなと思おて、ちょっと気合を入れてみたら、もう洗いざらいすべて話してくれまして…」
「ふん、やっぱりそうか、メガネ、コンタクト紛失事件の犯人は、ハムか。ふん、大沢がやりそうなことだ。善人面しおって、悪党が…」
広岡も人のことは言えない。宮本に、選手抹殺を焚き付けたのだから。これでおあいこである。

「バッター古田にかわりまして、八重樫。バッター八重樫！　背番号２８！」

八重樫がコールされると球場は微妙な雰囲気に包まれる。

「古田はどうした！」

「故障！」

「よりによって八重樫！」

「大矢はいねーのかよ」

「バカ、大矢は横浜の監督だろ」

「あ、そーか」

「八重樫のあの打撃フォームが見れるからいいじゃん」

「オレ、野球ファン歴短いから、八重樫見るの初めてだわ。モノマネでよくみえるけど」

八重樫の独特な構えに話題は及ぶが、打撃自体に期待をするむきはない。

だが、八重樫もただ奇妙なフォームの選手ではない。実力もたしかだ。１９８５年には、三割台を記録して、最下位球団に所属しながら、ベストナイン捕手に選ばれている。

捕手のベストナインは成績に左右されがち。八重樫以降、最下位球団からのベストナイン選出はない。

「八重樫！！」

土橋は目をひんむく。

「お前か！　お前にはお世話になったな！」

八重樫が最下位球団ながらベストナインに輝いた年、監督はこの土橋である。

「打撃には何度か助けられたけどよお、それ以上に拙い守備に何度泣かされたことか！」

打撃に秀でた八重樫であるが、守備はいまひとつ。何度もパスボールをおかし、当時の大洋が擁したスーパーカートリオや広島の高

橋山崎のコンビには、これでもかと走られたのである。

土橋が八重樫を知り尽くせば、八重樫も土橋の性格を知り尽くしている。

選手として２３年、その後コーチとして１５年、３８年間、プロ野球にいつづけた男、八重樫が、熟練の土橋潰しを見せる。

総力戦にいたらぬ事情

「とっとと打席にへえれ！！」

土橋がしびれを切らして、八重樫を恫喝する。だが、八重樫はひるまず、けしてマイペースを崩さない。

ゆっくりとスプレーをバットにかけて、ようやく打席に向かうと思いきや、また素振りを何度も繰り返す。

土橋の顔がみるみる赤くなる。明らかに八重樫にいらだっている。ようやく打席に入ると、あの独特のオープンスタンスを披露だ。

スタンドからは、その珍妙なフォームに、失笑ともとれる声が沸き起こる。

「ワハハ、ホントに体おもいきり開いてるぞ、アハハ」

「メガネ、メガネがずり落ちそうだ、あはは」

ずり落ちそうなメガネを直しては、またずり落ちる。そのたびに、打席を外すのだから土橋はたまらない。

「うぐぐぐぐぐぐ」

土橋はずばっと真ん中低目に投げ込む。八重樫は様子見とばかりにこれを見送る。するとどうだ、八重樫がまた打席を外すではないか。これで土橋の怒りは沸点に達する。

「八重樫めが、いい加減にしろおおお」

土橋は、八重樫にガンを飛ばす。八重樫は、それでもひるまず冷静の土橋の狙いを探る。冷静さを失い、独特の早いテンポまで八重樫に奪われた土橋が何を投げるのか。

「頭にきたから、オレの頭に投げるか。それともズバっと速球を投げて溜飲を下げるか」

八重樫は土橋の怒りをそのまま自分にぶつけてくると予想だてるが、土橋は、怒りの頂点から、緩いカーブを投げた。

真っ赤な顔で緩いボールを投げ込むとは、土橋も役者である。これは最高のチェンジオブベースのはずであった。

だが、八重樫はこれも読んでいた。土橋の性格をよく知った八重樫は、土橋の芝居を予想していたのである。

八重樫がはじき返した打球は、土橋のグラブをけちらしセンター前に飛ぶ。

センター前ヒット。八重樫は、三者凡退に終わるはずだった、この回に、一本のくさびを打ち込んだ。

八重樫は鈍足だ。それも超がつくほどの。当然、代走を送りたい場面。ヤクルトベンチには格好の代走要員がいた。

福地である。

ヤクルトにＦＡ補償で入団してまだ二年しか立っていない。しかし、そのわずか二年のどちらでも盗塁王を獲得した福地は、広岡の目に止まり、緊急召集されてのだ。二年連続で盗塁王を取った選手が、過去のヤクルトにいなければ、二度取ったのも福地だけである。

（他に、土屋、飯田徳治、東条、青木実、飯田哲也、青木宣親がいるが、すべて一度だけで終わっている）

「バットもグラブもいらん。お前は走る練習だけをしとけ」

広岡が福地にかけた言葉がそれだ。さすがに、打撃練習も守備練習もそれなりにこなしたが、練習の大部分を、福地が過ごしたのは、ビデオルーム。１１球団の登板が予想される投手のビデオを念入りに見て、牽制のタイミング、クセを熱心に研究した。

その特訓は、たしかな成果となって現れる。

「土橋さんか、牽制のくせはこう、クイックのタイムはあれ。絶対走れるのにな、二盗だけでなく三盗もできのに」

だが、広岡は福地のカードはきれない。八重樫は１２回表、捕手として出番が待ち構えているのだから。

打者は、投手の岡林。投手はいない、代打が送れない。ベンチには、福地だけでなく、バントのスペシャリストの角富士夫も控えてるが、彼を切ることもできない。

まさに宝の持ち腐れであるが、広岡はできる範囲で最善を尽くすしかない。

岡林がバントの構えをする。三塁の小笠原、一塁の大杉がするするとチャージをかけてくる。

一塁は鈍足の八重樫、ちょっとやそっとのバントじゃ、二塁には送れない。

祝２２０話　土橋と土橋

岡林は、右投げ左打ちの投手。左打席でバントの構えをする。右投げ左打ちの選手は、利き手でない左手でバット操作をしなければならないことから、比較的バントが得意でないとされている。では、岡林はどうか？

岡林のバントは三塁小笠原の前に転がる。

「まずい！」

岡林は思わず声を上げた。小笠原は二塁で殺してやろうと、グラブを一度叩いてから、ボールを拾い上げようとする。

だが、この無駄な動作が命取り。グラブの油が手についてしまったのだ。ボールを握る。油で滑る。持ち直す、二塁走者が鈍足の八重樫である事実を。この一瞬だけ忘却し、二塁は間に合わないと、安全策を取り一塁に送球する。

岡林はアウトにできたが、八重樫を二塁に進めてしまう。

「ガッツ、いい前進だ、気にするな」

土橋は怒鳴ることもなく、小笠原の全力プレーに免じて、逆に慰める。

「あめーかな、やっぱしよ、三塁小笠原は一流じゃねーよな…うん。三塁本職の片岡使えれば刺せたのによお」

攻撃型守備陣をひいた大沢は、このくらいの守備のミスは織り込み済み。だが、些細なミスであるが、この場面、日本ハムに重くのしかかる。

一死二塁。打者は池山。粗い打者であるが、この試合、両軍唯一の一発を放っている打者だ。

「敬遠…」

大沢はバッテリーに歩かせろとサインを出す。

「なにお～！」

土橋は口ではそういうが、これも一種の演技。監督経験ある彼自身この作戦は当然と思っている。相手に弱みを見せつけないための策のひとつである。

「八番セカンド土橋…背番号３８…」

土橋対土橋。土橋の入団は、土橋が監督退任した翌年であり、土橋と土橋が同僚になったことはない。

土橋はバットをまたいつもより短く持って、土橋を迎え打つ。

土橋は狙い球を絞ろうとも、ヒットを打ってヒーローになろうとも思ってはいない。ただただセンター中心に打ち返すkとだけ心がけている。

土橋は攻める。逃げては土橋の名がすたる。キレがあり、ケレン味のないボールをどんどん投げ込む。

土橋がついていけたのは、その何球目からであっただろうか。

捕手の高橋もそれとなく気づいていたが、後ろの打者の広沢、青木の方が土橋よりはるかに危険と察知して、土橋の投球に歯止めをかけなかった。

六球目。土橋が土橋の球を思い通りに、弾き返したのは、このボールだった。

スピンのかかった打球が土橋の胸元を襲う。土橋はグラブを持った左手でなく、素手の右手で弾いた。左手を出していたら、センター前に抜かれるというとっさの判断であった。

弾いたボールは土橋と小笠原の中間に転がった。

必死の土橋は目の前しかみえない。さっきのミスを取り替えそうと小笠原もまたしかり。彼らはボールを譲ることなく取りにいく。

両者鉢合わせの形になり、また弾かれたボールは今度は捕手高橋の元へ。高橋も必死だ。鈍足であるはずの三塁走者八重樫が、本塁に向かって突進しているのだから。

八重樫は全力疾走だ。これほど足を速く回転させたのはいつ以来だろうか。

高橋はボールをもぎ取り、ホームカバーに走る。だが、八重樫の手は、一瞬だけ早くベースの端をかすめていた。
「セーフ！！」
主審友寄の腕が大きく横に広がったとき、四時間超えの大熱戦は静かに終わりを告げた。

「え～　放送席！　放送席！　それでは、勝利監督インタビュー！　広岡監督にお話をお聞きすることにいたしまょう！　いやあ、すごい試合でしたね」
「たいしたことないですよ、両者ミスが多すぎた、それだけの試合ですよ」
「ヤクルトに勝利の女神が微笑んだ、その勝因はどこにあると思われますか？」
「采配です。大沢監督の采配にずいぶん助けられました」
アナウンサーの手にはじっとりと汗が滲んでいた。このまま広岡に喋らせると大変なことになるとアナ氏は独断でインタビューを切った。
「それでは放送席いったんお返しします…」

「え～今度は、ヒーローの土橋選手にお越しいただきました！　いやあ～　見事なサヨナラヒット！　狙いどおりでしたか？」
「……」
「打ったボールはなんでしたか？」
「……」
「ええ、遅くまで残っているヤクルトファンに一言…」
「……」
「次の試合ももちろん活躍しますよね？」
「…がんばります……」

こうしてヤクルト対日本ハムのＪＷＢＣ／Ｌ開幕戦は、延長１１

回、ヤクルトのサヨナラ勝利で幕を閉じた。

日本ハムベンチはあれに荒れている。

大杉がバットで給水機をぶっ壊せば、張本は足蹴り一発で、ベンチを破壊する。敗戦投手となった土橋は、たまたま目の前にいた森本の顔面を殴打。

だが、被害はこれだけ。一敗を喫してもまだチャンスはあるのだ。

「次だ、次、次こそ、絶対に勝つわ」

記者に囲まれた大沢は淡々と、談話を繰り返した。

祝２２０話　土橋と土橋（後書き）

数えてみたら開幕だけで全４５話…うわああ。

ゲームリザルト

主な選手の談話。

ダルビッシュ投手「7回も投げきれない自分が情けない。チームには勝ってほしかった。でもまだチャンスはある。また登板の機会があるのなら今度こそ勝ちたい」

金田投手「知らん、オレに聞くな。チームが勝った？　それはめでたいけど、ワシに勝ち星がつくわけじゃない」

張本外野手「チーム全体が浮き足立っていたように思える。次の試合は私が先頭になって引っ張ってぜがひでも勝ち名乗りをあげたい」

森本外野手「申し訳ありません、僕が気を抜かず走っていれば…」

古田捕手「疲れたわ…次の試合？　もちろん頭から出ますよ」

八重樫捕手「見事な走塁だった？　こう見えても走り出したら速いんだよ、オレ」

高橋捕手「大杉さんの同点弾になんとか応えたかったのに…」

小笠原内野手「…僕のせいです……」

鶴岡捕手「浮き足立ったが、なんとかゼロで切り抜けた。問題は打撃。僕が打っていれば…」

岩本投手「すんまへん…。偵察要員が何を謝ることがあるかって？　それは口がさけてもいえませんわ」

宮本内野手「いろいろあった。何があったかって？　そんなんここでいえることではない」

ゲームリザルト

日本ハム	0	0	0	0	0	1	1	0	0　1
ヤクルト	0	0	0	0	0	0	1	1	0　1×

日本ハム　ダルビッシュ－間柴－武田久－尾崎－木田－×土橋（一

敗）～鶴岡－田村－高橋信
ヤクルト　金田－梶間－五十嵐－安田－松岡弘－石井弘－高津－○
岡林（一勝）～古田
本塁打　池山１号（ダルビッシュ）
勝利打点　土橋１　観衆３０，７６５

「結局、最後まで付き合っちゃったなあ」
「安藤、それは当然、僕ら偵察隊の役割だよ」
「そうはいっても日高、ロッテの今江、西武の栗山は、１０回くらいに帰った」
「彼らは、千葉や埼玉に帰る必要あるからな、僕らホテル組と違って」
　在京チームだけでなく、すべての球団の選手が東京に集まっている。開幕セレモニーを控えているためだ。
「ところで、日高、お前残りそうか？　おれはぶっちゃけヤバイ。阪神投手陣の層は分厚い。さすが曲がりにも伝統の球団だわ…」
「僕も微妙なところだね。オリックスには飛び抜けた捕手はいないが、優秀な捕手がたくさんいる。藤田さん、中嶋さん、岡村さん、中沢さん…。その中で僕だけにある強味といえば、左打ちであること、現役オリックス選手であること…」
「そうか、ルールにあったな…。２００８～２０１０年度のいずれかに在籍している選手を組み込むことってのが…」
「そう。あまりにも現役から、かけ離れた選手ばかりだと、若いファンが感情移入しにくいって理由からね」
「巨人には阿部、わが阪神からは金本さん、広島からは栗原、永川、横浜から番長、村田、内川、中日からは井端さん、荒木、岩瀬さん。目の前で戦っていたヤクルト、ハムからは、ダルと青木、その他…」
「西武からは、涌井や、おかわり、中島、ロッテは西岡、里崎さん、ＳＢからは松中さん、杉内、そして楽天含む近鉄からは岩隈、マー

君の名前がすらりと上がるが」
「オリックスの選手は失礼ながら…加藤大輔、坂口、小松、山本、後藤、阿部、北川さんと名前は上がるけど…どうもピンとこない…」
「だから僕の出番なんだ。いくら坂口が打率二位でゴールデングラブを取っても、オリックスのとんでもない外野陣に殴りこめるか？　といわれても、首を縦に振りづらい」
「イチローさん、福本さん、長池さん、簑田さん、田口さん…藤井さん…谷さん…。オールオリックス・阪急いうよりも、全日本の外野陣でもおかしくない面子…。そこに坂口いうても、たしかに厳しいな…」
「それに、僕にはある大きな後ろ盾があるんだ…」
「え、なに、教えて…」
「ふふふ、秘密だ…僕がベンチ２５人に入った暁には、お教えしましょう…」

ゲームリザルト（後書き）

え？　日高ってこんなに知的なクールガイだったの？
いや作者も知りませんから

古田あえてあいつらに挑む！？

激戦の翌日、神宮球場クラブハウス。
高津と古田は心と体を休めている。
「しかし、昨日の試合はごっつう疲れたわ」
「僕のせいですよ、古田さん。あそこで大杉さんに不用意な一球を投じなければ…。あんな長引いた試合には…」
「ははは、高津。気にするな。勝てばいいんや」
古田の目の前には、関東のスポーツ新聞六紙が広がっている。
報知新聞、日刊スポーツ、スポーツニッポン、デイリースポーツ、東京中日スポーツ、そしてヤクルトと関係深いサンケイスポーツである。
「ええ試合やったのになあ…」
古田は思わずため息をついた。
「報知が巨人。デイリーが阪神。トーチュウが中日。持ってくるのは分かる…」
報知の一面は、『ＯＮＭだ！　史上最強のクリーンナップを川上監督宣言！！』
王ー長嶋ー松井のクリーンアップを大々的に取り上げている。
デイリーの一面は、『藤本監督、開幕に村山指名！　ザトペックが鶴岡ホークスを粉砕や！！』
トーチュウの一面は、『竜のエース杉下が大胆挑発！「落合よ、僕のフォークが当てれるか！」』
いわゆる試合前のプレービューもので、ファンの購買心を見事に煽る見出しが並んでいる。
「ウチの一面がない…」
「まあ、これらの新聞は系列みたいなもんやし、需要にちゃんと応えてるわけやから、文句はないけどな」
「あ、でもさすが、サンケイはウチが一面」

サンケイの一面は『ヤクルト先勝！！　四時間越えの死闘制す！』
「これはこれで当然や。フジサンケイは、いまでもスワローズの株主やし、昔のウチは、サンケイアトムズと名乗ってたほどやからな…が、問題は残りの二紙や」
「日刊は、石川陵、二日目おお叩き…。スポニチは、今度の重賞レースの予想が一面か」
「この二紙は、中正公立の立場のスポーツ紙やで…ウチで行ってほしいといいたいところやが…」
「スポーツ紙も、この不況で大変ですからね～。売上げが見込めない話題を一面に持ってこれない」
「そうや、これはこれで仕方ないと思うしかないんや…。この大会は、本当に盛り上がってるのか」
「世間が感心を寄せているのか…」
「温度差がある気がしてならんのや…」
「地上波で放送あったんですか？」
「フジテレビ…いうてもＣＳの方や…。あとＮＨＫさんのＢＳで完全中継したらしい…荒木さんや荒川ジュニアが解説を勤めらしいわ」
「フジはフジでもＣＳですか…冷たいですね…それじゃあ北海道は？」
「ああ、北海道では地上波あったらしいで…日本テレビの系列やったかなあ。さすが地域密着のハムや」
「視聴率は？」
「ローカルやからな、翌日の朝に分かるもんやない…しかも、７時から８時５４分の半端な延長なしの放送や」
「え、ちょっと待ってくださいよ…昨日の試合は６時１５分開始ですから…。あ、僕の登板、まったく地上波に入っていない」
「よかったやないか、打たれたんやし」
「でも大杉さんの一発が入っていないことになる」
「講義の電話がんがんかかってきたそうや。くだらないバラエティ流すなら、野球を最後までやれって」

「北海道は、熱い…」
「その他は、どうやろ…特に関東、そしてわが本拠地、東京の盛り上がり…」
「観客は満員…」
「新聞の隅っこに、金券ショップの昨日のチケットが原価割れいうて、記事になったるがな」
「満員だけど、溢れるほどの需要まではない…」
そのとき突然、奥の席に座っていた石井一久がおおあくびを上げる。
「わあああああ～～」
「なんや、カズヒサ、お前いつのまにおったん？」
「さっきからずっといますよ～　僕は殺気を殺せますからね、気づかないのも無理はありません」
「つまらんシャレいうな…。ところで、次の先発投手の石井さん。おおあくびあげてどうした？　昨日の試合に興奮しすぎて寝付けなくて、夜更かしでもしたか？」
「試合？　見てませんよ…ベンチ外でテレビに熱中するｈど野球好きでもありませんから…。あ、もちろんケータイで結果くらいはチェックしましたけどね…。眠いのは、ボンバーマンのせいです。ボンバーマンが僕を寝かしつけなかったんです」
「んあにゃゲーム疲れか、相変わらず、食えんやっちゃなあ」

「あ、ネットの方はどうなんですか？　ネットはダイレクトに盛り上がりがわかる場所です…いろいろと問題があるようですが」
高津は携帯を取り出して、某巨大掲示板にアクセスした。
「すげ～　古田さん…昨日の試合関係のスレッドがたくさん立ってますよ～」
たｗｗｗｗｗかｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗつｗｗｗｗｗ（６４）
高津んゴｗｗｗｗｗｗｗ（１３）
壊れた信号機高代（５４）

大沢監督の解任を望むスレ３（９８４）
ファイターズが負けたら、今日０時に自殺します（８７６）
【大下】昔の選手ってたいしたことなくね？【金やん】（７６）
戦犯高橋信二（５４３）
梶間って誰？（７６）
なんで尾花がコーチなの？　エースじゃないの？（９８７）
鶴岡＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞田村＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

「ほう実況スレはけっこういってるなあ～　３４まで伸びればなかなかやないか～」
「あ、このスレで古田さんの配球にいちゃもんつけてる」
「ほっとけ、勝手にいわせておけばいい。彼らは、好き勝手に議論することで野球を楽しんでくれてるんやから」
「金田さんに対しての配球が批判の的ですね…。球界のエースを７回もたせない配球は、古田の球数をかさませるリードが悪いと」
「あほ、アレは全部ノーサインや。金やんが勝手に投げたんや」
「大杉さんの一発にも手厳しいなあ…。一発だけを避ける場面、歩かせて同点の走者を出してもいいから、もっと慎重に攻めるべきだったって」
「あれはだな、後ろの大下さんがだな……、高津にいうてもしゃーないな。こいつにいわんとな……。いっちょ本人降臨といきましょうか？」
「え？」
「これも大会盛り上がりの強行手段や」
古田がケータイを向けて、高津をパシャリ。
高津は、断りなしの撮影に戸惑うが、ピースサインと笑顔は忘れてはいない。
「なんすか、古田さん、いきなりカメラで僕のことを撮って…」
「証拠にするんや…クラブハウスにいる高津、しかもバックに壁時計付きや、これ以上の本人証明はあらへんやろ」
「本人証明したいなら、自分の顔でも撮ってくださいよ！」
「まあええやん…。ほれ高津、自分のケータイみてみい…。猜疑心の強い掲示板の皆さま方が、一発でオレを正真正銘の古田敦也やと信用したで」
「あ、勝手に人の画像をネットに流して…」
「ふふふ…これで面白くなったわ…」

古田ＶＳネット住民

「高津、お前もみてみい。こいつら、いままで古田呼ばわりやったのが、急に敬称つきで書き込みだしたで。古田さん、古田捕手、古田選手…。ははは、かわいいやっちゃなあ」

「でも、このハンドルネーム、「慶三ラブニーチュ」いうのが、まだ疑ってますよ」

「ほんまや。クラブハウスでくつろぐ高津の日付時刻入りの画像見て、まだ疑う精神が分からんわ」

「なになに、これからオレが本人証明のためにクイズを出す？」

「古田選手は２０００本安打を放ち、みごと名球会入りをはたした大選手ですが、１６５４本目のヒットは、いったいどの投手から打ったでしょうか？　そんなん覚えてるわけないやろ…。アホか。お前は知っとるかちゅう話や」

「三分以内に、正解を出さないと、ニセ古田認定するって」

「勝手にせいや…。こいつ放っておいて、他の皆さんの疑問を解消してこうや」

「あれれ、おかしなもんだ。古田さんがクイズ無視し出したら、とたんに、他の住人たちが古田さんを偽者と疑いはじめた」

クイズ答えらんね、こいつ偽者じゃね？

じゃあ、あの画像はなんだ。

ブログかなんかで、この程度の私的画像は入手可能だぜ。

日付時刻は加工すれば何とでもなるしな。

偽者だ、ニセ古田だ。

古田、はやくクイズに答えんか。あれ、答えが分からない？　だって偽者だもんね。

「こいつら…。どこの世界に、記念でもなんでもないヒットの克明な情報記録してる打者おるねん」

「大リーグの歴史的打者、テッド・ウィリアムズは、打席ごとの結

果どころか、全投球内容も記憶してるといわれてますけど…」
「そんなん、おもしろおかしく箔つけしてるだけや…。しかし、こいつらも、こいつらや。わけのわからん一人のアホに振り回されてからに。冷静に考えろ。冷静に考えれば、こんなクイズが本人証明になるわけない」
「ネットの世界はこんなもんですよ。自分の意志を持って動いているようで、実は、少数の誰かの意志に振り回されている。それは、たいがい悪意にあふれてた曲がったものです」
「まあええわ…本人証明どうこうより、真摯にひとつ、ひとつ疑問を潰していけば、こいつらもやがて信じるやろ」
第一の疑問。デューシーの体当あたりを喰らった古田は、送球が満足にできないほど状態が落ちていた。
なぜ、途中交代を選択しなかったのか？　ベンチにはまだ八重樫という経験豊富な捕手がいたはずである。
「どうする、高津？　これ正直に答えるか」
「でも、まだ世間には漏れていませんよ。八重樫さんがメガネケースを紛失して、マスクをかぶれなかった事情は」
「そうか、バレてないんなら、バラす必要ないな。これは、テキトーに…」
開幕戦、絶対負けられない試合でしたから、なんとか最後まで、試合に出て勝利に貢献したかあったんですよ。
「よしこれで、こいつは納得やろ」

はあ？　それはまた自分勝手だな。チーム思うなら、交代を申し出るべき。なんだ、あの体当たりを喰ったあとの打席、まったくの無気力だったじゃないか。だから、広岡監督もしびれを切らして最後の打席に代打を送ったんだ。
そうだ、そうだ。八重樫なら故障抱える自分でも上とか思ってるんじゃね？
実際は、八重樫のが上でしたｗ　サヨナラのホームを踏んだ八重

樫＞＞＞＞＞＞得点、打点なし、走られ放題の古田ｗ

「かあ、こいつら…ほんとのこと書き込んでやるか！」

いやいや、八重樫さんがマスクをかぶれない事情があったんです。ここだけの話ですが、メガネとコンタクトのケースがちょっとの間だけなくなってしまって…。裸眼のままじゃボールが捕れないとおっしゃられて、なら自分がかぶりつづけるしかないと、覚悟を決めたわけです。

「これで、どうや、ぐうの音もでんやろ！」

ぷぷぷぷ、下手なウソをついてｗそんな都合よくメガネがなくなるわけねーよｗｗｗ

ニセ古田、もうちょい気の利いたこと書き込んでくれ。おもろないで。

八重樫なんての三流捕手だしたら、逆転喰らうと思ったのが正解だろ、どうせｗ

しかも、八重樫さんが、代打でヒットを打ったから、それとつじつま合わせるために、ちょっとの間をつけやがったｗ

おれもそれおかしいと思ったわ。なんだ八重樫のメガネは、古田の体当たりとともに消えて、代打出るときに待ってましたと現れたのか？ｗ

うわ、ほんと、都合よすぎだな、言われてみればｗ

「逆に泥沼にハマってますよ、古田さん…」

「くそお、だんだん腹立ってきたわ……」

そいや、なんで、古田の控えがよりによって八　重　樫？ｗ　ヤクルトには古田以外にまともな捕手イネーの？ｗ

＜＜大矢がいるじゃないか

ああ、大矢もヤクルトだっけ。そいや大矢いねーな、アイツ、強肩捕手だったんだろ？　どこいった？

＜＜おいおい、横浜の監督…。

マジ？　知らんかった…。大矢が監督だなんて、他にまともなのいねーのか、横浜はｗ

日本一監督が二人いるけどねえ。三原も権藤も、どっちゃも横浜の監督依頼に首を縦にふらんかった。

＜＜そりゃ、横浜の監督は願い下げだわなｗ　大矢しかなり手のいねーってわけかｗ

まあヤクルトにいても、古田の控えだし、監督やったほうがマシかも、横浜でもｗ

あと大矢がヤクルト嫌がったの、古田との仲がしっくりこないからって噂もあるぜ。。。う

「なんで、こいつら、大矢さんとの仲まで知ってるんだよ」

「こうしてＩＤ追っていくと、たちの悪いのは一人いますね」

「ああ、このＩＤのやつやろ」

「慶三ラブニューチュですよ、こいつ。さっき古田さんを偽者と煽った」

「名前も名無しやし、ＩＤもちゃうで」

「いえ、つなぎ変えたか、何かをして、ＩＤを変えたんですよ。文章のクセとかいけに古田さんに敵意丸出しだから、僕にはわかりますよ」

「そういえば、そうやな…。たしかに、こいつは慶三やなあ。しかし、よう気づいたな、高津」

「古田さん、しっかりしてくださいよ、捕手なら、これくらいの騙し見破らないと」

「しかし、高津、お前詳しいな。暇な時、この慶三みたいことしてるちゃうか？」

「いやいやいや、そんな暇人じゃありませんよ…。マイナー生活で寂しいからって…そんなＩＤを変えまくって、複数に見せかけて、

僕を構想外にした高田監督の悪口書きまくるなんて、虚しいことは」
「そうか、ならええわ」

＜＜お前、慶三ラブニューチュちゃうか？

「古田さん、また単刀直入だなあ。捕手らしく手を替え品を替えて、攻めると思ったのに」
「野球と違うで、これは顔の見えんネットや。こういうシンプルなのが相手の胸をつくんや」

＜＜はあ？　証拠は？　偽者呼ばわりするやつは、みな同一人物に見えるのかな
「凝りませんねえ」
「まあ、同一かどうか証明するもんないから。堂々巡りでらちがあかないわ」

それより、古田さん。こんなバカに付き合う暇あったら、質問答えてよ？

すいません、偽者呼ばわりされて、ついかあーとなっちゃって。それでは改めて、えーと＜＜５４３さんの質問からお答えしましょうか。広岡監督は、なぜ、あれだけ執拗な投手継投をしたかですね。たしかに、延長無制限、投手のベンチ入りが８人と考えると、７人継投は使いすぎとおもわれても、おうかしくありません。ですか、短期決戦の開幕試合と考えると、絶対に勝ちたい試合です。しかも広岡監督の勘もさえて、継投もズバズバ当たっていました。あとはミス
ターゼロの高津くんに９回を任せればいい展開を作りました。絶対的抑えの切り札がいるチームにとって、八回まで得点差を一点でもつけていれば、それで監督の仕事は終わりなのです。つまり、どんな起用しようとも、高津くんを出せる展開にさせれば、それで広岡

監督の采配はすべて正しいのです。高津くんが打たれたのは、結果論にすぎません。

「こんな感じでどうや！」

「まあ無理やりな感じもありますが、悪くはないですね…ですけど、慶三がまーあたつっつてきてますよ」

＜＜ニセ古田、絶対勝たなければいけない試合なんだろ？　それで同点に追いつかれちゃあ、采配自体間違いってこった。延長に投手一人しかいないなんて、それで勝っても結果オーライすぎるわ。

「なんか、慶三のいうことのが、筋が通ってる気が…」

「くそ、なめてたが、論客やな、慶三…。しかし、慶三ってなんや？　もしかしてあれか、川島慶三から取ったんか？」

「ヤクルトファンなら、そうでしょうね」

「オレの切られたあと政権を握った高田さんの寵愛を受ける慶三か…。こりゃ敵としてふさわしいハンドルネームかもしれんな…」

「石井一久、僕、度会、真中、藤井を切り捨てて、高田監督は、元日本ハムを中心に、高田ファミリーを作った。その象徴的存在が川島慶三…」

「燃えてきたわ、そうや、石井にも参戦願おうか、おいカズ…」

「あら、いつのまに一久いませんね…。トイレかな…」

おい、ニセ古田。コーヒーうめーか？ｗ

「おい、こいつ、なんで、オレらがコーヒー飲んでること知っとるんや」

「いやだなあ、古田さん、さっき画像を送りつけたとき、カップが画面に入り込んだんでしょう」ｋｋ

「だからといって、なんで中身がわかるんや…」

「あ、そうか…」
「すると、この慶三、犯人は…」

あの慶三さん、お腹の調子はいかがですか？
＜＜ちょっと待て、古田、なんでお前、俺がトイレにいること分かるんだ？

「だって、慶三は、石井やもんなあ」

じゃあー、勢いよく水を流すと、トイレから石井が、ケータイ片手にのっそりと出てくる。

「あれえ？　なんでわかったんですか？　古田さん…」
「そりゃ、この黄金バッテリーにかかれば、お前の演技なんぞイチコロよ」
「まあ、ばれないとおもしろくないでしょ、こういうの。だから、わざとヒント出したんですけどね」

「このまま終わりにしてもオモロないな。どうや？　三人ががりで、このスレの皆さんを翻弄するといきましょうか。オレがわざと弱みをいせるから、お前ら二人、ビシビシつっこんでくれや」
「賛成…おもしろそうだ」
「僕はもう飽きた、古田さんと高津さんだけでお願いします」
石井はケータイをしまい、壁に寄りかかって仮眠をむさぼるようだ。
「なんや、石井。連れないな…お前が慶三役やらんと盛り上がらんわ」
「あ、古田さん！　見てください！！」
「なんや」
「石井が寝ているのに、慶三役は書き込みを繰り替えしている！」

おい、古田。逃げたか！？
はよ答えんか、古田。
古田氏ね古田氏ね古田氏ね

「しかも、切れかかってる。あぶないやつや！　石井でないとするといったいなにものなんや、こいつ！」
古田は驚きで目を丸くするが、犯人はお前の目の前にいるだろ。
ちゃんちゃん

古田ＶＳネット住民（後書き）

ＰＣの調子が悪くてこんな話で申し訳ございません

西岡ＴＳＵＹＯＳＨ

デジタル運が最低最悪！！
機械トラブルに巻きこまれる！
電気関連の相性が大凶、なるべく機械を避けて、今日一日を送りましょう。

だから、なんだちゅうねん。この西岡様が、占いなんかに負けるかって話や。どの番組見ても、これや。
まあしょせん１２星座しかないんや。日本人の１２人に一人がえらい目にあうんか？　あらへんわ。
オレは、気にせず車を運転するし、バッティングマシーンで打撃練習もしたし、自販機で飲みもんも買ってやった。
それで、何が起きたかって？
だから、なーんも起きへんのや。
だけどな、そこまで各局揃うとな、ちょっと不気味やな…思うて、街角の手相占いのおっちゃんに見てもらったんや。
いや気にしてるワケやないよ。
ただ占いちゅうもんか、もし統一性があるのなら、おっちゃんも、テレビの占いと同じことというのかな思った話や。

おっちゃんは、オレを天下の西岡様と知ってか知らぬか、
「大物になる手相だ」
ってオレの手相をまじまじと見つめるんや。
当たってるやん。
「猪突猛進型なのはいいが、それが、時にトラブルを巻き起こすから、注意が必要」
当たらずとも遠からずやなあ。

「機械に関する運がないと出ている」
また来たわあ。手相も星座と一緒か。
「交通手段は、車か？　電車か？」
車や。
「なるべく機械移動は避けるべし。自転車も機械の一種だ。不幸に遭遇したくなかったら、徒歩で帰りなさい」
ありえんちゅうねん。大事な試合を控える、ロッテの一番遊撃手のスピードスターや。徒歩でとぼとぼ帰れるかい。
疲労が試合に出たらどうせいちゅうねん。
足が重くて、一塁到達速度が緩んだり、盗塁スタートが遅れたり、打球に対しての一歩目が切れず、追いつけずとかなったらどうしよう話や。
ボビーのあまり好みやないいうても、オレの守備の師匠の小坂さんが控えにおるんやぞ。あっさり交替いいわたされるわ。
オレは、占いなど気にせず、そのまま車で帰ったね。
エンストやろか、脱輪やろか、交通事故はさすがに洒落にならんわ…色々不安もよぎったが、なんもあらへん。
今は無事、自宅でくつろいでいる最中や。
占いに打ち勝つオレは、さすがやなあ。
テレビだってつくし、ケータイもつながる。風呂も沸くし、炊飯器のごはんもほっかほかや。冷蔵庫もよう冷えてるし、トイレもひとつのこさず
流してくれるわ。
「さあビールでも一杯やるか」
ないわ。
これか思うたが、ビール切れてるのは、機械やないわ。
ただのオレの不注意や。
こんなもん近くのコンビニでささっとこうてくれば、すむ問題やもん。
「今、１１時か…」

まさか思うて壁時計とケータイの時計とＤＶＤレコーダーの時刻とオレの腕時計を確かめたが、どれも同じ時を刻んでるわ。

「運悪いなら、どれか違ってるはずやで」

オレはまた運命を克服したわけかい。

「１１時…。スポーツニュースの時間やなあ。でも眠いなあ。今日はたしか、日ハムとヤクルトの試合があったはずや。ダルが先発いう話やったなあ。

どっち勝ったんやろ。オレがガキの頃好きやった池山さん打ったかなあ」

でもいちいち、テレビで試合結果確かめんでも、新聞見れば十分やなあ。どうせハムヤクや。テレビも時間さかんやろうし。

「あ、でも、あれや。新しくうちの監督になられる西村さんから、今日の試合のレポート提出しろいわれてたんや」

今頃、思い出しても、遅いなあ、スポーツニュースのダイジェストからレポートおこしても、西村さん抜け目ないから、すぐわかるやろうなあ。

コラー、ツヨシ。これ解説の関根さんがいったことと同じじゃねーか。とかお目玉食らうかもしれんわ。

「だが、ここで諦めんのが、西岡様や」

オレは考えた。オレ以降、大阪桐蔭の選手がプロにぎょうさん入るようなった。

平田、辻内、中田翔……。

アホとバカとボケばかりやないか。

漢字もまともに書けんわ、読書いうたら漫画だけ、キャンプで首脳陣の目気になって急ピッチ調整したら、故障誘発、おまけに小遣いだけはがばっとつかう放蕩もん。

桐蔭の恥さらしばかりやけど、オレはちゃうで。

「試合のレポートが不十分なら、それ以外で取り返せばいい話や」

オレにもオファー来てたんや、スポニュー生出演のな。

オレは試合前に精神集中する必要断ったんやけど、金に目がくら

んだ目立ちたがり屋がぎょうさんテレビ出るやろうから、それを、肴にレポート書くんや。

「オレは頭いいなあ」

感心してる暇はない。さっそくチェックや。

ケータイ開いた。

なんや詳しい番組紹介ないな。役に立たんわ。

PCつないだ。

これも、ダメや。横並びにニュースがあるのはわかるけど、誰が出るのかようわからん。

地デジやから、番組表も出るが、役にたたん情報ばかりや。

せめて、どの局に誰が出るわかれば、予定も立てやすいのに。

困るやん。あの話も聞きたい、この話をダシにレポート書ける。

だけど、バッティングして、どっちの話も聞き逃すことになったら、目も当てれん。

「こういう時が新聞の出番やないか。新聞のテレビ欄はニュースまで詳しく載っけてくれてるんや」

新聞、新聞、今日の朝刊はどこやねん…。

「あ、オレ、新聞取ってなかったわ」

どうせ、スポーツ欄と4コマとテレビ欄くらいしか、読まんし、かさばると邪魔やから、取らんかったんや。

「いらんゆうてるやろ。おっちゃんも仕事やろうけどな、いらんもんはいらんのや。野球のチケットくれる？　オレを誰だと思ってるんや」

毅然と新聞の勧誘断った、オレかっこいいけど、初めて困ったわ、新聞なくて。

「ビール買いに行くついでに新聞も買うか」

そやけど、今日の新聞やで。日付がかわろうちゅうこの時間に、置いてあるやろうか。

まあええ、とりあえず買いに行くとするか。

「はあ、新聞おいてへん？」
「はい、朝刊は夕方のうちに返品の箱入れて準備で片付けてしまうんですよ」
「箱に入れるん？　ならその箱あるやろう？」
「あ、そのカウンターの角に置いてある、ジュースの空き箱がそれですが」
「それちょうだい」
「あ、もう返品処理をしているので、今からではちょっと…」
「オレも誰や思うてるねん。西岡や。一億円プレーヤー」
オレは、５０００円置いたね。新聞返品の一箱を引き取ったんや。
店員のあんちゃん、あわてふためいていいたけどな、
「あまったのは、兄ちゃんにやるわ」
あんちゃんに、５０００円から、ビール代と新聞一箱、ひいた金あげるいうてやったんや。
缶ビール４本と、新聞一玉、５０００円で十分過ぎるやろ

開けてびっくりや。
返品された新聞多いのなんの。
報知、スポニチ、トーチュウ、デイリー、日刊、スポニチ…、スポ新だけやない、一般紙もあるな、
朝日、読売、日経、産経、毎日、千葉日報まであるわ…。
数えてみたら３２部あったわ。
新聞、１３０円やったけ？　１３０に３２をかけたらいくらになるんやろ。
オレこうみえても暗算得意中の得意やから、ぱっとだせるで。
「えーと、１３０に３２かけるのは複雑すぎるから、まず１００に３０をかけて…」
あかんわ、三桁絡む掛け算は、人間のできる範疇超えてるわ。
電卓、電卓…。
また機械や。

だけど、なんのそのや。
「４１６０円」
ほうれみい、電卓は正しい答えを出してくれたで。なにが機械運が最悪や。また弾き返したで
「ちょい待てよ。４１６０円やろ…ビール２８１円が４本で…これは電卓に頼らない、あくまでもオレの明晰な頭脳が弾き出した試算やけど、合計５０００円、超えてるやないか」
だから、バイトのあんちゃん、慌てたんか。
５０００円、微妙に越えてるが、それあんちゃんの持ち出しになるんやろか。
店長に、こってりしぼられて、そのうえ足らん金、自腹切るんやろうか。
「かわいそうや。バイトなんて、はした金で働いているんのに」
まあええ、今度、あのコンビニ行ったとき、
「黙って、受け取ってくれ」
と一万円入った封筒をあんちゃんのポケットに入れてやるか。
「オレはかっこええな」
失敗しても、かっこよく取り返す。これがほんまのスターや。
「それより、ニュースや。なんのために新聞買ったやと…」
オレはテレビ欄を眺めた。
「スポーツニュース横並びやなあ。しかもＮＨＫからテレビ東京まで全局に、野球関係者出るやん！」
こういうときのタメのオレのスーパー家電の出番や。
「オレのＤＶＤレコはとんでもないんやで。なんと、八局、同時に録画ができるんや！！」
誰が何のために、どういうときに使うと思ってたこの機能がついに役立つ時が来たで！！
「ＮＨＫ、日テレ、ＴＢＳ、フジ、テレ朝、テレビ東京。全部録画しても、二局あまるわ」
ＮＨＫは川上監督、日テレは星野監督、ＴＢＳはボビー、フジが

野村さん、テレ朝は仰木監督、テレビ東京が、オレを侍ジャパンから締め出した原。

「どれを見るか、迷うところやが、オレは迷わんで！　まず生でじっくりと見て、あとの局のは、録画したの後回しにして、順序消化すればええやんから」

　生で見るのは、どれにしようかな。早送りとかできんから、集中して見れるいうたら、やっぱり、ノムさんか。それとも仰木さんでもええかな。

　原はないわ。あれは、必死に名監督ずらしようと言葉を作が、中身がないわ。

「やっぱ、ボビーでええわ、オレの名前をキーマンに上げるはずやから、テンションあげてから、他のＶＴＲに挑めるし」

？

あれ。ＤＶＤレコの電源が入らん。コードか？　いやちゃう。

コード以外に、機械故障の原因がオレわからんわ。

それならなんやろ、接触不良？　それくらいしか思いつかんし。

なによりオレには、なおせない！

「これか、機械トラブルいうのは」

だから、なんやちゅうねん。

録画できんなら、生でみればええんや。

リモコンがあるんや。

リモコン使ってな、かちかちと器用に、大事なポイントを見繕って、見ればええんや。

　ノムさんが言葉に詰まったら、ボビーに素早くかえて、ボビーの通訳が、ボビーのだらだらしたコメントをどう手短に訳したらええか、困惑したそのスキに、星野さんにかえて、オレのロッテが最初にあたる中日の出方をさぐる。

　原はどうせ、小学生の文集みたいなことしかいわんから、チャン

ネル合わせんでもええか。
よっしゃ、気合が入ったで。さあ、肝心のリモコンはどこや。
「リモコンがないわ」
日付がかわろうとするこの時間になって、占いがオレを締め付けようとしている。

西岡は運命と対峙する

「イチバーンはニシオカ～」
やっぱりや。ボビーは、オレをキーマンに指名した。
「現在、定まっているラインナップは西岡だけです」
通訳の中曽根さんがそう続けてくれた。これは気合入れないかん。
落合さんも有藤さんもおられるのに、オレだけが、不動の座を与えてくれた。
だけどな、気合入れるのは、また後にせんとな。
今は、とにかくリモコンを探さないかん。
どこや、どこや。オレのリモコンはどこいった。
「見つからん」
いらんときは、その辺、あるとったら踏んづけるのに、こういう時に限ってでてこん。
「しゃーない、探してる暇はない」
そこら中ひっくり返せば、見つかるかもしれんが、そんな時間はないんや。
ＴＢＳを皮切りに各局、スポーツニュースが花ざかりやから。
「今の時間だけは気が抜ける」
横並びのニュースは、横並びに試合結果を伝えるからや。
「かぶっとるがな。ずらせば、数字取れると違う？」
そう素人考えで思うけど、やっぱ、試合を最初に持ってこんと構成がピタっと決まらんのかな。
パパっとチャンネルかえたが、試合前にゲストに話させたのは、ＴＢＳのボビーだけか。
一言、ふた言の所信表明演説やけど、それで、オレの名前あげんのやから、さすがオレやな。

「お、やっぱダルが先発か。ヤクルトの投手は、金田さんか。あ、池山さんが一発打ったわ。懐かしいな、ブンブン丸健在や。なんや、敬遠の
ボール打ったで、開幕からとんでもない試合やな」
まずい、つい見いてしまったわ。オレは的確にチャンネルをかえて、いつどこで、ゲストが話しだすか、監視せなあかんのや。
「フジにかえたら、ヤクルト目線やな。やっぱ株持ってるだけあるわ…。土橋さんが決めたんか。地味やなあ～」
横並びに始まった試合ダイジェストは、横並びで終わったわ。
「さあ、いっせいにゲストが話しはじめる時間や。これからが、オレの時間や」
しかし、リモコンなしに、テレビ見るの疲れんわ。このチャンネルかえる二つのボタンを交互に押すのは、意外と頭使うで。
ＮＨＫ、教育、日テレ、ＴＢＳ、フジ、テレ朝、テレビ東京の順番やったはずなのに、地デジに変えたら、ＴＢＳの前にテレ朝とテレ東がきやがって今までの価値観崩れるわ。
ロッテに入団して、ようやっと、東京のチャンネルの順番を体で覚えたところやのに、またリセットせなあかんのか。
「ボビーは、オレをキーマンに指名したから、ちょっと目離してええかな。まずはフジのノムさんや…」
ノムさんええことというなあ。さすが、オレが目をつけた監督さんや。
オレのガキのころは、ちょうどヤクルトの全盛期で、よう応援したもんや。
「フフフフ…。ボクは監督じゃないんですよ。監督は、鶴岡大親分や、ボクに構想を聞いてもしょうがない…。何？　もしもボクが監督だったらの
仮定でいい？　フフフ、鶴岡監督より、的確に人材を使いますよ、ボクは…。フフフフ」

さすが、ノムさんや。監督やない一選手の身分で、勝手に構想をベラベラとしゃべりまくる。この不遜なところが、すごくええで。オレもこうありたいわ。

「おっと、フジのノムさんに目を奪われている暇はないわ。他のチャンネルのゲストもしっかりとチェックせなあかん」

チャンネルボタンの右側の戻るのほうを押すんや。

「なんや、地デジやと、フジからひとつ戻ると、テレ東なんか」

原や。

「ええ～　コンディショニングを整え、全力で挑もうと思います」

空虚や。中身がなんもあらへん。こんなんリトルリーグの地区大会の試合前に、鼻タレたガキでもいえるわ。

「がんまります！」

内容のないうえ、ま～た、見飽きたグータッチかい。芸がないのう…。

原なんぞに、構ってる暇はないわ。日テレや。日テレには、星野監督が出ている。

偉そうやなあ、あ、また北京五輪の言い訳してるわ。オレが、ムードを壊した張本人になっとるが、違うで。あれは、本当は…。

まあ、北京振り返ってもしゃあない。オレは大活躍したんからな。

「星野さん、何かしゃべってくれ。中日としょっぱなに当たるんや」

そっから、材料探して、レポート書くんや。

ふふふふ、担当コーチにすべて任せてあるやて？　それじゃあ、北京の二の前や。大野さんはええとして、田渕さんはなんや。打撃コーチとヘッド兼任しとるクセにろくなこと言わんから、びっくりしたで。

「しゃーない、川上監督や、仰木監督や」

二人と因縁もないし、試合当たるか知らんが、おふたりとも大監督や。話し聞いといて損はない。

あかん、仰木さんは、酔っぱらい半分で、女子アナの三角地帯を見つめとるし、川上さんは、眠くなるような、説法じみたことしか

いうとらん。
「ＮＨＫから、フジに移動や」
やっぱノムさんの話が一番参考になるわ。
「あれ、おかしいな…」
押しても、チャンネルがかわらへん。クソ、この進むのボタンで、フジに飛ぶんや。
「もしかし、ボタンを無理やり押しすぎて、中のゴムが切れたかもしれん」
あかん、戻るのボタン押して、逆順でフジにいくんや。
「多チャンネルや…」
なんで、こうチャンネルあるねん。アナグロ地上波やったら、ＮＨＫの逆順いうたら、ボタンひとつ押せば、すぐにテレビ東京いくのに、なんやこの、聞いたことも、見たことないチャンネルは…。エロチャンネル？　あったんかそんなん、でも今見てる暇はないんや。映画、天気、スポーツ、アニメ、いくつあるねん。
ＢＳ民放？　韓流ドラマやテレビショッピングだらけやないか。
ふうやっと地上波にたどり着いたで。
「西村監督？」
なんで、西村さんが出てるんや。失礼ながら、西村さんに需要があるわけない。
どうしたこった？
オレは新聞のテレビ欄を手に取った。
「あ、これかいな」
千葉テレビ、西村監督、生出演。ＪＷＢＣ、２０１０年シーズンの意気込みを語る。
「やて？」
見落としてたわ…。
最初から、これをみとけばよかったんや。これを材料に、レポート書けば、西村試験管は、オレに満点をくれるはずや。

「なんやて？」
西村監督が、おじぎをして、退場したぞ。
「見逃した」
出演終えて、帰るとこやった。
おい、西岡、お前、昨日のオレの生出演見たか？
なにい、見てない？　死ね、バカ、それでもキャプテンか。
「どやされる」
リモコンがあったら…。
いやちゃうで、リモコンあったとしても千葉テレビにはかえんし、録画できたとしても、千葉テレビは範疇にないから、とらんし、
「デジタル運がないから、こうなったわけやない」
情報不足が悪いんや。
なんで、西村監督の出演オレ知らんかったんやろと後悔はするが、それは自分の責任や。
占いが当たったわけやない。オレの準備不足が悪かったんや。
「オレの運命が占いなんかでわかってたまるかい」

あ、鼻を膨らませてる暇ないで。さあ、フジに戻らんと…。
「なんや、映りが悪い…地デジやろ？　ありえへんわ…。写りがええだけが取り柄やろ？」
オレは文句いうてやろうと、テレビの説明書を手に取った。
「降雨減衰？？？？　なんや、それ…。悪天候の日は、地デジの写りが悪い場合があるやと？」
さっき、コンビニいったとき晴れとっややん。
オレは怒りをこめて窓を開けた。
「あ、雨どころやない、雷鳴ってるやん、気付かなかったわ」
クソー、風をやめ、雷止まれ、オレにテレビを見せろ。

そのときや、オレの体にピキピキドカーンいうて電流が流れたんは。

窓を開けたら、雷落ちるなんてあるか？　デジタル運はどこいったんや？

これじゃあ、普通に運が悪いだけやないか。

オレは時計の時間を見た。

１２時過ぎ、日付は変わっていた。

「はは～　もしかして、今日の占いみたら、落雷に注意とかでるんやろうか」

関心しとる場合やない、助け呼ばんと…。

オレは、まさしく死に物狂いになって、ケータイを手に取った。

手を伸ばしたときや、バキイ、音したんわ。

リモコンこんなところにあったんか。

「今頃、見つかっても遅いわ」

オレは、メールを打った。

ダイニングメールいうやろか、死んでおらんが…死にそうなんやから。

「誰でもいい、とにかく…」

ボビー？　宛先は、ボビーや。

このさい誰でもええ。

ヘルプミー…や。

日付は変わった。デジタル運は悪うないはずや。

西岡のメールは、生出演を終えたばかりの、ボビー・バレンタインに伝わった。

「オー、西岡デスカ～？　へるぷみー？　フフフ」

「どうしたんですか、ボビー？」

「西岡ノ体調ガ悪イヨウデス～　イチバンニシオカヲ小坂にカエテオイテクダサイ」

バレンタインは、体調不良の選手に無理強いをしいることはない。

大事な試合といっても彼の考えはブレない。

「死んでたたまるか…。オレは這ってでも、今度の中日戦には出るんや…」

だから、あんたは控えスタートの予定だってば。

西岡は運命と対峙する（後書き）

難解な小説だなあ

すべてはありえないことだった

「僕は、確かに池山さんにホームランを打たれたんです」
「ダル、オレもだ。池山さんに打たれたあの配球は間違いじゃないのかって、違うことを考えようとしても頭にこびりついてくるんだ」
「鶴岡さんもですよね？　僕がこのことをブログに書いたら、池山と僕が当たるわけがないと集中砲火受けましたよ。そうです、当たるワケないんです。僕と池山さんが対戦するわけない」
「そう当たるわけがない。現役のダルととっくに引退されている池山さんが」
「でも、僕は確かに対戦した」
「夢を見ていたんだ」
「僕と鶴岡さんが一緒の夢を？」
「そう、ダルとオレが偶然にも、同じ夢を見ていたんだ……」

「高津…。あれどうなったか？」
「あれってなんです、古田さん？」
「あれはあれや。掲示板の件や…。ほれ、つい、オレが、粘着質のファンにカーとなっちゃって…」
「はい？」
「なんや覚えとらんのか？　ええのう、抑え投手は。忘れるのも仕事やからのう…。ＪＷＢＣ／Ｌで検索してと…。あれ、おかしいな？　ない、全然ヒットせいへん…」

「あ、渡辺監督が痩せてもいないし、髪の毛がフサフサしていない！！」
「ワク、何を今さらのことをいってるんだ」

「だってですよ、松坂さん！　渡辺監督は全盛期の力と体型を取り戻して…」
「何馬鹿なこと言っているんだ？　たしかに、渡辺監督は、若い頃、イケメンで決めた髪型したスカしたトレンディーエースだったけど。しかし、無学で無知で向上心の欠片もないワクが、よく渡辺監督の全盛時代知ってるな。勉強したのか？　ちょっと感心したぞ」
「勉強も何も、松坂さん、ボクは確かに、見たんです。痩せて、イケメンで、髪の毛がふわりともられた渡辺監督を…」

「金本さん！！　ベンチ入り争いが熾烈すぎてたまらんですわ…。栗原のやつが生意気にも、ボクの前に立ちはだかるんです」
「はあ～？　何いっとるんや、新井。お前は、れっきとしたタイガースの三塁手やろう？　フルイニング出る義務のある、お前が何がレギュラー争いや」
「だって、栗原がいて、それを乗り越えても、三塁、一塁には、衣笠さんや水谷さんらとんでもないのがいて…」
「ぼけとるんか？　お前は、広島の選手やないといっとるやろが」
「だってだってだって…だって…ボクは確かに…。金本さんだって、掛布さんの前を守るのは緊張するっておっしゃってたじゃないですか」
「新井…。だってやないわ…。現実だけをみよう、お前も選手会の会長やろ？　そろそろ夢見ごろを卒業するんやな」
「だってだってだって…金本さんだって…」

「ヒサさん、どうします？　巨人から、緊急招集がかかりましたよ？　なにやら、二軍を作るらしく、僕らにも参加してもらいたいって…。しかし、いくら僕らが現役のペーペーでも扱い酷いっすよねえ？　さんざん振り回しておいて、今度は、二軍すよ？」
「内海…おめー相変わらず馬鹿だな？　なんで、オメーがいまさら

二軍なんだよ、あん？」
「今更っていうか、そりゃ、オレ、今や、セ・リーグに並ぶものがない大エースですよ？　でも巨人軍の長い歴史を見たら、一軍入りから漏れるのも無理はないかなとも思いますし…」
「馬鹿だと思ってたが、妄想も語りだしたか…、内海、大先輩のオレから一言…。病院いけ」
「え…。オレなんかおかしなこといってるかなあ」

「村田さん…四番打つって本当ですか？　いやあ、ＷＢＣ四番に引き続き、二冠ですねえ」
「うっちー、オレが四番打たなきゃ誰がいるんだ？」
「誰って、ポンセとか桑田さんとか松原さんとか…」
「はあ？」
「はあって…」
「うっちーが三番、オレが四番…。動かしようがあるのか？　スレッジだろうと、カスティーヨだろうとオレの四番は不動だ」
「スレッジ？？？　カスティーヨ？？？　村田さんこそ何をいってるんですか…」

「クソー、このままじゃ外されるわ。ボビーのやつは、ちょっとの体調不良で休養取らせるからのう。落雷を受けたこの体が戻らんと、小坂さんに遊撃の座を取らるわ…。一試合の休養で住んでも、気を抜いたらあかん。小坂さんは、その一試合で、レギュラーを奪い返せる働きができる人や……あれ？　あれれ？　なんで、ロッテに小坂さんがおるんやろ？　オレが休んだときに出てくるショートいうたら、早坂や、根元、塀内やろ？　そんなもんクズみたいのばかりやん…。オレは何を慌てふためいてるんや…」

大晦日に、こんな小説を読んでいる、そこのあなた。あなたはと

ても運がいい。

なぜ、運がいいか、それは次話で明らかになるだろう。

「和田、杉内、和巳。おまえらの球を、この世界の大捕手城島さまが受けてやるから、ブルペンこいや」
「あれ、城島さん、なんでホークスのキャンプにいるんですか？」
「なんでって、張り切ってるところで、水さすな、スギ。オレはなあ、ＪＷＢＣのホークスの捕手の座をなんとか、野村のじいさまから、奪いたくてな…」
「いやだな城島さん、阪神に入団したじゃないですか」
「は？　そりゃ阪神に入ったけど…それとこの大会は別やろが。ところで、和田。和巳はどうした？　あいつほどの投手が漏れるわけないだろ」
「和巳さんは、相変わらずリハビリですよ」
「リハビリも何も関係ないだろ。タイプカプセルに入れば、故障なんぞ誰でも元通り…」
「城島さん、そんなものがあったら、和巳さんは苦労してリハビリなんてしませんよ…はは」
「……？　はい？」

「ノリ、近鉄のみんなに久々にあうと楽しいな…やっぱ、オレの故郷は近鉄や…」
「タフィ、もうええんや、もう近鉄はええんや。素晴らしいチームやったけど、上がスカタンばかりやったから、のうなってしまったんや…思い出を、アルバムから引きちぎって、傷を付けるのはもうやめようや…」
「ノリ、お前、年俸の上げ下げが激しすぎて、自分を失ったんやないか？」
「だから、もうええって…楽天とオリックスでお互いがんばろうや。岩隈や憲史、大村など、元近鉄戦士がまだ頑張っとるからな」

「オレはオリックスに戻らん、近鉄に戻るんや…」

「うははは、ついの、この星野仙一が大々的に復活を告げる大会が来たな。島野作戦コーチ、ロッテの情報収集ぬかりはないか？あれ、島野さん、おらんのう…どこいったんやろ…。まあいい、とにかく、この大会で優勝するこそ、星野の野望を成就するただひとつの手立て…。これを踏み台に、巨人監督。コミッショナーと授受つなぎや…。さあてと、スケジュールを確かめてみるか…。明後日は試合やから、っら、講演、テレビ、有権力者への挨拶など入っとらんな…。ぬぬぬ？　どういうことだ、大会に割かれるはずのこれから数週間のスケジュールが真っ白や…？」

「おかしいかな、イチロー。オレな、たしかに監督を任されたんや。詳しい展開は忘れたけどな、なんか仰木監督が退場喰らってな。オレに監督せい、これも指導者の勉強やって、采配任されたんや…。それもベンチに１００人くらいおった、けったいなゲームでな…」

「仰木監督はこの世にいない。田口さん、それは夢です」

「いや夢やないって、あれはたしかに現実や。オレは現実を見たんや。ブーマーがおった、簑田さん、松永さんが若い頃のまんま三拍子揃っとった。福本さんが素晴らしい盗塁の出足を見せれば、山田さんのシンカーは美しく沈んだんや…」

「すべては夢です。いいですか、田口さん、現実の前に、誰もが非力です。誰もが、現実に破れ、夢を夢のままに終わらせる。ボクも夢をかなえようと努力しましたよ、でもその夢の半分もまだ叶えていない。それだけ現実というものは、高くそびえ立つんです…」

「アホか、イチローが夢をかなえとらんとしたら、世のすべての人は、現実に完敗やないかい」

「ええ、そんなものですよ…。だから、面白いんじゃないでしょうか…。死んだ人は生き返らないし、過去の栄光は帰ってこない…。

でも、時間は流れている…。そこで全力を尽くして、現実の壁を超えてやろうと、もがく。それが人生を楽しく過ごす、ただひとつの方法じゃないでしょうか…」

「イチロー…。意外とクサイこというのう…」

「僕だって、出てみたいですよ。歴史上のすべてのオールスターが揃った大会に…。そんな大会が現実にできるように努力してみようじゃありませんか…」

「努力って、野球しかできんオレらの努力するところやないような気もするが…。野球頑張っても、人若返らせることも、生き返らせることもできんしなあ…」

すべては夢だった。
すべては幻であった。
誰しも全盛期に戻らなければ、　故人は誰一人蘇らない。

ジャパンワールドベースボールクラシックは開かれない。

ジャパンワールドベースボールクラシック

完

２００９年分は。

鎌ヶ谷近郊の電気店はどこでしょうか

ところは、鎌ヶ谷球場。

開幕戦をサヨナラで落とした日本ハムナインは、開幕セレモニーをよそに、ここ千葉の二軍練習場で、窮地挽回を図るべく、さらなる精進を積んでいる。

「ふはああ～」

「稀哲、もっと気合入れんかあ～」

「稲葉さん、そりゃないっすよ。あんな長時間ゲームの翌日の朝っぱらから、フルスロットで挑めますかい。しかも、あれですよ、首脳陣のみなさまや、大杉さんや張本さんの東映の重鎮たちは、開幕式出席で不在。いるのは顔の知れたハムの選手たちばかり。鬼の目が届かないのに、練習に精を出せ、いわれてもねえ」

森本がいうとおり、グラウンド中見渡しても、いるのは、ハム様式のユニフォームばかり。

それもオレンジユニや、タテジマユニの数は少なく、目立つのは、北海道仕様のユニばかりだ。

「まあな。日程にも無理があるよ。これだけスケジュールが立て込んでいるのに、開幕で一日潰せっていうのもなあ。式に出ずに、調整に励んでいる真面目な俺らが、悪者みたいだ」

「ふはああ～。だからっす、あくびが止まらないのは～」

「だからといって、手を抜いた真似をするな。他の選手が式に時間を取られている間に、差をつけてやるんだ」

「真面目っすねえ～～、稲葉さん」

「ところでさあ、開幕式、何時からだ？」

「たしか、１１時からっすよ」

「また半端な時間やなあ～」

「なんでも、テレビ中継の関係らしいっす。ろくな枠が取れず、結局、昼前の半端な時間しか取れなかったらしいっすよ」

「テレビねえか？」
「あれれ？　稲葉さん。さっきということが違いますねえ～。やっぱ、気になるんすか？」
「テレビ中継あるってことは、それだけ何かの目玉があるってことだろ？　ただ、選手入場やらコミッショナーの開会挨拶ていどじゃあ、最近のテレビはくらいついてくれないからな」
「そういえばそうだ。なんか、仕掛けあるっすかねえ？　オレもテレビ見たくなってきたわ。よっしゃ、若いヤツに用意させるか」
　森本は内野で調整する、年下の鶴岡や田中賢介を呼ぼうとするが…。
「おいヒチョリ。鶴岡や賢介はお前より年下とはいえ、格下やないぞ。あいつらはきっちり、昨日の試合で結果を出したからなあ。ヒチョリ、お前の出番だ」
「そりゃないっすよ～　稲葉さん。３０近くなっていまさら若手の小間使いができますかい。それに、オレ稲葉さんと違って、７打数７安打で結果を出しましたよ～」
「あほ、そりゃ野球盤の話だ。いいから、ヒチョリ、お前がテレビ調達してこい」
「わっかりましたよ～」
「あ、ワンセグはだめだぞ、ちゃんと遠くからも見えるやつだぞ」

「まったく、人使い荒いなあ～」
　森本は、練習に精が出せなければ、パシリにも気が乗らない。だらだらと、足取り重く球場を出ようとしたとき、細身の男に出くわした。
「こんちわ～　森本さん～」
「あ、糸井…ちょっと待て、糸井、お前がなんで球場入りしてるんだ？　お前は最終選考で、実績不足と頭が足らないことから、落ちたはずだろう？」
　その正体は、糸井嘉男であった。

「いやそのはずなんですか、何か知りませんけど、大沢監督さんから、呼出くらいましてえ」
「なぬ？」
森本の頭脳は素早く、落ちたはずの糸井が練習場に呼び出される理由を、二、三割り出した。
ひとつ、練習の補助。開会式に主力が呼び出されるため、実戦形式の練習が困難。だから、適当に暇な若手を呼び出し、練習の相手をさせる。
糸井は、森本の代わりに、小間使いの役目を果たしてくれる救世主である。
ふたつ、交換要員。精細の見られるプレーを繰り返した森本の代わりにベンチ入できる状態かテストをするために、呼び出された。
糸井は、いわば森本に死刑を宣告しにきた、最高裁判所長官である。
みっつ、糸井は森本の尻に火をつけるためにやってきた、いわば踏み台でしかない。
糸井と森本は切磋琢磨するが、覚醒した森本は、ベンチの枠を、渡さない。
その結果、森本は、糸井を足場に、さらなる高みに到着する。

客観的に見て、大沢の狙いは、三つ目か。
ただし、糸井は踏み台にとどまらず、糸井を凌駕する可能性もある。
森本はそれを恐れている。
打率が二割五分そこそこでホームランをめったに打たない森本に、比べ、糸井は一軍定着二年目で三割十五本のラインを軽々突破した天才。
出塁率と長打率の和を足したＯＰＳも、森本の自己最高のそれを軽く超えて、リーグ最上位にランクされるほどである。
数字だけを切りとれば、森本が糸井に勝てる余地はない。

瞬時に、そこまで計算した森本は、糸井に先輩風をふかして、追い出しにかかった。
「おい、糸井。わざわさ来たところ悪いが、ちょっと頼みがあるんだよ～」
「なんでしょうか」
「テレビ買ってこい」
「テレビ??」
「そう、テレビだ。それもなるべく大きいのな。薄いのがいいなあ～　見栄え的に」
「なんでテレビが必要なんですか?」
「おい、糸井。オメーは頭悪いけど、体育会の仕組みはわかってるよなあ?　先輩に命令されたら、疑問すら持たず、はいといってけばいいの」
「は、はい…」
「声が小さい」
「はい!!」
「よし、いい声だ!　それじゃあ頼むぜ」
「あの、お代は…。薄型大型テレビってけっこうしますよねえ」
「自前に決まってるだろ」
「え…」
「お前は、年俸アップで大金持ちになったろ?それくらいあるだろう。持ち合わせねーのならおろしてこい」
こうして、森本は、糸井の練習参加を阻止しただけでなく、テレビの調達を押し付けたのだ。まさに、一石二鳥である。
森本は気分良く、鼻息混じりで、再び、グラウンドに足を踏み入れた。
「らーらーらららら♪　らーら～♪（北の国からのつもり）」
だが、そこには、森本が目を伏せたくなる光景が広がっていた。
「せっかく、糸井を追い返したのに意味ねーじゃん…」
外野には、あふれるような数の外野手たちが、腕をぶしていた。

大喧嘩による故障から復帰したばかりの白仁天。
その喧嘩相手の山本八郎。
８７年に三割三十本を記録してベストナインに輝いたブリューワ。
本塁打王のタイトル保持者のミッチェル。
東映時代、細く長くチームに貢献したラドラ。
主に外野時には一塁と、内外野兼任で１９６２年の日本一に貢献した左殺し吉田勝豊。
強肩好守のイチローのライバルこと上田佳範。
法政三羽烏の一人で、ポスト長嶋ともいわれた富田勝。
踊るホームラン王とよばれた陽気なウインタース。

彼らは、森本が糸井と同じく一度は、落選の谷底に蹴落とした男ばかりだ。
彼らは、森本の失態を餌に、谷の奥底からはいあがり、再び、日の目を見たのだ。
いや、森本の失態だけではない、外野陣全体の不振がそのさいたる要因だ。
森本をはじめ、６人いた外野手で、一応の結果を出したのは、猛出塁をみせた張本のみ。
代走で終わったデューシーは当然として、島田誠、大下弘、稲葉。
誰も、ヒットすら打っていないのである。

「せっかく、あの手この手を駆使して、生存競争を勝ち抜いてきたのに、また競争再開ですかあ～　はあ…」

規格外の天然

「これいわゆる刺激剤かあ～　森本稀哲は、破ったはずのライバルとの邂逅で、刺激を受け完全復活をはたすというちゃちだけど、万人受けする筋書きだなあ」

森本は口では強がるが、

「……オレ、この猛者たちにどうやって引導を渡してここまで勝ち抜いたんだっけ？」

内心は恐怖に満ちている。

「たしか、外野ならどこでもこなせる守備力と、代走でも使える走塁の高さ。それでいて貴重な右打ち。さらに、ムードメーカーとしてもその役割を果たす、うってつけてのベンチプレーヤー…。スゲーじゃん、オレ。自信を持て、この人達に、オレは勝ってここにいるんだ。オレより多少、打率が残せるからといって、ホームランが３０本打てるからといって、オレの便利屋ぷりにかなうやつは、ここにいないんだ。張本さんに、喉が乾いた、お茶買って来いといわれて、プライド捨てて、パシリを演じられるか？　オレはできる。だが、他の外野手はできない。そこの違いよ。社会ってのはなあ、自分を捨てた順に、勝ち組になるんだ…」

「ふう～　喉乾いたなあ」

稲葉がバスタオルで汗を拭っている。

「ほおら、きたきたきた～～～～～、稲葉さんが、ドリンクを欲してる。オレは稲葉さんの趣味嗜好を知り尽くしている。稲葉さんが、誰かにパシリを言いつけ渡す前に、オレは稲葉さんの飲みたいドリンクを差し出している…。これよ、この速さよ…」

だが、現実は森本が思うより怪奇。

「イナバサーン、ドウゾー」

「ありがとう、いや、サンキュー、ウインタース…。悪いね、僕よ

り年上のウインタースに気をつかわせてしまって…」
ウインタースに先を越されたのだ。ウインタースは、どこで情報を仕入れたか知らないが、稲葉の愛飲する…。
「しかし、オレが青汁を好んで飲ん出るてよく知ってるねえ～」
青汁を事前に用意していて、すかさず渡したのだ。
ウインタースはホームランを当たり前のように３０本打てるだけでなく、踊りもうまければ、パシリになることも厭わない。

「だけど、ウインタースは、走れない、守れないじゃないか…。左の荒っぽい長距離砲なんて、ソレイタとかぶってるし…。そこまでプライド捨てれる姿勢は、脅威だけど、オレのライバルじゃないね…。守って、走れる、右の外野手。そうじゃないとオレのライバルとはいえん」
森本が開き直り、遠い目でフェンスのはげた部分を見つめていると、
「どけどけどけどけ」
のけもの扱いにされる。
ぼーと突っ立つ森本は、ノックを受ける外野手の邪魔になっていたのだ。
「うまい」
その外野手は、森本の邪魔をいかんともせずに、フェンスに足をかけて飛球をキャッチする。守備の名手の森本が思わず賞賛の声をあげる外野手の正体とは…。
「井出さん?」
森本が、すっとんきょな声をあげた。
その外野手とは、井出竜也。
「おかしいすよ、井出さん。井出さん、外野守備走塁コーチでしょ？　初戦でも、一塁コーチとしてコーチャーズボックスにたってたじゃありませんか」
「オレもコーチで専念するつもりだったんだけど、大沢さんが、お

前も選手やれって、いきなり言い出すから、こうして、急ピッチ調整してるんだよ」

井出竜也。二度のゴールデングラブ賞を獲得した右の外野手。

走攻守に長けて、秋山二世の評価を経て入団。

穴のある粗い打撃、細身ながら、筋力抜群で一発長打を秘める、投手出身らしく肩は抜群、快脚と、勘の良さを生かした中堅での守備力は、日本ハム史上に残るものだ。背番号5をもあわせて、その特徴は、新庄剛志と酷似する。

だが、井出には、新庄の１００分の１の華もない。まさに、地味な新庄である。

「細身で右打ちの好守の外野、オレとよく似たタイプ…。しかも、オレより肩が強く、オレにない長打力も秘めている…ライバル？というか、オレ、どうやって、井出さんに勝ってここにいるんだっけ？　というか、オレ、必要なの？　他の外野手のみなさんをオレの代わりに入れた方が、チーム力あがるんじゃね？　ムードメーカー自負も、先輩に萎縮して、その実力発揮できず、スモールボールの申し子呼ばわりも、痛すぎる走塁ミス…。オレ、いらないじゃん」

森本は刺激剤注入で、闘志を燃やすどころか、精気を吸い取られてしまった。

ふてくされた森本は、フェンスによりかかり、ため息をつく。

「はあ～　よく考えれば、ベンチ入りしてなんになるの？　年俸がかかってるわけでも、通算成績に影響されることもない。名誉、云々いうけど、この大会、注目度あるのか？」

森本は、帽子を深くかぶり、視界をふさいだ。

「真っ暗闇…。今のオレの気分」

その時、森本のケータイが激しく揺れて、静寂の闇を一瞬で壊す。

「あ、ケータイ…。たく、ケータイ持って、練習なんて、張本さんに知られたら、タコ殴りだぜ？　dが、この場合はしょうがない…。パシリと業務連絡さないかんから…」

電話の相手は、テレビを買いに行かせた糸井である。

「糸井、ちゃんと買えたか？」
「あ、ヒチョリさん、あのですね、今、銀行でお金をおろすところなんですけど、あの、困ったことに、暗証番号がわからんのですよ。ヒチョリさん、オレの暗証番号、知ってますか？」
「はあ、なんで、オレがお前の番号知ってるんだ？　やっぱ糸井、お前は馬鹿だなあ～。暗証番号なんてよ、どうせ、背番号とか生年月日とわかりやすいものだろ？　バカでも忘れないようなのつけるんだよ、バカは」
「背番号？　オレいくつでしたっけ？」
「２６だろ、それも忘れるな」
「あ、２６か…。でも、困ったなア、２６って桁がふたつですよ？　番号は桁が４つ…」
「二桁と、四桁だろ、いらいらするなあ桁が足りねえーなら、２６の後か後ろに、二桁の数字くっつけりゃいいんだ」
「あ、そうか…。あ、行きました、というか、オレの名前を数字化したのが、番号やったです」
「名前を番号に？　いとい、あ、１１０１か…」
「そうです、それです」
「つうか、部外者のオレに、暗証番号教えるな、あとで替えとけよ」
「わっかりました…」
「たく、手のかかる馬鹿だなあ…糸井のやつ…」
電話を切ると、目の前には稲葉が立っていた。
「ヒチョリく～ん、テレビはどうした？　もしかして、糸井に買いに行かせたのか？」
猫なで声がまた怖さを増す。
「あ、稲葉さん…。そのとおり、糸井とばったりであって、パシリなら年下のオレがやりますと糸井が言いまして」
「ほんまか？　嘘くさいけど、まあいいか…。しかし、外野も大変だけど、内野も凄いぜ、いつの間にか、ダイヤモンド狭しと、人で埋まってる」

内野に目をやると、これもとんでもないのがわんさわんさ。

捕手には、高橋信二の稚拙なリードと拙守に懲りたのか、ダルビッシュ専用の鶴岡に代わって、ベンチ入りの予定の大宮龍男だけでなく、虎視眈々と返り咲きを狙う野口寿浩の姿もある。

大宮、野口ともに、捕手としての評価は高橋のそれの上をいく。

「オレには、一塁守備もこなせるという、お二人になりセールスポイントがある」

高橋は、そう強がるが、一塁手の層は、高橋の手を借りずにして、元から厚いのだ。

大杉だけでない、柏原もいれば、９３年大沢ハム旋風の象徴シューもいる。この日、練習に姿を現した小田義人もいる。小田といえば、メガネの右打者であるが、「あぶさん」で、景浦の交換相手として名前が上がったことが有名。当時の監督であった大沢が、小田を見返りに上げられた途端、拒否に回るほどの実力者だった。

「なんでガッツさんも一塁やってるんだ？　たしか、三塁に専念するように、大沢監督に言い渡されたはずなのに」

小笠原が、一塁手としてノックを受けている。

「大杉さんＤＨで、ガッツさん一塁なら、守備は固まるけど、ならサードはどうするの？　片岡さんだけじゃ、心もとないよ？」

片岡だけではない、サードもまた分厚い補強がなされている。

「ガッツが守備であれだけヘマやらかしたら、普通、控えの一番手、オレの出番やろ？　なんでこんなぬ三塁に人がいるねん」

片岡がボヤくのも無理はない。

小谷野栄一。勝負強さとツボに入れば、一発長打を備えるその打撃は６番サードのイメージにぴったり。また、風貌に似つかわしからずの、そのエレガンスで流れるような守備は一流そのもの。守備機会数の少なさを批判する声も一部にあるが、攻守揃った選手に違いはない。

古屋英雄。８１年の優勝チームのレギュラーであり、８５年には

三割三十本を記録した通称ボンバー。４度のゴールデングラブ賞獲得の実績は、守備名人の称号を確かにする。

西園寺昭夫。古屋が二度目の優勝の三塁手なら、西園寺は一度目の優勝のレギュラーサード。低い打率を選球眼でカバー、その高い出塁率は、マネーボール以後の今こそ、再評価されるべきであろう。ちなみに、水前寺清子のいとこ。

「オレの特徴がめだとうなるがな」

片岡が嘆くのも無理はない。出塁率の高さは西園寺。堅実な守備力は、小谷野、古屋に色を消され、スラッガー自負する長打力にしても、３０本打った経験のある古屋の前に、２１本が精一杯の片岡はひれ伏すしかない。

「賢介や金子もオレと同じ目にあえ」

片岡が呪いをかけるまでもなく、二遊間も、再招集されたプレーヤーでうごめいている。

奈良原浩。和製オジースミスと呼ばれたその俊敏な守備力は、史上最高とも言われる。遊撃、二塁をこれだけこなせる選手も、プロ野球史上、そうはいないだろう。

広瀬哲朗。スキンヘッドを露にすることを厭わないそのヘッドスライディングこそ、９３年大沢ハムの謎の快進撃の原動力。開幕戦は、解説者として迎えたが、再度、プレーヤーとしてお声がかかった。

半疑問形口調の解説は、いささかくどく、その舌鋒ぶりは評価の分かれるところだ。

高代延博。落合中日での参謀ぶりや、ＷＢＣサードコーチの印象が強いが、元々、日本ハムの人。小柄ながら攻守に忠実なプレースタイルは、大沢ハムの優勝に大きく貢献した。ドカベンの九番遊撃手高代のモデルは、法政大学時代のこの人。

そして、この人だ。

「オレも出るぞ」

白井一幸。参謀役に専念するため、二塁手の座を若い田中賢介と

金子誠に譲ったはずのこの男が、再び、グラブを手にした。
その守備力の高さと堅実性は、同時代に辻が存在しなければ、何度もゴールデングラブに輝いたとまでいわれる。
「おいおい、首脳陣が開幕式に出ているからって気を抜くな。オレが逐一、動きに目を光らせているからな。いい状態の選手がいれば、選手の名前に関わらず、どんどん入れ替えるぞ」
白井一幸が、サバイバルを宣言した。
「まあ、内野も大変そうだ」
「おい、ヒチョリ、対岸の火事みたいにいうな。外野の俺らにも内野の争いはかかってくるんやぞ」
「え？」
「よう考えてみい。外野６人体制だったろ？　内野も８人入れて万全のはずが、それでも、二遊間が足らなくなって、内野は背水の陣を描かなければならなくなった。ということは余分な外野を減らしてまで、内野の層を厚くする手もあるな」
「なんでっすって！！　その外野の余分な一人って…稲葉さん、ご愁傷さまです…」
「なんでだよ！！　ヒチョリお前が一番やばいだろ！？　まあ、オレも気を抜くとやばいわなあ。どっか、外野の一角をとらんと。代打役だけじゃあ、いつ落とされてもおかしくはない」
「それより、稲葉さん。なんすかあれ？」
「あん？　トラック？　なんで、グランドでトラック？」
「それも、助手席には糸井のバカが乗ってますぜ」
なんと、グランドにトラック？　しかも一トントラック？　しかも助手席には糸井？
さてさてどうなってるやら…。

下田コミッショナーが応援問題を考える

「いやいやお待ちしましたあ～」
トラックの助手席から笑顔で手をふる糸井であるが、森本は理解不能。
「何考えてるんだ、おめー、テレビ買いに行ったはずだろ？」
「ですから、そのテレビを運んでもらってるんですよ」
「は？　おいおい、もしかして、そのトラック荷台一杯に広がったダンボール箱の正体はもしや…？」
「ヒチョリ先輩、ご名答！」

ダンボールの封がとかれると、のどかな屋外球場に、不似合いなほど豪華絢爛なテレビが姿を現した。
箱には、最新薄型超特大テレビ６５型と表示されている。
さすがの森本も糸井の懐具合が気になったらしい。
「いくらした？」
「５０万ほど」
「キャッシュか？」
「もちろん！　野球選手ですから！　そこは気持ちよく現金払い」
「オメー、いくらなんでも高いしデカイわ…」
「ご心配なく！　ポイントが５万くらい一気につきましたから！！」
「はは、そうか…」

「最新型のバカ高いテレビでも、コードはつながないと映らないのな…」
これからが大変。グランドにテレビ受信機能があるわけがなく、ロッカー裏のテレビアンテナコードまで、延長コードを継ぎ足し継ぎ足しで、労を重ねて、ついにテレビは開幕式を捉える。
なお、この作業に、人手を食ったため、一時、練習は練習にならな

なかったこともしるしておく。
「ふう、ようやっと映ったなあ、ヒチョリ」
「妙に感動しますね、稲葉さん…。あ、ちょうど開会宣言の時間だ！！」
「おし、間に合ったな！」
場所は、東京ドーム。すでに１２球団の選手・首脳陣は、入場行進を終えたところのようだ。ホームベース付近に作られた壇上のマイク前には、メガネをかけた老人が立っている。
「誰ですかね、このじいさん」
「バカ、加藤コミッショナーだろ、現役の…」
「はあ…」
「歴代コミッショナーでは、指折りのまともな方なコミッショナーやぞ」
「まともな方って言い方…。失礼ながらも的をいているような…」
加藤コミッショナーの挨拶が終わると、すかさず、次の宣誓者が壇上に上がる。
「またご老人…誰ですか？」
「バカ、根来コミッショナーだろ、先代の…。歴代コミッショナーじゃ、特に何もしないありふれた存在。それが球界再編騒動にぶち当たり、批判の的になってしまった、ある意味不運な人」
「はあ…、しかし、お偉いさんの話ってのは、なんで眠くなるんだろう…。話慣れてるし、話に強弱もあって、まとまっているのは感心しますがねえ…」
森本は、早くも飽きが出始めた。それでも開会宣言は、歴代コミッショナーの受授つなぎでつなぐ。
川島、吉國、竹内、下田、金子、大濱、宮沢、内村、井上、福井…。
在任当時の球界の世相を振り返るはいいが、それを重ねられちゃあ、いささか平坦。

「これ、ほんとに地上波で放送してるんですか？　こんな構成じゃ、視聴者は逃げますよ」
「ああそうだろうな、だが、このご時世、あえて地上波が野球の開会式なんぞ放送してくれるんやぞ。なんか仕掛けがあるはずだ…」
稲葉の読みはさすがに深い。退屈な開幕セレモニーには、あるとんでもない仕掛けがあった。

「でも、稲葉さん。目玉いってもあれですよ。日本プロ野球のレジェンドが皆、行進終えて、列をなしているのに、彼らを超える存在用意できますか？　腕を組んで壇上見つめているＯＮやイチローさんの前には、いくら総理大臣や超有名人担ぎ出したってかないませんよ」
森本の言い分もある意味正しい。たとえ天皇陛下がお出ましになられても、選手たちが解き放つオーラには、お勝ちになられないだろう。
それほど、日本プロ野球の歴史のすべては、列に居並ぶ、大会参加の選手・首脳陣たちで吐き出されている。
だが、大会関係者は、ふさわしい目玉を用意していた。
仕掛け人は、パ・リーグ広報部長パンチョ伊東。
彼のあけすけのない人柄と、人脈の広さが、とんでもない目玉を作り出した。
日本プロ野球の伝説を超えるには、彼らを持ち出すしかない…。
そのパンチョがみずからマイクを取り、司会をつとめる。
「さあ、選手のみんなも観客のみなさんも、バックスクリーンの方をご覧あれ！！」
盛大な音楽が鳴り響き、照明は仰々しく暗転する。
バックスクリーン下の扉が開き、そこにスポットライトが当たると、パンチョのテンションは頂点に達する。
「出て来い！　メイジャーリィーグのとんでもない野郎ども！！」

「なに？」
「まさか！」
大型テレビを見守る日本ハムナインも驚きを隠せない。
なぜなら、歴代のメジャリーグ最強のメンバーが、次々と姿を現すのだから。
「まずは、ピィッチャーあ！！　サイヤング賞のサイ・ヤングとは、このお人のこと、歴代最多の５１１勝投手、サイ・ヤング！！」
サイ・ヤングが、だぶだぶのオールドユニフォームを着こなして、登場する。
「それに続くのは、テキサンエクスプレス、速球王、ノーラン・ライアン！！　投げるプロセッサー、精密機械マイク・マダックス！
マウンド上の暗殺者、ビックユニット、ランディ・ジョンソン！！　ハードワーカー・ロケットことロジャー・クレメンス！！　ヤンキースの生ける伝説、史上最高のクローザー、マリアーノ・リベラ！　近代最高の投手、ペドロ・マルティネス！！」

「おいおいおい、オレでも知ってる選手ばかりやぞ、これが目玉かいな…」
「こりゃすげえ、パンチョさんが用意したの？　とんでもないおっさんんだな…」

これに、コーファックスや、エカーズリーの殿堂入り選手が続き、締めは日本ハムナイン驚きの…。
「ゴセージ？？？　なんで、このメンツにゴセージが出てくるんだ！！」
鯰髭をびくつかせるゴセージの登場に日本ハムナインは疑問の嵐。
「ゴセージってあれですよね？　ダイエーにいたヘボ抑え？」
この疑問を解消させるのが、ヤンキースに留学経験のある白井一幸。
「おいおい、ゴセージは、たしかに、日本じゃさんざんの投手だが、

アメリカじゃあ、伝説クラスの投手なんだぞ。殿堂入りもしているんだ。１００マイルの剛腕で抑えとしては史上に残る選手、この面々に加わっても見劣りはせん」

「へえ、そうなんですか…。メジャー実績のある選手とは聞いていたけど、そこまでの存在とは…」

稲葉はゴセージに目を丸くしている暇はない。

投手がこれでもかなら、野手もこれでもかなのである。

捕手に、ヨギ・ベラ、イバン・ロドリゲス、マイク・ピアザ…。

一塁には、これこそ伝説の…。

「ゲーリック？？　あれが、鉄人、ゲーリックさんか…」

森本が、思わず敬称をつけてしまうほど、ゲーリックは尊大な光を放っていたのだ。

永久追放が解けないピート・ローズが姿を表し、それにＡーロッド、ジーターの現役組が続く。

「へえ、ジーターって、そんな偉大な選手なんだあ…」

外野は、バリー・ボンズ、グリフィー・ジュニア、ウィリー・メイズ、ハンク・アーロン、リッキー・ヘンダーソン。そして…。

「あの人も出てくるんか？」

「そりゃ、出てこないと、収まりがつきませんよ、稲葉さん…」

ベーブ・ルース。

彼は、ゲストとしての立場を考え、よけいな気を使い愛想を振舞うこともなく、ただただいつものどおり、尊大な姿勢を崩さない。

ふてぶてしい面構えに、大きな葉巻が憎い。

だがそれでこそ、伝説のスーパースターだ。

「偉そうだなあ～。手をふる真似事くらいしてよ」

森本のリクエストに答えたわけでもないが、ベーブ・ルースは、おざなりながら、手を振る仕草を見せる。

「ふわ、手振った…。ベーブ～」

いちゃもんつけていた森本が、もう、ベーブの虜だ。

スターは、自分の価値が落ちぬように奔走するが、スーパースターには、小賢しいイメージアップ作戦などはしない。存在そのものが、庶民を魅了してやまないのだ。実際どうだ？　手を振る真似事だけで、どれだけの反ベーブ派が寝返ったことだろうか。

「しかし、これは、超大型テレビの甲斐があったなあ。じいさん共の挨拶が続いたときは、どうなることかと思ったもんやが…」

稲葉が誉めそやすと、森本が照れる。

「いやあ、稲葉さん、それほどでも～」

「ヒチョリ、お前じゃないだろ、テレビを買ってきたのは糸井、偉いのは、空気の読めず、でかすぎるテレビを買ってきた糸井だ…。でも、これだけですんだら味気ない気がするな…」

「え？　もうオレお腹いっぱいですよ…」

「いや、これだけのメジャーの伝説と日本の伝説が顔を合わすことなんて金輪際ないやろ…。むざむざハイ、お別れです、お疲れ様でした～　いうのもな…」

稲葉の読みはどこまでも鋭い。セレモニーは、メジャーの伝説をお披露目するだけでは終わらせない。とんでもないことが起きるのだ。

菊池雄星登場？

「オレを打ち取れるジャップはいねーか？…ベーブはそう申しております」

ベーブの通訳は、日米野球でおなじみの冠陽子。

「え～　我こそがベーブを打ち取れると思うピッチャーいましたら、元気よく挙手を願います」

なんと、ベーブ・ルースは挑戦状を炊きつけてきたのだ。

「勝負は、男らしく一打席だ。オレを打ち取れたら、１００万ドルの価値のある直筆サインをやるぜ」

だが、なかなかベーブの挑戦状を受けて立つ物が現れない。

「どうせなら、最高の投手とやりてーな。ジャップといっても、最高の投手なら多少、歯ごたえあるだろうな」

ベーブはけしかけるが、乗ってくるものは一向に現れない。

メジャーの先駆け、野茂英雄は？

「おい野茂、お前いけや。ルースの野郎、生意気いうてるぞ。お前のフォークでぎゃふんいわせてこいや」

金村がけしかけても、野茂は首を縦に振らない。

「いや、開幕戦に向けて調整している最中です。無駄なボールは投げれません」

それでは、日本最高の投手、ダルビッシュは？

「昨日、投げてるからムリです」

では、４００勝投手金田正一は？

「ワシがなんで投げにゃあいかんのや」

日米野球にはほろ苦い思い出のある金田は手を上げたがらない。

球界の盟主を自負する巨人の面々は？

「絶対乗るな～　特に、負けん気の塊の堀内、上原…。こんなところで肩を使うのはバカバカしい。他の球団の投手に勝負させて、疲弊させてやるんじゃ」

ドン川上から直々に禁止令が飛びでれば、

「くそ、オレのカーブと速球なら、一捻りなのに…」

堀内が鉾を収め、

「ああ～　オレのフォークやったら、三振に取れるのに～　ああ、ベーブのサイン欲しいわ～」

グッズ収集マニアの上原も乗ることはできない。

それでは、川上の威光が及ばぬ、先輩選手の沢村栄治とスタルヒンは？

「……」

彼らは、このセレモニーに出席すらしていない。藤田元司投手チーフ、彼らと同世代の中尾二軍投手コーチ、両コーチの手ほどきにより、寸暇を惜しんで、現代野球の対応を繰り返している最中である。

中日も川上を尊敬する星野が指揮をとるだけあって、参加は認められない。

「この大会は、ワシの復権のためだけにあるんや。よけいな真似させん」

それでは、妙に自信家の揃うロッテ投手陣は？

「伊良部あげろ、オレが配球を組んでやるから、そのとおり投げれば、完全に打ち取れる」

「小宮山さんが行ってくださいよ。オレ、今日、肩に違和感あるんですわ。本調子なら、ベーブのおっさんなと一刀両断やけどね」

「オレの球威じゃ駄目だ。伊良部の力とオレの頭脳が合わさった時にだな…」

言葉には自信には満ちているが、行動には繋がらない。

飛び抜けた投手が揃うオリックスは？
「スローカーブとストレートで追い込んで、ストレートと同じ機動で、わずかに落ちるフォークを決め球に使えば、三振は取れる」
魔術師星野伸之が未来図を描くが、
「駄目だ、ストレートをぶち込まれる絵師か浮かばん。かといって、ストレート混ぜないと、緩急も錯覚も使えないし…」
球速の事情で躊躇する。

では、ソフトバンクの面々は？
「よっしゃ、このメジャー4年で培った配球術で、ルースなんて料理してやるから。誰かオレと組まんか？」
杉内、和田に目配せしても乗ってこない。
メジャーで、その配球術でつまずいた城島は信用しきらないのか。
近鉄勢の後方にいる田中将大は手を上げたくとも上げられない。
「マー、お前いけ」
「無理っすよ～　岩隈さん～」
ほんとは絶対の自信があるのだが、唯一の楽天生え抜きからの参加で遠慮したのか。

横浜投手陣はチキンの素性が響く。
「イタタタた…」
あそこが痛い、ここが痛いの元祖平松が突然、肩を抑えれば、
「オレもだ…」
あそこが痛い、ここが痛い二代目の遠藤は、アキレス腱を抑える。
「僕もや」
今度は、現役エース三浦大輔が、持病の肝機能が突然ウヅキ始める
佐々木はどうした？
「佐々木さん、行きましょうよ～　僕たちバッテリーにかかれば…」
谷繁が参加をけしかけても、
「ムリムリ無理無理無理ムリムリ……」

佐々木は顔面蒼白で、これを拒否。佐々木は大魔神の愛称とは似つかわしからぬ小心者なのだ。

好投手が雁首揃える広島は？

「タツ、いっちょ行ってみるか？」

大野が、相棒達川に誘いをかけるが、

「いやいや、大野、こうこうはやめておこう。ベーブにはワシの囁き通用しないけん」

達川がこの調子なら、彼のリードを頼る北別府や川口、津田は手を上げられない。

「オレいけるかも」

自慢のフォークと荒れ球を武器に永川が手を上げかけるが、黒田や高橋建に全力で止められる。

「頼むから、お前だけはでんでくれ」

出たかりなのは西武勢だ。

「松坂さん、あのデブのおっさん、そんなに偉いんですか？　オレなんか腹たってきましたよ。ちゃっちゃと料理して、サイン奪いとって、その場でまっぷたつに割ってやりたくなりましたよ」

「涌井、お前じゃ無理だ」

「なら、松坂さん、行ってくださいよ」

「オレでも無理だ。挑戦したいのは、やまやまだけど、みっともない思いはしたくないわ…」

「へえ、あのデブ、そんなに凄いんだ」

涌井のいたずら心に火がついたのか、後列でぽつんと所在なさそうにいた菊池雄星の腕を捕まえると、

「ほれ、菊池！　お前行ってみろ！」

「やっややややですよ、涌井さん、ああ～」

菊池の腕を無理やり持ち上げると、

「はい、決まった～」
冠陽子の甲高い声が響く。
「えええええええ～。プロ実績のない僕が、この場にいるだけでおかしいのに、ぼぼぼくが、あああああのののの伝説の打者と対峙するなんて～～～～。ありえないっすよ～　涌井さん～～～～」
菊池が慌てるのは、まだ早い。
上がった腕は、菊池だけではなかったのだから…。

菊池対ルース　次元を超えた対決

上がった腕は三本。
まず菊池雄星。
さらに、阪神の列にいた江夏豊。
「ワシがあのビッグマウス封じちゃるわ」
そして…。１２球団のどこの列にも並ん出ない、特別参列者である…。
斎藤佑樹。ハンカチ王子その人である

歴史上に輝く孤高の左腕江夏や涌井にしてやられた菊池はわかるとして、どうして斎藤がその腕をあげることになったのか。
後に、斎藤は、この時のために用意された仕込みのゲストとささやかれたが、実情は異なる。斎藤を呼んだ読売の関係者が、ひやひやしているのだから。
「僕なら、ベーブでも打ち取れる」
ただ単純に、斎藤は自信があるのだ。
同時に三本の腕が上がるとは思いよもよらなかったベーブ・ルースは、三人の挑戦を一手に引き受けた。
「カモン！」
「え～　ベーブは、骨のありそうなやつが三人も手を上げてきた。一人だけ選ぶのは、他の二人に申し訳が立たない。なら、三人ともの挑戦を受ける、かかってこい、クソヘボジャップども。おまえらの軽量級のボールなであの天井もブチ破り月まで飛ばしてやるぜ。と申しております」
カモン一言で、どうしてか冠陽子は、よけいな言語をくっつけて訳してしまう。
それが江夏らの闘志に火をつけるのだから、戦いは否応なく盛り上がる。

「一番手は、そのニキビヅラの少年！　童貞ぽい顔つきだな！　オレに勝ったら、いいお姉ちゃん用意してやるぜ！」
ベーブは指さしているだけだが、これまた冠陽子がよけいに訳してしまう。

菊池雄星対ベーブ・ルース。
「まさか、初めて相対するプロの打者が、ベーブ・ルースさんとは…」
菊池は戸惑が、準備は万全。投球練習のボールが唸りを上げてミットに飛び込む。
捕手は、西武で組むことになる銀仁朗を指名。
一塁には、清原。二塁には、辻。三塁、石毛。遊撃、松井稼頭央。外野は左から、吉竹、秋山、平野のまさに黄金の守備陣。
スタンドイン以外なら、どんな打球も取ってやるとよ、菊池にとってまさに心強い援軍だ。
ベーブ・ルースが左打席に入ると、おもむろに、バットの先端を菊池に向ける。
「え??」
戸惑う菊池であるが、そのバットの先端は菊池を飛び越えて、バックスクリーンに向けられた。
伝説の予告ホームランがここに再現である。
「え〜　ベーブは、お前の首を跳ねてから、バックスクリーンにボールを飛び込ませてやるぜ。と申しております」
冠陽子は、そう訳すがベーブは口を開いてはない。
菊池は息絶え絶え、顔は真っ青で落ち着いた様子はない。
「どどどどどどしよう、とんでもないことになった…僕の速球やスライダーが通用するだろうか？　高校生にもいとも簡単にスタンドに放り込まれるのに、相手は伝説の打者…。スライダーでかわす？　チェンジアップで翻弄する？　いやいやそれではこの勝負を授け

てくれた神様に申し訳が立ちません。
速球勝負。僕の１５４キロのストレートがどこまで通用するかが、この勝負の意味。打たれて当然だ…」
菊池はノーワインドモーションから、ケレン味のないボールを投じた。
速い。瞬きすら許されないスピードでボールが飛び込んでくる。
だが、ベーブの対応能力とスイングスピードは、それ以上に速い。
速球を見切ると、音速のスイングで、菊池のボールをひっぱたく。
打球は、あっという間にスタンドに消える。
ベーブは首をふる。どうやら、予告したバックスクリーンからやや左に飛びこんだことが、気に入らないらしい。
「オレの負けだ」
菊池の速球が想像以上に速く、ベーブは振り遅れてしまったのだ。
だから予告した位置より左にずれたのだが、それだけを悔いて、飛び出た実にきざなセリフだ。
実際は、ベーブの完勝。菊池の完敗である。
菊池は驚くことに、涙を流していた。
「くそお～～～」
プロ実績零の若者が、伝説の打者に牛耳られたからといって、恥じることはないのであるが、菊池の負けん気はそれを許さない。
列に戻った菊池は、涙をぬぐうタオルを持った松坂に慰められる。
「気にするな、菊池。お前はようやったよ」
西武ナインが菊池を勇気ある敗者ムード一色で迎えるなか、
「バカ、あんなおデブさんに打たれやがって。あ～あ、やっぱ、オレが投げてればよかった～」
涌井だけはいつもどおりである。
菊池と来たら、年功序列の野球界。次に若い斎藤の番と思いきや、斎藤は腕組みを崩さない。
「真打は最後に颯爽と現れる」
斎藤はでていかない。

江夏は、斎藤の非礼も気にせず、快く出番を受ける。
「なんや、もうワシか」
伝説のローンウルフ、江夏豊が大きな腹を揺らし、のっしのっしとマウンドに登る。

がんばれ!!タブチくん

誰もが、江夏は黄金バッテリーの相方田淵を捕手役に指名すると思っていた。

だが、江夏が口にした名前は…。

「ダンプさん、お願いします」

「よっしゃ」

ダンプ辻こと辻恭彦であった。

阪神時代の江夏の相方といえば、田淵のイメージが強いが、実は江夏が信頼しているのは辻の方なのである。

キャッチングに甘さのある田淵に比べて、辻の捕球はケレン味ない。それでいて田淵にない、江夏の要求に応えれる頭を使った配球ができるのだから、江夏が辻を選択するのも当然だろうか。

「捕手以外、誰を守備につかすかって？　そんなんいるんか。オレは、デーブのおっちゃんを三振に切ってとるんやぞ。捕手の辻さんおったら他にいらんわ」

ベーブに負けぬビッグマウスで、場を盛り上げる。

これがまた冠陽子の口添えで過剰に通訳されるのだから、ベーブの闘志に油缶を注ぐようなもの。

「キルユー!!」

江夏に向けられたベーブのバットは、そこから動かない。ホームラン予告でなく、江夏の首を切ってやるとの殺害予告である。

この短い単語ふたつも、冠陽子の手にかかると…。

「え～ベーブは、このたるんだ中年太りの男は、三分後、地獄に落ちるから、友人知人は、香典袋を用意しておけ…と申しております」

これまたお得意の過剰通訳である。

あらゆる修羅場をくぐってきた江夏は、このていどの挑発なんのその、まるでひるむところがない。

ゆっくりとロージンバックを指になじませると、辻のサインになんどもなんども首を振って、たっぷりと間をとる。
さすがのベーブもしびれを切らして、
「へーイ、ジャップ！！」
江夏の投球を促す。
ここにスキができたと、江夏は、素早くモーションを起こすと、外角低めに糸をひくような制球でストレートを決める。
「どうや、ベーブ。油断大敵やで」
不敵に笑うが、主審の手は上がらない。
「なんやと…ゾーン一杯やないか？」
江夏は凄むが判定は覆らない。
主審は、第一回のＷＢＣで有名になった、あのデービットソンだ。
彼は、アメリカびいきで、この判定をしたわけでもない。根っから、性根の腐った性格なのである。
無理やり白を黒と言い張り、注目を集めようとするタイプなのだ。
「なんや、あのおっさんかい」
外角低めの制球力が配球の根幹にある江夏にとって、あのゾーンがボールになるのは、まさに死活問題。
だが、江夏は逆境に追い込まれれば追い込まれるほど、嬉しくてたまらない投手。
「この感じ、あの日本シリーズ以来やな。人はあれを江夏の２１球いうか…」
この状況を、あの有名な日本シリーズ最終戦、無死満塁になぞらえた。
なにもこれは生きるか死ぬかの勝負の舞台でもない。ただのエキシビジョンマッチである。肩肘張る必要もないのだが、江夏にとって、史上最強の打者ベーブ・ルース＋史上最悪の審判デービットソンを相手するのは、それに匹敵するほどの逆境なのだ。
「ストライクにならんならどうするって？　なら空振りをとればええだけや…」

なんというシンプルな発想の転換。それでいて江夏は、そのシンプルな発想を、たやすく実行に移す　できる数少ない投手なのだ。

江夏の持ち球は、唸りを上げてアウトローに飛び込むストレート。プロに入ってから覚えた自称小便のカーブ。

ＳＦＦが８０年代後半に流行したときに、自分は昔からこれを投げていたとうそぶいた、浅く挟んだフォーク。

このみっつである。ストレート以外は、さしたる威力のあるボールではない。

だが、それが配球のエキスパート江夏とそれを引き出せる辻にかかれば、絶対のウイニングショット×３に化けるのである。

二球目、カーブ、ベーブは無反応。

腕が上がってもいいゾーンであるが、主審のデービットソンは断固としてストライクのコールをしない。

ボールカウント、ノーツー。

三球目、フォーク、いわゆるＳＦＦの変形バージョンである。

真ん中低めから、わずかながら落ちるが、これもベーブは反応しない。

もちろん、デービットソンのコールは弾まない。

カウント、ノースリー。

江夏は追い込まれたわけであるが、その本人に動揺のどの字もない。

「ふふふふふ」

不敵な笑いは続き、

「狙い通り、思う通り、事は進んでいる…。なあ、ダンプさん?」

その問い掛けに捕手の辻は静かにうなづく。

「馬鹿だな、江夏のやつ、エキシビジョンだぞ?　お客さんはお前の三振か、ルースのホームランが見たいんだ.フォアボールが一番しらけるだろ。勝負、勝負、真っ向勝負で打たれたっていいじゃない」

傍観者でしかない田淵は実に甘い考えでこの勝負を見ている。
「あの江夏もさすがの伝説の大物の前に、チンチンが縮こまったのかなあ？　オレが捕手だったら、マウンド走っていって、チンコつかんで、しっかりせいやと励ますところなのに…」
田淵は長年江夏と組んだ割に、江夏の考えを理解していなかった。
これでは、この勝負の捕手役から外されるのも無理なからずか。

「さあ～　江夏豊伝説、最終章。ベーブ・ルースを血祭りにあげる。の始まり始まり…」

ハンカチーフプリンスまで登場

「ノースリーやったら、普通の打者はどうする？　そりゃ一球見逃してくるわな。悔いを残したくないだの、様子見など、四球なら儲けなど、いらん考えをごちゃごちゃくっつけて見逃してストライクを取られることを正当化する。だが、打つか抑えるのかのエキシビジョン。四球なんて頭はどこにもない。しかも、ゾーンに来たら絶対スタンドに放り込むと、自信家のベーブが相手」

江夏はモーションに入る。

「だから、ベーブは振ってくる。しかも必ずストライクが来ると思い込んでいる！！」

江夏は、真ん中高めに懇親の速球を投げ込む。

だが、ボールは高い。高めのスキな主審なら腕が上がらぬこともないが、審判はデービットソン。待つのはボールのコールのみだろう。

だが、ベーブ・ルースはこれを振りに行く。

四球では申し訳がたたないとの配慮か、それでも速球勝負に応える心意気が振らせにいったのか。

「おっしゃあ～　ええ球やったぞ、ユタカ～」

辻がミットを叩き、江夏に声を掛ける。

ベーブ・ルースは、江夏の速球に力負けをして、空振りに取られたのだ。

「オーミステイク…」

ルースは、そうポツリと漏らし、今の空振りを悔やんだ。

「え～　ベーブは、今の速球は甘く、なんの変哲もない棒球だった。空振りしたのは、スタンドに放り込んでやろうと力みすぎた自分のミスで、力負けをしたわけではない、おいファットボーイ。もう一球、今の球投げてみな、スタンドに放り込んでやるから。と申しております」

冠陽子が例によって過剰通訳するのだが、当たらずとも遠からず。ベーブの真意を多分に汲み取っていた。

力んで、オーバースイングになったのも事実であるが、江夏の速球に力負けをしているのもまた事実。だが、もう一球、同じ速球を投げ込まれたら、スタンドに放り込む自信があるのも事実。

江夏に力勝負を要求したのであるが、江夏は乗ってこない。

彼は、いかにも全身全霊をかけ渾身の速球を投げ込むような顔をして、フォークを投げたのだ。

フォークとはいえ握りは浅く挟むだけ、佐々木のフォークのようにストンと綺麗に落ちることもなければ、野茂のフォークのように、左右に大きくぶれて落ちることもない。

ただ真ん中低めから、気持ち沈むようなフォークでしかないが、速球一本しか頭にない今のベーブにとって、それは魔球に見えた。

三球目にみたフォークにかかわらず、ベーブは尻餅をつくように空振りをした。

一度見たボール、見切ったはずなのに、心理的おごりが作用したのだ。

その姿は惨めですらあった。

それまで、ベーブをこの世の存在するもっとも偉大なものと見ていたスタンドの観客からも、ついに、失笑が漏れたのだ。

「なんだ、実はたいしたことないんじゃねーの?」

「さっきは菊池だから打てただけ」

日本語がわからずしても、ベーブは雰囲気を感じ取った。

よりによって野球後進国の日本人に嘲笑されることは、ベーブ・ルースにとってこのうえのない屈辱である。

「シャラップ、ジャップ…」

日本人は、作り笑いでも浮かべながらオレの靴をなめればいいんだ。

ベーブは、何よりも大事なプライドをかけ、チンケなプライドをかなぐり捨てた。

バットを短く持ち、何が来ても対応できる構えをとった。
これになにより驚いたのが、江夏であった。
「いかんなこれは。まさか、ああして来るとはな…」
江夏は、最後までベーブが振り回してくると読み、それに対応した配球を組んでいた。
「カーブ投げて空振り取ってやろう思うたが、ヤメタは。当てに来たら、ベーブのパワーに、東京ドームのふくらみのなさ。こすったあたりでもスタンドに消えてくわ…」
江夏が選択したのは、アウトローのストレート。投手の基本であり、江夏の真骨頂である。
江夏が全力を振り絞り投げ込んだ速球は、初球のコースと同じく外角低めに決まった。
素晴らしい制球力。見事な球道。
ベーブはこれを見送った、いや見逃した。
ベーブは打ちにいくことで、悪い結果がでることを恐れたのだ。
それだけ江夏の速球がベーブに恐怖心を与えたのだが、それでもデービットソンの腕はあがらない。
5つのランプがともっていたカウント表示は、一瞬のうちにひとつ残らず消えた。
結果は四球。
ベーブは感服したのか、
「ヘイ、ファットボーイ。ユー、エレガンスプレーヤー」
「え～ベーブは、あなたはとても素晴らしい投手だ。勝負は私の勝利に終わったが、中年太りの坊や、君はけして惨めな敗者ではない。この私にホームランされなかったことを励みに、胸をはってこれからの人生、お生きなさい。と申しております」
江夏に握手を求めるが、江夏はそれを拒否。
「あほか、オレは敗者や…。なれ合いなんぞできるかい」
そういってマウンドを降りた。

「馬鹿だなあ、江夏。四球はダメだって、しらけるだけだよ、なあ仙ちゃん」

横にいた悪友星野に賛同を求める相変わらず分かっていない田淵。

「ほんとだよ、俺だったら、ベーブ？　なにくそ思うてど真ん中に放るね、それで打たれたっていいじゃないか。お客さんはそれのほうが盛り上がるし、投手に拍手を送るだろうよ。逃げたら何もならんよ」

星野も分かってはいない。

江夏は、打つか抑えるかの勝負を四球で終えた敗者に違いないが、顔を覆いかくして逃げまわるような惨めな敗者ではない。

それは、スタンドから拍手が鳴り止まないことが照明している。

「いよいよ僕の出番か…」

ついにハンカチ王子斎藤佑樹がマウンドに上がる。

「この前のプロアマで坂本や新井とかに打たれて失点したけど、あれは相手がそれなりだから、それなりの投球をしたまで。今度の相手は、彼らとレベルが違う。僕の本気を出すまでだ」

あの小さな少年は何だ？　リトルリーグの選手か？　のベーブの疑問に冠陽子は、

「ディスナイーブボーイ、ハンカチーフプリンス」

と教える。

「？？？？　ハンカチーフ？　プリンス？？？　ホワッと？？」

当然、その意味は分からない。

大矢、目立つ

「捕手は誰に頼もうかなあ」

斎藤は捕手選びに入るが、もちろんこの場には早稲田で組んでいる白川や杉山翔太はいない。

必然的に、プロ選手から選ぶことになるのだが…。

「細山田先輩いらっしゃいますか～？」

早稲田で二年間苦楽をともにした、先輩捕手、細山田武史の名前をあげるが、斎藤の呼び掛けに応える細山田はここにはいない。

打率も盗塁阻止率も一割台の細山田が、この大舞台に立てるわけがないのである。

「斎藤、呼んだ？」

細山田は呼び掛けに応えるが、東京ドームから、電車で一時間以上離れた横須賀の合宿所（水道橋から営団地下鉄を乗り継ぎ品川に出て、京急線に乗りかえて、長浦駅下車、徒歩１０分、合宿所の途中にはコンビニもないので注意。食品類は事前に調達しておくのがベスト。なお合宿所前のグラウンドには、自販機数台があるが、人手によりすぐに品切れ。あてにしてはいけない）でこの開幕セレモニーを見守る細山田が駆けつけることは不可能。

「ああ、どうしよう、僕の実力を引き出せて、絶妙なキャッチングを見せてくれて、それでいて早実～早稲田の僕のブランド力に負けない捕手なんて、この中にいるかなあ？」

城島、古田、野村、田淵、木俣、伊東、森、阿部、中尾、達川、里崎、日高、田村、谷繁、矢野、梨田…歴戦の捕手たちが居並ぶが斎藤の希望に応えれる捕手はこの中にはいないのか。

「一長一短」

彼らを斎藤は、この言葉、一語で切って取った。

「野村さんや古田さんはいい捕手だけど、関西の人はどうもなれない…。同じ関東の阿部さんや田淵さんは頭が足りないし…いないも

んだなあ、意外と…」
斎藤のおメガネに誰もかなわないのである。
「捕手能力に疑問はあるけど、慣れた細山田さんがベストだったなあ～」
生意気な斎藤と誰が組んでやるかと、こうなると先輩捕手は意固地になる。
誰も名乗りあげなければ、斎藤も選ばない。

「細川さん、いったらどう？」
松坂が細川に立候補を勧めるが、細川も乗り気にならず。
「斎藤の球威じゃ、どうやっても無理。恥は書きたくないよ」

「あ、いた…」
斎藤がようやく見つけ出したのは、ロッテの列にいた醍醐猛夫だ。
斎藤と同じ早稲田実業卒業のロッテ球団捕手最多の出場記録を誇る名選手である。
まさにブランド、実績とも申し分ないが、斎藤はためらう。
「なるべく大卒の方が…」
早稲田実業出て、大学経由でプロのマスクを被り、それでいて実績を残した捕手など存在するのか？
いた。
いたのである。
みなさんよくご存知のあの男が、そっくりそのまま、条件に当てはまる。

「オレ？」
「大矢さん、よろしくお願いします」
大矢明彦である。
早稲田実業出て、しかも大学経由。それでいて知的なリードを見

せて、優れた守備力も携わっている。この対決に盗塁阻止の必要はないが、通算阻止率は、古田に次いで、史上二位の強肩を誇る。
東京出身でソフトな語り口も斎藤の要求する人物像にこたえている。
まさにうってつけ。大矢をおいて、他に誰がいるのか？　それくらい大矢は斎藤の希望にかなっている。
「でも大矢さん、駒大だっけ？　早実から駒大か～　まあ妥協しておくか」

大矢にしてもまんざらでもない。監督業に専念するのもいいが、素晴らしい捕手だったことも、現代にアピールしておく必要があるのだ。
昨日のヤクルトー日本ハム戦。大矢はなんどテレビの前でこの言葉を口にしたのだろうか。
「オレが受けていたら、金田さん一人で完封勝ちいしていた」
「あ、古田のヤロー故障しやがった！　あ～オレがいたらオレがいたら…。八重樫？　秦？　ばかにするな、ヤクルトの最強の捕手はオレだつうの」
モヤモヤとした気持ちをこの対決にぶつけるのだ。
さあ、捕手大矢の本領を発揮する時間だ。
相手も投手も身分不相応はない。
大矢は愛弟子谷繁から借りたレガース、不肖の弟子相川から借りたマスクをつけ、手にはなじんだマイミット。
これで準備万端の大矢は、斎藤と時代を超えた早実バッテリーを組む。

「斎藤、お前の球種を確認しておく」
「相手の虚を突く自由自在にコマンドできるストレート。心を見透かしたかのように動くツーシーム。横のスライダー、カット、カーブとカウント球もこれでもかと豊富。そこに伝家の宝刀フォークボ

ール、縦のスライダーとくれば、打てる打者は、この世には存在しません」

「よし、その意気やよし。組み立ては、オレに任せておけ。早実史上最高の黄金バッテリーでルース退治といこうぜ。さあ、斎藤よ。三振、凡フライ、凡ゴロ、どれがいい？」

「三振と行きたいところですか、ここは守備の皆さんも参加出来る凡ゴロにして起きましょうか。もうとびっきり惨めな、あたり損ないの、ルースがプライド捨てて全力で走るも、イチローさんにはならずで、悠々とアウトと行きましょうよ」

斎藤の希望がまた通り、守備陣も早稲田実業出身で固められる。

二塁には、宇野に競い負けた田野倉利男。三塁には、金田の代理監督でおなじみ、娘がアイドルだった徳武。

左翼には、外野経験もある醍醐。中堅には、王の師匠、荒川道場の主、荒川博。右翼には、王二世こと川又米利。

そして、その一塁には、その張本人、王貞治。

「祐ちゃん～　ルース恐れに足らずだぞ～」

世界の王の看板をひとまず降ろし、斎藤の補助に回る。

ところはまた鎌ヶ谷球場。

「いやあ、盛り上がってきましたね、稲葉さん」

「ああ、生で見れて良かった」

「あれなんすかこれ、何をしてるんすか？」

テレビの前に通りかかったのは…。

「中田、なんでお前がいるんだよ、実績ゼロが来る場所じゃないぞ」

中田翔、この小説二度目の登場である。

「いや、みんな練習をしてるから、顔を出したまでで…。あれ、これボロ雑巾王子やないですか？　何してるんすか？」

「斎藤に散々な目あったクセに、雑巾とかよう言えるな…」

「中田もよく見とけ。お前と同年代が、歴史に挑む瞬間だ」

しかし、テレビからは無情な通知が…。

「誠に申し訳ございませんが、放送時間が終了に近づいてまいりました…。なおＣＳ放送、日テレＧ＋でセレモニーの最後まで放送いたしますので…」

「あ、ブッチギリやがった！　しかも一番いいところで！」

「ああ、しんじらんねえ！　だから地上波はだめなんだよ！！！おいＧ＋にかえろ！！」

「稲葉さん、そりゃムリです！　これＣＳ対応してませんもん…」

「あああありえねえ！　何が最新型テレビだよ！！！」

「あ、でもデジタルスカパーイーツーとかいうの押したら見れるはず…」

「マジか！　はやくそれやれ！！」

「……どうやってやるんだろ…」

「知るか！！　知ってるやつ呼んでこい！！」

しかし日本ハムナインには家電に詳しいものなど一人もいなかった。

テレビを設置した電気屋も今帰ったところだ。

「はやくはやくはやくはやく！　ハンカチが投げちまう！　はやく！！」

稲葉は急かすが、事態は好転するどころか、暗転する。

「あ、テレビ自体見えなくなった…」

さてさて、彼らは斎藤の雄姿を拝めることができるだろうか。

妨害電波に負ケズ、受信せよ

「僕に興味をいだいた視聴者を釘付けにするために、格好の道具がある」

斎藤は、後ろポケットからハンカチを取り出すと、額、右頬、左頬、あご周りの順序で、丹念に汗を拭った。

高校三年の国体以来のハンカチのお披露目であるが、思ったより、受けがよろしくない。

「どうして？　なんで？」

観客の目がルースに集まっているせいか、それともハンカチに今更感があるのか。

あれこれ幾年の日々が過ぎた。世間の興味は移ろいやすいといわれるが、情報過多の現代、それは加速度を増しているように思える。観客には、まるで一発屋の演歌歌手が、そのただひとつのヒット曲を頼りに、ドサ回りする情景が重なるのだろうか。

なんにしても、ルースを踏み台に、アマの自分がプロの集う大舞台の主役に躍り出るという斎藤の目論見は、もろくも崩れたのだ。

こうなれば、投球で魅せて、世間の注目を、再び自分に向けさせるしかない。

「ルースを見るも無残なボテボテのゴロに取って、現代野球の真髄を見せつけてやる」

プロに挑む菊池が、プロで名を馳せた江夏が、砕け散った今こそ斎藤が輝く、このうえのないチャンスなのだ。

「大矢先輩、初球のサインお願いします」

斎藤は、大矢に敬意を表するかのように、大矢から出るサインをのぞき込んだ。

「さすが、大先輩。僕の意を汲み取り、僕が思い描いた配球と寸分違わぬ、球種とコースを選択してくれた」

大矢のベーブ・ルース対策は以下の通り。

斎藤の球威は、ルースには通用せぬ。だから、バットに当てさせないような配球をするか、タイミングと狙いを外して、バットに当てさせるような配球をするしかない。

斎藤には、絶対的な球威が欠けると同じく、絶対的な決め球も不足している。

一応、縦のスライダーとフォークボールの落ちる球を備えているが、１７５ｃｍの右投手としては、身長の足りない悲しさか、それを絶対的な武器にはしてくれない

斎藤の投球に慣れた六大学の各校の主力打者は、斎藤の落ちる球を、いとも簡単に見逃して、彼の投球の幅を極限までに狭くする術を会得している。

それならば、わざとバットに当てるボールを投げさせて、そこから、数センチ、コンマの世界で外しにかかるしか手立てはない。

甲子園の頃の斎藤や、大学入りたてで、すべての栄冠を手にした頃の斎藤なら、それはできただろう。

大矢が、ルースの好きなところを感じ取って、そこから、ほんの少しだけ外れた場所に構えれば、斎藤はそこに投げられただろう。

大矢が、ルースが打ち気にはやることを読み取って、斎藤にタイミングを外す球を要求すれば、斎藤はそれに応えただろう。

だが、それは、斎藤がフォームを崩す前の話。リーグ戦、大学代表と試合続きで肩を休めることがないことが影響したのか、前述の落ちる珠の威力が薄まったことを気にして、角度をつけようと、ツッタチ気味のフォームを意識過ぎたことが要因か、はたまた、１５０キロの球速にこだわり、むやみにスピードを求めたことが悪循環をもたらしたのか、斎藤のフォームは、微妙なメカニックの作動が消え失せ、絶妙な効力を発揮できなくなっていたのだ。

今の斎藤の状態なら、制球力で牛耳る配球は危険だ。

好きなコースから、ほんの少しだけ外したところに要求しても、好きなコースに投げ入れて、結果、ボールはスタンドに一直線に消えて行くだろう。

球威もなければ、圧倒するような決め球もない。それでいて制球の妙に信頼がおけなければ、大矢は頭を痛めるしかないが、そこは選手層の薄いヤクルトを日本一に導いた時の正捕手、いくらでも奥の手を用意しているのだ。

「初球は様子見」

大矢は、ルースが初球から手を出してこないと読んでいる。

「用心を重ね、錯覚を利用しよう」

幸いなことに、ルースは、菊池、江夏という、斎藤とまったく異なるタイプの剛球左腕の球筋を見ている。その残像が残っているうちは、あえて斎藤の手の内をさらすことはないのだ。

大矢の出した、初球の答え、それは、緩いカーブであった。

今の斎藤の状態で、初球のストライクが比較的、取れる球で、それでいて、万が一、振りに来てもタイミングの崩せる球。

その選択肢には、深い根拠と確信があったはずである。

斎藤は、大矢の構えたとおり、ゾーンの外角低めにカーブを投げられたし、ルースが振りにいくのも、計算には入っていた。

実際、ルースのスイングは、完全にタイミングの早い泳がされた不恰好なものであったが、信じられるパワーとスイングスピードは、大矢の予想のはるか上を行っていた。

ルースのバットから、放たれた打球は、弾丸のようにとんでいった。

大矢は、培った経験から、比較的、早い段階で、それがファウルと確信したが、その打球の行方から目を放すことはできなかった。

あまりにもケタ違いの打球で、目を離せなかったのだ。ボールは、ライトのポールのはるかファウル側の看板に当たって、二階席スタンドに消えた。

「崩したのに、あのパワー…」

大矢は言葉を失うしかなかった。

「ヘイ、チキンボーイ」

ルースは、初球から緩いボールを投げた斎藤をそう罵った。

「ファウストボール、カモン」
「えールースは、オレが昔、日本くんだりまで来た対戦してやった投手たちも、今のおまえのように、ごまかしのような変化球ばかり投げてきたぜ。オレが骨のない投手ばかりうんざりしているところに、現れたのが、お前と同じスクールボーイだ。名前は忘れちまったが、アイツは、真っ向から立ち向かってきたぜ。まあそのボール自体は、メジャーでごまんと見るような代物だったが、侍魂には感じ取るものがあったぜ。お前も、同じスクールボーイなら、先人にならって、真っ向からこい。それが侍の国の若者だろうが。とルースは申しております」
例によって、冠陽子が過剰に訳すのだが、それが大矢のヒントになるのだから、世の中、捨てたものじゃない。
「ルースは変化球勝負を嫌ってる？　真っ向勝負要求は、その裏返し？　そうか、ルースの時代は、変化球がそれほど盛んでない時代。あっても、カーブとか、その程度。現代のように、フォーク、チェンジアップと落ちるボールが、飛んかう時代じゃない」
斎藤のフォークや落ちるスライダーでも勝負になるかもしれないと大矢は思い始めた。
ルースの脅威に肌で触れて、斎藤の力の無さに絶望しかかったところで、一筋の光明をみつけたのだ。
「だけど、その落ちる球を効き目のあるボールにするためにはこれが必要不可欠。斎藤、君にこれを投げられる技能があるのか？　いや技術的問題というより、必要なのは、ハート…心臓の強さだ。斎藤、君には、それがありそうじゃないか」

ところはまた鎌ヶ谷。
「おいおいおいおい、はやくはやくはやくしろ。斎藤の投球が見れないじゃないか」
「ちょっと、急かさないでクダサイよ、稲葉さん。今、説明書読んで調べてるところですから…」

「そうだ、ラジオ、ラジオ、持って来い。賢介、お前、足が速いから、お前取ってこい」
「はい、稲葉さん、ただちに…」

「どうぞ、稲葉さん、ロッカーから練習中にＣＤ流すためのラジカセ持ってきました」
「おう賢介。お前はできる子だ。はやくはやくはやく、ニッポン放送でやってるようだ」
「えっと、ニッポン放送すね…」
ニッポン放送１２４２に合わせても、ノイズが酷く、聞こえてくるのは、妙にクリアな朝鮮語ばかり。
「あああああ、ＡＭラジオはこれだからダメなんだ」
苛立つ稲葉。ところが、賢介のラジカセの持ちようによっては、かすかながらに聞き取れる場所があり、「え～　ルースの超特大ファウルに恐れをなした斎藤、間を取っているのか、投げられないのか、ボールを取ったまま立ち尽くしております…」
「賢介、その角度、その角度…」
ラジカセを斜め４５度にして、賢介が片足を上げると、クリアに聞こえるが、
「あ、バカ足下げるな…」
疲れが来て、賢介の足の上げ幅が狭まると、なぜか音声は朝鮮語混じりになり聞こえなくなる。
アンテナの角度の問題で賢介の足の上げ方は、一見無県警のように思えるが、これが作用してしますのが、ラジオチューイングの不思議なところ。
「ぐぐぐぐぐ…」
おかげで、賢介は足を微妙に浮かせてなければならず、それが結果的に、いい足のトレーニングになるとは、この時の賢介は知らなかった。

「え？」

斎藤は、大矢の出したサインに、一瞬、心臓が止まりそうになった。

「まさか、そんな、どうして大矢先輩、いくらなんでも、それは反則じゃありませんでしょうか？　僕は、野球界の貴公子。イチローさんも松井さんも老先短く、これからの球界を、一人で背負う立場ですよ？　そんな僕が、たかがエキシビジョンのお遊びで、それも世界で一番偉大なる野球選手に、そんなボールを投げられるはずが…」

斎藤は、一瞬、マウンドを外し、ロージンを手に取った。

「自分では、松坂さんや桑田さんのような正統派を想定して投げているつもりなのに、ある野球雑誌に、選手のタイプ「東尾修」と書かれて、ずいぶん腹を立てたっけ。東尾？　それじゃ、僕のクリーンなイメージに合わないでしょうよ。マウンドでニタニタ汚い笑顔を浮かべて、ダマシとハッタリの限りを尽くし、打者を葬り去っていく。僕がそんなタイプの投手に見える？……。見えるならしょうがない…」

ボールに自信がある投手ほど、真っ向勝負を好み、脅しやひっかけをよしとしない風潮がある。若いウチは、それでいいたが、ボールの威力の衰えるころ、現実と想像上のギャップに苦しみ、一気に下降線を辿ることになる。

斎藤が口にした桑田がいい例。世間では本格技巧派の完成と見られていたが、速球に明らかな減退を見せた晩年でも、昔のイメージをすてきれず、真っ向から、打者に挑み、その結果は散々なものであった。

それは桑田の技術的欠陥というよりも、野球観に起因するものでたしかに、桑田のクリーンな姿勢は、賞賛を浴びるべきだろう。

が、もしも、桑田が打者の懐を攻めることを厭わなかったら？　その晩年は、また違ったものになっただろう。

斎藤はよく思う。

なにも、騙しや脅しを身上とするのは、球威に欠ける技巧派だけの特権ではないはずと。

もし、ボールに勢いのある若いうちに、あの手この手のテクニックを注入したら、それは敵なしの投手なのではないかと。

実際、メジャーにはその斎藤の思い描く投手がいた。ペドロ・マルティネスである。彼は、伸び上がるような１５０キロのフォーシームと、蛇のようにくねくねと曲がるカーブと必殺のチェンジアップを武器にしながら、ヘッドハンターの異名をとったように、打者の懐を
攻めに攻め、恐るべき数字をたたき出した。

打撃圧倒的優位の時代に防御率一点台、脅威の奪三振率、勝率…。

球威、球速が衰えた今でも、それなりの結果を残せるのは、攻める投球の賜である。

斎藤の理想像は、そこにある。

「端正な顔立ちから、涼しい顔でブラッシュボールを投げられたら？　あいつは、かわいい顔をしてえげつないと相手の打者はボヤくだろう…。僕にクリーンなイメージを追い求めるファンは？　大丈夫、野球は結果だ。結果が出てるうちは、何をしたって叩かれない。イイコを演じていれば、どんなプレースタイルだって、マウンド上と普段のギャップの問題で片付けられる…」

大矢の要求した場所は、あくまでも懐。だが、斎藤の視線は、ルースの頭だけにあった。

「どうせ狙うのなら、最も効果的な場所…」

「斎藤、な…げ……アンニョセヨハウニダ…」

「賢介、気を緩めるな!!　ちょうど投げた瞬間ええところに、朝鮮語が混ざったやないかい」
「ごごっごめんあさい、稲葉さん～」
「謝るな。よけい、ラジオが聞き取れんワ」

「ああ～　もんどり打って倒れたルースですが、立ち上がった途端に、マウンド上の斎藤に向かって何か言っております」

「ちょちょちょ、何があったんだ、なんでルースが怒ってるんだ？」

「それでも、斎藤は涼しい顔を崩しません。その無言を通す度胸の良さは、まるで、これくらいのビーンボールで腹を立てなさんなと、逆にルースを諌めてるように思えます」

「ビーンボール？　舞い上がって、手元が狂っちゃったのか？」
「いや、ヒチョリ、違うぞ。斎藤の性格と投球スタイルを顧みるに、おそらく、いや、確実にワザとだ」
「ワザと？　このセレモーニーのお祭り気分の対決でそんなマネしかすかね？　しかも、あのハンカチ王子ですよ～？？」
「斎藤が、アマ球界の王子で終わるつもりなら、そんなまねはせんだろう。抑えても、打たれても、きれいに投げてさえ入れば、マスコミやファンは、それだけで納得してくれる。だが、斎藤が、プロで生きていきたいと思うなら、必要になってくるんだ。こういったボールもな…。斎藤の実力じゃ、ルース討伐は無理と思ってたが、これはもしかしたらもしかするかもしれんぜ…」

「大矢先輩…もう一球いきますしょうか？　ルースはまだわかってないようですから…」
斎藤は、不敵に微笑む。

ブラッシンゲーム＝ブレイザー

「ルースに恐怖心を与えただけでなく、頭に血を上らせた…。一挙両得だよ、これは…」

斎藤だけではない。大矢もまた、この勝負を捕手人生の総決算のつもりで挑んでいるのだ。

監督としての勝負はこれから待ち構えているが、捕手としての勝負の場はこれ限りだろう。

セレモニーとして捉えるとか、ルースをお客様扱いにしようとか、大矢は一切頭にはない。

ただただ、いかに、世界一偉大な打者を打ち取るか、それだけが頭にあるのだ。

「斎藤のサインに首を振った勇気と要求通り投げ込めた度胸は、この勝負を、だいぶ僕らに優位にしてくれた。強烈なブラッシュボールの後には、なんだって、投げ込める。なんだって、有効なボールになる…」

大矢はこの二球を見て、ルースのタイプを自分なりに識別してみた。

現役の打者となると誰に当たるだろうか？

日本人には、こんな大きく強烈なスイングができる左打者なんて、いやしない。松井秀喜にしても、これほどの威圧感はない。

ならば必然的に、外国人打者になろうだろうか。

左打ちのプルヒッター…・ＮＰＢでいうとブラゼル？　同じ白人だし、太めの体格もよく似ている。実績は大違いだろうが、ルースがいまほど変化球が全盛ではない時代を生きたことを考えると、ブラゼルがそのままタイプスリップしたら、ルースのような数字を残すかもしれない。いやそれにしたって、ブラゼルは粗く脆い。さすがにルースをブラゼルに例えるのは失礼か。

ならばメジャーリーグ。

大矢は、さかんにメジャーを見るわけでもなく、メジャーの試合を解説した経験がとくにあるわけがないが、すぐに思いついた打者が三人いた。

デービット・オーティズ、ジェイソン・ジアンビ、アダム・ダン、である。

ジアンビとダンは選球眼に優れて、打率は少々低いが、出塁率は驚異的に高い。オーティズも下り坂の選手であるが、全盛時は、打率も長打を兼ね備えた恐ろしい打者だった。

その三人の中で、オーティズを選び、ルースと同一視した。打率も長打も残せる万能タイプの左の大型プルヒッター。

「オーティズの攻略法をルースに反映させれば、打ち取れるはず…」

ところが、困ったことに、メジャーに対して薄っぺらな知識しか持ち合わせていない大矢は、オーティズの有効な対策が思いつかないのである。

「これでは無意味」

大矢が、この方法を脳の隅っこに押し込めようとした瞬間、ある光景が引っかかった。

「オーティズといえば、オーティズシフト?」

大矢の頭に、とある日の早朝にみたヤンキース対レッドソックスが思い出された。

それは、王シフトよりも、よほど大胆なシフト。守備陣全体が大きく右により、左をポッカリと空けた守備陣形。

「いくらなんでやりすぎだよ」

大矢の感想はいまも変わってはない。だが、その価値観に違わぬシフトを、大矢自ら指示する。

「王さんベースにひっついて。二塁の田野倉、遊撃の石渡、三塁の徳武さんは、右寄って、右、そうそう、もっと右、右、右…。外野の三人も、左翼なんて誰もいなくていいから…」

早実ナインを全体的に右に動かして、ルースシフトをとる。

二塁の田野倉が一二塁間の間まで来て、遊撃の石渡が二塁ベース

の後ろに位置。三塁の徳武は遊撃の定位置より右に守備位置を取った。

外野にいたっては、左中間は無人、センターより右に三人の外野がいる。

「これでよしと…。ルースも王さんと同じ性分のはず…。空いた左方向に流し打つちゃちゃなマネなんてせず、意地になってプルヒッティングをしてくるだろう…。ブラッシュボールの残像があるうえに、外角のボールを無理になって引っ張りにきてごらん。いくらルースとはいえ、いい結果は望めないさ」

ルースの頬に、ビーンボールの怒りは残るが、シフトを気にした素振りはない。なあに、スタンドにぶち込めば同じさとでも思っているのだろうか。

「フォークが効く。スライダーが効く。ツーシームが効く。外に落ちる球を投げ込めば、空振りか当てるだけの打撃を繰り返すだろう。でもこのさいだ。なんならストレートを投げさせてみようか？　斎藤の１４０キロ程度のボールにルースはきりきり舞いになるだろうからさ」

大矢は、外角のストレートのサインを斎藤に送った。

「君のお望みの料理が調達出来そうだよ、ミジメでミジメで泣きたくなるような凡ゴロ。それも小柄な日本人の１４０キロの速球に偉大な白人打者が力負けしたっていう冠付きのね…」

だが、斎藤は首を縦に振らない。

「？　やっぱり、安全に変化球攻めでいくか？」

大矢は、斎藤の持つあらゆる変化球のサインを出したが、斎藤は首を縦に振ることはない。

「もしかして？？」

斎藤はああ見えて、負けん気の塊のような男。一度の威嚇にひるんだらなめられたままに終わる。ならもう一球ブラッシュボールを胸元に投げ込んでやるとでも思ったのだろうか。

「それはまずい、二度続けては、このセレモニーのムードをぶち壊

すことになる」
大矢は、おそるおそる、ブラッシュボールのサインを出した。
だが、これも斎藤はうなづかない。
斎藤もわかっている。二度ブラッシュを続けることは、いらぬ騒ぎを作ることでしかないと。
だが、これで大矢はサインを出し尽くした。
「？　もうお前が、投げられる球種はないぞ…」
サインは一周した。大矢の出すサインは、最初に戻る。
「外角のストレート」
斎藤はようやく、このサインにうなづいた。
「そういうことか」
何も斎藤は、大矢を弄んだわけではない。外角勝負がみえみえのこの場面。あえて首を振り続けることによって、ルースによけいな考える間を与えたのだ。これにより、外角一辺倒の山はりをしていたルースは、いらぬ雑念が頭をよぎるはずだ。
「さすが、斎藤…。２０歳そこそこのくせして、２０年選手のような駆け引きをしてくる」
ここまでは、完璧だ。
大矢の出したシフトも、斎藤の駆け引きも。
これで、思ったところにボールをコマンドできれば、斎藤の勝利は揺ぎ無い。
が、
哀しいかな、今の斎藤には、投げる精密さが欠けていた…。

一球で一話ペース

「松坂さん、斎藤がルースから空振りを取った！！」
「まさかまさかだよ。斎藤くんの球威と球速で、あのルースから空振りを取れるとはね」
「ほら、やっぱり！　オレが投げておけばよかったんだ！　斎藤より、球威、球速、配球、変化球の種類、決め球、マウンド上の風格が上のオレが投げていれば絶対に抑えられていたのに！」
「でもおかしいよな。ど真ん中だぜ。裏の裏をかいて、真ん中を投げたわけではない。大矢さんは外に構えていた。それが制球ミスで真ん中にいっただけの結果オーライにすぎない」
「ルースなんてしょせん過去の遺物なんですよ！　斎藤の１４０キロていどの平凡なストレートも打ち返さないんだ！　どうせルースの活躍していた時代なんて、斎藤が剛速球投手に見える時代なんですよ！」
「そんなわけーねーよ。野球は進化するが、いつの時代も一流は一流だよ…。斎藤のど真ん中に振り遅れるのはおかしい」

斎藤は致命的な投球ミスをした。
いままでの仕掛けと入り組んだ配球が台無しになるような一球であった。
斎藤のボールは狙った外角低めから、遠く高く浮き、ど真ん中にいった。
混乱状態に陥ったルースであるが、高校生でもジャストミートできそうなコースを、あのルースが打てないわけがない。
大矢は、投げられた瞬間、思わず、目をつぶったが、ボールは大矢のミットに収まっていた。
「どうして、ミットまでこれたんだ？　虚をつかれたルースは、思

わず見逃してしまったのか？」
ルースは空振りをしていたのだ。
江夏や菊池にようにパワーピッチから投じられたボールではない。
東京ドームのバックスクリーンの掲示によると、その球速は１４２。
たかだか、１４２。それも逆球で、低めめがけて投げたのが、抑えがきかず、高く浮いてきたボール。
球速表示ほどの威力はない。
だが、ルースは、ボールをとらえることができず、ステーキで作られたでっぷりとした腹をよじらせている。
この空振りで、ついにルースの幻想が崩れたのか、スタンドからは、ルースの実力を疑問視する声が漏れ始める。
「しょせん、昔の選手。大打者といってもアマの投手のど真ん中も打てないんだ」
「幻滅した」
「オレ、ルースの伝記家にあるけど、破って捨てるわ」
日本語がわからぬルースも、スタンドの空気を感じ取った。
たとえ、次のボールをスタンドに打ち込んでも、小柄なアマ投手のど真ん中に空振りを取られたルースという評判は、永遠に、こびりついて残るのだ。
誇り高きプライドの持ち主のルースにとってそれは耐えられぬこと。
ルースは、またバットを斎藤に向けて、叫んだ。
「ヘイユー！！　フルパワーＯＫ？！」
「え～ルースは、現代のスクールボーイは歯ごたえがなさすぎる。あのオレから空振りを取ったサムライボーイと、このリトルボーイは、投げている球が違いすぎる！！　ようやく豆粒くらいの勇気を振り絞って真ん中に速球を投げてきたと思ったら、ハエの止まるようなストレートだったぜ！　これでは、オレがさっきのボールにワザと怒ったふりした意味が無いじゃないか。怒りに触れれば、渾身

の速球を投げてくると思ったら、このていどとはね。こんなボール打ってもバカバカしいから空振りしてやったのさ。とルースは申しております」

「ワンボール」

「え～　ルースは、一球。一球あれば十分だ。お前のようなタバコのおまけの野球カードくらいのチンケな投手の球なんぞ、たとえ追い込まれたとしても、スタンドにぶち込んでやるさ。と申しております」

　ルースの本心はわからない。ど真ん中を空振りした恥ずかしさから思わず出た出任せか。それとも、禁断のネタばらしか。

　どちらでもいい。とにかくルースは、斎藤から特大の一発を放つだけで、その威光を保つことができる。

「斎藤、ルースのお望みのフルパワーのストレート投げるか？　投げねえよな…、俺にはわかる。今の斎藤のボールは、現状ほぼ１００％。それで、このボールなんだから、もう一球、速球を見せることは、自殺行為に等しい…。ついに、解禁だぜ…落ちる球。フォークにするか？　縦のスライダーとフォーク、一見、同じ落ちるボールに見えるが、その性質は異なる。

　縦のスライダーは右打者に投げるのに向いて、フォークは左打者にむく。縦のスライダーは、その名の通り、スライド回転で曲がり落ちるｎ比べて、フォークは、シュート回転がかかりながら落ちる。

　つまり、左のルースに取って、遠ざかりながら、落ちるのは、斎藤の場合、フォークボールのほうなのである。

　落ちるボールは空振りを取ることを主眼に置いている。空振りを取る基本は、遠くに落ちること。

「フォーク…」

　大矢は、采配をふるうときのように選択をあやまらない。

　捕手、大矢はいつも正しく選択する。

斎藤は、フォークの教科書どおり、縦に鋭く腕を振り下ろした。
これで、三振奪取の教本どおり、ストライクゾーンからボールゾーンに落ちる軌道を描ければ、ルースといえど、バットは空を切るであろう。
だが、斎藤のコマンドはここでまた狂いを見せる。
ボールゾーンから、ボールゾーンに落ちたら、ルースの卓越した選球眼はこれを見切る。
「助かった…」
大矢は、思わずそうつぶやいた。
「ストライクゾーンからストライクゾーンに落ちたら、スタンドインだったよ…」
九死に一生を得たわけだ。
制球の狂いが致命的に至らぬ斎藤は、やはり何かを持っているのか…。
「どうしよう、フォークの制球がこれじゃあ…・もう一度、フォーク続けるか？　いや無理だ。今の斎藤に教科書通りのフォークを期待するのは、あまりにも都合がよすぎる。落ちないでスタンドインか、今のように外れて、いたずらにボールカウントを増やすだけだ…。四球覚悟の攻めなんてできない。え江夏に続いて、連続四球じゃお客さんに申し訳が立たない。フォークもダメ…。ストレートもダメ…。何を投げさたらいいんだよ…」

そのころ鎌ヶ谷は…。
なぜか、田中賢介が、ラジカセを持ったまま、内野の金網をよじ登っていた。
「いい！！　賢介！！！　それだよ、その高さがいい！！　もっと登れ！　登れば登るほど、感度が良くなるぞ！」
金網の一番高いところにしがみついた田中賢介は、そこからめいっぱいアンテナを伸ばした。
「見切った！　見切った！！！　ルースが、斎藤、必殺のフォーク

ボール！！　超人的な選球眼で見切りました！！　投げた斎藤もあっぱれだが、見逃したルースもこれまた凄い！！　これでカウントはツーエンドツー！！　時空を超えたドリーム勝負は、いよいよ佳境に入ってまいりました！！！」

「すげえ！　斎藤、やるもんだな！　見直したぞ！」

絵の見えない稲葉は思わず、ラジオ実況の手に引っかかってしまう。

「あ」

ガシャーン。

一塁の守備練習に入ってた中田翔は、飛球を追っているうちに田中賢介が登っている金網に激突してしまったのだ。

田中賢介は、衝突で、おもわず、ラジカセを手放してしまう。

「あ！あ～！！　てめー中田！！　いつもは、そんな全力でファウルフライ追わないクセに！！　なんでこういうときだけ！！」

「はあ？　なんすか？　オレ、また悪いことしましたか？」

落ちたラジカセは、アンテナがポキリと折れ、ＣＤ収納部がパカリと半開きになっている。

まさに壊れかけのラジオである。

「アンニョハラミレルベセヨハセダ！」

それでも、朝鮮放送は負け時と流れている。

斎藤の挑戦、最終章～そして旅立ち～　あとは映画館でお楽しみください～

「どうすりゃあいいんだ。ストレートも落ちる球も見切られた…。残るは、ツーシーム……」

斎藤の持ち球を確認しておこう。ストレート、フォーク、縦と横のスライダーに、カーブ、そして、ツーシームだ。

カーブ、フォーク、ストレートは見切られ、横のスライダーは、左打者のルースにとって、真ん中に切れ込む可能性が大。落ちるスライダーは、大矢の独断で使用不可能と実質的に封印されている。ならば、頼れる球種は、ただひとつ。

「打者の手元で動くツーシームは、たしかに、打たせて取るに最も適したボール。だが、それは絶妙な制球と的確なボールの揺れができたらばの話。今の斎藤の状態でそれが期待できるか？　いや、コンディションをいい訳にするのはもうやめよう。斎藤の実力では、それは分の悪い賭けに近い。動かずに絶好球。動いてもど真ん中。ハズレくじがでる確率は極めて高い…。それでもこれしかないんだ。追い込まれながらも、僕らバッテリーの持ち味をすべて殺したルースの勝利だ……。ここまではね…。だからって、ツーシームが動かないなんて誰が決めた？　みんなどうせ当たらないと思いつつ、宝くじを購入するじゃないか……」

大矢は、揺れ動く気持ちを沈め、ツーシームのサインを出した。

「こい斎藤…」

斎藤は、もうルースを迷わせるために首を振ることはない。

ただただ大矢を信じて、自分に自信を持って、投げるしかない。

覚悟を決めた斎藤の心理状況は、運動神経の末端に至るまでプラスに作用させた。

斎藤のフォームは、この一球に限り修正され、ほぼ理想的なメカニックを整えていた。

それは駒大苫小牧の対決にみせたフォームにほど近かった。

ルースは、斎藤が全力でストレートを投げ込んでいるとは思ってはいないし、それを望んでいるわけでもなかった。

同じスクールボーイでも、斎藤は沢村栄治とは違う。沢村には沢村の良さがあり、斎藤には、斎藤の良さがある。時代は移ろい変わるもの。いつまでも過去の残影にこだわるわけにはいかない。このツーエンドツーという打者対投手の勝負としては、最も絶妙なカウントにおいて、投げ込む球。それがベストピッチでなくて何がベストピッチなのか。それをただスタンドにたたきこめばいいのだ。

緩いカーブ、ブラッシュボール、低めを狙ったはずが真ん中に浮いたストレート、決め球としての軌道を描けなかったフォークボール。

それはすべて斎藤の意志が込められたボールとは言い難く、制御不能状態でルースに向かっていったものだ。だが、このツーシームは違う。

大矢の要求どおり、斎藤の思いどおりのボールが投げられたのだ。

それまでの投球が不本意に終わる中、この一球の場面で、それが投げられるのだから、これは天性のものとしかいいようがない。

さすが、斎藤佑樹。投手としての素質を云々するよりも、スターとしての資質をたたえなければならない。

斎藤のツーシームは、獲物を狙う毒蛇のように動く。ルースは、ドームの天井をぶち破ってやるとばかりに、全身全霊をかけてスイングをする。

斎藤のツーシームは、ルースの想像より低めにきた。ルースは、ボールのしたっつらを叩いて、スピンをかけてやろう、それがダメなら芯でぶっ叩く。そのはずが、ボールは、ルースのバットのしたっつらに入る。

いくら世界一の打者ルースとはいえ、バットのしたっつらにボールが入ったら、それはゴロにしかならない。

「勝ったア」

大矢は、思わず叫んだ。

「よし」

斎藤は、小さくガッツポーズを取った。

スタンドの観客は感嘆の声を漏らし、この対決を見守っていた幾多のスタープレーヤーは、若武者の挑戦に拍手を送りつつ、嫉妬をした。

遠く鎌ケ谷では、中田翔が、ラジオ観戦をぶち壊したと、稲葉に一時間の正座を命じられたところだ。

ルースの放った打球はあたり損ないのゴロとなり、人工芝を転がっている。しかし、斎藤の注文した「伝説の偉人の凡ゴロ。惨め涙目混じり」は完成寸前に非常事態を宣言した。

調理人の大矢は、ルースに気を取られるばかり、自分の出したシフトを忘れていたのだ。

「ああ～　ルースシフトで全体的に右によっていたんだ」

打球が左方向に転がっていた。定位置ならば、遊撃手がよっこらせとちょっと動けば取れる位置。だが、そこには遊撃手はいない、いるのは三塁手の徳武であり、その徳武も遊撃手の定位置よりはるか右にいた。

「徳武さん～～～」

大矢が叫ぶ。

徳武が素早く動く。

徳武といえば、三塁手の守備率のセ・リーグ記録を持つ男、守備は堅い。

徳武が逆シングルでこれを捕球し、そのまま踏ん張って大遠投…。

ルースは走る、走る、走る。野球偉人は、けちなプライドにおごれることなく全力疾走を厭わない。

間一髪。
一塁の王がめいいっぱい足をのばす。
ルースは飛んだ。
ヘッドスライディングだ。ヘルメットは脱げ飛び、砂煙が巻い起こる…。
「アウト」
一塁の審判に回っていたボブ・デービットソンは、寂しそうに右腕を上げた。
「やったああ～」
斎藤は、マウンド上でぴょんぴょんと飛び跳ねる。
しかし、斎藤の視界に思わぬ光景が飛び込んできたのだ。
「ルースさんの髪型なんだあれ…。ビートルズのメンバーみたいな髪型…。しかも、なんとなく縮まったような…」
斎藤のいうように、ヘルメットが脱げたルースの頭は、ビートルズが世界的に流行らせたマッシュルームカット…。そして、ルースにしては小柄すぎるのだ。
「別人…？？？？」
どういうことだ、ルースは別人になったのか？

斎藤は、思わず叫んだ。
「ルースじゃない。どういうことだ、打ったのはルースのはずだ…」
よくセットされたクリーム色のマッシュルームカットをなびかせる、イカツイ顔したこの男の正体は…。

たしかに斎藤のボールを打ったのは、ルース。ところが、そのルースは、打ったまま走らず、そのまま打席内にとどまっていた。
「ウハハハハハ…」
ルースは高笑いを浮かべる。
「ピート。ユー、トレメンダス、ハッスルプレーヤー」
「えー　ルースは、オレはいちいち走らないよ。神様は遅刻したからって急がないものさ。必死こいて、一塁まで走る役目なんて、単打を打ってセコセコ打率と安打を稼ぐこまねずみに任せておけばいい。そんな惨めったらしい役割は、ピート・ローズというちょっとスカしたハッスル野郎が一番似合うんだ。と申しております」
冠陽子がこう訳した通り、ルースが打ったと同時に、スタートを切った打者走者の代走要員は、ピート・ローズであった。
ピート・ローズ。世界一安打を放った男。７０年代を席巻したスモールボールの申し子。故障を厭わない猛烈なハッスルプレーは、今も人々の記憶に残る。

「ありえない。野球を冒涜している…」
大矢は、思わずそうつぶやいた。
「だってそうじゃないか。打者が打って走るのが野球。代走は打者としての仕事が終わった後で送るものだ」
大矢は正論を吐くが、大矢だけではない。球場全体が、ルースに

裏切られたというムードなのだ。
「偉大な打者がすることか」
「走るのが嫌なら、勝負をしなければいい。第一、挑戦状を叩きつけてきたのは、ルースの方じゃないか」
ルースに強い風あたりが向くなか、斎藤が口を開いた。
「ルースは、足首を痛めたんじゃないかな…
「なんだって、斎藤…」
「大矢先輩…。これは初球を投げる前から気になっていたことなんですが、江夏さんや菊池と対決しているときと足のスタンスが違っていたんです…。左投手と右の僕とで、フォームを変えるタイプなのかなと思いましたが、どうやら前の二打席のどこかで足首を痛めて、それが負担となってフォームを替えざるをえなかったようです…」
「そうかそれは、気付かなかった…。斎藤、さすがの洞察力だ…」
「フハハハハッ」
斎藤の推理が通訳されたのか、ルースはまた高笑いを見せた。
「それは違うぜ、スクールボーイ。さっきもいったように、オレは最初から走る気なんて、微塵もなかったんだぜ。ピートだ。ピートの素晴らしさを、この現代の世に知らしめたかったのだ。ピートは知ってのとおり、今も永久追放の処分の身だ。彼の過ちを養護するつもりはさらさらない。むしろ、神聖なる野球を、私利私欲のためだけに、賭け事の対象にするなんて、とんでもないクソ野郎とさえ思っている。だがな、罪は咎めても、彼の全力プレーまで否定される風潮は間違っている！　だからこそ、あえてオレはピートを代走として使ったのだ。とルースは申しております」
ピート・ローズは、脱げ落ちたヘルメットを拾い、右手を上げて、万雷の拍手に応えた。
スライディングのさいに、地面にこすりつけた顔面はところどこ

ろ傷を追っている。鼻からは血、頬はすり切れ、上唇は裂傷している。

ルースの打者走者代走起用に疑問の余地があるにしても、ピート・ローズの猛烈なプレーは、ファンの心をつかんで離さないのだ。

「どうだ、斎藤、納得できたか？」

「どうでしょうか、大矢先輩。一流のメジャーリーガーといえば、打つも、走るも、守るも、すべてに全力を尽くすもの。あのピート・ローズのように…。そんな一流の中の超一流のルースが、走る事自体を否定するなんて、にわかには信じられない…」

ひっかかりが残るなか、勝負は終わりをつげた。

それでも、アマチュア投手である斎藤佑樹が、伝説の打者ベーブ・ルースを遊撃への三塁ゴロに倒れたことは動かせない事実である。

対菊池雄星、ホームラン。

対江夏豊。フルカウントからフォアボール。

対斎藤佑樹。遊撃への三塁ゴロ。

三打席、二打数一安打、一本塁打、一四球。打率．５００、出塁率．６６７、長打率１．２５０、ＯＰＳ１．９１７。

これが、ルースの残した、対日本人投手の成績である。

ルースは胸を張り、スタンドの声援に応えた。

「スタンディングオベーション！　プリーズ」

「え～　ルースは、ジャップはなんてノリの悪い人種なんだ。人マネの精密機械を、ほそぼそと作っているから、内へ内へとこもるのかい？　立ち上がれよ。立ち上がって、神の戯れに、強い拍手を送るんだ。と申しております」

ルースに促されると、観客は、重い腰を上げ、スタンディングオベーションのまねごとを始めた。

「フフ…ハハハ…」

「え～　ふん、なんとも不恰好できまりが悪いが、胴長で手足の短い黄色い猿どもには、これで精一杯だろうな。とルースは申しております」

ルース劇場特別公演は、一応の幕を閉じると思われた矢先…。

あの男が、噛み付いた。

「ヘイ、ベーブ」

バリー・ボンズだ。彼は、自分に記録を抜かれながらも、なお自分以上の賞賛を浴び続けるルースのことを快く思っていない。

※ここからは、冠陽子の通訳なしでお楽しみください。

「お前は、不抜けでブザマで、どうしようもないヘナチン野郎だ。たった一本のヒットだけで、何を喜んでいるんだ。おれなら三本ヒットを打って、当然の顔をする。三本スタンドにぶち込んで、ようやく笑顔を見せるぜ。もしも、惨めったらしいボテボテのゴロなんて打った日には、日本らしく、サムライの刀を借りて、この場で腹をかっさいてやるぜ！！！」

ボンズは、つばを飛ばして畳み掛けた。

ルースが、リプケンジュニアやジーターのようにローモデルとしても優秀な人物であれば、ボンズの雑言に受け流したかもしれない。だが、ルースも名うての問題児。ボンズの言葉に言い返さずにはいられない。

「おい、オレの記録を抜いたからって、偉そうにするな。ステロイドでつけた肉なんだろう？　オレを見ろ、オレのこの腹のだぶつきは、ステーキとビールが作った、純粋培養のものだぜ、この黒ダコ野郎が。それになんだい、そのスキンヘッドは、ハゲ隠しの苦肉の策かい？　ふふふ、黒ダコのつるつるには、オレのフサフサのパツキンの髪の毛が羨ましくってしょうがないだろう」

「なんだと、この白ブタ野郎が。第一、お前は日本人を舐めているから、打ち取られるのだ。日本は二度も世界の頂に立ったんだぞ。

アリンコのような体つきじゃあ、俺たちパワーの足元にも及ばないが、それを補う英知と工夫があるのだ。ヒデオ・ノモを知っているか？　あいつがお前の対戦相手だったら、虚しく三度、バットは空を切っていたはずだ」

「そんな投手がいるなら、どうして、名乗りを上げなかった？　そんなチキンボーイがオレを打ち取れるわけがない」

「第一、お前は野球を冒涜している。何が、打者走者に代走だ。そんなもの野球じゃない…」

ルースもルースなら、ボンズもボンズ。こうなれば、極限までに、口喧嘩はエスカレートする。

「カル、どうしますか？　止めに行きますか？」

現代野球の精神的象徴のジーターは、先代の精神的象徴のリプケンに助言を求める。

「やめとけ、デレック。すぐに止まるさ。それにいくらなんでも、満員の観衆の前の荘厳なセレモニーで、取っ組み合いはしないさ。いくら偉大なるイカれた野郎どもでもね」

「そうですね、見守るのも面白いかもしれません」

メジャーのレジェンドたちが、手放せば、日本野球の面々は止めるどころか、口出しもできない。

「うへへっへへ…。いやあ、ベーブも弁が立ちますねえ～。それにバリーも負けてはいない。これは見ものですよ。ウへへへへへ」

長嶋が笑えば、イチローもニタニタ笑いを隠せない。

「この感じいいよ、うん。僕が、谷さんにヤワラちゃんを紹介したとき以来の笑いがこみ上げてきてたまらない」

「おいおい、久々にこの世に来ら、エライもんを見ちゃったよ。ブロンクス・ズーといわれ、基クレージーな野郎どもに溢れていた７０年代のヤンキースを彷彿させるよ。あの時も、喧嘩が絶えなか

ったんだ。ビリー・マーチンとレジー・ジャクソンが、日々の挨拶のようにベンチでボコボコに殴り合ったもんさ。血沸き肉踊るぜ」

彼らを管理する義務のあるはずのパンチョ伊東まで大興奮だ。

そんななか、心配するのが、意外にも新庄。

「マイフレンド、ボンズが危ない。これは助けないといけんわ。でもどうしよう。オレ英語忘れちゃったよ。エーペだったのになあ…」

孤立するボンズの数少ない友人が、ジャイアンツ時代の新庄であった。

「おい辞めろ、ルース…」

ようやく彼らの喧嘩に割って入ったのが、ピート・ローズであるが、ルースにけんもほろろに扱われる。

「ピートか。お前は黙ってろ。単打打者ごときが、ホームランメーカーに口出しするもんじゃない。単打打者はフォードでも乗ってればいいんだ」

※ルースのこの発言は、シングルヒッターはフォードに乗り、ホームランバッターはキャデラックに乗る。という本塁打王ラルフ・カイナーの言葉が元。

「そうだ、この八百長野郎。お前は口をはさむべきじゃない」

ボンズもその尻馬に乗る。

「なんだと、八百長とは聞き捨てならないね。オレが野球を賭け事の道具にしたが、八百長はけしてしていない。オレのチームが勝つ方に賭けたんだ。それの何が悪い」

メジャーリーグの通算本塁打一位と三位に、通算安打一位のピート・ローズまで加わり、喧嘩はよりいっそうに豪華さを増す。

こうしてセレモニーは、歴史的喧騒を刻み終りをつげた。

それでは、鎌ヶ谷の日本ハムナインは？　彼らは、斎藤の雄姿を耳にすることができただろうか…。

「ヒチョリ、うまいな。座布団一枚」
なぜか、大喜利になっていた。
プレーの流れで罰を受ける中田翔を哀れに思い、森本と田中賢介が正座の列に加わったのが元。
そこで森本がふざけ半分で手を上げたから、勢い笑点の流れになる。
そこに、ちょうど座布団の束が球場のロッカー裏にあったから、始末が悪い。
「う〜んん、中田いまいち、はい座布団没収。お〜い飯山くん、中田の座布団一枚持ってってくれ〜……」

神々の喧嘩（後書き）

薄氷の日ハム編合計１４話。
このあと、日本人メジャーリーガーＶＳメジャー軍団のつもりだったがやめた。

とびきり豪華なマジックショー

「オレが監督？」

ええ、ここからは、侍メジャーリーガー対メジャー偉人軍団の対決をダイジェストでお楽しみください。

監督は、田口。かれがなぜ監督かというと、オーダーを決める際、唯一彼だけが打順に入れなかったからです。

こちらがそのオーダー。

松井稼６　井口４　イチロー９　松井秀Ｄ　城島２　岩村５　新庄８　福留７　中村３

なるほど、これでは田口が外れても無理はありませんね。

先発は、野茂。

野手が１０人しかいませんから、ベンチ入り２５人のうち１５人が投手というめちゃくちゃな構成になります。

１５人の内訳は、野茂、石井一、松坂、伊良部、黒田、大家、川上、多田野、柏田、藪、村上、長谷川、大塚、高津、佐々木と、日本の実績より、メジャーでの成績を主眼に選んだため、上原や小林雅英などがあえなくベンチから漏れました。

「これ全員使わんと気まずいな。これめっちゃ継投大変やん」

田口には前もこんなことがありましたね。

「オレも協力するで」

田口に助太刀いたしたのが、オリックスの一年先輩でもある長谷川でした。彼は、自ら投手コーチを買ってでて、田口の負担軽減を買ってでたのです。いやあ～　麗しき後輩思いですね。ところがところが、田口の他にコーチスタッフの任務についたのは、長谷川と、長谷川の頼みでブルペン担当を引き受けた元相メジャーリーガーマッシー村上だけ。

他の選手とはいうと、みな自分勝手で、わがままで、唯我独尊で、

自己の利益追求型ばかりのメジャーリーガーさんたち、みな田口に手を貸さずそっぽを向いてしまいました。

「オレが全部やらなあかんのか」

田口は、表面的にはこのように愚痴りますが、実は、おいそが氏の自分に、陶酔している面もあります。

「なんや、オレは、監督兼ヘッド兼助監督兼野手総合兼作戦兼外野守備走塁兼内野守備走塁兼バッテリー兼バント兼コンディション兼トレーニングコーチ兼選手かいな」

ほら、そういいつつ田口の目はらんらんと輝いております。

で、こちらが、メジャー偉人軍のオーダー。

ローズ４　ボンズ７　ルース９　ゲーリック３　メイズ８　シュミット５　リプケン６　マクガイアＤ　ピアザ２　クレメンス１

いやあ、クレメンスとピアｚザの犬猿バッテリーに、ボンズ、ローズ、ルースと喧嘩を繰り返した三人にステロイダーに、野球賭博野郎と、見どころだらけのオーダーですね。

でもこれダイジェストなんです。お見せできないのが残念です。

試合は一方的な展開になりました。侍投手陣、まともに通用したのは、野茂だけのありさま。石井、松坂が四球を連発し、伊良部がブチ切れ、よりによってヤンキースの大先輩球聖ゲーリックにメンチを切ったり、マック鈴木が、脳みその足りない投球を繰り返し、マクガイアにドームの天井をブチ破る特大弾を打たれたり、まるでいいところがありませんでした。

打線もしけたもの。ランディ・ジョンソン、マダックス、ウォルター・ジョンソン、サイ・ヤング、ペドロ・マルティネス、コーファックス、カールトン…、トム・シーバー、ボブ・フェラー。こうも超一流投手を繰り出されたら、さしもの侍打線も沈黙せずにいられません。

イチローの単打二本、ゴジラ松井の二塁打、福留の四球だけでは、田口がいくら張り切っても、得点する術がありません。

９回表終わって、１７－０。呆れるほど一方的な展開に、これか

ら開幕する、この侍軍団が各チームの主力のＪＷＢＣの存在価値が危ぶまれる事態に発展しかねません。

それでも田口は黙ってはおられません。

「オレの出番や、イチロー引っ込め」

よりによってイチローの打順で田口は代打オレをコールしたのでした。

もちろん、イチローの最終打席だけを楽しみに残っていたファンは大ブーイングを繰り返しました。

しかも、メジャー軍の投手は、史上最高の速球王ノーラン・ライアン。

イチロー対ライアン。まさに失禁ものの対決。それが田口にかわってしまったのだから、席を後にするファンが続出したのも無理がありません。

まあ、田口にして自分だけ試合に出ないわけにいかないので仕方ありませんね。

ところがところが、田口は、侍の意地を見せ、ライアンの１６１キロのボールを捉えたのです。捉えたと言っても、メジャーサイズの球場じゃ、外野手がちょっと後退するくらいのフライ。

しかしところは、東京ドーム。公表サイズはご立派ですが、ろくな左中間に膨らみもありません。

「入れー」

入ってしまったのです。

田口は、やったやったとガッツポーズをしますが、これに切れたのが打たれたライアン。田口にファッキングポーズをかますと、膨らみのないリトルリーグサイズの球場が悪いと、打球が飛び込んだ場所までとんでいって、蹴りを繰り返し入れる始末です。

しかしここで思わぬ事態がおきたのです。

ライアンが蹴りを入れると、フェンスがくるりと反転。ライアンが吸い込まれ、また反転してでてきたのが、ライアンとは違う、髭面の小太りの男。よく見ると中日のドジャース型のユニフォームを

着ています。
「それライアンじゃなくて、ライアルだろ」
とのツッコミが来たのは、だいぶ時間が経ったことでした。
ライアンは、９１年～９２年に所属していたマーク・ライアルに入れ替わっていたのでした。
ちゃんちゃん。

とびきり豪華なマジックショー（後書き）

このシリーズは全６５話に渡ってお送りする予定でしたが、濃縮・割愛しました

ベイも分けられる

ここＴＢＳ本社では、ＪＷＢＣ／Ｌの予算問題が議題に登っていた。

「え～　この大会で勝ち進み日本一になることに、なにか意味があるのでしょうか？」

「ＪＷＢＣは、野球人のプライドと尊厳がかかった試合です。日本一にはそれだけの意味にがあるのです」

「抽象的ですね。どうしても日本一に輝かなければならないのですか？　二位じゃダメなんですか？」

「どうせやるなら、二位より、日本一のがいいでしょうよ」

「日本一になると、何が得られるのですか？」

「誇りと名誉でしょうな。なにせ、７５年の歴史のナンバーワンだ」

「抽象的な物言いはもう結構です。具体的にお聞きしたい。金銭的にどれほどの違いがあるのですか？」

「具体的にと申しますと？」

「例えば、一回戦敗退と、日本一になった場合の損益の構造について」

「全試合の入場者収入と放送権料が主催本部にプールされ、順位によって、それ相応の分配金が得られる仕組みです」

「そうですか。初戦敗退なら、わずかな収入しかあてにできない。日本一なら取り分が大きくなる」

「そのとおり」

「だから、どうしても勝ちたいと？」

「勝つためには、予選が必要です」

「勝ために、どうして予算が必要なのですか？　この大会は、いつものペナントレースと違って、選手のギャラも一律です。多くの予算を割いたところで、よりいい選手を確保し、充実した戦力が得られるわけでもないはずですよ」

「ですから、ギャラが一律、そこが曲者なんです。超一流もそこそこの選手も同じギャラ。補欠登録ベンチ入りに金銭的差はありますが、控えと先発メンバーは同じギャラです。つまり、いくら働いても、ベンチに入れば同じギャラ。これでは選手のモチベーションが上がりません。野球選手というのは、一投一打に、お金というニンジンがぶら下がっているからこそ、何十、何百試合もの戦いに集中力が発揮できる人種なんです」

「それでその分の報酬、いわゆる出来高ですか？　それをニンジンに選手を発奮させようと？　そのお分を予算に盛り込んで欲しいと？」

「聞くところによると、巨人も中日もやるらしいですよ。特別予算に１０億以上を組んだそうです」

「巨人と中日は、マスメディアが親会社の球団です。チームが勝てば、新聞も売れるでしょう。広告の取り方も楽になる、テレビの視聴率も上がる」

「ＴＢＳもマスメディアじゃないですか」

「横浜が勝っても、テレビの数字は上がりませんよ」

「そんなことはない。横浜は一見、あまり人気のないチームに見えますが、隠れた熱心なファンが多くいる。９８年のようなフィーバーが起これば、それなりの経済効果がみこめるはずだ」

「経済効果ですか？　大矢監督は、最近のテレビの事情を知っておられますか？　どこの局も、スポンサー集めが苦しい。特に厳しいのが、野球中継。大矢監督が仰る通り、それなりの数字は見込めるでしょう。ですが、野球中継の視聴者層は、業界でいうところのＭ３層が主なんです。つまり、中年から老人の男性しか中継を熱心に見ない。この層は、購買意欲が薄く、極めて、スポンサー受けが悪いんです。スポンサーが望むのは、Ｍ１、Ｆ１といっわ購買意欲が強い若者なんですよ。つまり、勝って、視聴率が上がったとしても、スポンサーがろくにつかなければ、いい収益は見込めない。ＴＢＳとしては、それほどの旨みがないんです」

「そんなことはない」

「私の話はまだ続いております。大矢監督、最後までお聞きください。大矢監督ご自身が一番身にしみているおられるでしょう？　野球業界の不景気は。監督を解任されて、解説者に戻ろうと、フジテレビや、ニッポン放送の古巣をあたってみても、色よい返事が帰ってこない。あちらさんも、大矢監督は、功労者と認めてなんとか手を貸したいが、放送激減で解説の需要も、解説者の枠も、予算もなければ、首を縦に振れない。ならば、最近はやりのＣＳ放送。ＣＳといえば、全試合の中継が売り。いくら解説者がいても、困ることはない。地上波に比べて、需要はある。ところが、困ったことに、ＣＳには予算がない。ろくなギャラも出ないし、専属契約など夢のまた夢。一回いくらの本単位の契約でも、そのギャラは野球バブルころに比べたら、雀の涙。一度、家族で焼肉でも食べたら、吹っ飛んでしまうほどの額。さあどうしようと、大矢監督はこのような日々を送っておられると思います」

「それはいつものペナントの話だ。この大会は、ペナントとは違う。非日常の戦い。いつもは、プロ野球をスルーする人や、今はプロ野球に興味のない、オールドファンを掘り起こしてくれる大会です。ＷＢＣのような需要が見込める」

「ＷＢＣ？　ＷＢＣのスポンサーを知っての話ですか？　あの大会、たしかに数字は良かった。ですが、どこがスポンサーについたか知ってます？　パチンコ、パチンコ、またパチンコですよ？　放送権力も高額で、ＴＢＳにとって、そんな身入りのいい話でもないんです。その大会のようになると申されましても」

「それは、数字の読めなかった営業の失敗でしょ？　平日の午前中のゲームで、連覇の可能性が薄く旨みがないと判断したからだ。最初から、結果がわかっていたら、いっぱしのスポンサーはついている」

「ですから、野球中継は数字が取れても、旨みがないんですよ。たとえ、数字が望めても、大企業の食指は動かないんです。さきほど

も申したでしょう？」
「……」
「それにですね、大矢監督。ＷＢＣがあれだけの反響をうんだのは、国対国のグローバルな構図が大きいんですよ。最近の視聴者は、国内の戦いには、まるで興味がないのに、対世界だと、目の色を変えてみてくれるんです。ひるがえって、ＪＷＢＣたる大会はなんですか？　こんなもの、いつもやっているとおりの、ちまちました１２球団の対決じゃありませんか。どこが日本一になろうと、騒ぐのは熱心なファンと地元民のごく一部だけですよ」
「そんなことはない。ＪＷＢＣには、世界的なスケール感は欠けているが、歴史的な重厚さがある。沢村さんとイチローの時空を超えた対決、これは話題を呼ぶはずだ」
「本当にそう思いですか？　読売巨人軍の沢村栄治投手と、オリックスのイチロー外野手の対決がそれほどの興味と関心を呼ぶと、大矢監督は、本当にそうお思いですか？」
「ええ、もちろんだ。全国の注目と関心を一手に集めるだろう」
「イチロー外野手はまだしも、沢村栄治投手など、野球ファンの誰が知っておられるでしょうか？　野球ファン、それも記録や伝記などを読みあさるタイプしか、興味が持てないんじゃないでしょうか？　沢村賞を受賞スした、埼玉西武ライオンズの涌井秀章投手のコメントをお聞きになられましたか？」
「沢村賞の凄さを理解していないってやつでしょ？」
「それは契約更改でのコメントでしょう。涌井投手はそういいつつも、沢村投手の実像をよく理解していないんですよ。彼が、とあるバラエティー番組に出演した際、実は、沢村投手のことよく知らないんですよね、といけしゃあしゃあとコメントしています。現役の一流選手がその程度の認識とすると、一般人の認知度はいかほどか。これは聞くまでもないですね」
「涌井が特別なんですよ。あいつはとびっきりの無知で失礼なやつだ」

「そうですかね？　涌井投手は現代の若者と典型に移りますがね。その涌井投手が、知らない沢村さんとイチローの対決に興味引かれるでしょうか？　イチロー対メジャーの一流投手、あるいは、韓国のエース投手。視聴者が望むのは、こういった世界的規模の対決なんです。自国の歴史と対峙しても、さほどの興味は持ってくれない」

「君の話こそ、データがないじゃないか。ＪＷＢＣが盛り上がらないというデータをあるなら見せてくて」

「よろしいでしょう。こちらをご覧ください。いいいですか、このグラフ、小説家になろうの小説アクセス数のデータです。上と下、どちらが、ＪＷＢＣのデータとわかりますか？」

「上に決まってるだろうよ。上は、勢い良く右肩上がりに伸び、それから高いアクセス数を堅調に維持している」

「大矢監督、本当に世間からずれておられますね？　下ですよ、下。下こそが、ＪＷＢＣのアクセス数の折れ線グラフなのです」

「下？　下だと、ありえない。まるでベイスターズのように、地をはい推移しているじゃないか」

「これが、ＪＷＢＣの現状なのです。しつこい更新頻度と押し付けがましいほどのあらすじで、数が極めて少ない野球小説関連では、そこそこのアクセス数を誇りますが、全体からするとゴミのような注目度なのですよ。上のグラフは、とあるファンタジー小説です。名前は伏せますが、主人公が異世界に行き、敵を倒し、モテモテになるという、まあどうでもいい小説です。が、これに完全に負けているのですよ？　負けるどころか、勝負にもなっていない。アクセス数の桁が一つどころか、ふたつ、みっつ違うんです。こんな程度の注目度じゃ、スポンサーは集まりませんし、ＴＢＳは勝ってもうまみがない。勝ち残って、余計な経費を使うくらいなら、早々と負けた方が、節約になります」

「うむむむ…」

「よろしいですか？　大矢監督。それでは仕分けを行います。がっつりと予算を減らさせていただきますので。…球場内の、食事は、

バイキング方式で、選手、関係者、マスメディアはただ。無駄ですね。有料に切り替えます。いい食材を使う必要もない。試合前の腹ごしらえなど、腹持ちのいいうどんや消化の良いバナナで充分。選手の家族、知人の招待？　無駄ですね。身銭を切って、自分で切符買って来場願います。ボールボーイや警備員の管理スタッフ？　これも無駄だ。補欠がおられるんでしょう？　その人らにやらさせてください。どうせ補欠なんてお暇でしょう。球場によって、賃貸料に差があれますね。あの大矢監督、ＪＷＢＣ規定によると、使用球場は、過去に本拠地を置いた球場ならどこでもいいとありますね？」

「ええ、下関球場、川崎球場、横浜スタジアム、横浜、大洋、合併球団だった洋松で使用していた本拠地なら、どこでもいいんです」

「なら、川崎でいきましょう。下関だと、よけいな宿泊費や遠征費用がかかりますからね」

「ちょっと、待ってくれ。どうして川崎なんだ」

「川崎のほうが、はるかに球場使用料が安い」

「設備は劣悪、球場も狭い。僕は、横浜スタジアムの構造を念頭に入れて、構想を組んできたんだ。いまさら川崎じゃ、野球にならなくなる…」

「それは本当にそうなんでしょうか？　ただ実績と好き嫌いでメンバーを組んだんじゃないでしょうか？　球場がどうだろうと、野球に差が生まれるとは思えません」

「それは、君が素人だからだ。川崎は狭い。狭い球場なら、小技どうこうより、一発狙いの打線を組んだ方がはるかに効率的なんだ」

「今、調べたところ、メンバーの入れ替えは自由のことです。野球に影響するなら、球場ごとに勝手にメンバー、かえてくださいね」

「うむむむむ…」

「よろしいでしょうか？　それでは川崎球場を試合開催地に使用することを、連盟に報告しておきます」

「ちょっと待て、勝手に進めるな」

「大矢監督、休憩の時間です。ご異議がおありなら、再開後にお願

いします」

松原先生クーデターを企てる

「ええ～　それでは、再開いたします」
「どうもこんにちわ…」
「おやおや、大矢監督だけでは、埒があかないと、助っ人をお呼びしましたか」
「横浜ベイスターズ内野手、松原誠です」
大矢は、休憩中に松原を呼び寄せていた。松原といえば、あの金田を名球会会長の座から引きずり下ろした張本人だ。まさに強力なネゴシエーターである。
「私は、大矢監督のようなお人好しじゃありませんから、そこのところよろしくお願いします」
「これは手強い相手のようですね…。では松原さん、さっそくなにかおありのようで」
「川崎を使用するなら、それ相応の設備を整えてもらいたい。私も長年あそこを本拠地にし、愛着がありますが、あまりにも旧態依然とした環境には、ほとほと呆れ返ったものです」
「旧態依然ですか、具体的にいうと？」
「ロッテに逃げられちゃあいけないと、川崎市がむりやり人工芝を引き詰めたのですが、これがまた粗悪品そのもので、まるで鉄筋コンクリートの上で試合をやるようなもの。こんな芝の試合をしちゃあ、故障が頻発するし、華麗なダイビングキャッチや、スライディングなど、エキサイティングなプレーが見られなくなる」
「それで何が困るんですか？　野球からダイビングキャッチやスライディングがなくなったら、何が都合が悪いんですか？」
「そりゃあ困るでしょうよ。ファンは、選手から気が発散しているプレーが見たいんだ」
「本当にそうでしょうか？　たしかに、そういったプレーに、心が踊るのはわかります。ですか、それがなくてもゲームとしては成立

するでしょう？　環境が足かせになり、プレーが制限されることが、逆に試合のあやとなって、かえって面白くなるかもしれないでしょうか」

「それは素人考えだ。最高の環境で、心置きなく全力プレーをする。これこそが野球だ」

「本当にそうなんでしょうか？　それでは、その劣悪な環境で野球をやれれてた松原さんは、全力プレーを提供できなかったと？」

「私はいつも全力だったが、中には、おそるおそるプレーしていた連中もいるだろう」

「そうでしょうね。ですが、松原さんたちの時代のファンはそれで納得していたんでしょう？　劣悪な環境でやる試合に、お金を払われたんでしょう？」

「私のころと、時代が違う。今の人々は、川崎球場でやる試合に満足はしないだろう」

「本当にそうでしょうか？　かえって今の人は、歴史を好む傾向がありますよ。古き良き時代の川崎に興味を引かれて来ても、変に補修をしてたあったら、逆にがっかりされるんじゃないでしょうか」

「君、さっきといっていることが違うじゃないか。さっき君は、今の人々は、昔の事柄に興味を引かれない、といったはずだ」

「沢村投手の話でしょうか？　あれはテレビの視聴者層のお話でしょう？　実際に球場にこられるファンの方とテレビを見るだけで満足するようなファンの方では、趣味嗜好にかなりの差があるんですよ。テレビを見るだけのライト層は、目新し物好きで、世界的スケールを好む一方、球場に訪れるようなヘビーなファンの方は、保守的で、地域内完結を好むのです。時代遅れの環境劣悪な球場で、どんな野球をするのか？　そういう視点で興味を抱いてくれるのですよ」

「プレーの面はひとまず置いとくが、トイレが汚い。ろくな飲食店がない。などはどうなのかね？　顧客サービスがなっていないと、後で大変な事になるぞ」

「どうしてですか？」
「もう二度と来ないと思うだろう」
「それでいいんじゃないでしょうか？」
「どうしてだ」
「だって、たかが数試合でしょ？　限定復活の川崎にもう二度と来たくないとお客様が思われても、もう試合が開催されければ、その二度目もくそもない」
「それは詭弁だ」
「いえいえ詭弁ではありませんよ」
「勝ち進めば、何度でもやることになろうよ」
「そうですね。もし万が一、やる気もない、戦力もない、ベイスターズが勝ち進めば、二度目の川崎はあるかもしれません。ですけど、一度目に懲りて、二度目に来られないお客様がどれほどいらっしゃるでしょうか？　ベイが勝ち進んだ、飯もまずくて高いが、もう一度いってやるか。熱心なファンなら、そう思われるのでないでしょうか。たとえ、一度目でギプアップされても、その減少率たるや、いかほどでしょうか？　わざわざ億のお金をかけて、補修するほどでしょうか？」
「なら球場に合わせてボールを替えるのはどうだ？　うちは他球団よりも破壊力に劣る。狭い川崎球場で空中戦は勘弁願いたい。ならば、飛ばないボールを使って、一発狙いの相手を翻弄する野球をしたい。狭い球場なら、一発と力んだ打者の打球が、フェンス手前で失速するんだ。相手もたまらんだろう」
「球場ごとにボールを？　無駄の極みですね。道具に頼って、戦略を立てるのは、フェアじゃない」
「ウチだけではない。どこもやってることだ」
「だからといって、ベイスターズがやる必要もないでしょうよ。フェアでクリーンに行きましょうよ。あなたたちは、金食い虫。同じ金食い虫なら、企業イメージのアップくらい貢献してもバチが当たらないんじゃないでしょうか？」

「ふん、金も出さんで何が企業イメージだ」
「あれ、お金なら十分出していますよ？　必要最低限以上のお金は出さないだけであって、選手のギャラ、経費など、どこが身銭を切っていると思っているのでしょうか？　いいですよ。ＴＢＳはお金を出しませんから、勝手におやりください」
「くそ…」
「おやおやおや、切り札、松原大先生ももうお手上げ状態ですか？　これはいけませんねえ。何も、承諾なしに、予算削減をするつもりもないのに、折衝相手が切れたら、これはもう話し合いにもなりませんよ～。よろしいですよ、いうことがないなら、お帰りになられても。仕分けは、鋭敏にこっちの手だけで勧めますから」

大矢は、席を立った。
「松原さん、帰りましょう。旗色が悪すぎる。予算を握ってる相手のが上だ」
「ふふふ、大矢監督。そう急ぎなさんな。こっちには、奥の手があるじゃないか」
「奥の手？？」
「ふふふ、ふふふふふふふふ…」

仕分け最終章～永遠の旅立ち

「なんですか？　その奥の手っていのは？？」
「ＴＢＳがお金を出さないなら、他の人に頼んで、出してもらえばいいのさ」
「たしかに、そのとおりですけど、そんな当てがあるわけがない。大企業のＴＢＳでさえ、この有様で出し渋ってるんだ」
「君も僕もよく知ってる人だよ。アシナガおじさんは…」

「ウフフフ。大矢監督に、松原内野手。ハッタリはおやめになった方がよろしいんでないでしょうか？　このご時世に、野球にお金をかける企業があると思いますか？　親会社の私たちだって、いやいや出している現状ですよ？」
「あるよ」
松原は、ケータイを取り出した。
「コナミですか？　あそこはもうだめですよ。主力の野球ゲームの羽振りは悪くなる一方。野球に構うなら、他にお金を使いますよ」
「違うね」
「日本生命ですか？　日石エネモスですか？　野球に理解があり、いまだに社会人野球を保有し、ＮＰＢのスポンサー企業のひとつの…」
「残念、それも不正解」
「なら、どこに…。野球に構う企業など、そうそうあるわけがない」

「本当に大丈夫ですか、松原さん…」
「大矢監督、慌てなさんな。交渉の場では、うろたえた顔をした方が負けだぞ」
「そりゃ、大矢監督も心配しますよ、そんな企業あるわけないんですから…。ウフフフ」

「君は、笑った方がきれいだね。しかめっ面ばかり作るのはよくない。そうやって常に笑うべきだ」
「何をおっしゃられる、松原内野手…。こんな場で、にたにた作り笑い出来ますか」
「し、黙ってくれたまえ。先方が電話に出たようだ…。あ、私だ、松原だ。山下くん、ちょっと時間を借りたい…」
「山下？　どの山下さんでしょうか…」

「し、黙れといっただろう。私は山下くんと話しているんだ。…あ、山下くん。ちょっとお願いがあるんだけど、ＴＢＳがね、ベイスターズに予算を割かないと騒いでいるんだ。そこで君に予算の肩代わりをお願いしたい。そんな膨大な額にはならんよ。しかも、勝てば、黒字になる可能性もある。企業イメージも上がるよ。それで不十分なら、企業名をつけてもいい。横浜ヤマシタコーポレーションベイスターズでどうだ。ちょっと長ったらしいが、君の名前がついたところで、嫌悪感を抱くファンはいないだろう。なにせ、君は、球団史の五指に入るスタープレーヤーなんだから…。なになに？　喜んでお引き受けするって？　さすが君は太っ腹だ」
松原は一度、ケータイを耳から離す。

「松原さん、まさかその企業って…」
「そうだ、山下大輔くんのご実家のヤマシタコーポレーションだよ」
「ウフフフ、どんな大企業とお友達かと思ったらら、一選手の私企業ですか…。そんな会社に予算の肩代わりができるわけがない」
「君は、ＴＢＳの人間のクセにヤマシタコーポレーションのすごさも知らんのか。この程度の予算ヘッチャラの企業だよ」
「そうですか。なら話は早いですね。どうぞ、ヤマシタコーポレーションをＴＢＳの代わりにスポンサーにしてください」
「ほう、本当にそれでいいのかね？」
「なにがですか？　あなたがたも予算を確保でき、我々も余分な予

算を使わずにすみ、四方八方丸く収まったではないでしょうか」
「ほう、ＴＢＳのイメージはどうなるのかな？」
「といいますと？」
「ＴＢＳのイメージが地に落ちるんじゃないかな。ＴＢＳの日頃の行いから、ただでさえ野球ファンの心象はよくないのに、そのうえ、大会から手を引くとなると、どうなるかね？」
「さほどのダメージは受けないでしょうね。これぽっちの横浜ファンにそっぽをむかれるくらい、大会のスポンサーについて見込まれる赤字に比べたら」
「そうかな、君、いやＴＢＳは、野球ファンの層の厚さをなめているふしがある」
「なめていますよ、野球ファンなんぞとるに足りない、口ばかりで視聴率も取れせてくれない、もはや邪魔なものです」
「野球ファンの裾野はＴＢＳが思うより以上に広いんだよ。ふだんは仲が悪いが、一大事には連帯感を発揮する。もしＴＢＳが横浜から降りたとしたら、野球ファンは揃ってＴＢＳの番組は避けるだろう。ドラマのＤＶＤを買わなくなるだろう。ＴＢＳが社運を賭けた映画も見に行かなくなるだろう。その被害額たるや、おそらく、予算の赤字分など簡単に超えるでしょうな…」
「ありえない、うふふふふ」
「ありえるよ。横浜ファンだけならたかがかもしれんが、全国津々浦々の野球ファンがいっせいにＴＢＳを避けるんだよ…。ざっと６０００万の野球ファンがいるとする、その六分の一が嫌うだけでも１０００万だ」
「く…」
「ほうら陰惨たる未来が見えてきただろ？　さあ、ＴＢＳが野球ファンから信頼を失いたくないなら、我々の要求する予算を飲むんだ」
「……」

「しかしさすが、松原さんだ。ＴＢＳもしぶしぶ予算を飲みましたよ」

「いやあ、大矢くん。まだまだ手落ちだらけだよ。向こうもさるものだ。こっちが考えてたほどの予算要求はとおってないからな」

「それでもたいしたものだ。しかし、山下大ちゃんも急な頼みによくこたえくれましたね。電話一つで億単位の取引を快諾なんて、さすがの大ちゃん、太っ腹だ」

「あれは演技だよ。実際、私は、山下に連絡を取っていない。普通に考えてごらんなさい。これだけリスクある取引、この不況下、一発で決まるワケないでしょう。いくら山下と私の仲でも」

「まさかハッタリとは…　おそれいった…」

「フフフ、交渉の場は、一に、ハッタリ、二に度胸だよ。デマカセでも何でも、要求を飲ませた方が勝ちだよ」

「名球会のクーデターの実行者はいうことが違うな」

大矢は感心している暇はない。松原が、名球会クーデターに続けとばかり、自分の足元をすくう可能性があるのだから。

「帰って、一杯飲んで寝よ」

松原の目は光るが、肝心の大矢はいつもの調子であった。

巨人対近鉄プレビュー　おかしな文化人のおかしな芸

「おい、野茂、起きとるか」
「なんですか、金村さん。こんな朝はよから」
「新聞みい。めっちゃ腹がたつこと載ってるで」
「はあ、そうですか」
野茂は、金村を押し返し、寝所に戻ろうとするが、
「おい、そこで寝るな、野茂。新聞のテレビ欄ようみろ、今日の巨人とウチとの中継の煽りや」
「はあ」
「ここやぞ、ここ」
「いよいよ、お披露目。世界の王、ミスター長嶋、ゴジラ松井の超段クリーンアップトリオが、三連発を誓う。先発は、短期決戦の鬼、堀内か。Ｖ９監督、川上の采配も冴える。新鋭坂本山口も参戦？試合展開により、９時２４分まで延長～」
「腹立たんか？　対戦相手の近鉄のきの字もないんやで」
「それがなにか？」
「なんや、野茂。もっと発奮すると思うたんやがな～　相変わらず、クールいうか、物事に関心示さないやっちゃ」
「日テレじゃ、こんなもんでしょう」
「まったく、今日の先発なんやろ。闘志のかけらくらいは、ちっとはみせいよ」
「いや、僕やありませんよ、先発」
「なんやて、それはないやろ。世界の野茂やで？　メジャーで本当に認められた唯一の日本人投手やぞ？　野茂が先陣切らんと、他に誰がいるちゅう話や」
「いるやないですか、阿波野さん、岩隈投手…それにアレ」
「アレ？　アレはないやろうに。アレがお前差しおいて、先発などしたら、チームまとまるもんもまとまらんで。どうせスタメン三塁

手はノリのアホンダラやろが、オレが万が一、三塁守備についたら、きわどい打球によう手も出さんぞ。いかんせん最優先は、ノリの生意気ヤローやろが、オレが、何かの間違いで、スタメンに食い込んだら、チャンスにも適時打打とう思わんで。アレが投げるいうならな」

「僕が監督でも、アレで行きますけどね～　あの人には制球力があって、試合が作れる。しかも、３００勝という説得力のある金看板を背負っている。開幕に心中したくなる気持ちも理解できますわ」

「だからいうてな…。あ…今ちょうど１０時半か。この時間から、日テレで今日の試合の直前煽りがやるそうや。野茂、テレビつけてみいや」

「ハイハイ…」

野茂が眠たそうな目をこすりながら、テレビを付けると、そこには、川上の姿が映しだされていた。

「近鉄の対策？　特に取ってはおりませんわ。本当に強いチームは、対策など必要ありませんのじゃ。これが西武のようなチームなら別ですが、近鉄のような弱いチームの研究など必要ない。真っ向勝負でひとひねりですよ。フワハハハハ…」

「このたぬき爺が。そんなんテレビ用のコメントやろうが。この宿舎に盗聴器つけてまで近鉄丸裸にしよう思うてるクセにが…」

金村は顔を真赤にするが、野茂は平然としている。

「お前も腹立ていよ、ちっとは」

「ええやないですか、コメントひとつに心を動かしては、川上さんの思う壺ですよ」

「何々、近鉄の先発は野茂くんが有力？　ウハハハハハ。これは儲けましたな。鈴木啓示くんが来られたら、どうしようと思っていたところに、ノーコン投手の登板とくれば、９割の勝てる見込みが、１０割になりましたな、ウハハハハ…」

「クソ、勝ってなこと言いやがって…。野茂がくる思えばいいんや。来るのは、草魂のクサヤローやけどな…」

川上のインタビューが終り、番組はＣＭに移る。

ＣＭのしょっぱなから、今日の試合中継の番宣である。番宣番組のＣＭが、また番宣。

一本足を上げる王、首をクイクイとやる松井、大きく足を上げて傾く沢村、小首を傾げる江川がフラッシュのように次々と映ると、最後には、トルネード投法のシルエットに対峙する長嶋の図。そこに、次のようなナレーションが入り、ＣＭは構成される。

「ＪＷＢＣ開幕戦。巨人対近鉄。今日午後7時からオンエア」

「ようやく、近鉄の幻影が見えた思うたら、お前の投げているシルエットや。特徴あるから、野茂やとわかるが、これじゃあ、近鉄が無視されてるのも同然や。クソが…。西本監督のお姿や、ローズの珍妙な打法や梨田のコンニャク打法くらい写せよ」

ところが、よほどこの番組、スポンサー集めに苦労しているのか、次に公共広告機構のＣＭが挟まると、また、ナイターの番宣…。

「もうわかったちゅうの」

二度目のＣＭに金村は怒りを見せる元気があったが…。

「今日の午後7時!!　今日の午後7時!!　今日の午後7時!!」

これが3度、4度としつこく続くと金村も言い返す元気が出なくなる。

「もうええって…わかりました。洗脳するつもりか」

ＣＭが終わると、番組はスタジオに戻る。巨人対近鉄のムードを煽ろうと、双方のファンのタレント有名人が並び、討論の形になっている。

腐っても巨人だ。多種多様なタレントが並び彩りを添えている。

テリー伊藤、徳光和夫、中山秀征のおなじみの日テレ御用達タレントから、糸井重里、黒鉄ヒロシら知識文化人に、ブラマユらの

お笑い、西田ひかる、さほど野球に興味なさそうな南明奈ら華を添えるアイドル系まで豪華絢爛だ。

それに比べ、近鉄側の席に座るタレントと来たら、なんと貧相劣悪なことか。数とブランドで圧倒されれば、討論でも旗色が悪い。

ハイヒールモモコががなりあげても、近鉄の後援会長だったバクザン先生が意味なく書をたしなめ、それを披露しても、キダタローが即興で近鉄の応援歌を作っても、近鉄の例のシンボルマークを作った岡本太郎が「近鉄も爆発だ」と叫んでも、近鉄の大阪ドーム用ユニフォームを作って笑いものになったコシノヒロコが頼まれてもいないのに、デザインしたＪＷＢＣ特別仕様のユニフォームを着用し、大きな体を覆い隠しても、劣勢を跳ね返すどころか、近鉄勢は泥沼にはまっていく。

「なんや、これ。近鉄側の有名人選びのセンスが悪すぎやわ。意図的かいな。これ陰謀やないか。ローカル色、専門色が強すぎや。巨人側のようにもっとバランスのええの連れてこいや」

「他に誰かおりましたっけ、近鉄ファン？」

「……。ウチの母ちゃんの金村カネ子が近鉄ファンや」

「それ有名人違います」

「うちの実家の近所じゃ、めっちゃ有名や」

番組の最後は、ＰＣ、ケータイを使ったＷｅｂ投票が行われた。巨人と近鉄、どっちが勝つかの二択であるが、この番組を見たら、近鉄に入れろというのが無理な話。

「あ！　あ！！　巨人勝利のグラフが…どんどんどん伸びとる！！　近鉄勝利の方は、有田さんの足くらいしか動かんわ！　こんなん世論誘導やん。しかしこれで燃えて来たで。絶対に、巨人に勝って、世間をしらけさせてやるわ。こっちには、それだけでなく、３連勝４連敗の、あの日本シリーズの恨みがあるんやから」

「あれ、金村さん。ずいぶん張り切っておられますが、試合に出る

予定あるんですか？」
「今のところはないな…」
「そうですか」
「だから、オレの代わりにお前が頑張って、巨人を倒してくれ」
「そう気張られても、オレ投げんいうとるやないですか…」
「くそ、それなら、草魂のオッサン頼みかいな。草魂打たれて、近鉄が勝ついう展開にならんかなあ～」

ところが、野茂だけでなくその鈴木啓示も誰が先発であるか、知らされていなかった。
「おい、梨田、出てこい」
「なんですか、鈴木さん」
「お前、コーチ兼任やから、知っとるんやろ、今日の先発。誰なんや。オレはそのつもりで調整してきたのに、西本監督から、何もないんや」
「それが、僕もようわからんのですよ…。投手コーチの久保にも聞きましたが、彼も知らない言う事です」
「なんやと？　どういうこっちゃ。バッテリー担当の首脳陣すら知らんいのうはどういうこっちゃ」
「知ってるのは、西本御大だけいうことになりますね…」
「どういうつもりや、西本の爺さん…」
巨人のスパイ網を気にしてか、それとも野茂か鈴木かはたまた岩隈か決めかねているのか。西本監督の腹のなかはいかに？

今度の舞台はパチンコ屋！？

「そういや、金村さん。昨日、こんなことがあったんですよ」
「なんや、野茂いうてみい」
「……開幕セレモニー終わった後…暇つぶしに、パチンコ行ったんです……」
「あああそこやろ。大会特別仕様のパチ屋か。で、誰と」
「赤堀とか高村とか山崎さんとか佐野とか清川さんとか阿波野さんの投手陣と……」
「それで」
「……」
「だからなんや」
「……そこで、驚くような人にあったんです……」
「…びっくりするような人におうたなら、それらしく話せや」
「……」
「野茂の話はいつもまどろっこしいいわ」

野茂の話では面白い話でも面白くならない。野茂に替り、話を進めよう。野茂たちが訪れたパチンコ屋は、近鉄軍団が宿泊する東京ドームホテル近くに、ＪＷＢＣ用に特別にオープンをしたものだ。

一階にパチンコ、パチスロが並び、二階にはゲーム機器が並ぶ遊戯施設だ。

暇を持て余したＪＷＢＣ参加選手やマスコミが多く詰めかけることが予想されるため、パチスロ台、パチンコ台、さらに、ゲームまで、野球関連に彩られた異色の仕様になっている。

大会関係者の予想は、まんまと当たった。開幕セレモニーが終り、飲みに繰り出すのもまだ早いと、わんさと野球選手が詰めかけているのだ。

「どれも野球、野球。野球づくしのパチンコ屋やなあ～。ＣＲ巨人の星、ＣＲドカベンとか。よう見かける台もあれば、独自色の強いのもあるなあ」

来店早々の佐野が感心するやいなや、野茂はパチスロ台に張り付いていた。

「佐野みろこれ、ＣＲあだち充やって…」

「あだち充？　ああタッチとかＨ２の作者か～」

スロットが回り、タッチの主人公達也が３つ揃うとフィーバーする方式なのだが…。

「よっしゃ、野茂、最先いいなあ。さっそく、達也が２つ揃ったで…」

「……」

いきなり当たりの予感も野茂は変わらず冷静で佐野だけが興奮状態だ。

「こい来いこい、達也コイ～　？？？？　これ達也やろ？　よっしゃ来た～～。いきなしのフィーバーや」

佐野の喜びも虚しく、「残念でした～」の南の声とともにスロットはまた流れ始める。

「なんでや、今の達也やろ？？　達也３つ揃ったやろ。どうしてフィーバーせんのや。いかれてんのか、この台」

「佐野、さっきのは達也のうて，Ｈ２の主人公国見比呂やで。髪型がちょっとだけ違ごうたやろ」

野茂の解説通り、三つに出た目は、タッチの主人公達也でなく、Ｈ２の主人公、国見比呂であった。

一見して見分けがつかないのも無理がないほど、２つのキャラの造形に違いはない。

「見分けつかんちゅうの」

野茂と佐野のひとつ隣の台には、なんとダルビッシュが座ってい

た。新旧、日本のエースが隣合わせになっているのに、まったく気づかない両者。

ダルビッシュが帽子を目深にかぶって顔が見えにくいのが、気づかない要因か。いやそれにしてもダルビッシュは野球選手で埋め尽くされた店内でも頭ひとつ大きい。

ダルビッシュが打ち込む台は、ＣＲこせきこうじである。

「なんや、クソが、山下たろーが３つ揃うた思うたら、３つ目はやまだたいちか！　同じ顔やから期待してもうたやないか！　むかつくんじゃ！」

あだち充の台と同じレトリックで怒りを荒わにしていた。しかしダルビッシュがパチンコとは珍しい。あの事件以来封印していたはずのなのにだ。

彼が、なぜ、封印を解き、パチンコ台に興じているかといえば、その答えは、野茂の席とは反対方向のダルの隣席に座る男にあった。

「え！！！　なんすかこれ！！　急にじゃらじゃらと玉が噴出してきましたけど！！」

「菊池、それがフィーバーだよ」

「そうなんですか、涌井さん！！　パチスロ初めてだから、勝手がわからなくて…」

「ははは、喜ぶのはまだ早いぜ。そういうのはビキナーズラックといってな…」

ダルビッシュは、菊池雄星を連れ立って、涌井とともに来店していたのだ。　提案者はもちろん涌井。世間知らずの菊池に遊びを教えようと、まずパチンコの運びになったのだ。

※菊池とダルビッシュは、２０１０年１月１６日の今日現在、公的には、一度も顔合わせしていない。、

ちなみに、菊池の台は、ＣＲドン・ボルガン。９０年代初期のジャンプに連載されていた次原隆二の野球漫画を題材にした台である。まったくの無名漫画をも台にしてしまうあたり、さすが野球パチンコ専門店である。

パチンコにトラウマがあるダルビッシュは、最初、拒絶反応を示したが、盛大なる大会開催中は無礼講だとの、涌井の論理不明瞭な意見に押し切られて、いやいやの来店になったのだが、そこは、かつてのパチスロ狂。台を目の前にすると血が騒いだのか、こうして、一喜一憂を繰り返す始末である。

パチスロの封印が解かれれば、あれも解きたくなるのが、人間の性。すっかりと野球一筋の真人間に戻たはずのダルビッシュ。

右手でレバーをひねれば、遊ぶ左手が寂しくなる。

「一服したくなってきたわ…」

それはまずいぞ、ダルビッシュ。パチスロは百歩譲るにしても、タバコに手を出すのはご法度だ。一度の喫煙のつもりが、二本、三本、やがて一箱、一カートン…。

「真面目人間の菊池がタバコ持ってるワケないな」

涌井がタバコを所持しているか知らないが、たとえ持っていたとしても菊池の手前、涌井に無心するのは気がひけると、ダルビッシュ。隣の席に座る巨体の男にたかることにした。

「この兄ちゃん、デカイ図体やな…」

野茂とは気付かず、ダルビッシュは、野茂を兄ちゃん呼ばわり。

「なんか、茫洋とした兄ちゃんやなあ…話しかけづらいオーラを纏ってるわ…」

野茂をターゲットから外した、ダルビッシュは、すかさず、佐野に焦点を合わせる。

「太った兄ちゃんの付き添いのデブハゲのおっちゃん。これならタバコ持ってそうやな…話しかけやすそうやし…」

ダルビッシュは、タバコを一本借りようと、佐野に声を掛ける。

「あのー　すんませんが、タバコ一本くれませんか？」

「ん？　オレにいうとるの？　ええで。一本くらいあげるわ。パチンコ屋にいるもん、みんな仲間や、同士や。優しくせんとな」

ところが、佐野は、この男の正体がダルビッシュであるとすぐに

見破る。
「つうか、お前、ダルビッシュやないかい！　いかんやろ、お前がタバコ吸ったら！！」
大きな声を出すものだから、菊池雄星も気づく。
「あれ、ダルビッシュさん、タバコやめられたんでは…」
それまで爛々とした憧れのまなざしでダルビッシュを見ていた菊池の目がみるみるうちに曇っていく。
こうなるとダルビッシュ、菊池の手前、タバコは吸えない。
「冗談、冗談やちゅうの！　タバコなんてガキの吸うもんや！　オレは二十歳前にきっぱりとタバコから卒業したんや！　吸うワケないやろ！」
ダルビッシュのなんとも苦しい弁明に関わらず、菊池はすっかりと信用してしまう。
「そうですよね！　節制に努め、終始野球だけを考える。それこそ僕が憧れるダルビッシュさんです！」
ダルビッシュを見つめる菊池の目には、もはや一点の曇りもない。

「おい野茂に佐野やないか」
黒服のスーツ姿の男が、野茂に気付き声をかけてきた。
「あ、大森さん…」
その正体は大森剛だった。
「巨人軍の栄えあるドラフト一位の慶大のエリートがどうしてパチンコなんですか？」
佐野の刺のあるツッコミにも、大森は持ち前の鉄仮面を崩さない。
「オレがパチンコしに来たわけやない。付き添いや、付き添い」
「付き添い？　誰のです？」
「オレは大会期間中、ある選手の世話人をしているのだが、そのお人がどうしても、パチンコを打ちたいとおっしゃられれたな。現代文化を触れたいと…」
「誰なんです、その選手って…」

「このお人だよ…」
大森が手かざしするのは、巨人軍のウィンドブレーカーを着た男、その背中には大きく１４と記されている。
「巨人の１４番!!??　ま、まさか!!??」
「そのまさかだよ。しかし、ちょうどええな。そこには涌井、ダルの現役沢村賞受賞組、未来の有力候補、菊池もいる。そして、向かいの席には、新人投手で沢村賞取った野茂や…」
「すいませんねえ、オレだけ受賞歴なくて…」
「ふん、佐野、気にせんでええ。沢村賞いうても、しょせんパ・リーグで取ったもの…」
「基本的に両リーグから一人の賞に、パとかセがありますか?」
「まあな、だからといって、パ・リーグから取った投手は沢村賞とは認めんな。元々セ・リーグの投手だけに送らる賞や。その時代のが良かったわ。なんか、パの投手が沢村賞取る度に汚された気分や。沢村賞いうのは、セ・リーグで、いや巨人軍の投手がとってこそや…」
「なんだって、大森さんだって近鉄にいたくせ!」
「ふん、黒歴史やな…」
さあさあ突然の新キャラ、大森が出てきて、プレーボールまでまたしばしの時間が!

大森対パ・リーグ

「どうしたんだ、野茂に佐野」
入店から別行動していた阿波野、高村、清川らが、野茂の本隊に合流をした。
「あ、阿波野さん。どうもこんにちわ」
「大森か」
「そちらは清川さんに高村、山崎さん、赤堀か」
「どうしたんだ、大森」
「それがですね、阿波野さん。大森さんがどうもつれないんですよ」
「慶応大から巨人にドラフト一位で入れば、ちょっとはお高くなるもんさ」
「阿波野さんのいうとり僕はエリート中のエリートですから。高校は、あの名将・水原さんを産んだ高松商業。それから慶応では、リーグ戦・三冠王に加えて、全日本の五番を打ち、ソウル五輪の銀メダルに多大に貢献。当然、巨人軍は、エリート中のエリートの証である一位の座を用意して、僕を迎えてくれました。ちょうどそこにいる野茂くんとはソウル五輪で同僚で、ドラフト同期。野茂くんは八球団、僕は巨人のみが一位入札とかずに多少の違いがあれ、そこはプロに入るなら、一二球団どこでもいいとプライドを捨てた野茂くんとあくまで巨人一位以外はプロ入り拒否をした鉄の意志を持つ僕との差。ボク個人的には、史上最多の八球団の競合の偉業も捨てがたいが、やはり一球団でも巨人軍一位のが上と見ますがね」
大森の口は止まらない。
「おい、大森。いいかげんにしろよ」
「なんですあ、阿波野さん…あなた、沢村賞取りましたっけ?」
「取ってないな。僕の肩がすり減ったころになったようやくパ・リーグの投手にも門戸が開かれたからな。まあ、僕のベストイヤーだった89年は、斎藤雅樹が20勝に一点台の記録をたたき出したシ

ーズンだから、どっちにしろ難しかったけどな」
「そうですか、阿波野さんは沢村賞の受賞経験がない…それは残念でした…」
「なにがいいたいんだ、大森」
「あれ、阿波野さん。ここでパチンコを打っている人が誰かまだお気づきでなくて？　阿波野さんのような大投手いや、それほどでもないかな、好投手くらいかな…でしたら、オーラで気づいて欲しかったですけどね…。史上最高の投手が醸し出すオーラですから、モノが違いますよ」
「？　その巨人のウインドブレーカーを着たのは…」
「そうそのまさかですよ…。沢村栄治大投手であられます…」
「沢村さん…。復活したとニュースで聞いてはいたが、実際にこの目で見たのは初めてた。開幕セレモニーも欠席されていたし…」
「沢村賞を取ったことのない残念な投手の阿波野さんですが、それは元巨人の一員…。巨人時代はもっぱら敗戦処理に二軍暮らし。横浜を首になったあと、巨人軍の御慈悲で、コーチとして雇ってあげながら、投壊を招いたヘボ中のヘボコーチですか…。まあそれでも一応巨人軍の一員に違いはありません…
」
「なんだと、おい大森。お前だってろくな成績をあげた選手じゃないだろうが！」
「ろくな成績をあげていない？　ふん、この私を誰だと思っているんだ。何度も打撃タイトルを取り、巨人軍の優勝に貢献したスラッガーだぞ」
「ワハハハ。なんだ、大森。ろくな成績をあげなかったらといって、二軍の成績を自慢しださなくてもいいじゃないか！」
「二軍は二軍でも、巨人軍であることには違いはない。近鉄やパ・リーグなんていう誰も見ていないノンプレッシャーの環境でこそこそと出した数字よりよほどましだ」
「偉そうに。そのばかにする近鉄に移ったら、まるで、打てなかっ

たクセに…」
「近鉄？　この私が近鉄にいたと？？　おかしいな、高松商業から慶大に入り、栄光の巨人軍ドラフト一位…。引退後は、スカウトとして、巨人軍を下支えし、坂本勇人を発掘するなど敏腕ぶりを発揮するこの私のどこに近鉄などという汚らわしい経歴が入っているのか…」
　阿波野の後方にいた山崎がついに切れる。
「大森、おまえいい加減にしろ！　近鉄をこれ以上馬鹿にするとオレが許さへんぞ！」
「あらら、山崎慎太郎さんですね。パ・リーグのエースというだけで、嘲笑ものなのに、それも野茂がいなくなった後の荒廃した投手陣のしょせんは暫定エース…」
「なんだと、コラー」
「そっちの高村もそうだな…お前も暫定エースや。というか、野茂がいなくなって近鉄が消滅するまで、エースらしいエースなんていましたっけ？」
「くそ、表出い！　大森！」
　山崎は今に大森に食ってかかろうとするが、先輩格の阿波野が止めに入る。
「待て、慎太郎。開幕戦を明日に控える身だ。大森なんかと喧嘩しても意味がない。無駄な喧嘩をして出場停止になったらかなわん…。いややつの狙いはそこかもしれんぞ」
「ふはははは…。私たちは大巨人軍ですぞ。近鉄など、フルメンバーが絶好調でかかってきても、一捻りだ」
「大森、お前と話していてもしょうがない。せっかくだ。同じ背番号１４を背負う投手の身だ、沢村さんに尋ねたいことがやまのようにある。ちょっと二、三質問する機会をくれないか」
「だから、どうして、近鉄やパ・リーグの投手に沢村さんに質問する機会を与えなくてはならないんだ。巨人軍の伝統は巨人軍だけで受け継ぐ。門外不出だ。まあ、沢村賞受賞者のダルビッシュ、野茂、

涌井は質問くらいええかな。まあ阿波野さんも巨人軍の端くれ、阿波野さんも許可しよう
。それに清川さん。たしか、沢村さんと同じ京都商業の出身で、名前もあやかって英治…。清川もいい。菊池もいいかな。これから沢村賞を取る可能性がなんぼでもあるし、巨人軍にＦＡするかもしれない。どうせ、お前もホントは巨人に行きたかったんやろ？　だが、あとの佐野、高村、赤堀はダメやな。お前らは、沢村さんになんの縁もないカスのような投手やから」
　大森の勝手な言動はとどまることを見せない。
　この大森の態度に耐えかねたダルビッシュがついに行動に打って出る。
「あ、佐野さん。悪いんですけど、タバコと火、やっぱ、貸してくれます？」
「なんや、ダル…いきなり…」
　ふと、佐野はダルビッシュの顔を見ると、その目は怒りに満ちていた。
「まさか、ダル！　辞めとけ！　そんなんバカらしい！　出場停止になるだけや！！」
　大森は、ダルビッシュの冷たい視線に気がついた。
「なんだ、ダル、お前のその目は…。ははーん。やっかんでいるんだな！　巨人軍がお前をドラフトで指名しなかったことを！　まあオレもお前がいた東北地区のスカウトやったから、ようお前を見させてもらったが、悪いのはその目よ！　結局、人間性に信頼が持てず、お前の指名を強く推せなかったんだよ。喫煙にパチンコだけやない。感情むき出しのマウンド、練習態度、全部赤点やった。巨人軍は紳士たれ。品行公正な人間じゃないと巨人軍は指名できないんだよ…。まあその後世間の荒波にもまれて、ちったあ、真面目人間になったようだな、ＦＡで巨人軍に来ることを許可してもいいぞ」
「……佐野さん、火貸してください…」

大森対パ・リーグ（後書き）

大森がこんなやなやつがどうかはよく知りません

吸殻は灰皿へ

「あれっれ、あれ～？　そういえあ、巨人軍の伝統の厚さに私の力不足で屈した後の一年半ほどの記憶が定かではないんだよ。あれは９８年の初夏の頃だと思う。私はどこかに飛ばされたんだが、その先がわからないんだ。韓国？　台湾？　メキシコ？　アメリカのマイナーリーグ？　どこだっけなあ～。そうだ、近鉄とかいう愚かなで粗雑な野球チームだ。通告を受けた瞬間私は絶望したね。だが、巨人軍の厳命されたら、これは断れない。人生修行と思い、移籍を受けたんだ。いやあ～想像以上にひどいチーム、環境、野球レベルだったよ。巨人の二軍の試合より客席が寂しければ、やってる野球もみすぼらしいたらありゃしない」

　ダルビッシュの大森と見る目が、次第にきつくなっている。

「まるで巨人の二軍から三軍に落ちた気分だったよ。いくら気分を入れ替えて、この低レベルの野球で結果を出してやると思っても、いざグラウンドに立つととんでもない寂寥感に襲われてね。十分に力を発揮できなかったんだ。よくあるじゃないか、マイナー落ちしたメジャリーガーが気落ちし、３Ａでも成績を残せないって。それと同じ現象だな」

　ダルビッシュは、佐野にタバコの催促をやめない。

「佐野さん、お願いします…」

「ダメや！　ダル！　お前は前途洋洋の未来がある男！　お前がなんかしたら野球界が崩壊する！」

　佐野はダルビッシュにタバコを貸すことを渋る。佐野は、怒りの頂点に達したダルビッシュが、大森にタバコを押し付け、いわゆる焼印を押すと踏んでいるからだ。

「ダル、お前の代わりに、おれがやったるわ！！　オレはしがない中継ぎ投手で、しがないローカル解説者。オレが球界から追放されても、なんら痛手はないわ」

佐野はタバコに火をつけ、その先を、大森に向ける。
「はあはあはあ…」
大きく広がる額に、汗を滴らせる。タバコを持つ手の先はブルブルと震え、息は荒くなっている。
「いけ、重樹！　覚悟を決めい！」
佐野はタバコを持った右手を、大森に向かって振りかざした。
「あ！！」
ダルビッシュはたまげ、
「あ！？」
阿波野が目を丸くすれば、
「あ？」
赤堀は口を手で覆う。
「え？」
佐野は思わぬ展開に目をまるくする。
「あちちちち」
大森に当てようとした佐野のタバコの先は、トイレに行こうとたまたま席を立った菊池雄星の頬に当たってしまったのだ。
「先輩…熱いですよ…。でも、これも新人の僕に対する歓迎の意ですよね？　それなら甘んじて受けます」
佐野はすぐにタバコの先を頬から離したが、菊池の頬には、丸いタバコの後がくっきりと残っている。
「ごめん、菊池……。いやあ、悪気はなかったんや！」

「うははは！　なんだ、仲間割れか！！　パ・リーグ連中は、くだらない仲間意識だけは強いと思うたが！！」
大森は高笑いを浮かべる。
「劣勢リーグ、パの奴らは、巨人軍に嫉妬し、巨人軍に羨望し、巨人軍に入れなかった自分のこれまでの人生の足りなさを愚痴り合い、傷口を舐め合ってればいいんや！…あ？　なんや、この感触？」
その時、大森の頬に当たったのは、熱いタバコの先でなく、厚い

拳であった。
「ぐりぐりぐり…」
「え？」
「あ！！」
「ぐりぐりって…」
高村が山崎が清川が驚く。
「どうも、大森とかいう人、こんちわ～　埼玉西武ライオンズの一本柱、涌井秀章と申します」
涌井は、大森の頬に当てた右の拳の先を、ドリルをねじるように回す。
「てめー、涌井…。巨人軍に入れぬようオレが手を回してやるぞ…」
「いいっすよ。生涯西武すっから。西武にいるの気まずくなったら、大リーグ行きますから。いまさら、巨人もないっすよ」
涌井は気が晴れたのか、大森の頬から拳を離した。

「計算外の一撃…」
大森は般若のような生意気な面を一瞬崩し、ぼそりとつぶやいた。
大森以外、趣旨が測りかねぬ一言であったが、大森はすぐに怒りの顔を形作った。
「どれがええか？　涌井！　出場停止か、大人の間の揉め事らしくお金で解決するか、それとも、巨人軍に有益なる情報をしゃべってくれるか…どれにする？」
大森の出した和解案は以上の３つ。
この問題を外に漏らし、潔く出場停止を受けるか。
お金でなかった事にするか。
巨人軍に情報提供するか。
である。
涌井は主力投手の一人とはいえ、西武には、稲尾、郭、池永、工藤、松坂、東尾とエースクラスが溢れおり、涌井の欠場はさほどの痛手はない。

しかし、プライドが高く目立ちたがり屋の涌井のこと。
「出場停止？　冗談でしょ？」
これを一蹴だ。
二つ目のお金で解決であるが、これは現役スカウトの大森にとっても、実はおいしくない事柄。裏金事件発覚後、なにかと世間の目が厳しい時代、不明瞭なお金のやり取りは、あらぬ誤解をうむのだ。
「主力でもない敗戦処理がやっとの涌井を出場停止に追い込んでも、巨人軍にとっても美味しくないな…。３つでいこうか？」
大森の支持する和解案は、３つの情報提供である。
「ここには、近鉄、西武、ハムの選手がいる…。やっぱ欲しいのは、近鉄の情報やな。別に近鉄の情報など知らぬでも、１００％確実に退けれるが、これも１２０％絶対確実にするために聞いておこうか…。ズバリ聞く、明日の先発は誰や」
阿波野が、佐野が、高村が、赤堀が、清川が、山崎が顔を見合わせる。
「なんだ、同じリーグいうても、しょせん他球団。涌井の不祥事の尻拭いなどできないというのか？　パ・リーグの連帯などしょせんこのていどか」
「おい、大森…」
阿波野が代表する。
「なんですか、阿波野さん…」
「もし、明日の先発を明かしたら、この件はなかったことにしてくれるのか？」
「そりゃ、もちろん…。こんなくだらん揉め事を公にしたら、せっかくの大会に水を差しますからね…」
「そうか、なら、明かそう。パ・リーグの絆の強さを見せてやるぜ…。明日の先発は…」
「先発は……？」
大森は息を飲む。
「知らないんだよ」

「は？　知らないですむか！　阿波野さん、あんたは先発ローテの一角だろ？　近鉄にしたら、二度も１５勝以上した投手などごくわずか！　その一人の阿波野さんが、開幕前日に詳細なローテを知らないなんてありえない！　そうか、明日の先発は知らないが、阿波野さん、あんたが投げる日は決まってるはずだ。その日はいつだ！　それから逆算すれば明日の開幕投手が誰かと自ずとわかってくる！」

「それも決まってないんだ」

「嘘をつけ！　嘘の情報提供など受け付けんぞ！」

「じゃあ、野茂に聞いてみればいい」

「野茂？　野茂がいたか。野茂はどこいった」

大森の目の前でパチンコをしていたはずの野茂はいつの間にか、幽霊のように消えていた。

「開幕はどうせ野茂か草魂のどっちかや。野茂が明日投げないといえば、草魂が自動的に開幕投手のはずや…。その野茂はどこいった？？」

野茂を探すがあたりには見当たらない。

「どこや、どこいった、あのボケヤロー！…あ！　沢村さんもいない！」

大森は失態を犯した。

大森が世話役を命じられていた沢村が忽然と消えていたのだ。

沢村も、一心不乱にパチンコに打ち込んでいたはずだが…？？！。

わいわいベイスターズ

「巨人はロッテより弱い」
加藤哲郎がメガホン片手に、そう叫ぶと、バスにすし詰めの客人は、それに続き、
「巨人はロッテより弱い」
と、何度もコールをする。
これは、加藤哲郎先生と行く巨人対近鉄バス観戦ツアーの車内での一幕である。
一向は、加藤哲郎の毒舌解説付きの観戦目的に、一路ドームに向かうところだ。
「え～　ついにこの日が来ました～　あの日から２０余年、ろくなことがなかったですが、ついにそれを清算する機会が訪れました。どう考えても近鉄はロッテより強い。そして、巨人はロッテより弱いことは未来永劫変わらぬこと。つまり近鉄が巨人に負けるわけがないんです」
巨人対近鉄の一戦となると、この男はやはりかかせないだろう。

「まずい、沢村さんの世話役を仰せつかったのに、それが行方不明じゃあ、これまでコツコツと巨人軍で積み上げたものが一気に崩れてしまう！　どこいったんや！　野茂もおらんとこみると、あいつが沢村さんたぶらかして、どっか連れたったんか！」
大森は慌てるが、場のムードも白けきっている。
「ほれお前らも探せ！　探すの手伝わんと、涌井がやったこと大っぴらにするぞ！」
「慌てんな、大森。それが巨人の人間の悪い癖だ。ちょっとの問題を大きくしすぎだよ。大の大人が、ちょっとくらい行方不明になったとこで、何の問題はないよ」
阿波野がたしなめるが、大森は収まらない。

「何をいうか、阿波野さん！　沢村さんはそんじょそこらの野球選手やないんですよ！　歴史的偉人なんですよ！　そのお人が行方不明なんかになったら、巨人軍の恥です！」
「ほら、それも悪い癖。しみったれた名前と伝統にこだわりすぎる。いままで、相当な悪事を働いてきたクセに、正義感だけはイッチョマエ…」
「ふん、巨人軍に在籍してたというても、阿波野さんも、しょせんは近鉄育ちですね～。すっかりと考えが野蛮な近鉄に染まっている。やっぱり巨人に直に入って、頭が柔軟な若いうちに、しっかりとした教育を受けないと、こういった人間になるんですかね～。そういえば、阿波野さんもぜがひでも巨人に入りたいとドラフト前にいってましたっけ、地元の大洋を隠れ蓑に、当時よく使われた在京セ希望とかいう緩和剤を使って。それがかなわず、よりによって近鉄が引き当てたがために、こうして良識のない人間にならざるを得なかった…」
「だから案ずることはないよ、大森。騒ぎの主の一人はほらそこに」
「なに？」
大森が振り返ると、野茂が、ハンカチで手を吹きながら、ぬぼう～と現れる。
「なに、揉めてるんですか…」
「野茂、抜けるなら断りを入れろよ」
「阿波野さん。トイレくらい自由に行かせてくれたってええやないですか…」
「おい野茂。お前やろ。沢村さんを連れ去ったのは…」
「なんのことです？」
「知らばっくれるな。私がこうしてパ・リーグの取るに足りぬ連中と議論を繰り広げている隙をぬって、お前は沢村さんをどこかに連れ出した」
「逆ですよ…。沢村さんが、一緒に便所いこうやと声をかけてくれたんですよ」

「野茂？　お前、沢村さんと直に話をしたんか？」
「当たり前でしょう…」
大森は頭を抱えて、ふさぎ込んだ。
「ううう…。始末書を書かされる…。沢村さんは、戦中からこの時代に来たデリケートな身…。部外者の現代人との会話はご法度と上から強くいわれているのに…。もし、沢村さんがおかしな思想に塗固められたら、どう償いとつけても償いきれん…」
大森は、野茂に突っかかる。
「おい、野茂。沢村さんとどんな会話をした。工業高校から社会人に行ったお前が、慶応出身の私と違い知的な会話できるワケない」
「どんなって、取るに足りない会話ですよ。お前が大リーガー相手にバッタバッタと三振を取った投手かいわれましたから、はいそうですと、答えたまでですよ」
「それだけか」
「それだけです。あとフォーク投げたいから、今度教えてくれともいわれました」
「ばか、勝手にフォークなんぞ、教えるな。沢村さんは、念密に組まれたプログラムの元、現代野球に対応する投手へ作り替えている最中なんや。よけいな情報を勝手に入れるな」
「いや、人に教えんのも面倒なたちですから、笑って適当に誤魔化しましたけどね…」
「それで、沢村さんはどこいったトイレから帰ってこないやないか」
「ああなんか、パチンコも飽きてきたから、他の場所見に行くというてましたよ」
「なんだって…。これは大変だ、こんなところにいてる場合やない…」
大森は、かけてあったスーツの上着を切ると、別れの挨拶もせずに、この場を後にした。
大森の終始、勝手な言動に振り舞われたパ・リーグ連合は、開いた口がふさがらない。

「なんだったんだろ、あいつ…。結局、沢村さんへの質問コーナーも、涌井のグリグリに対する賠償も請求半ば…」
阿波野たちの疑問に、野茂が平然と答えた。
「大森さんも、やりたくてああいう言動取ってるわけやないって、沢村さんがいうてましたよ」
「なに？　大森のあれが素じゃないって？　それがそうしれ沢村さんにわかるんだ、野茂…」
「後でわかりますよ…。ここで種明かしをしたって面白くないでしょう…」
「……相変わらず、人を食ったやつだな…。真意が掴めない」

「阿波野さん、あそこ凄いですよ。勝ちすぎて、箱が何段重になって倒れそうだ」
高村が指さすのは、二、三台離れた台のこと。たしかに、両脇に箱が重ねられて、図体が隠れそうなほどだ。
「あれか…あの、帽子からはみ出たサザエさんヘアーに四角い顔に、メガネ…。やっぱりあれ田代さんか…」
「よう阿波野」
勝ちすぎて笑いが止まらない田代は、ウォーランドが四球を連発したときと違って、機嫌がすこぶる良い。
「緊急スタッフミーティングがあるといって、斉藤明夫さんが、急いで帰られましたけど、田代さんはいかなくていいんですか？　たしか打撃コーチ兼任でしたよね？」
「いいんだ、いいんだ。オレ出ても、どうせ、ぽかんと口開けているだけだもん。パチンコのが大事」
「そうですか…」
さすが、田代。ＴＶＫの生放送を、パチンコの勝ちが止まらずに、すっぽかした伝説があるほどの、パチンコ狂いである。

「いい人なんだけどね」
阿波野が遠くを見つめる。
「打撃コーチとしての実績も十分ですよね？」
山崎が続ける。
「そう、指導者としての才能もある。村田や多村は田代さんを師匠と崇める。でも監督には向いてないんだよ」
「それもわかります…」

ゲームセンター五十嵐信一

「気分転換に上のゲームセンターいこうか」
阿波野は、近鉄軍団を連れ立って二階にあるゲームコーナーに向かった。
二階も一階と同じく大会特別仕様で野球尽くしになっている。
実況パワフルプロ野球から、ゲームセンター用のファミスタ、ワールドスタジアムまでおなじみのゲームの筐体か並んでいる。
「目玉はあれだよ。ＪＷＢＣ大会特別バージョンのカード野球ゲーム」
「へえ、力入ってるなあ」
「この販売機でパックを買うと、金額に応じてランダムにカードが出てくるから、その選手カードに応じて打順を組む。よし、オレが試しに買ってみるか。もちろん、選ぶ球団は、近鉄と見せかけて、横浜に見せかけて、やっぱり近鉄…。試しに２００円のスタンダードバージョンをひとつ買ってみよう」
阿波野が、２００円を入れると、カードの入ったパックが一つ落ちてくる。
「何が、入ってるかなあ～」
阿波野がパックの封を切る。
「鈴木武…。草創期に活躍された俊足の遊撃手か…。金額はってない割に、いい選手を引けたな…。次は、森下重好…。近鉄創立年の４番打者か…お、３１本塁打打ってるな…こりゃいいな…」
「しかし、思った以上にマニアックな人選ですね…。近鉄ＯＢのオレたちでさえ、いまいちわからん人ばかりや」
「佐野も買ってみろよ」
「いやいや、ここは、オレのように平々凡々の人間やなく、野茂のような大金持ちに、高いカード買わせましょうよ。って野茂がまたおらへんやないか。アイツ、どこ行った?」

「ここや、ここ、佐野」
野茂はパンチングゲームの前にいた。
「なんだそこかい…。野球ゲームしかないはずなのに、どうしてボクシングゲームあるんや？」
「甘いな、佐野。これも野球ゲームやぞ」
「どこが。屈強な黒人人形叩いて、パンチ力を競うやつやろ？　よくゲーセンで見かけるもんやないかい」
「まあみてみい。説明よりもそのが早い」
野茂が、コインを入れると、人形が光だし、画面に選択肢が出る。
「は？　ミニマム級バナザード？　フライ級T・ウッズ？　バンダム級トレーバー？　ライト級アレン？　ミドル級シピン？　ヘビー級ガルベス？　スーパーヘビー級デービス？　どっかで聞いたことある名前ばかりやなあ」
「だから野球ゲームいうてるやろ。これは外国人選手と格闘できるゲームや
「ああそうか。そういえば、鮮烈な乱闘劇が記憶に残る選手ばかりやな」
「T・ウッズって誰や？　他はわかるが、このウッズいうのはようわからん」
「おい野茂。ウッズわからんか？」
「知らん。渡米した後の外国人選手は、どうも疎いな…。ガルベスは有名やからわかるけど…。ホランズワースとかゲレーロ兄とかキャンディオッティとかおらんのか？」
「普通、そっちのが知らんよ…。オレはわかるけどな」
「まあ、トレーバーあたりで行ってみるか。元同僚やしな」
「トレーバー懐かしいな。ブライアントと仲悪かったな」
画面には、髭面挑発のトレーバーが、ファイティングポーズを取って映し出る。
悪役プロレスラーばりに叫び、サービス満点だ。
「ひとつ疑問なやんが、これこのゲーム用にいちいち撮ったんか？」

「まあそうやろな」
「ギャラとか出るんやろか？　出るとしたら一律やろか？　それとも機械の可動に応じて出るんやろか？」
「知るかいな。さすが、野茂。肖像権とか、そういう細かい契約事項にうるさいな～。つうか、もう始まってるで」
「おうそうやった」
野茂が右手につけたグローブを黒人人形で叩くと、トレーバーに衝撃相応のダメージを与えられる仕組みになっている。
逆に、トレーバーも攻撃を仕掛けてくる。画面上のトレーバーが繰り出す攻撃をフットワークを使い摘便、かわさないと体力ゲージが減っていく仕組みだ。
さすが野茂だ。のんびり屋すぎるというか、大物というか。メジャークラスのパワーパンチを繰り出すのはいいが、そのぶんフットワークを使わず、体力ゲージがどんどん減っていく。
「おいおいおい英雄ちゃ～～ん。パンチはええですが、体力メーターがオレの毛根くらいばっさりと減ってますよ～」
野茂は佐野のからかいにも構わず、パンチを繰り出し、ついにはトレーバーを沈める。
「どうや…」
トレーバーは、まるで金田を追いかけてすっ転んだあの乱闘のように、ぶざまに伸びている。
「まあ、しょせんはバンダム級。こんなもんかいなあ」
「トレーバーいうたら、ブライアントだけでなく、ＤＨ一塁とポジションのかぶる石井さんや金村さんとも一切口聞かない仲やったなあ。いやあ懐かしい。次も同じ近鉄のデービスか？　一気にスーパーヘビーいったれや」

「おい慎太郎、これどういうことだ」
阿波野は開封作業中にパック裏を見ると、カードの概要に、監督カード一枚とあることに気づいた。

「監督カード？　それそのままですよ」
「監督カードがあるって、おかしいだろ。監督になるゲームなのに」
「ああそうか」
「慎太郎じゃ埒が明かない。誰かわかるヤツいないのか？」
その時、阿波野たちに近づくある影があった。
「お困りのようなら、僕がお教えましょうか？」
「お前は…松坂…」
「どうも、こんにちわ、近鉄のみなさん。まさかこんなところでお会いするとは…」
「開幕直前にゲームか？　余裕だな」
「それはみなさんも同じでしょう？　固い話を抜きにして…。ゲームについてなら、この僕におかませくださいね。もう二時間もこのゲームにはまってますから」
「二時間も？」
「このゲームは監督になるゲームじゃないんです。ＧＭになるゲームなんです」
「ＧＭに？　ということは采配ふるえず、見ているだけってことか？」
「ええそうなんですが、そこが、このゲームのツボなんです。ＧＭはチーム構成や方針を決めるんですが、監督によってはそれに従わないことがあるんです。逆に、監督の指示に選手が従わないこともある…。これは監督の頑固度とか信頼度のパラメーターにより替わってくるんですが…」
「なるほど、そう聞くと面白そうだな…。監督にも能力に違いがあるのか。仰木さんとか、能力高そうだ。逆に頑固度とかも高そうだから、こっちの方針に従ってくれないかもしれないけど…」
「そうそう、そのもどかしさが、このゲームの中毒性の鍵なんですよ」
「よし、じゃあ、カードの開封を続けるとするか…。残りのカードは一枚…。当然、まだ出てない監督カードだな」

「誰が出ますかね？？　西本さん、仰木さんならしめたものですけど、２００円のパックにそこまで期待できないから、岡本さんや梨田さんや佐々木のよっしゃーあたりでよしとしますか…」

「あ」

「うわ…」

阿波野がそのカードを引いた瞬間に近鉄軍団は凍りついた。

「よりによって…」

「草魂監督…」

鈴木啓示
投手上位根性型
打撃調整能力６１
スモールボール度４７
決断力５４
投手継投能力５７
頑固度１００
信頼度４

ゲームセンター五十嵐亮太

「買い換えるか？？？」
「いや、阿波野さん。あくまでゲームですよ。草魂監督で楽しましょうや」
「うむ…しょせんゲームだよな。草魂監督に敗戦処理にされ追い出されることもない」
「アハハ、阿波野さん。草魂監督にひどい目にあいましたね？」
「慎太郎は、数少ない、草魂監督で自分を取り戻した派だよな。仰木さん末期には、窓際族の扱いだったのが、草魂に替ると、ローテの柱に復活だったよな」
「そうですよ、草魂監督は意外といいところもあるんですよ…」
「仕方ない、試しにこれでいくか」
筐体には、このゲームの信者であると公言した松坂が張り付いていた。
対戦相手はというと、これがなんとまあ、世界の王である。
「おい松坂、ちゃっちゃと決めてくれよ」
「王さん、急かさないでくださいよ。このゲームの肝は打順編成とチーム方針決定にあるんですから」
松坂の持ち球団は、西武…でなく、巨人。
王の持ち球団は、巨人でなく、ソフトバンク。
巨人対西武の前哨戦とはいかず、松坂巨人対王ソフトバンクの変形対決となった。
松坂のチーム構成は、さすがに二時間もはまっているだけあって豪華絢爛だ。
ＯＮの全盛期カードを揃え、レアカードである～Ｉｆもしも～カードの松坂大輔、巨人軍バージョンまで手に入れている。
「どうですか、王さん。王さんをバックに、僕の巨人カードですよ。これはお宝物だ」

対して、王は福岡移転後のホークスの選手にこだわりメンバーを集めていた。松坂のように、時間をかけていないため、選手のメンツはしょぼしょぼ…。

「藤本博史に、吉田豊彦に、山本和範…。なんだおい、オレが追い出したぬるま湯体質が染み付いた南海の残党ばかりじゃないか。まあ、しゃーない。このメンツで松坂の金満巨人に勝つのがＧＭ冥利ってもんよなあ」

とはいえ、王ソフトバンクは明らかに分が悪い。

佐々木誠８　浜名６　山本Ｄ　ライマー７　吉永２　藤本博５
若井３　ライディ９　湯上谷４　吉田豊１

「このメンバーじゃ今にも生卵が飛んできそうだよ。ダメ捕手の烙印を押して打者に専念させた吉永に、いくら凡退にしても悔しさが見えないから鳥越と取替えた浜名に、ろくに練習しないで昼前に帰るカズ山本に、太った一塁のくせに、下位打者が一杯の藤本博史か。監督がオレなのが救いよ」

王は自分自身の監督カードを引き当てていた。

鈴木啓示カードと比較して、信頼度や打撃調整能力の高さは目に付くが、逆に、投手継投能力は低い。頑固度の高さはかわらずだ。

「一応、そこそこの能力だから起用したけど、ライディって誰だっけなあ。オレの時にいたかあ？　根本さんや田淵のころか？」

生卵が飛んできた時に、ちょうどいた、ちょっとだけ足の速いだけの何の特徴もない外野手ですよ。

一方の松坂巨人は、豪華さに加えて、松坂の趣味がよく出たオーダーだ。

高橋由９　篠塚４　王３　長嶋５　清原７　斉藤宜８　松坂１
桑田６　森２

自信がファンである桑田と清原を、とんでもないポジションで入れるわ、ＤＨを取らず自らを組み入れるあたり、自信家の松坂らしい。さらには、ＷＢＣを連続欠場した松井を外し、横浜高校の先輩の斉藤まで入れる余裕ぶり。

遊びを入れても、松坂巨人がリードしているあたり、王ソフトバンクの戦力の乏しさがわかる。

「おい、なんだ、おい、勝手にオーダーいじるな」

ＧＭ王が決めたオーダーを監督王が勝手にいじるのである。

頑固度の高い監督は、稀にオーダーを勝手に組み替える要素が入っている。

「まったく！　監督はオレだろ！　オレの決めたオーダーを監督のオレが勝手にいじるなんて。誰だよ、このプログラムしたのは！」

「王さん。気に食わなかったら、その赤いボタン押してください。それはＧＭの強権発動ボタンで、ＧＭの方針通り動かない監督を説き伏せるためのボタンですよ」

「うん、これか？」

王は、赤いボタンをしきりに押した。

「強権発動！　強権発動！！　ＧＭの方針に従わない監督の首は切るぞ！！」

以上のようなアナウンスが流れたが、頑固度が高い監督王は、譲らない。

「おいおいおい、頑固すぎるだろ」

監督王に苛立つ、ＧＭ王。

松坂は、王の特性をよく表現していると思うが、世界の王に対し、そうズケズケとはモノを言えない。

「しゃーない。４番若井でしゃーない」

ＧＭ王が８番においた若井を、監督王は勝手に４番に据えた。ＧＭ王は長打力皆無の若井を４番に置くのは、ナンセンスと思っているが、実はこれは王の過去の采配実績通りだ。

ダイエー就任二年目の１９９６年王は、小久保や吉永、秋山を他に置いてまで、若井４番にこだわったのだ。

長打力はゼロであるが、それなりに確実性の高い若井を４番に置いた采配はそれなりに理解出きたが、とうの王はそんなことをすっかりと忘れている。

「さあ試合だ、絶対勝つぞ」
王は極度の負けず嫌い。たかがゲームで済まない性分なのだ。

ゲームセンター五十嵐英樹

「よし、行け。我が王福岡ソフトバンクホークス！！　松坂巨人を打ちのめすんだ！」

試合は、王ソフトバンクの先行でプレーボールがかかる。

松坂巨人の先発は、松坂自身。空想上のカードだけあって、本来の松坂よりも、多分に能力アップをしている。

スライダーはイナズマのように切れて、速球は１５０を常時叩き出し、それでいてカット気味に入れば、落ちたり、のびたり、自由自在。これにスピードを殺したチェンジアップまであるのだから、王ソフトバンク打線では手も足も出ない。

淡白な攻撃にしびれを切らした王は、檄を飛ばす。

「おいおい！　佐々木誠なんだよ。おまえ一番打者だろ！　ボールをよく見ていけよ！　初球から手をだすなよ！　これだから南海の残党は好かないんだ！　勝利への執着心が薄い！　野球のやり方を知らない！」

佐々木の淡白な攻撃に頭を抱えれば、流し打ちで塁に出た山本和範の勝手な走塁にまた頭を痛める。

山本は、４番打者を迎えるこの場面に、意味もなくスタートを切る。

「おいおいおい！！　二死一塁、走っていい場面だが、打者は４番だぞ！　もっと大事に行けよ！」

山本の無謀なスチール敢行は、抜け目のない松坂ー森の巨人バッテリーにあっさりと封じられる。

「かあ～　これだよ、これ。南海残党は、個人成績しか頭にないから、身勝手なプレーに走るんだよ。山本和は、そう走れる選手じゃないんだから、４番若井の長打に期待を掛ける場面だ」

いやだから、若井に長打の期待はゼロですってば。

「いったい、全体、どうして、こう間抜けなプレーを連発するんだ、

うちのチームは」
　プレーに統一性が見られないのは、監督である王と選手間に溝があるのが原因。隠しパラメータとして、南海出身者は、福岡生え抜き組ほどの信頼関係を王と気付けないとあるのだ。（ただし大道と柳田は除く）
　ＧＭ王が、監督王に指示を出し、それを監督王が受け入れても、選手が従わないもどかしさ。能力値が低い上に、これでは勝てる見込みはもとよりない。
　それでも負けず嫌いの王は、ゲームに熱くなる。
「先発は吉田豊彦か。こいつも南海残党だ。いくら勝っても、それ以上に負けゲームを拵えやがるから、１０勝１０敗の投手はいらないと、オレが干してやった投手か…。期待できんが、しゃーない、これしかいないから、しゃーない」
　しかし、その吉田豊彦、王のかける期待値の低さと裏腹に、見事な投球を見せる。
「３番王？　うん、オレか？」
　松坂巨人にも登場した王貞治をきれのあるカーブとストレートで空振り三振に切ってとる快投を見せる。
「ゼロに終わったが、複雑だ。豊彦ていどのボールを打てないオレって、このゲームのプログラムどっかおかしいだろ、おい」
　王は秘策が浮かんだのか、松坂にゲームの仕組みについて問い直す。
「おい、松坂。このゲーム、捕手のリードも再現されているのか？」
「え？　そりゃ、もちろんですよ。細部までこだわって、作るのが、このゲームの奥深さですよ」
「そうか、いいことを聞いた。オレは、森さんと２０年近くいっしょにやった。その配球のクセは熟知してある…」
　王は、作戦指示のコマンドを入力して、監督である王に作戦を授ける。
「いいか、監督である王…。向こうの捕手の森は、安全策に走る傾

向があるから、外のボール中心になりがちだ。内角を見せられても、果敢に踏み込んでいけ」

愛娘とのメール交換で、すっかりとブラインドタッチの要領を得た王は、手馴れた手つきで、作戦を打ち込む。

しかし、頑固度の高い監督王は、この作戦に首を振る。

「お言葉ですが、ＧＭ。現場介入はおよしになってくださいませんか？　グランドレベルの作戦指示は、私めにお任せください」

なんと強権発動もむなしく、監督王はＧＭ王の作戦に従わない。

「おいおいおいおい、ふざけるのもいい加減にしろよ…。こんな監督じゃ勝てるもんも勝てないよ。生卵をぶつけたくなるよ」

ところが、ＧＭ王の作戦などお構いなしと、吉永は一発を放り込む。

作戦指示無視に腹を立てていた王も、まさかの先取点に手を叩いて喜ぶ。

「よくやった、吉永。さすが私の後継者と見込んだ打者だ…。リードは見れたもんじゃないが、打撃センスは一流だ」

しかし、この先制点に首をかしげるのが松坂。なにせ、裏をかいた１５７キロの内角低めのツーシームを放り込まれたのだから、納得いかないのも無理がない。

「まさか…読まれていた？　あ、王さん…。禁断の吉永カード使いましたね？」

「なんのことだ、松坂。オレは不正もないもしてないよ」

「いえ、不正というか、吉永さんのレアカードに、どんなボールを投げても、ズバリと読んで、打ち返すっていうのがあるんですよ。初期型パックにも、稀にいいカードがまぎれこんでいることもありますから」

松坂のいう吉永のレアカードというのは、例のスパイ事件を敢行していたといわれる時期のもの。他の吉永カードに比べて、読みの数値が格段に高く、それに比例して、打率、長打力、選球眼の数値も上がっているという、まさに無敵に近いカードだ。

王は、それとは知らずに、このカードを使っていたが、これは、反則行為に近い。このカードを切ったものに対する報復として、相手ユーザも禁断のカード使用が許される。それがこのゲームの暗黙の了解のひとつである。

「よし、王さんがそのつもりなら、僕も反則スレスレのレアカード使っちゃいますよ」

松坂がタイムをかけて、内ポケットから取り出した、あるカードを筐体に投入する。

「禁断のカード…。松坂にかえて松坂…」

「うん、松坂を降ろして、松坂だと？　なんだ同じじゃないか」

「いやいや、この松坂はとびっきりの松坂…、もしも、ステロイドと成長ホルモンをふんだんに使ったらの松坂ですから…」

そうなのである。これは禁手のなかの禁手。もしものなかのもしも。

あの選手が、ステロイド漬けになったらバージョンである。

さっきの松坂でも、無敵に近かったのに、この松坂はさらにとんでもない。ステロイドにより、筋力が格段にアップ。成長ホルモンの異常な分泌により、無尽蔵の体力も手に入れた。

「どうですか、王さん。スーパー松坂は…」

こうなると王も負けて入られない。

負けず嫌いの両者の戦いの決着はいかに？

ゲームセンター五十嵐洋一

「おいおいおい！　ありえないだろうよ！　１６１キロのスピードでスライドするなんて！」

「いやいやいや、王さん。このプログラムは正しいですよ。もし、僕に多量なステロイドを注入したらっていう仮定で計算をはじき出し、プログラミングされたものですから。現実の僕は、薬などに手は出しませんけど」

それまでもとんでもなかった松坂は、さらにとんでもなく進化を遂げていた。これでは王ソフトバンクは、追加点への加勢もそがれる。

「振っていけ！　振っていけ！　強い球を弾き返すのは、強いスイングだけだ！」

ＧＭ王の指示に珍しく、監督王が呼応する。監督王は、打撃陣にフルスイングを指示。だが、この松坂相手には、少しの作戦の徹底は意味をもたらさない。古来パ・リーグの野武士らしさをいくぶん受け継ぐ打撃陣は、意地になって、オーバースイングを繰り返えすが、それが逆に捕手の森にとっては、格好の餌食。生まれるのは、呆れるほどの凡打の山。

これには王もお手上げ状態。

「反則だよ！　いくらなんでも、松坂。オレは、このゲームの初心者なんだよ！　もう少し手加減してくれたっていいじゃないか！！」

「そうですか、それでは手を緩めて挙げましょうか」

「よろしく頼むよ。初心者には、優しくして挙げないと、このゲームの競技人口が膨らんでいかないよ」

だが、この王の泣き言が仇となる。

松坂は、ゲーム上の監督である藤田元司に、松坂を降ろすことを指示する。中間管理職型の藤田は、ＧＭの意見にけして逆らわない。

松坂を降ろして、マウンドに上がったのは、なんとスチュワート

である。
「スチュワート??　誰だそれ！　巨人にそんなやついたか！！！？」
「いやだなあ、王さん。もうお忘れですか？　王さんが巨人監督時代に、入団直前にご破算になったが投手ですよ」
「あ？　そういえばいたなそんなやつ…。たしかゲイ疑惑があって、契約がなかったことになったんだっけ…。だが、なんで入団してねーやつのカードまであるんだ！？」
「すいません、王さん。僕の巨人は強くなりすぎて、色々なもしもカードを集めすぎちゃったんです…。すいません、出す投手出す投手がとんでもなく」
「とんでもない？　そのスチュワートやらとはそんなにとんでもない投手なのかね？」
巨人入団直前にゲイ問題が持ち上がり、結局大リーグにとどまったスチュワートは、そこで突然に開花。連続２０勝する投手に成長し、一躍、全米を代表する投手となったのだ。
王はその事実を、すっかりと忘れているのか、最初から知らないのか…。
「なんだ、このスチュワートって投手は！！　球がとんでもなく速いわ！　重いわ！　それでいて制球が安定してるは！　ふざけた投手じゃないか！　なんだこの投手がオレが巨人監督時代に入団していたら、オレは福岡くんだりに落ちることはなかったのに…」
「あれ、王さん。やっぱり福岡行きを都落ちと認識されてるんですか？」
「そんなことはない。今や福岡が故郷みたいなもんよ。監督生活を終えても、福岡住まいがやめられないほどだ。だがそれとこれは別！　なんだスチュワートがいれば、広島や中日や阪神なんぞに優勝の機会を与えなかったのに！」
そうそれとこれとは別である。
王は何も福岡行きを悔いているわけではない。ただ巨人時代の失

敗が、今でも悔しくてたまらないのである。クロマティ、吉村、原などでリーグ屈指の強力打線を誇りながら、五年間で優勝一回に終わったのは、ひとえに投手陣のコマかずの問題。

江川、西本、加藤初らに陰りが見えて、斎藤雅樹や槇原、桑田のピークがまだその先だった投手陣。もしもスチュワートのような太い柱が一人いたら、ペナントレースの展開はガラリと違ったものになったであろう。

現にスチュワートという思わぬ贈り物を得たオークランドアスレチックスは、リーグ四連覇と一時代を築いたのだ。

王ソフトバンクは劣勢に回り、それを跳ね返せない。

先発の吉田豊彦はよくて勝率五割の投手らしく、突然に崩れ始める。

王のイライラは頂点に達し、ついには、筐体にパンチを繰り出すほどだ。筐体のガラスケースは、さすがに強力。王のパンチくらいでは、びくともしない。結果がでなければ、苛立は増すばかり。

「クソ～！　おい松坂！！　なにかこの境地を挽回する術はないか！」

「なにかあるかと聞かれても…。そうだ、王さん。販売機で、新しいパック買ってきたらどうです？　初期型の２００円パックなどけちなことをいわず、今度はどーんと一番高いのを買うんですよ」

「それはいくらだ」

「一万円でしたっけね」

「一万か。ちょっと値ははるが、背に腹は代えられぬ。ここは奮発するか」

王は、高級品をとかく好む長嶋と違い庶民感覚あふれるスターといわれる。横丁の定食屋に気軽に顔を出し、安物のラーメンをすする姿は博多ではもはや馴染みの光景。

だが、そんな王も、負けないためなら、惜しまず金を出す。

販売機に、惜しげもなく万札をつっこみ、一番高いパックを購入

だ。

「何々～。同じ一万でも、２５枚一組のパックと一枚きりのものがあるって？　ここは一枚きりの買うしかないだろよ」

王の目論見は一見正しい。２５÷一万と１÷一万。どっちがより高いコストの選手が引けるのか、一目瞭然だ。さらに王の望むのは、平均点の高いプレーヤではない。この境地をひっくり返す一人のスタープレーヤーなのだ。

だが、この選択が、王をより深い泥沼に沈めこむとは、この時の王は知らない。

ゲームセンター五十嵐章人

このゲーム、タイムが長い時間に及ぶと、ちょっとした演出がある。監督がそれぞれのキャラに見合った動きを見せて、待つだけのプレーヤーを楽しませてくれるのだ。

藤田監督がスルメを噛みしめながら、瞬間湯沸かし器の異名通り、時に切れるパフォーマンスを見せれば、監督王は、口をとんがらせ、大道芸のように器用なボール遊びを見せる。

だが、プログラムの容量にも限りがある。あまりにも長いタイムだと、各キャラ独自の演出はなくなり、一律の動きを見せる。

それが金やんダンスなどは、製作者の好みなのか、嫌がらせなのかわからない。藤田監督が、監督王が、満面の笑顔で足を高く蹴り上げ金やんダンスに勤しみ姿は、シュールを通り越して、不気味でさえある。

「オレに迷いなんてない」

王は、福岡移転後一万円一選手パックを選択した。

気のはやる王は、出てきたパックを奪い取るように取りあげて、真剣で紙を真っ二つするように封を切った。

「どんな救世主が出てくるのか」

王は、大きな目を見開いてカードを見た。

「おい、ふざけるな。このカードのどこに、一万円の価値があるんだ」

王の引いたカードは、ケビン・ミッチェルカードであった。たしかに、高額おパックにふさわしい高年俸選手であるが、役に立つかは、かなり怪しいものがある。

「オレは、ミッチェルにトラウマがあるんだ。こんなカードを使えるか」

ミッチェルカードの能力。打力、長打力がかなりの高ポイントで

選球眼も優れている。威圧感の特殊能力もあり、その性能は高額パックにふさわしいものであるが、やる気、気力、体力、献身度などが著しく低く、ゲームで使える可能性は限りなく低い。

「しゃーない。一万もしたカードを使わずほっぽり出すのも、もったいない。しゃーない、もう一度突っ込む」

王は、再び万札を入れた。もはやゲーム制作側のたくらみにまんまにはまっているのだが、今の王は体裁を気にしている暇はない。

「しゃーない、今のはしゃーない、切り替えいこう。次こそはいいのがでるだろうよ…」

王はまたカードを奪い取るように取り上げ、すぐさま封を切った。

「バティスタ…？？？？？」

今度出てきたのは、トニーバティスタ。来日前年度にメジャーで３２本のアーチを放った現役大リーガーとして二年１４億の大金を叩いた正真正銘の大物だ。

なるほど、ミッチェルと違い人格者として慕われていたバティスタ。やる気、気力、信頼度などの精神系パラメータはことごとく高い。

だが、長打力はまだしも、守備力、選球眼、打率などの肝心のパラメータはことごとく低いのだ。

「あのバティスタか。これも使えんぞ…。ふざけるのもいいかげんしろ、オレはいくらつぎ込んだと思っているんだ。それで、こんなカードしか出てこないなんて、ぼったくりもいいところだよ」

怒りの収まらぬ王は、バディスタカードをポケットに封印しようとしたが、すると、どこからか不気味な音楽が流れてくる。

その音楽にぴーんと来たのが、このゲームに通じる松坂だ。

「あ、王さん。それ呪いのカードですよ」

「呪いのカード？　なんだそれは松坂？」

「ごくわずかに流通しているカードなんですが、そのカードを引いたら、絶対に試合に使わなければならないんですよ」

「そんなのコンピュータにはわからんだろ？」

「いやいや、それがこのゲームの恐ろしさなんですよ。王さん、パックを購入したときＩＤとパスワードを入力したでしょ？」
「したぞ、それがどうした」
ちなみに王のＩＤはＲＩＥ（愛娘の名前）。パスワードは、ＢＩＧＯＮＥと大変わかり易くなっている。
「そのＩＤを入力して購入したってことは、コンピュータに王さんが呪いのカードをひいたってことが丸分かりってことなんですよ。なんらかの罰則があるらしいですよ」
「？？？どういうことだ？？？」
王は理解しきってないが、感覚的に大変なカードを引いてしまったことはわかる。
まるで、いくら外国人を取り替えても、まったく結果の出ない阪神の外国人野手獲得のようなもの。金をつぎ込んでも、それにふさわしい結果が出ない。
ここで一歩引けば、これ以上の損害は被らないはずだが、意地になっている王は、歯止めが効かない。
「もう一万円つっこもう。オレはこうみえて強運の星に生まれたんだ。三度目の正直って言葉もあるし、次こそは、有益なカードがひけるだろうよ」
王は強運の星に生まれたことはたしかだが、それは野球での話。ゲームに関する運は人並みにしか持ち得ていないようだ。
「おい、ゴセージだと？？」
またまた引いたのは、ダメ高額外国人のカード。
殿堂入りの大投手であるが、日本では嘲笑モノのヘボ抑えにすぎない。
速球指数は高ポイントだが、投球術、安定度はゼロに近い。
「また使えない選手じゃないか。もう三万円も無駄遣いしてしまった。たかが一食の食事代に何十万も費やすミスターと違って、オレは庶民派だ。これ以上、こんなゲームに金をつぎ込めん」
さすがの王も懲りたはずであるが…。

「選手は駄目だ。なら監督パックがあるじゃないか。このゲームの監督王は、残念ながら、真実の王を反映していない。GM王である私オレは、監督王にこの試合途中での監督解任を通告する」

今度は監督カードが含まれる特別パックに手を出す始末。

王の監督カードは、その性格をよりよく反映されたものだが、かえって現実の王にそり過ぎて、GM王は我慢できなかったようだ。

また万札をツッコミ出てきたカードは…。

「うん、もしもカード？　ついにオレにも、もしもカードの幸運が舞い降りたか」

王は、カードの端まで見て、もしもカードの刻印に胸を踊らせたが、現実は残酷だ。

「なに？　ツインドームカードだと？　どういうことだ」

カードには、ダイエーの経営極度の悪化による、ツインドーム構想崩壊で、幻に終わった第二の福岡ドームをここに特別に再現とある。

観客に優しく、選手にも使い易い、まさに理想的なドーム球場であるが、今の王にとってそんなことは関係ないこと。

「余計なお世話だ。バカヤロー」

王は怒鳴りあげて、感情は高まるばかり、ついついまた万札をつっこみ、高額パックを押してしまう。

「5万も使ったんだ。次こそいいカードが出るだろ」

王はどこまでも、前向きである。

「カードの端に監督カードとある。よし、根本さんでも、杉浦さんでも、秋山でもいい」

ああ、福岡移転後の監督は王を含めて、5人しかいない。つまり、アレが出てくるのは五分の一。引く確率のが低いわけであるが…。

「田淵？？？　田淵だと？？？？　ふざけるな、どうして、万札入れて田淵が出てくるんだ」

王は肝心なことに気付いていない。このゲームは、地道に試合を重ねてチームを強化するもの。金にあかせて、万札をつぎ込んでも、

ろくなカードが出てこない仕組みなのだ。
「田淵なんて、ダメな奴、監督して使えるか」
王がカードを叩きつけようとしたところ、またあの不気味な音楽がなったとさ。

ゲームセンター五十嵐明

「王さん。まだですかあ？　後が使えていますから早く試合を進めないと…」

「松坂。待て！いいカードが出るまでまってろ」

ところが、王の持ち金はつきる寸前。軽い外出とたかをくくり、残る万札は一枚きり。

「しゃーない。これでカスを引いたら、諦めるしかないわな」

王は覚悟を決めて、最後の高額パック購入を試みた。

「今度こそ…」

福岡ドームの天井は経費削減で、開閉しないのか、王の願いは虚しく天には届かない。

「ＤＪカラスコ…」

高額パックは、どこまで王の古傷をえぐれば気がすむのだろうか。バティスタを切って、取ってきたのが、このＤＪカラスコ。バティスタのように確固たる実績があるわけでもないこのドミニカ生まれの大リーガーに、ソフトバンクは二年六億の複数年高額提示をした。その結果は、散々なもの。あの銀仁朗に、一発を浴びるなど、ろくでもない投球を繰り返し、初夏の訪れを前に、表舞台から消えた投手だ。

その時、出初めの銀仁朗（当時の登録名・炭谷）は、このカラスコからの一発で、ポスト城島どころか、５０年に一人の超大型捕手と崇められたが、今のところは、谷繁開花前がいいところ。

カラスコの投手としての値踏みを間違えたことが、銀仁朗の今日までの過大評価につながっていると言えよう。

王の引いた６回、都合６万円の結果を改めて振り返ってみる。

ケビン・ミッチェル。トニー・バティスタ。ゴセージ。幻のツインドーム、二個目。田淵監督。ＤＪ・カラスコ。

この６枚のうちの４枚は、試合に使用せずとも、ペナルティがな

いカードだ。試合に影響を及ぼさなければ、立派なコレクションの一つとなろう。高額で珍妙なカードの数々は、カードルームに素敵な華を添えてくれる。

だが、問題は、残るバティスタ、田淵カードである。呪いのかかったこのカードは、使用しないと重大なペナルティが下る仕組みになっている。しらばっくれようとしても無駄だ。ＩＤ登録による購入で、すでにコンピュター側は、呪いのカードを引いたのを感知済み。

カードを引きちぎても時すでに遅し。その時は、使えない呪いのカードを試合の場に預けた時よりも、よほどむごたらしい窮地に王は落とされることになる。

呪いのカードの仕組みが、いまひとつわからぬ王であるが、世界のホームラン王は逃げない。

「しゃーない。田淵でしゃーない。バティスタでしゃーない」

王は、漫然と、呪いのカードを投入した。

だが、このＧＭ王の決定に監督である王は、納得がいかない様子だ。

「おい、オレが、どんな気持ちで、この福岡くんだりまで来たと思ってるんだ!!　成績が振るわないのはわかる。だからといって、試合途中に、解任などもってのほかだ!　せめて、この試合が終わるまで監督を続けさせてくれ!」

監督王の熱い叫びに、ＧＭ王は、冷酷な判断を下す。

「しゃーない、お前が、真実の王貞治の監督像を反映したものなら、解任通告はせん。だがお前は、残念ながら、王の名前を借りた、別の誰かなんだ」

ＧＭ王は、寂しそうにそういうと、強権発動ボタンを連打した。

監督・王はそれでも譲らないが、監督王に不信感を持つ選手や、「王ヤメロ」の看板を掲げたファンが、ＧＭ王を後押しする。

ＧＭ王と選手、ファンの板ばさみになった、監督王は、さすがに頑固を押し通すこともできず、解任通告を承諾した。

「次の監督は誰だ？　このオレをクビにするんだがら、それなりの監督だろうな？」

監督王の嘆きも道筋が通っている。まさか、世界の王の公認に、恥ずかしい人物を持ってこれないと思うだろう。

「田淵だ」

ＧＭ王は、そうつぶやきつつ、文字入力する。

「なんだと、田淵だと？　ふざけるな！　よりによって田淵だと！　田淵なんぞに監督の座は譲らんぞ！」

ＧＭ王は、監督王の言い分を最後まできかず、強権発動ボタンを押した。

すると、監督王は跡形もなく消えて、監督田淵が画面に現れた。

「この監督王の頑固さはなんだ、おい。松坂、このゲームのプログラミングは細部までよく表現しているけど、監督王貞治だけは、どうもよく再現されていないな」

「そうですね…」

松坂も監督そのものじゃないですかと喉元まで出かかったが、世界の王を前にして、そんなことは言えない。

実際この監督王貞治は、正しい王の人物像を見事に反映しているのだ。王の監督生活１９年のすべての試合をプログラムに入れて分析。

その結果、投手継投から、打順編成、指導力まで人間性の至る所まで完璧に再現できたのだ。

そんな完璧な監督王をどうしてＧＭ王は受け入れないのだろうか。醜い自分の姿を鏡を見るようで気分が悪いのか。

試合は監督田淵の元再開される。

「さあ、スーパー野球だ。閉店間際の猛反撃だ！」

田淵は、喝を入れるが、言語明瞭意味不明のキャッチフレーズは、ならず者だらけのナインに早くも不信感を蔓延されることに…。

ゲームセンター五十嵐明（後書き）

近鉄ナインが消えてしまった

ゲームセンター五十嵐、ヤクルトにもう一人いたほう

いまさながら、王と松坂がはまる、このカード野球シュミュレーションゲームについて説明しよう。

正式の商品名を『ベースボールタクティクス２０１０』といい、巷では、通称、『ＢＢＴ』と呼ばれるゲームである。ゲームメーカー大手のセガ・バンダイが制作、販売に関わっているものだ。

世に広く出回っているバージョンは、主に現役選手と現代存続する球団を収録したもの。ＯＢカードもあるにはあるが、それは大物の一部選手に限られて、阿波野が引いたような、防御率に口うるさいミケンズだの、弱小球団で光り輝いた高卒新人王の徳久だの、マイナーな選手カードは当然ながら、収録から漏れている。

この台は、ＪＷＢＣの大会のためだけに製作設置されたものだ。現在、稼働されているのは、全国を見渡しても、この店舗の一台限りである。この台の稼働実績が、好調を維持すれば、メーカー側に大量生産に踏み込む構えがあるといわれている。

であるが、あまりにもマニアックで、あまりにも、金払いを要求するこの特別台のシステムが広く受け入れられるか、疑問の余地は大いにある。

「うねり打法だ、そうだ、もっと上半身をねじって…。お前は、オレの現役時代のように、一本足で行け。いいか、大きく足を上げて、振り切るんだ。おい、足上げろいうてるだろ。逆らうと、ゲームで使ってやらんぞ」

田淵は就任早々、名コーチ？　ぶりを発揮するが、結果には結びつかない。

「田淵監督ですか…」

松坂は、笑いをこらえるのに必死である。なにせ、頑固で融通の効かない監督のあとに、天下のダメ監督の登場とあいなったのだか

ら。

「そらそらそら、初球からいけよ、初球から」

田淵は、初球打ちの指示を出したと思えば、

「おい、なんで、初球のあんなボール打つんだよ。もっと粘っこくいけよ、湯上谷。おまえさんのような、小粒な打者は、粘る姿勢を見せてこそ、なんぼだろ」

これである。自分の発言に責任を持てない監督に、誰がついてくるであろう。

すべてにおいてとんちかんな田淵采配は、王ソフトバンクをより、谷底に追い込むのだ。

これで、監督自身が、責任を感じれば、まだ救いの余地はあるのだから、田淵監督と来たら、どこまでもダメ監督である。

「西武では…。広岡さんがこういってた…。村田、お前外ばっかりだな。東尾ならもっと攻めの投球が出来たよ。本原よ、江夏のボールはあんなもんじゃない、オレのミットを焦がさんばかりのボールが来てたよ。石毛ならこういうね、浜名、お前も石毛と同じチームリーダーなら、発言に重みと責任を身につけろよ」

弱小球団にとっては、禁断の語句の数々だ。プロ野球選手は、他の球団と比較されるのも、最も嫌う人種である。

「もうお手上げだよ」

田淵は、改善の傾向すら見られないチーム状況に降参寸前である。

「GM、補給をお願いします。こんなチームなら、広岡さんでも勝てませんよ」

なんと田淵監督は、自分の惨状をよそに置いて、ぬけぬけとGM王に補強を要求するのだ。

GM王も突っぱねると思いきや、

「そうだな、田淵のいうとおりだ、人材があれば、監督の采配がチームの行方を左右するが、人材のないところに、監督がいくら奮闘しても結果は出ないのだ」

田淵の補強要求を受けてしまうのである。

「だが、田淵。オレは、もう万札持ってないぞ。高い選手は取ってこれない。それでいいかね？」
王は、素早い動きで文字入力すると、田淵はＯＫサインを出す。
「補強できれば、なんでもいいですよ。ホークス以下の選手なんて、他球団にそういませんもの」
王は、このゲームの策略にまんまとハマっているのだが、ゲームに夢中の王はそんなことお構いなし。
また販売機へと走るのだ。
「ありったけの小銭と１０００円札で、いい選手を引き当てよう」
有り金のすべてをぶち込む意気込みである。
ところが、安物のパックは、いつまでたっても王の期待に応えない。福岡に限定されたパックを意地になって買う王にも責任の一端があるだろう。
「榊原、杉本正、タネル、本原、山田武史、小川達明、ウィルソン、ライト、ラガ…」
引くカード、引くカード、明らかに使えそうもないカードばかりであるが、
「これで戦力補強になる。沈滞したチームに、彼らの外部の血を投入すれば、いい刺激剤になる」
王は、焼きが回ったか、なぜかこの引きに満足している。
「田淵、いい人材が取れたよ」
王は、迷うことなくカードを投入。
が、こんなチンケな戦力補強で、何の足しになるわけでもなく、チーム状態は、一向に浮上していかない。
「どうしてだ。どうして現状打破につながらないのだ。オレは、このゲームにいくらの金を費やしたと思っているのだ」
「ＧＭ。いろいろ手を尽くしましたが、どうにもなりませんわ。チームの根本から腐っているから、ちょっとやそっとじゃ、どうにも改善されません」
ゲーム上の田淵は首を振る。

「うぬぬぬぬぬぬ…」
　王の怒りは頂点を越し、いくぶん鎮まってきているとはいえ、王に負けの二文字は許されない。
「松坂、どうすりゃいいんだ」
「地道に強化するしかないんじゃないですか？　王さんのダイエー時代みたく…」
「そうか、オレがダイエー時代にやったようなことをすればいいのか。あの時も、このような惨状だったよ。いくら、札束で顔ひっぱたいて、選手連れてきても、ろくな結果が出なかった。皮肉なことに、その惨状が改善されたのは、ダイエーの経営悪化で、金が出なくなったあとだ。それも今のオレと同じだ。財布がおからになった今こそが、チャンスなのだ」
　王の大きな目は、爛々と輝いている。

「よし、地道に頑張るぞ」
「あの王さん、お言葉ですが、さっきから、阿波野さんや山崎さんが、順番待ちしているのですが」
「阿波野に、山崎？」
　王は、今の今まで、二人の存在に気がついていなかったのである。
「王さん、どうも～」
「なんだ、おまえらいたのか」
「王さん、さっき一階のパチンコ屋で、ひどい目にあったんですよ。大森のやつが生意気でねえ。王さん、巨人軍の先輩としてガツンといっておいてくださいよ」
　球界の紳士王貞治である、阿波野山崎は、それ相応の対応を期待したが、今の王は気が立ってる。
「バカヤロー、それくらい自分で処理しろ。阿波野、そんなんだから、お前は、伊原のボーク誘発で崩れるんだよ。山崎慎太郎。お前はなんだ、オレがＦＡ宣言するも引き取り手が無く、路頭に迷ってたお前を獲得してやったのに、まるで活躍しなかったじゃないか」

「はあ…」
大森以上の酷い仕打ちを受けるとは…。
「あの、ゲームの方は…」
「バカヤロー、まだオレの番だ」
そっちのほうもダメでしたとさ。

ゲームセンター嵐山（清正高校のブルドック）

王の気が立っている間に、他のゲーム筐体を紹介しんぜよう。

まずは、荒川道場ゲームである。プレーヤーは、昭和３０年代中頃の巨人軍の選手となり、当時、打撃コーチを勤めていた荒川博に師事をし、東京都内の荒川宅に、同僚の王貞治と大毎オリオンズの榎本喜八とともに、日参するゲームである。

プレーヤーの目的はただひとつ。究極の打撃フォームを会得して、成績を上げることだ。右打席と左打席用に、二枚のシートが用意してあり、プレーヤーは、そのどちらかに立ち、バットを持って、スイングをすれば、それをコンピュータが感知して、瞬時に、モーションキャプチャーを駆使し、画面上に、、プレーヤーの実際の打撃フォームを忠実に再現する仕組みになっている。

その画面上に再現されたプレーヤーのフォームを見て、荒川がいろいろ指示を出すのだが、荒川は王・榎本を育てた上げた名コーチであり、この二人以外失敗を積み上げてきた迷コーチでもあるのだ。荒川のアドバイスを適当に聞き流すことも必要だが、あまりに、プレーヤーが、荒川の助言を反故にすると、今度は痛いしっぺ返しが待ち受けている。荒川のプレーヤーに対する不満がある一定値を越すと、当時の監督である川上に、プレーヤーを使わぬように荒川が進言してしまう手はずになっている。プレーヤーは、実質的に干される形となり、成績を挙げられる機会を奪われてしまうのだ。

つまり、いくら荒川が荒唐無稽なことを要求してきても、その助言をほどほどに聞きつつ、自らの打撃フォームを完成させなければならないわけである。

しかも、同じ釜の飯を食べる、王と榎本がプレーヤーの感情を揺さぶってくるのだから、たまらない。　二人は、荒川と違って、直接的に邪魔をしてくるわけではない。ただその情念は、ゲーム上とは思えぬほどの凄まじさ。一心不乱に真剣をふる王貞治の殺気と、

坐禅を組みながら、ひたすら瞑想にふけり、時に奇行に走る榎本の無常に耐えなければならないのだ。

これが荒川道場ゲームの全容である。ゲームは２０１０年新しい時代を迎えた。もうゲームを娯楽や暇つぶし、学習、コミュケーションツールとしてとらえるのは古い。

これからのゲームは、精神鍛錬の場である。さあ、プレーヤーたちよ。誰も見たことのない世界を見るのだ。新しいゲームの息吹を感じるのだ。

……だから、このゲーム人気がないのである。

荒川道場という、視点の面白さから、ユーザーたちの目を一応引くが、ゲームの説明と概要を読んだだけで、たいていこの筐体を後にし、コイン投入までに至らないのである。

初めてこのゲームを稼働させてのが、荒川道場の被害者の一人、駒田徳広であった。駒田といえば、左打ちの一塁手だけで、勝手に王の幻影を投影され、荒川に一本足打法を託されたことがあるのだ。本質的に長距離打者ではない駒田は、一本足打法がしっくりこず、途中で脱走した過去がある。

本来のアベレージタイプの打法に戻した駒田は、名球会入りするほどの打者に成長したのだが、荒川道場に対する負の感情は捨て切れていない。

駒田は、ゲームを始めると、荒川の教えに背いてばかりで、積年の恨みをここではらしにきたのだ。

「駒田。お前は王二世だ。一本足を伝授する」

「いやです」

「駒田。真剣をふれ。お前は馬面だから（打撃フォームをキャプチャーするさい、体格や顔の造形もキャプチャーされて、その特徴を、精神的に攻め立てるいやらしさも、このゲームの売り）、紙でなく、ニンジン切れや」

「いやです」

「駒田。オレに逆らってばかりだと、試合に使ってやらんぞ」

「けっこうです」
「なんだど、お前なんて奴は、破門だ」
「とりあえず、お疲れ」
駒田はそう言い残すと、満足そうな顔でこの筐体を後にした。

人が寄り付かない荒川道場ゲームと違い、ほどほどの人気を誇るゲームが、『吹石一恵、徳一親子ゲーム』である。
このゲームも荒川道場と負けず劣らずに斬新で、なんと美人女優である娘・一恵と、近鉄顔の代名詞と呼ばれた父・徳一をいかに、そっくりに近づけるかのゲームである。似ても似付かぬ親子の代表格のようで、一恵のそのくっきりと濃い顔立ちは、親父から受け継いだものともいわれている。
それでも、美少女として人気を博した一恵と徳一を同一視するのは無理がある。そこで、プレーヤーの手で、二人に改造を加えて、いかに似させるかを競うゲームだ。
ゲーム上には、化粧道具、洋服一式…果てには、整形手術用の道具まで用意されてある。
もちろん、整形までとなると、プレーヤーの減点必死。いかに、道具と持ち時間を使わずに、二人を近づけるのかが、このゲームの鍵。
奇妙すぎるゲームであるが、人気は上々。特に女性陣のハートを捉えた。徳一に化粧する楽しさか。一恵を徳一に近づけるさもしさか。
その人気の源は定かではないが、これをまねしたのが、東尾修、理子ゲーム。
ところが、こっちは元から同じ顔すぎて、ゲームにもならないようだ。

「オレは勝つまで、このゲームを辞めんぞ。オレは物事を途中で押っ放り出すのは、大嫌いな性分なんだ。あのダイエー監督時代だっ

て、卵を放り投げられても、ヘボ監督だのいわれても、よりによってハイディ古賀に監督の座を脅かされそうになっても、オレは耐えて、日本一という果実を実らせたんだ」

王は気配りの人であるが、勝負となると、回りが見えなくなるきらいがある。

このゲームの順番待ちは、阿波野山崎だけではない。

やっとの思いで西日本パイレーツパックを揃えて、これをゲーム上に早く並べたい潮崎哲也。同じくレアカード揃いで、収集困難な大映スターズパックをなんとか揃えた、落合英二。

（落合と潮崎の共通点は、選手名鑑マニア）

相手が王でなければ、大人げなく割り込んででも、勝負と行きたいところだが、王には誰も逆らえない。

「オレ、譲ります」

空気を読んだ松坂が後列の阿波野山崎に譲ったが、それがまた王のハートに火をつけた。

「近鉄？　明日の前哨戦だ。勝つまで辞めんぞ」

王は、いつこのゲームの呪縛から逃れることができるのだろうか。

ゲームセンター山嵐（中山畜産高校の自称7割打者）

潮崎と落合英二は、その他にも、いろいろな特殊なレアカードを持っているのだが、王の独占状態が続いては披露する機会がない。

待っている間を利用して、即席カード展示場とした。

「オレの西日本パイレーツコレクション。どうや、落合」

「凄いっす。さすが、潮崎さんっす」

潮崎の持つ西日本パイレーツパックは、少々の労力では、収集不可能のパックである。ゲームに勝利した際に得られるポイントを集めてようやく、レアカードクジにチャレンジできる。　チャレンジしたからといって、そうそうたやすく狙いのカードが得られるわけではない。

なにせ、西日本は、たった一年限りの球団である。試合に出場した選手でさえ、たったの２６名に過ぎない。レアカードクジは、おおよそ１０００を超えるカードがあると考えると、西日本パイレーツカードを引く確率は、たった４０分の一でしかなく、２６名すべて集めるとなると、尋常でない時間をこのゲームに費やさなければならないことになるのだ。

潮崎は、効率的な方法をみつけ収集したかもしれないが、その苦労のほどは、途方もないのに違いなかろう。

「どうや、落合、これが平井正明、南村不可止カードや。巨人の選手の印象が強かろうが、れっきとした西日本パイレーツの選手やったんだぞ。西日本が西鉄に合併吸収されるさいに、巨人が、セントラルリーグに属する西日本の保有権は、合併球団である西鉄でなく、セントラりリーグにあると無理な主張してな。巨人に足りぬ遊撃手と5番を打てる外野手をまんまとかっさらっていったんや。それなら合併から漏れた選手も救済してやれよ思うが、いらない選手は、はいさよなら、どこか勝手に働き口見つけてねとなったわけや。で、こっちが日比野武カード。この人もな、巨人がどうしても欲しかっ

た捕手や。だけど、巨人の軍門にくだることなく、西鉄に行ったんやで。偉いもんやろ」

「凄いっす。さすが、潮崎さんです」

潮崎の自慢に落合は大きな目を見開く。

「で、これなんて垂涎ものやで。田名網栄二カードに野本喜一郎カードや。野球選手の経歴に詳しい落合なら、すぐにぴーんと来たとも思うけどな。どっちも、後の高校野球界の名将や。田名網さんは、山梨甲府工業の監督で、野本さんは、上尾高校の監督さんで、ともに甲子園を沸かせた名物監督や。田名網さんは２６盗塁しながら、合併球団にも残れず、巨人にもとってももらえず、わずか一年で、プロ野球をあとにしなければいかんかったんやで。そんな逆境から立ち上がり、甲子園出場監督になるなんて、人生何があるかわからん見本やな。それで野本さんの方は、山崎裕之さんや、仁村兄弟を育てたお人。その実績を買われて、浦和学院の監督に就任するも、初の甲子園出場を決めた直後に急死。結局、甲子園で采配をふるうことはなかったんや。鈴木健もその時の教え子の一人やぞ」

誰がついてこれるだろうか、このマニアックすぎる会話。ちょっとの野球通気取りでも、ここまでくるとチンプンカンプンであろう。

野球マニアを自認する松坂でさえも、傍で話を聞くだけで、二人の世界には食い込めない。

落合が、返す刀で、大映スターズの選手について語り始めたから、また大変だ。

「これは左の好打者、滝田さんのカードっすよ。こっちが、小粒な体でフォアボールを選びまくった山田潔さんのカード。いまでいうとマネーボーラーですかね。それで、このカードが、メガネをかけた風貌から教授と呼ばれた林義一投手。こっちはスタルヒンですよ。巨人のイメージが強いですけど、戦後はもっぱら、スターズ一筋の野球人生を送ったんす」

「すげーな。落合。でもこれにはかなわねーだろ。もしもカードコレクションだ。これが、山本功児監督が、他になり手なくロッテの

監督をだらだらと続けていたらカードや。このカードを使うと、どんな人気のロッテでも、一目散に観客と注目度が減る効果があるんやで。それで、これが、もしもイチローが、メジャーにも日本の他球団にも目をくれなかったらカードや。イチローの年俸がどんどん膨らみ、他の選手の年俸を圧迫していくんや。それで、アンチイチロー派閥が出き、イチローがどんどん孤立してより近かよりがたくなるいうカードや。このカードを場に出すと、とんでもない打率能力の誇るイチローが打順に加わるけど、他の選手のやる気が一気に落ちる効果あるんやで」

「すげーすね。潮崎さん。オレが持ってるのはこれくらいです。おしも、落合監督がひねくれていなかったらカードです。この落合監督は、とにかく素直の一言。無理に選手を干さなければ、報道陣にもすこぶる愛想がいい。ＷＢＣにも、惜しげもなく選手を派遣するし、選手の結婚式にも出席するんすよ。でも、このカードを場にでしても、中日の人気はあまり上がらない仕様なんです。どうしてでしょうか、落合監督の行き過ぎた無愛想が、不人気の原因といわれているのに。そして、こっちが、大矢監督カード。一見普通のカードなんですか、メガネのレンズがパカパカと開かない普通のメガネなんです。だからなんだといわれても困りますが、そういうカードなんです」

「お前も、レアなの持ってるな。これが、星野仙一巨人軍監督カードだ」

「わ、すげーす。オレも欲しいっす」

星野の名前が出たところで、もうひとつ、異色のゲームを紹介しておこう。

その名は『星野仙一立身出世ゲーム』である。このゲームは、プレーヤーが星野仙一となって、星野の代わりに、星野のかなわなかった夢を叶えるゲームである。

ゲームは、明治大学在学中から始まる。星野の野球人生の歯車は、巨人から指名を受けなかったことで、微妙に狂っていく。

まずプレーヤーは、そこから手直しを始めなければならないのだ。プレーヤーがすべきことは、とにかく勝つこと。それによって、巨人軍のスカウトの目を星野に向けさせて、ドラフト一位の座を勝ちとることだ。

ライバルは多い。同じ六大学の田淵、富田、山本浩二だけでなく、大橋穣、有藤通世、島野修、山田久志と全国津々浦々に存在する。

そのライバルたちよりも好成績を収めて、巨人一位の座を確固たるこちにしなければならないが、注目を集める選手になっても、まだ関門がある。それは他球団の横槍である。

そこは政治力の行使を使いどころ。明大の監督である島岡御大や明大ＯＢの球界関係者や財界人を上手に使い、巨人だけに指名されるように、根回しをする必要があるのだ。

うまく行けば、念願の巨人入り。巨人ブランドを手に入れた星野操るプレーヤーは、俄然有利となるが、そこまでうまくいくプレーヤーはほぼ皆無。

いろいろな障害に邪魔をされ、結局は、中日入りする確率が高くなるようにプログラミングされているのだ。

そこでのプレーヤーの役目は、星野を不世出の選手にすること。

一流半に終わった星野は、殿堂入りをかなわず、同期のドラフト一位が４人も名もいる名球会にも入れていない。星野が大物面をするたびに、たいした選手じゃなかったくせに、と陰口を叩かれないように、とにかくたゆまぬ努力で一流選手に仕上げることが必要。

さほど速いボールを投げれぬ星野とはいえ、体格度胸など持っている素質は超一流。これを開花させるのが、プレーヤーの役目。サボリぐせのある星野を叱咤し、最低でも名球会入りさせるのが目的。

とはいえ、それもまた難しく、たいていは星野が現実に残した数字に終わる。

だが、これからが本番。政治家星野の腕の見せどころだ。

解説者で、人脈を広げ、お茶の間に顔を売り、中日の監督になってからが、勝負。ここからは抜き差しないゲームの始まり。

とにかく選手を育てて、打倒巨人に励むこと。それだけが、後の星野の立志伝につながっていく。

うまくいけば、数年で、巨人軍の監督が回ってくるが、それは至難の業。長年コツコツと経験を積み重ねて、現実どおり阪神監督で星野人気のピークを迎えるのが、吉。

そうなれば、北京五輪監督である。

ここでしくじってはならぬ。温情や固定観念を切り捨てて、選手コーチ選考に励まなくてはならない。見事、金メダルを勝ちとれば、ＷＢＣ監督を経て、待望の巨人軍監督の座が待ち構えている。こうなれば、プレーヤーは勝利者も同然。

あとは、湯水のごとく金を使い、選手を補強すれば、巨人軍は勝手に勝っていくのだ。そして、目指せ、コミッショナー。目指せ、球界の支配者。球界の新しいドン。

ひとつ付け加えておくと、このゲーム。板東英二がつきまとってくるのである。プレーヤーの達せどによって、呼び名が変わっていくのが特徴。

仙ちゃん。星野さんが、星野の人生をなぞらえている時の尊称。星野さま、星野先生までいくと、実際の星野以上の人生の勝利者であるが、これが、星野と呼び捨てになると注意が必要。板東がつきまとわなくなると、もうゲームオーバー寸前の兆候であるのだ。

ゲームセンターアラシ（犬飼の飼ってた犬っころ）

「先発は誰かって？　そんなのこの俺様に決まっているだろう。誘導作戦かだって？　冗談じゃない。オレを誰だと、思っている。堀内恒夫。巨人軍の大エースだぞ。小細工など使わずとも、近鉄なんて一捻りよ。なに？　西本監督が堀内が来てくれれば、もっけの幸だって？　ふふ。いわせておけ。あの爺さん、この俺様の投球に、何ど煮えにを飲まされてきたと思っているんだ。完全試合というのも味気ないな。初戦でしょ、みんな注目してくれるゲームでね。いくらなんでもそれはやりすぎだよ。ただでさえ巨人の前評判がダントツなのに、スタートから、圧倒的な自力の差を見せつけられたら、見る方もいやんなっちゃうよ。完封くらいに、しっておこうかな。それだと、他の投手のみなさんに失礼だな。だって、巨人軍の全投手から、選りすぐられた強者ばかりなのに、オレ以外出番がないとなったらねえ。適当にちゃっちゃと投げて、他に人にも出番を譲ってあげますか…。それよりか、近鉄の先発どうなの？　なに？　各社割れている？　鈴木に野茂に阿波野、岩隈と誰か来てもおかしくない状況だって？　それは困ったなア。投げる方が問題なんだけど、打つ方がねえ。三発くらいスタンドにぶち込みたいんだけど、誰が投げるかわかんねーじゃ、イメージ作りが大変だよ。野茂みたいなジジクセー投手はオレは、イヤだな。まさか、投手のオレにフォークを投げてこないとは、思うけど、アイツはフォークしかねえ単細胞投手だからなあ。鈴木？　いいねえ、同級生。しかも、野茂と違って、真っ向からくる気持ちのいい男よ。阿波野？　巨人の監督時代は、お互いえらい目にあったよ。アイツが投げてきたら、ちょっとだけ気を緩めてあげようかな。　岩隈？　あの程度の投手が今の日本で屈指の投手なんだからねえ、寂しいもんだよ。そりゃ、投げているボールはご立派ですよ。フォーク、ストレートが低めに集まるし。横の変化もある。だけどねえ．先発投手が、はなから完投を

目指さないとはねえ。球数だかなんだか知らんが、それじゃあ、、とてもエースとは呼べないよ」

これが、堀内の試合前のインタビューの一部である。その自信のほどが伺えるが、問題は堀内が自分が先発であることを、完全にバラしてしまっていることだ。

予告先発でない場合、先発投手は最高機密といってもいい。監督、投手コーチ、本人以外口外できないこの情報を、こうもあけっぴろげに明かすことに何の意味があるだろうか？

しかも、情報漏れにうるさい川上巨人軍だ。堀内のこの行動は、いつもなら問題行為として槍玉に挙げられるだろうが、今日に限っては、事情が異なる。

「先発？　ホリだよ」

テツのカーテンで有名な川上が屈托たく先発を明かせば、

「そうそう。堀内だよ」

藤田投手コーチが、それを否定することもない。

「蓋を開ければ違う投手が出てくるとか、そういう姑息なマネは一切しませんよ。それならば、投手陣の球場入りを事細かくチェックすればいい。高橋一三、別所さん、斎藤雅樹、上原など、君たちが、開幕候補にあげた投手は、球場入りさえしないで、今頃ホテルで夢の中ですよ」

この藤田の発言にも嘘はなかった。先発要員に決まった巨人の主力投手たちは、堀内をのぞき、東京ドーム入りをしていないのだ。

それだけではない。前日に発表されたベンチ入り可能投手のそのほとんどが、まだドーム入りをしていないのである。

そんななか、ベンチ入りリストに入ってないはずの男が、姿を現したのである。

「下っ端だから断れなかったけど、こんな役目、やる気でね～」

そうボヤくのは、内海哲也である。

「あれ、内海さん。どうして、球場入りしてるんですか？　ベンチ入りから漏れたはずでしょ？　補欠のメンツにも入っていなかった

ような…」
　坂本の疑問ももっともである。
「まさか打撃投手ですか？」
「違う、違う。まあ、ソッチの方が、まだマシかなあ～」
「？？？」
　坂本の頭は、疑問に溢れるが、内海はその答えを明かしてくれない。
「あとでわかる…。ちゃんとできるかなあ～」
　そういうと、内海は、ポケットからメモの紙を取り出すと、ぶつぶつと暗唱しだした。

　阿波野、山崎対王のいわば、近鉄巨人の前哨戦は、思わぬ経過をたどっていた。
「くそ…」
　王のいらだちからわかるように、王ソフトバンクの劣勢なのである。
　王は合計で７万以上の金額をこのゲームに注いでいるのだか、それで基本パックの２００円しか使っていない近鉄コンビに終始リードを許しているのだから、恥ずるべき現象であろう。
　しかも、近鉄の監督は鈴木啓示である。日本球界きっての迷将相手に、この経過なのだから王ＧＭと田淵監督のマネージメントぶりのひどさが伺えよう。
　阿波野と山崎は、社会を分かっている。
「適当に手を抜きましょうよ」
「そうだな…」
　阿波野ＧＭが、強権発動で、投手を持ちカードで一番能力に劣るミラッキに交替させようとしたのだが、これに横槍を入れたのは、他にない対戦相手の王である。
「手加減されて勝ってもオレは嬉しくない！！」

そういって、阿波野たちを凄むのだから、交替を取り消すしかない。

阿波野、山崎が大人の対応を見せたのだから、王も甘んじてその好意を受けるべきである。

大人になりきれぬ王の意固地さのせいで、場の空気はどんどん淀んでいく。

福盛、戸叶、横山ら一昔前の横浜期待の投手陣が列をなしているゲームがあった。

その名は、谷繁元信育成ゲームである。

名前のとおり、谷繁を一人前の捕手にするゲームであるが、多少のデフォルメというか、現実に即したデータなのか、初期状態の谷繁は、これ以上ない大馬鹿人間としてプログラムされているのだ。

長打力や肩力はいっぱしのものがあるのだが、技術力が著しく劣り、口でそれを叩き込もうとしても、肝心の頭がもっと劣るだから、日なたに置いた古雑巾のように、なかなか吸収してくれないのである。

プレーヤーは、バッテリーコーチとなり、日夜、谷繁に付き添って育成するゲームなのだが、彼らのプレイスタイルは、本来の目的から逸脱していた。

だが、谷繁の度重なる恫喝に調子を崩し、あげく横浜放出の憂き目にあった上記の彼らは、このゲームを積年の怨みを晴らすを格好のゲームと捉えているのだ。

「けけけ！　谷繁がまたパスボールした！　フォークひとつとれねーでやんの」

「パンパースちゃーん！」

※パンパースは谷繁の若手時代のあだ名。

「サインくらいいい加減に覚えろよ。ああ無理か、自分の名前も漢字で書けないんだから」

このような調子なのであるが、そんな谷繁を一流捕手に育て上げ

た、横浜の育成力には恐れ入る。
球界きってのバカ捕手が、球史に残る捕手になり、谷繁がマスクを被らないと、投手陣が崩壊するとまでいわれているのだ。
谷繁だけではない、相川、鶴岡、さらに生え抜きではないが、秋本宏作と、育成するのが極めて難しいといわれる高卒捕手を、平成以降だけでも何人も育てているのだ。
それだけの捕手育成がありながら、どうして、毎年、とうのたった捕手をＦＡで獲得するのだろうか。どうして０９年度の正捕手がドラフト４位の新人捕手なのか。
横浜の長期低落は奥が深い。

「ＷＢＣに続いて、このＪＷＢＣも、わがＪスポーツが全試合完全放送の権利を獲得しました、えー本日のがんばれ日本プロ野球！？　は放送権獲得記念と称してＪＷＢＣ特別編として、１２球団の首脳陣、主力選手のインタビューをお送りしたいと思います。巨人軍は、もちろん、この人。原辰徳、コーチ兼任内野手です。どうも、原監督…。いや、今は原コーチですね」

「いやいや、こちらこそどうも」

　金村と大塚を爽やかな笑顔で迎えた原であるが、これがウソの取材であることに気付いていない。大塚とカメラを引き連れてまで、原に架空の取材を敢行したのは、すべては、バファローズ愛がなせるワザ。　インタビューと称して直前の内情視察に打って出たのだ。

「ＷＢＣに続いて、このＪＷＢＣも、わがＪスポーツが全試合完全放送の権利を獲に、まずは、己を知ること。それが完璧にできるひとばかち。いや、それができなければ、巨人軍の内なる戦いに勝ち残れない。内海を御覧なさい。彼の名前を出すのは、現役指揮官として、多少の心苦しさがありますが、あえて彼を俎上にのせて、話を進めましょう…」

　とにかく、原の話は時代掛かっていて、それでいて長い。

「内海がなぜ残れなかったか？　あれだけの力がある投手です。う～ん、外から見ている、金村くん、大塚くんの方がよく知っているかもしれない。どう、内海はいい投手？」

「そりゃ、もちろん、巨人のエースですから」

「そうだろ？　その内海がどうして選考から落ちたかというと、話は長くなるから手短に話そうか」

　すでに十分長いですよ。

「内海はねえ。コンディショングの整え方をまだよく知らない面が

あるんだ。現場を預かる指揮官としての立場からいわせてもらうと、とにかく調子に波のある選手が、一番、使いにくいんだ。内海は、落選したときに、Ｗｈｙ？　と疑問を感じたろうが、これを良薬にしてもらい、さらなる精進を重ねて欲しいね。どうだい、僕の話の意図がわかるかい、大塚くん？」

「ええ、よ～く分かります」

「そうか。それが侍としてのつとめというか、直江兼続じゃないが、頭に愛を感じている巨人軍の代表たるこのベンチ入り２５名は、みんなそれができているんだよ」

金村は、焦りを感じていた。原の話は、いちいち長く、それでいて抽象的で、いまいち内容が欠ける。敵情視察のインタビューなのに、それらしき情報はまだひとつも引き出せていない。

「それでは、相手は近鉄です。近鉄の印象を伺いたいのですが…」

金村は無理やり話を替えにでた。

「僕の中では、近鉄といえば、金村くんなんだけど…背広姿ということは、金村くんは、試合には出れないの？　てっきりバファローズのホットコーナーは君だと思っていたよ」

「いや、補欠にも入れんで、解説という立場で公平に見させてもらいます」

「そうか、それは残念だけど、近鉄さんとは、胸と胸を突き合わせて、ＪＷＢＣ第一回目の大会にふさわしい試合がしたいね」

金村の決死の方向転換も原の話は、一向に具体性を含まない。

インタビューは５分の約束で時間を取ってあるのだが、このままでは収穫ゼロで終りかねない。そこで珍しく空気を読んだ大塚が切り込む。

「そ、そ、それでは原、かん、いやコーチ。今度は選手としての話を聞きたいんですが…。ススス、スタメンの予定は？」

「スタメン？　無理を言っちゃあいけないよ、僕の守る三塁には、ミスタージャイアンツ、ミスタープロ野球がいらっしゃるんだよ。とてもとてもスタメンは無理だよ」

「そ、そそそでれば、選手生活の晩年守られたレフトや、一塁、それに新人ときに守った、にに二塁での出場は？」

「いやいや僕は、生まれながらのホットコーナーだよ。三塁以外守る気はないね。ＤＨなら別だけど…今日は、あいにくウチの主催試合だからね、まー代打の切り札で頑張るよ」

広報の津末が時間を気にしだし、インタビューは終りの時間。ここまで機密情報引き出しどころか、インタビューとしても平々凡々でつまらないものになっている。

危機感を感じた金村は、

「ちょっと最後に深くえぐらさせてもらいますが、今日のきょじ…」

捨て身の攻撃に出ようとしたが、原に遮られる。

「もう最後？　ならカメラをちょっと貸してくれるかな？」

「どうぞうどうぞ」

原は目を見開いて、思い切りのカメラ目線で、両腕を突き出し、これも得意のグータッチ。

「ええ～　我々は巨人軍は圧倒的な強さでこのＪＷＢＣを勝ち進むことを誓います。ファンのみなさま、ご期待下さい」

結局、終始原のペースで架空インタビューは終わりを告げる。

「なんや、結局、なんーも得られんかった。ＶＴＲどうするかって？　こんなんいらんわ。すててておいて」

「え～　金村さん？　これウソ取材やったんですか？？？」

「大塚、何度もそういうてたやろ」

「それじゃあ、緊張して、どどどどもることもなかったやないですか～」

「大塚。君は今もどもってたよ」

「佐野さん、このゲーム、佐野さん向きですよ？」

赤堀が笑い顔で、佐野に進めたゲームとは、野球選手を題材とし

たシューティングゲームである。
プレーヤーの機体が、迫る敵を撃ち落とすという、一見、普通のシューティングゲームであるが、その奥は、あらゆる意味で深いのである。
「佐野さんの機体もありますよ」
高村がそういうように、プレーヤーの機体選択画面に、佐野を模した機体があるのだ。佐野だけではない、他の7台も野球選手を模した機体なのだ。
そのメンツとはいうと、福浦和也、和田一浩、松中信彦、山下大輔、川上憲伸、衣笠祥雄、川村丈夫である。
もうおわかりであろう。このゲームは、数少ない毛髪を弾にして、敵を撃ち落とす異色のゲームなのだ。まさに、身を削るゲームであるが、搭載する頭髪量にも、機体によって差がある。川上、川村クラスの頭髪だと、わずかながらであるが、前方からも攻撃可能であるが、山下や和田までいくと、後方からしか弾が打てないのだ。
敵は前方から攻め立ててくるので、敵を撃ち落とす場合、和田や山下の機体は、旋回が必要。３Ｄゲームだけに、旋回すると、前方の視野が遮れれることになる。
和田や山下の機体は、初心者にはお勧めできないのである。

ゲームセンター荒金（後書き）

何の話だこれ

近未来の名球会会員登場

「読売ジャイアンツの練習は、午後４時３０分まで～」

ウグイス嬢の艶やかな声で、そうアナウンスされたとおり、ホームチームである巨人の練習は、終りを告げようとしていた。

ビジターチームである近鉄が、グラウンドに颯爽と登場…。とはいかない。野武士軍団というか、統率力に欠けるというか、まっとうな社会では生きていけそうもない輩ばかりというか、彼らは、だらだらと、かったるそうに姿を現してたのだ。

巨人とは大違いである。巨人の選手は、練習の動き一つをとっても、きっちりと規律に沿っている。ムダ球のない打撃練習。教科書どおりのウォーミングアップ。ノッカーである土井正三が、定規で測ったように的確にボールをはじき飛ばせば、長嶋、王らの守備陣は、流れるような動きでこれを処理していく。

ブルペンでは、投手陣が、最新のスポーツ科学に基づき、綿密な調整を行っている。

すべてにおいて、そつがないのである。ことによっては、そつのなさは平坦で面白みに欠けると意訳されるが、スポーツにおいては、それが、勝利への一番の近道である。

「すべてが計画通りにきておる」

これも、すべて、川上監督の指揮力がなせる技である。いくら選手が超一流ぞろいであって、肝心の指揮官に能力が欠ければ、たちまちに部隊は全滅する。

超一流の手駒に、超一流の使い手が、いるからこそ、絶妙なシンフォニーが生まれるのである。

「すごいな。これが巨人の練習か…。伝統あるチームはやっぱ違うな…」

中村紀洋は巨人の練習を見ただけで、降参ムード。心のなかで、

そっと白旗を掲げている。ノリだけではない。わが道を行くタイプの揃った近鉄ナインが、揃って、巨人の練習に縮み上がっているのだ。

「王さん…長嶋さん…サイン貰おうかな…」

梨田が、ＯＮの威光に目を丸くすれば、

「野球はなんだかんだいっても巨人やなあ」

主砲・土井正博も、分厚い巨人の戦力を直視できない。

主力がこれでは、近鉄は戦わずして、負けたも同然だ。どこかに、巨人何するものぞの豪傑はいないのか。

石井浩郎は？　ダメだ。巨人時代に味わった、数々のオイシイ出来事に思いを馳せている。

栗橋茂は？　これもダメだ。独身貴族の栗橋は、巨人軍の選手を理想な結婚相手の対象と見ている。

新井昌宏は？　ダメだ。彼の思いは、目の前の試合でなく、遠く行われているオリックス対広島の愛弟子イチローの打席にある。彼の脳内では、イチローの打撃フォームが、繰り返し再生差れている。

ああ、近鉄よ。力と力のぶつかり合いで負けるならまだしも、ブランドに屈し名前負けするとは…。

その時、ベンチの隅でボソリと吐かれた一言は、沈滞するムードを逆流するような牙を携えていた。

「読売がなんや」

ん？

今、なんていった？

いた！　一人だけいた！　天上界にそびえる巨人ナインに、つばをはこうとするものが。

「なんや、先輩方。読売の連中を、恋人眺めんような眼差しで見てからに…。伝統、伝統いうが、そんなもんカビがはいてるちゅうに」

その剛の者の正体は、大村直之であった。合併吸収されて実質的に消滅した近鉄にとって、そろそろベテランと呼ばれる頃になった大村でさえ、若手中の若手である。実際、大村より、年の若い野手

は、一人もベンチ入りしていない。投手陣にも、岩隈らがいるだけである。

最年少ならは、それらしき態度を取るものであるが、生来の一匹狼である大村は、そんなことお構いなしである。

「残念やなあ～。ワシをスタメンに起用してくれたら、右に左に、ヒットを量産して5打数5安打の活躍を約束するのに～。ああ、残念や。この安打製造機のワシが、代走守備固め要員やなんてなあ」

選手起用までに、言及する有様である。しかも、大村がふんぞり返るベンチの前には、西本幸雄監督が、早くも陣頭指揮を取っているのである。

少々、耳の遠い西本であるが、ひとりごとの割に、ハッキリとした大村の発言は、聞き漏らすことないだろう。

チームの和を乱す危険人物と見るのか。それとも監督批判ととるのか。

「大村、よういってくれた。その調子や。巨人がなんぼのもんじゃい。テツ（川上）が何様じゃい。あんなもん、金と名前にあかせて、補強しまくったおかげで勝ってるだけや…」

そのどちらでもなかった。大村の発言を、逆に、ムードを鼓舞する材料にしたのである。

元来、単純な性分ばかりの近鉄ナインは、がらっと巨人への見方をかえてしまう。

「そうや。金満巨人を葬り去ることが、近鉄が復活した理由やないかい」

「一致団結して、巨人を倒そー」

いやはや、わかりやすいチームである。

「あれ？　内海。お前なんで、グラウンドに来ているんだ？」

原は、選手登録もされていない内海のグラウンド入りの理由が分からない。

「あ…こんにちわ…。原かん…いや…コーチ」
内海は、脱帽して最敬礼。
「打撃練習の相手か？　それなら、もう終わってるぞ？　応援か？　それなら、ユニフォームを着ている意味がわからんなあ」
内海は、グラウンドに向かって走っていった。練習補助で来たならば、練習の終りに出てくるのはおかしい。個人的な応援なら、ユニフォームを着る必要はない。
すべては原のいうとおりである。首脳陣である原も知りえない、内海のグラウンド入りの意図は、はたしてどこにあるのか？？？

パチンコに飽きたダルビッシュ、涌井らは、とあるゲームにやみつきになっていた。
解説者ゲーム。
いくらスタープレーヤーである彼らも、いずれ選手生活を終えるだろう。一流選手の第二の人生の定番といえば、指導者か解説者である。後学のためというわけでもないが、彼らは解説者ゲームに熱を入れているのである。
このゲームの概要は、解説者になったプレーヤーが状況に応じて、あらかじめ用意してあった解説のお決まりのフレーズをリズムテンポよく、選択するといういたってシンプルなもの。
だが、単純なゲームシステムがかえって、クセになるのだ。
「そうですね」
「当たった方も痛いが、当てた方はもっと痛い」
「ご婦人方には分からない痛みです」
「先取点を取った方が、このゲームを有利に進めるでしょう」
こういったありきたりなフレーズを注入するだけであるが、それが意外と難しいのだ。選択肢は１０００以上、用意されてあって、そのフレーズにたどり着くだけでも一苦労。研ぎ澄まされた反射神経と、膨大な記憶力が要求される。

上級レベルになると、解説者どおりのキャラにそったフレーズ選びが求められるのだから、これまた大変。

例えば、関根潤三を指定されて、均衡を保ちながら終盤を迎えたとすると…。

「ロッテの園川投手の今日の決め球であるスプリットの切れがだんだん落ちてきています。ダイエーの攻撃陣は、スプリット狙いに来ても面白いでしょう。真ん中に入って一発もありますよ、」

とフレーズを組み合わせて、ゲームと両軍の状況を踏まえた解説をしだしたら、逆に失格。一流の解説ではあるが、関根さんの解説ではないからだ。

「先に点を取った方が有利だね」

となるべく当たり前のフレーズを選択しなければならないのだから、プレーヤーの頭を悩ませるだろう。

これが逆に、秋山登だと簡単である。

「そうですね」と時に無言を押し通せば、秋山になるのだから。

ゲームセンター新井潔

「まもなく読売ジャイアンツの練習時間は終了になります…」

王、長嶋らが、小走りでベンチに戻ってくる。

それでも、内海はベンチに戻らず、屈伸運動を繰り返している。

いや、内海だけではない。仁志、清水と選考から漏れたはずの選手たちが、グランドのそれぞれのポジションに散っているのだ。

巨人の練習はここまで。しかも彼らはベンチ入り登録もされていない選手たちである。

今や遅しと出陣の構えを見せていた近鉄ナインは、思わぬ事態にたじろくばかりだ。

「なんで、巨人の選手がまだおるんや」

佐々木恭介打撃担当コーチも目を白黒。

「さあ、なんででしょうかねえ…」

チームリーダーを任される大石大二郎も言葉を失する。

溜まりかねたグラブ片手の石井浩郎が、一人、巨人選手で埋まるグラウンドに乗りこんでいく。

「巨人の練習は終わったはずでしょ？　今は、僕らの時間だ。何の問題もない」

さすが、男・石井である。正の信念があるなばら、行動に迷いがないのである。

三塁ベース付近に立ち止まると、二塁の定位置にいた仁志を呼びつける。仁志といえば、石井の早稲田の後輩。８７年度まで在籍した石井と８９年度入部の仁志は、入れ替わりの形とはいえ、先輩後輩であることに違いない。封建的な体育系において、年齢ほど意味を成すものはない。

「おい！　仁志ちょっと来い！」

石井が呼び出せば、仁志はへーこらと愛想笑いを浮かべてすっ飛んでくるのが、縦社会の掟である。

ところがだ。

仁志は、石井の呼びつけにうんともすんとも言わないだけでなく、薄ら目で石井の顔を直視するという、なんとも侮蔑的な眼差しを一差し加えるのだ。

六大学の先輩である佐々木信也の挨拶を完全無視したことで、有名な仁志であるが、慶応出身で年がまるで違う仁志と違い、石井は同じ早稲田であり、巨人時代に三年同僚だった間柄。その石井の呼び出しを無視するのだから、培われていた秩序は崩壊していく。

「おい仁志!!」

語尾を荒らげても、仁志は一向に振り向かない。仁志の強情さをよく知る石井は、作戦を替えた。

よく見知った間柄とはいえ、今は、巨人と近鉄に別れた敵同士。グラウンドでは、あえて言葉を交わさないのも理解出来ないことでもない。

仁志の考えを汲み取った石井は、歩み寄りを見せる。石井、自ら、仁志の元に近寄っていって、甘い言葉で、仁志を崩しにいった。

「仁志くん。これはどういうことかな？　巨人の練習時間はもう終わったはず。しかも、君はベンチ入りのメンバーにも名を連ねてはいない人間。それがどうして、グランドに立つ必要があるんだ？　いや仁志だけではない。他の巨人の選手もそうだ。おかしいじゃないか。この時間は、近鉄に与えられた時間のはずだ」

石井は、丁寧に言葉を選んで仁志に対応したはずなのだが、とうの仁志の心情にははねかえってはいかないのである。

「あ、悪い？」

この応対では、石井が切れるのも無理がない。

「下手に出ればいい気になりやがって！　おい仁志!!　近鉄の時間だ!!　お前はさっさとグラウンドから去れ！」

「はあ？　近鉄の時間だって？？　誰がそう決めた!?」

「ホームチームの練習後に、ビジターチームの練習が行われるのは、野球界の常識だろ！

第一、さっきのアナウンスで巨人の練習は終了。出場選手は、みなベンチに引き上げたじゃないか！」

「ふ～ん。たしかに巨人軍の練習の終了はアナウンスされてたけど、近鉄の練習開始とはアナウンスされてはいないよな」

たしかに、仁志のいうとおりだ。普通、ホームチームの練習終了を告げるとともに、ビジターチームの練習開始のアナウンスもあるはずなのが、今日に限ってそれがないのである。

「忘れているだけだろ！？　ＪＷＢＣとペナントの勝手が違うからな！」

「ふ～ん。選手だけがプロフェッショナルじゃない。この大会は、審判、報道、大会関係者にいたるまで、本物が集まっているんだ。運営もその限りだ。運営の職人がそんなミスをするわけがない」

仁志のいうとおり、この大会は、いたるところまでプロの職人技で施されている。

アナウンスにもミスはない。わざと遅らせた理由もきっちりとあるのだ。

仁志と石井の亀裂をさらに深めるように、アナウンスは流れる。

「引き続き、巨人軍第二チームの練習時間です…」

わざと間をおいた事で、より驚ろかせる演出が狙いか。

「巨人第二？？？　いったいどういうことなんだ？？？」

「ほおら、流れましたでしょ？　近鉄の練習時間じゃない。この時間は、我が巨人第二チームのもの。いわば巨人二軍の練習時間。エリートコース一直線のオレには、二軍の二文字はかんにさわるけどね」

「二軍？　戦力を抱え切れない巨人が二軍組織を編成しようと勝手だが、二軍の練習なら、今やる必要はないだろ？」

「ふん。近鉄さんこそ必要ないんじゃないか？　近鉄一軍より、巨人二軍の方が上でしょう？　待遇、戦力、人気…すべてが巨人二軍以下で一軍づらするの辞めてくれませんかねえ」

「なんだと、仁志…」
石井は、仁志の胸ぐらをつかもうとするが、そこに一塁を守っていた中畑清が割って入る。
「すべては、仁志のいうとおり。おい、石井、お前も男ならわかるだろ？　野球界は強さこそが正義。弱小球団は一歩引くべきだよ」
「中畑さんまで…。いったいぜんたい、どうなっているんだ。これが僕の憧れたジャイアンツか？　僕が在籍した巨人軍か？　おかしいよ」
石井に加勢せじと、乗り込もうとした近鉄ナインであるが、警備スタッフに足止めを食らう。
「おい、いかせろ。もう我慢ならん」
いきり立つノリを警備スタッフは三人がかりで体で止めにくる。
（ちなみに、脇谷と古城と小田嶋）
ベンチ裏では、監督の西本が、川上に直談判を焚きつけようとするが、ここでも今度は連盟の大会担当に足止めを食らう。
「テツを呼べい。この件について説明してもらうわ」
混沌とする一方のこの状況、一人ぶつぶつと暗唱を繰り返すのがマウンド付近にいた内海である。
「くそ…。なんかえらく緊張してきた…。この感じ、小学校のときの学芸会以来だぞ…」
はたして、巨人二軍、ひいては内海には託された狙いとは？
横浜ドラフト一位の筒香嘉智ははまってはいけないゲームにはまっていた。
その名も横浜ぬるま湯ゲームである。横浜に入団にしたプレーヤーは、横須賀長浦にある合宿所に入るのだが、これからが大変。誰

もろくな練習をしていないのである。海に面して、周りには何もない片田舎。にもかかわらず、先輩選手たちは、わざわざ小一時間かけて東京に繰り出したり、地形を利用しては釣りに勤しんだり時に海水浴とさぼり放題。

いくら新人が練習に励もうとしても、先輩たちの誘いをむげにできなければ、緩いムードにも流されて、気がついたらぬるま湯にどっぷり。独立独歩で一人、鍛錬を重ねても、チームからだんだん浮いてしまう。

そこをバランスを取るのが、このゲームの腕の見せ所。那須野、染田、古木、田中一徳ら過去の幾多の有望選手が陥った罠に、筒香が打ち勝てるのか？

これはゲームだけの話ではない。現実の筒香にも襲いかかろうとしている問題である。

「大西先輩。もう飲めないっすよ…勘弁してください…」

と酒池肉林に身を滅ばしつつある筒香くん。本当に大丈夫？

ただこのゲーム。現実に即しているのか、寄ってくる女子アナがいないのが、同じ在京球団であるヤクルトアナ取り物語ゲームと違って、攻略しやすいところ。

内川のように実績を重ねれば、キー局の女子アナが寄ってくるのだが、並の選手じゃあ、二流モデルやタレントがイッパイイッパイ。ごく稀にＴＶＫの女子アナが近寄ってくるが、キー局アナと違って、華やかさに欠けるきらいがあるので、精神的動揺をきたさず練習に打ち込める？

巨人軍寸劇劇団

グラウンドではいざこざが起きているのに、のんきに巨人二軍の選手紹介が始まった。

「それでは、巨人軍第二チームのメンバーを紹介します。キャッチャーは、村田真一。背番号９」

いかにも粗雑なスイングから、たまに一発が飛び出るびっくり箱打法が印象に残る村田が、どうして、２０１０年現在の原巨人で打撃コーチを務めているのだろう。

失礼ながら、打撃理論に秀でているようにもみえない村田が、なにをコーチングするのだろう。実績溢れるベテランの多い巨人軍。谷や小笠原、ラミレスを師と仰ぐ選手がいるとは伝え聞くが、村田に薫陶を受けた選手がいるとは聞いたことがない。

バッテリーコーチが適任と思われるが、それも外様の西山に奪われた。それなりの評価をえた捕手経験を活かし、優れた配球哲学を後世の捕手に受け継ぎ、巨人の伝統を守っていく立場の村田がなぜ、バッテリコーチから左遷され、打撃コーチ補佐という実質的な閑職に追い込まれたのだろう。

村田のコーチ業としての資質は買われてはいないが、ムードメイカーとしての役割、監督の原と選手をつなぐ循環器としての職務が買われたのだろうか。

それとも、特に適した職務はないが、原派の番頭として政権に残っているだけなのうか。

村田の肩は極めて弱く、一発長打のある意外性の打撃も炸裂したのも、大久保が彗星のごとく現れた時まで。いかにも８番以外打てそうもない打撃成績と三本柱によりかかった配球力ながら、村田が常に巨人軍のホームを守り通してきたのは、伊東、古田らあてにしていた一流捕手のＦＡ補強が、当該球団の監督手形の切り札を切った引き止め交渉が効いたのか、有益な捕手補強ができなかったこと

に尽きる。
村田の前に現れた新人捕手は、巨人軍の正捕手としてのふさわしい器がなく消えていき、村田に懲りて取ってきた移籍捕手の数々は、一時期神がかり的な活躍を見せた大久保を除き、すでに下り坂を急降下していた選手ばかりであった。
その最大のライバル大久保の雑なキャッチングが、村田の平凡な技術を際立たせることになったのは、不幸中の幸いだっただろうか。

「ファースト、中畑清　背番号２４」
一塁手は、ヤッターマンこと絶好調男、中畑である。中畑は、そのキャラからか、低く見られがちであるが、残した数字は意外と高い。規定打席に到達しての最高打率は、８１年に記録した．３２２。本塁打と打点は、いずれも８４年の３１本塁打、８３打点。
それぞれ異なった年度の数字であるが、こう抜き出して見ると、一流のスラッガーに見えてくるから不思議である。それでも中軸を担うべく選手の最高打点が８３というのは、どうにも物足りない。これを含めて、７０打点以上さえ二度というのは、これでは、クリーンナップを外されて、６番、７番の下位打線に収まるのも致し方ないだろうか。
「セカンド、仁志敏久。背番号８」
セカンドは、仁志である。仁志といえば、現在石井ともめている最中だ。
止め役と見られた中畑が油に火を注いだら、仁志と石井の揉め事のすぐ目の前にいる投手の内海はどう思うだろう。
内海は、さかんにメモ書きのような小さい紙を見ては、ぶつぶつとつぶやいている。
「え～と…このセリフは…こっちだった…。揉め事が起きた時のセリフはこれだった」
内海は高なる胸のときめきを感じながら、仁志と石井の間に割って入った。

「ええい～　揉め事はやめい～」
　セリフは大行であるが、その口調は棒読み。テンションの上がりきった二人と能面の内海は、あまりにも違う。
「なんだ、お前、内海か」
「どうした、石井、巨人に、嫉妬で、もして、いる、の、か？」
　ずいぶんたどたどしいが、これでも必死に煽っているのである。
「嫉妬なんてしてない。ただ口の聞き方がなっていないといってるんだ。巨人軍は紳士だろ？　先輩にこんな態度とっていいのかって話だ」
「ふ、ふふ、ふ、ふふ…。なあに、きんて、つなんて、巨人の二軍よりよ、わいくせにエラソーなつらするな」
「なんだと？　お前は大森か。あいつも近鉄の一軍より巨人二軍のほうが良かったとふざけたことほざいていたな」
「しょしょしょうめ、いしてやる、よ。巨人にぐ、んが近鉄一軍よりより、強いことを」
「証明できるならしてみろ」
「ふへへへ。証明してやろうじゃないか」
　内海、だいぶ演技に慣れてきたのか、最後のセリフはすらっと出たのだ。
「よし、内海。投げてみろ。この男・石井のバットがお前のなまくら球を打ち砕いてやる」

「サード　岡崎郁」
　マウンド付近で繰り返される寸劇をよそに、アナウンスは続く。
　サードは岡崎である。みなさんご存知だろうか。実は、この岡崎が、巨人軍のサード史の重要な位置を占めているのを。
　巨人軍歴代で最もサード守備についた選手は、長嶋茂雄である。これは誰でも分かるし、次が、原辰徳であることも、少し頭をひねれば出てくるだろう。
　では三番目は？　人によって高田や中畑や元木。新しいファンな

ら小久保、江藤、小笠原のＦＡ戦士が思い浮かぶだろう。

だが、その誰でもない。サードの試合出場三位は、この岡崎なのである。ゴールデングラブも、サードに人を得なかった当時のセ・リーグの情勢においても、優勝補正のあった９０年のみ。打撃も三割を一度も記録したことがなければ、本塁打も１２本が最多。足も遅く、すべてにおいて特徴に欠けるこの岡崎が、三位の位置につけているのは、本人の努力か。村田と同じく、８０年代の投手偏重ドラフトによる野手の人材不足の賜物か。

内海に送られた秘密の指令とは、近鉄ナインの感情をとにかく逆撫ですることだった。これはパチンコ屋で野茂らを煽った大森からの流れであるが、野球とは、メンタル面が大きなウエイトを占めるスポーツである。

試合直前に、近鉄ナインの闘志にいたずらに火をつけることは、巨人にとって何のプラスがあるのだろうか。

国外追放処分はいつとけたの？

巨人の狙いは、近鉄を煽って、因縁ムードを作り上げることにあった。西武ソフトバンクような強豪チーム相手や、真の伝統の一戦を繰り広げることができる阪神相手とは違い、近鉄相手では話題性に欠ける。

そこで練りこまれた作戦が、近鉄に喧嘩を打って、対決ムードをムリヤリ作る戦略。これは球団内部より、読売新聞や日本テレビ側から出てきた作戦である。

野球は精神面が大きく左右するスポーツだ。

巨人はロッテより弱い事件のお返しを近鉄に食らわせられることを危惧する声もあったが、大会自体の盛り上げという興行的観点が優先されることになった。

ただＯＮの汚れなきスターにこの任務を与えることは、ブランドイメージの失墜につながる。そこで、この役目は、主に、ベンチから漏れた選手、関係者がおこなうことになった。

大森が、パチンコ屋で見せた、近鉄軍団に対する数々の失礼な態度は、この作戦の一環であることは、言うまでもない。

近鉄より巨人二軍と日頃から公言していた大森だけあって、この役割は、まさに天職。筋書き通りの煽りに、本音混じりのアドリブを混ぜて、見事な近鉄、ひいてはパ・リーグ勢相手の煽りっぷりであった。

今、グラウンド上で先輩石井浩郎相手に煽り続ける仁志も、巨人、メジャリーグ優先の言動から見て取れるように、大森に近い気性の持ち主。

喧嘩っ早い性格も相まって、上々な演技を見せている。

それに比べて、内海はどうだろうか。

人が良くもなければ、悪くもない内海の性格。さらに、そこに物覚えの悪さが重なれば、煽りのセリフがスラスラと出てこないのも

無理はない。
　喧嘩は、売り言葉と買い言葉のテンポのよい応酬によって、その火花が燃え上がるもの。
　内海のように、カンペ片手に、たどたどしい煽り文句を並べていては、その炎は一向に燃え盛らないだろう。
　仁志は思わず内海を睨みつけて、中畑はグラブで顔を隠し、必死に笑いをこらえている。
　石井も、何かがおかしいと感づき始めている。
「なにを、この内海が！　私と勝負がしたいって！　望むところだ！　早稲田～アマ全日本、近鉄、巨人、ロッテ、横浜で４番を張ったスラッガー男・石井浩郎を君のボールで打ち取れるかな？」
　石井が見事な口上を並び立てても内海はすぐさまに返さない。
　頭にセリフが空っぽの上に、頼むのメモ紙を紛失してしまったら、内海の脳をフル回転しても返すセリフは飛び出ない。
「え～っと、えーと」
　悪事をつかれて言葉につまる悪徳政治家のように、内海の口は回らない。
　内海の目線が、なくしたメモ紙にあれば、石井の視線もそちらにいく。
　石井は足元に内海の落としたメモ紙があることに気づき拾い上げると、すぐに声に出して読み出した。
「なになに～　相手が喧嘩を買ったときのセリフマニュアルだって？　1、弱小球団がいい気になりやがって。2、巨人二軍に勝てると思ってるのか？　これはさっき内海がいった言葉だな…そういうことか…」
　並の頭の持ち主の野球選手なら、入り組んだ展開の整理に若干の時間が必要なところであるが、石井は現役で、早稲田の二部に合格した頭脳の持ち主。石井はすぐさま事情を飲み込んだ。
「そういうことか…どうもおかしいと思った。そういうえば、野茂がパチンコ屋で偶然、沢村投手に出くわしたとき、すべては大会運

営上のこと。これからなにが起きても、近鉄の諸君は、あまり腹を立てぬようにといわれたそうだ。そのときは意味が通じなかったが、今は氷河期の氷が氷解したように事情がつかめる」

石井はメモ紙を握りつぶすと、巨人の植えたタネを暴き出した。

「大森がとったとされる態度も、今の仁志の私への無礼も内海の啖呵も、すべては演技というわけか…。紳士たる巨人軍の選手がする言動とは思えなかったが、これで合点がいったよ。巨人軍の意図はつかめぬけど、近鉄ナインに余計な感情を植えつけたことはたしかだね…。後悔しないように…」

ミステリー小説で謎解き役のように種明かしを続けるが、内海は気付いていない。アドリブでこの場をやり過ごそうとするが、適当な言葉が出てこないのである。

「あわわわ…わあわわわ…」

今の内海は、オリックスにドラフト指名されたときよりも、仲澤の起こした無免許飲酒運転事故でセンバツ辞退になったときよりも、東野の故障で日本シリーズ緊急登板したときよりも、動揺している。

石井の種明かしも、ベンチ際で巨人選手が扮した警備員と押し問答を繰り返す近鉄ナインは気づかない。

いくら腕っ節自慢の近鉄ナインでも、２０名そこらじゃ、６０人以上に及ぶ警備員相手には、多勢に無勢。

選手一人に警備員三人がかりでは、さすがに分が悪い。

そこで飛び出てきたのが、近鉄が誇る外国人軍団である。

日本語のわからぬ彼らは、巨人二軍選手の言動に腹を立てることもなかったが、この状況をみれば、自ずと立ち上がる。

ブライアントだ！　マニエルだ！　そしてデービスだ！！　日本人にはとうていかなわぬパワーの持ち主たちが立ち上がれば、劣勢もひっくり返せる。

ブライアントは、緒方耕一や井上真二をちぎるように投げ飛ばし、マニエルは、水野雄仁や吉原孝介に頭突きをお見舞いすれば、デー

ビスは、あの東尾に浴びせたパンチのラッシュで山本和生や、笹本信二らを蹴散らす。

「ガッデム！！」

デービスの闘争心に火がついてしまった！　東尾の暴行事件から暴力を振るわないと誓っていたデービスが、ここにその封印を解くのだ。（大麻の封印はしていなかったようだが）

デービスは脱兎の勢いでマウンドまで走っていくと、打者の敵は投手との本能からか、マウンドにいた内海を羽交い絞めすると、パンチをラッシュ。

事情がつかめない内海はただ殴れるだけ。

さあこうなると、両軍黙って入られない。影の武闘派、岡崎が割って入る。中畑、村田に外野にいた清水隆行、松本哲也、末次利光らまで走ってくる。

石井は止め役に回るが、その乱闘は意外にもこれ以上広がりを見せない。

監督、西本の的確の指示により、近鉄ナインの加勢が止められたのである。

西本の判断は正しかった。デービスは前代未聞の試合前退場を喰らうが、罰則を受けたのはデービスだけ。石井は傍観者を決めていたし、乱闘に加勢した巨人ナインはベンチにも入っていないのだ。

デービスという貴重な戦力を失ったが近鉄ナインが燃えるのには、これ以上の材料はなかった。

試合はいやにも白熱することになるが、そこに加わるはずの役者が一人欠落していた。

「ローズは？　ローズはどこや！！　なに、まだドーム入りしていないだと！！　どういうっこっちゃ！」

ベンチ裏で、佐々木恭介打撃コーチの罵声が飛ぶ。

ゴジラ対ジャイアン

「両軍の先発バッテリーを発表いたします。先行のジャイアンツのピッチャーは堀内　背番号１８！　キャッチャーは阿部。背番号１０！　後攻のバファローズの…」

先発バッテリー発表の時間に、また問題が起きていた。

「松井はどこだ！　ゴジはどこいったんだ！！」

土井正三内野守備走塁コーチが叫ぶ。

なんと、近鉄はローズ。巨人は松井と、両軍の主砲の球場入りが遅れているのだ。

連絡をとろうとするが、ケータイも不通の状態で、両者とも音沙汰がない。

二人ともスタメン入りしているため、球場入りがかなわなければ、即、他の選手と交替。いわば、偵察要員の扱いになり、このゲーム、出場不可能になるのだ。

なんとしてでも、試合開始前の球場入りの必要があるのだが、先に連絡を取ってきたのが、松井の方であるが、

「遅れます」

の一言で連絡を絶ったのだ。

「ああ、寝坊しちゃった～。もう5時か～」

夕方近くまで寝過ごすとは、松井はどういったタイムスケジュールを刻んだのか、気に掛かるところであるが、いまはそれどころではない。

ただ遅刻慣れした松井は、悠然としている。

「顔洗って、歯を磨いて、新聞読んで、メールのチェックして」

そんな場合じゃない。松井の借りた特別の宿舎から、ドームまで、およそ４０分。のんきに朝の営みを消化している暇はないのだ。刻一刻を争う事態。

「あ～　懐かしい。日本の夕方の時の流れ～　夕方5時になると、いっせいにニュースが始まるんだよなあ～」

テレビを見ている暇もない。

「今日の相手どこだっけ。あ、近鉄か。先発誰だろ。野茂さんかなあ。オレ、あの人とまともに当たった事ないんだよね。メジャーで対決してホームラン打ったけど、とうに全盛期を過ぎてたから、参考にもならないし…」

だから、そんなチェックは、球場入り後でもできるだろう。君は、巨人の五番打者。王、長嶋と、夢のクリーンナップを組む一人なんだから、遅れることは許されないんだって。

「日テレに替えるか…。中継やるから、直前情報とかやるかもしれない…」

リモコンを探してる暇ないって。

「お、オレのホームランカード。この大会用のも出るんだ。へ～知らなかった。なら、一本くらい打たねーとカッコつかねーなあ…」

間に挟まるCMに関心する暇もないぞ。

「ほ～　さらに、王さん、長嶋さんとオレに一発が飛びでれば、特別カードも発行するんだ。これはオレも欲しいなあ」

試合のCM明けに、また試合のCMを繰り返す、日テレの営業不振も問題だが、松井の態度はもっと問題だ。

「さあて…と…出陣といくか…」

おい、ちょっと待て、松井の服装はパジャマ姿だぞ。

「いっけね」

そうそう、迅速に着替えに取り掛かるんだ。

「パジャマだ…」

松井は、クローゼットを漁るが、私服がないことに気がつく。

「あれ…。あ、荷物に入れ忘れたんだっけ」

なんたる惨状。遅刻の上に着てく服がないだって？

それでどうやって、外出するんだよ。

「でも肝心のユニフォームはあるのさ」

そうユニフォームがなければ、絶望的だけど、それがあればまあなんとかなるか。

「よし、バックに、ユニフォームの上下を詰めて…おっといけね」

おやおやまた失策ですか？

「これヤンキースのユニフォームだった。あれ、オレ今なんの試合にいくんだっけ？　近鉄と対戦することはわかるけど、オレの所属先が…エンゼルスじゃないし」

そこ忘れるか。

「巨人…そうそう、巨人、巨人…。ちょっと待てよ」

また待ったかよ。

「今日は、ホームの試合だっけ、ビジターだっけ…。ユニフォーム二つ詰めて置けば、間違いないけど、かさばって入らねーや」

お前は、今、東京ドームに向かおうとしているんだろ？　ドームといえば、巨人の本拠地。こんなこと日本人の7割9分3厘7毛は知ってるぞ。

「ちょっと待てよ…。今日の試合は神宮だから、ビジターか」

おいおいおい、そっちか、向かう球場が分からなかったのか。ところで、どうして巨人と近鉄が、縁のない神宮でやると思う？

「ビジター用のユニフォームを詰めておこう」

おいおいおいおいおいお、大丈夫か、松井、遅刻の上に忘れ物とはスター失格だぞ。

「でも万が一ってもあるな。そうだ、ホーム用のユニフォームを着てけばいいんだ。もしビジター試合なら着替えればいいし、まがり間違って、ホームの試合なら、そのままユニフォームで挑めばいい。オレって頭いいや」

窮地挽回。松井の明晰な頭脳は的確な答えを弾き出した。っておい。

「さあ、球場いこうか」

あらら、巨人のユニ着て外出ちゃったよ。まあ公共の乗物を使用するわけじゃないからいいか。車から球場入りなら、ドアツー

ア。ユニを着てても、気づかれることはない。
「あ、いけね」
またかよ。
「車のキーねえや」
しっかりしてくれよ。
「どうしよう、いまさら、探してる暇ねーしな」
わかってきてるじゃないか。そうだ、君には時間が無いのだ。
「まあいいや、タクシー呼ぼう」
そうそうタクシー呼べば、車を動かせなくても、万事解決。ん？
いや、巨人のユニフォーム着て、タクシー呼ぶのもおかしいだろう。ま、このさい、その程度かまっている場合じゃないか。
「もしもし、タクシーお願いします」
松井が呼んだタクシーは、飛ぶような速さでやってきた。
「どうも、藤島タクシーの藤島です」
「なに？　会社名と運転手さんの名前一緒じゃん。個人タクシー？」
「ええよくおわかりで」
さすが松井だ、頭の回転が速い。
「日本ハムにいた藤島誠剛って覚えています？」
「うん、そういうえばなんかいたような気がするような…。運転手のご親戚かなにか？」
「私、本人なんです」
「へえ～」
もっと驚け。
「腕っ節の強さとその風貌から、ついたあだ名がジャイアンでした」
「ほ～」
もっと関心を示せ。
「松井選手とは、オープン戦やイースタンの試合で何度か顔を合わせましたよね？」
「あれ？　オレが松井秀喜ってわかっちゃった？」
そりゃユニフォーム着てその面なら誰でも一発だろ。

「さっき、行き先を神宮球場とおっしゃいましたけど、今日の試合は東京ドームなのでは？」
「マジ？？　あ、ほんと、いやあ、ありがたい。うっかりと違う球場いくところだった。じゃ、ドームに直行ね」
もっと感謝しろよ。

松井がなんとか間に合いそうな、一方、ローズと来たら？
バイクにまたがったはいいが…。
「ドームまでの道順忘れてもうた」
あらららら。

予想だにしない選手が続々と登場

「いやあ、先発前日の緊張感をほぐそうと、ここに来たけど、ゲームにハマっちゃたなあ」

阿波野は盛んにのびをする。

「あれ、阿波野さん、明日の先発なんですか？」

「そうだよ。西本監督直々にいわれてね」

「てっきり、野茂か、草魂投手かと思いましたよ」

「ああ、僕もまさか、開幕の大役を仰せつかれるとはね。思ってもみなかったよ。しかも相手は僕が所属していた巨人と来れば、燃えないわけにはいかないよ」

「ところでどうして阿波野さんなんですかね？　野茂か草魂投手の真っ二つですよ。世間の論調は。裏をかいたんですかね？」

「僕もそうかなと思って西本さんに問いただしたんだよ。身にあまる光栄ですが、話題作りや奇策なら、辞退させてもらいますってね。そういうと西本さんは、真っ赤な顔をして、阿波野、お前が大舞台に強いから、大事な開幕に、お前を選んだやといってくれてね。御大にこうまでいわれたら、受けないわけにはいかないよ」

「そうですよ！　阿波野さん！　憎き巨人を一蹴してくださいよ！」

「わからん。二年東京生活していて、何度も通った道なんやけどなあ～　さっぱりわからんわ。巨人時代の記憶を抹消しようして、一緒に道順まで消してしもうたのかなあ」

またがったはいいがローズ、道順を忘れている。松井のようにタクシーに切り替えればいいが、ローズはバイク通勤にこだわるのだ。

「巨人は、ワシのバイク通勤を許可せんかった。その恨みや。意地でもバイクでドームまでいったるで」

あくまでもカワサキから貰い受けた愛用のバイクにこだわるのだ。

ヘルメットをかぶり、いざ出陣！　エンジンをふかして、さあド

ームまで出発だ。
「道順忘れたが、走ってればそのうち思い出すやろ」
なんという無鉄砲ぶり。だが、それもまたローズか。
が、ローズ。道順を思い出すどころではない。のっけから渋滞に出くわす。バイクの機動性を借りて、すいすいと車の横を走り抜けようとも、あいにく、その道もバイクが塞いでいる。今日は、ローズの邪魔をするように、バイクが列をなして走っているのだ。
「あかん。渋滞や！　だから東京はいやなんや！　人が多すぎるんや！！　大阪みてみい。みんな、せかせか運転するから、渋滞なんぞ起きへんで！」
東京の比較に米国の都市を持ち出す当たり、米国系大阪人のローズらしいか。
「どないしよ。ワシをボロ雑巾のように捨てた巨人に恨みを返す絶好の機会やで」
ローズは立ち往生を余儀なくされる。
「ああ、もどかしい。これがメジャーのビックゲームやなら。警官の先導で、他の車両を追い越していけるのに…。日本はまだまだスポーツへの理解度が低いで」
ローズの嘆きもよくわかる。
アメリカに比べて、日本のスポーツ環境の貧弱なこと。それを少しでも是正しようとこの大会は、密かにメジャー方式にのっとっていた。こんなケースを予測して、球団の電話一つで警察官を手配される仕組みになっていたのだ。
「ローズが遅れている。ひとつ頼むわ」
「へい」
まるで出前を頼むように、佐々木恭介が管轄の警察に連絡すれば、はいいっちょとポリスがすっとんでいく。

「へイ、ローズ」
誰かがローズを引き止める。

「なんや」
思わず、関西弁で返したが、声の主のイントネーションは、明らかに英語圏のもの。それもそのはず、ローズに声をかけたのは、白人の警察官だったのだから。
「ワシになんのようだ」
「お前、ドーム行くんだろ？　オレが先導してやってもいいぜ」
バイクに跨る警官は、みるからに大柄で、腕を丸太のように太い。
「なに？　それは本当か？　ところで、みたところ白人のお前がどうして日本で警官をやっているんだ？」
「ふん、なんだ、ローズはオレのことを知らんのか？　無理もないか。お前より２０年もまえに日本にいたのだから。オレの名前はハル・ブリーデンさ。元阪神の一塁手で、引退後は、アメリカに戻って保安官をつとめた。それゆえか、オレが大会中に特別に日本の警察に招かれて、君のようなうっかり者のために、交通整備ってわけさ」
「なるほど。そうなのか」
「ヘイ、ローズ、のんびりしている暇はないぜ。オレが先導するからついてこい」
「イエッサー」
ブリーデンの先導の元、ローズのバイクが走る。制限スピードをはるかに超えているが、警察官の先導の元だ、スピード違反で捕まるわけはないのである。

「マー君」
「なんすか、岩隈さん」
「オレ、明日の先発」
「マジですか？」
「それが、マジなのよ。西本監督に呼び出されてね。ＷＢＣの快投に興奮した。開幕はお前しかいないっていわれてね」

「マジですか？」
「うん。巨人打線は、強力だ、１００球くらいでへばり切ると思うからマー君、後、よろしく頼むよ。近鉄リレーならぬ、楽天リレーで打倒巨人といこうじゃないか」
あれ？　阿波野も岩隈も明日の先発だって？　どういうことだ？
西本監督、ぼけちゃたの？

西本御大の頑固野球

一番セカンド大石大二郎。二番センター、タフィー・ローズ。三番ライト、チャーリー・マニエル。四番レフト土井正博。五番ファースト、ディック・デービス。六番ショート中村紀洋。七番サード石井浩郎。八番キャッチャー梨田昌孝。

これが近鉄のオーダーである。なんとも恐ろしいほどの重量打線。守備も走塁も小技もすべてお構いなしの布陣である。ショートノリ、サード石井など慣れたポジションでなく、あくまでサブのポジションを守らせるわ、外野の真ん中にローズを置き、もっぱらＤＨであったマニエルを守らせるわ、まさにファイヤーフォーメーションである。

だがこれも巨人には打ち勝つしかないという西本監督の信念からこそ。ぶれない姿勢は、奇想天外のオーダーに説得力を持たせる。

「ドームは、胸糞の悪くなるほど、狭いんや。外野なんて、二歩、三歩走れば、すぐにフェンスやないか。守備なんていらんわ。一点二点与えても、それ以上取ればいいんや」

西本が最初に吐き出した構想は、実に単純明快で、なおかつ、近鉄野球の方針をズバリと示すものであった。

「シーズンで３０本打った経験のあるやつ全部入れえ」

その西本の指示の下、ピックアップされた日本人が、土井、中村、石井、栗橋茂、羽田耕一であり、ジョーンズ、マニエル、バンボ、デービス、クラーク、ローズ、ブライアントであった。

「日本人は全員ベンチに入れますが、外人の方はポジションが重なりすぎて、厳しい」

この佐々木恭介の助言の元、外国人の方は激選され、ジョーンズ、バンボがその選からもれることになったが、その一人であるデービスの退場で、試合開始早々に入れ替える必要がある。

一塁に穴が空いたとなれば、石井を本職の一塁に、戻し、石井の

三塁にノリを入れて、ノリの遊撃に守備の人を入れれば、内野陣は俄然締まってくる。

あるいは、一塁も守れるレフトの土井を回し、ローズをそのレフトに、センターに大村や新井のそれらしき外野手を入れれば、外野の守備が固まる。

ところが、西本の策は、あくまで攻撃的。空いた一塁手にそのまま一塁手を入れるのだ。

「誰がええか？　五番にふさわしい奴おるか？」

そうなのである。デービスは五番に入っている。つまり守備の人を入れると、とたんにクリーンナップが軽量化するのである。

オールスターが凌ぎを削るこの大会。打線の穴がひとつでもあれば、先日のハムとヤクルトの試合をみればわかる通り、いやらしく、そこを攻め立てる作戦が取れるのだ。

大村や新井を入れれば、つなぎ役としての機能を果すだろうが、掃除役の役目は期待できない。

ショートの守れる、守備の人を入れれば、さらにその穴は際立つことになる。

そもそもノリが遊撃につくのは、近鉄の慢性的なショートの人材難からくるものである。

鈴木武、矢ノ浦、安居、石渡、吹石徳一、村上、水口、真喜志、吉田剛、武藤、前田忠節、阿部真宏…そして楽天から渡辺直人。

これが歴代の近鉄楽天のレギュラーショートであるが、今ひとつ飛び抜けた人材がいないことは、すぐに見て取れるだろう。

天才と称された矢ノ浦は、ギャンブルに身を滅ぼしたことでもわかるように、プレーにムラがありすぎるし、安居や鈴木武は盗塁王経験アリの俊足の持ち主であるが、いかにも非力。近鉄史上ただ一人の長打の打てる遊撃手である村上隆行は、わずか三年で、遊撃手を首になったことでわかるように、守備に難がありすぎる。

武藤も同様。ただ一人の三割遊撃手であるが、その守備は、素人と叩かれたほど。真喜志、前田の優勝時の守備職人は、、打撃が貧

弱すぎる。いくらショートは、守備力第一とはいえ、一割台の選手を抜擢するのは、いかにも厳しい。

吹石も遊撃手のレギュラー経験アリだが、それも便利屋として、たまたま多く遊撃についただけ。

そこで俎上に残ったのが、阿部、水口、石渡、渡辺のバランスの取れた選手たち。

いずれも大学出の選手らしく、基本に忠実な破綻のないプレーが持ち味。それでも、飛び抜けた数字を残したわけでないこの４人から、一人のレギュラーを選べというのも無理がある話。

肩の弱い水口に遊撃は無理。楽天生え抜きの渡辺をあえて近鉄チームに抜擢するほどの実績もない。

阿部か石渡の二択となれば、西本近鉄連覇時の正遊撃手で、近鉄遊撃手ただ一人のベストナイン経験者でもある石渡が、選択されるのも必然だろうか。

とはいえ、石渡も主に九番など下位打者をつとめた打者、いきなり五番の打順に食い込むのはいかにも弱い。

「一塁守れて五番打てる誰がおるんや？　土井を一塁に回せて、左翼に入れれるやつでもええ」

これだけ強打者を打線に並べて、控えに五番相応な打者がいる分けがないというのは、ペナントレースのお話。

この試合は、歴史上のオールスターだ。人材はいくらでもいる。

「ブライアントで行きましょう」

「ブライアント？　う～む」

西本が、ブライアントの起用にためらう訳がある。長距離砲好きな西本であるが、それは打率が備わってのこと。ブライアントのように三振が多すぎる低打率の大砲は、最も嫌うタイプなのである。

そのブライアントをベンチに入れたのも、一か八かの一発が欲しい場面での代打要員であり、それほどのプライオリティが高い選手ではなかった。

しかも当て込む打順は、最も走者が塁上を賑わすともいわれる５

番である。下位打線で自由に振り回せる打順ならまだしも、5番ブライアントは、当たる確率が極めて低い賭けに近い。

「う～ん。う～ん…。そや、ウチが先行いうことは、すぐに選手交代を告げることもないんやな？」

西本のいうとおり先行の近鉄が、いわゆる当て馬を正規の選手に交替する場合、初回表の攻撃でその選手に打順が回った時か、裏の守備についた時点である。

つまり、表の攻撃に5番まで打順が回なければ、選手交代は裏の守りまで後回しにできる。

「そんときに決めればええ」

時に決断力が鈍るのも、西本御大の特徴か。

一方の巨人ベンチは、近鉄の送り込んだ開幕投手に目を白黒。巨人が敷き詰めた情報網は、近鉄の先発を、右の岩隈久志で間違いなしとはじき出していた。

岩隈用に左打者をずらりと並べたのだが、コールされた投手は、左腕の阿波野秀幸である。

「すみません…川上監督…」

情報収集を任された西山一宇スコアラーが、川上にお目玉を食らっている。

「ばかもーん！　お前が岩隈で間違いなしというから、ワシは左打者を並べたんだぞ！！　西山！　お前はスコアラー担当から外す！　荷物運びでもやっとけい！」

先発を読み間違えた西山に対する川上の怒りもわかるが、西山にしても野茂か鈴木啓示の二択といわれる中、岩隈の抜擢を読んだ西山の着眼点は悪くない。

実際、西本は、阿波野と岩隈の二人に開幕の先発を言い渡していた。岩隈の前日の行動と調整を見て、西山は岩隈の先発を確信したのであるから、優れた調査・分析能力の持ち主といえよう。

ただその岩隈がダミーであることまでは、気づいていなかった。

阿波野先発も選には残っていたが、それもゲームセンターにハマっている時点で頭から消えていた。

まさか開幕の重圧に飲まれている投手が、ゲームセンターに入り浸るわけがないとの思い込みが、阿波野登板の可能性を抹消させたのである。

いわば、巨人にない、近鉄の緩さが、先発隠しにつながったのである。

ただダミーとして使われた岩隈は気分がいいものではない。

「よくやった。お前のおかげで、向こうさんのベンチはあわてふためいている」

恩師でもある久保投手コーチに、そうフォローされても、岩隈のわだかまりは消えない。岩隈がダミーに選ばれたのも、野茂や鈴木と違って、ダミー扱いされても、笑って済ましてくれる性格と見くびられていたからだ。

実際の岩隈は、野茂や鈴木に劣らず強情な性格であり、高いプライドの持ち主。

「……」

リリーフ待機を命じられた岩隈であったが、その命令を無視し、田中将大を引き連れて、ロッカーに立てこもったのだから、さあ大変。

そして近鉄ブルペンでも、とんでもない事態が起きていた。

「生涯先発完投がモットーであるワシやが、西本御大直々にリリーフの切り札になってくれいわれたら、断りきれん」

西本に岩隈と同じくリリーフ待機を命じられた鈴木啓示。珍しく素直に従ったと思いきや、ブルペンで王様気分。

「吉井、肩揉め。赤堀、お茶入れい。大塚、よっしゃー、よっしゃーうるさいぞ。黙って投げい」

継投策必至のこの試合。ブルペンがこれではどうなることやら…。

阿部はＶ９首脳陣の信頼を勝ち取れるか

クロマティ８　篠塚４　王３　長嶋５　松井７　高橋由９　阿部２　坂本６　堀内１

これが、川上の決めた巨人軍７５年の歴史のベストオーダーである。クリーンナップをＯＮ＋松井で固めることはあっさりと決まったが、その他のポジションの選考は難航を極めることになった。

その結果、割り出されたのが、右投手と左投手でガラリとオーダーを替えるツープラトン方式。

左投手の先発が予想されるならば、松井以外の二人を外し、高田やスイッチの柴田を入れることができるし、二塁の篠塚のところには、右打者の千葉茂が控えている。捕手の阿部のところは、ＭＶＰ捕手山倉で代用できる。

重厚な戦力を持つ巨人軍。右か左か先発の利き腕さえわかれば、八つ裂きにできる攻撃力を披露できるのであるが、肝心の先発の読みを外したら、それは満足に機能しない。

不動の松井と王を含めて、ラインナップに左打者６人も並んでいる。左投手の阿波野相手にいかにも分が悪いと思われるが…。

「川上監督、こんなデータがありますよ」

策士牧野茂ヘッドコーチが見つけきたデータは、巨人ベンチの動乱を沈めるに十分なものがあった。

「阿波野は、左打者を苦手にしているのです。見てください、このデータ。阿波野のベストシーズンの１９８９年のものです。左打者に対する被打率が、右打者の時のそれを大幅に上回っているでしょ？　つまり、慌てて右打者をつぎ込んで、ベンチのコマをいたずらに浪費することもないんですよ」

高田外野守備走塁コーチ兼外野手が、すぐに牧野のデータの正当性を裏付ける。

「さすが、牧野ヘッド。気を見るに敏だ。私も、日本ハムの監督時

代、阿波野とよく対戦しましたが、たしかに、左打者には投げにくそうだった。右打者には、得意のスクリューボール系の球やクロスファイヤ気味に飛び込むストレートを存分に使えるんですが、左打者相手だと、そうはいかない。左打者の体に切れこむような球筋のスクリューは、左打者相手には投げづらいですからね」

「でかした。牧野。さすがワシがこれと見込んで、中日派閥から連れてきた男じゃ」

川上のお褒めの言葉がすかさず飛ぶ。

川上がいうように、牧野は元々中日の人間。明治大から中日、引退後はそのままコーチとがちがちの中日の男を、親会社同士がライバルである巨人が引き抜くには、いろいろと軋轢があっただろう。事実、牧野ら外様コーチの招へいは、ポスト川上を狙う内部の人材を一掃するためという批判もあった。

実際、川上にも、やましい気持ちもあったろうが、牧野の優れた頭脳を買ったことも事実。牧野は期待通りの知謀を見せ、Ｖ９巨人の影の立役者の一人となったのだから、川上はやはりＶ９監督らしい慧眼の持ち主だ。

それにしても目につくのは、坂本勇人の抜擢である。大会開催決定時には、冗談でも名前が上がってこなかった男が、異例の大躍進。２００９年の活躍で、川相や二岡をごぼう抜きで、レギュラーショートの座を射止めてしまったのだ。

なるほど、たしかに０９年の坂本の成績は素晴らしい。だが、二岡のベストシーズンは、０９年の坂本のはるか上をいくものである。巨人軍遊撃手史上最多の２９本の本塁打を打った０３年の成績がそれだ。

ＯＰＳは０３二岡８２５、０９年坂本８２３とわずかな差であるが、二岡の１４盗塁に比べて、坂本の５盗塁はいかにも少ない。

いまでもこそ二岡は守備に難のあるイメージが強いが、当時の二岡といえば、強肩に広い守備範囲を誇るまさに大型遊撃手にふわしい選手であった。

それでも坂本が抜擢されたのは、二岡の度重なる女性スキャンダルを上層部が嫌ったという話もあるが、川上が坂本の無限の可能性を見出したことが一番の要因であろう。

そして、捕手はＶ９巨人の司令塔、森祇晶ではなく、阿部慎之助である。川上の分身ともいわれる森だけに、スタメン捕手は森を予想する声が大きかった。打撃はいうまでもなく雲泥の差であるが、森には阿部にない頭脳と経験があるからだ。

その森をベンチに追いやってまで、阿部にこだわったのはなにが原因であろう。

「ふん…どうしてオレがスタメンやないんや」

森はこのとおりベンチでふてくされている。

「ホリか？　堀内がなにか監督にいうたか？」

森の推理はズバリ当たっている。阿部の起用を進言したのは、バッテリーを組む投手の堀内自身である。

なにも、堀内が森の人間性を嫌っているわけではない。

「森さんは、たしかに厄介な性格な人だけど、それとこれとは別だよ。オレは人間関係を野球に持ち込むほど、嫌らしい人間じゃない」

堀内はそう弁明するが、ねちねちした森の人間性を堀内が毛嫌いしていることも間違いはない。

現役時代も、堀内は森とバッテリー組むことを嫌い、年の近い吉田孝司をわざわざ女房役に指名したほどだ。だが、原因は森の性格だけではない。

「よう、慎之助。まさか、お前とバッテリーを組む日が来るとはな」

堀内は、マウンド上で阿部と打ち合わせをする。知っての通り、阿部と堀内は、元監督と主力選手の間柄だ。一部選手とは、どうも相見えれなかった堀内かんとくであるが、阿部との間には何のわだかまりもないのだ。

「どういった配球の組み立て方をするかって？　お前は、難しいこと考えなくてもいいって。慎之助のリードじゃ心もとないからな」

堀内はそう毒を吐くが、本当のところは、阿部の成長を認めてい

るのである。

「配球に迷いがあった若い頃の阿部じゃないんだ。今の阿部は成長した。配球を任せてもＯＫだろう」

遅刻寸前に駆け込んだ松井もちゃんとレフトの守備位置にいる。

さあいよいよプレーボールだ?！

パナマの怪人

大石大二郎が打席に立つと、近鉄の外野応援席から『鉄腕アトム』のテーマソングが鳴り響いた。

大石と巨人の対決とくれば思い出せれるのが、１９８９年の日本シリーズである。大石は初回先頭打者アーチを掲げ、近鉄三連勝の勢いをつけたのだが…。

「ローズはまだかい」

佐々木恭介が怒鳴りあげる。

「今、連絡がありました！　あと五分もすればドームに到着できるって！」

「あほう！　その五分が命取りなんじゃ！　ローズは大二郎の次の二番打者や。もうすぐ打順が回ってくるんじゃい」

遅刻したローズは、ブリーデン保安官の先導のもとドームを目指していたのだが、まだ到着していないようだ。

ネクストバッターズサークルには、控え選手である小川亨がローズの代用として置かれているが、デービスに続き、ローズまで偵察要員と化したらば、近鉄の戦力ダウンは甚だしいものがある。

「どや、恭介！　ローズは到着したか！」

「それがまだなんですよ！　西本御大！」

「なぬ！　それじゃローズにも代打を出さなあかんのか！」

近鉄にとって、それは悪い話ばかりではないのかもしれない。二番センター・ローズは、いかにも攻撃面を重視しすぎているし、あまりにも守備と小技を軽視している。

もし、ローズの代わりにネクストに置かれている小川でも、新井宏昌でも大村直之でも、二番センターに相応できる選手を入れたなら、打線はつながりをぐっと増すだろうし、守備陣はそれなりに機

能するだろう。
西本監督も、覚悟を決めたようで、ローズの代わりとして、
「新井！　お前、小川の替りにネクスト行け」
新井を選択、指名した。
大石と長年、一、二番コンビを組んだ新井ならば、小川よりローズの代役に適役と見たのだろう。
それでも西本は、ローズという戦力ピースが欠けることに、ためらいを見せる。
「やっぱり、ローズは惜しいなあ。打倒・巨人に燃えるローズの力がどうしても必要やったんや…。恭介、なんとかなるんか？」
「なりますよ」
「ほんとか？」
「ちょっと規則違反をしますがね」
「それくらいなんや。巨人なんぞもっとえげつないことをしてきたやないか」
「ローズはもうすぐ到着します。おそらく裏の守備には間に合うでしょう。問題は、この表の打席。この打席だけ他のローズによく似た誰かを置いておくんです」
「そりゃええ考えやが、問題はローズに似たやつがどこにおるかやなあ」
「いますよ」
「はよう持って来い」
「万が一の用意遅れを考慮して、大石には待球を指示してください。なるべく時間をかけるようにと」
「よし、わかった！」

阿部は、吉田孝司バッテリーコーチから、うんざりするくらい山のような近鉄の資料を提示されたのだが、中でも阿部の目を引いたのが、８９年の日本シリーズのＤＶＤである。

紙の資料を読み進めるのは、どうも苦手な阿部であるが、これが映像だと、すいすいと頭に入るのだ。

何度も繰り返し見た映像で、とびきり印象に残るシーンが、今、打席にいる大石の先頭打者本塁打であった。

「小柄だけど、十分一発のある人だ。注意しないといけないなあ～。慎重に慎重を重ねて、ボール球から入ろう」

阿部は、この研究結果が裏目に出ることにまだ気がつかない。ローズ待ちの大石に、ボール球で攻めていくのは、いかにも愚行。

いたずらにボールを重ねて、カウントを悪化させるだけである。

いつもの堀内なら弱気な配球は断固受け付けないタイプであるが、今の堀内は、阿部の成長に心酔しきっているのだ。

「なに？　ボールから入れ？！　慎之助、初っ端から、これまたずいぶんと慎重だなあ…」

口ではそういいつつも、堀内は阿部の出すサインに深くうなずく。

堀内の投じたストレートは外角低めの決まる。

阿部は巧にミットを動かし、ボール球をストライクに見せかけようとするが、今の野球情勢、ミットを動かすのは、逆にストライクもボールに取られる可能性があるのだ。

阿部もよくそれを知っているが、開幕の独特の緊張感から、長年のクセがつい出てしまったのだ。

大石はタイムをかけt、打席を外し、思わせぶりに何度もバットを振って見せる。なにも阿部の意表をつく配球に戸惑いを見せているわけではない。

西本からの時間引き伸ばし作戦を忠実に実行しているのに過ぎないのだ。さすが、大石大二郎。近鉄いてまえ野球に見を染ながらも、その野球観の根っこは、小技と基本にうるさい亜細亜大学野球にある。

亜細亜出身の野手は、スラッガータイプが極めて少なく、赤星、井端と大石型の小粒ながらピリりと辛いタイプが揃うのも偶然では

ないだろう。
彼らは総じて、野球と自分をよく知っている。

「西本監督！　用意ができました！！」
「おう待ってたで、恭介！」
佐々木が引き連れてきたのは、ローズによく似た長身の黒人である。ローズに似せるように、深くヘルメットをかぶり、意識的に下唇を突き出している。
「なにもんや、こいつ。ローズによう似とるな」
「オグリビーですよ！」
「ああ、どっかで見た思うたが…」
佐々木が探し出してきたローズのソックリさんは、なんと、ベンジャミン・オグリビーであった。
ベンチ入りをしていないオグリビーが、球場にいたのはたんなる偶然。近鉄の応援と決め込んで、ポップコーン片手に観戦していたオグリビーを、内野守備王塁コーチの安居が目ざとく見つけ、つれてきたのである。
日本での実績はローズに劣るが、大リーグでの格は、ローズのはるか上。ブリュワーズの主軸をつとめ、本塁打王に輝いた経験もあるのだから、これ以上の代役はいないだろう。
ただ問題はある。
「その、西本監督、オグリビーのやつ、すでに出来上がっていまして」
「なにがや」
「試合もまだいうのに、ビールをガバガバ飲んで、アルコールが相当回ってきているようです…」
あららら、あぶさんじゃないんだから…。
「ウィー、ヒック…」
オグリビーは、のどを鳴らす。

「え、入ってますよね～」

阿部が思わずつぶやく。それだけ厳しいコースの堀内のストレートは決まったのだが、球審岡田の手は上がらない。

阿部は、ミット移動に続き、捕手が犯してはならぬ禁則事項をしてしまったのだが、緊張に身が揺れる今の阿部はそこまで頭が回らない。ゾーンへの無駄な抗議はご法度なのだ。

「コース半分外れている」

球審にコース半分の見極めができる力があるかはさておいて、捕手に勝手にセルフジャッジされたら、審判の心象は悪くなるに間違いはない。

もし阿部が文句ひとついわずに判定は受け入れたなら、同じコースに投げ込んで、ストライクを取ってもらえる可能性があったのだが、それもこの抗議で消えただろ。

主審への無駄な抗議は、損ばかりで、ひとつの得もないのだ。

ノーツーになったことで、阿部は配球を切り替える。

「慎重に攻めて行ってもらちが明かない。大石さんを歩かせるとやっかいだ…。とりあえずカウントを整えよう…」

カウントを悪くしたから、ストライクを取りに行く。実に単純な攻め方の方向転換である。このケース、それで間違いではないのが、阿部のもって生まれての強運さか。

出塁よりも、とにかく時間を稼ぎたい大石にとって、積極的にストライクを取りに行くのは理にかなった配球なのだ。

いくら絶好球がきても、ベンチからＯＫのサインが出ないウチは、前に飛ばせないのだから。

「あれ、簡単に二つとれた…。おっかしいな、近鉄打線は積極的に来るから、注意しろって口うるさくいわれたのに、簡単にストライク取れちゃったよ」

阿部は首を傾げる。甘いコースのストレートに大石がびくともしないのだから。

「待球作戦…？　おかしいな聞いていたのと、近鉄打線のイメージがずいぶんと違う」

２つストライクをとられたのだから、大石が時間稼ぎをするには、ファウルを乱れ打ちするしかない。

ハードルはとつぜん高く跳ね上がるが、大石は、すました顔で対応する。

大石は粘る。とことん粘る。

短く持ったバットをより短く持ち、右へ左へとファウルを乱れ打つ。

ローズに替るオグリビーの姿が見えてもとことん粘る。

しびれを切らした堀内は、

「とっととフェアゾーンに打てよ」

真ん中に投げ込むのだが、そのボールもカットバッティングでファウルにするのだから、巨人バッテリーはたまったものではない。

「ふう…」

思わず根を上げた阿部は、

「大石さん、いい加減にしてくださいよ。ヒットでもいいすから、前に飛ばしてください…」

思わず冗談が飛び出るのだが、それは本音に近い。

ローズに扮したオグリビーがネクストに入る。オグリビーを先導した鈴木貴久打撃コーチ補佐から、ＯＫサインが出る。

打席を外しながら、それを横目でみた大石は、それでもすました顔を崩さない。

大石、本来の打撃がここに解禁される。バットを心持ちか、少し長く持ち、打席に入り直す。

「あれ…？」

阿部は大石に違和感を感じる。大石は、ただでさえ高い位置にあ

ったバットを、さらに高く構える。
「おかしいな…」
さすが経験を積み、捕手としての評価が定まってきた阿部である。大石の少しの変化も見過ごさない。
「こころなしか、バットのグリップ位置と構え方が違うような」
古田や伊東のように、ズバリそれと見破るのではなく、半信半疑の疑問から入るのも、逆に阿部らしいといえるか。
「……打撃姿勢が変われば、打撃の思考も替るはず…。ボール球でもカットしにきたから、ボールを振らせようと思ったが、やめたわ…」
阿部は不確かなヒントから、確かなる答えへとたどり着いた。
今までの大石は、時間稼ぎのため、多少のボール球もカットしてきたが、今度の大石は、ボール球をきっちりと見極めてなんとか出塁をもぎ取ってやろうと企んでいるのだ。
「堀内さん…」
「うん…？　ボール球、ボール球とジェスチャー混じりにオレに要求したクセに、今度はストライク勝負だって…。まったく慎之助のやつ、このオレ様をもてあそんでくれるわ」
阿部と堀内の無鉄砲バッテリーは、力勝負を選択した。打てるものなら打ってみろ！　四球をもぎとれるものならもぎ取ってみろ！
１４８キロ。今日のマックススピードが計測される。コースは内角高目。振り下ろすタイプの大石相手にとって、ここは安全であり、危険ゾーンでもある。
堀内の球威が勝れば、バットをへし折って凡ゴロか、ボールのしたッ面を叩かせての凡フライ。
大石の力が上回れば、スタンドに飛び込む危険性のあるコースだ。
大石のダウンスイングが、ボールをとらえる。
その結果…。
「よし、ボテボテのショートゴロだ！」
阿部がマスクを取って、一塁のカバーに走る。

「これが堀内様の球威よ」
堀内はしたり顔。
「よっしゃ、ええとこ打った！」
西本はほくそ笑む。打者走者は大石大二郎。右打者としても、その出足の良さは俊足の左打ちと同等の一塁到達タイムをたたき出す。凡打をヒットに替える錬金術師だ。
「坂本～！」
阿部が叫ぶ。ショートは坂本だ。大抜擢された首脳陣の期待に添えるか！？
坂本が前進、前進また前進。複雑な回転を繰り返す打球を構わず素手で取ると、崩れたそのままの体制でジャンピングスローだ！
俊敏な動きでボールに回りこめば、取ってからも素早く動きを見せる。その動きは、確実性もあり華もある。
大石が駆け抜ける。一塁の王が大股で、坂本の送球を捕まえにいく。王は守備力も秀でている。ミットさばきは、坂本のワンバウンド送球を後ろに逸らせない。
「アウトだ！」
カバーに走った阿部が、塁審より先に判定を下す。
「アウト！！」
塁審の村田は、阿部のコールに惑わされたわけではないが、アウトをコールする。
「よし、ひとつとった…」
阿部は、たった一人の打者を料理しただけなのに、すでに心身とも疲れきっている。
「ふう…。これで後、２６アウト…。道のりははてしなく長いなあ…」
じっとりと滲む汗を拭う。
それにしても坂本の動きは見事だ、もしもショートが当初の予定通り二岡であったら、今の打球アウトにできただろうか。
積極的に動く坂本と待って取る二岡。そのタイプは、同じ大型遊

撃手にしてまったく異なる。
　ボテボテの打球、二岡のようにゆうたりと構えていたら間に合わない。坂本のように前に出るタイプはこなせるだろうが、打球に対して攻める守備は、それだけ危険性も伴うのだ。
　今の坂本のプレーにしたってアウトにとれたはいいが、巨人の首脳陣は芳しい評価を下してはいない。
「スローイングが乱れていた」
「今の守備はたまたま」
「若いだけに魅せるプレーに走りがちだ」
「王だから処理できた。あれが川上さんなら後ろにやってたよ」
　評価は、一様に辛い。特に、問題視されたのがスローイング。人工芝においてワンバウンド送球は基本であるが、坂本のスローイングの形のでは、送球の弾道が一定しないとみているのだ。
　大抜擢して、なお精進を求める巨人軍の厳しさは、さすが盟主球団か。

「タフィーさん、どうも」
　阿部は、元チームメイトであるローズんい対し、最低限の礼を払ったが、ローズはうんともすんとも返さない。
　それもそのはず、打席入ったのはローズではなくオグリビーなんだから。
「なんだ、無視か。元同僚っていうのに、つれないなあ」
　同僚であった阿部が気づかないほど、オグリビーはローズを演じきっているのだ。
「そりゃ、巨人にわだかまわりがあるっていのうはよく分かるけど、過去は過去で精算しようよ…」
　ローズの巨人に対する恨みは尋常なものではない。巨人に受けた仕打ちに今の枕を濡らす日があるほどだ。
　その恨みの矛先はマウンド上に仁王立ちする堀内にもある。
「オレがローズになんかした？　逆にオレが奴らの被害者だよ…」

ローズ、清原、元木、小田、江藤らいわゆる暗黒時代の巨人にはびこった清原軍団に、めちゃくちゃにされた思いのある堀内も、ローズに対しては複雑な感情があるんだ。

「ちょっと文句いったら、１０００倍にして返してくるんだ。やってらんねーよ、こちとら…」

さあ因縁のローズ対堀内だ。否応でも盛り上がる対決だ！

正体はオグリビーだけど。

阿部の恐るべき成長は緻密な配球を可能にするか

「タフィーさんの弱点は高目の速球…。そこを決め球に逆算して配球を組む…」

このローズが本物であったら、この配球で正解。メジャーで通用せず、日本で活躍するような助っ人はたいがい変化球をこなすが、速球に弱い。

速球と一口に行っても１４０キロていどなら、パワーの餌食だ。１４５キロ以上の威力が欲しいところであるが、堀内にはその速球がある。

「あ！　バットの出が速い！！」

初球、様子見でカーブから入ったが、そのバットの出に阿部は違和感を感じる。

「なんだ、これがローズのスイング？　いつものローズなら、もう少し遅れてバットが出てくるはずだ…。ところが今の振りは何だ？？　振り出しからコンパクトで早い！　今日のローズはいつもと異なる」

チームメイトとしてだけでなく、相手としてのローズもよく知る阿部は、スイングの違いを見逃さない。

「何かが違うぞ…おかしい…そういうば、気になるところがあったんだ…。構えがなんとなくぎこちない…。ローズ特有のバットの先端を水平にして、その先を小刻みに動かす構えをしているが、どこかぎこちないんだ！　何か大げさというか…。モノマネの人がわざと特徴を強く抜き出して、演じているようにみえる…」

観察眼が鋭い。若い頃の阿部なら、見過ごしていただろう些細な違いを、経験を積み視野が広がった阿部は見逃さない。

「本当にローズ…？」

「どうします、西本御大。阿部がちらちらとオグリビーを見ては、

なにやら怪しんでいますぞ」
「ふふんが。マヌケ面の阿部や。気がつくわけがないわ」

オグリビーはメジャー実績が豊富なだけあって、ローズとは打撃スタイル自体が大きく異なる。
速球に対し、コンパクトに対応できる術を会得しているのだ。それも当然、速球に対応出来なければ、メジャーで長く生活することは不可能に近い。
堀内ていどの速球なら、メジャー時代、腐るほどみているのだ。もしたとえ追い込むことに成功しても、ウイニングショットに高目の速球を選択することは、危険すぎる選択だ。
ローズでなくオグリビーであると阿部が気づけば、ローズと違い積極的に打ちに行くオグリビーの打撃姿勢を逆手に取って、早いカウントでボール球を打たせる配球に切り替えるべきだ。
ただローズであるか疑いかかる阿部にしても、正体がオグリビーであることを見ぬくのは不可能そのもの。
つまりは、この勝負、オグリビーが俄然有利に立つといえるが…。
「うわ、酒くせ…。なんだよ、ローズ酒が残っているのかよ…」
オグリビーはすでに出来上がった状態。酔っ払うオグリビーと有効な配球を取れないバッテリー、ならばこの勝負は五分となる？
ファウル。酔っ払ってもメジャーの実力者。日本においても、一時帰国で、すわドン・マネーの二の舞？　と思いきや連続三割のオグリビー。そのバットスピードたるや、阿部を震え上がらせる。
「おかしい、やっぱり、おかしい、慎重に慎重を重ねて、様子見を続けたが、ローズが堀内さんの１４７キロの速球に負けじと弾き返した。いつものローズなら振り遅れて、三塁側に打球が飛ぶのに、今のファウルは一塁側に強烈なドライブがかかった打球…。どういうことだ…。別人？　いやまさか…。史上最強の外国人助っ人ローズに代役を立てる必要がどこにあるんだ」
阿部の成長は著しい。物事を表面的に捉えず、裏の裏に目を配る

その姿勢はまさに一流捕手になった証明である。
ああ、あの若き日の阿部が懐かしい。阿部じゃプロの投手の女房役は務まらないと、プロアマ合同チームのシドニー五輪の正捕手から外された阿部が、いくらコーチや当時先輩捕手だった村田真一、上原、桑田らの投手陣が叱咤しても、まともな配球が出きなかった阿部が、工藤に打者を観察しろといわれても、ぼーっと口を開けていただけの阿部が、投手陣の崩壊を招き、巨人軍史上初のチーム防御率４点台にたたき落とした阿部が、見事、ここまで成長したのである。

「でもそんなわけーねよな。これはローズだ。そんな騙し討みたいなマネするわけーねよ」
ああ、そこまで疑いをかけたのに、お人好しの阿部はかわらずか…。
「西本さんは人格者と聞く。その人が、そんなことするわけねーな」
いやしてます。
「よし、堀内さん。渾身のストレートで三振と行きましょう…。１５０も出れば、ローズは打てませんて」
ローズに一物の感情がある堀内にとって、力勝負でローズを切って取るのは、望むところだ。
「待望の巨人監督の座をめちゃくちゃにしてくれた、ローズよ。その恨みはらさでおくべきか」
１５１キロ。堀内のマックススピードが出た。
「よし」
阿部も思わず声を上げたが、オグリビーはこの速球にもついてくる。コンパクトかつ鋭いスイングでこの速球を引っ叩く。
「ああ！　違う、やっぱり違う。ローズのスイングじゃない」
阿部は見逃さなかった。今のオグリビーがローズのマネをやめていたことを。バットを水平に構えず、立てて揺らすオグリビー本来の構えから、弾きだされた打球は、勢いが違う。

「由伸さん、バック、バック…」
しかし、時すでに遅し。打球は、ライナー性でライト方向にぐんぐん伸びている。ライトの高橋由伸が、バックにバックを重ねる…。

「ああ」
だが、ダイヤモンドでは、もっととんでもないことが起きていたのだ。
ローズに化けたオグリビー、酒が回って千鳥足、ろくに走れないのである。
「あかん、オグ…じゃなかったローズ、しっかり走らんか～」
西本ｎ怒声が飛ぶ。
「なんだ、これいったいぜんたいなにがなんやら…。ＪＷＢＣ、この大会はひと味違う！！！」
阿部も呆れるこの試合、そして打球の行方は…。

この小説では高橋由伸働いてます

打者走者のオグリビーは、酒が回ってよたってる。もはや千鳥足。打球は、ライナー性の打球で右中間に飛んでいく。

ライトは、何度もゴールデングラブ賞を獲得した高橋由伸。巨人軍史上、この男より、優れた守備をみせるライトフィルダーは誰一人いない。

高橋由伸が、バックにバックを重ねる。東京ドームは狭い。特にその狭さが際立つのが、右中間、左中間の膨らみのなさである。

両翼１００m、中堅１２２mと見かけ上のサイズは、いっぱしの近代球場であるが、ホームランが一番飛び込む、左中間、右中間のいわゆる膨らみといわれるこの部分は、１１０mと箱庭と揶揄される藤井寺球場のそれと同じなのである。

「ライトは由伸？　まずいぞ、アイツのところに飛ぶのはまずい」

堀内は、監督時代に、高橋由伸の守備に何度も助けられたはずが、なぜこのような口ぶりなのか。

膨らみのある球場なら外野フライの打球であるが、東京ドームの膨らみなら、フェンス直撃の当たりなのだ。もしも、膨らみのある球場とすると、高橋由伸の守備範囲ならランニングキャッチの打球。だが、その前に、高いフェンスが邪魔をする。

フェンスが邪魔をするなら、それをぶち壊すのが高橋のプレー哲学。

「飛ぶな～」

堀内は、叫ぶを重ねる。

高橋は、何度、果敢なプレーを試みて、故障をしたのだろうか。

全盛期といわれた二年目のナゴヤドームのフェンスに衝突。

東京ドームで、股間を強打したダイビングキャッチ。

堀内は、そんな高橋の果敢なプレーを無謀なプレーと捉えているのだ。

「お前が故障するシーンはみたくない」

が、高橋は、何度、決死のプレーでケガをしても、懲りない。それが高橋由伸のプレースタイルなのだから、断として変えようとしない。

高橋は、フェンスを恐れず、飛んだ。

フェンスに激突する。

「由伸〜」

「由伸さん〜〜」

堀内が、阿部が、打球の行方より高橋の体を心配する。

激突した高橋は、その場でへたり込む。

「大丈夫か、由伸〜〜」

今にも駆け寄らんばじかりの堀内であるが、高橋は、よろめきながら自らの力で立ち上がる。そして自分の無事を証明するよりも先に、グラブを上げて、直接キャッチしたことをアピールした。

「とりやがった、くそー抜けたおもうたに…」

「それよりも西本監督！　おぐ…いやローズ、ローズです！！」

歩くのもきついローズに化けたオグリビーは千鳥足からよろけて、しまいにはすっ転ぶ。

ヘルメットがずり落ちそうだ。これはまずい。メットで隠せなければ、いくらなんでも、オグリビーをローズとごまかせない。

「まずい、ばれる。鈴木と羽田、なんとかせい！！！」

佐々木恭介ヘッドの指示のもと、鈴木貴久打撃コーチと羽田耕一が、オグリビーに走りよる。

救護すると見せかけて、なんとかごまかそうと企みだ。

「大丈夫か…おぐ…いやローズ」

鈴木と羽田がオグリビーの肩を持つ。鈴木が落ちそうなヘルメットをわからないうちに戻せば、羽田は、汗を拭くふりをして、わざ

とオグリビーの顔を隠す。

疑ってた阿部が、近鉄軍団の一連の行動をみて確信する。

「おかしい！！　やっぱりおかしい！！！　その男はローズじゃない」

「何をいっているんだ慎之助…」

「堀内さん、誰かがローズに化けているんです…。何の企みがあるか知らないですけど…」

「そんなわけはないだろう」

一塁の王も否定する。

「調べてください。フォームが違えば、打撃スタイルも違う…。誤魔化そうとしても、僕にはわかるんです！！」

阿部の推理を聞いた牧野ヘッドが飛び出る。いかなる汚い策をとっても、勝利を目指す牧野ヘッド。これをタネに近鉄を揺さぶりにくるに違いない。

「まずい、ばれそうや」

西本も苦慮するが、牧野は意外な行動をとる。

「阿部」

「牧野ヘッド。近鉄のベンチに行って、調べてください！！　ローズじゃない誰かです。おそらく近鉄の他の外国人選手だと…」

「その発言は引っ込めろ」

「な、なんでですか？」

「理由は、あとで話す」

「え…」

とことん漬け込みにくると思われた牧野が、阿部に、これ以上の詮索を許さないのはなぜだろうか。

それには、深い理由があった。

ローズが遅刻しているなら、松井も遅刻しているのはご承知だろう。

松井の球場入りは試合開始に、結局間に合わず、今、レフトの守

備位置で松井秀喜を演じているのは、巨人軍史上最強の五番打者とうたわれた柳田昌宏だ。

つまり、ローズの身代わり違反をつついたら、逆に、近鉄側に、松井の身代わり違反をつつかれる可能性が高いのだ。

実際、西本ら近鉄首脳陣は、守備につく松井に違和感を感じ始めている。

「あれ、松井ってあんな小さかったか？」

「遠近法の関係やないですか」

柳田の身長は１７６足らず。１９０近い松井とは、いくら顔形が似てても体格が差がありすぎる。

牧野の計算だと、戦力的には、ローズが消える近鉄よりも、松井が消える巨人の方が痛いのである。

松井から入った情報によると裏の攻撃には間に合うよう。つまりこの表の守備を切り抜ければ、柳田を松井身代わり作戦は遂行されるのだが、もうひとつ大きな問題があった。

柳田は左投げなのである。松井は右投げであるから、左手にグラブをつけざるをえない。スローイングも問題なら、捕る方も不安がありすぎる。

「堀内、阿部。あとひとつだ。ひとつでこのイニングが終る。全力でとっていこう」

ごまかしついでに牧野は、こう激を飛ばすが、堀内はピンときていない。

「なんで、一回の表にそんな肩肘張っているのかなあ…。常に試合の全体像をとらえる牧野さんらしくない」

オグリビーの転倒騒ぎで忘れられいるが、高橋は今の激突で古傷の肩を痛めていたのだ。

「くそ…。なんとかこの試合だけは持ってくれよ…」

レフトは、利き手にグラブをつける柳田。センターはそもそも怠慢のクロマティ。そしてライトは、手負いの高橋。

巨人は、崩壊寸前の外野陣を背負い、この回を戦わなければならない。

「なんだって、牧野さんが、左翼だけには打たすなといっていたって？」

一回表から、早くもマウンド上にナインが集まる。

堀内を中心にＯＮ、篠塚が囲むそのメンツはいかにも豪華。ひとり気後れたした坂本が、その円から、一歩離れているのも、大抜擢された若者らしく、なんとも微笑ましい。

「松井はああみえて守備も巧みだろ。日本時代何度かゴールデングラブを取ったはずだぞ」

「ええ、ワンちゃん。松井はフィールディングもグッドですよ。いわゆるひとつのみっつのゴールデングラブのトロフィーを、いわゆる松井の自宅のリビングに輝いていますから～。ただメジャーに入ってから、あちらの外人さんたちに負けじと体重を増えしすぎて、若干、まごつく場面もみられるが、穴になるほどは落ちてはいませんよ～　エヘヘ。なあシノ…。う～ん、おまえも松井のプレーを見続けているから、あいつの守備力は知り尽くしてるはずだ…。どうだ、う～ん」

長嶋の説明だけでは、松井のゴールデングラブ歴がひとつかみっつか、いまひとつわからないが、正しくは三度。常連だった広島の緒方が故障したすきに三枠目に滑り込んだ松井は、絶大な記者人気をバックに、日本を去るまで、守備名人の地位を確保しづけた。

「そうですよ、チョーさん。松井の守備は見栄えが悪くとも、穴になるほどじゃない。おっかしなあ～　牧野さんの観察眼の鋭さなら松井の守備の確実さは見抜けると思うけどな」

「だが、あの牧野さんがそう強くいわれるんだ。これは何があるはずだ。左翼に打たせない投球を心がけろ」

「へいへい。オレをぶん殴ったこともある王さんに、いわれちゃあ、従わないわけにはいけませんよね」

堀内がしぶしぶ納得すると、作戦会議はお開きになり、ナインは元の位置に散った。

「この堀内さまが制限付きの投球を要求されるとはねえ～。自由奔放に投げてこそ、オレの荒々しさが十分に出るのによ。だからといって、オレはちまちまとした投球はしねえ。左翼に飛ばすな？　じゃあ、三振に取ればいいじゃん」

さすが堀内である。甲府の小天狗の異名は伊達じゃない。その鼻っ柱は殿堂入りした今でも、ぐんぐんと伸び続けている。

しかし、天狗は、舶来の赤鬼に震え上がることになる。

「三番ライトマニエル…」

そのコールを聞くと、堀内の背中がすっと伸びる。

「三番、マニエル？　赤鬼かよ」

何事にも頓着しない堀内は、いちいち相手の打順など調べない。この大事な試合だって、

首脳陣や、女房役が近鉄のスタメン表に一喜一憂していたその時、ロッカーで笑点を見てゲラゲラと笑っていたほどだ。

「オレにとっては最強の打者じゃないか」

その堀内がここまで恐れる男、それがチャーリー・マニエルだ。

「オレはＯＮと当たらないし、オレが投げていた時代、他のセの打者はろくなもんじゃなかったよ。そんななか唯一、厄介だったのがこのマニエル…」

堀内がそう感じるのもムリはない。堀内がよく投げていた昭和４０年代から５０年代初頭にかけて、ＯＮのように打率、長打を兼ね備えた打者、セの他球団に皆無。田淵、衣笠は確実性に欠け、若松や谷沢には長打がない。山本浩二や掛布の開花はまだ。

そこに突如と現れたのがマニエル。三割を優に超えて、４０本の本塁打を数えるマニエルは、堀内にとってはまさに黒船に乗った赤鬼に見えたことだろう。

しかも現在はフィリーズの現役監督として、海の向こうにも、信奉者の数が多いマニエルだ。応援に来たメンツもまた豪華。

アトリー、ハワードらフィリーズの主力から、インディアンズ時代の教え子、ジムトーミーやマニー・ラミレスまでいる。
ネット裏に陣取る彼らをたまたま見つけてしまった堀内は、ますますマニエルへの畏怖を強めることになる。
「あの黒人はホームラン王のハワードじゃん。あっちは最強の二塁手アトリー。ドレッドヘアーのラミレスまでいるぞ…」
隠れた大リーグ通と知られる堀内、私服姿の彼らをみんな分かってしまったからさあ大変。マニエルの凄さをますます思い知られることに。
「しかもマニエルは、他の振り回すだけしか脳のないような外人と違ってよ。スイングがコンパクトなんだよ。チッキショー。かっこよく三振取ろうと思ったけどムリかなあ
マニエルの日本での平均三振の数は、年６０個少し。今より三振の少ない時代に過ごした選手とはいえ、長距離砲としては少ない方には違いない。
「しょうがねえなあ。外野に打たせない、三振奪取も難しいとなれば、残るはゴロ打たせる投球しかねえな。ああ本格派のオレが西本みてーなツマンネー投球しねえといけねえのか。まあこれも勝つためよ」
しかし堀内の真意は阿部に伝えきらない。阿部は三振を狙う配球を組み立ててのだ。堀内の強気の性格を十分に引き出そうとした女房役としての配慮であるが、これが裏目にでる。
高目の速球や、ボールになるドロップカーブを投げさせるが、選球眼のいいマニエル、これに引っかからない。
低目のゾーンを丹念についてゴロ打たせい堀内はこれに乗り切れず、ボールカウントを悪くするばかりだ。
「どうするんだ。慎之助、カウント悪くなっちまったぞ」
阿部は歩かせてもいいコースに構えるが、堀内はこの要求には乗らない。
「バカいえ、いくらマニエルといっても、初回から四球覚悟の攻め

ができるかい」
　堀内は阿部の内角のボール気味に構えたミットより、中のゾーンをめがけてボールを投げ込んでくる。
「あ、やば」
　思わず阿部声をあげる。細かい制球に欠ける堀内の速球は、逆球となって外角に流れていく。
　外角の甘い速球。松井に化けた柳田に飛ばすのは絶好のコースと球種だ。逆らわず、上から叩く打撃を心がけるマニエルの打球は、打たせてはならぬ左翼めがけて飛んでいく。

　その頃、騒動の主の松井といえば…。
「あい」
　土井正三コーチに遅刻のお説教をくどくど食らうが、慣れた松井はなんのそのだ。
「いいか松井。僕は何も君が憎くて叱っているわけじゃない。君は日本野球を背負う大スターだ。自覚も持ってだな」
「あい」
「技術と精神を両立しないとイチローに勝てないぞ…」
「あい」
　反省をしてる素振りは、松井の受け答えからは感じられない。

赤鬼対小天狗（後書き）

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ５９７８ｊ／

よかったらこっちも読んでくださいね

元気ハツラツ

「ああ～　バカ。堀内の奴。あれだけレフトに飛ばすなって釘を刺したのに…」

牧野の悲鳴とともに、マニエルの打球は、松井に扮した左翼の柳田に飛んでいく。利き腕にグラブをつける柳田の守備は不安いっぱい。

マムシと呼ばれる見た目よりも、俊敏な足の運びで、前進、また前進。打球にはなんとか追いつきそうであるが、問題は捕球だ。

いつものクセでグラブをつけていない右腕を差し出しそうになるが、すぐにひっこめ、利き腕の左手にはめたグラブをあわてて出す。

しかし、慣れぬ動作は流れるようには決まらない。ぎこちないグラブの出し方が、打球の落下に対してうまく合わせられない。

落球。そして大股でダッシュしてきた柳田の股間をするりと抜けて、後逸の大惨事のはずが…またこの男が救った。

坂本だ。遊撃の坂本が地面につくその前に、この打球をグラブに収めた。本来は遊撃手が取れる範囲の打球ではないが、元々深めに守備位置をとる坂本が足の遅いマニエル対策にさらに、深い位置にいたことが奏功した。

だが、ボールしか見えていなかった柳田と坂本だ。急接近した二人は正面衝突の危険性があったが、そこは柳田がフォロー。覆いかぶさるように倒れ込んできた坂本を全身で受け止め、ダメージを最小限に抑えた。

坂本の果敢の守備に救われたが、どうみても左翼手の打球。深追いしてきた坂本の若さが、たまたま吉と出たプレーである。

巨人首脳陣の評価も一様に辛口。

「声の連携が取れていない」

「今の巨人の首脳陣は、何を教えているんだ。Ｖ９巨人ならできて当然のプレーができていない」

それでも猪突猛進の坂本のプレーによって、松井の失態が救われたのも事実だ。

大石の内野安打を防いだプレーといい、まさに、一回表は坂本の好プレーショーの舞台だった。

一二塁間で、坂本のプレーを悔しそうに見つめていたマニエルが、ぼそっとつぶやいたことから、替え玉騒動は再燃された。

「ヤナギダ…」

ヤクルト時代、対戦相手としてみていた柳田をよく知っているマニエルは、はからずも、替え玉を見ぬいてしまったのだ。

「ヤナギダ!!　マチュイ、ノー、ヤナギタ!　レフト、ヤナギダ!」

ベンチに戻ろうとする柳田指さして、二塁塁審の村田にさかんにアピールをするが、村田は、マニエルが何をいっているかわからず完全無視だ。

フィリーズの監督としてワールドシリーズで苦い思いをされたマニエルだ。松井の顔を忘れるわけがない。松井と柳田の顔をよく知るマニエルに間違いはない。

「ヘイ!　ササキ!　ヘイ!　ニシモト!」

たまらずベンチに救いを求める。

「監督、マニエルがなんやかいっております!!　柳田、柳田って…」

「柳田?　そうや。どうもおかしいと思うたわ!?　松井にしたら小さすぎるんや。遠近法やなんかやない!　あれは松井やない、柳田や!　そうや、引退後、ムード歌謡の歌手になった柳田や!　どっかで見た顔や思うたら」

西本御大。そこは最強の五番打者と紹介してください。

「なんですと!　こりゃあ規則違反や!　いやらしく突っ込まんと!」

佐々木は我を忘れて、興奮するが、逆にローズの替え玉を突っつ

かれる心配はないのだろうか。
「遅れてえろうすまん。間に合ったか？」
いやその心配ご無用。ローズはいま到着したのだから。
「ヨッシャー！　ローズが来たら、こっちのもんや！！　松井替え玉を突っついたる！」
飛び出した佐々木が、主審の岡田をつかまて激しい抗議に出る。
「岡田さん！　松井をちょっと調べて来れませんか！？　あれは柳田が化けているんです」
「何をわけのわからんことをいうんだ。佐々木君」
きょとんとする岡田。
佐々木に対向するように巨人ベンチからは、同じくヘッド格の牧野が出てくる。
「うんどうした？　何かあったか？」
ずいぶん白々しい牧野であるが、この牧野、どこまでもそつなく狡猾である。抗議の輪に加わる振りをして、岡田主審のズボンの後ろポケットにさっと何かを入れる。
感触で感づいた岡田は、そっとそれが何か確かめる。
このざらついた紙の感触。現金だ。それも１０枚やそこらじゃない。ざっと１００枚単位の厚さがある。
思わずにやけそうになる岡田であるが、押し込んで、なんとか主審の威厳を保つ。
買収工作に乗ったら公平なる審判として失格であるが、元々、この岡田という審判。巨人びいきで有名な男。
現役審判時代に連載していた夕刊紙のコラムで巨人を贔屓して何が悪いかと開き直り、謹慎を食らったこともあるいわくつきの男なのである。
つまりすでに審判失格のようなもので、あっさりと買収されてしまう。
「佐々木君のいいたいことがよくわからない。松井が柳田だって？　紳士球団巨人がそんなマネをするわけがない」

「そうだよ、佐々木君。オグリビーをローズに化けさせる近鉄じゃないんだから」
牧野にローズの件を持ち出しされたら、佐々木も分が悪い。首を捻りながら、ベンチに戻るしかない。
「佐々木、どうやった？」
「どうもこうもありませんて。やっぱり岡田さんは怪しい。牧野さんが飛んできたら、笑いをこらえきれないって顔をしましたし…」
「だから巨人は汚いんや！　自分とこに有利になるジャッジをしてくれる岡田を主審にねじ込んだに違いないわ。ワシはあいつに何度も痛い目にあってるんや…。だから逆に血がさわぐんや。奢りたかぶった巨人を倒してこそ、ワシの積年の恨み晴らせるんや……」
なおこのイニングふたつのファインプレーをした坂本には、大塚製薬から『元気ハツラツ賞』としてオロナミンCが送られる。
わずか１２０ｍｌの小瓶に、ビタミンCをはじめとした各種ビタミンが入ったのどごしすっきり、爽快感たっぷりの栄養ドリンクです。
これも飲めば、あなたも坂本のようなプレーができる?!

スーパーリアルベースボールのCMタレント

「監督！　誰で行きます？」
「何がや」
「一塁手ですよ。一塁のデービスは試合前に退場を食らっていますから、自動的に交替です」
「そうやったな。う～ん、う～ん。守備を固めるか……。ええーい。打ち勝つと決めたんや！！　守備は度外視や。大砲いれるでえ…。ブライアント呼んでこい！　土井を一塁にして、ブライアントを空いたレフトに入れとけ」
「さすがワシが見込んだ西本監督！　一度決めたら最後までその道を進んでいく！　ヨッシャー」

レフトブライアント。センターローズ。ライトマニエル。遂に外野陣はオール外国人選手に塗り固められることに。しかも俊足強打で、若手の頃、カブスの一番センターとして機体されていたローズはまだしも、両翼の二人の守備のまずは折り紙付きだ。
特にライトのマニエルの拙守は、ヤクルトから放出、近鉄シリーズ敗戦の主たる要因になったほどだ。
近鉄の先発投手は、ストレートのキレで勝負するタイプの阿波野。三振奪取も多いが、長打を浴びやすいタイプでもある。
守備に不安のある外野陣をバックに、阿波野は思い切った投球はできないはずであるが…。

「梨田さん、臆せず攻めていきましょう」
「おう。それこそ野茂や鈴木さんを差し置いて、西本監督がお前を送り込んだ甲斐があるってもんよ」

「一番センタークロマティ」
さすがに分厚い戦力層を誇る巨人である。貧打を俊足巧打で誤魔かすような一番には用はない。いきなりのクロマティ。
典型的なメジャリーガーであるクロマティは、行動の端々に日本野球を見下してることが隠せない。
打席の入りからして、なんとも憎々しい。風船ガムを膨らまし、馬鹿にしたような薄笑いを阿波野に送る。
見た目は優男そのものの阿波野であるが、このていどの脅しにはひるまない。きっと睨み返す肝っ玉の強さがある。
その阿波野の強気な性格は投球にも現れる。
ホームベースを覆いかぶさるように構えるクロマティの胸元めがけて、１４５キロのストレートを投げ込む。
クラウチングスタイルで構えるクロマティは、これをもんどりがえってよける。
いきなり阿波野のＭＡＸスピードに近いボールを投げ込まれたら、クロマティは威嚇に走るしかない。人差し指を追っ立てて、阿波野にファックユーである。
肝が座り、クレバーな阿波野。
「へい、クロウさん！　怒るようなボールでもコースでもないでしょ！」
阿波野のいうとおり、胸元のコースといっても、それほど危険なボールでもない。クロマティにしても演技半分。わざと威嚇をして阿波野のペースを崩しにきただけである。それを見抜かれたクロマティは、威嚇しても無意味と打席に入り直す。
「クロウさん。許してね。何も、僕は、君に腹を立てて胸元に投げ込んだわけじゃない。これも左打者対策の一環さ」
阿波野はスクリュー系の落ちる球が武器の左投手。このタイプの左投手は、スクリューを投げづらい左打者に、えてして弱いといわれる。阿波野もその典型のようなタイプ。キャリアハイの１９８９

年でさえも、左打者には痛打を浴びていた。
悩んだ末に出したひとつの答えが内角攻め。勝負球の外のボールに踏み込ませないようにするためだ。
それを読み取ったクロマティは、内角に投げにくくさせる企みをもっての威嚇の演技。
まさに、先頭打者から虚々実々の駆け引きが繰り広げられている。

「だからといって、阿波野。単純に内を攻めて外で勝負ともいかんよなあ。クロマティは、なにせ、年間規定打席に到達して初めて打率四割に乗せていた打者。外のボールでも、コツンと流し打ちでヒットを打つことくらいたやすいこと。後ろにはＯＮに松井がいる。一、二番はどうしても切っておかないといかんのだが……」
梨田の迷いを阿波野が感じ取る。
「それらなボール球を打たせに行きます？　クロマティは四球狙いで見てくる打者じゃない。少々のボール球でも打てるとなれば積極的に打ってくる打者です」
「それいこうか……。うん、待てよ。いくらクロマティがなんでも打ってくるダボハゼいうても、制御しているのは川上、牧野のＶ９コンビやぞ。そう一筋縄にいくか？　あの二人ならわがままなクロマティをなだめすかし、ボールを選ぶ出塁第一のお利口さんにすることも可能やぞ…」
「う～ん……」
長考の阿波野、思わずマウンドを外す。
「初回の第一打者からこれかよ。ああやっぱり巨人は違うなあ……。この巨人の投手陣を崩壊させて、Ｂクラスのどん底に沈めた間抜けな一軍投手コーチがいるらしい。あ、それ僕のことか……。ええい、迷っていたらいつまでたっても投げられない。覚悟を決めて、腕を振り切るだけさ」
阿波野の選択したのは力勝負。スライダーやカーブを外に投げても、好打者のクロマティは簡単に弾き返すと計算しての選択だ。

その選択は正解。センター返しを心がけていたクロマティは、阿波野の速球に振り遅れて、打球は三遊間に飛んでいく緩いゴロだ。

「よし……」

阿波野は口走るが、しかしコースが絶妙。しかもサードは石井。ショートは中村紀。どちらも攻撃重視で本職ではないポジションにつく選手だ。

足取りも軽やかと行かず、サードのイ石井は抜かれ、ショートのノリがなんとか追いついたが、体勢が悪い。踏ん張って一塁送球に入る。

普通の一番打者なら内野安打の当たりのはずが、打者走者はクロマティ。それなりの足が持ち味の選手であるが、明らかに手を抜いて走っているのだ。

捕ってからは早いノリは、巧みなハンドワークと一部の狂いのない正しいスローイングから矢のような送球を一塁に投げ込む。

間一髪どこｒか、ベースのはるか前でクロマティは諦め、スピードを緩めている。

怠慢守備ならぬ怠慢走塁。なんとしてでも、ＯＮの前に走者を置きたい巨人にとって、痛すぎる手抜きプレーだ。

「ノリちゃん、ありがとう」

「阿波野さん、気にせんとショートに打たせてください。僕は守備も名人ですから」

怠慢走塁をしたクロマティは謝る素振りも見せない。足を広げて、のけぞるようにベンチに座る。

「川上監督！　怠慢プレーです！　ウォーリー（与那嶺）に今すぐ交替させましょう！」

内野守備走塁担当の土井の進言に川上は首を縦に振らない。

「まだ一回だ。試合はトータルに考えるもの。クロマティにはまだ

チャンスを与えよう」
　川上の裁量でクロマティは、即交替は免れたが、罰金刑がくだる。
「へい、クロウ！　罰金ね！　５０万円ね！　ドルにして５０００ドルね！」
　クロマティは反論せず、ポケットからくしゃくしゃのドル紙幣を取り出し、これでいいだろとばかりに地面に放り投げた。
　Ｖ９首脳陣を中心にまとまりを見せると思われた巨人にとんでもない不満分子が現れたものだ。
　元来、気まぐれなクロマティだ。怠慢プレーを重ねつつ、時に超人的集中力を発揮する選手だけに、川上の即交替の決断ができないのか。

期待に股間を膨らませる天才打者

二番は、篠塚和典。右へ左で真ん中に、自由自在なバットコントールで、安打を量産する天才打者だ。

安居内野守備走塁コーチはベンチから、細かい守備位置の指示を飛ばす。

左方向は、流し打ちのシングルヒットが多く、右方向は、逆に、腰を回転させての長打が多い篠塚の特性に沿って、遊撃の中村紀と三塁の石井は三遊間をつめ、二塁の大石はベースより動き、一塁の土井は長打警戒に一塁線を固める。

内野陣の意思疎通は完璧であるが、外国人が揃う外野陣となるとことはスムーズに進まない。

外野経験が長く日本野球に染まりきっている中堅手ローズは、指示通りのシフトをとったが、問題は両翼の二人。

指導者経験が長い右翼手マニエルが、両手を広げて、指示内容がワカリマセーンとお手上げの構えをすれば、左翼手ブライアントは両腕を組み、立ち尽くすだけで、指示を視界にも入れていない。

「あかん」

思わず諦めの一言をつぶやく安居コーチを西本がすかさずフォローを入れる。

「あれでええんや。アイツらは打ってくれれさえすればあれでええんや。細かい指示に頭を使わせたら、打撃に悪影響するわ」

打ち勝つの信念のもと、少々の守備の稚拙さには、目をつぶるつもりの西本であったが、こうまで酷いと、さすがに、いらだちを隠せない。

意図を理解出きぬマニエルが安居の思惑とは逆に、中堅ローズの方にするすると移動しただしたから西本の怒りもついに爆発。

「むかっ腹がたって来たで！　マニエルは世界一経験のある監督やないんかい！　これくらいの意思伝達が汲み取れんと何が監督経験

者や！」
　顔を真赤にした西本は、何かに当たらないともはや納まり切れる状態じゃない。
　そこで西本門下生たちの出番。とくに中村紀と下位互換とさげすまれ、ベンチ入りさえ疑問視されていた羽田耕一は、我の出番と、率先して西本の前に出る。
「どうぞ！　西本監督！」
　覚悟ができている羽田は、自ら右の頬を差し出す。
「邪魔や！　羽田！　試合が見れん」
　といいつつも格好のストレス解消の標的が来たと、勇んで鉄拳を繰り出す。しかし、その拳は、羽田の差し出しだ右頬でなく頭をごつん。
　予想だにしない西本の攻撃に羽田は頭を抱えるが、その顔は怒りどころか、笑みさえある。
　なにも羽田がＭ体質なわけではない。それだけ西本の鉄拳には愛情が込めれているのだ。
　ただ、今の一撃は、単なる高ぶった感情の吐き出しところでしたが……。

「首位打者を切ったと思ったら、また首位打者…」
　阿波野の嘆くように、一番のクロマティが１９８９年の首位打者なら、二番の篠塚は１９８４年と１９８７年に二度の栄冠を獲得した打者。
　クロマティをやっとの思いで攻略したのにまた多大な労力を擁す天才が出てきたのだから、阿波野はたまらない。
「どこでも打つ……。インコースだろうと、アウトコースだろうと、速球だろうと、変化球だろうと、あらゆる球種とコースに対応してくる天才打者。投げるところがない……」
　阿波野が悩むに梨田は明確な答えを出す。
「なら、真ん中に投げればええ」

「なるほど……」
梨田の一見無謀とも思える配球に、篠塚は面食らう。
ど真ん中に飛び込むストレート。しかも球速表示は１３８キロと、明らかに抜いたボールだ。
慎重に慎重な攻めを重ねてくると読んでいた篠塚は、この配球に対応できない。
篠塚の引退後のインタビューなどで「苦手なコースはど真ん中」と種明かしをしたのを、何度も読んだり、聞いたりしてた梨田がとったある意味、逆転の発想の配球。
「篠塚だけやない。バットコントロール冴える天才打者というのはえてしてこういものよ。内なら引っ張り、外なら流し打ちと自由自在もど真ん中はどの方向に打ち返していいのかわからんのよ。ど真ん中なら素直にセンター返せばええというのは、素人の発想。天才というのは、細工に走りがち……」
阿波野の二球目もど真ん中のストレート。しかも球速表示は１３５キロ。初球より、さらに手を抜いたストレート。
この誰でも打てそうな失投を、天才篠塚は素直に打ち返せず、手首をこねてセカンドゴロだ。まさに梨田の思った通りに、余分なテクニックに走った結果の凡打だ。
「でこうなるのよ」
梨田の狙い通り。であるが梨田は、一見、最高の配球の結実に思える今の凡退劇にも満足していない。
「この配球が効くのは一度だけ。天才篠塚の前に同じ技は二度とできんわ。それを初回に出してええものか……。勝負どころに取っといた方が……」
梨田は後悔の念に駆られるが、ネクストサークルから次第に近づく恐怖の前には、その悩みもちっぽけに思えてくる。
「この人の前には、走者の一人も置いてはならん……。だから、後先考えずのその場しのぎの配球でええんや」

ネクストサークルで素振りを二度、三度繰り返し、入念に白木のバットにスプレーをかけ、王貞治が、一歩、一歩、噛み締めるように打席に向かう。

「三番ファースト王。背番号１」

さあ真打の登場に東京ドームは大歓声に包まれ、フラッシュの雨あられだ。

打席の王だけではない、ネクストには長嶋。さらにその後ろには、若干けだるさも醸し出しながら松井がバットを持って待ち構えている。

まさに夢のクリーンナップが遂に姿を現す。

「わーすげー　やっぱ、ＯＮはオーラが違うなあ……」

マウンド上の阿波野でさえファンの目線になってしまうほど、ＯＮの存在感はぐんを抜いているのだ。

「ＯＮＭ三連発……。最悪のケースも覚悟しておかんと、この三人とまともな勝負ができんわ」

世界のＢＩＧ１

クロマティ、篠塚の打席では、往年のバッティングマーチを盛大に奏でたライトスタンドに陣取る巨人ファンも、王の打席は固唾を飲んで見守っている。

だからといって王に敬意を払っているわけではない。ただ、王の現役時代に選手固有のバッティングマーチが存在しなかっただけなのである。

急ごしらえにオリジナルソングを作っても、収まりがとれず、かといって、現役終盤に流していた闘魂こめてを当てても、どこかその他の選手っぽく、しっくりこない。

結果、王の打席は無音に包まれる。

王に睨まれた阿波野の吐息が、ドーム中にこだまする。

「王さんの現役時代の尋常ではない四球の数を見て、当時の投手は、どうして逃げまくったんだろう？　王さんとはいえ打率三割ほど。打たれない確率のほうが高いのだから、僕なら絶対に勝負すると威勢のいいことといってたけど、今、その気持ちが分かったよ……。投げるところがない……」

打席で阿波野と対峙する王は微動だにしないどころか、呼吸ひとつ乱してはいない。

「これほどスキのない打者と対戦するのは、生まれて初めてだ……。西武時代の全盛期の清原だって、もっと脆さを出していた……。逃げたい……。逃げれるものなら逃げたい……。どんなボールを投げてもスタンドに放り込まれるような気がしてならない……」

ところが、梨田の出したサインは強気一辺倒。

「!?　篠塚さんの打席でうまくいったからって、それはないでしょ、梨田さん……」

阿波野も目を白黒させる梨田のサインとは……。

「こい、阿波野。真ん中にカーブや」

「いくらなんでも、世界の王さんですよ……。真ん中はない……」
「王さんやから、真ん中が効くんだ。考えてみい。この回、何球で二つアウトを取ったか。４球や。たった４球。もし王さんが初球に手を出し、凡打に倒れたら、たったの５球でこの回が終ることになる。川上さんや牧野さんが、そんな淡白な攻撃を許すと思うか？いくら王さんとはいえ、ここは待球してくる。いや、チームの勝利を第一に考える王さんだからこそ、見送るんや。初球甘い球とはいえ、ヒットを打つ確率は４割もない。見逃しなら１０割、球数を投げさせれる。より高い確率を取るのが、Ｖ９野球だ」
さらに梨田は、王が万が一打ってくることを見越して、カーブを要求した。ストレートならまだしも、初球から緩いカーブを打ちに行かないと見切ったのだ。
梨田の読みはズバリと当たった。
真ん中のコースに王はぴくりと反応したが、緩いボールとわかると、一本足をあげることもなく、見逃した。
「ふう……。篠塚さんから数えて、三球連続に真ん中とはねえ……いやいや疲れるよ。投げさせる梨田さんが向こう見ずなら、投げる僕もどうかしてるよ……。まさか、次も真ん中……なわけないよね……」
梨田は外に流れるスライダーを要求する。王はこれも見逃して、カウントは１－１。
「ええぞ。阿波野。野茂やなく、西本監督がお前を選んだのはこの制球力があるからよ」
梨田は次もボール球を要求する。
「王さんへの攻めは、ボールとストライクを交互に重ねること……。それができれば打ち取れる……。なにせ四球はボール４ついるんやけど、三振はストライク３つでとれるんやぞ」
梨田のある意味、当たり前のリードが、王にとっては最高の策なのだ。
王は、内角低めのストレートを見逃して、カウント１－２。

「これでもらったわ。この勝負」
ボールカウント先行でのこの状況に関わらず、梨田は王料理を確信しているのだ。
その根拠は、どこにあるのか。
「チーム第一で、初球から手を出さない律儀な王さんは、この１－２のカウントでも手を出してこない。失投なら別やが、コースに決まるボールは打ちにこんだろうよ。２ストライクをとれば、こっちんもんよ。あとは阿波野のウイニングショットを投じさせればええだけや。王さんは長嶋さんとは違う。間違わなければ、けして打たれない打者なんだ」
王は一本足打法からわかるように、自分の形で打つ打者。それがゆえに、自分の型から外れる攻撃には対応できないのである。
「だが、一歩でも間違ったら、あっというまにスタンドインだけどね」
つまり阿波野が、梨田の要求する絶対に王の打てないコースに投じれば、すなわち、この勝負、阿波野の勝利となるわけだ。
「外角ぎりぎりの真ん中あたりでええ。低め投げるとはいわん。ちょっと高くても阿波野の今日のストレートなら、王さんは振り遅れるはずや……。ええか、阿波野。このボールが勝負やぞ。２－２だからといって遊び球投げていいと思うな。２－３のフルカウントになったら、王さんが俄然有利になる……」
梨田の見立てのよると、勝負はこの一球で決まるという。フルカウントになると、いわゆる『王ボール』できわどいボールが、ボールに判定される可能性があるからだ。
阿波野もそれは重々承知。この一球がゲームを左右する。そこまでの思いをこめて投げ込んでくる。
「王さんには、昨日のゲーセンでのカード野球勝負で圧勝させてもらったんだ！　勝負運はこっちにある！！」
阿波野の全力をかけて、投じたストレートは、梨田の構えたミットに寸分狂わずに決まる。球速表示は１４７キロ。今日のＭＡＸだ

けでなく、阿波野の生涯でも、最も速い部類の数字。しかもそのノビもキレも最高で、圧倒された王は見送る。
「よし！！　勝った！」
「ストライクや！　でかした阿波野！！」
阿波野ー梨田バッテリーは、見逃し三振を確信するが、岡田球審の腕は上がらない。
「ボ、ボール！？」
ベンチに帰りかけた阿波野は、急ブレーキをかける。
「高さは間違いない。コースですか？！」
梨田は、思わず岡田球審に問いただすが、岡田は何も答えない。
「クソー！　また岡田や！！　あのヤローが」
西本は沸騰するが、捕手の梨田は煮えくり返る腹を収めて、つとめて冷静を装う。
「審判がボールいえば、ボールやな……」
阿波野に返球するが、最高の一球をボールに取られた阿波野は、すでに成すすべなくお手上げの状態だ。
「あのコース、あのボール。連続は無理！」
王の本当の恐怖はこれからだ。間違わなければ打たれない王であるが、投手が間違わなければ、間違わせる力があるのだ。
２－３のフルカウントとなり、ストライク勝負を恐れたバッテリーは、外に流れるスライダーという安全策という名の逃げを選択する。
バリー・ボンズと並ぶ、野球史上最高峰の選球眼を持つ王は、ちゃちな勝負球には掛からない。
二死から追い込んでの四球は痛すぎる。
そして迎える打者は、ある意味王よりも手強い男だ。史上最高のクラッチヒッターの登場……。
「４番サード長嶋！　背番号３」
「わー長嶋さんだ……」

王には冷静だった梨田が、長嶋には一転、ファンモード……。

「なんで阿波野さん、王さんと勝負しないんやろか。追い込んだ意味がないわ」
「そら、大村。世界の王さんや。攻めろいわれても、よう攻めきれんわ」
「ところどで、どうして金村先輩がおるんです？　ベンチにも入っておらんでしょ」
「まあ細かいことはええやろ、大村。応援団長として、オレ必要やろ？」
「いや別に」
「そんなことはどうでもええが、お前王さんの凄さ知らん世代やろ？」
「昭和５０年生まれですから」
「そりゃ無理ないな」
「王さんの監督としての資質の無さは痛いほど知ってますけどねえ」
「そうか、お前はソフトバンクで王さん監督の元４年もやったんやな。世話なったのに、えらいいいようやなあ」
「ワシは正直すぎてねえ。素質のない者にある言えない性格なんですわ。ええ人かもしれませんが、監督として頑固すぎますわ」
「そういう性格やから、ソフトバンクを半ば追い出されたんや」

「長嶋か」
「ミスターですね……」
「たいしたこたないわ」
「立教の先輩の西本監督だからいえるセリフですね……」
「長嶋はゲッツーのチョーさんと揶揄されてたの知っとるか？　チャンスに格段強いわけやないわ。走者がいたら自分で決めてやると何でも打ちにいくダボハゼなだけや。だから打点も多いが、その代

わり併殺も多いんや。今日の阿波野、ワシが送り込んだ阿波野なら、絶対に抑えられるわ」

王から長嶋に主役が交替するだけで、こうもムードが変わるのか。王の一挙手一投足を現職に見守っていたのが、今ではドーム中ざわめきに溢れている。

バッティングマーチがないのは王と同じ。応援自粛だと決まってお通夜状態になるのが、日本人の特性。それなのに長嶋は、楽器演奏の助けなくとも、まるでメジャーのボールパークにいるような錯覚にされる。本能をも惑わす長嶋は、やはりカリスマスターか。

「どーも～。梨田、元気～??　日本ハムの監督どう～」

初回な大事な打席に関わらず、独特の高いトーンで陽気にやれたら、梨田のリズムも狂いが生じる。

「いや長嶋さん、こちらこそどーも。おかげさまでハムでの監督も順調で……」

梨田は律儀に返答するが、すでに長嶋の興味は他に移っている。

「で、投手は阿波野？　彼はどういう球投げるっけ？」

阿波野といえば、長嶋巨人の一員として三年間在籍していた投手。１９９６年の日本シリーズ前に、秘密兵器として、レフティーズ（他に、河野博文や川口、宮本など）というとってつけたような愛称を長嶋、直々に貰い受けたこともある。

それほど密に阿波野の現役生活に関わった長嶋がいまさらどうして阿波野の特徴を聞き出すのか。

すっかりと忘却の彼方なのか、すでに盛りを過ぎた敗戦処理の投手の特徴など覚える必要なしであったのか。それともカマをかけて、梨田の混乱を誘っているのか。

「阿波野はですね～。右打者の内に飛び込む速球に、カウント球のカーブ、スライダーをまぜ、決め球に右の外に流れ落ちる必殺シンカーのある……」

つられた梨田は、ＮＨＫの解説で培った話術でよどみなく阿波野の特徴を説明してしまう。

「そうか。阿波野はそういう投手か。サンキュー、梨田……。君はどっかの誰かと違い明朗なキャッチャーだね、えへへへ……。やっぱり顔がいいと人間性も豊かになるのかな……えへへ」

だからといって、梨田が何の考えなもなく長嶋に情報を吹き込んだわけではない。

「うふふふ…。しめた、これで長嶋さんを惑わすことができる。怪我の功名だ。長嶋さんは正直な人だ。それを逆に利用しない手はない」

長嶋に伝えた阿波野の特徴は、内の速球。カウント球のカーブ、スライダー。外のシンカーである。つまり、外の速球。決め球にカーブ、スライダー。内のシンカーと、逆にいけば、自然と長嶋の虚をつくことになる。

梨田は外の速球でカウントを取り、シンカーを見せて、カーブを内に食い込ませて、それを引掛させるリードを思い描いた。

「巨人軍は永久に不滅ですと宣言した以来の公式の打席は、ボテボテのゴロに終りますが、全国の長嶋フリークの同士の皆様、怒らないでね」

人のよさそうなことをして実はえげつない梨田であったが、巨人首脳陣は、梨田よりも役者であった。

一塁に王を置いて、打席は長嶋。

この局面で思いもよらぬ作戦を披露してくる。

阿波野が投げると同時に、王がスタートを切っていたのだ。

打者集中の阿波野は、王が動いたことも気づかないのだから、クイックモーションなど取っているわけがない。

全力投球のおかげで、ストレートはノビよく走る。

「まさか……王さんが……」

梨田も頭の片隅にもなかった王のスチール。クイック、牽制なし、バッター集中の悪条件が重なる。それでも梨田の猛肩なら刺せる。

しかも走者は王。

ところが、ここでまた思わぬことが起きる。自由勝手の塊のような長嶋がチームプレーを見せるのだ。

盗塁援護の空振りである。わざと振るタイミングを遅らせて、梨田の送球を邪魔をする狙いだ。

王の盗塁に長嶋のチームプレー。まさかにまさかが重なれば、さすがの名捕手梨田も対応は不可能。

ボールを握り損ね、送球が乱れる。二塁の大石がカバーに入ったが、タッチすらできず、王の盗塁は成功。

「まさか王さんが……。くそー、牽制のひとつでもいれておけば」

「オレのミスだ、阿波野。捕手のオレの指示の徹底の不足だ……。つい長嶋さんとの勝負を楽しんでしまった」

してやったりの巨人であるが、ベンチを覗いてみると、この作戦は絶対的な自信はなかったようだ。

「阿波野崩しの一環にすぎない王の盗塁企図。まさか成功の土産つきとは」

「牧野ヘッド。おぬしも嫌らしい作戦を考えるのう」

「いやいや、これも川上監督の懐の大きさの賜物です。打者長嶋で王に盗塁のサインを送れる、川上監督以外、世界中探してもいませんわ」

さてはてこの盗塁が阿波野崩しのエサ巻きとはどういう意味があるのか。

僕ボークボーク

「阿波野という子は、知っての通りボーク事件から調子を崩した投手。つまり、走者を置いて牽制せざるをえない状況を作れば、ボークがチラつき勝手に崩れていく。問題は今日の打線に足が武器の選手がいないことだ。これにより阿波野は打者に集中できるが、早い段階で王のような走者を走らせることによって、誰が走るかわからないと植えつけておく。これで阿波野は、誰が塁に出ても、牽制に気を払わないといけなくなる。それがたとえ、阿部のような鈍足走者であってもだ。だから失敗覚悟で走らせたんだが、成功するとはねえ……」

以上、王の謎の盗塁敢行は牧野の種明かし通り。Ｖ９巨人は、俗に言うスリーランを待つような野球はしない。どこまでもイヤラシく、真綿で首を絞めるような野球を仕掛けてくるのだ。

実際、牧野の狙い通り、王の盗塁で阿波野は錯乱状態に陥っている。

「三盗もないことはない……」

長嶋に全精力を集中していた阿波野が、王の三盗というありえない策に怯えている。

じりじりとリードを取る王を見つめる阿波野は、落ち着きがない。

「阿波野。バッター集中で行こう。三盗などあるわけない」

梨田の声も阿波野は気が漫ろ。サインは出ていないかと、三塁コーチャーの黒江、一塁コーチャーの土井を交互にみては疑心暗鬼になっている。

「二塁の塁審は村田さん……。パ・リーグの審判部長で元近鉄だからといって、気を許してはいけない。あの人が、僕に対する牽制締め付けがいっせいに行われた９０年のパの審判員の一人……。だからこそ僕への牽制に厳しい目を持っている……」

９０年の度重なるボーク事件で、必殺技の牽制を封じ込まれて、

野球人生の下降線を描かざるをえなかった阿波野だけに、ナイーブになる気持ちは分かる。

かといって、阿波野が対峙するのは、走者でも審判でも巨人首脳陣でもない。打者の長嶋に集中すればいいはずであるが、狡猾なる巨人首脳陣は、どこまでも阿波野の過去を穿り返す。

このままでは阿波野の気持ちを収集出きないと、梨田が一度牽制を入れろのサインを出す。

これに応じた阿波野は、おそるおそるターンをして二塁に牽制する。が、この殺しにいくわけでもない、ゆったりとした牽制にでさえ、黒江と土井の両コーチャーは、執拗な阿波野殺しを止めない。

阿波野の心臓を射抜かのように指を刺した土井が叫ぶ。

「ボーク！！　ボーク！！　ボーク！！」

９０年の西武コーチで阿波野ボーク事件の首謀者の一人の黒江は言葉で阿波野を殺しにいく。

「村田さん、今のボークでしょ？　えッ違う？　阿波野の牽制だからてっきりとボークだと」

敵は目の前の長嶋と背後にいる王だけではない。両隣にもう二人いるのだ。四方八方敵だらけ、まさに四面楚歌の阿波野。

長嶋との勝負はあまりに荷が重すぎる。

なかなか投げられない阿波野を気にして、梨田が立ち上がり、声を掛ける。

「バッターオンリーでいこう」

梨田も口では前向きであるが、出したサインはその逆。

「歩かせてもいい。一塁は空いている……なあにＯＮの打棒を披露する機会を奪ったからと行って気にするな。今、全国の視聴者が俺たちを弱虫と罵倒してるだけや。何も命までは取られん」

いたって弱気の梨田であるが、それでも勝負への含みはもたしている。

「ボールでええんや。久々に満員の観客の前で打席に入った長嶋さんが、むざむざと四球を選びにくるとは思えん……。逃げて勝つ。

これも立派な勝負よ」
二球目、外に流れるシンカー。大きく外れ、梨田は体を動かして止めにいく。打ちたがりやの長嶋でも、さすがにこれは見逃す。
三球目、またもボールゾーンのストレートであるが、我慢の限界に達していた長嶋の打ち気は、これを見逃さない。
しかし、さすがに遠い。広大なミートゾーンに届かず空振りだ。
ヘルメットを飛ばし、しまったと過剰な自己演出を長嶋がしている間に事は動いた。
何気なく飛び出た二塁走者の王に向かって、梨田が崩れた体勢から、矢のような送球を送る。王は戻り切れず、カバーに入った大石がタッチしてアウト。
まさかの牽制死にドームはため息に包まれる。
阿波野と梨田はハイタッチを交わす。
阿波野が牽制できなければ、オレがすればいいとばかりの梨田のプレーに巨人ベンチは歯ぎしりだ。
「くそ、梨田め。巨人をコケにしやがって、１００倍にして返してやる」
牧野は鬼の形相だ。

その一方、巨人にものんきな人がいた。
「さあ、阿波野勝負だ。追い込まれたからといって負けないぞ」
王の牽制アウトでチェンジにも気付かず、一人打席で燃えていた長嶋であった。

賭博のドイ

「どうや、今の王さんのプレー。王評論家の大村の意見が聞きたいな」

「怠慢や。ホークスの選手がもしあんな無様な死に方したら、王さん、干さんばかりの勢いで選手しかるで。まあ小久保、松中レベルならだんまりやけどな」

「自分は棚にあげて、人には厳しいか。近鉄の監督にもおったやん。そういう監督。現役時代は自分勝手なプレーばかりして、いざ監督になったらチームの和がどうのと口うるさく総スカン食らったのが」

「なんや金村さん、また鈴木監督の悪口かいな。しゃーないお人や」

「そうか大村にとては高校の先輩で、お前を一軍に引き上げた人やもんな。草魂派いうのがおるもんやな」

「ええ～　放送席の村山さん」

「あ、一塁側リポーターの日本テレビの河村アナですか……」

「今の王選手のプレーなんですか、面白い背景が浮かび上がりました」

「面白い背景？」

「ええ、昨日の開幕セレモニー後、時間が空いた王選手は、ドーム近くのゲームセンターに向ったらしいんです」

「王さんがゲーム？」

「ええ、私もそう切り返すと、オレもゲームくらいするよといいかえされました。まあそれは置いといて、なんとそこで意外な人物に遭遇したんです。誰だと思います、村山さん」

「分かりません、誰でしょうか」

「阿波野投手です、今日、バファローズの先発の」

「へえ、これは驚きました。なんと阿波野投手！」

「しかも、ゲーム対決で開幕の前哨戦としゃれ込んだ模様です」

「それでその結果は？」
「そのゲーム野球采配ゲームなんですが、王さんの勝利らしいですよ。阿波野も健闘したが、最後には、監督経験のある自分の冷静さが、勝負を分けたと、王さんおっしゃっていました」
「ほう……。今のピックオフプレーで、阿波野は昨日の雪辱をしたと。しかし驚きましたね、中畑さん。あの王さんがゲームセンターとは……」
「あっひゃはは～　王さんとはいえ人の子ですよ！　ヘボ采配をふるえば、ゲームもしますよ！　あははは」
さすが長嶋シンパの中畑、王にはつとに厳しい。

「４番ファースト土井　背番号５１」
今や、清原、中島、松井稼頭央ら、西武の強打者の師匠筋として有名な土井正博であるが、元は近鉄の４番を１０年以上張った右のスラッガーである。
何度も麻雀賭博事件を犯し、無冠の帝王とさげすまれた土井であるが、（太平洋クラブ移籍後本塁打王獲得）上段に構えたその堂々と足る構えは、記念すべき大会の４番打者にふさわしいものがある。
「土井さんか。こりゃまたやっかいな打者だね。しかもこの人、日本シリーズに一回も出ていないし、ずっとパにいた人でしょ？　球宴やオープン戦で、オレと当たってるんだろうけど、本番じゃねーから、参考になんねーや。慎之助、お前は土井さんのことちゃんと理解してるかな？　どうだ!？」
「土井さん……。土井さん…」
阿部は、搭載する阿部コンピュターに土井正博と入力。必死に検索をするが、なかなか情報が出てこない。
「おっかしいなあ。何度も何度も対策を講じたはずなのに……どうして出てこないんだ……」
阿部コンピュータは、どを辿る内に……ドネルスがヒットしてしまう。、

「ドネルスの名称の変換……。近鉄入団時はC・D。オリックスに移籍するとドネルス本名で登録、翌年またC・Dに戻すが、故障多発で縁起かつぎで、またドネするに戻す……。って今、必要な情報じゃねーや。ど、ど、ど、ど、ど……」

続いて、堂上兄弟に堂上父がヒットしてしまう。

「打者である堂上剛裕、堂上直倫兄弟よりも、実は、投手である堂上父の打力が上回る……通算3本塁打は、兄弟の本塁打数を足した数字より多い（２００９年末現在）……。これもいらない今必要ねーよ。土井だよ、土井。土井正三でも土井淳でもなく土井まさひろ!!　土井雅弘……。９６年ダイエー入団、パラシュートボールという独特な遅いボールで何度か好投するが、長続きせず、オリックスに移籍も防御率１０点台とメッタ打ちで一年限り……。これか？　これだろ……。違うじゃないか、これ投手じゃないか!!」

「慎之助の奴、なかなかサインを出さないなあ～。慎重に慎重を期しているのか？　あいつも成長したなあ、オレが監督の時は、えいやで出たとこの配球してよく失敗してくれたもんだか」

あのぽんぽん投げ込む堀内が阿部を信じて、じっと、阿部待ちをしてくれるのだから、阿部は運がいい。

「これだ土井正博!!　経歴はどうでもいい！　ポイントはここだ！　通算４６５本塁打のうし流し打ちの本塁打はわずかに3本だけ！　つまり典型的なプルヒッター!」

ようやくたどり着いた正確な情報を元に、阿部は緻密なリードを試みる。

「よし！　プルヒッターにはこのリードだ!!　……ってどういうリードをすればいいんだ。吉田バッテリーコーチは、あとは自分で考えろといわずに、そこまで教えてくれればいいのに……」

阿部には、古田や伊東のような巧妙な配球は似合わない。データを元に、勢いをアレンジすれば、阿部流のリードが出来上がる。

「ええいままよ。堀内さんの球威を信じる。プルヒッターには力勝負だ!」

「うん？　内角のストレート？　おいおい土井さんのツボだよ。どうした慎之助？　お前の脳がフリーズしたか？　それともあれか？　オレを信じているのか？　信じるならそれに応えるボールを投げるまでよ」

阿部の出たとこリードが、堀内の闘争心をかきたてるのだから、世の中、何が奏功するかわからない。

堀内は、全球ストレート一本で、土井を牛耳る。

「いっちょ上がり」

土井のバットが三度空を切ったとき、堀内の帽子ははるか遠く、サード長嶋の守備位置前に飛んでいた。

さっと拾い上げる長嶋。

「あ、すみません。長嶋さんの手を煩わせて……」

長嶋に持ってこさせたら失礼とばかり、自ら走りより受け取ろうとする堀内であったが、長嶋の思考回路は、はるか上にいく。

「そーれ」

拾い上げた帽子を三塁側スタンドに、フリスピーのように投げてしまったのだ。

「えへへ……。ファンサービス、エへへ」

唖然とする堀内に長嶋は衝撃的な一言で追い打ち。

「おい、ホリ！　どうしたお前、野球選手がグラウンド上で無帽だなんて、お客さんに失礼じゃないか、うん」

ギャンブラー自己中心派

「はい、次、ブライアントや」
「三振に１０万！」
「赤堀、さすがギャンブラーやな。張り方が違うで。。大塚はどうする？」
「僕は、ホームランに１万賭けます」
「どっち方向に打つ？」
「そりゃ左のパワーヒッターですから、ライト方向でしょ」
「甘いな。ブラはどこにでも放り込む力あるわ。しかも、ここは東京ドームや。ワシでも打てる。まあええ。ライトに打ったら、割増にしといたる。石本さんは？」
「オレも三振やな。堀内さんの今日の調子なら、高い確率でそうなる」
「石本さんは、この世界が長いだけあって、冷静に身るね。で、マー君はどうする？」
「え…あ、はい、えっと……。すいません、この辺で、僕、降ろさせていただけたら」
「なんや、マー君。もうおけらか？」
「いやそういうわけでもないんですが……。僕の役目はロングリリーフ。そろそろ準備しないと……」
「真面目やなあ」
吉井、大塚、赤堀、石本ら近鉄の誇るセーブ王たちがブルペンで一同に介して何をするのかとえば、目の前で繰り広げられる試合をギャンブルの材料に一喜一憂……。
このノリについていけないのが、ただ一人楽天生え抜きから、出場している田中将大である。
参加選手最年少だけに、強面の先輩の誘いは断り切れない。しぶしぶ、ギャンブルの輪に加わったのである。

ビギナーズラックとはいかず、これまでの戦績はさんざん。大石、マニエルの打席でヒットを予想しながら、幼なじみ坂本の好プレーに阻まれて、2倍、3倍になるところがおじゃん。

救援準備を口実に、輪から抜けだそうとするが、助け舟を出す役目であろう肝心のブルペンコーチ小野和義までがギャンブルに肯定的なのだから、どうにもならない。

「吉井。オレはゴロにかける」

「さすが小野やなあ。渋いところをついてくる。フライ性の当たりが三振かのブラにゴロ打ちを期待するとはなあ」

そんな頼りない小野に見かねて、田中は直言する。

「あのお……。小野コーチ、僕、そろそろ救援準備に肩を作る時間すよねえ?」

「あん? 先発の阿波野さんは好調だ。先発が崩れたとき用のお前には、今日出番ないよ。ゆっくり休んでろ」

「はあ……」

「よっしゃ、ブラちゃん。三振」

「はい、赤堀の総取り~」

「くそ~ けっこう甘い球だったのに……」

「甘い球でも失投でも構わず三振するのが、ブライアントだ。大塚はそこ分かってないなあ~」

自軍の凡退に喜び声を弾ませる選手がどこにいるのだろうか。さすが近鉄、異端の集団である。

「はい、次はノリや」

胴元役の吉井は今の損失を取り返そうと必死。

「今日のノリの打撃練習見たか? 右に左に特大弾打ち分けていたで。こりゃ絶好調。打つのは間違いなしよ」

わざとガセを流し、有利な展開に持ち込もうとする吉井。そもそも今日の近鉄は、巨人二軍のグラウンド占拠騒動もあって、ろくな練習時間が取れていないのだ。ノリの打撃練習が好調どころか、そ

の練習すらしていない。
　ブルペンにこもり今日の競馬の結果に一喜一憂していた赤堀らは、その騒ぎを知らぬとカマをかけたのだ。
「ノリ絶好調か……。なら期待しないとな」
　まんまと乗ってしまった赤堀。
「それなら、右に一発打ち込むに一万」
　ムードに流された大塚は、ノリの好結果に一点張り。
「ならオレは、三塁線抜く長打！」
　石本もノリの打棒に期待を寄せるが、ノリ好調ムードの呼び水になったはずの赤堀が一転。
「ならオレは、三振にいかせてもらいましょうか」
「なんや赤堀。ノリ好調やぞ」
「ええみんながノリの豪打に期待するなら自分は凡打に張らないと、賭けが成立しないでしょう」
「そりゃそうやな」
　一同、ノリの出塁に賭けさせて親の総取りを狙った吉井は渋い顔だ。
　そもそも赤堀が、吉井の口車になったのはフェイク。他の参加者に一点を張らせ、自分だけその逆をいくことが狙い。
　さすが赤堀。一流のストッパーは、一流の詐欺師でなければならないことを証明してくれる。
「マー君は？」
　吉井は懲りずに田中に誘いをかける。
「え、あ、え？　そうっすねえ～　ノリさんは同僚ですから……」
「同僚なら看板直撃の特大弾にかけんとな。はい、マー君。セコムの看板にドッカーンに２０万と」
「えええ～～」
　と吉井に勝手に決められたマー君。しかも特大弾とは、あまりにも確率が低すぎる。
　田中は柴犬のような顔を歪めて、途方に暮れるが、ノリが後輩を

窮地から救う。
　豪快にバットを振り抜き打球はライト方向に高々と舞い上がる。
ノリは、お得意のバット投げを見せて、ホームランを確信。
「うわ、やや、やったー」
　いやいや参加してたはずの田中が大喜び。自軍の先制を喜ぶより、自分の儲けに胸を弾ませている。
　しかし、ブルペンの雰囲気は至って冷静。
「切れるよ」
「うん。ノリちゃんの右方向のポール際の打球は、ドライブがかかる」
　さすが百戦錬磨の抑えたちが培った見解は、正確無比。ノリの打球は大きく切れて、ポールの右に。打球はそのまま一塁側スタンドの二階席看板に当たる大飛球であったが、ファウルはファウル。
　天を仰ぐノリに呼応するように、田中もがっくりとひざまつく。
「惜しいなあ～　。でもまだ初球す。この打席期待できるっす」
　一人興奮する田中であるが、やはり他のブルペン陣は冷静そのもの。
「ああ、こりゃ三振だ」
「大塚。お前、ノリの本塁打にかけたやろ？　期待せんのか？」
「期待したいのもやまやまなんですけど、ノリが初球、いい感じのファウルを打つと、調子に乗ってスイングが大きくなるきらいがあるんですよ。ですよね、赤堀さん？」
「そうそう、それがノリの悪癖やね。ほら」
　大塚と赤堀が見切ったようにノリのスイングは、一球ごとに大きくなり、その結果。
「ほら、三振きた！！！！」
　赤堀の読み通り三振に倒れてしまう。
「くっそ、堀内さん、この回三者三振やぞ。いくら大振りのスラッガーだらけいうてもありえんやろ……」
　この回、すべて三振にはった赤堀は、この回だけで１００万以上

の勝ち。一方、負け続けの田中は既に２００万以上の負け。まさに明暗を分けたイニングである。

「近鉄軍団の雰囲気にどうやっても慣れませんよ～　岩隈さん帰ってきてください～」

頼みの岩隈は、先発の当て馬に使われたことに、プライドを傷つけられロッカーで籠城中。

ところが、困り果てる田中に助け舟が。がしかし、その舟もどうやら泥舟のようで……。

「マー君、ワシがおるやないか……」

「え……はい……」

近鉄投手陣から村八分状態の鈴木啓示が、同じ兵庫県伊丹市出身の田中を引っ張り込もうとする。

省かれながらもブルペンでも王様の鈴木。年齢の近い柳田豊を小間使いに君臨。柳田に肩をもませて、ふんぞり返っている。

「あんな輩に染まったら、マー君のためにならん。ワシんとこ来い。３００勝投手の心構えを教えたる」

動くも地獄、動かざるも地獄の田中は、まさに八方塞がり状態……。

「岩隈さん～～」

田中の心の叫びは岩隈に届くのか。

ヘイ！　カール！　ヘイ！

初回の対巨人上位打線を相手にしただけで、精も根も尽きはたしかのように阿波野が、マウンドに向かう足取りは重い。

クロマティー篠塚ー王の並びを切り抜けても、長嶋ー松井ー高橋由が待ち受けているのだから無理もないか。

そんな阿波野を見かねて、女房役梨田は、立ち直るきっかけにとアドバイスを送る。

「いいか、阿波野。巨人打線を天才と凡才に分けろ」

「そうはいっても天才だらけでしょ。巨人打線は」

「ああお前のいうとおりや。９人のスタメン野手のうち、６人、いや７人が天才や」

「残る二人が凡才ですって？　投手の堀内さんがその一人として、もう一人は誰ですか？」

「堀内さんも天才や」

「え、投手ですよ……」

「天才やなければ、投手が一試合に３本もホームラン打てるか？日本シリーズで二打席連続打てるか？　引退試合の最終打席で自ら祝砲をあげられるか？」

「そりゃそうですけど……。分かった、天才でない二人のうち、一人は坂本でしょ？」

「いやアイツも天才や。０９年のシリーズでアイツと当たったが、いかなるコースや球種に合わせられる対応力の高さは天才のそれや」

「じゃあ誰なんですか……」

「この回、誰からや？」

「４番の長嶋さん……」

「その前後や」

「は？　その前後っていったら……うそ～！？」

主審の岡田が時間を取りすぎると二人の間に割って入り、会話を

絶つ。
「ええか、阿波野。長嶋さんの後ろは凡才や。それ頭に入れて投げろ」
梨田は別れ際そう声をかけて、仕事場に戻った。
「5番は松井ですよ!?　松井が凡才……。梨田さん、何を言い出すのやら……。僕の気を楽にさせるためかもしれないけど、無理がありすぎる。ワールドシリーズＭＶＰ男が凡才だなんて……」

「どーも長嶋さん……」
回を挟んで、連続の長嶋であるが、梨田は挨拶を欠かさない。
「おい古久保。何か変だぞ」
古久保と勘違いされた梨田であるが、相手は長嶋だ。自分は梨田と言い張るのも無駄とそのまま流し、会話を続ける。
「何がですか？」
「オレはさっきも打席に立ったはずだ！　どうしてオレがまた打席に入るんだ！」
「それはですね。長嶋さん。さっきの回、長嶋さんの打席で僕が二塁にいた王さんを牽制で刺したから……」
懇切バカ丁寧に説明する梨田であるが、長嶋の興味の対象は、他に移動済み。
「おい有田！　マウンドの投手は誰だ？　近鉄の左投手というと神部か？　うん、違うか？」
「ええ、神部さんですよ」
梨田は、長嶋の天然ぶりを逆利用しようと、わざと乗ったのだ。
「おい的山！　神部はどういう投手だ？」
「神部さんは技巧派投手です。打者を見ながら、打ち気を逸らすタイプですね」
「そうか！　山下！　ありがとう……」

「ようわからんお人や……。だけど、相手を神部さんと思い込んで

いるのは、こっちにとって幸い。阿波野と神部さんは同じ牽制のうまい左投手だが、投げる球の質はまるで違う……。たとえ天才長嶋さんとはいえ、神部さん攻略モードで阿波野は対応できんよ……」

梨田は、１３５キロの神部に標準をあわせる長嶋を見越して、直球勝負を選択した。

「今日の阿波野は１４５は出る好調モード。目論見から１０キロも速いストレートが来たら、長嶋さんも振り遅れの山。神部速くなったなあ～うん？　と思わせているうちに最後はシンカー落として三振や」

梨田の読み通り、長嶋は阿波野の速球に振り遅れる。ファウルを重ねて、カウントは２－１。近鉄バッテリー、絶対有利な展開。

「これでシンカー……。ストレートで頭が一杯の長嶋さんのバットは間違いなく空を切る」

梨田の確信は、阿波野にも伝搬される。自信を持って振り抜かれた阿波野の左腕は、遅く逃げるようなシンカーとのギャップをさらに広げる。

腰砕けになる長嶋。バットに当てるだけで精一杯……。

「よっしゃ、いただき」

だが、梨田の喜びは、一瞬で泡となる。相手は長嶋である。腰が砕けても、手打ちになっても、下半身の強さが、バットのヘッドを残させる。

低めに落ちるボールを取らえると、打球はライトへ。

ライトのマニエルがバック、バック、しかし足を止める。

ボールは、巨人応援団が待ち構えるライトスタンドに飛び込んだ。

「まさか！　あの体勢で！！　やっぱり長嶋さんは天才だ……。天才というのはこういうもんや。術中にはめたはずが、天性の力でひっくり返す」

思いどおりの配球ができたはずの梨田もお手上げの状態である。

長嶋は割れんばかりの歓声にガッツポーズを何度も繰り返す。巨

人ファンだけではない、全身近鉄グッズに身を包んだ熱烈なファンまでも立ち上がって拍手をしている。数少ないながら陣取っていた近鉄ファンも、敵味方なく長嶋劇場のとりこになったか。

しかし近鉄ベンチはそうもいかない。

先制を許し、はらわたが千切れるばかりの苦い表情をする西本も、監督としての責務を忘れてはいない。

「おい！　土井、大石、石井、梨田！　よう見とけ！！　長嶋は踏み忘れるで！！」

「あ！」

見とれていた一塁手の土井は西本の一言で我にかえり、長嶋の足取りを見つめる。長嶋のことだ。ベースを踏み忘れるチョンボを犯す可能性はゼロではないからだ。

「踏んだ……」

土井とハイタッチを交わした行程で、長嶋は一塁ベースを踏む。

「大石！」

「はい」

土井は二塁の大石に思いを託す。大石は二塁ベースを凝視する。スキップするかのように大股で跳ね上がる長嶋。通り越す可能性は十分である。

「通り抜けろ」

大石が念じると、長嶋は大股のまま二塁ベースを空過してしまう。

「まさか……」

まさかのまさかであるが、長嶋の行動は常に常軌を逸している。大股で空過したはずの長嶋が、ムーンウォークさながらのバックステップを踏んで、空過した二塁ベースを後ろ足のかかとでチョンとやると、大石に満面の笑顔。

「えへへ……。大ちゃん……知っていますか……マイコー・ジャクソン……。０９年の初夏にお亡くなりになりましたね……えへへ……。彼に、ヘイ！　マイコー！　大会史上三度目のおめでとうと祝

辞を送った身として、残念でなりませんでした……。その弔いですよ……エヘヘ」

そりゃ、マイケルじゃなくて、カール・ルイスだろうと思う大石も、長嶋にはツッコメない。

「踏んでもうた」

最後の砦、梨田が確認すると一点が刻まれる。

先取点を許し、顔面蒼白の阿波野。野茂や鈴木啓示を差し置いての先発でだけに、このままズルズルいくと、批判の的になると、梨田はなりふり構わない。

「今のは天才の長嶋さんだから打たれたんだ！　次は凡才の松井や！　打たれるわけない！　気合入れなおしていこう」

二度目のタイムをとれない梨田は、捕手の定位置から叫ぶ。当然、打席に向かう松井の耳にも入る。

「今、なんていいました梨田さん」

遅刻でほうけていた松井であるが、今の一言で完全に目を覚ます。

「凡才いうたんや……」

梨田も否定はしない。

「へえ……。オレが凡才ねえ。いや、初めてじゃないですよ、そういわれるのも」

凡才ゴジラ

「やめてくれ、梨田さん。松井をこれ以上挑発するのは……。だいいち、僕が横浜時代に、松井にボコボコに打たれまくったのを梨田さんは当時近鉄にいたから、よく分かってないんだ。左対左だから、よく松井に当てられた僕だけど、打たれたイメージしかないんだ……。ただでさえ、相性の悪い松井相手に……」

阿波野の心の叫びも虚しく梨田は考えを改めるつもりはない。

「それでも松井が凡才であることには違いない。王さんと松井、今日の巨人打線で凡才は二人だけや」

「へー梨田さんって、そういうキャラだったんですね」

バットの先を阿波野に向けた松井は、梨田の真意を伺い切れていない。

「気にするな、松井。別にお前を否定したり卑下したいわけやない。正直な物言いだと、そう表現するしかないんや」

「別に気にしてはいないっすよ。気分は悪いですけどねえ……。甲子園で5連続敬遠される凡才っていますかねえ」

「小宮山が横浜時代、似たようなこというてたやろ」

「よく覚えてますよ。いわれたすぐ後に小宮山さんから、特大の一撃を打ちましたけどね」

「今では、イチローとの比較論でもそういわれるな」

「まあそうですね。イチローさんは”当てにいく”天才ですから、それに比べられるとねえ。どうしても、オレは、イチローさんにミートの才覚は劣りますよ。ＯＰＳとか長打率とか出塁率とか、今の野球界で重視される指標では、オレのが全然上なんですけどねえ」

「これで三度目の屈辱いうわけか」

「屈辱でもないですよ。オレは人より強く速いスイングができるだけの凡才ですから」

「そうだよなあ、松井。オレのいわんとするがよう分かっている」

「それでも凡才ですか」
「ああ、凡才や。何度もいうがお前と王さんだけが凡才。まあ王さんは飛び抜けた凡才やから別にして、お前はただの凡才や」
「王さんも凡才ですか」
「頭使って努力せんと打てんのは凡才や、王さんであってもな。王さんほどの努力もしない、頭を使わんお前は普通の凡才。その証拠をお見せしようか。今からオレは阿波野に投げさせたい球種とコースをお前に伝える。それでもお前は打てない」
「へー面白い……。一球目はなんですか」
「肩口から入るスライダーや」
「ほおホームランボールじゃないですか。横浜時代の阿波野さんから、そういう失投よく打たせてもらいましたよ」
「振ればの話やなあ。お前、振れるか？」
「振りますとも。長嶋さんとの”師弟”連弾がかかっている。それを二球連続で決めたとしたら、うちの勝ち確定のムードができる」
「そうだよなあ、長嶋、松井の二者連続となれば、ドームは蜂の巣をつついたような大騒ぎになるやろう。だからなおさら、初球の入りには気を付けんと」
「それでも失投をなげさせるんですか？」
「振らなければ、失投もクソもない。お前は絶対に振れない。だから失投やない。れっきとしたカウントを整えるボールだ」
「へえ、分かりました……それじゃお願いしますよ」
梨田の一連の口撃は松井を混乱させるための一種の策謀と思われたが、梨田の出したサインは、馬鹿正直に甘いスライダーを真ん中に投げ込め。
これをみた阿波野が一瞬、ぎょっとした表情を見せる。それを松井は見逃してはくれない。梨田が予告通りのサインを出すか半信半疑だった松井は、阿波野の表情の機微を見て、確信する。
「甘いスライダーか……。看板直撃かな」
それでも阿波野は梨田を信じて、果敢にいや無謀にも、肩口から

の甘いスライダーを投じる。松井の両肩は、ぴくっと動くが、バットは出てこない。

球審岡田の腕は上がる。

「ほれみい。振ってこれん、見逃したやないかい」

「そりゃ、打ちませんよ……。長嶋さんの一発のせいでドーム中にざわめきが残っていますもん。打ちにくくてしょうがない」

「そうか。信念が見逃したと思うたけどな。こういう大会の第一打席の初球を打ちにくのは、松井の野球観に関わる問題やからやろ」

「イチローさんや長嶋さんと違って、オレは普通の感覚の持ち主ですから、打てる球がきたからといって、がっつきません。それで、次の予告投球はなんですか？」

「今と同じコースにカーブやなあ」

「それ危険すぎますよ。ストライクを取れたからって二球連続で続けるコースでもない」

「そうか。危険すぎるか。思い直そうか、いや、それ無里や。阿波野にサインを送ってもうた。しかもアイツも恐れなしでうなづいてもうた。ああもう後戻りきかん」

阿波野は、また肩口から入るボールを投じる。コースは同じであるが、球種が違う。１２５キロでわずかに曲がり落ちるスライダーと違い、阿波野のカーブは１１５キロていどのスピードで、スライダーより大きな半円を描き曲がり落ちる。

それでも松井の技術ならば対応可能のボールであるが。松井はこれにも手を出せない。

「ほおれみい。あっというまに追い込んだなあ。ところでどうして見逃した？　予告通りのボールやないか」

「オレはウイニングショットを打つタイプなんですよ。根っからの４番打者ですから」

「そうか、オレにはタイミングが外れたから、手を出せなかったように見えたぞ。わずか１０きろていどのスピード差の緩急で対応で

きなくなる。これが凡才やなあ。天才なら気にせず打つ」
「それで次の予告はなんですか？　一球遊びますか？　それともボールは3つ投げれる、いやオレが怖くて四球覚悟なら4つ投げれる」
「まあそれがセオリーやな。一球遊ばせる」
「内ですか、外ですか」
「外でいこうか。日本の至宝に内角攻めはようできんわ」
「へえ～　凡才が至宝ですかあ」
これも予告通り、阿波野は最初からボールのコースに構えた梨田のミットに投げ込む。

「次も遊びますか？」
「凡才相手に球数消費するのももったいないわ。次はウイニングシュートで勝負する」
「ストレートですか？　左打者のオレにシンカーはないですよねえ」
「まあそれくらい読んでくれや」
「そうですか。それじゃ、お返しに、オレも予告させてもらいます。長嶋さんがライトに打ち込んだから、オレはセンターに打ち込みましょうか」
「約束は守れよ」
「守りますとも。オレも立派な社会人ですから」

ゴジラパンダウナギイヌ

ボテボテのファーストゴロを打った瞬間、松井は走れなかった。基本に忠実で全力プレーを怠らない松井にしては珍しい凡ミス。

だがそれだけショックが大きかったことがわかる。

「まさか、ありえない……」

ようやく我を取り戻し、走り出した松井であったが、すでに一塁ベースには、阿波野のベースカバーを制し、自らベースに入った土井がいた。

松井はバットを持ったまま、バックスクリーンに映しだされた今の打撃を見る。

「やっぱり、シンカーだ。ありえない。阿波野さんが左打者の僕に対して、シンカーを投げ込んでくるとは……」

歯をくいしばる松井に梨田が追い打ちをかける。

「だから松井。お前は凡才なんや。天才ならデータにない球が来ても打ち返せる。しかも今のように甘いコースなら当然」

阿波野は左打者の自分にシンカーを投げてこないと踏んだ松井は、外角の変化球を予測し、踏み込んできた。しかし、当時られた球種はシンカー。踏み込んだ松井を嘲るように、真ん中から足元に落ちてきたボールを松井は芯に捉えきれなかった。

梨田いわく”凡才”松井は、予期せぬ一手に対しての瞬発的な対応力に欠けているのだ。

「松井のようなタイプは教科書通り、あるいは今のような型破りの配球でしか打ち取れん……。だから怖いんやけどな。教科書通りの投球ができたら、どの投手も誰も打てんし、型破りのアイデアなんてそうあるもんやない」

しかし左打者に対するシンカーを投げきれず、あれだけ現役時代に左の好打者に痛打を食らった阿波野がどうしてゲームの展開の分かれ目のこの場面でシンカーが投じられたのだろう。キャンプの短

い間で身につけたのか、それとも。
「ふう……。シンカーのサインとはねえ、梨田さんも大胆だ。現役時代からまともにきまったことがない左打者への膝もとのシンカーをここで出すとは……。投げきれなかったけどどうにか打ちそこねてくれた」
阿波野はとくに自信や根拠があって投げ込んだわけではなかった。梨田の捨て身の賭けがたまたま当たったに過ぎない。
だがこの一球は左が並ぶ巨人打線に与えたインパクトは大。
松井は次打者の高橋由を捕まえて、
「おい、由伸。阿波野さん、シンカー投げてくるぞ」
「え、阿波野さんが？」
二球目がいつくるとは知らぬ、左打者に対するシンカーの幻影に怯えることになる。

「次は高橋由伸か。天才やなあ……。天才だけに勝負がみえんが、あっさりと倒れてくれるかもしれん」
梨田の色分けは以下の通り。クロマティ、篠塚、長嶋、高橋由、阿部、坂本、堀内の7人が天才。つまりどんなボールにも対応してくるが、それだけミスショットも多いタイプ。
王と松井だけが凡才。攻略法を描きやすいが、それだけに一歩間違えると大怪我につながるタイプ。
言葉の便宜上、王と松井を見下す形になったが、どれも難敵にはかわりはないのである。

長嶋の一発の余韻がまだ十分にあるドーム。それにほだされた同県人の高橋由と阿部は、自分も続こうと積極的に攻め立てるが、それを見越した阿波野と梨田のバッテリーは彼らを術中にはめる。
阿部が高々と打ち上げる。きれいな縦回転のスイングから弾きだされた打球は勢い十分。抜けたなら、阿部の足でも長打コースの当たりだが、今のローズのイメージとは違い昔は俊足強肩の外野手と

してならした中堅手ローズは、この打球を軽快な足取りでキャッチ。
がっかりとする阿部は、ライトの守備位置に向かう高橋由を捕まえては嘆く。
「ああ、いったと思ったのになあ～。でも由伸さんより飛ばしたからいいや」
「いやオレのが飛んだぜ」
「いや僕の方が飛びましたよ」
フライアウトの距離を競いあうのだから、天才たちの脳の中身は一般人には理解できない。
「まずいな、牧野ヘッド」
「まずいですね、川上監督」
「巨人の野球じゃないな。どうもあっさりとしてていかん」
「やはり向こう受けを狙いすぎましたかね、このオーダー」
「ああ、脇役タイプをいれておけば、阿波野のような精神的に脆さのある投手は今頃、ロッカーでさめざめと泣いているわ」
一点先取にも満足しない巨人ベンチであった。

拝啓男石井です

「男・石井浩郎。栄誉あるＪＷＢＣの第一打席にたたせてもらいます。堀内投手、阿部捕手、岡田球審。お手柔らかにお願いいたします」

ヘルメットを取り、９０度の角度でお辞儀する石井。しかし阿部は違和感だらけ。

「そういうキャラってテレビの番組上じゃないんですか？」

「なにをいう、阿部捕手。これが私の素だ」

「元木さんとかが、石井さんは、ああみえておちゃらけたすげべ野郎だといってましたよ」

「そんなわけはない。私は、色ごとには一切の興味はない。元木くんはどこだ？根拠のない誹謗中傷は風説の流布にあたるから、気を付けるようにいっといてくれ」

「そんな堅い人が、１０歳以上も年が下のレースクイーンあがりと再婚しますかねえ？」

「今は、投手と打者がお互いの間合いを図りながら、呼吸を整えるときだ。わけのわからぬことをボヤいて、むやみに惑わすマネはしないように」

「はいはい。それじゃあ行きますよ……」

阿部の要求が大胆なら、応える堀内も命知らず。三者三振の勢いそのままに、４番打者としての連続試合のパ・リーグ記録を持つ、豪打者・石井にストレートでご挨拶。

男・石井、それを見逃すなど無粋なマネごとはしない。振り切ることで挨拶を返す。

上段から振り出された石井のバット軌道は、無駄がなくコンパクト。ゆえに、ミートに狂いは生じず、バットはボールをとらえる。

一塁側に切れるファウルボールであったが、石井の感触は悪くない。堀内の一番速いボールを見たとの自負だろうか。

「よし」
と短くつぶやくと、バットのヘッドをちょんと触った。
「慎之助とはあまり対戦経験ないよなあ。君が一年目の２００１年、私はロッテにお世話になっていたし、２００２年の横浜在籍時に何度か顔を合わせた」
「そういうば、一年だけ横浜にいましたよねえ～。４番打ってましたっけ？」
「ああ一応な。グランという外国人選手と争っていた」
「グラン。また懐かしい名前を……」
「だが、その時の私は、引退を決めた年だけあってボロボロの状態。横浜時代のわずかな対戦経験を思い起こしても、何の参考にもならないだろう。今の私は４番を張り続けていた近鉄時代のものだ」
「わかりますよ。スイングが全然違いますもん。鋭くコンパクトでそれでいて力強い」
「いいところに気がついたな。私の打撃の極意は、振り幅の小ささにある。当時、西武の清原か近鉄の石井かと並び称せれたいたが、キヨとはタイプがまるで違う。１３０も４０も三振する清原と違って、私はその半分もしない。慎之助、よくわかるだろ。捕手として、どっちがやりにくい４番か」
「そりゃ三振が少ない方がやりにくいですよ。でも三振が少ないならそれを利用すればいいんですよ」
「慎之助、君も頭を使うようになったか。まあ一般入試で早稲田に入った私と違って、野球推薦の君じゃ、頭を使ってもたかが知れているだろうけど」

阿部の作戦はシンプルそのもの。
「ミートが上手けりゃ、それだけ少ない球数で結果が出る」
内角を攻めて、ポップフライをあげさせようと、阿部は、執拗に石井の懐に隠れるように寄る。
球威や球速に欠ける投手なら無謀な策略であるが、今の堀内は浮

き上がるほどスピードが乗っている。
しかも開き気味のフォームで球が抜けがちの今日の堀内の状態がいいようにでる。内角攻めの一番の不安点は、攻めきれず真ん中に入ること。抜けて石井の体に当たることがあっても、ボールが流れて真ん中にいくことがないからだ。
力と力の勝負を望む石井は、少々ボール気味のストレートにもバットを振り切る。
「ああ～」
しかし力負けだ。堀内の速球の威力が勝り、打球はフラフラと二塁篠塚、一塁王、右翼高橋由の中間点に飛んでいく。
勝負に負けても石井はひるまない。
「これも計算づく。力負けして凡フライを打ったとしても、振り切ればポテンがある!!」
「あ、まず、これがあるんだ。忘れてた。どやされる」
阿部は策にはめたがいいが、最善の準備を怠っていた。ポテンを警戒して、篠塚と高橋を詰めさせることを忘れていたのだ。
しかし、少々のミスを個人の能力でカバーできるのが巨人の凄さ。篠塚が後ろ向きでダイブして、追いつけないはずの飛球をグラブに収めた。
くやしがる石井に、ほっと息を吐き出す阿部。クールにボール回しをする篠塚。
しかしベンチの川上は、今のプレーをよしとしない
「気に食わんな。どうも気に食わん。これは私がやりたい野球じゃない」
「すべてが偶然の産物ですな」
「牧野ヘッドのいうとおり。最善の準備と指示の徹底こそ巨人野球、ひいては私の野球。スター選手の力に頼るだけじゃ、誰が監督やっても同じだ」
「川上監督の野球を理解し分身のごとく体現できるプレーヤーがグランド上には皆無」

「その通りじゃ。王、長嶋、堀内、野球センスの塊ばかりだが、野球頭脳があるやつがおらん」
「森を先発させればよかった」
「ふん、堀内が森はいやだとごねたからん」
「柴田、高田、土井、黒江らは今の先発野手と比較し力不足でベンチに留まっている」
「Ｖ９はＯＮだけで成し遂げたわけじゃない。影武者があってこそだ。いないなら」
「よそから取ってくればいい」
「それは長嶋野球じゃな」
「川上野球の真髄はいないなら」
「作り出せばいいじゃ」
「誰がいいですかね」
「そりゃもちろん下ろしたてのスポンジがええ」
「なんでも吸収できて、川上野球の色に染めれますからね」
「一人おるな、絶好のターゲットが。牧野ヘッド頼むぞ。やつを黒江二世、土井二世に作り替えろ」
「お任せください……。今、長嶋の横でハツラツと飛び跳ねる男を川上野球の体現者にかえてみせますよ。この試合が終るころまでには」

「よし！　斎藤！　ええ球や」

村田真一ブルペン担当の持ち前の泥臭い声色がブルペンに響く。

ずらりと並んだ豪華な巨人投手陣。一番右端のマウンドには、斎藤雅樹が立っている。サイドハンドから繰り出されるボールは、サイド投手にありがちな遠慮したクセ球ではなく、捕手のミットを突き破るような快速球である。

斎藤の後ろで順番待ちするのが、桑田と槇原。平成の三本柱のそろい踏みだ。

左端のマウンドでは別所毅彦が、豪快な高笑いを浮かべている。

「ガハハハハガハハハ。どうや藤尾！　久しぶりにワシの球を受けた感想は」

別所の剛球を受ける捕手は、藤尾茂。森以上の強肩強打の捕手といわれ、何度もベストナインを獲得した男がブルペン担当に回るのだから、巨人の選手層の厚さが伺える。

別所の横には、スライダーの元祖、史上初の完全試合男である藤本英雄がいる。

「よ…。あれこんなに落ちたっけ」

真ん中のブルペンでは、山倉が、西本のクセのあるシュートボールに嬉しい悲鳴をあげる。

「山倉さんの捕球感覚も鉛ましたねえ。今のにミットをかぶせて捕りにいくなんて」

「おい、西本。そりゃないよ。僕の豪速球じゃないんだから、お前のシュートなんて目をつぶっても取れるよ」

西本に憎々しげな一言を浴びせるのは江川だ。そして投手陣の調整ぶりに神経を尖らせているのが中尾ブルペン担当投手コーチ。

「中尾コーチ、２００勝もされてるんですか？」

これには上原も驚きを隠せない。
「ほんまけったいな投手陣やな～　なあ山口」
あまりにも豪華絢爛のメンツに気後れしていた山口鉄也に上原は気を使うことを忘れない。
しかし元々気の弱い山口はすでに気が動転していて、上原に満足な返答どころか、返事も返せない。
「大丈夫やろか。ぐっさんより入れる投手おったんやないか。中継ぎ左腕のスペシャリストが山口しかおらんから入れた思うけど」
しかし上原の口の滑らかなこと。これだけ偉大で尊大な先輩に囲まれたら、山口までいかずとも、ブルペンの横で小さくなるのが普通であるが、この男は違う。
同じ気質を持つ角盈男とともに、すっかりブルペンの盛り上げ役を担っているのだ。
「角さん。梨田さんの打撃フォーム、ほんまにこんにゃくみたいっすねえ。ギャハハ、手首をゆらゆらさせるだけやなくて、腰も振っとるでえ。おもろいわ、ギャハハ」
モニターに映る梨田のこんにゃく打撃に感化された上原は、立ち上がってさっそく実践。
「こんな感じやろか？」
腕を突き出して、腰を引いてゆらゆらと全身を揺らす。よりデフォルメされた上原の動きは、スタルヒンの心をとらえる。
「ワハハハハ。上原！　おまえおもろいな～」
「スタちゃんに受けてよかったわ～　角さんが渋い顔してたから外した思うたわ」
すっかり上機嫌の上原は、やや浮き気味。
ライバル同士を同じマウンドに立たせ、競争心を煽り、そこから生まれるジリジリとした緊張感で焦げ付きそうなブルペン内に、今の上原は不釣合い。
「なんかオレだけ張り切っとるなあ」
空気を察した上原は、椅子に腰掛け直すがそれでもひるむ様子は

ない。
「オレが必死に盛り上げてるのに、なんやのこの空気。スタちゃんくらいしか乗ってこんわ。角さんもいつもの明るさやないし。お、梨田さん、レフトフライか。ゴジ、よう捕ったなあ。アイツ守備がヘタなのに」
投球練習を終えてタオルを取りにきた槇原は、上原の言動に疑問を呈す。
「お前、よく騒げるなあ～　抑えの切り札に指名されたんだろ？」
「マキさんやないんですから、三回から緊張してガタガタ震えませんよ」
「その厚かましがオレにもあれば２００勝どころか２５０は勝てたのに。ほんと、羨ましいよ、上原の性格」
槇原のいうように、巨人の栄えある抑えの切り札を担うのは上原なのである。決めては度胸と制球力。そしてフォークがあることだ。先発こそ投手の信念のある上原は、最初これを拒絶。抑えをやるなら辞退をするとまで先発の座に固執したが、豪華すぎる巨人先発陣のラインアップを間近かで見て軟化。堀内のドロップカーブ。江川のミサイルのようなストレート。高橋一三のスクリューを魅せつけられたら、プライドの塊のような上原でも、先発にこだわることはできない。
「しゃーない。抑えやるわ」
それでもしぶしぶの口ぶりの上原は抑え専任にある条件をつけた。
「巨人の参加選手全員のサインが欲しい。ならやるわ」
なんとも、とほほな願いであるが、収集癖のある上原の目は本気。
「クロマティがギャランティくれんとかかんと？　ならオレ抑えやらんわ」
クロマティが肖像権を盾にサインを拒んだことで、上原はそっぽ向いてしまったのだから。上原自らクロマティに切り込み、利益が絡まぬことを納得させサインを書かせたことで事態は収拾された。

が、この騒動をみればわかるように、いかにも子供ぽい精神の持ち主の上原がはたして鉄の心が必要な抑えに向いているのか。

８時半の男宮田、鉄腕鹿取だけでなく、おちゃらけキャラでタレントとしても名を売った角でさえ、神妙な面持ちでモニターをじっとみつめているのにだ。

「どんな顔して出番待とうとそんなんオレの勝手やん。へらへら笑ってるやつが、いざマウンドで力が出せるか？　心配ご無用。オレは切り替えの上手い人間やから」

川上監督ー牧野ヘッドー藤田チーフ投手コーチのＶ９トライアングルが、抑えに指名したことはある。

「お、巨人の投手陣を木っ端微塵にした阿波野さんが打席に立ったでえ。代打出る思うたけどなあ、西本監督決断力ないなあ。しかし阿波野さんの構え、力感ないのお。浪人生がストレス解消にバッチングセンターいったみたいや。お、当てたわ、走ったわ。ギャハハハ、阿波野さんの真剣な顔、おもろいのお～　ギャハハ」

地獄か天国の分かれ道に立たされても、閻魔大王にちゃちゃを入れそうな上原なら、９回の一点差のマウンドなど、どうってことないだろう。

鼻ピアース

「お願いします！　それだけはやめて下さい！　坂本だけは型にはめないでください！」

川上を前にひるむことなく、原は試合そっちのけで熱くなっている。

「もう決めたことだ。坂本には、巨人軍のために自分を殺してもらう」

「坂本は、第二の原たつ……いや、長嶋さんになれる素質の持ち主です！　自由奔放にやらせることが……」

川上は頑として譲らず、原の言葉に耳を貸そうともしない。さすが大正生まれの頑固者、球界のドンである。さらに都合が悪いことに、坂本が雑なプレーをするのだから、原にはたまらない。

投手打者である阿波野が当てただけの打球がショートの坂本に転がる。しょせん投手の打球となめた坂本は正面でとらず、逆シングルでこれを捕球。さらに、きっちりと手はずを踏まず、流れのままにランニングスローをするのだから、どうしても送球の球道は乱れがちになる。

弾道は流れて、一塁の王がファーストミットをめいいっぱい伸ばしてようやく届く範囲。　これだけでも印象が悪いのに、雑なプレーに悪びれることもなく、坂本が笑顔を浮かべてファンの声援に応えたのだから、巨人首脳陣の怒りは爆発する。

内野守備担当の土井が、

「コラー！　勇人！　横着なマネをするな」

一喝ののろしをあげれば、黒江、高田とＶ９戦士から矢のようなお小言が飛んでくる。

「あんなプレーをするならオレが守った方がましだ」

「黒江さんのおっしゃるとおり。うちの慶三（川島慶三ーヤクルト）でもあんなプレーはようせんよ。ヤクルトの遊撃手ができてどうし

て巨人の遊撃手ができない？」
　締めは牧野ヘッド。坂本の両肩を抱きかかえる。
「お前のような端役がスターのようにプレーしてどうする。端役は端役らしく基本に忠実にプレーをするんだ。いいか坂本。今度こういうプレーをしたら、先発はおろかベンチからも外すぞ。なにせ、伝統ある巨人軍にはお前の替りなど腐るほどいるんやからな」
　牧野がすべてを伝え、川上は何も口を挟まないが、どっしりとベンチに座るその姿は威圧感十分。坂本の顔からみるみる覇気や精気が消えていく。
　原は現役巨人監督、坂本の育ての親として、意見を挟みたいが、雑なプレーが起きたあとだけになかなか行動に移せない。
「この回はちょうど坂本からだったな。よし、お前を試しいい機会だ。いいか、坂本。状況は三回の裏。１－０でうちのリード。そして８番打者のお前が先頭打者。次は投手の堀内。打撃がいい堀内とは投手は投手。過度の期待はかけられない。そして投手の阿波野は、表の攻撃で一塁まで全力疾走した直後。これをすべて踏まえて、何をすべきか、そして何をしたか。お前の考えと実行力を見極めたいと思う。いいな、もう一度いう。お前は元気ハツラツの若武者じゃない。きらびやかなスターを縁の下で支える本日たった一人の脇役だ。それを踏まえて、いってこい」
　牧野の注文に坂本の思考回路はショート寸前。原も思わず、見てられないと顔を覆う。
　ケースからバットを取り出し、ヘルメットにかぶり直す一連のルーティンも、いつもの滑らかさがないまま坂本は打席に向かう。
「なんやいきなり、どうせいちゅうねん。一点差の８番打者の役割。知らんちゅうね。ホームラン、カーンとかっ飛ばして追加点とればええんやないんか」
　バットにスプレーをたっぷりと掛けても、考えはまとまらない。
「８番ってなにをするもんやろか。オレも一軍一年目は８番やったけど、特に制約はなかったけどなあ。今、８番打ってるのは脇谷さ

んや古城さんやろ。あの人たち何をしてるんやろ……」
　坂本は先輩たちの活躍振りを脳内再生する。
「あっさりと初球打って凡退するシーンしか思い浮かばんわ」
　自らのプレースタイルを否定され、急に脇役の役目を果たせといわれても無理がある。
　持ち味の積極性を奪われた坂本は、阿波野の初球真ん中の失投を見逃してしまう。
「わからん。でもこれでいいんやないかな。阿波野さんは全力疾走したあと、初球をあっさりといかず、好球をも見送って球数を投げさせる。なんか、脇役の職人ぽい働きやぞ」
　坂本は真実を見つけたりと胸をなでおろすが、ベンチの評価は芳しくない。
「バカ！　絶好球じゃないか！　どうして見送るんだ！」
「そうだ、今の打たないやつがあるか！」
　土井や黒江の怒号が飛べば、原は頭を抱える。
「まったく勝手なことばっかりいうよ。あれこれ注釈押し付けて、坂本の持ち味殺そうとしているのは自分たちじゃないか。坂本は、あんたたちの二世じゃない。歴史に残る遊撃手になるんだ。それをなんだいつまらない選手にしたてようと……」
　ベンチの思わぬ怒号に坂本は我を失っている。
「どうせちゅうねん。オレのプレーが気にくわないなら先輩たちがかわりにどうぞって気分や」
　光星学院時代、監督の指導に反発し何度も反旗を翻した坂本。納得が出きなければ、すぐに顔に出る。
　口元からはぶつぶつと愚痴が垂れ流され、眉は込みあげた怒りで跳ね上がる。ヘルメットを深くかぶって、コーチ陣にわからぬように、きっと睨みつける。
「そんなん知らんわ。オレはセコセコツコツの川相や土井やないわ。オレは坂本勇人や。スラッガーや、勝手気ままにやらせてもらうで。ホームラン打ったるわ。それでも叱れるもんなら叱ってみい。外せ

るなら外してみい」
開き直った坂本は、いつものように、背筋をぴんと伸ばし、バットを大きく構える。
「よっしゃこい。阿波野！」
これで宣言通りホームランを打ったならば、坂本はスター候補生ではなく、もはや正真正銘のスターそのものである。がしかし……。
「あ、力んでもうたわ」
阿波野のシンカーに空振りした坂本は、まるで長嶋のようにヘルメットを飛ばす。
思いどおりにはいかないのが人生であり、野球である。

それって鬼籍？

「監督！　坂本が生意気な態度を取りましたよ！」
「監督！　懲罰です！」
「監督！！　あの一発狙いのスイングは問題です！」
「お前らがいわんでもわかっとおるわ。しかし何から何まで雑だ。守備、打撃、すべてに軽いな。原よ。お前さんは、いったい坂本にどんな教育をしておるんじゃ？」
「すいません川上監督……。彼はまだ若い。色々と注文つけるよりも、まず自由にやらせて……」
「それが許されるのも職業野球７５年の歴史で私と王、長嶋だけじゃよ。若さなど関係はない。素質がないものは、創意工夫が必要なんだよ。坂本がわからないようなら、私がこの場面なにをすべきか教えてやるわ。原。タイムをかけて坂本をベンチまで連れてこい」
「は、はい……。了解しました」

追い込まれた坂本は打席を外し、口を尖らせながら素振りをしている。見ないふりをしても、右打者の坂本には、一塁側巨人ベンチの動きがいやでも分かる。
「なんや、原さんが川上監督に説教くらってるで……。オレが要因やろうな……。まずいわ。オレ一人標的になるんやらまだしも、原さんまでも巻き込まれたら……。大変なことになったわ……。オレが悪いいうても、懸命にプレーしてるやん。それやのにどうしてこうなるんや……。なんかこういうこと高校時代にもようあったわ……。あの時もオレが一方的に悪いわけやないのに、おれが金沢監督に頭を下げて一件落着になったなあ……。大人の世界いうのは歩み寄るのが大切なのやろか」
悩む坂本に、原が駆け寄ってくる。
「ヘイ！　はやと！　ヘイ」

「なんでしょうか。原かん、いや原打撃コーチ補佐兼内野手……」
「川上監督がお前のことを呼んでいるから、ベンチにこい」
「え、今、打席の途中ですよ」
「そんなことはどうだっていいんだ。巨人の尊厳が掛かっている。時間はいくらかけていいはずだ。でしょ、岡田さん？」
原が白い歯をにっと光らせると、岡田球審はタイムを承諾する。
「なんですか、岡田さん。追い込んでリズムの乗ってきたこの場面、タイムを許すこともないでしょ？」
梨田は正論をぶつけるが、巨人寄りの岡田球審ははなから受付ない。
「まったくもう……」

「川上監督。坂本勇人を連れてまいりました」
川上なにをするものぞの坂本は目も合わせない。
「まずその態度だな。いったいどういう教育をしているのやら、現役選手にとって、ＯＢといえば父兄も同然。実の父親にそんな態度が取れるか」
それでも頑としてふてくされる坂本に見かねた原は、まるでやんちゃな生徒をたしなめる中学校の生徒指導の先生のように、接する。
「これ、坂本。まずヘルメットを取りなさい」
原にヘルメットを取り上げられた坂本は、さすがに目を伏せることができず、まっすぐと川上を見る。
「まあ細かい礼儀指導は試合が終わった後でもできる。今は心構えを叩き込むときだ。坂本、お前は牧野ヘッドに出された宿題の意味を理解していないようだな。あえてもう一度たずねる。この場面、８番打者のお前は何をすべきか」
「バットを短く持ち、コツコツとファウルで逃げて、阿波野投手を疲れさせる……。でしょうか」
搾り出すように語る坂本に川上は満額回答を出さない。

「甘いな。やはり巨人軍の伝統はしっかりと受け継がれてはいないようじゃ。これも長嶋が目先の勝ちほしさに、至らぬ外様ばかりを集めた弊害かな」

のらいくらりとはぐらかす川上に耐えかねた坂本が、ついに牙を向く。

「お言葉ですか、監督。オレは川相さんや土井さんみたいなセコイタイプやないんですよ。そんな自分を殺すような野球をやらされるなら、オレ試合にでなくてもええですよ」

坂本の見せたよけいな反骨心に保護者の原はハラハラ。

「これ、坂本！　川上監督になんて口を……」

思わず原は、坂本の口をふさぐ。このままでは、何をいうのかわからないからだ。

「す、すいません……。いつもは礼儀のできた子なんですけど、今日はちょっと……」

しかし、川上の反応は意外に坂本に寛大。

「わっはっは！　聞くに勝る跳ねっ返り坊やじゃな。私が求めていたのはこの若さよ。二岡でもよかったんじゃが、あえてこの坊やも起用したのは荒々しさに魅力を感じたからじゃ。ええか、坊や。お前の役目は、相手投手の決め球を殺す。それだけじゃ、それだけが脇役である坊やの役目なんじゃ」

「決め球を殺すやって？」

はっとした坂本は、思わず敬語を忘れる。

「そうじゃ、阿波野の決め球はなんじゃ？」

「シンカー」

「そのシンカーを殺すんじゃ。ええな、あくまでも”殺す”んじゃぞ。打つ必要はない。主役の捨駒になるべき脇役は打たんでもええんじゃ。ええか、阿波野はシンカーを右にしかゆ投げてこん。投手の堀内を抜かし、右打者は坊やと長嶋だけ。打つのは長嶋に任せ、坊やはその長嶋がシンカーを打ちやすいようにアシストをするんじゃ」

「アシスト？　どうやって？」
「ウハハハ。坊やはどこまでも跳ねっ返りよのう。まあええわ、元気で。アシストいうのは、ようは阿波野がシンカーを投げにくくさせる状況にさせるんじゃ。阿波野はシンカーを投げたがっとる。しかし、左偏重の今日のうちの打線に対して、右にしか自信のないシンカーを投げる機会がない。だから二球目にかかわらず、坊やにシンカーを投げてきたんじゃ。追い込んだわけでもないのにシンカー投げてきたのは、まあ一種のテストのようなもん。長嶋に対する決め球として使えるかどうかを確かめるためにな」
「あ、そやったんや。なんで１－０のカウントで決め球使うんやろと思うたが、そういう意味やったんや。川上監督のおじいちゃん、無駄に長く生きてないな。よう細かいとこ気づくわ」
「これ、坂本。おじいちゃんとはなんだ」
「原さん、せやけど、おじいちゃんやん」
「ははは、おじいちゃんだよ、坊やのいうとおりだ」
いつのまにか坂本は川上の心の扉をブチ壊し、家主のように寝そべっている。
「で、どうすんの？」
「シンカーを投げさせい。そして阿波野の精神に少しでも打撃を与え、長嶋に対して使いにくくするんじゃ」
「……おじいちゃんの話、抽象的でようわからんけど、まあシンカー打て話やな。わかったわ！　なら打ってくるわ！」
坂本には、すっかり持ち前の溌剌さが戻っていた。
「あれでもまだおかしいわ。なんやろ」
しかしまだ何がか足りないのだ。
「あ、そうか、登場曲や、ＧＲＥＥＮや。キセキが足らんのや」
川上の騒がしいの一存で、登場曲は使用禁止に追い込まれていた。
しかし坂本の望む奇跡は、川上から起きる。
「坊や。これが足らんのだろ？」
「ん？」

「ふたりよりそってあるい～て～　♪」
川上が突然、キセキをアカペラで歌い出したのだ。原は驚きで目が飛び出る。
「おじいちゃん、ようＧＲＥＥＮ知ってるやん」
「わはは、毎日、巨人戦を見れば覚えるわ」
「よし、なんか乗ってきたわ。阿波野のシンカー殺してくるで！！」

それって鬼籍？（後書き）

上原と同じキャラじゃねーか

V9の極意

「川上のおじいちゃんがいうことにゃ、シンカーを狙って打てばええんか。打ついうより殺せいうてたな。どう違うんやろ？　まあええ。そうすることにより、長嶋さん相手に、阿波野さんがシンカーを投げづらくなる。阿波野さんにとって右打者の外に投げるシンカーは生命線。打たれても使わんと勝負にならんから、打たれてもでも投げんとしゃーなと。そういうこっちゃな。せやけど、決め球のシンカーを投げさせる？　そんなん何を投げるかオレが決めるこっちゃない。阿波野ー梨田のバッテリーが決めるこっちゃ」

坂本は、与えられた宿題をここまで噛み砕かいて説明されても、いまだ正解が見えてこない。V9野球を実践するのには坂本は若すぎるのか。

「初球、まっすぐ。二球目、シンカーやろ。次も続けてシンカー投げてくれんかなあ……。いや待てよ。川上のおじいちゃんがいうことがようやく分かってきたで。シンカーを投げさせるようにオレから仕掛けていけばええんや」

坂本は野球の申し子だ。わずかの時間で巨人ベンチの求めていること理解した。

「シンカーを引き出し、それを殺すんや。コツコツとファウル打ってシンカーの球道を長嶋さんに見てもらうことも大切やが、それ以上に、近鉄バッテリーに嫌な印象をあたえる術がある。それは”ひっぱる”ことや。結果、凡打でもええんや。外角に流れ落ちるシンカーを右の自分が、腰を引かずひっぱることで、シンカー＝”空振り”か”流し打ち”を計算する近鉄バッテリーのコンピュータを狂わすことになるんや」

坂本は、いつもより打席の後ろに立った。

「そしてシンカーを引き出すいうのはこういうことやな」

打席の後ろに立ち、内角待ちと見せかけて、外のシンカーを投げ

させる。これが坂本のシンカーを投げさせる作戦だ。
名捕手梨田は、坂本のスタンスの違いも見逃さない。二球目までにできた足跡より、明らかに坂本は後ろにいるからだ。
「……」
梨田の視線が足元にあることに気づいた坂本は、内心ほくそ笑む。
「よっしゃ、梨田さん見とるな。これで投げてきたシンカーを、思い切り踏み込んで、ひっぱれば、宿題完了や」
阿波野が投球モーションに入る。梨田は外に寄る。坂本は外角シンカーを想定し、思い切り踏み込む。
「こい!!」
しかしリリースとともに、梨田は、坂本の体に隠れるように内に寄る。
「あ」
阿波野が投げ込んだのは内角をズバッとつくストレートだ。虚をつかれた坂本はバットも出てこない。
「シンカー投げさすように仕向けたのに、ストレート投げてくるなんて反則やないですか」
梨田に抗議をしても無駄。見逃し三振、それも最悪の三球三振に倒れた坂本は天を仰ぐしかない。
さすがの坂本も意気消沈。背中を丸めて、首脳陣を避けるようにベンチに帰る。
脇役の役目どころか、見逃しという最悪の結果に終わった坂本に対する風当たりは強い。土井や黒江の冷たい視線が飛ぶ。空気を察した原が坂本の心のケアと飛んでくる。
「狙いはよかったぞ。バッテリーにわかるようにスタンスをかえてシンカーを引き出そうとするあたりは。だが、坂本。相手捕手は百戦錬磨の梨田さんだぞ。お前がシンカーを引き出そうとわざと後ろに下がったことなどお見通し。それならストレートをズバッと決めれば虚もつけるし、球数も少なくすむだろう」
「あ、そうか……。裏の裏か」

「これでわかったろ、野球はお前が思っている以上に奥が深いんだぞ」

「はい……」

しゅんとなる坂本。

「だが、気にすることはない。お前はまだ若い。これから場数を踏めば自然に嫌らしいプレーができるようになる。ガンバレ、ファイトだ、グットラック」

原の歯の浮くような薄っぺらい単語の羅列に坂本はハッキリとした顔をしない。

見かねた堀内が、割って入る。

「原よ。口でいうよりは実践よ。オレもＶ９戦士の一人だ。オレが、シンカー殺しの極意を見せてやろよ。いいか、坂本。よく見ておけよ。これがＶ９野球の真髄だ」

悪太郎、先生に成る

「これがＶ９野球の真髄つうもんを見せてやるよ。坂本、めんたま、かっぽじってよく見ておけ」

ずいぶん威勢のいい堀内であるが、通算２１本塁打もスラッガーとしての堀内を証明するが、巧打者としての堀内を表現するものではない。，１７２の打率が示すとおり、少々、打撃のいい投手にしか過ぎない堀内は、いかにして坂本にＶ９野球のお手本をみせるのだろうか。

「まあ阿波野ー梨田のバッテリーはなかなかのもんよ。情報過疎、脳みそまで筋肉球団の近鉄にいるわりに、頭のキレるやつらだ。オレの打撃の資質がＯＮ並との情報はつかんでいるだろうよ。だからといって、しょせん投手さ。打者のように、のべつ幕無しに、打撃練習をしているわけではないオレは、やっぱり変化球は苦手なもんよ。それでも阿波野は、シンカーを投げてこんだろうよ。投手に決め球を投げて打ちとって何がエースか。それが主戦投手の意地ってやつさ」

堀内は、腰を大きく揺らす独特の打法を披露する。バットを上段に構えるのは、いかにも長距離砲のそれ。しかし今の堀内は、坂本のお手本となるために、自分を殺し、脇役を演じるつもりだ。

「決め球を投げない意地っ張りな投手の攻略法のお披露目の時間だ」

堀内の思うとおり、阿波野はストレートで押してきた。王、長嶋に投げるそれと、違い全身全霊をかけたとは言い難いストレートであったが、堀内の打撃を侮らず全力で向かってきたのは確か。そのストレートを、堀内が腰がちぎれそうなほどのフルスイングをしてきたのだから、阿波野ー梨田のバッテリーは警戒を強めざるをえない。

「投手打者を相手にするときは、二つの筋道を計算するものよ。一球で打たせて取るか、三振に取るかだ。投手なんかに、球数を浪費

したくないバッテリーは、まず、なるべく一球で仕留めることを考える。だが、不思議なもので、初球にストライクを取ると、二球目で打ち取ることよりも、三振を取ってやろうと欲が生まれるのよ。阿波野のような奪三振マシンなら、なおさらだ。しかも、オレのスイングにびびったときている……」

堀内は、坂本に合図するかのように大きく息を吐き出した。

「次、来るぜ。オレに投げたくないはずのシンカーがさ。これだけのスイングを見せられたんだもん。怖くてストレートはいけない。ならエースのプライドに触れても、シンカー二つで仕留めに来るはずよ」

阿波野はゆっくりと振りかぶる。

「いくらオレでも阿波野のシンカーは打てないさ。だが、殺すことはできる。これがＶ９野球の真髄よ」

堀内が引き出されたかのように、阿波野はシンカーを投じてきた。真ん中から流れ落ちる軌道は、対強打者のような緻密な警戒心はない。投手相手なら、これで十分といわんばかりの荒っぽい制球である。しかし、落ちるボールに見慣れていない堀内、真ん中から落ちる甘い球道にも、バットはついていかない。

それでもＶ９野球の体現者となるべき、堀内は必死のシンカー殺しを見せつける。落ち際と、決死のバット操作で当てた堀内は、極端に足を大きく開いたスタンスそのままに、思い切り、引っ張る。

「どうだ、坂本。見たか、これがＶ９野球よ」

投手ごときに、絶対当てられないはずのシンカーを当てられ、しかも引っ張られた阿波野のショックははかりきれないだろう。

「対長嶋に絶対必要のシンカー。その決め球が、投手堀内のなにげない凡打により、使いにくくなる。これがＶ９野球だ。９人がかりで一人の投手を殺しにいく、分かったか、坂本」

保護者と化した原は坂本に、今の凡打の意味と意義を伝えあげる。ところが、坂本はどこまでいっても反逆者。原の言葉尻を捕まえては、嘲り笑う。

「凡打やないですよ」
「え？」
三遊間に転がったこの打球をサードの石井がお手玉。半身の体勢から、なんとか送球をするが、それも高く浮き上がる。ファースト土井が、伸び上がって捕りにいくが、ミットの先に当てただけで完全捕球が出きない。石井、土井ともに、本職でないポジション。もしサードノリ、ファースト石井ならいとも簡単に処理できた打球だ。まさに、西本の超攻撃的野球が裏目に出たワンプレーである。
しかし、想定外のこの出塁を喜ぶ雰囲気が巨人ベンチにないのである。
「あ、しまった」
駆け抜けた堀内が舌を出せば、一塁コーチャーの土井は渋い顔をする。
「よけいだよ。投球に影響が出る」
土井が愚痴ると、それに呼応するように堀内がつぶやく。
「ホームラン打てばよかったよ。あーあ、走塁のお手本も見せないといけーねぞ、こりゃ……。まったく疲れるよ。これも若者の教育がなっていない今の首脳陣のせいだよ。巨人の野球とは何かと教え込まないと。川上さん以来、巨人にはろくな指導者がいねーんだな。あ、オレもその一人か」

オレがルールブックだ

「ホリ、どうするよおい。出塁することはなかったぞ」
「土井さん。出ちまったもんはしょうがない。投手は、投げる守る以外のよけいなことは極力しないで、点を防ぐことに神経を集中させるのが巨人軍の掟ですが、一度と走者となってしまったのなら、走者として全力を尽くすのも巨人軍の選手としてのつとめ。それに、坂本の目もあるでしょうよ。あれだけ口うるさくいって、走塁は手を抜くじゃ、示しがつきませんよ」
「お前の気持ちは十分にわかった。だが、ホリ。手を抜かぬなら、気も抜くなよ。手から戻って、ベースに指を突いて投球不可能なんてバカバカしいマネは辞めてくれよ」
「分かってますよ、土井さん。ぼくあ、投手ではなく野球人ですから。走攻守、すべてが超一流ですよ」
　堀内は宣言通り、走塁にも全力。じりじりとリードを広げて、阿波野を揺さぶりにかかる。
「阿波野、牽制投げてこい。それも間を空けるとか、スタートを遅らせるためとか、ちゃちな牽制じゃなくて、刺しにくる牽制をな」
　堀内の狙いは、阿波野にすれすれの牽制を促して、ボークを誘発すること。ボークで潰れた過去のある阿波野のこと。ボークひとつで崩れるのは必至。堀内は、九番投手の分際で決め球殺しどころか、阿波野自体を葬り去るつもりだ。
　しかし阿波野は、なかなか牽制を投げてこない。堀内の左足がアンツーカーから飛び出してもだ。堀内のリード幅は、もはや投手のそれではない。二盗を伺う俊足走者のそれだ。早い牽制が来たら、逆をつかれ戻り切れない距離である。それでも阿波野は牽制をせず、堀内を、ちらちらと横目で見るだけ。
「牽制をする勇気もないとは見損なったぞ、阿波野。お前さんは、総合力で勝負するタイプ。ボークが怖くて牽制をしないじゃ、ちっ

とも怖い投手じゃねーぞ」
　阿波野はモーションを起こすが、投げるのは正面。堀内を殺すでなく、打者のクロマティと勝負にいった。クロマティは阿波野のスライダーにタイミングが合わず、一塁側スタンドへのファウル。堀内は一度ベースに戻り、仕切り直し。
「ホリ、阿波野は牽制投げてこんなあ。投手のお前にスチールはないと決め付けてるのか」
「そりゃいくらオレでも、強肩梨田から二塁ベースを奪い取るのは不可能の話。でもですよ、土井さん。これだけリードを取られたら、クロマティの単打でも、一挙三塁の危険性がある。いや単打だけじゃない。二塁ベース上で、フォースプレーのタイミングになったら、このリード幅がアウトとセーフの分かれ道になる。いくら盗塁がないといっても、走者によけいなリードを与えちゃあいけないんですよ。だから投手は、一度でも牽制をすべきなんです」
　阿波野と向かい合う堀内は、またじりじりとリード幅を広げる。左足だけでなく、右足もアンツーカーから飛び出る勢いだ。いくら反応の優れた走者でも、まともな牽制がきたらひとたまりもない距離である。
「こい。阿波野、牽制を。それもボーグ禍事件の後に突貫工事で作り出した、そのへんの二線級がするような牽制じゃなくて、ヤクルト時代のノムさんに、あれぞプロと称された、あの本物の牽制をだ」
　阿波野は、二球目のモーションに入る。目線はホームのまま右足を胸の位置まで高くあげる。右足をゆっくりと降ろしにいく。牽制ではなくホームに投げる足の運びと堀内は、広く取ったリードをそのままに維持する。振り下ろした右足を上げなおして一塁牽制に切り替えたら、ボークに取られるからだ。
　しかし阿波野の右足はホーム方向に向かず、再び上がり、一塁に踏み出されてくる。牽制。それもボークすれすれの阿波野、必殺の牽制だ。逆をつかれた堀内は、足から戻る暇もない。頭から慌てて

戻る。伸ばした右手は、ファースト土井がかぶせにきたミットより、なんとか早くついたように見えた。しかし微妙な判定だ。

一塁塁審の島は一瞬迷った仕草をしたあとで、腕を横に広げた。判定はセーフであるが、一塁コーチャー土井が矢のように塁審・島に食って掛かる。

「島さん。今のボークでしょ。ボーク、ボーク。ホーム方向に振り下ろした足を上げなおして牽制してきた。走者をあざむく牽制だ」

阿波野は、堀内の挑発に思わず禁じられたボークすれすれの必殺牽制を解禁。足の動きが牽制の一連の動作と見られなければ、真違いなくボークと取られる牽制である。

土井が胸を突き出し、つばを吐きながら島に抗議をするが、島は受付ない。

「土井くん。あれはボークじゃないな。上手い牽制じゃがボークじゃない」

島ははねのけるが、土井は蓄積されたデータで攻める。

「それはおかしい。過去に二度もあの牽制の仕方で、阿波野はボークに取られた実績がある。判例に従えば、あれはボークのはずだ」

明治男の典型である島は、人のくだした判定どころじゃ、自分の信念を変えない。

「誰がどんな判定をしようと関係ない。今裁くのは、この私、島秀之助だ。私がルールブックだ」

土井の抗議は、島の決め台詞とともに退けられた。他の試合は別として、島が裁くこの試合、阿波野の必殺牽制は認められたことになる。ボーク誘発狙いの堀内のリードは、阿波野の武器を蘇らせてしまったのだ。それだけでも試合の帰趨に関わるのに、今の一連の牽制騒ぎは、巨人にとって暗い影を招いていたのだ。

誰にもわからぬように、堀内は右の人差し指を気にしている。

「まずい、帰塁の時に突いちまったようだ……」

堀内のひとり語りにフーセンガムぷく～

「島さんはあれなんですよ。昔の審判ですから、あれをボークに取らない。明治生まれの頑固の人ですから、今の審判があれをボークに取るからといわれても聞かず、自分の信念を曲げない。まあ阿波野潰しを牽制中心に考えていたこっちに不利なことは不利だけど、利用もできるよ。あれが取られないなら、オレだってボークすれすれの牽制をドシドシやっちゃうよ。まあ近鉄さんには、大石の大ちゃんくらいしか走れるのがいませんが」

堀内は土井からウインドブレーカーを受け取る。いつも一定の気温のドーム野球の多い昨今。すっかりと見かけなくなった墨に出た投手が寒さから肩の冷えを守るべく手段であるが、昔気質の堀内は、これがなきゃ落ち着かないのだ。

「まさかエンドランはありえませんよね、土井さん」

「V9巨人は相手の虚を突く野球だ。ありえない作戦を取ってこそ、相手に最大限のダメージを与えられる。どんなサインが出るかはわからない。覚悟を決め、準備を整えとけ」

「了解しました。まったくエースのオレにもサインプレーとはねえ。容赦ねえな。しかし打者はクロマティですよ。サインに従いますかねえ」

「それが心配よ。柴田やオレや黒江さんじゃないんだ。あの高慢ちきな大リーガーさんが、こっちのいうこと聞いてくれるかだな」

川上の意思を汲み取った牧野ヘッドから出たサインを、三塁コーチャーの黒江を中継役としてクロマティに伝える。クロマティは打席を外し、黒江の出たサインにうなづく仕草を見せるが、その視線が黒江のまばたくサインの動きに定まっているようにみえず、完全に理解しているか甚だ疑問が残る。

「１－２になったらエンドランをかけるから二球待てか……。投手のオレを動かせるとはねえ。一見無謀だけど、その実、理にかなっている。阿波野の必殺牽制でリードの取れなくなったオレは、たとえ、クロマティがつなげても二塁どまりが精一杯。一挙、三塁を狙わせるなら、動かすしかないと」

だが、川上の出したサインには疑問が残る。１－０のカウントで１－２のサインを出しているからだ。２球後のカウント状況であり、しかもボールが二つ続くことを想定したサインである。積極打法のクロマティを警戒して、近鉄バッテリーが二つのボール球を使うことは、十分予想できるが、問題はクロマティ。好球必打どころか、少々のボール球に手を出すクロマティがそこまで待てるかどうかだ。

がんじがらめのサインプレーに嫌気をさして、クロマティが反逆の”のろし”を上げたとすれば、その時、巨人が目指す精密な組織野球は、完全に崩壊する。

阿波野がセットに入る。堀内は牽制を警戒して、リードをほとんど取れない。二、三歩、塁から離れるだけの絶対安全圏にいる。

阿波野は、それを見て、打者クロマティに集中する。クイックモーションを取らず、十分に上げた足から、快速球を放る。しかし、そのボールの行き先は、ベースから大きくずれ、外角に外れる。さすがの悪球打ちのクロマティもこれには手を出さない。

「ほらきた。クロマティはやるときはやる男だ。チームプレイもできるんだよ……。とはいえ今のボールはアイツでも打てねーか。問題は次だなあ。１－１のカウントだ。いくらクロマティの積極性を近鉄バッテリーが警戒しているとしても、連続でボール球を使ってくるかだ。まあ川上、牧野の百戦錬磨のコンビの決めたこと、。そうなるんでしょうが」

梨田からサインが出る。阿波野はさかんに首を振る。

「小心者の梨田はボール球を重ねたいが、阿波野はストライクを投

げたがってるってとこか。まあどっちも理解できる話よ。監督経験のあるオレは、梨田の慎重にいきたい気持ちもわかるし、阿波野の強気な姿勢も同じエース投手としてよく分かる。さてどっちを取るかね。オレは慎重にいった方がいいと思うけどねえ。クロマティのここぞで見せる集中力はさすが大リーガー様よ。カウントを取りにいく球は危険だよ」

長いサイン交換のはて、どうやら阿波野が梨田を押し切ったように見える。折れた梨田が、納得するサインを、阿波野をいさめるように出したからだ。

「勝負かな。コーンと左中間だな」

堀内の見立て通り、阿波野は真ん中に投げ込んできた。クロマティはサインがなんだ、好球必打と始動に入る。

が、ボールは真ん中から曲がり落ちる、速目のスライダー。勝負と見せかけて、ストライクからボールになる変化球を投じてきたのだ。

さすがクレバーな阿波野であるが、クロマティはこれに引っかからない。瞬時にバットを止めて見送る。

梨田は振った、振ったと、ハーフスイングをアピールするが、三塁球審の山本隆造の腕は上がらない。

「ほう。さすがだな。本当に１－２になったよ。偶然なのか、それとも川上ー牧野コンビの慧眼通りか」

本当の勝負はここからだ。カウント１－２。堀内がスタートを切り、クロマティが打つ。それだけのことであるが、もしクロマティが空振りをしたら、一巻の終わり。堀内が強肩梨田の餌食になることは明らか。打ったとしても、フライは厳禁。戻れず併殺でイニングが終るだけでなく、堀内を休ませることなくマウンドに上げることになるからだ。

当ててかつゴロを打つことが絶対。しかしこれも近鉄バッテリーが、勇気を持ってボール球を投げてこられたら、すべてが水の泡。

近鉄バッテリーに、エンドランの仕掛けを予測できる余裕がある

か、外す勇気があるかだ。

「やれやれ、やっかいなことになったなあ。まあスタートを切らしてもらいますか。これも坂本ら甘ちゃんたちに、Ｖ９野球を身を持って教えるためだ」

古狸黒江

マウンド上の阿波野は頬をふくらませ大きく息を吐く。セットポジションから堀内を目で牽制すると、大きく足を上げる。エンドランのサインがかかっている堀内は、本来スタートを切るタイミングであるが、必殺の牽制に怯えて足を動かせない。動きがないとみた阿波野は、ホームに目を移し、上げた足をそのまま前に降ろす。

「ここだ」

堀内はスタートを切る。タイミングとしては最低最悪。クロマティが当てることが出きなければ、間違いなく二塁ベース手前で憤死のタイミングだ。

「せめて当てろ」

クロマティに願いを託すが、問題はこの自由気ままのフーセンガム男が、二球前に出たサインを覚えているかだ。

近鉄に動きが悟られないように、前もって出されたいわゆる”あらかじめサイン”である。

サインのやりとりなしで、走者堀内、打者クロマティがサインプレーを敢行するとは、近鉄にとってまさかの策。見事決まれば、エンドラン成功の事実以上のダメージを近鉄に与えることができる。中盤以降、近鉄ベンチが、巨人のありもしない作戦の亡霊に怯えること必至だからだ。

クロマティがバックスイングを取る。この男、なんだかんだいってメジャーリーガーだ。その気のない振りをして、しっかりとサインを理解実行に移す。

しかし、阿波野ー梨田のバッテリーも肝が座っている。三球連続ボール球を使ってきたのだ。いくらクロマティにストライク勝負は厳禁とはいえ、みっつ連続ボール球を選択できるものではない。

近鉄バッテリーの覚悟が、巨人ベンチの予想を超えた瞬間だ。

様子を横目でみる堀内も思わず叫ぶ。

「あ～」
外に外れるスライダーは、広いミートポイントを誇るさすがのクロマティにも当てることは無理。堀内二塁で憤死は必至の情勢。のはずが、クロマティがまさかまさかのチームプレーを見せる。
体勢を崩しながら、右手一本を伸ばして、必死になって外に流れるスライダーを当てにいったのだ。
「ウソ」
あきらめ半分、スピードを緩めていた堀内がまたギアを上げる。
バットの先でなんとか拾うと、打球はゴロとなって、東京ドームの新人工芝をコロコロと転がっていく。
転がる位置がまた絶妙。サード石井とショート中村紀のちょうど真ん中に転がっていく。
石井、ノリともにグラブを目いっぱいのばすが、ボールはその先。レフト前に転がっていく。
三塁コーチャーの黒江、迷ったあげく二塁に達する堀内にストップのサインを送るが、これも巨人の高等戦術。レフトの気を緩ませる陽動作戦なのである。
まんまと引っかかったレフトのブライアントは、チャージを緩ませるが、堀内は猛然と二塁ベースを蹴る。
「まったくこき使わせるぜ」
不満を口にするが、顔はほころぶ堀内は、トップスピードで三塁を目指す。ブライアントはようやく堀内の三進に気がつくと、処理してすかさずの送球。しかし元々守備に不安のあるブライアントに焦りが乗じれば、乱れて当然。そこそこの肩を誇るが、ボールは三塁ファウルゾーンに大きくそれる。カバーに入った石井が体を伸ばし返球を受けると、堀内に払うようにタッチしに行く。
微妙なタイミング。堀内は構わず頭から飛び込んで行く。
三塁塁審山本隆造の腕が横に広がる。
「セーフ！！」
堀内の右手が一瞬早くベースを触っていたのだ。胸についた砂を

払い、息を整える堀内。
「これがＶ９野球よ。どうかみたか、今の若人たち。ハアハア……ふうへえ……
これがＶ９野球か？　こんなに疲れたっけ」
思わず膝をつく堀内。汗が吹きで、ウインドブレーカーなど着てはいられないと、脱ぎ捨てるように黒江に渡した。
一死一、三塁。しかもエンドランを読み切り、外したはずから生まれた大ピンチ。線お発阿波野は投球数以上に疲労困憊。梨田は励ましの言葉もないと立ち尽くす。
「これが巨人か。やっぱり野球が近鉄とはレベルひとつ違う……」
ついに弱音を吐く梨田。近鉄猛牛軍団は、このまま巨人野球の前に葬り去られるのか？

「いかん、いかん。ただでさえ阿波野が顔面蒼白やのに、オレが弱気になってどうするんだ。よしここは間を取って……」
梨田は球審の岡田にタイムを要求する。
「岡田さん。ちょっと、阿波野を励ましてきます」
「梨田くん。感心しませんなあ。このイニング、これまでどれだけ時間をとったと思うてるんだ。意思伝達もいいが、あまりにも長すぎると、お客さんを飽きさせるよ」
「それもこれも巨人のせいでしょ。うちだって時間をもらう権利があるはずですよ」
梨田の正論にも岡田は首を振らない。
「これ以上の無駄なタイムは認めんよ」
「なら、タイムええですよ。インプレーでも」
梨田は吐き捨てるようにして、阿波野にはしりよった。
「勝手にせい」
それでも岡田はタイムを認めない。
堀内と黒江はさすがに抜け目ない。梨田と岡田のやりとりの異常に気がつく。
「黒江さん」
「ホリ」
二人顔をみわせると、
「今、岡田球審、タイムをかけましたか?」
「かけてないよ。インプレーだよ」
「いっちゃいます?」
「いけるならいけ」
タイムが認められていないということは、つまりインプレー中。
三塁走者の堀内ががら空きのホームに突入しても、得点となる。
堀内は、ボールが梨田の手にあることを確認して、ホーム突入の

スキを見計らっている。
　梨田もインプレー中は重々承知。それでも阿波野に喝入れなしで、このゲームの均衡なしと梨田は構わずホームを留守にする。
「阿波野。このままＯＮ迎えるのはまずいよなあ」
「はい。なにせまだ一死ですからね。次の篠塚さんを打ちとっても、王さんに回る」
「ならどうすればいい？」
「なんとかするしかないですよ」
「なんとかか。なんとかじゃ無理なんだよ。相手は天下の巨人だ。命がけでやらんと勝算はないで。簡単だ。併殺で打ちとればいんだよ」
「併殺？　簡単にといわれても、一三塁ですよ？　併殺崩れでも、一点が入る展開です。第一、ベンチからは前進守備の指示が出ていますよ」
「オレは作戦コーチを兼任している。オレの指示もベンチの指示と思え。とにかく篠塚を併殺にとらんと走者を二人背負ってＯＮを迎えるんだ。それだけは避けたい」
「天才篠塚さんですよ。思った通りに投げ込んでも、併殺網にはめることができるとは」
「阿波野ならできる。ええか、とにかく自分の力を信じてだな、内角低めにストレートを投げろ。いくら篠塚でもお前の渾身の速球を自由自在に打ち返すことはできん」
「ストレートですかあ？　併殺狙いなら変化球でかわしたほうが」
「それこそ危険や。いくら低く決めても、どこまでも篠塚のゾーンや。神業的なバット制御でカツンといかれる。虚をついてシンカーでいっても同じや。だが阿波野のストレートならそうはいかんぞ。お前のストレートは野茂ほどの球速はないが、キレ味は野茂以上や。篠塚だって、何も出きず二ゴロが関の山や」
「二ゴロ？　二ゴロじゃないとまずいんですか？　限定されるとちょっと投げにくいですよ。遊ゴロでも併殺に取れますよ」

「そりゃ限定するわ」
「どうしてですか？　ストレートで押し込むなら遊撃に飛ぶはず」
「いや篠塚は内角を引っ張るんや。だから振り遅れて、いや遅れてこそ二塁の真正面に飛ぶ」
「それはわかりましたけど、二塁に限定することは……」
「遊撃やと、６－４－３の併殺コースやろ。ノリが二塁の大石にトスをして、大石が投げることになる」
「あ！」
「わかったやろ。ここに大ちゃんおるから、話しづらいですけど」
梨田と阿波野だけでなく、チームリーダーの大石もマウンドのそばにいた。
「いいですよ。梨田さん。自分のことは自分が一番わかっていますから」
「ならハッキリいうが、大石の大ちゃんの肩じゃ併殺が取れんのだよ。篠塚はさして足の早速くない走者やが、なんといっても一塁に近い左打者や。併殺にはめたと思っても併殺崩れでの可能性は高い。それを防ぐために、一塁に転送するんは肩の強いものがふさわしいんや。二ゴロやと、４－６－３になるやろ。遊撃のノリが転送する役目になる。強肩でしかも屈強なノリなら、たとえクロマティが汚い併殺崩しを仕掛けても、踏ん張って一塁に強いボールを投げることができる。だから二ゴロなんや」
「わかりました」
「だが、一点だぞ。篠塚の膝下内角ぎりぎりのゾーンの一点に投げるんや、少しでもずれると押し勝ってもクリーンヒットの餌食や」
「一点ですか。たしかにそのゾーンならなんとかいけそうですか、一点とは厳しいな」
「お前ならできる！　西本監督が……」
阿波野は聞きあきたとばかりに梨田の先回り。
「野茂や鈴木さんを差し置いて、僕を選んだなら、それを信じてでしょ？」

「ようわかってる。なら大丈夫や」
「ところで、梨田さん。タイム取ってないですよね？」
「ああ、だから三塁走者の堀内さんが、こっちをジロジロ見て伺っているんや」
「飛び出しませんね」
「そりゃなかなかいけんやろ。三塁からホームとマウンド下からホームまでの距離どっちが近いか、金村でも的山でもわかるやろ」
「ちょっと弄んでみますかね」
「やってみるか」
梨田は堀内に見えるように、わざとボールを宙に投げる。堀内はそれスキができたとホームを伺うが、梨田がギロリと牽制すると、まるでだるまさんが転んだのようにピタリと止まる。
「あはは、面白い。しかし、いくらなんでも、打ち合わせ長くとりすぎじゃないですか？」
「インプレー中やから、いくら時間をかけてもええんや」
「それは逆転の発想……」
「巨人有利に進めるなら逆に利用するだけよ」
「へえ、梨田さんも成長しましたね。無策の優勝監督と影口叩かれてたのに」
「それは余計なお世話や」
「あはは」
梨田と阿波野は悦に入りすぎていた。堀内以外にもう一人走者がいることを忘れていた。一塁走者のクロマティが一塁コーチの土井の口添えでインプレー中と知ると、ひそやかにスタートを切った。
二塁の大石はマウンド上の会話を眺めている。遊撃のノリは話が長いと腕組み。二塁もがら空きだ。

引退後にフロント入り、篠塚はフロント企業入り

クロマティがするするとスタートを切る。ただ一人そのスタートに気を向けていた一塁の土井が叫んだ。

「梨田、行ったぞ！」

堀内だけに気を向けていたマウンド上の面々はその一声で目が覚める。

「あ」

「忘れてた」

大石が二塁のカバーに走ると、梨田はホームに走る。梨田の持っていたボールは、大石にトスされる。

「大ちゃん任せた」

しかし突然のこと。慌てたものだから、トスが乱れる。大石は横っ飛びでこれをよけいな好プレーすると、二塁にダイブ。

クロマティは二塁は無理と、急ブレーキをかけてすかさず戻る。逆にスタートを切ったのが堀内。ダイブした大石はベースを抱え気付いていないとみると、遊撃にいたノリが、奪い取るように大石の持っていたボールを取り上げる。ホームに矢のような返球。１５０キロに迫ろうかとする剛球に、これまた堀内は、三塁に戻るしかない。

結局、状況は一三塁のまま。

「ふう……。堀内さんをちょっとからかいすぎたかなあ。まあええ。騒動あっても、一損もなしならそれはそれでええわ」

梨田のポジティブな思考が近鉄ナインのいまにも崩れそうな心を食い止めた。

バットを背中に回し、大きく背伸びした篠塚。

「梨田さん。まだど真ん中ですか？」

「ないない。同じ配球が通用せんのが天才打者やろ。それより篠塚。

この前、家でテレビ見てたら、おもろいこと話してたで。エグザイルっておるだろ？」
「ああ知ってますよ」
「そのリーダーとやらが駆け出しの頃、ある大物野球選手の引退記念の飲み会に呼ばれたそだ」
「へえ」
篠塚のまぶたがぴくっと動いたことを梨田は見過ごさなかった。
梨田はこれはいけると畳み掛ける。
「その大物選手が飲み会な。なんと怖いお兄さん方が大勢いたそうだ」
「ですからなんですか」
「リーダーいうのは４０歳ぐらいで駆け出しいうたら１５年前くらいやろうな。今から１５年前いうたら９４、９５年くらいか。シノ、お前、９４年限りでバットを置いたよな」
「……」
「まさかその大物野球選手ってお前のことやないかな。あ、確信を持っていうてるわけやないよ。ただシノ、お前が怖いお兄さんがたのフロント企業に名を連ねて車庫飛ばしやった問題あったからいうてるんや」
「それがなにか？」
篠塚は認めずとも、特に心を乱している様子はない。
「なんやおもろない。ノムさんみたいにささやき戦術で動揺誘うと思うたが、シノ。お前とお兄さん方の付き合いは半ば公認やったな」
「４点差になりますよ」
「何？」
「ですから４点差になりますって。僕の一振りで」
「ほう。稀代のヒットマンが、一発狙いにくるのか」
「ええ、内藤から打った疑惑のホームランのように腰をくるりと回して、ライトのポール際に打ち込んであげますよ。右翼の線審はちょうどあの時の同じ、大里さんです……。ちょっとポールの外を通

ってもぐるぐる腕を回してくれます」
「ほう、面白わ。ヒットマンが一発狙いで力むとはこっちも助かるわ」
梨田は、よけいな一言で火をつけたなかんと思いつつ警戒感をより強める。
「とにかく阿波野。内角のここや」
梨田は篠塚の膝のすぐ下の辺りにミットを固定する。呼吸活動を辞めてまで、ミットを一寸たりとも動かさない。梨田の思いが阿波野に通じる。
阿波野は梨田のミットに寸分違わず、渾身のストレートを放り込む。さすがの篠塚も、このボールは分が悪いと見逃す。
「内角にちょうどえのがきたぞ」
「初球打ちじゃあっけないじゃないですか」
「そうか。二球目も同じとこやけどな」
阿波野は二球目も梨田を信じて投げ込む。煽らたように手を出した篠塚はこれを打ちに行く。しかしさしもの篠塚とはいえ、阿波野の全霊が隠ったボールに押し込まれる。
そしてボールは計算通り、ゴロになり二塁に飛んでいくが。
「よっしゃ！」
しかし、阿波野のボールは篠塚のバットを押しすぎた。計算以上にゴロは弱々しいのだ。
中間守備のゲッツーシフトを引いていた大石は慌てて前進する。
「まずい！　打球が弱すぎる併殺が取れん！」
三塁走者の堀内が追加点を奪いに全力疾走をかけてくる。
４－６－３を狙っても、併殺崩れになって得点の危険性が大、ならば堀内を差しにいくにしても、堀内のスタートが良すぎる。つんのめりながら捕球する大石の体勢が悪すぎる。
オリックスの監督時代、無手勝手流すぎると批判された大石は正しい選択をできるのか？

魚へんにブルーでＣＣ鯖シア

大石が取った選択は、堀内をホームで殺すことでも、二塁カバーのノリに送球して４－６－３のルートで併殺を奪い取ることでもなく……。

「どっちも間に合わなければこれがある！」

大石は、前のめりの体勢を翻し、一二塁間を進むクロマティに直接タッチをしにいった。４－６－３の転送劇での併殺完成どころか、堀内の出だしをみてホーム送球も無理とみて、４－６－３でなく、４－４－３で併殺を狙うのだ。

クロマティは腹を引っ込めて、大石のタッチを避けようとするが、大石は体ごとをぶつけにいく。クロマティの胸にグラブをタッグさせると、上半身を捻り、腕だけで一塁に送球。

「あ」

が、哀しいかな、ただでさえ弱肩の大石。肩も使えず手首を返すだけの送球から、強いボールが生まれるわけがない。

キャリー目算で３ｍほど。すぐに地面に落ちてコロコロと人工芝を転がっていく。

一塁の土井は、ボールを拾いに取りに出るか、それともコロコロ転がる送球を腕を伸ばして待ち続けるか、一瞬迷ったあげく、後者を選択した。

「はようこい！」

土井に急かせれるてもボールはコロコロとのんきに転がっている。篠塚は、クールでクレバーなプレースタイルをかなぐり捨て、併殺崩れの追加点狙いに一塁に全力疾走だ。それほど足は早くないが、左打ちでしかも一塁方向に体を倒す打ち方をするため、一塁は意外なほど近い。

絶好のスタートを切った堀内はすでにホーム手前。
「はあはあ。セーフになってくれよ。じゃなきゃなんのためのオレの疾走だよ」

ボールがくる。土井のミットがすくい上げる。篠塚が駆け抜ける。一塁コーチャーの土井が、恭しくセーフのジャスチャーを繰り返すが、塁審島の目は惑わされない。

自己主張の激しい現代の審判と違い、明治生まれの島は、短くつぶやくように宣告する。

「アウト」

ジェスチャーも分をわきまえている。腕を軽くあげるその姿勢が、逆に威厳たっぷりにみえてくるから不思議である。

阿波野が胸を撫で下ろし、一塁カバーに走っていた梨田がガッツポーズ。土井が今のはセーフだと、つばを吐きながら抗議するが、島は取り合う様子もない。

堀内の目は今のクロスプレーを公正的確に捉えていた。

「もっと全力で走れよ。篠塚。手は早いけど、足はたいして早くねーな」

ダイヤモンド一周しても、得点はゼロ。何一つ得られず虚脱感にうなされた堀内は、疲労感たっぷりにホームベース上で、思わず大の字になる。

「なにがＶ９野球を見せるだ。まったくよけいな回だ。はあはあ」

４つの塁を駆け抜けた堀内の呼吸は乱れ、心臓の鼓動は収まるどころか、早くなるばかりだ。

「わかってるだろうなあ。オレがＶ９野球の神槌をこれだけ見せたんだから、オレの他に守りにつく八人よ、今なにをすべきか……」

堀内はバックスクリーンの電光掲示板のオーダーを眺めた。

「ＯＮはそういうことをする役目じゃない。彼らは主役だ。松井は？　アイツは我関せずだ。由伸も同じ気質。篠塚は今の併殺で頭が一杯。クロマティには望むことすらできず、坂本は若すぎる。とな

ると、慎之助。頼んだぜ、お前が頼りだ。お前ならできる。オレがいたらないお前を我慢して使ってやったんだぞ。それくらいできるように成長してなきゃ」

堀内が託した阿部への願いは、時間稼ぎにあった。全力疾走を繰り返し、息の上がる堀内をこのままマウンドに上げるのは、いかにも危険。三塁打を打った投手が、次の回、突然として崩れるのは、掃いて捨てるほど見かける場面。阿部は、堀内の意を汲み取り、嫌らしく時間稼ぎを取れるのか。

「桑田がよくいってたよ。全力疾走くらいで投手がスタミナ切らしたら野球選手失格だってよ。そうならないように摂生と鍛錬を繰り返せってな。桑田のいうとおりよ。でも、それは理想論だ。こうして今、桑田以上の野球の天才・堀内様がこうして疲れきっているんだから。」

阿部が捕手防具一式をつけてグラウンドに飛び出してくるが、

「あ、いえね」

主審の岡田に待ったをかけて、プロテクタの紐を確かめる。

「すいませーん、岡田さん～。紐がキレたみたいなんで、ちょっと取替に戻っていいですかあ?」

岡田はプロテクタの様子を確認するが、どこにも切れた形跡はない。時間稼ぎの演技と岡田は見抜いた、岡田は阿部のタイムを許す。

松井からグルーブを受け取った堀内は、時間稼ぎをできたことよりも、阿部の成長に顔を綻ばせる。

「よく成長してくれたよ。それこそ巨人を代表する捕手、いや女房役だよ。見事に賢妻に育ってくれたよ」

いまだ途絶え途絶えの息を、必死に整える堀内。であるが、ここでまた信じられないことが起きる。

またあの男がブチ壊しにくるのだ。

長嶋がベンチに戻ろうとする阿部と鉢合わせになると、よく通る声を最大限にして、

「ん～　なんだ、なんだ。慎之助～？　紐なんて切れてないじゃないか～。いかんなあ、ハリーアップハリーアップ。これからのベースボールのトレンドは、テンポの良さを求められるよ～。よけいな間を取ることは、ファン離れにつながるぞ～」

阿部の演技をばらしてしまったのだから、すべては台なし。

阿部は、罰の悪そうな顔をして、グランドにUターン。

堀内は、味方の思わぬ邪魔にあい、息が整えることができぬまま、4回表のマウンドに登る。

「はあはあ……。まったく長嶋さんは……。長嶋さんだけに文句いえねーな。よけいな時間稼ぎの多さがファン離れ云々は正論だし」

それでも堀内は天才である。息を切らしても、何食わぬ顔をして、いつもどおりにパフォーマンスを発揮出来るはずであったが。

「まだノーヒットノーランがあるさ」

ここまで三回パーフェクトできた堀内は、先頭の大石大二郎をストレートの四球で歩かせてしまった。しかし二番に控えるのはローズだ。

「コイツには絶対打たせねー」

因縁の相手を迎えてスイッチが入ったか。

魚へんにブルーでＣＣ鯖シア（後書き）

下位打線だからさくっと終るはずだった！
はずだった！
はずだった！！
それがムリヤリＶ９に絡めたことが！

ローズの一人称は不安定

「走ってくたびれたなんて言ってられんわ。ローズだけは打たすわけにはいかんからなあ」
堀内は、ずれかけたメガネを直し、気を引き締め直した。

打席に入ったローズに、阿部は改めて挨拶してみる。
「どうも、タフィーさん」
「なんや阿部。挨拶なんかせんでええわ。真剣勝負にそんなんいらんよ」
「さっきは無視したのに、今度は反応してくれましたね」
「そりゃさっきのはワシやなくオグリビーさんやからな」
「あっさり認めんでも」
「済んだことはええやろ。今は堀内を八つ裂きにすることだけしか頭にないわ。このワシをぞんざいに扱いやがって、堀内のヤローを絶対に許さへんで」
「過去にこだわっているのはタフィーさんの方じゃないか」
「慎之助。お前も堀内に文句言いまくってたやないかい」
「あの時はあの時だよ。今の巨人があるのも堀内さんが泥をかぶって、若手を育てたくれたおかげさ。内海がそうだ。どうにも使えない左腕を我慢して使ってくれたんだぞ。他にも堀内チルドレンは山ほどいるんだぞ……えっと、えっと、えっと、えっと十川孝富？　野間口？　ちげーな、中村隼人？　ねーよ。内海しかいねーじゃん」
「ワシらを追い出したことが堀内の残した唯一の財産か。あきまへんなあ。だから、今の巨人に華々しさがないんや、勝っても人気ないんや。ワイやキヨさんのような豪傑がおらんからや」
「いつまでも堀内さんに恨み嫉みを重ねてくださいよ。そのほうが有利だからさあ。タフィーさんはカッカすると、どんなボールも振

ってくるから、打ち取りやすくなるんだよねえ」
「はあ？　ワテ、バントやぞ」
ローズは、背をすぼめてバントの構えだ。
「え？　あ？」
無死一塁、一点差の二番打者。この場面でバントはセオリー中のセオリーで、なんら不思議でない作戦であるが、打者はローズである。シーズン５５本塁打の記録を持つ３人のうちの一人である強打のこの男に、あっさりとバントをさせる闘将西本のはずがない。なんのために、守備を捨てて、強打者をずらりと並べたのだ。当たり前の作戦をして、何がイテマエ野球の集大成だ。
阿部も素直にバントが来るとは、これぽっちも考えてはいない。
「どうせフェイクでしょ。やってこないでしょ」
１０年のプロ生活を経た阿部は、このていどの策謀には惑わされないのだ。経験が阿部の自信となり、その自信が確固たる野球観を構築する。のはずであるが。
「やってこねーよな。……やってこないでしょ、いや待てよ、やってこないと見せかけて、やってくるの。いややっぱりやってきそうでやってくるようでやってこない。うん、何が何だかわかんなくなったぞ。やってくる、やってくる、やってこない。バントと見せかけて、やってくる。あれ、やってくる？　うん、わかんねーや。どうしよう、ベンチに指示を仰ごうか。巨人軍史上最強の捕手がベンチをチラチラと物乞いする。ねーな、ねーよ。いややっぱりそんなことといってられねーや」
阿部はプライドをかなぐり捨てて、ベンチを見た。まず最初に助けを求めたのが、吉田孝司バッテリーコーチ。しかし、吉田は阿部の視線を察すると、慌てて資料に目をおろし阿部の助けを無視した。
「なんだよ」
次の標的は、牧野と川上の巨人軍最高議決機関。しかし彼らは、阿部の物乞いを睨み返すことで退けた。
「自分で考えろっていうのか？　いや責任逃れか。しょーがない、

この人の助けは求めたくなかったけど」
　最後の望みは、同じ捕手の森である。ポジション争いのライバルだけに森が、阿部の助けに乗るとは思えない。が、森はしきりにバントの構えのジェスチャーを繰り返し、阿部にバントも十分ある、警戒しろのサインを送る。
「あの人がバント注意というのなら、逆に打って出ると読んでいるのかな」
　森の度重なるイビリにあった阿部は、森のいうことをはなから信じてはいない。森の逆の考え、つまりバントはないと森は考えているはずと阿部は感じ取った。
「だよな……バントはないよ、バントがあるわけない。なんのためのイテマエずらりだ」
　扇の要でもある阿部は、バント警戒の指示を特に出さない。三塁の長嶋、一塁の王も定位置やや後ろでローズの強打に用心している。
「バントできたら大変だ。ややもするとオールセーフだ」
　阿部は、バントのしにくい高目の速球でなく、低目にカーブを要求する。空振りが取れるが、当てるだけなら当てやすい遅いボールだ、バントの構えを崩すことのない、ローズはあっさりとバットの先に当ててくる。
「あれ、バントしてきたよ……へ？」
　打球は三塁線をコロコロと転がることなく、あっさりと切れたが、阿部のコンピュータはショート寸前。
「ほんとにバント？　はい？　へ？　え？　森さんはオレをかけるためにわざと逆をいったでなく、本当にオレのことを思って……。西本監督は小ワザなしのイテマエ打線を組んだのに、バント？？？
　ああ～わけわかんねえ～よ。オレの決断力、洞察力のなさがまずいのか？　やっぱりあっけらかんとした善人のオレは、巨人軍のベスト捕手なんて、荷が重かったのか？　ああ～、野村さんや森さん、古田さんのように猜疑心の強い悪人になりてー。目の奥底まで冷気にみちた人じゃないと、捕手なんてやってられねーよ、ああもう」

悩み苦しみ思わず顔を落とした阿部は、ローズがにやりと一瞬だけ笑ったことを見逃していた。

「慎之助、やっぱ甘いのう～」

4回表無死一塁

阿部はさんざん迷ったあげく、送るなら送ってこいと開き直った。次のマニエルとともに要警戒のローズをバントでスルーできるならそれで越したことがないからだ。バントならしたことのないローズのことだ。失敗する可能性も高い。初球のバントの構えだって不恰好、そのものではないか。

「堀内さん。バントっすよ、バント。西本監督は、猪突猛進タイプと思われがちですが、大事な試合になると弱気な虫がうずき、それが決まって裏目にでると聞きました。だがらバントなんです。陽動でもなんでもなく、初めて出した走者を大事にしたいんですよ」

そうと決めたら、阿部のサインはひとつ。高目のストレートをキーに組み立てる。堀内のノビのあるストレートはバントがしにくいのはもちろん、普通に打っても空振りが取れる威力があるからだ。しかもローズの弱点は、その高目のストレート。もしやの強打の策に転じたときの保険にもなるからだ。

「ばーか。慎之助。ばーか」

幼稚な言葉遣いで阿部を責めるローズであるが、逆にローズらしいといえば、このうえなくローズらしい。

阿部の読みは完全に外れていた。ローズのバントの構えは単なる陽動作戦。ひとつバントの構えをして、巨人を少しでも惑わすつもりが、ここまで効果的とは。

すっかり騙された阿部。そして阿部を妄信的に信じる堀内は、従順にうなづく。

が、その堀内、セットに入るもなかなか投げてこない。一塁走者の大石の出方を見ているのだ。

「走者も警戒しないとな。なにせ近鉄のハリボテ打線で足が使えるのは、この大石の大二郎だけ。それが走者となったら、足を使いた

くなるのが監督ってもんよ。ただ盗塁はねーと思うよ。クイック名人どころかクイックの始祖のオレと強肩慎之助のバッテリー相手に、いくら大石でもそう簡単にスタートは切らせんだろうよ。だが、リードを広くとれと指示を出すはずだ。それもオレが長く持てば持つほど、リード幅はじりじりと広がってくる。そこがチャンスよ」

大石がとるリードの幅は、堀内の思いどおり、ジリジリと広がっていく。右投手のために大石を背にする堀内に、本来その姿は見えないはずであるが、堀内は大石のリード幅を的確に捉えている。

その鍵はセットに入る堀内の目の前にいる遊撃の坂本にある。坂本は大石のリード幅を右手の親指と人差し指の距離の広さで、堀内に伝えていたのだ。距離が開くほど大石のリード幅が広がっていることを示すこのサインは、ベンチの指示でなく堀内と坂本の間で独自に決められたものだ。親指と人差し指の距離が広げられる範囲一杯になったのを見た堀内は、王山と身体を捻り一塁に牽制する。

みようによっては肩が入ったようにも見えるボークすれすれの牽制であるが、一塁塁審の島のボーク判定が緩やかなことを見ての阿波野に負けじの必殺牽制だ。

さしもの大石も牽制が飛んでくるとは思わず、逆をつかれる。

一塁の王がミットをベースに落としにいくが、そこに大石の姿はなかった。逆をつかれた大石は、戻り切れないとみて、二塁方向にスタートを切っていたのだ。

ランダンプレーで大石を仕留めようと、王はすかさずボールを持ち替え、二塁に送球。しかしここで巨人らしからぬプレーが起きる。二塁のベースカバーが遅れたのだ。

本来は遊撃の坂本がベースに入るはずが、最年少の坂本のことだ。二塁の篠塚に遠慮してか、それともただ左打者の場合二塁カバーは遊撃手の決まりごとを忘れたのか。

慌ててベースに入り、タッチしにいくが、すでに大石は頭から滑り込んでいる。

「あ〜」

坂本がドームの曇りがちの天井を仰いでも、大石が生き残ったことは覆らない。

バントか強打か迷うことなく、むざむざと大石の二進を許してしまった巨人。しかし動揺の波紋は坂本に留まっている。

篠塚は坂本を叱ることなく、年代の近い大石とのおしゃべりに花を咲かせ、堀内は二塁に行かせても後を取ればいいと強気の姿勢を崩さない。鬼よりも怖い巨人のＶ９首脳陣も若さが出たとそれくらいは織り込み済みと寛容である。

そしてローズのバントの幻影に怯えていた阿部は開き直る。

「これでバントがどうだのよけいな考えは吹き飛ばすことができる。無死二塁でもうローズにバントのサインはないだろうよ。打たせて引っ張らせれば併殺の危険性もなく進塁打にんなるからだ。となると強打一択で組み立てができる」

今の阿部に、日頃見せるほうけた表情はどこにもなる。確固たる自信で彩られたそのマスク姿は、まるで超一流の捕手だけが醸し出す抜け目のなさに染められている。

「よし！！　堀内さん。何も考えず渾身の速球を投げ込んでください」

阿部の強気にほだされた堀内は、憎きローズに力ある限りのストレートを投げ込むが、いつもの捕手際でのひと伸びがない。真ん中高目に浮いてきたストレートを思い切り振り切ったローズは、打った瞬間確信する。

「ざまあみされ～」

ローズが両手を高々と掲げると、打球は右中間最深部に一直線に飛んでいく。

「は、入るワケない。つまっている！！　堀内さんのストレートは押し込んだ」

阿部の願いも虚しく、クロマティと高橋由伸は早々と打球を追いかけるのを辞める。

ローズは、くるりと振り返るとうなだれる阿部に、追い打ちの一

言を浴びせた。
「あほう。東京ドームはアレではいるんや。慎之助、お前は何年ここでやっとんねん」
「あ……」
スタンドに飛び込んだことを確認すると、ローズはまた腕を突き上げる。そして、腕組みする堀内を一差し。その差した指をそのまま自分の頭に持っていって、ちょんちょん。頭のデキが違うと、クロマティのお得意のポーズのパクリをするしたたかさを見せる。
ローズは上機嫌ではねるようにベースを一周するが、ドームの不気味なほどの静けさに何度も首を振る。
左翼席で近鉄のチームカラーの赤に身を染めた一分の熱狂的なファンが喜ぶだけで、あとは水を打ったように歓声一つないのだ。全体ほぼ巨人ファンの超ビジター状態であることを改めて確認したローズである。
「ワシも一応元巨人なんやけどなあ」
ローズは一周して帰ってくると阿部にまた一言を浴びせる。
「堀内のボールあんなもんか。あの程度の投手に燃えて損したわ」
「なにい」
阿部は言い返そうとしたが、それも大人げないとなんとか喉で押しとどめた。
「たしかにローズのいうとおり。堀内さんのストレートはあんなもん？　いや違う。3回までの唸るようなボールなら空振りを取れたはずだ。裏の攻撃での全力疾走の影響？　それは大石さんを四球で歩かせた時点でいくらなんでも回復してるはずだ。……走塁？　まさかあの時？」

巨人暗黒時代の絆

「おかしい。球速表示を見ても１４７とそれなりに出ている。反応速度の関係でローズは、１４５キロ以上のボールはまず打たれないんだ。打たれるはずのないボールが打たれた。ローズの鬱々と燃えたぎる闘志が打たせたのか。いや、精神力の強弱で語るのも無理がある。１４７キロはまやかしの数字と見るべきだ。堀内さんに、なんらかの異変があって、最後のひと伸びがなかったと考えるべきだ。その要因は？　解明しないと大変なことになるぞ」

阿部は手をマスクの顎の部分に当て、考える人のポーズをとり、なんとか原因を探ろうと必死。

「堀内さんほどのキャリアと経験がある人だ。いくら開幕の緊張感にさえなまれつつ、飛ばしに飛ばしたとしても、４回で球威が落ちるのは早すぎる。なんらかのアクシデントがあったと考えるのが妥当。全力疾走の疲れはないとすると……」

阿部は、もう一歩で真相にたどりつくところだったが、岡田球審のハリーアップの催促の声と、苛立つ堀内に、打席に入って阿部待ちのマニエルに負けて、ついに推理を放棄してしまう。

「まあいいや。なんとかなるべえ。今のはローズがうまく打った。そういうことにしておこっと」

これが今日の控え捕手の森や野村のようなよく言えば妥協しない、悪く言えば陰湿な性格の捕手であったら、急かされても、マイペースで自分の世界に入り浸って、真実を暴きだすのだが、生来あっさりとした阿部は、神々の捕手の域に近づきとも、破りきれないでいる。

「堀内さんもうるさいからな。いちいちマウンド行くとさ」

ざっくりと原因究明を諦めた阿部は、あっさりとしたリードをしてしまう。

「ホームランのベース一周で間が空いた。テンポ、テンポ。テンポ

よくせめていこうや」
　阿部が内角に構えた瞬間、巨人ベンチの牧野ヘッドは天を仰ぎ、ライバル森は、にやりと笑った。
　ローズと同等かあるいはそれ以上の実力のマニエル。しかもローズに続けとばかりに、お祭り騒ぎに乗って、気分はノリノリ。少々、内角の厳しいボールでも裁けてしまう精神状態であることを阿部は分かっていなかった。
「やば」
　後悔の言葉を口にしても、現実は非常に流れて行く。
　気持ちよく振り抜くと、打球はあっという間に、ライトスタンドに消えていく。
　二打者で三点。
　いや二球で三点。
　マニエルが大きく拳を上げて、一塁コーチャーの吹石徳一とハイタッチを交わすときになって、ようやく一球の大事さを痛感する阿部。
「あああ……。なんてことをしてしまったんだ。あの時、ああしていれば。堀内さんとこにすっ飛んで、このイニングで急変した謎を解き明かしておけば、こんなことにはならなかったのに……」
　今からでも遅くないと阿部は、堀内に走り寄る。ベンチから藤田投手チーフが飛び出すのを制止してでも、一対一の会談にこだわる。
「いったいどうしたんですか。堀内さん！　打たれるはずのないボールを打たれていますよ」
「どうもうこうもねえよ。打った奴がえらかっただけさ」
　つっけんどんな堀内であるが、これも阿部の想像の範囲内。逆にこの堀内の態度を見て、阿部は確信する。
「見せてくださいよ、指」
「あん？　だからなんでもねえって」
　阿部はムリヤリ堀内の手首をつかむ。
「ほらやっぱり……」

「バレちまったらしょうがねえ。さっき走塁でよ、指をついたんだよ。でもよ、ちょっと曲がってるだけで痛みはたいしてねえし、ボールを握っても影響はねえよ」
「だからですよ。人差し指の最後の一押しがないから、ボールの最後のひと伸びがなかったんです。だから打たれないはずのボールを運ばれた」
「甘く見ちまったかあ。近鉄を、いや野球そのものを。手負いの状態で、抑えられる打線でも試合じゃねえんだよな」
ガラにもなく堀内は落胆する。
「慎之助。藤田さんに、言いたいなら言いつけろや。この試合はオレだけの試合じゃねえ。巨人の伝統をかけた試合だ。それを忘れちまったオレは巨人のエース失格だよ」
「藤田さんに言いつけていいんですか？」
「あん？」
「らしくないですよ」
「うん？」
「堀内さんらしくない。いいじゃないですか、まだ三点ですよ。このフザけたほどの打線相手に三失点完投勝利ならそれほど悪くない」
「慎之助……」
「二点差くらい、飛んでもない巨人打線なら軽いもんすよ。たとえＯＮ松井が打たなくても、この阿部や堀内さんが下位にいるじゃないですか」
「そうだな何も諦めるこったない」
「そうっすよ。２００４年、２００５年の巨人が無駄じゃなかったことを、堀内ー阿部の師弟コンビバッテリーで見せつけましょうよ」
「まさか慎之助に励まされるとはなあ。よしストレートのノビがないなら、それで打ち取るのが、天才投手ってもんよ。堀内さまの投球術と阿部の配球術を合わせれば怖いもんなしよ」
「はい」

こうして堀内を見事立ち直らせた阿部であるが、その配慮が、配球まで回りきらないのが阿部のもどかしいところ。

４番土井にこれまた痛打を浴びる。

「あれ？　やっぱり堀内さんを引きずり下ろした方がよかったかしら」

たまらず藤田投手チーフコーチがベンチを飛び出してくる。一度追い返した阿部であるが、ひどくなるばかりの状況に、藤田の介入を受けざるを得ない。

藤田を中心にマウンド上で輪ができる。王は口をとんがらせ眉間のシワをより深くすれば、長嶋は底抜けの陽気さもさすがに失せている。

「ホリ。いったいどうした突然の崩れよう」

「すいません、藤田コーチ。あまりにもスイスイ来たもんでついつい調子に乗っちゃって」

「キャリアがあるお前がそんな投球するとは思えんけどな。前の回の走塁の影響か？」

「そりゃねーすよ。オレは天才ですから。最近の6回投げて先発の仕事をしたとか抜かす輩とは違って、先発完投当然のスタミナ満点の大エース様ですから」

「そうか。それにしてもどこかおかしい」

藤田の詰問が続き気まずい空気に包まれる。堀内との絆を取るか、チームを取るか板挟みになっている阿部は真実を打ち明けようか悩む。

堀内の突き指を正直に明かせば、堀内は早期降板に追い込まれる事になる。逆に突き指を黙っていれば、手負いの状態で火のついた近鉄打線を抑えるのは至難の業。

阿部の本心は堀内とのバッテリーで完投勝利を飾ることであるが、チームの勝利に個人的感情は変えられない。

「藤田コーチ！　実は……」

阿部の口が真実を伝えようとしたその瞬間。

王が堀内の右手首をつまみ上げる。

「藤田さん！　見てくださいよ、これ」

「どうしたワンちゃん」
「指ですよ。指」
「王さん……」
堀内は半ば観念したように妙に従順。
「さっきの回でベースに指を突いたかなんかで、突き指したようですよ。投げた後、指を気にする仕草を見せたからおかしいと思っていたら案の定このザマですよ」
「突き指？　どうしてそのことを伝えなかった。我々巨人軍はすべては勝利という栄光のためのプレーをしているんだ。故障を正しく伝えないとは、その精神に反するものだぞ」
「すいません、藤田さん。巨人の開幕投手に選ばれたプライドからどうしてもマウンドを譲りたくなくて……。それがこのザマですよ。もう煮るなり焼くなり好きにしてくださないな」
「誰が交替させるといった」
「え？」
「我々、首脳陣がどういう気持ちを込めて、お前を開幕のマウンドに送り込んだと思っているんだ。ＯＮを中心とする我が打線は１０点は軽く取れる打線だ。まだ三失点で何を慌てる必要がある。この試合はお前と心中する覚悟だ」
藤田の思わぬ信頼に堀内は目を丸くするが、阿部は冷静さ忘れない。
「でも藤田コーチ。指を突いたことにはかわりがない！　この状態で近鉄打線を抑えるのは無理があります！」
「指を突いたがなんだ。堀内は幼き日、その人差し指をうどん製造機に挟まれて、その先を１ｃｍばかり失ったじゃないか。それを思えばどうってことはない」
理論派藤田らしからなぬ精神論であるが、根性の権化のような王が後押しをする。
「そうだぞ、ホリ！　藤田さんのおっしゃられるとおりだ。お前は才能に溺れる悪い癖がある。時には根性で押し通すことも大事だ」

そういうと王は堀内の人差し指を持ち、思い切り引っ張った。
「イタタタタ……」
堀内は思わず悲鳴を浴びるが、さしもの悪童堀内も王には逆らえない。
「どうだ、ホリ。突いた指もこれで戻っただろ」
「……」
戻るわけねーだろと堀内は言いたげであったが、いくつになっても王は怖い存在にはかわりない。
「な、治りましたよ」
「そうだろうよ！　よしこれで万全だ！　三点取られたのは事実であるが、それを忘れて切り替えていこう！」
「ワンちゃん、ありがとうな。堀内の教育係は昔も今もワンちゃんしかいないよ」
「そんな藤田さん、当然のことをしたまでですよ」
「それもいいがお前に託すといっても我慢の限度があるぞ。５回だな。５回までに改善の見込みがなければ、たとえ勝利投手の権利が掛かっていても、問答無用で降ろす」
「貰ったチャンスを生かさなければ、巨人のエースじゃありません。オレに開幕のマウンドを譲ってくれた別所さんや沢村さんに申し訳が立たないってもんですよ」
「よし。お前に託したんだから、それ相応の投球をしろよ」
こうして藤田を中心とするマウンド上の輪は解けた。
「堀内さん」
「なんだ慎之助」
「藤田さんて球界の紳士の異名どおり優しい方ですね。てっきり、どうして隠していたと怒りに任せて僕もろとも引きずり下ろされるかと思ってましたよ」
「慎之助、もう一つの堀内さんの異名を知ってるか？」
「え？」
「瞬間湯沸かし器だよ。つまり一度怒りの導火線に火がついたら大

変なことになるってわけだ」
「……」
「それにな、高校時代は四国じゃ有名な番長だったんだぞ。規律に触れるが法律には触れないかわいい小悪人のオレと違って、あの人の悪ぷりはテレビではいえないくらいだよ」
「そうなんすか……。優しい物腰からは想像できない」
「まあ5回だな。5回もこの調子なら、オレとお前は」
「この試合からのぞかれる」
「この試合だけじゃ済まないぞ。二度とチャンスがないと思っておけ」
「二度とですか?!」
「ああそれくらいする人さ。そしていくらでも替りがいるのが巨人軍だ」
「……」
「そうならないようにどうすればいい?」
「どうすればって」
「あるだろうよ。オレたちには最終秘密兵器がある」
「……いきますか? あれだけ試合前の打ち合わせで使わないと確認したのに」
「いくしかねーだろ」

藤田はベンチに戻っても険しい顔を崩さない。
「まさかあいつらの前じゃいえんだろ。リリーフの準備が整っていないから、投げてくれとは。私の失敗といえば失敗だが、まあ堀内ほど大舞台に強い男はいない。アイツにかけてみるのも面白い」

西本の鉄拳制裁

「チェンジアップだ」
「チェンジアップ？　封印したはずですよ」
「そうよ、たしかに封印したさ。だがそれもストレートがのびていたらの話。今のような手負いの状態の時こそ、第三の球種を混ぜてかないと通用しねえんだよ」
　堀内の持ち球といえば、ストレートとドロップ気味に落ちるカーブが有名であるが、知られざるウイニングショットを保持しているのだ。
　その球種とは、ストレートと同じ振りから繰り出される抜いたボールであるチェンジアップ。速い球とみ間違えた打者を嘲り笑うように、手元で落ちるボールである。
　メジャーの影響もあって、猫も杓子もチェンジアップを投げる現代とは違い、堀内の投げていた昭和４０年代にこのボールを投げる投手は稀。だから必殺のボールとなり、２０勝できないエースと揶揄されていた堀内を２６勝投手にさせたのであるが、もろ刃の剣であることも事実。
　チェンジアップに頼りがちになると、腕の振りが弱くなりストレートの威力が落ちる危険性もあるからだ。現に堀内も、２６勝の翌年１９勝をあげたが、その後二桁勝つのにやっとの平凡な投手に成り果てている。
　だから堀内は、あえてこの球種を封印し、カーブとストレートのたった二つの球種でこの試合に挑むことを決めたのであるが、そうはいってはおられぬこの状況。
　ついに幻のウイニングショットの封を解く時が来た。

「ブライアントか。チャンジアップを試してみるのには格好の打者だぜ」

なんでも振ってくるブライアントである。しかも当たる確率が極めて低く、たとえチェンジアップが決まらず失投になっても、空振りが取れる可能性のある打者。堀内のいうとおり自信のないボールを試投するにはもってこいの打者である。

初球からチェンジアップを投じる。変化が早く見極めしやすいボール。次の打者である中村紀のような選球眼に長けた打者ならば、いとも容易く見逃せれる球道であるが、ブライアントは空振りをしてしまう。

この完成度では、チェンジアップを続けるには危険性があまりにも高い。だがしかし、堀内はチェンジアップのサインが出るまで首を振り続ける。

「シーズンに２００も三振してくれる打者だぜ。ここで試さずどこで投げる」

連続のチェンジアップ。前のボールより手元で変化をするのであるが、今度は高低に甘さが残る。高目から真ん中に落ちるその球筋は、ホームランボールのそれ。

歴代屈指のホームランバッターであるブライアントに対し、あまりにも危険なボールのはずであるが。まるで初球のＶＴＰを繰り返したように、同じ空振りをする。

バットヘッドの返しの速さとスイングの豪快さが。返って。空振りの虚しさをより濃くする。

「助かったよ。こんな間抜けな空振りをしてくれる打者がクリーンナップの一角を占めてくれて」

この二球の空振りを見ても阿部は慎重なリードを欠かさない。阿部は、一球遊び球として、高目の速球を選択するが、堀内は首を振る。

「三球も続けて投げれば、感覚はつかめるぜ」

なんとこれまたチェンジアップを要求する。壊れたぜんまい仕掛けのおもちゃのように空振りをするブライアントであるが、３つ連続同じボールはいくらなんでも危険。

それでも阿部は、堀内のわがままを受け入れる。
「堀内さんが責任取ってくださいよ」
三球連続のチェンジアップ。前の二球の球筋の不完成を見れば、あまりにも無謀。しかし、チェンジアップの早期完成こそ、堀内ー阿部バッテリーの復権のただひとつの道となれば、投げないわけにはいかない。
堀内はまるで１５０キロの豪速球を投げ込むような腕の振りをして、１２０キロ台の緩いボールを投げる。球筋も真ん中からボールゾーンに落ちる空振りを一番取れやすい球道。
三球連続だからそこの優れた感覚が生きる。逆に三球連続だからブライアントは見切れるはずであるが。
「ああ～。だからブライアントは使いたくなかったんや」
近鉄ベンチの西本が思わず落胆するように、ブライアントは同じ失敗を三度、それも三回連続で繰り返す。
「やっと決まったぜ。これよ、この感覚が昭和４７年のセ・リーグの強打者たちを震え上がらせた堀内さまのチェンジアップよ！」
「バカ、アホ、ドジ、ボケ、カス、ノータリン、お前のカーちゃんデベソ、小学校からやり返せ」
西本は、ベンチに戻ってきたブライアントに罵倒の言葉を思いつく限り浴びせるが、とうのブライアントはどこ吹く風。
「西本監督。ブライアント諦めますか？」
佐々木恭介ヘッドが、西本の気持ちを拾い上げたが、
「あほう。佐々木。ここまで来たらブライアントと心中や。４三振しても５打席目にホームランを打ってくれる男や」
「そこまで耐え切れますかね」
佐々木がそう口にしてしまうほど、西本は荒れていた。殴られ役の羽田耕一が今三振で、殴られ蹴られ、すでにのびてしまっているほどなのだから。

００年プロアマ合同チーム一番沖原二番飯塚

「あかん！　引っけてしもうた」

ノリがそう吐き捨てたように、堀内のチェンジアップはますますの冴えを見せつける。

ブライアントの三球の試投で十分に感覚を取り戻したようで、次の６番の中村紀には、カーブ、ストレートで追い込むと、二球の遊び球を挟んで、チェンジアップをバットの下面に当てさせて内野ゴロに仕留めたのだ。

ブライアントと違い、鋭い読みと多大なデータ蓄積を併せ持つ中村紀のこと。堀内の第三の球種、つまりチェンジアップがあることは頭にあったが、まさかこの場面で投げてくるとは思わず、得意のフルスイングを見せれなかったのだ。

ブライアントへの三球のチェンジアップをネクストサークルから見て、多投できぬ完成度と見積もった中村紀の野球センスはさすがであるが、それでも要求してきた阿部とそれに見事応えた堀内のバッテリーにしてやられた打席であった。

中村紀はさかんに首をかしげるが、裏をかいた阿部への賞賛も忘れてはいない。

「まいったわ。カーブもストレートもどっちもどうぞと待ち構えていたら、まさかチェンジアップが来るとはな。阿部も成長したのう。シドニーの頃、プロのボールは捕りきれないと鈴木郁洋に捕手の座を追われ代打に終始した奴と同一人物には思えんわ」

阿部と中村紀といえば、２０００年のシドニー五輪のチームメイトである。この時、中村紀は４番を打ち、阿部は中大４年の控え捕手兼代打の切り札とした参戦していた。かれこれ１０年がたつが、ノリと阿部がチームメイトになったのはこれ一度切り。日本代表、オールスター、日米野球など、何度も顔を合わせていいようであるが、同じベンチに座ったのはシドニー以来、不思議とないのである。

「そりゃ１０年も経てば、誰だって成長しますよ。経験と実践が第一の捕手はなおさらです」

阿部は中村紀の口車に乗らずにサラリと交わし、特に喜びの表情も出さずマスクをかぶり直す。

「そうか。何年立っても成長せいへん奴はせいへんけどね。まあ今のでチェンジアップを見たから、もう怖いもんなしや。ええか阿部ちゃん。野球はトータルの勝負や。５打席１安打でも、それがサヨナラ弾なら大ヒーローや。まあオレの５打席目に堀内さんと阿部が試合におるかは知らんけど」

「ノリさんこそ代打出されないように注意してください。勝負の遅いのが持ち味でしょうが、監督は短気な西本さんですからねえ」

「返す言葉もイッチョ前になったのう」

ただ一死二塁から内野ゴロを打った中村紀を責める雰囲気は、近鉄ベンチのどこにもない。

「ナイスバッティング」

攻守交代に備えて、レガースをつけたままネクストに入る梨田がそう声をかければ、

「さすがノリや。死んでもたたではすません。これがブライアントとの違いやで」

西本監督も内野ゴロと思えぬほどの上機嫌である。

それもそのはず、中村紀は走者を返す役割と走者を進める義務を両立していたのである。タイムリーを打って加点すると意気込むだけでなく、最悪二塁の土井を三塁に進めようと右打ちを徹底していたのだ。

イケイケ一辺倒になりがちの近鉄イテマエ野球であるが、時にきっちりとした野球もできるのだ。

逆転に次いで、自己犠牲に富んだチームプレーが出れば、ムードが悪くなるはずがない。

一言居士の大村や、同じ右打ちの三塁手であるノリには一物ありいつも一言多く騒動を巻き起こす金村でさえ、もう文句や愚痴が飛

び出ない雰囲気である。
流れは間違いなく近鉄にある。
巨人にとってたまらなく嫌なこのムード。阿部はどうやって風向きを変えようか。
「二死三塁7番は石井さん。石井さんから逃げて、8番の梨田さんからも逃げて、二死満塁で9番は投手の阿波野さん。まだ4回、”開幕投手”の阿波野さんに代打はない。阿波野さんの悲劇的に非力な打力からすると無得点に終えるには容易くはない。ただそうして逃げに逃げを繰り返して、近鉄に吹き荒れる風を断ち切れるか。第一、堀内さんがそんな弱気な策でゼロに終えてたとしても、立ち直るきっかけにつながるわけがない……。ならば勝負だ……」
阿部の意思は勝負。首脳陣の意思を確かめるべく阿部はベンチをみた。
川上は相変わらず腕組みであるが、牧野ヘッドは一塁を刺して4本指をかざす。
「逃げ！　ベンチは逃げ！　それじゃあだめなんです！　ベンチにいる者たちには、この逆風がわからないのか！　イニングを考えれば逃げで正解。しかし試合を考えれば勝負しかないのに」
阿部はグランドにいるものにしか感じ取れぬ自らの感性を取るのか、それともけして風に流されぬ理詰めのベンチを取るのか。
阿部は錯綜する。まさしくゲームの分かれ道である。阿部よ。試合を司るのは、ベンチに引っ込んでいるものではない。グラウンドに立つプレーヤーこそが試合を動かすのだ。
自分を信じ、最善の選択をしろ。
「逃げでいいや。ベンチがそういってるんだもん。どうなってもオレ知らね」
あれれれあららら。

逃げて逃げて逃げまくれ

「いいですかあ～　堀内さんに石井さんに梨田さん。今から石井さんと梨田さんのどっちも歩かせて。阿波野さん勝負というなんともトホホな作戦を取りますよ～」

阿部はもうやけくそ。見え見えの策であるが、自ら作戦の意図を吐き出してしまう。

逃げの投球をこれ以上なく嫌う堀内。しかもいくら本来４番打者の石井浩郎といえ、７番打者８番打者の下位打者を連続に敬遠するとは、これ以上プライドの傷つける策はないであろう。

堀内は顔を真赤にして、マウンドを蹴り砂が散る。阿部はそんな堀内を慰めようともせずに、ただ憮然と立ち尽くす。

「文句あるなら、首脳陣に直接どうぞ」

阿部はそのままプレーがかかっても座らない。大きく右腕を振り敬遠の狼煙を出す。

堀内はうなづきもせずに、おざなりに足を軽く上げると、キャッチボールより気の抜けたフォームで、始球式のように緩いボールを阿部に投じる。

「なんだ敬遠か」

腕をぶしていた石井もこれには拍子抜け。

「ええ、敬遠すよ。石井さんのような大打者と勝負しても分が悪いって判断すよ」

「そう見せかけて一転勝負とかそういう作戦じゃないのか」

「そんな突拍子のない作戦は、巨人王道野球から外れていますって」

「それもそうだなあ。安全策を取り責任逃れをするのが巨人野球だよな。オレも3年いてよく知ってるよ」

石井は一塁に歩く。石井が歩けば、梨田との勝負は考えらない。

４球連続、立ったままの阿部にボールを投げる儀式を終えると、場面は二死満塁、打者は9番阿波野に移った。

やるせなくため息をする阿部と全身から精気が落ちたような堀内。
その一方、近鉄ベンチは蜂の巣をつついたように大盛り上がりだ。
阿波野の打力に一切期待してないにしてもである。
ベンチ入り登録されていないヤジ将軍金村が阿波野に檄を飛ばす。
「阿波野～　一発カマしたれ～　満塁弾で７－１や～　楽になるでえ」
「そんな無理っすよ。当てるのも難しいすよ」
めったに打席に立たない阿波野は、自分のバットを持っていない。
一打席目は、なんとかバットに当てて一泡ふかそうと新井宏昌のアベレージタイプのバットを使用した。この二打席目、阿波野がバットケースの中から選んだバットのグリップ裏には、太い黒マジックで数字の１６と刻印されていた。
「ブラちゃん、借りるよ～」
ブライアントのバットである。新井タイプのアベレージバットから、先端の細いホームランバッタータイプのバットに替えたのである。
金村のヤジもまんざら間違いでもない。阿波野はまさかの一撃狙いに三度思い切りバットを振るつもりである。
「プロ野球史上最もパワーのない満塁弾を放った打者になるのもいいかも」
阿波野が試しにブライアントのバットを振ってみる。するとヘッドの重さに負けてよろけてしまうのだ。満塁の場面で打席に立つ打者がこの銚子では、本来笑いどころではないはずであるが、そこは近鉄。
「なんや、阿波野さん。３つ振るまえに腰をいわしてしまいそうやなあ」
大村の毒が飛ぶと、笑いがどっと湧き上がるほど、ベンチのムードはいい。
阿部が恐れていたのは、まさにこのお祭り野球。
「だからいったじゃないか。まあいいやムードで勝敗が決まれば、

野球の技能を高めるための鍛錬なんていらねえもん。それこそ毎日宴会でもすればいいんだ。ちょうど松井さんという重しがなくなって清原さんが誰を気にすることなく、巨人を締めていた０３年から０５年の雰囲気だ。あんときも見せかけの雰囲気は良かったぜ。元木さんが清原さんの小間使いになって若手をかわいがりという名のイジメをして、ローズが弘田さんにブチ切れ、清原さんが堀内さんに反旗を翻し……。あ、全然雰囲気良くねーよ。でも勝ってたろ？

いや全然勝ってないよ。人気もガタ落ちした思い出したくもない超絶暗黒時代だよ。ほら、やっぱりムードがいいだけじゃ勝てないって、いい証拠じゃないか。あれやっぱりムード良くねから勝てないんだっけ。ああもうわけわからん。難しいこと考えるのやめよ」

阿部は気分を入れ替えて堀内に声をかける。

「堀内さん～　気を入れなおしていきましょうや～　打者は弱いよ～　ちゃっちゃと切りましょう～」

堀内はすねたままであるが、帽子の庇を上げて、のぞかせる眼鏡の奥のその眼はまだ死んではいない。

「慎之助。阿波野ぐらい左手でも打ち取れるわ」

堀内に減らず口が出る間は、彼の気が途切れていない証拠。阿波野討伐、追加点を許すことなく、このイニングは終るはずであったが。

信じられぬことがまた起きる。

藤田がタイムを取りベンチを飛び出してくるのだ。イニング二度目。自動的に堀内は交替である。

「あ　へ？　え？」

あっけに取られた阿部は、藤田を止める言葉も出ず藤田はフェアラインを超えようとしている。

野菜ソムリエ

「超えた。超えちゃった」
藤田がフェアラインをまたいだその時、堀内の降板が自動的に決まった。
「何～　馬鹿にするなあ～」
交替させるならその前に替えろ。二人も歩かさえて投手の場面でイヤラシく替えることはないだろう。それが堀内の言い分である。なにも堀内の独りよがりの感情ではない。至極まっとうな意見である。これが開幕を託したエースにする仕打ちか。それもよりによって、自分も巨人の大エースであった藤田の決断。
同じエース投手なら、堀内の今の気持ちが分かるのが当然。投手を前にマウンドを降ろされる。これ以上恥ずかしい降板の仕方はないのである。
堀内は藤田の弁明を聞くことなく、スタスタと自分からマウンドを降りていく。
「困ったもんだ。ホリのああゆうところは昔からちっとも変わらん」
藤田はやれやれと腕組みをする。
黙っていられぬのが恋女房の契を交わした阿部。
「お言葉ですが、藤田コーチ」
注釈を入れて藤田の決断の腹を探る。
「ここで降ろすのはおかしすぎますよ。第一、5回まで猶予を与えてくれるはずでしたでしょ?」
「5回まで様子をみるといったが、5回まで交替しないとはいってないぞ」
「ですけど、なにもこの場面、敬遠二つさせて打者が投手の阿波野さんの場面で交替を告げるのは、あまりにも堀内さんのプライドを軽視しています!」
「エースだからといって、一選手のプライド伺いをしていいゲーム

じゃないんだ。いいか阿部。あえて、投手が打者の場面で次の投手に交替させたのは意味があるんだ」

「意味？」

「阿部も知っての通り、リリーフ専用の投手は、抑えとして調整させてる上原含め、鹿取、角、宮田の４人しか入っていない。つまり残りの投手は、リリーフ要員であって、リリーフ要員でない、つまり先発完投型をベンチに入れているんだ。ただでさえ救援に慣れていない投手を送り込むんだ、なるべく楽な場面で送り出したい。楽な場面といっても、オールスターの集うこの試合にそんな場面ありゃしない。回の初めから送り出しても、ピンチのようなものだ。なら投手が打者の場面に送り出すのが一番気が楽だろう？　それがたとえ今のような満塁の場面でもだ。歴史ある巨人軍から厳選された実力者が阿波野ていどに打たれるわけがない。だからあえてこの場面にリリーフ投手を送るのだ」

「そんな……」

藤田の言い分は、苦しい言い訳に過ぎないと阿部は慎みを覚えるが、大事な試合中、そこまで熱くなるのも差し支えが生じると阿部はこれ以上の口答えをグッとこらえた。

ところが、王が阿部に代わり藤田に口を飛んがらせている。

「藤田さん。あんた先発に完投ばかりさせてきたから、投手の替え時がいまひとつ分からないんだよ」

まさかの王の首脳陣批判に、阿部はたじろぐ。それでも藤田は球界の紳士の異名通り、柔和な笑顔を携えることを忘れない。

「ははは。ワンちゃん。これはオレの決断じゃないんだよ。すべては川上監督が決断したこと」

「いやあ、投手の全権は投手チーフの藤田さんでしょ？　責任逃れはよくないよ。とにかく、あんたは継投がヘタ。オレのように投手をつぎ込んで試合を作るってのが苦手なんだよ」

それでも引かない王に、藤田の顔が次第に赤く沸騰してくる。

「王！」

それまでのワンちゃん呼ばわりから、王と呼び捨てだ。ついに、瞬間湯沸かし器の裏の顔を見せはじめる。

「継投自慢もいい加減にしろ。お前は、短気だから投手を信頼しきれず替えていたのすぎない」

二人に挟まれた阿部はまさに板挟み。どちらの肩を持っていいかもわからない。若い坂本は凍りつき、頼みの長嶋は能天気ににこにこしてるだけ。

「シノさん。どどどどうしましょう」

篠塚に泣きつくが、

「オレ長嶋さん派だから」

と篠塚も無関心だ。

「どうなってるんだよ。栄光の巨人軍たるものが、どうしてバラバラになるんだよ」

泣きそうになる阿部であるが、当の騒動の主二人は素知らぬ顔。

「阿部は気にしないでいい」

「そうだぞ、慎之助。Ｖ９の栄光もこうして築きあげてきたんだ。選手と首脳陣が自由に意見を交換し、喧々諤々の論争を繰り返して、正しい道を見つけてきたんだ」

阿部には、このいい争いが論争というか、悪口の言い合いにしか見えないが、この二人に口を挟めるわけがない。

「はあ……」

納得したふりをするのが精一杯だ。

「王！　そんな意固地な性格だから、あんな娘になるんだ」

「何を藤田さん！　あんただって慶応出の紳士ずらしてるけど、高校時代は反吐が出るほどの悪党だったじゃないか」

論争という名の口喧嘩は続く。コーチの藤田はまだしも、王のヒートアップは試合に悪影響を及ぼすこと必至。この怒りをどうして晴らし、試合再開後の一塁の守備につくのか。

ところが心配ご無用。一流の中の一流である王は感情制御などお手の物なのだ。

突然、ミットを置き、つかつかとベンチに戻ると、汗を拭う堀内の袖を捕まえて、利き手でない右の拳で堀内の頬を強く乱打。
「これでスッキリした」
情けない投球に対しての愛の鉄拳と思った堀内は、文句ひとつ言えない。
まさかただのストレス解消台とは夢にも思わないだろう。

「ところで、藤田さん。肝心の次の投手は誰なんですか？」
「出てきたらのお楽しみだ」

ブルペンには、上原、鹿取、宮田、角のリリーフ四人衆に加え、江川、西本、桑田、斎藤、槇原、高橋一三、別所、城之内、澤村、藤本英雄、スタルヒンの各先発投手が投球練習を繰り返している。
当然、ベンチ入りの投手は限られている。４人のリリーフ専門に先発の堀内で５人。投手枠が９人とすらなら、つまり、多くとも１１人の先発陣の中から４人の投手しか登録できていない。後の投手は単なる調整でしかないのだ。
はたして先の１１人の中から、川上が二番手としてコールするのは誰か。

「ん～ホリに替えて、クワダ、くわだ、桑田ね」
「おいチョーさん。あんた今監督じゃないから」
「ん～　そうだったか？　ん～？」
自分を監督と思い込んでしまった長嶋の間違いコールで場内が沸く中、二番手投手が姿を現す。

中尾→伊藤芳明→高橋一三→新浦→宮本→高橋尚成→内海の先細りのような左腕

「藤田さん、さすがですねえ～。コーチ、監督と伊達に投手を見続けてはいない」
「だろうよ、ホリ。ワンちゃんはああいうが、見事な替え時だったろうよ」
「まさか、たった４球、それも中村紀をゴロで仕留めたあとで、チェンジアップが使えないと見抜くとは」
「オレの目はごまかせんぞ。それに、たった４球じゃない。４球も見れば分かるだ。あのていどの制球の精度と切れ味のチェンジアップで、近鉄いてまえオールスターを抑えられるわけがない。お前がこれを覚えて２６勝した昭和４０年代後半のチェンジアップに見慣れていない打者なら、今日のでも魔球に見えただろうけどな。チェンジアップなど、そのへんの投手が誰でも投げれる時代の打者にこれじゃあきつすぎる。カーブとストレートの威力が落ち、チェンジアップが必殺のボールにならないお前を、いつまでも巨人軍のマウンドに置いておくわけにはいかないからな」
「すべてお見通しで」
堀内は王に殴られた頬を赤くしながら、立ち上がる。
「打っても走っても、投球に影響の出ない身体を次の登板までに作ってきますか。絶対、この屈辱を晴らしてみせますよ」
藤田は何も応えない。
「まさか次の登板剥奪だの無粋なことはいいませんよねえ」
「巨人軍の開幕のマウンドを任せた男に次のチャンスがなくてどうする」
それを聞いた堀内は、一瞬安心したような顔を見せてから、タオルを肩にかけたままベンチ裏に消えた。
「誰だ、誰だ、誰だよ。次の投手は」

阿部は各投手の特徴と球種を必至に暗誦する。
「えっと、今日のベンチ入り投手は……。先発型の１２人を４グループに分けたんだっけ。今日の先発の堀内さんのグループは、通称Ｙグループ。えっと、桑田さんと高橋一三さんと藤本英雄さんが一組になってて。桑田さんはオレもよく受けたからいまさら覚える必要なしと覚えなかったけど、えっと桑田さんの決ま球は……ミヤボール……。違うな、なんで桑田さんなのに、ミヤボールなんだよ。どういうつながりがあって、桑田真澄のどこにも入ってないミヤボールなんてつけるんだよ。ミヤボールって誰の決め球だっけ？　みやみや……宮本さん？　違うよ、あんな三流の谷間投手が食い込めるほど巨人の投手陣は薄くないよ」

「ジャイアンツのピッチャー堀内に替りまして、高橋一三。ピッチャーは高橋一三。背番号２１」
場内アナウンスが流れて、阿部はｐ来くると耳を動かす。
「高橋一三さん！？　えっと、えっと、えっと、えっと、えっと、高橋一三さんの球種は、カーブ、スラダー、スクリューボールだっけ。あれ、これ、同じ高橋姓の左腕でも高橋尚成さんの特徴じゃねーかよ。紛らわしいな～　おっかしなあ～　あれれ？　ミヤボールの投げ手ってこの人だっけ？」
ベンチから小走りにマウンドに向かってくるのは、高橋一三。
Ｖ９時代、堀内と左右のダブルエースと称されたサウスポーだ。天を仰ぐような独特のフォームからの荒れ球が武器。安定感に欠けるが、大舞台での勝負強さと左腕の稀少性が買われて、内なる競争に勝ち上がってきた。
「慎之助。分かってるな」
テンポよく試合に入りたい高橋一三は、細々とした打ち合わせを省きにくる。
「分かってますよ」
分かっていない阿部であるが、勢いに負けてつい相槌を打ってし

まう。いそいそと投球練習に入った高橋一三は、オーソドックスにストレートから入る。
「いくぞ、慎之助！」
「はいな……はいな？　なんかこのリズムの受け答えどっかで聞き覚えあるぞ。考えるのは辞めよ。どうせ正解にはたどり着かねーから」
　高橋一三のストレートは勢いよく阿部のミットに収まる。
「うっひょー。いいボール。同じ高橋でも高橋尚成さんとはまっすぐの威力が段違いだね～。このボールじゃ沢村賞取れるよ」
　高橋一三は、左手を水平に動かす。スライダーを投げたいとの意思表示である。
「スライダー？　ストレートにスライダーって、ヒサノリさんとここまで同じだ。っていうか、誰でも投げれる球種か、この二つ」
　スライダーの練習球に手応えありと、高橋一三は、左手を捻る。今度はカーブを投げるのと意思表示だ。
「次はカーブだってえ！　ストレート、スライダーときて、カーブだって！　何の因果か偶然か！　高橋ヒサノリさんとここまでまったく同じ球種のレパートリー！」
　締めの練習球の要求に、高橋一三は、さっきと逆の方向に左手を捻る。
「！！！　まさか、いやそのまさかだ！　スクリュー！　いわゆる左投手特有のシンカー系統のボール！　これも高橋尚成さんと一緒だ！！　ストレート、スライダー、カーブにスクリューだって！　高橋尚成さんと高橋一三さんは苗字が同じなら、投げる球種のレパートリーもまったく同じ！　オレが混合して特徴を覚えるのも無理がないほどの神の悪戯のごとくの偶然の一致！　しかも練習球、８球のうちの３球もスクリューに当てる心づもり。これは投球の基本とされるストレートに費やした練習球と同配分！　ストレート三球！　スライダー、カーブを一球づつ挟んでのスクリューを三球！
つまりはスクリューボールこそが高橋一三の命綱との確かなる意思

表明！」

妙に興奮する阿部であるが、ふと我に返る。

「って、何、コーフンしてるんだ。オレ、カーブ、スライダー、スクリューの組み合わせでスクリューを決め球って、左腕じゃありふれた組み合わせじゃないか……」

阿部のひとり言で文字数を稼げたところで試合は再開される。

場面は二死満塁、打者は九番投手の阿波野。ＤＨ制のあるパ・リーグで長く過ごした阿波野に打席の経験はほとんどない。通算２９打席立って、２本の単打がやっとの打者である。ほとんどヒットの期待ができない打者と考えて差し支えない。

何の期待も持てないだからこそ、近鉄の気楽な押せ押せムードは、奇妙に膨張していく。

「阿波野～　バットに当てたら三塁やなく一塁に走るんやで～」

金村の他愛のない野次さえも、好ムードを助長していく。何がが起きる雰囲気。バットに当てさえすれば、奇蹟が起きても何の不思議なこともない。

堀内がマウンドのままなら危険性があったのかもしれない。左打者にとって見えすい右のオーバーハンドの堀内なら、当てることくらいはできたかもしれない。

だが、マウンドにそびえ立つのは、サウスポー、それも天を仰ぎみる奇妙なフォームから荒れ球を投げ込む高橋一三。

阿波野は、高橋一三が弓を引くように左手をテークバックするとき、薄曇りのドームの天井を見上げたそのとき、臆病ながら、腰を引いてしまった。

腰を引けた打者が、荒れ球をヒットできる分けもなく、阿波野は三球三振に倒れた。

ただ三つとも振ったことで、阿波野はスッキリとした表情を見せることができた。

「岡島秀樹は下を向いて投げるけど、高橋一三は上を向いて投げる。正面を向いて投げれてくる投手なら打てるけど、天井や地面を見な

がら投げてくる投手なんて打てるワケないよ」
試合は４回裏、二度目のＯＮ松井の夢クリーンアップが登場する。
「追加点は奪えなかった。でも二点あれば、もう十分」
逆転に気をよくした阿波野は飛び跳ねるようにマウンドに向かっていく。

巨人時代レフティーズの一人でした

「本日二度目のＯＮ＋ゴジラ勝負。日本で生まれ育った投手として、この三人といっぺんに相手するだけでもなんたる幸運と興奮なのに、それも二回目とくれば、投手冥利の独占禁止法に反すると他の投手からクレームが来てもおかしくないほどだ。巨人軍の伝統と伝説に立ち向かうことはそれだけ重くいのだ」

左手でもてあそんだロージンバックから、白い煙が沸き立つ。二点のリードは阿波野に余裕という一筋の光を差し込ませた。余裕はただでさえ身軽な阿波野の体を、さらに軽く羽ばたかせる。

三番王は、梨田いわく凡才打者の一人である。凡才打者は、王と松井秀喜の二人しかいないらしい。（堀内から高橋一三に９番打者が替ったことで、凡才打者の数は二人から三人に増えたかもしれない。高橋一三の通算打撃成績からして、堀内のような天性の打撃センスを発揮できるとは到底、思えないかだ）

「オーソドックスな攻め。野球が出きて１００有余年、強打者対策に頭を悩ませて続けてきた守る側は、確実に打ち取る方程式をいくつか開発してきた。なかでも王さんのような左の大砲を打ち取る策は、今や高校生投手でさえ知っているほど、野球業界に当たり前に横たわっている。その一つがこれだ」

阿波野は、徹底的に王の外角を攻める。

「面白くもおかしくもない教科書どおりの攻めこそが、梨田さんいわく凡才の超強力打者、王さんに効くんだ」

王の卓越した選球眼は、阿波野のボールの出し入れを正しく見極める。ボール一個、いや半個でも王のゾーンから外れれば、王は手を出すことはない。王がボールと自信を持って見逃せば、球審岡田は手をあげることなく、ボールカウントの光をひとつ灯らせる。

「ふう……。王さんの耐え忍ぶ姿に負けちゃあいられない。王さんの誘いにはまっちゃいられない。王さんから逃げているわけじゃな

いんだ。僕は王さんと勝負をしてるからこそ、ボール球を投げているんだ。王さんの無言の挑発に乗って、内角のホームランゾーンに投げ込むことは、べつにそんなの男らしい勝負でも何でもない。投手と打者の空間支配のせめぎ合いとすると、打者の圧力に屈しただけのことだ。僕は、王さんの大きな眼に、いくら睨まれても負けやしない。自分の投球をする」

阿波野の渾身のスライダーは、外角低目、梨田の構えたミットにピタリとおさまる。ぎりぎりの投球。王ストライクなる言葉が存在するこの業界、このボールがストライクとなることは難しいのかもしれないが、丹念にコーナーをつく阿波野の精錬な投球姿勢が、巨人びいきの岡田の手さえ上げさせる。

「風は僕に吹いている。何が運命の変わり目かは知らないが、とにかく3イニングという序盤戦を終えたところで、巨人から近鉄に流れという魔物が移ったことは、たしかだ。流れに乗れば、何だって上手くいく。こんなこと、１９８９年、ブライアントが４連発打ったとき以来、僕の野球人生にはついぞなかったことだ」

阿波野が2ストライクに王を追い込むと、ただでさえ、極端だった王シフトが、ついに奇々怪界なシフトに変形する。

王よ、追い込んで、必死になって流してくるなら、流してみろ、そんな西本の意思表示のように、近鉄守備陣は、左側の守備陣をがら空きにさせる。

サードの石井が本来の遊撃手の守備位置からさらに二塁よりに立ち、その直線状にレフトのブライアントを置く。

ショートの中村紀は二塁ベースを前に、八重歯を見せれば、セカンド大石は、三人の野手がいて、いつになく”渋滞した”一二塁間に居心地悪そうに、腰を落ち着かせる。

王の度重なる挑発に乗らない阿波野は、逆に王を嘲り笑うように、外角に勝負球を配する。

「王さんならコツンと流して誰もいない三塁線に討つなんて無粋なことはしないですよね。外角のギリギリの厳しいコースでも思い切

り引っ張って、右方向の野手が誰もいないところ、つまり王さんのホームランを妄信的に待つ巨人ファンが陣取るライトスタンドを狙いますよね」

王は腰がはち切れんばかりの猛烈なフルスイングで、反撃の一手でなく、追撃の一点を狙いに行ったがが、阿波野の投じたボールは、王のバットとの正面衝突を寸前に避けるように、曲がり落ちた。

「王さんから三振を取った。僕が高校一年生の時に現役を引退して、真剣勝負がかなうわけのない王さんから僕が三振を取った」

阿波野は王からの三振奪取に感慨を覚えるが、満足することなく、心を渇望させたまま、さらなる欲求充満に野望を馳せる。

「４番サード長嶋。背番号３」

王の三振でため息に包まれていたはずのスタンドが、この男のコールひとつで空気が変わるのだから、カリスマスターが及ぼす波及効果はただならぬものがある。

「長嶋さん。今日二度目の対決。一度目の勝負は、僕の得意球であり生命線であるシンカーを流されての被弾。コースが間違ったわけでも、配球に難があったわけじゃない天才打者、それも飛び切りの天才打者だから打たれただけ。だから何も恐れることなく、僕はシンカーを投げる。堀内さんに巻き込まれて引っ張られたからといって、それだけでシンカーを捨てたら、巨人ベンチの思うツボだ」

梨田も阿波野の心を読み取ったように、シンカーを決め球とするリードをとる。

「そうですよ、梨田さん。さっきのホームランは天才打者が奇蹟を起こしただけ。奇蹟なんて二度続けて起きないから奇蹟なんですよ」

「ん～阿波野は何をブツブツいっておるんだ。オレは巨人監督二期目の時代、ヤクルトの野村の狸爺がブツブツなんのオレの文句をいっているんだと気になって読心術を会得したんだぞ。阿波野、お前が何をブツブツ言ってるかはすべて、お見通しだぞ～」

長嶋は阿波野の口の動きに必死についていくが、
「おい、梨田。阿波野の奴にいってくれ。口の動きが早すぎて、何をしゃべっているか、わからんって」
「巨人時代の長嶋さんに干された不遇を、いまさらぶちまけているわけじゃないから安心してくださいよ、長嶋さん」
「ん～、そうか～。ならいいや。オレの悪口だったら許せんぞ阿波野だげど、ゲーム戦術に関わる重大な戦術をだらだらと述べてるなら別にいいや～」
天真爛漫、人の噂など一切気にしない人間に見えて、意外と自分の評判に敏感な長嶋であった。

ＯＮ＋松井対阿波野第二ラウンド！

「なあマー君。そろそろワシらの出番やないかな」
ブルペンの中央にどかっと座り、モニターを見つめる鈴木啓示は、直立不動の田中将大に指示を飛ばす。
「ええ？　阿波野さん、立ち直ってきましたよ。これからスイスイと巨人打線を封じそうな勢いですよ」
「甘いな、マー君。阿波野なんて優男が、巨人の伝説的打線相手に５回持つ思うか。一つのアウトを取るのにも汲々としてるやないか、それに梨田のこれも優男やな、が一球、一球に余裕のないリードしとるからスタミナ消費もいつおの数倍や。三年の監督経験から顧みて、ワシはこの回に阿波野が崩れる思う。だからマー君とワシの真打ちコンビが救援せなあかんのや」
「でも……。投げろといわれても」
田中は、ブルペン担当の小野投手コーチをちらちら見る。
「小野投手コーチの指示が出てからでないと……」
「なんやワシよりも小野の奴を尊重するいうんか」
「いやそういうわけでもないんですけど……。一応、小野コーチがブルペン担当ですから……」
「小野なんて選手として二流なら、指導者としても二流や。そんな輩のいうことを聞くまでもないで。選手として超一流、指導者としても超がつくほどでもないが、まあ一流のワシと比較にもならんヤローや。それにな小野も、ワシの監督方針に楯突いたヤローでな、ワシが首を切っとった仰木近鉄の残党の一人なんやで」
「はあ」
小野への恨みつらみが今、何の関係があるのかと不思議そうな顔をする田中であるが、鈴木相手に言えるわけがない。
「とにかく投げるんや。さあマー君、伊丹の生んだ天才投手、競うように一緒に投げようやないか」

鈴木はタオルを投げ捨て、ゆっくりと立ち上がる。
「おい有田受けんか～」
鈴木啓示とくれば、受ける捕手は有田の他はいない。鈴木ー有田と言えば、プロ野球史上ひときわ強い光を放つスーパーバッテリーである。
「へいへい」
有田が重い腰を上げ、ミットを何度か叩く。
「マー君はどの捕手にするんや」
「そうですね、鈴木さん」
「鈴木さん？　なんやか、むず痒いなあ。他の言い方ないもんかな。ワシとマー君の特別な関係をよく現す、ワシの呼び方」
「す、鈴木先輩とかはどうですかねえ……？」
「鈴木先輩？　先輩いうのもどないなもんやろな。野球界なんてひとつでも年上なら、誰でも先輩や。それが金村のような尊敬に値しない選手でもや」
「そ、それじゃあ、鈴木大先輩……」
「大先輩？　なんやか仰々しいのう。いくらワシが最後の３００勝の大投手やからって、殿堂入りの大選手やからって、大をつけるのもどないなもんやと思うな。マー君とワシの関係はフラットとまではイカンが、近しい関係やで。大いうのもなあ」
「……」
めんどくさいおっさんに目をつけられたものだと田中は、こころの中で舌打ちをする。
鈴木と田中の間に一瞬の静寂が訪れてそれを破るかのような一言が、ブルペンの向こうから漏れた。
「そんなおっさん、クサでええで、マー君」
不遜なモノの言い方からして、発言の主は吉井あたりだろうか。
マー君は肩をビクリとさせるが、鈴木啓示は表情を崩さない。
「まあ呼び方なんかどうでもええな。さあ投げようか」
「でも……」

「なんや、なんや。まだ指示待ちかいな。小野のいうことよりワシを信用せい。マー君の世代じゃ知らんかもしれんが、ワシは監督時代、継投の魔術師いわれたんやで。佐野ー赤堀の必勝リレーはマー君も聞いたことあるやろ？」

「まあなんとなく……」

「あれは前の監督の仰木さんが作ったいわれてるけど、実際そのとおりやけど、あれはワシのなかじゃワシの手柄なんや」

「はあ……」

「まあそんなこんなでワシのいうことを聞けばブルペン調整うまくいくこと間違いなしや。それでマー君は、誰を相棒にするんや？　ワシは有田やけど」

ブルペン捕手として、ブルペンに待機しているキャッチャーは、鈴木が売約済みの有田を始めとして、石山、藤井、古久保、光山、山下、的山の近鉄出身が占めている。

田中の女房役といえば、嶋基宏の他にいないが、嶋はこの大会に帯同をしていない。

「そりゃまあ受けてもらったことのある藤井さんですかね……」

「藤井か。マー君は嶋とばかり組むから、藤井を嫌ってるとばかりおもてたが、それでも藤井を指名するんかいな」

「いや別に嶋さんとのバッテリーも、僕が希望したわけでなく、たまたま同期入団だったから、先輩捕手と組むよりも、気が楽だろうと、当時の首脳陣の方々が勝手に決めただけで……」

「そうか、なら藤井でええな。さあ受けようか」

鈴木は有田が座る直線上のマウンドにのっしのっしと向かうが、そのマウンドには、すでに石本貴昭が先客として、びゅんびゅんと速いボールを投げ込んでいた。

「なんや、石本！　ワシの有田やないか」

「鈴木さん。文句なら小野コーチにいうてください。いや小野コーチに指示を飛ばした西本監督にいうてください」

「なんやと、西本監督は、ワシらロングリリーフを挟まず、直接、

救援投手につなぐつもりかいな！　あかんわ、西本のオヤジは、しょせんは野手出身の監督や！　今日の阿波野の状態で抑え陣に直接バトンを渡せるわけがない。第二先発としてワシらのように長いイニングを投げられる投手の尻拭いを仰がないかんのに！　まったく……ワシが監督も兼任するば良かったわ。勝てる試合もよう勝てんわ」

鈴木はバカバカしいとばかりに、また腰をどかっと落とす。

「マー君も座らんか」

「はあ…。あ！　長嶋さんが打った！」

モニターの中では、長嶋が阿波野の勝負球”シンカー”を捉えていた。

「お、長嶋さんの打席やったのか」

阿波野のシンカーを堀内さながら強引に引っ張ると、打球は猛烈なバックスピンがかかったままショートの中村紀に飛んでいく。ショートとしての守備範囲には難はあるが、ハンドリングは超一流のノリは、難しい回転の打球も難なくさばくと、正確無比なスローイングで長嶋の一塁到達を阻む。

「やった、ノリさん！　さすがっす！」

「さすがノリやろ。ノリはなあ、ワシが我慢強く起用したんや。ノリは育つは、金村干せるわ、一石二鳥やったで」

「この調子なら、阿波野さん、7回くらいまで持ちそうですね。そうなるとロングリリーフの僕らは開店休業ってとこですね」

「ところで、マー君。岩隈はどうしたんや？　アイツも第二先発グループやろ」

「岩隈さんなら先発のダミーに使われたことに腹を立てて、ロッカーに籠城中っすよ」

「なんやと?!　まったくちょっとエースと誉めそやされるやからといって天狗になりすぎや。投手というのは、どうして傲慢な性格で、チームを顧みないバカヤロウが多いんやろか、なあマー君。ワ

シらは違うけどなあ」
「はあ……」
あんたが、その傲慢の典型だろうと思う田中であった。

阿波野は、ネクストから音速の素振りをいながら打席に向かう松井を凝視する。
「松井……か。松井を打ち取れれば、ＯＮ＋松井を三者凡退に取るという、おそらく球史始まって以来の偉業を達成することができる。まあこのクリーンナップが公の場でお披露目になるのが今日はじめてだけど……。あれ？」
松井の打席の中での違和感に阿波野は、はっとした顔を見せる。
「なるほど……。一回の失敗を学習して、次の打席に役立てるなんて、さすがに松井だ、優等生だ。だけど、その工夫を、暗中模索にとかえてあげるよ……。僕も投手として優等生だからね」

「スタンスを心持ち、すなわち、何気なくこの試合を眺めているだけじゃわからないほど、ほんのわずかだけホームベース寄りに立った。これは僕の外角球の想像以上の切れ味を、一打席目に目の当たりにして修正してきたんだ。さすが松井秀喜。梨田さんいわく凡才だ。凡才は天才と違い、努力と工夫なしで功績を残すことはないからね」

松井のスタンスの変化は、梨田もお見通し済み。それとなく松井にほのめかし、揺さぶりにかかる。

「なんや、松井。阿波野は大の得意やったろ。横浜時代の阿波野がお前に対して投げるボールなく、立ち尽くしてた場面何度も見たで」

「ちょっと違いますね。ちょっとだけですけど」

「そうか、ちょっとか。だいぶ違う思うけどな。横浜時代の阿波野と今マウンドでそびえ立つ阿波野はなあ。肩を酷使される前のリフレッシュな阿波野だ。横浜時代と同じ１４０という球速をバックスクリーンに表示しても、切れとノビが全然違うぞ。だからお前は、阿波野を打とうと必死にもがいてるんじゃないかな」

「あんましゃべりすぎない方がいいっすよ。真剣勝負の舞台で」

「つれないな、松井。それともアメリカが長すぎて、選手とこうして気軽に会話する術を忘れたんか～」

「……ジーターは親友です。Ａ－ロッドは仲の良い仕事仲間です」

「そうか、心配ご無用ってわけか。松井はメジャーでもすっかりと馴染み溶け込み、あまたなる友人を置き土産に、ニューヨークからロサンゼルスに旅立つ、そういうわけか」

「……」

「だからか。チームメイト愛しさに、己をすてて自己犠牲に走ったのは。オレは日本野球に身を置くものとして、日本野球のホームラン打者代表のお前には、一発狙いの自由気ままな打撃を期待したの

になあ。走者がいれば、走者を返そうと忠実な打撃をし、走者がいなければ、走者になろうと失投も時にあえて見逃し、カウントを深く打者有利に進めていこうとする。そんな松井はアメリカだけにしろよ。ここは日本や」

「同じですよ。どこの国だろうと野球スタイルを変えるつもりはない」

「なら外にボールを集めても、流して塁に出るなんて馬鹿げたマネはせんよな。ヒットを一本でも打てば最低限の仕事は果たせるからって、遅刻の罪滅ぼしになるからといって、そんなのゴジラ松井やない」

「当たり前でしょ、梨田さん。二死走者なし、オレが塁に出たからといって得点確率は低い。狙うは一発でしょ」

松井はそういいながら、ホームベース寄りに立っていたスタンスを、わからないように元に戻していた。

「……それこそ松井やで」

梨田は心の中でほくそ笑んだ。松井が挑発にのってスタンスを一打席目と同じにしたからだ。今日の阿波野のボールの切れからすれば、松井の元のスタンスでは外のボールに対応仕切れないからだ。

ベース寄りに立ち、一発狙いを捨て外角球を流してヒット狙いにいくつもりだった松井は、梨田の口撃で足場も打撃も元のスタンスに。

迷いのある松井は、阿波野の外角球に惑わされて、バットの真芯やや上のホームランスポットで捉えたはずが、

「あ、いかん、しまった、芯からずらされた！」

阿波野のストレートの切れ味は、松井のバットの芯からも外す。

「危なかった。あのスタンスのままなら真芯やった……」

梨田はマスクを取って、打球の行方を見守る。だが、打球はセンター方向にどんどんと伸びていく。

「真芯やないのに、ぐんぐん伸びる！　これが松井か！」

センターのローズが背走に背走を重ねる。センターのフェンスの

手前で張り付くように構えると、打球は、ローズのグラブにすっぽりとおさまる。

「ふう～」

梨田は思わずため息をついた。首を振りながらベンチに戻る松井を捕まえると、

「どうした松井。東京ドームで１０年もやったお前やのに、この球場の特性忘れたか？　左中間、右中間の膨らみのなさミニ球場のそれと同じかそれ以下のド東京ドームやが、センターの最深部は、大型球場にふさわしい広さがあることを」

「忘れちゃあいませんよ。それにオレのパワーを持ってすれば、どこでも入ります。ただミスショットなだけですよ。狙い、読み、タイミング、すべてが外れまくった大ミスショットです。それであそこまで飛んだのだから良しとすればいいんじゃないですか」

「ほお」

梨田はそれ以上言葉を足さず、グラウンドを後にする。

そしてＯＮ松井のクリーンナップを三者凡退に抑えた阿波野は興奮の色を隠せない。

「スゲーな、このとんでもない３、４、５を出塁なしで仕留めるなんて。これもひとえに僕の実力……というのは冗談で、梨田さんのリードに、攻撃陣がくれた二点差という心の余裕があったからだ。一点差なら同点はいかんと一発怖がって投球が逃げになりがち。二点があるから縮こまらず思い切って腕を触れたんだ」

近鉄ベンチはまるで試合を締めた抑えの切り札を迎えるように阿波野を歓迎する。

「よっしゃ、阿波野ようやった！　あの三人を打ち取るなんてお前にしかできん！」

金村が真っ先に祝辞を述べれば、

「そうやね、もしも投手が野茂さんやなら、どっかでつまらん四球を出してたから。制球のいい阿波野さんならではよろしいかな」

大村も毒を交えつつ阿波野の偉業を称える。

こうして盛り上がる近鉄ベンチの一方、巨人ベンチは静まり返っていた。

何も点差が巨人軍の雰囲気を形作っているわけではない。キャンプ、オープン戦、そして長嶋のソロホームランで一点のリードを奪っていた3回までも、ベンチの雰囲気は今とあまりかわらないからだ。

あまりにもスター揃いで、ムードメイカー的存在がいないのである。

奔放な長嶋も、ムード作りに熱心ではない。自由気ままな長嶋は自分の世界に人を引きずり込むはあるが、その世界は人に心地よい世界とはいえない。

助っ人ながら王巨人のムードメイカーを自認していたクロマティも今日はおとなしい。一回の手抜き走塁を咎められたことから、フレクサれ続けているのだ。

阿部、坂本ら本来馬鹿をやって盛り上げ役にでるべき若手連中もいたっておとなしく、ベンチの済みで小さくなっている。

勝っていれば、ベンチがお通夜でも問題はない。だが今巨人は二点のリードを奪われているのだ。

劣勢を跳ね返すのには、ある程度の勢いが必要。時にプレーのひとつでも勢いをもたらすことは可能であるが、それは偶発性に頼り切るもの。

必然的に勢いをもたらすプレーヤーが今の巨人ベンチに現れるだろうか。

王が守備につく前に大きな声を上げる。

「まるで胃が痛くなる展開だな」

胃の全摘手術をした王は痛む胃がない。だからジョークとなりうり一笑いを起こそうと王は発したのだが、胃を摘出した理由が理由だけに、ベンチの誰もがあからさまに笑えないジョーク。それだけにベンチはひっそりするが、長嶋だけは気にせず笑う。

「ワンちゃんはジョークもいけるねえ～　笑いすぎて体が半分固まっちゃうよ～」

これまた笑えないネタを持ち出して、巨人軍のベンチはお通夜からお葬式へと突入する。

一軍も二軍も投手出身が監督って……。いかがなもんよねえ、それって。

ムードメイカーの不在。

絶対的な戦力を誇る巨人軍だからこそ生じたほころび。

「まだ5回だよ。5回。二点差なんてワンチャンス、あっという間だよ」

王ダイエーや森西武でヘッドコーチ、助監督をつとめ名参謀ぶりを発揮した黒江が丸っこい体全体からよく通る声を出して、沈黙しがちのベンチに活を入れるのだが、しょせんはコーチからの一言。

選手と同じ目線にないコーチからの言葉は、けしてチームの体内に染み渡らない。

選手の誰かから声が出なければ、けして心地よいムードは形作れないのである。

「元木でも入れときゃ良かったかなあ」

高田が首を捻る。

「練習もろくにしないし、よけいな一言が多く、だらけきった態度は士気に大きくマイナスで守備も打撃も今一つで、ベンチに置いておくのも人員の無駄な元木だけど、こんな劣勢時でもヘラヘラと減らず口の叩ける大介は、巨人にとって異端児のなかの異端児……。いまさら不詳の息子の不在を嘆いてもしょうがないかな、土井さん」

「大介の必要性は僕があれほどスタッフ会議で力説したのにいまさらだよ。僕以外、大介のベンチ入りに賛同してくれた首脳陣は誰もいなかったじゃないか。特に原だよ、原。打撃コーチの補佐の分際で、世界一監督を盾に、僕の元木大介必須論に真っ向から反抗した。なにが、紳士たれ巨人には元木はふさわしくない人材だよ。いい子ちゃんだけでチームワークをうたっても、なあなあで終るだけっていうのが分かっていない」

「それでも原の意見が通るのだからしょうがないですよ」

「3連覇だなんて、あれだけ補強すれば誰でもできるよ。それをさ

も自分だけのお手柄みたいに。まあ愚痴っていてもしゃーないわな。巨人軍のモットーはなんや、高田」

「いなければいただいてくる」

「そうそう、戦力が欠けるなら、あらゆる手段を講じて選手を取ってくる。これは何もＦＡ制度が始まった最近だけであらず。脈々と続く巨人ＤＮＡ。別所さんを南海から奪い取り、王や長嶋さんをひっくり返して、招き入れた」

「だけど、大会規定により、他所から持ってくるわけにはいかない。それよりなにより試合はもう始まっている。いまさら誰をベンチに入れることも出きない」

「だから、巨人軍第二のモットー」

「いなければ作り上げる」

グラウンド上ではすでに5回表の近鉄の攻撃が始まっている。投手は高橋一三で代わらず、打者は大石大二郎。トップからの好打順である。勢いの流れどおり打順のめぐりも近鉄に傾く。

「そうだよ、高田繁外野守備走塁コーチ兼外野手。内野守備走塁コーチ専任で試合に出れない僕から見れば羨ましい立場である高田。なければ作る。これも巨人の伝統だよ。なにが巨人は広島を見習って選手を育成しなさいだ。歴史的観点からみたら巨人ほど育成に重連を置き、それを成功に転嫁させた球団はないのに。例えば川相だよ。河埜和正が極端に衰えて、遊撃手がどうしても必要になったときだ。高校時代投手だったドラフト4位の川相を二軍で鍛えに鍛えてその後釜に据えた。川相育成には僕も深く関わったけど、こういうこともできるのがまた巨人なんだよ」

「ムードメイカーを作りましょうか」

「控えがいいね。控え選手だと常にベンチにいることになるから、ダックアウトから表も裏も声が絶えないことになる」

「今日の控え野手は、山倉、森さん、原、川上監督、わたくし高田、与那嶺さん、柴田さん、松本、そして……」

高橋の変化球攻めにも屈せず食らいついていた大石であったが、

7球目にやっときたストレートに押し込まれて、ポップフライを打ち上げる。
「川相……。さっき例に出した川相」
「9人の野手のうち、私と原と川上さんは首脳陣を兼任している。首脳陣がムードメイカーには成り難い」
「森さん、山倉は典型的捕手人間、いかにも暗い。与那嶺さんも心はアメリカの人だ。日系で姿形は日本人そのものでも、日本に生まれ育った日本人とは精神的な壁がある」
「柴田さんは、横浜育ちらしい明るいキャラだが、言葉にどこか刺がある。シニカルな物言いは時にチームに波風を立たせる。松本はあまりにも大人しい」
「となると残るは……」
打席にはローズ。高橋一三とローズには、堀内と違って、一見何のいざこざも因縁もなさそうであるが、
「なんやこの高橋とかいう投手、誰かと思うたら、高橋一三かい」
ローズはいつものように深めにかぶってたいたヘルメットの日差しを少しだけ上げる。
「……ところで慎之助、ワテと高橋に何の関連性があったかいのう」
「忘れたんかい。タフィー……。二軍監督でしょ。堀内さんが一軍監督のそのときの二軍の指揮を託されたのがV9の投の立役者のもう一人の一三さん」
「お、そやなったな……。それより慎之助、ワシ、高橋カズミになんか怨みやいざこざあったか？　あったら教えてくれや。恨みつらみ嫉みをパワーに転じさせるから」
「そんなもんしるかい……」

パパは打ったぞ～

「しかしけったいな投げ方するのう。カズミは」
「どうすんのタフィーさん。高橋一三さんは上を向いて投げるよ。下を向いて打つあんたが打てるの？」
「任せなさいな。ワシは日本プロ野球選手でありメジャーリーガーやで。奇妙なフォームの投手はあちらでいくらでも見てきたんやで。カズミみたいに上を向いて投げる投手なんぞよういたわ」
「本当かよ。ノールック投法の岡島さんがあれだけ珍妙がられて、あれだけ打ちづらい投手とされているのに」
「まあ打つからみてみい」
ローズは自分のスタイルを変えようとしない。ヘルメットのひさしを鼻のあたりまで深くしたまま高橋一三を迎えうつ。
初球、空振り。リリース寸前に天をちらりとみる高橋一三の投法に惑わされたわけでもないが、とにかくタイミングが合わない。
「なんや慎之助。今のボール。あの一三は堀内と同世代の投手やろ？　ボールを動かすなど邪道、きれいな回転のストレートこそと教えられた時代の男やろ？　それがどうした、今のボールなんか動いたで。変化球かな思うて、バックスクリーンの電光掲示の球速をみたら１４３キロやん。ストレートやなあ。それなのにどうしてワシが空振りした？　ワシが１４３キロのストレートくらいに振り遅れるわけないやろうが」
「別に動かないよ、高橋一三さんのストレートは。正真正銘のフォーシーム、いわゆる綺麗な回転さ」
「ならどうしてワイが空振りした」
「もともとストレートに弱いじゃん、タフィーさん」
「１４５キロ以上のボールはきついが１４３ならミートできるで」
「やっぱひさしが悪いんじゃないの？。一三さんが上を向くでしょ。タフィーはそれが気になっても深いひさしが邪魔して、より首を上

げようすると結果的にヘッドアップしてしまう」
　阿部はあえて敵に塩を送るが、頑固なローズは聞きつけない。
「だからいうて変えんわ。一人の投手攻略にいちいちスタイルを変えたらやってられんわ」
「そう、なら勝手にやってよ。楽に打ち取らせてもらうから」
　高橋一三は同じように上を見ながら二球目を投じる。阿部の選択した球種はスライダー。ローズがタイミングがまったくあってないと感じつつも、直球を続けず変化球をミックスするあたり阿部の慎重さと成長が伺える。
　ひさしを深くヘルメットを被っていたはずのローズが、リリースの瞬間、秘策を見せる。
　阿部はローズの三味線ぶりに思わず言葉を発する。
「あ、汚ね！」

　高田と土井のムードメイカー急造作戦会議。すべてのベンチ要員が候補であったが、一人、二人と消えて残るはただ一人。
「川相か」
「川相はどうだろ」
「たしかに川相みたいなベンチ要員はムードメイカーに適任だよ。終盤まで試合に呼ばれないから、結果に一喜一憂せずに同じテンションで応援に回れる。川相の出番なんて代打バントか、坂本に代打代走が出た後の遊撃守備くらいだし」
「それに川相は地味なキャラに見えて、けっこう熱い男。それなりに弁もたつし」
「なら川相に任そうか」
　土井は結論を急ぐが、高田が待ったをかける。
「川相……。川相ねえ」
　高田は剃り跡が青々としているあごひげをなでるように触る。
「あいつは土井さんも知っての通り、高卒ドラフト下位指名から巨人のレギュラーまで這い上がってきたど根性男だ。それに飽き足ら

ずこの大会でのレギュラーも虎視眈々と狙っている飽くなき上昇志向の持ち主。そんな男が、自然にナインの士気を高めることができるかね。どっかでレギュラー組の失敗を願ってるんじゃないかな。下心が見え隠れする檄を飛ばしても、ムードが盛り上がっていくかどうか」

「高田。それは違うな。いいんだよ、それで。ぐつぐと煮えたぎる熱い下心が見え見えでもな。選手は大人どおし、うわべだけの声の掛け合いでも、心を燃えたぎらせる術を持っているんだよ。オレらの若い頃がそうだったじゃないか。オレだってポジション争いをしていた広岡達朗さんの好プレーに内心、ちっと思いながら表面上手厚い拍手を送ったもんだ。広岡さんは、もちろん、ライバルの僕の拍手が心からじゃないと知っている。それでも広岡さんは僕に笑顔を見せてハイタッチをかわしてくれたんだよ」

「そうですけど……」

「かかったな慎之助」

ローズは投げた瞬間、首をくいと上にあげてひさしを浅くしたのだ。うまく阿部を欺き、高橋一三の上向き投法にもヘッドアップをしたかったのだが、

「あかん、勝手が違ったわ」

首を振り上げたために、今度はスイング始動でまでのメカニズムに狂いが生じて、ど真ん中に流れてきたスライダーにこれまたタイミングが外れて空振りしてしまったのだ。

高田はそれでも乗り気じゃないが、土井は自ら川相の前に出向き、急造ムードメイカーを任命する。

「川相、ちょっと頼みたいことがあるんだ」

「はい？」

川相が土井を見る目。それは一選手が首脳陣を見る目ではなかった。黒目と白目の配分が1対3としたら、その3の部分の白目が濁

り切っていたのだ。
一見、寝不足の充血した目に見えるが、それは違った。あきらかに川相の目の濁りは、チームメイトの失敗を願う赤い波状で血走っているのだ。
「坂本がエラーをしたら僕の出番ですよね？　土井コーチ。内野守備担当から見て、やはり僕の守備力が坂本をはるか上をいってますよね？」
さあ土井は、この川相をムードメイカーへと変心させることができるのか、土井の指導者としての手腕が問われる。

途中経過

「え～中畑さん　ちょっとお待ちいただけますか。今、他球場の途中経過が入ってまいりました。本日はここ東京ドームの巨人対近鉄戦だけでなく、一昨日開幕したヤクルトー日本ハム以外のゲームが行われているんですが、国民的スターイチローの一挙手一投足の注目が集まる、広島東洋カープとオリックスブルーウェーブの対戦、定刻の6時ちょうどに試合が始まってる模様です。もちろんイチローはスタメンに名を連ねています。中畑さん、上田、仰木のオリックスW監督は、イチローを何番に起用したと思われます？」

「そりゃイチローといえば一番打者でしょうよ。イチローが先頭打者に立つほど、相手チームに脅威なものはありませんよ！」

「それでは池谷さんは何番だと？」

「え、中畑さんと同じじゃ面白くないでしょうから、私は三番打者として起用されたと思いますよ。イチローも素晴らしいトップバッターですが、オリックスにはもう一人の最強のトップバッターである福本豊さんがおられます。イチローは一番以外でも栄えますが、福本さんは一番以外で起用しちゃいけない格の選手です。ですから、福本さんとイチローを両方生かすのは、必然的に一番福本、三番イチローの並びになるでしょう」

「中畑さんと池谷さんのご意見が真っ向から異なりましたが、では特別ゲストとして放送席にお越しいただいた野茂投手にもお伺いしましょうか」

「……え、僕ですか？」

「はい、野茂さんです。イチローは何番だと思われますか？」

「何番でもいいんじゃないですか、別に……」

「まあ野茂さんのような実力者なら、相手の打順など頭に入れずとも、自分の投球さえすれば抑えられるでしょうが、評論家の目線でお話をお願いします」

「解説の目線でですか、そんないい加減な好き勝手言える第三者の目線で僕はモノを言いたくありませんよ……。でも仰木監督をよく知るものからして、9番やないですか？」

「9番？　これはまた大胆な予想。隣の中畑さんも目を飛び出して驚いています」

「いやいや野茂くんの目線は違うね～。メジャーも知り仰木さんもよく知るからこそ飛び出てくる推測だねえ。いやはや私には思いつかないですよ、あのイチローが最下位に置かれるなんて。ガハハ」

「それでは野茂さん、その9番と予想された根拠を」

「根拠？　別にないですよ。ただ仰木さんがしそうなことかな思っていうたまでです」

「そうですか。三人の解説者のみなさんの意見が違う興味深い予想ですが、残念ながら正解はいらっしゃいません」

「なんですと？　もしや4番イチロー？」

「中畑さん惜しい。正解は二番イチローです」

「ほう二番イチローねえ。福本イチローの一二番コンビか。こりゃたしかに史上最高の組み合わせだけど、イチローが二番打った経験あったっけ？　メジャーじゃもっぱら一番でしょ？　オリックス時代も最後の年に4番を打った以外は一番か三番じゃなかったかなあ。二番打者の役目をイチローがこなせるかちょっと気になりますねえ」

広島対オリックスの試合は広島ズームズームスタジアムで行われてきた。球場はもちろん満員。しかも相手は人気のないオリックスだけあって、ほぼ広島ファンで埋められている。

オリックスの打順は以下の通り。

福本8　イチロー9　簑田7　ブーマー3　松永5　マルカーノ4　中沢2　大橋6　山田1

走攻守揃った理想的なオーダーだ。下位の三人の打力にいささかの問題はあるにせよ、長池や谷のベンチに控える豊富な代打陣で十分カバーできる。

先発はもちろんこの人、下手投げの歴代最多勝投手である山田久志だ。

一方の広島は、山田の先発を予測し、左打者をずらりと並べてきた。山本浩二、衣笠の外せない二人のスターと適当な左打ちが山中しかいない捕手を除くすべてが左打ちないしはスイッチヒッターである。

捕手が口八丁の達川光男、一塁に鉄人衣笠祥雄。二塁に二度の首位打者経験のある正田耕三。三塁には、本職の遊撃を高橋慶彦に譲った野村謙二郎。そしてその遊撃の高橋慶彦を挟み、外野は山本浩二、前田智徳、そしてライトルが右翼手としてスタメン表に組み込まれていたが、急遽攻守兼ね備えたライトルをベンチに戻してまで抜擢されたのが、

「はあ？　長嶋清幸？　古葉監督もモウロクされましたかねえ。ライトルおる、山崎隆造もおる、緒方孝市もおる、嶋重宣もおる、水谷実雄もおる、山本一義もおる、それなのにどうして長嶋じゃけんのう。首を傾げるわ」

いくらでもいる外野陣の中から選ばれたのが、三割一度すらなく、長打も年間１５本塁打がせいぜいの長嶋であるから、ファンが嘆くのもよくわかる。

「ワシもわからんわ。なんで長嶋のマメなんじゃろ」

「そうそう金本がおるでしょうよ」

「あ～か。金本はまた阪神に強奪されたじゃろが」

「あ～そうじゃった」

長嶋が起用されたのは、山田久志にすごぶる強いとデータがあるからだ。８４年のシリーズで長嶋は山田に痛打を浴びせ続け、三度投げて０勝というほろ苦い成績で、山田生涯最後のシリーズを終わらせた。

もともとベンチにも入る予定がなかった長嶋である。それがオリックスとの大戦が決まり、先発が山田久志で間違いないと長嶋が急

遽ベンチ入りすることになったのだから、当然、弾かれる男が一人いるわけだ。

それはもちろんベンチ入りのぎりぎりの末席に名を連ねる男。

「ええ～　せっかく張り切ってきたのに！　広島の新球場に初めてホームチームとしてベンチ入りができると思ったのに……。あんまりですよ～」

「新井」

ベンチ落ちを告げた大下内野守備走塁コーチが新井の肩をぽんと叩く。

「ワシも抵抗したんやぞ。新井は右の大砲、ここぞという時に必要になるとな。でも古葉監督他首脳陣が若いお前を落としやすいと言い出してな」

大下は新井の落選理由を説明するが、実際はその逆。スタッフ会議のその時、誰を落そうか言い出しづらい雰囲気の中、真っ先に新井の名前を出したのは、大下本人だからである。

「新井でいいでしょ。置いといてもまぐれの一発しか期待できませんし、ワシに頼み込んでカープ入りにこぎつけたクセに阪神に行った不義理な奴に遠慮することはありませんて」

それも知らずに新井は大下の言葉に涙つぶを落とす純粋ぷり。

「大下コーチ！　わたくし新井貴浩はきっとカープのベンチに舞い戻ってきます！」

「そうか、ガンバレよ。でお前さんがベンチ近くにおるのも辛気臭いから、球場のどっか離れたところで見てくれよ。そやな、ネソベリアなんかええやろ。ワシもあそこで試合が見たいと思うてたところや」

「え、ネソベリアですか？」

ネソベリアとは、広島新球場の名物のひとつ。寝っ転がりながら試合観戦を楽しめる観客席の一角であるが、当然そこには熱心な広島ファンが占めてオリ、裏切り者の新井は、敵陣に飛び込む覚悟をしなければならない。新井がネソベリアの方を見ると、いかにmガ

ラの悪そうな全身赤に染めたオヤジどもが、酒を楽しんでもう出来上がった状態。

「あの中でですか……」

「それと新井くん。ネソベリアいうても寝るなよ。眠気防止にこれを宿題にするから、ようやっとけよ」

大下が差出したのは、分厚いノート。

「これ５０ページあるから、全部使って今日の観戦レポート書くように。これがあればお前さんは眠ることなくゲームに集中できるな」

「は、はい……」

「ええか、レポート量に不備があったら何が待ち受けてるか、わかるやろ」

大下は言葉を濁したが、新井と大下のつうかあの中。もしもリポートに穴があれば、とんでもない罰則があるのは新井は十分に分かっている。

「ははは、微笑ましいけど、大下さん。ちょっといじめぽくないですか、ははは」

大下と新井のやり取りを微笑ましく見守るのが、同じ駒大閥の野村謙二郎だ。

「いじめはよくありませんよ。いじめやシゴキは現代の若者を遠ざける要因です。多少ゆるくしてあげないと今の人はついてこないですよ、大下さん」

さすが猛練習を課し、ガムテープで口を塞いでまでも練習に集中させる野村がいうことだけに含蓄溢れる意見である。

「ノー！　ノー！」

「最後だけ英語かい」

ローズは結局、高橋一三にタイミングが合わず、空振り三振に取られる。

「むむむ、坂本に打球が飛んでいかなった！　ローズの強烈な打球をグラブさばきの未熟な坂本が弾き、オレの出番が回ってくると思

ったのに！　ち！」
「川相、それじゃあいかんぞ」
土井ははたして川相の淀んだ心を清らかにすることができるか。

川相遂に自己犠牲に目覚める

「だから川相。心の中でライバルの失敗を願うのはいいんだよ。だけどそれを言葉にしちゃいけないんだよ」

「お言葉ですが、土井コーチ、わたくし川相昌弘は、近年のそうしたチーム内の慣れ合いに疑問を持ち続けてきたのであります。ライバルであるチームメイトと仲良く話すわ、果ては食事にでかける。同僚といえど個人事業主であること我々は敵同然。それが一緒に杯をかわずとはいかがなものかと」

「わたしも近年の慣れ合いにへきへきとしていたところだが、それとこれとは別。今はその気持ちをグッとこらえたでだな、ムードメイカーの役目を果たして欲しいんだ」

「なんですと、私にピエロとなれと？」

「まあ言葉を悪くするとそうなるな。まあ劣勢をひっくり返すためには、誰かのモットーを犠牲にして、チームを尽くさなければならないんだ。それもすべてジャイアンツの旗のもとだぞ。とある野球漫画の主題歌にでもあったじゃないか。僕もよく出てるｋ漫画だけどね」

「ジャイアンツの旗のもとですか？　巨人軍を追われて中日に希望とやりがいを求めた身としては譲りかねるものがあります。巨人軍に復帰を許されても、まだどこかで巨人に反発する自分がいるからです」

「その気持ちは分かる。でもな、川相。お前も中日で指導者生命終えるつもりはないやろ？ゆくゆくは巨人でコーチの要職に付きたい気持ちはあるだろ？」

「そりゃお世話になったチームですし……」

「なら巨人軍愛を示せ。原じゃないが、少し曲がりくねった巨人愛でもいい。愛を示せば、運命は振り向く。とにかく自己を捨てて、巨人愛のもとムードメイカー役に染まってみる。さすればお前の道

を開かれよう」
「わかります……。やってみますか。現役時代ヤジ将軍とならした私、人をやじることを仲間への声援に合わせ扉を回転するようにかえればいいこと」
「よし、受けてくれるか！　さっそく声を張り上げ守備につく巨人軍の仲間たちを鼓舞してくれ」
　川相はメガホンを口に当てて、腹の底から声を出す。
「おいおい一三さん、ツーアウト、ツーアウトですよ！　いい調子ですよ！　このまま行きましょう！　三者をきっちり取って攻撃のリズムを作りましょうよ！」
「そうだ、その調子で頼む」
　高橋一三は川相の声援が効いてか、今日一番の難敵ともいえる三番マニエルを振り遅れのショートゴロに打ち取る。
　ショートは川相のライバル坂本である。それでも川相は、坂本の失敗を願わず、
「勇人！　きっちりとれよ！　投げ急ぐなよ！　マニエルは足が遅いぞ！　正確に放れよ！」
　正しい助言をおくるほどだ。坂本は川相のアドバイスが骨身に染みたのか、時折見せる雑なスローイングではなく、流れるような動作で、一塁に取りやすいボールを投げる。
「ナイス！　勇人、それだよそれ！　井端みたいな堅実なプレーだよ」
　土井は川相の献身ぶりに思わず柄にもない涙を流す。
「川相、お前……」
　坂本がアウトを取った勢いそのままベンチに戻ってくる。
「よし、川相。今度は言葉でなく身体で坂本を歓迎しろ！」
　土井に促されるまでもなく、川相は自ら坂本に歩み寄り、右手を差し出す。
「おめでとう、勇人」
　相手が川相だけに坂本は警戒心たっぷりであったが、川相が満面

の笑みを携えていることがわかると、すっと自らも右手を出し、握手の返答をする。川相と坂本の右手同士が結ばれる。がっちり組み合わされてたライバルどおしの絆。そのとき殺伐としていた巨人軍のベンチに、いっときの清風が吹き荒れた。がしかし。

「いたたた」

坂本が次第に顔を赤くする。

「どうした勇人」

様態を気にする川相本人が右手に思い切り力を入れて、坂本を苦しめていたのだ。

「いや、なんもないです」

一筋縄、仲良しごっこができない巨人軍はさすが伝統と規律の球団ともいえよう。

98年から99年にかけて、高橋由伸はたしかにCMスターだった

「集合！」

オールスター打線だけあって、ここまで選手個々の自主性に任せっきりだった巨人首脳陣であったが、4回までの拙攻つづきにさすがにしびれを切らしたのか、牧野ヘッドコーチが川上監督の命を受け、ベンチ前で円陣を組んだのだ。

「こら、阿波野ていどの投手を打ち崩せなく、なにが巨人軍75年の歴史から選択された精鋭だ。お前らを信用して、細かい指示を与えなかったら、このザマだ。いいか、西本監督は守備を捨てて、超攻撃的布陣を組んでいる。せっかく敵の大将自ら、大きな穴をこさえているのに、そこを狙わずして、なにが嫌らしい野球だ。好き勝手に打ちだけなら、近鉄の低脳いてまえ野球と同じじゃないか。考えて、野球せいよ。しかもこの回は6番からの下位打線だ。いわば脇役。ベンチの意思を遂行してこそ存在する意義がある。わかったか、穴を執拗につけよ！」

牧野が繰り返す、近鉄の穴といえば、本職の名手、梨田、大石をのぞく、6人の守備陣である。たしかに、6個も穴があれば、頻繁に打球は飛んでいくが、決定的なミスをもたらすにはいたっていない。それどころか、ローズやノリの意外な攻守が光りを見せ、巨人ベンチも苛立ちが募るも分かるだろう。

「さらにだ、この回、一人でもでれば、投手の打順に回る。藤田投手チーフの構想だと、高橋一三は前の回まで、右打者に多くの打席が回る6回からは、右の藤本英雄投手に替える予定だ。円滑にかつリズムよく試合を流すには、どうすればいいかわかってるだろうな。石にかじりついでも、この回、投手の打順に回せよ、以上だ」

牧野の演説が滞りなく終ると、円陣の輪が崩れ、この回の先頭打者、6番高橋由伸、そして次の7番阿部が我先に出てくる。

「由伸さん。脇役ですって、オレたち」

「なめられたもんだな、慎之助」
「そうっすよね。」たしかに今のオレたちは、6番と7番の下位打者ですよ。だからといって脇役じゃないっすよ。主役っすよ。それが脇谷や寺内みたく、しみったれた脇役の仕事ができますかて。なにが守備の穴を狙えだっすよ。そんなもん狙わずともホームラン打てば点が入るってもんすよね」
「慎之助、お前、まるで、いつものペナントじゃクリーンナップの一角を占めてるような口ぶりだけど、お前、だいたい今日と同じ7番あたりの打順じゃないか。普段から下位打線、つまり脇役だろ」
「あ、そんなこというなら、由伸さんだって！　今日の試合は6番なんて、けっこういい打順ですけど。先日の（現実の）オープン戦じゃ8番とか打ってたじゃないですか。それこそ脇谷や寺内や古城さんや、絶不調つうかそれが実力？　のスンちゃんや、原監督に干されてふれくされた仁志さんや、その仁志さんを干すために連れてきたのに、まったく打てない小坂さんとか、なんのために来たのかわからないアルフォンゾとか、オレが休むんだときに、オレの偉大さを際だたせるように、ふざけた打撃を繰り返す加藤健や實松や昔の村田善則さんが座るような打順に堕ちた由伸さんにはいわれたくないな」
「くだらない仲間割れはやめようぜ。ムードメイカーの命を受けた川相さんが、無駄に張り切るから」
「あ」
「まあそんなこんなで仲間割れはやえよう。とにかく僕はスターだ。高橋由伸だ。世間はＯＮ＋松井のクリーンナップをひとまとめにして、夢のとか、史上最強とか騒いでるけど、ＯＮ＋松井、高橋、つまりＯＮ砲＋ＭＴ砲の競演の3～6番のセットだってことを分からせてやる」
「ＭＴ砲？　な、懐かしい……。由伸さんが、なぜかウルフなど言われてた時期に、よく使われてましたよね……」
「ウルフはやめろ。僕の苦い過去のひとつだ。巨人逆指名会見とと

もに、僕の思い出のブラックボックスに鍵かけて厳重に閉まってあるんだから」

「す、すいません。古傷えぐちゃって……。アロハ着て警戒なハワイアンミュージックバックに、狂ったように踊ってたダイハツアトレのCMはタブーと控えてましたが、ウルフまでがアンタッチャブルワードだとは……」

「アトレCMは、逆に僕の全盛期の象徴だから、どんどん語ってもいいぞ」

「はあ……。そ、それじゃあ、広末涼子とアイドルよろしく競演していたチョコレートのCMは……。って打席に行っちゃったよ……」

先発にとっては、5回とは最初に迎える大きな山である。勝利投手の権利がかかる、この回を乗り切ることが、先発投手が乗り切れるかの最後の分岐点である。

「5回、6番、下位打線。のはずが、それでも巨人の打線はタフ。しかも由伸、慎之助かよ、まったく投げるスタミナ切れるその前に、精神力のスタミナが切れちゃうよ」

高橋由伸は、一打席を経験しただけに、開幕の独特な開放感から解き放たれている。繰り返すスイングにも、いかにもケレン味がなく、素振りだけでも抜群のセンスが伺える。

「投手にとって、由伸が厄介なのは、スイング軌道だけじゃない。タイミングの取り方が絶妙なんだ。例のあの足を何度もステップするような独特のタイミングの取り方は、並の打者のように、投手のタイミングに合わせにいくんじゃなく、彼の場合は、踏んでるうちに勝手に合っていくんだ。それこそ練習で会得できるもんじゃない、まさしく天性のものだね……」

由伸は、初球から食らいついていく。打球はバックネット裏に飛んだが、タイミングはどんぴしゃり。阿波野の分析どおり、たやすく料理できる打者ではないようだ。

「でも僕は、由伸を攻略するよ。大雑把な梨田さんらしい、粗い分

析どおり、由伸は天才。どんなボールでも打てる。投手がタイミングを崩しにかっても、タイミングを合わさられる。だからこそどんなボールでも打ちにいく。それがボール球でもだ……」

ネクスト阿部が、思わずくちをひん曲げる。

「由伸さん。あんな口叩いて自分だけ抜け駆けかよ。なにが好き勝手やるだ。上司の命令に従順な子猫ちゃんじゃないか」

阿部がへそをまげるように、由伸の打球はライト方向に飛んでいく。牧野の指示通り、守備の穴。しかも活火山の火口のように大きくあいた穴に飛んでいく。

ライトのマニエルは、落下地点がわからず右往左往。それはまるで野球ゲームの初心者の守備のよう。ふらついた足取りで、前にいったと思えば、後ろに下がる。

ローズのカバーを仰ごうとも、ライト線に飛んだ打球は、マニエル一人でどうにかするしかない。

「あ〜あ。ついにマニエルに難しい打球が飛んでもうた〜　どないしよ佐々木〜」

「西本監督。あわてんでくださいよ。この守備を組んだ時点で、このくらいは織り込み済みでしょ。第監督らしく、どんと構えとってください」

「ゴルフでインチキ繰り返し、解説首になった佐々木にいわれとうないわ」

「それ、今いわんでええやないですか。今は夢の対決の最中です。世知辛い現実はひとまず置いてきましょう」

由伸は、二塁を蹴って三塁に向かっている。落としたら三塁打確実、ヘタしたらランニングホームランの打球だ。

これが巨人の流れなら、マニエルは期待通り、落球するのだが、今の流れはあきらかに近鉄。

マニエルは、何度かお手玉をしつつも、ボールは離さない。イージーなフライキャッチに、マニエルが両手を上げて喜ぶのだから近

鉄ベンチのやんややんやの大喝采。またムードがよくなるのだ。

「あ〜あ。もう由伸さん。阿波野さんのボール球打っちゃってさ、相変わらず淡白な野球だね。ちょっとは大人にならなきゃ」

阿部は、由伸の野球の幼さに慎みを覚えるが、そういう阿部も……。

「いっけね、ミスショット！」

ボール球を強引に打ちにいき、平凡なセカンドゴロに終わるしまつだ。

「もう、先輩方……。最年少のオレによけいなプレッシャーかけんくださいね……」

8番の坂本に、牧野のもうひとつの厳命、這いつくばってでも、塁に出て9番投手に回せがのしかかる。

「ま、楽にいこ……」

重圧にまけじと、あえて肩の力を抜く坂本だが、

「勇人！　力を抜くんだぞ〜　いいか、勇人〜　リキむな、失敗を思い描くなよ。塁に出れず、コーチのお目玉くらう自分だけは思い描いちゃいけない。最新のイメージトレーニングじゃ、そういうの現金だからな〜　失敗の連続のはてに、ライバル川相にレギュラーとって替られるなんて、断じて思っちゃだめだぞ〜」

急造ムードメイカー川相がよけいなことを吹き込んでは、抜いた力も倍返しに戻ってくる。

「なんか、コチコチや。おかしいな、自分こんなに緊張したことないのに、なんでやろか」

川相のかけた呪いを坂本は振り払うことができるのか。

草魂準備開始、草魂準備中

「坂本だ～。あ～僕投げたいっす！」

近鉄ブルペンで田中が一人浮くくらいに興奮している。

「なんや、マー君。そないいきり立って。あ～そうか、坂本いうたら、マー君の幼なじみやったな」

「そうなんすよ。幼なじみやったんですけど、まあ特に仲が良いわけじゃなかったんすよ。僕が大人しいというか普通のグループに対し、アイツはやんちゃなグループでしたからね。溝があったんすよ。それに加えてアイツがエースで僕が捕手。どっちが女子に人気がったかは言わなくてもわかりますでしょ？　いまや球界の大エース、大スターにまで成長した僕と違って、アイツは一介のレギュラー選手です。努力と天性の素質の違いで、ここまで差をつけることに成功しましたけど、子供時代に鬱積した妬み。樋上が一掃されたわけじゃないっす。それを少しでも晴らすために、是が非でも坂本に投げたいんすよ」

「まあその気持ちもいたいほどわかるが、今は5回二死や。5回の山を超えたら、勝利投手の権利が得られるんや。マー君も先発やろ？　阿波野の気持ちがわかるやろ？　坂本退治は阿波野に一旦譲り、マー君は終盤に回ってくる坂本第三打席で思いをぶつければええ。どうせ優男の阿波野や。5回こえたとこでへばるやろから」

「そうはいってられないんすよ！　坂本なんて去年のちょっとした春先の勢いの貯金で、先発の座を勝ち取ってるだけっす。次第にメッキが剥がれている現状、そんなに多くのチャンスはないはずっすよ。この打席で最後かもしれないっすよ。次の打席、劣勢に迎えたらどうせ代打に取ってかわれるでしょうから。あ＝もうほんと投げてーな～」

だが田中の願いはいつまでたってもかないそうもない。なぜなら、西本監督が田中を投げさせたがらないからだ。

「西本監督。この巨人打線はそんじょそこらの打線じゃありません。いくらまだ5回といえど、阿波野の精神的スタミナはすり減り尽きかけています。リリーフの準備を怠らないようにしなければなりません。田中を作らせます。落ちるボールがあり馬力のある田中なら、6回7回の試合の山場を乗り切れます」

久保康生投手コーチの的殺な進言にも、西本はいい顔をしない。

「田中はダメや。あいつは楽天の投手や。近鉄のユニフォームを着たこともない投手に投げさせたない」

頑固一徹の西本は、楽天生え抜きを一人入れろとの球界筋の圧力から田中のベンチ入りを渋々は認めたが、試合に起用するつもりははなからなかったのだ。田中一人、近鉄のユニフォームでなく、楽天のユニフォームを着て出場していることにも、違和感を口にする。

「田中に、近鉄のユニフォーム着たら考えるいうとけ」

近鉄に所属経験もない田中に、近鉄のユニフォームは着させられないとゴネたのは、西本本人であったが、それもすっかり忘れているようだ。

一方の巨人ベンチでは、選手のカードを切り始める中盤を迎え、激しい動きをみせていた。

「おい高田。坂本出たら代打でいくぞと監督からの勅命だ。ネクストで準備しとけ」

「はいわかりました、高田外野守備走塁コーチ」

と高田は、一人芝居で試合出場の喜びを表現する。

それをみて指をくわえるのが土井である。

「いいな高田は〜。僕は兼任じゃなく、専任だから、どう転んでも試合に出れないからな」

「これも実力の差ですよ、土井さん」

「二流選手にはかれたら腹が立つセリフだけど、天才高田じゃ言い返せないわ。三塁と外野の両方で一流で、走塁も長けてるなら、限りある控え野手にこれくらい心強いベンチプレーヤーいないからな

～」

「ははは」

高田は、内川好きの娘を持つ雅子さんをもとりこにする、笑顔をこさえてネクストに、膝をついて座る。六大学の女学生を酔わせた、さすがのマイルドスマイルだが、高田は鬼の浪商出身でもあるのだ。

明治のひとつ後輩の星野仙一をも恐れさせる高田のじりじりとした視線は、坂本の背中をも焦がす。

「なんやろこの背中に感じる熱い高田さんの視線は……。塁に出な、よくもオレの出番をお膳立てせんかったなと殴り殺されるそうになるほどや。牧野ヘッドの檄から、川相さんに高田さんと、どんだけオレをいじめりゃ気がすむんやろか」

だが坂本は、重圧があればあるほど、それを楽しめる選手だ。

「打ったるで～」

しかし、相手が悪かった。今の阿波野は、５回の壁を乗り越えようと全身全霊をかけていたのだ。

胸元を襲ったストレートの威力に思わず坂本は目の色をかえる。

「なんや今の直球は……こんな凄いボール投げる人やったんか」

阿波野は坂本を５回二死無走者で迎えた８番打者とはみていない。最終回の最終打者の気持ちで立ち向かっていたのだ。

「この回で終わってもいい。そのつもりで僕は投げる。巨人オールスター相手に完投勝利とペース配分して無駄だ。一球でも抜いたらつけこんでくるからだ。投手分業というか、持てる戦力をすべて注ぎ込まないと勝てる相手じゃない」

阿波野はこの回でスタミナが尽きていい覚悟で投げてくる。だから、坂本は得意の内角のボールをうまくミートできず、外角のシンカーに、まんまと泳がされる。

「内角狙って、それ来て、捉えられんなら、オレ打てるわけない」

坂本がお手上げをすると、５回は三者凡退で終る。４、５回と連続の完全投球。だが阿波野は自ら限界を口にし、

「６回からは、頼むよマー君、頼むよ、岩隈」

二人のロング救援投手の名前をあげて、思いを託したが、その田中が西本から私的、それも勝手な理由で戦力外、岩隈は先発ダミーに怒り、ロッカーに籠城中であることを知らない。

「へいへい。６回からいくかもしれんから、心と体の準備をしとけ？　分かっとるわ。先発完投こそ投手がモットーのワシが、西本の親父を男にするために、救援なんぞを受け入れたんや。覚悟も準備も万全やで」

阿波野は、鈴木啓示がリリーフの筆頭候補であることを知らない。その鈴木啓示は、大舞台にことごとく弱く、近鉄日本一なしで消滅の大きな要因の一つである。それほど勝負弱い鈴木に阿波野はおとなしくマウンドを譲るだろうか。

「あれ、鈴木さん、なんか緊張してませんか？」

鈴木専用のブルペン捕手を努める恋女房有田は、鈴木の精神状態の少しのヒズミも、見逃しはしない。

「アホいえ、有田。この３００勝の大投手のワシが緊張なぞするかい」

そういいつつ、鈴木啓示の足はぷるぷると震えていた。、

早稲田大学学生桑田

阿波野が三人で片付けため、巨人は戦略面で大きなヒズミをきたすことになる。９番の高橋一三に代打を出して、６回からは、次の投手を送るはずであったが、阿波野の鬼神のような投球に、その算段は、もろくにも崩れた。

高橋一三をもう一回投げさせて、６回裏に代打を出すのがまっとうな戦略変更と思われたが、巨人は予定通り、高橋を降ろし、藤本英雄をあげることにした。

「６回から、藤本さんを投げさすといったんだから、いまさら変更はできんよ」

藤本は巨人の大先輩だけに藤田とはいえ、遠慮があるのか、それとも戦力を多く抱えすぎるゆえの悩みか。とにかく投手をつぎ込まないと、多すぎる好投手を使いきれないのだ。

本来、藤田は継投が不得手。投手を信頼しきり、時に、投げさせすぎまで引っ張るのが、藤田野球の根幹。仰木や、王、野村のように、コロコロと投手を替えまくり、相手の出鼻をくじきにかかる野球は、けして好きではないのだ。

「藤本さん、一回だけの登板になりますが、全力を尽くして投げてきてください」

「おおわかった。いってくるわ」

藤本は史上初の完全試合を達した戦中戦後すぐの大投手である。先発を任される格と実力がある投手であるが、６回裏は藤本からの攻撃。劣勢の展開、投手に代打を送るのは必然。それほどの投手を一回限定で送り出すしかないのだから、藤田の持てる悩みの苦しさも分かることだろう。

「藤本さんの次は桑田だったな、ふう。こういうの慣れてないよ。第一、投手ってのは投げてみないとわかんないんだよ。多く使えば使うほど、調子の悪い投手を上げざるをえなくなる。オレにはわか

らんよ。一打者ごとにしつこく投手を替える野村や仰木の気持ちがな」

藤田は、ブルペン連絡用電話の受話器を耳に当てる。

「中尾ブルペンコーチ。7回からは予定通り桑田で行きます」

「6回裏に逆転してもか？」

「ええ。川上監督は当初の継投の予定を替えるなといっております」

「そうか、桑田に強くいっとくわ。絶対に7回からいくから、そのつもりで気合を入れて投げろよと」

「桑田に気合を入れろですか」

桑田との付き合いが長く恩師と崇められる藤田は、Ｖ９時代の指導者である中尾よりも、よほど桑田の性格を把握している。

「まあ、あまり入れ込まないように伝えてください」

「おう、わかったわ」

中尾は受話器を置くと、威厳たっぷりに桑田を呼びつけた。

「おい、桑田！　ちょっと来い」

桑田はいわれたとおり素直に中尾の前に呼び出されたが、その顔は従順には程遠い。どこか怒りを含んでいる。

「なんや、桑田。その顔は、オレに文句あるのか」

「あの中尾コーチ。お言葉でしょうか、そういう上下関係だけを拠り所に、強く出るのはそろそろお辞めになった方がよろしいんじゃないでしょうか。今はもう２０１０年ですよ、戦中でもＶ９時代でもありません。そんなやり方じゃ、若い選手はついてきませんよ。メジャーを見てください。コーチと選手に上を下もありません。上下でなくフラットな関係を保っています。だからといって、なあなあな関係に陥ることなく、自由にディスカッションする雰囲気もあります。なんでもアメリカのマネをしろというのつもりはありませんが、ええところは、どんどん取り入れていなかいと、日本の野球はいつまでたっても旧態依然。発展しませんよ」

「なんや、コイツ。偉そうに、一選手の分際で」

中尾の一喝にも、桑田はひるむ素振りすら見せない。

「中尾コーチって、前川八郎～中尾～藤田元司～堀内恒夫～桑田真澄の中尾さんですよね？」
「なんやそれ。ああ背番号１８の系譜か。その通りや。ワシは巨人の初代エースやったんやで」
「へえ」
桑田はニヤリと笑う。
「なんや、その含み笑いは」
「エースですか。その巨人の初代エースがどうして、コーチ専任なんですか？」
「コーチ専任は、藤田もやろうが」
「藤田さんはしかたがないですよ。投手として一流、指導者としては超一流。超一流の方に専念なさるだけですから。でも中尾コーチ、あなたは、指導者として一流とは思えませんね？　たしかにＶ９時代に、投手コーチとして貢献なさったようですが、正しい理論を提唱したとか、誰かを育てたことより、悪い噂の方をよく聞きますよ。指導者として二流なら、一流である投手に専念するはずですよ。あ、一流やないですから、投手として登録されなんだかな」
「黙って聞いていれば、いいたいことイイやがって！」
中尾はついに桑田に手をあげる。効きての逆に右の鉄拳が桑田の左頬を襲う。
「殴らんと分からんやろ」
桑田は、反撃することもなく、ただただ笑っている。
「えへへ。こういうのですよ。殴ったからって何も伝わりませんよ。体に傷をおうだけで、心のは何も残りません」
「く、生意気な」
中尾は、鉄拳を受けてなお笑っている桑田の不気味さに、二発目をためらい、右の拳を下ろした。
桑田は、たらりと流した一筋の血を拭うことなく、投球練習をするためマウンドに登る。
「ねへねへ。しかし、中尾コーチ。安心しましたよ。僕を効き手で

ない右で殴らてたんですから。左手を大事にするのは、逆転のベンチ入りを狙ってらっしゃるからでしょう？　いくら制球力に信頼をおけない中尾投手といっても、２０９勝は巨人生え抜きの投手のなかで今でも最多勝利だそうですから、そのプライドにかけてでも、一試合でもマウンドに上がりたいところですよね、ねへねへ……」

「なんとでもいえ、ワシは面倒なやつとはかかわりたくないわ」

「それなら自由にやらさせてもらいます……」

桑田は、ブルペン捕手を努める村田真一をしっしと手で払う仕草をした。

「桑田、なんやオレと組むんがいやいうのか？」

「ええ、村田さんのキャッチングが稚拙すぎて、僕が気分よく投げられまへんのですよ。吉原孝介か村田善則を呼んできてください」

「くそ、なんやと、真澄……」

桑田に今にもくって掛かりそうな村田であったが、村田の同期で、桑田も信頼を寄せる槇原が止めに入ったことで、これ以上の騒動には発展せずには済んだ。

「まあまあ、チュウ（村田の愛称）も真澄も気を沈めて……」

「マキがそういうなら、ここは穏便に済ますが、オレは桑田の球は受けんよ。勝手に他の捕手を呼んでこい」

「ええそれでええですよ。僕の望み通りですから」

だが、村田が引いても、誰も桑田の捕手に名乗り出るものはいなかった。山倉や、広田、藤尾、といった巨人軍の歴代正捕手が、ブルペン捕手として参加していたが、中尾コーチが醸し出す無言の圧力に負けたのだろうか。

「えへへ。山倉さんは、現役時代、僕の球受けてくれましたよね、しかも今やれっきとした早稲田の先輩・後輩です。それでも受けてくれませんか、ねへへ。吉原や村田善がおったらなあ。まあええわ……」

桑田は、なんと捕手不在のまま、投球を開始したのだ。

「ストレート行きます」

桑田の教科書どおりのフォームから繰り出されたストレートは、糸を引くような球筋だ。

このストレートが、捕手のミットにピタリと収まったら、どれだけ気分が晴がましいことだろうか。

だが、受けてもないあま、ストレートはブルペンの壁に当たり、虚しく跳ね返る。

桑田はそれを自分で拾いに行くと、

「カーブ行きます」

息一つ乱すことなく、次の投球モーションに入る。

桑田の奇妙な壁当て投球練習が続くなか、藤本英雄は、老練な投球を見せていた。

４番の土井は、スライダー一本槍で、狙い球を絞っていた。

「スライダーの元祖いわれる藤本さんや、待ってるうちに一球はスライダーくるはずや。それ狙ったる」

生粋のギャンブラーである土井は、一本に的を絞るが、それを見透かしたように、藤本は配球を組み立てる。

「なんやスローカーブも投げるんか」

「おや、シュート？　スライダーかと思うたら、逆に曲がりおった」

「今度こそ、スライダーやろ。昔の投手は、スライダーの他はカーブ、シュートしかないはずや。か～ストレート！　それも１３７キロとたしたスピードのないのを真ん中に投げてきおった！　阿部のリードか

いや阿部がこない味のあるリードするわけがない。藤本さんや……。

完全試合男、監督兼任大エースで巨人を優勝に導いた男、やっぱり手強いわ……」

強打者であり、名打撃コーチであり、名うてのギャンブラーである土井をまんまと引っ掛ける藤本は、さすがに日本初の完全試合男だ。

完全試合の元祖

スライダーの元祖ながらスライダーを隠し、他の球種だけで勝負する老練な投球をみせる藤本英雄に近鉄打線は手をこまねく。

土井が凡打に倒れた後、打線をぶつ切りにする問題児5番ブライアントが、佐々木ヘッド兼打撃コーチから、藤本攻略の助言を受ける。

「ええか、ラルフ。スライダーや、スライダーが得意の投手やから、真ん中より内側にイメージを持てうよ」

「OK、OK。キョースケ」

だが、なにせ何も考えず振るだけのブライアントである。佐々木のアドバイスがどれだけ頭に入ったか怪しく、藤本の特徴さえわかったいないなら、藤本のスライダーをあえて投げない配球は逆効果になるはずだ。裏をかいたつもりのカーブをブライアントが待ってましたとスタンドに放り込む危険性だってあるはずだ。

しかし……。

ブルン、ブルン、ブルン……。虚しくバットが。三度空を切る。

佐々木の助言とか、藤本の裏をかく頭脳的投球とか、なにが引き金となり、ブライアントがまるで見当違いなスイングを三度繰り返したか、わからずじまい。

「オーマイガ」

ブライアントは、惨めな自分に腹が立ったのか、立てた右膝に、バットを乗せて、空振り続きで有り余った力を目一杯に込めて、バットを真っ二つに折ると、その折れた太い方の半分を、近鉄ベンチに向かって、手首のスナップを手裏剣を投げる要領で回転をかけて、飛ばした。飛ばされたバットの破片は、バットケースに当たって、跳ね返り止まった。

誰が傷ついたわけでもないが、ブライアントの怒りに任せた蛮行に、西本が怒りを露にする。

「ムッカー」
「西本監督、落ち着いてください。監督ほどのお人なら、外国人の操縦術くらい熟知してますでしょ？　放っておこばええんです。あれでストレスを解消しておるんですから。溜められるよりは、ましですよ」
「アホ、外国人に行儀なんぞ期待しとらんわ、佐々木。ワシは、打たんから文句をつけとるんや。それも三打席連続で、なんの粘りも工夫もない三振やないか。だから、ワシはブライアントを打線に組み込みたくなかったんや。あんな打撃繰り返してたら、そのうち相手に流れがいくわ」
「裏の守りから交替させますか。もう回って一打席やろうし」
「むむむ……。ここまで耐えて、そらないわ、佐々木。ブラと心中覚悟や。４打席立たせたら、そのうち当たるやろ」
「ほうですか。その言葉忘れんでくださいよ。ブライアントに、もう少しだけのチャンスを与えたのは、監督ですよ。ブライアントが、またミスして、オレのせいにされたら困りますからね、ハハハ」
「あほう、佐々木。ワシはそないモウロクしとらんわ。ボケ老人と一緒にさすな」
「そりゃ失礼しました」
「覚えとっても、ワシはお前のせいにするわ」
「はっは、そうですか。ははは……」

狙い球を絞るタイプの中村紀洋は打席に入る前から、藤本にすっかり翻弄されていた。
「スライダーの元祖。日本初の完全試合男。子供の頃、野球の大百科みたいでよう読んだから、藤本投手のことは、一打席の対戦もないうちに熟知しているはずやったが、なんで、スライダーが一球もきいへんのよ。まあそれも配球やけど、オレんときもスライダー投げてこんとはどうも思えんな」
滅多なことからは、初球から手を出さない中村紀は、一球目の、

甘いカーブを見逃す。
「初球カーブ。やっぱりスライダーやない……」
二球目は、外角低目に決まるストレート。中村紀はこれにも、ぴくりとも動かない。
「追い込まれたが、きっとスライダーは投げてくる。そのきっちりとした根拠はあるで」
三球目、またも外角低目のストレート。追い込まれただけに、手を出したくなるコースであるが、中村紀は、これも悠然と見逃す。
「ストレートを決め球にするわけないやんか。藤本投手が、本番で投げられるのは今日この試合限りかもしらん。しかも次の回は藤本投手からや。代打が出てお役御免になるはずやから、投げてもこのイニング限り。スライダーの元祖が、スライダーを投げずにこの大舞台から去れますか？　オレがフルスイングなしで当てるバッティングだけで、試合を終えるのと一緒や。そんなん耐えれるわけないわ」
４球目、内角のシュート。これも中村紀は見逃す。
「２－２の並行カウント。投手の気持ちからしてフルカウントの前に、決め球のスライダーを投げたい。となれば、伝家の宝刀の抜きどころはここしかない」
５球目、どんぴしゃり、藤本英雄は、この試合、三打者、都合１２球目にして、初めて伝説のスライダーを投げてきた。
真ん中から外角に流れていくその軌道は、スライダーの教科書通りの球道だ。ここまで隠し通したら、打者は反応も出きずに空振りをするはずだが、中村紀の図抜けた読みと、他の球種を一切頭から外した大胆さの前には、最大限の効力を発しない。
美しいスイングアームで、流れていくスライダーをバットの先で捕まえると、打球は速い球足で、一二塁間を抜けていく。スライダーを打つにはこれしかない打撃であるが、一塁ベースを少し回ってから、塁に戻る中村紀は不満げな表情を浮かべる。
「あかん。狙い通りのボールが来たのに、ヒット止まりとは。ここ

は狭い狭い東京ドームや、流し打ちで、ライトに一発打たんとアカンのに……。想像してた以上のキレやったから、バットの先端でしか捕まえきれんかった。スライダーの元祖いうても６０年前の投手、しょせんスライダーを猫も杓子も投げる現代じゃありふれた切れ味でじょと穿った見方をしたのがまずかった。元祖が冠されるのは、ただ日本初やからやないわ。その質も一級品やったな」

ヒットを打ってもさらなる打撃向上を求める中村紀は、ベース上で盛んにスイング軌道を確かめる素振りをする。そんな姿を見せられたら、同じく打撃の求道者の王貞治は黙ってはいられない。

「どうしたノリ。いい打撃だったのに、まだ何か足りなかったか？」

「いやもっと踏み込んでいけば、一発を打てたと思うて」

「そうか。前のシュートが効いたかな。あの残像でもう一歩がなかったのかな。それよりノリ。藤尾元さんの配球はどうかな」

「スライダー隠し作戦は巧妙すぎますよ。まさかあれほどスライダー投手のイメージがあるお人が、僕の打席の決め球でスライダーを隠し通すなんてね」

「石井にスライダー投げてくると思うか？」

「ええ。僕は投げてくると思いますね。だって僕に打たれたままでマウンド降りのもしゃくでしょ？　スライダーの元祖の看板が傷付いたままですよ。僕ならスライダーを投げまくって、石井さんを抑えにかかりますけどね」

「オレもノリと同じ気持ちだ。悔しいまま試合から去れるっていうんだ。もしも、長嶋さんの猛打賞の後に、タコ続きのオレの打席が回ってきたら、意地でもホームラン狙いにいくもんな。そういうプライドの高さないとスラッガーやエースなんてやってらんないよな。土井みたく進塁打で満足の小兵じゃないんだから」

王とノリの予想通り、藤本はすべてのボールをスライダーにして、石井に立ち向かった。スライダー隠して近鉄の裏をかくなんて投球なしでも、藤本は十分に抑えられるのだ。

藤本は、野球の進化に合わせ、スライダーを半ば封印した過去の自分を恥じるかのように、スライダーをストライクゾーンに巧みに出し入れして、強打者石井浩郎を血祭りに上げた。

6回裏、巨人の攻撃。注目は近鉄の継投のタイミングである。鈴木啓示につなぐか、それとも阿波野がいけるところまでいかすか。

近鉄ナインが守備につく。問題児ブライアントも守備要員が送られることもなく左翼の守備についている。そしてマウンドに登った男は、同じ左利きでも野性味たっぷりの骨太の男ではなく、肩で息する優男だった。

阿波野続投。

「なんやと、ワシは6回からやなかったんか」

足止めを食らった鈴木啓示は、話と違うと小野ブルペン担当コーチを睨みつける。

「あの小心者の阿波野にどこまで投げさす気や、まったく……。中盤から終盤にかけてしびれる接戦、ワシのような肝っ玉投手の出番やろが」

仁王立ちから、不満をぶちまける鈴木。だが、その足はプルプルと震えていた。

猛牛対猛牛軍団

「阿波野続投は巨人にとって朗報。三周り目で慣れた目に、精根尽きはてた阿波野が投げ抑えるすべはなし」

２点差で中盤を迎えても。川上はこの余裕。さすが、球界のドンというべきか。

「そのまま、尖兵役として高田を送り込みますか。それとも他の者に代打に行かせ、別の攻撃ルートから、阿波野を攻略としますか。与那嶺あたり、わざと左打者を代打に送り込み、９番から王まで左打者をあえて続けさせて、左対左を並べることで、西本監督に、阿波野の交替を躊躇させる戦略もありますが」

「そうだな、う～ん……」

川上は、ベンチの壁に下げられたホワイトボードに視線をやる。

「捕手　森、山倉。内野手、原、川上、千葉、川相。外野手、柴田、与那嶺、高田。か……。う～ん」

森と山倉ら控え捕手はもとより、打撃に秀でた選手ではない。柴田は代走の切り札であり、川相はバント要員だ。川上自身は代打の切り札中の切り札である。となれば、高田を前の回どおり、そのままいかせるか、左対左に構わず与那嶺を切るか。勝負弱さが引っかかるとはいえ、一発のある原は走者を置いた場面で使いたいが……。

「私にいかせてください。川上監督」

その原が、自らの代打起用を進言する。打撃コーチ補佐を兼任するは、一選手でなく川上に意見できる立場なのである。原の存在を軽んじていた川上も、さすがにＷＢＣ世界一、日本一、アジア一の三冠監督として名将の地位を固めつつある原を無下にはできない。

「心意気は買う。じゃが、原くん。君はもっと走者の詰まった場面で使いたい」

「お言葉ですが。川上監督。それは少し古い野球ですよ。劣勢を切り崩すのは、ちまちまと四球や走者をためるよりも、まず一発ガツ

ーンと相手に大きなダメージを与えることこそ重要。私が指揮をとったＷＢＣの第二回にもそういった場面が多々見られました」

「そうかな、あのＷＢＣは。どちらかというと一発よりもコツコツと積み重ねた攻撃で得点を重ねたように思えたが」

川上は、今の野球にも通じている。ウソやデタラメで論理を固めてもすぐに見破られるのだ。

「ぎく……。いやあ、川上監督はよくテレビをご欄になられていますね……。いやまあその通りなんですが、とにかく私を送り出してください！」

「もしや、原くん。君は、走者の詰まった終盤で代打に送り出されるのが、怖いのかな？」

「ぎく……。いやいやいや、あのその……現役時代あれだけ叩かれて、またマスコミの餌食になるのはごめん……とかいやそういうやましい気持ちはないのですが……」

原の必死の弁明も川上は取り合わず、

「高田行け」

前の回の通り川上は高田を代打に送り込んだ。作戦失敗と原は、川上の座る場所から遠く離れた現役世代が多く陣取るゾーンに、おずおずと戻っていった。

「どうして僕の考えがお見通しなんだ。あれがＶ９監督の研ぎ澄まされた観察眼か。Ｖ３（日本一、いち度、日本シリーズ敗退いち度、ＣＳ敗退いち度）の僕はまだまだだなあ」

だが、川上の采配に腹を据えかねるのは原だけではなかった。

「どうしてワシをいつまでもベンチに置いているんだ、テツのくそ野郎が。ワシをベンチに入れとくて、使わんとは飼い殺しやないか」

反川上の象徴ともいえる千葉茂だ。千葉は、二塁の篠塚と左右の投手で先発を分ける約束で、メンバー入りをしたのだが、左の阿波野先発でも自分が起用されないことに苛立ちを見せている。

先発を読み間違っただ川上と牧野に千葉を陥れようとする悪気は

なかったが、川上に恨みのある千葉はそうとは思ってはいない。
「先頭打者、走者をためたい場面なら、あっさりとした高田やなくて、しぶといワシやろ。ワシなら打てずしても、粘りに粘って四球をもぎ取るのに」
千葉のような反川上の危険因子を、あえてベンチに入れたのはどういう意図があるのだろうか。巨人の戦力の分厚さからすればたとえ実力者の千葉を外しても、いくらでも説明がつくのにもかかわらずだ。試合の戦略立てよりも、組織人事に長けた川上のこと。何かしらの狙いがあっての、千葉ベンチ入りのはずであるが……。

「なんや、阿波野続投か。西本監督も適当な監督やな。そんなコロコロと気が変わる采配しとった選手はようついてこんよ。選手、とくに投手いうのはわがままな人間ばかりや。西本監督は何年監督やってるんや、まったく……」
足止めを食らった鈴木啓示は不満を隠そうとはしない。一見もっともな見解であるが、選手の気持ちを踏みにじりつづけ、チームを崩壊させた鈴木だけに、説得力には欠けている。

阿波野自身もまさかの続投に、マウンド上で目を白黒させている。
「いいですか、僕が投げ続けても。そりゃ投げさせてもらえうるなら、どこまでも行きたいですよ。でもこの試合は、ただの一試合じゃない。総動員で勝ちにいくと、西本監督自身の口からおっしゃられたじゃいですか」
「作戦や。作戦」
「作戦？　どういうことですか、梨田さん」
「代打に誰が出てくるかで、次の投手を決めるんや」
「あ、なるほど。右の代打が出たら、右投手に、左の代打が出たら僕の続投」
「いや、左の代打が出たら、左の投手に交替や。お前以外のな」
「僕以外の左投手……。石本さんですか……」

「いやいや、あのお人だよ……」
「あのお人……あああの人……。あの人だとしたら、梨田さんも僕ともども交替じゃないですか？」
「捕手がもとも二人しか入れてないやろ。それに抑えの４人衆はオレと組ませた方がいいと西本監督のお考えだ……」
「あうんですか、あの人と梨田さんが……」
「合わせなきゃしょうがないだろうよ」
「そうですよね、相性云々言ってられませんよね。僕もあの人は苦手ですが、信じて後を託すしかない」
「お、高田さんだ。代打は高田さんだ。右打者」
「つまり、右投手ですよね。右のある程度長く行ける投手といったらマー君か、岩隈かな……」
「あいにくその二人はな……。まあ、ええやろ、ここで言わんでも、後で分かる」
「何かあったんですか？」

代打高田が告げられると、近鉄ベンチから久保康生投手コーチが阿波野のもとに小走りに向かう。
「ご苦労さん」
お尻を何度か、叩くと、阿波野からボールをむしり取った。それを合図にしたかのように、今度は西本監督がのそのそと主審の岡田の元に向かい、投手の交替を告げた。

「久保コーチ、誰です、いやどっちです？　マー君か岩隈の」
「どっちでもないよ。次の投手は、猫だ」
「猫？　はあ？」
「その猫の名前はニャロメという」
「ニャロメ？　あ、ああ、あの人ですか……」
「まあいわば右のワンポイントだな。ワンポイントに１００勝投手が出てくるんだから、西本監督のいう戦力を集中して打倒巨人、打

倒川上監督の心意気がよく分かるよ」

「近鉄の選手の交代をお知らせします……」

はたして次の投手ニャロメの正体とは……？

愛子様のお母様もお忙しい公務の合間をぬってテレビに釘付けだ！

「柳田さん、頼みましたよ」
「おう、任せておけって」
阿波野は、柳田の到着を待って、マウンドを降りていく。

柳田豊。そのひょうひょうとした風貌から、赤塚不二夫の人気漫画『もーれつア太郎』の猫のキャラクターになぞらえて、ニャロメと親しまれる変則のサイドスロー投手である。
阿波野、野茂、鈴木啓示、岩隈の豪華絢爛４本柱や、赤堀、大塚、吉井、石本の抑え４人衆と比べて、その知名度はあまり高くないことは、スタンドからの反応でも見て取れる。
「やなぎた？　誰だよ」「知らね」「岩隈出せよ、マー君出せよ」
「名鑑みると、通算防御率４点台だってよ、つかえねーよ」「恩師西本監督を男にするだて、なんだコネかよ」
若いファン中心に酷いいわれようであるが、西本監督の肝入りでベンチ入りを果たした柳田。打倒巨人に燃える西本が使えないコマをベンチに入れるはずはないのであるが。

「え、オレも？」
サードにいた石井は、思わず自分を指差す。まさかのダブルスイッチで、阿波野もろとも、石井も交替なのだ。
ダブルスイッチとは、メジャーリーグ、とくにＤＨのないナリーグでよく使われる名称。投手交替と同時に、回りが遅い打順に投手を入れ、替りに、投手のいた打順に野手を入れる。交替させた投手に、長いイニングを任せる戦略だ。ナリーグと同じくＤＨのないセ・リーグで日常的に見られる作戦であるが、この名称が定着しているとは言い辛い。クローザーや、ツーシームなどのあちらの言葉が簡単に輸入。定着しているのに、比べて、ダブルスイッチが定着しな

いのは、日本のメジャー中継がイチロー松井松坂らがいるアリーグに集中しているからだろうか。

「無念、残念、守備に打撃にいいところがなかったが、作戦上仕方ないなあ……、7番の私の打順で表の攻撃終わったんだから……」

優等生らしく石井は愚痴を押し殺し、ベンチに消えていく。ただ……。

「おっと、選挙運動忘れてた。私は、このたび自民党の推薦を受け、参議院、秋田選挙地区に立候補しました石井浩郎です。どうか、このわたくしめに清き一票をお願いいたします……。これでよしと……」

夏に向けての選挙運動を忘れてはいなかった。

ダブルスイッチで打撃のいい石井を降ろすだけに考えられる野手交替は、ただひとつ。逃げ切り用に守備のいい選手を送ることだ。石井、ノリの三遊間は悩みのタネのひとつ。ノリを本職のサードに回し、遊撃に守備名人を送り込めば、内野はぐっと締りを見せるだろう……。が、しかし、近鉄ベンチの取った選手起用は、どこまでもいてまえの精神に基づいていた。

「近鉄の選手の交代をお知らせいたします。サードの石井に替りピッチャーの柳田が入り、ピッチャーの阿波野に替り村上が入りショート。ショートの中村紀がサードに入ります。6番サード中村紀。7番ピッチャー柳田。9番ショート村上。以上に替ります」

なんと石井の替りにベンチから出てきたのは、打撃の人村上隆行であった。

村上といえば、大型遊撃手と騒がれながら、あまりにも雑な守備でわずか三年で遊撃手失格、外野転向を言い渡された選手。お世辞でも、守備要員として出てくる選手ではない。たとえ、強肩と俊足にそれなりの定評があってもだ。

「なんで、村上のお義兄ちゃんが出てくるの？」
「知らんわ、オレが聞きたいところだ、義弟よ」
よく知られたとおり、中村紀の妻は、村上の実の妹。二人は、いわば義兄弟で三遊間コンビを組むことになるのだが。
「義兄ちゃんの守備はよう信用できんから、三遊間の深い当たりは僕に全部任せてくださいよ」
「アホ、お前の足じゃ、追いつけるか」
「義兄ちゃん、追いついても、そこから悪送球とかすっるやないですか」
「そりゃま、そうなんだよ。送球が不安定だから、仰木さんの遊撃失格を言い渡されたんだよ。だからなんで、遊撃の守備固めがオレなんだろうな」
村上をあえて守備要員に送った西本の意図とは？
「むきい。佐々木、どうしてお前、守備のええ遊撃手いれておかなんだ」
「あの、私は、監督に石渡か真喜志か阿部真宏か守備の堅いの入れるように進言しましたが、監督が打撃優先、打てないやつは控えでもいらんとおっしゃったやないですか」
「そんなんワシゆうたか？」
「ゆいました」
「証拠は？」
「ありますよ、ほら、この通り」
佐々木は、ズボンのポケットから、一枚の紙を取り出し、広げてみせた。それは西本が、村上ベンチ入りを決めたとの誓約書だった。西本のサインの上に、指の指紋を押し付けた跡があるのだから、西本は言い逃れできない。
「そうか、それなら仕方がないわな。過去のワシが決めたんやから……」
だが、自分で決めたからと引き下がる西本でもない。
「むきい。過去のワシは何を血迷ったんや、むきい、むきい」

と腹立は収まることはなかった。

代打起用された高田は、村上の遊撃起用に、ほくそ笑まずにはいられない。

「村上といえば、オレのハムの監督時代、よう世話になったな。なんでもないゴロを弾くは、捕ったと思うと、とんでもない送球するわ。たしか30個くらい失策したんじゃなかったかな……。三遊間に引っ張れば、なにが起きるか。オレの打撃スタイルには、うってつけの状況だな」

高田の打撃スタイルとはいかなるものだろう。その辺りは、高田と同年代の鈴木啓示の見解を仰ごう。鈴木啓示は足止めを食ったまま、ブルペンで仁王立ちのままだ。高田代打に過剰反応する田中を諫めている。

「すげえー　高田さんが打席に立った！　なんか、不思議っす。僕が駒大苫小牧時代、ハムのGMとしてよく見に来てた人のプレーする姿をみるって」

「マー君は、ワシの現役時代も知らんのだから、高田さんのプレーを知るわけないな。高田さんいうのは、ある意味楽な打者やったんやで」

「え、V9のレギュラーでしたんでしょ？　しかも1，2番を任されてたと聞いてます。いかにもしぶとそうな野球巧者やないんですか？」

「まあ、巧者いうのも間違いはないんや。足も速いし、守備も絶品、ベンチのサインプレーに十分応える野球頭脳も持ち合わせているんやが、肝心の打撃がやな。頑固一徹で融通が効かないんや」

「へえ。そりゃ意外っすね……。右打ちでもなんでもごされと思ったましたが……」

「右打ちなど滅相もないわ。高田さんの打球は、ファウルソーンにしか飛ばないんや、極端な言い方をするとな」

「ファウルソーンしか？　どういう意味っすか？」

「見とればわかるよ、マー君。その名も高田ファウルの意味がな……
「高田ファウルっすか？」

高田ファウル対ニャロメ

柳田登板、高田代打の二人の対決は渋さはあるが、いかにも地味。もともと近鉄は人気なしと中継に乗り気でなかった日本テレビは、さぞ青ざめていることだろう。

ＯＮ松井対野茂、あるいは岩隈、田中でこそ、視聴率が取れる唯一の手段と、この対決を盛り上げる煽りのＶＴＲを作ったのも水の泡。まさかの阿波野の先発で、巨人が劣勢であるなら視聴率が取れる材料がないからだ。

原や川上の代打ならまだしも、Ｖ９のスターといえど、今やヤクルトの地味な監督に成り果てた高田では、移り気な視聴者をつなぎとめるものはどこにもない。

内川が大好きで、最近学校を休みがちな愛子さんと、その愛子さんの母親であり、これまたお仕事をサボリがちな、中学時代は多摩川に追っかけをしてたほどの高田繁大好きな雅子さんしか、興味をもつ視聴者はいないと断言してもいい。

日テレ関係者は、この対決が終りとっとと終り、ＯＮの打順が回ることを祈るが、あれだけ世話になった野球をあっさり見切る日本テレビには神様は微笑まない。

高田ファウル。

引っ張りしかできない不器用な高田の打球は、ことごとく三塁線、しかもファウルゾーンにしか飛ばないことを揶揄して、いつしかつけられた俗称。

ファウルに名前を冠されるのも、世界広しでも、この高田だけであろう。

その異名通り、高田の打球はいくら打っても三塁線をはるか切れるファウルしか飛ばない。柳田の一度背中を見せてからくるりと回転させて、横からひょいと投げる得意なフォームからは、曲がりくねるクセ球しか投げてこないことも相まって、延々とファウルが繰

り返される。
「高田さん、ええ加減にしてくださいよ」
「梨田、黙っとれ。オレも三遊間破りたいんやが、そこに飛ばないんだ」
「多彩な変化球を投げてきそうな変則サイドに見せかけて、カーブとまっすぐしかない不器用な柳田さんに、これまたいかにも業師のようで、流し打ちひとつできず延々と意味もなくファウルを打ち続ける高田さんか、なんか似ていますね」
「うるさい、梨田。誰がハムの監督に推薦させたと思うたんだ。当時のＧＭだったオレだろ」
「それはそうかもしれませんが、推薦しておいて、自分はさっさとヤクルトの監督になったじゃないですか。おかげで半端なチームの指揮を任されるハメに……」
「藤井をあげたじゃないか」
「貴重な中継ぎの押本と有望株の慶三を取られましたが。ヤクルトのお荷物を古巣に押し付けて、秘蔵っ子を持ってただけやないですか」
「それくらい全権監督の特権よ。梨田よ悔しいなら、オレのようなすべてを掌握できる監督になってみろ。いつまでも、上の言いなりのお人好し監督じゃなくてな」
「目指してみますよ……」
永遠と続くかに思われた高田のファウルも、いつしか終焉を迎える。
それは実にあっさりとしたものであった。外に流れていくボールからボールになるカーブを思わず振ってしまった高田の打球は弱々しく三遊間に飛んでいく。
「しまった、ボール球打った」
と高田は失敗を口にするが、打球は、忘れされた狙い通りに飛んでいたのだ。
遊撃の村上の守備には不安が一杯。義弟の中村紀を制すと、勢い

よく前進してくのだが、その足取りは、バウンドに合わせられず、グラブの出し方もぎこちない。

なんとか、グラブに入れたはいいが、持ちかえるときに、何度かお手玉。右打者とはいえ高田は俊足で、Ｖ９野球の象徴らしく、手を抜くことなく一塁まで全力疾走だ。

少しのミスも出塁の命取りにつながるのだが、村上は、ミスにミスを重ねる。

肝心の送球が高く浮き上がったのだ。上手い一塁手なら、裁ききれる送球だが、一塁は本職の一塁手でない土井だ。伸び上がって、この送球を取ると、ベースから離れしまう。その間に高田の快脚が、一塁を駆け抜ける。

記録はエラー。

疑問の守備要員村上の不安が、早速、現実のものとなった。

「むきい。むきい」

「西本監督ですよ、村上を選んだのは！」

佐々木は誓約書を西本の前にかざすが、西本はそれを奪い取るとビリビリにやぶく。

「ええい、スズや、スズ！　この境地は近鉄の大エースの鈴木にしか抑えられんわ！」

ついに西本は、鈴木啓示のをコールした。

「バファローズの選手の交代をお伝えします。柳田に替りまして、ピッチャー鈴木。９番ピッチャー鈴木。背番号１」

監督としての鈴木は、近鉄ファンの信頼感がまるでないが、投手鈴木となれば、別。投手鈴木のコールでオールドファン中心に、大歓声が巻き起こる。

「ソーコン！　ソーコン！　ソーコン！」

の大合唱だ。鈴木に対して、悪い感情しか持っていない若いファンも、このムードにすっかりと感化。鈴木啓示を、巨人打線を一網打尽にする絶対的な救世主として迎え入れる。

まさかの大声援に気分をよくする鈴木は、胸をはってブルペンの扉を開けた。

「いってくるで、まあみとってな、三者三振で片付けてくるから」

鈴木は口では強気であるが、相変わらず、その足はぷるぷると震えていた。

アリナシコンビ

「金村さん、鈴木先輩が登りましたね」
「大村、ふん、オモロないわ。クサなんぞ、巨人打線の餌食になれ……いいたいところやが。ここはワシも応援するわ、しゃーない。打倒巨人で、自分勝手で、お互い嫌い合うワシら近鉄軍団やが、ここはまとまらないとしゃーない……」
※鈴木啓示嫌いが有名な金村であったが、現役時代、自分と守備が重なっていた石井浩郎やトレーバー、他に、西日本と東日本、大卒、高卒の文化の違いか、大石大二郎とも仲が悪かった。（石井とはお互い近鉄退団後修復）
「鈴木先輩～　育英魂見せてくださいよ～」
大村のエールに負けじと、金村も鈴木にエールを贈ろうとしたが、
「よし、ワシもエールを送らせてもらうわ……。ところで、大村、クサのことなんて呼んで、声援送ればええんや」
「そんなん、オレ知りませんよ」
「クサ、クサ、あのおっさんのこと言い過ぎて、なんと呼んでたか、すっかり忘れてもうたわ」

「ワシに任せんかい」
胸を張りマウンドに登る鈴木啓示だが、表向きの言葉の強さと違い、内心はバクバクと心が揺れ動いている。
先発勝利数歴代一位の鈴木啓示は、救援に慣れていないのだ。分業制が定着していなかった若い頃は、何度もリリーフのマウンドを踏んだ鈴木啓示であるが、投手として完成された以降はもっぱら先発専任。
１９８０年、二度目の広島との日本シリーズの雌雄を分ける第７戦、リードを維持したままマウンドに立った鈴木啓示は、慣れぬ救援に戸惑ったのか、それとも近鉄初日本一、西本監督初の日本一の

重圧に腕が振り切れなかったが、広島に逆転を許し、近鉄、西本ともども悲願を未来永劫消し飛ばした過去があるのだ。

「ワシは大投手。ワシは最後の３００勝投手。ワシが救援に回ったのは、阿波野以下やなからやない、大試合は、中盤を占める投手こそが、大事。だからこそワシをここに配置したんや。西本の親父の期待に応えるために、ワシはやる」

鈴木は、本来の精神状態ではないと自分でわかるのか、ブツブツと暗示をかけて、なんとか緊張をとこうとしている。

「よっしゃ。心が晴々としてきたで。さあ～やりますか。ワシの監督時代しかよう知らん若いファンに、ワシの凄さをわからせてやるかい」

屈伸運動を繰り返す鈴木。

「よっしゃ、有田。お前に、サインは任せた。このワシを気分良く投げさせるために。懸命にリードせい」

「なにいうてるんですか、鈴木さん。僕は梨田ですよ」

「なんやと！　ほんまにお前梨田やないか。いったい、どういうこっちゃ。ワシは有田としか組まんのは、西本の親父もよう分かってることやろ」

「まあまあ、これは鈴木さん先発の試合やないんですよ。鈴木さん先発なら、捕手も有田さんでいけばいいでしょうが、今、有田さんに交替したら、もう捕手はいないんですよ」

「ええやろ、そんなん気にするこったない。ワシと有田で試合の最後までいけばええんやから」

「鈴木さんは中継ぎですよ。うちの攻撃で投手に打順回ったら、鈴木さんは代打で自動的に交替です。エースに頼るんやなくて。ある限りの戦力を投入して巨人を倒す、そういう方針です。」

「うむむうむ」

「鈴木さん。何も僕らがコンビ組むのは、初めてのことやないじゃないですか。現役時代もなんどなく組んだし、鈴木監督時代は、有田さんを参謀にするではなく、僕を作戦コーチに選んでくれたやな

いですか」
「あほう。有田やなく、お前を選んだのは、ワシやなく、会社の方針や。本社筋からしたら、有田よりも、お前を幹部候補生として評価してたんやろ。それに有田のやつは、ワシの監督失敗を見越して、いくら阪神から呼んでも、こんかったんや」
　９３年当時の有田は阪神のバッテリコーチ。鈴木政権は、有田の参謀を中心にして組閣すると思われていただけに、有田が組閣から漏れたのは予想外の出来事だった。代わりに、よりによってライバルの梨田が内閣入りしたのだから、なにがあったのかと周囲に勘ぐられるのも無理がないことだった。
「もうええ。梨田は取るだけや。サインは有田が出すように、ワシがいうとく」
「無理ですよ、鈴木さん。有田さんに僕いわれましたから。ナシ、鈴木さんに、なにいわれても、お前がリードせいと。試合の流れを知った僕のリードの方が、途中から試合に入る有田さんよりも、勝つ見込みあるいうことでしょう」
「むむむ。ワシが、お前のリードで投げるのか？　むむむ、気い使いで、投手上位のお前のリードは、ワシにはよう合わんのや。有田のように、ぐいぐいと引っ張てくれな、ワシよう投げれんのよ」
「弱気ですな」
「なんやと」
「僕も、コーチ、監督、解説者として苦労を重ねましたから、成長しましたよ。現役の頃のように、鈴木さんに遠慮したリードなんてしませんよ」
「ほんまか？　しゃーない、今は、お前が恋女房や。ナシを信じるんしかないわな」
　ようやく捕手梨田に、納得した鈴木は、マウンド上にそびえ立つ。
「打者は誰やった？　クロマティか。ワシの相手に相応なしや」
　積極打法のクロマティと無四球試合の記録を持つ鈴木、だけに逃げることない、真っ向勝負が繰り広げられるはずであったが、

「なんや、ナシ。ボール球で入れやと?」

「また、ボール球、要求してきた。しゃーない、ワシは梨田を信じてるんや」

「あ~クソ!　ノーツー」、」いや、２０１０年のルール適用変更から、ツーボールナッシングいうんか?　なんかあちらに迎合しとるようでワシは好かんが……とにかくボール先行してしもうたやないかい。なにが、成長した梨田は、強気で、ワシをぐいぐい引っ張るや。弱気な慎重派梨田のままやないか。あ~有田、お前がいないとワシはやっぱりダメや~　今からでも遅くはない、梨田と交替してくれや~」

鈴木は、思わず手にしていたロージンバッグを腹立ちを紛らせるかのように、投げ捨てた。

カツカレー

「有田呼んでこい」

梨田の弱気なリードに苛立ちを隠せない鈴木。だが、梨田にもボール球を続ける明確な意図はあるようだ。

「確かに、無四球完投の記録保持者だけに、制球力は一流、構えたところに、ビシビシとボールがくるけど、それが逆にクセモノ。同時に被本塁打記録保持者でもあるように、ボールが素直すぎるため、ストライクを続けると、一発を食らう可能性が高い。しかも打者はクロマティ。基本的にアベレージヒッターやけど、東京ドームサイズの球場なら、十分に一発を打てる力のある打者。さらに超がつく積極打法の打者とくる。積極的に、ストライクを取る投手と、積極打法の打者がぶつかったら、表が出たら、早くアウトカウントを増やすことができるが、逆に裏が出た時、すなわち同点や……。少しでも危険性があるのなら、ボールを続けて、クロマティの打ち気を少しでもそらしてから、勝負するのが得策。だから、あえて二球のボールを混ぜた」

梨田は、鈴木の気持ちを沈ませるように、ボールを優しくこね間を取ってから、返球をする。

「なにも、オレは鈴木さんを、信用してないわけやない。ボールを二つ続けても、カウントを持ち直せるだけの技量と度胸があると値踏みしたから、ボール球を二球見せるという特異なリードができるんや。さあ、こい、鈴木さん。渾身のストレートを外角低め投げてくれ。焦らされたクロマティは、思わず手を出し、ゴロの凡打を築くはずだ」

「？　ここでようやく勝負か。梨田の弱気さに呆れ返ったワシやが、勝負に転じるなら、渾身のボールを投じるまでや」

意気込み新たに、鈴木は3球目を投じるが、梨田の厚い信頼も、鈴木の闘志もボールには乗り移らない。リリースの瞬間から、すで

にボールゾーンに外れた球道は、なんでも打ちますのクロマティさえ手を出さない。
　カウント、スリーボールナッシング。鈴木は、マウンドに上がって、たった三球で、崖っぷちに追い込まれた。
「くう～。梨田や梨田のちんたらとしたリードのせいや。このワシは現役時代、一球遊び球を挟んだことあっても、二球続けたことは一切ない（自己申告）。梨田のあほうが、慣れぬことをさせたから、感覚が狂ったまま、三球目を投げなしゃーなくなったんや。それがみてみい、このざまや。かあ～。ボール３つでどないするつもりや」
　二球目までは計算通りの梨田であったが、鈴木を信用しての三球目の大ボールは、まったくの予想外の出来事。
「どないしましょ……。困ったな。ストライク取りにいって、見逃してくれる打者やないし、かといってこの状態なら、きわどいとこ投げさせたら、ボールになる可能性大。そうや、有田さんになってみればええんや。こういうとき、鈴木さんの恋女房の有田さんなら、どうやってピンチを脱却するか。う～ん、やっぱ強気だろうなあ。鈴木さんは大投手。そう信じて、リードするしかないな」
　梨田は、ミットを何度か叩き、
「おい、啓示！」
「なんや、梨田、急に呼び捨てにして」
「上下関係など、今いってる場合やないやろ。覚悟決めて投げんかい。ピンチにばたついて、腕が縮こまってるから、いつもの制球力ないんや」
「なにい、偉そうに、お前にいわれでもわかっとるわ」
　格下の梨田の無礼に切れる鈴木であるが、怒りを梨田にぶつけたため、上がってから震えっぱなしだった足が、いつのまにか止まっている。
「なるほど、この人はこうやって、操縦してくんか。若い頃のオレは遠慮があって、鈴木さんを立てることしな考えてなかったが、有田さんみたく、頭ごなしに引っ張って行けば、反発しつつついてく

るんや……いけるで、この勝負。スリーボールからでも、このクロマティなる厄介な打者を打ち取れるで」

梨田の構えはど真ん中。

「ぬぬぬ……おもろいわ。お前のいうとおり投げたるわ」

怒りが原動力の鈴木であるが、そのフォームは、左腕投手の教科書の巻頭を飾らせたいほど、基本通り、美しく流れていく。

真ん中高目に浮いてくる速球、四球狙いなど一切頭のないクロマティは、当然、手を出してくる。

しかし、心の震えが消えた鈴木のまっすぐは、手元で伸びていく。クロマティのバットの上っ面を叩き、ボールはそのまま高く打ち上がる。平凡なキャッチャーフライだ。

規定打席に到達して、史上唯一の４割打者である安打製造機クロマティのミートを狂わすとは、さすが３００勝投手鈴木だ。

マスクを飛ばした梨田が、がっちりとボールを取る。

「よっしゃ、ワンナウト、ワンナウト」

指を一本つきたて、味方の士気を上げる。

「ふん。ワシの実力からして軽い、軽い」

すっかりといつもの調子が戻った鈴木。やはり梨田式慎重操縦術よりも、有田式強気操縦術のほうが、鈴木のようなタイプには、合っているのか。

「次は、シノか。この調子で、強気にいって、また併殺や。ＯＮの前に走者なしでこの試合いこう……」

ところが、ネクストサークルには、その篠塚はいない。バットを持った川相が屈伸運動をしている。

「代打？　川相、いや。川相はダミーや。一死取られてバント屋川相出しても意味ない。普通の試合なら、左投手やからといって、篠塚ほどの打者を引っ込めたら、こっちはぼろ儲けなんやが、この試合は違う。控えにも、とんでもないのがうじゃうじゃいるんや。さてと、川上監督は、どのとんでもないのを切ってくる……？」

川相がベンチに、引込み、替りに出てきたのは、
「千葉さん……？　千葉茂？　猛牛や、バファローや。バファローズの由来たるお人やないか……」
反川上の急先鋒たる猛牛・千葉茂が、ゆっくりと打席に向かう。
「どーも、先輩」
「おう、梨田か。ええ名前やろバファローズいうのは。知ってるか、ワシが監督するからいうて、ワシの愛称の猛牛を英訳してチーム名にしたんやぞ」
「もちろん、知ってますよ。常識です」
「ほんまか？　ほんまに知ってるのか？　そうか、ならええわ。なら、ワシが来る前のチーム名知っとるか？」
「パールズでしょ？」
「そうや、よう知っとるな……。それで、パールズからなんて、チーム名にかわったか、知っとるか？　ヒントはワシの愛称や」
「さっきもいいましたよ……」
「なんやその態度は、それが大先輩に対する態度か！　あんなしょーもない球団を指揮してやったワシに恩はないんか……」
一人でとぼけて、一人で怒る千葉を梨田は、
「背番号も同じ3。まったく、誰かがいってたとおりだよ、千葉茂は、ある意味、長嶋茂雄ってね……。確かに、天然ぶりがよく似ている。こっちは西日本らしく、クセのある天然だけどね」
千葉を長嶋と同一視する。
「これで、実力までも長嶋さんなら、こっちは困り者だけど……。監督千葉茂の酷さは、当時を知る先輩方によく聞いたけど、選手としてはどうだろう……」
野球センスは、ユニフォームの着こなしに出るという格言がある。長嶋を見ればそれはよく分かる。コーディネーターが付いてるがごとく、ぱりっとした着こなしを、一流選手はするのだが、ひるがえってこの千葉は、シャツが少し出てるは、右と左のストッキングの長さは違うは、どうみても着こなしのセンスはない。

「格言通りでたのむよ……」
「さあこい、鈴木啓示。猛牛のワシが、草魂など食い尽くしたる」

クロマティバンド

「どうしたクロウ。僕に何かいいたいことあるのかい？」
凡打に倒れたクロマティ。いつものとおり悪びれることなくベンチにふんぞり返ると思いきや、原打撃コーチ補佐兼内野手の前でもじもじとなにか言いたげ。
「タツ！　イヤ、ハラサン！　ハラサン、ユーコーチね？　クロウ、選手ね？　ＯＫ？」
「ＯＫ、ＯＫ、よくわかってるじゃないか。僕のほうが、多少、君より偉い立場にあるんだぞ。おっと、外国人は。コーチと選手がフラットの関係だってね、ソーリー、ソーリー。ところで、なんだい、クロウ。かしこまっちゃって」
「ボク、３－１ね。シカモ、イマノダセキ、スリーボールから、キャッチャーフライね。カワカミのボス、ボクをミキッテナイカ？」
「なんだい、一打席目で、怠慢走塁やらかしても、ふんぞり返ってた君と同一人物とは思えないね。うん？　そうか、わかったぞ。高田さんの出場で、君に火がついたと。なるほど、そうか。高田さんがそのまま外野守備につき、次の投手、まあ桑田なんだが、その桑田が、一番の君のところに入るのを危惧してるのかな？　いわゆるダブルスイッチで結果の出せなかった君が交替されると」
「ＯＨ～　サスガ、ハラサンネ～。ワールドチャンピオンのマネージャーね」
「急に僕を褒めたからって、いまさら遅いよ。クロウ、君は、僕を暴露本でさんざんコケにしてくれたじゃないか。僕を鏡ばかりみるナルシストのお坊ちゃまだって」
「ノー、あれクロウさんがカイタンジャナイネ～　キョウドウ出筆ね。ホワイディング、ロバート・ホワイティングね～。ハラサンシッテルネ、ホワイティング、ニホンジンのワルグチ、ダイスキネー」
※ロバート・ホワイティング

アメリカ人日本野球ライターの第一人者。著書に、菊とバットなどがある。

クロマティと共同で出筆した『さらば、サムライ野球』は有名。

「リアリー？　まあ、僕もそう根に持つタイプじゃないから。あれだけ失礼な仁志だって、僕は許したんだ。クロウさん、僕はもう気にしてないから。よし、川上監督にひとつ進言してみよう」

「ＯＨ～　ハラサン、サンキュー、アリガトウね～」

「でも、条件がある。ひとつ、初回の走塁のような怠慢プレーはしないこと。それに、もう一度、ムードメーカーになってくれるかな？」

「ムードメーカー？」

「バンザーイ、バンザーイだよ。センターの守備につく前に、懐かしのあのパフォーマンスをすれば、どうも盛り上がりに欠ける場内の雰囲気を一変できる。今、グラウンドに散らばってるメンバーは、ザ・ジャイアンツらしい清廉潔白な面々だけど、いかにもアクがない。道化師を演じれるのは、クロウ、君しかいないんだ。僕は、清原、元木、ローズ、後藤、小田、江藤らを、腐ったミカンと称して、巨人軍にあってはならない人材と就任早々一掃させたが、クロウ、君のような腐ったミカンが一人はいないと、チームは逆にナアナアになると今日しみじみ分かったよ」

「ＯＫ！　ＯＫ！」

「よし、男と男の約束だぞ」

原は、コーチ権限で、川上にクロマティの気持ちを伝えにく。

「川上監督」

「どうした、原打撃補佐」

「クロウのことなんですがね」

「クロウ？　ああ、楽をしてもクロウ、クロウか」

「お～　川上監督、クロウの応援歌を歌えるとは、いやはや恐れ入りましたよ～　ははは。それよりも本題です。クロウを使い続けていいただきませんか？」

「無理じゃな。ノースリーから打ってフライ打つバカがいるか」
「そこをなんとか。ここは私の顔をたてて。アイツは、トータルでやる男です。それが一流の大リーガーってもんですよ」
「君のコーチ生命をかけるかね？」
「へ？」
「もし君の進言で起用を伸ばしたクロマティが、また不抜けたプレーを繰り返したら、その時、君は覚悟できているかということだ」
「えっと……そのあの」
キャンプ中のミスで（内海ら原チルドレンの過大評価）総合コーチから、打撃補佐に二段階降格の悪夢を味わった原にしたら、これ以上の降格は避けたいところだが、クロマティにあまで見栄を切った手前、
「もちろんです！　覚悟がなくて、どうして人の上に立てますか」
「よし、わかった。原打撃補佐の進言どおりクロマティをオーダーに残すことにしよう」
原の進退をかけた進言の元になったクロマティといえば、試合そこのけで、裏でこそこそ。
「原はかわらずお人好しだ。監督経験して人間に深みがでたかと思ったら、前と同じあまちゃんだ」
と、例の共同執筆の一人であるロバート・ホワイティングに早速、情報提供。
歯ブラシ輸入会社の失敗や、離婚の慰謝料などで、金欠が伝えられるクロマティ。どうやら、新たな暴露本出版で、印税生活の夢再びを描いているようだ。
「題名は？　『（お金がないから）またきたよ、サムライ野球　～ＪＷＢＣの内幕～』　ＯＫ、ＯＫ。儲かれば、なんでもＯＫ」
千葉攻略に頭を悩ませる梨田。
「どういう選手かはイメージはできる。四球の数がめちゃく多く、右打ちの名人やったな～。かといっても、それは６０年前の野球の

レベルのこと。その時代に、今のような多彩な変化球はありましたか？　どんな選球眼のいい打者でも、思わず手を出すようなフォークボールがありましたか？　右打ちさせまいと、執拗な攻めやシフトがありましたか？　そういう話や。何も先人をナメてるわけやない。正しく、分析すりゃそうなるちゅうこっちゃ……。よっしゃ、右に打つなら、右に打ってくださいよ、近鉄の大先輩。そして、巨人野球を半端に持ち込み近鉄を十年送らせた大戦犯さん……」

梨田の読みどおり、千葉は鈴木の厳しい攻めに得意の右打ちがうまく決まらない。一塁に高田を置いて、一塁手の土井がピタリとベースにつき広がる一二塁間めがけて、打球を飛ばしたいのに、鈴木がびゅんびゅんと内のきわどいところに投げてくるものだから、バットが出てこないのだ。

なんとか当てることができても、鈴木の速球に完全に力負け。一塁側スタンドに弱々しいファウルを飛ばすのがやっとなのだから、慎重派の梨田も内角攻めこそ、絶対的に安心できるコースと、鈴木に続けてのサインを出す。

自分の速球が信頼されると気分のよくした鈴木のボールも、投げる度に、スピードとキレが増していく。追い込んで、打たれるわけのない渾身の速球が、内角ゾーンぎりぎりに飛び込んでくる。

「よしもらった」

と梨田が口にするのも無理はない。千葉はむざむざと右打ちという必殺技を完全に封じこまれて、とぼとぼとベンチに帰っていく……はずであったが、千葉の打法。それまでの遠回りに出ていたバットが、内側からスムーズに出てくる。いわゆるヤンキースのジーターが見えるような、インサイドアウトの内角球を右打ちするお手本のような打法を、追い込んだここにきて見せてくるのだ。

「なんやと、あのコースを……」

打球は見事、一二塁間を破っていく。ライトは拙守のマニエル、一塁走者は、Ｖ９野球の体現者高田。サードを陥れいれなければウソになる。

高田が、さっそうと三塁ベースに滑り込むと、一死、一三塁。ONを前にして、とんでもないお膳立てができあがる。

「しかし、なんで、あのコースが打たれるんや。いやあの打ち方なら打たれても、おかしくはない、問題はあの打ち方を追い込まれてから初めてすることや。最初からしてれば、もっと早く打てたものの」

梨田の疑問ももっともだ。だが、それも千葉茂の一流のショーマンシップ。

千葉は一塁ベース上で、その種明かしをする。

「おい、土井、ワシが見初めた土井よ」

「なんですか……」

一塁の土井は、千葉が近鉄監督最後の年に入団。一見、土井の才能に目をかけた恩人のようであるが。

「千葉さん、オレ、あんたのこと嫌いですわ。高校中退のオレの才能をようみんで、整理対象にしたでしょ。千葉さん首になって、替りに別当さんがこられて、目をかけられて、今のオレがありますが」

「そんなんええやろ。昔の話や。それより、今のみたか？　急に内角の難しい球、くるりと回ってコツウ打つから、びっくりしたやろ？　あれ最初からできたんやけどな、追い込まれるまで隠しとったんや。追い込まれてから打つほうが、お客さんはハラハラドキドキが楽しめるし、ワシも長くテレビに映れる、一石二鳥やで、あはは」

なんと千葉は、わざと追い込まれるまで、本来の打撃を隠していたというのだ。西日本製長嶋の千葉のいうことだけに、本当に隠していたのか、それともとっさに出た打撃をごまかしているのか、その真偽は不明であるが。

プロ野球史上もっともチャンスに強い男

「ぬぬぬ～」
「どうしましょう。西本監督、えらいピンチが訪れましたが」
「佐々木、お前にいちいち言われんでも分かっとるわ」
いらだつ西本。一死一三塁で、ＯＮだ。王を逃げても長嶋と松井が出てくる。プロ野球史上、もっともやっかいな打順の回りに近鉄ナインは直面する。
「王を切って、長嶋も切ればスリーアウトやないかい」
「ですけど、そううまくいきますでしょうか」
「なあに、打者が大打者なら、投げる投手も大投手。同じ大選手なら、大投手が勝つのが、野球いうもんや。どないな強打者でも、打率は４割いかんのやからな」
「でも西本監督。それはあくまでも打率。出塁率でいうと、今打咳に立つ全盛期の王さんは優に５割を越えていきますよ。５割いうたら、投手が抑える確率のが少ない」
「むむむ。そないなこと分かっとるわ……」
西本は苛立ちを紛れに、大きな声を出すと、
「スズ～　敬遠や～　敬遠～」
「ちょっと待ってください。西本監督。」

なんと王を敬遠しての、満塁で長嶋勝負を選択する。これには、王対鈴木の背番号１対決を心待ちにしていたスタンドも拍子抜け。当の鈴木さえ、
「あかんて、勝負させてください。せっかく、闘志が煮えたぎり、ボールが走ってきたのに……」
とあからさまな西本の采配批判を口にする。捕手の梨田も納得いっていない。鈴木が気持ちの面での逃げを嫌えば、梨田は戦術面で、敬遠策に疑問を唱える。

「ちょい、それはないやろ。一塁空いてるならまだしも、一三塁やで。しかも王さんは逆転の走者。続く打者は……長嶋さんだ」

西本の采配は絶対と、鈴木ー梨田のバッテリーは、王を敬遠するが、その波紋は守備につくナインにとどまらない。参謀の佐々木も西本作戦に異を唱える。

「ちょっと監督、ほんまに、ええんですか。王さん、逃げても長嶋さんですよ」

「お前がいうたやないか。王は打ち取れる確率が少ないと」

「また責任をおっかぶせる……」

「いいや、別にお前が迷い込ませた王敬遠策やない。王・長嶋を連続で打ち取る確率よりも、長嶋だけを打ち取る確率のが高い思うて歩かせたんや」

「でもまだワンアウトですよ。長嶋さん取れても、後ろにゴジラ松井が控えてます」

「そうやったな。まだワンアウトやった……。村上のアホが凡ゴロ弾くから、勘違いしいてた」

「ええ～　そりゃないですよ、西本監督」

「まあこれでええんや。満塁やろ……長嶋は、別名ゲッツーのチョーさんやないか。きっと無様な併殺を打って、いつものように球界みんなのヒーローやなく、今日この時ばかりは、ワシらだけのヒーローになってくれるわ」

西本がもはや神と偶然に頼るしかないほど、大ピンチで長嶋を迎えるのはタフな出来事。

「４番サード　長嶋　背……番…号…さ…」

東京ドームはウグイス嬢のコールをも待てない。長嶋、長嶋と、球場中に大声援が巻き起こり、ところどころウグイス嬢のコールがかき消されるほどの盛り上がりだ。

「史上もっとも、チャンスに強い打者をこの状況で迎えるとは……ふう」

梨田もマスク越しから、長嶋の醸し出すオーラを否応に浴びる。そのオーラのどこにもネガティブな要素が含まれていないのだから、梨田もたまらない。

「長嶋さん、さすがすぎるわ。こんなメンタリティある人間がこの世にいるものか。一打逆転いうチャンスでも、普通は凡退したらどうしようとか、少しでも失敗した将来像を描くもんやけど、この人は違う。成功の未来が約束されたかのようや」

それもそのはず、梨田の４０年近くのプロ野球生活の中で、今の長嶋のように、チャンスを迎えるのが、嬉しくてたまらないと満面の笑みで、打席に入る選手なんて見たことも聞いたこともないからだ。

「どこにも気負った様子がない。なんだろう、この精神力の強さは……」

長嶋は、鈴木にバットを突き出し、時代劇の剣豪よろしく、果し合いを申し出る。

「こい、村田辰美！　いざ勝負だ！」

※村田辰美……８０年代に活躍した近鉄の左腕投手。ヒゲ面にひょうひょうとした細身の投手象は、同じ年代に活躍していた松沼兄に近い。

上体をかがむように始動するフォームは、まるで横手から下の角度で腕が振れてくると思わせるが、テークバックからぐぐっと上体を持ち上げ、結局、左腕投手のありがちな角度からボールが出てくる。そのサマは、怪しい風貌さながら、打者を詐欺にかけているようにも見えた。

投手コーチとして、鈴木監督政権に関わったが、主な実績は、殻を破りきれないドライチ寺前投手の頬に頭文字のＴのペインティングさせて登板させたくらいと、指導者実績は乏しい。関西テレビの解説者として軽妙なトークで古巣近鉄を斬るのが適職だったといえよう。

「いや長嶋さん。鈴木さんですよ……投手は……」
「うん？　エルビラ？　メキシコの英雄、ノーヒッター左腕か。相手に不足なしだな」
試合の帰趨を分かつこの場面で、このおとぼけぶり。
※エルビラ……ラソーダが外人投手輸出を始めると、真っ先に戦力外となった投手。
「近鉄の左腕投手なら、誰でもええんですね……」
梨田も呆れ返るが、勝負は別。
「こんな大ピンチにリードもどうもこうもない。鈴木さんを信じるしかない。鈴木さんが大投手であることをここで照明してもらうしかない……」

草魂ここに際立つ

一死満塁二点差、長嶋対鈴木啓示の逃げも隠れもでぎやしない、まさにこの試合、いや今大会の最高潮を、迎えようとしている。

「さあこい！　啓示！　男と男の勝負といこうじゃないか！」

「お、長嶋さん。珍しく、人の名前を間違えずに言えたぞ」

梨田も思わず、驚く、長嶋コンピュータの正常作動であったが、

「通算５１勝４７敗　防御率４．４０の大投手よ！　さあこい！」

なんと今度は、通算成績を誰かと間違うおとぼけぶり。鈴木といえば、３００勝を越えた大投手であることは、巨人の内海投手もおそらくご存知なくらい、野球関係者に知られた事実。それを、どうみても一流とも一流半ともいえない通算成績を持ち出してくるのだから、大ヒーローになれる大チャンスが回ってきた興奮で体だけでなく、脳みそもほってたのか、長嶋のボケっぷりも常軌を逸してきている。

「誰と勘違いしたんや？　まあ長嶋コンピューターの誤作動は、大きな間違いを起こすのではなく、些細な事柄を混同するからな。例えば、史上最強の5番打者の柳田さんとウチにもいたコンコルド打法の淡口さんと、そして清水隆行をよく混同することが有名だが、これも何もデタラメで間違いているのでなく、左打ちで強いライナー性の打球を飛ばす引っ張り型の強面の外野手という、ちゃんとした共通項があるから。この間違いの流れもそうだ。一見適当な混合を重ねているにみえて、村田辰美、エルビラと近鉄の左投手という共通点がきっちりあるんや……。ウチにいた左で５１勝。しかも防御率が平凡な割に、きっちりと勝ち越している。おったかそんな左投手……。う～ん、う～ん……」

意味なく悩む梨田に、じれた長嶋が、

「おい梨田。何をしている！　早く勝負のとっかかりとなるサインを出さんか！　お客様が、名勝負を今かと待ちわびているぞ」

「すんません……ちょっと悩むことがあって……」
「なんだ、もしかして、小池が？　小池のことか？」
「は？」
「小池だよ、小池秀郎。通算５１勝の左投手といえば小池秀郎しかないじゃないか」
「あ～　小池ですか～　これで頭のつうかかりが取れました……。うん？」
　梨田は正答を得て、頭のモヤモヤが吹き飛んだ思いだが、新たなる疑問が生じていた。
「なんだ長嶋さんって、わかっててボケてるのか……？　これも長嶋さんが、長嶋を演じる義務から出たボケ？　いやそんなわけないやろ……この人はほんまもんの天然やで……いやでも……計算づくって部分もあるかもしれないな……オレの小意気なダジャレのように、ファン目線に立ったパフォーマンスかもしれない」
「おい梨田、いい加減にしろ！　早くサインを出せ！」
「あ、ただちに……」
　急かされた梨田でも、出すサインに一点の曇りも存在しない。長嶋を完膚なきまでたたきのめすという晴れやかな配球意図が鈴木に伝わると、鈴木啓示は、ついに、大投手の牙をむく。
　慣れぬリリーフの違和感も、苦手な大舞台での緊張も、満塁の崖っぷちで長嶋と対峙することで消え失せた鈴木の迫力は、監督時代に地に落ちた世間の風評を取り戻してあまりあるものであった。
　左腕投手の博物館があったなら、入り口そばに誇らしげに展示されるだろう、鈴木の流れるようなフォームは、一直線で梨田のミットにおさまるストレートボールの球道をさらに優雅に際立たせる。
「う～ん、いい球……いい球だぞ、啓示！　これこそ野球だ。プロフェッショナルベースボールだ！」
　対峙する長嶋がそう誉めそやすように、鈴木の初球の入りは見事の一言。内角ぎりぎりの対角線上に、クロスファイヤーのストレートが決まったのだから、チャンスに打ち気にはやる長嶋でさえ手は

出せない。
　この初球の入りが勝負の明暗を分けた。
　若い頃は、当時の左腕投手の例に漏れず自分の速球に奢りたかぶる剛球一直線だった鈴木。当時の変化球といえば、お決まりのカーブに、フォークを多少混ぜるだけ。だがそんな愚直な鈴木も、おのれの球速の低下と打撃マシンの登場によるバッティング技術の革命的進化の元、技巧派の味も取り入れる必要性に迫られたのだ。
　そんな鈴木の境地を救ったのが、スライダー、シュートの横の変化球だ。従来の縦の攻めに横の攻めが加われば、攻め方のレパートリーは一気に膨れ上がる。
　いかなる場面においても、あらゆる配球に応じられる手立てを得た鈴木は、困ったらストレートの愚直な投手のままならとても到達出きぬだろう、３００勝といういただきに達した。
「横の変化で翻弄させてもいい、縦の変化で勝負にでてもいい。ただいくら併殺が最善の場面でも、それを狙いにいくことはしない。なぜなら、長嶋さんのあふれんばかりの運の量は、バットに当てさえすれば何かを起こすからだ。無論、結果、併殺打ならそれに越したことはないが、とにかく三振を奪いにいく」
　三振を結果に考えるならば、梨田の出すサインはどうしても元の慎重派梨田に戻る。
　自分を有田に見立て強気の梨田を演じてきたのに、攻めにいかず、ボール球のサインを出せば、せっかく乗ってきた鈴木のリズムも崩れるて、またへそを曲げると思われたが、
「ボール球を入れるやと？　ナシ、お前さんのリードは、やぱっりまどろっこしいわ」
　口では不満を漏らすものの、覚醒した鈴木は、自分が大投手であることを忘れてはいない。遊び球にも全身全霊をかけて、投げるのだから、極上のスパイスとなり、あとの配球を楽にする。
二球目のシュートが外れて、三球目の真ん中から曲がり落ちるスライダーに、長嶋のバットが出る。長嶋は、バットを放り投げ出しま

で振っていないとアピールするが、梨田のアピールの元、一塁塁審二出川の裁量を仰ぐと、ハーフスイングとなり、ストライクカウントがまた一つ増える。

「追い込んだら、勝ったも同然や……。鈴木さんになんだって要求できる」

勝負を終える前に勝ちを確信したセリフを吐くのは本来、ご法度。自ら負けフラグを立てにいくようなものであるが、今の鈴木には何の関連性も持ちえない。

「これが３００勝投手の鈴木啓示や！」

監督時代、人間性をも否定された鈴木の鬱々としていた魂の叫びのもと、よく振れた腕から繰り出されたフォークボールは、真ん中低目からボールゾーンに落ちる、理想的な軌道を描く。いくら長嶋でも、このボールは打てやしない。バットが空を切った瞬間、球場内、いやテレビを通した全国民が、鈴木啓示の価値を見直したといっても過言でもなかった。

あの世界でもっとも勝負強い長嶋を、この場面で仕留めるとは、鈴木啓示なる男は、やはり大投手であると、今ようやく世間に認識されたのだ。

大舞台に弱くドラマが作れない男と言われた鈴木啓示が、はじめて紡いだドラマに、近鉄ベンチの数多いアンチ鈴木たちも、さすがに感嘆の言葉を持って称えるしかない。

鈴木にプライドをギタギタにされて、ボロ雑巾のように巨人に追い出された阿波野も、

「やった、やった！」

と手を叩いて、希望をつないだ鈴木にエールを送る。

そして、あの男さえもだ。

「や、やりました……す、鈴木台先輩……長嶋さんを三振にと、取りました……」

「なんや、金村さん。味方が大ピンチの第一陣を切って取ったのに、いつもの口の滑らかさがありませんね。悪ぐちならポンポンでるの

に」

「大村、アホいえ、投げてる投手が投手や、手放しに賞賛できるかい。とはいえ、多少、感動したことは事実や。やっぱあのおっさん、偉そうなだけの投球はするな……が、次は松井や。一難去って、また一難や。あの草魂のおっさん、二打者連続都合よう打ち取れるかねえ」

「応援役なら、素直に応援しとってくださいよ」

長嶋が切られても松井がいる。

ドームの巨人ファンはそう願わずはいられないが、梨田は松井に長嶋並の警戒心を払わない。

「実力は置いといて、役者が長嶋さんより、一段劣る松井に打たれてたまるか」

「どーも、凡才の松井で～す。梨田さん、三打席目っすね、この打席は打っちゃおうかなあ。こういう時に、さらっとおいしいところ持ってちゃうのがオレなんすよ。注意したほうがいいっすよ」

ゴーゴーゴジラ松井くん

鈴木啓示がドラマを作れない男なら、松井もにた気質のある選手だ。ただ松井が鈴木と事情を異にするのは、松井はドラマの主役に一見、ふさわしくなさそうで、数々の伝説を彩ってきた事にある。

甲子園の５連続敬遠。０３年渡米初年度のアリーグチャンピオンシップでの、ペドロ・マルティネスからを崩すきっかけにした一打。そして記録に新しい昨年のワールドシリーズのＭＶＰ。

こうして列記してみれば、なんだ松井も数々のドラマを演じてきたじゃないかと思われる向きがあられるだろうが、松井怪物伝説を強く色づけるのは、最初の５連続敬遠くらい。真っ向勝負が美徳である甲子園において、敵将から完全に勝負を避けられたというエピソードは、いかにも触らぬ最強打者にたたりなしで、松井の神秘性を増すものであったが、日本野球において、何か特記事項があったかといえば、首を横に振るしかないし、渡米後の伝説は、期待はずれのレッテルを張られる寸前の松井のあげきが結果につながったと見えてしょうがない。

ワールドシリーズＭＶＰは、契約切れ延長なし、すなわち戦力外を決めたヤンキースへの意地の総結であるし、渡米初年度０３年のプレーオフの活躍も、堅実な中距離打者がきっちりと忠実な仕事をしたとしかいいようのないもの。

だから長嶋を打ち取った梨田は、松井に対して、兜の緒を締め直すどころか、安閑たる気持ちを持っている。

「打たれるわけない。長嶋さんさえ打てない局面で、松井が取り返すような働きをするわけない。なあ松井。お前もそう思うやろ？ここで打ったら、お前の恩人である長嶋さん、ぶんむくれるぞ。オレがヒーローになり損ねた場面で、どうして松井が打つんだって。あの人、ああ見えて、嫉妬深い人だから。まあ打たんからそんな心配するこたないか」

「……。いや、こういう場面だから打っちゃうんじゃないですか？　オレってそういう星の下に生まれたみたいですから？　なんかこう高校時代からあれなんですよね。どうも格下の人と比較されちゃう。甲子園の実績では、清原さんと比べられて、よく言われましたよ。打った本数がまるで違うねって。キヨさんは１３本、オレは４本すから、見た目の本数は全然負けてるんですけど、内容はオレの圧倒。キヨさんの頃の甲子園は飛ぶバットの全盛でラッキーゾーンつき、しかも５回でて毎回勝ち進めばそれくらい打てて当然でしょ。オレみたく打席を奪われて、終了じゃないんだし。そんなキヨさんに、実力のほどの違いを見せつける絶好の機会が訪れたんすよ。それも巨人の３，４番を並んで打つという、誰にでも比較しやすい構図で。そこで実力つうか素質つうか努力の差を歴然とつけたつもりなんすけどね、どうも世間は、キヨさんのがお好きのようで。浮き沈みが激しい派手な方に目が行っちゃうのかな」

「珍しくよう言うな松井」

なぜか、この切羽詰った一大局面で、梨田に思いをぶつける松井。

「それに聞いてくださいよ、梨田さん。メジャー行ってからもそうなんすよ。なんでオレが、イチローさんみたいな短距離打者と比べられるの？　ＷＢＣ連覇の立役者ってそんなに偉いの？　ＷＢＣ決勝の誰だか知らない投手って、オレが打ち砕いたフィリーズのクリフ・リーやペドロよりも凄いボール投げるの？　まったくなんで世間の人々は、物事の真実の価値が分からなんでしょうね。今だってそうっすよ。ここでオレがガツンとホームラン打って、巨人逆転のヒーローのはずなのに、どうせ、明日の新聞の一面は、”やったぞ長嶋先制弾”すよ。よこに小さく、松井の逆転の一撃を起因する一打とか、オレの働きまで長嶋さんのおかげみたいに脚色して」

「ほう、お前、ここで打つつもりなんや」

「悪いですか？」

「まあ打たせんから、打ったあとのあれこれ悩んでも無駄やぞ……」

松井が思いのたけをすべて吐き出すと、奈須田はようやく腰を落

とす。
松井といえば待球打者の典型。よほどの甘いボール以外は、まず初球を見逃してくる打者だ。
梨田もそうして組み立てるが、松井の狙いはそれの逆をいくもの。ストライクなら振りにいくと決めているのだ。自分のモットーをひっくり返してでも、なんとしても逆転のヒーローとなり、巨人の真の実力者は自分であることを、天下に知りしめたいのか。
松井の狙いは悪くなかった。鈴木のボールは、松井の見逃しを見越してか、外の若干甘め。松井が引っ張ってライトスタンド一直線のゾーンにきたのだから。だが、今の鈴木に力勝負を挑むことはなかった。
松井の驚異的なパワーを持ってしても、鈴木のボールは打ち砕けなかった。鈴木のここ一番の制球力の前に、ボールを叩くことができても、ボールを上げることができなかったのだ。
一二塁間に飛んだ強烈なライナーをセカンドの大石が大事そうに取ると、東京ドームはまた、ため息に満ちた。その雰囲気は、松井を責めるというよりも、長嶋が打たないなら松井に打てるわけがないとうもの。松井が一番嫌う空気だ。
「ハードラック。オレは勝負に勝ってたよ。ああどうして、オレって国民的ヒーローになれる寸前まで行くんだけど、その一段上に上がれないんだろ。これでいまだ長嶋＞松井の図式だよ。あ〜あ」
7回表、マウンドに上がるのは……。
「ただいまの回代打いたしました高田に替りまして、桑田が入ります……」
「いいですか、ボールさん。打者は梨田さんですよ。打てる捕手だからといって、惑わされちゃいけません。しょせん、捕手にしちゃ打てるですから……えへへ」
例のボールにつぶやくパフォーマンスをひっさげて桑田の登場だ。

検索　鈴木啓示　土井正三

鈴木の鬼気迫る投球に、野球ファンは敏感な反応を示した。

検索サイトの急上昇ワードに鈴木啓示がランクインすると、第二検索ワードも様変わりを見せたのだ。それまでの、鈴木啓示　無能　鈴木啓示　最低　鈴木啓示　最低の監督といったネガティブ含みの検索ワードから（鈴木啓示　土井正三なるものもある。ネットユーザーは、この二人を同時に検索してどんな答えを期待しているのだろか。ちなみに上位に並ぶのは、無能ぶりを叩くページだらけだ）、鈴木啓示　伝説　鈴木啓示　球速　鈴木啓示　記録　といったよく知らぬ現役時代を紐解こうとするポジティブな検索ワードが目立ってきたのだ。

注目度が高く、一部地域を除き、全国中継の巨人戦とおいうこともあるが、それだけインパクトのある投球を鈴木が見せた証明だ。

「よ！　鈴木大先輩、みごとな投球でした！」

大村が声をあげて、長嶋松井斬りをした鈴木を迎え入れる。アンチ鈴木の多い近鉄ベンチは、このときばかりは鈴木に素直に脱帽と思いきや、やはりこの男は、草魂おじさんとは相まみえることができない。

「ふん。偶然やろ、偶然」

応援役として、ベンチ登録もされていないのに、ベンチの真ん中にどかんと座る金村は、鈴木の一声掛けることもなく、そっぽを向いて面白くなさそうな顔をしている。

「松井が調子悪いだけやん。アイツ今日遅刻しおったで、だから練習が足らんかったんや。打撃練習してれば、あんな外の甘めのボール、松井のホームランゾーンや。スタンドどころか、あのセコムの看板直撃やで、クサのボールなんぞ」

「しかし金村さん、これでええんでしょうか。ベンチ一丸とならな、

打倒巨人は果たせんとちゃいますか？」
「大村、お前は近鉄いう球団をようわかっとらんのや」
「なにがです。近鉄に１１年もおったオレになにがわからんことあるんです」
「近鉄いうのはなあ。慣れ合いで勝つチームやないんや。基本信頼を寄せるのは、親しい仲間の一部だけ。時には憎しみをエネルギーに変えて、それ力に試合をしてきたんや。９４年の快進撃もそうやろ。お前は新人時代で一軍におらんかったから、よう知らんおもうけど。あんときもな、監督がアレで、コーチが無関心主義の梨田さんいうとんでもない首脳陣やったんやで。梨田さんも、いまこそ名将づらしとるが、当時はダメコーチもダメコーチで、オレが試合途中で引っ込められたときに、『カネ、もう帰ってええで』とか、ノリの守備固め出されたオレに試合途中いうのに帰宅命令だしたんやで。コーチがそれやから、選手の仲もばらばらや。オレは大石さんや、石井浩郎とは口も聞かん仲やったし、オレのサードの定位置を脅かしてた中村紀。当時、三年目か。そのノリをオレはよう憎んだもんや。なにせ、強肩に正しい守備をする上に、バッティングの筋がええ。おまけに、水谷実雄打撃コーチにつっつかれて、よう練習もする。なんやコイツ、潰さなオレが生活できんなる思うたもんや。エースの野茂は知っての通りクサに呆れて、二軍でサボリ。でも近鉄は勝ち進んだんやで。チームワークなんて糞食らえや。野球は個人個人が勝手にやれば勝てるもんと当時、思い知ったもんや」
「でも翌年ボロ負けましたよね。そのおかげで、二軍にいたオレの一軍昇格が早まり、レギュラー取れましたが」
「オレがＦＡで中日行って、チームのまとまりなくなったんと違うんか」
「え？　さっきというてること違いますよ、金村さん」
「言質に責任を持たんのも、マスコミ球団やない近鉄の特徴や」
その鈴木、さすがに長嶋、松井連続斬りで、精根尽きはてたか、

ぐったりとベンチの壁に寄りかかっている。
本女房の有田がブルペンから駆け寄ってきて、今の投球の労をねぎらう。
「ようやりましたわ、オレがおらんでよう抑えられた」
「有田か。正直、梨田のリードじゃ心もとなかったが、さすがのオレや。なんとか抑えることができたわ」
「ほんまになんとかですわ。千葉さんに馬鹿正直に内角続けてコツンと一、二塁の間破られたときは、梨田の配慮のなさ疑いましたが。いやあ、梨田は何年たっても梨田ですわ、オレならよう投げさせませんって、あんなところ。オレがマスクを被ってたら、ないピンチでしたけど、よう投げましたわ」
さすがに有田だ。解説でもおなじみの結果論で、梨田の配球を腐すところなど、彼の調子の良さと自己顕示欲の強さも見て取れる。
「そうやないピンチや。そうや走者一人は柳田の残した高田さんやけど、満塁の二人はワシが出した走者やないか」
「そうですね、そういえば。自作自演みたいなもんですね。自分の舞た種をなんとか自分で駆っただけですね。まるで江夏さんの２１球とおなじや」
鈴木の賞賛に沸く近鉄ベンチであったが、はたと気づいてみれば、鈴木が導いたピンチを鈴木がなんとか抑えただけ。
そうと気づくと、せっかく湧き上がった人間性は認めずとも、実力は認めてやろうとの、鈴木への好意的な雰囲気は、次第に薄れていく。
「あれ、オレよけいなこといいました?」
いつも本音でずけずけいう有田は、よけいなことも口にしてしまう。
「いうたわ。まったく、せっかくワシが大投手であることを思い出し始めたのに」
「すんません、ガハハハ」
それでも悪びれない有田。だからこそ、鈴木とは妙にウマが合う

のだ。
「ええわ、許したる。有田、今度こそ、お前と組みたいな。梨田で抑えられるなら、お前と組んだらワシ完全試合できると違うか」
「完全試合？　できませんって。鈴木さん、よう一発浴びる人ですから、まあ一失点無四球完投勝利くらいやないですか、ガハハハ」

久々に桑田と組む阿部は、顔をこわばせている。それもそうだろう、表面上、若い阿部に優しく接してた桑田。それでおリードへのダメ出しは、自然と阿部の耳に伝わってくるもの。桑田ー阿部のバッテリーは謎の復活を見せた２００２年以外は、見事なまで打ち込まれたのだから、なおのこと。

桑田ろバッテリー解消した阿部が、いくらその後経験を積んで、見違えるほどの成長したとしても、桑田の顔を見れば、未熟だった頃の自分が蘇えるのも無理がないこと。
「桑田さん、球種は現役時代のまんまでいいですよね」
「ＯＫだよ、慎之助。ワインにさほど精通していない君でも知ってる通り、ワインというものは、より熟成させた方が、おいしくいただけるんだ。僕の球種もワインと一緒。寝かすほど味が出るんや、わかったかい、慎之助くん。特に子供の頃から投げてるカーブなんて、３０年ものだよ」
「はあ……」

たとえにワインを持ち出すのはまだしも、意味が通らないのはどうだろうかと阿部も訝しげな顔を見せる。
「あの桑田さん、ワインの話は分かりましたが、あの球種は……。ひととおり投げれるとみていいんですよね？」
「君はパウリーノって捕手知ってるかい？」
「はあ？」
「そうか、しらないか。いいんだよ、僕がパイレーツ時代に組んだ捕手さ。ドミニカ出身でね、リードのイロハも知らない捕手でネ。僕があえてボール球で入る配球もあると教えたらびっくりしたもんさ。

いやあ、メジャーの野球も遅れているところは遅れてるんだね。見聞を広めるつもりでいったメジャーで、逆に僕が見聞を広めてきちゃったよ」

「はあ……」

ずらずらと意味不明なこと並べる桑田に阿部はたじたじ。

「あのですから、球種は……」

「球種？　ああ球種ね。カーブとまっすぐだけでいいよ」

「え、いいんですか？　二種類で？」

「僕は元々、カーブを軸にする速球派の投手や。せっかく若い頃の肉体を手に入れたんやから、若さにあふれた投球せんと」

「はあ」

阿部は真顔になって桑田の話を聞くが、

「とみせかけて。シュートも、スライダーも、チェンジアップも、スプリットも投げるよ」

いしいひさいちの描くところの裏をかく桑田を演じられても、阿部はリアクションすらできない。

もやもやを抱きながら、阿部は捕手の定位置に戻る。

あっけらかんとした阿部が捕手。あっけらかんとした梨田が打者。そして複雑怪奇な精神構造を誇る桑田が投手。奇妙なトライアングルに、淀んだ空気が流れるなか試合は終盤を迎える。

村上、ノリの魚屋義兄弟三遊間コンビ

ボールさん、ボールさん。梨田さんですよ。どう抑えこみましょうか」

ボールにつぶやく桑田は見慣れた光景であるが、この試合が大試合であることを意識してか、いつもより多めにつぶやいている。

桑田のつぶやきをベンチから見つめ慣れている、王、長嶋もプレーヤーとして同じ目線で桑田のパフォーマンスを体験すると話はまた別のようで、

「おいおい桑田。どうでもいいから早く投げろよ」

王が文句をぶつぶつ吐き吐き腕組みながら、体を左右に揺らすサマはいかにも桑田にじれている様子が伺える。

対する長嶋も、

「う〜んクワダ。う〜んクワダ」

とまるで悪夢をみるのごとく桑田の名前をただつぶやくだけで、いつものような当意即妙なボケもオチお見せれない。

それだけ桑田のつぶやきがよけいなパフォーマンスで、味方野手陣からテンポとリズムを奪いだけの代物に過ぎないわけであるが、どうして桑田はこのつぶやきを投球間に取り入れることにしたのだろうか？

桑田のようにボールにつぶやいた投手が、桑田の前にいなかったわけではない。現実に大リーグのフィドリッチというデトロイトタイガースの投手が桑田のようなつぶやきを見せたことが有名である。

フィドリッチは彗星のように現れて、すぐに消えた伝説的投手。その時代は桑田の幼少期に重なり、当時から野球に関してませてた桑田は、今よりも情報量が限られた中、目ざとく拾い上げて、自分のモノにしたのだろうか。

それとも同じく桑田の幼少期に強い印象を与えたドカベンの影響であろうか。ドカベンの続編の大甲子園から登場した犬飼知三郎は

桑田と同じくボールにつぶやいてたのは有名である。
大甲子園は桑田のＰＬ時代と連載が重なる。規律厳しいＰＬの環境を考えると、自由に漫画を読めたのかは疑わしいが、そこは一年からのスターの桑田。あらゆる手段を講じて漫画の調達をしたかもしれない。
桑田がどちらの影響を受けたのか、それともまさかの自分で考案したパフォーマンスか分からないが、ただでさえ異形である桑田の個性をより際立たせていることは間違いない事実だ。
「ボールさん、ボールさん。とにかく低目、低目に行ってくださいね。梨田さんていどなら、僕が低目をつけば絶対に打たれないから」
桑田の自信も過信にも至らない。桑田のいたずらに長いパフォーマンスに眉をひそめる梨田は、鼻をあかしてやると意気込むのだが、阿部の構えたミットに切れ味鋭く飛び込んでいく桑田のボールに、柔軟性にあふれるさしものコンニャク打法でも対応できない。
桑田の代名詞である大きく縦に落ちるカーブに泳がされれば、球速以上の威力のあるストレートに振り遅れる。
そして決め球のシュートに詰まらせると、梨田の放った打球は、弱々しく三塁と投手の間に転がる。
三塁の長嶋も、投手の桑田も守備範囲の広さには定評がある。どっちが取りにいっても裁ける打球であったが、この二人は遠慮なく、自分が目立つことしか考えていないこともかぶるのだ。
漫然とマウンドを降りてボールを取りに行く桑田と、これも久々に、守備の見せ場が来たと張り切る長嶋。
二人の視界に相手の姿がいるわけがない。見えるのはボールだけ。相手に譲ることなく早い者勝ちだ。早くボールを取った方が、華麗なフィールディングでドームの歓声を独り占めできるのだ。
勝ったのは桑田だった。先にボールをつかむと、さして足の速くない打者走者梨田に対して、ひとつのスキもみせない流れるような守備姿勢を見せつける。
素手で取り、体勢が崩れたそのままで、矢のような送球を一塁に

送る。　送球のあとも、桑田は鼻持ちならない美意識を維持し続ける。

　これくらい僕の野球センスを持ってすれば朝飯前とばかり、妙に淡々とした姿を形作るのだ。一塁のセーフアウトを確認することなく、帽子のひさしを深くし、マウンドにゆったりと戻る姿はなんともキザ。

　それでも桑田のイメージアップ大作戦は、最後に思わぬほころびを見せる。桑田に見せ場を取られた長嶋が、ひらひらと右手の手首を揺らしながら、カニ歩きで桑田に近づいているのだ。

　これは例の有名な長嶋の送球のあとのパフォーマンスであるが、桑田に取られた悔しさを紛らわせるためか、ボールに振れてもいない長嶋が見せた滑稽なエアー送球に、ドーム中の視線は集中。長嶋の奇行の前に、桑田のええかっこしい一連の動作はどうにも霞んでしまう。元々、長嶋監督時代の起用法に腹に一物ある桑田。

「またこの人、一人で目立とうとしてる」

　長嶋のスタンドプレーをこころよく思うわけがないのだ。

「ボールさん、ボールさん、三塁方向には打たせないよ。だって、変な人に、見せ場を独り占めにされてしまうもの」

　桑田は自ら、投球の幅を狭めたことに気づいていなかった。シュートのキレている今日の桑田はどうしても三塁方向にボールが飛びがちなのであるが、三塁方向のゴロがご法度となると、どうしても伝家の宝刀シュートを鞘におさめなければならない。

　縦、横、奥行きを最大限に活用してこそ、冴え渡る桑田の投球術。

「村上さんか。ふふふ、ボールさん、ボールさん、超案配ですよ。この人が打てるのは、甘く入ったストレートと変化球だけ。僕の四隅にきちきちと投げ込まれるボールさんが打てるわけないんだから」

　と村上をなめきった桑田は、痛いしっぺ返しを食らうのだ。桑田の分析どおり、未完の大器のまま現役を終えた村上は、厳しい変化球攻めに対応できる技術に著しく欠けるのであるが、そこは近鉄猛牛軍団の良くも悪くも象徴的だった村上のこと。技術的欠陥を気合

でカバーをするのだ。
村上の頭の中には、前の回の軽率なエラーで一杯。なんとかそれを取り返そうと必死な、村上のバットは、桑田の渾身の外に逃げるスライダーをとらえる。打撃の教科書よろしく、センター前に弾き返された打球は、桑田を襲う。
桑田の守備力なら裁ける打球であったが、まさか村上に当てられるとは思ってなかった桑田。十分な守備姿勢がとれず、股間を抜かれてしまう。
「なんやと。このオレが村上なんぞに股間を……」
素の桑田が関西弁まじりで、村上をコケにしても、侮ったすえに生まれたヒットは帰ってこない。
打球は、二遊間を抜けるとセンター前に転がっていく。打球が死ぬことで知られるドームの新人工芝。二塁ベースの上を通過するあたりで、急激に勢いがなくなっていく。
センターは怠慢プレーで知られるクロマティだ。いつものように、だらだらとやる気なさげに前進してくる。
これを見た村上、さらなるポイント稼ぎとばかり、止まりかけた足に、またギアを入れて、猛然と二塁を目指す。俊足強肩の大型選手の村上だ。技術のなさで盗塁数が伸び悩んだ現実もあるが、本気をみせたそのときの足は速い。
「なんや、クロウさん。あんなに仲良くしてるのに、手抜きプレーかよ」
英語が堪能である桑田は、外国人選手と特に仲が良い。その一人あるはずのクロマティの怠慢プレーで、境地に立たされるなら、意外と脆い精神力の持ち主である桑田はとどめなく崩れていくのか？

くわたきよ　はらしのずかな　かはたはら　いしい（ドラクエの復活の呪文。いまいまで）

怠慢守備に定評のあるクロマティ。むざむざと村上の二塁進塁を許してしまうのか。一死一塁の無駄な抵抗が、一死二塁なら、近鉄加点、巨人三点差に突き放されるか否かの瀬戸際に早変わり。いまひとつ勝負強さの足りない桑田のこと。得点圏に走者を置くことは、巨人ひいては桑田のこの試合を終わらせることにつながるのだが、はたしてクロマティはそれでも守備は査定に入らぬとなめたプレーを繰り返すのか。

ところが、クロマティはたらたらとした前進を急にやめ、いきなりの猛然とした突進を見せたのだ。首脳陣に咎められたから、必死のプレーをしたのだろうか。そうならば、巨人現役時代に見せた怠慢プレーの数々は説明できない。怠慢プレーを起こす度に、首脳陣、マスコミだけではなく、ファンまでがクロマティの人格を否定するほどのブーイングを送ったにもかかわらず、態度をいつまでも改めないクロマティがいたのだ。おそらくクロマティにしたら、オレを降ろして代わりに誰を起用するの？　と当時の日本野球の実力と重厚な戦力を持ち続けているとおもわれがちな巨人軍の意外な層の薄さを見くびったことからの安心と慢心からだろうか。たしかに。クロマティを干してまで起用に値する選手が巨人にいたかとおいうのは否。吉村はれっきとしたレギュラーであったし、５０番トリオのもう一人の野手駒田は、左翼の松本と一塁の中畑の控えとして常時ではないが、試合に出ていたため、控えの外野手にろくな人材がいなかったのだ。誰がクロマティの代わりに、仁村薫や、藤本健二、石井雅博などの一軍半ともいえぬ外野手の出場を喜ぶだろうか？

クロマティはそういった日本野球の人材の不足にあぐらをかいて手抜きプレーを改心しなかったのだが、史上に残るオールスターの集う今日の面々、クロマティと比較しても、なんら劣ることない人材がベンチに、いやベンチ外にもうようよしているのだ。クロマテ

ィの心にうずくまるのは、フットボール仕込みの強烈なハッスルプレーをもっとーとする与那嶺か。それとも、赤い手袋、横浜生まれのギャンブラー、柴田勲か。それとも、ベンチにあえて入らず、ご意見番と称して、ネット裏から厳しい目でこの試合の行方を見守る青田昇か。青田と同じく、外野のバランスの問題でベンチ入りならずも、その打撃センスはクロマティも認めるところの吉村禎章か。

いずれにしてもクロマティの代わりに外野の一角を占めても不自然でない実力の持ち主ばかり。いかにも粗い呂明賜の打棒にいらぬ危機感を感じ心を入れ替え、単打狙いで史上初の４割打者誕生かと騒がれたクロマティのこと。必要に迫られれば、三拍子そろった完璧なるプレーヤーしかメジャーのレギュラーでいられなかった時代に何年もエクスポズの中軸を務めたプライドが顔をのぞかせる。

急にあげたスピードをも抑制し、緩やかなゴロにタイミングよく入り、勢いそのまま矢のような送球を二塁のカバーに入った遊撃手の坂本に送る。

話が違う、クロマティといえばへろへろの頼りなげな放物線を描く送球しかできないはずと村上ははっとするが、野球の素質はあっても、野球の技術にいささか欠ける村上のこと。急に止まれず、急に引き返すことができず、そのまま、エイヤと坂本の落球を期待して二塁に頭から滑り込むが、村上のかぶる赤に染まった今思うと、派手の一言のヘルメットの頭頂部（鈴木貴久が、なぜか空いてた穴３っつほどから、オバQのごとく髪の毛を逆立てていた辺り）にグラブをかぶせれば、好判断の好走塁一転、暴走と化した村上はうなだれるしかない。

それにしてもクロマティが突如むき出しした強肩とはいかがなものだろう。弱肩で知られるクロマティだが、メジャー時代では年間２０以上の補殺を記録したほどの好送球が自慢のプレーヤー。日本に来ていたときはすでに衰えていたというよりも、守備の好プレーをしても年俸査定に響かないから、必殺の鉾をおさめてが正解。巨人時代のクロマティでも、練習中、時に今のように強肩を見せてい

たと証言があるからだ。
　そして問題は村上の行く末だ。前の回のエラーに、この暴走。成績度外視で起用されてた遊撃手時代なら若気の至りと許してもらえるかもしれない元気が裏目に出たプレーだが、今の村上は違う。結果を残してこそ生き残れる立場なのだ。
　西本から浴びるのは鉄拳か、それとも腹に一発のキックか。村上が暴走の罰則を観念すると、桑田は１０・８で見せたガッツポーズをここに再現している。
「やったクロウさん。さすがメジャーだ。日本野球とは質が違う」
　今さっき口にしたクロマティの罵倒の数々を棚上げして、美辞麗句を並べる桑田はさすがにちゃかりとしている。
「クロウさんは、僕と仲がいいから真面目にプレーしてくれたんだ」
　日ごろ欠かさぬ外国人選手とのコミュニケーションがここに結実と桑田は喜ぶが、親交ある桑田だからクロマティがしたプレーなのか、レギュラー脱落の危機に尻に火がついたから飛び出たプレーなのか。おそらく後者であろうが、桑田が自分だからしてくれた友好の証と勘違いして、マウンドさばきをするなら、巨人にとっては幸いであろう。
　クロマティの好プレーに御礼の返信をしたいならば、桑田は次のトップに帰っての大石をテンポよく打ちとることがそれにあたるだろうが、桑田はどうにもピリっとしない。
　大石をストレート系のボールでかっこよく打ちとろうとした桑田。しかし短く持つ大石にコツンコツンと当てられて、あげく抜き出したサンダーボールこと伝家の宝刀フォークボールが落ちきらず一二塁間を破られてしまう。
「法難や」
　桑田は大石に打たれたことを偶然に帰そうとするが、首脳陣は桑田のボールにキレがなしとメモを走り書きする。
　二死一塁、走者はなんども盗塁王を取った大石大二郎。走って当然。走れなければ不自然の場面であるが、さてクイックの苦手な桑

田。大石を一塁ベースに釘付けにすることができるのか。それとも、一塁走者に気を取られローズに痛い一発を食らうのか。

「桑田なら打てるわ」

球威がガタ落ちした桑田しか知らぬローズは見下ろして打席に入るが。

綺麗な桑田ですか？　さらけ出した桑田ですか？

「桑田の１４０キロていどのストレートなんぞ、ちょちょいのもんやで。のう慎之助」

１９９６年来日のローズは、終わった桑田しか知らない。１９９５年の疑惑のダイビングキャッチで、一年半以上に及ぶ長期のリハビリを経て復帰した桑田は、もはや桑田真澄から程遠いものであった。

小柄な体を目いっぱい使った躍動感溢れる直球は消え失せ、復活のマウンドにいた桑田のストレートは１４０キロの無機質なデジタルの球速表示とほぼ同一の価値しかなかった。

桑田の残した実績も球威の低下を如実に物語る。故障前、当たり前のようにあげていた二桁勝利が復帰後はたったの３度だけ。しかも復帰初年度の１９９７年の１０勝は完投０。投球数の厳格な制限があったために致し方なしの内容ともいえるが、投げれば完投は当たり前の故障以前の桑田からすれば実に寂しい内容。その翌年１６勝と生涯二番目の勝ち星をあげるが、防御率は４点台で規定投球回に到達した投手を後ろから数えた方が早いありさま。

桑田の変化は勝ち星で誤魔化し切れない。落ち続ける投球内容に限界説が漂っていた２００２年、桑田は突然、一流投手に舞い戻る。

特別、桑田の球威に復活の兆しがあったわけではない。桑田自身の変革をあげるなら、チェンジアップの習得だろう。左打者を苦手にしていた桑田は、その左打者に逃げるように落ちるチェンジアップを新たに球種のレパートリーに加えたことで、カーブだけではない桑田のもうひとつの緩急に戸惑いを見せた。それがまず一つ。もう一つは、プロ野球そのものの劇的な変化。劇的というよりこの年だけの異変ともいうべきか。高さひとつストライクゾーンが広がったこと。ルールの適用を厳格にとろうとした球審は、明らかに高く外れたボールにも、腕を上げたのだ。それまでただのボールとコー

ルされていた桑田のカーブが高目ぎりぎりのストライクとなれば、桑田の投球術は無限大に広がっていく。

大きな二個の武器を経た桑田は限界説を吹き飛ばすように、快投の連続。そして最優秀防御率のタイトルを獲得することになったが、

「のう慎之助。一年だけ桑田が活躍したな。なんやったのあれ」

「なにって、あれはオレの二年目の出来事だろう。一年の苦い経験がオレを成長させたんだよ。だからリードが冴えて、落ち込んでいた桑田さん好投を繰り返したわけさ」

「お前のリードか。ほう。、それならなんで、翌年から元の桑田に戻ったんや。さらに経験を積んだお前が桑田をひっぱれば良かったんや」

「タフィーさん。あんたみたいな守備がとりたててうまくない人がセンターラインなんかにいたからだよ」

「ほう、ワシのせいいうのか。ワシは巨人に二年しかおらんかったのになあ。２００３年以降桑田は何年巨人のマウンドで惨めに打たれ続けたって話や」

「つべこべ言わず打席に入ってよ。ハリーアップだよ。最近ダラダラと会話が長いって思う向きが増えているらしいだ」

「なんやそれ。まあええわ。桑田なんぞ、ワシのハードヒッティングの餌食にしたるわ」

阿部は広く視野を取る。ローズの強打に気を取られる事なく、一塁走者大石まで神経を研ぎ澄ませている。

「桑田さん、牽制入れてください」

桑田にサインを出し、牽制を促す阿部であるが、桑田は牽制一つ入れようとしない。

「どうしたんですか、桑田さん。走者は稀代の盗塁王大石さんっすよ。二死一塁走って当然の場面じゃないですか」

牽制一つするまで、投球のサインを出さないと阿部は、執拗に桑田に牽制を促すが、それでも桑田はセットのまま動かない。

「長く持って大石さんの出方をみている？　いや違う。いつもの桑田さんなら、オレの牽制のサインを嫌がらないはず。工藤さんと違って後輩捕手にガミガミ言わず、従ってくれる人なのに、どうして。は、まさかこれが村田さんがたまに言っていた頑固な桑田さん？　聖人のイメージある今と違い、昔の桑田さんは向こう気の強い投手だったらしいけど」

阿部も薄々気づいているように、今の桑田は誰のアドバイスも効かない元の悪童・桑田に戻っていたのだ。

「牽制入れる必要ないで、阿部。大石が走ろって二塁に行こうとそれがなんや。ローズを打ちとればええやないか」

巨人の投手は牽制はおろかクイックの習得にも熱心ではない。力がある投手が揃っていたせいか、二塁などただでくれてやる。それでもホームは踏まさせんなどという自分の実力を過信した向きがあったのだ。当時の巨人の盗塁阻止率の低さがその傾向を物語っているが、それでも当時の巨人は投手王国でありえた。

「せめてクイックで投げてくださいよ、桑田さん……」

牽制を諦めた阿部は、せめてクイックで放って盗塁阻止の共同作業に協力を願ったのだが、桑田の足の上げ方は明らかに走者を完全無視していた。

右足が大きく上がった瞬間盗塁の成否は決まっていた。

「ああ～　またオレの評価が落ちる……」

あっさりと二塁を陥れた大石を背にしても、桑田はなんの動揺もない。

「表の桑田の美学が綺麗な投球で打者との勝負を楽しむなら、裏の桑田はいかなる手段を使っても打者を抑えにかかるんやで」

上っ面の桑田ではなく素の桑田でいくと宣言したその投球は、快投よりも怪投が相応しいもの。ローズの胸元をつくと、ローズが見せた怒りにも桑田は何ら悪びれる仕草はない。にやりと不敵に笑うとおなざりに帽子を取ったのだ。

「桑田、ファッキユー！」

指さして、汚い言葉を続けるローズであるが、桑田の精神力の前に脅しは意味がないとすれば、すぐに怒りの演技を引っ込める。

「慎之助、あれ桑田か？」

「あれも桑田さん、いやあれこそ桑田さんだ、タフィー」

伝家の宝刀カーブに、シュート、スライダー、スプリット、チェンジアップ。縦横に奥行き、そして打ち取る執念まで加わった桑田は手強い投手に変貌している。

１－１の並行カウントから繰り出したストレートがさらにそのレパートリーに加われば鬼に金棒だ。

「なんや、今のストレート。これ桑田か？」

阿部のミットに心地よく飛び込む桑田のストレートの前にローズは大きな目を白黒させる。

「これが桑田さんだよ……タフィー……って、こんなストレート投げれたんだ桑田さん……」

女房役阿部も驚く桑田のストレート。

「あ、そうか全盛期に肉体を戻したんだっけ」

忘れがちな設定を都合よく口にする阿部捕手に感謝して次回。

西本野球が密かに進行中でした。後付ではないですよ、後付では、なんども繰り

性根をさらけ出した桑田の投球にはスキがない。ローズを内角高目の釣り球で脅し、外の低目一杯にのびのあるストレートが決まったのなら、もうローズの頭は複雑怪奇の迷路にハマってる。

「１００球に一球や。桑田のあんな球二度とこんわ。のう慎之助」

「そう思ってなって。この桑田さんは、タフィーがよく知る桑田さんじゃないんだぜ。オレのミットを蹴破るような回転を持って飛び込んでくるストレートを投げれる桑田さんだ。しかも、全国津々浦々の野球人のお手本のような聖人・桑田さんじゃない。今の桑田さんは、マウンド上のマフィアだからさ」

「マフィア？　日本でいうヤクザか？」

「日本で言い換えなくてもいいでしょうが。あんたの母国の言い方じゃないか」

「あ、そやったな。マフィアや、マフィア。桑田はマフィアや。それでマフィアだと、どんなボール投げるんや？」

「そうだな。清く正しく正々堂々の投球はしてこないだろうよ。しつこく、時に陰湿の壁を乗り越えてあらゆる手段を講じてタフィーを斬りにくるんじゃないかな」

「おい慎之助」

「なんだよ、もうしつこいうな」

「清く正しく正々堂々って言い方、表現がダブってるで。同じ言葉を繰り返して、より強調したいんやろうけど、それならそれで、ちょっと違う言い方したほうがええで。例えばな、清廉潔白、正々堂々とかな。これなら正しいって言葉がダブらず、違和感ないやろ？」

「はいはい……。って、なんでオレが、タフィーに日本語教育されなきゃいけないんだ」

秘めたる悪童の心を開いた桑田は、ローズの仕草を見て、投げる投球を決めた。桑田が決めたといっても、主導権は阿部にある。阿

部と桑田の考えが共鳴すれば、サイン交換は穏便に済むのであるが、桑田はただひたすらに首を振りつづける、桑田特有の捕手方向に猫座に構え、グラブを前に突き出し、斜めにした帽子にアウトローならではの雰囲気を醸し出しながら、桑田の首は左右に揺れる。

追い込まれるとヒット狙いに切り替える頭の良さがあるローズの特性をよく知った阿部は、流し打ちしやすい外角を二球を続けるよりも、ローズの穴でもある内角をつく腹づもりであった。もしボールならそれでよし。２－２の並行カウントから仕切り直しお狙いがあったが、桑田は一気にローズの息の根を止めようとしている。

桑田の雰囲気で勝負したがってると感じた阿部は、サインを落ちる珠に切り替えた。三振が多いローズは、その反面、落ちるボールを見逃せる選球眼の持ち主でもある。落ちるボール絶対主義の日本に１３年もいれば、その対処法など自然に身につくのだ。

だから阿部は、ローズに落ちるボールを投げさせるのは無駄と思うのだが、内角で勝負してこないとなるとこの攻めしか見当たらない。投手絶対有利のカウントから、打者有利のカウントに量りのメモリが戻ることを覚悟してサインを出したのだが、桑田はそれでも首を縦に振らない。

「まさか」

半信半疑の阿部は、外角のサインを出した。二球連続の外角勝負はあまりにも危険。ストレートに勢いがあるとはいえ、ローズならば同じ球を続ける攻めの対応は容易だからだ。

「え？　これも違う？」

それでも桑田は首を縦に振らない。じれた阿部はサインを出すのをいったんやめて、頭の整理し直しにかかる。

「内角も落ちる球もダメで外角もダメ？　なら何を投げたいんだよ、まったく。いつもの桑田さんなら、オレに気を使ってくれてある程度捕手任せにしてくれるのに、今の桑田さんは妥協をしないな……。あ、もしかして首を振ってローズを惑わす作戦？　いやでもわざと首振りも、ちゃんとサインは用意されてたし……。うん？　もしか

して、球種が違う？　桑田さんの球種のレパートリーで決め球となるのはストレート、落ちるカーブとフォークだけ。シュートとスライダーは左打者のローズには効き目がないとはなっから頭になかったが……」

おそるおそる阿部は、サインを出す。外角のスライダーのサインだ。桑田のいつもの投球術からすれば、内にスライダーの決め球はあっても、外からねじ込むスライダーはないはずだ。打者を欺くよりも、投手の純粋な完成度で打者を仕留めたい桑田は、ボールと見せかけて、外からゾーンに入ってくるスライダーを嫌うはずであるが、今の桑田はマウンド上のマフィア。なにをしてもゼロに終えることを優先する。

「お、うなづいたぞ……」

阿部と桑田がようやく以心伝心。二塁走者大石がローズにコースのサインを送ることを見越して、阿部はわざと内角に構える。桑田の投げると同時に外に体を寄せる初歩的なトリックプレーなのであるが、大石も熟達した野球職人。阿部の誘導にはかからず、阿部の動きを持って、ローズにサインを送る。

「ローズ、外だ、外だ」

大観衆のドーム内、叫び声よりも、伝わるのは大石の必死のジェスチャー。腕をさかんに大石から向かって右方向に振ると、大石監督、ローズ選手で一年半を過ごしたローズは首尾よく勝負は外角と反応をする。

「大石、ありがとう。ホームに帰ってこいよ」

ローズはコースだけでなく、さらに球種も知っていたのだ。西本野球の影の真骨頂、サイン解読は初回から密かに進行中。西本野球対策十分の川上巨人は、複雑なサインとそれをイニングごとに変えることをもって解読の恐怖から逃れ続けてきたのであるが、解読からの逃避もこのイニングは失敗に終わったのだ。サイン交換にいたずらに時間を食うことを嫌った桑田が簡単なサインを要望したことが事の始まり。それでも素人が一見では理解不能のものであるが、

二塁走者は大石だ。高度な野球頭脳でサインを一瞬に解読。コースを伝えていた時の腕の振りが三本指であったことで、ローズはスライダーと球種まで知ることが出来ていたのだ。

「外からスライダーをねじ込んでくるやと、桑田のクセに猪口才な、力いっぱい叩いてライトに放り込んでやるわ」

ローズは大きな鼻をふくらませて、ボールからストライクゾーンに切れ込んでくるスライダーを狙いにいったのであるが。

「あ？　あれ？」

ボールは内に切れ込むことなく、さらに外へ外にハズレていく。桑田はスライダーと真逆の動きをするシュートを投げたのであった。

「大石、スライダーちゃうやん」

空を切ったローズは首を振るのであるが、阿部が出したサインも確かにスライダー。だから真逆の動きをしたシュートに体をついていくのがいっぱいいっぱいで、驚異的反射神経で後ろにそらすことがなかったのは幸いであったが、

「桑田さん……なんでシュートを投げたの？」

三振を取れたがいいが、振り逃げの危険性お十分あったボール。見過ごしてはならないと早速、阿部は、何度もガッツポーズを繰り返す桑田を捕まえて事情徴収。

「桑田さん、サイン間違いですか？」

「オレがそんなミスするわけないやろ」

「でも僕はスライダーのサインを出しましたよ」

「大石がサイン盗んでるのがわかったから、逆のボールを投げたんや」

「さすが桑田さんと言いたいところですか、あやうく振り逃げだったっすよ」

「あれくらい逆いっても取れるやろ」

「いやでもキレがすごすぎて、もう一歩足の運びが遅れたら、逸らすとこだったすよ」

「逸らす？　捕手が投手の投げたボールを逸らすやと？　ありえん

わ。もし逸らしたら、お前を水道橋の駅の前の神田川に沈めたとこやったわ」

「い、なにもそこまでしなくとも」

いつもと違う桑田の迫力にビビる阿部であったが、桑田の変貌もラインの内まで。ファウルラインをまたぐと、いつもの柔和な桑田が帰ってくる。

「いやあ、慎之助。よう捕ってくれたね。大石さんがローズにサインを伝えてらっしゃるのが感知できたから、瞬間的に逆の動きのボール投げちゃってごめんよ、うんごめん。でもうまく鳴ったよ、本当、慎之助はうまくなった。お礼に年代物のワインをご馳走するからね」

「え、ははい……」

桑田の急変ぶりに戸惑う阿部。

「どっちがホントの桑田さんなの？　どっちも桑田さんかな……」

7回裏、ラッキーセブンの攻撃。今や懐かしきジャイアンツファイヤーが流れ巨人反撃のムードがいやでも盛り上がる中、近鉄のマウンドに登るのは……。

「え？　ワシ続投？」

前の回の熱投で燃え尽きたはずの鈴木啓示が、危険度の高いといわれるマウンドまたぎしかも、大ピンチを切り抜けたあとのマウンドを踏む。

「監督時代は、佐野のボケがリリーフ風情が、二回投げるだけで文句いうなドアホが思うてたが、たしかに大変やな、リリーフいうのも」

近鉄自慢の救援陣お披露目近々？

「しかし西本監督。ほんまにエエんですか、鈴木さんをこの回も行かせて。慣れないリリーフにプラス、長嶋さんゴジラ斬りで相当まいってたようですよ」

「しゃーないやろう。高橋由伸、阿部と左が二人続くから、そこまで投げてくれんと、抑え４人衆につながっていかんわ」

「抑え４人衆（石本、吉井、赤堀、大塚）の実力なら残りの３回を４人で賄い切ることも可能や思いますが」

「甘いな、佐々木。だからお前はええ年して解説首になるんや」

「現実にひっ迫する問題は言わん約束ですよ、西本監督……」

「お前の現実はええとして、久保、抑え４人衆の特徴いってみい」

ブルペン連絡用の受話器片手に、事細かな指示を与えていた久保は、西本の指令が下るとそっと受話器を元に戻す。

「抑え４人衆の特徴ですか？　いまさらのようですが、投手チーフの私にはチームの命運を左右するリリーフ陣について、ベンチにいる首脳陣ひいては選手たちへの説明義務があると肝に銘じて……コホン。え～まず一番の古株の石本貴昭から。抑え４人の中で唯一の左腕です。左打者に当てるは当然して、まっすぐがスライダー回転するクセ球は、右打者にも十分通用します。猪突猛進の性格そのままストライクゾーンで勝負しがちで、一発の危険性も常につきまといますが、梨田さんのリードや、私たち首脳陣のきめ細かい指示でうまく操縦すれば高い確率で打者を牛耳ることができるでしょう」

「なるほど、石本は右も左にも通用するが一発注意か。次」

「え、吉井はご存知の通り、強気な攻めに特徴があります。今や先発吉井、野茂直伝のフォークの吉井のイメージが強いですが、元はえげつないシュートと球威溢れるストレートでねじ込むタイプです。抑えの吉井は冷静沈着の先発の吉井と比べて、熱くなり過ぎて自分を見失いがちです。長いイニングをこなせる投球術はありますが、

抑えに心身ともヒートする性格を考えると長くても1イニング程度の短い仕事場を与えた方がいいでしょう」

「なるほど吉井、特に抑え吉井は、クレージーな男やから長丁場は載りきれないいうわけか」

「次は大塚ですが、大塚といえば私が近鉄コーチ時代に最初に手がけた男。不肖の弟子との言葉がありますが、まさしく大塚によく当てはまる男。球団のご行為に甘えての夢のメジャーへのポスティング。それが入札0と近鉄残留の運びとなると、大塚は一転残留拒否で翌年のメジャー挑戦を容認した中日に一時的に身を隠しました。その時私は、大塚という男は恩を仇で返す男なのかと、彼を見限るような発言もしましたが、それも遠い過去として水に流しましょう。投手大塚はとにかく素晴らしい投手です。球威だけなら野茂以上、そして縦のスライダーのキレは誰にも手出しできない必殺のボール。ただ燃焼型というか、長いイン軍を投げれる球種も技術もない男です」

「大塚も短いイニングがええってことか。よし最後」

「赤堀ですが、彼は古き良き時代、最後の抑えでしょう。1イニング限定などやわなことを言わず、3回でも4回でも平気な顔で投げきる男です。今のリリーフ陣なら3人いや4人がかりで抑えにいく終盤を一人で投げてくれるのですから、コーチにとってこれだけありがたい投手はいません。いわばセットアッパー＋セットアッパー＋クローザー＝赤堀です」

「ほう、赤堀は長い回いけそうやな、佐々木これ聞いてどう思う？」

「近鉄の誇る抑えが4人もおるんですから、7回のこのイニングからどんどんつぎ込んだほうがよろしいちゃいますか？」

「あほう。相手は巨人やで。いくらいつものペナントじゃ1イニング投げれる投手やからって、この舞台でそれが通じるか。3イニングを4人より、2イニングを4人の方が勝つ確率が高いわ。つまりこの回をやな、抑え4人衆の手を借りずして乗り切るんや。さすれば近鉄の勝利、そしてワシ悲願の打倒巨人、いや打倒川上のテツと

なるんや。あのメガネの奥のめんたまよう見てみい。あんな冷徹な人間の目あるんかいってものよ。勝つのワシら近鉄人情野球や」

鈴木がもう一度アクセルを入れなおして、この回を締めれば勝利の確率は限りなく１００％に近づくと西本は読むが、現実はけして思い通りには進んでいかない。

鈴木の甘く入った肩口からのスライダーを初回のフェンス激突により肩の痛みがいまだ癒えない高橋由伸は、歯を食いしばり得意の初球打ちだ。ラインドライブのかかった打球は、近鉄守備の穴を襲う。

「なんでライトがマニエルのままなんや～」

西本がいまさら超攻撃的野球を悔やんでも遅い。ライトのマニエルは右中間破ろうとするこの打球になんとかもつれる足で追いついたはいいが、二度、三度とジャックル。これを見た高橋は二塁を陥れる。

二塁ベースに頭から滑り込む高橋の野性味あふれつプレーは、まさにウルフの名前を久々に思い出してくれるもの。高橋の果敢なプレーに矢のような返球が合わされば、クロスプレーの迫力はさらにますのであるが、マニエルにそんな肩の強さは期待できない。

へろへろのボールが何度ものバウンドをもってして、中継の大石に返ってくるのがやっと。

「マニエル交替や～」

西本が癇癪を起こすが、７回もマニエルを守備につかすのは西本が決断したことなのだ。

時間を7回表終了間際に戻してみよう。

「西本監督、もう終盤です。守備固めにいきますか？　特に外野をどうにかしたほうが」

「あほう、マニエルは8回に回ってくるやろう。超攻撃的野球と腹を決めたら、打席が回る可能性があるならそこまで耐えるんや」

このセリフを吐いた時の西本はさすが名将の貫禄に溢れていたのであるが、今の西本ときたら、まるで駄々っ子そのもの。

「ええい、誰や、マニエルそのままいかせいいうたの。佐々木、お前か？　藤瀬（外野守備走塁コーチ）お前か？　それとも鈴木貴久（打撃コーチ）お前か？」

ヘッド格の佐々木や外野守備走塁コーチの藤瀬はまだしも一打撃コーチである鈴木に外野守備に対し何の権限があるのだろうか。

止めどなく広がる西本の癇癪は、阿部の一振りで無限大に膨張する。

Ｖ９巨人の要リードの森を控えにして試合に出続けた阿部は、ついにその天才的打撃センスを披露する。

「また外野や。今度はレフトや、マニエルやない！　やれやれ……やないわ！　レフトもポンコツのブライアントやないかい！」

西本のいらだち紛れに、蹴られ続けるベンチ前のコンクリートが変形しだすころ、阿部の放った打球はブライアントの頭を超えていこうとする。

岩隈さん、出てきなさい。

高橋由伸の二塁打でマウンド上の鈴木啓示は自らを失ってた。一発長打を恐れず、ストライクゾーンに投げこむのが鈴木啓示であるが、慣れぬリリーフ、おまけに長嶋松井斬りの疲労感と満足感を持ったままマウンドをまたぐのはさすがの３００勝の大投手でも、さすがに我を失うようで、威風堂々としたマウンドさばきがどうも見られないのだ。

いつもの鈴木なら梨田の及び腰の配球だから打たれたと居直るところだが、今の鈴木は、間違ったところに投げ込んだと狼狽しているのだ。一定の気温で快適なはずの東京ドームのマウンドでしきりに落ちる汗を拭う鈴木であるが、ぬぐい切れぬほど、次から次へと汗が吹き出るものだから、マウンドの土は鈴木の草魂のつまった汗で湿っていく。あざやかな土色だったマウンド上が、精気を失った薄ら黒い土色に変わるサマは、まるで鈴木の心の葛藤の変化を映し出しているようにも見える。

「なんで、まだワシが投げなあかんのや。西本監督、頼んます、ワシを試合の重圧から解放してください」

鈴木が投手生活でおそらく初めて吐いた弱音。それでも西本はどかっとベンチに座っている。西本を突き動かさないのは、鈴木への信頼か、それとも投手のコマ不足からくるのか。

「むむむ、スズ、この回だけ耐えてくれ」

阿部への初球、西本の眉間のシワはさらに深くなる。慎重を期して入ったはずの外へのボール球のカーブがたたきつけられるようなワンバンドになる。梨田は体ごと止めにいき、高橋の三塁進塁は妨げられたが、それでも鈴木の限界を示すのは十分すぎる一球だった。

「むむむ、おい久保！」

腹立ちまぎれに久保を呼びつけると、西本は最大の問題児の名を上げた。

「岩隈を用意させろ」
岩隈は西本が自分を先発隠しのダミーにしたことに腹を立て、ロッカーに籠城中。誰にも入ってこれないように、パイプ椅子やテーブルなどがロッカーの扉の前に敷き詰められている。
岩隈はただ一人、ロッカーに腰をかけてケータイをいじっている。岩隈の心が試合にあるのなら、そのケータイは途中経過を表示しているはずであるが、残念ながら、岩隈の心は目の前の試合にあらず。家族の近況を知るためのメール画面だ。岩隈がこの状態なら、いますぐの継投策は不可能。抑え４人衆の出番が８回からに限定されるならば、残るセットアップマンは一人だけ。田中将大がその人あのであるが、田中といえば、
「西本監督、田中で行きましょう。高校ＷＢＣ五輪とリリーフ経験も豊富なマー君なら、この苦境をしめてくれるはずです」
「田中はダメやいうてるやろ。ワシは好かんのや、近鉄のユニフォームに一度も袖を通しとらん輩がこの試合に参加するんが」
西本の頑固さに、田中の出場停止は解けない。ならば鈴木に託すしかないのであるが、
「久保、岩隈や。クマに投げさせろ」
「ですから、岩隈は……」
「岩隈は頑固な男や。ワシによう似て一度そっぽ向いたらなかなか振り向いてくれん男や。でもそんな岩隈を懐柔できるお人がこの世の中に一人だけおるんや」
「え、誰ですか？　ご両親ですか？」
「違うわ。ご両親やない。もっと影響力ある人や。ワシは直接知り合いやないが、間接的には知っている人や。実はな、さっきその人にな、連絡したんや。岩隈を動かせるおひとはあなたしかおらんとな。もうドームに来るはずや。ワシは上林いう捕手と毎日時代の同僚でな」
「上林……？？」

鈴木の球道はどうにも定まらない。無四球試合の記録を持つ男がどうしてこれほど制球力を乱すのだろうか。それが大試合の重圧か、巨人打線の威圧感か。

阿部がのけぞるような逆球を投げると、西本は重い腰をあげる。

「岩隈や、岩隈がロッカーから出てきたで。久保、岩隈つかまえて、急ピッチに仕上げるように支持せい」

「え、岩隈出てきましたか？」

西本には聞こえていた。岩隈が重い扉を開けて、試合に戻ってきた福音が。ベンチの裏から顔をのぞかせる長身の茶髪の男。それはまさしく岩隈。

「どーも久保コーチ、ご心配かけました。岩隈久志、ただいま試合に復帰します！」

「どうしたクマ、あれだけ固くなだったお前が……」

「あのお人に言われたな、出てこなきゃしゃーないですよ……ふふふふ」

「あのお人いったいそれは誰……」

「あ、その前に西本監督！　すいませんでした、つい切れてしまって……」

西本に深く頭を下げる岩隈。頑固一徹さは岩隈の比ではない西本。いつもなら簡単に許さないはずが、今はそれどころじゃない、

「反省したら許さん道理はないわな。岩隈、はよう、ブルペン行け。出来上がり次第、お前をこの回の後始末を任せるで」

「はい、分かりました！　肩が壊れてもいいくらい手早く投げ込んできます！」

岩隈はブルペンに走る。それにしても、岩隈の心をここまで解き放てる人物とはいったい誰であろうか。

「西本監督、いったい誰を呼ばれたんですか？」

「久保、勉強足らんなあ、上林いうたら毎日におった捕手や。そのあとは某有名宗教団体が深く絡む政党の議員になったんや。某有名宗教いえば、岩隈も信仰しとるよな。そこの一番お偉い人が出てき

れくれ言われたら、いくら天照の大御神・岩隈でも動くやろ」
「あ……その人はもしや……いけ……」
「ふふふ……。巨人には負けれんのや、川上が率いる巨人にはな」
西本にそこまでさせる巨人いや川上に対する積年の思い。その思いが重責になったのか、鈴木は阿部に痛打を浴びる。
ブライアントの頭を越えて、ワンバウンド、ツーバウンド。ブライアントのそこそこの肩を持ってしても高橋由伸の本塁生還は防げない。
3－2。ついにゲームは一点差。そして今しがた作り出した岩隈に登板命令がくだる。
「次、いや次の次にいくで」
無死一塁、打者は坂本、一点差。送りバントと読んだ西本は、岩隈の投入を9番、おそらく代打がでるだろう、そこに定めた。
「阿波野ー鈴木ー岩隈。こんな命がけの継投がテツにできるか」
西本の自負を嘲り笑うように、川上は策を打つ。必死の継投をしたいならどうぞ、巨人は戦力の厚さで打ち破るからとの意思表示か。
まず阿部がベンチに戻ってくる。泳ぎそうになった外のボールを腰を逆回転させる得意のツイスト打法の粘り腰で左中間に落とすヒットを打った阿部はご満悦。ただツイスト打法は腰を戻すためについついスタートが遅れがち。二塁までいけた打球を一塁止まりの単打にしたのだから抜け目ないＶ9首脳陣の目は誤魔化し切れない。戦略上だけでなく罰則の意味もある交替におもわず控え捕手の森がほくそ笑む。
「阿部、減点やな。ふふふ」
出された代走がこれまた豪華。１２球団広しいえど代走に名球会会員を切れるのは巨人くらいだろうか。
赤い手袋柴田勲が青白いヒゲの剃り跡をムンムンとさせ一塁ベースに走る。
そして打者は坂本。高い確率で送りバントのこの場面。ベンチにはこれまたスペシャリストの顔がある。

「バント、バント、バント、バント、バント」
バントなら川相しかいない。本人すっかりその気でバットを持って準備に余念がないのだが、川上は一向に川相を呼ぶ素振りすらない。
バントの構えをして必死のアピールの川相であるが、それも虚しく川上には届かない。
「坂本、頼んぞ」
荒川打撃コーチが坂本のおしりを叩いて激励する。
「あれあれあれ？　もしかして首脳陣の皆様、バントなら坂本でもできると思っているんですか？　いやいやバントの世界はそんなに甘くないですぜ」
坂本は首脳陣の期待に応えれるだろうか。

岩隈さん、出てきなさい。（後書き）

なんか色々とやばいなこの小説

荒川道場緊急開場

「阿部、アレだぞ、アレをやれ」

阿部の適時打に隠された秘話。荒川博打撃コーチが打席に入る阿部を捕まえて耳打ちをしていのだ。

熾烈なサバイバルの渦に飲み込まれているのは選手だけでなくコーチ陣も。全試合の契約をしている首脳陣は監督の川上と牧野ヘッド、藤田投手コーチのトロイカ体制だけ。あとのコーチは試合ごとの招集なのだ。６回まで長嶋のソロ一点だけの打撃陣の責任を問われるのは必至。首筋に涼やかなものを感じていた荒川はいてもたってもいられず猛アピールに出た。

阿部にアレをやれと耳打ちしたが、阿部どころか荒川自身もアレの正体はわかっていなかったのだ。

愛弟子王の一本足打法の誕生秘話は王の教育係を任された荒川が王の不振にたまりかねた他の首脳陣の突き上げがあったから。荒川はキャンプでほんの一時取り組んだ一本足を王に指示。アレをやれといわれた王は一本足を披露。そこから王の本塁王の物語が始まるのだが、阿部と荒川にそんな密接な関係があるわけがない。

「アレ？　アレってなんだよ、わかんねーよ」

阿部はぶつくさと打席に入り、得意のツイスト打法を披露したのは荒川の指示とは無関係のこと。それでも手柄を自分のものにしたい荒川は必死にアピール。

「見ましたか、川上監督、今の腰を逆にひねる打法！　あれがアレですよ。私が阿部にやれといったアレですよ！　えっと、ツイツト？　なんかそんな名前の打法だよ。アレ、私が阿部に教えた打法ですよ！」

一連の報道でツイスト打法の正体を知っていた首脳陣は荒川には騙されない。左門豊作似の荒川は、取り繕うようにずり落ちそうなメガネを直す。

「おい王、真剣振れ」
まずい雰囲気を感じ取った荒川は唯一の頼りである王に、意味不明の特訓命令を下す。そして荒川は坂本に近づきバントのイロハを教え込む。いまさらのことばかりで坂本はいかにも嫌そうな顔。
「いいか、坂本。バントいうのはな。バットの先端を利き手で持ち投手に正対してだな」
「はあ……」
バントといえば川相の右に出るものはいない。川相は一言口添えしたくてたまらない様子であるが、コーチでもない川相はそれもできない。試合の雌雄を決する展開だけに、さすがの川相も坂本のバント失敗を願えないが、それでも送りバントの場面で自分が指名されないもどかしさに体を震わしている。
「オレなら１００％決められるのに、どうしてオレを指名しない？
坂本なら代打で出てそのままショートの守りにつくスムーズな交代劇を提供できるのに」
確かに川相なら絶対送りバントの場面でも決められる場数を踏んだ経験と卓越した技術力がある。
外野守備走塁コーチの高田は川上に川相の起用を進言する。
「監督、川相使いましょうよ。川相なら１００％まではいいませんが、９割は決めれますよ」
「坂本でも７割決められるだろうよ」
「たかが２割ですか、されど２割ですよ。確率の高い策をとるのがＶ９野球ではなかったんですか」
「土井まだまだ甘いな。選手を使い切る場面じゃないんだよ。まだまだ終盤もつれる場面はくる。ならば唯一の控えの二遊間である川相はその時のためにとっておくのが常道。もし９回一打勝負を決する場面で坂本の打席がきたらどうする？　代打を出せなくなるじゃないか。私は坂本の実力を信じているが、信頼はしていない。坂本に任せるよりも優秀な代打がいるじゃないか、うちのベンチには。もしこの回に川相を切ると送りバントは決められるかもしれんが、

その後の采配の融通が効かなくなる。だから私はあえて7割の確率でバントを決めれる坂本に期待をかけて送り込むのだよ」

「なるほど、勝負全体を考えるなら時に低い確率を取る。V9巨人野球は奥深いですなあ……」

7割の成功とは一見、高い確率であるが、送れて当然のバントの性質を考えると、幾分低い成功率だ。

「ああ～」

鈴木の高目に浮いた速球。浮き上がる球威もないこのボールは、川相ならいとも簡単に決めれるボール。それでも坂本は一発で決めることができない。技術力の単純の不足か。それともかかる重圧の重さにさすがの現代っ子坂本も手が震えたのか。

「一発で決めてくれよ、なんども一塁と二塁の間行き来するのもかなわんよ」

一塁走者柴田はそうぼやく。

「ねえ土井ちゃん」

一塁手は土井。名球会仲間であり、同級生である土井にフランクに接する。

「ねえ今日空いてる？　ポーカーやらない？」

「柴田、あいにく今日はマージャンの約束あってたな。どや、お前もやらんか？」

「マージャンって土井も凝りないね。なんどもマージャンで痛い目にあったのに」

「そういうお前もやろ。事件後の会見でトランプ柄のセーター着てたお前には言われたくないわ」

「スチールもある」

梨田は坂本の送りバントと決めつけない。初球の坂本の拙いバントを見てサインを変えてくる可能性をみたのだ。

「柴田さんに走らせる？　エンドラン？　それとも走らせてバントか。それなら坂本の肩の重荷も少しは軽減される……。柴田さんの

足なら少々まずいバントで転がせば二塁はセーフになるからな」
坂本は打席を外し一塁コーチャーの土井からサインを受け取る。複雑な指示が送られているのか、時間がかかる。巨人にしたら念密な意思疎通を図ってるはずが、近鉄にとってはもってこいの時間稼ぎ。
岩隈が急ピッチで調整をしているからだ。
「よし、肩が軽いなあ～　なんだろう、この爽快感。やっぱりあのお人直々にありがたい激励を受けたからかなあ」
恋女房藤井ブルペン捕手のミットに切れのいいボールがビシビシ決まる。岩隈は思ったより早く肩ができそう。それもこれも巨人の時間のかかるサイン交換のおかげなのだが、さすがのＶ９巨人首脳陣にもそれは見越せない。
「あ、やったわ」
鈴木が投げると同時に柴田がスタートを切る。単独盗塁のギャンブルスタートではない。バントの手助けをするバントエンドランのスタートのタイミングだ。鈴木は坂本の懐厳しいところにボールを突くが、球威の激減した今、坂本でもバントスポットに当てられる。
「お、やった」
坂本がやっとの思いで送りバントを決めるたその時、久保からの連絡の電話を取った小野ブルペン担当投手コーチの小野が岩隈の名前を叫ぶ。
「クマできたか？　次行けだとよ」
「万全っす。小野コーチ！」
岩隈がブルペンの重い扉を開く。

荒川道場緊急開場（後書き）

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４０２８ｋ／

ファミコンに少しでも思入があるならこちらもどうぞ

質は保証しません

ＭＸテレビの実況

「藤井さん、行きますよ！」

岩隈はいままで投球を受けてもらっていた藤井と同時出撃を促すが、藤井が猛者ぞろいの近鉄捕手陣に割って入るのは難しく。

「おいおい、クマ。オレがベンチ登録されてるわけないやろ」

「え～藤井さんあっての僕ですよ！　それじゃ捕手は誰なんですか」

岩隈と藤井といえば近鉄時代から慣れ親しんだ黄金バッテリー。０９年クライマックスシリーズの救援登板時、岩隈とともに藤井がコールされたのは記憶に新しい。

「なんだクマ、それも知らんで。今まで何を見てたんや。監督だよ、捕手は監督」

藤井と岩隈の共通の監督といえば三人だけ。そのうちの二人が捕手出身だから確率３分の２。いくら時に空気の読めない岩隈でも３３％のハズレクジを引くとは恋女房藤井も思わない。

「え～ブラウンですかあ～　あの人、捕手なんかできるんですか～？」

「あほう」

藤井は岩隈の勘違いを直ちにただそうとするが、そこは悪乗り軍団近鉄の事。

「よう分かったな、ブラウンやぞ」

吉井が口火を切れば、

「ブラウン、近鉄の捕手やったやん。仰木さん時代末期は、オレと山下さんと古久保さんとブラウンの４人の日替わり捕手やったなあ」

ブルペン捕手としてベンチ入りしている、近鉄～中日～巨人～ロッテ～横浜～韓国プロ野球～ＮＯＭＯベースボールクラブのその長ったらしい経歴のどこにも見当たらない日本ハム専属の解説者としてすっかりおなじみの光山も乗っかってくる。

「ブラウン、あのメガネのメタボおっさん大丈夫かなあ～」

岩隈は首をかしげながら、ブルペンから出撃する。

「坂本くん、犠牲を払ってまで僕がヒーローになる絶好のチャンスを作ってくれてありがとうな」

「え、桑田さん、打席に入るつもりですか？」

「ふふふ。投げて打って走って、それがスーパースター桑田真澄さ。打つだけ、投げるだけじゃ、野球選手やない、ただの投げてと打ちてや」

９番に入っている桑田は、自分が打席に送り込まれることを信じて疑わない。いくら打撃センス抜群の桑田といえど、本職の打者の打撃にはかなうわけはない。ましてや巨人軍のオールスター。ベンチには、原や与那嶺らスタメン入りならずがおかしいほどの選手たちが控えている。

時に自信が暴走する桑田だ。桑田の妙な思い上がりが桑田を打席に送り込んでいるとおもいきや、べ代打を送ろうとするベンチの動きがないのだから仕方がない。

「どうみても僕だよなあ……」

自称代打の切り札原は、首をひねる。

「カワカミはソコマデボクをキラウノ？　ドウシテ？　ボクガデショ？　ナゼクワタをダセキニオクルの？」

一発長打の原よりもむしろ好打者与那嶺のほうが一死二塁のチャンスには期待ができる。それでも与那嶺が呼ばれる雰囲気はない。

「まさか？　え？」

バントの出番を坂本に奪われて、内心すねている川相であるが、原や与那嶺が呼ばれる雰囲気がないならばまさか自分が代打？　と川上や牧野の顔を交互に見るが、川相を求めている様子はどこにもない。

あならば誰が代打に送られるのか。それとも桑田の打撃を信じて送り込むのか。

「よっしゃ、投手は岩隈か。フォーク注意でいつもよりバットを短

く低目を意識して立つか」
　桑田は都合のいい未来像を思い描くが、ビジョンを描いた画用紙はクシャクシャに捨てられることになる。
「桑田ご苦労」
　川上が桑田を呼び戻す。桑田ががっくりと肩を落として、ベンチに戻ってくる。
　川上はベンチの誰にも代打でいくぞと声をかけていない。原にも与那嶺にも川相にも、そして森、山倉の控え捕手二人にも。ならば誰が代打とコールされるのだ。川上は球審の岡田を呼び寄せて、思いもよらぬ名前をコールする。
「代打ワシ！」
　なんと自分の名前をコールしたのだ。選手兼任監督として登録している川上が起用されることはなんんの問題はない。ただそれでも代打川上が異様な作戦に思われるのはワケがある。川上が監督時代の風貌のままだからだ。白髪にやや太めの体つきはどうみても今すぐに打席に入る風貌ではない。背番号も監督時代の７７だ。監督としての威厳を光らせるためにわざと監督時代の風貌を選択した川上であるが、このままの打席入りは、マスターズでも違和感がある。
　だが、川上がやや黒みのかかった赤に染色された赤バットをとった瞬間、奇蹟は起こる。
「おお～」
　それを真近で見ていたクールな桑田でさえ目を丸くする演出。なんと川上はバットを握った瞬間、明らかに若返ったのだ。髪は黒髪に戻り、体型はシェイプアップされる。そして肝心の背番号は７７からスロットの目がめまぐるしく変わるように永久欠番１６になる。
　粋な演出のもと、川上哲治が永久に野球の神様であることを証明するために打席に向かう。
「川上さん……かあ」
「クマ、川上さんの特徴くらいは知ってるよな?」

「ブラウン……。あれブラウンじゃないよ!?　その柔和な顔は……。なんだ梨田監督いや、いまは選手か。なんかおかしいですよね。監督とバッテリー組むなんて…えへへ」
「まあな。それはまあいい。川上さんといえばなんや?」
「打撃の神様、弾丸ライナー……ですかね?」
「そうだ、川上さんいえば、その二つの異名や。弾丸ライナーいうからにはお前のフォークを思い切り叩いて一塁線破ろうとする打撃してくるぞ」
「僕のフォークを芯に当てるなんて神様だろうと無理ですよ。梨田さん」
「そうかもしれんが、川上さんはもうひとつ異名があるんだよ、クマは知らんかもしれないが」
「え?　なんですか?」
「テキサスのテツや」
「テキサスのテツ?????　なんですかそれ、川上さんってテキサス州出身なんですか??」
「そんなわけないやろう。テキサスヒットのテキサスや」
「ああ……」
「外野と内野の間にポトリと落ちるテキサスヒット、つまりポテンヒットが多いからついたあだ名や。情けないヒットを揶揄しているが、その実、川上さんの凄さを物語っているんや。崩されても執念でヒットに持っていく。この場面、ポテンが落ちた瞬間に同点や。いくらお前の変化球が自信があるいうても注意せいよ」
「わっかりました、梨田さん……えへへ」
「ほんまにわかってんか。どうもお前のニヤケ顔をみるとこっちが入れた気合も萎えてくるような気がしてしゃーないんや」
「えへへ……いいじゃないですか、梨田さん。人生というのは笑顔ですよ、笑顔……。てっぺん行くのは笑顔を携えないと……」

7回裏3ー2、一死二塁で代打川上、投手岩隈、まさに試合はク

ライマックス。

西本対川上

「岩隈、絶対に抑えてくれよ。ワシの炎の救援を無にしてくれるな」
いつもは孤立しがちで、自分が投げていない場面など我関せずで、登板後の体もケアを優先しがちな鈴木啓示もベンチの中央で仁王立ちになって声援を送る。
切羽詰った試合の行方を分かつ場面、つまらぬ信念やプライドを捨てて、ただ勝利のためにひとつになる。それが今の近鉄ベンチのムード。選手の個人的好き嫌いを越えて、チーム一丸となる。

「フォーク、フォーク、岩隈のフォークをとにかく低目に集めれば、いくら野球の神様といえどそうは打てんはずや……」
岩隈を抜擢した恩人でもある梨田は、岩隈に初球から勝負球のフォークを要求する。真ん中低目のストライクゾーンぎりぎりから落ちる教科書どおりの理想的なフォークボールに川上のバットはピクリとも動かない。
川上の現役時代にはライバルの杉下ほか、ほんのわずかの選ばれた投手のみが投げられた魔球フォークにも川上は心の隙間を一ミリも見せない。これには、川上の反応を見るためにあえてボール球から入った梨田の配球も次に生きてこない。なぜならば微動だにしない不動から得られる有益な情報は皆無だからだ。
「さすがやなあ……。代打の一打席きりやから初球から狙いに来ると思うたが、さすが神様や。こっちの考えを読みきったか、それとも図抜けた選球眼がボール球と瞬時に判別したか……」
梨田の戦略にヒズミが出たその瞬間、愛弟子梨田の気持ちを汲み取ったように西本はタイムをかける。
「タイムや、タイム。おい吹石、今からワシのいうとおり守備の指示を出せ」
吹石野手総合コーチを呼びつけると、事細かく守備陣形の指示を

伝える。伝令役と化した吹石一恵の実父吹石徳一実は美人な娘と瓜二つ野手総合兼走塁コーチは、ベンチの前にせり出して、近鉄守備陣を言葉のタクトひとつで大胆に動かす。

「川上は見たことないやろ、こんな野球。いやベンチや解説席茶の間からはさんざん目にしたはずやが、打席から見たことは一度もないはずや。面食らえやがれ、テツよ。そしてワシの愛する近鉄最後の孝行息子岩隈の餌食になれや」

遊撃の村上が二塁ベースにひっつくように守備位置をとると、空いた三遊間に三塁の中村紀が移ってくる。一二塁間は一人大石がガッチリと締め、一塁の土井は一塁ベースの上に立つ。

王シフトもびっくりな大胆なシフト。日本野球で初めて特別な守備シフトを敷かれたのは王。ならば王の入団前に現役を終えた川上には特別なシフトが存在しないことになる。西本には”シフト童貞”川上の動揺を誘う狙いもあるのだろう。さらに動かされた守備位置にもハッキリとした理念があるのだ。弾丸ライナー川上の異名は、流し打ちもできない裏替えしでもあるのだろう。シフトひとつだけで西本の頑固一徹さに打倒川上の執念が伺える。

「また監督は大胆なことをしだしたな」

梨田も初球配球ずみのあとのこのシフトに戸惑いがあるのも事実。ただ大胆すぎるシフトは、梨田から迷いをぬぐい去った。

「西本の親父が頑固なら川上さんも負けじと頑固。意地でも流し打ちなどしてこないやろ。ならば呼応略の糸口はいくらでもある。９０度満遍に使って打ち返す打者には捕手もお手上げやが、４５度のグラウンドの半分しか使ってこん打者には、あらゆる攻め方が応用できるもんや。西本監督さすがに策士や」

引っ張りにくる打者なら外のボール球が効くのは火を見るより明らか。梨田は外角にミットを構え、制球力に絶対的自信のある岩隈は要求通りそこに投げ込むが、選手としての意地よりも、プレーイングマネージャーとしての栄誉をとった川上は、勝利を優先する。

なんと川上は、誰もが予想だにしなかっただろうバントの構えを

見せる。セーフティーバントだ。がら空きの三塁を狙いにいく。まさかと三遊間にぽつんといた中村紀は、猛然と転がされた打球を取りに行くが、どう見ても間に合いそうもない。ならば見送ってファウルを願うしか手はない。取りに行こうとした岩隈を制止する。

「クマ、とるな！　どうせ一塁も三塁も間に合わん」

線上を不安げにコロコロと転がっていた打球は、やがて線の上からハズレて行く。

「ほう、よかった～。フェアやったらエライことになったで」

中村紀がファウルと確認するとボールを拾い上げ岩隈にトスする。

まさかの川上のバント作戦であるが、それでも近鉄は川上シフトをやめない。西本の頑固さがこの時ばかり裏目にでるだろうか。勝負を優先する川上の前にはあまりにも危険すぎるシフトだ。

一塁に走り出していた川上は再び西本野球を粉砕すべく打席へと戻ってくる。

「若い体になったのに、一塁行って戻ってくるだけで疲れる気がするのはなんでだろうな……ふふふ。これも年寄りの生活が長かったからかのう。梨田はどう思う？」

「いやそれより驚きましたよ。まさかドンがバントでこられるとは……」

「ふふふ……梨田。私がバントなどつまらぬものを本気でするとおもうか？」

「え、でも今現に……」

「西本を試しただけじゃよ。わざとファウルになるバントごときでシフトを辞めるような意思の弱い監督なら私のライバルにしてはあまりものモノたらんからのう。ふふふ、しかし嬉しいぞ。それでも断として変えてこんのだから。その頑固さがことごとく裏目に出るのが対私の西本だけどね、うふふふ」

「なるほど……しかし川上監督も頑固ですね。流し打ちすればがら空きなのに」

「個々の感情で勝利を優先するのは巨人野球ではご法度だよ。近鉄

では知らんが。だがのう梨田、私は西本との個人的な勝負にも勝ちのろしを上げ、自軍の勝利ももぎ取るよ、ウフフフ」

「凄い自信ですね、さすが球界のドン……」

「二球、二球もあれば十分。岩隈のボールは見切ったよ……うふふふ」

川上の自信に梨田は震え上がると、居ても立ってもいられぬ西本はまた重い腰をあげる。

「タイム、タイムや」

再びタイムを要求する。球審の岡田から同じイニングで二度目のタイムは遠願いたいとの注意喚起がある。それ以前に西本はなんのためにタイムをとるのか。川上のまさかのバントに怯えて、シフトを解除するのか。コロコロ信念を変えては、西本の信頼が揺らぐというもの。一丸となって燃える近鉄ベンチに水をさすことになろうが……。

「あほう、選手交代や。文句あるかい」

「交替？　誰を替えるんや？　岩隈は今上がったばかりやし、ブライアント、マニエルの守備の穴の両翼は次の回の攻撃を考えて我慢するとあれほど言ってたのに……」

訝しげな梨田に西本が出した解答。それはローズを指さすことで誰の目にも明確になった。

「ワシ？　オレ？　ミー？　ワタシ？　ワテ？」

ただ一人まもとな外野守備ができる自分が呼ばれるとは思わなかったローズは、思いつくばかりの一人称を連呼して戸惑のほどを現す。

「大村いけい」

「待ってました」

ローズの替りに元気よく中堅の守備位置につこうとするのは大村だ。打撃最優先で組まれた近鉄ナインで唯一の守備の人といっていい大村が終盤の一点差のこ状況送り込まれるのは当然すぎる策であ

るが、問題はまともな守備ができるローズを降ろすことにある。
「ローズはもう回ってこん。だから交替させた」
西本の言にも納得できる節はある。残り二回今ローズで終わった打順の回りで、再びローズに回ることを頭に入れる必要はないからだ。同点延長となればローズに何度も打席は回るだろうが、逃げ切り優先のこの場面に延長を想定するのは最悪の事態を考えればありかもしれないが、西本の攻撃的野球は最良の結果だけを追い求める。一点差を守り切る自信のもと送り込まれた大村守備カードであるが、ローズの心中にも配慮が必要。大リーガーの世界において一番屈辱的なことは、回の途中で下げられることだからだ。西武にいたジェファーションが東尾に同じ扱いを受けて即帰国したのは記憶に新しい。
「なんでワイなんや、それも回の途中やぞ……」
ぶつぶつと戻ってくるローズ。せっかくの好ムードをブチ壊しにする火種になるのか。

近鉄外野陣で珍しくまともな守備力のある男

元気よく飛び出す大村に比べて、ローズの不満ありありの顔つきはどうだろうか。打倒巨人に燃える近鉄ナインの士気を歪めることにつながらないだろうか。

「監督ほんまにええんですか？」

佐々木恭介が西本に念を押してももう遅い。選手交代は告げられたのだから。

「ピンときたんや」

「それでもローズですよ。守備に期待のできる外野手ですよ。それにアイツはこういうのを一番嫌うんです！　途中交代にひと暴れしてもおかしくありません！」

「それくらい、わかっとるわ」

西本はやおらローズに近づくと、そそり立つ怒りの湯気を覚ますようにローズを説き伏せる。

「ローズ。悪かったな、いくら打順の回る可能性が低いからって、こんなタイミングでお前を下げて……。だがこれも全部勝つための采配や。打倒巨人や、許してくれ」

しゃべりが上手くない西本が、鼻を詰まらせながらも懸命に言葉を選びながらローズを説得する。言葉のひとつひとつよりも、西本の熱い気持ちがローズに伝わる。

「そやな。打倒巨人や。西本のおやじさんとワシは憎き巨人を木っ端微塵にするために試合をしてるんやったな。個人的感情を捨てなアカンな」

説き伏せられたローズはベンチ最前列になって前のめり。どうやらローズが要因による近鉄内部崩壊は防がれたどころか、ローズ応援団長なる新戦力を獲得したようだ。

「いけえ、岩隈～！　巨人などいてまえ～！」

ローズの声援を受けて岩隈がマウンド上に優雅にそびえ立つ。梨田のサインはあくまでも外角一辺倒。川上が頑固一徹引っ張りを決め付けてるなら、外で勝負しようとの腹づもり。何も川上に付き合って、引っ張りやすい内角を無策にも要求する必要はない。

「川上さんは二球で岩隈を見極めたとおっしゃった。川上さんの現役時分なら、投手などせいぜいカーブ、シュート、まっすぐの三球種がせいぜい。二球も見れば投手のすべてが丸裸だろうが、岩隈はワケが違い。現代仕様の好投手や。ストレート、フォークだけが岩隈やない。スローカーブにスライダーにシュート、いくらでも一級品のボールがあるんですよ……」

外に構えた梨田が要求する第三の球種はシュートボール。もし川上がミート打法に切り替えてきても。どこまでも外に逃げる切れ味いいシュートボールなら、当てても凡打が関の山と見たからだ。

「シュートを弾丸ライナーにできるならしてみてください。野球の神様……」

岩隈の制球力はやはり図抜けている。梨田の構えるところに寸分違わずボールが投げ込まれる。外のゾーンぎりぎりから、シュート回転してさらに外に逃げていく球道は、神様川上持ってしても、当てるのも困難。川上本来のボールの上を叩いて強烈なライナーを放つ打撃はできず、困ったあげく、しゃくりあげたバットにボールの下を当てるのが精一杯。

「よっしゃー！　弾丸ライナーならずや！　凡フライや……」

梨田はマスクを投げ捨てて、川上攻略を喜ぶが、ふらふらと上がった打球に”弾丸ライナー”と違うもう一つの異名を思い出さずにいられなかった。

「この打球の上がり方……。ポテンがある！　神様のもうひとつの異名……テキサスのテツや！　テキサスヒットあるわ！！」

対西本、対近鉄いずれの勝利にこだわる川上は、最初からテキサスヒット狙いであったのだ。外国人揃いの拙い外野陣の前に落としに行けば、ヒットになる確率は高いと踏んだのだ。

センターとライトの間にふらふらと上がった打球。ライトはマニエル。川上の狙いどおり守備にまごつく外野手だ。前進したかと思うとバックしたりと落ち着きがない。そして外野手同士の連携などお構いなしのローズがセンターのままだったら近鉄は大やけどを負ったかもしれない。

が西本のヒラメキによりセンターには大村直之がいる。今日ベンチ入りしている近鉄外野陣で唯一複数回ゴールデングラブ賞を獲得した守備の名手だ。拙い外野手のフォローなどお手の物。

「マニエルさん、下がって！」

マニエルをどかすと自分が取りに来ると声のアピール。アメリカ人のマニエルに対して、日本語での指示は配慮の欠けてるが、そこは日本を第二の故郷とするマニエル。少なからずの日本語は覚えている。マニエルは大村の指示どおり後ろにどくと、回り込んだ大村がスライディングキャッチを持って、川上のテキサスヒットを未然に防ぐ。

「ワシの狙い通りや！　昔からいうやろ、替ったところに打球は飛ぶ！　とな」

「……って西本監督、そんな迷信にすがりついただけの大村投入ですか」

「あほう、佐々木、言い伝えいうのは正しいから、受け継がれていくんや！」

ハーフウェイんいいた柴田が体を切り返し一目散に二塁に戻っていく。これで大村が好送球で併殺完成をできたなら大村は大ヒーローなのであるが、そうは上手くいかない。

大村の送球は大きく逸れて、その間に柴田の二塁到達されてしまうのだ。

「くう～　併殺はならんかったか。まあええわ、これで二死や！　抑え４人を繰り出すまであとワンナウトや！」

打ち取られた川上にさして動揺はない。どうやら凡打による悔恨が采配に響くことはなさそうだ。

赤バットをケースに入れると、川上の風貌は元の監督モードに戻る。白髪が7割を占め肉付きがよくなる。

「惜しかったですね、監督」

「抜けた思うたんだかな。狙いどおりライトの前に運んだのに、たこ顔のセンターにやられたわい。だがな牧野、打席に立ったのは無駄じゃなかったぞ」

「といいますと？」

「見えたんだ、岩隈攻略の全貌がな」

違反フォームの始祖は山崎慎太郎

「牧野ヘッド。一塁コーチャーの土井と三塁コーチャーの黒江を呼び寄せろ。岩隈のクセを伝授する」
「わかりました、ただちに」
牧野が土井と黒江を手招きで呼びつける。川上の言を授かった牧野は、そのまま土井と黒江に岩隈のクセを伝授する。
「岩隈にそんなクセがあったとは……」
「さすが川上監督、たった三球を見ただけでそこまで解剖されるとは」
百戦錬磨の野球職人土井と黒江が驚くような川上の観察眼の恐怖は、マウンド上で会談する岩隈ー梨田のバッテリーにも伝搬する。
「どうしたんですかね、梨田さん」
「あれだろ、クマ。お前をクセを見破ったか何かでそれを伝授してるやろうな。相手は神様川上さんや。一打席でお前を徹底解剖できたもおかしくない」
「一打席で僕のクセがわかるなら、誰も苦労しませんよ」
「オレもそう思うわ。日本ハムの監督としてお前のクセを見破ろうと何度もビデオとにらめっこやが、いくらやっても分からん。まあブラフかもしれんな、一種の演技や。クセが分かったふりして、こっちの動揺を誘うためのな」
「そうですよ、気にすることありません」
「でも不気味やな。二死は取れたが、得点圏に同点の走者がいることは確かや……。そうや、クセがバレたと思うたら、クセがバレんようなフォームで投げればええんや」
「ちょっと待ってくださいよ、梨田さん。そんな簡単にフォームを変えれるわけがありませんよ。このフォームにするためにどれだけ苦労を重ねたかと……」
「今のフォームにするためにどれだけの苦労か。そうだよな、前の

フォームが規則違反となたからには苦労をする必要があったんや……。でも前のフォームはそれはそれで打ちにくいフォームやった、しかもクセが出づらいいうか、どうしても目を取られるフォームの一点がある」

「前のフォームならそりゃ大丈夫ですよ、クセなど出ない」

「なら前のフォームで投げればええ」

「何をいってるんですか、梨田さん。前のフォームは違反投法……」

「お前、この大会の特別ルール知らないな。選手の個性第一の観点で、当時の野球規則でＯＫやった投法は違反にならんのや」

「マジっすか？？　初めて聞いた……。それじゃあ前のフォームでやっていいんですか？」

「それよりお前、前のフォームで投げれるんのか」

「大丈夫っすよ。何千回も投げてたフォーム、神経の隅々に記憶されてますよ」

「そうか、なれそれでいこうか」

「はい！　近鉄のユニフォームを着たのならやっぱあのフォームっすよね！」

一番に帰ってクロマティ。牧野経由で川上の岩隈対策を伝授された土井は包み隠さずクロマティに耳打ちする。土井を野球をよく知った教育熱心の熱い男と自著で高く表したクロマティは土井のいうことなら間違いないと岩隈攻略に自信を深める。

「お～　なるほど～　土井さんありがとー」

独特のクラウチングスタイルで岩隈を迎えうつクロマティは、川上のいう岩隈の３つのチェックポイントに目を光らす。

セットポジションの岩隈はグラブを前にして一時静止。そして足を上げる。二塁走者の柴田の足を考えると、高い足の上げ方は禁物。盗塁だけでなく生還できるかできないかの微妙な当たりのさい、一歩目が違えばセーフになる確率が高まるからだ。

だが岩隈は足を高く上げるどころか、上げた足をまた下げて、二

回足を振りあげる。２００５年の規則の厳密な適用により闇に葬られた二段モーションだ。

「あ、二段モーション！？」

思わず冷静沈着な牧野ヘッドが取り乱し、川上が真一文字に結んだ唇を噛みしめるほど、岩隈ー梨田のバッテリーの作戦はＶ９首脳陣の意表をつくものであった。

クセ解剖どころか、フォーム自体無に返されたらたまったものではない。

足を二度上げた時点で二塁走者柴田は楽々と三塁を陥れようとするが、まったく別のフォームで投げられたクロマティは、伝授されたクセチェックどころではない。たまらず打席を外して見逃す。

「ノー　ノー！　違反ね～！」

クロマティは盛んに球審岡田に規則違反のフォームであると訴えるが、巨人びいきの岡田球審もさすがに受け付けない。

「クロウ、残念ながら事前に認められたフォームなんだ。二段モーションは厳密にいうと違反だが、時代が認めたフォームでな……」

「オーノー」

巨人びいきの岡田球審にそうまで言われたら、お手上げのクロマティ。ならばクセ解剖に頼らず自らの技能だけで岩隈を攻略するしかない。

元々一あまりくらい短く持ってたバットをさらに短く持つ。１９８９年一時期夢の４割達成かと騒がれたミート中心のバットの持ち方だ。一気逆転のヒーローを狙わず、まずは適時打、同点の殊勲者狙いの腹づもり。

気分屋のクロマティの本気に岩隈ー梨田のバッテリーもより警戒心を強める。

「どこにもスキがない。どこに投げてもコツンと打ち返されそうな、雰囲気や」

川上が凡打してもただでは死なずと見つけ出してきた岩隈のクセが無駄になった今、それでもなんとか岩隈を攻略せんとするクロマ

ティのチーププレーの精神は、巨人の眠れる王者の威信を呼び覚ます。

岩隈対クロマティ

クロマティの狙いはレフト前にあった。大村の好守を間の間たりにした今、センター前に飛ばすのは得策ではないと、センター返しを捨て、レフトへの流し打ち一本に的を絞ったのだ。

ワンストライクを取った岩隈ー梨田バッテリーはフォークの連投で空振りを取りに行く。正確なバットコントロールで地面すれすれに落ちて行くフォークボールを捕まえると、打球は狙いどおり拙い守備のブライアントを襲いかかる。

頭の違いとばかり、クロマティは走りながら、ヘルメットをつんつんと指差す。クロマティ特有の相手を挑発するポーズだ。それだけクロマティは適時打になるとの絶対の確信があったのだ。

だが、物事には絶対はない。物事に絶対があるとしたら、カツノリが捕手として先発出場するときの監督は野村克也であることだ。

（だがこれにも例外はある。２００４年、野間口獲得にこぎつけた巨人はカツノリの労をねぎらって消化試合のスタメンに起用し、さよなら試合としたかったが、カツノリはコーチ就任を断り現役続行志願のためそれはただの巨人最後のゲーム出場となった）

ブライアントのまごつく足取りは、西本監督の血圧は急上昇させたが、血管をぶち切らすとまでいかない。

前進、前進、また前進。そして慣れないスライディングを敢行し当てずっぽうで出したグラブの先にボールが飛び込んだからだ。

「やったブライアント！　ワシはお前を信じてたやで～」

「西本監督あれだけブライアントを糞味噌にしたくせにとチャチャのひとつ入れる私ですが、ピンチを切り抜けたらどうでもええですわ！　よっしゃー！」

西本、佐々木の闘将コンビを先頭にまさかのブライアントの好プレー？　に近鉄ベンチは蜂の巣を叩いたかのような大騒ぎ。

一方巨人は同点が、一点スリーアウトチェンジなのだから、嗚咽

とともにうなだれるしかない。
　ブライアントと巨人時代後年が重なり、日本シリーズでも対決したクロマティは、ブライアントの守備のまずさをよく知っていたために、レフト前に飛ばせばヒットは確実と執拗にレフトを狙ったが、その努力もブライアントの奇蹟のスライディングキャッチの前には水の泡。
「お～の～」
　頭を抱えるクロマティ。そして梨田がクロマティの挑発を同じポーズをするこおによってお返しする。「クロウさん」
　クロマティをわざと敬称つきで呼ぶと、頭をつんつんと差す。
　自分の得意のポーズをやり返されただけなのに、クロマティは湯気を立てて怒りまくる。
「ミーを侮辱してるね！　ナシダ！　ファックユー！」
　中指を立てるクロマティ。気分屋のクロマティによけいな火をつけたと梨田のよけいな挑発をたしなめたいところであるが、クロマティがこの回を持って引っ込むのだから。、沸き立った闘志は意味はない。
　クロマティの打順一番に投手が入り、代走の柴田がそのまま、クロマティに替りセンターの守備につく。いわゆるダブルスイッチの元、クロマティはこの試合から永遠に消え去ることになる。
　それでもクロマティが悔しさを晴らべく、チームの士気を上げようと、ローズのようにベンチの最前列に立つのなら、クロマティの湧き上がった闘志は無にはならないが、メジャーのプライドが邪魔をしたか、クロマティはそのままぷいとふてくされて、ベンチの裏に引っ込んでしまう。
「岩隈、よう投げた！」
　岩隈を思わず抱擁する西本。そしてクロマティに何のケアもしない川上。
　この両軍の空気差が、たったの一点差を何点もの重みにしているのだろうか。

「ピッチャー角！」

投手は角。左のリリーフの座を現役世代の山口と最後まで競ったが、選考されたのは角であった。いやらしい角度から投げ込む切れのあるストレートが、本格派でクセのない山口を土俵際でうっちゃったのだ。

それでも制球力や有効な落ちるボールの有無で山口を押す声は今でも少なくない。そんな良からぬ外野の声を角は覆すことができるだろうか。

そして阿部に代走が送れたからには捕手の交替も必須。本来なら第二捕手の森の出番であるが、角と同世代で何度もボールを受けたことを優先してか第三の捕手と目されてた山倉がマスクをかぶる。

山倉起用は相性の問題といえど森は面白くない。ただでさえムスッとした仏頂面をより暗く滲ませる。、

角の脳裏にフラッシュバックする悪夢の数々

ただ森にしても藤田とともに、川上派閥の大番頭の自覚があるためか起用の不満をあからさまにはしない。

「山倉、ガンバレよ～　角を好リードしろよ～」

と心にもないことを叫ぶが、心の中では、山倉の失敗を願ってやまないのだ。

山倉が角を操縦できず、四球、四球で塁を埋めて川上の怒りが爆発して、やっぱり森がマスクをかぶらないとの都合のいい未来像をおもいえがいている。

悪運の強い森だからか、現実も森に都合のいい歴史を刻みだす。

マニエルの初球、大きくハズレるボール。山倉は体で止めにいくが、奮闘むなしく股の間をすり抜けていく。

川上の査定に記されたのは、角の制球難か、それとも受け止められなかった山倉の怠慢な捕球技術か。

何にしても森待望論が湧き上がるきっかけになったのは事実。

それでも角の変則モーションは、川上のお眼鏡どおりの結果をたたき出す。

「顔をみたくない角とまたアタルとは～」

マニエルが泣き顔を見せたように、横から繰り出される角のボールは、左打者にとっては背中から急にボールが出てくる感覚に襲われるのだ。

そもそも安定感で角を屈指する山口を押し抜けて角がベンチ入りを決めたのは、対外国人用のため。左の振り回すタイプの外国人強打者の多い近鉄にはもってこいのタイプだからだ。巨人時代全盛の角は、初対戦の外国人に特に強かったことで知られる。

左打者の外国人の初打席に限ると、打率にして一割満たず、そしてその半分以上が三振の恐ろしいデータがあるほどだ。

角の一年目に対決したヤクルト時代のマニエルもその一人。制球

難の荒れ球もあいまって、マニエルはボールを追い切れない。闇雲に振り回したバットが、スピードガン表示の２０キロ増しの体感速度があるといわれる角のボールを捉えれるわけがなく、マニエルは無残な空振りを三度繰り返し、あっさりと三振を喫する。

「サバシアより打ちにくい」

マニエル監督率いるフィリーズがワールドシリーズで対戦したヤンキースのエース左腕よりも上と最大限の褒め言葉で角を評する。それほど打ちにくい角であるが、右打者と相対すると別人になる。

４番は土井。いかにも左殺しの雰囲気を漂わす懐の広い右の強打者だ。

右打者の内角に飛び込むクロスファイヤーは危険と外で勝負する角と山倉の８０年代巨人バッテリーであるが、丹念にコースをつくほどの制球力のない角の腕は対マニエルほど振れない。置きにいくボールはスピードガン表示の１３０キロどおりの威力。もうひとつの得意のボール、カーブも切れ味がない。

「ああ～　晃多にバカにされる～」

現在ロッテの育成選手として奮闘中の実の息子の晃多にお父さんの勇姿を見て研究しろよと啖呵を切ったのだろうか、親父として息子に恥ずかしい姿を見せられないが　その意気込みも気負いとして重圧がのしかかり、簡単に４つのボール球を土井に投じてしまう。

「四球だ～」

角に四球はつきもの、出したベンチもひとつの四球程度は想定済み。ベンチが安閑として見守っているのに、どうして角はそれほどまで怯えているのだろうか。

「四球、札幌、デーゲーム……」

四球ひとつから、まるで連想ゲームのように悪夢がフラッシュバックする。

角と四球といえば今や伝説となった札幌円山球場での１イニング１０四球の事件が思い出される。

角一人で１０個の四球を出したわけではないが、押し出し二つを

含む3個の四球を出したことは今にもこびりついて角の脳裏から離れない。

それでも5番は角の得意とする左の振り回す外国人のブライアントだ。しかもここまで三打席連続三振とバットに当たる雰囲気もまるでないブライアント、ベンチも打ちとって当然と次の6番中村紀をどう打ち取るかに移っている。

「ブライアントが角を打てるわけがない。三振は間違いない」

「問題は二死となってノリを迎えたときのこと。ノリの後ろは投手の岩隈だが代打が出るっ事は確実、走者を無駄に貯めたくないからノリ勝負だな、角は危険すぎる。ここは右のサイドハンドの鹿取の投入と行きますか、川上監督」

「そうだな、藤田コーチ。それがゼロに切り抜ける一番の戦略だな」

たださしものV9首脳陣といえど、抜け落ちていたデータがあった。

ここは東京ドーム、そして天井にはカメラがぶら下がっている。そのカメラに当てた史上たった一人の打者がブライアント、そして投げた投手はこの角であったのだ。

角本人にとって忘れることがない悪夢。もちろん十分それを頭に入れての投球であるが、打たれたのは球威がガタ落ちした日本ハム時代、巨人時代の全盛期に戻ったオレが打たれるわけがないと真ん中高目の甘いストレートを投じる。

それでも20キロ増しの体感速度のある角の渾身のストレートが、左打者に打たれるわけがないのであるが、歴史は繰り返す。

ブライアントの超高速スイングからはじき出された打球は、呆れるほど高く舞い上がる。

鹿取大明神

高々と舞い上がった打球はカメラめがけて飛んでいく。

巨人時代全盛期の自慢の速球でハム時代の悪夢の再現になるわけがないとタカをくくってた角でるが、まさかの現実に目を疑う。

「当たるわけがない！　オレの速球が当たるわけがない！」

角の自信は過信とはならない。角の願いが通じたか、打球は天井カメラすれすれ、カスリもせずセンター方向に飛んでいく。

「ほ……というか当たるわけがないんだ、オレのピークの時の速球が！」

角が胸をなで下ろすのもまだ早かった。打球の勢いは認定ホームランなどの特別ルールの適用がいらないほどの強さがあったのだから。

センターの柴田が追うことも諦める。打球はそのままセンターバックスクリーンに飛び込んだ。

「あれ？　カメラに当たらないざまあみろと思ったら、入っちゃた……」

唖然とする角、そして三振の連続でたまってたうっぷんを解き放つようにガッツポーズを繰り返すブライアント。

５－２。一点差まで詰まった点差は再び広がりを見せる。

「まさか角が打たれるとは……」

Ｖ９巨人の緻密なデータチェックからも抜け落ちていたブライアントと角の因縁。角のコールを聞いて、ふさぎ込みがちだったブライアントがニヤリと笑ったことを巨人首脳陣は知らなかった。

「すいません、藤田コーチ」

「気にするな角」

球界の紳士ともいわれる藤田だ。四球から一発と最悪の投球を見

せた角にも笑顔で対応する。
「ご苦労さん、角。もう二度と出番はないからゆっくりと休めよ」
「え？　え？　え？」
球界の紳士の毅然とした対応を見せつつ瞬間湯沸かし器の一面を除かせた藤田は、実質的な戦力外を通告する。
「がっくり……。これじゃ一晃に顔向けできんわ」
アメリカのマイナーリーグで頑張る長男の名前を上げて、角は長い胴体を小さくしながらベンチに帰っていく。
「ピッチャー鹿取！」
川上が出てくる前にコールされたのだから、巨人のベンチは顔を見合わすしかない。
「鹿取のコールと来たらオレの出番だろうよ」
一塁の王の犯行であった。１９８７年から、ピッチャー鹿取のセリフは王の口から出るのが、正しい日本、まさに様式美なのである。
王にコールされたから気持ちがはやったわけでもないだろうが、鹿取が小走りでベンチから飛び出してくる。緊急登板は鹿取のお手の物。一回持たずの先発のあとを受けて、延々とゲームセットまで超ロングリリーフをしたのも一度じゃない鹿取。どんな場面でも嫌な顔ひとつせずに淡々と投げる鹿取は、救援陣の鏡といえる。
ブライアントに続き連続ホーマーと鼻息を荒くする中村紀を、鹿取のサイドからの切れ味鋭いボールが翻弄する。
細かいコントロールはないものの、僚友山倉の構えたところに、鹿取はきちきちっと投げ込む。
スライダー、スライダーの連投で一発狙いのノリの気持ちをはぐらかしたところで、一転、内角にシュート回転のまっすぐを投げ込めば、ノリのフルスイングも十分にできない。
「あかん、打たされたわ……」
中村紀は二塁千葉への内野ゴロに終る。７番は投手の岩隈。７回限定で投入された岩隈、当然代打が出てくる。

近鉄に残る野手陣は、以下の通り。

実質先発出場のブライアント、６回からショートに入った村上、７回途中からセンターに入った大村の三人は出場済み。

残る野手は６人。控え捕手の有田。内野は小川、羽田。外野は、栗橋、新井、礒部。

右のサイドの鹿取だから、当然球筋の見やすい左の打者がセオリーだ。となれば羽田と有田以外の４人となる。新井、礒部は守備力からして、両翼の外国人に替り守備要員として投入されるのが必然。選択肢は、小川か栗橋、いずれも西本学校の優等生の二人に絞られたが……。

「栗橋いけい」

「西本親父、オレのこと忘れたと思いしたよ」

プロ野球選手の独身会長であり、熱帯魚をこよなく愛するヘラクレス栗橋茂がゲームのダメを押すために重い腰をあげる。

浪速のガッツマン

熱帯魚をこよなく愛し、花の独身貴族を謳歌する栗橋茂は、ヘラクレスの異名も取った左のパワーヒッターだ。鹿取のような横の変化でかわしにくるサイドハンド投手は大好物。

西本は西本学校の優等生である栗橋の起用で飽くなき加点を目指し、瀕死の川上巨人の息の根を完全に止めようとしている。

「栗橋いけえ」

西本の鼻にかかった独特の声色は栗橋に強い影響を与える。同時代の投手といえセパに別れていたため、ほとんど対戦のない鹿取のボールに初球からフルスイング。

外に逃げていくシュートボールに栗橋のバットはカスリもしないが、巨人バッテリーに与えた衝撃は相当なもの。

「栗橋さんやるな」

冷静沈着でめったに取り乱さないことで知られる山倉が思わずそうつぶやくように、栗橋はただの一振りでたんなる代打から細心の注意を払うべく切り札に昇華したのだ。

高校時代に南海にドラフト二位指名されて当時の兼任監督である野村直々にオレの後継者はお前しかいないといわれても、進学を譲らない山倉は一言も発せずに野村を追い返したエピソードでも知られるように黙して多くを語らない山倉であるが、一度口を開くとずらずらと言葉を連れる性分のようで、まるでささやき戦術のごとくぶつぶつと呟き出す。

「そういえばずいぶん叩かれなあ、現役時代、外、外の安全策のリードって……有田さんや中尾みたいに移籍してきた捕手がちょっと内角攻めたくらいで、強気のリード、山倉を見習うべきってやられたもんだ。あんなもん控え捕手だからできるリードなのによくいうよな、ブツブツ……」

長嶋巨人のバッテリーコーチとして華々しく巨人に帰ってきた山

倉であったが、かのような性格は部下に当たる捕手陣には評判がよろしくないようで、デーブ大久保には愚痴だらけの陰湿コーチの烙印を押されたほどだ。まさかコーチ時代の失敗の悔恨がリードに影響したわあけではないが、外、外、外、外の安易な配球は栗橋のフルスイングの鴨になる。

球足の早い打球はあっという間に三遊間を破っていく。驚異的な守備範囲を誇る長嶋が颯爽とひらりと飛んでも追いつかないのだから、栗橋の打球スピードの早さが伺いしれるだろう。

「ヨッシャー」

栗橋と同年代である佐々木は我が事のように喜ぶ。

「さすが西本道場で鍛えた選手は違いますね、監督」

「そうやな、特によう目をかけたのは野手や」

「スタメンには梨田とマニエルしか出てませんが、今ヒットを打った栗橋に、ベンチにいる小川さん、羽田に有田、手違いでベンチ入りならずも、本来はウチのナンバーワン遊撃手である石渡と西本近鉄Ｖ２戦士が勢ぞろいですわ」

「そうやな、だが一人大事なのがおらんぞ」

「……あの男のことですかい」

「１番平野、２番小川、３番佐々木、４番マニエル、５番栗橋、６番羽田、７番アーノルド、８番梨田、有田、９番石渡やろ。一人おらんやろうが」

「アーノルドですね……」

「あほう、そこやない一番打者や」

「平野ですか……」

「そうや平野や。あいつがおらんと西本近鉄にならんやろう。切り込み隊長や」

「連絡がどうにも取れんのですよ」

「まったく強肩のアイツがおれば守備固めに頭を使わんでもいいのに……」

西本のいう平野とは平野光泰のこと。西本近鉄のＶ２に貢献した一番打者で強肩好守を完備した好選手。当然招集のお達しが平野にも及んだが、引退後、数年ラジオ解説をした後、行方不明なのだから連絡の取りようもない。

「平野がおればなあ……」

「この放送をどっかで見てるとちゃいますか」

「ならええがな……おっと打順は梨田か……ここは叩き込むで……代打や」

西本は代打攻勢と腰をあげるが、

「え？　監督、梨田ですよ、梨田！　７回２失点の捕手ですよ！」

「巨人を叩き潰すチャンスや」

西本は佐々木の制止にも耳を貸さずに代打を告げる。

「代打小川！」

さすがの穏健派梨田も、この起用法には思わず異を唱える。

「監督、抑え４人衆は、有田さんより僕のリードを取るいうたやないですか。だからあえて相性のよくない鈴木さんと僕を組ませたんでしょうよ」

「ナシ、お前は試合は生き物いうのがまだわからんから、日本シリーズひとつ勝てんヘボ監督のままなんや。試合は常に動く。その流れを自らに引き込む采配をワシはしてるだけや」

日本シリーズ通算０勝２敗の梨田が、日本シリーズ通算０勝８敗の西本のお説教を受けて、梨田はすごすごとベンチに戻っていく。

過去の短期決戦を無駄な動きから試合の流れを濁し、ことごとく失ってきた西本。好リードで引っ張る捕手をあえて降ろすという分の悪い博打采配は、試合の流れを悪い方に変える雰囲気がプンプンとしてくる。

「モーやん、いけ。立教魂を見せてこい」

立教の後輩でもある小川。世界一農民顔の野球選手ともいわれる小川が鹿取打ちに成功すれば、試合の流れなどをいたずらに心配する必要もないのであるが、代打起用が二度続けて当たる確率は低い。

ミート力のうまさで鹿取のボールを右に左にファウルを乱れ打ちと打撃技術の高さは十分にアピールできた小川であったが、フェアグランドに飛んだ打球は、あえなくレフト松井のグラブに吸い込まれる。

「ああ～　もうちょっとやったのに。ムキー！」

ヒットと早合点し思わず立ち上がった西本がハンカチを噛みしめると、８回の攻防は結局ブライアントの特大弾のみで終る。

西本は立ったそのまま複雑な選手交代を告げに球審岡田の元に向かう。

「間違わんとしてくださいよ」

「あほう、ワシをボケ老人扱いすな」

終盤に来てそろそろダレてきた観客の目を楽しませようとマスコットが飛び出てきて、イニング間のショーが始まったようだ。

巨人側からはもちろんジャビットとそのファミリーが。そして近鉄側からは今や懐かしいバファリードが飛び出てくる。

バク転や愛らしい動きで客の目を楽しませるジャビットファミリーと違い、バファリードと来たら、久々ゆえかどうも動きにキレがない。

ダンスも拙く愛想もないと来たら、失笑が漏れてくるの必然。

「マスコット対決はこっちの負けかいな。しょーもないダンスや」

金村が忌憚なき意見を飛ばすと、それに腹を立てたわけでもないが、突如バファリードはマスコット業界のタブーを犯す。

「うわ、首もいだで」

なんとバファリードは自ら、首のぬいぐるみ部分を外してその素顔をあらわにしたのだ。

「あ！　あの顔は！」

マスコットの中身は不問の風潮

「あのパンチの利いたパンチパーマは平野光泰やないか」
なんとバファリードの正体は、噂の平野本人であった。念入りに練りこまれたパンチパーマはザ・近鉄そのもの。思えばダブルのスーツに強面のパンチパーマでセカンドバッグを脇に抱えたヤクザと一見見間違える近鉄選手といえば平野そのもの。これに生粋の大阪育ちの大阪弁が加わればまさに金村も泣いて謝るほどだ。
「なんであのオッサン、バファリードの中に入ってるんや。そいうえば行方不明やったな」

タブーをおかした平野の演じるバファリードを必死に誤魔化そうとジャビットファミリーが徒党を組んで平野バファリードを隠そうとするが、
「どけい」
どすの利いた平野の一喝で包囲網はあっさりと解ける。
「西本監督に挨拶をするんや」
顔を顕にしたまま西本に近づくと平野バファリードは一礼。
「西本監督、こんな姿ですんませんがお久しぶりです」
「おう平野か。探したわ、どうや今すぐ帰ってこんか。次の試合になるがお前をスタメンで使ったってええ。そえだけお前はウチに必要なピースなんや」
「キャンプオープン戦をこなしてない私がいきなり割り込むわけには行きませんわ。競争に勝ったやつを今のまま起用してください。私はバファリードの中身として陰ながら応援しますから」
「そうか、それは残念や。まあマスコットも今や重要な戦力や。そっちで頑張れよ」
「はい、精一杯やらされてもらいます」
平野は下げていた頭を上げるとぬいぐるみの頭の部分うぃかぶり

直し、平野光泰からバファリードに戻っていった。
それでも不肖の後輩に睨みをきかすことは忘れない。近鉄ベンチに金村がいることを見つけると、野太い声で一喝。
「こら～カネ。ベンチ外のクセしてなにベンチにふんぞり返ってるんや。こっち来い、ワシと一緒にぬいぐるみ入って応援せい」
怖い先輩平野に何度もしめられた苦い思い出のある金村は背筋を伸ばす。
「いえ結構ですわ。僕よう踊れませんので」
「そうやな、ダンスもようできんやつにバファリードが務まらんわな」
バファリードファミリー入りを免れた金村であったが、一言多い性格はそのまま。
「自分もよう踊れんクセにほんまに、あのオッサン」
不恰好なダンスを続ける平野バファリードを一くさり貶すと、試合は8回の裏に突入していく。
ついに近鉄の誇る4人のセーブ王の出番だ。まず西本がコールしたのは吉井理人。抑え4人の中ではダントツの知名度を誇る吉井だけあってドームは大歓声に包まれる。
そして捕手は有田に交替。両翼のお荷物であったマニエルとブライアントがつに引っ込んで守備固め。代打した小川がそのまま一塁に入り、一塁の土井が左翼に回る。そして右翼にはようやく日の目を見た名球会会員新井宏昌。現在のオーダーをチェックすると、1番セカンド大石。2番センター大村。3番ライト新井。4番レフト土井。5番キャッチャー有田。6番サード中村紀。7番ピッチャー吉井。8番ファースト小川。9番ショート村上。
なんと試合開始のオーダーから同じ打順と守備位置にいるのは大石だけという徹底ぶり。
ベンチ入りの野手は羽田耕一を残すのみ。攻撃重視から守備重視に切り替えた西本の徹底ぶりが伺える。まさしく近藤貞雄が提唱したアメフト野球を彷彿とさせるものがある。

土井を本職であるレフトに戻しライトに守備に秀でた選手と言えないまでもゴールデングラブ獲得経験のある新井を配置。そして内野は手違いで守備についた村上をのぞき守備の名手の誉れ高い布陣だ。

だが問題は捕手の有田修三にある。有田もゴールデングラブの前身であるダイヤモンドグラブを獲得した経験のある守備の名手であるが、梨田が一人が紡いできた配球の流れを変えてしまう恐れがあるのだ。慎重な梨田に比べて、強気一辺倒な有田のリードから歪みが生まれることは十二分にありえる事だ。

巨人の攻撃は二番の千葉茂から。

「なんや捕手が替ったか。ニヤニヤ野郎からむっつりとしたアンパンみたいなの替ったからびっくりしたわ」

「千葉大先輩お久しぶりです。有田ですよ、近鉄巨人ともに千葉大先輩の後輩に当たる」

「有田なんかワシがしるかい。お前の兄貴が広島にいた投手だなんてワシが知っとるかいな」

「十分知ってるやないですか」

有田のリードはやはり強気。有田が在籍した巨人近鉄ともに大先輩である千葉にも臆するところがない。吉井の得意球である、シュートをこれでもかと内角に逃げ込む。

千葉も得意の右打ちでこれに応戦。勝負はゆえに深いカウントに持ち込まれるが、この有田のリードに肝を冷やしているのが、交替の憂き目にあった梨田。

「有田さん、強引に行き過ぎですって……ちょっとはかわしてくださいよ。巨人打線に真っ向からの勝負は禁物ですって……」

さあ突然の交替で試合に放り込まれた有田は3点のリードを無駄にすることなく試合を終わらせることができるであろうか。

吉井はロック好き

弱点と見破れば、執拗に同じコースに同じ球種を続けることが有田のリードの最大の特徴。

右打ちの名人で知られる千葉には内角をえぐるシュートが有効と見れば、呆れるほどシュートを要求する。千葉が近鉄の元監督であり、バファローズの由来と知る吉井はそれでも度胸満点に、有田の要求通りに攻め続ける。

「屈強の大リーガーに厭わず内角を攻めたワシやぞ。千葉さんだろうと構わず内角行くわ」

有田の融通の効かないリードに梨田は不安をあらわにする。

「もうええってシュートは。フォークでも要求すれば空振り三振取れるのに、まったく有田さんは頑固やな～」

千葉がシュートに徐々にタイミングが合いつつある事を梨田は余さず感じ取る。

「スライダーでもええ、外角いってくれ。吉井のスライダーはたいしたボールやないが、それでもシュートを続けるよりはマシや。千葉さんのバットの振りがだんだん鋭くなってる。おまけにバットの出る角度もええ。いくら吉井の制球がよくシュートがぎりぎりに決まっても、いつかやられるわ」

有田は内角を要求。そして吉井は首を振らない。７球目。また吉井は千葉の内角をえぐる。７球連続いｓてのシュートボールだ。千葉は元祖四球神と言われた選球眼でこれを見極める。

千葉に威圧されたわけでもないが球審岡田は腕を上げない。気の短い吉井は、ストライクじゃないかと二歩三歩とマウンドを降りて詰め寄ってくる。ただでさえ近鉄に分の悪い球審岡田の心象をこれ以上悪くできないと有田が声で制して吉井はマウンドに戻る。

それでも一度火のついた吉井の腹ワタは煮えくり返っている。マウンドの砂を何度を蹴り上げ、苛立ちを紛らわせようとするが、熱くなった吉井の感情の温度は冷めることがない。

捕手の有田は吉井の同じ性分。カッカした吉井をおさめるどころか、火に油を注ぐことになりうる。本人もそれを自覚してか、マウンドには行かない。

二塁の大石はチームリーダーであるが、孤高の人でもある。監督時代さながら見て見ぬふりを決め込めて、吉井の元に向かわない。

遊撃の村上といえば、吉井とプロ入り同期で同級生。吉井の感情を押さえつけるにはぴったりであるが、これもマウンドには行かない。先輩大石が声を掛けないなら後輩の自分は行きづらいのか。

村上の義弟である中村紀もこれでは行けない。義兄を差し置いて、目立つことができないからだ。

先頭打者だ、ベンチから飛び出る場面でもない。

このまま煮えたぎった吉井はマウンドに放置されるのか。

高ぶった感情を制御できない吉井は絶妙な制球を乱すことにはならないか。

いやダイヤモンドにはまだこの男がいた。一塁の小川亨である。のそのその吉井に近づくと、まるで農家のオッサンが近所のヤンキーをたしなめるように、吉井のおしりをぽんぽんと叩く。

「まあええやないの。ボールだろうと、吉井ちゃん。次いこうや、次」

小川独特の柔和な顔で言われたら、さしもの強情吉井といえど、煮えたぎったマグマも干し上がってしまう。

さすが少年時代、足の悪い同級生を毎日おぶって学校に通ったことで知られる聖人小川。吉井を見事になだめすかし一塁の守備位置に、まるで休日パチンコ屋に向かう農家のおっさんのようにてくてくと戻っていく。

２－２、並行カウント。

我を取り戻したのは吉井だけではなかった。小川の作った絶妙な

間は有田の配球にも変化をきたす。

強情な内角一辺倒を改めて、外角に体を持っていく。

吉井の得意球といえば、シュートの他にフォークが思い浮かぶ。チェンジアップ、スライダーなども揃えるが、やはり吉井といえばフォークのイメージが強い。野茂直伝とホラを吹き、実物のそれ以上に効果を発揮したフォークボールが外角に決められれば千葉といえど攻略不能だろう。

それでも千葉は、外に沈んでいくフォークボールをバットに当てて得意の右方向に持っていく。

一二塁間に飛んだ打球、驚異的な守備範囲を誇る大石が抜かれても小川がいる。左投げの一塁の小川のグラブを持つのは右手だ。右投げの一塁の土井なら逆シングルになり抜かれた打球でも小川は抜かせない。見事にさばくと、一塁のベースカバーに入った吉井にトス。

またしても交替したところに打球は飛び、近鉄はワンナウトをもぎ取る。

そして迎えるは三番王。近鉄ブルペンでは左の石本が急ピッチに投球を繰り返している。

左対左にこだわるなら石本投入であるが……。

ピッチャー石本と夢想状態の岡本伊三美がコールする。それがすべての始めりでもりだ。

西本には躊躇がない。すべての手を尽くし川上巨人を叩き潰す腹づもりだ。

久保がマウンドに向かう前に球審岡田に投手交代を告げる。これには投手コーチに取ってもっとも難敵であるマウンドを譲ろうとしない吉井のようなタイプをどうやって懐柔しようかと色々手段を練っていた久保もびっくり。

吉井といえば１９８９年仰木近鉄優勝決定試合で抑えの切り札の自分でなくエースの阿波野がリリーフのマウンドに立ち優勝投手に輝いたことに、なんで抑えのオレを信用しないんやとぶち切れたことであまりにも有名だ。

ただでさえ判定に湯だってる吉井。ワンポイントリリーフで降ろされることでどれだけ暴れるかと思うと、ロッカーの壊れ物をとっとと、吉井の目につかないところに退避する必要性があると思われたが、あれかれ２０年の修練を積んだ吉井は大人になったのか。

「降ろされたいうたかて切れませんよ、久保コーチ。ははは。ワシもハムで3年もコーチやらさせてもろうてるんですよ。替える方の気持ちも分かるようになりましたよ」

あっさりとボールを久保に預けて、自らすごすごとベンチに戻っていく。

「吉井も変わったなあ。やっぱり人の上に立つ役職につくと丸くなるもんだな」

久保もしみじみと吉井の変心に感心する。だがいくら多少丸くなったといえど吉井がクレージーなことにはかわりない。

ベンチを蹴り上げるとグラブを思い切り叩きつける。怒りを晴らすお決まりのメニューを一通りに実行すると、吉井の視線の先には壁。

「吉井、それだけはやめとけ。商売道具やぞ」

杉内が利き手で壁を殴りつけ骨折してシーズンの大半を棒に降ったことは記憶に新しい。それだけではない。当の金村は、西武時代自分の投球の不甲斐なさに腹を立てた豊田が壁に利き手を殴りつけようとするのを寸でで止めた過去がある。

金村は吉井を後ろから抱えるように羽交い絞めするが、吉井の暴走は金村にも止まらない。

壁に思い切り拳を叩きつける。ドグシャ、ゴシュとの奇妙な音がした後、壁には亀裂が、そしてぶつけた吉井の拳からはタラタラと血が流れ落ちていく。

「遅かったかあ」

金村はため息をつくが、吉井は何故か笑顔。

「金村先輩。ワシは大人になって分別がつくようになりましたよ」

そういって吉井は笑いながら、ぶらぶらとさせ利き手の右が無事であることを示す。

「なんやびっくりしたわ。叩きつけたのは左手か～　ならええわな」

「ははは。ワシ、両手投げの近田でもわびすけでもベンティットでも※両刀の多田野でもないですからね」

※多田野をコーチングする吉井だからいえるジョークです。

「そうやな、左ならいくら傷つけても大丈夫やな、ははは……ってそんなわけないやろ」

吉井の降板は巨人ベンチにもまさかであったようだ。吉井攻略法をこれから披露しようとした巨人ベンチは慌てて作戦を引っ込める。

「雷作戦は無駄か」

高田はドームの音響係に雷の音を鳴らすことを密かに指示していた。もちろん吉井が雷が大の苦手だからだ。

「レーザーポインターもだな」

牧野ヘッドはバックネット裏にいた巨人のスパイ部隊である上田と福王にレーザーポインターを引っ込めることをブロックサインで伝えた。

レーザーポインターで投手の目をくらますという卑劣な事件が一時期野球界に多発したがその初めての被害者は吉井であった。

「ピッチャー石本」

左の王には左の石本。１９８０年に引退した王と１９８１年に近鉄に入団した石本の対戦経験があるわけがない。時代の些細の行き違いで生涯対戦することがないと思われた二人がここに実現する。

石本といえば5年目に突如開花。投げれば勝つの強運ぶりを発揮しなんと救援だけで１９もの勝ち星を上げたのだ。その勢いは翌年の８６年に衰えることもなく今度はセーブを荒稼ぎし連続の最優秀救援投手に輝いた。８７年となると酷使の影響からかその勢いは衰えを見せたが、それでもリーグ最多登板と献身ぶりを示した。この3年の奮闘でさすがに肩が上がらず８８年以降の石本は輝くことはなかったが、それでもこの3年に残した成績の凄まじさは近鉄抑え伝説の先頭に立つだけのものがある。

余談となるが、ピッチャー〇〇とリリーフの酷使ぶりと采配のマンネリぶりを揶揄するのは８７年の鹿取でなく、実はこの石本が元祖といわれている。

「まさか王さんとやれるとは」

「おいイシ、投げたいボールいってみい」

「そりゃスライダーとストレートしかないでしょ、オレには」

「そうか。だがイシのストレートとスライダーなら王さんに打たれるぞ。どうや王さんの内角つけるか」

「王さんといえど内角つけずして何が猛牛軍団の抑えですか」

「そうやその勢いや、頼むで、イシ」

「はいな、有田さん」

有田と王といえば、王の巨人の監督時代、上司と選手の関係だ。肩がまるで使い物にならなかった有田であるが、パンチ力のある打撃と強気のリードはいかにも王好み。山倉が絶好調でＭＶＰに輝い

た１９８７年をのぞき、王は有田を好んで試合に起用した。
「王さん、今日は監督と選手の関係やありませんよ、ビシビシ行かせてもらいますよ」
「望むところだ、有田。どんどん攻めてくれよ。四球攻めにうんざりとしてたところだ」

箱庭球場藤井寺

石本対王。勝つのは長くに渡りホームラン王と君臨した王か、それともたった二年で野球生命のすべてを吐き出した石本か。

石本といえば闘志あふれる攻めの投球が持ち味だ。いくらホームランを打たれても下を向かない。その精神力の強さは藤井寺球場を本拠地にして飛ぶボール全盛の時代の抑えを務めたけがある。当時の抑えといえば1イニング限定などのやわな使い方ではなく、早ければ6回からマウンドに登ったもの。当然、頼れる投手はもういない。ホームランの一本や二本で精神面に影響が出るようならば、とてもセーブ王の栄誉には輝けないのである。

石本の図太さを示す試合といえば1イニング6被本塁打のワースト記録を西武戦で記録した時、6本中4本の本塁打を浴びたのが、この石本。それでも石本の闘志は燃え尽きず王者西武にゼロゲーム差まで追いつめた近鉄の立役者として君臨したのだ。

「一発はええ。四球だけは出すなよ、石本」

西本の気持ちは言葉にして伝えなくとも石本は理解していた。

「四球は厳禁。3点差、走者を貯めるなら一発を打たれた方がマシ。それがたとえ王さんやろうと同じこと。王さんにホームランを打たれるのは当たり前。長嶋さんに打たれたら試合の雰囲気は変わるだろうけど、王さんに打たれても試合の流れは変わらない」

少々近鉄に取って都合のいい論理であるが、石本がそれで強く腕を振れるならそれはそれでいい。

石本は闘志、気合、気概、気迫、気持ち……。吐き出せるものをすべて解き放ち王に対する初球を投げ込む。

石本の渾身のストレートは有田のミットを強く叩く。有田の性格を理解している王も、逃げなしの真っ向勝負で来ると分かっていた。それでもフォアザチームの王は初球攻撃を踏みとどまる。

１４５キロと表示された電光掲示板のガン表示を見て、思わず王

は口を尖らせる。
「有田、石本ってあんなにボール速かったか？」
「王さん、石本はこんなもんやないですよ。もっと速いですよ。石本は１５０は出ますよ。東京ドームのガン表示が厳しんやないですか」
「そうか、違うリーグだったから石本の投球内容を詳しく知らないんだ」
「ほうですか」
　些細な会話のやり取りでも、有田は言質を見失わない。石本をよく知らないと答えたならば、有田はそれを利用すればいいだけ。真っ向勝負の石本を王に悟られないため、有田はワンストライクの後にわざと大きく外れるボール球を要求した。
　石本は一瞬、打ち合わせと違うと眉を潜めたが、有田が大人しく首を縦に振れとジャスチャーをしたために、すぐに平然とした顔に戻し何食わぬ顔で大きく外れるボール球を投げた。
　王は思わず打席を外す。
「なんだ有田。こういう投手か。初球の入り方だとドンドン向かってくる投手だと思ったぞ」
「ちょっと気の弱いところのある投手でねえ……ストライクをよう続けられんのですよ」
　王の石本像を見事にミスリードさせた有田は心の中でククと笑う。
「なんや有田。勝負せんか。王に一度ボール球投げさせたら、投手の手がブルって、よけいなボールを重ねるで」
　自軍の将西本の目も騙せれば有田の陽動作戦は成功したのも同然。
　抜いたスライダーを真ん中低めに要求して簡単に追い込むと、王はまた口を尖らす。
「なんだ有田。オレに対し１－１から簡単にストライクを取ってくる奴のどこが気弱なんだ」
「いや王さん、私も驚きましたよ。ストライクからボールになるスライダーを要求したのに真ん中に入ってきて。一瞬目をつぶりまし

たもん」
「そうか。そりゃしゃーないな。長嶋さんや松井とは違う。世界の王のオレに対すればどんな投手でもチビって制球ミスするわな」
王はまだ石本を弱気な投手と取違いている。有田はこれを利用しない手はない。追い込んだ上にボール球をふたつ使う余裕がある２－１というカウント。
弱気な石本ならボール球になるスライダーを連投してくるはずだが、実際は強気がユニフォームを着ているような石本。世界の王から三振を奪うという野望を果たすべく、ストライクゾーンに全力のストレートを投じてくる。
有田の構えたミットは外角低め。あの王の最大の好敵手江夏豊が三振を量産したゾーンだ。江夏のように細かい制球のない石本だけに、有田のミットは若干の修正が必要になるが、それでもゾーンにこないと思っている王から空振りを取れるには十分のコースと球威。のはずであったが、王はやはりレベルが違った。大きく足を上げる一本足打法の黄金比からバットを振り下ろすようにスイングすると、捉えた打球は一直線にライト方向に飛んでいく。
日本テレビが王のために設置したホームランカメラが約３０年ぶりの任務につく。カメラは高々と上がった打球を捉え続ける。
石本は燃え尽きたのか、打球の行方を見ることもしない。
王はホームランと確信したのか走りだすこともしない。

ポスティング失敗第一号

「石本のあほうがどうして王にそんな甘いボールを投げるんや！ムキー！」

西本は逃げて走者をためるなら一発のがマシと自ら述べた方針を完全無視して石本の真っ向勝負を批判する。直情型の西本だけの目の前の現実に一喜一憂するのは無理のないことか。

「有田、どこが気弱な投手なんだ」

ホームランと確信した王は有田に話しかける余裕があるが、打球は思わぬ軌道を辿る。

ライトのポール際、フェンス直前で打球は急失速する。１００ｍと誇大表示されたドームのフェンスにピタリとついたライトの新井のグラブにすっぽりと打球はおさまる。

「なんだフライか」

７５６号の世界記録を作ったときのガッツポーズまではいかないが、追撃の一発の価値を高めるためにそれなりのポーズを考えてた王は肩透かし。

「後楽園なら入ってたんだけどな。後楽園の感覚で打ち上げたのが間違いだったか」

王は首を捻りベンチに戻っていく。東京ドームは今や狭い球場の代名詞的扱いであるが、それでも後楽園に比べて広いことは間違いない。東京ドームの両翼の広さは公称１００ｍ。実はそれよりも数メートル狭いとの噂がある。（野球規則により１９８２年以降新球場を作る場合両翼９９ｍ、中堅１２０ｍ以上の距離が必要。それが最初に適用されたのが東京ドーム。だからドームは新時代の球場ともてはやされた。だが東京都心の球場。広い球場を作るのは限界があり、外野席をムリヤリ作るために膨らみの部分が最大限に削れたことは有名。東京ドームの狭さが取り沙汰されるとき、たいていはこの膨らみの部分のなさをいう。膨らみの距離はホームから１１０

m。箱庭と言われた藤井寺とほぼ同じ距離なのである）

後楽園球場の両翼は公称９０ｍ。ドームと同じく距離をごまかしてるいるのは公然の事実。一説には８６ｍが正しい距離とされるが、７８ｍなどとんでもない説もある。

「いくわけがない。ここは藤井寺じゃないですよ、王さん。ここは東京ドーム。未来の球場。メジャーサイズのスタジアムですよ」

１９８７年に野球生命を吐き出した石本は８８年開場の東京ドームをいまだ最新型の球場と思い込んでいるのだろうか。それでもドームの両翼の広さに助けられたのは事実。王から三振を奪うという幼少時代からの野望は潰えたが、石本の真っ向勝負はここに報われたのだ。

これで８回裏ツーアウト。３点の点数差を考えると、このまま石本続投もありと思われるが、西本の執念はさらなる継投をやめない。一人一殺のリレーで巨人打線を完全に封じ込もうとするのだ。

「長嶋にはこいつや。もう一人の走者も出させんぞ」

西本が球審岡田に告げた名前は、

「ピッチャー交代、大塚や。大塚」

大塚晶則。ポスティング失敗からの球団との一悶着による最悪の形で近鉄を退団した大塚が古巣のマウンドに上がる。

マウンド上には大塚の師匠である久保が待ち受けているが、いまだ久保は大塚の無礼を許していない。

「ポスティングはあくまでも球団の厚意。選手側が勝手にできる権利じゃない。それを履き違えた大塚をオレはまだ許さない」

大塚はパドレス時代の同僚で抑えの切り札だったトレバー・ホフマンの登場曲であったＡＣ／ＤＣのヘルズベルを口ずさみながらマウンドまで小走りに登場。近鉄側はビジター球団だけにさすがに登場曲をかけれないために、自らの鼻歌で代用したのであるが、大塚がお茶目な一面を見せても久保は大塚を許そうとしない。

「まったくメジャーにかぶれて。お前は今どこのチームのユニフォームを着ていると思っているんだ。後ろ足で砂をかけるように出て

行った球団のユニフォームだぞ」
　大塚が久保に向かって一礼するが、久保は無視をしている。試合中といえど久保は大塚に心を許さないのか。不穏な空気を感じ取った大塚が気まずそうな顔でマウンドの土をならす。
　選手とコーチが違う方向を向いていると、せっかくのいい流れも壊れることになりかねない。チームを第一に考えると久保は大塚に歩み寄る姿勢を見せるべきではないか。たとえそれが表面上のやり取りでもこの際かまわない。コーチと選手間に意思疎通がない異様な光景を見せつけるよりも遥かにマシだからだ。
　空気を感じ取り、先に歩み寄る姿勢を見せたのは大塚の方だった。
「あの時はすいませんでした、久保コーチ。頭ではわかっているんですが、どうしてもメジャーに行きたくて、ついあのような行動に……」
　それでも久保はそっぽを向いたまま、大塚の投球練習を冷たい目で見つめている。
「久保コーチ……」
　だが久保はそっぽを向いたまま話し始める。
「もし長嶋さんから三振を取ったら許してやらないことはないぞ、大塚」
　条件付きであるが、久保も歩み寄りを見せる。
「三振ですか？　長嶋さんから？」
「無理か。ならお前は一生久保道場から破門のままだ」
「それは困りますよ、久保コーチ」
「なら命がけで三振を取って来い」
「わかりました！　やれるだけやってみます！」

　打席に入るのは長嶋茂雄。大塚と同じ千葉県人であるが、７０年代生まれの大塚はその以前の千葉県生まれの野球選手、例えば掛布や宇野のように長嶋を崇拝しているわけでもない。
　だが長嶋のカリスマ性はひしひしと伝わってくる。

「この人から三振かよ……。どこ投げても打ちそうだよ……。まるでボンズだ（大塚が最初に所属したパドレスとボンズのいたジャイアンツは同地区でよく顔を合わせた）」

大塚は思わず息を飲み込む。近鉄時代の背番号１１を偉大なる先人野茂に譲り、ＷＢＣレンジャーズ時代の１６を背にした大塚は背中を猫背にしてグラブを突き出す独特なセットポジションを見せる。

「ん～有田。久々だな～　元気だったか！」

「そりゃもう長嶋さん。元気でしたよ」

「そうかそれはよかった～！　お前が捕手だと肩が弱くていつ走れるか監督のオレはハラハラしたぞ～」

「いや私は長嶋さんの元ではプレーしてませんですから」

「ん～　そうか？　あれは藤本監督の時だったか～。ミスティクしちゃったな～　ハハハ」

「藤本監督ってそれ戦前戦中の話じゃないですか」

「なんだ有田。藤本監督といっても二人いるんだぞ？　藤本定義監督と藤本英雄監督の二人だ。有田はそこをよく理解しているのか？　本当か？」

「してますよ、しっかり」

「そうか、で、有田お前はどっちの藤本監督の元でプレーしたんだ？　定義か？　英雄か？」

「いやですか、プレーどころか、私生まれてもいませんて、ハハハ……」

長嶋がわざとムリヤリなボケをかまして、有田の思考回路を狂わすと、大塚は近鉄大塚の復権を目指しテンションを徐々に高めていく。

原巨人抑えコレクション

大塚は長嶋と交じらわない野球人生を送っている。長嶋ジャパンが本来の活動していた２００３年と２００４年は、まさに大塚にとって激動の時。０３年にメジャーポスティングで一時期中日に身を潜めていた大塚は翌年晴れてポスティングがみのり、念願のメジャー挑戦とあいなった。

当時の大塚も日本有数の抑えの切り札と評価されていたが、大塚周辺の賑やかさにさすがに長嶋ジャパン招集は見送られた。その後大塚がジャパンの抑えの重責を担うのは長嶋から王に日本の将がかわった時のことだ。

「有田、投手は誰？　う～ん大塚か～？　大塚といえば、う～ん抑え投手だったな～。有田どうだオレの小記憶力におののいたか？」

「そのとおりですよ、長嶋さん。たしかに大塚は抑えですよ。よく覚えてましたね」

「当たり前だよ、有田。オレは大塚が欲しくて欲しくて、門奈を差し出してでもアヤツの事を引き入れたかったんだ」

「門奈って……。それ同じ抑えでも赤堀の交換相手やなかったですか？」

「う～ん、誰だ？　赤堀って？　う～ん？」

長嶋はとぼけるが、有田のいうことが正しい。指先に神経が通ってないような投球を繰り返す槇原や、毎度のように塁に走者をためるだけためて、最終回のドラマを作り巨人ファンの血圧とテレビ中継の視聴率を上げるだけ上げた石毛やただ一度のオールスター出場時に肩痛を訴えても野村や権藤に知らん顔されたことから、実質的に野球人生の幕を下ろしたチョ・ソンミンやお化けフォークといわれた落差の激しいフォークを持ちながら１３０後半のストレートがせいぜいなら、打者は容易に見極めることを僕らに身を持って示してくれたマリオ・ブリトーやその翌年に、マリオの再来と期待され

たバルカンチェンジなる今思い出してみると何のぼーるであるが思い出せないほど印象の薄い決め球で一世風靡しなかったデビットなど長嶋巨人の抑えといえばヘボストッパーが立て続けに現れては消えたことでおなじみ。

　ＦＡ市場で抑えをかき集めたくとも、短命の抑え投手は市場には出回りづらい。ならば佐々木と並び最高峰の抑えだった赤堀に白羽の矢を立てたのは戦略上正しいといえたが、その交換要員として近鉄に差し出したのが、なんとルーキー時代の一時だけスクリューボールを武器にセ界を席巻した門奈哲寛とくれば、近鉄球団もバカにするな商談は成立しない。

「門奈だぞ。門奈。どうしてバファローズはこんな美味しい商談に取り合わなかったんだ、有田。門奈と言えば一軍で起用さえすればスクリュー武器に三振の山を築ける投手だぞ。いったい誰だあんないい投手を二軍で虫干しにしてたのは、なあ有田」

「長嶋さんですよ」

　梨田ならズバリといえずお茶を濁すところだが、ズケズケとモノを言い過ぎる有田はハッキリと指摘する。

「そうか、オレか。う～んオレか……」

「そういえば長嶋さん。最近の小林雅英を例を上げるまでなく、ペドラザ、豊田、マイケル中村、クルーン、シコースキーと抑えや中継ぎ投手ばかり巨人はよう取りますねえ～」

「だろう。オレもちょっとやりすぎだと眉を潜めているんだ。まったく原は育成どうのと偉そうなこと言ってるが、リリーフ陣は外様ばかりだよ」

「一塁手や４番集めるをようけ集めるよりもマシやないですか？広沢や石井がベンチにいてもたいして意味がありませんが、リリーフなら中継ぎや敗戦処理と用途がありやないですか」

「そうだよ、有田。君からも原によくいってくれ。相手の戦力を削るために選手をかき集めるのは球界のためにならないと。う～ん」

「いいですか、長嶋さん。大塚がじっと待ってますから、そろそろ

構えてくださいよ」

「う～ん？　なんだ試合中だったか。よ～しこい大塚！　我が……」

「へいへい、大塚は長嶋さんと同じ千葉県人ですよ」

そろそろ長嶋んい付き合うのにも疲れてきた有田は先回りで長嶋の口封じ。

「東海大の後輩、大塚よ、先輩に全力でヴつかってこい！」

さすがの有田も出身校すら忘れるとは思わずずっこける。長嶋の作戦が効いたか、有田は安易にストレートを選択する。積極打法が持ち味の長嶋に対し、やや緻密さを欠いた配球だ。振ってくる打者には、ボール球から入る配球も今やセオリーであるが、大塚の投球パフォーマンスは有田のケアレスミスをもカバする。

走者がいなくても常にセットポジションの大塚。そこから足を上げて、９０度の角度からボールを握り潰すように腕を振り下ろす豪快なオーバースローから放たれたボールは、シュルシュルと音を立てて長嶋に立ち向かっていく。

１５３キロ。今日投げた他の１２人の投手の誰よりも速いストレートはさすがの長嶋も打ち返せない。

長嶋は豪快に空振りすると、その勢い凄まじくヘルメットが飛んでいく。投げも投げたり、それを向かい打つ打者が見事なスイングで投手に返戻すれば、球場はどっと沸く。

巨人ホームだけに長嶋の空振りに対する拍手が大半であるが、大塚の投球に対する賞賛もファンは忘れてはいなかった。

近鉄ファン中心に飛び出る自らの名前を呼ぶコールに、大塚は胸を熱くする。

「これが長嶋さんか……。日本が生んだ最大のヒーローに祭り上げよだけはあるな……。イチローやボンズとも対戦したが、その二人とはまた違う感覚が沸き上がってくる」

長嶋は脱げ落ちたヘルメットをかぶり直すために一度打席を外す。

「う～んさすがに大塚は我が横芝敬愛高校の後輩だ」

と高木晃次と大塚くらいしかプロ選手を排出していない高校を自分の母校と錯覚する長嶋に免じて次回に続く。

一人一殺

有田のサインは再びストレート。長嶋に連続して同じ球種。しかもストレートとはあまりにも無謀。それでも有田はあえてストレートを続ける。それだけ大塚の球威と球のノビがある証拠だろうか。

基本的にストレートと落ちるスライダーの二球種しかない大塚。首を振ることもなく有田の意のまま二球目を投じる。

やや力んだか大塚の投じたフォーシームの程よく回転のかかったストレートは有田が低く構えたミットとはまるで逆に高く浮き上がる。

ボールを見逃して打者と投手の力関係が対等になる並行カウントに持ち込もうとしない長嶋は、これを打ちにく。ケレン味のないフルスイングでヘルメットはまた空に飛んでいく。

バットとボールが衝突した後に焦げ臭い匂いがすると、打球はバックネット裏に飛んでいく。

ファウル。悪球打ちの名人長嶋さえも力負けする大塚の豪速球の威力たるや、さすが生存競争の激しいメジャーリーグで自分の居場所を得ただけのことはある。

「大塚という投手はこんないい投手なんだ！」

長嶋は思わず驚く。有田の動揺を誘うとか、計算づくのボケ混じりのコメントではない。素の長嶋から飛び出したコメント。長嶋は、心の奥底から大塚に感服している。

「そりゃ近鉄投手陣で一番球威のある投手ですからもの。今のケースのように打者一人限定で全力投球が許されるなら野茂や鈴木さんよりいい球投げまっせ」

「野茂や鈴木以上か。う～ん、ウチにも欲しいなあ」

「ウチにも？」

「川中でどうだ？　川相の後釜として期待したがてんで期待はずれの川中でもバファローズなら遊撃のレギュラー取れるだろ？　なん

なら二軍の帝王堀田もつけていいぞ。同じく二軍の帝王だった吉岡が立派にレギュラーを勤め上げてるなら堀田でも使い道あるだろう。う～ん？　２対１のトレードだぞ。バファローズさんにも損はないはずだ」

巣に戻った長嶋でも思考回路が変わっていることにかわりなく、第二次の監督時代に何故か脳はタイムスリップ。大塚を欲しい欲しいリストに加えては、自軍に圧倒的有利な商談で強引に取引を進めようとしている。

「川中と堀田？　冗談いっちゃいけませんよ、長嶋さん。元木と清原の大阪コンビならウチも考えてもええですけど」

有田も長嶋に悪乗り。

「元木と清原？　ダメだ、ダメだ。話にならんぞ、有田。う～んキヨと大介は勿体無い」

「どっちにしろベンチやないですか。清原はマルティネスの控え。元木は江藤や二岡の控え」

「うちは近鉄と違って、他球団の２倍３倍の戦力の厚みが必要なんだぞ。人材の無駄遣いと叩かれてもいい。そうでもしないと他球団が張り巡らす巨人包囲網はくぐりきれないんだ」

「そうですよね～。監督がアレですから、戦力が整わんと」

有田が最大限の嫌味を入れるが長嶋はまともには取り合わない。

「そうだろう、監督もまずいんだ。原のようなお坊ちゃま采配じゃ猛獣のような選手たちを操縦できん。堀内のようなズボラな奴じゃ神経の行き届いた管理ができん。あいつらじゃ監督失格だよ。だから野村なんて陰険な野郎に何度も優勝をさらわれるんだ」

メビウスの輪のように捻じり込んだ長嶋の思考回路は野村ヤクルトに対する惨めな敗戦の数々を堀内と原に押し付けて帰結する。

「ほうですよね……」

有田ももう長嶋との正常な話のやり取りは無理と長嶋操縦を諦めて、大塚操縦に頭を切り替える。

追い込んだら、大塚が勝ったも同然。いくら長嶋といえど二つの

絶対的決め球を持つ大塚を追い込まれてから切り返すのは不可能に近い。

いつもりよりよく走るストレートに伝家の宝刀縦に曲がり落ちるスライダー。どちらを投げ込んでも高い確率で三振が取れるからだ。落ちるスライダーの影に怯えさせて、真っ直ぐをズドンと投げ込むのもよし。ボール球を3つも使える余裕たっぷりのカウントなのだから、落ちるスライダーをこれでもかと連投するのもよし。

どちらも限りなく正解に近い二択から強気の有田が選んだ選択肢はスライダー。

強気の有田ならストレートの真っ向勝負を選択するはずではないかとの外野の声が聞こえてきそうであるが、強気の有田だからスライダーを要求できるのだ。

大塚のストレートの走りがよく、スライダーは一球も投げていない。しかも投球練習でスライダーを試投したさいに、上から叩く大塚の独特のフォームが、絶好調すぎて体の切れがいい今日は災いしてか、どうもスライダーが曲がり落ちすぎてワンバウンドになりがちなのだ。

慎重な梨田なら真っ直ぐを見せ球にするか、スライダーを投げさせるにしても、わざとボールからボールになるスライダーを要求して使えるかどうかの見極めのために一球を消費するだろう。

だが強気な有田は回り道せずに、直行便で長嶋から三振に奪いにいく。長嶋を三振のおとしめるという行為は、長嶋を神と崇める有田の世代にとっては裏切り行為に等しい。

体を蝕む罪悪感を逆にこの上ない快感にするために有田は大塚に腕を振って投げ込めとジャスチャーで支持する。

有田は真ん中に構える。落ちるスライダーは打てると錯覚させてこそ栄えるボール。真ん中から落とすのが一番の効き目なのであるが、ちらりと捕手の構えた位置を覗き見してコースと球種を推測する長嶋はそれと感づく。（構えるときにバットの芯の部分を確かめるフリをして捕手の構えをチラ見するのは長嶋の得意芸）

「有田め。真ん中勝負とは生意気な」
長嶋はひとあまり短く持っていたバットをさらに短く持ち、大塚のスライダーに対応しようとするが、それも無駄に終る。
大塚の投じたスライダーはバットが届く距離にこないのだから。上からたたきすぎたスライダーは、長嶋の想像以上に曲がり落ちる。
「やったボール球を振ってくれた」
長嶋のバットは虚しく空を切り、その場で天を仰ぐ、有田は切れすぎたスライダーをポロリとこぼし
、長嶋にタッチしにいく。振り逃げが成立する状況だが、勝負に負けた長嶋は一塁に走ることはないと有田のタッチを避けることもなく受ける。スライダーが来ることを察知した長嶋だから、完全なボール球のスライダーに思わず手が出てしまったのであるが、それでも長嶋は、大塚を賞賛することを忘れない。
「う～んアッパレだ。オレの先輩で大学時代せっせと南海来いと栄養費くれた大沢先輩ならそういうだろう。大塚、君と正々堂々の勝負ができてオレは嬉しかったぞ」
捕手をチラ見したことは棚にあげて、混じりっけなしの真剣勝負と長嶋が喧伝する。それでもドーム中が惜しみのない拍手を大塚と長嶋の二人に送るのだから、この勝負が人々の心を打ったのはたしかだろう。
「ヨッシャー」
佐々木恭介伝来の叫び声を上げて大塚はマウンドを降りていく。公約通りの有言実行の長嶋三振斬りに師匠久保から不肖の弟子大塚に許しの言葉がでるだろうか。
「言われたとおりやってきましたよ、久保コーチ」
「ふん、騙されて長嶋さんを本当に三振に取りやがって。さっきのはデタラメの約束だ。オレがお前を許すと思うか？」
「……」
久保のつっけんどんな態度は変わらず。それでも久保が緩みそうになる口元を必死にこらえていることを見つけた大塚はそれだけで

満足とたった3球だけの大仕事を終える。

西本の執念の一人一殺リレーで千葉・王・長嶋の殿堂入りトリオを見事封じ込めた。9回表3点差のほぼ近鉄勝利確定の場面で、それでも巨人はあくまでも勝ちにこだわると、川上は勝利への執着の一片を見せつける。

二岡もとっとけ

セオリーどおりの采配なら3分の2しか投げていない鹿取の続投で9回の投手起用の最善策だろうが、あえて川上監督はリリーフをつぎ込む。3点差がなんだ、

一見ただの無駄遣いに思えるこの投手リレー。巨人軍なら跳ね返して当然の点差と当然の逆転に気合を入れるために奮起を促すのか、それともされど初戦、たかが初戦、一つの負け試合などガタガタするな、一発勝負のトーナメントではない。余裕の小手調べと調整と投手の実力把握の意味を込めての投手交代か。

堀内ー高橋一三ー藤本ー桑田ー角ー鹿取。都合7人目の投手は、角、鹿取と来たらこの人しかいない。水虫にさえ悩まされる幅広い顔の中南米から来た男サンチェ……がベンチ入りすることはさすがにない。ガリクソンでさえ歯にもかけられない豪華巨人投手陣にサンチェが割り込む余裕があるわけがない。

9回表ON凡退で絶望感の広がる巨人のマウンドに立つのはこの男だ。

「やってられんわ。なんでオレやねん」

けだるい顔で不満を平気で吐き出せるこの男は上原。川上から直々に抑えの切り札に指名された守護神が敗戦処理同然のマウンドに立つ。

「鹿取さんの続投でええやん。気が乗らんわ。こんな場面。元々救援なんて先発落伍者が仕方なくやるポジションやろ？　一回限定セーブがつく場面だけで使うから川上監督がいうから渋々受けたのに。なんでこの場面オレなんやろ。たく」

「ブツブツ言うな上原。鹿取が登板した時点で言っただろうに。9回表負けの展開でおお前にいってもらうって」

藤田投手チーフの前でも臆せず愚痴れる上原はさすがの度胸。藤田がたしなめても上原の舌鋒は絶好調のまま。

「オレの他に宮田さんがおるやないですか。交代するなら宮田さんが行く場面でしょ？」
「８時半過ぎたから、宮田の登板はない」
「８時半の男だから８時半以降には投げさせれないいうんですか。しゃーない采配ですね」
「演出もプロには大事な要素だ。宮田の初登板は８時半きっかりと決めてある」
「たく……。オレは演出の犠牲者なわけですか」
投球練習のさなかでもブツブツと愚痴の止まらない上原。それでも口が滑らかなのが上原の江府町のバロメータなのか。
ＷＢＣの監督として上原を実質的なエースとして起用した王も上原のお性格を重々理解しているのか、
「ウハハハ。上原はこういう男なんですよ。先輩だろうとなんだろうと容赦しないんですよ。でも、有言実行なのがこの男なんですよ、ねえチョーさん？」
長嶋とくれば言わずもがな上原をエンゼルスと競いあって取ってきた時の監督。新人の時から３年も上原を見てきたのだから、わずか数週間の上司王以上に上原のことを理解していて当然だ。
「う～ん？　そうそうワンちゃん。二岡は色々口うるさい男だけど、やるときはやる男だよ」
相変わらず二岡と上原の混合しているようだ。もはや名前を間違えられるのは慣れっこの上原。それでも聞き流さないのは上原でもある。
「口うるさい二岡いうの想像すると気味悪いもんがあるなあ。貧乏・広島が３億出せるのに、大巨人さまはその３倍出せますよね？　とか口やかましく駆け引きする二岡はなんかあかんなあ」
「９８００円はどうかと思うぞ」
「王さん、二岡がモナの毒牙にかかったとき、そっちを批判しましたね。オレもそう思いますわ。新人時代はプロがどうあるべきか分からんかったオレは紙バック持ち歩いてましたけど、やっぱりプロ

はブランド物を身につけてナンボですよね」
と長嶋のボケのおかげで二岡の痛い過去が威厳ある開幕戦でほじくり出されてしまう。王・長嶋・藤田の監督のまで上り詰めた3人が会話の中枢に入ればどうしても山倉は格からして黙りこくってしまう。
「……」
これでは初のバッテリーとなる上原との意思疎通が図れるはずがない。先に歩み寄りの姿勢を見せたのは上原の方。
「山倉さん、オレの球種とかわかります？　そりゃわかりますよね、有名なオレですから。ハハハ」
９８年に長嶋巨人から見捨てられた山倉は９９年入団の上原と特に顔見知りではない。
「……フォークとストレートだろ？」
「そりゃ知ってますよね。なにせオレ巨人の大エースやから。オレも山倉さんのことよう知ってますよ。あまりにも無用な長物やったから名前をもじってナマクラとかいわれてましたよね？　あと槇原さんがバース掛布岡田に三連発打たれたのもオレ甲子園で生で見てましたよ」
「……」
さすがの鉄仮面山倉も無礼な上原に切れたのか沈黙が続く。
「……それ捕手僕じゃなくて、佐野クリストだよ。よく勘違いされるけど」
「ほんまですか？　当時の捕手いえば山倉さんの一枚看板やったから。つい勘違いしてもうた」
とどうでもいい間違いを指摘して、無礼をたしなめることなく巨人ナインは散っていく。
抑えと言われつつ敗戦処理として立たされるマウンドに乗り気でない上原。口が立ちすぎる上原をなだめすかすどころか、ますます増長させるままの王・長嶋の重鎮。そして十分な意思疎通ができないままでいる山倉との初のバッテリー。

救援が失敗する状況証拠はいくらでも揃っているのに、上原は最大限のパフォーマンスを発揮する。やはりこの男、どこまでも図太いのか。先頭は9番途中からショートに入った村上。失策に走塁ミスと良い所のない村上。なんとか打ってアピールしたいところだが、そのやる気が逆に空回りする。上原の絶妙な制球力でコーナーにビシビシとノビのあるストレートが決まり、そこにフォークが混ざれば村上のような猪突猛進の荒っぽい打者は打てっこない。

「よっしゃ……いう場面でもあれへんな。村上さんくらい三振にとって」

まるで村上ごときに打たれるわけがないと上原は感情を表に出すこともしない。

近鉄の打者はトップに帰って大石大二郎。上原の地元大阪の球団であり、有名になりすぎる前は近鉄に逆指名入団が内定していた上原にとって、大石は馴染み深いスターの一人だ。

「ららら……♪」

大石の応援歌鉄腕アトムを口ずさみながらの余裕のマウンド。しかしその余裕が油断につながる。１６６ｃｍと極めて小柄ながら筋肉隆々の大石は２９本塁打の記録を持つ一発のある打者でもあるのだ。上原が真ん中高目に何気なく投げた１３９キロのストレートは大石は大根斬りのように上から引っ張叩く。

「あれ？　あれ？」

打球は左中間にふらふらと舞い上がる。

「オレの球威に力負けしとる。凡フライやろ」

上原は当たりの弱さを見て振り返りもしないが、今投げている舞台が膨らみのまるでない東京ドームであることを思い出すと、

「ここ東京ドームやった！」

振り返っては口を開けてあんぐり。さんざん東京ドームの狭さと打球の飛びの良さを指摘してきた上原だけに、気が気でない打球の行方だ。はたしてエース堀内に続き抑え上原も決壊してしまうのか。

オリオールズパークアットカムデヤズ

「しまった！　ここは我が愛するメジャーの古き良き時代を回帰した新時代球場の先駆けオリオールズパーク・アットカムデヤズやなかったわ。東京ドームや。狭くてみみっちい日本の古ぼけたバブルのつけの球場やん」

　０９年の渡米以来メジャーリーガー気分が抜けない上原は現実に引き戻される。大石が上から叩いた打球は、エアードーム球場特有の屋根を押し上げる風に乗り、ぐんぐんと伸びていく。しかも飛んだ場所がまた上原の神経を逆なでする。膨らみがまるでない左中間だ。メジャーサイズの球場とまでいかず、現代の日本サイズの球場でも凡フライの当たりが、東京ドームではホームランになる可能性があるのだ。

　熾烈なる先発争いから脱落した上原が見つけた抑えという生き場。先発投手こそ絶対の価値観がある上原であるが、重厚なる巨人軍７５年の集大成の投手陣の抑えというのも悪いブランドでもない。ましてや大逆転の先発復帰を狙うなら、是が非でもゼロに抑えておいきたいマウンドであるが、何気なく高目に投じた不用意な一球からの失点は抑えの座さえ失しかねないほどの大減点だ。

　ただ９９年の状態に戻った上原の球威はホームラン性の当たり押し戻すほど球威と球のノビがあった。

「よっしゃ、失速しとるで」

　しかし打球の飛んだ場所が悪い。中堅方向よりに飛べば守備には絶対の自信のある韋駄天・柴田が軽々とキャッチする当たりであるが、あいにく飛んだ方向は左中間でも左翼手より。左翼手につくのは、３度のゴールデングラブ賞の実績も記者人気の高さからと陰口が叩かれる松井。日本時代の松井は、メジャーに行ってからの守備を剥奪されるようなけして悪い外野手でもないが、それほど秀でた外野守備を披露した選手でもなかった。

「ゴジの方に飛んだ。こりゃアカンわ」
ひとつ年上の松井といえど、上原には上下関係はない。松井をゴジと呼び捨てにできるの１９７４年以降の生まれは高橋尚成とこの男だけだ。
ヤンキース時代はもっぱらレフトの人だった松井も巨人時代はライト３年、センター６年でレフトの守備経験はルーキー時代のたったの一年だけ。１７年ぶりについた左翼守備・ａｔ東京ドームだけに松井は打球の行方がわからずまごついてしまう。
打者走者は快速が持ち味の大石。すでに二塁を蹴って三塁を音してれようと虎視眈々。松井が打球を取れずさらなるまごつきを見せれば、一挙にホームインの勢い。
しかし松井はあっさりと上原の懸念も大石の野望を無に返す。豈図らんや打球を処理してしまったのだ。
「楽勝じゃん。こんな当たり」
慣れぬレフト守備とは慣れた東京ドームなのか、落下地点の予測に少し手間取っただけで、膝に不安のない松井にとってイージーな打球だったのだ。
そしてすかさずヤンキース時代でも一部左翼守備マニアにメジャー屈指の返球処理スピードと噂されたスローイングを見せつける。
なるほどさしたる肩の強さをもたない松井だけにそれをカバーするために身につけた高等技術だろうか、イメージするよりも早く上原の元にボールに帰ったものだから、上原も口あんぐり。
「なんやゴジ。なんでここで張り切る？　無安打のくせしてからに」
それでも上原は松井を一くさりするのは忘れない。意外な好守でピンチが広がるのを防いだことに対する返礼の気持ちはどこにもみられない。だがそれが上原のペースだろうか。あくまでも自分が大将で自分が最高のパフォーマンスをすればチームは勝手に勝つ、チームプレーなど糞食らえの気概こそが上原が上原たる所以か。
上原の投球ペースはまるで高校野球のように速い。なにかに急かされたごとく、山倉のサインがでると素早くうなずき、瞬く間に投

球モーションを起こす。

上原の持ち味の投球テンポはそれだけで武器となり打者を立ち遅らせる効果もあるのだが、仕掛けの早い打者には逆に命取りとなるのだ。

二番に入っていたのは大村直之。２０００本安打を目前とする安打製造機は、上原に負けず劣らずリズのいい打者だ。一番打者の小兵はボールを見ていけなどの価値観はこの男には存在しない。

好球必打。大村の特性をよく知るこずるいバッテリーならボール球を初球から投じら、好球必打が悪球打ちになることもあるが、逃げることを恥と思う上原は、自信と威信を持って好球を投じる。

大村はそれを快打。一発狙いが目立つ今日の近鉄打線で初めてといっていいほど、鋭くコンパクトに振られたバットからはじき出された打球は、心地よい回転をして大村のヒットゾーンへと飛んでいく。

センター前にポトリと落ちるクリーンヒット。二死からの走者は特に気にすることはないのであるが、上原は異常なほどの落胆振りを示している。

「大村だけは絶対打ち取んたかったのに。アカンわ初球やからと、ボールを置きにいってもうた。アイツは打ちに行くタイプや。そんなんオレが高校時代、アイツの勇姿をテレビで見とった時から当たり前のことやったのに」

上原と大村、巨人からメジャーに飛び立ったスター選手と地味なパ一筋の職人選手。セとパとリーグも別で一見無関係の間に見えるが、上原には、多少一方通行ながら大村を意識せざるを得ない理由があったのだ。二人は同級生。しかも大村は甲子園優勝チームの三番打者というスター。１９９３年の夏の甲子園決勝戦、大村は満員の観衆の万雷の拍手の元、打席に入ったものだ。一方、上原はよく知られた通り、甲子園から程遠い中堅私立の控え投手兼任外野手。

９３年、１８歳の頃の大村と上原は天と地ほどの差が開いていたのだ。大村の躍動する姿をテレビでうらやましげに見ていた上原は、

大舞台のこの場所で積年の嫉妬心を晴らそうとしたが、またも不用意な投球で、自ら台なしにしたのである。

藤田投手コーチがボールペンをサラサラと動かす。メモ帳に上原の投球内容を書き記しているのだろう。その内容は上原にはわかるわけがないが、聞き心地のいい話題が書き込まれているとは到底思えない。おそらく初球の入りのブザマさから抑えを任せるのは不安などの酷評ともいえる評価。そうれを感じ取った上原は、敗戦処理のマウンドで出すつもりのなかった本気の上原を渋々あらわにする。

「3点差で誰が本気で投げてやるか思うたが、しゃーない。本気でやらなしゃーない。どう考えとうても巨人軍史上最高の投手のオレがこのマウンドで終りやなんて不条理なこと、オレが許すかい」

本気を出すと意気込む人間はこの世の中にいくらでもいるが、たいてい力のないものの戯言。本位を出せる実力やバックグラウンドもない、ただの強がりに過ぎないのであるが、上原は別。

本気を出した時の上原のすさまじさは国際試合無敗の実績だけでもよくわかる。

三番はこれまた途中から入った新井宏昌。１９８７年には１３０試合制の安打記録を作ったほどの寡黙な好打者。イチローの師匠とも言われる新井を打ち取るのは本来至難の技であるが、本気の上原はそれを容易く可能にする。

「日本の打者相手にがむしゃらに投げるなんて新人以来や」

それまで大人しかった上原のフォームが豹変する。投げ終わったあと、まるで飛び跳ねるようなフィニッシュを見せると、ボールにも躍動が伝わったのか、踊るように新井の手元で伸び上がる。

落合も感服した打撃技術の持ち主の新井のバットに当てさせもしない。

「イチローさんに茶化しのメール送ろ。あんたの師匠もたいしたことあらへんかったって」

新井を見事三振に打ち取ると上原は涼しげにマウンドを降りる。

「5ー2の9回表のマウンドに抑えのオレがおる。今からテレビつけた人は絶対巨人が勝ってると場面と勘違いするで。でも現実はオレは敗戦処理なにゃ。あーあ、大事な肩を無駄にすり減らしたわ」

近鉄のマウンドに立つのは抑え4人集の4人目、赤堀元之だ。5度の最優秀救援の佐々木江夏の4度を上回る日本記録だ。

そして9回裏絶体絶命の巨人の先頭打者は5番の松井。ここまで遅刻に無安打に梨田に凡才扱いされるなどいいところのまるでない松井。

「いよいよエンジンがかかってきた。ホームラン打っちゃおうかな～。いやいや走者をためる場面だ。巨人ーヤンキースーエンゼルスと勝つチームしか知らないオレは自己犠牲に溢れてるからね～。どっかの弱小球団一筋の鈴木さんみたいな自己中なプレーはしないよ」

近鉄最高の守護神対松井で9回裏最後の攻防の火蓋が落とされる。

松井の意地

大塚のような１５０キロを優に超える豪速球投手でもなければ、吉井のようにシュートで内を突きフォークを落とす投球術の幅広さもなければ、石本のように左腕の有利さも燃えたぎるような闘志をみせることもない赤堀は５度の最優秀救援の栄誉に輝いたのは、可動域の広い独特なフォームから繰り出すストレートのキレと尋常ではないスライダーの曲がり幅があったこそだ。

特にその肩の可動域の広さ、腕を弓を引くように後ろに持っていくテイクバックの雄大さは同じスライダー投手の最高峰である伊藤智仁を彷彿させるものがある。

「１イニング限定の抑えなんて楽勝っすよ」

「３イニング４イニング平気で投げてたお前にしてみればそうかもしれんが、相手は巨人やぞ。１イニングやからといっても気を抜くなよ」

そして赤堀が他の３人の抑えを前衛に配し近鉄の守護神となりえるのは、強気な有田が抑え役に回るほどの図太い精神力。そして一人一殺の一部分にしか過ぎなかった他３人の抑えと違い、１イニングを任せられるのは、１イニング限定の現代の抑え投手と違い規定投球回に達し最優秀救援と最優秀防御率の両冠を獲得したことも分かるようにロングリリーフも十分にこなせるから。

巨人相手は一つのアウトが１イニングに値すると目算する西本にとって、３イニングを平気で投げる赤堀は１イニングを十分に任されるという試算があっての起用だろうか。

「３点差でしょ？　それだけあれば鼻歌交じりでも抑えられるよ」

赤堀が自信満々にマウンドにそびえ立つに違って、松井はどこか不満げな表情を見せている。

「まさか巨人の大先輩でもあられる有田さんも僕をコケにするとは……」

中学以来人の悪口をいったことがない松井でも近鉄捕手陣の度重なる口撃には眉をひそめる思いがあるようだ。梨田からは打撃の才能がないと蔑まれて、怒りの打撃も実らず凡打の山。そして新しい捕手有田からは、打撃技術でなく、

「ゴジ……。解説ん時のネット裏からみるとよう分からんかったが、こうしてマスク越しから真近にみると、お前さんホンマに顔でかいな～」

身体的特徴を揶揄される。野球技術に関することなら受け流す松井であったが、身体的特徴をなんやかんや言われれば聖人松井も我慢ができない。

「有田さんだって思ったより顔が丸いっすよ。オレ阪神ファンですから、よく阪神巨人の試合をテレビで見てましたが、そん時見てた印象よりもなんだが顔が丸い」

「あほ、顔の丸さはまだ愛嬌などの可愛さがあるが、顔のデカさはみっともないだけや」

「そういうや、有田さん、バース掛布岡田の3連発の時に捕手でしたっけ？　山倉さんをこのネタ持ち出してからかった時、あれオレじゃないと言ってましたから、第二捕手の有田さんすよね？」

「あほ、オレは１９８６年から巨人や。８５年の時はまだ近鉄おったわ。鈴木啓示大先輩最後の年やから、お守り役のオレはまだ必要やったんや！」

「え？　じゃあその時のマスクは誰だったんですか？　有田さんが移籍してくる前の山倉さんの第二捕手って誰でしたっけ？」

「オレがいちいち覚えてるか、アホ」

答えは佐野クリスト。同じ間違いをした上原に聞けば分かりますが、試合は松井の疑問が解けないうちに進んでいく。

有田の抱く松井の打者像は梨田の持つイメージにほど近い。

「間違わなければ打ち取れるな」

松井にいうわけでなく独り言でもらした言葉も意外と執念深い松井は聞き逃さない。

「またオレを凡才扱いかよ！　くぞ、打ってやる！」
　いいこちゃんモードで打席に向かった松井は一発で1点を返すよりも、一発を捨てて塁に出る事を主眼に置いていたが、今の有田のつぶやきで一変。甘い球がきたらあえて見逃さず、ガンガン振っていくつもりだ。
「赤堀さんといえば、まっすぐとスライダーの二択。まっすぐは１４０後半出る。スライダーは落ちるスライダーに近い球道を辿るが、ひとり前に投げた大塚さんのようなフォークの切れ味のスライダーともまた違う。曲がり幅の大きいスライダーだ。初球ストライクカウントを稼ぎたいなら、曲がり幅の大きいスライダーは制球しづらいから、ストレートを低目の安全な場所、外角低目、それもやや甘い所に投げてくると思う。四球を出すよりも一発のがマシとの考えから多少ゾーンを甘めに取るからだ。異チームプレー優先のいつものオレならお行儀よく見逃して深いカウントを作りにいくが、一発打たないとやってられないオレはそれを打ちに行く」
　鮮明なる松井コンピューターは初球の入り方を以上のように解析した。元来の読みの鋭さに、無安打、近鉄捕手陣の度重なる卑下を見返そうとする意地が加われば、松井は信用できる近未来予報士にもなれる。
　結果、有田は外角低めにミットを構えて、赤堀はそこ目がけて糸を引くような綺麗なストレートを投げ込む。
　松井は誰にもマネできない超高速スイングで外角低目のストレートに逆らって、ぶっ叩く。
　一打一閃。芯で捉えた打球は、ホームラン打者はボールの下ッ面を叩いて角度をつけるなんてちゃちな常識に囚われず、一直線の閃光となってライトスタンドに飛んでいく。
　ライトの新井は一歩も動かない。赤堀は振り返ることともしない。
　松井の意地と飛び抜けた技術の結実が巨人反撃の狼煙となる一点をスコアボードに点灯させた。

「ヤベ、打っちゃった。ホームラン、この場面、一発よりも走者を溜める場面だよなあ」
　一発を打ち込んでなお自己満足のプレーを反省する松井はさすがに優等生だ。
「こんちわノリさん。ノリさん、メジャーで何本ホームラン打ちましたっけ？　オレかれこれ１００本は打ちましたけど」
　三塁の中村紀を松井は塁を回るついでにはやし立てる。
「……」
　メジャー時代一本もホームランを打てなかった中村紀は反応することもないとだんまりを決め込む。
「あれ？　オレなんかいけないこといっちゃいました？」
　人の悪口は言わない松井であるが、時に空気を読めない発言で度々世間をにぎわすのもまた松井である。

小野は雄星の育ての親になれるのか

3点差が2点差になろうがなんてことはない。赤堀ほどの実績ある抑え投手が二点を与えて同点に追いつかれる展開にどうしてなるかイメージが沸かないからだ。

すぐに熱くなる西本も松井の一発は許容範囲のようで、

「ふん、いたずらに塁を賑わさすならこの方がマシや」

浮きがちの体を鎮め、どっかりとベンチに腰を据えている。

松井を迎える巨人ベンチもさほどの盛り上がりを見せていない。百戦錬磨の強者たちの巨人ベンチ、この一発が反撃の狼煙の一発になるか、焼け石に水の一発なのか、感覚的に理解しているのだろう。

「ゴジよくやった。オレのいったとおりだったろ？　な、な？　いったとおりのいってくれよ」

荒川博打撃コーチが自分のポイント稼ぎに言葉を投げかけたのが目立つだけ。Ｖ９首脳陣の多くは、この一発があだ花になることをよく知っている。この状況から再度チャンスメイクする難しさをよく知っているのだ。荒川以外の巨人コーチは

登板を終えた上原はタオルを肩にかけて松井を出迎える。

「いやあ、さすが松井さん、凄い一発でしたよと～と褒めたいところやけど、打つならもっと早い回に打てばいいのに。そうすれば、オレが無駄な敗戦処理などせずに済んだのに」

「悪い、悪い、上原。今日遅刻して打撃練習しなかったろ？　前の３打席が打撃練習の代わりみたいなもんだったんだよ、ハハハ」

「そういやゴジは遅刻すると必ず打つんやったな。まあええ、一本でも打てばええほうか」

「それより我が同世代ウルフこと高橋由伸に全力で応援しようや。オレの一発が無駄な抵抗に終るのか、それとも反撃への切り込み口になるのか、すべてはは次打者のアイツに掛かっているといってもいいぞ」

松井の一発の余韻が残る中、高橋由伸が打席に立つ。巨人を捨てて、メジャーに飛び立った松井と上原と違い巨人を死に場所に決めた男は、原いわくジャイアンツ愛が違う。初回の果敢なフェンス激突で痛めた右肩が回が進むにつれて、痛みが増してきてもなんのその、松井が赤堀のストレートを打ったなら、自分はウイニングショットを打つとばかりに、赤堀の伝家の宝刀曲がり幅の大きいスライダーに標準を絞る。左打者の高橋の足元に曲がり落ちるスライダーを高橋は思い切り叩く。

松井の一発で塁に走者がいないなら、自分が塁にでればいいと高橋由伸は一年先輩の偉大なる個人プレーの穴埋めをする。

センター大村とライト新井の間に落ちるクリーンヒット。

無死一塁、２点差。一発出れば同点の場面。勝ちが決まったと決めつけていた近鉄ナインもさすがに浮き足立つ。

「むむむ……赤堀……しっかりしめろ、お前がウチの切り札や。最後の命綱や、お前の後には誰もおらんのや」

ちょこまかと動いて、窮地を打破してきた西本であるが、抑え４人の最後の砦で、鈴木、岩隈の４本柱の緊急起用のカードも切った今、赤堀を信じて祈るしかないのだ。

「これ僕また用意したほうがいいですかね？」

すっかりと寂しくなったブルペンに田中将大は投手が一人ポツリ。投手指定のプルペン捕手陣もロッカーに引き上げ、ブルペンに残るのは小野ブルペン担当と田中専用のブルペン捕手の嶋だけ。

「あん？　自分で決めろや」

なぜか喧嘩腰の小野に、

「えっと、そうだ、うん、えっと、ほら別に僕が決めることじゃなくて、ベンチからの要望に沿ってだな」

近鉄軍団に楽天田中と二人ですっかりと自分を見失った嶋はしどろもどろ。

「別に嶋さんには聞いてないっすよ」

「そう？」

「赤堀さん、絶対抑えてくださいよ～。延長１２回の補欠登録の選手起用が解禁するまで、僕一人で巨人打線相手なんて無理っすから」

田中の気持ちもよくわかる。サヨナラ負けでこの回で終るなら別だが、もしも延長に突入した場合、ベンチ入り投手は、戦力外田中を残すのみ。田中一人で延長１３回の補欠登録の選手解任まで持たせなければならないのだ。いくら田中でもこの状況は酷すぎる。勢いづいた巨人打線を３イニング完封など至難の技なのだ。

近鉄が置かれている状況も加味すると赤堀は同点に追いつかれた時点で負けに近い。つまり一発も許されないのだ。

打者は阿部の代走から試合に組み込まれた柴田勲。田中幸雄とただ二人の三割なしの名球会会員である。

「柴田さんか……もらった」

三割なしの印象の強い赤堀は、柴田を安全牌扱いする。しかし柴田には隠された能力があったのだ。

競馬大好きの赤堀か、それともポーカーの人生を振り回されたトランプマン柴田か。どちらのギャンブラーに軍配は上がるのか。

延長１３回の補欠解禁を予想して続々と投手がブルペン入りしてくる。雄星を強い言葉を浴びせてシゴキまくる昔気質の小野と舞い上がった嶋に挟まれた田中は、これで気まずい思いをしなくていいと胸をなで下ろすのだが。

「ちわーす……あ、え、い、あ？」

よけいに戸惑はめに。さて田中が見たいような光景とは？

小野は雄星の育ての親になれるのか（後書き）

なんで最終回なのに他に飛ぶのかね

スイッチヒッター柴田は完成品か

ぞろぞろとブルペン入りした近鉄補欠登録の投手陣。ただおかしなことに、その人数たるや規定の５人を遥かに超えている。

「いすぎやろ」

田中がポツリとそう漏らすのもおかしくないが、規定上１５人までの補欠登録の出場はＯＫの幾分寛大な特別ルールがあるためそれも已む無しか。

「お、あれパウエルやないか、懐かしい」

まず田中が顔だけで誰か判別できたのは二重契約で経歴に泥を塗りたくって帰国したパウエル。

今や最悪助っ人の一人として名前が上がるパウエルであるが、残した実績は外国人投手史上に残るもの。長身から投げ下ろす必殺”パワーカーブ”は最強巨人打線といえど手を焼くだろう。

「であれは高村さんやなあ。ウチ（楽天）の二軍コーチや」

楽天で同じ釜の飯を食う高村の判別も田中にとっては容易なこと。１５０キロのスピードボールに切れ味鋭い高速スライダーにスプリットフィンガーファウストボールは、ひとつ上の大エース野茂と居並ぶ素質と言われた男だ。調子がいい時の高村は攻略不能。補欠登録が勿体無いほどの実力者であるが、投げてみないとわからない不安定さが本登録から漏れた大きな理由だ。

「そんであのチビデブのおっさんは佐野さんか」

近鉄投手陣では有名人である佐野も田中は一目で分かる。中継ぎ投手として初めて年俸一億円の壁を突破した男は、スライダー、シュートの横の変化を軸に度胸満点の投球をする。抑え経験者優先のリリーフ

投手陣選考で中継ぎ一筋の佐野は惜しくも落選することになったが、むしろ延長１３回以降のありふれない有事に出陣する補欠投手にぴったりといえるだろう。

「……あとはよう分からん」
田中は早くも補欠投手陣解明の匙を投げる。あとに続くのは田中の年代に馴染みのない投手だらけなのだろうか。
「嶋さんわかる？」
４歳年長の嶋に助け舟を出すが、嶋も、
「あれは丸顔の山崎慎太郎さんだろう……」
とミスターフルカウントと制球難をドカベン山田太郎にバカにされた山崎が判別できたのが精一杯。
「小野コーチ分かりますよね？」
田中と嶋の新人時代の一年だけ上司だった小野に委ねるが、その小野、指定席だったコーチ専用ベンチに姿がなく、
「あれどこいったんだろう？」
と嶋がキョロキョロと小野の居場所を探すと、小野はなんとブルペンで投球練習を始めているのではないか。どうやら小野も補欠登録されているらしく、早速の肩慣らしか。それもそのはず小野といえば元々補欠登録されて当然の実力者。阿波野と小野の左腕二本柱は西武を追いかける近鉄の屋台骨だったのだから。
鈴木啓示二世と言われたその左腕から、切れ味鋭いボールを同い年で同じ宗派の光山相手にビシビシと投げ込んでいる。
「小野コーチってあんないいボール投げるんや……。知ってましたか、嶋さん……」
「オレもよく知らなかったよ。あれだけ投げれればちょっと横暴なコーチングしても無理はないかな……」
「ですね……。てゆうか僕がベンチ登録されるよりも小野コーチが最初から登録された方がええようなボールですよ、あれ……」
「しょうがないだろ、野球機構が楽天生え抜きを一人選べって暗にお前のベンチ入りをゴリ押ししてくたんだから」
「まあその辺の事情も漏れ伝わってきますが、でもやっぱり実力のある投手が入るべきっすよ……。パウエルも凄い落差のカーブ投げてるし、高村さんのボールなんて僕よりも速い」

「いや田中、お前も負けてないよ、自信もてよ。楽天生え抜き一人選べたって、草野さんや渡辺直人さんや永井やオレなど色々な候補がいたなかでお前が選択されたんだから」
「え、他のお三方はいいとして、嶋さんの候補入りだけはないでしょう……」

赤堀は柴田の実力を見くびっていた。
「３割なしの実績が示すとおり、どうせ当てて内野安打狙いの打撃技術の低い打者でしょ、柴田さんて」
はなから自分のボールは柴田は打てないと自信に溢れているのだ。名球会ブランドに怯えて萎縮するよりも、見下ろして投げる方がまだましといえるが、それにしても柴田の実力を低めに見積もりすぎている。
赤堀の天狗の鼻は初球を投げ終わったあとにさらに伸び上がるだから、始末が悪い。赤堀が自信満々に投げ込んだ低めのストレート、球速表示にして１４６キロのボールをいともたやすく柴田は見逃してしまう。赤堀はこれを自分のボールのスピードについてこれてないと勘違いする。
「楽勝、楽勝、ワンナウトはもらったも同然」
しかしこれは柴田の正しい野球観による見逃し。生涯三割なしの事実から打率の低さばかりが取りざたされて、ちょっと一発のある仁志タイプの粗い打者と勘違いされがちな柴田であるが、実際はＶ９野球の申し子として抜群の選球眼を持った打者なのである。その証拠に．３９０台と４割の大台を目前とした出塁率を二度もマークするなど、打率に比べて高い出塁率を記録する現代野球でより評価されるタイプなのだ。
柴田の隠された能力、選球眼が近鉄相手に牙をむく。際どいところを二球とも見逃しで、カウントは１ー２とあっという間に打者有利に。
見くびっていた赤堀もさすがに僅差の最終回、細心の注意を払っ

ているためか、柴田の実力の軌道修正をする。
「あれ？　結構見てくるぞ。つなぐ打撃よりブリブリと振り回して一打同点の一発狙いにくると思いきや際どい所を容易に見逃すとは……」
　兜の緒を締め直した赤堀は、ボール球を振らせるという技術の低い打者相手特有の攻めをやめて、ストライクゾーンに強いボールを投げ込んでくる。
　高目から切れ込んでくる曲がり幅の大きいスライダーで２－２の並行カウントに戻す。
　追い込んだたら、こっちのものと赤堀は、伝家の宝刀スライダーを決め球に選択して、思い切り腕を振り切る。追い込まれたこの状況、普通の打者なら手が出したくなるこのボールにも柴田のバットは止まる。ストライクゾーンからボールゾーンに流れ落ちた理想的なスライダーにさえ柴田の選球眼は惑わされない。
「フルカウント……クソ……」
　赤堀と違い柴田と時代がかぶる有田も、柴田の選球眼は想像以上だったようで、
「まさか赤堀のこのボールも見逃してくるとは……。２－３のフルカウント、四球出せば逆転の走者や。かといって真ん中いけば同点の一発放り込む力もあるお人や。当て逃げで三遊間に転がされてると、フルカウントやから一塁走者の由伸もスタート切るから一塁二塁どっちゃもセーフで内野安打や。こんな打者が代走から試合に出るんやからどんなチームや、まったく」
　有田は迷ったあげく、真ん中高目に構えた。四球を嫌い一発打てるなら打ってみろの有田らしく強気なリードだ。梨田ならあわよくば三振でボールゾーンを使うリードも考えられたが、赤堀は首を振らない。勝負別れ目のこの投球、はたして赤堀は柴田を断てるかどうか。

ＭＭ砲

赤堀は有田のサインに首を縦にしセットポジションから、運命を左右するフルカウントピッチ。

高目からスライダーをねじ込むという無謀な投球。四球を出して逆転の走者はまずいと赤堀の脳裏に過ぎったのか、スライダーはバッテリーの意図よりも高目に浮き上がる。

「しめた！」

それまで威風堂々とベンチで腕組みして睨みをきかせていた川上がそう漏らしてしまうほど絶好球。しかしあまりにもチャンスボール過ぎたのか柴田は、それまで肝に銘じていた繋ぐ意識がどこかに吹き飛びオーバースイング気味にバットを振りきってしまう。

ミートポイントからズレたスイングから放たれた打球はただ高々と舞い上がる。赤堀の上空にフライが上がるが、投手はよほどのことがない限りフライを取りに行かないものだ。マウンド上から逃げるように走り降りると、うようよと寄ってきたサード中村紀、ショート村上、セカンド大石がオレが取ると声を掛け合う。義兄弟コンビの村上、中村紀が譲り合わなければ、大石も勝利へと一歩近づくことになるアウトを取りたくてしょうがない。

ゆえに三者は激突しそうになるが、プロたるものフライごときは落とさないものだ。

結局、取ったのは大石。インフィールドフライが宣告されて落としても無問題の飛球であったが、試合には流れもある、簡単なフライを落としてはチームの勢いが削がれることにつながりかねないのだ。

大石はそのまま静岡生まれの同県人でもある赤堀にボールを渡しにいく。

「あと二人だ。なんとか投げ切れ」

「任せてください。２点差なんて僕にとってはセーフティーリード

ですから」

赤堀が強気の姿勢をますます強める一方、柴田はすごすごとベンチに戻っていく。しかし、Ｖ９巨人のつなぎ役を自負する柴田が最後の最後にどうして一発狙いの打撃をしてしまったのだろうか。想像だにしない甘いボールが来たために力んでしまったのか。

それは致し方ないだろう。そもそも柴田の左打席はプロ入り後の作り物なのだから。巨人軍は甲子園優勝投手柴田に早々見切りをつけて、当時日本にも活躍ぶりが漏れ伝わっていたヤンキースの大スターミッキーマントルに柴田をなぞらえて強打のスイッチヒッターの夢を柴田で叶えようとしたのであるが、両打席とも一級品とはいかず、結局、左打席は内野安打狙いの当て逃げ、そして本来の打席である右打席は左打席を突貫工事するために練習不足がたたって、力任せの粗い打撃と虻蜂取らずに終わってしまったからだ。

右打席も左打席も生涯打率は変わらないが、長打の出る頻度は右打席が圧倒してたという。１９６８年、柴田はＯＮの後どうしても定着しなかった５番打者を任されるのであるが、５番打者を演じきるために、柴田は左打席を捨てて右打席に立ったのだ。その時マークした２６本塁打は、柴田が右打席一本なら３０本３０盗塁を軽くマークするスーパースターになれる可能性を示したものといえよう。つまり、日本初のスイッチヒッター柴田は、柴田の本来の可能性を狭めたものと言えるが、今の打席、予期せぬ絶好球から出た色気が捨て去られた過去の自分を思い起こしたオーバースイングだったのか。

「川上監督、すいません、つい振りすぎてしまいました」

「らしくないな、Ｖ９戦士なら何をすべきか分かってると思うたが。つなげる意識を持ったなら今頃一三塁だったぞ」

原や長嶋傘下の選手ならば監督の教えが悪いと責任を押し付けることもできようが、教え子の打撃だけに川上も気分が悪い。

いや川上よりも柴田の打撃に苛立っていたものがベンチにいた。

「一二塁だったら、オレの出番やったのに……」

そう川相である。

「次の坂本はオレと同じショートの選手だから替えやすいはなおさら、いやそれ以前に王さんだろうと長嶋さんだろうとバントが必要な場面ならオレが送り込まれたはずなのに、一二塁、２点差、ベンチにはバントの名人、う～ん、またオレの出番が消えてもうた」

一死一塁、打者は８番坂本、代打バンター川相はない場面であるが、切羽詰ったこの場面代打がつぎ込まれてもおかしくない。

坂本以上の打者がいなければ別であるが、ベンチには原がいる。与那嶺もいる。打撃の職人与那嶺ならチャンス拡大が望めるし、巨人軍史上最低の４番の原でも一発で同点の怖さがある。

それでも川上は坂本の可能性を信じたのか、坂本を打席に送る。

「オレ期待されてるやん」

虚ろな目でテレビを見ながら坂本の失敗を願う二岡がいることも知らず坂本は打席に入る。

「ホームラン打てば同点やな、オレヒーローやん。松井さんと長嶋さんが一発打ったからって、オレのが扱いええやろうな」

まるですでに自分がヒーローとなったかのような坂本の妄想。であるが、これくらいの図太い神経がなければ最終回の打席など立てないのだ。

そして坂本とくれば田中である。幼馴染の坂本に田中が無関心でいられるワケがない。

「なんなら僕投げますよ！　坂本なんて僕のボールが打てるわけないすから」

と登板をアピールするが、アピールしたいコーチの小野が自分の投球練習にかかりっきりなのだから、聞く耳を持つものが誰もいない。

「って誰も聞いてない」

ぽつんと寂しい田中の背中に忍び寄る影。

「アハハハ、無理だよ。お前さんもいい投手だけど、赤堀とはくぐってきた修羅場の数が違うよ」

ソフトな口ぶりながら、ズバリと田中の幼稚さを切り刻むこの男とはいったい何者であろうか。

「は、あんた誰っすか？」

振り向いた田中も誰だか判別不能の細身の男の正体とは。

神戸ははしゃぎすぎる

「うっふふふ…お若いの、こういう場面はね、ボールの力とかじゃなくて、精神力の強さがモノを言う場面なのよ。僕が斉藤明夫や伊東昭光といったたいしたボールを投げない投手を抑えに起用した理由がこれなのよ。あいつらもどうってことのないボールしか投げないけど、ハートが違うわけよ」

「はあ……。ハートなら僕もそうとう自信ありますけどね……。それに五輪やＷＢＣやＣＳんい甲子園とこの若さで大舞台経験も豊富やし……」

「僕に口答えする度胸もあるしねえ……」

「って誰なんでスか？　近鉄ＯＢなことは分かりますけど……」

「最近の若い選手はけしからんねえ。自分のことのＯＢすら分からないって」

「いや別に僕近鉄とまったく無関係やし……」

「そうなの、へー」

このなんともマイペースな細身の左腕の正体は皆様お分かりであろう関根潤三さんなのである。

「他の近鉄ＯＢに聞いてくれれば？」

と関根さんは意地悪にも田中を近鉄ＯＢの元に走らせる。ただ田中、小野や高村の元に走らず何故かパウエルの元へ。

「フーフー」

と英語がしゃべれるわけのない田中は、まるで熱いスープを冷ますのに必要以上に息を吹きかける神戸拓巳のようにフーフーいってしまう。

「オータナカ」

それでも拙い英語の問いかけに慣れたパウエルは意図を汲み取り、

「セキネ、セキネ」

と答えてしまう。

「関根って、あの関根さん、ウッソオー？」
「ウフフフ。ようやく分かったかい、それにしても僕の名前を最初に口にしたのが外国人さんとはねえ……ウフフフ。別の僕は出るつもりはなかったんだけど、西本さんにああも言われちゃあねえ。関根の入る余地はないって、補欠なら登録してやるぞと言われて僕カチンと来て、補欠からでもいい、西本さんを見返せるならとこうしてブルペンまで来ちゃったのよ」
「関根さんって野手とばかり……」
「ウフフフ。どっちもだよ、天才はどっちでもできるのよ」
「どっちもすか？？」
「投げてはエース、打っては3番打者よ、ウフフフ」
「へー知らなかった、そんな凄いお人とは……」
「僕のことはいいから、ゲームに集中しなさいよ」
「あ、そうか」
「坂本はマー君のおさ馴染みだったよね、僕の同級生といえば、根本陸夫で……」
「はあ……」
関根さんの話が遥かかなたの昔話に陥る前にゲームに話を戻そう。
一死一塁打者は8番坂本だ。坂本といえば引っ張り専門の打者。外のスライダーが絶対的決め球の赤堀相手にはだいぶ分が悪い。
それでも優れた対応力を示す坂本は、即興ながら初対戦の赤堀対策を講じる。いつもより一歩前内角よりにスタンスを取るのだ。
3打席坂本を見た梨田なら立ち位置の違い気づいただろうが、初めて坂本の打席を間近にする有田が気づくわけない。
「しめた……」
外のスライダー一本槍で坂本を打ち取れると坂本の工夫を知らぬ有田のリードは一本調子になる。
初球の入りのスライダーを坂本強振。いかにもタイミングがあってないような不恰好な振りは、スライダーを投げ続けさせるための坂本の三味線だった。

「いける……」
経験豊富な有田をも騙した若き坂本の演技力は同じボールを投げさせる。
「きたで……」
坂本お待ちかねのスライダーがまた飛んでくる。しめたいけると坂本は思い切りスライダーを振りに行く。坂本の脳内に再生されたのはチャンス拡大の二塁打か。それとも一挙同点に追いつく一発か。
しかし悠々たる未来溢れる坂本のイメージ像ははかなく崩れる。赤堀のスライダーは、坂本の想像以上に曲がり落ちるのだ。
「なんや、このボール……」
崩された坂本。バットの先端に当たってしまった打球は、コロコロと一二塁間に飛んでいく。
「あかん、ヒーローどころか、併殺でおしまいやの戦犯や」
セカンドの大石が軽々さばく。そして二塁のベースカバーに入った村上に転送、二塁を踏んで、一塁に送球。併殺完成ならばその時点でアウトは3つ、試合終了であるが、巨人の運命やいかに。

ウォーリーを探せとも探すなとも言いたい気分ではありません

一死一塁から狙い通りのスライダーを打って出て併殺コースに打ってしまった坂本。彼ができる努力はただ一つ。目指せ一塁。遊撃手村上の手から離れた送球が一塁手の小川のミットに吸い込まれる前か同時のタイミングで坂本が一塁ベースを踏まないと、その瞬間に試合は巨人の敗戦で終了してしまう。

チームに帰れば一番打者を任される坂本であるが、飛び抜けた俊足の持ち主ではない。盗塁王を取るタイプではないし、、足で安打を稼ぐ猪口才さもない。おまけに一塁により遠い右打者。

坂本は凡打に落胆することなく手を振り前に前にと足を進ませない限り併殺は完成する。

それなのに坂本は凡打を悔いて一瞬スタートが出遅れる致命的なミスを犯してしまう。併殺完成の筋書き通りのドラマが再現される可能性は限りなく高くなった。

大石のすり減った肩が二塁転送を遅らせるか、荒っぽい村上が雑なプレーをすれば別であるが１９８５年～１９８７年の3年間、三遊間コンビを組んだ二人の息はぴったりとまではいかないが、スムーズにことが進む。

ああ～坂本はこの若さで近鉄相手にまさかの敗戦の戦犯の汚名を背負うのか。しかし神は坂本に配慮する。野球の神様といえば川上を指す向きもあるだろうが、川上はあくまでも打撃の神様であり、野球の試合のワンプレーにイタズラする権限はない。

村上がボールをリリースしたとき、併殺崩しの果敢なスライディングとまではいかないが、痛む右肩を作用点とする右腕を上げた高橋由伸の左の手のひらが村上の視界に入ったのか、村上の一塁送球は微妙に狂う。

さあ野球の神様は坂本に多少の肩入れをした。あとは坂本の試合を捨てない全力プレーで自ら運命を切り開く番である。

坂本は一瞬のスタートの遅れを取り戻すように、懸命に一塁に走る、走る、走る。光星学院時代、高校野球に嫌気がさして寮から脱走を試みようとしたあの時よりも坂本は全力を出して走っている。

歯を食いしばり、目は血走る。ヘッドスライディングで一塁に飛び込めば、審判への印象に多少は影響するし、アウトになっても叩かれ具合が多少薄らぐかもしれないが、坂本は勝利への実益を取った。

坂本は一塁に駆け込む。フィニッシュは前傾姿勢だ。

村上から転送されたボールが小川のミットに飛び込む。

坂本が最後に伸ばしたスライドか、それとも小川のミットに飛び込んだボールか。

どっちが早く一塁ベースに到着したか。

判定は二出川塁審に委ねられるまではなかった。明らかに坂本の足の方が一塁ベースに早く届いていたのだ。

「助かったわ」

ヒーローになれずも最後の打者となることは免れた坂本は一塁ベース上で満面の笑みを作ろうとしたが、凡打で笑みを漏らしては首脳陣の反感を買うと瞬時に思い笑顔を引っ込めた。

それにしても併殺完成の当たりが、併殺崩れとなったのは坂本の全力疾走の成果でもあるが、併殺崩しのスライディングをした高橋由伸の貢献度も大きい。

ベンチに戻る高橋由伸に坂本はお辞儀して併殺の戦犯を免れたことに礼を贈る。

「由伸さんどうも」

ただ高橋由伸は坂本に返礼をしない。坂本を嫌っているわけでなく、右腕を思い切り上げたせいで、右肩の痛みがより激しくなったからだ。

高橋由伸の右肩と引き換えに勝ち取った巨人軍大逆転勝利の望み。無駄にしてはならない。

打者はこれまた途中から入った9番捕手山倉和博。意外性の男と

呼ばれ、１９８７年のＭＶＰ捕手であるが、打撃の確実性に劣ることは確か。

川上が腰を上げて代打を起用する。一発で同点の場面は相変わらず、ついにレインボーマン原辰徳の出番か。

当の原は自分の出番と信じきって、背番号８が刻印されたマイバットを持って、準備万端。しかし川上がコールしたのは原とは別の切り札の名前だった。

「代打ウォーリー与那嶺」

川上が９回二死ビハインドの絶体絶命の場面に送り込んだのは、ウォーリーこと与那嶺要。千葉とともに反川上派の急先鋒と知られる男を最後の切札として起用するのだから面白い。

「僕じゃないのか」

気持ちをスカされた原はバツの悪そうな顔してバットを引っ込める。がしかし川上の意向を土井が伝言に走る。

「タツノリ、バットを置くことはない、ウォーリーが出たら君が代打だ」

「リアリー？」

と何故か片言の英語で答えてしまった原であるが、ウォーリーが出れば一番は投手の上原。森と川相の比較なら原が代打で当然。そんな当たり前の試合展開が読めずしてどうして三連覇の名将なのかと原の評価をおとしめるのは辞めにしよう。９回二死ビハインドとなれば誰でも我れを見失う危険性があるのだから。

メガネ面の四角い顔のウォーリー与那嶺が左打席に入る。

「ボク打つヨ。でも川上のためじゃないよ、ジャイアンツのためネ～」

柴田、二岡、長野、吉村、スミスを押し抜けて背番号７をつける与那嶺が巨人の命運握る。

あと一人

川上派だろうと反川上だろうと9回裏二死絶体絶命のこの状況にはそんなことはどうでもいい。

巨人逆転勝利への未来を作るための団結がそこにあるのも。それはいかにも急造で、脆いように思えるだろうが、選ばれた巨人選手の意思は突貫工事をも匠の仕事する。

ウォーリーこと与那嶺要に課せられた使命はたったひとつ。チャンスメイクをして逆転の走者になるべく、石にかじりついても一塁に出ることだ。

ヒットでもいい、四球でもいい、エラーでも振り逃げでもいい。アメフトで培った特攻精神で与那嶺は出塁しようとする。

「打撃の職人与那嶺さんか……」

あと一人で勝利の美酒が待つ赤堀はそうつぶやいた。あと一人で試合は終る。腕がちぎれても赤堀は全力で投げきる覚悟だ。

内野陣の司令塔大石は、相手に分からないように、そっと他の内野陣に指示を送る。

「セーフティーあるぞ……」

バントの構えをして、セーフティーバントを注意しろと喚起を促す。

「セーフティー？　オレのところ転がしてこい。カッコよくさばいて試合終了のヒーローになったるわ」

サードの中村紀が重心を前に倒してじりじりと前進する。一方の一塁手の小川は一塁走者に坂本がいるために塁にひっついている。それでも一塁方向に転がしてくるのは十分に考えられることで小川もあとワンナウトに気を抜く様子がない。

日本初打席いきなりセーフティーバントを見事に決めた与那嶺はどこに転がしてくるか分からない。転がしてくると見せかけて内野を前にさせて、間に強い打球を打つ高等技術もできる打者だ。首位

打者二度、ＭＶＰ一度、生涯打率3割越えの与那嶺が都合１４人目野手なのだから、あらためて巨人の層の厚さが分かるだろう。

川上が特に与那嶺に耳打ちすることはない。関係性が危うく、言葉もろくに交わさない間柄なこともあるが、監督、ヘッドコーチと指導者経験豊富の与那嶺は何をすべきか自分が言わなくてもわかっているとの信頼感か。憎しみあう仲で信頼関係を構築できるとはさすがトップのプロ選手だろうか。

「テツはボクをシンジテルね。ボクもテツをシンジヨウ。今日このときばかりはネ」

与那嶺の４０年近いプロ野球経験から、何をすれば出塁できる確率が高いかを瞬時にはじき出した。

初対戦の赤堀相手に打ち砕くのは困難。四球狙いも赤堀のストライクゾーンに集まる制球力では望むべきではない。

ならばすでに包囲網が敷かれていても、得意のセーフティーが一番確率が高いだろうとはじき出した。狙いはどこだ？　一塁方向か？　小川はベースにくっついてる。しかし前進して処理できれば、一塁目指す与那嶺にタッチすれば試合は終る。ならば投手方向か？

赤堀のフィールディングはバント攻撃に耐えられるだろう。いかにも動きの良さそうな体躯は容易にゴロを処理することだろう。

残るは三塁方向？　中村紀は見かけに比べて守備は軽快だ。おまえけに目立ちたがり屋の彼は飛び跳ねるように最後のアウトに取ろうと処理するだろう。

どこを転がしても近鉄内野陣は穴がない。

赤堀は初球を投げ込む。ケレン味のないストレートが有田のミットを叩く。球審岡田の腕が上がる。ワンストライク。あの一人から、あと二球に近鉄応援団のコールが替る。与那嶺はタイムを取り打席を外す。

「赤堀とかいう投手はボクがハワイに帰ってから出てきた投手ネ。でも打てないボールじゃないネ。１６０キロでも投げると思ったら１４５キロネ。メジャーリーグにも上がれなかったボクでも打てる

ヨ。でもボクはボールとケンカしにはいかないヨ」
二球目、赤堀はスライダーを投げ込む。与那嶺がバントの構えをする。近鉄セーフティー包囲網を強行突破の構えだ。
与那嶺は、流れ落ちる赤堀の必殺スライダーをバントスポットに見事に当てる。
はたして与那嶺が転がした先は、一塁方向でも投手方向でも三塁方向でも、プッシュバントに転じて二塁の大石や遊撃の村上に標準を絞るわけでもなく、日系ハワイアンスナイパーが狙いを定めたのは、捕手の有田だった。
「オレんとこ転がしてきた」
与那嶺は、西武や南海、日本ハムのコーチ時代に近鉄有田の何度も見てきた。そして有田が飛び抜けた鈍足であることも知っていた。
一塁を目指し走る与那嶺。赤堀の前進を制して、自らボールを取りにくる有田。鈍足の有田であるが、打球処理は迅速だ。むんずと掴むと矢のような送球を一塁に送る。
セーフならチャンス拡大。アウトなら試合終了でネクストサークルの原は史上最低の４番打者を覆す絶好の機会が失われることになるが。
「ウォーリーファイト！！」
この期に及んで安直な声援を与那嶺に送る原の思いは届くだろうか。

第一話目の主人公が登場

まさか自分の前に転がしてくるとは思ってもいなかった有田は送球を焦る。矢のような送球を送っても、それが高く逸れればまさしく台無しだ。

小川が精一杯ノビをして捕まえにいくが、ミットの先からポロリと溢れる。その間、いや有田が高い送球を送らなくとも、悠々セーフとも思える与那嶺の快脚は素晴らしく、すでに一塁ベースを駆け抜けた与那嶺は一塁コーチャーの土井に向かってバッティンググローブを投げ渡す余裕ぶり。

「ボク出たよ、川上さん。どうだテツ」

与那嶺は、Ｖ９巨人のＶ１０の野望を目前に打ち破った以来の打倒川上を果たしたのだ。

「これでボクが逆転の火付け役として記者のみなさんに囲まれたら、ボクを最後の最後まで干した川上さんの采配批判をするヨ、ウフフ。こんないいプレーヤーをどうしてスタメンに起用しなかったのってネ」

一見与那嶺の感情の表し方は幼稚であるが、川上に対する意地が巨人敗戦の危機を救ったのだから、これもある意味巨人軍の伝統のなせる技か。

「つないだヨ若大将」

与那嶺の思いは原に託される。

「上原にかわりましてピンチヒッター原背番号８」

ネクストサークルに姿を現したときから観客はざわめき立っていたが、改めてウグイス嬢が原の名前をコールするとドームは今日一番の大歓声に包み込まれる。

この歓声は松井どころか、ＯＮにもなかったもの。原の人気とスタメンを外され最後の最後までまたされた飢餓感からなるものか。

とにかくドーム中のファンの視線は原一人に集まっている。

「原さんってこんなに人気あったんや」
思わずそうつぶやいてしまったのは二塁走者の坂本だ。坂本の世代となれば、原の現役時代はよく知らない。ならば原の人気がいかなるものかもよく理解してないのだ。
「なんだ坂本、知らなかったのか？」
大石があと一人の状況でも気安く坂本に話しかける。
「そりゃ知りませんよ、大石さん。僕が小学校入る頃には原監督辞めてましたもん」
「人気あったよ、原は。僕は同級生だからなおさらよくわかるんだ」
「へえ～大石さんって原さんの同級生やったんだ」
「原の人気と来たら最盛期は大手のＣＭが８本とかそりゃ凄かったんだよ。チョコレートのＣＭとか出てまるでアイドルさ」
「へえ～」
「オールスターでもファン投票がすごくて」
「へえ～」
「でも僕なんだよ、原じゃなくて当時のオールスターのファン投票１２球団一位に輝いたのは」
「へえ～……。いつのまにか大石さんの自慢になってやないですか」
大石がさり気なく現役時代の人気ぶりを坂本世代に伝えたところ、原が大歓声と猛烈なフラッシュを背に打席に向かう。
「二死一二塁。２点のビハインド。もう逆転のさよなら３ランを打った僕しか思い浮かばない」
原は成功の未来しか思い浮かばないほどのポジティブ思考。
「タツ、久しぶりやな」
有田の挨拶にも原は若大将らしく爽やかに返す。
「有田さん。シーユーアゲイン」
コテコテの日本人有田に対して、得意の原イングリッシュが飛び出るほど原の思考回路は絶好調なのである。
ただちょっとまって欲しい。原は一打さよならのチャンスに打席に立つことが切望される男だろうか。ファンも原に待ってましたと

声援を送るが、現役時代の原にチャンスに弱いだの、ひ弱だの、親知らずを抜いたくらいで休むなだの、史上最低の４番だのと罵倒の限りを浴びせたのは他ならぬドームのファンではないか。
　それが原に対する少しの飢餓感だけで、これだけの声援をしれっと送れるのだからファン心理たるものは一筋縄では解明し切れない。
　ただ原を切望した救世主と見ていたファンもおよそ１５年ぶりにたった原の打席を姿を見て、苦い記憶がプレイバックしたか。
「あれ？　なんでオレ原に期待してたんだ」
「そうそう、チャンスに原が回ってきたら、結果が出る前にため息をしたのに」
「どうして今の原に期待しているんだろう？」
「ばかにするな、原はチャンスに強いんだぞ。勝利打点は史上一位だし、得点圏打率は三割越えているぞ」
　ファンの中にも意見が割れてきて、怪しい雰囲気になったきた。ファンの気持は共通観念となってドーム中に駆け巡るように伝わっていく。
　原を待望していた雰囲気はいつのまりか薄くなり、いつのまにか原で大丈夫の雰囲気が蔓延してくる、
　原はまだその雰囲気に気づいていないが、捕手の有田の囁きが原の横綱土俵入り気分に味噌をつける。
「タツ、お前の苦手な得点圏や、フフフ。川相や森さんの方が怖かったで、お前さんで助かった」
「……」
　まるで自分が長嶋並にチャンスに強いと思っていた原は現実に引き戻された。
　グリップの握りに力みが伴っていく。見下ろしていた赤堀が次第に大投手に見えてくる。
「ホワイ？　どうして自信がなくなっていくだ。タツノリ。自信を持て、ファイトだ、ゴーだ、タツノリ」
　と粗末な激励な言葉を並べて自己暗示をかけるが、勢いの消えた

原は救世主となれるだろうか。

一球の緊張感

９回裏二死２点差一二塁。二塁走者は併殺崩れでなんとか残った坂本。一塁には頭脳的プレーで執念の出塁をした与那嶺。そして一番に返って投手上原の打順に取っておきの代打の切り札原辰徳。投手は近鉄守護神赤堀元之。

否応にも盛り上がらざるをえないラストダンス。日曜日の午後９時２０分日本中の視線は原に集まっていた。

原が打っても打たなくても話のネタに突きないこの場面であるが、実況中継する日本テレビは期待で胸を一杯にする視聴者に向かって残酷な宣告をする。

「え～誠に申し訳ないのですが、ＪＷＢＣ開幕戦、一球の緊張感（２００３年～）、元気を日本に（２０１０年～）、バトルボールパーク宣言（２００２年～）劇空間プロ野球（１９９２年～）日曜ナイター中継、巨人対近鉄は放送時間を延長してお送りしてまいりましたが、９時２４分までの放送とさせていただきます。何とぞご了承くださいませ。なおＣＳテレビＧ＋では試合終了までお送りしています。ご加入のお問い合わせはこちら……」

なんとこの大事な場面で地上波放送の試合途中の打ち切りもありとのお知らせだ。地上波中継時間内で試合を完結させるには原は凡打に倒れるか、それともサヨナラのヒーローになるしかない。

５－３の平凡な試合展開でこれほどまでに試合時間が伸びたのは、選手間の余計なトークが多すぎるのが原因か。それとも細切れの投手起用でいたずらに時間をくったのか。

いずれにしても全国の視聴者が原の勇姿を目撃できる残された時間はわずか３分間。３分間のインスタントドラマの行方はいかに。

打席に立った原はバットを高々と掲げフーと息を吐く。そしてきっと投手の赤堀を睨みつけると、独特の顎を引いては突き出す仕草を繰り返して、精神状態を高めていく。

巨人軍史上5本指に入る4番打者としての実績を持つ原が与えられた打席はたったの1。松井やONが4打席立ったのは対照的だ。だがこのたった一打席が巨人の運命を決定づける打席なのだから、原は幸運の女神につぐつぐ愛されているいえよう。いや、たった一打席で戦犯扱いされる可能性もあるのだから、興奮の女神は原を弄んでいるとの見方もできる。

なんにせよ原が打つか打たないかにすべてがかかっている。

一二塁とはいえ、塁はまだ一つ空いている。原の次打者は二番の千葉茂。原よりもしつこく肝の座った勝負根性のある厄介な打者であるが、原のような一発はない。ならば原を避けて千葉勝負も近鉄ベンチは頭の片隅によぎるはずであるが、西本はなんの指示も送らずどっかと腹を据えている。

赤堀にも有田にも逃げるだの際どい所に投げて打者の出方を見るだのの様子はない。あくまでも原勝負の心づもり。勝負弱い原にかけたのか、それともこの場面原から逃げて何がプロフェッショナルか。どうしてファンを楽しませるのか。急にプロとしての義務感が生まれたのか。それまでしゃべり倒していた解説の中畑も、

「この場面、解説する必要はありません！　原と赤堀の対決をじっくり見ましょう」

とお口にチャックモード。特別ゲストの野茂は最初から黙して語らないから別にして、何故か問題はもう一人の解説の池谷公二郎。

「え～赤堀は私と同じ静岡生まれで、原の一発が生まれれば……」

静寂を持って最後の対決を演出するという暗黙の了解を読めず、ダラダラと解説を続ける。さらに池谷は、

「忘れてました。この対決はターニングポイントです」

と誰もが思い出したくない日テレ中継の暗黒の演出を急に思い出す始末だ。

一人浮き上がる池谷をよその赤堀は有田のサインにうなづく。ボール球で入る小洒落た配球を赤堀ー有田のバッテリーは好まない。あくまでも初球からストライクを取りに行く。

外角低め、投手の生命線に渾身のストレートを投げ込む。糸をひくような球道。原はこのボールを打ちに行かない。原たる役者は初球打ちだのという無粋なマネはしないのだ。

ボールか、ストライクか、微妙なゾーン。いや球審が巨人びいきの岡田出なければ腕を上げて然るべきゾーンに飛び込んだ見事なストレートであるが、巨人びいきの色眼鏡をかめた岡田は腕を上げるのか微妙なコースだ。

有田は背中越しに判定に耳をそばだて、原は思わず岡田の顔を凝視する。

「ストライ〜ク〜」

岡田は腹の底からコールした。有田はうんうんとうなづく。原は一瞬白い歯を見せたが、すぐに真顔に戻る。さすがの巨人びいき岡田もこの場面は公平に裁くだろうか。

「タツ、これで近鉄の勝ちや」

有田がまた原を揺さぶりにいく。

「ワンストライクで勝負の行方が見えるなら、三球もストライクを投げる必要性はありませんよ、有田さん」

「それもそうやな……うふふ…」

笑う有田は徐々に原の懐に体を寄せていく。

「もしこれでタツを打ち取れたら東尾さんになんかおごらないかんかもなあ」

原は突然飛び出た東尾の名前に神経をぴくっとさせる。有田のサインにうなづいた赤堀の目線はミットになく原、いや原の頭にあった。

赤堀ー有田の強気なバッテリーは、強気を通り越して原の頭を狙いにいくのか。野球の醍醐味がつまったこの場面をぶち壊す気でいるのか。

原貢総監督

原も赤堀の視線が自分の頭にあることを危機管理能力から感じ取ったが（原巨人の危機管理能力とはクルーンがいても小林雅英やマイケル中村など同じ抑えを何枚も抑えておくことだ。故障離脱時の替りになることは当然として他球団の戦力を削ることにもなる）まさか全国の視線が集中する場面で頭に投げてはこないだろう。外勝負の布石で腰を引かせて踏み込ませないための引掛けであると原は意図を見破るが、もしも東尾のような投球をされたら命に関わると、原は若干腰が引き気味のスタンス位置を取る。

それを見た有田は腰が引けたならば当たる危険性はなくなったとサインにサインを重ねて赤堀に今度こそ東尾ばりのブラッシュボールの要求する。

赤堀は何食わなく顔で何度かうなづいてセットポジションに入る。はたして赤堀は原の頭を目がけて投げ込む。二塁走者の坂本は真後ろから見ているために、リリースした瞬間に、

「監督！　危ない！！」

自分を抜擢してくれた恩師に向かって注意の信号を送る。原は逃げちゃいけない。日本シリーズで東尾のブラッシュボールに腰が引けて、踏み込めなくなり外の甘いスライダーにヘナヘナのへっぴり腰で空振りした原はもはや過去の原辰徳。ＷＢＣ世界一と二度の日本一にアジア一と修羅場と経験を積んだ原はもう逃げない。

あらかじめ一歩足を引き気味に構えた原は逃げる必要はないのだ。顔面に近くを素通りする赤堀のボールに原は涼しげに見送る……ハズだった。

のであるが、赤堀の投じたボールは１２７キロと表示されている。赤堀のストレートは軽く１４５キロは出る。つまり赤堀の投げたボールはストレートではない。ブラッシュボールとくれば、その球種はストレート、あるいはストレートとほぼ同じ球速が出るシュート

ボール、つまりファウストボールと相場は決まっている。
赤堀の投げたボールはストレートいやブラッシュボールではなく、原の頭を変化点にする大きく曲がり落ちるスライダーだったのだ。
何食わない顔でよけて、赤堀に向かって一言二言、危ないじゃないか、絶対的な守護神なら正々堂々と勝負しろと紳士的な抗議をするつまりだった原は赤堀ー有田のバッテリーにまんまと一杯食わせたのだ。
大きく曲がり落ちたスライダーは、真ん中高目に決まる。
「ストライク～」
巨人びいきの岡田でさえ躊躇なく腕を上げる。ブラッシュボールを漫然と見逃すはずが、ストライクを取られて原はいかにも罰が悪そう。
元木の一年目のオープン戦、小宮山の投じた大きなカーブを頭に当たると思って、頭を下げたらなんとそこから曲がってストライク。元木はこれがプロのボールかと目を白黒させたあの場面を彷彿とさせる今の原。当時の高卒（正しくはハワイで一年間）ルーキー元木はまだしくも、何千打席もプロのボールを見た原がこれでは、半信半疑だった東京ドームのファンはついに愛想を尽かす。
まるでＯＮ以上の千両役者の登場と原に待望の拍手を浴びせていた巨人ファンはどこにいったんだろう。まるで原の打席がどんな結末を辿るのか、未来が見えたかのように、ため息さえ漏れてくる。
追い込まれた原。追い込んだ上にボール球を十分に使える赤堀ー有田の近鉄バッテリー。
左翼外野席にごくわずかに存在する近鉄ファンは、
「あと一球」
と声を張り上げる。もう一度シュートでも使って原の内角をえぐるのもいい。外にスライダーを投げて、焦る原のバットを振らせにいくのもいいだろう。
赤堀ー有田のバッテリーはなんでもできる。対して原はなんにでも対応しなければならない。

「原さん打って」
テレビで見ている松本哲也が日本生命のパンフレット片手に原に声援を送る。
「監督！」
大田、小田嶋、久保、市川、田中大二郎の東海大閥の巨人選手が東海大学松前記念館で拳を強く握る。
「赤堀さん抑えて」
仁志、清水、二岡、林、ら原巨人から追放された選手が事もあろうか、近鉄の応援をする。
赤堀の投げた運命の三球目。外角から逃げて行くスライダー。安全策とボール球を振らせにいく腹づもり。原の頭にもあったが、バットが思わず出てしまう。原は必死になってバットを止める。
振ったなら空振り三振でゲームセットだ。ハーフスイング。有田は一塁塁審の二出川にチェックスイングのアピールをする。
二出川は腕を横に広げる。
ハーフスイングは取られない。原は休止に一生を得たが、それでも原が絶体絶命であることは変わらない。
「決め球はまっすぐのはず。それが有田さんの強気なリード。それが近鉄野球。いやパ・リーグの野球。力でねじ伏せて勝利のタッチと企んでいるはずだ」
赤堀のストレートに対応すべく、原はバットを一あまし短く持つ。
第４球。赤堀の腕が弓矢を引くようにテイクバックする。よく振れた腕から放たれたのは、原の読みどおり渾身のストレートだ。１４７キロと表示されたキレのいいボールを原は原らしく腰を捻りちぎるような豪快なフォームで振り抜く。
バットと衝突したボールは、東京ドームの薄曇りの天井に向かって、高々と舞い上がる。

フライ

見上げていると憂鬱な気分に落ちていきそうな東京ドームの薄曇りの天井に向かって、よどみない発給が高々と舞い上がっていく。

投手の赤堀は打球結果がどうなるかそれ以前に、原の打ち上げた打球を見て、ある印象を持った。

「どこかでみたことがある風景だ」

試合の雌雄を決する打球に対して、ずいぶんと情景現れるのんきな感想であるが、それは赤堀が正しかった。

「子どもの頃よくテレビでみた気がする」

同じような感想を抱いたのは赤堀だけではなく、三塁の中村紀もだった。特に８０年代に少年時代を過ごした巨人ファンのノリにとって、バット飛ばしをよくマネした中畑や同じサードの原に対する思い入れは人一倍強いものがある。

「ようみたなこの打球」

原と同郷の義兄村上に同意を求めたい所であったがそうはいかない。

赤堀の渾身の高目のストレートを読みきって思い切りバットと全身のパワーをぶつけた原が放たれし打球は高々と舞い上がり、今にも天井に当たりそうなほどの高さを記録してから、グランドに向かって落ちていく。

フライが上がって落ちるまでの時間なんてたかが6秒ほどなのに、どうしてこんなに長く感じられるのだろうか。

どうしてファンはため息混じりに打球を見つめられるのだろうか。

どうしてファンは一種の望郷を抱けるのだろうか。

どうしてファンは席を立てるのだろうか。

どうして日本テレビは試合の途中ですが、放送を終了させていただきます。試合を引き続きご覧になりたい方はＣＳ系日テレＧ＋をご覧くださいと視聴者に告知することを辞めるのだろうか。

どうして西本は真っ赤な顔で鼻の穴をひらいているのだろうか。
どうして原は白い歯をみせているのだろうか。
どうして中村紀はオレが捕ると義兄の村上や捕手の有田を制しているのだろうか。

それは、原が打ち上げた打球がサードへの平凡なポップフライだったからだ。
原の現役を知る人々にデジャブ的な感覚を味わせる、どこかで何度も繰り返しうんざりするくらいみた光景。既視感のように、まるでＶＴＲのエンドレスリピートをしているかのような情景。
原が絶好のチャンスにポップフライを上げて、苦笑いしつつ白い歯をキラリと光らせるのは、ある時期日本において日常の出来事だった。
原の現役時代に間に合わず、妄想と幻想が作り上げしイメージに置いて原は逆転のヒーローになると信じて疑わなかった原チルドレン坂本は二死から上がったフライは全力疾走との基本を守りつつ、
「ウソや、ウソや、ありえへん」
と目の前に起こっている出来事に対し、怯え戸惑う。
ちょうど走者坂本の目の前だった。サードの中村紀が大きく腕を何度か回し、自分の打球と近鉄内野陣どころかドーム中のファンいやテレビで見つめる全国味にアピールしている。
打球は落ちてくる。それでも坂本は原が奇蹟を起こせる人だと思っている。
坂本が入団して巨人はセリーグ三連覇。負けを知らない坂本がまさか巨人が近鉄など消滅球団に負けるとは信じられないのだ。
「落とせ！」
落とすわけがない。プロの内野手がこのフライを落とすわけがない。坂本もそれはよく分かっていたが奇蹟なるものに縋りたくなったのだろう。
ノリのちょっと派手めな作りのグラブにボールがすっぽりとはま

ると、試合は終る。坂本の幻想が崩れる。
原が苦笑いをしつつ派手な崩れ方で凡打に終わったことを悔いる。ドーム中のファンはああやっぱりかとの思いで席を立つ。
ごく一部の近鉄ファンが禁止されている紙吹雪を乱舞する。ノリが喜びを爆発させると、赤堀と有田が勝利の握手をする。日本一決定の試合のようにいっそ飛びつこうとも有田は思ったが、たかが１勝と思い直した。
西本がどんな原動力がそうさせたかわからなほどのスピードでダックアウトを飛び出してくる。
日本テレビの放送は原のがっくりとしたポーズで終り、とるに足りない後番組の宣伝をしている。

５－３。３時間２３分に渡る激闘は大阪近鉄バファローズの勝利で幕を閉じた。
まさかの敗戦でも巨人ナインも首脳陣も意外とサバサバしている。
「負けたか」
川上がそうポツリと漏らしただけで、悔しさを見せることなく無言でベンチを後にする。

ゲームの終りに

モニターで試合終了をじっと見つめていた仁志敏久は、
「よし」
とつぶやくと腰をあげた。隣にいた清水隆行が長年の1、2番コンビ（原巨人時代は逆にされた挙句二番の役割を果たせない仁志は8番という屈辱的な打順に降格されている）で培ったコンビネーションよろしく、仁志に大人の忠告をする。
「仁志さん。いくら僕らを実質的な巨人追放にした原さんだからって凡打によいはないでしょ。確かに原さんの嫌われず構想に入っていたならば僕らは伝統の巨人軍の一員としてベンチから野球を見ていたかもしれないですけど、それとこれとは別ですよ。巨人ＯＢなら近鉄に負けた事実を重く受け止めて、個人的感情に左右されるべきじゃないです」
「何勘違いしてるんだ、清水。確かにオレは誰これ構わずズケズケとモノを言う性格からか原さんに嫌われている。でもオレは原さんは嫌いじゃないぜ。なんたってオレたちの年代は原辰徳世代だからな。長嶋さんはとうにいなかったし王さんもすでに晩年。憧れるなら原さんの世代だ。ＢＡＮＢＡＮ野球界なるベースボール・マガジン社発行の雑誌の懸賞に応募して、原さんのサイン入りバットを当てたときはそれは嬉しくて、当選者　茨城県　仁志敏久と書かれてたその雑誌は今も家宝として茨城の実家に保管してあるほどだ」
「ならどうして、よしと叫んだんですか。なあ二岡。お前も仁志さんのよしってつぶやきを聞いたよなあ？」
清水の隣には二岡智宏がいた。仁志とは違い原の寵愛を一身に受けていた二岡であるが、多すぎる故障と諸費用９８００円ほどのつまらない女遊びに坂本の台頭が重なって巨人から居場所を失った二岡だ。仁志と違った意味で原には複雑な感情がある。
もしも二岡の足が満足に動かなくなる前に負担の少ないサードに

でもコンバートされていたら、崖の上のポニョの宣伝がけたたましく流れていた真夏のリハビリ中に起こした火遊びもなく、今でも巨人にいた事だろう。この大会のこの試合のショートの先発は二岡だったかもしれない。

「仁志さん。そりゃないっすよ、清水さんのおっしゃるとおりです。いくら原巨人が憎くてもよしなんて言っちゃあいけないっすよ」

「何を勘違いしてうんだ、二岡と清水。オレは原さんの凡打にも巨人の敗戦にも喜んじゃいないぜ」

「それじゃあなぜ”よし”なんて言ったんですか」

清水は立ち上がる。仁志に食ってかからんばかりの勢いだ。モニターにはローズと阿波野のヒーローインタビューが流れている。

「あ、タフィーに阿波野さんだ」

不穏な空気の流れる中、あっけらかんとしているのが林である。彼も他の3人と同様、原巨人から追放されて北海道に新天地を求めざるを得なかった男。中継ぎ、抑え、ワンポイント、時に敗戦処理とあれだけ貢献したのに、その疲れが祟って肘を壊しのに、どうして巨人軍はポイ捨てのように林を捨てたのだろう。林と役割がかぶる山口なる純然たる原チルドレンの登場か、それとも裸体をメールに乗せたのがまずかったのか。鍛え抜いた体を見せびらかしたくなって何が悪い？

「お前らばかだな。今の”よし”はこれから仕事の始めを意味するんだ。オレたちは巨人を追放されたが、復権は許された。ベンチの外でも巨人に貢献しろと川上監督直々に言われちゃ断れないだろうよ」

「そうですよ、仁志さんの言うとおりだ。勝ったのは近鉄です。巨人が勝ったならば処理の余韻に浸りヒーローインタビューを最後まで聞こうとするのが多勢のはずですが、現実は近鉄が勝ったのですよ。試合終了とともに、どっと席を立つのです」

仁志に同意するのは木佐貫だ。原巨人から追放されたのは他４人と同じも、木佐貫は特に原に恨みはない。品行方正の木佐貫は人を

恨むことはしないし、人に不快な思いをさせることもな。だから彼は追放されたのでなく、努力足らずで実力不足から巨人にい続けることができなかったと思っている。

折り目正しい木佐貫には真っ白なポロシャツと緑の作業ズボンと帽子がよく似合う。

「仕事か。やんなきゃいけませんかねえ」

二岡はどことなくやる気が感じられない。ただ二岡も木佐貫と同様、よく服装が似合っている。胸元に輝く東京ドームの横文字のワンポイント刺繍がなんだか誇らしい。

「川上監督に言われたんだ……」

年長の仁志が帽子を深くして、気合を入れなおしたなら、グループに属するものは従わなければならない。木佐貫、清水、二岡の順番に重い腰を上げて、最後に残った林が渋々立ち上がる。

「ああ～阿波野さんとタフィーのインタビュー最後まで聞きたかったなあ。あの二人も僕らと同じく巨人追放組みだ。積年の無念を晴らした今の心情が聞きたかったなあ」

「林、そんなの家に帰ってニュースでも見ろ。さあいくぞ。一日東京ドーム警備員の職務を担ったオレたちの仕事が今本格的に始まる」

仁志たちが授かった任務は東京ドーム一日警備員。彼らはこれから試合終了後どっと人で溢れ返る入退場口の整理に向かうのだ。

東京ドームといえば回転ドアが名物。ドーム球場内と屋外では気圧が違うためドアをくぐろうとするとき突風が巻き起こるのだ。

仁志たちは回転ドアのそばに立ち交通整理をしつつ、退場時に風が吹き荒れることを観客たちに喚起する。

「押さないでください～。順番にお願いいたします～」

野球選手より公務員が向いていると言われる木佐貫はさすがに堂の入った仕事ぶりをみせる。誠実かつ迅速な対応は観客に木佐貫と気づかせないのに十分だ。

それに比べて二岡はどうだろう。木佐貫と同じく観客に注意を喚起する係なのであるが、てれがあるのかそれともなんでオレがこん

なことをしなければならないんだとの余計なプライドが顔をみせたのだろうか。

「二岡もっと声だせよ」

仁志からすかさず喝が入る。さすが仁志だ。常総ー早稲田の名門校でキャプテンを務めただけはある。

二岡も仁志の一喝で心を入れ替えたのか、見違えるように生き生きと仕事をしだす。

「もーなんとでもなれ」

開きなった二岡は大きくよく通った声で観客たちに声をかける。ここまでハッチャケる二岡は稀。ただ顔とともに声質もよく知られた二岡だけに、巨人ファンが多数を占める今日の観客はいつか気づくのである。

「二岡？　二岡だ！

「あ、ほんとだ。こっちは木佐貫だ」

「この警備員は清水じゃないか」

「こっちは林だ」

「仁志もいる」

続々と顔を割れ出す。写メやサイン攻めに合うと思いきや、今の巨人ファンの気持ちは一様。

「お前たちいないから負けたんだ」

「そうだそうだ、坂本もいいけどやっぱり二岡だよ」

「最後の場面、原監督じゃなくて、清水が代打なら勝ってたぞ」

「林がブライアントに対してなら絶対三振だった。角はねーよ」

「木佐貫さん。次の試合先発してください。あなたのストレートとフォークの威力なら勝利絶対間違いなしです」

と選出漏れされた選手にいまさら出場の懇願しだすのだ。純粋な実力や残した実績からすれば、やや過大評価になことは否めないが、彼らの人気のパラメータと見ればそれも許容範囲か。

ただ不思議なことに仁志待望論だけついぞ出てこないのだ。５人のなかでは実績は随一。それでも仁志の声が上がらないのは、同じ

セカンドの篠塚や千葉でもう十分の充足感か。それとも個性の強い選手群に我の強い仁志を送り込むことは自殺行為に等しいとファンは見抜いているのか。

自分の声が上がらず次第に仁志は不満の色を強くする。

「オレはいらねーのかよ、くそ」

客の面前に関わらず不満をあらわにする。

「仁志さん……？」

その時、初めて客から仁志の声がかかる。

「あ、お前らは……」

声の主の顔を見た瞬間、仁志の顔はドンドン曇っていった。

ゲームの終りに（後書き）

いったいオレはなんの話をかいているんだろうか。

警備員対観客

「ええ～放送席、放送席……。本日のヒーローはもちろんこのお二人、逆転のホームランを打ったローズ選手と先発で試合を作り見事勝利投手となられた阿波野秀幸投手です。いやあ～素晴らしい活躍ぶりでした。まずは阿波野さんからお話をおうかがいたしましょう。古巣でもある因縁の巨人軍相手、見返してやろうと力が入ったと思われますが」

「巨人にはコーチもさせていただきお世話になりましたが、肝心の現役時代にいい思い出はありませんですからね。一軍で投げても敗戦処理。河野さん、川口さんと次々と降りそそぐ補強の嵐でいつしか僕はハナから構想外。そりゃ当時の恨みつらみを投球にぶつけましたよ……」

東京ドーム中のモニターに阿波野が大きく映っているさなか、臨時警備員と化した仁志たちは、会いたくもない者たちと顔を合わせることになった。

「もしかしして仁志さんですか？」

「オレが仁志だのお前らに不都合な点でもあるのか？」

仁志は警備員の仕事を恥ない。身なりを包み隠さず、自分が警備員仁志敏久であることに誇りを持っている。

「やっぱり仁志さんでしたか。そうなると見たことあるなあと感じていたずいぶん体格のよろしい警備員の方々も清水さんであり、林であり、木佐貫さんであり、二岡さんなんでしょうね」

「なんだその警備員に落ちたオレらを哀れなのをみるような顔は。聞きたいのは、コッチのほうだよ。亀井。なんでお前らが私服姿でドームにいるんだ」

仁志が巨人にいることから在籍している顔なじみといえば亀井くらいだろうか。

「原さんに言われたんですよ」
仁志が眉をぴくっとさせる。仁志の前で原の名前を出すのはタブーとまではいかないが、過剰反応なしで流すまで人間はできていないようだ。
「原さんに？」
「ええお前さんたちは、伝統の巨人軍のベンチ入りをするまでの実力と経験はまだないが、近い将来、それに値するような選手に洋々とした未来の持ち主だ。だからスタンドから巨人軍の伝統を勉強しろって言われて、こうして松本や長野、越智、山口、脇谷さんらを連れ立って開幕戦観戦となったわけですよ」
亀井だけではない、越智、山口の風神雷神コンビから、新鋭松本、新人長野の顔も見れる。彼らは原に言われた通り応援バット片手にスタンドから巨人に声援を送っていたようだ。
それにしてもこの扱いの差はいかがしたものか。
仁志ら原巨人追放組みは場内整備の警備員。まるで最後の夏の大会、ベンチから漏れてボールボーイをやらせれて惨めな思い出作りをさせられる3年生部員。
一方の亀井ら原チルドレンは、本人ならびに巨人軍の将来への糧とスタンドからの気楽な応援。まるで幹部候補生の新入社員が入社前に本社を下見するようだ。
未来なき追放組みと洋々たる原チルドレン。しかしこの両者、これほどまで扱いに差をつけるほどの明確な実力差があるのだろうか？
「脇谷……」
苛立つ仁志がまず標的にしたのが脇谷。御存知の通り仁志をうまいことして干した原がムリヤリレギュラーに当てはめた男だ。そこそこ打つが、仁志のような一発があるわけでもなく、安定した守備力があるわけでもなく、自慢の足も盗塁に生かせなければ、毎年のように巨人が微妙なセカンドの外国人に手を出すのもわかる。
「オレがせっかくオメーがやりやすいように横浜に行ってやったのに、オメーいつレギュラーになるの？」

「すいません、仁志先輩……」
「謝ってすむような問題じゃねーぞ。原巨人から追放された者は、皆ある一種の不満を抱いてるんだよ。実力で負けたらなしょうがない。だがそこに、実力とは無関係な要素、政治的取引や個人的感情があるのなら何か許せないってな。なあ清水、お前もそうだろ？」
「え？」
突然、仁志にふられた清水は戸惑う。日本テレビ専属解説者の座を得た清水は、あからさまな原巨人への批判は避けたいものだ。
「ええ……そのあのまあそのですね、仁志さん……」
「清水だってそうだ。まだ十分三割打てる打力があるのに、亀井とか未熟なヤローどもに場数を踏ませてるために犠牲になった。亀井は２５本も打つ選手に育ったからいいじゃないかって？　へん、２５本がなんだ。あんなもんまぐれさ。それは今年の打撃成績が示している」
ズケズケとモノをいう仁志は、口をつぐむ清水の気持ちまで代弁する。ドームの通路に広がる不穏の空気は、いくら回転ドアを勢い良く回しても入れ替えることができない。
原チルドレンと原巨人追放組の間に高まる緊張感は、二つのグループに分けた張本人が、より混迷の度合いを高めることになる。
「あ、メールだ」
仁志とのやり取りに興味がなくボ～と携帯を眺めていた越智が真っ先に気づく。
「原さんからだ。なんだろう……。えっと原チルドレンのみんな、きちんと応援できたかな？　だってさ。僕宛てじゃなく原チルドレン宛か」
「となると僕宛てにも来てるのかな」
越智とくれば山口。山口も携帯を開く。
「あ、僕の所にも来ている。原さんから原チルドレン宛てだって。越智と同じ文面だな。えっと～”試合終了後すぐの緊急ミーティングで選手の入れ替えが議題に上がったことを伝える。君たち、原

チルドレンは有力候補であることには間違いない。か……早速入れ替えの案内来た。先発から中3日でリリースやらせれるのは御免だけど、こういう入れ替えなら大歓迎だ」

越智、山口だけではない。松本にも亀井にも同じ文面が来ていて、果ては長野や脇谷にも入れ替えを示唆するメールが届いているのだ。

「ありえねえ。なんであいつらなんだ。亀井や越智をいったいどこに使えるっていうんだ？　それならこいつらより遥かに実力者のオレに清水や二岡だろうよ」

清水は自分にも入れ替えを示唆するメールが届いてないかチェックする。

「あ、僕の所にも原さんから来てますぜ」

「なんだと清水？　原さんからだと？　読んでみろ」

「ええ……”巨人ＯＢの皆様方元気してますか？　試合終了後の混み合う中の人員整理はご苦労なことと思われますが、培ったジャイアンツ愛をもとに、精を出して下さないね”　原辰徳巨人軍打撃コーチ補佐兼任内野手より”ですって……。入れ替えの要請じゃなく、人員整理へのエールですね……」

「原のヤロー……ふざけたメール送りやがって……」

仁志の元にも清水と同じ文面のメールが届いていた。怒りが頂点に達した仁志は思わず携帯を叩きつける。そんな仁志の態度に耐えかねたのか、ついに原チルドレンが反撃。

「しゃーないでしょ。別に仁志さん、イランですもの。巨人軍にはね、感情を押さえつけれないものはイランのですよ」

亀井が先輩仁志に楯突く。

「テメー亀井、それが先輩に対する口の聞き方か？」

巨人ファンが渦巻くドームの通路で巨人選手の同士の抗争勃発か？

ジョーバズーカー

「ジョー、おはよう」
「おはよう井口さん。セカンドのレギュラー確定おめでとうございます」
「城島さん。おはようっす」
「ようムネリン。残れて良かったな」
「ジョーさん。ちわっス」
「杉内か。打たれたからって今度は切れるなよ。ってオレとお前が組んだｒ打たれるわけないか」
「あ、城島さんだ。よく抜け抜けよ帰ってこれましたね」
「ハハ。和巳にはいわれたくねーよ。ハハハ」
「城島くん、杉浦だ。よろしく頼むよ」
「あ、杉浦さん。お久しぶりです。バッテリー組めたらいいですね。杉浦さんのボール受けれてナンボの大会っすから」
福岡ヤフードームに舞い戻った城島は上機嫌だ。こうみえて人見知りの城島は、見知らぬ顔ばかりでいささか居心地の悪い阪神と違い、まるでホークスは我が家そのものだ。
「いいな、この感じ。我が恩師王さんは巨人にいるのはあれだけど、居心地は悪くないな～」
鼻歌交じりの城島は、天敵たちにも笑顔で挨拶を交わす。
あまりにも個が強すぎて近い将来の小久保政権の足かせになると城島獲得を控えた経緯のある小久保。
「ようジョー」
「小久保さんっすか～。監督就任おめでとうございます～。秋山さんの次すか～？」
「まだ早いわ」
さらにはそりが合わないと有名だった松中にも城島は笑顔。
「松中さん。今日一塁守るってほんとっすか？　イップスの送球で

きないじゃはずじゃ？」
「一塁守れんでオレがＤＨやと、ジョー、お前が出れんだろ」
「そうっすか？　僕が正捕手ですよ？　ノムさんとかいう陰湿な三冠王のおじさんのためにＤＨを空けるならわかりますけど」
　ホークスの選手選考はパズルのように混迷を極めている。同じポジションに有力選手がひしめくわ、ＤＨに座るだけの打力と名前のある選手が多くいるわで誰の顔を立てるか鶴岡親分の腕の見せどころであるのだ。
　例えば野村を正捕手にすると、城島が余ることになる。城島をＤＨに起用すると門田がはずれることになる。（三拍子揃った頃に復元されるでなく、アキレス腱切断後の一発しか狙わない門田に復元したために、門田はほぼ守れない）
　門田を左翼に起用すると、左翼の松中の行き場所が送球イップスで自ら失格を決断した一塁しかなくなるのだ。
「なんだジョー。お前今日守るつもりなのか？」
「いやあ松中さん。オレも大人っすよ。今日の先発は杉浦さんなんでしょ？　これが杉内や和巳や和田の先発なら鶴岡親分に殴り込んででもオレの先発起用を進言しますが。杉浦さんときたら天敵といえど野村さんに譲るしかないっすよ。なんってたって南海黄金バッテリーっすからねえ。オレは大人しくＤＨで野村さんのリードを勉強させてもらいますよ。さぞ素晴らしいリードを見せつけてくれるんでしょうね」
　野村を讃えつつ毒を含ませるあたり城島らしいか。
　そんな上機嫌の城島の目の前に思いもよらぬ選手が現れる。
「城島さん……はじめましたですよね？」
「うん？　お前は田上か～」
「あれ僕のことわかりますか？」
「わかる、わかるぞ。オレの空いた大穴を埋めてくれてありがとうな。２６本もホームラン打つなんて凄いじゃないか」
「いやあ埋めたといっても……まだまだっすよ」

「そりゃまだまだだよ。肩もリードも打撃もオレの足元にもおよばんよ。ハハ。唯一勝ってるのは足くらいか？　アハハ」

さすが城島だ。他人をむやみに褒めることはない。必ずどこかに刺がある。ベストナイン捕手田上の存在が足かせになり、ソフトバンクが城島獲得に本腰を入れなかった敬意があるだけに余計に辛辣か。それにしても城島が不思議に思うことは田上がここにいること事態だ。

「野村さん、オレ、吉永さん。捕手この3人でいいやろ？　なんで田上がいるんだ？」

「オレもよう分からんのですが、とにかく鶴岡監督から来いと言われて……」

「あ、そうかブルペン捕手だ。岩木さんや森さんのバッテリーコーチ経験者。果てはドカベン香川さんも招集されてるように、ブルペン捕手の人手が足らんのだ。だから田上みたいなのが呼ばれるんだろうな」

ブルペン捕手。惜しくもベンチ入りに至らなかった捕手がブルペン捕手を任されるのは、この大会では当たり前のこと。ホークスにおいても例外でなく城島が名前を出した3人以外にも吉田博之や松井淳や筒井や山崎勝己や的場などホークス史上に残る捕手達がブルペンの壁として多数駆り出されている。

ロッカールームにも裏方の名前が記された紙が貼り出されていた。打撃投手にも、若田部や永井、星野、ヒデカズなど活躍した投手の名前が目立つ。

「若田部さんとか結局打撃投手なのか。こりゃいいわ。しこたま打ちこんだろ」

裏も表も豪華な大会であるが、城島は紙に記されたある名前を見落としていた。まさかあの名前が裏方に記されているはずはないという思い込みがそうさせたのか。

「ふんふん～♪　阪神の投手は誰かなあ～。オレがよく知る現役組なら楽やけど、安藤や能見は来ないか～。江夏さんかな～、村山さ

んかな～」
　城島のイメージトレーニングに登場する自分は7番ＤＨ。門田、野村、松中の協力クリーンナップに小久保を挟んで真打の出番。
「塁は賑わしてくれそうやけど、みんな鈍足だなあ～。ホームラン打つしかねーやこりゃ。ハハハ……」
　都合のいい想像で胸を膨らませる城島に忍び寄る薄暗い影。
「ん？　なんか急に胸のもぞもぞとしたもんが広がってきたぞ」
　さすが捕手城島。些細な変化も見逃さない。城島レーダーの察知したものは……。
「よう城島。なんや、あの阪神でのリードは……。まるで幼稚園児のようなリードやな」
　背後から忍び寄る影は、天敵の多い城島の中でも最大の天敵だ。
「ノムさんっすか。こりゃどーも」

ゲームリザルト

「いくらお前らが現役ピチピチで未来ある身分だからといってオレたち先輩を差し置いてメンバー入りはゆるさねえ」
「お言葉ですが仁志さん。あなたたちは巨人軍からいらないと判断されたその程度の実力。自分を考えみれば、オレらより使えるなんて言えんと思いますよ」
「くそ言わせておけば……。なにも3連覇はお前らの力じゃねえよ、ガッツとラミちゃんにクルーンやグライシンガーのおかげだ。こいつらが今回の大会巨人から出場できるのか？　ガッツとラミちゃんはお一昨日のヤクルトハムの試合に出てたし、クルーンはベイのセットアップ。グラシンはヤクルトに呼ばれるか知らんが、巨人はグラシンを登録してない。オレがいいたいことがわかるか？　亀井、山口、越智、長野、松本、脇谷。お前らは初戦は枝葉なんだよ。代用可能のな。ガッツやラミちゃんがいてグラもクルーンも雇えたらオレの身を一時預けてた大矢ベイスターズでも優勝できるぜ」
　仁志が切り込めば亀井もとまらない。仁志は警備員であることを忘れ、亀井はただの観客であること忘れいる。彼らには巨人軍の誇りが無いのだろうか。
　彼らのことを巨人軍の一員であることに気づいている観客は、すでに冷めた目で両者の確執の行方を見守っている。
　ただ一人の一流企業のＣＭタレントである松本哲也は正義感を見せようとするが、慣れぬプロ同士の喧騒に足元をふらつかせる長野とゴッツンこ。
「いて」
「あいた」
「なんだよチョーノ。センター優先だろ」
「ごめんマツ。プロの段取りがまだわからなくて」

松本と長野が衝突しお互い痛みをこらえれば仲裁者はもういない。越智と山口はおとなしい性格からだんまりであるし、脇谷は仁志に怯えて動きも取れない。

「仁志さんなんていらんですよ、巨人には。千葉さんや篠塚さんが故障しても土井さんがおられる。なんあら脇谷さんのがましですよ」

「ふん、オレが脇谷以下だって？　ばかにするな」

「現に負けたやないですか。０６年。仁志さんは脇谷さんに負けたから、ベイに逃げ隠れたんでしょ」

「ふざけんな、亀井。あれは原さんの贔屓起用だ。小坂や鈴木尚広をオレを干す口実に使おうとしたが、実力不足でご破算。そして担ぎ出されたのが、実力不足でも未知数の新人で将来のために我慢して起用と言い訳できる脇谷に白羽の矢が立ったんだよ。その後の脇谷も見ればバカでもわかるじゃねーか。オレを追い出して起用するほどの器じゃないってね。原さんがしたい野球は不満分子の一掃して自分に従順なつまらない個性の奴に塗り替えることなんだよ。だから勝っても勝っても、原巨人の視聴率は伸び悩むんだ。選手がつまんねーんだよ」

「仁志さん……。それ以上、原巨人の悪口いうの辞めてくれませんか、いくら大先輩の仁志さんだからといって……」

拳をワナワナとさせる亀井。手をだすのはまずい。口喧嘩なら証拠は残らないが、手を加えたら、目に見える傷が残る。

「かかってこいよ、カメ」

仁志は亀井を挑発する。

「ならいかせてもらいますよ」

亀井と仁志の喧嘩を止めるものはいないのか。

木佐貫は人員整理に忙しく、亀井他の原チルドレンは仁志にビビっている。

二岡は干からびたように虚ろな目をして、林は、刺激的なメールが届いたのか、にや付いた顔でケータイに見入っている。

「やめて下さい、仁志さん。辞めろ、亀」

日本テレビ解説者の清水はどちらにも肩入れできないのか、中立を装っている。

仁志と亀井は聴衆の前でみっともない姿を晒うのか。

しかし、彼らを止めたのは意外な人物だった。

「巨人、弱い、堀内バカ。弘田最低。勝って当然や。今から清原さんや元木と祝杯あげたい気分や」

それは場内モニターから流れてくるローズのヒーローインタビューだった。日本語がペラペラのローズであるが、公式的な会見は通訳を通すのが常。それが自分を捨てた巨人を見事見返してやったことからの高揚感か、通訳なしで気持ちをまくし立てるのだ。

ただローズの素直な感情表現が仁志や亀井のジャイアンツ愛に火をつけた。

「カメ、聞いたか今」

「聞きましたよ、腹立ちますよね。いくらいざこざがあって辞めたからといって自分の古巣をここまでこき下ろせるんですから」

「だよな」

「あれ？　仁志さんもローズと同じ穴のムジナでしょ？　ローズに喝采を送りたい気分やないですか？」

「それが不思議なんだよ。ローズと同じく巨人が憎くてしょうがなしオレがローズが並べる巨人を侮蔑するキーワードがいちいち癇に障るって」

「なんででしょうね」

「たぶん、ローズは巨人を嫌っても近鉄バファローズという帰る場所がある。でもオレが帰る場所はベイスターズでも独立リーグランカスター・バーンストーマーズでもない。やぱり巨人なんだよ。誰でも故郷をバカにされたら腹が立つだろう？」

「僕はまだよう分からんです。最初に入った球団を望郷するんは」

「亀井、お前も気を抜くと巨人にいられなくなるぞ。レギュラーでい続けるのはそれだけ大変なんだよ」

仁志は怒りの眉を下げて、先輩らしく柔和な表情を後輩に見せる。

「ええ踏ん張りますよ。巨人にいるために。そしてこの大会のベンチ入りできるようにアピールし続けます」
「そうか、オレも頑張るぜ。まあ今は人員整理の警備員だけどな」
仁志は帽子を深くかぶり直し、自分の仕事場に戻った。亀井たち原チルドレンはその仁志たちの先導の元に回転ドアを潜った。
こうして前日のパチンコ屋から始まった長い長い試合は終りを告げた。

ゲームリザルト
近鉄　０００　３００　０２０　５
巨人　０１０　０００　１０１　３
近鉄　○阿波野－柳田－鈴木啓－吉井－石本－大塚－Ｓ赤堀
巨人　×堀内－高橋一－藤本－桑田－角－鹿取－上原
本塁打　長嶋１号（阿波野）　ローズ１号（堀内）　マニエル１号（堀内）　ブライアント１号（角）　松井１号（赤堀）
勝利打点　ローズ１

城島対厄介な客人

「まったく城島、お前のあのリードはなんや。お前は捕手向きやない。お山の大将、投手型人間や。ワシや森みたいの常に最悪のことを考えるネガティブ人間が向いてるんや。ブツブツ。田淵とお前は捕手やったらいかんわ」

挨拶を交わすこともなく、のっけから城島を糞味噌に貶す野村。古田や矢野のように聞き流すタイプの人間ではない城島は、野村のボヤキに真っ向から反論するのがいつものこと。

０３年の日本シリーズでは、日本一後の祝勝気分真っ盛りの生番組で野村批判を繰り返したことや、０９年の第二回ＷＢＣでのメディアを通じての舌戦を繰り広げたことは今も記憶に新しい。

そんな水と油の関係の野村と城島が同チームでしかも同じポジションを争うのだから、なにかしらの確執が起こることは必死の情勢と見られていた。

キャンプ、オープン戦ではお互い意識して避けあって顔も合わせない二人が遂にここで会話を交わしたのだ。

「コラコラコラ～　オモロイものが見れるで、スギ」

「ですね、和巳さん」

ソフトバンクの新旧エースの杉内と斉藤和巳も二人の動向に釘付け。だからといってあからさまに凝視することもできず、斉藤和巳はケータイを利用して自分のブログを更新するふりをして、杉内は、主食のブルガリアヨーグルトを食べる隙に野村と城島に分からないように目配りしている。

二人が期待するのは、正面衝突の口汚い罵り合いである、が、城島は意外なほど柔和な表情を見せる。

「いやあノムさん。愚痴やボヤキはこの辺にしておいてくださいよ～」

「なんや城島はマスコミ越しにオレに文句は言えるが、面と向かっ

ては言えんなのか。意外と小心者やな、フヘヘ」
「違いますよ、ノムさん。オレとノムさんが天敵なのは生涯変わることのないことですが、何も同じチームになってまでもいがみ合うことはないでしょ」
「ほう～お山の大将のお前からチーム第一のセリフを聞かせるとは。ホークス史上最高の捕手はオレだ。野村なんかに負けるかって新聞雑誌の取材に答えてたやないかい」
「あれとこれとは別っすよ。あれは試合を盛り上げるための演出っすよ。ノムさんもようやるでしょ、マスコミ使うのは」
「そうか、ならお前はワシがホークス最高の捕手と認めたのか。今日のスタメンもワシやろうし」
「今日は杉浦さんでしょ？　杉浦さんとくればノムさんしかおらんでしょうよ。南海黄金バッテリーに譲りますよ、開幕戦くらいは」
「ウヘヘヘ。やっぱワシやろ？　城島やなくワシがホークス史上最高の捕手や」
何故か上機嫌の城島は、ガラにもなく野村を持ち上げる。だが、城島は城島だ。ただで会話を済ませない性分の持ち主だ。
「いやあ最高の捕手はオレっすよ。肩も守備もオレが圧倒してるのは当然で、打撃もせっまい大阪球場本拠地ならオレなら６０本は打てるし、顔もスタイルも比べることもなくオレが上ですけど、チームの和とホークスの歴史を考えてノムさんに譲るだけですから。今日はＤＨで大人しくしてますが、次のおそらく杉内や斉藤和巳が先発する試合はオレがマスクをかぶらせてもらいますから、そん時はノムさんがＤＨでお願いしますよ。ウハハハ。Ｄｈのないセリーグの本拠地なら一塁でもやってくださいよ、アハハ」
しっかりと自分が最強捕手であることを誇示する。
「ウヘヘ、やっぱり城島はそうでなくちゃ。昔、江本、門田、江夏を南海の３悪人と称したが、お前を入れて４悪人ってとこやな……」
それでも野村は、先輩に敬意を表しつつ刃向かう刃を見せ続ける城島の気概が嬉しくてたまらないのだ。

「それじゃあな、城島。ワシは杉浦と打ち合わせしてくるから。うへへへ。お前は門田や松中にでもＤＨの心構えを聞いてきい。おっとワシが愛する松中とお前は犬猿の仲やったな。ゲヘッヘ」

去り際も一言多い野村。

「ふう～　一番厄介な先輩と挨拶終わったわ～」

肩が軽くなったと城島は、

「われらの～われらの～ダイエ～ホ～クス～♪」

と若鷹軍団の口ずさみつつ上機嫌は変わらない。ロッカーを抜けると、城島はグラウンドに飛び出す。もう二度とない思っていたホームとしての福岡ドームのグランプリや入りに感慨を覚えたか、ただでさえ大きい城島の鼻の穴がさらに大きくなる。

「そういや初めてやな～。王貞治が監督しないホークスでの試合は～。鶴岡監督とは何度か話をさせてもらったけどまだまだ取り除かんといかん壁がある」

鶴岡監督はベンチにどかっと座り、呆れるほど多くの記者と談笑している。

「あの輪に割って入るのは無理だな」

城島だって、引くときは引く。

「やあ城島」

「うん？」

背中越しに城島に声がかかる。振り向くとそこにいたのは長髪、メガネ、ヒゲにスケッチブックの引退間際の湯上谷……ではなく漫画家の水島新司先生だ。大のホークスファンの水島だけに、オールスターが集うこの試合に居ても立ってもいられず、ドカベンスーパースターズ編の連載を大ゴマ連発でとっとと完成させて、大嫌いの飛行機に乗って駆けつけたのだ。

「なんだ水島先生やないですか」

水島は城島の手を取って抱擁せんばかりの勢いだ。

「なんで阪神に行っちまったんだ。オレは日本に帰ってくるならホークスとのお前のセリフを信じて、ずっとずっとお前の帰りを待っ

てたんだぞ」
「いやあ～すいません先生。先に声をかけてくれたのが阪神で……。まあ今日は現実を忘れて夢の世界で試合を楽しましょうよ」
「そうだな、ホークスの扇の要を守るお前の姿が見れるだけでよしとしようか」
「あれ？　先生。オレのスタメンを期待してるんですか？　先生、ノムさんの大ファンでしょ？」
「いやあ今でもノムさんは漫画のアイデアをくれて恩人で大ファンだけどね。ちょっと諸事情があって、今オレの漫画でノムさん使えないんだよ」
「諸事情？」
野球漫画に疎い城島は野村が水島漫画に出れなくなった事情に詳しくない。
「あれだよ、あれ」
ヒソヒソ声で水島が指差すさきには、例の野村婦人がいた。野村婦人はバッティングゲージの後ろに立って、まるで自分が打撃コーチのように選手に指導している。
「やっぱ、あの人絡みか……」
その後、野村婦人に負けじと城島に身勝手で何様のアドバイスを送る水島を丁重に受け流した城島はシートノックを受けつホークスナインにある違和感を覚える。
「あれ？　あれ？　うん？　あの人がおらんぞ……」

ジョーの憂鬱

「おかしいぞ。守備練習すべき人がしていない」
城島は守備練習に散ったホークスナインに違和感を覚え、訝しげな顔をする。
「門田さんが練習していないぞ。門田さんは今日の試合はＤＨじゃない。ノムさんが先発捕手でオレがＤＨに入るのだから、門田さんはレフトの守備に付く必要があるはずだ。アキレス腱を切った後のホームラン打者門田博光に復元された門田さんは練習なしでそのまま守備に付けるほどの状態やないはずだ。それなのに門田さんは守備練習をしていない。どういうこっちゃ??」
城島は右手に顎を乗せて考える人のポーズ。
「ようわからんわ。よっしゃ直接門田さんに聞いてこよう」
深い考察お放棄して、早くも門田本人に事情聴取。考えるよりもまず行動なのも城島らしいか。
門田は一塁側内野フェンスによっかかって、日向ぼっこしている。開閉式なのに、ケチくさく密閉状態の福岡ドームであるが、天気のいい開幕の今日ばかりは、屋根を開けて強い日差しが差し込んでいる。
門田は帽子を取り、薄い頭をあらわにしながら、気持ちよさげの笑みを浮かべてたたずんでいる。
そんな門田を発見するやいなや城島は、ローソンの年賀状大作戦のＣＭ出演時のように、門田に矢継ぎ早に詰問する。
「門田さん、こんちわ、久しぶりっす。って固い挨拶はこれくらいにして、なんで守備練習しないんっすか？　アキレス腱を切って後の門田さんでしょ？　三拍子揃った強肩右翼手時代の門田さんならいまさら試合前の軽いノックなんて受けなくても、守備の勘は研ぎ澄まされていると思いますが、今の門田さんは練習でもせんとようフライも取れん状態でしょう?」

「ふふふふ……城島。私はムダなことはしない主義なんよ」
「ムダなこと？　守備練習がムダですか？　どうせ今日の試合、僕がマスクをかぶらんから関係ないですけど、守れないレフトがいるとリードの幅が狭まるんすよ。ダイエー時代は意外と上手いバルデスとかいたし、マリナーズ時代は、イバニエスはまだしも守備の人チャベスがいたから、それほど痛感したわけでもないですが、今阪神では痛いほど思い知ってるところです」
「フッフフ。だからムダなことはしないん主義なんよ、私は」
「？？？？　ムダなんですかね～　守備練習は？？？？」
いくら問い詰めても本音をはかない門田に、さしもの城島も落城。疑問は完全に解き明かせないまま城島は、捕手道具一式をつけて自らも守備練習に参加する。
「あの口ぶりだと門田さんは守らない？　ＤＨが門田さんだとすると、オレはどうなるんや？　オレ控えなんてありえんから、ノムさん控え？　いやそれもないやろ。人心掌握に優れた鶴岡監督がそんなことするわきゃない。控えに置いてもぶんむくれないオレはまだしもノムさんを最初の試合でベンチに置いたら、ノムさんの愚痴とボヤキでベンチがどす黒い色一色になりかねんわ……。そうなるとオレは守る？　一塁城島か？　若い頃何度かやったポジションだし、守れんこともないが……。一塁にはノムさんとはまた別の”三冠王さま”がおられるぞ。松中さんは左翼もできるいうか、送球イップスお抱える松中さんは今や左翼一本……」
城島は目を凝らして外野の守備練習に意識を飛ばす。
「背番号２９の左投げ……カズ山本さんか……。で同じく左投げの背番号３１は柴原さんだな……。であの見覚えのない顔は杉山さんって人か。たしか首位打者経験者や……。どこを見ても逆さにしても人の顔に見える上下対称顔の松中さんの顔が見えん……」
左翼専門の松中が他の外野のポジション練習についているわけがなく、
「どこいったんだ、あの人。あの人も門田さんみたく守備練習拒否

か？　オレや井口さんがいなくなって増長してると聞いたがついにそこまでなったか」

　ところが松中は一塁の守備練習についていた。意外と軽快な動きで森脇コーチの芸術的なノックを処理すると、送球イップスを克服すべく捕手城島に矢のような送球。

「ジョー行くぞ！」

「お？　なんだ松中さん、そこにいたんすか？　てっきり外野やと思いましたよ？」

「あほ、ジョー。オレは鶴岡監督に今日は一塁の練習やっとけ言われたんだ」

「鶴岡親分直々に？？　おかしいな……。オレが一塁じゃない？」

　城島のパズルは断片的な情報ばかりでなかなか完成に至らない。

「？？？　門田さん、守備練習なし、松中さん一塁じゃ、オレ、ノムさん、門田さん、松中さんが出れるポジション配置が思い浮かばない……」

　ネガティブ思考ならば、薄々気づきそうなものであるが、これぽっちも後ろ向きに物事を考えない城島。

「ってことはノムさん控えでオレが正捕手？？　ウッソー！　鶴岡親分思い切ったことするねえ～。そりゃオレのがノムさんよりも遥かにいい捕手やけどさあ～」

　そしてベンチに入れるはずのない田上が横にいて守備練習していることにも城島はなんの疑問も持たない。

「オレ、ノムさん、吉永さんに加えて田上も？　捕手ベンチ入り４人か？　まあ吉永さんや田上は代打要員として機能する強打の持ち主やかな～。しかしどうでもいいけど田上の守備終わってるなあ～」

　城島はなんの疑問も持たず守備練習を笑顔で終える。

「オレが先発捕手か～。阪神の先発オーダーでも思い浮かべてシュミレーションとするかなあ～。先発の杉浦さんは、下手からのカーブとストレートが武器の投手や。それで一番は真弓さんだろうな。今のオレの監督で同じジョーなるあだ名のお人が先頭とはなんたる

奇遇。二番は赤星か吉田さんだろうな。コツコツとした打撃に注意や。で三番はいよいよバースの登場だ。杉浦さんの強いボールで強気に内角攻めをしましょうか……外角のボールも簡単に流し打ちでスタンド放り込むからなあ～」

いまだ上機嫌な城島であるが、感情の起伏の激しい城島に神様はいつまでも同じテンションのままにさせない。

出身地まで晒しあげることが特徴的な福岡ドームのウグイス嬢が先発オーダーを告げるときが、城島がすこぶるいい機嫌を保っていた最後であった。

「先行の阪神タイガースのバッテリーを発表します。ピッチャー村山。背番号１１。兵庫県出身」

「ほう江夏さんやなくて村山さんが来たか～」

「キャッチャーは田淵。背番号２２、東京都出身」

「捕手はオレの現役控えの矢野さんじゃなくて田渕さんか、ホークス史上１のダメ監督、漬け込めるぞ～」

「続きまして、後攻の福岡ソフトバンクホークスのバッテリーを発表します。ピッチャー杉浦。背番号２１。愛知県出身」

「はいはい、それはわかってますよ……。実現不可能と思われていた杉浦ー城島の夢の黄金バッテリーと行きますか……」

城島は先発捕手であることを未だに信じて疑わないのであるが。

「キャッチャー野村。背番号１９。京都府出身」

コールされたのは野村だ。杉浦と野村、城島も予測した通り当たり前すぎるバッテリーであるが、断片情報ですっかり自分が先発捕手と思っていた城島は、このコールに激情する。

「はあ？？？　はあああ～？？？？？　なんでオレやない？？？」

顔を真っ赤にして、ブラッグス以上に鼻の穴を広げた城島は今でも高村を殴りそうな勢いだ。

「捕手ノムさん、一塁松中さん、ＤＨ門田さん。これじゃあオレが控えと決まったようなもんじゃないか！！」

しかし、城島の怒りはこれですまない事態が待ちかねているとは城島はこの時知らない。

」

元祖鉄人飯田徳治

「はあ？？？　いったどういうこった」

捕手野村のアナウンスを聞いた城島はゆでダコのように顔を真赤にさせるが、持ち前の図々しさからか、いまだ、自分が先発オーダーに組み込まれていることを信じて疑わない。

「ノムさんが捕手でオレが一塁か？　となると守る練習してない門田さんがＤＨとすると、一塁しか練習してない松中さんはどこいくんや？　いまさら左翼は守らせんよなあ。となると、松中さん控えか？　三冠王を控えにするとは鶴岡監督も思い切ったことするなあ。もし、オレが松中さんの立場なら、腹いせ紛れにパイプ椅子投げつけて、巻き添えくった王さんが逆ギレする騒ぎを起こすくらいぶち切れるわ」

とこの調子だ。ポジティブ思考の城島も度が過ぎると、思ってもみない出来事に柔軟に対応できなくなるのか。

「一塁の練習もしとくかな～。監督に言われんでも、自ら意図を読み取り準備するオレってさすが日本人唯一のメジャーリーガー捕手やなあ」

自画自賛は止まらず、捕手防具一式をベンチに置くと、キャッチャーミットそのままで、一塁の守備練習に参加だ。

「なんだ。ジョー。どういう風の吹き回しだ」

天敵松中が、城島のテリトリー来訪に迷惑そうな顔をする。

「松中さん、嫌そうな顔せんと、よろしくお願いしますよ～」

割れこんだ城島は、松中に向かって放たれたはずのノックの打球を勝手に取ってしまう。

「おいジョー、オレの打球勝手に取るな」

「えへへ。結構いいグラブさばきでしょ？　しかし一塁なんて久しぶりだな。ホークスの最終年以来かな」

捕手一筋の城島でだるが、若い頃は一塁転向が真実味を帯びたこ

ともある。雑な捕球が目立つ城島は、打撃を生かすために一塁転向が検討されたが、一塁を守るにしてもあまりにも足が遅いため流れてしまった。捕手しか生きる道はないと悟った城島はそれから懸命に練習してメジャー屈指の守備力を持つ捕手と言われるまで成長したのだった。ただ雑な捕球は日本一の捕手となった今でも時より顔を除かせるのであるが。

「えっと飯田さんでしたっけ、こんちわっす」

一塁の守備練習についていたのは松中だけではない。百万ドルの内野陣とうたわれた１９５０年代前半に一塁手を務めた飯田徳治もノックを受けていた。

「たしか衣笠さんの前に連続試合出場記録を持っていた方っすよね？　いやあ連続試合出場ってのも考えようっすよね。オレも今それに悩まされてるところですよ、ハハハ」

城島はまだ気付いていない。右打ちの飯田と左打ちの松中が一塁練習についていることの意味を。

同じ右打ちである城島は、飯田と重なり、左投手用に起用するならば、長打力は劣るが、走力や守備力が圧倒する飯田に軍配が上がることを。

つまり右投手には松中、左投手には飯田を一塁に起用する構想があるとすれば城島が一塁守備につく機会はないのである。

城島がすべてを気づいたのは、守備練習から３０分後。スターティングオーダーが発表されたときだった。

「先行の阪神タイガースのスターティングオーダーを発表します……」

真弓９　吉田６　バース３　藤村富Ｄ　掛布５　金本７　田淵２
岡田４　新庄８　村山１

「ほうウチの監督が一番か。４番は初代ミスタータイガース。オレもすぐそのうちそう呼ばれるようになるんやけど……。で鉄人は７番か。８番に前の監督で９番に新庄さんか。さすが阪神、下位まで強力打線を築ける戦力的厚さがあるな。まあホークスも負けてはお

らんのだけど。６番か７番あたりになんとこのオレがおるんやぞ……」

今でも自分がスタメンであることに一縷の疑いもない城島であるが……。

「引き続き後攻の福岡ソフトバンクホークスのスターティングオーダを発表します」

「お、キタキタ……」

「１番センター広瀬」

「お、盗塁王兼首位打者」

「２番セカンド井口」

「早速オレと苦楽をともにした選手の登場！」

「３番指名打者門田」

「お～やっぱり門田さんはムダなことはせんのだな～。宣言通りのＤＨや」

「４番キャッチャー野村」

「まあわかってたことだ。次行こ」

「５番ファースト松中」

「ファーストは三冠王さんか……。って待てよ、一塁はオレやろ！　ＤＨでも一塁でもなきゃオレにどこ守らせる気や！　もしかしてオレ外野？？？」

「６番サード小久保。７番レフト山本和。８番ライト佐々木。９番ショート川崎」

「ってオレの名前がどこにもない。オレ、控えやないか？　ちょっと待て。このオレを控えなんておかしい」

城島は鼻の穴を大きく広げて激昂。

「鶴岡監督、どこや。なんでオレがスタメンに入れんかと一言行ってきてやる。監督室、監督室！」

鶴岡に殴り込みせんとばかりの勢いの城島を止める向きは、ホークスベンチには不思議とない。城島の迫力に圧してか、それとも城島のこの程度の怒りは日常茶飯事なのか。

「どこや監督室」
ただでさえプッツン状態の城島に追い打ちをかけるように、残酷なアナウンスは続く。
「福岡ソフトバンクホークスの控え野手をお伝えします。捕手、吉永、田上……」
「うん？　今何かいったか？　吉永、田上が控え捕手と……。ちょっと待てよ……。オレの名前が控え捕手にもない？？」

年賀状大作戦第三弾

「田上！！！」

なんという屈辱。城島並の打撃センスがある吉永のベンチ入りは仕方ないにしても、まさか田上に蹴落とされてのまさかのベンチ入り漏れには城島のプライドはズタズタと切り裂かれる。

引き裂かれたプライドは、監督室に向かう城島の足取りを加速させる。

「もう我慢ならんわ！　クソ鶴岡め！」

ローソン年賀状大作戦第一弾。ホームラン王なのに知名度の足りない小久保。

ローソン年賀状大作戦第二弾。盗塁王なのに知名度が足りない村松。

そしてローソン年賀状大作戦第三弾こそが、城島。三年目で正捕手の座を確かにした城島は、年賀状印刷に鷹の図柄がないとローソンに怒鳴り込む。

それだけホークスを愛していた小久保だからこそ、自分が受けた仕打ちに我慢ができないのだろう。

城島は挨拶もノックもなしで、扉を開けて直々に鶴岡に殴り込みをかける。

「ちょっと鶴岡監督。どういうことですか？　このオレがスタメン落ちどころか、控え選手にも入ってないって」

城島の野太い声にも鶴岡は動じない。椅子に座り資料に首っきりのまま、

「あ？　なんや城島か」

と生返事で城島に応じる。

「なんやじゃないですよ！　説明してもらいましょうか！　このオレ様が、日本人唯一のメジャリーガー捕手が、ホークス史上ダントツの捕手で、肩も打撃もリードも顔も全部文句なしのオレ様がどう

してメンバーからこぼれ落ちるのか」
「あ？　説明いるか？」
「当たり前じゃないですか？　こんな理不尽なことありゃしないですよ。１００歩譲って、キャッチャー野村さんはいい。あの人を立てないとチームの雰囲気が悪くなるばかりだろうし。でもオレを起用せんのはおかしい。ＤＨオレ、一塁松中さん、左翼門田さん。これで丸くおさまるじゃないですか？　カズ山本さんをレフトに起用している場合やないですよ！」
「だから選手起用にいちいち説明がいるかとワシは聞いておるんや」
「あったりまえじゃないですか！　選手が納得できない起用なら監督はとくとくと至った経費を説明するのが義務ってもんでしょ！」
「そうかな」
「は？　しらばっくれてんとくださいよ！」
「そういう風潮はワシは好かんな」
「風潮とかそういう問題じゃない！」
　城島は熱く燃えるが、鶴岡は至って冷静だ。その温度差たるや、城島のテンションを下げる触媒と化している。
「なあ城島」
「はい？」
「お前も大リーガーやろ」
「大リーガーですよ！　メジャーの世界なら選手が采配に疑問を持ったら、こうして監督に説明を要求するｒのが当たり前なんですよ！　鶴岡監督みたく古すぎる日本野球の人じゃ違和感あるかしれませんですけどね！」
「ここは日本だぞ」
「日本とかアメリカとかの問題じゃないんです。いいものはどんどん取り入れなんと日本野球は送れたままですよ」
「監督が絶対なのが日本野球や。説明する必要なんてないわ」
「まったく頑固な人だなあ！　田上が入ってオレが落ちる理由なんてこれっぽっちも見当たらんのですからこうして殴りこんだわけで」

「そんなもん理由なんてひとつや。実力や、実力」
「はあ!?　弱肩で捕球下手でろくなリードもできない振り回すだけの田上がオレのどこを優ってるゆうですか？」
「そんなもん自分で考えろ。とにかく城島、お前は、首脳陣からの構想から漏れた。それだけや」
「まったく拉致があかないですよ！」
「説明はしてやった。さあ下がれ」
「下がれ？　いやあ帰らせていただきますよ！　試合に出れんのなら球場にいる必要なんてなにひとつない！　マリナーズ時代にベンチから試合を見続けるつまらなさをいやってほど思い知りましたからね！」
「あほ。帰るのは許さん」
「はい？　オレが帰らずして何をするいうんですか？」
「見なかったんか？」
「は？」
「打撃投手やブルペン捕手など裏方に回る選手の名前を貼り出さしといたろ」
　ロッカールームに貼り出された手書きの紙を城島は確かに目にしている。
「ブルペン捕手の欄にお前の名前も書いといたやろ。なんで見落とした。それでも捕手か。視野の狭いこちゃな。ノムなら一瞬で記憶するわ」
「ブ、ブ、ブ、ブルペン捕手？？？！！！　このオレ様がブルペン捕手ですって！！！」
「そうだ。キャッチングが下手なお前やけど、救援投手を気分良く乗せれる元気の良さがあるやろ。それ買ってブルペン捕手に指名したんや。ガンバレよ」
「がんばれって？！　ブルペン捕手を！！」
「そうや。ブルペン捕手言うても、この大会のは、普通のブルペン捕手やない。巨人では藤尾や村田真一が任されるほど、ベンチ入り

捕手と紙一重のポジションなんや。ブルペン捕手頑張れば、ベンチ入りの希望も見えてくると違うか？」

「は？　は？　はあ？？？」

「まあ嫌なら帰ってもええんやぞ。その代わりブルペン捕手サボったってことはもう二度と大会には出れんいうことやがな」

「二度と？」

しかし城島も大人になったものだ。ホークス時代の血気盛んな城島ならすでにキレて部屋から飛び出していたところだろう。培った苦い経験が、城島をぐっと我慢させる。

「そうや、ホークスから追放や。それが嫌ならブルペン捕手をガンバレ」

「くく……。わかりましたよ！　ブルペン捕手を頑張りますよ！　世界一のブルペン捕手となって、野村の座るキャッチャーボックスの座を取替してやる！」

そう啖呵を切って監督室を飛び出した城島は、逃げも隠れもせず、ホークス側のブルペンに脇目を振らずに向かう。

「クソ！　クソ！」

果たして城島をブルペン捕手に突き落とした鶴岡の狙いはどこにあるだろうか？

「まず開幕はノムや。城島はまだいらんいうこっちゃう。いらんならいらんなりの使い方があるってもんよ。ふふふふふ」

年賀状大作戦第三弾（後書き）

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ００８２ｌ／

良かったらこちらもご覧ください

親分の人材活用術

若い頃の猪突猛進な城島なら荷物をまとめて福岡ドームを飛び出すはずであるが、苦労を重ねて人間性に多少の幅ができた城島は逃げない。

「日本一のブルペン捕手になってやる」

そう啖呵を切って監督室から忙しく飛び出ると、脇目もふらずにブルペンに向かった。

ブルペン捕手城島をすでに受け入れていたホークスブルペン陣は、城島を暖かく迎える。

「ジョーさん、ブルペン捕手かいな。給料泥棒やな」

一つ下の斉藤和巳が軽口を叩くと城島が背負っていた重荷がすう～と消え去る。

「バカ、和巳。この大会は裏方も選手の誰もギャラは一律や」

「そうだった。ブログも書いても投げても給料は一緒やった」

「バカいってないで。和巳、軽く投げてみろ。お前の肩は全盛期に戻った。ルーズショルダーに心配せんでもいいんだ」

城島は早速捕手防具一式を装着すると、臨戦態勢だ。城島がキャッチャーボックスに腰掛けると、ブルペン捕手とは思えないほどの存在感を発する。

復元された肩とはいえ、投げるのに恐怖心を感じ投球を控えていた斉藤和巳は、黄金バッテリー城島にけしかけられれば、投げないわけにはいかない。

「しゃーない、投げますか」

さすがに松坂を抑えて日本最強の投手の呼び声もあった斉藤和巳だ。マウンドに立っただけでも、なんともいえない存在感がある。

身長はダルビッシュに負けても、体幹の太さが違うためか、誰にも負けない威圧感がある。

「この感覚、久しぶりやな～」

そして斉藤和巳は大きく振りかぶるのだ。ダルビッシュは常にセットポジションで投げ、上原はノーワインドアップ。見た目よりも利便性を優先したフォーム作りをした現代の超一流投手に比べて、斉藤のようなワインドアップモーションは、ロスが大きく無駄の多いフォームともいえるだろうが、観賞用には、これほど雄大なフォームはないのだ。野球を始めたばかりの小さい子供が前出のダルビッシュと上原に斉藤の三人のどのフォームを真似するかといえば、圧倒的に斉藤和巳のフォームが好まれるだろう。

さらに正真正銘の真上から投げ下ろされる斉藤のボールは、ブルペンに陣取る並み居るホークス投手陣の目をひく。高い位置から繰り出されたロケット弾のようなボールは、城島のミットを重く叩く。

「これや、和巳。このボールや！」

「まあまあやな～　久しぶりやからこんなもんかな～」

口では今ひとつの評価を下す斉藤であるが、緩んだ口元は隠しきれない。

「和巳さん、嬉しそうっすね」

「バカ、和田。このくらいのボール、オレにとっては6割がた程度の肩慣らしや」

「6割？　今のが6割？　へえ～すごいね斉藤くんは～」

和田と斉藤の会話に割り込んできたのは、ホークス史上最多の勝ち星を誇るサイドハンドスロー投手の皆川睦雄である。何でも絶賛することでおなじみだった解説よろしく、斉藤和巳を褒めちぎる。

「いやあすごいよ、南海での現役時代、巨人や近鉄コーチ時代に解説時代通しても、君のようなボール投げられる投手は見たことないよ」

これには、皆川といえばサンチェや西本とイザコザを犯した巨人コーチ時代の印象が強い斉藤は裏があるのではないかと、皆川の絶賛になかなか乗ってこない。

「そうですかねえ……？」

熱烈な巨人ファンだった斉藤和巳は、当時漏れ伝わっていた選手

の気持ちを汲み取れないダメ投手コーチ皆川とのイメージとのギャップに苦しむ。西本の大ファンだっただけに、なおさらだ。

「うん？　どうした何か会話が弾まないね？　そうか君は西本のファンだったよね？　大丈夫、西本とは和解ゴルフを経て、今やフレンドリーな関係を保っているよ」

「ほんまですか？　和解ゴルフとかありましたよね、当時小３の僕はよう意味がわかりませんでしたが。それじゃ、サンチェとも和解したんですか？　たしかオーバースローのオレにサイドスローだったミナガワが何を教えるんだって切れたはずやけど……」

「ハッハハ、さすがにサンチェとは和解のゴルフはしてないな」

どこか噛みあわない二人の会話。ところが何も会話がギクシャクするのは皆川と斉藤だけではない。

南海勢とダイエー・ソフトバンク勢の間には見えない壁がそびえ立っているのだ。

和田や斉藤、杉内らの福岡勢の集団と皆川、スタンカら大阪勢の集団には、よそよそしい雰囲気が流れている。

投手は実質的個人競技とはいえ、チーム間に溝があるのはまずい。二つの勢力の融合がなければ、ホークスの上位進出は夢のまた夢なのだ。

遠く監督室にいる鶴岡も微妙な空気を熟知していた。

「どうするかやな、南海とダイエーソフトバンクを一致団結させんのは。ベンチにいる野手陣はワシがやるとしても、ブルペンまではワシの監督は届かん。そのための城島よ。図々しい性格した城島なら二つの壁をぶち壊してくれるはずや……。どうせ開幕は代打の城島をあえてブルペン捕手専任にすることでチームの融合を図る。これこそ、鶴岡親分流の人材活用術よ……」

なんと鶴岡の城島外しの意図は南海投手陣と福岡投手陣の融合にあったのだ。

視野は広いが、機敏とは言えない城島が鶴岡の策謀に気づくだろうか？

「なんだ、和巳、南海の先輩とのおしゃべりに夢中に鳴りやがって、はよ二球目投げんか」

この調子では、鶴岡の見えない配慮も意味がなく終る恐れも?

親分の人材活用術（後書き）

なんか眠くて適当になった

的は我にあり

ソフトバンクの先発は杉浦。そしてキャッチャーはもちろん野村の南海黄金バッテリーのはずであるが、大卒と高卒。エリートと雑草。敵を作らない人格者と敵だらけの人格崩壊者。関西出身と中部地方出身。長嶋が戦友と長嶋が目の上のたんこぶ。そして鶴岡派と反鶴岡派。

これほど歩んできた道が違えば、二人の息がぴったりと行かない。

野村のリードに杉浦が応えての南海黄金時代っと見る向きがあるが、杉浦本人はあっさりと否定。まだ若く正捕手なりたてで打つだけで精一杯の野村を自分からサインを出して、引っ張っと述懐しているほどだ。

この試合でも杉浦がサインを出して、野村がうなづくだけなら、黄金時代の日々を再現できるだろうが、長い長い時を隔て捕手リードの第一人者となった野村が、投手だけに野球の醍醐味をしゃぶらせるとは思えない。自分が主導権を握るとばかりに、野村自ら率先的にサインを出すに違いないだろう。

野村が目立とうとすればするほど、黄金バッテリーに歪が生じるのは必死。鶴岡親分たる策士がこの程度のチームワークの乱れを想定してないとは思い難く、それでも杉浦相手に野村をマスクをかぶらせたのだから、何かしらの確信めいたモノがあるのだろうか。

黄金バッテリーはのっけからつまずきを見せる。杉浦と野村は打ち合わせをしようともしないのだ。

これでは、細かい配球の打ち合わせどころか、サイン交換の際にどちらか主導権を握るかどうかも決められないのである。

杉浦は、自身の監督時代にドラフト指名した吉永幸一郎相手に、一塁側のベンチ前でキャッチボールを繰り返しているし、野村は野村でベンチにどっかりと座り呆れるほど多くの記者と解説者相手に、おなじみの即席講演会を披露しているのだ。

地元向けテレビの解説者として球場を訪れている藤本博史（口ヒゲを蓄えアザラシのような体型をしている方。欽ちゃん球団に在籍経験もある元オリックスでイチローの練習パートナーだった藤本博史の方ではあらず）が野村に質問攻めをする。

「どうですか、野村さん。相手は因縁ある阪神タイガース。勝てる自信はありますか？　攻略法とか頭の中にあられますよね？」

野村はいつになく取材熱心の藤本博史の姿を見て思わず苦笑い。

「なんや、藤本博史。いつもはろくな取材もせんくせに今日はどうした？」

「いやいつもこの調子でやらさせてもらってますよ」

「ほんとか？　ワシが築いた名門南海の伝統を粉々にしやがった暗黒時代のお前がか？　お前の頃のホークスのキャンプは、昼過ぎにもなると練習をおっぽりだして、とっとと帰るのばっかやったやないか？　山本和とかお前とかが率先して球場から逃げ出したやろ？」

「あっっはは。まあそのとおりですが、野村さんきつういなあ。秋山さんとか小久保が入ってきて、夜遅くになるまで練習して、こっちはびっくりしましたよ。この人達がホークスを変えてくれると革新しましたよ。僕はそれを横目に偉いな～と思いつつ早引けさせてもらいましたけど、はは」

「ふん。ワシが追い出さらなければ、南海もぬるま湯軍団にならんかったのに。返す返すも鶴岡御大のワシに対する仕打ちが南海ホークスの止めを刺したと思うわ」

野村自身は、南海追放を鶴岡親分の政治的判断といまだに思って疑わないが、実際は、野村一家の公私混同に選手がへきれきとして、球団に組み上げたもの。調査した結果、酷過ぎる実態を目の当たりした南海球団は、大スター野村を切るしか球団抗争を終える手段がないと判断し、野村追放の決断に至ったのである。

あくまでも球団の独断で、当時部外者だった鶴岡が感知するところではないが、それでも後任監督が鶴岡派の広瀬だったこともあり、野村の鶴岡憎しの感情は永久氷壁のように溶けないままでいるのだ。

「鶴岡親分の野球は前時代的過ぎる。ワシが監督兼任とまではイカンが、采配くらいはワシがやってやってもいいぞ。鶴岡監督は、親分づらしてベンチにふんぞり返ってればええんや。ぐふふふ」

記者向けのリップサービス含みとはいえ、鶴岡に対する野村の舌鋒はとどまるところは知らない。

一言多い城島をまんまとブルペンに追いやった鶴岡であるが、城島が問題にならないほどの問題児がベンチにどかっと腰をおろしているのだ。

真弓、赤星ら挨拶に来た阪神ナインにも野村の口は滑らか。

「なあ真弓。阪神の監督どうや？　想像以上に疲れるやろ？　特に真弓のような生え抜きやない外様監督はマスコミの標的になり易いんや。ワシなんかもマスコミに潰されたようなもんや。特に鶴岡御大の息がかかっとるスポニチにはこっぴどくやられたわ。ワシのボヤキを勝手に増幅させて、選手との対立を煽るわ、果ては、それが捏造の域までや……。阪神の監督だけは二度とごめんや。ぐふふふ」

波乱必至のホークスベンチ。鶴岡対野村の行方はいかに？

的は我にあり（後書き）

野村とか城島とか個性が強すぎて長大化する。出すのを控えよう。

ユタカとオジキ

野村の前にたむろす報道陣や城島が巻き起こした波乱で、なんだかんだいっても賑いを見せるホークスベンチとは違い、三塁側のタイガースベンチは話す声も絶え絶えで沈み切っている。

何が雰囲気を悪くしているのだろうか。

お家騒動を撒き散らすことでおなじみの地元マスコミが、問題発言を一言も漏らさないように、監視しているからか。選手間の仲が元々、よろしくないからか。どうしたって選手で埋まる三塁側ベンチは、選手が醸し出す今日の試合に挑むオーラで埋まらない。

「雰囲気悪いですな～。エヘヘヘ」

野手筆頭総合コーチ（役職だけで特に役割はない）兼野手キャプテン兼内野手なる重々しい役割を担う吉田義男は、低い位置から冷静に自軍を評する。

野手キャプテンなる称号を得た吉田なのだから、雰囲気を悪さを感じ取ったら、率先して、盛り上げていかなければならないはずなのに、ただただ薄ら笑いを浮かべて腕組みしているだけだ。

そして、吉田の周りに集まるのはもちろん吉田派。といっても吉田派は今や傍系の岡田派に取って変わられる勢いなのか、吉田の周りで笑顔を絶やさないのは、実質的に外様である真弓明信しかいない。

「真弓、お前だけや、ワシについてくるのは」

「いや、別に僕も吉田派ってわけじゃやないんですが、他に居場所がなくて」

吉田が表現するような岡田派なる派閥は実際には存在しないが、岡田を慕って、藤川球児や金本、矢野、今岡ら、現役選手が岡田の周りを取り囲んでいるのだから、それは実質的に岡田派と呼んでも差し支えないだろう。

「みんな岡田の方にいってもうた。まあしょうがないですわ、今の

タイガースを支える連中が多くこの試合に出場してるから。それでも吉田派と岡田派を合わせれば、村山派の勢力を上回るのだから、よろしいことにしておきますか、グフフ……」

そして吉田といえば、永遠のライバル村山だ。村山も吉田と同じく、名誉投手コーチ（役職名だけで実際はなにもタッチしない）兼投手キャプテン兼任投手とごちゃごちゃとした役職を担っている。村山派の筆頭といえば江夏豊である。村山を出汁に球界にしがみつく必要のない江夏は、ベタベタと村山の肩を持つわけではないが、それでもトレードに出された当時の監督である吉田を忌み嫌うあまりに、村山を過剰に慕うに至った経緯は、あまりにも有名だ。

「ユタカ、ワシについてきてもええことないで。ワシ以外についとった方が甘い汁がすえるぞ」

「別に損得関係であなたについてるわけじゃないですよ。ただ投手村山を尊敬しているだけですよ」

「そんならええわ」

先発予定の村山の投球を見つめる江夏の眼は確かに、猿山のボスを見る眼ではない。ザトペックと呼ばれた村山の熱い投球術を少しでも盗んでやろうとする、ハイエナの目だ。

この年にして更なる野球道を追求する江夏であるが、確かに江夏の居場所は村山の横にしかない。黄金バッテリーの女房役、田淵も江夏との仲がいいわけではない。ブチ、ユタカと気軽に呼び合う仲であるが、江夏が田淵でなくダンプ辻を捕手に指名したことからもわかるように、田淵のリードや捕手としての気質を江夏はあまり買ってないのだ。

それ以前に育ちが違いすぎる。東京育ちの大学出身のお坊ちゃん選手と母子家庭育ちの関西の悪ガキじゃ水と油だ。

監督を努める藤本定義とは新人時代の監督だけあって関係は良好。江夏を気前のいい先輩とする当時若虎掛布や江夏と阪神はなぜ勝てないのか？　なる新書を共同で出版した岡田との関係も悪くない。全方位外交と揶揄される真弓との仲も悪くなるわけがなく、新庄や

金本、赤星らも評論家江夏として接しているために関係が拗れるわけがない。吉田以外の選手とは意外と問題のない江夏であるが、憎むべき最大の敵はコーチ陣にいた。

金田正泰野手総合コーチだ。ユタカ、オジキと呼び合った蜜月関係は金田が監督就任してすぐに壊れさった。金田のやり方がどうも納得できない江夏は、金田との確執を呆れるほど深めていく。その金田が管轄外のブルペンに足を運んだから、さあ大変。

当時の村山投手兼任監督から、指揮権を取り上げて、実質的チームナンバーワンの座に付いた当時の金田ヘッドコーチは、往年のごとく、村山の上から目線の指示を出す。

「村山、よう投げ込んとけよ。立ち上がりが大事になる試合やからなあ」

「へいへい」

村山は金田の頭ごなしの指示を軽く流したが、江夏が黙っちゃいない。

「おいおい、投手の調整に部外者が口挟むなよ」

江夏はあくまでもひとり言。金田に向かって言い放ったわけではないが、金田に聞こえないように言ったわけじゃない。明らかにブルペンの誰にでも響き渡るボリュームは、当然、金田の耳に届く。

「おいユタカ、お前今なんて言うたか？」

凍りつくブルペン。それでも一人マイペースなのが井川慶。

「久しぶりに日本のアニメとか生で見たいから早く試合終わらせなきゃ」

江夏と金田の４０年越しの衝突など目もくれず、一人びゅんびゅんとキレのあるボールを投じている。

越権行為ですよ、金田さん」
　野手コーチの分際で今日の先発の村山に図々しくアドバイスする金田に江夏は怒りをあらわにする。
「ユタカ、別にええって。金田さんは大先輩や。先輩の言う事は聞いたならあかんわ」
「こんな言行不一致のおっさんのゆこと、どうして、はいはいと黙って聞かないかんのですか」
「なんやユタカ。ワシに何か文句あるんか？」
「ありますよ、山ほどね。まずオレのことを親しげに名前で呼ぶのは辞めてくれませんかねえ。むずがゆくてしゃーない」
「ふん、そんなんワシの勝手や。タイガースのかわいい後輩を名前で呼んで何が悪いんや。愛情表現や」
　江夏も引かなければ、金田も引かない。二人の衝突を止めることができるただ一人のブルペンスタッフである村山は仲を取り繕うことなく、延々と投球を繰り返すばかりだ。
　ブルペンにはイヤーな空気が蔓延している。開幕戦にこの雰囲気とは、さすがにお家騒動が体質的なお騒がせ球団である。
　見事ブルペン入りを勝ち取った、藤川球児、久保田、ウィリアムズのＪＦＫトリオも困り果てている。
「これが、タイガースの伝統か……」
　藤川は目を白黒させこの騒動を見守るが、対照的に、四六時中我関さずの久保田は、ひたすらボーッとしている。日本語の分からないウィリアムズは、何故かアメリカ滞在の長い井川に通訳を頼みつつ、江夏と金田の衝突を楽しんでいる。
「ヘイ、イガワ。ミスターエナツ、ドウシタ？」
「ジェフ、う～ん、え～と、なんていったらいいんだろう、え～と、そうだ、ミスターエナツアンドミスターカネダ、ライクキャッツア

ンドドッグだっけ？　仲悪いって……。でカネダ　コールド　エナツ　ア　モンキー……でいいのかな？」

「オオ～　それはイケナイネ～」

井川は、金田が権藤正利を猿と呼んで、その権藤に殴られた因縁話を江夏との仲違いの話と混同してウィリアムズに伝えてしまう。

「エナツ、モンキー？　う～ん　コーリング　ザピッグ　イズ　モア　スータブル（豚と呼んだ方が相応しいじゃないか）？」

こうしてウィリアムズの祖国オーストラリアに間違った江夏と金田の因縁話が伝わることになるのであるが、それはまた別の話。

大切な試合前にさすがに野放しにしっぱなしはまずいと”球道くん”こと中西清起ブルペン担当投手コーチが、金田と江夏の仲裁に立ち上がる。

「辞めてください！　二人とも！！」

さすが、自宅をも嗅ぎつけるしつこすぎるストーカーに切れて、ビンタをかました逸話のある中西だ。大先輩二人にも臆せずに立ち向かう。

「球道、黙っとけい」

「そうやユタカの言うとおりや、中西みたいな小童が口を挟める話と違うで」

「やめて下さいって」

たまらず中西は、二人の間に割って入る。

「球道、なんの心配してるんや？」

「なんのって殴り合いが始まったら大変でしょう？　試合どころじゃなくなりますよ」

「馬鹿か、球道。試合前に殴りっ子するワケないやないかい」

「へ？」

「そうやユタカの言うとおりや。殴り合いなんてせいへんで」

「で、でも」

「ワシは阪神いう会社には一物あるが、タイガースは愛してる。そんな我がタイガースの偉大なる先輩方とかわいい後輩たちが、手を

結び頂点を目指そうとする第一歩の試合をッぶち壊すマネをするわけない」

「そうや、それもユタカの言うとおりや」

「ですよね、金田さん」

犬猿の仲はどこいにいったかと思うほどの二人の息の合うこと。

「それじゃ、喧嘩はせんのですね？　ふう～よかった～」

「当たり前や、喧嘩は試合の後のお楽しみや」

「そうそう。天国に帰る前に江夏との因縁を片付けておかんと、現世をよう去れんわ」

「あれ、金田さん？　地獄かと思ったら天国ですか？」

「お前と違うわ。地獄に堕ちるだろうお前ともう顔を合わせんと思ったから、この大会は好都合すぎるわ」

大人の理性で一線は越えないと思われた両者であるが、因縁のけじめは後のお楽しみのようで。

「ふう～良かった。大会後ならどうぞ、どうぞ、いくらでもやってください。気が済むまで」

中西も一安心。

「って結局、殴り合いはする予定なんですね……」

数少ないブルペン陣の中の常識人である藤川球児は、まっとうな感想を述べる。

そして、いよいよソフトバンク対阪神の注目の一戦のプレイボールがかかる。

もうひとつの注目といえば始球式。ソフトバンクのホーム福岡ドームとくればこの男しかいない。

一塁ベンチから、始球式を担当する人物が登場するだけで福岡ドームは大声援に包まれる。

球道くん（後書き）

てゆうか誰が始球式か考えてない

始球式

始球式にずらりと並ぶのは、川勝博南海オーナー（１９８８年春に死去。球団売却はその年の秋に行われたことから、ホークス所持にこだわった頑固者オーナーの死去により突貫工事的に球団譲渡が行われたことが伺える）。

そしてダイエー中内功とその実の息子でオーナー代行も務めた中内正（リーダーシップに優れた４番打者小久保を巨人に無償で譲り渡したことで、ナベツネに恩を売り、見事、球団売却後も巨人のフロントとして球界に残ることに奏功）の親子の登場だ。

私財を投げ売って建てた福岡ドームだけに、中内功はどこか誇らしげ。今や外資の手に渡った福岡ドームであるが、一時だけの一城の主気分に心地よく浸り、満面の笑みを浮かべる。

もちろん上に羽織るウィンドブレーカーは大きく描かれた鷹が際立つダイエー時代のもの。間寛平や森脇健児らダイエーファンの有名人がよく着用してたことでお馴染みである。

そしてソフトバンクオーナーの孫正義の登場だ。

ホークスを紡ぐ４人のオーナー。一目でホークスの激動の歴史を見ることができる豪華絢爛の４人であるが、はてさてこの４人はどんな始球式を披露するのか。

多人数の始球式と言えば、人数分の打者と捕手が用意されて横一列に一斉に投球をするのがお決まりだ。ＡＫＢ４８やモーニング娘。など十把一絡のアイドルグループの始球式はたいていこうして行われるが、オーナー４人は、前出のアイドルグループらとは野球界における格が違いすぎる。

果たしてオーナー４人は横一列でなく、ホームベース、マウンド上、二塁ベースを結んだ直線状に、惑星直列のごとく縦一列に並ぶ。

センター付近には南海川勝。二塁ベース付近には中内親子。そしてマウンド上には孫正義だ。　どうやらホークスを先なる時代に紡

いできた4人のリレー方式で始球式がされることは、センター付近にいた南海川勝オーナーがボールを保持していることで明らか。

川勝が高々とボールを持った右手を上げると、遠く離れた球審円城寺のプレイボールのコールにより、始球式は投じられる。

えっこらせと川勝が中内功に向かって投げると、ボールは頼りなさげに二塁付近まで飛んでいく、呆れるほど多くのバウンドを重ねてから、中内功がよっこらしょと腰を曲げて差し出したグラブに収まる。やっとこさ行われたボールリレーは、まるで南海ーダイエーの球団譲渡のさまにそっくりと重なる。

中内功は投球を中内正に任せる。それはオーナー代行として、実質的球団管理を中内正に任せたことに重なる。

さすがの中内正は若いだけあって、見れる投球モーションでマウンド上の孫正義にリレーする。川勝ー中内功ラインよりもだいぶ手短に行われたリレーは、球団名とユニフォームの変換だけで本拠地も球団歌も変わらずに行われた、ダイエーソフトバンクの球団譲渡にそっくり当てはまる。

そして少年時代に野球経験のある孫正義が自信を持って投げ込んだボールは、ワンバンドして捕手のミットに収まる。

空振りする打者は阪神の一番打者真弓明信のはずであるが、どうもホークスのユニフォームを着用してるようだ。それも上が南海のグリーン柄のユニフォーム、下はソフトバンクの白いズボン、そして三宅一生デザインのガッチャマンヘルメットを着用し、ガムをくちゃくちゃ、バットを極端に短く持ち、ゆらゆらと揺らしながら、オープンスタンスで構える、宅麻伸似のいかつい男こそが、南海ーダイエーソフトバンクのユニフォームを選手として、袖を通しただ一人の男、大道典嘉である。

空振りがお約束の始球式だけに、ミート名人の大道のバットは空を切るが、空振りのそのスイングが自分の型のややデフォルメされた模倣であるために、誇張気味なスイングとなる。短くバットを豪快に振り抜く姿は、どこかしら不条理の世界だ。

代打の切り札の枠を獲得できなった大道であるが、ホークス、３親会社の歴史を知る唯一の現役選手として、始球式の打者の大役を担ったのである。

空を切った大道がヘルメットを脱ぎ、オーナー４人が万歳の形でドーム中の大声援に応えると、始球式は幕を閉じる。

いや捕手が問題だ。投手、打者が特別なら捕手も特別ゲストのはずだ。

「ワシは始球式みたいな晴れの舞台に相応しくないちゅうことか」

先発捕手野村をすねさせてまで、始球式の捕手の役割を担った人物とは？

湯上谷

孫正義が投じたボールを、膝を折り曲げ身を呈して受け止めた始球式専用の特別捕手は、長髪に牛乳瓶底メガネに、顔中ヒゲもじゃの晩年のくたびれた頃の湯上谷宏（当時の登録名は湯上谷？志）……ではなくホークス漫画と来たらこの人をおいて他にいないだろうの水島新司先生……とみせかけて若い頃は、南海随一の人気者で、『あぶさん』の作中でも女性ファンにキャーキャーいわれてた描写のあったのに、わずか１０数年の時の隔ては残酷で、栄養失調気味の水島新司のような風貌に成り果てた湯上谷のようで、マスクをカッコよく投げ捨てて、これみよがしに捕球したミットを高々と掲げる姿を見ると、やっぱり、『あぶさん』の作中で主人公あぶさんの謎の三塁コンバートは、天才と騒がれながらも、伸び悩んでいた小久保が脱税事件でおつとめしている最中のレギュラー三塁手最右翼だった当時の湯上谷に対するカンフル剤と描写だったと謎解きされた頃のメガネをかけた妙にきりりとした湯上谷でもなく、どう見ても、引退後福岡ドームの営業部に配属されて、心機一転というか営業らしく、汚らしいヒゲを剃り落とした頃の湯上谷でも、現場に戻り、いつの間にか一塁ベースコーチャーとして、装着が義務付けられたヘルメットをかぶりながら、コーチとしては大変有能だった大石大二郎ヘッドコーチがめまぐるしく出す隙あらば走れサインを走者に伝達したり、どう見てもアウトのタイミングなのに、習慣的にセーフだと腕を横に広げて意味のない主張をする湯上谷ではなく、どう見ても水島新司先生その人であった。

元阪神ファンでありあぶさん連載からホークス一筋に転身した水島新司先生こそ、ソフトバンク対阪神のこの一戦の始球式捕手を勤め上げるのに相応しいのである。

女性投手は絶対的なウイニングショットがあれば打者一人はいけるかもしれないなるヒントで野球狂の詩を描き、酒飲みの飲んべえ

でも代打一打席なら十分集中力は持続するのヒントであぶさんの連載開始を決めた恩人でも野村は、今や水島漫画でアンタッチャブルの存在。横槍が入り、使用禁止となったのだ。

それでも水島は野村のファンであることはかわりない。

「頼みましたよ、ノムさん」

「ああ」

ホークスの歴史を紡いだ始球式のボールを野村に受け渡すと熱戦の火蓋は切って落とされる。

阪神のトップバッターは、１９８５年の阪神優勝の立役者である真弓。ボールを選んで出塁をもぎ取るなど、せせこましい野球は仕掛けてこない。

近鉄ヘッドコーチ時代や今の阪神監督としてする野球と同じく一発長打、一人で得点するつもりだ。

福岡ドームの左翼席では、お馴染みのミッキーマウスマーチに乗せて、真弓、真弓、ホームランの大コール。そして他のお客に迷惑と禁じられた、ファンが横一列となってスタンドをせわしなく往復するいわゆる真弓ダンスも限定復活だ。

ホークスの先発投手は、細身の体にメガネがいかにも紳士的な杉浦忠。しかし投げるボールは投球練習からして凄まじい。

浮き上がるようなストレートと1メートル幅に曲がるカーブの威力は、阪神攻撃陣を恐怖の奈落に突き落とす。

「おい真弓。お前、杉浦と対決したことあったか？」

「ないですね、野村さん。僕の太平洋クラブ入団前に引退されましたから」

「そうか……初めてで打てる投手やないで……」

「初めてだろうと関係有りませんよ。今日の阪神打線とこの僕はね……」

「グヘヘ……抜かせ……」

湯上谷（後書き）

すごいな、この一話実質5秒ほどしか時間が流れてない

ささやき戦術

「どや真弓、阪神の監督は。外で見るよりよほど堪えるやろ？　ワシなんかありもせんこと書かれたり、イチを１００にして書かれたもんや。なんや知らんが地元マスコミはワシを応援せんと皆、敵や、敵……。特に酷いのがスポニチ。スポーツニッポンの大阪のや。あそこは記者や評論家が鶴岡親分の子分ばかりやからな。親分死去後も、親分死しても意思を受け継いだのか、ワシを目の敵にし続けたんやで。真弓も注意せいよ」

　得意の野村の囁き戦術がいきなり炸裂するが、真弓は阪神で見せる監督ぶりさながら我関せずと、大先輩野村の言葉だけで、一応耳を傾け、相槌を挟むが、心を取り乱す素振りがどこにもない。野村がささやく狙いは、おしゃべり欲を満たすことと、打者の頭をかく乱することにあるのだが、努めて無表情主義の真弓には意味がないこと。長嶋は聞いているのかいないのか区別がつかず、王は野村のボヤキに乗りながらも心は投手にあり、張本は、銀座での張本の武勇伝をささやくの野村への怒りをバットに乗せて現すが、真弓は聞き流しすのだからたちが悪い。王タイプとも長嶋タイプとも違う。長嶋タイプなら野村の格好な講演の目玉ネタになり、野村沙知代が殺人スケジュールを組むのであるが、真弓のこの反応では話のネタにもならない。それにしても真弓といい大石といい秋山といい、最近の監督は闘志を表さず、内に込めた監督タイプが多いのはなぜだろう。感情を表さず、話を好まない、または面白みのない話の監督は、つまらない地味な監督と分別されて、マスコミ受けがよろしくないとされる。

　努めて波風を立たせない真弓が、監督の座を追われる材料があるとしたら、それは成績不振かマスコミによる売れない監督叩きだろう。

「……こら真弓。何か反応せんか。阪神の監督はどうやと聞いてる

んや」
「それさっき、ノムさんに挨拶しにいったとき、さんざんしゃべりましたよ。今は試合中、先輩も後輩もないですから、余計なことはしゃべりませんよ」
「そうか。つまらん奴よのう」
「それはそうとノムさん、杉浦さんにサインを出さないでいいんですか？」
「サイン？　そんなもんワシは出さんで」
「？　それはないでしょ。早く出してくださいよ。そうしないとプレーがかかっても試合は始まりませんよ」
「だからワシは出さんゆうとるやろう」
「そんな馬鹿な。ノムさんたる名捕手がサインを出さないで、投手主導のリードを許すわけがない。僕がライオンズ時代にロッテや南海の捕手だったノムさんは、老体を酷使しながら、頭をフル回転させてサインをせわしなく出していたじゃありませんか？」
「フフフ……。杉浦がいうからしょうがないわ。昔のままでやりましょうよ、ノムさんとな……」
「昔のままに？」
真弓が、野村の言う意味が分かるのは、すぐその後の事だった。
「あ……」
サインを覗くために前傾姿勢を取っていたはずの杉浦が、胸、腹、腰の辺りを続けざまに触るのである。投手がサインを出す時におなじみのブロックサインである。しかし真弓は、杉浦のブロックサインが出ると、すぐさまタイムを要求して打席を外す。
「ちょっと、待ってくださいよ。投手のブロックサインは禁止されたはずですよ？　眼が悪くて捕手のサインが見えないから。自分でサインを出していた槇原が、このルール改正で成績を落とした記憶がある……」
「ふふふ。真弓、勉強せいよ。この大会は、先人の技を尊重する趣旨や。日本ハムの試合で投げた尾崎が今や禁止のロッキングモーシ

ョンを披露したやろ？　ブロックサインも同じや。古き良き時代の現代に見せるべく技や」

「へえ～　尾崎さん、ロッキングモーション披露したんだ」

「なんや、あの試合も見とらんのか。どうせゴルフやろ？　一試合先行開幕した試合くらいチェックしとけ。ワシはダルビッシュがブルペンで首を捻ってる開始前から土橋のサヨナラ打まで漏らさず見たで……野球ジャンキーやからな」

「ゴルフ……ご名答といいたいところですが、やきゅつくですよ、やきゅつくに夢中だったんですよ。尾崎さんもＯＢ選手で出てきますよ」

「やきゅつく？　なんやそれ？」

「なんやそれも糞もないですよ。やきゅつくのＣＭのノムさん自身出ていらっしゃったじゃないですか……」

「忘れたわ。ワシは人気者の売れっ子やから、いくらでも仕事があるから、いちいち覚えとらんわ」

「ゲームですよ、ゲーム。僕も仕事でやきゅつくのソフト貰って、夢中になった口ですけどね。それよりは試合だ。どうして杉浦さんがサインを出すんですか？　杉浦さんがサインを出して、何が昔のままなんですか？」

「昔のままなんや、これがな……」

「え？」

「まだ正捕手成り立てで、打撃で手一杯やったワシに代わって、アイツがサインを出してたんや。情けないこっちゃで。配球の神様野村様なるものが投手のサインの言うとおりにミットを構えるんやから……」

「投手主導ですか……」

真弓はニヤリと笑う。

杉浦が白鳥の羽ばたきと表された華麗なアンダースローから糸をひくようなストレートを投じる。シュルシュルと音を立てた回転のいいボールは、外角低めに向かって飛び込んでくる。

「狙い通り。投手主導なら、初球からストライクで入ってくる」
中西太道場の生徒は一目で分かる。掛布といい岡田といい若松といい皆バットを体の前にゆらゆらと揺らしながら立てて構えるからだ。中西太道場の優等生である真弓にしても例外ではない。
狙いをつけた外の低目のボールを思い切り振り抜く。
真弓～真弓～ホ～ムラン～♪　ミッキーマウスマーチに乗せてひっきりなしに流れる阪神応援団の楽曲どおり、真弓の放った打球はスタンド向かって高々と舞い上がる。

バニッシュ／スライダー

「うわ～　監督、打った！　打った！」

ホークス側のブルペンでひときわ賑やかなのが城島ブルペン担当捕手である。城島のいう監督とは、今城島が再び属するソフトバンクホークスの監督鶴岡ではなく、杉浦の渾身の初球まっすぐを快打一閃、得意の右方向に、おっつけながら引っ叩いた、阪神の恐怖のトップバッター真弓のことだ。

つまり城島は、今現在、現役選手として忠誠を誓う阪神タイガースの指揮官真弓の活躍に一喜一憂しているのであるが、考えて直してみて欲しい。今、城島は再びホークスの一員として、ホークス側のブルおペンにいることを。複雑にねじれたホークス、タイガース、城島の関係は、馬鹿正直な城島にとって、ユニフォームに絡みつく糸くずのようなものかもしれないが、ただ一つ、言えることはブルペンにいる城島以外誰もが、真弓の快打など望んでもいないことだ。

「ジョー。騒ぐな」

城島に注意の一言を飛ばしたのは藤田学ブルペン担当コーチだ。あだ名は、馬であるが、現役を辞めて、動かないその姿は他の動物に例えた方が相応しいくらいだ。

「いいじゃないですか～藤田学コーチ。藤田コーチみたく、生涯ホークスの身には僕の気持ちはようわからんのですよ」

「アホ。オレはオリックスでもコーチやっとったわ。生涯ホークスでもない」

「ああ～そうだ。石毛オリックス、レオンオリックスの元で二年ほどやってましたよね。チーム防御率5点台の投手コーチ。ホークスと当たると、毎度のごとく20点取られてましたっけ」

「アホ、そりゃ二年目や。一年目は、防御率3点台に、投手成績、一位、二位を金田・具の左腕コンビで独占させたんや。オレの手腕でな」

「おっとそうでしたっけ。でもご安心あれ。僕は、真弓監督を応援しつつホークス愛にも溢れていますから。おっと、ライトの佐々木誠さんが後退してフェンスについた。それジャンプだ。タイミング合えば捕れるぞ」

誰にでも臆せず言い返せる城島の方が舌戦では一枚上手か。

肝心の打球の行方はどうなったのだろうか。ホークスのライトは城島のご紹介どおり、佐々木誠だ。終の住処になるはずだった福岡ドームのライト定位置を、秋山との超大型トレードでわずか一年で終えることになった佐々木であるが、佐々木ほどの野生の勘が備わった、先天的センスに優れた選手は、たった一年のホーム球団として福岡ドームのライトを守った経験で、すべてを熟知して、体が覚えて忘れさせない。

佐々木誠がフライを深追いしなかったのは正しい選択だった。なにせ、壁にへばりついてジャンプ一番、ボールをもぎ取ろうとも、フェンウェイパークのグリーンモンスターならぬ、高くそびえるグラディエーションモンスターのいくらジャンプを頑張ってもけして届かないところに当たるのだから。

フェンスから跳ね返るボールを予測した佐々木誠だったが、結論を急ぐと、1メートルほど、佐々木の予測よりずれていたのであるが、

「秋山さん、みたくかっこよくカバーリングしようと思ったがずれてもうた」

予測のズレを取り返すのは、右翼手に適した左投げから繰り出されるパワーアームだ。ライトの深い位置からの二塁返球に関わらず、佐々木の強肩はセカンドの井口を中継役に使わない。

二塁ベースカバーに入るショート川崎に直接届くと判断した井口は、佐々木の返球をスルーする。

ワンバウンド、ツーバウンドして一直線に二塁ベースに届く返球の前に、楽勝のスタンディングダブルとたかをくくっていた真弓は、返球に怯えてギアを入れなおす。

足から二塁ベースに滑り込む真弓と体を忙しく反転させ真弓にタッチしに行く川崎のどちらが忠実なるプレーをしたのか？

真弓も川崎も黒いストッキングむき出しのいわゆるオールドスタイルでプレーしている。４本の黒いストッキングが交差する中、飛び込んでくる白球のコントラストは、意外と鮮やかであるが、二塁塁審田中の眼は誤魔化されない。

川崎のタッチのが早いと見抜いた田中は腕を高々と上げる。

「よっしゃ！　ムネリン、ええタッチや。鳥谷のぞんざいなタッチならセーフやったぞ！　オレは今、鳥谷のタッチの甘さでだいぶ盗塁阻止率損してる身だから、ラブ、ムネリン！　タイガースにＦＡでゴー！」

真弓の快打に喜び、川崎の目立たぬ好守に拍手を送る城島はマイペースすぎる。ただ、鶴岡も野村もいないブルペンでは城島は王様に変りなく、

「なんかジョーさん、節操ないな～」

「和巳さんの言うとおりっすよ。ホークスの応援だけしとってください」

「僕も杉内と同意見です」

「和田、和巳、杉内の若きホークス四天王も偉くなったもんよのお～　この城島様に口答えできるんだから……ん？　四天王って３人しかおらんやないか。もう一人はどこいったんや？」

「もう一人？　ああアレはアレですよ」

「うん、アレはアレだね」

「そうそう、練習試合でいつものアレを連発して、選考から早々と落選しましたよ。城島さんが調整段階、実践の守備機会はまだ早いと磯釣りに励んでる最中に、アレはアレ続きで、すぐに消えてもうた」

「そんのきの捕手は誰や？」

「誰だったかな、和巳さん？」

「あん時は吉田博之さんだっけかな～」

「くう～　新垣のスライダーを捕れるのは世界広しともオレだけなのに～　惜しいなあ、オレがマスクかぶれば捕ってあげて、四天王が勢ぞろいの快挙も夢やなかったのに……。新垣は今悔しくてしょうがないだろうな、なあスギ」

「そうかな、アイツの事だから、この試合のこともケロっと忘れてカツ丼でも頬張ってるんじゃないかな」

「まあアイツならそうかな……。オレみたいにちゃらんぽらんの性格が野球に生きるわけでもなく、ちゃらんぽらんな性格そのままの投球する男やからな～」

「それはそうと、ジョーさん。二番は吉田さんっすよ」

「お～ムッシュ吉田……。和巳と同じ京都出身や」

「どんな打撃するんですかね？」

「さあな……なにぶん、オレが生まれる前に現役辞めてる人や」

二番吉田は小柄の体に相応しくない、ずいぶんとふてぶてしい打席の入りを見せる。コールされて素早く打席に入らず、

「げえへへへ……ウへへ……」

と中村玉緒風の笑いを披露しながら、さかんにバットの先をしごいている。そういえば中村玉緒も吉田も京都。京都では、この笑い方も珍しくないのか。

「ゲへへへ……どうもムッシュ吉田さん……。吉田さんとの真剣勝負は南海と阪神の日本シリーズ以来かれこれ４５年ぶりくらいですなあ……ウへへへ」

そして野村も京都。笑い方もよく似ている。偶然なのか、作者の意地悪心の意図的なのか。

「２０球くらい粘りますから、ノムさん、覚悟しておいてくださいな……ゲへへへ……」

ムッシュ

阪神の藤本定義総監督が二番に吉田を起用した意図はどこにあるのだろうか。遊撃に吉田を選んだ腹づもりはいかがなものなのであろうか。

遊撃には、阪神タイガースただ一人の生え抜き名球会会員である藤田平もいる。守備力や走力は、明らかに吉田に軍配が上がるが、打力、特に、二塁打を左右のギャップに放つ柔らかい中距離打者の資質は、どうみても藤田平に分がある。

しかも今日のオーダー、新旧ダイナマイト打線の主役を散りばめる豪華絢爛な打線。いかにも攻撃にかたよったラインナップ。投手が左打者を宿命的に苦手とするアンダーハンド杉浦が、確実にくることをあわせると藤田平が吉田よりも、ダイナマイト打線を総括するこの打線によく似合うはずだ。

永久欠番の偉大さと村山と二分する勢力の大きさを考えての吉田起用ならば、打順は二番でなくてもいいはずだ。守備型の遊撃手には、指名打者制の9番なる打順の最下位で1番打者にコツコツとつなぐ役割がよく似合う。代わりの2番には、右打ちもできる岡田なりやつなぎ役の役割も担えることを２００３年の一年がかりで証明した金本を入れればいい。

それでも藤本定義総監督が2番遊撃手吉田にこだわるのは、どんな意味があるのだろうか。

「エヘヘヘ、グヘエエ……。４０年ぶりに真剣勝負の打席に入るゆうのに、投手が杉浦とは、これは難儀の事ですな～　グヘヘ……あんな速いボールに、よ～く曲がるボール、よう打てませんわ～」

「なに言うてんですか、ムッシュ。あんた、打てんでも、バッテリーに致命的なダメージを与えられるでしょ？」

野村は、吉田2番起用の秘密の核心に迫るのだが、

「そんな事よりも、ノムさん。僕のことを、みんなムッシュいうの

は、なんでですかな～」
　吉田は軽くはぐらかす。
「そりゃ、あれでしょ。あなたがフランスで野球指導していたからでしょ？」
「そりゃ分かりますが、フランスにいたから、みな敬称がムッシュになるのは、アメリカ帰りの元大リーガーはみな”ミスター”ですかな～？　そりゃいかんでしょうよ～　ミスターいうのは、ミスタープロ野球、長嶋しか呼んではあきませんて～」
「あんたもミスタータイガースでしょ？　ならミスターと呼んで差し上げましょうか？」
「いやいや滅相もない。やっぱり僕はムッシュでいいです～　フランス帰りの野球人は大変珍しいことですから～。ミスターはやっぱり長嶋一人ですわ～」
　吉田は軽口をたたきつつ本領を発揮する。杉浦のうなるを上げるかのごとく浮き上がるストレートは、野村のあまり上手くないキャッチングでは、捕りきれないほどの威力であったが、球審円城寺は首を捻り腕を上げない。
　野村は振り返りもせずに、円城寺にコースが外れたか、高いかを聞くが、
「どっち？　スタンカの時見たくストライクをボールにしたの？」
　円城寺は、黙して語らない。
「どっちでもええんやないですか、ノムさん。ハリーアップ、ハリーアップ。野球は迅速に進めましょうや」
「……これだよ、これ、だから、ムッシュとはやりにくんや……」
　野村が補球した位置は、やや高めでコースを外れたかのように見えるが、アンダーハンドの杉浦の浮き上がるような球筋は、ベース上においては、ストライクゾーンを通過したかのように見えたが、それでもストライクを取られないのは、吉田の身長にある。
「あれ違いますか？　僕、人よりちょっと背が低いから、ゾーンも人様よりも小さいやないんですか。ゲヘヘヘ」

吉田は、しれっと最大の武器を明かすが、ひときわ小さい体をさらにかがめて構える吉田のストライクゾーンは、明らかに狭くなる。

「杉浦も投げにくいでしょうな～　ウヘヘヘ」

これが、当時の大投手金田をも苦しめた吉田のエースキラーたる由縁だ。的が小さく投げにくいのは、当然として、バットを極端に持ち、際どいボールをカットしにいくのだから投手はたまらない。エース級の投手となれば、振り回す強打者はむしろ楽。力と力の勝負は臨むところなのだが、この手のタイプはどうしてもやりにくい。杉浦も例外でなく吉田の業師ぶりに手を焼く。

「またカットしてもうた～　ゲヘヘ……かなわんなあ……。フランスで野球指導したとき、ファウルが続くと守備側も攻撃側も飽きてくるんですわ～　野球を世界に普及するには、時間単色が必要です。一打席にやたら時間がかかるんはイケないことですよ。エヘヘ……」

口とやってることがまるで逆。バース、藤村兄やあとに続く猛打者たちに杉浦の全球種を見せるかのように、吉田はとことん杉浦のクセのあるボールをカットしていく。

リードを放棄した野村も愚痴る。

「はよ、アウトになってえなあ～」

「エヘヘ、僕もはよベンチに戻って、休憩を取りたいんやけど、どうも体が勝手に粘ってしまうんでかないませんわ……ウヘヘ」

カーブ、シュート、ストレートが各コースに散らばり、ネクストのバースが杉浦のすべてを目に焼き付けると吉田はお役御免とばかりに、ポップフライを打ち上げる。

「あきませんわ。僕の役割は転がすこと。二番が打ち上げちゃ話になりませんわ」

二塁の井口への平凡なフライに終わるが、吉田の二番打者としての仕事ぶりは十分すぎるほど果たした。

「僕の真弓が一球で終わるから、スギのボールを丸裸にするのに時間と労力がかかりましたわ～　ゲヘヘ……」

これが藤本定義が吉田二番に託した思い。ガンガン攻めに行くト

ップバッター真弓の補填の役割を吉田に任せたのだ。野球に人生かけて７０年。さすがに吉田は自分の役割をわかっている。

そして吉田が自分を殺してでも、お膳立てした次打者こそは、タイガース史上最強の打者だ。

「バースか……間近でみると、ケンタッキーおじさんにそれほど似てないわ。カールおじさんの宣伝で白ひげメガネの紛争したワシのが似てるくらいや……ぐへっへ」

ムッシュ（後書き）

ほとんどキャラクター小説だな

チェスト

阪神史上最強打者であるか、それとも１２球団ひっくるめて最強の打者か異論があることだろう。１９８５年、１９８６年に残した打撃成績は、確かに、同じ８５、８６年に三冠王を取った落合と並びプロ野球史上最高峰の成績である。だが、同時期に落合が同じような数字を残したことからもわかるように、当時は酷く打高投低であったのは間違いなく、この両年を元に他の偉大な選手達と数字比べするのは若干無理があることだろう。

ただ価値がなくなるほど本塁打が飛び出た両年とはいえ、バースが圧倒的であったことは事実。ひとつ抜けた打撃を披露できたのは、遊撃手川崎宗則の迷いからも伺える。

いつも元気で、猪口才なく動きまくる川崎ムネリンが、守備位置で悶々としてるのだ。

「どうしていいかわからん」

腕組みし、じっとバースの打席の入りを観察するが答えがでない。１９８１年生まれの川崎は、バースの全盛期をよく知らないが、バースの打撃の特徴くらいは、朧気ながら理解している。

「引っ張り一辺倒の打者だったら、楽なのにな～　幼少時代にわずかながら得た情報や、たまに見る過去のＶＴＲとか見ると、バースさんは、右に左に長打を連発してるんだよな～。ウチの小久保さんみたく引っ張り専門の打者で逆方向は、いかにも当たりそこね、振り遅れの打球が飛ぶっていうのなら守りやすいのに、でしょう？」

川崎は、これまた守備位置に困る三塁手に同意を求めるが、その三塁手が、話のネタになっている小久保であることをすっかり忘れるおちゃめなムネリン。

「あ、いっけね～　三塁はその小久保さんだった」

「鳥越とかに同じことといわれてたら、裏で説教やが（小久保と鳥越は同級）、ムネにいわれても腹は立てんよ」

「すいません、小久保さん……。あのその小久保さん、バースさん対策にどう守備位置を取った方がいいですか？」
「分からんなあ。オレはムネと違って、バースの打撃の恐ろしさを生で見た世代やが、バースの打撃スタイルは、よく日本に来る外国人みたく、打撃方向が偏るわけやないから、とりようがないんや。しかも、頭と技術が図抜けた打者や。シフトを敷いても、逆をつける打者や」
「へえ～　でもそんな凄い打者のバースさんがどうして、メジャーで通用せずに日本に来ることになったんですか」
「まあ、あれやお、日本の投手のが、メジャーの投手よりまっすぐが５～１０キロは遅い。しかもバースの当時の球場は、皆、箱庭や。ムネに分かりやすく例えると、ほとんどの球場、北九州市民球場でやってたもんや。そんな環境なら、メジャーの投手に振り遅れてたバースでも、コンパクトにミートしてけば、楽に長打や」
「なるほど、さすが、博識の小久保さんですね。でもウチの投手は、杉浦さんですよ。え、杉内さんや和巳さんじゃないの？　と最初思いましたが、打者二人のストレートの速さを見て、僕も納得。バースさんが、振り遅れる、当時の日本の投手の５キロ増しの体感速度、つまりバースさんが打てない速球ですよ、あれ。ですから、バースさんは自由な打撃ができないんじゃないですか？」
「ムネは、ポジティブやな～。ただお前のいうたいことはよう分かる。杉浦さんは、バースの自由にさせない。だから逆方向であるオレとムネの三遊間は、弱々しい打球しかこん。バースの足やと、打ち取った当たりが内野安打なんてないんや。だから定位置より深く守れ。万一、芯をくった時の打球の速さに対抗できるし、内野安打お防げる位置や。そんでオレは、三塁線を抜ける長打防ぐためにライン際をつめて守る。これでいくぞムネ！」
「わっかりました！　チェスト！！！　と気合を入れたがいいですが、捕手が野村さんでしょ？　野村野球なら、一打者、極端な話だと一球ごとにシフトを替える細かい野球をやってくると思いました

が、野村さんからなんの指示も出ませんね？」
「そうそう、それはオレも気になってたところや。アレやろ、杉浦さんがサインを出していることに関係してると違うか？　つまり杉浦さんと組むときは、主導権は完全に杉浦さん、そして野村さんは、なんもせんという取り決めがあるんやないかな？」
「へえ～　わっかりました！　誰とも滑らかな人間関係を保てる僕には分からない複雑怪奇な人間関係ですが、僕は守りますよ！　チエスト！！」
　バースに最大限の注意を払うんおは、捕手野村も同じ。
「阪神の打線の鍵は誰が見たって、神様、バース様や。こやつをいかにして封じるかが、ホークス勝利の道や。ワシは暇にあかせ、バースのビデオや資料を漁ったで。明確な弱点ないお手上げの打者やったが、朧気な弱点は、発見できた。ワシが配球できるなら、筋道立ててサインが出せるんやが、なにせ杉浦が主導権で、ワシは捕るだけの田淵や城島みたいな捕手に成り下がっとる……。これじゃバース攻略どころやないが、そんなもんワシは知らんわ。打たれてもスギと鶴岡親分の責任や。そう考えるとこっちは楽やな……ウヘヘヘ」
　バースが打席に入ると、懐かしきマーチが阪神応援団が陣取る左翼応援席だけでなく、三塁側一帯からも聞こえ始める。
「バース、かっとばせ～　バース！　レフトへライトへホ～ムラン！！」
　歌詞も音楽も単純だから、誰の耳にも残り誰にでも歌いやすい。単純なメロディーが尽きて、勢い複雑化する昨今の選手テーマと事情を異にする。しかも、レフトへライトへホームランを期待するのは、選手テーマの歌詞の常套句であるが、左右に打ち分ける長距離砲などめったにいないのは当然として、久慈あたりにもホームランを期待するのだから、始末が悪い。
　だが、バースは違う。歌詞通り、右に左にとホームランを打てる

打者であるのだ。棒立ちの姿勢から、やや体を前傾させ、肩にバットを乗せてから、二度三度バットを振り下ろしてタイミングをはかるバース。往時のそのままの打撃スタイルは、当時のファンを仕草だけでしびれさせる。

杉浦がサインを出す、野村が億劫そうにミットを構える。内角高目。

「いきなり、まっすぐか、怖い、怖い……グへへへ」

初球から打っていくバースの打撃スタイルを理解しての速球勝負だ。それだけ自分の速球に自信と確信のある杉浦だ。

杉浦の手から離れたボールは、虹のような軌道を描きバースの胸元に飛び込んでいく。

一二塁間の冷戦

小久保と川崎が、事細かく、守備位置の意見交換をする一方、一、二塁間は、冷え切っていた。

ファーストは松中、セカンドは井口の１９９７年入団の同期の桜コンビの間に、活発なコミュニケーションがないのはなぜだろう。

守備位置についた時から、二人の間には、なんと言えない微妙な空気が走っていた。井口が、グラブの先を少しおじぎさせて、松中への挨拶にかえても、松中は、何のリアクションもとらずに、時間だけが過ぎていく。

バースが杉浦の投じた初球を猛然と振りにいき、のびるストレートに振り遅れたバットからは、バックネットに飛んでいくファウルボールしか生み出されないが、バットスイングのすさまじさから、ボールとバットの衝突の摩擦から、焦げ付くような臭いがグランド中にただよっても井口と松中は、何も関心を示さない。

二人の関係の亀裂が生じたのは、いつからだろうか。アトランタ五輪を供にした二人は、アマチュア時代は、親友として知られていた。

ヤクルトが、アトランタ五輪の４番松中に、オマリーの後釜、一塁レギュラー保証の条件を差し出しても、井口と供にプレーがしたいと、ダイエーの逆指名枠二位を選択したほどだ。

それなのに、いつから井口と松中の間に弾む会話が見られなくなったのだろう。一説には、練習もせずに、遊び呆けている松中に、井口が嫌気を差したからとも言われるが、真相は定かではない。

「ひえー　バースさんのスイングは想像以上に凄まじいなあ～」

バースの実力におののいた川崎は、後ずさりするように、思わず、二歩三歩と守備位置を深くする。

「井口さんも後ろに下がった方がよろしいですよ?」

後輩ながらも、物怖じせず先輩選手に意見できる川崎は、井口に

的確な支持を出す。

「悪いが、ムネ。僕はここでいい。あまり深く守備位置を取ると、一二塁間抜かれるからな。なにせバースの打球は、僕がホワイトソックス時代に経験したツインズのモーノーやレッドソックスのオルティーズらメジャーを代表する左のプルヒッターに匹敵するほどの打球速度だろうし、しかも、一塁手は、”アノ人”だよ、動きの悪い”アノ人”のケアもセカントの仕事だ。だから、あまり深い守備位置取ると、一二塁間の打球に対応しきれなくなる」

むろん、井口のいう”アノ人”とは、一塁手の松中のことである。名指しもできないほど仲は壊れたか。しかも、井口は川崎だけでなく、松中の耳に届くほど、ハッキリとした口調でいったから、さあた大変。

「チ」

松中は、短く舌打ちを鳴らすと、一塁ベースにひっつくくらい一塁線に身を寄せた。そこまでいうなら、一二塁間の打球は、井口、お前が全部処理しろよと言わんばかりの守備位置だ。

松中のチーム第一よりも個人的感情の勝った身勝手なプレースタイルも、ホークスの本拠地福岡ヤフードームだから、試合の流れは味方する。

果敢にバースを攻める杉浦は、これでもかとストレートを連投する。バースも負けじと振り抜き、打球は、火をふくようなライナーとなって、一塁線を襲う。

井口の言動に切れて守備放棄のはずが、ここに飛んでくると読んでいたかのように松中は、一塁線のライン際に待ち構えていることになった。

打球はフェアかファウルか微妙な当たり。半身を翻し打球速度に体をついていけば、松中のいた守備位置では処理できる打球。だが、松中のグラブは、打球をスルーする。一歩送れたタイミングから、バースの超弩級の打球スピードに間に合わない。

ベース上に倒れこむ松中の上を打球は虚しく通り過ぎていくが、

間一髪、打球は、ベースを通過せず、右に大きくドライブがかかって、ファウルラインを割っていく。

さすがワシらのバースや！　と総立ちになった阪神ファンもファウルの現実には、為す術なく、仕切り直し。

松中の動きの悪い守備も、記録に残らず記憶の闇に葬り去られるはずが、井口は、きっちりと松中の怠慢ぶりを指摘する。

「あの守備位置なら取れる打球でしょうよ……。まったく……あんな気の抜いた守備位置を取るなら、指名打者として、守備の時は、おとなしくベンチに座っていてよ……」

もちろん、井口の愚痴は、ひとり言のつぶやきでは終わらない。松中の耳が、怒りの赤に染まったことから、井口のズバリ指摘は、松中に聞こえるように投げかけたことが分かる。

「クソ。見とけよ、井口……」

思わず熱くなる松中は、一二塁間を思い切り詰めてくる。井口の手柄にさせまいと、一二塁間の打球は、意地でも取りに行くつもりだ。

この松中の自分勝手の意地だけの守備シフトが、捕手野村には、松中の好判断に見えるから世の中わからない。

「なんや、松中、あんなに守備にやる気見せる男だったかのう。守備位置の是非は置いとくとして、一球ごとにめまぐるしく守備位置を変えるなんて、感心するわ。元々、打者としての素質をワシは勝ってたが、守備にも熱心とは、さすが、このワシがＷＢＣ日本チームの４番打者に選んだことあるわ……ウヘヘ」

もともと松中を盲目的に高評価する野村だけに、松中の一挙手一投足が意味のあるものだと勘違いするのもむりはない。

「ところで杉浦お前はバースとの勝負、どうやって落とし前つけるつもりや？　追い込んだ、ボールカウントはまだ3つも余裕がある。カーブもシュートも超一流のお前や。ボール球になる変化球で誘いにくれば、バースといえど、巻き返しは困難やぞ……」

しかし杉浦に野村の忠告は聞こえない。あくまでもストレート勝

負。ストレートで相手の軸を封じて、バース個人との対決だけでなく試合自体を有利にしようとする魂胆だ。

「知らんわ。バースに3つストレート続けるなんてワシは知らんわ。まあええわ。打たれても、ワシの責任違うし」

杉浦は、全身を踊るようにくねらせ渾身のストレートを投じる。野村が言うまでもなく、バース相手に同じボール3球は、誰が見ても危険、分の悪い勝負。

だが、杉浦も意地になって投げているわけではない。低めぎりぎりから、わずかにシュート回転をかけて落ちるストレートを選択したのだ。しかも、ストレートといえど、ゾーンは、ストライクからわずかに外れたボールゾーン。バースが振ってきても、安全のゾーンだ。

バースは、当然、3球続けてのストレート勝負と錯覚しているから、ボールの上を叩く。

それでもバースのスイングスピードは、強烈な打球を可能にする。またまた火が出るような打球が飛んでいく。

しかし、そこにも松中がいる。守備に関心がなく、連続シーズン一位と三冠王の副産物から初のゴールデングラブをもぎ取った２００４年以来、はっきりと一塁守備に興味がなくなり外野とベンチに引っ込んだ松中が、バースが飛ばすところ、飛ばすところにいるのだから、松中は、まるで予知能力者と錯覚されるのも無理がない。

はたまた飛んできた打球を、またまた松中は弾く。打球予測がたまたま当たっても、守備能力がついていかないのだ。

回転のかかった打球は、松中のグラブを弾く、予知能力者も守備の名人ではないことを夜に知らしめたが、弾かれた打球の先に、松中を”アノ人”呼ばわりするあの男がいたのだ。

井口には、松中の手助けをするに抵抗はない。

弾いた打球を迅速に処理すると、バースの足を考えて、ゆったりと一塁ベースカバーに入った井口に送球する。バースは、内野安打で打率を稼ぐタイプのわけでなく、あっさりとアウトになる。

守備に関心のない松中は、打球の飛んだ先々に必ずいる不可思議さに、松中をよく知る福岡ホークス勢が狐につままれたかのように唖然とする中、一回の表は、結局、３人で終了する。

そしてホークスの攻撃は、これ以上ない切込隊長、南海史上生え抜き２０００安打達成者３人のうち一人である広瀬から始まる。

ザトペック投法

ホークスのトップバッターは、チョロこと広瀬だ。首位打者と盗塁王を同じ年に獲得したプレイヤーは、同じホークスの佐々木誠、イチローとプロ野球史上ごくわずか。

打って走れる理想的な一番打者だ。対するタイガースの先発投手は、ミスタータイガースの冠を投手でただ一人授かった村山実。とにかく胸やけするほど、熱い。一球も投げてもいないのに、すでにヒートアップ。完全に熱血人間として出来上がっているのだ。

神経質にマウンドを鳴らし、打ち合わせにくる捕手田淵をグラブを持つ手で追い払う。投球前の精神集中、誰にも邪魔をされたくないからか。

かといって村山が、マウンド上で誰でもウエルカムの友好的な姿勢をとっても、集まる内野陣はいないだろう。一塁手のバースは外国人だし、サードの掛布は、引退間際のどさくさで監督村山を嫌うのは有名。そして、なんといってもショートの吉田は、生涯、村山と相まみえることができない永遠のライバル同士。一人、セカンドの岡田だけが、子供時代に村山とデパートの屋上でキャッチボールした思い出から村山に気軽に声をかけれる立場だ。

なお岡田は、村山の引退試合前の甲子園のグランウド上でキャッチボールをしたとされるが、あれはウソ。前出の通り、引退直前にデパートの屋上で、阪神後援会の有力者の子息である野球少年岡田彰布と相手をしたのが、実際の話し。それが、なにをどう伝言ゲームされてか、村山の引退試合直前に岡田が相手をしたと話が誇張されているが、歴史とは、いかにいい加減に伝わるかのいい見本だろう。

プレイがかかっても、村山は精神集中のための瞑想をやめない。じれる吉田と掛布が、村山のテンポの悪さを愚痴り合うが、これが村山のペースだ。

ひとしきりの儀式が終わると、村山は猛然と振りかぶる、ザトペック投法と表現された、熱さと暑苦しさが同胞する独特のスリークォーターから、キレのある速球を投じる。

村山と言えば、杉下、村田兆治と並び称される昭和のフォーク名人。だからといって、格式を重んじる村山は、初球からフォークは投げないのだ。

村山の炎のようなストレートは、田淵の構えた外角低目にピタリと収まる。

投げ終えたあとのフォームも、まるで歌舞伎役者の見栄のごとく仰々しい村山は、両手、両足を大きく広げて、初球の出来に満足してか、

「おっしゃあああああ〜」

と福岡ドームの大歓声をもつんざくような大絶叫をあげる。

だが、球審の円城寺は、村山の絶叫に応えない。首を二度、三度振ると、小さな声で

「ボール」

とつぶやいたのだ。思わず後ろを振り向く田淵。

「円城寺さん、今のボール？　辛いな〜　コース、高さ、どっち？」

田淵が疑問を持てば、村山が吠えないわけがない。渾身の外角低めの直球が、ボールと判定されて、村山が黙っているわけがない。

脱兎のごとくマウンドを駆け下りると、球審円城寺に詰め寄る。

「円城さん、今のがなんで、ボールや？　ストライクやろ？　なあ、なあ、今からでも遅くないから、ストライクに替えてよ。私、間違ってましたというてよ、頼むよ、なあ、なあ？」

興奮してまくし立てる村山に、田淵が間に入って止めに入る。先発投手が、一球投げて退場とあいなったら、試合どころではないからだ。村山の涙が今にも溢れそうな猛抗議にも、円城寺は頑として受け付けようともしない。

やがて、村山は、プイと後ろを向き、マウンドに帰っていくが、ブツブツと絶えず動かす唇からは、到底、判定に納得できてないこ

とが伺える。
　ストライク、ボールのたかが判定も、村山にとっては、されど判定。一球とも、妥協しない村山の姿勢には、学ぶことも多くあろうが、村山の去り際に、
「しかし堪らんわ。こんな一球ごとに、熱くなられちゃあ～　試合時間がどれだけのびることか～」
　田淵がポロリと漏らした本音こそが、すべてを表している。一球ごとに感情の起伏を激しくしたら、ただでさえホークスオールスター相手の神経擦り切れる一戦。早期のスタミナ切れ必至だからだ。
　さらに、一球ごとに村山が、判定にいちゃもんつければ、この小説、どれだけのびることか……。

ザトペック投法（後書き）

一話執筆にどれだけ時間がかかるかクイズ

１　まあ2～3時間？

２　一日がかりヒーコラ考えながら書いてる。

３　構想3分　執筆３０分　見直し0分

４　すでに出来上がった小説を切り貼りしてる

田淵の解説自慢3大話

「なあブチ。村山がこの調子だと、お前も操縦が面倒そうよのう」
「いやいや、その通りですよ。広瀬さん。タイガースにあ、村山さん、江夏、小山さんと、こっちの自由にならない投手ばかりですぜ。村山さんとオレで、思い出に残るエピソードとえば、１９８７年、村山さんが二度目の監督に就任する時ですよ。コーチになれ言われて、深夜に、オレの東京の家に来てねえ。コーチとして手腕を勝ってくれるのはありがあいけど深夜はないですよ。トレード通告の時も、深夜。タイガースいうチームは、どないなチームなんですかね」
「ホークスのがええチームやろ？」
「え？　ホークスとオレ。なにか関係ありましたっけ」
田淵とホークスといえば、ダイエーホークス、二代目監督。野球に関わったものなら、忘れもしないエピソードが詰まった稀代の迷監督なのであるが、田淵自信は、濁して語ろうとしない。
「なんや、ホークスで監督やったの黒歴史か？　オレはお前に感謝しとるんやぞ。お前の二年目に、オレを走塁コーチとして呼び戻してくれたやろ。監督失敗の烙印を押されて、半ばホークスから追い出されたオレが、南海身売り後、福岡ダイエーに名前も場所も変えたというても、そりゃ嬉しかったぞ。監督から１コーチに戻るのは、多少、違和感があったが、そこは、オレの専門、走塁や。きっちりと結果出したったぞ。おかげで、監督大失敗で終わったはずのモヤモヤとした野球人生を綺麗に終わらすことができたわ。福岡ダイエーの南海と違う豪華な待遇も味あわせてもらったしな」
広瀬は、南海監督失敗後、解説者として、約１０年活動していた。解説と現場が毎年のように入れ替わる流動性の高い世界といえど、１０年も解説の世界に身をおけば、現場の世界は遠くなるもの。広瀬のように監督まで登りつめて、かつ失敗して終わり、球団買収で本社の体勢が替われば、なおいっそう復帰は遠くなるはずだ。

そんな隠居生活に半分足をつっこんでいた広瀬を、ホークス復帰に導いたのは、なにをいう田淵福岡ダイエー監督である。

「そんなこともありましたなあ～」

阪神現役時代のホームランアーチストとしての全盛期、西武に移籍後、広岡に感化されて、巨人を倒して日本一を達成した円熟期、そして阪神コーチ時代、うねり打法なる新打法を提唱し、阪神優勝の夢を結実させた打撃コーチ時代は、自慢話のように、よく解説で語る田淵であるが、ダイエー監督時代と北京五輪コーチ時代は、あまり語りたがらない。

「いやあ、でも広瀬さんの走塁コーチはお見事でしたよ。こっちの期待以上でしたわ。盗塁を激増させて、大野が盗塁王、佐々木が二位、湯上谷まで３０盗塁して3位と我がダイエーホークスの３人が上位を独占。金銀銅揃い踏みと騒がれたものですよ」

ただ単純な田淵だけで、褒められると弱い。盗塁激増は、ダイエー時代の数少ない実績だけで、自然と口が滑らかになる。

ただ広瀬も、鶴岡野球の象徴的存在。意味もなく、田淵をおだてりゃ木に登るをしたわけではない。広瀬の狙いは、捕手田淵に甘いコースを要求させるためだ。

ただでさえ、厳しい内角攻めを打者がかわいそうと控える田淵だけに、おだて誉めそやされれば、捕手田淵の攻めは、極めて甘くなるのが、当然のこと。

「おだててもボールは甘くなりやしませんよ～」

そういつつ田淵の大きな体は、外角に体をよそて良く。前を見ていても、田淵の巨体の動きは、広瀬の視界にいやでも入ってくる。

「ニヤリ」

広瀬はニヒルに笑い、阪神内野陣は、ショートの吉田以外、守備の名手が存在しないことを今さらながら確認すると、広瀬は、一二塁間を狙い打ちにいく。

熱い村山の熱気は、２球目でも冷めることはない。むしろより熱く暑苦しく、田淵の構えたミットめがけて、ねばっこいボールを投

げていく。
好球必打の広瀬は、外角狙い通りのボールを叩きにいく。しかし田淵も意外と策士？　それとも村山が勝手に球種を選択したか、ボールは、ストレートの軌道から落ちていく、村山・必殺のフォークボールだ。
だが、広瀬は、うまくバットを操作して、フォークを拾う。打球は、これまた狙いどおり一二塁間を転がっていく。
「一塁バース、二塁岡田。阪神タイガースの弱点はここや！」
あっけなく抜かれる一塁バース。やはり巨体のバースの動きはよろしくない。そして二塁の岡田。これも打撃の人であるが。
「オレ打つだけやないでもう……」
自称野球頭脳の高い岡田は、田淵の構えとサインから、見事な打球予測をしていたのだ。村山の三塁手コンバートも、たった一年で払いのけ、あくまでも二塁手にこだわりを見せた岡田だけに、一二塁間を弱点とは、意地でも呼ばせたくないのである。
「お、広瀬はん。こんな足速かったんか、もう」
だが、岡田にも誤算があった。広瀬の足が想像以上に速かったのだ。

仁丹

二塁の岡田は、打てる二塁手、守備はそれなりとおもわれがちだが、本人の強い自負とこだわりの通り、意外と軽快なフットワークで打球を捌きにいく。

「ほらみてみい、これが二塁にこだわるオレの守備力や。誰や、ヨッさん（吉田）以外の内野に弱点ありいうてたやつは。この足さばき、見てみいや、ほれ」

しかし、打者走者の広瀬は、能書きを述べて間に合う足ではない。右打者とは思えない、一塁到達速度で、ベースを駆け抜けようとするのではないか。

「アカン、もたもたしてるヒマやないわ」

疾風のように駆けてくる広瀬の風を感じた岡田は、ゆっくりと着実に送球するのを諦めて、クイックスローで一塁ベースカバーの投手村山に投げ渡す。

「これが、ゴールデングラブ賞一度の守備力や」

※岡田が、ゴールデングラブ賞の栄冠に輝いたのは、もちろん例の１９８５年のこと。よほどまずい守備力でなければ、優勝ご祝儀で記者投票が優位に進むのは、２００３年の今岡のゴールデングラブ賞受賞でも実証済み。

「ほれアウトや、どうやほれ」

セルフジャッチでアウト判定をくだす岡田であるが、駆け抜けた広瀬の足か、それとも。ベースカバーに入った村山の足のどちらか早くベースに触れたかは微妙。

広瀬への初球の判定で、早くも、村山の猛烈抗議が炸裂したに続き、この判定も村山不利の判定に転んだら、どれだけ無駄な時間な浪費することだろうと、一塁塁審の田中が気にしたワケでもなかろうが、村山のベースカバーが一歩、早いと判断した田中は、アウトの判定をくだす。

「ほれみてみい、なにが、岡田の守備は弱点や。バースは見た通り、打つだけの置き物やが、オレはちゃうで。高い野球頭脳を持ち合わせた総合力の図抜けた二塁手や。ゲヘヘヘ」

８５年、阪神唯一の日本一戦士として、スタメン起用される岡田であるが、長い阪神タイガースの歴史、何も岡田だけが、スタメン起用に値する二塁手ではないのだ。

戦後すぐに組まれた旧ダイナマイト打線の司令塔だった本堂。

吉田、三宅とタイガース史上最高の内野陣を形成した鎌田。

低迷期に渋いヒットを連発した和田。

そして、２００３年の首位打者、今岡。

「気い抜いたらアカン。打つだけで満足して、守る方を疎かにしとったら、藤本総監督の狸じいさまは、目ざとく、他の二塁手に入れ替えてくるからな。ライバルをあてがって、レギュラーの尻に火つけさすんのは、オレが監督でもようやる手法よ。濱中に林威助や葛城を当てたり、ラロッカにバルディリスやバイナムをあてがって戦法が、よう成功したわ」

岡田の策略が、本当に成功したかどうかの検証は、また別の機会にして、岡田が、ベンチやネット裏から注ぐ、二塁のレギュラーを奪いとる野心に燃えたぎった熱い視線を感じているのは事実。

鎌田実が、アウトになってもそれでよしとせずに、岡田の守備の問題点を鋭い舌鋒で辛口解説すれば、和田豊は、長打のない小柄な内野手を逆手にとって、いかに岡田が持ち合わせない個性を発揮するかを常に考えている。

一方の今岡誠は、相変わらず無。守備にまったく興味もなく、かといって岡田からレギュラーを奪い取るなど、しち面倒臭いことを考えたくない今岡は、定まらない視点で、ただ試合を眺めている。

「鎌田さん、和田、そして闘志のひとつも感じんが今岡。あの三人は、いつオレからレギュラー奪ってもおかしくない三人や……。おっとベンチには、まだ二塁手おったな。オレの前のレギュラー二塁手が」

もうひとりのライバル二塁手とは、中村勝広である。選手登録はされず、内野守備コーチ兼一塁ベースコーチとして、ベンチ入りする中村は、監督時代と同じく、相変わらず生気のない表情でゲームを見つめている。

「あのおっさんは、オレの敵やないで。グフフ……」

早稲田の先輩である中村勝広を、後輩である岡田が、これほど軽んじるのはなぜだろうか。たしかに中村は三割打った経験もなければ、最多本塁打も１０本少々、かといってゴールデングラブ賞の受賞歴もなければ、盗塁も二桁がやっとのこれといって特徴のない選手。それでも、選球眼はたしかで９０個以上の四球を選んだ年もあるし、土の甲子園を本拠地にして、年間１０個そこらの失策数は、守備の堅さを如実に表している。

８５年以外にこれといった成績を残してない岡田が、中村を眼中にないと言い切る自信はどこから来ているのだろうか。

「あのおっさん、オレの代打に亀山なんぞを出しやがった。ベテラン選手のプライドは大事にせなアカン。もし金本に代打桜井広大とか采配ふるったら、金本の気持ちはそこでプッツンするで。早稲田の先輩後輩がなんや。選手のプライド考えん人にポジション譲れるか」

岡田と中村の確執は意外と根深い。岡田のオリックス監督就任の条件として、中村勝広ＧＭの解任があったと噂されるほどだ。

岡田の要望が通ったか定かではないが、中村勝広ＧＭは、成績不振の責任を取らされ、昨年限りでＧＭ職を解かれている。

「ホークスの二番は誰や？　なんや井口か。オレと同じ大学出の打てる二塁手やな。しかも男前やで……グフフ」

岡田が、エキゾチックフェイスの井口になぜか興奮を覚えると、すでに、球場中の視線は井口に集まっていた。

福岡ドームのスターである井口であるが、身勝手な退団劇、その後の日本復帰でロッテを選択したことで、もはや福岡のホークスファンにとって井口は完全に敵。

あたたかい声援にブーイング・ヤジが混ぜこちゃになる異様な雰囲気の中、井口は、ルーティン通り、バットを前方に何度も突き出す。

いーぐーち♪

「意識？　別にしませんよ。だって、ロッテの一員として、もう何度もここに（福岡ドーム）訪れてるでしょ？」

井口に心からの声援を送れない福岡のホークスファンの微妙な気持ちをよそに、井口は涼しい顔をしている。

今に限らない。井口という男は、どうしていつも平然としているのだろうか。東京出身で中日ファンの家庭に育った井口が、平然に東京出身なら誰もが憧れる巨人を振るいにかけて、子どもの頃からのファンである中日の誘いを平然に断わって、福岡のダイエーを逆指名した時も、井口は平然としていた。

あれだけ入団時に騒がして、自ら選んだホークスに平然と三行半をつきつけて、自由契約選手として、ホワイトソックスに入団したときも井口は、平然としていた。入団時に裏約束があったと憶測が渦巻いてもだ。

入団時の約束といえば、井口は五輪のプロ参加を見込んで、五輪が開催される際は、自ら望めば出場できるなる条項を交わした井口だが、いざ全面的に五輪プロ参加が認められても、井口は故障を理由に平然と辞退したものだ。

ＷＢＣの時もそうだ。井口は、日本一の二塁手の立場から、参加熱望を口にしつつも、同期生松井の辞退が決まると、平然と松井に続いている。

そして、メジャーで平然と世界一になった井口は、平然と日本に戻ってきた。井口と違って地元出身で生え抜きで若い本多雄一が、井口の後の二塁手にすっぽりと収まっていたから、城島のように復帰待望論がマイ起こらず、平然と監督手形を切ったとされるロッテに入団した。

そして、今、井口は平然と近い将来の井口内閣に備えて、着々と足場を固めている。井口を招き入れた元ダイエーの瀬戸山代表、石

川球団社長がそうであるし。井口を荒っぽい・２５０の打者から３割を超えるしぶとい打者に塗り替えた金森打撃コーチの招聘に、井口の青山学院時代のひとつ上の先輩である川越英隆や井口と東都リーグでしのぎを削った今岡誠の獲得もそうだ。

彼らを帯刀に井口は、まるで生涯ロッテの生え抜きのような顔をして、平然と監督の座に付くのだろうか。

「おい井口。東京出身の身で福岡は大変だろ？　オレも東京が恋しくなってさ、ぜひ契約延長をと追いすがるダイエーフロントを振りきって、退団したようなもんさ。（※実際のダイエー田渕監督は、三年契約がつつがなく満了すると、もう結構とばかりに慰留一つなく円満に退団している）」

「まあ田渕さん、やっぱり東京の暮らしのがいいですけど、福岡の街も捨てたもんじゃないですよ」

「まあそうだけど、若田部、オレがドラフト一位で指名して、新人二桁勝利投手に育て上げた若田部も、烏龍茶ぐいと一気飲みして落ち着いてから、会見に応じただろ？　いくら当時のダイエーの羽振りがいいって、いたって、若田部みたいな生まれも育ちも関東のやつは、福岡行くのに多少の違和感があるもんよ。だから、嫌な顔見せれまいと、お茶飲んで一息ついたんだ。それで、若田部もＦＡ修得したら、横浜に戻ったろ？　武田もそうだ。あいつは福岡の街が大好きで、明治の先輩星野の仙ちゃんに半ば脅されてＦＡ宣言したんだけど、あいつも東京だ。やっぱ関東出身は、福岡を永住の地に選ばんもんよ。多村だって分からんよ。あいつは単身赴任だ。ＦＡ取ったら、在京球団にとんぼ返りしても何にもおかしくない。まああいつの場合は、怪我なくＦＡの日数を満たすのが大変だけどな」

さすが田渕だ。ムダのおしゃべり解説に定評があるだけにダラダラと井口相手にしゃべりまくる。野村のボヤキ戦術のように、会話の中から、相手の狙いを探ったり、動揺を誘う高等戦略含みなのであるが、田渕は違う。ただの井戸端会議なのである。

「で、井口、お前、何年の自分に戻ったのよ？」

「２００３年ですね。１００打点カルテットで日本一になった年ですよ。ちょうど年齢的に油が乗った時期ですし、金森当時スコアラーから打撃姿勢の全面的改善をされた年でもありますよ」

「なんだ、３割打った年かいな。オレが阪神の打撃コーチとして、浜ちゃんにうねり打法を伝授して、阪神を呆れるほどつながる打線にした年だろ？　日本シリーズの時、お前さんの対策繰り返しやったから、よう覚えてる……もう忘れたけどな……はは」

田渕のもう一つの特徴である自慢話が、ここでも炸裂する。

「０２年くらいの井口だと良かったのに。内角に明らかに弱点ある欠陥だらけのフォームは、キャッチャーとして、いかにもやりやすい相手だったのになあ。でも、井口、お前、まだ内角苦手なんだろ？　どんどん突いていくから、覚悟せいよ」

といいつつ田渕は、巨体を内角によせていかない。なにも、駆け引きで内角攻めを予告したわけでもない。ただ人のいい田渕は内角攻めを好まないのだ。

「だって、痛いでしょ、悪いでしょ、当てたら。それに、仕返しに、オレに死球飛んできたら、たまったもんじゃないよ。デッドボールって痛いんだよ……って思い出させないでよ。現役の時、１００何個も食らった、一つ一つの傷が疼きだしちゃうよ」

井口の外回りするドアースイングが、いかにも外角が得意で、内角が窮屈。打者に悪いと弱点つけない田渕のリードは、井口にもってこいのはずであるが、村山の優れた制球と、伝家の宝刀フォークボールの切れ味は、井口にたやすく攻撃させない。

三段フォークとも称された村山のフォークボールの意味するところは、オーバーハンド、スリークウォーター、サイドハンドからフォークを自由自在に投げ分けれることだ。

田渕のリードが偏っても、村山の感性は、単細胞の配球を芸術的にする。

マネーボールに書かれたとおり、選球眼の改善は困難極めるもの。マネーボールが全ての真実とすれば、若い頃、出塁率が３割を超え

るのがやっとの井口は、生涯、驚異的な出塁率を残すはずがないのであるが、ロッテ井口は、日本有数の選球眼を持って、四球を選びまくっている。

その井口でさえ、ストライクかボールか分からないくらいに微妙なコースに制球不可能ともいわれるフォークボールを投げ分ける村山のなんと高密なことか。

「あれがストライクか……ボールと思ったけどな～」

井口は首を振りながら、一塁側のベンチに帰っていく。

「ふふふふ、私の配球、ズバリ、ズバリ」

そして、バッテリー対打者のはずが、実質蚊帳の外だった田渕が、なぜか勝ち誇る。

「井口を切ったと思ったら、このおとっちゃんの登場ですか？　一個したにおとっちゃんいうのもなんだが、まさにおっさんだもんな、この男は」

福岡ドームの打席に立つはずがなかったあの男が、ついに銀色のドームの屋根の元、福岡のファンの声援を浴びる。

「３番指名打者門田　背番号６０」

オリックス時代に巻き起こった帰れコールはもうない。福岡ドームに巻き上がるのは、門田にホームランを期待する声援だけだ。

ウィリーメイズ～バリー・ボンズ～新庄剛志の点と線

「金本さんは、もっとセンター寄りに守ってくださいよ。門田さんは、典型的なプルヒッターっすからね～。レフト線にポテンを気にするより、左中間抜かれん位置取りが大切ですから。え、左中間？　オレの超人的守備範囲の広さなら捕れるやん。ぜーんぶ、僕がさばいちゃおうかな～。あまりにも、僕ばかり目立と、阪神の場合、周囲がうるさいんで、そういう個人プレー自粛しておきますわ、テヘヘ」

先輩金本にも臆せず守備位置の指示を出すのは、センターを守る新庄だ。この男、考える野球が大の苦手に見えて、守備に関して。細かい野球を実践できる、経験と能力が備わっているのだ。

金本だけにとどまらない。もちろんライトを守る同じく福岡県人で尊敬してやまない真弓にも声を掛ける。

「あ、真弓さん、もっとライト間際詰めてくださいよ。門田さんのフルスイングで当たりそこでポテンが考えられますからね。投手っていうのは、打ちとって前に落ちる打球がヒットになるのが、いちばんこたえるんですからね」

真弓は、グラブを突き出しＯＫのサインを新庄に送る。

「てへっへ。真弓さんに指示出しちゃった。僕が一軍に出始めた頃、真弓さんは、もう代打の切り札でめったに守る機会もなかったから、真弓さんに指示を出せるなんて、身に余る光栄だわ。まじで」

嬉しくて仕方がない新庄は、思わず笑みが自然にこぼれてくる。試合中にエヘラエヘラと笑顔を浮かべれる雰囲気は、阪神においては存在しない。

日本ハムでは自由にできたことが、こと阪神においては、マスコミやＯＢの古臭い体質やファンの厳しい目線に監視されて、自由が効かないのだ。

この開幕試合に向けて、いろいろと仕掛けを考えてきた新庄であ

るが、広報の検閲にあい、渋々と断念した経緯もある。
新庄のロッカーには、使えなくなった変装道具の数々が寂しげに眠っているのであるが、今の新庄が最大のパフォーマンスを披露するには、余計な道具はいらない。
ただ磨きぬかれた体とグラブさえあればいいのだ。
「で、オレはここっと」
新庄は、ありえないほど前に守ってる。長距離打者門田用の守備位置とは到底思えないほど前だ。
「だから、前に落ちた打球がヒットになるのが1番投手にとってこたえるっていってるでしょ？　え？　門田さんが長いの打ったらどうするって？　そん時こそ、オレの守備の見せ場よ。ウィリーメイズのザ・キャッチみたいに、後退、後退、また後退でキャッチすればいいんしょ？　え？　ウィリーメイズって誰だって？　オレのサンフランシスコジャイアンツの大先輩よ。オレとおんなじセンターのポジション、守った人よ。あ、サンフランシスコでのオレのベストフレンドのバリー・ボンズの名付け親でもあるんよ」
新庄の大胆な守備位置にセカンドの岡田も仰天する。
「あのアホンダラ。どこ守ってねん。オレがちょっと下がったら、ぶつかりそうなくらいに前に守って。まああいつは守備だけは信用なる。口出しせんとおこか」
セカンド岡田も気づいた新庄の守備位置をなぜか扇の要で守備位置全体を見渡せる田渕がまるで気づかないのである。
それもそのはず、田渕は相変わらず、おしゃべりに余年がないのだから。
「カド、オリックス時代に平和台訪れた時は、球場一帯から帰れコール巻き起こって、大変だったけど、今、ずいぶんと静かだな。歓声もないのも寂しいけどな」
「そりゃしょうがないですよ、田渕さん。私は、あくまでも大阪ホークスの門田ですから。最後の二年だけ福岡ダイエーでやらせてもらいましたが、あんまり成績残せませんでしたしね。なにか、ホー

ムとはいえ、ビジターみたいな感じですわ。福岡いうのは」
「そうよ、そうよ。お前は最後の二年だけ福岡に来てくれたのよ。もう当時中内さんに是非にと請われて監督やってたオレは、救世主がきた、これで４番は決まりと、手放しで喜んだもんよ。なにせ、一年目は、みっともないくらいの大敗。しかも４番がいなくて、二軍から実績のまるでない吉永幸一郎を無理やり上げて、使ってたくらいだから」
「すいませんねえ、重ね重ね、打てなくて。迷惑かけた福岡のファンと迷監督の田渕さんを男にしたろと頑張ったんですが、もう体がついていかなかったんですわ」
「謝ることはないよ。もう過去のことだ。オレは過去にはこだわらん主義でな」
　解説では、さんざん成功体験を語るポジティブシンキングの田渕さんは、みっもとない過去には、振り返らない模様です。
「それで、カド、打たんでくれるか？　オレが監督やってたときも打たなかったから、今、打つこともないだろ」
「アハハハ、打たせてもらいますよ。せっかく、体も全盛期に戻してもらえましたから……あ！　１９８８年に二冠王取った時の体やった。全然、五体満足ではないですわ。アキレス腱がみしみし痛むし、よう走れませんわ。アハハ」
「そうか、８８年か、南海最後の年やな。４０超えてたよな。そりゃよう走れんわな。たとえアキレス腱がピンピンしてても４０歳は走れん」
　３０を前にまったく走れなくなった田渕だけに、含蓄のある言葉だ。
「で、カド。お前に細かい配球なんていらんだろ？　どうせ何も考えんと、バット振るだけだろ？」
「考えてますよ」
「うそこけ。オレが、パリーグに来て、何が驚いたって、客の少なさと、バッターがなんも考えんとぶんぶん振ってくることだよ。そ

の典型が、カド、お前やろうが」
「考えてますよ。ホームランを打つことだけをね」
「やっぱ、これだ。だからセリーグ育ちのオレは、パリーグの野球がいつまでも分からんのだよ。考えないやつが1番怖いわ」
たいして何も考えてなさそうな田渕が、ホームランを打つだけしか頭にない門田をどう攻めるのか。
門田の後ろ、ネクストサークルには、あの男が待ち構えてる。
「門田と田渕の野球なんて、投げしました、打ちましたの図体のでかいだけの幼稚園児でもできる野球や。あんな野球みとったら目が腐ってくるわ。ああ～はよ、打席に立ちたいわ」

ザ・キャッチと物干し竿とイガグリ頭

「で、カド。お前の苦手なコースとか球種ってなんだっけ？　ほら、オレ、中内さんに請われて、堤さんにせっかく出されたライオンズの監督手形を断わってホークスの監督やったろ？　そんときオリックスにいたお前の対策をしたようで、もう忘れちゃったのよ。ほれ、もう２０年も前だろ？　で、得意なコースどこよ」

「そんなんいえません。いうなればホームラン、今打ちますから、そこが得意なコースで球種としておきましょうか」

「ちぇ、つれないやつよのお。福岡転勤族仲間なのに」

村山は田渕をあてにしない。独自に集めたデータと感性で門田を攻め立てる。

門田は門田だ。村山対策などまるでしていない。なぜなら打てると思ったボールを全力で振るだけだからだ。

門田は腹が捩れるほど猛烈なスイングを初球から繰り出す。しかし、村山の投じたカーブを捉えきれず、バットは空を切る。あまりにも猛烈で強烈なスイングは、無関心だった博多のホークスファンの心を呼び覚ますのは十分だった。

門田、門田のコールが、球場のあちこちで芽生えようとしている。

「なんや門田のアホが。あれだけ振りすぎはよくない。コンパクトに振れば、勝手に飛んでくとオレが口が酸っぱくなるほどゆうたのにまだあんなスイングするのか。さすが、江本、江夏、門田の南海三悪人や」

野村もあきれるほどのスイングを繰り出す門田であるが、フルスイングは、初球だけの村山に対する脅しではない。

駆け引きゼロ、目指すはライトスタンドのみの門田は、２球目のフォークにもフルスイングだ。アッパー気味の門田のスイングは、上から投じた村山の三段フォークの一段目、縦に切れてくフォークの落ち際をきれいに拾う。

打球は、門田の全身の力の全てを乗せて、高々と福岡ドームの開かれることのない屋根に向かって舞い上がる。

「アカン、ほれみたことか、新庄。だから変な守備位置取るないうたろ。頭抜かれるで」

セカンド岡田が冷静に打球の行く末を思いやる。たしかに、高々と舞い上がった打球は、新庄の超前進守備をあざけり笑うように、センター・バックスクリーン目がけて飛んでいく。打球を見ないいわゆる目切りのできた後景姿勢で、ひたすらに人工芝を蹴り上げてバックする新庄は、まるで背中に目がついたかのように、打球の落下地点を感知する。

「このあたりだ！」

半身の姿勢から、くるりと振り返った新庄のグラブに、門田の打球はすっぽりと収まろうとしている。

守備の逆をついた打球をも抜かせない新庄のスーパーウルトラダイナミック守備に阪神タイガースは救われたのである。

だがしかし、新庄のパフォーマンスは、捕球するまで終わらない。賛否両論のあった、捕球する際に、ぴょこんとうさぎ跳びする、例のキャッチをこの場でも披露したのだ。

新庄いわく、捕球するさいに上体を浮かせることにより、ショックの軽減をはかる目的があるらしいのだが、当然、捕球ミス確率も高まるのだ。

実際、巨人戦で、このジャンプをしたところおでこに当てて、当時の巨人の清原の大爆笑を誘ったシーンは、有名すぎる。

「よっと」

それでもうさぎ跳びキャッチに心酔する新庄は、落とすわけにはいかない。

「この大歓声、地味な守備まで見世物にかえるオレは、やっぱスーパースターだわ」

セカンドベース目の前から、センターバックスクリーン手前まで約５０ｍを移動した新庄の自作自演のウルトラキャッチにより、ホ

ークスの攻撃は三人で終了する。
「なにゃ、門田が出塁する思うて、レガースつけずに、ネクストサークルで待っとたら、あのバカ簡単に打ち上げよって、そして、捕ったのも門田以上のバカや。まあこっちは、門田と違いかわいいバカやけどな。グフフフ」
面倒くさそうにキャッチャーミットを付ける野村の横に疾風のごとく飛び出したのは、川崎宗則だ。
「よっし～。さあ～新庄さんに負けじと元気に守るぞ～」
「なんや、あの元気小僧は。ほんと、バカばっかりやな両軍とも……。そしてタイガースの４番は、バカになれるお人や……物干し竿か、懐かしい響きやで……グへへ」
「うへ、長いバット……」
三塁守備につこうとする小久保が思わず漏らす。次の回の打席の回る藤村富美男が、見たこともないような長いバットをかついでネクストから打席に向かおうとしているからだ。
「物干し竿バットに驚いて、自分も試したくなって、振ってみるが当たらない。なんやこれオレが漫画のあぶさんでようやられたパターンやないかい」
なぜか水島新司先生にイガグリ頭に書かれる小久保のつぶやきを持って二回に入る。

ザ・キャッチと物干し竿とイガグリ頭（後書き）

おおきく振りかぶってってしゃべりすぎだろ
いくらなんでもこんなにしゃべる暇ないよ

多村仁志　神奈川県厚木市出身

「４番指名打者藤村富美男。背番号１０。広島県呉市出身」

福岡ドームのアナウンスは、打順、ポジション、選手の名前、背番号だけでなく、出身県、出身の市町村までいうのが通例になっている。まるで相撲の土俵入りのようであるが、地元密着の先駆けの球団として、出身にこだわるのは、当然の事といえよう。

大阪タイガースの象徴的存在だった藤村富美男が、広島県出身であることは、若いファンや選手には、やや意外な事実であったようで、特に過剰なほどの反応を示すのは、ホークスのブルペンだった。

「うっそ～　初代ミスタータイガースの藤村富美男さんって広島出身だったの～」

中でも、ひときわ大きな声を上げたのは、阪神とソフトバンクの間で揺れ動くブルペン捕手城島だった。

「なんすか、ジョーさん。今や阪神の一員やのに、永久欠番なるような偉大な選手の基本的な情報知らずして」

鋭いツッコミを入れるのは、城島の傍らで佇む斉藤和巳だ。

「いやあ～さすがに出身県まではインプットしてなかったんだ。背番号とか、一応の成績は頭に入れたけど。だって、オレもうすぐミスタータイガースいわれる身やろ？　初代ミスタータイガースが藤村富美男さん、二代目が今投げてる村山実さん、三代目が、田淵幸一さん、で４代目に掛布さんが襲名して以降、いないようだ。２０年以上ばかし空白だったミスタータイガースに相応しい人材がフロムシアトルから舞い降りたわけで」

「江夏さんとか、吉田さんはミスタータイガースやないんですか？」

「いい質問や。江夏さんも、吉田さんも、ミスタータイガースとは呼ばれてないみたいなんだよ。同時代に村山実さんがいたのが不運だったようや。ようするにや、小久保さんや松中さん、井口さんがいくら活躍しても、オレという華のある選手がいるおかげで、くす

んだようなもんやな」
「なるほど。オレの活躍で、杉内や、和田や、新垣や、馬原の活躍が目立たないようになったようなもんですね」
「そうそう、スターは並び立たんのよ。スターは、いつの時代も一人いればいいんや。あとは脇役よ、華を引き立てる」
「わははは」
城島と斉藤和巳が、傷心の心を過去の栄光を思い蘇らせることで、癒しているうちに、ホークスナインの視線は、藤村のバットだけに集まっていた。
「どした、みんな、モニター凝視して。なんやねん、あのバット、長すぎるわ」
「和巳さん、あれがこの有名な物干し竿ですよ」
「そうやったな～スギ（杉内）。よくあぶさんで書かれてるやつやなあ～。あぶさんの物干し竿に興味を持った選手が、振れるかどうか試すが、全然振れんと、やっぱりあぶさんはすごいやって落ちがつくんや。そういや～藤村富美男選手も出てきたな～　あぶさんの最初の方で。藤村富美男さんの影響であぶさんが、物干し竿使い始めるエピソードあったわ」
「よく知ってますね、和巳さん」
「そりゃ、和田、毎日、暇やからなあ～。長編名作マンガ一気読みに挑戦する暇なら、いくらでもあるで～。ドカベンシリーズ全巻に、こち亀、ゴルゴ１３も制覇済みや。今度は、コボちゃんにも挑戦しようと思うてる」
「はあ～……」

「長いバットやね～。藤村のおとっちゃん」
ただでさえ長い物干し竿が、藤村が歌舞伎の大見得を切るように、投手方向に大げさにかざせば、物干し竿バットは、捕手野村には、まるで野村が青春時代をすごした大阪の街の象徴・通天閣のようにみえてくる。

「なんや、ノム。まるで、ワシのバットを物珍しげに語りおって。何度もお前とは対戦しただろが」
「何度も対戦してないですよ。せいぜいオープン戦。それにワシがレギュラーつかんだ頃、もう藤村のおとっちゃんは、監督兼選手だったでしょ？　代打ワシ！　が名文句と残るくらいだから、ほとんど打席にも立ってないでしょ」
「そうあ、なら杉浦と対戦するのも初めてみたいなもんやな～。どや、ノム。杉浦いうのは、打ちやすい投手か？」
「そんな長いバットで、振り回したら、杉浦の思う壺でしょうな、グへへへ」
　杉浦も藤村のバットの長さはお見通しだ。長いバット、どうしても窮屈になるインコースを自慢の浮き上がるストレートで、偉大な先人に構わずついていく。
　漫画あぶさんの景浦安武も物干し竿バットを使いながら、インコース打ちの達人の設定だった。モデルに当たる藤村も、いかにも窮屈なインコースを、うまく肘をたたんで、打ちにいくが杉浦のストレートの切れ味は、藤村の現役時代に対戦したどの好投手にも見られないほどであった。
　長い物干し竿バットが、誰にもない遠心力の波状を持って、空振りする。オールドファン中心に藤村の豪快なスイングに湧き立が、野村は冷静に、物干し竿を切る。
「おとっちゃん。バットを短く持って、コンパクトに振りにいったらどうですか？　短く持っちゃ物干し竿の意味はなくなるとはいえ、これじゃあ、何百打席立っても、杉浦は打てませんぜ」
「アホ、ノム。長く持たな、何が物干し竿や。お客さんに失礼や」
　さすが、歌舞伎や笠置シヅ子のステージを見て、ショーマンシップを学び取った藤村だけのことはある。あくまでも、お客様第一主義だ。だがしかし、物干し竿を振り回しているうちは、杉浦攻略は困難。打線の中軸４番が、意固地になればなるほど打線は分断されていくが、はたして。

必殺仕置人

藤村の物干し竿バットを振り回していたら杉浦の伸び上がるストレートが打てるわけがない。確信めいた近未来が、杉浦の腕の振りをより、優雅に鋭くする。

藤村の腰がくるると回転するが、いかにも捉えるのに、厳しいコースに杉浦は巧みに投げわける。インコースぎりぎりの速球に、藤村の物干し竿バットは衝突したが、いかにもバットの根元。真っ二つに折れるか、捕手野村の前にみっともなく転がるゴロ、それもショーマン藤村が一塁に走るのもためらうくらいの恥晒しの打球結果になるはずが、どうしてこうして、詰まった当たりは、しぶとくセンター前に飛んでいく。

「そんなわけがない」

野村は長すぎるプロ野球経験から、長すぎるバットを長く持って、杉浦のストレートをセンター前に運べるわけがないと感覚的に理解している。

それでも現実は、野村の経験則に基づかない。

ショート川崎、セカンド井口、センター広瀬のトライアングルのちょうど中心にポトリと打球は落ちる。藤村は、重役出勤のごとくゆったりと一塁ベースに到着すると、にんまりと笑顔を見せる。

「これが初代ミスタータイガースの打撃や」

知りもしない松中のヘルメットをむりやり脱がせると、短く刈り上げ、M字の額が広がる松中のおでこを勝手に撫で回す。

「そんなわけがないやないか」

野村は現実を目の前にまだ納得がいかない様子だ。

「後で、納得するまでビデオでもみて検証せないかんわ。ワシの野球教本にない出来事だ」

ところが、藤村の時代に存在しえなかったファンサービスが、野村の謎を試合後に持ち越さない。

「あん？」
バックスクリーンに映される藤村の打撃に全ての答えがあった。
「なんや、そういうわけか。なにがミスタータイガースや、なにがお客様第一や。セコイまねしおって、まあ」
なんと藤村は、杉浦が投げた瞬間にバットを極端に短く持って、それこそ普通のバットの長さの選手がひとあまり余して持つような握りで、今のストレートを迎えうったのだ。
「あんだけ短く持ちゃ、そりゃインコースにも振りまけんわ。普通のせっこい打者ならまだしも、いかにもエースと４番打者の真剣勝負みたいに演出した役者さんがするマネですかね～。あ～役者さんか、藤村のおとっちゃんは、そういや役者もやっとったな～　必殺シリーズや。必殺仕事人だか仕掛け人で仕置人……ああそうや必殺仕置人や。その仕置人の元締めみたいのやってたはずや。家の時代劇チャンネルで最近見たわ……」
野村の言うとおり、藤村富美男は、野球界から退いたあと、役者デビューも果たしていたのだ。時代劇俳優藤村富美男にとって、杉浦ー野村の黄金バッテリーも、所詮は演技の素人。主役俳優を演じそうで、脇役俳優にコロリと転じるくらいお茶の子さいさいなのである。
「ふん。大は小を兼ねるや。長いバットを短く使っちゃいけんと誰がいうたんや」
杉浦討伐を見事果たした藤村は、一塁ベース上で相変わらず、松中の頭を撫でながら、意気揚々だ。

「無死一塁……。これが相手が西武や巨人のなんでもござれの野球が達者なチームなら大ピンチやけど、相手は阪神や。ワシは３年いて浮上のきっかけも与えてくれんかったチームや。伝統的に野球下手のチーム。優勝した時のチームを思い浮かべれば早い。昭和３０年代の藤本監督での優勝は、村山、小山、バッキーの超人的エースの奮闘で勝った優勝や。８５年は、ワシが言うまでもない、打力が

全てや。それで０３年と０５年は、あんなもんただの勢いや、星野が札束で横っ面叩いたからや。しかも、５番は、この男や……。今、一番意気消沈している男、一回裏の守備でも生気のない浮かない顔しとったで……」

ネクストサークルから打席に向かう男の足取りは重い。どの選手も久びさに万全な体で真剣勝負ができると喜び勇んで打席に向かうものであるが、この男だけは、どうにも表情が暗い。それはなぜか？

「５番サード、掛布、背番号３１。千葉県千葉市出身」

それは、この男の正体が掛布だからである。

「は～ふ～は～」

何度もため息をつく掛布。塁上に走者がいることは、スラッガーにして、テーブルにご馳走が乗っているのに等しい。誰が豪勢なディナーの前にため息をつくだろうか。それは掛布の気持ちが試合にないからだ。

「ノムさん……」

「なんや、掛布。金の工面ならワシはせんぞ。お前も知ってのとおりサッチーが、ワシに慈善の金貸しなんて許すわけがないやろ」

「そうですよね……はあ～」

恵まれない体格負けせずに、フルスイングで右に左にセンターにホームランを打ちまくった掛布が、安全牌のわけがないが、私生活で頭がいっぱいの掛布はそれどころではないのだ。

「ふん、こんな状態の掛布を打ちとっても面白くもないわ。まあええか。我がホークスの勝利のために打線の中心に安全牌おったほうが都合がええわ」

生気のない掛布を目の前に、野村は安全牌と切り捨てる。阪神史上２リーグ制以降ただ一人複数回の優勝監督である策士藤本が、明らかな打線の穴を中軸に組み入れるとは思えない。確かな勝算があっての掛布起用のはずであるが。

「！！」

監督藤本のサインを経由した三塁コーチャー安藤統男のブロックサインをみた掛布が、狐につままれたような顔をする。

「なんや、掛布。わかりやすいな、バントでもでたか？」

掛布にバント？　生気のない掛布を見て、藤本監督は掛布に5番の働きを諦めたか？

31匹の無視

「バント？　４代目ミスタータイガースであり、二冠王も獲得して、ＯＮの次に日本を背負う打者と目された僕にバント？　いやいやいや……」

掛布は、安藤のサインに納得ができずに、クセである打席の土ならしをいつもより多めに繰り返してから、再び安藤のブロックサインに目をやる。

「僕にブロックサインが出る自体ありえないんだけど、フリーに打たせるか、あって送りバントの僕に、ましてバントなんて、中村勝広さんや、弘田さん、平田や北村みたいな小粒な打者がやることをどうして僕がしなきゃいけないの？　おかしいよ、おかしい、絶対におかしい」

それでも、何度ブロックサインを受け取っても、安藤のサインはバントを示している。

「ヒットエンドランならまだわかるよ。でもバントはないでしょ、バント」

ぶつぶつと小声で愚痴る掛布の絞ったボリュームでも、野村の地獄耳は聞き逃さない。

「なんや、バントか。そりゃしょうがないわな。私生活で頭のいっぱいのお前が打てるわけがない。まして杉浦や。バントで賢明や。ところで、おまえ、送りバントできるのか？」

「野村さん……」

掛布が野村の顔をじっと見つめる。

「なんや」

「お金貸してください、それがダメなら、仕事紹介してください。ノムさん、今マスコミに顔が利くでしょう？」

「ふん、なんや、送りバントの現実を叩きつけられても、お前の頭は、まだ現実モードか。あほくさ、勝負の世界に戻ってこれん、や

つと話するのもバカらしいわ」

「そうですか……。塁に出れば、他のホークスナインと顔合わせできるな。一塁は、三冠王、６億円プレイヤー松中くん、二塁は元メジャーリーガーで溜め込んでそうな井口くん、三塁は、打点王であり、だ○ぜい王である小久保くんだ。みんな、お金持ってそうだな～。先輩の頼みは断りきれんだろ……」

「ふん、今のお前が塁に出れるかちゅうんや」

藤本の出すサインは、送りバント。監督の権限は絶対だ。ミスタータイガース掛布であろうと逆らうことはできない。もし、サイン無死するならば、マスコミの矢のような叩きは、容易に想像できる。マスコミの厳しさを嫌になるほど味わった掛布は、いまさら、若い頃の苦渋の日々を再現したくないはずだ。

「とりあえずバントと……。野球魂が煮えたぎった現役の自分なら、バットのサインなんて無死してホームランかっとばしたところだけど、今はそれどころじゃない。バントならバントでしょうがないわ……」

生気のない掛布は、サイン造反の気概もなく、おとなしくバントの構えをする。驚いたのは、両コーナーを守る、松中、小久保だ。

「掛布さんがバント？」

「おいおい、マジかよ？」

半信半疑ながら掛布のバントに備える。小久保はじりじりと前に出てくるが、その歩みは、確信めいていない。まさか掛布にバントはないと思いたげである。

杉浦も心得ている。バントの構えをする掛布を完全に信用していない。様子見とボール球で入ってくる。

高目のボール球、バントの職人なら悠々と見逃してくるコースだが、バント素人掛布は、釣られてやりにいく。バントの練習も経験も乏しい掛布が、杉浦のライジングストレートを目の前に、サイン実行できるわけがない。

「おっと……」

ボールはむなしく、ころころと三塁線を切れていく。野村は転がるボールを拾い上げると、ぽいとボールボーイに向かって投げ捨てる。

「おい、掛布。今のわざと失敗したやろ？　そりゃそうや。強打者がバントなんてできるかなあ」

「いや、ノムさん。僕が普通にバントやりに行きましたよ。ただ杉浦さんのボールにクセがあってできなかっただけです」

今の掛布には、野球に対する熱さが決定的に欠如していたのだ。私生活で頭がいっぱいの掛布は、野球感情のない、ただの命令に服従するロボットに成り下がっている。

「あん？　なんや、掛布、いい加減にせいや。そりゃ、今の私生活がおもろうないのは分かるが、神聖なグラウンドにそんなもん持ち込むな」

「でも、野村さん。今、ここで打ったからといって、問題解決するわけじゃない。この試合に何十億のにんじんがぶら下がってたら別ですが」

「か～、それが野球の虫、掛布と３１匹の虫か。あほらし、心配してそんしたわ。はよ、バントやって、ベンチに帰れ、このバカタレが」

「分かりましたよ、野村さん。ぱぱっとバントして帰りますよ……。阪神ベンチで金持ってそうな人探さなきゃ。そうだ、中村勝広さんがいいかな、あの人、千葉の大富豪だし」

野村の叱咤にも掛布の野球魂は目覚めない。安藤のブロックサインを受け取る掛布。それでもバントのサインが出る。

「またバント……。まあしょうがないわ。藤本監督も、僕が魂の抜け殻であることをお見通しなのかな……」

陰鬱な掛布は再び、バントの構えをする。

えいえい～かっけふ　相手のピッチャーごめん

「かっけふ！　かっけふ！　ほーりこめーほーりこめー掛布」

久びさに復活した掛布コールに掛布のテーマが虚しい。バントする掛布を見に、彼らトラキチは球場に足を運んだわけではないからだ。

「あほか～　なんで掛布にバントや～。藤本の狸オヤジ、死にさらせ、ボケが～」

「おい、藤本のじいさまは、とっくのとうに死んでんねんぞ」

「ほんまか？　ああそうやな～　死人も生き返る試合やったな。ならどうヤジれいうんや～　ワシらんい取って、死んでまえ～以上のヤジなんてあらへんぞ。というか、藤本監督って誰やねん。ワシは知らんぞ。ワシの知っとる藤本は、アホみたいに高目のストレートに力負けして力ないポップフライ打ち上げる猿だけや」

「巨人と阪神の両方の監督した史上ただ一人の人やぞ、藤本定義監督は。金食い虫の星野が、二人目になりたがとったが、北京五輪の失態で全てがおじゃんや」

「なんやて。巨人の監督やって？　なんで、巨人の血が通ったじいさまが、神聖なるタイガースの監督してるねん」

「藤本のじいさんは、名監督や。タイガースを二度優勝させる監督が他におると思うか？」

「なぬ、二度も？　そりゃ名監督中の名監督や。藤本のじいさん、巨人の血がどうのゆうて、ごめんな」

「でも、掛布にバントのサインを送るのは、げせんて」

「そうや、問題はそれや。藤本のクソアホやろーが！　なんで、掛布にバントさせるねん。そんなにバントさせたきゃ、代打バンターに秀太とか、引間とか、斉藤秀光でも出しとけが、ボケが」

阪神ファンが納得していなくても、掛布はバントする。杉浦の攻

めどころは、初球と同じ。真ん中高目に投げ込めば、バント素人掛布はバントできるわけがないのだ。

「ぽーん」

掛布は、思わず、後ろに虚しく打ち上がったバント飛球をぽかんと口を開けながら見守る。今の掛布にバント問題は重くのしかからない。バントのサインで壊れたプライドよりも大きな傷が、常に胸を切り刻んでいるのだ。

「もうどうでもいいわ。バントでもなんでもさ、はー。ふー。ベンチに帰って金策や……」

「そんなに、私生活が気になるか」

気のない掛布に呆れてた野村が一転同情モード。諭すような口調で、掛布に情をかける。

「どうにもなりませんからね～　これぱかりわ。お金は天下の回り物とよう言ったもんですよ」

「そうか～ふう～。なんやか、ワシまで落ち込んできたわ～。まあスリーバントはないやろうから、振ってけよ。私生活は打ってもどうにもならんが、野球で負った慎みは、野球で取り返せるからな」

「?!」

「なんや、急にはっとした顔して」

「そうですよ、野村さん。打ってもお金は返せませんが、野球に対する怒りは精算できますよ。そうだ、昭和５０年代、王さんを除いた最大のスター打者の僕にバントなんてありえません。この怒りは私生活のイザコザで覆い隠してる場合じゃないですよ。野球に対する怒りは、野球で返さないと」

「なんや、急に生気を取り戻して。蚊のカッちゃんのＣＭで見せた下手な笑顔の演技みたいな顔してからね」

野村の一言で掛布は劇的に生まれ変わったのだ。もともと、単純な掛布は、単純なきっかけで単純な自分を取り返せるのだ。

藤本監督が出したサインを経由した安藤のブロックサインは、はたまたバント。バントベタな強打者にまさかのスリーバントのサイ

ンだ。

ところが、従順な掛布はもういない。打席に立つ掛布は野球の虫に舞い戻っているのだ。

「オレにバントやと？　それもスリーバント？　あほらし、そんなんできるか、ボケ。なにが藤本定義だ。村山や吉田よりまともな監督と聞いてたが、とんだアホ監督やないか、ボケ、クソ、サインなんて無視して打ちにいくで」

掛布のサイン無視。選手は監督の駒であるならば、立派な造反であるが、サインを出した藤本本人は、なぜか笑みをこぼしている。

「ふん、荒治療や。これで、若虎掛布が戻ったやろ」

なんと藤本定義は、わざと掛布にバントのサインを出していたのだ。バントのサインを出すことによって、生気のない掛布に野球に対する怒りと情熱を呼び出そうとしたのだ。

藤本の狙いは見事的中とまではいかない。野村の一言がなければ、掛布はおめおめとスリーバント失敗でベンチに帰還する可能性があったからだ。それでも、掛布の気持ちを掘り起こすのは十分なものがあった。

「バントなんてするかい」

小さい体をよじらせながら振り切る掛布の独特なスイングは、同じく小さな体で、野球選手の夢を叶えようと奮闘する野球少年たちを魅了したものだ。

掛布の本気の眼を感じ取った杉浦は、バントはないと読みきって、ボール球になるシュートで、大事な攻めを企ててきたが、掛布の羨望のスイングは、杉浦のボールを打ち砕く。

ゴルフスイングのようなアッパーで外角低めをすくった打球は、レフト方向に飛んでいく。左方向に流し打ちのではなく、左方向に引っ張ると評したほうがふさわしい力強い打球は、左翼手山本和範の頭上を超えようとしている。

ドラ改めカズ

ソフトバンクホークスの左翼手は、山本和範だ。ゴールデングラブ受賞歴がありながら、後年、指名打者に落ち着いた経歴をみるだけで、守備力に賛否があるのは伺える。元投手の強肩を武器にして、捕殺を繰り返し、守備要員からレギュラーに登りつめた苦労人であるが、難聴気味の耳は、打球音での判断を困難にする。よって、守備勘に難があるのか、肩を壊した８９年以降は、次第に指名打者要員となるが、今の山本和範はいつの山本和範だろうか？

オールスターＭＶＰをもぎ取り、走攻守の揃った１９８６年の山本和範か？

初の規定打席到達の3割をマークし、門田が消えて、次第に指名打者の道を歩み始めた１９８９年の山本和範か？

それとも、渋くイチローに続いて打率二位をマークした、バントをしない2番打者と注目された出塁率モンスターだった１９９４年の、7月途中に登録名改名申請した山本和範改めカズ山本か？

後年になるほど山本和範の守備力は、ほぼゼロに近づくが、はたして山本和範は、掛布の強烈な打球にいかなる反応をするのか？

「こんな打球取りまちぇんて」

ハナから捕球を諦めた山本和範は、足を止めて、フェンスからの跳ね返りを待つ。積極的守備姿勢のなさが、山本和範の守備の不安を予見させる。

まさか、鶴岡親分は、ＤＨ専任だった１９９４年のカズ山本を左翼手として起用したのか？

いや違う、鶴岡が起用した山本和範は、三拍子揃った１９８６年の山本和範だったのだ。

山本和範が足を止めたのも、無駄に深追いするよりも、どうせフェンス直撃の打球、跳ね返りを待った方が得策と名外野手らしく判断したからだ。

ただ福岡ドームで守った経験のほとんどない山本和範は、打球の跳ね返りをやや誤る。

「なんじぇ、そっちに飛ぶのよ」

多少、想像外の場所にボールは跳ね返ったが、ゴールデングラブ受賞者らしく素早いカバーリングで、ミスを最小限に食い止める。

「ホームにはいかしぇん」

※なお山本和範選手の発音がやや悪いのは、漫画あぶさんを参考にしております。山本和範と遠縁だった水島新司先生だけに、これが正しい山本和範像なことでしょうから。

さすがに、山本和範は強肩でゴールデングラブを受賞しただけはある。正しいスローイングで放たれたボールは、緩やかな放物線の元に、バックサードされる。

一塁走者の藤村富美男の一挙ホームの野望を打ち砕く送球は、カットマンなしにダイレクトで三塁手小久保に帰る。

打者走者の掛布は二塁に。私生活のもやもやが、このツーベースで吹き飛んだか、掛布は晴れ晴れしい顔を塁上で浮かべる。

「おいムネリン、お金貸してくれんか」

ただ金策に対する執念は、心が晴れても消し飛ばないご様子で。

そして、無死二三塁の大チャンスに阪神が迎える打者は、これ以上ない打者だ。

「ここでお前か。まったくやっとられんわ。阪神の中でたった一人考えた打撃のできるお前が、、ここで回ってくるんやから。さすが、名将藤本定義監督や。伊達にプロ野球創世記から監督しとらんわ、正しい打順を組んでくるわ」

「光栄ですわ、野村さんにそんな評価されて」

ファイティン製の妙な首輪をぶら下げて、登場するのは、鉄人金本知憲だ。だが、いくら金本がドラフト会議の抽選の結果、広島と競いあって阪神が手に入れたかといって、阪神の歴史上の最強オーダーに金本のいる違和感は拭いきれない。

「なんか、変な気分ですわ。やっぱり、僕は広島東洋カープの金本

なんですかね？　山本浩二さんや、衣笠さんや、江藤、緒方、新井と混じって、広島ベンチに座っておったほうが楽でしたわ」

「そんなことないわ。もう広島時代の金本の方が違和感あるわ。たまに過去のＶＴＲで赤いユニフォーム着たお前見ると、何や知らんが、もぞもぞっとするわ」

「そうですか。まあ阪神にも、もう8年もお世話になってますからねえ。広島は１１年ですか」

「ふん、ワシが監督やっとたときに、お前が来てくれればのう。まあ、ワシが監督じゃ、ようオーナーは金庫の鍵を貸してくれん。星野やったから取れたんやろうけど」

「時の運ですわ。ちょっと時間軸がずれてたら、野村阪神の金本が登場しとったかもしれませんよ」

「お前が3番打ってくれれば、どれだけ助かることか。ワシが3年間阪神の監督やっと時の三番は、アホでバカでどうしようもなかったころの新庄に、誰が誰だかようわからんが、タラスコ、ハートキー、ペレスといったダメ外人に、これまたワシと気が合わんてブンむくれた今岡や二軍の万年期待の若手やった濱中をむりやり打たせたり、そりゃひどいもんやったで、三割打てるのおらんわ、ホームランはええとこ、１０本少々の弱打者ばかりや。お前がおったら、せめて最下位脱出の念願はかなったのにな」

「高いご評価、ありがとうございます。それはそうと、無死二三塁か。ヒーローなる大チャンスや。一発狙って振り回していくかな～」

「ふん、あんたがそんな打撃するかい。そんな野球脳ゼロのスラッガーみたいな打撃を。阪神にお前が吹き込んだのは、勝つ野球や。状況に応じた打撃ができるのが、あんたの最大の強み。勝つ野球実践できるいうても、お前が在籍した広島１１年で優勝ゼロやけどな、ぐふふふふ……」

広島のアニキ

やはり、金本が阪神の歴史上最強オーダーに名を連ねるのは、期待感よりも、違和感の方が大きいように阪神ファンでさえとられているようだ。

それもそのはず、広島で生を受けて育ち、広島カープに影響されて野球に励み、同じ広島出身の山本浩二が監督の時に、ドラフト指名されて、同じ広島出身の山本一義打撃コーチによって打撃指導されて、同じ広島出身の三村が監督の時に見出されて、同じ広島出身の達川の時に、３割３０本３０盗塁のトリプルスリーを記録した金本にとって、広島は切っても切り離せないキーワード。

星野阪神に請われて、半ば強引に移籍した金本は、今やすっかり阪神の顔として、縦縞のユニフォームのイメージしか思い浮かばないほどであるが、８年たった今でも、金本から広島カラーが消え去ったとはいいきれない。

それだけに、阪神がレフトの定位置を空けて、広島とガチンコのドラフトくじ引き勝負を挑んだことは、阪神ファンの間にも賛否両論があったのだ。

田宮謙次郎や赤星や金田正泰など、金本に負けず劣らずの外野手がいるのだから、そこまでして金本取りに目くじら立てる必要はないのではないかと、あくまでも金本を助っ人扱いする冷静な意見が圧倒的であったが、球団は、勝負に出て、金本の所属権利を広島から奪い取ることに成功したのだ。

「広島ＯＢであり、阪神に現役でお世話になってる身からしたら、どっちの球団から参加しても違和感はないですよ」

それがドラフト抽選後の金本の記者会見の一声だった。公的な意思表明と違い、金本の居心地が悪そうなのは気のせいだろうか。

藤村、村山ら関わりのない大物ＯＢに挟まれて萎縮しているようにも見える金本は、自分と違い広島に帰った弟分新井を、マスコミ

越しでからかうことでしかストレスのはけ口がないのだ。
「金本さん、袂を分かれた広島の新井選手になにか一言」
「新井くん、新井くん。そっちの居心地はどうかな？　大下コーチにこってりと絞られてると思うけど、ヘボでヘタクソな君は練習しないとしゃーないから、スパルタ受けても、気を落とさずに練習に励んでちょうだいね」
　新井に軽口を叩く金本も、阪神のムードについての質問には、一転、口を濁らすのだ。
「ナインとはうまくやってるかって？　そりゃ東北福祉からの腐れ縁の矢野がおるからね～。え？　ＯＢ世代とのコミュニケーションは進んでいるかって？　そういうのはこれからですよ、これから、プロ野球選手ってのは、アマと違って勝ってまとまるんですわ。試合を進めてくうちに次第に馴染んでいきますよ」
　とまるで居心地の悪さを白状するかのような、ぎこちない受け答えに終始しているのだ。
　そんな金本でも、打席に立てば、阪神勝利に全力を尽くす。なぜなら、金本は、高い野球頭脳を備えた努力の野球エリートだからだ。
「一発狙いましょうかね」
　口では、粗雑な長距離打者を演じつつ、腹の中では、
「相手は大投手、杉浦さんや。球場は呆れるほど広く、バカバカしくなるほどフェンスの高い福岡ドーム。一発狙いの戯言が実現できる状況やない。タイガースの投手は、これも大投手、防御率０点台も記録したことある村山さんや。一点取れれば勝てるかもしれん投手や。無死二三塁。前に打てば、ほっといても一点は入る場面や。一点や、一点とりゃ勝てるかもしれんなら、オレがすべき打撃は、最低限でええんや。高望みせずに、基本に忠実に最低限の仕事を実行すればええんや。無死二三塁で最低限いうと、犠牲フライやな。犠牲フライで気軽に打てば打球が勝手に伸びて、長打が出る可能性も高まる。かといって、簡単に犠牲フライ打たせてくれる投手でも捕手でもない。フライをあげさせんと低めをついてくるはずや。な

らその低めをどうやってフライにするかだ。オレのアッパー気味のスイングだと、外角低めのボールは、バットの上面と衝突しやすい。低めに丹念につくのが逆に狙い目になるわけだ」

金本はぶつぶつと頭の中を整理するようにこの打席の狙いを暗唱する。

「ヤクルトや阪神の監督しとった頃、お前と対戦するんが一番楽しみやったで。考えて工夫する選手こそが、野球界のレベルを高めていくんや」

野村の金本に対する高評価は相変わらず。だが、勝負に、個人的感情は挟まない。野村は金本斬りに全力を尽くす。

「スギ、最初はここや……って、ワシに配球の権限なかったんや。あ～あ、バカらしいわ」

金本と杉浦の勝負に野村の入る余地はない。金本の状況判断に優れた打撃が勝つか、杉浦のピンチでの身の程し方が優れているかの勝負だ。

「最低限、最低限。犠牲フライでもええから、スコアボートに先取点を書き加えるのがオレの仕事。一仕事でもすれば、阪神の一員として周囲も認めるてくれるやろ」

まるで、移籍したての外様選手のような心境の金本は、歴代の強者が揃う阪神に馴染めるのだろうか。

天才ホームランアーチスト

高い対応能力で勝ち上がってきた金本は、いつの試合でも正しいプレーをする。大投手の大投手戦、先取点の比重はあまりに重過ぎる。たとえ、3ランホームランの最善過ぎる結果だろうと、犠牲フライをぽんと打ち上げようと、得点の価値はほぼ等しい。

「ダメや。思ったより、速いわ、キレるわ、なんや、この杉浦さんのストレート。交流戦やシリーズでみた同じアンダーハンドに分類される渡辺俊介より、腕の位置は高いが、高い分だけ球速も球威もある……。ぽんと上げて犠牲フライで最低限に着実に先制点と思うたが、このホップする球質、ちょっとやそっとじゃ、外野に飛ばすのも大変や」

杉浦の想像以上の球威におののいた金本は、思わず打席を外し考え込む。

「おい、新井。遠く広島マツダスタジアムで、試合してる新井よ。お前なら、どんな打撃をする？　オレと違って、ブラウンの元、ケース打撃（点差、カウント、走者によって打撃姿勢を替えること。提唱者のブラウンは、広島現役時代、状況に関わらず一発狙いの打撃を繰り返してた。指導者たるものは、現役時代の残影を払拭しても、理想の野球を提唱しなければならないのだ）を学んだお前や。臨機応変に頭を切り替えるやろ？」

※とうの新井は、広島マツダスタジアムにいることはいるが、直前にベンチから外されて、ネソベリアから、課題レポートつきで観戦してることを金本は当然知らない。

「とはいうても、ケース打撃を考えすぎて、自慢の意外性の一発が消えたお前は、ちいさくまとまったつまらん打者になってもうたけどな……ウハハハハ」

金本のいうとおり、新井は年々に小さな打撃を繰り返す打者に成り下がった。大打者山本浩二が、新井の素材と素質に夢を見て、い

くら成果が出なくとも、いくらまずい守備や走塁で試合を落としても、我慢した結果、新井は山本浩二の持つ球団記録の４４本にあと、１本に迫る４３本塁打を放って、本塁打王に輝いだのだ。

だがしかし、ケース打撃にとりつかれた新井は、確実性は確かに高まったが、年間２０本塁打がやっとのありふれたクラッチヒッターになってしまったのだ。

「聞こえるか？　関門海峡を隔てて、広島にいる新井よ。オレみたいな中距離砲と違う、お前は長距離砲の素質があるんや。右打ちなどつまらん野球せんと、もっとブリブリ振っていけよ。まあオレは、つまらん打撃をするけどな。野球の流れに逆らわず、状況に応じた野球をするのがオレの野球人生や」

聞こえてるか、新井。金本は、まるでテレパシーを送る超能力者のように、遠く離れた新井に話しかけた。

もし、金本がテレパシーを送信する素質があるならば、もし、新井にテレパシーを受信できる素質があるならば、新井は金本の金言に胸を震わせることだろう。

「アニキ、金本アニキ……」

時同じして、広島マツダスタジアムのネソベリアにいた新井は金本のことを想っていた。

まさか、金本と新井の師弟愛がテレパシーの送受信を可能にしたのか？

いや違う。

「アニキ、アニキ、ああアニキ……」

ただたんに四六時中、新井の頭には金本の残影がこびり付いているだけなのだ。離れれば離れるほど、新井の頭の中の金本の残影は色濃くなる。

「いかん、いかん。なんで新井のあほのことなんて、考えてるんや。杉浦さんに投球に集中しないと打てやしないわ。いいや、打つことは諦めた。外野フライなんぞ望めんわ」

金本は、二度三度屈伸してから打席に入り直す。

「打たんでも、野球はなんとかなる競技なんや、とくに塁上に走者が賑わってるならな。しかも二塁三塁や。詰まってないのが好都合や」

金本は最低限中の最低限の打撃を考えている。杉浦は、無死二塁三塁の状況、無理にコーナーをつき塁上に無駄に走者を賑わせる必要はないと考えている。

カウントは、金本の卓越した選球眼と我慢強い打撃姿勢が、いかんなく発揮されて、２－３のフルカウントに勝負は持ち込まれる。

「前に飛ばす、ゴロでええんや。とにかく前に飛ばせば、点が入る。鶴岡親分も一点はええ、打撃で取り返せると踏んでか、前進守備をとってない。この守備シフトやと、ぽんと外野フライを飛ばさんと、前にゴロを打つだけで点が入るんや」

そして粘り強く、無理をしない金本は、フルカウントから、さらにファウルを重ねて、杉浦を苦しませ続けさす。

「一点がなんだ。僕を援護する攻撃陣は、我が故郷南海と、僕が監督として一年、フロントとして三年、手塩にかけて育てた福岡ダイエー（ソフトバンク）の集合体だ。一点くらいの損失は、すぐに取り戻してくれるはずだ」

一塁は空いている。後続は、田渕、岡田、新庄と杉浦が得意とする右打者が続く。ならばしつこく金本を歩かして無死満塁のギャンブルもありだが、マウンド上の紳士、杉浦は、一か八かの賭け事を嫌う。

「ボールでもええのに……」

つぶやく野村に、杉浦を拘束する力はない。あくまでもストライクゾーンで勝負した杉浦と前にゴロを打てば点が入ると踏んだ金本の思惑は一致する。

杉浦の投げ込んだシュート回転がほどよくかかった低めに逃げ落ちていくボールを金本は基本に忠実なスイング軌道で叩きにいく。

「おっしゃ」

杉浦と金本の描いた近未来像どおり、打球はゴロとなって前に飛

んでいく。
　遊撃川崎が、オールドスタイルのストッキングを躍動させながらS元気よく前に飛び出てく。
「バックホーム……！　やーめた……」
　藤村の意外と速い走力で、バックホームを諦めた川崎は、一塁送球を選択する。全力疾走がモットーの金本は、あわよくば内野安打を狙いにいくが、あと一歩届かない。
「アウトか……でもこれでええんや。オレにつく記録はショートゴロに打点1やが、これでええんや。最低限中の最低限やが、とにかく阪神に先取点が転がり込んだ。ゲームが終わった後のボックススコアが思い浮かぶわ。勝ち投手村山、負け投手杉浦、そして昔懐かしい勝利打点がオレに記録されるんや……」
　金本はファイティンのネックレスをじゃらつかせながら、ベンチに戻っていく。
「なんだい、金本。気のない打撃をしちゃってさ。どうせアウトになるなら三振しとけよ。オレがたまった二人の走者を帰す3ランのはずが、2ランになったじゃないか」
　帰る金本と打席に向かう次打者田渕は交錯する。
「すんません、田渕さん……」
　金本の必死の仕事ぶりを評価しない7番打者は、偉大なるホームランアーチストだ。
「福岡ドームの打席って初めて入ったけど、こりゃ広いわ。でもオレには関係ないね、ホームランアーチスト田淵幸一なら、どんな球場でも当たればホームランなんだから、クヒヒ」

天才ホームランアーチスト（後書き）

ＩＤなしでも感想がかきこめるって知ってましたか？

がんばれタブチくん（サブタイトルに使うのは、多分三度目）

「T－岡田と坂本はね、オレが打撃コーチを務めたプレ五輪のレギュラー選手だったのよ。つまりは、オレの教え子も同然。あの時は、Tに、小さくまとまらず、長距離砲の気構えを伝授したような気がするんだ。かれこれ、3年でしょ？　何を教えたまでは憶えてないけど、オレはたしかにTを育てたよ」

と田淵は、たかがひと月たらずの教え子である坂本やT－岡田の成長ぶりに鼻高々。本人たちが、田淵打撃コーチの教えを胸に、日々精進してるかは定かではないが、とりあえず田淵の中で、坂本とT－岡田が教え子認定されたのは定かなようだ。

「よっこらしょと」

田淵は、どうも重々しく打席に入る。

「あ～遠いね、うん、遠い。福岡ドームのフェンスは高いし、距離は長いし、ホームランアーチストのオレにとっては、この球場は天敵だよ、まったく、とほほ。こんな広い球場に移転するから、オレのダイエー時代の愛弟子である佐々木誠や岸川や藤本博史が成績落とすんだよ」

「ダイエーの打者いうたら、みんな、足を上げて打っとったな。あれ、なんや、お前の教えか？　ヤクルト時代、たまにダイエー相手にオープン戦すると、みんな、同じように足上げて打っとて、なんやこいつらアホみたいに同じ打法しやがって思うたが」

「ズバリそのとおりですよ、ノムさん。ダイエーの時、打者のみんなにオレの一本足打法の伝授したのよ。だいたい、一本足打法が打者の究極でしょ？　あの世界の王さん、世界で一番ホームラン打った人が、足を上げて打ってたんだから。オレも王さんの姿見て、足をあげるのが、打者としてただ一つの正しい打ち方だと思ってね。特にオレみたいなホームランアーチストは、足を上げないとさ。だから、ダイエーの連中にもみなに教えんだよ。フフフ、その成果

か、藤本博史、佐々木誠、吉永幸一郎、岸川勝也、みな大打者になったでしょ？　ダイエー時代を黒歴史にするオレだけど、彼らを育てた功績だけは誇れるんだよ」

「佐々木？　山本和範？　あいつらのどこが大打者や」

「ホークスのベストメンバーとして、スタメン入りしてるじゃないの。吉永だって、代打の切り札としてベンチにどかっと座ってるでしょ、巨人の星の左門豊作みたいな顔をして」

「ふん、佐々木や吉永になんでお前ら揃いも揃って足を上げるんやと聞いたら、あれは門田のマネして足を上げて打ったといってたで……なにがオレの教え子や……田淵のタの字も出さんかったで」

「……門田のまね？　そりゃ門田も足を上げてたし、オレと違って、佐々木と吉永と同じ左打者だから、そっちを参考にしてもおかしくはありませんよ、ふん。門田だって、オレには及ばないが、歴代酸三位のホームランを記録するアーチストなんだから、でも藤本博史や岸川はオレの教え子で間違いないでしょ？」

「藤本博史や岸川が、ホークスベンチのどこにおる？　藤本博史や岸川が挨拶に来たが、あいつらＣＳ放送やラジオの解説として、球場入りしてるんやないか。それにのう、始球式で球場訪れた大道も泣きついて来たで。田淵さんが監督の時、ひどい目にあいましたよ～。自分はアベレージバッターなのに、体が大きいからって田渕さんに勝手に長距離砲扱いされてね～　足上げて振り回す打撃を要求されて、自分の打撃が狂いましたよ～　ってのう」

野村の容赦ない暴露話で、田淵はすっかりふてくされモード。

「……」

ぷくーと膨らませたほっぺは、まるで漫画『がんばれ！タブチくん』のタブチのキャラを彷彿とさせる。

「ノムさん、そこに座ってください」

「もう座ってるがな」

口調も思わず、西田敏行演じるアニメ映画『がんばれ！タブチくん』のタブチ、そのまま。まさにモノマネをするご本人。掛布

が、松村の影響を受けて、いつおよりはっきりとホワストと思わず口走るようなものだ。

「あのですね、ノムさん。僕は大道の体の大きさに可能性を感じてですねえ。小さくまとまって欲しくないからですねえ」

「大道と同じように、横浜にいた畠山準も大道と同じことを愚痴ってったぞ。オレがあいつをオールスターに監督推薦したときや。畠山もお前に一本足をムリヤリ押し付けられたあげく、まったく打てなくなり、あげくお前が監督やっとた一年目のオフに首を切られたんだよな。当時の大洋に拾われて中距離打者として、あまり足を上げない確実性の高い打法に変えて、成功したが。お前の一本足こそ理想いうのはええが、押し付けるのはよくないぞ」

「あのですね、ノムさん、そこに座ってください」

「もう座ってるよ」

「……」

田淵は、タブチくん、そのままに苦々しい顔をして、汗をたらりと垂らす。

「まあいいですよ、ふん。ホームラン打って、鼻息荒く、もんだどんだいと言ってやりますから、見ててくださいよ」

※漫画タブチくんの中で、田淵がまさかのホームランを打って、もんだどんだい（どんあもんだい）と鼻くそを飛ばさんかの勢いで鼻息荒く、ベースランニングするシーンがある。田淵は、漫画タブチくんのように、野村の繰り返す誹謗中傷で堕ちた評価を覆すような、ホームランを打てるだろうか。

「あ～こんないいボール投げるもんな～」

セリーグと違って、パリーグは寂しいな～。

お客さんは少ないし、野次も厳しいし、

投手もいいし。

※がんばれ！タブチくんの４コマ漫画参照。

田淵は杉浦の浮き上がるボールにまったく合わず、空振りしてしまう。振り遅れたあげく、バランスを崩し、もんどり打つ、無様な

姿を晒してしまう。
「ちょっと、ちょっと、こんな球打てるわけないじゃないですか！　なんですか、杉浦さんって、下手投げからこんな速いボール打てるわけないですよ～」
「そりゃ、田淵が打てる投手やないで、杉浦は」
「田淵がって、ノムさん！　僕はね、ホームラン王を取ったんですよ！　ホームラン王！　ノムさんはホームラン王取ったことありますか！」
「あるよ、９回も」
「きゅきゅきゅきゅきゅきゅ９回も！！　ふん、どーせ僕なんて、１回ですよ、ふん」
「あなたすぐにすねるんだから……、これでええにゃったか？　タブチくんのミヨ子さんの受け答えは」
　野村もいつのまにか、タブチくんを演じる田淵に侵食されて、ミヨ子さん役を演じてしまう。※ミヨ子さんとは、漫画タブチくんでの架空の田淵の奥さん。ボケるタブチに対し、身も蓋もないツッコミを繰り返す。モデルは、田淵の前妻のＨさん。
「ふん、でもねえ、１回といってもね、あの王さんが現役時代に取ったんだから、ノムさんの９回とは価値が違いますよ」
「ほう、よう王の現役時代にホームラン王を取ったなあ……あ～王が怪我した年だ！」
　※王選手が怪我した年だ～。
「もう、ノムさん。あのですね、そこに座りなさい」
「もう座ってるよ……って、杉浦が投げたがっとるぞ、もうええやろ」
「打ちますからね、見ててくださいよ」
　ホームラン王一度とはいえ、それは王貞治の全盛期に当たった不運と故障の多さからだ。ホームラン１本あたりの打席は、史上屈指。日本人では、王貞治に次ぐ高い数値を示してる。放物線に上がる起動は、まさにホームランアーチスト。落合が本物のホームラン打者

は秋山と田淵だけと言い切るのも納得できる。

「あ、しまった！」

だとしても杉浦の浮き上がる球道は、田淵のアーチスト能力を半減させる。それでも田淵の理想的なスイングから放たれた飛球は、高々と舞い上がる。華やかさをまき散らしながら。

がんばれタブチくん（サブタイトルに使うのは、多分三度目）（後書き）

なんだこれ

川崎なう

「あ～打ち損じてもうた～」

捉えたはずが、杉浦の伸び上がるストレートは、田淵のホームランスポットのさらに上っ面を叩かせる。

１ｃｍ、１ｍｍの世界。僅かな差が、田淵の美しいホームラン軌道をただのファウルフライに変えさせる。

サードの小久保とショートの川崎、そして、福岡ドームに守なれていないレフト山本和範が打球を追う。

「ふん、どうせ、チャンスで打てませんでしたよ。これでまた、怖い怖い阪神ファンに、豚だの、日本ハムにキロ何円でトレードされろだの、道頓堀に沈めてまうでとか、深夜までいたずら電話が鳴りっぱなしになっちゃうよ、とほほほほほ」

ファウルフライで、チャンスを逸したと田淵は、すでにしょげかえって、バットを引きずりながら、とぼとぼとベンチに戻ろうとする。

がしかし、ファンサービスに躍起の最近の福岡ドーム事情が、田淵に味方する。

「田渕さん、まだチャンスありますよ」

ネクストの岡田に諭されて、田淵は、まだチャンスの糸が、今岡の細い毛先くらいつながってることに気づく。

「なんだと岡田。おっと、そうか、エキサイトシートだっけ？　張り出した観客席だ。オレが福岡ドームで采配奮ってたとき、あんなのなかったよ」

もちろん、平和台球場終焉とともに、契約更新を断られた田淵監督は福岡ドームにおいて、一試合も采配など揮っていない。

物忘れの激しい田淵は、都合よく間違えるのであるが、まだ死んでいないとなれば、田淵は、ホークス守備陣が追いきれないことを願う。

「入れ、入れ、なんとかシートに」
通称コカコーラシートは、グラウンドに張り出された特別席だ。広いファウルグランドは、打者を困らせ、投手をほっとさせてきたが、狭まれたファウルグランドは、打者をにやつかせる。
守備にいまひとつ意欲のないレフト山本和範は、早々と追いかけるのをやめたが、サードとショートは、意欲満々。
特に、ショートの川崎は、球界きっての突貫小僧だ。お客様がぎっしりと詰まった観客席に、怖がりもせず突進する。
「ムネ！　任せた」
「任せてください、小久保さん！」
小久保が川崎に、全力野球の精神を託すと、川崎は、三塁側のフィールドシート、つまり、熱狂的阪神ファンで埋まる観客席に頭から突っ込んでいく。
川崎が必死なら、阪神ファンも必死。なんとか川崎のフライ捕球を邪魔しようと、手にした応援バットを川崎のグラブ前にかざすが、川崎の培った野球勘は、飛球の落下地点をほぼ正しく感知する。
「ここだ」
「ばか、川崎、余計なことするな。オレが打撃コーチを務めた北京五輪予選、北京五輪本戦のメンバーだろ。ちょっとは元有能な上司に遠慮せいよ」
田淵の意味不明の懇願も、川崎の闘志の前には届かない。阪神ファンの群に、頭から飛び込んだ川崎が、闘志の次にナインとファンに掲げたのは、グラブをはめてた左手だ。
「取りました～」
まずフライキャッチ成功をアピールすると、引き続き、生死の確認だ。飛び込んだ時よりも、より勢いをつけて、川崎は、阪神ファンの群から脱出する。
「しかも川崎宗則は元気です！」
帽子が脱げて、額から、たらりと血が流れるが、川崎は飛んでくるトレーナーを制止して守備につく。

さすが、ダルビッシュの影響でツイッターを初め、国内ＦＡ権を見事修得した川崎。度胸が違う。執念が違う。

阪神ファンから怒声混じり、ソフトバンクファンからは、黄色い声援が飛び交う中、川崎は守備位置に戻りながら、声援に応える。

「とことん飛び込みます、そして飛び込みあきます　ハッピーになります」

※　ｈｔｔｐ：／／ｔｗｉｔｔｅｒ．ｃｏｍ／Ｋａｗａｓａｋｉｕｎｅｎｏｒｉのつぶやき参照

「ムネリン、よけいなことしよって。球場のファンはまだ、オレと杉浦さんの対決を楽しみたいの。……まあいいか、オレのかわいい教え子のファインプレーだから」

田淵は、勝手に川崎を教え子認定して、すごすごと帰っていく。

田淵が倒れても、まだこの男がいる。まさに、ダブルクリーンナップの打線の厚みだ。

「８番セカンド岡田　背番号１６　大阪府大阪市出身」

「たぶっさんの野球はこれだからダメなんや。金本と田渕さんの野球の違いを見てみい。一方はチーム打撃、もう一方は勝手な打撃。どっちが４番に入ったときに阪神が強かったか、一目瞭然やろ。それに、三塁ランナーの掛布さんも問題や。ファウルフライかて、犠牲フライになるやろ？　なんで、スタート切らんのよ。無理と思っても、スタート切る姿勢が大切なのよ。阪神は仕掛けてくるとイメージ植えつければ、ホークスの守備陣も、今度同じ打球が飛んだら、ちょっとは慌てるやろ。まったく、これが阪神野球のまずさよ。こんな大試合に選ばれる連中がどれもそれって野球を理解してへん。まともな打撃するのは、外様の金本と外人のバースくらいや」

熱狂的阪神ファンである岡田が、１プレー、１プレーにいちいち毒っけたっぷりの解説付けながら、今、打席に入る。

S☆1会員ナンバー18　桑田真澄

「おい、小久保、お金貸してくれないか。お前巨人からＦＡしたとき、たくさん貰っただろ？」

岡田が毒舌の的になった三塁側のファウルフライでスタートを切れなかった掛布であるが、サード小久保相手に金策に入っていたら仕方がない。掛布にとって、試合も大事なら、人生はもっと大事なのだから。

「おーかだ、おかだ、おーかだ　ホッムラン、ホッムラン、ホームラン、おーかだ」

早稲田の応援のマーチをそのまま継承したお馴染み岡田の応援歌が、福岡ドームに鳴り響く。

強烈な早稲田愛を滲ませる岡田だけに、懐かしのこのマーチに乗れば、煮えたぎる闘志は最高潮に達するはずが岡田はどこかで、試合の流れを読んでいる。

「ツーアウトやろ？　それに阪神が相撲部屋呼ばれて雑な野球しとった頃の象徴田渕さんが、一発狙いが安納場不発で三塁の走者が残ったままや。そんで、オレの次はこれもまたアホの代名詞新庄や。村山さんが投げてるんや、普通の投手に普通の監督なら、六大学が生んだ史上最高の天才打者のオレと勝負すうわけないわ。気合入れるだけ無駄や。立って歩かすの大投手杉浦さんのプライドに差し障るがあるやろうから、まあ臭いところついて、オレを歩かしにかかるやろな」

さすが、選手、二軍助監督、二軍監督、一軍走塁コーチ、一軍監督、解説者と多角的な視線から野球を学んだ岡田だ、無駄に闘志を消費させないのだ。

「どうせ四球やろ、こんなところにエネルギー、ガーと使うんも無駄や。勝負どころは、後ろにあるで。そんとき、燃えかすみたいな

精神状態やったらアカンやろうし」

岡田の予想通り、杉浦は初球、外角のボール球から入ってくる。岡田の肩はぴくりと動いたが、投げた瞬間、ボールと見切ると、打撃姿勢を途中で辞めた。

「ほらみてみい。立教出身の杉浦さんは、早稲田の英雄のオレを怖がってるんや」

してやったりの読み勝ちに加えて、早稲田＞立教の絶対的価値観は未来永劫健在と早稲田愛に溢れる岡田は思わず頬を緩ます。

「グフフフ……グへへへ……オレを避けて当然やで……グフフフ、グへへへ」

早稲田愛に溢れる岡田の象徴的事項として語られるのは、母校の後輩鳥谷の偏重起用や早稲田の後輩中村壽博が監督を努める日本文理大の古川秀一を、菊池雄星を回避してまでドラフト一位で指名したことであるが、もう一つ忘れてはならないのは、早稲田をダシに巨人単独一位指名を勝ち取った桑田への憎悪だ。日ごろから、常に桑田憎しを公言していた岡田は、１９８５年以降の岡田の下り坂に桑田との対戦が限られながらも、毎年驚異的な高打率を残したものだ。

「桑田、許さん、こけにしおってからに……。ふん、社会人入学のクセに、早稲田のＯＢづらして、早慶戦で我が早稲田を応援しおってからに・・・」

と、杉浦相手にしても、なぜか憎き桑田への憎悪が口をついで出てくるほど、桑田憎しなのだ。

この打席は四球と見きって、ほっと安心した気持ちが、岡田の集中力をはぎ取り、岡田の脳裏に、先の日曜日に早慶戦をテレビスタッフ付きで応援してた桑田の姿が過ぎらせたのだろうか。

ところが、２ボールの後の三球目、杉浦への対抗心が弱まりきった岡田の虚をついてか、杉浦は、一点、勝負にくる。

真ん中のストレートを入れられると、岡田は、一瞬ぎょっとした顔を見せた後、にんまりとした笑顔を見せる。

「オレと勝負？　まさかなあ、オレと新庄、どっちが打ち取りやすいなんて、自明の理やろ？　新庄は勝負強いとか、大舞台こそ力を発揮するいう奴がおるが、オレは全然そう思わんよ。新庄みたいな打撃技術に欠陥がある男は、二線級相手には、抜群の身体能力で打ちよるが、杉浦さんみたいな超一流投手は絶対に打てんのよ」

　岡田独自の新庄論が飛び出すと、今まで、だんまりを決めていた野村がついに口を挟んでくる。野村と岡田といえば、二人とも藤山寛美によく似た風貌なだけで、対談が組まれたこともある因縁の二人だ。顔、形だけでなく、周囲に構わず毒を吐き散らす性格までソックリだ。

「ふん、岡田、なに、自分の力を買いかぶっとんのや。ワシが阪神の監督しとった時もそうや、おまえさんが、二軍監督やったろ？　ようワシにつっかかってくれたもんや」

「その節はどうも、野村さん」

「ふん、いまさら、礼などいらんわ。二軍の選手に野村の野球を理解する必要がなんてない、どうせ、オレが監督になるんやから、オレの野球だけを理解しろ言うてたらしいな」

「いうてませんよそんなこと」

「ふん、どうだか。それに、新庄とお前なんて、たいした差はないわ。お前さんは、自分が歩かせて、新庄勝負と決め込んどるがな。杉浦にとっちゃお前でも、新庄でも案配に変わらんわ、ボケが」

「そんなことありませんよ、野村さん。新庄とオレは打者のランクが一個分は違いますから」

「ふん、なら新庄はどうして、大リーグで打ったんや」

「打ったいうても、・２５０でしょ？　そんなんあれですよ、メジャーの投手もピンきりで、たとえ、ピンでも新庄みたいな準レギュラーにしゃかりきに投げ込まんし、よう研究もせんのですよ。それも通用したいえるの、最初の一年くらいですよ、二年目後半辺りは、もうメジャーの投手に見切られてましたから」

「ふん、それで、お前は、メジャー行っとったら、新庄より打った

いうのか」

「もちろんですよ、実際、１９８６年の日米野球で、オレよう打ちましたもん。連続三冠王取ったころの落合さんが全然パワー負けしとったのに、オレは鋭いライナー性の当たりを連発しましたよ。落合さんみたいに、バットアクションの大きい打撃が通用すんのは、日本のおっそいストレート投げる投手だけですよ、メジャーのクセのあるファウストボールは、オレみたいに、コンパクトで鋭いスイングやなきゃよう打てんのですよ。社交辞令含みもあるでしょうが、１９８６年の日米野球で、あちらの評価が一番高い打者は、現にオレでしたもん。アメリカの監督が、デービージョンソンやったかな？　がオレと芸者を帰りの飛行機に乗せて帰りたいいうてましたもん」

※岡田が延々と語った自慢話は、ほぼその通り。ただ最後のデービージョンソンのくだりは、岡田の誇張。日米野球の監督は、決まってお世辞含みで、誰々をメジャーに連れて帰りたいというが、１９８６年の日米野球は、大リーグ選抜の圧勝すぎて、唯一の敗戦を、日本に全勝するのも大人気ないとわざと手を抜いたとの証言もあるほどだ。それだけ圧倒的な差の前には、さすがのお調子者のアメリカ人でも、お世辞のひとつもでないだろう。

「ふん、そんな天才打者がどうして、．２８０、２０本がせいぜいの打者で終わったんや。．３４２　３５本打った８５年以外並のスラッガーやないか。あれか、やっぱり、８５年は覗きしとったんか？　それとも、極端な飛ぶボールやったんか？」

「ふん、南海やないんですから、そんな卑怯なマネしてないですよ。ただ優勝しても、たいして年俸上げてくれん会社に憤りを感じたんは事実です。打っても、打っても、年俸上がらんなら、そんなよう打ちませんよ」

「ふん……まあ、お前が１９８５年のピークん時の岡田でも、杉浦は違うで。江川、北別府、尾花、こんなんがエースやった８５年とはな」

「勝負なら、勝負でええですよ。ただ、岡田と勝負するのは間違いだったと後悔させますけどね」

相変わらず主導権は、杉浦にある。胸、肩、腹部と順番に触ると、野村がうなずき、杉浦がセットポジションに入る。

1－2のバッティングカウントから、杉浦が選んだ球種は、自信たっぷりの高目のストレートだ。下位打者の岡田など、変化球を混ぜるまでもないとの、強いエースの意思表示か。

「狙ったところに、きたで」

が、ハイボールヒッター岡田にとって、高目は大好物だ。宿敵桑田をなんども沈めたのも、好きな高目に抜けたカーブやストレートを叩いたからだ。

「右中間まっぷたつや」

ただ、岡田は、まだ真の杉浦のストレートの怖さを知らないでいる。

S☆1会員ナンバー18　桑田真澄（後書き）

オレ、関西人でも早稲田にもなんの関係もないのに岡田や野村に成り切るのは面倒だ。

岡田色を好む

岡田は徹底的に右中間狙いの打撃を心がけていた。年間３０本塁打異常が１９８５年、ただ一度。杉浦の見たこともないアンダーハンドからの快速球に加えて、広い福岡ドーム、一発狙いの色気を完全に払拭するとは、さすが高い野球頭脳と豊富な経験を持つ岡田といえるが、内に秘めた狙いの理由は、もうひとつあったのだ。

「ぐふふふふ、右中間破れば、二塁打や。ぐぐふふふふ…単打や三塁打なら、あかん。二塁打打たなあかんのや。二塁打打てば、ショートのムネリンにお近づきになれるからな」

掛布が、金を貸してくれそうな選手を求めて、塁に出たが、岡田は、自分好みの選手に接近するために塁に出る。

オカマと一夜を共にしたことが、写真週刊誌に激写され、ゲイバー好きを、隠すことなく、公言する岡田は、大のイケメン好きなのだ。

現在監督を務めるオリックスにおいて、ぽっちゃりダンディー日高のリードミスは激しく糾弾するが、鈴木郁洋が同じミスをしても、岡田は、捕手の配球に非を求めない。

コーチングスタッフ人事にも岡田は自分の好みを反映させる。醜い投手崩壊が起きても、星野伸之投手コーチはお咎めなく、叱責されるのは、憎き明治大出身でもある三輪隆バッテリーコーチだ。

三輪が二軍に落ちても、星野に責任追及はされない。鈴木も星野も、球界きっての細身のイケメン。しかも、若い女性ファンが追いかけるような派手なルックスではなく、いかにも同姓受けするような渋さも醸し出している。

岡田が、鈴木や星野に責任の一端を被せない理由は定かではないが、とにかく、岡田の狙いは、二塁打を打って川崎ムネリンに一歩でも近づくことなのだ。

「井口はあかんわ。入団当初は凛々しく静観やったが、今は太目や、

オレの好みから外れたわ」
　同じ二塁付近に守るイケメンでも、井口は好みではない岡田。岡田は、二塁ベースから、いかにも単打でも生還できるように大きくリードするふりをして、川崎のおしりを間近で楽しむのだろうか。
　だがしかし、岡田の好色な野望は、杉浦の快速球の前に立ちふさがれる。
「あかん、こんなノビのあるボールみたことないわ」
　高目の速球に自信を持つ岡田でも、振り遅れる杉浦の下手からの快速球の前に、阪神は、追加点の夢を打ち砕かれる。
「なんだ、オレの打席ないんか、つまんな～い」
　走者がたまった大ヒーローになれるチャンスを逃した、ネクストサークルの新庄はがっくりとうな垂れる。
「まあいいわ。次の回、えっと、2回の次だから、2の次は、えっと、えっと、えっと、さ、さ、さ、さん回？　そうそう、2の次は3やった。3回はオレからの打順になるんだもん、まあいいわ」
　持ち前の根拠不明のポジティブシンキングで、新庄はすぐに立ち直る。
「えっと、スリーアウトチェンジになったら、オレ何すんやったっけ？？　……えと、えっと、ヤバイ、久しぶりに野球やるから、ルール忘れてもうた。あ、そうだ、守りだ、守り、守りにつくんやな……えっと、どこ、オレ、スーパースターやったから、スターといえば、投手やな。一番、野球が上手いやつがやつポジションじゃん」
　新庄は投手グラブを抱えて、村山に先んじて、マウンドへ。投手らしくマウンドの土を鳴らしていると、ただでさえ終始ぴりぴりとしたムードを醸し出す神経質な村山の怒りを買うことに。
「ぼけ、あほ、カス、なんで、お前みたいな脇役が、主役の場所におんねん。死ね、なす、こらおい、ボール投げつけんぞ、この売れないタレント新庄が」
　当然、村山の一喝を食らい、新庄はみるみるうちに涙目に。
「だって、オレ、あのその……」

弁明にしどろもどろな新庄を岡田がまるで、小学校低学年の保護者のように抱き抱える。「あほ、新庄、お前の守備はセンターやろ。ばか、ぼけ、村山さんが集中してるんやからブチ壊すな、あほめ」

岡田に諭されて、新庄はようやく、定位置のセンター守備位置につく。

「???　オレ、脇役？　ウッソー？　スターでしょ？　オレ？　大スターでしょ？」

それでも状況把握できない新庄であるが、杉浦との大投手に熱中する村山の気分が害されたのは、紛れもない事実だ。

村山は、やはり新庄が適当に踏荒したマウンドを、必死に自分の型にあったマウンドに変貌させようとするが、無駄にパワーのある新庄が、やたらめったら踏荒したマウンドの土は、なかなかしっくりと造形できない。

「くそ、あほが、あのボケ、死ねや新庄。オレの終生のライバル長嶋茂雄の立教時代の盟友・杉浦忠相手に渾身の投球をしてる最中に、余計なことしくさって……」

かっかする村山にしめたと、2回裏の先頭打者、野村はほくそ笑む。

「村山いうても、かっかした村山は怖ないわ。一流投手といえど、冷静になって初めて一流なんや。精神状態がかき乱されたら、その時点で二流やで……ウッヘヘ」

心理戦に優位に立った野村は、試合展開もタイに戻すために、4番の仕事をすべく、打席に向かう。

松中土建

新庄にマウンドを踏み荒らされた村山は、野村との名球会対決を前に必死に、自分好みのマウンドに造り変えようと、地ならしするが、ついに時間切れ。

主審円城寺のプレイの声が、度重なりかかったら、村山といえど妥協しなければならないのだ。

「クソアホボケ新庄を責めるのは簡単や。が、今はそんなん気にしとる暇はないわ。ノムさんや、ホークスの大将ノムさんを斬って、我がタイガースに勝負の機運を運ばなあかんのや」

村山がマウンドにしっくりきていないことを、野村は漏らさず看破する。

「新庄のアホのおかげや。村山ー田淵バッテリーの秘策を披露しようと思うたが、この打席では必要ないみたいやな。なにせ、村山が苛立っとる。ただマウンドの投げにくさを嘆いてるわけやない、投手にとってしょせん脇役の外野手新庄に、神聖なるマウンドを踏み荒らされた怒りや……。この村山の精神状態なら、初回みたいな神経が行き届いた投球はできんやろ。田淵の薄っぺらい配球にうなづいて、投手独自の色を出す余裕もなく、単調な攻めに終始するはずや」

野村は、現役時代同様、深呼吸を繰り返しｔから、ゆったりとバットを構える。

「大捕手、大監督の野村は知られてても、代打者野村は、どうしてか忘れられがちや。王に次ぐ歴代二位の本塁打を記録した和製ベーブ・ルースのワシの猛打を、今の若いファンに見せつけたるわ」

マウンドがしっくりこない村山は、野村の見立て通り、神経が、配球・制球までに行き届かない。

初球、外角ぎりぎりにストレートを配し、ストライク先行で対決を優位に持っていこうと企むが、田淵のミットが数十センチも動く

ほど、ボールは外に大きく外れる。荒れたマウンドでは、ザトペック投法の本領発揮もフルパワーとはいかないのだ。

「クッソ、コントロールがようつかんわ。ええい、こうなったら、細かい制球と配球で勝負するのも辞めや」

田淵の出したサインはフォーク。例によって、浅はかな田淵のリード。２球目にフォークを選択する裏付けは特にはない、ただストレートを投げたから、次はフォーク、その程度の配球理論なのだが、村山はしめたと何度も盛んにうなづく。

「ノムさんなんぞ、香車や（まっすぐしか打てない打者を揶揄する隠語）。ワシのフォークが打てるわけがない」

田淵の単純なリードは、時に投手の闘志を燃えたぎらせるのだが、野村が田淵のリードを見破らないわけがない。

「ストレートの制球が悪い。フォーク中心に組み立てに変えるはずや。しょせん田淵の考えはその程度や。ストレートが決まらんから、はい捨てましょうじゃ、投手いうのはいつまでも立ち直らんいうのに……ぶつぶつ……」

野村の読みどおり、村山はフォークを投じてくる。田淵の出したサインは、球種だけのサイン。どのコースに投じるか、ストライクを入れにくるか、それともボール球を振らせにくるかは、村山の感性に掛かっているのだ。

「ふん、コースもドンピシャや。村山の性格なら、ボールカウントが２つ先行するより、フォークといえども、ストライクゾーンにねじ込んでくると思うたわ」

監督も兼任せず選手一本、しかも配球は杉浦に任せっきりと、約４０年ぶりに打者に専念できる立場にいる野村だけに、読みも鋭くズバズバと当たる。

「カキーン」

野村は快音を口にする余裕を持ちながら、ストライクゾーンに入ってくる甘いカーブを強振するが、村山の執念は野村の知能の上を行く。

「なんやと」
思わぬボールの軌道に野村はとまどい慌て、バットを止めようとするが、手首の返った状態では、野村の技術といえど、軌道修正は難しく、止めかかったバットに当てただけの打球は力なく投手村山に転がっていく。
簡単にさばいた村山は、余裕のトスで一塁のバースに送球。ショートゴロに倒れた野村は目を白黒させる。
「フォークやない、チェンジアップや、今のタイミング抜かれた感じとボールの軌道は。どういうこっちゃ。村山がチェンジアップを投げるなんぞ初めて聞いたわ」
茫然自失の野村を横目に村山はほくそ笑む。
「うふふふ、フォークの連投やと持たんから違う球を投げたまでよ、ノムさんよ。オレがチェンジアップを投げれたかって？　なにも現役時代の球種しか投げちゃいかんと誰が決めましたかい？」
勝利に邁進する村山は現役時代の球種だけに飽き足らず、新たなウイニングショット開発に余念がなかったのだ。
しかも、技術追求の前に村山は、プライドの鎧を脱ぎ捨てた。なんとチェンジアップ習得に、弟分江夏を介して、井川慶に教えを乞うたのだ。
大先輩村山に教えることはできないと恐縮する井川（というよりは、大物ＯＢとコミュニケーションを取りたがらない）を、持ち前の燃えたぎるしつこさで説き伏せ、ついにチェンジアップの極意を会得したのだ。とはいえ、村山にチェンジアップを多投するつもりはさらさらない。
「こういう投球の袋小路に入った時に使う緊急用のボールや、あとはストレートとフォークのコンビネーションで牛耳ったるで」
あくまでも村山の代名詞、フォークを勝負球として、ホークス打線を封じるつもりだ。
「？　なんやったっけ、この男……」
闘志の炎で心を煮えたぎらせる村山であるが、野村の次打者の見

慣れる顔に思わず、その炎を弱火にしてしまう。
「三冠王、三冠王ですよ、村山さん」
気配りしない女房役と叩かれた田淵も、たまにはいい仕事をする。二歩、三歩、村山に近づいて、次打者の情報を耳に入れたのだ。
「三冠王？　そやった、データ解析したとき、よう言われたな。野村の次に座るであろう松中いう男は、三冠王を取ったスラッガーや、要注意やと……」
１９９８年に惜しまれながら、この世を去った村山は、松中をよく知らないのも仕方がない。ただ松中も、村山の生存時に、鳴り物入りで入団した選手、村山も、ヘルメットを取り挨拶する松中の顔を見て、ようやく松中の素性が掴めてくる。
「松中いうたらあいつやろ。たしかアトランタ五輪の全日本チームの４番打っとた男や。たしかダイエーの騒がれた入団したはずや……なんや、あの男、三冠王にまで登りつめたんか」
死後の球史に、村山は実に興味深け。
「三冠王いうても、なんだか締まらん顔しとるのう、若いのに頭も寂しいし」
ところが、その締まらない顔つきの男が、村山殺しに三冠王の極意を見せつけるのだから、野球は奥深い。

松中土建（後書き）

４００話記念
印象に残ったシーンや選手

必要以上に先輩風を深せる高橋尚成
必要以上に毒と無知を撒き散らす涌井
殿馬のマネして白鳥の湖捕球を試みるが、失敗に終りグラウンドに転げてしまう阿部真宏を見て、爆笑する下山と笑いをこらえる塩崎

見知らぬ三冠王

「三冠王？　オレの中の三冠王いうたら、戦前の中島治康さんに、ノムさん、王、落合、バース、ブーマーだけや。この薄毛の若造が三冠王やと？　そんな風格あれへんのに、最近の野球界はどないなってんてんねん」

　１９９８年に逝去した村山が、ただ一人知らない三冠王が、今打席で相対する松中である。均整の取れたボディにゆったりとした構えは、大打者の風格を否応なく醸し出すが、松中の顔を見ると、どうも気合が削がれると、打者とのにらみ合いにも負ケズ魂をヒートアップさせる村山が、松中から視線を逸らしてしまうのだ。

「あかん、なんや、この若造の面。上下ひっくり返しても、おんなじようなだまし絵みたいな面しおってからに、眠たそうな眼しおってからに、どうも、対三冠王の気合が乗ってこんわ。ホンマにこいつ三冠王取った大打者なんか？　その辺の道路で、邪魔くさく、スコップでも持って、工事しとる方が似合いそうなあんちゃんやないかいな」

　テンポよい投球術が信条の村山が投げとまどう姿を見た女房役田淵は、愛する亭主に気分よく仕事させるために、松中殺しに、頭脳をフル回転させる。

「そうか、村山さんは、松中がどんな打者かよう知らんのだ。三冠王だっていう有益すぎる情報は、オレが口添えしたが、どんなタイプの打者かまではよう知らんのか」

　田淵は、松中退治に、有益な戦略を張り巡らそうとする。

「松中、松中……どんな打者だったか？　たしか、オレが、有能な打撃コーチとして、一発に頼らないつながりある打線を構築して阪神タイガーズを１８年ぶりの優勝に導いた２００３年日本シリーズに、松中が４番を務めるダイエーと対戦したもんだが、オレ、別に、バッテリー担当じゃないから、松中対策なんてまったくやってない

な……」

　考えても、考えても、松中のバッター像が見当たらない田淵がどうしたかというと、

「おい、松中、お前どんな打者だったか？」

「はあ？　なんすか、田渕さん」

　松中本人にたずねて、疑問解決を図ろうとするのだ。

「だから、どんな打者だったか聞いてるんだ。苦手なコースどこや？」

　どこの打者が、対戦するバッテリーに弱点をばらすというのか。

「はあ？　そんなん自分で調べておいてくださいよ、捕手なんですから」

「あ、お前、オレが打撃コーチを努めて、一発に頼らないつながりある打線を構築して、日本代表を６大会連続の五輪に導いた、２００７年のアジア予選に、お前を呼ばんかったからって、なんだ、その言い草は。あれは、お前が、怪我した時の保障がどうだと、いらんことというから、星野の仙ちゃんが、怒って、金まみれの奴はいらんってなったんじゃないか」

「痛み止め注射のかかせない僕は、ドーピング関係がうるさい五輪には出場できませんから、どうでもいいですよ」

「あ～そうかい、そうかい、大先輩のオレに、サービスできないというのかい。オレが、王さんの前の前のダイエー監督だって知ってるか？」

「そりゃ知ってますよ」

「お前みたいな打者が４番にでんと座ってれば、せめて福岡ドーム開場の年まで、監督できたのに、とほほ。オレが監督してた時の４番は、死にぞこないのご老体門田やブーマーだからな～。周りを囲む打者もヘボ外人のラガやアップショーに、岸川、藤本博史の半端な日本人打者だったしなあ～」

　松中に対する怒りから、なぜか、ダイエー監督時代の悔恨に頭が飛ぶ田淵。

「オレの時のドラフト一位は、元木だぞ？　チキンハートの木村恵二だそ？　野茂と同等の評判でくじ引き当てたのに、いいとこ１０勝したらそれ以上負ける若田部だぞ？　あ～お前みたいなのを指名できてれば、とほほ……」

結局、有益な松中退治は見つからず、田淵は、本能でサインを出さざるを得ない。

「村山さん、三冠王ですよ、注意して行きましょう」

松中をよく知らなければならない立場の田淵が、この状態なのだから、村山は、今、目の前の打席にいる松中の姿から、全ての情報を読み取らなければならない。

「懐が広そうや。内角厳しいところついても、いかれそうな雰囲気あるな……」

村山は洞察力を信じて投げるしかない。手探りの状態のまま投じた初球は、外ぎりぎりに狙ったストレート。微動だにせず見逃す松中の姿から、村山は多くの情報を得る。

「今の初球を手を出さんとなると、我慢強く、選球眼に優れた打者いうことやな。それなら、これはどうや」

２球目、村山は、危険と見切った内角に、これまた渾身のストレートを投げ込む。松中の狙い球なのか、フルスイング。やや球威に押されたが、バックネット裏に飛んでった打球の勢いは、村山にインパクトを与えるには、十分過ぎるものだった。

「やっぱり、三冠王取るだけはあるな。オレの全力のストレートに、ケレン味なくついてく。しかも、スイングは速く、ミートにも優れてるわ。ストレート勝負で、若き三冠王を打ち取るといきたいところやが、投げる相手は杉浦さんや、虎の子の一点を守らんといかん。勝負に徹さないかん」

田淵からフォークのサインが出るまで、首を振り続けた村山は、三冠王との勝負を楽しむのではなく、阪神に勝利の栄光をもたらすために、ボールゾーンで勝負を決めようとする。

「死にさらせ、若造が」

悲哀に満ちたザトペック投法から、投じられたフォークボールは、村山の理想に近い落ち方を描いたが、松中のバットは、問題なく捉える。

「なんやと、あのコースを?」

見知らぬ三冠王の技術に驚愕する村山。落ちる球全盛時代の、ただ一人の三冠王は、フォークをこなせなければ、高打率は残せないのだ。

松中のバットに乗せられた打球は、左中間に飛んでいく。名手新庄もさすがに、三冠王の打球スピードには勝てない。

松中は一気に二塁を陥れる。スタンディングダブルの当たりだが、松中はチームを鼓舞するように、猛然とヘッドスライディングを敢行する。

巻き起こる砂塵に、脱ぎ飛ぶヘルメット。悠々の二塁打であるが、松中の気にするのは、チームの士気の高まりよりも、脱げたヘルメットで、あらわになる頭皮。さっと落ちたヘルメットをかぶり直すと、ようやく笑顔。

「信彦が打ったら、オレも打たんとあかんなこれは」

続く6番は松中の兄貴分小久保。松中に負けじと、気合が入る。

見知らぬ三冠王（後書き）

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４０２８ｋ／

野球ファンのみなさんこっちもよろしく

だ・て・ん・おう

小久保？　小久保いうたら、あれか、ダイエーの若造やな」

１９９８年を堺に、野球知識が滞っていうる村山にとって、小久保の記憶は、若手時代までで止まっているのだ。

「ふん、本塁打王だかなんだか知らんが、勝負強い飯田の徳さんや、しぶとい森下や、一発長打のあるハドリが出てきた方が、小久保なんかよりよほど怖いわ、助かったわ」

村山の現役時代に対戦した、ホークス出身の、勝負どころで迎えると厄介な打者をあげつらい、小久保を軽く見るが、一方の女房役田淵は、小久保を要警戒する。

「お前、本塁打王取ったよな？」

「取りましたよ、田渕さん」

「王さんが、怪我した年か？」

田淵が、唯一、本塁打王を獲得した年は、王が怪我した年として、あまりにも有名。

「いえ、王さんに指導された年です」

小久保が、唯一、本塁打王を獲得した年も、デストラーデが復帰するも、離婚問題で６月に退団し、ブライアントが故障で夏前に消えて、石井浩郎が４番連続試合にこだわり、故障のしたまま、試合に出続け、選手生命が実質絶たれる要因となり、清原が肩を脱臼し、ニールが仰木野球の元、コンスタントな試合出場ができず、本塁打王争いのライバルが、田中幸雄やデューシー、イチロー、初芝などの中距離打者だらけとなった年である。

「そうか、お前、打点王も取ったんだっけ？　すごいな、オレ、王さんいたから、打点王は、ついぞ取れんかったわ」

王さんが怪我した年にすら、田淵は、打点王を獲得できなかったのだ。勝負弱さのせいか、それとも、田淵の前にろくに出塁できない阪神打線の脆弱さが、あだとなったか。

「ええ、打点王も取りましたよ」
「１９９７年だろ？」
「ええ」
「ん？　１９９７年って、お前、もう一個タイトルとらんかったっけ？」
「長打率をとりましたよ」
「いやいや、そんなマイナーなのじゃなくて、〇〇王ってつく、一般人にも、それらしき価値が一目で分かるようなタイトルだよ」
「はあ……」
小久保の顔は次第に曇ってゆく。触れられたくない過去をほじくり返されたからだ。
１９９７年とは、小久保の実質的なピークイヤーであり、人生の頂点からどん底へのダイブが、控えていた年でもあるのだ。
「だ……だ、だ、だつ……なんだっけあ……脱獄王でもないし、脱線王でもない。オレが西武にトレードされた時、腹立ちのあまり、置き石をして、阪神電車を脱線しようと思ったこともあったっけ……」
野村のように狡猾な心理作戦を実行できるタイプの捕手ではない田淵は、なにも、わざと真綿で首を絞めるようもったいつけて、言いあぐねいてるわけではない、ただの記憶容量の質の問題なのだが、うろたえた小久保に打撃の隙が見える。
村山が慎重にボール球で入ってくると、小久保のバットは、気のないスイングで手首が返ってしまう。
村山は大投手だ。よく知らない小久保でも、たった一度のスイングをマウンド上からみただけで、小久保の打者としての性質をものの見事に見破る。
「前の打者の松中は、さすが三冠王だけあって、柔軟な打撃を仕掛けてきたが、小久保いうのは違うな。しょせん、本塁打王や、右打者や。よくいる一発長打狙いのスイング軌道が大きなタイプやないか。こういうのには、ストレート勝負は厳禁やが、しつこくフォー

ク投げときゃ、そのうち、3つ空振りしてくれるタイプや」
小久保、組み易しと、村山は猛然とフォークを続ける。
「ただ、半端なフォークはあかんわ。フォーク落とすなら、ワンバウンドなるくらいのフォークでないと、アッパースイングにすくわれるで……」
地面に叩きつけるようなフォークボールを村山は、オーバーハンドから投げ込んでくる。
気負う小久保は、ボールゾーンに落ちるフォークにも、つい手が出てしまう。
「よっしゃ、振ってくれた」
しかし、打者を空振りに仕留めるのは、バッテリーの共同作業。ボールを振らせても、捕手が捕球するまで、作業は完了しない。
雑な捕球に定評のある田淵は、叩きつけられたフォークを体で止めにもいかず、むざむざと後ろに逸らしてしまう。
「あ、くそ、ブチのアホタレが！　はよ、取り行け、のそのそせんと！」
バックネット裏にころころと転がるボールに、村山の絶叫があってmようやく、面倒くさそうに体を動かす田淵。
「だから、キャッチャーって嫌いなんだよ。パスボールしたときの面倒くささに、恥ずかしさはたまわんよ、もう」
グチグチとぐちをたれながら、ようやく、ボールをカバーするが、当然、二塁走者の松中は、この間に、三塁を陥れている。
「忘れておった、田淵の捕球技術の執念のなさを。ダンプ辻や、ヒゲ辻なら、体で止めにいくんに、田淵は、ミットだけで取りにいくんやった。オレのキレのいいフォークが、そんなキャッチングで取れるか、アホ」
小久保料理に、フォークの連投と決め込んでいた村山は、田淵のキャッチングの拙さに呆れ返る。
「三塁いってもう、もう今のようなフォークは投げられんわ。田淵が逸らして、同点に追いつかれるのがオチや……。くっそ、案配や、

思うた、小久保が強打者に早変わりや……」

配球の袋小路にはまる村山。だが、田淵は、村山の心理も読まずにフォークのサインをしつこく出す。当然、村山は、

「アホ、投げれるか、フォークを。甘くなったら、一発くらうわ」

何度も首を振るが、それでも田淵はフォークにこだわる。

「信用してくださいよ、オレの配球を。オレも小久保と同じ右のプルヒッターだから、フォークの連投の邪魔くささはよく分かるんです」

あまりにも、しつこい田淵に、ついに村山は自暴自棄となる。

「もうどうにでもなれ、一点で済むならそれはそれや」

ついに、フォークのサインに賛同してしまう。田淵を信じたのか、それとも、一点はくれてやるとの開き直りか。

「オレを信用して、ワンバウンドになるようなボール球のフォークを放ってください、村山さん。セ・リーグのダイヤモンドグラブ受賞捕手田淵幸一が体をはって、止めますから」

ミットを二度三度と叩き、村山を鼓舞させる田淵であるが、直前の稚拙なキャッチングを見たら、村山はフォークの連投を避けたくて当然。

「フォーク？　田淵のアホボケが、ホンマに止められんのかクソが。しかし、今のパスボールを見て、小久保はフォークを決め球に使ってこんとみて、ストレート狙いに切り替える。狙い球とわかっていても、あえて、そのボールを投げるのも、エースとスラッガーの対決の醍醐味やが、この広い広い福岡ドーム本拠地にして、本塁打王取れるような打者には危険すぎる勝負や。なら、頭から消えかかったフォークの連投を選択すれば、小久保のバットは高い確率で空を切るが、田淵のミットも同じくらいの確率で、空を切るやろ。かといって、田淵が取れるくらいの落ちのフォーク投げたら、小久保のようなアッパーのバット軌道の打者には、簡単に外野に運ばれ、犠牲フライやわ。え〜い、しゃーないわ、逆転ツーラン食らうよりましや。田淵が逸らして同点覚悟で、フォークを投げるしかないわ」

覚悟を決めた村山は、決め球にフォークをセレクトする。迷いの消えた村山のフォークは鋭く落ち、ストレートと思い込んだ小久保のバットを振らせたが、問題は田淵が捕球できるがどうかだ。逸らせば、松中がホームに還ってくるだけでなく、最悪、小久保を振り逃げで一塁に生かすことになる。

「ブチ、ちゃんと捕れよ！」

村山は絶叫とは逆に、パスボールに備えて、ホームベースカバーに行く準備をする。松中もフォークが落ちた瞬間に、すかさずホームを陥れようと大きなリードを見せる。

守備も攻撃も準備万端、田淵が逸らすことを念頭において、万全の動きを見せるが、田淵は、いつまでも、タブチくんの主人公ではなかったのだ。

なんと、あの親が毎日新聞社勤めで、小さい頃から、蝶よ花よと育てられた、甘ちゃん田淵が、体を張って、ワンバウンドしたフォークボールを止めにいくのではないか。

「おいおい、ブチが捕りおった」

バッテリーを組む村山も驚く、田淵のまさかの身を呈した捕球術に、本塁を陥れようとしていた松中も慌てて三塁に戻る。

「見ろ、これが、阪神史上最強捕手田淵幸一や！」

１０年間、関西にいただけあって、興奮すると、たまに関西弁が飛び出る田淵は、たたでさえ大きな鼻をさらに大きくして、三振を完了させるために一塁に送球する。

「ダンプ辻がなんだい、ヒゲ辻がなんだい、和田徹がなんだい、土井垣がなんだい、山本哲也がなんだい、徳網がなんだい、カイザー田中がなんだい、城島がなんだい、木戸がなんだい、関川がなんだい、矢野がなんだい、山田勝彦がなんだい、笠間がなんだい、山川がなんだい、片岡新之介がなんだい、嶋田宗彦がなんだい、狩野がなんだい、カツノリがなんだい、浅井がなんだい、門前がなんだい、阪神の歴史上、オレ以上のキャッチャーがどこにいますかって」

めったにない体をはったプレーに酔いしれる田淵は、自分がいかに阪神史上ナンバーワンの捕手であるか、自負するが、あまりにも、妄想が激しすぎて、一塁送球に遅れが生じてしまうのだ。

「打撃と肩が史上最高なのは、世間さんは承知だろうけど、加えて、好リードに好守備で完璧な捕手じゃありませんか、みましたか、関西のスポーツ新聞、田淵が捕手じゃ勝てない？　矢野を起用すべしだって？　へへんだ」

一度は三振と諦めかけていた小久保も、田淵がもたつきを見て、一塁に走り出す。

「ヘイ、タブチ！　ボール！　ボール！」

一塁のバースに促されて、ようやく我に帰った田淵。
「おっと、いけない」
リードが適当でも、キャッチングに波があっても、田淵がダイヤモンドグラブを獲得したのは、送球のすばらしさにあるのだ。
田淵の右手からリリースされたボールは、弾丸のように、一塁ベースに飛んでいく。
「オーナイスボール」
バースが思わずつぶやくほど、田淵の肩は図抜けていたのだ。
「相変わらず、肩だけはええな」
これには、ホークスベンチの鶴岡も、捕手田淵の肩を再認識する。
「ワシは走る野球で、勝ってきた監督やが、田淵の強肩の前には、ゴーのサインは出しづらいかもな」
年間２００盗塁は当たり前だった、南海ホークスの走る野球を指揮してきた鶴岡にとって、足を封じられるのは、采配の下半身不随をおかしたのにも等しい。
「だが、捕手田淵は、田淵や。付け入る隙はいくらでもあるで……」
しかし、鶴岡野球のしたたかさは全身不随にでもならない限り、消えてなくなることはない。
「なんのために、ワシが城島を干してまで、こいつをオーダーに組み込んだと思うんや。鶴岡野球を知らぬ鶴岡野球の申し子を……」
鶴岡は不気味に微笑む。

ドラかカズか

「あえて、この男をオーダーに組み込んだのはワケがある。この男こそ、ダイエー、南海の両方を知る選手の中で、ただ一人、鶴岡野球を実践できる男やからや」

鶴岡野球とは、はたしていかなる野球であろう。盗塁数の呆れるほどの多さから、足を使ったかき回す野球だることは数字からも読み取れる。さらに、１００万ドルの内野陣と称された守備の堅い攻守の選手を配置したことから、内野守備にも重みを置いた野球であることもわかる。しかも、足攻野球も、自慢の内野陣も一度解体し、４００フィート打線なる長打力重視の野球を提唱したこともあるのだ。

これだけみれば、臨機応変に戦術と信念を切り替える柔軟性の高い野球こそが、鶴岡野球の真骨頂といえるが、鶴岡が、あえて組み込んだ、山本和範に期待する野球は、先の３つの野球のいずれとも異なるのだ。

山本和範には、そこそこの走力を持つが、盗塁王を獲得できる足があるわけでもなく、ゴールデングラブ獲得の実績があるとしても、鶴岡野球では、軽んじられる、外野の両翼の枝葉の選手でしかない。

かといって、年間２０本塁打を越えたことも、一度と圧倒的な長打力があるわけもない、この選手に、鶴岡親分は、何を期待したのだろうか。

山本和範が守るレフトに門田をいれておけば、城島を指名打者で使えたのは、当然。二死三塁、７番の打順に城島が座っていれば、阪神ナインは、恐怖に身を震えることになろうが、現実には、山本和範がいる。

実績知名度十分とはいえ、歴史的ホークス打線に組み込まれるのには、ややパンチ力の弱い山本和範は、何を思って打席に入るのだろうか。

「監督さん、お久しゅうぶりでちゅ」
「お～　ドラ、久しぶりやな～」
　元上司の田淵だけに、あだ名で呼ばれるのも不自然どころか、自然といえるのだが、山本和範は、怪訝な表情を浮かべる。
「田渕さん、ドラいうのは、辞めてくだしゃいよ」
「なんだ、ドラはドラだろ。ドラキュラに似た風貌だから、ドラだろ」
「子どもがいじめられるんです。や～い、お前の父ちゃん、ドラ～いうて。だから、カズ山本に登録名を替えたんでしゅよ、わざわざ」
「お～　そうだった、忘れてた、ついつい、ごめんな、ドラ、悪いな、ドラ、もう二度とドラとは、呼ばんぞ、なあドラ、許してくれ、ドラ」
　と田淵は、度の過ぎる天然ぶりを披露して、さすがの強面山本和範も、田淵にはまいったと、これ以上の深入りを辞めた。
「ところで、ドラ。なんで、お前がこの打順にいるんだ？　たしかに3割打てる打者だし、ホームランだって、２０本近くは打てるが、歴史あるホークス打撃陣の中で、お前が、特に優れてるとも、オレは思わんのだが」
「知りまシェンよ、僕を抜擢した鶴岡監督に聞いてくださいよ」
「城島のが怖かったなあ～。なんで、鶴岡監督は、城島を干したんだろ？　とはいえ、三塁に走者を置くと、城島と同じくらいにお前は怖い。外角の難しいコースをちょこんと左に流せるし、内角投げると、一発もある。選球眼もあるから、ボール球の誘いにも乗らんし、厄介な打者だな」
　物事の本質をことごとく外すことに定評のある田淵であるが、さすが、三年間も監督として、見続けてきた山本和範評に、大きな間違いは見られない。
　田淵の評価どおり、鶴岡が山本和範を高く買った理由は、しぶとさにある。何度も解雇の憂き目にあいながらも、その都度立ち上がってきた不死鳥山本和範は、打撃スタイルにも、人生を投影するの

だ。

しぶとくかつ泥臭い打撃は、それこそ鶴岡の目指す理想の打撃。指名打者城島のカードを切らなかったのは、どうせ打つだけの選手（鶴岡に限らず、当時の野球観からすると、外野の両翼は打つだけの選手）なら、淡白な城島よりも、しぶとい山本和範を起用した方が打線に厚みを出せると踏んだからに他ならない。

「僕もレギュラー起用される理由は、ようわかりましぇん」

本人も驚きの先発起用であるが、山本和範は、鶴岡親分の期待に応える。

「山本和か、オレが阪神の二回目の監督の時、よくオープン戦で当たったから、まあだいたいわかるわ」

されどオープン戦、たかが、オープン戦である。特に、山本和範のように、野球に生活感を漂わせる選手は、オープン戦のデータなど、まったく当てにならないのだ。

物事は、半端に知っているのが、一番、危険とはよく言ったもので、村山も、知ったかぶりの先人たちと同じ末路を辿ることになる。

「ええ打者やが、ものすごくええ打者やない、打ち取れるで」

山本和範を必要以上に軽く見たのが命取りだ。

「ボールや、ボール」

「これも、ボールや、ガッチュ」

ストライクからボールに落とせば、振ってくれる”だろう”で選択したフォーク攻めが、山本和範には、効き目がないのだ。

「あれ、ツーボールやと？　まあええわ、ストライク取ったるわ」

山本和範の技能をなめて、安易にストライクを取りに行った村山は、山本和範のシャープなスイングに地獄の底に落とされることになる。

「チャンスボールや！」

高目に落ちるフォークを、山本和範は、大きく足を上げて、思い切りよく振り抜く。

イチローの出塁能力は案外低い

「しまった、見くびりすぎたか」

村山は、真ん中高目に投じて、初めて後悔する。

「切れろ、切れろ」

長嶋に食らった天覧試合の有名すぎるホームランよろしく、フェアかファウルか、微妙な当たり。もしも、フェアと判定されたら、この先５０年くらいは、あれはファウルやったと村山の恨み節の常套句になりかねない際どい打球であるが、打球は村山の悔恨も、今はやりのビデオ判定も仰がない。

「思い切り叩きすぎてもうたわ」

山本和範が悔いるように、引っ張りすぎた打球は、ポール手前で大きくファウルゾーンに切れていく。

「ドラ、おい三振前のバカ当たりか？　お前にしちゃあ飛ばしすぎだろ、しかし、よう飛ばすな、手塚がよく嘆いてたけど、ドラほど筋力のないスポーツ選手はみたことないそうだ。手塚いうのは、オレが監督時代にダイエーのトレーナーを務めたやつで、漫画あぶさんじゃ、景浦安武の腰の治療を施したことでも知られる奴よ。ちなみに、阪神時代にオレが提唱したうねり打法も、手塚の受け売りよ」

「引退試合のホームラン思い出しまちたよ。あん時も、今みたいに福岡ドームのライトスタンド目がけて、ライナー性のしゅごい当たりを打ったんでちゅから」

山本和範の引退試合といえば、１９９９年、ダイエー初優勝の立役者篠原貴行の無敗記録を打ち破った激弾があまりにも有名だ。

田淵の言葉を引用するまでもなく、大ファウルに酔いしれた打者は、たいてい、よけいな力みが打撃を狂わし、好結果が出ないもの。

しかし、鶴岡監督が大抜擢するように、山本和範は、自分がどんなタイプの打者であるか、熟知している。

「しぶとい打撃……しぶとい打撃……」

山本自身、そう念じるように、一発の魅力に溺れることなく、的確な打撃ができるのだ。

「際どいボールを投げても無駄ですよ、僕、振りましぇんから」

村山ー田淵のバッテリーが、ボール球で誘っても、山本和範は、ピクリともしない。

１９９４年、山本和範は、彗星のごとく現れたイチローの打率・３８５に次いで、二位となる．３１７の高打率を残した。

もしも、イチローの抜擢が一年遅れたら、１９９４年の首位打者は、バントをしない２番打者カズ山本になるはずが、その差、約７分とイチローのすごさを際立たせるだけに終わったのだが、この年のカズ山本の出塁率は、．４２９、イチローの出塁率は、．４４５と、今より重要視される、出塁能力の差は、１分ちょっとしかないのだ。

打率の面で大きく水をあけられたカズ山本が、イチローの出塁能力に匹敵するには、優れた選球眼がなければ不可能。

特に長打力もないカズ山本が、多くの四球を生産するためには、並外れた選球眼が必要となる。

「今のボールでちゅか？　円城寺はん」

山本和範は、際どいコースをセレクトするが、円城寺はストライクをコールする。

フルカウント、打者の心理状態とすると、少々のボール球は振ってしまうものだ。フォアボールの危機に瀕する投手がボール球を投じてくるわけがないからだ。

田淵だって、ありていの打者の心理は読める。ボールくさい球を要求して、山本和範の凡打を誘いにくるが、

「ボール、ボール、ボール！」

山本和範の卓越した選球眼は、際どいコースを選ばせる。

「ドラ、振れよ」

「すんまへん、田渕はん」

山本和範は、バットを投げ捨てて、今にも、踊りそうな勢いで一

塁に向かう。
「もうけ、もうけ。ヒットも四球も出塁は出塁や」
にたにたと笑う山本和範。この泥臭い野球スタイルこそ、鶴岡親分が大抜擢した大きなあ要因である。
「へい、バース、おれんこと覚えてるか？　８６年のあんたも出ておったオールスターでＭＶＰを獲得した山本和範や」
「お～　お～　オーケー、オーケー」
山本和範の日本語が分からなくとも、山本和範の独特な風貌を、バースは忘れてはいない。
「おい佐々木誠、オレを還せよ！　南海ーダイエーを渡り歩いた意地を見せるんや」
ネクストの佐々木誠に、山本和範は上機嫌にエールを送る。
ここまでは、まさに鶴岡野球の理想であるが、鶴岡親分は、を調子に乗りすぎた山本和範の怖さを知らないのだ。
「エへへ……」
必要以上に大きくリードを取る山本和範。８番打者とはいえ、元首位打者で十分に得点の期待のできる佐々木誠だ。
ベンチから当然、複雑なサインは出ず、佐々木誠の打棒に全てを託す場面だ。球場中の視線も打席の佐々木誠と投手の村山に集まり、走者の山本和範に気配りする向きはどこにもない。ただ両軍ナインの中で、一人だけ、山本和範の特性をよく知っている男が、山本和範が妙にそわそわしていることに気づく。　山本和範の上司でもあった田淵だ。
「ふふふ、オレが監督の時も、よう勝手なプレーをしてくれて、オレの頭を抱えさせてくれたもんやが、今日、ついに、ドラの勝手さが、オレを幸せにしてくれる時がきたぞ……」
田淵にしては、珍しい、選手の微妙な動きで、次の状況を予測する頭脳プレー。球団にも、田淵の指導者実績にも何ももたらさなかったと酷評されたダイエー３年間が、ついにここで生きるのか？

一本足打法以外には、予期せぬ出来事

一塁塁上で、しきりに、ガッツポーズを繰り返したあと、山本和範は、大きくリードを取る。チャンス拡大の出塁とはいえ、たかが四球で、これだけ感情を爆発させる選手も珍しい。

「オレの明晰な頭脳をよく悩ましてくれた、ドラの自分勝手な、プレーが、初めて、オレに味方してくれるで」

もそもそと所在なさ気な動きを繰り返す、一塁塁上の山本和範をみて、さすがの鈍い田淵も

ダイエー監督時代3年間の苦い記憶が、山本和範に対する感覚を鋭敏にさせたのか、近い未来を的確に察知する。

「くるぞ、くるぞ……。ドラは、頭脳的な野球もするけど、とんでもない野球もするんだ。それが、オレや根本さんや王さんが、いくら洗い流そうとしても落とせなかった、大阪末期の崩壊してた南海ホークスというぬるま湯に浸かりきった垢だ。打っても、打っても、報道されんから。目立つためなら、何でもするんだ。時に、チーム度外視のプレーをね」

ホークスとタイガースの対決に、残念ながら、南海末期と、ダイエー初期を知る人間はあまり存在しない。

あまりにも弱く、鶴岡南海黄金時代や、王ダイエーの申し子たちに占拠された最強ホークスの面々に食い込めないことは当然。

だから、山本和範のスタンドプレーをよく知るのは、田淵、他、わずかな平和台ホークス関係者に限られる。

今、打席に入る佐々木誠が、その関係者の一人であることは、単なる幸運なのか、鶴岡親分が意図して打線を連続させたのか、定かではないが、とにもかくにも、田淵以外に、自軍の選手、それも打席に立つ選手が、山本和範の特性をよく知るのは、これから起こるであろう未来に、摘便、対処できるはずだ。

「ドラさんのガッツポーズが止まらなくなると、危険信号や」

パの在阪球団出身らしく、豪快なプレースタイルが特徴的な佐々木誠であるが、森西武の王者のエキスも、一年とはいえ、体に浸透させた身、視野広く、グラウンドを見渡せるのだ。

「田渕さん」

「なんだ、佐々木」

「いや、なんでもないですわ」

田淵も佐々木も、気づいた。だからこそ、口数少なく会話を終えるのだ。

いくら、初球打ちがスタイルの佐々木誠とは、いえウエストボールから入る配球に、手を出してはいかない。

それでも佐々木は振らざるを得ない。山本和範が、意味もなくスタートを切っているのだから。

「なんや、なんで、あいつ、盗塁するんや。ワシは、いつそんなサインを出した」

これには、鶴岡親分もびっくりだ。鶴岡野球を知らずして、鶴岡野球を体現できる選手と、山本和範を評価してた鶴岡であるが、自分勝手なプレーに走る山本和範のダメ特性までは、認知してない。

田淵は十分予想して、村山にウエストボールを投げさせたのだ、打者の佐々木も、盗塁死の危険を察知して、どんなボールでも初球スイングを決めていた。

だが、田淵が度胸よく外してくるまでは読みきれなかったらしく、ホークス末期の左打者にありがちな豪快な一本足打法もそこそこのタイミングを崩されたスイングになるが、悪球打ちの資質のある天才打者は、長身田淵が背伸びするほど大きく外れたボールを、本気に当てにいく。

「く」

新沼謙治似の顔を崩してまで、必死に当てにいくが、思いは届かない。中途半端に出したバットは、田淵の送球を邪魔するには十分なものはあったが、田淵捕手の最大の取り柄、日本人離れした強肩までは奪いきれない。

「ドラやられたり」
田淵は得意げに二塁に送球、意気揚々と二塁に走ってきた山本和範は、運気の最高潮にいる自分が刺されるとは、思ってもおらず、スライディングも甘めになるが、二塁ベースカバーに入った遊撃手吉田のグラブが、ベースにたどり着く前に、右足に置かれると、初めて、自分が置かれた惨めな状況に気づく。
「なんだって、どないなこっちゃ！」
山本和範は、ヘルメットが脱げて、薄い頭皮が顕になっても、気にすることなく天を仰ぐ。
「田渕さん、そりゃないですよ、監督時代にホークスにあれだけ迷惑かけたくせに、この試合でも、ホークスの意地悪しますか？」
「お見通しだよ、ドラ」
田淵が珍しく、女房役の吟味を口にする時、ホークスにとって、二死、一塁三塁の同点、逆転のチャンスは、まったくの無に帰る。
「なんや、なんで、走るんや、山本和範のやつめ」
経験たっぷりの鶴岡親分でさえ、予想だにしない、山本和範の身勝手なプレー。
「そうえいば、ＮＨＫの解説で、たまに、門田に取材すると、山本和が、私が打席の時勝手に走るから、打ちにくくてしゃーないですわとようぼやいてたわ。今頃、思い出す、ワシもワシだが、しゃーない。山本和を起用した責任をワシにある。山本だから、盗塁死を生んだ思わず、山本だから粘って四球を奪い取ったと思わな」
予想外の山本和範の暴走でチャンスを逸したホークス。それでも、大エース、杉浦には、動揺のかけらもない。
「ドラさんなら、しょうがないわ」
田淵と同じく、監督として、山本和範を起用してた杉浦だけに、山本のプレースタイルはあらかじめ織り込み済みなのである。
「９番は、あの男ですか……。一発だけに注意……そう、一発だけにね……」
杉浦の銀縁メガネが光る先には、嬉しそうに打席に入る新庄剛志

の姿があったのだ。

「エヘヘヘ、日本シリーズ最終戦以来の打席……ウフフフ……キャッチャーの谷繁さんに、新庄、最後の打席か、ストレートだぞと、球種を教えてもらったんのに三振した以来か。だって、中日の投手の誰やったからな、そうそう中里？　とかいう若い子のボールが速くて、まっすぐくると分かってても、よう打てんかった。ワールドシリーズで１６０キロ投げるエンゼルスのパーシバルとかいう投手と同じ衝撃を受けたもんだ。あの中里って投手、どうなったんだろ？　あれから４年、えらい投手に成長したんだろうな……」

新庄最後の打席は、２０１０年６月現在、中里最後の栄光とも知らず、新庄は４年ぶりの打席を楽しみにして待つ。

途中経過　大矢対三原の前哨戦

恩師三原脩率いる西武ライオンズとの対戦を控えた大矢横浜ベイスターズ監督は、敵地西武ドームに乗り込む。

マスコミを通して、また直接の直前対談を通して、三原マジックに翻弄され続けた大矢であるが、どこか自信たっぷりではないか。なにか対三原に有効な索を発見したか、それとも、単なる開き直りか。無理もない、マスコミ予想は数あれど、横浜の勝ちを予測したメディアは皆無なのだ。

地元メディアの神奈川新聞でさえ、大矢横浜絶対的の苦戦を報じる始末だ。

「なにが西武に勝てる見込みないだよ、やってみないとわからないじゃないか。投手層の厚さが違うって？　しゃらくせい、こっちは大エースの平松政次が先発なんだよ、勝てる見込みができたら、秋山さんに繋いで、最後に大魔神佐々木を送り込む予定なんだよ、投手層の薄さがなんだ、最初に切るカードの豪華さはライオンズにも負けてはいないよ。野手陣の豪華さも違うって？　しゃらくせいやい、石毛、豊田さん、中島、松井稼頭央、みんなショートじゃないの、一人しか出れないんだよ？　清原とカブレラのいる一塁はどうするの？　指名打者に回したくても、そこにはデストラーデがいるんだよ、純粋に実力だけで比較すると、清原がベンチだよ？　あの清原がベンチに座らせて、おとなしくしてると思う？　あのただでさえうるさい豊田さんも、遊撃手争いに破れて、ベンチだよ。豊田さんが清原と徒党を組んで、ぐちぐちとベンチでやりだしたら、こっちのチャンスだよ。こっちは、戦力の重なりさえろくにないんだから。監督の器が違うって？　しゃらくせい、三原さんと僕のなにが違うんだよ。三原さんは、たかが三球団を優勝に導いただけじゃないか、西鉄、大洋を変貌させて日本一にさせただけじゃないか。僕だって、僕だって、僕だってねえ……」

大矢の出所不明の勢いもここでストップすることになる。冷静に考えると、どう見ても、分の悪い戦力比較、投手力、守備力、攻撃力、機動力……どれをとっても西武が横浜を上回る。それでも、ヘボ監督なら駒を持て余し、有能な将なら、劣る戦力を何倍にも見せることができるだろうが、監督の実績の差も歴然としているのだから、大矢は為す術がないはずである。

それでも、なぜか、根拠不明の自信に溢れる大矢、なにが有効な西武攻略の糸口を見つけたのだろうか？

「ふふふふ……」

西武球場特有の長すぎる階段を登る大矢に、謎の微笑み。

「分かったんだよ、分かったんだよ、先発が。今日の先発が」

みなさまはお覚えであろうか、三原が西武開幕投手は絶対に予想できないと、言い切ったことを。ファンに予想の楽しみを与えることにプラスして、相手の動揺を誘う狙いもあるのだが、大矢はすっかりとその策にハマったらしく、戦力分析を半ば、おっぽりだし、先発投手の予想だけに少ない時間を費やしたのである。

「山下大ちゃんとか、斉藤明夫とか、田代とよく話しあったよ、誰が先発に来るかってね」

対策会議のメンバーがアレ過ぎるのは、このさいツッコムのはよして、大矢の予想と根拠を聞いてみよう。

「三原さんって人は奇策が大好きなんだよ。調べてみると、西鉄時代にも、開幕投手に
、エース投手でも主力クラスでもなく、まったくの一軍半投手を先発させたんだよ。僕も名前を調べて、驚いたもんだ。２０勝投手の西村、河村、島原、川崎を差し置いて、通算１０勝もしてない、長坂、太田なる僕も聞いたことのない投手を先発させてるんだもん。だから、僕は、稲尾さんとか、東尾とか、松坂とか、涌井とか、工藤とか、そういう先発してきて当たり前の投手は投げてこないと思う」

と大矢は、さぞ自分が導いた傾向のように語るが、通り一辺倒の

エース投手が開幕投手ではないことは、すでに三原自信が公言済みなのだ。

つまり、大矢は無駄な時間を費やしたことになるのだが、ベイスターズ最高頭脳機関の優秀なるスタッフは、開幕投手予想をより混迷させる。

「でも、明夫がこういうんだよ、監督、三原さんがああいうのは、ひっかけで、蓋を開けてみたら、当たり前の投手が先発するんじゃないかってね、明夫の予想は、松坂大輔だったよ、アメリカ大リーグを神と崇拝する三原さんのような世代は、その大リーグで、頑張ってる松坂を先発させてくるんじゃないかってね。僕は明夫に、もっともだといったもんだ」

だから、三原監督は、エース投手の開幕はないと、あれほど……。

「それで、山下の大ちゃんがさ、なら、稲尾さんで来るんじゃないかと言い出したんだ。なるほど、稲尾さんといえば、三原さんが、一番信用する投手だ、大事な開幕を一番信頼する投手に任せるのは自然、この意見にも、僕は深くうなづいたよ」

ええ、大矢さん、言いにくいんですが、三原さんは、エース投手の開幕はないと……。

「稲尾、松坂の二択となった僕の頭を悩ますように、待ったをかけたのが、田代だった。大矢監督、なら東尾さんでくるんじゃないかってね。東尾は、知っての通り度胸満点、しかも、打者の傾向を調べる役割もできる。なるほどと、僕は田代の意見に膝を打ったね、三原さんは、日本シリーズでも、すっかり衰えた引退寸前の元エース川崎徳次を、相手の出方を探る役目として、開幕に指名したもんだ。東尾の球威は松坂に劣るが、制球はピカイチ。その再現も十分にあると……」

ですから、大矢監督、聞いてます？　三原さんは、言い切ってるんですよ、エース投手の登板はないと。

「だが、僕は見切ったんだ、ベイスターズの優秀なるスタッフにも納得できる意見があったけど、僕の出した見解、今日の先発は、あ

の男だよ、違いない」
　西武球場特有の長い階段を渡りきったその時、大矢の浴びた日差しは、西武ドームの屋根が、太陽本来の光量を、いくぶん遮断したものだった。
「ふふふふ、さあこい、三原脩、さあこい、岸孝之、夜の帝王よ！」
　大矢が見切った西武の開幕先発は、岸孝之であった。ただ、最近の岸の好調ぶりをプロ野球ニュースで見ての岸開幕予想であったが、その岸は、開幕投手の調整に励むことなく、大矢のちょうど頭上、西武ドームのバックネット裏にいた。
「たり〜　ベンチ外の投手は、スコアラー役かよ〜」
　岸は、スコアブック片手に、私服姿で、面倒くさそうに、バックネット裏に座っている。
　調査部隊でも飛ばせば、岸先発の可能性はゼロにできるが、ぬるま湯横浜に、緻密な戦略はない。
「よしこい、岸！　君のカーブのクセはもう見破ったぞ」
　大矢は来るはずがない、岸先発にいまだ備えている。

途中経過　大矢と田辺と山下と田代

大矢の頭を痛めるのは、先発投手だけではない。先発野手も誰が来るのかわからないのだ。

横浜ベイスターズが誇る賢明なスタッフが、西武第二球場に出向き、野手の状態を直前にチェックする。

「問題は、誰がショートの先発ですかね、山下さん」

「そうだよ、田代。第二回ＷＢＣレギュラーで若さが光る中島か、２０世紀ベストナインに選ばれた松井稼頭央か、西武黄金時代を支えた石毛か、それとも、西鉄黄金期の花形、豊田さんか、この４人の誰かだと思うけど」

「甲乙付けがたい、４人ですね」

「うん、横浜に例えると、僕の後釜のサードを銚子や村岡や清水や大野が争ったようなものだよ」

「打力がまったくないが、守備と走力に目をつけて、守備攻撃の役割分担を提唱した近藤貞雄監督が重用した村岡か、守備はそこそこで、２７０程度の打率は残すが、長打力皆無ながらも、法政大の先輩関根監督が起用にこだわった銚子か、前の二人に比べて、本塁打を年間数本打てるパワーが魅力で、須藤監督に抜擢された清水か、それとも、リトルリーグレベルの守備をパワフルな打撃でカバーしようと、大学の先輩古葉さんが、オレを押しのけて開幕起用しても三振ばっかたった大野雄二の争いくらいに甲乙付けがたいレベルですね」

「うん、つまりは、ベイも西武も熾烈な争いをくぐり抜けた選手が、先発起用されることに違いなはないよ」

「そうそう、横浜の戦力が薄いたって、オレと山下さんが控えなんですから。ショートは石井琢朗、サードは、村田修一と、オレらを過去の人にする現役世代がいるのは、横浜の強みですよ」

「うん、それで、僕たちは、彼らのバックアップをすると共に、こ

うして、コーチスタッフの役割にも専念できるからね」
　ネット裏に張り付いて、西武の練習を研究する、田代と山下であったが、グラウンドで繰り広げられるのは、驚きの光景だった。
「なんで、ショートの守備練習に、あの選手が入ってるの？　田代はどう思う？」
「……あの選手誰でしたっけ？　ヒゲが濃くて、ずんぐりむっくりの体型からして、イケメンショートに分類される中島や、松井稼頭央や、豊田さんでも、長身の石毛でもないことは一目で分かりますが」
「えっと、だれだっけ、どっかで見たことのある選手だよ……」
「あ、そうだ、思い出した、田辺ですよ、山下さん！」
「田辺？　田辺って、ノーコンの左腕？」
「違いますよ、それはうちにいた田辺学です！　あの小柄な青ひげの男は、田辺徳雄ですよ！」
「え、田辺って、あの西武黄金時代のレギュラー選手でありながら、ひときわ地味な田辺かい？」
「そうです、その田辺ですよ！　選手食堂で、あまり来ない西武ドームのラーメン、食う時間我慢してまで、こうして見学に来て良かった！」
「いくら、首位打者争いもして、黄金期のレギュラーだっても、先の４人を押しのけて、田辺先発はないと思うけどね～」
「でも、試合前にこうして、他の４人を押しのけて、ノックを受けてるんですよ？　レギュラー起用されない選手に、そんな好待遇させますか？」
「う～ん、田代のいうとおりだ。代行といえど、一軍監督を経験しただけあって、田代も抜け目ない眼を持つようになったねえ～」
「大矢監督に連絡します」
　興奮の面持ちの田代は、携帯を取り出し、早速、大矢に連絡を取る。
「もしもし……おおやか……え？　間違って、ラーメン屋かけちゃ

ったよ……まあいいや、ラーメン屋大至急頼む」
「まったく、田代はいつもラーメンが頭を占めてるんだね、仕方ない、僕から大矢さんに連絡しとくよ……もしもし、大矢監督？　とっておきの西武の情報を入手しました。西武の先発ショートは、田辺です。え？　近鉄、中日と渡り歩き、一年だけ、花開いた投手のですって？　違いますよ、それは、田辺修ですよ！」

※田辺修……１９７０年、つまり、大矢がルーキー時代に一年だけ花開いた投手。（近鉄時代にも規定投球回数に一度だけ達してる）
西本聖ばりに大きく足を上げる独特のフォームを武器に、この年に防御率３位の好成績を残している。当時新人大矢が、田辺といえば、この田辺を思い出すのも無理はない……ことにこの場はしておく。

「とにかく、田辺なんです、田辺が先発ショートなんです！　田辺の分析はしてないはずですから、今からでも当時の資料を洗ってください！　田辺とは、横浜は１９９８年の日本シリーズで対戦してますから、なんなかの資料はあるはずです！」
山下は、大矢にまくしたてて、監督としてはダメすぎるが、コーチとしてはまあまあ有能と評された働きぶりを、今また披露する。
「山下さん、ラーメンきましたよ」
「お～　田代、秋元宏作、稲嶺茂夫、中村武志、ウィット、内藤雄太」
「なんですか、その脈絡の無い選手の列挙は？」
「横浜ベイスターズ歴代の背番号３９、つまり、サンキューだよ」
「あ～なるほど、さすが、山下さん、洒落も冴えてますね」
山下の歓喜の洒落が飛び出し、二人は出前のラーメン屋に舌包みを打つ、一方、グラウンドでは、思わぬやりとりがあった。
猛烈なノックが終り、田辺は、腕を腰につけながら、一休み。
「ふう、西武の練習は二軍のオレにも、厳しいよ。どうせゲームに

出ないのになあ」

つまり、田辺は、一軍選手としてでなく、二軍選手として練習に参加してたのだ。もしも、先の４人のショートに立て続けにトラブルがあったときを見越しての練習。西武らしく、高い危機管理能力の表れであるが、すっかり田辺が先発と思い込んだ、田代と山下のマヌケ元ダメ監督コンビ。

そして、二人の情報提供をすっかりと信じ込んだ監督室の大矢は、田辺攻略にヌカリなしと、西武ショート四天王の分析そっちのけで。探し出した田辺の資料を読みあさる。

「ふふふ、田辺のサプライズ起用で、僕の動揺を誘うつもりでしょうが、三原監督、そうは行きませんよ、あの横浜を二位に導いた名将大矢はお見通しですぞ……」

また策略にはまり、無駄な時間を過ごす大矢であった。

途中経過　開幕6カードの中で、一番、忘れ去られた試合

ヤクルトー日本ハムが一足早く試合を終え、巨人ー近鉄の試合も終了、同時進行のソフトバンクー阪神も順調にイニングを消化し、西武ー横浜、広島ーオリックスの事前情報も流れる中、ただ一つだけ、沈黙を守るカードが存在するのは、ご存知だろうか。

そう、ロッテー中日である。

五輪の大戦犯星野と、契約問題のゴタゴタの真っ最中だったバレンタイン、両監督が激突する注目のカードのはずだったが、星野北京五輪の失態も、星野自信があれはもう笑い話ですわと茶化すように、世間からすっかり忘れ去られ、バレンタインの去就問題も、西村ロッテの思わぬ快進撃で、熱狂的なロッテファンの口からも話題にのぼらなくなっている。

それでも、星野、バレンタインの両監督の個性が、良くも悪くも、際立つのは事実。

「バレンタインには負けれられないよ。バレンタインも、ワシも、ドジャースのラソーダをマイファーザーと尊敬する、兄弟分みたいなもん、兄が弟に負けれられますかい。なに？　バレンタインとは、初対決だって？　そうそう、あいつがロッテの監督最初にやったの１９９５年やろ？　９５年いえば、ワシが華々しく中日の監督に復帰する年やったふぁ、高木守道のおっさんがよけいなことして、一年だけ、任期を伸ばしおった。それで、次のバレンタインは２００４年、つまり、ワシが阪神を優勝させて、勝ち逃げ……いやいや、健康問題で監督を辞めた次の年から、ロッテの監督に返り咲いたんや。つまり、ボビーとは、公式戦は当然として、オープン戦でも顔を合した事ないんだ、平成を代表する監督同士が不思議なことにな……。今日は勝てるかって？　バカヤロー、勝てる気持ちが無くて監督が務まりますかって……はは、それは言いすぎやけど、もちろん、負けませんよ、ロッテには、落合もいるしね、対策はしてきた

かって？　バカモン、ワシは何年、落合の監督やったと思うてんや。5年やぞ、しかも、巨人時代にも対戦しとる、いまさら、落合のデータなど、見んでも、明治大学野球学部出身のワシの頭に入っとるわ」

星野は得意の独演で、バレンタイン、落合に対しての対抗意識を披露するとともに、盛りあがりに欠けるカードに注目を集めようと必死の話題づくり含みのトークを展開する。

一方のバレンタインも星野に負けず劣らずの目立ちたがり屋でショーマンだ。

「お～　日本のみなさん、お久しぶりデース。覚えてますか？　ボビーですよ～」

お得意の愛嬌たっぷりのおどけたトークで、まず自信の存在を再認識させるバレンタイン。

話の話題は当然、今日の試合だけでなく、西村ロッテの快進撃に及ぶ。

「悔しくないデスね～　みな、私とニシムラが育てた選手デスからね～。ニシムラは優秀なヘッドコーチでした。私の野球を間近で学び、そこにニシムラ独自のカラーを加えて、今の快進撃があるのでしょうね～」

と、大人の反応を見せるが、話題がオーダー固定に及ぶと、表情を一転、曇らせる。

「う～ん、オーダー固定ですか？　ニシムラはオーダー固定の野球をしてるのですか～？　う～ん、私の元で、彼は何を学んだのでしょう～　相手の投手やコンディションにあわせて、適時オーダーを変更するのは、現代野球にかかせない戦術だというのに……。故障者が出たらどうするのですか？　経験の少ない選手を起用するハメになりますよ。相手投手が、固定オーダーを見て、投げやすいと感じたらどうするのですか？　試合開始前に負けたも同然ですよ。荻野貴司？　誰ですか？　え、ロッテの今年のドラフトナンバーワンで、快進撃を二番センターとして支えた、快足のニューフェイス？

おーそうですか～」

と、荻野貴司の存在を知らぬと、とぼけるバレンタインであったが、荻野の存在は海の向こうでチェック済み。

「荻野はケガをしたと聞きましたが～」

と、知らぬはずの荻野なる選手の怪我まで、しっかり情報収集しているのだ。

「新人選手の荻野を固定したために起きた怪我じゃないのでしょうか。もし、荻野を摘便、休ませていたら、あのような故障は未然に防げたと思うと残念でたまりませんですね～」

バレンタインは、お得意のオーバーなリアクションを交えつつ、西村ロッテの快進撃を、さらりと貶してみせる。

ところが、そのバレンタインがまさかの快進撃に眉をひそめる西村が、ロッテ野手陣にかかせないピースであるのだから、野球、いや、人生は面白い。

「９番かな、１番かな、２番。ボビーは、いったい、僕をどこの打順に当て込んでくるか、それとも起用しない？　僕が守るセンターには弘田さんもおられるし、ありえないことでもないなあ。僕より小力のある弘田さんを買ったといえば、マスコミの雑音をシャットアウトできるし……」

意趣返しでスタメン落ちも覚悟する西村。だが、現役監督は西村だけではない。そう、あの男が、２０年以上の時を隔て、ロッテに帰ってきたのだ。

「おはよ～　ニシ、元気か？　ってこの前の交流戦でしゃべったばかりだな」

「どうも、落合さん……」

落合博満が、あくびをこらえながら、起きたままのボサボサの髪で、面倒くさそうに登場だ。

バレンタインが、落合を軽視する発言を繰り返した経緯があるだけに、落合とバレンタイン、そして、星野の三人の行動は、マスコミ注視の的なのである。

「おい、ニシ、福嗣と母ちゃんに、千葉のおみやげ買ってこいと頼まれたんだけど、千葉の名物ってなに？　オレ、川崎のロッテしか知らねーから、千葉の特産には詳しくねーだよ」

落合は、バレンタインにも、星野にも挨拶どころか、ひと目も合わさず、ノックを受けるために、内野グラウンドにとぼとぼと走っていく。

星野は、落合の挨拶がないと目くじらを立てることもない。ただ、ひたすらに腕組みしながら、笑いをこらえてる。

「オチ、ボビーか、こりゃ、マスコミ、1番つまらないカードともういわれないだけの名優が勢揃いや……。主演は、このワシ、星野仙一やけどな、フフ……」

漢字ドリルに励む大人は昨今、別に普通

あの２００６年の日本シリーズ以来の真剣勝負の打席となる新庄は、いささかぎこちない動きを繰り返す。

「なんか打席に入るリズムが掴めんわ」

スプレーを、バット一面に吹きかけて、そのスプレー缶を、カッコよく投げて、打席に入る新庄のリズムがどこかおかしい。

「えっと、スプレーかけるやろ？　で、このスプレー缶どうするのよ？」

スプレー缶の処分の仕方が分からず、何秒か考えこんだあげく、新庄は、スプレー缶でなく、バットを捨てて、打席に入ろうとする。

「これでいいんだっけ？」

頭に疑問のマークが、無数に湧き上がるが、新庄はいたって真剣。それでも、スタンドや、守るソフトバンクナインは、新庄特有のパフォーマンスと勘違いする。

新庄のパフォーマンスといえば、数々の喝采を浴びてきたプロ野球界随一のエンタテインメント。が、スプレー缶とバットを間違えた打席に入るパフォーマンスは、いかにも、三流ＣＭや４流４コマ漫画にありがちで、爆発力はない。

引退後のタレント活動の停滞で、新庄の魅せるプレーも落ちたものだと観客席から失笑が渦巻くなか、新庄はスプレー缶片手に打席に入る。

「おい、新庄、もうつっこんでええんか？」

新庄との仲が良好で、２００６年の開幕前に、ヤラセの中傷合戦を繰り広げた野村も、さすがに、新庄の意図不明のパフォーマンスに困り果てた顔をしている。

だが、今の新庄は、パフォーマンスでも何もなく、素のボケなのだから始末が悪い。メジャー時代や、日本ハム時代のどこか、念入りに作りこまれたパフォーマンスの数々と違い、阪神時代の新庄は、

新庄の持つ素の面白さで、周囲の失笑を買うのだ。
例えば、大人になっても、漢字の読み書きができず、漢字ドリルの課題を与えられたことや、年賀状を生まれて初めて出したエピソードなど、どれも、日本ハム時代に見せた映画のタイアップパフォーマンスのような作為的な香りは感じられない。
清々しいほどの天然ぶりである。今、復元された新庄は、阪神時代の新庄なのだから、周囲が対応に困るほどの、でたらめなパフォーマンスを演じても、なんら不思議はないのだ。
「あれ、オレ、スプレー缶持って、打席に入ってる?!」
ようやく気がついた新庄は、急いで、捨てたバットを拾いに戻る。
「いけね、いけん、つい、間違いちゃったよ……」
大ボケに思わず赤くなる新庄を見て、野村は感じ取る。
「なんや、新庄。また、阪神時代の赤ん坊のような脳みそに戻ったんか? ワシも苦労させられたわ、こいつの予想だにせん言動の数々は……。ホークスにとって、しめたものか、それとも、よけい厄介なのか……ハム時代の新庄も、何をしてくるか不気味だったのに、阪神時代の新庄はさらに気味が悪いわ……野村シンキングベースボールは、新庄みたいな、なにも考えてない打者が、一番、対応に困るんや……」
野村は、新庄の勝手流に、ほのかな恐れを抱くが、打たれる恐怖は感じてはいない。
「岡田が新庄を小馬鹿にしてたときは、ちょいとカチンときたもんやが、実際、打席に立つ新庄の立ち姿を見ると、隙だらけやな……。杉浦のような超一流のアンダーハンドを打ち込めるフォームやないわ」
新庄は、後ろに倒れるくらいに、バットを背中にくっつけたあと、構えるときは、逆に先端を極端に体の前に倒す構えがおなじみであるが、確かに、この構え、雄大で見栄えはよろしいかもしれないが、どこか隙だらけであることは否定できない。
内角ついたら、つまりそうで、外角の流れる変化球にはくるくる

回りそうな、いかにも打率・２５０が限度のこの構え、野村が案配扱いするのも無理がない。

だがしかし、新庄は意外性の男なのだ。新庄が通用するわけがないと、酷評まみれのメジャー挑戦もそこそこの成果を収め、もう限界といわれながらも、日本ハム一年目は打率３割に迫る高打率を残したものだ。

「野村さん、杉浦さんってどんな投手なんですか？」

「どんな投手もくそもないわ、新庄。ただの下手投げよ」

「下手投げ？　へえ～それは有益な情報どうも」

いまさら杉浦は下手投げの情報を仕入れた新庄。いかにも手遅れ感はいなめない。

「うわ、めっちゃ速いわ～　なんや、このボール」

しかも、一球目、杉浦の制球ミスの真ん中のストレートに、完全に振り遅れる。

「下手投げでこんな速い人いるの？　オレ初めて見たわ～」

ネクストサークルや、ベンチで新庄はいったい何を見ていたんだとのツッコミも虚しいくらいに、新庄の情報収集回路は、遅れをとっている。

それでも、意外性のかたまり、新庄だ。なにかを起こす、スーパースターだ。

大舞台に強い新庄だ。日本シリーズやワールドシリーズでは、大活躍したではないか……。

えっと、ほら、その、特に思い当たる場面はないが、球宴では二度のＭＶＰに輝いているのではないか。一度目のＭＶＰは、１９９９年の球宴３試合目の地方球場での活躍だ。３試合目の球宴となれば、両軍すでに燃え尽きて、後半戦を頭に入れながらプレーするために、どうも淡白な試合になりがち、新庄の活躍した試合も、ご多分に漏れず、内容がまるでない試合だった。

なら二度目のＭＶＰは？　そう例のホームスチールで獲得した試合だ。なんだ、大舞台で活躍したスーパースターってより、球宴の

しらける隙間をうまい具合に縫った印象を与える。
新庄は本当に大舞台で躍動したのか？　躍動できるスター性を持ち合わせているのか？　それともトリックスターなのか？
その疑問は、この打席で解き明かされようとしている。打てるわけがない杉浦のボールを打ち砕いてこそ、新庄は大舞台に強いスーパースターの冠、偽りなしと証明できるのだ。
「こい」
いつになく、真剣な眼差しで杉浦の２球目を待つ新庄。彼が劇画の主人公なら、ホームランでも、たらないほどの目の光量であるが、新庄が直面するのは現実なのである。
杉浦の華麗なアンダーハンドから繰り出される伸び上がるようなストレート、狙い通りのストレートのはずが、新庄のバットはまるでついていかない。
「うわ、２球目はもっと速いわ！」
バレリーナのようにくるくる回る新庄のその姿に、熱狂的な阪神ファンは、いくら新庄を我慢しても、無様な三振を繰り返してた暗黒の日々を思い出す。
「あかん、新庄が打てるわけない。なんで赤星出さんのや、藤本のアホ監督が。杉浦は新庄みたいな荒っぽい右打者はなんも怖くないんや、赤星みたいなコツコツ当てにくる俊足の左打者のがよほど怖いんや。藤本定義め、野球わかっとんのか、ほんまに」
辛口の阪神ファンは、すでに新庄にダメ出しをし、赤星起用を進言する。阪神ファンにとって、新庄は暗黒時代の象徴、赤星は復興の担い手のイメージなのだから、致し方なしだろうか。
新庄に対する期待感が、パフォーマンスにおいても、プレーにおいても、限りなくゼロに近づいた３球目、なぜか、新庄が微笑を見せるのではないか。
２０００年に打撃の華を咲かしても、なお新庄は追い込まれると一貫の終わりの打者には変りなかった。そんな新庄が、どうして、２－０の絶体絶命のカウントで、微笑を見せれる？

「オレ、わかっちゃった、杉浦投手がなにを投げるか、エヘヘ」

なんと新庄は、配球の読みに限りない自信を持っているのだ。はたして、その根拠とは？　そして、新庄は絶体絶命の大ピンチから、自らを救い、スーパースターの称号を確かなものにすることができるのか。

うつ状態は誰でしょう?

「わかっちゃった、えへへへ……」

なんと、いかにも鋭い読みも、卓越した野球理論も、なにももちあわせてないような新庄が、杉浦が次に投げてくるボールを完全に予測できるという。

はたして、新庄の近未来予測に根拠はあるのか、それとも、当てずっぽうのデタラメなのか。

「杉浦投手が、自分からサイン出してるっしょ? 珍しいな、しかも、捕手は野村さん、オレに配球の大切さをしつこくしつこく、ほんとしつこく、耳にたこができるくらいに、植えつけてた人が捕手なのに、投手主導のサインを出すなんて、槇原さんみたいで珍しいなと(槇原は弱視のため、捕手のサインがマウンド上からよく見えず、自分からサインを出していた。しかし、投手のブロックサインが禁止されたために、槇原は、仕方なしに捕手のサインに配球を委ねる。見やすいサインなど工夫をしたが、それでも、サイン間違いが多発、槇原の成績は、投手のブロックサイン禁止により、徐々に落とすことになる)、1球目から気になって、サインを見てたんだけど……2球目も同じなんよ! 胸、鼻、腰と順番に触った! あれ、もしかして、一球目と同じサインなら、同じ球種くる? ストレートの連投? うそっしょ? マジかいな? 半信半疑やったけど、ほんとにストレートが連続にきて、僕ちゃんわかっちゃった! 杉浦投手が何を投げてくるか! それで、三球目のサイン見たら、これも前の二球と同じ! こりゃ、もうストレート投げてくるといってるもんでしょ!」

新庄の理屈は限りなく正しい。いくら、杉浦ー野村の百戦錬磨のバッテリーでも、打者ごとに、サインを変える工夫があったとしても、一球ごとにサインを変えることはしないはずだ。いくら頭のキレる黄金バッテリーでも、一球ごとにサインを変えていたら、どこ

かで、重大なサインミスをしでかすに違いない。
三球連続、同じサインが出されたら、すなわち新庄が見破ったように、同じ球種がくる可能性が高い。
ストレート。いくら、オーバースイングになりがちで、ストレートに振り遅れる傾向にある新庄とはいえ、3球も同じストレートを投げ込まれれば、目も体もスピードに慣れてくる。
「どこに、ホームラン打っちゃおうかな～　バックスクリーンがいいかな？　左中間にぶち込むのがいいかな？　それよか、どうやって、ダイヤモンド一周しようかな。オレらしく、大はしゃぎしながら、周るんもよし、あえて、ぐっと感情を押し殺して周るんも悪くないな。打って当然みたいな？　感じで」
新庄の都合のいい近未来予測は、ベース一周のやり方までに及ぶ。球種を見破っただけで、ちと大げさに思えるが、スーパースター新庄なら許される。超ポジティブシンキング状態に陥った新庄は、物事を全て、自分有利に推し進めたではないか。
むしろ、新庄にすら見破られた杉浦ー野村のバッテリーの情報機密機能が問題である。投手がサインを出すことは、つまり打者にもろ見えであることを意味する。杉浦ー野村のバッテリーならば、新庄レベルにバレないような緻密なサインのやり取りも可能のはずだ。それでも、ストレートにこだわるのには秘策があるのか？
野村の了承を得た杉浦は、いつもより大きく振りかぶる。新庄のギラつく目に怯えて、少しでも大きなフォームで威力のあるボールを投じないと、やられるとの危機察知能力が瞬時に働いたか。
「ムフフ、スーパースター、スーパーヒーロー、２－０となる決定的な一発。オレ、お立ち台……先制打の金本さん、ごめんなさい……」
ポジティブシンキングは、ついには試合終了後にも及ぶが、新庄の気持ちは打席に十分残っている。確実に来るはずのストレートに立ち向かっていく。
はたして、杉浦の手から放たれたボールは、まっとうなフォーシ

ームの回転、つまり、ストレートだ。
「ほりゃあ～」
新庄は気合の掛け声とともに、待ってましたとフルスイングだ。
「バックスクリーンにゴー！」
……だがしかし、新庄の力みかえったオーバースイングは、杉浦の渾身のストレートを捕えきれない。バットの先端に当てるのが精一杯で、小フライになった飛球は、杉浦の前に弱々しく飛んでいく。
「うっそ～！？　なんで～？！」
打者にとって、最も屈辱的な凡打の仕方は、捕手か、投手かのフライアウトともいわれている。空振り三振のほうが、かえって、振り切ったと清々しい気分でベンチに帰れるものだが、当てに行って小フライは、いかにもカッコ悪い。
アウトと分かっても、一応、一塁に走る姿勢を見せなければならない。小フライの結末を傍観しながら一塁に走るのは、打者にとって屈辱的な刹那であろう。
小フライを捕球した杉浦は、にこりと笑顔を見せてつぶやく。
「９番打者には、分かってても、そのボールで打ちとらないと、エース投手とは、いえません。９番打者に当てられるとは、今日の僕の具合も意外と悪いなあ」
なんと、杉浦は、新庄が感づいたと分かってのあえてのストレート勝負。しかし、新庄を新庄と意識せず、ただの９番打者として、弱打者扱いしていたのだ。
常に主軸を打ち続けた……とまではいかないが、まあ６～７番あたりには収まってた新庄にとって、９番打者扱いされるのは、小フライを打ち上げた事実よりも屈辱的かもしれない。ただの９番打者ではない、阪神７５年の歴史の選ばれた９人の打者の一人であるのに、杉浦は、まるで新庄を、突然変異的に打撃開眼した金子誠のような、ただの９番打者、守備だけの人と、軽く扱ったのだ。
「どうして、なんで、分からん、オレ、スーパースターなのに？」
それにしても、新庄のポジティブシンキングはどうして、実を結

ばなかったのだろうか？

新庄は、全て、自分が思う通りに人生を切り開いたのではないか？　いや新庄が、思い通りの人生を送れるなら、新庄の打率は優に3割を超えてるはずだし、新庄は、あの人は今状態に陥らないはずだ。

売れっ子タレントとして、新庄を見ない日はないくらいに、テレビを賑わせるはずであるが、実際の新庄は、坊主頭で、刑事から逃げ惑う姿しか、お茶の間に届けられない。

つまり、新庄のポジティブシンキングは、結果が必ずしも、出るわけではないのだ。時に、ただの妄想になりがちでも、新庄はポジティブシンキングをする……はずであったが、

「おれ、たいした打者やないんかな～　分かってて、打てんて、分かってて、ピッチャーフライやなんて、恥ずかして、死にたい気分やわ……」

とぼとぼとベンチに帰る新庄は、ありえないほど落ち込んでいる。

そうだ、今の新庄は阪神時代の新庄なのだ。阪神時代の新庄は、時にうつ状態に落ち込み、引退を口にしたこともある。ポジティブシンキングの真逆の一面を見せていたのだ。

「はあ～　ふう～」

ベンチでもしょげる新庄。新庄の打棒には期待をしていない阪神ベンチも、守備の計算はしてるはずだ。守備にも、今のうつ状態が響いたら、新庄自体が大荷物になる危険性も？

熊本県出身のクマさん（小手指のたこ焼き）

「は～　オレ、センスないわ～　打撃もへたくそやし、９番打者なのに、１番打者の真弓さんにつなげる打撃もできんし、は～　やっぱり、オレやなくて、赤星が入った方が、チームとしては良かったかな～」

どんな状況に陥っても、持ち前の明るさを忘れないはずの、新庄がひどく落ち込んでいるではないか。それほど、分かってても。なお打てない自分の技術の拙さに絶望したか、杉浦のボールに場違いの感覚を覚えたか。

肩を落とし、後ろ暗いオーラを纏い、ベンチの隅で小さくなっている新庄を、百戦錬磨の名将藤本定義は見逃さない。

「なんや、新庄、小さくなって。ワシが聞いとった、いつでも明るい陽性のキャラと違うぞ。たった一打席の凡退くらいで、あないにしょげとったら、チームの士気に影響するわ。ワシは、新庄がムードメイカーと聞いたから、技術的欠陥に目をつぶって、あえて起用したのに。ムードメイカーは、ムードメイカーやが、暗くなるムードを作ってどうするんや」

藤本監督の新庄起用の狙いは、純粋な戦力的の換算よりも、新庄特有のキャラのプラスアルファを期待してのものだった。

だが、藤本定義の見聞きしてたイメージとは違い、必ずしも、新庄は、チームを明るく照らす太陽的存在ではないようだ。

自分の成績に一喜一憂して、内に抱え込む姿は、藤本の期待するムードメイカーとは程遠いものがある。守備はまだしも、新庄の攻撃力では、大投手杉浦相手にはいかにも分が悪い。ならば、肩と長打力は、著しく見劣りするが、新庄にはない足技の魅力に、しぶとさを兼ねる赤星憲広の起用が

が、藤本定義の頭を過ぎっても不思議ではない。

「おい、後藤ヘッド。赤星に心の準備をしろというてこい」

藤本監督は、さすがに阪神を二度優勝に導いた将、常にベストのメンバーをグラウンドに送り込むが勝利への近道とする選手起用の常道にぬかりない。

早くも、3回裏の守備から、戦力的マイナスが目立ち始めた新庄に代わり赤星を送り込み、チームに活を入れるつもりだろうか。

「へい」

藤本の命を授かった後藤次男は、ベンチ裏の控え室で、終盤の試合出場に備えて準備運動を欠かさない赤星の元に走る。

安藤統男、中村勝広、金田正泰、若林忠志ら、藤本定義監督を補佐するヘッドコーチ役には、何人もの阪神監督を経験した候補が上がった。多くの候補者の中から、後藤次男が選ばれたのも、意外といえば意外だ。

二度の阪神監督を務めながら、なんと合計した在任期間は、二年。つまり、二度の監督とも、たった一年でその使命を終えたことになる。

一度目の監督は、巨人に次ぐ二位と上々の成績、二度目の監督は、なんと球団史上初の最下位。

天と地ほどの結果に差があったとしても、一度目も、二度目も、たった一年限りに違いはない。これだけ成績の差があっても監督としての評価はぶれることなく一定。

一度目の監督は、吉田か、村山か、どちらの巨大派閥が実験を握るかの闘争の中の暫定政権、二度目の監督は、その吉田と村山の政権が事実上の失敗に終り、なり手が消え失せた中の敗戦処理的の政権。

つまりは、後藤次男を監督として起用する意味は、つなぎ役でしかないのだ。とはいえ、ヘッドコーチの職務は、選手と監督のパイプ役、後藤のように、誰とでも仲隔てなく接することのできる無難な男が向いているのだ。

藤本定義のように経験豊富で、自分だけでも、十分な策略を練れる監督の元のヘッドコーチは、クセのある戦略家よりも、後藤のよ

うな潤滑油的存在が、ある意味適任なのだ。
「おい、赤星」
「なんすか、後藤ヘッドコーチ」
入念な屈伸運動とストレッチを繰り返す赤星は、自分の出番をここ一番の代走に限定した準備をしているのか、バットスイングどころか、バットさえ持っていない。それも当然、投手が打席に立つことのないDH制において、赤星の打席機会の可能性はどうみても皆無。ずらりと並ぶ9人の打者のメンツを見ても、代打赤星も考えづらい。打者赤星はないと見れば、足の手入れにウェートを置くのは当然のことである。
「出番のようやぞ」
「は？　まだ三回ですよ、代走送るのは早すぎやしませんか？」
赤星が疑問の表情で、眉尻を上げても不思議ではない。まさか、赤星より格上の守備力と評価が定まっている新庄に替えて、赤星が守備から試合に入るとは思ってもいないからだ。
「新庄さん、今の打席でどこか痛めたんですか？　後藤ヘッドコーチ」
「ああ、痛めたようやぞ。心いう、野球選手にとって、1番、重要な箇所をな」
「え？」
グラウンド上では、杉浦が相変わらずの快投を演じている。史上最強の一番打者真弓を問題なくなぎ倒すと、二番、吉田の止めを刺そうとしている。
「は〜　ふ〜　へ〜」
試合は滞りなく進行するが、新庄の病も悪化に向かって進行する。赤星の姿が見えても、新庄は目の色を変えることはない。
「赤星？　なんだオレもう交代？　それはそれでいいや、スーパースターのオレより、レッドスターの方がいくらか役に立つやろ……」
新庄のメジャー行きのあと、大きく開いた甲子園のセンターの穴を埋めたのが、赤星だった。歴史は繰り返すのか、今日、この時も、

赤星が新庄の後を引き継ぎ、タイガースに新風を吹かすのか。

呼び出された赤星は、新庄の状態をしきりに気にしている。

「新庄さんのことだ、空振りした際に、どこか痛めたのかな？　僕と違って、バットが背中に巻き付くほどの大きなスイングだから」

赤星は、新庄を横目でちらちら、それでいて、まじまじと見つけるが、どこか痛めた様子は感じ取れない。

「どこも痛そうにしていない。僕も、体が小さくケガの耐えないプレイヤーだったから、どこか怪我すると、出したくなくても、つい表情に出してしまうのは、痛いほど分かるけど、新庄さんには、どこかを痛めた形跡はどこにもない……。背筋をやったようにも見えないし、足首を変な風にひねったようにも思えない。ただ、あるとしたら、心の損傷だ。あの、いつも明るい新庄さんが、どこか覇気がない……何があったんだろう、何を気を落とすことがあるのだろう？　野球人にとって、五体満足の全盛期の体でプレーができるのに……僕なんて、嬉しくてたまらないのに、それが控えで、代走くらいしか出番がないと分かっているのに、それでも笑顔がこぼれてしょうがないのに、どうして、新庄さんは落ち込むんだろう？」

赤星の投げかける疑問に新庄は答えない。ただ赤星を、すがるようなうつろな細目で、じっと見つめているだけだ。

「赤星、お前、試合に出えよ。センスのない身体能力だけのオレよりも役に立つやろ？」

ぶつぶつと鬱々な繰り言をするだけだ。

「なんや、新庄、ワシの作戦も効果なしか」

これには、藤本定義監督も、計算が外れたと首をかしげるしかない。赤星を呼び寄せたのも、新庄を見切ったからではない、ライバル赤星の姿を見せることで、新庄の発奮を促すことが狙いだったのだ。

それが、赤星の姿を見た新庄は、より落ち込むことになったのだ

から、藤本の新庄発奮策は、失敗に終わったとしかいいようにない。

「く、新庄いうのもワケの分からんやっちゃ。これが戦争を切り抜けた選手やなら、競争相手の姿みて、燃えない奴はおらんはずなのに、新庄は、なんや、複雑な思考回路しよってからに」

煮え切らない新庄に苛立つ藤本。決断の期限は迫っている。吉田が粘りの打撃で、杉浦を苦しませてるとはいえ、あと一つのアウトで3回裏に突入することに違いはない。

このうつ状態の新庄を守備につかせたら、いつ致命的なミスをおかしても不思議ではない。外野守備は、球場が拡大した現代野球でさえも、軽視されがちだが、外野守備のミスは致命傷になるのは事実。

内野手が打球をはじいても、走者が一塁に残るだけだが、もしも外野手が打球を後逸したら、それはすなわち、二塁打以上の長打につながり、走者がいたら、一人残らず生還させる大きな傷をチームに負わさせる。

だからこそ、藤本は的確な決断をしなければならないのだ。落ち込んだままの新庄を試合に起用し続けて、精神的回復をじっと待つのか、それとも、すっぱりと見切りをつけて、新庄と遜色ない実力の持ち主赤星をセンターに起用するのか。

スター選手の替りなど存在しない普段のペナントの薄っぺらな戦力構造と違い、この試合のベンチには、いくらでも戦力のストックがあるのだ。

精神的の病にかかった新庄を我慢して起用する理由などどこにもない。日本の監督で初めて、きっちりとした投手ローテーションを構築した柔軟の野球脳の持ち主藤本定義なら、情に偏らない決断が下せるはずだ。

グラウンド上では、打者吉田が微妙な判定に猛抗議をしている。第三次吉田内閣の時に、吉田は、羽織っていたジャンパーを脱いでは腰に巻き付ける、おフランス流の抗議を見せたものだが、打者吉田には、ジャンパーの着用は許されてはいない。

それだから、拍子抜けしたわけではないが、京都人らしいしぶとさが売りの吉田にしては、あっさりと抗議の矛を収める。

3回表の阪神の攻撃は、何事もなくあっさりと終わったように傍からは見えるが、ベンチ内では、決断の時に特有な重苦しい雰囲気が充満していた。

新庄を切るか、切らないか。

藤本は動くか、動かないか。

根が単純である新庄は、苦手な打撃から得意の守備に役割が変わることで、あっさりとうつ状態から抜け出せるのか。

それとも、先輩新庄に気遣って、赤星は、藤本に新庄を起用し続けることを直訴するのか。

「久びさのゲーム、ゲーム……。福岡ドームのセンターは守りがいあるぞ」

いや、社会人出身らしく気遣いのできる赤星であるが、それ以上に赤星は、小さい体にも負ケズ、熾烈な野球サバイバルを勝ち残ってきた図太い精神力の持ち主なのだ。

試合出場のチャンスを、自ら蹴るマネなどしないのだ。

「グラブ、グラブ……どうせ代走だろうと、グラブの手入れを多少怠りがちだったけどこの際しょうがない」

すっかりとゲームに出る気満々の赤星、そして、どうせ試合から降ろされると、ふさぎ込む新庄。

「おい、赤星」

藤本は、改めて、赤星の名前を呼ぶ。

「はい」

赤星は、藤本に説明を受ける前から、全てを理解している。代打よりも、代走よりも、守備から試合に入る方が、リズムを作りやすいことも。

「さすが、藤本監督、ベストな起用方法……」

藤本は、呼び寄せた赤星に、何も言葉を続けない。ただ無言で肩を指さすだけだ。

「肩？　新庄さん、肩やっちゃたのかなあ～　でも打席で肩をやるか？」

「おい、赤星、肩や、肩」

藤本定義は、しきりに、自分の左肩を指差す。赤星は、藤本の行動を、新庄に、なんらかの肩の異変が見つかったことを指し示すと受け取ったが、新庄は知っての通り、右利きだ。左の肩を痛めても、送球には影響ない。守備から赤星が試合に入る理由にならないはずだ。

「肩……ですか？」

訝しげな赤星に藤本は答えのトドメを刺す。

「ちょっと、肩がこったんや、もんでくれんかのう」

「は？　試合中ですよ、監督」

「試合中やからこるんや。こうも拙攻を見せれたらたまらんわ」

「そうですか、監督命令となれば……」

赤星は、絶妙な力加減で藤本の肩を揉み出す。同じ藤本でも、同期入団で一つ年下の藤本敦士の肩なぞ、死んでも揉まない赤星であるが、監督命令、しかも、阪神史上、最も偉いとされる立場にある藤本定義となれば、話は別だ。

縦社会の野球界、上からの命令といっても、これでは単なる小間使い。社会人出身で、ＪＲ時代に車掌を務めたこともある常識人赤星だから、おとなしく命令に服従するが、これが同じ一選手でも、江夏豊のような荒くれ者ならどうなったか。いくら、尊敬してやまない藤本監督とはいえ、選手は、監督の奴隷ではないと、激しく突っぱね、監督批判を繰り返すはずだ。

だが、藤本定義は、なんのために赤星を呼び寄せたのか。初めから、肩もみをさせるために呼んだとは、とうてい思えない。やはり、新庄に替えて、赤星をセンターに起用するために、わざわざ呼び寄せたはずだ。それなのに、赤星は肩もみが終わると、

「赤星、ご苦労さん。終盤のここぞの場面で代走で使うから、裏で、

ワシの肩の次には、ゆっくりお前の体をほぐしておいてくれ」
赤星を用済みと、代走の準備に返してしまうのだ。
一部始終をうつろな目で見守っていた新庄は、赤星の起用がないことに、胸をなで下ろすどころか、余計に落ち込む始末。
「なんで、赤星に交代させてくれんのよ……センスがなくて、野球脳の足りんオレよか、赤星のがよほどチームに役立つプレーができるっしょ？」
新庄は重い腰を上げる。裏の守備につくためだ。いつものようにスキップするような足取りはどこにもなく、重しを引きずる囚人のように、のたのたとグラウンドに向かっていく。
「また選手に情をかけてもうた。監督失格や」
新庄の頼りなさげな後ろ姿を見ながら、藤本はつぶやいた。
「ただ思い踏みとどまったのも情だけやない。ワシが考えに考えたすえに、選び抜いた九人の精鋭を試合の序盤に壊すことができなかったからや。それに、新庄いう男は何かをしでかす男と聞いている。ワシが死んだあとに、プロ入りした男やから、ワシはこやつが何をしでかすかよう分からんが、それが良きにつけ悪しきにつけ、見てみたいんや。とんでもないプレーでもええやないか、プロの野球や、職業野球や。常人離れした男が、予期せねとんでもないプレーを見せる。それも職業野球の醍醐味や」
藤本は、新庄の可能性にかけたのだ。数々のスーパースター伝説の逸話が残る新庄の持っている見えない力に。
ただ藤本は知らない。新庄の大きな調子の波の底は、そう簡単には終わらないことを。つまり、試合中に極限までに落ち込んだ新庄の心は、一試合が終わるまでに治る見込みがまずないことを。
このゲームは、ペナントレースの長丁場ではない。一試合の重みが違う短期決戦だ。
波の底に沈む新庄に、期待を抱くのは、分の悪すぎるギャンブルとしかいえない。合理的な野球を構築し、球界のトップを常に疾走してきた藤本にしては、珍しく負けてもともとの賭けをしたものだ。

ただ、新庄は何かを持った男。分の悪いギャンブルは、当てたときに見返りが大きいものだ。

藤本の勇気ある賭けは、新庄の沈みきった心を揺さぶるだろうか。

三回の裏、１－０、阪神のリード、打者は8番の佐々木誠が打ち直しする。

「山本カズさんが気になって、さっきは、ろくに自分らしいバッティングができんかったけど、おかげで、ちょうど回の先頭、トップバッターの回りになった。超攻撃的一番打者のオレの真骨頂が発揮できる場面や」

盗塁王と首位打者を同時に獲得したたった三人の打者のうちの一人である、佐々木誠。

残りのうちの二人は、続く9番打者の川崎宗則が尊敬してやまないイチローであり、もう一人は、トップに帰って、一番打者の広瀬である。

川崎も最多安打と盗塁王を同時に獲得したイチローと同型の打者。つまり、3人連続で、安打を放つ能力が高く、かつ塁に出したら、厄介な走者に成り代わる打者が出てくるのだ。

バッテリーにしたら、相手にしたくないタイプの打者が続き、普通の捕手ならば対処法に頭を悩ませるものであるが、未来型捕手田淵（田淵の登場で、守備型捕手の時代は終り、打力第一の時代に移り変わるといわれたが、あれから４０年、守備の伴ない捕手は、率先的に他のポジションにコンバートされることに違いはない）は、ヒットの乱打にも、足の恐怖にも怯えない。

「そろそろ7時や、関西と福岡の地上波放送が始まる時間だ。今まで、おっくうおっくうサイン出してたが、見栄えよく、てきぱきとサインを出さんといかんなあ」

気にするのはテレビ映りばかり。はたして、田淵のような前時代的の捕手が、次から次へとオールスター選手が出てくる、このタフな試合のゲームメイクができるだろうか。

「村山さんの調子がイイけど、捕手が田渕さんなら漬け込むすきあるな」

日米にまたがって、リードを批判されるブルペン捕手城島にみ見切られる田淵は、三人の攻撃的トップバッターをどう攻略していくだろうか。

大府高校～亜細亜大学～ＪＲ東日本の経歴なら、普通じゃない人だらけの野球界

ここでクイズ

なぜこの小説はこんなに細かいのか

1　作者の性格

2　試合展開を考えるのが面倒でどうでもいい会話で逃げている。

今日も田淵がオチとなる

安打製造機に俊足の魅力が加わる3人が連続するが、村山ー田淵のバッテリーは、彼ら三人の特徴を細かく分析すれば、この3回を三者凡退に切り抜ける確率は自ずと高くなるはずだ。

佐々木も、川崎も、広瀬も最多安打獲得者に違いはないが、打席が多く回る1～3番打者とはいえ、安打を多く重ねるには、それ相応の打数の犠牲が必要なのだ。

つまり、四球狙いの我慢と慎重な打席を多く積み重ねるよりも、好球必打を信条に、打てるボールなら、少々、ストライクゾーンを外れても、打ちにくい姿勢が必要なのだ。

先頭バッターだから、甘いボールでも見てくると安易な考えを持てば、確実に相手のツボだが、慎重に攻めていけば、それだけ打ち取れる確率が高まるのだ。

バッテリーは、首位打者の威光にも、最多安打が持つ言葉の響きにも、怯えることなく、勇気を持って、配球のセオリーをブチ壊しにかかれば、3人の尖兵を牛耳ることができる。

だがしかし、村山ー田淵のバッテリーは、それに気づいてるだろうか？

同じタイプの三人が続くということに。バッテリー、打者ともども、初球は様子見のセオリーは通用しないことに。

田淵は、初球から、村山の得意のフォークを要求できるか？

それとも、初球攻撃をモットーとする自分には、初球ストレートはないと、あえてフォークを待つ佐々木の裏をかいて、ストレートを待っていない佐々木に、ストレートと分かっても反応できないコースに、ストレートを要求出来るか？

ストレートで入るにしても、フォークで入るにしても、裏の裏をかいて、カーブを投げ込むにも、佐々木の特徴を理解しないと分の悪い勝負としかいいようがない。

はたして、田淵は、佐々木が首位打者を獲得した時の監督。佐々木の初球狙いは、いやというほど見ているはずだ。村山が知らずとも、田淵は理解してるはずだ。

「おい、佐々木、お前、なんで、岡山なのに、南海のファンやったんや。岡山といったら、オレの親友、星野の仙ちゃんみたく、お隣兵庫を本拠地とする阪神のファンか、これまた岡山に隣接する、オレの親友のコージの広島のファン、この2チームのファンが主流で、あとは、全国放送が繰り返されていた、オレがドラフトの時、どうしても入りたかった巨人のファンしかいないはずなのに、なんで、お前、南海ファンなんだ？」

「いいじゃないですか、弱くて、人気のないチームのファンになっても。オレ、ひねくれた所があって、みんなが好きな球団を、どうにも応援できない性格なんですよ」

「そうか、ひねくれもんならしゃーないわ……？、親友の悪口いうのもなんだか、星野もだいぶひねくれてるけど、あいつは主流の阪神ファンだったぞ」

「星野さんは、反権力みたいなのが売りなわりに、ミーハーなところがあるやないすか～。そうでなきゃ、五輪監督で一旗揚げて、巨人の監督の野望を果たそうなんて、思いませんよ……とにかく、オレは、岡山の南海ファンなんです、学校に、NとHの緑の野球帽で通ったほどのね」

「そうか、子どもの頃の趣味嗜好をあれこれ行っても仕方がないな。それで、佐々木、お前、どうして、そんなに初球から打ちに行くんだ？　ストライクは3つまでもあるんだぞ。なにも急がなくても、いいやん」

さすがの田淵といえども、ベンチ横から、3年間、都合１５００打席以上も佐々木の打撃を見守れば、佐々木の特徴を忘れやしない。

「だって、初球が一番、甘いボールが来るでしょ？　2球目、3球目と球を重ねるごとに、厳しいボールが投じられるのが野球の道理。なにも、難しい球が来る確率が高くなるのを待つこともないでしょ、

監督……おっと、こうして打席に立つと、つい昔のくせで……田淵さん……」

「その前向きの姿勢がいいよな～。オレなんて、初球に一番、甘いボールが来ると頭ではわかっていても、２球目、３球目まで待っていれば、もっとホームランに打ちやすいコースにくるんじゃないかと、消極的な考えで、つい見逃しちゃうんだ……」

「あははは……田渕さんらしいといえばらしいですね。ダイエー監督の時も、勝負どころの判断の遅れで、選手も?マークの采配を繰り返し……おっと、こうして打席に入ると、ついササクレだってた昔のクセでダメ監督批判しちゃって……」

「いいんだよ、オレは過去を認めた。ダイエー時代のオレは、お前のいうように、たしかにヘボ監督だった。だが、今はどうかな?あれから２０年、打撃コーチで阪神を優勝させて、ヘッドコーチで、日本を最後の五輪出場に導いた。今のオレなら、的確な采配でどんなヘボチームで優勝させる自信があるのになあ……ＴＢＳの縁で横浜でもいいから、雇ってくれんかな、尾花よりは、ええ采配ふるうで」

「はあ……」

ダイエー監督を、半ば辞めさせられて、２０年。長い時は、田淵に自己認識をさせたと思いきや、根本的な人間性は、そう簡単には変えることはできないのだった。

「ところで、佐々木。初球攻撃に警戒して、ボール球で入るだろ?半端なボール球は、悪球打ちのお前には、逆に好都合。ならば、極端なボール球で入るとする、お前、振るか」

「振りませんね」

「なら、ワンボールだ。２球目いうても、ノーストライク、ワンボールだから、ファーストストライクだ、初球攻撃と一緒。警戒せな、イカンよな。ストライクを取りにいっても、半端なボール球でもダメ、積極打法のお前にはやられる。……となると、やっぱり、明らかなボール球を投げさせないかん。……お前、明らかなボール球、

振るか？」
「振りませんね」
「……ノーストライク、ツーボール。おいおい、ストライク取りにいかんと、いけないカウントじゃないか……お前、このカウントで、誘うボール球振るか？」
「振りませんね」
「……おい、佐々木。積極打法の打者ってどうやって、抑えるんだ」
「知りませんよ、そんなもん……」
弱点を知り尽くしていても、明確な攻略法に辿り着けない田淵であった。

ＢＡＢＩＰ　ファリード

意外や意外、田淵は、こうみえて、古い野球観に埋没しないのだ。３０年ぶりに捕手稼業に復帰するにあたって、田淵は、巷で密かに流行りのセイバーメトリクスを勉強してみたのだ。

数ある斬新的な指標の中で、田淵の心を捉えた二つの事柄は、ＯＰＢとＢＡＢＩＰだ。前者は、英語の略称で小難しく表現しなければ、出塁率である。出塁率をいまさら、詳しく説明するつもりはない。なぜなら、後者のＢＡＢＩＰがまったく聞きなれぬ指標だからだ。

「うふふふ、出塁率がそんなに大事だとは、この年になって気づいたぞ。１９９２年、オレがダイエー監督最後の年に、佐々木は・３２２で首位打者を獲得した、だが選んだ四球は少なく、出塁率は・３６４にしかならん。これでもいい出塁率にかわりはないが、なんとまあ、藤本博史、低打率のイメージが高く、この９２年には、打率・２５３しか残しとらん。だが、出塁率を見るとどうだ？　なんと、・３７４や。首位打者の佐々木を軽く上を行く……。はよ、教えてよ、出塁率のが大事だってさ、オレ、それ当時から知ってれば、もっと勝てたよ、出塁率の高い藤本博史に下位打線なぞ打たせずにさ、もっと上位を打たせれば……ああ……そして、もうひとつ、気がかりな指標がこれ」

ＢＡＢＩＰ＝（被安打－被本塁打）÷（投球回数×２．８＋被安打－被本塁打－奪三振）の計算式で成り立ち、Ｂａｔｔｉｎｇ　Ａｖｅｒａｇｅ　Ｂａｌｌ　ｉｎ　Ｐａｒｋの略語である。

つまりは、投手の三振と四球と被本塁打以外のグラウンド内で起きた打撃結果は、すべてはある一定の確率で安打となるとの決め事で求められた架空の防御率だ。

この計算式で求められた防御率よりも、実際の防御率が良ければ、その投手は、本来の実力よりも運良く抑えていることになり、逆に、

実際の防御率が、この計算式で求められた架空の防御率より悪ければ、その投手は、運悪く本来の実力が数字に反映されないことを示す。

一般的にグラウンド内に飛んだ打球がヒットになる確率は3割といわれている。このグラウンド内打率が、3割よりも高ければ、その打者は運の回りがいいだけで、下回れば、運の回りが悪い打者となる。

つまりは、三振、四球、本塁打の打撃結果のみが、本来の投手と打者の実力で、それ以外の結果はたんなる運に起因するとの、いささか暴力的な指標だ。

例えば、三振が多く、四球や本塁打が少ないにも関わらず、仮定以上の高打率を誇っている選手は、運よくヒットコースに飛んでいるだけで、この指標をもとにすると、そのうちに打率が下がっていくと結論できる。

２０００年の首位打者から一気に打率を落とした金城は、この指標の考え方を取り入れると、運を全て２０００年に出しきり、出がらしの運しか残っていない０１年、０２年は、打球をグラウンド内に飛ばしても、ヒットにならず凡打の山を築くのは、至極当然と言い切っているのだ。

「うふふふ、つまりよ、佐々木も金城と同じタイプや、四球が少なく、グランド内に打球が飛びやすいタイプだ。本塁打さえ飛ばされなければ、ヒットになるのも、凡打になるのも一定の確率だ。１９９２年の首位打者で運を使い果たした佐々木は、たとえバットに打球を当ててもヒットにならんのよ、なぜなら、佐々木の打球がヒットコースに飛んでいく運は９２年にほぼ出しきったんだから。オレが監督の時にヒットになる運を使い果たして、オレが捕手として、マスクをかぶれば、ヒットになる運を使い果たしてるなんて、佐々木よ、なんて、お前は、監督孝行の選手なんよ」

つまりは、積極打法の佐々木の有益な攻略法などなく、真偽不明の新指標に頼り切って、佐々木は打球をグラウンド内に飛ばしても、

ヒットにならないと勝手に決めつけたのだ。
ダイエー監督時代に、ジャネット八田婦人の趣味の占いを選手起用に取り入れたことで、顰蹙を買った田淵らしい考え方だが、あくまでも野球による指標を試合に取り入れた分、以前よりも成長してるとも言える。
「逆に言えば、三振と四球と被本塁打は投手の責任ってことよ。初球に、三振も四球もないから、ほら、村山さん、被本塁打を食らわんように、しっかりと投げてよ。まあ佐々木は、福岡ドームに移転して、本塁打が激減した男だ。この球場で一発を食らう可能性はなかんべいが……」
結局、村山の力頼りで、女房役も果たせない田淵であるが、村山は委細構わず、エネルギッシュに初球を投げ込む。
田淵以上に、佐々木の初球攻撃に警戒した村山は、厳しいフォークを投じる。佐々木は、もちろん、自分本来の打撃を忘れずに、足を高々と上げて、強烈なフルスイングを仕掛けて行く。
佐々木のイメージができないファンに、佐々木の立ち姿を最近の選手で例えると、２００９年まで中日に在籍していた李炳圭が当てはまる。
顔立ちに、長身の佇まい、そして打撃姿勢まで、そっくりなのだ。だが、打撃の冴えは、李炳圭を完全に凌駕する。
佐々木の放てし打球は、福岡ドームの右中間に飛んでいく。
「あれ？　ヒットが出ない目じゃないの？　もしかして、ホームラン？　ホームランは村山さん、投手の責任ですよ」
まるで部外者のように見守る田淵。だが、あわてふためかない田淵のさざ波のような感情は、事を大きくしない。
佐々木の打球は、ライト真弓のグラブにすっぽりと収まる。
「ほらみてみい、オレの計算通りだろ？　佐々木にはヒットになる運がもう残ってないんだよ」
妙に鼻息を荒くする田淵であるが、この先の三振四球本塁打以外の全てを運に起因することは、捕手の仕事放棄とも取れる。

田淵のリードの博打ぶりに気づいたのは、阪神でも、ソフトバンクでもない、第三者の男だった。

試合のない二球団は、今日、休養日。東京のホテルで、この一戦をテレビで見守る男がいた。

「田淵さん、相変わらずやな」

ダルビッシュだ。ケータイ片手に、得意のツイッターでつぶやきながらの観戦。

フォーク、スプリットのどっちも使い分けてるように見える。一種類のフォークしか投げれない僕にとって参考になる　ＲＴ　@ＫａｗａｓａｋＭｕｎｅｎｏｒｉ：　村山投手の投げているのは、フォーク？　スプリット？　試合中、早く教えて、ダルビッシュ

ａｂｏｕｔ　１　ｍｉｎｕｔｅ　ａｇｏ　ｖｉａ　Ｔｗｅｅｔ　Ｄｅｃｋ

ツイッターなう

佐々木さんだ。ダイエー時代の佐々木さんは、小さかったからよく知らないけど、西武時代の佐々木さんは覚えてる。僕の地元大阪ドームで何度か未た。豪快な打撃をする打者って印象。

ａｂｏｕｔ　７ｍｉｎｕｔｅ　ａｇｏ　ｖｉａ　ＴｗｅｅｔＤｅｃｋ

タイガースの捕手の田淵さんは、僕が五輪のチームだったときのコーチだった人。野手担当やったから、あまり関わりなかったけど、人が良さそうなおっちゃんって印象。でもミーティングとか聞いてると、リード面でちょっと不安。ちゃんと筋だった配球できるのかなあ？

ａｂｏｕｔ　６ｍｉｎｕｔｅ　ａｇｏ　ｖｉａ　ＴｗｅｅｔＤｅｃｋ

試合のないダルビッシュはホテルで、他の5試合を楽しんでいた。ちなみに、地上波日本テレビでは、巨人対近鉄。独立ＵＨＦ局の東京ＭＸテレビでは、このソフトバンク対阪神（ソフトバンクが局の資本を持つため、ソフトバンク戦を定期的に放送している）。ＴＶＫ（テレビ神奈川）、テレ玉（テレビ埼玉）は二局同士に、西武対横浜。そして、千葉テレビでは、ロッテ対中日が放送されている。

広島対オリックスを覗き、５試合中４試合をただで見れる環境にあるダルビッシュが、なぜ、あえて、ソフトバンク対阪神を選択したのか？

女性レポーターが実況と独特すぎる放送体制のＭＸテレビ、ソフトバンク戦をあえて、選んだのは、もちろん、この男を応援するためだ。

「いけ、宗さん！」
クールなダルビッシュが思わず声援を送るその先には、頼れる先輩川崎宗則がいた。
「よし、男・川崎宗則、石にかじりついても、出塁してくるでごわす」
珍妙な鹿児島弁をわざと語尾に交え、九州人の意地と誇りを胸に川崎は打席に入る。
一死走者なし、９番川崎に期待されるのは、いかなる形でも塁に出る事。四球でも、ヒットでもない、デッドボールでもいい、エラーを誘う形でもいい。どんな汚い打撃結果になっても、トップバッターにつなぐことが９番打者のたったひとつの役割だ。
「田淵さん、こんちわっす」
「おう、ムネ、久しぶり。とゆうか、あの星野ジャパンのメンバーの若いヤツらで気軽にオレに声をかけてくれるのお前だけだよ。ダルビッシュや涌井、西岡なんて、オレの顔をみると、嫌なやつが来って逃げ出すもん」
「逃げちゃだめですよ、田淵さん。人生っていうのは、逃げちゃ、ハッピーになれませんから」
「はあ？　いきなり、何をいうてるんだ？」
個人的に雇ったカウンセラーのカウンセリングが効きすぎたのか、度の過ぎたポジティブシンキングを披露する川崎。
「人生は前しかないのです。前向きに歩けば、必ず、ハッピーになれるのです。後ろ向きに考えちゃだめですよ、田淵さん」

あ～あ、佐々木さん、捉えたと思ったのに、真弓さんの正面だ。
ａｂｏｕｔ　５ｍｉｎｕｔｅ　ａｇｏ　ｖｉａ　ＴｗｅｅｔＤｅｃｋ

@ｍｅｔｏｒｏｉｄｏＺＥＲＯ　ＲＴ@ｆａｒｉｄｙｕ　ダルビッシュはソフトバンクを応援してるの？

ａｂｏｕｔ　４ｍｉｎｕｔｅ　ａｇｏ　ｖｉａ　ＴｗｅｅｔＤｅｃｋ

違う、僕は、ファイターズの勝利しか考えてない。ただ、一野球ファンとして、いいプレイがみたいだけ。ただ個人的によく知っている川崎さんは応援している。

ａｂｏｕｔ　４ｍｉｎｕｔｅ　ａｇｏ　ｖｉａ　ＴｗｅｅｔＤｅｃｋ

　ここではつぶやけないけど、僕は川崎さんの攻め方を知っている。田淵さん、わかってるかな？　ちょっと心配。。人事なのに（笑）

ａｂｏｕｔ　３ｍｉｎｕｔｅ　ａｇｏ　ｖｉａ　ＴｗｅｅｔＤｅｃｋ

違う、そうじゃない、そこはムネさんが好きな場所。田淵さん、やっぱり、わかってないな～。

ａｂｏｕｔ　２ｍｉｎｕｔｅ　ａｇｏ　ｖｉａ　ＴｗｅｅｔＤｅｃｋ

ＲＴ@Ｔａｂｕｃｈｉ２２　@ｆａｒｉｄｙｕ　おいダルビッシュ、田淵をバカにしたらしょうちせいへんぞ、この羽曳野のクソガキが。

ａｂｏｕｔ　２ｍｉｎｕｔｅ　ａｇｏ　ｖｉａ　ＴｗｅｅｔＤｅｃｋ

僕は田淵さんをバカにはしてない。ただ間違った配球に間違ったといってるだけ。

ａｂｏｕｔ　２ｍｉｎｕｔｅ　ａｇｏ　ｖｉａ　ＴｗｅｅｔＤｅｃｋ

あ、ムネさん、打った〜。センターに抜ける。。。！
ａｂｏｕｔ　１ｍｉｎｕｔｅ　ａｇｏ　ｖｉａ　ＴｗｅｅｔＤｅｃｋ

あ、ショートの吉田さんが捕った！　さすが牛若丸！　ムネさん、走れ！　内野安打なら狙える！
ａｂｏｕｔ　１ｍｉｎｕｔｅ　ａｇｏ　ｖｉａ　ＴｗｅｅｔＤｅｃｋ

あ、ムネさん、頭からいった！　イチローさんに怒られる！
ａｂｏｕｔ　１ｍｉｎｕｔｅ　ａｇｏ　ｖｉａ　ＴｗｅｅｔＤｅｃｋ

ダルビッシュの実況どおり、センター前に抜けると思われた打球を、ショート吉田に俊敏な動きで回り込まれ、外野安打の夢敗れた川崎は、なんとか、内野安打にしようと、禁断のヘッドスライディングを敢行したのだ。

尊敬するイチローが毛嫌いするヘッドスライディング。北京五輪予選で、強烈なダメ出しされて以来、封印してきたはずのヘッドスライディングが、つい我を忘れてか、飛び出してしまったのだ。ｌ

これで一塁がセーフになれば、イチローの更なるダメ出しは免れようが、間一髪、川崎は、アウトのコールに身を沈ませる。

「ああ〜　やってしまった、イチローさんにあとで怒られる〜」

ムネさん、やってしまった。イチローさんに、こってるとやられるぞ〜　僕はちょっと楽しみ（´∀｀）
ａｂｏｕｔ　０ｍｉｎｕｔｅ　ａｇｏ　ｖｉａ　ＴｗｅｅｔＤｅｃｋ

「オリックス戦の試合後に、僕の打席結果をチェックしたイチロー

さんから、矢のようなお叱りの電話が来るぞ～」
　川崎、近い将来の不安に顔面蒼白。イチローのオリックス二軍時代の指導者だった福本豊の「ヘッドスライディング厳禁。手より足のが強いやろ、怪我するだけや」の教えを忠実を守るイチローは、ヘッドスライディングを毛嫌いしているのだ。
「怒るイチローさん、身悶える僕……それもいいかもなあ～　ハッピーかもしれない」
　多少のエムっ気のある川崎宗りんは、イチローの説教さえ楽しみにするのでした。

　あ、一番の広瀬さんもショートゴロだ。しかし、吉田さんは上手いなあ～。取ってから早い。僕にとっての日本一の遊撃手はうちの金子誠さんだったけど、今日から変わるかも。。。
　ａｂｏｕｔ　０ｍｉｎｕｔｅ　ａｇｏ　ｖｉａ　ＴｗｅｅｔＤｅｃｋ

　三回も見事ゼロに抑えた村山。２リーグ分立後、たった一人のシーズン規定投球回数に到達して、防御率０点台は、やはり伊達ではない。
　机上の計算上、この試合村山が投げている間は、ソフトバンクは一点も入れられないのだから。

今牛若丸

守備機会ゼロの新庄は、欝から脱出できず、ベンチに帰る足は遅い。

内野安打の野望を打ち砕かれた川崎は、それでも前向きだ。

結果を出す機会がなかった新庄と、結果を出せるチャンスに恵まれながら、ものに出来なかった川崎。

どっちのプレイヤーに暗い顔が似あうかは分からない。ただ言えることは、野球の神は、汚名返上できる機会と汚名挽回できる機会を、平等に与えるということだ。

新庄はいつまでも落ち込んでいる暇はないし、川崎は、絶望の渦に笑顔で巻き込まれることはない。

結果が出るのだ。試合が終わる、その時、ベンチにいる両軍５０人の選手と首脳陣、監督に等しく、結果が出るのだ。

どんな野球人だって、結果からは逃げ切れるワケがない。新庄と川崎は、その時、今と同じテンションを保っていられるかどうか。それは、序盤を終えた４回では、誰も分からない。

遊撃の定位置に向かいながら、川崎は妄想する。

「怒られる。イチローさんに怒られる。ヘッドスライディングはあれだけやるなといっただろ、ムネ！　ひい～ゴメンなさい、イチローさん。結果が欲しくなってつい、頭からいってしまいましたと弁明する僕。それでも、イチローさんは納得できず、僕を責めたてる。カレーを食べるのも忘れて……」

川崎は、思わず、福岡ドームの曇り気味の銀色の屋根を見上げる。

「嬉しい未来、イチローさんに怒られながらも、世界のイチローさんを、一時、独占できる僕、宗りん……はあ～　それも幸せ、内野安打にならずとも幸せは訪れる……」

やばいぐらいに前向きな川崎。だが、ヘッドスライディングに囚

われの身となった川崎は、グラウンド上で起きたある出来事を見逃したのだ。

ショート、吉田義男の名人芸。コンクリートの上で守っているに等しい人工芝では、ろくな守備ができないないと日ごろ、公言してやまない吉田であるが、ザ・人工芝といえる福岡ドームのグラウンドにおいても、見事な守備を繰り返したのだ。

センター前に抜けると誰もが思った打球に、俊敏な動きで追いつくと、小柄ながら強靭な足腰を利して、迅速な送球体勢に移行。川崎、広瀬の内野安打製造機を、見事、一塁ベース上で殺したのだ。

吉田さんの守備は、僕が子どもの頃に読んだ本のまま！　捕ってから投げるのが早い！

ａｂｏｕｔ　４　ｍｉｎｕｔｅ　ａｇｏ　ｖｉａ　ＴｗｅｔＤｅｃｋ

ダルビッシュも絶賛したように、吉田の守備技術は、５０年たっても、遊撃手の教科書となりうる。目の前に生きた教材が躍動しているというのに、同じ遊撃手の川崎はどうだ。

自分の打席でのショートゴロは仕方ない。全力疾走の最中に、吉田の動きを盗みとれというのもおかし。だが、続く広瀬の打席での吉田の動きを川崎は、じっくりと観察し、自分の技術として吸収するべきだった。

イチローとの淡い未来に胸いっぱいの川崎は、吉田のプレーを見逃したのだ。尊敬するイチローが、このことを知ったら、また説教の材料が増えるだろう。

同じタイプの選手のプレーは、目をさらにしてみろとは、いかにもイチローの流儀にそっている。

野球選手としての日々是学習を怠った川崎には、それ相当の報いが待ち受けている。

しかし、阪神ベンチのギクシャクぶりは、吉田の見事な技術も埋没するほどにひどい。

なんと、投手の村山が、吉田のプレーに感謝の意を捧げるどころか、

「あんなん、さばけて、当然や」

とナインの誰にでも聞こえる声で、吉田をくさすから、さあ大変。どんなプレーを、共存共栄につながらない、吉田派と村山派の二大派閥の長。

「僕は、村山を助けようとか、そういう気持ちは毛頭ありません。僕は、自分ができるプレーしただけですから……グへへ、ぐへ」

吉田も吉田。村山と顔を合わせず、ベンチに戻る。二大ミスタータイガースのかみ合わない言動に、ベンチはさそかじしらけムード……のはずが、これがどうして、当然と受け入れているのだ。

お家騒動の耐えない阪神にとって、選手間のいざこざは日常茶飯事。

現に、新たな火種がくすぶり出している。

「なんや、新庄、また正座させたろか？」

それまでじっとしていた藤田平が、天敵、新庄の様子がおかしいと噛み付いてきたのだ。

藤田平といえば、新庄が引退騒動を巻き起こした時の監督であり、原因。

「はあ……はあ……やっぱ、あの時辞めた方が良かったかな～　そうすれば、阪神のベストナインに選ばれんと、恥かく必要もなかったのに……」

落ち込む新庄。新庄に臨席する今岡の呆けた顔。

殺伐としたベンチは、いつ何時でも、関西のマスコミに格好のネタを提供する。

ポロリ、ピッコロ、じゃじゃ丸

３番バース、４番藤村兄、５番掛布。左、右、左のジグザグクリーンナップが杉浦を不安の渦に叩き込む。

たかが一点差とはいえ、相手投手は、ミスターゼロの村山だ。これ以上の失点は、すなわち致命傷につながる。杉浦は一発を極力避けつつ、慎重な投球が要求されるが、逃げてばかりでは、いたずらに走者を貯めるだけ。

慎重かつ大胆な投球術で、打線のつながりを分担しなければならない。

だが、杉浦の投球術に重荷になるプレイヤーがいる。

打撃の結果に気を取られて、守備姿勢のベストを尽くしていない遊撃川崎だ。ゴールデングラブ受賞経験ありの川崎だが、守備力の評価はそこまで高値を維持しない。

軽快な動きでゴロにおいつくが、遊撃手にしたらあまり強くない肩と、危なっかしい捕球技術が、川崎の守備の評価を地に落とす。

それでも万全の準備を怠らなければ、川崎の守備は、穴をさらすことなく、無難に流れるのだが。

「バースは打球は強烈やが足は遅い。内野を全体的に後ろにさせろ」

鶴岡監督の指示を受けて、蔭山ヘッドコーチは、ジェスチャーとブロックサインで、緻密に守備位置を動かす。

広角に長打を打てるバースを警戒して、外野陣は全体的に深め、一方の内野陣は、バースに内野安打はないと、強打に備えて、これまた深めの守備位置に移動させる。

サード小久保とセカンド井口は、蔭山の指示どおりの守備位置に動くが、今のヘッドスライディング解禁で起きるだろう未来に頭が上の空の川崎は、蔭山の指示を見逃してしまう。

川崎のサイン見落としに気づいたキャプテン小久保は、

「ムネ、下がれいうてるぞ」

川崎に声をかけるが、小久保のキャプテンシーあふれるフォローも、上の空の川崎の耳を通り過ぎていく。

はたして、準備を怠る川崎の前に打球は飛ぶ。川崎が野球の女神に溺愛されているなら、いくらショートのボールが飛ぶ確率が高いとはいえ、打球はそう簡単には飛ばないはずが、二度のサイン見落としは、野球の女神を呆れさせたようだ。

「あ、打球が飛んできた」

流し打ちとは思えないバースの強打は、ショート正面のゴロとはいえ、尋常ではない打球スピードと回転を伴なう。

それでも万全の準備を怠らなければ、川崎の守備は、穴をさらすことなく、無難に流れるのだが。

「よっしゃ！　かっこよくさばこう！」

勢いよく前に出てきた川崎。だが、事前確認を怠った川崎には、バースの鈍足が頭から抜け落ちている。

なにも勢いよく飛び出さなくても、落ち着いて投げれば、十分間に合うはずなのに、川崎は急ぐ。そして、通常の守備位置から飛び出した川崎の勢いのよさは、バースの打球の威力を、カウンター的により高めることになる。

バースの打球の勢いを吸収するどころか、倍増させた川崎のよけいな元気のよさは、川崎のグラブから、大きく打球をそらす事になる。

「おい、ムネ、慌てるな」

思わず小久保は叫ぶが、この叫びが余計な一言となり川崎の体をガチガチに固まらせる。

守備位置確認の掛け声をスルーした川崎の両耳は、神ファン怒号混じりの中でさえ、小久保の一声を届けるのだから皮肉なものだ。

慌てるなといわれたら、慌ててしまうのが人間の道理。西本監督の高目に手を出すなのアドバイスで、より高目を意識して、とんでもないボール球に手を出した近鉄打者陣を例に出すこともないだろう。

「あ」

余計な一言により、余計な力を入れてしまった川崎の指先は、微妙な感覚を失わさせ、川崎の送球を高目に浮かせる。

伸び上がるように川崎の送球を捕球しにいく一塁松中の奮闘むなしく、川崎の送球はとんでもない悪送球となり、内野安打のないはずのバースを一塁に残すことになる。

「うっそ～　やっちゃった～」

思わず舌を出す川崎。

「イチローさんに怒られる……かな？　イチローさんはライトの人だし、僕、ショートでだし。どっちかっていうとヤクルトの宮本さんにダメ出しをくらいそうなプレーだな～」

ヤクルトの宮本も、今日はゲームなく、テレビ観戦をしているはずだ。ショートの神様吉田とＷＢＣ、五輪で何度もチームメイトになった川崎の共演だ。

宮本は、５試合の中から、この試合に注目しているはず。内野手の最高峰に位置する宮本なら、テレビ画面上からも、川崎の犯した準備不足の罪を断罪できるはずだが。

東京は宮本の自宅。たしかに、宮本の見つめるテレビ画面には、このソフトバンクと阪神の一戦が流されていたが、

「なんやこのアナウンサー、ショートの川崎に飛んだゴロなのに、セカンドゴロいうたぞ……さっきから間違いばかりだし、なんでＭＸテレビは、女性アナを使ってるんや？」

ＭＸテレビ名物の女性リポーターのとんでも実況に、視聴、聴覚、思考を囚われ、川崎のプレーを論じることもできないようだ。

併殺コースに引っ掛けろ

ミスを犯したら、ただちに反省をする必要がある。準備を怠ったという、プロのベースボールプレイヤーとして、一番やってはいけないミスを犯したとしても、ミスに慌て不貯めることなく自分を顧みることができれば、川崎は救われただろうに。

「ヤクルトと日本ハムがノーゲームだ。宮本さんが見てるかも知れないし、ダルビッシュにさっそく、川崎さんがミスしたと、嬉しそうにつぶやかれたかもしれないし、青木くんが女子アナの嫁と一緒に、僕のエラーをせせら笑っているかもしれない」

川崎の頭の中には、二度と同じミスをしないために何をすればいいのか、前向きな思考はなく、ただ、このミスをどう咎められるしかないのだ。

だから、川崎は、また同じことを繰り返す。

杉浦は冷静なマスクを崩さす、初代ミスタータイガース４番藤村富美男に立ち向かった。

杉浦の計算は以下の通り。

物干し竿の長いバットを逆手にとり、杉浦得意の右打者の外角に大きく逃げるカーブを、バットの先端に引掛させ、併殺網にかける……。制球とカーブのキレに絶対の自信のある杉浦は、かなりの確信を持って、カーブ攻めを断行する。

藤村富美男を三振に打ち取るのに、あきたらず、一石二鳥の併殺狙いの、欲張りな投球術。杉浦の研ぎ澄まされた精神力と、走者を二塁に進めようと、殊勲にも右打ちをしようとする藤村の打撃姿勢が重なり、作戦は完全に実現するはずだった。

二塁ゴロ、セカンドの井口が待ち構えるように捕球して、そのまま二塁ベースカバーに入るショートの川崎に、トスをする。

４－６－３の理想的な併殺コースであるが、ここでも、また川崎はミスを繰り返す。

守備に多少の問題ありとの風評の流れる川崎であるが、連続に凡ミスするほど、川崎の野球技術は低くない。

それでも、ミスにミスを重ねるのだから、今の川崎がいかに、野球の女神から疎まれていることが分かるだろう。

「あ、しまった」

なんでもない井口のトスを川崎はポロリとこぼしてしまう。それでも一塁走者は鈍足のバースだ。

慌てなければ、十分間に合うはずであるが、ここでも準備の足りない川崎はミスにミスを重ねてしまう。

もしも、打球が飛ぶ前に、川崎の頭の中でシュミレートが完了していれば、ミスを犯したとしても、最善の切り返しができたのだろうが、知っての通り、藤村の打席の間、川崎の頭の中に渦巻いていたのは、仲間うちに、エラーをどういじられるかだ。

捕球に失敗しても、バースなら十分に間に合うと事前のシュミレートができていれば、川崎は、こぼれたボールを拾うや否や、二塁ベースに駆け込み、そのままの勢いで一塁に送球して併殺狙いの野望を途切らせないはずであるが、今の川崎には、落ち着きはなく、あわてふためいている。

「ひとつでもアウトを稼がないと」

ふたつのアウトを一挙に取れるチャンスが残っていたのにも関わらず、状況が見えない川崎は、一塁に送球してしまう。

右打者であまり足が早くない藤村は悠々のアウト。一見、最悪のオールセーフの恐怖をまぬがれ一安心のようにみえるが、取れるはずのふたつのアウトを逃したショックがはるかに上をいく。

「ワンナウト〜　ワンナウト〜」

川崎が、右手の指を突き出し、持ち前の元気のよさで、アウトカウントをひとつ増えたことをアピールするが、川崎のミスで失ったみっつのアウトの前に、なにか空々しさをホークスナインに蔓延させる。

南海派の多くは、もともと川崎のショートスタメン起用を快く思

っていなかったのだ。ホークスには、なんといってもセの吉田義男と並び称された、パの名ショート木塚忠助がいる。

福岡ドームの人工芝に慣れていない木塚とはいえ、ミスがミス。木塚ならイージーにさばいていたと南海派の関係者に思わせるのには十分なものがあった。

「なにが、ムネリンや。なにが、ＷＢＣの正遊撃手や。わしらの木塚が上やないか。鶴岡親分は、なにを九州のホークスの連中に顔立てしてるんや。鶴岡親分の実力主義からいうと、木塚スタメンが当然やないか」

松中、井口、小久保、川崎とスタメン内野陣は全て、九州のホークス勢。つまりは、１００万ドルの内野陣と評された南海ホークス黄金期の内野陣は全員、ベンチに押し込められていることになるのだ。

一塁手の飯田徳治、二塁手の岡本伊三美、遊撃手の木塚忠助……。ベンチに控える黄金の内野陣は不平分子と化すのか。それとも、１００万ドルの内野陣の残り一人の三塁手であった、ヘッドコーチ蔭山と監督鶴岡が、不満を抑えながら、ベンチワークに冴えを見せるのか。

「」

全ては川崎の精彩次第だ。川崎の頭の中がよそに向き続ければ、もともと真っ二つに割れていた南海派と九州派の亀裂は修復不可能のレベルに達する。

イチローいわく葛城育郎の守備は田舎のラーメン

掛布を打ちとっても、一息つく暇もなく、さらなる強打者が、杉浦に襲いかかる。同じ左の金本だ。一打席目、凡打に終わったが先制点となる打点を稼いだ金本は、気分を良くしている。

未知の強豪、杉浦の分析も一打席目と立ち上がりの投球で解析終了。

「今度はヒットつきの打点を稼がんと、新井に威張れんわ。金本お兄ちゃん、ゴロの打点1で満足なの？　いわれてからかわれるわ」

二死二塁、チーム打撃の入り込む余地はない。ただ、自らの打撃を信じ、打席に立つのみだ。

金本の集中力が、高まる証明として、打席で構えたときのバットの先端の揺れが、通常よりも小刻みに早いのだ。

それは、金本の心臓の鼓動が、より早くリズムを刻むのを表しているようだ。

杉浦も負けてはいない。金本との対決は投球する前から始まっている。名うてのスナイパーのように、ギラつく眼をする金本に、杉浦はひるむことはない。

メガネの奥底の両目が、金本を捉えてはなさない。

勝負の機運は否が応でも高まるが、水を刺したのは、誰であろう、杉浦の頼れる味方だった。

ホークスベンチの黒田正宏バッテリーコーチが立ち上がり、右手で一塁ベースを指さしながら、逆の手で4本指を立てる。

一塁ベースは空いている、金本を歩かせろの指示だ。バッテリーコーチの黒田といえば、野村が兼任監督をしてたときに入団した南海の捕手。しかも、数少ない、ガチガチの野村派だ。その元部下であり、野村派の構成員である黒田に指示を受けるのだから、捕手野村の気持ちも微妙だ。

「なんでオレが黒田に指示をうけないけないの。金本を歩かすかど

うかは、オレが決める」
　自ら、コーチ兼任を断り、一捕手の道を選んだ野村とはいえ、本来配下である黒田に操られるのは、気分がよろしくないようだ。
「ふん、オレが決めたるで……金本はやっぱ歩かしやな、一塁は空いてるし、次は穴が多い田淵や。どっちと勝負したほうが、このイニング、ゼロで終わるか、火を見るより明らかや……」
　結局、野村は、愛弟子黒田と同じ選択をするのだ。
「ゲヘヘヘ、黒田が偉いんやない。オレの教育が正しいから、黒田がオレと同じを選択をする。それだけのことよ、グヘヘ」
　ただ金本との勝負を避けるといっても、野村は立ち上がることはない。誰が見ても分かる経験は、いたずらに阪神ファンや、次打者田淵のプライドをくすぐるだけだからだ。
　なにもわざわざ、こちら側から、相手の雰囲気に火をつけることはない。野村は、腰をおろしながら、金本を避けることで、勝負が起伏なく流れる状況を作り出す。
　初球、２球目が、外に外れ事で、金本は自分を歩かせに掛かっていることを認識する。
「なんや、オレ歩かしかいな」
　敬遠気味の四球に慣れっこの金本であるが、この試合は、いつもの試合と事情が違いすぎる。金本を避けても、後ろにとんでもない打者がいくらでも続くからだ。
「オレを避けて、新井や今岡や葛城育郎が出てくるペナントの試合と違いますよ。。金太郎飴みたく、同じ実力の打者が続くのが、この大試合……」
　続く打者は、金本よりも脆さがあるとはいえ、格は上の田淵だ。金本のいうように、金本を避けたあとに、・２５０、年間ホームラン数本が精一杯の葛城が出てきたら、どれだけ楽なことか。
　杉浦ー野村は、色気を出して、臭いコースで誘うが、金本は一見魅惑的なお誘いを断る頭脳の持ち主だ。真面目に野球に取り組む金本なら、しつこい谷町の誘いも断り、体調を管理することができる

のだ。

「四球貰い～」

結局、カウント、ワンスリーから投げ込まれた外のシュートも外れ、金本は、予定通り、一塁に歩く。

「オレの後ろが、頼りない新井さんなら、少々のボール球でも強引に打ちにいくところやが、今日のオレの後ろは田淵さんや。もらえる四球はもらって、一挙、田淵さんの３ランで試合を決める。それがオレの役割や」

思えば、金本は後続の打者のプロテクトに恵まれていない野球人生を歩んできたのだ。

阪神移籍当初、３番を打っていたころは、４番はつなぎの４番と一見聞こえのいいキーワードで、桧山や浜中が入っていたが、あわせても２７０、２０本がせいぜいの打者であり、４番に座り続けたら、１４７打点と常識外の打点を稼いだ２００５年の今岡以外はろくな５番打者がいないのだ。

０５年に全ての運を使い果たした今岡、金本の後に座るととにかく力む新井（かといって、金本の前を打たすと、金本を頼り甘えが出るのが新井の性格）。気がつくと５番に座っていた葛城など、金本との勝負を避けて当たり前のメンツが並ぶ。

それだけに、後ろに田淵や岡田が控える、このシュチュエーションは金本にとって日ごろ背負う肩の重荷を下ろせる試合なのだ。

いつもの試合なら４番金本の打席結果にすべての試合の流れは押し掛かるが、この試合においては金本は単なる有能な駒でしかない。金本が決めなくても、いくらでも頼れる打者がいるからだ。

「この感じ、まるで広島の黄金時代のようや。オレがいて、野村謙二郎さんがいて、江藤がいて、前田がいて、緒方がいて、正田さんがまだいて、西山さんが時に頼りになって、ロペスがいた頃がこんな感じやった。オレが打たんでも、他の誰かが打ってくれたものや」

思い出すのは広島時代のことばかりと、阪神に選ばれて、阪神のために試合に出ている金本にしては、いささか配慮にかけるのだが、

それにしても、金本が広島にいた時代を黄金時代と称するのはいかがなものか。

野村、緒方、前田、江藤、金本、綺羅星のごとく生え抜きの三拍子揃った高選手が並ぶのは、いかにもまぶしいが、このメンツを持ってしてでも一度の優勝も果たせなかったのは、何が原因であろうか。

「この阪神のオーダーも素晴らしいが、オレはあの当時の広島打線に軍配を上げる。７５年のオールスターより、一時代を切り取った打線のが魅力的いうのもおかしなもんやな」

だが、その広島が優勝できなったのは何故か？

「あのメンバーで一度でも優勝してたら、野球の歴史は変わってたはずや。オレもＦＡせんとこの場所にいなかったはずや。今頃、山本浩二さんの隣で、マツダスタジアムのレフトを守ってるはずや。あ～優勝したかったのう……」

広島への断ち切れる思いは、いつまでも金本の心を締め付ける。

それはそうと、田淵を頼りにした金本であるが、田淵なる打者はそれほど頼りになる打者だったろうか。

「一発打っちゃうもんね。バカにしないでよ」

鼻息荒く、一発狙いを公言する田淵に。過度の期待をかける金本はいかがなものか。

話の都合次第でどんどんコーチは増えていく

田淵が、水島新司や梶原一騎原作が書きそうな好意的な自伝漫画の主人公なら、田淵のプライドをいたずらに刺激するこの場面、特大の一発を見舞って、ホークスの作戦を嘲り笑うはずだが、もしも、田淵が、ギャグ漫画の主人公、タブチくんだとしたら、この場面は、力みかえった挙句、惨めな三振というオチが待ち受けてるだろう。

はたして、どちらの田淵が顔をののぞかせるか。川崎が繰り返した三度のミスを致命的にさせるか、それとも川崎がミスを繰り返しても、点は与えないと、逆に川崎にラッキーボーイのイメージを植え付けることになるか。

全ては田淵の狙い次第だ。

激動のダイエー一年目を後半の躍進で、翌年に大いに望みありの印象も持たせたまま監督を勇退した杉浦。そして、上がり目のダイエーを受け継ぎ、見事にぶち壊した田淵。

様々な因縁が絡み合う中、田淵はこの試合の勝負の起伏の打席に立つ。

「一発打っちゃうもんね」

いきり立つ田淵の気勢をそぐように、ベンチから飛び出したのは、ブレイザー作戦コーチだ。

「なんだ、ブレイザー、オレになんか文句でもあるの?」

ブレイザーと田淵といえば、ここにもいろいろな因縁が絡み合っている。ブレイザーといえば、田淵を阪神から追い出した張本人なのだ。

守りとスピード野球を掲げたブレイザー新監督は、守れない、走れない、たまに打つの田淵を就任早々、戦力外の烙印を押したのだ。

ブレイザーの意向でなく、新生西武のたっての頼みのトレードと強調されても田淵は納得いなかい。監督が変わって放出されたならば、誰の意向が働いた結果か、一目瞭然だからだ。そのブレイザー

が急に飛び出してきたのだから、田淵は怪訝な表情を浮かべて当然である。

しかも、投手コーチ、監督、あるいはバッテリーコーチ以外の首脳陣が守りの時、便ｃｈから飛び出すのは稀とくれば、田淵の心の動揺もより強くなる。

「ブレイザーがいったい何のようよ。あの外人、なに？　なんのコーチ？　阪神も南海も結局優勝させれなかったくせになにをでかい顔してるのよ。優勝経験のない監督のいうことなんて説得力なくて、誰も耳を貸さないよ。あ、オレもそうか」

田淵が自虐するが、田淵のいうことにも一理ある。ブレイザーが飛び出した理由がないからだ。作戦コーチのブレイザーが守りの時に授けられる戦術は、さほど多くのレパートリーが思い浮かばない。配球はバッテリーコーチや投手コーチの権限であるし、誰と勝負するかは、監督の裁量だ。守備位置の変更は、内外野のそれぞれの守備の担当が指示をするものである。

ならば、なぜ、ブレイザーはベンチを飛び出したのか？

いきなりわいてでたこのゲーム、最大の謎。

ブレイザーはラインの外で、捕手野村を呼び出し、市原通訳（ダイエー・中日・近鉄に在籍していた控えの内野手市原圭の実父。あぶさんの古い巻で詳しい）を通して、なにやらヒソヒソ話。

「なにを話すことあるんだ、ブレイザーごときが知っているオレの弱点なんて、ノムさんはとっくに知ってることだろ？」

疑心暗鬼に陥る田淵。ブレイザーの口の動きで読心術……といきたいところだが、

「……ア、……ヴぇ？　口の動きで何のアルファベットか分かるが、つなげてみても何の単語か分からんわ」

法政大学野球学部の田淵の頭脳では、読心術をもってしても、ブレイザーの話す内容が分からないのだ。

しかし、兼任監督時代、コーチのブレイザーに采配を半ば任せた野村といえど、いまさら、ブレイザーの教えを乞う、野球のイロハ

があるものだろうか。
　ここに第二の謎が生じる。あの自分の野球理論こそが世界一と思っている野村が聞き耳立てるブレイザーの戦術とはいかなるものか。田淵を絶対的にしとめる確信を秘める革新的な戦術なのか。通算打率2割6分台の田淵をゼロ割打者に貶める有効な戦術なのか。
　ずいぶんと長い間、話し合いが行われて、野村、市原、ブレイザーの三者会談は終了を見た。
「なんだい、そんなにオレの攻略に時間をかけてくれるの？　そりゃオレ阪神で一番怖い打者だからそれくらい当然だけど」
　一番怖い打者が7番に置かれる確率はかなり低い。それこそナゴヤ球場最後の年の中日大豊か。いやあの時の大豊でさえ、前の打順の6番には突如花開いた山崎武司が座っていた。
　つまり7番に一番怖い打者を置く可能性は限りなく低いものであるが、それでも田淵は自分が最高の打者と信じて打席に立つ。
　過信は時に人をドン底に突き落とすが、自信は人を上り調子にさせる。ブレイザーの秘策を授かった野村に対抗するには、これくらの虚栄心が必要なのである。
「ねえ、ノムさん。ブレイザーの奴、なんていってたの？」
「どこのバカが、自軍の機密をばらすんや」
「それはそうだね」
　監督一年目のトレード会議で、当然機密事項だった他球団のトレード要員を（そういえば、広島のリストに長嶋と長内の名前があったね）ばらした田淵とは思えないセリフだ。
　田淵は成長したのか、それとも相変わらずなのか。そして、ブレイザーが授けた秘策とはなんなのか。

ブレイザーは何かを考える

「オレの攻略法なんて、ブレイザーが知ってるわけないよ。そんなに絶対的な弱点抱えてたら、オレ、ブレイザーが監督してた南海戦に、一本ホームラン打ててないよ。そうじゃないでしょ？」

いぶかしがる田淵であるが、それでは田淵に対する有益な攻略法とは、いったいどんなものが考えられるだろうか？

田淵はいうまでもなく右のプルヒッターだ。それも冠に”強烈”の二文字がつくほどのパワーヒッターである。右のプルヒッターは、えてして穴が大きく、攻めどころが多くある。

田淵も例外ではなく、その典型であり、内角に厳しいボールを投げ込み、外角に逃げるスライダーでもかもせば一溜まりもないだろう。

だが、田淵がいくら穴の大きな打者とはいえ、内角に狙ったボールが少しでも甘く入ると、外角のボールゾーンに逃げていくはずのカーブが、そのままストライクゾーンにとどまると、一転、田淵の絶好球に変身する。内角のボールには腕をたたみ、外角のボールには、日本人らしからぬ長いリーチをいかし、一発を叩き込めるからだ。

ホームランを打つ素質だけなら、王貞治に次ぐ歴代二位の実力の持ち主ともいわれる田淵だ。

ありふれた通り一遍の攻めは当然野村は熟知しているし、付与する危険性もよく知っている。に関わらず、ブレイザーの秘策に、野村が抵抗なく耳を傾けたのはなぜだろうか。

野村さえも思いつかないとんでもない秘策に違いない。

「なにがブレイザーはシンキングベースボールの元祖よ。日本人は、あんたが来日する前から考えた野球を構築してきたんだよ。かくいうオレも法政時代、一学年下の早稲田の安田のインチキ配球になんとか対抗しようと頭を捻ったもんよ。大学生のオレでもやってたん

だから」
　田淵がいうところのシンキングベースボールとブレイザーの提唱するところのシンキングベースボールは、やや事情が異なると思われるが、この際、田淵のおっしゃられることが正しいことにして話を進めよう。
　とにかく田淵は、自分を阪神からおっぽりだしたブレイザーに嫌悪感ありありで、その野球スタイルや野球理論を認めていないことは、手に取るように分かる。
　そのブレイザーの授ける秘策など、鼻で笑って無視を決め込めばいいもの、そうとはならないのは、そこに野村が介入しているからだ。
「でも、あのノムさんが、おとなしく、人の意見を聞くなんて、もしかして、よっぽどの秘策かも知れない」
　とるに足りないと見下していたブレイザー理論に、野村が加わるだけで、強い真実味を帯びてくるように思えるのだから、人の心理は面白い。
「……なんだ？　人がよいオレにビーンボール攻めか？　オレは阪神時代の若い頃に頭に死球食らって生死をさまよった過去があるんだよ。そんな打者に危ない攻めはしちゃあいけません。オレが西武に移籍して、まだ捕手をやってたころの話。東尾と組んだときは大変だったよ。アイツは内角攻めたくてそしょうがない。ところが、捕手のオレは当てたらかわいそうだろと、外角中心のリード。さすがに捕手と投手の信条が真っ向から対立したら、バッテリーなんて組めやしない。それからオレは指名打者人生が始まったんだ。捕手田淵は、東尾に引導を渡されたもんよ……とはいえ、東尾とは夜のバッテリーはよく組んだものだけど」
　疑心暗鬼に陥る田淵。野村は捕手の定位置に腰をおろす。
「ビーンボール来る？」
　田淵はちらりと野村のミットの位置をカンニング。
「これは暗黙の了解というか、紳士協定というか、やっちゃいけな

い行為なんだけど、ビーンボールの魔の手から身を守るためには、仕方がないこと」

田淵はタイミングを取るふりをして、野村のミットの位置を、横目でチラリと盗み見するが、野村の体は外角にも内角にも寄らない。真ん中に居座ったままだ。

「？　ビーンボールじゃない？　いや、ビーンボールだからこそ、内角に体を寄せる必要もないか。ボールが抜けただの言い訳が効かなくなるし」

田淵は、ビーンボールに警戒してすっかりと腰は引けている。

初球、杉浦は甘いコースにカーブを投げ込んできた。

「なんだ、ビーンボールじゃないじゃないか」

及び腰だった田淵は、無事にいる自分にほっと胸をなで下ろすが、甘いボールでワンストライクを稼がれたのは事実。

「初球にビーンボール投げず、この打席にこないと見せかけて、二球目に投げ込む？　東尾がようやった手だわ。来ないと安心させて、頭を狙う。この攻めをされると、打者の精神状態はもうボロボロよ。いつビーンボールが来るかの恐怖に縛られ、足ガタガタ震えて勝負にもならんのよ」

田淵は二球目もビーンボールに警戒して、及び腰で投球を待つ。

だがしかし、二球目にもビーンボールは飛んでこない。

「あ」

外のこれまた甘いストレートだ。

「これで追い込まれた。いくら東尾でも追い込んで、ボールナッシングなら、もったいなくて、ビーンボールなんて投げんよ。万が一当てて死球で出すなんて、もったいないからな。……ということは、ビーンボールはもう来ない？　それ以前にブレイザーの秘策ってなんなの。ピンチの場面でこの田淵様を迎えて、甘いボールを続けて投げさすなんて……」

結論を先にいうと、ブレイザーが野村に授けた秘策などなかったのだ。すべては田淵を惑わせるための演技。

シンキングベースボールを掲げるブレイザーが、ＩＤ野球の野村と通訳交えて三者会談とくれば、打者は何かあると勘ぐって当然。疑心暗鬼に陥る心理状態を逆手のとってのヤラセの演技だったのだ。

ブレイザーと野村が何を長々話し込んでいたかというと、他愛もない思い出話だったのだ。カツノリは大きくなったかとか、カツノリは今何をしているとか、カツノリは野球選手として大成したかとか、沙知代夫人は、アメリカの大学を卒業したかとか、試合とは無関係のどうでもいい話を、秘策と勘違いさせた時点で、野村、ブレイザーコンビの勝利。

田淵は、杉浦の持つ、ストレート、カーブ、シュートの続く、４つ目の見えない持ち球に幻惑されたのだ。

田淵が待ち続ける４つ目の球種、ブレイザーの秘策はいつまでたってもやってきやしない。

「あ～　ただのカーブ！　それもすっぽ抜けのカーブ！」

杉浦にしては制球ミスの外に大きく流れないカーブにさえ、田淵にとっては魔球に見えた。

「チャンスに三振とは、怖い阪神ファンの方々に豚だの死んでまえだのやじられる、道頓堀に沈められる……とほほ」

大きくパワフルなスイングが逆に虚しい。第三者ブレイザーに幻惑された田淵は、空振り三振に倒れる。

４回終わって、１－０で阪神の最小得点差のリードは変わらない。

コーチもたくさんいるのです

４回裏、ホークスの打順も一回りして、村山のフォークのクセや配球も分かりかけたはずだ。田淵のリードで一味加えるのも限界がある。ならば、ベンチからの後方支援が、村山ゼロの伝説を保つ、唯一の手段だろう。

いつものペナントと違い、この試合はベンチ登録できるコーチに限りがないのだ。これは、多すぎる過去の偉大な選手を一人でも、試合に参加させる苦肉の手段なのであるが、これを最大限に、いや必要以上に利用したのが阪神藤本監督だった。

「そんなにコーチをしたいやつがおるなら全員させればええやないか」

伝統球団だけに、コーチになれる人材は星の数ほどいる阪神だけあって、選手としてのベンチ入りだけではなく、コーチとしてのベンチ入りも熾烈を極めたのだ。

誰が入った、誰が漏れたの骨肉の争いを避けるために、策士藤本監督が掲げたのが、コーチ超分業制だ。

投手コーチを3人置いたとしたら、職務分担でいざこざを起こすのは、目に見えている。ならば初めから、細かく役割を決めていればいいのだ。コーチは山のようにいるのだから。

「オレが吉田さんに教えれることなんてないのに」

のっけから戸惑うのは、遊撃手守備担当コーチに任命された平田勝男だ。４年連続のゴールデングラブ賞に輝いたショート守備の職人も、格上の吉田に教えるれることなどないと困り顔。

ショート守備に教えれることがないならば、守備位置の指示と平田遊撃手守備担当は行きたいところだが、吉田が的確なポジショニングをするのだから、もうやることはない。

「まあしゃあない。声出しでもしますか」

明治大学出身らしく元気者の平田はやることがないならば、声出

しに精を出したいところが、ここにも専任のコーチが存在するのだからいろいろと面倒なものだ。

「村山さん！　気ぃ抜かんとこの回もしっかり抑えてくだしゃいよ！」

読売テレビから、解説のオファーがありながら、ベンチで愛する阪神を応援できるなら、断る理由はないと、コーチ依頼を引き受けたのは、ご存知、浪速の春団治・川藤幸三だ。

トラ柄のメガホン片手にひっきりなしで阪神に応援を送る。

元気者の川藤だけに、沈む新庄のかっこうのメンタルケア役になると思いきや、川藤もその部門は部外者。メンタルコーチも存在しているからだ。

「グヘヘ、スギモトアヤ、ダイスキネ～」

なんとそのメンタルコーチの役についたのは、オマリーなのだ。特命メンタルコーチと称された、やや意味不明のコーチ業に精を出すオマリー。

ではなぜ阪神はオマリーにメンタルコーチの役目を授けたかというと、

「ウヘヘ、コウシエンニハ阪神電車がイチバンヤ～」

持ち前の脳天気さが評価されたのが一つ。もうひとつは、あまりにのダメっぷりで有名となった外国人スカウト術や打撃コーチとしての資質のなさを見て、余計な口出しをされるなら、メンタルコーチでもやらせとけとの判断だ。

「お～新庄さ～ん。暗いね～　いつものアホみたいな明るさどこ～？　知能がついたから暗さも伴った？」

とはいえ、以上のような不躾なメンタルケアをみるとメンタルコーチとしての腕にも若干の不安が残る。

そして、試合を逐一分析する解析部隊も用意されているのだ。

「井口は村山さんのフォークを見切ったとみていい。フォーク狙いで逆らわず右狙いをしてくる」

和田豊配球解析コーチは、井口の狙いを瞬時にはじき出す。

「真弓さんをそれに気づいてるが、まだシフトの寄せが足らない。もうすこし右によってもらう」

吉竹春樹右翼守備担当コーチが、和田の分析に即座に反応。的確な守備位置を指示する。

「田淵さんにフォークの連投を許可していいですか？」

続く木戸克彦捕手リード担当コーチが、法大の先輩でもある田淵に臆せずサインを出す。

「いいだろう。フォークと井口が分かっていても、前もって守備シフトを敷いていれば、ヒットは防げる」

解析部隊をまとめるのが、佐野仙好分析統括コーチだ。

阪神のイメージからするといくぶん聡明すぎる解析部隊であるが、彼らの的確な分析は早くも実を結ぶ。

井口は、村山のフォークを予想通り右に打ってでたが、シフトの罠にすっぽりとはまる。

「よし、綺麗にはまると気分がええな」

先輩田淵に指示を出し、それがまんまと当たった木戸は恍惚の表情を浮かべる。

そして、コーチの分担はベンチだけにとどまらない。ベンチの裏でも、コーチの手腕が発揮されていたのだ。

代打要員が、来るべき代打に備えて準備するミラールーム。ここにも三人のコーチの姿があった。

「今岡、いい振りや」

右の代打と控える今岡を叱咤するのは、右の代打専任コーチの八木裕。

「藤田平さん、いい振りですね……でもちょっとその代打の気構えとしたら……」

左の代打として控える藤田平に、恐縮しながらもアドバイスを送るのは、左の代打専任コーチの桧山進次郎。

準備する代打陣と代打専任コーチの悪戦苦闘ぶりを見守るのが、代打部門統括コーチの遠井吾郎だ。

代打安打の球団記録を更新した桧山、その記録を保持していた遠井。そして、０３年優勝時の代打の切り札だった八木。

三人の代打の神様さえ、ベンチ入りが許されない阪神の伝統が織りなす層の厚さ。そして、代打の神様たちを差し置いて、代打要員としてベンチ入りしたのだから、選ばれた選手は息を感じるべきであるのだが。

「はあ……はあ……」

八木のせっかくのアドバイスも右から左の今岡は、いつもと同じく空虚な顔をしている。

それでなくとも代打で結果を出した試しのない今岡だ。今岡のベンチ入りは、藤本の犯した致命的なミスなのか、今岡の偉大なる実績を信じた藤本の好判断なのか。

それは今岡が打席に立つであろう終盤戦までは分からない。

和製トラボルタのあだ名はいかがなものか

解析部隊の大雑把な阪神らしからぬ解析は、史上三位の本塁打数を誇る３番門田にも、いかんなく発揮される。

「１－０。最小得点差。門田さんのことだ、当然この場面も一発を狙ってくる」

遠山奨志・左のスラッガー解析コーチは、門田の狙いをみやぶる。

「遠山だったら、シュートを見せて、外角のスライダーやストレートを決め球にするところだけど、村山さんは、右のフォーク投手。遠山のような攻め方はできない」

と葛西稔右のサイドハンドアンダーハンドフォーム分析専任投手コーチがそれに返す。

「そうだな、僕ら、変則技巧派タイプと村山さんは投球術が根本的に違う」

伊藤敦規ブルペン専任コンディショニングコーチは、疑問点に鋭くメスを入れる。

「とすると、村山さんに出す的確な指示は？」

田村勤・左のサイドハンドアンダーハンドフォーム解析専任投手コーチは疑問を呈する。

「そういうときは、村山さんにすべておかませだ」

工藤一彦フォークボール担当コーチは、村山の投球術に打倒門田の命を託すことを提案する。

「そうですね、なにもコーチだからといって、頭ごなしに指示することもない。ここは百戦錬磨の村山さんにお任せする場面です」

中田良弘元吉田えりの頼れる監督兼士気向上投手コーチは、村山に委任することで結論付ける。

「よし、お任せするのサインをおくろう」

伊藤史隆投手部門分析結果伝達担当コーチが、村山にサインを送る。

「なんや、あいつら、ああするこうすると長々分析したあげく、オレ任せかいな」

長考のあげく、お任せのサインが出て、拍子抜けの村山であるが、あのどうしようもない阪神暗黒時代の面々が（工藤や中田や伊藤史隆は、８５年の優勝メンバーであるが、どこか、暗黒時代にいたイメージが上をいく）熱心に野球を研究する姿に、妙な感動を覚える。

「あいつらのために門田は、なんとしてでも打ち取らなあかん。二死無走者で、あの４番のおっさんを迎えることが、この試合をゼロ行進で終わらせる近道やからな」

史上三位の本塁打数を誇る3番門田の後ろには、さらに上をいく史上二位の本塁打数を誇る４番野村がいる。

打線の分断こそが、ミスターゼロ伝説の継続と村山はさらなる闘志を燃やす。それでも門田から逃げて鈍足野村で併殺狙いの勝敗優先の投球はみせない。

真っ向勝負だ。門田を王貞治、野村を長嶋茂雄に見立てて、ザトペック投法はさらに熱苦しさを増す。

「きええ〜い」

まるで古典的な少年漫画のような雄叫びをあげて村山は、門田と勝負する。負けじと門田も腹の分厚い肉がはちきれんばかりのフルスイングで村山の気概に応える。

結果、勝ったのはまたも村山だ。

「三振か……まあええわい、村田兆治と対戦したとき以来やな。こんな燃えた勝負。三振の結果でもやりきったと思えるだけで野球した気になるわ」

三振でも男と男の勝負ができたとサバサバしている門田。だが、そんな門田を野村は許せない。

根本的な野球観の対立。

「バカが。ボール球振りよってからに。オレが兼任監督してたとき口が酸っぱくなるくらいにいっただろうが。お前には四球覚悟の攻めをしてくるんだから、選べばいくらでもフォアボールが取れる。

後ろにオレがおるんやから、安心して一塁に歩けと。それがなんやオレが教えて４０年たっても、同じ失敗繰り返してからに、ほんとにまあ、門田と江夏と江本はろくでもない人間や」

野村は、あえて門田の耳に届くような大きな声でぼやくが、門田は平然と無視。野村はあくまでお野球に現実を求めるに対し、門田は野球にロマンと快楽しか求めないのだ。

二人の大打者の野球観が、ここまで根本的に履き違えば、交わることは不可能に近い。

「二死無走者、一点差。しかも頼れる４番、一発狙いの打撃が許される場面やな。四球なんてせこいこと言わず、ブリブリと振り回してくるか……おと、これじゃ門田のなんも考えん打撃と同じやないか……ウヘヘヘ。まあオレは考えた結果、一発狙いをする。門田はなんも考えんと一発狙いをする。一見、同じやが、たどり着いたルートがまるで違う。オレは門田みたいな無残な姿はさらさんぞ……」

憂鬱とした野村阪神を支えた男たち

井口、門田退治に十分な効力を発揮した阪神ベンチの分析解析部隊であるが、４番捕手野村のアナウンスを聞くと一同、そろって尻込み。

「ようやく解析に乗ってきたところで、野村さんか……」

和田がぐっと息を飲む。

「手ごわすぎる相手やな、和田」

常に堂々とした姿勢を崩さない木戸が、珍しく弱気な態度を見せる。

それもののはず、和田と木戸といえば、和田は選手兼任、木戸は専任として、コーチで仕えた身。野村のあらゆる意味の恐ろしいをよく知っているのだ。

「解析しますか……木戸さん」

「辞めとこ、オレらの半端な分析能力は、逆に野村さんの思うつぼや。ここは、村山さんを信じて、４番とエースの対決をじっと見守ろうや」

「ですね……」

要は、野村にはかなわないと、分析解析部隊は、仕事を投げたわけだが、その気持もよくわかる。野村野球に強く影響を受けた和田と木戸だ。野村野球の傍系の考え方が、野村のとっていいカモでしかないからである。

ならば、野村はどんな狙いをもってこの打席に入るのか？

門田が来たボールを打つタイプなら、野村は来るボールを予想して打つタイプだ。それも、野村はよくいるそのへんの山はり打者とは違い、しっかりと狙いと根拠を持って、ボールを搾り出す。

「一発狙いや。いくら後ろがオレが最大限に評価する大好きな松中いうても、今の村山の状態から連打で得点するのは難しい。ならば

絞りに絞って、あぶり出したボールを叩いて、同点に追いつくまでよ。うちは大エースの杉浦が投げとる。しかも後攻めや。追いついたら俄然有利に試合を展開できる立場や」

野村は打席に立つとふうと息を吐く。

「そこらの野球が分かっとらんバカは、一発狙いと決めたら、来るボールをなんでも振り回せばいいと思うてる。だが、同じ一発狙いでも狙いを絞れば一発が出る確率は上がるものや。工夫をしない弱者は弱者のまま、敗者となる。工夫をする弱者は、時に勝者となる。これが野村流野球確率論よ。つまりは同じ実力同士が戦ったら、考えたほうが勝つってわけや……。今日の村山は、フォークを多投しとる。ホークス打線が強力すぎるから、それだけ慎重になってるいうこっちゃ。ならそのフォークに狙いを絞れば、打てる確率が上がる思うやつはまだ甘い。狙うのはストレートよ。村山のフォークのキレと低目に集まる制球力と福岡ドームの呆れるほどの広さを考えみれば、ボールゾーンに落ちるフォークをすくい上げて、すあの高い高いフェンスを越すのは、ほぼ不可能や。しかも、一口に村山のフォークいうても、投げる角度も、上、斜め、横、落ち方も、スピードも豊富で使い分けてくる。これではいくらフォークが多いから、そのフォークを待っていうても分が悪すぎる。握力が落ちてフォークの切れが鈍る終盤戦ならいざしらず、まだ回は4回や。スタミナも手の力も十二分にある。それならストレートを待てばええ。今日の村山のストレートは切れと制球力があるにしても、びっくりするほどの球威も球速もない。他の右打者の誰よりもホームランを打ってるオレなら、片手でもスタンドインよ……グへへ」

ところが、ときおり冴える田淵のリードは、野村の狙いを見透かす。

「二死無走者で、一点差の4番の打席。オレの現役時代でもよくこんな打席あったけど、たいてい一発しか狙わんもんよ。この打席のノムさんもそうよ。いつものならグリップをひとあまり余せて握るノムさんが、この打席ではめいっぱい長く持っている。福岡ドーム

の広さに対応するために、少しでも遠心力をだそうとする狙い。つまり一発しか頭がないわけ。今日の村山さんのフォーク相手に一発を狙うのは酷すぎる。ならば狙いは自然とストレートになるわな……」

田淵の観察眼が際立つ。捕手は扇の要、グランド３６０度に目を配れとあれだけ

現役時代に口酸っぱく言われても、ついぞ実戦に移さなかったあの田淵にとって、大変めずらしいことだ。

「フォーク、フォークで攻めさせてもらうよ。フォークの連投は、村山さんの握力を極限まで落とすが、４番相手の多少の消耗はしょうがない……」

田淵に狙いを見透かされた野村に立ち場なしのはずであるが、野村はそれでも強気のストレート待ちを崩さない。

「とはいえ、オレがストレート狙いなんて、捕手が田淵でも嶋でも気づくわな。ストレート狙いでした。ストレート来ませんでした、だから打てませんでした……こんなん凡百のバカや。頭のええオレみたいな野球人はその一歩先をいく。ストレートが来ない確率が高いなら、工夫を施し、ストレートが来る確率を高めればええんや……つまりこういうこっちゃ……」

野村は田淵に聞こえるようにつぶやく。

「おい田淵、村山にフォーク投げさせるのは危険やぞ。前の回から徐々に切れが鈍ってきてる。井口や門田に通用しても、オレならガツンや」

「その手には乗りませんよ、ノムさん。村山さんのフォークの切れが健在なのは、捕手の僕が一番よく知っていること……」

野村は田淵を口車に乗せて、少しでもフォークのお化けの幻影を振りほどくために必死であるが、野村の口撃は身を結ぶのか。

田淵だって考える

いくら当てたらかわいそうと、内角攻めを躊躇するお人好し田淵だからといっても、野村の口車にのってほいほい配球を変化させるわけっもなく、

「ノムさん、その手には乗りませんぜ」

得意のささやき戦術で、ストレートが来る確率を上げる作戦を失敗に終わる。だからといって、野村の最善の策がささやき戦術であるはずもない。第二第三の手段が野村の頭の中をくるくると回っているのである。

「いくら、間抜けでお人好しの田淵いうても、こんなささやきには乗らんか。だが、みてみい、プロ野球に関わって５０年のオレの策略を。必ず村山にストレートを投げさせてみせるから」

啖呵を切った野村であるが、村山は初球からフォークボールを投じてくる。膝下から切れ味鋭く落ちる見事なフォークであるが、ストレート一本に絞った野村は当然、手を出してこない。カウントは０－１。ボールが先行したカウントでボール球になる確率の高いフォークは要求しにくいはずであるが、田淵は臆せずフォークのサインを出し、村山は信念を持ってフォークを投げる。

彩りあふれる村山のフォークのレパートリー。上から投げ下ろした初球とは違い、今度は横手気味の角度からフォークを投じる。

横手特有のシュート回転がかかったフォークは、野村の膝下に落ちるが、野村は当然振ってこない。

田淵も村山も、初球、二球目の見逃しを見て、ストレート狙いを確信するがフォークの連投をやめるつもりは毛頭ない。

「歩かせてもいい覚悟よ。とのかく４番のノムさんだけは打たしちゃいかんのよ。捕手で４番の大黒柱のノムさんが打てば、ホークスのベンチのムードは俄然盛り上がるのよ。走者を一人置いて松中を迎えるのも不気味だが、ノムさんと真っ向勝負して一発をくらうよ

りマシよ。かといって、フォークの連投に勝算がないわけがない。一発狙いに陥った打者いうのは、多少のボール球でも気がはやって、振っちゃうものよ。たとえそれが狙いのボールじゃなくてもね。しかも、ノムさんは、意外と四球の数が多くない打者だ。王さんじゃないんだ、機械のようにボール球を見逃せる打者じゃないんだ。見てみなさい、次にフォークを要求する、たとえそれがボール球でも、ノムさんは我慢しきれず手を出しちゃうから。カウントはそれでも1－2だが、その一球のストライクが大きすぎるんだ。ノムさんのストレート狙いの信念が半壊しかかり、ボール球のフォークでも手を出したくなるから……」

田淵らしからぬ緻密な配球であるが、ふと野村を真下から観察した田淵、それまでの二球と明らかに違う野村を見て、田淵はそれまでの考えを捨てざるを得なくなる。

「なんだ？　めいっぱい長く持っていたノムさんが、ひとあまり握りを余せるいつものノムさんのグリップに変えてきたぞ……はあ、ささやき戦術にも負けぬフォークの連投と切れ味を見て、つい頑固なノムさんも考えを変えたか。村山さんのフォーク相手に一発狙いは無理とみて、普通の打撃を心がけようということか……。こうなると、二球見せたフォークは逆に危険なボールとなる。一発を捨てたノムさんにとっては、フォークをちょいとすくい上げて、ヒットを打つくらい簡単な作業。0－2のカウント、ストレート一本やりの山はりをやめて、フォークを頭に叩き込んだノムさん、相手にストライクが取れるボールいうたら、このボールだな」

はたまた珍しく捕手らしい観察眼を光らせた田淵は、野村の握りの違いを漏らさず見つけ出し、野村の一発狙い＝ストレート一本やりの終焉を感じ取り、配球を根本的に変えたのであるが、もちろんこれは、野村の仕掛けた作戦なのである。

「ふふふ……ブチの奴、引っかかりおったわい。あいつでもわかるように、分かりやすくグリップの握りを変えてみせたが……一発狙いだからといって、わざわざ長く持つ必要があるか、アホ。ひとあ

まり持ってもコンパクトに狙い球を振り抜けば、この広い福岡ドームでも楽にスタンドインよ。握りの違いを見て、オレがストレート一本槍の山はりを捨てた思うだろ、この間抜けな捕手は。だがな、田淵。オレはそうと決めたら、やり通す男よ。沙知代がええと思ったら、奥さんがいても、いくら球団に睨まれても、人生の班女はアイツしかいないと決めたようにな」

まさに野村の考え、実践編である。

「これが野村流の野球よ。考えないのは悪、考えても、実戦できないのも悪、そして、考えて、かつ相手を自分のペースに巻き込む、それだけが善なのよ、勝負の世界いうものは」

フォーク攻めを決めたバッテリーから、こないはずのストレートを引き出せたのである。

「さあ投げないはずのストレートを、あの呆れるくらい高いフェンスの上に弾き飛ばすか……野村の考え、実践編、これにて終了！」

村山は、最初に決めた配球と違うと感じつつ、今日の田淵は冴えていると、疑いもなく、田淵のサインにうなづく。

カウント０－２からの三球目、無造作にストレートを投げ込むのはあまりにも危険であるが、フォーク狙いの構えを見せた野村にとって、裏をかいた投球のはず、楽にカウントを稼げるボールのはずが、相変わらずストレート待ちの野村にとっては、待ってましたの絶好球なのである。

田淵は、巧妙な野村の作戦にひっかかったのか。

「さあ、こい！　大阪のヒーローは、村山でなく、オレや、いうのを改めて証明したるわ」

昭和３０年代、大阪の野球の英雄といえば、村山でも、吉田でもなく、確かに、野村と杉浦であった。歴史に埋もれた事実を今現代に知らせるために、野村は村山から一発を放たなければならないのだ。

「……！！　なんやと！」

だがしかし、村山が０－２の打者の圧倒的有利なカウントから投

じたボールは、フォークでも、野村が来る確率を高めたストレートでもなかった。

「カーブ？」

わずかな半円を描き、野村の手元で鈍く落ちる村山の切れの乏しいフォークであるが、狙いを外すのは十分すぎる切れ味だった。

「まさか」

狙いを完全に外された野村は、バットを止めようとも止めきれず、バットの先端に心許なさげに当たった打球は、平凡なサードゴロとなる。

サード掛布が、必要以上に大げさなアクションを交えて、これを処理、一塁に送球する。一塁にろくに走れないほど野村は打ちひしがれた

「なんでカーブが来るんや！　４番のオレだぞ、フォークか、ストレートの二択だろが。なんでしょぼいカーブが来るんや……。一打席目に魅せられたチェンジアップの出来損ないみたいのが来るのは頭にあったが、まさかカーブが来るとは……。しかし、よりによって、しょぼいカーブ、一発狙いの強打者にバッティングカウントで投げるボールやないわ、田淵があほ捕手だから要求できたんや」

村山の球種に、フォーク、ストレートだけでなく、カーブやシュートがあるのは、野村も十分承知。そして一打席目で見せられたチェンジアップの出来損ないも一応のマークをしていたが、フォークに比べて、制球の精度も切れも落ちる他の変化球を４番の自分に投げてくるわけがないと思い込んでいたのである。

「思い込みは、成長の最大の敵……誰かがそう口やかましく言うてたやろ？　誰の言葉や？　ああ、オレが好んで使う言葉やったな……」

またも野村は、田淵のリードにしてやられたのだ。

「フォークの比重を置いたからといって、安易にストレートを投げさすのも怖いから、カーブを投げさせたのよ」

まんまと引っ掛けたはずの田淵に、まんまと引っかかった野村。

考える捕手の第一人者の野村が、打って捕って投げるだけの捕手の典型の田淵に連続で敗れたのだ。

「打って投げれる田淵が、考えるやと、なんやスーパー捕手の誕生やないか……」

イチローも口癖のようにいう。素質が日本人のそれを凌駕するメジャーリーガーが、日本人選手のように考えて、かつ練習に熱心に取り組んだら、勝てるわけがないと、逆に熱心ではないから、勝てる見込みがあるし、イチローは勝たせてもらえる（チームはそうはいかないが）わけであるが、素質はメジャーリーガークラスの田淵に考える力が備わったら、はたして、身長も根本的な方の強さも劣る野村は田淵に勝てる見込みがあるのだろうか。

「ふん、予期せぬボールを投げさせて、相手を打ち取る配球なんぞ通じて二度までや。三度目にフォークでもストレートでもないボールを決め球に使ってみい。スタンドにぶち込んだるから、覚えておけよ、田淵が」

執念深い野村は、負の体験をエネルギーに転化できうるのだ。

そして、４回裏もゼロが刻まれる。ミスターゼロ村山伝説は、滅多にない田淵の好リードが相まって、輝きを増していく。

田淵だって考える（後書き）

前の打席と同じ展開と気づいてなんだかグダグダに

世相の最大関心事

ソフトバンクー阪神の人気球団同士の熾烈な戦いが盛り上がるのは、グラウンド上だけではない。スタンドでも、両軍のファンの激しい応援が火花を散らしている。

そして、静かにこの戦いを見守るのが、白髪をべったりとなでつけた初老の男と一人の太目の若者である。

彼ら二人は、コンコースの手すりに前傾姿勢で体を委ね、熱狂の渦の中、明らかに違うテンションで試合を見守っていた。

「青田さん、予想通りの投手戦ですね」

「ワシが言うたとおりやろ？　野球を半端にかじった奴らは、ダイナマイト打線と門田野村松中の壮絶な打ち合いを予想しおるが、先発予想をみてみい。村山と杉浦やぞ。藪や若田部が投げると違う。球史に残る大エースの投げ合いや。野球は投手や。いくら打者が揃っとっても、投手が良すぎるなら点は入らんもんよ。しかもや、村山も杉浦も絶好調の情報が入ってきたと来る。これはもう、投手戦しかないわな」

「青田さん、さすがです。青田さんの見立て通り試合は進んでいますね」

「１－０か。まあ最小得点差やが、２回で先取点が入るいうのは、さすがのワシも予想外の出来事や。ワシは、阪神にハンデの１をつけた。つまり、ダイエーが優勢とみたわけや。投手も打撃も五分とみたワシが、ダイエーが優勢と見たのは、捕手の差や。野村と田淵の差や。昨今、リード至上主義がはびこり、捕手の配球次第でゲームは覆るゆう向きがあるが、野球はそない甘くはないわ。捕手の指先一本で試合が決まるほどな。だが、一点を防ぐ配球はできる。それが出来るのが野村で、できないのが田淵とみて、ワシはダイエーを優勢にした。じゃが、どうだ、ワシが信じた野村が、どうしてかリードを放棄しとる。鶴岡親分と何かあったか、杉浦の自主性に任

せたか知らんが。もし野村の手助けがないまま試合が進むとなると、ダイエーは一点に泣く可能性があるぞ。若いの」

「あの青田さん、お言葉ですが、その、今のホークスの親会社はダイエーではなく、ソフトバンクという携帯電話やネット関連の仕事をしている会社でして……」

「なんやその、ソフトバンクいうのは？　またどっかの銀行が合併してできた新しい銀行か？」

「いえだからその、銀行ではなく、ソフトバンクは、携帯電話の会社でして……」

「そんなんどうでもええわ、ダイエーのが短くて言いやすいからな」

９７年冬に逝去された青田は、ダイエーの喜劇的結末を知らないのだ。

「どうでもいいが、若いの。お前さんは、これからどう試合は展開していくと思う？　ワシが死んでからの野球界の動きをよう知らんのだから、今の選手の情報はお前さんの知識が頼りなんや。阪神の抑えの藤川球児とかいう投手はそんなに凄いんか？」

「球児さんですか……凄いの凄くないのって、コールされた時点で相手の球団は逆転を諦めるほどの抑え投手ですよ」

「ほう、それじゃ、ハマの大魔神みたいなもんか？　フォークが凄いのか？」

「いやフォークはそれほど凄くはありませんが、とにかくストレートのノビが尋常じゃないんです」

「ストレートが凄い？　東映の尾崎くらいか？」

「……尾崎さんですか、この前のヤクルト戦で投げられましたよね……球速は尾崎さんですが、、ノビは球児さんです」

「そうか、そんな凄いんか、藤川いうのは。その藤川につなぐまでに村山は頑張れはいいわけか。６回。６回まで投げ切れば、あとの三回は、佐々木と同等の藤川に任せればええんか。村山もフォークの連投でスタミナ切れが迫っとるが、そんな抑えがいるなら、スタミナ切れも怖ないな」

「いえ、球児さんは1回限定です」
「1回限定？　なにをやわなことをいうとるな」
「いや、最近の抑え投手はそうなんですよ」
「でもハマの大魔神でさえ、2回、3回は投げよるぞ」
「あ、その佐々木さんから抑えの常識が変わりまして……」
「抑えに常識もクソもあるかい。チームのピンチの時に出てきてこその火消し役やないか。それがなにが1回しか投げませんじゃ」
謎の若いモノに突っかかる青田。老いてなお血気盛んであるが、そんな青田に近づく人影があった。
「青田さんですよね？」
「はあ？」
すらっとした野球帽にサングラス姿の男の声に、怪訝そうに振り返る青田。
「なんやお前、ワシになんかようか？　しかし、お前、ようワシがあの青田と分かったな」
「そりゃ分かりますって、球界の大先輩ですからね」
「先輩やと？　ちゅうことはお前も野球人なのか？」
「ええ、端くれとでもいいましょうか」
「ふん、なら帽子と色メガネとりやがれ、先輩の前に出る服装やないぞ」
「そうですね、失礼しました……」
謎の男は、帽子とサングラスを言われたとおり外す。
「わかりますか？　僕の正体が？　わかりませんよね……」
謎の男をまじまじと見つめる青田。
「わからないと思うか？」
「思いますよ、青田さん、巨人にはお詳しいようですが、他のことはあまり知らない様子ですから」
「ふん、ばかにするな。ありゃＴＶ上の演出じゃい。ハンデ師を影の生業としてるワシがお前を知らんでどうする……ダイエーのエースのお前をな」

「ふふふ、わかりましたか、意外だなあ」
「ふん、村田よ、村田勝喜よ。松井の星稜高校の先輩じゃ」

世相の最大関心事（後書き）

危ないロープを渡っている気がする

福岡ドームに広がる黒い霧

５回表、阪神タイガースの攻撃は、８番の岡田からだ。
「へえ、グラウンド上で、ユニフォームを着たオレを村田勝喜と分かるのも意外なのに、グラウンド外で私服姿のオレを村田勝喜と一瞬で分かるとは。これは青田さんを見くびってましたよ」
「ワシがダイエーのエースを知らんでどうする。弱小ダイエーで３年連続二桁勝利やぞ」
「強いチーム、例えば、西武みたいな守備がしっかりしたチームにいったら、どれだけ勝つか……ですよね」
「あほ、逆に西武みたいながんじがらめのチームはお前のようなタイプは合わんのや」
「オレもそう思いましたよ。トレードが決まったとき、オレが西武？　ガラじゃないってね……」
「ところで、そのダイエーの大エースのお前が、なんでこんなところにいるんや。１４０中盤の速球に、カーブ、フォーク、シュート、スライダーと多彩な変化球を操れるお前は、一塁側のブルペンにでも入って、恩師杉浦のピンチにいざ馳せ参じようと投球練習してなおかしいやろ」
「オレもそう思いますわ。なんで、オレ、キャンプにも呼ばれんってね。オレより実力の下の若田部や吉田豊彦さんでも呼ばれたのに。どうして、オレが漏れる？」
「この大会のダイエーのＧＭは、根本やったな？」
「はい、根本さんです。西武と兼ねていますけど」
「お前を追い出した根本が、お前を呼び出すわけがない」
「でも、オレと一緒にダイエーを出された佐々木さんは招集されて、今、８番ライトとして試合に出てますよ」
「ふん、根本がお前のなにを嫌ったか知らんが、実力があるのに、呼ばれない理由があるんやろ？」

「理由ですか……あるような、ないような……」
「ふん、分かってるくせに」
「ところで、青田さん。青田さんの隣にいる太目の若いのは何者ですか？　ハンデ師青田さんの横で、野球観戦とは、カタギの人間には思えませんがね」
「補助役だよ。１９９７年までの野球界しか知らんワシのために、最近の野球事情をご教授してくれるな」
青田に隠れがちだった、謎の太目の若者は、遠慮がちに村田に挨拶をする。
「ど、どうも……」
まじまじと太目の若者を見つめる村田。
「……どっかでみたことあるな……あ、分かった、お前、あれだろ？　近大の江夏……」
「え、分かりますか？」
「分かるよ、ホークスの後輩だ。大隣憲司……期待の左腕だ」
「よくご存知で……」
「それはそうと、オレが村田勝喜であることはわかっただろうが、村田勝喜が何者かしってるか？」
「ええっと、ダイエーのエースで、３年連続二桁勝利で……」
「ばか、それ、今、青田さんが言ったとりやないか」
「すいません、お名前は存じ上げているんですか、詳しいことまでは……」
「まあしょうがないな、大隣くんが、まだ小学生の頃だからな、オレの全盛期は。それはそうと、その期待の若手の大隣くんがどうして、青田さんの補助役を勤めてるんだ？」
「まあその、あの……」
言いよどむ大隣に見かねた青田が割って入る。。
「まあええやないか、色々と事情があるんよ。ところで、村田。ワシになんかようか？　ただの挨拶か？」
「まあただの挨拶ですわ。あれ、あの白髪の紳士はもしかして？

と寄ってみたら、やっぱりあの青田さんでして……でも、ただの挨拶で済ませたくない感情が湧き上がってまいりました」

「どういうこっちゃ？」

「野球賭博の権威、青田さんとちょっとした勝負をしたくなったんですよ」

「勝負？　なんや、めんこでもするのか？　ビー玉でもするのか？」

「いやあ、青田さんが子どもの頃にはまった遊びじゃございませんよ。青田さんが大人になってはまった遊びをしたいのですよ……阪神の打者は岡田さん。岡田さんがどういう結果になるか？　ちょっと興味深くありませんか？」

「ふん、なんや、ワシにたかりに来たのか？　逆に返り討ちにしてやるわ。岡田はな、気合が乗ったときは、手のつけれれない打撃をするが、そうでないとてんでダメな打者や。なんでオレが８番なんよと膨れたとこも見られる……打たんよ、岡田は……」

「そうですか、青田さんは打たないですか……なら、オレは成功する方に賭けますよ」

「成功する方？」

「ええ、打者の成功といえば、出塁することに他なりません。一般的に出塁とは安打と四死球の合計を指します。とはいっても、出塁率はどんなに優れた打者でも４割がせいぜい。王さんやボンズのように５割を超える化物もおりますが、岡田さんは化物ではない。つまり、青田さんが有利な賭けなんですよ……圧倒的な有利不利のある賭けって成立しますかね？」

「せんな……分の悪い賭けなんぞ、胴元としても、商売上がったりや。だから、ハンデいうのがあるんや」

「ハンデですか、６・４で、投手の有利のスポーツですから、当たったときの還元率を打者に高めに設定しておけばいいですね？」

「そうや、なんや、村田。賭けに慣れてるな……。打者のオッズを１．２に設定する。これで公平や。ところで、いくら賭けるんや。というか、いくら欲しいんや？」

「常識の範囲内ですよ、常識の。ほら、今、社会を騒がせている大相撲の野球賭博問題でも、数万程度の仲間内の賭けは、許してもらえる雰囲気ありますでしょ？」

「ふん、賭けは賭けや。金銭の大きさで変わるもんかい……」

村田は、青田に向けて、指一本を立てる。

「岡田さんが勝つ方に、一万円……」

「ほう、一万か、そりゃ確かに常識の範囲内やな……」

「でしょう？　ダイエー、西武から問題児として放出されたオレ。三度も常識の渡り廊下から足を踏み外すマネはしませんよ。中日は、星野監督の鉄拳制裁に嫌気が刺して、自分から辞めましたけどね……」

「……なら、ワシは岡田の凡退に１０００万賭けるか」

思わぬ金額提示にクールな村田も表情を崩す。

「いっせんまん？　ちょっと、青田さん、どこが常識の範囲内なんですか？」

「久びさにきた現世、これくらいの刺激がないとな」

「しかし、一千万の用意はできるんですか？」

「あほ。この大会のギャラはワシクラスになると１０００万は優にあるんや」

「だからといって、一千万は……」

「おじけづいたか、村田よ。これくらいでおののくようなら裏の世界は向いてないぞ」

「……いやあ、……でも、オレが一万でしょ？　青田さんが１０００万だ。これ賭けが成立しますか？　取り分はどうなるんですか？」

「簡単や。１００１万がプールされる。勝ったほうが１００１万を総取り。で、分の悪い方に賭けたお前は、賭けた一万に２割増しやから、１万２０００円だ。つまり、ワシはプールされた１００１万にプラスして２０００円を支払う権利が生じるんや」

「でも、青田さんが勝ったところで、１００１万。つまり１万の儲けですよ……？」

「それが賭けいうもんや。時にバランスを失した相場になる。だが、そんな時こそ賭けの世界を存続させる。続けることが大事や、何事もな」

「そうですか、それでは、賭けは成立しました。青田さん、逃げないでくださいよ」

「暴力団の親分との交際が発覚しても、堂々としたワシや。逃げるわけないやろ」

この打席に１０００万を超える金額がかかっていることもつゆ知らずの岡田は打席を大事にするのか。

「なんか、気い抜けるな。オレが塁に出ても次、新庄やん。打てるわけないわな。生産性のない走者になるのはなんか虚しいな」

村田の気を知らず、無気力さを口にする岡田。

さて、岡田はたぎらない闘志を燃やすことができるのか？

福岡ドームに広がる黒い霧（後書き）

賭博に詳しくないのに
世相を反映させてムリヤリ賭博かく
オレが一番の被害者

ハンデ師の謎

「青田さん、本当にいいですね？」

「ええよ。勝負に乗ったからには引き下がることはせんよ」

賭ける金額の多少で村田が圧倒的優位な立場にいるのは間違いのないことだ。だがしかし、投手対打者は、打者に分の悪いことは歴然たる事実。岡田のような好打者でも、勝ち目＝出塁率は三割半ばがいいところ。しかも、好投手杉浦相手に、その出塁率はさらに下がるとみていい。つまり、村田は、取り分的には恵まれた立ち位置にいるが、勝ち負けにおいては、不利な立場にいるのだ。

「オレと青田さんの賭けは決まったが、大隣くんはどうするの？君も賭けるかい？」

生々しいやりとりを唖然と見つめていた大隣は、急に振られて、戸惑いのあまり、声がうわずってしまう。

「え、あ、あのその、僕は遠慮させていただきます。その現役の立場で、常識の範囲内の賭け事とはいえ、やっぱり色々と問題がありまして……」

「そう、そりゃ仕方ないな。現役からいろいろやましい遊びをすると、オレみたいに放出されるからな、よしなら、決まった！　あとは、岡田さんの打席結果を見守るだけだ」

岡田はヘルメットを右手で何度も押さえる仕草をしながら、バットの先端を突き出す、岡田独特のタイミングの取り方で杉浦と相対する。

だが、この岡田の構えだけで、青田は、岡田の乗り切らない気分を指摘するのだから、さすが、当代きってのハンデ師と呼ばれただけはある。

「村田には残念なことやが、この打席の岡田はやっぱｒダメや」

「どうしてです？　なんで分かります？」

賭け事となると熱くなる村田は、大先輩青田に語気を強める。

「構えた時のバットの揺れよ。岡田は調子がええときほど、バットがよう揺れるんや」
「へえ……。でも調子がいいからといって、この打席はどうなるか分かりませんよ。絶不調だって、当たりそこねがヒットになるのが野球ですから。杉浦さんの手元が狂って、いきなり背中にズドン、デッドボール。そんなんでもオレの勝利ですから」
「まあ黙ってみてろよ」
奇妙な緊張感が、心なしか福岡ドームの白銀の天井にどす黒い霧を張り巡らせる。
杉浦が、一息吐き、見上げる天井には、野球賭博が作り出す熱狂はみえているのだろうか。
「気合が入らんいうても、立教の誇る大投手杉浦さんの顔を見ると、闘志がむくむく湧いてきたわ。東大と立教は野球で問題外。法政と明治は勉強で問題外。早稲田のライバルは慶応だけやで。いつの時代もな」
杉浦はこのイニングに入る前に決めていたことがあった。
５回のテーマは、力で制圧すること。立ち上がりは済み、体と心に昔の切れが出てきた。しかも打線は下位打線。自らの力の有り様を試すにはもってこいの場面だ。
万が一、打たれたとしても、福岡ドームの広さと杉浦の球威を考えみれば、岡田、新庄、真弓に手痛いミスは食らわないとの計算もある。
「力で押さえ込む」
杉浦は自らに宣告するように、小声でつぶやくと、宣言どおりの力押しの投球を見せる。
「ほう、杉浦の奴。力できたな。岡田をなめてかかったか」
「青田さん。杉浦さんは、岡田さんを舐めすぎっすよ。岡田さんはこの試合では下位打線ですけど、８５年のダイナマイト打線のクリーンナップを張った打者ですぞ」
「ほほう、入団したときの監督であり、抜擢してくれた監督でもあ

る杉浦相手によういえるな」
「仕方ないですよ、それとこれとは別、杉浦さんを恩人と感謝しても、岡田さんに賭けたからにはですね」
自分の状態を確かめるべく力押しの杉浦と燃えない気持ちをふつふつとたぎらせる岡田の勝負はあっけなく終わりを告げる
４球目のことだった、岡田が何気なく打ち上げた打球は、ショート川崎、セカンド井口、センター広瀬の三角地帯にふらふらと飛んでいった。
打球があがった位置と、センター広瀬、セカンドの井口の動きを考えると、広瀬と井口のいづれかの打球のはずだったが、元気者川崎が前の回のミスを取り戻そうと、空元気をフル回転させて、余計な飛び出しをしてきたのだ。
川崎の勢いにおののき、ちょうちょする井口と広瀬。そして打球は、嘲り笑うように、三角地帯のど真ん中に落ちる。
「なんや、しょぼいヒットやな。早立戦、番外編は、立教の杉浦さんの判定勝ちでええわい。こんなヒット嬉しくないわ」
ヒットを打って仏頂面の岡田であるが、村田は破顔一笑。狂気に満ちたほどの喜び方を見せる。
「やった～　１００１万だ～。おっと、あんまり、騒ぎすぎのもよくないな。このご時世だ……」
「ふん、これがあるのが野球よ。そして賭け事よ」
「青田さん、本当によろしいんですか、１０００万ですよ……」
「当たり前やろ。どっかのアホなヤクザみたいに勝ったのに払い戻ししないあげく、それをネタにゆするマネはするか、この青田さまが」
「よし、１０００万か！　現役時代の一番、羽振りのいいときなら、すぐに使い果たしてしまう金額ですが、つつましい今のオレには何年分ですよ！」
「……喜んでるところ悪いが、まだこの回は３アウトやないぞ」
「は？」

「なんや、村田。ダイエーの大エースのお前がせこい。勝ち逃げか？」
「え？」
「１０００万なんて、お前の全盛期の年俸じゃ、一ヶ月足らずやろ？　この場で、全盛期の年俸分稼ぐ気概をみせい」
村田の現役時代の最高年俸はおよそ８０００万ほど。
「え？　どういうことですか？」
「どういうこともないわ、次は新庄や。さてどうなるかいのう」

星稜高校出身者は蟻地獄にハマる

「9番センター新庄」

新庄の出身地福岡のファンは、新庄の奇抜なパフォーマンスを期待するが、うつ状態の新庄にパフォーマンスをする心の余裕があるわけがない。

「ふう～憂鬱だ。岡田さん、塁に出ちゃった。これまた憂鬱だ。だって、走者ありの打席で凡退したら、また阪神ファンに口汚い野次を飛ばされるからなあ」

うつ状態の新庄は、考えること全てが後ろ向きなのである。絶対的に失敗する未来が頭を占め、成功する未来の自分はそこにはいないのだ。

「？　バント？　バントコーチの久慈さんがバントをあるように口を動かしている」

バント専門コーチの久慈は、さりげなくバントを示唆して、オレにバントと怒り心頭になるはずの新庄のフォローをしたのだが、今の新庄にとって、バントは逆に恥を欠かないための策なのだ。

「バントか。ハム時代の1年目に2番座ったときはようやったわ。初打席もバントやったな」

意外と小技が利く新庄。送りバントの技術なら、ライバルの赤星以上かもしれない。

新庄がバントとなれば、青田と村田の即席野球賭博は紛糾してしかるべきだ。バントは投手の勝ちなのか、打者の勝ちなのか、それとも勝負は持ち越されるのか。

「逃げんよな、村田よ。勝ち逃げはギャンブラーとして最低の行為やぞ。礼儀知らずか？」

「賭け事に礼儀もくそもないですよ。賭け事自体礼儀の範疇から外れてますよ」

「ふん、国が認めているギャンブルがあるやないか。それより、村

田、礼儀以前に男やないぞ、ここで逃げるのは。逃げて、１０００万で満足するか？　それを元手にもっと稼ぐ。それが男のロマンやないか」

「……青田さんにそこまで言われたら、逃げるわけには行きませんよね……やりましょうか、新庄……青田さんはどう見ます？」

「どうもこうもないな、ワシは阪神の藤本定義監督の元、ヘッドコーチやっとたんだぞ。巨人の監督時代もよう知っておる。藤本監督が何をしたいか、熟知してる。ここは送りバントや」

「送りバント？　新庄ですよ、打たせますよ。それに送りバントは投手の勝ちか、野手の勝ちかはっきりしませんし」

「村田は、お前は打者の勝ちを出塁率の定義に基づいたな？　四球と安打か。そうなると送りバントは負けやな」

「……ちょっと待ってくださいよ。そうなると、オレは新庄の安打か四球に賭けないといけないみたいじゃありませんか？　連続出塁の確率はどんなに優秀な打者が並んでも2割そこそこなのに、ましてや新庄ですよ？　打者の勝ちに連続で賭けさせるのは、確率が低すぎますよ」

「なら辞めるか？　逃げるのか？　ワシは１０００万を賭ける。なにい、心配するな、闇の仕事をこなせばすぐに手に入る額や。つまり、お前さんが勝てば、今の１０００万が倍になるんやぞ」

「倍……ゴクリ」

思わず、村田はつばを飲み込む。賭けに勝つだけで２０００万となれば、誰しもが心に動揺の波を作るだろう。

「魅力的やろ？　ただし、お前も１０００万を賭けるんやな。さっき勝った金や」

「青田さんが金額を指定することもない……」

「それもそうやな。ならまたセコく1万賭けるか？　男ならば、賭けで儲けた１０００万なんぞ、宵越しの銭やろ。失ってもともとの金や」

「……なにか、上手いですね。はめられているような気がします。

それも泥沼の蟻地獄に……。確かに、オレは男だ。勝負して当然ですよね。いいでしょう、受けてたちましょう」

「ほう、」それこそ。ダイエーの大エースや。新庄が勝てば、村田の持ち金は倍の２０００万と打者に賭けた修正オッズの分が入る。そして杉浦が勝てば、ワシは差し引きゼロになるわけや」

「新庄はバントをしませんよ、サインを無視してでも打ちに行く男です。そして、こんな時に綺麗なヒットを打って、どうだ、バントのサインを出したベンチめと一塁で笑う男です。だから、オレは２０００万を手にするんだ……」

村田は、明らかに、青田のペースにはまっていた。もともと低出塁率の新庄、しかも送りバントが考えうるこの場面で、新庄に出塁を期待するのはあまりにも酷。

新庄が持つ、サムシングに賭けた村田であるが、はたして新庄はどれほどの星の下に生まれてきただろうか。

ベンチのサインに逆らい自我を貫く男だろうか。そして、村田も青田も新庄がうつ状態であることにまた気づいていない。

はたまた結果はあっさりと出る。

新庄は村田が期待をかける強いスター性を帯びる男ではなかったのだ。ましてやうつ状態にある新庄は、バントは恥を欠かないためにもってこいの作戦と従順にバントをしたのだ。

三塁小久保に向かって、新庄のバントはやや強く転がる。

ダッシュよく飛び出た小久保は、二塁で岡田を殺せると、送球を焦ったのか、ジャックルした。これは二塁は無理とみた小久保は一塁送球に切り替える。俊足の新庄だ。十分にバントヒットの大逆転がある展開であると、村田は期待のため息を漏らす。

「あ、いけ、新庄、走れ」

だがしかし、新庄は走らない。とろとろと歩くように一塁に向かう新庄に、バントヒットの奇跡を期待するのは不可能。

送りバント成功。投手杉浦の勝利。つまりは、杉浦に賭けた青田の勝利である。

「あ、いや、え……」
一瞬にして、１０００万のミリオンダラーを失った村田は顔面蒼白。
「ワシの勝ちやな」
「いやでも、青田さん。いくらなんでも、打者の連続出塁、しかも新庄の出塁を期待するのは明らかに……送りバントが投手の勝利というのも、なんだか納得いきませんよね」
「賭けに乗ったお前さんが悪いんやないか」
村田を泥沼に引き込んだのは、青田自身のくせにぬけぬけと言えるものだ。
「いやでも……」
すると、うつむき加減だった村田が、急にこわばった笑顔を作る。
「これでちゃらですね！　差し引き、ほぼゼロです！　もしかするとオッズの関係で、オレに数万程度の勝ちがあるかもしれないすけど、まあ賭け事は常識の範囲内に終わって、良かったんじゃないですか？　１０００万だとか、浮世離れした金額が飛び交いましたけど……」
「差し引きゼロか、あるいは常識の範囲内……。のう、村田よ。ここで終わるつもりか？　最初に言ったやろ？　野球は3アウトや、まだ1アウトや、残り2アウトもある」
「まだ賭けを続けるってことですか……」
「次の真弓の打席、ワシは５０００万を賭ける」
「５０００万って、バカげてますよ。この大会のギャラ、そこまで高くないでしょ？」
「あほ、ワシは顔が広いんや。闇のルートをたどれば、すぐに５００万ほど用意できるわ……。真弓の打席結果を予想する。たったそれだけで、５０００万がお前の懐に入るんやぞ、まさか逃げると言い出すか？」

「５０００万って青田さん……」
「何度もいうとるやろ、金は用意できるって。だが、ひとつ条件がある」
「条件？」
「お前も１０００万を賭けい」
「は、１０００万って、ご冗談を、青田さん。現役選手でもないオレがそんな大金用意できますか！」
「さっき、１０００万賭けたやないか」
「あれは、岡田さんの打席で勝った分ですよ、ちゃらになった今は」
「なら、ワシの５０００万はいいんやな。真弓の打席結果、丁か半かを当てるだけで、お前の全盛期の年俸分、稼げるチャンスいうのに」
「……」
「男なら、賭けてみいよ、村田」
「……５０００万か、価値はありますね……青田さんは、信用できる人だ。どっかの相撲取りを恐喝したアホと違い、逃げも隠れもしないはずだ……丁か半か。なんだ、オレがいた頃のダイエーの勝率より高いっすね……」
　現役選手ではない村田に、１０００万をすぐに用意できる当てはない。それでも、半分の確率で５０００万を手に入れられる魅力の前に、村田は首を縦に振るのだ。
「やる気になったか、さすがにダイエーでエースを張った男やな。ところでな、送りバントは、打者の負けとしたが、ルール変えんか？」
「え？」
「送りバントは投手の勝ちでもない。ベンチの勝ちや、ならば打者の勝ちと計算してええんやないか。これで、打者の分の悪さが相殺

できるやろ？」
「……なんですか、いきなり、ルール変更を」
「ワシは、さっきもいったとおり、藤本定義の元で選手もコーチもやったんや。あのじいさんのことはよう知ってる。それで、あのじいさんが、ここで、どんな采配をふるうかもな」
「どういうことです？　賭ける前だ、なにが誘導なような気もしますが」
「一死二塁やろ？　この場面な、あおのじいさん、２アウトになっても、三塁に走者を送ることにこだわるぞ」
「まさか、真弓さんですよ？」
「真弓だからといって、関係ない。藤本のじいさんにとっては、ただの駒や。しかも、三塁に走者を置いて、迎えるのは、二番の吉田や。吉田のミートの巧みさは前の二打席で、村田も分かったろうが、三塁にコツコツ当てる吉田。ほれ、村田よ、お前も投手やから分かるやろ？　ポテンヒットで一点入る恐怖が」
「……まあ分からないでもないですが、確かに、三塁に走者を置いて、嫌なのは、長距離より、むしろ吉田さんみたいに当てに来るタイプかもしれません」
「藤本のじいさんも元は早稲田の主戦投手や。三塁で当てに来る打者を迎える恐怖をよう知っとるんや」
「それで、真弓さんも送りバントというのですか？　つまりルール変更で、真弓さんの勝ちと？」
「いや、ただ藤本のじいさんの采配のクセをいったまでよ。藤本のじいさんを知らん村田のような若いのに、不利にならんようにな」
「……真弓さんの勝ちに賭けるのは、それでも分が悪いですよ。三度連続、打者の出塁を願うのは」
「なら、杉浦の勝ちに賭けるか？」
「……」
村田の頭によぎったのは、過去の二打席の真弓の結果だ。二打席のうち一打席に出塁を記録している。

「三打席で二度の出塁を期待するのは、確率からみて酷とみるか、それとも真弓さんは実力者、初回のヒットで調子の波が来ていると見るか。3打数3安打の打者に4安打目はないと代打を出した三原さんなら、三度目の期待をしないだろう……だが、オレは村田勝喜だ。ダイエーのエースというヤクザれた身分だ。そしてホークスの象徴といえば鶴岡親分。情に厚い鶴岡さんなら、調子の波の頂点に期待をかけるはず。乗ってみるか、ホークスOBの端くれとして、鶴岡親分の温情采配に……真弓さんの勝ちです、よろしいですか、青田さん?」

「三回連続、打者の勝ちに賭けたか。ええ賭け方や。さすが、ダイエーの大エースやな。ブレがない。するとなると、ワシは自動的に杉浦の勝ちに賭けないかんわけか。真弓は過去二打席で杉浦のボールを見切ってる。そうとわかって、杉浦に賭けないかんいうのは、辛いものがあるな」

杉浦の元に、ホークスの投手コーチの柚木が飛んでいく。マウンド上で杉浦を囲んで、緊急会議だ。

「なんや、このタイミングで飛び出すことはないやろ」

「なんですかね」

「敬遠はないな。いくら一塁が空いていて真弓が怖いいうても、バースまで回る形を作ることはない」

「でもカウント次第ならありますよ、それほど真弓さんは怖い打者です」

村田は黙ってはいるが、一塁が空いている状況での四球になる率の意外な高さを知っている。約一割出塁率が跳ね上がるというデータもある。真弓の四球でも村田の勝ちの場面である。利益になる要因を黙秘する権利は、ギャンブラーにもきちんと用意されているのだ。「ところで、青田さんは、中断中ですから、聞きますが、なんで、このカードなんですか? 青田さんといえば巨人でしょ? 巨人ー近鉄が試合してる東京ドームに現われるとばかり」

「あほ、巨人が勝つと決まっている試合をみる必要なんてないわい。

それなら、ダイエーと阪神の実力伯仲の試合を見たほうがええわ」
「試合どうなってるかな、青田さんのいうとおり巨人が優位に試合を進めているかな？　大隣くん。ちょっと携帯で調べてみて」
「は、はい……」
急にお鉢が回ってきた大隣は、あわてて携帯に目をやる。
「なんや、最近は電話で試合の経過がわかるんか。便利な世の中になったもんやな」
「えっと、5回終わって、巨人が一点リードされてます。近鉄ローズの逆転弾が出たようです」
「ふん、序盤の一点差なんぞ赤ちゃんのオシッコのようなもんや。すぐにひっくり返るわ」
近鉄がほぼ圧勝の形で勝利を飾ったことは、みなさんご存知だろう。名うてのハンデ師青田とはいえ、展開を見誤ることがあるのだ。
村田と青田の勝負の行方は、いまだ混沌としているとしかいいようがない。

阪神タイガースはなぜ勝てないのか？

二塁ベースの岡田は、燃えきれない打席で生まれたポテン安打が、村田の人生を激動の渦に叩き込んでいるとは、つゆ知らず、相変わらず、自分の後継監督の真弓に対して尋常ではない敵対心をたぎらせている。

「よく世間のみなさんが勘違いしてるけど、オレは別に真弓さんの活躍を期待してないわけではないよ。ただ阪神に勝って欲しいからの、いろいろな直言なんよ。ただただ我が愛する阪神に勝って欲しいだけや」

と口では言いつつ、野球エリートの自分が、雑草の真弓に選手としての実績では負けても、野球理論で負けるわけにはいかないとは思っているらしい。

「真弓さんとオレとの野球理論の深さの違いを見せてあげるよ。もし万が一、真弓さんがヒットを打つやろ？　それもオレよりももっと渋くて情けないポテンヒットや。まあ田淵さんや、掛布さんや、バースが二塁の走者やならホームに還ってこれないやろ。でもオレは還ってこれるのよ、同じ当たりでもな。それは、足の速さだけやない。野球頭脳が違うのよ」

岡田は自分の脳天を人差し指で何度か突く仕草を交える。

「ここが違うのよ、ここが。打球判断に対する違い、走塁のスタートの判断の違い、野球エリートはいろいろと違うがな、一番の違いは準備よ、準備」

するすると岡田は、大きめのリードを取る。

「このリードの大きさよ。それも杉浦ー野村のバッテリーに目の敵にされない程度の大きさよ。牽制が飛んでこん、それでいて単打で還ってこれるリードの幅がこれなのよ。グヘヘヘ、真弓さんのタイムリーが出るやろ？　野球の素人は真弓さんばっかりに目がいくけれど、野球の玄人は、オレの走塁の準備のよさに目を付けるのよ。

そして、世間は気づくのよ、阪神を勝たせた影の功労者は、オレやとな」

なぜか、成し遂げてもいないのに悦に浸る岡田であるが、岡田がリード幅を大きくとって狙いはホームへの生還確率をあげるためではない。

岡田のもうひとつの狙いとは。

「グヘヘヘ」

岡田のリードに合わせて、遊撃の川崎もこまめに守備位置を変える。しかしそのたびに岡田は川崎に少しでも近づこうとリード幅を変える、奇妙なイタチごっこが繰り返されるのである。

「グヘヘヘ、ムネリンはええ臭いしとるで……」

優男の遊撃手がタイプである岡田にとって、川崎は格好の獲物なのだ。

「オレの早稲田の後輩、野球エリートの都会もん鳥谷もええが、野球雑草鹿児島のやんちゃボーイ川崎もええなあ」

後ろ目でちらちらと川崎のお姿を拝見する岡田の口元には、一筋のヨダレがこぼれ落ちていく。

「ゲヘヘヘ……」

しかしこの岡田のでしゃばり過ぎたリード幅が、村田の人生をさらに深い闇に放りこむのだから、未来予測はつかめない。

「真弓さん、打ってください。お願いします」

村田はガラにもなく神頼みと、両手を合わせる。

「ふん、村田よ。お前はどこの神に祈りを捧げてるんや？」

「え？　どこでしょうね、一応仏教徒ですがら仏様でしょうか？」

「ふん、日本人に一番多いのが一応仏教徒いうのや。そういつつクリスマスを祝うんやぞ、いい加減なもんや。ワシみたいに宗教に一途になれや」

青田は両手を組み、祈る。青田までもガラにもなく神頼みだ。

「ワシは敬虔なクリスチャンや。この世を去る前に洗礼を受けたんやぞ。ワシの葬式も教会であげたんや」

意外にもクリスチャンの洗礼を受けた青田。
はたして、幸運の女神は、敬虔な青田に振り向くか、一応の村田に振り向くか。
全ての鍵を握る真弓の打席アプローチはこうだ。
「？　岡田のやつ、なに出しゃばって、リード幅大きくしてるんや。バカ、もう少し控えめにしろ、杉浦さんか、ノムさんのいずれかの牽制で殺されるぞ」
真弓は必死に岡田に目配せして、リード幅の修正を促すが、頑固な岡田は頑として動こない。
「オレに意見が言える野球頭脳やないでしょ」
先輩真弓の意見にガン無視の岡田に、八方美人の真弓はさりげないフォローを心がける。
「しゃーない、こうなりゃ、岡田が気づかれて刺される前に早打ちして、、岡田を還すしかないわ」
岡田のでしゃばりをみずからのプレーで相殺しようとする真弓は、さすがに波風を駆り立てない性格の主である。
早打ちを決めた真弓は、いきおい多少のボール球にも手を出さざるを得なくなるわけで。
「右打ち」
杉浦の投じた多少のボール球になるインコースのシュート回転のかかったストレートを強引に右に持っていこうとするが、激しくシュート回転のかかったストレートの前に真弓の技術も投影されない。
打球は、ライナー性の打球となり二遊間方向に飛んでいく。
セカンドの井口でも、ショートの川崎でも捕れる当たりであるが、元気者の川崎の出足が勝る。
「チェスト！」
度重なるミスのイメージを払拭しようと、やや大げさに飛び込んだ川崎のグラブの先にボールは入った。
「よっしゃ！」
だが、川崎にはまだ仕事がある。リード幅が大きく戻り切れない

岡田を殺すことだ。
瞬時に体を起こし、岡田の背中にタッチに行く川崎。ホーム生還の確率を高めようと、試みた入念なる準備が逆に命取りになった岡田は、二塁ベースに戻り切れず、川崎のタッチの洗礼をものの見事に食らってしまう。
「よし！」
併殺完成、一瞬にして5回表は幕を閉じる。しかし、岡田は、目を付けていた川崎に直に触れられたものだから、殺されてなお満面の笑み。
「グヘヘヘ、グヘ、クールな鳥谷もええが、元気者のムネリンもええな」
だが、本当の被害者は真弓でも岡田でもない、いうまでもなく村田である。
「ああ～抜けたと思ったのに、こんな時にスーパープレーするなよ、川崎のやつ！」

途中経過　達川のイチロー殺し

「１０年来、ワシが温めに温めたイチロー殺しの秘策を披露するチャンスがようやく巡ってきたけんのう。張り切るしかないんじゃ」

達川の企てた驚きのイチロー殺しの秘策とは、いったいいかなるシロモノか。達川はプレイボール早々、先発北別府の元に駆け寄り、内野手４人を集めて、早くも密談だ。

「悪いのう、キヌさんに、ヨシヒコに、江藤に、正田にもわざわざ来てもろうて。じゃがのう、イチロー殺しには、内野手４人の皆様方の協力も必要なんよ。よう聞いてくれ。ちょいと突飛で、一見バカバカしく見える策なんじゃけど、イチロー封じるにはこれしかないいう策なのよ、許してちょうだいよ。この策はのう。ワシが広島の監督になった９９年に思いついた策じゃ。イチローオリックスと日本シリーズで当たったとき、披露しようと温めて置いたんじゃが、いつまでたってもオリックスがシリーズに出てこんから、秘密兵器のままに終わってもうたが、なんや、江藤？　オリックスも優勝してないが、広島も優勝してないだと？　わかっっとるわ、江藤」

江藤は何も口答えしてないのに、なぜか達川の口撃の対象に。戸惑う江藤であるが、広島現役時代に達川のいつとんでくるかわからない毒舌は慣れっこだ。

「達川さん、僕、何も言うてませんよ」

生粋の関東人である江藤は、広島のえげつない風土に耐えきれず、ＦＡ宣言して、生まれ故郷に戻った経緯があるのだ。だが、江藤の喋り方は、広島弁に汚染されてか、どこか達川のしゃべりのイントネーションが伝染している。

「そうか、なにもいうてないか。ならええ、ワシの空耳か。それよりな、秘策よ、秘策。イチローは内野安打が得意じゃろ？　ワシ、考えたんじゃ。ＢＳでやっとるメジャー中継見ながら、イチローの内野安打をどうすれば封じることができるかを」

１１年前の広島監督時代に思いついた秘策といいつつ、メジャー中継を見て思いついたと飛び出す当たり、達川の適当さが伺える。

「そんで、ワシ、思いついたのよ。これ、うちの内野陣なら、内野安打を封じることは不可能じゃないか。メジャーリーグの肩の強い内野手がまったく殺せないイチローを、どうして、肩の弱い正田や、動きに雑さがあるヨシヒコが刺せるか、いや刺せるわけないと達観したのよ」

名指しで、守備の欠点を指摘された正田は、思わずムっとした顔になる。血気盛んな正田であるが、それでも感情を押し殺す術は会得している。彼も場数を踏んだ大人だからだ。

だが対照的。高橋慶彦はいくらコーチ、二軍監督として、経験を積んでも、喉につっかかる感情を吐き出さないと我慢ならないタイプなのである。

「おい、たっちゃん。そりゃないでしょう？　いきなり、チームメイト批判か？」

もともと、達川と高橋慶彦といえば、ダイエーコーチ時代に何度も殴り合いの喧嘩をした間柄だ。達川にひと腐りされれば、いつ喧嘩が始まってもおかしくない関係にある。

「まあヨシヒコよ、本当のことというて、怒るようなタイプやないやろ、お前さんは」

「まあね、確かにオレの守備は雑さがあるよ。ただ相手がイチローとなれば、精神を研ぎ澄ませてだな、無駄のないプレー運びでイチローだって刺せるよ、うん」

達川と高橋慶彦の臨戦態勢を感じ取ったわけではないが、衣笠がそっと二人の間に割り込み、関係の修復を図る。

「おいヨシヒコ。お前は、そうやって、相手によって、プレーの懸命さにムラがあるから、守備に絶対的な信頼感がないんやろ」

「まあそうですね、キヌさんにいわれちゃあしょうがない、認めるしかない。オレの守備はたしかにムラがありますよ。イチロー相手だからといって、突然、魔が刺して、へぼなプレーしちゃう可能性

もないことはないですよ」
「そうじゃろ、キヌさんのいうとおりじゃ。お前のムラのあるプレーに、ワシは何度泣かされたことか。ワシはお前を信用せん、だから、ショートに、セカンドに、江藤のファーストに、すいません、キヌさんのサードに打球が飛んだ瞬間に、ワシはイチローの内野安打を覚悟するんじゃ。広島内野陣じゃ、イチローは一塁に刺せん。じゃからのう、イチロー殺しはこうなるのよ」
「本気ですか？　達川さん……」
いつもいたってクールに赤いほっぺを絶やさない北別府が思わず絶句するほどのイチロー殺しの策の正体は。
「驚いかいのう？　全国民大注目のイチローの初打席じゃ。こんくらい思い切った作戦を披露せんとのう」
マウンドにできていた6人の輪は解ける。
とびっきりのいたずらを仕掛けたように達川はにやにや笑いながらキャッチャーの定位置に戻る。
「なんでしょうかね、その達川さんのしたり顔。気になりますねえ、オオカミ中年とも言われた達川さんが、いったいなにを考えているのか」
策にはめようとするイチローすら期待に胸を震わせる達川のイチロー殺しの秘策とはいったいいかなるものか。

途中経過　達川のイチロー殺し

達川のイチロー殺しとは、いったいいかなるシロモノか。達川に挨拶をするだけで笑いが堪えきれない様子のイチローも、まさか真っ向勝負が美徳とされる開幕の第一打席から、達川が禁断の秘策を披露するとは思ってもいないだろう。

「どうも、達川さん。解説やコーチとしてはお会いしたことありますけど、こうして、捕手と打者の間柄で相対するのは初めてですね。どうも、僕は鈴木一郎です。よろしくお願いします」

イチローがオリックスに入団したのは１９９２年、達川が引退した年だ。密かに注目されていたルーキーとはいえ、高卒からオープン戦に招集される選手ではなかったイチローが、違うリーグの達川と当たるはずがないのだ。

初めての捕手には、初めてとしての礼儀があると、イチローは、半ば八百長行為を口にする。

「真ん中に投げてください。ストライクひとつ先行から始めましょうよ」

イチローは初球を見ることを宣言。開幕の格と先輩捕手達川に対する礼儀か。積極的な攻撃打法が持ち味であるイチローは、自ら、最大の武器を捨てることになるのだが。

「ほう、それなら、ペイ（北別府）にど真ん中投げさせようかのう、大イチローさんが、ストライクひとつくれるとおっしゃられているのだから……おい、ワシがそんな作戦にひっかかると思うか？　オオカミ中年言われたワシやぞ。人を騙すことはあっても、騙されることはないけんのう。どうせ、素直に真ん中投げたら、カコーンとプレイボール本塁打にするつもりじゃろうが？」

「フフフフ、バレましたか？　あと、コーナをつく投球が信条の北別府さんでしょ？　初球にど真ん中投げると、手先の感覚に微妙に狂いが生じて、その後、打ちやすくなるかなと思ったんですよ」

「ほんまにイチローは、先輩に対してもいたずら心を忘れんのう。イチローがそのつもりなら、ワシもいたずらしようかのう」
達川は、イチロー殺しの秘策を話の行きがかり上、いたずらと称したが、達川のいたずらの種はすでにグランドに巻かれ、芽が生えようとしていた。
「どういうことですか、達川さん？」
「どういうこともないけんのう。江藤も、正田も、キヌさんも、ヨシヒコも、みんな真面目に勝ちたいだけじゃ」
「だからといって、ふざけるのもいい加減にしてくださいよ。内野に一人もいないじゃありませんか！」
達川が捕手の定位置に戻る。北別府はマウンドにいる。だが、一塁の江藤も、二塁の正田も、三塁の衣笠も、遊撃の高橋も、定位置にはいやしないのだ。
イチローシフトに、広島マツダ本社のコンピュータが弾きだした、打球が飛んでくる確率が高い場所に動いたわけでもない。
「へえ、こういう野球をしてくるんだ」
イチローも思わず苦笑い。
「いいのかなあ、これで」
生真面目な江藤は納得しようとも、首をひねるしかない。
「岡田さんが後で聞いたら、絶句するで」
今や広島ＯＢというよりも、岡田の懐刀のイメージが強い正田は、秘策の是非を岡田に委ねる。
「達川はやっぱり、変わってるよ」
衣笠は野球が出来れば、なんでもいいのだ。
「たっちゃんは相変わらずやなあ。まあええよ、このシフトの責任は、全部、あいつがかぶると言うてるのだから、高橋慶彦様は、策の駒となり傍観するまでよ」
達川と犬猿の仲である高橋慶彦は、うつむきかげんで腕組みをする。
はたして、彼ら内野陣はどこにいるのか？

彼ら内野陣は、外野にいたのだ。
「これぞイチロー殺しの最大の秘策。7人外野じゃけん。ブラウンが5人内野をようやるけど、あれと似たようなもんかのう」
「全然似てないですよ、達川さん、ありえませんって！」
「ワシは、オリックス時代のお前の全打席のデータをにらっめこしながら、一晩考えた。それで、このシフトにたどり着いたわけよ。内野安打は防ぎようがないなら、内野に一人も置かんと、外野安打の確率を下げるために内野４人を外野に置けばええと」
「……外野安打だろうと内野安打だろうと、転がせば、絶対ヒットですよ」
それもそのはず微妙な当たりどころか、平凡な当たりも全部、外野に抜けていくからだ。
「ああ、そうか、そうじゃのう、イチローの言うとおりじゃ、木を見て森を見ずじゃ。転がせば安打は変わらんのじゃ……ふん、イチローよ、そんなことは、最初から、計算の内よ」
「……どんな秘策かと思いましたが、ウケ狙いですね、笑いに厳しい僕の点数は低いですよ、これでは」
「あほじゃのう、ウケ狙いじゃないけん、ワシはいつも本気で真面目よ。ワシも真面目に野球をやるから、イチロー、お前も真面目にやれよ」
「……いつも、真面目ですよ、僕は」
「お前が、尊敬できる数少ない野球人の一人、王さんは、いくら王シフトを引かれても、気にせず、シフトが密集する方向を狙ったものよ。王さんを尊敬してやまないお前が、シフトの逆をつくようなせこいマネはせんよのう？」
「どういうことです？」
「バントヒットでも、チョコンと当てれば、ヒットじゃが、お前は、7人いる外野の空いている所にヒットを打たないけん選手じゃ。そうしてこそ、イチローじゃ。ワシのいう意味分かるじゃろ？」
「まあわかりますねえ、広義では。でも狭義では、わからないとこ

ろがありますねえ。僕はヒットマンなんですよ、王さんと違う、スタンドに打ち込まなくとも、人がいないところに打てば、ヒットなんですから」

「そうか、そういうせこいまねをするなら、これじゃ」

達川はイチローの後ろに隠れるように構える。数々のビーンボールを受けてきたイチローは、達川の動きだけですべてを察知する。

「死球でも出塁は出塁ですね。出塁率は上がりますね。でも、僕、嫌いなんですよ、打率とか、出塁率とかって、割り算ですからね、体育会系の僕には、やっぱりシンプルな足し算がいいんですよ、安打数は増えるけど、減らないでしょ？」

虚々実々が入り乱れるイチロー対達川であるが、トリプル主演の三人目は忘れがちである。

「打たせて取るという投球術が僕の持ち味だけど、たまには三振を狙ってる見るかな。世界のイチローから三振、東国原知事から宮崎県民栄誉賞が貰えそうだ」

北別府が静かな闘志を、しとしと赤いほっぺにたぎらせる。

途中経過　達川のイチロー殺し　女地獄油殺し

「僕を外野に置くなんて、どうなっても、知りませんよ。達川さん……まあ僕の一軍初出場はこのライトなんだけどね」

一塁の江藤はライトのポール際前に守備位置を取っている。二塁の正田は、ライトの前田とセンターの長嶋の中間辺り。高橋慶彦は、センターとレフトの間、そして衣笠は、レフトのポール際の前に守っている。

「オレも江藤もヨシヒコでさえ外野の守備経験あるとはいえ、それはごくわずか。正田に至っては外野についた記録さえない。達川のやつも思い切ったことするよ。たとえ、アイツの見立て通りにイチローの打球が飛んできても、フライが捕れるか分からないのに」

外野に7人もいると、マツダスタジアムの広大な外野も旧広島市民球場並の狭さに見えてくるから不思議だ。

一方の内野はがらんどう。中心のマウンドに北別府がいるだけだ。1986年のゴールデングラブ賞北別府とはいえ、とても一人で守りきれるものではない。

ちょこんと当たればヒット確実の不可思議の守備に達川は、どんな勝算を見出したのだろうか。

「いやあ、達川さん、この感じ、いいっすね～。日本語が通じる相手にあれこれ嫌がらせを受けるのは。アメリカだとこうはいきませんから。同じ嫌がらせでも、こっちがハナから英語がわからないとバカにした感じで、無言の嫌がらせですからね、いやあ、懐かしい。僕がライトを守ると、品のない野次が矢のように飛んでくる大阪ドームの柄のよろしくない近鉄ファンを思い出しますよ。野次だけと安心していると、モノまで飛んでくるんですから……モノねえ、モノ……画鋲が飛んできても、チクとした痛みが伴うだけですけど……ビーンボールが飛んでくるとなると、チクじゃ済まないなあ」

「イチロー、心は決めたか？　お前さんは、王さんを尊敬してるん

じゃろうが。その王さんは、カープが施した王シフトにどう立ち向かったかのう？　誰もいない逆方向にバントすれば全部ヒット。流し打ちすれば、これも高確率でヒット。それなのに、王さんはどんな打撃をしたかのう？　自分の型を忘れずに、王シフトを嘲り笑うように、ライトのスタンドにぶち込んだんじゃ……感動するのう、さすが王さんじゃのう、このワシをダイエーのコーチに呼んでくださった、王さんじゃのう……さて、イチロー、お前さんは、どういう打撃をするかのう？　それでも誰もいない内野に打って、ヒットを稼ぐか？　誰も称賛せんようの、そんなヒットは」

「王さんは王さんでしょうよ。王さんはライトのスタンドに打ち込む人。僕は、ヒットを打つ人。それがどんな当たりでもいい。とにかくHのランプが灯れば、見ている人は惜しみない拍手を送ってくれる」

「そうか、それもそうじゃのう。ヒットを打てば、安打製造機イチローか。なら頭に喰らえばええんじゃ」

達川は、イチローの背後に体を持っていくだけでなく、ついに、ミットをイチローの頭のそばに持っていく。

「こうじゃ。北別府は精密機械じゃ。一部の狂いもなくお前の頭を狙う……覚悟せいよ」

プレーボール第一球、しかも開幕の緊張感ある中での初球にビーンボールを投げ込むバッテリーなぞ聞いたことはない。

それでもやると決めたら殺るのが達川だ。北別府だって平気な顔で、達川のミットの位置にボールを投げ込む。

１３７キロ。マツダスタジアムが計測した北別府の初球の球速がこれだ。北別府にしては平均的な球速であろうが、イチローにとっては危険なボールに変わりわない。

それでも強い信念を持つイチローは、このボールに怯えることなく涼しい顔で見逃す。

耳元に、ヒューンと危険な香りを残し、ボールが通りすぎてもだ。

「本当に投げましたね、ビーンボール」

「ビーンボール？　人聞き悪いのう。どんなボールでも打つイチローの打撃センスを警戒した結果のボールよ」

突然、投じられたビーンボールに球場は唖然呆然。見たこともない外野7人に始まり、目の肥えた広島の観客の野球脳も、達川のトリック野球の前にはショート寸前なのだ。

「いやあ、北別府にしては珍しいコントロールミスでしたね、開幕の緊張感でしょうか～」

広島ホームテレビの解説者池谷公二郎は、相変わらず的外れの解説をしている。達川のミット通り投げ込んだ北別府のどこに制球ミスがあったというのだろうか。

「いや、池谷さん。北別府は達川さんのミットに投げ込みましたよ」

ダブル解説のもう一人である小林聖始がすかさずまっとうなフォローをするが、池谷は聞く耳を持たず。

「北別府がこの調子なら、１９７６年の沢村賞投手である、この私が投げたほうがましでしたよ。いくらイチローでも、私のぎったんばっこんのフォームから繰り出される快速球は打てませんでしょうから」

突如、自分の自慢話を始める始末。

「それにしもどうして、この私が解説なんでしょうか、ベンチ入りはもちろん、コーチとしても引手があって当然のはず」

巨人、広島で迷コーチぶりを発揮した池谷を、いくら広島がガチガチの生え抜き主義といっても、さすがに起用しづらいだろう。

「達川さん、勘違いしないでくださいよ、なにもビーンボールに怯えて心変わりしたわけじゃないですから……。内野に打ってヒットを打つのは簡単。それなら外野7人の間に落とす方に挑戦してもいいかな？　こんなチャンス二度とありませんからねえ」

「そうか、イチローようやく心変わりしてくれたか、王さんを見習うか。それこそ世界のイチローじゃ……」

達川は体をイチローの背後に隠すことを辞めた。

「それで、イチロー。どこに打つのかのう。外野は密集しているぞ」
「王さんと同じく、シフトを嘲り笑うようにライトスタンド。イチローはホームランを狙えば、４０本打てる伝説を証明させてあげますよ」
「ほう、イチローがプレイボールホームラン、それは盛り上がるのう、興行としたらこの上ない理想的な展開じゃ」
　イチローは狙ってホームランを打てるは事実だろう。打撃練習でポンポンとホームランを打ち込み、大リーガーをあ然とさせ、球宴のホームランダービーに推薦されるほどだからだ。
　だからといってイチローがどんなボールでもホームランを打てるわけではない。ホームラン打者として体格的なハンデのあるイチローは、内角付近のツボにはまれば、いくらでも自由にスタンドに打ち込むだろうが、外角球をねじ込んでスタンドにぶち込む力もなく、かといって流し打ちが本塁打になるほどマツダスタジアムは狭くはない。
　北別府の制球力を持てさえすれば、イチローのホームラン予告を打ち砕くことは十分可能のはずである。
「ペイ勝ったぞ。ワシはイチローとの心理戦に勝ったんじゃ。このイチロー殺しの肝は心理戦よ。イチローに外野を狙わせる時点でワシらバッテリーの勝ちなんよ……」
　達川は一塁ベンチの古葉監督に分かるように、右手で小さな丸印を形作る。体を半分ベンチに隠していた古葉は、達川のサインにほっとした顔。
「アイツが絶対成功させるから、ワシの口八丁を信じてくださいというから、この無謀すぎる作戦を許したが……あのバカ、本当にイチローをはめよった」
「古葉監督、ワシの言うとおりじゃたろ？　古葉監督は達川の作戦聞いて、絶対成功せんと頑として認めんかったが、作戦コーチであるワシが、達川を信じてくだされとムリヤリ押し込んだのが功を奏しましたのう」

作戦コーチの大下が自らの手柄のように語るが、古葉は首を横に振る。

「大下、お前は、そんな奇策は成功せんと絶対反対の立場だったろうが」

「そうっだったかのう、いやあ、最近物忘れが激しゅうて……」

カメレオンのように、ころころと立場を変える大下のことだ。達川の作戦が失敗に終わると、ほれ言ったじゃないかと言い出しておかしくはない。

「ワシはもう外しか投げさせん。ちょこんと流したければ流せばええ。ワシはその瞬間イチローを軽蔑の対象にするがのう」

達川はあくまでも外一辺倒。北別府も制球マシーンの異名通り、寸分の狂いもなく、そこに投げ込んでいく。

ちょこんと打てば、ヒット確実のゾーンであるが、有限実行がモットーのイチローは、体をよじり、ねじ込むように外角ギリギリのボールをライトスタンドにぶち込もうとする。

イチローは気づいただろうか。いや、フォームの1ミリの狂いも瞬時に熟知するイチローのことだ。メジャーのスピードボール対応のステップ幅の小さいフォームから、大きく右足を振り上げる懐かしの振り子打法に戻っていたことくらい気づいているだろう。

それとも反動をつけて遠くに飛ばすことを考えた上の振り子打法か。

イチローの全身全霊をかけた打球は、イチローシフトを嘲り笑うように、外野7人の上を飛んでいこうとする。

ゆとりとすりすりゆすり

「いやちょっと冷静に考えてくださいよ、青田さん、カタギのオレが１０００万なんて、用意できるわけありませんじゃないですか」
「賭けに乗ったのは村田、お前さんのほうやろ？　いまさら何を泣き言いうとるんや」
「でも、青田さん……そ、そうだ、裏のホークスの攻撃も賭けの対象にしません？」
「最初にワシがいうたやろ？　３アウトまでが勝負やと」
村田は、完全に青田の熟練の術中にはまっていたのだ。口車に乗せられ、打者の勝ちに三回連続かけた村田。そして、勝敗は打者からみて一勝二敗の勝率・３３３。平均的な出塁率と同じ数字である。
つまり、村田は負けるにして負けたのだ。村田の勝敗も一勝二敗。それもその一勝が最初に来たからたちが悪い。
幸先良い勝利でいけると思った村田は、青田の泥沼にはめやすい精神状態に陥いていたのだ。
村田は笑う。
「あはははは」
人間は絶望の淵に落ちたとき、まず笑うのだろうか。そして、村田は突然怖い顔をして切れだす。
「ちょっと考えればわかるでしょ、１０００万なんて大金、現役でないオレが用意できるわけないと。そうだ、青田さん。こういう手もありますぜ。１０００万の負けを帳消しにして、さらに、オレに大金が舞い込む手が……」
「ほうそれで、どんな手や？」
「いいですかね、青田さん、野球賭博の世間の目が厳しいところで、堂々と賭博をして。しかも、青田さんは、賭博のハンデ師ときている。これが世間に知られたらどうなりますかね？　いくら青田さんがもうすでにこの世の人間でないにしても、青田さんのご遺族は、

まだおの世界で暮らしているんでしょう？　そして何よりも、青田さんの大好きな巨人軍の顔に泥を塗ることにもなる」
「どうした、村田。それより、なんでお前、オレに近づいてきた？」
「なに平然と装っているんですか？」
「最初から、そのつもりやったんか？　ワシを揺さぶろうと」
「いや、たまたま球場に古巣の応援に来て、たまたま球界の大先輩がいたから、当然の挨拶をしたまですよ」
「ほう……それで、そんな手でワシから数千万の大金を脅し取ろうというのか？」
「脅し取る？　人聞き悪いなあ。取引ですよ、これは正当な取引」
「お前は、最近の野球事情にはワシより通じてても、世の中の動きは知らないと思える。なあ大隣よ」
「ですね、青田さん」
「は？　どういうことですか？」
「ワシがハンデ師で何が悪い？」
「開き直りですか？　あははは」
「大隣よ、まだ分かっとらんようだ、新聞見せてみい」
「はいただいま」
「新聞？」
大隣は、青田の命令通り、バックの中からタブロイド版の新聞を取り出す。
「本当に知らないんですね、村田先輩」
大隣が村田によく見えるように見せた新聞の大きな見出しには、村田の全てをひっくり返す言葉が踊っていた。
「は？　野球賭博は青田に任せろ？？　大会公認ハンデ師の青田が今日の5試合を鋭く切る？　どういうことですか、これ？」
「どういうこともないわ。野球賭博は公認なんや。ヤクザが仕切って大金が動くくらいなら、公的機関が仕切って、その儲けた金を野球振興やいろいろな所につかおうとなったんや」
「本当に知らなかったんですか？　村田先輩。けっこう話題になり

ましたよ～。かくいう僕も最近の野球事情に詳しくない青田さんをフォローするために選ばれた公的なハンデ師補佐ですから」
「……？？？　ということはどういうことだ？　オレは１０００万を払わないといけないのか？　いやおかしいでしょうよ、これは公的な賭けでもないし、常識な範囲内でもない……」
「公的も常識もクソもあるかい。男なら１０００万払え、村田よ」
「……」
血の気を失った村田の胸中に去来するのは、後悔か、それとも諦めの境地か。
「逃げるかと思うたが、立ち向かう心があれば大丈夫やろ、村田よ」
「大丈夫？　なにが大丈夫なんですか？　真面目に働いて１０００万をコツコツと払えってことですか？」
「その仕事ワシが斡旋してもええぞ。それも斡旋料はサービスしとく」
「仕事？？」
「根本はワシのいうことを聞くだろうな、ワシが村田を今から招集しろいうたら断りきれんやろ。村田もなんだかんだいって、ダイエーのエースだった男や。その気になれば、今からホークスの投手陣にも組み込めるぞ。１０００万だ、登録さえされれば、ギャラとして１０００万出る。なんだ、村田が今背負ってる借金と同額やないかい」
「……？　青田さん、もしかして最初からオレにやる気を出させるために……」
「そんなんあるか、いくら名うての予想屋のワシでも、お前の登場は予想外や」
「……」
青田によって、借金の蟻地獄にはまる寸前だった村田は、青田の蜘蛛の糸により救われようとしている。
「吉永、試合に出ませんかね？　オレはアイツと同期で同級生でよくバッテリーを組んだ仲なんすよ。野村さん、城島もいいけど、や

っぱり知った吉永とバッテリーを組めたら、オレの持ち味を最大限活かしてくれると思うんですよ」

それまで荒んだ眼をしていた村田がすっかりと希望に満ちた眼をしている。

「……やる気になったか、根本にいうとくぞ、次の試合で先発村田が見れたらええのう。ワシはその試合を相手チームにハンデをつけたる。本気になった村田ほど怖い投手はおらんからや」

「次の試合はムリっすよ、試合感や調整ってもんがありますから。次の次あたりオレが先発でしょうけど」

「よういうな……。次は斉藤和巳、その次はスタンカ、それがワシの先発予想や」

こうして、村田のまさかの復帰が決まり、試合はゲーム成立の5回裏に突入していく。

ゆとりとすりすりゆすり（後書き）

危なすぎる話だった
というか１００万文字こえてこの程度の評価の
ってオレくらいなんだなｗ

途中経過　抗争勃発

イチローは、言い争いにいい負けた達川を見返すためだけに、一発を狙ったわけではない。

イチローの真の理由は、阪急とオリックスで割るチームをひとつにするためだ。第一回ＷＢＣのアメリカ戦を見れば分かる。クレメンス、Ａ－ロッド、ジーダー、グリフィーＪｒら居並ぶメジャーリーガーに見とれ、すっかり気後れしていた日本選手に、自分たちも対等に戦えることを示すために、あえて狙ったプレーボールホームラン。

ピービーから、放った一発と同じように、イチローシフトを嘲り笑うような弾道が、マツダスタジアムのライトスタンド目がけて、飛んでいく。

「よっしゃ」

細切れの雄叫びを上げて、走りだすイチローは、達川に当たるか当たらないか微妙な位置に、バットを投げ捨てる。

「おい、もうワシらに勝った気か。甘いわ、イチロー、北別府のアウトコースはただのアウトコースじゃないけん。お前がとらえた思うても、捉えてないんじゃ。打球は失速する。なぜなら、北別府は、微妙に絶妙にシュート回転をかけ、お前さんのパワースポットをひとつ外したんじゃ」

達川の自信も妄言ではなかった。イチローの捉えたと思った打球は、完全に捉えきれてなかったのだ。

イチローはホームランバッターではなく、真芯からひとつ外れた芯では、外角球をスタンドに放りこむパワーは備えていないのである。

舞い上がった打球は、マツダスタジアムのポール際で急失速する。首尾よく回りこんだ外野手が、大飛球を見事、キャッチ……と行きたいところであるが、イチローの大飛球をもぎ取ろうと、慣れぬ外

野フライに右往左往しているのは、一塁手の江藤である。

ポール際過ぎて、右翼手の前田が間に合わない位置だ。代わろうとも、代われるわけがない。

「江藤さん、任せたわ」

元来、全力プレーを惜しむ前田だけに、慣れぬ江藤に任せっきりで、遠くから見守っている。

一歳年下の天才外野手であり、ライバル心を燃やした前田の視線が気になったのか、それとも、若い頃に守っただけの外野手に慣れていないのか、江藤は、フライの落下点を迷ったあげく、明らかに場違いな場所にスタンバイする。

打者走者と化したイチローは、もたつく江藤を見て、ギアを入れ替える。

「スタンドインのホームランは夢と終わったけど、ランニングホームランに替えさせてもらう」

さっそうと一塁を蹴り上げると、ものすごいスピードで二塁に向かう。イチローの野望は果てることはない。なぜなら、外野7人で、内野は完全にお留守状態。イチローを二塁で殺そうとも、三塁で刺そうとも、そこには誰もベースカバーがいないからだ。

つまり江藤が落とした瞬間、誰にも邪魔されることなくイチローのランニング独演ショーが開始されるのである。

イチローは、安全を確認する。7人いる外野手の中から、フライを捕球する江藤とそのカバーをする前田以外の5人の外野手が、イチローが行く先々の塁のカバーによってたかって走ってくると外野の5人の動きをつぶさに見学しても、誰もベースカバーに動こうとしない。あまりにも突飛なシフトに残りの5人の外野手は思考回路をショートさせたと、イチローは安心し切る。

そして、江藤は誰もが抱いた不安通り、フライを落球する。達川の口撃で外野安打を狙わせた作戦は一応成功し、普通のシフトなら確実に外野安打の位置に江藤を配置したまではよかったが、江藤が外野フライに不慣れであることが、最後にして最大の誤算であった。

ファーストミットの土手に当てて転がるボール。
「あ」
江藤は、急いで捕りに行くことなく見守っているが、内野手江藤は、外野手は孤独であることを忘れていたのか。内野手は打球を落としても、すぐそばの誰かがフォローしてくれるが、外野手はそうはいかない。よほどの打球でないかぎり、自分の落としたボールは自分で拾いにいく必要があるが、ここで前田の動きが光る。
ライバル江藤のフォローを放棄したとさえ思えたライトの前田が、適切な動きでこぼれ落ちたボールを拾いあげて、すかさず送球の体勢に入っているのだ。
前田は、江藤のフライのカバーを放棄したわけでも、怠慢守備でもなく、むしろその真逆。江藤の落球に備えて、適切な位置取りをしていたのだ。
「どこに投げればええんじゃ」
しかし、異例の7人外野は、歴戦の外野手前田の動きもフリーズさせる。すかさず送球と行きたくとも、どこにもベースカバーがいないからだ。
躊躇している間に、イチローは二塁ベースを陥れようとしている。
迷う前田に、横にいた本来セカンドの正田がすかさずフォロー。
「北別府さんや、北別府さんに向かって投げえ」
「そうか、北別府さんじゃ」
投手の北別府が、二塁ベースカバーに向かって走っている。その北別府に向かって、前田は矢のような返球。
「あ、北別府さんが出てきた」
横目で北別府の二塁ベースカバーを確認するイチローだが、ベースまでの競争で、イチローは投手に負けるわけがないのだ。前田の返球を受けた北別府のベースカバーより早く、二塁に到達すると、イチローは、立ち止まることなく、そのまま走り過ぎる。
「目指せ、三塁！」
それも、当然、三塁のベースカバーもがら空きなのだ。達川も本

塁の死守を辞めようとしなければ、イチローは三塁ベースをもらったも同然、あとは、ボールを持った北別府に追いつかれることなく三塁ベースにたどり着けばいいはずであったが、三塁ベースには、いつのまにか、衣笠がいたのだ。

「よく走ったね、イチロー、ご苦労さん」

「うっそ～、衣笠さん、なんでいるの？」

「いくら、イチローより足が遅いといっても、オレも１９７６年のセ・リーグ盗塁王だぜ。君が、三塁に到達する時間があったら、レフトのポール際から走って帰ってこれるよ」

イチローは、いないはずの三塁衣笠と投手北別府に挟まれて、二三塁間でランダウンプレーに巻き込まれる。

無駄な抵抗を繰り返したあげく、これまたいつのまにか、ランダウンプレーに参加した正田のタッチを背中に食らい、これにて、イチローのランニングショーは、志半ばで終了する。

「はあはあ、これくらいで息を切らしたらアスリート失格だけど、なんかいつもより疲れたわ」

イチロー殺しは、紆余曲折がありながら、一応、広島側にハッピーエンドの結末をみたのだ。

「やった～　さすが名捕手タッちゃんじゃのう！　奇策でファンの眼を十分、楽しませた上に、きっちりとイチローを殺したぞ～」

まるで子供のように喜ぶ達川であったが、外野にポテンと打球が落ちたあとの、イチロー殺しの内野守備シフトはまったく考えてもいなかったのだ。

「キヌさんに感謝じゃ。ワシもまだまだ甘いのう」

一連の忙しい動きのあと、一応、イチロー殺しが成功した？　広島古葉監督は、急に疲れが来たのか、ベンチに腰をおろしてしまう。

「タツを信じてよかったな。アイツが絶対成功させる自信がありますからと強弁したから、思わず、うんといってしまったが、よくよく考えれば、とんでもない策だぞ、これは」

達川の出した交換条件は、もし作戦が失敗したら、捕手の交代を認めてもいいというもの。達川の口八丁のハッタリリードを買う古葉であるが、俊足強肩の西山や現在の野球をよく知る石原の起用も捨てがたいと、達川排除の流れもチームにプラスになると感じていた古葉。

「これで、タツを使わないかんのか。あいつ名捕手のイメージあるが、肩もたいしたことなく、キャッチングも平均以下なんだよ。この作戦の結果は痛し痒しだなあ」

首をひねる古葉。そして、三塁側のオリックスベンチは、今の達川のオキテ破りのシフトに色めき立っていた。

「達川は野球を舐めておる」

奇策には、寛容のイメージのある仰木がまず切れると、もう一人の闘将上田が黙っていられるわけがない。

先発捕手の中沢を名指しに、

「おい、中沢。達川にぶつけい！　いや8番の達川に打順が回るまで、我慢ならんわ。一番の高橋からどんどんぶつけていけ。こうなりゃ、戦争や。野球は戦争や」

幕開けから、なにやら物騒なマツダスタジアム。イチロー以外見所なしと言われたこのカードも俄然注目の的に？

小久保は誰を信じればいいのか

ゲームは、命運を分かつと古来の日本野球から特に言われてもいない5回の裏の突入していた。

ホークスの攻撃は、5番の松中から。驚異的な打撃技術を持つ松中は、村山のフォーク攻めに負けじと、低目のボールをコンパクトなスイングですくい上げて、逆方向であるレフトに松中らしい打球を放つ。

松中は、打球の行方を見ることなく、一気に二塁を陥れようとする。足に致命的な故障を抱え、鈍足のイメージがある松中であるが、走れ出せばそれなりに速いのである。

金本の山なりの返球を受けたカットマン吉田は、滑りこもとする松中を見て、二塁岡田への返球を諦めた。

「野球も人生も同じです。あきらめが肝心なんですわ、グヘヘ。私、吉田義男は無駄なことはしません……グヘヘ」

松中は頭から滑りこむと、脱げるヘルメットから顕になる後退しかかった頭皮を気にすることなく、二塁ベースを何度も叩く。興奮ついでに出た闘志の表しというよりも、沈滞気味のチームと自分を鼓舞するための一種のパフォーマンスか。

しかし、頭の状態を必要以上に気にする松中のこと。観衆の視線に自分の後退した頭皮がさらされることを嫌い、脱げたヘルメットの位置をどこかとキョロキョロ。

岡田の手元にあったヘルメットを奪い取るように拾うとしたが、選手会の先輩でもある岡田のいたずらにあう。

「なんや、松中。そんなに頭をすぐに隠したいんか?」

岡田はヘルメットを拾いあげると、グラブで隠そうとする。

「お願いします、岡田先輩。ヘルメットをお返しください」

「そんなに気にすることないやろ? ハゲはハゲや」

ハゲという言葉に過剰に反応する松中は、先輩岡田相手にかかわ

らず、ちょっとむっとした顔をする。
「お言葉ですが、岡田先輩。僕はハゲじゃなく、意識的に坊主にしてるんですよ」
「ならええやん。自分からした髪型ならええやん、客に見せても」
「そういう岡田先輩だって、薄いじゃないですか。僕は生え際の後退にとどまってますけど、岡田先輩は全体的にざっくりと本数が減ってらっしゃる」
「なにをいうてる、オレの髪の状態見るか？」
岡田が帽子を取って、見せびらかせると、松中びっくり。寂しいはずの岡田の頭に、こんんもりと髪が盛っているのだ。
「あ！　パンチパーマをかける余裕まである！」
「そうよ、忘れたか？　この大会は全盛期に戻れるのよ。オレの全盛期は１９８５年よ、２５年前よ。まだオレ２０代後半よ、禿げてるわけないやろ？」
「むむむ……」
かくいう松中も、岡田と同じく全盛期の三冠王時代に体を戻したわけ。３０そこそこの松中に戻ったわけであるが、当時から進行していた松中の頭は、今見てきたとおり。
「クッソ～　もっと若い頃に戻せばよかったかなあ～。あ、ダメか、ファームにおった頃は髪ふさふさだったけど、実力はアレやわ。能力捨てて、髪を取ったら、またホークスファンに給料泥棒と叩かれるわ……」
二塁打放った松中が気落ちすれば、次打者、小久保もプライドを傷つけられたと逆上する。
「バント？　オレがバントやと！」
弟分であり、良きライバルである松中の巧打に発奮して、オレも続くと意気込んでいた小久保は、まさかのバントのサインに燃えたぎる気持ちが、すかされた気分になる。
「マツが打ったんや。当然、オレも打てるで。のはずなのに、なんでバントなんや」

あからさまに送りバントのサインに不服そうな顔をする小久保。そんな小久保を気遣ってか、選手と鶴岡のパイプ役である蔭山ヘッドコーチが、鶴岡に口添えをする。

「鶴岡監督！　ええんですか？　小久保に言ってきかせましょうか？　この場面でバントをする意味と重要性、アイツも福岡ホークスのキャプテンの立場ですから、説明すれば分かってくれると思いますよ」

「いらんわ、監督のいうことを選手は聞く。それだけが道理や、説明する必要なんてないわ」

「ですけど、監督。このままだと失敗の……」

鶴岡は、断固として小久保への事情説明を拒んだ。頑固者鶴岡ゆえか、それとも、説明する必要がなくとも小久保が命令を遂行すると信じているのか。

それ以前に、ホークスのベンチには、小久保を操縦できる立場ある人物が皆無なのだ。

首脳陣の多くは南海派閥。小久保の入団時監督である根本はＧＭとして、ベンチ外、小久保のプロ入り後最大の恩師である王も、小久保の兄貴分であり、現監督である秋山も他球団のベンチにいるのだ。

大阪ホークスと福岡ホークスのつながりの微妙さは、戦前から懸念された事項であったが、今、その弱点がゲームの帰趨をわけようとしている。

王がベンチにいたならば、小久保に絶妙な一声をかければ、小久保はおとなしくバントをするだろう。ところが、そんな人物が皆無の現状、小久保は不満を抱きながらバントをする。普段からバントをあまりしない小久保に、さらに乗り気でないという要因が重なったら、どうなるか。

「あかん、あげてもうた」

村山の高目のストレートをバントしにいった小久保であるが、バントスポットに狂いが生じてか、あっけなく投手フライを打ち上げ

てしまう。
　村山が拝み取りでキャッチ。松中は慌てて二塁に戻り、最悪の併殺は免れたが、小久保の気持ちは晴れることなく曇っていく。
「クソ～」
　思わずバットを叩きつける小久保。その怒りは、バント失敗の悔しさか、それとも、バントを命じた鶴岡への無言の抗議か。
「小久保。オレがお前の失敗をカバーしゅるから、両目ぱっちりと広げ見ていてくんさいよ」
「カズさん……」
　続く山本和徳が、ガラにもなく、他人のミスを帳消しにしよとチームプレーの精神を垣間見せる。
　普段はどこか頼りない南海残党である山本和範も、大阪ホークス、福岡ホークスのつなぎ役としての役目を心得ているのか。
「村山しゃんのフォークを打って、松中を迎え入れるばってん」
　山本和範のフォーク狙いも当然、村山はここに来て、さらにフォークの投球割合を増やしているからだ。
　田淵も女房役らしき気遣いが芽生えたか、フォークを多投する村山の状態が気になって、マウンドに走る。
「どうですか、村山さん」
「ブチ、オレに気にせんで、どんどんフォークのサインを出せよ」
「本当にいいですか？　いくらなんでも多投しすぎです、これじゃ9回完投まで、持ちまえせんぜ」
「あほかい。オレの仕事はゼロに抑えることや。ゼロに抑えるために、フォークを投げなあかんなら、握力が消し飛んでも投げるまでや」
「しかし、先発完投っこそ投手の美学と語った村山さんらしくない」
「あほう、今の野球は事情が違う。しかも相手はホークス最強メンバーや。完投なんて、はなから考えてないわ。先発の仕事はとりあえず5回を投げきること。そしてオレの仕事は投げた回をすべてゼロに終わらすこと。それだけや」

「そうですか、後ろには、山本和行や藤川球児が控えてますからね。万が一に備えて江夏もいける状態にある。よし、村山さんが全力を果たしきっていいつもりなら、オレもとことんフォークのサインを出しますよ」

「頼むで、ブチ。そしてオレのフォークをそらさんと止めてくれよ」

「がってんだ！」

と名捕手らしく村山との打ち合わせを終えた田淵であるが、いきなり山本和範への初球……。

「あ、やば、空しちまった」

村山のさして難しくないフォークを体で止めきれず、松中を三塁に進めるパスボールを犯してしまう。

小久保の送りバント失敗で来た流れを帳消しにする致命的なミスであるが、それでもたいして気にしないのが田淵の人間の大きさだ。

「まったく、村山さん、いきなりワンバウンド放ることないでしょ。心の準備ができてないんだから、とりきれないよ」

どんなフォークでも止める大見得きったその口先が乾かないうちに、この発言。さすが田淵といいましょうか……。

谷津ゴロゴー

7番の山本和範がすべき役目は、三塁走者の松中を石にかじりついても還すことだけだ。手段はなんでもいい。ヒットでもホームランでも飛び出せば、なおよしであるが、犠牲フライでも内野ゴロでも得点が入るシュチュエーション。フォーク連投にパスボールが多発することから、振り逃げ覚悟の気構えでもよし。とにかく同点に追いつきさえすれば、ホークスファンで埋め尽くされるホームゲームだ。

ゲームの勢いは、俄然ホークスに有利に傾くだろう。

「松中をかえしゅますから見とってください、田淵しゃん」

「そうはいかすか、ドラ、いや、カズ、いや、ドラ？　お前をどう呼んだらよかったっけ？」

「どっちでもええですわ。とにかく歴戦の先輩たちや羨ましい素質を持つ後輩たちを差し置いて、僕を起用してくれた鶴岡監督の恩に報いなければならんたい」

闘志を燃やす苦労人山本和範に、一塁コーチの森下守備走塁コーチから、サインがでる。森下コーチといえば、何度もアキレス腱を断裂しながらも、不屈の闘志でゲームに復帰した鶴岡南海を代表する名選手であるが、コーチ業としても歴史に名を残している。

かの有名な燃えよドラゴンズで森下コーチのピストンサインとそのコーチ業ぶりが歌われているからだ。

歌の歌詞に登場するくらいに印象的な森下コーチの素早く両手が動くサインを見て、山本和範はそう来たかと感心した面持ちで何度もうなづく。

「なるほどょ。さしゅが、鶴岡監督。勝負どころを知っとるね」

山本和範が感心する鶴岡が森下コーチ経由で伝えたサインの内容は、ゴロゴーだ。つまり、山本和範が打った瞬間に、松中がスタートを切る思い切った走塁だ。二死ならば当然の走塁であるが、場面

はまだ一死。もし山本和範がライナーやフライを打ち上げたら、当然、飛び出した松中は戻れずアウトになるわけだ。犠牲フライになるような滞空時間の長い当たりなら、戻ってこれる時間はあるだろうが、内野フライやライナーだと、松中の切り返しの能力からすると間違いなく併殺だ。

一瞬にしてチェンジになるリスクを背負っても、鶴岡がゴロゴーのサインを出すのは、当然、内野ゴロが飛んだときの松中の生還確率を高めるためだ。

阪神の守備陣は、バックホームに備えて前進守備を敷いている。松中の走力を考えると、正面の強い当たりで還ってこれる可能性は低い。しかし、ゴロゴーのサインを出すことで打ったと同時にスタートを切ることから、その確率を高めることができるのだ。

そして、ゴロゴーのサインは、打者山本和範、走者松中ともどもに思い切った動きをさせる副作用がある。

山本和範はゴロを打つ打撃を心がけるだろうし、松中は自分の責任から開放されて、アウトになってもベンチのせいとばかりに思い切ったスタートが切れるからだ。まさに走る野球をキャッチフレーズにした鶴岡監督らしい作戦であるが、この動きを察知したのは二塁の岡田である。

「ゴロゴーあるで」

さすが野球エリートを自負する現役監督の岡田であるが、馴染みのない言葉にはっとするのがショートの吉田だ。

「ゴロゴー？　なんやそれ？　岡田、僕に分かるように説明せい」

三度の阪神監督経験があり、二十世紀末まで現代野球に関わった吉田らしからぬ発言であるが、年をとると物忘れが激しくなるものでご容赦してもらいたい。

「ようは、打った瞬間に三塁走者の松中がスタート切るいうことですよ、吉田さん」

「なんや、そうか。僕もようやった作戦やないか。ゴロゴーいう難しい言葉使うからよう分からんかったわ。それで、ゴロゴーいうの

は何語や？　フランス語なら僕、精通しとるから違うよな」
　いや、単なる和製英語です、おそらく。
「なるほど、打った瞬間にスタート切るか。僕のところへ飛んできたらどうしよか？　なあ岡田はどう思うか？」
「もしほんまにゴロゴー仕掛けてきたら、間に合わないかもしれませんね。オレんところ飛んできても、諦めて、一塁投げますわ」
「そうか、岡田はそうするか。なら、僕はバックホームやな。なんやか、わけのわからん作戦だけど、今牛若丸の僕なら、そんな作戦しいた意味ありますの？　とホームで刺しますわ」
　さすが、名手吉田だ。鶴岡野球に負けじと、バックホームで一点を死守する選択肢を選ぶ。一見、無謀であるが、世界で最も送球アクションの早い内野手と称された吉田のことだ、ゴロを打った瞬間、同点と沸き立つホークスベンチに水をさすことは十分可能であろう。
　そして、妙に冴える田淵は、鶴岡野球にどう対応するのだろうか。犠牲フライでも同点の場面。フライを上げやすい高目は禁物とフォークの連投でもパスボールの可能性が出てくる。しかも低目をつくと、ゴロを打ちやすく、ゴロゴー作戦をとるホークスに優位だ。
　鶴岡野球は一歩も二歩も先を読み、阪神を真綿で首を絞めるように苦しめる。
「三振にとればいいじゃん……今日の村山さんの球威だと、ストレートで空振りを狙うのは、難しいな、となると、やっぱりフォークの連投か」
　自分が何度もパスボールを繰り返し、その都度、走者を進めていることを忘れているとしか思えないリードであるが、これもおおらからで大雑把な捕手だからこそできるリードか。
　もし、野村や森のような神経質な捕手ならば、何度もパスボールを繰り返すうちに、フォークのサインを出しにくくなるだろう。これは、ある意味、自分に責任がかぶさることから逃げるリードであるが、田淵はそんなことを気にしやしない。
「今度、パスボールなら一点入る？　いやいや、この稀代の名捕手

田淵幸一さまが止めてあげますから、どうぞ、村山さん、お投げくださ い」

何度も繰り返したミスを棚上げにして、この自信。しかし、この田淵の根拠のない自信が、今日の村山の勇気の源になっているから、野球はわからない。

「いつものお前は信用ならんが、今日のお前は信頼する。全力でフォークを投げるから、ちゃんと受け止め～よ」

村山は三振狙いでフォークの連投だ。山本和範も自慢の選球眼を武器に、フォークを見極めるが、球審・円城寺がそれまでの打席よりも、低いコースをとるものだから、山本和範はたまらない。

「ちょちょ、そこさっきまでボールでっしゃろ?」

戦前派の頑固者円城寺は、ストライクボールの抗議は受け付けない。うんともすんとも言わないものだから、山本和範は諦めてゾーンを下に広げるしかない。

しめたと村山は、広がったゾーン目がけてボールを投げ込むが、一球にかける執念が違う山本和範は、難しい低目のフォークを巧みな技術で当てにいく。

ゴロゴーの指示のもと、松中はバットに打球が当たった瞬間にスタートを切る。フォークは空振りも取れるが、一度バットに当てさすれば、ゴロにするにはおあつらえ向きのボールだ。

「ガッチュ!」

山本和範はゴロを打った瞬間、走るのもほどほどに何度もガッツポーズを繰り返す。ゴロが転がった方向は、二遊間だ。セカンド岡田、ショート吉田、どっちでも処理できる当たりであるが、年功序列いや、守備の巧みさの違いか、岡田は吉田に打球処理を譲ると、勢いよく飛び出してきた吉田が、ホームで松中を殺さんと、目にも留まらぬ早業で送球体勢に入るが、なぜかどうしてか、スタートを切ったはずの松中が三塁に戻ったではないか。

「あいちゅ、どういうこっちゃ」

まさかの事態に松中は細い眼を白黒させるが、吉田はしめたもの。

ホーム送球から、一塁送球に切り替えると、安定した着実な送球フォームで、山本和範の一塁進出を阻む。
「はあはあ、いけんかった……」
頭から三塁ベースに帰る松中。それにしても、ゴロゴーの作戦通り、ゴロが放たれたのに、スタートを切ったのに、どうして松中は三塁に帰ったのだろうか。
三塁コーチャーの森脇が、直接松中に真意を問いただす。
「どういうこっちゃ、信彦」
「いや、森脇さん。岡田さんが処理したら、そのままゴーですか、吉田さんでしょ？　今牛若丸といわれた吉田さん相手にホームで勝負する勇気が急になくなって……」
「お前のセルフジャッジは分からんでもないが、これはベンチが決めた作戦やぞ」
「分かってます、でもですね、大事なランナーだと言い聞かせるうちに足がすくんじゃって……」
松中がそのままホームまで突っ切ったら、一点入っていたかどうかは分からない。吉田の見事な送球技術の前に本塁生還を阻まれたかもしれないし、松中の足が早くホームに入っていたかもしれない。
過去のもしもは、もう誰にも分からないが、はっきりしたことがある。選手とベンチとの意思疎通が取れていないことだ。
「かあ～　サイン通りや。なんでいかなんだ」
思わず頭をかかえる鶴岡親分。
「いやこれでよしとしましょうよ、三塁に走者が残ったことをよしと」
「蔭山ヘッド。お前さんも甘いわ、この判断ミスは致命傷や。こっちに来かけた流れが向こうにいきよる」
野村に情の野球と揶揄された鶴岡野球は、確率よりも試合の流れを重視するのだ。
「こういう流れはいかんのだじゃよ。選手が作戦を遂行できん流れはのう。三塁に走者を残ったからよしやない。この流れやと三塁走

者は還ってこんままこの回は終わるで」

野村に今の鶴岡のセリフを聞かせたら、こう言うだろう。「流れですべてが決まるのら、野球に頭はいらんやろ」。験担ぎを重視する野村であるが、流れの一言で野球を片付けない意地っ張りな野球観の持ち主だ。

野村の70年がかりの野球観も捨てがたいが、鶴岡の戦前から野球を見ている野球観も鋭いものがある。

「ほらみてみい、ワシのいうたとおりやないか」

8番佐々木の捉えたと思った打球が、バースのグラブにすっぽりと収まる。

「ああ～」

天を仰ぐ佐々木、そして、あの時そのまま突っ込んでおけばよかったと後悔する松中。

かくして5回裏もゼロは刻まれる。2リーグ分裂後のシーズン防御率上位4位のうち、3つを占める村山の伝説はまだ続くのか。それとも、完投をハナから捨てて、フォークの連投を決めた村山の握力はもう限界値に達しているのか。

「く、なんとか5回まで持ったが……」

握力が一秒単位で弱まっていく右手をじっと見つめる村山。

藤川球児、山本和行ら阪神歴戦の救援陣が備えているとはいえ、エースが降板するにはまだ早過ぎる。

エモやんは本当は野球界を思ったいい人です

「おや、山内孝徳さん。福岡ヤフードームの屋根が、だんだん開いていきますよ」

日に日に実況の腕が上がりつつあるようなきがしてならないＭＸテレビの女性実況、長友アナが思わず声を張り上げる。

「珍しいね。屋根を開けて試合をするなんて、僕が現役の頃は、天気だと必ず開けてたもんだけど、最近は閉めっぱなしだったもんな」

ＭＸテレビの解説の山内孝徳は、１９９２年に引退しているために、福岡ドームでのプレー経験はなし。山内孝徳特有のその場しのぎのデタラメか勘違いである。

「しかし、どういう風の吹き回しだろうね。お金がかかるから、勝利の儀式の時以外、開かないはずなのに。長友さんの股が開くのはけっこうだけど、ドームの屋根が開いてもね。投手の身からしては急に環境が変わるのは、ちょっと困るよ」

「浜名さんはどう思われます？」

キャバクラでホステスをくどくような口ぶりの山内孝徳と違い、もう一人の解説の浜名千広はいたってクール。

「どう……どうでしょうか。やっぱり、南海の先輩方……も多く参加してる……試合ですから……やっぱり自然の下でやるのがベスト……と思ったんじゃないでしょうかね……」

「はい……そうですか。ＭＸテレビ、ホークスストロング中継のここまでのハイライトをここでご覧ください」

山内孝徳の戯言も、浜名のちょっと意味の通らない解説も長友アナは、残酷に黙殺し、進行に専念する。

「４回、いや５回……ごめんなさい、６回表のタイガースの攻撃は２番の……えーと、吉田義男選手……え～、からです。どうでしょうか、山内孝徳さん」

「吉田さんは嫌らしい打撃をするよ。僕も嫌らしいけど。長友さん

は、いやらしい男はどうかな？」
「え～そうですか……吉田選手は嫌らしいと……つまり、しつこい選手ですか？」
「うん、しつこい選手だよ。僕もしつこいよ。長友さん、今晩暇？」
「え～　え～　あっと、吉田選手、打ち上げました。これはいけません、二番打者です。もっとしつこくいかないと」
　目の前の事実を伝えることに精一杯の長友アナは、見事に山内孝徳の誘いを受け流すのだ。
「セカンド、いやショート、いや、センターか……う～んライトも出てきたぞ～。おっと結局捕ったのは、レフトの山本和選手だ～」
「いやセンターの広瀬さん……ですね……」
「おっと失礼しました、浜名さん。捕ったのは、センターの……えっと、ひろ、ひろ……」
「広瀬さんですね」
「おっとこれまた失礼しました。広瀬が取って、ワンアウト！」
「長友さん、聞いてる？　今夜どう？」
　このとおり、終始咬み合わない、謎の実況中継が東京のローカル局で繰り返されているのだ。この小説に書かれた内容はフィクションであるが、恐ろしいことに事実に忠実に沿っている。
　なぜか年間とおして、実況を受け持つことになった長友アナ。そして、九州限定のおちゃらけ解説者だったはずの山内孝徳も謎の東京進出。これに、現役時代のイメージそのままクールすぎる解説の浜名が加われば（凡打に倒れても悔しさを表に出さない浜名は、闘志を表に出さない選手を極端にいやがる王監督に嫌われることになる。そしてその浜名の代わって抜擢されたのが、喜怒哀楽の激しい鳥越なのである。この一件で、アンチ王になった浜名はダイエー退団後、チームに戻れないでいる）、ローカル色満点のメンツもこの大会開幕戦の特別感が湧き出るか。
　そして、ユニークすぎる実況解説といえば、阪神側も同様だ。川藤、小山、吉田、掛布、岡田、真弓、村山ら有名解説者の多くがベ

ンチ入りしている現状、解説者が手薄になるのは致し方なし。さらに、伊藤史隆、工藤一彦、中田良弘あたりも、多く割り当てられたコーチ陣に名を乗せていれば、もうこの男しか解説のスターはいないのだ。

「次、バース？　いくら厳しいエモやんでもバースだけは認めるよ。でも、他の打者はみなクズよ。藤村富美男さん、おっと、僕のだいぶ先輩だね……でも時代が違いすぎるよ、昭和２０年代の打者を４番に使おうとする藤本監督のむしが良すぎますよ……うへへへ。ほら、バースは打つでしょ？　オレのいうたとおりや。でも藤村富美男さんは期待できへんですよ。バントでええんちゃいますか？　あ、でも次掛布か。ああ、やっぱり今のなし、二死から借金問題で頭がいっぱいの掛布が打てるわけがないよ」

とラジオ解説をいいことに好き勝手いいまくる江本。

「もうちょっと抑えて？　抑えますかな。ラジオなんて今時誰も聞いてませんぜ。うへっへ……なあ池田？　お前も思うやろ、今時ラジオは時代遅れやて。好きな人はＣＳやＢＳで払って見てるよな？」

法政の後輩であり、江本と同じく、ホークス、タイガース両球団のＯＢである池田は、現場復帰の野望もあってか、江本までは切り込めないのだ。

「ええ……そうですね、あの……いや藤村富美男さんはいい打者ですよ、はい」

苦しいフォローをするのが精一杯。これで、藤村富美男が一発放てば、罵詈雑言の江本も黙らせることができるのだが、タイミング悪く、藤村富美男はポップフライを打ち上げる。

「ほれみい、オレのいうたとおりやろ？　初代ミスタータイガースだかなんだか知らんけど、大昔の打者を４番にしたら、打線が途切れるだけだちゅうの。エモやんが監督なら、こんな馬鹿げた采配はふるいませんよ」

タイガース、ホークスのエースとして球団史に名を残しながら、両球団のどちらからも出場オファーのない江本だけに、いつもより

毒舌が冴えているのだろうか。

「しかし、ソフトバンクの方もひどい野球をするね。いつもあんなに偉そうに、リードがどうの配球がどうのと古田を腐していた野村さんがリードもせんとはねえ。オレが解説と知って、批評されるから嫌がったのかな。ウヘヘヘ」

江本特有の肩をすくめて、首だけが微妙に動く笑いが飛び出ると、バースは残塁に終わる。

「ほらみてみい、打てんかったやろ？　オレのいう通りや、バース以外はカスやね、ウヘヘヘ」

藤村富美男に送らせて、掛布勝負と言い切ったとは思えない解説ぶり。どんな状況でも結果、自分の解説は正しかったと聴取者に思わせる江本のテクニックか。

「全部、オレの言うとおりに事が運んでるよ。なんなら、次の試合から、オレが監督やろうか？　え？　ホークス、タイガースどっちかって？　そんなもん契約金の高い方や、ウヘヘヘ……」

絶口調の江本であるが、彼の自信満々の解説を覆すような出来事はこのあと待ち受けてるのだろうか。

試合は6回裏に進む。

エモやんは本当は野球界を思ったいい人です（後書き）

いやあー急に試合のテンポが出てきたぞ～
バース掛布をすっとばすってのもあれだけどねえ

酒戦投手

6回裏も当然のようにマウンドに立った村山であったが、その右手から握力が消え去ろうとしていた。

「……情けない。このオレがたった5回投げただけで、この有様とは」

右手の手のひらを見つめ、思わず、ため息をつく村山であるが、悟られてはいけないと、すぐに元の鬼の形相で、打席に入ったホークスの9番打者川崎を睨みつけた。

「くう。しかし、最近の小僧はあれやな。どいつこいつも、お坊ちゃんみたいな面しおって。これが長嶋さんなら、顔を見るだけで、こっちの闘志がむくむくと湧き上がるもんやが、この川崎いう小僧は、逆に気分を萎えさせてくれるわ」

どうも気分が盛り上がらない村山を察知するのは、必要以上にこの試合に入っている阪神コーチ陣だった。

「なんや、村山の奴。情けないのう」

ブルペンの端のベンチに横並びに座るコーチ陣の面々。村山と呼び捨てるあたり、かなりの伝説クラスの選手と思われる。

「そうじゃ、そうじゃ、藤村の弟が言うとおりじゃ。あいつが九回、一人で投げきりと啖呵を切るから、こっちは救援陣に肩を作る指示を出さんいうのに」

藤村隆男投手総括スペシャルアドバイザーが、村山を真っ向から切り捨てると、梶岡忠義投手統括スペシャルアドバイザーも賛同する。

藤村隆男といえば、知っての通り、藤村富美男の実弟であり、2リーグ分裂ごろの阪神のエースだ。

一方の梶岡忠義といえば、これまた藤村隆男と同時代に活躍した阪神の主力投手。絶対不可侵の存在に祭り上げられた村山に、一言言える存在として重宝される立場にある。

かといって、年長者は年の功を発揮するにとどまらず、時に、組織にとって煙たい存在となる。

「酒を飲ませて、マウンドに上げさせればよかったんじゃ」

劇画チックな提案をするのは、西村幸生投手総合スペシャルアドバイザーだ。主戦投手ならぬ、酒戦投手と揶揄された人物ならではのセリフであるが、これが冗談で終わらせないのが、年長者の恐ろしいところだ。

「西村さん、いい提案やね」

と西村のジョーク？　を真に受けるのは御園生崇男投手潤滑スペシャルアドバイザーである。メガネをかけた、その紳士然とした面持ちは、銀行員のあだ名がふさわしい。

「今から、マウンドいって、村山に飲ませてくるかのう。何がええか？　酒か、ビールか？」

御園生にとっては、村山は関西大学の後輩であり、気軽に無理をいいつけることができる立場にあるのだが、さすがにこの提案は、他の４人からダメ出しを食らう。

「だめだよ、御園生さん」

「そうそう、御園生さん、いくらなんでも試合中に酒を飲ませたらまずいでしょ」

「そうや、酒を飲むのは、野球の精神から外れてるで」

そういいつつ、カップ酒を何本も空にして、赤ら顔に西村。

「そうか、いくらなんでもそれはないか。ところで村山の状態はどうや？　６回で限界とは、先発としては情けなすぎるが、あの状態なら、南海に逆転食らうぞ」

「どうしよか」

う～ん、う～んと考え込む４人であるが、妙案は浮かばない。それ以前に、彼ら４人は、選手としてもコーチとしても置き場所に困った存在なのだ。伝説の名選手を無下にすることはできないため、適当にあしらわれたポストである。

だからして、彼ら４人が、いくら継投か続投か悩もうとも、試合

は無関心に進んでいくのである。
「今、何球や、湯舟？」
「はい、藤村さん。今、川崎に投げたので９５球目ですね」
「９５球か。これで疲れたヒーコラ、いう時代になったか。情けないのう、わしらの時代は平気で、２００だの、３００だの投げたいうのに」
「時代が違いますよ、藤村さん。しかも、村山さんはフォークを連投してる。僕もフォークが武器の投手やったから分かりますけど、これきついんですよ」
　フォークのない時代の投手にいっても分からないというわけではないが、投球数カウント専門投手コーチである、湯舟敏郎はにたにたとクールな笑いを見せる。
「お前、ワシをバカにしたな。にたにた、笑いやがって」
「いいや、藤村。こいつはこういう顔なのよ」
「なんやと、梶岡。どういうこっちゃ？」
「元から、笑い顔なんよ。いつもこの顔やで」
　さすが、梶岡、２００３年まで存命されたことはある。湯舟の特性を知り尽くしているのだ。
「ほんまか？」
「ワシが試したる。おい、湯舟、１９９２年にノーヒットノーラン達成した試合を思い浮かべてみい」
　湯舟は、それでもニタニタとした微妙な笑いを変えない。
「なんや、湯舟。ノーヒットノーランいうたら、投手にとってこれ以上ない喜びやろ？　もっと心の底から笑えー」
　大先輩の藤村にも媚びることなく、湯舟はいつもの表情を変えない。
「そんで、湯舟。３７試合登板して、優勝に貢献したにも関わらず、近鉄首になって、日本シリーズの最中に新たな職探しをしていた頃を思い浮かべてみい」
　これまた湯舟は表情をなにひとつ変えないのだ。

「おい、湯舟。野球選手の首いうたらこの世の終わりやろ？　それにふさわしい顔をせいや」
　はたまた切れる藤村隆男であるが、湯舟の表情は当然のように代わり映えしない。
「かあ～　ふざけやがって。まったく最近の若いのは、もっと喜怒哀楽を表に出せいよ」
　と和気あいあい？　のブルペンコーチ陣をよそに、一人、大マジなのが、中西清起ブルペン担当コーチだ。
「久保田、入念に心の準備をしとけよ。いつお前が呼ばれるかわからんからな」
　ＪＦＫの一人である愛弟子久保田に熱い激励だ。
　久保田は、ムスッとしたいつもの感じで、何も言わず、中西の言葉に深くうなづく。
「お～」
　モニターを見ていたブルペン陣から歓声が起こる。川崎がピッチャー返しで村山に打球を当てたからだ。
　胸に当てたボールを、痛みにひるむことなく、すぐさま拾いあげて、一塁に送球する。川崎はあれだけイチローに禁じられたヘッドスライディングがまた飛び出てしまうが、この思いも届かない。
　間一髪で川崎をアウトに取った、村山であるが、ただでさえ切れかかる握力に胸の痛みが重なれば、いくら不屈の男、村山といっても限界がすぐそこに迫り来る。
　一番に帰って広瀬に四球を与えると、今日初めて、ブルペンの電話がけたたましく鳴り響く。
　ブルペン電話受話器取り外し担当の仲田幸司が受話器を取り外し、ブルペン電話受け渡し担当の福原忍から受話器を受け取った中西。
「はい、状況はこっちでも把握してます！　いつでもいけるように準備させてます！」
　急ピッチに仕上げる久保田。　村山の降板のあと、久保田が投げるというのか？

阪神の球団史に名を残す大エースから、微妙なリリーフエースへの継投。熱狂的な阪神ファンは、この采配をどう受け止めるか？

なんで久保田？　はああ？はあ？？　ハアハア…・・

なぜ、久保田が村山の替りに登板するかも疑問点であるが、それ以上に、なぜ、久保田が歴代の好投手たちを蹴散らし、ベンチ入りにこぎつけたかだ。

今はやりの、タイトルだけが印象的で、内容はうっすり浅めの新書風にいえば、”どうして、阪神首脳陣は、明らかに見劣りした久保田をベンチに入れたのか？”と表現できるだろうか。

とにかく、久保田がベンチ入りしたのは歴然たる事実だ。抑え投手として、２００５年の優勝に貢献し、０７年にはシーズン最多登板記録を樹立したタフネス久保田であるが、知れば知るほど、阪神ファンとしての熱狂度が増すほどに、久保田のアラが見えてくるから不思議である。

辛辣なファンの間には、久保田の実情をよく知らない藤本監督が、最優秀中継ぎ投手2回とシーズン最多登板記録の成績だけをみてベンチ入りを判断した向きがあるほどだ。

それでもごくごく少数の穏健派の阪神ファンの見解では、どんな状況でも嫌と言わず投げる久保田は潰しのきく投手。敗戦処理にもってこいじゃないか、大敗している場面に江夏や小山を投げさせるわけにはいかない、オールスターキャストにも汚れ役は必要と、一見、久保田の必要性を説いているようで、久保田のまさかのベンチ入りにどこか納得できない自分をムリヤリ納得しているようにも見える。

だから彼ら少数の久保田擁護派も、まさか、一点差のこの場面に久保田が投入される手はずが進んでいるとは、夢にも思わないはずだ。

「久保田はないわ。ＪＦＫの揃い踏みで話題性込みいうならまだ分からんでもないけど、球児は入っとるが、ジェフ（ウィリアムズ）は入っとらん。ＪＦＫならぬＪＫや」

「ええやん、久保田がメンツに入っても。久保田は黙々と阪神に貢献してくれてる功労者や。報いてやらんとな」

テレビ中継を見ながら、久保田ベンチ入りを咎める友人を、なだめる穏健派の阪神ファンであったが、テレビが三塁側ブルペンで久保田が投球練習しているシーンがひとたび映ると、

「はああ～　なんで、久保田が投げてるねん！　一点差やろ！　まさか久保田を投入する気か！　藤本監督、頭大丈夫かいな～」

声を荒らげてしまうのだ。それだけ、この場面に久保田を投入するという事実は、日頃よく試合を見る阪神ファンにとって、許しがたい事実であるようだ。

「村山さんが限界といつ藤本監督が判断してもおかしくないぞ。久保田、テンションをマックスにしとけよ」

と久保田に口ごとに集中を訴えかける中西ブルペンコーチであるが、よくよく考えてみると、精神的弱さがどこかある久保田よりも、やや球速が劣るとばいえ、度胸満点の中西の方が中継ぎ役として適任ではないか（中西は自宅マンションまでしつこく追い回すストーカー女を、ビンタを食らわし逆に撃退したこともある）。１９８５年の日本一の時には、山本和行や福間納ととみに勝利の方程式として最優秀救援も獲得した中西、実績も十分であるが。

「おい、久保田。オレの推薦やぞ。オレの抜擢やぞ。スタッフ会議でな、最後の投手一枠、お前かオレで割れたんよ。首脳陣の多数は、オレの度胸を買ってか、オレを押したんやけど、オレが久保田をぜひに入れてくれと頼み込んでねじ込んだんや。なにも現役のお前に気を使ったわけやない。１５０キロを優に超えて、制球もイメージよりもいいお前は、この大舞台にふさわしい救援投手なんや。いいか、久保田、自分を信じろ。お前は、ＪＦＫの三番手やない、３人いてこそのＪＦＫなんや」

久保田は、恩師中西の期待に応えることができるか。

そして、グラウンド上では、打者井口対投手村山だけでなく、捕手田淵と走者広瀬の対決も繰り広げられていた。

「数を稼ぐだけの盗塁はせんよ、あほらしいから。１０点差で走って、盗塁がひとつついて何が楽しんや。こういう一点差の場面で盗塁してこそ、盗塁の快感が味わえるんやないか」

日頃から、無駄な場面での盗塁の意味の無さを語る広瀬にとって、最近の点差が開いた場面のスチールは盗塁と記録されない風潮は、いまさら遅いと思っているだろうか。

逆にいうと、一点差のこの場面こそ、広瀬が盗塁の快感を味わえる絶好のシュチュエーションだろう。しかも、捕手は、田淵。リードや捕球力は注意散漫なところがあるが、その強肩は本物だ。純粋に肩の力だけを考えると、歴代一位の通算阻止率を誇る古田を凌駕するとまで言われている田淵の肩ＶＳ歴代二位の通算盗塁数、そして、歴代屈指の盗塁成功率を誇る広瀬である。

「いくら、プロ野球歴代屈指の強肩のオレだからといって、投手の協力体制がないと盗塁は刺せないよ。だから、村山さん、執拗な牽制球をよろしく」

田淵は、村山に牽制のサインを出す。わかってるわいとばかりに、田淵の催促に目を向いた村山であるが、投手としての仕事はこなす。

執拗な牽制……頭から帰る広瀬……しかし、この牽制動作さえも、村山のわずかに残る体力を奪っていくとは、どれだけ村山が疲弊しているのかわかる。

２番の井口は、盗塁王２度獲得した走者であるが、何人も盗塁王に貢献した打者でもあるのだ。

ダイエー時代は、川崎、ホワイトソックス時代はポドセニック、そして今、ロッテでは驚異の新人荻野貴の盗塁の数を共同作業で増やしている。

走者が盗塁するまで待つ作業と、捕手の送球を遅らせるための絶妙なタイミングでの空振りはさすが井口であった。

フォーク一辺倒の阪神バッテリーもさすがにこの場面はストレートが多くなるが、それでも田淵は広瀬を刺せない。

「あ～盗塁許しちゃったよ」

田淵の好送球むなしく、広瀬は二塁ベース上で涼しい顔をしている。

「まったく、村山さん、もっと牽制してよ。。一塁に釘つけにしてよ」

村山が広瀬に投じた牽制球は合計9球。これ以上牽制すると遅延行為と応援団からブーイングが巻き起こるくらいのしつこさだった。

その事実をもって、自分が負けたと認めない田淵の強肩捕手としてのプライドが垣間見られる。

二塁に走者は進んだ。盗塁援助の呪縛から解き放たれた井口は、持ち前の勝負強さを見せることができるのか。

途中経過　牛島・小宮山の野球放談

千葉マリンスタジアムでは、千葉ロッテ対中日のプレーボールがいよいよ間近に迫っている。スターティングメンバーも発表されて盛り上がる両軍のファンであるが、ロッテの誇る理論派コンビも黙っちゃいない。

牛島と小宮山がスタメン発表を興味深げに見つめている。

「スターティングメンバーが発表されましたけど、牛島さんは予想通りですか？」

「まあだいたいそうやね、小宮山はどう？」

「と自分から振っておいてなんですが、僕は、先発陣から漏れて救援の身でありまして、もしも僕が先発なら、そりゃもうスコアラーの方の分析や新聞情報やら、練習試合の成績を見て、こうじゃないか、ああじゃないかと、星野さんが監督だから、あの選手は使うだろう、逆にこの選手は使わないだろうとそれこそ睡眠時間が大幅に削られるほど予想しますけど」

「そういわれるとリリーフは必要ないね」

「でしょう？　しかも、僕は、牛島さんや小林雅英大先生みたいに起用方法が終盤の１イニングに固定されているわけではない。勝っている試合で投げるか、負けている試合、それも僅差か大敗の場面か、それすら分からない。そういう身分の投手がスタメンを予想してどうなるかと。そりゃ、弱点や強いところくらいは頭に入れておきますけど、救援は流れですからね、もう自分の長所をさらけ出すしかない、相手の打順がどうだろうと、そんなもん気にしている立場ではない」

「そうやね。小宮山の言うとおりよ、救援投手がマウンドに立つってことは、それだけ試合が煮詰まっている言うわけやから、もうメンバーなんて、ぐちゃぐちゃよ。誰が代打に出てくるかもわからんしね」

「それでも、牛島さんは気にならるでしょう？　ロッテ、中日の両球団のＯＢですからね」

「そういう目線から見るとやっぱり気になることは確かやね」

「ぶっちゃけどっちがよかったですかね？　どちらからの球団からも熱烈なオファーのあった牛島さんは、結局、ドラフトのくじ引きの結果、こうして、僕の隣に座ってらっしゃいますけど、もしも、自分の意思で決まる逆指名だとしたら、投手牛島はどっちのブルペンを選んだか？」

「酷な質問やね。どっちの球団にも等しくお世話になった身としては。恩がある星野さんの元でやりたい気持ちもあるし、なにせ、星野さん就任のオフに出されたからね。逆にいうと、放出された方と放出される方としたら、星野さんにリベンジしたい気持ちも持ち続けてたよ。日本シリーズで古巣中日とやりたいと。でも、当時のロッテからしたら、最強西武を倒しての優勝なんて、夢のまた夢やったからね」

「夢のまた夢……いや、夢のまた夢どころか、はかない幻を追いかけるようなものですよ、当時のロッテで優勝を目指すのは、なにさ、当時の監督だった、牛島さんがお嫌いな監督のカネヤン自ら、西武にはマジックでもないと勝てやしないと言い切るくらいですから」

「そういう小宮山は、もし、横浜とメッツとロッテの３球団のどれかを逆指名できる立場におったら、どこを指名すんの？」

「そりゃもう、ロッテですよ、首になった僕を拾っていただいた横浜さんや、僕の長年の夢あったメジャー挑戦をかなえてくれたメッツには、いくら感謝してもしきれないほどですが、おう小宮山といえば、ロッテのイメージは切っても離せないですから。引退した今、どこに出向いても、元ロッテの小宮山ですから。嫌な思い出も、辛い出来事も、そりゃもう数え切れないほど経験させていただきましたが、それでも、やっぱりロッテを選ぶしかないですよ」

「小宮山はそうやろうね、でも、僕は等しくお世話になったし、活躍もできたと思うてるし、東京では元ロッテ、名古屋に行くと、元

中日と使い分けることもできるしね、いやらしい話」
「そんな牛島さんは、このメンバーどうです？　救援陣の僕らには関係ないスタメンですが、ファン目線で語りましょう。僕がみた中日の第一印象ですが、どうして大島さんがいないんだ？　これにつきます。星野さんとは関係も良好な大島さん。監督になったときに星野さんにあやかって背番号77をつけるほどですから。そんな大島さんがどうしていない？　これが、オーダー予想にあれこれ頭を捻らなかった小宮山悟の素人意見です」
「そうね、大島さんがおらんよね。サード、ファースト、レフトと守れる大島さんはどこかに割り込んでも、おかしくないやね」
「サード、ファースト、レフト……まあ僕が言うのも何ですが、どこも下手ですけど、大島さんはなにせ中日史上二番目にホームランを打った方ですからね、守備に目をつぶっての起用もありなんじゃないかと」
「サードには、高木守道さんとかぶる立浪を置きたい。一塁には、谷沢さん、それこそ谷沢さんを外すと、反星野さんやから外したと勘ぐられる。なにも、開幕から波風立てることはない。レフトは、ロッテの先発予想が、伊良部、村田さん成田さん、木樽さんとみんな右投手やから、左打者を置きたい、となると安打製造機の田尾さんの起用も頷ける。指名打者という4つめのポジションもあるけど、そこには江藤慎一さんを置く必要がある。すると、大島さんは控えになるわけやね。でも、大島さんは控えでも戦力になると踏んでるのよ。関係が良好だからこそ控えに置けるし、あの人、とにかく元気やから、声が出せる、しかも、代打本塁打のシーズン記録をいまだに持っている人やから、代打の切り札にもなる」
「大島さんの代打といえば、僕も日本ハム時代の晩年によく対戦させていただきましたよ。確かに、一球にかける集中力と気合が尋常ではないお人でした。次に、捕手の木俣さんというのはどうです？
　中尾さんや中村がいる中での起用」
「中尾さんも、中村武志も、木俣さんもみんな一緒にやったけど、

やっぱり、木俣さんの打力やね。３割３０本のいずれをマークした捕手は、中日史上、木俣さんだけやからね」

「そうか、牛島さんは3人の捕手のいずれとも現役生活を過ごしたんだ」

「そうよ。でも、木俣さんとは、木俣さんの最後の晩年の3年やったし、中尾さんにマスクを譲った頃かやから、あまりバッテリーは組んでないのよ。中村武志とは、逆に僕の中日最後の二年がかぶるけど、僕が一軍、彼は二軍におったからね。公式戦で組んだことはないんよ」

「それでは、中尾さんは知り尽くしてるはずですね？　中尾さんといえば、強気なリードの印象がありますけど」

「それが、中尾さんも、あの人、よう休む人やったから、なにか組んだり組まなかったりやったのよ」

「僕もよく覚えてますよ。中尾さんのサボりぐせは。当時、しがない予備校生だった僕は、中尾さんに励まされましたもん。ＭＶＰ中尾が休むなら、オレの予備校サボりも正当化されないとおかしいと……」

「ははは……すると、当時の僕は誰と組んだんやろね」

「ははは……僕のロッテ時代第一期と同じだ。清水将海、橋本、猪久保、福澤、定詰、青柳、吉鶴、椎木、田村さん、山中さん……はては、なんと、マイク・ディアズまで、色んな捕手とかわるがわる組まされたおかげで、誰がどんなリードをしたか、さっぱりと忘れましたよ」

「ははは、ロッテの捕手は、袴田さん以降、里崎が出てくるまで、定着せんかったからね」

「二番、福留、三番立浪の打順も違和感ありますね。逆だと自然ですが、この並びは、世のプロ野球人の誰が見ても違和感があるでしょう」

「二番福留は、バントをしない意思表示やと思うね。立浪を二番にいれると、ついバントのサインを出しがちやけど、福留を二番に置

くと、バントするのはもったいないいう思いが出てきて、勝手な歯止めになるんよ。ワンアウトあげて、走者を進めるんやなくて、出塁率が高い福留をさらに塁に出し、勝負強い立浪で走者を一掃する、腹積もりなんやないかな」

「なるほど。僕の星野中日のイメージは、飽くなきバント野球なんですか、メンバーの揃うこの試合では、違う戦法をあえてとると……。しかし、福留立浪の並びより、なにより、僕が驚いたのは、９番高木守道さんですよ。燃えよドラゴンズの印象からすると、高木守道はトップバッターで決まりのはずが、まさかまさかの９番ですから。星野仙一と高木守道の関係が気になりますよ。まったく中日と縁もゆかりもない部外者からして、こういうのはなんですが、興味深いの一言です」

中８　福留９　立浪５　江藤Ｄ　谷沢３　木俣２　田尾７　宇野６　高木４

これが発表済みの中日のオーダーだ。確かに、高木守道の９番に違和感を感じるだろう。

高木守道を一番にして、中と一二番コンビを組ませ、福留、江藤、谷沢のクリーンナップにつなげる。これが、打線の流れとして自然と思えるのだが、星野はあえて、高木守道を９番に置いた、その真意は、強力なライバルであり、目の上のたんこぶである高木守道のやる気を失わせるためか、それとも純粋に戦力的観点か。

オーダーひとつで、波乱を匂わせる注目の一戦はまもなくだ。

途中経過　牛島・小宮山の野球放談（後書き）

途中で全部消えるという悪夢に耐えて書き直しました

「開幕投手にも格ってものがあるだろう」といいつつ、ジンクスだけで西村を開幕投手にしたわ

「このドーム、天井開くんやったか。忘れとったわ」

6回表から開き始めた天井の開閉にようやく気づいた村山は、それだけ、目の前の打者との勝負に集中していたと言えるだろうか。

それとも、開閉に気づいてしまった村山は、さすがにスタミナ切れに集中力が持たなくなったともいえるだろうか。

はたして、福岡ドームの異変に気づいた村山は、広瀬にスチールされ、ズタズタに引き裂かれそうになった気持ちに、ひと踏ん張りがついたことも事実だ。

「やっぱり、野球は屋外でやるもんや。オレの二度目の監督の時、東京ドームのオープン仕立ての年やったが、もう息が詰まりそうで、野球してる気がせんかったて……ええのう、夜やから、お天道様の光は受けられんが、風が匂い立つわ……」

切れかかる村山の気持ちとスタミナに、天然の風が最後のひと踏ん張りのガソリンを注入する。

「よっしゃ、とにかく、この井口を最後と思って投げようか。次は左の門田や。逃げるわけやない。うちには、優秀な左投手がようけいる。そいつらに任せればええんや。とにかく、オレの仕事は井口を打ち取り、アウトカウントを二つにすることや」

三打席目の勝負となると、村山も井口も、お互いを分かりつつある。

「内角や。こいつはとにかく内角をいかに攻めれるかが鍵の打者や」

「村山さんのフォークは多種に富んで手強い。フォークを捨てようとも、これでもかと連投してくる。さてどうしたらいいものか」

村山と井口の間に心理戦の火花が散るが、もう一人の主役であるはずの田淵ときたら。

「井口は、前の2打席は……あれ打たれたっけ？　抑えたっけ？　お前がオレが監督してたときにおったらなあとか世間話はしたし、

お前、巨人にいたブラッドリーに似てるな、なに？　高校時代のあだ名がまさしくそのブラッドリーだったとか、話の内容はよく覚えてるが、どうにも配球までは……。まあ、とりあえずフォークか……」

　相変わらずの田淵であるが、フォークを徹底するのは悪くない。村山が完投第一に考えているならばこれ以上のフォークの連投はありえないが、村山は井口で完全燃焼するつもりだ。一番、打ちにくいボールを要求するのは間違ってはいない。

「バックネット裏で、淡々と球種を打ち込んでいる球種チェックの西村龍次さん。村山投手の配球の傾向をお聞きしたいのですが」

　テレビ朝日のたった一人の解説者である栗山英樹が、バックネット裏でひたすら球種チェックをし、たまに呼ばれては、一言二言解説する西村を呼び出す。

　栗山と西村といえば、同じヤクルトＯＢであるが、実績は、４年連続で二桁勝利の経験あり、西村が開幕投手だとチームは優勝するジンクスが途切れるまで何度も開幕投手を務めた西村が、規定打席到達一度で、ゴールデングラブ賞を獲得したくらいの栗山をはるかに凌駕する。

　それでも、栗山がメインで、西村はサブという現実は、解説者といえど実績以上にプラスアルファが必要であることを知らしめてくれる。

「ええ、村山さんはですね、もうフォーク、フォークの連投ですよ。僕の球種チェックのフォークのボタンが、押しすぎてパカパカになるくらいですよ。多分、この井口の打席でもフォーク一辺倒で押してくるんじゃないですか。井口は落ちるボールを不得手にしてますからね」

　と短い解説の出番ながら的確な評論をする西村であるが、その西村の予想どおり、村山は最後のフォークの連投だ。

「井口は内角につまり、、腕の伸びる外角は得意な傾向がある。しかし、得意な場所もひとつ外すだけで投手の攻めどころになるんや。

打者も得意の場所に来たと手を出す。しかし、そこからボールは変化する。もう打者のバットは止まらん。そういう寸法や」

村山の配球は大胆、すべて外角のフォークで決めにくる。盗塁援護の空振りですでにワンストライクのハンデを負った井口は、少々のボール球に手を出さざるをえない状況にある。

ワンバウンドになる切れ味も失った村山のフォークであるが、好きな場所のひとつ外れたゾーンは最大の弱点であるとの村山の見立て通り、井口は二度の空振りを持って、この打席を終える。

いうもは、右打ちと選球を心がける井口であるが、好きな場所辺りに何度も投げ込まれるうちに、プロ入りした直後の粗すぎた時代が蘇ったか、力みかえって、一発長打で逆転をねらったあげくの三振。それだけに、後悔の念が強いのか、井口は何度も首をひねりながらベンチに帰っていく。

「まずい、このままだと、打撃のメカニズムが狂っちゃう。金森さんに電話しなきゃ」

ベンチに帰るやいなや、粗い打撃スタイルを根本的に変えてくれた金森栄治の連絡先を確認する井口であった。

そして、村山は、腰に手を付き、フウーと息を吐き出すと、それを合図にして、ぞろぞろと内野陣が集まってくる。

誰もがしる仲の悪さであるショート吉田はもとより、村山を自分の現役の中で最低の監督と位置づけるサード掛布、村山に大嫌いなサードにコンバートされたことをいまだに根に持つ岡田。そして、村山監督二年目に、長男の病気騒動で解雇されたバースは、村山に若干の引け目を感じている。

それほど、村山から気持ちが離れる条件があふれる内野陣が集まるのもワケがある。

「よう投げたな」

犬猿の仲である吉田も、村山の熱投には賛辞を惜しまない。

「ヨッサンの守備のおかげや」

村山もうわついた返礼ができるのも、今日の仕事が済んだ証拠か。

「若林コーチ呼んできましょうか？」

「田淵、若林コーチは、兼任監督で、エース兼優勝監督にまでなったお人や。言わんでもわかるやろ」

若林忠志投手チーフコーチがベンチを飛び出してくる。それに続くように、藤本監督が、やれやれとベンチから出てくる。

村山が、若林コーチにボールを手放す前に、藤本監督は球審の円城寺に次の投手をコールしていた。

お家騒動が名産地のタイガースらしからね、選手と監督の息がピタリとあった投手交代劇であるが、そのリリーフ投手はいったい誰であろうか。

もしも、ベンチ入りさえも疑問符が投げかけられる久保田の名前が告げられたならば、阪神ファンを震源地に、球場に大嵐が吹き荒れることは間違いないが。

当事者である門田は、誰が救援投手として飛び出すか三塁側を凝視している。門田はいうまでもなく左のスラッガーだ。左のワンポイントが常道であるが、それでも久保田投入か。

「左……やっぱオレには左投手やね」

三塁側のベンチから飛び出してきたのは左投手。久保田ではない。背番号のふた桁目だけが見え隠れする。その数字は2。２０番台の背番号を持ち、一点差の勝負どころで飛び出す左腕といえば、この男しかいないだろう。

この際阪神救援左腕を総浚え

左の強打者門田に相手に登板する阪神の左の救援投手といえば、誰が思い浮かぶだろうか。

１９９２年、まさかの快進撃に前半戦だけ大貢献した田村勤。

その１９９２年にルーキーイヤーを過ごし、満月の夜だと調子が上がることから、オオカミ男と一部に称されていた幻の新人王弓長起浩。

松井秀喜をことごとく封じた度胸満点の苦労人、遠山れーすこと、遠山奨志。

グリコ森永事件の犯人とされるキツネ目の男とあまりにも似ているために、警察につけられたこともある古溝克之。

あの落合とともに１９７９年にロッテに入団した、たった二人の新人のうちの一人であり、運動能力の高さと技巧で８０年代中盤の弱投を支えた福間納。

それともＪＦＫに対抗して、橋本健太郎や桟原将司とともに、ＳＨＥならマイナーユニットをの一人江草仁貴か。

それともそれとも、パームボールを武器に一瞬だけ活躍した藤原仁か。

彼らは、素晴らしい左腕であるが、この手のｐ一人一殺の最高峰でありＪＦＫの一角であるジェフ・ウィリアムスさえも、ベンチ入り登録ならずに、悶々と出番を待ち続けれているのだから、阪神タイガース７５年の歴史は分厚い。

背番号２０番台の左腕となると、１４０キロそこそこと、さして球速があるわけでもないのに、なぜか、スピードキングの異名を持つ筒井和也、背番号２０がいるが、彼が入るには、さらなる努力が必要だろうか。

同じく、現役の能見篤史も、素晴らしいボールの切れを持つ左腕であるが、たった一年の実績では、アピールが足らずベンチ入り登

録を逃している。

それでは、先発、中継ぎ、救援とフル回転し、当時の選手としては、大変珍しくメジャー挑戦を球団に訴えた変わり者の山本和行、背番号２５か？

彼は、重要な役割を持つ中継ぎ左腕として、ベンチ入りしているのであるが、今、彼は、なぜか、ＵＦＯを見た不可思議体験を、後輩の久保田と藤川球児にとくとくと説いているのだ。

「いいか、球児に久保田。オレがふと夜空を見上げるとだな、見たこともないような光量が……」

人様の夢ものがたりを聞かされるほど、退屈でうんざりするものはないとよく言われるが、それが大先輩ならなおさらだ。くだらないと思いつつも、嫌な顔ひとつできないのだから。

それにしても、野球人がＵＦＯを見たと言いはるのは珍しいことだ。ＵＦＯを見るのは、決まって、話題性が欲しい売れない芸能人が、日々の暮らしに飽き飽きして、刺激と注目が欲しい一般人に決まっている。

毎日が刺激的な野球人ならば、活躍するだけで、話題と注目が集められるに関わらず、ＵＦＯを見たと言い切れる山本和行は、本当に見たと言い切れるほどの体験であったか、それとも、山本和行が変人だらけの球界で、とびきりの変人である証なのか。

おそらく、後者の可能性が高いが、のんびりと後輩いじめをする今の山本和行の登板はないだろう。

するとなると、江夏豊、背番号２８か？　次の試合かその次の試合の先発が確実視される江夏であるが、球界のオヤジと敬う藤本監督の頼みとなれば、マウンドに駆け上るだろう。

大投手であり、阪神の投手史上もっとも熱い支持基盤のある村山の次にコールされて名前負けしない投手といえば、この江夏と、３００勝投手の小山正明か、兼任コーチであり、戦中の大エース若林忠志か、藤川球児くらいしかいないだろう。

しかし、その江夏は、ベンチにデーンと腰を据えている。

「いくら尊敬してやまない藤本監督といえど、ワンポイントで江夏いってくれいうても、オレはいかんよ。一人だけ投げろ言われても、どうやって集中力を高めるか、オレよう知らんもん」

とワンポイント投入をやんわりながら拒否の構えだ。するとなると、先発２０番台の救援左腕といえば何者だ。

背番号上のローマ字のネームの一文字目も確認できた。

”Ｉ”である。つまりイニシャルが”い”から始まる苗字のようだ。すると岩田稔、背番号２１か？　まだ出てきたての投手といえど第二回のＷＢＣ代表の金看板のある岩田であるが、そこで見せた大舞台の弱さと救援としての適正のなさから、ベンチ登録は外れたのだ。

さては、猪俣隆、背番号２５か？　いや通称イノマティーのナックルとさして速くないが角度のあるストレートを武器にする長身左腕の猪俣であるが、彼は、引退後の米国で寿司職人をしていた経験を買われ、この大会では、食事の調達役として帯同しているのだ。

するとなると、この男しかいない。背番号が２０番台で、イニシャルがＩの左腕投手。そして、ベンチ入りにこぎつける実績と実力とネームバリューのある男といえば、この投手しかいない。

「ああ、やっぱり」

この男は、巻き上がるブーイングにも、想像通りとマイペースの仏頂面を崩さない。

「阪神タイガースのピッチャー村山に替わりまして、井川。タイガースのピッチャー井川、背番号２９！」

井川のいの字の時点でため息が起こり、いがと確定した時点ですでに大ブーイングが湧き上がり、最後の”わ”から、それ以降のアナウンスは怒号にかき消されていた。

「なんで井川やねえ～」

「死にされせい～　藤本～！　お前、ヤクザから金貰っているやろう～」

藤本監督は、逆に暴力団と関係している怪しい選手をことごとく

球界から消し去っとされる監督だ。まったくの濡れ衣である。
「なんとでもいえや。ワシが井川を評価しとる」
どんなブーイングにもびくともしない藤本監督。さて、藤本監督が井川をそこまで評価する理由はどこにあるのか？

「なあ、井川。懐かしいだろ？　このブーイングと口汚い野次、これぞ阪神ファンや」
田淵は、絶え間ない罵倒を受ける井川を、気遣うが、井川は慣れたものと平然だ。
「いや別に懐かしくはないですよ。今、ニューヨークで同じようなブーイングを受けてますからね。日本語のぶん、きついですけど」
阪神ファン、ヤンキースファンと、世界でも指折りの熱狂度の高いファンにここまで嫌われて、なお平然としている井川の精神力も見上げたものだ。
ドラフト制以降、江夏の次に活躍する生え抜き先発投手であっても、２００４年以降、批判の的だった阪神時代。
そして、活躍しないから受けて当然の批判を受けるヤンキースの下部組織所属の現在。
ニューヨークでは、伊良部秀輝、パバーノと並び3大詐欺師投手される井川であるが、クレイジーなファンを見返せることができるか。
「打たれても抑えてもそれは結果。僕の仕事は投げろと言われたイニングを無事に投げ終えること。それ以上もそれ以下もない」
達観する井川であるが、ここで打たれれば、自責点1がつくのは村山だ。ミスターゼロ村山に泥を塗ることは、井川に対する負の感情をより高めることになるのであるが。

この際阪神救援左腕を総浚え（後書き）

山本和行がＵＦＯいたエピってあったよなと検索してみると
この小説しか出てこねー
もし山本和行がＵＦＯみたと言い切ってないとしたら、この小説の
４４５話の全ての根幹が音を立てて壊れることもない

途中経過　横浜に下克上

「よし、決まったぞ！」

優秀なスタッフと入念な打ち合わせを繰り返し、執拗なシュミレーションをした結果、構築された大矢横浜の先発オーダーは以下の通りだ。

「捕手は谷繁。土井さんもおられるけど、打力と現代野球に精通していることを考えると、浜のホームベースは、シゲ　シゲ　司令塔（横浜時代の応援歌の歌詞より抜粋）しかいないよ」

谷繁が森を嫌い、金と安定性を求め中日に脱走を図らなければ、大矢二期目の捕手も、ベテランに成長した谷繁に任されることができたのにと大矢は、思わず感慨にふける。

「ありがとう、谷繁。オレのために戻ってくれて。ありがとう、ドラゴンズさん、谷繁にオファーを出さず、再ドラフトなしの無競争でベイに戻してくれて……。いやはや感慨にふけっている場合じゃない。ファーストはもちろん、松原さんだ。無冠の名球会会員と揶揄されるけど、浜のファーストベースはこの人じゃないと、そしてセカンドはやっぱり、ローズさ。サードは村田、最近の彼は情け無い限りだけど、彼のレギュラー起用に４番を打たせるのは約束だからしょうがない。ＷＢＣの４番の奮起を期待しよう。そして、ショートは琢郎だね、大ちゃんもいるけど、ここは琢郎だ。大ちゃんには、兼任コーチとしての名参謀ぶりを期待しよう。そして、外野の三人は、左から、多村仁に、金城に、ブラッグスだ。ここは、オレの頭がおかしくなるほど迷ったポジションみっつだけど、最終的にこうなった。スイッチに攻守完備の金城にとてつもないパワーと強肩の光るブラッグスは、勝負強いポンセに競い勝った。そしてなんといっても、レフトの多村だよ。第一期の大矢政権の時は、故障ばかりに二軍でいて、ようやく使える選手となったと思ったら、これまた故障だらけで、オレが第二期政権を構築するときには、もうト

レードの駒に成り果てた多村とようやく縁結びできるよ。そして最後の指名打者に抜擢するのが、シピンさ。オレはヤクルトの強肩攻守の両リーグナンバーワン捕手時代に、よく、こいつと当たったけど、とにかく嫌な打者だったよ。田代や桑田さんや近藤和彦さんやオレの大好きな鈴木尚典ら、いろいろな指名打者の候補が上がったけど、現役時代のオレと何度も相対したのも、何かの縁さ。ピンときたね、シピンでいけと」

そして、打順はこのとおりだ。西武ドームの監督室のホワイトボードに力強い字体で書かれた横浜の開幕オーダーは、なにやら厳粛の雰囲気を帯びている。

「石井琢６　シピンＤ　松原３　村田５　ローズ４　多村７　ブラッグス９　谷繁２　金城８……どうだい、この攻撃的なオーダーは！　二番のシピンなんて、凡百の監督じゃ、とても思いつかないだろうよ！　これだけのメンツでオーダーが組めれば、つなぎ役なんていらないんだよ、もう、打って、打って、打って、名将大矢がすることがないとベンチであくびがでるくらいに勝手に打ってくれればいいんだよ！」

自分の考えたオーダーに思わず見とれて、口元からヨダレが垂れかけない大矢。そんな大矢に来客の影が。監督室のドアがコンコンコンと三度、ノックされる。

「誰？　今、忙しんだよ、試合前」

これから大矢は、決めたオーダーを審判に提出する用の用紙に書き記す作業があるのだ。机には、その用紙とこれ用に縁起担ぎのために奮発して買った高い万年筆が置いてある。

「お父さん、私よ。陽子ですよ」

「なんだ、陽子か！」

大矢は、臨戦態勢の厳しい顔を一転として、プロ野球ニュースで見せるような柔和な顔にする。大矢を一瞬にしてここまでデレデレにしするのは、大矢の実の娘で、数年前にベイスターズの専属リポーターとして活躍したこともある陽子である。

大矢はそそくさと席を立ち、監督室のドアを開けっ放しに、部屋を出て、娘と濃密なコミュニケーションを取る。

「よく来てくれた。試合前にお邪魔じゃないかって？　いやいや試合前こそほっとする一時が必要なのさ」

主を失いがら空きとなった横浜の監督室。そこにたまたまか、いや隙を見計らっていたのか、近藤昭仁ヘッドコーチが通りかかったのだ。

横浜での選手実績が皆無で、監督として優勝したわけでもなく、まぐれの二位が一度あるだけで、あとはオールＢクラスの大矢が、監督に抜擢されたことを快く思わない近藤昭仁は、キャンプ中の紅白戦を監督交代の下克上マッチと位置づけ、そこで勝利したことから、自らを大矢と同等な監督としての権利を持つと勝手に思っているのだ。

「肩書きはヘッドのままだけど、僕は実質的に大矢と同等、いやそれ以上の権力を有する立場だよ。だいたいおかしいんだ。３年でＡクラス一度の僕と５年……最後の一年はふた月もやってないけど……その５シーズンでＡクラス、たった一度の大矢がどうして監督で、どうして、僕がその部下なのさ。大矢は横浜の優勝を一度も知らないんだよ、僕は１９６０年の日本一のＭＶＰだよ。おかしいじゃないか」

不満が爆発寸前の近藤和彦は、大矢がいない間に監督室に侵入すると、掲げられたホワイトボードのオーダーに強い憤慨を覚える。

「大矢の奴！　なんてひどいオーダーを組みやがるんだ！　アイツは本当に三原脩名監督の元で野球をやったのかい？　なんだいブラッグスって、僕もよく彼を知ってるが、あんな勝負弱い打者のスタメンはありえないよ。なんだい多村って、あんなケガの多い打者のスタメンはありえないよ、いつ故障するかひやひやしてたら采配も存分にふるえやしないじゃないか」

大矢は審判提出用の用紙が白紙であることに気がつく。そして、実行することはひとつだ。

「大矢はやっぱりばかだね。こんな大事なものを放ったらかしで、どっか行くんだから」

近藤昭仁は、横に置いてあった奮発した万年筆を握ると、一気に吐き溜めていた気持ちを書き記す。

「これが近藤昭仁横浜のベストオーダーさ」

そして、その紙を握りしめると、ニヤリ。

「さてと、提出してきますか……おっと、このホワイトボードも現実と違いが出るのだから、書き直さないとね～」

簡易用の黒板消しでさっと大矢の力強い字体を消すと、近藤昭仁は今度はマジックを握り締め、これまた一気に書き直す。

「ふふふ、たまげろ、大矢。肩書きは監督大矢、ヘッドの僕のままだけど、実権を握るのは、この僕さ……ふふふ……」

近藤昭仁は、万年筆とマジックについた指紋を入念に拭きとり、証拠を消す入念さを見せて、主のいない監督室をあとにする。

そして、娘との甘い歓談の一時を過ごした大矢は、オーダー提出期限が迫るとばかりに、そそくさと監督室に戻ってくる。

「あれ、おかしいな、提出用の用紙がないぞ」

さすがの大矢もすぐに異変に気づくのだが。

「あ、田代か斉藤明夫が気を効かせて、ホワイトボードどおりのオーダーを書いて審判部に持っててくれたのかな？　斉藤明夫はまだしも、田代は頻繁にオーダー提出するミスをするからちょっと信頼できんけどね……あははは、かんらかんら……」

上機嫌の大矢は、用紙がないことにはすぐに気づいたが、ホワイトボードのオーダーが書き直されちたことには、遅れて気がつく。

「なんだ！　このオーダーはどうなっているんだい！　横谷８　高橋雅６　種田５　ラコック３　畠山７　ロドリゲス９　ジョンソンＤ　高浦２　進藤４　だって！　誰のいたずらだよ、こんなオーダーで勝てるわけないだろうよ！　横浜は当たり外人が多いのが数少ないとりえなのに、どうして、ラコック、ロドリゲス、ジョンソンと半端なのを抜擢するんだよ！　セカンド進藤って、オレのハチャ

メチャめちゃくちゃ思いつきコンバートの失敗作じゃないか！」

これは大矢を驚かせるための近藤昭仁のいたずら。横浜愛がより強い近藤昭仁が、負けて当然のオーダーで挑むわけがないのだ。

近藤昭仁の書き記したオーダーは、大矢案に近藤昭仁なりの手心を加えたものであり、三原ライオンズに勝ちにいくオーダーであるから、大矢は安心して試合に挑めばいいのであるが。

「待てよ、このオーダーでもいいかもな。相手は巨人と並ぶ強大な戦力を誇る西武。どこの雑誌・新聞も西武に特Ａ評価、うちに特Ｄ評価をつけてるくらいだ。しかも、名将三原さんが監督をするとなると、もう手品でもしないと勝てないというわけ……この奇想天外なオーダー、三原さんも読めヤやしないはず……横綱相手に十両がっぷり四つに組んじゃだめ。勝ちたいなら、猫だましくらい食らわせないと。意外といけるかもしれんぞ、このオーダー……」

だから、このオーダーは、近藤昭仁のいたずらであって……。

「誰の書いたものか知らないけど、イケル、イケルぞ！　勝てる見込みが出てきたぞ！」

いやだから提出したオーダーはまっとうなオーダーであって……。

「大矢マジック……ゴロと響きもなかなかいいじゃないか。明日の新聞の見出しは、まさかの大矢横浜勝利で埋め尽くされてるぞ……」

と、ムリヤリぼけてくれる大矢監督でした。

井川のキャラ設定は難しい

井川とコールされただけで、これだけ阪神側のファンが荒れ狂うとは。ある程度の予想は立てられていたが、想像以上の嫌われっぷりだ。

もしも、ＪＦＫの一角であるジェフ・ウィリアムスがコールされていたら、大声援に包み込まれていたらだろう。先発完投が美学の村山から中継ぎ投手への交代に眉をひそめる一部オールドファンは眉をひそめるかもしれないが、その声は、ここ１０年爆発的に増えた新しいファンによってかき消されるだろう。

思えば不思議なものだ。井川は２０勝投手で、あの２００３年のＭＶＰ左腕。その井川がブーイングを受けて、極めて高い確率で一人一殺の仕事をこなすが、時に荒れ狂うウィリアムスが声援に包まれながらマウンドに登ると予想されるのは、一見、一筋縄で納得できるものではないが、阪神ファンの中では、それは共通認識と呼んでも差し支えないのである。

「どうだ、井川。久しぶりだろ、日本のマウンドは」

田淵は、サインの確認ついでに、ブーイングに圧せられる井川の気持ちの懐柔を図る。

「４年ぶりですね、まあ懐かしいといえば懐かしいですけど。その懐かしさが、僕に勇気を与えてくれるかどうかはわかりません」

「ちょっと、野次がきついけどな、ニューヨークもこんなもんだろ？　まあ４年もむこうにいれば、英語のスラングなんてイヤでもわかるだろうから、日本語の野次と感覚的には同じか」

「同じですね、もう慣れっこですよ」

「しかし、お前は、阪神ファンによう嫌われるな。ヤンキースファンに嫌われるのは分かりるが、エースとして二度の優勝に貢献したのに、阪神ファンがここまで嫌う理由もないわな。まあ、このオレも阪神時代の晩年はこんな感じで、４タコでチャンスを食いつぶし

た試合とか、いつ殺されてもおかしくない、それくらいの恐怖を感じてたもんよ」

「そうですか」

「でもなにか、オレの時と性質が違うのよ。オレはいくらダメなときでも、巨人戦で一発打てば、それまでオレを糞味噌にいってたファンが手のひら返しで、涙を流さんばかりにオレに熱い声援を送ってくれたもんだが。どうも、お前の嫌われ方は違うな。なんでだろうな？　やっぱりあれか、自分で出て行ったのが心象悪いのか？　この調子だと一人一殺くらいじゃ、熱い手のひら返しは期待できそうもないぞ」

「いいですよ、別に。ファンを気持よくされるために投げるわけじゃないですから」

「そこよ、その熱度に欠ける受け答えが、阪神ファンをいたずらに刺激するのよ。嘘でも、ファンの声援のおかげとかいってればいいのに、お前はそういう自己演出の仕方が下手だもんな。ポスティングの時もそうだ。３０億の置き土産で甲子園をリニューアルできたのに、ファンはちっともお前に感謝せんよなあ」

「いいんですよ、別に。人に感動を与えたくて野球をやってるわけじゃないですから」

「それよそれ、その井川の煮え切らなさが、熱い阪神ファンをいたずらにささくれ立たせるんよ。で、お前にとって野球とはなんだ？」

「それじゃあなんのためと言われると……自己修練っすかね？　いややっぱり、生活のためっすかね～。阪神ファンやヤンキースファンが一人もいない場所で毎日飽きるまでゲームしてお支障がないくらい稼げれば、それでもう満足ですよ」

「がめつくそれでいて向上心のないお前は、副業やギャンブルで、稼いだ金をさらに大きくしようという下心もなさそうだもんな」

「お金を増やすなら、安全でコツコツですよ」

「そうか、そのセリフが耳痛いのがおるな、ここのサードにも」

私生活のイザコザを忘れるほど、試合にのめり込んでいた掛布が

この一言で、とたんに生気を失う。
「……掛布、聞こえたか？」
「……」
青い顔して黙ったまま下を向く掛布。しかし、井川はよく事情がつかめない。渡米後の掛布のイザコザであることから、井川が知らないでも無理はないことか。
向こうにいても、情報収集に熱心な松坂タイプの選手ならネットその他で、日本の情報を掴んでいるだろうが、２００１年オフの野村監督解任を知るのも約二週間の時が必要だったほど、のんびり屋がすぎる井川のことだ、ＯＢの動向など知る由もないだろうか。
「掛布さん、なにかあったんですか？」
抜け抜けと聞けるのが井川であろうか。
「お金がらみと人間関係以外の悩みなら、聞けないこともないですよ」
人に無頓着な井川の精一杯の優しさだろうが、大人の悩み事で、金も人間関係も絡まない悩みのが珍しいはずだ。
「井川……」
掛布は搾り出すように、心情を吐露する。
「お前もオレと同じ関東の高校からそのまま阪神に入った身だ。関東人が、関西でやっていく難しもわかることだろう。そこで、井川」
「……はあ」
「金を貸してくれんか。締まり屋のお前は余裕があるだろ？」
「……無理ですね。お金の話は無理です。返ってこない可能性が１ミリでもあるものは無理です」
「そうか……また試合後、頼みに行くわ。心変わりを期待して」
掛布はすごすごと寂しそうにサードの守備位置に帰っていく。
「掛布は期待してただろうな、この歴戦の勇者が集うタイガースナインの中でもお前が一番金の工面利くだろうし……まあいい、とにかく、門田だ。門田を切るのが、お前の役目だ。いいか？」
「わかってますよ。与えられたイニングをこなすのが、僕のたった

ひとつの役目ですから。打たれても抑えても試合の勝敗がどうのはこっちの感知できる問題じゃありませんから」

とことんマイペースを貫く井川であったが、それまで遠くで見守っていたセカンドの岡田が急に近づいてきて、一言二言エールを送る。

「……おい、井川」

「……ども、監督……いや岡田コーチ……いや岡田内野手……かな」

「岡田さんでええやろ。それより井川、門田さんはいくら全盛期に戻ったお前いうたかて、そう簡単に抑えきれる打者やないぞ」

「はあ……」

「あれやアレ……アレをああしてソレよ。それがオレのアドバイスや。言うとおりにしてみい、抑えられるはずや」

「はあ……」

岡田監督の元で3年の時を過ごした井川なら、指示代名詞だらけで、一般人には到底わかりようのない岡田ワールドも理解できるのか。それが培った師弟関係のはずであったが。

「???　はあ……」

いくらマイペース井川でも、世話になった元上司には逆らえないのか。意味不明アドバイスをそのままにして胸にしまう。

ようやく散った阪神ナイン。そしてマウンド上に雄大にそびえ立つ井川には、相変わらずの怒号が飛び交っている。

「門田さんか……で、門田さんってどんな打者だっけ？」

漫画とアニメとゲームとサッカー以外は二の次の井川にとって、自分が現役で対戦した打者以外はまったく興味がないのだ。メジャー熱望も、居づらい阪神そして日本から脱出できるための手段であって、特にメジャーリーグに詳しいわけでもないのだ。

「まあいいかな。抑えても打たれても、それは監督の責任だ」

門田が大きく話題になった１９８８年の当時、井川は9歳と物事が十分にわかる年ごろだったのにも関わらず、この有様だ。

自分の好きなジャンルはとことん知り尽くすが、それ以外はまる

で興味なしの井川はある意味、怖いものなしか。
そしてそれまでの極度のマイペースぶりが信じられないような、マウンドさばきを見せつける。
全身を大きく使った熱量の高いフォームは、マウンドの前任者村山のザトペック投法にも負けてはいない。
門田は初球様子見と決めていたのか、それともあまりの井川の豹変ぶりに驚いたのか、初球の甘いストライクを簡単に見逃してしまう。
初球のストライクひとつで雄叫びをあげんばかりにガッツポーズを取る井川。
「あと二球ストライクとれば、今日の僕の仕事は終わり。今日家に帰ったら、なんのゲームをしようか」
体は燃えても、なお心はマイペースなのだから、井川のキャクターも複雑怪奇である。

伝説の打撃コーチ

井川は、それではいつの時代に時を戻したのだろうか？　井川はやはり頑固者でプライドある他の選手と同じく、体を全盛期に戻るカプセルに入るのを、今が自分のピークであるとはじめ拒否していたが、それでは使いものにならないと中西投手コーチに諭されて、しぶしぶ時間を戻したのであるが、その戻す時間にも一悶着があったのだ。

井川の希望したのは、２００２年の井川であった。井川のピークイヤーといえば、優勝、２０勝、沢村賞、ＭＶＰとタイトル総なめした２００３年が思い浮かぶが、井川の思う全盛期は、その前年の２００２年だったのだ。

２０勝と１４勝、見た目の成績はやや劣る２００２年であるが、防御率は２．４９と０３年の２．８０を遥かに上回り、投げたイニングも奪三振も０２年の方が良好な数字を収めている。

今はやりの細かいデータ分析でも、ＷＨＩＰ（打たれたヒットと出した四球の数を投げたイニングで割ったもの。当然、少なければ少ないほどいい投手とされる）が、０２年は１．０３で、０３年は１．１７と、ここでも０２年に軍配を上げるのである。

与四死球率も０２年が若干よいとなれば、勝敗は時の運で意味のないものとする最近の投手らしい考え方をする井川にとって、０２年をピークイヤーとするのは無理もないことであるが、ここで恐れたのが打たれたときの反応だ。

ただでさえ印象の悪い井川が、一般的に井川の最盛期とされる０３年を外し、０２年に時間を戻したとなれば、どうして０３年にしなかったんだ。０３年のボールなら打たれなかったかもしれないだろうとの批判が巻き起こるのは眼に見えている。

数字が示すとおり、、０２年の井川の方が状態が上回ることはすぐに分るが、選択ミス、いやわざとピークの年を外し、言い訳の利

く前年を選んだとうがった見方をされるおそれもあるのだ。
さすがに、阪神ファンの言動に辟易とし、やがて気にしないことが最善の対策と悟りを開いた井川であっても、予期される７５年分の阪神ファンの罵詈雑言が応えるのだろうか。
中西コーチと話し合った結果、井川は０３年の井川を選んだ。前年より、ややストレートの威力やチェンジアップの抜けが劣るとはいえ、この０３年も驚異的な左腕であることにかわりはない。
井川の持ち球である、スライダー、チェンジアップ、そしてストレートの全力が出し切れれば、史上三番目のホームランを打つ門田であろうと付け入る隙はないはずであったが。
「球場の違い、ストライクゾーンの違い、ボールの違い、捕手の低すぎるレベル……僕がメジャーで今ひとつ通用しない理由は色々とあるけれど、やっぱりこれが大きい……打者のレベルの違い……門田さんは、たしか相当なホームランを打った人だけど、その門田さんも、アメリカに行けばいいところ３Ａの５番打者が相場……日本に来れば歴史的な成績を残すだろう打者が平気で８番、９番の下位打線を打つのがメジャーの層の厚さ……僕は、今その渦でもがき苦しんでいるのだけど……３Ａの５番打者は抑える自信はある……ヤンキース参加の３Ａスクラントンで歴代最多勝利の僕が、抑えられないわけがない」
と少々、曲がった自信の持ち方であるが、とにかく井川は大打者門田に対しても、見下ろして投げているのは事実。それが、好結果につながるか、それとも過信につながるか。
井川が二球目を投げようとしたとき、一塁側ベンチから、高畠康真打撃コーチ補佐が飛び出してきた。
「おいカドヤン（門田）、相手は左の井川やぞ。打てるか？」
大打者に向かって、左投手は打てるかとはぶしつけすぎる投げかけであるが、門田は逆に笑顔を作って、高畠を迎える。
「あはは、高畠さん、心配いらんですよ。僕が若い頃なら、どんなしょぼくれたワンポイントでも左投手なだけで、こりゃあかんわと

尻込みしたもんですが、今の僕はちゃいますよ」
「そうか、その意気や。オレはお前の心構えを確かめに来たんや。どうも初球の見逃し方が腰が引けてて、怪しかったからな。これで、弱音の一つでも吐いたら、鶴岡親分に右の代打を進言しとったわ」
南海をはじめ、ロッテ、ヤクルト、ダイエー、中日、オリックスと渡り歩き　伝説の打撃コーチの異名を取り、ＮＨＫで彼をモデルにしたドラマまで放送されたこともある高畠の当意即妙なアドバイスに、どうも神格化され近寄りがたいオーラをプンプンとさせていた門田から、どこか角が取れたのだ。
「高畠さんもかわりましたね。昔はもっと頭ごなしの指示やったのに。高校教師をやったおかげでしょうかね？」
「あほう、オレは昔から選手の心のわかる名コーチよ」
プロ野球界を離れたあと、高校教師として活躍した高畠は、門田を引き寄せて耳打ちをする。
「井川のボールは抜けやすいぞ。そこを叩け。３つのストライクを取ろうとしたら、ひとつは絶対甘い球の来るタイプや。それがストレートだろうと、チェンジアップだろうと、スライダーだろうと、カドヤンの実力なら必ず打てるで」
「へいへい」
岡山出身の高畠と岡山の社会人チームにた門田だけに意思の疎通も完璧だ。そっけない受け答えの門田であるが、高畠の耳打ちを肝に銘じ井川に相対す。
「井川か……２０勝左腕か……相手にとって不足なしやな。これが１３０キロ後半がやっとで、しょぼいカーブスライダーしか投げれない、いかにもワンポイントがせいぜいな左腕やったら、打って当然であほらしくて打席に入る気もおきんが……」
井川は腕を振り切った初球のストレート一転、二球目はよく抜けたチェンジアップを投入してくる。これが膝下に決まり、門田は腰がよじれるくらいフルスイングで空振りする。
ツーストライク、ノーボール。それでも門田は、絶望しない。

「高畠さんがいうてたやないか。井川は3つストライクをええとこころで取りきれる投手やないと……」

田淵は、この門田の余裕に気づくべきであったが、鉄は熱いうちに打てとばかりに、三球勝負を選択してしまうのだ。

「こい、井川！　外角に渾身のストレート、ずばり！」

高畠の耳打ち通り、井川は3つ連続絶好の場所にストライクボールを配するだけの制球力は持ちあわせていなかった。

田淵のミットは内側に修正せざるを得なくなり、それは門田にとって、絶好球とまではいかなくとも、好球ていどには値する。

門田のよく振れたバットから弾き返された打球は、投手の井川を襲うセンター返しの打球となる。やや守備に難のある井川の差し出すグラブは一瞬だけ送れ、門田の打球はセンター前に綺麗に抜けていく。

「ヒットか。う〜ん」

ホームランの打ち損ないがヒットと日頃から公言する門田だけあって、この程度のクリーンヒットは取るに足りないものであるが、井川を蟻地獄にハメるには十分な当たり。

強肩のセンター新庄を警戒して、二塁ランナーの広瀬は三塁に止まるが、それは4番打者の前に格好のチャンスができたことを意味する。

「オレの足や、勝負すれば新庄といえど、勝ったかもしらんが。お膳立てや、ノム、オレを返せ」

野村は広瀬のエールに応えることができるのか。

「またこれか。いい加減にしてよ」

井川はぼそっと呟く。マイペースの井川もよほど腹を据えかねる野次が阪神ファンから飛び交っているのだろう。

「井川、こりゃ、ボケ、しねえ！」

「おい、井川、お前分かっとるんやろうな！　三塁の広瀬は村山の自責点になるんやぞ！　もしホームに戻ってきたら、イテまうぞ、おんどれが」

「水戸にはよう帰って、納豆でもかき混ぜとけ、このアホンダラが！」

二死とはいえ、一三塁で打者は井川をよく知る右の野村。井川にしては酷すぎる場面であるが。はたして、ベンチは動きを見せるのか。

動くにしても、次に投入が予想される投手は久保田である。もし動くとしても、腸が煮えたぎった阪神ファンに油を注ぐだけともいえるが。

アルキメデス・ポゾ

阪神側ベンチの若林忠志投手兼任コーチがもぞもぞと動き出す。やはり、井川は対門田のワンポイントの起用なのだろうか？

次は右の野村だ。いかにも懐の広い野村は、歴代二位の本塁打を放ちながら、左腕キラーの側面もある。

ただでさえ分の悪い井川。しかも、案の定、傷口を広げた井川に対し、阪神ファンはもうプッツン状態だ。いつ、大きな暴動に発展してもおかしくないほど荒れ狂う阪神ファンに、さすがの超マイペースの井川も口を曲げ、どこか不貞腐れた態度をとっている。

あらゆる状況が、阪神側にマイナスの検査結果を示している。この状況を打破するのは、めまぐるしい投手交代の他はない。

もしも阪神の監督が、野村や仰木など一人一殺の猫の目リレーが持ち味ならば、この場面、間違いなく投手交代の決断を下しただろう。

いや監督が誰であろうと、山田久志や尾花のように、監督と同等な強い権限を持ち、しかも、投手交代をするのが趣味のような監督なら、やはりこの場面、すでに次の投手の名前をコールしているだろう。

だが古狸こと藤本定義監督は微動だにしない。

「井川よ。２０勝左腕なら、このイニングくらいは責任持てえよ。相手は野村や。あいつはワシがユニオンズの監督やってたときからよう知っとるが、二流、三流投手は親の敵みたいに打ちよるが、一流投手はよう打てん打者よ。ちょっとひねって、カーブ投げればイチコロや。一流どころか、ヤンキースに誘われる超一流のお前さんなら、抑えて当然の打者や」

と藤本定義はベンチにどかっと座り覚悟を決めているのであるが、それでも、もぞもぞと落ち着かないのが、若林忠志投手兼任投手チーフコーチだ。

「ポゾ、なんや、お前、ワシが続投いうたら、続投なんや、腰を落ち着かせえ。首脳陣がおたおたしてどないするんや。選手が見とるやろ」

若林忠志はハワイ生まれの日系人であり、通称ポゾ。ポゾとくれば、いかにも、ミドルネームの類かなにかと思われるだろうし、横浜にいた進藤の控えの小柄なカリビアンを思い出す向きもあるだろう。しかし、ポゾの由来は、坊主がなまったものだ。幼少時代から坊主がトレードマークだった若林は、いつしか当たり前のようにポゾと呼ばれるに至ったのだ。

「OK、ボス……。私、ブルペン、いいか?」

「お、ポゾ、なんや、そのつもりになったか? よっしゃわかった、投手コーチの役割は、第二投手コーチの上田次郎に任せるから、いってこい」

「お~ボス! ものわかりいいね~」

若林は、投手コーチの役目を第二ベンチ投手コーチの役割を担いながら、何もすることがなく手持ち無沙汰の上田次郎に任せ、いそいそとブルペンに向かっていく。

「これで、継投の筋道は決まったで。このワシの青写真のとおり、行くかは、井川。お前しだいや。ヤンキースの左腕の意地をみせい」

とこれまでの言動から見て取れるように、藤本は、やや大リーグそのものを過大に評価しているきらいがあるのだ。藤本の世代といえば、大リーグは、歯も立たない雲の上の世界。その世界の最高峰に位置するヤンキース所属の左腕となれば、藤本の井川に対する評価がうなぎのぼりになるのも無理はない。

「3Aいうてもたいしたもんや。3Aのチームでも日本野球はよう歯がたたんからな」

当時の価値観が抜けきれない藤本は、マイナーリーガーで落ち着いている井川も、最大限に評価をしてしまっているのだ。

ネコもシャクシもメジャー挑戦し、マイナー落ちは明確な失敗と位置づけられる価値観とのギャップが産んだ井川の続投か。それと

も、純粋に井川の実力を買っての続投なのか。

藤本の答えがどうなるかは、井川のモチベーションにかかっている。育ての親？　とされる野村相手に、恩返しと燃えるのが一般的な野球人の心の持ちようであるが、井川はひと味も二味も違う。

「打者一人っていうから、嫌な救援を引き受けたのに。話が違うな……」

超現実派の井川は、続投を決めた藤本に意気に感じず、それでもふてくされているのだ。

「野村さんか……。阪神ファンも、生え抜き選手の僕より、結果残せず首になった野村さんの方が好きみたいだし、いっそ打たれたほうが喝采を呼ぶかな」

井川のふてくされも、ここまで来れば末期症状だ。八百長まがいの発言は、チームの士気だけでなく、試合の品質もぶち壊すことに井川は気づいているだろうか。

「おい、井川。知っとるか？　野村さんはカーブを投げてれば打たれないんだぞ」

田淵は、カーブのサインを出そうとするがはたときづく。

「ストライクボール、スライダー、チェンジアップ……。カーブ投げれないじゃないか」

井川も不器用とはいえプロ。高校時代はまっすぐとカーブの在り来りな投手だっただけに、カーブが投げれないはありえないが、プロの一軍打者を仕留めることができるレベルのカーブが投げきれないことも確かだ。

「スライダーでいいや。同じ曲がるボールだしな」

と投手が替わっても大雑把なリードをする田淵。そして、ふてくされきった井川。

このバッテリーが、緻密な読みで初球の入り球を絞り切る野村に勝つ見込みはあるのだろうか？

アルキメデス・ポゾ（後書き）

ベンチ入りをはたした阪神の投手は7名
判明しているのは、今投げている井川
そして物語上に登場した山本和行、藤川球児、久保田、江夏。
残り二人は未だ謎ということで

島岡御大に逆らった反逆児

井川のそっけないふてくされた態度が、阪神ファンをよりいっそう刺激したのか、渦巻く怒号の波は大津波警報が発令されるほどに発展していた。

「ノムさん、頼むで！　裏切り者の井川を打ってくれや～」

「野村！　野村！　野村！」

相手方のコールが飛び出る屈辱的な展開に井川の心中はいかに。

「見返したいけど」

それでも、見返せないのが井川である。

井川なんていなくなって清々したとポスティング移籍を喜ぶ阪神ファンに今に見ていろと恨み晴らさで置くべきかと胸に秘めても、３０億円の損失を計上したと嘆くヤンキース上層部にいくら腹を立てても、伊良部に次ぐ日本からの輸入失敗とニューヨークのマスコミに叩かれても、人種差別まがいの野次をヤンキースファンに食らっても、井川は実力で黙らせないでいるのだ。

この最悪の雰囲気を覆すのは、野村を胸が透くような投球でねじ込むしかないのであるが、今の井川の精神構造では、都合のいい未来像を描けないのである。

体が０３年のピーク時に戻ったとしても、強気の扉を開く鍵は見つからない。迷える井川を手助けできるのは、捕手田淵の甲斐性であるのだが。

「ノムさんはカーブが打てないのは有名すぎる事実。さすがに、熟達した技術を身につけた晩年は、二線級のカーブは捉えていたけど、一級品のカーブはくるんくるんであることには変わらなかった……。問題は、井川が一級品のカーブを投げれるか否かであるけど……ちょっと厳しいなあ……井川のカーブなんて、オレ阪神時代にいやってほど投球見てるけど、ほとんど記憶にないぞ……ならば、スライダーで代用するか……同じ曲がる系統のボール……しかし、こんな

単純な戦略がノムさんに通用するかね……」

今日、ここまでの野村対田淵の読み合いは、なんとこれが田淵の完勝なのである。フォークとまっすぐのコンビネーションの村山のイメージの裏をついて、チェンジアップやカーブを投げさせて、野村の逆をつくことに成功したのだが、いわば、投げない球種を決め球に持ってくるのは、掟破りに近い。虚を付かれたと野村があわてふためいて凡打に倒れたがいいが、本来は危険過ぎる攻め。

なぜなら、いつも投げない球種は、それだけ制球ミスの可能性が高く、やはり質の高くないボールになる恐れがありすぎるからだ。

村山が絶対の制球力の持ち主であったから要求できた攻めであり、井川のような得意なボールでも、どこにいくか分からない投手に求められる攻めではないのである。

しかも、野村は一度ならず二度も引っかかているために、もう同じ攻めは通用しないと見ていいだろう。ならば、考えうるのは正統な攻め方だ。正統といっても、馬鹿正直な攻めを意味するわけではない、野村の心理状態を読みながら、井川の得意のボールをいかに配置するのかにかかっているのだ。

「この場面、問題はノムさんが何をしたいかだ。ノムさんは後ろの松中をこれ以上なく高く買っている。ボール球で攻めても、喜び勇んで一塁に歩くだろう。４番だからと決める打撃はしてこないはず……。こっちも満塁で松中は願い下げ。そうなると、ストライクを先行しつつ、打ち取りにかかるしかないわな」

今日の田淵は田淵にしては珍しく、頭が冴えているのだ。正しい、見解で野村の狙いを解き明かし、井川に入り球の指針を示す。

「これだ……さあこい、井川！」

田淵が要求したのは、外角低めのストレートだ。決め球に曲がり球を考えての初球のストレートか。しかし、井川の制球力と今の精神状態では、田淵のミット通りに投げれるはずがなく、井川のボールは案の定、浮き上がり、甘いコースに入っていく。

野村は果敢な初球攻撃で、このストレートをかっ飛ばしにかかる

が、井川の腕の振りとボールのキレに翻弄されてか、バックネット裏へのファウルに終わる。

「なんや、初球からまっすぐかいな。このオレが舐められたもんやのう。怖がって怖がって、ボール球の変化球思うたわ」

と野村は田淵に聞こえるようにささやくがこれは野村流の罠。ストレートは野村の読み通りで、ケレン味ないスイングをしたはずが、井川のボールが予想以上に浮き上がったために仕留めきれなかったのだ。

「……。狙い球でなくて、このスイング……やはり野村さんにストレート攻めは危険だな……」

素直な田淵は、あっさりと野村のあの手この手の蟻地獄にはまり抜け出せない。井川のストレートは想像以上の野村の邪魔になっているのに、田淵の頭から井川のストレートは消え去ったのだ。

「これで、あとは変化球を待てばいいんや」

田淵からストレートのサインを抹消された野村は、変化球一本に的を絞る。

「カーブ？　ないな、井川のカーブはないわ。あいつのカーブは高校レベルやと、オレが投げさせるの辞めさせたんや。それで代わりに覚えさせたのが、スライダー。そして、落ちるボールがないとこれからのプロ野球はやっていけないぞと、これまたオレの指令で当時のは投手コーチの八木沢があいつに覚えさたのが、チェンジアップや……。どっちかやなあ……。いくら、曲がり球が苦手のオレだからといって、左投手のスライダーは、右打者には投げにくい。とくに井川レベルの制球力なら、真ん中よりやや内側に甘めのコースの絶好球になる恐れがある。するとなると、チェンジアップか……。くくく、オレが教えたのも同然の決め球を打ち砕く。この快感はたまらんものがあるのう」

野村の話術の先導で、田淵の逃げ道はスライダーとチェンジアップのふたつになったわけであるが、同じ右のホームラン打者である田淵も左投手の投げるスライダーが甘く入ると、絶好のホームラン

ボールに成り果てることは十分に理解している。

「要求したところにこない。そしてことごとくボールが高く浮いている。そんな今日の井川にスライダーは危険すぎる。そうなると、もうこれしかないわな……」

田淵はチェンジアップ攻めを決め、そして、野村の待ちもチェンジアップ一本。読みと配球が合致し、怒るであろう結果はマウンドでうずくまる井川のはずであったが、それ以前に大きな問題を孕んでいたことは、さしもの野村さえ気づいていなかったのだ。

野村の現役時代、左腕といえば、右打者に対して、カーブ、スライダー、ストレートのいわゆる懐に入ってくるボールがほとんどすべてで、フォークやスクリューなど逃げていくボールを投げる投手は、後年の鈴木啓示や高橋一三など、ごくわずかの一流に限られていたのだ。

つまり、調子が悪い井川の決めきれないチェンジアップでも、野村にとっては難しいことにはかわりなく、開き直った井川の腕の振りのよさも相まってか、ほぼ真ん中からキレなく落ちていくチェンジアップさえも、野村にとっては魔球に見えるのだ。

「あ」

バットの先端に当たった打球は、心もとなさげにセカンド岡田に転がっていく。打撃型二塁手岡田でも、この打球はイージーすぎる。丁寧に処理して、一塁のバースに送る。

「なんや、オレとしたことが……はやり過ぎたわ。いくら、左腕のチェンジアップがオレが現役だった時代にないにしても、井川のチェンジアップなんぞ一球見れば、見極めるレベルやったのに。２ストライク取られても、井川なんぞ打てたんや。クソ～が」

悔しさを紛らわせるためにヘルメットを投げ捨てる野村。一球みれば見極められる井川のチェンジアップであるが、二打席凡打に倒れた野村はワンストライクを捨てる心の余裕が欠如していのか。

井川は、野村に、いや阪神ファンに勝ったのである。甘いチェンジアップを、左腕の落ちるボールを見慣れていない野村が打ち損じ

るという一応の但し付きがつくのだが。
　それでも井川に対する阪神ファンの見方は覆るまでには至らない。井川を評価するむきもあるのだが、マウンドから降りる井川になおしつこくブーイングを送っていることからして、阪神ファンの井川に対する苛立はワンナウトを取ったくらいでは、まだまだ晴れきれないのだろう。
「どうや、これがヤンキースが買った左腕の威力や。野村が打てるわけがない」
　井川投入成功に胸をはる藤本であったが、結果的にゼロに終わったが、危険性の高い継投策であったことに違いはない。２打数１安打と被打率５割の数字を残し、一人一殺のワンポイントも失敗に終わっていたからだ。
　しかしまだ井川投入の是非を語るのは早い。なぜなら、次の７回は松中から始まり、小久保を挟んで、山本、佐々木、川崎と左打者が続くのだ。
　体力だけはありまっている井川、そして藤川球児投入はまだ早過ぎるとなると、続投の目もありうるのであるが。
　問題は井川の心情だ。
「今日の僕の仕事は終わり。あとは、試合が早く終わることを願うだけ。野球は試合時間が決まってないから嫌いだ。サッカーなら……」
　と、すでに心、試合にあらずなのである。
「ん～　いやそういうことじゃなくて……なんていえばいいのかな……ん～　そう、井川の投入はやっぱり失敗ですよ。野村さんが抑えられたのも、偶然の産物。采配も配球も井川の投球も全然だめ……。それなのに、なんで抑えられたかって？　そりゃ野村さんがまずったからでしょうよ」
　たどたどしい言葉遣いながら、かなりの毒を吐くという新しい解説スタイルを確立したＮＨＫ－ＢＳの今日の解説を務めるホークスＯＢの武田に一刀両断されたこのイニングとは、いったいなんだっ

たか。

そして、試合はいよいよ終盤戦に移っていく。

寝ても覚めても城島のことばかり頭によぎる

「しかし、いまだに、よくわからんことがあるんですよ。どうして、城島がいないの？　そりゃ野村さんの方が格もやや上ですし、年功序列に先発投手が杉浦さんであることを考えると、やっぱり先発捕手は野村さんだとは思うんですけど、どうして、ベンチにもいないのか？　ですよ。吉永も田上もそりゃいい捕手ですよ、ええ。でも、やっぱり僕の育てた城島ですよ。僕の前の前のバッテリーコーチだった達川が、こりゃ捕手としてはとうてい使えんと見放して、王さんもリードに呆れて内之倉や川越をかわりに使ったり、森さんや豊田さんら高名な評論家の方々が、そろってダメ出しするような城島を、なんとか一人前のスーパーキャッチャーに育てるのに、微力ながら大きく貢献したのがこの僕ですよ。その僕の育てた城島がどうして、ベンチなんだろう。例えば、今の場面、もし野村さんではなく、城島の打席だったら、打ってましたよ間違いなく、ええ。そりゃ、城島は左投手が苦手なのは有名ですよ、でも大舞台となれば過去のデータはまったくの白紙になるのが城島の恐ろしさです。井川のチェンジアップを捕まえて、ライトスタンドの中段にぶち込んでますよ」

と話ののっけから過度の城島・愛を撒き散らすのは、モチロンのこと、城島の育ての親の若菜だ。福岡ローカルの地上波の解説を務める若菜であるが、阪神でも田淵の後釜として3割、ゴールデングラブ、オールスターと栄冠に満ちた捕手生活を送った若菜のこと、田淵の控え捕手の座を矢野と争う立場であり、当然のように、タイガース側からも出場オファーがあったのだが、地元球団である福岡のホークス愛があまりにも強すぎる若菜は、いまさらそのホークスを敵に試合はできないと出場のオファーを蹴ったのである。

若菜と昔から仲の良い島田紳助いわく、城島は顔つき、動作まで師匠である若菜に似てきた。いやそっくりであると。そこまで師匠

に従順な弟子を持つと、愛情もここまで深まるものか。
　こうして、柳田聖人、藤本博史の豪華？　トリプル解説の若菜は初回から、城島、城島といない城島の話を連呼しているのである。
「城島によくいったんですよ。捕手というものは、普段の生活も野球につなげるくらいでないとダメと。例えば、街を歩いていて綺麗な女の人にあったとするでしょ？　ストーカーじゃありませんが、女の人をよく観察して、どんな行動を取るか予測しなさいと。女の人の格好が派手で化粧も濃かったとしたら、これから夜のお勤めに向かうとか、小奇麗な格好で服装もこどもこどもしているなら、学生さんかなにかで、これからデートじゃないかと。そういう推理というか普段から頭を働かせなさい、そうすれば必ず捕手のリードに生きると口を酸っぱくして言ってきたんですよ。。おかげで日本一の捕手、そしてメジャーのレギュラー捕手となって、最初に批判してた人がみな手のひら返しをするほどに、この僕が成長させた城島がどうしていないのかと、ええ。鶴岡監督の考えることは、僕にはよくわかりませんねえ」
　城島がベンチにもいない理由を、若菜は皆目見当がついていないが、槍玉にあがるのは、やはり、城島を押しのけてマスクを被り続ける独妻政権の野村だ。
「野村さんが城島に勝っているのは、経験からくるリードの深さくらいでしょ？　肩は、城島の方が問題ないくらいに強いし、守りも、そりゃ城島もお世辞でも捕球技術の高い捕手とはいえませんが、野村さんも似たようなもの。なんてたってパスボールのダントツの記録捕保持者ですから。その野村さんのただひとつのとりえのリードを杉浦さんに任せたら、もう野村さんを使う意味がなくなりますね。打力を期待はずれで、井川ごときの変化球に腰砕けなあ¥ら、吉永幸一郎や田上秀則を使った方がましってもんですよ、ええ」
　６回まで、一失点の数字だけみると、杉浦が主導権を握ったことは必ずしも、間違いでもないが、５０年前の野球ならいざしらず、現代野球が入り混じるこの試合では、投手だけが配球を管理するの

は、そろそろ限界が近づいているのではないか。
　６番の金本こそ打ち取ったが、リードは冴えるが打撃はいまひとつの７番田淵には痛打を浴びる。
　タブラン（田淵のランニングホームランの略。とうてい実現不可能な物事を例えるときに使う言葉。それだけ、当時の野球界では田淵のランニングホームランは不可能とされていた）の言葉がある通り鈍足に加えて、次の塁を盗もうとする姿勢もかける田淵は、欲張れば、二塁もいけた当たりなのに、一塁に止まってしまう。
「ふふふ、リードも冴えると打撃もよくなるわ。なあ、松中。昔から言うだろ、キャッチャーだけは打たれたらダメ。リードが冴えてくるって。ただでさえ、好リードを連発する今日のオレがさらに冴えたらどうなるのよ？　ふふふ」
　と一塁の松中を捕まえては、お得意の自慢が始まった田淵であるが、今日の田淵は自慢も許されほど、捕手としてチームに貢献しているのだ。珍しいことに。
「オレと比べて、野村さんはどうよ？　打撃も冴えなければ、リードも放棄とは。やっぱり、城島を使った方がいいんじゃないの？　ベンチにも入ってない？　ああそう、もう遅いか」
　鼻息荒い田淵は、田淵にしては珍しく走塁にやる気を見せる。
「おい、松中、知っとるか？　オレの現役時代の通算盗塁数を」
「知りませんよ、そんなもん」
「１８だよ、１８！　１６年で１８だよ」
「少ないですね」
「それで年間最高の３盗塁を記録した年がいつか知っとるか？」
「だから知りませんよ、そんなもん」
「痩せてて足が山本浩二より速かった阪神時代だと思うだろう？　正解はなんと西武時代の１９８０年なんだ！　タブチくんだのタブタだのからかわれてた頃だよ。オレがなにがいいたいかわかるか？」
　松中」
「分かりませんよ、全然」

「ようは盗塁は、足の速さで決まらんてことよ。投手のモーションをいかに盗むか、そしていかに思い切りよくスタートを切るか、これよ、これなのよ。ようは頭と技術の勝負なのよ」

「はあ……」

「そして都合よく、投手はアンダーハンドでモーションも大きい杉浦さん、そして捕手は球界屈指の弱肩捕手ノムさん……狙い目ですなあ……」

田淵のリードはいつもより大きめだ。本当に走る気なのか？　いくら虚を突くとはいえ、田淵にスチールは大胆すぎるのであるが。

途中経過　前田健太参上

長嶋の抜擢で急遽をベンチから外された新井はそのまま帰すのも新井のためにはならないと、大下の言付けでこの試合のレポート提出義務が課されたのだ。

ネソベリアから、選手の一投一打を注視する新井であるが、長身で判別しやすいの顔の新井がうろうろしているのに、どうにも地元広島ファンは反応が悪い。

「あれ、新井やろ？」

「新井じゃ」

「新井じゃろうなあ」

「新井はベンチに入っとるんはずじゃが？　数日前の新聞に載っとったぞ。新井、滑り込みでベンチ入り確保を大下コーチが名言と」

「いや、急遽外れたようじゃ。ケータイの速報画面のベンチ入り選手にも新井は入っとらん」

「そうか、そんじゃ、あやつは新井じゃ」

「新井か」

「出てったときは腹を立てたもんじゃが、今はもうどうでもええな」

「そうじゃ、そうじゃ、今更帰ってくれきても邪魔じゃし、阪神でもお荷物じゃからのう」

「そんなんより試合じゃ、試合。福本が打席に入ったぞ。こいつはイチロー以上に塁にだしたら厄介じゃ。二盗三盗に本盗まで注意が必要じゃからのう」

強烈な野次や罵倒にさらされると心配していた新井もこの反応には拍子抜けである。あれこれ言われるのおきつかろうが、軽んじられるのはもっときついだろう。

「……まあいいや。集中してレポートが書けると思えば」

駒沢大出身、今ではプロ野球選手会の会長を務めるほど立派な社会人に成長した新井であるが、どうも書くのは苦手のようだ。

2010

「ケータイ、パソコンは便利だけど、紙に直に書くって力を退化させるなあ……」

もともと、たいしたライティング能力の備わっていない新井であるが、ケータイでポチポチ、パソコンでカタカタ、文字を打つのが慣れた今、一層に書く力が消えていたのだ。

「イチローシフトの成功か失敗かの是非は……是非ってどういう感じだっけ？　ケータイで検索しながら書くと、次のプレーを見逃すしなあ、ひらがなでごまかすと大下コーチの説教の絶好の材料となるし……ああもう、いらいらするなあ……。このさい全部、平仮名で書いて、家で清書するかな……ああ、もう徹夜になるな……。なんで、、この僕がレポートなんて、学生でもないのに……」

ぶつぶつ置かれた苦境を愚痴る新井に近づく新たな人影が。その人物特定は、新井より先に、熱心な広島ファンの間で行われた。

「あれ、あの帽子を目深くかぶった男は？」

「前田健太じゃ！」

「マエケンじゃと！」

「ほんまじゃ、マエケンじゃ」

「ほうじゃ、ほうじゃ、マエケンじゃ！　私服姿でもオーラが違うのう、すぐに分かったわ！」

どうだろう、この新井を見つけたときと全く異なった広島ファンの反応は。まるで、新井をは過去の人、それも憎悪の対象ですらない、遠い遠い過去の人扱いであったのに、この前田健太を見つけた広島ファンの騒ぎようと嬉しがりようときたら。

「サインはあとでね。遊びにきてるんやなくて、試合を研究しにきてるんやから」

とサイン拒否にも、スターの貫禄が身についた前田健太の前に、騒いでたファンも一瞬でおとなしくなる。

「どうも、新井さん。お久しぶりです、前田健太です」

「なんだ、マエケン。お前もレポートを課題にされたか？　大野さんか野村さんに言われたんだろう。メンバー入りにはまだ早い、早

すぎるお前やが、試合は見に来い。今後の勉強のためになあとかいわれて」

「いえ、自発的な行動ですよ。これからの参考のために、試合を見てみようかなと、バックネット裏でチャートを付けるのもいいですけど、一度くらいはネソベリアを体験しておこうかなと」

「研究熱心だのう。しかし、まあ頑張れよ、次の大会がもしあったとしたら、その時はメンバーに入れるくらいに成長しておけよ。どうも、カープは今ひとつ、投手層の厚みがなくてなあ、若いお前が一枚加わるだけ、ダークホースからの脱出が図られるし」

「いや、それが新井さん。僕、先発が決まってるんですよ」

「先発、オールスターのか？　そりゃ、お前だろ、今年のセ・リーグは東野かお前以外ろくな先発投手がおらんからのう」

「いえ、その現実のオールスターも多分、僕が先発でしょうが、この大会の、えっ……となんでしたっけ、正式名称は長くても覚えてませんけど、とにかく、この大会の先発要員に決まったんですよ」

「はあ？　お前が先発じゃと？　お前、キャンプに呼ばれてたか？」

「呼ばれてませんねえ。キャンプやってた当時、まだ僕、実績ほとんどなかったですから」

「あの地獄という形容詞さら手ぬるいほどの過酷なキャンプに参加しないで、メンバー入りをあとから決めるなんて、キャンプで苦しみまくったオレとしては、とうてい納得しないよ」

　広島のキャンプが繰り広げられた時期、それはすなわち２００９年の春頃である。当時の前田健太はようやく一軍に出始めた頃で、キャンプ招集の声がかからなくとも無理がないのだ。翻って、新井といえば、今更どの顔さげて広島に戻ってくるんだとの批判の中、理不尽なキャンプをくぐり抜け、ベンチ入りを勝ち取ったのだ。そんな新井でも戦略の事情で急遽ベンチ入りが取り消されたのだから、無競争でメンバー入りを決めた前田健太に、軽い慎みを覚えても不思議ではない。

「前田健太は時期がいいんだよ。オレは時期が悪いんだよ。もしも、

この大会の開幕が、数年前だったとしたら？　広島からＦＡし北京五輪の４番が内定し、株が高値を記録したころに開催してたとしたら、今、オレはここにはおらんだろうよ。今頃、阪神の一塁をバースに替わって守っとるで」

　いや、さすがに北京五輪の４番でも、年８本塁打では、バース抜きはないだろうよ、新井さん。

「そうですね、数年前なら僕のベンチ入りはありえませんね。今、開催しているから、旬の僕が呼ばれているかもしれません。新井さんだって、４３本塁打で本塁打王に輝いた０５年ころだったら、衣笠さんを押しのけて、サードを守ってたかもしれませんね」

「……しかし、お前が先発か。カープの投手層も薄いのう。通算３０も勝っとらん投手が先発ローテの５枚か６枚の中に入るとは」

「今は通算２６勝ですか、現役終わる頃までは２００は勝ってるから誰も文句は言わせませんよ。カープで２００勝ったのは、北別府さんしかいないじゃないですか」

「って、お前、２００勝の時、広島におるのか？　メジャーか、メジャー帰りで違う球団におるんやないか？　それ以前にお前は２００も勝てるほどの投手か？　お前の尊敬するＰＬの先輩の桑田さんもお前以上のハイペースで若い頃から勝ってたのに、２００は勝てんかったぞ」

「どうでしょうかね、僕が何勝でも終わるのか、そして僕が生涯広島で終えるのか、そうじゃないのか、そんな未来の話はわかりませんよ。新井さんだって、まさか広島出身で、野村さんや大下さんの頼みで入団して、まさかＦＡで阪神に行くとは誰が予想したのでしょうか」

「……そうだな、未来は誰にも分からない。そして、その未来を少しでも予想可能にするために、オレは課題のレポートをせっせと書いている……あれ、福本さんの打席終わってる？　おい、マエケン。福本さんはどうなった、はよう教えい、スコアブックの提出の宿題もあるんよ」

「もう、新井先輩、しっかりと見ててくださいよ。福本さんはサード衣笠さんへのライナーですよ」
「そうか、そうか。ありがとう、マエケン」
と前田健太をすっかり信じてスコアブックの記入する新井であったが、実際、福本はセカンド正田へのゴロで倒れたのだ。後輩のいたずらにまんまと引っかかった新井である。
「新井さん、さっき、未来は予想できないとおっしゃられましたよね」
前田健太は、すくっと立ち上がる。
「でも、予測できることがひとつだけありますよ。僕が先発して、そして、僕は目の覚めるような快投をして、プロ野球の歴史に前田健太ありと知らしめる。それだけは、僕の努力次第で予想可能の未来なんですよ」
「よう言うわ。まあそれくらい言わんと、パのダルビッシュ。セの前田健太と並び称されるないからのう」
「池田コーチからは、北別府、外木場、黒田、佐々岡、川口の次の登板と言われました」
「6番手かよ、偉そうな口ぶりからもっと前かと思ったよ。試合を重ねる前に敗退したら、回ってこないだろう」
「先輩方は、もう評価アップは不可能、黒田さんも評価は定まっている。でも、僕は違う。いくらでも評価を上げられる立場にある。さあ、また現実でスーパーピッチングをして、評価を急上昇させるとするかあ。首脳陣の評価も変わってくると思いますよ、秋頃には、どうして北別府さんを開幕にしたんだ。マエケンなら勝っていたと言われるまでになってたりして」
「すごいビッグマウスだのう。まあ、今のお前の勢いだと実現不可能と言い切れんとこが悔しいが」
新井も認めざるをえない前田健太の急成長ぶり。オールスターファン投票で投手が両リーグ最多投票を記録するのもセ・リーグでは初、ライバルがひしめき、投票が分散する投手が最多得票に輝くこ

とは、ほとんど不可能なシロモノ。両リーグ合わせても、過去には、甲子園人気の太田幸司しかいないことからも、今年の前田健太の突出ぶりがわかる。

それだけの勢いのある前田健太だけに、偉大な先輩たちを押しのけ、第二戦のカープのマウンドに登っているかもしれない。

エイトメンアウト　ブラックタイガース

ホークス側の解説者は、若菜、武田、山内孝徳ら試合に出場してもおかしくないクラスを招集できたのであるが、一方の阪神側の解説者の脆弱さときたら、江本と池田のフジサンケイ系列の解説者が名前が売れているだけで、他の関西ラジオ局は和田徹や吉田剛などマイナーどころを引っ張り出さざるをえない始末。それもこれも、あいつが入ってどうしてあいつがいないと派閥間の軋轢がお馴染みお家騒動に発展するのを恐れた阪神のフロントが、とにかく細かくコーチの役職を作り、そこにムリヤリ、多くの選手を押し込んだに過ぎない。

しかし、コーチ屋フロント経験のない現役選手をコーチにするわけにいかず、ベンチ入りにこぎつけない選手は相応に出てくることになったのだ。

そこに目をつけたのが、神戸の阪神放送局であるサンテレビ。空前の解説者不足を補うためと、新鮮なサプライズを提供するために、ひねり出されたプロジェクトが現役選手をゲスト解説に呼び出す試みだ。

ホームラン王レースを引っ張るブラゼル、そして首位打者争いを繰り広げるマートン、打撃も守備も思い切りがよすぎる平野恵一、ロッテからの最上の献上品・久保康友、そして投げれば打線が奮起する影の新人王対抗馬・西村憲、毎年、なかなかの好成績ながらいつまでたっても、勝利のリレーの仲間入りにならない渡辺亮。西の新番長と騒がれながら、ますい守備と集中力の続かない打撃でレギュラーをつかめきれない桜井広大。

そして、忘れてはならないのが、この男、タイガースに吉田、藤田の両名ショートがいなければ、確実に今日の試合のスタメンを張っていただろう、鳥谷敬の８名である。

ただでさえ、狭い放送席にははいりきれない程の人数なのに、お

まけに、ブラゼル、マートンには通訳さんが必要となれば、放送席のゴンドラは乗車率２００％の窮屈さだ。

「田淵が火の出るような当たりを放ち、出塁しましたが、８名の中で田淵さんをよく知られる方は……桜井選手ですかね……」

近年、田淵が阪神に在籍したのは、２００２年と２００３年の両年のみ。その時代から在籍するのは、桜井広大しかいないのだが、どうしてか、機嫌の悪い桜井は率先して話に入り込んでいこうとはしない。

「……」

「おい、桜井、お前そうだろ」

平野が、桜井の胸をつつき、反応を促すが、桜井は先輩の催促にも動じないほど、ぶんむくれているのだ。

それもそのはず、ゲスト解説が多すぎて、椅子の用意が間に合わず、なんと格下の桜井と西村には、球場内から見繕ったパイプ椅子に座らされているから、桜井がむくれるのも当然か。西村はまだしも、桜井とパイプ椅子には、切っても切れぬ後ろめたい関係にあるからだ。

「……」

とはいえ、桜井や西村はフレッシュさを醸しだすため、ブラゼル、マートンは完全に話題性優先で、舌鋒鋭い解説は、ハナから期待されてはいない。ゲストとして中継を彩りだけでなく、解説役として期待されるのは、平野、鳥谷ら中堅層なのである。

しかし、鳥谷の解説がこれまた面白くないのだ。

「打席には、今のオリックスの監督であり、鳥谷選手の早稲田の先輩であり、さらには鳥谷選手の育ての親でもあられる岡田ですが、鳥谷選手、岡田にはどのような打撃を期待してますか？」

「……いや、別に、特に思うことはないです……」

「ええっと、それでは質問を変えましょうか。岡田の打撃を鳥谷選手はどう見ています？」

「……まだ二打席しか見てませんし、現役時代の岡田さんもよく知

りませんから、なんともいえませんよね」
局側としては、現役選手ならではの技術論や精神論、そして縁のある選手への熱い叱咤激励を期待しての現役選手のゲスト解説なのであるが、鳥谷の当たり障りのないのも度が過ぎる解説は、すべての思惑をぶち壊す。
最初の紹介以来、いっこうに話がふられずに退屈なブラゼルはついにあくびをし、同じく話がふられないマートンは、シーズン当初から、熱心につけたメモを見返している。
久保康友は盛り上がりのかける雰囲気に、せっかく用意したピカチュウの被り物の披露を断念し、渡辺亮は１１０キロ台の曲がる変化球がパームなのかカーブなのか今日真実を解き明かそうしたが、これまた雰囲気に負けて断念。
なにをきいても通り一遍の受け答えしかしない鳥谷と、たまの解説席で緊張して、夏休みの子供ゲスト状態の平野がメインのサンテレビ解説は、混迷の度をより深めることになる。

「さてさて、いつ走りましょうか。岡田も打ちづらいだろうから初球から走りましょうかね」
すっかり走る気まんまんの田淵であるが、足の遅い選手のスチールの絶対条件は１００％の確率で成功すること。
盗塁成功の円グラフが１００％になるためには、バッテリーの無関心が絶対条件であるが、杉浦ー野村の百戦錬磨のバッテリーにいちるのスキがあるだろか？
田淵に無関心と思わせて、矢のような牽制球でまんまと飛び出た田淵を刺すひっかけ作戦ではないか。
それ以前に、この一点差の大事な走者の勝手な走塁は、監督の許可なしで許されるものだだろうか。
選手をがんじがらめにする采配を振るわない藤本監督とはいえ、田淵の勝手な盗塁敢行、そして案の定の失敗の流れの悪さは嫌うはずだ。

ベンチから藤本監督が出てくる。田淵の鼻息の荒さをみて、勝手な走塁を仕掛けてくることを感づいたか。

「なんで、監督が出てくるの？　岡田に代打かな？　左の藤田平もまだベンチにいるし、なくはないはわな……」

藤本監督は田淵を指差す。

「オレになんのよう？　もしかして勝手に走ることを感づかれた？」

しかし、藤本監督が歩みをすすめるのは、主審の円城寺の方だ。田淵を指さして、主審に交代を告げるとしたら、それは田淵に代走を送ることを意味する。

「オレに代走？！　ちょっと待ってくださいよ！　オレだから走れるんですぜ？　しかも、オレは好リードで６つゼロを並べた影の功労者！　そんな男を途中交代させるなんて……」

渡辺博之野手総合コーチに尻をポンポンと叩かれて、ベンチから飛び出したのは、矢野輝弘だ。代走の切り札赤星でなく、捕手としては足が速いが、盗塁を仕掛けるまではない矢野を送り込んだ意図は、すなわちこのイニングの攻撃より、裏の守りを重視した動きとみていいだろう。

藤本監督の判断としては、田淵は攻撃型の捕手、すなわち、田淵の打力でリードを奪って、あとは田淵より守備に信頼のおける矢野を抑え捕手として逃げ切りをはかろうとの狙いか。いきなり、マスクをかぶらせるよりも、負担の少ない代走から徐々にゲームに慣れさせる意味もあるだろう。

「なんで、オレに代走？　オレ途中交代？　ここまでのリードは撒き餌ですぞ？　撒き餌をふんだんに撒いた成果が終盤戦に……」

田淵は、ベンチに下がっても文句をダラダラ並べるが、あっさりと切り替えの早いのｍ田淵である。

「まあええわ。久びさに野球を真剣にやったから、頭も体もぱんぱんよ。野村さんに読み比べで３度も勝ったから、それでよしとしようか」

一塁走者矢野、打者は岡田。盗塁敢行するほどの矢野ではないが、エンドランの走者としては最適。そして、右打ちのうまい岡田が打者となれば、エンドランのサインをちゅうちょなく藤本監督が送るのも当然だ。

スタミナが限界に近づき、エンドランをみやぶる余裕のない杉浦は、右打ちのしやすい外角にストレートを投じて、まんまとエンドラン網に自らはまりにいく。

一二塁間に放たれた打球は、松中も井口も取り切れず、ライトに抜けていく。ライトの佐々木は二塁を蹴った矢野を三塁で殺そうと、バックサードの返球をするが、やや高くそれて、サードの小久保がとるのがいっぱいいっぱい。

「ようやったのう、矢野。田淵のアホンダラじゃ、こうはいかんぞ。二塁が関の山で、ベースの上で、はあはあいっとるはずや」

金田正泰三塁コーチャーも絶賛する矢野の走塁テクニックで、阪神は一死一三塁の絶好のチャンスを形作った。

打者は9番の新庄、うつ状態でないにしても打撃の信頼性にかける新庄である。アンダースローの杉浦が比較的苦手にする左の藤田平や赤星がまだベンチに残っていることから、本来は代打が適当な策であるが、藤本監督は動かない。

新庄の打撃を信頼したというよりも、新庄の守備力を信じているのだ。新庄の凡打は計算のうち。たとえ、新庄、真弓が倒れてこの回がゼロに終わったとしても、新庄の守備力を捨てきれないと判断したのだ。一点を取りにいくでなく、一点を守りにいくことを選択した藤本監督の采配はどうでるか。

「新庄は内角の厳しいところを攻めていけば、絶対に打たれない。僕の速球が打てるわけがない」

自信の内角攻めを決めた杉浦であるが、そこには誤算があった。１００球を越えた杉浦は、微妙な制球ができるほどのスタミナがなく、そして、新庄は内角に飛び込んできた厳しいボールを瞬時に避ける精神状態にはなく、結果……。

「いて」
新庄の腰に杉浦のキレのいいストレートがドスン。もんどり打って倒れる新庄。いつものパフォーマー新庄ならば、多彩なリアクションで、この死球の衝撃を笑劇に変えるのであるが、うつ状態の新庄は無言でのた打ち回る。
「おい、新庄、はよ一塁いけや」
野村の冷たい一言で新庄は、腰を抑えながら一塁に小走りに走っていく。
一死満塁だ。それでも、鶴岡は動かない。それほどまで、杉浦を信用しているのか。
「鶴岡大監督も勝負勘が狂ったか？　この状態の杉浦を続投なんて……打たれるで、とんでもない高確率で……。まああの一手を使えば、その確率をぐっと低めることができるがのう……。頑固な杉浦が受けてくれるか。窮地のたった一手の策やからのう」
腰に腕をやり、杉浦の状態を案じる野村。はたして、野村が内に秘める、続投杉浦がこの回を切り抜けるたったひとつの作戦とは？

真弓真弓ホームラン

「たったひとつだけや。続投杉浦がこの大ピンチを切り抜ける策は」
マスクを後ろにやり、野村はため息をつく。
「ただ、この策は大きな問題が壁になって立ちはだかるんや。プロ野球選手、それも、投手ちゅうもんはな、これが一番、やっかいなんや。しかも、相手は投手、江夏といい、江本といい悪人しか務まらんポジションや。プライド。杉浦のプライドや。杉浦のプライドが問題なんや」
主審の円城寺にタイムを要求し、一歩二歩と牛歩戦術のように遅い歩みで、杉浦の元へ野村は向かう。
「この策を杉浦が飲めばこの場面、ゼロで潜り抜ける確率はぐっと上がる。だがその前に、アイツがこの策を飲むかどうかわからん。オレは知らんわ、鶴岡親分と杉浦が勝手にやっとるんや、杉浦が主導権を握れえとな」
杉浦は下を向いて浮かない表情をしている。打ち取りやすい打者が並ぶ、杉浦にとっての案配の下位打線3人を揃って、塁に出したことをいまだに悔いているのだろうか。
「田淵への入り球違ったかなあ……右狙いの岡田に外のボールはないか。それ以上に新庄だよ、あの案配、新庄に厳しい攻めはいらなかった。甘いコースでも、僕の球威に負けて打ち損じる打者に」
前を向いてこそ、試合に立ち向かえるのがスポーツマンであるが、今の杉浦は過去の失敗を悔いるだけと非常に危険な状態にある。
そんな杉浦を救えるのは、女房役だけだ。
「どや、杉浦。この場面を潜り抜ける作戦を思いついたか？」
「ノム。率直にいってくれ。僕の今の球威は、真弓に通じるか。捕手の目線からアドバイスが欲しい」
「なんや、スギ。オレの介入なしで抑えられるんやなかったのか？」
「そりゃ抑えられるさ」

「ふん、案配の打者をことごとく塁に出してよう言うわ。オレがリードしとったら、この回はもうとっくに終わってるで」
「お前のリードなんて、それほど神業じゃないだろう。それはお前とよく組んだ僕がよく知っている。だから、僕が主導権を握ったんだろう」
「そりゃ、オレのサイン通り投げたら、ゼロに抑えられるなら、南海はあんなに巨人に負けてないわな。だがな、杉浦。バッテリーちゅうもんは、共同作業よ。投手一人で打者に向かうより、捕手と英知を合わせて、対抗したほうが抑えれる確率が高いやろ？　打者は一人、バッテリーは二人や。二人もいれば、知恵比べで負けるわけがない」
「……なんだ、サインを出させろってことか？」
「……お前のスタミナは切れかかっとる。このイニングを持てばええほうや。オレがリードしとけば、無駄球すくなく完投できたのにのう……。どや、スギ。最後はオレに任せんか？」
「……」
「お前がいうように必ずゼロに抑えれるリードはできんかもしれんが、ゼロになる確率を高めるリードはできるで」
「……全盛期のつっぱった僕なら、ノムの申し出を一蹴していただろう。でも、今の僕は監督、フロントで勝つ難しさを知っている。少しでも勝つ確率があがる策があるならば、プライドを捨てても飛びつきたい心境だ……。いいだろう、ノム。お前のリードにしたがってやるか」
「ふん、さすが投手はプライドの塊のガキ大将やな。人の好意を受け取るにも、なんだか尊大や。まあええわ、スギ。サインは昔のままや。いいか？」
「ああ、昔のままだな、わかった」
　こうして、野村と杉浦の夫婦会談は、野村が主導権を握ることを杉浦が認めてお開きになった。
「捕手ができるのは、ただどの球種をどこのコースに投げさせすか

やない。あらゆる手段を使って、打者の打つ確率を減らすことこそが重要なんや」

捕手の定位置に戻った野村は、さっそく、ささやき戦術の毒を真弓に撒き散らす。

「おい真弓。阪神の次の監督は星野やぞ。お前、監督辞めたらどうするんや？　お友達の梨田に泣きついて、ハムのヘッドコーチの役割でももらうか？　今の世の中、解説復帰は厳しいからのう。もし復帰できても、ＣＳ放送なんぞ、はした金しか出さんぞ」

太平洋クラブ、クラウンライター時代に、野村のささやき戦術を経験した真弓は慣れっことばかりに、野村のささやきを聞き流す。

しかし、野村ができることは口撃だけではない。これぞ、野村野球の真骨頂のじらし作戦だ。

「スギ、首振れよ」

初球の球種もコースも、マウンド上での会談で確認済みのバッテリーなのに、杉浦は野村の出すサインに執拗に首を振る。

これは野村の出した首振りのサイン。杉浦が首を振り続けることで、真弓の頭をごちゃごちゃにし、さらに焦らしの効果もある。

野村野球といえば、焦らしの野球だ。一人一殺の投手継投、執拗なサイン交換、必要以上な牽制球……。それらすべての真の狙いは、時間を余計に取って、相手の集中力を切らすことだ。

集中力の折れ線グラフを下向きに描かせることが目的である。野村にとって野球とは集中力のスポーツだ。勝負どころでいかに集中して力を最大限に発揮できるかにかかっていると野村は見る。そうならば、その集中力を切らすことができれば、勝つ確率は自然に上がっていく。そのためのささやき戦術であり、焦らし作戦だ。

経験豊富の真弓であるが、杉浦の首振り、プレートを外して、マウンド上をぐるぐる回り、ボールをこね直すなど、野村の指示による焦らし作戦にさすがの真弓の集中力も徐々に低下していく。

「早くしてよ」

このセリフが真弓から漏れた時、野村はしめたと杉浦に投球を促

す。それまでの焦らし一点、早いモーションから投げ込まれた杉浦の投球に、真弓は思わず見逃してしまう。

「ほれみい、甘いコースで初球のストライクが取れたやろ？　野球ちゅうもんは、初球がすべてなんや。それもピンチの場面ならなおさらや。初球をストライクに取れれば、勝ったも同然なんや」

初球をストライク、それも甘いボールを見逃してとなれば、打者の焦りも増していく。あとは、ボール球とストライクを適当に混ぜておけば、史上最強の一番打者である真弓料理もお手の物だ。

「あ、くそ」

真弓はインコースに食い込むそれほど力があるとはいえない杉浦のシュートにつまり、内野フライを打ち上げる。

ショート川崎へのフライ。これまでなんどもミスを繰り返す川崎でも、この飛球はイージーすぎた。

インフィールドフライが宣告されて、落としてもアウトになる当たりであったが、川崎は当然のごとくキャッチする。

「よっしゃ。ツーアウト！　ツーアウト！　あとワンナウトでチェンジです。杉浦さん、気合を込めていきましょう！」

「ほんといまひとつの結果続きなのに元気だな、ムネは」

杉浦も思わず、呆れる川崎の元気小僧ぶり。阪神の打者は吉田だ。何度も繰り返すが、ベンチには、名球会会員の藤田平も、殿堂入り選手の田宮謙次郎もいる。

杉浦が比較的苦手とする左打者の代打攻勢となれば、野村のリードの手助けを粉砕できる効力があるのだが、藤本監督はそれでも動かず、吉田にかける。

やはり、藤本監督は守りの野球の人なのか。守りの野球としは、ショート吉田は絶対欠かせないピースだからだ。

だがしかし、ここで一打がでれば阪神が俄然有利、勝利確定に近づくのも事実。代打の一振りにかける作戦もあろうが、藤本監督は吉田に託す。

「野村のリードがなんや。あんなもんまがい物や」

粘り強い吉田だ。打てないにしても、根負けした杉浦が押し出しの四球を与えることも考えられるが、配球の呪縛から抜けだした杉浦は、まるでスタミナ万全の初回のように生き返る。ノビのあふれる杉浦のストレートをカットでファウルファウルと粘りきるには、さすがの吉田も無理であった。

最後、力ないボールが一塁の松中に飛ぶと、ゴロを捕球した松中がそのままベースを踏み、ついにスリーアウトチェンジだ。杉浦は、野村の力を借りて、最大のピンチをゼロでくぐり抜けたのである。

「ありがとう、ノム」

「スギにしては、珍しいな。素直にオレに礼をいうなんて。なんかこそばゆいわ」

最後にしめした黄金バッテリーの絆を胸に、杉浦は、ついに鶴岡監督に限界を口にする。

「次はバースですか。バースを4度も相手にするのは、骨が折れますよ」

「ご苦労やったな、スギ。ノムの力を借りてスレスレの投球を見ると、次もいけとはよういえんよ」

試合は、7回裏に突入する。井川は続投するのか。打者は左の松中であるのだが。

迷宮のクロスワード

杉浦の限界を悟ってか、鶴岡監督や柚木投手コーチの指示なしで、にわかに動き出したホークスのブルペン陣。

「おい、杉内。入念な準備しとけよ、次の回の頭からあるぞ。なんせバースやかなら。左でも右でも抑えれる投手として、先発も十分こなせるのに、あえてブルペンに回ってもらったお前の出番やろ」

馬というあだ名であるのに、ぶくぶくと太って、南海の先輩でもある、あの江夏に、コーチといえど、多少、節制しないと選手に示しがつかないと猛烈な批判を食らったこともある藤田学ブルペン担当は、杉内に早めに肩を作るよう指示を送る。

沢村賞、ＭＶＰ、奪三振王、最多勝獲得、ＷＢＣ代表二度の華々しい実績から、先発も考えられた杉内であるが、手薄な左腕救援陣を厚くするために、リリーフに回ったのである。

ホークスの救援左腕といえば、中日に放出された三瀬幸司や、９９年のダイエー日本一に大きく貢献した篠原貴行や、遅咲きの吉田修司が候補にあがるだろうが、三瀬は対金本がいる阪神戦は使い物にならないし、吉田修司は、やや球速に欠けるきらいがある。

そうなると、篠原の一択であるが、篠原も練習試合やオープン戦でことごとく打たれ、ベンチ入りから最後の最後で外れた。

９９年の全盛期に時を戻した篠原であるが、精神状態は２０１０年の球威が格段に落ちた今のまま。ストレート一本で押せる球威とノビがあるのにも関わらず、あの時のようにストレートで押しきれず、あまり得意でない変化球が甘めに入って、打ち砕かれたのである。

それでも、篠原は、幸運の女神に愛された貴重な左腕であることに違いなく、現在、心の微調整を施しているのだ。

そこで、白羽の矢が立ったのが、先の杉内ともう一人のホークス左腕の秘密兵器、マッシー村上こと村上雅則である。

「和田、杉内。お前さんたち、みんなメジャーに行くんだろ？　どこの球団がいいか、オレが紹介してやるぞ。そうだ、オレもお世話になったサンフランシスコジャイアンツはどうだ？　なんてたって西海岸。気候は温暖だし、日系人も数多い。しかも、リンスカムなど、おまえらに刺激を与えてくれる若手投手の宝庫だぞ」

のっけからお得意のメジャートークを交え、ホークスの後輩をサンフランシスコジャイアンツの後輩にしようと必死なマッシー村上。口先も冴えるが投球にも期待がかかる。日本では、先発でも活躍したマッシーであるが、メジャーでは、もっぱら救援の左殺し専門。

当時の左の強打者相手に、互角の勝負を繰り広げていたマッシーにとって、大リーグ未満の実力であるバース退治など、軽いものだろう。

「テレビでみてて、なんであんなにバースに打たれるか、ほんと不思議だったよ。オレなら絶対の確信を持って抑えられるのに」

１９６０年代の時代性を考えると、これくらいビッグマウスでないとメジャー選手と渡り合えないのだろう。

現代の最高の左腕と称される杉内か、それとも日本人初のメジャーリーガーマッシー村上か。バース殺しの依頼は、どちらの左のスナイパーに送られるのか。

「井川、次もお前やろ？　ベンチ前のキャッチボールの用意でもしとけよ。リリーフは肩が無駄になると、キャッチボールをようせんのがいるが、お前は先発オンリー。リリーフに倣うより、先発のリズムのまま行ったほうがええやろう？」

木戸コーチにキャッチボールを促される井川であったが、ベンチの端にどかっと座った井川は、たった二人に投げただけでこれだけ汗が出るの？　と人体の神秘を感じるくらい滝のように流れ落ちる汗をタオルで拭きとりながら、ぶっきらぼうに答える。

「もう、投げませんよ。僕の役目はひとつアウトを取って、６回を終わらることですから」

「松中から小久保を挟んでカズ山本さん、佐々木誠、川崎と左が並ぶんやぞ、お前がいくしかないやろ？　なにもお前にいけるところまでいけというてるわけやないぞ、藤本監督は。お前は言い方が悪いが、右打者をおびき出す餌なんや。お前の左腕に怯えて、相手の鶴岡監督が右打者を送ったらそれでも、お前の仕事ははたしたのも同然よ。例えば、松中に代打があったとするやろ？　三冠王に代打やぞ？　いくら７５年の戦力をつぎ込んだからいうて、三冠王に代打は、やっぱり力が落ちるんや。お前は、戦力を落とすちゅう重要な任務が残っとる。だから、藤本監督はお前に動かんのや」

「それ、木戸コーチの見解でしょ？」

「あほ。たしかに、オレの見解やが、藤本監督がお前に降板も告げにこんのは、こういうこっちゃろと推測した結論やないか」

「右の代打が出てきたら、僕はそれでお役御免でしょうかね？　なにか、エース投手にする扱いじゃないですよ。僕の好きな将棋に例えると、まさに捨て駒ですよ」

「捨て駒でもええやないか、少しでもチームに貢献できるやから。とにかく、藤本監督は動かんいうことは、お前の続投つうわけや」

　表の攻撃が終り、守備に移っても、藤本監督は投手交代を告げに動かない。ベンチから、威厳たっぷりに出てきた藤本監督が、主審の円城寺に告げたのは投手交代ならぬ守備交代だ。

　前の回に代走に出た矢野が、そのまま田淵にかわり、マスクをかぶる。井川と矢野といえば、関西を熱狂の渦に巻き込んだ２００３年の黄金バッテリーである。

　投手交代の気配がないと井川は、しぶしぶ、グラブを持ち、ベンチを立つ。

「おい、井川。この回も抑えたら、お前の好きなゲームやアニメのＤＶＤをおごってやるから、気合を入れ直して、投げてこいよ」

「遠慮してきます。木戸コーチより、稼いでますから」

　いくら、藤本監督がヤンキースに３０億で買われた井川を評価し

ているとしても、イニングまたぎ程度で、これだけ、不満そうな井川にこの回も任せるには、危険性が高すぎるのではないか。田淵から、井川をよく知る矢野に捕手を替えて、気分一新で力を引き出そうとする藤本監督の狙いも、極端すぎるほどマイペースの井川の処方せんにはなりえない。

「おい、井川。打者が松中、投手がお前、それで、捕手がオレ。思い出すやろ、２００３年の日本シリーズを。いやあ、西日本を中心に日本中が燃えたシリーズやったなあ」

「２００３年ですか。遠い過去でもなければ、すぐに思い出せるほど近くない、微妙ですね」

体が全盛期に戻ったとはいえ、精神状態はヤンキースで干されたままに井川を気遣って、矢野は２００３年の熱闘の日々を思い返してやろうとの心遣いも、井川には効き目をもたない。

「２００３年といえば、迷宮のクロスワードですよ」

「なんや、その迷宮のなんとかって……。また、ゲームかなんかか？」

「名探偵コナンの劇場公開作品ですよ。いやだなあ、矢野さん。関西に住んでいて、読売テレビ制作の国民的アニメを知らないでいるなんて、ありえないですよ」

「コナンはようわからんが、まあ、アニメを口にするだけ余裕があるってことだからまあええか」

井川のお知りを激励の意味を込めて、何度か叩き、矢野は捕手の定位置に舞い戻る。

そして、松中が気合を込め直し、打席に入る。

「なんや、松中に右の代打はないんか」

藤本監督は、松中に右の代打、打点王獲得経験がある、松中と同じ一ルイス鉄人飯田徳治が代打に出て、すかさず左の井川から右の投手に替える腹積もりであったが、松中がそのまま打席に入るとなると話は別。違う戦略が練られて当然。考えられるのは、井川のそのまま続投である。もう一人、救援専門左腕の山本和行がいるが、

7回の投入はやや早く、できるだけ井川を引っ張りたいところであるが。

「上田次郎臨時投手コーチ。マウンド行って来い」

ところが、藤本監督は動きを見せる。若林忠志に替わり、臨時の投手コーチを努める上田次郎をマウンドに行かせるのだ。これには井川も、話が違うとばかりにびっくり仰天。

「右の代打が出てきたら、交替もやむなしだけど、松中さんのままでどうして僕が降ろされなければいけないのですか？」

まったくの正論をぶつける井川。オールスターが揃う試合ならではの豪華な一人一殺の継投であるが、オールスターだけに、交替にプライドが挟むものだ。

ひとたびプライドを軽視すると、お家騒動の火種に事欠かない偏屈ぞろいの阪神オールスターだけに、いつ内紛が勃発してもおかしくないのである。

「分かりましたよ。交代しますよ」

と口では快諾の言葉を吐くが、その井川の表情は不満たらたら。ベンチに戻って、グラブを投げつけるとか、壁を蹴り上げるなど、あからさまな采配批判に打って出ない井川であるが、くすぶる不満は、ベンチに充満している。

先発左腕として江夏に次ぐ実績と実力の持ち主である井川。これからも井川を頼りにする場面がいくらでもあろだろうが、それでも、なぜ藤本監督は主戦投手のプライドを踏みにじる采配をするのだろうか？

「ふん、選手のプライドなんぞ、いちいちかまってられるか。勝つための作戦や」

と開き直る藤本。この偏屈ぞろいのオールスターをまとめられるのは、藤本定義だけと白羽の矢がたったのであるが、最初の試合から、マイペースでおとなしい井川をも、不満分子にさせる藤本采配は、真価を発揮できるのだろうか。

「いいか、久保田。お前はボールもいい。制球力も意外と悪くない。それでも、打たれるのは心構えが悪いんだ。物事を悪い方、悪い方に考えている。いいか、久保田、オレの言うとおりにするれば、抑えられるようになるぞ」

久保田を目の前に、簡易投手コーチと化している山本和行であったが、井川に替わって、マウンドに上がるのは、どうやらこの男らしい。

「和さん。ベンチから行けという電話です」

中西ブルペン担当から、出撃の合図が出ると、山本和行はすくっと立ち上がる。

「いいか、久保田。マウンドで実践してkるからな。目を皿にして見とけよ」

山本和行投手コーチの時代から広島投手陣は崩壊したまま今日を迎えているよ、

「久保田。いいか、今からオレが言うことを実践してみい。球児までとはいかんが、お前の素質からすると、相当な投手になれるぞ。いいか、とにかく気持ちを前向きに持て。お前のコールを聞いた阪神ファンが拒絶のブーイングをしてもだ。そんなもん屁のようなもんと思えよ。オレは抑えれる、オレのボールは打たれるわけがないと思え。阪神ファンよ、騒ぐなら騒げ、罵声を投球の糧に変えるんだ」

登板直前であるのに、久保田に心構えを教えるのを辞めない山本和行。それだけ、不甲斐ない投球が続く、後輩投手が気にかかるのだろうか、それにしても、山本和行の指導は精神論に傾きすぎているきらいがあるのだが、山本和行”投手コーチ”は、メンタル面の強化で、一人の投手を化けさせた実績がある。山本和行が広島の一軍投手コーチを務めていた時代だ。勢いある速球がありながら、伸び悩んでいた紀藤真琴を、久保田に教えたようなメンタル面の強化で一本立ちさせたのである。山本和行によって生まれ変わった紀藤は、それから3年連続の二桁勝利をあげる投手に成長した。安定感に欠けるものも、北別府、川口、大野、長富が衰え、頼れる投手が、佐々岡だけだった広島投手陣に紀藤の成長は大きなウェイトを占めていた。

ただ広島投手陣全体が改善されたわけではなかった。山本和行一軍投手コーチ時代に出てきたのは紀藤と斎藤雅樹のそっくりまねた山崎健と新人の山内や一年限りのドミニカン旋風のチェコくらい。

山本和行の独特な指導法は、紀藤以外の投手には合っていなかったのだろうか。とはいえ、一人の投手をエースクラスに仕立て上げたのは事実。その山本和行が、今日この日まで、阪神のコーチとして声がかからないのはなぜだろう。一匹狼的の山本和行を歴代の阪神監督は煙たがったのか。

なぜおれをコーチにしないと、なにも阪神に恨みがあるわけではなかろうが、山本和行は２０年の鬱憤を晴らすように、藤川球児に久保田に救援投手の心構えをとくとくと説いている。

「投げた試合の結果を毎日ノートに書けよ。復習をしたら次は予習だ。名前から書けよ。私は久保田智之です。とそっからだ。それで、最初の打者はだれだれで、こうして抑えて、ああして球児につないだと、まあ一種のイメージトレーニングやな・とにかく、野球はメンタルが左右する競技や。プロになったら、素質はたいして変わらん、あとは工夫とポジティブな気持ちになれるかだ」

「和さん、出番ですよ」

「わかった、球道。いいか、久保田。続きはマウンドの仕事が終わったあとだ。いいか、久保田、オレの投球術をよく観察しとけよ。お前より１０キロ遅いストレートで打者を料理してきてやるから」

登板直前まで、話し込むとは、それも山本和行のリズムなのだろうか。それにしても、藤本監督は禁じ手ともいえる策をとった。

左投手から左投手への交替は普通はありえないからだ。特に救援の左投手は、左打者を打ち取るために野球をしてるといっても、過言ではなく、その左投手が左打者を迎えて、ベンチを下げられるとは、不満を内に込めて悶々とするタイプの井川でなくても気分がいいおのではないだろう。

「鶴岡め。ここで飯田徳治を出してくると思うたのにな。三冠王を降ろした、しめたと右のとっておきの投手を送り込んだのに。松中をそのままいかせるとはこっちの計算違いも度が過ぎるわ」

藤本は、飯田の代打を鶴岡は決断すると読んでいた。松中の評価が低いわけではなく、鶴岡はそれだけ飯田の実力を買っているはずとの計算での井川の見せかけの続投。藤本は井川を前の回で降板させるつもりであったが、飯田をおびき寄せるためだけに、この回のマウンドに上げたのだ。どっちにしろ、井川の交替は予定どおりであるが、とっておきの右投手ではなく、左投手に変えざるをえない状況は、誤算そのものだ。

「左の山本和行さんか。左の僕に左に替えるなんて。よほど信頼してないのかな。信頼してないのはいいけど、それなら、僕をマウンドにいちいち上げず、そのまま山本和行さんを送り込めはよかったのに」

不信感を持った井川は、この一件で、反藤本定義第一号となったのだろう。不満分子を一人増やして、ゲームもぶち壊したとなれば、最悪の開幕戦だ。そうならないために山本和行は、くすぶるお家騒動の火種の消火活動に励まなくてはならない。

何度も現役時代にファイヤーマン賞を受賞し、授賞式の壇上で、火消しのはっぴをうっとうしそうに着た山本和行だけに、消火活動はお手もののだろうか。

それにしても、矢野も大変である。回が始まってもいないのに、二度も、投手と打ち合わせをしなければならないのだから。

「山本和行さんと組むのは初めてですね。オープン戦でもすれ違いになりましたし。山本和行のままなら、田淵さんの方がよかったかな？　現役時代に何度も組んでるでしょうし」

「おい、矢野。バッテリーなんて経験じゃないんだよ。投げるのは投手。投手の技術と気持ちがあれば抑えられるんだよ。野村さんからだろうな、捕手のサインで試合が動かせるって風潮になったのは」

「はあ……それで、球種は、カーブ、フォーク、シュートでいいですよね？」

「ああ、それでいい。どんな球種をどんなコースにでも要求していいぞ。それが打者の狙い球でも、創意工夫と技術で抑えこむから」

「はあ……」

井川の交替で変わり者が去ってくれとやれやれの矢野であったが、井川を軽く凌駕する偏屈が出てくるのだから、矢野の大変さを表すグラフも天井を突き抜けそうだ。

「シモと思えばいいか。いや、シモもたいがい、おかしな奴だけど、山本和さんは、また違った変人だぞ、これは」

アラフォーカルテットに一角である下柳を思わず連想する矢野。

「そうか、そうか、シモか、下柳やと思えばええんや。長身左腕で、フォークが武器いうの似てるし、性格も似たものがある。シモをリードするつもりでいけば、こりゃいけるかもっしれんで」

下柳ー矢野のバッテリーといえば、ストレートをほとんど使わず、スライダー、シュート、フォークをとにかく低目に集める配球が持ち味だ。

「打たせてとるか。福岡ドームは広いし、一発の危険性もないから大胆にいけるな。守備も固まったし」

藤本が下した守備重視の布陣は、捕手交替だけでなく、内野のテコ入れにまで波及した。セカンドの岡田を早々と引っ込めて、阪神の黄金内野陣の一角、鎌田実をセカンドの守備に投入したのだ。

「オレの守備、信用してへんのか。あれやで、ほんま、藤本さんは、えらいことをしてくれたなあ」

守備のミスもないのに下げられたと岡田はいかにも不満そうな顔を浮かべて、ベンチにふんぞり返る。

岡田の守備に難があっての決断ではない、鎌田の守備が早々と守備固めを投入する価値があるだけの守備力なのだ。

当初、打撃が非力すぎると鎌田のベンチ入りは疑問符が投げかけられたいた。阪神はセカンドに人材を欠くわけでもなく、和田豊もいるし、現役では、平野や関本賢太郎もいるのだ。なにも、彼らしぶとい打撃を持つ選手を押しのけて、守備だけの選手を入れることはないだろうとの否定派の意見が目立ったが、ねじ伏せたのは藤本本人。

「黄金の内野陣で、守り切る。これがワシの野球や」

藤本は、鎌田だけでなく、プロ野球史上屈指の三塁守備を誇る三宅のベンチ入りも独断で決めた。掛布に打順が回る可能性がある僅差の試合のために、三宅の投入はまだであるが、もしも、三宅の出番があるならば、その時、昭和３０年代、日本野球を席巻した、セカンド鎌田、サード三宅、ショート吉田の黄金の内野陣を再結成される。投手が藤川となれば、一点差も、１００点の差に見えてくる

くらいの鉄壁の守り固めであるが、問題は、そこまでにリードを保てるかどうか。

すべてはやはり、山本和行の左腕にかかっている。救援の名手が、三冠王松中をどう料理するのか。

山本和とカズ山本

久保田や球児に、救援のなんたるかを実戦で示そうと意気込む山本和行であるが、そのマウンドさばきは、意気込みとは裏腹に、淡々としすぎている。

矢野から受け取ったボールをこねるさま、井川が踏み荒らしたマウンドを自分好みに修正するさま、松中を横目でチラチラと見やり、最新の状態を確認するさま。そのすべての挙動に、熱が込められていないだ。

「なにが、マウンドで実証だよ」

これには、闘志をあからさまに現してこそ、救援投手の美学を持つ藤川球児も、山本和行の動きを疑問視。

「なあ、久保田。これじゃ、お前と一緒やろ？　お前も、無表情とか、打たれたら、もっと悔しそうな顔せんかとファンに叩かれるが、和さんも同じやないか」

「……」

出番に備えて投球練習を繰り返す久保田は、あえて藤川の問いに無言を突き通す。

「相手は、三冠王の松中さんや。歯を食いしばり、打てるもんなら、打ってみろの気迫を前面に押し出さんと、打たれるで」

藤川の救援学とは真反対の山本和行のマウンドさばき。

「ようみてろよ、久保田に球児。特に久保田。お前と同じようで、オレのマウンドさばきは違うんだ。久保田のマウンドさばきは怯えと覇気の無い印象を人に与えるが、オレは違う。打者を見下ろす余裕を感じさせるんだ」

山本和行は、矢野の出すサインを前かがみで見る。

「捕手が出すサインはどうでもいいんだ。大事なのは、投手がいかに考えて、アレンジを加えるかだ。ストレートのサインが出て、この打者に初球ストレートはまずい、打たれると感じても、なら打た

れないために、どうするかを考えればいい」
　山本和行は矢野の出すサインに躊躇することなく、何度もうなづく。矢野は山本和行と初めて組み、サインの出し方から、確信のないサインだと分かっていてもだ。
「一発のある松中、場面は一点差。様子見のボール球で入るのも悪くないだろう。だがな、矢野、お前の慎重なリードは時に臆病すぎるんだよ。いたずらにボールカウントを苦しくするだけな配球を解説席から何度見たことか」
　山本和行は首を縦に振りながら、矢野の配球にアレンジ、それも原型を留めないほどの自分流を加える。
　矢野の構えた位置は外角のボール気味のコースであったが、山本和行は漫然と、真ん中に緩いストレートを投げ込む。
　球速表示にして、１３３キロの何の変哲もないストレートであったが、松中は簡単に見逃してしまう。
「うっそー。真ん中かよ」
　思わず驚きの声を上げる松中。初めて打席でみる山本和行よりも、よく知っている矢野の配球と性格の特性から、自分に対して慎重な攻めをしてくると決め込んだ松中は、まさかの甘いボールに手も足もでなかったのだ。
「山本和さんはオレのこと知ってるのか？　オレは三冠王だよ。アトランタ五輪の４番だよ。第一回ＷＢＣの４番だよ」
　松中の実力を現役解説者山本和行が知らないわけがない。よく知っているからこそ、山本和行は、あえて、真ん中に投げて、ストライクを取りに来たのだ。
「打ってこないと思ったら、真ん中に投げればいいんだ。それもなにも全力で投げる必要はない。手投げでもいいんだ。とにかく、ストライクを取れればいいんだ。どうせ、見逃してくるんだから……。野球というのは、カウントのスポーツ。１－０（ワンストライクーのノーボール）になるか、０－１（ノーストライクーワンボール）になるかで、天と地ほど違うんだ。ボール先行のカウントは打者に

余裕を与え、投手に焦りを生む。不思議なもので、ワンストライクを取られただけで、打者はボール先行のカウントからは、手を出さないようなボールにも手を出してしまう」

山本和行は、また矢野のサインに躊躇なくうなづく。フォークのサインであったが、矢野はまた慎重に低目にボール球になるフォークを要求したのであるが、これまた山本和行は自己流に当てはめる。

「これも、真ん中でいいんよ。見逃してもストライクが取れる。松中はオレのフォークの軌道もオレの投球術もわかってない。まさか、真ん中にフォークはないだろうと、フォークと見切った瞬間に、松中は見逃してくるはずや」

山本和行は、宣言通り、真ん中にフォークを投げる。矢野は、要求したコースと違い、真ん中に入ったことから、コントロールミスと思わず、

「あ、やば」

と声を上げたが、松中は魔法にかかったように、このボールも見逃してしまう。

「ありえん、このオレに連続、真ん中は」

２ストライクを先行されたことよりも、連続に真ん中を攻められたことに、腹を立てる松中。しかしこれもすべて山本和行の狙い通りなのだ。

「ストライクを先行した。一発を食らいたくない場面に三冠王。技巧派とされるオレに、慎重な攻めに定評のある矢野。どう考えても、ボール球で攻めて来ると思うよな。その思い込みを利用したのよ。いいか、久保田、これが投球術だ。速いボールを投げるだけが脳じゃない。ストライク先行こそ野球なんだ。そして、２ストライクを取れば、、こっちのもん。２－０の絶望的なカウント、どんな打者でも一割打者に成り下がる。あのイチローでさえも、２－０からは、３割も打てんもんよ」

ここまで、無謀ともいえるほど強気な攻めを見せた山本和行であるが、２－０と追い込んだら、世間一般のイメージ通り、そして矢

野の持ち味通り、ボール球を巧みに混ぜて、松中を料理にかかる。
まさかの真ん中連投で冷静さを失った松中に、際どいコースも絶妙な変化球のキレもいらない。明らかなボールコースに安全なボールを投げ込めば、勝手に力んでアウトの泥沼にはまってくれるのだ。
それでも選球眼がよくしぶとい打撃も持ち味の松中、2ボールにファウル2つまで粘ったが、最後、明らかなボール球のフォークを打ち損じた。
「クソ！」
松中は不甲斐ない打撃にバットを叩きつける。真ん中をふたつ見逃したあげく、ボール球を打ち損じるという最悪の打撃をした松中が悔しさをあわらにするのも無理がないことだろう。
「これだ、久保田。みたか、これが投手だ、これが救援の技だ」
山本和行の叫びが、ブルペンの久保田に届くだろうか、久保田は投球練習中のため、モニターは横目でチラチラ見ているだけだ。
出番はまだと試合を見守る余裕のある藤川の山本和行に対する投球の評価は手厳しい。
「これはビギナーズラックのようなもんよ。松中さんは、初めてあたる和さんの投球をよく知らない。だからこそできる投球。同じ相手と何度もあたるペナントじゃ到底通用しない攻めだよ、なあ久保田？」
「……」
久保田は、やはり無言を貫く。山本和行の実証に興味がないのか、それとも、自分とは合わない投球術とはなから決め込んでいるのか。
松中同様、6番小久保も山本和行の巧みな投球術の餌食になる。フォークがいつかくるかくるかと思わせて、最後までストレートとカーブで押し通した山本和行の老練な投球にしてやられたのである。
簡単に2アウトとなり、打者は左の山本和範。偶然にも山本和対決であるが、同じ左打者でも松中と違い、山本和範は左腕相手にも起用されるほど、プライオリティは高くないようで、鶴岡監督は、

あっさりと代打を決断する。
「ちゅるおか監督！　待ってください！　かならじゅ打ちますから！」
　山本和範は、何度リストラの憂き目にあっても、立ち上がってきた持ち前の粘りで、引き下がろうとするが、鶴岡はすでに代打をコール済みだった。
「残念やったな、カズ。次こそ頑張れよ」
「次？　次もチャンスがありゅんですか？」
　山本和範に恐れることは、、二度と野球ができないことだけだ。次の機会が保証されているならば、粘る必要はないとあっさりとベンチに下がっていく。
　代打は誰だ？　右の代打だろう。先に名前が出た飯田徳治か？　それとも、見出しのオカのニックネーム通り勝負どころに強い岡本伊三美か？
　いや、何のためにこの男をベンチに入れたのだ。福岡ドームの広さをなんのそのとスタンドにぶち込むだけの長打力と代打でも力を発揮できる思いきりのよさがある右の大砲がベンチにいるのではないか。
「左の山本さんや、オレやないやろ、お前かもな」
「オレ？　ですか、吉永さん？」
　城島を押しのけてのベンチ入りだけでサプライズなのに、まさかの代打の一番手と来た日には……。
　田上秀則。捕手でありながら、２６本塁打を放ったパワーを見せつけるか。なおホークス史上年間２５本塁打以上を放った捕手は、野村、城島、そして田上しかいない。

60年前のマネーボーラー

鶴岡野球の申し子だろうと抜擢した山本和範にさしたる結果が出ないまま代打を決断できる鶴岡監督は、過去に意固地にならず柔軟性を持つ采配をふるえる監督といえるだろうか。

さて、鶴岡が猛然と送り込むとっておきの右の代打はいったい誰であろう。7回裏二死走者なし一点差で、打順は下位打線に向かっていく。

しぶとく出塁のできる選手を送り込むか。そしt出塁したならば、俊足の選手をセットとし代走に送り込み、盗塁、エンドランと足技で同点狙いの策を切るか。

それとも、一気に一発長打で同点狙いに行くか。右の代打になりえて、長打を狙えのは、誰もが知っている秘密兵器の田上秀則しかいない。

「オレの出番か」

代打の控え室、バットを振るのをやめて、モニターをチラチラ、状況の推移を見守る田上であるが、呼ばれる雰囲気はない。

この代打の控え室である鏡が四方に敷き詰められたミラールームに、田上の他、同じ大阪出身の先輩捕手でもある吉永幸一郎、一匹狼の柴原洋……彼らは左打者であり出番がくる可能性はないが、そして、飯田徳治、岡本伊三美、木塚忠助の南海黄金時代の戦士がいる。飯田らは右打者であり、呼ばれる可能性が高いが、彼らも呼ばれる様子はどこにもない。

「いったい、誰が代打なんや、鶴岡親分」

自然と不信感と苛立が募るが、鶴岡監督はすでに代打をコール済みだ。コールの前に代打にいくぞと気合を入れなおしてから、打席に向かうのが自然の流れである代打稼業にとって、コールされてから初めて自分の出番とわかるのは、それだけでかなりのハンデである。

経験豊富すぎる鶴岡監督が、その流れを熟知していないわけがないのであるが。久しぶりの監督業、そして今日初めての代打起用どころか、選手交代、かつての勝手を一瞬、忘れてしまったのだろうか。

いや、鶴岡はもうろくも浮き足立っているわけでもなかった。鶴岡の送り込んだ右の代打一番手は、すでに準備万端と打席を待ちわびているのだから。

「山本和範に替えて、代打、蔭山！」

鶴岡が球審円城寺に告げた代打の一番手は、それまで、鶴岡の横にぴったりとついて参謀役に徹していた蔭山ヘッドコーチ兼任内野手である。

これなら代打の控え室であるミラールームに代打起用を言付ける使者が舞い降りなかったのも理解できる。鶴岡に密接する蔭山だ。次、お前行けよの一言で済むはずだ。

しかし、問題は、蔭山の準備。ピタリとついて試合の動きを一球、もっと細かくひとつの動作も見逃さないとグラウンドに集中していた蔭山に代打の準備をする暇があったかどうかだ。

「おい田上。蔭山ヘッド、代打の準備しにここ来たか？」

「いや、吉永さん、オレ、ずっとここにいますけど、まったく見かけませんよ……。柴原さんは？」

一匹狼の柴原にふるが、柴原はただ無言で首を横に振る。

「柴原さんもか……采配批判でもないけど、代打の準備せずに打てるもんかなあ？　蔭山ヘッドはそれでも大丈夫な人かもしれんけど、オレには無理やで……」

代打の控え室を取り調べた結果、蔭山は代打の準備に、バットを一振りもしていないようだ。その蔭山を代打に送る思いきった采配。その采配の出どころは、鶴岡の独断でなく、なんと蔭山ヘッドと協議の結果なのだった。

「おい、蔭山。代打だ、右打者だ。誰がええと思う？」

「せっかく、城島を切ってまでベンチにいてらんですから、田上い

うのでどうでしょうか？　一発長打もありますよ」
「いや、田上いうのに、オレは期待してはいるが、信用はしてない。田上は、粗い投手なら期待できるが、山本和行やぞ。投球術の前に捻られるは。しぶとく食らいついていけるのが欲しいな」
「しぶとく喰らいつくですか？　飯田の徳さんもおるし、岡本伊三美もおりますが、それならば、この私でしょうよ」
「そうやな、お前しかおらんな。しかし、お前、バット振ったか？　準備したか？」
「する暇ありませんよ、鶴岡親分が、蔭山、蔭山、私を離さないんですから」
「それもそうやな、それで大丈夫か？」
「ええ心配ありまへんよ。なぜなら、思いきりバットを振る必要ないんですから」
と、鶴岡は、蔭山がなんの備えもしていないことを知って、代打蔭山をコールしたのである。準備なしの蔭山を起用した意図はどこにあるのか。

「蔭山さん……」
松中、小久保の超スラッガーと対峙しても、顔色一つ変えず、淡々と斬ってとった山本和行であるが、蔭山の登場にギョッとした顔を思わずしてしまう。
通算５３本塁打と、３００本以上放つ松中、小久保のＭＫ砲には、比較にならないほど一発長打のない蔭山に、どうして山本和行は、それまで見せなかった怯えを見せるのか。
「先発メンバーにベンチ入りのメンバーを見て、一番いやな人はこの人だな、出てこないといいんだがと思ってたら、この通り。さすが、鶴岡親分、相手が嫌がる采配をふるってくるな」
身長１６５センチの小柄な体で横幅があるわけでなく、バットも極端に短く持った蔭山に山本和行は、なにをそんなに嫌がる要素があるのだろうか。

「出塁率４割超えが二度……現役時代はよく知らんが、これだけで、しぶとい打者とわかるわな……こういう打者は一番やっかいなんや。ボール球で翻弄しよと、振ってこないだからな」

それまでのマウンドさばきと違い山本和行に余裕の二文字が消え去る。ボール球で翻弄すると見せて、時に真っ向勝負の投球術が、一番効きづらい打者だからだろうか。

一発長打皆無でリーグ最多四球を二度。これは類まれなき選球眼としぶとさを合わせてもたなければできない芸当だ。

「ボール球は振ってこないだろうし、きわどいコースはカット、カットやろな。かといって、松中にやったみたく、真ん中で虚を突くなら、まってましたとコツンとセンター前やろ……」

出てきただけで、山本和行が思考の袋小路にはまるほどの存在感を見せる蔭山。カット、カットで粘り、四球狙いなら、確かに、入念なバットスイングの備えはいらないだろう。

いつ訪れるかわからない代打起用に備え、何百、バットを振ったかわからない田上は、

「どうせ、結果は出ないやろ。準備なしで打てるもんやないでしょ」

と準備なしの蔭山に失敗を期待するが、蔭山は、短く持ったバットで、際どいところから、山本和行がそれならばと投げたど真ん中もカット、カットの嵐で粘り、その間にわずかにくるボール球をしぶとく見逃し、１５球目、カウント、もちろんフルカウント２－３から、根負けした山本和行の大きく外れたボール球を見送り、ついに出塁をもぎ取る。

「ほれ、バットを思いきり振る必要なかったやろ」

見事な粘りでもぎ取った四球。そして、８番は佐々木誠、これまた左打者だ。山本和範と同じく、左投手相手に打席に立たせるほど、プライオリティの高くない佐々木には、やはり代打が送られる模様。

「オレの番やろ？　一発長打で逆転や」

今度こそと意気込む田上。さて、ついに秘密兵器田上の出番となるだろうか。

途中経過　ハーパー緊急参戦

それは、近藤昭仁マジックにかかり、大矢の意図したオーダーが書き換えられて提出される少し前の話だった。

長い長い、大矢の監督生命が危ぶまれて、大矢の監督生命が終り、新しく田代監督が誕生して、その田代監督も代行のままに終り、どこからか尾花を引っ張り込んで、やはり負けが込むその呆れるほど長い時を経て、ようやくベンチ入り野手のメンツを大筋に決めたはずなのに、また大矢ら首脳陣の頭を悩ませる選手が彗星のように現れたのである。

「さよなら逆転ホームランだぞ、田代」

「しかも、満塁」

「さらに、巨人戦で憎きクルーンから」

「おいおい、明夫。憎きクルーンはないだどうよ。クルーンは再び、うちの投手として、佐々木につなげる重要な役割を担うんだから」

「すいません、大矢監督」

「それにしても、異常だよな。半月も経っていないけど、打率４割だぜ、田代」

「ええ、ありえないですよ」

「例えば、、開幕の西武戦は、右のスライダー投手の先発が予想されている。稲尾さん、異東尾、郭泰源、あるいは池永さん……左打ちの一塁手がいれば、起用の幅が広がるよな」「ええそうですねよ、大矢さん……。うちの先発一塁手は松原誠さん、右の一塁手。名球会会員の松原さんは守備を含めて欠かせない選手であるけれど、左打ちの一塁手がいればなあと思いますよ、打撃コーチ補佐の立場からして」

「だろうな、田代。投手コーチ補佐のオレとしても、右投手相手に左打者を並べられると、いやーな感じがするよ」

「左の一塁手に駒田がいるじゃないかというけれど」

「佐伯もいるといるけれど」
「駒田だって一応、名球会会員じゃないかというけれど」
「佐伯は、創立元年から生き残るベイスターズの生き証人で、ぬるま湯ベイにしては、珍しく練習熱心であるというけれど」
「川上さんと王さんがいるから、自分を使う場所がないと感づいた駒田は、ちょこざいなく、巨人のキャンプから逃げ出して、横浜のキャンプに参加して、何気なく、ちょことちょこと流し打ちのヒットを打って、実績と知名度ど成績でメンバー入りを決めたけど、よく考えると、長打もなく、一塁しか守れなく、足も遅く、四球も選べない一塁手の駒田だよ」
「先発野手はだいたい決まったけど、控え野手はどうしよか、石井琢朗と仲が悪いけど、レ一塁と外野の両翼も守れてムードメーカーになれるし、首脳陣にお中元お歳暮を欠かせない佐伯にしようか。でも、佐伯と駒田はキャラがかぶっているぞ、ベイ時代の駒田よりも長打はあるけど、守備も走力も微妙な佐伯だな」
「その二人よりも、ハーパーだよ」
「ハーパーだよな、明夫と田代。どうだ、今からでも遅くはないよ、ハーパーを呼び出そうよ」
「今からですか？　今から、キャンプも練習試合もオープン戦の競争もくぐり抜けていない選手を、ただ１０試合ていど打ったから呼び出すのは、他の選手に示しがつきませんぜ、なあ田代」
「ああ明夫。ハーパーを入れれば、三原マジックの三原さんもデータがない、なにものだ一体と、西武との交流戦にも出ていないハーパーのデータ集めに苦慮するだろうけど、やっぱり、駒田や佐伯の気持ちを考えるとですね」
　煮え切らない田代と斉藤明夫に、大矢は腹に据えかねる思いをぶちまける。そばにあった壁をどんと叩くと、ベイの現状をぶちまける。
「だからだめなんだよ！　うちは！　こだわるメンツやプライドなんてないはずなのに、一流球団みたいに振舞う！　実力優先でいこ

うよ！　駒田や佐伯よりもハーパーをベンチに入れて方がいいとなれば、ハーパーで行こうよ！　オレはハーパーを呼ぶぞ！」
「本気ですか、大矢監督！！」
「ああ、オレは本気だ」
「考えなおしてください、大矢監督。ハーパーはマラベ二世かもしれませんよ、思い出してください、マラベを！　開幕の阪神三連戦に打ったときは、誰もが横浜の当たり外国人の系譜を予感した。ブラッグス、ローズときて、セルビーを挟んで、マラベも当たりか、さすが牛込渉外担当……のはずが、すぐに弱点がばれて急失速！　日本一のエンジンをかけてくれたマラベには、横浜ＯＢとして感謝しますが、そのマラベを開幕３連戦をみて、呼び出すようなものですよ！」
「マラベとは違うさ。ハーパーは本物だ。三試合で弱点がバレたマラベと（２０１０年７月１８日現在）１１試合たって、なお打率を上げるハーパーとは違うんだよ！　とにかく、オレはハーパーをここに呼ぶぞ！　おい、田代か明夫。どっちでもいい、連絡しとけ」
「連絡しとけ……って言われてもなあ、明夫」
「ああ、田代」
「連絡先、知りませんよ」
「うん、ハーパーはまだ現実の世界の人間。こっちは、現実と虚構の入り交じった、一種のパラレルワールドの人間だもん。現実には、プロ野球ニュースで、解説としては一流だなと改めて示す大矢さんに、Ｊスポーツの解説にどこでも顔を出すオレに、湘南の二軍監督になんの問題なくもどっている田代がいる。ここにいる私らと違う世界が流れている。その現実にいるハーパーを呼び出せと言われてもねえ」
「う～ん、そうか、呼び出すには、ハーパーを虚構のこの世界の住人にしなければならないのか……」
　ハーパー招集を諦めかけた３人。なあに、もともと、テレビのニュースに触発されての思いつきだ、大矢の立案が露と消えても、彼

らは無念の気持ちを引きずらずにゲームに入れるはずだ。しかし、斉藤明夫いわく、虚構と現実の入り交じったこの世界と現実の世界の橋渡しができる男が都合よく現れるのだから、彼らは運がいいとも言える。

「大矢監督、大矢監督」

大矢の名前を何度も呼びかけ、監督室をノックする男がいる。

「誰だ？」

「うん、その声は……仁志？　仁志じゃないか！」

「仁志？　そういえば、仁志だ！　仁志ならいいぞ、入れ、仁志！」

途中経過　ハーパー緊急参戦？？？

「お言葉に甘えて、監督室にお邪魔させていただきます」
扉を丁重に開けて、すぐ仁志は、大きく頭を下げる。
「引退の挨拶に参りました……と前置きはこのくらいにして、本題に入らせていただきます。大矢監督、ズバリ、ハーパーを欲しがってますね？」
「……うむむ、さすが仁志だ。現役時代に見せたポジショニング巧みな守備そのままに、需要を読み取るな。たしかに、、我々、ベイスターズの俊鋭なる首脳陣３人は、ハーパーを欲しがっていたところだ……そのハーパーは確か、仁志が、アメリカの独立リーグのチームメイトで、仁志の紹介で日本行きを決めたんだな？」
「はい、まったくのその通りでございます。横浜久しぶりの当たり外国人打者は、この仁志敏久の紹介です……。なんなら、この場にもハーパーを呼び出しますか？　ハーパーはこの私を働き場所を与えてくれた恩人と思っています、彼がこの私の頼みを断るわけがない」
「本当かい？　ハーパーをこの場に呼び出すことができるとな？」
「えへへ」
「お礼……そうだ、仁志、紹介料かなにか必要か？　引退したてのお前はなにかと物入りだろ？」
「いいえ、謝礼目当てでハーパーを紹介するわけじゃありません、横浜に勝って欲しいからですよ、頼みますよ、大矢さん、打倒巨人ですよ……」
仁志は、ハーパーの代理人と胸をはるように、仕事っぷりも迅速だった。携帯電話で「こい」の一言で、西武球場に呼びだすと、ハーパーはどこからとなくすぐに現れた。
場所は西武ドームに隣接する駐車場。西武の００７に悟られないように、臨時のテストの場所に選ばれたのだ。

「どうも、監督の大矢だ」
ハーパーはまだ大矢が何者か理解していないが、球団史に残る選手たちがつどう試合との趣旨は理解をしている。だから、大矢は球団史に残る最高の監督であるはずと勘違いしているようだ。他の優勝監督やめぼしい監督候補に断られ大矢の回ってきた経緯も知らないのだから、無理もないことか。
「おー大矢サン、ヨロシクオネガイシマース」
ぺこりと頭をさげると、時間はない。すぐさま、斉藤明夫相手に打撃のテストの時間だ。
見も知らない投手相手に不利にならないように、斉藤明夫のだいたいの球種と球速と投手のタイプを田代に教え込まれるハーパー。
「いいか、ハーパー、グラサンヒゲナマズ、ピッチャー、カーブ……ブレーキングボール、フォークボール、ＯＫ」
「ヒゲナマズ？　ほわっと？」
「いいんだ、そこは無視して」
田代の拙い英語でも十分に斉藤明夫の投手としてのなりが分かったハーパーついに打席……といっても、駐車場。大矢が引いたチョークの囲いであるのだが、しかし、ハーパーの構えはびしっと決まっている。
「いかにもスキのないフォームだな、田代」
「穴の大きい打者ならば、構えだけでどこが弱いかわかるものですが、このハーパー、構えに隙がない」
「お二人さん、構えで分かるなら、斉藤明夫という試験台は入りませんぜ。幾多の名打者を赤子のように捻ってきた斉藤明夫の投球についてこれたら、判断してくださいな」
「そうだな、なんのための投手斉藤明夫だよな。実戦形式で一線級投手についてこれるかが問題だよな」
捕手を努めるのは、もちろん、名捕手大矢。規定により、横浜からは試合出場はできない大矢はその鬱憤を晴らすように、張り切って斉藤明夫をリードする。

「こい、明夫！　ヤクルト、横浜大洋の異種バッテリーの誕生だ！」
大矢の要求した入り球は、様子見のスローカーブだ。
「情報を与えたとはいえ、外国人が初球のスローカーブ」を打ってくるとは思えん。スローカーブを見せて、次の明夫の速球についてこれるか。緩急に弱い外国人は多いからな」
大矢のハーパー攻略法は、１１０キロのスローカーブと１４５キロのストレートのその差３５キロの緩急差で翻弄し、縦の変化であるフォークで仕留めるというもの。
たいていの外国人打者は、この攻め方で苦もなく打ち取れるものであるが、調子の波の最高潮に乗っているハーパーには、通用しない攻めであった。
制球力には定評のある斉藤明夫。大矢の要求どおりのスローカーブを内角低目に配したのであるが、ハーパーは待っていましたとばかりに、初球からケレン味のないフルスイングをブチかます。
「なんだと！」
大矢の絶叫と、斉藤明夫が諦め、後ろも振り向かないことが、ハーパーの結果を物語っている。
「駐車場だから、よくわからないけど、グラウンド内だったら、おそらく、スタンドだぜこれは……どうだ、明夫に田代」
「明夫は、意地とプライドがあって、認めないかもしれないけど、大矢監督、確かにホームランの当たりですぜ」
「オレも認めるよ、東京ドームなら看板直撃だよ」
たった一球で斉藤明夫なる一流の試金石を打ち砕いたハーパー。やはりのっている男はちがうのか。
「よし……大矢監督、次、行きましょうか？」
「いや、明夫。もういいだろう、もういいよ、もういいだろうよ」
大矢は、斉藤明夫に罰印でテストの終了を合図する。
「ってことは、一球で合格ですか？」
「いや、田代……不合格だよ」
「え、不合格？」

「ちょっと待ってくださいよ、打てれば腹立たしいオレでも、ハーパーはどうみても合格と認めますぜ。それでけ、今の当たりはインパクト高かったですぜ。あ、そうか、大矢監督。飛んだ場所が悪かったのかな？　ここは駐車場。大矢監督のマイカーでも当てたとか……」

「違うよ、明夫と田代。オレがな、ハーパーを不合格に決めた理由はな、ハーパーには悪いがキャラがまだ分からんのよ」

「キャラが分からない？　どういうことですかいな、大矢監督？」

「聞いてくれ。この大会は、なにも勝ち負けにこだわる大会じゃない気がしてきたんだ。たしかに、ハーパーをベンチに入れるのは正解かもしれない。でも、この大会の趣旨はそうだろうか？　勝てばいいのか？　いや勝つのが目的だけど、もっと濃いドラマ性をファンは楽しみたいはずじゃないのかな？」

「キャラクター性？　どういうことですか、大矢監督」

「いや、さよなら満塁弾を放ったハーパーをすぐにベンチにいれる即時性の強さも悪くない。だけど、ファンはそれで楽しいのかってことだ。オレのように、古田正捕手で出番がないヤクルトを捨てて、監督を選んだ、田代や明夫や佐伯みたいに、横浜一筋、そして駒田のように巨人で軽んじられるなら横浜で……。これがキャラの強さなんだよ、ドラマなんだよ。ファンは、勝敗とともに、横浜の、大洋の球史を見に来ているんだ。ハーパーが活躍するよりも、佐伯が活躍したほうが、よほど嬉しいのがファンなんだよ。それを提供するのが我々の役目じゃないか」

「確かに、大矢監督の言うとおりかもしれませんね、なあ明夫」

「……理解出来ないことはないかな」

「そうだろ、明夫に田代……。ハーパーには悪いが……。ハーパーがただの一瞬だけ輝いたヒーローに終わらず、試合に出してもおかしくないキャラクター性を帯びたその日に、まだおの大会がダラダラと行われていたら……。その時、ハーパーが必要になるかもしれない」

大矢は不合格の経緯を、つたない英語で伝える。ハーパーは、理解したのか完全には理解しきってないのか分からないが、不満の表情を浮かべることない。

「そういうことだよ、ハーパー……。残念だけど、現実のペナントでは頑張れよ」

爽やかなものだ。あったばかりなのに、一球の勝負だけで、彼らはアスリート同士として認め合っている。いきなり呼んどいて、不合格を言い渡す不条理さにハーパーは腹を立てもしない。

「チ、恩を売るのは失敗か」

駐車場の影から成り行きを見守っていた仁志は、舌打ちをするが、それにしても試合前の貴重な時間を結果、無駄なテストに費やしたベイスターズ首脳陣は、西武との熾烈な情報戦に大きく遅れをとることになる。

途中経過　ハーパー緊急参戦？？？（後書き）

なんだいこの話

ピッチャー石本

「吉永さん、ここはオレですよね？」

「そうだよな、田上。なんのために捕手3人体制なんだよ。先発捕手野村さんの途中交代は終盤の代走しかありえないのに、どうして、田上とオレを入れたかだ。捕手二人体制だと、万が一を考えてどうしても代打を送り難い。しかし、捕手3人体制やと後先考えんと、代打を送ることができる。なんのために、他の野手を削ったんての捕手3人制や。なんのために、、投手を一人削っての捕手3人や」

控え捕手兼代打要員の吉永と田上は、ホークス在籍が重ならず直接の面識はないが、同じ大阪出身の打撃型捕手であることと、大の食いしん坊であることから、すぐに意気投合したのだ。

大好物の缶コーヒーをがぶ飲みしながら、バットスイングをする吉永と、とりあえず、間食用に用意してあるものを適当につまみながら、これまた代打に備える田上。

準備万端、そして投手は左の山本和行だ。なんのために、捕手3人だ、そして左殺しを期待しての田上だ。

呼ばれる前から出動する気満々の田上であったが、またまた高調した気分はすかされる。代打に呼ばれたのは、はたまた、南海の生え抜き、鶴岡親分の秘蔵っ子だった。

「岡本さんいくで」

藤原満野手総合コーチに呼び出されたのは、岡本伊三美。のちに近鉄で、ピッチャー石本を酷使した監督として知られ、実の娘がテニスプレイヤーだったことの方が有名であるが、ＭＶＰ獲得経験のある南海を代表するプレーヤーでもあるのだ。

「分かった」

”見出しのオカ”の通称通り、勝負強さは天下一品。そして、テスト生、二軍から這い上がった経歴だけでしぶとさは十分伺える。

「岡本伊佐美さん……。鶴岡親分、さすが、投手が嫌がる采配がわ

かってるよ……」

陰山と同タイプの泥臭い打撃スタイルが持ち味の岡本の登場に山本和行は、また嫌な表情を見せる。しかし、久保田に救援の何たるかを見せてやると大見得を切っただけに、弱気な投球は見せれないのだ。

「陰山さんほどやないが、岡本さんも、バットを短く持ち、しぶとい打撃を見せるタイプや。オレの押したり引いたりの投球は、通用しずらいタイプや」

二死一塁、さほどのピンチではないはずであるが、それを大ピンチに感じさせるのは、さすがの鶴岡采配か。陰山はそれなりの走力があり、新たな研究により、山本和行の牽制のくせを暴きだしたはずだ。二塁を盗まれれば、単打でも同点の場面。そして、打者の岡本伊三美は、陰山と同時代を過ごした選手で、陰山が何を仕掛けてくるか、感覚的に分かっている。山本和行の特徴も解説時代、近鉄時代に十分すぎるほど見ている。

「山本和行いうたら、カーブ、フォークのコンビネーションやな、しかも、打ってこないとみると真ん中に投げ込む大胆さもある投手や。だが、このワシにその投球が通用するか？　どんな隙も見逃さんと、集中してるワシや。真ん中でストライクを投げてみい。そん時は逆転2ランや、また明日の新聞に殊勲打岡本伊三美の名前が踊るで」

昭和３０年代の右打者らしく、岡本伊三美は全身に殺意と執念をまとって打席に入っている。この一打にすべてをかける生活の臭いをプンプンとさせている。

この迫力には、さすがの矢野も腰が引けている。

「陰山さんといい、岡本伊三美といい、なんや、この鶴岡南海勢の漂わすもんは。最近の野球選手には、ちょっとない感じやぞ……」

あらゆるデータを集積し、この試合に挑んでいる矢野であるが、鶴岡南海勢のデータ集めには苦慮しているのだ。

「ダイエーソフトバンク勢はもちろん、門田さん、佐々木さん、山

本さんら南海～ダイエー勢のデータは容易に集まったが、どうにもならんのが、この南海勢や。ユーチューブを探してもろくな動画ないし、あぶさん全巻読んでも、岡本伊三美さんも、蔭山さんもほとんど出てこんぞ……」

岡本伊三美は、ちらりと近鉄時代に登場するが、蔭山は、あぶさん連載前の逝去されているために、登場するのは不可能である。

「藤原満さんが、ムエタイのボクサーに似てるからチャイ。桜井さんが料理名人、藤田学さんが泥酔すると顔が伸びるからウマ、のちのスカウト時代に中学生の古木克明を発掘し、ダイエーの逆指名をこぎつけた鈴木正さんのマネージャー時代、オレの中日の時の後輩、市原圭のオヤジの市原稔さんの半世紀とか、せっかく穴が開くほど、あぶさんを読み込んで、南海時代を研究したいうのに、その選手たちは出てこんやないか。出てくるのは、あぶさんｂｅｆｏｒｅの鶴岡南海時代の選手ばかりやないか」

漫画喫茶で半日かけてあぶさん全９６巻を読破して、細かく南海時代の選手の特徴をつかんだ矢野であったが、あぶさん連載時の南海は弱小暗黒時代、その時代の選手はこの試合のメンバー入りに届かず、多くは九州勢と鶴岡勢に占められたわけであるが、つまりは、矢野が持つ鶴岡南海勢のデータはゼロに等しい。

苦手なコースや得意な球種はおろか、どんなタイプの打者か、おおよそも理解していないのだ。野村門下生でデータの重要性を痛感している矢野だけに、データなしのリードには、どうにもキレが感じられない。そして、しぶとい打者の連続に、おののく山本和行。

戦う前に負けたも同然の阪神バッテリーであるが、鶴岡野球は容赦しない。バッテリーのほころびを大傷に広げようと、いやらしい攻めを見せる。

初球スチール。蔭山はヘッドを兼任するだけに、盗塁敢行に躊躇がない。鶴岡とサインなしのアイコンタクト成立した盗塁敢行の取り引き。

打者に気を取られて、走者への警戒を欠いたバッテリーを嘲り笑

うように、いとも簡単に二塁を盗みとる。
「よっしゃ、二塁奪い取ったで。岡本行けよ、ライト前ちょこんでええ。それで、オレは同点のホームを駆け抜けたるわ」
二塁を奪い取った蔭山は、さらなる泥臭い野球を実行に移す。サイン盗みだ。
「第三者が介入するのはグレーゾーンや。しかし、試合に参加してるオレが盗んで何が悪いか？」
矢野のミットの構えとサインを漫然と観察し、打者の岡本にシグナルを送る。
「しかも、こういう野球か。さすが、野村さんが現役時代の野球は、今よりも、こすっかく生活臭が強すぎるわ」
矢野も蔭山のサイン盗みに、すぐに気づくが対処の仕方が見当たらない。
「下柳やったら、あうんの呼吸でサインと違うボールを投げ込める芸当が出来るんやが、バッテリーを組んで、ホヤホヤの山本和さんとはそんな高等技術はできんよ。さてどうしたものか……」
矢野は扇の要であり、抑えの捕手だ。藤本監督から、ほぼ、守りの全権を委任されている。配球だけではない、守備位置を自由に動かれる権利も有している。
「……あんまり、阪神の偉大なＯＢのみなさんに指図するんも気が引けるが、しゃーないやろ。試合をわける重大な場面や。体裁気にしてる暇はないわ……」
矢野は全体的に守備位置を右に寄せる。データのない岡本を打席の立ち姿とこの状況だけで右狙いと見切ったのか。
「野村さんに最初に言われたわ。データのない打者が出てきたら、どうすんや、矢野と。オレはこう答えたんや、データがないなら仕方がありません、感性頼りですかねと。そしたら、野村さん、カンカンや。あほか、矢野、データがな打者なんておらんと、バットの持ち方、打席での構え、立ち姿、試合状況、それがすなわち最新のデータやぞと、つまり、初めて当たる打者も、なにもりや透明人間

なわけやなく、姿形がちゃんと見えるわけや。そこから、いくらでも、データを読み取ることができると野村さんはいいたかったんや。岡本伊三美さんをよう知らんから打たれましたなんてコメント、明日の新聞に載ったりでもしたら、相手側やけど野村さんが、矢野、アホタレと説教しにきてもおかしくないからな」

野村の教えどおり、相手が与えてくれる最低限の情報から、岡本の特徴とデータを読みきった矢野の狙いは、吉と出るのか。

「野村さんはよう言うてたな。キャッチャーは最悪のケースだけを考えろと。思い描いた最悪の状況から脱却するには、どうしたらいいかだけを考えろと。二死二塁、打者は勝負強差には定評のある岡本さん。とはいえ、極端に短く持ったバットと福岡ドームの広さを考えると、長打の可能性は、最悪のケースを思い浮かべてもない。この状況、予想される一番可能性の高い最悪とは、カツンと外野手の前に落とされて、一気に本塁生還されることや。つまりは、最悪の脱却を図るには外野の前に落とさない、つまり外野を前に寄せることやが」

矢野は大きくな身振り手振りで、外野手を全体的に前に寄せるが、

「僅差の終盤や。前に寄せたら寄せたで、今度は頭を抜かれる可能性が出てくる。同点、しかも長打になって、二死三塁とかになったら、それこそまた最悪や。それを考慮すると、前に寄せるのも限界がある。金本、新庄、真弓さんの三外野手っもよく状況把握ができるようで

、前に出る限度のラインを知っている。妥当の位置とはいえ、前にカツンと落とされる可能性はまだ高い……」

矢野はマスクをかぶり直す。

「そして、野村さんはこうも言うてた。最悪の状況を抜け出す術が見当たらなければ、最悪の中から最善を見つけ出せと……。最悪の状況、のらりくらりと散らす山本和行さんにしぶとく食らいつく極端な勝負強さを見せる岡本さん……。覚悟が必要、必要なのは覚悟やないか。打てれる確率が高いならば、打たれ方を考えればええんや。つまり……どこに、打たれるか、そしてどんな打球を打たれるかや。金本、新庄、真弓さんの外野は３人。金本の前に打たれたらおしまいや。少し前のカネに肉体時間を戻しているとはいえ、金本の肩は走塁のうまい蔭山さんを刺せるほどの能力はない。東北福祉

時代からよくカネを見てきたオレがいうから間違いなく。打たせるなら新庄か真弓さん、右狙いやから自然にそっちに飛ぶやろうけど、新庄の猛肩はもちろん、いかにも内野手上がりの素早いモーションから正確な送球を見せる真弓さんも刺せる肩を持っている。しかし、ここにも問題がある。どんな打球なのかや。カーンと当たりが良すぎるクリーンヒットがセンターに飛んだやなら、いくら蔭山さんがヘッド兼任で思い切った走塁ができる立場とはいえ、一気に三塁を回る決断はしにくいやろ。しかも、三塁コーチャーは、日本ハム時代の新庄の怖さを知る森脇コーチや。一か八かでも回さんやろ、ライトに飛んでも同様や。となれば、あえてヒットを打たれる覚悟を決めたなら、三塁コーチャーの森脇コーチが、思わずぐるぐると手を回す当たりでないといかんのや。新庄の肩に怯えつつも、手を回すような当たり、つまり、極めて弱い当たりがふらふらと落ちる当たり、これはいけると！　回しても、それでも新庄と真弓さんはホームで同点劇を防いでくれるやろう。それこそ、自軍の戦力を知り、最悪の状況を覚悟してからの脱却や」

　矢野の目論見は、ヒットを打たれても、ホームで二塁走者の蔭山を刺せる当たりを打たせることにあった。ホームに生還されるのはまずいが、三塁で止まるのもこれまた最悪の状況が続くのだ。二死とはいえ、一三塁で、９番の川崎。まだ代打の切り札は残っている。飯田徳治。岡本伊三美と同じ属性の打者で、実績は格上のとっておきの打者である。

　つまりは、新庄と真弓の補殺能力に怯え、三塁ストップの決断をされても、状況は最悪にかわりなく、それは岡本を歩かせても同じ。逆転の走者を置いて飯田徳治を迎える最悪の状況は続くのだから。

　ならば、矢野は考えた。ヒットを打つなら、打ってみろ、ホームタッチアウトで葬り去ってやると。確率重視の野村野球の申し子矢野にしては、大胆すぎる覚悟であるが、これも野村の教えを忠実に守り、アレンジを加えた矢野ならではの作戦のようだ。

「抑えるならそれはそれでいい。打たれるなら、ホームで殺せる当

たりを打たれろ。そうなると、とことん低めをついて、ポテンヒットか凡フライになるような配球をすればええんや」

山本和行とはなにせ初めてのバッテリー。打ち合わせなく、指先のサインの動きだけで矢野の意図が山本和行に伝わるかどうかは定かではない。

経験豊富の山本和行とは、鶴岡のしぶとい代打策の前に精神のスタミナを失いかけているところだ。

「くう〜　コツコツと当てに来るだろうから、力でねじ込んだるわ」

のらりくらりと交わす投球が持ち味の投手である一方、力勝負に打って出れる投手でもあるのだ。力で抑えようと力み、それを岡本の巧打に利用される危険性をはらむ。

「とにかく、低目や低目。低目に投げときゃ打たれても、望みどおりのふらふらポテンヒットで三塁コーチャー、ゴーや」

矢野は低目、低目の指示を出す。当然のこと、二塁走者の蔭山からサインとミットの位置はもろ見え。蔭山が岡本にサインを送ると、勝負の早い岡本は山本和行のボールを果敢に打ちにいく。

しかし、力んだ山本和行のボールは、岡本の想像よりやや浮き上がる。岡本のバットの上っ面にかするように当たった打球は、矢野の読み通り、センター前にふらふらと上がる打球となる。

「よっしゃ！　ヒット性の当たりを打たれてよっしゃもないもんやが、とりあえず、よっしゃ！　これは三塁コーチャーが回す当たりや、そして新庄の肩なら十分に刺せる当たりや」

お望みどおりの打球が飛んだと喜ぶ矢野であったが、ここに大きな誤算が生まれる。

「あ、しまった！　つうかアホな、どういう野球や」

なんと二塁走者の蔭山がスタートを切っていた。つまりはエンドラン。サインを盗んだ蔭山は岡本が絶対バットに当てれるという信頼のもと、投球モーションを起こすと同時にスタートを切っていたのだ。

「とんでもないボール球やったら、三盗失敗アウトやぞ！　よう走

れるな！　どないなってるねん、南海の野球は！」
　矢野が鶴岡野球の無謀な作戦を嘆いても遅い。矢野の予想に反し、いくら新庄の肩が冴えても、これではホームで刺せっこないからだ。
　蔭山はすでに三塁に到達して、一挙にホームに還ろうとしている。
「あああ～」
　叫ぶ矢野であるが、野村野球の申し子を救ったのは、野村野球の教え子、しかもかなりの異端児であった。
　なんと前にポトリと落ちると思われた打球を、センターの新庄が前進につぐ前進で、グラブの先で捕ってしまう大ファインプレーを見せたからだ。
「こっちもアホな！　いくら前進守備を敷いていたいうても、普通のセンターが取れるあたりやないぞ……。いや忘れてた、うちのセンターは、あらゆる意味で普通のセンターやなかったんや」
　矢野の誤算を救った新庄のスーパープレー。本塁直前で取れたことに気づいた蔭山は、まさかとセンター方向を見やり、あんぐりと口を開ける。
　大殊勲のセンター新庄であるが、うつ状態の新庄はうかれた様子ひとつなく、阪神ファンの大声援にも下を向いたまま、応えることもない。
「なんや、新庄。いま気づいたが、アイツ暗いな。まるで阪神時代に一緒にやってたときみたいや。あの時も、時たま、ああゆう状態になって決まって、極度の打撃不振になったもんやが、絶対の自信を持つセンターの守備力は崩れることはなかった」
　感謝とともに、新庄の複雑怪奇な精神状態にしばらくおののく矢野。
　７回裏のスコアボードにゼロが記録された。１－０の胸が張り裂けそうな緊張感に満ちた試合はまだ続いていくようだ。

サンフランシスコの英雄、北九州の英雄

杉浦降板が決まり、リリーフの用意が迫られるホークスベンチであるが、８回の先頭打者が左のバースとくれば、この男がコールされるに他に選択肢は存在しない。

「マッシーさん、出番です」

藤田学ブルペン担当投手コーチの出動命令に、村上雅則は投球練習を辞める。

「打者は誰？　左でしょ？　え？　バース？　おっしゃ、相手に不足なし……」

ブルペン最年少投手の馬原から手渡されたペットボトルの水を一飲みする。

「よっしゃ、いくか！　史上初の日本人メジャーリーガーが三冠王退治といきますか」

杉浦を降板させるには、それ相応の格と実力を持つ投手へのリレーが必要となる。しかも、一点差の終盤、打者は一番怖いバース。左のワンポイントとはいえ、二線級の左で投げるだけの投手でお茶をにごすことはできない。だから、日本人初のメジャーリーガーで、日本復帰後も通算１００勝をあげた村上雅則に白羽の矢が立つのである。

「杉浦に替わりまして、ピッチャーに村上が入ります。ピッチャー村上」

杉浦に完投を、裏の攻撃で逆転を信じ、さらに完投勝利を望んでいた南海のオールドファンたちは、まさかの途中降板に驚きを隠せないが、救援する投手が村上雅則と知り、杉浦降板の嘆きの声をかき消すような、大歓声に包まれる。

「おい、マッシー。お前、こんなに人気あったか？　なかったやろ？」

「ノムさん、相変わらず人が悪いですな。ありましたよ、僕は日本

人初のメジャーリーガーですよ、そりゃもうアメリカで登板するたびに、日本人が僕の投球を固唾を飲んで見守り、日本に帰国したら、まるでビートルズ来日みたいな騒ぎに……」

「あほいえや。お前のメジャー挑戦なんてひっそりとしたもんやったろうが。当時の日本じゃ、アメリカ大リーグの情報なんぞ、だいぶ遅れて入る外伝だけやろ。そんなんでどうやって日本のファンが盛り上がるんや。なにが、ビートルズ来日ばりの騒ぎや。お前、オレはたった一人の大リーガーなのに、なんで人気がないんだと愚痴ってたやないか」

「あはは、さすが僕の南海在籍当時の野村監督兼任捕手。よく、お覚えで。しかし、今の僕は杉浦さんに負けないくらいの人気者なんですよ。聞きましたか？　今の大声援。杉浦さん降板で、え～という落胆の声が上がり、救援する投手が僕とわかると、その落胆の声がかき消され、僕の登場を待ちわびる声援にかわった。どうです？　４５年の時を経て、ようやく僕の真実の価値が分かりだしてきたんですよ？　レベルが上がった今の選手が、満を持して挑戦しても、必ずしも成功するわけでもないのに、今より野球技術の情報共有が難しかった４５年前に、メジャーで１シーズン、リリーフとして投げた村上は、思った以上に凄い男じゃないかと、そういう意味の声援ですよ」

「あほいえ。そんな難しい意味やない。ただ紙上や話でちらりと見聞きした今や伝説の人物を生で見れる珍しさや、それだけや。付加価値なくせば、通算１００勝程度の一流半の投手に過ぎやしないやないか」

「あはは、ノムさん。厳しいですね」

「おい、マッシー。とことん、お前を伝説の投手と思うてる若いファンをがっかりさせるで。４５年も前に活躍した投手だ、どんな豪速球を見せてくれるのか期待をふくらませるファンを裏切るで。相手はバースや、投手はお前や、わかるな？」

「はいはい、分かりましたよ。野村さんのリードどおり投げればい

いんでしょ？」
　弱冠二十歳で大リーガー相手に互角の勝負を演じてきた左腕投手。どんな剛球投手かと日本復帰後は注目を集めたが、蓋を開けてみれば、左のスリークォーターから変化球で相手を惑わす技巧派投手。野村は、イメージと現実のギャップを逆手にとって、バースを料理するつもりだ。
「バースか……バースねえ。僕は１９８２年に引退した、バースはその翌年に日本にきた。つまり入れ違いというわけだ。バースは僕のことをよく知らない、逆に僕はバースのことをよく知っている、得意なコースから、メジャーでどのチームにいたかもだ。そして、僕はバースに怯えない。あの江夏だって、バース相手にしり込みするだろう。江夏はメジャー挑戦がかなわなかった男、一方のバースはメジャーから落伍した男。同じ失敗した身とはいえ、格はバースが上。しかし、そのバースより、僕が格上なわけさ。僕はメジャーから落伍したわけじゃない。メジャーも引き止めたが、契約の問題で、泣く泣く日本に復帰したのさ」
　村上は、独善的な論理展開でバースを上から見下ろしている。
「その僕が打たれるわけがないんだ。メジャーの強打者と渡り合った僕が、日本に落ちた三冠王にどうして打たれる道理がある？」
　虚勢を張る勢いが必要となる投手と違い、捕手は冷静に力関係を推し量らなければならない。
「変化球も十分こなせるバースに、変化球勝負のマッシー……。ダメやないか。真っ向勝負は打たれるで……。しゃーない、アメリカかぶれに鶴岡親分の采配成功に肩を貸すのはしゃくに触るが、ホークス勝利のためや。口でバースを混乱させておくかいのう。へい、バース！」
「オー、ミスターノムラ！」
「ピッチャーマッシー村上。ファウストボールピッチャー、ＯＫ？」
「ＯＫ、ＯＫ」
「……英語は苦手や、義理の息子はハーフやけどな。この程度しか

できんわ」
　野村は拙い英語で、バースに村上を速球投手と間違ったイメージを植えつけた。しかし、バースに伝わったかどうかも、バースが信じたかも分からない。
　なぜなら、村上の投じた初球のスローカーブをバースは真芯で捉えたからだ。火の出るような打球がライトに飛んでいく。
「く、鶴岡采配に、アメリカかぶれの虚勢に、オレのささやき戦術。全部失敗やないか」
　野村は思わず腕を組むが、バースのライナー性の打球は伸びすぎて、そのままバース用に深い守備位置を取っていたライト柴原洋のグラブに収まる。
「ハードラックやな、鶴岡采配もアメリカかぶれの虚勢も失敗したが、オレのささやき戦術でなんとか救ったわ」
　と野村は、自分の幻影戦術が効いた結果のライトライナーと勝手に手柄にするのである。
　そして、今日一番の当たりが正面ついて頭をかかえるバース。それにしてもいつの間に柴原がゲームに出場していたのだろう。
　前の攻撃での代打攻勢により守備の変更が迫られるのはわかりきったことなのに、投手交代に気を取られて、おざなりになった守備交替。
「なんだよ、せっかく現役のスター選手が試合に出たっていうのに、どうして地元福岡のファンは沸かないんだよ」
　村上の十分の一の歓声も上がらなかったことにいつまでも不服そうな柴原。救援投手と守備要員では、注目の度合いが違うといえど、現役、しかも地元北九州市出身の生え抜きに対する扱いが悪しやしなませんか。
「まあいい。終わってみればヒーローはオレさ。守備要員でひっそり入ったオレが、逆転のサヨナラ打でもみくちゃにされるんだ。それこそドラマってもんよ」
　とはいえ、８番に入った柴原。９回までに回ってくるには、相当

の走者を賑わせることが必要不可欠なのであるが、さて、現役選手でありながらすっかりと忘れられた感のある柴原に目立つシーンは回ってくるのだろうか。

北九州のイチロー

打球が飛ぶまで、選手交代の紹介に至らない柴原とは、どうしてこんなに地味なキャラなんだろうか。２０１０年現在、現役選手であって、ファン投票選出経験あって、この存在感のなさ。

２０１０年の年俸も１億を軽く超える１億２０００万円なり。それでいて、代打兼控えの外野手に甘んじているのに、斉藤和巳や新垣のように、年俸の無駄遣いの槍玉にもめったに上がらない。

「替ったところに打球は飛ぶ」

と柴原は、選手交代時に紹介がなかったことを恨むことはない。よく言われる言い伝えを体現したことに小さな喜びを噛み締めている。

「今に見てろよ、この試合が終わったときのヒーローは、オレだ。今に見てろよ、井口に松中に星野。柴原ってまだいたの？　え、なんでこの試合に出てるの？　とは言わせはしない。藤川球児の豪速球を弾き返し、歓喜の輪の中心にいるのは、このオレさ」

柴原はスコアボードの自軍の打順に目をやる。

「８番ライト柴原……か」

今、打席を終えた代打岡本の替りに打順に入っているのだ。当然、次の打席が回ってくるまで、９人分待たなくてはならない。残り、６つのアウトで試合終了の危険性をはらむ試合であるが、一点差、数人走者を賑わせれば、柴原が密かに狙うように、９回裏のちょうどいい場面に対藤川、一打さよならの絶好のチャンスが回ってくる可能性もある状況だ。

「ベンチに座って数カ月、４月の終りのまだ肌寒さが残る頃に始まったはずのこの試合、今猛烈な暑さに日本列島が襲われている。この間の３か月、オレはひたすらに、ベンチに座って出番を待っていたわけであるが、試合をジーと見つめるのも疲れ、逃避するように見つめだしたのが、試合外の展開だ。特に興味深いのが、この小説

のタイトルがコロコロ変わること。南海対大阪だの副題が付いたと思えば、いつのまに、プロ野球オールスターの冠が頭についている。今の副題は、H対Tに落ち着いたが、この後ろに意味ありげに続くのが、さよならゲームという言葉だ。ひと月前ほどだろうか、この言葉が副題にくっついてきたのは。さよならゲームとなれば、勝つのはホークスに限られる。そして、サヨナラの餌食になるに、一番ふさわしいのは、最強の守護神、藤川球児だろう。そしてサヨナラのヒーローにふさわしいのが、なんでいるの？　なんで柴原？　と疑問符の嵐が吹き荒れるこのオレだろうよ。どうして、柴原が入ったいるの？　その答えは、忘れ去られた好打者の栄光と業績をいまた世間に知らしめるためさ。ダイエーの三度の優勝と二度の日本一、のすべてに貢献しているのは誰だよ？　城島とオレしかいないだろうよ。　松中？　井口？　最初の優勝はレギュラーになってもいないペーペーやないか（松中、井口とは同期入団であるが関係は良好ではなく、星野と柴原といえば、ドラフト時に星野が吐き捨てた、「柴原は金まみれ」とのセリフが歴史に残る）」

あまりの存在感の薄さを、自分がヒーローになる遠大なる伏線と勝手に思っている柴原。たしかに、柴原のメンバー入りは意外の一言で、ファンの間に受け入れられている。

熱心なホークスファンやマスコミは、こぞって柴原よりも使える選手、ベンチ入りにふさわしい選手を、主に柴原と同じ外野手に絞って探しはじめている。

柴原なら杉山光平がいるのではないか？　ちょうちん打法と言われた独特のフォームからヒットを量産し、首位打者に輝いた鶴岡南海後期の主力打者だ。

柴原なら村松有人の方が便利に使えるのではないか？　肩の強さは柴原に譲るが、守備範囲と走力、走塁テクニックは遥かに上。課題の打撃もコンパクトに鋭く振り抜く打法をマスターして柴原以上の打率を稼ぎ出しているのではないか？

柴原ならペドロ・バルデスでもカルロス・メイでもいいのではな

いか？　同じ左のアベレージタイプであるが、２０本を超える本塁打を放ったその長打力は柴原を圧倒する。

　コツコツの打撃しか期待できない柴原ならば、高性能の中距離打者の出番ではないか。

　柴原なら岸川勝也でもいいのではないか？　守備力に難はあるが、一発長打の魅力は柴原にはないもの。しかも、広瀬をのぞき、両翼に佐々木誠、山本和範の左打者がいて、外野起用も考えられる門田も左。控えは右打者の需要が湧き出るはずで、ならば柴原よりも岸川ではないか。

　右の外野手なら河埜敬幸もいる。本職はセカンドの選手であるが、センターのレギュラーを２年間務めた経験のある河埜は足も肩もあり、内野のどこでも守れるユーティリティーの側面もある。いずれにしても、外野しか守れない柴原よりベンチ要員として使い道がありそうだ。

　右も左も兼ねる打者なら、１９９１年の盗塁王大野久もいる。元阪神の話題性もあって、現在高校野球の監督を努める大野を起用すれば、教え子たちに、先生の全盛期の全力プレーを見せてやることもできる。

　現役なら、長谷川勇也もいるし、本塁打王を争うオーティズもいる。

　それなのに、彼らを押しのけて、どうしていったい、いまさら柴原が試合に起用されるのか？　鶴岡が、自分の子飼いの選手ばかりになるのを嫌い、あえて、現役選手の九州産の選手を多めに入れて、バランスを取ったとの噂もあるが、やはり買われたのは、柴原の持つ実力であろう。

「なんや、柴原はこんなええ選手に育ったのか？　補殺も多いし、ゴールデングラブも取っている、三割も４度を放っている。こんなバランスのええ選手を漏らすわけにはいかんな。しかも、初戦は福岡ドームや、地元や。やっぱり柴原入れとこ」

　これが柴原を選出するに至った鶴岡評である。２０００年に逝去

されて、ここ１０年の柴原を知りえない鶴岡の柴原評だけに、その後の柴原をよく知る現在のファンの目からは色々と突っ込みどころがあるだろうが、知らない鶴岡だけに、残した数字を客観的に評価できる側面もあるはずだ。

つまり、柴原は必要とされてのベンチ入りであるが、その起用方法とたるや、やはりあまり大事にされてないというか、守備要員とはいえ、勝ってる場面の逃げきりではなく、代打に替わりに入る消極的な守備起用、しかも、何事も無く試合が終われば、打席が回ってこない打順……。

「それでもヒーローはおれさ」

このまま打順が回らなければ、出ていた事実も誰にも記憶されないまま終わりそうな柴原に栄光の瞬間は訪れるだろうか。

「え？　なんで？　どうして？？」

マッシー村上が驚きで目を白黒させるのも無理はない。藤本が信じられない采配を振るってきたのだから。

「なんや、藤村のおとっつぁん、ケガでもしたか？」

野村コンピューターも予想外、なんと、４番指名打者藤村富美男に代打が送られたのだから。

「藤村富美男に替わりまして、景浦！　指名打者に景浦が入ります！」

とのアナウンスが流れると場内は騒然とする、ミスタータイガース藤村富美男に代打が送られたから驚いているわけではない。送られた代打が景浦だからである。

「なんでなんで？　景浦ってあぶさんだろ？」

「うちの選手じゃないの？」

「それより漫画のキャラでしょ？」

驚くは無理もない、現在のファンにとって、景浦といえば、漫画あぶさんの主人公なのであるから。

ヨッサンのセリフは京都弁を思い浮かべながら読んでください

景浦？　まさか、景浦はホークス一筋の選手であるから、阪神からの出場の権限はあるわけがない、第一、水島新司先生は落合の持つ連続三冠王や、王の持つ５５本、そして、イチローもバースも達成しなかった４割とあらゆるプロ野球記録を塗り替えたと思い込んだいるが、あぶさんこと景浦安武は漫画のキャラだ。

科学の突然的進歩により、人間の時間を自由に操ることが実現可能になったことが、この大会の開催の契機。合わせて、一から自在に人間を作る実験も引き続き行われてたが、大会の開幕は間に合わず、各球団漫画の架空キャラを再現することは見送られたはずだ。

それなのに、どうして景浦が代打で送り込まれるのか？　しかも、ホークスではなく、阪神だ。まさか、景浦は景浦でも、安武ではなく、息子の景虎か。近鉄にドラフト一位指名を受け、合併後のオリックスを経て阪神に放出された経緯のある景虎ならば、阪神からの出場の権限はあるが、しかし、景虎も漫画のキャラであることにはかわりなく、なんども言うとおり、科学の進歩は、ゼロから架空の人間を作るまでには及んではいないのだ。

まさか、代打景浦とは想像だにしていないマッシー村上は、野村を呼び寄せる。

「ちょっと、ノムさん。景浦って、あの景浦？　あぶさん？　いやおかしいですよ、あぶさんはないですよ。反則ですよ」

「あほか、マッシー。このアメリカかぶれが。お前は、アメリカ大リーグの歴史は知ってても、日本野球の歴史を知らんのか。阪神の景浦いうたら、あぶやないやろ、景浦将に決まってだろが」

「あ～そうか、景浦は景浦でもそっちの景浦か。あ～びっくりした～　いやあ、もちろん知ってますよ、この私、村上雅則は、メジャーは当然、日本野球の歴史にも精通している貴重な野球人ですからね。阪神の景浦といえば、阪神創世記の４番であり、沢村栄治さん

の最大のライバルですよね」
「ふん、今更わかったか」
もちろん、あぶさんの主人公の景浦安武の景浦は、この初代ミスタータイガースの景浦にあやかったものだ。物干し竿のバットは、藤村富美男に模したものであり、ホークス一筋のファンの前には、熱狂的阪神ファンだった水島新司先生らしいモデルの選択だろう。
ちなみに、景浦将の名前の方の将は、もうひとつの水島漫画の代名詞であるドカベンの甲子園では、バントができずバットを叩きつけたシーンくらいしか印象に残ってないのにドラフトでは超大物扱いされていた土井垣の下の名前の将に、余すことなく使われている。
さらに、あぶさんの酒飲みのキャラは、永淵洋三をモデルにしているのには有名すぎるし、生年月日と身長体重は有藤道世、打撃フォームは土井正博を参考にしていると言われている。つまりは、景浦安武は、阪神へのノスタルジーと連載当時のパ・リーグ主力選手の遺伝子を合わせて作ったキャラなのだ。
そして、代打に限定されるキャラ設定は、この野村捕手兼任監督のアドバイスを参考にしたものなのだ。
「オレが、水島に飲んべは体力と持続力はないが、集中力はある。代打なら使えるいうたんや。代打しかできないが、あの漫画の肝やったのに、いつのまにか、スーパーマンやからのう。しゃーないわなあ」
「って、ノムさん。漫画への愚痴はいいですから、景浦さんの打ち取り方を教えてくださいよ」
「あ？　そんなもん知るかい」
「知るかいって、それを調べるのが、野村さんでしょ？　野村野球でしょ？　主力のデータだけじゃない、代打から試合に出ないような第三の捕手まで調べ上げて丸裸にするのが、シンキングベースボールでしょう？」
「そりゃ、練習試合や紅白戦、オープン戦いや、打撃練習のｈとつでもすれば、その情報は余すことなく、オレの耳に届くはずなんや。

チームが派遣するスコアラーとは別に、松井優典や柴田猛を個人的に派遣して、徹底的に阪神を丸裸にせいと指示をしたんやが、景浦のおっさんはバットを振った形跡すら一回もないんや」

「そんな選手をどうしてベンチに入れるんですか！　おかしいですよ、私も一年だけ阪神に在籍して、何の実績も残せませんでしたが、一応阪神のＯＢです。阪神の歴史の分厚さは理解してるつもりです。一回も打席に入ってない選手のベンチ入りが許せるほどの選手層の薄さはありあせんよ！」

「そうやな、景浦のおっさんが入ったおかげで、田宮謙次郎のおっさんや金田正泰のおっさんなどうるさ型がベンチから漏れたんや。内部崩壊のニオイがするで、しかも、よりによって、藤村富美男のおっさんに代打や。あのおっさんは一番の不満分子やぞ……げへへへ、阪神ベンチの大崩壊が今から楽しみや。お家騒動の中には巻き込まれたくはないが、外から眺めるには、これ以上の見世物はないからのうう。げへへ」

「下世話な笑いはいいですから、とにかく、景浦さんへの納得いくリードを頼みますよ」

「期待するな、データのないワシは。城島や阿部や田淵程度リードしかできんぞ」

「城島、阿部、田淵……なんだ皆歴史に残る捕手じゃないですか」

「そやな」

小意気なジョークを交えて、緊急会談を終えたバッテリー。しかし、野村が睨むとおり、よりによって、藤村富美男に代打はないではないか。

初代ミスタータイガースに二代目ミスタータイガースだ。二人ともプライドの塊である。

藤村富美男になんらかの故障があっての代打ならばまだしも、そうではなければ、波乱の臭いが漂うが。

「景浦さん、ドカンと一発かましてくださいよ」

その藤村は、ベンチの先陣に立って大きな声援を景浦に送ってい

る。わだかまりひとつないとすると、やはり故障があったのか？
それとなく、吉田義男が藤村富美男に真相を問いただす。
「藤村さん。どっか、体を痛めましたかね、ウヘヘ」
「吉田、ワシに気軽に話しかけるようになったか。藤村排斥事件の主犯は当時の野手のキャプテンのお前やなかったか？」
「そうです。でも、あれはもう５５年前のことです。５５年の時はすべてを洗い流しまっす。わたかまりはないですわ。うへへ」
「そうか、そうか、ワシももうどうでもええわ。ガハハ。いや、ヨッサン。なんともないわ、ワシはピンピンしとるわ。第一、指名打者なんぞでどこで故障するんや？」
「それなのに、景浦さんが代打に送れられました。悔しくないのですか？　ウヘヘ」
「あほいえ、ワシから藤本のおとっちゃんにいうたんや！！　景浦のおっさんが暇そうやから、試合に出してやれと、そしたら、藤本のおとっちゃんはこういんや、景浦は守れん、代打でしか使いようがないとな、代打に使うにしても場面がないと。なら、ワシのところで使えいうたんや。指名打者いうのは守る必要ないんやから。あとの守備位置に頭を悩ませることはないとな」
「しかし、そうはいうても」
「ここで、出すしかないんや。ワシは最後の打席かもしれん、あぶさんいう漫画のモデルが景浦のおっさんなら、このホークスのファンがいるこの球場で景浦のおっさんが出ないわけにはいかんのや。職業野球いうのは、お客さんを楽しませて、なんぼや、ワシはショーマンや。お客が喜ぶなら打席でも譲るわ」
「そうですか、うへへ。さすが、藤村富美男さんですわ。お客様第一とは。ミスタータイガースならそれでいいかしれんが、監督としては失格ですけどな、うへへ」
「ヨッサン、相変わらず、はんなりした京都弁に毒を交えてくるのう、がはは、まあええ、なにもかも懐かしいわ」
笑って受け流す藤村富美男であるが、吉田に話した代打の経緯は

真っ赤の嘘。なぜならば、代打を持ちかけたのが藤本監督の方だからだ。景浦が現代野球に通用するか見てみたいから、打席を分けてくれの要望に、藤村富美男は激昂したが、そこは藤本定義、巨人と阪神で優勝経験ある猛獣使い。ある事ない事吹いて、藤村富美男という難敵をあっという間に納得させたのだ。

「ふん、相変わらず単純よのう、藤村は。問題は景浦や、はたしてこの男が現代野球に通用するか？　そこに阪神がこの大会を制覇するかどうかの大きな鍵なんや、７６年の歴史をそのまま戦力層に反映できればな、それは大きいで」

藤本定義の景浦代打の狙いは、戦前の野球が現代野球に通用するか、どうかだ。藤村富美男をのぞいて、出てくる選手は２リーグ制以降の選手ばかり。もしも、景浦が使えるとなれば、１リーグ時代の選手を使いやすくなる。逆に、景浦が現代野球についていけない醜態を見せてしまったら、１リーグ時代の選手起用には、ためらいが生まれる。

つまりは、景浦は１リーグ時代の選手の実力をはかる試金石なのだ。景浦が使えるとばれば、１リーグ時代から球団を持つ阪神は、ライオンズなどの２リーグ制以降の新興球団にアドバンテージを持つことができるのだが。

「城島のバカタレはこんな気分なんやろな。頭真っ白、景浦情報ゼロや。やぶれかぶれの出たとこ勝負のリードや、まるで阿部のようにな、げへへ」

ヨッサンのセリフは京都弁を思い浮かべながら読んでください（後書き）

景浦　柴原　出す予定はなかった二人で何話も潰れる

暑さに負けて野村の一人称がオレからワシに

野村の頭に敵方の情報がなにひとつないのは、めったに無いどころか、この情報社会の今、ありえないことだ。ありえない状況に直面したときには、目に見える情報をかき集め、インスタントのデータを作れとは、野村が歴代の捕手たちに口酸っぱくいってきた教えであるが、今の野村は景浦の姿から、何かを盗みとろうともしない。

ただ覚悟を決めて、白紙の情報からサインを出すだけある。

「不気味、驚異、伝説の男の打撃をみたいのがファンだろうが、なにもワシらはファンのために野球をやってるわけやない。勝つためにやってるんや」

勝てばファンは喜ぶとの考えの王に対して、それは巨人、ひいてはセ・リーグだから通用する考え、パ・リーグの選手はただ勝つだけでなく、ファンを引きつける野球が必要と激しい論争を繰り広げた野村であるが、情報皆無の野村は我を失ったか、伝説の強打者との勝負から逃げようとしてる。

「雰囲気的にも、試合展開的にも、ここで景浦のおっさんに一発食らったら、おしまいや。戦中、戦前の野球いうのは、まっすぐばかりの直球勝負のイメージがあるが、それは大間違い。球種は今のように豊富ではなかったが、カーブや、シュートを多投する技巧派が大勢を占めてたんや。投手不足に分業制の”ぶ”の字もない時代、投手はノラリクラリとかわして一人で投げきるんしかなかったんや。その時代を代表するスラッガーに、技巧派マッシーは分が悪いに尽きるわ。弱点や得意なコースが分かっているならまだしも、何もわからんじゃ、攻めようもないわ。ならば、触らぬ神に祟りなしや。景浦大明神や。5番、6番は左の掛布に金本や。腕が横からでるマッシーを打ちづらいタイプ、ゼロに抑えるなら、これが安全策いうもんや」

野村は勝負を避けることを決めたのか、体を大きく、外側に寄せ

る。

「ちょっと、野村さん。伝説の打者とはいえ70年前の選手ですぜ。現世に戻って、ろくに打席に入ってない打者ですぜ。勝負を避けるとは、弱気すぎやしませんか？　私のスクリューボールが打てるわけがない。70年前に、右打者から見て大きく外に逃げるボールなんて存在もしていなかったんだから」

村上は、強気に勝負を望むが、野村の気持ちは変わらない。しかし、景浦はなぜ、この打席を初打席にするほど打席に入らなかったのだろうか？

キャンプ、オープン戦と打席に入る機会はいくらでもあったはず。しかし、景浦には別のプログラムが組まれいたのだ。戦地で非業の死を遂げた景浦は約70年ぶりの日本。同じ1リーグ時代の選手であっても、藤村富美男のように、戦後の日本を知っているわけではない。現代野球に慣れるよりも、現代社会とのギャップを埋める必要があったのだ。

同じく戦地に散った沢村栄治も、景浦と同様のプログラムを消化していた。現代社会のギャップを埋めることを重視しすぎ、勢い、練習試合に参加する時間は削られ、ついに開幕まで試合に参加する機会を逃し続けたのだ。それでも、景浦がベンチ入りとなったのは、それだけ、景浦の凄さとカリスマ性を藤本監督が認めているからに他ならない。そして、衝撃のデビューの舞台に選ばれたのが、景浦をモデルにした主人公が在籍するとされる、この開幕のホークス戦。

「景浦の披露には、これ以上ない舞台ができあがった。現在でもよく知られるミスタータイガース藤村富美男に代打とは、景浦いう男はどれだけ凄い選手なのか？　お客さん、そう思うやろ。しかも、モデルになった漫画キャラのいる球団が相手や、これ以上の衝撃度あるか。ふふふ、打っても、打たなくても、おもろい場面や。職業野球や、勝つのは第一やが、お客さんの目も楽しませんとな」

藤本の代打景浦の狙いには、一種のパフォーマンス的要素も含まれているのだが、野村が受けて立たないならば、話は成立しない。

しかし、１７３ｃｍ、７５Ｋｇと当時としては、均整の取れた体でも、現代では、小柄な部類に入る景浦に、野村はどうして、これほど怯えるのか。

「身長なんて関係ないわ。スラッガーの本質は手首の強さや、柔らかさや。ワシもみい、景浦のおっさんと同じくらいの背格好や、それでも歴代二位や、現代野球でも、西武のおかわりがそうや、景浦のおっさんより小さいくらいの体で、あれだけ本塁を放ってるやろ？　つまりは見た目だけで、現代野球には通用しないと軽んじるのが、危険なんや。物事を即時的に処理しようとすると痛い目にあう。伝説のスラッガーの内面は、外面からではわからまじ。避けて通るが一番なんや」

初球、二球、いずれもボール。納得しきってない村上は、サインに反して、ストライク勝負に打って出ようとするが、怒りで手先が微妙に狂ったか、結局、ゾーンから大きく外れたボール球になる。

初球、二球とボール球の弱気の攻めに、場内からは大ブーイングだ。阪神側だけではなく、あぶさんのモデルの打撃をこの目でみたいとホークス側のファンも、勝負を望む罵声を飛ばすが、野村がファンの声援に動転するほど、面の皮が薄いはずなく、野村は景浦との勝負を避けることにかわりはない。

勝負を望んだ村上であるが、ノーツーのカウントから、伝説の打者相手にストライクを取りにいく気概はなく、ついに野村の前に陥落。

景浦をそのまま歩かせてしまう。もちろん、福岡ドーム超満員３万５０００以上の大観衆から、矢のようなブーイングが飛ぶが、野村は気にすることはない。

「ぐへへ、もっと罵声を浴びせいや。パ・リーグ育ちは、罵声に快感を覚えるんや。悪役上等や」

しかし、野村、藤本の遠大なる戦略にはたと気づく。それは、景浦の一塁までに歩く足取りの重さが引き金だった。

「なんや、景浦のおっさん。さすが、打球を追いもなかった外野守

備が伝説に残ることあるわな。のったり、のったりと一塁に歩く……。守備に、走塁にやる気なし！　こりゃ、代走でお役御免やな……代走？　代走はアイツがおったやないか！　ワシが取れとフロントに申し立て、ワシが新人王を取らせたアイツが！　赤星！　そうか、藤本のおっさんは、最初から、ワシが勝負を避けるとみての景浦起用なんや。本当の狙いは、代走赤星にあったんや！」

野村にちらつく代走赤星の影。阿部、城島、田淵のような情報なしの出たとこ勝負を嫌い、避けた景浦との対決。しかし、駒が赤星となれば、阿部や城島や田淵のような強肩のない野村はいかにも旗色が悪い。赤星に走られまくれ、二盗、三盗となれば、一点差のこの場面に致命的な四球となる。

「これが、藤本のおっさんの野球かいな、こすっからいのう、明治生まれは……」

暑いから、まきでいこう

「本当の狙いは、四球に歩くことにあったんかい！」

野村の脳裏にちらつく、赤星の影。城島や田淵のようなパワフルアームの持ち主なら、赤星の足との真剣勝負に望むところだと腕を撫すところであるが、野村はカツノリともども、親子そろって、球史に残る弱肩捕手。投手に、クイックモーションの習得を促したり、正確でコンパクトな送球を心がけ、なんとか見れる阻止率を保ってきたが、赤星といえば、クイックモーションできて当たり前の時代に盗塁を量産した稀代の俊足ランナー。その赤星、相手に捕手野村は分が悪いとしかいいようがない。二盗はもちろんのこと、鮮やかなる三盗を決められる危険性が高い。赤星は走らなくとも、バッテリーの驚異となる。いつ走るかと見せかけて、村上と野村の集中力を奪い去り、打者に打ちやすくさせる走者だ。

しかも、赤星は、野村が獲得に一役かい、抜擢をして新人王を取らせた選手。自由自在に次の塁を盗むのは、恩師の顔に泥を塗ることになるのだが。

「うん？　動きない？　アホな、なんのための赤星じゃい。この場面で起用せんと、どこで赤星を使うんじゃい。景浦のおっさんと赤星じゃ、走者として雲伝の差があるぞ。藤本監督、久しぶりの現世で頭働かんのか？」

景浦は一塁にとどまったままで、藤本監督に動きなし。ベンチの最前列で、いざ出陣と準備運動をしていた赤星も拍子抜けだ。

「代走なしかいのう。ふふふ、これが阪神の野球や。ワシが監督になって、根本的な体質を変えるまで、こんな大雑把な野球がまかり通っていたんや。やって当たり前の選手起用ができんで、なにが打倒巨人や、あほくさ」

野村は、藤本監督の抜け目のある采配に、胸をなでおろし、打者集中とマスクをかぶり直すが、代走を送られなかった景浦が、これ

また信じられないことを起こす。

「??　なんやと、どういう野球や！　こんな野球知らんわ」

野球に関わって６０年の野村さえも、驚きを隠せないのは、景浦の一塁上の動きである。

なんと、景浦は、一歩たりとも、リードを取らないのだ。いくら、盗塁を仕掛けない景浦とはいえ、ベースから離れ、二塁方向に何歩か足を踏み出すのが普通。走塁のやる気のない走者、例をあげるとアレックス・カブレラだって、よっこらしょとばかりに塁を心持ち離れる。しかし、景浦は一塁ベースにひっついたままだ。いくら、景浦が、気分の乗らない時は、フライを追いもしない伝説の怠慢外野守備の逸話の持ち主にしても、このリード放棄は、怠慢の二文字で済まされない、敗退行為に近いプレーだ。

「あの、景浦さん……でしたっけ？　えっと、リードしなくて、いいんですか？」

伝説の選手に、恐る恐る注意を促す、このイニングからサードからファーストに回った小久保であるが、景浦は聞く耳を持たないというか、耳に届いてから、首を振れるというか、うっすらとした笑顔を交えて、小久保の親切心を無言で拒絶する。

「リードしない……それならそれでいいんですよ、こっちは別に困らないどころか、有利に働きますし……」

小久保は、大きな声で、一塁側のベンチに確認を取る。

「リードしてないですから、一塁ベースにひっついている必要はありませんよね？」

鶴岡監督に許可をとった桜井内野手担当コーチが、小久保に向かって、両手で大きな丸印を掲げる。

一塁に奏者がいる場合、牽制するために一塁手はベースにひっつくわけであるが、走者にリードする意思がないとなれば、その必要性は皆無。ならば、ヒットゾーンを狭めるために、一塁手は通常の守備位置に戻るのは当たり前のことだ。

掛布、金本と阪神打線は左のパワーヒッターが続く。一二塁間を

抜けようとする強烈な当たりを止める確率が、これで増したわけであるが、いくら景浦が伝説の選手であり、特別扱いされて当然の格であるにしても、当たり前のチームプレーもできない選手を起用することは、チームの士気に関わりやしないか。

「相変わらずやな、景浦。今のファンにこういう豪傑がいたと示すんには十分の衝撃があるプレーや、リードしないいうのはな。こっちにしても、景浦みたいなうっかりぼんやりとした選手が、リードでもしたら、いつ牽制で刺されるか、ヒヤヒヤもんやから、これはこれでいいんや、なあ後藤ヘッド」

「いや、私は景浦さんをあだこうだ論ぜる立場におりませんで……」

と、ベンチも認める怠慢走塁で、ベンチも揃って、川藤ベンチコーチを中心に景浦のリードなしを腹から笑っているのだから、

「みてみい！　景浦のおっさん、リードもできんぞ！　ガハハ。昔の野球は何を教えとったんや！」

士気に関わりなしか。

しかしそうはいっても、赤星代走なしは堅実の野球とは言い難い。イニングはすでに8回、景浦の再びの打席の可能性は低い。ならば代走を切って、当然の場面のはずであるが。

藤本監督には、景浦を指名打者の置き続ける理由があるのだろうか？

5番、掛布はプライベートの問題を忘れようと、現役中よりもハツラツとプレーしている。左の変則投法の村上にも幻惑されず、思い切りよく振ったバットからはじき出された打球は、レフト方向に飛んでいった。レフトはこのイニングから、ファーストから回った松中だ。守備に難のある松中であるが、負けている展開、守備を軽視しても、重厚な打線を維持しなければならないのだ。厚みのある打線づくりの歪に飛んだ打球であるが、松中はいつになく打球への執念を見せる。果敢なスライディングキャッチで、これを好捕。うまい外野手ならランニングキャッチの打球。偽装ファインプレー製

造機ともいえるが、帽子が飛んで、頭皮があらわになることにも厭わない松中のプレー、ホークスファンは沸き返る。

そして、松中は帽子を拾うまえに、一塁送球で併殺を狙うが、リードも取っていない景浦はすでに一塁ベースに戻っている。

リードなしだから、併殺にならずに済んだともいえるが、もしも松中の前にポトリと落ちる打球だったとしたら、リードなしの景浦は二塁ベースに到達できただろうか。打球判断にも問題のありそうな景浦だけで、二塁封殺のレフトゴロに終わった危険性も高い。

「あほな野球よのう。まああほな野球をやってるうちは、こっちの逆転の目もあるいうこっちゃ」

景浦んお怠慢プレー放置に、天が阪神を見放したわけではなかろうが、金本の強打も野手の正面をつく。野村の配球をズバリと読んで、逆方向への会心の当たりであったが、替った野手の所にボールが飛ぶのいいつたえのまま、代打からサード守備についた蔭山選手兼任ヘッドの好捕の阻まれる。

このイニング、三つのアウト、柴原、松中、蔭山とこのイニング守備についたか新しい守備位置に移った選手に飛んだもの。いいつたえは、ホークスに味方をするのか。そうとなれば、最善の策と野球をおこたる阪神には、当然の報いがあるはずなのだが。

抜け落ちた４６９話が忽然と姿を現す

「イニングまたぎ？　なんやそれは、そんな言葉、ワシは聞いたことないぞ？」

開幕前のベンチ入りを詰める最終段階のスタッフ会議の席、藤本定義監督は、中西清起が何気なく発した聞きなれぬ言葉を聞き流さずに、間髪なく疑問を投げかけた。

「イニングまたぎ？　ああ、すいません、藤本監督の野球世代ではあまり聞きなれぬ言葉かもしれませんね。イニングまたぎというのは、そのものズバリ、イニングをまたぐ投手への精神的負担を表す言葉でありまして、これは救援投手に限られることでして、たとえば、７回ツーアウトから登板した投手が、次の８回も行くには、たった一人を抑えただけでも、途切れた気持ちをですね、また高める負担を強いるよりは、すっぱりと違う投手をマウンドに上げたほうがスムーズに試合が進むんでして……」

言葉を知らない者に、手短に口で説明するのは難しいものだ。中西コーチは四苦八苦しながら、藤本監督にイニングまたぎがなんたるかを解き明かしているの。がしかし、先発完投こそ花形投手の時代の監督である藤本は頭で理解しようとも、感覚的に新しい野球観念を拒絶する恐れもあるからだ。回をまたぐくらいで文句をつける投手はいらないイニングまたぎを根本から一蹴してもおかしくない藤本であるのだが。

「そうか、今の野球はそういうもんなや。わかった、イニングをなるべくまたがせない野球をしようか。ワシは川上や三原とは違うわ。頑固に自分の野球と自分の時代の野球にこだわらんタイプや。現代野球がそうならば、それが最先端の正しい野球のはずや」

と、あっさりと現代野球を受け入れてしまうのだ。これには、逆に中西コーチの方がびっくり。

「ええ、監督。ほんまにええんですか？　イニングまたぎをなるべ

くさせないように継投を考えると、投手総動員体制になりますよ」

「なあに、我々がコツコツと築いたタイガースの投手王国やないか。１０人継投しても、その１０人は全員、他球団が羨む一線級揃いや。見事な継投策を見せたるで」

さすが、縦横無尽の投手起用が当たり前の時代だったに、ローテーション制度をわれ先に取り入れたこともある藤本だ。いいとなれば、意固地にならず、新しい野球戦術を取り入れる。

がしかし、藤本がいった出てくる投手、すべてが一線級の投手リレーが、この試合に実践できるのだろうか？　大エース村山、２０勝投手井川、８０年代の抑えのエース山本和行、たしかにこれまで出てきた投手は、どれも一線級といって、差し支えない投手。イニングまたぎをしないと決めた藤本だけに、山本和行の続投は考えづらい。となれば、８回裏、９回の藤川球児につなぐためにセットアッパーの出番となるのだが。

何度も名前が上がり、入念なブルペン調整をしながら、呼ばれることのない久保田の登板か？　ＪＦＫの一角である久保田ほど、８回に投げるセットアッパーにふさわしい投手はいないだろう。しかし、久保田は一線級リレーの範疇に入るかに疑問の余地がある。藤本が、自信を持って、久保田の名前のコールしても、湧き上がる怒声が、久保田を一線級とは認めないだろう。　するとなれば、禁断の江夏、リリーフか？　まさかに備えてベンチ入りする江夏であるが、江夏本人は救援登板するつもりはさらさらない。先発投手が人数合わせと調整を兼ねて一応ベンチ入りをしている、その程度の捉え方をしているのだ。もしも、今、江夏に登板命令が下っても、乗り気のない江夏は、気が乗らない投球を見せるだろう。

もしかして、藪恵壹か？　いや、藪は９０年代後半の暗黒時代を一人で支えた功労者に敬意を表すつもりのベンチ入り。投げる場面は、負け試合のロングリリーフであることは、本人にも確認済みだ。球威と球種の豊富さんい定評のある藪だるが、僅差の終盤に送り込むには、あまりにも暗黒時代のトラウマがありすぎる。久保田同様、

藪登板には、阪神ファンから負の反応があるだろう。久保田のようにあからさまの怒声よりも、藪には厳しい時代を思い起こす悲鳴が聞こえてきそうであるのであるが。

　８回に誰が出てくるのは、ホークスベンチも読めないようだ。継投の名手、野村でさえ、誰が出てくるか見当もついていない。レガースを外しながら、回の先頭打者である川崎をつかまえる。

「おい、ムネリン。誰が出てくると思う？」

「はい！　野村さん！　野村さんが分からないもの、この僕がわかるわけがありません！！」

「それもそうやな。久保田か、藪が出てくれば、儲け物やが……。うん？　景浦のおっさんに代走はない。景浦のおっさんは指名打者の藤村の兄ちゃんの代打や！　指名打者を解除すれば、そのまま、景浦のおっさんが投手となる……。そうか！　景浦や！　投手景浦将！　規定投球回に到達しての勝率１０割は、破りようのない不滅の記録や！　そうか、投手景浦のための赤星代走なしやったんや！　ぐむむむ……藤本のおっさんはさすがや。野球を初めて７０年のワシの思いつかん采配をふるうわ」

　打者としてだけでなく、投手としても一線級の成績を残した景浦だ。野村のにらむとおり、まさかのセットアップマンとして、登板はありうるだろうか。

藤原満の実際の顔は浮かびません

まさかの景浦、指名打者解除で、そのままリリーフ登板となれば、打者景浦の情報すら少ないのに、投手景浦の情報となれば、皆無といっても過言ではない。技巧派か、速球投手か、制球力に秀でた投手か、度胸があるのかないのか、うかつな投球をするタイプなのか、まるでわからない中、予想される１イニングを逃げ切れる可能性は高いからだ。

戦前戦中の野手の片手間にやる投手業とばかにすることもできない。勝率１０割の記録が物語るように、景浦將投手は、勝利の女神に愛されているのだから。

「わからんなあ、打者景浦は触らぬ神に祟りなしと避けて通ればよかったが、投手景浦はそうはいかんのう。どんな投手や？　こんな投手かとデータと特徴を完全に把握する前に８回に終りが訪れるわ。１点差といえど、９回は藤川球児なる絶対的な守護神が控えておるにゃから、この回が勝負やのに……」

野村は打者景浦に引き続き、投手景浦攻略にもお手上げ状態だ。野手景浦は、飛球を追う気もない外野守備や豪快な打撃の伝説から、選手としてのアウトラインを頭の中で描くことができるが、投手景浦は残した成績以上の情報は皆無。

急いで、野村は投手景浦の成績を野村門下生の一人である藤原満野手総合コーチに調べさす。

「おい、チャイ（同名のキックボクサーに似ていることから、藤原満のあだ名はチャイというらしい）。景浦の成績や」

「へいへい、野村監督……いや、今日は野村生涯一捕手やな……」

藤原満は野村に指図通り、常備されている分厚いレコードブックから、投手景浦の成績を調べるあげる。

「へいへい、ええ景浦ですか……１９８２年には、代打だけで３１本の本塁打を打ってますね……。多くて１３０打席で３１本塁打で

すから、たまげた成績ですわ」
「そう、ボケると思うたわ。そりゃ、景浦でも漫画の方の景浦やろ」
「いやあ、監督、いや、野村生涯一捕手。お約束でんがな……と、見つけましたぜい、投手景浦將の成績を……。１９３６年春は、有名な勝率１０割の年ですわ。勝率１０割いうても、６勝やから、参考にもなりまへんなあ。投球回数の多い翌年の１９３７年の成績の方が投手景浦將の特徴をよう表してるちゃいますか？　１０６回を投げて出した四球は３９四球、奪った奪三振は５２。まあ、当時の早打ちの傾向のある野球界でこの奪三振率はまあまあでんな、逆にこの四球数は、投手景浦將いうんは、あまり制球力に長けた投手ではないと示す数字ですな」
「三振を取れる球威はあるが、荒れた傾向もあるいうわけか」
「うん？　なんや、この数字は？」
「どうした、チャイ？」
野村は、笑顔を携えて思わず身を前に乗り出す。景浦攻略法の糸口を見つけての喜びだけではない。数字の羅列から驚きの発見のできる藤原を、鍛え上げたのは野村自身。データ野球を植えつけた教育が間違ってないとの自負も、笑顔の裏にはあるのだろう。
「被本塁打がゼロなんです！　そりゃ、当時の飛ばないボールと非力な打者ぞろいを考えれば、少ないいうのは当たり前かもしれへんですが、ゼロいうのは驚きに値するにちゃいまっか？」
「そうや、ゼロいうのは普通じゃないわ。チャイのいうとおりや！　ゼロいうのは、どこまでいってもゼロや！　被本塁打ゼロから読み取れる投手の背景は、よほど前に飛ばせない剛球か、ゴロを打たせるために低めを丹念につける制球力があるかや。いずれにしても、一発は厳禁の僅差の終盤、被本塁打のない投手は、監督は自信をもってマウンドに送り込める……」
景浦將投手は、通算２７１回を投げて、被本塁打は２本。この年の景浦が偶然に恵まれて本塁打を打たれなかったのではないことを通算の数字は示している。

「セットアッパーにはぴったりの投手いうわけか、ますますあるで、８回、１イニング限定のセットアッパー景浦將が……」

と、野村は限られた数字から、投手景浦の可能性ありの感触を得るのであるが、どうだろう、この一連の流れ。まるで、野村が一選手ではなく、監督も兼任しているようではないか。

「……そや、忘れとったが、ワシは監督やないやないのか？　監督は誰や？　そうや、鶴岡御大や！　鶴岡御大は何をしとるんや、まったく、あのおっさんの野球は、データ野球やなく、出たとこ勝負の野球やから、選手に的確な指示も出せんわ」

野村もはたと気づくが、鶴岡といえば、景浦の後年と現役時代がかぶっている。選手鶴岡は、景浦のプレーを見ているはずであるのだが。鶴岡は、なぜ景浦投手起用に備え、攻略法を打ち出さないのだろうか？

「あほか、ノムめ。よけいなことを吹き込みやがって。投手景浦があるわけないんや。戦前の投手が今の野球にそうそう対応できるわけないんや、圧倒的な力を持つ沢村やスタちゃんならまだしも、景浦のような片手間の投手が通用するほど、甘いもんやないんや。藤本のオヤジもそこのところはようわかってるはずや。だから、投手景浦を調べる必要はないんや」

と、鶴岡は、投手景浦の可能性はないと見ている。だから、景浦攻略に頭をひねることがないのであるが、それでは、タイガース、８回のセットアップマンはいったい誰が指名されるのか？

鶴岡の後方の壁には、今日のベンチ入りメンバーでまだ出場していない選手の名前の書いたホワイトボードが備え付けられている。

ソフトバンク

投手　馬原　宅和　佐藤道　杉内▲　ペドラザ
捕手　吉永▲　田上
内野手　木塚　飯田
外野手　樋口▲

阪神

投手　藪　久保田　（江夏▲）　若林　渡辺省　藤川
捕手
内野手　藤田平▲　今岡
外野手　赤星▲

▲は左打ち、左投げを表す記号。（　）にくくられた投手は先発要員で登板しないと見る投手。

つまり、景浦投手でなければ、江夏と抑えの藤川をのぞく４人の中からセットアップのカードが切られることになるのだが。

「まあ、あいつやろ。藤本のオヤジなら、あいつを出してくるはずや」

ホワイトボードの残りの投手欄を見つめる鶴岡の目は、ある投手一点に定まっていた。

鶴岡と野村、急接近

「ワシはわかる。パリーグでは大映スターズ、日本シリーズでは阪神と、藤本のオヤジとは、何度も真剣勝負重ねてきたんワシにはわかる。藤本の性格上、８回に投げさせる投手は、この男しかおらんわ」

鶴岡の見つめるホワイトボードの選手名の正体は若林忠志だった。若林といえば、兼任コーチとして、藤本監督の横に立ち、共謀で勝つための投手継投の構築に励んでいたが、試合中盤、控えの投手コーチである上田次郎に投手運営を任せ、ふらりと消えてしまったのだ。

「若林さんの行き先はブルペンや。ワシはあの人の大学の後輩やからわかる！　あの人は、兼任監督の先駆けみたいな人で、それもただ監督をやりつつ、片手間で選手も兼ねるいう半端なモノでなく、超人的エースとして、投げまくり、自らを優勝監督に押し上げるような人や。つまり、投手コーチとなった今も、その魂は健在なわけで、８回の大事なイニングを託せるのは、自分しかないと思うはずや。若林忠志！　藤本のオヤジが、胸突き八丁の８回に切るカードはこれしかないはずや！　景浦さんと同じ戦中派の投手といえど、残した実績が違う。今の選手にも十分と通用する投球ができる実力者や。なにしろ七色の変化球は、今の球種の多い野球にも通じるものがある」

鶴岡の読みは、セットアッパー若林。忽然と消えた若林は、鶴岡のにらむ通り、阪神側のブルペンで、念入りな投球練習に励んでいた。サイド気味、スリークォーター、オーバーハンドと腕の出る角度を変えて、カーブ、シュート、シンカー、ナックルなどの七色の変化球の曲がり具合を確かめている。しかし、この投球練習、登板に合わせて、体調、精神力ともに、急ピッチにあげるわけでなく、どこかゆったりとした、いわゆる調整に終始していることが気にな

る。鶴岡の見立てのように、この回、登板となれば、心身ともにエンジンをかける段階になければいけないはずであるが。

「どう？　カイザー。ボール切れてる？」

若林専任ブルペン捕手である、カイザー田中（若林と同じ日系ハワイアン）に、余裕を持って調子を尋ねている態度からは、いざ登板の切迫感がどこにも感じられない。

「球児に万が一のことがあったら、後を継げるピッチャー、ボクしかいないからネ。緊急事態に備えて、調整しないとネ」

なんと、若林は8回のマウンドに備えての調整ではなく、延長を考えての調整のようだ。細かく刻む藤本・若林、共謀の必殺リレーであるが、細かく刻むゆえ、もしも同点延長戦となれば、投手の駒不足にあえることは、目に見える。その万が一、いや、いくら藤川や8回のセットアッパーに自信があるとはいえ、わずか一点差、同点延長の可能性は、万が一という言葉では表せないだろう。

そんなブルペン事情も知らずに、ついに、鶴岡と野村は接近を見る。先に声をかけたのは、鶴岡の方であった。

「おい、ノム。わかってるやろな、若林やぞ、若林」

まともな会話は、本日お初のわりに、鶴岡はフランクに話しかける。対鶴岡には取り払えないような壁のある野村であるが、試合に関わる率直な意見交換を拒む理由はない。

「なにを耄碌しとるんですか、鶴岡御大。景浦に決まってるでしょうが。なんのために代走赤星を切らなかったんです。指名打者解除で投手景浦をするためですよ」

「いや、ノム。景浦投手はない。お前は景浦を買いかぶり過ぎとる。ここを任せられるのは、本物のエース若林しかおらん」

と丁々発止の議論が続くなか、もっさりとベンチから出てきた藤本監督が、主審に選手交代を告げる。

「あ～　金本に替えて、赤星をセンターに入れる。センターの新庄をレフトに1。それから、サード掛布に替えて三宅。そして、投手、

山本和に替えて……」

投手交代とともに、念入りな守備交換が行われる。今打席を終えたばかりの、金本や掛布を降ろし、守備固めのスペシャリストである三宅を三塁に、そして、代走要員とみられた赤星をセンターに入れる。純粋な守備力は、新庄＞赤星であるのは明確であるが、赤星がプロ入り後センターしか守っていないことから、新庄をレフトに回したのだ。新庄も赤星と同じく、日本野球においては、外野を守るときはセンターにしかつかない特別な外野手であるが、メジャー時代は外野の3ポジションのどこでも守れることを強いられたために、レフトの経験も豊富と見ての守備交換だ。

そして、問題の8回を守り切るセットアッパーはいったい誰なのか？

藤本監督は選手交代を告げると、ベンチに帰らずに、そのままマウンドに向かう。本来の投手コーチ、若林が調整中のために、自ら、投手コーチ役を買ってでたのだ。そして、その藤本監督兼任臨時投手コーチがボールを受け渡し投手は。

「頼むで、省やん」

「任せとってください、藤本監督」

8回のセットアッパーの正体は、省やんこと渡辺省三であった。

「渡辺省三やと？　おい、ノム？　予想できたか？」

「鶴岡御大、予想できんことはないですが、まさかまさかでもありますよ。セットアッパーとなれば、大切なのは球威です。相手を抑えこむ球威が必要です。渡辺省三にそれがあるとは思いませんが……。渡辺さんなら、まだ久保田のがいいですわ」

野村と鶴岡も、想像の範疇外にいた渡辺省三なる投手はいったいどんな投球を見せるのか？

Ｎｕｍｂｅｒグラフティ

投手渡辺省三がコールされてからの両軍のファンの反応はなんとも微妙だ。久保田や藪がコールされたら、強烈なブーイングを采配批判に替えて、巻き起こそうとてぐすねひいて待っていた阪神ファンもまさかの渡辺省三にポカーン。江夏や若林の登板なら、盛大な声援で沸き返ったろうが、渡辺省三なら静かになるも無理はない。

「渡辺省三？　ああスカウトしてたおっさんか」

「渡辺省三スカウトなら、知っとるで、仲田幸司や遠山を取ったスカウトやろ？」

「スカウトの実力はわかったが、問題の投手としての実力はどないなんや？　一点差のこの場面に出てきてもおかしくない投手なのか、それとも我々ファンが、ヤジって然るべきの起用なんか」

「ざっと調べてみると、通算１３４勝で、防御率は二点台前半やな。最優秀防御率を一度獲得してるが、とくに大エースいうわけでもない」

「むむむ、なんとも微妙やな。まあええわ、一応ブーイングでも送ってくか」

と、結局、ブーイングを送ることに決めたのだが、舵取り役がこの有様なら、ブーイングの合唱も今ひとつ盛り上がらず、対するホークスファンも渡辺省三登板は予想だにしない展開であったようで、一様に静まり返っている。

「むふふ……この反応、快感やのう、省三」

藤本監督は、喉につきあがる笑いを堪えきれないようだ。

「しかし、藤本監督も思いきりましたのう、江夏や若林さんもいるんに、この私を送り込むんですから」

「江夏や若林が抑えるのは当たり前、お前みたいに歴史に埋もれそうになった好投手が抑えるんやから面白いんやろ？　だから、ワシはファンのみなさんの反応が堪えきれんのよ。よう知らん投手が抑

える、そして抑えられる。これが職業野球やろ、これがこの大会をいちいち開いた意味やろ？　誰もが知っている伝説の投手が抑えたところ、それは当たり前のこと。よう知らん投手が抑えるんから、この試合の意味があるんや」

「そうはいうても、監督、私、抑えられるでしょうか？　捕手の矢野もどうリードしていいかわからんちゃいますか？　練習試合で二度投げさせてもらいましたが、そん時の捕手は、山本哲也と徳網さんでっせ。矢野とは初めて組むはずや」

「関係ないわ、とにかく、お前の投球ができれば、この１イニングくらいはゼロで抑えれる」

「自分の投球ですか……」

「矢野、わかってるか？　渡辺省やんの投球術のなんたるかを」

「分かってますよ、藤本監督。参考図書、Ｎｕｍｂｅｒグラフティ魔球列伝ですよ。その本の渡辺省三さんの項は、ページがよれるほど読み返しましたもん。抑え捕手がセットアッパーの投球を知らんじゃ済まされませんもん」

「そうか、よっしゃ、それなら、問題ない！　セットアッパー渡辺省三、ストッパー藤川球児でホークスを完封といこか」

藤本監督は、矢野と渡辺省三の肩を叩き、ベンチに戻っていく。

「渡辺省三……投手？」

先頭打者の川崎は、まさかの渡辺省三の起用に思考回路がストップしかけている。

「野村さん、どんな投手なんですか？　渡辺省三投手って」

「ワシより二つくらい上やな、省やんは。オープン戦やシリーズで何度か対戦したが、そうやな、技巧派投手といってもいいな」

「技巧派投手……ですか？　８回の１イニングを抑えにきた投手ですから、てっきり力任せの投球をしてくる投手だと思ってましたよ」

川崎は、野村から渡辺省三の特徴を割り出そうとするが、ここで円城寺球審の邪魔が入る。ハリーアップを促し、早く打席に入るよ

う手招きしている。
「うわあ～　もう時間だ～。野村さん、一言でお願いします。そうだ、現代の投手で誰に近いのか、それでいきましょうか」
「現代の投手……そうやな」
野村は顎の辺りを撫で回す。
「ハムにいた、いわくつきの投手の名前なんやったかいのう」
「ハム？　もしかして、多田野投手……」
「そうや、その多田野や！」
「多田野さんですか……わかったようなわからないような……」
川崎は首をひねりながら打席に向かう。ここまで当たりがなく、何度もミスを繰り返した川崎に、代打でもおかしくない場面だ。
しかし、鶴岡に呼び止められることなく川崎は打席に向かう。それだけ、川崎と鶴岡の間に厚い信頼関係が構築されているのだろうか。
「多田野さんに似てるって……。もしかして、ほ……。いや、まさかね、そうだとしても、いや、もう野球とは関係ないし、どっちもイケルからって……。配球パターンには何の関係もないわけで」
渡辺省三を多田野に例えた野村の一言が逆に川崎を深く悩ませているようだ。たしかに、多田野という言葉には、あれこれ詮索したくなる魔力が散りばめられているが。
「この打席でもヘッドスライディングするような当たりを放ったら、さすがのイチローさんも許してくれないだろうな。よし、ここはスタンディングツーベースでも狙うか。左中間を破るような……」
打席に入った川崎は外野の守備位置を確認する。左中間のどこに放てば、打球が抜けやすいかを確かめるためだ。
「……あ、そうか、レフトは金本さんじゃないんだ。レフトはこの回から新庄さんなんだ！　センターに入った赤星と合わせて、うわあ、ちょっとやそっとの当たりじゃ、抜けやしない、鉄壁な左中間じゃないか」
分からない投手に、構築された鉄壁の守備陣を打ち破り、川崎は

それまでのミスを精算できるような快打を放つことができるだろうか。

Ｎｕｍｂｅｒグラフティ（後書き）

どうもおかしいと思ったら一話投稿し忘れてました
４６９話にお戻りください

マットソン　フェルナンデス　猪俣　前田　北川

勇猛果敢の積極攻撃が持ち味の川崎だ。初見の投手にだって、様子見の打撃は仕掛けてこない。元気いっぱいケレン味のないスイングを見せつけるのが常だ。

渡辺省三の投球フォームはいたってコンパクト、その投球動作だけで、渡辺が技巧派の投手であることを物語っている。

「多田野さんぽくないぞ」

川崎の頭の中には、まだ野村に言われた渡辺省三は現役投手でいうと多田野のたとえが引っかかっていた。多田野は投球動作からしてトリッキーで打者を欺こうとする意思が満々であるが、渡辺省三のフォームは、いたって素直なスリークォーター気味のフォームだ。

投げ込まれるボールも、多田野のように、微妙に曲がりくねる汚い球筋ではなく、昔の投手にありがちな綺麗な順回転のフォーシームのストレートだ。このボールが、外角低めをかすめるように、ストライクかボールか微妙なゾーンに飛び込んでいく。

川崎は、若干の戸惑いを感じつつも、レフト線を狙い打ち。憧れのイチローの打法を違法コピーしたかのような流れるようなフォーム。バットの先端に乗せた打球は狙い通りのレフト線に飛んでいくが、ややタイミングに遅れをとったか、打球はどんどんファウルゾーンに切れていく。

「あちゃ〜。やっぱり多田野さんの余計なイメージ像に惑わされて、バットのヘッドの出が、流し打ちにしても遅すぎた」

レフトは新庄。たぐいまれなる身体能力を武器に、この打球をファウルフライにしようと、チーターのように追いかけるが、さしもの新庄もフェンス際に切れていく打球には追いつけない。フェンスに当たって、ファウルになった打球を見つめる新庄の顔は、相変わらず憂鬱。うつ状態の新庄でも、守備には全力、マックスの動きができるから不思議である。

阪神時代から打撃や精神状態の波の大きな選手であったが、守備だけは、どうしてか別なのだ。打率二割そこそこで、本塁打が売り物の主軸打者の癖に夏の時期まで一発が飛び出さなかった１９９８年でも、ゴールデングラブの連続受賞は逃さなかったことはある。

打席を外し、初球攻撃失敗を悔いる川崎であるが、しっかりとした手応えを感じてもいる。

「打てるよ、打てるよ、この投手なら。今のストレートは１３６キロか……。いくら、初球といえど一点差の切羽詰った場面、渡辺省三投手の今日の状態でのマックスに近い数字だろう、１３６キロという数字は。１３６キロ……はは～ん、野村さんがいう、多田野を彷彿とされるという意味が分かりかけてきたぞ。オーソドックスなオーバーハンドの割に速球の威力がないということかな」

川崎は、野村の喩えをこのように解釈したのであるが、この解釈が大きな間違いであることに気づくのは、２ストライクを待たなければならなかった。

カーブ、シュート、スライダーと持てる変化球を駆使して、渡辺省三は川崎を追い込んだのであるが、川崎はそれでも慌てるそぶりはない。

「追い込まれてもいける。多田野さんなら、フォークの幻影に惑わされるところだけど、渡辺省三さんは横の変化ばかり。速球も出て１３０後半のしかも多田野さんのように汚い回転のくねくね動くボールじゃない。追い込まれても怖くない投手だ」

川崎は余裕を持って勝負球を待ち構えている。カウント２－２。常識的に考えて、この５球目に勝負を仕掛けてくるはずだ。いくら制球命の技巧派渡辺省三とはいえ、フルカウント勝負には持ち込みたくはない。この５球目に、最も自信の持つボールを投じるはずだ。そして矢野が選んだ渡辺省三の勝負のボールは。川崎の狙い球は。

「球種にヤマを張る必要性はなし！　どんなボールも打てる！　ストレートにカーブ、スライダー、シュート。なんでもいらっしゃい

！」

川崎は狙い球を絞らず、自然体だ。どんなボールでも打てるという自信のあらわれか。しかし、そんな川崎の虚を突くようなボールが勝負球に選ばれる。そして、川崎はその瞬間、渡辺省三を多田野にたとえた意味がわかるのである。

渡辺省三のそれまでと寸分変わらない投球動作から放たれたボールは、超スローの山なりのボールだ。

いわゆるイーファスピッチ。多田野が好んで投げることで有名になったボール。しかし多田野がこのボールを投げるのは、試合の流れを変えたい時や、沈滞したチームの雰囲気に活を入れるためであり、比較的、打者が打ってこないとみた状況で投げるボールだ。勝負球に使うことはまずないボールであるが、渡辺省三は自信を持って、このボールを投じてきた。

「そうかそういう意味か。これが多田野さんというわけだ」

まさの超スローボールに戸惑いを見せた川崎であるが、一瞬で仕切りなおし、このボールを終始一貫狙い続けた左方向に持っていこうとする。あまりにスローボール過ぎて、タイミングを取り直す時間があったのが阪神にとっての命取りか。しかし、この超スローボール、川崎の手元ではたまたサプライズを提供する。

「回転がない！？　ゆらゆらと揺れている！　ま、まさかこのボールの正体は、ただの多田野さんのような超スローボールでなく、超スローナックル！？」

川崎がこのボールの正体に気づくのは遅すぎた。渡辺省三はにやにやと笑いをこらえるのに必死だ。会心のいたずらを仕掛けた子供のような無邪気な笑顔だ。

川崎は、揺れるボールに開き直り、絶妙なバットコントロールなぞクソ喰らえ。バットに当てさえすれば、なんとかなるとばかりに適当に出したバットに、なんとかスローナックルを捉える。

「いけえ～」

これまでのミスを帳消しにするための出塁なるか。

ホークスの伝統は脈々と受け継がれる

「落ちろ～」

川崎は願望を口に出しながら、快足走者として足を踏み出すが、打球の行方を見守りつつも、トップスピードを保つあたり川崎が類まれなる走者であることをしめしている。

しかし、飛んだ場所が悪すぎる。レフトの新庄が前進につぐ前進、ショートの吉田とサードの三宅が半身の姿勢でバック、バック。

ショート吉田もサード三宅も阪神史上最も守備のうまいそのポジションプレーヤーは当然として、プロ野球界に範囲を広げても、最もうまい選手に名が挙がるプレーヤー。レフト新庄は、オールスター寄せ集めチームにありがちの専門外のポジションについているが、外野の３ポジションのどこの守備でも、超一流の輝きを放てるほど新庄は卓越した外野守備名人なのだ。

川崎も運が悪い。プロ野球史上に残る三人の間にポテンヒット性の当たりを飛ばしたのだ。もし、確率統計を取るために、１０００回、ポテンヒット性の当たりを飛ばして、何本ヒットになるか、何本守備に阻まれるか、を実験するとしたら、この３者のトライアングルほど高確率にアウトを取る守備陣形はないだろう。

ただそれはあくまでも統計の結果であり、必ずしも起きることではない。なぜなら、川崎の願いはかない、ちょうど三者の間に打球はぽとりと落ちたからだ。

「やった～」

川崎は絶叫するが、巧みな走塁にぬかりはない。すきあらば、二塁を陥れようと一塁ベースを蹴り上げるが、新庄が捕球したのを見て、急ブレーキ、切り返し、一塁ベースに戻る。

一挙に二塁ベースを陥れたならば、ムードは完全にホークスに流れこむが、新庄相手に勝負するのは分が悪すぎる。取ってから送球動作に移るのも早い、投げるボール自体も１５０キロクラス、そし

て送球の制球も平均以上となれば、二塁を狙うのを辞めたほうが賢明だ。

しかも、間一髪のタイミングとなれば、また川崎はヘッドスライディングを仕掛けるのは目に見えている、今日三度目の危険なヘッド。いくら一塁ベースにヘッドスライディングを仕掛けるとは違い、二塁ベースへのヘッドスライディングはイチローもやる可能性があるといっても、三度目だ。仏の顔も三度までだ。イチローのお説教は深夜を乗り越え、早朝に突入するのは想像に難くない。

「よっしゃ！　とにかく塁に出たぞ～　まさかの超スローボール、しかもナックル回転の無回転のボールには戸惑ったけど、揺れ動くボールをなんとかバットに当てることができた！　イチローさんもよくおっしゃられる！　とにかく、バットに当てろ！　当てさえすれば、何が起きるかもわからないのが野球だ！　その通りになりました！　ありがとうございます！　イチローさん！」

オリックス時代の晩年にイチローがホームランを打ったときに、ホームベース上でよくやった、カンフーの礼をモチーフにした、両手をあわせて、目をつぶりながら頭をペコリと下げるポーズを川崎は真似てみる。

「さあ、ヒットは打った！　出塁をした！　次は優秀なる走者となって、二塁、三塁を駆け抜けてホームに還ってくる役目を果たさないと」

じりじりとリードを取る川崎。もちろん、鶴岡にしても川崎スチールの選択肢はある。

ホークスの歴史は盗塁の歴史といってもいい。鶴岡兼任監督時代から、木塚や蔭山飯田を中心に走り回ったものだ。その伝統は、福本以前の最高の走者広瀬に受け継がれる。

暗黒時代といわれ福本が盗塁王を独占したころも、藤原満が５０盗塁をマークしたことがあるし、そしてダイエー時代になっても、帰ってきた広瀬走塁コーチが、佐々木誠、大野久、湯上谷宏に盗塁のコツを伝授し、この３人でパ・リーグの盗塁三傑を独占したこと

もある。その後は高橋慶彦を招き、勝利につながらず無駄な盗塁とも言われたが、村松と浜名の３０盗塁デュオを作り、島田誠は、井口、川崎の盗塁王誕生を後押しした。

そして、大石大二郎だ。秋山監督、大石ヘッドの世にも珍しい元盗塁王コンビは足でパ・リーグを席巻している。本多、川崎の俊足一二番コンビはもちろん、長谷川、松田の下位打線も縦横無尽に走る姿は、鶴岡南海時代の年間２００盗塁は当たり前の時代を彷彿とさせる。

つまりは、広瀬、高橋慶彦、島田誠、大石らの優秀なるコーチ陣は、盗塁はやる気とコツであることを教えてくれる。失敗を繰り返しても、メゲない気持ちさえあれば、盗塁は量産できるのである。

もちろん、それなりの走力を携えている必要はあるのだが、一塁走者の川崎はそれなりどころではない走力を有している。

「走れる、走りたい！　バントもいいけど、盗める！　だって、渡辺省三投手は超スローナックルが決め球じゃないですか！　そのボールを投げるタイミングを見計らえば、送球のコントロールには定評のある捕手矢野さんだからといって、この僕を刺せるわけがない！」

鶴岡親分に向かって、行っていいですかと、盛んに目配せする川崎であるが、鶴岡はぷいと横を向いたままだ。

川崎はじっとサインが出るのを待つ。はたして、川崎に二塁盗塁のゴーサインは出るのだろうか。

ミラクル男のピストンサイン

優秀なる一塁走者であり、鶴岡”走る野球”の後ろ盾のある川崎は二塁ベースを奪い取れるだろうか。一点差の８回、無死から出た走者。そして、打者は一番に帰って広瀬。走者を進めれば、井口、門田と頼りがいのある主軸打者につながっていく。

盗塁か、送るかの二つの選択肢がある場面、確率を重視するならば、送りバントだろう。黄金の内野陣を敷き詰める阪神守備陣でも、一塁にはまだバースが残っている。金本、掛布を降ろす決断をした藤本だが、延長同点で縺れる展開を考えると、まだ最強打者バースは残しておきたいのか。しかし、そのバースがこの僅差の切羽詰った場面にお荷物となる。

いくら渡辺省三が自慢の制球力で広瀬のバントを失敗させようと四苦八苦しても、バースの前に転がせれば一発だ。二塁で俊足川崎を殺そうとも考えないバースに、一塁でアウトをひとつ取れればいいと、バースの守備に多くを望まない阪神ベンチの思惑は一致する。

つまり、バースの前に転がせさえすれば、失敗目のバントでも高い確率に成功に転じるのだ。送りバントは成功できる安心の逃げ道がある一方、盗塁のリスクは極めて高い。渡辺省三の牽制のクセや、クイックの巧拙がまるでわからないからだ。渡辺省三は、主に、昭和３０年代に活躍した投手。つまり、あまり盗塁阻止に投手が気を払わない時代の投手で、盗塁阻止の可否は、すべて捕手の肩にかかっているとされた時代だ。牽制はまだしも、クイックはろくにできないことが想像されるが、そこは、名将藤本定義が、セットアッパーに選んだ人材だ。この短期間の間に現代野球に通用する盗塁阻止の術を身につけていてもおかしくない。

「それで、森下一塁コーチ！　渡辺省三投手の牽制やクイックのウマさをざっと教えてください！」

川崎は、一塁コーチの森下から渡辺省三の盗塁阻止の巧拙を事情

聴取だ。森下といえば、渡辺省三と同年代の選手であり、違うリーグとはいえ、日本シリーズで顔も合わせたこともあり、渡辺省三について詳しいデータを持っていても不思議ではない。

「それがだな、僕の経験上、渡辺省三いう投手は、この時代の他の投手と同様、さして、盗塁阻止に秀でた投手ではないはずなんやが……」

なぜか、森下は言葉を濁らす。

「え？　何か疑問点でもあるんですか！」

「あれよ、あれ」

森下が困り顔でベンチを指差す、その指先には野村がいた。野村は、森下に輪をかけて、鬼のような顔をしながら、両手の人差し指をクロスさせて、小さなバツ印を形作っている。

「ノムの野郎が、僕に向かって、走るなと盛んに指図してるんや。あいつは、松井や、柴田のいわゆる野村派の人間や、暇な定岡のお兄ちゃん（定岡智秋）をスコアラーとして派遣し、独自のデータを招集してるんやが、どうもそのデータによると、渡辺省三は走りにくいそうや」

「走りにくい？　森下コーチが体感した現役時代には、走りやすい投手だったのにですか？」

「あの藤本監督がこの場面に救援に送り込むんやぞ。クイックや牽制はぬかりなくマスターしたと考えておかしくない。ノムの派遣したスコアラーの誰かが、渡辺省やんが盗塁阻止の秘密特訓したとか、練習試合でその片鱗を見せたとか情報をキャッチしたんやろ」

「なるほど、キャンプ、オープン戦の短期間の間に現代野球に対応したわけですか！　さすがですね！　いや対応した投手を起用してると考えたほうが、自然ですか！」

「そういうことや。この場面、投げるいうことは、そういうテクニックを身につけた投手いうこっちゃ」

「なるほど！　でも、このチームの監督は、野村さんじゃありませんよ！　鶴岡親分です！　鶴岡ホークスですよ！　野村さんはただ

の生涯一選手にすぎません！　僕は鶴岡御大のサインの発信を待ちます！　鶴岡野球ならば、ゴー！　のサインが出ることを信じて待ちわびます！」

鶴岡の意見を汲んだサインが蔭山ヘッドから発信される、そのサインを受け取った三塁コーチの森脇が、川崎と森下一塁コーチに受け渡す。

「……？！」

「見ましたか、森下コーチ！」

「そりゃ見たわ！」

「やっぱり、僕は鶴岡野球を信奉してます！　少々、無理があってもこじ開けるのが鶴岡野球です！　猪突猛進ですよ！　ヘッドスライディングをとやかくいう輩がいますが、怪我を恐れて野球ができますか！　少々のリスクを払ってこその野球ですよ！」

鶴岡の出したサインは盗塁なのか。野村のように細かいデータ収集をしないとされる鶴岡だ、渡辺省三の盗塁阻止の向上に気がついていない可能性もある。いや、野村に比べてデータ収集の意欲は薄いが、人望の厚い鶴岡は、色々なルートから勝手に情報が集まってくる。渡辺省三の変化に気づいていてもおかしくはない。気づいていなお、強気の攻めか。

それにしても、川崎は、やはりイチローのヘッドスライディング禁止令に、胸に一物あるようだ。名指しこそしていないが、サラリとイチロー批判をしている。憧れのイチローであるが、プレースタイルの細微に見解を違えることは、なんら不思議なことではない。

「村松さん波に頭からヘッドスライディングして、土煙ばあーと吹き荒らして、逆転のムードを作るぞ！」

川崎はその気だ。強烈なヘッドスライディングをチームに、イチローに見舞いするつもりだ。

川崎、イチローに歯向かう

「もう、ズザッザザザラザーってな感じで、二塁ベースに頭から飛び込みますからね！　僕の果敢なヘッドスライディングがセーフとなった暁には！　森下コーチも大げさすぎるジェスチャーを交えて、僕の盗塁成功を祝ってください！　二盗した僕のヘッドスライディングに森下コーチの歓喜が加われば、それだけでチームのムードが変わりますからね！」

「そうやな、極端すぎるほどいこか。そうなれば流れはこっちのもんや……。と話は変わるが、ムネ」

「なんでしょうか、森下コーチ！」

「お前、ヘッドスライディング好っきやなあ～。今日、お前何回ヘッドした？　いや何回するつもりや？」

「そりゃ、僕の野球スタイルですから！　誰にも文句は言わせませんよ！　チームのため、僕のため、飛び込まなきゃいけない場面があるんです！　頭から滑るよりも、駆け抜けたほうが速いなんて抜かす野郎どももいますが、それはヘッドスライディングの技術とかける心構えが違うのです！」

「そうか、でも怪我だけはするなよ。貴重なレギュラー選手やからな、お前が怪我をすると大変や。替わりは、木塚の忠さんや、僕、森下整鎮になるからな……。なんだ、かえって、チーム力アップやないか？」

「怪我？　怪我？！　は！」

「どうした、ムネ」

「怪我といえば、そうか！　ああ～なんてことだ、森下コーチ！」

「だからどないしたんや」

「ヘッドスライディングには故障がつきものです！　いくら技術があるプロだといっても、あの立浪さんでも脱臼してしまうほど、ヘッドスライディングは危険がつきものです！　気を抜いたヘッドス

ライディングよりも、気を入れたヘッドスライディングの方が故障を誘発するんです！　かの立浪さんが現役中唯一ヘッドスライディングを披露したのは、あの有名な１９９４年１０月８日です！　しかし、ヘッドスライディングに気を入れすぎた立浪さんは、肩を強く打ち、それを生で見ていた中日の熱狂的なファンのイチローさんはヘッドスライディングほど、百害あって一利なしのものはないと強く感じたそうです！　そのつまりなんですか、僕は、大好きなイチローさんのモットーと自分のプレースタイルに板挟みになっていたことを、この切羽詰った場面で出塁できたことで、すっかりと忘れていました！」

「どうでもいいが、ムネ」

「なんでしょうか、森下コーチ！」

「渡辺省やんがセットに入るぞ」

「ああ、そうだ、忘れてた、僕は走者でもあるんです！　うっかりぼんやりして、けん制で刺されたら、それこそイチローさんの説教、弓子さんの３食付きでこんこんと一日がかりが待ち受けます！」

渡辺省三がセットに入る。盗塁阻止に投手が気を使わない時代の投手の渡辺であるが、きっちりと長くボールを持ち、二盗にはやる川崎の気持ちを焦らすことに成功している。

やはり、野村偵察隊の調査結果どおり、渡辺は、ある程度の盗塁阻止のテクニックを身につけたからこそのこの場面のセットアッパーに指名されたのだろうか。

「おあ！？」

「え！」

はじめに驚きの嗚咽を発したのは鶴岡だった。そしてその次の驚きの声を発した主は川崎だ。騒がしい球場の中でもよく通る声で、川崎は、渡辺省三のけん制の上手さを驚嘆の声で表現した。

「野村さんの情報どおり、いやそれ以上にけん制が巧みだ」

手からベースに帰った川崎は、渡辺省三のけん制にただでさえ大きな目を、より大きくする。一方の鶴岡は、自分が知っている渡辺

省三よりも、素早いけん制ができることへの嗚咽だった。
「なんや、渡辺省やん、こんなにけん制うまかったか？　小器用な投手いうのは頭にあったが、これほど、うまいとは思わなんだ……果敢に走れいうサイン出したが、取り消しや。おい、蔭山ヘッド。一球目は様子見のサインを出せい」
　今の素早いけん制を見て、すかさず鶴岡は初球盗塁を取り消し、初球は様子見のサインに切り替えた。ただ盗塁を諦めて、すぐに送りバントに切り替えないあたり、鶴岡走る野球の自負が読み取れる。
「ええ、盗塁なしですか！」
「なしやないぞ、様子見ちゅうこっちゃ。渡辺省やんが、クイックできるかを確かめるためや」
「ああ、なるほど！　驚きましたよ！　いくらけん制がうまいといっても、それをかいくぐって二盗できるのが僕ですから！」

　渡辺省三がセットポジションから第一球を投じる。野村の情報どおり、きっちりとしたクイックモーションができている。足の上げ幅を極端に少なくし、それにより腕の振りやボールの強さの減退を最少限に抑えられている見事なクイックモーションだ。もちろん、制球力も普通のモーションで投げている時と同じように秀でている。外角低めに見事に決まるスライド回転のストレートは、球速表示１３５キロ以上の驚異をホークスベンチに与えた。
「やっぱり、送りバントに切り替えるかのう。井口、門田に勝負をかけるか……。しかし、送って二塁にやったところ、渡辺省やんの低目につく制球力からは単打は生まれても長打はないやろ。となると同点が精一杯、同点となると、９回からは藤川に替わり、若林さんが出てくる恐れがあるのう……球威がなくとも、巧みな投球術で相手打者を料理する若林さんを出すのはまずい展開や。それならいっそ、この回ゼロでも藤川球児が出てくる９回にかけてもええか……おい、ノム、藤川球児いう投手はそんなに打ちにくいか？」
　はたまた鶴岡と野村との禁断の急接近である。

「そりゃもう、鶴岡御大。あいつは1イニングだけ投げさせたら、稲尾や杉浦クラスですぜい」
「そうかそれほどのクラスか。そうはいうても、ノム、お前なら打てるな？」
「あははは、鶴岡御大、よくいうてましたでしょ。野村いうのは二線級は打てるが、一線級は打ったとこ見たことないって」
「そうか、それもそうやな。そのクラスの藤川球児を出すのもまずい、送りバントをして同点狙いも勝ち目が上がるわけでもない……逆転するしかないな、このイニングに。少々、無理な作戦を実行に移し、一挙の逆転劇を演出するしかないわけか。渡辺省やんのクイックが早い？　けん制が巧み？　そこをかいくぐるんが、鶴岡走る野球やないか！」
　気弱になっていた鶴岡が一転、いつもの攻めダルマに舞い戻る。
試合の帰趨を分けるこの場面、鶴岡の強気は逆転劇に結びつくのか、空回りに終わるのか。

ピッピピ、うるさいなあ。なんであの人、球場でストップウォッチ握ってるんだ

鶴岡の出した結論は、盗塁。一か八かの策に打って出たか、いや走る野球の伝統を信じることができるならば、盗塁のサインを現在、バトンを持つ川崎に送ることも無謀の策とはいえないだろう。

「ほら見てくださいよ！　森下コーチ！　やはり、盗塁のお許しが出ましたよ！」

「おい、あんまり大きな声を出すな、バースは外国人とはいえ、将棋をたしなむほどに、日本の文化に精通してるんやぞ」

「いいじゃないですか、分かるならわかったで！　相手の厳重な警備をかいくぐるのも、また盗塁の快感ですよ、森下コーチ！」

「だとしても、この場面は重大すぎるぞ、あと笑顔はやめろな、走りたがりのお前が笑顔になったら、阪神ベンチに盗塁のサインが出たと教えてるようなもんやぞ」

「ですから、そこをかいくぐるのが、ホークスの走る野球ですよ。わたくし、川崎宗則、この度、大会開催が決まって、ホークスの歴史を学ばないとまずいなと思い、資料を読み漁ったんですか、ホークスの歴史とは、快足、俊足、韋駄天の歴史といっていいんですよ！　木塚さん、蔭山ヘッド、飯田徳治さん、河西さん、鶴岡監督、そして森下コーチ！　もちろん広瀬さん、それから藤原満さん、そしてダイエーになって、佐々木さん、大野さん、湯上谷さん、村松さん、浜名さん、この辺りになると僕もよく知っていますが！　そして、井口さんに僕！　そして末席ながら本多雄一も盗塁のお家芸を伝承すうｒ立場にあるんですよ！　盗塁とはホークスの伝統そのものなんです！　怖がって、盗塁が成功できますか！」

　といいつつも、川崎は渡辺省三のけん制に警戒して、ややリードの幅が狭くなる。それでも、リードの幅の減少は、より思いきりのいいスタートを切ることで、取り返すつもりだ。

　執拗な警戒を続ける渡辺省三は、何度もけん制を繰り返す。その

たびに川崎のリード幅は心持ち狭くなるのであるが、何度もけん制を体感するうちに川崎は、渡辺省三のクセを見抜くことになる。

「わかりました！　首がやや一塁方向に傾く、けん制の時は！　いくら上手いけん制をマスターしたといえ、それは長年の技術の集約ではなく、若干ながらも付け焼き刃の代物！　完璧なけん制じゃないんです！　クセがわかったなら、スタートも思いきり切れる！」

渡辺省三の首は傾かない、川崎が見抜いたクセのとおりだと、ホームへの投球の合図である。はたして、渡辺省三はホームに投球する。川崎の見抜いたクセのとおりだ、川崎は投球とほぼ同時にスタートを切る。

「盗塁成功！」

川崎は頭から滑りこみ、ムードが一変するすぐ近くの未来を思い描くが、なんと打者の広瀬が、投球を一塁方向にカット打撃でファウルを打ってしまう。

さすがの猪突猛進の川崎も広瀬が打ったことには気がつく。

「え？　ちょっと待って下さいよ！　スチールのサインは広瀬さんにも伝わってましたよね！　監督経験もある広瀬さんがサインを見逃す単純ミスをするわけがない」

まさかのファウル打ちに川崎はあ然とするが、広瀬はもちろんサインを見逃すなど、単純なミスをする格の選手ではない。サインを分かって、川崎のスタートを知っていて、あえてファウルを打ったのだ。

「なんじゃい、川崎の奴、オレのことをなんで打ったやときょとんと見やがって。川崎は走ってて見えんかったかもしれんが、渡辺省やんは、一球目のクイックよりも、さらに早いクイックをしたんや。川崎のあのスタートじゃ、刺されてたぞ」

なんと渡辺省三は川崎いわく付け焼き刃ながら、いや付け焼き刃だからこそ、クイックをするたびに、クイックモーションのタイムを短縮させているのだ。大会本部が雇ったクイックモーション計測係である光山英和のストップウォッチの測った、今の渡辺省三のク

イックモーションのタイムは、驚異の0秒台だった。
「速いね。川崎はあのままいったらアウトになってるよ」
解説席でいちいち投手のクイックモーションを測ることでお馴染みの光山が速いと断言するほどだ。そして、大会本部は、光山一人では信ぴょう性がないと、もう一人の計測係を雇っていた。ドラフト情報の一人者であり、最近、ストップウォッチ計測分野にも手を広げ仕事維持を狙う小関順二である。
「早いターンのけん制にも臆せずスタートを切る川崎宗則（鹿児島工業〜ダイエー・ソフトバンク）も見事だが、渡辺省三（阪神〜阪神スカウト）のクイックモーションはそれ以上に凄い！　僕はかれこれ5年以上、投手のクイックモーションを計測しているが、渡辺省三ほど、早いタイムを出すのは稀である、広瀬がファウルで逃げなければ、二塁で川崎は刺されていただろう、それほどのタイムだ。渡辺省三はクイックに気を払わない時代の投手。その渡辺が、これほどのクイックモーションもマスターするのだから、まさに過去と現代野球の融合。この技術を見れただけで、この大会を開催した価値がある！」
とお得意の文字数稼ぎも織りまぜて、渡辺省三のクイックモーションを大絶賛だ。二人の奇特な計測マニアに称賛される渡辺省三のクイックモーション。そして、試行するたびに、クイックモーションの進化が見られるならば、川崎は足がすくんでスタートさえ切れないはずだし、それ以前に鶴岡は盗塁のサインさえ出せず、消極的に送りバントのサインに切り替えるだろうか。
「2－0や。今頃、送りバントも遅いわ！　ええいこうなりゃやけっぱち……いうこともないか、とにかく攻めるで……それが鶴岡野球や」
早いけん制、速くなるばかりのクイックモーションにもめげず、鶴岡は盗塁のサインを出すのを辞めやしない。
「盗塁！　それでも盗塁！　まってましたよ！　鶴岡野球ですよ、それが！　……ってディズボールの盗塁じゃない！」

川崎のいうディズボールの盗塁とは、このボールで絶対の走れのサイン。つまり走者の盗塁優先で打者は援護の空振りか見逃すことを求められるが、鶴岡の出したサインは、いけたらイケとやや弱気に傾きだしている。カウント２－０、阪神バッテリーはいくらでも外すチャンスがあるし、それどころか広瀬は援護の空振りや見逃しをしている余裕はない、１ストライクを取られればアウトなのだから。

しかし、川崎に行けたらイケの許しを出すことは、ディズボールの盗塁のサインを出したに等しいのである。

「絶対に盗塁する！」

また何度もけん制を受けたあと、渡辺省三はモーションに入り、ホームへ投球だ。それと同時に川崎はスタートを切る。

「絶対に奪える！」

あまりにも無謀な賭けやすぎないか？　いや、川崎は根拠ゼロで走ったわけではない、２－０のカウント、当然、ボール球を混ぜてくる場面だ。渡辺省三の混ぜてくるだろうボール球といえば、そう、例の超スローナックルなのだ。川崎は読み切っていた。

「次のボールへの緩急の布石として、この場面は超スローナックルを遊び球に使ってくる！　あれだけのけん制とクイックを見せて、まさか僕のスタートはないだろう、安心して、遅いボールを投げてくるだろう！　ここが狙い目なんだ！」

川崎の読み通り、渡辺省三の投じたボールは、大きな弧をえがいて、薄ぼんやりした白銀の空から落ちてくる超スローナックルだ。

「よし、快盗川崎ムネリン、犯行成功！」

yと、喜びの犯行声明を送るのはまだ早い。問題は、超スローナックルがストライクゾーンに入っていることだ。大きく弧をえがくこのボールを渡辺省三は、確信犯的にストライクゾーンかボールゾーンか微妙なところに投げ込んできたのだ。

平面のストライクゾーンを通るのではなく、立法的なストライクゾーンを通るこのボール。同じく大きな弧をえがくカーブと同様、

この手のストライクゾーンを立法的に使うボールは、たとえゾーンをかすめていても、審判はあまりストライクを取らないものだ。それがカーブが廃れた遠因ともいわれているが、広瀬はそれでも見逃すことができない。審判が南海の敵、円城寺だからだ。１９６１年の日本シリーズ、この円城寺の判定によって、南海は奈落の底に突き落とされたわけである。この試合、円城寺は南海不利な判定はしていないとはいえ、ジャッチが阪神側に有利に傾く危険性は捨てきれない。見逃して、ストライクを取られたら、一巻の終わり。広瀬は打ちに行くしかない。同年代とはいえ別リーグ、そして、殆ど見ないだろう、超スローナックル。揺れて落ちてくるこのボールを、名球会会員、４割打者誕生？　と騒がれた広瀬でも自由にするのは難しく、揺れるボールにバットのヘッドもとらえ切れない。バットの上っ面に当たってしまった打球は、一塁方向にこころなさげに飛んでいく。一塁はバース。巨体を揺すりながら、この打球をキャッチ、そして飛び出した川崎を殺そうと、その巨体をまた一塁ベースを置いかぶさるように飛び込ませる。

「しまった、帰れないと併殺だ！」

急ターンの川崎も、バースと同じく、頭から一塁に飛び込んでいく。だが、川崎の闘志をむなしく、判定はアウト。

「ああ～　なんちゅうこっちゃ」

鶴岡は思わず、頭を抱え、川崎はベースに飛び込んだまま、顔を上げない。さすがの川崎も最悪の併殺という結果に意気消沈したのか？

ムードメーカー川崎が沈んだら、もはや逆転不可能だぞ？

「」

WAHUI HISHI HUDOU HURIYAMA

見逃したらストライクを取られる可能性がある微尿なゾーンに投げ込まれた渡辺省三の超スローナックル。広瀬の腕さえあれば、ファウルで逃げるとか、ゴロを転がして、川崎を二塁に穏便に進める進塁打を打つことは難しくないはずだが、あまりみたことのない、屋根付き球場の薄汚れた白銀の屋根から、揺れ落ちながら降り注ぐ超スローナックルを自由にできなかったようだ。叩きつけて、一二塁間を抜くゴロにするはず打球が、バットの操作ミスで一塁手バースへの小飛球になりはてたわけだ。

「広瀬なら、最低でも転がせて、進塁打を打ってくれると思うたが……」

ホークスの伝統を信じ、積極的な足技を貫いた鶴岡采配であったが、この局面は裏目に出たようだ。そして、一塁ベースにバースより早く戻れず、憤死した川崎は、地面に顔を伏せたまま立ち上がりもしない。度重なるミスにも、めげず常にチームの先頭を切って、声出しに励み、拙攻続きのチームのムードの沈滞を防いできた川崎が塞ぎこんだままなら、逆転の開演ベルも鳴らせやしない。

「くっそ～」

「おい、ムネ、いい加減、顔をあげんか！　お前のミスやないし、広瀬の失敗でもない。攻めた結果や、仕方ないことや」

森下コーチが顔を上げさそうとするが、川崎はベースに顔をこすりつけ、いつまでも失敗を悔いている。新庄に続き、この試合、通算二人目、球史に残る元気者がまた陰の世界に堕ちていくのか。

「くっそ～」

ついに顔をあげた川崎、もちろん、気を取り戻したわけではない、一塁塁審真鍋が醸しだす、試合が長引いているんだ、いい加減ベンチに帰ってくれのオーラに、さすがの川崎も空気を読んだのだ。問題は、川崎の表情。もしも新庄のように、落ち込みまくった顔を見

せたら、その時ホークスの試合は、４つのアウトを残して終わっても同然といえるのだが。

「こっれから、逆転にいっきましょう！」

そんな心配は必要のないことだった。意外と繊細な新庄と違い、ポジティブすぎる川崎はこれくらいの失敗にメゲないのだ。

「まだまだ行けますよ！」

川崎は、両拳を強く握り、併殺に沈むホークスベンチに活を入れる。打者を考えず出すぎたお前が帰れなかったから併殺になったんだろとのムードも漂うが、その本人がこれだけ明るければ、失敗を攻める雰囲気にはなりえない。

「井口さん、行きましょう！」

次打者の井口にすかさず声援を送る川崎であるが、その井口が打席に向かう後ろ姿をみて、川崎は違和感を覚える。

「井口さんの背ネームのローマ字は、ＩＧＵＣＨＩのはずだけど、失敗の涙に明け暮れた僕の目には、なぜか、Ｈ・ＩＧＵＣＨＩとみえたぞ？　井口さんと同姓、うちにいたかな？　いたとしても、井口資仁だから、イニシャルはＴ、つまり、Ｔ・ＩＧＵＣＨＩとなるわけだけど、Ｈとみえたのは、僕の見間違え？　それとも、井口さんは、この大会を契機に、イニシャルがＨになる名前に改名した？

たとえば、湯上谷さんにあやかって、？志とか、藤本博史さんにあやかって、博史とか、小川史さんにあやかって、史とか、森脇浩司さんにあやかって、浩司さんとか……。そんなわけはないな」

川崎は思わず、目をこするが、より鮮明に捉えた井口の背ネームは、ＨＩＧＵＣＨＩ。つまり、ＨとＩＧＵＣＨＩを分ける中点が存在しなったのだ。

「え、ＩＧＵＣＨＩでなく、ＨＩＧＵＣＨＩ……って、背ネームの前に、背番号が全然、違うじゃないですか！　井口さんは7で、ＨＩＧＵＣＨＩさんは、３！　……もしかして、代打？　いやまさか井口さんに代打？」

川崎が顔を伏せていたうちに、井口には代打が送られていた。樋

口正蔵、左打者だ。１７６ｃｍと背は井口と変わらないが、体型はやや痩せ型、よく見れば背番号と合わせて、違いは明らかだが、ミスに混乱する川崎がみ間違えても無理もないか。

「どういうこと、井口さんに代打って？　試合のどこかで故障でもした？」

困惑する川崎に、答えを出したのは、とうの井口本人だった。

「いや、ムネ。オレはピンピンしてるぞ、どこも痛くも痒くもない」

「え、それで、井口さんになんで代打ですか？　４割近い出塁率見込める井口さんですよ？」

「オレもえ？　っと思ったが、鶴岡監督はじめして、蔭山ヘッドから穴吹、高畠両打撃コーチに、山村打撃補佐とほとんどのコーチ陣、そして、野村さんにまで、こういわれたら、オレも納得するしかない……樋口を出せば、７割近い確率で出塁できるとな……」

「７割？　７割って、あの僕らも尊敬してやまない偉大なる王ソフトバンク会長でさえ、５割がやっとですよ？　ボンズでさえ６割強がレコード。それなのに、出塁率７割って……」

「信じられないだろ？　でも、信じられないことが歴史に埋もれてるのが、野球だ。超スローナックルなんてありえないと思ってたろ？　でも実在してた……」

「でも、もしも、７割が真実なら、どうして、スタメンじゃないんですか？」

川崎が疑問に感じてもおかしくはない、７割の出塁率とはありえない数字だからだ。はたして、代打、樋口の秘密とは？

出塁率7割の亡霊

「ちょっと待って下さいよ、井口さん、繰り返しますけど、出塁率7割は尋常な数字じゃありません。４割を超えれば、一流、５割を超える打者は王会長だけ、そして６割となると、超一流の選球眼にステロイドパワーを注入した超人ボンズだけが望める域ですよ。いくらなんでも７割なんだなんて、ありえない数字です。井口さんに、代打起用を納得させるために誇大に吹聴したんじゃないですか？」

「オレもそう思って、樋口さんの生涯成績を調べてみたんだ。オレもお前も樋口さんに詳しくないだろ？」

「ええ、僕はホークスの歴史をざっと見直しましたが、樋口さんは名前だけを確認したまでで、実情がつかめないままでした。ベンチ入りのメンバー見て、唯一、え？　と思ったのが控え外野手の樋口さんです。実力云々ではなくて、よく知らない樋口さんがベンチ入りする違和感というか……読み込んだ、漫画あぶさんでも樋口さんは姿どころか、名前すらありませんでしたし」

「そうだろ、オレもムネと同じ印象を持って、樋口さんの生涯成績を調べてみたんだ……。通算１０年実働があり、生涯打率・２８１……」

「樋口さんの活躍した時代を考えると、それなりに優秀ですね。１９６０年代といえば、まだ打撃マシンもないし、打撃投手の方の数も限られた時代、動くボールを見る機会がなければ、それだけ打撃は不利になる……。ただ出塁率７割にはほど遠いのもほどがあります。本多が二桁本塁打を放つくらいに」

「そして、通算本塁打は１５本」

「１５本？　それって年間最高とかじゃなくて、通算本塁打ですか？」

「ああ、通算だよ。１０年で１５年、つまり年間、１本ないし、２本がせいぜいの選手ってわけだ」

「となると、足が武器の選手ですか？」
「そう思うだろ？　ところが、通算４１盗塁さ」
「４１盗塁……？　僕や本多なら一年で軽く走れる数字……。クイックもない時代で、俊足の走者ならいくらでも走れた時代ですよ？」
「だろう、年間、二桁の盗塁もない。本塁打もなければ、盗塁が多いわけでもない、それでも、樋口さんは、鶴岡南海の４００フィート打線の一番打者として機能していた」
「そうだ！　７割の出塁率というならば、四球を選びまくる一番打者なんだ！　僕や本多はよく、四球が選べないために、一、二番打者失格と叩かれますが、樋口さんは非力ながら、抜群の選球眼と我慢強い打撃で四球を選びまくる、いわゆるマネーボール志向に好まれるタイプの選手なんですね！」
「そう思うだろ？　オレもそう思って、穴が開くほどに年度別成績を眺めたさ。すると、読み取れた年間最多四死球数は、なんと２８。規定打席に到達して２８だ」
「２８？　それって、僕や本多が一、二番失格と叩かれる根拠である四死球数の数と変わらないじゃないですか！　それで７割の出塁率と大ボラふけますか？」
「そして、問題の出塁率なんだが、規定打席に到達して．３５２が最高、規定打席に未到達なら．３５４という数字。非力な一番打者としては、上々の出塁率だけど、オレを降ろして、代打に出すほどの数字じゃない。オレは４割を越えた出塁率をマークするほどの選球眼の持ち主」
「２０１０年の最高出塁率の有力候補ですものね……しかし、ますます謎です！　４割超えの出塁率をマークしたこともある井口さん、こういっちゃなんですか、僕でも、本多でもマークできるくらいの出塁率が限度の樋口さんを代打に出すのは、やっぱり、右投手には、左打者という、ありきたりの理由で、それじゃとてもじゃないが、井口さんは納得しないだろうと見て、７割の出塁率が期待できると、誇大に樋口さんの実力を粉飾したってことですかね？」

「いや、そうともいえないんだ。鶴岡監督だけの見解なら、実力の粉飾の疑いも強まるところだが、鶴岡監督と仲が良好とは、とてもいえない野村さんまでが、樋口は7割の出塁率を期待できるとおっしゃられるんだ」

「鶴岡監督だけでなく、野村さんまで？」

「ああ、野村さんだけでなく、穴吹、高畠両打撃コーチから、僕らもよく知る山村打撃補佐まで、口を揃えて、樋口さんの代打は妥当だというんだ」

「そこまで首脳陣の見解が一致してるとなると……」

「ああ……鶴岡派に野村派、そして大阪と福岡に真っ二つに割れて、一枚岩とはいえない、このホークスベンチの意見がこれだけまとまりがあるとなれば、オレは納得せざるを得ないだろうよ。樋口さん、7割の出塁率伝説を信じるしかない。生涯出塁率が．３２５で、オレの日本通運出塁率は．３５４と樋口さんの年度別最高出塁率に等しく、メジャー通算でも．３３８と樋口さんの生涯出塁率を上回る……。それでも、樋口さんの方が、オレよりも出塁を期待できるとなれば、信じるしかないだろうよ」

「出塁率7割の根拠の出どころが気になりますよね。一致する出塁率の見解が、7割に真実味を持たせる……」

左打席に入った樋口は、いかにも平均的な体格の持ち主であり、そしてオーソドックスのフォームから、樋口が7割の出塁率を期待できるという根拠のカケラすら見受けられない。

福岡ドームの7割を占めるホークスファンも、よく知らない樋口が代打に出てきて、その実力に懐疑的だ。ホークスを半ば捨て、メジャーに旅だった井口の代打だからこそ、知らない選手に取ってかわられても、それほどの罵倒の声が起こらないのだろう。これが、福岡のファンに絶大的な人気を誇る小久保あたりの代打なら、また違った反応になったに違いない。

「矢野くん、こんにちわ」

樋口は、捕手の矢野にご挨拶。矢野は、少し驚きの表情を浮かべてから、やや間があって、樋口に向かって、マスク越しの会釈をする。

「驚いてるようやな、矢野くん。それもそのはず、まったく知らん者同士やからな。しかし、君と僕は、同郷なんよ。君も、大阪市出身やろ？　僕もそうなんよ。といっても、それだけや。大阪は日本一の野球選手の産地。同郷なんぞ、珍しくないわな」

「そうですか、そりゃあどうも……」

挨拶もそこそこに、阪神ベンチから、田宮謙次郎外野手総合コーチ兼ＯＢ会長が飛び出してくる。同郷の後輩、井川に手厳しい注文をつけることで有名な田宮は、ベンチから外れたのが不思議なほどの抗選手だ。その田宮が、藤本の命を受けて、矢野をはじめとする内野陣を手招きで集め、なにやら協議の時間を持つようだ。攻撃専門のコーチが、守備時にベンチを飛び出すのも珍しいのに加えて、出るタイミングも一風変わっている。二死無走者、そして打者は飛び抜けた数字を残していない樋口。

「タイガースも、樋口さんを警戒してますよ、井口さん」

「ああ、田宮さんは、樋口さんと同時代にパリーグにいた人だ。なにかしら、樋口要警戒の情報をつかんでるんじゃないか」

「出塁率７割……は、ホークスベンチだけが見える亡霊じゃないってことですね……。タイガースにも見える、実体化しだした７割の根拠……」

暑苦しるしさ5ー川藤ーパンチ佐藤ー川崎宗則ー爽やかさ5

「なんだろう、二死無走者で守備側のベンチが騒ぐこともないでしょうよ」

「ムネ、その二死無走者の状況にしたのは誰だ？」

「すいません……。井口さん……この私、川崎宗則です！」

しゅんとなるどころか、なぜか勝ち誇るように白状する川崎。この調子だと、川崎は、いくら失敗を繰り返しても新庄状態に陥るのは、ほど遠いだろう。

「まあ、ムネをいじるのはこのくらいにして、投手コーチの上田次郎さんが出てくるならわかるけど、どうして野手のコーチの田宮謙次郎さんが出てくるんだ？　樋口さんと田宮さんは同時期に同じリーグにいた選手。もしかして、樋口さん、出塁率7割のなんらかの秘訣を田宮さんは知ってらっしゃるかもしれないぞ、ムネ」

「さっすが、井口さん！　経験と豊富な知識と勉強量に裏打ちされただけあって、読みが濃厚で鋭いっす！　たしかに、田宮さんが出てくるのは不自然ですよね？」

その田宮を中心にマウンド付近で輪ができるのだが、この会議に一塁のバースも加わっているのだ。普通、外国人選手は、言葉がわからないことから、遠巻きで見つけるか、怠惰な選手だと、輪にも加わらず、暇そうに守備位置から離れず、突っ立てる輩もいるのに、バースときたら、ご熱心に、会話の輪に加わるどころか、中心に位置している。そして、なにやら、笑顔で近づいてきた田宮がひとこと、ふたこと、バースに言葉をかけるのであるが、戦前生まれの田宮とバースに満足な意思の疎通ができるわけもなく、田宮は他の選手たちに助けぶねを求めるが、投手渡辺省三、捕手矢野、二塁鎌田、三塁三宅、いずれも英語に精通しておらず、遊撃の吉田は、ムッシュの敬称がつくほど、外国滞在が長かったが、それはフランスであり、バースには、吉田の片言のフランス語は通用しない。

困った田宮は、通訳を呼び寄せるのか、三塁側ベンチに向かって、手招き。

「なんだ、なんで、あの人が出てくるんだ？」

井口が思わず、目を丸くしたように、なんと田宮の手招きで三塁側ベンチから出てきたのが、取ってつけたような役職で、コーチ登録を便宜上しているとはいえ、実際はヤジ将軍兼ムードメイカーにすぎない川藤幸三だ。

「川藤さん！　これはまた暑苦しそうなキャラの人が出てきたぞ！」

とこれは川崎の意見であるが、マイルドなフェイスに誤魔化されがちであるが、川藤と川崎宗則は、性格を細かく分けると、意外と同じ線上にいるはずだ。どちらも、暑苦しいほどの元気者として。

川藤は、２５年前に引退している選手ながら、今でもＣＭ、テレビ出演多数とあって、この試合のトップスターの一人だ。姿を現しただけで、やんやの大喝采。試合に出ることのない川藤はファンの期待を裏切ることなく、称賛だけを浴びるのか。

田宮は川藤をなぜ、呼び寄せたかというと、もちろん、バースの相手だ。

「ヘイ、ランディー！　Ｏｋ？　ユー、アウト！　この試合、試合というのは、英語でなんというやったか？」

「ゲームに決まってますがな、川藤」

「おう、そうや！　ヨッさん、おおきに！　ユー、リタイア、このゲーム、ＯＫ？」

つまり、バースをこの試合から退かせる趣旨を川藤は伝えたいわけだ。川藤の奥さんは学校の先生であるが、川藤自身の英語力は中学生英語もいいところだ。それでも、バースには通じてしまうのだから、言語コミュニケーションとは、細かい文法よりも、勢いであること教えてくれる。

外国人選手は、回途中の守備交替を極端に嫌う傾向にある。たとえば、２０００年、西武にこの年だけいた、元レッドソックスの中距離打者ジャファーソンは、守備のミスの直後に、当時の監督東尾

に交代を命じられて、激昂、その勢いで退団、途中帰国とあいなった。

元メジャーリーガーにとって、それほど、回の途中の守備交替は、プライドを傷つけられる屈辱な行為であるらしく、守備の途中交代は当たり前の日本野球の感覚からは、理解しがたいものがある。（とはいえ、日本で生まれ育った野球選手の中でも、守備のミスを咎めての途中交代に激怒した選手がいる。東映時代の張本勲だ。当時の大下監督に途中交代を命じられた張本は、試合直後、監督室に殴りこみの勢いで直談判、大下監督もこの起用自体、まずいと思っていたらしく、なんと大下は、張本の目の前で、ナイフで手首を切りつけた。自らを傷めつけることで、張本への謝罪としたのだが、さすがの張本も面食らったか、自殺未遂寸前の行為には、怒りの矛を収めざるを得なかったようだ）

しかし、日本流に染まったバースは文句もいわず、そのままベンチに戻っていく。将棋の師匠である川藤に直接いわれたら仕方ないのか、バースは、

「ＯＫ、ＯＫ！　タイガーズ、グットラックね！」

と笑顔でベンチに戻っていく。

もしも、同点に追いつかれたことを考えて、金本や掛布を守備要員に交替する中、バースだけは残していた藤本采配であるが、この場面、ついにバースを下げる決断をした。

替りに一塁の守備につくのは、藤田平だ。本職はもちろん遊撃手であるが、一塁手としてもダイヤモンドグラブ獲得経験のある選手。首位打者を獲得した年で、打撃のご祝儀的な受賞ともいえるが、遊撃手出身だけあって、バースよりは、遥かに広大な守備範囲と的確な状況判断が期待できる。

これで、タイガーズは、捕手矢野、一塁藤田平、二塁鎌田、三塁三宅、遊撃吉田、左翼新庄、中堅赤星、右翼真弓とベンチ登録した人材の中で、考えうるだけで最高の守備陣形を敷くことになった。矢野、新庄、藤田平、赤星はゴールデングラブ獲得経験者だし、真

弓は内外野、どのポジションについてもそつなくこなすプレイヤーであり、鎌田、三宅、吉田の三人は守備のベストナインが存在しない時代のため、守備の賞の獲得経験はないが、いずれも球史に残る名手だ。

しかし、藤本ら阪神首脳陣は、どうして代打樋口のタイミングで、バースを降ろし、史上最高の守備陣形を敷くことにしたのか？

「バースさんを下げた！　どういうことですか、井口さん！」

「そりゃ、バースよりも藤田平さんのが守備が上手い。当たり前じゃないか」

「でも、タイミングが！　変えるなら、このイニングのはじめに替えておけばよかったはずですよ！　やっぱり、代打樋口さんになんらかの警戒をして……」

「ああ、一塁守備を替える、これが7割の謎を解き明かす、最大のキーワードだろうな」

暑苦しるしさ5ー川藤ーパンチ佐藤ー川崎宗則ー爽やかさ5（後書き）

新着表示の時間帯以外からくる人はどっからきてるんだろう？
野球小説が読みたくてここ来る人はいないはずだが

検索すれば樋口の秘密なんて一発だろうが

「一塁守備を改善しなければならない。つまり、攻撃の軸、バースを降ろしてまで、藤田平さんを入れたのは、樋口さんを出塁させないための強い意思表示の現れですか？」

「そうだ、ムネ。オレを下げてまで、樋口さんにかけた、そして、バースを下げてまで、樋口さんの特徴を削りに来た。鶴岡、藤本、両経験豊富の監督の意地と意地のぶつかり合いだ。下ろされて、いくら理由をつけられても納得できていなかった自分だけど、なんだが、この最善を尽くしきった采配合戦のゆくえを見守りたくなってきたよ……」

バースに替った藤田平が一塁守備につく。携えるのは、ファーストミットではなく、慣れ親しんだ遊撃用のグラブだ。手に馴染む方を選んだのか、それとも、送球を受けるよりも、ボールさばきのが重要になるというのか。

ボールさばき、つまり、藤田平は送球を受ける能力が買われて一塁守備についたわけではなく、遊撃手出身らしい守備範囲の広さとグラブさばきを買われたものだ。一塁手と三塁手は細かいグラブさばきよりも、強い打球をさばく反射神経のが重視されるポジションであるが、っ小回りのきく藤田平を選択し、そして、その藤田平は融通がきくグラブを選択した。

つまりは、樋口の最大の武器とタイガースが最も危険視すべき特徴は、内野グラウンドで起きやすいことを示唆しているのだろう。

「内野手を固めた。そのものずばりだが、内野安打を警戒しているに違いないな」

「お言葉ですか、井口さん、内野安打を警戒って、僕や広瀬さんが打席に入ったんですよ？　僕や広瀬さんは盗塁王ですよ？　樋口さんは年間一桁盗塁がやっとですよ？　もし、樋口さんが多少、内野安打が多いタイプだとしても、足で内野をかき回されるのを警戒す

るならば、この回の先頭から、バースさんを下ろすのが正解ですよ」
　いつまでも答えのでない井口と川崎の思考の袋小路に助け舟を出したのは、作戦コーチのブレイザーだった。ブレイザーは市原稔通訳を携えて、樋口の最大の武器を説明しようとする。
「インフィールドヒット？　内野安打ですか？　いや、ムネと今、内野安打じゃないか、内野安打ならムネでもオレでも打てると話してたところで」
　種明かしされても腑に落ちないという二人。だが、続く、ブレイザーの一単語にすべての謎が解き明かされる。
「ドラックバント？　ドラックバント、つまりはセーフティーバントですか？　樋口さんはセーフティーバントの名人？」
「そうだ、ムネ。どこの本でよんだことあるぞ！　昔、南海にはセーフティーバントの名人がいて、それを武器に年間最多安打の記録を作り、その記録は何十年たった今でも誰にも破られることなく、燦々と輝きを放っているって！」
「セーフティーバントですか？　ああそれで、バースさんを替えて……でも内野安打って、警戒するのは分かりますが、7割の出塁率はありませんよ、やっぱりおかしい、種明かしされて、なおおかしい。樋口さん、出塁率7割の根拠はないんです！　つまりは井口さんを替える方便にしかすぎないんです！　セーフティーバントを警戒されて、成功できるほど、阪神の守備陣形は甘くないですよ！」
「いや、ムネ。まんざら7割はホラでもないかもしれんぞ」
「え？　どういうことですか」
「ムネ、お前もバントを要求される打順だから、よくわかると思うが、バントしにくいボールってどんなボールだ？」
「高目の速球と切れのいい変化球ですかね、縦にストンと落ちるスライダーとかフォークは目線もぶれますし……」
「今、マウンドに上がっている投手は誰だ？」
「渡辺省三さん……」
「渡辺省三投手にそういうボールはあるか？」

「あ！　ないです！　スライダー、カーブ、シュートと投げてきますが、いずれも横のゆるい変化……。バントをしにくいボールじゃないです！　ストレートも低目にあつめるタイプですし！」
「そして、お前も食らった超スローナックルだ」
「はい、超スローナックルはやっかいなボールですか、バントはしやすいボールです！　あのスローボールを自由にバントできなきゃ、野球選手失格ですよ！」
「つまり、渡辺省三投手はバントを決めやすい投手であるといえる、いくら内野陣をガチガチに固めたからといっても、自由にバントを転がされたら、ひとたまりなく、セーフティーバントは成功する」
「それなら、いっそのこと、バントをしてくるとわかっているなら、高目に速球を投げるのはどうですか？　いくら渡辺省三さんの１３５キロとはいえ、高目の速球はバントの自由はききませんよ！」
「バントのしにくいボールは、今度は打ちやすいボールになるな」
「あ！」
「渡辺省三投手のようなタイプは、低目に集めてこそ活きるタイプ。高目に力ないボールを投げたら、樋口さんの巧打の餌食になる。敷いたバントシフトも命取り、強打の前にボールは内野を抜けていく。かといって、キレのいい変化球を投げろといわれても、どだい、無理な話。１３５キロの腕の振りの投手がストンとキレのいい変化球を投げるなんて虫が良すぎる話だ」
「なるほど！　我が、ホークス首脳陣は、一手先まで読み込んで、樋口さん代打を決めたわけですね！　凄いなあ、短時間で、普段、バラバラの首脳陣の意見が一致するなんて……」
「しかもだ、ムネ。タイガースベンチは気づいているとしても、樋口さんのセーフティーバントをまともに体感はしていない。セーフティーバント対策は、何度も実際に体感して、生まれるもの。樋口さんを殺すための的確な守備陣形は、重ねた経験からこそ生まれてくる。つまりは、南海阪神の昭和３９年のシリーズで樋口さんのバント攻撃をみたとしても、実質初見に近い、阪神内野陣は有効な対

処手段を見つけられないまま、樋口さんにバントを決められる。史上最多の内野安打を放つ技術の前に、初見の守備陣は指をくわえて見守るしかない」

「それが、出塁率７割の根拠……実際、決まったわけじゃないから、そこまでの説得力は僕の中にないけれど、恐ろしいですよ！　これがプロ野球７５年の歴史と歴史の融合であり、ぶつかり合いなんですね！　ただ、内野安打ってのはどうかと思いますよ、やっぱりクリーンヒットこそ、安打として誉めそやすべきで、内野安打は運がいいとか、出塁できてよかったねと、そこまで止まりにしていたほうが……」

と、またも、イチローを暗に批判する川崎ムネリンでした。

検索すれば樋口の秘密なんて一発だろうが（後書き）

樋口が打席に入るまでに何千文字を浪費してるのか

もうわかったから早く話を進ませろ

樋口の生涯出塁率が．３２５。現在の感覚とすると、やや低いように感じるが、樋口は投高打低の時代の住人。一発のまるでない内野安打打者を、わざわざ警戒して四球を献上する投手はいないので、打率と比べても平均的な出塁能力の持ち主といえる。

その樋口が技巧派、制球力命の渡辺省三と相対す。バントをさせずらい球種や球速の持ち主ではない渡辺省三は、樋口にとって組みやすい投手。四球で逃げることもなく、バットを当てるのも難しくはない。ゆえに内野安打の量産は期待でき、バントヒットを決めるにしては、阪神の内野陣は強固すぎるが、樋口は、その件については狼狽してはおらず、逆に、守備名人の鼻をあかせるとバント職人として張り切っているほどだ。

以上、各種の条件が樋口に味方をしている。おそらく、この要素を樋口の生涯出塁率に入れ込むと、時代背景を考えても平均的である樋口の出塁率は跳ね上がることになる。

はじき出される数字は、およそ5割。この時点で、一流選手の出塁能力をはるかに凌駕し、王貞治のレベルまで到達している。

「樋口の代打は正解！　反鶴岡で、鶴岡采配にいちいち難癖つけてきたワシがいうのやから、間違いない！　渡辺省さんのボールなら樋口は自由にできる！　外れの多い鶴岡采配やがこれは当然の策。井口をそのまま立たせていたら、渡辺省さんの緩急に一溜りもなく、捻られている！　樋口の成功確率は5割を上回ると、ワシは見る！」

気がつくと監督通算２４年と恩人であり、最大の敵でも鶴岡の監督通算と並んだ野村も、樋口の代打に太鼓判だ。鶴岡と同じ法政大出身で鶴岡カラーが強いためか、野村兼任監督就任で大幅に出番を減らした樋口は、この試合で初めて、野村に認められることになる。

しかし、野村が認めても、出塁率は5割強にしか跳ね上がらない、鶴岡のいう7割という根拠はどこから来るのか？

「なあ、タカ（高畠）」

「はい、なんでしょうか、穴吹打撃コーチ！」

「セーフティーバントの成功率知ってるか？」

「いや、調べたこともありませんな、不勉強で申し訳ない」

「5割強や」

「5割強？　それはヒットになった確率ですか？」

「ああそうや、つまり、打率やな。打率が5割強。言うわけや。毎年、トップの選手はそのくらいの確率で成功させている。大リーグでもイチローはそのくらいの成功率をしめしている」

「それなら、ヒットを狙うよりも、セーフティーバントの方が確率、ええないですか？　なら、全部、やらんと、特に樋口さんみたいな短距離打者は全部、セーフティーバントすると4割打てるとちゃいますか？」

高畠はやや穴吹をからかうような口ぶりだが、穴吹はいたって本気だ。

「ワシもそう思うよ。ワシは獲得競争が起きたほどのスラッガーやったからそんなことせいへんけど、樋口みたいな短距離はそれでええと思うよ」

「それなら、なぜ、セーフティーバントの上手い短距離打者は、バントづくしの野球をしないんでっか？」

「そりゃ、野球人としての意地よ。かのイチローでも、セーフティーバントは、どうしても打率を落としたくない時や、２００安打への数合わせに取り入れるくらい。つまりは、ある種の恥の概念があるんやろうな、プライドちゅうか。しかし、この樋口は逆や。プライドがあるいうても、それは内野安打年間最多のプライドや。つまり、恥も外聞を捨てずして、セーフティーバントができるんや。誇らしげにな。それだけ、強い自信と精神力の裏付けがおうたなら、タカ、どうや？　打撃コーチの職人として、成功率はあがるか？」

「上がりますとも！　それも格段に！　何の迷いもなく、セーフティーバントをする心と、裏打ちされた技術があるならば、成功確率は……おおよそ、高校教師の免許もあり、実際、教壇にたったワシの目算ですが、7割！　7割は成功できますとも！」

人育ての名人、穴吹義雄と、伝説の打撃高畠の導き出した樋口の代打成功率は7割。これにて、鶴岡の狙いは、ホークス全攻撃スタッフに行き届いた。

人の思考の行き着くところは同じであることは、ベンチの端と端、穴吹、高畠と井口、川崎の発想が似通っていることからもわかる。

「知ってるか？　ムネ、セーフティーバントの成功率を。オレは知ってのとおり、今、千葉ロッテに属している。そのロッテのコーチに２００９年まで、バントコーチなる役職があったことは、お前もよく知っていることだろう」

「はい！　諸積さんですよね？　バレンタイン政権の崩壊でありふれた役職になりましたけど」

「その諸積さんは、ある年度、セーフティーを狙って、５割の成功率を収めたこともあるそうだ」

「ひえ～５割っすか？　３割を打てば一流の世界で、５割はちょっと……」

「すごいよな、で、問題は諸積さんがプロで3割を残したかというと……」

「よくて、２８０のイメージがありますね！」

「そうだ、５割の確率で安打を計算できる、これはバントの上手い左打者だけの特権のようなもの、その特権を行使できるのに、どうして、セーフティーバントばかりしないか、聞いてみたんだ」

「そりゃ、井口さん。いくらなんでも、左の内野安打量産打者に嫉妬しすぎですよ！　そりゃ、バントばかりやってれば、相手が警戒したって、３割は打てるかもしれないですけど、毎打席、バントを狙うのもですね……」

「プライドもあるしな。それで、ちょっといい数字を残したって、

あまり面白くないって、諸積さんはいうんだ、ムネも同じ気持か？
　たまにセーフティーバントを試行する左打者として？」
「そりゃ同じですよ！　ホームランを捨てた僕ら打者とはいえ、外野に飛ばせば、二塁打、三塁打が生まれる可能性があるんですから！」
「そうだろ？　ところが、樋口さんはセーフティーバントの名手の意地にかけて、そして、代打に送られたオレに恨まれないためにも、すべての欲望を捨てて、バントをしてくるんだ」
「あ！　それが7割の秘訣か！　プロ野球史上もっとも、セーフティーバントを自由気ままに操った樋口さんが、この打席にバントヒットの成功だけを考えたら！」
「これ以上、出塁を期待できる打者はこの世にいないさ、たとえ薬漬けのボンズさえもね」

　7割の成功確率を信じて疑わないホークスベンチは、樋口にとって強い味方となっている。ベンチから送り出されるプラスのオーラを纏った樋口は、より高い確率でバントを決められるだろうか。
　そして、矢野コンピュータは、セーフティーバントの名手の対処の仕様がない。剛球王藤川球児ならば、高目にノビのあるストレート連投で、樋口の職人芸をぶち壊せるのだが、投手渡辺省三ではそうはいかない。
「ボール球はダメ。四球を出したら、怖い怖いクリーンナップにつながっていく……。かといって、ストライク勝負は、バントの技術の格好の餌食……。いくら、史上最高の内野陣が警戒を払っていても、格好の場所に決められたら一溜まりもない……。く、押すも引くも地獄！　さすが、鶴岡親分や、いやらしい野球を仕掛けてくるな」

セーフティの攻防

樋口は視線で、阪神のバッテリーと内野陣を惑わせる。樋口がちらりと、遊撃吉田を見れば、吉田は自分のところにプッシュバントしてくるんじゃないかと、つま先重心を前にかける。また逆方向の一塁藤田平を見れば、替ったところに打球が飛んでくると、心の準備万端の藤田平を注意過剰で精神メーターの針を振り切らせようとする。内野陣にプレッシャーをかける樋口に、矢野はセーフティーバントを仕掛けてくるとは信じきっていない。

「野手を前に出し、打球を抜けやすくする作戦やないか」

次の展開を決めつけないのも、野村の教えか、それとも長年の捕手生活で培った矢野なりの知恵か。矢野といえば、東北福祉時代、大魔神佐々木と組んだ捕手とされるが、佐々木より一個下の矢野は、佐々木にそれほど信頼されておらず、佐々木が投手の時、矢野は佐々木の目の前ではなく、右横のサードを守っていた。佐々木には、捕手矢野を全面的に信用できないにかがあったのか。それは佐々木得意のフォークの軌道が一定と決めつけて、思わぬフォークの落ちに対応できなかったのだろうか。とにもかくも、矢野はエース佐々木と組ませてもらわないことから、起きる事態を決めつけないことを学んだようだ。

「しかし、決めつけんとリードが半端になる。バントをさせて殺す場合と、バントをさせない場合の攻め方はまるで違う。どっちつかずの半端でいくと、セーフティーの名手の格好の餌食や。５５本の内野安打記録ばかり目立つが打率３割を記録したように、巧打も注意すべきやからな……決め付けることもだめ、半端もダメか。そして投手は渡辺さん。典型的な技巧派やが、ミラクル投手の側面もある。ミラクル投手なら、ミラクルを起こしてくれることを信じるか……超スローナックルをボール球。スローボールはただでさえ、バントをしやすいのに、さらに超がつく。揺れるがこれほどバントし

やすい球はないわ……が、それがボール球やったら？　それもとんでもないボール球やったら。バントをしやすいスピードで、それでいてとんでもないボール球。なにが起きる？　バント名人の樋口さんは見逃す自信はあるか？」

矢野のリードは勝利だけを全力で追求するよりも、ある意味実験めいたリードだ。超スローナックルを投じたとき、セーフティーバントの名手樋口はどんな反応を示すのか。

相変わらず、樋口はバントの構えなく阪神守備陣に目の動きだけでプレッシャーをかけている。重圧をじりじりとかけることを選択するならば、初球からのバント攻撃はないはずだが、渡辺省三の投じた超スローナックルに居ても立ってもいられなくなったのか、バントの構えをする。初球は様子見のつもりが、あまりにもバントには好球のスローすぎるボールで色気が生まれたようだ。バットの先端は三塁方向を指していた。サード三宅、ショート吉田の史上最高の三遊間に挑戦状を叩きつけるのか。大きく外に揺れて逃げる超スローボールをバントスポットにすっぷりと当てはめる。しかし、バントを仕掛けた方向は三遊間の方向ではなく、逆方向である一塁と投手の間だ。バットの先端を三塁に向けながら、一塁方向に転がす超高等技術を見せたのだ。

投手の渡辺と一塁の藤田平が前進してくる。しかし、その間をするりと抜ける樋口のバント技術はやはり絶妙。バントすると同時に一塁に走りだすスタートの良さは、一塁出塁を確定付ける動きか。

一塁と投手方向に転がして、その間を抜けば、そこには誰もいない。いるはずの二塁手の鎌田は一塁のベースカバーに入っているからだ。

「7割の出塁は言い過ぎじゃなかった！」

と川崎が叫んだ瞬間、信じられないことに、鎌田がそこにいたのだ。いないはずの鎌田、一塁カバーにいったはずの鎌田がそこにいた。

「なんだって！　でも、それじゃ一塁カバーがいないじゃないか！」

と川崎が叫ぶが、これもまた正しい。一塁の藤田平や投手の渡辺はバント処理で前に出ているからだ。いまさらカバーに走っても、樋口との競争に間に合うわけがないのだが、鎌田が素早くスローイングをすると、一塁カバーには、これまたいないはずの渡辺省三がいたのだ。

「どうして！　あ、そうか！　渡辺省三投手は、前に出るふりをして、最初から一塁のベースカバーに走っていたんだ！」

これまた川崎の説明通り、渡辺省三は、途中で体を切り返し、ベースカバーに走っていたのだ。これぞ、鎌田と同時代にプレーした間柄だからできるプレーであるが。走り打ちならぬ走りバントの樋口との競争に勝てるだろうか。

一塁ベースを先に踏むのは、樋口かそれとも渡辺省三か。タイミングは同時にみえたのだが、塁審真鍋はアウトのジャッチを下した。

この判定に慎みを感じたか、樋口はヘルメットを叩きつけんばかりの怒りを見せたが、それも一瞬、すぐに一塁ベンチに帰っていった。

「よう見てるわ。僕の負けや。渡辺省三さんのカバーが見事やった」

あっさりと競争の敗北を口にした。

「バントはこんなもんやろうけど、アウトになったらしゃーない、負けを認めるか」

樋口が真っ先に向かったのは井口の元だ。

「悪かったのう、井口。出塁できんで」

「いえ、素晴らしい対決を見せてもらいました。それだけで満足ですよ」

「そうですよ！　7割の出塁率の片鱗は見せてもらいましたよ！　たまたま3割の出塁できない目が回ってきただけですよ！」

と川崎は妙に興奮するが、我に返ると、このイニングまでに同点に追いつけないホークスに勝ち目はほぼ消えたとみてもいい。それだけのクローザーが、阪神に控えているからだ。

「8回も結局、ゼロ！　やばいですよ！　9回にはあの人が出てき

ますから！」

セーフティの攻防（後書き）

あれ、なぜか1～3話に見たことのない話が

チェーンエース

試合はついにクライマックス最終回を迎えようとしている。１－０、最小得点差で阪神のリードで、残すは１イニングのみ。ホークスが最小得点差のままに裏の攻撃を迎えるのはそう難しくない注文だろう。

なぜなら、阪神の攻撃は７番の矢野から始まる、やや案配の打順だからだ。７番の矢野は、先発捕手田淵よりも長打力はかないもしないが、打撃技術はむしろ上。田淵が一度しか記録していない規定打席を到達して三割を二度マークしていることから、矢野はたやすい打者ではないことを示しているが、矢野のこの試合での起用法が起用法である。田淵の守備要員、いわゆる抑え捕手として起用だ。打撃よりも守備を期待して、ベンチが送り出していることは矢野も重々、承知で、気持ちの重点も守備にだけ置いている。

「オレ、打順、回ってくるんか」

スコアボードを見て、初めて自分の打席から回が始まると気づいたほどだ。それほどリードに首ったけということか。矢野に続く８番も岡田から途中に鎌田実に替わっている。

「はよう、打席回ってこんかい。ワシが守備の人だけやないことを知らしめたるわ」

鎌田本人は矢野と違い、打てる気満々であるが、鎌田はやはり、最強の内野陣を形成するためにベンチ入りした選手。両軍の野手の誰を見ても、鎌田よりも、打率、出塁率、長打率の打撃三部門のどれをとっても、鎌田より劣る選手はどこにもいない。打てる気があったとしても、打てる確率が低いのは明白だ。そして、９番は相変わらずうつ状態の新庄が入っている。守備では切れ味を見せる新庄だが、打撃の状態は、台風の発生数と本塁打の号数を競っていた１９９８年（７月頃にようやく今シーズン１号の出た新庄、追いかけるように台風一号も発生。それから数日、新庄と台風のつばぜり合

いが続いたが、新庄の打棒はピタリと止まり、結局、台風の圧勝に終わった）の最悪の状態に近く、鎌田同様、打撃にはてんで期待ができないだろう。

つまり、このイニングは阪神に得点が入る確率は限りなく低く、ホークスは万全の継投策を取らずとも、最小得点差のまま裏の攻撃に突入できるのだが、鶴岡監督は動く。村上雅則を８回の１イニングで降ろし、３番手の投手の名前を主審に告げた。

「エースの登場ですか！！　諦めていないという意思表示ですよ！」

「ムネ、宅和さんがどういう投手かお前知ってるのか？」

「知ってますよ、小久保さん！」

この回から、代打を出された後輩井口に替わり懐かしきセカンドの守備についた小久保は、川崎に知ったか疑惑をかける。

「もちろん知ってますよ！　宅和本司投手は、南海黄金時代を前期を紡いだ”チェーンエース”の一人ですから！」

「お前、あぶさんだけでなく、Ｎｕｍｂｅｒ文庫のヒーロー列伝も読んだんか？」

「もちろんですよ！　宅和投手を知るのは、この一冊しかないと野村さんにいわれたら！　チェーンエースというのはですね……」

チェーンエースとは、鶴岡南海前期を支えた、太く短く輝いたエース群である。鶴岡南海には、杉浦の入団まで圧倒的なエース投手が存在していなかった。この試合の投手コーチを努める柚木進が杉浦入団までのエース格だったが、ＭＶＰを一度獲得したとはいえ、シーズン１９勝が最高と２０勝、３０勝投手が当たり前のようにいた当時の球界の情勢では大エースとはいえず、ペナントを勝ち抜くためには、酷使に耐えれる若き働き馬を常に必要としていたのだ。それがチェーンエースと言われる７人の投手たちだ。色男過ぎたために女性ファンから刃傷事件の標的となった”アンダースローの元祖”武末悉昌。酒飲み過ぎて、高橋ユニオンズに飛ばされた江藤正。野茂のように剛腕で野茂のように大食漢の服部武夫。くねくね投法の大神武俊。早稲田のエースはプロでも即エースを新人２０勝で証

明しながらそれっきりの木村保。そして中村大成、昭和３０年、つまり、三原西鉄の黄金時代に一矢を報いた年のエース級投手。その中村大成と同じ昭和３０年に大活躍したのが、これからマウンドに上る宅和本司である。宅和本司はチェーンエースの宿命から逃れられないように、たった２年で実質的な投手生活の幕を下ろしたが、このたった２年の活躍が、のちの稲尾や堀内、池永、尾崎、松坂ら驚異の高卒新人の先駆けだったこともあり、宅和の名前は彗星のように現れては消えたチェーンエースの中でも一際後世に光を放つことになる。

　鶴岡南海の栄光を下支えするために身を削り、そして消えたチェーンエース７人の中から宅和だけがベンチ入りの栄誉を与えられたわけであるが、それはただの功労者への配慮ではない。

「鶴岡監督はいってました！　うちのエースは杉浦やが、もう一人エースがいると！　え、それは誰ですかと、僕がしつこく聞いても鶴岡さんはついぞはっきりとした名前をおっしゃられなかったんですが、勝っても負けても９回に投げるのがその投手やとおっしゃられてました！　それが宅和さんだったんですね！」

「馬原もおるし、ペドラザもおる。２００勝投手の皆川さんもおられるし、杉内もベンチに入っている。それら歴代屈指の抑えと実力者を押しのけて、鶴岡監督が杉浦さんと並ぶエースと期待する宅和さんはどんな投球を見せてくれるんやろ」

野村の教え実践編

野村と宅和本司は生まれ年も入団の年も一緒の同級生だ。

「おい、宅和。球種は昔のままでええか？」

「おう、ノム、いいぞ……といいたいところやが、ノムとワシは組んだことあったか？」

と息ぴったりとはいかないのだ。宅和は入団一、二年目の酷使で肩を壊し、野村はその間、二軍でひたすら腕を磨いていたのだ。野村がやっと二軍から這い上がったとき、すでに同期生宅和は”過去の人”になっていた。だから、バッテリーを組んだ経験があっても、それは過去の人、宅和であり、全盛期の宅和ではない。野村は全盛期の宅和と実質、この試合で初めて組むことになるのだが、野村にも宅和にも、なんら気負いはない。

「カーブ、いや当時風にいうとドロップやな。とにかく、まっすぐとドロップの二種類でいい」

「まっすぐかカーブか、1か2かかいな。ワシが捕手でなくても、たとえ阿部でもできるな。配球の妙味のない投手なんぞ、面白くもなんともないわ」

「ふん、捕手は面白くないだろうが、お客様はお喜びになるぞ。なにせ、現代の打者が、名もよう知らんような投手に、あっさりと抑え込まれるんやからな」

「ふん、そんな上手くいくか。たとえそうなったとしても、ワシの影に怯えたんや。まっすぐ一本で追い込んでもみい？　ワシの影に怯える打者は次こそ、カーブがくるに違いないとまっすぐ一本にはれんもんや。そこに、お前が頑固に投げ込むまっすぐがずっどーんと来る。あっと見逃しても、もう遅い。これぞ、野村のリードなしでも、野村のリードが効いたようなもんや

「あほか、ノム。ワシの速球があってこそや。捕手のリードなんて関係あるかい」

「そうやのう、お前の速球があってこそよ。頼むぜ、同級生、とんでもないストレートで阪神打線を血祭りにあげいよ」
「おうよ、同級生」
野村は捕手の定位置に戻るやいなや、打席に入ったばかりの矢野につかまる。
「野村さん、宅和投手というのは、どういう球を投げるんですか？」
「なんや、矢野。知らんで打席に入るいうのか？　準備こそ戦いのすべてとワシがよう教えたのに、その準備を怠るとは、野村門下生失格よのう」
「すいません、野村さん。つい裏の守りに頭がいっぱいで……」
「それで、ワシが簡単に教えると思うか？　試合の中で一番価値のあるものは情報や一億円と相手の機密情報のどっちかを選べいうたら、ワシは……やっぱり、一億選ぶかのう」
「いや、それはそうですけど……」
野村の話術にしどろもどろの矢野であるが、野村はなんとあっさりと宅和の情報をバラしてしまう。
「カーブ、ドロップ気味の落ちるカーブとまっすぐやな。まっすぐは速いで。高卒新人から２０勝できるんは、快速球を持つ怪童しか出来んシロモンやからのう」
「まっすぐとカーブですか……」
思わぬ野村の言動に矢野は戸惑うが、相手が野村であることを忘れてはならない。
「なんや、信じきってないようやな。試合中は球試合ならぬ騙し合いやとよう教えたが、嘘をつくときは嘘をつく価値があるときだけや。今の矢野に嘘をついてもしょうがない。絶対打ち取れる案配の矢野に宅和が打たれるわけがないからのう」
「……そんなに凄いんですか？　宅和さんって」
「松坂、尾崎、堀内、田中のマー君……その系統と思ってええな」
「つまり、１５０キロは軽く出るレベルだと？」
「球速表示のなかった頃の投手やからのう。とにかく何キロ出るか、

ワシも楽しみや」
「……」
矢野と野村の腹の探り合いはここでいったん打ち切り。投げたくてウズウズしている宅和がすでに振りかぶっていたからだ。
５５年前の幻の怪童のベールがつに脱がされる。はねるようなワインドアップから、教科書どおりの見事なオーバーハンドから、角度のついた快速球が投じられる。
様子見なのか、それとも裏の攻撃で頭がいっぱいなのか、矢野は手も足も出ず見逃すしかない。
「ナイスボール！」
思わず、野村がそう叫んだように、宅和のストレートは糸を引くように野村のミットに収まった。
「１４８キロ……」
「１４８やな……。球児よりは遅いが、ズドンとくる球威はこっちのが上やろ？　球児？　球児といえば、裏の回はやっぱり、球児が出てくるんか？」
「藤川ですか？　そりゃもちろん、抑えは球児しか……あ」
まずいと思っても、もう遅い、矢野は自ら、自軍の戦略を明かしてしまったのだ。
「あ、もクソもないわ。球児が投げんで誰が投げるんや。久保田に９回一点差、門田、ワシ、松中が抑えられるわけがない」
「そ、そうですね……それじゃ、仮に球児が来るとしましょうか？」
「仮もクソもあるかい。球児以外に誰が投げるんや。しかし、胸糞悪いな、ワシが阪神を一年目から優勝させて、世間の大ヒーローになろう思うたところに、ドラフト一位がどこの誰かわからん、ごぼうみたいな高校生やぞ？　即戦力投手をプレゼントするのが、大監督を招く時に礼儀ちゅうもんや。その藤川が阪神の監督時代だけやなく、今のワシも苦しめようとしているとはのう」
「その、藤川ですか、あの、こんなこと、聞くのはおかしいとは分かっていますが、その、藤川はまっすぐ一本で行った方がいいです

かね？　それともカーブやフォークを織りまぜて、コンビネーションで打ち取ったほうが……」
「あほか、なんで必ず対戦する打者に聞くんや」
「そうですが……」
「ワシが、お前に疑問を感じたらなんでも聞け言うたからか？　ワシに分からんものはない、ワシに分からんのサッチーと長嶋の性格だけやと言うたからか？」
「ええまあその……。まっすぐ勝負の方が球児は乗っていけるでしょうし、万が一打たれても悔いが残らないと……」
「あほか、悔いが残るも残らんもないわ。結果、打たれたらそれは失敗や。悔いが残らん投球したから、いいってもんではないぞ」
「……そうですよね！　さすが、野村さんです！　悔いとか投手のプライドを考えちゃいけないんですよね！　勝てばいい、結果が出ればいい、捕手はそれだけを考えるべきですよね！」
　野村の言葉に吹っ切れた矢野であったが、バットはよく振れない。二球目もさらに加速した宅和のストレートに見逃すと、
「オレには野村さんのリードのクセがわかる！　あれだけ毎試合、配球を叩き込まれたら、いやでも野村さんの考えが透けてくる！　２－０で追い込んだら、一球、高目の釣り球を見せて、高低の感覚差を利用して、ドロップを落とすと見せかけて、まっすぐをズドンと外角に決めてくるのも読める！」
　矢野の思いはずばり、野村のリードに反映されるが、野村はバレバレのリードでも矢野は、宅和を打てるわけがないと見下ろしているのだ。
　結果、１キロ刻みに加速する１４９キロに矢野のバットのヘッドは出てこず、半端なスイングで三振をコールされる。
　次打者の８番鎌田は、守備の人。出塁すらも期待されていないが、反骨の人、鎌田は打てる気満々だ。
「ノムさんに宅和さん、オレを舐めるなら舐めてくださいよ、コツンと打ち砕いたるから」

意気込みだけは４割打者、サンテレビで７０を越えてなお、毒舌混じりの解説を続ける鎌田らしいが、通算打率は．２３４、出塁率は．２６１、そして長打率も．２９５とオール二割台、打率と出塁率の差もほとんどなく、打撃の粘り強さも期待できない鎌田は、１イニング全力投球の宅和に軽く捻られる。力ない打球が二塁に転がるが、

「二塁にいつの間に、小久保がおるねん！」

鎌田は二塁小久保をチャンスと見て、全力疾走を怠らないが、二塁小久保は、辻、福良、大石、白井一幸らが一斉に衰えた年に当たった幸運とはいえ、ゴールデングラブ経験ありのそれなりの名手である。

力ない凡ゴロはなんなくさばけるのである。

「くっそー、いつも阪神の連中をボロクソに言うてるのに、これはカッコ悪いなあ～　まあええわ、ワシももうええ年、年寄りの毒は笑って許してくるもんや、あはは」

と鎌田は毒の矛を収める気はないらしい。これで二死、九回表の攻撃があっさりと終わるかどうかは９番のこの男にかかっている。

「はああ～　回ってきてもうた……回ってこんでいいのになあ、どうして先輩方は回したんだろ？　オレへの嫌がらせ？」

と相変わらず、うつ状態の新庄。回るもなにもこの回３人目の打者の新庄が代打を出されない限り必ず打席が回るのだ。それもわからないほど、うつなのか、それとももともと、危うい知能の持ち主なのか。とにもかくにも、新庄の打席の結果で多少なりとも藤川への重圧が変わるに違いない。あっさりと三者凡退ならば、ホークスに流れを渡すし、まぐれの一発があれば、ホークスを半ばあきらめさせるのだが、はたして。

名は体を表す

新庄のまさかに期待をかけ、堕ちていくばかりの人生をひっくり返そうと企む男が福岡ドームのスポーツバーにいた。

「おい、新庄。打たな承知せんぞ。オレは阪神の勝ちに賭けたんだ。ハンデはホークスに1。つまり、このままだと同点引き分け扱いになり、オレの望む払い金が返ってこないんだ」

一際図体のでかいこの男の正体は。

「新庄、てめえ、ソロ打てこら。打たな、また鳴尾浜の二軍時代みたく、ジュース買いに行かせるぞ、こら」

「もしかして、中込じゃないか？」

「なんや、オレを呼び止めるんは？　は、あなたは！」

「あたなやない、球界の大先輩であり、阪神ＯＢでもある青田昇さまや」

また、顔を表す歴史を彩る好試合の中に黒い交際の影。ハンデ師総帥の青田が、村田勝喜に続き、中込伸を発見したのだ。

「青田さん……」

「聞いたぞ、中込。お前が監督になるとはのう……」

「台湾っすけどね……」

「台湾でもたしたもんや。プロの一軍監督いうのは、なかなかなれるもんやないからな」

「その後は聞いてないんですか？」

「アホか、このワシが情報収集を怠るわけないやろうが」

「……ですよね、なにせ、今時、八百長に首を突っ込んだ日本人なんて、この世に戻ってきた青田さんにとっては一番気になるニュースかもしれませんねえ」

「よう日本に帰ってこれたな、台湾つうか、日本以外のアジアの国は、外国人の犯罪にとくに厳しく、容易に国外脱出できないと思うたが」

「できないっすよ。ただ、この大会だから帰ってこれたんです。永久追放、犯罪者、すべてが許される大会ですから。そして、流れる時間の外に置かれた大会、オレが逃げようとも、時間の歪で迷い子になるだけですから」

「そうか、そうよのう。なにせ、野球賭博が公認された大会やからのう。なんでもありやな」

「青田さんなんでしょ？　見事なハンデをつけたのは？　そのとおりに接戦ですね」

「ふん、たまたまや」

「たまたまの予想が今のオレを苦しめるんです。１－０で阪神勝利じゃダメなんです。新庄のまさかの一発を放てば、２－０になって、オレの総取りなんですよねえ」

「あほか、新庄が打つわけがないわ」

「まあ青田さんがそういうなら、そうなんでしょうけどねえ。まさかが起きるのが野球っすよ……」

中込は人生をかけていた。新庄が打てば、人生を取り返すほどの大金を得ることができる。だが新庄が打たず、藤川が追いつかれたりしたら、中込の人生は闇の世界で閉じることになる。

「新庄、打てそうか？」

「打てるわけないでしょ、ノムさん……」

弱気な新庄はこのとおり、守備の時のような精気はどこにもない。

「その前に、お前、宅和がどれだけの投手か知っとるか？」

「宅和本司投手、福岡県立門司東高等学校（後の　福岡県立門司高等学校）から５４年、南海に入団。いきなり２０勝を上げるなど、南海の大エースとして君臨。この年と翌年に獲得した最多勝、高卒から連続はのちの松坂しかマークしていない記録……」

「なんや、お前、どうした！　お前らしくないほど知っとるやないか」

「ベンチでも、後ろのほうで小さくなってるしかないんですよ、僕

みたいな実力不足の選手は。だから、選手名鑑がお友達なんです。隅々まで読み込んじゃいましたよ」

「で、宅和はどんなボールを投げるんや？」

「……えっと、選手名鑑には書いてませんでした……」

「あほか、相変わらずやのう……だが、ネクストで何球も見たやろ？」

「え？　ぼっとしてた。あ、そうか！　ネクストサークルで前の打者にどんな投球をしているかを観察すればいいんだ。初めてあった投手も初めてあった気がしなくなる！　さすが、野村さんですね！　長年、野球をやられれば、色々な野球のやり方を覚えるんですね！」

この調子の新庄だ。うつ状態の精神状態に宅和の情報が一欠片もなければ、打てるはずがない。

「打て、打てよ、新庄！」

「期待かけるだけ、心の無駄やぞ、中込。新庄に宅和が打てるわけがない」

そんな人生切羽詰った中込に、場違いの明るい色合いの声がかかる。

「中込さ～ん、僕の作ったウーロン茶ができたあるヨ～」

と、紙コップをふたつ両手にそれぞれ持ち、中込を振り向かせたのが、これまた大柄な郭李建夫だ。

「郭李、うっさいわ、ウーロン茶なんぞ、どうでもええわ、今は新庄が打たないかどうかがすべてなんだ！」

「そんなこといわんで、中込さ～ん。僕の作った手製のウーロン茶ヨ。日本人が作ったのに負けないからヨ」

郭李といえば、今でこそウーロン茶作りの名手として知られるが、もともと野茂以上のフォークと剛球を持つスーパー投手として阪神に入団した投手。その郭李を飲み食いに誘い、ダメにしたとされるのが、この中込である。太りに太り、腰のキレを失った郭李建夫は、９２年のバロセロナ五輪で全日本を打ち破った投球を一回も見せる

ことなく、消えていったのだ。
「ところで、このバーコード頭のじいさん、誰？　中込さん」
「あほか、その人は、青田昇さんや！」
「青田さん？　ああ～あのズームイン朝でジャイアンツ応援してたじいさんですか。これはこれは」
「失礼すぎる、郭李！　そのじいさん、ものすごく怖い人なんやぞ！」
「中込さん、怖い人いうんですか？　そりゃ、とっても怖い人なんでしょうね」
　失礼すぎるのも度が過ぎると、青田でも苦笑いを浮かべるしかない。
「まあ、なんでもええ、ところで、郭李よ、ワシの分のウーロン茶あるか？」
「あるわけないヨ。青田さんは、勝手に販売機で買ってきなヨ」
「ふん、そうするわ……」
　と、三人が台湾日本融合のコントを繰り広げている最中に、新庄は手も足も出すこともできず、追い込まれていた。
「スッゲ～　なんだ、このボール？　１５０出てるぞ～　僕に打てるわけがないわ」
「おい、新庄、お前、腐っても元大リーガーやろが？　１５０キロくらいイヤというほど、見たやろ？」
「なにいってるんですか！　野村さん！　日本で二割そこそこのセンスのない打者がメジャーなんて夢のまた夢ですよ！」
「あかんな、記憶が混同しすぎて、自分がメジャーにいたことすら忘れているわ。しかし、こういう新庄は怖い、要注意……する必要あるか？」

危ない橋を渡るのはもうよそう

１－０の動きの少ないゲームながら、選手交代は頻繁に行われ現在の打順はこのとおりだ。

真弓９　吉田６　藤田平３　景浦Ｄ　三宅５　赤星８　矢野２
鎌田４　新庄７
広瀬８　樋口９　門田Ｄ　野村２　松中３　小久保４　蔭山５
柴原７　川崎６

阪神は、積極的な守備交替で黄金の守備陣形を形成し　一方のホークス小久保にいたっては、サードに始まり、ファースト、そして今守るセカンドと、内野を一回りする勢いだ。さすがにショートにつくことはなさそうだが、勝負が延長に縺れるとその可能性も捨てきれない。

「新庄、打てよ。打たな、承知せんぞ」
「おい、中込。新庄が追い込まれて、打てると思うか？　アイツが打てるのはただでさえ真ん中気味の甘いボールに限られるのに、宅和ーノムのバッテリーやぞ？」
「やってみないとわからんじゃないですか、青田さん。新庄はあれでもメジャーで４番を打った男ですよ？　意外性の男ですよ？　奇跡を起こすかもしれんじゃないですか」
「ワシが信じられんのはそこよ。新庄がメジャーいいって、しかもそこそこの数字を残したとは、どうも信じられんのよ。メジャーも落ちたんか、ワシがこの世を去ってから、新庄が急成長したか。今日の新庄見てると、ワシがよく知る新庄とかわらんから、おそらくメジャーの拡大路線で新庄でも出番と数字を残せるまで、落ちたんかのう」
「青田さんは新庄を低く見積もりすぎっすよ、打ちますよ、新庄は」
「宅和が打てるわけがない。メジャーの二線級が打てても、宅和が

打てるわけがないんや。松坂？　そんなんよりも、宅和のが上や。宅和が外角にズバリと決めれば、新庄なんぞ、一分も打てる確率ないわ」

「お言葉ですか、青田さん。その外角投げておけば、大丈夫だろうのだろうが命取りになるかもしれませんよ。宅和さんは見たところ、きれいな順回転のフォーシーム。その回転のいいきれいなボールが、野村さんの構えたミットにピタリと決まれば、新庄は一溜りもないかもしれませんが、前の二打者にこの新庄うへの二球をみると、絶妙な制球力の持ち主とは思えない。球の力で微妙な制球力のなさを補うタイプです。つまり、狙ったところにいかない可能性がたかい。野村さんのミットよりも内側に入る危険性が高いんですよ。バットが外側から大回りに出るタイプの新庄にとって、外角すこし真ん中内よりのボールは絶好球になりえるんです。オレのように、ストレートが勝手にスライド回転するいわゆる真っスラなら、新庄の芯を外すでしょうが……」

「新庄はスタンドにぶち込むいうのか？」

「ええ、見ますよ」

「監督経験者はいうことが違うのう。物事を一面からみない、視野広く多面的に見れるな」

「いまさらですよね、今の視野の広さがあれば、オレ、あんなに負けなかったっすよ。もっと勝ってましたよ、暗黒時代の阪神をバックにしててもねえ」

「なら今、投げればええ」

「キャンプ参加の誘いすらないオレっすよ？　まあ薮さんがベンチに入ってて、オレが入ってないのもおかしいすよね。暗黒時代を支えたエースへの労りかどうか知りませんが、薮さんならオレのが上っすよ。多彩の球種にそれなりのストレートの持ち主の薮さんは、逆に一流選手の餌食になり易いんですよ、クセのないフォーム、クセのないボールですからね。ならオレのように、ずしりと重いボールに素直じゃないまっすぐを持つ投手の方が面白いと思いますけど

ね。監督オレなら、贔屓目でなく、藪か中込を選べと言われたら、中込を選びますよ」

　中込のかける期待に新庄は応えることができない。宅和がえいやと投げた外角カーブこそ、バットが止まったが、続けて投げられた外角のストレート、しかも、中込の見立て通り、やや内側に入る甘いボールに化したが、今の心が表れるように波を打つ新庄のバットは、このボールをとらえ切れない。

「いけえ！！」

　しかし、波を打っても、新庄のバワーは捨てたものじゃない。打球はぐんぐんとセンター方向に伸びていくが、広い福岡ドームにぶち込むほどの当たりでもなく、この回からレフトに回った柴原のグラブにすっぽりと入る。ライトを守っていた8回に続き、この回も守備機会に恵まれた柴原。

「よし、なにかオレにオレにとボールがくる！　これは、裏の回にオレに打席が回ってくる予兆！」

　柴原はこの現象を、自分がまさかのヒーローになる予兆と捉えるが、柴原の打順は8番、裏の攻撃は3番の門田からだ。打順が柴原の感じるときめきのように、都合よく回れば、同点の場面で、二死満塁で柴原の打順が回ってくるのだが。

「くっそ～」

「残念やったな」

「でもまだ分かりませんよ、青田さん。裏で同点になるかもしれませんよ！　裏にホークスが同点に追いつき、阪神が表の攻撃で二点以上を取れば、オレの取り分は……」

「あほか、同点なんてあるわけないわ。藤川いう男はものが違うんやろ？　ワシはよう知らんが、皆が口を揃えるからな」

「……くっそ。オレが投げてればなあ、ゲームを面白くするのに、オレが監督ならなあ、いちいち理由をつけて、藤川以外の投手を出すのに！」

「なんや、中込、八百長はあかんぞ。賭けてもええが、ゲームに手を加えるのは野球の神に反しているぞ」
「……そうですよね、野球の神か……。オレのやった行為はたしかに、野球の神に版してたかもしれませんね」
「なら、投げるか？　懸命に投げて、打たれても、抑えても、野球の神に誤りを入れるか？」
「……次の試合、阪神のブルペンにいるのは、薮さんではなく、オレかもしれませんねえ」
「……」
青田は、村田に引き続き、中込も更生させたのか。いや、村田以上の悪童中込のことだ。次の試合までまっとうな場所に居続けることも難しいかもしれない。
「青田さん、ウーロン茶飲むか？　あんたの分を作ってきたヨ」
事情がよくつかめない郭李建夫は空気を読めず、だからこそ場を和ませる。

今日、一番の歓声が福岡ドームに響き渡る。バースが呼ばれたときよりも、掛布が呼ばれたときよりも、ボリュームを1メモリ上げた音量である。タイガースファンの待ってましたの絶叫と、そしてホークスファンの悲鳴だ。
「全球ストレート勝負？　門田さん、野村さん、相手にそれは危険ですよ？　危険だからこそ、やっと時の喜びは大きいですけどね」
絶対的守護神の藤川球児がついにマウンドに上がる。

藤川は真っ向勝負を選ぶのか

「回って来い、まわってこい、マワッテコイ、８番のオレのところに回って来い。ヒーローはオレだ。野手はたった一球でヒーローになり、投手はたった一球で戦犯になる。それが野球だ。だからヒーローはオレだ。門田さんから始まる裏の攻撃。門田さんと野村さんを一発を警戒するばかりに、阪神バッテリー、おそらく、藤川、いや絶対確実に藤川球児と矢野さんのバッテリーは、二人を歩かせて走者は一、二塁。５番の松中はバントさ。三冠王のオレ様にどうして、バントなんだと、松中は怒りをあらわにするが、オレがヒーローになる運命どおりに運ぶこの試合、松中はめったにしないバントを、へたくそなりに成功させる。そして、小久保さんは満塁策で歩かせてる。これで７番の蔭山さんに回るが、運命のシナリオは、蔭山さんを主人公にしない、なぜなら、主人公になるべき人物は、その後ろ、つまり、オレだからだ。１－０の満塁。投手が球児で、打者はオレ、柴原洋。試合はクライマックスで、福岡ドームを埋め尽くす観客をどう思うだろうか？　よかった、柴原で。ところでどうして柴原ていどがベンチに入ってるんだといぶかしがる向きの方が多いだろう。だが、舐めてくれて結構。球児がカッコよく力でねじ伏せようと思ってくれて結構。なぜなら、力勝負相手こそ、オレのミート巧みの好打者ぶりが発揮できるからだ。左中間に弾き返された打球、門田さんに続き、二塁走者の野村さん……逆転の走者、野村さんがそのままってのもおかしいか、木塚さんあたりが代走に出てて、一気にホームに還ってくる……」

　柴原の妄想は暴走する。柴原の想像通りのシナリオが描かれれば、守備から入り存在する気づかれていない柴原が一転、大ヒーローになるのだが、絶対的守護神藤川球児は、ご丁寧にドラマ作りに協力してくれるかどうか。

「矢野さん、どうします？　速球勝負でいきますか？　それとも変

化球でいきますか？」
「あほか、この場面に最初から決める余裕あるかい。その時、その時、最善のボールをオレが選ぶまでよ」
「最善のボールですか。もし、僕が本調子ならば、速球が最善のボールになりますけど、全球速球なんてこともありますか？　もちろん、一球ごとに矢野さんが最善のボールを選択した結果ですけど」
「あほか、全球、ストレート勝負をする場面でも相手打者でもない……わといいたいところやが、球児、お前が本調子ならば、全部、ストレートを要求するかもしれんぞ。悔いが残るとか残らないの問題やない。それが最善やからや。お前のしょんべんカーブや、申し訳なそうに落ちるフォークよりも、ストレートのがまだ信用できるからな」
「ふふふ、しかし、気持ちイイですよね。０６年の球宴でカブレラと小笠原さんをストレート一本でなぎ倒したときよりも、アドレナリンが噴出されるにちがいません。なにせ、歴代三位の本塁打の門田さんに歴代二位の野村さん、そして三冠王の松中さん相手ですから」
「都合いいシュミレーションはやめろよ、ともいいたいところやが、お前はやって不思議やないからな」
藤川球児に胸を矢野はミットで叩き、気合を再注入する。
「任せたで」
「お任せしてもらって結構ですよ。必ず、ご期待に答えしますから」

「３番、指名打者門田。背番号６０」
門田が屈伸をしながら打席に入る際、なんと野村の元によって、一言二言、言葉を交わすのではないか。門田と野村といえば、犬猿の仲で有名な関係。監督野村のいうことさえ、門田は耳を貸さずに自分のプレースタイルを貫いたものだ。野村から歩み寄るならまだしも、門田から野村の元に向かうとは、門田はそれだけ、この打席にかけているのだろうか。

「野村さん、出ましょうか、打ちましょうか？」
「どっちでもええわ、どっちにしろ、ヒーローはワシや。お前が本塁打を打っても、塁に出るだけでも、ワシはサヨナラ弾になることは変わらんからな」
「それで、打つか出るかはどうしてらよいでしょうかねえ」
「どうするもなにも、何も考えてないお前にアドバイスなんぞあるか。ただ思いきり、来たボールを振り回すだけのお前に」
「いや、この場面、私もチームのための打撃をやってみたくなったんですよ」
「なんやと？」
「私のいたときのホークスはずっと弱かったでしょ？　一度、野村さんが監督の時に優勝しましたが、それも前期優勝でたまたまシリーズに歩を進めただけのもの。ずっと弱いチームにいたら、チームのためにプレーをするなんて、馬鹿らしくなって、自分がいかに気持ちよく試合をできるか、それだけを考えて野球をやってきましたが、このゲーム、いやこの大会、ホークスは優勝できるチームでしょ？　ならたまには勝ちを追求する野球をやってもいいかなと思ったんですよ」
「ふん、いまさら遅いわ。ワシが監督の時にその境地に達してれば、南海もなくなることはなかったかもしれんのになあ。まあええわ、門田。藤川は振り回して打てる打者やないぞ」
「そうですか。むっと来るところですが、野村さんがいうならばそうかも知れませんね」
「当てにいく打撃はすることはないが、力と力の勝負だの、フルスイングして満足だの、そういう打撃なら、むこうの思うつぼや。アッパー気味のお前のスイングなら、球児の浮き上がるストレートに合うわけないからな」
「そうですか、フルスイングでもなく、当てにいく打撃でもなく、コンパクトで力づく振れですか、私の打撃の辞書にはない、半端の打法ですが、仕方がない……」

ハリーアップと球審ん円城寺に急かされた門田は、ようやく打席に向かった。

「フェンスぎりぎりのホームランでもええか、いつもならそんなシケたホームラン打つくらいなら、空振り三振のがましと思うオレやが……」

眼光鋭く、藤川を睨みつける門田。藤川も負けてはいない、門田から目線をそらさない。

15秒ルール

「かーどた！　かーどた！」
「ふーじかわ！　ふーじかわ！」
　両軍に絶え間ない声援が送られる中、もう一人の主役である矢野は入り球に頭を悩ませていた。
「ストレートで入るか、カーブか。それとも意表をついてフォーク？　門田さんはじっくりと自分の好きなボールを待つ典型的な慎重打法がモットーのスラッガーだ。フォークを初球に投げたところ、振る素振りもなくなんなく見逃すだろう。完全に無駄球に終わる危険性が高い。ならば見逃しても、ストライクがとれるカーブでいくか。ただ藤川のカーブは、普通のカーブすぎる。ストレートを頭に入れてこその、ポッと抜けるカーブだ。門田さんは、一球も生のストレートを体験していない。つまり、ストレートの驚異に怯えることなく、カーブを体験できる。もしも、、門田さんが慎重に勝負球を選ぶスラッガーの本質の禁を破ったならば？　初球狙いに切り替えて、一発同点弾を狙っているならば。ややアッパー気味にヘッドが回ってくる門田さんのスイングと、藤川のカーブの軌道は合致する。初球いきなり同点となったとしたら、もうホークスに流れこむ勢いを止めることはできないだろう。いくら藤川とはいえ。、その時点でジ・エンドに限りなく近づく……。ストレートか、結局、ここにいきつくんやなあ。入りがストレートなら、決めるのも結局ストレートになるんか。これが藤川球児だ、といえばその通りやが、もし打たれたとしたら、マスコミは糞味噌にオレらバッテリーを叩くやろな。球宴のお祭りでもないのに、ストレートの力勝負を選んだ、愚かなバッテリーやと……」
　しかし、矢野は予見される批判を恐れず、サインはストレートだ。藤川は待ってましたとばかりに、矢野が一本指を出したその刹那にうなづく。

「野村さんも言うてたな。悔いが残るとか残らないとか、そういうくだらない価値基準で投げるボールを決めるなと。打たれないために最善のボールを選択しろと……。オレは最善のボールを選択したんや、それが愚直のストレートでなにが悪い。打たれても悔いなしや……。あ、くだらない価値基準をもとにしてしまった……。まあええわ、とにかく、ストレートを投げれば、門田さんは打ち取れるんや」

うなづいた瞬間に、門田はストレートを投げてくることを察知した。ストレートを投げたくて仕方がない投手が、寸暇なく首を縦に振るならば、それはストレートのサインが出た証しであると、長年蓄積した経験から見破っていたのだ。

「どうぞ、どうぞ、ストレートどうぞ。最高のストレートを投げてきてくださいな。山口高志を体験した私には、どんなストレートでもスローボールですから」

と門田はすでに打った気でいるが、サインが出てからが長いのが藤川の投球術。走者がいなくても常にセットポジションの体制から、ボールを長く持ちなかなか投げない。藤川自身の精神の統一と、打者をじらす狙いがある。

１５秒ルールもおかまいなし、藤川はボールを握って、１５秒たっても、まだセットポジションの体制のままだ。２０秒、２５秒……それでもまだ藤川は投げようとしない。しかし、門田も精神の揺らぐことなく、高めた集中力を切らすことなく、藤川の投球をじっと待っている。藤川は、門田が息を抜く瞬間を待ち、その隙を狙って、投球をしようとしたが、門田に隙がないとわかれば、自分のタイミングで投げるだけだ。

３０秒……１５秒ルールの倍の時間を要しても、藤川はまだ投げようとしない。そして、３５秒、ゆっくりと足を上げる。しかし、その瞬間に、球審の円城寺が腕を大きく横に振り、タイムをかける。

間合いの長さを嫌って、門田がタイムを要求したわけでもなく、円城寺自らがタイムを取ったのだ。おそらく、門田の集中力が切れ

ずとも、円城寺の集中力が切れたためだろうか。円城寺の時代の投手は、揃ってテンポが良く、藤川のような間合いの長い投手は稀だっただろうか。タイムがかかっただけでお咎めなしで終わったが、矢野には心配の種が生まれたのだ。

「まずいわ、これはまずいわ。円城寺さんが藤川の間合いの長さを気にしている。無いも同然の１５秒ルールの適用される可能性もあるぞ……まずいわ、もしそうなれば、藤川のテンポとリズムが根本的に崩れる。一球、一球、いちいち、精神統一して魂こめて投げるタイプの藤川が１５秒ルールに急かされて投げたら？　同じ１５０キロでも、魂のこもってない１５０キロはの恰好の狙い球になるわ……。藤川のリズムを見るためにカーブをボールにして様子見するか？　いや、やっぱり最初に決めた通りや、まっすぐでいこう、門田さん相手に無駄なボール球は逆に危険。時には、開き直ることも必要や……野村さんもｙういうとったやないですか」

変わらず矢野はストレートを要求。藤川はうなずき、セットポジションに入る。また長い間合いをとり、矢野は時間を気にしてハラハラ。

「１０秒……１１、１２、１３、１４、１５……取られるかも……」

しかし、円城寺は１５秒ルールを適用しない。

「よっしゃ、しめたといいたいところやが、あんまりいい印象を与えんぞ。球児、投げえい」

藤川は矢野に急かされたわけでなく、自らも危険を察知して、２０秒すぎのタイミングで足を上げた。前の投球の約半分のセットポジションでの間合い。長く待たされた初球は、藤川らしく唸りを上げるストレートだ。球速表示は１５１キロ。矢野の心配を他所に、藤川は初球からフルスロットルの状態だ。

門田も待ってましたのストレートを振りにいく。渾身の直球と悔いのないフルスイングから、自分のリズムで投げれない、勝利追求のスイングとやや魅力は減退気味であるが、二人の勝負の行方は。

門田対藤川球児

それが起きたのは４球目のことだった。門田は、藤川の火の玉ストレートを初球にみて、勝利追求の打撃をさらに強く心がけることに決めた。

「こら、あかんわ。どらだけ凄いストレートいうても。山口高志や村田兆治よりは、凄くないはずやとタカをくくっとったが、山口高志や兆治より上いわんが、質の違うストレートや」

すると、門田は、初球にタイミングが遅れて、振りもできず、見逃しのストライクを取られたことを反省し、大きく上げる右足をいつもより低く、めいっぱい持つバットの握りもひとあまり余して持つことにした。アキレス腱切断の大怪我を負って以来、走れないならホームランを打つしかないと、中距離打者から長距離打者転向を決めた門田である。だが、美学を貫いても、藤川の初見のストレートを打ちきれないと、確率向上のためにアキレス腱断裂前の打撃スタイルにあえて戻したのだ。アキレス腱断裂後の門田が、．２９０　４０本を平均とするならば、アキレス腱断裂前の門田は、．３１０　２５本のイメージか。どこまでも遠くまでも飛ばしたい衝動を抑えて、あえて出塁優先の打撃を心がけるのだ。

「私がホームランを打とうと思えば打てる。だが、私と野村さんの連弾を期待するよりも、私が出て、野村さんの一発を期待する方が可能性あるでしょ？　私に一発が出ると、藤川の余計なプライドに火をつけて、まず野村さんは打てない。ならば、私はただ塁に出るだけでいい。私に木塚さん辺りが代走に出て、警戒するあまり野村さんへの注意が甘くなり……ほらこっちの方がまだ野村さんは打てそうでしょ？」

野村に助言を求めても、野村には媚びない門田の頑固さはさておいて、門田の心構えはチーム優先といえるだろう。

そして二球目、矢野は一球目の藤川のストレートの状態を見て、

今日の藤川はいつもの藤川、つまりストレート一本だけで押しきれるとの確信を得たのか、躊躇なくストレートを続けて要求する。二球目も同じく火の玉ストレート。高目から浮き上がるストレートに今度の門田は手が出る。勝利を追求したスイングは火の玉ストレートを当てることができたが打てることはできなかった。三塁側スタンドに飛び込むファウルボール。明らかに振り遅れていた。この二球目に門田は藤川への認識をまた新たにしたのだ。

「山口高志のストレートは低い身長から浮き上がるボール、兆治のストレートは高い角度から振り下ろされるストレート。同じ超剛球でも、この藤川のストレートは長身から振り下ろされる浮き上がるストレートや。つまり、山口高志と村田兆治の特徴を合わせ持つと考えてもいいわけやな。ふふふふ、私が引退して、プロ野球も魅力がのうなっと思うてたが、今の野球界にも私が体験したことのないボールを投げる投手がおるんやなあ」

とんでもない強者と思いつつも門田の顔は笑っていた。未知なる強豪との勝負が嬉しくてたまらないのだろう。そして3球目は見せ球のフォークボールだった。低目からボールゾーンに落ちる理想的な軌道であったが、村田兆治のフォークボールをイヤというほど体験した門田にとっては、この程度のフォークボールは取るに足りないものだった。矢野もフォークボールが勝負球になるとは思ってはおらず、次のボール、つまりは、また高目に浮き上がる火の玉ストレートを生かすための捨て球だった。

「打てるもんなら、打ってみい」

藤川は、少々芝居かかったセリフを発しながら、このボールを投げ込んだ。そして、このボールはセリフ負けしないだけの球威と球速とボールのノビ、ストレートに必要の3つを兼ね備えたボールだった。

門田は前の二球のストレートを見て、決めにかかるストレートはさらにとんでもないボールがくるだろうと、さらに打撃をコンパクトにして、この勝負球を待ち構えた。

その打撃スタイルは正解。力と力の勝負を選んだら、おそらく振り遅れて三振していたからだ。浮き上がるストレートを芯に近い部分で捉えた打球は逆方向に飛んでいった。

「やった」

門田は打った瞬間に手応えを感じた。その手応えは、ボールのやや下側を叩くホームランアーチストとしての手応えではなく、ボールの真芯を打ちぬく中距離打者としての手応えだったのである。

捉えた打球は三遊間にライナー性となった飛んだが、飛んだ場所が悪かった。史上最高の三遊間を抜けるほど、門田は中距離打者に成り切っていなかったのだ。

三塁手の三宅がまるで、飛燕のようにショート方向に飛んだ。そして、ジャンプ一番のダイビングキャッチでこのボールをつかんだのだった。

頭をかかえる門田とガッツポーズを作る藤川。二人の明暗を分けたのが、三人目の演者、三宅の守備力だったのだろう。

ダイヤモングラブ賞やゴールデングラブ賞など守備の賞があったならば、長嶋を差し置き獲得しただろうといわれる三宅の守備力が現代のファンにも披露されたのだ。

九回も一死、しかし、ホークスはもっとも頼れる打者を迎えようとしている。

「この人か……やっかいや」

思わず、藤川がつぶやく。

「しかし、だから面白いんや。藤川球児、恩師野村克也をなで斬り！　明日の見出しかな」

広末涼子と同級生　松坂世代　かわった名前にかわった顔立ち　兄弟バッテリー

「野村さんか。別に感慨もないし、かといって恨みつらみも特にないな。恩師いうほど、感謝すべき教えを乞うたこともないし、起用せんかった、このクソ監督いうのもない」

第二関門は４番打者の野村。ここまで当たりなしでも、怖すぎる打者には違いない。藤川にとってはプロに入ったときの監督でもあるのだが、矢野と違い、これといった感情を野村には抱かない。野村政権下の三年間、藤川の登板は２０００年の一年に限られている。だからといって、干されたわけとか、藤川の素質を見抜けなかったわけでもない。

当時の藤川は明確に力不足だったのだ。体も電柱のように細く、腕の振りや野球センスに見るべきものがあっても、体力づくりの段階の投手には、２０００年のように、間隔を開けて短いイニングを試し投げさせるくらいの起用法しかないからだ。

短いイニングに限られた藤川球児は爆発的な力を発揮するものであるが、当時の藤川球児は１４０キロがやっとの平凡な投手。ドラフト一位、松坂を回避しての指名といった付加価値がなければ、取るに足らない投手にしかみえないだろう。ただその付加価値が藤川をダイヤの原石に見せた。筋力がついたならば、なかなかの投手になるとの予見は誰の胸にも抱かれだろう。ただ、今の藤川のように圧倒的な投手に成長するとは誰も思わなかったはずだ。

それは監督だった野村もそうだったろう。期待のドラフト一位の二年目、体力づくりは卒業と一軍起用を決めたのだろうが、当時の藤川にはまだまだ素質を光らす基礎体力促進が必要だったのだ。結局、二年目の藤川のみせたパフォーマンスは、半端なもの、つまりは将来、大投手クラスに育つというよりも、ローテの3番手とか普通レベルのセットアッパー、その程度の投手になるだろうとの期待しか抱かせなかったのだ。

「ワシは腹がたったぞ。優勝5回日本一3回の名将を呼んどといて、どこの馬の骨か知らん、ごぼうみたいな体格の高校生を一位指名するんやからな」

野村も同様、藤川に対して、さしたる印象はない。三年のうち二軍はもっぱら二軍暮らしなのだから仕方がないことだろう。野村の著書や講演の話題にも、藤川が登場することは少ない。育てたわけでも、何らかの因縁があって、干したわけでもないからだ。

「まさか、こんな投手に育つとはな。ところで、矢野。ワシにもストレート勝負でいくのか？　ワシはカーブが打てない野村やぞ。その裏を返せば、カーブ以外の投球、つまりストレートにはめっぽう強いいうこっちゃ」

野村は打席に入るやいなや、矢野を揺さぶりにかかる。野村がカーブを苦手にすることはたしかであるが、藤川クラスのカーブに狙いを定めれば、スタンドに放りこむことくらい容易なものだ。矢野がまんまとカーブを要求するか、それとも、藤川のストレートを信じるか。

「……」

矢野は野村と挨拶を軽く交わしただけで、あえてその後の会話を続けない。

「なんや、矢野。大捕手のつもりかいな。城島ていどに場所を奪われ、二軍でふてくされているお前のどこが大捕手や。かあ～　偉くなったもんやなあ」

野村の逆ささやき戦術は続くが、矢野はそれでもうんともすんとも答えない。ささやき戦術への一番の対処法、話しかけれも応じない。この野村の教えを忠実に守っているに過ぎない。微動だにしなければ、情報は何も得られないからだ。

矢野は静かにコクリとうなずき、初球の入り方を選択した。初球はストレート。たとえ、野村がまっすぐにめっぽう強いとしても、今日の藤川は打ちきれないと踏んだからだ。

矢野の選択は正しかった。藤川がいつもの間延びしたリズムを取

れないにしても、藤川のストレートは唸りをあげたのだ。野村は果敢に初球を狙いにいくが、あえなく振り遅れて、空振りに終わる。

１５１キロ。藤川は自分のリズムを失っても、その火の玉ストレートの威力は、野村をも一捻りするだけの威力がある。

矢野はそして見切った。ストレートの連続で野村を打ち取れることを。そして、ストレートの影にフォークを交えれば、よりその確率があがることを。とにかく、藤川のストレートは打たれないとの確信をもったのだ。そして、野村の空振りがいわゆる三味線、ストレートをおびき寄せるためのわざとの空振りでないことも感じ取っていた。それも野村からの教えだった。三味線の空振りはすぐに分かる。演技が入るのだから、大げさなオーバースイングとか、いつもと違うタイミングで始動したとか、どこかにわざとらしい跡が見えるはずだと。しかし、野村のスイングはどこにもわざとらしい痕跡が見られなかった。本気のスイングで初球から藤川のストレートを叩きにいったのだ。初球狙いにも野村なりの狙いがあるのだろう。つまりは、藤川のストレートはカウントは進むほど攻略不可能になる、２ストライクと追い込まれてから窮地挽回は不可能である。だから、初球から狙いにいった野村は、初球攻撃の失敗で、実質的に敗北したに等しいのだ。

「く、思った以上に手元でのびてるのう、このまっすぐをなんで、ワシが阪神の監督の時に投げないんや……まあ愚痴やボヤキをいってる場合やない。だからといって、このワシが、おめおめとなんの工夫もなく、斬って取られると思うか？　グへへへ。打てないストレートを投げるなら、簡単なことや。打てるストレートにすればええんや、グへへ。それが、シンキングベースボールよ、頭を使う野球よ、ぐへへ」

汚く、こずるく、泥まみれで

藤川は勝ったも同然だった。野村が１５０キロを超えるストレートを打ちきれないとわかったからだ。たとえ、ストレートを捨てて、フォーク待ちに切り替えて、待ってましたのフォークが来ても、野村は打てないだろう。それだけ、初球のストレートの幻影は野村の脳裏にまとまりついて離れないからだ。だからといって、カーブを狙うことはしないし、矢野は要求しないだろうし、藤川もたとえカーブのサインが出てもうなづかないだろう。藤川のカーブはカウント球で精一杯であり、もし虚を突くためのカーブボールだとしても、切羽詰ったこの場面の決め球に選択できレベルにはないからだ。

藤川、完全有利。しかし、野村は負けを認めない。

「野球は配球がすべて。傾向を読み、状況を観察し、次に投げてくるボールが分かるならば、勝ったも同然。しかし、わかってても打てないボールがあるとしたら、それだけじゃお手上げ状態になる。ならば、そのわかってても打てないボールをわかったら打てるボールにすればいいだけや。簡単なことや。わかってても打てないボールを作り出すメカニズムを壊せるもんなら、壊せばええんや」

矢野は惑わない。連続のストレート勝負にちゅうちょしない。いくら、野村と藤川の力関係を冷静に読み取り、力勝負で間違いなしと判断しても、真ん中に投げ込まれれば、打たれることはあるだろう。ならば、矢野は、真ん中高目に構えるのみ。低目に構えれば、高目に浮きがちな藤川の球道はど真ん中になる恐れがあるが、高目に構えれば、その危険性も少なくすることができる。高目を狙って、より高く浮き上がっても、それはただのボール球になり、運がよければ、恰好の釣り球となるからだ。

「どっちに転んでもころでええ。一発で同点で迎えるは三冠王の大打者。セオリーには反してるが、これはこれでええんや。セオリーに反する野球をするなばら、それだけの確固たる理由がなければい

かんとは、野村さんの教え……あるじゃないか、立派な理由が……。大打者野村さんを打ち取るにはこの方法しかないって……」

藤川は、二球目のセットポジションに入る。相変わらず間延びしたセットポジションであるが、円城寺に１５秒ルールの適用をされるのを恐れて、藤川にしては、やや手短な持ち時間でモーションに移ろうとする。

精神集中、打者への焦らし、呼吸の整え、ボールへの入魂、これらすべてをわずか１５秒内でパッケージングするのだから、どうしても一つ一つの目的遂行は薄れざるを得ない。それでも１０割方のストレートといわずとも、９割に近いストレートを投げれるのだから、今日の藤川の調子は絶好調に近いといっていいだろう。

だがしかし、いつもよりコンパクトにしてセットポジションがさらに短くされたらば？

藤川がセットポジションに入って１０秒のあたり、野村がおもむろにタイムをかけて、打席を外したのだ。

「円城寺さん、藤川のセットポジション長すぎやしませんか？　あれじゃ、こっちの気持ちの集中力が途切れ、男と男の勝負ができませんて」

門田の打席ではじめにみせたような長すぎるセットポジションならば、主審の円城寺も野村の抗議も聞く耳をもっただろうが、平均よりやや長めのセットポジションには、さすがの円城寺も抗議をはねのけるしかない。

「そうでっかいな、気にしすぎやと？　まあええわ」

とおなとしく引き下がった野村であるが、再びセットポジションに入り、今度は１０秒の時が経つ前に、また打席を外し、藤川のリズム崩しを徹底する。

「まだ長いセットポジションや。これだから野球は間延びすると嫌われて人気低下するんや。ええんか、ああいう焦らしを目的の野球を認めて？」

焦らし野球のエキスパートといえば、野村である。長いサイン交換も、イニング間の執拗なジグザグ継投も、すべては相手の気持ちをはぐらかすためなのだ。その野村が焦らし野球に文句をいったところ、説得力は皆無だが、藤川に効き目はいっぱい。

すでに藤川は自分のリズムとテンポと集中の仕方を忘れていた。円城寺の指摘、そして野村の抗議により、藤川のセットポジションの時間は大幅に削られる。

これがいつものペナントレースならば、我関せずとはねのけて、自分のリズムで投げる藤川であるが、大先輩野村、古の時代の主審円城寺には逆らえず、ついに、藤川は、セットポジションに入ったら、上原なみのリズムで投げざるを得なくなる。

「打ったも同然や。グヘヘヘ、ワシの弾丸ライナーがレフトスタンドにぶち込まれるで」

しかし、藤川からリズムが失われても、減退した能力は、制球力だけだった。矢野が高く構えたミットが下に、下にと下がり、ど真ん中に投げ込まれるほど藤川の制球力は狂いを見せていたが、その火の玉ストレートの威力はそれまで同様、破滅的でさえあったのだ。

打ち砕こうと振り抜こうとした野村ｎバットを逆に粉々に粉砕。打球は豪華守備陣のどこにも転がらず、コロコロと藤川への投ゴロ。ゴールデングラブ賞の獲得実績ないとはいえ、藤川もフィールディングにも定評がある。だが、この投ゴロは誰でもさばける見せ場のない打球だった。

野村は走る気力なく、藤川はゆっくりと一塁に送球。藤川ー矢野のバッテリーは、野村のいやらしい戦略にも屈せず、門田に続き野村も葬り去り、二つ目のアウトを獲得したのだった。

しかしだ、野村はおめおめと引き下がる男ではなかった。次の打者の松中を捕まえると、ぽぞっと助言をする。

「初球や、初球、初球を打ちいけ。絶対に打てるから」

蒼い稲妻がセオリーを攻める

洞察力に優れ、視野を常に広く持つ矢野であるが、難敵野村を片付けた嬉しさから、野村が松中にボソリとつぶやいたことを見逃していたのだ。

一方の藤川は自分が三者凡退に切ってとるのを当然の出来事をし、野村と松中の一部始終を目しても、特に矢野に報告をすることもなかった。

舞い上がった矢野と、思い上がった藤川の運命はやはり、しっぺ返しにあうとの運命に帰結する。

門田、野村を打ちとってほっとしたバッテリーは松中をなめていた。ネームバリューに多少の見劣りするが、松中は三冠王。確実性と藤川をよく知る現役選手の特性を顧みると、さらなる難敵の登場と気を引き締めるべきだったのだが、気を抜いたバッテリーはあっさりと初球ストレートを選択する。門田、野村の時のように、深い観察と絶対の確信があって導かれたストレートではなかった。ただ、前の打者をストレートで打ち取れた、そのていどの理由しかなかった。

野村に助言をもらった松中は、強い確信を持ち打席にたった。松中への助言には、見過ごすことができない重大なポイントがあった。「初球を狙え」とはいったが、「初球にストレートがくる」とは指定してはいなかったのだ。いくら、野村とはいえ、配球予測に絶対の自信はない。ストレートのくる確率が高井といってもそれは絶対ではなく、思慮深い矢野のことだ、カーブやフォークでかわしてくることも十分に考えられる。だから、球種の特定はせず、はぐらかしたわけであるが、松中にはこの助言で十分。あの野村が初球狙いをほのめかしたのだから、初球ストレートの可能性は高い、なぜなら、藤川相手とはいえ、一番バットに当てやすく、初球から狙い打ちのできる球種はストレートなのだから。

確信と自信を持った松中は、初球のストレートを振り抜く。大方の予想どおり、ストレート、そして、野村の初球狙いの助言どおり、そのボールは打ちやすいコースにきた。

真ん中低目、いくら藤川のストレートとはいえ、低目のストレートは浮き上がらない。

このボールを捉えた松中のバットからはじき出された打球は音速の速さで二遊間を抜けていく。さすがのセカンド鎌田、ショート吉田の黄金の二遊間でも、この弾丸ライナーの前には一溜りもない。

「こんな打球か。面白くないなあ」

コロコロと転がる打球をセンターの赤星が処理。替ったところに打球が飛ぶの言い伝えどおり、交替したての野手に印象的な打球が飛ぶ終盤戦、赤星も自分のところにファインプレーで目立てるギリギリの打球が飛んでくると待ち構えていたのだが、飛んできた打球は守備機会もつかない（もちろん後逸したり、送球ミスをしたら失策はつく）ただの打球処理だったために、赤星は拍子抜けだ。

「球児、３アウト目は、僕のところ、それもギリギリ、前に落ちそうな打球とか、頭を超えそうな打球だけど、さすが赤星だから取れたって打球を飛ばせよ。新庄さんのままなら、とれなかったって打球を。肩や派手なプレーでは負けるけど、こと守備範囲の広さや、球際の強さは、新庄さんを凌駕することを、みんなに印象つけないと。このままじゃ、試合に出ていたことすら、誰の印象に残らず終わるもんなあ」

９回裏、二死一塁、一点差、松中ほどの打者に一発を浴びず、単打で済んだことに胸をなで下ろすべきなのであるが、それは通常のペナントレースの試合だ。

この試合は尋常でない打者が並ぶ。松中に続くのは小久保。逆転サヨナラホームランの可能性が十分すぎるほどある打者だ。

鶴岡監督も、最後までやるべき采配を怠らない。松中を呼び寄せ、代走の切り札というべき存在である木塚忠助を一塁走者に送った。

その遊撃守備力は川崎以上の評価があり、盗塁王を何度も取った

韋駄天選手だ。

阪神バッテリーは、小久保の逆転サヨナラに警戒しつつ、一塁走者木塚の足技にも注意を払わなければならない。

松中への不用意な一球がつくりだした、精神が棒切れほどに磨り減る場面。藤川はセットに入ると、一塁走者の木塚の出方を見る。

一点差、二死。鶴岡が監督をしてた時代までは走者を動かすことは完全なタブー。盗塁死ならば、そこで試合終了だからだ。だが、長嶋茂雄がセオリーを打ち破ることで、日本野球の常識を変えた。第一期監督時代に、このシュチュエーションで代走松本匡史に出した盗塁のサインを出し、盗塁成功、次打者の山本功児のヒットで同点に追いついたのだが、マスコミの論調はいたって、長嶋野球は無謀の一点張りだった。しかし、時代は長嶋野球に追随する。今では、この場面で走らせるのも野球のセオリーのひとつと認められているのだ。

「シゲの野郎がやったなあ。ワシはあの時、シゲのアホが走らせてと毒づいたものだが、今、同じ場面に立ち会うと、走らせたくなってウズウズしてくるわ」

長嶋監督以前の鶴岡野球は、はたして木塚を動かしてくるか。投手はクイックやけん制に定評ある藤川。捕手は飛び抜けた強肩ではないが、安定した送球で高い盗塁阻止率を誇る矢野。そして打者は、二塁に進めなくとも、一発長打で走者を還すことのできる小久保だ。

鶴岡の選択はいかに。

足にスランプはあるのか

一塁走者の木塚にかかる期待は、果敢なスチール成功か、スチールをバッテリーに警戒させて、小久保への注意を薄らげるか、スチールを仕掛けなくとも、抜群の走力と図抜けた走塁テクニックで、ホームベースを陥れるかの、いずれかだろう。

盗塁を敢行しなくとも、木塚の走力と成し遂げた実績はゲームの中枢に位置するのだが、その木塚の様子がどこかおかしい。

質実剛健の九州男児らしく、木塚は豪快な人柄で知られるが、塁上の木塚はどこか自信がなさげで、視点も定まらず、目をキョロキョロとさせている。

見かねた一塁コーチャーの森下走塁コーチが、木塚に駆け寄り、肩をかける。

「どうしたんですか、木塚さん」

「どうもこうもないぞ、森下。なんか、身が重い、足が出てこんのじゃ」

「身が重い？　足が出ない？　あなたのような韋駄天選手が急になにをいうとるんですか」

「なにをいうてるんやないわ、いうてるとおりや。かれこれ５０年ぶりの公式戦やろ？　重圧か、試合感か、なんだかわからんが、とにかく、ワシの体が金縛りのような状態なんじゃ」

「金縛り？　って、木塚さん、あんた、オープン戦では、全盛期さながらの軽快な守備や、走塁をみせていたじゃないですか！　キャンプ、練習試合、公式戦を通じてのデキは、遊撃手争いのライバルである川崎のムネよりよほどよかったじゃないですかいな。南海派はみんないうてましてたでしょ？　なんで、川崎がスタメンなんや、ここは、韋駄天木塚やろと。オープン戦とはいえ、的山やら、阪急の藤田らの強肩捕手から、軽々、盗塁を決めていたじゃないですかいな」

「あほう、オープン戦と公式の試合は、やっぱり違うんじゃい。しかも、九回一点差のツーアウトやろ？　失敗はすなわち試合終了の場面やないかい。足がガタガタ震えて当然じゃい」
「ガタガタって……」
たしかに、木塚はガタガタと膝を震わせている。木塚の言葉に嘘はないようだ。
「ほんまに震わせておるやいですかい……。木塚さん、この場面、スチールのサインがあるかもしれないですぞ？　鶴岡御大は、それだけ木塚さんの足と度胸を信頼している。サインが出たら、どうするんですかいな。私が、ブロックサインを返して、盗塁の取り消しを求めましょか？」
「あほう、余計なことするな。ストップのサインに反して、走ったことがあるワシやが、盗塁のサインに反することはないわ。それだけは辞めえよ」
「しかし、木塚さん。走ってアウトなら、それで終りの場面ですぞ」
「終りなら終りでええわ。ワシがサインに反して、走らず終わるよりも、ナンボかましじゃい」
「ナンボか、ましって、あーた、木塚さん……。まったく、大正生まれは、自分勝手すぎるわな……」
しかし、選手の状態を一瞬にして見破る眼力のある鶴岡のことだ。木塚の様子がおかしいと見抜けば、盗塁のサインを出すことはないだろうと、森下は思った。
木塚は走らずとも、阪神守備陣には驚異。この場面で代走に送られた木塚が足の不調など夢にも思わぬ阪神守備陣は、木塚を最高の走者と扱い、木塚の足に怯えることだろう。それだけで、木塚代走の価値があるはずとの森下の考えに反して、鶴岡親分は、『初球から走れ』のサインを送る。
「まさか、まさか」
いっそのことサインを無視しようと思ったが、鶴岡体制に逆らうことは、ホークス内で自らの地位を失うことに等しいことをよく知

っている森下は、そのままのサインを木塚に伝えたのだ。
すぐ近く、口頭で伝えれる距離ながら、木塚は森下経由のブロックサインで、鶴岡の意思を受け取る。ふんふんと頷く木塚であるが、その表情は不安でいっぱい。
この木塚の変調を、阪神ベンチが見逃すわけがなく、藤本監督は、後藤へッドとないやらゴニョゴニョ。
「おい、木塚のやつがなんかおかしいぞ、後藤へッド」
「へい、どっかおかしいですな。木塚のやつと私は同級生ですから、あいつのことはようわかりますが、ああいうふうなアイツはあまりみたことありませんな」
「緊張か？　日本シリーズの大舞台を何度も体験したアイツがいまさら緊張するか？」
「日本シリーズいうても、もう５０年前でっしゃろ」
「そうやな、感覚が薄れていてもおかしくないわな。ちゅうことは、盗塁いうのは出足がすべて。その出足が過度の緊張で奪われる木塚に盗塁のサインは……」
「ないでしょうな」
「よっしゃ、後藤へッド。バッテリーにサインを送れ、盗塁の警戒よりも打者に集中しろと」
「はいな、監督！」
後藤へッド経由で送られたサインは、藤本の見方そのままの『盗塁はない、打者集中』だ。受け取った矢野は意外な顔を見せるが、
「盗塁はない？　木塚さんは歴代の屈指の韋駄天走者なんでしょ？」
矢野は半信半疑。だが、木塚のことは、同年代の首脳陣の方がよくしっているはずと、矢野はそのまま受け入れてしまう。
藤川は何度かけん制をしたが、リード幅を狭める目的のもの、けして、過度に盗塁を警戒したわけではなかった。
盗塁を警戒しないならば、球種はストレートに限られない。カーブでカウントを取ることもできるし、フォークを見せることもできる。

だが、矢野は、半端な変化球ほど、小久保の餌食になることは、小久保の巨人時代に繰り返した対戦でよく知っている。だから、矢野は、絶対的な自信のあるストレートを要求して、藤川もそれを受け入れた。

過度の警戒はしないが、藤川は万全を期して、クイックモーションを怠らない。

盗塁の警戒をせずとも、ストレート、繰り返された牽制球、そしてクイックモーションの盗塁阻止の三点セットが揃ったわけであるが、木塚は藤川が投げた瞬間にスタートを切る。

「うっそ、やっぱ走ったやん！」

しかも、絶妙なスタートだ。初めてあたる藤川という投手、そして足と心の不調を訴えていたに関わらず、どうして、木塚は恰好のスタートが切れたのだろうか？

盗塁警戒にはストレートを投げてくると当たり前の読みをした小久保は、このストレートを本気でスタンドに放り込もうと、強振するが、火の玉ストレートの前にあえなく空振り、そして矢野は、間髪なく二塁に送球をする。

二塁で盗塁を阻止した瞬間、試合は滞りなく終わるが、しかし、矢野が低く這うような送球をした先に、すでに木塚は滑り込んでいた。土煙を上げて滑りこむ木塚。ベースカバーに入ったセカンドの鎌田にボールが届く前に、木塚は塁上で、着いた砂埃を払っていた。

スタート、スピード、スライディング、盗塁の三要素のすべてクリアしてしまった木塚。

「おい、木塚はん。どこが、不調なんや！　絶好調やないか！」

森下の驚きに、木塚はしてやったのいたずらな笑顔で返答する。

「あほか、森下。んなわけあるかい、このワシが盗塁で足が震えるって？　全部、演技や」

「くわ～　あのおっさん、人が悪いわ～。敵を騙すならまだしも、味方をも！」

頭をかかえる森下であるが、二死二塁、鶴岡監督時代にはなかっ

たセオリーを成功させたホークスは、タイガースを極限まで追い詰めたことになる。

柴原とはこの小説においてなんなのか

リスクを犯してでも動いた鶴岡と、それに応えた木塚の足技の見事さ。二人の信頼関係が、二死二塁、ヒットが出れば同点の状況を作り出したのだ。

木塚の状態を見誤り、ものの見事にスチールを許した阪神ベンチであるが、得点圏に走者を送られた動揺はそれほどでもない。逆に、この状況を利用してやろうとの心構えだ。

「一塁が空いた。小久保を歩かせる選択肢も出てきたな。どうや、後藤ヘッド」

「その辺は、あえて言わんでも、捕手の矢野はわかってるでしょう、藤本監督。これが、うかつな田淵が捕手なら、いちいち状況確認をする必要がありますが。グラウンド上の監督の異名もある矢野のことですから」

阪神首脳陣が矢野を大人扱いしたが、それとも、木塚の状態を見誤り、誤った指示を与えたことに懲りて、矢野任せにすることで、責任回避を考えたのか、いずれにしても、小久保の処遇は矢野の判断に任されることになった。

「一発で試合を逆転し、終わらせることのできる小久保。しかし、オレも球児も小久保のことを知り尽くしているし、右のスラッガーらしい脆さも同居している小久保や。小久保を歩かせれば、逆転の走者となる。続く打者は、前の打席でしぶとく四球を奪い取った蔭山さん、バットを短く持ち、コツコツと当てるタイプの打者は、球児がもっとも、いやらしく感じるタイプや。がしかし、蔭山さんを歩かせたところ満塁。もし、しぶとく速球を合わされて、ヒットを打たれたとしても、外野の前にポテンの単打が精一杯やろ。レフトに飛んだら、超のつく強肩の新庄がいるし、ライトに飛んでも、内野手あがりでコンパクトな送球ができる真弓さんや。いくら二塁走者の木塚さんが俊足とはいえ、一気にホームを陥れるのは難しい

し、勝負しにきても、ホームで殺せる自信のある両翼や。センターの赤星は、二人に比べて、肩に不安があるが、送球の精度は負けてはいない。万全の体に戻ってはりきるアイツのことや、レーザービームとはいかないまでも、好返球を見せてくれるだろう。いずれにしても蔭山さんに出塁を許しても、それは満塁止まりの可能性が高く、８番打者に勝負は持ち越されるはずや……。うん？　ホークスの今の８番打者、誰やったか？　最初に佐々木誠さんがスタメンに入っていて、代打の岡本伊三美さんが出たところはよく記憶しているが……」

　矢野もひどいお人だ。城島、松中、小久保と並び、ホークスの四天王とも言われたことのある（井口を合算すれば、五人衆）柴原の出場している事実を忘れているなんて。思わず、矢野はスコアボードのオーダーをみて、ホークスの８番打者を確認。

「そうやったな、柴原や、柴原……。満塁で柴原は結構嫌な感じやぞ。目立たないプレーヤーだが、ミート力は確か。球児のストレートといえど、合わせてくる打撃センスはある打者……。蔭山さんと違い、前進守備の外野の頭を超えるだけのパワーもある……。これも危険な打者にかわらんなあ……穴のある小久保を取るか、それとも小久保から逃げて、しぶとい蔭山さんや、何かを起こす柴原との対決を選ぶか。こんなんホントはベンチが決めることやけど、なぜか、監督、コーチから、なんのサインも指示もない。オレが決めろってことか？　しゃーないわ、決めたで……勝負！　小久保はこういう場面で力む打者や。そして、もう一人の代打の切り札がいたことを忘れていた、飯田徳治、飯田さんや、打点王と盗塁王に野球殿堂入りの大選手や。蔭山さんか柴原のところで、満を持して出てくることは十分考えられる。穴の多く勝負弱さもある小久保と蔭山、柴原、飯田が出てくる敬遠策を、秤にかけると、やっぱり、小久保勝負がベストの選択やな……」

　矢野は、見つめていた誰もいない一塁ベースから目を離すと、ネクストサークルのさらに後ろで、じっと自分の出番を待つ柴原は眉

をひそめる。
「勝負？　矢野さん、小久保さんは勝負弱い打者じゃないですよ。こういう場面こそ一発を放つ打者なんですよ！　小久保さんを敬い遠ざけて、蔭山さんに回すべきだ。そして蔭山さんは、オレに回すべきだ。さよならゲームのヒーローは、ひっそりと観衆の前に姿を表し、盛大な声援を受けながら、グラウンドを去るんですよ！」
　いつまでも、自分がヒーローになることを信じて疑わない柴原である。柴原の頭の中に駆け巡るシュチュエーションは、満塁の場面から、外野の頭を越す逆転サヨナラのタイムリーだ。が、しかし、その柴原、なんと打撃コーチ補佐の山村善則に呼び寄せられる。
「おい、シバ。あんまり、入れ込むなよ」
「山村コーチ、この場面で入れ込まずに、どこで入れ込むんですか？」
「そりゃそうやが、代打を送られたらがっかりくるだろ？」
「代打？　このオレに代打？　４度も３割を打った経験のあるこのオレに代打？」
「飯田さんもまだベンチに残っておられるやろ？　しかも吉永もおるし、さすがに田上はないやろうが、まだ代打が三枚も残っている。蔭山さんのところで、飯田さん。そして運良くお前のところまで回っても、吉永が代打。これが普通の策やろな」
「普通って、なんのために、オレが守備から地味に入っていると思うんですか！　なんのために、この小説の題名に意味ありげなさよならゲームと付け加えられてると思っているんですか！　すべてはオレがヒーローになる布石でしょうよ？」
「この小説？　なにをいうてるか、ようわからんが、とにかく、代打を送られても、気を落とすなよ、柴原、お前はまだ現役選手、この試合の心の傷が、ペナントに影響したら、かなわんからな」
「……く、そんなん影響しませんよ、なぜなら、この試合のヒーローになるのは、オレですからね。現実のペナントにも、いい気分を持ち込むだけですよ……」

となぜだが、柴原だけ、この試合が小説上の架空の試合であることを認識しているのだ。だからこそ、自分がヒーローになることを信じて疑わないのだろう。物語上、地味で目立たな人物に突如、スポットライトが当たるのは、よくある手法だからだ。

だが、柴原の思いを小久保が打ち砕く。藤川のストレートを思い切りよく振り抜いた小久保の打球は、高々とライトのスタンドに向かって打ち上がる。

「いけえ～　入れ～　って入ったら、オレのヒーローどころじゃないじゃないか！」

柴原のヒーローどころか、小久保の打球がスタンドに飛び込んだ時点で、この試合はホークス勝利で終わるのだが。

盛り上がってる中、一人冷めてるやつっているよな

盗塁を敢行されて、小久保への二球目。藤川の投じたストレートは、気持ちすることなく、空振りスポットの内角高目に、しかも程良く浮き上がるボールが投げ込まれた。

これまで幾度となく対戦した小久保と藤川の対戦からすると、このゾーンに藤川のベストでなく、ベターなストレートが投げ込まれれば、小久保はかなりの高い確率で空振りしてたはずだ。当てたにしても、ポップフライか、内野の頭を越すヒットがせいぜいで大怪我につながることはないはずのゾーンのはずだった。

しかし、勝負弱いレッテルがはられる小久保が、この場面、苦手とするコースののびあがるストレートを空振りもせず、ボールのしたっつらを叩くこともなく、上からかぶせるように振り抜いた打球は、ホームランアーチストらしく、４５度の角度プラスアルファの軌道となって、レフトスタンドに向かって弾丸となって飛んでいく。

「いけえ～」

ベンチで最前列でメガホン片手に大声で声援を送っていた川崎が、今日一番の声をからし、この打球の後押しをする。川崎だけでなく、ベンチ入りの選手、首脳陣が前のめりになって小久保の打球を見守っている。１－０の接戦ながら、ホークスはチャンスを潰すだけ鬱屈した展開が初回からつづいている。その鬱憤も小久保の打球がレフトスタンドにぶち込まれれば、すべてが台風一過のあとのように雲ひとつなく晴れるのだが、その前に立つ柴原だけは、微妙な表情を崩さない。

「入れ～って、入ったら、オレの打席は??　二死満塁、ヒーローになるのはお前しかいないってシュチュエーションで回ってくるオレの打席は?　もしも、このまま試合が終わったらな、オレはいったいなんのために試合に出てるんだ?」

打球を前のめりで見つめるベンチの中、一人しらける柴原。柴原

の気持ちが打球に乗り移ったわけでもないが、小久保の打球は、レフトのポール際の間際で、急激にドライブ回転がかかり、大きく切れていく。

阪神ファンの悲鳴とソフトバンクファンの歓声が織り交じったなか、打球はポールの左側を通過したように見え、そして、三塁塁審の橘高は大きく手を広げて、ファウルのジャッチを下す。

選手に時に高圧的な態度を取ることで、色々と問題の多い橘高審判であるが、この判定には特に意義を捉える向きはなかった。

二塁走者の木塚はファウルと見切り、打球の途中で振り向いた体を元の本塁方向に戻したくらいだし、総立ち状態のベンチも、ファウルとわかるやいなや、これまた元の位置に戻ったくらいだし、当の小久保も、打ち直しでもう一発とすでに打席を外して、バットを何度も振っている。そして、藤川も飛ばされた打球にショックはない。

「打ってもファウルのコースに投げたんじゃい、騒ぐな、ボケ」

と居直っているが、捕手の矢野は、藤川と正反対の反応を見せている。

「打っても、ファウルのコース？　とんでもないわ、打ってもどころか、明確な空振りゾーンに投げ込まれた投球や。小久保と球児の過去の対戦の相性からいったら、空振りしてしかるべき場所や。どうして打てた？　ストレートがくるとわかってるとか、そういうちゃちなもんじゃないわ。わかっていても打てないのが球児のストレート。打たれる自体が問題なんんや……」

ふと矢野は小久保の背中を見ると、矢野の目には、小久保から強い気が発せられるようにみえて仕方なかった。

「？　こんな小久保見たことないわ……。球児のストレートに気後れすることなく、逆にいらっしゃい、ぶち込んだるのオーラを感じるわ……ほんまに、これ、オレがよう知る小久保か？……うん、そうや、この小久保はオレがようしる巨人時代の小久保や、ベテランの味、やキャプテンシーが主に語られるソフトバンクの今の小久保

やないんやった。ダイエー時代の若々しい肉体の小久保や。１５０キロのストレートにも負けじと、広大な福岡ドームのスタンドにぶち込める、均整の取れたスラッガー小久保やったんや。時間は戻っている、そして打てないはずの球児のストレートに負けない肉体に戻っている……追い込んだに違いない……が、あとひとつのストライクがあまりにも遠くきつい……救いはボールを投げられる余裕が３つあることや、気持ちのはやる小久保をいかにボール球を振らせるか勝負やが……球児はそういうような投手やない。ボール球を交えての老獪な投球ができないタイプや……く、あとひとつのストライクで試合が終わるいうのに、とんでもない状況になってもうたな、クソ」

　あとひとつのストライクにも頭を悩ませる矢野。そしてホークスのベンチでは、川崎が一人気が乗らない柴原をつかまえては、注意を促す。

「こら、柴原さん。ちゃんと、声を出して声援を送らないからファウルになっちゃったてでしょ？」

「悪い、ムネ。もしホームランなら、オレの打席が……。だって、この試合のヒーローはオレ……」

「もう、柴原さん！　誰がヒーローになってもいいでしょ！」

「いや、ムネ。この試合はオレがヒーローになる流れなんだよ、だから今の小久保さんのファウルは運命、そして、小久保さんは四球かヒットあるいはむこうのエラーと試合が決まらない形であとにつなぐぞ。それがこの試合の筋書きなんだ」

「なにわけのわからないことをいってるんですか！　とにかく声を出しましょうよ！」

「わかったよ、ムネ。オレは一匹狼のキャラでそういうタイプじゃないんだが……」

　川崎から水島新司特別デザインのメガホンをもらうと柴原は声を出す。

「小久保さん、出塁頼みますよ～　四球でも死球でもいいですから

〜　ヒーローオレにつないでくださいよ〜」

「って、柴原さん……誰がヒーローになってもいいじゃないですか、チームが勝てば、まったくもう……」

　自分がヒーローになると信じて疑わない柴原であるが、結果的に盗塁援護となった初球の空振りに、特大のファウルに終わった二球目、阪神守備陣を真綿で首を絞めるようにじわりと攻め込むが、追い込まれて、ボールカウントがひとつもない、守備側に圧倒的なカウントであることもまた事実。

「追い込んだのに、こっちが追い込まれてるようや、それだけ今の小久保のスイングは脅威を与えるわ……」

　矢野はすっかり弱気、はたして弱気の矢野は強気一辺倒の藤川をリードできるか。

盛り上がってる中、一人冷めてるやつっているよな（後書き）

この試合だけで文庫本一冊のボリューム
たいしてドラマも起伏もないのにに

逆転の走者

矢野は、空いている一塁に小久保を追いやり、次の打者で勝負することを考えはじめていた。投手は藤川であり、歴史を貫くタイガースの守護神であり、かつ今現在のクローザーである。２－０の一見、守備側絶対のカウントシュチュエーションから逃げることは大きな恥であるが、打たれるショックはその日ではない。確実に現実のペナントにも尾を引くことだろう。

今後、交流戦だけでなく、日本シリーズでも、小久保と藤川が相まみえることは、十分にありえること。ここで打たれた、現実の勝負で、小久保に精神的有利に立たれることは間違いない。

「いっそ、逃げるか。逃げるが勝ちいう言葉もあるからな。いやいや、現実も大事やが、この試合も大事。現実の試合にかかるのは、生活やが、この試合にかかんは、意地とプライドや。どっちも大切なもんや。だから、勝利とプライドの両立する配球をせなあかんな……」

矢野は、横目でちらりとネクストサークルで誰がバットを持って、待ち構えているか確かめる。

「本来の打順では蔭山さんが入ってる7番やが、やっぱり、代打の切り札、殿堂入り選手であり、打点王である、鉄人飯田徳治さんがおられるな。蔭山さんで後ろにつなぐよりも、飯田さんで決めることを選択したか……小久保を歩かせれば、一二塁。そして代打の飯田さんも、敬って遠ざけるならば、満塁で回ってくる打者は……」

さらに矢野は飯田の後ろで、打順が回って来いと強い念を送る柴原の姿を確認する。

「柴原か。まだ代打陣には、飯田さんを切っても、吉永幸一郎がおるな。オレが控え野手陣で一番マークしてるんは、吉永や。あいつは、ムラがあるが、打撃センス自体は、門田、野村、松中のこの超強力クリーンナップにも負けないものがあるとみている。落ちるボ

ールを難なく見送る選球眼に、どんなボールでも、華麗なスイング軌道でスタンドにぶち込む、パワーと技術は驚異的。好調な小久保＞未知なる強打者飯田さん＞柴原の序列やが、吉永いう秘密兵器を持つホークス相手に満塁策は危険すぎるわ。満塁にして、さあ柴原やと思うたら、柴原押しのけて、後ろから、のっしのっしと吉永出されたらたまらんわ」

小久保、飯田を連続で歩かしての捨て身の満塁策も危険。勝負ももちろん危険。矢野は、さらに藤川の気持ちを思いやって、だからこその逃げながら打ち取る策略。つまりは、余裕のある3つのボールカウントを上手く使うリードを心がけることに決めた。

フォークボールの連投だ。藤川のフォークボールは、ストレートの驚異があってこそのボール。佐々木や野茂のように、フォークボールだけで打者を牛耳るほどの威力はない。フォークを予想し見逃せる勇気があるならば、小久保クラスの打者なら難なく見逃せるのだ。

はたして、小久保は2－0から投げ込まれた藤川のフォークを見逃す。真ん中低目の膝あたりから、ストンと落ちる理想的な軌道であったとしてもだ。この藤川のベストに近いフォークが効き目をもたらさないことは、つまり小久保相手には、逃げながら打ち取る作戦は取れないということだ。

続いても、矢野は、フォークボールを要求した。前のボールと同様、打者が振りたくなる軌道から落ちるフォークボールであったが、これも小久保はたやすく見逃す。

2－0の絶対的守備側有利のカウントから、2－2の平行カウントに戻ったわけだ。

追い込んでから、滅多に打てない藤川からして、平行カウントでも有利に違いないが、それにしても、小久保の内容がよすぎる。二球目の特大弾のファウル、そして連続のフォークボールの見逃し。

「逃げる？　球児が追い込んでから逃げるんか、ありえるか、そんなこと。だが、逃げないとやられる予感がプンプンするわ。野村さ

んの考えどおりなら、すべての配球は勝つためｎあり。選手のプライドなんてチンケなものは気にするなやが……。ストレートも振り抜ける小久保、フォークも通用しない小久保。ならば、藤川の第三の球種であるカーブを投げさせるか。虚をつくカーブに見逃してくれるかもしれん……」

矢野は、藤川にカーブのサインを出そうと、指をぱっぱと動かさうとするか極度の緊張からか、それとも、カーブに対しての迷いからか、指が自在に動かない。

「くそ、やっぱり、カーブは怖いわ。頭にないカーブを投げるいうのは短絡的すぎる。小久保の頭にないならば、球児の頭にもないはずだ。おまけに、ここまで球児はカーブを一球も投げていない。今日のカーブの感覚がつかめぬままに、決め球で使えるか？　いくら、思いきりのいい球児とはいえ、腕が振れるか？」

矢野は頭を捻りに捻ったあげく、結局、ストレートにたどり着く。

「球児は結局、ストレート投手なんや……とか、根拠のない選択やないぞ。連続のフォークの幻影を見た小久保は、球児の高目のストレートを振り遅れる！　はずや……」

それでも、絶対的な自信がない矢野。その矢野の微妙な精神状態が藤川に伝染したのだろうか。内角高目に投げようとした藤川のストレートは、手元が狂う。

小久保の右手首にもろに当たる、デッドボールだ。逃げるか勝負か、迷ったあげく、結果的に逃げたも同然のデッドボールで小久保を一塁に歩かせることになる。

「結果的に良かった……か？」

気になるのは小久保の状態だ。右の手首を抑えたまま動かない。ホークスのベンチには、飯田、吉永、田上の三選手が残っている。しかし、飯田、吉永は、代打要員として今にも出番がある選手。小久保がプレー続行不可能となれば、田上を代走に送るしかないのだが。

田上は捕手というポジション、そして小太りの見た目通り、鈍足

の走者である。一塁走者は逆転のランナーだ。鈍足の田上には、役者不足はなはだしいのであるが。

迷将門馬監督は最後に夏をぶち壊す

右手首を抑えながら、うずくまる小久保。あまりの痛みでのたうち回る勢いだ。鼓膜が破れても、練習を続けた逸話があるほど、鉄人小久保は痛みに強いが、藤川の全力に近いストレートをまともに受けた傷は、鼓膜の損傷ていどでは済まない。骨が折れるまでいかずとも、ひびは確実に入っているだろう。いくら、我慢強い小久保とはいえ、この死球は試合続行は不可能のはずだが、困ったことに、今のホークスには、適切な代走要員が用意できないのだ。

試合中盤からの人海戦術で、すでに残りの野手は3名。飯田徳治、吉永幸一郎、田上秀則だ。本来なら、盗塁王の実績のある飯田が代走には適当であるが、その飯田、蔭山の代打としてネクストに立っている。チャンスに抜群に強く、それなりの長打力と確実性のある飯田は、代打の切り札中の切り札。試合を動かせる場面に飯田を起用しようと、この場面までとっておいた取っておきの代打だ。このイニングが何事もなく終われば、飯田は出し惜しみで終わる危険性もあったのだが、それでも、鶴岡はホークスの超一流のスタメン陣がつないでくれることを信じていたのだ。鶴岡の願いにホークスの攻撃陣は見事に応え、二死ながら、一二塁、ヒットが出れば、同点。長打が出れば、一打逆転さよならの場面を作り出したわけであるが、逆転の走者小久保がプレー続行不可能となれば話は別。代打の切り札、飯田は代走の切り札となり、小久保の替わりに逆転の走者として送り出されることになるのだが、鶴岡は代打飯田に対するこだわりを捨てきれない。

「蔭山をそのまま送る起用法もあるやろ、蔭山は最初の打席で四球を選んでいる。藤川のストレートがいくら速くても、蔭山の打力なら当たることはできる。ヒットなら打てる、つまり蔭山でも飯田と同じ程度、つなげる確率は高いだが、決める確率は極端に落ちる。蔭山のヒットは、ほぼ内野の頭を越す当たりに限られる。いくら木

塚の足でも、阪神の豪華外野陣の前には、たやすく還ってこれん。つまり、蔭山が出て、満塁になって、勝負は8番の打順に持ち越されるわけやが……その8番が問題や……柴原か、それとも、ここでも代打のカードを切って、吉永とするか……」

バットを小脇に抱え臨戦態勢の柴原の背中を見やる鶴岡であるが、鶴岡は柴原を、柴原が思い描くイメージ（憧れのイチローや前田智徳とまではいかないが、なぜか自分は確実にヒーローになれると思い込んでいる）の1割も、柴原を信用していない。そもそも柴原のベンチ入りは、GMである根本の進言。根本がダイエー時代に獲得に深く関わった、城島、松中、小久保、井口、そして柴原のいわゆる福岡ホークス五人衆のうち、柴原一人だけ、ベンチ入りから外れたら具合が悪いとの判断だった。

ただ鶴岡にしても、柴原をいやいや受け入れたわけではない。確実な攻守は、もともと鶴岡が評価したものだったし、ライトからレフトと一回ごとに細く守備位置を替える采配に違和感なくついてこれる柴原の野球に対する取り組み方に関心を抱いたところであった。

だがしかし、この場面は別、生死を分ける場面を柴原に託すほどの信頼感はないのだ。前出の通り、柴原のイメージする柴原像の一割ほどの信頼感しかない鶴岡だ。なら満塁、打順は8番に持ち越されるとならば、代打吉永を切るのか。矢野は、吉永の飛び抜けた打撃センスに強い怯えを感じているが、これもまた鶴岡は、矢野ほど吉永を評価していない。

「吉永か。あいつのしゃくりあげるような荒っぽい打撃で、藤川の高目のストレートが打ち切れるか。なら柴原のミート打法のが、藤川を打つ確率があるわ」

吉永の評価は柴原以下。となれば、この打順で決めるしかない。蔭山を送り込んでつないでも、勝負は8番となれば、決めるのはこの打順だ。飯田をそのまま送り込むしかないのだ。代打飯田となれば、代走には送れない。吉永は柴原のところで出す可能性がある。となれば、代走に送られる選手は、もうこの男しかいない。

歴史的スター選手が集まり、一桁台の若い番号が占め、大きい番号でも門田の６０ぐらいのグラウンドで、一人、７０とコーチと見間違うような大きな番号を背負う男の出番だ。

「お、オレ？　ほんまにオレですか？」

代走の出番があるかもしれないから、急いでベンチに戻ってこいと藤原野手総合コーチに名指しされても、まだ信じきれない田上。それもそのはず、田上は図抜けた鈍足なのだ。

２００９年までの一軍実働７年３５６試合で田上が記録した盗塁はなんとゼロ。２０１０年の８月現在もゼロ。いくら鈍足の走者であったとしても、エンドラン崩れなどで、何個か盗塁を成功させるはずなのであるが、田上にはそれすらないのだ。盗塁失敗も２００９年まで、４つ。つまり、エンドラン崩れの盗塁、打者の空振りで捕手が送球にまごつく盗塁さえ成功できない田上の走力。飯田が広い福岡ドームの外野を破る長打を打ったとしても、田上の足では一挙に本塁生還はとても期待できないのである。

しかし、各種の選手起用を考慮すると、田上代走しかないのであるが、田上代走は、もし延長にもつれ込んだときの守備陣形にも大きな影を落とす。鶴岡が小久保負傷の前に考えていた守備シフトは以下の通り。

捕手野村　一塁飯田　二塁木塚　三塁小久保　遊撃川崎　左翼柴原　中堅広瀬　右翼樋口

柴原のところで代打吉永を起用して延長にもつれこむとすると、

捕手野村　一塁吉永　二塁木塚　三塁小久保　遊撃川崎　左翼広瀬　中堅飯田　右翼樋口

となるはずであったが、小久保の負傷ですべてが狂うことに。

捕手野村　一塁吉永　二塁木塚　三塁田上　遊撃川崎　左翼広瀬　中堅飯田　右翼樋口

と、内野の両コーナーを鈍足の捕手で占める、危うすぎる内野陣の出来上がりだ。しかも、野手の控えはゼロ。大会特別規定により選手を足せる１３回までは交替なしで戦わなければならないのだ。

「小久保、右の手首やろ？　足を痛めたわけやないやろ？　走れることくらいはできるよな？　痛みをこらえて走ったとしても、福岡ドームで二塁打、三塁打を量産したお前なら、田上よりはよほど速いはずや」

祈るような鶴岡であるが、川村隆史トレーニングコーチから報告された小久保の状態は鶴岡が頭をかかえるものだった。

「監督！　小久保が痛みで転がった時に、足首も捻ったようで……」

田上ってスポットライトを当てるほどの選手かよ

しかしなんといっても小久保だ。王ホークス育ちは、根性が違う。松中は足を引きずりながらも試合に出続けるし、井口はＷＢＣをさぼってでも公式戦に集中するし、城島は捕手のフルイニングの偉業にこだわるし、そして小久保は右手に骨折の疑いがありながら、足首を捻り腱が切れている可能性が高いながらも、それでも這ってでも試合に出続けようとする。

山村打撃補佐や藤原総合コーチや川村トレーニングコーチが、止めようとしても、小久保は試合の前線に出てこようとしている。

「行かせてください！　這ってでもホームに還ってきて、ホークスを勝利に導きますから！」

小久保は鶴岡に直言するが、鶴岡は断腸の思いで、この頼みを首を縦に振らない。

「お前の気持ちは重々わかる。ホークスを愛し、福岡組のキャプテンに任命されたお前が死球くらいで、ベンチに下がれるかとその気持だけで、ワシは胸が熱くなる思いや」

「はい！　わたくし、小久保裕紀！　ホークス一筋の身として、ホークスを愛する気持ちは誰にも負けないと自負があります！」

とまるで、３年間だけ、どっかの盟主球団にいたことを忘れているかのような口ぶりだ。

「だがな、小久保。お前の気概は嬉しいが、這ってでも還ってくるプレーヤーはちょっと困りものなんや。一打逆転の走者、悠々と還ってこれる走者と替わるんが、本当のホークス愛やないか」

「……たしかにそうです。それこそホークス愛かもしれませんね……。僕が馬鹿だったかもしれません。故障を我慢しだましだまし出ることが、美徳と考え、それが本当にチームにプラスになるのか、そこまで頭が回らなかったかもしれません……。それで、鶴岡監督。僕の代走はいったい誰なんです？　そいつのもと、いや年上かもし

れないから、その選手の元にいって、直接、僕の今の気持ちを注入したいと思いますんで。代走から試合は入りにくい、だから僕の気持ちを受け渡すことで、少しでも試合の入り方にプラスとなれば……」

「田上や」

「た、田上？？　田上って」

小久保の頭の中が一瞬真っ白になりフリーズする。小久保の記憶するホークスの田上とは、あの田上しかいないのだ。

「同じ、”たのうえ”でも田之上やないよな、オレと同級生であり、２１世紀初のホークスのエースの田之上慶三郎やないよな、投手やもんな、それ以前にベンチ入りしとらんか。田上って、ちょい待ち い、鶴岡監督！　田上って田上秀則ですかいな！　秀ですか！　たのですか！　あいつが代走なら、オレのがよほどましですよ！　痛めた足首を引きずったって、田上よりも速く走れますよ！」

「いくら田上が典型的な捕手体型で、足で魅せるタイプやないにしても、手負いのお前よりはましや」

「そんなことありません て！　オレのがましです！　いや、田上ならば、投手。控え投手の中から、田上より足の速いはいくらでもおりますよ！　たとえば、杉内。そうや、スギや、スギ。杉内なら、よほど田上より素早い走塁が期待できますよ！」

「あほう、小久保。それでもキャプテンか。投手の走塁技術と野手の走塁技術は天と地や。いくら純粋な走力が上いうても、場数を踏んでない投手、ましてや、杉内は指名打者でめったに塁上に立たん投手や。そんな投手なら、田上のがよほど走塁に期待がかかるわ。間一髪の判断が投手にはできん。一瞬のちゅうちょが生死を分ける。そんな大事な場面に投手はないわ」

「しかししかしですよ……」

それでも引き下がらない、田上代走に納得いかない小久保に鶴岡はついに強権発動。

「おい、藤原に穴吹。小久保を強引にでも医務室に連れてけ。きっ

ちりと治療させんとな。次の試合に響くといかん」
「ヘイ、鶴岡親分」
と、穴吹コーチと藤原コーチは、嫌がる小久保の両脇を抱えて、無理矢理にベンチ裏に引きずっていく。そして入れ替わり立ち替わりにベンチに登場したのが、まだ自分が代走に送られたことを信じきれない田上だ。
引きずられる小久保に、
「頼むで、田上。全力で走れば、故障したオレと同等くらいに走れるやろ」
と声を掛けられても、満足に応対できないくらいに、田上は、いまだ予期せぬ状況に飲まれている。
「……」
ボーっとする田上に、かかさず川崎が助言。
「田上さん、代走初めてですか？　よし、代走経験それなりにある僕が心得を教えましょう！　まずは屈伸やらで体をほぐす、これは当然ですが、それ以上に大事なのが、状況の確認です、控えとはいえ試合にのめり込んでいる田上さんは、なんやいまさらとお思いになられるでしょうが、馬鹿にできないんですよこれが。塁上に立った瞬間、試合に入りきれず、ポッと抜け落ちちゃうことがあるんです！」
「体をほぐす……状況確認か……。ありがとうな、ムネ」
田上はいわれたとおり、まずは足を伸ばしたり、曲げたりの屈伸で体をほぐし、次は状況確認。控えとはいえ、試合にのめり込んでいる田上は現状を認識しているはずだったのだが、これがそうもいかない。
「2アウトで、走者は一二塁！　一点差やから、オレ、逆転の走者やないかいな！」
と今更ながら、自分が重大な走者であることに気づく。そんなうかつな田上に、九州共立大の先輩でもある柴原がボソリ。
「おい田上。飯田さんが長打を放っても無理せんでいいぞ。三塁で

止まってもええ。オレに回せ、先輩のオレがお前をゆっくりと還す当たりを打ってやるからな」

「はい、柴原先輩……その節はよろしく……」

とまだ夢遊病状態の田上は一塁ベースに立っても、まだぼーっとしている。その姿は、首脳陣の頭痛の種になるには十分。

「大丈夫ですかね、鶴岡監督」

「蔭山ヘッド、心配するな。田上は年間１００試合以上のプレーを積んどるんやろ。小学二年生にちゃんと登校できるか心配するようなもんや」

鶴岡はそれでも田上代走安心理論を展開するが、川崎の掛けた言葉で、その信念も揺らぐことになる。

「田上さん。隠し球に気をつけてくださいよ～。また引っかかったら、シャレになる場面じゃないですからね～」

「隠し球？　おいちょっと川崎、なんやその隠し球いうのは！　なんや、またいうのは」

「あれえ、鶴岡監督知らないんですかあ？　高校の後輩の山崎浩司さんの隠し球に引っかかって、アウトになったことがあるんですよ。田上さんは」

「なななんやとを～　足が遅いのはわかっていたが、それ以上にうかつでふつつかで間抜けな奴やったのかあ～　かあ失敗したわ、これなら足の速い投手を代走に送ったほうがましやった～」

鶴岡はいまさら、田上代走を後悔するが、いまさら代走の代走は送れない。もはや田上と心中するしかないのである。

大沢親分は江戸っこでなく神奈川の海沿いの言葉です

「ええ～　あのそのええと、ホークスファンの皆様には、非常に申し訳ないのですが、そのあのあっと、えっと、ＭＸテレビホークスストロング野球中継２０１０の放送時間があと、一分、えっと、４０秒、あ、３０秒に瀬間仲ノルベルト……あ、違った、迫ってきたので、試合の途中ですか、野球中継を終了させていただきます……」

「え、ほんと、残念だなあ。恰好のいい場面なのに。中継は終わるけど、僕と長友さんの試合は終わらないよね？」

と、相変わらず、キャバクラの口説きモードの解説山内孝徳にいちいち反応する余裕もない長友アナは強引に中継を締めようとする。

「あ、あの、その今のスコアはホークスがえっと……あ、解説は山内孝徳さん、浜名千広さんのお二方、実況はわたくし、えっと、あ……」

と自分の名前もいえず、残酷にも中継時間は終りを告げてしまう。急に代走に指名された田上が、まだ夢遊病状態で一塁塁上に突っ立ている映像をバックに画面上には、野球中継終了の文字が。しかし、ＭＸテレビがお先に幕を閉じても、試合はまだまだ終わらない。終わらないどころか、今がクライマックスだ。

二塁走者は球界の歴史に残る足の持ち主の木塚、そして一塁走者は超がつくほど鈍足の田上。どちらも代走、そして走塁の技術と走力自体には天と地との差がある。

極端なコントラストを描く二人の走者を置いて、それを還す役目をするのは、代打から守備につき、渋い働きをする蔭山ヘッド兼任選手にさらに代打の飯田徳治。

衣笠の前の連続試合出場の記録の持ち主であり、打点王、ＭＶＰ、盗塁王、１００万ドルの内野陣に数えられた一塁守備も評価が高く、そして野球人最大の名誉でもある野球殿堂入りも果たしているスペ

シャルな選手だ。まさに鶴岡の最後の切り札。この男を試合に出さずして、負けるゲームは考えれないとの鶴岡の執念が選手に通じてか、作り出した逆転のチャンスに、ついにに切り札飯田を送り込む。

「バッター蔭山に替わりまして、飯田。バッターは飯田。背番号23、神奈川県横浜市出身」

ご丁寧に出身地までアナウンスする福岡ドームのウグイス嬢の情報どおり、飯田は神奈川は横浜生まれのいわゆるハマっ子だ。いまでこそ、横浜出身の選手は珍しくもなんともない時代であるが、当時の球界は、野球が盛んだった四国や九州、そして関西、中部と愛知から西の選手が大勢を占めた時代。高校野球でも箱根の峠を優勝旗が超えることは一種の一大事とされていた時代だ。当時のプロ野球界でも横浜出身の主な選手といえば、この飯田に守備の名手として知られた苅田久徳がいるくらいだ。

大阪を本拠地にする南海といえば、その傾向はさらに強く、遊撃木塚＝佐賀、三塁蔭山＝大阪、二塁鶴岡＝広島、中堅黒田（ドジャース黒田の実父＝長崎、左翼堀井＝大阪、右翼笠原＝大阪、捕手筒井＝和歌山……とその他レギュラー選手が西日本出身の中、一人だけ東日本出身の飯田は異彩を放っていたことは想像に難くない。

しかし、一人だけ違うバックグラウンドを持ったハマっ子らしい洒脱な飯田は、それだけファンに違ったイメージを与えたことだろう。

「頼むわ、飯田。ワシはお前を信用しとる」

「ワシの代打や、打たな承知せんですぞ、飯田さん」

「ワシを還せや、飯田。それも全力で走らんような当たりならなんでもええわ」

上から、鶴岡、蔭山ヘッド、そして二塁走者木塚の心情だ。それぞれが西日本の言葉で期待をかけるなか、飯田は垢抜けた横浜言葉で期待のきびすを返す。

「このオレをここまでベンチに置いていたことを後悔させてやる。木塚だけでなく、一塁走者のあの……たうえとかいうデブも返して

やろうじゃんか」

鼻息荒く打席に入る飯田は、矢野の挨拶を受ける。

「よろしくお願いします、飯田さん。こんな大変な状況ですが、はじめまして、矢野と申します……」

言葉遣いこそ標準語であるが、端々に関西弁のイントネーションが抜けきれない矢野の口調に飯田は気分を悪くする。

「ベンチにいても、関西弁だらけで気分がわるいところ、グラウンドに出れて、ようやく関西の品のない言葉のジャングルから抜け出せると思ったら、捕手のあんたも関西弁かい。まったく、野球界という場所は、関西弁が標準語だから、かなわんなあ。やっぱしあれだな、僕ら古い東（あずま）の人間がもっと頑張っていたら、今頃、野球界の勢力地図は東が有利で、野球言葉も関東弁で占められたのになあ。残念だ。まあ今からでも遅くないな。ここで僕が逆転さよならのヒットを打つ。僕がお立ち台に上がる。大昔の南海の選手だから、テレビを見ている人たちは、どぎつい関西弁でインタビューが繰り広げると思うだろう、そこで、この僕の綺麗な澄み渡るような横浜の言葉が流れるわけだ。このギャップに全国のオナゴさんたちはしびれずにいられないよなあ、なあ矢野くんだっけか、捕手の君……」

と藤川攻略法に頭を捻るどころか、すでにヒーローインタビューのビジョンでいっぱいの飯田。イメージトレーニングは十分。はたして、飯田は野球殿堂入りに恥ない活躍を見せることができるのか。

球児の意地

一塁走者の田上は、川崎にいわれ通り、まずは今現在の状況の確認。スコアボードを注視しながら、自分が置かれた立場を諳んじる。

「えっと、二死で、二塁は木塚さんで、一塁はオレで……それで、打者は代打の飯田さんで、得点差は一点やから、木塚さんが同点の走者で、オレが逆転さよならの走者やん。うわ、ものすごい重要な役目やないか、あらためて確認すると、ほんまにオレでええんかいな」

状況再確認は、心を落ち着かせるどころか、より田上に重圧をかけることになったのだ。

「おい、田上。わかっとるか？」

一塁コーチャーの森下コーチに体をつかみかかれ、耳打ちをうける田上。

「分かってますよ。隠し球には引っかからないっすよ、森下コーチ」

「当たり前や。この場面で隠し球でアウトになったら、世間がお前を叩く前に、このオレが、こ場でお前をボコボコにしたるわ」

「いや、森下コーチ。隠し球はかかった走者にも責任はあるのは当然として、コーチャーズボックスの走塁コーチにも責任があるもんですよ」

「わかっとるわい。藤川に隠し球をかける余裕なんぞないから、今、藤川の元にボールはある！　ちゃんと確認を怠ってない名コーチやろ？　まあ隠し球はええとしてだな、田上。打球が飛んだ位置別に、すべき走塁をお前にレクチャーしたるわ。まずは外野の前にぽとりと落ちたヒットの場合や。二死やから、打った瞬間にスタートを切れる。木塚さんの足なら還ってこれるが、お前の足なら無理はせんでええぞ、三塁を欲張らず、二塁に止まってけ」

「はい、単打なら無理せず二塁でＯＫですね、わかりました」

「そんでもってな、複雑なのは、飯田さんが外野の間をやぶる長打

を打った場合や。木塚さんは当然還ってくるが、問題はお前や。お前んの足なら、いけて三塁やと思うだろ？　しかしな、右中間方向に飛んだら、別や。ライトの真弓が捕球したら、内野手上がり特有の素早いモーションからそれなりの送球を繰り出し、中継の二塁の鎌田に返せるが、赤星が捕球したときや。赤星は、現役のお前の方がよく知ってるとおり、肩はかなり弱い。肩の弱さを素早い正確な送球で補うタイプやが、それも限界がある。つまり、赤星が捕球したときは、一挙に生還のチャンスなんや。当然、三塁の森脇が、そのあたりを摘便判断し、腕を回すか、止めるかを判断するだろうが、打球の飛んだ方向でお前もなんとなくわかるやろ。赤星が取るか、真弓が取るんかは」

「はい、二塁ベースを回るときに、ちらりと見えますね」

「よし、右中間にコロコロ転がったら、一気にホームを駆け抜ける、そのつもりで準備をしとけ、心身とものな。もしも、鈍足のお前が逆転の塁を踏んだならば、一躍お前がヒーローや。ええか、田上。走塁は足の速さだけで決まるんやない、野球頭の出来で決まることを世間に知らしめてやれや」

「わかりました、森下コーチ！　城島さんを外した甲斐があったと世間のホークスファンに思い知らせてやりますよ！」

と代走に起用されたときの不安な表情はどこにいったかと、田上は俄然やる気満々。お。もちろん、隠し球に引っかからないように、森下コーチ同様、ボールがどこにあるのかもちゃんと注視している。

一方の矢野は、勝負強く、未知なる飯田をどうやり過ごすかに頭がいっぱいだ。

「飯田さんがストレートが強いのか、それとも変化球に妙技を見せるのか、データが少なすぎて、ようわからんのや。歩かせて満塁にさす手もあるな。満塁は押し出しの危険を伴うが、なんというても、投手は球児や。満塁押し出しを犯すような脆い投手やない。しかし、満塁にしたら、柴原。代打に吉永が出てくる危険性があるな。吉永は怖い。同じ大阪で一個下の吉永は、オレが中学時代から、大阪中

に名が轟いていたほどの打者や。勝負するのも地獄、歩かせても、新たなる地獄が待ち受けているならば、一二塁の間に勝負をかけたほうがましやな……」

　矢野は考えをまとめたが、一応ベンチの考えも仰ぎ見る。前の小久保の勝負するかしないかの判断を避けたベンチであるが、今度のベンチはきっちりと答えを出す。現役監督時代に、飯田に何度も痛い目にあった藤本は、飯田を避けて、次の打者、柴原か代打に出る可能性のある吉永勝負を進めてくる。ベンチと矢野の意思は異なったが、ベンチのこの指示は強制ではなく、こういった考えもあるとの意見を進言したに過ぎず、決定権は矢野に委ねられた。

「勝負したほうがええと思うがな……。球児はどうなんや、球児は。投げるのはアイツだ。

飯田さんか次の柴原か吉永のどっちと勝負しやすいんやろうか？……と聞くのもヤボか。球児が逃げる選択をするわけがないわ……よっしゃ、勝負や、球児こい！　最高のストレートを投げて、飯田さんに野球界が５０年間で、どんだけ進歩したのかを見せつけてやれや」

　藤川は矢野の勝負のサインに待ってましたと、ゆっくりとうなずき、セットポジションに入る。

　初球、矢野の選択したのはストレート。強気の選択であるが、前の打者の死球で、感覚が狂ったのか、それとも、小久保怖さに何球もボール球を投げ込んたことで、腕の振りに微妙な影響があったのだろうか、藤川のストレートは、ベース上に叩きつけられるような球道で投げ込まれた。

　矢野は後逸せんとばかりに、体を張って止めにかかるが、フォークならまだしも、藤川のストレートが暴投になることは、稀どころか、ありえないことなのだ。

「……オレのリードのせいか？　小久保に対し、勝負か逃げるかあやふやな態度を取り、結果死球になったことで、球児の腕の振りになんらかの違和感が生じたんか？　逃げの投球などめったにしない

球児や……ボール球を続けることで、本来の腕の振りが……くっそ、この状態だと勝負は危険？　いや飯田さんを避けたとしても、今度は満塁押し出しの危険性もあるほどの、腕の振りの状態や……」

あと一死から、最大のピンチに陥った阪神バッテリー。この苦境を切り抜けることができるのか。そして、阪神のブルペンでは、藤川の初球を見て、ある投手が動き出していた。

「ほんまなら、前の打者で準備して、次の打者で投げろいわれても、投げれないもんや。だが、愛するタイガースの大ピンチとなれば、話は別。もしも、藤本監督がいけいうたら、はいはい、いかせてもらいますよ……といえるくらいの状態にしておかんとな」

江夏豊がゆっくりと、それでいて急ピッチに肩を作り始める。

今週のプレイボーイはデーブと江夏の対談

やはり、藤川は慣れぬボール球の多投で、いつもの制球の感覚を失ったのだろうか。初球の叩きつけるようなボール球の失態に続き、二球目の藤川のボールも、矢野の意図した位置には届かない。

矢野の構えたミットの位置のはるか上、かといって、火の玉ストレートがのびあがった、いつもの空振りを取れる球質でも、球道でもない。ただ勢いなくうわずっただけのボールは、飯田の空振りも、必死にバットを止めようとするハーフスイングも引き出せず、あっさりと見逃される。

「これが、藤川とかいう投手か。うわさのような投手じゃないな。いくらでも、打てそうなストレートじゃんか」

１４９キロと福岡ドームのあまり出ないスピードガンで上々の数字が表示されているにも関わらず、打者の飯田には、なんの驚異も与えていない。

いくら藤川とはいえ、上に下にと、軌道が外れすぎたボールには、打者は釣られて、バットを出してしまうこともないのだろうか。

「まずいな、まずい。球児は満塁にしても、押し出しの危険性がない投手と思うてたが、今の球児……オレの覚悟のないリードで、普段の状態から逸脱してしまった球児には、満塁押し出しを恐れもしないど真ん中でも空振りを取れるストレートがないんや。ストライクを自信を持って投げ込めない球児には、満塁の状況をこっちから与えるのは危険過ぎるわ。だからといって、現状、ボールが２つ先行して、ストライクがひとつも入ってない状況……進むも地獄、進まないのも地獄。なんやこれ、前の小久保の時と一緒やないか。くっそ、なんや、この試合、なんや、このホークスいうチーム、なんや、この９回裏、どれだけ３つのアウトを獲得するんが難しいんや……」

いたって矢野は弱気。いくら、野村の教えどおり、捕手は常に最

悪の状況を考えて配球せよが、染み付いている矢野とはいえ、松中に安打を浴びて、走者を残したあとの矢野のリードは弱気すぎやしないだろうか。

いつものペナントでは、つとめて矢野の考えどおりの投球をする藤川であるが、さすがに今日の矢野のリードには、疑問を抱き始めているようだ。

追い込んだ小久保に対し、ストレート攻めができず、フォークを続けさせて、カウントを悪くさせたあたりから、藤川の心は、矢野から離れはじめていた。そして続く、飯田に対するリードぶりで、藤川の矢野への不信感は拭えないほどのわだかまりになって、ついに表情と態度に現れはじめてきたのだ。

「矢野さん、いくらなんでも、そりゃないっすよ、矢野さん。あと一息で仕留められるとこまでいった小久保さんという獲物を逃がして、さらに、この飯田さんからも逃げようとしてるんですか？　プロ野球７５年の長い歴史上で、最高の守護神のオレが、二人続けて、逃げろいうんですか？」

マウンドの土を不満げに、こねくり回す藤川には、いつものような絶対の自信はない。

しかしなにも、矢野は飯田に対し、逃げると決めてサインを出しているわけではない。矢野のクサイところをつけというあやふやな姿勢が、藤川の狂いかけた指先の感覚をさらに狂わせたのだ。藤川にとって、際どいところをつく投球は逃げに等しく、矢野が思うように打ってくれれば儲けモノの配球に応える投球技術もなければ、打たせて取るともりなんて、ハナからないのだ。

「堂々と打てないボールを投げ込んで、三振で締めたいのに、矢野さんときたら……」

いくら藤川とはいえ、魂の込められないストレートは、ただの１５０キロのストレート。誰でも投げれるボールではないとはいえ、特別なプレミアがつくほどのストレートではなくなっていた。

三球目、またも矢野は、逃げか勝負か、あやふやな位置にミッ

トを構える。そすて、藤川のストレートには、また気の抜けた球質となり、飯田になんなく見逃される。外角低め、ボールふたつ外れたボール球。これで、カウントは０－３。

「おい、いいかげんにストライク投げんかい。これじゃあ、オレがヒーローになれんじゃんか」

飯田も勝負してこない藤川にイライラ。藤川も藤川で、勝負できない自分に、こんな自分に追い込んだ矢野の弱気な姿勢にイライラ。そして、この状況を作り出した矢野は、究極の選択を迫られることになる。いくらフジカwとはいえ、０－３から、打者を打ち取るのは至難の技。しかし歩かされば、矢野が密かに恐れる吉永が登場するおそれが十分にある。

「そのまま、柴原が打席に入るのを祈って、飯田さんを避けるか。柴原も巧みなミートの驚異はある、球児のストレートを弾き返せる技術もある。が、意外とここで決めてやろうと力みがはいり、とんでもないボール球、つまり、今の球児が投げる恐れがあるボールも振ってくれる打者……。吉永＞飯田選手＞柴原の順番で驚異。逃げて柴原勝負が最善の策か……」

しかし、その柴原は、試合の流れを読むというか、小説の構成上の展開を読めるというか、すでにヒーローになった気分で、いまかいまかとネクストで出撃を待っている。

「０－３！　ほらやっぱり、オレの読みとおりだろ？　オレがヒーローになるようにできてるんだよ、この試合はさ。抑えドミンゴのおかしさを全国民に知らしめたのは誰だ？　このの柴原洋さまの逆転サヨナラのスリーランだろ？　そして、この小説の謎の副題の意味を教えるのも、この柴原洋さまだ！」

そしてカウント０－３のこの状況は、藤川にすべてを託したとベンチんいどかっと座り覚悟を決めていたはずの藤本も動かせる。

「柴原も吉永もどっちにしろ、左か。うちのブルペンには、もう一人だけ左投手が入ってるな。ブルペンのにらみを利かす役目で、アイツを入れたわけやが、一人くらいは投げれるやろ、そしてオレと

アイツの関係なら、意気を感じて投げてくれるはずや」
藤本を球界のオヤジと仰ぐアイツのことだ、藤本がブルペンに連絡を取る前にすでに準備をはじめていた。
「いつもの抑え役の時なら、きっちりとしたルーティンをこなさければ、ろくな投球はできませんよといいたいところやが、愛するタイガースの一大事となれば話は別や。ルーティンを省略しても、一人くらいは投げれる状態にしとかんとな。ホントは抑えの球児の救援なんぞ、あってはならぬことやが、この試合は大きすぎる。一人の選手のプライドにこだわってる場合やないんや」
江夏がデップリとしたお腹にグラブを置く、独特なセットポジションから急ピッチの投球を繰り返し、まさかの出動命令に備えている。

きゅきゅきゅ球児の球投

「江夏も感心するわ。こっちから指図せんと、準備に入っているなんてな」

藤本監督は、上田次郎臨時投手コーチに、ブルペン担当の中西に緊急の連絡を入れたのだが、返ってきた中西の応えは、

「江夏さんなら、誰が言うまでもなく、もう準備にとりかかってますよ。抑え投手のルーティンを完全に省略してまで、次の左の柴原の所で、投げるつもりでおりますよ」

と江夏の準備万端を伝えるもの。

「あの、江夏がなあ。いきなり、登板なんかできますかと、すねるわ、怒るわ、暴れるわまで、予想していたが」

思わず、感嘆のつぶやきを漏らす上田次郎。ちなみに、上田次郎は、江夏よりもひとつ学年が上。野球界においての上下関係は、プロの年数よりも、学年と年齢で決まるのが常識。プロでは3年先輩の江夏は、当然、上田を”さん付け”の敬称つきでよびべきなのだが、江夏だけの常識”年上とはいえ、後からプロに入った選手には、タメ口で上下関係も発生しない”の独特すぎるルールに基づき、上田は、次郎とか、ウエとか、呼び捨てのあだ名で呼ばれていたのだ。そんな江夏に対しては、上田も気を使うのだろう、緊急の連絡なのに、藤本監督の言付けに一瞬の戸惑いを見せ、躊躇したのが、その気持ちの現れだろうか。

なんにしても、江夏が準備をしていることは、阪神にとって、転ばぬ先の杖。もしも、藤川が飯田をそのまま歩かせて、満塁の大ピンチをこさえても、存在しないはずの藤川より信頼のできる投手が、ここに登場したのだから。

だがしかし、藤川にとっては面白くないもの。抑えのプライドの塊のような藤川の扱いを一歩間違えると、第二回のＷＢＣのように、藤川球児という投手が使いものにならない可能性も秘めている。

満塁の大ピンチを迎えても、投球に変調をきたしていると自分でわかっていても、藤川は最後まで、抑えの役目をまっとうするつもりでいるだろう。たとえ、交替する投手が、抑え投手の始祖のような存在である江夏でもだ。第二回ＷＢＣで、抑えの座をダルビッシュに取られた時のように、あからさまなふてくされた態度を取るのは間違いないだろう。

そんな藤川が、もしも江夏がブルペンで準備していることを知ったとしたら、やけくそな投球をしだしてもおかしくはない。なげやりの投球が開き直りに転じて、好結果に出ればいいが、相手は殿堂入りの好打者の飯田。結果オーライが通用するレベルの打者ではない。

阪神としては、江夏の準備を藤川が知らないところで内密にすすべるべきだろうに、ことがあろうことに、捕手の矢野が江夏の準備をばらしてしまうのだ。

藤川に向かって、キャッチャーレガースの前で大きなお山の形を作ると、その存在しない山の上にミットを置き、そのミットを大きく振る仕草をしたのだ。最初はなんのことか理解できないでいた藤川も、矢野がこの切羽詰った状況で、意味のない動作をしないと、ジェスチャーに思いを巡らせたところ、

「は！　出っ張った腹の上にミット、つまりグラブを置いたってことは、そのミット、矢野さんは左手に当然付けている、そのグラブを振ったってことは、左投手の意味……江夏さん？　もしかして、なんやと、オレを信用できずに江夏さんを用意してるやと？　アホか、クソ。藤本監督、オレが子供の頃に好きだった巨人の初代監督やというから、へえ～そりゃすごいなと、よう素性も采配能力もわからんと、信頼を寄せていたが、こんなアホ監督とは、思わなんだ、アホが、クソが」

当然、藤川は、抑えの自分が信用されきっていないことといに、腹を立てることは眼に見えていたことだ。それにもかかわらず、どうして、矢野は江夏の準備をバラしたのだろうか。

「このままの球児に投げさせていたら、置きに行っての痛打か、腕が振れずに四球を出す可能性は高い。ならば、状況を変えんとな。荒治療やし、いいか、悪いかどっちに転ぶか、ようわからん、賭けやが。やらんよりましや。だからあえて、江夏さんの準備をほのめかし、球児を怒らせた。この怒りが好影響に出てくれればええんやが……」

矢野の構えは真ん中低目。飯田から逃げれないし、ど真ん中に置きに行ったら、痛打の可能性もなきにしもあらずと、矢野は低目に要求した。

いつもの藤川だと、軽くクリアできる課題であるが、今の藤川は感覚の狂いに、怒りの要素が加わっている。矢野のミット通りに投げ込める確率はかなり低いのであるが、藤川の投げ込んだ４球目の、これまたストレートは、矢野の低目に構えた位置から、かなり高く、つまり、ど真ん中に放り込まれたが、飯田は見逃す。

「なんだ、いいボール投げられるじゃんか。最初から、こういうの投げろよ」

０－３のカウントだ、待てのサインが出てもおかしくない場面であるが、飯田を信用し、次の打者をさほど期待してない鶴岡は、打てるなら打てのサインを出していた。

ど真ん中の打てれば打てるコースであったにもかかわらず、飯田が見逃したということは、打てるコースであっても、打てないボールだったのだ。つまいは、江夏の準備に対する怒りが本来の藤川の力と球威を呼び戻したから、思わず飯田は打てないと見逃したわけだ。

矢野の賭けは半分勝ちに転じた。江夏への準備の怒りは、藤川の球威を呼び覚ましたのだが、制球力まで本来の藤川のモノを呼び戻したかどうかはまだわからない。現に今のボールは矢野の構えたミットをかなり動かさせたからだ。

カウントは０－３から１－３に。ポイントはこのカウントだ。１－３から、またストライクをとって２－３とすれば、俄然、バッテ

リーが有利になる。１－３から振らないボール球も、２－３からは、３ボールからボール球を投げないとの先入観と見逃したらストライクを取られる危険性から、打者は振ってしまうものだ。試合巧者の矢野は、そのあたりの打者心理を利用することは得意中の得意。

「問題は、２ストライク目をどうとるかや。ここまでフォーク二球の他、全部ストレートの球児。ここでカーブですっと見逃しを取れれば、エエんやが。怒りで球威が戻っても、制球がさらに荒れている球児、しかも、ここまで一球も投げていないカーブを要求するのも勇気がいるわ。ここは信じるか、球児の怒りと意地の火の玉ストレートに。たとえ、ふたたびど真ん中にボールがいったとしても、打たれないストレートを投げてくれるはずや。これは、なにもストレートを打たれたらしゃーないとか、そういうんやない、ストレートがベストだからストレートを投げさすんや」

と自分に言い聞かせる矢野であったが、１－３からストレートでストライクを取りにいくのは博打に近い。初対戦の飯田とはいえ、すでに５球目のストレート。目が慣れきっているからだ。

「ストレート一本しかない場面じゃんか」

と飯田も独特の読みから、ストレート一本の絞り。そしてこの状況を、ブルペンで急ピッチの投球しながら、横目でモニターを見ていた江夏が、急に投球練習を辞めて、またどかっとベンチに座るではないか。これには、中西ブルペンコーチを始め、ブルペン中がまさかの驚きの目。

「え、江夏さん、じゅ、準備は、もうすんだんですか？」

「中西コーチ。準備をする必要はもうないんだ」

「もうないって、いやあの次の打者に回ったら……」

「だから、この飯田さんの打席で、試合は終わるのさ」

「え……？」

「まあ見てなさいて。どっちか勝つかは、神でも仏でもないオレは知らんが、とにかく、この飯田さんで試合は終わるんだ。これは勘とかそういった不確かなものじゃない。長年、野球を見たオレなら

わかるんや。飯田さんも、球児も、ここで終わらせようという気概のぶつかり合いが、試合を閉めさすんだ」

と、江夏は、この打席で試合が終わることを予見して、投げる準備はやめた。しかし、柴原は相変わらず、自分がヒーローになることを疑いもしない。

「１－３までは想定外。だが、次の一球は、確実にボールさ、そして、このオレに打席はまわるのさ。影の世界からひっそりと現れた柴原洋を、日のあたるヒーローにするためにね」

はたして、江夏の長年の経験からくる読みか、それとも、小説の構成上の展開がなぜか、読める柴原の願望か。この勝負の結末は、どちらの胸のざわめきが当たるのだろうか。

「しかし、球児の奴は、オレが準備していると知ったら、えらく怒るんじゃないかな。抑え投手とういうのは最後の切り札、もう誰の救援も仰がないという自負とプライドがある。同点に追いつかれたり、延長になって試合展開によって、次の投手が出てくるのはこれはしかたがないこと。ただ追いつかれたりしないのに、９回をまっとうできず、違う投手に交替されるほどの屈辱はないんだよ。オレだってそうだ。例の２１球の時や。尊敬してやまない古葉監督だけど、あの時ばかりは、このヤロー、なにしやがるんだと思ったな。オレが投げているのに、北別府や池谷を準備させているんだから。当時の日生球場は、マウンドから、ブルペンの様子が丸見えの構造だったから、いやでも分かったわけだが、この福岡ドームのブルペンは、グラウンドの目の届かない場所にあるからその心配はいらんな。もしも、球児がオレの準備に気づいたら、そりゃもう大変やろうな、心が荒れすさみ、試合なんてどうでもいいとなげやりの投球をしてもおかしくない。それくらい抑え投手のプライドってのは、誇り高いし、尊重するもんなんや」

　江夏は、藤川が江夏の準備に気づいていることを気づいていない。江夏の危惧するとおり、藤川の心は、怒りに震えているのだが、その怒りは現状にプラスに転んでいる。だが、いつまでも、藤川の怒りを正のパワーに変える作戦が功を奏するとは思えない。

　怒りのパワーは球威と爆発的な球のノビを呼び覚ましたのだが、肝心の制球力をほぼゼロの数値に傾けたのだから。

　ふつふつと湧き上がるエネルギーを押えきれない藤川であるが、そんな藤川を矢野はじらす。

「タイムをお願いします」

　と矢野はタイムを要求し、あえて間を取るのだ。球種はすでに捨て身のストレート勝負で決まっているし、投げるコースも３ボール

だから、クサイところには投げ込めない。それにもかかわらず、矢野が時間を取るのは、ひとえに、江夏の準備時間を取るためだ。急ピッチに準備する江夏に少しでも肩を作る時間を与えるための間作りであるが、その江夏は、自分の出番はない、つまり、打者飯田でこの試合は終ると読んで、準備をやめたことを矢野は知らないのだ。

普段は、長すぎるほどの間合いを取る藤川であるが、怒りのエネルギーが充満した今の藤川は早く投げたくてしょうがないのだ。イライラする気持ちは、藤川の行動に表れる。足の先でほじくり返した土の盛りが、通常の二倍三倍の山となっている。

タイムを取っても特に何をすることもない矢野は、時間つぶしのためにミットを何度も叩いたり、立ち上がったり、座ったりを無為な行為を繰り返す。

「矢野くん、無駄な時間取りはやめたまえ」

これ以上のタイムは遅延行為に当たると、主審の円城寺にさとされた矢野は、やむなく、江夏の準備のための時間を解く。

「わずか、一分にも未たん」

そして出されたサインはもちろんストレート。そして、ストレートしかない、いあやストレートしか投げれないと自分でも悟っている藤川は、何の迷いもなくサインにうなずく。

「見てろ、おまえさんがた。この飯田さんの打席で試合は終わるから。しかも、この一球でも終わる可能性が高い。なぜならな、飯田さんはストレートをすでに4球もみている。おそらく5球目もストレート。矢野の配球がストレートしか投げれないように追い込んだからな。そして、飯田さんも、ストレートしかこないことをわかっている。飯田さんは殿堂入りするほどの名打者や、5球も同じ球種を投げられて、バットに当てられないわけがなかろう。それがたとえ150キロの球児のストレートでもな。さらに飯田さんは、状況を考える打撃ができる人。間違いなく、ホームランは捨てて、ヒット狙いのミート打法でいくはずや、追い込まれる前のこのカウント

で勝負を決めようと考えるはずや。となると、バットに当てて、いや当てるだけでなく、”打てる”可能性が高い。しかも、典型的な中距離打者の飯田さんは、福岡ドームの広いギャップの間に打球を落としにかかるはずや」

「すると、江夏さん。この試合は、飯田さんのサヨナラ打で試合は終わると読んで、準備を取りやめたと？」

「いや、中西。そうやない。飯田さんは打てるが、試合はどっちに転ぶかはわからん。なぜなら、今のタイガースは、史上最高の守備陣形を敷いている。バットに当てて、それが芯を捉えたところで、打球がヒットになるとは限らんわけだ」

「そういうことですか、たしかに、試合は終りますね……。二人の走者を還す長打になるか、それとも、いい当たりを守備が防ぐか……どっちにしろ、飯田さんで試合は終り、江夏さんが準備する必要性はないわけだ……。でも、江夏さん、一塁走者、つまり、逆転の走者は田上ですよ、長打で還れますか？」

「中西、おまえさんは鶴岡野球を知らんな。１―３といえど、打者がバットに当てる技術がある選手ならば、かまわず走者を動かす監督なんやよ」

「たしかに、スタートを切れば、広い福岡ドーム、打球がテンテンとするうちに田上でも還ってこれますね……」

以上が江夏の飯田で試合が終るの読みの根拠だ。深い洞察力と長年野球を見てきた江夏だけに、説得力のある論法だ。が、対向する柴原は、この試合が小説の一部分であることをなぜか気づき、その視点から、勝負は自分の打席に持ち込まれると読んでいる。

「なんのために、オレが地味に守備から、試合に入っていると思うんや。なんための副題なんや。なんのためのまさかの田上の代走なんや。すべたは、オレがさよならのヒーローになる伏線じゃないか。オレがカツンと打って、大学の後輩の田上がゼエゼエいいながら、命からがら、二塁から生還する。すべてはそのための伏線なんだ」

ホークスが勝つか、タイガースが勝つか。江夏の洞察力が当たるのか、試合から逸脱し、二分が小説のキャラと認識する柴原のが読み当たるのか。

すべては藤川の放つボールの威力と、飯田の繰り出す打撃技術と、ホークスの大逆演劇を阻もうとするタイガースの守備陣の強固さにかかっている。

藤川のよく振れた腕の振りから投じられたストレートボールは、火の玉となり、ど真ん中のコースを通過しようとする。

そして、飯田のはじき飛ばした打撃技術は、コンパクトなヒット狙いのミート打法。藤川の球威に力勝負を挑まず、逆にその球威を利用して、長打を放つためのスイングだった。

「まずい！」

捕手の矢野が思わず、そう叫んで目をつぶったのは、飯田のバットが真芯の近くで藤川のボールを捉えた時だった。

右方向、レベルスイング。剛速球退治には、これしかないという理想的なスイングから繰り出された打球は、一塁線を襲った。破られれば、長打コース、江夏の推測どおり１－３からスタートを切った二塁走者の木塚は当然、そして一塁走者の田上でさえも還ってくる当たりだった。

藤川は飛ばされた打球に振り返りもしなかった。満足なストレートを投げられて、悔いがないのか、怒りの投球前とは１８０度違った清々とした顔で、ホームのバックアップに向かっている。

飯田の飛ばした打球方向も正しいはずだった。三塁線には、長嶋以上のサード三宅がいるし、二遊間には、吉田、鎌田の超Ａクラスのコンビがいる。

だから飯田は、守備力が劣る一塁線に打球を飛ばしたわけだったが、そこにいたのも本来は遊撃手、一塁手以上の打球への執着心と対応を見せる、藤田平がいた。

藤田平は、長打コースの打球を横跳びで阻もうとする。

「抜けるな！　取るな、ファウルになれ！」

抜ければ、さよならの長打、取れば、試合終了。柴原の祈りが現実になるためには、藤田平が取り切れず、ファウルゾーンに落ちることだけだった。

勝利への執念

「ちょっと、待てよね、ねえ、なあ！　オレの打席は？　憧れの前田さんやイチローさんに負けず劣らずの天才的ミート打法を魅せる柴原洋さまの打席は？　オレがバットを魔法の杖にように流れるようなバットスイングで、球児のボールをセンター前にはじき返して、九州共立大の後輩、田上はドッタドッタと意気を切らしながら、さよならのホームを踏んで、これくらい普通のことと、慌てず騒がず、クールなヒーローの誕生で、この糞長い試合が締められるはずだったのに！　どうして、オレの前の打席で試合は終わるんだ？！」

柴原は信じられない光景を目にした。小説の構成上、鍵を握るのは自分であると信じて疑わなかった柴原の前に繰り広げられた一投一打は、飯田の打席を持って、つつがなく試合を終了させるプレーだった。

飯田が弾き返した打球は、一塁線を襲い、おそらく前任者のバースのままだったら、取り切れない位置に飛んだ打球を、守備固めに入っていた藤田平が半身の姿勢から倒れこむように飛び込んで、ファーストミット……いや本来遊撃手の藤田平は一塁守備にも、慣れ親しんだ遊撃手用のグラブをつけていたわけだが、そのグラブの先に飯田の打球はすっぽりと入ったのだ。

バースが取れない打球だったのは当然として、上手い一塁手、たとえば、福浦和也や王貞治、そして愛甲猛、駒田徳広など、一塁に有利とされる左投げの選手が守備についていたとしても、取り切れなかったかもしれない。なぜなら、一塁線の打球は、左投げの好守の一塁手にとっては、ミットを逆向きに差し出す、いわゆる逆シングルの形になるのだから。

それに比べて、他の一塁守備能力では左投げの選手に劣るかもしれない右投げの藤田平であるが、一塁線の打球には、二遊間に飛んだライナー気分で飛びつけるのだ。

グラブを差し出す方向も、体の向きも順方向。だから、強烈な打球スピードを記録した飯田のライナーを阻むことができたのかもしれない。

「いけえ～　木塚さん、ゴー。ええい、田上も三塁回っちまえ～」

しかし、森脇三塁コーチャーがグルグルと手を回しているのではないか。投球と同時にスタートを切った二人の走者のうち、木塚はもう三塁ベースを蹴って、ホームに辿り着こうとしている。そして続く、田上は、太り気味の体型らしく、出足は遅いが、走り出せば、それなりの走力になる典型のように、息を切らせながら、その進むスピードは想像以上に速い。

しかし、彼らはなぜ全力疾走をしているのだろうか？　藤田平が捕球していれば試合は終了だというの……。そうだ、藤田平は受け止めはしたが、完全捕球には至らなかったのだ。

藤田平の目の前には、落としたボールが転がっている。そして、飯田は、一塁到達速度に若干不利の右打者のハンデを覆そうと、全力で走っている。

飯田がボールが一塁にたどり着くより、速くベースに飛び込めば、同点、いや田上の走塁いかんでは逆転サヨナラの可能性もある。

藤田平が、飯田がたどり着く前に迅速にボールを処理すれば、試合は終了だ。

はたして、藤田平は起き上がるのに、もたついている。そして一塁ベースカバーに入るべき投手の藤川球児は、なにを早とちりしたのか、長打の備えて、ホームにバックアップに走っていた。

「やべ」

優先すべきは、一塁のベースカバーと今更ながらに気づいた藤川は体を切り返し、全速力で、一塁に走りだす。

いくら運動能力に優れた藤川といえど、スタートの遅れは致命的。ならばとセカンドの鎌田がベースカバーに走るが、これも遅きに失し。飯田をアウトにする選択肢は、藤田平がボールを拾いそのまま一塁ベースに飛び込むしかないのだ。

今の鳥谷と同じく、ユニフォームが汚れ無いプレースタイルが批判されがちだった藤田平であったが、状況が状況だ。このワンプレーには、タイガースの７５年の歴史がかかっているのだ。藤田平はボールを拾いあげると、そのまま、一塁ベースに体ごと飛び込んでいく。全速力で走る飯田に踏みつけれることにも躊躇せずに。

もしも、飯田が勝つためならどんなプレーにもためらわない大阪のど根性野球が骨の髄まで染み込んでいたら、藤田平を踏みつけても、同点、そしてさよならへの執念を成就させただろう。しかし、飯田は大阪の野球で、野球人生を全うする選択肢を選択せず、生まれ故郷横浜に近い東京の国鉄に１０年選手の特権で自ら移籍した男だ。

だからスピードを緩めのだろうか。仏の徳さんが一蹴だけ見せた優しさが勝負を分けた。

藤田平がベースに置いかぶさるようにグラブを置くと、そのすぐあとに飯田が駆け抜けたようにみえた。もちろん、飯田は藤田平のグラブを踏みつけるマネはしていない。

そして、一塁塁審の真鍋は高々と右手を上げて、アウトをコールした。三塁ベースを蹴って、いざ本塁へと息を切らしていた田上も三塁コーチャー森脇の、

「田上、もう終わったんだ」

一言で現実に気がついた。

９回裏３つ目のアウト完了。１－０の僅少差で、阪神タイガースが福岡ソフトバンクホークスを破ったのだ。

「はあああ？　おいおいおい、約三ヶ月……いや前哨戦を入れると四ヶ月ほどかかって、これかよ？？？　大逆転さよなら、そしてヒーローは思わぬところからやってくる。小説の基本でしょうよ？

それがエンターテイメントあふれる物語の正しい流れってもんでしょ？？　オレの打席は？　オレの見せ場は？　オレはなんのため

に試合に出てるの？　感嘆なフライを、それこそラミレスでも、今の金本兄貴でも、フィリップスでも、巨人時代の張本さんでも、とりあえず外野に置いていたズレータでも、巨人時代のマルティネスでもペタジーニでも、中田翔でも、取れそうな打球をふたつだけさばいておしまい？？」

　といつまでも試合終了が信じられない柴原に、川崎がそっと近寄る。

「柴原さん、負けて悔しいと思いますが、僕も腸が煮えくり返るくらいに悔しいですが、現実は現実です！　現実を認め、そこからどう脱却するかが、成長するたったひとつの心構えです！」

「ムネ、いや、だっておかしいやろ？　これで終了ならただの凡戦だろうよ？　なんのためにこんなダラダラと試合を描いてきたんだよ？」

「ショックなのは分かりますよ、でも柴原さん！　現実を見ましょうよ！　僕らは敗者なんです」

「ムネ、お前だって、そうだ。あれだけミスを犯しただろ？　あれどう考えても伏線やろ。試合のどこかでムネが取り返す伏線だろう。そうじゃなきゃムネがあんなにつまらんミスを繰り返すか？」

「……柴原さん。まずはシャワーを浴びましょう。すっきりすれば、混乱した頭もリフレッシュされますよ」

　といつも前向きの川崎も、フィクションの世界から逸脱しかかった柴原の相手はできないようだ。まるで心をダメにした患者に対応するように、柴原を抱えベンチ裏に消えていった。

　そして、グラウンド上では、ヒーローインタビューが行われていた。守りの勝利、先発の村山か抑えの藤川が呼ばれるはずだが、いまだ腹の虫が収まらない藤川はお立ち台を拒否、そして村山も先発完投以外、ヒーローとして扱われるのは不本意と、藤川同様、試合の殊勲者扱いを拒絶した。

　結局、虎の子の一得点をたたき出した金本が、お立ち台に呼ばれたのだが、金本の一打点は内野ゴロであげたもの。

「ほんとに僕でええんですか？　ただの内野ゴロですよ、あれ」
と呼ばれた本人も苦笑いのインタビューだった。

このヒーローインタビューを遠く離れた埼玉で見守るのが大矢だった。

「おい、明夫に田代！　オレはえらいことに気づいたぞ！」

天谷と古城のホームランの欧州

「見ていたかい、田代に明夫」
「そりゃまあ見てましてたけど、大矢監督のチャンネルチェンジャーぶりがあまりに稚拙でいいシーンを見逃しぱなしでしたけど」
横浜の大矢監督に、斉藤明夫投手コーチ兼任投手に、田代富雄打撃コーチ兼任内野手の三人は、研究がてら、他球場の動向を西武ドームのモニターで見つめていたのだ。
未だ地デジ対応していないアナログテレビで見てる野球中継は、ＢＳ－１のソフトバンクー阪神、そして日本テレビの巨人ー近鉄のたったのふたつ。そのふたつの野球中継は交互に観戦していた三人だが、チャンネル権を握る大矢のリモコンさばきが今ひとつで、日テレとＢＳを切り替える間に、いいシーンを見逃すチョンボが多発。現に今の今、藤川対飯田のクライマックスのシーンで、なぜか大矢は日テレに切り替えて、最後の一球を見逃したばかりだ。
斉藤明夫がなぜ、日テレに切り替えたと問い詰めると、大矢は、いや、横浜のＯＢでもある阿波野のヒーローインタビューが見たかったと弁明したが、日テレはちょうど試合終了と同時に時間切れで、ヒーローインタビューが中継に入る余地などどこにもなかったのだ。
大矢は、それでもＣＭ中に、阿波野が一瞬でも映ることを期待して、しぶとく日テレのままにしていたのだが、ＣＭの連続で、野球中継に復帰することなく後番組のドラマに移ってしまったのだ。
「あれ、阿波野は？」
ＢＳ中継がクライマックスに差し掛かっていたことをすっかりと忘れいた大矢は、あろうことに後番組のドラマに興味を示してしまったが、見かねた斉藤明夫が、むりやりリモコンを奪い、チャンネルを日テレに替えさせたのだ。しかし、すでに最後の一球は投じられていて、捕手の矢野が勝利にガッツポーズをする場面が、モニターには映されいたのだ。

「もう、大矢監督。見逃したじゃないですか」
「悪い悪い、球児のやつ、いつもは、もっと間合いが長いだろ？　大事な場面、もっと時間を取ると思って、その間に阿波野のヒーローインタビューも確認しておこうと思ったんだが、あにはからんや、球児の奴が、想像以上に早くボールを投げやがって、ラストシーンを見逃してしまったよ、僕の立てた綿密なプランによると、打倒巨人を果たした阿波野の晴れがましい顔に、ソフトバンク阪神の結末も両得で楽しめるはずだったのに、球児の奴、ぶち壊しやがって！　まあそれはいい、おい明夫に田代。お前ら、気づかないか、ソフトバンク阪神の終りの宴を見て」
「終りの宴？　金本がヒーローインタビューをうけているだけでしょ？　なあ田代」
「ああ、明夫。心は広島の金本が、オレがヒーローインタビューでいいの？　っていう居心地悪そうな顔が大映しになってるだけですよ、大矢監督」
「だから、その金本をみて、何かを気づかないかと聞いているだ、まったく気の利かないコーチ陣だな。まったく1を聞いても、2で反さないコーチ陣だな。金本、そして巨人戦の阿波野のもう一人のヒーローはローズだ。そしてヤクルト戦のヒーローインタビューは誰だった？」
「ヤクルト戦？　覚えてないなあ、誰だっけな、明夫」
「田代はまったく二日前のことも忘れているのか」
「二日前？　ずいぶん昔のことのように感じていたが、二日前だったのか、ヤクルト戦。ないか、ずいぶん寒さ厳しい季節にやってた印象があるんだけどな。で、肝心のヒーローインタビューは誰だったけな？　えっと、ホワイトセル？　いや飯原だっけ、畠山だっけ、それとも兄妹どっちとも、三割打つ遊撃手の川端……だっけな」
「田代は、まったく最近の選手しか記憶にないんだなあ。そいつらが出れる試合じゃないだろうに、権威と歴史のある試合だ。それなりの実績じゃとても出れる試合じゃないんだぞ。選手が試合に出れ

るなら、確固たる実績、そうだなタイトルホルダーが望ましいが、優勝メンバーとか、印象的な成績を残した選手じゃないとな、とても組み込める試合じゃないさ。監督を努めるなら、最低一度は優勝を経験した監督でないとなあ。なあ明夫に田代、お前ら、大洋～横浜一筋の選手じゃ、ちょっと高すぎるハードルだけど、ふたりともクリアしてるよな？」

と大矢は、１２球団で唯一優勝経験のない監督である自分を棚にあげて、田代と斉藤明夫のダメっぷりを叩く。

「それはそうと、本当にお前ら記憶力が欠如してるな。それとも、情報収集を怠ってるのか？　他球場の結果を逐一チェックするのは、首脳陣にとって当たり前すぎる仕事じゃないか。土橋だよ、土橋。ヤクルト戦のヒーローインタビューは土橋だよ。金本、ローズ、土橋。三球場の打のヒーローインタビューがこの三人なのさ。さて、明夫に田代。もうわかるよな？　この三人の共通点はなんだ？」

「金本、ローズ、土橋……？　お前わかるか、明夫」

「いや、田代。ちょっと待てよ……金本、ローズ、土橋？　守備位置は違うし、金本もローズも左翼手やが、土橋も左翼手を守ることはあるが、基本はセカンドだし、打順も金本、ローズはクリーンナップを打つ強打者だけど、土橋は脇役タイプや。メガネをかけてるのも土橋だけだし、アフロなのもローズだけ。眉がうっすらとしてるのも金本だけ。う～ん、なんだろうな。どうにも正解が見えてこんですよ、大矢監督」

「ヒントをやろう、明夫と田代は同級生だろ？」

「あ、そうか！　明夫とオレは同級生！　ローズ、土橋、金本も同級生なんだ！」

「なるほど、田代、そうだ、その三人は同級生や！　アメリカ育ちのローズを同級と呼ぶのは変やが、三人とも１９６８年生まれなんや！」

「……それで、大矢監督。それがなにか？」

「ふふふ、おまえらはどうこまで浅はかで思慮深さがないんだ。法

則だよ、法則。もう3つも重なったら、偶然じゃないのさ。もう勝利の法則なのさ」

「勝利の法則？」

「そうさ、明夫。勝ちたいなら、１９６８年生まれにこだわれだよ」

「なるほど、１９６８年生まれがヒーローインタビューを受けるとわかれば、１９６８年を生まれを積極的に起用すれば勝てる確率が上がると！」

「１９６８年生まれといえば、２０世紀の野球も２１世紀の野球のどっちも知る世代さ。あ最新の野球も昭和の野球も体験している経験値の高さが、７５年の歴史が融合する試合に生きるんじゃないかな？」

「１９６８年……うちに誰がいますかね、大矢監督？」

「ふふふふ、大魔神はどうだい？　１９６８年生まれだよ、１９６８年２月２２日。月日までいえるのは横浜ＯＢとしてあたりまえだよな？」

「でもどうですかね、大矢監督。１９６８年生まれは１９６８年生まれですが、佐々木は早生まれで、１９６７年生まれのいわゆ清原桑田のＫＫ世代に分類されるんじゃないですかい？」

「う、痛いとこをつくな、田代のくせに。まあ確かにそのとおりだ。佐々木はＫＫ世代というべきだな、金本と佐々木が同じ年んお生まれでも、金本が佐々木にペコペコするのは、未来永劫変わらない、それが野球界の上下関係のルールだよな。ならいい。横浜にはいい選手はいくらでもいる。佐々木以外にいい１９６８年生まれの選手はいるだろ？」

「いるか、田代？」

「う～ん、ああそうだ、明夫！　野村、斎藤隆、五十嵐、盛田幸妃、島田直也、小檜山、有働、横浜の初期の投手陣を支えた当時の若手らは、みな同い年だったろ？　たしか、佐々木の少し下だから～」

「二個下だ。佐々木の二個下の世代だぞ、だって、清原桑田の優勝を野村は一年生でアルプススタンドで見てた言うてたから」

「……なんだと、おい、明夫に田代。オレはそいつらの顔を思い浮かべて、そいつらを重点的に起用すれば、勝利が勝手に舞い込んでくると皮算用しってたんだぞ！　それじゃあ、川村は？　波留は？　やつらは何年生まれの世代なんだよ！」

「１９７０年世代ですね、石井琢朗もその世代です」

「うむむっむむ。１９６８年より今度はふたつも下の世代かよ。おいおい我ら横浜ベイスターズには１９６８年のパリっとした選手はいないのかよ！　おい明夫、資料だ、資料。ドラフト名簿だ。１９６８年生まれの世代がいないかを徹底的に調べるんだ！」

ドラフト外

「ええい、明夫に田代。はやくドラフト名鑑を広げろ。まずは、１９６８年の世代が高卒でドラフトにかかった年、つまり、１９８６年の秋のドラフトのページだ」

「はいはい、１９８６年のドラフトですね……１９８７年の入団組ですね」

まるで駄々っ子をあやすような口ぶりで興奮する大矢をなだめすかした斉藤明夫は、ドラフト名鑑を広げて、該当ページを探す。

「あった、あった。１９８６年の秋。お、近藤真一が大写しになってるな。そうか、１９６８年のトッププランナーは近藤だったんか。初登板初先発でノーヒットノーランを達成した怪物。しかし、我々、大洋が指名した選手は、１９６８年のトッププランナーの近藤真一ではなく、４学年上の１９６４年世代の大学生である阿波野だ。のちに、ウチに移籍して、日本一に多少なりとも貢献した阿波野だけども、この時のくじ引きでは縁がなく、近鉄に奪われたんだったな。それで、ウチが替りに指名したのが、デニーや。当時は、友利結で通ってた、デニーか。オレの部屋子（同じ部屋で寝食を共にし先輩のお世話をする）で、よう殴らせてもらったわ」

「デニー？　明夫、デニーなのか？　１９６８年世代のウチのドラフト一位は？　デニーか、西武時代の活躍のが印象深いが、まあしょうがない、デニーを起用すれば、勝てるなら、起用にためらうこともない。制球に不安のあるアイツだけど、球威は十分。一人か二人をなんとか抑えてうちに、打撃陣が奮起。そんな展開に持ち込めれば、デニーが勝利のヒーロー、１９６８年の世代がヒーローインタビュー数珠つなぎが保てるな」

「いやいや、大矢監督。デニーは、近藤と同じ年にドラフト指名を受けた高校生ですか、残念ながら、あいつは子供の頃のちょっとしたことが重なって、高校入学が一年遅れてるんですぜ。つあり、１

９６８年の世代ではなく、１９６７年の世代。ＫＫコンビと同級ですぜ。清原や佐々木と平気でタメ口聞いてますし」
「そうか、デニーは前の年の世代か。まあいい、ドラフト一位以外にも高卒入団の１９６８年世代はいるだろ？　おい明夫。二位から順番に名前を上げてってくれや」
「はいはい、えっと、二位は石井章夫……」
「石井章夫？？　誰だ、それ、おいおい、誰だよ」
「誰でしたっけね？　慶応大の捕手らしいですが、入団拒否してますわ」
「入団拒否？　なら、覚えてなくてもおかしくはないか」
「大矢監督。オレは覚えてますよ」
「なに、田代。記憶容量が他人より少なそうなお前が覚えてるとはな！」
「えっと、石井章夫は石井貴のお兄ちゃんなんですよ」
「石井貴？　西武のかい？」
「ええ、石井貴は藤沢藤嶺高校でしょ？　オレと同じ藤沢の高校なんです。石井自体は、綾瀬市出身なんですが、石井のお兄ちゃんと石井貴は結構年が離れてて、父親を早くに亡くしたことから、不安定なプロに進むより、社会人の安定を選択したんですよ。まだ小さい石井貴の金銭的面倒を見る必要もありましたしね」
「なるほど、なんという慎ましやかな兄弟愛だ。石井貴は兄貴の期待に応えて、立派なプロ野球選手になることで、恩返ししたわけか。まあどっちにしろ大学生だ。１９６８年世代には無関係。さあ、明夫、３位以下の名前をあげろ」
「３位は松村高明。池田高校出身の投手ですね」
「松村？　いたっけな？　オレが覚えてないってことは活躍はしてないんだな。次」
「４位は大野雄二です。大矢監督も、よくご存知でしょうよ」
「ああ右の代打として巨人やヤクルトでもしぶとく活躍したスラッガーだな。当時の大洋は、ホームランを数本打ったくらいで、和製

大砲と崇められる情けなさだったが。たしか、須藤さんに嫌われていて、巨人に出されたと思ったら、須藤さんが巨人のヘッドコーチで復帰しちゃって、また干されて、ヤクルトに出されたんだっけ。まあ大野雄二も社会人出身だろ？　専修大経由だ。１９６８年世代じゃない。次」

「５位は塩崎兼一、６位は榊原勝也ですね。塩崎は八幡商業出身の投手、榊原は北陽の外野手です」

「おいおい、なんだよ、塩崎に榊原って。どっちも知らんよ。そんな選手を試合に起用できるかってんだ。１９６８年生まれの世代だからって。しかも、当時のドラフトは６位までだろ？　なんだよ、うちの１９６８年の高卒世代は完全に不作か？」

「いや、大矢監督。ドラフト外なる制度は当時ありましたぜ」

「おお、そうだった！　ドラフト外！　ドラフト会議に漏れた選手だからといって、侮っちゃいけない。当時のドラフト外は、もうひとつの選手獲得戦争の舞台で、進学から急にプロ入りした、ドラフト会議にかければ上位指名間違いなしの有望株がひっそりと入ること数多し！　さあ、明夫、希望の１９６８年生まれの高卒ドラフト外入団をあげつらえ！」

「宮下正彦……」

「宮下正彦？　うん、最近よく目にする耳にする名前だな」

「関東一の４番打者宮下明大選手の実父ですよ」

「ああそうだ、甲子園で５打数５安打したスラッガーの親父か！　思い出した、たしか、プロ初打席で三塁打を打ったんだよな？」

「ええ、あの試合はオレもブルペンで見てましたが、ドえらい新人が出てきたと思いましたよ、初打席三塁打なんて、実力とプラス運がないと達成できませんから。でも、その後の宮下は伸び悩んだ」

「息子の宮下くんは、プロ志望届けを出したそうだな。息子が、親父の無念を晴らすことに期待しよう。で、次のドラフト外は？」

「山田博一、本間哲郎ですね。どっちも北海道の高卒の子。たしか山田の方はアイスホッケーの才能もあったはずですよ」

「ううん、１９６８年世代だが、プロでは活躍してないなあ。次」
「次は最後です」
「最後？　そりゃドラフト外といえど、際限なく獲得できるわけがない、まあ４人くらいだろう。さてその最後のドラフト外入団は？」
「大矢監督もよく知ってますぜ」
「お、きたか！　オールスターが集う試合に名前をあげても見劣りしない実力者が！　で、その名前は、明夫、もったいぶるなよ、この、この！」
「名幸ですよ、名幸」
「名幸？　名幸って、あれか、デニーと高校時代バッテリーを組んで、セット入団と話題になった名幸？　その高校は、今や春夏連覇で全国的に知られる興南高校だ。しかし、名幸は、選手会が選ぶベスト審判に選ばれるほど、その道で成功した男だが、選手としてはなあ……。くそ、高卒世代は全滅じゃないか！　おい明夫、次だ、次、４年後の１９６８年が大学４年となって、指名された世代のページを広げろ。１９８６年の４年後だから１９９０年の秋だ！」

何話もしつこく続ける話でもないような

「１９９０年の秋だ！　１９９０年のドラフトのページに、我が横浜ベイスターズの救世主の名前が記されているはずだぞ！　わたくし、大矢明彦を名監督に昇華させる１９６８年生まれの世代の選手は誰だ、明夫！」

「そう興奮しないでくださいよ、大矢監督……１９９０年ですね、あ……タカノリの年だ。鈴木尚典が４位指名された年ですよ！　大矢監督」

「タカノリの年か！　我が愛する鈴木尚典。鈴木尚典の再生は、育ての親であるわたくし大矢明彦にお任せよと、開幕から3番に使い、三割そこそこ打って、このタカノリを守備がまずいからって代打要員に追いやってた前任の牛島よ、見たか？　と思わせといて、夏前に完全にスタミナ切れで結局、牛島が正しく、オレが間違っていたことを証明させたタカノリか！　しかしタカノリは、横浜高校から直接プロ入りしたんだろうが。１９６８年生まれの世代じゃないな」

「大矢監督、あいにくこの年はですね、高校生を重点的に獲得した年なんですよ。米正秀や加藤将斗」、そして渡部高史がこの年ですよ」

「加藤ってあれか、東北高校に野球留学した岸和田出身の左腕だな。それなりに活躍したと思ったら、オフのイベントの駅伝で足首を故障してそれっきりになっちゃったやつだな。米はこのドラフトでは拒否して、社会人経由してから、改めてベイの仲間入りになったんだよな。２０１０年現在でも打撃投手として頑張ってくれてる。そして、渡部。この渡部も早いうちから一軍出場してたな。ただ度が過ぎたパフォーマンスが、抜擢した近藤さんの逆鱗に触れて、オリックスに放り出されたんだよなあ。懐かしい。たしか、前の大野と同じく、ロッテにたどり着いたら、そこにも放出した近藤さんが監督してて、結局干されて終わったんだよなあ。というか、１９７２

年世代はどうでもいいんだよ、明夫。大事なのは１９６８年世代の大学生だよ。１９９０年は、小池の年だろ？　８球団競合の小池を引き当てて当てたのがよりによって、人気イメージ最悪だったロッテで、一部始終を見守ってた亜細亜大学の図書館は、怒号に包まれたもんだよ。さて、小池取りに参戦したのかな、この年の大洋っは？」

「いや、大矢監督。小池取りには向かってませんねえ。大洋は、事実上の逆指名を得て、大物大学生を一本釣りしてますぜ」

「大物大学生？？　ほらきたぞ、１９６８年生まれの救世主だ！　誰だ、その大学生ってのは」

思わず、身を乗り出す大矢だったが、

「お喜びの中、申しにくいんですが、大矢監督。水尾ですよ、水尾嘉孝ですよ……」

水尾の名前を聞いて、がっくりと肩を落とす。

「水尾？　なんだい、水尾かよ。野茂に次ぐ史上二人目の契約金一億円男と騒がれながら、まったくの期待ハズレに終わった水尾？　さっきの渡部とセットに放出されたオリックスや西武じゃワンポイントとしてそれなりの活躍はしたがな、いくらウチの投手陣の層が薄いといっても、特に左腕の名前が思い当たらないといっても、水尾の手を借りるほどでもないな」

「それに大矢監督、この大会規定により、再現できる実力は当該球団で残した実績で限られるんですよ。だから水尾を起用したときの実力は、大洋、横浜時代のもの。まったく一軍実績のない水尾ですよ」

「ああそうか、その水尾か。オレもバッテリーコーチとして谷繁をしごいてた頃だったけど、その頃の水尾じゃあなあ、いくら１９６８年は活躍するってジンクスに頼りたくてもなあ。それで、水尾だけなのかい、その年の大学生は？」

「いや、宮川一彦もこの年ですよ。水尾に続いて二位で指名されてます」

「宮川？　ああ左打ちの内野手か。今阪神の矢野とかと東北福祉で同期だった選手だよな。即戦力内野手として期待されていて、新人王候補にも上がってたっけ。しかし、高橋雅裕や清水からもポジションを奪えず二軍暮らし。オレが監督になって一年目、ローズ、進藤、石井琢朗の内野陣を総入れ替えして、失敗して、ローズがやっぱりセカンドがいいとセカンドに戻って、空いたサードに進藤を入れたら、慣れぬサードで故障して、誰もかわりの選手がいなかったから、まあ左打ちだし宮川でも使ってみるかと、使ってみたら、なにか最低限の成績を残して、サードの穴を埋めてくれた選手か。最低限すぎて、翌年から使おうとも思わなかったけどね。たしか川端一彰、これも宮川と同じく特徴に乏しく、最低限の成績を残すタイプの選手。この川端と左右の投手に応じて、サードを使い分けたっけ。しかしまあ、なんにせよ、豪華な内野陣をけちらして宮川を入れることもないよな。おいおい明夫、１９６８年生まれの世代はもう打ち止めかい？」

「打ち止めですねえ」

「それじゃあ、社会人選手だ。高卒から何年も苦労してようやくプロにたどり着く選手や、大卒でプロにかからず、社会人のワンクッションを置いてプロにたどり着く選手が、１９６８年生まれの世代にもいるはずだ」

　ところが、斉藤明夫が色メガネ越しでまじまじとドラフト名鑑をめくっても、１９６８年生まれで横浜入りした目ぼしい社会人選手にはめぐり合わないのだ。

「大矢監督、こりゃいませんわ」

「いないって、おいおいおい、この大会のキーポイントは１９６８年生まれの選手だよ！　打撃のヒーローだけでない、ヤクルトーハム戦で勝ち投手になったのは誰だ？　岡林だろ、彼も１９６８年世代だ！　１９６８年を勝負どころで使えずどうやって勝てばいいんだよ！　おい明夫、そして田代！　そうだ、明夫、いいこと考えたぞ、田代！　直接ベイに入らずとも、他球団を経由してベイにたど

り着く１９６８年生まれがいるはずだ！　いや日本人でなくてもいい、外国人選手の中にもきっといるはずだぞ、１９６８年生まれの世代が！」

めくれどめくれど真実にはたどり着けず

探せど探せど１９６８年世代の使えそうな選手が出てこない。募るいらいらが頂点に達した大矢は、ついに斉藤明夫が資料参照にするドラフト名鑑（ちなみに最新版ではなく、なぜか６年前のバージョンで最近のドラフトは載っていない。１９６８年世代を探し出すには、最近のドラフトはまったくの無関係であるが、資料としては手落ちもいいとこ。資料一つまともに揃えない横浜が、いったいなにをアナライジングするのだろうか？）を掴みとると、そのまま放り投げた。

「あ、監督。まだまだ探してるところなのに。大卒～社会人経由の選手が獲得禁止の二年を経てドラフトにかかる１９９２年のドラフトを見ているところなのに」

「明夫、おれはいつから、ベイスターズに身も心も捧げたと思ってるんだ？　ベイスターズ元年は１９９３年だが、横浜ベイスターズの始動は１９９２年の秋だ。オレは新生ベイスターズにバッテリー担当コーチとしてくわわり、その年のドラフトはより一層ほっぺを膨らまし注目してたんだよ。だから誰がドライチで、誰が入団した年だがよく覚えてるんだ。小桧山の年だろ？　松井秀喜に伊藤智仁の二大モンスターに都合７球団が競合するところ、ベイスターズ元年の命運を託したのが小桧山。聞くところによると、バロセロナ五輪じゃ、伊藤が二番手の扱いで、エースはむしろ小桧山だったらしいじゃないか。負けられない強豪国の先発は小桧山。どんな凄い投手かと、思ったらただ度胸があるだけの酒飲みのちゃらんぽらんの奴だったとはなあ。二位は佐伯だろ？　そして五十嵐もこの年だ。ヒゲ魔神な。捕手の川崎やサイドハンドの吉井もこの年。元年を優勝で飾るべく大学社会人の即戦力選手をかき集めたんだよな」

「小桧山は慶応から日石ですよね？　あれ、もしかして１９６８年世代じゃないですか？」

「いつもにまして浅はかだな、田代は。たしかに日石経由の小桧山だけど、小桧山は五輪特例で一年でプロ入り選手だったんだよ。つまり１９６８年世代が大卒から二年たったこの年の一位選手だけど、世代的には１９６９年生まれだ。って、前にやったろ？　有働や五十嵐、野村、小桧山、盛田、島田はみな同い年って。田代は今さっきの会話を記録する容量もないのか」

「すいません、大矢監督」

「まあいい。いくらドラフト名鑑をめくっても１９６８年生まれの目ぼしい選手は出てこない。なら考えがある。外国人選手でもいい、移籍選手でもいい。なりふりかまわず使える選手を探すんだ。いいか、キーワードは１９６８年４月２日以降の生まれか、１９６９年早生まれだ」

　田代は外国人名鑑、そして斉藤明夫は移籍トレード網羅図鑑を手に取り、目ぼしい１９６８年世代を探すが、これまた横浜首脳陣は路頭に迷う。

「田代、ローズはどうだ！　ローズは来日当時まだ若かったろ？　１９９３年来日でまだ２０代中頃だったはずだ。ローズは１９６８年世代じゃないか？」

「ローズ？　ローズですね、ローズ、ローズ……」

「グリンとランドルフを間違えた田代でもローズと誰かを混同しないよな」

「ローズって、ポンセとともに来日して、やる気のないフォームからそこそこの数字を残した左打者ですっけ？　たしかファミスタの初代にも登録されてたような……」

「ばか、それはローマンだろ？　ロしか合ってないじゃないか！」

「グリンとランドルフなんて、途中のンしか合ってませんぜ」

「ばか、開き直るな。いいか、ローズだぞ、ローズ！　ローズは、アドュウチでもないし、ジェリーホワイトでも、マイヤーでも、ジェームズでも、トレーシーでも、マーク・ブタスカでも、ラコックでも、ラムでも、ゲーリー・ジェスターでもないぞ！　はあはあ…

…田代が混合しそうな田代と現役を共にした外国人の名前をあらかた並べてやった。とにかくローズだ」
「ローズは１９６７年の３月生まれですね」
即答の田代に大矢は思わずガクッと拍子抜け。
「おい田代。いきなり答えを出すな！　せっかく、お前とオレがテンポのいい漫談を繰り広げていたのに、ローズと念を押しても、それでも鋭くボケるお前を期待したのに！」
「いや、そんな暇じゃないでしょ、大矢監督」
「そりゃそうだけどな、って１９６７年生まれか。ローズは、同姓の（綴りは異なる）タフィ・ローズと同世代どころか、二つ上のデーブ大久保の世代じゃないか！　丙午に当たりろくな選手がいない世代なのに、ローズはよく活躍したもんだ」
「……そうですね……」
「いや田代。そこは、アメリカ人に丙午は関係ないでしょって、ツッコミが入るべきなんだよ！　まったく明夫と違い、田代との漫談トークは上手く弾まないな」
それから大矢は、１９６８年生まれの外国人を探しまくるのだが、
「マラベは？　マホームズは？　セルビーは？　どれも違うのかい？　１９７０年以降の生まれか。それじゃあ、バークベックは？　なに１９６１年生まれだって？　シュワーズは？　なに１９６４年生まれだって？　結構年を食ってたんだなあ……」
「大矢監督いましたよ！　１９６８年生まれが！」
「なにい、誰だ、田代！」
「スコットです」
「スコット？　スコットって誰だ？」
「１９９４年にいたじゃないですか、外国人の起用する枠が広がって、二人の打者を外国人で占めざるを得ないベイスターズが投手の枠に外国人を起用できる機会が生まれて、それで取ってきたのがスコットですよ」
「そういえば、いたような気がするなあ。牛込さんが探し出してき

た投手で、３Ａでかなりの奪三振率を記録した投手だから、故障した佐々木の替わりに抑えも務まるって前評判だったスコットか。しかし実情は期待はずれもいいところ、敗戦処理でしか使えない球威で夏過ぎには消えたっけなあ……。と遥か過去に思いを委ねている場合じゃない！　なんだ、見つけた貴重な１９６８年世代が、また使えないって。もう外国人はいい。おい明夫、そっちはどうだ、移籍選手に目ぼしい１９６８年生まれはいたか？」

「中村日出夫っていたでしょ？」

「ああ、西武から移籍してきた大砲タイプの右打ちの一塁手だな。そいつがそうなのか？」

「ええ、移籍前年二軍で２４本記録したから、期待したんですけどねえ」

「中村日出夫の名前をあげるところを見ると」

「ええ、目ぼしいのがここにもいない」

「おい、田代に明夫！　１９６８年生まれの目ぼしい選手がいなくてどうやってウチは勝てばいいんだよ！」

「どうやってって、なにも１９６８年生まれの活躍は偶然でしょ？　ジンクスは大切ですけど、こだわることでもないですよ」

「明夫、だからお前はヘぼコーチでヘぼ解説者なんだよ。１９６８年生まれの活躍が重なるのは偶然ではない、もはや必然だ！　現代の野球と過去の野球が交差した時代を知る年代が、ちょうど１９６８年生まれなんだよ！　試合の流れと勝負どころを熟知できる経験も積み、かといって古い野球観ばかりにもとらわれない。そんな１９６８年世代がいなくて、どうやって勝てばいいんだよ！　ウチみたいな戦局の不利が予想されるチームにとって、開幕戦を取ることがすべてなんだよ！」

「あのう、大矢監督」

「なんだよ、田代」

「試合はもう終わったはずですよ？」

「あん？」

「いや、６時開始の西武とウチの開幕戦はもう終わったはずです。だから我々はこうして他球場の試合をテレビで高みの見物と洒落こんでるんじゃないですか」
「うん？」

１１時４０分執筆開始今しがた執筆完了

「ですから、大矢監督。今、日曜日の九時半でしょう？　ヤクルトと日本ハムの試合が大学の試合の関係で前倒しになった試合が行われたのが、金曜。そして、一足遅く開会式があったのが、土曜。そしてヤクルト日本ハム以外の１０球団の開幕戦、５試合が一斉に行われたのが、今日、日曜日です。大矢監督は、開幕戦のヒーローは１９６８年世代と他の試合から推察して、私と明夫に横浜に該当する選手はいないかと探させたわけなのですが、よくよく考えると、我々の開幕戦はもう済んだんじゃないかと」

　田代は、それまでのふつつかでうかつなキャラを返上するかのように、理路整然と大矢に解き明かし始めた。たしかにそうだ、流れる時間軸からすると、同時進行の開幕戦を眺めることができる大矢と田代と明夫は、開幕戦を終えたばかりの三人でないと、、前後関係からしておかしい。

「なにをいってるんだ、田代！　いくらオレが１２球団中、最悪の監督と噂されようとも、押試合が終わったか、終わっていないか、くらいは認識してるぞ」

「それでは、大矢監督。開幕戦は終わったのですか？」

「終わったと聞かれたら、終わったとしかいえないな。なにしろ、こうして我々三人の首脳陣は他球団の試合をモニターで見る余裕があるのだから」

　田代だけではない。斉藤明夫も気付き始めている。自分が、狂いそうな時間軸の中に引きずり込まれていることを。

「ならどうして、開幕戦のヒーローのジンクスにこだわり、我々に１９６８年生まれの世代を探させているのですか？」

「明夫までなにをいうんだ。検証じゃないか。開幕戦のジンクスが、我々の世代にも正しく適用できたかどうかを」

「それで、大矢監督。ジンクスは、我々の試合、横浜ベイスターズ

対西武ライオンズの一戦にも正しく波及されたのですか？　ジンクスどおり１９６８年生まれの世代がヒーローに仕立て上げたチームが勝ったのですか？」

「明夫に田代も試合を体験しただろうよ。いくら明夫と田代でも今、終わったばかりの試合を忘れやしないだろう？」

「それで、大矢監督は開幕戦を認識しているのですか？　終わった実感があるのですか？　なにが起きたかを詳細に語れるのですか？」

「あったりまえだろ、明夫に田代。素晴らしい試合だった。開幕戦にふさわしいゲームだった。私の恩師でもある三原監督の復帰戦としてこれ以上のないゲームだった。のっけから炸裂する三原マジック。我々が予想だにしない采配、選手起用。それでも我がベイスターズは臆せず、三原ライオンズに立ち向かった。英智と策謀と勇気とパワーとスピードが、９イニングのすべてに満面に充ち溢れていた。こんなゲームの注目度が薄いなんてありえないよ。地上波はもちろん、ＢＳ中継もない。埼玉と横浜の地方局とＣＳ放送くらいしか中継がなかったのが残念なほどだよ」

「９イニング？　９イニングで試合は終わったのですか？」

「ああそうだよ、複雑な人間関係が渦巻くこの大会、延長戦にもつれ込んだら、３時間ゲームですむかい？　試合開始から３時間半しか立っていないのに、我々首脳陣がこうしてくつろぐ余裕があるってことは、試合は３時間ていどで終わったって証拠だろ。マスコミへの会見、選手への叱咤……」

「叱咤？　叱咤ってことはまずいプレーがあったってことでしょ？　試合はやっぱり大方の予想どおり敗北で……」

「ばか、明夫。勝っても叱咤は必要だ。たるんだプレーや冷静さを欠いた動きがあったなら、勝ったからとナアナアにせず、締めるところは締めて……」

「なら、勝ったってことですか？」

「勝ったともいってないだろうよ。勝敗をばらしたら、これから試合を見るひとはどうする？　結果の知った試合ほど面白くないもの

はないだろうよ」
「これから試合を見る人？　いったい誰に向けてモノを言ってるんですか？　日曜日、遊びに出かけ、試合に間に合わずテレビ録画を見る人にですか？　それとも日曜も仕事で、これからスポーツニュースのダイジェストを見る人向けですか？」
「分かってるだろうよ。我々が誰に見られているのか。そして、我々は時間を少しだけ、戻して、熱い熱い試合の渦にまた巻き込まれなくちゃいけないんだ」
　大矢は手元にあったスポーツ新聞を広げた。日付は今日のもの。昨日の開会式と今日の試合展望が主な記事の、もう古新聞ともいてもいい新聞だ。
「この新聞はどこだ？　スポニチか。西武とスポニチは多少なりとも関係あるからなあ……だがそのスポニチすら、今日の西武の先発予想を当てられなかった」
「そりゃそうでしょ。誰も当てれるわけがないですよ」
「スポニチの予想は、稲尾さん。試合後の会見で、西武担当の記者を捕まえて聞いてみたんだよ。どうして、稲尾投手と予想したのかって。そしたら、三原監督が一番信用する稲尾投手を後ろに置く戦略を取ることは、過去の日本シリーズでもわかっている。開幕戦に稲尾投手を起用せず、違う投手を投げさせたがる傾向もわかっている。だから、逆に稲尾でいくんじゃないかと、彼はそう読んだそうだ」
「稲尾さん、開幕なら当たり前のようで、多少の驚きはありますよねえ。我々の予想でも稲尾さんはないとの見方が大勢を占めていた。だから裏の裏をついて稲尾さんの先発というのも、三原マジックですよね」
「そうだろ？　オレはこのスポニチを朝、目を通して、稲尾さんもあるのかなあと、頭から稲尾さんはないと外していたけれど、西武担当記者が予想するならないこともないだろうと。でも他の新聞はどう見てるんだと、他の５紙を見てみたんだ。これが驚き、スポニ

チと合わせて、６紙のすべての予想が違っていたんだ。もうオレの頭はパニックさ。他の球場の先発予想は９割型的中させているのに、どうして西武だけはこうなんだと、よりによってウチの対戦相手だけ、予想不可能状態とはなと」

「６紙６様。でもその６人の開幕投手予想のすべてが」

「外れたときたもんだ」

え、まだ試合やるの？

「いやいや、まだ違和感ありまおすよ。山本浩二さんや衣笠んと一緒のグラウンドでできたらいいなとの夢はありましたけど、バースや掛布さん、田淵さんと一緒にチームでやるとはね。いまでも、なんだか信じられないというかしっくりこませんよ」

福岡ドームのグラウンド上では、まだ金本のヒーローインタビューがつづいている。結果的に勝利打点は金本に記録されたが、内野ゴロであげた打点だけに、金本の歯切れも悪い。そして、阪神タイガースの一員として出場する違和感がまだ拭えきれてないようだ。

阪神の金本は見慣れていても、、田淵や、バース、掛布と並ぶとなんらかの違和感を感じるのは間違いない。阪神の歴史的オールスターにこそ居心地が悪そうな金本であるが、自分がこの試合のヒーローであることは、表面上の言葉ほど恥じてはいないようだ。安打でしろ、内野ゴロであげた打点にしろ、得点ボートに点を加え、それが結果的に決勝点になったことは紛れもない事実。

自分の成績よりも、勝利を優先する金本だけに、勝ち試合の決勝点をたたき出したことに、ようやくチームの一員になれたと胸をなで下ろしているだろう。

そして、敗れたホークスサイドのショックは思ったより大きい。僅差の敗戦だったこともあるが、拙攻とミスが重なったことが敗因であることが、悔しさに輪をかけているのだろう。

今日の試合の戦犯ともいえる川崎だが、元気は忘れてはいない。

「甲子園じゃないんですよ！　みなさん、プロは試合に負けても次があります！　短期決戦といえどリーグ戦、一敗くらいはどうってことないですよ！」

「しかし、ムネ。エースの杉浦さんで負けたんやぞ」

松中がベンチの恥で前のめりになって歓喜の阪神ファンを恨めしそうに見つめている。

「杉浦さんはたしかに、大エースです。ですか杉浦さんは南海を代表する大エースです！　大阪の大エースです。僕らにはまだ、ダイエーの、ソフトバンクの、大エースがいます！　九州の大エースがいるじゃないですか！」

「和巳のことか……。そうかアイツも投げられる状態に戻ってるんだな」

「そうです、斉藤和巳さんですよ！　あれほど負けないエースがいますか！？　松坂さんと投げ合っても平気で勝ってた投手ですよ。次の試合、どこと当たるかも、どの投手と巡りあうか、わかりませんが！　斉藤和巳さんが負けると思いますか！　元の肩に戻った斉藤和巳さんは、世界のエースです」

「でもな、和巳は、肝心の短期決戦に弱く、日本シリーズ、プレイオフに都合5度出て、ほとんど勝ってないんやぞ」

「ほとんど勝ってない？　なら今度は勝つ確率が高いんじゃないですか！　運の回りってのはそういうもんですよ！　斉藤和巳さんのような実力者がいつまでも負けるわけないじゃないですか！」

どこまでもポジティブな川崎、そして、ブルペンでは城島が闘志を燃やしていた。

「クッソ～　投手が杉浦さんだから、先発捕手とはさすがにいかんが。せめてオレがベンチ入りしてたらなあ、最上最強のクラッチヒッターのオレが、効果的すぎる代打一発を放ってるのに……」

悔しさをにじませる城島だが、いつまでも落ち込んでる城島ではない。すぐに気を取り直し、近くにいた斉藤和巳の右腕をつかむ。

「おい、カズミ。次、負けたら終戦やぞ。これを救うんは、オレとお前の黄金バッテリーの他におらんよな？」

「……」

「なんだ、カズミ。故障してる間に弱気になったんか？　オレと組んでた頃の生意気なほど無敵の投手だったお前はどこにいったんだ？」

「……いや、オレが先発ですよ。もう投手コーチの柚木さんに申し

渡されてます。二戦目は九州のエースでいくと」
「なら、なんでもっと自信をもたんのだ。景気いい言葉いわんのだ」
「いや城島さんがベンチにも入るかどうかもわからんのに、バッテリーの絆を交わすのもどうかな～思うたんですよ」
「あほ、鶴岡さんは相性を優先してバッテリー組むはずや。オレをあえてブルペン捕手に追いやったのは、二戦目に備えてのことだ。ブルペン捕手として、色々な投手のコミニケーションを取らせるためや。最初は、ブルペン捕手？　このオレ様が？　と頭を茹でらせたもんだが、鶴岡さんの真意がわかれば、納得できることよ」
「バッテリーの相性優先？　それなら田上、いや的場さ先発やないですか」
「この～カズミ！　野村さんの控えならオレの怒りは歯ぎしりでおさまるが、的場や田上に先発捕手奪われたら、野村さんと共に、鶴岡監督に殴りこみかけるぞ」
「あはは、冗談ですよ、城島さん……」
斉藤和巳は急にブルペンのマウンドに小走りに向かって、手招きで城島を座らせる。そして、おもむろに投球フォームに入る。堂々としたワインドアップ、そして左足を上げきったところの雄大なモーション、そこから放たれるボールは、ズシリ重く城島のミットに収まる。
「よっしゃ、このボールや。日本には斉藤和巳がいる！　とあの落合監督にいわせたオレの超剛球がここに復活や」

そして、時間の流れはいまだ9時５０分。ホークスとタイガースの試合が終わって２０分少々。大矢と田代と明夫が、自分たちの試合が終わってることに気づいてわずか数分の時間しか立っていない……。
そして、大矢は時計の針をまた戻す。なんど、通ったろう、日曜日の夕刻、試合前の独特の緊迫感はなんどもなんども、なぞらえ、そして新しい物語に塗り替えられる。

カミソリシュート

西武ドームの選手関係者駐車場は、まるで高級車の販売展示場だ。いかにも高そうなゴツゴツとした車が居並ぶなか、愛車のセルシオからさっそうと降りてきたのは、今何かと話題の東尾修だ。西武ライオンズの主力投手として、この大会でも獅子奮迅の活躍が期待される東尾の背後に迫る影があった。

「お～い、トンビ」

「なんや、オレをあだ名で呼び捨てるやつは」

東尾は怪訝そうな表情で振り返るのだが、そこにいたのは、同じ２００勝投手で名球会の先輩の平松政次。こちらは対戦相手の横浜ベイスターズの大エースだ。各新聞紙の開幕投手予想はこの平松で一致している。

「凄むことはないだろ」

「これはこれは、平松さんですか」

眉間に寄せたシワ一転、いきなり、ペコペコモードで平松に握手を求める東尾。しかし、平松は東尾の差し出した握手を拒絶するではないか。

「おい、トンビとオレは、今日投げ合うんだろ？　名球会のお遊びゴルフじゃないんだから、友好モードじゃおもしろくないだろ」

「投げ合う？　オレと平松さんが？」

東尾の眉間にまた深いシワが寄っている。

「投げ合うだろ？　今日の西武の先発はお前だろ？」

「へえ～今日の横浜の先発は平松さんなんだ。それは知らなんだ。てっきり秋山さんか、遠藤か、番長三浦の誰かと思ってた」

「……今日の先発がオレだと仮定しての話だ。西武の先発はお前なんだろ？」

「……どうして、オレだと思うの？　西武は横浜と違うよ。開幕戦の先発にふさわしい奴がいくらでもいる」

「いくらでもいるからお前なんじゃないか？」
「どうして？　いくらでもいるからオレなの？」
「オレは知ってのとおりフジサンケイグループの人間だから、サンケイスポーツを愛読してるが、そのサンスポの先発予想はお前なんだよ」
「へえ～」
「だからといって、オレは評論家としても一流。記者の予想の尻馬に乗るだけじゃなく、オレが導きだした結論もお前の先発なんだ」
「ほう～」
「さっきもいっただろ？　いくらでもいるからこそお前が開幕だと。お前の球威も変化球もたいしたことはない。正直いって、別格の稲尾さんはおろか、松坂や若い涌井の足元にも及ばんだろう」
「そりゃ自覚してます」
「だが、絶妙な制球力と度胸がある。様子見の開幕戦にはぴったりじゃないか。三原さんはそこを買ったんじゃないかな。しかも、トンビ。お前は、西鉄、太平洋クラブ、クラウンライター、西武とライオンズの４形態を知り尽くす稀有な投手。九州ライオンズと埼玉ライオンズの融合を目指すなら、開幕にお前を起用する。それが三原さんの用兵だろう？」
「だろうって、知りませんがな……」
「そして、しつこくいるが、いくらでいるからこそのお前の先発だ。短期決戦といえど、負けても次がある。トンビで負けても、松坂がいる。郭泰源がいる。そして稲尾さんがいる。この安心感こそが、西武ナインの足取りを軽くするんじゃないか？　オレが負けたら、次誰がいる？　と疑問符がつき、平松では絶対に落とせないと肩肘張る横浜にはできない戦略だ」
「……へえ～色々考えますね。ところで、平松さん。他のスポーツ新聞読みましたか？」
「いいや、読んでないぞ」
「ライオンズの先発、面白いことになってから、目を通していたほ

うがいいですよ……それじゃ、試合前、敵同士が話し込むのも怪しまれますから、このへんで……」

東尾は、口笛を吹きながら、平松に後ろ姿で手を振って西武ドーム内に消えていった。

「スポーツ新聞？　今のスポーツ新聞は談合かと思うほど、どこも似たりよったりだろ？　どこも東尾先発予想じゃないの？」

ぽつんと残された平松は、東尾の残したメッセージに呆然とするが、一方、横浜ベイスターズのロッカーでは違う悲鳴が鳴り響いていた。

「なに？　おいウッチー（内川）」

「どうしたんですか、村田さん」

村田が手にするのは日刊スポーツ。なにも村田が意図的に日刊スポーツを選んだわけではない。選手のロッカーに誰のものとなく投げ捨てるように置かれていたスポーツ新聞を拾いあげて、広げただけなのだ。だが、この日刊スポーツが、村田のくすぶってた闘志にメラメラと火をつけることになるのだから面白い。

「いや、今日の西武の先発が涌井だってよ！」

「涌井が先発？　ありえないですよ。いくら涌井といっても、西武の選手層の中では埋没するレベルですよ」

「だが、ウッチー。新聞が嘘を書くか？」

「書くこともあるでしょうよ、村田さん」

「東尾さん？　稲尾さん？　そんな昔の投手といまさら対戦してもな、現代野球のレベルをを舐めんな、かったりーなと感じてたが、涌井が先発となると、これはもうガチンコの試合になるぞ！　知ってる同士、遠慮も探りもいらない。なにより現代野球こそが最高峰であることを、世間に知らしめれるいいチャンスじゃないか。涌井を４番のオレが打ち砕く。それを羨ましそうにベンチで見つめる古い野球人。いやあウッチー。これだよ、これこそがオレらの世代こそが、野球界の頂点と……」

熱く語る村田の一方、内川はいまだ涌井先発に半信半疑。

「ホントに涌井なんですか？　どうもしっくりこないなあ。僕としては、大分の大先輩の稲尾さんとやりたかったのに。しかし、涌井の根拠ってあるんですかね？」

「あるだろうよ、ウッチー、稲尾さんには悪いが、稲尾さんの球種はスライダーとシュートくらいだろ？　一方の涌井は、スライダー、カーブ、シュート、ツーシーム、フォーク、チェンジアップ、シンカーといくらでも球種がある。どっちが打ちにくいのは一目瞭然だ。三原監督さんも、古い野球観にとらわれない斬新な考えの持ち主らしいから、涌井の多種多様の投球術を見て、現代野球こそ常に最高峰と思い知って、涌井先発を決断したんじゃないかな」

「……涌井がですか？　涌井はいい投手ですけど、ダルビッシュのように、知らない人を一瞬で虜にするようなタイプには見えないんですけどね～。無尽蔵なスタミナ、しつこい投球スタイル、ポーカーフェイスと見れば見るほど、味わい深くなる投手ではるんですが」

「それじゃ、ウッチーは誰が来ると思ってるの？」

「渡辺久信さんじゃないかな……」

「今の監督の？　どうして」

「いえ受け売りなんですけどね、出かけにスポーツ新聞買ったら、でかでかと今日の西武の先発は渡辺久信と書いてあったんですよ。三原監督が、日本シリーズ開幕戦４度の実績を買ったそうですよ。なにやらこの４度は、西鉄時代を通じて、ライオンズ史上最多のシリーズ開幕戦先発らしくて……」

「どこのスポーツ新聞？　日刊じゃねーよな。日刊は涌井だからな」

「報知……です」

「はん？　もっとはっきりと大きな声でいえよ」

「報知新聞です……」

「報知って、お前な、ウッチー。情報収集目的でも、今日の試合のじゃなくて、今度、巨人に行く時のためだったのか？　かあ、ウッチー。主力選手の心ここにあらずだから、いつまでもベイは弱小のままなんだよ」

「そういう村田さんだって……どうして、急に王さんや秋山さんの著書を読み始めたんですか？　どうして、ベイスターズカラーの青じゃなくて、黒と白のツートンカラーのリストバンドを発注したんですか？　どうして多村さんにまたよろしくってメッセージを送ったんですか？　どうして寺原にソフトバンクの内情を聴取しだしたんですか？　村田さんこそ、チームにここにあらずじゃないんですか？」

「ぎく……」

とまさに心、この試合にあらずの二人でした。

斉藤宜之　紀田彰一　多村仁　矢野英司　横山道哉↑この人

西武ライオンズ監督三原脩は、監督室の一室にずらりと並べた主要スポーツ新聞６紙をみて、ほくそ笑んでいた。

「最近のスポーツ新聞記者は、取材熱心で先発予想くらいかなりの確率で当てると聞いたが、この有様か。どの新聞を見ても、今日のライオンズの先発を当てていない。スポーツニッポンは稲尾、サンケイスポーツは東尾、報知新聞は涌井、日刊スポーツは渡辺久信…惜しいなあ、確信に近づいているようで、その周りをぐるりと囲む迷い道をグルグルしてるに過ぎない……。それでは、デイリースポーツ。阪神タイガース情報に強みのある新聞だが……」

デイリースポーツの一面はもちろん阪神関係の記事。開会式で実現された江夏対ベーブルースの時空を越えた対決を大きく報じつつ、バース、藤村、掛布、金本、真弓、田淵の名前をずらりと並べて『史上最強ダイナマイト打線で野村城島撃破や！』の大見出しで、ソフトバンク対阪神の前哨戦を盛り上げている。

結果的にダイナマイト打線は不発に終り、鉄壁の継投と守備陣で勝ち取った勝利で、野村撃破は当たったが、城島はベンチにも入っていない……と未来を知るものにとっては、若干的外れの一面大見出しであるが、阪神ファンの気持ちを鼓舞するのがデイリースポーツの使命なら、役目は果たしているといえるだろうか。

「タイガースだらけですなあ……」

三原はごてごてとした関西特有の紙面構成に霹靂としつつ、ページをめくるが、二面を見ても、三面を見ても、阪神情報づくし。

「これは横浜とライオンズの試合直前情報は載ってないかもしれんなあ」

と三原が諦めかけたその矢先、さらにめくった５面。三原の目に飛び込んできた横書きの大きなキャプションは、

「三原マジック攪乱作戦！！　開幕先発候補が１０人？」

と、予想外にも横浜西武を大きく取り上げた記事。これには三原も苦笑い。

「いくら先発投手が絞り込めないといっても、これはいけませんなあ。１０人も名前を上げれば、自然と当たるでしょうな」

記事の内容に詳しく目を配ると、『横浜スコアラーも困惑！　西武の開幕投手が絞りきれない。横浜のスコアラーが開幕投手の可能性がありと踏んだ投手は、なんと総勢１０人を超えるようだ。横浜ベイスターズの横山道哉西武担当スコアラーによると、「稲尾さん、東尾さん、松坂、涌井、工藤さん、池永さん、渡辺久信さんら有力候補はゴマンといるし、他に郭泰源や石井丈裕さんらも、過去の日本シリーズの実績から穴候補として注意が必要。さらに西口さんの調整も先発前の調整なんだよな。絞るのが大変だよ、なにせ三原さんだからね、相手は。今、名前をあげた投手の誰が来ても不思議じゃないから、スコアラーの仕事も大変。１０人分の対策を立てないといけないからね」と誰が来るのか検討つかずお手上げ状態だ。過去、なんども野球ファンをあっと驚かす選手起用をした三原監督だけに、誰も想像だにつかない投手がマウンドにのぼってもおかしくない？』と横山スコアラーの談話を交えて記事を構成している。

そして、今日の試合予定にある西武の先発投手は、松坂。各紙、調整の具合をみて松坂二戦目と読んで、松坂開幕投手を外すなか、あえてデイリースポーツは松坂開幕を押してきた。なにか根拠があるのだろうか、それとも阪神以外の情報が当たっても外れても誰も気にしないからと適当な予想だろうか。いや、肝心の阪神の先発予想を、これまた各紙二戦目と読んでいる江夏としているデイリースポーツだ。（開幕投手は村山。デイリースポーツは江夏ベンチ入りの情報をつかんでしまったために、すわ開幕先発か？　と勘違いしたようだ）

根拠もなにもなく穴狙いに走ったのだろうか。

「うふふふ……いいところまではいってるんだけどなあ。誰の予想にもつかない？　まあそうだろうね、でも過去のライオンズをよく

知るものなら、おかしくない投手だと私は思うなあ。しかしまあ、１０人の名前をあげて、なおまったく当ててないんだから、新聞記者対私の前哨戦は、私の圧勝かな？」

そして最後に三原が目を通すのが、東京中日スポーツ。デイリースポーツ同様、特定球団＝中日に大きなつながりのある新聞。やはり、中日とロッテの試合関連の情報量がダントツ。星野が拳を突き出し、気合満点の写真が、バレンタインなんぞに負けるか！　のキャプション付きで大きく掲載されている。

肝心の先発予想は池永。三原の「池永は稲尾以上の天才的野球センスの持ち主」コメントから導きだされた池永開幕投手予想のようだ。

これにて、スポーツ新聞主要六紙の先発予想が出揃ったわけだが、すべての予想が異なる違う投手の名前のうえに、

「中日スポーツも違うのか。まったく取材熱心なのはいいけど、最近の記者のみなさんは真面目すぎて、記者の勘ってものが欠落してるのかなあ」

三原の考えを読みきった新聞は一紙すらないようだ。

「しかも、全紙、右投手か。横浜の一番打者は誰？　石井琢朗くん、左打者じゃないか。左打者には左投手でしょうな……最初の一人が肝心ですぞ」

彼らはただボタンを押してるわけではない

西武ドームの外野で入念にストレッチをするのは、松坂をはじめとする西武自慢の若手投手陣だ。涌井、岸、帆足……。現役世代に頼らずとも、十分すぎる投手陣を形成できる西武。若くして、その分厚い投手陣に割って入るのだから、いつの時代のライオンズの投手はハイクオリティだ。

足を伸ばした松坂はストレッチ運動の負荷のために、

「おい、ワク。背中だ、背中」

涌井に背中に乗るように命令。

「いいんすか？」

涌井は背中合わせになり、松坂に全体重を乗せる。

「いてて……。おめー、おめーよ」

想像以上の涌井の重さに松坂は悲鳴をあげて、払い退けるように、涌井をどかす。

「おい、ワク。オメー、こんなに太ってたか？　まったくオレがいない間にぶくぶく太りやがって。横浜高校に帰って、また小倉部長の地獄のアメリカンノック（外野のポール間を左右に走らせながら、ノックの雨あられ）でもやるか？」

と松坂は、涌井以上に意味なく肥えた自分を棚にあげての、お説教。さすがの涌井も、大先輩松坂に言い返せないはずが。

「松坂さんにはいわれたくないっすよ。豚に豚といわれるようなもんすよ」

と思いきり、言い返してしまう。

「それじゃ、オレが豚みたいじゃないか」

「いや豚でしょ、どう見ても」

そこまではっきりいわれちゃ、松坂も苦笑いを浮かべるしかない。これも涌井の憎めない性格からか？　いや涌井のふてぶてしい面構えは、普通に憎みきれるはずだが……。人のよい松坂の大人の我慢

だろうか。

その松坂軍団の敵陣に勇敢にも？　乗り込むのが横浜が誇る若きスラッガーの二人。村田と内川のデコボココンビだ。

「おい、マツ」

「あ？　なんだシュウ（村田修一）かよ。どうした、オレになんか用か？」

「同世代のよしみだ。正直に答えろ。お前、今日の先発だろ？」

「はん？　オレが今日の先発だって？　ありえーねよ。いくらオレがレッドソックスが１００億出した価値がある投手だからって、ＷＢＣの連続ＭＶＰだからって、どう考えても甲子園史上最強の投手だからって、ライオンズには敬うべき先輩がいくらでもいるんだぞ。稲尾さん、東尾さん、工藤さん、池永さん……実力と素質なら文句なくオレが開幕だけど、先人を立てる意味もあるこの試合、オレじゃねーって」

「いや、デイリースポーツがお前の先発を予想してるぞ。知らばっくれるな」

「デイリー？　よりによって、デイリー？　デイリーに西武を取材する余裕ってあるの？　ないでしょ。阪神にかかりっきりの新聞の情報を信じるなんて、シュウもヤキがまわったか？」

「オレが聞いい話だと、ライオンズの監督の三原さんは、お前の実績、メジャーに１００億で買われたっての聞いて、いたく感動されたそうじゃないか。三原さんはアメリカが雲の上時代の人。メジャーが争奪戦を繰り広げる投手が、ライオンズにいるなったら開幕を任せたくなるんじゃないか？」

「ふん、だからオレじゃないって、しつけーな、シュウ」

「じゃあ誰だよ、お前じゃないとしたら」

「オレがいえるわけねーだろ」

「お前じゃーねとしたら、そこの涌井か？」

同級生同士のざっくばらんの会話にさすがの涌井も割り込めずに

いたが、お呼びがかかったとなれば、涌井の舌は軽やかに回りだす。もちろん涌井特性の毒をたっぷりと舌の先に練りこませて。

「オレですか？　僕が開幕？　村田さん、買いかぶりすぎっすよ」

「いや、お前でもおかしくはないよ。現に、スポーツ新聞でお前の開幕を予想しているとこもあるくらいだ。多彩な変化球を冷静に集める涌井に、三原さんがライオンズを託してもおかしくはない」

「そりゃ、僕はスライダー、カーブ、シュート、フォーク、シンカー、チェンジアップ、カットファーストといくらでも変化球を使いこなせるし、現代の稲尾さんというべきほど無尽蔵な体力もあるし、きっちりとボールを長くもてる球持ちのよさも誇れるし、ピンチに陥っても、味方がエラーしても、たとえば、ここで名前をあげるのも気に引けますが、あえて実名をあげますと、ＧＧ佐藤さんがレフトフライを見失ってり、石井義人さんが打球に対する執念を見せずに、無抵抗外野に通しても、表情ひとつ変えず投げれる僕なんて、とてもとても……」

「謙遜してるのか、自負してるのか、ようわからんが、それだけ能力あれば抜擢されてもおかしくないだろ？」

「とても、とても、もったないっすよ」

「もったない？」

「もったないっすよ、ええ。この僕が横浜相手なんかに投げるなんて」

「は？　なんだよ、涌井……とお前のペースに乗るのはよそう。いつものお前のパターンだ。相手を見下して、精神的優位に立とうする一種の自己暗示だろ？」

「ところで、村田さん。村田さんが４番ってマジっすか？　ケータイのニュース見て驚きましたよ。村田さんを４番にするほど横浜の層って薄いのかなって」

「オレが４番かだって？　オーダーをいえるわけねーだろ？」

と村田は口にするが、村田４番のキーワードだけで、村田の頬を緩んでしまうので、４番に指名されたことはバレバレだ。

「４番ですか？　はあ～村田さんの一発に注意するだけでいいのかあ～　なんだ、今の最弱の横浜と同じじゃないですか？　そんなチーム相手にこの僕が投げるなんてもったいなさすぎて」
「く、言いたいことといいやがって、２００９年の交流戦では、オレだけを注意すればいいと大口叩いて、ベイ打線に火車にされたじゃないか」
「そうでしたっけ？　打てれたことはいしいち憶えてないなあ。ところで、内川さんも先発なんですか？」
　と、ようやくアゴを長くしながら動向を見守っていた内川の出番だ。
「痛いところつくなあ、涌井。はっきりいっちゃうけど、オレは代打要員だよ。まあ涌井が救援に出たら、打ち込んでやるから」
「代打要員？　それじゃ出番がくるまでアゴを長くして待つんですね……？」
　この程度の毒では、内川を怒らすことも、場に混乱を持ち込むこともできない。満足のいかない涌井は、ついに禁断の秘密を明かそうとしてしまう。
「それじゃあ、今日の先発をバラしましょうか？　毒舌涌井さんの特別サービスです」
　涌井の口に対して、放任主義の松坂であるが、さすがにチームの機密事項をばらされるのはまずいと、涌井の口を両手でふさぎにかかる。
「おい、ワク、それだけはいうな……」
「もごもご……もご……まつぬ……もごもご……」
　口は塞いでも、涌井の毒は、小さなすき間から漏れてくる。いくら迂闊者ぞろいのベイスターズナインだって、こんな重大事項、聞き漏らしはしない。
「おい、ウッチー」
「はい、村田さん」
「聞いたか？」

「聞きましたとも」
「まつぬ……まで聞こえたな？」
「はい」
「松沼兄弟のどっちかか。こりゃ、ウッチー」
「意外ですね。だからといって可能性ゼロとはいえない実績の持ち主です、兄弟、両方共」
「さっそく、首脳陣に報告だ！」
と横浜側のベンチに勇んで戻る村田と内川であったが、その背後、西武の選手に熱心に取材する評論家の姿が。細身の体に特徴的なメガネと整えられた口ひげ。そして、兄とは正反対にごつい体に、四角い顔、チャームポイントは口元のほくろの弟。まさに、松沼兄弟が、今日の球種チェック解説のために、各投手に球種の再確認を行っている最中だ。いくら三原監督が策士といえど、ベンチに入らない背広組の解説者を先発には持ってこれない。
完全にデタラメの情報を、まんまと松坂、涌井の横浜高校師弟コンビに吹き込まれた村田と内川。
「こんなに上手く騙されるとは思いもよりませんでしたね、松坂さん」
「まあな。世間にバカ高校とおもわれがちの横浜高校だけど、ちゃんと知謀も使えることも世間にアピールできたな」
「ちぼう？　なんすか、ちぼうって？」
「それくらいの言葉知っとけよ。これだから、与太高っていわれるんだよ……」

グラウンドレベル

西武投手陣と真反対、三塁側よりのグラウンドでは、横浜の選手たちが試合前の調整に励んでいた。中でも目立つのは、やはハマの大魔神こと佐々木。そして、佐々木とくれば、この二人。東北高校、東北福祉大を通じての後輩の斎藤隆と、９０年代中盤のセリーグを席巻した佐々木との恐怖のダブルストッパーの一人、盛田幸妃だ。

「おい、隆、チェリオ」

「はい、ただちに～」

と某野球４コマ漫画なら斎藤隆がパシリに使われるところだが、実際の斎藤隆と佐々木との関係は意外とフレンドリー、斎藤隆よりも、むしろ佐々木の方が気を使うらしい。そして某野球４コマ漫画といえば、盛田はぼのぼのでいつところの初期のシマリスごとき弱気なキャラとして描かれていたが、これも世間が受けるイメージとは違って、盛田はじつにおちゃらけた人間なのだ。

「佐々木さん、またオレの脳がおかしくなっちゃまずいんで、オレの投げる１イニング、佐々木さんが投げてくださいよ」

と自分の病をギャグにできる人間性の幅広さかあるのだ。

そして、この３人は、『ハマの勝利の方程式』を自認する。戦力に劣る横浜であるが、リリーフ陣の質の高さでは、どこにも引けを取らないと自負しているのだ。

「オレと隆と盛田がいれば、一人、１イニングでも、７回からの終盤を賄える。ついでに、斉藤明夫さんもいるし、大投手秋山さんだってリリーフに控えている。問題は、そこまでリードを保てるか、そこまで先発投手が持つかだが、先発投手の質もいつもの横浜じゃない。平松さんがいる、遠藤さんがいる、野村だっているし、三浦の番長が５番手くらいに名前のあがるレベルだ。試合を作れる投手が揃ってる。これはいけるぞ、なあ、盛田と隆」

「そうですよ、佐々木さん。佐々木さんのフォークに、僕のスライ

ダー、そして盛田のシュート。これだけ質の高いウイニングショットを1イニングごとに見せられたら、たとえ王者西武の豪華絢爛な野手陣だって戸惑い面食らいますよ」

「佐々木さんのフォークが大暴投、隆のスライダーが真ん中に切れ込み痛恨の被弾、そしてオレのしつこいシュート攻めが大乱闘を引き起こす可能性もありますけどね」

と盛田が鋭いギャグで話の腰を折ったところに忍び寄る二人の評論家の影か。その二人の評論家は、これ以上なく馴れ馴れしいのだ。

「やあやあ、横浜の誇る、り、り、リリーフ陣のお三方！　お久しぶりです。大塚です」

「どもども、大洋ホエールズ～横浜ベイスターズ通じてのＯＢのデニーです」

それもそのはず、大塚とデニー、どちらも佐々木たちに因縁浅からぬ二人だ。

「なんだよ、大塚、背広姿でさ。ベンチ入りは逃したのかよ？」

「いいこと聞いたな、大魔神！　なにせ、この大塚さまは、短期決戦の鬼。長丁場のペナントレースでは十分に力を発揮できないんだけれども、集中力の持続する短期決戦ならお手もの！　日本シリーズの史上最高打率は誰だか知ってるか？　この大塚さまなんだよ」

「だから、その大塚さまがなんで、背広姿なんだよ」

佐々木は大塚の実力をよく知っている。大塚クラスの実力なら西武野手陣に食い込めないことも。それがわかって、あえて大塚をいじってるのだ。

「でもな、オレは西武のキャンプのメンバーにすら入れなかったんだよ。それで、このオレは三原監督に直談判したんだけれども、僕をベンチに置いてください！　きっと役立ちますからと。そしたら三原監督はなんておっしゃったと、お、思う？　大塚くん、君の実力のほどは十分わかっている。ベンチに入れてとけば、足に肩に守備に勝負強い打撃と欠かせない戦力になるだろう。だが、君には試合をグラウンドで盛り上げるよりも、試合を伝えるほうで盛り上げ

て欲しいといわれたんだ。つまり、三原監督は、オレの野球の実力も買ったけど、それ以上にこ、こ、こ、この話術をか、かかか、買っていいいいただいたんだよ。いやあ、これこそ適材適所の三原野球だなあ。ベンチに置いておくだけが野球の用兵じゃない、ベンチの外でも野球にプラスになる配置ができる。オレは三原監督に見初められて、解説者としてこのグラウンドを訪れたわけなんなんだ」

と三原監督は、頭ごなしに実力不足の大塚を追い出すだけでなく、あの手この手でおだてて、大塚をやんわりと排除することに成功したわけであるが、三原監督がいうように、大塚にそれ相応の話術があるかも疑問。現に、気心しれて佐々木との会話ですら噛みまくっているのだから。

「ほう、お前、解説か？　よかったな、ツカやん（大塚）有名選手はたいがい試合に出るから、空前の解説者不足なんだろ？　その隙に上手く潜り込めてよかったなあ」

「えへへ、そこまで褒めるなよ、てれるよ、まあＢＳ朝日のそれも、グラウンドレベルのレポーターだけどね……テへへ」

「で、そっちのデニーはどこの仕事？」

「Ｊスポーツ＋だよ。橋本武広さんとの東尾時代の左右のセットアッパーのダブル解説だよ」

「Ｊスポーツ＋？　って西武にべったりのＣＳ局だろ？　あれ迷惑なんだよな、ケーブルだと＋だけ別料金払わないと見れない仕組みなんだよ。オレみたいな大金持ちならはした金だけどさ……まあそれはいいとして、デニー、なんだよ、大洋～横浜だろ、お前が一番長くいたのは？」

「ふん、仕事をくれた方の応援をするまでさ、それがこの厳しい現代社会を生き残るただひとつのスベさ」

「け、どっちも西武かよ、どっちも敵かよ、スパイならお断りだぞ」

「スパイ、佐々木もひひひ人聞き悪いなあ。オレとデニーは、とびっきりの西武の機密情報をこさえて、同級生のよしみで、君たちだけにそっと教えてあげようとおもったのに。なあデニー？」

「ああ、大塚。お前ら、西武の先発が誰か知ってるか？」
「先発？　ああ今その話題でもちきりだな、さっきも記者の輪ができてたよ、その件でさ。どうやら主要スポーツ新聞６紙の先発予想が異なったみたいだからな、こんなこと滅多にないらしいな」
「うふふふ……」
「なんだよ、大塚、その不気味な笑いは……」
「オレたちが、西武の先発を知ってたとしたら？」
「なにい、機密情報ってそれか？　おい、大塚、そっとオレの耳元でつぶやけ……」
「知ってると思うか、オレが？」
「なんだよ、どっちだよ、相変わらず煮えきれない奴だな」
「いや知らないけど、けっこうな情報を掴んでいるんだ、先発が誰か、確信に迫る情報をねえ」
「大塚の言うとおりさ、三原監督は、横浜の一番打者が誰かをしきりに気にしていた」
「一番打者？　それがどうして先発につながるんだよ」
「そして、二番、三番とシュミレーションしていくうちにある重大な結論に達したらしい」
「……だから打順がどうしたんだよ！」
「一番は石井琢朗だろ？　二番はどうやら近藤和彦さんが座る可能性が高いらしい。そして三番は、大矢監督に決まったときから、確定事項のように鈴木尚典の名前しかあがっていない……」
「だから、その三人がどうした……あ、左打者！？　全員左打者か！」
「そうそのとおり、全員、左打者の可能性が高くなったことで、三原監督はある決断を下したらしい。初回は９イニングのうちのただの１イニングではない、試合の重さの約３割を占めていると考える三原監督は初回に勝負をかけてくる戦術を取るらしい。そして、勝てる戦術とファンに驚きを与えることを両立できる投手は、この男しかいないとサプライズ起用を決めたらしい。いイニングを抑える

ことがお前の役目だ、そしてファンとマスコミの度肝を抜いてやれとその投手に直々におっしゃったらしい」
「らしいばっかだな」
「あくまでも噂だからな、なあ大塚」
「ああ、デニー。そしてその左打者退治を、ままま任される投手は」
「オレが大洋時代に二年、そこの盛田が一年だけ。そして佐々木と斎藤隆は入れ違いになって一緒にプレーしてない」
「西武にもいたけれども、というか、むしろ西武のイメージの方が大洋時代よりも印象深いけれども、まあオレも入れ違いで一緒にプレーはしていないけれど、オレの親友の清原は、西武の最後の一年を共にしたのだけれど」
「って、永射さん？」
佐々木の一声に、大塚とデニーはわざとらしいリアクションを見せる。
「ドキ」
「ギク」
「って、それもう永射保さんしかいないじゃん、なあ盛田」
「……ほんとに、永射さんかなあ」
「どうした、盛田。なにか引っかかるのか？　永射さんしかいねーだろ。あの人の背中からくるカーブは左打者は打ちきれんぞ」
「いや、永射さんは確かにサプライズだけど、なんか、予想できる範囲のサプライズって気がするんだよな」
「どういうことだよ、盛田」
「いや、永射さん先発は別に三原監督以外でもやりそうじゃないですか。たとえば、広岡さんとか森さんとかもやってきてもおかしくない策。三原監督があれだけ開幕投手を煽っているんだから、もっとサプライズ起用の予想すらできない投手が投げてくるような気がしてならないんですよ」
「永射さんで十分すぎるほどサプライズだって、盛田は考えすぎだよ」

「そうかなあ……」
「まあまあ、盛田に佐々木。あくまでもライオンズ側の噂を君たちに伝えただけだから、そう考え込まないで。ちなみに永射保さんに関する豆情報を。野球狂の詩の水原勇気っているだろ？　ピンク・レディーのピンクのサウスポーってあるだろ？　あれどっちも左のアンダーハンドで、そのどちらも当時クラウンライターの永射さんの……クラウンライターといえば、ピンクのユニフォームで、オールスターで王さんと対戦したときに、それをみた阿久悠さんが……」
と延々と大塚が今仕入れたばかりの永射保トリビアを語るが、ダラダラと長いだけのために割愛。

「どうする、盛田に隆。首脳陣の誰かに今の情報を伝えてくるか？」
「う～ん、盛田はどう思う？　左の永射さんがくると思えば、石井琢朗の一番打者はあまりにも不利。だったら、右の山下大輔さんを石井琢朗の替わりに、そして近藤和彦さんの所にはスイッチの屋鋪さんあたりを入れる作戦もとれるよ」
「オレはいちいち伝えんでもいいと思う。なにか、あの二人があえてデマの情報を流しているようにしか思えないんだ」
「デマ？　お前まだ、永射さんは誰にも予想できる範囲のサプライズ起用というのか？」
「う～ん」

スポーツ新聞６紙の見解が異なり、さらにグラウンド内では意図的に色々な情報が交錯している。はたして、三原と言い渡された先発投手だけが知る三原マジックの答えとは？

焦らし戦法

横浜の打撃練習の時間。主砲の松原誠が、右打席のケージに立ち気持よさそうにバットを振って、ポンポンとスタンドに叩き込んでいる。その横には、石井琢朗。左打席のケージに立ち、鋭いバットスイングから、ライナー性の打球を飛ばしている。

打撃投手を努めるのは、ベンチ入りを惜しくも逃した投手たち。五十嵐英樹、島田直也ら１９９８年の日本一に貢献した投手の顔もみえるが、いずれも右のスライダー投手。

「おい、五十嵐。稲尾さんのスライダーはそんなに曲がりが大きくないぞ。もっとカットボール気味に投げてくれ」

と松原が、五十嵐のカーブチックの曲がりの大きなスライダーに注文をつければ、石井琢朗も、ひとつ上の先輩島田直也にも臆せずに、

「直也さんも、もう少し、僕の懐にスライダーを投げれませんか？池永さんといい、東尾さんといい、左打者の内角にも、どんどんスライダーを投げ込んでくるらしいですから」

と石井琢朗は、池永と稲尾を想定して、打撃投手の島田に二人に近い球筋のボールを投げるように、調整を促している。

松原も、石井琢朗も、稲尾、東尾、池永ら右のスライダー投手が開幕投手で来ることを想定そして打撃投手に島田と五十嵐をセレクトしたのだろう。

だが、打撃練習の順番待ちをする村田と内川は、他のナインが知りえない情報を握っている。

「松沼兄弟のどっちかだぞ。どうする、ウッチー。二人に教えるか？　お前、タクローさんと親しいだろ。ちょっと耳打ちしてこいよ。松沼兄弟のどっちかがくるって、アンダーハンドの投手に投げさせておいていいって」

「ええ～　村田さん、お願いしますよ。仲がいいとかえってですね、

僕らのつかんだ情報がガセだったときに気まずいもんのがありますよ」

「それもそうだな。しかも、ウッチー。対西武もあるが、これは内なる戦いだぜ」

「内なる戦い？　どういうことですか、村田さん」

「だってよ、こんな試合に出たところ、ギャラは一律。ＦＡ登録日数に加算されるわけでもない。なんの得もないんだよ。得がないからこそ、選ばれたからには、試合に出続けなきゃ意味ないんだよ。ベンチにいるだけじゃ、名誉は獲得できない。名誉が欲しければ、味方を蹴落しても、試合に出る気概がなきゃ。だから、オレは黙ってるぜ」

「村田さん、相変わらず、自分を大きく見せるすべを知ってますね……」

「ふん、なんとでもいえ、ウッチー。オレは、アンダーハンドを打って、オレだけ松沼兄弟に備えるぜ」

村田の打撃練習の順番、村田は何人も控えている豪華な打撃投手人から、アンダーハンドスローを選ぼうとしたが、

「アンダーハンドいたっけ？　木塚さんや加藤武治さんはサイドハンドスローだからな。もっと下から潜り込んで投げるサブマリンはいねーのかよ」

困ったことに、横浜が用意したなかからアンダーハンドを探し出せないのだ。木塚と加藤武治は腕が横から出るタイプ。下から繰り出されるスピードボールが武器の松沼兄弟の兄、松沼博久とは、タイプがやや違う。

「木塚さんと加藤さんじゃ腕の出る角度が、松沼兄やんとは違いすぎるな。二人を打ったところで参考にもならん。ここは、松沼兄やんでなく、オーソドックスなオーバーハンドの弟の方が出るように願うか……。いや、オーバーハンドならあえて打たなくてもいい。アンダーハンドだから、球筋を見ておきたいんだ。木塚さんか加藤さんに下から投げるようにお願いするか。それもなあ、付け焼き刃

のボールを見てもな……。おい、ウッチー」
「なんですか、村田さん」
「ロッカー行って、検索してきてくれ。『大洋　アンダーハンド』って。オレが知らない時代にアンダーハンドがいたかもしれんからな」
「検索で見つかりますかねえ～。まあモノは試しと……」
内川は、大洋時代のアンダーハンドを探し出すためにロッカーに走る。この間に、村田はオーバーハンドの速球派の松沼弟を想定して、同じくオーソドックスな本格派である打撃投手山口俊をセレクトした。
どうして自分がベンチ入りできなかったか、まだ納得しきっていない山口は、打撃練習といえど、再アピールの場。村田相手にも、構わず１５０キロ超級のストレートをどんどん投げ込む。
「うっひょ～。仮想松沼弟のつもりで立てた山口だが、いくら東都の江川と異名取った松沼弟さんでも、ここまでのボールは投げとらんだろうよ。これじゃ、仮想松坂のストレートだよ」
村田は山口の剛球に押され、まともに前に弾き返せない。さらに、山口はポンポンと投げ込むものだから、村田は息継ぎの暇もない。ネットから情報を持ち込んだが、内川であるが、その情報を村田に伝えれない。
「はあはあ……。大洋　アンダーハンドで検索しても、ろくな情報は出てこなかった。秋山登さん？　打撃投手を頼める格の人じゃない。堀井恒雄さん？　あの人は、先乗りスコアラーとして、他の球場に付いているよ。しかも、この二人、動画を検索したところ、サイドハンドに近い腕の角度。……でも、あの村田さんが、なんの収穫なしなんて許すわけないし、見つけてきたのが、誰だよ、この人って投手だけど……」
内川の視線に気づいた村田は、山口を手で止めて、内川の顔を見る。
「で、誰かいたか？　大洋時代のアンダーハンド」

「はあはあ……坂井さん……田中さん……です」
「坂井さん？　田中さん？　はあ？　誰？　ＷＨＯ？」
「えっと、坂井さんってのは、通算１６０何勝した投手で、田中って人は、荒れ球のアンダーハンドで……どちらも、ロッテから大洋に移籍したって共通点があって……」
「で、その二人はここの球場にいるの？」
「いえそれが、坂井さんは、ロッテでの実績のがあるから、多分、向こうの方にいると思いますし、田中さんの所在はつかめませんでした……」
「でしたって、ウッチー。収穫なし？　アンダーハンドを探しあてても、ここにいなきゃしょうがないじゃん……」
と雲行き怪しくなり、二人の間に広がる険悪な雰囲気。しょせん、内川は石井琢朗派かよ、オレのいうことは遂行できねのかよと村田は思い、内川は内川で、無理難題を押し付けられたことに、アゴをさらに尖らせている。
険悪なムードに気がついたのか、とある二人が仲裁に割って入る。
「どうしたんだ？　村田」
「うん？　あ、松沼さん」
「村田は日大だろ？　オレたち兄弟は東洋大。東都出身だから仲間みたいなもんだよ。なにか困ったことがあったら、いってくれよ」
「いやちょっと、今、アンダーハンドの打撃投手を探してるんですよ。で、ウッチーに探してくるように頼んでも、なかなか連れてきてくれないなあって……」
「アンダーハンド？　なら僕に任せろよ」
「いいんですか？　松　沼　さ　ん」
「いいんだ、いいんだ。どうせ僕らは、球種チェックくらいしか出番がないんだから。打撃投手を努めるくらいどうってことないよ。逆に体をほぐすいい運動だよ」
「ありがとうございます、松沼さん……えっと、お兄さんは博久さんでしたよね」

「ああそうだよ、弟は雅之だよ」
「よろしか、村田に内川」
松沼弟の会釈に、村田と内川は、脳天が地面につくくらいの深いお辞儀で返す。
松沼兄は背広を脱ぎ、Ｙシャツ姿で打撃投手のマウンドに登った。
「お願いします」
と村田がヘルメットを取り、また頭を下げた瞬間に、ようやく内川が重大なことに気がついた。
「って、村田さん！　その人こそが松沼兄やんじゃないですか」
「あ？　あ！！　ってなんで開幕投手が背広姿なんだよ！　どうして敵の打撃投手を気軽に引き受けるんだよ！　って、あああ～オレらは松坂と涌井の陰険与太高コンビに騙されたんだよ！」
ようやく二人が気づいた頃には、時すでに遅い。アンダーハンドの先発が完全に消えても、東都の先輩松沼兄のご好意を無下にはできない。それが球界の上下関係なのだ。結局、村田は登板しないであろう、アンダーハンドの球筋を、脳裏に焼き付けてしまって、よけいなイメージトレーニングをすることになるのだ。
「くっそ！　松坂と涌井のヤロー。なにが松沼兄弟　もごもごだよ！」

そして三原監督は、三原本人と先発当人以外の第三者にはじめて今日の先発の名前を明かしたのだ。明かした相手は、稲尾。三原が一番信用する投手だ。
「嘘でしょ？　ええ～」
冷静な稲尾すら驚きの声を上げる、意外な先発の名前とは。

偏食主義者

「おい、隆。お前、大矢監督に進言してこいよ。西武の先発が永射保さんだって」

「いやですよ、佐々木さん。そうだ、盛田、行ってこいよ。お前、大矢監督の第一期政権の二年間いずれも開幕投手に指名されたろ？　大矢監督はお前を信用してるんだよ」

「おいおい、隆。オレだっていやだよ。大矢監督は、オレを先発に転向させたことに負い目があるんだよ。先発転向失敗→近鉄放出→病を患うの一連の流れを自分の責任と感じてか、オレに遠慮があるんだよ。だからよけいに話しづらくてな。やっぱりここは、佐々木さん、お願いしますよ。歴代の横浜の監督にモノを言えるのは佐々木さんくらいですよ」

「冗談じゃないよ。情報の出所が大塚とデニーだぜ。怪しいったらありゃしない。ガゼ情報で右打者を並べてみ？　右投手がきたらそれこそ三原マジックの餌食だよ」

「いやでも、その三原マジックに対抗するにはですね、永射さん先発をズバリ読みきったってそのくらいのインパクトを三原監督さんに与えないと、とてもじゃないと大矢監督じゃ、三原監督に名前負けしますよ。左打者が並ぶところに左のサイドハンドの永射さんを当ててくるのがマジックの最大の効力。蓋を開けたら、あるで永射先発を読みきったように、右打者が出てきたら、それこそ横浜のペースですよ」

斎藤隆も5年のアメリカ生活で自己主張と討論の術を身につけたのか、佐々木相手に真っ向からまくし立てる。これには、永射先発を信用しきってない盛田も思わずうなづく。

「そうですよ、佐々木さん。圧倒的不利なウチは、スタートダッシュで三原監督を打ち負かすくらいの勢いがないと」

「う〜ん、で盛田。永射さんは右打者相手にはどうなんだ？　オレ

は日本シリーズで巨人相手に投げてる永射さんしか印象にないからな。1シーズン、同じチームにいたお前は永射さんが右打者に通用する有効な武器があったか覚えてるか？」

「右打者相手の有効な武器？　そうっすねえ……オレ、二軍だったから、一軍の永射さんの投球をそこまでしっかりみてないですけど、キャンプとかオープン戦で見た限りですと、永射さんはカーブくらいしか球種はなかったはずですよ」

「カーブ？　ああ左打者の背中から出てくるような大きなカーブだろ？　日本シリーズで篠塚さん相手によく投げてたな。しかし、そのカーブだけとなると、右打者相手は分の悪い勝負になるな。左投手が、右投手を攻略するためには、フォークなり、チェンジアップなり、シンカーなり、スクリューなり、なんらかの落ちるボール、つまり右打者の外側に逃げていくボールが必須だ。そのボールを投げれないとしら、右打者をずらりと並べるオーダーの価値はあるな。たとえ永射さんが1イニングこっきりの先発だとしても、その1イニングは初回、つまり、先制パンチを食らわすには、この上のないイニングだ。たとえ西武が相手だとしても、初回に、格下のウチが先制点とってみろ？　浮き足立つぞ。それも、三原マジックを読みきっての得点となれば、浮ついた足取りは、この西武ドームの屋根に届くほどになるぞ……」

思案した結果、佐々木はある結論にたどり着いた。

「オレたち三人が首脳陣に進言するのは、やっぱり色々と角が立つ可能性が高い。ならばここは、たとえ永射保先発がガゼ情報であっても、憎まれないキャラに頼むしかないな」

「憎まれないキャラ？　いますか、そんなキャラ」

「いるだろ、恰好の奴が。オレたち、ブルペン投手陣のおもちゃになる予定の男さ」

佐々木は、すくっと立ち上がり、三塁側ファールグランドに向かった。

「ファールグランド？　なんの用だろ？　なあ盛田」

「知らんよ、隆、佐々木さんの考えることは、いつお直情的すぎて、検討もつかないよ」
　佐々木の向かったファールグランドには、金網越しに、ファンに向かって、せっせとサインをするクルーンの姿があった。
「おい、クルーン」
「へ？　ア、佐々木サン」
　佐々木を神のごとく崇めるクルーンは、顔を見合ったそばからペコペコ状態。
「お前に頼みあるんだけどさ」
「ヘイヘイ、佐々木サンのタノミとアレバ……」
「大矢さんでもいい、斉藤明夫さんでもいい、とりあえず、お前も知ってる首脳陣の所にいって、ある重大な情報をつかんだことを知らせて欲しいんだ」
「インフォメーション？」
「イエース　いいかクルーン、ライオンズ、スターター、サウスポーサイドハンド、ナガイ、ＯＫ？」
「ナガイ？」
「イエース、ナガイ」
「ロング？」
「ロング？」
「ロング？　う～ん、それでいいか、ロングで覚えていけ。いいかクルーン。斉藤明夫さんでも、大矢さんでもいい、ライオンズの先発は、ロング＝永射保と伝えてくるんだ！」
「ＯＫ！　がってんだ！」
　クルーンはふたつ返事で、まるで獲物を追う狩人のように全速力にベンチに消えていった。
「やれやれ、ちゃんと伝わるかなあ」
　心配顔の佐々木に、クルーンいなくなった後のサイン攻めの波がやってくる。金網越しに伸びる無数のファンの握手を求める手とサイン用紙。
「待った、待った、サインしてやるから、順番にな」

そして、佐々木から重要な任務を承ったクルーンはベンチ裏に向かうと、丁度良く兼任コーチの斉藤明夫とばったり。
「なんだ、クルーン。そんなに息せき切らせて、どこ行くんや？便所か？」
「ノー、ノー、明夫サン！　ライオンズ、スターター、僕知ってるヨ！」
「なんだど、クルーン？　誰や、ライオンズの先発」
出所不明、ましてやクルーンの持ってきた情報を素直に信じるコーチもなかなかいないはずだが、この斉藤明夫という男、疑いもせず信じてしまうおおらかさとずぼらさがあるのだ。
「ロング、ロング……」
クルーン、痛恨のミス。忘れないようにと連想用に覚えていた、ロング＝永射から、ナガイがのけ落ちて、意味のなくロングだけを連呼してるではないか。これでは、永射保にたどり着くのは不可能に近い。たとえ斉藤明夫と永射保が二年間、ブルペンを共にした球友でもない。
「ロング？　うん、どっかで聞いたことあるぞ」
ロングでなにを連想したのか、斉藤明夫は、手持ちの資料集の中から、外国人名鑑を取り出し、その場で広げた。
「ロング……ロング、いた！　西鉄の投手や！　なんだ、まさか、三原マジックの答えはロングだったのか！　当時流行りの駐留米人のアルバイト選手。すぐにアルバイト選手自体が禁止になり、ロングは退団を余儀なくされたが、残した実績は、３試合で２勝０敗、防御率は１．７５！　あるぞ、サプライズ起用。おいクルーン！お前どこで、この情報を仕入れた？」
情報が間違って伝わりつつあるとクルーンも薄々気づいていたが、斉藤明夫の勢いの前にはなかなか言い出せない。
「なんだ、クルーン。そうか、クルーン。そうだな、外国人同士のコネクションで仕入れた情報だろうな。本来、外国人同士の仲間内

でとどめんといかん情報を、チームを思って、オレだけに伝えてくれたんやな。お前の気持ちは重々わかる。深入りはやめとこ、ただライオンズの先発はロング。この情報をオレが聞いた、それだけでええんや」

斉藤明夫はクルーンの肩に手を置く。

「ところで、お前の日本名なんやったっけ？　横浜時代ふざけてつけて呼んでたよな？　ムツゴロウだっけ？」

「ノー、ノー、僕のジャパニーズネームはタカユキね～」

「そうや、タカユキや。ムツゴロウって全然違うな。どっからムツゴロウと思いついたんやろ？」

それが。先走りすぎた第六感とも気づかず斉藤明夫は間違った情報を抱えたまま、先発ロングを伝えるために監督室に向かう。

そして、いよいよ両軍の先発オーダーの発表だ。西武の先発投手はもちろん、横浜、西武の打順も気になるところ。

とくに西武の野手陣は豪華すぎて、だれを先発にさせるかで、開幕投手以上あまたの予想オーダーがちまたの野球好きに予想されているのだ。

さらに、今日の試合に限って、三原監督の強い要望により、監督同士の先発オーダーの交換前に、先にファンに発表する演出が取られる。通常だと、先発バッテリー、そして先発打順の順番の発表になるが、今日に限って打順が先、そして最後に先発が発表されることになる。

つまり、西武の先発投手は、場内アナウンスによってはじめて、三原、稲尾、先発当人以外に同時に知らされることになるわけだ。

「先行の横浜ベイスターズのオーダーを発表します。一番ショート……」

http://www.youtube.com/watch?v=njurm

スポーツ各紙が予想した、稲尾、松坂、東尾、渡辺久信、涌井、池永に加えて、その他、マスコミ報道に登った郭泰源、石井丈裕。そして、嘘か誠か、サイドハンドサウスポー永射保に、松沼兄弟らグラウンド上で錯綜する怪情報が駆け巡ったが、結局、有能な横浜首脳陣が最後に断定した西武の開幕投手の名前は、アル・ロング。駐留米軍のいわゆるアルバイト選手で、３試合の登板実績のない投手だがあ、その３試合で２勝をあげている右の好投手だ。

なるほど３試合で２つ勝てる投手となれば、少ないサンプルでも三原が抜擢してもおかしくない数字を残しているといえる。だからこそ、斉藤明夫は、クルーンの持ち込んだ不確かな情報を信じてこんで、監督の大矢に上告したわけだ。大矢は大矢で、なるほど、その手があったかと机を叩くと、西武の開幕投手をロングであると決め込んでしまった。

永射保をロングと覚えたクルーンから生まれた怪情報。ただ、妙な悪運づいている大矢のことだ。クルーンの痛恨のミスから、生まれた斉藤明夫の勘違いが、大矢横浜の味方となるかもしれないのだ。

「ふふふ……三原監督。ロング先発とは驚きましたよ。しかし、三原監督は、外国人仲間の情報共用を舐めてらっしゃった。日本人なら門外不出の情報と強くいえば、死んでも秘密を秘守するでしょうが、外国人となると、そこまでの主従関係は存在しない。仲間の外国人にポロリと漏らしてしまうものなんですよ……。ふふ、スタメンの準備はＯＫ。右投手のロングに、外国人投手が嫌がる三人のしつこい左打者を揃えましたよ……。三原マジック敗れたり！」

と大矢はほくそ笑み、会心のスターティングオーダーを今か今かと待つ。

「それでは、先行の横浜ベイスターズの先発オーダーを発表します……」

開幕戦とあって、特別に横浜スタジアムからウグイス嬢を招いての発表だ。

↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？ｖ＝ｎｊｕｒｍＣ９ｂｄＭ０

（この人の声のつもりでお読みください）

「１番ショート……」

永射保先発が上告されていたら、右打者の山下大輔が起用されただろうが、ロングは右投手。左打者でショートストップといえば、この男しかいないだろう。

「石井琢朗！　背番号５！」

ホエールス～ベイスターズを通じて、最多の安打を放った男が、横浜のトップバッターという指定席に帰ってきた。

「２番センター近藤和彦！　背番号２６！」

続く２番打者は、元祖天秤打法の近藤和彦。屋鋪、波留、金城、長崎、中塚らとの熾烈なセンターレギュラー争いを制し、そして、田代と佐伯との”背番号２６”争奪戦にも勝利した近藤和彦が、平成の天秤打法松本哲也のフォームはまだまだ天秤度が足らないことをここに証明する。

「３番レフト鈴木尚典！　背番号５１！」

３番はマシンガン打線の象徴二年連続首位打者獲得の鈴木尚典だ。大矢監督の時点で決まっていたと陰口を叩かれつつも、オープン戦、練習試合でしっかりと成績を残し、堂々のクリーンアップの先陣を努める。

背番号５１は、入団時と引退時につけていた番号。全盛時につけていた背番号７が、ポンセとかぶるために、鈴木尚典は、イチローと同じ番号だから、浜のイチローと称された因縁深い５１を選択したのだ。

「４番サード村田修一！　背番号５５！」

４番は現役の横浜の選手の村田。ローズ、ポンセ、桑田武、松原誠ら、村田よりも４番者にふさわしい選手はいたかもしれない。だ

が、ＷＢＣで４番を努め、現役選手として横浜の未来を引っ張る村田を、あえて４番に指名したのだ。（って来年、違うチームにいるかもしれないけれど）。そして、背番号は２５でなく、５５。４番は勝ちとっても、背番号は大先輩である松原に譲ったのだ。背番号５５は、これまた同じ背番号２５の先輩スラッガー新井がいたために、北京五輪でつけた番号だ。

北京五輪といえば、メダルを逃し、村田は大不振に終り、ファンやマスコミに叩かれまくった因縁の大会。縁起がいいか悪いかというと、やや不吉な番号であるが、村田は北京五輪の悪夢を払拭するために、あえてこの番号を選択したのか……。

「５番セカンドロバート・ローズ！　背番号２３！」

５番はローズ。横浜日本一の時の４番打者であるが、長打力がやや足りないために、どちらかというと５番タイプか。走者を置けば置くほど打率をあげる特性のある打者だけに、この５番が適任か。当人のローズは、いつものとおり、ベンチの一番端っこ、誰にも離されないオーラを体中に漂わせながら、静かに闘志を燃やしている。

「６番ファースト松原誠！　背番号２５」

安打数こそ、石井琢朗に抜かれたが、本塁打と打点はいまだ、ホエールス～ベイスターズ史上最多の松原。本来なら４番に座ってもおかしくない松原が６番にいるのだから、横浜打線は侮りがたし、だ。

「７番ライト、カルロス・ポンセ！　背番号７！」

松原と同じく、本塁打王一回、打点王二回のポンセが７番に座るのは、横浜打線の層の厚さを感じさせる。そしてこのポンセ、意外や意外、人気が絶大なのだ。横浜大洋は、たったの１５年の短い命。その間、ほとんどＢクラスながら、都会のイメージを漂わせていた横浜大洋ホエールズは、隠れた大人気球団だったのだ。その時のスター選手のポンセとなれば、大歓声を受けるのは、当たり前といえば当たり前。

「なんだよ、オレよっか、ポンセの方が歓声大きいじゃん」

小さなことも気にする村田が、４番の自分より、７番のポンセの方が人気のあることが気に食わないようで、若干ふてくされてしまう。

村田も嫉妬する人気者とあとには、ファンが反応に迷うこの男の登場だ。

「８番キャッチャー、谷繁元信！　背番号８！」

歓声もない、かといってもブーイングもない。微妙。横浜日本一の正捕手谷繁であるが、今や中日の谷繁のイメージが強すぎる。

かといって功労者であり、横浜に舞い戻った谷繁に、悪い感情を込めた声援は送りにくい。だからこその無音に近いお出迎えか。

「まあ、しょうがねーな。オレから出ていったんだもんな」

この微妙な反応には、先発投手のボールを受けるために、ブルペンにいる谷繁も苦笑いだ。

西武ドームの試合だから、当然、指名打者制度が取られる。ここまで、指名打者の選手が呼ばれてないということは、９番が必然的に指名打者の選手となる。

指名打者を９番に置くのは、指名打者のなり手に困ったセリーグチームがたまにやる消去法の戦法だ。たいてい、相手のパ・リーグチームからは、最弱打者に指名打者を使うことに嘲笑されるのだが、嘲り笑われることには慣れきっている大矢横浜が指名した９番指名打者とは？

http://www.youtube.com/watch?v=njurm

疲れたので続きはまた明日

赤星並に話が長い

指名打者のイメージとくれば、守備がまずいが、秀でた打撃を見せる打者。この場合の秀でた打撃が示すところは、打率や安打数よりも、長打力だろう。

守備に気を使わず大型でぶりぶり振り回す打者がたやすく想像される。横浜でそのイメージに合致する選手を探すとすると、村田との熾烈なサードのレギュラー争いに敗れたが、大洋日本一の時の４番打者で、清原と並び新人本塁打記録を５０年以上保持する桑田武。

あるいは、オバQやアジの開きなど数々のユニークな呼び名で親しまれた大味大洋の象徴、田代富雄か。

さらにさらに、飛ばす打球もドデカイが、その鼻の穴の大きさはさらに規格外のデカさのブラッグスか。

６０年の球団史の約半分を荒っぽい大砲を揃えた大味の野球を展開してきた横浜だけに、その手の打者が数知れず。９番打者とは、普通、上位へのつなぎ役の業師タイプが想像されるが、打順のつながりを無視して、一発をひたすら狙う荒っぽい打者を９番に置くのも、またオールスターの集う試合らしいではないかと、ファンが誰がコールされるか期待に胸を膨らませても、三原マジックならぬ大矢マジックは、その膨らみきった胸を、小さ針でツッツキ、破裂させる無頓着さを備えている。

「あれ、大矢監督。オレ、兼任コーチですよね？」

いまさらいまさら、田代が、大矢に自分の役職を尋ねる。ただ田代がうっかり者といえど、自分がどんな役目を担ってベンチにいるかくらいわかっている。それにもかかわらず大矢にいまさらの確認をするのは、田代にしたって意味がある。

「なんだよ、田代。いまさらだな。お前は、打撃コーチ兼任内野手だろ。多村や村田や金城を育て上げ、古木を半端に育てた、お前のコーチとしての手腕と、さらに年間３５本を放ったこともある長打

力、その両方に期待をかけての兼任内野手じゃないか」
「いやでも、兼任内野手なんだから、スタメンでないにしても、ベンチ入りはしているかなと思っていたんですけど、私の名前が、ベンチ入りメンバー表のどこを探してもないんですか……」
「なに、田代の名前がない？　ああ、ほんとだ。うっかりしてた」
　田代の差し出したメンバー表のコピーを大矢はわざとらしく見るのだが、田代を直前に外したのは、大矢自身だ。右の代打として田代をベンチに入れるつもりだった大矢だが、控えのメンツを見渡すと、左打者がいないことにふと気づいた。
「右の大砲をコレクションのようにずらりとベンチに置いておくのもオツだけど、左の代打がいないと話にならんなあ。西武のリリーフ陣には、潮崎とか稲尾さんとか、右打者が攻略が難しい投手がいくらでもいる。右打者をダブつかせる構成はまずい」
　と判断した大矢は独断で、メンバー表提出直前で田代を左打者のこの男に差し替えたのだ。
「ど～も、田代さん～」
「って、なんで、駒田が横浜のベンチにいるんだ？」
「いやだなあ～　田代さん。ボクだって、立派な横浜ＯＢじゃないですか。横浜日本一の立役者であり、２０００本安打を達成したのも横浜だし、コーチを努めたのも横浜だし、解説者として主に担当する試合も横浜の、どこを切っても横浜しか出てこない駒田がどうしてベンチに座っててていかんのですか？」
「どうしてって、世間的には、駒田っていえば、横浜っていうか巨人だろ？　馬だの人参ほしいかだの雲にまで身長が届きそうだの色々とネタにされたのは、巨人時代だろ」
「馬だの人参ほしいかだの雲にまで身長が届きそうだの最初結婚してた奥さんとすぐに別れた理由はなに？　とか娘にマコと名付けて、上から読んでも下から読んでも駒田マコってふざけた名前をつけるなだのは、横浜時代でもさんざんネタにされましたよ？」
　と駒田は、田代の疑問に平然と言い返す。

「だけどな、駒田。巨人時代では、２０本以上打ったり、三割を何度も打ったり、巨人のクリーンナップに駒田ってのはしょぼすぎるといわれながらも、それなりの実績を残したが、横浜に来てのお前はなんだ？　毎年のように満塁ホームランを打って、さすが満塁男と称賛されても、ホームランは毎年１０本前後、権藤さんいわく、駒田の２０００本のヒットのうちの半分は、左とちょこんと流した汚い内容のヒットで生きながらえたお前だ。お前をいれるくらいなら、他の左打者を入れたほうがましだよ」

田代は、そうこの駒田にベンチ入りの座を取られてしまったのだ。ベンチ入りせずして、ないをコーチと兼任するのだろうか？

通算成績はまだしも、横浜駒田と田代を比べると、左右のバランスを抜きにすれば、田代に軍配をあげざるを得ない成績が並んでいる。

巨人から追い出されるようにＦＡでやってきた外様の駒田に、コーチ選手と横浜一筋の田代にとってはたまらない屈辱だろう。

大矢は、能力比較や田代の根強い人気を考慮に入れて、駒田＞田代の決断を下したのだろうか？　いやいくら大矢でも、駒田を上に見る浅はかな判断はしないだろう。

それでは、なぜ駒田逆転ベンチ入りにこぎつけたのか？　そこには、この大会の裏規定があったのだ。

「ふふふふ……。田代さん、首脳陣のクセして、大会の掟も知らんのですか？」

「掟？　なんのことだ？」

「名球会会員はベンチに入れる不文律があるんですよ。強制力はないにしろ、もし名球会会員をベンチから漏らすことがあるならば、金田元名球会会長から、直々の指導があるんですよ？」

「どういうことだ？　なら巨人が駒田の責任をとるべきだろう？　なにもよそ者の駒田を横浜が面倒みることもない」

「ふふふ……。このボクが、巨人のベンチに入れると思いますか？　王さん、川上さんっていう偉大な一塁手を二人も抱えているんで

すよ？　なら横浜が面倒を見るしかありませんね」

名球会会員となれば、争奪戦の対象となるもの。実際、大杉や小山など複数球団にまたがって活躍した名球会会員は熾烈な争奪戦を繰り広げた末に、当該球団に所属が決まっている。しかし、駒田は名球会会員にかかわらず、お荷物扱い、たらい回し状態なのだ。

巨人のベンチ入りが絶望的なのは、火を見るより明らか。なら面倒を見るのは、横浜でしかない。左右のバランスを考えて、田代外しを決めたときに、大矢の頭にあった左打者の代打は、駒田でなく、佐伯貴弘だった。

なるほど、駒田と違って、安定した成績を残していない佐伯であるが、年度別成績を抜き出すと打率、本塁打で、横浜駒田を佐伯は上回る。さらに、佐伯はベイスターズ一筋、横浜大洋は知らず、横浜ベイスターズのすべてを知っている正真正銘の横浜ベイスターズ生え抜きの人気者だ。その佐伯を駒田より上に見るのは当然のことだが、大矢が決断する前に、目に飛び込んできたのは、名球会元会長の金田の催促ＦＡＸ。『監督、首脳陣の皆様、ぜひとも、我が名球会の仲間を使ってください！』と金田の似顔絵つきで、起用を促している。

他の名球会会員はどうにかなりそうだ、あとは駒田だけと、駒田のいく末を案じていた金田は、大矢の元に、催促ＦＡＸを大量に送りつける作戦を取ったのだ。

強制力も罰則もないが、駒田を外すと、金田の鬱陶しい直接指導が待ち構えている。いくら大矢といえど、金田の小言をとくとく説かれるのは、ごめんだ。

金田の催促作戦で負けた大矢は、駒田より佐伯の信念をあっさりと崩し、駒田の名前を書き込んでしまった。

田代は、駒田に負けたのではなく、先に佐伯に負けていたのだから、駒田のせいにするのは、若干、お門違いだが、不満をぶちまける先は、やはり駒田相手。

「だからといって、駒田よりオレだと思うんだけど？」

「ボクを入れないと、金田さんがうるさいんですよ？　それでもいいですか」
「金田さんがうるさい？　そりゃ想像するだけで地獄絵図だな。それならしょうがない。駒田でいいや」
さすが一軍監督を代行ながら務めておいて、あっさり二軍監督に戻れる田代だろうか。

そして、話を戻そう。田代でも、桑田でも、ブラッグスでも、マイヤーでも、ミヤーンでも、パチョレックでも、吉村でも、古木でもない指名打者の正体は？
「９番指名打者高木豊！　背番号３！」
なんと指名打者のイメージとはほど遠いスーパーカートリオ（正しくはスポーツーカートリオ）の一人の高木豊だ。性格に問題ありとされる高木豊は、スタメン入りでも、文句と不満がたらたらだ。
「なんで、９番？　大矢監督は、オレの出塁率知ってるの？　通算.３７０だよ？　９番に置くよりも１番に置くべき出塁率の高さだよ？　なんで、ＤＨなの？　ローズよりもオレの方がよほど守備がうまいよ？　それに二塁手は内野の司令塔。司令塔が日本語しゃべれなくて、どうすんのよ、たく！」

高木豊のタレント時代

「まったく、なんでオレが？　どうしてオレが？　なんで指名打者なんだよ。どうして9番なんだよ。面白くないなあ」

試合に出れたからとよしとせず、高木豊の口からはじとじとした愚痴が止まらない。

「ローズがヘボプレーしないかなあ。次から、オレがセカンドなのになあ」

さらに、味方の失敗を願うところなんて、いかにも横浜大洋暗黒ぬるま湯時代の選手。嫌いな投手が投げている時に、追いつける打球もわざと見逃したとの逸話もよく聞く時代の大洋の選手だけに、自分よければそれでよしなのか？

それにしても、どうして大矢は高木豊を起用したのだろうか？なるほど、実績は素晴らしい。高木豊も自負するように通算出塁率・３７０は相当高い数字。二塁手の守備率の記録を持っていたし、盗塁王の経験もあって、三割常連の高木のスタメンは当然の策といえるが、高木のメインポジションであるセカンドのには、運悪くローズがいるのだ。

オール大洋のチームなら、近藤昭仁、シピン、基満男、ミヤーンを差し置いて、高木豊がレギュラーセカンドとして起用されるだろうが、さすがのオール大洋ホエールズのセカンド高木豊もローズの前には、分が悪い。

毎年安定して3割を越えた得点圏打率を誇る史上屈指の勝負強さを誇るローズは、打線の得点源として絶対欠かせない選手なのだから。

だからといって、パ・リーグホームの試合はご覧のとおり、指名打者制度がしかれる。

「9番はしぶしぶ納得してもいいけどさ、せめて守らせてよ。ローズの守備力とオレの守備力、どっちが上だと思ってるの？　このへ

ボ首脳陣以外は１０人が１０人、ローズを指名打者に置いて、オレをセカンドにするよ。なんどもいってるとおり、セカンドは内野陣の司令塔でしょ。ショートやセカンドだけでなく、外野の守備位置の指示をするポジションなのよ。しかも、投手が困っているときに、さっと駆け寄って、的確なアドバイスをするのは、やっぱり意思疎通が楽な日本人同士でないとねえ。ローズは陽性なキャラじゃないし、内野にナインが集まっても、輪の外でぽつんとしているタイプだよ。まったく、野球がわかってないよ。プロ野球ニュースでは、あんなに偉そうに解説するのに、監督やらせるとこれだよなあ」

高木豊の愚痴も一理はある。外国人ではどうしてもコミュニケーションに限界がある。しかも、ローズときたら、その限界にも挑まず、最初から孤独でよしとするタイプ。

僅差の展開になった場合、細かい守備位置の意思疎通が試合の帰趨を分かつ場合もあるだろう。司令塔であるセカンドの職務放棄から、ゲームとチームが崩壊する恐れもあるのだ。

だが、横浜首脳陣は、そのあたりの危険性をわかっていて、あえて、ローズセカンド、高木豊指名打者のシフトを選択したのだ。

さて、その意図はどこにあるのか？　グラブさばきに定評あり守備の安定感があるのは、ローズと高木豊の共通点。セカンドとしては大型だけに、ローズの守備範囲はさほど広くないが、高木豊だって、自分がエラーがつくのを恐れて、取れそうもない打球はわざと追わなかったと噂されるセカンドだ。守備範囲だってそう変わらないだろう。

では、高木豊を指名打者に追いやることを決断した、その真意は？

「高木豊？　スタメンはいいけど、あいつを守らせるのは辞めようよ。あの肩の弱さなら、併殺が取れないよ。意思疎通に問題ありでも、肩が強く併殺プレーが得意のローズをセカンドに置こうよ」

大矢は、高木豊スタメンを決めたとき、高木豊をセカンドに置いて、ローズを指名打者にするつもりだった、プロ野球ニュース仲間である高木豊の性格をよく知っている大矢は、高木豊を指名打者に

置くと、ふてくされて不満分子になる危険性があること重々承知していたのだ。だが、その大矢の決断に待ったをかけたのが、ヘッドコーチの近藤昭仁だ。

元はといえば、高木豊のセカンド人生の終幕は、近藤昭仁の横浜監督就任からだ。前述の理由と同じく、高木豊の肩の弱さでは、セカンドでは無理とローズの起用を決めたのは、近藤昭仁本人。その近藤昭仁が、セカンド高木豊をよしとしないのは当然の成り行きだろう。

（近藤昭仁の就任に伴い、サードにコンバートされた高木豊は、そこでも一塁送球にも山なりになる信じられないほど肩の弱さを見せつけて、すぐに送球にあまり関わらない一塁手にコンバートされた。身長１７０ちょっとの一塁手は、これまた見栄えが悪かったものだ）

しかし、近藤昭仁はヘッドコーチであって、監督ではない。監督はあくまでも大矢。高木豊をセカンドに起用することがベストと思えば、近藤昭仁の横槍に構わず、自論を押し通せばいい。だが、大矢は、あっさりと近藤昭仁の言いなりになってしまう。

「そうですね。併殺は取れないよりも、できるだけ取れたほうがいい。併殺崩れで残った走者が致命的な失点につながることもあるでしょうから」

と大矢は、あっさりと近藤昭仁理論の前に陥落してしまったのだ。頑固もすぎるとチームは硬直するが、柔軟すぎるのも監督としての威厳がなくなる。しかも、近藤昭仁といえば、横浜対大洋の紅白戦を勝手に監督決定戦として、勝った大洋の監督の近藤はこれまた勝手に横浜の監督になったつもりでいるのだ。もちろん正式には、大矢が監督のままで、近藤昭仁の勝手な監督決定戦は意味を持っていない。それでも、近藤は虎視眈々と監督の座を奪うための下克上を狙っている。そんな近藤昭仁に付け入る隙を与える大矢は、やはり監督としてはうかつすぎるのだろうか。

そして、横浜の先発は、もちろんこの男をおいて他はいない。大洋日本一の時の大エース秋山登をリリーフに置くことが決まったと

きに、この男の開幕しかなくなったのだろう。スポーツ新聞の全紙の予想はすべて一致。新聞のテレビ欄にも『カミソリシュートＶＳライオンズ打線』の見出しが踊ったように、この男の開幕は周知の事実だったのだ。

「ピッチャーは、平松政次！　背番号２７！」

時代がダブらない平松と谷繁は、もちろん初のバッテリー結成だ。

「こんなに曲がるのかよ」

中日、横浜だけでなく、ＷＢＣや五輪予選、オールスターで幾多の名投手のボールを受けてきた谷繁。そんな谷繁も驚かせる平松のカミソリシュートの威力は、西武打線をきっと苦しめることだろう。

その西武打線も注目の的だ。三原監督は先発投手だけでなく、打線にもマジックの種を仕込むのだろうか。

「後攻の埼玉西武ライオンズのオーダーを発表します……」

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？ｖ＝８ｕＰＰｄｔｒＪＺＰ８　↑今度のウグイス嬢の声はこちらの方です。

「１番ショート……」

一番打者はショートの選手のようだ。ライオンズのショートの歴史といえば、絢爛豪華。豊田に、石毛に、松井稼頭央、そして現役最高峰の中島と、この４人の中の誰がコールされてもなんらおかしくない実力伯仲の面々だ。

「１番はショート？」

「ショートは田辺なんだろ？　山下大ちゃん」

「ええ、大矢監督。私が視察に行った結果、西武の先発ショートは、森西武黄金時代のレギュラーショート田辺徳雄の他にはいません！」

と三原の陽動作戦にまんまとひっかかり、４人の誰でもない選手を予想する、間違った人たちもおられますが……。

流線型打線の真実

「西武のショートは田辺！　森西武を下位打線から支えた右打ちの職人が、中島裕之、松井稼頭央、豊田泰光、石毛宏典ら、プロ野球史に燦々と輝くスーパー遊撃手を押しのけて起用されるんですよ」

実家が金持ち、自身も慶応大出身で野球エリートの山下大輔は、エリートならではの余裕で興奮を抑えるが、三原の用兵を見破った快感には、金持ち喧嘩せずのクールさを装い切れないのか、若干、鼻息を荒らげている。

なるほど、三原マジックなら、田辺起用もありうるかもしれない。４人のスター遊撃手よりも、田辺起用が勝利に近づくとなれば、大矢と違って周囲の圧力に負けずと、田辺起用を決断するかもしれない。横浜の先発は読み通りの平松。平松のカミソリシュートに、右打者の石毛、豊田、中島は手を焼くだろうし、スイッチヒッターで左打席に入る松井稼頭央も、左投手が投げるキレのいいスライダーのように大きく逃げていくシュートには面食らうだろう。

ならば、落合並の内角をさばくテクニックの持ち主と称された打撃センスの持ち主である田辺の起用があってもおかしくない。

ただショートの入る打順が一番打者と決まった今となっては、田辺遊撃の可能性はゼロに等しい。いくら打撃テクニックのある田辺といっても、長い現役生活１６年をほとんど６番以降の下位打線で過ごした田辺を、積極的打法が持ち味で出塁率が打率とあまり変わらない田辺を、足がある走者の目安である二桁盗塁を生涯一度きりしか記録していない田辺を、一番打者に起用する監督がいるだろうか。いくら三原だって、マジックを全面に撃ち出しても、適材適所の起用は忘れやしない。

それにもかかわらず、山下はいまだに田辺ショートを信じて疑わないし、大矢も山下の進言を全面的に信用したままだ。

「ふふふ、三原さん。田辺起用で、僕たちを面食らわせようとして

も、こっちはおみとおしですから」
と大矢は、すでに三原マジックのその上を行ったつもりなのである。
１９８６年、森西武初優勝の時のＭＶＰの石毛か？
第二回ＷＢＣのレギュラーショートで、現役屈指の遊撃手中島か？
たった一人の日本人メジャー遊撃手である松井か？
それとも、三原の信頼厚い西鉄黄金時代の野武士豊田か？
この４人の誰がコールされるか固唾を飲んで見守る観客、マスコミたちの中で、横浜首脳陣だけ、ショート田辺と決め付ける異様さ。
「１番ショート松井稼頭央。背番号７」
三原の選んだショートは、松井稼頭央だった。一番打者に起用されるのだから、二番、三番タイプの豊田と中島は消えて、一番打者を長く務めた松井稼頭央と石毛のどちらかに絞られたわけだ。そして、その二人の中から三原が選んだのは、松井稼頭央。やはりショート投手平松には、スイッチヒッターをぶつけるのが得策と見たのだろうか。
清原、秋山、カブレラ、中西、おかわり中村ら主軸に右打者が多く並ぶ西武打線だ。起用に迷ったら、スイッチヒッターを選ぶのは自然の成り行きだろうか。
「あれ、山下大ちゃん……」
「あれ、大矢監督……」
「田辺じゃないよ」
「田辺じゃないですよね」
「なんで、大ちゃんは、田辺が起用されると思ったの？　ライオンズ遊撃手四天王じゃなくてさ、なんで５番目の男、田辺がさ」
「……なんででしたっけ？　たしか、田代コーチと西武が第二球場でやってる練習を視察いって……あれれ……えっと……」
間違った決断を下すのもしかたがない。大切なのは、どう失敗を役立てるかだ。つまり、失敗の要因を追求して、二度と同じミスを起こさないように、しっかりと対策をねらなければいけないのに、

この組織のトップはなあなあに事態を収束させる。
「まあいいか」
「まあいいです……かね？」
「いいよ、いいよ、大ちゃん、失敗は誰にもある。ショートの予想が外れたからって、試合に負けるわけでもない。こっちは先発投手を読みきってるんだぜ？」
「そうですね、大矢監督……」
と大矢は先発投手を読みきったつもりでいる。田辺以上にありえないロング先発という読みにもかかわらずだ。
「うん？　ロングか。そういえばいたな。私が米軍から呼んだアルバイト選手だ。この選手の起用も面白いな。ファンもきっと驚くだろうよ」
当の三原でさえ、ロングの認識はこの程度なのだ。新たなる三原マジックの種探し、奔走する三原は、いつもライオンズ全選手を網羅した名簿に首ったけ。
使える選手はいないか、ファンの度肝を抜く選手はいないか、と試合開始の直前のこの時も名簿に目を落としているのだ。
三原は、今、ロングの存在を思い出したばかり。つまり、三原が今の今まで忘れきってたロングの先発なんてありえないのだが。
三原でさえ、その程度の認識のロングをどう間違って、開幕投手と決めつけたのだろうか、横浜の首脳陣は。
名解説者の定評も、横浜日本一の礎を築いたとされる１９９７年の栄光も、第二次政権二年目以降で、すべてを台なしにした感もある大矢。
そして、自己主張が激しすぎるヘッドコーチ近藤昭仁。田代や山下らおっとりとしたコーチ陣。彼らは、二番以降の打順の読み間違える。
「二番は誰でいくと思いますか？　大矢監督」
「そりゃ、大ちゃん。辻だよ、辻。大砲ぞろいの西武打線で、つなぎ役を演じられるのは、辻くらいなものだよ」

と大矢は、辻の二番を予想するのだが、辻は、意外にもバントが下手で、森西武では、二番辻を一種のタブー。辻の収まる打順は、一番打者の尖兵役か、打順最下位の九番で、そのしぶとさを発揮させる。辻の打順は、ほぼこのどちらかに収まっていたのだ。

事実東尾西武になって、二番に座った辻はどこか居心地悪そうで、プロ以来最低クラスの成績を残し、西武をリストラされるハメとなった。そして、野村ヤクルトに救われた辻は、やはり最初、二番の打順を任されていたが、シーズン途中から、三番の稲葉と打順交換。

二番稲葉、三番辻という万人が持つイメージとは、やや異なった用兵がされたものだ。それらすべてを周知し、さらには三原は、二番打者に最強クラスの打者を置く”流線型打線”の提唱者であることを知っていれば、二番辻がないことは自然とわかるのであるが。

「二番サード中西太。背番号６」

プロ野球史上最強の打者とされる中西の名前がコールされたことで、ドドーと沸き返る西武ドームの観客席。そして、横浜首脳陣は天地がひっくり返るほどの驚きを見せる。

「なんで、中西さん？」

「おかしいよな、中西さんが二番って」

「三原さんは野球をなめているよ。いくら、オールスターで打線を組めるからって、中西さんの二番はないよ。打順なんて、ただの決め事。気にせず打てなんて、日本野球で育った選手には通用しない論法だよ。試合をみててみなさいよ。走者が一塁にいる場面で中西さんに回ってごらん？　自由に打っていいのか、それとも走者を送る打撃を心がけるか、中途半端になって、きっといい結果はでないからさ」

と三原野球にダメ出しをする大矢だが、続く打者の顔ぶれに、目を丸くするとともに、

「３番指名打者アレックス・カブレラ。背番号４２」

「４番ファースト清原和博。背番号３」

続けざまにコールされるライオンズだけでなく、歴史に残る強打

者たちに、大矢は早くも前言撤回。

「あわわわわ。なんだ、この打線。そりゃ、中西さんを二番における余裕があるよな……」

三原の提唱する流線型打線の肝は、二番と三番打者に最強打者を並べることにある。西鉄時代では、二番豊田、三番中西がそれに当たり、今日のこのオールスターライオンズでは、二番中西と、三番カブレラが三原が認める最強打者に当たるのだ。

「フヘヘヘ……」

気分屋のカブレラは、自分が４番でないことに、最初不信感を抱いたのだが、通訳を通じて三原理論に説き伏されるとすっかりと上機嫌モード。

「フフフヘヘヘ……」

陽気な笑顔を浮かべながら、カブレラは、カブレラ用マスコットとして、特別にベンチ入りしている栗山をいじり倒している。

江夏にぶくぶく太りやがってと叩かれた立花

４番は清原。森西武黄金時代のほとんどの試合の４番を務めた清原だけに、オールスターライオンズの４番に座ることはなんら違和感がないはずなのだが。

三原らライオンズ首脳陣が選択した４番清原の決断に、大矢ら横浜首脳陣はなぜかニンマリだ。

「清原ですよ、近藤さん」

「清原か……、大矢くん。フフフ」

近藤昭仁ヘッドは、いつのまにか、大矢を監督と呼ばず、君付けで呼んでいる。年が上の近藤だが、監督は完全に上司。その上司を君付けで呼ぶとは、近藤の中のヒエラルキーが、勝手に、自分＞大矢となったあらわれか。そして、大矢は、君付けされたことに気づかないか、それとも、気づいていたとしても、さして気にしないか。君付けに対しては、なにも触れないまま会話は進行していく。

「清原、４番とはなあ。これほど楽な４番はいないよ。中西さんやカブレラ、あるいは現役の和田ベンちゃんでもおかわり君でもいい。清原以外にいくらでも４番にふさわしい打者がいるのに、三原さんはどうして４番に清原みたいな打者を選択するの？　清原は内角という明確な弱点が存在する。内角を見せて、外にスライダーやフォークを投げれば、確実に三振に打ち取れる打者なのに。ボクを抜擢してくれて、ボクが尊敬してやまない三原さんだけど、この４番清原ははっきりいって間違ってるよ。平松もベンチは楽だよ、しかも、平松はシュートピッチャー。平松のレベルの半分のシュートも投げられない川崎憲次郎に、あれだけ苦戦していた清原が、カミソリシュートを打ち切れるわけがないよ。三原マジックも４番清原だけは不発だよ」

「ですけど、近藤さんは、巨人のヘッドコーチ時代の１９９０年、結果的に屈辱の４連敗に終わった西武とのシリーズで、『清原だけ

は別格、彼を徹底的マークして、勝負を避けていけば、西武に負けることはない』と豪語してませんでしたっけ？」

「いや、大矢くん。あのときの清原はたしかに素晴らしかったんだよ。だが、今の清原は違う。あの時のような、選球眼もチーム打撃もすっかりと忘れている。一発狙いの清原なんて、いいカモだよ、４番に大きな穴があるんだよ」

「ですけど、近藤さん。私たちが対決する清原は、巨人時代の朽ちた清原ではなく、西武黄金時代の清原ですよ？」

「同じさ、同じ。当時の清原にみんな勘違いしてたのさ。ボクもその一人だけどね。清原はＯＮレベルと勝手にこっちが思って、そういう攻め方をしてきた。だが、清原がＯＮのレベルの三分の一も到達してないと分かった今、清原を怖がることなんてないんだ。二死一塁で、中西さんに回った場面があったとする。ボクなら中西さんを歩かせるね、そして当然、続く、カブレラも歩かせる。そして４番清原と勝負させる。清原は、前の中西さん、カブレラを歩かされて、ないくそと燃えているだろう、その清原を簡単に料理するのさ。もうそうなったら、清原を４番にした三原さんも、そして清原自身もプライドがズタズタ。間違った４番に間違った４番を選んだ監督にチームのムードは沈み切る。もう勝負は、横浜のものさ」

「すごい采配ですね。しかし成功すれば、たしかに横浜は圧倒的精神的有利な立場に立てますね、近藤さん」

「だろう？　実際の試合でこのシュチュエーションがやってきたら、ボクは迷わず、中西さん、カブレラ敬遠のサインを出すはずさ」

とヘッドコーチは、監督に意見はできるが、最終決断を下すのは、あくまでも監督である大矢なのに。

「見ものですなあ」

とまるで傍観者のよう。そして、近藤昭仁と大矢の立場が、自然の成り行きでひっくり返りそうなこの時、

「５番は誰だと思う、田代コーチ」

「誰でしょうね？　お前はどう思う、波留打撃コーチ補佐」

「そうですね……西武の5番といえば、やっぱりデストラーデですか……」
「おうその、デストラーデ！　あいつのパワーは凄かったなあ。たしか一年目は、二軍において育成してから……」
「それはバークレオじゃないでしょうか……」
「あ、そうだったか、じゃあ、メジャー復帰したデストラーデの替わりに3番レフトを任されるも、貧打拙守、おまけに試合中に入浴したことを森さんに咎められて二軍に幽閉されたのが、デストラーデだっけ？」
「いやそれは、トレンティーノじゃないでしょうか……」
「うん、そうか？　それじゃあ、誰だよ、デストラーデってさ」
「そのあのスイッチヒッターで日本シリーズだと決まって勝負どころで一発を放って……」
　波留もいまさら説明するのも面倒くさそうであるが、ライオンズには、そのデストラーデをはじめてとして5番打者の印象の強い打者が3人いる。二人目は関口清治。三原西鉄時代の打者で、同じクリーンナップの中西、大下が横綱なら、関口は名大関と称されたものだ。
　そして、三人目が今や中日のイメージが強いが、伊東伊原西武の5番といえば、この男しかいない。和田一浩だ。カブレラを避けても和田がいる。なんとも相手チームにとって厄介な打線の並びだ。
　デストラーデと合わせて、この三人、誰が5番に座ってもおかしくない実力と実績がある。そして、カブレラに指名打者を取られたことから、この三人のポジションはすでにレフトの一択。本来は一塁手のデストラーデだが、清原に一塁を取られた今、不慣れな左翼を守らない限りスタメンはない。そして和田と関口のメインポジションはいずれもレフト。となれば、コールは守備位置まで決まったも同然、5番レフト～とウグイス嬢の悩ましい美声が響くはずだったのだが、
「5番ライト……」

なんとコールされた守備位置はレフトではなく、ライトを守れる選手。ライトを守れて、さらに5番打者として実績のある選手といえば……まさかのまさか、あの北京五輪で日本中の怒りと失笑を買った3年連続２０本塁打の実績あるとは思えないほど扱いが、毎度悪いあの選手しかいないのだが……。

まさかの5番ライトに横浜ブルペン陣もざわめきたつ。

「ライト？　そういえば、隆。西武のライトって誰がいたっけ？」

「誰でしょうね、佐々木さん。盛田、お前わかるか？」

「西武のライト……平野さんとか、ウチにも一年だけいた小関とか……どっちにしろ5番を打つタイプじゃない、完全なつなぎ役。この二人じゃないとしたら、西鉄時代の大下さん？　いや大下さんは、この前の日本ハムの試合にスタメンで出てたし……」

「ブコビッチっていたよな？　あいつも5番だったろ？　巨人との日本シリーズでいいとこで打ちやがったよな」

「いやさすが、ブコビッチはないでしょう」

「じゃあ立花さんか？　立花さんも巨人との日本シリーズでいいとこで打ちやがったよな」

「佐々木さんは、巨人ファン目線なんですね……」

「隆も佐々木さんも一人忘れてますよ。大事な5番ライトを、しかも現役を」

「現役の5番ライト？　誰だ？　落合さんの神主打法の真似してる高山だっけ？　あいつか、まさか」

「いや高山じゃなく、ジー……」

「GG!?　ありえないって、GGは！　もしGGが5番だったら、こっちはもらっと同然だよ、あいつは大舞台に弱いタイプだ。打撃も守備も大穴が待ち構えてるだけだよ」

「ですけど、あのパワーは捨てがたい。GGをはじめてみた三原さんが、一目惚れしてもおかしくないですよ」

「もしそうだとしたら、三原さんってのたいした監督じゃねーよな、いうほどさ。GGがコールされた瞬間、横浜の勝利は決まったも同

然だぜ……」

さて西武の5番打者の正体は？

ジェリーホワイト　ロバートウィッシュネツキ

和田一浩か、関口清治か、それともオレステス・デストラーデか、それともそれともまさかのG，G，佐藤の投入があるのか？　演出か偶然か、ウグイス嬢のお姉さまが、５番ライトのあと一泊を置いたあとに、

「テリー・ウィットフィールド。背番号４５」

畳み掛けるように、一泊置いた一瞬を取り戻すように、ウグイス嬢のお姉さまは、いいっ切った。

「テリー？　ああテリーか」

横浜ブルペン陣の三人も、三原マジックにやられたという驚きよりも、記憶の盲点をつかれたのだろうか、三人が顔を見合わせるとうなづき合うという奇妙なリアクションを見せた。

「テリーを忘れてな、隆」

「うん、盛田。テリーがいたよな。和田のベンちゃんやデストラーデにライトは任せられない。関口さんも古い資料を読むと、肩を壊した経緯があるらしいから、これも肩の抑止力のいるライトは無理。しかし、テリーならライトもセンターもレフトもできる。飛び抜けた守備力はないが、タフィー・ローズタイプで、それなりの捕球力と守備範囲と肩を持ち合わせるんだもんな。そりゃＧＧを起用するくらいなら、テリーを当ててくるよ。右、右、右と右の大砲が三枚続いたところ、いくら歴史に残る強打者の並びだとしても、同じ打席の打者が三人も続くと投手は投げやすいからな。三人とも同じパターンで打ち取れる。これで５番み右の大砲を並べてみ？　僕ならニンマリだよ。そこで挟みたいのがテリーのようなクラッチタイプの左打者。ですよね、佐々木さん？」

「テリーか。こいつもまた巨人との日本シリーズで打ちまくりやがったよな……。たしか、１９８３年の第７戦で逆転の長打を打ちやがった」

「佐々木さんは、どこまでも巨人ファン目線なんですね……」
「いいだろ、横浜に入団する前の話だ。どこのファンだろうとオレの勝手だろ。今は横浜一筋の愛を貫いているよ」
と佐々木はそう弁明しつつ、滴る汗をタオルで拭うが、そのタオル、ジャビットが大きく描かれたオレンジ色のタオルで、長嶋、王、そして後輩の松井、高橋、阿部、坂本らにも構わずに、巨人の開幕予想オーダーの選手の直筆のサインがずらりと並んでいる。
「説得力ないすねえ」
「なにが？　横浜愛一筋でも、巨人のお宝グッズは収集するだろ？　王さんに長嶋さんに、松井のサインが一枚のタオルで収められてるんだぜ？　ＴＢＳラジオの解説者同士の馴染みで元木の馬鹿に頼んで、もらってきたんだ。村田や琢郎のサインが入ったタオルなんて、足ふきマットにもならんが、このタオルは佐々木家の家宝だよ」
と佐々木が巨人愛を見せつける一方で、６番打者がコールされる。
「６番か……て、そういえば秋山さんがまだ呼ばれてねーな。センターは何番に入るにしろ、秋山さんを置いて他にいないぜ」
「秋山さんがクリーンナップに座れないってとんでもない打線ですよね？　それこそメジャーリーグ並の打線じゃないですか？　佐々木さん」
「は、盛田。なにいってるのお前、メジャーにいたことあるっけ？」
「いやないっすよ……」
「ははは、メジャーの打線はこんなもんじゃないぜ、なあ隆？　カブレラ、キヨ、テリーのクリーンナップのどこがメジャーだよ、なあ隆？　ヤンキース打線のがよっぽど怖いっての。カブレラやテリーはメジャーの落伍者で、清原がメジャーのレギュラー取れると思うか？　なあ隆？　お前もメジャーリーガーの端くれだからわかるだろ？」
日本での実績、評価、存在感は佐々木が斎藤隆を圧倒するが、アメリカとなったら話は別。すでに、斎藤隆が佐々木を凌駕する評価だ。だがしかし、東北高校時代からの付き合いの斎藤隆は、佐々木

の操縦法をよく知っている。大人の対応で佐々木の伸びきった鼻を折らないでおいとく。

「そうですね、佐々木さんのフォークは誰にも打てないんだから、誰が並んでもですよね……」

「で、秋山さんは6番あたりかなあ……あの人の打撃は穴があるけど一発長打の魅力と足を考えると6番あたりに置くのがベストかなあ」

ここまで、万人の予想を微妙に外してきた三原の打線構想。がしかし、6番にきてようやく予想どおりの選手がコールされる。

「6番センター秋山幸二。背番号1」

佐々木のいうとおり穴のある秋山にクリーンナップは難しいと考えた三原は、秋山の置き場所に苦慮したのだ。盗塁王を取った足を考えれば、一番に置く戦略も議題に上ったが、出塁能力の問題と、あっさりとした打撃がトップバッター向きではないと一番秋山案はあえなく廃案。

かといって下位打線すぎると、秋山のプライドに関わる。精神的ムラのある秋山は、気持よくプレーさせる必要ありと性格を読み取った三原の出した答えが、6番秋山。6番といえば、一番走者の回る打順との統計結果もあり、チャンスに弱い秋山を三原はできることなら置きたくないのだが、プライドに関わるとなると、三原マジックも冴えを見せない。

結局、折衷案で秋山6番が決まったのだが、三原の配慮も秋山には、完全に伝わらない。

清原が4番でどうしてオレが6番？　と秋山は憮然とした表情で、ベンチの背もたれに寄っかかっているのだ。

ただ表情に乏しく、自分をさらけ出すことがない秋山。秋山自身がベストと考える三番に置かれたとして、表情にさほどの差はないだろうが。

「7番レフト和田一浩。背番号22」

続く7番は和田。今や中日の人の印象。そしてはじめて着るレジ

エンドブルーのユニフォームだけに違和感は倍増だ。（大会規則により、開幕試合は現在着用するユニフォームを着る。西武は当然、レオマークのないシンプルな帽子に、白を貴重にしたデザインのユニフォーム）

ただ、もともと古風な顔立ちにプレースタイルだけに、西鉄時代をモチーフにした今のユニフォーム姿もすぐに見慣れるだろう。

「和田のベンちゃんか。隆、お前、東北福祉大で和田と一緒にやったろ？」

「はい。僕が４年の時の１年です」

「神様と奴隷かよ。隆、お前のいじめのせいで、和田の頭、ああなったのか？」

「いえ、入学当初から来てました」

「そうか、いじめはよくないよ。いじめは。神様と奴隷だからって、いじめはよくないよ……。なんか、喉乾いたなあ～。隆、チェリオ買ってきてくれ」

「え？　はい、わかりました……ただちに！」

と、斎藤隆はチェリオの入った販売機を目指しダッシュで走りだしましたが、何度も繰り返しますが、これは漫画のイメージで、実際は、佐々木の方が斎藤隆に気を使うようで……。

「なあ、盛田。もう打順は読めたよな？」

「ええ、佐々木さん。残りのポジションは、捕手とセカンド」

「捕手が伊東さんで、セカンドが辻さんだろ？　セカンドは片岡も頑張ってるけど、守備力といやらしさがダンチだよ」

８番キャッチャー伊東。そして９番セカンド辻。森西武前期でいやといいほど見た打順の並びで誰もが決まりと思ったのだが……。

「８番キャッチャー和田……」

「和田って、ベンちゃんは今コールされただろ？　あいつはたしかに捕手上がりだけど？」

三原マジック炸裂？　和田のクローン造成に成功したのか？　レフトに和田がいて、キャッチャーも同じく和田？

そして滅るお気に入り

「ありえねーよ！　いくらなんでも反則だろうよ。和田をレフトとキャッチャーの二役をやらせるなんて！　なあ盛田」

「そうですよ、佐々木さん。和田の打撃はたしかに買えますが、和田のクローンを作って、二役やらせるのは、明確なルール違反、そして倫理的にもおかしいですよ。それに、キャッチャー和田なら伊東さんでしょ？　打撃は和田でも、キャッチングの上手さが違う。リードの巧みさが違う。盗塁阻止のテクニックやバント処理などのフィールディングも違いすぎますよ。和田が、東尾さんや稲尾さんのような大投手を引っ張れるとも思えませんし、伊東さんが捕手じゃないのは、ベイスターズにとって、チャンスですよ！」

と佐々木と盛田は、あらぬ和田クローン作戦に盛り上がっているが、さしもの三原でも和田のクローンを作り、一人二役ならぬ、二人二役はしないだろう。だが、三原がクローン作戦を考えていたのは事実。稲尾が１０人いれば、それはすなわち史上最強の投手陣であると、三原はルールのすき間を縫うように、稲尾のクローン１０人を受注。

「大会規則には、どこにも同じ選手を二人以上出場してはいなけい」

と三原はクローン稲尾の１０人の出場を企むが、受注が完了する前に三原作戦が漏れたために、大会本部は急遽、大会規則を補足。『同じ選手の出場は一人まで』の規約を追加して、三原の稲尾クローン作戦の野望を直前で食い止めることに成功したのだ。三原も規則には逆らえないと、稲尾クローン作戦を引っ込めたが、稲尾の受注は完了済みで、１０人できた稲尾は、制球力と耐久力のありすぎる打撃投手、そして稲尾の投球を解説する稲尾解説者、その他、名球会役員など各所で活躍が予定されている。

和田がクローンでないとすると、捕手和田の正体はいったい何者だ？

「８番キャッチャー和田博実。背番号１２」
和田は和田でも、和田一浩でなく、和田博実だ。西鉄黄金時代の正捕手。西武を代表する捕手が伊東勤なら、西鉄、太平洋クラブ、クラウンライターの九州ライオンズを代表する捕手は、和田博実なのだ。ライオンズの長い歴史においても、伊東に続く、捕手のナンバー２は、明らかに、この和田博だろう。細川も近年の実績で追い上げているが、捕手ながら三割を打ち、二桁本塁打を４度記録し、西鉄三連覇に貢献した和田をまだ追いぬいていないだろう。
しかし、横浜ブルペン陣、そして横浜首脳陣の反応は、一様に、？マークが頭上を飛び交かっている。
「伊東じゃない！」
大矢はしめたと、頬を緩めた。伊東のリードをいかにかいくぐるかを最大のポイントにし、そして伊東の慎重かつオーソドックスなリード解剖の答えが出ないままこの日を迎えた大矢だけに、伊東の先発落ちは願ってもない朗報。
「和田さんか！　西鉄時代の捕手だな！　近藤さんと同世代の選手です！　和田さんはどんなリードの傾向があるのですか！」
「和田さん？　僕が西武のコーチの時、一緒にやったけど、リードまではなあ……。同年代といっても、別のリーグで日本シリーズで戦ったわけでないし、オープン戦であっただけじゃあなあ……」
いつも、どこからわいてきたのかわからないほどあふれる自信を体中にまとう近藤昭彦ヘッドコーチであるが、その近藤がこの調子。首脳陣最年長の近藤が和田のリードの傾向がわからなければ、他のコーチ陣もお手上げだ。
「まいったなあ。稲尾さんや池永さんら西鉄勢でも、伊東がマスクをかぶると思ってたからなあ。和田さんの研究なんてこれっぽちもやってないよ」
これも三原マジックなのか。誰もがライオンズの捕手は伊東で決まりと、雑誌新聞等の各種の予想も元から印刷されたように、８番捕手伊東だったのだから。

しかし、どうやら三原は、ただ予想を外すためだけに、和田を先発捕手に指名したわけではなさそうだ。

「……」

三塁側ベンチの端、三原監督のいる位置と真反対の位置に伊東は憮然と座っているが、

「伊東さん、なんで先発じゃないんですか？」

いい意味で空気の読めない中島裕之がズバリ、自分を抜擢してくれた監督でもある伊東に直言だ。

「いや、ナカジ。オレは納得済みだよ。三原さんに最初、先発落ちをいわれたときはむっと来たものだけど、チームの作戦上の選択だといわれて納得したんだよ」

と口では伊東はそういうが、明らかに顔はふてくされている。

では伊東のいう作戦上の関係での先発落ちとは、いかなる意味を持つのか？

「どういうことだよ、盛田」

「どういうことって、佐々木さん。あれじゃないですか？　和田さんが捕手ってことは、先発投手が西鉄時代、和田さんとよく組んだ捕手ってことじゃないですか？」

「なるほど、相性ってことか。三原野球の後継者といわれた仰木さんも相性重視の野球をしたなあ。ということは、ライオンズの先発投手は和田さんと組んだ西鉄時代の投手ってことだな」

「そうなりますねえ。たしか、池永さんの頃は、もう和田さんは正捕手を外れて外野や代打に回ってたそうですから」

「稲尾さんか。なんだ、これだけ騒いだ割に……だな。結局、本命の稲尾さんかよ」

「三原マジックですかねえ。ライオンズと聞いて誰もが連想する投手が先発するのに、誰もが騙されたと思うのは……」

「で、伊東さんの次は和田さんってのはわかったけどさ、他にライオンズの捕手って誰がいたの？　わが巨人が西武と最初に日本シリーズやったときの捕手は、伊東さんの出始めで、肩の強い大石さん

とベテランの黒田さんの併用だったけど」
「誰がいましたっけ……」
悩む盛田の背後に、壁に寄りかかりながら舟を漕ぐ野村弘樹ブルペン担当コーチを佐々木は発見。
「おい野村！」
佐々木は、一応目上であるブルペン担当コーチの野村を呼び捨てだ。
「は、はい」
強烈な目覚ましを食らった野村は目を覚ます。
「おい野村。お前、ブルペン担当コーチでライオンズを丸裸にしたんだろ？」
「あ、はい。夜中中かかってついウトウトと……」
「お前の健康状態はどーでもいいから、ライオンズの捕手は、伊東さんと和田博実さん以外、誰がいるか、オレと盛田に講義しろ。ニュース解説の池上さんみたいにわかりやすく頼むぜ」
「わかりやすくですか……三番手は細川ですかねえ」
「細川が三番手？　あんなヘボな打撃のやつが？　ライオンズも意外とたいしたキャッチャーいねーな」
「で、他に、野村さんとかえっと若菜さんの若い頃とか、西武や楽天で編成やってる楠城さんとか、あと和田さんの後釜に巨人から取ってきた宮寺って人がいて……西鉄最初の捕手は日比野さんって……」
「はん？　おれは池上さんみたいな解説を頼むっていってんだよ、それじゃあ名前の羅列じゃねえか！　け、せっかく地味なお前に話を振ってやったのに、このつまらなさと来らな」
と佐々木が、新キャラ野村弘樹にダメ出しをした時、一方の横浜首脳陣は、事前につかんだ情報の確かさに色めき立っていた。
「大矢監督！」
「明夫！」
彼らも、佐々木らブルペン同様、和田の起用を西鉄時代の投手が

開幕先発するための相性重視の作戦だと結論づけていた。
「こりゃもう、アル・ロングですよ！　やっぱり！」
「そうだよ、明夫！　我々優秀な横浜首脳陣は、三原マジックに打ち勝ったんだよ！　アル・ロングがなんだ！　我々は読みきったんだ！」
しかし、彼らは気がついていない。アル・ロングの在籍は１９５３年のみ。１９５５年入団の和田がバッテリーを組みようがなく、相性重視もなにもないことを。
「９番セカンド辻発彦。背番号５」
当たり前すぎる名前がコールされても、ざわめき一つない。片岡の急成長があったとしても、史上最高クラスの守備力を誇る辻を抜くのは難しいのだろう。

そして、ついにライオンズの開幕投手がコールされようとしている。
開幕投手本人と三原と稲尾しか知らないその名前がついに披露される。
「ライオンズのピッチャーは……」

背番号２３

「ライオンズのピッチャーは……」

アル・ロングとなぜか確信するにいたってしまった横浜首脳陣であるが、大急ぎでアル・ロングの情報を集めようとしても、ろくな情報がないのだ。

頼りの？　外国人名鑑のアル・ロングの欄はどこも、アルバイト選手であること簡単な略歴を記しているだけ。無機質に並んだ数字から、制球力に難があり、までは判明したが、それ以上の情報はついぞ集まらなかった。

インターネットに活路を見出しても、古すぎる情報は、資料のコピーが限度のインターネット。いくら検索しても、名鑑から読み取れる情報以上にものはどこにもなかったのだ。

外国人らしく長身、そして制球力に難があり、そして右投げの投手。肝心の球種はまったく不明、当時はスピードガンがなかったために、球速はいずれにしろ判明するわけがないが、遅いのか、速いのか、そのどちらでもないのかすらも分からないままだ。

アル・ロングの情報がなければ、先発を事前に分かったとしても、なんの意味があるのか、いぶかしがるむきもあるだろう。だが、大切なことはアル。ロングが何者かではない。

裏の裏をつく三原マジック敗れたりと情報合戦に勝ったことが重要なのだ。もしも、まさかのアル・ロングならば、先発がコールされた瞬間、三原マジックにはまった横浜ベンチは、平常心を失うことだろう。アル・ロングは何者か？　なんの意味があるのか？　三原の考えの裏をのぞこうと苦心しているうちに、アル・ロングと三原に逃げ切られるだろう。アル・ロングと三原を理解しようとする間に抑え込まれて、勝ち逃げされることだろう。

だが、まさかの先発を予期できていれば、驚くことはなにもない。ただ見知らぬ外国人投手と当たった時を思い出せばいいのだ。

アル・ロングの角度と身長は５０年前の野球界では特別のものだっただろうが、今の球界ではありふれている投手にすぎないのだ。
しかしこれらすべてもアル・ロングが先発ならではのこと。アル・ロングの名前を三原が思い出したのが今、そして、和田博実とアル・ロングはすれ違いの現役生活であることから。アル・ロングの先発などあり得るわけがないのだ。
だが、横浜首脳陣は、まだロング先発を確信している。そして、西武の先発が明かされた時、彼らは落差を楽しむように、三原マジックの上を行ったと有頂天にいるのだ。
そして～

「ライオンズの先発ピッチャーは……」
西武ドームのウグイス嬢は、パンチョ伊東のドラフト会議の司会をまねしたように、演出か、一拍どころか、二拍、三泊と間をとったあとに、
「……畑隆幸。背番号２３」
ついに、その名前を明かした。
「畑？」
「はあ？」
「誰だよ？　おい隆。稲尾さんじゃねーぞ！」
「佐々木さん、隆はチェリオを探して奔走している途中ですよ」
「なんでこの一大事に、ジュースなんか買いに行ってるんだよ。あの馬鹿が！　メジャーに居すぎて緩んだか！　誰だかわかんねー先発投手がコールされて一大事だというのに！」
「永射保さんって情報はなんだったんでしょうね。オレは最初から怪しいといってましたが、やっぱり永射さんじゃなかった」
「大塚とデニーのつかんできた情報はあんなもんだろが。大塚はオレと東北福祉の同期だとしても、デニーは横浜で一緒にやったといっても、やっぱりあいつらはガゼを吹きこんだんだよ！　やっぱり、あいつらは、西武寄りの人間なんだよ！　クソが」

「永射保さんってのは、大塚さんがつかんだ情報から推測した名前に過ぎない。大塚さんのつかんだ情報自体は間違いでもなかったかもしれないですよ」
「なに、どういうことだ？」
「いや、佐々木さん。大塚さんのつかんだ情報てのは、三原監督がウチが左打者を並べてくるかしきりに気にしていた。そして野球というのは最初が肝心といってた、その２つでしたよね？」
「ああ、そうだよ」
「その情報から、大塚さんやオレたちは、永射保さんを連想したのですが、この畑って投手は、その２つに合致した投手かもしれませんよ」
「？　どういうことだ？」
「左打者に強く、そして肝心の最初のイニングを打ち取れる技術と実力がある投手で、そして、和田博実さんと組んだことがあり、なによりも誰も予想できず、ファンと横浜に衝撃を与えることができる投手……なのかもしれませんよ。いや、この条件のすべて合致している投手のはずです。じゃなきゃ、三原監督が開幕投手に指名しませんよ」
「……なるほどな……って、なんでこのオレ様が盛田の解説に納得しなきゃいけーねんだよ。第一、この畑って投手は左投手なのかよ！！　それすらわかんねーだぞ。利き腕がどっちかもな」
　開幕投手がわかっても、はてなのマークが取れない二人に、斎藤隆の調子外れの陽気な声が飛び込んでくる。
「佐々木さん～！　チェリオありました～　はあはあ。西武ドームを飛び出して、近所の酒屋の自販機まで買いに行っちゃいましたよ～」
「隆、なにがチェリオだこの一大事に。西武の開幕投手の利き腕もわかんねーんだぞ！」
「西武の先発投手？　ああ畑さんでしたっけ？　通路で聞きました

よ。そして……」
「そして？　そして、なんだよ！　隆！」
「西武側のブルペンがモニターに一瞬映って、畑という投手は左で投げていましたよ！」
「なんだど、左だと？」
「ほら、やっぱり佐々木さん！　オレの推理どおりでしょ」

「畑？」
「ロングじゃない？」
「どういことだよ。誰だよ、ロングが先発っていったやつ！　よく考えればないよ！」
　しかし一方の横浜首脳陣は、ロング先発でないことにまず驚いているのだ。これでは畑は誰であるか解き明かすまで時間を要することになる。
「明夫だ！　明夫が言い出したんだ、ロングが先発だって！」
「いや大矢監督。僕のせいじゃありませんよ。クルーンの野郎が吹きこんできて……」
　さらには、みっともなく仲間割れの模様。ただ彼らも大人で言い争いもそこそこで、畑の話題に移る。
「畑？　畑はわかるよ。西鉄時代の左投手でしょ。私は入れ違いで一緒の時代にやってないけれど、近藤ヘッドはほぼ同時代ですよねえ？」
「ああ、畑はよく知っているよ。別のリーグだけどね。稲尾と同期の左腕投手で、入った時は、稲尾より畑の方が期待と話題を集めていたんだよ。甲子園で活躍してね、アメリカ遠征でもインパクトを残した投手だ。プロでも何度か二桁勝ったはずだよ、でもね、でもだよ、いくらなんでも、開幕投手はないよ。松坂や東尾や工藤や池永がいるのにだよ。いったい、三原監督は何を考えているんだろう？　三原門下生の一人であるボクは、三原さんのことをよくわかっているはずだけど、それでも、この起用はまったく理解できないよ」

定岡三兄弟

「わからないよ、まったくわからない。何を思って、畑を三原監督があえて開幕投手に指名したのか。ボクには理解できないよ。三原監督に説明して欲しいよ。いや説明しても、納得できない自信があるね。こんなもん、マジックでもなんでもないよ。ただ予想できない投手を開幕投手に持ってきて自己満足してるだけさ」

三原監督を生涯の師と仰ぎ、三原を意識した采配を監督時代にふるってた（開幕投手に有働を連続で使ったり、前日ＫＯされた先発の加藤将人を中０日で連続先発させたり、『死に馬に蹴られた』など三原もよく発した余計な一言で敵を怒らせたり、思い切って若手を抜擢したり，思い切って、ベテランを排除したり、嫌いな選手を追い払うようにトレードしたりだ）近藤すら理解不能の開幕投手畑。

いまだ左腕投手であることしかわかっていない横浜ブルペン陣とは違い、さすが畑と同時代にプロ野球でプレーした首脳陣が多い横浜ベンチ、畑の実力と人となりがわかっている。それでも、畑をあえて起用した意味が見えてこないのだ。

「畑は、スピードガンがあれば１４０中盤くらいは出ていたはずだ。制球が大型左腕投手らしく、いまひとつ。これまた左腕投手らしくドロップ、今でいう縦のカーブ、そして、当時の左腕投手にしては珍しくスライダーやフォークを操っていた。だけど、どれも特別特筆したレベルじゃない。それなりの左腕投手だけど、開幕投手に起用するレベルじゃないよ」

「ですよね、近藤ヘッド。私も子供の頃、なんとなく西鉄畑投手の投球をテレビで見た覚えがありますが、とてもこの大舞台の先発を任せる投手には思えませんでしたよ。先発しても、すぐに稲尾さんの尻拭いを求めなきゃいけないレベルの投手でしたよ」

隙あらば監督の座を奪い取ろうとする近藤昭仁と隙だらけの大矢であるが、畑先発の是非についての意見は完全一致。

それなりの投手であるが、松坂、東尾ら豪華先発陣を押しのけて開幕に起用するまでの投手でもない。

それが横浜首脳陣の見方だ。だが、三原がそれでも畑を先発に起用した理由がなにかあるはずだ。

そして、畑先発を決めた張本人である三原はなにを思いベンチに腰掛けている？

「フフフ。驚いてる、驚いてる、横浜のベンチもそしてこの球場を埋めつくすファンの方々もそしてテレビやラジオ、最近はインターネットというもので情報を享受されているファンもいると聞くが、それらのメディアを通じて、無数の人々が畑の先発に驚いていることだろう。驚くだけならまだしも、横浜ベンチのような反応はしてはいけませんなあ。驚くだけならば、試合に支障はない。驚いた上に、腹を立てるのは、いけないことですぞ、野球という競技は平常心でプレーしてこそ、最大の能力が発揮できる競技。平常心を失えば、持っている素質の半分も発揮できない。そういう競技ですぞ……」

三原は、畑先発に驚きに包まれるドームの雰囲気を噛み締めるように味わっている。

そして、騒動の主である畑がブルペンからグラウンドへと現れる。ほとんどの観客や横浜ベンチが初めてみる畑の姿。

しかし、畑が驚きの主だとしても、特別な身体的特徴があるわけでもない。ただがっちりとした左腕投手の姿が見えただけ。驚きの声が漏れても、すぐに沈静化し、見知らぬ投手を歓迎するにふさわしいしらけた空気がドームの中に漂い始めている。

「畑……投手ですね。オープン戦、練習試合、チーム内紅白戦……いずれかの非公式試合で一度も投げていないと勝手に思ってましたが、違いますね。投げています」

球界の俳人こと江尻亮チーフコーチが、対西武の資料に目を通すと、そこには畑の今大会における開幕投手に抜擢されるまでの足跡が記されたいたのだ。

「え、投げてたの？　江尻チーフ。詳しく、その登板成績を」
　大矢が目を丸くするのも無理がない。まったくのノーマークの畑。誰も予想できない先発投手ならば、秘密兵器は秘密にしておかなければならないと、練習試合の登板は控えていると思いきや、投手畑はひっそりと登板しているのだ。畑は注目されない登板で確かな実績を刻み開幕投手抜擢に弾みをつけていたのだろうか？
「宮崎県でキャンプを張っていた西武は、近隣で同じくキャンプを張るソフトバンクと練習試合を数試合したのですが、畑投手は、そこの2試合目に投げています。三原監督が、『ボーダーライン上にいる投手をすべて試すために、細かい投手継投をした試合』なんですか、畑投手は7回表一死一塁から、左打者の長谷川勇也相手に登板していたようです。肝心の成績ですが、これがパッとしない。ポンポンと追い込んだものの、バットを短く持った長谷川に粘られて、四球を出した後、続く湯上谷に、四球の後の初球を狙えの格言のどおり、甘いストレートを痛打されます。これが運良くサードのスティーブの正面をついて、飛び出した二塁走者の定岡智秋を刺して、なんとか、無失点に切り抜け、このイニングを持って降板……。これだけなんですよ、畑投手が投げた形跡は」
「四球を出しあとに、湯上谷ごときに痛打か。結果的にアウトを2つ取ったとしても、ボーダーラインの投手が生き残れる登板実績じゃないなあ。普通なら、この登板で表舞台からは消えるくらいのがっかりな内容。現に畑投手はそれから投げてないんだろ？　どういうことだ。非公式試合で実績も残してない投手をどうして抜擢するんだ。まったく見えてこない」
　三原マジックの種の出所をつかもうとも掴みきれない大矢であるが、近藤昭仁ヘッドが、監督の大矢以上に監督らしく動揺する横浜ベンチを鼓舞する檄を投げかける。
「おい、お前たち。畑がどんな投手だろうといいじゃないか。三原さんがよくやる手なんだ。最初、どうでもいい左投手を何人か投げさせ、相手を迷わせて、すぐに本命の投手にスイッチする。この手

は、三原マジックでもありふれた手なんだ。畑だろうと誰でもよかったんだ。ボクらを驚かせ、いらだちさせれれば。畑がピンチを作ろうとどうでもいいこと、すぐに東尾でも稲尾が出てくるんだから。いいか、惑わされるな。惑わされなければ、畑先発なんぞ好都合だ。向こうが大試合に投げるレベルじゃない投手を出してきてくれたんだからな」

三原マジックをよく知る近藤だけに、ある程度の説得力があったのか、横浜ナインは立ち上がる。

「そうだよ、畑投手、ごっちゃんですだよ。一発もらった！」

４番の村田が立ち上がり、畑をＫＯに追い込むホームランを宣言するなど、畑先発は逆に横浜ナインに火をつけたようだが、三原の狙いはどこにある？

マジックの種はあっけなく

グラウンドに現れた畑は、先発捕手の和田博実相手に肩慣らしと最終調整のキャッチボールを入念に繰り返している。

なるほど１７６ｃｍ、８２?の公表プロフィール通りがっちりとしたその体つきはいかにも、入団時、稲尾以上の評価を得て、アメリカ遠征の際に大リーグが目をつけられたことがある。現役選手では成瀬や杉内に近い体型だろうか。

三原マジックの中心人物だけに、ネット越しに好奇のフラッシュの嵐。携帯カメラから、いかにも高そうなカメラの恰好の被写体になっている。

グラウンド上は、さながら三原マジックの種明かし会場に化しているが、試合前には、一つこなしておかなければならない儀式がある。

そう、試合前セレモニーの華、始球式である。

「試合に先立ちまして、始球式のご案内をいたします。本日、栄えあるプロ野球オールスターワールドベースボールクラシックの、ライオンズ、並びに、ベイスターズの開幕戦の始球式を務めるのは、作家、そしてタレントとしてもおなじみの……」

これまでの他の試合の始球式は、偉大な球界の先人を敬ったり、球団の地元にまつわる名士が登場したり、由縁ある歴代オーナーが駆けつけたりしたものなのだが、どういうわけだが、この試合の始球式は、作家、いやいちいちタレントと付け加えるあたり、有名人というよりも芸能人に近い存在だろう、が務めるのだ。

芸能人がなんの根拠もなく始球式を務めるわけがない。おそらくなにかの宣伝の一環だろう。このように格式高い試合が、宣伝の場に塗り替えられるのはなんとも微妙の一言。

が、資金難の現実に直面しているのは事実。スポンサーがつくのなら、芸能人の宣伝くらい致し方なしだろうか。

しかし、球界のブランドの重大さを常に訴える三原監督がよく、芸能人の始球式を許したものだ。西武または西鉄がらみの偉大な先達はいくらでもいる。三原が一声かければ、喜んで始球式の場に現れてくれるのだろうに、どうして三原は宣伝活動の場にさせて平気なのか。

「ふふふふ。うふふふふふ」

三原はただ笑っている。それも笑いを堪えきれない感じのいわゆる含み笑いだ。始球式に登場するタレントがそんなに吹き出すような面をしているのだろうか。

一方の横浜ベンチは、タレントの始球式を一様に深いな顔で見つめている。

「残念だよな、ウッチー」

「そうですよ、村田さん。最近の西武は、西鉄時代や太平洋クラブ時代のユニフォームを着用したり、歴史から逃げず直面する姿勢が好感を持てたのに。芸能人風情に始球式をやらせるなんて。そりゃ普段のペナントのどうでもいい一試合（横浜はたいてい重みのないどうでもいいペナントレースを消化している）なら、タレントの始球式もアリですよ。結構、ミはーなところがある僕は、今日はあのドラマのあの人とか、今日は、あのグラビアアイドルか、なんて楽しみにしちゃう面もないことはないですけどね。栄えある開幕戦でタレントはないでしょうよ。ライオンズなら、そうだな……たとえば、ドラフトを作ると言い出した西鉄時代の西球団社長とか、それこそ西鉄身売り後、宙ぶらりんになっていたライオンズを私財を投げ売ってでも支えた中村オーナーでもいいんですよ。当然、ライオンズを消滅の危機を救っただけでなく、球界の盟主に育て上げた堤オーナーもありです」

「ウッチー、なんか、お前、妙に球団史に詳しいな」

「いや、ライオンズオールスターと戦うに当たって、球団の歴史をちゃんと学んでおこうかなと、多少付け焼刃ですけど……」

「まあ、ウッチーの言うとおりだ。どこの誰がどんな宣伝するかは

知らんけどよ、タレントさんはねーよなあ。ああ～せっかく４番に座らせてもらって、よっしゃやるぞって気合が盛り上がってたとこなのによ、タレントの様にならない始球式見せられたら、その盛り上がったテンションも萎えちゃうよ」

「それじゃ、目でもつぶっていたらどうですか？」

「お色気タレントのムフフな始球式だったら困るだろうよ。人を見て、凝視するかは判断するぜ」

「いやでも、作家兼タレントですよ。お色気振りまける該当者いますか？」

「作家兼タレントか。高橋源一郎……志茂田景樹……室井佑月……なんだよ、この作家兼タレントのいかがわしさわ」

「ある意味、色気はあるメンツですよね……」

「始球式を務めますのは、作家、そしてタレントでもお馴染みの、畑正憲さんです」

ライオンズ側のベンチから、畑正憲……通称ムツゴロウが、テレビで見せたあの笑顔と同じ表情で、観客席に手を振りながらマウンドに駆け寄ってくる。

ドーム中はポカーン。どうして、いまさらムツゴロウなのか？いったいなんの関係があるのか？　ただの宣伝か？　すでに過去の人であるムツゴロウに宣伝が必要なのか？

ドームにいる選手、マスコミ、ファンのすべてが同じ思いを抱く中、ムツゴロウさんは、西武の開幕投手に握手を求める。

バリバリの体育会系である畑隆幸と、典型的な文科系の行き着く先である作家を稼業とする畑正憲。がっちりとした畑隆幸とか細い畑正憲。まるっきり正反対の体形の二人であるが、その顔つきが、どこか似通っているのだ。

そういえば、苗字は同じ”畑”だ……。

この時だ、ドームのあちこちで始球式のからくりに気づきはじめたのは。

「畑正憲？」
「畑隆幸？」
「同じ畑？」
「あ！　そうだ！」
　気づいたのは、やはり畑隆幸の現役時代を知る年長者だ。
「そうだよ、大矢くん！　西鉄ライオンズの畑は、作家の畑正憲、つまりムツゴロウと親戚だったはずだ！　今、思い出したよ！」
「そうだ、そういえば聞いたことがありますよ。ムツゴロウさんの従兄弟が球界にいたって話は！　それが畑隆幸投手のことだったのか！」
「まさか、大矢！　三原さんは、ただそれだけのために……ただムツゴロウさんが始球式だからってだけで、畑を開幕に持ってきたっていうのかい。いや、おかしい。どうしていまさらムツゴロウさんなんだ！　最盛期ならわかるけど、いまさらだよ。ムツゴロウさんの始球式が先か、それとも畑の開幕を持って行きたいために、ムツゴロウさんに頼んだのか！」
　すべての意味が白日のもとになった今、慌てふためく横浜ベンチを会心のいたずらを成功させた子供のような顔をしている三原はこみ上げる笑いを堪えきれない様子だ。
「見ろ、大矢！　あの三原さんの顔を！　ムツゴロウさんの始球式が先でも、畑の先発が先でもないんだ！　ただムツゴロウさんの従兄弟の投手が西鉄ライオンズにいた事実を現代のファンに伝えたかった。それだけなんだ！」
「それだけですか？　近藤ヘッド！　まさかただムツゴロウさんの従兄弟は野球選手だった！　その程度のトリビアを知らしめるためだけに！？　いやそれだけのための開幕投手を決めるなんて！？」
「大矢、お前も三原監督の元でプレーしただろ？　あの人は、大事な試合にくだらないいたずらを仕掛けてくる人なんだよ。見ろ、あの顔を！　いたずら大成功の笑みを堪えきれない顔だぞ！」
「そうか、その程度なんだ。畑投手の起用の意味は！」

グラウンド上では、畑正憲の始球式がとり行われている。やはり、ムツゴロウさんに投球を期待するのは酷。いくら、従兄弟である畑隆幸とキャッチボールをした日々も遥かなる過去なのだ。

時速にして５０キロほどのへろへろ山なりボールは、和田のミットには到底届かない。

グラウンド上では、なんともいえない雰囲気が漂っているが、今の横浜ベンチに始球式をのんきに見届ける暇はない。

「大矢！　いたずらなら、浸け込め！　畑の先発が致命傷になる攻撃を仕掛けるぞ！」

「そうですよ、近藤ヘッド！　その意気がよし！　ですよ！」

ｃｏｃｏを全員召上がり済み？

横浜ベンチの頭を悩ませ続けた西武の開幕投手も、フタを開けてみればなんてことはない。

ただ、ムツゴロウさんの従兄弟が野球選手だった事実を大々的に知らしめたかっただけなのだ。

しかし、いくら三原でも、いや三原だからこそ、荒唐無稽の采配はふるわない。投手畑が、開幕投手でも試合は作れると十分なシュミレーションをしているのだ。

畑がたとえ通用しなくても、それは織り込み済み。西武のブルペン陣には、稲尾、東尾ら豪華救援陣が控えているのだ。

先発より救援投手に重みをおく三原采配に抜け目はない。東尾が、稲尾が、畑が打者一人で役者不足を露呈しても、すぐに駆けつけるべく、試合前から万全の準備をしているのだ。

しかし、畑の実力も捨てたものではないだろう。なにせ稲尾以上の評価を得た左腕だ。がっちりとした体格から放たれる速球は重さとスピードは十分。

クラシックなサウスポーが操る、ドロップやカーブだけでなく、スライダー、フォークなど現代の左腕に必要なボールも備えている当たり、いくら横浜のトップバッター石井琢朗が２０年近くに及ぶ打者人生の中であらゆるタイプの左腕と相対し打ち砕いた実力者だからといって、畑は位負けしないだろう。

西鉄で何年も同じ釜の飯を食った仲であり、学年ひとつ違いの捕手和田博実との息もさすがにぴったりだ。

「おい和田さん。この石井琢朗いうのはどういうタイプの打者だ？

オレは球界から離れて久しいんだ。死ぬ直前まで野球界に携わっていたお前さんなら、石井琢朗の攻略法のひとつやふたつ持ち合わせてるだろうよ」

「石井琢朗か、もちろん知ってるぞ。オレが阪神のヘッドコーチを

やってるとき、横浜で出始めだったからな。そうだな、ムツゴロウさんにちなんで動物で例えようか？」
「おう、そうしてくれ。ごちゃごちゃ言われるよりも、イメージしやすいわ」
「石井琢朗を動物に例えると、チーターだな」
「チーター？」
「そう、チーター。狙った獲物は逃さない。そして、目にも止まらぬスピードで相手を惑わせる。さらには、後ろ足、つまりは足だけなく、前足、つまり人間でいうと手だな。足も手も速いんだ、これが」
「足が速いいうのはわかる。だが、なんだ、その手も速いって。女に目がないいうことか？」
「うふふふ。まあ、そう意味だな」
「女に手が速いって、野球にどう関係あるんだ」
「いやらしい打撃をするちゅうこった」
「いやらしい打撃？　なんだ、女にもいやらしければ、野球にもいやらしいんか」
「そう。とにかく、石井琢朗の打撃はしぶといの一言だ。追い込まれたら、バットを短く持って、自分が待っているボールが来るまで、延々と粘る打撃ができるんよ」
「ふん。なにが粘る打撃じゃ。オレは多彩な変化球を持ち合わせてるんだぞ。手を変え品を変え持ち球を投げていけば、いつかバットは空を切るじゃろ」
「畑。お前さんはたしかに、ワシらが現役時代だったあの当時では、多彩な変化球の持ち主だったろうよ。だがな、今の野球はカーブ、スライダー、フォークなんて誰でも投げられる標準装備なんよ。軽くみるとコツンとやられるぜ。しかも、監督はあの三原さん。開幕投手だからって、打者一人で替える采配を平気でふるえるおっさんだぞ」
「ああ、わかっている。三原監督に何度もいわれたわ。いいか、畑、

お前が自由にできるのはベースひとつだけ。ってな」
「ベースひとつだけ？」
「つまりはまあ、エラーでもヒットでもフォアボールでもデッドボールでも、一人走者を許したら、もう続投はない思えいうこっちゃ」
「そりゃきついなあ。まあ、一人も走者を出さなきゃ、最後まで投げさせてもらえるいうこっちゃな」
「そりゃ完全試合やんか」
「完全試合やる勢いで投げいこっちゃ。三原監督さんの鼻を明かすぞ。話題づくりで出した畑が好投したら、逆に三原のおやじさん立場ないだろうよ」
「おっしゃ、三原のおやじさんを慌てさす投球をするぞ」
打者一人の開幕投手になる可能性のある畑だが、ふれくされるわけもなく、逆に三原監督の鼻を明かすぞ意気込んでいる。
迎えうつ横浜打線であるが、右腕投手のロング先発を予想したオーダーを組んだだけに、上位3人が左打者が並ぶ、左腕相手に少々分が悪い打線構成だ。
しかし、左打者といっても左腕を苦にしない実力者だらけ。対左だからといって、気負いなく立ち向かえば、打ち崩せない投手ではないはずだが。
「どうする、大矢！」
監督とヘッドコーチの上下関係を忘れ、すっかり大矢を呼び捨て板についた近藤昭仁ヘッドコーチ・大矢も大矢で、呼び捨てにされても気にしやしないで、はいはいと近藤ヘッドにひれ伏してしまう。
「天下の石井琢朗ですよ。そのままですよ、当然」
「いや、琢朗とはいえ、左対左の不利は変わらん。しかも、見たこともなければ、情報もない畑相手だ。三原マジックの出鼻をくじくには、最初の一打者が肝心だぞ。畑を攻略できる右打者を起用すべきだ。もしも、最初にガツンと叩ければ、この試合は、完全に横浜のペースとなる」
「代打ですか？　それじゃ石井が当て馬みたいじゃないですか！」

「仕方がない。一選手のプライドを気にしちゃ、三原監督は越えられんぞ。ここは代打を進言する。ヘッドコーチの立場としてな。最終決断はもちろん、大矢。君にある」

「いやでも、石井に代打を出せば、この試合は勝てるかもしれませんが、この大会の石井琢朗が完全に死んでしまいます」

「大矢、君は、チームの勝利よりも、選手のくだらないプライドを取るのか？　それが君の監督としての甘さだ。非情になりきれないから、チームは緩んでいくんだ。選手の気持ちをおもんばかるのもいい。だが、チームに比重を置かないと、ぬるま湯集団に成り果てるぞ。ちょうど今のベイスターズのようにな」

「いやしかしですね……近藤ヘッド」

いきなり監督大矢に突きつけられた決断。

「お～い、桑田さん。用意頼むよ～」

近藤ヘッドはすでに右の代打の切り札としてベンチ入りした、大洋日本一の時の４番であり、いまだ破られない新人本塁打記録を持つ桑田を呼び寄せた。

左の畑相手に左腕キラーでもあるスラッガー桑田をぶつけて、先頭打者出塁どころか、先頭打者本塁打を狙うようだ。

たしかに、桑田代打でも畑は打者一人完了するまで逃げれない。同時代の選手で比較のしやすい二人の選手としてのネームバリューは圧倒的に桑田が上回る。

代打桑田は、三原マジックに対抗する最善の策ともいえるが、問題は石井琢朗だ。人一倍プライドが高い石井琢朗を当て馬のように扱えば、不満分子に成り果てるのは見えている。

「石井琢朗がブンむくれたら？　なあに、いつものペナントレースの試合じゃないんだ。石井琢朗を降ろしたら、永池や堀江や万永や藤田や福本クラスの選手かいないわけじゃない。石井琢朗と匹敵する実力者である山下大輔がいるじゃないか」

と近藤は石井琢朗が戦力にならなかったケースをすでに想定済みで、石井琢朗が欠けても戦力的痛さはないと計算している。

だが、大矢は非常になりきれない。
「琢郎だよ、琢郎。横浜の日本一の時の野手の最大貢献者だよ。この琢郎をこんな使い方をしていいのか？」
揺れる大矢は最善の決断をくだせるだろうか？

マジックにはマジックを

石井琢朗は、畑の投球練習を横目に見ながら、タイミングを取っている。プレーボールがかかる前からすでに、打席に入っているように気を張り詰めているだ。

これほどのやる気にあふれた石井琢朗を久方ぶりだろう。横浜から広島としびれる試合に一番遠ざかっているチームと二番目に遠ざかっているチームに所属している石井琢朗だけに、これほど注目と緊張感にあふれた試合は、横浜日本一の時の日本シリーズ以来だからおよそ12年ぶりだろうか。

大矢にも、石井琢朗の迫力は十分に伝わっている。まさか、代打起用が検討されているとは思いもしないだろう石井琢朗に、大矢は声がかけづらい。

「どうしよう。近藤ヘッドのいうこともわからないものでもない。まさかの畑開幕の三原マジックに打ち勝つには、先頭打者代打くらいのインパクトが必要なのは確かだろう。左キラーでスラッガーの桑田さんが代打に出れば、三原監督といえど、平常心にいられないだろう。なにせ、三原監督にいいようにやり込められると予想されていた12球団で唯一の優勝なし監督のあの大矢が、三原マジック以上のマジックを披露しようとしているだから。未来は頭の中に描ける。代打に出た桑田さんが、開幕の雰囲気に飲まれた畑ー和田のバッテリーの出鼻をくじき、初球を思いきり振り抜いて、あの西武ドームの横浜ファンが埋め尽くすレフトスタンドの芝生席に打ち込む姿が。三原監督は口あんぐりだろう。そしてマスコミ各紙は、打電するだろう。三原マジック敗れたり！　いささか遊びがすぎた三原采配に大矢マジックの鉄槌がくだる！　そんな見出しも想像できるが、だがしかし、石井琢朗に、久しぶりに戦う野球人の目をしている石井琢朗になかなか君は当て馬だよとは言いにくいぞ」

大矢は、石井琢朗を呼び寄せての状況説明すらできないでただた

だベンチの奥でもぞもぞとしているだけだ。
近藤ヘッド直々に代打の指名された桑田武はバットを持って張り切って、裏のミラールームに消えている。
そして、石井琢朗はベンチの自分を当て馬扱いにする動きなどつゆ知らずに、すでに打席に入った気分でネクストで畑の投球を凝視している。
「畑投手は、まったく知らない投手。まさかの開幕でデータすらない。だからといって、僕は攻略を投げ出したりしない。いままで何千とプロの一軍の打席を体験していれば、何の情報もない投手との対戦なんていくらでもあった。そういう知らない投手にどうやって相対するかもわかっているつもりだ。２０年のプロ野球生活の経験が生きる時が今だ。投球練習だからといって、おろそかにしちゃあいけない。わずか数球の練習の中にも情報が詰まっている。ストレートと変化球の割合は？　ストレートか変化球か、投手の一番投げたいボールはなに？　マウンドさばきはどうだ？　落ち着いているのか、先発に浮き足立っているのか？　投球練習だけでこれだけわかるんだ」
ぶつぶつとつぶやく石井琢朗の一言、一言のすべてが金言。大矢の耳にも石井琢朗が築いた野球理論が聞こえてくるから始末が悪い。
「この男を当て馬にしていいものか？　今は広島の人といえど、いつか指導者として横浜に帰ってくるべく人材だ。この男を腐らせてはいけない。この大会だけでなく横浜の将来に響くぞ」
大矢は、石井琢朗を試合から除く重さになかなか決断が下せない。そして後方からは近藤ヘッドの突き上げだ。
「おい、大矢。早く石井に言ってこいよ。お前の選手としての重さは十分承知している。そして横浜愛の深さもわかっている。だからこそここは引いてくれ。それがチームのためなんだからとでもささやいてこいよ。琢郎はああみえて意外と単純な奴だぞ。プライドをくすぐってやればイチコロよ」
ならば近藤ヘッド直々に石井琢朗の説得にかかればいいと大矢は

思うが、年長のヘッドには直言しづらい。
しかも、近藤はたちが悪いことに、ベンチ内のコーチ陣を言いくるめて、代打桑田信者を着実に増やし続けているのだ。
「大矢監督。これしかありませんよ。三原マジックを打ち破るのは、最初にガツンと思い切った采配が必要ですよ！」
親大矢に見えた山下内野守備走塁コーチ兼内野手も代打桑田を支持し、
「そうですよ、山下さんの言うとおりだ。琢朗のみたいなコツコツ選ぶ一番よりも、ライオンズ超強力打線に対抗するなら、一番にホームランバッターの桑田さんですよ！」
と田代打撃コーチ兼内野手といってもベンチ入りしていないので兼任もクソもないが、その田代も代打桑田策に目を輝かしている。
田代が横浜で育てるタイプの打者といえば石井琢朗タイプよりも、思いきり振ればそれでよし。結果はあとからついてくるの脳筋系の打者ばかりだ。石井琢朗一番にするよりも桑田をトップバッターに持ってくる策に賛同するｒのは自然の流れ。そういえば、監督代行時代も荒っぽい右の大砲の吉村を一番で使い続けた過去がありましたっけ。
さらに江尻野手チーフまでも代打桑田策に異を唱えない。江尻といえば、監督代行時代に石井琢朗を当時のレギュラーサード清水を押しのけて抜擢した恩人でもある。
田代と違って豪快に打ち勝つ野球よりも、早稲田出身らしく細かい守りの野球を好む江尻でさえも、
「石井琢朗はこれしきで腐るタイプではありませんよ。代打桑田さんで行きましょう。石井は不満な顔をするでしょうが、それはチームにとってマイナスにはなりませんよ。替えられた悔しさをバネにチーム力をアップさせてくれるでしょうよ」
育ての親の江尻さえも石井外しを厭わないのだ。
「桑田さんでいきましょう！」
監督経験者が並ぶスタッフに混じってなぜかコーチングスタッフ

入りしているコーチ最年少の波留敏夫打撃コーチ補佐も、長年一二番コンビを組んだ石井に情けをかけない。

近藤ヘッドだけの意見ならば、撥ね付けるのも楽。だが、スタッフの総意なら話は別だ。スタッフとの協調路線を取る大矢内閣では多数決は絶対だ。

そして大矢の耳には、ベンチ裏で素振りを繰り返す桑田のバットのびゅんびゅんと音を立てる豪快なスイングや、ミラールームの床を蹴り上げるスパイクの音も漏れ伝わってくる。

「琢郎。ちょっと来てくれ」

協調路線の大矢はスタッフの波には逆らえないのか、ついに石井を呼び止める。

大矢の中では優勝監督

「琢郎。ちょっと来てくれるのか」
石井の名前を呼ぶ大矢の顔は硬直している。キャンプの時んいチームリーダーに指名した石井を当て馬扱いする気の重さは、大矢がいくら平静を取りつくろうとしても、隠しきれないだろうか。
「なんでしょうか、監督」
呼ばれて駆け寄ってくる石井も、まさか当て馬扱いにされる運命が待ち受けているとは思わないだろう。その目は、ここ１０年はとんと見なかったほど輝きに満ちている。
「琢郎……」
代打が出るから下がってくれといいだそうとした大矢であったが、石井の目の輝きの前に思わず、言葉を飲んでしまう。
「う……」
大矢の見た石井は、第二次政権時代の石井ではない。２０００本安打を達成し、上がり目のまったくないチーム状況にすべての目標を失っていたあの石井ではなく、大矢第一次政権の頃のチームも、自身もぐんぐんと上り調子だった頃の石井だ。
目の輝きは、山下大輔の頭よりも強い光を放ち、大矢の決心を鈍らせる。
「琢郎……」
琢郎の目の輝きの前に大矢の心もあの第一次政権時代にタイムスリップだ。１９９７年、大矢二年目。夏場の快進撃でヤクルトを追い詰めながらも、石井一久のノーヒットノーランの前に沈んだその悔しさをぶつけた１９９８年の快進撃がまるで今目の前に起こっていることのように、大矢の脳裏に駆け巡る。
「１９９７年の悔しさがあったから、１９９８年の優勝と日本一があった。オレはあの胴上げされた時の気持ちを一生忘れないだろうよ」

１９９８年の監督は大矢でなく権藤だろうとのツッコミは無粋だ。大矢の１９９７年があっての１９９８年の日本一だ。監督が大矢のままだろうと横浜は間違いなく優勝していたと大矢が思っているのだからｔら、それはそれでいいのだろうか。

「あの時の琢郎だ。あの時の琢郎を下ろすわけにはいかないな。たとえ代打桑田さんが三原マジックを帳消しにするインパクトがあったとしても、代打桑田さんが特大の先頭打者あアーチを放つとしても、この石井琢朗のリーダーシップを捨てるわけにはいかない。石井琢朗の攻守が、きっと横浜を勝利に導いてくれるだろう」

「なんですか、大矢監督。小声でぶつぶつと……」

「いやこっちのことだ」

「それでなにか用でしょうか……」

もう大矢は、石井琢朗を下ろす気持ちはさらさらない。ベンチとの協調路線の信条を投げ捨ててでも、石井琢朗にこだわる心を決めたのだ。

「いや、畑投手の攻略法を教えようとおもってな。攻略法といえｄ、野球は１０割成功するスポーツじゃないから、絶対的ではないけど、オレのアドバイスがあるなしじゃ成功率は一割は違うぜ……。畑投手は、お前の知ってのとおりまさかの先発だ。だからといって情報は皆無じゃない。畑投手と同時代を過ごしたベンチの年長者さんたちが、かろうじてデータを持っていた。西鉄時代の左腕だから、カーブかストレートの力押しだと思うだろ？　それがな、スライダーやフォークも使えるらしいんだ」

「へえ……スライダー、カーブですか」

「だから、追い込まれても打てるとタカをくくってはまずいことになるぞ。外にスライダーで抜かれたり、フォークを落とされたら、見知らぬ投手の見知らぬ球筋、お前といえどころっとやられてしまうぞ」

「精度はどうなんですかねえ？　スライダー、フォークを持ち球としていても、投げれる自信がなければ、決め球にはなりきれないで

しょう」
「う〜ん、そこまでのデータはないんだよなあ。ただスライダー、フォークを持ち球にしていたとの断片的な情報しかない。練習試合で一回投げたこともあるようだが、その時の配球の割合のデータもあいにくなあ」
「そうですか……」
「だが、だからこその攻略法があるんだぞ。知らない投手だからっていって、一番打者の役割だからといって、ボールを見極めようとは思うなよ」
「どういうことですか？」
「西武のバッテリーは見ての通り西鉄バッテリーだ。クラシックな物の考え方をしてくるだろう。つまり、開幕の初球はストレートってな。捕手の和田さんはコーチ時代にお前と対戦している。だからなおささら、初球は見てくるとストライクの取りやすいストレートを選択してくるだろう」
「打っていいんですかね？」
「いいんだよ、三原監督は畑投手を開幕にしたが、全幅の信頼を寄せているわけではない。おそらく少しでも怪しくなれば、すぐに控え投手を出してくるだろうよ。だから待球戦術など必要ない、ボールを見極めて後続の打者に情報を与えても意味はない。打てるボールを積極的に打つこそ、三原采配に立ち向かう唯一の対抗策だ」
「……初球からガンガン打ちにいくのは、僕の野球観から少し外れますが、いいでしょう。初球打ちこそが勝利へのたったひとつの道ならば。野球観にこだわることなんてくだらないプライドですよ。そんなもんチームの勝利のためなら捨てる覚悟がありますよ」
「よし、いけ、初球ストレートをカツンとセンター前に弾き返せ」
大矢は檄の念押しのように、石井の右肩をポンポンと二度三度叩く。
「単打でいいんですか？　バックスクリーンに入れるつもりだったのになあ」

石井のジョークに大矢は言葉を発することなく、にやりと笑っただけで、くるりと振り返りベンチに戻っていった。

球審の元によらずに帰ってきたことで、代打桑田はないと察した横浜ベンチはさっそく大矢の優柔不断ぶりに陰口を叩く。

「まったく、だから大矢はダメなんだよ。くだらない情に采配が左右される。最善と思った策の前に選手一人一人の気持ちなんて、吹けば飛ぶほどの軽さなのに」

近藤ヘッドが大矢に聞こえるように吐く采配批判にも、大矢は動じもせない。そして大矢は、すっかり自分が代打に起用されるつもりの桑田の元に駆け寄って、すぐさまのフォローだ。

「桑田さん。すいません。ここは石井琢朗に行かせてください。桑田さんは代打の切り札です。然るべき場面で必ず使いますから、その時まで気持ちを切らさずベンチで準備をしていてください」

桑田は自分の出番がないことに、あからさまなイヤな顔をしたが、文句はいわずのそのままベンチ裏に下がっていった。

「ふう、大変だよ」

それもそのはず、この大会の特殊性、監督よりも年上の選手がうじゃうじゃいるのだ。年長の選手たちを使う難しさを大矢は、

「まるでオールスターの監督だよ」

オールスターの監督は基本的に前年の優勝監督に限られる。優勝経験なしの大矢はオールスター監督の大變さをわからないはずであるが、一般論でモノを語っているのだろう。どこを向いてもスターだらけのオールスターの選手起用の大変さは横目で見てもわかるのだ。

だが、この試合がオールスターと決定的に違うのは、オールスターがすべての選手を流れ作業的に出す試合であるのに、この試合は控え選手を使っても使わなくても監督の自由なのだ。つまり控え選手を使えば使うほど先発選手の不満は鬱積し、控え選手を使いそこねると逆に控え選手は不満分子となるのだ。

「う〜ん、やっぱり引き受けきゃよかったなあ」

いまさら後悔する大矢だが、試合はもうプレーボールが掛かっている。後戻りは出来ないのだ。

「初球打ち、初球打ち……」

ぶつぶつつぶやきながら大矢野球を実践しようとする石井。そして、西鉄バッテリーは、満を持してストレートのサインを出す。

「やはりこれだろうよ」

大矢の予想通り西鉄クラシックバッテリーは大試合ほど初球はストレートで入る狙い通りだ。

うんうんとうなづいた畑は、大きく振りかぶる。そして振り切った腕から放たれたストレートは重要感たっぷりだ。

しかし、コースは甘い、真ん中高目、石井琢朗は猛然と打ちにいく。

「よし、狙い通りだ～！　え、ああ～！？」

なんと真ん中の絶好球、そして読み通りなのに、石井琢朗は打ち損じる。

「ちょっと、待てよ、タクロー！！」

大矢は絶叫だ。打ち損じた石井琢朗の打球はバックネット裏にむなしく飛んでいく。

「あああ～。オレがこだわった石井琢朗！　オレの攻略法どおりにボールが来たのにどうして打ち損じる？！」

西武ドームに表示されたスピードガン表示は１３７キロ。畑はぐるぐると肩を起点に腕を回している。初球の緊張感か腕が振り切れない、つまり１３７キロは畑のマックススピードではない証拠だ。

「しかも、満足のいかないボール！　甘いボールを一球見逃すと二度甘いボールがこないのがプロの世界！　タクローはなんであのボールを打てないんだよ！」

一人、熱くなる大矢に近藤ヘッドは冷静に言い放つ。

「ふん、だからいっただろうよ。代打桑田さんだったら、１３７キロの真ん中高目なんて絶好球だよ。今頃先制点が入ってベンチが盛りがっている頃だろうよ。待球の石井に初球打ちなんて慣れないこ

とをさせるからこうなるんだよ」
さっそく外れた大矢采配に、ベンチには早くも不信感が広がっている。

瀬能あづさ→荒瀬香織

「ああ～」

大矢の落胆ぶりもひどいものがあるが、当の本人の石井の落ち込みようは輪をかけてひどい。なにも石井はストライクを取られるたびに打率が一割ずつ下がるような荒っぽい技術不足の打者ではない。むしろストライクを重ねるごとに、しつこい攻撃を心がけしぶとすぎる打撃で相手バッテリーをじわりじわりと苦しめるタイプの打者だ。ひとつストライクを取られても、どうってことのない打者のはずであるが、大矢に伝授された攻略法のそのままのとおり、初球ストレート、それもど真ん中の腕が振りきれていない絶好球がきた。すべては狙い通りのストーリーにかかわらず主役の石井は上手に立ち回れなかったのだ。大矢の野球を実践出来なかった悔い。そして正体不明の投手の投げたまさかの絶好球をとらえ切れなかった無念。いくつもの悔恨が石井を襲いかかり、そして石井の２０年の蓄積である野球技術も崩そうとしている。

二球目、畑と和田のバッテリーは初球ストライクを取った事実を喜ぶでなく、満足なボールを投げれなかった状態の悪さを猛省していた。

腕の振りの悪さを直すセオリーのひとつにスナップをきかせるボール、つまり畑にとっては大きく割るカーブを投げて突貫工事的に腕の振りを修正するのだが、畑と和田は半ば二球目を捨てて外のカーブを投げ込んだ。

バッテリーにとっては配球のための外のボールではなく、調子を整えるためだけのボール。いわば、対打者石井ではなく自分たちためだけのボールなのであるが、この完全に遊び球、捨て球にも、石井は手を出してしまう。

「あ」

しまったと思っても、もう遅い。外になだらかに逃げていく完全

にコースひとつ外れたカーブに石井はなぜか手を出してしまう。
外のボールとわかった石井は、出かかったバットを止めにかかったが、すでに時すでに遅く、石井の手首の返りは止めきれなかったのだ。
墨審に小久保が「聞けえよ！　墨審に～」と恫喝するほどの微妙なハーフスイングではなかった、明らかに手首の返ったスイングは、捕手のアピールから墨審の判断を仰ぐことすらなく、完全にハーフスイングだったのだ。
石井はどうしてこんなボールに手を出したのか、打席を外しりに首をひねっている。
やはり初球の悔恨が石井の卓越した選球眼をも狂わせてしまったのだろうか。
しかしこのカーブのできにも、畑は満足した様子はない。腕の振りの修正目的に投げたカーブとしても、カーブの変化自体、調子のバロメーターにはなるのだろうか、その曲がりにその変化点に畑はどうにも納得した様子はない。
つまり石井は初球の腕が振り切れない１３７キロの甘いストレート、そして二球目の失敗品のカーブの二球の前に追い込まれてしまったのだ。
いずれのボールも石井のレベルなら容易に弾き返し、容易に見逃しボールランプにひとつ点灯させれるボールにすぎない。そのレベルのボールに追い込まれてしまった石井は、いったい何が狂っていたのだろうか。
二球目のハーフスイングは一球目の悔いが要因であることはわかるが、問題は初球の絶好球をとらえ切れなかったことだ。
精神的、あるいは肉体的に、または技術的スランプを抱えているのだろうか？
「なんでだろうな、今日は朝から絶好調。テレビの占いも西武ドームまでの長い道のりもすいすいこれて、今日は何かいいことあるんじゃないかなとウキウキ気分で球場入りしたのにだ」

どうやら精神的には絶好調、だとすると問題は肉体的か、技術的にあるのだろうか。今日一日限りのスランプだとしても、石井とはいえ、チャンスはいくらでもあるわけでもない。

山下大輔がすぐに取って代わるレベルにいるのだ。少々の打撃不振の石井なら、山下大輔の総合力は石井を圧倒するに違いない。

しかし、山下大輔といえど、ベイスターズナインのリーダーにはなりえない。つまり、石井のスランプが長引くとすると、半数を占めるベイスターズナインの求心力を急激に失う危険性もあるのだ。

「最低でも粘って一番打者らしい仕事をしないと」

肉体的あるいは技術的スランプは、すでに石井の絶好調だった精神面にも影響を及ぼし始めている。

すでに、石井は塁に出る一番の仕事よりも、一球でも粘る消極的な一番の仕事をまっとうしようとしているのだ。最低でも粘るとの目標からは、それ以上の結果は産み出しにくい。

「しかし、ここで情報のない投手と戦う難しさが出てくる。追い込まれてどんな攻めをしてくるのか皆目見当がつかない。しかも僕は先頭打者、前の打者の攻めを参考にすることもできないし、捕手も伊東さんじゃない。もし捕手が日本シリーズでやりやった経験のある伊東さんだったら、知らない投手でもどんな配球をしてくるかは想像ができる。しかし、捕手もよくわからない和田さんだ。三球勝負を仕掛けるタイプなのか、ボール球を打たせるタイプなのか、変化球中心なのか、ストレートでずばりと来るのか。それすらもわからな。つまり、今の僕は真っ白の状態から、追い込まれてしぶとい打撃を展開しなきゃいけないんだ」

情報を知るために参考にする先頭打者の一番の難しさだろうか、その一番打者の逃げ切れ無い運命の前に、石井は翻弄されることになる。

畑と和田のバッテリーは、三球目に外に遊び球を投じてきた。石井は二球目と違い容易に見逃すが、このボールから読み取れるバッテリーの情報は皆無だったのだ。

「ただのストレート。しかも１３８キロと初球のストレートより１キロ増しとはいえ、なんの変哲もないボールだ。これが畑投手のマックススピードか、それとも抜いたボールなのか、さらには、このボールは変化球勝負の布石なのか、それともストレートでズバリきたボールが外れたのか、今の僕からは何も読み取れない」

遊び球から次のボールを予想するのは、打者にとっては必須事項。しかし、今日の石井は頭も冴えてこず、この遊び球に続く物語が思い描けない。

技術的あるいは肉体的スランプから波及した精神的スランプは、石井の読みも鈍らせたのだろうか。

そして、まったくわからないままの石井は、畑と和田のバッテリー、それも、満足なボールを投げられない畑のボールにやり込められる。

４球目、畑は勝負のボールを投げ込んだ。石井の足元から落ちるフォークボールだ。しかし、このフォークもストライクからストライクのフォーク。ストライクからボール球になるのがフォークのセオリー。セオリーから外れたフォークは好球になるはずだが、配球の物語を思い描けない石井は、これまた打ち損じてしまう。

石井の技術レベルなら落ち際をバットコントロールで捕まえて、レフト前に芸術的なバッティングで弾き返せるボールだったが、石井のバットコントロールはうまくいかず、当てただけの打球は平凡なショートゴロになりさがる。

しかし、平凡なショートゴロも石井にとってはヒットコースだ。左打ちで出足の速い石井は、内野安打製造機の典型なのだ。

そして西武のショートは松井稼頭央。メジャー移籍で、ショートとしてのプライドを失った松井は、今、約６年ぶりに公式戦のショートを守っている。

捕球ミスに送球ミス、あらゆるミスを繰り返し遊撃手の座から転げ落ちた松井のショート守備。石井は腐らず一塁を目指せば、一塁は自分のモノだと信じて走っている。

「カズオ！　ひとつでもミスしてくれ！　ひとつのミスがあれば僕は殺されない」

同じショートのミスを願う石井は複雑な心境を抱くが、スランプの入り口にいる石井は人を蹴落してでも、生き残らなければならないのだ。

内角攻めの真田対内に強い坂本

西武の先発遊撃手争いの勝ち残ったのは、松井稼頭央。いったい、三原は松井の何が秀でていて、豊田、石毛、そして中島を押しのけてまでスタメンショートに松井を決めたのだろうか。その遊撃手らしい俊足は、虚をついて盗塁を敢行するタイプの3人とは明らかに違うし、３０本塁打を放ったのも松井だけ。他の三人の大型ショートはいずれも２０本塁打台にとどまっている。そして打率の面も三人を凌駕している。日本時代に残した7年連続3割は他の3人どころか、１２球団のどの時代のどの遊撃手を見渡しても近づく者もいない大記録だ。（遊撃手の連続3割の二位は中島の４年連続。２０１０年も3割確定だから5年連続となるのは間違いなし。偉大なる先人松井稼頭央の記録を抜く権利を持つ中島だが、メジャー挑戦が足かせになるだろうかか）

走攻、いずれを見ても松井稼頭央が四天王の中で抜きん出ているのは事実。三原の選択もオーソドックスともいえるが、恩師三原にベンチに置き去りにされた豊田は、走攻の2ツールにおいては、松井の実力を、

「ふん、面白くないけど、松井は走攻の部分には文句のつけようがない。三原さんが松井にほれるのも当然だ。このオレ、豊田泰光がもしも監督だとしても、４人の遊撃手の中で誰が一番、走攻に優れていると聞かれたら、迷わず松井稼頭央と答えるだろうよ。だがな、野球は守備こそ最大の攻撃なんですよ。この守備をおろそかにして負けたチームを、オレはいくらでも見てきたわけですよ。走攻守三拍子揃って、初めてスーパー遊撃手なのに、どうして松井稼頭央なのよ。オレが監督なら、当然、ショートはオレを選ぶね。だってね、松井稼頭央のショート守備はメジャー挑戦でボロボロに成り果てたんだもの。見ててごらんなさいよ、石井琢朗のこの打球を松井稼頭央は、満足に処理できずに石井を一塁に残しちゃうから。遊撃手っ

てのはデリケートなんですよ。一度自信を崩したら、二度とできるポジションじゃございませんよ」

と豊田が、ベンチのど真ん中でぶつぶつと講談『オレが許さん！』を絶賛披露中。ひとりごとに過ぎないとはいえ、チームの中枢にいるべき人物が味方の失敗を予感するのは掟破り。

だが、この程度の失言暴言は三原はお構いなしで、豊田を放置。うるさい豊田が横にいて、ようやく西鉄時代の気持ちが盛り上がるというもの。

そして、松井稼頭央は豊田の予想通りに、石井の正面のさほど難しくない当たりもさばけずに遊撃失格の印象を拭えないのだろうか？

コロコロと人工芝の上を規律正しく転がる打球に、松井はグラブを突き出しながら、颯爽と前に出てくる。

「ほら、いわんこっちゃない。稼頭央の奴は遊撃手失格の烙印を押されたというのに、なんだ、あの雑な入り方は、見てろ、あの勢いでゴロにぶつかりにいったら正面衝突、弾くからさ」

豊田の辛口批評はとどまるところを知らないが、松井の出した先に、ボールが入り込むと、すかさず投げる方の右手にボールを持ち替えて、勢いそのままでランニングスロー。

「む、取ったな。だが、遊撃手はここからが大変なんだ。ゴロを取るだけじゃアウトになりませんよ。取って投げて、そして一塁手が捕球して、初めてアウトになるんだ」

と豊田はいまだに松井の失敗、そして自分にショートのポジションが回ってくることを諦めちゃいない。

「ランニングスロー。ほら、また雑なプレーだ。いくら石井の足が速いからって、稼頭央の肩なら止まって投げてからでも、十分に間に合うんです。それがなにを急いで、腕だけのランニングスローで投げるんだ。見ててみな、とんでもない高投か、一塁の清原が取り切れない変なゴロの送球になるから」

それでも豊田の辛口は滑らかに回転するが、走りながら投げても松井の送球にブレは見られない。

ワンバウンド送球を意識しすぎて（人工芝の場合、ワンバウンドさせるくらいの送球の方がダイレクト送球よりも確実性が高い）や低投気味になるが、一塁手はＰＬと西武黄金時代で一塁手の基礎をきっちりと学んだ清原だ、多少のずれた送球は巧みなミットさばきで難なく処理をする。

石井琢朗は必死になって駆け込んだが、間一髪間に合わずに天を仰ぐ。

平凡な内野ゴロが石井だから、間一髪のプレーになったのだろうか、それとも、松井稼頭央の迅速なプレーが石井の内野安打の野望を打ち砕いたのだろうか。

それにしても、豊田の予感をよそに、松井はまずまずの遊撃手返り咲きのプレーを完成させた。

慣れない大リーグ球場の天然芝の前に崩壊した松井の遊撃手としてのプライドは、慣れ親しんだ西武ドームの人工芝の上に完全に取り戻せたのだろうか。

松井はまずはワンナウトと指を一本突き上げてアピールをしている。しかし、アウトにした今も豊田の遊撃松井の復活戦の評価は手厳しい。

「ふん、あれじゃあダメだな。なぜダメか、わかるか？　ナカジ」

いつのまにか、豊田の横には中島がいた。大先輩の遊撃手が、ぶつぶつと野球講談をしていることに気づいた中島は、愛嬌よく豊田の横の位置を確保したのだ。

「いや全然、わかりませんよ」

いつもの調子であっけらかんと中島は答える。

「一塁の清原のあの顔を見たか？　松井が微妙な送球をしたときに明らかに嫌そうな顔をしたのをオレは見逃さなかったぞ。いやオレだけじゃない、稼頭央も清原の苦々しい顔が目に入ったはずだ。清原と松井稼頭央といえば、ＰＬの先輩後輩だな。そして西武時代、松井稼頭央が若い頃に、出て行く前の一塁清原と組んだことがあったな。その時の清原は、今のように、松井がおかしな送球をするた

びに、ちゃんと投げんかいとイヤな顔をしたものだ。清原ＦＡで一番ほっとしたのが、本来先輩の退団を惜しむべきの後輩の松井稼頭央だったらしい」

「???　それがどうしたんですか？」

「ふん、まだわからんか、ナカジ。人工芝で復活した松井稼頭央の遊撃手のプライドは、今の清原の苦々しい顔で一瞬にして再崩壊したのよ。見ててごらんなさいよ、次にまた同じような遊撃ゴロが飛んだとき、松井稼頭央の遊撃手生活の最後だから。つまり、オレかナカジ、君のどっちかの出番ってわけよ」

「???」

「ふう、まだわかってないのか……」

説明役がグラウンドにいないことに気づく。だから清原がつぶやく

横浜の二番打者は近藤和彦。元祖天秤打法の好打者だ。首位打者獲得経験こそないが、打撃ベストテン2位に輝くこと4度。アベレージヒッターの最大の勲章をつかめずとも、誰もが認める技術の持ち主だ。

だが、この近藤和も左打ち。石井と同様、右の代打が検討されてもおかしくないが、ベンチにはその動きはない。

「近藤さんは替えられんだろう」

大矢に打って変わって、監督気分の近藤昭仁ヘッドも、二個上の先輩の近藤和彦は率先的に替えづらいのだろう。

右の代打策を切り出さない。

「近藤ヘッド。ここで代打はどうでしょうか？　石井と違って、近藤和さんは、別にリーダーでもないし、好打者といっても、外野手です。替えの効かない選手でもないし……」

逆に今度は大矢が、代打策を進言するが、

「馬鹿か。近藤和さんを降ろせるか。当て馬扱いになんかできるか」

とあっけなく一蹴されてしまう。選手をモノ扱いする近藤も、さすがに年長者の選手は扱いづらいのだろうか。

ベンチ入りしている選手で、近藤ヘッドより年長者の選手は、この近藤和彦に、代打げ検討された桑田、そして、秋山ー土井のバッテリーの4人。

つまり、実質的にベンチの主導権を握りつつある近藤昭仁にとって、この4人はアンタッチャブルの存在なのだろうか。

もし磐石になりつつある近藤昭仁の牙城が崩れるならば、この4人の誰かだろうか。

そのまま打席に入った近藤和彦は、バットの頭と尻を持つ、頭上に掲げ背伸びを繰り返してから打席に入る。

独特すぎる天秤打法は、入念なストレッチが打席の直前まで必要

なのだろうか。

「僕がこの世の中を留守にしていた間に、天秤打法をシンボルにする選手が出てきたそうだけど、本家はやっぱり違うなって所を見せつけないとね」

近藤和彦の死去後に登場した巨人の新鋭松本哲也のビデオを念入りに見た近藤和は天秤打法の天秤具合の物足りなさに、本家本元の天秤打法を刮目せよと、現巨人のフロントにいる近藤昭仁を経由して、メッセージを送った。

松本の天秤打法も図抜けて奇抜な打法だが、近藤和の天秤打法は、さらに奇想天外だ。打席に入った近藤和は、二度三度バットでホームベースの位置を叩くように確認すると、そのバットを頭上に掲げた。そして掲げたバットの持ち方が天秤打法と評される由縁だ。右手をバットのグリップエンドにかぶせると、反対の左手は、バットの先端を触れるように優しく握るだけ。さらにバットのヘッドを斜めに倒した、その形はまさに天秤そのものだ。

よく見るてんびん座のイメージ図形とそっくりそのままシンクロする。松本ももちろん同型の持ち方をするが、近藤和の持ち方はさらにバットを天空に掲げ、右手と左手の位置が離れている。

この形から、オーソドックスな打ちにいく形になるとは信じられない構えだ。松本で見慣れているはずの現代のファンも、近藤和の本家本元の天秤打法の異様さにざわめきたつ。

「あんな、フォームでほんまに打てるんか」

一塁の清原も興味津々に見守っている。しかし、一番驚くべき、また投球ペースを崩すくらいに驚いてほしいバッテリーも、西鉄クラシックバッテリーだけに、近藤和の天秤打法は見慣れたものだ。公式戦やシリーズでかち合ったことはないが、オープン戦やオールスターでイヤというほど目にしたのだからそれも当然だろうか。

そして、注目すべき点はただひとつ。この構えらどう打ちに行くかだ。松本でさんざんみている慌てるように、バットを引く形を近藤和も再現するのだろうが、それにしても、近藤和の天秤具合は極

端すぎる。
本当に打ちに行く形に持っていくにしても、松本以上のスピードを伴わないと、速球にはとても間に合いそうもない。
畑はワンアウトを取って落ち着いたか、近藤和に対して、思う存分の腕の振りを見せつける。
石井に見せたおじぎするストレートとは明らかに違い、手元で伸びるようなストレートを投げ込む。球速表示は１４５キロ。石井の打席から約7キロ増し、これがアメリカも獲得に動いた快腕畑隆幸の正体だろうか。
このストレートに近藤和はどうやって打ちに行く形に持っていくかが、注目の的であったが、近藤和の巧みなバットさばきは見られない。
畑の思わぬスピードにあっけを取られたか、それとも、最初から初球は見逃すつもりだったか、近藤和の天秤打法の天秤は、天秤のまま、つまりバットは上空に掲げられたままだ。
バットの戻し方に注視してた観客は肩透かし。そして、近藤和はおもむろに打席を外し、バットを二度三度振る。
「あれ、近藤さん。今のストレートにピクリとも反応せんかったねえ」
捕手の和田に真相を問いただされた近藤和は正直に心中を告白する。
「いわ、和田。松本くんに天秤打法のなんたるかを教えようと力入れすぎて、いつもより天秤具合を極端にしすぎたわ」
なんと、松本を意識し過ぎた近藤和は、本来の自分の天秤の形より、より極端な、より見世物的な天秤打法の形にしてしまっていたのだ。つまり、天秤の具合が極端すぎて、まともにバットを打ちにいく形に持って行けなかったのだ。
「意識しすぎるとダメ。やっぱり自然な形の打撃フォームが一番だ」
再度、打席に立ち直した近藤和の天秤具合は、前の形よりも緩和されている。

「そうやろ。あんな形じゃとても打ちにいけへんわ。この程度の天秤やないと、バットは出てこんで」

清原も納得の天秤打法。しかし、石井の失態で本来の自分ｗ取り戻した畑の稲尾以上の剛球は、近藤和の天秤打法を根本的に狂わせようとする。

行沢→立浪→宮本→野々垣→今岡→（松井）→前田忠節

近藤和彦は、松本に天秤打法のなんたるかを教育しようと肩肘張るのはやめて、自分本来の自然な天秤打法から、これまた本来の自分を取り戻しつつある畑に相対する。

だが、近藤和への初球で手応えを感じた畑と和田の西鉄クラシックバッテリーは、自慢の球威とスピードで、天秤打法のタイミングを根本的に崩そうと企む。

初球に続いて、連続の速球勝負。近藤和のような特殊なタイミングの取り方は、どうしてもスピードあふれる投手には、タイミングが遅れがちになる。畑が左腕なればなおのこと。

それでも、近藤和の培ったテクニックがあれば、遅れたタイミングを逆に利用するように、ちょこんと三遊間の頭を狙った流し打ちでヒットを飛ばすことはできるのだが、今の畑の剛球は近藤和に小手先のテクニックを使わせない。

近藤和の技術が畑の剛球の前に弾き返され、打球は一番の石井と同じく、遊撃への平凡すぎるゴロ。

開幕の緊張感に悩まされていた石井の時と、石井を打ち取ったことで本来の自分を取り戻した後も、結果的に同じ遊撃ゴロとなるのも面白い現象だろう。

そして、なにより近藤和の平凡な遊撃ゴロを喜んでいるのは、ベンチの豊田だ。

「ほら、ナカジ。いったそばから、ショートの松井へのゴロだよ。松井稼頭央は、さっきのショートゴロを処理し、送球したときの、やや手元が狂ったボールを、ＰＬの大先輩でもある怖い怖い清原に、きっと睨まれてから、またメジャー時代のイップスがぶり返すよ。捕球して、さあ送球しようと、一塁みたらそこに清原がいる。これでもう、遊撃松井のプライドは再崩壊だよ」

と豊田はぐだぐたと横にいる中島にご説法を垂れるが、

「????」

中島は文章にして3行以上の説明文をよく理解できないのだ。

「まあ、要約すると、松井は失策をして、三原監督はオレを使わざるを得ないってことだよ」

「????」

中島には、人を蹴落して自分の地位を確保するという概念がもとよりないのだろう。西武のレギュラーも、争って獲得したというよりも、松井稼頭央のメジャー移籍で、そのまま空いたポジションを与えられたのだから。

生存競争を理解できない中島は置いとくとして、松井は遊撃ゴロをさばいて、そして、清原にびびることなく、つつがなく送球をして、松井の遊撃復帰問題なしをアピールできるのだろうか？

石井の時と同じく、これまた松井は一見、雑、しかし雑に見えて、この処理の仕方が松井のペースであり、松井の遊撃手としての美意識なのだ。

確実にアウトが取れて、それでいて遊撃手として魅せるプレーの両立を目指してきた松井らしいプレーなのだが、松井がゴロをグラブに収めたとき、近藤和は一塁ベースまで半分も到着していなかった。ほぼ同じゴロを打った石井は、同じ時点で一塁ベースまであと4分の1あたりまで到着していたのとは雲泥の差だ。

左打ちの小柄なアベレージタイプの左打者である近藤和は一見俊足の持ち主に見られるだろう。盗塁王獲得経験もあるからなおさらだ。だが、近藤和は、大学時代あまりの鈍足ぶりから、足の遅さを電車の鈍行に例え、そして近藤の苗字をもじって”ドンコ”とあだ名をつけられたものだ。足が遅くとも、工夫とやる気さえあれば盗塁王は獲得できるかもしれない。だが、一塁到着は素の足の速さがモノを言う。創意工夫とやる気でタイムを短縮できるのも限界がある。

近藤和の足の遅さが松井の頭にあれば、一呼吸を置いてから、確実な送球で一塁で刺しにいくだろう。

自由放任主義の三原ライオンズだが、データ野球もきっちりと実践している。特に守備と走塁は、担当の伊原春樹が細かくやかましく選手に意識付けしているのだ。

伊原を煙たく思ってた松井も、伊原の有益な情報は聞き逃すことはない。

当然、近藤和の足の遅さは確認済み。だから松井は足の遅い打者走者の時のセオリー通り、確実な送球を心がけようとしたが、その一瞬の間が命取りとなったのだ。

一塁ベースでミットを構える清原の鬼の形相が目に入ってしまったのだ。

「少しでも逸れたら、ワシは取らへんで」

「おい、松井のガキが。変な送球してワシに余計な仕事をさすんか」

「おい、カズオ。立浪、宮本、行沢さんと他のＰＬ出身は規律正しいプレーをするのに、お前はなんや？　そんな雑なプレーをしくさる奴はＰＬのＯＢを名乗るんやないで」

松井の頭の中に、色々な清原が走馬灯のように駆け巡り責め立てる。かからなくていい重圧に押しつぶされた松井の遊撃のプライドは再度崩れ始める。

「あ！」

松井は送球した瞬間、短く声を上げた。

「あ～」

明らかな高すぎるボールにベンチの中島は大きく声を上げた。

「ほれみたことか。やっぱち、やりやがったよ」

自分の予想通りと、豊田は寄りかかっているベンチの背もたれに、さらに重心をかけた。

そして、清原はボールを取るために高く飛ぶとか、松井の送球をなんとか受け止めようとする努力をすることなく、松井の送球は清原の頭上、遥か高く通りすぎていった。

「ほれみい、松井。やっぱりやりやがったのう」

三年生はてんのうへいか。

「ワシは取りにいかんで、あほらし」

松井の送球はとんでもない悪送球。一塁清原の頭上の遥か上を通過して、一塁側のファールネットに叩きつけられる。

本来、清原は身を呈して、ジャンプしてでも取りに行く意識がなければならないが、後輩松井には手厳しいのか、清原は、ＰＬ、西武で叩き込まれたきっちりとした野球を実践しない。

清原が実践したのは、ＰＬで培った厳格な上下関係の方だったのだ。

悪送球をした松井は真っ青な顔で、鬼のような顔をする清原の冷たすぎる視線に絶えきれない。そして、悪送球をカバーしにくのは、捕手の和田博実、そして、二塁の辻発彦。右翼のテリーの三人だ。基本通り、ショートゴロが飛んだ時点で悪送球のカバーに備えてスタートを切った和田。そして、松井の送球が高く舞い上がった瞬間に、辻とテリーはいざ鎌倉と駆けつけた。

一番最初にボールに到着したのは、最初にスタートを切った和田ではなく辻だ。西武ドーム開場前に西武を後にした辻であるが、基本的構造は前身の西武ライオンズ球場時代と同じ。西屋根のない西武球場を知り尽くした辻は、悪送球の高さと速さを確認した時点でどこにボールが落ちるかをある程度想像できた。だからカバーリングも絶妙なのだ。

辻がボールを拾った時点で、打者走者の近藤和は一二塁間の中間にいた。そして二塁ベースのカバーは辻が後にした時点で松井の責務。不安そうに辻の送球を待つ松井に、辻は松井の後逸を想像したが、日本ハムのヘッドコーチ時代に辻の隙の無さをイヤというほど経験した近藤和は無理をしなかった。

急ストップをかけて、一塁に舞い戻る。辻はこれをみて、二塁送球から一塁送球に切り替える。素早いモーションから速さよりも正

確性を重視した送球を心がける。
しかし、ドンコとあだ名をつけられた近藤和だが、盗塁王を取ったテクニックは走塁技術に現れる。手から帰った近藤和に、辻の送球を受けた清原はミットを叩くようにかぶせにいくが、近藤和の戻りの方が一瞬だけ早かった。セーフの判定に一瞬悔しさをにじませた清原であったが、すぐにファインカバーの辻にエールを送った。
「辻さん、さすがですね。これが西武の野球ですよ。森野球ですよ」
森監督をＰＬの中村監督と同じく世界最高の監督を崇める清原は、森野球の申し子の辻の正しい野球に称賛を惜しまない。
辻は、これしき当然なことと清原の称賛にグラブを下げるだけに応えるが、しかし、辻への称賛は松井へのあてつけでもあるのだ。
清原は返す刀で、きっと松井を睨み返す。
「辻さんと同じ西武の野球を学んだはずなのに、どうして稼頭央はああなんや」
ぶつぶと松井の批判はとどまらない。清原の気持ちは分からないでもない。トップバッターから2打者連続で、松井がまずい送球を繰り返したのだから。
だが、松井の悪送球の原因は清原にもある。石井の時のややまずい送球を清原がドンマイ、ドンマイと逆に励ますように見逃してくれたら、松井は清原と一軍生活が重なった苦い西武時代の二年間をフラッシュバックすることなく、近藤和のショートゴロもなんなく処理したに違いない。
清原の冷たすぎる視線を食らった松井はすでに本来の自由奔放な自分を見失いかけている。大きな目はギョロギョロと泳ぎ、ゼイゼイと息は荒くなるばかり。精神集中のために噛み続けるガムの噛むリズムも乱れがちだ。
「どうすればええんや。この回が終わったら、清原さんに殺されるかもしれんわ」
松井の小さな叫びに、助けは飛んでこない。松井に気にするなとか、清原に稼頭央が萎縮しているぞと一言いっておくからなとか励

ましの声をかける役目は、当事者の清原と松井以外の内野手だ。
だが、三塁の中西は西鉄出身で良くも悪くも我関せずの性分。江本に『ベンチがアホやから』といわれてた当事者である中西は、西鉄現役時代人を蹴り落とすのが常だったのを痛いほど思い知った中西は、この程度の揉め事に気を払わないのだ。
ならば、西武時代、約三ヶ月、松井と二遊間を組んだ辻が助け舟を出すと思いきや、辻はあの日本シリーズで泣き出した清原に励ましたような心遣いを、松井には見せない。
「野球に馴れ合いは必要なし。後、１アウトで日本一の状況だったあの時とは違う」
と辻は、松井をあえて見放して、自家作用で立ち直りの期待をかける。
「このイニングが終わったら、清原さんに殺されるから、このイニングが永遠に終わらなければいい」
松井の思考回路はついに行くところまで行き詰まる。たしかに、清原といえど、グラウンド上で松井に制裁を食らわせないだろう。イニングが終わらなければ、松井の死刑執行は先延ばしにされる。だが、いくらマシンガン打線が火を吹いても、イニングは永遠には続かない。いつか終わりは訪れるわけだ。ならば、イニングが終わる前に松井は、名誉挽回をするしかない。目が覚めるようなプレーをして、清原に制裁をためらわすしかない。だが、この精神状態の松井に好プレーが期待できるだろうか。
「もう、ダメだね、松井は。この試合だけじゃない、この大会、いや一生、遊撃を守れないほどの心の傷を負ったよ」
と豊田が断言するほどの精神状態だ。
横浜の三番打者はこれまた左の鈴木尚典。引っ張り専門の打者ではなく、広角に打球を自由自在に飛ばせる鈴木尚典。畑の速球をコツンと遊撃方向を狙ってもおかしくない。その時、松井は、遊撃手のプライドを取り戻せるだろうか。

ベイスターズはよけいなことをしないほうが結果がでる。まあ結果出たのってそ

横浜の三番は鈴木尚典。石井、近藤和に引き続き3人目の左打者だ。前の二人と同じく左投手に翻弄されるほどやわな技術の持ち主ではないが、二人続けて畑に打ち取られた当たりの結果が出ていると、左打者だけで分が悪く思えるもの。

「どうだ、大矢。尚典に代打を出すか？」

近藤ヘッドは、懲りずに右の代打を進言するが、鈴木尚典は大矢の肝入りの選手だ。

「だめですよ、最初にいったでしょ。尚典の三番だけはどんな投手相手でも動かさないって。そりゃ結果が出なきゃ、考えますよ。しかし、一打席も与えてないのに代打の決断はないですよ。約束違反ですよ、尚典の3番にこだわらせてもらう替わりに、私の独裁ではなく、首脳陣の協調路線を敷いているのだから」

「そうだったな、悪い、悪い。尚典は聖域だったな、大矢が監督の間は」

「監督の間って、近藤ヘッド。まるで、私の監督の座がいつ何時ぐらついてもおかしくないみたいじゃないですか」

「おかしくないだろうよ。お前、知らないのか？　この大会の規則を」

「規則？　大会特別規約みたいな小冊子は一応目を通しましたが？」

「その冊子のどこかに書いてあったろ。監督、コーチ、首脳陣は、一試合ごとに交換可能って」

「へえ。選手の交換可能は当然知ってますが、コーチもですか。そうか、なら、この試合でまずい判断を下したコーチは、私の監督としての権力で更迭できるというわけですか？」

「おいおい、大矢。意図的に監督を抜くなよ。選手、コーチ、監督のとっかえはいつでも可能ってことだ。次の試合の監督は、このボクでもおかしくないってことだよ」

近藤の口から、クーデター計画を聞かされても、大矢はのんきなものだ。

「ははは……まさか、近藤ヘッドと私は運命共同体ですよ。私が首を切られる時は、近藤ヘッドも道連れですよ。あはは」

と、大矢にとても忠誠を誓っているとは思えない近藤ヘッドへのこの謎の信頼感。

「そうだな。お前が監督を降ろされるときは、ボクも一緒だよな、あはは」

近藤も大矢ののんきさに若干拍子抜けだ。

そして、そのまま打席に立つ鈴木尚典の狙いは左方向。畑の剛球を流し打ちつもりだ。流し打ちならば、打球が飛んでいくのは遊撃方向。遊撃には、ノイローゼ気味の松井稼頭央がいる。

「殺される。殺される。今度悪送球したら、試合中にかかわらず、清原さんにダイヤモンド上を引きづられるかもしれん」

青い顔の松井がブツブツとつぶやいている。だからといって、鈴木尚典は松井をとことんいじめてやろうと遊撃狙いを決めたわけではない。畑の１４５キロを記録した剛球と喧嘩せずに打ち砕くのは、逆らわず遊撃の頭を超える当たりを打つしかないと考えたからだ。

巨人時代にいやというほど鈴木尚典の広角安打法を食らった清原は、さすがに西武とＰＬ野球を学んだだけに、過去の対戦データから自分で適切な守備位置を考える。

「走者が塁にいなきゃ、一二塁間を気持ち詰めるんやが、あいにく、どっかの馬鹿のせいで一塁に近藤さんがいるからな。オレは一塁にひっついてけん制に備えないとあかん」

と一塁走者がいるために清原は自由な守備位置を取れない。しかし、内野陣に適切な守備位置を出すことはできる。

これまたヤクルト選手時代や横浜のコーチ時代に鈴木尚典の打球方向をさんざん見た二塁の辻とアイコンタクトで、守備位置の確認をする。

「辻さん、もうちょっと一二塁間に詰めたほうがええん違いますか

？　タカノリは広く空いた一二塁間を狙ってきますよ」
　と清原が辻に意見をいうと、辻はすぐさま適切な答えを出す。
「あんまり寄り過ぎるのもまずい。一二塁間をつめたら、二遊間を狙う技術の持ち主だ」
　と清原の意見を受け入れつつ、一二塁間の打球にも、二遊間の打球にも、対応できる守備位置に移動する。
「一二塁間も、二遊間も、どっちも対応できる守備位置か。さすが辻さんや。辻さんの守備範囲の広さなら、これが正解か。二塁手にしては規格外の身長を利して、横っ飛びでどっちのヒットも防げる守備位置か」
　と清原は辻には強くでないが、松井となると話は別だ。
「おい松井！」
　辻への応対と違って、松井には上から目線。グラブと手招きで丁寧に守備位置取りの意見を出した辻とは１８０度違い、松井への守備位置取りの指示は、なんとアゴだ。
　アゴをクイクイと動かすと、オドオドした松井は清原のアゴの向く方向に動く。
「二遊間は辻さんに任せておきい。お前は三遊間に飛んだ打球を処理すればええ」
　と清原の指示は松井に三遊間を詰めろというもの。サード中西の守備範囲を信用していない清原は、松井の意識を三遊間に寄せて、三塁と遊撃の間のヒットコースを狭めようとの狙いだ。
　清原は、松井いじめを一時休戦して、的確な守備位置を松井に支持したつもりだが、松井は疑心暗鬼だ。
「ほんまにええんか？　鈴木尚典さんと日本シリーズくらいしか対戦してないオレは、鈴木尚典さん相手の守備位置に意見できる立場やないけど、鈴木尚典さんみたいな安打製造機タイプに極端な守備位置を取るのはどうかと」
　確かに、松井の言うとおり、辻が定位置、そして松井が三遊間に寄ったために、結果的に二遊間ががら空きとまではいかないが、広

く空いてしまったのだ。
「？」
打席に入った鈴木尚典はさすがに首位打者経験者。すぐさま二遊間の空きに気づく。流し打ち、そして、一塁に走者がいるときのセオリー、広く空いた一二塁間に打て。鈴木尚典の頭にあったふたつのヒットコースに今、もう一つのヒットコースが追加されたのだ。
「センター返し。センター返し……」
ぶつぶつとつぶやく鈴木尚典。同じ鈴木のイチローの『センター返しでいいなら１０割打てる』ではないが、みっつのヒットコースのどこを飛ばしてもいいのなら、鈴木尚典の気はぐっと楽になる。もしも、鈴木尚典に制約なく勝負できれば、かなりの確率でヒットなら打てるだろうが、余計な制約を加えてしまうのが、横浜ベンチなのだ。
「一塁走者の近藤さんは、盗塁王経験者なんですよね、近藤さん？」
と大矢は一塁走者の近藤和を動かすつもりなのだ。
「え？　サインあり？」
ベンチの動きを感じ取った鈴木尚典は一瞬、ぎょっとした表情を作る。打者もまさかのサインプレー。
「余計なことをしないで任せてくれればいいのに」
大矢に感謝しても、鈴木尚典の実力が最大限に発揮されたのは、権藤監督時代のサインなしの無手勝手野球の頃だ。
ベンチと選手の気持ちが一致しない時、チームはえてして悪い方向に転ぶものだ。
」

眠い

製薬の多さは、横浜の選手に不満と混乱を招くだけだ。権藤はそれを分かってか、それとも、野村にええカッコしいと陰口を叩かれる権藤流を押しとおしただけか、自由奔放の野球を展開した９８年だけ、栄光が訪れたわけであるが。

大矢は分からないのか、それとも分かっていて、横浜に合わない采配をふるうのか。

「盗塁もいいな、エンドランをかけるのもいい。それとも三原マジックの向こうを張って、まさかまさかのバント攻撃もいいな。一死一塁で三番打者、いくら三原さんでも、バントは思いつかないだろう。送りバントどころか、戸惑ったライオンズ守備陣が慌てふためいてオールセーフの一二塁も十分あるぞ。いやいやエンドランならぬ、ランエンドヒットもいいぞ。近藤和さんは鈍足でも盗塁技術は確かだ。そして尚典の打撃技術もこれまた確か。エンドランよりも難度の高いランエンドヒットを成功できる走者であり打者だ」

と大矢は思いつく限りの作戦を頭に思い描き、成功したときの三原マジックならぬ大矢マジックの見出しが大矢の全身をかけめぐっている。

しかし、横浜に流れる無手勝手こそ最大の力を発揮できる遺伝子を理解している、していない以前に、清原の守備陣形の指示で。二遊間が大きく空いているのだ。

「センター返しならヒットの確率高いのになあ」

鈴木尚典がベンチの動きに首をひねるのも無理はない。ヒットをどうぞといわんばかりに、西武の守備陣形に明らかに大穴が開いているからだ。

大矢が暴走しても、監督とヘッドの上下関係崩壊近しの近藤ヘッドの強権を発動すれば、大矢の意味のない動きを食い止めることができるのだが。

大矢と同じ、いや大矢以上に動きたくてウズウズしている近藤ヘッドは、大矢に輪をかけて、名指導者と呼ばれない症候群に掛かっているのだ。

「そうだよ、大矢！　相手のミスで出した走者だ。動いて死んだからといって、もともとなかったと思えばいい。どんどん動くべきだ！　ボクは近藤和さんを走らせるのがいいと思うよ。近藤和さんは盗塁王経験者だ。足が多少遅くて、、西鉄バッテリーなら走れるよ」

「そうですか、近藤ヘッド！　近藤和さんは走れますか！　私も単独スチールはどうか。尚典の初打席は、エンドランなどで気を散らすよりも、まず早いカウントで走らせてから、じっくりと打たせたいと思ってたところなんですよ！」

「よし、初球から近藤和さんを動かさずぞ！」

と大矢と近藤ヘッドの二人の最下位経験者監督が盛り上がりを見せたところ、冷静な江尻野手チーフコーチが横槍を入れる。

「監督、ヘッド、お言葉ですが、和田さんの阻止率はそれなりですよ。全盛期には5割を越すシーズンもあります」

「5割を越す？　古田や僕並の阻止率じゃないか。まいったなあ。いくら近藤和さんが盗塁技術に長けていても、5割を越す捕手なんて伝説クラスだよ、僕や、古田や、僕や、僕や、僕みたいにね」

犬猿の仲である古田の名前を上げてでも、自分の残した盗塁阻止率の高さを誇らしげに語る大矢。大矢の自慢を置いといて、盗塁阻止率5割の捕手に勝負を挑むのは、自ら無駄死に行くようなものだ。

盗塁阻止率5割の数字は、三原マジックに当てられて近藤マジックで見返そうと暴走気味の近藤ヘッドへの抑止力になる。

「その数字はちょっと具合がわるいなあ。ボクがプロに入った時に、和田はもう捕手としては下り坂で、肩が弱くいつでも走れるってイメージがあったから、ちょっと意外だね～」

しかし、近藤ヘッドの暴走采配は抑止する車止めがあっても、車止めギリギリに停車しようとする。

「ならエンドランをかけよう。尚典ならなんとか当ててくれるうだ

ろうよ」
　なんという適当な采配。冷静的確な分析によって求められた作戦というよりも、動きたくて仕方なく、自由に動きがとれないなら動ける範囲で動こうという、なんとも流れまさせの采配だ。
「走れ！　近藤和さん！　打て！　尚典！」
　大矢が気色ばった顔つきで、興奮しながら大矢は一塁コーチの中塚にブロックサインを送る。受け取った中塚は、その意を打者の鈴木尚典に伝える。
「……」
　初球からの動きに、鈴木尚典は思わず口を一文字。表情に出したら敵に気づかれると不満を最大限に収めようと務めたが、鈴木尚典の表情のわずかな変化を西武野球は見逃さない。
「！！　尚典の奴のあの顔……」
　伊原だ。走塁面の指導とお目付け役としてベンチ入りしている伊原は、鈴木尚典の口一文字ですべてを見通した。
「動いてくるな。なんだ？　単独盗塁？　いやエンドラン？　エンドランだろうな。近藤昭仁さんのあの誇らしげな顔。あれはエンドランやスクイズを出した後によくする顔だ。西武で一緒だったからオレはよくわかるよ」
　と伊原は横浜ベンチの動きに気がつくが、近藤昭仁以上に暴走気質があり、コーチの立場から勝手にサインを送るなど日常茶飯事の伊原でも、大監督三原の前には多少の遠慮があるのだ。
「どうしようか、三原さんに進言しようか。いや辞めておこうか。出すぎた奴と睨まれたらかなわん。いややっぱりオレがなんのためにベンチにいるかっていうと、相手のクセ破りだ。三原さんもそれを期待して……いややっぱり期待されてるから最初が肝心なんだ。出したサインがダミーで、尚典や近藤さんの表情も演技だとしたら、オレは開幕の初回から三原さんの期待に応えるどころか、マイナスイメージを与えることになる」
　さすがの伊原も遠慮する三原の威厳は凄まじいものがあるのか、

伊原はサイン破りをぐっと飲み込み、自分の存在アピールと最初の仕事に選んだのは、
「おい、カズオ。なんだ、その守備位置は！」
清原に守備位置を動かされたばかりに松井を標的だ。
「オレ？」
今度は伊原の標的になった松井は、清原に従っていいのか、伊原の指示どおり動けばいいのか、自問自答しても答えが出てこない。
「どっちに動けばエエんのよ。伊原さんの言うとおりか、清原さんの言うとおりか。伊原さんの指示に従ったら、清原さんにボコボコにされるし、清原さんの指示に従ったら今度は伊原さんにグチグチくどくどやられるで」
開幕の初回からとんでもない精神的苦痛を味わっている松井。
「松井稼頭央はたしかにいい選手。このオレより足も速いし、肩も強い。だが、問題は心臓よ。プロの一流となれば素質にさしたる違いはない。勝負を分けるのは精神力の強さなんだよ。なあ、ナカジ、お前さんもそう思うだろう？」
と豊田が自慢の心臓を抑えながら、中島に同意を求めるが、
「？？？」
中島はまたも理解に時間を要している模様だ。
「お前さんもある意味、オレくらいにハートは強いのお」
豊田も呆れる中島の無邪気さ。たしかに、いい意味で松井に中島の無邪気さがあれば、送球イップスにかからずとも済んだのかもしれない。
「飛んでくるな。飛んでくるな」
清原と伊原の守備位置の間で揺れ、そして自分の守備機会がないことを祈る松井には、豊田、石毛、中島の他の四天王を押しのけて、もう西武のショートを守れる能力ではないかもしれない。

また抜け落ちてました（前書き）

５４１話分を投稿し忘れました

また抜け落ちてました

清原と伊原の間に悩まされる松井の守備位置取りはある意味絶妙だ。伊原の視線を感じたら伊原の望む二遊間よりの守備位置を取り、清原が松井のチェックに入ったら、清原の指示通りの三遊間を詰める守備位置に寄っていく。

メジャーの野球のそこまで管理されない野球に慣れきった今の松井には、窮屈すぎる状況だ。

「なんで、オレだけこんな目に合わないかんの」

と置かれた苦境を恨む松井だが、しかし少し冷静になって考えて欲しい。メジャーの放任主義はある意味、指導者の責任逃れともいえる。松井に自由にやらせたのだから、責任は松井にはない。それが向こうのスタイルなら、松井のミスは指導者の自分の責任と共同関係にある日本の野球。

松井には少々窮屈かもしれないが、放任主義の前に、野球スタイルの貯金を切り崩しかなく、ついに貯金はゼロ、野球スタイルの赤字に陥った松井には、多少の管理野球も必要かもしれない。

「放っといて欲しいわ」

といいつつ松井は、どこか、他人にちょっかいを出される自分に懐かしさを感じている。

そして、松井と違って打者の鈴木尚典は、余計な作戦に頭を悩ましているのだ。

「エンドランって……」

突然出されたヒットエンドランを実行せよのサイン。ヒットエンドランは決まったときの利益は絶大なものがあるが、リスクもその分大きい。特に畑のようないまだ得体の知れない投手相手のヒットエンドランは危険性が高すぎる。

「どんなボールを投げるのかも完全にはわからないし、問題は制球力だ。エンドランはストライクが来ることが前提。もしも畑投手が

荒れ球の投手だとしたら、初球をストライクを取りにくるバッテリーだとしても、エンドランの成功率は下がるだろう」

伸ばせ上がって、細かい状況をつかめない横浜首脳陣と違い、鈴木尚典は冷静に物事を考えている。鈴木尚典の状況理解によると、初球エンドランはリスクが高すぎるようだ。

「自由に打たせてくれればいいのに。これだけ空いた二遊間は、絶好のヒットコースなのになあ」

作戦に首を傾げる鈴木尚典だが、作戦にさからって自分の野球をやり通すキャラでもないだけに、上からの命令は着実に実行しようとする。

その作戦が到底不可能でもだ。竹槍でＢ２９を撃ち落とせといわれたら、鈴木尚典は不満ひとつ顔に出さず、届かない空に向かって、竹槍を突き上げるだろう。

だが作戦に忠実で組織は潤滑に回っても、試合は思うように進まない。鈴木尚典はエンドランを実行しようとしたが、鈴木尚典の懸念通り、畑のボールは荒れ狂う。

近藤和がスタートを切る。なるほどさすがに技術と洞察力と思いきりで盗塁王を獲得した走者だけに、エンドランのスタート（けん制に引っかからないため、打者の動きを横目で見るために、スタートは単独盗塁より遅れがちになる）でも、そのスタートは抜群。

鈴木尚典は、畑の投球を見ると同時に近藤和の好スタートを横目に入るのだが、鈴木尚典の目には、スタートは絶妙であっても、スピード自体には、ヒットエンドランのヒットは空振りに終わっても、盗塁は成功の未来をどうしても描けない。鈍足の近藤と蔑まれただけに、鈴木尚典には足が進んでないように見えたのだ。

「バットにボールを当てなければ、二塁で近藤和さんは殺されて一巻の終わり」

鈴木尚典に盗塁失敗の懸念が広がれば、捕手の和田が飛び上がるようなボールにも飛びつかなければ盗塁失敗、二死走者なしの絶望的な将来しか待ち受けていないのだ。

そうとなれば鈴木尚典はとんでもないボール球に飛びついてでもバットに当てなければならない。ファウルで逃げれたら最高に近い結果。仕切り直しになるし、横浜ベンチに作戦の異常性を反省させる契機にもなるからだ。

だがしかし、鈴木尚典の二年連続首位打者獲得の打撃技術は、とんでもないボール球をフェアゾーンに打ち返すことを可能にしてしまう。

「しまった。これは駒田さんのキャラだ。自分のキャラじゃない」

鈴木尚典がそうつぶやいても遅い。鈴木尚典が大根切りでとんでもないボール球を悪球打ちした時、ボールは逃げ隠れも出来ないほど、コロコロとフェアゾーンのど真ん中を転がっているのだから。

フェアゾーンのど真ん中？　そうだ、二遊間は広く空いていたはずじゃないか。清原の指示ミスで松井は三遊間を詰めていたはずじゃないか。

伊原の怒号が飛んで、松井は二遊間に体を寄せた振りをしたが、打った瞬間、松井は三遊間に詰めていた。

するとなると二遊間ど真ん中に打ち返した打球はそのままコロコロとセンター前に抜けていくのか。そしてスタートを切った近藤和はあまり速くない快脚で一挙に三塁を陥れ、一死一三塁の大チャンスで４番村田を迎える横浜にとってこの上ない恰好のシュチュエーションを迎えるだろうか。

いや横浜にとってエンドランをかけていたのが逆に命取りだったのだ。近藤和を二塁で殺してやろうと、二塁のベースカバーに入ったのは二塁手の辻。つまり広く空いていたはずの二遊間は、通常より狭まった二遊間に成りかわっていたのだ。

鈴木尚典ほどの打撃技術なら二塁の辻を見て、一二塁間に打ち返すことは十分可能なのだが、エンドランのサインで必死にバットを当てにいった尚典にその余裕はない。

そして転がった二遊間のボールに、広大な守備範囲に定評のある辻のグラブの先は引っかかる。１８２ｃｍのセカンドにしては大型

の体を横っ飛びでセンター前を防いだ辻は、倒れた姿勢のまま、辻に替わって二塁のベースカバーに入る遊撃の松井にバックトス。

辻と松井の９５年の後半に3か月だけ組んだ二遊間のキーストンコンビは華麗なる併殺を完成させるだろうか。

しかししかしだ、松井は今や送球イップスのウィルスが体中に蔓延中。二塁で近藤和を封殺することはできても、一塁送球ができるだろうか。

松井の視線の先にはどうしても、あの清原の顔が入るのだ。この絶好の併殺コースを成功させなければ、清原の制裁はよりひどさを増すだろうか。

いや清原の制裁に加え伊原のネチネチとした鉄拳が飛び交ってもおかしくない。初回だけで三度目の送球ミスとなるからだ。

3．3秒の攻防

辻はグラブに入ったボールをそのまま後方の二塁ベースに向かってトスする、いわゆるバックトスの妙技を見せつける。

盗塁を阻止するためのベースカバーに入ったアドバンテージがあったとはいえ、そんじょそこらの二塁手ならとても追いつけないような打球に横っ飛びで追いつき、さらにはムダのない動きでバックトスを見せつける辻の超ファインプレーがあったからには、キーストンコンビの相棒松井は、着実なプレーで応えなければならない。

遊撃のプライド絶賛崩壊中の松井とはいえ、送球イップスが病のほとんどを占める。だから併殺処理のベースカバーはなんなくこなせるのだ。

併殺崩しを企む近藤和の強烈なスライディングをなんの、華麗な足さばきで二塁ベースを踏んで、まずはアウトひとつの封殺を完成。

しかし松井にとっての大問題はこれからだ。二塁ベースを踏んで、すぐさま一塁に送球を、しかも打者走者はそれなりの俊足走者である鈴木尚典だ。

１９９８年の日本シリーズでは、この鈴木尚典の足に西武は悩まれたものだ。一塁到達速度の意外な速さだけでなく、肩の衰えありありだった伊東がスタメン捕手をかぶってた初戦と二戦目には、伊東の肩と西武投手陣のクイックの稚拙さを嘲笑うように自由自在にスチールを決められたトラウマが西武側にはある。

だから当事者だった松井は、鈴木尚典の走力の恐ろしさを十分に理解している。素早い正確な送球がなければ併殺は不可能であることを分かっている。

そして、辻の二塁の送球、そして松井の二塁ベース封殺。この処理はスピード、正確性、全てにおいて完璧に近く、あとは、一塁にそれなりの送球を転送すれば、鈴木尚典の俊足とはいえ併殺は十分に完成できるだろう。

だが、問題はそれなりの送球を送球イップスの松井ができるかどうかだ。一塁の送球するとき、否応にも、一塁手の清原が眼に入る。清原から目をそらして、送球しようともそれは不可能。一塁手を視界から逸らして、まともの送球ができるわけないからだ。

近藤和の猛烈なスライディングを飛燕のごとく飛び上がって避けた松井は、ジャンピングスローの形で一塁に転送しないと併殺には間に合わない。一死一塁から併殺を完成させるのと、併殺崩れで、走者を一塁に残し、４番村田を迎えるのは、天と地ほどの大きな違いがある。左投手に自信を持つ村田には、一挙2ラン本塁打で2点を先制される危険性を十分にはらんでいるからだ。

だからこそ併殺完成は試合の命運を分かつといっても過言はないが、送球イップスの松井は、それも難しいジャンピングスローを完成できるだろうか。

飛び上がって空中にいる松井の目線の先には、一塁の清原の般若のような顔と大きく構えるファーストミットがあった。

清原の顔は相変わらず松井には厳しい。初回に三度目の送球ミスをやらかしたら、どうなるか分かっているだろうなとの念押しが、鬼のような顔を形作るシワに刻まれているようだ。

「あかんわ。今度ミスったら、確実に洗濯機行きやわ」

松井がおもわずつぶやいた確実に洗濯機行きとはどういうことだろうか。まさか松井と清原の母校であるＰＬ野球部には、ミスを犯したら洗濯機に入れられて、スイッチオン。小汚いスライディングパンツと一緒にぐるぐると回されるイベントでもあるのだろうか。

松井の真意はつかめないが、それでも刻一刻と迫る鈴木尚典の一塁ベース駆け抜けの前に、松井は意を決めて、一塁の好送球を転送しなければならない。

「ええい、もう死んだも同然や」

開き直ったか、うじうじと考えず、心を決めた松井は、一塁に送球をする。ジャンピングスローだけに、いや松井のイメージだろうか、横からひょいとカッコつけたように投じたそのモーションは、

やはり玄人筋に不評を買う。

「あ、また、稼頭央のバカが。横着な送球をしおって」

伊原がまた説教の材料がひとつ増えたと心の拍手ボタンを押すことになったが、一見横着に見えるプレーもこの状況ではベターなプレーだ。形に構う暇はなく、一瞬でもはやく一塁に送球するには、今の松井にとってこの一見雑なスローイングしかないのだから。

併殺完成には寸分の無駄もあっては不可能な状況が、逆に送球イップスの松井には好影響を与えたのだろうか、前の近藤和の打席で見せたとんでもない送球と違って、この送球はいたってまともな送球になったのだ。

ただまともといっても程度問題。前の送球がネットに叩きつかれるようなとんでもない送球。そしてこの転送は、一塁の捕球コースにのったからまともと判別されるに過ぎないからだ。ジャンピングスローで上の角度から投げたためか、松井の送球も余分な角度がついてしまう。理想的な角度を描けない送球は、ミットを構えた清原の前で、嫌らしいバウンドを伴なう。

「あ、ヤバ」

意識的にバウンドさせた送球なら、逆に取りやすいのが人工芝上の野球だ。だ、松井の送球は、バウンドを意図してはいない。だから、清原に取りにくい送球になるのだ。

二度あることは三度ある。この回、三度目の送球ミス。松井はこのイニングが終わる恐怖に打ちひしがれているが、このイニング途中に制裁が食らってもおかしくないほどのミスの連続だ。

清原の視線に怯え、伊原のきつすぎる叱咤に心臓の鼓動を極限までに早め、そして三原のショート松井を諦める決断につながるだろう。

ＡＴＦのＦはファンダメンタル

清原の鬼のような形相をまじまじと見なければ、一塁のまともな送球なんて無理。しかし、鈴木尚典の足を考えれば、急がなくては間に合わないの思いが松井の比較的まともな送球を可能にした。

しかし、上の角度から投げられたボールは、清原のミットに届く前に地面に着き、嫌らしい回転を伴って、何度もバウンドしている。

それでも、ＰＬ、プロを通じて２６年間も一塁を守り通した清原の捕球技術なら、ひょいとすくい上げて、アウトにできる程度の難度のバウンドだ。だが、今の清原は松井に厳しすぎる視線を送っているのだ。松井が繰り返す送球ミスを際立たせるためならば、清原はわざと取れるバウンドも取れないふりをして後ろに逸らすこともできる。

併殺完成よりも、遊撃手松井追放がチームのためと清原が判断すれば、清原はゴールデングラブ賞５度の巧みなミット裁きを見せないで、ボールを後ろに逸らすだろう。

だが、清原は、この嫌らしい回転のバウンドを、ファーストミットを天向け下から上に器用に動かし、巧みにすくい上げたのだ。つまり、清原は、松井のミスを際立たせる嫌がらせを選択せずに、チームｎ勝利第一を選んだのだ。

鈴木尚典は俊足を飛ばし、一塁に全力疾走で駆け抜けたが、清原のミットすくいの方が、一瞬だけ早いと、一塁塁審は判定した。

併殺完成。

そして、清原は、アウトのコールを確認すると、すくい上げたボールを右手に移動させて、そのボールを清原を横目に見ながら、おどおどとベンチに戻る松井へと投げつけた。

松井はまさか転送したボールが、また自らの元に戻ってくると思わず、グラブを差し出すタイミングが若干遅れたのだが、清原の投じた送球は、キャッチボールの基本に忠実に、回転のよい取りやす

いボールで、さらに、一番取りやすい胸元にめがけて放られたために、遅れた反応を示した松井にも容易に取りやすいボールだったのだ。

清原はボールを投げつけたまま、松井に一言どころか、一瞥もせずにベンチに走り戻っていった。

だが、松井にはボールを投げられた意味が痛いほどわかっていた。

「基本通りに投げれば、相手は取りやすいってことか」

清原に投げつけられたボールをまじまじと見ながら、松井は忘れていた基本を思い出していた。

しかし、清原の無言の教授だけでは、事は済まない。松井が同じイニングだけで、みっつもの送球ミスを重ねたの事実なのだから。

送球ミスといっても、そのうちのふたつのミスは清原のミットさばきで文字通り救われて、記録にも残らないミスだ。だが、一塁手歴が図抜けて長い清原だから取れた送球、もしも、一塁手歴が短いか、守備に興味を示さないような選手が一塁を守っていたら、三つの送球ミスは、そのままミスとして記録に残っただろう。

結果良しならば、反省しないのは、敵方の横浜野球にはありがちかもしれないが、基本プレーをおろそかにしない西武の野球では断じて許されるものではない。

その伝統が、選手首脳陣がけたたましく代替わりしても、一定以上の強さを保ち続ける秘訣なのだから。

そして今日のベンチでは、西武野球のお目付け役は、伊原が務めている。三原に指図されるわけでもなく、伊原は松井に指さしながら近づいていく。

松井は、裏の攻撃のトップバッターとしての準備があり、伊原は三塁ベースコーチャーとして、さっさとグラウンドに出ていかなければならない。

しかし、西武野球の伝統を受け継ぐために、少々の遅延行為は致し方なし。

「おい、稼頭央！」

守備につく横浜ナインも思わず振り返るような大きな声で、伊原は松井を呼びつけた。

「なんだ、あのプレイは！　お前は野球をなめているんか！？　キヨだから助かったものの、デストラーデが一塁だったら、全部、後ろに逸れているぞ！　だからお前はメジャーでショート失格の烙印を押されるんだよ。お前は、基本がなっていないメジャーの間抜けな連中よりも、さらに基本がなっておらんのだ」

と衆人環視の前で伊原はくどくどと松井を叱り飛ばす。伊原の口撃に嫌気が刺したことも、西武を飛び出した一因でもあった松井は、また始まったかと思うが、上司伊原に逆らうことはできない。相手の選手や大勢の観客の前で説教を受ける屈辱を甘んじて受けるしかないのだ。

「大変だな、西武も。強いチームってのは嫌だねえ。なんか野球が楽しそうじゃないな。よかったよ、ぬるま湯チームと呼ばれる横浜に逆指名入団して。何度ミスを犯そうが、ゼロに終わったら、それでよかったで済ませてくれるもん」

と松井が説教を受ける姿を横目で見ながら、サードの守備についた村田は、横浜伝統のなあなあ野球の良さを改めて実感するのだ。

「こういう小うるさそいチームに入ってたら、絶対、オレ今のような地位は築けてねーな。まあＦＡ移籍なら、こういう小うるさそうなチームに行くんだろうけど、大型契約のお客様に強くいえるようなコーチや監督なんていねーだろうから大丈夫か」

とぬるま湯チームから強豪チームに引き抜かれるのがベストの選択と答えを出した村田であるが、体ならしのボール回しで、村田は、送球しようとした時に、ポロリとこぼしてしまう。

「いけね、いけね」

と笑顔でこぼしたボールを拾いあげる村田に、小言を挟むチームメイトも首脳陣も存在していなかった。西武ならば、伊原の怒号や、ナインの叱咤が矢のように飛んできたのだろう。ボール回しも満足にできないチームが、試合に１００パーセント、基本に忠実なプレ

ーができるわけがない。
横浜は、このことを理解しているのだろうか。

村田

伊原の松井に対する公開説教を尻目に、横浜ベンチは、伊原の熱心すぎる指導に半ばあきれ返っている。

「伊原はねえ。裏でやりゃあいいもんを。あんなもん、お客さんの前でやるもんじゃないよ」

大矢がせせら笑えば、近藤昭仁も伊原の性格をズバリと指摘する。

「あいつとは、西武時代に一緒にコーチやったし、今、巨人では、ボクがフロント、伊原がヘッドの関係だからよく知っているけど、あいつのああいうやり方はいつものことだよ。状況を忘れてでも選手をしかる熱心の指導者を演じているんだよ。つまりはアピールさ。雑多なその他のコーチに過ぎない伊原が目立つにはあのくらいをしなきゃいけないってことよ。まあ、三原さんは、伊原の狙いなんておみとおしさ。あの人のことだ、伊原の下心なんてわかってるはずだよ。無駄なのにね」

と伊原の熱心な指導を自己アピールと切り捨てる。

「まあ、伊原も選手としては控えに過ぎない立場。そこから這い上がるのは、あれくらいの図太さがないとダメってことなんだよね。ボクは肯定もしないけど、否定もしないよ」

近藤昭仁もアピールの上手さなら伊原に引けを取らないだろう。超二流選手と三原に評されたのは、欠ける素質を、立ち回りの上手さで自分を大きく見せたからに違いない。思えば、横浜監督に就任したときのアピールも見事なものだった。プロ一年目、ヤクルト、西武、巨人のコーチ就任一年目（ヤクルトは１９７８年、西武は１９８２年、巨人は１９８９年）にいずれも日本一になっている強運の持ち主だ。だから、横浜監督一年目も必ず日本一になる運命と喧伝したのだった。だが、当時の横浜に若い有望株が多かったといえど、初年度日本一は不可能そのもの。近藤昭仁の自己アピールは現実のものとはならなかったが、それもある程度仕方がないといえる。

だが、この手のジンクスは、自分が言い出したら、えてしてそこで終わるもの。近藤の着任一年目の日本一伝説は、監督就任一年目のシーズンの行方が決まる前に、近藤昭仁が自ら引けらした時点で終わっていたのかもしれない。

そしてまた、この手のジンクスは一度壊れたら、今度はとことん裏目に出るものだ。

その後の近藤昭仁の一年目といえば、１９９７年のロッテ監督、そして２００６年の原巨人二期目のヘッドコーチであるが、ロッテでは最下位、そして巨人では、独走一転急失速と逆に悲惨な一年目と成り果ててしまったのだ。

だが、近藤昭仁も大矢を伊原をあざけ笑っている場合でもないはずだ。松井の度重なるミスが伊原の説教の最大であり唯一の要因であるのだが、西武は横浜の攻撃をゼロに抑えたのも事実だ。３つの送球ミスがあり、そのミスのうちのひとつは失策が記録されるほどのミス。そのミスに漬け込めない横浜の攻撃のまずさが逆に際立つというものだろうか。

「大矢。エンドランの采配自体は悪くなかったよな」

「ええ、近藤ヘッド。辻がちょうどいいところに守っていました。運が悪かった」

「ああ、さすがの辻だよ。日本野球の８０年近い歴史の中であのプレーができる二塁手もごくごくわずかで、辻は確実にその一人に入るだろうよ。もちろん、そのごくごくわずかの中には、名二塁手の座を蹴って、ヘッドについたボクも含まれるんだけどね」

と近藤、大矢の横浜頭脳集団の中枢は、運の悪さと辻だからできたと自らの采配を顧みず、他の要因にゼロに終わった原因をかこつけるが、そもそも、辻があの位置にいたのも、エンドランをかけて、一塁走者の近藤和をスタートを切ったからだ。二塁ベースカバーに入る必要がなければ、辻といえど、あの守備位置にはいなかったはずだ。

つまりは、余計な作戦が併殺打を築きミスに漬け込めなかった最

大要因。だが、エンドランのサインが余計だとしも、打者の鈴木尚典とあうんの呼吸が取れてさえいれば、状況はまた変ったはずだ。鈴木尚典がエンドランに不満を抱かず、引っ張る意識で一二塁間を狙っていれば、カバーに入った辻の逆をついて、打球はコロコロとライト前に抜けていったはずである。

すべては作戦なれをしていない鈴木尚典を縛り付けるような作戦をとった横浜ベンチのミスだといえよう。

守備のほころびをつけなかった横浜であるが、横浜の選んだ開幕投手に間違いはない。

マウンドに上がるのは、大洋のプリンス、ホエールズ、ベイスターズを通じて、ただ一人の生え抜き２００勝投手の平松政次だ。

横浜とはいえ、開幕投手にふさわしい投手は何人かはいる。大洋日本一の立役者の秋山登がいるし、横浜大洋の大エース遠藤一彦、ドラフト制以降ただひとりの成功した左腕投手の野村弘樹、そしてベイスターズ暗黒時代を支えるハマの番長三浦大輔だ。

特に秋山と遠藤は、当初、平松よりも開幕投手にふさわしいと押す声がチーム内でも強かった。秋山のサイドハンドからの大きなカーブは、右の強打者相手に大きな武器になると目算され、遠藤のストンと落ちるフォークは、やはり長距離砲ぞろいの西武打線を苦しめるとの意見が強かった。

だが大矢が選択したのは平松だった。右の強打者に平松のカミソリシュートが効果絶大と判断したのだろうか。ルールにより、横浜での現役経験のない大矢は、マスクはかぶれないものの、捕手大矢の目線から、平松開幕こそが西武が一番嫌がる起用と見たのだろう。

「あいつうるさいんだもん、オレに投げさせろって。同級生だろ？分かってるだろうなって」

と大矢は、口でこそ同級生、そしてプロ野球ニュースで長く付き合う仲の縁故雇用をほのめかすが、それは大矢の一種のてれだろう。

考えてみよう、平松の起用こそ西武相手にはベストだろう。たとえば遠藤のフォークは、もろ刃の剣だ。西武の大型打線から空振

りの山を築くかもしれないが、逆に落ちきれないフォークは、長距離打者にとっては恰好のホームランボールだからだ。

その点平松のカミソリシュートならば、少々の制球ミスがあっても、大傷にはならない。カミソリシュートが切れすぎても死球ひとつのテイクワンベースですむし、シュートが切れすぎずに真ん中に集まっても、意外と怖がりが多い西武打線は、シュートの恐怖の連続から、甘い球がたまに来ても踏め込めずに、おめおめと見逃すだろう。

そして、あえてリリーフに回した秋山を挟む。秋山のサイドハンドからのキレのあるボールは一級品。清原、秋山が並んだ西武黄金時代でさえも、Ａクラスとはいえない伊藤敦規や内山正博や足利豊のサイドハンドにカモられたものだ。超Ａクラスの秋山が短いイニングを全力で投げ込めば、いくら西武打線といえど打ちきれないはずだ。そして最後に大魔神佐々木をつぎ込めば、横浜の対西武の必勝リレーは完成する。

横浜の選択が正しいことは、西武ベンチの動揺からもわかる。内角に弱点があるといわれ続けた清原は、平松のコールを聞いて、眉を一瞬だけ潜めた。

「カミソリシュートやろ？　内角にそんな厄介なボール、攻められたら、オレ打ちきれんわ」

とあっさり仮想対決で白旗を上げてしまう始末だ。

「だが、オレも内角をしつこく攻められて２４年のプロ野球生活を送ったんや。色々な方法があるわ。内角に投げさせん作戦はな」

と不敵に笑う清原の秘めたる対カミソリシュートの策とはいかなるものだろうか。

村田（後書き）

第５４１話分を投稿し忘れてました
５４１話分にいまさらですがお戻りください

三塁の空気の読めないデブと住生活グループ

平松のカミソリシュートは、特に右打者にとって。これほどやっかいなものはないのだ。胸元に１４０キロ中盤のボールが勢いよくとびこんでくるのだから、その驚異たるやおわかり頂けよう。あの天下の長嶋茂雄も、平松嫌いを公言していたほどだ。ボールから逃げずに向かっていくタイプの長嶋の腰が思わず引けてしまうのだから、右打者は右打席に立っているだけで攻略不可能といえよう。

ならば、ポイントを握るのは、左打ちの打者になる。長嶋とくれば、王。王は長嶋と違い平松をカモにしていたのだ。それもそのはず、左打ちの王にとって、平松のカミソリシュートは自分から遠ざかっていくボールにすぎないからだ。

左投手の投げるスライダーと同じくらい変化するボールはそれはそれで厄介であるが、右打者のような恐怖心は皆無。シュートの亡霊に溺れることなく打席に立てる左打者はそれだけで圧倒的に優位に立つ。

平松先発濃厚の情報は当然、三原もキャッチしていた。ならば、ずらりと左打者を並べるオーダーを組む作戦もあったはずだ。現に、スポーツ新聞や雑誌のオーダー予想は、三原マジックなら思い切った左中心の打線を組むと仮定し、以下のようなオーダーを掲載したメディアもあったほどだ。

栗山８　平野９　松井６　テリー７　デストラーデＤ　鈴木健５
片平３　高木大２　高木浩４

スイッチヒッターの松井、平野謙、デストラーデを含めれば全員左打者のオーダーだが、右打者を含むオーダーと比べるといかにも格が落ちる。右打者とはいえ、中西や清原を差し置いて、夢のオーダーには、不釣合いな名前が並んいるではないか。規定打席到達一度や高木浩之、捕手としてはほとんど実績のない高木大成の名前まで上がっている。左打者のオーダーだが、右打者を含むオーダーと

比べるといかにも格が落ちる。
それでもこのオーダーがないと言い切れないのが、三原の怖さ。三原ならありうるかもしれないイメージは、予想オーダーも無限にする。
しかし、三原は開幕投手にマジックの全魔力を使い果たしたのか、一方の開幕打線はいたってオーソドックス。
オーソドックスにライオンズオールスターを並べると、右打者天国になるのは見ての通りだ。スイッチの松井を含め、左打席に入るのは、他にテリーだけ。左打者二人のオーダーを見て、思わず、平松はほくそ笑んだほどだ。
「カミソリシュートをヒジが曲がっても投げまくるぞ～」
この試合で、肘が吹き飛んでもいい覚悟の平松は、とことんのカミソリシュート攻めを宣言するが、なぜ、三原は、平松とわかって、オーソドックスなオールスター打線を決めたのだろうか。平松攻略を考えれば、もう少し、左打者とのバランスに配慮してもよかったはずだが。
「左打者を並べることも頭にはあった。だが、左を並べたオーダーとオーソドックスなオーダーを見比べると、その破壊力は一目瞭然で、オーソドックスなオーダーにあがる。右打者が平松のカミソリシュートに苦戦するのは、計算済み。だが、苦戦しつつ、カミソリシュートを工夫して打ち砕いてくれるのが、オールスターといえるのだ」
と述懐するとおり、三原はわかっていてあえてオーソドックスなオーダーを選択したのだ。三原の夢は上から下まで強打者の並ぶ流線型打線の強化版。その夢が叶えられるメンツが集まったのだから、そこに姑息な作戦はいらないということか。
たしかに、ライオンズは伝統的に左打者よりも右打者に強打者の多いチーム。西鉄黄金時代は、中西、豊田、関口、高倉が右だし、唯一の左のスラッガー大下弘は、ドラフト抽選の結果、日本ハムに取られた。そして西武黄金時代も同じ、清原、秋山、石毛は右打者

だし、左打者といえば、デストラーデや平野のスイッチヒッターの名前があがるのみ。

その伝統は今も生きる。東尾時代は、黄金時代の反動から、高木大成や小関竜也、大友進、高木浩之や左のコツコツと当てるタイプが多かったが、ライオンズの伝統はやはり右の強打者と、現在の中心打者も栗山巧以外、ほとんど右。中島、おかわり中村、ＧＧ佐藤、片岡易之……。さらに少しさかのぼって、０４年の日本一の時のクリーンナップは、フェルナンデス、カブレラ、和田といずれも右打者。左を一人、あるいは二人、それも右打者の周りを囲ませて、クリーンナップを形作るのが最近の打線の組み方のセオリー。

平成の日本一チームを見ても、右打者オンリーのクリーンナップを組むのは、この年の西武だけだ。

歴史的に右打者が左打者を圧倒することを考えれば、三原がオーソドックスな打線を組んだのも頷ける。

だからなおさら二人の左打者に重みがかかる。テリーとスイッチの松井稼頭央である。松井は先頭打者にかかわらず、伊原に説教を食らっている最中。

くどくどと続く伊原の説教の間を見計らって、松井はグラブをベンチに置き、バッティンググラブに付け替え、バットを握る。

さすがの伊原も、松井の準備は咎めず、松井は器用にも説教中に攻撃スタイルに自分を塗変えてしまう。

「くどくど……雑なプレーは……くどくど」

主審のハリーアップの声にお構いなしに続く伊原の説教だが、伊原でも空気は読む。そろそろ説教を切り上げようと腕時計で時間を確かめると、締めは松井に耳打ちだ。

「おい、稼頭央。いいことを教えてやるぞ。三塁の村田……お前はあのデブとほぼ入れ替わりでメジャーに逃げ去ったから、ようしらんと思うが、あいつは怠慢だ。そして、打撃に頭が一杯で守備に神経がかよっていないタイプだ。あのデブの前に、転がしてみろ。バントでコツンとな。確実にセーフになるぞ」

と伊原は説教に留まらず、出塁のアドバイスだ。耳打ちを終えると、伊原はそのまま、伊原いわくデブの村田が守る三塁の横のコーチャーズボックスに走っていく。

たしかに、松井と村田の時間軸を考えると、村田の特徴は伊原が遥かに詳しい。伊原のアドバイスの内容自体に反論はない松井だが、「クッソ、伊原のおっさん。うっさいちゅうねん。せっかく送球ミスを取り戻すために、先頭打者ホームランでもガツンといこうと思うてたのに。余計なことを吹き込みやがって」

と松井は伊原のすべてをうざったがるのである。自由すぎて、逆に自分が顧みられない寂しさをアメリカで感じていた松井だが、日本に帰ってくると今度は管理の嵐だ。

松井は、日本とアメリカの決定的に違う文化の間に悩まされながら打席に向かう。

村田ゴールデングラブ賞に異議あり

伊原はコーチャーズボックスつくと、まず行うのが、守備陣の心構えだ。伊原のように２０年も至近距離から相手の守備を眺めていると、顔つきだけで、心の中が透けてくるのだ。

伊原の到着に気づいた村田は、帽子を取って軽く会釈をする。

「ども」

「よお」

ありふれた短い文句で挨拶は事無く終了するが、村田の帽子の中身をみた伊原が眉を潜めたのはいうまでもない。なぜなら、ど派手な金髪に、サイドを刈りあげて、ツンツンとおっ立てるいかにも村田らしい髪型は、団塊の世代伊原にはとうてい理解できるものではないからだ。

「あいかわらずだ」

村田が伊原のチームの一員なら、調子に乗るなと戒めの蹴りが一発入ってもおかしくないほど、村田の開幕戦への気合の出で立ちは、伊原の常識外。

「もちろん、相手の選手を蹴り上げやしないけどな」

いくらなんでも、伊原でも、敵様の選手に活は入れない。だが、さすが伊原だ。グラウンドに転がっている些細な情報も、すべえ試合に役立てようとする。

「安心したよ。村田がいつもの村田で。偉大な先輩方の前に無礼な姿を見せられないと、賢くまとまった姿だったら、オレの作戦は成り立たんからな」

伊原は、村田の出で立ちがいつもの村田の目立ちたがり屋そのままで、つまりは、いつもの村田は、ぬるま湯軍団の村田であると判断した。

「稼頭央に転がせばセーフだといった手前、村田が村田で安心したわ。しかも、このデブ……」

伊原は、メガネの奥底から、村田をさらに観察する。

「守備に気が入ってない。おそらく頭の中は、二回の先頭で回ってくる自分の一打席目で一杯のはずだ。顔に書いてあるわ。守備なんてどうでもいい、オレは４番だ。打てばいい。畑って投手はこんな投手か、じゃあ、ああいう打撃をすれば打てるなあ……とか自分勝手な考えに頭が溢れかえってるはずだ」

伊原の見立ても完璧とはいえない。伊原の独断と偏見で決めた作戦が大失敗に終り、原監督が困惑するシーンも現在の巨人によく見られたものだ。

そのため、伊原は後進の育成の名目上、三塁コーチャーから外され、原の手元に置かれている。それだけ、三塁コーチャーの伊原が原の出したサインと違った作戦を勝手に、打者や走者に送っていたのだろう。

伊原は薬にもなるが、毒にもなるチームスタッフなのだが、わかりやすい村田は、伊原の見立てどおりの考えをしているのだ。

「ブツブツ……畑さんとかいう投手の球筋はだいたい見れた。和田さんって捕手の配球の傾向も分かってきた。ドカンと一発どこにぶち込もうかなあ。右にすまして打つのもいいし、バックスクリーンに放りこむのもクール。もちろん豪快な一発でさすが男・村田。４番抜擢は間違いなかったと、オレの４番にあれこれいう周囲を黙らせてやる一発を放つのも悪くねーな」

と伊原の思ったとおり、村田の心は守備にあらず、打席に向かっているのだ。それどころか、すでに一発は打つのは当然、どこにぶち込むのかを迷っている有様だ。

「このデブ、あいかわらずだ」

ほくそ笑む伊原だが、村田の守備は伊原の評価より悪いものだろうか。見た目とチームの哀れなほどの弱さで村田の守備は過小評価されてはいないだろうか。

投手あがりの１４０キロの送球に、巧みなグラブさばきはいかにもホットコーナー、ダイヤモンドの華にふさわしい。と村田自身は

思っているのだ。

「男・村田ゴールデングラブ賞のセのサーは、今年も横浜ベイスターズ、背番号２５、村田修一なんだけなあ。記者のみなさんは、どうせ宮本さんに入れるんだろ？　イメージだけでさ。あんなサードやって３年足らずのロートルより、オレの方がサードとしてふさわしいのによお。肩もよえーし、エラーも試合数オレよか少なねーくせに、ひとつ多いし、守備範囲だって、オレの足のが動くぜ？　他のサードも、新井さんにガッツさんなんて論外だし、森野さんは、問題外の送球してるし、栗原はホンモンのサードとはとてもいえねーし。オレがどう考えても一番じゃん。２００３年以降、男・村田ゴールデングラブ賞は村田修一が８年連続受賞なのに、記者選考じゃゼロって、マスコミに本物の野球を見る目はねーのかよ」

と村田自身の守備評価は、いささか過大評価だろうか。なにはともあれ、村田の気が守備に回っていないことは、伊原の見立て通り。

「よし、稼頭央。来い！」

伊原は、松井に向かって、手拍子を二度三度繰り返し、叫んだ。来いとはつまり、言われたとおりに、セーフティーバントを遂行しろという意味だ。村田の不抜けた状態を直に確認した伊原は、サードに転がせば、セーフになるとの確信を得たのである。

しかし、問題は松井の気分にある。度重なるミスで落ち込む自分のムードを一新するには、ガツンと長打一発しかないと決めていたからだ。

「村田の守備は、伊原のおっさんのいったとおり、神経通ってへんわ。あいつの前に転がせばセーフかな思うが、ガツンと打ちたいな。平松さんのカミソリシュートは怖ないから、左の自分には。それに平松さんは、左打者の胸元に投げ込むタイプでないと聞く。胸元に投げてきいへん右のシュート投手なんて、左打席の自分は大好物。高い確率で打てるのに」

平松の時代には、今ほど左打者が並ぶ打線がなかったためか、現代の右投手が左打者を攻略する最もオースドックスな手段のひとつ、

胸元めがげてスライダーやカットボールを放り込み、外角に踏み込ませにくくするという投球術を平松はもっていないのだ。

つまり、左打者にとって、逃げていくカミソリシュート中心の配球はいかにも対処しやすい。だが、ちょっと待ってほしい。左打席にシュートといえば、松井がメジャーでさんざん痛い目にあった攻略法ではないか。

シュート＝向こうで言うところの左の外角に逃げていく微妙なツーシームに内野ゴロの山を築いた松井がどうして右のシュート投手に恐怖心を抱かないのだろうか。

「平松さんとメジャーのツーシーム投手は違うんや。平松さんはどうってことない」

平松を軽く見るその松井の真意は？

「」

一球も投げずに何話目か

「平松さんのシュートはカミソリシュートいうからに、スピードとキレはあるだろうが、大きく曲がるんやろ？　速くてキレのあるボールは確かにやっかいやが、左打席に立つ分には気にすることはない。メジャーの投手みたく同じシュート系統でも、小さく細かい変化なら邪魔臭いけどな」

松井が平松を嫌がらない真意は、シュートの曲がり幅にあったのだ。平松のシュートは速くキレがある嫌らしい必殺球であるが、大きく動くぶん、変化点はどうしても早くなり、ゆえに、ストレートと見極めがしやすい。

だが、今流行のツーシームはカミソリシュートのような大きく曲がる変化はないが、細かい変化のため、変化点がより打者の手元となる。

つまりは、ストレートかシュート（ツーシーム）かの見極めがつかないまま、打者はスイングを始動しなければ間に合わないのだ。松井は日本で見ることが少なかった手元で微妙に動くボールに苦しみ凡打を量産したのだが、平松のシュートがカミソリシュートであり、手元で微妙に動くいやらしい球種でないとわかれば、平松に対して恐怖心を抱くことはないのだ。

「スイッチヒッターなんて、周りがいうほどイイもんやない。打席がふたつやなら、単純に考えて練習量は倍や。しかも、左に多く立つと右打席の感覚を忘れるから、その分を取り返すために、またバットを振る回数を増やさなあかんし、とにかくスイッチヒッターなんてたいしてイイもんやないんや」

と突然、スイッチヒッターの大変さを嘆く松井であるが、もちろんスイッチヒッターにもそれなりの優位点はある。練習が倍になりくたびれるだけなら、誰もスイッチヒッターなんぞに変身しないのだから。

「まあそんなスイッチヒッターでもええところは少しはある。ひとつは、右投手と左投手の利き腕の違いによって、出番が偏らんところや。無能の監督や指導者なら、左打者が左投手と相対したときに、機械的に右の代打を送る。それが左投手を不得手にしていない打者でもや。しかも、代打に出てきた右の代打とやらが、たいてい間違ってベンチ入りしたような打力の持ち主で、左投手が貧弱な右打者を見てしめたと胸をときめかすもんや。が、スイッチヒッターなら話は別。左投手が出てきても、右打席に立てば、替える監督はまずおらん。それが慣れない右打席で、内心、若手がおっかなびっくりの打席でもや。そこがまずひとつ。そしてこれが意外に重要なのが、右投手の時に左打席に入る、左投手の時に右打席にはいる。つまりは、いずれの利き腕の投手の胸元をえぐるシュート系統のボールに悩まされないことや。打者の一番の難敵は胸元に来る強いボール。胸元のボールに一度恐怖心を抱くと、踏み込めなくなり、今度は外のボールが打てんようになる。だが、スイッチヒッターにとって、シュートは常に外側に逃げていくボールに過ぎない。普通の右打者や左打者が抱く恐怖心を抱くことなく打席に立てる。これが結構盲点やがスイッチヒッターの最大の取り柄。他に在り来りな、左打席は一歩分、右打席より一塁に近いとかあるけど」

松井はブツブツとつぶやきながら、左打席に立ち足元を固めていく。

「しかし、メジャーの最近の流行は、スイッチヒッターを有利にさせんのや。向こうの最新の投球術は、右投手なら左打者の胸元に飛び込む、つまりはカットボール系統でどんどんと攻めこんでくるんや。このボールや、シュートほどの恐怖心はないが、邪魔臭いことは変わらん。これに逆側の外角ツーシームを混ぜられるとより邪魔臭いねん。が、ここは日本。しかも、投手は昭和の時代の平松さん。左打者の胸元にスライダー系統を投げる投球術はないと聞く。怖がることはなんもない」

と平松に精神的有利に立つ松井であるが、捕手の顔を見ると、

「あ」
「あ、ってなんだよ。松井稼頭央！　メジャーリーガーになったからには、日本のベテラン選手なんてどうでもいいのかよ！」
「どうも、谷繁さん」
「よお、稼頭央」
「ひ、久しぶりっすね……」
「久しぶりだな。打者と捕手としてこうしてやりあうのは、約7年ぶりか。いや西武とセのオレは、オープン戦しか当たらなかった時代だ。真剣勝負は、そうか12年ぶりか、あの日本シリーズ以来な」
「12年か。あの時、谷繁さん、横浜の捕手でしたよね？」
「なにをいまさら」
「なんでよりによって中日いったんですか？　巨人ファンでしたよね？」
「巨人ファンが中日行っちゃ悪いかよ？」
「いや別に。巨人から誘いはなかったかなと」
「ねーに決まってるだろ。ちょうどオレがFAした年に阿部が出てきたんだよ。バカでアホで間抜けで周りが見渡せない阿部だけど、打撃がいいし、肩もあるし、一年目に上々な成績を残したから、オレの出る幕がなくなったってわけよ」
「なるほど」
「そういうお前も巨人ファンだろ？　原さんの大ファンだろ？　なんでメジャーに行ったんだよ？」
「メジャーから色よいオファーが来らメジャーにまずいくでしょう」
「そうだな、メジャーから色よいオファーが来ら、メジャー行くよな。ってオレへの嫌味かよ。メジャー熱望してマイナー契約の話しか来ずに森さんがいる横浜には帰れず、仕方なくなぜか中日に行ってしまったオレのよ」
「いや別にそんなわけでは……」
「で、マイナー暮らしでメジャーから色よいオファーが来ないであろう今の稼頭央はどこに行くのよ？　やっぱり巨人か？　原さんの

待つ巨人か？　井口をロッテに取られて、いまだエドガーやら脇谷やら古城やら中途半端な二塁手でお茶を濁している巨人か？」

谷繁はもちろん、巨人が松井にオファーを出すことはまずないことを踏まえて、動揺を誘う狙いで揺さぶりをかけているだけなのだ。

第二回ＷＢＣの原の扱いに怒った松井サイドは、半ば原への絶縁状を叩きつけた状態。だが、元西武の楠城編成部長がいる楽天入りが有力とされるが、松井にしたら、東北よりも暮らし慣れている東京の巨人のオファーをそれでも待っているのだろうか。

「いや別に」

痛いとこを付かれたと、必死に誤魔化そうとする松井だが、

「やっぱり巨人か？　そうだよな、巨人だよな。小さい頃の夢だし、元巨人はいまだに引退後有利だからな」

「いや、谷繁さん。野球選手なんて一年後、どこにいるかなんてわからないですよ。メジャー契約を受けて、どっかのチームでやってるかもしれないし、メジャーの夢再びと引き続きマイナーで頑張ってるかもしれないし、もちろん日本にいてもおかしくはないですよ、どこのチームかわかりませんが」

と一般論で逃げる松井に谷繁はどこまでもしつこく食い下がる。

「ああ～先輩にそんな煮えきれない態度とっていいのかな？」

「え？」

「西武の打線を上から下まで眺めたとき、オレより年下少なねーなと思ったんだよ。なんだよ、後輩はカブレラと和田ベンちゃんと松井しかいねーじゃん。カブレラは上下関係関係ない外国人だし、和田はあの風貌でかわいい後輩というのも無理あるし、松井くらいかよ、ならたった一人の後輩だ。サービス配球しちゃおうかな～って思ってたのに、なんだよ、そのメジャーから誘いのなかったオレを馬鹿にし、さらに煮えきれない態度！　ああもうわかった！　サービス配球はなし！　プロ野球の未来を背負う後輩だが、どんどん厳しい攻めをしていくぜ！」

「え？　厳しい攻めって？」

といまさらながらの質問をする松井だが、
「厳しい攻めもわからんのか、何年野球界にいるんだよ。胸元どんどん行くぜ！」
「胸元すっか？」
松井が疑問に思うのも不思議ではない。平松は、西武が調べた限り、左打者の胸元を攻める投球術は存在しないのだから。
「お前、平松さんをみくびってるだろ？　左打席なら簡単に打てると思ってるだろ？　みくびるなよ」
と２００９年巨人３連覇決定後に吐き捨てた落合の名セリフを松井に振ったが、最近の日本球界事情に疎い松井はピンときてない。
「だから、平松さんをなめるなってことだ。平松さんにオレはいってやったんだ。左打者の胸元に攻め込めないで、右投手が好投できるのは昭和のレベルまでですよってな。平松さんの名球会投手のプライドが邪魔してなかなか聞き入れてくれなかったけど、もういい！　オレは松井の胸元に要求する」
と谷繁は内角攻めを宣言する。平松相手には、内角攻めないとたかをくくっていた松井は、話が違うとぎょっとした顔をする。
「話が違うやん」
外角から微妙に逃げるボールも内角攻めもないはずだったが、内角攻めの封印が解かれた今、松井は攻略法を変えなくてはならない。
「内角攻められるやろ。外に大きく逃げていくやろ……」
とまたブツブツとつぶやく松井。だが、気になることがある。
「なんで、谷繁さんは左打者の内角攻めができることをばらしたんだろう？　隠しておけばいいのに……」
松井の疑問もそのとおり。内角攻めないと見ている西武側に秘密兵器をばらす必要は皆無のはずだが……。
「？？？」
？マークが一杯の松井の背後で、谷繁はぺろりと舌を出している。

佐藤赤田フェルナンデス貝塚野田平尾高木浩之は０４年の日本一戦士なんですよ

平松の主な球種は、カミソリシュート、つまりはシュートに逆の変化であるカーブとスライダーの三つだ。現代の打者がなによりも嫌う落ちるボールが実質ないも同然なのが不安の種。

カーブを低めから曲がり落として、落ちるボールの代用品にする手もあるが、フォークやチェンジアップに見慣れた現代の打者に落ちるカーブ程度ではさほどの恐怖心を植えつけることはできないだろう。

だから、必然的に横の変化が平松の攻め方の主武器になる。右打者ならば、シュートで懐をえぐり、スライダーを外に投げる。平松のスライダーが特別なボールにないにしても、特別すぎるシュートを見せつけられたあとのスライダーは格別なボールになる。

それがたとえ、真ん中に入る甘いスライダーでも、カミソリシュートを見た打者は踏み込めず、外角ギリギリに決まった見事なスライダーに見えてしまう。

それが横の変化を主武器にする投手のオーソドックスな投球術であるが、左打者にはこれが通用しない。特別でないスライダーは、左打者の懐を突くに、危険過ぎるボールだ。外に逃げるカミソリシュートへの伏線にしようとも、撒き餌のスライダーが致命傷になりかねないからだ。だから、平松は内角にスライダーやカーブを投げ込めず、左打者には、外角中心の攻めにならざるを得ない。外角低めをめがけて、ストレートと曲がり幅の大きすぎるシュートでのみ、打者を料理するのは、いかにもハードルの高すぎる作業だ。

「おかしいな。谷繁さんは、今確かにこういったよな。腹に据えかねるから、オレの内角をえぐるって。おかしいんだよ、内角を攻めれるわけないんだよ、平松さんが、左打席に立つオレの内角を」

首を何度もひねる松井。松井が谷繁の脅しに疑問符を投げかけるのもおかしくはない。

「平松さんは、左打者の内角をスライダーでつける投球術がない。だから、左打者を懐を気にせずに、外角中心に考えろと、ミーティングで口酸っぱくいわれたのに。佐藤友亮横浜専用スコアラーが横浜の試合にくっつき回って、得た確かなデータなのに」

何度も黄金時代を築いたライオンズだけに、選手余りは巨人と並ぶ大問題。そのため、余った人材、特に若い世代を有効的に使うために考えられたのが、選手スコアラーの導入だ。現役世代は若さと行動力のあり、古い価値観にとらわれないと、三原が判断したのだ。

大事な開幕の相手である横浜に派遣されたスコアラーは佐藤友亮。慶応高校に一般入試で入る頭脳の持ち主である佐藤友亮は、地元球団である横浜の偵察を任された。

キャンプ、オープン戦、練習試合と横浜が行く所につきまとった佐藤友亮は、当然、開幕投手に備えて、５試合もの調整登板を繰り返した平松は徹底解剖済みだ。

その佐藤友亮が弾きだした平松評は以下のとおり。

カミソリシュートは超一級品。今の誰にも例えられない曲がり幅の大きさとキレの鋭さを備えている。そして、逆に変化であるスライダーも要注意が必要。ただカミソリシュートと違い、スライダー全盛時代の今、スライダーは特別なボールではない。しかも、左打者の懐に突っ込めないスライダーは、今の投手の投げるスライダーは、右打者にも左打者にも驚異になるとの概念は捨ててもいい。谷繁捕手もスライダーを左打者に使えないことを気にしてか、オープン戦でも何度も、スライダーを左打者の懐に投げさせたが、いずれもうまくいくことはなかった。２０年現役を続けてマスターできなかった投球術は、やはりわずかな調整期間の間にモノにすることはできなかったのだろう。

「だろ、友亮？　練習してもできへんかったんやろ？　なあ友亮？　野球エリートのオレと違って、勉強エリートのお前がいうから間違いないよな？」

佐藤友亮のスカウティングと谷繁の口撃の前に、思考の板挟みに

なる松井。昔の選手が突貫工事的に今の技術をマスターしたケースも多い大会だが、内角攻めは、投球術の中にもマスターする難度が高いものだ。佐藤の見立てどおり、２０年の現役生活でマスターできなかった左打者の内角攻めを短期間でマスターできるとは思えない。

マスターできなかったとしてもチャレンジした痕跡があるのは確か。谷繁の長年の経験から見切り発車でも必須の技術と判断すれば、少々の制球ミスの危険性を顧みて、スライダーを内角に使ってくる可能性はあるが。

「ブラハやろ？　谷繁さんのブラハや？　あれアロハやったかな？　そうや、ブラフや、ブラフ。谷繁さんは使えないはずの内角攻めを持ち出して、オレの動揺を誘いにきただけや。外角球に絞って踏み込んでくるオレのステップ幅をウソ情報で狭める狙いや」

なるほど。マスター出来なかった技術を逆手にとって、あると見せかける谷繁のベテラン捕手らしい高等戦術か。

「ないやろうな。でもないとわかっていても、内角攻めを頭から捨て去ることはできんのや。内角ないと踏み込んで、もし内にビュッと投げ込まれたらどうや。いくらスピードを緩めたスライダー系統のボールでも逃げ場のないオレには致命傷になりかねないわ」

死球の危険性が薄まることをスイッチヒッターの少ない利益に上げていた松井が、死球を気にして打席に入るという矛盾。

逃げ腰のステップを見た谷繁はしめたとまた舌を出す。

「フヘヘヘ。さすが稼頭央。わかりやすく引っかかってくれるわ。稼頭央みたいな強打者に平松さんが内角攻めしたら、甘く入ってガツンだ。しねーよ、内角攻めなんて」

平松は初球を投げ込む。オーバースローという表現よりも、スリークォーターとの表現がぴったりな腕のアングルから繰り出されるだろうボールは、スライダー、シュートの横の変化だと容易に想像出来るものだ。

「スライダーで懐突いてくる？　それとも得意球のシュートかストレートを外角低めにオーソドックスに決めてくる？」

ないはずの内角攻めに思考の半分を奪われた松井は、外角から甘く入ってきたゆるーいカーブにピクリと右肩を動かしただけで、ほぼ無抵抗に見送ったのだ。

「カーブ？？　しかも甘いカーブやなあ……」

初球、抜かれたカーブに拍子抜けの松井

「フヘヘヘ。カーブでストライク取れたぜ！　これは勝ったも同然！」

松井の頭から完全に外れてた緩いカーブで初球のストライクをとった谷繁は有頂天。だが、調子に乗りすぎるきらいのある谷繁だ。思わぬミスにつながる恐れも？

このお話はフィクションであり、実際の村田はこれほどひどくはありません……

首脳陣、ベンチ、グラウンドに立つナイン、そしてこの試合を見守るマスコミや観客のすべてが平松の投じた一球目を固唾を飲んで見守っていたとき、サードの村田がなにをしていたかというと、

「爪に垢が入ったままだ」

少し伸びた右手の爪の先に泥が紛れ込んだことに気づいた村田は、潔癖症なのか、少しの爪の垢も気になるようだ。投球そっちのけで爪を眺めている。だが、試合中の村田は当然、左の手にはグラブを着用。どうやったて、爪の垢はほじくって取れやしないのに、守備が終わって、グラブを置いてからでないと爪掃除はできないのに、グラブをつけたままどうにか、爪の垢をほじくれる奇跡の一手はないかと村田は、試合そっちのけで思いを巡らせている。

ご覧のとおり、平松の投球に集中しているわけではない村田だから、初球のカーブをみて、もなんの感想もなく、カーブから次の投球を予想して守備位置を適時に替えるわけでもない。

こんな調子の村田は放っておいても、守備に対する意欲は薄い。だが、伊原はそれでも、村田を集中攻撃する。村田の集中力を少しでも剥ぎ、守備の第一歩を一瞬でも遅らせるためだ。

「おい、村田。今年ＦＡだったな?」

試合外なら、球界の大先輩であり、東都リーグの偉大なる先人である伊原を無視することはご法度。だが、試合中となれば話は別。伊原の紳士協定外のコミニュケーション。村田は無視しても、当然。伊原は明らかに集中力を剥ぎにきているのだから。

だが、ＦＡを話題にしたくてうずうずしている村田は、伊原の話に乗ってしまう。

「新潟は考えものですよね」

「そうだろう。横浜にそのまま残ればいいけど、いきなり新潟はきついな。なら地元のソフトバンクか?」

「ソフトバンクもいいですけど、なるべく引越しはしないほうがいいですねえ」
「なら巨人か？」
「巨人。自分は強い者を倒す快感を求めて、野球をやってるんですよ。巨人はないっすよ、絶対にないっすよ」
　といいつつ、村田は巨人の魅力に鼻の頭を赤らめている。村田が巨人に引かれる理由はなんだろうか。金銭的優位か、地理的優位か。それとも、優勝という、今のチームのままでは体験できそうもない果実を求めてか。
「だが、巨人は甘くないぞ。お前のデブりすぎた動きでは、サードはとてもとても。ファーストには、ガッツもいるし、それ以前にファーストでは、お前のちび過ぎる。要はお前は、チビデブなんだよ。そんなだらけた精神を象徴するかのような体形のままじゃ、巨人は取りにいかんだろ」
　村田の気を戒めるつもりが、罵倒の連続となるのも伊原らしいか。
「……」
　黙って聞いていた村田も、デブにちびにそれを重ねてチビデブ呼ばわりされちゃ村田の機嫌も悪くなる。
　試合のルールに則って、村田は伊原に返答をしなくなるが、伊原の作戦は、村田に効果満点だ。伊原の罵倒で湯だった村田は、すでに守備どころじゃないはずが、
「クッソ！　チビデブってなんだよ！　この陰険メガネが！」
　と伊原をつぶやきでけなすが、ＦＡをして大型契約を勝ちとる時に、守備と走塁がネックになるのは、村田も薄々気がついている。
「仕方ねーな。守備にも力を注ぐか」
　と、村田は突立気味の守備姿勢を辞めて、股を割り、谷繁のミット位置をじっと見つめ、一歩でも早い出足をするための体制をとる。
　伊原の罵倒は、村田の守備を目覚ました余計な一言だったが、伊原は満足顔で、松井に檄を飛ばす。伊原の忠告通りに、セーフティーバントの構えを取らない松井に対し、当然ｃｏｃｏ力思っていな

い伊原は、いつもより強いトーンになりがちだ。
「こら！　稼頭央！　言うとおりにしないとまた蹴飛ばすぞ！」
伊原はなにも松井がセーフティーを決めなかったことに切れているわけではない。セーフティーバントを敢行しなくても、バントの構えを見せるだけで、守備側にプレッシャーと動揺の渦に巻き込む事ができるからだ。
「バントの構えをすると、三塁のデブがセーフティーを警戒して前に出る。前に出たら、三遊間を抜けやすくなる。要は揺さぶれるんだ、バントの構えをするだけで。稼頭央の奴、西武の一番打者のクセに細かい野球ができんからな……」
伊原が不満に思うのは、松井の嫌らしさの欠如だ。素質がありすぎるため、細かいプレーを疎かにしても成績は残してきた。だが、大リーグの舞台はそうはいかない。そして年齢を重ねれば、素質も次第に失われていくものだ。
「稼頭央はだから年を取るたびに精細がなくなっているんだ」
伊原の罵倒の数々は、松井のこれからを思ってのものだ。松井に伊原の気持ちが伝わるだろうか。
「なんで、カーブなんや」
松井のコンピューターは初球のカーブで狂いかかっている。両サイドをうまく使うタイプの平松だ。初球が内か外に決まっていれば、二球目以降の予想がしやすい。
外の次は内がきやすく、その反対に内の次は外がきやすいのが、配球のセオリーだ。だが、真ん中のカーブからは次の予想は立てられないい。内がくるか、外でくるか、半々だからだ。
「ウヘヘ。上手く決まった。初球、真ん中のカーブでストライクを取れたのは大きすぎるぜ」
谷繁はほくそ笑む。
「稼頭央は、オレの口撃で両サイドの恐怖に怯えている。カーブからでは、次、内に来るか、外に来るか、判断できねーからだ。だが、平松さんは左打者の内角なんて使えない。だから外、外の攻めしか

ないんだ。それでも、両サイドに散らされる恐怖に怯える松井は、内を捨てきれぞ、よって外角への踏み込みが甘くなる。外のボールも思いきり踏み込んで降振りきって、レフトスタンドのあの網を超える力のある松井に、一歩を踏み込ませないのがどれだけ大きいことか……」

松井相手に連続のゆるいカーブの配球はありえない。そして内角に投げ込む投球術も危険過ぎる平松相手に、谷繁はミットを外に構えるしかない。

「ここですよ、平松さん」

だが、谷繁の恫喝で内角攻めもあると怯えている松井は、両サイドに気持ちを張り巡らすしかない。

しかし、平松の投じるのは外角だ。松井は、あるはずのない内角攻めに怯える。内角サイドの攻めという幻影を捨てきれずに、外角に的確な反応ができない。

「外？」

内と外の半分に張っていた松井は、外角にも反応を示すが、谷繁の睨んだとおり、あと一歩の踏み込みができない。

外のボールかストライクか、今日の主審の反応をまだみていないからそのどちらともいえないストレートに一歩の踏み込みが足りない松井のバットは的確に力を注入できない。

松井が九死に一生を得たのは、それがファウルになったことだろう。

「あかん。外の甘めのボールやったのに、踏み込みが足らんかった」

三塁側の内野スタンドに消えていく打球を横目に見ながら、松井はブツブツと反省をする。その松井の一方、谷繁はガッツポーズでもしたい気分だ。

「よっしゃ！　オレの口撃で一歩の踏み込みをさせなかった！　もう勝ったも同然だぜ！」

２－０。３つのボール球を効果的に使えば、谷繁の長年培った配球能力なら、打ちたがりの松井を術中に陥ることはできるだろう。

そして、三塁側に飛び込んだファウルということは、サードの村田とショートの石井琢朗とレフトの鈴木尚典が反応を示したってことだ。

鈴木尚典と石井琢朗は俊足を飛ばし、内野スタンドに飛び込むファウルとわかっていても、追いかける姿勢は示した。

だが、問題はもちろん、村田だ。かったるそうに打球方向に振り返り、だるそうにスタートを切り、ファウルとわかると追う姿勢もそこそこですぐに守備位置に戻っていった。もちろん、とにかくだるそうな雰囲気を全身に纏ってだ。

「なんだよ、ファウルかよ。くそ、無駄に走っちまったよ」

しかし、村田の守備への意気込みはなんだったんだろうか。大型契約を獲得するために守備に力をいれたはずの村田の守備にしては寂しい限りだ。

「デブの割りにちゃんと打球を追う姿勢を出したぞ。今日の村田はちょっと違うか？」

いや伊原の判定によると、今の村田でも、村田にしては精一杯のプレーのようだ。つまり、いつもの村田はこれ以上に打球に対する執念がないというわけだ。

「やっぱだりーな。守備に一生懸命になるんわ」

心を入れ替えて二球目にすでに守備に飽きた村田。さてはてこの村田の有様で大型契約を勝ち取ることができるのか。

実際の村田はもう少しだけ、守備に気をはらっています

「あかんわ。貴重な左打ちのオレがあっさりやられるわけにはいかんな」

松井はまた打席を外し、反省をする。シュート投手の平松のシュートを一球もみずに、追い込まれたのだから一番打者としては恥ずべき事項であろう。

カーブ、ストレート。それなりのボールが決まったが、ハイレベルの左打ちの松井にとってはなんてことのないボールだ。カーブは緩やかな円軌道を伴って真ん中のコースに落下してきたし、外角の一番打ちづらい低めギリギリにめがけて投げ込まれたストレートは１４２キロにの変化のないフォーシームに過ぎず、どちらのボールも松井が松井ならば、スタンドにぶち込んでもおかしくない程度のボールだった。

谷繁に存在しえない内角ボールを植えつけられたがための打ち損じ。そして、谷繁のかけた魔法の効力はいまだ有効。

「次あたりに、内角にエサ巻きのボールが飛び込んでくるかもしれんな。カット気味かなあ。それともスライダーらしいスライダーを投げ込んでくるんか、ズバッとストレートを投げてくるんか。いずれにしても、ボールコースやろうな。勝負球への伏線となるボールのはずや。おそらく勝負球は外。いくら谷繁さんが裏も表も自由自在に使い分ける老練な捕手いうても、内を勝負にしてこんやろ。そして外角に決めるならやっぱり、シュートやろうな。左のオレいうても、シュートは平松さんの主武器や。早めに切れ味を確かめいやろう。しかも、二番打者は中西太さん。シュートを有効的に使わんと抑えきれん打者や。となると、オレの打席でウイニングショットとなるシュートの切れ味を確かめたいし、そしてウイニングショットとするために、幸先の良いスタートが切りたい。となると、やっぱり内角にエサ巻いて、内を印象づけてからのシュートやな」

松井の読みは半分当たっていた。二番打者から中西、カブレラ、清原とごつすぎる右のスラッガーが続くことを考えると、ショートの切れ味を一球も確かめずに、のちの三人に突入するとはできるだけ避けたい。

ならば、これまた松井が推測するとおり内角を見せて、外角勝負はセオリーだが、左打者の内角攻めはリスクが高いと感じる谷繁は内角を見せず、そのままシュート勝負の心づもりだ。

「追い込まれてのボールだ。少々のボール球も手を出してくるはずだ。打者が積極性の塊である稼頭央ならなおのごとし。しかし、内角の頭がある稼頭央は前のボールと同じ踏み込みが足りずに、手打ちのサードゴロに終わるだろうよ」

当然、松井がないはずの内角に怯えていることも谷繁は承知。そして、谷繁は自信を持って、平松にシュートを要求する。

ようやくシュートを投げられると谷繁のサインを見た平松は一瞬だけ白い歯を見せた。

その一瞬の表情の変化を伊原は見逃さない。しかも、伊原は村田を煽っている最中でもだ。

「おい、村田。稼頭央はセーフティーしてくるぞ。デブで動きの鈍いお前だ、投球前からすするすると全身してこないと間に合わないんじゃないか」

と追い込まれて、セーフティーの意思は松井になしとみるや伊原は、作戦を切り替えて、村田のないはずのセーフティーを意識付ける作業に励んでいた。

迷惑顔の村田のその向こうに待望のシュートのサインが出た平松の笑顔が見えれば、伊原はその表情の変化が何を物語っているか、長年のサードコーチャー経験ですべてが分かっている。

「平松さんのあの笑顔？　そうか、ついにシュートのサインが出たか。わかりやすいな投手って人間は。無表情をキメ込んでも、どこかに情報が漏れてくる」

間髪なく、平松がシュートのサインを受け取ったことを理解した

のだ。
「シュートか。まあシュートだよな」
谷繁が松井にないはずの内角攻めを植えつけたことを知らない伊原は、シュートの選択を当然のように受け取る。
そして、伊原が松井へ球種を伝達するのは、平松の投球の最中だ。
「サイン盗みのなにが悪い。サインを盗まれる不抜けたバッテリーが悪いんだろうよ」
と当たり前のように開き直る伊原は、球種伝達に躊躇がない。
平松が振りかぶり、シュートを投げるに程よく下がった腕のアングルから、二球目のストレートよりも速い腕の振りでシュートが放たれる。
本物のシュート投手のシュートは、ストレートよりもむしろ球速が速くなるものだ。腕の振りや体の作りがシュートを投げるにより適しているからだろうか。
松井も長年の経験と卓越した動体視力から、腕の振りの速さの違いをファウストボール継投のボールがくると、瞬時に判断した。
「内角にストレートがズバや」
しかし、内角に攻めてくると思い込んでいる松井は、腕の振りの速さで速球系のボールがくるとわかっていても、内にシュートを投げる投手はいない、つまり速球系といえばストレートと決め込んでしまったのだ。
だが、平松が投じるのは外角のシュート。腕の振りから球種を絞れても、このままでは何の意味ももたらさない。だが、伊原は腕の振りの違いをシュートボールと見切ったのだ。
当たり前の配球の読みから判断した伊原と余計な配球パターンを谷繁に吹き込まれた松井の違いか。
「シュートだ！　稼頭央！」
伊原は鍛錬した声帯で稼頭央に届くような大きな声を発した。その声は、村田が思わず、
「うっさ」

と耳をつんざくような声。大観衆をぬって、その声は松井に届くが、

「うっさいねん、あの伊原のおっさん。シュートが来るわけないやろ」

内角攻めを確信してしまっている松井は、伊原の情報を邪魔と受け取るが、平松のボールは、松井の意に反して、外角に投じられて、そこから急激に逃げるように曲がっていくのだ。

「外角？　しかもシュート？」

とまったく予想だにしていなかったボールに戸惑う松井。だが、ボールはストライクかボール か判断しづらいゾーンに飛び込んでいる。

追い込まれた松井は振りにいくしか道はないのだ。

「くっそ。伊原のおっさんの言うとおりや」

外角に逃げていくシュートは、カミソリシュートの異名のほどの切れ味はなかった。おそらく今日、初めてのシュート、そして的のない左打者に投じたためか、いつものキレとはほど遠いのだろう。

シュートの切れ味のにぶさは、予想だにしなかった松井のバットに当てさせることを可能にする。しかし、踏み込みが足らない松井は、外角のボールには、どうしても手打ちにならざるを得ない。

バットの先端に心許投げに当たった打球は、サード方向に飛んでいく。

「おっしゃ、来た。ホットコーナーの見せ場だ」

村田がぽんとグラブを叩き、うれしげにこの打球に備える。三遊間のサードよりの打球、普通の守備範囲のサードなら、なんなく捕球するボールだが、なにしろ村田だ。

守備にミを入れたといいつつも、相変わらず注意力が散漫で、出足の一歩が遅い村田。そして、打者走者は俊足の松井だ。

「内野安打ある！」

と伊原はあきらめが悪く、村田に再口激を開始し、松井内野安打に加担しようとする。

プレー中に選手に口でやっつけようとするのは、明らかに紳士協定違反しているのだが、伊原は手段を選ばない。

野次を飛ばすなら、どんな野次が効果的だろうか。

「おい、村田！　デブでちびのお前じゃ、そのボールはさばけんぞ！　恥かきたくなければ、見逃せ！　捕球したとしても、お前のにぶさじゃ稼頭央は内野安打じゃ！」

と、ひたすらの罵倒か。それとも、

「おい、村田！　その打球を処理したら、巨人に入れたってもいいぞ！」

と、逆に褒め殺しをして、村田の動きを固めにかかるか。さもなければ、

「おい、村田。うひゃあー、あっはやー、ウハウハザブーン」

とまるで関係のないことを叫び、村田の集中を剥ぐのか。伊原のキャラでなではいが、キャラではないだけに逆に効果的なのかもしれない。

「おい、村田！　……」

最近、タコ足捕球する一塁もあまりいない

「おい！　村田！　うひゃほいはああはは～」

となんと伊原はどう考えても伊原のキャラじゃない、３番目の野次り方を取ってきたのだ。冷静沈着ともいえず、どちらかというと猪突猛進型であるが、おちゃらける場面などない伊原だけに、効果的と判断したのか。いや、伊原の野次にはまだ続きがあるようだ。

「そのゴロを処理したら、巨人だぞ！　巨人！　華の都のメディア球団だぞ！　本収入だけでなく、副収入もガッポリだ！」

なんと、伊原は意味不明の野次で村田の気を散らすだけに飽きたらず、持ち上げ作戦に打って出たのだ。いや伊原の野次はそれだけで留まらず、まだまだ続く。

「で、ちゃんと取れるかな？　取れるわけないよな。デブでちびのお前のリーチじゃ、腕を伸ばしても、腹につっかえて、届きやしないだろうよ！」

となんと、褒め殺しの持ち上げの次は、一転、陰湿な叩きなのだ。３つの野次り方のすべてを搭載して、村田のゴロ処理を邪魔する伊原の執念は凄まじい。

そして、松井が打って、ゴロを処理する間のわずかな時間でこれだけの情報量を野次れる伊原のなんと手馴れたことか。

だが、村田はおすまし顔で伊原の野次を受け止める。最初の意味不明な伊原らしくない野次にこそ、耳をぴくっとさせる微反応を見せたが、畳み掛けた褒め殺しと罵倒には、まったくの無の反応を突き通す。

少年野球時代から、辛辣な野次をくぐり抜けて、ここあでたどり着いたスター選手の面の皮は、一般人の考えが及ばないほど厚いものがあるのだろうか。

「あ～　稼頭央のバカが。村田を惑わす動きをしないからちょうど取りやすい打球になっちまったよ。オレにいわれとおり、セーフテ

ィの構えで揺さぶっておけば、村田が前に出て、抜けたかもしれんのに」

伊原が早くもため息をつくように、松井の打球は、三遊間の三塁よりのゴロ。守備範囲がけして広くない村田でも、楽に追いつける打球だったのだ。だが、伊原の嘆きのとおり、松井の揺さぶりで村田の守備位置取りが前になっていたら、また違う結果になったのだろう。

諦めの早い村田、自分のさばける範囲ではないと、転がった瞬間に打球が三遊間を抜けるのを見守るだけだったかもしれない。

しかし、通常の守備位置にいた村田にとっては正面と評してもいい打球の位置。かっこよく半身の姿勢から、グラブを差し出し、村田は反転してスローイングの構えに入る。

ボールを処理するまでは、その体形からも動きに限界があるため二流の三塁手だが、取ってからは一流だ。動きの悪さの原因であるでっぷりとした体形が逆に、正確なスローイングの恰好な土台に変身するからだ。

「よいしょ」

だがしかし、一言入れる余裕があるだろうか、どっこいしょとまで言わないのはましだが、打者走者は俊足のそして、今の打席は左打席の松井だ。正面に近い平凡なサードゴロをヒットに変える走力の持ち主ではないのか。

「くっそ、外中心かよ！」

だが、松井はいつまでも騙された配球を悔やんでいるだけでなく、外角のボールに踏み込みが足らず、手打ちにならざるを得ないがために、崩れた姿勢を整えてからのスタートは明らかに、出足の一歩を遅くしている。それだけでなく、もともと、イチローや青木や川崎のような逃げ打ちのタイプではなく、きちんと振りきったあとに一塁にスタートを切るタイプの松井は、俊足の左打者であるが、内野安打量産型とはいえないのだ。

だからこその村田の一呼吸を整えるための「よいしょ」の間合い

どりの一言であったのだ。そして、村田の送球は元剛腕投手らしく、華麗で豪快だ。

真横の腕の位置からはじき出されたボールは、唸りを上げる。球速に直すと楽に１４０はあるだろうか。

そしてスローイングの体勢となった村田の背中には、背番号の一桁目の数字である5が見切れている。そして、かすかに見えるのが、背番号ふた桁目の数字である、これまた5。いつもの背番号ふた桁目は2が見え隠れするのだが、馴染みの背番号２５は偉大な先輩である松原に譲って、村田は北京五輪予選と本戦でつけた因縁の５５を着用しているのだ。

砲台村田かが放てし送球は、ぐんぐんと勢いを増し、その背番号２５を譲った偉大なる先人の一塁手松原の元に飛んでいく。

自称守備の名人の村田と違い、松原は正真正銘の球史に残る守備の名人。ただの三塁からの送球を捕球するだけでも、見せ場にするその松原の守備の極意とは、両足を限界まで伸ばすいわゆる”タコ足捕球”である。

一瞬でも早く捕球して、アウトの確率を高めようとの明確な意思のあるこの松原の捕球は、チームに＋をもたらすだけでなく、観客に恍惚をも与える。

松原が足を伸ばした瞬間、遠く離れた三塁側のベイスターズファンはやんややんやの喝采を送る。

「ち、オレの見せ場なのに」

村田は歓声と視線が松原に向いたことに若干の不満を抱くが、テンポよくワンナウトを取った事実の前には笑顔になる。

「ワンナウト！　ワンナウト！」

松井を一塁で見事に殺すことに成功した松原は、片指をあげて、大きくな声で叫び上がる。そしてリズムよくボール回しが始まる。

松原が二塁のローズに転送し、そのボールをまた村田に返すのだが、

「おっと、やべ」

なんと村田は、またボール回しで落球なのだ。気持ちの入ってい

なかったイニング開始前の落球はご愛嬌でも、みずから守備機会に関わった上の落球は、せっかく生まれたチームのリズムを剥ぐものだろう。

村田は、落としたボールを拾いあげて、投手の平松に送球するが、伊原はこれをみてニンマリ。

「やっぱ、村田は村田よ。いくらでも付け入る隙があるわい」

とアウトを取られても村田を標的にすることを変えようとはしない。

帰国中の稼頭央選手「清原さんの前では直立不動だった」

松井が倒れ、打席は流線型打線のある意味象徴である二番中西だ。それに続くのが、３番のカブレラ。ネクストサークルに入り、ヘルメットをかぶらずに、バットを数本重ねて、振り回すとのおなじみのデモンストレーションで、マウンド上の平松を威圧している。

さらに続くのが、４番清原だ。中西、カブレラ、現役のおかわりくん中村を差し置いての４番に気分をよくする清原は、目下の標的の松井の惨めな凡打にも、眉をひそめない余裕がある。

「稼頭央のバカが。ＰＬ～西武でどんな野球を学んできたんや。メジャーの大雑把な野球に、そのすべてを忘れたんか？　なんやあの無気力な凡打は。一番打者は塁に出るんが仕事やない。後ろの打者に情報を多く与えるんが仕事なんやぞ。西武の黄金時代の辻さんがそうやった。稼頭央よりよほど大きい背を小さく構えて、コツコツと当てにいって、ファウルで逃げる辻さんに後続の打者がどれだけ助けられたことか。ファウルに逃げていくうちに、辻さん一人で投手のほとんどの球種が見れたもんや。それがこの稼頭央のアホはたったの３球や。稼頭央がどれだけ平松さんの情報を引き出したんいうんや？　なんもないやろ。武器でないカーブに外のストレート、肝心のシュートがようやく見れた思うたら、当てに行きやがって、肝心のシュートの切れ味と曲がり具合の確認ができんかった。たく……やっぱ、しばかなあかんか、あのボケは」

と気分を良くする清原の松井評は、かねがね優しいものだ。もしもこれが６番清原とか、巨人時代にハイタッチを拒否した事件でおなじみの７番清原だったら、どうなったことか。

今頃、松井の無気力凡打に腹を据えかねた清原は、平沼に食らわせたヒップアタックを松井にお見舞いしたかもしれないのだ。

手出しせず手厳しい批評で済んだのも清原４番の賜物だろう。

そして、清原は、ネクストサークルの後ろ、ベンチの先陣を切っ

て、出番を待ち構えている。カブレラと同じく、無坊ならぬ無ヘルメットの清原は、白木のバットを片手に、右足を付き出して、状況を見守っている。

「カミソリシュートの平松さん相手に、ポイントは左打席に立つ稼頭央やったんや。あいつが、しぶとく出塁せんとなかなか厳しいもんがあるな。勝利の秘訣のひとつに、４番打者を初回から打席に立たすいうのがあるが、松井の凡打でそれも叶いそうもないな。中西さんやカブレラいうても、平松さんのカミソリシュート相手、しかも初見のや、出塁は難しいもんがあるな。右打者にカミソリシュートは一番利く飛び道具や」

二番の中西がバッターボックスに立つ。身長は１７０ｃｍそこそこで横幅にボリューム感があるにしても際立つ体格ではない。だが、醸しだす雰囲気はスラッガー特有のそれだ。

「これが怪童中西太か。中西さんといえば、オレの印象は近鉄の打撃コーチ時代が強いが、なるほど、伝説の大打者の雰囲気は構えただけであるわな」

と清原も刮目せざるを得ない中西の雰囲気。だが、清原はそれでも、ライオンズには＋にならないことを予見する。

「でもな、なんか、気がしてならんのや。このイニングにオレの打席が回ってこん気がな。ガキの頃から西武巨人と４番一筋、途中、顔が怪獣みたいにゴツイのに、４番の座を譲らないかんかったが、４番に座って３０年のオレはわかるんや。初回に４番の自分に打席が回ってくるか来んかがな。４番打者に初回から打席が回ってくるのは、半々かやや回ってくる方が上回るかもしれん。回ってこなきゃ、集中するのもバカバカしいと４番打者にこなれると集中力の制御ができてくるもんや。つまり、回ってこんなら集中する必要はないからな。４番の勘がこのイニングは三者凡退で終わるいうてるんや。おかしいけどな、稼頭央はまだしも、怪童に怪物カブレラやぞ？　どっちが塁に出ると考えてもええはずや。どっちの出塁率は４

割超えとる。どっちが塁に出る確率は8割は超える計算やからな。それでも、4番の勘は集中力の無駄遣いをさせんのや」

と清原は回ってこないなら、集中するのもバカバカしいとだらりとした態度をとり始める。あくびをかみ殺し、眠そうに目をしばたかせる。平成の古来から集中した清原ほど怖いものはないといわれているが、逆にいうと気の抜けた清原より安全パイの4番打者もいないのだ。

もし中西かカブレラが出塁して西武は、大チャンスどころか、一転大ピンチだ。気の抜けた清原が平松のカミソリシュートを打ち切れる可能性は極めて低いといわざるをえないからだ。

だが、清原の培った4番の勘もバカに出来ない。清原ほど常勝チームで4番を務めた選手なぞ日本野球史上一握りもいないからだ。その清原が断言するには、なにか根拠があるのだろうか。中西、カブレラが連続で切ってきられる何かがだ。カミソリシュートは右打者に絶対的な武器、それ以外の何かがだ。

そして、村田はひとつゴロをさばいて上機嫌。ボール回しの痛恨のミスも気にもせず、また爪の先の垢をみている。ゴロをさばいた時にまた土が紛れ込んだのか、爪の半円には、汚れが増している。

さっとグラブをとって、垢をほじくり出すわけにもいかず、悶々としていた村田は、ついに右手で右手の爪掃除のやり方を思いついたのだ。

「こうすればいいじゃん。なんで思いつかなかったんだろう」

思いつけば簡単、親指の爪をうまく使い、それぞれの指4本に爪の先を潜らせて、垢をほじくりだせばいいのだ。

「これ使えるじゃん」

と爪掃除に夢中の村田。親指の爪掃除は、逆に他の指のつめ先を潜り込ませればいいのだ。

「るんるん」

と鼻歌まじりで爪掃除に熱中している村田に伊原はにんまりだ。

「おい、シュウ」

シュウ？　伊原は確かに村田に向かってそう呼んだのだが、それまで村田と無機質な呼び方から、一転、親しみを込めたあだ名呼ばわりに村田はちょっと驚き、

「シュウ？　許銘傑のことですか？」

「許銘傑の実力で西武投手陣に入れるわけねーだろ。シュウといえば、村田修一のシュウだろ？」

「それはわかりますが……」

いきなりあだ名呼ばわりに警戒感を強める村田。さて伊原の狙いとは？

ユウキと志田の思い出

「おい、シュウ」

それまでよそよそしく、苗字で呼んでいた伊原が、急に村田を名前の一部を取って、馴れ馴れしい応対をしてきたのだ。

何事にもむとんちゃくな村田もこれには、伊原の腹の底が見えて不気味に思い、警戒感を強める。

「なんでしょうか、伊原さん」

無視しても、マムシの伊原はどこまでも食らいついてくると、村田は一応の応対をとったのだが、浸け込む場所が確認できれば、それが針の糸ほどの大きさでも、伊原は銀河系の大きさに広げえよと食い込んでくる。

「知っているか？　シュウ。この大会にも、ゴールデングラブの表彰があるってことを」

「ゴールデングラブ？　ほんとっすか？　この短い大会にも個人表彰あるんすか？　東都でリーグ戦やっていたときも、ベストナインや首位打者、最優秀選手の表彰はありましたけど、短い大会で守備の優劣をつける必要性ってありますか？」

乗り気でなかった村田でも、気になる情報には食いついていく。ゴールデングラブ獲得経験のない村田にとって、短期決戦のおざなりな賞でも、賞は賞だ。

「オレもそう思うがな、賞が存在するのは、明確な事実だ。取れるもんなら取っておいたほうがいいんじゃないか？　この大会のゴールデングラブは、実質的にプロ野球史上最高の守備名人と認められたのも同然だからな」

「オレが取れますかね？」

まんざら乗り気でもない村田は伊原の罠にめりめりとはまっていく。

「取れんわけないだろよ。さっきのあのグラブさばきといい正確な

スローイングといい、ゴールデングラブ賞のトロフィーが自宅のリビングに飾られてもおかしくないレベルだぞ」

さらに伊原は村田を褒め殺しだ、褒め殺し、罵倒、意味不明の３種類の野次から選び切れずに３種類ごちゃまぜの野次を飛ばしたが、伊原ははたと気づいたのだ。村田の特性をだ。

村田といえば、逆境ほど力を発揮する性質の選手だ。横浜というチームに属している性質上、引き立て役になりがちな村田であるが、引き立て役に満足しない村田は、ベロをぺろりと出す。佐々岡から引退記念のホームランをお見舞いし、矢野の引退試合ではこれまた優勝への追い上げムードに矢野の去り際への哀愁につまった球場の雰囲気を一撃でぶち壊す。

そんなに罵倒や意味不明な野次は逆効果。ならば慣れぬ有頂天の舞台に登らせればいい。

北京五輪予選の惨状を取り返すためにＷＢＣ４番にふさわしい打撃を披露したら、走塁中の肉離れとのオチをつけた村田は、木を登らせればコテンと落下すると伊原はみたわけだ。

だから、思ってもない美辞麗句を並べて、村田もおだてれば木に登らせようとするのだ。

「ゴールデングラブ？　ムリっすよ、ムリ」

再否定する村田だが、各球団の三塁手の顔と名前を思い浮かべていみると、

「巨人は長嶋さん、近鉄は……中村ノリさんだっけ？　で、西武は中西さんが守ってたし、ハムのサードはガッツさんだったよな、で相手のヤクルトは岩村さんだ。他の球団は今試合中だけど、たしか、阪神は掛布さんで、ソフトバンクは小久保さんだ。それでロッテは有藤さん？　中日は誰だろうな、なんか立浪さんが守ると聞いたし、広島は江藤さんじゃなくて、衣笠さんらしい。でオリックスは松永さんって予想を見たな」

と村田は他の球団の三塁を誰が守ろうと興味ないよと顔をしつつ、ズラズラとレギュラー三塁手の名前を上げ始めた。さすが各球団を

代表する三塁手の面々だ。ゴールデングラブやその前身のダイヤモンドグラブが存在しなかった時代に現役を過ごした中西以外の１０人の三塁手は一度以上ゴールデングラブを獲得しているのだ。

うち小久保は、二塁手での獲得経験しかないが、二塁手でのゴールデングラブの獲得は三塁手での獲得より当然ハードルは上。

そして、獲得できるわけがない中西でも、その三塁守備は定評あり。優勝経験何度もある中西はそれだけ票が集まりやすく、もし当時守備の賞があれば一度は獲得していると思われる。

だからだ、である、しかしながらである。村田だ。１２人の中で、中西以外のゴールデングラブを獲得できる環境のあった１１人の三塁手の中でたった一人なのだ。

ゴールデングラブ獲得経験のない三塁手は。

３０歳を越えて、足を痛め、太るばかりの村田がこれからゴールデングラブを獲得する可能性は低いとしかいわざるをえない。そんな村田がなんとまあ、

「取れるかもしれんな」

と、なにを根拠に、なにをおもってか、大会ゴールデングラブに色気を示したのだ。

「オレの守備力は先人のかたがたにはまさるも劣らない」

村田に、長嶋のような華やかさがあるのだろうか、有藤のような大型三塁手のダイナミズムがあるだろうか。村田が強肩といっても、松永や中村紀の弾丸のような送球にかなうとも思わないし、衣笠ほどの執念や、掛布のような泥臭さもないし、サードにしては小柄な体でめいっぱいのプレーも岩村や立浪に負けている。もちろん、重戦車型のサードとしても、中西に引けをとっているだろう。

ただ一人、ゴールデングラブを獲得しているといっても、サードとしては素人に近い小笠原や足を痛めてからサードになった小久保には勝っているとしても、とても、ゴールデングラブに値はしているとは言いづらい。だが、すっかり褒め殺しにひっかかった村田は、

「よっしゃ！　どんどんサードゴロこいや！　ゴールデングラブに

アピールだ」
と鼻息荒いのだ。
「ふん、単純な奴めひっかかりやがって。この大会にゴールデングラブ？　知るかそんなもん」
なんと、伊原はゴールデングラブがこの大会に存在しているかどうかもあやふやなのだ。それでも、村田を有頂天させたことには満足のご様子。
「投手の平松はシュート投手だ。どんどんサードにシュートにつまったゴロがくるぜ。その時だ、お楽しみだぜ。ゴールデングラブの色気でよけいな雑念まじりの村田はポロポロやってくれるぞ……」

捕手と打者がたらたらしゃべるだけの話から、三塁手と三塁コーチャーがたらたらしゃべるだけの話

伊原の褒め殺しでその気になってしまった村田に狙いを定めたわけではない。平松のシュート攻めは打球方向を限定するのだ。

鋭く、胸元いや内蔵をえぐるほどの威力のあるカミソリシュートをグラウンドに弾き返そうとすると、どうしても内野ゴロ、それも三遊間、または三塁線を襲うファウルかフェアか微妙な当たりにしかならない。シュートに逆らって、逆方向に狙いを定めても逆効果だ。ボテボテのゴロが遊撃の前か二塁の前に転がるのが関の山だろう。

超一流の打者中西太は、逆方向狙いの逆らわない打撃は、逆にバッテリーの思うつぼであることは重々承知。打者中西太が培った経験論というよりも、コーチ、監督（ベンチがアホやからと江本にいわれた）としての体験談だろう。

「シュートに逆らうないうと打者は右方向にムリに打とうとする。それじゃ、みすぼらしいゴロがセカンドに転がるだけや。そういうときはこういえばええ。シュートに力負けせんと振りきって、三遊間をぶち破るような当たりを打てとな」

と中西は、シュートの力勝負には力で対抗するのが、シュート殺しにもっとも適した打法と考えるのだ。

シュート狙いの中西に、シュート攻めは危険なのだろう？　裏をかいて、スライダー、カーブを外に集める策を取るべきだろうか？

捕手は百戦錬磨の谷繁だ。裏も表も自由自在に使い分ける捕手だろうが、その谷繁は、

「外勝負ない！　ない！　球史に残る大打者に裏をかく勝負なんて逆に怖すぎるよ！」

と裏をかくのは、逆に裏目に出る可能性が高いと谷繁は見ている。

「もう、シュート一本だよ！　シュートを打つか、打たないか、そして当てて内野ゴロになるか、甘くはいって、スタンドインになる

か。紙一重の勝負にしかならないんだよ。でもそれでいいんだ、これが球史に残る打者と、大洋横浜のナンバーワン投手との勝負なんだから、シンプルでいい。シンプルこそがこの試合のキーポイントだよ」

内角攻めは一歩間違えれば大やけど。内角は打者が一番打ちにくいスポットだ。歴史に残る打者でもこのコースを弱点とする打者は数多い。落合しかり、清原しかりだ。

だが、内角攻めは投手の側にも高い技術力と強い精神力を要求する。死球を怖がって、コースが少しでも中にはいれば、一番打ちにくいボールは、一転、一番打ちやすいボールに変身を遂げるからだ。

だが、シュートいえば平松、平松といえばシュートの平松は違う。内角に投げ込める技術と精神力を兼ね備えているのだ。

「当てたなら当てたでしゃーない。打者は一塁にいけるご褒美があるんだよ。オレのシュートを絶対に前に飛ばせない打者が、ただで一塁にいけるんだから、これ以上のご褒美はあるの？」

と死球をまったく怖がっていない。それが打者中西相手でも同様だ。

「中西さん、当ててしまったらごめんなさいね」

野球殿堂入りのレジェンドにも臆することはない。

１４５キロ、トップスピードに近づいた平松のシュートが、今初めて右打者相手に唸りを上げる。

内角のストライクゾーンから、急激に曲がる平松のシュートボールは、中西の大きなお腹めぐって迫ってくる。

「ウソ」

思わず、捕手の谷繁が声を上げるほど、平松のシュートは際立っていた。中西は初球からフルスイングするが、バットの根っこに当たった打球はむなしく捕手の後方にあがるだけ。

谷繁はフライに向かってスタートを切ったが、打球がスタンドに飛び込む軌道と確認をすると、マスクを投げ捨てることなく、捕手の定位置に戻っていった。

「こっちもウソ。だよ、ほんとになんなんだよもう、これが名球会投手と殿堂入り打者の対決かよ？」

百戦錬磨の谷繁は、横浜、中日、そしてオールスター、五輪予選、日米野球、ＷＢＣなどの舞台で、様々な好投手と好打者を間近で見てきたのだが、その谷繁も驚きを隠せないのだ。最初の谷繁のウソは、平松のシュートへの賛辞だ。

横浜時代は、盛田幸妃、そして中日時代は朝倉健太や、吉見一起などのシュート投手のボールを受けてきた谷繁が思わず、平松のシュートの切れ味に唸ったのだ。

「これがカミソリシュートかよ。盛田さんのシュートを何度も受けて、今、朝倉とかシュート投手がいるけど、あいにく同級生の川崎憲次郎のボールはほとんど受けずじまいだったけど、盛田さんのシュートのスピードと切れ味が一番だと思ってたが、平松さんのカミソリシュートはちょっとレベルが違うかな。練習試合で見たときよりも二倍三倍増しだよ。やっぱり、本番となると投手の投げるボールは違うねえ」

一番の松井にもシュートを投げさせた谷繁だが、左打者の松井相手と右打者の中西相手のシュートの切れはやはり違うのだろう。そして、打者二人目、そしてシュート二球目で、平松のエンジンが掛かり始めた証拠だろうか。

「立ち上がりでこれって、調子に乗ってきたときのシュートはどんなんだよ」

そして、谷繁の二言目のウソは、中西への驚きだ。

「根っこだぜ、根っこ、それもグリップエンド近くまで、抉ったシュート。どん詰まりだぞ。そのどん詰まりのミートポイント、普通の打者んらオレが二、三歩後ろに下がって、楽々捕れるキャッチャーフライが関の山だぜ。それがどうしてスタンドまで届いちゃうんだよ！？　考えられんて、それだけスイングスピードに力と速さがある証拠だよ」

谷繁が、伝説の打者と投手の力と力の勝負に、捕手の立場を忘れて興奮しているとき、村田はどうだろうか？

「ふわああ～」

なんとまあ、あくびである。守備に力を入れると意気込んでいた村田は、ファウルを見上げるとついあくびが出てしまったのか。

「ファウルの連続は辞めてよ、テンポよく打たせていこうよ」

村田はすでに守備に飽きを見始めている。ゴールデングラブ狙いはいずこ？

石毛ようやく登場

村田があくびをしている間にも、バッテリー間では凄まじい火花が飛び散っていた。

ポリポリと頬をかく村田と対照的に平松と中西の発する体温の熱はほとばしるように、熱い。

「シュート、シュート、シュートで押し通すぞ」

谷繁はなにがなんでもシュート攻めは続ける。いつコースが甘くなって、一発を浴びる危険性を帯びていてもだ。中西をウイニングショットのシュートで圧倒することが、この試合、劣勢が伝えられる横浜が、西武を打ち負かすただひとつの方法と感じ取ったのだろうか。

シュートはフォークに続いて、ストライクを取りづらいボールだ。落ちきらずストライクゾーンに留まるフォークや、曲がり幅と曲がり始めの関連でストライクに飛び込むシュートは絶好のホームランボール。中西ほどの打者ならかなりの確率でスタンドにぶち込まえる代物だ。だから、シュートはボールゾーンに切れこむように曲がっていくのだが、中西はボールとわかってもあえて、シュートを振りにいく。

バッテリー同様、シュートを支配することが、平松崩しの最大唯一の方法論とわかっているからだ。

曲がり幅が大きすぎて、打てないシュートには、中西は巨体をそっくり返し、これをよける。危ないボールと平松や谷繁を恫喝することなく、中西はただ静かにバッターボックスに戻っていく。

「ふん、太っさんは優しすぎるよ。演技でもいいから、平松をきっと睨みつければいい。いくら平松でも、中西太に睨まれちゃあたまりませんわ。シュートがボールひとつ甘くなるんのに」

豊田は中西の紳士的なプレースタイルに懐疑的。いやそもそも、豊田は、中西が二番に座ることを快く感じていないのだ。

「流線型打線の二番といえば、この豊田泰光の代名詞。この試合はオールスターの遊び場じゃないんだ、真剣勝負だってことをわすれちゃいけませんぜ。真剣勝負の二番は、二番を長らく務めたオレのような打者でないと務まりきれんのよ。一番打者があっさり倒れたときには、それなりの二番打者の心得ってものがあるんだが、それを太っさんがわかるわけがない。あの人は、なにも考えんでもいい、3番を打ってた人でしょ？　三原さんは、そのことをよくわかっていると思っとたがなあ。なんで、豊田を二番にしないの？　どうして中西さんが二番なの？」

表の守備では、松井がショート守備についていたことにさんざん、不満を撒き散らし、続いて、裏の攻撃では、これまた本来自分のポジションである二番に座る中西への不平をまくし立てる。

「だろう、ナカジ。お前さんも不満だろ？」

とこれまた引き続き、中島を不平分子仲間に引きこもうとするが、

「……？？」

中島はこれまた豊田がなにを不満を感じているのかまるで理解していないのだ。

「ナカジ、お前さんも二番経験者だろうよ？　二番は、二番の経験を多く積んだ者にしか務まらんことは、君がよく知っているはずだ」

豊田は、第二回のＷＢＣでの中島の二番打者としての絶好の働きが強く印象にあり、それをふまえて中島を説き伏せようとするが、

「？？？？　ボクが二番ですか？　よう、わかりませんよ。二番の気持ちは……」

と肝心の中島は、ＷＢＣのことなんてすっかりと忘却の彼方だ。

「若い頃は7番、成績あげてから三番打たせてもらってますけど……。メジャーで、ナカジマ、お前、二番打ていわれたら、そりゃ打ちますけど……」

半端な過去は切り捨てて、常に視線は未来に向いている中島は、不平分子軍団の一員には成り難いと豊田は、ようやく彼の本質に気がついたようで、

「お前さん、みたいに朗らかな性格だったらなあ、オレもどっかの監督をやってたろうし、もっと楽に殿堂入りできたんだろうけど」

と中島の素直さに我を顧みるのだが、口先が乾くのも早く、

「お～い、ハチ……石毛はおらんか……」

（ハチは石毛の愛称。大学時代の背番号が8だった、眉が八の字だからとか、由来は各説あり）

「なんでしょうか、豊田先輩！」

石毛は、いまさらなんのためだろうか、三原の横で帝王学を学び取ろうとしているのだ。

いまさらなんのためだろうか？　西武時代の石毛なら話はわかる。将来の西武の監督が確実視されていたからだ。だが今の石毛はすでに指導者の王道から外れきっている。

西武時代、兼任監督を嫌がりダイエーに飛び出したのが、すべてのボタンの掛け違いの始まり。二軍監督になり、ポスト王をこらまた確実視されながら、弱まった根本の権力と並行するように、石毛の立場もなくなり、ダイエー球団からも追い出されて石毛は、ＮＨＫ解説で見聞を広めたあと、これまたなんのつながりか、宮内が黄金時代の西武にあこがれを抱いたのか、オリックスの監督に、これまたなぜか就任。

しかし、ダイエー二軍時代に懸念されたとおり、オリックスの監督も志半ばで、解任。路頭に迷う寸前に、石毛は独立リーグの道を見つけるのだが……。

「おい、石毛！　お前もおかしいと思わんか！」

「なにがでしょうか、豊田先輩！」

「オレとお前がベンチなんて、おかしいよ。チームリーダーは、グラウンドで目を光らせてこその、チームリーダーだよ。ベンチにいちゃ、ただの外野の外野のうるさい衆人にすぎんもん」

豊田は、中島を切り捨て、今度は、石毛を『干された名遊撃手被害者の会』に引きこもうと企む。

「いや、豊田先輩の頼みですか、石毛宏典、これを承諾することは

できません！　三原監督に楯突くなんて、とてもとても！　私、石毛宏典は、三原監督から名将のエキスをすべて吸いつくすとの野望を抱いて、このベンチ入りを楽しみにしてきたんです！　ベンチに干されてこれ幸い、なぜなら、三原監督の采配ぶりを間近で見続けられるんですから！」

　いやだから、石毛さん、三原監督のエキスを吸いとって、これから、どこで、そのエキスを生かすのでしょうか？

ホームラン打っちゃだめなんだよ

平松と中西の力と力に技がブレンドされた名勝負は、多くのファウル打球とともに、長らく続くのだ。

二番打者から力のはいりすぎた勝負に捕手の谷繁はくたくた。谷繁はただ、機械的にシュートのサインを出して、ミットを中西の懐に構えるだけであるが、たったそれだけなのに、谷繁は、すべての毛穴から汗が飛び散る感覚に襲われる。

「これだけ内角攻めを続けたら、外が効果的と見る向きもあるだろうよ。あるいは、オレのしつこすぎる内角攻めを単調と受け取る、自称玄人もいるだろうよ。そんな評論家や似非ファンがいたら、ここに座ってみろといいたい。中西さんの迫力だけでなく、どこに投げてもついていけそうなムードを否応なく感じるだろうから。たとえ、外にスライダーを投じて、抜きにかかっても無駄だろうよ。中西さんは、苦も無く、右に追っつけれるだろよ。そして、少しでも甘くなったら、スタンドインだよ。それを感じ取れねー奴がウザウザ騒ぐなって言うんだよ！　中西太の恐怖は、身近な捕手でないとわかんねーだからな」

内角のボール、ことに、平松ほどのシュートを打つには、多大なる技術力が必要となる。腕を折りたたみ、最短距離にバットを出さなければ、どん詰まりのサードゴロが関の山だろう。

中西の内角の裁きは、教科書通りだ。大きな腹につっかえそうになりながら、巧みなバット裁きで平松のシュートをファウルしている。

「中西太は、中村剛也……。オレはそう見ていたんだよ。西武の予想オーダーを眺めたとき、オレが対戦したことのない打者は、あれ？　中西太さんと外人のテリーだけか。なら中西さんは、現役打者でいうと誰であろう？　やっぱり同じライオンズの三塁手で、太めのホームランアーチスト、おかわり中村しかいねーかな。……それ

で、オレはおかわり中村と相対したときの気持ちでリードしてるんだが、おわかりくんといっても、中西さんに喩えるのは、実力不足だったようだな。この粘り、おわかりくんには存在しねーぜ」

中西と平松が逃げないなら、谷繁も逃走劇を描かない。そして、カウントは２―２の平行カウントから、同じように切れ味鋭く胸元に飛び込んできたシュートボールを中西は、ついにグラウンドに打ち込む。

その打球方向はもちろんながらのサード方向だ。

「オレ？」

気が入っているのかいないのか、よくわからない村田は、はよ決着つけよと傍観していた勝負の行方が自分に委ねられていることに気づく。

「よっしゃ！　見せどころ」

なにが見せどころだろうか、魅せるつもりなら、いつ飛んできてもいいような準備をしておくべきだったのにだ。

中西の打球は、たとえサードが取れそうな打球でも、逸話に残っていることを村田は知るべきだった。

「やべえ！　サードいった、また村田だよ！　中西さんとサードへの打球っていったら、伝説のサードが飛びつこうとしたら、そのまま打球がスタンドに飛び込んだ伝説のアレじゃねーかよ！　村田がそんな中西さんの打球をさばけるか？　だから、オレは、人間関係のいざこざをあえて無視して、石井琢朗をサードにいれろって主張したんだよ！　で、ショートは山下さん。これで三遊間は鉄壁になるのに、村田を使いたいなら、ＤＨがあるって、大矢さんに懇願したんだが、４番サードはキャンプの頃からの村田との約束だって、聞き入れてくれなかったんだ」

谷繁はシュート投手は、三遊間の守備力こそ命と首脳陣に主張したのだが、約束の二文字の前に受け入れられず。

横浜は、東スポにことさら批判されることもなく、約束が横行し

ている球団だ。
　ドラフト上位指名選手の年には、当たり前のように、セット指名である同じ学校やチームの選手がいることは有名だし、トレード関連も、首脳陣やフロントとなにかつながりを見つけようとするならば、なにかの縁を見つけることは容易なのだ。
　コネも、情実も無視してかかれるオールスターの試合なのに、どうして、横浜首脳陣は、約束手形を発行するのだろうか。
　そして、伊原は狂喜乱舞だ。飛んだ場所は、三遊間、サードがとっても、ショートが捌いてもおかしくないコース。
「よし、村田のデブ。よくばれ！　目の前にぶら下がるゴールデングラブに食いつけ！　よくばって、石井の打球を奪うんだ！」
　伊原が期待するのは、村田の出すぎた守備。石井なら楽にさばける打球だが、村田がでしゃばると、何かを引き起こす可能性が高いからだ。
　いつもなら、０３年後半から０８年に組んだとおり、「石井さん、どうぞ」と守備に出過ぎない村田はあっさりとゆずるところなのだが、伊原の褒め殺しにまんまとはまった村田は、貪欲にも、この打球を取りにかかるのだ。
「記者のみなさん、よくご覧アレ！　これが、今大会ゴールデングラブに輝く村田の守備です！」
　伊原は、サードゴロに対する村田の出足で、数秒後に確実に起こるだろう、未来を想像した。
「ショートの打球を奪い取れるのは、長嶋さんの全盛期だけ。このデブが、そんなマネをしようとも、勢い殺せず、大きく弾くのが確実！　あるいは、上手く処理をしても、体勢を立て直せずに、一塁送球が乱れることだろう！」
　伊原の予想は、村田の失策であるが、強烈な打球に横っ飛びの村田は、ないをしでかすのだろうか。
「ええい！」
　かっこよく横っ跳した村田は、グラブに打球を収めて、着実な一

墨送球ができるのだろうか。

三遊間ひとりぼっち

伊原は、村田の出だしをみて、みっともないミスをすると確認したものであるが、村田はどうだろう。

打球に追いつく前から、村田の頭の中身は好プレーを決めたあとの自分の栄光に満ち溢れている。日大の同級生の館山が得意のピアノ演奏で、村田の好プレーを祝賀する音楽をバックに、横浜同期であり、東福岡の後輩でもある吉村が、パーンと勢い良く、祝いのクラッカーを鳴らすと、大西や、松坂ら松坂世代の同期たちが、村田の好プレーパーティーを、嫌々ながら開催している。

「おめーら、オレがゴールデングラブを取ったからって、ひがむなよ。ケケケ」

とワイン片手に村田が得意げにしているそんな風景をすでに思い浮かべている村田である。　追いついたあとに、勢い殺して打球をさばけるかとか、体勢を整えて送球をできるか心配はしていないのだ。

心配は配慮につながり、、配慮は慎重さに糧となる。猪突猛進、大胆不敵なプレースタイルもいいが、そこに慎重さがなければ、確実なプレーは生まれてこない。

慎重さが皆無の村田は、村田の思い通りにならず、伊原が思い描く案の定なプレーをしでかすはずと……思われた。

だが、現実は、誰の予想通りの道につながりはしない。

横っ飛びの村田は、打球を弾くとか、送球できるかとか以前の問題だった。村田の横っ飛びは、打球に飛びつけなかったのだ。

「あれ?」

村田は、全力で守備をすればこれくらいの打球は追いつけると思っていた。守備に気を張ってそうな岩村などが、追いつける打球、自分も本気を出せば追いつけるのは当然のはずが、村田の横っ飛び

は届かず、村田の守備範囲の限界は、打球をスルーさせた。

「あ」

伊原は、村田を買いかぶりすぎていたかもしれない、褒め殺しをすれば遊撃手の打球も飛びついて、余計なミスを頻発させるとほくそ笑んでいたが、伊原の引き出した村田の本気は、遊撃手の守備の邪魔もろくにできない程度だったのだ。

「このデブが！」

伊原が吐き捨て、村田はべったりと人工芝の絨毯の上に寝そべって動かない。

そして、肝心の打球の行方は、遊撃手の石井琢朗の動きの良さに救われたのだ。

サードが捕れなかった打球を懸命にさばくのが遊撃手の最大の見せ場だろう。両足を急ブレーキさせて、逆シングルで捕球。

中西は、トリプル３を達成したほどの俊足の持ち主。太った体を揺らしたその動きの良さは、アスリートの上に”超”を乗せたいほどだ。

だが、石井のフィールディングは一流だが、強肩は、これまた超がつく超一流だ。元投手で桑田二世と呼ばれて、二軍の要望株だった石井の肩は、球速に直すと１４０中盤は超えているだろう。

「村田の介護は琢郎がいたか。サード村田と考えるよりも、サードもショートも石井琢朗が守っていると考えたほうが良さそうだ」

伊原が嘆くように、石井琢朗の守備範囲の広さは村田を最大限に助けるのだ。思えば、石井は、内野転向後、もともと三塁手。ショートに進藤という名手がいたためのサードだったが、このサードでもゴールデングラブを獲得しているのだ。

村田だけゴールデングラブ獲得歴がないサードであったが、サードのゴールデングラブは石井が獲得済みだったのだ。伊原の嫌味とおり、石井がサード&ショートと考えれば、松原、ローズ、そして石井と黄金の内野陣と表してもおかしくないのだ。

中西の俊足も石井の強肩の前には叶わない。そして残る記録は、平松に打者一人をアウトにした事実、中西にショートゴロ、石井にアウトをアシストした印である補殺、そして一塁の松原には、走者をアウトにした刺殺がつく。

「オレにはなにがつく」

地べたのひれ伏したままの村田の頭に疑問符がついた。全力プレーになんの意味があるのだろう。全力だろうと無気力だろうと、自分にはなにも記憶がつかなかったのだ。

「全力って疲れるな」

ようやく立ち上がった村田と無関係に、試合はつづいていた。三番のカブレラが威圧感たっぷりに打席に入っている。

アウトカウントはふたつ。

「アウトもうひとつで、この回は終わり。そして、次の回は4番のオレから始まる」

もうダメだ、村田の興味は攻撃に移っている。

「サードゴロに、三遊間のゴロ。サードの守備機会なんて一試合で5、6個だろ？　1イニングでふたつも来たんだから、三つめはねーな。東福岡～日大の野球も頭もエリートの確率論だと、ゴールデングラブといきり立っても、もう打球が飛んでくる確率は著しく低い。なら、頭はもう攻撃に切り替えていいな。それが4番だけに許される特権だ」

補殺＋刺殺に失策を合計した守備機会、サードは平均3個もない。つまり、3イニングに一回しか守備機会はないとの確率だ。村田の言うとおり、確率を問題にすると、4回までサードには打球は飛んでこないかおしれない。だが、それはあくまでも確率の問題であり、同じイニングの中で、何個もサードゴロが飛んでくるなんて珍しくもないだろう。

しかも、投手はシュート投手の平松だ。なおさらのことサードゴロが村田を再襲来する確率は残っている。

だが、

「西武の畑って誰だよ？　はあ？　ふざけんなよ。なんであんなに西武の投手の配球や傾向を勉強したのに、あの苦労はなんだったんだよ。かあ～、これが三原マジックかよよと初回のオレの心は荒れたもんだが、３人の打者の攻め方と球種の傾向を学び取れは、オレには十分さ。ストレートは速いが、振りまけるほどじゃねー。４番村田の起用は正解と世間に示したるわ。バックスクリーンに放りこむオレの姿が見えるぞ」

心はもうすでに、バッターボックス。そばで見ていた伊原もさすがだ。村田の心移りを間髪なく見破る。

「このデブ。また心移りしやがったな。もう守備はどうでもいいって顔だぞ。まあええわ。このデブにひっつくよりは、カブレラだ、問題は」

打席に入ったカブレラは、すでに谷繁といざこざを起こしている。胸元の辺りにバットを払うように振って、なにやらアピールしている。

「はあ？　胸元に投げるなってことか？　投げたら切れるぜだって？　カブレラが怖くて、捕手ができるかよ」

谷繁はカブレラの脅しにも怯えず、内角攻めを繰り広げるつもりだ。

お祭り気分の空がある　お祭り気分の風がある

カブレラと谷繁で、すぐに思いつくエピソードは、２００４年の日本シリーズの満塁ホームランの押収だろう。満塁弾を打った谷繁は、捕手に打たせるとリードまで乗ってくるの定説を覆すかのように、カブレラに満塁弾をお見舞いされてしまう。

強烈なしっぺ返し、ノックアウト寸前のカウンターパンチは、谷繁の脳裏に『カブレラ恐怖症』を植えつける。

「カブレラを外すって噂あったから、小躍りしたい気分になったんだよ。マジで？　カブレラを外してくれるの？　ファーストは清原さんで、ＤＨはスイッチヒッティングと大舞台の次席を買ってデストラーデを三原監督は起用する？　って情報を、ロッカーに落ちていた佐伯が購入した夕刊ゲンダイの野球面で見たんだけど、デストラーデだったら、横浜としたら万々歳だったんだよ。デストラーデは、たしかに一発も怖いし、四球を選びとる冷静さと選球眼、それに、日本シリーズで見せつけた勝負強さと、そりゃグリグリの要注意打者に違いないんだけど、そのデストラーデよりも、またカブレラは一段階違うね。デストラーデには、弱点が羽切していたから、間違わなきゃ打ち取れるって、安心感がバッテリーには生まれるけど、（デストラーデとオレは奇しくも、同じ１９８９年入団の同期生。まあ、デストラーデと対戦するのは、オープン戦くらいで、当時の大洋の弱さじゃ、日本シリーズで遭遇するなんて、不可能願いだったしな）カブレラは違うんだよ。デストラーデより、選球する意思は薄弱で、どんなボールでも手を出してくれる期待感もあるんだけど、そのどんなボールもスタンドに放りこむ技術力と桁外れなパワーを兼ね備えてるんだよ。こんな
打者、横浜、中日で２０年以上、いろんな打者を見てきたオレだけど、カブレラだけだね。横浜で一緒にやって、今、セカンドを守っているローズも、カブレラと同じどんなボールを打ち返せれる技術

力があったけど、カブレラと違うのは、ローズのパワーは桁が外れていないってことだ。……落合監督……この大会の監督は、なぜか大矢さんだから、落合さんと呼ぶべきか、それとも、落合内野手か？　まあどうでもいいけど、落合さんも認めてたよな、今の球界、本物の４番打者といえるのは、カブレラだけ。いや、落合さんが引退して以来、自分に匹敵する打者はカブレラだけともいってたな。例のミッチェルリポート以来、若干し体が萎み、全盛期のパワーがなくなったっていっても、この目の前にいるカブレラは、全盛期の西武時代に時間を戻したカブレラだ……」

谷繁はカブレラの太すぎる腕を横目でチラチラ。

「あの腕の太さはなんだよ。そのへんの女の子のウエストよりも太いぜ。……この超ド級のパワーに対抗するのは、決断力と勇気しかねーな」

谷繁は、前の打者の中西に続き、カブレラを打ち取る手段はひとつしか思い浮かばない。

いや、シュート攻めこそが、この最強の打線に立ち向かうたったひとつの方法と覚悟しなければならないのだ。

カブレラは、内角攻めをさせまいとあの手この手で、谷繁に圧力をかけてくる。自分の胸元を何度か叩いたあとに、平松に向けて、予告ホームランの仕草。バットを突き立てる。

胸元に何度も投げ込んだら、命の保証はないよとの一種の殺害予告だろうか。その犯行内容の予想はつきにくい。平松を殴りかかるのか、それとも、花形満のノックアウト打法よろしく投手ライナーをぶっぱなし、平松の脳天に２００キロ超のボールをぶち当てようとするのか、自ら手を下さずとも、後ろに控える清原をマウンド上に作られた緊急仮設リングに上げるのか。いずれにしても、強面、巨漢のカブレラに警告じみた行動をされたら、投手はたまったものではない。名球会投手平松だとしても、不安な影が胸にうずくだろう。

谷繁は、平松がカブレラにビビリ、内角攻めを遠慮するのを恐れ

て、マウンドに駆け足して、平松を叱咤激励する。
「なんだよ、谷繁。二死無走者で、捕手がマウンドにわざわざ出向くなんて」
「普通じゃないっすよね～。でも、二死無走者だから、最善の努力をするんすよ。このまま三者凡退に終わるのと、気を抜いて、作ってしまった小さな傷口が大きく広がるのと、どっちがいいんすか？　そりゃ前者でしょ。このイニングをつつがなく終わらせるために、ボクは駆け寄ったんですよ」
「それ、横浜で覚えた野球か？」
「いや、残念ながら、中日で培ったものです」
「そうか、やっぱり、中日は横浜と野球の質が違うんだな。ひとつのプレーを疎かにしない姿勢が終わってみたら、首位とダントツ最下位の差になってるのかな。まあ、チームの体質批判はよそう。で、谷繁、なんの用だ？」
「平松さん、びびんないでくださいね～」
「びびる？　なんの話だ？」
「いやいや、強がってもわかりますよ、カブレラが平松さんにバットを突き立てたときに、さっと目を離して、ロージンバッグを触るふりをしたじゃないすか？」
「わかったか？　いやびびったわけじゃないんが、バットの先端を向けられるとどうにも気分が悪くてね。ところで、その投手の一瞬の仕草の変化も見逃さない野球はどこで習った？　今度こそ横浜だといってくれよ」
「いえ、残念ながら、それも中日で習いました。って、チームの体質批判はこのへんにして。カブレラってのは、ああ見えて、意外と気が小さいところがあるんですよ」
「え、あの強面でか？　本当かい、谷繁？」
「ええ。たまに、カブレラの乱闘騒ぎとかあるでしょ？　でもよく思い浮かべてください。カブレラが誰かに殴りかかったシーンとか、清原さんみたいにバットを投げつけたなんて記憶にありますか？」

「う〜ん、そういえばそうだな。騒ぎの中心で、相手に捲くし立てるカブレラは思い浮かぶけど、投手を殴りつけるとか、そういうシーンはないよな」

「でしょ？　すべては脅しのための演技なんですよ。邪魔臭い内角攻めをさせないための」

「なるほどな。一見、力押しだけで、なにも考えてなさそうで、緻密な野球をするのか」

「掛からないでくださいよ。とにかく、内角攻めを繰り返しましょう。球界の大スター長嶋さんに内角攻めをした平松さんですよ。カブレラの胸元なんて恐れるにたりずですよ」

平松を勇気づけたあと定位置にもどるその時、谷繁とカブレラは目が合う。

カブレラはきっと谷繁を睨みつけるのだが、谷繁がカブレラよりも鋭い眼光で睨み返すと、途端に目を逸らしてしまう。

「ほらね、これがカブレラなんですよ。恐れに足らず！」

平松にカブレラの気の弱さを行動で証明しつつ、谷繁は自らの脳裏にうずくカブレラ恐怖症をも払拭しようとしているのだ。

「さああ、平松さん。どんどんシュート攻めで行きましょう！」

谷繁は、カブレラの後ろに隠れるように構える。完全に内角攻めしかありえない体の位置だ。谷繁の決断力と勇気に奮い立たされた平松は、中西に投げたシュートより、より素晴らしいシュートを谷繁の隠れそうなミットめがけて投げ込むのであるが、

「うっそ〜〜　マジかよ！！」

カブレラは、その今日一番のシュートをいとも簡単に打ち砕くのだ。

「って、なんだよ、この打者！！」

谷繁の絶叫とともに、カブレラのロケット弾は、どんどんと超加速していく。

お祭り気分の空がある　お祭り気分の風が吹く

カブレラの丸太よりも、ぶっとい腕からはじき出された打球は、大気層を通りぬけ宇宙まで飛んで行きやしないか、宇宙にさまよう宇宙船にボールが直撃して、損害賠償を請求されやしないかを心配するほどの弾道の高さと驚異的なスピードを伴っていたが、

「あのボールは、打ってもファウル……だよな、谷繁？」

「平松さん、あのコースは打ってもファウルっすよ！」

とバッテリーは文字上は涼しげな発言で、配球どおり、要求どおり、狙い通りに打たせたボール、ストライクカウントをひとつ取ってやったぜと上から目線であるが、その表情は、平松、谷繁ともども真っ青。

いくら要求通りのコースに満足したボールが行ったとしても、カブレラの驚異的パワーを目の当たりにしたら、震えは当然として、失禁しなければ、それでまあよしのレベルなのだ。

バッテリーの狙い通り、打球は、ポール際でどんどん切れて、通過するときは、左翼側のポールの遥か左側のファウルゾーンに位置していたのだが、その打球が失速せずに、西武ドームの屋根と外野通路のわずかな吹き抜けを抜けて、落ちた地点が確認できない場所まで飛んだならば、

「なんだよ、このカブレラ。オレの知ってるカブレラよりもよほどすげーじゃねーか。日本シリーズや交流戦でさんざん当たったけど、これほどすごくはなかったぜ」

谷繁は冷や汗をかきつつ、ファウルになった事実にほっと胸をなで下ろすと同時に新たな恐怖を感じていた。

「今のがホームランになっていた方が、よかったかもしれんわ。この怪物の打ち上げた打球をもう一度、見せられる可能性もあるわけだろ？　今の打球で心臓が止まりそうだったのに、もう一度となると、心臓にとどめがくだされるわ。しかし、カブレラってここまで

だけ？　う～ん……あ、そうか。オレがカブレラと真剣勝負した最初は、２００４年のシリーズじゃねーか。それまで、オープン戦や、球宴でいくらか当たっていたとしても、それはあくまでも調整とお遊び。そして、０４年といえば、カブレラの衰えが懸念された年でもある。たしか、オープン戦で、近鉄の山村のシュートを食らって、骨折したんだよな。あれから、カブレラは平均５０本のパワーが、平均３０本そこそこの普通の打者に成り下がったんだ。そして、今目の前にいるカブレラは、５０本平均のカブレラだ。つあり、オレは、初めて、全盛期のカブレラと対峙しているんだ……。全盛期のカブレラがこれほどまでだとは、正直、想定外。だが、こっちも全盛期の平松さんに、全盛期のオレの頭脳で対抗してるんだ……」

　と谷繁は思考を一時停止して、こっちの方を見る。いわゆるカメラ目線だ。そのカメラは、どこの局が設置しているわけではない。小説内のカメラ、つまり、読者にむけて、谷繁はものを言う。

「って、全盛期のオレの頭脳って、サインが覚えられずパンパースとか、某マンガでアホキャラにされていた頃のオレだと思っているだろ？　まあその時のオレだけど、アホに見えても、色々と考えていたんだぜ」

　と谷繁は、見えない誰かに向かって、問いかけたあと、カブレラをまた横目でチラチラと観察しなおす。

「出ているオーラもそう思うとなんかちげーよなあ。今のファウルは、三振前のバカ当たりとみることはできん。先制ホームランの予兆と見るべきだ。戦前から圧倒的不利の予想のウチにとって、先取点を取られることは、限りなく敗戦に近づくといってもいい。いけいけもいいけど、大事にいくべきだ……大事にいく、そして、先取点を取られないたったひとつの確実な方法は……これしかーねな」

　カブレラに標的を定めていた谷繁ズアイは、キリキリと標準を変更。ピントを合わせた先には、カブレラに負けないほどの大きな顔の清原がいた。

「カブレラを歩かせて、清原さんと勝負。清原さんは、野球に少し

でも興味のある者なら、常識中の常識の弱点を持っている。内角に弱い。そして、平松さんは、その内角攻めを得意とする投手。オレと同期の川崎は、ヤクルト時代、シュート中心に巨人に入ったばかりの清原さんを攻め立て、ほとんどヒットを打たれない対戦成績を残した。巨人時代初期の清原さんが犯罪者扱いされた一因には、川崎が清原さんの前に立ちはだかったこともあるだろう。それだけ、清原さんは内角攻めに弱いんだ。長い現役生活、克服しようと工夫を試みたが、ついぞ適当な対処法は発見できずに、バッテリーを脅して内角攻めをさせないっていう窮地の一手を持ち出さなければならないほどだった。だが、上下関係に厳格な清原さんが、名球会の大先輩平松さんに強く出れるわけがない。つまり、清原さんは内角攻めを受け入れざるを得ない。内角攻めに汲々とする清原さんは、カブレラをより打ちとりやすのは明白だ」

谷繁は、カブレラ敬遠、清原勝負を思い立つ。だが、初回から、しかも二死をとって、走者はなし。さらに、ストライクをひとつとって有利な立場からの敬遠は、明らかにセオリーの範疇外だ。そして、清原は4番の勘から、このイニングは三者凡退に終わり、打席が回ってこないと予感している。

「カブちゃん、振り過ぎや。三振前のバカ当たりやで」

その清原の勘にも反する谷繁の策。敬遠すれば、清原の勘を覆すだけでなく、清原のプライドをざっくりと傷つけることになる。

「でも、清原さんは、前の打者が敬遠されると燃えるんだよな。松井を敬遠して清原さんと勝負したことも星の数ほどあるけど、けっこう打たている印象だ。清原さんのプライドを刺激せずに、カブレラを遠ざける方法ねえ……」

谷繁の暗中模索が続くなか、カブレラが放った打球のボールの行方はどうしたのだろう。

西武ドームの吹き抜けを抜けて、ボールは西武ドームの左翼側外野通路をテンテンと転がっている。

「こんなとこまで飛ばしたのは、誰や？　とんでもないパワーやな

？　うん、この音楽、この不可思議な歌詞。なにがお祭り気分や」

コテコテな関西弁の男が、そのボールをそっと拾いあげる。

「カブレラを歩かせるのは悪くない策だ。本気を出したカブレラの怖さはオレがよく知っている。０４年のシリーズ最終戦、ここで打たれればほぼ中日の負けの場面で、満を持して投入した切り札山井から打った一発なんて、そのいい例だ。落合さんが４番らしい４番はカブレラだけと言い切るのも痛いほどわかる。それほど、１００％のカブレラが醸しだす威圧感たるや。しかも、今のカブレラは手首をやる前のカブレラだぜ。スーパー４番打者の前にウルトラをつけたくなるほどの打者。そのカブレラを遠ざけるのも、当然の策だが、問題は清原さんだ。清原さんは、恐らく、いや間違いないレベルで平松さんのシュートを打ちきれないだろう。確実に打たれる打者の後ろにほぼ確実に打たれない打者がいるならば、捕手の選択する戦略はただひとつなんだけど……。清原さんも工夫をするだろう、バットを極端に短く持って、バットを捌きやすくしたり、シュートをファウルで逃げて、ひたすら得意の外角を待ち続ける我慢の一手が、まともな策だとしたら、清原さんは裏のカードも切ってくるだろう、極端にベース近くに立って、死球上等、当てれるもんなら当ててみなと、シュートを投げられなくする手や、それこそ、パワーハラスメントで、後輩のオレを脅し、真ん中から外を投げるようにけしかけるかもしれない。だが、清原さんの表の工夫を打ち砕くほど平松さんのシュートは史上最高クラスだし、清原さんの脅しに涼しい顔で対応できる、キャリアと度胸がオレには備わっている。清原さんの策は問題ないが、問題があるとすれば、清原さんへの回し方だ。あからさまな敬遠なら、清原さんをいたずらに刺激する。本気のカブレラが恐怖に満ちてると同様に、燃えた清原さんほど怖いものはないんだ……」

谷繁はミットを外角に構えた。ついに右打者の外角の封印を解くのか、それとも、カブレラ敬遠のための外角体よせなのか。立ち上

がらずとも、外角外れて大きく構えるのは、明らかにそれとわかる敬遠。清原のプライドをたぎらせる燃料になりやしないか。

平松は、まだ谷繁を全面的に信用している。明らかなボール球の要求に、心中不満げながら、谷繁の要求通りピタリ、ストレートを投げ込む。

球速１４６キロのボール球。谷繁はうんうんとうなづきながら平松に返球する。

そして、間髪入れずに、横目でカブレラをギョロリ。チェックするのは、カブレラのスタンス。中日で学んだ野球……ではなく、これは森横浜時代に培った観察眼だ。一球ごとに打者の変化を逐一観察し、それを配球に最大限に生かすのは、谷繁が苦手な森が口を酸っぱくした教えだ。森がいやで、谷繁は新天地を中日に求めたのだが、嫌いな森の教えを役立てるのは、さすが谷繁、猪口才なしだ。だが、口うるさい上がいない谷繁にとって、パラダイスのはずだった中日は、ハワイに隠居している森を影のアドバイザーとする監督の落合をはじめ、森繁、辻、笘篠兄と天敵森の門下生に溢れかえって、谷繁が横着なプレースタイルに戻りやしないかチェックの目を光らせているのだから皮肉なものだ。

「一歩前に出てる。しめた」

谷繁が特にチェックするのは、カブレラの足元の位置。今の外角のボール球でカブレラは、一歩前に出たわけだ。

「初球のシュートをバカ当たりして、次は外角。対角線のセオリーといえばセオリーだが、カブレラはそう感じていない。今のボール球をオレたち横浜バッテリーは、もう怖くてシュートを投げられないと感じ取ったはずだ。だから、外角勝負に対応するために、一歩前に出た……だげどな、この一歩じゃ、オレの作戦には不十分なんだよ。カブレラはあらかじめ、シュートに対応するため。いつもより、一歩後ろに立っている。だから、一歩前に出ても、それは元のスタンスに戻ったにすぎないんだ。一歩前に出すためには……」

谷繁はまた体ごと外角に寄った。平松は、連続のボール球の要求

に、今度は不満を顔に表したが、すぐに無表情に戻り、谷繁をただ信じて、ミットどおりのコースに投げ込んだ。

１４３キロのストレート。前のボールより、３キロ減なのは、連続のボール球に平松の心と体が調和しなかったからだろう。

谷繁はまたすぐさま、カブレラのスタントを注視した。

「よっしゃ、また前に一歩出た。これだよ、この足の位置だよ。オレが求めてたカブちゃんのスタンスは。この足元こそ、清原さんを刺激せず、カブレラを一塁にいかせるたったひとつの方法だ。たぶん、勝負を避け気味と気づいたカブレラは、ボール球でも打とうと前に出たんだろ」

連続の、それも明らかなボール球。考えられるのは、座ったままの敬遠だ。このままボール球を外角に連続で投げさせて、カブレラを歩かせると誰でも予見できる配球。

だが、誰でも予見できるのなら、４番に座って３０年。そして、３番松井、４番清原の時代から前の打者を勝負を避けられて、勝負されることに慣れている清原は、

「あん？　ちょい待てや。谷繁のとっちゃん坊や！　カブレラを敬遠して、オレと勝負するつもりか？　アホか、ボケ、カスが！　ちんぽついとんのか？　いまだに、オシメつkれるんか？」

と、当然ながら、敬遠の匂いを嗅ぎとり、横浜にとって、不利益しかない、燃えたぎる清原につながる燃料をぶち込むになりかねない。

「ふへへへ……。清原さんも感づいているな」

谷繁は、左目で、カブレラの状態、そして、右目で清原の顔色を伺う忙しさ。

「だけど、清原さん、その燃えたぎりそうな闘志は無駄になりますよ。なぜなら、カブレラは、清原さんのプライドを刺激する間もなく、一塁に歩くんだから。さらに、平松さんに勝負を逃げたと汚名を着せることもなく、すべてが丸く収まる方法がな」

谷繁は、一転、体を真ん中に持って行き、ただミットは、カブレ

ラに悟られないように、内角に持っていく。
「平松さんは、シュートで勝負できて納得、カブレラは緻密な配球に感服しつつ一塁に、そして、清原さんは、燃えたぎりそうな闘志がふっと消え去り打席に立つんだ」
平松は、内角にギリギリにシュートを投げ込む。
「これがたったひとつの方法！　デッドボール作戦！」
なるほど、谷繁の作戦の意図は以下のとおり。カブレラを前に出したのは、デッドボールを当たりやすくするため。外角二球は、内角勝負のための慎重なエサ巻きで、デッドボールをわざと当てたと思わないカブレラはしぶしぶ一塁に歩く。そして、清原も配球の上のやむえない死球と見切り、カブレラ敬遠、清原勝負を選んだわけでなく、カブレラと全力で勝負した結果、自分に打席が回ってくると思うから、これも余計な闘志はたぎらない。
さらに平松は、四球で歩かせたなら心中複雑になるが、得意のシュートでの死球なら、納得するというわけだ。
まさに高卒すぐに一軍の一線にいる谷繁ならではの用意周到な作戦であるが、集中力がたぎるカブレラは、谷繁の２０年の蓄積よりも上に行く。
「はああ！　おいちょっと待てよ！　カブレラ！」
谷繁の絶叫のワケは、カブレラが、二歩下がったのだ。つまり、カブレラは、元から谷繁が内角で勝負することを見切っていたのだ。
二歩下がったカブレラには、デッドボールになるボールもストライクゾーンと化す。
カミソリシュートに負けず振りきったカブレラのバットからまた弾丸のような打球が飛んでいく。
「規格外！　規格外すぎるぞ、この男は！」
谷繁の一球の間に二回目の絶叫をＢＧＭにしつつ、カブレラの打球はセンター方向に飛んでいく。
そして、初球のカブレラの特大ファールボールを拾い上げたこて

こての関西弁の男の正体とは。
「あれ、佐伯じゃねーか」
「ほんとだ、佐伯だ！　佐伯だ！」
有名人を見つけたと、子供が駆け寄ってくるが、この男は、他人のガキにも容赦無い。
「おい、お前ら、失礼やろ、佐伯やなくて、佐伯さんやろ！　それにそのカッコはなんや。シャツはズボンに入れろや、みっとない！」
キャラに似合わず、礼儀にうるさい佐伯貴弘であった。

横浜の戦力は各箇所に穴だらけ！？

清原は長年培った４番の勘と、そして、松井や秋山など、前の打者が時折自分より打つ打者が占めていたことから、後続の清原との勝負を選ぶ雰囲気を嗅ぎ分けるのにも慣れている。

だから、カブレラに明らかなボールが２つ投げられた時に、初回から、カブレラ敬遠、自分で勝負の屈辱を味わう可能性もひしひしと感じたわけだが、三者凡退で自分に回ってこないとの４番の勘と相反することから、清原は、谷繁の作戦を感じ取っていた。

「カブレラは怖い打者や。だが、その後ろにいるのは、さらに怖い打者や。谷繁は一流の捕手、それがわからんわけがない。だから、カブレラ敬遠と見せかけての、カブレラ勝負は、分かりきった策やったんや。カブレラもそうやろ。明らかなボール球は、慎重な内角攻めの布石と読み切っていたから、投球と同時に後ろに下がり、あれだけのスイングができたわけや」

清原は、自分に対する評価をやや過大評価気味に値踏みしてるのだ。

カブレラをわざわざ歩かせて、より危険な自分との勝負を選ぶわけがないとの思い込みから、つなげた綱渡りな発想である。

谷繁は、内角攻めの布石での連続のボール球ではなく、勝負にいった上の仕方なしの死球と見せかけるための配球であったし、カブレラも内角攻めを読みきったわけでなく、本気を出し切ったカブレラの集中力は、どんなボールも打ち返せるだけなのだ。

投球と同時にスタンスを後ろに下げて打った打球が、飛距離が出るはずがない。ましてや、一番深いバックスクリーンに飛び込むわけはない。

だが、それらの価値観は、ごく普通の打者に対する評価で、全盛期の１２０％集中したカブレラは、不可能を可能にするのだ。

誰もいないバックスクリーンに向かって、ぐんぐんと伸びていく

打球。打球の凄まじさに、谷繁は口をあんぐりとし、平松は後ろに向く気力すらない。

だが、清原はそれでも、４番の勘を信じきっている。

「オレの打席は次の回の先頭か」

カブレラの打球に伸びろ、伸びろとエールを送るまでなく、清原はくるりと振り返り、バットをグラブに置き換えようとしている。

「バットの根っこや、根っこ。いくらカブレラでも、あれで入るわけがない」

との判断を清原は下したわけだが、確かに平松のシュートは、カブレラのバットの根っこに食い込んでいたのだ。

谷繁はもともと、カブレラに当てるためにコースとシュートの曲がり幅を要求したのだから、平松はサインどおりの曲がり幅の大きなシュートを投げたのだ。

だから、カブレラの想像以上に食い込んだシュートは、バットの根っこにしか当たらなかったわけであるが、それでもカブレラのパワーはぶっ放す。

清原が平凡な外野フライと見切っても、打球はぐんぐんと伸びている。

「いけえ～」

立ち上がって声援を送るベンチウォーマーの中島の姿に、見切ったはずの清原は、またくるりと振り返る。

「ウソや。入るわけあらへん」

清原も呆れるほどのカブレラの打球は、ぐんぐんと伸びるのだが、横浜のセンターは誰であろうか。

「ううんん」

横浜ベンチの大矢は思わず、唸りを上げた。自分が選んだセンターに間違いがあったと、いまさら後悔したのだろうか。

横浜のセンターは、打席に入らなければ超一流選手といわれた屋鋪要でも、９０年代後半のセ・リーグ外野守備御三家の新庄、飯田、緒方孝市に次ぐ４番目の守備力の評価もあった波留敏夫でも、ライ

ト、レフトの印象も強いが、素質的には、センターも十分こなせる多村仁でもなく、代打要員に成り下がった今現在でも、外野守備力ならチームナンバーワンの評もある金城龍彦のいずれでもない。（３４歳の代打要員より守備力が光る選手がいない横浜はさすが横浜ともいえる）

協調路線の大矢が選んだセンターは近藤和彦なのだ。盗塁は技術と度胸と思い切りよさがあればある程度の数はこなせても、外野の守備力のほとんどは、素の走力による。鈍足と馬鹿にされながら盗塁王を獲得した近藤和彦は、はたして外野守備も一流なのだろうか。

外野守備の足と肩の素質に次ぐ必須能力である、打球勘とポジショニングの良さを備えているだろうか。

打球は左中間方向に切れていく。左中間といえば、レフトも打球を追いかける。レフトといえば、

「あちゃあ～　尚典だよ」

大矢が監督就任したときから決めていた３番レフト鈴木尚典だ。近藤和彦と違い、足自体は俊足の範疇。だが、近藤和彦と決定的に違うのは、打球判断能力のなさ、捕球も今ひとつ上手くなく、ついでに中学時代の故障から手術を経験しているため肩は極めて弱い。本塁どころか、中継の遊撃に返球するのがやっとで、その返球も、バウントの数が５本指で収まらないほどだ。

鈍足の近藤和彦と守備力皆無の鈴木尚典の左中間コンビはスリル満点。

「だからあれだけオレはいったんだ。守備力を固めろと、近藤和さんを起用するならレフトで、鈴木尚典を起用するならＤＨがベストだと！」

近藤昭仁ヘッドが今更ながらに指摘するが、打球はすでに落下地点に入りかかっている。

清原の予想どおり、バットの根っこに当たった打球は、さすがのカブレラのパワーでもスタンドにぶち込むのは不可能だった。

時代がまったく異なる二人の左中間コンビには、コミュニケーシ

ョンにも大きな問題があった。
「オレに任せろ」
と近藤和彦が声をかけても、打球をオロオロと追いかけるに精一杯の鈴木尚典は指示が出ていることにも気づきやしない。
近藤和彦は鈍足をカバーするように、的確な打球判断を備えていて、落下地点をほぼ完璧に予想していたのだが、そこに鈴木尚典がいることまでは、ナビゲート不可能だったのだ。
「危ない！」
ショートの石井琢朗が声を荒げる。落下地点でオーライオーライと構える近藤和彦に鈴木尚典が突進しているからだ。
このままでは正面衝突は避けられない。近藤和彦は落下地点に入っているため、避けることは守備放棄を意味し、鈴木尚典は走りだして止まれるほど起用じゃないのだ。
近藤和彦のグラブにボールが落ちてくると同時に、鈴木尚典はグラブを突き出しながら、頭から近藤和彦の中腹部に突っ込んでいった。
落とせば、インプレーとカブレラはいつもの怠慢走塁癖はなんのその、これまた走り出したら速い足を飛ばして、貪欲に次の塁を狙っている。
落とせば大ピンチ、捕れば三者凡退。だが落としても取っても正面衝突の事実は変わらない。ひとつのナウトと引き換えに二人の主力選手を失いかねない。

戦力外のお礼参り

「佐伯さん、朗報です！」
「なんや、大西。尾花が首にでもなったか？」
子供と戯れながら礼儀指導する佐伯に、子分として？　来場していた大西から一声かかる。
「いや、尾花はまだ首になっていないですが、どっちみち、住生活グループに身売りしたら、旧球団の最下位監督なぞ虫の息ですが、鈴木尚典さんと近藤和彦さんが正面からぶつかったようです！」
「なんやと、どっちも左打ちの外野手やないか！　いきなり佐伯さまの出番か？　といいたいところやが、ベンチ入り登録されてへんオレの出番は、次戦以降になるが」
ベンチに漏れた佐伯ら不満分子の選手たちは、なにを思ってたか、連れ立って、西武ドームに来場しているのだ。
長年コツコツと積んだ実績と９８年の日本一メンバーの強みとベンチ要員でも代打、ムードメイカーと使い道が豊富な佐伯は当選確実と思われていたが、意外と豊富な横浜野手陣に佐伯の入り込める隙はなかったのだ。
「悪い佐伯。お前を入れたかったが、どうしても、ベンチに空きが見つからなかった」
と、横須賀のベイスターズ練習場で一人残って熱心に練習する佐伯に、大矢は直に最後通告を下したのだが、佐伯もボーダーライン上にいることは理解していた。選考漏れも仕方なしとさばさばした表情で宣告を受け入れたのだが、問題はその後の処理だ。
佐伯は、ベンチ入りに漏れても、てっきりコーチやなにかで大会に参加できると思い込んでいたのだ。
だが、大矢は、ちょうど佐伯が現実で戦力外を食らったときのようなまずすぎる対応をしてしまったのだ。
「それで、大矢監督。僕は、どんな形でチームに貢献すればいいで

しょうか？　コーチですか？　それともムードメイカーとして、選手登録なしでのベンチ入り。あるいは、達者な口と豊富な経験をいかしての解説者と。男・佐伯貴弘、なんでもお受けいたします」

「いや、佐伯。それがだな。コーチとして残す考えもないことと、解説者など外部での経験を積んでも、将来的に横浜のユニホームを着られる保証はないことなどを合わせて通告しなきゃいけないんだよ。しかもだな、解説のあてもいろいろ探したんだが、解説経験ありで、余った選手を色々使わなきゃならなくてな、佐伯の枠を確保できなかったんだよ」

「って、大矢監督。それ、実際の戦力外になったときと同じ対応やないですか！　しかも、解説の道もないって！」

これで怒り狂った佐伯は、練習を斬り上げて、怒り心頭のままベイスターズ練習場を後にしたのだ。

そして、佐伯は、同じように、選手、職員、解説、コーチなどなんの枠も与えられなかった横浜出身を集めて、こうして西武ドームに乗り込んできたのだ。

先ほど登場済みの大西宏明は、横浜、オリックス、近鉄のいずれも球団から箸にも棒にもかからず。日本ハム時代にレギュラー経験ありも、格下の鶴岡にベンチ入りを奪われた野口寿浩。

里崎と二大看板といわれながら、捕手層の薄いロッテからも見向きもされなかった橋本将。第４の外野手、貴重な控えていどでは大会に及びではない森笠繁。

サイドからの剛球を武器に、あの津田と並ぶ年間２８セーブを記録した経験ありながら、まったく忘れ去られた存在の小山田保裕。

２０本塁打、最多犠打の得意なつなぎ役も、大矢体制では軽んじられる小池正晃。

イケメンゴジラとあだ名されて、近未来の横浜４番は間違いなしと思われたが、その近未来は、近未来通信を意味するものだったのか、古木克明。

そして、本来、こんなどクサレ軍団に属せず、華やかなグラウン

ド上にいるべきだった吉村裕基。現に、この大会の開催が決まった０８年のオフの時点、吉村は３４本塁打を放ち、順調に成績を重ねれば、７番ライトスタメンは、ポンセではなく、この男のモノのはずだったのだ。

合計９人の佐伯軍団は、反尾花、反大会の首脳陣体制の元、ここに結集したのだ。選手用通路から、堂々と大矢に抗議を考えてた佐伯軍団だったが、大会本部から発行されたＩＤカードなしで入場できないと突き返された佐伯軍団は、怒りをより蓄積されて、今度は、正真正銘、堂々と？　入場券を購入しての西武ドーム侵入とあいなったのだ。

はたして、この佐伯軍団の目的はなんだろうか？　９人の険しい顔つきを見ると、穏便に済まされる事項ではとてもなさそうであるが。

「なんやと、大西！」

佐伯は思わず、吹き抜けの通路から、グラウンド上を見下ろす。近藤和彦と鈴木尚典の追突具合を見るためだ。

近藤和彦、鈴木尚典ともども、グラウンド上にぐったりとしている。異常ありと、他に守備についたナインは駆け寄るが、ここでも村田はダラダラと足取り重い。

落とせば、すでにダイヤモンド一周しているカブレラのランニングホームランか、それとも、エラーに判定されるとか、ワンヒット、ワンエラーか、いずれにしても、西武に先制点が記録される。

「審判！」

近藤和彦は、グラブを高々と突き上げ、捕球か落球か確かめにきた二塁塁審にアピールをしている。

近藤和彦は、鈴木尚典の突撃に負けず、ボールを落としていなかったのだ。近藤和彦の根性に大歓声が巻き起こるが、まだ問題は山積みだ。

鈴木尚典と近藤和彦の状態が気になるところだ。近藤和彦は、鈴木尚典の頭突きを食らった胸を抑えこんで息を切らしているし、鈴

木尚典は、衝突で脳震盪を起こしているのか、寝転がっているまま、頭をグラブで抑えている。

横浜のファンやナインだけではなく、西武ナインやファンも二人の無事を祈る中、佐伯軍団の親分格佐伯は、

「よっしゃ、尚典、ようやった！　休んどけ！　休んどけ、この大会終わるまでじっくりな！　やっぱり、横浜のレフトは佐伯貴弘さまが似合うんや！」

プロの選手にとって、最大のライバルは戦う相手ではなく、ポジションを争う味方なのだ。味方のミスや不調、故障を願う佐伯は、プロ選手としては間違ってはいない。

ポジション争いの活躍や無事を祈るのは、ただの偽善というものだ。

ベンチ裏から、大会臨時トレーナーとして雇われ中の大沼幸二や、小野寺力、帆足和幸、藤田太陽、長田秀一郎の５人の現役投手陣が、担架を担ぎながら、緊急出動するが、まず、近藤和彦は、手をあげて、それを拒否し、鈴木尚典も近藤和彦に続くように、グラブを盛んに振って、無事を、医務部隊と球場中に報告する。

二人の安否の無事確認に球場中に拍手と喝采が湧き上がるが、一部、温度が低いままなのは、レフトの吹き抜けの佐伯軍団だ。

「拍手はいらんやろ。プレーを見てへんが、どうせ、尚典のドヘタが、打球判断できずに、ムリに突っ込んだやろ？　拍手はいらん、逆にブーイングするべきや」

プレー見ずとも、ズバリと本質を突く佐伯は、さすが横浜ベイスターズ一筋１８年だ。

横浜ベイスターズは、今シーズン限りは確実の状況で、つまり横浜一期生でただ一人の生き残りの佐伯は、横浜ベイスターズの、良いことも、悪いことも、悪いことも、悪いことも、つらいことも、つらすぎることも、ややマイナスな事象が多いが、すべてを体験した生き字引である。投手には、番長・三浦がいるが、野手では、佐伯ただ一人。

その佐伯が、ベンチから戦力外通告されるのだから、とんでもない行動に打って出ても理解できないことはない。

「佐伯さまをのけものにするのは、どんだけ恐ろしいことか、目にもの見せたるわ」

１０・１９

野村から譲り受けたというよりも、野村が西武球場のロッカーに置きっぱなしにしていった特大の頭用の特大ヘルメットを成り行き上、長年の愛用品になってしまった清原は、そっとそのヘルメットをベンチに置き、攻撃態勢から守備態勢に切り替えを行う。

打球の行方を見守っていた他のナインと違い、清原は４番の勘から、あっさりと攻撃に見切りをつけていたために、帽子をかぶり、ファーストミットを装着するのが、早い、早い。

誰よりも早くグラウンドに飛び出す清原は、長年こびりついた怠惰な清原のイメージとは、１８０度異なる、野球小僧そのものの純粋さを醸し出している。いまだ、鈴木尚典と近藤和彦の安否を気遣う横浜ナインとは、当然、グラウンド上で鉢合わせとなり、心配そうに行方を見守る同じ一塁手の松原は、名球会仲間の気軽さからか、敵味方を一時忘れて、清原と野球談義だ。

「おい、キヨ。お前が無冠の帝王なのは、有名すぎるが、元祖はこの私だぞ」

「そうですよね、よう聞きましたよ。僕の前に、松原さんがそういわれてたって。僕の師匠の土井正博さんも、そういわれてたそうですけど、なんとか、晩年に本塁打王を獲得し、その汚名を晴らすことができたそうですが」

「といっても、キヨ。お前は、新人王や、最高出塁率、ベストナイン、ゴールデングラブといった、打撃主要三部門以外のタイトルなら獲得経験あるだろ？」

「いやまあ一応、取らせていただきましたが……」

「私は、新人王はもちろん、ベストナインやゴールデングラブ、当時はダイヤモンドグラブといってたがな、それらの賞さえ獲得経験ないんだよ」

「マジですか?！　松原さんっていうと、タコ足捕球の守備力の高

さで有名でしょ？　ダイヤモンドグラブもないんですか？」

「王さんだよ、王さん。王さんが私が取るべき賞をすべてかっさらっていったんだ」

「王さん！　ああ、そうか、時代がちょうど重なりますよね。同じ時代にスーパースターがいると、同じポジションの選手は、どうしても恵まれない結果になりますよね。僕もそうです。僕もスーパースターですから、同じポジションだった石井浩郎さんや、ＰＬの後輩の片岡は、日陰の人生を歩まいかん、かわいそうな立場でしたよ。片岡は、落合さんの入団にはじき出されて、三塁いって、ようやく日の目を見ましたけど」

※清原と同じ一塁手だった、石井浩郎は、清原に競い勝ち、９３年と９４年に連続ベストナインを獲得。さらに、清原は後輩の片岡にも競い負け、９６年の一塁手ベストナインとゴールデングラブをまんまとさらわれている。つまりは、清原は相当、吹きまくっているということです。

無冠の帝王同士の一時、野球談義の輪が溶けるのは、鈴木尚典と近藤和彦の無事が確認されたときだった。

松原は急いで、ベンチに戻り、攻撃に備えて身支度をする。６番に座る松原は、４番から始まる二回の攻撃に必ず打席が回ってくるから、その準備も入念だ。

そして、４番はあの男だ。

「ようやく、オレの出番だぜ！　ありがとう、大矢監督、男・村田を４番に置く最善の決断をくだしてくれて。いや、礼をいうのは、大矢監督の方だな。なんせ、４番、男・村田の献身的な働きで、大矢監督は名将の冠をいただくことになるんだから……」

ようやくの出番に嬉しくてたまらなそうな村田を見て、清原は、今一度、スコアボードの横浜の打順を確認する。

「村田のへんちくりんのアホが、にたにたしてたと思うたが、なんや、ベイの４番は、あのへんちくりんなんか！」

いまさらながらに清原は、４番村田に驚く。

「あのちびが４番って、横浜の人材不足も甚だやな～。他におらんのか？　いやおるやろ、ローズや、松原さんや、オレと共に、新人本塁打記録を持っている桑田さんやら、なんなら、オバQ田代さんでもええし、タイロン・ウッズや、ポンセもおるやろ。なんで、村田なんや！　オレと村田じゃ、４番対決と盛り上げるのも難しいやろ。残した実績、風格、人気、知名度、大舞台の強さ、スター性、おまけにマスクの良さがまるで違うやないか」

清原は、村田を完全に下に見るが、成績を今一度、ひもといてみると、

シーズン最高打率　清原　．３０７　村田　．３２３

あれあれ？　キヨマーの惨敗ですねえ。どうしたことか、荒っぽいイメージのある村田に打率で完敗だとは！　そうか、出塁率だ。出塁率は村田に完勝でしょう。つなぐ打撃の自制心が求められる強豪球団を渡り歩いた、だんじりファイターが、弱小球団一筋、勝手な打撃ができる村田にシーズン最高出塁率で負けるわけがない。

シーズン最高出塁率　清原　．４５４　村田　．３９７

ほら！　みたことか！　やはりなんとか後続につなようとする意識は、所沢の種馬が村田を圧倒しているじゃないか！　出塁率４割を何度も記録する平成の無冠の帝王に対し、村田はゼロ。出塁能力は、ＫＫコンビの後ろのＫの方の圧勝！

ではではシーズン最多本塁打数は？　数少ない通算５００本塁打達成者の球界の番長のこれも圧勝ではないでしょうか？

清原　３７本　村田　４６本

う～ん、なんと、村田が、同じ強打の一塁手のブーマーにあやかってキヨマーに９本の差をつけて圧倒。やはり、プレッシャーのない消化試合の多い村田が有利か？　それとも、純粋に試合数の問題か？　全盛期が１３０試合シーズンだったスーパーカップのＣＭタレントと、１４０試合以上の試合数確保されている村田との差だろうか。

ならば率で比較すればいい。長打力を比較するなら、長打率が適

当だ。シーズン最高長打率を比べてみよう。

清原　．６１５　村田　．６６５

なんとまあ、村田が、奴を退寮させることは、人様に迷惑を振りまくようなものと根本管理部長に名指しされたを、５分も凌駕しているのだ。

いやはや、村田の素晴らしさを再確認するための記録比べになりかけているが、４番に一番必要とされるのは勝負強さである。４打数１安打でも、それが決勝打ならば、４番は最高の仕事をしたとみなされるものだ。では、シーズン最多打点を比べてみよう。

清原　１２１打点　村田　１１４打点

やはり、天性の勝負強さを持つ、ファミスタではきよすくとの偽名が使われていたの圧勝だ。４６本塁打で、最高１１４打点の村田は、２２本塁打、３７打点を記録した古木とまではいかないが、著しく、打点と本塁打のバランスが欠けているではないか。

「もっと見栄えのええのを、大矢監督も起用しやがれよ」

と、覚せい剤を打たずに、ホームランを打とうが、村田を鼻で笑うのも納得の、格と実績の違いではないか。

嘲りの笑いを清原から受けていると知らず、村田は頭の中は、畑の攻略法で溢れている。

「まったく知らない投手でも、３打者も配球のボールの傾向を見れば十分過ぎるぜ。ストレートも変化球もどっちでもこいだ」

と自信にあふれる村田の気合を削ぐような采配を、マジシャン三原は見せようとする。

ショート古城しかいねーのかよ

「スライダー、フォークにカーブ。ストレートは１４０中盤か。自分は、速いまっすぐに振り遅れるって印象あるだろうけど、実際は違う。一見m差し込まれてるようで、押しこむ力があるんだ。あのストレートなら打てる確信はできた。センター返しを頭に入れておけば、タイミングが遅れても、ライトにぶち込めるぜ。西武ドームは、そう右中間に膨らみがある球場じゃない。横浜スタジアムより広いとはいえ、押し込める大きさだぜ」

村田は、畑攻略に自信を持っているようだ。ストレートの対処法に頭の中が一杯なのは、裏返せば、フォーク、スライダーは、悩むほどのボールではないと見切ったのだろう。

村田は、初回の1～3番の畑の投球を見て、畑の攻略法はひねり出すことができたかもしれない。さすが、ただ振り回しているようで、相手の虚をつき、時に相手の力を利するクレーバーな打者の村田らしい洞察力で、畑をあっという間に丸裸にしたのだ。

だが、村田は畑を丸裸にできても、敵将・三原のことはなにも分かっていないのだ。村田が打てると確信すれば、三原は村田を思考を先回りしている。打てる確信がある村田に、三原は思考の勝負を挑まない。なぜなら、三原は、村田と畑を勝負させない選択肢がとれるからだ。

三原の作戦は、横浜首脳陣も予想済みだった。監督の大矢といい、ヘッドの近藤昭仁といい、言動、采配に初回から切れ味がまるでないが、こと、三原が繰り出すマジックへの対処は取れるのだ。大矢も、近藤昭仁も、三原監督に見出されて、プロ野球のレギュラーを確保しただけに、采配が読めても不思議ではない。

「大矢。覚悟してるよな」

「当然ですよ、近藤ヘッド」

「誰でくるとおもう？」

なんと、ヘッドの近藤昭仁は、畑の続投か、それとも投手交代をするかを議論のテーブルにあげるでなく、三原なら投手交代は当然、問題はすでに、誰を出すのかに移っているのだ。

「右投手でしょうね」

「右だろう。というか、左投手でベンチ入りしているのは、ワンポイント用の永射だけだ。工藤は、第二戦以降の先発なのか、ベンチどころか、予備登録（延長１３回以降に選手を＋できる大会特別規則）にも入ってない」

西武は、打者も右打者偏重なら、投手も左よりも、右投手なのだ。西鉄時代から振り返ると、左の主力投手といえば、先発の畑、ノーヒッターを記録した井上善雄。福岡時代では、この二人の名前が浮かぶだけだ。

西武に移ってもその現象は変わらず。前出の永射、工藤に、後に中日、ダイエーと渡り歩いた杉本正、１９９３、１９９４年の森西武末期に、潮崎、鹿取とともに、サンフレッチェ、トリプルストッパーと呼ばれた杉山賢人。

そして、近年では、ただのシンカーをムネオボールと名付けて話題を呼んだ三井浩二に、０３年の日本シリーズのウィリアムス、吉野の働きを見て、サイドハンドに変身した星野智樹、そして、出てきた当時は、西口、松坂に次いで３番手、そして、松坂が旅立ち、西口が衰えた今も、涌井、岸に続いて３番手の、永遠の３番手の帆足和幸の名前が浮かぶくらいだ。

帆足、三井、杉本、杉山、星野、井上善は、検討及ばず、ベンチ入りは果たせず、他に石井一久やグラマンの現役組もいるが、石井一久は当然、ヤクルトからの出場で、グラマンはここ二年の不振で選考から漏れたのだ。

つまり、西武の左腕は、サプライズ枠の先発畑に永射、そして工藤のみなのだ。あとは、右の好投手に投手枠は埋め尽くされている。

「東尾か」

「東尾はないでしょ。まだ二回ですよ」

「稲尾か」
「稲尾さんもないでしょ。まだ二回ですよ」
「豊田清はどうだ？」
「豊田は抑えでしょ？　まだ二回ですよ」
「おい、大矢。このままベンチ入りの残り7人の投手にダメ出ししていく気か？」
「いえ、近藤ヘッド。そのつもりはないですが。二回から投げる投手が誰かなんてわかりませんよ。二回から継投策を繰り出すなんて、普通じゃないですから。ウチでそんな継投できませんよ。そんな継投したら、投手に何人の枠を注いでも足りません」
「それでもそうだなあ、大矢」
惜しい、彼らは真実に近づきつつも、真実の周りをバリケードする障壁を取り除けず、その周辺をぐるぐる周り、時に真実の中身をみようと、高い壁を背伸びして覗き込もうとするのだが、バリケードが邪魔して、真実の確認ができないままなのだ。
ただ、彼らは、やはり横浜の首脳陣なのだ。西武ドームのブルペンは、両ベンチ共に、フェンスの横に丸見え状態になっている。つまり、西武側のブルペンを覗き込めば、次に誰が投げるかの検討くらいつくはずなのだが、彼らはうっかり者なのだろう。
最重要なファクターを見逃す、致命的なミスを時折、繰り返すのだ。
西武ドームのブルペンは、二人が同時に投球練習できる仕様になっている。
黒いサングラスに、ごつい体に、ごつい顔に、腕組みする姿はユニフォームを着なければ、怖い人そのもの。現に、私服姿は、柄物のシャツといういかにもその筋の人。
「おい、おめーら、ちゃんと投げねーとブッ殺すぞ」
森繁和ブルペン担当投手コーチ。今や、中日の投手陣のまとめ役のイメージが強いが、元々は西武ライオンズ第一期生だ。
三原の命を受け、西武のユニフォームに再び、袖を通す。

さすがに強面の森繁でも、東尾や稲尾には強くは出れない。この恐ろしい口調が浴びせれるのは、森繁より若い投手に限られるだろう。

一人は、渡辺久信。

「いわれなくても、気合を入れて投げますよ」

渡辺久信は、現役時代、森繁にコーチングされた経験ありのため、森繁のべらんめぇ口調は慣れたものだ。

聞き流して、びゅんびゅんとキレのいいストレートをブルペン捕手の仲田秀司に投げ込んでいる。

だが、森繁の口調は、慣れていない投手にはきつすぎるのだ。渡辺久信の隣、森繁の言葉をいちいち真に受けて、あからさまなふくれっ面を作るのは、涌井秀章だ。

「いちいちウルセーぞ、このおっさん……」

ぶつぶつと、森繁に、聞こえないように、それとも意外と聞こえるていいように？　つぶやく涌井。おもえば、涌井も森繁も千葉出身。千葉県出身の選手は、長嶋に象徴されるように、おおらかであっけらかんとした選手が多いのだが、この西武の二人の千葉産投手の気質は違う。

だが、森繁も百戦錬磨の投手コーチ。涌井レベルの跳ねっ返りの操縦法は手馴れたものなのだ。

涌井への強い物言いも、涌井を奮い立たせるための計算のうちだろう。

果たして、三原が畑に続きコールする投手は、涌井か、それとも渡辺久信か。２１世紀の新エースか、昭和から平成にかけてのトレンディーエースか。

ショート古城しかいねーのかよ（後書き）

気がつくと一回だけで一月たってた
しかも次の西武の投手誰にしようか
西武は選手層が厚すぎる

ナゴドに漂う冷気

「おい、大矢。西武のブルペン見てみろ」

さすがの一本ネジが抜けている横浜首脳陣でも、まる見えの西武ブルペンの様子は、いつか眼に入る。先に、渡辺久信と涌井が、二人並んで投球練習していることに気がついたのは、近藤ヘッド。ヘッドは、監督の補佐的役割、監督はどうしても、勝利を追求するあまり、ひとつのことに頭をとらわれがちで、視野狭窄になりがちだ。だから、ヘッドは逆に視野を広く持ち、監督に適切な意見をいえる立場でなければならない。

近藤ヘッドは、ヘッドの仕事をきちんとはたしたといえるが、問題はその気づくタイミング。大矢監督よりも監督づらする近藤ヘッドの視野は大矢までとはいかないが、視野を広角に保っているとはいえないだろう。だから、すぐに気づくべき、西武ブルペンの様子が、交代の直前まで目に入らなかったわけだ。

「？　ほんとだ。４１番と１６番……」

「渡辺久信と涌井だな」

「右投手ですか。やはり、我々の予想通りだ」

予想通りと鼻を高くしても、左はワンポイントの永射だけ。打者は、村田、ローズ、松原と右打者が続く状況での左→左のリレーは、いくら三原マジックといえど、ありえませんから。　誰が見てもわかりやすい、ありきたりな投手リレーを予想できたからって、大矢監督、鼻を高くしちゃあいけません。

「で、どっちなんだ？　大矢はどっちだと思う？」

「そうですねえ。渡辺久信も涌井もタフなタイプだ。どっちも先発完投の典型的なタイプです。１イニングのきっちりとしたリレーを形作る必要はない。３イニング、４イニング、たとえ、リリーフに合わせた全力投球でも、それくらい持つスタミナと馬力がある投手ですから」

「だから、解説をやってるんんじゃないんだ。どっちでも取れる逃げ道に逃げこむ必要はない。ボクは、渡辺と涌井のどっちがでてくるかを聞いているんだ」

「そういう近藤ヘッドはどうなんですか」

若干、大矢はキレ気味だ。

「ボクは、涌井だと思うねえ」

「涌井ですか？」

「ああ、三原さんの好きなタイプは涌井のようなタイプだよ。渡辺もいい投手に違いないが、一本調子で制球力に欠ける。まだ試合は序盤だ、是が非でも避けたいのは、一発を浴びること。渡辺といえば、現役時代、一発病の投手として悪名を馳せたのは、大矢もよく知ったことだろう。三原さんは、そういう一か八かの投手を嫌うんだよ。それに対し、涌井は三原さん好みだ。制球力、多彩な投手は、渡辺久信にない強み。なによりも、表情をひとつ変えず、淡々と投げる姿が三原さんが最も重視するエースの条件だ。うちの秋山さんといい、稲尾といい、三原さんが頼った大エースはどっちも能面だろ？」

「なるほどなあ。となると、大事なリリーフ、実質的に第二先発は涌井ってことか。私はてっきり渡辺久信と思ったんですけどねえ。村田はストレートに差し込まれるタイプだから、高目に伸びるストレートのタイプの渡辺久信がいいと、これは監督目線ではなく、捕手目線での予想ですが……」

どうやら、横浜首脳陣の西武二番手予想は、近藤ヘッドの押す涌井でまとまったようだ。

同じ三原チルドレンでも、わずか二年だけ三原采配にふれた大矢よりも、長年、三原采配に付き合った近藤の意見の方が、いかにも真実味はありそうだ。

だが、物事は、過去のデータからすべて推し量ることは不可能だ。

三原の出した結論は、いや、結論に至る経路も、近藤や大矢が予想できる範疇をはるかに超えていたのだ。

西武ベンチの三原がどっかりと座る席の横には、河村久文投手コーチの顔がある。河村といえば、稲尾のひとつ前の西鉄の大エースで、シュートで押す投球術そのままの強気なハートの持ち主。その投球術と強気な投球姿勢は、年の近い稲尾だけでなく、コーチとして指導に関わった東尾や加藤初、そして南海時代の教え子の加藤伸一や藤本修二、投手としては大成できなかったが畠山準にも受け継がれた。

晩年、西鉄時代の同僚仰木に呼ばれてのオリックスコーチ時代も、河村は、０２年防御率一位の技巧派左腕金田や小倉に河村イズムを注入したものだ。

河村の教え子は、概して、シュートを武器に強気な攻めをするのが特徴的。オリックス時代の教え子の小倉は、弱気な性格で、そのサイドからの快速球を生かせずにいたが、河村イズムを投球術にむりやり流し込まれたことで、一躍救援投手として花開いたものだ。

つまり、河村の好みは、シュートを軸にした強気な投手。涌井か、渡辺久信のどちらか、河村好みかといわれれば、それは涌井に違いない。

横浜の先発平松から伝授されたシュートは、涌井の豊富な投球レパートリーのひとつ。シュートも球種のレパートリーにあるが、それは晩年球速が落ちて、試行錯誤のすえに身につけたものにすぎない渡辺久信とは、シュートの熟達度で大いに差をつけている。

当然、河村は、涌井推し。だからといって、三原に押し付けるわけでなく、

「監督。涌井と久信を並んで、投球練習させていますが、ブルペンの森繁和の連絡によると、どうやら、涌井の仕上がりの方がいいみたいですぜ」

と森繁和経由の情報と河村は進言するが、これは河村のウソ。実際、森繁ブルペンコーチの連絡だと、涌井、渡辺久信、甲乙つけがたいほど調子は上々との報告だったのだ。

つまり、河村は小さなウソをついてまでも、自分が好みの涌井を

押したかったのだが、三原の反応は実にそっけないものだったのだ。
「涌井の方が調子は上々か。ふ～ん。まあええな、まあええ。どっちもいい投手と思うとるが、涌井の調子の方がいいのか。ふ～ん」
立ち上がった三原は、ベンチを飛び出て、主審に投手交代を告げに行く。

「は？　投手交代？」
いまさら、三原の行動に驚くのは、打席が回る４番村田だ。先発・畑の攻略法を練っていた村田は拍子抜けだ。
「どういう野球だよ。わけのわからん先発を出したかと思ったら、すぐさま降板て。クソ、これが三原マジックかよ！？」
三原の告げた名前は、村田が聞こえる位置ではない。だが、読心術の心得のない村田も、三原の口の形でどんな名前が告げられたかは、なんとなくわかる。特に最初の一文字の口の動きは見逃さなかったのだ。
「口を大きく横に開いたぞ」
村田も三原の口ぶりを真似してみる。
「”あ”の段か？　あ、か、さ、た、な、は、ま、や、ら、わ……えっと、これに当てはまる西武の投手の名前ってえと……あ……？　か……？　さ……？　た……？　な……？　は……？　なんにも思いつかねー。ま……松坂？　いや待てよ、マツはベンチにも入ってねーはずだ。や……これもいんーえぞ。ら……ってらから始まる日本人なんて、ヤクルトにいた乱橋さんしかねーぞ。ら……らから始まる日本人なんて、ヤクルトにいた羅本さんしかねーぞ。わ……あ！！　これだ、わだ！　西武の”わ”から始まる投手つーと、涌井に渡辺久信さんに、一応、渡辺智男さんもいるけど、涌井か渡辺久信さんのどっちかだ！　すげー情報をオレは得たぞ～」
と村田が喜んでももう遅い。なぜなら、三原は主審に宣告済み。宣告済みならば、もうウグイス嬢に審判経由で投手の名前が届いて

いるからだ。
　それにしたって、涌井か渡辺久信の二択だなんて、まずいベンチワークに定評のある横浜首脳陣だって、すでに気づいている事柄だ。そんな遅れた情報にいまさら歓喜のガッツポーズをするなんて、クレバーなプレースタイル（攻撃面だけは）をモットーにする村田らしくないだろう。
「ライオンズの選手の交代をお伝えします……。ピッチャー畑に替わりまして……渡辺久信。背番号４１」
　西武ドームが大きな歓声に包まれる。渡辺久信の登板を待ちわびたファンの歓喜の声援か、それとも、まさかの先発畑を早々、見切りをつけた三原采配への驚きか。
　それにしても、またしても、横浜首脳陣は三原に裏を書かれたわけであるが、
「涌井じゃないのか！」
「近藤ヘッド、話が違うじゃありませんか！　涌井じゃない、渡辺久信ですよ！」
「なんだ、大矢。おまえのせいだ。お前があやふやな姿勢をとるから、ボクの頭まで鈍ってしまったんだ。よく考えれば、渡辺久信だよ、三原さんなら渡辺久信を出すってのは、ボクはおみとおしだったのに、大矢の他人行儀の解説がボクの頭を狂わせたんだ！」
　としょうもうない内輪もめを繰り返す横浜首脳陣であるが、なにも三原は横浜首脳陣の裏をかいたわけでなもない、なぜなら、三原は、涌井でも、渡辺久信でもどっちを救援に立てても良かったからだ。
「渡辺久信くん、涌井くん、どっちを出しても恥ずかしくない投手。戦力の分厚いライオンズ投手陣の競争を切り抜けたんだ、素晴らしい投手に決まっている。私が、どっちがいいと決めることもない。渡辺久信を選んだのは、気の迷いだ。主審に告げる時に、バックスクリーンの広告に４の数字が見えたんだ。だから背番号４１の渡辺久信にしただけだ」

なんと、今回の三原マジックには、タネも仕掛けもない。ただ成り行きの起用にすぎない。にもかかわらず、横浜首脳陣は、また三原マジックにはぐらかされたと疑心暗鬼になるのだから、三原が持つ魔術師のイメージは、想像以上に、試合展開に大きな影響を与えているのだろうか。

「渡辺久信さんか……」

その投手起用を聞いて、村田は思わず、舌なめずりだ。

「80年生まれのオレが持つ投手渡辺久信のイメージ……ブライアントの4連発の3発目を食らったに象徴されるように、一発病、一本調子、技巧がない、時に荒れることもあるが、カウントが取れる変化球もろくにないため、どうしても直球中心になりがちで絞りやすい……。なんだよ、男・村田を先制弾のヒーローにするために出てきたような投手じゃないか。うへへへ」

伊東は、GGを連れ立って競輪に

「森繁さん。オレっすか？」

自分とは思わずにいた渡辺久信は、驚き顔で自分を指差す。ブルペン担当の森繁も首をさかんにひねる。

「おかしいな、河村さんにナベと涌井の状態連絡したとき、河村さんが明らかに涌井を投げさせたがってるのが伝わってきたから、てっきり涌井だと思ったんだよ。だから、涌井の尻を何度も蹴っ飛ばして、気合を注入したところなのに」

しりを膝蹴りで三度も蹴られた涌井はすっかり、腹を立てて顔が真っ赤だ。森繁流のスパルタ指導法は、渡辺久信の新人類世代までは、なんとか通じても、涌井のような超がつく新人類世代というか、ゆとり世代のトップランナーには逆効果もいいところ。

星野ジャパンの熱血指導が、涌井、ダルビッシュを筆頭とする若手軍団には総スカンだったのは記憶に新しいところだ。

ふくれっ面が、もうはちきれるレベルに達している涌井は、仏頂面で、成り行きを見守っている。

「おい、ワク。紙コップにタオルだ」

リリーフが出撃するのは、一連の儀式が存在する。それはたいてい、コップ一杯の水、あるいはスポーツ飲料を一飲み、そして、投球練習で噴き出る汗を拭きとって

出撃態勢とするのだが、そのコップとタオルを用意するのは、リリーフ陣の最年少投手と相場は決まっている。

涌井は、ライオンズの歴史のもっとも新しいエースだ。つまり、涌井は、他のどの投手より年下であり、小間使いにされるのは宿命であるのだが、なにせ涌井だ。松坂のような特別扱いとはいかず、高卒一年目から先発一本の特別な存在であることはかわらず、下っ端としての生き方を最小限度の体験しかしていないのだ。

「……」

だから、涌井は、現監督の渡辺久信にも不機嫌な表情は変えず、どうぞとか、がんばってくださいとか、従順な言葉のひとつ吐けず、無言のまま、コップ、タオルを機械的に受け渡すだけだ。

普段の渡辺久信なら、涌井、舐め過ぎじゃないか、天狗になるのはまだ早いとばかりに、引き釣り回して、体でわからせようとするのだろうが、もうウグイス嬢は、渡辺久信の名前をコールしている。そんな時間は存在しないのだ。

「じゃあ、行ってきます」

と涌井への怒りはひとまず後回しで、ブルペンの金網をこじ開け、小走りで出陣だ。

グラウンド上に姿を表すと、渡辺久信は、これみよがしに何度も何度も帽子を取ってはかぶる仕草を繰り返すではないか。帽子を取る度に、西武ドームには微妙な歓声が沸き起こる。それもそのはず、渡辺久信の頭髪がふさふさだからだ。

ファンが見慣れたハゲ散らした渡辺久信はどこにもいない。帽子をあげるたびに、ふさっと頭髪が波を打つのだ。

「ふふ、みんな、見てる、見てる。そうだよ、ふさふさナベちゃんが昭和の時代から、時を隔てて、ここに復活だよ」

肉体を全盛期に戻れると聞いて、渡辺久信がまず喜んだのは、球速復活よりも、毛根復元だったのだ。

復元される年代は、自らの意思で選択できるのであるが、渡辺久信が選んだのは、３度目の最多勝を自己最多の１８勝で飾った１９９０年の自分ではなく、二度目の最多勝を獲得した１９８８年。９０年の防御率は2点台、８８年の防御率は3点台、勝ち星も3つ少なく、普通に考えれば、９０年を全盛期とするのだが、渡辺久信は、９０年は、すでに後退が始まっていた、８８年ならまだふさふさとした頭髪を保てていたと、なんと投手としての全盛期よりも、毛根の全盛期終幕寸前を選択したのだ。

その甲斐あって、渡辺久信は、トレンディーエースと呼ばれた当時のまま復元されたわけであるが、野球よりもスタイルを重視して、

何事だと怒るのも筋違い。なぜなら、ファンは、渡辺久信の全盛期の投球もみたいが、それ以上に、トレンディーエースの冠にふさわしい渡辺久信をみたいのだ。トレンディーエースも、その名に反して、歴史の一部。歴史を体験するのが、この大会の趣旨のひとつ。

だから、あながち、見た目を重視した渡辺久信の行動は間違いでもないわけだ。

「ナベさん。お待ちしてましたよ」

清原は、先輩の渡辺久信のために、マウンドを丁寧に慣らし待ち構えていた。渡辺久信と清原は、工藤、笘篠兄、そして、問題になった大久保とあわせて、ウルトラ5兄弟と呼ばれていたほどの仲良しで、この5人組で夜の街（所沢からはるばる銀座や池袋に繰り出して）を闊歩したものだ。その後、工藤と清原が微妙な関係になり、この5兄弟の絆はあえなく崩れたが、清原が、渡辺久信を兄者と慕う良好な関係には変わりはない。

「よお、キヨ。こうしてお前のお出迎いを受けるのも、懐かしいな」

見渡せば、二塁は黄金時代を共にした辻、そして遊撃は、顔をみるだけで、渡辺久信は西武の苦悩の晩年時代を思い出すだろう、松井稼頭央。

「辻さん、稼頭央。どっちも見慣れた光景だ」

だが、三塁は、中西太。現役時代を知らない渡辺久信にとっては、ライオンズの選手というよりも、ライバル近鉄の打撃コーチの印象だろう。

「サードは、秋山さんか、石毛さんか、鈴木健、あるいはクーパーなんて外れ外人もいたけど、中西さんに守ってもらうのも心強いし、伝説の一部に触れたみたいで、逆になんだか、新鮮だ」

と渡辺久信は、サードの中西も受け入れるが、捕手もみて眉をひそめる。

「で、捕手はおなじみの伊東さん……伊東さんがとんでもない守備に我慢して使ってくれた中島や片岡、栗山らの活躍で、監督一年目

はおいしい思いをさせてくれて……って、ああそうか、捕手は伊東さんじゃない!!　和田さん??　あ～」

「あ～　とはなんだ、久信」

捕手は、和田博実のままだ。サプライズ先発畑の相性をあわせての起用のはずであるが、畑が降板しても、捕手は、渡辺久信と長年組んだ伊東に替えることなく、和田そのままだ。

「いえ、失礼しました……。伊東さん以外の恋女房を想定していなかったもんで。和田さんといえば、僕にとっては、二軍の監督やコーチのイメージが強すぎて、捕手和田さんの実態がちょっと……」

「安心しろ、久信。お前がオレのことをわかってなくても、オレはお前のことをよ～く知っておるから」

左肩をポンポンとミットで叩き、渡辺久信を、和田は必死に安心させようとするが、

「で、久信。お前の球種、なんやったか?」

「もう、和田さん。知り尽くしてるんでしょう?」

「いや、悪い、悪い。ちょいとド忘れしてもうてな」

「ストレート、フォーク、スライダー、カーブですよ。シュートもありますが、それほど自信はありません。スライダーは、横に曲がるのと、真っスラ回転の二種類がありますよ」

といまさら球種をチェックしあうあたり、息ぴったりの夫婦とは言い切れなさそう。

即、伊東の起用に至らなかったのは、捕手二人制の難しさか。それとも、打席に入ってもいない和田をおろすのも、さすがに無手勝手流の三原も躊躇するのか。

いつまでも、出番のない伊東は、ベンチの隅でブツブツ。

「久信は難しいピッチャー。オレじゃないとどうなｒか知らんよ」

と愚痴りモードであるが、まだ伊東の頭が試合に向いてるだけましなのか。伊東といえば、監督の時、采配よりも趣味の競輪に夢中とマスコミに叩かれた経験もあるからだ。

伊東のつぶやきが、今週のメインレースの予想になったとき、三

原の求心力に危険信号が灯る時だろうか。

得体が知れないからって中田亮二に四球はどうかと

渡辺久信と、捕手の和田の呼吸は、はじめから合わない。和田の出すサインに、渡辺久信は何度も首を振り、焦れた渡辺は、プレートをいったん外し、帽子をかぶり直し、間合いを取る。

「初球ストレートのサインに和田さんはこだわるけど、打者は４番だよ。一見、風貌からして４番の風格はいまひとつない村田だけど、初球ストライクをとるストレートでいくのは、ちょっとなあ」

渡辺が何度も首を振っても、和田はしつこく、ストレートのサインを出し続ける。半世紀前の捕手・和田にしたら、投手の初球はストレートとの思いが強いだろう。

しかも、投手は本格派の渡辺。本格派投手を気分よく投げさせるには、やはり、初球、ストレートから入るのは譲れないだろう。それが、たとえホームランバッター村田だとしても、相手に合わせるよりも、投手本位のリードを取るのは、これまた、古きよき時代の恋女房の和田らしい。

だが、森西武の負けない野球が染み込んでいる渡辺には、凝り固まった信念は存在しない。渡辺の頭にあるのは、いかにして投げれば、勝つ確率が高いかだ。

「しかも、村田は空気の読めない打者で有名と来ている。投手の第一球を尊重して、見送ろうなんて秀純な考え方なんてしない。打ちやすいボールを投げて、なにが悪いと開き直って、初球からガツンとフルスイングしてくる打者だ。だから、フォークやカーブで様子見すべきなんだ。オレの気分を乗せようと和田さんの気持ちも十分わかるけど、このへんは、やっぱり伊東さんの方が慎重だよなあ」

渡辺は、ちらりとちらりとベンチを見ても、三原は捕手伊東の交替を決断する様子はない。

「和田は、渡辺をコーチや、二軍監督の立場から指導しているんだろ？」

と、まるで、バッテリーを組んだことがなくても、指導者と選手で結んだ絆の過去があれば、相性ぴったり、息は合うだろうとの考え方だ。

三原は内野手出身だけに、バッテリーの微妙な相性までに頭は回らないのだろうか。

「……三原さんには、オレの思いが伝わってないようだ」

と諦めた渡辺は仕方なく、和田がしつこく出すストレートのサインにうなづいた。小宮山や牛島など理論派投手は、たとえ若手捕手のまずいリードだとしても、首は振らないものだ。それが打たれる可能性の極めて高い球種やコースだとしても、首は振っては若手捕手の育成に結びつかないと、彼ら理論派投手は首を振らず、サインそのままのボールを投げる。

だが、ただ投げて打たれては、防御率を悪くするのは投手自身。理論派投手は、サインにうなづきつつも、あえて微妙に外してボールを投げて、危険を回避するようだ。

若手捕手の自主性を重んじるとともに、ボール球を投げることによって、間違ったサインであったと身を持って知らせることができ、まさに一石二鳥なのだ。

かといって、牛島や小宮山が自らの成績を犠牲にしてでも、サインに従った若手捕手は、その後のロッテを支えたかというと、これがそうでもないのが微妙なところ。

福澤洋一、清水将海ら、極度な捕手不足からむりやり起用された新人捕手は数知らずが、ほとんどの捕手が数年で、正捕手としては実力捕手と見切られている事実もある。

渡辺久信は、彼ら理論派投手と違い、あまり考えてない投手の典型に属されるが、考えてない投手が3度も最多勝を取れるだろうか？

「わざと、ボール球を投げて危険回避だ。その策しかない」

和田は、日本シリーズ経験豊富の名捕手、新人捕手ではないが、先輩の大捕手には違いない。サインに首を振らないのは、遠慮が大きいだろう。

打席の村田は風貌に似合わず、鋭い読みを備えている。どんなボールが来るかはわからないが、バッテリーの呼吸が合ってないのは重々承知。

ならば、早打ちよりも、バッテリーの相性の悪さを見極めるために、初球は待ち、観察モードだ。

広岡監督にタコ踊りと称された、よく言えば弾けるような、悪く言えば、めちゃくちゃなフォームから、渡辺久信は第一球を投げ込む。

１４７キロのストレート。和田の要求どおりの球種だが、構えたミットから、低くそして大きく外にずれる。和田のメンツを立てて、打たれる危険回避には、ここしかないボールであるが、初球ストライクがアウトへの筋道とすれば、わざとボール球で入る攻めは、投手を苦しくする。

それでなくとも、制球力に欠ける渡辺久信。初球がわざと投げたボール球だとしても、二球目以降の制球力に微妙な影響を与える。

二球目、ストライクを狙いにいったストレートも高目に大きくハズレる。カウント、ノーストライク、ツーボール。いわゆるバッティングカウントだ。

ここでまたボールを重ねれば、絶体絶命のノースリー。しかし、安易にストライクを取りにいくと狙い打ちされるという微妙なカウントだ。

運命の分かれ道の０－２に、渡辺ー和田の初体験バッテリーは、的確な逃げ道を取れるだろうか。いや、呼吸や相性云々ですむ問題では、もはやなかったのだ。

なぜなら、初球のボール球のリズムの狂いを取り戻せるほど、渡辺は修正能力に長けた投手ではないからだ。

ストライクをねじ込もうとも、もはやゾーンに入れる術は、渡辺には存在しなかった。

残り2球とも、目を覆いたくなるようなひどいボールを重ね、結局、村田を歩かせることになる。

「なんだい、つまんね。重大な一発病患者のナベ〇投手から、華々しく花火をぶちまけようとの意気込みで打席に入ったに、男・村田の前にちびって四球ですか？」

村田は口では憎々しげだが、勝負を避けられた事実には、笑みが止まらない。自分のあとが、自分よりも前評判の高いローズだけになおさらだろう。

「よう、村田」

「清原さん、ちわーす」

一塁で、清原と再会を果たす村田だが、同じ４番とは思えない身長差に、清原は優越感を抱きっぱなし。

「相変わらず、ちっこいのう」

「清原さんがでかすぎるんスよ」

「４番は、ワシくらいのタッパがないと見栄えがしないもんやぞ」

「問題は身長じゃないっすよ」

「じゃあなんや？　これのことか？」

清原は、村田の余分な腹の肉をひとつまみ。

「やめて下さい……清原さん……あ……」

「ワシはそんな趣味ないんじゃい。気持ち悪い声出すな」

「すいません、つい……。ところで、話し変わりますが、渡辺さんって制球力ないっすね。西武黄金時代のエースだから、もっと攻め立てると思い込んで打席に立ったのに、ストレートの四球で肩透かしっすよ」

「まあ、現役時分から、制球乱す投手やったけど、ちょっとおかしいなあ。やっぱり捕手が、伊東さんやないのが、大きいのかのう……」

「和田さんって人は、西鉄時代の方っすよねえ？　同じ和田なら、和田一浩さんのがいいんじゃないですか？　西武時代にバッテリー組んだだろうし……」

「和田のベンちゃんがいまさら捕手をやれるかい。あいつの捕手はド下手やぞ？　キャンプで捕手に再挑戦しとったが、まともなキャ

ッチングもできんかったぞ？　三原さんも臨時の捕手で使えれば、選手起用の幅が広がると期待しとったが、あの体たらくやと、捕手ベンちゃんはないやろ」

「じゃあ、伊東さんをベンチから引っ張り出すしかないんじゃにですか？　あるいは、渡辺さんに見切りつけるか」

と塁上の冗談として、捕手和田博実ならぬ捕手和田一浩待望論が持ち上がったが、冗談を現実にするのが、三原マジックであるといえる。

ベンチを飛び出した三原が、レフトの和田一浩を指差すではないか。

「オレ？　ですか……」

急に指さされた和田一浩。まさか、冗談のはずだった捕手和田一浩のカードを切るのか？

得体が知れないからって中田亮二に四球はどうかと（後書き）

ＣＳの試合をみていてなんだかぐちゃぐちゃの話に
だったら更新するなよ！
ってまあそのとおり

安牌だった和田さんがＭＶＰって？

「え、僕ですか？」

三原に指さされた和田は、監督が自分になんの用があるのか、一瞬、検討がついてない表情を見せたが、三原の指先が、同じ和田でも、左翼の一浩の方でなく、捕手の博実に向いたときに、ようやく、自分が求められた役目がうっすらと分かりだしたようだ。

「まさか、和田さんと、守備位置交換？　いや、たしかに、三原監督さんには、もしもの時にマスクを被るケースを想定して、いつでも行ける準備はしておけと言われてはいたけれど、まだ、僕の師匠でもある伊東さんがベンチにでんと控えているのに、大捕手を差し置いて、僕の捕手はないでしょうよ。おそらく、渡辺久信さんと僕が西武時代にかぶっていたから、いやこの場合のかぶっていたは、頭髪の寂しさをごまかすために、細工をする意味のかぶっているじゃなく、同じ時期に同じチームに在籍してたって意味だけど、確かに、同じチームの捕手と投手という立場で、渡辺さんの投球をブルペンで受けたこともあったけど、当時の僕は新人のペーペー、渡辺さんを知り尽くすほど、コンビを組んだわけじゃないのに。渡辺さんと同じ釜の飯を食ったのもその一年限りで、公式戦で組んだかどうかの記憶も定かじゃないのに……。そんな僕と渡辺さんを組ませる気なのかな？　いくら監督さんのマジックでも、タネも仕掛けもないと……。肝心のマジックのタネである僕の捕手技術の未熟さに、三原監督さんのマジックをズバリ成功に持って行きようがないのに……」

突然の指名を受けた和田は、捕手としての自信がなく、狼狽状態。和田は、よくありがちな元捕手の強打者だが、意外と捕手経験は豊富。

強肩俊足の捕手として、入団した１９９７年から２００１年までは、外野が副業で、捕手が本業だったのだ。都合５年間の苦労がみ

のり、和田はポスト伊東に限りなく近づいたのだが、その人のよすぎる性格と、捕手としては大型すぎる体格は、細かい技術が要求される捕手という特殊なポジションに不向きと判断されたのか、和田にとっての二人目の監督にあたる伊原の監督就任で、捕手和田は廃業を余儀なくされたのだ。

伊原直々に、外野手一本を告げられた和田は、捕手に未練を残しながら、マスクとミットを捨て去り、それからただの一度も捕手としての出場がないのだ。

その和田に捕手を捨てさせた伊原は、今、走塁コーチとしてベンチに入っている。

「和田の捕手は駄目だ。肩は悪くないが、キャッチングの拙さが投手のリズムを割く。そして、なによりもお人好しすぎる性格が、捕手向きじゃないんだ。古田、ノムさん、うちの伊東、うちの監督だった森さん、そして、谷繁……名捕手と名の高い捕手は、皆性格に一癖も二癖もあるじゃないか。とにかく、和田の捕手は辞めといたほうがいい。いくら、久信が、和田博実さんと今、初めて組んだからといって、相性重視すぎる。和田と和田じゃ、捕手のレベルが違いすぎるんだ……。相性程度ではひっくり返れないほどの差があるんですよ、三原さん！」

と和田ベンちゃんの捕手の危険性を論じる伊原だが、その声は、遠く離れたベンチの向こう側にいる三原には届かない。

突立たまま、腕組みに貧乏揺すりを繰り返す伊原はイライラを募らせる。

「こういうのは、オレの出番じゃない。いまの原巨人の時のように、オレがヘッドコーチなら話が別だが、この大会でのオレは、一介のコーチにすぎん。オレではなく、三原監督の参謀というべき存在が、常に横にいて、すっと進言するべきなんだが……」

三原のマジックは確かに、当たれば見返りは大きいが、外れ時のリスクも大。三原の独走を食い止める参謀が横にいれば話は別だが、なんとこの大会のライオンズに、ヘッドコーチや作戦コーチのいわ

ゆる参謀格はベンチ入りしていないのだ。

三原の要望というわけでもない。適任者が不在なのだ。三原の一番弟子で、ライオンズ関係者といえば、すぐに思いつくのは、仰木彬だろうが、その仰木はオリックスの監督、そして娘婿でもある中西は選手に専任、西鉄時代のヘッドコーチ格の川崎徳次は、極度のギャンブル好きが三原に嫌われてか、ベンチ入りも果たしてもいない。

他のライオンズ監督経験者を参謀役につけようとしたが、福岡ライオンズ時代の初代監督の宮崎要や、ドローチャー来日不可で臨時監督になった鬼頭政一はネームバリュー不足、闘将江藤慎一は中日で選手、稲尾は監督に専任。西武に入ってからの根本はソフトバンクとのダブルGM、森は巨人で選手、広岡はヤクルト監督、東尾、伊東、渡辺は選手に専任。そして、伊原は、ご覧のように、一コーチに過ぎない。伊原の口うるさすぎる性格を三原が知って、口出しさせないために、コーチの役割に制限をつけたとの説もあるが、真偽の程は定かではない。

三原のマジックに口を出せる勢力がなければ、三原はどこまでも暴走できるのだ。明らかに、危険性高いマジック采配も三原が決断したら、止めることはできないわけだ。

だが、一言居士の伊原が口をつぐんでも、あの男がライオンズベンチにはいるではないか。

「まったく、三原さんは、今の西武の選手を知らなすぎるよ。いくら捕手経験5年ありといえど、和田のベンちゃんの捕手、こういったオールスターが集う真剣な試合で使っちゃいけない選手です。もしもミスをしても、ベンちゃんは悪くないよ。起用する方が完全に悪いレベルです」

と、簡易、オレが許さんを繰り広げる豊田は、尊敬する三原の前といっても、怖いものなしだ。ベンチウォーマーが予想された豊田を作戦参謀に任命させて三原の歯止め役にする案もあったのだが、豊田、三原ともども、これを拒絶して、あっけなく廃案になった経

緯もある。頑固すぎる性格は両者とも。参謀役廃案は、衝突を恐れての大人の対応だといえようが。三原に届くほど大声で采配批判を繰り広げれば、衝突も近しか。

29本塁打11盗塁

三原に、コーチや選手が抱く心の不満が届くかどうかだ。和田をいまさら捕手、それも、捕手を使いきっての緊急事態の捕手なら致し方なしだが、まだ回は二回、そしてベンチには、本来の正捕手伊東が、頬をふくらませて腰を下ろしている。

伊東を差し置いて、和田博実を起用するだけで、十分な火種なのに、その上、伊東より先に、和田ベンちゃんを捕手に起用すれば、くすぶった火種は爆発し、チームは開幕の第一戦の序盤から崩壊するかもしれない。

たとえ、和田ベンちゃんが成功しても、それはただの偶然で、大局が読めないマスコミは別として、三原マジックと誉めそやす向きは、チームには生まれないだろう。

万が一、いや、捕手和田ベンちゃんの起用は、かなりの確率で裏目に出るだろう。その時だ、カリスマ三原は音を立てて崩れ落ち、奇策に溺れる迷将と見る目は、塗り変わるだろう。

それほどの危ない橋、コロコロちゃんことトラックスラーと、８８年の阪急の練習生西口順一と、ドカベン香川と、まるで肉塊のように太っていたダイエーのカスティーヨを同時に、今にも朽ち果てそうな吊り橋をわたらせるようなもの、それが捕手和田一浩の起用だ。

「どうしよう、どうしよう」

指差しされてから和田の頭は、どうやって捕手をすればいいかで一杯。リードで頭を悩ます遥か前のレベル、グローブを前に突き出し、キャッチングの感覚を必死に思い出している。つまり、配球どうのより、渡辺のボールが取れるか、どうかを心配しているのだ。この和田を捕手起用できるのか？

人格者の和田博実といえど、素人寸前の和田一浩に捕手の座を奪われたらいい思いをしないだろう。和田博実は、肩が衰えてからは、

打撃と俊足を生かすために外野の出場が主だった選手。だから、和田と和田を交換して、レフトの守備位置に一時避難しても、違和感なくこなせるだろうが、力が劣りすぎている元捕手に、ポジションを譲ったとなれば、話は別だ。不満を抱えたままのサブポジションを上手くこなせるほど、外野は簡単なポジションではない。

イージーなフライが飛んだとしても、抱く不満の塊は、打球判断を狂わせるだろう。

そして、三原はどう決断するのだ。レフトの和田を指さしたまま、捕手と左翼の交替をまだ、主審に告げた様子はない。

「ベンちゃんが捕手？　いやいやとんでもないですよ、三原さん！　いくら、オレと和田博実さんの呼吸があってなくても、ベンちゃん捕手はないでしょ」

当の渡辺も捕手交換に懐疑的だが、はたして、三原の決断は。

「和田くんに……ニックネームはベンちゃんというのかな？　和田ベンちゃんくんに、私は、心の準備を促したまでだ。それが今の指差しの意味」

と、三原はくるりと振り返り、主審にはなにも告げずに、ベンチに戻っていった。大胆不敵な三原マジックでも、捕手の交換は危険性が高すぎると回避したのだろう。

だが、三原は、まだ捕手交換を諦めきってはいない。

「様子見だよ、様子見。走者はまだ一人、それも一塁じゃないか、足がそれほど速くない村田くん。なに、もう一人、二人、和田と渡辺くんの相性を見極める時間はある」

つまりは、決断を先延ばししただけだ。元はというと、和田博実の先発起用は、畑のサプライズ先発の副産物。三原も、愛弟子和田博実よりも、伊東の力量を買っているのは事実。それでも、伊東を出せないのは、捕手二人制で、第三の捕手は緊急事態のみの和田一浩。そして和田博実に一打席も回っていないうちの交替は忍びないとの配慮だろうか。

だから、捕手交換でしのぎ切るという緊急のカードを切るしかない事態に陥っているのだが、さて、横浜の5番打者は、ロバート・ローズ。

史上最強の外国人選手の話題が出るときに欠かせない選手の一人だ。広角に長打が打てる、そしてミートが長けているなど、この選手の長所は数限り無いが、特筆すべきは、その勝負強さだ。通算打率が三割を遥かに超えるローズだが、得点圏の通算打率は、それをさらに上回る。得点圏打率は、誤差の範囲で、打数を重ねる内に、通常の打率に収束するという見方もあるが、このローズ、ライフタイムの規定打数ともいえる４０００打数にあと少しに迫りながら、得点圏打率は、持ち打率に収束するどころか、その差を引き離すばかりの安定した勝負強さを兼ね備えている。

最新のデータ分析であるセイバーメトリクスには否定されがちの勝負強さという指標であるが、これだけ高い通算得点圏打率を記録したローズの前に、勝負強さなんてものは存在しないという理論を高らかには語れないだろう。

「あれ、これチャンステーマだろ？　オレはまだ一塁にしかいないよ。横浜の応援団、先走っちゃった？」

と、村田が、レフトの横浜の応援団の狂乱ぶりに疑問符。彼らが奏でるバッティングマーチは、今の横浜のチャンステーマ、つまり、得点圏に走者を置いた時の特別であり、固有のテーマが流れていることに訝しげなのだ。

「おい、村田。お前は知らんのか？　今のベイのチャンステーマは、もともと、ローズのテーマやぞ？」

と清原に注意されて、初めて気づく村田。村田と違い現役時代がローズと重なる清原には、このテーマは、むしろローズのバッティングマーチとしておなじみ。

「この曲を聞くと、横浜のマシンガン打線にいいようにやられたあの時を思い出すんや」

と、口では恐怖体験を語る清原であるが、バッティングマーチを応援団のリズムに乗って口ずさむ当たり、ローズのテーマは嫌いじゃないようだ。

「ローズのテーマなんだ。へえ～　というか、そういう話も聞いたことあるなあ」

関心する村田だが、小意気なジョークも忘れてはいない。

「なんだ、てっきり、オレの盗塁を予期して、チャンステーマを先走りしてると思いましたよ～」

「村田が盗塁やと？　デブで短足のお前がか？　ありえへんわ」

「失礼ですね、清原さん。こうみえて、プロ通算８盗塁っすよ」

「８盗塁？　そんなもんか、ワシは何盗塁したと思う？」

「……オレが、８年で８盗塁っすからねえ。清原さんはたしかプロ生活２３年、ていうことは２３盗塁くらいすかねえ？」

「あほ。ワシは５９盗塁や。若い時は二桁盗塁もようしたもんや（とはいえ二回）

「５９盗塁っすか！　へえ、意外と走られてるんですね～」

「ははは。お前みたいなデブで短足と違うんや。若い頃のワシは、カモシカのような俊足の持ち主やったんやぞ。８年で８盗塁のお前が、ワシの偉大なる５９盗塁を抜くのはいつの日やろな～。単純計算で５９年か！　ガハハハ。というか、村田はＷＢＣでみっともない肉離れをしよったよな？　ワシも現地でみて、カッコ悪い怪我しおって、国民のみなさんのスラッガーに対するイメージ悪くなるやんけ。肉やビールばかり食らって、節制せえへんから、ちょいと走っただけで故障すると思われるやんけ」

と、夜の帝王として、数々の武勇伝を残し、野球選手のイメージを著しく低下させた張本人の貴重なアドバイスを村田は丁重に受けるしかない。それが上下関係ですから。

「あはは。清原さん、あはは」

「で、村田、あの怪我をしてから何盗塁したんや？」

「ゼロです……」

「ゼロやと？　ガハハハ、まだ２０代なのに走れない選手に成り下がってもうたか！　二年でゼロなら、５９年たっても、８盗塁のままやな！」

と、２０代で走れなった村田を小馬鹿にする清原だが、通算５９盗塁のうち、５８盗塁までがプロ入り９年目の２７歳のシーズンで記録したもの。つまり、２０代で走れない置物と化したのは、清原が先駆者なのである。その後、１４年間でわずか１盗塁の清原は、お意外と走れる大砲から、見た目通りの走塁に興味を持たない鈍重な大砲に成り下がったわけだが、村田はどうだろうか。清原を見ると、スラッガーに盗塁の指標は無意味とはいえないだろう。多少でも走ることが、体の堅調さを示し、打撃成績を反映するの清原が身を持って証明している。

「ローズは右打ちが上手い、それも、コース関係なく右中間に持って行ける。走者がいるとなお集中力が増し、そのテクニックは制度を増す。そして久信は制球力に欠けるから、構えたミットどおりに行く投手じゃない。この投手で、ローズを打ち取るのは、もう球威で打ち勝つしかないんだ。そして、久信の特徴を生かす。久信のボールは、スライダー回転がナチュラルでかかる真っスラの持ち主。この真っスラの持ち味を上手く使いこなせる配球を考えれば、チャンスのローズとはいえど、打ち取る可能性は高くなるんだが……」

と伊東は、自分がマスクを被っているつもりで、仮想リードを繰り広げるのだが、渡辺ローズを知り尽くした伊東の思いは、今マスクを実際に被る和田博実に届くのだろうか。

和田博実が、ローズを打ち取るために渡辺にサインを出す。相変わらず、呼吸は合ってないようだ。渡辺は何度も首を振り、またプレートを外す。

中塚政幸のガッツガッツナイト

引き続き渡辺の女房役をつとめることになった博実の方の和田であるが、呼吸は相変わらず合わない。

またも初球の入り方に納得できない渡辺は、サインに何度も首を振って、それでも和田が意固地にサインを変えないことがわかると、プレートを外し、帽子を角度４５度あげて、おでこにこびり付く汗を利き腕の右の甲で拭う。

「ふう。違うんだよな、和田さん。ローズは右中間方向に長打を打つイメージがあるから、内角をついて詰まらせようという配球だろうけど、ローズは内角に詰まりながらも右中間に持っていく打者なんだよ。だから、コースを丹念につくよりも、球威で勝負をかけるべきだ。外角だろうと、力で上回れば併殺コースに打球は飛んでいくはずなんだ」

２３歳当時に戻った渡辺の生え際ラインは、当然全盛期。だから、汗を拭うにも、今の生え際では味わえない感覚。眉の上に手の甲を当てると、前髪に触れる感触に虜になっているのだ。だから、何度も汗を拭う仕草を繰り返すのだが、この行為が、横浜首脳陣に余計なことを考えさせているとは、渡辺は夢に思わないだろう。

「久信のあのおでこをなでる仕草は、意味ありげじゃないか、大矢」

「近藤ヘッドも気づかれましたか！　私もなにかあるんじゃないかと気になっていたところですよ」

「なにかとんでもないことをしでかすサインじゃないか？」

「走者無死一塁で守備側が何をできるかというと……特別な守備体形？　併殺網にかけやすいシフトを敷くサインとか？　投球と同時に内野陣が大胆に動き……」

「浅はかすぎるよ、大矢は。相手はマジシャン三原さんだよ。その程度のアイデアのわけがない」

「とすると、どんな意味があるんですか？」
「走者は一塁。それも、隙がありすぎる村田だ。村田が横浜に入って以来どんな野球を学んできたか考えてみろ。自由放任といえば聞こえがいいが、特に何もしない教えないだけの山下大ちゃん、そして投手指導は一流だが、野手指導能力はゼロの牛島、そして大矢、君。さらには、大矢が首になって、大洋～横浜の大雑把な野球の象徴である田代代行、最後に、これまた牛島と同様、野手に教えるスキルはゼロの尾花だ。こんな指導者に恵まれない選手も珍しい。この５人の細かい野球ができない無能指導者が創り上げた、打つだけで、守備走塁の知識がない、どこに出してもみっともない４番が村田だ。三原さんからしたら、これほどマジックにかけやすい選手はいないだろうよ。村田が走者に出たとき、いや、もしかして、村田をわざと歩かせたかもしれない。とにかく、走者村田を恥をかかせるために何かを仕掛けるはずだよ」
「？　走者一塁で村田を恥にかかせるって……どんな方法がありますか？」
近藤に無能呼ばわりしても、大矢はさして気にもとめていないようだ。
「あるだろうよ、たとえば、わざと暴投して、村田を二塁に走らすんだよ」
「わざと？」
「ああ。村田は、走塁に気を払わないタイプだ。球がそれるのを見て、スタートよく二塁に陥れるタイプじゃない。清原とぺちゃくちゃおしゃべりしている姿からもそれがわかるだろうよ。和田がボールを逸らしたと同時にスタートなんて切りゃせん。一塁コーチャーの中塚にせっつかれてようやく二塁に向かうだろうよ。普通の暴投やパスボールならそれでもいい。想定外のミスで捕手も慌てるだろうから、スタートが遅れたって二塁は陥れることができうだろうよ。だが、和田はわざと球を逸らすんだよ、おそらく取りやすい、投げやすい所に弾くだろうよ、だから二塁への送球も準備万端。最高の

送球で、鈍足村田を二塁ベース上で料理できるだろうよ」
「なるほど……そういう手もあったか……じゃあどうします？　ボールが逸れても、村田には動くなと指示しておきます？　もちろん、ボールがバックネット裏まで転がるようなら別ですが」
「バカいえ、大矢。相手がボールを逸らすってわかっているんだぞ。スタートだよ、スタト。村田を動かすんだよ。いくら村田でも、ボールを逸らした捕手に刺されるか？」
「いくらなんでも、村田の単独スチールは危険すぎますよ、近藤ヘッド！」
「ちょっとくらいリスクがあるほうが、リターンは大きいんだよ。三原さんが仕掛けるマジックのその上を行く。戦力の劣る横浜が勝つためには、これくらいの蹴手繰りが必要なんだよ」
「……マジックにはマジックですか……一理あるかもしれんなあ」
「よし、ボクがサインを出す。見ててくださいよ、三原さん。不肖の弟子が、偉大なる師匠を超える記念すべき瞬間を……」
勝手な妄想を暴走する横浜最高頭脳機関は、三原を警戒するあまり、存在しないマジックを作り出したのだ。
勘違いと三原を意識するあまり、考え出された鈍足村田の単独スチールの勝ち目ゼロの無謀な作戦を伝えるために、近藤は、両腕を器用に動かし、ブロックサイン。
まずは、三塁コーチャーの山下に伝えられたとんでもない策は、山下を経由して、村田と中塚に届く。とんでもないサインを伝達する山下だが、いたって冷静、生まれながらの金持ちは、滅多なことで取り乱さないものなのか。このへんが、成金の他の選手と違うところ。何があっても取り乱さないその性格が、連続最下位で首になりながらも、さよならの胴上げを拒まなかった、特異な精神状態に起因するのだろうか。
「はあ？」
村田が疑問を抱くのももっともだ。ここ3年間一度も盗塁を成功

していない自分に単独スチールがでるのだから。打者は勝負強すぎるローズ。長打も多いローズだ、右中間の最深部に打ち返せば、村田でも一挙生還できる確率があるのに、自らアウトをあげにいくような愚策を取るのだから。

村田は、清原に悟られぬように、中塚にサインの確認。オフシーズンはラジオのディスクジョッキーを務めるタレント性に、独特な丸メガネから、円鏡とあだ名された中塚政幸もメガネの奥の目を丸くする。だが、村田はまだしも、現役時代、典型的な1、2番タイプでコーチ経験も豊富な中塚が、サインを見間違える可能性は極めて少ない。

「のようだ」

の短い一言で、単独スチールのサインに間違いないことを村田に伝える。

「マジかよ。盗塁ってどうやってやったっけ?」

3年間も盗塁をしていないと、村田はスタートの切り方の基本も危うい状態。さらにサインは、単独スチール。村田の通算8盗塁といえど、単独スチールはほとんどなく、エンドランの失敗が、捕手のミスで運良く二塁セーフになったのが多分をしめよう。

だから、単独スチール、打者が打つか打たないかにかかわらず、投球と同時にスタートを切るには、村田にとって、特別な技術が必要なのである。

二塁ベースに近い方の左足を何度も細目に動かしながら、村田は飛び出すタイミングを伺っている。

渡辺は、けん制を入れるどころか、村田を目で殺すこともなく、完全に打者集中。村田が単独スチールを仕掛けてくるとは思ってもないだろう。

そして、渡辺は和田がしつこく出す内角のストレートのサインにようやく、首を縦に振らる。

「和田さんも譲らないなら仕方ない。ミットを無視して、自分が投げたい場所に投げるしかない。オレは外角を狙う、逆球になるけど、

同じストレート、和田さんの捕球技術なら捕ってくれるはずと信じて投げ込むしかない」

渡辺はサインにうなづきながら、自分の投げたい所に投げ込む最終手段を選択した。

そしてこの、強硬手段が、村田のまさかの単独スチールと相まって、とんでもない結果を生むとは誰が予想したのだろうか。

渡辺がセットポジションから、始動すると同時に、村田はスタートを切る。

静岡住生活リクシル・オレンジティーズ

三原マジックの亡霊に怯え、なぜか猛然とスタートを切る村田、そして渡辺は、大先輩捕手和田のサインお構いなしに自分が投げたいボールを投げ込む。

無死走者は鈍足の４番打者で、プロ野球史上、長嶋と並ぶ勝負強さを備える5番打者の打席なのに、なぜ、スタートを切るような事態に陥いったのだろう。

ヘッド近藤と監督大矢だからこそなせるとんでもない作戦だが、彼らが繰り出す奇策がいつもいつも失敗に終わるほど、彼らが持つ球運は弱くない。

渡辺は、わざと和田の構えた内角の逆球となる外角に投げ込むのだが、それは和田の配球を信頼していない渡辺でも、和田のミット裁きには強い信用を置いている証拠だ。少々、コースが間違っていても、和田のキャッチング能力なら、なんなく受け止め、そして、逆球の意味、つまり、渡辺は和田の配球に疑問を抱いたままのマウンドに気づいてくれれば、なおよしの意味を込めた逆球作戦であるが、渡辺は、渡辺自身のボールの癖を忘れていた。

渡辺のストレートはホップするようなノビがあるとともに、自然にスライダー回転がかかっているのだ。つまりは意識せずに真っスラ、今でいうカットボールを投げ込んでいると同然なわけだが、この真っスラ回転が、外に投げるのを意識したあまり（渡辺の制球力では、過剰すぎる意識を持たない限り狙ったところにはいかない）、いつもより、強烈な真っスラ回転がかかってしまったのだ。

すわ逆球と体を外側に移し、さらにスライダー回転も計算してミットを出した和田であるが、過剰すぎる真っスラ回転の前に、和田のミットは、渡辺のボールを捕えきれない。

「しもうた」

和田が思わず声を上げたとき、ミットを弾いたボールは、和田の

前をコロコロと転がっていた。さらに、和田は逆球を捕ることに意識が一杯で、村田の動きを見落としていたのだ。

スタートを切った村田の出足はすこぶる遅い。彼は、この走塁が、重大な意味を試合にもたらすことを理解していないのだろう。

盗塁失敗でもかまうもんか、三年間盗塁ゼロの走者を走らせる方がどうかしていると、悪い意味で開き直るだろう。

「村田のスタートはどうなっているんだ！　あれじゃ、三原マジックにかかるだろうが！　あのアホが！　今のベイはどんな野球を教えているんだ！　だから住生活にいいようにやられるんだ！」

ヘッドの近藤は、村田の細かい野球無教養ぶりに今更ながらに驚くが、今までの近藤なら、このまま村田の盗塁は失敗に終わり、また名将ぶりたくても、無謀な奇策を使ったとたかれるありきたりな運命が待ち受けているのだが、天はたまには、近藤ヘッドを名参謀と誉めそやしてくれるのだ。

逆球のボールを止めるのに、必死で捕手の和田は村田の静かなるスタートに気づいていない。そして、投手の渡辺も和田のキャッチングが期待はずれだった現実にとらわれて、これまた村田の動きが頭に入っていない

「和田さん！　二塁！　二塁」

ようやく一塁の清原の掛け声で、村田の動きに気づいた和田は、転がるボールを素手でむんずとつかむと、そのまま二塁ベースカバーの松井稼頭央めがけて、矢のようなボールを送球した。

警戒なしの状況からのスタート、そして捕手がボールを前に弾きまごつく、走者の動きが入っていない。これだけタイムラグがあるならば、普通の走者なら楽々セーフ。であるが、村田は普通の走者じゃない。スピード、走塁技術、意欲、すべてが赤点クラスの落第生ランナーだ。盗塁の締めのスライディングだって、いわゆるお嬢さんスライディング。

スピードを殺さない技術やベースカバーのグラブを蹴り上げるような強烈さもない。だから、アウトのタイミングでも、思わず二塁

塁審が手を横に広げるほどのごまかしの高等テクニックもない。ないないづくしの村田の盗塁が成功するには、もうひとつのミスが必要。

矢のような送球をした和田であるが、渡辺のストレートにナチュラルなスライド回転がかかったように、和田の送球には、シュート回転がかかる。一塁方向に流れるシュート回転は、捕球したグラブをそのまま置けば、そこに飛び込んでいる走者のヘルメットや足があるから、アウトになる確率はそれだけ高くなるだろう。スライド回転のかかった送球はタッチが遠回りになるが、シュート回転の送球は、逆にタッチが速くなる利点もある。だから、シュート回転の送球は、捕手の送球テクニックのひとつにあげられるのだが、それも、ベースカバーに入る二遊間が、送球の癖を熟知していればの話。

時代を隔てた渡辺と和田が初めて組んだバッテリーなら、和田と松井も初コンビネーション。

「なんでやねん」

まっすぐの送球と勘違いした松井は、和田のシュート回転の送球を捕りきれない。グラブの端につかまえるのがやっとで、今にもこぼれ落ちる心配からは、どうしても走者へのタッチプレイが甘くなる。

お嬢さんスライディングをかます村田だが、おそるおそるのタッチに負けるような甘さはない。

怠惰が生み出した鈍重な体はスピードを殺すが、タッチに負けない体の強さも作りだす。

スライディングに負けた稼頭央のグラブから、ボールはポロリと溢れる。二塁塁審の判定を委ねるまではない。ボールを落とした時点で、無謀な作戦は結果オーライになったからだ。

村田のまさかの単独スチール成功は、三原マジックにいいようにやられていた試合の流れを根本的に覆す大きなプレーになるはずだ。

今日のところは此の程度の話で勘弁してください

「あれ？　あれれ？　あれ」

村田はまだ信じられない。単独スチールが成功した自分を信じられない。二塁に村田の体が届く遥か前に、送球はベースカバーに達し、待ち構えた遊撃手に嘲りの笑いを浮かべられながらタッチされても、サインを出した監督かコーチが悪い、だって横浜だもの、選手にぬるま湯に浸らせているのは首脳陣の甘さととんちんかんな掌握術が原因だものと、すっかり開き直ることができるのだ。

観客のみなさん、悪いのはボクじゃありませんよね？　とアピールするように、薄ら笑いを浮かべながら首を何度か振れば、自称玄人のファンたちは、責任の所在を選手になすりつけるでなく、間の抜けた首脳陣にあると思い込んでくれるのだから。

そんな責任逃れの未来しか想像できていなかった村田だが、この単独スチールには、マイナス思考が功を奏してのだ。

死んでもともとの気持ちが、村田に絶好なスタートを切らしてしまったのだ。これも、村田にしては絶好なスタートのレベルで、俊足のランナーならしくじったスタートだろう。

それでも村田にとっては、ありえないほどの順風満帆の出航。だから気分よくスタートとスピードを直通につなげることができて、村田にしてはとんでもない中間走を記録したのだ。これもあくまでも村田の自己最速であり、俊足のランナーがもし村田のようなスピードの中間走なら盗塁成功はもう絶望と、途中で走るのを辞めて、巨人単独指名が決まった澤村拓一のダークなニヤケ顔を拝見しに、中央大学の野球部寮の前までいって、「地味な実力者を陰険な方法で取りまくるから、巨人の人気は落ちるんだよ、馬鹿やろ～」とひっそりとした抗議活動を行ないかねない。

スタートと中間スピードが村田にしては上出来なら、そして、捕手の捕球ミスに、捕手とベースカバーの連絡ミスとこれだけ条件が

重なれば、村田のスライディングが、まるで、海辺に打ち上げられてのた打ち回るトドのようなものでも、盗塁は成功するだろう。

そして、村田はどこまでいっても盗塁の素人だ。スタート、スピード、スライディングのいわゆる盗塁の必須条件の３Ｓがプロ野球選手レベルでは、最低限の最低限。由規の弟の佐藤貴紀が、育成の最下位付近で、仕方なくまあ弟でも取っておいてやるかと指名されるよりも、もっと最低限にうごめく村田の盗塁技術は、盗塁成功したって、露呈する。

「……？　どんなんだっけ？　盗塁を成功した時ってよ。例えば、オレの打席でうろちょろ走りまくって邪魔クセーたっらありゃしない石川は数を稼ぐだけでまったく意味のない盗塁を成功したときどうやったっけ？」

俊足選手が盗塁を決めたときの一連の動作といえば、セーフの確認をするやいなや、二塁塁審にタイムを求め、さっと立ち上がると、アンツーカーの土を、パッパと颯爽と払い落とす、この一連の動作が流れるように決めるのが俊足ランナーならではのものだ。

村田は、この俊足ランナーの一連の動作を決めたいのだが、そうはいかない。村田はいつだって、何をやってもさまにならないものだ。連続本塁打王を取っても、ＷＢＣ４番でも、それでもそれでもかとブランドを獲得しても、人気がいまいち沸騰しないのは、その何をやってもさまにならない村田の生きざまが反映されているのだが、本業ともいえる本塁打を打っても、なにか決まらない村田が盗塁を決めたって、決まるわけがない。

「まず、砂を追い払うんだっけよ？」

おっと、村田。危険だぜ、君は二塁塁審にタイムを要求する前に、砂を払おうとしているのだ。

砂を払うときにタイムをかけるのは、塁上を離れてためだ。塁の砂をなるべき被せないマナーの一部なのだが、タイムをかけず、インプレー状態の君は、砂を払うとき塁を離れやしないよな？　ベースの上に砂をかぶせたって、男・村田にマナーなんて言葉は似合わ

ないんだから、イメージダウンにもならないだろうよ。
だが、村田は間が抜けたにもほどがある。タイムをかけず、塁上を離れ砂を払おうとしているのだ。
「ズボンの下まで、砂と土が入りやがったぜ、クソ」
ベルトをほどき、砂と土を払う村田のミスに、まず気づいたのは一塁の清原だ。ああ見えて抜け目のない野球をする清原は、村田の信じられないミスを見逃さない。
だが、声を出したら村田に気づかれると、清原は黙して、松井稼頭央が気づくのを待つのだが、その松井は、どうしたのだろうか、小狡い野球を学んではいないのだろうか。
「おい、村田。お前、タイムかけてへんで」
投手の渡辺にボールを返そうとしたときに気づいた松井は、そのまま塁を離れた村田にタッチすればアウトが取れることを忘れたのだろう、なんとご丁寧にも村田を窮地から救いにかけるのだ。
「あ、稼頭央さん、ありがっとうす」
とようやく、村田は二塁塁審にタイムを要求した。
「お前、盗塁せんから手順わからんのやろ？」
「あはは、稼頭央さん、そのとおりですよ」
とゲラゲラ笑う村田と松井に、清原は怒り心頭だ。当たり前だ、村田をアウトにできるチャンスをミスミス見逃した上に救済もしたのだから。
「稼頭央のクソが、またやりやがったわ！　もう今度という今度は許せんで。このイニングが終わったら、何をするかわからんで！」

カキーン

ローズ打ったああ

かーん

かーん　かーん　かーん

かーん　かーん　かーｎかーん

かーん

かーん　かーん　かーん

かーん　かーん　かーｎかーん

かーん

かーん　かーん　かーん

かーん　かーん　かーｎかーん

かーん

かーん　かーん　かーん

かーん　かーん　かーｎかーん

かーん

かーん　かーん　かーん

かーん　かーん　かーｎかーん

かーん

かーん　かーん　かーん

かーん　かーんn　かーん
かーん　かーんn　かーん
かーん　かーんn　かーん
かーん　かーんn　かーん
かーん　かーんn　かーん
かーん　かーんn　かーん
かーん　かーんn　かーん
かーん　かーんn　かーん
かーん　かーんn　かーん
かーん　かーんn　かーん

かーん　かーん
かーんかーんかーｎかーん
かーん

かーん　かーん
かーんかーんかーｎかーん
かーん

かーん　かーん
かーんかーんかーｎかーん
かーん

かーん　かーん
かーんかーんかーｎかーん
かーん

かーん　かーん
かーんかーんかーｎかーん
かーん

かーん　かーん　かーん
かーん　かーん　かーｎ　かーん
かーん

かーん　かーん　かーん
かーん　かーん　かーｎ　かーん
かーん

かーん　かーん　かーん
かーん　かーん　かーｎ　かーん
かーん

かーん　かーん　かーん
かーん　かーん　かーｎ　かーん
かーん

かーん　かーん　かーん
かーん　かーん　かーｎ　かーん
かーん

かーん　かーん　かーん
かーん　かーん　かーｎ　かーん
かーん

かーん　かーん　かーん
かーん　かーん　かーｎ　かーん
かーん

完？　完？　完？
完？

かーん　かーん　かーん
かーん　かーん　かーｎ　かーん
かーん

始まりザマスよ～　ふんがー

あれからいくつかの時がたったのだろう。
すべてが止まった原因はまったくの不明。
謎は謎のままで終わり、試合の経過を眺めていた人々は、止まった理由も再開した契機も何もわからずまま受け止めるしかないのだ。

あのとき…。
村田は確かに盗塁を仕掛けたはずだ。
そして盗塁は成功に終わったはずだ。
全ては間違いない事実なのだから。
村田が無謀にも盗塁を仕掛けるという暴挙を敢行し、それが悪い偶然に偶然が重なった結果、見事成功したその時から、時は進行をするのを諦めたようだ。

ありえないことが起きたことで、時は人格を持ち絶望をしたのだろう。突然、慣れぬ人格などを待ったがための悲劇。
時は、人間らしさとは何か？　を慣れないなりに思案してしまって、人格を持つ、それすなわち、悩み苦しむことと早とちりしてしまったのだろう。
だが、何十億の年月を刻んだわリに、いまだ青々しい時などに付き合ってる暇はない。
なぜなら。時は永遠にリズムを刻むだろうが、我々、人類が持てる時間は有限なのだから。
だから、
うじうじとした時間をせっつかせて、またいつもの怠惰な日常に戻すのだ。
我々の強い意志で。
余暇を持て余した貴族すらあくびを咬み殺すのが困難なあの遅々

としたゲームの続きと結末を見るために。
一度、幕を開けた物語は、どんな三文芝居だろうが、終幕するくらいの権利は有しているのだから。

そして村田は村田を眺めている。
村田は大矢も眺めている。
口元の端を斜めにあげて嘲笑を交えながら。

明らかな間違った采配が何重もの偶然が重なり、成功に終わった今、コンダクター大矢は「監督の仕事はここまで。あとは選手に任せる」と
ベンチに重い体をどっしりと降ろしている。
「ローズと松原さんに任せれば間違いない。通算打率が右打者としては驚異の3割2分を越えながら、さらに得点圏打率はその上を優に超えるローズに、ホエールズ史上最大の打者であられる松原さんが控えているんだ。この二人のうちのどっちかが、渡辺久信を打ち砕くに違いない。得点圏に走者を進めれば確実に点が入る打線。僕が指揮した第二次政権の時の、笑えるほど惨めな下位打線とは違うんだ。任せれば、きっと点が入る」
村田の盗塁の是非はよそに置いといて、ローズと松原に全幅の信頼を置き、彼らの任せるのは間違った選択ではない。
大矢のいうとおり、村田と内川とついでに吉村がいて、横浜はどうして最下位なの？　強力打線じゃないか、投手が壊滅的だから？
いえいえ、投手も壊滅的ですが、タイトルホルダーや日本代表を多数輩出して強力打線
に一見見えますが、打線の方も壊滅的なのです。いやむしろ、打線の貧弱さが最下位続きの原因なのかもしれないのです。
横浜打線はハリボテなんです。いかにも豪快な九州男児がい並び見栄えがよくても、打率、出塁率、得点などの主要スタッツが軒並み１２球団の底辺。負けて当然とデータが冷静に表しているのです。

タイトルホルダーが稼いだ数字を帳消しにするのが貧弱な1，2番コンビとその下をいく下位打線の面々。

２００９年、大矢のプロ野球ラストイヤーに細山田、松本、山崎と期待をかけちゃいけないレベルの新人たちが、このクリーンナップの周りを任せざるを得ないほどの惨状。

２割に乗せるのがやっとの彼らに取って代わる武山、石川、下園らも彼ら新人より、ほんの少しましな程度。

広島ファンが横浜よりましと惨めな優越感に浸るくらいのどんぐりの背比べ状態の打線とローズ、松原、さらにその後ろに二冠王経験のあるポンセがいる打線とは何もかもが違うのだ。

だから、大矢が取った策は間違いない。監督がマヌケ面で指をくわえているだけでも、得点シーンは産出されるのだから。

だがら、なお村田に盗塁のサインを出したのは結果的に成功に終わっても、責められる策なのだ。無死一塁のままでも、十分に得点の確率は高く、リスクを冒す必要はどこにもないからだ。

だから、村田も不満を漏らしている。

「大矢も尾花もしょせん同レベルじゃねーかよ。なんで、あそこで盗塁なんだよ？　いつものオレの後が佐伯だの吉村だのビグビーだのスレッジだのＪファーマニアクだのと違うんだぜ？　ローズなんだぜ？　松原大先生なんだぜ？　二塁打量産機の彼らなら、客観視にみてもそう足の速くもない、まあいうほど遅くもないオレを一塁から一挙生還させる力があるはずだ。盗塁なんてありえねー作戦だよな。なあ村田？　うん、オレが村田だろ？　どうして、オレが村田に同意を求めてるんだ？　それ以前に、なんでオレは、居心地の悪い厚い布である二塁ベースの上じゃなくて、ちょっと上質のふんわりとした座り心地のいいソファにいるんだ？　どうして、オレをオレを見ているんだ？　どうして、村田は村田に問いかけれるのか？」

え？　まだヤルの？　もういいだろ

上質な居心地良さに浸る村田が見る光景は、反面、見るに耐えない惨状なのである。

引きずるような長いズボンの裾に、これまたむさ苦しく延びる後ろ髪と無精ひげのコラボレーションは見る人間をことごとく不快にさせるだろう。

今の村田のように、セレブ気分に浸れる立場にあれば、なおさら、不躾な格好の人間に嫌悪感を抱くのは当然といえる。

「・・・・・見るにつけて不愉快な野郎だな。ああーそれに格好も悪けりゃ、態度も悪いぞ。この最低野郎ときたら・・・・・。鈍足走者がまさかの盗塁成功で、相手チームに恥かかせたのがそんなにうれしいのか、小汚いほくそ笑みを浮かべやがって。人の不幸にこれ以上ない喜びを浮かべるなんて、人間性が下劣な奴がやることだぜ。まったく・・・・・この最低最悪の男はどこのどいつだ？　おい、背中の背ネーム見せろや。よし、ちょうどよく、この下劣野郎の汚いバックショットをとらえてくれたぜ。ありがとうよ、ベイスターズ戦を年々縮小方向でこのご時世、今年で消滅も仕方ないと思いきや、全盛期並に巨人戦以外のホームゲームを中継との暴挙に出たＴＶＫの敏腕カメラマン。で、その名前つうと・・・・・・Ｍ・Ｕ・Ｒ・Ａ・Ｔ・Ａ？　村田？　むらた？　どっかで聞いたことのあるビッグネームだなと思ったが、オレじゃねーか。どうなってるんだこりゃ。何でオレがをオレを見ているんだ？　つうか、イスに座っていること事態変じゃねーか。オレは栄光の４番打者として、王者西武を打ち破ろうと試合出場してるはずだぞ？　その４番村田様がどうしてイスに座ってるんだ？」

村田が疑問を抱くのももっともである。村田は引退試合登板の佐々岡から一発を放ったり、これまた引退試合に押さえ捕手として登場した矢野の花道の筋書きをすべて台無しにする逆転弾をぶっ放し

たりと、場の空気をめちゃくちゃにすることは定評があるのだが、そんな村田も一般的な価値観くらいは持っている。

それはつまり、自分が自分の行動を逐一チェックできるのはおかしいということだ。

村田が村田を監視する。村田はあることを確かめた。村田はいつのまにか試合後に飛び、そして勝利と殊勲打の有意義な気分が高揚して、監督室を占拠、そして今日の活躍ぶりをＶＴＲで確かめなおしているのではないか。

いくら村田といえど、試合中に監督室に立てこもることはないだろう。試合後の可能性もありうる。

ならばと村田はその推理が名推理かどうかを確信するために、監督室のテレビモニターのチャンネルを他に替えることにした。

「もし今が試合後なら、この大会の結果をどこも報じているところだろうよ。大会の意義と規模のわりに注目度はか細いが、短くとも結果くらいは横並びに報じている時間だ。それが日本の野球の試合があった日の日付変更直前だぜ」

ところが、村田がいくらチャンネルを替えようとも、試合の結果はどこも報じていない。村田の目に映るのは、内容に欠けるバラエティとわずか一局だけいやいやキー局地上波放送している日本テレビの巨人近鉄の試合の模様だけだ。

「どういうことだ？　試合後じゃねえ。今は試合中だ。ありえねえ、どうして試合中なんだ！　どうして四番打者のオレが監督室にいるんだ！　四番とチームは心中のはずだ。試合終盤の競った展開以外にオレが追放される理由はどこにもねえ！　それなのにどうしてオレがここにいる？　いや、オレはグランドにいる！　そして監督室のもいる？　どういうことだ」

日本中がホフパワーの奇妙な語感に虜になっているがごとく、村田の頭には疑問符が押し詰めている。

だがその村田の視線の先にあるテレビモニターが映し出すのは、今がいつなのかを確かめるためだけに一巡して戻ってきたはずの西

武横浜を中継するテレビ埼玉＝テレたまではない。一巡してさらに通り過ぎ、村田が手を止めたチャンネルの数字は8。

日付は明かせないが、この試合が行われている曜日は日曜日。そう日曜日夕暮れのチャンネル8といえば、

「花沢さんのお父さんに、酒屋のサブちゃんに、ノリスケが横一列に並んでいるぞ。けして絡み合うことのないサブキャラの競演に、奇妙な感覚におそわれるぜ」

サザエさんにうつつを抜かす中、村田の疑問は次第に氷解していく。

「まあどうでもいいや。オレが監督室にふんぞり返っていて、オレがグラウンドで奮闘している。オレは楽だし、王様感覚で気分がいいし、オレの奮闘ぶりにオレのイメージがあがる。一石二鳥。悩むことはなにもねえ。これでいいんだ」

モニターはもう西武横浜を映さない。敵情視察とばかりに巨人近鉄の熱闘に浮気することもない。

チャンネルを替える権限を持つ監督室のひとときの主の手は止まり、そしてソファーにより深く座り直し、仕事を終えた心地よい疲労に包まれながら、村田は目を閉じ始めた。

すべては今、収束したのである。

實松はサヨナラヒット打ってないけれど

村田は夢をみていたのだろう。

村田の現実とは、蘇ったノリと抱きつき、絶不調ながら盛り上げ役の仕事を欠かさない森本に呆れつつ、感心し、６勝の壁を破り、ひとつの勝ち星増の満足を覚えることだ。

いずれの村田も個人の商品価値を高めることだけを念頭に置いた村田ではない。チームの和を第一に考えたニュー村田、すなわち２０１１年の新キャプテン村田である。

キャプテン就任受諾にさいし、ＦＡ移籍後の商売を有利に進めようとする村田の下心が存在したのは否定できない事実であるが、理由がなんにせよ、キャプテン村田は進化したのだ。

村田の変心に敏感なファンは、村田の姿に嘘偽りを感じないのだから、ファン投票に進んで投票し、村田をセリーグ三塁手部門の一位に押し上げるのだ。

だからもう監督室にふんぞり返るような村田は存在しないのだ。内なる敵を追い出すことに成功した村田は二塁ベース上で、プロ野球オールスターワールドベースボールクラシックのベイスターズと現実のベイスターズのふたつのベイスターズをおもんばかる。

そして、追い出された怠惰な村田は、監督室に逃げこみ、追い出した村田のカッコ悪いのがかっこいい奮闘を嘲笑するのだが、それも飽きて、眠りについた瞬間、実体を持たない生命エネルギーの儚さか、、消滅の憂き目にあうのだ。

さらば、怠惰な村田よ。

さらば、チーム状態に一喜一憂せず、負けても負けても何の心の変化も起きないベイスターズよ。

さらば、交流戦６勝のベイスターズよ。そして、こんにちわ、交流戦７勝のベイスターズよ。

米村一塁コーチャーが、一本の単打にも拳を突き上げ、チームを鼓舞するベイスターズは
、こびりついた暗黒のぬるま湯を振りきったのだ。

そして、怠惰な村田を追いだした二塁ベース上の村田は、何を思うのだろう。

さらなるチームの奮闘か、それともチーム単位のスケールに留まらず、野球界全体の繁栄を願うのか。

「うへへへ、成功、成功……盗塁もなんだか知らねえが成功しちゃったし、イメチェンも今のところ、上手くいってるぜ。変心村田には、何球団をも金持ち球団が殺到するぜ。もともと大実力者に心も綺麗となりゃうっちーどころの争奪戦じゃすまないぜ。地元のソフトバンクもいいな～。巨人に４番サードってのミスター長嶋みたいなポジションもいいな。統一球で陥った貧打を救うのは、オレみたいな右投げ右打ちの正統派スラッガーだけだからな。うへへ……」

怠惰なる村田を追い出した村田。

次なる内なる敵は、慢心した村田であった。

村田に重なりあう欲望を全て振りきった時、村田が真のキャプテンになるのだろう。

残る欲望は２４６／２４７。

村田はまだ１／２４７の欲望を追い出したに過ぎないのだから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7943f/

プロ野球オールスター・ワールドベースボールクラシック

2011年9月26日13時19分発行